

国定読本用語総覧¹⁰：第六期『こくご』『国語』 昭和二十二年度以降使用 あ～つ

著者	国立国語研究所
ページ	3-973
発行年月日	1995-07
シリーズ	国立国語研究所国語辞典編集資料；10
URL	http://doi.org/10.15084/00001623

国立国語研究所
国語辞典
編集資料
10

国定読本用語総覧
10

第六期「あゝつ」

●『くくく』『国語』昭和二十二年以降使用

国立国語研究所編

刊行のことば

国立国語研究所は、その事業項目として国語辞典の編集を掲げている。その一つは歴史的辞典であるが、日本語の展開発達を記述する基礎をなすものとして、我々は日本大語誌とも名づけるべきものを構想した。文献の上にたどられる限りの日本語の足跡を、用例として収集し、整理しようとするものである。

時代をかりに三百年、百五十年、五十年等に区切つて見るとき、一八五一年以後の時期は、日本語が近代的発展をとげた、著しい一時代である。そして一九〇一年からの五十年は、現代語の基礎の確立した時期と見ることができる。我々は、まずこの五十年にしばつて、用例収集の作業にとりかかった。ここに取り上げる六種の国定読本は、ちょうどこの時期に使用されたものであつて、この時期の国語教育の基本教材であり、その用語は、それ自身発展しつつ、国民的な現代語の成立の基礎をなすことができる。

ここで国定読本というのは、明治三十七年四月から昭和二十四年三月までの間に使用された文部省著作の小学校用国語教科書六種のことである。その六種を使用時期に従つて示すと次の通りである。

- 第一期 明治三十七年より使用『尋常小学読本』（今日イエスシ読本と俗称）一〜八
- 第二期 明治四十三年より使用『尋常小学読本』（今日ハタタコ読本と俗称）卷一〜十二
- 第三期 大正七年より使用『尋常小学国語読本』（今日ハナハト読本と俗称）卷一〜十二
- 第四期 昭和八年より使用『小学国語読本』（今日サクラ読本と俗称）卷一〜十二
- 第五期 昭和十六年より使用『ヨミカタ』一〜二『よみかた』三〜四『初等科国語』一〜八（今日アサヒ読本と俗称）
- 第六期 昭和二十二年より使用『こくご』一〜四『国語』第三学年（上下）第四〜六学年（各上中下）（今日みんないいこ読本と俗称）

第一期国定読本については、『国定読本用語総覧1』一冊にまとめ、第二期国定読本から第六期国定読本まではそれぞれ二分冊とする方針で刊行を進めてきている。このたび刊行するのは第六期国定読本の用語総覧の第一分冊であり、「あつ」の部を収める。

この作業は、もともと、この時期の用語を採集する方法の検討のために、国語辞典編集準備室において試験的に行ってきたものであるが、昭和六十三年十月に国語辞典編集室が新設され、その室の事業として引き継がれた。作業方法については、最初手作業で行っていたものを、第三期からコンピュータ利用方式に切り換えるなどしたが、結果はほぼ当初の内容と体裁を踏襲してきた。今後も内容については一貫した方針を保持するつもりであるが、第五期より体裁を部分的に改めた。すなわち、約一万三千の見出しのうち、特に使用頻度の高いもの（五期では度数二〇〇以上、六期では二五〇以上）約五十語についてのみ、文脈を固定長方式にした。いわゆるK W I C方式である。四段組を三段組に改めたのは、右の変更に伴うものである。文脈範囲指定に費やす研究者の時間を節約するのが目的であり、読者諸賢の御理解をお願いする。

この『国定読本用語総覧10』の編集作業及び諸本の調査にあたったのは、室長 木村睦子、調査員 林大（名誉所員）、貝美代子、久池井紀子、山田雅一、乾とねである。

国定読本の諸本の調査にあたっては次の機関及び諸氏のお世話になったことを記して謝意を表する。

国立教育研究所教育情報資料センター教育図書館、東書文庫、財団法人教科書研究センター附属教科書図書館、山形県立博物館教育資料館、千葉県総合教育センター、筑波大学附属図書館、日本女子大学附属豊明小学校、国立国語研究所名誉所員 芦沢節、文化庁文化部国語課主任国語調査官 安永実、財団法人教科書研究センター附属教科書図書館 副館長 中村紀久二、山形大学教授 石島庸男

また前九巻にひきつづき印刷刊行を引き受けられた三省堂にも謝意を表する。

平成七年四月

国立国語研究所長

水谷 修

解 説

- (一) はじめに
- (二) 国定読本第五期から第六期へ
- (三) 第六期国定読本について
 - (三・一) 『こくご』『国語』編集の考え方
 - (三・二) 『こくご』『国語』各巻の編集
 - (三・三) 書誌・底本

(一) はじめに

国定読本の資料的意味と第一期国定読本の概要については『国定読本用語総覧1』の解説に、第二期国定読本の概要については『国定読本用語総覧2』に、第三期国定読本については『国定読本用語総覧4』に、第四期国定読本については『国定読本用語総覧6』に、第五期国定読本については『国定読本用語総覧8』に記したので、ここでは、第六期の読本発行の事情と、今回の作業対象である第六期国定読本の概要について述べる。

(二) 国定第五期から第六期へ

ここでいう第六期国定読本とは小学校で昭和二十二年度と昭和二十三年度に使用された『こくご』『国語』の合計十五冊である。それ以前の読本が「サクラ読本」「アサヒ読本」等とよばれるのになし、「みんなのこ読本」とよばれるものである。昭和十六年から順次使用された第五期国定読本はすでに昭和二十年八月の終戦で使用停止になり、昭和二十年度後期と昭和二十一年度のいわゆる「墨ぬり教科書」「暫定教科書」を経た後に使われた。昭和二十二年度と二十三年度に全国で使用された唯一の小学校国語教科書であり、文部省著作である。昭和二十四年度からは、民間の手による国語教科書の発行が始まり、明治三十七年以来四十五年間続いた一種類の教科書で統一された時代(第三期に若干の例外あ

り)は終わる。

第六期の始まる昭和二十二年四月一日は、教育基本法(法律第二十五号)・学校教育法(法律第二十六号)の施行の日であり、それに基づく九年間の義務教育と六三制開始の日でもある。国民学校令(昭和十六年三月一日)は学校教育法により廃止になった。

学校教育法第一条に、

この法律で、学校とは、小学校、中学校、高等学校、大学、盲学校、聾学校、養護学校及び幼稚園とする。

とあり、昭和十六年以来的国民学校初等科は小学校となった。第十七条には、

小学校は、心身の発達に応じて、初等普通教育を施すことを目的とする。

とある。

教科書については第二十一条で、
小学校においては、監督庁の検定若しくは認可を経た教科用図書又は監督庁において著作権を有する教科用図書を使用しなければならない。

前項の教科用図書以外の図書その他の教材で、有益適切なものは、これを使用することができる。

とある。ここでいう「監督庁」は同百六条で文部大臣としている。学校教育法施行規則(昭和二十二年五月二十三日、文部省令第十一号。昭和二十二年四月一日から通用)第二十九条では、

小学校の教科用図書は、文部大臣の検定又は認可を経たもの若しくは文部大臣が著作権を有するものを使用しなければならない。

となつてゐる。

教科については学校教育法施行規則第二十四条に、
小学校の教科は、国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作、家庭、体育及び自由研究を基準とする。

とある。ここに国民学校期に国民科の中の一科目とされていた国語は、

独立した教科の位置を回復する。

学校教育法第二十一条を法的根拠として検定教科書の時代が始まる。昭和二十二年九月十一日に文部省は検定教科書制度実施を發表、同年十二月十九日の教科用図書委員会官制改正、昭和二十三年二月三日の教科用図書の検定の要領告示、同年四月三十日の「教科用図書検定規則」改正、同年七月十日の「教科書の発行に関する臨時措置法」公布、同年八月十三日の「教科書の発行に関する臨時措置法施行規則」公布を経て同年十一月十二日に検定合格教科書名(日本書籍『太郎花子国語の本』三年上・三年下、ローマ字教育会『ローマ字の教室』二の巻)を發表し、昭和二十四年四月検定教科書の使用開始となる。

昭和二十四年度以降も「みんないいこ読本」は、「文部省としては、よい検定教科書が出そろってくるまでは、学校に不自由と不便とをかけないためにも、あるいは一著作者としてみずからの著作発行や改訂をやめるわけにはゆか」ず、「また現に新教科書の企画は進行途上にあるので、これは一応完成させる必要がある」ため(文部時報第八四六号)、民間の教科書とならんで発行されつつけたが、次第に採用部数が減り、のち発行中止となる。

(三) 第六期国定読本について

(三・一)『こくご』『国語』編集の考え方

昭和二十年九月十五日に文部省は「新日本建設ノ教育方針」を公表した。その中で教科書については「教科書ハ新教育方針ニ即応シテ根本的改訂ヲ断行シナケレバナライガ差当リ訂正削除スベキ部分ヲ指示シテ教授上遺憾ナキヲ期スルコトヲナツタ」とある。

昭和二十一年五月十五日、文部省は『新教育指針』を發行した。その「国語・国字を民主化すること」の中で「特に学校においては、話し言葉の教育に一そう力をそそぐとともに、教科書・教師用書などに正しくわかりやすい国語・国字を用ひるやうにしたいものである。」としている。

第六期は編纂趣意書も教師用書も發行されなかった。一方、米国教育使節団の示唆のもと、「学習指導要領」が發行された。『学習指導要領一般編(試案)』が昭和二十二年三月二十日に發行されたが、国語科の最初の『学習指導要領 国語科編(試案)』が發行されたのは第六期開始後八か月以上経た昭和二十二年十二月である。「学習指導要領」編集と教科書編集は平行して行われたという。

『学習指導要領 国語科編(試案)』の「第一章まえがき」には国語科学習指導の範囲と目標について述べている。

国語科学習指導の範囲は、
一 国語科としての指導

(一) 話すこと(聞くことをふくむ)

(二) つづること(作文)

(三) 読むこと(文学をふくむ)

(四) 書くこと(習字をふくむ)

(五) 文法

二 連関をはかるもの

(一) 全教科、ことに社会科課程の諸單元

(二) 学校生活の諸経験

(三) 家庭その他、一般社会生活の諸経験

としている。

国語科学習指導の目標は次のように示している。

国語科学習指導の目標は、児童・生徒に対して、聞くこと、話すこと、読むこと、つづることによって、あらゆる環境におけることばのつかいかたに熟達させるような経験を与えることである。

ところが、これまで、国語科学習指導は、せまい教室内の技術として研究せられることが多く、きゅうくつな読解と、形式にとらわれた作文に終始したきらいがある。今後は、ことばを広い社会的手段として用いるような、要求と能力をやしなうことにつとめなければならぬ。

(三・二)『いづい』『国語』各巻の編集

昭和二十年十月十三日、文部省に教科書局が設置され(勅令第五七〇号)、国民学校の国語科の教科書は第一編修課が担当することになる(文部省訓令)。国民学校が小学校となる昭和二十二年四月以降も第一編修課の担当である。教科書局が廃止される昭和二十四年五月三十一日まで『文部時報』は省内の職員抄録を三回載せている。それにより次のとおり知ることができる。

◎昭和二十一年二月十五日現在(第八二五号)

教科書局長 有光次郎

図書監修官 大島文義、山形寛、金子平一、戸田清、竹下直之、丸山

国雄、久世誠一、勝田守一、松尾俊郎、松田武夫、木下広居、関富

市、渡辺光、岡銀次郎、西村厳、重松伊八郎、石森延男、湯沢幸吉

郎、近藤唯一、鈴木久春、藤井信男、丸山俊朗、稲沼瑞穂、豊田武、

長谷川淳、浅野三郎、和田義信、小池善雄、谷口孝光、松本彦三郎、

永田義夫、島田喜知治、穴戸良平

調査官 広田栄太郎、吉田澄夫

◎昭和二十一年十月二十日現在(第八三五号)

教科書局長 有光次郎

第一編修課

課長 石山修平

国語 石森延男、藤井信男、(兼)麓保孝

◎昭和二十二年六月二十五日現在(第八四一号)

教科書局長 稲田清助

第一編修課

課長 林伝次

国語 石森延男、藤井信男、関富市

文部省で新しい教科書(国語とは限定していない)の編集がはじまったのは昭和二十一年一月ということである。

六・三・三・四制を昭和二十二年度から実施すると決定するのは昭和二十一年十二月末だが、予算の了解もついて六・三制の二十二年四月からの実施が最終的に決定するのは二十二年二月二十六日である。

第六期の教科書発行着手前の経緯について、昭和二十二年十二月に教科書局庶務課長近藤唯一は次のように記している。

「よい教科書を編修する」ことは、臨機的、消極的には従来の教科書を削除訂正する暫定本にはじまった。この仕事は、実際相当に手数のかゝることであつたので、かなりの時日を費したため、あと一箇年は暫定教科書のうち使えるものは使い、だんだん新教科書の体系を確立するほかあるまいと考えられた。しかし、新学制の問題が起つたのと前後して、右の考方は御破算にして、昭和二十二年度使用の分から全面的に六・三・三の制度に即応する新教科書を作るということになつたのは、時既に昨年の後半期に入つてからのことであつた。取急いで新教科書の基調たるべき社会調査、生徒児童の生活、興味、能力等の調査や学習指導要領や教科書の編修に着手したものゝ、一方において教科書の重要な基本になる学制そのもの、及びこれに伴う教科課程もまだ審議を終らない間に、これと併行してやつて行かねばならない情態であつたから、新教科書の発行には順序の上からも、時期的にも、非常な不便と無理があつたことはおおいがたい事実である。以上のように、従来とは根本から趣きを異にする事情の下に、小学校から新制高等学校、師範学校にわたつてその全学年の教科書を、一箇年に一・二学年分ずつ作つていた陣容で、一挙にやり遂げようというのである。弁解がましいが、なみたいていの苦勞でなかつたことは、ことさら申すもやばな話であらう。(文部時報第八四四号)

また石森延男は當時をふりかへつて次のようにのべている。

編集趣旨を定めることがなみたいていではなかつた。憲法もなし、教育基本法もなし、学習指導要領もなしのまっ暗闇のさ中のこと、しかも従来の教科書とは、一変した世界を築かねばならない。編集委員としても次の諸氏に加つてもらつたのもこのときである。(谷川徹

三・中野好夫・河盛好藏・矢沢邦彦・興水実・麻生磯次・片岡良一・川端康成・岩淵悦太郎・佐藤信衛・西尾実・小林英夫・吉田精一・石井庄司。(中略) 編集の方針は、人間性に即して社会性を重んじるという単純素朴なことだけであった。(『言語生活』昭和四十年五月号「占領下のころ」)

また、「国語の教科書を執筆した冲山光は、「CIEは、①明晰な思考、②生き生きとした話し方、③簡潔な表現、④楽しくわかりやすく、の四原則を示しただけで、自由にかかせてくれました」と証言している。」(竹前栄治『GHQ』一九八三年、岩波新書) という。

また文部省は新国語教材を一般から募集した。昭和二十一年四月九日公募し、当選者十二名の氏名文題は同年十月二十一日発表された。十月二十二日付けの朝日新聞によれば応募総数は一二二五点で採用は十二点、その当選者の内訳は児童生徒三名、訓導一名、詩人二名、作家三名、一般三名である。この発表内容は『学習指導要領 国語科編(試案)』(昭和二十二年) 巻末の参考二「小学校国語教科書における教材原作者ならびに原典一覧表」に「けん賞入選」として掲載された十三点とは完全には一致しない。公募については三十年以上たつてからの鼎談で(石森)「募集したけれども、一般の人から集まらなくて……」(井上)「こういう形にしたわけですね。立派な方ばかりですから。」(石森)「そうです。一般の人に募集しても、なかなか書けないでしょう。」という発言もある。(『みんないい子』読本をめぐって―国語科教育学の歩み―)『国語科学教育研究第七集』一九八一年六月、明治図書出版。『現代国語教育論集成 石森延男』に再録)。

第六期読本の最大の特徴は「当用漢字表」「現代かなづかい」の採用と平仮名先習である。

○当用漢字表

提出された字種と字体は「当用漢字表」(昭和二十一年十一月十六日公布、内閣訓令第七号・内閣告示第三十二号)による。このため第五期には漢字表記された桶・垣・柿・汁などは仮名表記である。

「当用漢字表」が簡易字体を本体として採用したために第六期から字体が新しくなった漢字は次の五十三字である。

囲医采駅円画会絵覚字関歆婦経輕鉦号残齒辞美写図数声浅銭総統
対体台鉄点当読麦発変宝豊万満予両礼旁湾沢(沢)は振り仮名つきの提出(以上第五期が旧字体)

独区(以上第四期が旧字体、第五期の提出なし)

権(第三期が旧字体、第四期・第五期の提出なし)

なお、研糸虫贅はすでに第五期以前から簡易字体が用いられた。

「当用漢字表」の字体の整理は昭和二十四年四月二十八日の「当用漢字字体表」(内閣訓令第一号、内閣告示第一号)でおこなわれる。このため、「当用漢字字体表」で初めて簡易字体が採用される氣縣單書來國などは、旧字体のままである。

昭和二十三年二月十六日に「当用漢字別表」(教育漢字)が発表された(内閣訓令第一号、内閣告示第一号)。しかし、その日以前に修正発行まで終わっていた二十三年度用の各学年の上巻は「当用漢字別表」をとりいれることはできなかった。二十三年度用の中巻と下巻については、巻末の一覧表において、該当する漢字を○でかこんでたとえば「○でつつかんだかん字は、「とう用かん字べつ表」(教育かん字)にはいつていないかん字です。」(『国語 第四学年中』昭和二十三年四月二日修正印刷、同二十五日修正発行)のような注記をほどこすことによってその旨をしめした。

おなじ昭和二十三年二月十六日に「当用漢字音訓表」(内閣訓令第二号、内閣告示第二号)が発表されたが、これも第六期には実現されていない。

○仮名づかい

「現代かなづかい」(昭和二十一年十一月十六日公布、内閣訓令第八号・内閣告示第三十三号)による。国定国語読本が国定第二期(明治四十三年)から採用していた歴史的仮名づかいは、昭和二十一年度末をもって終了した。

○仮名

国定読本では初めての平仮名先習である。『学習指導要領 国語科編 (試案)』(昭和二十二年度)では「書きかた」の一、二、三学年における目標の中で「主として、ひらがなをまちがいに書けるようにし、進んでは、かたかなも書け、漢字もまじえて書けるようにしていく。」としている。

つぎに、国定第六期の文字の扱い・文語・候文・横書き・ローマ字について述べる。

① 五十音図

『いく』の巻末に平仮名の五十音・濁音・半濁音・拗音・濁拗音・半濁拗音の表が掲げてある。『いく』の巻末に同様の片仮名の表がある。

② 漢字

各教科書の巻末に新出漢字の一覧表がある。この一覧表では次の五字が重複して提出されている。

- 横 「第四学年中」と「第四学年下」
- 外 「第三学年下」と「第四学年上」
- 句 「第五学年下」と「第六学年上」
- 兄 「第三学年下」と「第四学年上」
- 湯 「第四学年下」と「第六学年中」

また、「第五学年上」の一覧表十一字めの「着」は「看」の誤植である。さらに、本文中に振り仮名がなく用いられているにもかかわらず一覧表に載せられていない字が二十五字ある。

各教科書の一覧表の新出字数(重複提出の五字の修正後)と実際に出現している一覧表外の字種は次のとおりである。

書名	新出字数	一覧表外字
こくご一	二〇	労
こくご二	三〇	
こくご三	五一	
こくご四	四七	
国語 第三学年上	六七	者重
国語 第三学年下	八三	
国語 第四学年上	五〇	
国語 第四学年中	四三	
国語 第四学年下	五一	取輪
国語 第五学年上	五六	
国語 第五学年中	二三	慣傾穴昔鼻
国語 第五学年下	五四	
国語 第六学年上	二九	床普寝
国語 第六学年中	三三	
国語 第六学年下	四八	課使守状政善著筆忘
合計	六八四	二五

学年別の一覧表の漢字提出数を第五期と比較すると次のとおりである。

	第五期	第六期
第一学年	一一九	五〇
第二学年	二七六	九八
第三学年	二四四	一五〇
第四学年	二二五	一四四
第五学年	二三四	一三三
第六学年	一九三	一〇九
合計	一三〇一	六八四

一覧表の六八四字とここにあげた二五字は、すべて当用漢字表にふくまれる。このほか、挿し絵にだけ出現する字に「郵」「龍」がある。「郵」は当用漢字、「龍」は当用漢字外)

③ 促音および拗音の表記

第六学年のおわり(『国語 第六学年下』)まで右傍に小書きした。

④ 分かち書き

第二学年のおわり(『こく』四)まで行われた。

⑤ 送り仮名

全調査はしていないが、たとえば第五期で「表す」「現れる」「集る」と表記したものが「表わす」「現われる」「集まる」となっている。少なくとも「表わす」「現われる」「集まる」は文部省「送りがなのつけ方(案)」(昭和二十一年三月)と矛盾しない。

⑥ 外国の地名・人名及び外国語の表記

従来どおり促音・拗音は小書き、長音は「ー」を用いている。第五期と表記が異なるものには(第五期)イタリヤ(第六期)イタリア「ピヤノ」ピアノ「バタ」バター「ハンケチ」ハンカチ」などがある。

⑦ 文語文

第五期までとは異なり、文語文の課はない(短歌・俳句の課をのぞく)。口語文の課の中の一部の文語文としては『国語 第四学年中』「二あぶらぜみ」に「やがて死ぬけしきはみえずせみの声」があり、それ以降も例がある。

⑧ 候 文

国定第六期には候文も「候」の語もない。

⑨ 横書き・アラビア数字・英字

『国語 第四学年上』の「八 うさぎ日記」と『国語 第四学年中』の「七 いねを育てて」は横書きである。国定国語読本では初めてである。これらの横書きの本文中にアラビア数字と英字が出現する。これも国定国語読本では初めてである。

⑩ ローマ字

ローマ字教育の教材はのせていない。昭和二十一年七月に「昭和二十二年度からローマ字教育を行う」旨の文部大臣の発表があり、昭和二十二年二月二十八日に「国民学校におけるローマ字教育を行うについて」(国民学校におけるローマ字教育実施要項)の通達があったが、ローマ字は非必修(ローマ字教育を行うかどうかは学校ごとに決定する)であり、第六期の国語教科書では扱わない。

(三・三) 書誌・底本

第六期の教科書は発行前に連合国軍総司令部の検閲が必要であった。連合国軍総司令部の検閲は、正式には昭和二十一年一月十七日の連合国軍最高司令官総司令部覚書「日本教育制度管理政策ニ関スル一九四五年十月二十二日付指令ノ適用ニ関スル件」に「尚文部省ハコレラスベテノ教科書、教師用参考書及教材ノ英訳ヲ検閲及認可ヲ受ケルタメ当司令部宛提出ノコト」とあることにより始まる。

通達の類では昭和二十一年四月九日に「本要領ニ依ル教科書ハ学校教員、生徒、児童ノ需給数供給ノ予定ニシテ其ノ奥付ニハ必ず「Approved by Ministry of Education」ノ記入アルモノトス」(発教三十七号)とあり、六月六日には「本年度新学期から使用すべき教科書用図書は、連合国軍総司令部の許可を得て、印刷発行した国定又は検定のものに限るのであって、その奥付又はとびらには「Approved by Ministry of Education」と附記してある。」(発教六十三号)とある。

石森延男は次のようにのべている。

当時は、編集といっても、決定原稿はすべて英訳し、タイプに四通うち、CIEの係官に提出、検討があつて修正され、認可される。さらに組版許可を得て、印刷に回す。見本が認められて、はじめて正式の印刷が許可される。この手続きは、まことにきびしく行われ、もし誤りがあれば、文句なしに罰せられた。(前掲『言語生活』)

事前に提出する必要がなくなるのは戦後検定期にはいつてからの昭和二十五年九月十八日付覚書「日本教育制度の管理に関する最高司令官検

閣指令AG第三五〇号(昭和二十年十月二十二日)(CIE)の適用について」による。

第六期の書誌上の特徴に次のことがある。

国定第三期から国定第五期までは文部省原本があり、見ることができたが、第六期についてはまだ見ていない。

国定第二期から第五期までは奥付にある符号により使用年度を特定することができたが、終戦時以降はこの符号がない。

第六期の奥付には「Approved by Ministry of Education」と付記してあり、その日付が印刷されてある。

昭和二十三年八月十三日以降に発行された教科書の表紙には「文部省著作教科書」と印刷してある。これは「教科書の発行に関する臨時措置法施行規則」(昭和二十三年八月十三日、文部省令第十五号)の第一条に「文部省検定済教科書」又は「文部省著作教科書」と表紙に記載することがさだめてあるためである。

この期の底本は従来どおり、初年度使用本を用いた。ただし、『国語第六学年下』は昭和二十二年度用は発行されていないので、二十三年度用である。初年度使用本の決定は各巻の奥付の日付の情報によった。『国語第六学年下』以外の十四冊は二十三年度用の修正発行本があるので、発行、翻刻印刷、翻刻発行の日付が二十二年度用として矛盾のないものは二十二年度用と判断した。

この用語総覧の底本は以下のとおりである。

こくご一 第一学年前期用 昭和二十二年二月二十日翻刻印刷

昭和二十二年三月十五日翻刻発行

東京書籍 芦沢節氏蔵本

こくご二 第一学年後期用 昭和二十二年九月三十日翻刻印刷

昭和二十二年十月十日翻刻発行

東京書籍 芦沢節氏蔵本

こくご三 第二学年前期用 昭和二十二年二月二十一日翻刻印刷

昭和二十二年三月十五日翻刻発行

こくご四 第二学年後期用

国語 第三学年上

東京書籍 芦沢節氏蔵本
昭和二十二年十月十四日翻刻印刷
昭和二十二年十月二十五日翻刻発行
東京書籍 芦沢節氏蔵本

国語 第三学年下

昭和二十二年三月三日翻刻印刷
昭和二十二年三月二十日翻刻発行
東京書籍 筑波大学蔵本

国語 第四学年上

昭和二十二年十一月七日翻刻印刷
昭和二十二年十一月二十五日翻刻発行
日本書籍 国立教育研究所蔵本

国語 第四学年中

昭和二十二年五月三十一日翻刻印刷
昭和二十二年七月五日翻刻発行
東京書籍 筑波大学蔵本

国語 第四学年下

昭和二十二年十二月十八日翻刻印刷
昭和二十三年一月十日翻刻発行
東京書籍 東書文庫蔵本

国語 第五学年上

昭和二十二年三月十一日翻刻印刷
昭和二十二年三月二十日翻刻発行
東京書籍 芦沢節氏蔵本

国語 第五学年中

昭和二十二年六月三十日翻刻印刷
昭和二十二年七月二十日翻刻発行
東京書籍 芦沢節氏蔵本

国語 第五学年下

昭和二十三年一月七日翻刻印刷
昭和二十三年一月三十日翻刻発行
日本書籍 国立教育研究所蔵本

国語 第六学年上

昭和二十二年三月二十日翻刻印刷

国語 第六学年中

昭和二十二年四月十日翻刻発行
東京書籍 芦沢節氏蔵本

昭和二十二年九月六日翻刻印刷

昭和二十二年九月二十日翻刻発行

東京書籍 芦沢節氏蔵本

国語 第六学年下

昭和二十三年八月二十三日翻刻印刷

昭和二十三年九月二十日翻刻発行

東京書籍 国立教育研究所蔵本

解説の執筆にあたっては以下の文献を参考にした。

『文部時報』八二四号～八六七号 昭和二十一年一月～昭和二十四年十

二月

『学制八十年史』昭和二十九年三月 文部省

『近代日本教育制度史料』第十八巻 十九巻 二十三巻 二十五巻 昭

和三十二～三十三年 講談社

水谷三郎『教科書懇話会の歴史』昭和三十六年

『日本近代教育百年史 6』一九七四年三月 国立教育研究所

東京書籍株式会社史編集委員会『近代教科書の変遷』昭和五十五年九

月 東京書籍株式会社

『国語教育史資料』第六巻 昭和五十六年四月 東京法令出版

『昭和戦後史 教育のあゆみ』一九八二年八月 読売新聞社

『戦後日本教育史料集成』第一巻 第二巻 別巻 一九八二年十月～一

九八四年二月 三一書房

飛田隆『戦後国語教育史』昭和五十八年 教育出版センター

『有光次郎日記』平成一年八月 第一法規

『現代国語教育論集成 石森延男』一九九二年二月 明治図書

『学制百二十年史』平成四年十一月 文部省

『教科書年表』一九九三年二月 財団法人教科書研究センター

凡 例

- (一) 内容 (二) 底本 (三) 用語採集の範囲 (四) 見出し語の立て方 (四・一) 単位 (四・二) 読み (五) 見出し語の注記 (五・一) 見出し (五・二) 漢字 (五・三) 品詞 (五・四) 人名・地名などの注記 (五・五) 度数 (五・六) 表記 (五・七) 活用形 (六) 見出し語の排列 (七) 用例と所在 (七・一) 用例文 (七・二) 所在 (七・三) 層別

(一) 内 容

本書は、昭和二十二年度から用いられた第六期国定読本『こく』、『國語』（いわゆるみんないいこ読本。全十五冊。）の全用語を五十音順に排列し、その全用語のうちアからツの部までを収めたものである。

(二) 底 本

各種機関または個人の所蔵本を底本として用いた。詳しくは本書所収の解説参照。

これまでは底本に忠実にしたがうことを宗とし、編纂趣意書によって改める以外に手を加えることをしなかった。しかし、この第六期国定読本は、戦後の混乱の中で非常に急いで編集され、印刷されたものらしく、随所に誤植らしきものが見られる。これまでの例にしたがって初年度使用本を底本にしたところ、多くの誤りが目についたため、其の部分については二十三年度本を参照し、改められている場合はそれに従った。

(三) 用語採集の範囲

底本のうち、

- ① 目録
② 本文
③ 図版

の部分を用語採集の対象とした。ただし、③のうち、判読しがたい語は除いた。表紙・扉・ページを示す数字・奥付などの部分は、用語採集の対象としない。

なお、六期については編纂趣意書も教師用書も存在せず、したがって読み方を指示するような資料はすくなくとも公には出されていないが、編集者らが調査した新出漢字と読み替えは、テ以下の用例を収める『国定読本用語総覧11』の巻末にまとめて付録とする。

(四) 見出し語の立て方

(四・一) 単 位

自立語は原則として文節から助詞・助動詞を切り離したものを一単位とし、助詞・助動詞は、『現代語の助詞・助動詞——用法と実例』（国立国語研究所報告3）を参考にして単位を決定した。ただし、

① 形容動詞は立てない。形容動詞の語幹にあたる部分を「形状詞」として一単位とし、語尾にあたる部分を助動詞とする。

② サ変動詞「する」、および「いたす・くださる・なさる・もうしあげる」など意味上ほぼサ変動詞「する」にあたるものが、体言または体言相当のものにじかに接続している場合は切り離さない。

③ 助詞・助動詞を構成要素に持つ副詞・接統詞等の処理は別に行う。

④ 動植物名や固有名詞(人名・地名・戦争名・課名・題名など)は全体で一単位とする。

⑤ 同語形であっても品詞の異なるもの、口語・文語などで活用の異なるものは別見出しとして扱った。ただし、「会う」のように口語五段活用と文語四段活用の終止形が同形で併存するものは、一つの見出しにまとめた。

複合語などの後部にあられる要素については、次のように切り出して見出しに立て、↓で、主となる見出しを参照させて検索できるようにした。

あいて↓いろいろなあいて・はなしあいて

(四・二) 読み

五期までは、漢字表記の読みを決定するにあたって、編集趣意書または教師用書に新出または読み替えとして提示されている漢字を参考にしたが、今回はそのような資料がなく、編集者らの判断により、普遍妥当と思われる読みを採用した。したがって読みが問題となるような場合に、証拠として用いることはできない。

(五) 見出し語の注記

各見出し語ごとに、次のような事項を記した。

例				
見出し	漢字	品詞	度数	表記
うみ	海	(名)	81	うみ 海
				↓みずうみ
				後要素

用例

三454回

ぼくは海をわたってきたのだ。

所在(巻・ページ・行)

属別

見出し

漢字

品詞

度数

表記

活用形

ささ・げる「捧」(下二)3 ささげる《一ゲ》

十441 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめの
れいにささげて、その成功をしらせた。

(五・一) 見出し

現代仮名遣いによって、和語・漢語は平仮名、外来語は片仮名で記した。

活用語は終止形を見出しとし、活用しない部分と活用する部分との間に・(中点)を入れた。

(五・二) 漢字

語の識別のため、必要に応じて、見出し語にあたる漢字を注記した。

(五・三) 品詞

品詞は次の通りとし、後に示すような略号を用いて示した。なお、助詞と動詞は、さらに、細分類を行った。

名詞(名) 代名詞(代名) 形状詞(形状) 副詞(副) 連体詞(連体) 接統詞(接) 感動詞(感) 助詞 動詞 形容詞(形) 助動詞(助動)

助詞は次のように分類し、後に記すような略号を用いて示した。

格助詞(格助) 副助詞(副助) 係助詞(係助) 接統助詞(接助)

並立助詞(並助) 準体助詞(準助) 終助詞(終助) 間投助詞(間助)

また、動詞は活用の種類によって分ち、次のように示した。

四段(四) 五段(五) 上二段(上二) 上一段(上一) 下二段(下二) 下一段(下一) カ行変格(カ変) サ行変格(サ変) ナ行変格(ナ変) ラ行変格(ラ変)

(五・四) 人名・地名などの注記

見出し語の意味・用法について、必要に応じて、「人名・地名・課名・話し手名」などの注記を加えた。なおその場合には品詞は省略した。

(五・五) 度数

見出し語ごとに、その使用度数(用例の数)を記した。

(五・六) 表記

その見出し語の全用例について、片仮名・平仮名・漢字や、振り仮名の有無などの表記の異なりを列挙した。二種類以上の表記がある場合は、次の順とした。

- ① 片仮名
- ② 平仮名
- ③ 変体仮名
- ④ 漢字(片仮名の振り仮名つき)
- ⑤ 漢字(平仮名の振り仮名つき)
- ⑥ 漢字(振り仮名なし)
- ⑦ アラビア数字
- ⑧ ローマ字

(五・七) 活用形

活用のある見出し語の用例について、活用形の異なるものを列挙し

た。ただし、ここでのいう活用形の異なりとは、未然形・連用形などの別ではなく、語形上の異なりをさす。

活用形を列挙する際、活用しない部分(見出しで、中点・より前の部分)は―で記し、活用する部分を、原文通りの仮名遣いで、片仮名によって示した。

また、二つ以上の活用形がある場合は、五十音順に並べた。

(六) 見出し語の排列

見出し語の排列は現代仮名遣いの五十音順とする。ただし、片仮名は平仮名に、濁音・半濁音は清音に、小字(アイウエオ つやゆよ)は普通の仮名に、長音符号「ー」は直前の仮名の母音に、それぞれ置き換えたものとみなして、一字目から順次、五十音順に排列する。

同じ仮名の連なりとなった見出しは、次の各項を一字目から順に適用して排列する。

- ① 清音↓濁音↓半濁音
- ② 小文字↓大文字 すなわち、拗音↓直音、促音↓直音
- ③ 普通の仮名↓長音符号

以上によっても排列の決らないものは、次の各項を順に適用して排列する。

- ① 次の品詞順とする。

名詞↓代名詞↓形状詞↓副詞↓連体詞↓接続詞↓感動詞↓助詞↓動詞↓形容詞↓助動詞

a 名詞のなかでは次の順とする。

課名↓話し手名↓人名↓地名↓それ以外の名詞

b 助詞のなかでは次の順とする。

格助詞↓副助詞↓係助詞↓接続助詞↓並立助詞↓準体助詞↓終助詞↓間投助詞

c 動詞のなかでは次の活用順とする。

四段↓五段↓上二段↓上一段↓下二段↓下一段↓カ変↓サ変↓ナ変↓ラ変

② 漢字表記の付けられるもの、付けられないものの順とする。

a 漢字注記の付けられるものについては、字数の少ないものから多いものの順とする。字数が同じ場合は、一字目の画数順とし、一字目が同画数の場合は、『康熙字典』の順に並べ、同字はまとめたうえで、二字目の画数順とする。

b 漢字表記の付けられないものについては、平仮名↓片仮名（外来語）の順とする。

(七) 用例と所在

(七・一) 用例文

用例は、仮名遣い・分かち書きなどまで、できるだけ原文通りとした。漢字字体は、対応する普通の明朝活字体とした。

用例の長さおよび体裁は、巻8から見出し語により二通りに分けた。すなわち出現頻度の高い語（主として助詞・助動詞）はKWIC形式とし、それ以外のものは、従来通り可変長とした。用例文の中間の一部を省略する場合は、〈略〉のように示した。

同一見出し語に含まれる用例は、底本における出現順に排列した。

用例中、見出し語にあたる部分は太字で示した。

なお、五十音図・いろはは、本文ではそれぞれ一部分を示すにとどめ、付録に全体の形を示す。

(七・二) 所在

用例は、見出しにあたる語のはじまる位置によって、底本の巻・ページ・行の順で所在を示した。第六期国定読本は、学年によって書名の表

記が『こくご』と『國語』に分れるが、巻番号は通して数える。すなわち、『こくご』一〜四が巻一〜四に、『國語』第三学年上下が巻五・六に、『國語』第四学年上中下が巻七〜九に、第五学年上中下が巻十〜十二に、第六学年上中下が巻十三〜十五にあたる。

なお、図版中の語は、

五36図

のように記し、図版中の語であることが分かるようにした。

(七・三) 層別

用例文の文体上の性格を次の三類八種に分類した。

① 口語文 文語文 候文

② 散文 韻文 手紙文

③ 地の文 会話文

以上のうち、口語文・散文・地の文については注記せず、それ以外は、上記の分類の第一字目によって、**文** **候** **韻** **手** **会** のように区分を示した。ただし第六期には候文は出てこない。

なお、目録と図版中の語については、原則として層別の表示を行わない。

あ

あ (感) 25 アあ

三73 9 会 「あ、そうだ、光だ。」

四103 8 会 あ、そうか。

五10 5 会 あ、あそこにきれいなさくら。

六22 5 会 あ、だれかと思ったたら、きりぎりすさんでしたか。

六84 3 会 あ、つりばりをとられた。

六92 2 会 あ、さようでございましたか。

六96 8 会 あ、それにちがいない。

六97 2 会 あ、これですっかりくになりました。

六97 7 会 あ、これだ。

六104 2 会 あ、人がこつちをみている。

七23 9 会 あ、わすれていた。

七26 5 会 あ、そうか。

七72 5 会 あ、ほたるだ。

九62 1 会 あ、きたな。

九101 9 会 あ、そうそう。

九133 6 会 「あ、こうもりだな。」

九134 1 会 「あ、びっくりした。」

十19 12 会 「あ、きれいなにじ。」

十49 8 会 キントットガ——アドコヘイタノ——

——イコウ

十54 4 会 「キントットガ」「アドコヘイタノ」

は、そのことをいいあらわしています。

十一11 6 会 あ、大学のボートだ。

十一45 1 会 「あ、まちがった。」と、大声でいいました。

十一46 1 会 「あ、まちがった。」とさけんだ弟よ。
 十三37 9 会 あ、おぼさん。
 十三40 8 会 あ、真ちゃん。
 あ 2 あ

二4 3 会 『あ』のつくことばを、みんなであ

つめてみましょう。」「あたま——足——あこ

四78 10 あ——雨、ゆき、あられ。

ああ (副) 1 ああ

六9 1 会 ああいうねじはもうなくなつて、あれ一

つしかないのだ。

ああ (感) 53 アア ああ

一64 4 会 ああ、つかれた。

二54 3 会 「ああ、そのりんご、いちろうにいさ

んからもらったのです。」

三5 9 会 ああ、お日さま。

四18 7 会 「ああ、かるいよ。」

四63 5 会 「ああ、よかった、よかった。」

四107 1 会 ああ、みえる、みえる。

四107 8 会 ああ、だんだんちかづいてくる。

四133 1 会 ああ、これははずかしいことを申し

ました。

五53 8 会 ああ、あれね。

五86 1 会 ああ、そうか。

五93 8 会 「ああ、きれいなお月さま。」

五95 8 会 ああ、よかった。

六6 11 会 ああ、なんというなさない身のうえで

あろう。

六15 9 会 ああ、助かった。

六26 9 会 ああ、あたたかい、あたたかい。

六33 10 会 ああ、おどろいた。

六36 4 会 ああ、またふいてくるよ。

六40 1 会 ああ、いい考えがある。

六50 1 会 楽しいことがあるような、ああ、さわや
 かな朝の空。
 六50 5 会 考えごとでもきそうな、ああ、おおらか
 な晝の空。

六50 9 会 きたくないこともきえそうな、ああ、おご

そかな夜の空。

六60 6 会 アアサワヤカナ——七 アサノソラ——

五

六90 6 会 ああ、おいしい水。

六138 2 会 「ああ、こわかった。」

七18 9 会 ああ、とんでる、とんでる。

八43 6 会 「ああ、かわいいひめです。」

八47 11 会 ああ、せいっぱいはたらいて、晩ごはん

もいただいた。

八51 6 会 ああ、『びんぼう』か、『びんぼう』はう

ちじゃおことわりだ。

八52 7 会 ああ、『びんぼう』か、『びんぼう』はう

ちじゃたくさんだ。

八53 10 会 「ああ、『びんぼう』か。」

八75 4 会 「ああ、ありがたい。」

九138 10 会 「ああ、いいとも。」くもは、ちょう

ちよを手ばなしました。

十15 12 会 ああ、すきとおった青い色ですか。

十一13 6 会 ああ、われわれみんな、遠い國から旅し

てきた旅人のような氣持のする目だ。

十二17 9 会 ああ、こおろぎさんですか。

十三6 11 会 ああ、そのさかな春のきざしは、よも

にあらわれて、目に見えぬかすみのようにたなび

いている、

十三7 6 会 ああ、季節のこういうのどかなとき、こ

ういうしずかな午前にあつて考える、

十三41 8 会 ああ、リックサクも二つある。

十三46 5 ああ、ヨットのようだ。
 十三55 1 会 ああ、よく来たね。
 十三60 1 会 ああ、あれか。
 十四38 2 会 ああ、いい音がする。
 十四38 4 会 ああ、聞える、夜明けの音楽が聞える。
 十四60 12 会 ああ、やっと思いだした。
 十四97 7 ああ、そのときもとき、ちょうどマッチ
 はもえつくしてしまつて、女の子のそばには、あ
 つい、かたいかべしかのこつていなかった。
 十五18 1 文 閣 ああ、日本、まさに立つべし。
 十五63 2 会 ああそうか。
 十五67 7 ああ、なつかしい新島のおばさんだった。
 十五69 9 ああ、新島のおじさんは、私を京都まで
 もつれて来て、朝夕かわいがつてくださったのだ。
 十五71 2 会 ああ、満ぼうがいすにこしをかけて、
 ペンをにぎっている。
 十五75 5 — ああ、忘れもしない、満面べにをさ
 して語られたホランド博士のあの熱情のことば。
 十五76 3 ああ、新島のおじさんが、いまなお満ぼ
 うを守つていてくださったのだ。
 十五113 3 会 ああ、そうだ。
 あああ (感) 1 あ、あ、あ
 十60 9 会 あかちゃんは、「あ、あ、あ」といった。
 アール ↓いちアールあまり・さんじゅうアール・な
 んぜんアール
 あい [会] ↓めぐりあい
 あい [合] ↓おきあい・おしあい・おしあいする・
 おつきあい・おつきあいする・ぐあい・しあい・し
 りあい・つかみあい・つきあい・つづきぐあい・ば
 あい・はなしあい・まげぐあい・わりあい
 あい [問] ↓たにあい
 あい [愛] (名) 8 愛 ↓ことばのあい・ははのあ

い
 十一16 6 、いちばん美しい花、天と地にかがやく
 ものの中で、いちばん清らかな、すみきつたたま、
 それはおかあさまの愛です。
 十一18 1 朝も、晝も、夜も、流れやまぬ愛のしみ
 ずに、うるおされ、やしなわれて、のびていく命
 のわか葉。
 十四4 6 それは、フィリップの作品の中にみな
 ぎっている大きな愛の氣持、そこからさしてくる
 とうとい光のためなのです。
 十五60 10 長男に生まれて父母の愛を一身に集めて
 いた身にとっては、
 十五75 3 会 「愛はにくしみよりも強い。」
 十五109 8 会 「母の愛の喜び」です。
 十五109 9 「母の愛の喜び」を手をたたいてむかえ
 ます。
 十五112 10 会 おかあさんたちの愛は、喜びの中でも、
 いちばん美しい喜びなんですよ。
 あいいる [藍色] (名) 1 あい色
 十五54 6 会 そのあい色のふうとうには見おぼえが
 ある。
 あいうえお 2 アイウエオ
 六110 11 みんなアイウエオ、カキクケコ——という
 五十音の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中に
 はいっている音ばかりではないか。
 六112 6 そうして、こんどは、アイウエオ、カキク
 ケコから、じゅんじゅんにいってみたところが、
 あいうえお (略) (五十音図) 2 アイウエオ (略)
 あいうえお (略)
 一66 図 あいうえお (略)
 三18 図 アイウエオ (略)
 あいこ [相子] (名) 5 あいこ

九98 7 会 でも、あいこだ。」やまだ「なにがあいこ
 だ。」たかぎ「じょうぎひろつてやったじゃないか。
 九98 8 会 なにがあいこだ。」たかぎ「じょうぎひ
 ろつてやったじゃないか。」やまだ「ぼくだって、
 すみをみつけてやったじゃないか。」
 九98 11 会 だから、あいこだ。
 九99 5 会 だから、あいこだらう。
 九99 10 会 よし、じゃあ、あいこになるように、も
 う一つなぐつてやる。
 あいこくしゃたち [愛國者達] (名) 1 愛國者たち
 十三18 3 いかにして、國運をもとどりにするか、
 これが、デンマルクの愛國者たちの心をくだいた、
 もつとも大きな問題でありました。
 あいこでしよ (感) 2 あいこでしよ
 一12 5 圖 じゃんけんぽんよ、あいこでしよ。
 六127 2 会 「あいこでしよ。」五ひきのうさぎさん
 たちは、大きな声でじゃんけんをして、おにをき
 めました。
 あいさつ [課名] 2 あいさつ
 一3 3 あいさつ……二十四
 一24 7 十一 あいさつ
 あいさつ [挨拶] (名) 10 あいさつ ↓ごあいさつ
 五52 9 「略。」と、あいさつをしていく人もあ
 ります。
 十14 9 おとうさんのそばへきて、あいさつをして
 から、「略。」とたずねました。
 十一41 7 圖 廣場にどうたおとなりどうし、え顔
 にほころびあいさつをする。
 十二89 5 ごく簡単な「ありがとう」というあいさ
 つにしても、
 十二89 6 感謝の心持をこめていうときと、ただと
 おり一べんのあいさつとしていうときとは、い

いかたもわって来るであろう。

十五44 10 「たいへん焼物がおすきのようですが、あなたは——」と、あいさつともつかず、返事ともつかない答えかたをした。

十五55 2 あいさつを終わって、用事をきりだすと、

十五76 9 「略。」と、意外なあいさつをされた。

十五79 4 私には、あなたがた日本の小学校のみなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。

十五80 11 そう思いながら、年よりの私は、日本の小学校のみなさんに、はるかなあいさつを送り、

あいされかた 「愛方」(名) 1 愛されかた

十五61 5 「略。」と、必ず書きそえてあったの

を見ても、その愛されかたがわかる。

あいしあう 「愛合」(五) 2 愛しあう 《ウーッ》

十五119 4 私は、愛しあう人たちには、いつでも

しんせつにいたします。

十五122 1 愛しあって生きていけ。

あいじょう 「愛情」(名) 4 愛情

十九 9 その少女のわけてくれたくりは、むじやきな心からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。

十一78 4 そうして、あたたい愛情のこもったことばで、しっかりとするようにと病人を上げました。

十一78 7 病人がなんだかうれしうにその話す声に——愛情とかなしみとのまじりあった、しみじみとしたそのちょうしに、じつと耳をかたむけて

いるようにみえたからです。

十二42 5 これは、ケラーのサリバン先生に対する信頼と、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、

一つになったおかげです。

あいず 「合図」(名) 3 あいず

七52 4 「略。」しんぼんの先生のあいずで、ぼくらは場所をこうたいした。

九110 2 「略。」というあいずをされた。

十68 1 ふたりは、それをあいずのようにして、ぬき足さし足で、そつとおくのへやに近づき、

アイスクリーム(名) 1 アイスクリーム

十三32 7 面白い、おいしいアイスクリーム

アイスクリームうり(名) 1 アイスクリーム賣り

十三32 7 アイスクリーム賣りがやって来る。

あいする 「愛」(サ変) 12 愛する 《サー・シースル》

十17 10 小さな心にも、ことばを愛することを

知って、勉強したら、どんなにしあわせでしょう

十37 10 世界じゅうの人から愛される眞珠、これ

を、人工で作りますことはできないものだろうか

十二32 12 私は、先生——「略」、私を愛するため

にきてくださった——そのかたの両うでの中に強

くできあげられました。

十二102 2 これをみても、平和を愛した古代の人た

ちの氣持がよくわかるではありませんか。

十四7 3 自分にはまだ子どもたちがのこつて

いる、子どもたちはじゅうぶん愛してしてくれる

十四9 3 妹にしても、私にしても、心からおか

あさんを愛しているからだ、

十四9 11 自分を愛してくれる子どもたちのこと

を思つて、安らかに生きていくのださるのだと、

思いたいのです。

十五74 10 神の目から見れば世界の人類はすべてそ

の愛する子どもなのだから、人種的な区別など、

あるべきはずはない。

十五79 8 そうした風景から、自分の國を愛すると

いうことを学んでいる日本の子どもさんたちにも、

十五102 9 これは、『両親を愛する幸福』で、

十五108 4 『愛することの大きな喜び』ですよ。

十五120 8 みんな元氣で、この學校を愛してくれ

あいそ 「愛想」(名) 1 あいそ

十五85 12 あいそのいい人たちだからね。

あいた(感) 1 あいた

九132 8 「あいた、あいたたた。」

あいだ 「間」(名) 77 あいだ 間、このあいだ

二59 1 みなさんのつかっているつくえも、

こしかけも、長いあいだはたらいできました。

三26 3 長いあいだかかって、やっと切りたお

すことができました。

三77 5 あなたたちがねているあいだ、お日

さまは、よその國の子どもがあそべるように、

光をあげにいくのです。

三102 8 また、小人のようだったおひめさまは、

三月ほどのあいだに、すくすくとせいがのび

て、

四35 4 生徒さんが子どものげたのはなをおを

上げるあいだ、かさをさしてあげたのですね。

四114 6 長いあいだ、ほんとうにおせわにな

りました。

五37 3 このような木が、たおれて土にうずまり、

長いあいだかかって石炭になったのです。

五52 5 ゆうごはんをまつあいだ、私は、まさこを

うば車に乗せて、はるおと大通りにでました。

六26 10 夏のあいだに、こんなにたぎぎをあつめ

ておいて、よかったね。

六38 1 立ちならぶビルディングのあいだから、と

びあがつてくる親子のつばめ。

六41 2 ビルディングのあいだから、略、列をつ

くったつばめのむれが、かかしの方へとんでくる。
 六54 9 ㊦ 「ここに立って、お月さまを枝のあいだからみてごらん。」
 六54 10 すると、月は枝のあいだにじつとしていますが、雲はさっさと走っていきます。
 六55 9 月は、もうさっきの枝のあいだにはなくて、木をずっとはずれてしまっていました。
 六102 9 おや、だれかが、しょうじのあいだから顔をだしている。
 六142 4 そのあいだに、うさぎさんたちは、手をつないで、そこをにげだしました。
 七38 6 私は、人と人のあいだをかきわけていこうとしました。
 七45 7 それから、二三どのおし問答が、ふたりのあいだにとりかわされた。
 七52 11 ぼくらのほうのボールが、よくあいてにあたって、ちよつとのあいだに、勝つことができた。
 七56 5 家と家とのあいだに、ほそ長く光っています。
 八9 8 茶のまへにげこみ、そこにすわっている私のひざのあいだにもぐったり頭をつっこんだりします。
 八74 1 がんのむれが、そろってあしのあいだからとびたつた。
 八74 6 青いけむりが、くらい木のあいだから雲のようににたちのぼった。
 八75 10 そのあいだも、たまの音はあしのあいだに鳴りひびき、てっぼうはひきつづいて火ふたをきった。
 八75 11 たまの音はあしのあいだに鳴りひびき、
 八87 9 あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どんなに苦しんだか、

八99 2 あいだを30㍥ぐらいずつあけ、きそく正しく植えました。
 八100 9 葉と葉のあいだから、新しい葉がたくさんできました。
 八103 5 花のさくのは、1日にすこしのあいだだけだと思いました。
 八108 1 ぼうのあいだにいねをはさんでこいたらよくとれました。
 八108 8 いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこすつてもみがらをはじきました。
 九36 4 ㊦ かこうがんの岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみずが、せかれて、たきになり流れになつて、
 九36 7 ㊦ 夏のあいだ、〈略〉、この谷まの流れにはいつて、頭から水をあびるのが楽しかったです。
 九96 5 そのあいだに、やまだがいきかけける。
 九119 9 水は大きなごろごろした石ころのあいだから、ブツブツと音をたててわきだして、
 九127 6 ある日の夕がた、このくもは、木と木のあいだに、巣をかけました。
 九132 9 くもが、手でさすっているあいだに、みつばちは、〈略〉、にげていつてしまいました。
 十二12 ㊦ 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。
 十三33 9 このあいだに立って、佐吉をはげましたり、なぐさめたりしたのは、母であつた。
 十三46 佐吉が、はじめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、たて糸のあいだをぬっていく横糸であつた。
 十三75 ㊦ じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうをとって遊んでいました。
 十一23 4 父親の生きているあいだは、みんなはげ

ましあつて、どうにかこうにか切りぬけてきました、
 十一73 8 待っているそのあいだが、少年にはたいへん長く思われました。
 十一77 4 感謝するような色が、そのひとみに、ちよつとのあいだうかぶようにみえました。
 十一79 6 心を休めるような希望と、胸をこおらせるような失望とのあいだで、たえずはらはらしていました。
 十一80 11 ㊦ もうすこしのあいだですから。
 十一85 4 ㊦ ぼく、ここに五日のあいだいました。
 十一90 2 医者は、病人の上にしばらくのあいだうつむいていましたが、
 十一92 10 なんと呼ぼうかと思つていううち、五日のあいだ呼びなれていた名が、しぜんと口にはぼつてきました。
 十二34 3 それからいく日かのあいだに、〈略〉、私は、「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさんことばをつづることを覚え、
 十二36 12 水がいきおいよく流れているあいだに、別の手に、〈略〉、「水」という字を書いてくださいました。
 十二55 5 子どものときからきかれた傳説が、そのあいだにおりこまれているからである。
 十二55 9 ただ人々のあいだで語り傳えられているだけで、
 十三9 3 ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知つて、ととのつた知識として、
 十三11 3 一つのことと他のこととの間に、すこしのつながりもなく、原因と結果との関係もないのに、
 十三19 3 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたたり、

道路をつくったり、みぞをほったりするときに、よく、國土の地質や地味を研究しましたが、

十三219 これをノルウェー産のみの間に植えて

みると、両種のみは、たがいにならんで生長し、

十三335 だから、車の動いている間、たえまなく、「キリキリ、リリリリ」がびびく。

十三3811 その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるくるまわしながら、楽しそうなようす。

十三407 その間、かた手に持ったさっきの手紙をくり返して読む。

十三453 三郎くんのことばの間に、あいてがなにかいっているわけです。

十四81(手) 一生の間、いくたびとなく、おとうさんのおことばを思いだすことにします。

十四228(窓) 長い間つかっているうちに、すっかりなれてしまって、日本語になったと考えていいだろう。

十四277(窓) 長いあいだつかっているうちに、もともとの日本語のように思われてきたのだ。

十四455 フランク・マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、黒い波の間をおよいでいました。

十四4811 助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人たちが力をおとさないように、

十四763 これと同じような氣流のじゅんかんが、もっと大じかけに、陸地と海との間に行われてお

ります。

十四766 これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。

十四768 これが、(略)、アジア大陸と太平洋との間におこると、それがいわゆる季節風(モンスーン)で、

十四943 女の子は、二つの家の間に、ちよつとした、身をかくす場所を見つけた。

十四959 それがもえ続いている間、大きな前のにすわっていた。

十四983 たくさんの小さなろうそくが、みどりの枝の間からかやいて、

十五5110 祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年の月日をへだてて、いま、まごたちによってふた

たび結ばれることになった。

十五801 いろいろな國の人々の間に、友だちとして心のかよったおつきあいができるようになったのは、

十五825 水がめや、ひつくりかえったかなえなどの間で、たべたり、飲んだり、

十五941 その間に、「はちきれそうならい」は、光のこのあたりを、力まかせにおさえました。

十五1196 「光」の方へ行き、ふたりは長いあいだ

だきあいます。

あいだがら 「間柄」(名) 1 間がら

十五607 私の父とは、心をゆるした間がらのこととて、両者のつきあいはかなりひんぱんであった。

あいたた (感) 1 あいたた

六1611(窓) 「あいたた。」と、大きな声をたてました。

あいたた (感) 1 あいたた

九1328(窓) 「あいた、あいたた。」くもが、手でさすっているあいだに、

あいた (感) 1 あいた

四487 「あいた。」と、声をたてました。

あいて 「相手」(名) 28 あいて 相手 いろいろなあいて・はなしあいて

四194(窓) お話が あいて なしにはできないように、文も あいて なしには 書ける ものではあり

りません。

四194(窓) 文も あいて なしには 書ける ものでは

ありません。

四197 先生が こう おっしゃったので、みんなはそれぞれ あいての 人を きめてから、文を書きました。

四201 まさおさんは、あいての 人を「おかあさん」にきめて、つぎのような文を書きました。

四267 「きりぎりす」をあいてに書きました。

四284 きよしさんは、じぶんを あいてに書くことに、

七491 ぼくのほうは、センターが外野へでしまったので、あいてのセンターが、「(略)。」とさ

わいだ。

七5210 ぼくらのほうのボールが、よくあいてにあ

たって、ちよつとのあいだに、勝つことができました。

七531 あいては、町の、いちばん強い学校だ。

七5311 あいてのセンターは、ぼくをねらった。

九9311 両方ともあいてに氣がつくが、わざと知らないふりをしている。

十325 あいての人をうやまうとともに、自分のつとめをはたすだけの勇氣を、もちたいと考えます。

十361 世間からはますますわられて、だれひとりあいてにしてくれなくなり、まずしさはいよいよ

よせまってくる。

十4610(窓) あなたが自然をあいてとして、眞珠を世界の人々にあたえたことに、心から敬意をささげ

- 十一62(会) みるみるうちにあいてをぬいてしまおう。
 十二827 清水選手の相手はチルデン選手でした。
 十二858 相手を一きよにうちのめすぜっこののチャンスです。
 十二885 相手の人のいうことばのわけをよくききかけて、それによくかなうようにしなくてはならない。
 十二8812 話をきくときには、相手の人のいっていることばをよくききわけ、のみこまなければならぬ。
 十二891 そうでないと、相手の人に満足と與えることができないし、また自分の誠意も通じない。
 十二8912 それは自分の生活を軽らくにし、相手の人をいやしめることにもなるからである。
 十二933 書くことは、話すこととちがつて、その場のようすが相手にみえないから、
 十三446 ただ、あいてになる人が、見物人の目につかないだけです。
 十三453 三郎くんのことばの間に、あいてがなにかいつているわけです。
 十三454 ですから、文字にあらわれないあいてのことばを考えて、〈略〉、電話の話らしくしなければなりません。
 十三457 あいてのいうことを聞いて、それから三郎くんのことばをいい、
 十五2912 右手に短刀をふりかざし、左手で女の子をかばい、昔の物語に出てくる英ゆうのように、このただけだけしい相手を待ちかまえていました。
 十五327 血まなこになって目の前を相手を相手しているものには、なんにも耳にはいりません。
 あいにく「生憎」(副) 1 あいにく
 八495(会) 「王さまに、さしあげたいことはやまや

- まですが、わたしには、あいにく、一まいのシャツの持ちあわせもございません。」と答えました。
 あいらしい「愛」(形) 1 愛らしい《一ク》
 十二2911 このごろふとつてきて愛らしくなった民ちゃんをだいてやろうとすると、
 アイリッシュ・ナショナルほけんがいしや (名) 1
 アイリッシュ・ナショナル保険会社
 十四454 アイリッシュ・ナショナル保険会社の社員、フランク・マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、
 アインシュタイン (人名) 1 アインシュタイン
 十五811 私たちの時代がはやく思われるようになることをいひます。——アインシュタイン
 アインシュタインはくし (人名) 1 アインシュタイン博士
 十四344 アインシュタイン博士の話によると、うちゅうは、けつしてはてしのないものではありません。
 あう「会」(四五) 23 あう 会う 《イ・ウ・オ・ツ・ワ》↓おあいする・であう
 三1037(会) 「光るようにうつくしい かぐやひめに、ひと目でも あいたいのものだ。」
 八326(会) 「では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう。」
 八3211 ふたりは、天の川で楽しくあうことができました。
 八738(会) きみはみつともないから、いいしあわせにあうかもしれないよ。
 九189 また、ときには、あらしや、そのほかの思いがけないさいなんに、あわなともかぎりません。
 九303(文) ほしいそぐいぬにあいけり木のめ道

- 九449(手) ぼくはみなさんにあつてお話がしたいと思いましたが、
 九1397(会) わたし、おかあさんにひと目あったら、もう、命はほしいとは思いません。
 九1441 自分は、〈略〉、たまたま、あの白いちようちよにあうことができた。
 十101 どこへいっても、遊びたわむれている子どもにあいました。
 十109 プラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。
 十146 その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少年にもあいました。
 十二84 ある日のこと、母親がなつかしくなり、会いたくなったので、学校から家へもどってきました。
 十三396(会) あいたいな、早く……はい、四時ね。
 十五5610(会) 日本留学生第一号とでもいおうか、私をはじめて会った日本人について話をしあけよう。
 十五962(会) 『ふとった幸福』どもが、ひどい目にあわせたのだよ。
 十五967(会) かけて行って会おうよ。
 十五969(会) ほかの者にまで会っているひまはないよ。
 十五9911(会) 会ったおぼえがないもの。
 十五1005(会) この人、まだぼくたちに会ったことがないんだってさ。
 十五1027(会) こんどあったら、わかるでしょう。
 十五1072(会) だって、ぼく、その兄弟にあつたよ。
 十五1146(会) さあ、これで、おまえたち、私に会ったのだから、あしたまた、あの小さな家に帰って、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだろう

ね。

あう「合」(五) 11 あう 《ーイーウーツーワ》

↓あいしあう・いいあう・いましめあう・うけあう・おしあう・おそれあう・かさなりあう・からみあう・かわいがりあう・ささやきあう・しあう・しんじあう・だきあう・たすけあう・つきあう・つきあう・とけあう・とりあう・にぎりあう・にくみあう・はげましあう・はなしあう・はまりあう・まじりあう・まにあう・むかいあう・むきあう・もたれあう

三60 2 みんなの心があわないと、どこへもいけません。

三60 10 合 「みんなの心があわないと、どこへもいけないじゃないか。」

三63 1 みんなの心があいましたから、いっしょになって、丘の大きな木のところまでのぼりました。

三65 4 また、心があわなくなりました。

三66 1 合 「心があわなくてはだめ、だめ。」

三69 2 みんなの心があいました。

六19 1 合 バイオリンの「なかなかよくあつたね。」

六19 3 合 こんなによくあうと、たいこのうちがいもあるよ。

十二89 3 自分が話をするときには、その場のようすによくあうように、氣をつけて話さなければならぬ。

十三11 2 このように、道理にあわぬことを信ずるのを、迷信という。

十五38 2 「海」を「うみ」などをつかって、その漢字の意味にあった日本語をあてて読むこともした。

あえぐ「喘」(五) 1 あえぐ 《ーギ》

九105 8 みんなだまって、あえきながら登っていった。

あえる「会」(下) 3 あえる 《ーエーエル》

三78 8 合 だれにもお日さまはとられません。雲

さえていかなかったら、まいあさあえますよ。

九148 3 合 うまくおかあさんにあえたかしら。

十一87 7 合 じきまたあえるね。

あえる「敢」↓せきあえる

あお「青」(名) 5 あお 青

一33 3 お日さま——にじ——あか——あお——きいろ——まる——四かく——三かく——よしこさんのかいたことば。

二14 7 赤や青やむらさきのたまができました。

三82 4 ジュデーは青がすきでした。

五11 10 合 赤と青のしるしのついたもの。

十四63 7 日光にすかして見ると、湯げの中に、に

じのような、赤や青の色がついています。

あおあお「青青」(副) 3 青々

三67 10 青々とした中に、ふんわりした、小さな、

白い雲がとんでいました。

七66 4 青々とはれて、すすきすこしゆれている。

十二14 3 まだ青々とした木の葉の中から大きくの

ぞいているのもいい。

あおい「青」(形) 26 あおい 青い 《ーイーク》

二66 6 合 「あかい——あおい——あつまる——あ

そぶ——あさい——あまい——」

二37 10 合 空は、ほんとうに青い色でした。

三82 2 合 「青い色、みえた。」ジュデーがいい

ました。

五35 1 ガスこんろの青い火は、ガスがもえている

のです。

五51 4 合 島をとりまく 青い海、青い海。

五51 5 合 島をとりまく 青い海、青い海。

五58 5 合 なんだか、青い、青い水の中にういてい

るようだ。

五58 5 合 青い、青い水の中にういているようだ。

五67 1 合 そうして、青い海へはなしてやったよ。

七9 2 星のちらばった青い夜空は、子どものクレ

ヨン画と同じだ。

七25 7 合 それから十日すぎて、からだ黒つぽ

かったのが、青くかわってきたんですよ。

八59 6 山の上には、青い空がすきとおるようす

んでいる。

八74 5 青いけむりが、くらい木のあいだから雲の

ようにたちのぼった。

八104 3 二つにわってみたら、中に、青いものがま

るくふくらんでいました。

十15 8 合 それはすきとおった青い色ですよ。

十15 12 合 すきとおった青い色ですか。」と、日本

の海の美しさを、思いうかべるようにいいました。

十一15 4 オルガンのキイから、赤い、青い、金色

の、ちがった形の小鳥が、はばたいででて、

十一31 7 合 青い空にはかすみがかめて、ひばりは

朝から大うかれ。

十一40 2 合 山のもみじ葉みなりはてて、青くし

げるはまつ・すぎ・ひのき。

十二19 12 合 二三年は、青い小さな実が、ほんの二

つ三つ、ついたりつかなかったりだったのに、

十二64 3 葉は青く、くきは長く、みきは高くそび

えているが、根はちつともみえない。

十二94 8 太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむれて

とんでいる景色を思い、すすきの野原を心にえが

き、

十四92 1 寒さがしみこんで、足は赤く、青くなっ

ていた。

十四947 女の子は、両足を——そのあわれな、小さな、赤く、青くなった両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で重ねて、どうかして、あたためようとしたり。

十五102 会 『青空の幸福』で、もちろん青い色の着物を着ていますし、

十五103 会 『春の幸福』で、きらきら光る青いたまの色をしています。

あおいとり 『青鳥』(名) 4 青い鳥

十五83 会 青い鳥だって、〈略〉、この人たちのなかまにまよいこんでいないともかぎらない。

十五90 3 会 青い鳥をさがしているのです。

十五90 6 会 青い鳥とね。

十五98 9 会 あの子たちが青い鳥を持っていないことは、わかっているのだからねえ。

あおいり 『青色』(名) 1 青色

三33 6 会 青色やちゃ色のくすりびんが、たくさんならんでいました。

あおうめ 『青梅』(名) 1 青うめ

十一57 5 会 はちみつやいちご、青うめ・わさび、にがい、にがいくすり、一つ一つしみる。

あおがえる 『青蛙』(名) 2 あおがえる 青がえる

二24 2 会 先生、大きな あおがえるが、とうもろこしの はっぱに、じっと ぶらさがっていました。

十三67 すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、たけのこや、ちようや、はち、へびや、とかげや、青がえる。

あおきさん (人名) 1 あおきさん

二63 会 「あおきさん——あんどろさん。」

あおぎつつ・ける 『扇統』(下) 1 あおぎつつ

る 《ケ》

十68 12 こしをうしろにひき、せんすの手だけをまえにつきだして、あおぎつつけていました。

あおぎり 『梧桐』(名) 4 あおぎり

八14 3 夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に生みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。

八14 10 ようちゅうが、はいだして、あおぎりのふといみきをつたって、〈略〉おりていきました。

八16 1 あおぎりの根ばかりではなく、あたりの木の根ものびています。

八24 5 しばらくすると、れいのあおぎりの木でも、ほかのあぶらぜみが「〈略〉。」と鳴きはじめました。

あおぐ 『仰』(五) 3 あおぐ 《イーギング》

十二71 9 芭蕉は、くもった空をあおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがっていました。

十四41 11 みんな空をあおぐ。

十五67 8 そのなつかしい顔をあおいだ私の目からは、たまのようなみだが流れ出た。

あおぐ 『扇』(五) 17 あおぐ 《イーグーグ》

十67 7 会 でも、風がどつきを運んできてはたいへんだから、次郎かじや、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやってくれ。

十67 11 会 「さあ、あおげ、あおげ。」

十67 11 会 「さあ、あおげ、あおげ。」

十67 12 会 「さあ、あおげ、あおげ。」「あおぐ、あおぐ。」

おぐ。」

十67 12 会 「あおぐ、あおぐ。」

十68 4 会 「もつと強く、あおげ、あおげ。」

十68 4 会 「もつと強く、あおげ、あおげ。」

十68 5 会 「あおぐ、あおぐ。」

十68 5 会 「あおぐ、あおぐ。」

十68 6 会 「もつと強く、あおげ、あおげ。」

十68 6 会 「もつと強く、あおげ、あおげ。」

十68 7 会 「あおぐ、あおぐ。」

十68 7 会 「あおぐ、あおぐ。」

十69 12 会 「さあ、あおげ、あおげ。」

十69 12 会 「さあ、あおげ、あおげ。」

十70 1 会 「あおぐ、あおぐ。」

十70 1 会 「あおぐ、あおぐ。」

あおぐろい 『青黒』(形) 2 青黒い 《イー》

六43 9 青黒い夜空に大きな三日月さま。

八104 8 葉のうらに、青黒いなかのたまごが生みつけられていました。

あおさ 『青』(名) 1 青さ

六50 2 会 すんだ青さをもちながら、ときにはくもる書の空。

あおざさ 『青笹』(名) 1 青ざさ

九117 1 文 会 青ざさをいれやれたればいけのふなはや青き葉のかげにきておる

あおざめる 『青腿』(下) 1 青ざめる 《メ》

十一67 11 少年は、勇氣をふるいおこして、〈略〉、青ざめた、やせこけた顔をしている病人たちをみまわしました。

あおし 『青』(形) 2 青し 《キ》

九117 1 文 会 青ざさをいれやれたればいけのふなはや青き葉のかげにきておる

十五93 文 会 はまの子ら火をたく青き月夜となり

あおぞら 『青空』(名) 4 青空

六115 7 たこが青空で右や左にゆれると、自分もいっしょに首をふりながら、しっかり糸をにぎっています。

九54 6 かやの枝は、まっ黒にかさなりあつて、青空は一きれもみえず、

14 2 青空の美しさ、朝明けの空、夕やけの空の

美しさ、月の夜、星の夜の美しさ。

15 102 12 会 『青空の幸福』で、もちろん青い色の
着物を着ていますし、

あおた 〔青田〕 (名) 1 青田

9 28 1 文 会 二重に青田の上にうすれゆく

あおた 〔青葉〕 (名) 1 青葉

11 34 3 会 麦のとりいれことなくすめば、はい色
雲が空うちおおい、青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。

あおみがかる 〔青〕 (五) 1 青みがかる 《一ツ》
13 33 10 青みがかった明かるい夜空に、なんきん
だまのような星がばらまかれて、

あおむき 〔仰向〕 (名) 1 あお向き

9 30 1 会 ぐれていく巣をはるくものあお向きに
あおむけ 〔仰向〕 (名) 1 あおむけ

15 29 3 鳥は、〈略〉、つかんでいた女の子をはな
して、あおむけにたおれかかりました。

あおむし 〔青虫〕 (名) 15 あおむし

7 22 9 会 あおむしをさがしにくるのさ。

7 22 10 会 あおむしをとって、どうするの。

7 23 1 会 子すずめ、あおむしをたべるの。

7 23 6 会 おかあさん、あおむしのことを、話して
いたんです。

7 23 9 会 もう、おさらいがすんだから、あおむし
のせわをしよう。

7 24 9 兄は、ニセンチほどに大きくなったあおむ
しを、新しい葉にうつす。

7 24 11 会 先生も、あおむしをかっていらつしや
るって。

7 25 2 会 あおむし、大きくなりましたね。

7 26 10 会 あおむしが、へんな色にかわっている。

7 27 2 会 先生は、あおむしがさなぎになるって、

教えてくださらなかったの。

7 28 9 会 あおむしがさなぎになったところを書い
たのが、よくできたって。

7 29 5 会 黒つぶい、かわいいあおむしは、だいこ
んのはっぱと同じ色にかわっていた。

7 29 7 会 ぼくは、あおむしは、かくれみのをきて
いるようなものだと思った。

7 29 11 会 きんのう、学校から帰ってみると、あおむ
しは、もう黄色なさなぎにかわっていた。

7 32 10 会 あんなあおむしが。

あおむしくん 〔青虫〕 (名) 1 あおむしくん

7 24 8 会 さあ、あおむしくん、新しいごちそうだ。
あおめ 〔青芽〕 (名) 1 青め

15 10 6 文 会 いけがきのすぎの木ひくみとなり家
の庭の植え木の青めふく見ゆ
あおりたてる 〔煽立〕 (下二) 1 あおりたてる

《一テ》
15 30 6 わしは、羽音はげしくすこし舞いたった
かと思うと、こんどは両羽をあおりたて、大きな
風をまき起すようにして、少年の周囲をおおい包
むいきおいでせまってきた。

あおる 〔煽〕 (五) 3 あおる 《一ラ》
6 31 9 きものすそが風にあおられる。

6 34 3 雲のひげがあおられて長くのびる。
14 86 8 風にあおられた雪のむれが、道を消し、
木をおり、汽車を立ちおうじようさせ、
あか 〔赤〕 (名) 8 あか 赤

1 33 3 お日さま——にじ——あか——あお——き
いろ——まる——四かく——三かく——よしこ
さんのかいたことば。

2 14 7 赤や青やむらさきのたまができました。

3 81 7 ピーターは赤がすきでした。

四 107 6 会 赤やき色できれいだね。

五 11 10 会 赤と青のしるしのついたもの。

十一 40 7 会 ほしたかぼちゃは赤やら黄やら、にわ
とりどもはひなたぼこ。

十三 29 8 黄色や、赤や、白の糸たばくりひろげ
られ、にぎやかな話が続く。

十四 63 7 日光にすかして見ると、湯げの中に、に
じのような、赤や青の色がついています。

あかい 〔赤〕 (形) 51 あかい 赤い 《一イーク》
ひうすあかい

1 9 3 会 四 たまいれ しろいたま、あかいた
ま、しろいたま。

1 9 5 会 あかいたま、あかいたま、しろいた
ま。

1 9 6 会 あかいたま、あかいたま、しろいた
ま。

1 10 5 会 あかいたま。

1 11 5 会 こんどは、あかいたまを かぞえましょ
う。

1 50 1 みんなながいみみのある、あかい目の
うさぎさんでした。

2 6 6 会 「あかい——あおい——あつまる——あ
そぶ——あさい——あまい——」

2 18 4 会 「一しゅうかんに一ど、赤いきものを
きるものはなかに。」

3 34 5 会 まっ白なかびんに、赤い花がさして
ありました。

3 75 5 そのうちに、赤いお日さまは丘のかけ
へしずんでいきました。

3 81 6 会 「赤い色、みえた。」ピーターがいい
ました。

四 26 3 手 りんごさんのほったの赤いこと。

九六九 これはみんな赤いズボンをはいたどんぐり

でかついでやつて来る。

めかえせいさく
「赤絵製作」(名) 1 赤絵製作

十五484 はん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、この赤絵製作の方法が他にもれないように、保護されていた。

あかえのはち (題名) 2 赤絵のはち

十五37 赤絵のはち

十五432 赤絵のはち

あかえまち 「赤絵町」(名) 1 赤絵町

十五483 赤絵屋もあったが、これははん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、

あかえや 「赤絵屋」(名) 2 赤絵屋

十五482 そのほかに、色絵をつける赤絵屋もあったが、これははん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、

十五486 いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、ひとりでこの焼物を作ることは、むずかしいことであった。

あかし 「証」(名) 1 あかし

七796 ouchi あちらで、あかしをたててもらおう。

あかし 「赤」(形) 6 あかし 《キ・ク・シ》

九275 ouchi 草原に一本あかしはじめみじ

九1166 ouchi ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤きかにいてすぎの山しずか

十五104 ouchi 荒れ庭にしきたる板のかたわらにふるばちならび赤き花さく

十五108 ouchi ばらの木の赤きめをふくかきの上に

十五143 ouchi 大きなうでとど見ゆ

十五155 ouchi ひるすきていよよにあかきばらの花

いよよに重くかたむきふかむ

あかし 「明」(形) 1 あかし 《シ》

十五125 ouchi ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

あかしお 「赤潮」(名) 4 赤しお

十四12 ある年のこと、赤しおが、おびたたく生した。

十四41 この赤しおのために、母はみな死んでしまった。

十四43 ふたたび、赤しおがよせてきた。

十四49 さいわいに、赤しおもよせてこなかった。

アカシヤ (名) 1 アカシヤ

十一485 アカシヤの花が風にゆれ、畑では、いちごがさかりだった。

あかちゃん 「赤」(名) 12 アカちゃん あかちゃん

二64 ouchi 「あかちゃん——あかんぼ。」

四43 あかちゃんが生まれると、ここに知らせます。

九129 どこかであかちゃんのなき声がしています。

九130 あかちゃんのなき声も、子もり歌もきこえませんでした。

十493 ouchi イコウ——アカちゃん ネテルワ——

十525 五六歩いったかと思うと、よそのおぼさんが、あかちゃんをおんぶして、そばを通りました。

十526 ouchi 「アカちゃん ネテルワ」でした。

十602 ouchi 「そとへで、あかちゃんにも、みせてあげて。」

十603 おかあさんが、あかちゃんをだっこして、おもての通りへでいらした。

十608 「略。」といって、月の方へ手をやった

ら、あかちゃんは、「略。」といった。

十三534 まだわかい、美しいおかあさんが、まる

まるとふとったかわいいあかちゃんをだいていて、

十三543 そのあかちゃんがキリストで、そのおか

あさんがマリアだということは、すぐにわかりました。

あかつき 「曉」(名) 2 あかつき

十一335 ouchi 短か夜しらむを待ちかねて、だいこんの花にあかつきの 色ただよえば勇ましく、すき・くわ持つて野にいそぐ。

十一894 あかつきの光が窓から白くさしこんできたとき、

あかとんぼ 「赤蜻蛉」(名) 9 赤とんぼ

十二941 「赤とんぼがとんでいる」

十二942 「赤とんぼ」という文字をとおして、すいすいとびまわるかわいい赤とんぼを、心の中にえがきます。

十二943 赤とんぼを、心の中にえがきます。

十二945 「赤とんぼ」が「とんでいる。」——

このようにまるとると、だれでも読んで、すぐにそのわけがわかる。

十二948 太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむれて

とんでいる景色を思い、

十二9412 弟にせがまれて、赤とんぼをとりにか

けたが、

十二951 野はぎがさいっていたので、赤とんぼはと

らずに、花を手にいっぱいつんで帰ったことを思

う。

十二956 しょんぼりと校庭に立っていると、赤と

んぼが自分のまわりをとんでいた。

十二958 「赤とんぼがとんでいる。」こんな短い

文であるが、

あかにし 「赤螺」(名) 1 あかにし

十二9711 古代の人は、はいが、はまぐり、かき、

しじみ、あかにしなどをたくさんたべていたよう

です。

あかり ㇿつきあかり・ゆうあかり
 あがり ㇿあめあがり
 あがゝる「上」(五) 30 あがる《一ツ・一リル・レ・一ロ》ㇿうかびあがる・うきあがる・おあがりなさる・おあがる・おきあがる・おどりあがる・たちあがる・できあがる・とびあがる・のびあがる・はいあがる・はれあがる・ふきあがる・ふくれあがる・まいあがる・めしあがる・もえあがる・もりあがる・わきあがる
 二29㉓ ㇿしに あがつてから、かずを かぞえてみました。
 三17㉔ はんたかは、しずかに ごてんに あがつてきました。
 三31㉕ かいだんは はじめに 十五だん あがつて、それからまた 十五だん あがるようになっていきます。
 三31㉖ それからまた 十五だん あがるようになっていきます。
 三31㉗ 一だん あがるごとに、あたりのようすがかわります。
 三32㉘ あがつた ところの かべには、えがはつてあります。
 三45㉙ もう ひと足で りくへ あがるうと いうとき、白うさぎは、「略」といって わらいました。
 四78㉚ ふ——ふけふけ 風よ、たこ あがれ。
 四91㉛ ひとはき はいて、うちに あがつて おいでになると、ひたいから ゆげが たつ。
 四104㉜ きょうは、お礼に あがりました。
 五33㉝ かんぱんの クレーンが、あがつたりさがつたりして、荷物をつみこんでいます。
 五79㉞ ピシャピシャと、あがつたりさがつたりし

て、流れていきます。
 六15㉟ 木の葉の船は《略》、川の岸につきましたので、ありは、ぶじに岸に あがる ことができた。
 六114㊱ 「へんなたこだな。こんなものがあがるものか。」といつて わらいました。
 六114㊲ けれど、あげてみると、なかなかよくあがりました。
 六114㊳ だれのたこよりもよくあがりました。
 六114㊴ やあ、よくあがる。
 六115㊵ ただしちゃん、海外から ひきあげてきた子で、来年少学校へ あがります。
 七7㊶ ろうかをすうつと通つて みたり、かいだんを トントン あがつて みたり、
 七12㊷ 「だいぶ手があがつた。」このときの「手」は、文字を書くことをさしています。
 九41㊸ 思わぬところに 炭やき小屋があつて、ゆるいけむりの あがるのが みえました。
 九109㊹ みんなが急停止をすると、雪けむりが一どにあがつた。
 十一45㊺ 園長さんのまゐりで、だんを あがり、両手をすつとさしのべて、おめんじょうをいただいて、
 十三25㊻ 土地のねだんがあがつて、あるところで は、百五十ばいになりました。
 十四64㊼ 茶わんから あがる湯げをよく見ると、
 十四65㊽ せんこうのけむりでもなんでも、《略》いくらかの高さまでは、まっすぐに あがりますが、
 十五63㊾ なんとかしなければ、おみこしは あがりませんよ。
 十五82㊿ 雲のまくがあがると、園の前の方に、高い大理石のまゐり柱でできた大廣間のようなもの

があらわれます。
 十五114㊿ おまえたが この上まで あがつて来たのは、
 十五115㊿ でも、おまえたは、どうして ここまで あがつて 來られたの。
 あかるい「明」(形) 36 アカルイ あかるい 明かるい《一イ・一ク》
 一62㊿ きゆうに あたりが あかるくなりました。
 二15㊿ あんな 大きな、あかるい お月さまは、どうしたら えに かく ことが できる でしょう。
 二52㊿ 六の ぼめん 一どくらくなり、また あかるくなると、おかあさんが、いすに こしかけて、本をよんで いらつしやいます。
 二65㊿ 空が あかるくなつて きた。
 二65㊿ あかるくなつて きた。
 三5㊿ あかるい 山。
 三112㊿ お月さまが 一どに 十も でたかと思われほど、あたりが あかるくなりました。
 四81㊿ あかるく かざつた クリスマス。
 四120㊿ いままで くらかつた へやが、あかるくなりました。
 五10㊿ もう 明かるくなつた。
 五44㊿ 明かるい 世界の 空とんで、平和のうたを うたおうよ。
 五54㊿ 空は、まだ、ほんのりと 明かるくて、つぎの星を みつけることは、できませんでした。
 五7㊿ これで 教室が 明かるくなりました。
 六4㊿ 小さな鉄のねじが、ふいに ピンセットにはさまれて、明かるいところへ だされた。
 六49㊿ うすむらさきに ほのぼのと、明かるくそまる朝の空。
 六51㊿ 月の明かるい 晩でした。

六〇二 闇 ウスムラサキニ——七 ホノボト——

五 アカルクソマル——七 アサノソラ——五

七三三 明かるい音楽。

七五六 明かるい月夜です。

八二四 朝日が山の上のぼって、明かるい光が

さつとさすところになると、

九四三 白い紙に赤い色をぬりますと、明かるい感

じになります。

九四八 けれども、いちろうが目をさましたときは、

もうすっかり明かるくなっていました。

九五四 その坂を登りますと、にわかにはつと明か

るくなって、目がちくつとしました。

一〇三二 ぼくがいるために、うちの中が明かるくな

るように、できないものでしょうか。

一二四〇 しかし、ケラーに「ことば」というもの

をわからせることによって、そのまっ暗なさびし

い心を明かるくすることに成功しました。

一二五八 ところがいま一だんというところで、い

ちぼんどりが鳴いて、東の空が明かるくなった。

一三三三 青みがかった明かるい夜空に、なんきん

だまのような星がぼらまかれて、

一四三八 明かるいひびき。

一四三八 東の空が明かるくなってくる。

一四四三 闇 どんな暗い日だって、それが明かるく

してくる。

一四五四 明かるい地の上でくらししているかたに

は、土のことはわからないでしょう。

一四九五 明かるい、赤いほのおがかがやきだした。

一四九七 ほのおが明かるくもえあがった。

一四九九 じっと見つめているうちに、一つの明か

る星が落ちるのを見た。

一四一〇 まっ晝間でも、それ以上に明かるくはな

いと思われるくらいであった。

一五〇四 喜びの兄弟ぶんのようなものですからね。

あかるさ 「明」(名) 2 明かるさ

九四五 この赤い色のそばに黄色をぬりますと、赤

い色だけでは感じられなかった明かるさがあらわ

れます。

九一六 屋根の雪かきおとしいる少年の顔の明

かるさ日のでる中に

あかるさ 「明」(形) 1 明かるし 《一》

一五一六 少年たちよ、野にはたらきて、土ほ

こり顔よごすとも、わするるな、明かるくすめる

ながえ顔。

あかんぼ 「赤坊」(名) 6 あかんぼ かわのあか

んぼ

二六四 「あかちゃん——あかんぼ。」

五四七 山から川をあかんぼが生まれる。

五五一 小さいたにまに、小さいながれ山から川の

あかんぼが生まれる。

五五二 川をあかんぼ、チョチ、チョチ、アワワ。

七三二 あかんぼのくせに、ひげなんか。

八一七 人間のあかんぼが、したのさきをじょうず

につかってちちをのむのと同じように、

あかんぼ 「赤坊」(名) 2 あかんぼう

一八三 それから、コンセテラは、それから、

あかんぼうは——みんなどうしている。

一三五一 まだあかんぼうで、母うしがしたでなめ

ると、よろけるんだよ。

あき 「秋」(名) 23 あき 秋 ↓かきのあき

一三〇四 あきがきて月がうつくしくなると、か

ぐやひめのようすはいっそうかなしそうにみ

えました。

四七〇 花ばたけととく。

四二五 秋 九月はお月み。

五九二 そういつているうちに、秋になりました。

五〇五 秋になると、また、わたり鳥がやってきま

した。

七九七 春には春の話、秋には秋のものがたり。

七九七 春には春の話、秋には秋のものがたり。

八五二 秋のはじめのある晩、

八二四 にぎやかに鳴きたてたせみも、やがて、秋

になると、みんな死んでしまつて、

八三三 秋がきた。

九一八 ヨーロッパのつばめも同じように、ヨー

ロッパの北の方ではんしくしたものが、秋には、

南ヨーロッパを通過して、遠くアフリカまでもいつ

て、冬ごしをします。

九一八 しょうわ六年の秋、オーストリアの都

ウィーンのできごとです。

九二七 すみきったボールの音や秋の風

九三三 いまはもうかきの葉もすっかり落ちつく

して、秋も終り近くなりました。

九四三 秋になって、ぼくは山へいくのが楽しみ

になりました。

一〇二九 すると、秋の終りには、一びようあまり

の米を自分のものにすることができました。

一三六 日はまた照って水たつぷりと、いねの

かぶばりこのうえもなく、秋のみのりも思われる。

一三六 秋 はぎの花ふく朝風も、音さえすずし

くなってきた。

一二九 太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむれて

とんでいる景色を思い、

一二九 土ひょうは、はぎやすきがさきみだれ

た秋の野原。

十三15 5 これ、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのだ。

十三32 9 秋には、なつめ賣りがやって来る。

十五65 7 秋たけてりんごのみのるころ、おじさんとお婆さんは京都へひきあげられたが、

あきかぜ 「秋風」(名) 1 秋風

九27 4 秋風にプールの水がゆれている

あきこ 「秋子」(人名) 3 秋子 秋子

十二91 10 秋子も同じように、「略。」と書いた。

十二92 7 ほかの人がこれと同じ文を書いたとしても、そのなかみは、おそらく、太郎や秋子と同じではなからう。

十二95 3 秋子は、おと年、この学校にうつてきたときのことを思いだす。

あきこさん (人名) 1 あきこさん

二6 1 会 「あつしさん——あきらさん——」「あきこさん——」

あきさめ 「秋雨」(名) 1 秋雨

十一38 8 秋かきねににおうきんもくせい、しとしとと降る秋雨に、ちれば山にはまつたけが、かおりも高くはえてくる。

あきぞら 「秋空」(名) 1 秋空

十一37 8 秋こずえをかけるもずの音も、すむ秋空によくひびく。

あきたけん 「秋田県」(地名) 1 秋田県

十二57 4 秋田県の男鹿半島に、神山、本山という

二つの山がある。

あきち 「空地」(名) 4 あき地

十一28 12 一にぎりのあぶらの種をかりて、かわらへいって、あき地にまいておきました。

十五24 3 このひつじかいは、がけの中ほどのあき

地に、草のしげっている場所を見つけて、

十五28 3 鳥は「略」、ある岩角のすこしあき地の

あるところを目にかけておりて行きました。

十五28 10 鳥がそのあき地へ身をおろすかおろさないうちに、

あきつ 「秋津」(名) 1 あきつ

十五76 文 影絵めく牛馬朝日を織るあきつ

あきなう 「商」(四) 1 あきなう 《イ》

十五17 2 文 少女たちよ、花そだてつつあきない

て、つづれ着るとも、失うな、やさしく清きなが

心。

あきばれ 「秋晴」(名) 1 秋晴れ

九32 10 秋晴れのすみきった空の下に、山のすが

たが、さかさまに湖の中にうつて、

あきらか 「明」(形状) 5 あきらか 明らか

十45 11 世界の学者の研究によつて、天然真珠と

まったく同じであることが、明らかにされた。

十三9 2 種々のことがらの関係を明らかにして、

きまった法則を知る。

十三15 1 こまかに計算した結果、コペルニクスの

いったとおり、天は動くものではない、地球が動

くのだということを、明らかにしました。

十四50 6 このことは、あくる日の新聞に出たマッ

ケンナの話で、あきらかになったのですが、

十五13 3 文 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸

の外明らかに月ふけわたる

あきらけし 「明」(形) 1 明らけし 《ク》

十五12 8 文 紙をもてランプおおえばガラス戸の

外のつくよの明らけく見ゆ

あきらさん (人名) 1 あきらさん

二5 10 会 「あつしさん——あきらさん——」

あきらめる 「諦」(下) 6 あきらめる 《メ》

三105 4 たいていの人は、あきらめてしまいまし

たが、さいごまでどうしてもあきらめない人

が、なんんかのこりました。

三105 5 さいごまでどうしてもあきらめない人

が、なんんかのこりました。

九71 11 いかにもざんねんだというふうに、しばら

くひげをひねったまま下を向いていましたが、

やつとあきらめていました。

十53 11 あきらめて歩きかけると、水おけがありま

した。

十二85 11 チルデン選手もおうえん者たちも、

もうあきらめていたときでした。

十五27 3 下につかまれている女の子は、あきらめ

たのか、おそろしいのか、《略》、すこしもさわが

ず、

あきる 「飽」(上) 1 あきる 《キル》

十一5 3 川口の子どもたちは、いつも砂原で、す

もうをとったり、おにごっこをしたりして遊んで

いるが、それにあきると、そのボートをながめて

は、いろいろな話をしあつて楽しむ。

あきれる 「呆」(下) 1 あきれる 《レ》

十一84 10 《略》と、父親はあきれてうながし

ました。

あく 「開」(五) 14 あく 《イ・キ・ク》

三113 3 すると、しめきつておいたくらの戸が

ひとりりで あきました。

六17 8 まくがあくと、きりぎりすが大ぜいあつ

まつて、音楽会をしています。

七6 1 あちこちのまどがあいて、教室も目がさめ

た。

七96 8 ねずみ色の4ひきは、生まれてから12日め

のきょう、みんな、目があき、

八775 あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあ
いているのをみつけたので、

八872 おりよく戸があいていたので、あひるの子
は、雪の中の草むらへはいりこんだ。

九208 さいいいなことに、そのとき、あいていた
家が、一けんあったので、

九509 まっ白な岩のがけの中ほどに、小さなあな
があいていて、

九883 まくがあく。

九13411 大きな口をあいてたべようとしたとき、
ちようちよは、「略」と頼みました。

十二1035 四角なあながあいていたり、「略」、おも
しろいお金です。

十三5912 絵の前には、一台の長いすがおい
てあったが、見物の人が、かわりばんこにやって
来て、あいているときがなかったよ。

十五596 私の顔を、あなのあくほど見つめていた
博士は、

十五684 音もなくドアがあいて、

あく「開」(下二)1 あく「一ケ」
十五144 目をあけてつくづく見ればばらの木
にばらがまっかにさいてけるかも

あぐ「上」(下二)1 あぐ「一ゲ」ひみあく
十五121 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸の
とのもを見ればよきつくよなり

あくしゅ「握手」(名)1 あく手

十二868 ネットをはさんで、両選手はかたいあく
手をかわしました。

あくしゅ・する「握手」(サ変)1 あくしゅする
「一シ」

五61 川は友だちとあくしゅして、川はだんだん
大きくなる。

あくび「欠伸」(名)2 あくび

七108 かしの木は、あくびを一つして、「略」、そ
れから、ねむりにおちていった。

九733 やまねこは、大きくのびあがって、目をつ
ぶって、半分あくびをしながらいいました。

あくま「悪魔」(名)2 あくま

十五308 その目、そのくちばし、その羽音、まっ
たく大きなあくまです。

十五311 その石を取るが早い、目の前二メー
トルほどまでせまって来たこのあくまの胸をめぐ
て、全身の力をこめて投げつけました。

あぐむ ぐたぐたあぐむ

あくる「明」(連体)15 あくる

五678 あくる日、おじいさんは海へやってきまし
た。

五1053 しじゅうからは、あくる日もやってきまし
た。

六751 あくる朝、おとうさんから、「略」とき
かれて、ごろうは、「略」と答えました。

八64 その晩から家族のひとりになり、あくる日、
ピオという名がつけられました。

八3910 あくる朝になりました。

八658 あくる日はいいお天気で、太陽は、ごぼろ
の上をてらしていた。

八862 あくる朝早く、ひとりの農夫が通りかかっ
た。

十372 あくる年から、豊田式人力織機は、國內に
つかわれるようになったが、

十一254 そのあくる日から、金次郎は、とりが鳴
くと、まだ暗いうちからおきて、遠い山へいって、
十一2812 あくる年の春、黄色い花がさいて、たく
さんの実がつけました。

十一599 あくる日、太郎は、友だちの正男と一雄
と三人づれで、学校から帰るときのことであった。

十二332 サリバン先生は、お着きになったあくる
朝、私をおへやに呼んで、

十二612 ところが、そのあくる朝ながめると、高
どのは消えてしまつてあとかたもなく、

十四506 このことは、あくる日の新聞に出たマッ
ケンナの話で、あきらかになったのですが、

十五6710 そのことのあったあくる日、私は、ひさ
しぶりで窓のあけはなれた新島家をおとずれた。

あけ ぐあさあけ・よあけ

あけか・ける「明掛」(下二)1 明けかける「一
ケ」

十一933 夜は明けかけていました。

あげは「揚羽」(名)1 あげは
十一125 あげはのちようが、まつのかげから舞っ
てでる。

あけはな・す「開放」(五)1 あけはなす「一シ」
十五461 ひくい屋根も、あけはなした店も、「略」、
かれには、みなめずらしいものばかりであった。

あけはな・つ「開放」(五)1 あけはなつ「一タ」
十五6710 そのことのあったあくる日、私は、ひさ
しぶりで窓のあけはなれた新島家をおとずれた。

あけぼの「曙」(名)1 あけぼの

十五954 「あけぼののむらさき」とか、「こはく
のつゆ」などがあらわれます。

あける「明」(下二)3 明ける「一ケル・一ケレ」
十一415 もちつきまかせて、しめなわをはり、
一夜明ければうれしいはつ日。

十四387 「夜が明ける。」

十四393 夜が明ける。

あける「開」(下二)27 あける「一ケル・一ケル」

「うちあける・おあける・おしあける・こじあける・ひきあける・まどをあけると」

一434 よなかに 目を あけると、おとうさんがそばに たって いました。

一465 かばんを あけて なかを みせますと、一528 おとうさんも 目を あけました。

四1171 窓を あけては いけないと いうのですか。」おとひめ「そうです。

四1193 戸を あけては いけないと いうのですか。」おとひめ「そうです。

五95 窓を あけて、あのを ぼつちゃんを かけさせて おあげ。

五2410 窓を あけて、あのを ぼつちゃんを かけさせて おあげ。

五486 まどをあけると、いまの ぼつちゃんに 光が、さつと いったいながれこんで来た。

五922 窓を あけて、あのを ぼつちゃんに 光が、さつと いったいながれこんで来た。

六293 戸をあけて、きりぎりす一、二がはいってきます。

八103 おこたりすると、赤い口をあけて、私たちをおどしたりかんたります。

八111 学校から帰ってきたすえの女の子が、茶のまのドアをあけて、ひよいとふみこんだたん、

八117 くちばしから血をだして、目さえあけたりとじたりして、からだをふるわせてもう虫の息です。

八146 親せみが、あのほそくがった口のさきで、かいた皮にあなをあけて、ていねいに生みつけておいてくれましたので、

八993 あいだを30㎝ぐらいずつあけ、きそく正しく植えました。

九1299 おまけに、あみに大きなあなをあけてしまいました。

十1911 窓をあける女の先生。

十689 おしれをあけるときになると、十702 思いきって、ふたをあけてみました。

十一545 窓 「つり皮あけずに中ほどへ。」

十一6411 母親は、(略)、自分たちのみ子もあつて、家をあけることができないので、

十一682 大きくみ開いた目をあけて、じつと空間をみつめている者もありました。

十一688 看護人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまって、カーテンをあけて、

十二523 いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切つて、まん中にあなをあける。

十二759 芭蕉はすぐ戸をあけました。

十二878 すずりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をはいて持つていくだろう。

十三401 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよつて、ひきだしをあける。

あ・げる 「上」(下二) 98 アゲル あげる 《ゲ・一ゲル》はおあげる・おあげなさる・おあける・およみあげる・かきあげる・きずきあげる・くみあげる・こしらえあげる・こみあげる・さしあげる・しあげる・すくいあげる・すりあげる・だきあげる・つきあげる・つくりあげる・つみあげる・とりあげる・はさみあげる・はねあげる・はりあげる・ひきあげる・ひろいあげる・ふきあげる・ふりあげる・まきあげる・みあげる・みがきあげる・もうしあげる・もちあげる・よみあげる

一488 おとうさんは、うしろの おきやくさんのにもつをもつて あげました。

一489 わたくしは、おばあさんの 手をとつて

あげました。

二508 窓 「あげよう。」じろうも、となりのへやへいってしまします。

二528 大きなりんごを、おかあさんにあげます。

二534 さちこは、またおかあさんにあげます。

三105 窓 小さな ひしゃくで おちゃくんで、かけて あげましょ、おしやかさま。

三717 窓 わたしが はきだして あげよう。

三7510 ピーターが 大声を あげました。

三771 窓 「よその 國の子どもたちに 光を あげるのですよ。」

三776 窓 あなたたちが ねている あいだ、お日さまは、よその 國の子どもが あそべるように、光を あげにいくのです。

三987 紙に かいた字を、どこへ おくつて あげましょ。

四271 窓 きみの だいすきな きゅうりを あげよう。

四271 窓 ねぎも あげよう。

四272 窓 もうしばらくくなくて くれたら、かごからはなして あげるよ。

四312 窓 わたくしは、うちの にわに さいている コスモスの 花を あげようと思ひます。

四329 窓 雨が びしゃびしゃ ふるので、わたくしは、かさを さしかけて あげました。

四355 窓 生徒さんが 子どもの げたのはなをおを すげる あいだ、かさを さして あげたのですね。

四721 これに あたつた 人には、おもちゃの ねこと、いぬとを あげます。

四724 これに あたつた 人には、ハンケチを あげます。

四727 これを ひいた 人には、なにも あげませ

ん。

四七二 〇 『あげられません』というわけです。

四七二 〇 これがあたった人には、につきちょうをあげます。

四九二 〇 この人にうってあげようか。

五二四 〇 ぼくは、はっと思つて、すぐ立つて、その人をすわらせてあげました。

五二九 〇 ついでですから、一つ持つていつてあげましょう。

五三八 〇 きみの受持の子どもたちに、それを送つてあげよう。

五六六 〇 それが、海へ帰してくれ、お礼はいくらでもあげるといったが、

五八八 〇 きょうは、おにんぎょうのおもりのしかたをしてみせてあげよう。

六二三 〇 ぼくがひょうしをとつてあげる。

六三〇 〇 花のみつをわけてあげよう。

六三九 〇 つかまえて、たなにあげたら、あぶくをだしておこつた。

六七一 〇 雪だるまはお話はいないけれども、はるえさんが、なにかお話をしえてあげたらどう。

六七二 〇 だるまさんのうたをつくつて、うたつてあげようか。

六八五 〇 では、私がいいことを教えてあげましょう。

六八五 〇 早く船にお乗りなさい。おしてあげますから。

六九四 〇 たこ 〈略〉。はじめてあげにいったときに、みんなが、「〈略〉。」といつてわらいました。

六九六 〇 けれども、あげてみると、なかなかよくあがりました。

六九六 〇 「作つてあげようか。」

六二四 〇 これ、ただしちゃんにあげるの。

六二四 〇 かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃんのところへ持つていつてあげるんだ。

六二二 〇 うさぎさんたちは、おさるさんにみんなつかさをあげようと、話しあいました。

六二四 〇 あげるよ。お受けなさい。

六二四 〇 りすさんは、くるみがいすきだそうだから、あげようか。

六二四 〇 「あげよう。」

六二四 〇 りすさん、さ、あげるよ。

七一七 〇 てんぶらは、これであげるんだ。

七五〇 〇 どの学校のせんしゅも、みんな、運動場に整列して、式をあげた。

八三九 〇 では、その願いどおりにしてあげましょう。

八五八 〇 みんな手をあげて、「〈略〉。」と、汽車によびかけた。

八六三 〇 わたしについておいで、大きな世界の鳥小屋へつれていつてあげるからね。

八八四 〇 人がしんせつにしてあげるときは、喜ぶものですよ。

八九九 〇 わかいはくちようは、そのほそ長い首をあげて、心のそこから喜ばしそうにさげんだ。

九四六 〇 「小公子」をみなさんにお話ししてあげてください。

九八三 〇 あとでよくみてあげるから、かごにいれておきなさい。

九八二 〇 「でも、みてあげよう。」

九八二 〇 三百五十メートルも登つたところで、つえをあげて、「〈略〉。」というあいずをされた。
九八九 〇 自分の命は、つばめさんにあげよう。
九八九 〇 オモタイカラ モッテ イッテ アゲルノ

ヨ

一五〇 〇 黒いぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、

一五八 〇 おとなりのよし子ちゃんと、なお子ちゃんに、三たばずつあげました。

一六〇 〇 「そとへで、あかちゃんにも、みせてあげて。」

一七二 〇 すると、太郎かじやは、きゆうに両手で顔をおおい、おいおい大声をあげてなきました。

一八一 〇 少年は、するどいさげびをあげて、その場に立ちすくみました。

一八五 〇 ぼく、あの人におくすりを飲ませてあげるのです。

一八七 〇 わたしは、これからすぐにうちへ帰つて、おかあさんを安心させてあげよう。

一九一 〇 ほかになにもあげるものがありません。

二二六 〇 家内じゅうが歓声をあげているといつても、いいすぎではありません。

二四八 〇 簡単な人形の作りかたを教えてあげよう。

二五六 〇 次にいくつかの例をあげてみよう。

二六〇 〇 高どのに立つていた長者は、日のまるとのおおきをあげて、しずみかけた日をさしまねくと、

二七〇 〇 いろいろお手傳いをしてあげた。

二七〇 〇 下男のように住みこんであげてもいいけれども、

二七三 〇 おじさんも手傳つてあげよう。

二八三 〇 (顔をあげて、そのことばを味わうように、) 生きて帰つて來ました……
二八八 〇 ラファエルのかいたマドンナのかわつたのを見せてあげよう。
二九〇 〇 ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、

かべにかかっている一まいの絵を見ました。

十四15回 おかあさん、これからたびたび手紙をあげることにしましょう。

十四23回 たとえば、ここにあげたことばの中でも、クレヨン、ズボンはフランス語、

十四53回 暑い日に照らされながら、せつせと養分をこしらえて、送ってあげたからですよ。

十四54回 それは、大部分、根の私が、土の中から吸いとって、送ってあげたものです。

十四55回 水と養分とを吸いとって、夜も晝も送ってあげるの、たいへんなねおりです。

十四56回 葉さんが、〈略〉、養分におこしらえになったものでも、私が運んであげなかったら、りっぱなかぼちゃの実にはなりません。

十四56回 高いところがおすきなようですが、そこへつれて行ってあげるの、この私です。

十四57回 私は、いっしょうけんめいそれをなおして、あなたがたがかわれないようにしてあげたのです。

十四59回 さっきから問題になっている養分だって、みんな私がわけてあげたのです。

十四59回 水だって、ためておいてあげたのです。

十四59回 ぼくがとびまわって、かふんをなかだちしてあげなかったら、実は一つもつかなかったのです。

十四61回 このかぼちゃは、お礼に、すっかり人間にあげてしまっても、さしつかえないと思えますが、どうでしょうか。

十四69回 一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

十四100回 「〈略〉。」と、女の子は、声をあげた。

十五27回 だいじょうぶだ、安心しておいで、私がいますくつてあげるから。

十五50回 ほかの外國人にも話してあげましょう。

十五56回 私がはじめて会った日本人について話をあげよう。

十五61回 「満ぼう、いいところへつれて行ってあげるから、さあ、出かけよう。」

十五69回 顔をあげてへき面を見あげると、おじさんの大きな写真があった。

十五83回 ねこは、ひとことも口をきかず、〈略〉、黒いまくをあげて、すがたをかくしてしまいます。

十五93回 幸福どもは、喜びの声をあげながら、いやがる子どもたちをひきずって行こうとする。

十五119回 やがてはなれて顔をあげますと、ふたりの目にはなみだが光っていました。

あご〔顎〕(名) 2 あご

二45回 「あたまで——足——あご——あさひ——あした——あそこ——」

十二50回 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作って、のりでとめる。

アコーデオン (名) 3 アコーデオン

七46 かれは、むねに、大きなびかびかしたアコーデオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。

七46回 青年は、アコーデオンを、両手でぐつとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。

七46回 青年は、すわって、アコーデオンを黒ぬりのケースにおさめた。

あごひげ〔顎髭〕(名) 1 あごひげ

四83回 まっ白な あごひげをつけた サンタクローズのおじいさんができあがりました。

あさ〔朝〕(名) 67 アサ あさ 朝 ↓まいあさ

一17回 あさの こぼんきいだな。

一52回 もう あさでした。

二74回 『あさ』ということばの つくものを、

あつめてみましょう。

三77回 それから、あさになつて、お日さまがあなたたちのところへ かえってくるのです。

三77回 あしたの あさも、お日さまは きっと かえってきてくれるの。

三94回 よるの ほしも、あさの 風も、みんなのものです。

四9回 あさからばんまで、トッテンカン トッテンカンとはたらいています。

四27回 あしたの あさも、また かけっこをしようね。

四47回 あさの 風は、氣もちよく、がんの むなげにあたりました。

四55回 つぎの日の あさ、かっちゃんは、ねつがずつとさがって、まぶたを すこし ひらきました。

四56回 あしたの あさ、出発してもいいよ。

四61回 あすの あさ、出発しよう。

四79回 し——ものの あさ、白い いき。

四89回 雪だというと、あさ 早くはねおきて、そとにとびだして、雪かきを なさる おじいさん。

五19回 二日めのあさ、やつと汽車からおろされ、

五49回 あさの光に、身をきよめるのはうれしい。

五108回 近いところに製材所ができて、のこぎりの やかましい音が、あさからばんまでびきました。

六43回 さわやかな朝の空。

六49回 うすむらさきにほのぼのと、明かるくそまる朝の空。

六50回 楽しいことがあるような、ああ、さわやかな朝の空。

六58回 雪の朝

六五八 4 このあいだ雪の降った朝、一年生の子が、

《略》、はき物に雪がついてころびました。

六六〇 三 罫 ウスムラサキニ——七 ホノボノト——

五 アカルクソマル——七 アサノソラー——五

六六〇 七 罫 タノシイコトガ——七 アルヨウナ——

五 アサワヤカナ——七 アサノソラー——五

六六九 毎朝、このらん、その日の朝の温度を書

きつけましょう。

六七五 一 あくる朝、おとうさんから、「《略》。」とき

かれて、ごろうは、「《略》。」と答えました。

六八三 三 罫 朝から一ぴきもつれないなんて——おや、

ひく、ひく。

七二九 日曜日はれた朝。

七四九 かるやかなしらべは、朝の光のように氣持

よく、車中のすみからすみまで流れた。

七九三 朝、いつてみたら、右から四ばんめのへや

に、子うさが4ひき生まれていました。

七九八 朝早くいつてみたら、子うさは巢の中で

ねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。

八七七 朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しい

ものです。

八三七 いなかのしものふかい朝の野にでたとき、

《略》はおじろの声をきくと、

八三九 三 罫 「あすの朝から、たしかにそのようにな

るでしょう。」

八三九 一〇 あくる朝になりました。

八五六 二 朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎ

り、美しい砂地がみわたされた。

八七四 朝になって、よそからきたあひるの子は、

すぐにみつけれれた。

八八六 二 あくる朝早く、ひとりの農夫が通りかかっ

八四三 二 朝、花のようすをみにいきましたら、まだ

さいていませんでした。

九二六 六 その日はたいへん寒いあらしの日で、朝か

ら晩まで、こやみなく雨が降っていました。

九四三 五 罫 朝早く庭にでて、

一一一七 二 朝も、晝も、夜も、流れやまぬ愛のしみ

ずに、うるおされ、

一一二二 二 これを持って、朝早く工事場へいきまし

た。

一一三三 八 罫 青い空にはかすみがかめて、ひばりは

朝から大うかれ。

一一六三 三 三月のある朝、いなかの人らしいひと

の少年が、《略》、父親をたずねました。

一一七二 一 そうして、朝になると、また看病をはじ

めました。

一二三二 先生は、お着きになったあくる朝、私を

おへやに呼んで、一つの人形をくださいました。

一二五九 一 田植えだというので、里のおとめたちは、

赤いたすきもかいがいしく、朝から集まってきた。

一二六二 二 ところが、そのあくる朝ながめると、高

どのは消えてしまつてあとかたもなく、

十三二八 朝になると、日は東の空からのぼり、夕

がたになると、西の空にしずみます。

十三三二 朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ歩

いて来る。

十四三八 九 罫 朝が近づく。

十四三九 四 罫 みんなの朝がくる。

十四三九 五 罫 わたしたちの、楽しい朝がくる。

十四四〇 五 罫 おおらかな朝。

十四四〇 六 罫 おごそかな朝。

十四四〇 七 罫 日本の朝。

十四四〇 八 罫 わたしたちの朝だ。

十四四二 二 罫 この美しい朝をむかえよう。

十四四二 八 罫 わたしたちの前に、朝がきた。

十四四二 二 小雪の降った元日の朝、人々が、マッチ

賣りのむすめの、ひえきつた小さなきながらを見

つけたとき、「《略》。」といった。

十五八五 五 罫 きみわれ口そそぐ朝のそここの小

流れ

十五二〇 朝の十時と午後の三時ごろと、日に二ど

ずつ、

十五二一 七 ある朝、このアメリカ人の家族は、いつ

ものように散歩に出ました。

十五二七 朝の冷たい空気の中を、アルプスの深い

谷の中を、大わしは、《略》おりて行きました。

十五五三 四 カーネギー博物館のあるピッツバーグに

着いたのは、暑い真夏の日の朝であった。

十五六五 一〇 喜んだ私は、朝早くからそれをガラガラ

とひきまわすので、

あさあけ「朝明」(名) 1 朝明け

十四三 朝明けの空、夕やけの空の美しさ、月の夜、

星の夜の美しさ。

あさい「浅」(形) 6 あさい 浅い 《—イ—ク》

二六六 罫 「あかい——あおい——あつまる——あ

そふ——あさい——あまい——」

二二八 罫 あさいところをわたりました。

七三三 罫 それは、かた方の足あとが、一つおきに

あさくなつていましたので。

八一九 せみの子たちは、はじめにはあさいところ

にいて、ほそい木の根のしるをすつていますが、

十三五七 あさい水には、あしのめがすすくと、

するどい角をのぞかせた。

十三八七 知識には、浅いものと深いものがあるが、

その深く進んだものを科学的知識という。

あさおき 「朝起」(名) 1 あさおき

二710 会 「あさぼん——あさごはん——あさおき

——」

あさがお 「朝顔」(名) 18 あさがお

一387 あさがおのはながさきました。

一388 あさがおのはながいつつさきました。

一391 うすもいろの あさがおのはなが、いつ
つかきねにさきました。

二77 会 「あさがお——あさつゆ——あさかぜ——

——」

五438 手 ぼくのすきな花は、あさがおです。

五439 手 空色のあさがおです。

五597 かきねにあさがおの花が、三つはじめてさ
きました。

五5910 会 おかあさん、あさがおがさきましたよ。

五629 会 このきゅうりだって、あさがおとおなじ
ですよ。

五636 会 あやこも、このきゅうりも、あさがおの
花もおなじだよ。

五6311 会 あさがおきゅうりは、自分ひとりで、
大きくなったのでしょうが、

六7910 ごろうは、いつか「こくご」でならった
「あさがおの花」を思い出しました。

六7910 そうして、自分とあさがおの花とが、たい
へん近いもののように思われました。

七123 「あさがおに手をやりましょう。」

七125 これは、あさがおのだしている手のことで
はありません。

七126 あさがおのつるがまきつくように立ててあ
る、竹や木のことをいいます。

七583 あさがおの花が、ラジオの音楽をきいてい
ます。

十一513 庭のあさがおの花は、みんなふきちぎら
れ、へちまの葉は、みんな下向きになってしまっ
た。

あさがおにつき 「朝顔日記」(名) 1 あさがお日記

七645 毎日書いてきたあさがお日記。

あさがおのはな 「課名」2 あさがおの花

五33 あさがおの花……五十九

五596 八 あさがおの花

あさかぜ 「朝風」(名) 7 あさかぜ 朝風

一374 あさかぜが、そよそよとのほらを ふきま
す。

二77 会 「あさがお——あさつゆ——あさかぜ——

——」

八978 なえが朝風にゆられるようになりました。

九89 「風」を「朝風」として、これにいろいろ
なことをつけてみましょう。

十一371 会 はぎの花ふく朝風も、音さえすずしく
なってきた。

十四416 会 朝風がふいてきた。

十五213 朝風にひびくすずの音、
あさがた 「朝方」(名) 1 朝がた

八726 朝がた、かもとびおきた。

あさからよるまで 「題名」1 あさからよるまで

三852 あさから よるまで

あさざり 「朝霧」(名) 1 朝ざり

十五212 朝ざりの中から、白い雲のわきたつよう
に、すべり出るまっ白なひつじのむれ、

あさぐもり 「朝曇」(名) 1 朝ぐもり

九302 文 まえ向けるすずめは白し朝ぐもり
あさぐろい 「浅黒」(形) 1 あさ黒い 《—イ》

十一637 少年は、色のあさ黒い、おも長な顔で、
考えぶかそうな目をしていました。

あざける 「嘲」(五) 4 あざける 《—ラーリ》

八933 そのむかし、いじめられたり、あざけられ
たりしたときのことを考えた。

十3210 豊田佐吉は、村の人々から、こういつてあ
ざけられた。

十407 村や町の者は、幸吉のむだばねをあざけり、
そのゆめのような考えをわらった。

十409 まわりの者から、どんなにあざけられ、か
らかわれても、その助力者となってくれたのは、
つまのうめであった。

あさごはん 「朝御飯」(名) 4 あさごはん 朝ご
はん

二79 会 「あさぼん——あさごはん——あさおき
——」

四636 あんしんして、たのしい あさごはんをた
べました、

五626 あさごはんのとき、はたけではじめてとれ
たきゅうりをたべました。

八4011 王さまは、朝ごはんをめしあがろうとなさ
いました。

あさざくら 「朝桜」(題名) 2 朝ざくら

十五224 朝ざくら

十五61 朝ざくら

あさざくら 「朝桜」(名) 1 朝ざくら

十五63 朝 朝ざくらみどり子にいうさようなら

あさし 「浅」(形) 1 あさし 《—キ》

十五131 文 あさき夜の月影清み森をなすすぎの
こぬれの高きひくき見ゆ

あさって 「明後日」(名) 1 あさって

十613 あしたもあさっても、せいくらべをします
よ。

あさつゆ 「朝露」(名) 3 あさつゆ 朝つゆ

二77 ㊦ 「あさがお——あさつゆ——あさかぜ——」

四71 5 『ろ』の字とかけてなんととく。あさつゆととく。ころは、『は』の上にある。

九28 2 ㊦ 朝つゆの中に自轉車のりいれぬ

あさなわ ㊦ 麻繩 (名) 1 あさなわ
十五35 1 また、木の皮や、あさなわなどであんだひももつかい、色のちがつた貝や、じゅうだまを結びつけることも行われた。

あさねぼう ㊦ 朝寝坊 (名) 1 あさねぼう

二82 ㊦ 「あさねぼう。」と、へんなこえでいったので、みんなわいました。

あさのこくばん ㊦ 課名 2 あさのこくばん

一29 八 あさのこくばん……十七

一71 八 あさのこくばん

あさばん ㊦ 朝晩 (名) 1 あさばん

二79 ㊦ 「あさばん——あさごはん——あさおき——」

あさひ ㊦ 朝日 (名) 8 あさひ 朝日

二45 ㊦ 「あたま——足——あご——あさひ——あした——あそこ——」

六62 9 朝日の光で、アルコールのびんがきらっと光った。

七53 朝日の光がななめにさしてきた。

八24 1 朝日が山の上のぼって、明かるい光がさつとさすところになると、

十四41 5 ㊦ 「朝日が、朝日がのぼる。」

十四41 5 ㊦ 「朝日が、朝日がのぼる。」

十五76 ㊦ 影絵めく牛馬朝日を織るあきつ

十五33 9 まっ白な山までも、朝日の中のこの勇ましい少年をはめたたえているようでした。

あさひがわ ㊦ 旭川 (地名) 1 あさひがわ

五43 4 ㊦ ぼくのねえさんは、あさひがわへおよめにいっています。

あさむく ㊦ 欺 (四) 1 あさむく 《一カ》
十五71 ㊦ 冬の水一枝の影もあさむかず

あざやか ㊦ 鮮 (形状) 2 あざやか

十三35 8 子どもたちは、そのあざやかな色どりに、正月氣分を味わう。

十四70 5 これは、夜、電燈の光をあてて見ると、もっとよく、あざやかに見えます。

あさゆう ㊦ 朝夕 (名) 1 朝夕

十五69 9 ああ、新島のおじさんは、私を京都までもつれて来て、朝夕かわいがってくださいましたのだ。

あさよ ㊦ 浅夜 (名) 1 あさ夜

九118 7 ㊦ ほおずきを口にふくみて鳴らすごかわずは鳴くも夏のあさ夜を

あさる ㊦ 漁 (四) 1 あさる 《一リ》

十五114 ㊦ わか草のはつかにもゆる庭に来てすずめあさりととなりへとびぬ

あざわらう ㊦ 嘲笑 (五) 1 あざわらう 《一イ》

十二52 ㊦ 「略。」といてあざわらいました。

あし ㊦ 足 (名) 61 あし 足 1 あとあし・あまあし・うしろあし・かたあし・てあし・とあし・ぬきあし・さしあし・ひとあし・ふたあし・まえあし・みあし・あし・りようあし・ろっぽんあし

一29 4 足も二ほん、ひだりみぎ。

一30 3 足となかのいいことば。

一31 3 この足で、どこへいったでしょう。

一31 5 この足で、どこへいくでしょう。

二45 ㊦ 「あたま——足——あご——あさひ——あした——あそこ——」

二36 3 ㊦ 五人めのめくらは、足をなでて、《略。》といました。

四13 3 この町の手となり足となって、はたらいしています。

六86 ねじは、しごと台のあしのかげにころがっていた。

六13 7 足がつるとすべって、「あつ。」というまに、川の中におちてしまいました。

六58 7 そのひょうしに足をいたためて、歩けなくなりました。

六128 10 トネルのさか道に足をすべらせて、ころころと、下の方へころがりこんでいきました。

六134 5 どうせ、足の早いことにかけては、しかさんにはいけません。

六139 5 五ひきのうさぎさんたちは、あせをふいたり、ねころんだり、足をもんだりしていました。

七34 6 わりにわりこもうとする男の人もあり、足をふまれて、おこっている女の人もありました。

七37 7 ㊦ 「頭はどうきよう、足はおおさか。」

七39 9 はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配そうに私の方をみていましたが、

七77 2 ㊦ そうして、左の足が一本短くて——それから——といてから、ちよつと考える。

七81 9 ㊦ しかも、左の足の短いことを、ちゃんと知っているのです。

七92 5 だすときに、わらを足でけったりして、あばれました。

七97 9 親うさぎのうちにすがりつきますと、親うさぎは、足でけって、のませませんでした。

八10 6 歩いているとき、追いかけてきて、かかとや足の指をつついたりするのです。

八17 10 虫は、《略》、大きくなるにつれて、六本の足がだんだん強くなり、

八22 9 足もできました。

八46 けらいたちは、足をぼうにしてさがしまわりました、やはりみあたりませんでした。
 八60 野原にはかれ草がつみあげられ、このとりは、長い赤い足をして歩きまわっていた。
 八66 9 足のうまく足をつかうようすや、あのしせいなのをみてわかる。
 八71 8 あひるにはかみつかれ、略、えさをくれるむすめには足でくばされた。
 八77 11 にわとりは、足はみじかいが、いいたまごを生んだ。
 八85 10 あひるの子は、あながこおってしまったように、いつも足をつかっているかならなかつた。
 九17 4 すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。
 九34 7 ちよまの根は、略、たこの足のように一かぶから七本も八本もでていて、
 九56 2 みえない方の目は、白くびくびくうごき、足もひどく曲がつてやぎのようですし、
 九95 3 そうしてさっさといきかけるが、舞台はしで足をとめる。
 九129 5 あぶが、足をひっかけて、ブンブンいっているところだ。
 九130 1 略、と、くもは、足をふんばって身がまえをしました。
 九145 2 くもは、そつと自分の手をのぼし足をのぼしてみました。
 九145 3 ふしくれた手、とがった足、
 九145 4 いままでこの手で、この足で——くもは、自分ながら自分のからだを、そろそろしく思われてきました。
 十47 9 ところが、私たちの足では十二三分のこ

ろですが、妹にはそうはいきませんでした。
 十48 2 これは、足がおそいというためばかりでなく、
 十50 6 黒いぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、妹はびっくりして、
 十50 9 「クツケルヨ」は、足をせなかに「くつつけるよ。」というのです。
 十一17 3 わたしのためには、いばらの道をもふみわけたその足。
 十一52 7 けれども、その足も動かすことはできなかった。
 十二45 1 右手を受け持つ人、左手だけの人、足だけのひと、それぞれ手わけしているんだが、
 十二106 9 二ひきのうさが、うしろから手をふり足をふって、おうえんをはじめました。
 十四56 11 くらんなさい、私のこの足を、手を。
 十四88 5 足がつめたくなって、立ちどまったためであろか。
 十四89 2 子どもたちは、この黒い土の上に集まって、足でトントンとふんでみたり、
 十四90 8 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。
 十四91 10 だから、その足のつめたいことといったらなかつた。
 十四91 11 自分の足だか、ひとの足だか、わからないくらいだった。
 十四91 12 自分の足だか、ひとの足だか、
 十四92 1 寒さがしみこんで、足は赤く、青くなっていた。
 十四96 2 女の子は、小さな、つめたい足を、かやくほのおの方へのぼした。
 十五84 4 かわずだまりて人の足大きくすぐる

十五56 4 私、小手をかざして足の下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ、
 十五64 11 そうして、足をばたばたさせながら、略、と命令した。
 十五84 6 小ひつじの足に、小うしのかんぞうもある。
 十五87 11 腹のへらないときに物をたべる幸福で、略、ふたりとも、足はうどこんです。
 十五104 12 ひら手でたたいたり、いそがしく足でけつたりして気持ちがよいにはねまわります。
 あし 〔葦〕(名) 6 あし
 八72 9 あひるの子は、このあしの中で、横になつて休みたいと思つた。
 八74 1 がんのむれが、そろつてあしのあいだからとびたつた。
 八74 4 あしの上に廣がつている木の枝にものぼつていた。
 八75 11 たまの音はあしのあいだに鳴りひびき、てつばうはひきつづいて火ぶたをきつた。
 十一55 8 ことばはひびく、あしの葉のふえよ。
 十三57 あさい水には、あしのめがすすくと、するどい角をのぞかせた。
 あじ 〔味〕(名) 11 あじ 味
 八94 4 品種は、あじのよい「農林1号」というのだそうです。
 九36 11 手にとつて口へいれると、つめたくてあまい味がしました。
 九120 9 あまいような、すずしいような、氣の晴れ晴れするような味だった。
 九122 1 それで茶をたててみると、いままで味わつたこともないような、ふしぎな味が感じられた。
 九123 3 すると、いい味は、もっと遠いところで感

じられる。

九124 右岸や左岸では、その味がきえてしまうこととがあつても、中ほどでは、いい味はたえなかつた。

九125 中ほどでは、いい味はたえなかつた。

九123 大きな支流が流れこむところへくると、ときどきあまい水の味がわからなくなつてしまう。

九123 11 ここで茶人のしたには、まぎれもないいい味のはつきりと感じられるようになった。

九124 近くまでくると、いい味の水は、左の岸のほとりを流れていた。

九126 1 そこからさらに、すこしさかのぼつて水を飲んでみると、いい味は、すこしもなかつた。

アジア〔地名〕1 アジア

十二466 日本ではあまりさかんでなかつたが、アジアでもヨーロッパでも、りっぱな影絵しぼいできています。

アジアたいりく〔地名〕1 アジア大陸

十四768 これが、もうひとまわり大じかけになつて、たとえば、アジア大陸と太平洋との間におけると、それがいわゆる季節風（モンスーン）で、あしあと〔足跡〕（名）10 足あと

七82 11 私さばくを旅していますと、砂の上からくだの足あとがつづいていました。

七83 1 11 それなのに人の足あとがみえません。

七83 8 11 それは、かた方の足あとが、一つおきにあさくなつていましたので。

八56 4 11 ぼくは、砂地の上になつてすぐな足あとをつてみようと歩いて歩きだした。

八56 5 11 すこし歩いてからふり返つてみると、足あとが曲がついている。

八57 5 11 いま歩いてきた足あとをみると、

八57 6 11 みちがえるように、まっすぐな、しっかりとした足あとがついている。

十四878 その人の足あとをしるべに、第二の人が歩いて行く。

十四87 11 やがて第三の人も通り、第四、第五の人も、同じ足あとをたよりに通つて行く。

十四88 1 11 ぼつりぼつりとしるした足あとが、廣野を横ぎる一すじの道となる。

あしあと〔足音〕（名）6 足音

六7 3 11 ふいにバタバタと足音がして、小さな子どもがふたり、おくからかけだしてきた。

六128 3 11 おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさんたちは、うまくにげました。

七8 3 11 渡りろうかをとる足音がきこえる。

十一81 4 11 ドアのそとに足音がきこえて、やがて、「略」という声がきこえました。

十二32 4 11 私は、近づいてくる足音を感じましたので、略、両手をさしました。

十四38 10 11 夜明けの足音、しずかな夜明け。

あしかけ〔足掛〕（名）1 足かけ
十二106 5 11 かえるは、うさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。

あしきき〔足先〕（名）3 足さき 足先
九56 3 11 ことに、その足さきは、しゃもじのようなかたちだったのです。

十二35 9 11 そうして私は、くだけた人形のかげらを足さきを感じながら、ゆかいに思いました。

十五64 1 11 だされたくつを見て、にこにこわらった私は、それを足先につっかけるなり、すぐ、小鳥のようにとびだした。

あした〔明日〕（名）12 あした

一18 3 11 あした てんきになあれ。

二46 11 「あたま——足——あご——あさひ——

あした——あそこ——」

三77 10 11 あしたの あさも、お日さまは きっと えてきてくれるの。

四27 5 11 あしたの あさも、また かけっこをしようね。

四56 8 11 あしたの あさ、出発しても いいよ。

五98 8 11 あした山へつれていって、はなそうと思つているのです。

六110 8 11 よし、あしたはうまくやって、みんなをわらせてみせるぞと思つたが、

九47 6 11 あした、めんどろな裁判をしますから、おいでなさい。

九102 3 11 いっしょにあやまろう、あした——

十61 3 11 あしたもあさつても、せいくらべをしますよ。

十一85 9 11 ぼく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにいさせてください。

十五114 7 11 さあ、これで、おまえたち、私に会つたのだから、あしたまた、あの小さな家に帰って、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだろうね。

あしどり〔足取〕（名）5 足どり

五75 8 11 おじいさんは、口ごたえもできず、力のない足どりで、海へやってきました。

六25 4 11 ありはなんにもいわないで、おもい足どりでかみてにさつていきます。

十25 6 11 坂道を、ゆつくりとした足どりで、家に帰ってくる。

十一38 6 11 村道に立つ大のぼり、ゆききの人もえ顔して、その足どりもいそいそと。

十五21 12 11 女の子は、あぶない足どりで、山の上の

方に、〈略〉、とかく家庭教師の手からはなれて行きそうにしていました。

あしなみ 〔足並〕(名) 1 足なみ

十一112 〔足〕いい整調が、りっぱに日本じゅうの足なみをそろえてくれるにちがいないよ。

あしばや 〔足早〕(形状) 1 足ばや

十七7 おとうさんの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけていって、

あしぶみ 〔足踏〕(名) 1 あしぶみ

一237 「くつがなる」では、あしぶみをしました。

あしもと 〔足元〕(名) 6 足もと

八583 ふり返ってみると、足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺の屋根や停車場が目についた。

九376 〔足〕じめじめした足もとがきみがわるく、そのうえ、〈略〉雑草がいちめんにはえていて、

九396 〔足〕上の方のかれ枝をじゅんじゅんにたたき落し、足もとの枝をおろして、

九401 〔足〕足もとをよくみて、氣をつけてね。

九613 そのとき、いちろうは、足もとでパチパチしおのはねるような音をききました。

十二735 白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、子どもたちや、芭蕉の足もとに落ちて、

あじわこ 〔味〕(五) 5 味わう 《ーウーツ》

九1211 それで茶をたててみると、いままで味わったこともないような、ふしぎな味が感じられた。

十646 みなさんも、大きくなったら、〈略〉よい藝術を味わうことを、喜ぶだろうと思います。

十三359 子どもたちは、そのあざやかな色どりに、正月氣分を味わう。

十三433 (顔)をあげて、そのことばを味わうように()生きて帰って来ました……

十四469 このときぐらい、しみじみと歌のありがたさを味わったことはありませんでした。

あじわえる 〔味〕(下) 1 あじわえる 《ーエ》

六279 〔味〕はたらかないものには、この楽しさ、この喜びはあじわえないだろう。

あす 〔明日〕(名) 5 あす

四613 〔あす〕あすのあさ、出発しよう。

八398 〔あす〕あすの朝から、たしかにそのようになるでしょう。

十四101 〔あす〕ランプとコーヒー入れとは、あす、送らせませす。

十五773 きょうのできごとを、あすまでのぼすな。

十五1191 〔あす〕ほどなくあらわれるあすの日を待ちながら。

あずかる 〔与〕(五) 1 あずかる 《ーリ》

三147 ある日、おしゃかさまは、王さまのおまねきにあずかりました。

あずける 〔預〕(下) 2 あずける 《ーケ》

十338 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

十一286 そこで、ふたりの弟は母親のさとに、金次郎は親類のまんべえさんのところに、あずけられることになりました。

あすこ 〔彼処〕(代名) 2 あすこ

八910 〔あすこ〕あすこに新しいのがいるよ。

十五1087 〔あすこ〕あすこに、ずっと後の方に、パールをかぶったままで、ちつとも出て来ないのは。

あせ 〔汗〕(名) 16 あせ

二399 たろうは、あせをふきながら、あたりのけしきをながめます。

三509 〔目〕目もとをすえて石を切る、あせをながして石を切る。

四537 あせをいっぱいかいている がんたには、この風がなんともいえないいい氣もちでした。

四917 ほおにはあせがつたわっている。

五294 〔あせ〕どこかのおじさんが、荷物を二つ持って、あせをふきふきあるいていました。

六1810 上でき。」と、さもまんどくそうにしき台をおりてきて、あせをふきます。

六1394 五ひきのうさぎさんたちは、あせをふいたり、ねころんだり、足をもんだりしていました。

九397 〔足〕足もとの枝をおろして、やつとおりとくると、からだじゅうがあせです。

九549 いちろうは、顔をまっかにして、あせをほとほと落しながら、その坂を登りますと、

九698 やまねこは、〈略〉、ひたいのあせをぬぐいながら、いちろうの手をとりました。

九846 だれもかれも、あせを流し、顔をまっかにしてほっています。

九1058 だんだんのぼり坂になると、からだがかほってあせがでる。

十一355 〔庭〕庭にかがやくひまわりの花、あぶらぜみの声さわがしく、晝の休みもあせがでる。

十一365 〔日〕ひとりのあせもおさまって、夕風ふけばたいこ鳴り、

十二851 見物人は、いよいよ手にあせをにぎりました。

十五653 きびしい夏の日に、私をせにおいながら、あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、

あせ 〔汗〕(名) 1 あせ

十一379 〔庭〕あせに火とさくまんじゅしゃげ 庭にもえたつはけいとう。

あせだく 〔汗〕(名) 1 あせだく

六二七三 毎日あせだくだったね。」あり「そのおかげでさ、いまこうしてあたまることまでできるし、

あせばむ「汗」(五) 1 あせばむ《—ン》

九〇九 急停止すると、ぱつと雪けむりが立ち、あせばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。

あせまみれ「汗」(名) 1 あせまみれ

一四八 あせまみれになった工員の顔、胸、うで。

あぜまめ「畦豆」(名) 1 あぜまめ

一三三 畦はそだつし、あぜまめのびて、

あぜみち「畦道」(名) 1 あぜ道

一六〇 一 その近道というのは、田のあぜ道で、と

ちゅうに、《略》一本橋がある。

あそこ「彼処」(代名) 6 あそこ

二四六 一 「あたま—足—あご—あさひ—

あした—あそこ—」

五一〇 一 あ、あそこにきれいなさくら。

五二八 一 ほら、あそこをくらん。

五五二 一 あそこ大きく光っている屋ですよ。

八七〇 一 あそこにいるあひるの子をさ。

一五八 一 私たち、あそこへ行ってもいいの。

あそび「遊」(名) 2 あそび 遊び いろいろはあそ

び・かいぶんあそび・ことばあそび・トランプあそ

び・なぞあそび・はやくちあそび・ひとりあそび・

ふくびきあそび

四六七 一 「かいぶんあそび」これは、上から よん

でも下からよんでも、おなじになることばを

考えだす あそびです。

一三三 一 私は、すぐこの指の遊びがおもしろく

なって、それをまねようと思いました。

あそびじかん「遊時間」(名) 1 遊び時間
一五八 一 私は、遊び時間にふくろうをみにいきまし

た。

あそびたわむれる「遊戯」(下) 1 遊びたわむ

れる《—レ》

一〇一 一 どこへいっても、遊びたわむれている子ど

もにいました。

あそびつづける「遊続」(下) 1 遊びつづける

《—ケ》

八三 一 ふたりは、毎日野原で楽しく遊びつづけま

した。

あそびともだち「遊友達」(名) 1 遊び友だち

一三二 一 どれも身なりはきれいではないのですが、

芭蕉は、いつも遊び友だちにしていました。

あそびばしょ「遊場所」(名) 1 遊び場所

一三三 一 子どもたちにとっては、かけがえのない、

楽しい遊び場所であり、

あそぶ「遊」(五) 69 あそぶ 遊ぶ 《—バ—ビ—

—ブ—ボ—ン》↓おあそびなさる・はいあそぶ

二六六 一 「あかい—あおい—あつまる—あ

そぶ—あさい—あまい—」

二四六 一 しゃぼんだまをふいてあそびました。

二一五 一 かんがえものをしてあそびました。

二〇一 一 おわりに、ひとりがいったことばから、

おもいついたことばをじゅんじゅんにつづけ

て、あそびました。

一五八 一 ある日、みんなであそびにでかけまし

た。

一六三 一 そうして、そこでおもしろくあそんでか

ら丘をおりてみずうみへでました。

一六九 一 それからみんなはおもしろくあそびま

した。

一七九 一 五人の子どもが、もみじのこかげのす

なばであそんでいます。

一七九 一 むちゅうであそんでいましたので、

四二〇 一 さつき、みんなとねこねずみをして

あそびました。

四二九 一 ぶどうえんのおじさんのところへい

て、あそんでくることかな。

四六五 一 「早口あそび」これは、いいにくいこ

とばをみつめて、それをまちがえないで、早く

いってあそぶのです。

四八五 一 星のきれいなこのよるを、みんな

なかよくあそびましょう。

四八四 一 クリスマスツリーのそばで、みんな

あそびました。

四九六 一 四人の子どもが、一ぴきのかめをとり

まいて、あそんでいます

四九七 一 このかめをころがしてあそぼう。

四九八 一 ころがしてあそぼうよ。

四九九 一 さあ、あつちへいってあそぼう。

五〇〇 一 どうぞゆっくりあそんでいってくだ

さいませ。

五〇一 一 世界の友よ、手をつなぎ、なかよくとん

であそぼうよ。

五〇二 一 みんなは、《略》、日のかんかんでるところ

で長くあそばないことなどを、話しあいました。

五〇三 一 いっしょにあそぼうよ。」かこの中のひ

わは、なかまをよびました。

五〇四 一 「ここであそんではいけません。」

五〇五 一 いまあそばないで、いつあそぼうとい

うのさ。

五〇六 一 いつあそぼうというのさ。

五〇七 一 ここで楽しくあそんでおいで。

五〇八 一 まあいよいよ、こんないいときにあそば

いで、いつあそぼうというんだね。

六243 ㊦ いつあそぼうというんだね。
 六514 ㊦ ふみおと、よしおと、みちこの三人が、か
 げふみをして遊んでいました。
 六516 ㊦ 三人は遊ぶのをやめて、空をみあげました。
 六673 ㊦ お友だちと遊ぼうと思って、山の谷を歩い
 ていきました。
 六677 ㊦ 遊びましょう。」と、子ぐまがいうと、
 さるは子ぐまをみてこわがって、
 六1217 ㊦ 五ひきのうさぎさんは、〈略〉、フットボー
 ルをしたりして遊びました。
 六1229 ㊦ うさぎさんたちは、くるみの木の下で遊び
 ました。
 六1261 ㊦ あなをほって、トンネルをこしらえて遊
 ぼうよ。
 六1318 ㊦ 「こんどはなにをして遊ぼう。」
 六1337 ㊦ 「しかさん、ただ遊ぶんだよ。」
 六1338 ㊦ ただ遊ぶんじや、おもしろくない。
 七284 ㊦ はるおは、さつきから、おもてで遊んで
 いますよ。
 七307 ㊦ さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。
 七665 ㊦ うら山に、みかんを持って遊びにきている。
 八510 ㊦ かたへ乗せたり、てのひらで遊ばせたり、
 □さきにふくんだえさをとらせたり——
 八112 ㊦ うちがわでむじやきに遊んでいたピオを、
 かた足でふんでしまったのです。
 八274 ㊦ むすめたちが、楽しみに歌ったり、花つみ
 をしたりして遊んでいました。
 八2810 ㊦ ほかのむすめたちは、野原で遊んでいる
 のに、うちのむすめは、〈略〉感心なことだ。
 八865 ㊦ 子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、
 あひるの子はまたいじめられるかと思って、
 九442 ㊦ 妹は、かきの葉を「〈略〉。」といってひ

ろい集めては、ままごとをして遊びます。
 九469 ㊦ 天気の良い日は、〈略〉、先生とみなさん
 が、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。
 九909 ㊦ 「もうきみとは遊ばないからな。」
 九9010 ㊦ だれがきみなんかと遊ぶもんか——
 十81 ㊦ しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶこと
 がすきですから、
 十82 ㊦ 道で子どもたちが、なわとびをして遊んで
 いたりしますと、
 十1012 ㊦ 三人の少女は、その葉をひろい集めて、
 〈略〉、遊んでいました。
 十113 ㊦ その少女たちも遊びにきています。
 十2112 ㊦ 「早く、あの野原で、遊びたいな。」
 十484 ㊦ 道ばたにあるものを、なんでもみつつけて、
 〈略〉、そこで遊んだりしたからでした。
 十523 ㊦ 「モット」ここで遊んでいたと、私にね
 だったり、
 十736 ㊦ じつは、どんなさまのおるすのあいだ、
 私どもは、すもうをとって遊んでいました。
 十一53 ㊦ いつも砂原で、すもうをとったり、おに
 ごっこをしたりして遊んでいるが、
 十二113 ㊦ あの廣場で遊んでいる子どもたちをご
 らんなさい。
 十二334 ㊦ 私がしばらくその人形と遊んでいますと、
 十二349 ㊦ ある日、私が新しい人形を持って遊んで
 いますと、
 十二711 ㊦ そのあたりに遊んでいる子どもたちも、
 同じ気持でした。
 十二731 ㊦ 「みんなは、雪が降ったら、なにをし
 て遊ぶの。」
 十二9410 ㊦ すすきの野原を心へえがき、自分もそん
 なところについて遊んでみたいと思う。

十三281 ㊦ 夏は夏で、ひんやりとした土べいの日か
 げを選び、風の通り場で遊んでいる。
 十三282 ㊦ 遊ぶといっても、べつに、おもちゃや絵
 本などを持って遊ぶわけではない。
 十三282 ㊦ おもちゃや絵本などを持って遊ぶわけ
 はない。
 十五10510 ㊦ ぼくたちは、よくいっしょに遊ぶので
 すもの。
 あそべる [遊] (下) 2 あそべる 《一ペル》
 三776 ㊦ お日さまは、よその國の子どもがあ
 そべるように、光をあげにいくのです。
 四734 ㊦ これをあつ紙に書いて、えもつけて、
 あそべるようにこしらえることにしました。
 あたえる [与] (下) 9 あたえる 與える 《一
 エーエル》
 十4610 ㊦ あなたが〈略〉、眞珠を世界の人々にあ
 たえたことに、心から敬意をささげます。
 十二3710 ㊦ この生きた一ことが、私のたましいを目
 ざめさせ、光と希望と喜びとを與えることになっ
 たのです。
 十二382 ㊦ それは、先生が與えてくださった新しい
 目で、すべてをみるようになったからです。
 十二892 ㊦ そうでないと、相手の人に満足と與える
 ことができないし、また自分の誠意も通じない。
 十三2411 ㊦ 木材があたえられたうえに、いい氣候が
 あたえられました。
 十三2412 ㊦ いい氣候があたえられました。
 十四3710 ㊦ 星は、きつと、あなたがたに力をあたえ
 てくれるにちがいありません。
 十五746 ㊦ 兄が特権を與えられねばならないという
 理由はすこしもない。
 十五748 ㊦ 親としてみれば、自分の子女にはすべて

同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に
巢だたせたいのが念願である。

あたたか「暖」(形状) 3 あたたか

三三4 図 あたたかな かげ。

三三6 4 図 こづかいさんのおへやはあたたかです。

八二5 図 あたたかなへやにはいつてさ、ものごと
を教えてもらえる人たちのなまこまりをししたんだ
もの。

あたたか「い」「暖」(形) 19 あたたかい 暖かい
《イ・ク》

二六5 1 図 あたたかい かげがふいてくる。

二六5 3 図 ふいてくる、あたたかい かげ。

四一六 2 図 せながほかほか あたたかい。

六二六 9 図 ああ、あたたかい、あたたかい。」あり
「夏のあいだに、こんなにたぎぎをあつめてお
いて、よかったね。」

六二六 9 図 ああ、あたたかい、あたたかい。

六三1 4 図 このあたたかいトンネルで、今夜、ゆっ
くりとねむりたかったのさ。

八八4 4 図 はくちようは《略》、この寒い國からあ
たかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。

八九3 7 太陽はあたたかく、おだやかにてらした。

九二1 10 なるべく早く南のあたたかいところへ運ぶ
ために、飛行機をつかうことにしました。

九二2 4 それでも運びきれなくて、九月十九日の晩
には、ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあた
かくした貨車をつつて送ったほどでした。

九二3 7 この國の人々が、あわれなこの小鳥たちに
しめしたもつとも人間らしいあたたかい氣持は、

十一三〇 8 図 ひがすすぎれば風あたたかく、

十一七8 4 あたたかい愛情のこもったことばで、
しっかりとするようにと病人をはげました。

一二三六 2 私は暖かい日なたにでかけるのだと知っ
て、おどりがりました。

一二五五 3 自分の生まれたところは、なんともいえ
ない暖かい感じのするものである。

一四六7 1 春さきなどの、ぼかぼかあたたかい日に
は、

一四六八 4 あたたかい空氣がのぼっていくあとへ、
《略》つめたい空氣が下からふきこんできて、

一四八九 10 読む人の心がひかれるのは、ものごとを
あたたかくながめた人によって書かれた文である。

一四九7 2 まるやきの鳥が、ほかほかとあたたかい
いきをたてて、テーブルの一方におかれてあった。

あたたかさ「暖」(名) 1 あたたかさ

八二〇 6 上からつたわってくるあたたかさ、かわ
きかたで、《略》を知ります。

あたたまる「暖」(五) 1 あたたまる 《一ル》
六二七 5 図 そのおかげでさ、いまこうしてあたたま
ることもできるし、

あたためる「暖」(下) 7 あたためる 《一メ・
一メル》

八一一 11 ぐすりをのませるやら、あたためるやら――
あらゆる手あてをつくしましたが、

九二〇 10 へやはいそいであたためられ、《略》、つば
めたちのとまるところがつくられました。

一四六八 1 陸地の上のどこかの一地方が、日光のた
めに、特別にあたためられると、

一四七五 1 地面の空氣が、日光のためにあたためら
れてできるときのむらは、飛行家にとって、たい
へんあぶないものです。

一四七五 7 畑のほうが、森よりも、日光のためによ
けいあたためられるので、

一四九4 8 両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で

重ねて、どうかして、あたためようとした。

一四九4 10 その両手をあたためためるために、一本の
マッチで《略》、火をともしことができたならば、

あたたふた「副」 1 あたふた

一五九3 7 図 おまねきをいただきながら、そうあた
ふたとおいとますることもできませんからね。

あたま「頭」(名) 54 あたま 頭
二四五 図 「あたま――足――あご――あさひ――
あした――あそこ――」

二五八 図 おかあさんは、三人の あたまを、しずか
になでてやります。

四五五 1 かつちゃんねつがでてきたので、みん
なが かわるがわる、つめたい 水で、あたまを
ひやしてやりました。

四六四 5 かつちゃんが、わびるように ちよこんと
あたまをさげたので、

五二六 7 といつて、かるくあたまをさげて、そこを
でました。

五九一 7 図 このたけのこが、えんの下にあたまをだ
したので、

五九一 11 図 のびて、のびて、とうとうえんの下のい
たで、あたまをコツンとうったのだよ。

五九五 11 あたまからせなかにかけて、き色がかった
美しい鳥になりました。

六三六 6 おれるようにあたまを地につけるすぎの木。

六四〇 9 新しいことがあたまにうかんだので、

七三五 2 汽車がゆれるたびに、前後からおされて、
さぶらうは、だんだん頭を私によせ、

七三六 8 頭の上で声がしました。

七三七 7 図 「頭はとうきょう、足はおおさか。」

七三三 3 「《略》。」と、頭をさげました。

七四一 1 私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、

せなから、腹までふりまかれて、
 七92 4 おくへはいってでてこないで、小屋へ頭
 をいれて、だきあげて、そとへだしました。
 七99 6 母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭をそろ
 えて、なかよくにんじんをたべていました。
 八67 7 だんだんなれて、指さきへもかたへもとま
 るようになったばかりか、頭の上にも乗り、
 八98 8 私のひざのあいだにもぐったり頭をつっこ
 んだりします。
 八22 7 頭がでます。
 八23 2 虫はぐっとそり返るようにして、頭をうし
 ろにさげました。
 八66 1 水はひなたたちの頭の上を流れたが、すぐに
 うかびあがってきて、うまくおよいだ。
 八67 7 そこには、二つの鳥の家族が、一つのうな
 ぎの頭のことであらそっていた。
 八74 8 頭をねじ曲げてつばさの中にいれた。
 八90 5 かわいそうにあひるの子は、ころされるも
 のと思ひながら、水の上に頭をたれた。
 八92 11 年をとったはくちようが、新しいはくちよ
 うのまえにきて頭をさげた。
 八93 2 どうしていいのかわからないので、つばさ
 の中に頭をかくした。
 九21 3 いく干というつばめたちは、人をおそれず、
 へやにはいつてくる人があると、たちまち、その
 かたや、頭や、手にとまりました。
 九36 8 手 この谷まの流れにはいつて、頭から水を
 あびるのが楽しみでした。
 九64 5 なんといいつつて、頭のどがつているの
 がいちばんえらいのです。
 九66 5 なんといいつつて、頭のどがつたものが、
 いちばんえらいんです。

九67 6 頭のどがつたのが——「ガヤガヤ、
 九69 3 3 この中で、いちばんばかで、〈略〉、頭の
 つぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」
 九72 3 3 こがねのどんぐりニリットルと、しおざ
 けの頭と、どちらがおすきですか。
 九72 5 やまねこは、さけの頭でなくてまあよかつ
 たというふうに、
 九100 5 たかぎ、頭をかかえてにげるまねをする。
 九141 9 だれかが、くもの頭をなでています。
 九143 1 月はもう頭の上まできていました。
 十一15 9 小鳥が、はばたいてでて、くるくる、く
 るくる、ぼくたちの頭の上を、まわりはじめる。
 十一68 8 その大きなへやのはしまでいくと、看護
 人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまって、
 十一69 1 少年は包みを下におくと、頭を病人のか
 たのところへさげて、
 十一79 11 医者とは、まったくだめだといわんばかり
 に頭をふりました。
 十二15 2 そのくち草をとりのけようとすると、
 大きなえんまこおろぎが一ぴき頭をだしていた。
 十二51 4 よくかわかしてから、絵のぐで、顔をか
 いたり頭の毛をぬる。
 十二53 11 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔
 や頭がみえないようにする。
 十三29 3 その「ビューン」がとると、〈略〉子
 どもが、もう、頭をつるつるにそられている。
 十四48 10 頭から大波をかぶっても、平気で歌を続
 けていました。
 十四57 4 それは、頭のぼうしで、日、水、土、は
 ちたちだということがわかりました。
 十五22 6 みんなの頭の上が暗くなって、なんだか

大きなあらしがふき起ったような音がしました。
 十五26 6 わしが大きなくちばしで女の子の頭でも
 つつけば、大けがをするか、殺される心配がある。
 十五30 1 大わしは、太いけずめの最初の一げきで
 少年の頭をくだこうと、向かって来ました。
 十五70 2 じつとおじさんの写真に見入りながら、
 私は無言で頭をびよこんとさげた。
 十五72 7 しずかに頭をさげた。
 十五82 8 金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭に
 いっぱいつけています。
 あたらしい「新」(形) 55 あたらしい 新しい
 《イーク》
 二60 4 こんど、みなさんが二年生になったら、
 あたらしい一年生がはいってきます。
 五68 3 金のさかなさん、おばあさんが、新しい
 おけがほしいといっています。
 五68 6 帰るまでには、新しいおけができていま
 すよ。
 五68 8 おじいさんが帰ってみると、おばあさんは、
 新しいおけを持っていました。
 五109 6 小鳥でも感心なものだ、新しいことをど
 んどんおぼえていく。
 六110 9 新しいことがあたまにうかんだので、もう
 そんなことはどうでもよくなってしまった。
 六113 10 五十音について、新しく思いついたことを
 みんなに話して、
 六129 2 新しいおにがきまって、またはじめようと
 したとき、
 七98 8 毎年、新しく入学した子どもたちが、わ
 たしのそばへやってきた。
 七99 9 毎年、新しい卒業生たちが、わたしのそ
 ばからさっていった。

七104 渡し終ると、またひき返して、新しい子どもを乗せ、向こう岸へ運ぶ。
 七135 「新しく手をつけた。」このようなときの「手」は、どんないみにつかわれているのでしょうか。
 七248 兄は、二センチほどに大きくなったあおむしを、新しい葉にうつす。
 七88 うさぎは、新しい草をいれてやると、それほどばかりたべて、
 八726 そうして、新しいなかまをみた。
 八910 「あすこに新しいのがあるよ。」
 八921 新しいのがきた、きた。
 八927 「新しいのが、いちばんきれいだ。」
 八9210 年をとったはくちょうが、新しいはくちょうのまゑにきて頭をさげた。
 八9211 新しいはくちょうは、すっかりはにかんでしまった。
 八936 にわこの木でさえ、新しいはくちょうのまゑに枝をたれた。
 八979 黄みどりの新しいなえが、だんだん育っていきます。
 八1002 どのなえからも、すこしずつ新しいなえができました。
 八1005 1本のなえのまん中からでた新しい葉が、5cmぐらいいました。
 八1009 葉と葉のあいだから、新しい葉がたくさんできました。
 八1011 新しい葉は、まるまってでできます。
 九86 ことばの組みあわせも、それぞれちがった新しい思いをおこさせます。
 九543 谷川の南の、まっ黒なかやの木の森の方へ、

新しい小さな道がついていました。
 九938 新しいすみをひろいあげるが、自分の物ではないので、なおあたりをさがしている。
 十239 新しい家のたつた町、ふみきりばんのおじいさん。
 十364 いままでの失敗のもとをとりぞいて、新しい設計図をこしらえあげた。
 十377 日本の新しい出発にあたって、この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであらう。
 十416 かれは、新しく母貝を求めてきて、やりなおしにかかった。
 十563 かいこが、皮をぬいで新しく成長していくように、
 十564 私も、ここで、いままでの作文のからをぬぎさって、新しい世界にふみだしていこうと思います。
 十一77 ポートは向きをかえて、あぶないところからぬけだして、新しい方向に進んでいく。
 十二349 ある日、私が新しい人形を持って遊んでいますと、
 十二357 私は、(略)、新しい人形を手にとって、ゆかにたたきつけました。
 十二382 それは、先生が與えてくださった新しい目で、すべてをみるようになったからです。
 十二394 私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日待つことを知りました。
 十二1101 外國から書物が新しくはいってくることは、外國人の心が傳わることで、
 十二1132 新しい学問をきり開いていくときは、
 十二1149 こんどの新しい憲法は、この議事堂でたじょうしました。

十三511 新しい勇氣や空想をもって、春は、また、楽しい船出のほぬのを、高くかかげる季節。
 十三254 すたれた都市はふたたびおこり、新しい町村が、いたるところに生まれました。
 十四256 新しいものが世の中にできてくると、
 十四257 新しいものが世の中にできてくると、ことばも、それにつれて、新しく生まれるものであることが、考えられる。
 十四409 新しい世界のおとずれ。
 十五456 日本の手工業も、外國から新しい方法を学んで、
 十五517 主人は、新しい茶をハギンスにすめながら、「(略)」と、自分のことをうちあげた。
 十五10712 それは、毎日ぼくたちを照らす光に、二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。
 十五10812 いま來ようとする新しい『喜び』をむかえているのですよ。
 十五1107 そのうえ、毎日、新しい力と、わかさと幸福とがますますです。
 十五1242 新しい旅の門出、希望をもって。
 あたらしいしゅっぱつ (課名) 2 新しい出発
 十一31 五 新しい出発……四十三
 十一43 五 新しい出発
 あたらしいせかい (題名) 2 新しい世界
 十36 新しい世界
 十554 新しい世界
 あたり (名) 34 あたり ちちゅうぶアラビアあたり
 一627 きゆうに あたりが あかるくなりました。
 二401 たろうは、あせを ふきながら、あたりのけしきをながめます。
 三318 一だん あがる ごとに、あたりのよう

すがかわります。
 三112 6 お月さまが 一どに 十も でたかと思われ
 るほど、あたりが あかるく なりました。
 四109 1 うらしまは、あたりの うつくしさに おど
 ろいています。
 五40 2 ⑤ きゅうにあたりが美しくなると、私は、
 なんだか、ぼんやりするほどのしい氣がします。
 五43 1 ④ 一日じゅうてつだいをして、うちに帰る
 ころは、もう、あたりはくらくなくなっています。
 五54 9 それから、あたりをみまわしましたが、空
 は、まだ、ほんのりと明かるくて、
 五57 6 あんまり大きな声をだしたので、あたりの
 人がわらいました。
 六44 4 ねじは、おどろいてあたりをみまわしたが、
 六51 5 そのうちに、あたりがきゅうにくらくくなっ
 て、かがみえなくなりました。
 八16 2 あおぎりの根ばかりではなく、あたりの木
 の根ものびています。
 八20 9 あたりのくらくなかけた夕ぐれをみはか
 らって、《略》地上にはいだします。
 八25 4 やがて、秋になると、みんな死んでしまっ
 て、あたりもひっそりとしずかになります。
 八27 5 天帝は、あたりをみまわして、なにかさが
 すようになさいました。
 八30 3 天帝は、《略》、黒うしのしっぽのあたりを
 一つきおつきになりました。
 八56 9 まえのよりはまっすぐだが、《略》、わきみ
 をしたあたりが横にそれている。
 八61 7 そうして、みどりの葉の下で、あたりをみ
 まわした。
 八76 4 なん時間もたってから、ようやくあたりを
 みまわし、

九27 2 ⑤ 月の夜をわが家のありしあたりまで
 九40 7 ⑤ すこし氣がおちついてから、ぼくはあた
 りをみまわしますと、
 九57 10 男は、喜んで、息をハアハアさせて、耳の
 あたりまでまっかになり、
 九93 9 新しいすみをひろいあげるが、自分の物で
 はないので、なおあたりをさがしている。
 九134 2 くもが氣がついてみると、あたりにいいに
 おいがします。
 九141 1 あたりには、やはりばらの花のにおいがし
 ていました。
 十10 6 そのあたりは、フランスの國道にそった景
 色のよいところですから、
 十50 4 いぬに近よってみると、ひふ病にかかつて
 いて、顔のあたりの毛が、ぬけていました。
 十一68 4 大きなへやはうす暗く、あたりにははげ
 しいくすりのにおいがただよっていました。
 十二71 11 そのあたりに遊んでいる子どもたちも、
 同じ氣持でした。
 十二72 5 そのあたりにいるのは、川べりにある船
 大工の子どもや、《略》りょうしの子どもたちで、
 十四45 10 ことごとく波にのまれてしまったように、
 死のしずけさがあたりに廣がりました。
 十五23 6 先生が第一にさわぎだす、両親があわて
 てあたりをけけまわる。
 十五73 7 つくえに白線をひいて「國境」をつくつ
 たあたりを、声高らかに読みあげられた。
 十五94 1 「はちきれそうなわらい」は、光のこし
 のあたりを、力まかせにおさえました。
 あたり ④ ↓ かせあたり・さしあたり・あたり
 しいだい・ひあたり
 あたりまえ ④ ⑤ 2 あたりまえ

三28 6 ⑤ あの いきおいの いい くすのきで つ
 くれた ふねだもの、いきおいの いいのが あた
 りまえさ。
 十四25 4 ものどことばが、いっしょになっている
 ということは、あたりまえのことだが、なかなか
 おもしろいと思った。
 あたる ④ ⑤ 26 あたる 《ツ・ラー・リ・
 ール》 ↓ いきあたる・つきあたる・みあたる
 三23 7 ⑤ 日があたらないうで、こまったものだ。
 三25 7 ⑤ 日の あたるように するには 切るより
 ほかに しかたがあるまい。
 四47 6 あさの 風は、氣もちよく、がんの むなげ
 に あたりました。
 四71 9 これに あたった 人には、おもちゃの ね
 こと、いぬとを あげます。
 四72 4 これに あたった 人には、ハンケチを あ
 げます。
 四72 10 これが あたった 人には、につきちやうを
 あげます。
 五80 10 それが、にしもりさんのせなかにあたりま
 した。
 七52 10 このときは、ぼくらのほうのボールが、よ
 くあいてにあたって、
 八23 11 虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれし
 そうです。
 八107 1 じょうぶに作ったいねかけに、日がよくあ
 たるようにきちんとかけました。
 九38 1 ⑤ 高いすぎやまつのはえているところは、
 晝でもうすぐらく、日があたらないうで、
 十37 7 日本の新しい出発にあたって、この自動
 組織が、どれほど大きな役わりをはたすことであ
 ろう。

十四7㊦ 養殖眞珠発明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とするならば、作製に失敗したわたしは、星にもあたらないでしよう。

十六67㊦ そちらからふいてくる風にあたっても、たちまち死ぬといわれるくらいだ。

十六97㊦ それなら、もう、ふたりとも、どつきにあたって死んでいはずじゃないか。

十六91㊦ ぐずぐずしているうちに、どつきにあたるにちがいない。

十二1512 日のあたるところ、かげになったところ、十二243 わたしには、かわいいめいとおいにあたります。

十二739 あられはその手にはのらないで、顔にあたりふところにとびこんだりします。

十三301 歩いて行くと荷がゆれて、しぜんにふんどうがどらにあたる。

十四566㊦ 花さんでも、葉さんでも、日のあたるところや、高いところがおすきなようですが、

十四672 土のしめついているところへ日光があたって、そこから白い湯げがたつことがよくあります。

十四7211 日のあたっていかべや屋根をすかして見ると、

十五317 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしとあたります。

十五458 ハギンスの祖父にあたるプリンクリーが、十五519㊦ じつは、私は今右衛門のまごにあたるものです。

あちこち 「彼方此方」(代名) 8 あちこち

四2110㊦ あちこち まわっているうちに、ぴよいと中にはいりました。

四554 そこで、目ざとい がんが 五六は、あちこちで みはりばんをしました。

七61 あちこちのまどがあいて、教室も目がさめた。

七542 ボールは、すばやくあちこちにとんだ。

七749 甲乙ふたりが、あちこちをまわしながら、なにか、ものをさがして歩いてくる。

八465 けらいたちは、あちこちとさがしまわりましたが、

九935 それを舞台のおくになげすて、なお、あちこちさがしつづけるがさる。

十一367㊦ 夕風ふけぼたいこ鳴り、清い歌声あちこちと、こよい楽しいぼんおどり。

あちら 「彼方」(代名) 8 あちら

一466㊦ さあ、あちらのへやへいらっしやい。

二426㊦ おまえが きれいな ことばで いえば、あちらだって、きれいにいうさ。

三2310 あちらの村でも こちらの村でも、こういって、この大きな木を みあげました。

五749㊦ 「あちらへつれていけ。」

六1284 おにが あちらからくると、こちらへかくれ、六1285 こちらからまわっていくと、みんなはあちらへこっそりわたりました。

七796㊦ いや、あちらで、あかしをたててもらおう。」ふたりは、旅人の両手をとる。

十五1081㊦ それから、あちらの遠い遠い金色の雲の中に、〈略〉いる人、だれなの。

あちらこちら 「彼方此方」(代名) 5 あちらこちら

三307 みんなは あちらこちらに わかれました。

五202 私もその人の手ににぎられながら、あちらこちらへまわりました。

十二564 傳説を広く全国で調べてみると、よく似たようなのが、あちらこちらで発見される。

こちらにまわすのです。

十四905 「〈略〉。」と、小さなマッチ賣りの女の子は、町をあちらこちら歩きながら思った。

あっ (感) 10 あっ

五112㊦ 「あっ、びっくりした。」

五575㊦ 「あっ、でた、でた。」

六108㊦ ふさぎこんで下をみつめていた女の子が、思わず「あっ。」とさけんだ。

六138 「あっ。」というまに、川の中におちてしまいました。

六365㊦ 早く、早く、あっ。

六10610㊦ 「あっ、ピゴウキダ。」

七2010㊦ あっ、白いちようちよがとんできた。

七211㊦ あっ、こっちにも。

八114㊦ 「あっ。」と、女の子ばかりでなく、茶のまにいたうちじゅうのものがびっくりして、

九963㊦ あっ、それだ。

あっ 「当」(下) 1 あっ 《一テ》

九1183㊦ ふくじゅそうのつぼみいとおしむおさな子や夜はいろりの火にあてており

あつい 「厚」(形) 4 あつい 《一イーク》

十一818 一方の手にあつくほうたいをしたひとり男が、〈略〉、そのへやにはいつてきました。

十二684 大きなかたい物を切るのこぎりののは、大きくてあつい。

十四978 女の子のそばには、あつい、かたいかべ

しかのこつていなかった。

十五7910 私のつくえの上には、日本のみなさんが

書いたあつい絵の本が、いつもおかれてあります。

あつい 「暑」(形) 9 あつい 暑い 《一イーク》

あつむしあつい

六133 あつい日中の道を、ものを運びながら歩い

てくると、のどがかわきました。
 六271 夏のはあつくてたいへんだった。
 七94 お晝に、うさぎのところへいつてみたら、暑いのでねむってました。
 八148 暑い夏がやってくると、たまごは、はじめてかえりました。
 八991 よいお天気で、風もなくあついでした。
 九313 どちらへきたときは夏の暑いさかりでした。
 十三24 ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はとくに、しもさえ見ることがあったのです。
 十四539 じりじりと暑い日に照らされながら、
 十五534 カーネギー博物館のあるピッツバーグに着いたのは、暑い真夏の日の朝であつた。
 あつい「熱」(形) 11 あつい 熱い 《一イーク》
 二231 ほとをだいていたら、たいへんあついとおもいました。
 五804 水の音をきいていたら、せなかがあつくなってきました。
 十四622 中には、熱い湯がいっぱいはいってあります。
 十四631 熱い水蒸気がひえて、小さなしずくになつたのが、無数にむらがつているので、
 十四641 茶わんからあがる湯けをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。
 十四651 熱い湯ですと、《略》、どんどんとさかにたちのぼります。
 十四707 それも、お湯が熱いほど、もようがはっきりします。
 十四721 ひえた水が下へおり、そのまわりの、わりあいに熱い表面の水が、そのあとへ向かつて流れ、

十四725 湯の、中までも熱いところと、わりあいぬるいところが、いろいろに入りみだれて
 十四727 これに日光をあてると、熱いところとつめたいところとのさかいで、光が曲がるために、
 十四735 つぎには、熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかして見ると、
 あつかい ↓きちがいあつかい・のけものあつかい
 あつかう「扱」(五) 2 あつかう 《ウ・ツ》
 ↓とりあつかう
 四68 世界じゅうの人の心をつなぐ糸を、まいにち あつかう ところです。
 十四875 ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情をあつかっても、おもしろいと思う。
 あつがみ「厚紙」(名) 1 あつ紙
 四734 これをあつ紙に書いて、えもつけて、あそべるようにこしらえることにしました。
 あつけ「呆気」(名) 2 あつけ
 十733 「《略》」。だんなは、あつけにとられてたずねました。
 十五5912 「《略》。」と、あつけにとられているタピストをしり目に、げんかんに出て、
 あつさ「暑」(名) 3 暑さ
 十一359 たくさんと落ちくる大ゆうだちに、いまの暑さはどこへやら。
 十五653 暑さのきびしい夏の日に、私をせにおいながら、
 十五738 博士の家族たちは暑さをどこかにさけて、家の中はがらんとしていた。
 あつさ「熱」(名) 1 熱さ
 十四741 湯がひえるときにできる、熱さとつめたさとのむらが、どうなるかということとは、
 あつしさん「人名」 1 あつしさん

二510 「あつしさん——あきらさん——」
 あっち「彼方」(代名) 9 あっち
 三798 「こら、雨、あっちへいけ。」
 四9910 さあ、あっちへいって あそぼう。
 七212 あっちにも。
 七617 ひとところで、からすが鳴くと、あっちでもこっちでも鳴く。
 七653 あっちでもこっちでも、だっこく機。
 九527 南なら、あっちの山の中だ。
 九617 草の中にあっちにもこっちにも、こがね色のまるいものが、ぴかぴか光っているのでした。
 十6910 もとの場所において、あっちへいこう。
 十二271 こちからあっちへいくとなると、すぐに手をついて、いざり歩きになります。
 あっちこっち「彼方此方」(代名) 1 あっちこっち
 九8010 あっちこちほつてみて、なんにもみつからないと、だめだと思ってやめてしまふ。
 あっぱ「名」 1 アッポ
 十499 アッポタイテルよその人には、なんのこともか、おそらくわからないでしょうが、
 あつまり「集」(名) 1 集まり
 十四335 この太陽系は、ぎんが系といわれる屋の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。
 あつま・る「集」(五) 36 あつまる 集まる
 《一ツ・リール・レ》よりあつまる
 二66 「あかい——あおい——あつまる——あそぶ——あさい——あまい——」
 三710 みんな あつまれ。
 三81 あつまれ。
 三191 花の名は十二 あつまりました。
 三192 虫の名は十五 あつまりました。
 三193 魚の名は十三 あつまりました。

- 三194 鳥の名は十四あつまりました。
 三346 ⑤ みんながそのまわりにあつまって、しやせいをしていました。
 三1038 まいにちまいばんあつまってきて、おじいさんの家のまわりをとりまきました。
 四114 町じゅうの友だちがみんなあつまってきます。
 四499 二十九わのがんは、あわててかっちゃんのところへあつまりました。
 四609 しかたがないので、二十九わのがんは、テーブルのまわりにあつまりました。
 四843 そのつぎの日の夜、お友だちがあつまりました。
 四951 ひろがったり、あつまったり、ふわふわとながれたりして、だんだん下におちてくる。
 五561 もう、たくさん、子どもや町の人々が、あつまっていました。
 五832 おひる休みのとき、私たちは、運動場にあつまって、先生をまん中にならびました。
 五889 子どもたちが、みんな、りょうかんさんのまわりにあつまりました。
 六178 まくがあくと、きりぎりすが大ぜいあつまって、音楽会をしています。
 六209 テーブルのまわりにあつまって、まるくならします。
 六567 私たち一組のものは、みんな集まって、どんなものにしようかという相談しました。
 七165 学校の運動場に、子どもたちが集まっています。
 七547 みんな、また運動場に集まって、終りの式をした。
 七741 みんな、集まれ、集まれ。

- 七742 みんな、集まれ、集まれ。
 八2410 そこへなかが集まってきて、にぎやかな音楽会のようになりました。
 九765 めいめい、シャベルや移植ごてなどを持って、角のむきみ屋のところに集まっていました。
 九1052 ぼくたちは、〈略〉、スキーをつけ、二本のつえをつきながら、そこへ集まった。
 十二438 ⑤ 童話の本に、人形が夜中に集まっておどろだす話がありましたよ。
 十二5911 田植えだというので、里のおとめたちは、赤いたすきもかいがいしく、朝から集まってきた。
 十二8211 試合を見物しようと、方々の國の人々が、そのコートを目がけて集まりました。
 十二1145 みなさんがたの代表が、全國からここに集まって、いろいろなことを相談します。
 十三297 どこからともなく、女の人たちが集まって来て、糸屋さんを取りまく。
 十三313 これを聞きつけて、子どもが大ぜい集まる。
 十三5611 ⑤ そのころ、レオナルド・ダ・ビンチだの、ミケランジェロだのという天才の集まっていた、美術の中心のフロレンスで、
 十四892 子どもたちは、この黒い土の上に集まって、足でトントンとふんでみたり、
 十五331 氣がつくと、もう自分のまわりには、おおぜいのひつじかいが集まって来ており、
 あつみ〔厚〕(名)2 あつみ
 十二683 のこぎりは、あつみをもっている。
 十二696 どんなにはたらきがあつても、それにあつみと廣さがなかったら、正しくりっぱに世の中をわたることができない。
 あつめ〔集〕1 ことばあつめ

- あつめる〔集〕(下)25 あつめる 集める 《メーメル》1 ひろいあつめる・よびあつめる
 二44 ⑤ 『あ』のつくことばを、みんなであつめてみましょう。
 二75 ⑤ 『あさ』ということばのつくものを、あつめてみましょう。
 二85 「い」のつくことばをあつめました。
 二88 「え」のつくことばをあつめました。
 二89 「お」のつくことばをあつめました。
 二91 あつめたことばを、みんなかきとめておきました。
 二94 ⑤ せっかくあつめたことばが、ごちゃごちゃになっています。
 三182 一くみは花の名をあつめました。
 三183 二くみは虫の名をあつめました。
 三184 三くみは魚の名をあつめました。
 三185 四くみは鳥の名をあつめました。
 三195 あつめたことばにえをかきそえました。
 三2610 そこで、大ぜいのだいくをあつめて、ふねをつくることになりました。
 四578 くだものをあつめたり、花をかざったりしました。
 四5710 すっかり用意ができると、みはりばんのがんたちもあつめました。
 四677 一組であつめた「早口あそび」。
 四691 二組のあつめた「かいぶん」。
 六2610 ⑤ 夏のあいだに、こんなにたぎぎをあつめておいて、よかったね。
 八375 もっとたくさんがねを集めようと願っておいでになりました。
 八461 さっそくけらいたちを集めて、「〈略〉。」と、おいいつけになりました。

九203 協会へは、電話が、ひっきりなしにかつて、つばめを集めていることを知らせてきました。

九866 ⑤ それから、道具を集めて、めいめい持ってきた物があるか、おしらべなさい。

九913 一、二も、たかぎの落した物を集める。

十五5012 プリンクリーは、日本の美しい焼物にひきつけられていろいろな焼物を集めた。

十五6010 長男に生まれて父母の愛を一身に集めていた身にとっては、

あて [当] (名) 1 あててあて・めあて

十五835 ⑤ どうもあんまりあてにはならないけれど、青い鳥だって、〈略〉、この人たちのなかにまよいこんでいないともかぎらない。

あて [宛] ① ぽちあて

あてこすり [当擦] (名) 1 あてこすり

十649 狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきや、ひやかしなどで、できている

あてな [宛名] (名) 1 あて名

五173 ⑤ ぼくは遠いところへいくんだけど、あて名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。

あてはまる [当嵌] (五) 2 あてはまる 《ラール》

六612 いろはがるたやことわざの中にも、このこととあてはまるものがみつかりました。

十三1011 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、この考えのまったくあてはまらぬことは、いうまでもない。

あてはめる [当嵌] (下二) 1 あてはめる 《メレ》

十3810 ⑤ このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。

あて [当] (下二) 19 あて [一テ一テル]

① ぽちあて

一235 「うたをうたえば」では、くちにてを

あてて、らっぱのようにしました。

四227 「にいさん」にあてて文を書きました。

四228 ⑤ なんのえか、あててごらんなさい。

四243 「いもうと」にあてて書きました。

五152 私は、としおさんが、みつおさんにあてて書いた手紙です。

六1111 時計屋さんは、しあげた時計をちよつと耳にあててから、ガラス戸だなの中につりさげた。

六793 ⑤ ほら、左のむねのところに手をあててごらんなさい。

七516 ぼくらのほうが、どんだんあてられて、センターまで、外野にでてしまった。

七517 ぼくもあてられた。

七5311 センターが、外野のセンターにれんらくをとって、どんだん、あてにあてた。

七5311 センターが、外野のセンターにれんらくをとって、どんだん、あてにあてた。

十一768 でも、ハンカチを目にあてているときには、じつとみつめていました。

十二4610 ⑤ これに光をあてて影絵にしてみせるのだが、人間ばかりでなく、動物などもでてる。

十四563 ⑤ 葉さんが、それを日の光にあてたり、

十四634 日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬのでもおいてすかして見ると、

十四6911 それを日なたへ持ちだして、じかに日光をあて、茶わんのそこをよく見てごらんなさい。

十四704 これは、夜、電燈の光をあてて見ると、もつとよく、あざやかに見えます。

十四726 これに日光をあてると、熱いところとつめたところとのさかいで、光が曲がるために、

十五382 「海」を「うみ」などをつかって、その漢字の意味にあった日本語をあてて読むこともした。

あと [後] (名) 58 あと 後

二69 ⑤ 「あとで。」といいました。

三308 あとで、できた作文を、ひとりびとりよみました。

四4510 ⑤ あとからなにかおっかけてきやしないかと思つてね。

四507 ほかのものは、あとになり、さきになりして、はげましはげまし、さげびました。

四651 ⑤ まだ、からだがじゅうぶんではないから、あとのものがじゅんじゅんにたすけていこう。

四759 を——「を」の字は、ことばのあとにつく。

四896 ⑤ すずめ親子のねた あとは、さらさらさらと雪の音。

五605 ⑤ あとで写生してごらん。

五8510 ⑤ おまつさんはあとからきますよ。

六1128 はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメ、その二ぎょうだけで、あとは、〈略〉、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった

六1377 しかさんは、うさぎさんたちのあとを、ど

んどん追いかけてました。

六1415 ⑤ そこから、あとをつけてきたのだ。

七404 私は、いそいで、さぶろうのあとを追いかけてました。

七684 あとのやりかたは、文章をきりつめていくのと同じです。

七9510 1 びきは白で、あとは黒っぽい色をしていました。

八四八 八 八とぐつすりねるばかりだ。

八六四 八 八いままでだいていたのだし、あと四五日はすわることもできませんから。

八九六 八 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。

九二三 八 そのころ、オーストリアは第一次世界大戦のあとで、まだそのいたでがなおっていないころでした。

九三八 八 日があたらないので、雨の降ったあとのようにぬれています。

九四二 八 母やおばがくわをいれるあとから、ぼくたちはむちゅうになつていもをひろいました。

九五三 八 それからあと、「やまねこ拜」というはがきは、もうきませんでした。

九八三 八 あとでよくみてあげるから、かごにいれてとっておきなさい。

九八五 八 さあ、あと三十分ほつてみましょう。

九八六 八 あとの三十分は、ひじょうにみじかく思われました。

九八七 八 そのほかの友だちが、落ちているやまだのかばんやぼうしをひろつてあとにつづく。

九八八 八 そのあと、学校帰りの女の子ふたり、通りすぎる。

九八九 八 「でも、いやだな、けんかしたあとの氣持つて。」

九一〇 八 のだ先生が先頭に立たれ、いしい先生は、みんなのあとからこられた。

九一一 八 そのあとから、小さな子どもが、よちよちと歩いてくる。

九一二 八 はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もとのままになっていた。

九一三 八 あと半分だ。」幸吉とうめは、たがいに

はげましあった。

一〇二 八 門からもどつてきて、道にでたとき、あとをふり向きました。

一〇三 八 冬の用意もしだいに進み、あとはもみすりするばかり。

一〇四 八 少年は、勇氣をふるいおこして、その後からついていきながら、

一〇五 八 けれども、病人は、いっしんに少年をみつめたあとで、目を閉じました。

一〇六 八 ねむつたあとでは、目を開いたときに、その小さな看護人をさがすようにみえました。

一〇七 八 父親は、じつと病人の方をみつめたあとで、いくども少年にはおずりしてからいました。

一〇八 八 みなさん、これも人のしたあとでは、なんのそうさもないことでございましょう。

一〇九 八 夏じゅう美しい花をつけていたが、あらかたちつて、あとにくつかの実がなつていた。

一一〇 八 いま、民ちゃんが〈略〉、正男のあとを追つかけて道まででていたのよ。

一一一 八 「ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しんだあとでした。

一二二 八 この人形だつて、みんながねしずまつたあとで、動いているのかもしれないよ。

一二三 八 いいだしたことはあとへひかないので、

一二四 八 もうあとわずかというところで、日ははや西の山に傾いて、くれそうになつてきた。

一二五 八 「ビューン」と、あとをひくようなひびきがする。

一二六 八 電話のはじめの人は、三郎くんのおぼさん、それからおとうさん、そのあとはマンシェウから帰つて来た眞二くん、おしまいにおかあさん。

一二七 八 私は短い旅をしたあとで、七時にパ

リーに着きました。

一三八 八 雲が消えてしまったあとには、いまいった、ちりのようなもののぼかりがのこつていて、

一三九 八 あたたかい空氣がのぼつていくあとへ、入れかわりに、そのつめたい空氣が下からふきこんできて、大きなうずができます。

一四〇 八 ひえた水が下へおり、そのまわりの、わりあいに熱い表面の水が、そのあとへ向かつて流れ、

一四一 八 それが、おりた水のあとへとどくじぶんにはひえて、そこからおります。

一四二 八 はじめ、うらのほうをかるく四つに割つて、あとは、十文字の小さな木ぎれをはさんで、

一四三 八 チョンチョンとたたいて、みごとに割つていました。

一四四 八 私はあとのほうの映画に心をひかれた。

一四五 八 ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情をあつかつても、おもしろいと思う。

一四六 八 おじさんとおばさんはそのあとを追つて出て來られたが、

一四七 八 十の春をむかえた私は、母や多くの弟妹たちをあとに残し、〈略〉京都に移つた。

一四八 八 一方が先に生まれ、他方があとから生まれたというだけのことです。

あと「跡」(名) 6 あと↓あしあと

一四九 八 草をくいとつたあとをみますと、かみきれないで、のこっている葉がありました。

一五〇 八 いねの花のすんだあとをさわってみると、いままでべしやんこだったさがが、ふくれてかたくなつていました。

一五一 八 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえがきながら、小鳥のようにおりてくる。

十一1711 かなしみもいたみも、あとなくぬぐわれ
ます。

十二571 雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五
郎が畑をうったときのくわのあとで、

十五1137 におまけに、いつかランプをつけるとき
やけどをしたあとまであるよ。

あとあし「後足」(名) 1 あと足

七946 あと足を長くのばして、まえ足を胸の下に
いれていました。

あとかた「跡形」(名) 1 あとかた

十二613 ところが、そのあくる朝ながめると、高
どのは消えてしまつてあとかたもなく、

あとずさり・する「後退」(サ変) 1 あとずさりす
る「ーシ」

八75 だんだんあとずさりして、〈略〉、テーブル
のはしからころげ落ちたりしました。

あとずさる「後退」(五) 1 あとずさる「ーッ」

十五309 少年が女の子の後にかばうようにして、
すこしあとずさつて、岩角へ身をよせかけたとき、

あどでえ 1 アドデエ

六10410 「アドデエ」ときこえる。

あともどりする「後戻」(サ変) 1 あともどりす
る「ーシ」

九1233 あともどりして飲んでみたり、ずっと上流
へいってためしてみたり、

あな「穴」(名) 21 あな 穴↓ほらあな

五922 ゆかいたをはがして、たたみのまん中に
あなをあけてやったら、

六114 ピンセットでねじをはさんで、きかいのあ
なにさしこみ、

六1098 自分ではなをつまんで、はなのあなから息
がもれないようにして、

六1261 あなをほつて、トンネルをこしらえて遊
ぼうよ。

六1263 五ひきのうさぎさんたちは、めいめいにあ
なをほりはじめました。

六1265 あなはずんずん長くなっていきました。

六1267 「そっちのあなと、こっちのあなとつづ
けようか。」

六1267 「そっちのあなと、こっちのあなとつづ
けようか。」

八145 親ぜみが、あのほそくがった口のさきで、
かたい皮にあなをあけて、

八208 せみの子は、だいたんに、まっすぐなあな
を地表に向けてほつていき、

八859 しかし、一晚ごとに、そのおよぎまわるあ
ながだんだん小さくなっていった。

八859 あひるの子は、あながこおつてしまわない
ように、いつも足をつかっているかなければならな
かった。

九509 がけの中ほどに、小さなあながあいていて、
そこから水がふえのように鳴つてとびだし、

九129 おまけに、あみに大きなあなをあけてしま
いました。

十二154 そうして、文雄が手をのぼすと、すばや
くあなの中へかくれてしまった。

十二523 いたぎれを、はば二センチ、長さ九セン
チくらいに切つて、まん中にあなをあける。

十二524 あなの両わきを切りこんで、手さきをま
るめ、指の線をほる。

十二535 手は、手さきのほうをいれて、穴に糸を
通してぬいつける。

十二1035 四角なあながあいていたり、〈略〉、おも
しろいお金です。

十三284 そのへんを走ったり、地面にこしをおろ
して、あなをほつたり、

十五596 ことばみじかにその関係を物語る私の顔
を、あなのあくほど見つめていた博士は、

あなた「貴方」(代名) 82 あなた

一288 「けさ、あなたは、その目でなにを
みましたか。」

一556 あなたはそのたまをもっていますか。

一586 あなたはいのちのおんじんです。

一603 あなたの おうちに おいて いただいた
おかげで、しろちゃん、げんきな になりました。

一621 あなたも、おとうさんも、おかあさんも、
みんな いい 人ですもの。

一656 それなら、あなたの 目の なかに ふた
つ ひかっていますよ。

三108 ちょうも 小鳥も たのしそう、きょうは
あなたの 花まつり。

四1041 あなたのお力で、いのちびろいをいた
しました。

四1103 あなたが うらしまさんで いらつしやい
ますか。

四1327 はごろもを お返し したら、あなたは、
まわずにかえつて おしまいになるでしょう。

五168 あなたは、どこまでいくの。

五249 ぼっちゃん、あなたもおかけなさいな。

五565 はるおさん、ほら、あなたの みつけた二
ばん星よ。

五719 「お金持のおくさん、これであなたもま
んぞくでしょう。」

五744 「女王さま、これで、あなたもごまんぞ
くでございましょう。」

五七六 海のぬしになりたい、ひろい海で、あなたをけらいにしたいと思っています。

五八六 おまつさんか、あなたがみえなかったから、かぜでもひいたかと思って。

六三九 あなたのしごとはこれからよ。

六七八 ごろうさん、あなたは、ねむってしまったら動かなくなるでしょう。

六九四 あなたが、それを動かそうと思って動かしているの。

六九七 息と同じように、あなたがねむっているときでも、どきんどきんやっていますよ。

六八七 もしもし、あなたは、どうしてないていらっしゃるのですか。

六八七 あなたは、その大きな木にのぼって、まっていらいっしゃい。

六九一 あなたは、どなたでいらっしゃいますか。六九三 けれども、あなたの角はおりません。

七二七 あなたは、きょう、しくびんのなっぱを、とりかえましたか。

七八二 あなたは、そのらくだを、どこかへつれていったのにそういない。

七五二 らくだは、あなたがぬすんだのではない。八二九 「あなたの名はなんといいますか。」天帝は、その男にたずねました。

八三三 「王さま、あなたはお金持ですね。」と、そのみ知らぬ人がいました。

八四三 あなたは、こがねと一ぱいの水と、どちらをえらびますか。

八八〇 あなたは、私のいっていることがおわかりにならないのです。

九四五 あなたは、ごきげんよろしいそうで、けっこうです。

九五六 あなたはやまねこを知りませんか。

九五九 いったい、あなたはたれですか。

九六〇 ちょっと裁判に困りましたので、あなたのお考えをうかがいたいと思いましたのです。

九七二 あなたは、こがねのどんぐり二リットルと、しおぎの頭と、どちらがおすきですか。

九三九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

一四〇 世界のために、きつと、あなたの願いがかないます。

一四六 あなたが「略」、眞珠を世界の人々にあたえたことに、心から敬意をささげます。

一四六 養殖眞珠発明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とするならば、

一一七 いいことと、正しいことは、おかあさま、あなたの目から教えられました。

一一七 このかた、あなたのおとうさんですか。

一一八 「あなたと同じように、いなかのかたですがね。」と、看護人が答えました。

一一八 外国から帰ったばかりで、ちょうどあなたが入院したと同じ日に、入院したんです。

一一八 どうやら、あなたのむすこさんと同じ年ぐらいのむすこがいるらしく、

一二一 あなたの声もたいそうよくおなりではありませんか。

一二三 ピアノの先生が、散歩にいらして、あなたの鳴く声に耳をかたむけて、

一二六 あなただってその実をそんなに美しくなさるには、ご苦心があたりだったでしょうね。

一二二 あなたの歌には、そのさびしい氣持がでているので、人の心を動かすのだって、

一四九 いま、おかあさんが力をおとしておしまいになったら、あなたのルイは、たいへんかなしい思いをしなければなりません。

一四一 あなたのルイから パリー、千九百七年四月十一日

一四三 あなたを思うすべての心をかたむけて、さようなら。

一四四 そうして、おかあさん、あなたのことを思うとき、「略。」と、こんなことが思われるのです。

一四六 あなたが私を思ってくださいるとき、私もおかあさんのことを思っています。

一四七 あなたはルイ

一四八 花さん、あなたが、どんなに美しくさいたって、

一四九 「たいへん焼物がおすきのようですが、あなたは——」

一五〇 すると、あなたは、そのプリンクリーさんのおまごさんでしたか。

一五五 はるばるたずねてみえたあなたへのごちそうに、「略」、私がはじめて会った日本人について話をしてあげよう。

一五七 え、あなた、ぼくを知っているの。

一五八 あなた、どなたです。

一五九 あなたはそう思うの。

一六〇 あなたの知っているのは、ぼくたちだけですよ。

一六二 ぼくたちは、いつだって、あなたのまわりにいるのですよ。

一六三 ぼくたちは、あなたといっしょに、たべたり、飲んだり、「略」、くらしているのですもの。

一六四 あなたは、やっぱり、なんにも知らない

いのですね。

十五101 6 ㊦ ぼくは、あなたのおうちの幸福のかしらですよ。

十五102 3 ㊦ でも、ぼくたちがなにをしていても、

あなたには、なんにも見えないし、

十五102 6 ㊦ ぼくは、あなたにつかえる『健康の幸福』です。

十五108 5 ㊦ まあ、どうあなたがやってみたって、あれをすっかり見るには、まだ小さすぎますよ。

十五109 3 ㊦ あなた、あの女の人を知らないのですか。

十五109 4 ㊦ あなたの二つの目をたましいのどん底におちつけて、よくごらんなさい。

十五109 5 ㊦ あの人、あなたを見えています。

十五109 7 ㊦ あれが、あなたの『おかあさんの喜び』です。

十五110 4 ㊦ でも、あなたは、うちのおかあさんについているけれども、ずっときれいだもの。

十五117 6 ㊦ あなたは『光』なんです。

十五117 7 ㊦ あなた、この私がおわかりですか。

十五117 10 ㊦ 私は、それは長いこと、あなたを求めている『正義であることの喜び』でございます。

十五118 2 ㊦ あなた、私をごんじですか。

十五118 2 ㊦ 私は、あなたをすいている『美しいものを見る喜び』でございます。

十五119 2 ㊦ あなたは、私の子どもたちに、それはごんじつでしたね。

あなたがた『貴方方』(代名) 28 あなたがた

四39 10 ㊦ ただしいことは、いつも、あなたがたのいいお友だちになったり、先生になったりしてくれます。

四40 3 ㊦ あなたがたは、これから、りっぱなこ

とばにいろいろであうでしょう。

四130 3 ㊦ 天人のはごろもと申しまして、あなたがたには、ご用のないものでございませう。

六39 9 ㊦ わたしたちのなかがわるい虫をとってそだてたいねを、こんどは、あなたがたがまもるんですもの。」かし「そりゃそうだけど——」

七75 11 ㊦ あなたがたは、なにかさがしておいでのようにだが——

七76 3 ㊦ あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていらいしやるのではありませんか。

七85 6 ㊦ あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、むりはない。

十二96 3 ㊦ あなたがたの家に、写真帳があるでしょう。

十二96 4 ㊦ それにはあなたがたのおとうさんや、おじいさんや、ひいおじいさんの写真がでいたり、

十二96 5 ㊦ あなたがたの小さいときの写真などもあるでしょう。

十二96 7 ㊦ その写真帳をひろげてみると、あなたがたの家の昔からいままでのことがさまざまに思いだされるでしょう。

十四13 10 ㊦ あなたがたおふたりの写真は、いま、〈略〉、私の前においてあります。

十四29 2 ㊦ あなたがたに見てもらいたいものがあるのです。

十四31 5 ㊦ あなたがたは、これからの日本にとってだいじなかがたです。

十四31 7 ㊦ あなたがたの考えひとつで、日本はよくもわるくもなるのです。

十四31 9 ㊦ あなたがたのものをみる目、ものを考える力が大きくなっていけば、

十四32 1 ㊦ さて、私は、あなたがたに星を見るよう

にすすめましたが、

十四32 3 ㊦ 天上の星とあなたがたとは、あまりにかけはなれているために、

十四37 2 ㊦ みなさん、あなたがたは、いま、日々の生活にもつらい思いをしています、

十四37 10 ㊦ 星は、きつと、あなたがたに力をあたえてくれるにちがいありません。

十四54 2 ㊦ あれは、私たちの養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがたが、かつてに花をさかしたからです。

十四57 1 ㊦ こんなに大きなきずができていますが、私は、いっしょうけんめいそれをおして、あなたがたがたれないようにしてあげたのです。

十四57 8 ㊦ あなたがたは、自分のことしか考えないようですが、

十四60 6 ㊦ あなたがたは、どうして地面にはえたのか、考えたことがありますか。

十五79 3 ㊦ 私には、あなたがた日本の小学校のみなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。

十五79 5 ㊦ 私は、あの美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、

十五80 11 ㊦ あなたがたの時代がきたときには、

十五90 3 ㊦ たぶん、あなたがたも、あの鳥、どこにかくれているか、ごんじないでしょうね。

あなたがた『貴方方』(代名) 6 あなたたち

三77 4 ㊦ あなたたちがねているあいだ、お日さまは、よその國の子どもが あそべるように、光をあげにくのです。

三77 7 ㊦ それから、あさになつて、お日さまが

あなたがたのところへかえってくるのです。

三83 5 ㊦ 「あなたたち、にじがみえて。」

五178 〇 あなたたちはまだいい。
 十二17 〇 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、

わたしは、自分の國にのこしておいてきました。
 十四576 〇 戸の外で聞いていると、あなたたちは、
 ずいぶんかつてなことをいっていましたね。

あなたのおもっていることは〔課名〕 2 あなたの
 思っていることは

十二7 四 あなたの思っていることは……二十

七

十27 四 あなたの思っていることは

あに〔兄〕〔話手〕 35 兄

七22 一 また、すずめがおりにてきたよ。」兄「しずか
 にして、みていてごらん。」

七22 三 兄「すずめが、だいこんの葉をみている
 よ。」

七22 七 兄「はるお、あまり大きな声をだすから、
 にげちゃったよ。」

七22 九 なにしにくるの。」兄「おおむしをさがしに
 くるのさ。」

七22 11 おおむしをとって、どうするの。」兄「す
 ずめにやるのさ。」

七23 二 すずめ、おおむしをたべるの。」兄「だい
 すきさ。」

七23 六 兄「おかあさん、おおむしのことを、話
 していたんですよ。」

七23 九 きょう、しくびんのなっぱを、とりかえ
 ましたか。」兄「あ、わすれていた。」

七24 六 どうして、葉を砂の中に立てるの。」兄「か
 れないようにさ。」

七24 八 兄「さあ、おおむしくん、新しいごちそう
 だ。」

七24 11 兄「ねえ、おかあさん。」

七25 四 なん日ほどたっているかしら。」兄「ちよ
 とまってください。」

七25 六 日記帳をみながら、兄「たまごから小さい
 虫になるのに、七日かかっています。」

七25 11 どうして、はっぱと同じ色になるのか、わ
 かりますか。」兄「どうしてかしら。」

七26 二 にいちゃん、わからないのかい。」兄「なま
 いきいな、はるお。」

七26 五 はっぱと同じになるのは、鳥などに、すぐ
 みつからないためですよ。」兄「あ、そうか。」

七26 九 にいちゃん、にいちゃん。」兄「どうしたの
 さ。」

七27 一 おおむしが、へんな色にかわっている。」
 兄「ほんとだ。」

七27 四 兄「いええ、どうなるか、みんな自分でし
 らべるようにと、おっしゃっただけです。」

七27 11 兄「観察日記に、さっそく、これを写生し
 ておこう。」

七28 三 兄「おかあさん、ただいま。」

七28 五 兄「おかあさん。」

七28 七 兄「きょうね、國語の時間に、先生にほめ
 られたの。」

七28 九 どうして。」兄「おおむしがさなぎになった
 ところを書いたのが、よくできたって。」

七29 二 どんなふうにかいたの。」兄「よんでみま
 しょうか。」

七29 四 兄「自轉車のチューブのようにふわふわし
 た、黒っぽい、かわいいおおむしは、

七30 七 兄「さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。」
 七30 九 兄「おやつ、おかあさん、おかあさん。」
 七31 三 にいちゃん、なあに。」兄「ちようになっ
 ちようになつた。」

七31 11 美しい羽ですこと。」兄「あの羽をしばった
 ら、きれいなしるがでそうね。」

七32 三 兄「羽をふるわせている。」

七32 七 おや、ひげをはやしている。」兄「ほんとう—
 ひげだね。」

七32 九 あかんぼのくせに、ひげなんか。」兄「ほん
 とうにきれいな。」

七32 11 兄「略」、ここからだして、庭のだいこん
 の葉に、うつしてやりましょうね。」

七33 四 にいちゃん、早くいこう。」兄「きつと、と
 びだすよ。」

あに〔兄〕〔名〕 13 兄
 六92 10 〇 兄のだいじなつりばりなので、私も困
 てしまいました。

七24 二 兄は、しくびんの中の砂に水をやる。

七24 九 兄は、二センチほどに大きくなったおおむ
 しを、新しい葉にうつす。

八71 三 おしまいには、自分の兄や姉からまで、
 「略」といわれた。

九34 6 〇 母と、おぼと、兄と、妹と、ぼくの五人
 で、三日間かかりました。

九39 2 〇 かれ枝のたくさんついている高い木をみ
 つけると、兄かぼくがのぼる役をひきうけました。

九39 11 〇 下では、兄や、母や、おぼが、「略。」
 とか、「略。」などいわれたが、

九45 8 〇 兄は、大きくなって農業をするために、
 いま知りあいの家でみならいをしています。

十22 七 ひとりの友だちは、その兄といっしょに種
 まきをしている。

十30 八 家では、弟たちのめんどろをみてやり、兄
 や姉の手助けになりたいと思います。
 十二23 三 せまい家なので、兄は氣のどくだといっ

て、いつもえんりよがちにしています、

十五74 兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力のちがいは別として、

十五74 6 それによって兄が特権を與えられねばならないという理由はすこしもない。

あね「姉」(名) 6 姉

八71 3 おしまいには、自分の兄や姉からまで、「略。」といわれた。

十30 8 家では、弟たちのめんどうをみてやり、兄や姉の手助けになりたいと思います。

十二23 5 ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、

十二24 12 姉だけにわかるへんなことをいっています。

十二25 4 姉が、いそがしいので、おしめカバーをさせたままほっておくと、

十二29 5 ある日、学校から帰つてくると、姉が大さわぎしていました。

あねたち「姉達」(名) 1 姉たち

十二23 2 長いこと外地にいた姉たちがひきあげてきました。

あの「彼」(連体) 135 あの

一58 2 あのとき、たろうさんがくろいぬをおってくださらなかったら、どうなっていたかわかりません

三53 3 山のあの色。

三26 6 すると、あのちえのあるおじいさんが、「略。」といました。

三28 3 すると、あのちえのあるおじいさんが、「略。」といました。

三28 4 あのいきおいのいいくすのきでつくったふねだもの、いきおいのいいのがあ

りまえさ。

三74 7 あの丘の上を。

三94 2 あのまっ白な雲もみんなのもの。

四23 2 あのまどから、にいさんとよく星をみましたね。

四24 8 おとなりのまさちゃん、あのいけのそばまでさんぼしてきました。

四88 1 あの白い雲に、だれかが、ちぢまっていくようです。

四103 8 あのかめさんかい。

五9 5 じろう、せきをあけて、あのぼっちゃんをかけさせてあげ。

五12 9 「にいさん、あのんだあれ。」

五27 4 どこかでありがとうといいたと思ったけれど、いうところがなかったものだから、それであの人にいったのよ。

五27 5 でも、あのかた、わかったかしら。

五35 2 あのガスは、なにかから作るのでしょうか。

五60 3 あの三つの花が、そろってしんこきゅうしているようにみえますね。

五61 7 それでも、まいにちあのつるをのぼしたのは、だれかしら。

五61 10 あのつぼみをこしらえたのは、だあれ。

五75 4 あのひろい海で、金のさかなをけらいにしてやりたい。

六6 6 あのいろいろな道具、たくさんの時計、(略)、どれをみても大きくてえらそうである。

六15 9 もし、あの木の葉の船が流れてこなかったら、どうなっていたかしれない。

六38 5 あの屋根にとまっているのは。

六39 4 あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。

六40 6 帰るといったって、あんな遠いところ——でも、もう一どの村に帰りたいなあ。

六44 2 ほんとうにあのかかしが帰っているだろう。

六44 11 さあ、あのかかしったら、(略) なんべんもさげんでいたよ。

六48 8 ふと、そんなこと思わせる、あのまっさおな海の色。

六49 5 ふと、そんなこと思わせる、あのまっ白な波の音。

六72 6 いったい、あの雪だるまは、死んでいるのか、生きているのか。

六82 4 あの大きなたいをつつてみたいです。

六132 3 決勝点は、あの山のとっぺんにしよう。

六133 3 「あの山のとっぺんさ。」

六133 4 あの山のとっぺんか。

六134 7 自分たちは、あの大きなすどい角で、つきあげられてしまわなければなりません。

六134 9 しかさんに勝ったところで、あの角をおるなどということはできません。

六141 4 あの谷をわたるときに、ちゃんとみつけたのだ。

七5 1 あの白いブラウスの女の子かな。

七5 7 やっぱあの子だった。

七9 4 あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。

七31 11 あの羽をしぼったら、きれいなすがでそうね。

七85 6 あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、わりはない。

八14 5 親せみが、あのほそくどがった口のさきで、かたい皮にあなをあけて、

八257 あのぬけがただけは、いつまでもささだけにかたくすがりついています。

八333 天の川は、なん千なん万という星がかざなりあって、あのように、ぼうつとした銀の川のような光をはなっているようにみえるのです。

八348 光のとどく時間ではかると、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。

八354 あのたなばたものがたりのはたおり星は、二九・五光年ですから、

八595 あの山にのぼったら、もっと大きなけしきがみえるだろう。

八669 会 あのうまく足をつかうようすや、あのしせいなのをみてわかる。

八6610 会 あのしせいなのをみてわかる。

八689 会 あの一わをのけたほかは、みんないい子だ。

八819 会 世界じゅうで、あの人ほどこうな人はありはしないから。

八848 あひるの子は、あの美しい、しあわせなはくちようをわすれることはできなかった。

八851 あひるの子は、あの鳥の名も、どこへとんでいったのかということも知らなかった。

八853 しかし、いままでもだれをなつかしく思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。

八854 どうして、あの鳥のもっているような美しさをもたらなどと望むことができよう。

八893 会 私は、あのけだかい鳥のところへとんでいこう。

八898 会 冬じゅうひもじい思いをしたりするよりは、あの鳥にころされたほうがましだ。

九2410 あの家のかき下につくった古果がなつかしいのでしょう。

九468 手 あの廣い学校の運動場で、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。

九576 会 あの文章は、ずいぶんへただったろう。

九582 会 「あの字もなかなかうまいか。」

九592 会 あのはがきは、わしが書いたのだよ。

九781 会 そう、あの向こうの小高いところに、白い物がちらちらとみえるでしょう。

九13611 会 くもさん、あのお月さんのところへいってみたいと思いませんか。

九1441 たまたま、あの白いちようちよにあうことができた。

九1482 会 お月さんのところへとんでいったあの白いちようちよは、どうしたろう。

九191 あのとげとげしたいがわかれて、じゅくしたくりの葉の落ちるころでしたから。

十2112 会 早く、あの野原で、遊びたいな。

十674 だんなは、ちよいちよいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、

十727 会 おまえは、だんながだいじにしているあの湯飲み茶わんを、庭石にたたきつける。

十737 会 たおれたはずみに、あのたいせつなかけものを、あのとおりひきさいてしまいました。

十737 会 あのとおりひきさいてしまいました。

十11011 会 船ばかりではなく、あの町でも、あの工場でも、また、日本の國全体だって、同じことだと思ふ。

十11011 会 あの町でも、あの工場でも、

十272 会 あの子は、どうかしているのではないだろうか。

十14611 ああの山のすがたが、小さいころのことを、いろいろと思ひださせる。

十1604 会 あの橋はあぶないから、けつして渡つてはいけない。

十1616 会 まえからあぶないといっておいた、あの橋を渡つたのではないかね。」とたずねた。

十1854 会 ここにあのおじさんがいます。

十1856 会 ぼく、あの人におくすりを飲ませてあげるのです。

十1857 会 あの人、いま、ひどくわるいんですから、ゆるしてください。

十1862 会 「だれですか、あの方は。」

十1113 会 あの廣場で遊んでいる子どもたちをこらんさい。

十1172 会 あのざくろの色もかけてないや。

十2010 会 わたしはまた、あのような絵のぐがあらばいいなと思いましたよ。

十2111 会 でも、あなたの歌には、そのさびしい氣持がでているので、人の心を動かすのだって、あのだい先生の歌がよかったよ。

十2462 会 あそこは影絵もあつたよ。

十2613 そのあくる朝ながめると、(略)、きのう植えたなんきうアールのお美しい田さえなく、

十2811 私はいまでも、あのとときのことをわすれることができません。

十2846 あの小さいからだは、まほうつかいのようになつて、

十304 あおの音は、おもちゃ屋さんだ。

十3312 あおの音が系に負けないほど大きな星の世界が、なおいくつあるのです。

十359 みなさん、ごらんさい、あの上の星を。

十509 しかし、たとい、名まえはわからなくても、あの美しい歌は、いまでも、われわれの耳にひびいてくるように感じられるではありませんか。

十四5812 会 あのかわききつた夏のさいちゅうに、あの雨のおかげで、かれるのが助かったことを考えてごらんさい。

十四591 会 あの雨のおかげで、

十四601 会 だから、あのかぼちゃは、みんなよくのものだといってもいいのです。

十四611 会 もし、あの人間がいなかったら、〈略〉、私たちは、はえもしなければ、

十四721 会 あの「かげろう」がたつのは、〈略〉氣流のむらが、光をおり曲げるためなのです。

十四801 会 人々に伝えるうちに、あのような、短くて調子のいい、氣のきいたものになったものと

十四1024 会 あの子は寒さでこごえ死んだのだ。

十五402 会 あの有名な源氏物語や枕草子などは、

十五437 会 あの、ニューヨークのメトロポリタン博物館の――

十五541 会 あの有名な「ちようるいずふ」の著者ダブリュー・ジェー・ホランド博士、

十五756 会 ――ああ、忘れもしない、満面べにをさして語られたホランド博士のあの熱情のことば。

十五795 会 といいますのは、私は、あの美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、

十五8311 会 あの人たちは下等でもあり、たいていはまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、

十五8412 会 だが、おまえさんたちは、あのだうがしをわすれたのじゃないかな。

十五851 会 あのとおりテーブルの光栄になつてい

十五854 会 あのだうがしをわすれたのじゃない

十五856 会 あの人たち、ずいぶんうれしそうな幸福そうな顔をしているなあ。

十五858 会 なんだか、あの人たち、こつちを見たようだ。

十五8811 会 それから、あの、なかまにはいらなくて、せなかをむけているのはだれです。

十五891 会 あの男のことは、きかないほうがよろしい。

十五896 会 あのとおり、さわぎやどもが、おまえさんがたを呼びたてているでしょう。

十五904 会 たぶん、あなたがたも、あの鳥、どこにかくれているか、ごぞんじないでしょうね。

十五9111 会 あの、育ちのわるいわかい女はだれだね。

十五978 会 まあ、あふとつた子のわらうことはどうです。

十五1059 会 きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。

十五1062 会 でもぼくは、まだわかいから、あの人

十五1077 会 のわらうのを見たことがあります。

十五1093 会 すると、あ

十五1095 会 かな。あなた、あ

十五1122 会 なた、あ

十五1147 会 なた、あ

十五1163 会 なた、あ

十五1165 会 なた、あ

十五1167 会 なた、あ

十五1167 会 なた、あ

十五11610 会 なた、あ

十五11611 会 いいえ、あ

十五1172 会 顔を

十五1172 会 待ち

十五1172 会 十五1172 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

十五1236 会 十五1236 会

り、いたずらをしたり、

あははは (感) 3 あははは

三456 〇 あははは。」と、いつてわらいました。

六307 〇 「あははは。」と、大声でわらいました。

十四576 〇 あははは、いま、戸の外で聞いている

と、あなたたちは、ずいぶんかってなことをいつていましたね。

あはははは (感) 1 あはははは

五874 〇 あはははは。

あばれ ↓ おおあばれ

あばれだす 「暴出」(五) 1 あばれだす 《一シ》

八306 黒うしは、おどろいて、大あばれにあばれだしました。

あばれまわる 「暴回」(五) 1 あばれまわる

《一ッ》

四944 黒い、こまかいものがとんでいる。あばれまわっている。

あばれる 「暴」(下) 2 あばれる 《一レ》

七926 だすときに、わらを足でけつたりして、あばれました。

十五275 女の子は、あきらめたのか、《略》、すこ

しもさわがず、あばれもせず、じっとしています。

あびせる 「浴」(下) 1 あびせる 《一セ》

十五303 少年は、身をおわすと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。

あひる 「家鴨」(名) 53 あひる ↓ おやあひる・みにくいあひるのこ

八608 みずうみの岸の、ごぼうのはえているところ

に、一わのあひるがすわっていた。

八629 「略」と、たずねてきた年よりのあひる

がいった。

八649 「略」。年よりのあひるは、そういつて、

どこかへいつてしまった。

八664 みにくいあひるの子も、いっしょになって

およいだ。

八6710 〇 あそこにいるあひるの子をさ。

八681 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくい

あひるの子の首すじにかみついた。

八688 年よりのあひるは、「略」といつた。

八702 みにくいあひるの子は、《略》、にわとり

からもぶたれたり、つつかれたりした。

八702 みにくいあひるの子は、あひるのなかま

らわの口をいわれるばかりでなく、

八707 あわれなあひるの子は、立っていたほうが

いいか、歩いていたほうがいいかさえも、わから

なかった。

八717 あひるにはかみつかれ、《略》、えさをくれ

るむすめには足でけとばされた。

八719 そこで、みにくいあひるの子は、かきねを

とびこえてにげだした。

八721 「これも自分がみにくいばかりに——」と、

あひるの子は思った。

八724 あひるの子は、ここで一晩横になった。

八729 あひるの子は、このあしの中で、横になっ

て休みたと思った。

八748 あわれなあひるの子はきもをつぶした。

八7411 はなをあひるの子のそばにつきつけて歯を

むいた。

八755 あひるの子は、ため息をついた。

八763 しかし、かわいそうにあひるの子は、おき

あがる氣にもなれなかった。

八768 くれがたになって、あひるの子は、ある小

さなひやくしょうの小屋へやってきた。

八7610 風がひどいので、あひるの子は立つことも

できず、

八774 あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあ

いているのをみつけたので、そこから中へいつ

ていつた。

八785 朝になって、よそからきたあひるの子は、

すぐにみつげられた。

八7810 〇 これからはあひるのたまごもたべられる。

八793 そこで、あひるの子は、三週間ばかりため

しにおいてもらった。

八798 「略」と、あひるの子にたずねる。

八806 それで、あひるの子は、すみっこにすわっ

てばかりいた。

八807 あひるの子は、きゆうにおよぎたくなつた

ので、にわとりに思わずその話をした。

八834 そこで、あひるの子はでかけていつた。

八845 あひるの子は、それを見て、ふしぎな氣持

になった。

八846 あひるの子は、《略》、その首をはくちよう

の方へさしのべ、《略》大きな声をだした。

八848 あひるの子は、あの美しい、しあわせな

くちようをわすれることはできなかった。

八851 あひるの子は、あの鳥の名も、どこへとん

でいつたのかということも知らなかった。

八856 あひるの子は、水のおもてがすっかりこ

おってしまったように、水の中をおよぎまわら

なければならなかった

八859 あひるの子は、《略》、いつも足をつかつて

いなければならなかった。

八862 あひるの子をみつめて、木ぐつでこおりを

くだき、うちへつれて帰った。

八864 すると、あひるの子は生き返った。

八865 子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、

あひるの子はまたいじめられるかと思って、
 八八八 そこで、あひるの子は、バターのいれてある
 八八八 おかみさんは声をはりあげ、火ぼしであひ
 八八八 の子をつた。
 八八八 子どもたちは、あひるの子をつかまえよう
 八八八 として、《略》、わらったりさけんだりした。
 八八八 おりよく戸があいていたので、あひるの子
 八八八 は、雪の中の草むらへはいりこんだ。
 八八八 あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どん
 八八八 なに苦しんだか、ここで話すにはあまりにもか
 八八八 いそうである。
 八八八 ひばりが歌いだしたとき、あひるの子は、
 八八八 ぬまの草むらの中で横になっていた。
 八八八 すると、とつぜん、あひるの子は、つばさ
 八八八 をばたつかせることができた。
 八八八 あひるの子は、そのみごとな鳥を知ってい
 八八八 た。
 八八八 はくちようはあひるの子をみた。
 八八八 かわいそうにあひるの子は、ころされるも
 八八八 のと思ひながら、水の上に頭をたれた。
 八八八 それは、ぶかっこのなみともないあひる
 八八八 の子ではなかった。
 八八八 生まれがはくちようのたまごであつてみれ
 八八八 ば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。
 八八八 私はまだみにくいあひるの子であつたと
 八八八 き、こんな幸福があらうなどは、ゆめにも思わ
 八八八 なかった。
 八八八 その下を、あひるがならんで通っていく。
 八八八 あひるが、「ガア、ガア」とさわいで行
 八八八 く。
 八八八 〔浴〕(上) 4 あびる 《一ビール》

三六九 〔それなら、海の水をあびて、ねて
 三六九 いるがよい。〕とおっしゃいました。
 三六九 白うさぎはすぐ海の水をあびました。
 三六九 夏のあいだ、《略》、この谷まの流れには
 三六九 いて、頭から水をあびるのが楽しみでした。
 三六九 この光を全身にあびよう。
 三六九 あひるども
 三六九 〔家鴨共〕(名) 1 あひるども
 三六九 八六二 ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎま
 三六九 わるほうがすきであつたからである。
 三六九 〔蛇〕(名) 4 あぶ
 三六九 九二五 あぶが、足をひっかけて、ブンブンいつて
 三六九 いるところだ。
 三六九 九二七 くもが、いきなりとびかかっていくと、あ
 三六九 ぶは、《略》、すいとにげていきました。
 三六九 一三九 あぶが一ぴきとんで来る。
 三六九 一四〇 あぶはちとらす。
 三六九 〔泡〕(名) 1 あぶく
 三六九 一六四 つかまえて、たなにあげたら、あぶくをだ
 三六九 しておこった。
 三六九 あぶない 〔危〕(形) 16 あぶない 《一イ・カツ・
 三六九 一ク》
 三六九 一四六 かたなだの、てっぽうだの、あぶないも
 三六九 のはみんなとりあげられてしまいました。
 三六九 一六四 「あぶないところだつた。」といつて、
 三六九 大いそぎで木からとびたつていきました。
 三六九 七一九 あぶないよ。
 三六九 七四八 あぶなかつたが、わずかのちがいで勝つた。
 三六九 七五五 あぶなくころびそうになつた。
 三六九 九四三 〔手〕(名) そんな高いところ、あぶないから、早
 三六九 くおいておいで。
 三六九 一〇八 だじようぶかい、あぶなくはないかい。
 三六九 一七一 ポートは向きをかえて、あぶないとこ

ろからぬけだして、新しい方向に進んでいく。
 一六〇 一の橋はあぶないから、けつして渡つ
 一六〇 てはいけない。
 一六〇 一六一 まえからあぶないといつておいた、あ
 一六〇 の橋を渡つたのではないかね。
 一六〇 一六二 ひよつとすると命を失うようなあぶな
 一六〇 いときで、
 一六〇 一六三 地面の空氣が、日光のためにあたためら
 一六〇 れてできるときは、飛行家にとって、たい
 一六〇 へんあぶないものです。
 一六〇 一六四 女の子は、あぶない足どりで、《略》、と
 一六〇 かく家庭教師の手からはなれて行きそうにして
 一六〇 ました。
 一六〇 一六五 ひつじかい、身のあぶないこともわす
 一六〇 れて、思わず鳥のせにとびついたのでした。
 一六〇 一六六 すると少年は、あぶないことが近づいた
 一六〇 と感じたので、
 一六〇 一六七 みんな、あぶないよ。
 一六〇 あぶら 〔油〕(名) 5 あぶら油
 一六〇 二四八 「あたまた足—あご—あさひ—
 一六〇 あした—あそこ—」《略》。「あぶら。」
 一六〇 七五五 よくみのつてから、油をとるんだからね。
 一六〇 一七八 夜の勉強には油がいります。
 一六〇 一七九 その油を自分でとりたいたいと思ひ、となり
 一六〇 のおばさんから一にぎりのあぶらな種をかりて、
 一六〇 かわらへいつて、あき地にまいておきました。
 一六〇 一八〇 これを油にかえて、本を読み続けました。
 一六〇 あぶらえ 〔油絵〕(名) 2 油絵
 一六〇 九三三 山のすがたが、さかさまに湖の中にう
 一六〇 つつて、がくにいった油絵のように美しくがや
 一六〇 いてみえます。
 一六〇 一四二 デッサンとか、モデルとか、バックとか

いうことばも、西洋の油絵がはいってきたときに
傳わってきたのだということが想像される。

あぶらぜみ〔課名〕2 あぶらぜみ

八23 二 あぶらぜみ……十四

八14 二 あぶらぜみ

あぶらぜみ〔油蟬〕(名)6 あぶらぜみ

八14 夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に生

みつけた、あぶらぜみのたまごがありました。

八196 あぶらぜみでは、七年もかからないと、親

になることができないといひます。

八24 黒いところは黒く、茶色のところは茶色に

なつて、いかにもあぶらぜみらしくなります。

八245 れいのあおぎりの木でも、ほかのあぶらぜ

みが〔略〕と鳴きはじめました。

八247 このわかいあぶらぜみは、きゆうに元氣に

なつて、そろそろと歩きだしました。

十一354 庭にかがやくひまわりの花、あぶらぜ

みの声さわがしく、晝の休みもあせがでる。

あぶらな〔油菜〕(名)1 あぶらな

十一28 11 その油を自分でとりたいたいと思ひ、となり

のおばさんから一にぎりのあぶらなの種をかりて、

かわらへいつて、あき地にまいておきました。

アフリカ〔地名〕2 アフリカ 小さなアフリカ

九182 ヨーロッパの北の方ではんしょくしたもの

が、秋には、南ヨーロッパを通じて、遠くアフリ

カまでもいつて、冬ごしをします。

十五359 いまから五六千年ぐらゐまえに、アフリ

カのエジプトには、そうした絵文字とよばれるも

のがあつた。

あふれ・でる〔溢出〕(下二)1 あふれでる

デ

九121 泉をあふれてた水は、さらさらと走つて、

あふれる〔溢〕(下二)6 あふれる 《一レ》 1

ちあふれる・わきあふれる

七695 たつぷりと、春は、小さな川にまで、あふ

れている、あふれている。

七696 あふれている、あふれている。

十一282 さかわ川がまたあふれて、のこつていた

わずかの田や畑も、流されてしまいました。

十一522 あふれそうな乗客にまじつて、どうやら

乗車口へもぐりこむことができた。

十二107 大きな目、のびた手さき、しっかりふま

えた両足、どこをみても、力があふれています。

十五1218 読んでいるうちに先生がたに対する感謝

の念があふれてきた。

あまあし〔雨脚〕(名)1 雨あし

十184 2 いけのおもてにはじける雨あし。

あまい〔甘〕(形)6 あまい 《一イ》

二67 1 「あかい——あおい——あつまる——あ

そぶ——あさい——あまい——」

九36 11 手にとつて口へいれると、つめたくてあ

まい味がしました。

九1207 あまいような、すずしいような、氣の晴れ

晴れするような味だった。

九1232 大きな支流が流れこむところへくると、と

きどきあまい水の味がわからなくなつてしまう。

十703 うまそうなあまいにおいがして、黒っぽい

ものがはいつていました。

十二366 すいかずらのあまいにおいにひかれて、

庭の小道をおりていきました。

あまがえる〔雨蛙〕(名)1 あまがえる

十187 その下で、きょんとしているあまがえる。

あまがき〔甘柿〕(名)1 あまがき

十一375 1 あまがき・しぶがき赤くなり、くりも

ばらばら落ちだした。

あまぐ〔雨具〕(名)2 雨具

十二66 すると、にわか雨が降りだしたので、近

くの家をたずねて雨具をかりることにしました。

十二71 1 雨具をかりたいのです。

アマストじだい〔名〕1 アマスト時代

十五732 手には、古ぼけたアマスト時代のもの、

京都時代のもの、なつかしい数々の写真があつた。

アマストだいがく〔名〕2 アマスト大学

十五56 12 私はまだわかくてアマスト大学の助手

をつとめていたころ、

十五58 1 慶應三年九月二十一日、マサチュセツ

ツ州アマスト大学に入学、

あまだれ〔雨垂〕(名)3 あまだれ 雨だれ

三843 ビーターは、はのさきに あまだれがあ

るのをみつめて、「略」といひました。

三847 みんながみまると、その あまだれの 中

に、小さなにじがみえました。

六376 「の」の字のはねたさきから、雨だれのよ

うななみだがこぼれおちる。

あまちゃ〔甘茶〕(名)1 あまちゃ

三95 1 あまちゃの中からひょっこりと、おで

になつたか、おしやかさま。

あまど〔雨戸〕(名)1 雨戸

十二751 ふだんは筑波おろしがさわがしく、雨戸

をゆさぶつたり、大川の波の音がバサリバサリと、

まぐらにひびくのがしたが、

あまのがわ〔課名〕2 天の川

八26 三 天の川……二十六

八26 三 天の川

あまのがわ〔天川〕(名)12 あまの川 天の川

一52 6 これは あまの川ですよ。

一6010 図 それでは、みんな、あまの川で だいや
もんどを ひろって きたのですね。

一653 図 あまの川の だいやもんど、おかあさん
のおみやげに いただいたの。

二56 図 「あまの川。」「略。」「あつしさん——
あきらさん——」

八282 やがて、大きな天の川にさしかかりました。

八293 天帝は、〈略〉馬車を走らせて、天の川の
西の岸を通っていらつしやいました。

八308 黒うしは、にわかにかげだし、天の川へ落
ちこもうとしましたが、

八322 天帝は、〈略〉はたおりひめを天の川の東
の岸のごてんにもどしてしまい、けんぎゅうを西
の岸に帰しておしまいになりました。

八3211 ふたりは、天の川で楽しくあうことができ
ました。

八332 天の川は、なん千なん万という星がかさな
りあって、あのように、ぼうつとした銀の川のよ
うな光をはなっているようにみえるのです。

八361 夜になって天の川をみると、なんともいえ
ない大きなふかい感じにうたれます。

十四338 このぎんが系というのは、地球をとりま
いている天の川の内がわにあるたくさん星のむ
れなのです。

あまみず 「雨水」(名) 1 雨水

十189 3 わら屋根ののきから、たきのように落
ちる雨水。

あまやどり 「雨宿」(名) 1 雨やどり

十1810 その下で、雨やどりをしているにわたりの
むれ。

あまり 「余」(名) 3 あまり 多いちアールあま
り・いちまんキロあまり・いちメートルあまり・

いっぽうあまり・さんじっセンチあまり・じゅう
まんばあまり・はっぴやくねんあまり・よんじっキ
ロあまり

六1176 紙は半紙でいいし、骨は工作のあまりのひ
ごでまにあわせました。

八866 子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、
あひるの子はまたいじめられるかと思つて、おそ
ろしさのあまり、牛乳なべの中へとびこんだ。

十三259 戦いによって失われたシュレスウィヒと
ホルスタインとは、すでにつぐなわれて、なおあ
まりあることになりました。

あまり 「余」(形状) 4 あまり

八8710 あひるの子が、〈略〉どんなに苦しんだか、
ここで話すにはあまりにもかわいそうである。

十739 図 あまりの申しわけなさに、ふたりとも、
命をすてておわびをしようと考え、

十四323 天上の星とあなたがたとは、あまりにか
けはなれているために、自分たちとはえんがない
と思つている人もあるでしょう。

十五469 図 そのねだんのあまりに安いのにおどろ
いた。

あまり 「余」(副) 25 あまり

三1111 あまり しんばいしましたので、かみのけ
が白くなり、こしもまがつてしまいました。

四1149 図 あまり 長くなりますので、もう、おい
とましようと思ひます。

五215 あまり こんでいましたので、みんな、ぶつ
ぶつとことをいながら、

六83 男の子はゆびさきでそれをつまもうとした
が、あまり小さいのでつまめなかった。

六1071 みんなもあまりわらつてくれない。
六1206 図 でも、のりがかわかないうちにあまりい

じると、すぐはがれますよ。

六1389 とらさんは、晝ねをしていたのですが、う
さぎさんたちがあまりガヤガヤ話をするので、目
をさましてしまいました。

七227 図 はるお、あまり大きな声をだすから、に
げちゃったよ。

七859 図 あまり遠くへいかないうちに。

八711 あまりテーブルの上でぎょうぎのわるいま
ねをすると、「これ。」としかったり、

八316 はたおりひめは、あまりうれしいので、は
たをおることをわすれてしまいました。

八963 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎ
て、あとでなえがよくとれないそうです。

八1064 両方をくらべてみて、あまりちがわないこ
とがわかりました。

九93 二つか、三つのことばの組みあわせだと、
すぐ心にもを思ひうかべることができですが、
あまりたくさん重ねると、ごちゃごちゃになつて、

十二465 図 日本ではあまりさかんでなかったが、
アジアでもヨーロッパでも、りっぱな影絵しばい
ができています。

十二788 あまり かわいい少年だったので、よくみ
ていますと、

十三269 あまり 廣くもない道の両がわの土べいの
上から、〈略〉の枝などが、ずつとびだしてい
る。

十四222 私たちは、あまり多いのにおどろいた。

十四276 図 それが、あまり古い時代にはいつてき
て、長いあいだつかっているうちに、もともとと
らの日本語のように思われてきたのだ。

十四297 どうも日本人は、むかしから、あまり星
に親しみをもつていなかったようです。

十四29 8 ですから、星のおとぎ話は、日本にはあまりありません。

十四63 6 つぶがあまり大きくないときには、

十四73 11 このふしぎなものがなんであるかということは、まだ、あまりよくわかっていないようです。

十四76 1 これがあまりはげしくなると、きけんになるのです。

十五90 10 というのは、その鳥をあまり上等とは思わないからです。

あまる「余」(五) 3 あまる《リール》

七14 5 ちょっと、手にあまるしごとだな。

十58 9 たばが十あって、五まいありました。

十73 8 次郎かじやは力があまり、茶だなの湯飲みをはねとばして、こなみじんにいたしました。

あみ「網」(名) 13 あみりかなあみ

五50 9 網 あみひく人の 黒いかげ 黒いかげ。

五65 6 おじいさんは、あみでさかなをとり、おばあさんは、糸をつむいでくらししていました。

五65 10 ある日、おじいさんは、海にでてあみをなげました。

九128 2 ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、あみをはることはできませんでした。

九129 4 そのとき、あみがにわかによれました。

九129 8 おまけに、あみに大きなあなをあけてしまいました。

九130 7 風が思いたしたようにふいてくるので、あみがゆれ、くももいっしょにゆれました。

九131 6 みつばちは、くものあみを知らないで、まっすぐにとんできました。

九132 10 みつばちは、つなをほどこいて、あみをくい切って、にげていってしまいました。

九133 8 あみにつきあたってはたいへんと、くもが思ったとたんに、

九133 10 あみは、すっかりやぶれて、くもはそのままだ地面に落ちました。

九140 9 くもは、おなががすいているのに気がつき、また、あみをかけようと考えました。

九141 10 あみをはり、かくれていて、ほかの虫がひつかると、いきなりとびついてかみこすなんて、なんとひどいことをしてきたものだろう。

あみかた「編方」(名) 3 あみかた

十29 3 たとえば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあみかたか、なぜ、このようなあみかたをしなければならなかったのか、よく考えてみたいと思います。

十29 3 そのあみかたはどんなあみかたか、なぜ、このようなあみかたをしなければならなかったのか、

十29 4 なぜ、このようなあみかたをしなければならなかったのか、

あみのめ「網目」(名) 1 あみの目

十三26 6 ペキンの町には、ホートンが、あみの目のように通じている。

あみめ「網目」(名) 1 あみ目

十三34 4 細い、細い小枝のあみ目の先にも、はやふつくと、季節の命はわきあがって、

あみもの「編物」(名) 1 あみ物

十29 3 たとえば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあみかたか、

あむ「編」(五) 1 あむ《ーン》

十五35 1 木の皮や、あさなわなどであんだひももつかい、

あめ「雨」(名) 48 あめ 雨 ↓ おおあめ・にわかあめ

一32 4 お日さま——おつきさま——おほしさま——

——くも——かぜ——あめ——ゆき——きた——みなみ

二52 6 ふる あめですか。たべる あめですか。

二14 2 あめがやんで、にじがでました。

二20 4 かぜゆき あめ かさまんと

三79 7 雨でした。

三79 8 雨 「こら、雨、あっちへいけ。」

三79 10 雨にぼくの いどを いっぱいにしてもらうんだから。

三80 4 ぼくの 道は、雨にめちゃめちゃにされちゃった。

三80 7 雨は、みんなのいう ことには おかまいなしに、どんどんふりつづけます。

三81 2 そのうちに、雲は 雨をつれて、空をすすんでいきました。

三83 10 お日さまが、雨の つぶつぶをしゃべんだまみたいに光らせるのよ。

三90 2 雨の日にはどんな音。

四25 8 でも、雨が ふると、どこかで 休んでいると思います。

四31 6 きのう、学校から かえる とき、雨がふっていました。

四32 7 雨がびしゃびしゃ ふるので、わたくしは、かさをさしかけてあげました。

四55 5 その夜は、さいわい、雨もふらず、

四78 10 あ——雨、ゆき、あられ。

五4 3 山に雨が降る、きりがおきる、夜は夜つゆがおきる。

七58 1 雨がはれて、にじが大きくなりました。

七62 2 雨が降る。

七88 1 5月5日 (出) 雨

七88 4 5月6日 (出) 雨のち晴

七91 2 6月28日 (木) 雨
 七92 1 7月20日 (金) 雨のちくもり
 七94 9 10月23日 (火) 雨
 七98 2 11月29日 (木) 雨
 八95 5 5月5日 (出) 雨
 八101 10 8月18日 (出) くもりのち雨
 八103 6 9月7日 (金) 雨
 八105 3 9月29日 (出) くもりのち雨
 九114 つぎには、雨の降るところであった。
 九19 3 その年は氣候がわるくて、九月の中ごろ、
 《略》寒さになり、雨が降りつづきました。
 九19 4 おりから南へ飛行中だったつばめは、食に
 うえ、つめたい雨にずぶぬれになって、
 九21 7 その日はたいへん寒いあらしの日で、朝か
 ら晩まで、こやみなく雨が降っていました。
 九38 1 (注) 高いすぎやまつのはえているところは、
 《略》、雨の降ったあとのようにぬれています。
 九128 8 流れは急流だし、雨の日も風の日もある。
 九128 2 ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、
 あみもはることはできませんでした。
 十19 2 小学校のかわら屋根から雨がしたたる。
 十21 8 (金) 「おかあさん、雨がはれてきれいね。」
 十11 34 3 (鯛) 麦のとりにいれことなくすめば、はい色
 雲が空うちおおい、青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。
 十11 51 8 雨にうたれながら、電車のくるのを待つ
 ていた。
 十11 53 3 大きな声だが、雨や風の音のために、乗
 客の耳にきこえそうもない。
 十11 63 3 雨の降っている三月のある朝、
 十12 7 1 (金) 雨で困っております。
 十14 58 12 (金) 空から降る雨、あれだつて水ですよ。
 十14 59 1 (金) 夏のさいちゅうに、あの雨のおかげで、

かれるのが助かったことを考えてごらんさい。
 十46 7 1 前日雨でも降って、土のしめっていると
 ころへ日光があたつて、
 十510 12 (金) 『雨の幸福』で、眞珠をいっぱいつけ
 ています。
 あめ (名) 3 あめ
 二5 1 (金) 「あたま 足 あご——あさひ——
 あした——あそこ——」《略》。「あめ。」
 二5 3 (金) ふる あめですか。たべる あめですか。
 二5 4 (金) 「たべる あめです。」
 あめあがり 「雨上」(名) 1 雨あがり
 七66 1 雨あがりの麦のは、子どもと子どもとかけ
 ていく。
 あめいろ 「飴色」(名) 2 あめ色
 八21 2 あめ色をした六本足の虫が、
 八22 2 あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、
 われめができました。
 あめのなか (課名) 2 雨の中
 十1 3 4 六 雨の中……五十一
 十11 51 1 六 雨の中
 あめふり 「雨降」(名) 2 雨降り
 七89 8 うさぎでも、くもった日や雨降りの日は、
 きらいなのでしょう。
 八103 7 9月7日 (金) 雨 26度 きょうは雨降り
 でした。
 あめやさん 「飴屋」(名) 1 あめ屋さん
 十13 30 5 (金) いまのは、あめ屋さんだ。
 アメリカ (地名) 8 アメリカ
 十12 4 3 コロンブスがアメリカを発見して帰った
 とき、イスパニア人はたいへん喜びました。
 十12 39 7 これは、ヘレン・ケラーというアメリカ
 の女の人を書いた「わが生がい」の一せつを、日

本語になおしたものです。
 十12 98 10 いとぐちとなつたのは、アメリカのモー
 ルスという学者が、東京の大森の貝づかを発見
 してからのことであります。
 十15 40 8 ローマ字は、アメリカ・イギリス・
 《略》など、世界の大半につかわれている文字で
 ある。
 十15 43 3 銀座通りをアメリカの一しようこうが歩
 いていたが、ふと、ある店先で立ちどまった。
 十15 52 4 そのころ留学生としてアメリカのスタン
 フォード大学に学んでいた私は、
 十15 57 8 (金) 大きなつくえのまん中にチョークで線
 をひき、向こうは日本、こちらはアメリカといっ
 て、たがいに向かいあい、
 十15 73 12 老博士は、きょうに乗じて、アメリカの
 考えかたについて熱意をこめて語られた。
 アメリカきって (名) 1 アメリカきって
 十12 82 7 チルデン選手は、アメリカきっての名手
 です。
 アメリカさんがくかいがいん (名) 1 アメリカ
 山がく会会員
 十15 56 1 (金) 外人の中で、富士山や磐梯山のいただ
 きをきわめたのは、アメリカ山がく会会員であつ
 た私をはじめでだろう。
 アメリカじん (名) 2 アメリカ人
 十15 20 5 ユングフラウの山中のホテルに、アメリ
 カ人の一家族が来て、しばらくとまっていました。
 十15 21 7 ある朝、このアメリカ人の家族は、いつ
 ものように散歩に出ました。
 あやこ (人名) 3 あやこ
 十15 59 8 あやこは、それを見つけて、「《略》。」とい
 いました。

五624 あやこは、なんとこたえていいのか、わからなくなっていました。

五636 あやこも、このきゅうりも、あさがおの花もおなじだよ。

あやこさん (人名) 2 あやこさん

二622 「あつしさん——あきらさん——」あきこさん——「あやこさん。」

五618 あやこさんがひっぱったの。

あやし・い (怪) (形) 2 あやしい 《—イ》

七793 あやしい。

七812 それに、もっとあやしいことは、この人は、私どものらくだのことについて、それはよく知っております。

あやつり (操) (名) 1 あやつり 下にんぎょうあやつり

十二461 あやつりは文楽よりもっと古くからあったし、

あやつる (操) (五) 3 あやつる 《—ツ—ル》
十242 エレベーターをあやつる大きな車輪が、まわっている。

十3611 その織機をあやつって、りっぱにぬのを織ってみせたのは、佐吉の母であった。

十二4512 文楽は手でつかうのだが、そのほか、指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろ種類がある。

あやまち (過) (名) 2 あやまち

八132 ころしたのは、もちろんあやまちですが、八133 信用してくれていたものを、あやまちのためにあわれに死なせたというなげなさは、

あやまり (誤) (名) 1 あやまり

十三163 ガリレオは《略》自分の説はあやまりであつたということにして、ゆるしてもらいました。

あやまる (謝) (五) 2 あやまる 《—ル—ロ》

二434 ほら、ちゃんとあやまるだろう。

九1023 いっしょにあやまるう、あした——

あゆみ (歩) (名) 2 歩み

九1142 いもうとの小さき歩みいそがせてちょ紙かいにゆく月夜かな

十二1153 このような歩みをたどってきた日本を、これからどうもりたてていけばいいでしょうか。

あゆみ・く (歩来) (カ変) 1 歩みく 《—ク》

九305 歩みくる胸のへにちようとびわかれ

あゆみよる (歩寄) (五) 1 歩みよる 《—ル》

十五544 博士は、しずかに歩みよる私にしているしうかい状に目をそいで、

あら (感) 4 あら

五886 「あら、おかしいわよ。」

五927 あら、りょうかんさん、ちがいますよ。

六363 あら、子どものかかしだね。

七188 あら、そうですか。

あらあらし・い (荒荒) (形) 2 あらあらしい 《—イ—ク》

十二403 みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、氣持があらあしくなり、かんしゃくもちになったのもむりはありませ

ん。

十二408 サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくのには、

あら・う (洗) (五) 8 あらう 《—ウ—ツ》

三487 早く川の水でからだをあらって、がまのほをして、その上にねるがよい。

四545 一わが、きず口をていねいにあらってやりました。

六637 手をあらって、しゃぼんを水の上へおいた

ら、つるつとすべった。

六973 女のはつりばりを水であらって、海の神にさしあげる。

七724 うまよ、そんな大きなりをして、子どものように、からだまであらってもらっているのか。

七902 ねこが顔をあらうように、うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました。

十一133 はてしもなく、ゆるやかにうつ波の声は、われわれの心をあらうようにきこえる。

十二5610 みそ五郎は、雲仙岳にこしかけて、《略》、まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。

あらかた (粗方) (副) 1 あらかた

十二137 一本のざくろの木があつて、夏じゅう美しい花をつけていたが、あらかたちつて、

あらし (嵐) (名) 7 あらし 下におおあらし

八773 あらしはますますはげしくなってきた。

九188 ときには、あらしや、そのほかの思いがけないさいなんに、あわないともかぎりません。

九216 その日はたいへん寒いあらしの日で、朝から晩まで、こやみなく雨が降っていました。

十一528 電車は、歯ぎしりでもするように車の音をたてて、あらしの中をつき進んでいく。

十二8610 見物人たちは、しばらく、あらしのようなはく手をおしませんでした。

十四424 心に太陽をもて、あらしがふこうが、雪がふろうが。

十五227 みんなの頭の上が暗くなって、なんだか大きなあらしがふき起ったような音がしました。

あらす (荒) (五) 2 あらす 《—ス》

十二579 昔、神山のおくにおが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、十二5812 おには約そくをまもって、そののちはも

う田畑を荒らすようなことはなくなった。

あらそい「争」(名) 2 あらそい

九六〇九 〇 おとといからめんどうなあらそいがおこつて、ちよつと裁判に困りましたので、

十四四二六 天には雲、地にはあらそいがたえなからうが、心に太陽をもて。

あらそ：う「争」(五) 1 あらそ：う「ツ」

八六七 そこには、二つの鳥の家族が、一つのようなぎの頭のことであらそつていた。

あらためて「改」(副) 1 あらためて

六四一五 そこで、あらためて声をだして「ヌ」といつてみた。

あらっばい「荒」(形) 1 あらっばい「イ」

九四四八 それにくらべて、自分は、なんとあらっばい

アラビア ↓ちゅうぶアラビアあたり

アラビアンナイト「題名」 1 アラビアンナイト

七九六 〇 アラビアンナイトのように、いろいろな話がある。

あらゆる(連体) 3 あらゆる

八一一 くりすりをのませるやら、あたためるやら—

あらゆる手あてをつくしましたが、

十二三二 〇 私の心の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、

十二三七 〇 私の手にふれるあらゆるものが、生命をもつて動いているように感じはじめました。

あられ「霰」(名) 6 あられ ↓たまあられ

四七八 〇 あ—雨、ゆき、あられ。

八八三 〇 雲は、あられや雪で重くなってひくくたれて

十二七二 〇 雪やこんこん、あられやこんこん。

十二七三 〇 やあ、あられだ、あられだ。

十二七三 〇 やあ、あられだ、あられだ。

十二七三 〇 小さな手をしゃくしにして、受けようと

しますが、あられはその手にはのらないで、

あらわしかた「現方」(名) 2 表わしかた

十五三四 〇 それをその場にいない人や、遠くにいる人に知らせるためには、文字に書くか、またほかに特別の表わしかたをしなければならぬ。

十五三五 〇 これらの表わしかたとともに、事物の形を絵にうつすことも行われた。

あらわす「現」(五) 32 あらわす 現わす 表わす

す「シースーソ」 ↓いいあらわしかた・いいあらわす・かきあらわしかた・かきあらわす・にっぽんごのかきあらわしかた

三〇八 〇 「略」とおっしゃいますと、かぐやひめは、またすがたをあらわしました。

七四三 〇 すぎたことかもしれないが、このかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。

九六九 〇 色の組みあわせが、さまざまな感じをあらわすのと同じように、

九六 〇 音の組みあわせも、いろいろな氣持をあらわします。

九一〇 〇 その中で、たいこのたたきかたによって、いろいろな心持をあらわすことができるし、

九一〇 〇 水の音をたいこであらわすことなどは、ちよつと考えられないが、

九一六 〇 それから、水の中にドブンとびこんだときの音もあらわした。

九一一 〇 風といえは、「略」、「ビュウビュウ」とかいうことばであらわしているが、

九一一 〇 風といえは、「略」、それをたいこであらわすというのだからおもしろい。

九一二 〇 もっとおもしろいと思ったのは、雪の降つてくるところをあらわしたひびきである。

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

九一四 〇 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、

とができない。

十五367 数という形のないものを表わすのに、線を横に一本引いたり、二本引いたりした。

十五369 「うえ」「した」という考えを表わすのには、線を横に引いて、「・」をその線のうえに

おいたり、したにおいたりして表わした。

十五3610 「・」をその線のうえにおいたり、したにおいたりして表わした。

十五373 それに線を加えて、「もと」とか、「すえ」とかいう考えを表わすことにした。

十五375 また、それまでに作られた文字を組みあわせて表わすこともくふうされた。

十五379 その文字の左側に「木」を書いて、「略」、「木」に關係のあることを表わし、

十五393 漢字から、日本語を表わすのに便利なたかなや、ひらがなを作りだすようになった。

十五732 やがてすがたをあらわした博士の手には、〈略〉、なつかしい数々の写真があった。

あらわす 〔著〕(五) 1 著わす 《—シ》

十五515 日本の古い美術に対する愛着がふかく、日本美術工藝史十二巻という大作を著わした。

あらわる 〔現〕(下二) 2 あらわる 《—ル—レ》

九167〔文〕 赤いぬの一ぴきゆけばこの町のそここよりぞいぬのあらわる

十五57〔文〕 歌のもと末 ふたたびも、友の心にあらわれぬ。

あらわれ 〔現〕(名) 1 現われ

十四865 「ぴきのごん虫をながねんかかって調べ

るのも、ごくさいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

あらわれる 〔現〕(下二) 22 あらわれる 現われ

る 《—レ—レル》

四1101 魚がでてきてならぶと、そのうしろから、おとひめさまがあらわれます。

六931〔文〕 そこへ年をとったかたがあらわれて、

六1329 うさぎさんたちのまえに、大きなしきさんがあらわれました。

七43 中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小屋が、ぼうつとあらわれる。

八429 おくやみになっていらつしやると、きのうの、み知らぬ人があらわれました。

八8810 ところが、木のしげみから、二三ぼの美しいはくちようがあらわれてきた。

九46 この赤い色のそばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは感じられなかった明かるさがあらわれます。

九77 「月」だけで思いだした心の絵とは、いくらかちがったものがあらわれてくるでしょう。

九411〔文〕 道もないところから、木こりのすがたがあらわれます。

十4310 すると、五つぶの眞田眞珠が現われた。

十652 狂言には、よく、太郎かじやと次郎かじやが、現われます。

十二578 昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、

十二8012 そのひとみの中には、「略」という色があらわれていました。

十二834 そこへ両選手があらわれました。

十二899 食事のたびごとにいう「いただきます」「ごちそうさま」にしても、そのときそのときの心持があらわれるはずである。

十二905 話すことばは、その場その場にあらわれるその人の面影ということもできよう。

十二10410 屋根の形や左右にのびたろうかのかっこ

うにも、ほうおうという鳥の美しいすがたがあらわれていることに気がつくことでしょう。

十三612 さかんな春のきざしは、よもにあらわれて、目に見えぬかすみのようにたなびいている、

十三454 文字にあらわれていないあいでのことばを考えて、

十五823 園の前の方に、高い大理石のまるい柱でできた大廣間のようなものがあらわれます。

十五956 「こはくのつゆ」などがあらわれます。

十五11812〔文〕 ほどなくあらわれるあすの日を待ちながら。

あり 〔蟻〕(名) 22 あり

三522〔文〕 ありは すみれの 花に のぼり、「高い高い」といいました。

四394〔文〕 ありを ころそうと したとき、にいさんのことばを思いだして、ころしませんでした。

六133 「一ぴきのありがいました。」

六136 ありは、川の岸で、うつむいて水をのもうとしました。

六141 ありは大きな声をだしてさげびました。

六145 ありは、いっしょうけんめいにさげびつづけました。

六149 はとは、いそいで木の葉をとって、ありのそばにおとしてやりました。

六151 木の葉は船のようになって、ありのそばを流れました。

六153 「略。」 ありはそういつて、すぐ木の葉の船につかりました。

六157 木の葉の船は波に流されて、川の岸につきましたので、ありは、ぶじに岸にあらわれることができました。

六161 ありは、心から木の葉におれいをいまし

た。

六16 2 そのとき、ありのまえをひとりのかりうどが弓矢を持って通りました。

六16 8 ありは、いそいでかりうどのすねにはいはいりました。

六16 9 小さなありでも、力まかせにかんだので、かりうどもびっくりして、

六21 6 そのとき、しもてから、ありが三びき、ゆっくりでできます。

六25 1 荷物がありか、ありが荷物か。

六25 1 荷物がありか、ありが荷物か。

六25 4 ありはなんにもいわないで、おもい足どりでかみてにさっていきます。

六26 1 二のぼめん かみて半分はありのいえの中、しもて半分はそとになっています。

七60 3 考え考え歩きまわるような、大きなあり。

九62 1 ありのようにやってくる。

十三46 3 ありが、ちよりの羽をひいて行く。

あ・り「在」(ラ変) 4 あり《リ・ーレ》↓これあり

九27 2 月の夜をわが家のありしあたりまで

十四81 6 かべに耳あり。

十四81 9 親しきなかにも礼儀あり。

十五13 7 月照らす上野の森を見つければ家ゆるがして汽車ゆきかえる

ありあけかい「有明海」(地名) 1 有明海

十二57 1 仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をうったときのくわのあとで、そのとき落ちた土くれが、有明海の中にある湯島であるという

ありあり (副) 3 ありあり

八13 8 鳴いているほおじろの声をきくと、ピオのすがたがありありとうかんできて、

十54 12 わずかのことばですが、この中には、妹のすがたが、ありありとうかんでいます。

十三57 6 おじさんは、そういいながら、目を細くして、ありありとその絵を目の前に見るようなようすをなさいました。

ありいち「蟻」(話手) 8 ありー

六22 5 ありー「あ、だれかと思つたら、きりぎりすさんでしたか。」

六23 11 ありー「せつかくですが、わたしたちはみんな、はたらくやくそくをしているのです。」

六26 3 ありー「まだからそとをみて、『雪が降ってきた。』」

六26 6 ありー「さ、そろそろ夕ごはんにしようか。」

六26 10 ありー「夏のあいだに、こんなにたきぎをあつめておいて、よかったね。」

六27 4 ありー「そのおかげでさ、いまこうしてあたたまることもできるし、

六29 6 ありー「お元氣ですか。」

六30 1 ありー「どうしよう。」

ありいち「蟻」(名) 2 ありー

六26 8 ありー「は、ろの火を赤くもえたせです。」

六30 4 ありー「お、おの方からみつをびんにいれてもってできます。」

ありいちに「蟻」(名) 2 ありー、二

六24 7 ありー、二をさそい、大きな荷物を、「略」と、かけ声をかけて持ちあげます。

六29 1 おや、だれかたずねてきたらしい。ありー、二が戸の方をみています。

ありいちにさん「蟻」(話手) 2 ありー、二、三

か。」ありー、二、三——「きりぎりす」いいだろう。

六29 10 すこしでもいいから、わけてください。」ありー、二、三——「きりぎりす」どうかたのみます。

ありがたい「有難」(形) 22 ありがたい《ーイ・ウ・ーク》

四33 6 どうもありがとう。

四99 6 うってくれるかね。それはありがたい。

四110 6 このあいだは、うちのかめをおたすけくださいまして、ありがとうございました。

四116 9 これは、これは、おみやげまでいただきまして、ありがとうございます。

四132 1 それは、ありがとうございます。

五9 8 どうも、ありがとうございます。

五12 3 どうもありがとうございました。

五13 7 どうもありがとうございます。

五26 6 ありがとうございました。

五41 10 このあいだは、お手紙ありがとうございました。

六15 2 「ありがたい。」ありはそういつて、すぐ木の葉の船につかまりました。

六143 9 五ひきのうさぎさんたちは、みつばちさんのことばを、たいへんありがたう思いました。

七38 2 どうもありがとうございます。

七43 7 楽しい音楽をきかせてくださる心持を、ほんとうにありがたう思います。

七45 9 では、ありがたういただきます。

八48 1 ありがたい、ありがたい。

八48 1 ありがたい、ありがたい。

八75 4 「ああ、ありがたい。」あひるの子は、ため息をついた。

九23 10 また、飛行機という文明の利器が、このし

ごとにつかわれたということを、たいへんありがたいことだといわずにはいられません。
 九 69 1 会 どうもありがたうございました。
 十五 89 12 会 いいえ、どうもありがたう、『ふとった幸福』さん。
 十五 123 6 楽しい六か年の思い出を残してくれたこの運動場、この校舎、あの農園、みんなありがたう。
 ありがたさ 「有難」(名) 1 ありがたさ
 十四 46 9 このときぐらい、しみじみと歌のありがたさを味わったことはありませんでした。
 ありがたみ 「有難味」(名) 1 ありがたみ
 十 17 9 会 外国でくらしてみても、つくづく、自分の國のことばのありがたみを知りました。
 ありがたう 「課名」 2 ありがたう
 五 24 三 ありがたう……二十一
 五 21 一 三 ありがたう
 ありがたう 「有難」(感) 25 ありがたう
 二 49 1 会 「にいさん、ありがたう。」
 四 99 9 会 ありがたう、おじさん。
 四 114 2 会 ありがたう。
 五 12 5 会 おにいちゃん、ありがたう。
 五 26 1 会 「おねえさん、ありがたう。」
 五 26 10 会 はるこさん、いま改札口の人にありがたうっていったのは、どういうわけ。
 五 27 2 会 どこかでありがたうといたいと思ったけれど、いうところがなかったものだから、
 五 30 1 会 ありがたう。
 五 30 7 会 ありがたう、ありがたう。
 五 30 7 会 ありがたう、ありがたう。
 五 106 11 会 ありがたう。
 六 45 1 会 ありがたう。

六 82 9 会 ありがたう、にいさん。
 六 97 9 会 ありがたう。
 六 97 9 会 みなさん、ありがたう。
 九 50 2 会 くりの木、ありがたう。
 九 51 6 会 ふえふき、ありがたう。
 九 52 8 会 きのこ、ありがたう。
 九 53 9 会 りす、ありがたう。
 九 139 1 会 「ありがたう、くもさん。」
 十一 91 8 会 ありがたう。
 十一 92 6 会 看護婦さんありがたう。
 十一 92 7 会 お医者さん、ありがたう。
 十二 26 1 会 ありがたう。
 十二 89 5 会 ごく簡単な「ありがたう」というあいさつにしても、
 ありがたうございます 「有難御座」(感) 3 ありがたうございます
 一 58 1 会 ありがたうございます。
 六 30 6 会 ありがたうございます。
 七 44 11 会 みなさん、ありがたうございます。
 ありさま 「有様」(名) 3 ありさま
 十二 60 6 長者は、高どの上からこのありさまをながめて、得意になっていた。
 十四 86 11 このものすごいありさまを映画化することは、たやすいことではあるまいが、
 十五 55 7 会 まあ、そのようなありさまで、せっかくのおたずねもむだになるようなわけだが、
 ありさん 「蟻三」(話手) 9 ありさん
 六 22 9 ありさん「うちへ帰るところなんです。」
 六 24 5 ありさん「でも、わたしたちは、はたらけるときにはたらくのですよ。」
 六 26 5 ありさん「風がでてこなければいいね。」
 六 27 3 でも、夏のころはあつくてたいへんだっ

た。「ありさん」毎日あせだくだったね。」
 六 27 8 ありさん「はたらかないものには、この楽しさ、この喜びはあじわえないだろう。」
 六 28 10 ありさん「おや、だれかたずねてきたらしい。」ありさん「二が戸の方をみています。」
 六 29 2 ありさん「おはいり。」
 六 29 4 ありさん「きりぎりすさんじゃないか。」
 六 30 3 ありさん「花のみつをわけてあげよう。」
 ありさん 「蟻」(名) 5 ありさん
 六 21 10 会 おやおや、ありがたさんがきたよ。
 六 22 1 会 ありがたさん、ありがたさん。」よばれても、あたりには気がつきません。
 六 22 1 会 ありがたさん、ありがたさん。
 六 22 3 会 ありがたさんたら、ありがたさん。」
 六 22 3 会 はじめて気がついて、
 六 22 3 会 ありがたさんたら、ありがたさん。
 ありさんたち 「蟻達」(名) 2 ありさんたち
 六 24 9 会 苦労しようのありさんたちだな。
 六 24 10 会 こんな楽しさも知らないで、気のどくなありさんたちだよ。
 ありし 「在」(連体) 2 ありし
 十五 59 3 「略」と、ありし昔を語ろうとした。
 十五 66 5 それからいく年たっても、せっくがくるごとにその人形をかざって、ありし日をしのぶことをわすれなかった満ぼうの心から、
 ありた 「有田」(地名) 3 有田 有田
 十五 47 1 会 九州の有田です。
 十五 47 6 有田に焼物がはじめられたのは、いまから三百三十年ばかりまえのことである。
 十五 48 3 そのほかに、色絵をつける赤絵屋もあったが、これははん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、

ありたち 「蟻達」(名) 3 ありたち
 六22 2 ありさん、ありさん。」よばれても、あり
 たちは気がつきません。
 六22 4 ありさんったら、ありさん。」ありたちは
 はじめて気がついて、
 八25 6 せみの死がいはい、ありたちがよってたかっ
 てひいていきますが、
 ありったけ 「有丈」(名) 2 ありったけ
 七35 5 私は、ありったけの力をだして、さぶろう
 をかばうように両手をつっぱりました。
 十五99 3 廣間の中へかけこんで来て、ありったけ
 の声をはりあげて、「略。」と歌い、
 ありときりぎりす 「題名」 2 ありときりぎりす
 六25 ありときりぎりす
 六17 6 ありときりぎりす
 ありとはと 「題名」 2 ありとはと
 六24 ありとはと
 六13 2 ありとはと
 ありに 「蟻」(話手) 5 あり二
 六23 4 さあ、はいりたまえ。」あり二でも。
 六26 4 あり二「今夜はつものかもしれない。」
 六27 1 夏のあいだに、こんなにたきぎをあつめて
 おいて、よかったね。」あり二「ほんとうだ。
 六27 11 はたらかないものには、この樂しさ、この
 喜びはあじわえないだろう。」あり二「たしかにそ
 うだ。」
 六30 2 どうしよう。」あり二「かわいそうだね。」
 ありにさん 「蟻」(話手) 3 あり二、三
 六22 6 あり二、三「きりぎりすさん、こんにち
 は。」
 六26 7 さ、そろそろ夕ごはんにしようか。」あり
 二、三「そうしよう。」

六26 9 あり二、三「ああ、あたたかい、あたたか
 い。」
 ありのまま 「有俣」(名) 2 ありのまま
 十31 10 自分をえらそうにみせかけたり、人をだま
 したりしないで、ありのままのすがたで、つき
 あつていきたいのです。
 十一61 9 また父にきびしくただされて、太郎は、
 やつときょうのことを、ありのままにうちあげた。
 ありふれる 「有触」(下) 1 ありふれる「一
 レ」
 七41 11 ごくありふれた曲であつたが、旅をしてき
 た私には、しみじみときかれた。
 ある 「或」(連体) 79 ある
 二26 1 窓 あるところに、川がありました。
 二32 3 窓 あるところに、六人のめくらがあり
 ました。
 三14 7 ある日、おしゃかさまは、王さまのおま
 ねきに あずかりました。
 三22 2 むかし、あるところに、一本のくすのき
 がはえました。
 三25 2 あるちえのある おじいさんがいいまし
 た。
 三43 4 ある日、はまべにでてみると、わにざ
 めが いましたので、これはいいと思つて、
 三58 8 ある日、みんなであそびにでかけまし
 た。
 三100 2 むかしあるところに、「竹とりのおきな」
 という おじいさんが すんで いました。
 三100 6 ある日のことです。
 三107 1 みかどは、〈略〉、ある日、かりのおかえ
 りに、とつぜん おたちよりになりました。
 三109 1 ある年の春のころから、

三109 6 十五夜がちかくなつたある夜、
 三116 4 あるとき、「略。」と、おつきのものに
 おたずねになりました。
 四113 3 ある日のこと、うらしまは、父や母の
 ことを思いだして、
 五19 6 二日めのあさ、やつと汽車からおろされ、
 〈略〉、ある町のゆうびんきよくにつきました。
 五21 2 ある日のゆうがたでした。
 五65 9 ある日、おじいさんは、海にでてあみをな
 げました。
 五105 11 ある日、二三ばのひわが、さんちゃんのお
 ちのまつの木におりてきました。
 六18 1 あるきりぎりすはバイオリンをひいていま
 す。
 六18 1 あるきりぎりすはチェロをひいています。
 六18 2 あるきりぎりすはふえをふいています。
 六67 2 あるところに、一びきの子ぐまが住んでい
 ました。
 六107 6 弟ははながつまつているために、あること
 ばが、うまく発音できなくなっている。
 六121 4 ある日のこと、五ひきのうさぎさんは、ま
 つ林の中で、〈略〉遊びました。
 七26 7 それから、いく日かたつたある日の午後。
 八52 秋のはじめのある晩、一家そろつて、ぎん
 ざの大通りを歩いていましたら、
 八53 あるデパートのまえのうすくらがりに、
 八10 11 ある土曜の午後、
 八37 3 あるところに、金持の王さまがいらつしや
 いました。
 八38 1 ある日、王さまは、宝ぐらの中で、宝物を
 かぞえておいでになると、
 八44 3 あるところに、ひとりの王さまがいらつ

しゃいました。

八五八 ある日、ぼくは遠足でみはらし台へいった。
八七六 くれがたになって、あひるの子は、ある小
さなひやくしょうの小屋へやってきた。

八八三 ある夕ぐれ、太陽が美しくしずむときで
あった。

九五八 オルガンで一つの音だけひいてきいても、
その音には、ある感じがこもっているものです。

九一七 フィリピンで、ある年の十月のすえ、子ど
もがつばめをつかまえました。

九一七 5 さいたま縣のあるところで、

九二四 2 つまり、ことしある家ののき下で巣をつ
くったつばめは、來年また、同じ巣へもどってく
るというのです。

九四七 2 ある土曜日の夕がた、

九八七 2 ある晴れた日の午後

九一七 5 ある日の夕がた、このくもは、木と木のあ
いだに、巣をかけた。

一一一六 ある日のこと、おとうさんが、《略》おか
しを、一ふくろやったのがはじまりで、

一四一 2 ある年のこと、赤しおが、おびたたく発
生した。

一四一 3 ある小さな生物が、海水いちめんふえて、
海水が茶色にかわるほどになるのである。

一四一 一〇 あるとき、うめが、母貝の中をしらべてい
るうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。

一五五 一一 あるとき、なにげなく妹の作文をみました。

一六五 9 ある村に、けちんぼの旦那がありました。

一六六 2 あるとき、この旦那は、用事で、となり
村までいかなければなりませんでした。

一一一 六三 3 雨の降っている三月のある朝、

一二一 四 六 ある日、祝賀会の席で、人々がかわるが

わる立ってコロンブスの成功を祝しますと、

一二一 六 3 ある日、太田道灌は、たがりにでかけ
ました。

一二一 八 3 家をはなれて勉強にでかけていましたが、
ある日のこと、母親がなつかしくなり、

一二一 九 一一 ある町角の廣場で、

一二一 一一 一〇 ある日、リビングストーンが木かげで書物
を読んでいた。

一二一 二九 5 ある日、学校から帰ってくると、姉が大
さわぎしていました。

一二一 三四 9 ある日、私が新しい人形を持って遊んで
いますと、

一二一 三七 六 めばえてこようとする心のはたらきと
いったようなあるふしぎなものを感しました。

一二一 五八 4 おには、これを承知して、ある夜、石だ
んをきずきました。

一二一 五九 9 ある年の夏、

一二一 六一 7 昔、あるまじい人が、《略》、この岩屋
からぜんやわんなどの家具のであることを知った。

一二一 六二 八 ある日のこと、八郎が山でしごとをして
いると、のどがかわいてきた。

一二一 一〇 九 同じ名まえの人も世の中には多いが、あ
る人は、幸福な暮らしをし、ある人は、たいへん
不幸になっている。

一二一 一〇 九 ある人は、たいへん不幸になっている。

一二一 二二 4 もみは、ある大きさまでのびると、そこ
で生長をとめました。

一二一 二三 一 大もみがある大きさ以上に生長しない
のは、

一二一 二三 3 ⑤ もしある時期になって、小もみを切り
はらってしまったら、

一二一 二三 7 小もみは、ある大きさまでは、大もみの

生長をうながす力をもっているが、

一二一 二五 5 土地のねだんがあがつて、あるところでは、
百五十ばいになりました。

一二一 四四 2 千九百二十年十月の、ある月のない夜の
ことです。

一二一 四四 二 ある家の、かぼちゃのとりのれまつりの
晩のことでした。

一二一 五二 四 ある夏のことでした。

一二一 五二 七 ある朝、このアメリカ人の家族は、いつ
ものように散歩に出ました。

一二一 五二 八 2 鳥は《略》、ある岩角のすこしあき地の
あるところを目がけておりて行きました。

一二一 五三 四 銀座通りをアメリカの一しようこうが歩
いていたが、ふと、ある店先で立ちどまった。

一二一 五四 一 七 ある日、プリンクラーは、どうやら覚え
た日本語で、町をひとりりて散歩していた。

一二一 五四 六 3 ある小さな店先に出た一まいの赤絵
のはちを手にとつて、かれは、びっくりした。

一二一 五五 一 一 ⑤ ところがある日のこと、せんばいの教
授がやって来て、

一二一 五五 一 七 ⑤ ある日のこと、せい書をギリシア語で
読みたいといひだした。

一二一 五五 六 九 ある日のこと、おじさんとおばさんが外
出の用意をととのえて、

ある「在」(五) 947 アル ある《一ツ・リ・リ
ル・レ・ロー》おある・せいぎであることのよろ
こび

一二一 一六 5 つかいます。まだあります。なんでしょ
う、なげる。まだあります。足となか

一二一 一六 六 はしる。ほかにありませんか。この
ます。「けんさがあるようですね。」「へ

一二一 一六 九 2 はながかざってありました。びい

501 なながいみみのある、あかい目のう
 541 ひろったことがありますか。」「略。』
 549 、「はなればしに ある がっこうにはい
 5510 ずらのたまごほど ある だいやもんどを
 569 ろに、みおぼえの ある かおが、たくさ
 595 なばたけの なかに ありました。おじいさ
 645 たくしは、そこに あったこしかけにも
 655 んなさい。まだ ありますよ。」「あかい
 187 ちにちに二へん あるのに、いちねんに
 227 へへと」までも ありました。どうして
 261 ところに、川が ありました。くつが
 269 、「せまいはしが ありました。二ひきの
 323 六人のめくらが ありました。そのうち
 325 をみたことが あるかい。』と、いま
 332 さわったことが あるかい。』と、また
 555 は、おとうさんも あります。おじいさん
 555 ます。おじいさんも あります。けれども、
 558 なったにちがいが ありません。それは、
 156 ません。しかたが ありませんから、はん
 252 した。あるちえの ある おじいさんがい
 258 ほかにかたが あるまい。』と、いいま
 266 ると、あのちえの ある おじいさんが、
 278 ぶように 走るでは ありませんか。」「略。』
 283 ると、あのちえの ある おじいさんが、
 318 そうじがして あります。一だんあ
 325 は、えがはって あります。『略。』と
 327 略。』と、かいて あります。」「略。』と
 331 ばこが たくさん あります。ぎょうぎ
 336 大きなもけいが ありました。青色や
 338 まるいびんも ありました。へやの
 345 い花が さいて ありました。みんなが
 358 っている人も あります。のこぎりを

359 いて いる人も あります。かなづちで
 361 っている人も あります。ガタガタ、
 365 まどが ふたつも あります。火がもえ
 369 大きなながしも あります。こづかいさ
 373 うさぎを かって あるところを きまし
 583 うちは、丘の上にあるのでも、ふもとに
 584 のでも、ふもとにあるのでも ありませ
 584 もとにあるのでも ありません。丘のち
 585 ようど なかほどにあるのです。それで、
 586 れば 大きな 木のあるところへでられ
 703 かの上になにか あるのを みつけまし
 709 かびかしたものが あります。」「略。』デ
 779 ひるとよるが あるのです。」「略。』
 795 たりする ひまも ありませんでした。に
 843 さきにあまだれが あるのを みつけて、
 101 と光る 竹が一本 ありました。ふしぎに
 108 のにんげんでは あるまい。』と、お思い
 110 さないくふうは あるまいか。』と、ふ
 116 のは、「するがにある 山が いちばん
 488 たくさんうえて あります。よくみが
 495 書けるものでは ありません。先生が
 454 話しない日は ありません。お話を
 439 いをしようでは ありませんか。おてが
 434 ついたことは ありませんか。先生
 357 でしたことが ありますね。」「略。』
 367 、こんなことが ありました。』といっ
 373 たくてしやうが ありませんでした。思
 378 おさえたものが ありました。それは、
 422 のびることも あるし、きゅつとち
 423 とちぢむことも ありました。どのよう
 426 てしまうことは ありませんでした。」「へ
 451 うとするものは ありません。」「略。』

452 よういなことでは ありません。どうか
 452 つくるところでは ありません。ちょうど
 453 の山のむこうにある みずうみのとこ
 453 もりとした林が ありました。がんの
 453 ってくるものが あります。そこで、目
 471 は、『ろ』の上に ある。」「略。』四組
 471 は、『は』の上に ある。四組の「ふく
 495 なに雪のたねが あるものだ。降って
 108 かけが二つ おいてあります。そこへ、か
 116 、どんなことが あっても、おあけに
 130 略。』」「略。』」「ありません。」「略。』
 154 ねのところに書いてありますから、まちが
 155 すから、まちがいはありません。けれども
 191 から、おちる心配はありません。私たちは
 210 っていた子どもが ありました。いしろ
 226 さは、それだけでは ありません。いしろ
 231 略。』」「それもあるけど。」「略。』
 232 へ。」「まだほかにあるの。どんなこと。
 245 略。』」「それもあるけど。そうしたら
 317 ものことが書いてありますよ。』といっ
 385 こんなことが書いてありました。」「略。』
 395 どころ下は、雪がありません。山の木の
 421 ところにならべて あります。私は、まだ
 422 うへいったことは ありません。けれども
 529 さつをしていく人も あります。まさか、
 614 めがでないことは ありません。わたしが
 621 かあさんの力では ありませんよ。」「略
 632 やつたりしたじやありませんか。」「略
 634 あさんのせいでは ありませんよ。』とお
 731 王になっているでは ありませんか。そばに
 779 花が、三本かざって ありました。かおより
 871 花が、まるい目が二つあって。」「略。』」「へ

五873(会) は、三つも四つもあるかと思つていたよ
五877(会) いわ。目が四つもあるっちゃ。」「(略)」「
五905(会) でなされたことがあった。それでな、さ
五907(会) んにおかあさんがあるって、おかしいな
五916(会) びてゐるだけのことがありました。「(略)」。
五9510(会) ひなはずずめではありませんでした。ひ
五9511(会) でした。ひぼりでもありませんでした。あ
五975(会) には、ひわのむれもありました。さんちゃ
五1019(会) ひるまえは、水道のあるいどばたの高いと
五1074(会) おもしろいことがあるのかい。」「(略)」。
五1075(会) 略。」「いろいろなあるよ。」「そういつて、
六48(会) ここは時計屋の店であることがわかった。
六61(会) なのははしら時計である。ねじは、これら
六66(会) なさけない自分であらう。あのいろいろ
六69(会) きくてえらそうである。ひとかどの役目
六72(会) 不足はなさそうである。ただ自分だけが
六76(会) けない身のうえであらう。」「ふいにバタ
六95(会) 、役にたつことがあるのかしら。」「と喜
六1011(会) ん喜んだのはねじであった。時計屋さんは
六173(会) をつがえてゐるではありませんか。」「(略)」
六194(会) いこのうちがいもあるよ。じつにゆかい
六1911(会) いときは、二どとありませんね。」「しき
六206(会) と休みしようではありませんか。」「みん
六2010(会) は、お茶が用意してあり、くだものが、た
六2011(会) さんおさらにもつてあります。みんな、樂
六3411(会) 声がでないのである。雪、だじよう
六401(会) ああ、いい考えがある。心配しないでま
六499(会) 。楽しいことがあるような、ああ、
六544(会) ついて、まえの方にある木の下へいきまし
六605(会) イコトガ——七 アルヨウナ——五 ア
六667(会) いかか、楽しみではありませんか。お話の

六六九 5。そんなに大きくはありませんが、これを
六七一 5 会 いました。「口があるから、お話もする
六七四 3 会 な命というものがありますよ。それを考
六七四 3 会 えたらわかるじゃありませんか。」とお
六七四 10、それだけでは命があるとはいえないと、
六七七 9 いきをするから命がある。うしろうまもそ
六七八 3 会 よく考えた。命のあるものは、日に日に
六七九 2 会。「息ばかりではありませんよ。ほら、
六八〇 3 会 いさん、お願いがあります。」ほでりの
六八一 1 会 みこと「お願いがあるのです。」みことほでり
六八五 8 会 こと「申しわけがありません。どんなこ
六八七 6 会 よう。そこに船がある。あれにお乗りな
六八七 10 会 門のそばにいどがあって、そのそばには
六八九 3 会 などところにいどがある。きれいな水だ
六九五 4 会。いや、たしかにあるはずだ。だれか知
六九〇 7 がって、ついそこにあるようにみえるでは
六九〇 10 向こうの家の屋根であつた。「略。」こう
六九二 7 だ。はりがねが六本あることまでわかる。
六九四 7 えから、かぜぎみである。しかし、ねつは
六九五 9 略。」といったのである。ぼくも、もちろ
六九六 2 ようにいったことがあるのではない。しか
六九六 4 そうなことばつきである。その、弟がまだ
六九六 5 たから感心したのである。そこで、ぼくも
六九六 9 だいすきな飛行機である。ぼくは、ここだ
六九七 8 できないことばとがある、ということに氣
六九七 9 とに氣がついたのである。ぼくは、夜、勉
六九八 1 もいえることばとがあるのだらう、と考え
六九八 8 がでない音のはずである。ぼくは、いまま
六九八 9 なから声ができる音であることはたしかとな
六九八 10「の」つくことばがあつたら、「ダ」や「
六九九 3 がぬけているだけである。そこで、あらた
六九九 4 これらもはなの音であることがわかつた。

六113 4 うえで作つたものであることがわかつて
六113 11 ろうと考えたからである。 十 たこ お
六137 2 いクレヨンで書いてありました。「へ略」。
六140 6 してくれるみこみもありません。とらさん
七68 会 「もう帰る子がある。一年生だ。手を
七95 会 話したら、いくつあるだろう。アラビア
七96 会 、いろいろな話がある。春には春の話、
七116 いろいろなつかいかたがあります。じょうずな
七122 になると、人の手ではありません。これは、
七125 ている手のことではありません。あさがお
七127 きつくように立ててある、竹や木のことを
七147 がつつかいかたがあるのは、「手」だけ
七148 は、「手」だけではありません。「へ略」。
七14 11 とが、ちがう人がある。「へ略」。「へ略
七15 9 いろなつかいかたがあるのは、おもしろい
七15 9 は、おもしろいではありませんか。三
七16 10 会 生、きょうは風がありませんから、ちよ
七34 6 もうとする男の人もあり、足をふまれて、
七34 7 こっている女の人もありました。私と弟の
七35 9 会 どうもいったことがあるのですもの。それ
七38 9 むにも、よいいではありません。そのとき
七41 11 ごくありふれた曲であつたが、旅をしてき
七42 10 きな声をだした人があつた。みると、しら
七42 11 と、しらがの老人である。「へ略」。「車中の
七44 9 会 ちのころさしであります。お受けとり
七45 3 会 りでひいたのでもありません。ただ、た
七46 4 高いオペラの序曲である。私は、汽車のま
七46 10 の「はないずみ」であつた。駅の名もまし
七47 7 、いきつくものではありません。文章は、
七48 1 という文章が、二へんあります。はじめに書
七48 3 めのは、書きたしてあるだけ、よむ人に、
七48 7 ドッジボール大会があつた。ぼくも、せん

七五4 6 た。ほくたちの勝である。みんな、また運
 七五5 6 くなっていくことがあります。心にはつき
 七五5 8 宝石のようなものでありますから、よけい
 七五5 9 とぼは、ちりほどもあつてはなりません。
 七六1 ちで、ふとんほしてある。炭を切る音も小
 七六5 ち、二つのやりかたがあります。一つは、は
 七六2 せていくやりかたであります。まえのやり
 七六3 さのいけがきの上である。ぼたんでもさい
 七六4 6 らつしやるのではありませんか。」ふた
 七六8 6 だは、かた目ではありませんか。」ふた
 七七9 6 「それにちがいありません。」甲「どこ
 七八1 6 から、つけた荷がありましたね。」甲「乙
 七八2 6 ましたね。」甲「乙」旅人「そ
 七八6 6 くだをみたのではありませんか。」甲「え、
 七八7 6 しくごんじではありませんか。」乙「そ
 七八9 6 も、きいたのでもありませんか。」ふたり
 七九1 6 らくだがかた目であることを知っていま
 七九5 6 らくだがびつこであることも知っていま
 八〇1 6 、知っているじゃありませんか。」甲「乙」
 八〇4 6 、この男にちがいありませんか。どうぞ、
 八〇8 6 にも、いいぶんがあるかね。もしあるな
 八〇8 6 があるかね。もしあるなら、ここで、は
 八〇8 6 の草ばかりたべてあつたからです。」裁
 八〇8 6 のこっている葉がありました。それで、
 八〇8 6 「それはほかでもありません。道に、麦
 八〇8 6 には、とても元氣があります。うさぎでも
 八〇8 6 、うさぎは、元氣がありません。なるべく
 八〇8 6 八四五。いぬでもねこでもありません。鳥——そ
 八〇8 6 八八八。いだろうと思う人もありませんが、それ
 八〇8 6 八九六。わてかたといつたらありません。びつくり
 八〇8 6 八四四。ぶらぜみのたまごがありました。親ぜみが
 八〇8 6 八四九。ました。二ミリほどある、白いうじのよう

八一7 3 えてくれたことではありません。人間のあ
 八二8 4 、林の中にごてんがあつて、中から、はた
 八三4 9 二十分や三十分ではありません。五日や二
 八三4 10 。五日や二十日でもありません。五ヶ月や
 八三4 10 五ヶ月や八ヶ月でもありません。」「光年」
 八三4 11 ほど、遠いきよりであります。さて、空の
 八三5 1 のくらいいきよりにあるのでしょうか。二十
 八三5 3 う。二十光年の星もあり、三十光年の星も
 八三5 3 り、三十光年の星もあります。あのたなば
 八三5 8 るに光っている星があります。百光年の星
 八三5 9 ます。百光年の星もあり、一千光年の星の
 八三5 9 千光年の星のむれもあり、一万光年の星も
 八三5 10 り、一万光年の星もあります。それどころ
 八三7 4 いいひとりの王女もあつて、なにひとつ不
 八三7 4 ひとつ不足なことはありませんでしたが、
 八三8 7 6 した。「すこしはある。けれども、まだ
 八四2 5 ねよりもたいせつであつたからです。」「略
 八四2 11 6 なかなしいことはありません。」「略」
 八四5 3 れをきいて、ちえのある人たちは、みんな
 八四6 6 とみつかるものではありません。金持だと
 八四6 6 りなかつたり、金もあり、からだもりっぱ
 八四7 7 づな一けんの小屋がありました。その小屋
 八四8 2 6 より幸福なものはあるまい。ほんとうに
 八四9 9 福のほしくない人はありませんから、どこ
 八四9 10 えてくれるにちがいありません。けれども
 八五0 7 むかえてくれる人があつたら、その人のと
 八五0 10 すと、いぬのかつてある家がありました。
 八五0 10 ぬのかつてある家がありました。その家の
 八五10 10 、その家にかつてあるいぬが、おそろし
 八五1 8 。それから、かつてあるにわとりに氣をつ
 八五2 11 は、うさぎのかつてある家のまえへいつて
 八五3 7 でしたが、なさけのある人とみえて、台所
 八五4 4

八五7 3 さきに、ひきあげてある小船がある。よし
 八五7 3 きあげてある小船がある。よし、あれを目
 八五9 2 らし台にすえつけてある望遠鏡をのぞいて
 八六0 3 かは、いいお天氣であつた。麦ばたけは黄
 八六0 4 らすむぎはみどりであつた。野原にはかれ
 八六0 6 りには、大きな森があり、森の中には深い
 八六0 7 には深みみずうみがあつた。みずうみの岸
 八六0 9 をかえしているのであつた。けれども、親
 八六1 3 まわるほうがすきであつたからである。と
 八六1 3 すきであつたからである。とうとう、一つ
 八六3 8 6 だまされたことがあつてね、そのひなに
 八六5 2 へんみにくいものであつた。親あひるは、
 八六9 1 6 「あれは美しくはありませんが、たちは
 八七1 2 わるくなるばかりであつた。おしまいは
 八七2 3 して、大きなぬまのあるところへやつてき
 八七3 3 してまもないものであつた。」「略。」と、
 八七3 10 「略。」このときである。「略。」と、空
 八七4 3 ちがはじまつたのである。かりうどは、ぬ
 八八1 9 6 ほどりこうな人はありはしないから。」
 八八3 10 美しくしむときであつた。草むらから、
 八八4 3 それはくちようであつた。はくちようは
 八八6 8 は、バッテリーのいれてあるたるの中へとお
 八八7 11 りにもかわいそうである。太陽がてりはじ
 八八8 2 ていた。美しい春であつた。すると、とつ
 八八9 11 った。はくちようであつた。生まれがはく
 八九1 1 くちようのたまごであつてみれば、あひる
 八九1 5 幸福をさつたのである。大きなはくちよ
 八九3 2 。ほんとうに幸福であつたが、すこしもい
 八九3 5 のうえになつたのである。にわこの木で
 八九3 10 6 八九三。くあいひるの子であつたとき、こんな幸
 八九3 11 6 八九三。き、こんな幸福があるうなどは、ゆめ
 八九4 6 した。ういたもみがあつたので、手ですく

八〇五 ないいねが、5かぶりました。先生にお
八〇六 大きなかぶは30本もありました。こんどは
九〇五 感じがするにちがいありません。四色、五
九〇六 てきこえるにちがいありません。色の組み
九七二 いう一つのことばがあります。このことば
九一一 、「たしかに水の音である。はじめに、川の
九一一 たちさわぐところである。つぎには、雨の
九一一 、「雨の降るところであった。それから、水
九一一 をきいているようであった。つぎに、風の
九一二 つとふいてくる風であり、竹やぶを流れて
九一二 ぶを流れてくる風であり、町の通りを、電
九一二 物をふいていく風である。風の音よりも、
九一二 あらわしたひびきである。たいこを、ひく
九一二 けてうち鳴らすのであるが、いかにも雪が
九一二 なるのは、ふしぎである。しばいで、ゆめ
九一二 場面を演ずることがある。こんなときにも
九一二 もっていないからであらう。もし、きく人
九一四 ならんでいることがあります。この中には
九一五 、「親つばめほどくありません。口ばしの
九一六 黄色にみえるのさえあります。こうして、
九一七 ようから四千キロもあるフィリピンで、あ
九一七 ラリアまでいくのがあるということです。
九一八 けっしてふしぎではありません。しかし、
九一八 落ちてきたことがあります。その年は氣
九二〇 いていた家が一けんあったので、協会では
九二〇 にはいつてくる人があると、たちまち、そ
九二一 すと、やはりそうであることがわかりまし
九二四 、「一万キロあまりありますが、つばめは
九二四 もわすれたことはありません。先生のこ
九三〇 先生、おわかりありませんか。みなさ
九三六 は、山のふもとにある森の中の小さな農
九三三 圃。四五十センチもあるこいいます。い

九三三 十センチあまりもあります。三びきもと
九三三 んぶで三百五十本ありました。それは、
九三六 ように雑草の中になりました。手にとっ
九三七 つて帰ったこともありましたが、ぼくはは
九三七 くのが、すきではありませんでした。だ
九三七 なん十メートルもある高いすぎやまつ
九三七 の。八九メートルもある木の上で、なたで
九三九 きこえないときがあります。上の方のか
九三九 きのぼったことがありました。のぼるた
九三九 るに炭やき小屋があつて、ゆるいけむり
九四一 も、二本や三本はあります。ぼくたちの
九四二 なかきの木が三本あります。朝早く庭に
九四二 ようど二リットルあります。」やまねこ
九七二 学校から四千キロほどある貝づかへいきまし
九七二 たべていたときがあつたらしい。その貝
九七二 がみつかることがあるのです。ひとつこ
九八〇 した。「略。」「ありそうところをほ
九八〇 略。」「略。」「ありそうところをほ
九八二 先生のとこにあるのと同じだね。」「先
九八二 らみないなものがあつたでしょう。先
九八二 具につかつた物があつたでしょう。それ
九八二 針や、もりなどがあつたでしょう。それ
九八二 もりなどいろいろあります。ここからで
九八二 ようにみえる物もあります。それから土
九八六 きく人は、ひとりもありませんでした。四
九八六 い持ってきた物があるか、おしらべなさ
九八六 わけられたところである。たかぎには友だ
九八六 さがしていたすみである。受けとりにくい
九八六 の名まえが書いてある。」「たかぎ、あつ、
九八六 の一本すぎのそばであつた。ぼくたちは、
九八六 とびこんだところであつた。」「略。」「と、
九八六 ておきあがるものもある。にこにこわらい

九〇九 ものなどさまざまである。みんなが急停止
九一一 すべられるところである。たちまち先生の
九一一 んという勇ましきであらう。みんなは思わ
九一一 生がとばれるばんである。先生は、はちま
九一一 ほんとうにゆかいであつた。十 ちよ紙
九一一 求めて 十のころであつた。私は父につれ
九一一 こまれた美しい泉があつた。父は、その泉
九一一 まつ川からひいてあるのだ。」「泉をあふ
九一一 し、ひとりの茶人があつた。茶のうまさ
九一一 うまさがいいちである。なんとかしてう
九一一 この上流にいい泉があるのではないかと氣
九一一 きえてしまふことがあつても、中ほどでは
九一一 なくて、遠い上流にあるのだとさつた。
九一一 、「雨の日も風の日もある。さかのぼるのも
九一一 泉はこの近くにある。」「茶人はつれの
九一一 うそれはただの水であつた。」「略。」「茶人
九一一 はまつ川の上流にある。」「茶人は、長い
九一一 口ほどは、村ざとがあつて川べりに道もあ
九一一 あつて川べりに道もあつたが、いまはそれ
九一一 落ちる小さな谷川がある。そこをくんで飲
九一一 れもないうまい水であつた。そこで、谷川
九一一 よろとわきでる泉があつて、それでもう終
九一一 、それでもう終りであつた。茶人は、そこ
九一一 しんだというところである。十二 一 びき
九一一 それは、みつばちであることが、くもには
九一一 こと耳にしたことはありませんでした。ま
九一一 た、口にしたこともありませんでした。い
九一一 ちよさんは、羽があるからいいな。」「と、
九一一 、わらっているではありませんか。くもは
九一一 いものはどこにでもある。高い木が大きく
九一一 いまも、どこにでもある。ただ、その美し
九一一 ちつづけたいものである。心がけひとつで

十64 する。心がけひとつである。心がけひとつで
 十711 かけて通ったこともありました。しかし、
 十84 わしてやったこともありました。二月半ば
 十812 わけてくれる少女もありました。あのとげ
 十102 ナフという石の橋があつて、イエンヌとい
 十104 れていました。岸にある丘の上には、セン
 十108 。その橋のたもとにあるプラタナスのなみ
 十1112 のは、やつでほどもありました。「略」。
 十128 ばへこない女の子もありました。「略」。
 十132(会) にこわいものではありませんよ。」おと
 十135 方言でできた小歌のあることを、おとうさ
 十138 ヒー茶わんのおいてあるテーブルをかこん
 十1310 しい子どもたちではありませんか。あんな
 十1311 、わるくいう旅人もありますが、おとうさ
 十148 は、そのいなか町にある商業学校の下の学
 十152 、きれいなところもあり、きたないところ
 十153 、きたないところもあり、日本も、やはり
 十175(会) れもわかるものがあります。そういう
 十197 もうあ学校の教室である。ひとりの生徒が
 十276 自分の身のまわりにあるものを、よくしら
 十279 トマトが畑に植えてあれば、そののびかた
 十2711 に果をかけることがあれば、果のはりかた
 十2810 におどろくにちがいありません。(二)
 十293 ば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかた
 十321 な考えをもちたくはありません。ぼくは、
 十322 がえのないひとりであることを、ほころよ
 十324 のの部分、部分があつての全体、という
 十331 ていたが、ひまさえあれば、織機のことを
 十332 べつづけていたのである。村じゅうの者が
 十3310 たりしたのは、母であつた。佐吉の考えは
 十3311 佐吉の考えはこうである。人間の衣食住と
 十3312 なたいせつなものであるから、ぬのを織る

十344 らない、というのである。佐吉が、はじめ
 十346 をぬっていく横糸であつた。横糸はおさに
 十347 へといききするのであるが、これを人の手
 十3410 織られていくからである。佐吉の考えは、
 十3412 い空想になりがちであつた。たまたま、そ
 十356 は、なかつたからである。「略」。佐吉は
 十361 も、まんまと失敗であつた。世間からはま
 十3612 たのは、佐吉の母であつた。それは、明治
 十371 四才のときのことである。あくる年から、
 十376 自動織機のはじめである。日本の新しい出
 十378 わりをはたすことである。眞珠「へ
 十383 、ひとりのわか者があつた。眞珠は、海の
 十386 なんでもないものであつた。眞珠母貝の中
 十389 とがわかつたからである。「略」。それか
 十3811(会) 現できないことはあるまい。」それから、
 十392 られた御木本幸吉であつた。「略」。幸吉
 十398 ば、成功するわけであつたが、理論と実際
 十3912 たために死ぬものもあつた。たとえ、はき
 十403 ところで、かわりのあるはずはない。しか
 十410 のは、つまのうめであつた。うめは、「略」
 十414 わるほどになるのである。この赤しおのた
 十415 もみなかつたことである。かれは、新しく
 十421 発生した半円眞珠であることが、わかつた
 十4211 の心からの助力者であつたうめが、この世
 十437(会) とびあがつた。「あつた。あつた。」ゆ
 十437(会) った。「あつた。あつた。」ゆめにもわ
 十4311 眞珠が取れたわけである。「略」。かれは
 十455 リアや南洋の島々であるが、日本産のもの
 十4510 珠は、まがいものであるといつた。しかし
 十4511 珠とまつた同じであることが、明らかに
 十467(会) ったことが、二つあります。一つは、ダ
 十468(会) 、ダイヤモンドであり、いま一つは、眞

十477 ころに、廣い草原があるので、そこへつれ
 十483 りでなく、道ばたにあるものを、なんでも
 十485 べつにいそぐともありませんでした。ので
 十5311 かけると、水おけがありました。そこに、
 十588 うしたら、たばが十あつて、五まいあまり
 十613 、はなのところまでありました。あしたも
 十628 うものをみたことがありませんか。能を知ら
 十631 いを、きいたことがあるでしょう。能は、
 十634 いろちがうところがあります。いちばんち
 十6311 、それぞれのめんがあります。そのために
 十643 いものが、たくさんありますが、能は、そ
 十644 、すぐれたところのあるものとなつていま
 十6412 が、狂言はそうではありません。つぎの「
 十659 けちんぼのだんながありました。おかみさ
 十693 いじそうにしまつてあつた、一つのまるい
 十705(会) 「こんなどくつてありはしない。ひとつ
 十7111 でなく、わるちえがあつたから、おちつき
 十721(会) 、うまいくふうがある。」といいながら
 十143 くには小高い丘があつて、そこからおき
 十157 になつていたのである。「略」。「略」
 十1103(会) 「では、実力があつて、力いっぱい
 十1195 えもんという人がありました。たいへ
 十12012 のていぼう工事があつて、どの家からも
 十1215 にたないことはありませんでした。そ
 十1223 の切れている人もあります。金次郎はわ
 十1233 下にふたりの弟がありました。いちばん
 十1251(会) 「どんなことがあつても、親子四人、
 十1256 そのお金は多くはありませんでした。が、
 十1267 ならないと書いてありました。金次郎は
 十1278 十二文はすむ者もありましたが、金次郎
 十1279 その十二文さえありませんでした。そ
 十1302 。そればかりではありません。いろいろ

11 43 3 うち園の卒業式がありました。弟が卒業
 11 43 6 かびんがかざってありました。ようち園
 11 59 7 しいことばではありませんか。」「略
 11 59 10 帰るときのことであった。「略。」と、
 11 60 3 け渡した一本橋がある。太郎は、まゑか
 11 60 7 められていたのである。が、いま、友だ
 11 63 9 、ナポリの近くにある村からきたのでし
 11 64 10 自分はちのみ子もあって、家をあげるこ
 11 68 1 ようにみえる者もあれば、びっくりでも
 11 68 3 みつめている者もありました。また、子
 11 68 3 うなっている者もありました。大きなへ
 11 69 11 —これが父親であろうとは、とても思
 11 70 3 親らしいところはありませんでした。息
 11 75 8 ど、まだ望みがある。氣をつけておあ
 11 78 1 いくらかわかるであろうと思うと、いろ
 11 80 1 なぐさめることがありました。それは、
 11 83 12 がけないこともあるものだ。」少年は
 11 86 9 ところに家族があるのでしょうか。どう
 11 89 1 目にうかぶこともありましたが、それも
 11 91 5 もあげるものがあります。これを病
 11 5 9 より立とうはありますが。このとき
 11 7 12 をたくしたものでありました。はた織
 11 8 8 と立って、そばにあった小がたなをとり
 11 13 6 本のざくろの木があって、夏じゅう美し
 11 16 1 った角、まるみのある面、重みのかかっ
 11 16 8 絵のぐがたくさんあった。しかし、パレ
 11 17 11 よくおなりではありませんか。はじめ
 11 18 4 てくれるものがあります。せんだっ
 11 18 12 じょうずなのもあるし、へたなのもあ
 11 18 12 し、へたなのもある。毎晩鳴いている
 11 20 10 ような絵のぐがあればいいなと思いま
 11 20 11 したよ。あれがあれば、どんなかげの

11 22 2 「自分には父もある。母もある。まだ
 11 22 2 父もある。母もある。まだわかい。先
 11 22 2 わかい。先生もあるし、友だちもある
 11 22 3 も、いいすぎではありません。やしきが
 11 23 7 あたり困ることはありません。ふたりの
 11 24 1 にかとりつく物があるとすぐに立ちあが
 11 26 5 てくださった日であります。それは一八
 11 31 4 ヶ月まえのことでありました。この日の
 11 31 6 なものがこの世にあることさえ知らず、
 11 34 1 それぞれ名まえのを知ったのは
 11 34 6 二つとも同じ名であることを私にわから
 11 34 11 っているものであることを、はつきり
 11 35 3 形が同じ名まえであることをわからせよ
 11 35 6 冷たいものの名であることを知りました
 11 37 8 にはみな名まえのがあることがわかったの
 11 37 11 「などのことばがあったことを思いだし
 11 38 11 ばらしいことではありませんか。ケラー
 11 39 11 なったのもむりはありません。ケラーの
 11 40 4 うあ教育に経験のあるサリバン先生にき
 11 40 6 おどりだす話がありましたよ。」「略
 11 43 9 動く人形だつてあるよ。一雄くんは、
 11 44 4 いをみたことがあるかね。」「略。」「
 11 44 4 人形しばいがある。その人形などは
 11 44 7 ル以上のものもあるが、まるでたまし
 11 44 8 とびだすこともある。人形はものをい
 11 45 3 樂のほかにまだあるんですか。」「略
 11 45 10 へ。」「略。」「あるとも。いまいった
 11 46 1 いろいろ種類がある。あやつりは文樂
 11 46 1 もっと古くからあったし、おじさんの
 11 46 3 のころは影絵もあったよ。」「略。」「
 11 46 9 しい色がつけてある。これに光をあて

11 47 1 いろんなものがあるんですね。」「略
 11 47 3 ていても、心にあることを、なにか美
 11 47 4 うとする氣持がある。だから、人間が
 11 47 5 、かならず詩もあれば、絵もある。音
 11 47 5 もあれば、絵もある。音楽もある。命
 11 47 5 もある。音楽もある。命のない人形を
 11 47 7 うとする望みもあるのだ。」「略。」「
 11 48 1 のいいところがあるからね。ところで
 11 55 3 感じのするものである。なつかしい山や
 11 55 4 山や、おもむきのある川などがあるため
 11 55 4 きのある川などがあるためばかりではな
 11 55 6 まれているからである。傳説には、正し
 11 55 7 もとづいたものもあるが、昔からいい傳
 11 55 8 名になったものもあるが、ただ人々のあ
 11 55 10 ってしまうものもある。それで、おじい
 11 56 2 ただおもしろみがあるばかりでなく、と
 11 56 2 、とうといことである。傳説を廣く全國
 11 56 3 に共通なものさである。次にいくつかの
 11 56 5 雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五
 11 56 11 が、有明海の中にある湯島であるという
 11 57 1 の中にある湯島であるという。九十九
 11 57 2 という二つの山がある。どちらもけし
 11 57 4 てやるといふのであった。おには、これ
 11 58 3 しょうけんめいであるから、みるみるう
 11 58 7 り十二キロの湖がある。これが湖山の池
 11 59 3 これが湖山の池である。昔、この里に長
 11 59 4 の岩屋というのがある。昔、あるまじ
 11 61 7 にはひとり母がある。母にそのからだ
 11 63 6 りだといふことである。七 みえな
 11 63 11 こぎりには、はがある。のこぎりはは
 11 67 2 いる。はたらきのある人は、はをもった
 11 69 1 んなにはたらきがあつても、それにあつ

- 1270 7 につけて不自由であるうから、いろいろ
 1272 6 るのは、川べりにある船大工の子どもや
 1274 9 とつてきてくれるのであるし、そのうえ、台
 1274 12 三日は困ることもありません。ふだんは
 1275 6 入口をたたく者があります。「略」そ
 1276 5 、「みせるものがあるよ。」芭蕉は、え
 1276 8 の目らしくいてありました。曾良は、
 1278 8 げまされたことはありませんでした。あ
 1278 9 人らしいところもあるのです。「略」と
 1279 8 会。「いきたくありません。」「略」。
 1281 5 手は世界的名手ですが、私もどう
 1282 9 およぶところではありません。それでも
 1284 10 おされるものではありません。もう然と
 1286 1 送ってやったのであります。チルデン選
 1286 2 だしたしせいではありましたが、やわら
 1289 7 もかわってくるであろう。食事のたびご
 1289 9 あられるはずである。そうでなかった
 1290 1 とにもなるからである。どんなたつとい
 1290 4 いからねんぶつである。話すことばは、
 1291 12 。太郎と同じ文であるが、その中にた
 1292 3 きのがたくさんあったこと、りすをみ
 1292 8 同じでないためである。みんなが「遠足
 1292 10 やはりこのためである。しかし、たみ
 1293 2 ぼとしての性質があり、おもしろさがあ
 1293 2 り、おもしろさがある。書くことは、話
 1293 7 ことがたいせつである。文を書くときに
 1294 7 は文字のおかげである。ところがこれ
 1295 9 「こんな短い文であるが、読み手によ
 1296 3 の家に、写真帳があるでしょう。それ
 1296 6 ときの写真などもあるでしょう。その写
 1296 9 悲しいことなどもあるでしょう。次の写
 1297 4 こに貝がらがあります。みたところ
 1298 11 してからのことでもあります。石器と土
 1299 3 う。石の矢の根があります。石のおの
 1299 5 ます。石のおのがあります。しかの角な
 1299 8 で作ったつり針もあります。また、土器
 1299 9 す。また、土器もあります。これは、食
 1300 2 なわ目のものがあるのです。じょうもん
 1300 5 いろいろのものがあります。じょうもん
 1300 9 式土器というのがあります。それは、も
 1301 7 は一メートルほどあり、男や女のいろ
 1301 11 まなどがかざってあります。このやさし
 1302 2 がよくわかるではありませんか。はにわ
 1302 4 こしらえたものがあります。夢殿の観
 1302 10 に作られたものであります。夢殿の観
 1303 6 にならんだ文字があつたりして、おもし
 1304 3 という建物の中にある名高いほうおう堂
 1305 9 の毛皮がひろげてあります。くだものを
 1305 10 やお屋らしいものもあります。これは、平
 1307 2 物絵巻の一場面であります。平安時代の
 1309 11 ローマ字で書いてあります。外国から書
 1310 6 ますが、そうではありません。江戸時代
 1310 10 はめこんだものもあります。黒うるしの
 1311 4 げられるものではありません。汽車第
 1311 6 かわいい汽車ではありませんか。これは
 1311 9 間を走つたものであります。汽車にかぎ
 1311 6 くよりほかに道はありません。ことばを
 1311 7 うしずかな午前にあつて考える、「略」
 1311 7 生よ、長くそこにあれ。」二 眞理
 1311 8 せつなことがらである。知識には、浅い
 1311 8 ものと深いものがあるが、その深く進ん
 1311 9 る土台にするのである。たとえば、花の
 1311 9 知るようなものである。知識が開けず、
 1311 10 わるいから不幸があるなどといった。今
 1310 7 移つて困つた人もあれば、わるいとい
 1310 8 のよくなった人もある。同じ名まえの人
 1311 5 他のこの原因であると、信ずるのであ
 1311 5 ると、信ずるのである。原因・結果の関
 1311 9 いことはたくさんあるが、それは、学者
 1312 6 まだ進むことである。ガリレオ
 1314 6 道は、だえん形であつて、太陽はいつも
 1314 9 レオという学者がりました。わかいこ
 1315 1 、それは一種ではありません。自轉とい
 1315 5 れで、夜と晝とがあるわけ、春・夏・
 1315 5 春・夏・秋・冬のあるわけ、すっかり
 1316 3 の説はあやまりであつたということにし
 1316 6 と、そんなことはありませんでした。「ハ
 1317 3 ほかには、鮎山があるのでもなく、いい
 1317 4 もなく、いい港があるのでもなく、わが
 1317 5 な、しずかな國であります。美しいおと
 1317 7 ンの生まれた國であります。世界の樂園
 1318 4 とも大きな問題であります。戦いは敗
 1318 10 て、さかえるのであります。このとき、
 1318 11 たひとりの軍人がりました。戦場から
 1319 7 べんの空想家ではありません。かれは、
 1319 8 かれは、科学者であり、理想を実現する
 1319 9 ルクの半分以上もあつて、その三分の一
 1319 10 のできない土地であります。これをこえ
 1319 11 ダルガスのゆめであります。このゆめを
 1319 12 は、ただ二つしかありません。その第一
 1320 1 、その第二は木であります。ユートラ
 1320 3 くしげつた森林がありました。しかし、
 1320 7 草を植えることにありますが、もつとも
 1320 9 あれ地に育つ木があるかないか、まず、
 1320 11 一産のもみの木であります。これなら
 1321 8 か、ということでありました。これをノ

十三 21 12 ダルガスの希望であり、デンマルクの希
 十三 21 12 ンマルクの希望であるこの植林は、みこ
 十三 22 7 されなかったのであります。デンマルク
 十三 23 4 長するにちがいありません。」という
 十三 23 10 、発見されたのであります。このおかげ
 十三 24 4 もさえ見ることがあったのです。そのこ
 十三 25 9 れて、なおあまりあることになりました
 十三 26 7 は、小路のことである。どこの家も、高
 十三 27 8 このホートンではあるが、ここに住んで
 十三 27 10 楽しい遊び場所であり、なつかしい思い
 十三 27 10 い思い出の天地である。冬は冬で、風あ
 十三 28 6 たりしているのである。もの音には、い
 十三 28 7 いろいろなものがある。まず、もの賣り
 十三 30 3 も、大小さまざまあって、音色もちがう
 十三 30 10 は、さるまわしである。「ジャン、ジャ
 十三 31 11 でやって来る者もある。まんじゅう屋が
 十三 32 10 とえ、鳴りものであると、呼び声であ
 十三 32 10 ろうと、呼び声であらうと、トンネルの
 十三 33 1 運ぶ一輪車の音であらう。水に不便なべ
 十三 33 9 わからないほどである。それだけに、空
 十三 33 10 美しく、星の夜であれば、またさらに美
 十三 34 10 れん」が書かれてある。れんは、めでた
 十三 34 10 句や、詩の一節であるが、みな、りっぱ
 十三 34 11 な文字で書かれてある。小さな子どもは
 十三 35 1 くなって、文字であることがわかり、そ
 十三 35 11 つけてとばすのであるが、とぶと、風を
 十三 35 12 。ふえには大小があるから、はとがむれ
 十三 36 2 こそ天上の音楽である。中庭のあんずが
 十三 36 4 のも、このころである。やなぎのわたが
 十三 37 4 電話がとりつけてある。左手につくえ。
 十三 41 1 話番号が書いてあったもんだから……
 十三 41 3 会 いよ。ぼくがある。なんでもあるよ

十三 41 3 会 ある。なんでもあるよ。いっしょにつ
 十三 41 8 会 だってたくさんある。いっしょに読も
 十三 41 9 会 クサクも二つある。そうだ。おぼさ
 十三 42 1 会 よ。話がうんとある。見せたいものだ
 十三 42 5 会 ……そう、二つあるのならもうよ…
 十三 45 3 会 いのむずかしさがあります。三郎くん
 十三 53 3 会 るく原色ですってあります。まだわか
 十三 53 8 会 手で、こう書いてありました。「略」。
 十三 54 8 会 んは、絵かきではありませんが、絵がす
 十三 55 1 会 しろいことでもあるのか。「そういっ
 十三 55 5 会 こし大きいがあるよ。」といって、
 十三 56 8 会 画館にかざってあるよ。ラファエルは
 十三 56 9 会 へんじようずであった。が、そのころ
 十三 58 2 会 よくない。色のあるのは、その点はよ
 十三 59 2 会 デンの美術館にある絵で、『シストの
 十三 59 11 会 長いすがおいてあったが、見物の人が
 十四 4 3 会 けつして少なくはありません。けれど
 十四 6 3 会 せまってくるではありませんか。パリ
 十四 8 7 会 できないことがあるとしたら、それは
 十四 9 8 会 るなんて、どうあっても考えのたりな
 十四 10 6 会 小さなかさがあるとか——それには
 十四 10 8 会 ずかしいことはありません。いたって
 十四 13 3 会 、小さなさがあります。それは、コ
 十四 14 1 会 私の前においてあります。おとうさん
 十四 15 2 会 分には子どもがあるということをお考
 十四 16 11 会 した。パリにある、なにかさういっ
 十四 20 12 会 」。『ずいぶんあるなあ。』といって、
 十四 22 11 会 チャも、外国語であったとお話になっ
 十四 25 7 会 く生まれるものであることが、考えられ
 十四 26 7 会 傳わったことばであらう。また、音楽の
 十四 26 11 会 ってきたことばであらう。また、図画工
 十四 28 3 会 たかなで書いてあることばは、たいて

十四 28 5 会 典というものもあるから、それを調べ
 十四 29 2 会 もらいたいものがあるのです。見てもら
 十四 29 3 会 どこかにしまっているもののように聞え
 十四 29 4 会 そういうものではないかもしれません。だれでも
 十四 29 9 会 、日本にはあまりありません。日本は景
 十四 30 1 会 だろーという人もありますが、そればか
 十四 31 1 会 が特別の國でもあるかのように考えて
 十四 32 2 会 略」。という人があるかもしれません。
 十四 32 4 会 と思っっている人もあるでしょう。けれど
 十四 32 10 会 ふかいつながりがあるのです。人間は、
 十四 32 11 会 てもいすぎではありません。みなさん
 十四 33 8 会 天の川の内がわにあるたくさん星のむ
 十四 33 12 会 なかなかそうではありません。あのぎん
 十四 34 1 会 が、なおいくつあるのです。こうなっ
 十四 34 5 会 しないものはありません。博士の計
 十四 35 4 会 もかなしむことはありません。そのバク
 十四 35 6 会 算したりするではありませんか。これ
 十四 36 8 会 、まづしい学生であったとき、物理の時
 十四 37 7 会 いことは、なんであるかということも、
 十四 37 9 会 するようなことがあったら、どうか天上
 十四 37 10 会 てくれるにちがいありません。四 夜
 十四 44 11 会 汽船が、十ばいもある定期船につきあた
 十四 45 7 会 れは、気が気ではありませんでした。助
 十四 46 9 会 を味わったことはありませんでした。な
 十四 50 10 会 に感じられるではありませんか。六
 十四 52 7 会 ないかぼちゃはありませんが、それだ
 十四 52 10 会 んな、十キロもあるような大きなかぼ
 十四 52 11 会 は、花の一部であるめしべの根もとが
 十四 53 1 会 ことはうたがいありません。「略」。
 十四 57 4 会 いってきたものがあります。それは、頭
 十四 58 3 会 えてみたことがありますか。「水が統
 十四 60 8 会 、考えたことがありますか。」花も、

十四 62 2 に、茶わんが一つあります。中には、熱
 十四 63 10 ることがどっさりありますが、それは、
 十四 64 1 しんになるものがあって、そのまわりに
 十四 65 4 度を計る寒暖計があるなら、いろいろ自
 十四 66 12 どにできることがあります。春さきなど
 十四 67 3 がたつことがよくあります。そういうと
 十四 67 7 らなんメートルもある、高い柱の形にな
 十四 67 9 るのを見ることがあるでしょう。茶わん
 十四 67 11 大じかけなものがありません。それは、ら
 十四 68 3 おおわれた地方があると、あたたい空
 十四 68 12 思つてさしつかえありません。もつとも
 十四 69 2 すのちがったのもあります。だから、ど
 十四 69 5 によくにたものであるという一つの例に
 十四 69 10 たようすはなにもありませんが、それを
 十四 71 5 く理科の本などにある、ビーカーのそこ
 十四 72 12 のが見えることがあります。あの「かけ
 十四 73 10 なもようがなんであるかということは、
 十四 73 12 らとなにか関係があることだけはたしか
 十四 76 1 されるかたむきがあります。これがあま
 十四 76 6 山腹と谷との間にあって、山谷風と名づ
 十四 76 11 ばまだいくらでもありますが、ここでは
 十四 79 5 してそれることがありません。ただ、困
 十四 80 5 えられていのもあるかもしれません。
 十四 83 3 「雪國」というのであり、もう一つは「雪
 十四 83 3 「雪」というのであった。「雪國」は、
 十四 83 5 映画にしたものである。雪が降りだして
 十四 83 9 あつかったものである。「雪」というの
 十四 84 1 映画にしたものである。ただ一ひらの雪
 十四 84 1 だ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、
 十四 84 11 にしくんだものであった。空から降つて
 十四 85 3 できるといふのである。「略」。こんな
 十四 85 9 ちらも雪にえんのあるものであるが、私

十四 85 10 えんのあるものであるが、私はあとのほ
 十四 86 5 同じ心の現われであらう。「雪國」の映
 十四 86 8 などもその一つである。風におおられた
 十四 86 10 てしまうことすらある。このものすこい
 十四 86 12 たやすいことではあるまいが、ばんそう
 十四 87 3 ことができそうである。ふぶきのやんだ
 十四 88 4 こうと思つたのであらうが、いつのまに
 十四 88 5 にふかれたからであらうか。足がつめた
 十四 88 6 ちどまつたためであらうか。それとも、
 十四 88 8 がちがったものであらうか。雪國でいち
 十四 88 11 き的雪どけごろである。半年も雪にとざ
 十四 89 10 った書かれた文である。十 マツチ賣
 十四 91 7 いだと思つたのであらう。そこで、その
 十四 93 6 えたことはそれであつた。女の子は、窓
 十四 93 10 でも、満足したのであらう。女の子は、手
 十四 94 9 。けれどもだめであつた。両手もまた、
 十四 97 3 の一方におかれてあつた。そのとき、ま
 十四 98 11 しかにそれは星であつた。「略」。女の
 十四 99 5 のしんせつな人であつたおばあさんが、
 十四 99 8 てきかせたことがあつた。女の子は、ま
 十四 100 6 いで、たばの中にあつたマツチをみんな
 十四 100 12 思われるくらいであつた。おばあさんが
 十四 101 4 でなかつたことであつた。おばあさんは
 十五 9 5 籬 やげおりすてである道のまんじゆしや
 十五 19 3 という美しい山があります。スイスの首
 十五 19 7 ルばかりの高さがありますが、そのほと
 十五 20 1 くつかの停車場があつて、そこには、氣
 十五 22 11 と、三メートルもあるような羽をひろげ
 十五 23 8 ばたしているではありませんか。さあた
 十五 23 11 とびついたものがあります。だれでしょ
 十五 26 7 、殺される心配がある。そんなことのな
 十五 28 3 のすこしあき地のあるところを目がけて

十五 29 5 にそまつた短刀があります。少年は、必
 十五 31 2 はずれようはずはありません。大わしは
 十五 33 7 ここでいうまでもありません。目の前の
 十五 34 7 にも必要な方法である。それで大昔には
 十五 35 10 とよばれるものがあつた。中部アラビア
 十五 35 11 これににた文字があつた。漢字も、もと
 十五 36 5 ら発達したものであるが、形のないもの
 十五 37 1 かいう字の起りである。木は、もともと
 十五 37 2 してできたものであるが、それに線を加
 十五 37 4 かいう字はそれである。また、それまで
 十五 37 9 「木」に関係のあることを表わし、字
 十五 37 12 七百年ほどまえであるが、日本では、「
 十五 38 8 がつた読みかたがある。しかも、字によ
 十五 38 9 、いくつかの音のあるものがあり、また
 十五 38 9 の音のあるものがあり、またいくつかの
 十五 38 9 たいくつかの訓のあるものもある。たと
 十五 38 9 の訓のあるものもある。たとえば、「上
 十五 39 10 作りだしたものである。かなは、日本の
 十五 40 3 て書かれた作品である。しかし、いまで
 十五 40 10 われている文字である。ローマ字は、ま
 十五 41 2 字から出たものである。このエジプト文
 十五 41 6 るのもそのためである。ローマ字は、全
 十五 41 7 全部で二十六字である。この二十六字の
 十五 42 1 は世界的な文字であるから、日本語が世
 十五 42 2 れるようになるであらう。日本語の書
 十五 42 8 つかっている國があるうか。日本のこと
 十五 42 9 方法がないものであるうか。私たちは、
 十五 43 5 ンドにかざられてあるさらやちを、し
 十五 44 2 今右衛門焼じやありませんか。古い焼
 十五 45 10 そのころのことであつた。ある日、プリ
 十五 46 3 しいものばかりであつた。ある小さな店
 十五 46 5 いみごとな焼物であつたからである。「へ

十五 46 5 物であつたからである。「略」。「略」
 十五 46 10 会、まだほかにあります。か。「略」。
 十五 47 7 かりまえのことである。佐賀はん主は、
 十五 48 2 をつける赤絵屋もあつたが、これははん
 十五 48 7 むずかしいことであつた。今右衛門は、
 十五 49 11 とめて買うことがあるということを知り
 十五 49 12 すことにしたのである。「略」。「略」を
 十五 51 6 でになつたものである。主人は、新しい
 十五 52 3 大戦がたけなわであつたころのことであ
 十五 52 3 つたころのことである。そのころ留學生
 十五 53 3 ーネギー博物館のあるピッツバーグに着
 十五 53 4 い眞夏の日の朝であつた。目ざすりつば
 十五 53 12 しん士のすがたであつた。学生時代から
 十五 54 3 いうしあわせ者であらう。博士は、しず
 十五 54 6 会には見おぼえがある。わかつた、わか
 十五 54 9 つて、かたわらにあつたいすをすすめる
 十五 54 10 すをすすめるのであつた。私がこの博物
 十五 55 11 会 というクラブがあり、おかしなもよお
 十五 56 2 会 山がく会員であつた私をはじめで
 十五 56 3 会 の高さも不明であつた。そこで、山の
 十五 56 8 会 はふかい関係があるのだが、きょうは
 十五 57 6 会 たが、室は二つあつても、つくえは一
 十五 58 10 会 には、「略」。「略」とある——新島嶼とい
 十五 59 10 会 うものがたくさんある。きょうは、もう
 十五 60 1 て、横づけにしてあつたりつばな自動車
 十五 60 5 明治二十年の夏であつた。当時、母校札
 十五 60 8 かなりひんばんであつた。ふつう「満ぼ
 十五 60 10 いたずらざかりであつた。ことに、長男
 十五 61 5 、必ず書きそえてあつたのを見て、そ
 十五 61 6 なにえらいかたであるかを知らなかつた
 十五 61 7 幌の創成川の岸にあつた家につれられて
 十五 62 2 石の上にそろえてある大小二つのくつを

十五 67 2 かたくとざされてあつた。そのうちにク
 十五 67 3 新島家のとなりにあつた教会の日曜学校
 十五 67 3 日曜学校の生徒であつた私は、そのクリ
 十五 67 10 出た。そのことのあつたあくる日、私は
 十五 67 12 には、おもむきのあるかねがつるしてあ
 十五 67 12 るかねがつるしてあつて、これでたけ
 十五 68 1 しゆもくがそえてあつた。「略」。「略」とよ
 十五 69 2 んの大きな写真があつた。きずのあるみ
 十五 69 2 があつた。きずのあるみけんの下にかが
 十五 69 4 とよびかけそうであつた。「略」。「略」おぼ
 十五 69 8 写真がかざられてあるではないか。ああ
 十五 70 10 会 インキがおいてあるではないか。おじさ
 十五 71 9 のせた。町の東にある寺の一角に、こけ
 十五 73 3 しい数々の写真があつた。ふかい思い出
 十五 73 8 そのころは眞夏であつたので、博士の家
 十五 74 3 ことはみな同じであつて、そこになんか
 十五 74 9 せたいのが念願である。神の目から見れ
 十五 74 11 種的な区別など、あるべきはずはない。
 十五 74 11 すべて兄弟姉妹である。それで、世界平
 十五 78 7 間にとつて眞実であるものは、他人にと
 十五 78 9 ても眞実だからである。人の心をひくた
 十五 79 4 けの特別の権利があると信じます。とい
 十五 79 9 にかかつたことがあるからです。私のつ
 十五 79 11 、いつもおかれてあります。歴史の上で
 十五 80 3 われわれが最初であります。それ以前は
 十五 83 11 会 たちは下等でもあり、たいていはまあ
 十五 84 5 会 、あんなに肉がある。ちようづめもあ
 十五 84 5 会 。ちようづめもある。小ひつじの足に
 十五 84 7 会 しのかんぞうもある。「パン」いかに
 十五 89 11 会 んと席がとつてありますよ。「チルチ
 十五 90 12 会 っ」といいものがありますよ。わたしは
 十五 96 5 会 くん、幸福はあるのだから。けれど

十五 96 8 会 。私たちに用のあるものは、どうせこ
 十五 99 10 会 て、そんなことあるのですか。「チ
 十五 105 11 会 のは、「正義であることの大きな喜び
 十五 106 2 会 のを見たことがあります。その後に
 十五 106 3 会 のは、『善人であることの大きな喜び
 十五 110 3 会 福は、世の中にありませんよ。』チル
 十五 112 1 会 どこにしまつてあるの。それは、おと
 十五 113 4 会 、星がいっぱひある。ほんとうにおか
 十五 113 7 会 をしたあとまであるよ。でも、ずっと
 十五 115 6 会 んに、ふたりはありますよ。どんな
 十五 117 11 会 ていた『正義であることの喜び』でこ
 十五 120 2 きょうは修業式があつた。校長先生のお
 十五 121 10 、せつない氣持であつた。受持の佐藤先
 十五 123 9 会 人ない同級生であつた。「略」。「略」
 あるいは「或」(副) 1 あるいは
 九 147 2 くもは、力いっぱいあげば、あるいは、
 つばめのくちばしからころげ落ちることができた
 かもしれない。
 あるいは「或」(接) 5 あるいは
 十三 9 12 むかしは、星を見て世の中がみだれると
 いたり、「略」。「略」あるいは、きつねがつくとか、
 「略」などといった。
 十四 80 6 それは、なん回もなん回も、あるいは、
 なん代もなん代もやつてみた結果、とうとう一つ
 の眞理だと思われたので、
 十五 19 8 いただきまで高山植物のさきみだれてい
 るけいしや面を、あるいは、氷河が無言の流れを
 きざんでいる深い深い谷の上を、
 十五 53 1 とちゅう、あるいはミシガン湖のほとり
 にたたずみ、あるいはナイアガラの水をながめ、
 ボストン、ニューヨーク、ワシントンと無事に旅
 を進めて、

十五53 1 とちゅう、あるいはミシガン湖のほとりにたらずみ、あるいはナイアガラのたきをながめ、あるかす「歩」(四) 1 歩かす《一サ》
九153 3 着ぶくれて歩かされいし女の子ばんとたおれそのままなくも

あるがぞう「課名」2 ある画像

十三3 10 七 ある画像……五十三

十三53 1 七 ある画像

あるき ↓いざりあるき

あるきか・ける「歩掛」(下二) 2 あるきかける

歩きかける《一ケル》

十53 11 あきらめて歩きかけると、水おけがありました。

十54 6 「イコウ」ときめてあるきかけると、道の

わきで、たき火をしていました。

あるきかた「歩方」(名) 2 あるきかた

五72 7 女王さまのようなあるきかたも、口のききかたも知らないで——國じゅうのものわらいになるよ。

十二108 10 舞う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶりによって、このお面は、生きもののように、いろいろな表情をあらわします。

あるきだす「歩出」(五) 7 あるきだす 歩きだす《一シ》

二43 8 のぼろう。「たろうはげんきよくあるきだします。

六70 5 ね。にいさん、この雪だるま、歩きだしそう

八24 7 このわかいあぶらぜみは、きゆうに元氣になつて、そろそろと歩きだしました。

八56 5 ぼくは、砂地の上にまっすぐな足あとをつけてみようと思つて歩きだした。

八56 7 そこで、向こうにみえるまつの木を目あてにして歩きだした。

十52 8 妹は、また、ちよこちよこ歩きだしました

が、よその家の門の中へ、はいつていこうとします。

十53 8 かたにかけると重いから手に持つのだと、

ませたことをいって、歩きだしました。

あるきはじめる「歩始」(下二) 1 歩きはじめ

《一メ》

十52 4 ここで遊んでいたいと、私にねだったり、

《略》していましたが、やつと歩きはじめました。

あるきまわる「歩回」(五) 5 あるきまわる 歩

きまわる《一ツ・リール》

四106 4 かめは、うらしまの手をとつて、そこら

をぐるぐるとあるきまわります。

七60 2 考え考え歩きまわるような、大きなあり。

八60 5 野原にはかれ草がつみあげられ、こうのと

りは、長い赤い足を歩いて歩きまわっていた。

九121 8 茶人は、日本じゅうを歩きまわつて、うま

ました。

三40 2 ぼくらはかたをくんで、くさはら道を

あるいてかえりました。

三40 5 きょうならつたばかりのしょうかを、大

声でうたいながらあるきました。

三41 6 ぼくらはふたりになって、麦のほとす

れすれにあるきました。

三74 6 それで、みんなはいすをおりて、その

光の中をあるいていって、

四123 7 もえている火をもってあるくかわ

りに、わたくしをもってあるきます。

四123 7 わたくしをもってあるきます。

四127 5 けしきにみとれながらあるいていま

す

と、どこからか、よいにおいがしてきます。

五6 8 野原をゆっくりあるいていく、

五27 9 しんきちくんは、電車をおりてから、元氣

にあるいて帰りました。

五29 4 どこかのおじさんが、荷物を二つ持つて、

あせをふきふきあるいていました。

五41 4 のびはじめた草の上を、うれしそうにあ

るいていました。

五63 9 ねてばかりいたのが、はうようになり、

立つようになり、あるくようになつて、

六13 4 あつい日中の道を、ものを運びながら歩い

てくると、のどがかわきました。

六16 4 そのかりうどは、きゆうに歩くのをやめて、

弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

六67 4 お友だちと遊ぼうと思つて、山の谷を歩い

ていきました。

六68 2 子ぐまはまた歩いていきました。

六70 6 ほんとに歩くとおもしろいな。

六140 2 のそり、のそり、そばに歩いてきました。

七二二 しずかにして、みていてごらん。」すずめは、びよんびよんとんで、庭のはたけの中を歩く。
 七四〇 甲乙ふたりが、あちこちをみまわしながら、なにか、ものをさがして歩いてくる。
 七八八 〇 おどろいて、方々をさがして歩きました。が、みあたりません。
 七九六 ねずみ色の子うさが、きょうは、巢からでて歩いていました。
 七九八 〇 お晝ごろみたら、子うさは、七ひきとも、巢からでて歩いていました。
 八五二 ある晩、一家そろって、ぎんざの大通りを歩いていましたら、
 八一〇 歩いているとき、追いかけてきて、かかとや足の指をつついたりするのです。
 八三六 町はずれの野原を歩いたりいなかのしものふかい朝の野にでたとき、
 八六五 虫たちは、へ略、手ごろな、皮のうすい、しるの多い木の根をさがしてあるきます。
 八八三 土の中は、たとえ一二センチ歩くにも、トンネルをほっていかなくてはなりません。
 九二一 〇 あめ色をした六本足の虫が、こしを高くして、ひょっくりひょっくり歩いていくのは、
 九四四 どんどん歩いていくと、さびしい村にさしかかりました。
 九七五 日がくれましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。
 九八五 すこし歩いてからふり返ってみると、足あとが曲がっている。
 一〇〇一 しっかりと目あてをみさだめて歩いてみよう。
 一〇一五 いま歩いてきた足あとをみると、
 一〇二七 あひるの子は、立っていたほうがいいか、歩いていたらほうがいいかさえも、わからなかった。

九七八 先生について、五十人のなかまが、おくれなように歩いていきました。
 九八六 〇 帰りは、みんなかわるがわるリヤカーをおして歩きました。
 九九七 〇 いっしょに歩いているうちに、きゅうにつかみあいをはじめるんだもの。
 一〇〇一 岸にそって上流に向かって歩きながら、
 一〇一〇 くもはのそのそと歩きました。
 一〇二七 おとうさんの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけていって、
 一〇三三 そのあとから、小さな子どもが、よちよちと歩いてくる。
 一〇四七 家から十二三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるので、
 一〇五七 〇 いつもその本を手からはなさず、くり返しくり返し、大声で読みながら歩きました。
 一〇六七 〇 ふたりは、はしごだんをのぼって、長いろうかのはずれまで歩いていきました。
 一〇九二 〇 だけど、ぼく、遠い道を歩いていくんですから、しぼんでしまいます。
 一一〇四 〇 民ちゃんをなんとかして早く歩くようにしてやりたいものです。
 一一一六 〇 なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、そのまわりをぐるぐると歩きます。
 一一二六 〇 けれども、かんじんの歩くことはまだできません。
 一一三三 〇 かた足をなげだして、おしりでいざって歩くのです。
 一一四二 〇 立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二足ほど歩きました。
 一一五五 〇 「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。

一二二四 荷車をひきながら、ゆっくり歩いて来る。
 一二三二 歩いて行くと荷がゆれて、しぜんにふんどうがどらにあたる。
 一二三六 〇 大通りを、ぶたがぞろぞろと歩いて行く。
 一二四八 〇 一面の銀世界となった廣い野原を、第一の人が歩いて行く。
 一二五七 〇 その人の足あとをしるべに、第二の人が歩いて行く。
 一二六六 〇 歩く人は、おそろく、まっすぐに歩こうと思ったのであろうが、いつのまにか曲がってしまふ。
 一二七六 〇 まっすぐに歩こうと思ったのであろうが、
 一二八五 〇 「へ略」と、小さなマッチ賣りの女の子は、町をあらこちら歩きながら思った。
 一二九二 〇 かわいそうに、その子は、おなかがすいて、こごえて、身をひきずって歩いていた。
 一三〇六 〇 やいた鳥は、へ略、テールからとびおりて、ゆかの上をよたよた歩いて、その女の子の方へずつとよってくるではないか。
 一三一三 〇 さくらさくら人が子が歩かせて
 一三二一 〇 ふたりの子どもは家庭教師につれられて、
 一三三六 〇 がけの上をそろそろ歩いていました。
 一三四四 〇 銀座通りをアメリカの一しようこうが歩いていたが、
 一三五五 〇 おじさん、早く歩いてよ。
 一三五八 〇 私をせにおいながら、あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、
 一三六八 〇 ねこは、ひとことも口をきかず、これも、右手の方のおくへ向かって歩いて行って、
 一三八五 〇 あるける「歩」(下) 4 あるける 歩ける 《一ケ・ケル》
 一四〇三 〇 男の子は、げたのはなかが切れてあ

るけなかったのです。

六58 7 そのひょうしに足をいためて、歩けなくなりました。

十二24 6 めいの民ちゃんは、二つ、満でいえは一年三ヶ月で、まだ歩けません。

十二29 4 民ちゃんは三足四足と歩けるようになりました。

アルコール (名) 4 アルコール

六63 1 朝日の光で、アルコールのびんがきらっと光った。

六63 3 アルコールは銀の水。

十四21 1 コレラ、マラリア、トラホーム、アルコール、ガーゼ。

十四23 1 会 ゴム、ランドセル、コーヒー、コレラ、アルコールはオランダ語、

アルコールランプ (名) 1 アルコールランプ

十四71 6 よく理科の本などにある、ピーカーのそこをアルコールランプで熱したときの水の流れと、

同じようなものになるわけです。

あるしゃんちよう (課名) 2 ある写真帳

十二3 7 十一 ある写真帳……九十六

十二96 1 十一 ある写真帳

アルプス (地名) 3 アルプス

九22 2 つばめをのせた飛行機は、(略)、アルプスをこえてヴェニスへとんでいきました。

十五19 2 ヨーロッパのアルプスの山々のうち、もっとも高い山の一つに、ユングフラウという美しい山があります。

十五27 8 アルプスの深い谷の中を、大わしは、少年をせにのせ、少女を下にさげて、ずんずん、落ちるように、下へ下へとおりて行きました。

アルプスさん (名) 2 アルプス産

十三21 7 そうして、かがふと思いうかべたのは、

アルプス産の小もみを移植してみたかどうか、ということでありました。

十三22 5 アルプス産の小もみを植えたので、かれるのはふせがれましたが、その生長は、これによつてはたされなかったのであります。

あれ (彼) (代名) 65 あれ

一53 1 会 あれは、みんなだいやもんどですよ。

一53 7 会 あれはふしぎなだいやもんどですよ。

一63 2 会 いいえ、あれはたろうさんたちのおくにですよ。

二24 1 会 先生、いものはのつゆは、あれ、ただの水でしょうか。

三16 9 会 これははんたかの手でございます。

あれは門のそとにいますので、このはちをわたくしにとどけようとして、手をここまでのばしたのです。

三70 4 会 あれ、あれごらんよ。

三72 4 会 あれなにあ。

三107 6 会 あれがかぐやひめだな。

四107 3 会 かめ「あれがりゅうぐうのご門でございます。」

四127 9 会 りようし「あれはなんだろう。」

五11 10 会 あれ、なにかしら。

五12 1 会 シグナルだよ。あれをみて、汽車が、とまったりとおつたりするのだ。

五52 10 会 まさこが、「あれあれ。」というので、西の方をみると、日がしずんでまもない空に、大きな星が光っていました。

五52 10 会 まさこが、「あれあれ。」というので、

五53 8 会 ああ、あれね。

五54 2 会 あれ、三ばん星。

五56 5 会 あれ土星というのよ。

五57 8 会 ねえさん、あれが星なの。

五58 8 会 あれが、ぼくのみつけた二ばん星かなあ。

五89 4 会 高い山からたにそこみれば、うりやなすびの花ざかり。あれは、よいよいよい。

五89 8 会 うらの山から海べをみれば、波にうかんださが島。あれは、よいよいよい、これは、よいよいよい。

五90 2 会 『さが島』とおうたになったとき、おじぎをなさいましたね。あれはどうですか。

六6 2 ねじは、これらの道具や時計をあれこれとみくらべて、あれはなんの役にたつのだろう、

(略)と考えているうちに、

六9 1 会 ああいうねじはもうなくなって、あれ一つしかないのだ。

六9 2 会 あれがないと、町長さんのかいちゅう時計がなせない。

六74 8 会 あれはちがいますよ。

六87 6 会 そこに船がある。あれにお乗りなさい。

八57 4 五百メートルほどさきに、(略)小船がある。よし、あれを目じるしにしてやってみよう。

八67 10 会 親あひるにつれられたひなたちが通っていくと、一わの鳥が、「あれをみるがいい。

八68 9 会 あの一わをのけたほかは、みんないい子だ。あれだけはしくじったね。

八69 1 会 すると親あひるは、「あれは美しくはありませんが、たちはほんとうにいいんです。

九78 2 会 向こうの小高いところに、白い物がちらちらとみえるでしょう。あれが貝づかです。

九107 2 会 あれがスキー場だ。

九131 4 会 羽音がだんだん近づいてきます。「あれが、うまくひっかかるといいな。」

十一 97 ㊦ おきを大きな船が通っていくよ。あれはどこへいく船だろう。

十一 13 12 いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよう。

あれは、あわてもののほおじろだ。

十一 14 1 あれは、元氣もののがらだ。

十一 14 2 あれは、この村のさみしがりの小すずめだ。

十二 20 11 わたしはまた、あのような絵のぐがあればいいなと思いましたよ。あれがあれば、どんなかげのところで、美しい色にできますがねえ。

十二 45 5 ほら、分家のおじいさんの大すきなじようるりさ。あれにあわせてしばいをするんだ。

十三 60 7 ㊦ あれも、西洋の名画でしょう。

十三 60 11 ㊦ ああ、あれか。

十三 60 11 ㊦ あれは、ミケランジェロのかいた、てんじよう画の一部だ。

十四 21 5 ㊦ あれもそうか。

十四 54 1 ㊦ とちゅうから、黄色くなって落ちてしまったたぐさんのかぼちゃの花を見えています。あれは、〈略〉、あなたがたが、かつてに花をさかせたからです。

十四 58 12 ㊦ 空から降る雨、あれだって水ですよ。

十四 93 8 ㊦ あれはやき鳥だろうか。

十五 44 1 ㊦ あれは今右衛門焼じやありませんか。

十五 68 12 ㊦ あれを「ごらん。」と指さされるままに、

十五 83 4 ㊦ 光「あれがこの世の中でいちばんふとっただれの目にも見える『幸福』どもだよ。

十五 89 1 ㊦ あの男のことは、きかないほうがよろしい。あれはすこしひねくれ者で、

十五 96 3 ㊦ チルチル「でもいいや。あれだけ残っていいばいいや。」

十五 97 3 ㊦ 光「あれは『子どもの幸福』だよ。」

十五 97 5 ㊦ あれは、歌を歌ったり、〈略〉するけれど、まだ、お話できないのだよ。

十五 105 4 ㊦ あれは、不幸のほらあなからにげて来た『とてもたまらなくなるゆかい』ですよ。

十五 105 8 ㊦ あれは、『大きな喜び』ですよ。

十五 106 4 ㊦ あれが『不幸』に行くのをとめることは、なかなかむずかしいのです。

十五 106 7 ㊦ あれにうつちやられると、ぼくたちは『不幸』そのもののように、はじめなものになってしまふのです。

十五 106 11 ㊦ その後、『もののわかる喜び』が立っていますが、あれは、いつでも、兄弟の『なにももののわからない幸福』をさがしているのです。

十五 107 4 ㊦ あれはわるくなってしまったのです。

十五 108 4 ㊦ あれは、『愛することの大きな喜び』ですよ。

十五 108 5 ㊦ どうあなたがやってみたって、あれをすっかり見るには、まだ小さすぎますよ。

十五 108 9 ㊦ あれは、人がまだ知らずにいる『喜び』たちです。

十五 109 7 ㊦ そら、手をひろげてこちらへかけてくる。あれが、あなたの『おかあさんの喜び』です。

十五 121 5 ㊦ けれども、思うことがすこしも書けていないことに気がついた。あれもいいたい、これもいいいたいと思った。

あれ(感) 2 あれ

三 70 4 ㊦ あれ、あれ「ごらんよ。」

十五 85 7 ㊦ あれ、『キャッキャッ』といっている。

あれあれ(感) 2 あれあれ

十五 23 9 ㊦ 「あれあれ。」ときけぶばかりです。

十五 27 11 ㊦ もう、がけの上で「あれあれ。」と

いつている人々の目には、〈略〉見えなくなってしまうました。

あれこれ「彼は」(代名) 3 あれこれ

六 62 ㊦ ねじは、これらの道具や時計をあれこれとみくらべて、

六 79 ㊦ 男の子は、やがてしごと台の上のものをあれこれといじりはじめた。

十二 14 6 ㊦ 文雄は、あれこれと考えていたが、根もとをかこうと決心した。

あれち「荒地」(名) 10 あれ地 荒地地

十二 23 9 ㊦ 近所の荒地地を三ノアルばかりかいこんして、

十三 19 6 ㊦ こんどは、のこった土地の大部分をしめるユートランドのあれ地と戦い、これを豊かな土地にしようとする大計画をたてました。

十三 20 8 ㊦ もっともむずかしいのは、あれ地に木を植えることです。

十三 20 9 ㊦ このあれ地に育つ木があるかないか、

十三 20 12 ㊦ これなら、ユートランドのあれ地にも育つだろうと思つて、実際に試験してみると、

十三 21 2 ㊦ ユートランドのあれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていませんでした。

十三 22 3 ㊦ みどりの野はできたが、ユートランドのあれ地から建築用材を求めるダルガスの熱望は、実現されません。

十三 23 10 ㊦ ユートランドのあれ地には、おいしげったもみの林が見られるようになりました。

十三 24 10 ㊦ ユートランドのあれ地は、大もみの林がしげったために、こえた田園となりました。

十三 26 3 ㊦ 誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、

あれにわ 「荒庭」(名) 1 荒れ庭

十五104 文 荒れ庭にしまったる板のかたわらにふるばちならび赤き花さく

あれの 「荒野」(名) 1 あれ野

十三211 ユートランドのあれ野には、年ごとに、みどりの野が廣がりました。

あれはてる 「荒果」(下二) 1 あれはてる 《一テ》

十三204 しかし、切りとるばかりで手入れをおこたつたために、土地は、年を追ってやせおとろえ、ついに、あれはてってしまったのです。

あ・れる 「荒」(下二) 8 あれる 《一レ》

三547 山が あれた、海が あれた、かぜであれた。

三551 山が あれた、海が あれた、

三552 海が あれた、かぜであれた。

五679 海はすこしあれていました。

五706 海はあれていました。

五731 海はまっ黒になってあれていました。

六354 ないだりあれたり、海みたいなものさ。

八769 小屋はひどくあれていて、どっちにたおれるかわからなかった。

あわす 「遭」(五) 1 あわす 《一サ》

十718 だんなが帰ったら、どんな目にあわされるかわからない。

あわす 「合」(五) 1 みるみあわす

あわせ 1 みるみあわせ・もちあわせ

あわ・せる 「合」(下二) 15 あわせる 《一セ・一セル》 1 かんがえあわせる・くみあわせる・つきあわせる・はりあわせる・みあわせる

四681 かえるがひとひよこ、ふたひよこみひよこ、あわせてひよこひよこむひよこひよこ。

四851 すると、みきこさんのいもうとの たつこ

さんが、それに あわせて おどりました。

四112 4 魚たちが、たくさんでてきて、にぎやかな おんがくに あわせて おどりはじめます。

五106 6 旅のひわも、大よろこびで、声をあわせてうたいました。

六218 大きな荷物を、力をあわせて運んでいきます。

六9710 みことは、それにあわせておどりをおどる。

六1192 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。

七1110 「手をあわせる」の「手」も、これと同じつかいかたです。

九65 ほかの樂器を、いっしょにあわせてひいてみたらどうでしょう。

九67 音をうまくあわせると、とけあった美しい

ひびきとなつてきこえるにちがいありません。

十二455 5 あれにあわせてしばいをするんだ。

十二4611 6 それが音楽や歌にあわせてしばいをするわけだ。

十二5211 二まいあわせて、図の点線のところをぬう。

十二1121 三人がひとつに心をあわせた美しさは、このとおりっぱなものとなつて生まれたのです。

十五376 「日」と「月」をあわせて「明」が作られ、

あわただしさ 「慌」(名) 1 あわただしさ

十五12 毎日の生活のらんざつとあわただしさの中に、それを失っている。

あわつぶ 「粟粒」(名) 1 あわつぶ

十395 幸吉は、あわつぶほどの核をこしらえて、それを、母目の体内にさし入れてみた。

あわてかた 「慌方」(名) 1 あわてかた

八96 とつぜん、上へ飛行機でもとんでくると、そのあわてかたといったらありません。

あわてふためく 「慌」(五) 1 あわてふためく

《一イ》

十四477 たいていの人は、しょうとつとつときにあわてふためいて、そのためにかえつて波にのまれてしまったのに、

あわてもの 「慌者」(名) 1 あわてもの

十一1312 あれは、あわてもののほおじろだ。

あわてる 「慌」(下二) 11 あわてる 《一テ》

四222 ねずみたちは、あわてて わの そとへにげました。

四498 二十九わの がんは、あわてて かっちゃんのところへ あつまりました。

五573 5 あわてないで、しずかにごらん。

六1289 1 ぴきのうさぎさんが、あわててにげたので、トンネルのさか道に足をすべらせて、

六1294 たぬきさんは毛をぬらしてなにかあわてています。

八1110 みんなあわてて、口々によんで、元氣づけるやら、くすりをのませるやら、

九589 その声が、あんまり力がなく、あわれにきこえたので、いちろうはあわてていました。

九628 ぎよしやもたいへんあわてて、こしから大きなかまをとりだして、ザックザックとやまねこのまえのところの草をかりました。

十三347 ふと氣がついて、子どもたちは、あわてて家にもどつて行つたりする。

十五236 先生が第一にさわぎだす、両親があわててあたりをかける。

十五447 店の主人はあわてて、「たいへん焼物がおすきようですが、あなたは——」

あわれ 「哀」(形状) 7 あわれ

八117 あわれにも、くちばしから血をだして、
「略」、からだをふるわせてもう虫の息です。

八133 信用してくれていたものを、あやまちのた
めにあわれに死なせたというなげなさは、

八707 あわれなあひるの子は、立っていたほうが
いいか、歩いていったほうがいいかさえも、わから
なかった。

八748 あわれなあひるの子はきもをつぶした。

九236 この國の人々が、あわれなこの小鳥たちに
しめしたもつとも人間らしいあたたかい氣持は、

九588 その声が、あんまり力がなく、あわれにき
こえましたので、

十四947 女の子は、両足を——そのあわれな、小
さな、赤く、青くなった両足をそろえて、

あわれ 「哀」(感) 2 あわれ

十五444 空にはなちし わがそ矢は、あわれ
いずに 落ちにけん。

十五511 空になえし わが歌は、あわれい
ずに 落ちにけん。

あんがい 「案外」(副) 1 あんがい

十二922 くりはあんがい少なかつたこと、そのか
わりきのこがたくさんあつたこと、

あんしつ 「暗室」(名) 1 暗室

十204 9 暗室。

あんしん 「安心」(形状) 2 安心

六1383 ここまできたら、もう安心だね。

八94 私たちの家のうち、中でも茶のまほど、す
きな、安心なところはないうように——

あんしんさ・せる 「安心」(下一) 1 安心させる

《セ》

十一875 わたしは、これからすぐにうちへ帰っ

て、おかあさんを安心させてあげよう。

あんしん・する 「安心」(サ変) 4 あんしんする
安心する 《一シ》

四636 あんしんして、たのしい あさごはんをた
べました、

六1434 安心して、ゆっくりおあがりなさい。

七998 よいぐあいに、みんな元氣よくそだってい
るので、安心しました。

十五271 だじょうぶだ、安心しておいで、私
がいますくつてあげるから。

あんず 「杏子」(名) 1 あんず

十三363 中庭のあんずがさいて、花びらがホト
ンへちらちらと降ってくるのも、このころである。

あんぜん 「安全」(形状) 5 安全

四472 そこらが一ばん安全らしい。

四512 下からねらわれている ときには、ばら
ばらになって、はなれてとべば 安全なのです
が、

八188 親たちの大てきのすずめもねこもやってこ
ないから、安全です。

十五268 どこでもいいから、安全な場所へおりな
ければならないと、少年は思いました。

十五2610 こしようにできた飛行機乗りが、安全な
着陸地を上からさがしているような氣持で、

アンデルセン (人名) 1 アンデルセン

十三176 おとぎばなしを、世界の子どもたちにお
くつた、アンデルセンの生まれた國であります。

あんどうさん (人名) 1 あんどうさん

二633 あおきさん——あんどうさん。

あんな (形状) 28 アンナ あんな

一634 それで あんなにおおきいのです。

二153 あんな 大きな、あかるい お月さまは、ど

うしたらえに かくことができるでしょう。

三347 わたくしも、早く 大きく なって、あんな
きれいな花をかきたいとおもいました。

三494 かぼちゃの花が さきました、あんな
ところに さきました。

三838 あんな ところに だれが かけたの。

三1043 どうかして、あんなに きれいな 人が
およめにもらいたいのものだ。

四953 よくも あんなに 雪の たねが ある もの
だ。

五271 だって、電車のおかげで、あんな遠いと
ころまで、一日でいって帰ってきたのですもの。

五543 あんな小さいの。

五547 「五ばん星、あんなところ。」

六405 帰るといったって、あんな遠いところ—
でも、もう一どあの村に帰りたいなあ。

六601 カボチャノハナガ—七 サキマシタ—
—五 アンナトコロニ—七 サキマシタ—

六729 死んでいたら、《略》、あんなに元氣のいい
顔つきもしていないはずだ——

六892 おや、あんなところにいどがある。

七3210 あんなあおむしが。

八6910 たまごの中にあんまり長くいたので、あ
んなふうになっただけですよ。

九585 四年生だってあんなには書けないでしょ
う。

九894 あんなになかのいいふたりが。

九1367 くもさん、あんないいお月さん、みえな
いの。

十1310 あんないなかはつまらないと、わるきいう
旅人もありますが、

十621 たけのこは、どうして、あんなに早くのび

るのでしょう。

十一 99 会 あんな大きな船の船長と、コックスと、

どっちがむずかしいだろうね。

十一 85 10 会 ほら、あんなにぼくをみています。

十四 48 2 会 こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よ

くあんな美しい声がだせるものだと思います。

十五 83 2 会 あんなにうまいものをたくさんたべて、

うれしそうにしているふとった人たちは、

十五 84 4 会 それに、あんなに肉がある。

十五 103 6 会 みんな、いつでもあんなにきれいな。

十五 116 9 会 なんて、あんなに顔をかくしているの。

あんない ↓ごあんないいたす

あんない・する [案内] (サ変) 3 あんないする

《――シ》↓ごあんないしなさる

四 108 6 会 そこへ、かめがうらしまを あんないして

はいつて きます。

六 91 8 会 まもなく、ほおりのみことをあんないして

でてくる。

十五 95 9 会 私たちをあんないに来た。

あんない [余] (副) 13 あんない

二 24 4 会 あんないいろがにているので、ぼく

はじめはきがつきませんでした。

四 56 9 会 ぼくたちのたびに、あんない おくれる

から。

五 57 6 会 あんない大きな声をだしたので、あたりの

人がわりました。

五 58 1 会 あんない長くみていないで、さあ、おか

わり。

八 68 6 会 あんない大きすぎてみっともないから、

かみつきたくなるんだよ。

八 69 9 会 たまごの中にあんない長いので、あ

んなふうになっただけです。

九 58 8 会 「略。」その声が、あんない力がなく、

あわれにきこえたので、

九 101 7 会 ぼくがあんないじまん話をするもんだか

ら――

十一 52 11 会 あんない乗らないでください、満員で

すから。

十二 19 5 会 いや、わたしはあんないへたなので、

耳ざわりでいやがっておいでだろうと思いました

――

十五 83 5 会 どうもあんないあてにはならないけれ

ど、青い鳥だって、〈略〉、この人たちのなかまに

まよいこんでいないともかぎらない。

十五 114 5 会 うちにいるとね、あんない用が多すぎ

て、ひまがないのだよ。

十五 116 11 会 あんないはつきり顔を見せると、『幸

福』たちがこわがるだろうって、

あんない (名) 3 アンヨ

十 49 1 会 クロイワンワン――キタナイワンワン

チャン――アンヨ ナメテルワ――

十 50 7 会 「アンヨ ナメテルワ」といって、私に知

らせたのです。

十二 30 10 会 「チロイ、ワンワン、チップ――ワン

ワン、ゲタナイ、アンヨ、イタイ、イタイ。」

い

い [意] (名) 1 意

十五 53 7 会 私は、しばしためらったのち、意を決し

て大きなドアをコツコツとノックした。

い (終助) 56 い ↓はだをかぶのかい

一 12 6 会 もう いいかい。

一 13 2 会 もう いいかい。

一 13 4 会 もう いいかい。

二 32 6 会 みんなは、そうというものをみたこ

とがあるかい。

二 33 2 会 いや、目でみなくても、手でさわった

ことがあるかい。

二 40 10 会 たろう「だれだあい。」

二 41 1 会 山びこ「だれだあい。」

三 13 5 会 わかったかい。

三 62 2 会 「それで いいかい。」

三 62 5 会 「デビッドもそれで いいかい。」

三 66 9 会 「それで いいかい。」

三 67 3 会 「それで いいかい。」

四 56 3 会 いいのかい。

四 56 10 会 だいたいようぶかい。

四 59 10 会 りすさん、がんの なかまを みかけな

かったかい。

四 60 2 会 ふくろうさん、がんの なかまを みな

かったかい。

四 64 1 会 「どうだい、かつちゃん。」

四 103 8 会 あのかめさんかい。

五 28 8 会 先生からかい。

五 85 9 会 どうしたのかい。

五 107 4 会 ここにいて、なにか、おもしろいことが

あるのかい。

五 108 1 会 おりてこないかい。

六 23 5 会 どうだい。

六 35 1 会 だいたいようぶかい。

六 75 2 会 どうだ、ゆうべの命のこと、わかったか

い。 六 76 11 会 なんだい、ごろうくんは。

- 六105 8 会 「はなをかむのかい。」
 六116 7 会 「きみ、作れるかい。」
 六127 6 会 「もう、いいかい。」
 六127 9 会 「もう、いいかい。」
 六127 11 会 「もう、いいかい。」
 六132 4 会 いいかい。
 七26 1 会 にいちゃん、わからないのかい。
 八8 1 会 「どこの生まれだい。」
 八62 1 会 これが世界だと思ってるのかい。
 八79 7 会 「おまえさんは、たまごを生むことがで
 きるかい。」と、あひるの子にたずねる。
 八80 2 会 せなかをまるくしたり、のどを鳴らした
 り、火花をだしたりすることができるとかい。
 九49 7 会 やまねこがここを通らなかつたかい。
 九51 2 会 やまねこがここを通らなかつたかい。
 九52 1 会 やまねこがここを通らなかつたかい。
 九53 3 会 やまねこがここを通らなかつたかい。
 九65 3 会 だめだい、そんなこと。
 九88 9 会 いやだい。
 九89 4 会 どうしたんだい。
 九101 3 会 かにんするかい。
 九102 5 会 けんかの話をするのかい。
 九136 6 会 「なんだい、なんの用かね。」
 九142 3 会 おまえは、わたしをわすれたのかい。
 十68 10 会 「だいじょうぶかい、あぶなくはないか
 い。」と、ふるえ声でいいながら、
 十68 10 会 あぶなくはないかい。
 十二79 2 会 そうだったのかい。
 十三59 9 会 ふふん、そう思うかい。
 十五92 10 会 来いというのに聞えないのかい。
 十五101 10 会 みんな聞いたかい。
 十五105 3 会 このらんぼうなやつ、いったいなんだ

- い。
 十五113 12 会 おまえ、見たことがなかつたかい。
 い 10 い る 以
 二8 5 「い」のつくことばをあつめました。
 四70 10 「い」の字とかけて、なんととく。
 四70 10 い
 四74 2 七いろはがるた いーいの 一ばん。
 四74 2 七いろはがるた いーいの 一ばん。
 四77 5 めー「ゐ」の字はこれから「い」を
 つかう。
 四77 5 「ゐ」の字はこれから「い」をつかう。
 四77 5 「ゐ」の字はこれから「い」をつかう。
 十五39 8 「い」は「以」、「は」は「波」、「に」は
 「仁」というように、漢字の全体をくずしたもの
 から作りだしたものである。
 十五39 9 「い」は「以」、
 い い「良」(形) 249 いい 《ーイ》 ↓ みんないいこ
 一4 3 会 おはなをかざる、みんないいこ。
 一5 2 会 きれいなことば、みんないいこ。
 一5 4 会 なかよしこよし、みんないいこ。
 一12 6 会 もういいかい。
 一13 2 会 もういいかい。
 一13 4 会 もういいかい。
 一13 5 会 もういいかい。
 一29 6 手となかのいいことば。
 一30 3 足となかのいいことば。
 一46 6 会 いいですよ。
 一47 5 会 これはいいおこさんだ。
 一47 6 会 げんきないいおこさんだ。
 一53 8 会 しんせつないいい人がひろうと、だい
 やもんどですが、
 一60 5 会 ぴょんちゃんも、きれいずきないいいこ

- になりました。
 一60 6 会 はねちゃんも、ものを はつきり いう
 いいこになりました。
 一60 7 会 まきげちゃんも、おともだちと なかの
 いい、やさしいこになりました。
 一62 2 会 あなたも、おとうさんも、おかあさんも、
 みんないい人ですもの。
 二10 1 会 人の など、そうで ないものにと、わ
 けたら いいとおもいます。
 二10 6 会 くさの など、とりの など、そのほか
 のものにと、わけたら いいとおもいます。
 二10 10 会 目に みえる ものと、みえないものと
 に、わけたら いいとおもいます。
 三20 8 会 どんな 虫が いい 虫とおもいますか。
 三25 5 会 こんな 大きな 木を、切って いいもの
 でしょうか。
 三28 5 会 あの いきおいの いいくすのきで つ
 くった ふねだもの、
 三28 6 会 くすのきで つくった ふねだもの、いき
 おいの いいのが あたりまえさ。
 三43 5 会 はまべに でて みると、わにざめがいま
 したので、これは いいと思つて、
 三59 9 会 「いいよ、いいよ。」
 三59 9 会 「いいよ、いいよ。」
 三62 2 会 「それで いいかい。」
 三62 5 会 「デビッドもそれで いいかい。」
 三62 8 会 「みんな それで いいね。」
 三66 5 会 「どっちへ いったら いいか、風に き
 いて みようよ。」と、いいました。
 三66 9 会 「それで いいかい。」
 三67 3 会 「それで いいかい。」
 三82 9 会 「き色でも いいじゃないか。」

四二〇九(手) 会 さあ、用意はいいですか。
 四二一(手) 会 はい、いいです。
 四二八三(手) 会 ふわふわとして、氣もちがいいだろうな。
 四三〇一〇(手) 会 おてがみを書いていいし、えをかいてもいいと思います。
 四三一(手) 会 えを かいてもいいと思います。
 四四〇一(手) 会 ただし ことばは、いつも、あなたがたの いい お友だちになったり、
 四四五五(手) 会 おしまいは 氣がらくで いいからって、いったじゃないか。
 四四六五(手) 会 わがままは もう よすが いいよ。
 四四七一(手) 会 まん中がいいな。
 四四七九(手) 会 がんばるには、この 風が なんとも いえない いい 氣もちでした。
 四四八三(手) 会 「いいのかい。」
 四四八八(手) 会 あしたの あさ、出発しても いいよ。
 四四八五(手) 会 ねているうちに、いい こと 考えただ。
 四四九二(手) 会 どうでも いいや。
 四四九七(手) 会 いい お天気で 氣もちがいいな。
 四四九八(手) 会 いい お天気で 氣もちがいいな。
 四四九九(手) 会 きょうは いい お天気で。
 四五〇〇(手) 会 なんとまあ、いい けしきだろう。
 四五〇一(手) 会 にいさん、もう おりていいの。
 四五〇二(手) 会 いいよ。
 四五〇三(手) 会 あなたたちはまだいい。
 四五〇四(手) 会 でもいいの。
 四五〇五(手) 会 きみは小さいから、まあいいよ。
 四五〇六(手) 会 これには、きみのようないい子どものことが書いてありますよ。
 四五〇七(手) 会 白くてゆつたりとさく、ひんのいい花で

す。
 五四三六(手) 会 ねえさんはいい声でした。
 五四四一(手) 会 いい 氣持がして、たのしくなった。
 五四四二(手) 会 いい 色ですこと。
 五四四三(手) 会 あやこは、なんとこたえていいのか、わからなくなりました。
 五四四四(手) 会 「いいですか、写しますよ。」
 五四四五(手) 会 いい おびだ。
 五四四六(手) 会 おちを コップ コップ といたでいて、こんなに いい おぼろさんになったのだよ。
 五四四七(手) 会 いまに いい おぼろさんになったのだよ。
 五四四八(手) 会 ひわが、いい 声で さえずりますよ。
 五四四九(手) 会 ひわが、いい 声で さえずりますよ。
 五四五〇(手) 会 このまま かって おいたらいいでしょう。
 五四五一(手) 会 「略」と、いい 声で 鳴いて、
 五四五二(手) 会 ほんとうに いい 氣持だ。
 五四五三(手) 会 いい だろう。
 五四五四(手) 会 いい 音だろ。
 五四五五(手) 会 まあいいや、こんないいときに あそばないで、いつ あそぼうというんだね。
 五四五六(手) 会 まあいいや、こんないいときに あそばないで、いつ あそぼうというんだね。
 五四五七(手) 会 風がでて なければいいね。
 五四五八(手) 会 すこしでも いい から、わけてください。
 五五五九(手) 会 ああ、いい 考えがある。
 五五六〇(手) 会 南へ ひきあげる ついでだから、えんりょ しないでいいのよ。
 五五六一(手) 会 わたしも せきが であらいいなあ。
 五五六二(手) 会 いま、この 雪だるまが、お話を すればいいって、いつていたところよ。
 五五六三(手) 会 死んでいたら、(略)、あんなに 元氣のいい

顔つきも して いないはずだ——
 六八一一〇(手) 会 たった 一日 だけで いい のです。
 六八一一一(手) 会 でも、つて みる が いい しさ。
 六八一一二(手) 会 この つりざお を 持つ て いく が いい。
 六八一一三(手) 会 では、私 が いい ことを 教えて あげ まし ょう。
 六八一一四(手) 会 すると、海の 神は、きつ とい い ことを 教 えて くださる でしょう。
 六八一一五(手) 会 これは、いい もの が み つ かつ た。
 六八一一六(手) 会 なんでも いい から、き て くだ さ い。
 六八一一七(手) 会 「ダ」や「ド」に いい か え れ ば い い わ け だ。
 六八一一八(手) 会 「略」と、「元氣のいい 声で いい ました。
 六八一一九(手) 会 紙は 半紙 で いい し、骨は 工作 の あ ま り の ひ ご で ま に あ わ せ ま し た。
 六八一二〇(手) 会 のり は、ご は ん つ ぶ を よ く ね る と、い い の り が でき ま し た。
 六八一二一(手) 会 紙の上で いろいろ と ま げ ぐ あ い を し ら べ、
 六八一二二(手) 会 ちやうど い い 長 さ に ひ ご を 切 り ま し た。
 六八一二三(手) 会 早く か わ く と い い な。
 六八一二四(手) 会 「もう、いい かい。」
 六八一二五(手) 会 「もう、いい かい。」
 六八一二六(手) 会 もう、いい かい。
 六八一二七(手) 会 うさぎ たちは、なん て ひ と が い い ん だ ろ う。
 六八一二八(手) 会 いい かい。
 六八一二九(手) 会 いい と も。
 六八一三〇(手) 会 いい よ。
 六八一三一(手) 会 その かわり、ぼく が 負 け た ら、この 角 を、
 六八一三二(手) 会 お っ て し ま っ て も い い。
 六八一三三(手) 会 ちつ とも い い こと で は な い と、う さ ぎ さ ん たちは 話 し あ い ま し た。

六135 2 ㊦ いいか。

六135 5 「略。」と、元氣のいい声をかけました。

六139 2 ㊦ 「いいごちそうができた。」

六139 11 ㊦ いいところへきてくれた。

七7 8 ㊦ 一どでいいから、風になりたい。

七27 6 ㊦ 先生は、いいことをおっしゃいましたね。

七30 6 ㊦ いいな、にいちちゃん。

七33 2 ㊦ それがいいわ。

七47 6 ㊦ どこまで書きたしても、それでいいところまでは、なかなか、いきつくものではない

ません。

七51 2 ㊦ じゃんけんをして、いいほうのボールを

つかいなさい。

七82 9 ㊦ もしあるなら、ここで、はっきりいうが

いい。

八5 6 ㊦ 鳥屋というより、ほおじろ屋といったほう

がいいかもしれません。

八7 10 ㊦ ピオ、いい声だなあ、おまえは。

八60 3 ㊦ いなかは、いいお天氣であった。

八61 8 ㊦ みどりは目のためにいいから、親あひるは

みたいだけみさせてやった。

八64 5 ㊦ そんなものはほっておいて、ほかの子ど

もに、およくことを教えてやるがいいよ。

八65 8 ㊦ あくる日はいいお天氣で、

八66 10 ㊦ あのうまく足をつかうようすや、あのし

せいなのをみてわかる。

八67 10 ㊦ あれをみるがいい。

八68 9 ㊦ あの一わをのけたほかは、みんないい子

だ。

八69 3 ㊦ あれは美しくありませんが、たちはほ

んといいんです。

八69 7 ㊦ ほかのものと同じようにおよくし、いや、

ほかのものよりうまくおよくといってもいい。

八70 7 ㊦ あわれなあひるの子は、立っていたほうが

いいか、歩いていたほうがいいかさえも、わから

なかった。

八70 8 ㊦ 歩いていたほうがいいかさえも、

八71 4 ㊦ おまえなんかは、ねこにくわれてしまえ

ばいい。

八71 6 ㊦ 遠いところにいてくれさえすればいい。

八73 8 ㊦ きみはみつともないから、いいしあわせ

にあうかもしれないよ。

八78 1 ㊦ にわとりは、足はみじかいが、いいたまご

を生んだ。

八79 1 ㊦ おすでなければいいが、まあ、かつてお

いてみよう。

八81 4 ㊦ でも、水の上をおよくのは、いい氣持で

すからね。

八81 7 ㊦ 水の上をおよいだり、もぐったりするの

がいい氣持かどうか。

八82 10 ㊦ いい友だちはみんなそうしたものだよ。

八93 1 ㊦ どうしていいのかわからないので、つばさ

の中に頭をかくした。

八96 1 ㊦ きょうは、お天氣がいいので、もみまきを

しました。

九14 7 ㊦ いい音楽をきいても、それがわからないの

は、

九62 4 ㊦ きょうは、そが日あたりがいいようだ

から、そことこの草をかれ。

九67 11 ㊦ どうしたらいいでしょう。

九68 3 ㊦ こういいわしたらしいでしょう。

九71 5 ㊦ これからは、用事これあるにつき、明日

出頭すべし、と書いていいでしょうか。

九75 4 「略。」と書いてもいいといえよ

たと、いちろうはときどき思うのです。

九80 9 ㊦ もし、手あたりしだいにやって、ぐあい

よくないかをほりあてたらいいが、

九81 2 ㊦ ぼくは、どこか一つのところをきめて、

廣く深くほっていくのがいいと思います。

九89 4 ㊦ あんなになかのいいふたりが。

九90 2 ㊦ もういいったら。

九90 10 ㊦ いいとも、だれがきみなんかと遊ぶもん

か。

九90 11 ㊦ もういいいたら——

九91 9 ㊦ もういいじゃないか、そんな話——

九95 9 ㊦ なんだっけいいじゃないか。

九98 6 ㊦ つかなくたって、いいよ。

九102 6 ㊦ してもいいさ。

九102 7 ㊦ そう、してもいいね。

九108 6 ㊦ 先生、もういいでしょう。

九121 ㊦ 茶人は、この上流にいい泉があるのではな

いかと氣がついた。

九123 3 ㊦ すると、いい味は、もつと遠いところで感

じられる。

九125 ㊦ 中ほどでは、いい味はたえなかった。

九123 11 ㊦ ここで茶人のしたには、まぎれもないいい

味がはつきりと感じられるようになった。

九124 4 ㊦ 近くまでくると、いい味の水は、左の岸の

ほとりを流れていた。

九126 1 ㊦ そこからさらに、すこしさかのぼって水を

飲んでみると、いい味は、すこしもなかった。

九131 4 ㊦ あれが、うまくひっかかるっていいな。

九134 2 ㊦ あたりにいいにおいがします。

九134 4 ㊦ いいにおいをかいてみると、(略) 苦し

九一四 八 ちょうどういや。
 九一六 七 くんさん、あんないいお月さん、みえないの。
 九一七 三 わたし一どでいいから、お月さんのところへいきたいと思います。
 九一八 一〇 ああ、いいとも。
 九一九 四 だから、わたしをたべてもいいと思って
 いるんだけど。
 九二〇 一七 さあ、早くとんでいくがいい。
 九二一 七 ちょうちよさんは、羽があるからいいな。
 九二二 九 くもは、なんといつて返事をしているかわからないので、そのまままっています。
 九二三 二 それから、いいゆめをみることもできた。
 九二四 七 自分のもっているいいところを、えんりよ
 しないであらわし、
 九二五 八 友だちのいいところを、すなおに学んでい
 きたと思います。
 九二六 一二 自分ひとりぐらいいいというよう
 な、無責任な〈略〉考えをもちたくはありません。
 九二七 七 こんなことでもいいのか。
 九二八 二 川口はいいところだ。
 九二九 一 ぼくはからだもいいし、息もつづく。
 九三〇 二 いつもそのうえを考えていて、いいこ
 とをはっきりきめる。
 九三一 三 では、実力があって、力いっぱいはた
 らくいい船員には、だれがなるのさ。
 九三二 一〇 いいコックスが日本を正しい方へつれ
 ていくのさ。
 九三三 一二 いい整調が、りっぱに日本じゅうの足
 なみをそろえてくれるにちがいないよ。
 九三四 一四 いま、わたしが知っているいいことと、
 正しいことは、

九三五 二一 金次郎はいいことを考えつきました。
 九三六 四二 みんな元氣のいい返事をして立ちます。
 九三七 五七 デンマルクの農業のことを勉強して、ぼ
 くは、いい農夫になろう。
 九三八 一五 力をおとさずにいるがいいよ。
 九三九 三三 もういくらでもないでもいいでしょう。
 九四〇 一四 高いところからたれさがったのもいい。
 九四一 一四 まだ青々とした木の葉の中から大きくな
 ぞいているのもいい。
 九四二 一五 だが、根もとのところに三つ四つかた
 まってしだれているところもいい。
 九四三 一六 いい色の絵のぐがたくさんあった。
 九四四 一七 たいへんいい色になりましたね。
 九四五 一八 そこへいくと、こおろぎさんよりよほ
 どいいのです。
 九四六 二〇 わたしはまた、あのような絵のぐがあ
 ればいいなと思いましたよ。
 九四七 二五 はじめはいやがっていた民ちゃんも、よ
 ござれていないほうが氣持がいいので、
 九四八 一 絵には絵のいいところがあるからね。
 九四九 八 きみもひとつ、作ってみるといいよ。
 九五〇 六 一代二代はいい人で、よくさかえたが、
 九五二 八 住みこんであげてもいいけれども、芭蕉
 はひとりしずかにしているのがすきだというし、
 九五三 一〇 芭蕉は、くもった空をおおきながら、雪
 が早く降るといいなと待ち遠しがついていました。
 九五四 一四 このような歩みをたどってきた日本を、
 これからどうもりたてていけばいいでしょうか。
 九五五 一四 デンマルクは、〈略〉、鉾山があるので
 なく、いい港があるのでなく、
 九五六 一四 木材があたえられたうえに、いい氣候が
 あたえられました。

九五七 三九 行ってもいいでしょう……はい、はい。
 九五八 四一 いっしょにつかえばいいよ……
 九五九 四一 いいじゃないか。
 九六〇 四二 せっかくの記念品だから、とっておい
 たほうがいいよ……
 九六一 五六 たいへんいい絵だなと思いました、が、
 九六二 五五 これでも、本物にくらべたら、やっぱり、月と太陽みたいにながうといつもいいな。
 九六三 一〇 ランプについては、いろいろいいこと
 を教えてくれました。
 九六四 一三 くぎへかけるようにしたほうがいいと
 か、調節ができるとか、
 九六五 一〇 よく説明しておもらいになるといいと
 思います。
 九六六 一八 が、きはつ油をおつかいになったほう
 がいいのです。
 九六七 一三 どこまでコーヒーを入れているのか、
 おわかりになります。
 九六八 二二 つかっているうちに、すっかりなれて
 しまつて、日本語になつたと考えていいだろう。
 九六九 二八 その中で、かたかなで書いてあること
 ばは、たいてい西洋からきたことばと思つていい。
 九七〇 三八 ああ、いい音がする。
 九七一 四六 なんだか、すうつといい氣持になつて、
 自分が水の中にひたつていることも、わすれてし
 まつたほどでした。
 九七二 五三 葉は、元氣のいい青年でした。
 九七三 五八 いつも日あたりのいいところに出て、
 九七四 六〇 だから、あのかぼちゃは、みんなぼく
 のものだといつもいいのです。
 九七五 六七 いちばんいい種を、來年もわすれずに
 まいてもらうことができさえすれば、

十四70 10 ひえるのは、湯の表面の茶わんのまわりから、熱がにげるためだと思っていいます。

十四77 7 木を割るときには、もとのほうから割るがいい、

十四77 7 竹を割るときには、うらのほうから割るがいいという教えでした。

十四80 8 人々に伝えるうちに、あのような、短くて調子のいい、氣のきいたものになったものと

十五20 2 そこには、氣持のいい、小さなホテルがここかしこに立っています。

十五23 9 どうしたらいいか。

十五26 8 どこでもいいから、安全な場所へおりなければならぬと、少年は思いました。

十五61 11 満ぼう、いいところへつれて行つてあげるから、さあ、出かけよう。

十五83 10 私たち、あそこへ行つてもいいの。

十五83 11 いいとも。

十五85 12 あいそのいい人たちだからね。

十五90 11 だが、まあいいでしょう。

十五90 12 もっといいものがありますよ。

十五91 2 なかまにはいつて、わたしたちのすること、みんな見るといいですよ。

十五92 12 ぎょうぎのいいことばをつかつてもらいたいものです。

十五96 3 でもいいや。

十五96 3 あれだけ残つていればいいや。

十五97 4 話をしてもいいの。

十五104 3 それから、ぼくは、まだなかまのうち

十五119 12 だまつておいでよ、いい子だから。

十五123 9 ほんとうにみんないい同級生であつた。

いいあう 「言合」(五) 2 いいあう 《—イ—ツ》

六54 2 よしおとみちこが「略」。「略」。

十一25 3 「略」。「いいあいました。」

いいあわしかた 「言表方」(名) 1 いいあわしかた

十二93 4 その場のようすが相手にみえないから、

ことばづかいやいいあわしかたには、いっそう氣をつけなくてはならない。

いいあわす 「言表」(五) 1 いいあわす 《—シ》

十54 5 「キントットガ」「アドコヘイタノ」

は、そのことをいいあわしています。

いいえ (感) 30 いいえ

一63 2 いいえ、あれはたろうさんたちのおくにです。

二46 6 いいえ、これは、お月さまが、くもからでてくるところです。

五28 9 いいえ、(略) 帰つてくるとちゅう、よその人からもらったんです。

五30 10 いいえ、はじめてです。

五61 9 あやこさんがひつぱつたの。「いいえ。」

六84 9 おまえは、なにかつたか。 「ほおりのいいえ、つれませんでした。」

七27 4 教えてくださらなかったの。「兄、いいえ、どうなるか、みんな自分でしらべるようにと、

七27 9 これ、死んでいるの。」母「いいえ、生きていますよ。」

七78 9 だれかにおききになったのですか。 「旅人「いいえ、みたのでも、きいたのでもありません。」

八79 9 たまごをうむことができるかい。」と、あひるの子にたずねる。「いいえ。」

八80 3 「いいえ。」

九58 10 いちろうはあわてていいました。「いいえ、大学の四年生ですよ。」

九64 4 どんぐりどもは、口々にさげびました。

「いいえ、だめです。」

九64 8 いいえ、ちがいます。

九66 7 いいえ、ちがいます。

九70 7 いいえ、お礼はどうかとつてください。

十一59 6 『はい』ということばと、『いいえ』ということばだ。

十一59 7 『はい』『いいえ』、やさしいことばではありませんか。

十一62 5 人のいうことに『いいえ』といきるには、ほんとうの勇氣がいる。

十一62 8 ひよつとすると命を失うようなあふないときでも、いいだすことのできないほど、『いいえ』ということばはいいにくいのだ。

十一85 3 いいえ、おとうさん。

十二32 11 先生——私の心の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、いいえ、それよりもなによりも、私を愛するためにきてくださった——

十二79 4 「いいえ。」

十五46 11 いいえ、もうこれだけです。

十五89 12 ちゃんと席がとつてありますよ。」チルル「いいえ、どうもありがとう、『ふとった幸福』さん。」

十五111 1 きぬなの、銀なの、それとも眞珠なの。」母の愛「いいえ、これは、おまえたちのほおずりと、おめめと、だつこと織つたのですよ。」

十五112 4 あの戸だなの中にはいつているの。」母の愛「いいえ、いいえ。」

十五112 4 母の愛「いいえ、いいえ。」

十五113 ㊦ いいえ、それは同じことですよ。

十五116 ㊦ あの人、顔を見せることはないの。」

チルチル「いいえ、あの人には、あんまりはつきり顔を見せると、『幸福』たちがこわがるだろうって、心配しているのです」

いいかえる「言換」(下一) 3 いいかえる 《―エル・エレ》

六110 ㊦ 「ナ」や「ノ」のつくことばがあったら、

「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。

十三9 ㊦ いいかえれば、ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、

十四78 ㊦ うらのほう、いいかえると、竹の先のほうから割ってみると、

いいか・ける「言掛」(下一) 1 いいかける 《―ケ》

十二24 ㊦ 民ちゃん、ぼつぼつものをいいかけていますが、ちよつときいてもわかりません。

いいかげん「好加減」(形状) 5 いいかげん

八16 ㊦ だから、虫たちが、いいかげんにすすんでいても、なにかの木の根にいきあたります。

九63 ㊦ いいかげんになかなおりをしたらどうだ。

九66 ㊦ いいかげんになかなおりをしたらどうだ。

九67 ㊦ いいかげんになかなおりをしたらどうだ。

九89 ㊦ ふたりとも——さあ、いいかげんにして帰ろうよ。

いいかた「言方」(名) 2 いいかた

六110 ㊦ 「ダンダ」といってみると、いかにも弟のいいかたそっくりになった。

十二89 ㊦ ほんとうに感謝の心持をこめていうときと、ただとおり一ぺんのあいさつというときとでは、いいかたもかわってくるであろう。

いいきる「言切」(五) 1 いいきる 《―ル》

十一62 ㊦ 「いいえ」といいきるには、ほんとうの勇氣がある。

いいすぎ「言過」(名) 2 いいすぎ

十二23 ㊦ 家内じゅうが歓声をあげているといつても、いいすぎではありません。

十四32 ㊦ 星によつてみちびかれ、星によつて生きているといつてもいいすぎではありません。

いいたげ「言」(形状) 1 いいたげ

十一88 ㊦ 病人はしげしげと少年をみつめながら、

《略》、なにかものをいいたげにしました。

いいたす「言足」(五) 1 いいたす 《―サ》

十五76 ㊦ 「略。」といいたされた。

いいだす「言出」(五) 9 いいだす 《―シース》

六86 ㊦ おまえからいいだしておいて。

九71 ㊦ なにかいいだそうに、しばらくひげをひねって、目をぼちぼちさせていましたが、とうとう決心したらしく、いいだしました。

十52 ㊦ ここで遊んでいたいと、私にねだったり、

そのくせ、でかけようといいいだしたりして

十一62 ㊦ ひよつとすると命を失うようなあぶないときでも、いいだすことのできないほど、『いいえ』ということばはいいにくいのだ。

十二5 ㊦ 人々は、なんのためにこんなことをいいだしたのかと思ひながらやってみました、

十二60 ㊦ 里の人たちはおどろいたが、いいだしたことはあとへひかないので、

十三13 ㊦ これを最初にいいだしたのは、《略》、

ポーランドのコペルニクスという人です。

十四51 ㊦ 「略。」こういいだしたのは、根のしるしをつけた老人でした。

十五57 ㊦ ある日のこと、せい書をギリシア語で

読みたいといいいだした。

いいつけ ㊦ おいいつけ

いいつけ「言付」(下一) 5 いいつける 《―ケ》 ㊦ おいいつける

三11 ㊦ それで、たくさんのけらいにいいつけて、まもつてくださることにしました。

五74 ㊦ 「略。」といいつけました。

九62 ㊦ 「略。」やまねこは、大いそぎでぎょしゃにいいつけました。

十66 ㊦ 「略。」といいつけ、それから、きびしい声でいいつけました。

十二60 ㊦ 長者は、なんと思つたか、なん千アールの田をきょう一日で植えてしまえといいいつけた。

いいつた・える「言伝」(下一) 2 いい伝える 《―エ》

十二55 ㊦ 傳説には、《略》、昔からいい伝えられたというだけのもののほうが多い。

十四80 ㊦ よその民族から教えられて、それからいい伝えられているものもあるかもしれません。

いいにくい「言悪」(形) 7 いいにくい 《―イ》

四66 ㊦ 「早口あそび」これは、いいにくいことばをみつめて、それをまちがえないで、早く

いつてあそぶのです。

六109 ㊦ 「かむ」の「ム」がいいにくいらしい。

十一58 ㊦ おとうさん、こんないいにくいことばは、ほかにないでしょう。

十一59 ㊦ おとうさんは、もっといいにくいことばを知っているよ。

十一59 ㊦ やさしいようだが、なかなかいいにくいことばだよ。

十一62 ㊦ 『いいえ』ということばはいいにくいのだ。

三〇三 一、「かぐやひめ」という名をつけました
 三〇三 八　　ちは、「略。」と　いって、まいにちま
 三〇五 二　　めは、「略。」と　いって、どんなりっ
 三〇五 七　　むずかしいことを　いって、それができ
 三〇五 八　　およめにいくと　いいました。けれども
 三〇五 九　　も、かぐやひめの　いうようには、だれも
 三〇六 一〇　　たが、「略。」と　いって、かぐやひめは
 三一一 二　　んに、「略。」と　いって、きていたう
 三一一 三　　めは、「略。」と　いって、みかどへお
 三一一 九　　、「ふじの山」と　いうようになりまし
 四一八 二　　、ゴロンゴロンと　いった。おかあさんに
 四二一 一〇手　　は、「略。」と　いって、しゃがみます。
 四三〇 三　　いてもらいたいと　いって、文を書きま
 四三一 四　　「に知らせたいと　いって、つぎのような
 四三三 一　　は、「略。」と　いうおとうさんのこ
 四三三 七手　　に、「略。」と　いって、わかれてい
 四三五 一　　「略。」ここまで　いわれても、まだ、な
 四三六 三金　　生きていますと　いうことが、わか
 四三六 八　　んが、「略。」と　いって、つぎのような
 四三七 六金　　に、「略。」と　いおうとしました。
 四三七 一〇金　　た。『略。』と　いう声でした。わた
 四四四 八　　ろが、「略。」と　いったのは、かっちゃ
 四四五 三金　　してくれて　いったから、そうし
 四四五 六金　　いいからって、　いったじゃないか。」
 四四六 三金　　にならびたいと　いうの。「略。」「へ
 四四六 六金　　してくれて　いったのに。」「略。」
 四四六 九金　　にならびたいと　いうんだね。」「略。」
 四四七 三金　　ちゃんが　そう　いうなら、十五ばんめ
 四四九 一〇　　ぼうでやられたと　いうことがわかりま
 四五五 七　　した。かさかさ　という木の　音が
 四五七 五　　いらいをしようと　いうことになりまし
 四五八 七　　た。「略。」「こ　う　い　って、か　っ　ち　ゃ　ん　は

四六三九。」「略。」「こういわれて、かつちゃん
四六六五。」「略。」「こういわれて、あそぶのです。
四七二一。」「略。」「にやあ・わん」というわけです。」「略
四七二五。」「略。」「これは、『略。』というわけですよ。」「略
四七二八。」「略。」「げられませんか」というわけですよ。」「略
四七三一。」「略。」「ます。『略。』というわけですよ。」「みん
四八三三。」「略。」「弟が、『略。』と聞いて、一まいのえ
四八四二。」「略。」「弟は、『略。』と聞いたので、ねえさん
四八五九。」「略。」「と、大きな声でいったので、みんなが
四八九八。」「略。」「雪の音。雪だというとか、あさ早くは
四九〇二。」「略。」「ちは、『略。』といいながら、いって
四九〇四。」「略。」「声で、『略。』といいながら、いって
四九一七。」「略。」「ては、いけないうのですか。」「おと
四九三二。」「略。」「四一三二。」「略。」「天人は、うそということを知りませ
五〇一五。」「略。」「がきて、『略。』と聞いて、私たちをみんな
五〇二六。」「略。」「ぶつぶつとここをいながら、出口の方
五〇三三。」「略。」「とき、『略。』と聞いて、かけさせてく
五〇四六。」「略。」「って、『略。』と聞いて、みんなを立た
五〇五二。」「略。」「いて、『略。』と聞いて、せきをすこし
五〇五五。」「略。」「ども、『略。』と聞いて、とうとうかけ
五〇五七。」「略。」「うございました。と聞いて、かるくあた
五〇六〇。」「略。」「にありがとうっていったのは、どうい
五〇六三。」「略。」「いったのは、どういうわけ。」「略。」「
五〇六六。」「略。」「かでありがとうっていったのと思
五〇六九。」「略。」「と思ったけれど、いうところがな
五〇七二。」「略。」「、それであの人がいったのよ。」「略
五〇七五。」「略。」「、うれしかったというのほ
五〇七八。」「略。」「くは、『略。』と聞いて、小
五〇八一。」「略。」「略。』『略。』と聞いて、小
五〇八四。」「略。」「ときどき、こ
五〇八七。」「略。」「、ときどき、こ
五〇九〇。」「略。」「くは、『略。』と聞いて、小
五〇九三。」「略。」「略。』『略。』と聞いて、小
五〇九六。」「略。」「ときどき、こ
五〇九九。」「略。」「くは、『略。』と聞いて、小

五40 6手 年は、ほう年だといひます。いま、たく
五46 6 がした。「略。」というようにきこえた。
五53 1 さこが、「略。」というので、西の方をみ
五53 4 ました。「略。」といひて、手をたたいて
五53 7 、東の空をみながらいひました。「略。」
五53 11 した。「略。」そよいいながら西の方をみ
五55 10 あさんにこのことをいひて、ごろうさんを
五56 6 星よ。あれ土星というのよ。」じゅんば
五57 4 「略。」私は、こういひて、はるおのかた
五59 1 さんは、「略。」といひました。するととは
五59 3 るおも、「略。」といひました。私は、い
五60 1 つけて、「略。」といひました。「略。」
五63 7 なつて、「略。」といひて、おわらにな
五66 5 かなは、「略。」といひました。おじいさ
五66 8 「略。」とやさしくいひて、はなしてやり
五66 11 くらでもあげるといひたが、わしはお礼
五67 7 さんは、「略。」といひました。あくる日
五68 3 におけがほしいといひていひます。「略
五69 6 は、家がほしいといひます。」「略」。
五70 5 さんは、「略。」といひました。おじいさ
五70 11 さんになりたひといひます。「略」。
五71 11 さんが、「略。」といひますと、おばあさ
五72 2 さんはおじいさんにいひました。「略」。
五72 10 えさん、ぐずぐずいわずに海へいひてお
五73 6 女王になりたひといひていひます。「略
五73 9 「略」。「略。」といひました。おじいさ
五74 6 さんは、「略。」といひました。おばあさ
五75 1 おじいさんをよんでいひました。「略」。
五76 2 さかなは、でてきていひました。「略」。
五76 5 う女王はいやだといひていひます。海のぬ
五76 7 けらいにしたいといひていひます。金の
五76 9 のさかなは、なにもいひないで、しつぽで

五八^一 りして、「略。」といてとびあがつたの
五八^三 は、え日記を書くといいました。たなかさ
五八^四 ばをたくさん作るといいました。ささきく
五八^五 は、星をしらべるといいました。いとうく
五八^七 の作文を書くんだといって、よろこんでい
五八^九 十音にわけてみるといいました。「略。」
五八^四 ようかんさんはこういいながら、ほうきを
五九^一 略。」「略。」こういつてから、りようか
五九^九 ると、『略。』というのだよ。それで、
五九^三 てから、「略。」といって、手おけをさげ
五九^六 とうは、まひわというのですが、ふつう
五九^三 は、ひわ、ひわといっています。いまに
五九^二 略。」「略。」そういつているうちに、秋
五九^二 ました。「略。」というと、ねこは、おど
五九^一 略。」「おとうさんにいわれて、よくみると
五九^五 ゃんは、ひわによくいつてきかせました。
五九^一 ようなひとりごとをいいました。ひわは、
五九^六 ひわが、「略。」といいました。「略。」「
五九^七 略。」「略。」そういつて、ハーモニカの
五九^一 まった、こまったといっていました。しか
五九^六 よんだ。「なんという小さい、なさけな
五九^一 い。ああ、なんというなさけない身のう
五九^三 つけて、「略。」というと、男の子はゆび
五九^九 さんは、「略。」といいながら、しごと台
五九^一 わしたのは。ああいうねじはもうなくな
五九^八 略。」「略。」といてわした。ねじ
五九^三 べって、「略。」というまに、川の中にお
五九^三 略。」「ありはそういつて、すぐ木の葉の
五九^一 ら木の葉におれいをいしました。そのとき
五九^五 せんか。「略。」といって、大いそぎで木
五九^九 きれいなもんくをいいましたね。こんな
五九^一 、いつあそばうというのさ。わるいこと

六23₂ 会 さ。わるいことはいわない。さあ、はい
六24₃ 会 、いつあそぼうというんだね。楽しむた
六24₇ らでかけよう。」といて、あり一、二を
六25₄ 「ありはなんにもいわないで、おもい足
六27₇ 会 ぶんだべられるというわけだ。」あり三
六30₇ 「なんどもお礼をいってたちざります。
六40₅ 会 。かし「帰るといったって、あんな遠
六52₁ 略。」と、よしおがいました。月はいま
六53₁ 略。」と、みちこがいました。ふみおは
六53₂ 。ふみおは、両方のいうことをきいてい
六53₂ のいうことをきいていました。「略。」
六53₃ 会 まが走っているといいたね。みちこさん
六53₄ 会 が走っているといいたね。「略。」「へ
六54₁ 会 」。ふみおは、こういって、空をみあげま
六62₇ ました。「略。」といました。みじか
六67₉ 略。」と、子ぐまがいうと、さるは子ぐま
六68₁ がって、「略。」といて、木の上にする
六71₂ 会 すればいいて、いいていたところよ。
六71₇ るえは本気になっていました。はるえは
六71₁₀ 会 ね。はるえさんのいうとおりね。雪だる
六74₂ 会 には、みんな命というものがありますよ
六76₆ ろうは、「略。」といいながら、この手が
六78₁₀ さんが、「略。」といました。ごろうは
六81₂ 会 す。「ほてり」の「どういことだ。」ほおり
六102₄ はこうひとりごとをいながら、そとをの
六104₁₀ い。「あのねえ」というのが、「アドデエ」
六104₁₀ る。「にいさん」というのは、「リイサン」
六105₃ つきも、「略。」というのが、「略。」と
六105₆ さんが、「略。」といて、みんなで大わ
六106₁ まえに、「略。」ということばを、そのよ
六106₂ とばを、そのようにいったことがあるので
六106₃ かし、「略。」というのが、いかにも弟

六106₃ のが、いかにも弟のいいそうなことばつき
六106₄ る。その、弟がまだいいわなことを、さ
六106₄ いことばを、さきにいったから感心したの
六106₈ らブルン、ブルンというばくおんがきこえ
六106₁₁ 思って、「略。」といた。いってから、
六106₁₁ 「略。」といた。いってから、すこしふ
六107₃ 。弟が、「略。」といたので、みんなは
六107₈ ことばとがある、ということに気がついた
六108₉ 、いままで、ものをいうときに、声はな
六108₁₁ らでるかでないかということ、考えたこ
六109₂ った。では、なんという音が、はなから声
六109₆ と自分で声をだしてきくと、いかに
六109₉ ニ、「ミ」、「ム」といってみた。苦しい。
六109₁₀ つまんで、「ナ」といいながら、耳できい
六109₁₁ と、まるで「ダ」といっているようだ。弟
六110₁ にして、「はな」といっているんだと思
六110₄ しに、「なんだ」というかわりに、「ダン
六110₅ りに、「ダンダ」といってみると、いかに
六111₁ 、カキケケコ——という五十音の中で、ナ
六111₁ 中で、ナニヌネノという一ぎょうの中には
六111₃ 。ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだ
六111₆ 声をだして「ヌ」といってみた。これもは
六111₉ つまんで、「ヌ」といおうとしたら、じつ
六111₁₁ と、ナニヌネノという一ぎょうは、ぜん
六112₃ とも、マミムメモという一ぎょうの中には
六112₄ マ、「メ」、「モ」といってみたら、これら
六112₇ ら、じゅんじゅんにいってみたら、これら
六112₁₁ 。ぼくは、五十音というものは、一年生の
六113₉ わせてやろうなどという気持は、どこかへ
六114₆ んなが、「略。」といてわらいました。
六114₈ りました。わる口をいったものも、「略」
六115₁ ものも、「略。」といて感心しました。

六115₄ ばから、「略。」といました。ただしち
六115₇ ゃんは、「略。」といてにこにこしまし
六115₁₁ と、ただしちゃんがいきました。ほんとう
六116₃ なので、「略。」といますと、ただしち
六116₅ と、元氣のいい声でいきました。たろうさ
六120₁ いって、「略。」といておみせしました
六123₅ した。「略。」そういいながら、カチン、
六128₈ ながら、「略。」といて、うまくにげま
六130₅ んが、ま顔になっていうので、うさぎさん
六132₇ 「略。」「略。」といおうとすると、うさ
六134₂ たちをつきあげるといいます。「略。」
六134₉ あの角をおるなどということはできません
六141₂ のとき、「略。」という、それこそかみな
六143₆ 」と、うたいながらいきました。五ひきの
七11₅ 略。」同じ「手」ということばにも、いろ
七12₂ れは、持つところということばになります。
七12₃ 。また、「略。」というときの「手」は、
七12₇ る、竹や木のことをいうのです。「きゅう
七13₁ どうして、「手」ということばが、文字を
七13₈ で、「まいの手」といったり、「略。」と
七13₉ たり、「略。」とかいいたりします。私ど
七13₁₀ るように、「手」ということばも、さまざま
七14₁₁ 思っていることと、いうことが、ちがう
七15₃ 。これは、「腹」ということばを、いろいろ
七26₂ 会 い。「兄」なまいきいうな、はるお。」母
七36₅ 。「略。」私はそういって、どうぞぶじに
七36₁₀ 」。と、心配そうにいきました。すると、
七37₈ れかが、「略。」といたたので、みんなが
七38₅ うしろのおばさんがいってくれましたので
七39₁ の人が、「略。」といたかと思うと、い
七40₉ に、心の中でお礼をいしました。(二)
七44₇ 老人は、「略。」といて、青年のまえに

七45 6 った。「略」。そういつてから、老人にば
七45 10 な声で、「略」といって、おじぎをした
七47 6 ても、それでいいところまでは、な
七48 1 ッジボール大会」という文章が、二へんあ
七51 3 先生が、「略」といわれた。ぼくらのほ
七54 3 たびに、「略」という声がおこった。ふ
七59 2 あげられたことばということはできません
七68 7 つきりと写しだすということにほかなりま
七77 3 「それから——」といつてから、ちよつと
七80 2 「いったい、どういふことなのか、くわ
七82 6 裁判官」ふたりのいふことは、よくわか
七82 9 こで、はつきりいふがいい。「旅人」は
七83 3 くだがかった目だといふことは、どうして
七83 7 。して、びつこいふことは。「旅人」そ
七83 10 菌のぬけていふことは、なぜわか
七84 7 す。それが麦だといふことが、なぜわか
八4 3 私の中に、ピオといふ、うちじゅうの人
八4 8 んたきさんいる鳥といわれるほおじろです
八4 9 るようになったかといえは……。秋のはじ
八5 6 いました。小鳥屋といふより、ほおじろ屋
八5 6 より、ほおじろ屋といったほうがいいかも
八6 5 、あくる日、ピオといふ名がつけられまし
八8 3 のです。「略」といふのは、同じ日本の
八9 4 心なところはないといふように——庭さき
八9 6 、そのあわてかたといつたらありません。
八9 9 こんだりします。といえは、いかにもおく
八13 3 あわれに死なせたといふなげなさは、い
八16 9 す。これは、木からいふとめいわくしごく
八16 10 すが、せみの子からいへば、母親のちぶさ
八19 8 ることができなといふます。なんといふ
八19 9 といふます。なんといふ氣長なことではし
八20 7 とで、いまが夏だといふことや、よい天氣

八29 5 した。そのすがたといふ、その目といふ、
八29 5 たといふ、その目といふ、ふえの音といふ
八29 6 といふ、ふえの音といふ、申しぶんのない
八29 7 なたの名はなんといふますか。「天帝は、
八29 9 は、けんぎゅうといふものです。「略
八29 10 」。けんぎゅうといふのですか。「略
八33 2 は、なんなんなんという星がかさなりあつ
八33 7 の、ただ「遠い」といふ考えだけでは、こ
八33 9 たちは、メートルという単位を用いてきょ
八34 3 それは、「光年」という単位です。一光年
八34 4 どきよりをさしていふます。光の速度は
八35 6 まえに発した光だといふわけになります。
八36 4 しく運行しているといふことです。このき
八38 5 、そのみ知らぬ人がいふました。「略」
八38 10 だ満足ではないといふのですか。「略
八41 10 した。「略」。こういって、王さまにだき
八44 1 略」。王女は、こういって、王さまにすが
八45 2 さまは、「略」といふおふれを、おだし
八45 5 。けれども、これといふ考えはでませんで
八45 6 まの病氣をなおすといふものができまし
八45 7 た。その人は、こういふました。「略」
八50 4 自分は「幸福」だといふずに、「びんぼう」
八50 4 、「びんぼう」だといふつもりでした。そ
八53 11 「略」。と、いふましたが、そのこ
八54 8 てきて、「略」といふてくれました。黄
八61 6 略」と親あひるがいうと、ひなたたちはす
八61 11 べ」と、ひなたたちはいふた。「略」とい
八62 3 いった。「略」といふながら、親あひる
八62 7 「と、ひとりごとをいって、こしをおろし
八62 9 た年よりのあひるがいった。「略」。「略
八63 1 べ」。と、われないといふたまごはどれかね
八63 3 年よりのお客さんがいふた。「略」。「略

八64 2 たり、「略」といふたりして教えたの
八64 9 りのあひるは、そういって、どこかへいっ
八65 11 こんだ。「略」といふと、ひなたちも一
八66 8 べ」と、親あひるはいふた。「略」。そ
八67 11 の子をさ。なんといふかっこうだろう。
八68 1 の鳥が、「略」といふと、もう一わの鳥
八68 5 べ」と、親あひるがいった。「略」。年よ
八68 11 ひるは、「略」といふた。すると親あひ
八69 6 りうまくおよぐといふてもいい。大きく
八70 1 ひるは、「略」といふてかばった。みに
八70 2 なまからわる口をいわれるばかりでなく
八70 5 てきた。「略」といふて、顔をまっかに
八71 5 らまで、「略」といふた。親あひるで
八71 7 ですから、「略」といふた。あひるにはか
八72 8 「略」と、かまがいった。あひるの子は
八73 5 べ」と、その一わがいった。「略」。この
八79 2 「と、おばあさんがいった。そこで、あひ
八79 11 べ」とすると、ねこがいう。「略」。「略」
八80 4 ものたちがものをいふていふるときに、自
八81 10 「あなたは、私のいふていふことがおわ
八82 1 べ」。と「おまえさんのいふことがわからない
八82 2 べ」。わたしのことはいわれないとしても、お
八82 10 よ。いやなことをいふようだが、それは
八85 2 とんでいったのかといふことも知らなかつ
八89 9 きた。「略」。そういって、水の中にとび
八92 9 んなは、「略」といふと、年をとつたは
八93 5 、いちばん美しいといわれる身のうえにな
八94 4 い「農林1ごう」といふのだそうです。や
八94 10 ら、早くめがでるといふことです。5月
八105 1 うんかのためごだといふことでした。みん
八105 5 いねは、いもち病といふ病氣にかかったの
八109 8 ら、これは平年作といふことになります。

九七二 ここに、「月」という一つのことばがあ
 九七五 ます。この「月」ということばに、「水」
 九七五 ことばに、「水」ということばをそえたら
 九七六 ばをそえたら、どういふけしきを思いだし
 九八一 らに、「虫の声」ということばを加えたら
 九八七 させます。「風」ということばに、ほかの
 九八六 だすこともできるという話がおもしろかつ
 九八九 音をたたいた。風といえは、「そよそよ」
 九八九 ビュビュウ」とかいうことばであらわし
 九八九 たいこであらわすというのだからおもしろ
 九八五 いこをたたく。音というものは、情景をあ
 九八六 てはなしたものだといふことがわかりまし
 九八六 までいくのがあるといふことです。日本の
 九八六 ランネルスドルフといふところから、はじ
 九八六 ました。「略」といふ運動に全國民が、
 九八六 れました。いく千といふつばめたちは、人
 九八六 た。また、飛行機といふ文明の利器が、こ
 九八六 ごとにつかわれたといふことを、たいへん
 九八六 ありがたいことだといわすにはいられませ
 九八六 じ家に帰ってくるといわれています。つま
 九八六 巢へもどってくるといふのです。近年にな
 九八六 きつと、「略」といふ喜びます。わけ
 九八六 ないといけないといわれて、ほねをおり
 九八六 します。ポキンといふ音がして、ガサガ
 九八六 か、「略」。などいわれたが、ぼくはが
 九八六 葉を「略」といふてひろい集めては
 九八六 らの色がよいとかいふてながめています
 九八六 を向けるようにといわれました。ぼくは
 九八六 、そのめんどうだといふ裁判のようすなど
 九八六 、にやつとわらっていました。「略」。
 九八六 がつて、「略」といいました。すると、
 九八六 いて、かなしそうにいました。いろいろ

九七二 なる、「略」といいました。男は、喜
 九七五 した。「四年生といふのは、小学校の四
 九七五 五、にたにたわらっていました。「略」。
 九七五 なる、「略」といいました。そのとき
 九七五 て、腹をつきだしていました。「略」。
 九七五 んぐりで、その数といつたら、三百でもき
 九七五 ワアとみんななにかいっているのです。「
 九七五 して、もうワアワアいっていました。ぎょ
 九七五 どもむりにいばつていますと、どんぐり
 九七五 だめです。なんといいつたつて、頭のど
 九七五 がヤガヤ、ヤガヤいって、なにがなんだ
 九七五 んとひげをひねつていました。「略」。
 九七五 んぐりどもが口々にいきました。「略」。
 九七五 だめです。なんといいつたつて、頭のど
 九七五 が、ひげをひねつていました。「略」。
 九七五 ねこは、なるほどといふようにうなずいて
 九七五 ねこは、「略」といいました。「略」。
 九七五 「略」。といひますと、やまねこ
 九七五 ねこは、まだなにかいいたそうに、しばら
 九七五 いちろうはわらっていました。「略」。
 九七五 かにもさんねんだといふふに、しばらく
 九七五 、やつとあきらめていきました。「略」。
 九七五 くてまよふかたといふふに、口早にぎ
 九七五 、口早にぎよしやにいました。「略」。
 九七五 分あくびをしながらいいました。「略」。
 九七五 「略」。やまねこがいきました。ふたりは
 九七五 、「やまねこ拜」といふはきは、もうき
 九七五 「と書いてもいいといえよよかったと、い
 九七五 います。むかしといつても大むかしのこ
 九七五 しで貝つかに着くといふところで、先生は
 九七五 こをほると、そういうものがみつかるこ

九八二 口々にこんなことをいうのを、先生は、耳
 九八二 じょうもん土器といつて、貝つかからで
 九八二 じょうもん土器といふ種類で、こんなた
 九八二 略」と、みんながいうと、「略」と、
 九八二 ら追いたてるようにいわれた。百五十メー
 九八二 ぼくが、「略」といひました。すると、のだ
 九八二 先生が、「略」といひました。ぼくたち三
 九八二 あげて、「略」といひました。ぼくたち三
 九八二 るすがたは、なんとという勇ましきであろ
 九八二 に飲んでから、私にいった。「略」。水は
 九八二 ら、やめて帰ろうといった。しかし茶人は
 九八二 てんりゆうきょうといふ景色で名高いとこ
 九八二 「茶人はつれの人といった。まつ川がてん
 九八二 、心から楽しんだといふことである。十
 九八二 な。この二三といふものは、ちつとも
 九八二 つかけて、ブンブンいっているところす
 九八二 つぶつひとりごとをいひながら、くもは、
 九八二 、また、パタパタといふ羽音がきこえてき
 九八二 、このおかあさんといふことばを、長いこ
 九八二 ちよに、「略」といひました。きゆうにな
 九八二 「と、ひとりごとをいひました。くもは、
 九八二 「くもは、なんとといつて返事をしてい
 九八二 て困りました。そういういなかへは、め
 九八二 ができました。そういう子どもの中には、
 九八二 とめて、「略」といひながら、おとうさ
 九八二 うど、プラタナスといふ木の葉が黄色くな
 九八二 町には、ボンナフといふ石の橋があつて、
 九八二 あつて、イエヌといふ川が、その下を流
 九八二 、センチエヌといふお寺の高いとうも
 九八二 とうさんをみてさういひました。「略」。
 九八二 略」。おとうさんがいひました。それから
 九八二 まらないと、わるくいう旅人もあります

13 12 のも、一つは、そういうかわいらしい子ども
 14 2 らです。ビエンヌという川の岸には、手ぬ
 15 6 さらにこんなことをいいました。「略。」
 16 1 思いうかべるようにいいました。フランス
 16 9 「と、おとうさんがいつてきかせました。
 17 4 会。『略。』」なんていつたつて、だれもわ
 17 6 会。ありません。そういう遠い國へいくと、
 20 7 暗室。「略。」という先生の声とともに
 29 2 のがこうなつたかということ、考えてし
 31 6 かげで人のわる口をいわないようにしたい
 31 12 らいどうでもいいうような、無責任な
 32 4 があつての全体、というつなかりをわすれ
 32 10 村の人々から、こういつてあざけられた。
 33 11 る。人間の衣食住というものは、みんなた
 34 4 ければならない、というのである。佐吉が
 35 12 えぬき、これならという一台の機械を作り
 36 11 「略。」「略。」といつてはめたたえた。
 41 1 めは、「略。」こういつて、失望にせずむ
 45 10 まがいものであるといつた。しかし、世界
 46 4 いへん喜んで、こういつた。「略。」六
 47 5 つになる——まるでいうと二年三月にな
 48 2 れは、足がおそいというためばかりでなく
 48 8 めしに、私は、妹のいつていることばを、
 50 5 ワンワンチャン」といつたのは、そのため
 50 7 ヨナメテルワ」といつて、私に知らせた
 50 10 なかに「略。」というのです。そのとき
 50 12 「と、ひとりごとをいいました。母がこし
 51 7 「イライノ」といつて、いぬにたずね
 51 10 「オハナシシテ」という心らしいのです。
 52 10 、おとなびたことをいいました。門からも
 53 2 ヤンネテルワ」といつて、いぬが
 53 4 シタッタシタ」といつて喜びました。「

53 7 ずして、手に持つといひます。かたにかけ
 53 8 だと、ませたことをいつて、歩きだしまし
 57 2 の子は、「略。」といつて喜びました。
 59 2 私が、「略。」といつて、学校から帰る
 60 3 さんに、「略。」といつたら、おかあさん
 60 8 。私も、「略。」といつて、月の方へ手を
 60 10 んは、「略。」といつた。 たけのこ
 62 8 みなさんは、能というものをみたことが
 63 11 は、めんの藝術ともいわれ、ヨーロッパの
 64 7 いっしょに、狂言というものが演じられま
 64 10 どで、できているといつてもよく、それを
 65 6 おそれず、そうかといつて、なにをしても
 66 4 じゃ、次郎かじゃというふたりの下男に、
 66 5 から、きびしい声でいひました。「略。」
 66 6 会。には、『ぶす』といつて、おそろしいど
 66 8 会。たちまち死ぬといわれるくらいだ。ふ
 67 5 つといつてみようといふことになりました
 68 11 べ。と、ふるえ声でいひながら、いつでも
 72 2 はらい、「略。」といひながら立ちあがり
 73 4 おいおいなきながらいひました。「略。」
 11 6 10 会。ックスが大声でいうだろう。「略。」
 11 8 8 会。んとくにきみのいうとおりだ。ぼくら
 11 9 4 会。「略。」「そういわれて、自信をもつ
 11 9 4 会。、よしやろうといふことができたなら、
 11 10 7 会。略。」「さあというときには、ひとりで
 11 10 9 会。ちろんさ。そういう男には、ぼくがな
 11 19 1 会。川縣のかやま村といつて、さかわ川にそ
 11 19 3 に、ぎんえもんという人がいました。働
 11 19 5 もに、りえもんという人がありました。働
 11 20 3 ていました。そういうときに、金次郎が
 11 21 9 。しかし、なんといつても子どもです。
 11 22 5 らじをさしだしていひました。「略。」

11 23 10 「略。」元氣よくいつた母親も、子ども
 11 24 10 郎が、「略。」というのに、その晩のう
 11 25 12 それは「大学」といつて、かん文で書い
 11 27 8 中には、正月だといふので、そのうえに
 11 27 10 ずかな金がないといふことはいえませ
 11 45 2 略。」と、大声でいひました。弟は、さ
 11 45 11 いのことだからといつて、ごまかさな
 11 49 11 らは、北海道だといひます。さつぽろに
 11 53 8 んは、「略。」といつた。そのことばを
 11 54 9 私は、「略。」といつた、しゃしようさ
 11 59 2 づつ、「略。」といふと、父はにこにこ
 11 59 5 会。えた。「なんといふことばですか。」
 11 59 6 会。べ。「はい」といふことばと、「いい
 11 59 12 会。、いいえ」といふことばだ。「略
 11 59 12 略。」と、正男がいうと、一雄はすぐ賛
 11 61 5 会。した。その近道といふのは、田のあぜ道
 11 62 2 会。からあぶないといつておいた、あの橋
 11 62 5 会。と、よわ虫だといつてわらうのです。
 11 62 8 会。よわ虫だ。人のいうことに「いいえ
 11 62 10 会。、いいえ」といふことばはいにく
 11 63 10 会。おに「はい」といひなかつたのだね。
 11 65 2 会。た。少年の父親といふのは、去年、しご
 11 65 2 会。れていくようにといひました。「略。」
 11 65 3 会。んの名はなんといふの。」と、看護人
 11 65 6 会。ながら、その名をいひました。しかし看
 11 65 7 会。し看護人は、そういう名を思ひだせませ
 11 66 7 会。うに、「略。」といひました。「略。」
 11 66 12 会。ただ、「略。」といつただけでした。ふ
 11 68 10 会。けて、「略。」といひました。(二)
 11 70 3 会。ほかには、どこといつて父親らしいとこ
 11 70 6 会。略。」と、少年はいひました。「略。」
 11 70 10 会。んとかひとこといつてください。」け

十二 72 9 看護婦はやさしくいきました。「略」。
 十二 73 2 ほかになんにもいわずにいってしま
 十二 74 4 べ」と、看護婦がいきました。医者は、
 十二 75 1 考えてから、こういきました。「略」。
 十二 76 2 が、ほかになにといっていることもでき
 十二 77 5 そうして、なにかいおうとでもするよう
 十二 77 9 ったように思うといいました。夕がた、
 十二 79 10 まったくだめだといわんばかりに頭をふ
 十二 80 6 た、なにかものをいおうとでもしている
 十二 80 12 んで、「略」といって力づけました。
 十二 81 2 うど、少年がそういうほかない希望をも
 十二 81 5 がて、「略」という声がきこえました
 十二 82 3 「略」。男はそういて、少年の方へと
 十二 83 2 ほおずりしてからいきました。「略」。
 十二 84 5 「とだけ、やっといきました。「略」。
 十二 87 1 父親はチチロにいきました。「略」。
 十二 87 4 、看護婦が小声でいきました。「略」。
 十二 87 8 略」。父親はそういてでいきました
 十二 88 9 者は、「略」といいました。そこで、
 十二 89 7 略」。と、医者はいきました。少年は病
 十二 90 8 略」。と、医者はいきました。「略」。
 十二 91 4 少年に渡しながらいきました。「略」。
 十二 91 9 略」。と、少年はいつて、一方の手で花
 十二 92 2 た。「略」。そういつて、すみれをベッ
 十二 92 10 いて、「略」といいて、名をなんと呼
 十二 93 1 た。「略」。そういつて、少年は、その
 十二 95 2 男が、「略」といいてあざわらいまし
 十二 95 7 とり、「略」といいました。人々は、
 十二 95 11 の苦もなく立てていきました。「略」。
 十二 96 9 た。「略」。こういつて戸をたたきます
 十二 97 12 なきぞ悲しき」という古歌に、少女の思
 十二 98 7 した。「略」といいて、母のそばへか

十二 9 9 母は、「略」といいました。ガラス
 十二 11 7 、ベスタロッテという人でした。書物
 十二 11 11 ひとり、書物というものはなにかすば
 十二 12 4 たべってしまったということです。一
 十二 14 12 べ」。ひとりごとをいながら文雄が、そ
 十二 18 5 くら、ピッピッという音がしました。は
 十二 18 10 くら、ピッピッという音がする。みんな
 十二 20 8 いる文雄さんがいつてましたよ。どう
 十二 23 3 兄は氣のどくだといいて、いつもえんり
 十二 23 6 声をあげていっているといいて、いすぎで
 十二 23 8 父がまえからそういうときのことを考え
 十二 24 2 。ふたりのまことというのは、父母にとっ
 十二 24 5 んは、二つ、満でいえば一年三ヶ月で、
 十二 25 1 んは、二つ、満でいえば一年三ヶ月で、
 十二 27 6 にはいつていっているといいて、すこしも
 十二 27 8 きると、だれかがいつたことを思いだし
 十二 27 11 えて、「略」といいて、民ちゃんに持
 十二 28 2 んはうれしそうにいつて、その包みをと
 十二 29 11 べ」。わたしはそういいながら、このごろ
 十二 30 2 って、「略」といいて、おとな
 十二 30 6 んは、そのことをいって、おとな
 十二 33 5 手に、「人形」という文字をつづられま
 十二 33 11 、指さきで人形という字をつづりなが
 十二 34 10 いて、「人形」という字をつづりなが
 十二 35 12 とりのぞかれたという満足を覚えたばか
 十二 37 1 は早く、「水」という字を書いてくださ
 十二 37 5 る心のはたらきといたようなあるふし
 十二 39 7 ヘレン・ケラーというアメリカの女の
 十二 39 10 な文章が書けるということは、なんとす
 十二 40 10 べ」。に「ことば」というものをわからせる
 十二 44 6 本には、文楽といいて、りっぱな人形
 十二 44 11 人形つかいといわれる人がいて、も

十二 45 4 人形はものをいわないが、そのかわ
 十二 45 11 あるとも。いまいつた文楽は手でつか
 十二 48 4 平やわがままをいわないからね。「へ
 十二 55 7 いい伝えられたというだけのもののほう
 十二 55 9 いるだけで、そういう人たちのなくなる
 十二 56 2 きのこしておくといいことは、ただおも
 十二 56 8 島原にみそ五郎という大きな男がいた。
 十二 57 2 ある湯島であるという。九十九の石だ
 十二 57 4 に、神山、本山という二つの山がある。
 十二 58 2 をくわせてやるというのであった。おに
 十二 58 10 ろがいま一だんというところで、いちば
 十二 59 10 の家の田植えだというので、里のおとめ
 十二 60 7 もうあとわずかというところで、日はは
 十二 61 7 に、家具の岩屋というのがある。昔、あ
 十二 61 9 った。それからというものは、いり用の
 十二 62 5 くれなくなつたという。十和田湖、十
 十二 62 8 いた。名を八郎といた。ある日のこと
 十二 63 11 田湖のおこりだということである。七
 十二 70 2 の近くに、曾良という人が住んでいまし
 十二 70 9 いるのがすきだといいて、家もせまいの
 十二 78 6 語で、「略」といいました。私は、い
 十二 80 7 は、「略」。いうまでもなく、日本
 十二 80 8 に「ジャパン」ということばに力をいれ
 十二 80 11 には、「略」という色があらわれてい
 十二 81 1 いました。日本という國をみたこともな
 十二 87 5 父が、「略」といいて。庭で植え木の手
 十二 87 6 している父にこういわれたら、バケツか
 十二 87 8 をあげた父にこういわれたら、水さしに
 十二 87 10 している父にこういわれたら、手おけに
 十二 88 4 わる。「略」という簡単なことばでも
 十二 88 6 でも、相手の人のいうことばのわけをよ
 十二 88 12 には、相手の人のいうことばをよ

十二 八十九 「ありがとう」というあいさつにしても
 十二 八十八 謝の心持をこめていうときと、ただとお
 十二 八十七 のあいさつとしていうときとは、いい
 十二 八十六 食事のたびごとにいう「いただきます」
 十二 八十五 ら、ただ口さきでいうだけのことになる
 十二 八十四 るその人の面影ということもできよう。
 十二 八十三 〽。太郎が、こういう短い文を書いた。
 十二 八十二 人な「遠足」という同じ文題で書いて
 十二 八十一 ても、「略」といい、「遠足」という
 十二 八〇 いい、「遠足」ということばは、だれに
 十二 七十九 「赤とんぼ」という文字をとおして、
 十二 七八 リカのモールズという学者が、東京の大
 十二 七十七 ようもん式土器といふのがあります。そ
 十二 七十六 れ、やよい式土器といふのがあります。そ
 十二 七十五 、やよい式土器といふ名まえがつけられ
 十二 七十四 人形は、はにわといつて古代人のほかか
 十二 七十三 す。夢殿の観音といつて、いまでも、多
 十二 七十二 作られた平等院といふ建物の中にある名
 十二 七十一 す。ほうおう堂といふ名まえは、屋根の
 十二 七十 いているからだといわれていますが、屋
 十二 六十九 にも、ほうおうといふ鳥の美しいすがた
 十二 六十八 れは、鳥羽僧正といふ人がかいた動物絵
 十二 六十七 ったのは運慶だといわれています。ふた
 十二 六十六 物語はイソップといふ人が書いたお話で
 十二 六十五 なです。まき絵といふのは、うるしをぬ
 十二 六十四 。この絵は北斎といふ江戸時代の人のか
 十二 六十三 もので、浮世絵といふです。この浮世絵
 十二 六十二 ヘルアナトミアといふ人体のことを絵い
 十二 六十一 れは、民主主義といふことばをほんとう
 十二 六十 ことばを生かすといふことは、身に行う
 十二 五十九 とは、身に行うといふことです。こうし
 十三 七六 ああ、季節のこういふのどかなとき、こ

十三 七十七 どのかなとき、こういふしずかな午前にあ
 十三 七十八 のを科学的知識という。深い、正しい知
 十三 七十九 との関係についていうと、おしべのかふ
 十三 八〇 の中がみだれるといったたり、でんせん病
 十三 八十一 星が出たからだといったたり、あるいは、
 十三 八十二 不幸があるなどといった。今日でも、ま
 十三 八十三 いとかわるいとかいい、名まえの字画を
 十三 八十四 。しかし、よいといった方角へ移って困
 十三 八十五 あれば、わるいといった方角へこして、
 十三 八十六 はまらぬことは、いうまでもない。日本
 十三 八十七 ずるのを、迷信という。一つのことと他
 十三 八十八 思われます。こういふうぶな考えかたが
 十三 八十九 ていて動かないという、いわゆる天動説
 十三 九〇 の星の一つだ、ということもわかりまし
 十三 九一 る星の一つだ、ということもわかりまし
 十三 九二 のコペルニクスという人です。しばらく
 十三 九三 ツ人でケプラーという人が出ました。こ
 十三 九四 したりして、そういう星——これをわく
 十三 九五 —これをわく星といふますが——の空に
 十三 九六 にいるものだ、ということを見えしまし
 十三 九七 まれたガリレオという学者があらまし
 十三 九八 、コペルニクスのいったとおり、天は動
 十三 九九 地球が動くのだということ、明らかに
 十四 〇 した。地は動くといつても、それは一種
 十四 一 りません。自轉といつて、一晝夜に一ど
 十四 二 す。また、公轉といつて、自轉をしながら
 十四 三 てはならない、といいました。ガリレオ
 十四 四 いではならぬといわれました。ガリレ
 十四 五 やまりであつたといふことにして、ゆる
 十四 六 てしまったのかという、そんなことは
 十四 七 す。世界の樂園といわれるこの國も、千
 十四 八 とホルスタインという、作物のよくでき
 十四 九 國の建てなおしという大事業をなしとげ

十三 二一八 みたらどうか、ということでありました
 十三 二二八 〇 まえがくれるといった材木を、さあ早
 十三 二三九 ちは、「略」といって、かれにせまり
 十三 二四〇 父に、「略」といいました。わかいダ
 十三 二四一 さまたげになるといふ、植物学上の事実
 十三 二四二 いる。ホートンというの、小路のこと
 十三 二四三 んでいる。遊ぶといつても、べつに、お
 十三 二四四 ヤン、ジャツ」といふように聞える。こ
 十三 二四五 とか、西遊記とかいふ、中國のむかし
 十三 二四六 たり、せりふをいふたり、はやしをい
 十三 二四七 〽。こんなことをいふて通る。アイスク
 十三 二四八 ひびくが、なんといつても、いちばん耳
 十三 二四九 美しさは、なんといつたらよからう。と
 十三 二五〇 れる。文字の國といわれるのも、いわれ
 十三 二五一 〽……じらさないでいって……え、おと
 十三 二五二 〇 は、ぜいたくといふもんだ。それに、
 十三 二五三 ばいではないかといふと、そうではなく
 十三 二五四 、あいてがなにかいっているわけです。
 十三 二五五 ません。あいてのいうことを聞いて、そ
 十三 二五六 郎くんのことばをいい、そうして、三郎
 十三 二五七 のラファエルという画家のかいたもの
 十三 二五八 の「マドンナ」といわれています。これ
 十三 二五九 さんがマリアだといふことは、すぐにわ
 十三 二六〇 た。「略」といって、喜んでむかえ
 十三 二六一 すと、「略」といって、一まいの絵を
 十三 二六二 たいにちがうといつてもいいな。」「へ
 十三 二六三 のフロレンスという町の絵画館にかざ
 十三 二六四 は、ウルピノというところで生まれ、
 十三 二六五 ンジェロだのといふ天才の集まってい
 十三 二六六 〇 そこにかいたといふ小さな絵だが、じ
 十三 二六七 おじさんは、そういうながら、目を細く
 十三 二六八 あさんの喜びという心持が、よく出て

十三58 12 「おじさんはそういつて、同じひきだし
 十三59 3 会 のマドンナ」といわれている。これは
 十三59 7 会 じさん。なんていうか、ただのおかあ
 十三59 8 会 のおかあさんという感じが、よく出て
 十三60 12 会 て、うまさからいうと、ラファエルの
 十三61 3 会 ろうね。なんといつても、二十二か三
 十四5 5 会 るのです。それというのも、フィリップ
 十四5 12 市役所のガス係という職についたとき、
 十四7 7 会 が、おこったというにすぎないのです
 十四8 8 会 いらつしやるといふことです。なにも
 十四9 2 会 いる、なぜかといえは、妹にしても、
 十四11 11 会 われるだろうといふことでしたが、も
 十四12 6 会 つかっているといふのが教えてくれた
 十四15 2 会 子どもがあるといふことをお考えにな
 十四16 11 会 る、なにかそういうものがご入用の
 十四18 6 会 うに、「略。」といった。すると、窓ガ
 十四18 9 会 んが、「略。」といった。これを聞いて
 十四19 1 会 本語で、なんといつていたんでしよう
 十四21 1 会 略。」「略。」といつて、みんながおど
 十四21 5 会 か、「略。」とかいいながら、先生のお
 十四22 6 会 さもふしぎそうにいうと、先生は、「略
 十四24 1 会 ンボジア語だといわれている。そのほ
 十四24 12 会 に、「ラジオ」といふことがはいる、
 十四25 1 会 に、「タバコ」といふことが、傳えら
 十四25 2 会 が、傳えられたといふことがわかった。
 十四25 4 会 よになつていふといふことは、あたりま
 十四25 8 会 んじよう」などといふお話が、つくれそ
 十四26 9 会 とか、ソナタとかいふことは、西洋音
 十四26 11 会 工作の時間によくいう、デッサンとか、
 十四26 12 会 とか、バックとかいふことが、西洋の
 十四27 1 会 わつてきたのだといふことが想像される
 十四27 5 会 「略。」などといふときの漢語は、た

十四28 5 会 、外來語辞典といふものもあるから、
 十四29 3 会 もらいたいなどといふと、どこかにしま
 十四29 4 会 れはけつしてそういうものではありませ
 十四29 10 会 かつたのだらうといふ人もありますが、
 十四31 4 会 ことでした。そういうちつぽけな考えで
 十四32 2 会 には、「略。」といふ人があるかもしれ
 十四32 11 会 っ生きていふといつてもいいすぎでは
 十四33 4 会 系は、ぎんが系といわれる星の大きな集
 十四33 7 会 。このぎんが系といふのは、地球をとり
 十四33 11 会 の世界の全部かといふと、なかなかそう
 十四34 3 会 ると、うちゅうといふものは、どこまで
 十四34 7 会 よそ二十億光年といふことです。二十億
 十四35 3 会 し、それだからといつて、すこしかな
 十四35 7 会 えば、人間の力といふものは、うちゅう
 十四35 8 会 ばらしいものだといふことができるでし
 十四35 9 会 を。まあ、なんといふしげさでしやう
 十四35 10 会 でしやう。なんといふ美しさでしやう。
 十四35 10 会 でしょう。なんといふおそかなすがた
 十四36 10 会 ら、星をつかめといわれ、そのことばに
 十四36 11 会 い感動を受けたといふことです。夫人は
 十四37 7 会 、なんであるかといふことも、しぜんに
 十四44 11 会 で、ローマン号といふ小さな汽船が、十
 十四47 2 会 ている人は、どういふ人かわかりませ
 十四47 10 会 った中で、なんといふおちついた、また
 十四47 11 会 いた、またなんといふほがらかな人だろ
 十四48 3 会 いものなら、こういふ美しい歌に送られ
 十四49 11 会 の歌を歌つた人といふべきです。さて、
 十四51 6 会 に、「略。」といふ話しあいをやつて
 十四53 1 会 ち花のものだといふことはうたがいあ
 十四53 2 会 どは、葉さん、いつてごらんさい。
 十四53 7 会 実になつたかといふことは、ごぞんじ
 十四55 9 会 つるは、しづかにいいました。「略。」

十四57 3 会 す。「つるがこういつたとき、高い声で
 十四57 5 会 土、はちたちだといふことがわかりまし
 十四57 7 会 かつてなことをいつていましたね。あ
 十四58 1 会 、養分のことをいつていらつしやいま
 十四58 3 会 私ですよ。そういうことを考えてみた
 十四58 5 会 略。」水が続いていました。「略。」
 十四59 9 会 いたずらなはちがいました。「略。」
 十四60 2 会 ぼくのものだといつてもいいのです。
 十四60 5 会 がつてなことはないませんよ。あなた
 十四60 11 会 ばらくして、根がいました。「略。」
 十四61 6 会 せんね。公平にいつて、みんなのもの
 十四61 11 会 います。これは、いうまでもなく、熱い
 十四63 1 会 ので、もし、そういうしんがなかつたら
 十四64 2 会 やすくできないといふことが、学者の研
 十四64 3 会 たあとには、いまいつた、ちりのような
 十四64 8 会 くあります。そういうときに、よく氣を
 十四67 3 会 くなります。そういう地方のまわりに、
 十四68 2 会 ロとか八キロとかいふのですから、そう
 十四68 9 会 のですから、そういう、いろいろなかわ
 十四69 1 会 できたは、いまいつたようなばあいば
 十四69 5 会 にたものであるといふ一つの例に、らい
 十四71 4 会 。だいたい、そういうふうなじゅんかん
 十四71 12 会 ができます。そういう部分からは、ひえ
 十四72 9 会 のために、さきにいつたようなもようが
 十四73 10 会 がなんであるかといふことは、まだ、あ
 十四74 3 会 が、どうなるかといふことは、ただ、茶
 十四74 8 会 流れがおこるかといふようなことにも関
 十四75 4 会 のです。とつ風といふものがそれです。
 十四77 4 会 木もと竹うら」といふことを教えて
 十四77 8 会 から割るがいいといふ教えました。私は
 十四79 10 会 木もと竹うら」といふ簡単なことを、知

十四 79 11 「二三が四」という算数の九九と、に
 十四 80 2 ると、なん百年という前からつくられて
 十四 83 2 一つは「雪國」というのであり、もう一
 十四 83 3 う一つは「雪」というのであった。「雪
 十四 83 10 である。「雪」というのは、雪の景色を
 十四 85 3 ることができるのである。「略」
 十四 85 8 紙」とは、うまくいったものだ。このよ
 十四 88 10 いものは、なんといっても、春さきの雪
 十四 91 11 のつめたいことといったらなかった。自
 十四 92 3 おみそかの晩だというのに、その子は、
 十四 95 2 た。まあ、なんといううれしいことだろ
 十四 96 8 と、まあ、なんというふしぎなことだろ
 十四 102 5 と、まあ、なんというふしぎなことだろ
 十五 6 3 くらみどり子にいうさようなら 家を
 十五 19 3 、ユングフラウという美しい山がありま
 十五 23 1 わしが、サアツという羽音をたてて、空
 十五 23 2 ます。「略」という声をたてて、みん
 十五 27 2 めに「略」といわずにはいられませ
 十五 27 11 上で「略」といっている人々の目に
 十五 28 1 き、鳥はサアツという羽音をさせたか
 十五 32 2 から、ガヤガヤという人声が聞えてきま
 十五 32 8 いに「略」という鉄ぼうの音がした
 十五 33 7 それはいまこでいうまでもありません
 十五 35 7 たものが、文字というものの起りとなつ
 十五 36 2 のようになったといわれている。漢字
 十五 36 4 字 漢字は、いまいったように、はじめ
 十五 36 7 でたとえば、数という形のないものを表
 十五 36 8 うえ「した」という考えを表わすのに
 十五 36 10 「上」「下」とかいう字の起りである。
 十五 37 3 か、「すえ」とかいう考えを表わすこと
 十五 37 4 「本」「末」とかいう字はそれである。
 十五 37 10 「シ・ハン」という音をしめしたりし

十五 37 12 海を「カイ」というようにもとの中國
 十五 38 5 みかたを「音」といい、日本のことばに
 十五 38 6 る読みかたを訓という。それで、たいて
 十五 39 9 「に」は「仁」というように、漢字の全
 十五 41 1 イマ字は、まえにいったように、その大
 十五 41 6 った。ローマ字といわれるのもそのため
 十五 44 11 私にはハギンスというのですが、じつ
 十五 45 1 さんがね」といって、すすめられた
 十五 47 8 ん主は、お庭焼といって、自分の家でつ
 十五 47 10 「色なべしま」といわれる、色のはいっ
 十五 47 11 んすぐれていたという。このお庭焼のた
 十五 49 11 買うことがあるというのを聞いて、作
 十五 51 3 ヤパンタイムスという新聞も発行した。
 十五 51 3 た。しかしなんといっても、日本の古い
 十五 51 4 術工藝史十二巻という大作を著わした。
 十五 53 11 トになにごとかをいいながらうたせてい
 十五 54 3 きた私は、なんというしあわせ者であろ
 十五 54 7 ルダン博士からいつてきている日本の
 十五 55 11 きで、鹿鳴館というクラブがあり、お
 十五 56 9 生第一号とでもいおうか、私をはじめ
 十五 57 9 らはアメリカといつて、たがいに向か
 十五 58 3 日本語の先生というわけだが、かれこ
 十五 58 10 ある——新島襄という名を耳にした私は
 十五 61 2 んは、「略」といって私をかわいがつ
 十五 62 7 した。「略」といって、おじさんはお
 十五 62 8 の、おばさんといつてごらん。」小さ
 十五 62 12 くのはいやだといつてののですよ。
 十五 65 8 樽で目についたといつて、車のついたみ
 十五 68 1 、これでたけたというように、しゅもく
 十五 68 11 だろくに——」といながら、主なき書
 十五 69 7 とつていられたという大きなつくえの上
 十五 71 4 なつたら——」といつて、おばさんは声

十五 71 12 んは、「略」といって、私をひきよせ
 十五 72 1 「新島襄之墓」という五つの文字をきざ
 十五 73 6 士は、「略」といって、日記をくりひ
 十五 74 6 とから生まれたというだけのことで、そ
 十五 74 7 れねばならないという理由はすこしもな
 十五 74 12 平和、人間平等という理念が、ここから
 十五 75 8 つを傳えてくれといながら、自動車の
 十五 76 10 日本語の一つだといわれた。五 その
 十五 79 5 ると信じます。といひますのは、私は、
 十五 79 8 分の國を愛するといふことを学んでいる
 十五 85 2 さとうがしを。いつてみれば、すばら
 十五 85 7 ヤッキヤツ」といっている。わらいこ
 十五 86 1 そうによぼうというのだろう。それを
 十五 86 7 しましうよ。人というものは、自分のし
 十五 88 1 にも知らないという幸福」で、みんな
 十五 88 2 もわからないという幸福」は、こうも
 十五 88 4 んにもしないという幸福」と、『必要
 十五 88 4 以上になむるという幸福」でね、ふた
 十五 92 9 チロー。来いといふのに聞えないのか
 十五 92 10 、だれが行けといつた。そこでなにを
 十五 93 2 まいきなことをいうな。なにかおまえ
 十五 93 4 、「いぬぶつぶついいながら、テーブル
 十五 94 4 チルは、「光」のいうように、ダイヤモ
 十五 98 3 子どもの幸福というものは、地の上で
 十五 105 11 の。まず第一にいかなければならない
 十五 106 7 ですから。そういうわけで、あれにう
 十五 107 7 も、それを妹にいつてはいけません。
 十五 110 2 。なにが幸福といつて、これほどの幸
 十五 112 5 いのさ。人間というものは、目を閉じ
 十五 115 1 っから、どういふように私を見なけ
 十五 121 5 がつた。あれもいいたい、これもいい
 十五 121 5 いいたい、これもいいたいと思った。読

いえ「家」(名) 117 いえ 家

一253 たねまきする人、いえをたてる人、さかなをとる人、

三792 すなで、トンネルや、いどや、家や、道をこしらえています。

三962 にわの 花も、空の 雲も、とおい 山も、ちかい 家も、かくことが できます。

三102 その うつくしさは たとえようも なく、家の すみずみまで 光りがやくほどなので、「かぐやひめ」という 名をつけました。

三103 まいにち まいばん あつまって きて、おじいさんの 家の まわりを とりまきました。

三107 家にはいつて くらんになると、光の中にきれいな おひめさまが すわっています。

三111 おじいさんの 家の まわりは、弓矢をもった 人たちで、いくえにも とりかこまれ、

四113 うらしまは、父や 母の ことを 思いだして、きゆうに 家へ かえりたく になりました。

五205 なしの 花のきれいに さいている 家に、はいりました。

五207 私は、その 家のげんかんにおかれました。

五227 いちろうさんが 家に帰ると、おかあさんが、げんかんにもかえに できました。

五551 食事をすませてから、またちよつと、家のまえに でてみました。

五654 ふたりは、ふるい 小さな 家に 住んでいました。

五6811 もう 一ど金の さかなの ところへ いて、家を もらって おいで。

五695 うちのおばあさんは、家がほしいというのです。

五698 家はちゃんと できて いますから。

五6910 おじいさんが 帰ると、りっぱな 家が たって いました。

五773みると、まえに住んでいた、ふるい 小さな 家が たって いました。

五846 いとうくんは、海岸のおじいさんの家で、海の 作文を書くんだったって、よろこんで いました。

六261 かみて 半分は ありの いえの中、しもて 半分は ねと になって います。

六555 それから、三人は わかれて、それぞれ 家へ 帰りました。

六693 一ばん 遠くから 通っている 子どもの 名や 家の 場所も 書きました。

六10010 それは、ここから 百メートルも はなれて いる、向こうの 家の 屋根であつた。

六1042 向こうの 家の せんたく物も みえますよ。

七218 (三) きしもとくんの 家。

七357 家を でるとき、おかあさんに、「へ略。」と うけあつて、さぶろうをつれて きたのでした。

七565 家と 家との あいだに、ほそ 長く 光つて います。

七565 家と 家との あいだに、中でも 茶の まほど、すきな、安心な ところはない という ように――

八108 小さな 家で、小さな かつこうを して いながら、毎日 なにか かつたことを して だしては、

八498 「幸福」が、いろいろ な 家へ たずねて いきます。

八499 この 家を たずねても、みんな 喜んで つかえて くれる ちがひ ありません。

八509 この 「幸福」が、いろいろ な 家を たずねて いきますと、いぬの かつて ある 家がありました。

八5010 いぬの かつて ある 家がありました。

八5010 その 家の まえに いて、「幸福」が 立ちました。

八511 その 家の 人は、「幸福」が きたとは 知りませんから、

八512 まずしい こじきのような ものが 家の まえに いるのを見て、「へ略。」と たずねました。

八517 「へ略。」と、その 家の 人は、戸を ピシャンと して しまいました。

八518 おまけに、その 家にかつて ある いぬが、おそろしい 声で 追いたてる ように 鳴きました。

八5111 こんどは、にわ 通りの 家の まえへ いて 立ちました。

八521 その 家の 人も、「幸福」が きたとは 知らなかったと みて、

八522 いやなものでも 家の まえに 立つた ように 顔を しかめて、

八529 「へ略。」と、その 家の 人は ふかいため息を つきました。

八534 「へ略。」と、その 家の にわ 通りは、用心 ぶかい 声を だして 鳴きました。

八536 「幸福」は また、その 家でも ごめんを いう りました。

八537 こんどは、うさぎの かつて ある 家の まえへ いて 立ちました。

八5311 その 家の 人が でてみると、

八542 その 家の 人も 「幸福」が きたとは 知らないうで でしたが、

八553 「幸福」には、その 家の 人の 心が よく わかりました。

八556 それを うれしく 思って、その 家へ、幸福を わけて おいて きました。

九208 さいわいな ことに、その とき、あいて いた

家が一けんあったので、

九二〇 協会では、おおいそぎで、その家をつばめたちのためにぐあいよくつくりなおしました。

九二四 1 むかしから、つばめは、同じ家に帰ってくるといわれています。

九二四 2 ことしある家ののき下で巣をつくったつばめは、

九二四 10 あの家ののき下につくった古巣がなつかしいのでしよう。

九二五 8 自分の家へいそいそと帰ってきたつばめをむかえる人の心は、

九二五 5 ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、

九二七 7 家のまえをちよつとでると、はるか下の方に美しい湖がみえます。

九三六 1 1 ときぎをとりにかく山は、ぼくの家からは十六分ほど登るのですが、

九四三 1 1 こちらはかきの木の多いところで、どこにも、二本や三本はあります。

九四五 10 兄は、大きくなって農業をするために、いま知りあいの家でみないをしをしています。

九七六 7 みるまに、貝がらの山が家のまえにできま

す。

一四四 4 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。

一四三 8 窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。

一四三 9 新しい家のたった町、ふみきりばんのおじいさん。

一四五 6 坂道を、ゆっくりとした足どりで、家に帰ってくる。

一三〇 8 家では、弟たちのめんどろをみてやり、兄や姉の手助けになりたいと思います。

一三三 8 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、

佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

一四七 7 家から十三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるので、

一五〇 1 家からでてしばらくいくと、

一五二 8 妹は、〈略〉、よその家の門の中へ、はいって

いこうとします。

一六〇 5 だから、金次郎は、子どものときから、家の手つだいをしてよく働きました。

一六一 1 さかわ川のいほう工事があって、どの家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで働くことになりました。

一六二 12 毎晩、家に帰ってくると、〈略〉、わらをたたいてわらじを作ることにしました。

一六七 6 たいこをたたいて、家から家へやってきます。

一六七 6 家から家へやってきます。

一六九 12 やがて、金次郎は、親類の家からでて、もとの自分の家に帰り、

一七〇 1 金次郎は、〈略〉、もとの自分の家に帰り、一家をふたたびおこすことができました。

一七四 6 北海道の家には、うしが四頭いた。

一八一 2 村の人たちに助けられて、みんな、ぬれぬずみのようになって家に帰った。

一六四 11 母親は、〈略〉、自分たちのみもあって、家をあけることができないので、

一八四 6 晩には家に着けるから。

一八六 6 すると、にわか雨が降りだしたので、近くの家をたずねて雨具をかりることにしました。

一八八 3 家をはなれて勉強にでかけていましたが、ある日のこと、母親がなつかしくなり、

一八八 4 母親がなつかしくなり、会いたくなった

ので、学校から家へもどってきました。

一二九 5 1 「おまえが学問のちゅうとで家に帰ってくるのは、ちょうど、織物をちゅうとでたち切るのと同じことです。」といました。

一二三 2 せまい家なので、兄は氣のどくだといって、いつもえんりよがちにしています。

一二五 10 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家を作っておく。

一二五 9 きょうは長者の家の田植えだというので、

一二六 6 家にはひとりの母がある。

一二七 2 深川ふかがわの芭蕉ばきょうの家の近くに、曾良そらという人が住んでいました。

一二七 9 芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、家もせまいので、

一二七 10 家もせまいので、自分は、その近所に別に家をかりて住むことにしました。

一二九 3 あなたがたの家に、写真帳があるのでし

う。

一二九 6 7 その写真帳をひろげてみると、あなたがたの家の昔からいままでのことがさまざまに思いだされるでし

う。

一三二 6 8 この家も、高い土べいを立てめぐらしているの

で、

一三三 4 7 ふと氣がついて、子どもたちは、あわてて家にもどって行ったりする。

一三三 4 15 いまどこの家でも二けんぶんも、三けんぶんもの人が、寝とまりしているんだよ。

一四二 8 7 私は、なにか大きな楽しみをもったような氣持になって、家に帰ってきた。

一四二 5 2 ある家の、かぼちゃのとりいれまつりの晩のことでした。

一四二 6 6 思いきって、その屋根うらの家へ帰るこ

ともできなかった。

十四943 女の子は、二つの家の間に、ちょっとした、身をかくす場所を見つけた。

十五64[文] 家を出て手をひかれたるまつりかな

十五102[文] 月が出る山の家にうしをつないだ木

十五112[文] 人の家にさえずるすずめガラス戸の外に來て鳴け病む人のために

十五137[文] 月照らす上野の森を見つあれば家

ゆるがして汽車ゆきかえる

十五478 佐賀はん主は、お庭焼といって、自分の家であつた食器とか、おくりものにする焼物とかを作らせていたが、

十五4812 職人のちんぎんや材料のお金をはらうために、家の道具を賣らなければならなかった。

十五617 私、札幌の創成川の岸にあつた家につられて行つても、思うぞんぶんにふるまつた。

十五6510 朝早くからそれをガラガラとひきまわすので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。

十五6511 たまりかねた家の書生が、〈略〉、くじょうの手紙を京都へ送つたりした。

十五686 〈略〉と、家の人によびかけながら、おもわずとびこんだ私をだきしめた。

十五7210 自動車は、やがてこう外のすばらしい家のげんかんに横づけになった。

十五739 博士の家族たちは暑さをどこかにさけて、家の中はがらんとしていた。

十五796 私は、〈略〉お國を親しくおたずねして、町や、家や森や、山をながめたり、

十五1147[文] あしたまた、あの小さな家に帰つて、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだらうね。

十五11412[文] 小さな家に帰るのですよ。

いえ (感) 6 いえ

三564[文] いえいえ、それはなりません。

三564[文] いえいえ、それはなりません。

三567[文] いえいえ、それなりません。

三567[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

三573[文] いえいえ、それなりません。

「二」は、〈略〉、ナニヌネノという一ぎょうの中にはいつている音ばかりではないか。

六1122 「ム」がいえなかった。

八361 夜になつて天の川をみると、なんともいえない大きなふかい感じにうたれます。

八805[文] かしこいものたちがものをいつているときに、自分の考えなどはいえないのだよ。

十354 りっぱな機械をみて、感心するとともに、なんともいえないかた身のせまい思いがした。

十一96[文] けれども、ぼくにはなかなか、よしきたとはいえない。

十一2710 そんなわずかな金がないということはいえませんが。

十一588 〈略〉と、早口にすらすらいえるようになった。

十一6211[文] なんだか氣まわりがわるくて、そういえないのでした。

十一7512 少年は、もつとなにかききたかったが、いえませんでした。

十二2410 民ちゃんは、まだ、うんこもしつこもいえません。

十二2411 早く、いえるようにしてやりたいものです。

十二553 自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。

十二8811 わけにかなわないことをすれば、〈略〉、そのことばがわかつたとはいえないことになる。

十二11011 黒うるしの中に、銀や貝が光をはなっているのは、なんともいえない美しさです。

十四615[文] このかぼちゃは、だれのものとも、簡単にはいえませんが。

十五1219 それはなんともいえない、せつない氣持

であった。

イエンヌ (地名) 1 イエンヌ

1012 ポナフという石の橋があって、イエンヌという川が、その下を流れていました。

いが「毬」(名) 1 いが

1091 あのどげとげしたいががわれて、じゅくしたくりの実の落ちるころでしたから。

いがい「意外」(形状) 2 意外

15598 園 おや、これはまた意外だ。

15769 「略」と、意外なあいさつをされた。

いかが「如何」(副) 5 いかが

7439 園 みなさん、いかがでしょう。

12764 園 先生、今夜の雪の句はいかがですか。

15614 手 ちかごろ、満ぼう先生はいかが、毎日お話ししております。

15977 園 ごきげんはいかが、ごきげんはいかが。15977 園 ごきげんはいかが、ごきげんはいかが。

いがく「医学」(名) 1 医学 ↓オランダいがく・せいよういがく・ドイツいがく

121131 この本によって、日本の医学は、はじめてしっかりとしたものとなりました。

いかげや「鑄屋」(名) 1 いかけ屋

132910 いかけ屋が来る。

いかす「生」(五) 6 いかす 生かす 《一サ・一シース》

129512 いったん読まれてしまうと、《略》、その人その人の生活や経験によって生かされてくる。

121155 それは、民主主義ということばをほんとうに生かしていくよりほかに道はありません。

121156 ことばを生かすということは、身に行うということです。

13206 これを生かすのは、みぞをほって水をそ

そぎ、平野の雑草をかりとり、じゃがいも牧草を植えることにありますが、

14498 しかし、このおじょうさんくらい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。

15404 漢字の長所をいかして、かなに漢字をてきとうにまぜるのが、

いかだ「筏」(名) 1 いかだ

11448 長いいかだを組んで、材木を遠くの山から運んでくるのもみえる。

いかに「如何」(副) 2 いかに

13182 いかにして、國運をもとどおりにするか、

15552 文 園 いかに目ざるとき 人とても、声の行くえの見えんやは。

いかにも「如何」(副) 15 いかにも

16063 「略」というのが、いかにも弟のいいようなことばつきである。

16096 「ム」と自分で声をだしていつてみると、

いかにもはなから声がでているような気がする。

16115 「ダンダ」といつてみると、いかにも弟のいいかたそっくりになった。

1699 といえは、いかにもおくびょうもののようにも思えましようが、

1624 黒いところは黒く、茶色のところは茶色になって、いかにもあぶらぜみらしくなります。

16127 たいこを、ひくく、こまかくつづけてうち鳴らすのであるが、いかにも雪がしんと降りしきっているような気がした。

1689 それから、いかにも氣どったようすで、しゅすの着物のえりを開いて、

16719 いかにもさんねんだというふうに、しばらくひげをひねったまま下を向いていました、

16077 いかにもすべりよさそうないしやが、長

くつづいている。

11808 それが、ときにはいかにもはつきりとしたので、

13336 冬の日には、いかにもさむざむとした氣持をおこさせる。

13579 園 そのマリアは、たいへん美しくて、いかにもおかあさんらしいと思うのです。

135710 園 いかにも、おかあさんの喜びという心持が、よく出ているね。

149712 いかにも大きな木で、それが美しくかざられていた。

15848 園 いかにもうまそうだなあ。

いき「行」↓ヴェニスいき

いき「息」(名) 26 いき 息 ↓ためいき・ひといき・むしのいき

1155 いきもつかれます。

1628 さすがのへびも、いきがくるしくなつたので、力をゆるめました。

14798 しーしものあさ、白いいき。

16769 園 先生、ぼくたちは動いたり息をしたりするから、生きていくんですよ。

16776 園 雪だるまは動きもしないし、息もしていませんね。

16779 いぬは動くし、いきをするから命がある。

167710 風や、自動車や、水車は、動いていても息をしないから、命がないんだと、

16788 園 けれども、息はするでしょう。

167811 ごろうは、息をすることも自分の力ではないことをきいて、なるほどと思いました。

16792 園 息ばかりではありませんよ。

16796 園 息と同じように、あなたがねむっているときでも、どきんどきんやっていますよ。

- 六〇九 8 はなのあなから息がもれないようにして、
「ナ」、「ノ」、《略》》といってみた。
八二一 1 あらゆる手あてをつくりましたが、それなり、まもなく息をひきとりました。
九五七 10 男は、喜んで、息をハアハアさせて、耳のあたりまでまっかになり、
九三二 5 くもが、じいつと息をこらして待っている、と、
一〇五〇 11 「フツ」と息をはきました。
一〇八一 1 《会》 ぼくはからだもいし、息もつづく。
一一二七 11 母親と相談して、戸をしめきって、息をこらして、だれもないふうをしていました。
一一四二 1 《副》 学校へいそぐ子どもらの、息はま白に舞いのぼる。
一一七〇 4 息をつくのもやつのようでした。
一一七四 4 病人は、身動きもしないで、苦しうに息を続けていました。
一一八二 7 少年は、父親のうでの中におれましたが、胸がせまって息もつけませんでした。
一二四七 7 まるで、息をこらしてしずかにしている、子どもたちのむねのように。
一四九七 2 まるやきの鳥が、ほかほかとあたたかい息をたてて、
一五七四 4 《文》 息白しいままで残る明星ぞ
一五八二 2 《会》 ぼくたちは、あなたといっしょに、たべたり、飲んだり、目をさましたり、息をしたりして、くらしているのですもの。
いき「意氣」(名) 3 意氣
一三三八 5 戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣はしずみ、その活動はおとろえました。
一三二二 1 そこで、デンマルクの國運回復の意氣は、年々高まってきました。

- 一三二六 1 敗戦のために意氣のおとろえた國民は、希望をとり返し、
いきあたる「行当」(五) 1 いきあたる《一リ》
八一六 3 だから、虫たちが、いいかげんにすすんでいっても、なにかの木根にいきあたります。
いきいき「生」(副) 4 生き生き
六一八 4 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、ただしちゃんの顔が、生き生きとうきあがってきました。
八〇〇 6 どのなえも生き生きとしています。
一三五六 2 いっそう生き生きとして、その着物やばだの色の美しいのにおどろかされました。
一四八七 1 このものすごいありさまを《略》、かなり生き生きと表現することができそうである。
いきいきする「生」(サ変) 1 生き生きする
《一シ》
一三九六 6 牧場が、生き生きしたみどりでわらい、
いきうつし「生写」(形状) 1 生き写し
一四一四 4 《副》 お写真は、ほんとうに生き写しで、生きておいでになったときそのままです。
いきおい「勢」(名) 12 いきおい
二二一 3 いきおいくよく走るきもち。
三二二 3 たいへんないきおいで、ひるもよるも、ぐんぐんとのびていきました。
三二八 4 《会》 あのいきおいのいいくすのきでつくったふねだもの、いきおいのいいのがあたりまえさ。
三二八 5 《会》 いきおいのいいのがあたりまえさ。
八〇一 4 みんなで植えたなえが、いきおいくよく育っています。
一二三六 12 冷たい水がいきおいくよく流れているあいだに、

- 一三二八 12 ときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく。
一四六五 3 反対に、湯がぬるいと、いきおいがよいわけです。
一五四五 5 《文》 ときいきおいにまなこすら、その行く末を見ざりけり。
一五二八 12 鳥を後へひっくり返すようにするいきおいで、ぱつと、地面へすばやくとびおりました。
一五二九 9 大わしはすぐにとび起きて、《略》、おそろしいいきおいで少年にとびかかって來ました。
一五三〇 7 こんどは両羽をあおりたて、《略》、少年の周囲をおおい包むいきおいでせまって來ました。
いきおいづく「勢付」(五) 1 いきおいづく《一キ》
一七二 2 おくびよう者が、きゆうにいきおいづき、せんすをほうりだして、自分も指をつっこみました。
いきかえり「行帰」(名) 2 いきかえり いき帰り
一一二六 10 まきをとり山へいく、そのいき帰りに、いつもその本を手からはなさず、
一五六七 1 学校のいきかえりにその門前を通っても、新島家の窓は、かたくとざされてあった。
いきかえる「生返」(五) 6 生き返る《一ツ・一ラ・一リール》
一五三七 8 大むかしのたいようのねつが、かたちをかえ、石炭の中にたくわえられていて、いまそれが、私たちのために、生き返ってはたらいっているのです。
一五九九 5 水をふきかけたり、くすりをつけてやりしめますと、やっと生き返りました。
一四二六 6 《会》 もし、ひめが生き返るなら、わしはもうこがねなどはいらない。

八八6 すると、あひるの子は生き返った。

十三25 ところが、ここに、木材よりも、農作物

よりも、とうといものが生き返りました。

十三26 あれ地をみどりの野とし、祖國を生き返

らせ、

いきか・ける 「行掛」(下) 3 いきかける 《ーケ

ル》

九952 そうしてさっさといきかけるが、舞台はし
で足をとめる。

九9510 やまだ、おこっていきかけるが、思いなお
して、さっさすてたじようぎをひろつくる。

九965 そのあいだに、やまだがいきかける。

いききする 「行来」(サ変) 1 いききする 《ース

ル》

十347 横糸はおさによって、右から左、左から右

へといききするのであるが、

いきさつ 「経緯」(名) 1 いきさつ

十4911 そのときのいきさつを知っている私には、

このことばの意味がよくわかります。

いきつく 「行着」(五) 2 いきつく 《ーイ・ーク》

七477 どこまで書きたしても、それでいいという

ところまでは、なかなか、いきつくものではありません。

八574 小船にいきついて、それにもたれて、いま

歩いてきた足あとをみると、

いきなり 「行成」(副) 8 いきなり

四627 かっちゃん、いきなりへびのくびに

かみつきました。

六136 とらさんは、いきなり、「略」と、われ

がねのような声をたてました。

六1411 一ぴきのとらさんが、いきなり、もう一ぴ

きのとらさんにとびかかりました。

七391 「略」といったかと思うと、いきなり

さぶろうをだきあげ、

九1297 くもが、いきなりとびかかっていくと、あ

ぶは、「略」、すいとにげていきました。

九14410 かかれていて、ほかの虫がひつかかると、

いきなりとびついてかみころすなんて、

十722 「略」といいながら立ちあがり、いき

なり、とこのまのりっぱなかけものをひきさきま

した。

十一809 少年は「略」、いきなり病人のうでをつ

かんで、「略」といつて力づけました。

いきもの 「生物」(名) 7 生きもの

六775 たしかに、動いたり大きくなったりして

いるものは、みんな生きものだね。

六777 雪だるまは生きものではないからね。

十353 銀色に光った、たくさん機械は、生きもの

のように動いていた。

十一83 乗り組んでいる者が、みんなそろって

一つの生きものみたいに進んでいく。

十二8312 ボールはたましいのこもった生きものの

ようになつて、はねとびました。

十二10811 舞う人のあるきかたや、身ぶりや、手ぶ

りによって、このお面は、生きもののように、い

ろいろな表情をあらわします。

十四586 生きものに、いちばんたいせつなものは、

私たち水です。

イギリス (地名) 3 イギリス

十169 所りやあ、フランスではフランスのこと

ば、イギリスではイギリスのことばを話すよ。

十169 フランスではフランスのことば、イギリス

スではイギリスのことばを話すよ。

十五408 ローマ字は、アメリカ・イギリス・

「略」など、世界の大半につかわれている文字で
ある。

いきる 「生」(上) 31 生きる 《ーキ・キル》

↓ここにいきっていることば

四136 町ぜんたいが、ひとつになつて 生きて

います。

四363 そこに いなくても、その人の ことば

が 生きて いる という ことが、わかりますか。

五6410 こうして、まいにち、たっしやで生きて

いけるのは、だれのおかげだろう。

六244 楽しむために生きているんじゃないか。

六486 海 どこかでだれかがめくつて、大

きなきれいなページ、生きた絵本の一ページ。

六726 いったい、あの雪だるまは、死んでいるの

か、生きているのか。

六727 もちろん生きているとは思わないが、死ん

でいるとも思えない。

六737 雪だるまは生きているのでしょうか、死

んでいるのでしょうか。

六742 生きているものには、みんな命というも

のがありますよ。

六757 だいいち、おまえが生きているんだから、

わかりそうなものだがな。

六769 先生、ぼくたちは動いたり息をしたりす

るから、生きているんでしょう。

六773 ぼくたちは、だんだん大きくなるから、

生きているんでしょう。

七279 いいえ、生きていますよ。

八177 しぜんにそなわったかしこで、これで

じょうずに生きていくのです。

九149 もし、きく人の心が高ければ、それだけ音

樂のねうちが生きてくることになろう。

- 十一 23 4 父親の生きているあいだは、〈略〉、どうにかこうにか切りぬけてきましたが、
- 十一 25 7 そのお金は多くはありませんでしたが、四人が生きていくにはじゅうぶんでした。
- 十二 19 9 会 わたしはなん年もなん年も生きていますからね。
- 十二 37 9 この生きた一ことが、私のたましいを目ざめさせ、光と希望と喜びとを與えることになったのです。
- 十二 41 10 クラーは、もうサリバン先生なしには、生きていきません。
- 十二 47 8 会 でも、生きた人間のほうがうまくやれるし、それに便利でしょう。
- 十三 43 2 会 生きて帰って来ました——か。
- 十三 43 3 会 顔をあげて、そのことばを味わうように。生きて帰って来ました……」
- 十四 8 6 会 つらいのをがまんして生きていきます。
- 十四 9 12 会 自分を愛してくれる子どもたちのことを思つて、安らかに生きていくのだと、
- 十四 14 4 会 おとうさんのお写真は、〈略〉、生きておいでになったときそのままです。
- 十四 32 11 人間は、〈略〉、星によつて生きているといつてもいいすぎではありません。
- 十五 68 10 会 おじさんが生きていたら、どんなにか喜ぶだろうに——
- 十五 77 2 生きるためにたべよ。
- 十五 77 2 たべるために生きるな。
- 十五 122 1 会 愛しあつて生きていけ。
- いく「行」(五) 594 イク いく 行く 《カ・キーク・ケーク・コーツ》
- 一 21 3 会 いで、のみちをいけば、みんなか
- 一 22 7 会 した。「のみちをいけば」のところは、

- 一 31 3 この足で、どこへいったでしょう。この
- 一 31 5 この足で、どこへいくでしょう。十四
- 一 39 6 月さんのところへいったゆめをみまし
- 一 43 8 会 月さんのくへいくんだよ。いそいで
- 一 44 3 会 いよ。ふたりでいっていらつしやい。
- 一 44 7 いそいでえきにきました。「略」。
- 一 53 2 会 ひとつひろつていっておかあさんの
- 一 59 1 ろちゃんのうちへきました。しろちゃ
- 一 11 8 ろいろにかわつてきました。はじめは
- 一 37 2 会 、わらいながらいってしまいました。
- 一 37 9 会 がら、かえつてきました。空は、ほ
- 一 48 2 、となりのへやへいこうとして、きゅ
- 一 49 2 、となりのへやへいきます。三のぼ
- 一 50 9 、となりのへやへいってしまいます。
- 一 57 6 ながら、あるいていきました。そこへ、
- 一 64 8 会 國もすぎていく。みんな「すぎて
- 一 64 9 会 「みんな」すぎていく。からす「あたた
- 一 68 1 会 「そうだ。はやくいこう。」みんな「はや
- 一 20 1 した。えをかいでいくうちに、花の名
- 一 22 4 ぐんぐんとのびていきました。なん年か
- 一 29 7 ゆたかになつていったというこで
- 一 30 4 会 きたいところへいって、そこでかい
- 一 41 3 の方にまがつていってしまいました。
- 一 43 2 むこうのりくへいってみたいと思ひ
- 一 44 5 会 えながらとんでいくから、むこうの
- 一 44 10 ながら、わたつていきました。もうひ
- 一 60 4 会 なつて、「どこへいこうかね。」とおき
- 一 61 7 会 りてみずうみへいこうよ。」といいま
- 一 63 9 。みずうみを右へいけばもりへでます
- 一 63 10 りへでます。左へいけばたきへでます
- 一 64 1 会 ます。「どちらへいこうか。」おとうさ
- 一 66 5 会 ーが、「どっちへいったらいいか、風

- 一 69 5 会 はじめにもりへいって、それからた
- 一 74 6 の中をあるいていって、まっすぐに
- 一 75 7 かげへしずんでいきました。「〈略〉」。
- 一 75 9 会 まの光、どこへいったの。ピーター
- 一 76 4 会 日さまがつれていってしまつたのよ。
- 一 76 6 会 さまつてどこへいくのかなあ。」と、
- 一 76 8 会 ね、よその國へいくんですよ。「〈略
- 一 77 6 会 に、光をあげにいくのです。それから
- 一 79 8 会 、雨、あつちへいけ。」パーバラがい
- 一 81 1 んがわまでにげていきました。そのうち
- 一 81 2 て、空をすすんでいきました。そこへ
- 一 84 2 んにじもきていきました。ピーターは
- 一 91 1 す。いぬも走つていきます。わたくしは
- 一 91 2 たくしは、学校へいくときとかえる
- 一 100 5 山へ竹をとりにいきました。ある日
- 一 100 7 りもはやく山にいつて、「〈略〉。」と、
- 一 104 9 会 ろにもおよめにいきません。いつまで
- 一 105 8 できたからおよめにいくといいました。
- 一 106 9 会 したが、「どこへいくのもいやでござ
- 一 108 2 会 「では、つれていくのはやめよう。」
- 一 115 9 に天へのぼつていきました。みかどは
- 一 12 2 。となりの町と、いったりきたりしま
- 一 12 5 おいとおい町へいくことができます
- 一 17 5 もつて、おふろへいくのがみえるの。
- 一 23 7 会 へくりひろいにいきましようね。ぼく
- 一 26 5 会 さんは、どこへいってもきれいな
- 一 28 9 なんだらう。山にいつて、くりひろい
- 一 29 2 じさんのところへいつて、あそんでく
- 一 29 4 おばさんのうちへいつて、いもほりの
- 一 31 7 会 かさをさしていくと、むこうでよ
- 一 33 4 会 元氣よくかけていってしまいました。
- 一 33 7 会 一、わかれていきました。」四

四三六〇 ちにおつかいにいきました。そのと
 四四三 早くとんで いっちゃあこまるよ。
 四四八 になつてとんで いきました。やがて
 四四九 かのようにおちて いきました。「略」。
 四五〇 ちゃんのおちて いくのを、下からう
 四五一 っ、かついで いこう。「略」。「へ
 四五三 ずうみのところへ いこうと話しあいま
 四六二 おくをさがしに いきました。しずかな
 四六五 ぶんにつけて いこう。「三十ばのが
 四六八 、みえなくなつて いきました。六こ
 四七三 とうさんは、町へ いって、まだかえら
 四九〇 となりまではいて いく。学校へかよう
 四九九 「さあ、あちへ いってあそぼう。」子
 四一〇 ぼう。「子ども二いこう、いこう。」子
 四一〇 ども二いこう、いこう。「子どもたち
 四一〇 二」といいながら、いってしまいます。
 四一八 して、海の方へ いってしまいます。
 四一三 は、すぐそばまで いって、大きな声で、
 四一〇 しろい。つれて いってもらおうかな。
 四一一 つくりあそんで いってくださいます。
 四一八 手をとつて、でて いきます。みんな、手
 四二六 すいすいとんで いく。空にかすん
 四二八 きものをもつて いこうとします。ま
 四三三 ん天へのぼつて いきます。右に左
 四三三 すいすいとんで いく。空にほんの
 四六八 をゆつくりあるいていく、水車をくるくる
 五七一 たけにも水をまいていく。川ははたらく
 五七四 ゆつくりとながれていく。汽船や荷船がと
 五七八 海のとおりすていく。川はだまつては
 五八四 。さあ、改札口へいこう。「パチン、パ
 五八六 「きみは、どこへいくの。」「略」。「へ
 五八八 なたは、どこまでいくの。」「略」。「こ

五七三 くは遠いところへいくんだけど、あて名
 五八三 たはしらしらべていって、北の方へいく
 五八三 ていって、北の方へいく友だちと、南の方
 五八三 友だちと、南の方へいく友だちと、西の方
 五八四 友だちと、西の方へいく友だちと、東の方
 五八四 友だちと、東の方へいく友だちを、それぞ
 五二七 ら、出口の方へでていきました。しかし、
 五二九 んよろこんで帰つていった子どもがありま
 五二二 のさとの、いなかにはいきました。ひさしぶ
 五二二 り、一日でいって帰つてきたので
 五二九 から、一つ持つていってあげましょう。
 五三〇 たへせて持つていきました。駅につく
 五二二 、ほつかいどうへいったことはありませ
 五二二 ほんとうに、一どいてみたいと思いま
 五二二 すぐ目のまえを、いったりきたります
 五二二 ひがわへおよめにいっていきます。ぼくは
 五二二 ぐいす おつかいにいくとき、うらの竹や
 五二二 も鳴らさず 船がいく 船がいく。海
 五二二 船がいく 船がいく。海のはてから
 五二二 と、あいさつをしていく人もあります。ま
 五二二 星をみせますよ。いってみませんか。
 五二二 いっしょに、学校へいきました。もう、た
 五二二 さかなのところへいって、家をもらつて
 五二二 さかなのところへいって、たのんでおく
 五二二 ぐずいわずに海へいっておいで。」おじ
 五二二 「あちへつれていけ。」といいつけま
 五二二 、海の中へおよいでいってしまいました。
 五二二 いる小川のところへいきました。そうして
 五二二 たりして、流れていきます。「略」。「
 五二二 、らくらくと流れていきます。「略」。「
 五二二 おくざしきにつれていきました。「略」。「
 五二二 ちは、みんな帰つていきました。りようか

五九三 かんさんは、帰つていく子どもたちをみお
 五九四 山へわらびをとりにいきました。その帰り
 五九四 だもの、ひろつていって、かつてみよう
 五九四 ところまでとんでいくことはできないよ
 五九四 の枝で休んだりしていきました。「略」。
 五九四 あした山へつれていって、はなそうと思
 五九四 、おどろいてにげていってしまいました
 五九四 、おどろいてとんでいってしまいました
 五九四 うからは、どこかへいってしまいました
 五九四 にむこうへとんでいこうよ。空はひろく
 五九四 つの木の上へにげていきました。かごの
 五九四 は、そのままとんでいってしまいました。
 五九四 どんどんおぼえていく。「おとうさんの
 五九四 のかげにころがつていった。このとき、父
 五九四 で木からとびたつていきました。ありと
 五九四 きみたち、どこへいくの。」「ハモニカ
 五九四 りでかみてにさつていきます。しきしや
 五九四 、空にすいこまれていくかし。10 から
 五九四 るまいながらおちていくかし。18 大す
 五九四 られて、空にきえていくかし——点にな
 五九四 、うかんではきえていく。32 日がくれか
 五九四 いる。37 しずんでいくお日さまをおつて
 五九四 が空にすいこまれていく。それをつつむよ
 五九四 の山の方へとんでいったんだよ。」子が
 五九四 ばらばら かけていく。からから、か
 五九四 かけかけ、どこへいく。おちばの、お
 五九四 すずめと どこへいく。かきの秋や
 五九四 大いそぎではなれていきます。そうして、
 五九四 方へどんどん走つていきます。けれども、
 五九四 が大いそぎでとんでいくようにもみえます
 五九四 大いそぎでとんでいくでしょう。「略
 五九四 がずんずん動いていくのがよくわかるよ

六五三¹⁰ いると雲が動いていくし、雲をみている
 六五三¹⁰ お月さまが動いていく。いったいどっち
 六五四⁴ の方にある木の下へいきました。そうして
 六五四⁸ は木のそばへ走っていきました。「略」
 六五四¹¹ 雲はさつさと走っていきます。よしおが大
 六五五⁸ た、にわの木の下へいってみました。動か
 六六六⁷ うにお話がすすんでいくか、楽しみではあ
 六六七⁴ て、山の谷を歩いていきました。すると、
 六六八¹ するするとのぼっていきましました。
 六六八² 子ぐまはまた歩いていきました。このほ
 六六八¹⁰ た。「略」学校へいくとき、雪だるまの
 六六八³ 日に日にそだっていく。たとえ動かない
 六八〇⁶ が、私は毎日山へいって、鳥やけものを
 六八二⁶ さ。わたしは山へいこう。^{ほおりの「ほ}
 六八二⁸ つりざおを持っていくがいい。^{みこと}「ほおり
 六八二² 私に海のごてんへいくようにと教えてく
 六八四⁸ つりばりをとっていったものはないか。
 六八四¹⁰ かあさんのところへいった。「略」おか
 六八四⁴ す。はじめてあげにいったときに、みんな
 六八四¹⁰ んのところへとんでいって、「略」とい
 六八四¹⁰ のところへ持っていったあげるんだ。
 六八四³ のくるみを持っていて、山のてっぺん
 六八四⁶ ずんずん長くなっていきました。「略」
 六八四⁸ ンネルの中を走っていきました。「略」
 六八四⁵ こちらからまわっていきくと、みんなはあち
 六八四¹¹ 方へころがりこんでいきました。「略」
 六八四¹¹ うから、どこかへいってくれたまえ。ほ
 六八四¹ 向こうのやぶの方へいってしましました。
 六八四⁹ やぶの中をとんでいきます。のぼりざか
 六八四¹ ないで校門をでていく子ども、かたを組
 六八四² で話しながらでていく子ども、ならった
 六八四⁴ 大きな声で歌っていく子ども、なんども

七九¹⁰ のそばからさつていった。おぼろ月が
 七九³ 岸へ、船をこいでいく。渡し終ると、ま
 七九⁹ ら、ねむりにおちていった。二手とい
 七九⁷ ら、自分でみつめていきましようね。」は
 七九³ にいちゃん、早くいこう。」兄きつと、
 七九⁸ へは、もう二どもいっていったことがあるので
 七九⁶ あいだをかきわけていこうとしました。し
 七九¹¹ ルのように送られていくうちに、にこにこ
 七九² 高いところを渡っていくさぶろうを、おも
 七九⁵ だんくわしくなっていくきます。どこまで書
 七九⁷ ちは、コートへでていった。たかやま先生
 七九⁵ 章がみじかくなっていくことがあります。
 七九¹ たしのまえを走っていく。紙が、くるくる
 七九⁵ まわりして、帰っていった。よく落ちるか
 七九⁵ 黒い雲は、どこかへいってしまつたのに。
 七九³ バタやつて、にげていった。ひとところ
 七九⁵ 、どんどん、うえていく。みんなそろって
 七九⁵ なそろって、うえていく。もやのかかった
 七九⁷ ンボン船がでかけていく。雨あがりの麦の
 七九¹ もと子どもとかけていく。もみじがまっか
 七九⁹ その人の顔にせていくややかたです。も
 七九¹ きや木材をけずっていき、だんだん、そ
 七九² その人の顔にせていくややかたであります。
 七九⁴ 、文章をきりつめていくのと同じです。や
 七九¹ くる。甲「どこへいったのだらうね。」
 七九³ た。さて、どこへいったものかしら。」
 七九¹ 、どこかへつれていったのにそういない
 七九³ よへ、いっしょにいってもらおう。」旅
 七九⁷ とる。むりにつれていく。二の場面 人
 七九⁹ ことと思う。早くいってらくだをさがし
 七九¹⁰ い。あまり遠くへいかないうちに。」甲
 七九³ のち晴 29度 朝、いってみたら、右から

七九⁴ 、うさぎのところへいってみたら、暑い
 七九⁴ 晴 19度 けさ、いってみたら、左がわ
 七九³ 雨 13度 朝早くいってみたら、子うさ
 七九¹ どころか、向かっていこうとさえるので
 七九² がったりしておりていきました。地面にお
 七九¹⁰ ぐりさぐりもぐっていきまします。そこは木の
 七九³ いかげんにすすんでいっても、なにかの木
 七九⁷ でじょうずに生きていくのです。虫は、は
 七九⁴ 、トンネルをほっていかなくてはなりませ
 七九² かえて地の上へでていきます。しかし、ほ
 七九² ふかくもぐりこんでいきます。七年の月日
 七九⁹ 地表に向けてはっていき、あたりのくら
 七九³ りひょくくり歩いていくのは、ほんとうに
 七九⁷ それにはいあがつていきました。地表から
 七九¹⁰ だの色もこくなつていきます。虫は、すず
 七九⁹ まのそばへ、とんでいってとまりました。
 七九⁶ ったたかへひいていきますが、あのぬけ
 七九¹ 、草原をよこぎっていきましました。
 七九⁴ そって車を走らせていくと、林の中にこ
 七九⁹ 、そのままだどこかへいってしましました。
 七九¹⁰ ったこがねになつていきましました。王さま
 七九⁴ た。どんだん歩いていくと、さびしい村に
 七九⁶ さがそうと、歩いていきましました。ところが
 七九⁸ 小屋の中へはいっていきましました。中には、
 七九⁸ いろな家へたずねていきましました。だれでも
 七九⁹ いろな家をたずねていきましますと、いぬのか
 七九¹⁰ た。その家のまえにいて、「幸福」が立
 七九¹¹ りのいる家のまえへいって立ちました。そ
 七九² りわとりをぬすんでいきはしないかと思
 七九⁷ ったある家のまえへいって立ちました。「へ
 七九⁶ 幸福をわけておいていきましました。五
 七九¹ 遠足でみはらし台へいった。山のおねを曲

八64 9 ういつて、どこかへいつてしまった。それ
 八65 10 水のところへおりていった。さつと水の中
 八67 3 会 の鳥小屋へつれていつてあげるからね。
 八67 8 たひなたちが通つていくと、一わの鳥が、
 八72 2 、またさきへとんでいった。こうして、大
 八75 3 ピシャと、どこかへいつてしまった。「略
 八76 5 早くぬま地をにげていった。田や野原をこ
 八76 6 て、どんどん走つていった。(三) くれ
 八77 7 こから中へはいつていった。中には、おぼ
 八81 5 会 へもぐつてそこへいくと、それはさつぱ
 八83 4 ひるの子はでかけていった。そうして、お
 八84 4 ずうみへと、とんでいった。高く高のぼ
 八84 5 。高く高のぼつていった。あひるの子は
 八84 11 ンぞこまでもぐつていった。あひるの子は
 八85 1 名も、どこへとんでいったのかということ
 八85 9 んだん小さくなつていった。あひるの子は
 八89 3 会 のところへとんでいく。私のようなみ
 八89 4 会 ンもなく近づいていくのだから、ころさ
 八89 10 うのほうへおよいでいった。はくちようは
 八92 4 ンのところへ走つていつて、もらつてきた
 八98 1 が、だんだん育つていきます。どこの田も
 八101 5 いきおいよく育つていきます。5 かぶをの
 八103 2 、花のようすをみにいきましたら、まださ
 八105 2 んだん黄色くなつていきます。9月29日
 九5 5 、五色と数をましていけば、その感じはま
 九16 6 す。まもなくさつていかなければならない
 九16 7 れません。これからいこうとする遠い國の
 九16 10 ろそろ日本をさつていき、十一月のはじめ
 九17 8 ともつと南へとんでいくのです。南洋の島
 九17 10 オーストラリアまでいくのがあるというこ
 九17 11 こんなふうになつていきますが、ヨーロッパ
 九18 3 遠くアフリカまでもいつて、冬ごしをしま

九22 3 てヴェニスへとんでいきました。それでも
 九30 1 会 声もなし くれていく巢をはるくものあ
 九32 2 手 へたきぎをとりにいつたりするので、ま
 九33 2 手 。この湖へつりにいくのが、いちばんの
 九33 8 手 しもの方へとりにいきました。村の子ど
 九33 9 手 ろうそでとりにいくので、たいそうに
 九35 6 手 手わけして植えていきました。いもなえ
 九36 1 手 。たきぎをとりにいく山は、ぼくの家か
 九37 4 手 へたきぎをとりにいくのが、すきではあ
 九41 3 手 って、ぼくは山へいくのが楽しみになり
 九41 6 手 なれたのと、山へいくたびに、めずらし
 九41 11 手 まにどこへ渡つていったのか、いまはも
 九44 9 手 き、ぼくもつていつたのでした。ぼく
 九49 4 を、上の方へ登つていきました。すきとお
 九49 9 会 、東の方へとんでいきましたよ。」と答
 九50 1 会 「東なら、ぼくのいく方だねえ。おかし
 九50 2 会 とにかく、もつといつてみよう。くりの
 九50 6 いちろうは、すこしいきますと、そこはも
 九51 4 会 、西の方へとんでいきましたよ。」「略
 九51 6 会 まあ、もうすこしいつてみよう。ふえふ
 九51 8 ちろうがまたすこしいきますと、一本のふ
 九52 4 会 、南の方へとんでいきました。」と答え
 九52 8 会 まあ、もうすこしいつてみよう。きのこ
 九52 11 ろうが、またすこしいくと、一本のくるみ
 九53 7 会 、南の方へとんでいきましたよ。」「略
 九53 8 会 。「略。」「南へいつたなんておかし
 九53 9 会 まあ、もうすこしいつてみよう。りす、
 九54 1 いちろうがすこしいきましたら、谷川に
 九54 5 は、その道を登つていきました。かやの枝
 九55 10 は、だんだんそばへいきましたが、びつく
 九70 3 会 からも、はがきがいつたら、どうかきて
 九76 2 ロほどある貝づかへいきました。先生が、

九76 3 。先生が、町角までいつて、待っているよ
 九77 6 会 、きょうこれからいく貝づかですよ。」「
 九77 8 れないように歩いていきました。平らな畑
 九81 2 会 、廣く深くほつていくのがいいと思いま
 九82 2 て、そこをのぞきにいつてみると、先生の
 九83 6 会 「略。」「私はかけていつて、先生におたず
 九89 7 くん。」と、つれていこうとする。やまだ
 九90 6 会 まだくんをつれていけよ。」「六うん。」「
 九90 7 会 をひつぽつて、「いこうよ、やまだくん
 九91 9 会 ——たかきくん、いこうよ。友だち、
 九102 8 会 たかき「じゃあ、いこう。」「やまだ「首は
 九103 1 会 うぶだよ。さあ、いこう。」「やまだ「いこ
 九103 2 会 いこう。」「やまだ「いこう。」「ふたり、な
 九104 4 て、山のスキー場へいつた。まえの日に、
 九105 9 あえぎながら登つていつた。スキーの雪を
 九106 7 うけんめいに登つていつた。まつ林の中を
 九106 8 まつ林の中を通つていくとき、だれかが、
 九108 1 会 もうすこし上までいこう。」「と、いし
 九109 11 だ上へ上へと登つていかれたが、三百五十
 九110 9 ぼくたちは、登つていつてはすべり、おり
 九111 5 んだ。みんなそこへいくと、いま、いし
 九112 5 しくちゅうをとんでいく。」「略。」「と、だ
 九123 1 ては上流へたどつていつた。大きな支流が
 九123 4 たり、ずっと上流へいつたためしにみたり
 九125 3 ンでは泉をさがしていつた。はじめの八キ
 九129 7 きなりとびかかつていくと、あふは、力い
 九129 8 して、すいとにげていきました。おまけに
 九132 10 くい切つて、にげていつてしまいました。
 九132 11 うととんで、にげていくみづばのうしろ
 九134 5 だのいたみもきえていきました。目のまえ
 九136 4 べてしまふわけにもいきません。」「略。」「
 九136 11 会 月さんのところへいつてみたいと思いま

九三三 月さんのところへいきたいと思います。
 九三八 さんをさがしにきたいのか、ちょう
 九三九 さん、早くとんでいくがいい。」ちょう
 九四〇 白ばらの花がとんでいくように。くもは、
 九四一 にも。くもは、とんでいくちょうちよをみ送
 九四二 たまま、空をとんでいきました。くもは、
 九四三 のところへとんでいったあの白いちょう
 九四四 フランスのいなかいときは、子ども
 九四五 、めったに日本人もいかなかった。日本
 九四六 おとうさんの歩いていくそばを、足ばやに
 九四七 足ばやにかけぬけていて、てんで、お
 九四八 季節でした。どこへいても、遊びたわむ
 九四九 、おとうさんもよくいてこしかけました
 九五〇 をとりあってとんでいて、小さなのをえ
 九五一 んびつ一本買いにいくにも、日本のこと
 九五二 そういう遠い国へいくと、自分の國のこ
 九五三 点字の上をすべっていく。7 オルガンが
 九五四 るがならんで通っていく。そのあとから、
 九五五 て、炭坑にはいっていく工員。ヘッドライ
 九五六 を、ずっとつづけていきたいと思ひます。
 九五七 界なども、しらべていきたいと思ひます。
 九五八 のわけをよく考えていてみようと思ひま
 九五九 とのことをしらべていくような心がけを、
 九六〇 くして、助けあっていきたいと思ひます。
 九六一 を、すなおに学んでいきたいと思ひます。
 九六二 がたで、つきあっていきたいのです。ぼく
 九六三 糸のあいだをぬっていく横糸であった。横
 九六四 がずんずん織られていくからである。佐吉
 九六五 、しだいに高まっていったが、小学校をで
 九六六 のをみごとに織っていく、ふしぎな機械に
 九六七 もくる年も、うまくなかった。村や町
 九六八 ていねいにしらべていった。すると、かれ

九六九 死員をどんどんみていった。すると、五つ
 九七〇 第三と母員を開いていくと、どれにも眞珠
 九七一 ので、そこへつれていくと思つたのです
 九七二 すが、妹にはそうはいきませんでした。四
 九七三 ようにして、つれていきました。ためしに
 九七四 ン——モット——イコウ——アカチャン
 九七五 タイカラ モツテ イツテ アゲルノヨ——
 九七六 ガ——アドコヘイッタノ——イコウ——
 九七七 コヘイッタノ——イコウ——アッポタ
 九七八 家からでてしばらくいくと、道のまん中に
 九七九 じめました。五六歩いったかと思うと、よ
 九八〇 門の中へ、はいっていきこうとします。その
 九八一 のそりと、どこかへいくところでした。あ
 九八二 した。妹は、そこへいって、水おけのふち
 九八三 ガ「アドコヘイッタノ」は、そのこ
 九八四 ます。自分で、「イコウ」ときめてある
 九八五 いで新しく成長していくように、私も、こ
 九八六 い世界にふみだしていきこうと思ひます。
 九八七 間にふくろをみにいきました。そうした
 九八八 まり木の下においていきました。
 九八九 べてから、山の方へいって、たくさん取っ
 九九〇 、たけのこのそばにいて、せいくらべを
 九九一 事で、となり村までいかなければなりませ
 九九二 自分たちも、そつといつてみようというこ
 九九三 おいて、あつちへいこう。ぐずぐずして
 九九四 それを、口に持っていきました。「略。」
 九九五 げをひいて通っていくのがみえるし、川
 九九六 い方向に進んでいく。ぼく、これがう
 九九七 みだれずこいでいくと、乗り組んでい
 九九八 みたいに進んでいく。これこそ、いち
 九九九 、きみについていきさえすれば、だい
 一〇〇〇 きな船が通っていくよ。あれはどこへ

一〇〇一 。あれはどこへいく船だろう。」「略
 一〇〇二 。きつと遠くへいくんだらう。」「略
 一〇〇三 しい方へつれていくのさ。」「略。」
 一〇〇四 ートの方へかけていった。二 ーめいめ
 一〇〇五 た毛が遠くとんでいく日だ。あげはのち
 一〇〇六 おをひいて消えていく。ああ、われわれ
 一〇〇七 た毛も遠くとんでいく。唱歌 先生が
 一〇〇八 ら遠い空へにげていった。おかあさま
 一〇〇九 なわれて、のびていく命のわか葉。わた
 一〇一〇 、朝早く工事場へいきました。たくさん
 一〇一一 、わたしが山へいって木を切つてきて
 一〇一二 そんなら、今夜いって、返してもらっ
 一〇一三 、その晩のうちにいて、子どもをつれ
 一〇一四 おきて、遠い山へいって、しぼをかつた
 一〇一五 が、四人が生きていくにはじゅうぶんで
 一〇一六 もりつぱになつていきました。金次郎は
 一〇一七 まきをとりに山へいく、そのいき帰りに
 一〇一八 でしたが、そこへいってからは、いよい
 一〇一九 かりて、かわらへいって、あき地にまい
 一〇二〇 ところをふやしていったりするうちに、
 一〇二一 を黄色にそめていく。青い空にはか
 一〇二二 つしよに北海道へいきます。北海道へい
 一〇二三 きます。北海道へいって、じやがいもを
 一〇二四 うしても北海道へいこうと思う。北海道
 一〇二五 がいもをつくりにいこう。おかあさんを
 一〇二六 とまらずに走っていきましよう。やつと
 一〇二七 の中をつき進んでいく。一 停留所ごとに
 一〇二八 の門ばんのまえへいって、一通の手紙を
 一〇二九 がしにフランスへいったのですが、数日
 一〇三〇 のところへつれていくようにといいまし
 一〇三一 はずれまで歩いていきました。そうして
 一〇三二 その後からついていきたがら、おどおど

十一 68 7 なへやのはしまでいくと、看護人は、一
十一 71 12 去年、みおくっていった、最後に船の上
十一 73 2 なんにもいわずにいったしまいました。
十一 76 1 んでした。医者はいったしまいました。
十一 83 4 ところへつれていかれたのだな。わた
十一 83 12 ころだ。さあ、いこう。まあ、ほんと
十一 84 6 した。「さあ、いこう。晩には家に着
十一 84 9 した。「さあ、いのか、いかないの
十一 84 9 した。「さあ、いのか、いかないの
十一 87 6 二円だけおいていくから、こづかいに
十一 87 8 はそういつてでいてきました。(四)
十一 89 2 だいに暗くなつていきました。その晩、
十一 90 12 つとわきのほうにいった看護婦が、
十一 92 1 遠い道を歩いていくんですから、しほ
十一 92 5 だ人にのこしていきます。看護婦さん
十一 16 11 おして、かいていくうちに、ひととお
十一 19 1 ようになつていくようです。「略
十一 19 8 略。」「そこへいくと、こおろぎさん
十一 20 7 も、思うようにいきません。」「略。
十一 25 7 ものかげへつれていって、用をたさ
十一 26 11 てぐんぐんおしていって、かべぎわにお
十一 27 2 つちからあつちへいくとなると、すぐ
十一 27 10 れ持つて学校へいきましようね。」と
十一 28 6 あ、いっちょにいきましようね。」た
十一 36 9 庭の小道をおりていきました。だれかが
十一 40 9 ケラーをしつけていくのには、なみなみ
十一 40 12 がついて、学校にいくようになりました
十一 45 9 いると別世界にいったような楽しい氣
十一 55 10 て、順々に消えていってしまうものもあ
十一 61 11 り。そうしてよく日いてみると、頼んだ
十一 62 1 れもかれもかりにいくようになった。そ
十二 65 5 、深く廣くのびていく。のびていく根の

十二 65 6 びていく。のびていく根のさをさえぎ
十二 66 10 草や木がしげつていく。のこぎりの
十二 71 3 所へ木をひろいにいったりしました。こ
十二 73 11 どもたちのかけていく方に、自分もいっ
十二 76 6 蕉は、えんがわにいったなにか持ちだし
十二 79 7 略。」「日本へいきたくない。」「略
十二 79 8 略。」「略。」「いきたくありません。
十二 86 4 しいものになつていきました。つぎつぎ
十二 87 7 ばいいて持つていくだろう。手紙を書
十二 87 9 水をいれて持つていくだろう。ふる場の
十二 88 1 ばいくんを持つていくだろう。ことばは
十二 89 11 力がうしなわれていく。それは自分の生
十二 90 8 「くりひろいにいった。」太郎が、こ
十二 90 11 かったこと、山へいったこと、弟やいぬ
十二 91 1 弟やいぬをつれていったこと、くりがた
十二 91 3 と落ち葉をふんでいったこと、小鳥が鳴
十二 91 11 「くりひろいにいった。」と書いた。
十二 92 2 だちにさそわれていったこと、くりはあ
十二 92 12 「くりひろいにいった。」といい、「遠
十二 94 10 もそんなところに行つて遊んでみたいと
十二 113 3 学問をきり開いていくときは、いつの時
十二 115 3 らどうもりたてていけばいいでしょうか
十二 115 5 んとうに生かしていきよりほかに道はあ
十二 8 5 、しだいにましていく。一人まえの人と
十二 29 12 つとめをはたしていくために、知識をま
十三 33 2 しておく。歩いて行く荷がゆれて、し
十三 34 8 けん、水を運んで行かなければならない
十三 36 9 てて家にもどつて行つたりする。ホート
十三 36 10 ぞろぞろと歩いて行く。あひるが、「ガ
十三 36 12 ガア」とさわいで行く。花よめ行列のラ
十三 38 2 ちらの方へ走つて行く。五 電話 人
十三 38 2 配給物を取りに行つたんじゃないでし

十三 38 7 んとうにつれて行つてくたさいよ……
十三 38 8 ったか、遠足で行きました……お客さ
十三 39 9 んだもの……行つてもいいでしょう
十三 40 1 んが書きのこしていった手紙を、とりだ
十三 40 2 と、また電話口に行き、電話をかける。
十三 41 10 キングにつれて行く……ねえ……
十三 43 7 ……(と、うら手に行く……声だけ続く。
十三 46 4 ようの羽をひいて行く。ああ、ヨットの
十三 48 7 。とやへ追われて行く、白いレグホンた
十三 49 3 らいながら走つていく。空気が、わ
十三 50 6 の泉を、そうじに行つて来るよ。ちよっ
十三 51 1 うしをつかまえに行つて来るよ。母うし
十三 52 8 日と、むすばれていくように。七 あ
十三 54 7 じさんのところへ行きました。おじさん
十三 58 3 、すりがうましくないから、また困
十三 59 11 だよ。わたしが行つたとき、この絵の
十四 8 6 まんして生きていきます。どうしても
十四 15 4 いつでもとんで行きます。おかあさん
十四 15 11 ば、おあいしに行く日のくるまで、い
十四 31 11 力が大きくなつていけば、日本は、見ち
十四 32 12 っぽな國になつていくのです。さて、私
十四 32 8 学も、ふかまつていったのです。よそ目
十四 45 5 シナも、しずんでいく船からほうりださ
十四 48 4 送られて、死んでいききたいものだと思
十四 48 5 その方におよいで行きました。近づいて
十四 50 1 ケンナがおよいで行つたように、やがて
十四 56 7 、そこへつれて行つてあげるの、こ
十四 66 9 ながら、のぼつていきます。これとよく
十四 68 4 い空気がのぼつていくあとへ、入れかわ
十四 74 6 、表面からひえていくときには、どんな
十四 87 8 第一の人が歩いて行く。その人の足あと
十四 87 10 第二の人が歩いて行く。やがて第三の人

十四 87 12 をたよりに通って行く。ぼつりぼつりと
 十四 91 2 かたほうはどこへいったか、つい見いだ
 十四 91 4 男の子がひろって行ってしまった。その
 十四 93 5 かなしげに通って行きながら、その小さ
 十四 99 4 さまのところへ行くのだ。」と、女の
 十四 99 7 ところへのぼって行くのだと、話してき
 十四 100 1 神さまのおそばへ行ったおばあさんを見
 十四 100 4 ちゃん。もう行っちゃいや。」と、
 十四 100 8 っしょにつれて行ってください。ねえ
 十四 100 9 っしょにつれて行ってください。」と、
 十四 102 1 神さまのおそばへ行くかのようにのぼっ
 十四 102 1 のようにのぼって行った。小雪の降った
 十五 19 10 われわれを運んでいくれます。その
 十五 21 11 の下の方まで落ちていくのを、おもしろそ
 十五 22 4 の手からはなれて行きそうにしていまし
 十五 23 7 へゆったりとんで行く大きなやまわしの
 十五 24 7 は、どこへ持って行かれるかわかりませ
 十五 26 1 ように舞いおりて行きました。けれど、
 十五 27 10 下へ下へとおりて行きました。もう、が
 十五 28 4 を目がけておりて行きました。すると少
 十五 32 11 、谷の中へ落ちて行きました。少年はほ
 十五 45 7 業の道をたどっていくようになった。ハ
 十五 48 11 敗に失敗を重ねていった。職人のちんぎ
 十五 59 11 。さあ、うちへ行こう。」と、あつ
 十五 61 7 た家につれられて行っても、思うぞんぶ
 十五 61 11 ところへつれて行ってあげるから、さ
 十五 62 4 おじさんたちと行くのがいやなのか。
 十五 62 12 だらけだから、行くのはいやだといっ
 十五 63 12 たらう。さあ、行こうぜ。」だされた
 十五 64 5 て十メートルとは行かないうちに、私は
 十五 71 5 っしょにお寺へ行って来ましよう。そ
 十五 80 9 もっとひろがっていきますように。そう

十五 83 1 へ向かって歩いて行って、黒いまくを
 十五 83 10 たち、あそこへ行ってもいいの。」光
 十五 90 1 ちよっとのまも行かないのです。ぼ
 十五 92 10 パンも、だれが行けといった。そこで
 十五 94 1 たちをひきずって行こうとする。その間
 十五 94 6 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 94 7 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 96 7 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 98 11 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 99 7 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 106 5 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 107 7 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 107 12 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 114 11 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 119 6 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 十五 122 1 福」どもがにげて行くのを見ながら、「へ
 いくえ 「幾重」(名) 1 いくえ
 三 11 10 おじいさんの 家の まわりは、 弓矢を
 もった人たちで、いくえにもとりかこまれ、
 いくしゅうかん 「幾週間」(名) 1 いく週間
 十二 34 7 〈略〉を知ったのは、先生がおいでに
 なってからいく週間もたってからのことでした。
 いくせん 「幾千」(名) 1 いく千
 九 21 2 いく千というつばめたちは、人をおそれず、
 いくたび 「幾度」(名) 1 いくたび
 十四 8 1 一生の間、いくたびとなく、おとうさ
 んのおことばを思いだすことにします。
 いくつ 「幾」(名) 11 いくつ
 五 105 9 この鳥は、いくつもげいができるのね。
 六 142 7 山を、いくつも、いくつもこえました。
 六 142 7 山を、いくつも、いくつもこえました。
 七 9 5 あの日からきょうまで、わたしのみたこ

と、きいたことを話したら、いくつあるだろう。
 十二 13 8 夏じゅう美しい花をつけていたが、あら
 かたちって、あとにいくつかの実がなっていた。
 十二 56 6 次にいくつかの例をあげてみよう。
 十四 34 1 あの花が系に負けないほど大きな星の
 世界が、なおいくつかあるのです。
 十四 66 1 けむりがゆらゆらして、いくつものうず
 になり、
 十五 20 1 その登山電車のとちゅうにはいくつかの
 停車場があつて、
 十五 38 8 字によつては、いくつかの音のあるもの
 があり、またいくつかの訓のあるものもある。
 十五 38 9 またいくつかの訓のあるものもある。
 いくど 「幾度」(名) 7 いくど
 一 54 2 ええ、いくどもひろいました。
 九 119 5 父は、その泉の水を手ですくって、いくど
 もうまそうに飲んでから、私にいった。
 十一 58 6 いくどもくり返しているうちに、太郎は、
 〈略〉すらすらいえるようになった。
 十一 80 6 また、なにかものをいおうとでもしてい
 るように、いくどもいくども、むりにくちびるを
 動かそうとしました。
 十一 80 7 いくどもいくども、むりにくちびるを動
 かそうとしました。
 十一 83 1 父親は、じつと病人の方をみつめたあと
 で、いくども少年にほおずりしてからいいました。
 十三 8 10 これをいくどもくり返してたしかめ、
 いくにち 「幾日」(名) 3 いく日
 七 26 7 それから、いく日かたったある日の午後。
 十一 83 7 いく日おまえはここにいたのだね。
 十二 34 3 それからいく日かのあいだに、〈略〉、私
 は、「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさん

のことばをつづることを覚え、

いくねん「幾年」(名) 1 いくねん

十五664 それからいく年たっても、せつくがくるごとにその人形をかざって、

いくひやく「幾百」(名) 1 いく百

十四985 いく百もの小さな人形が見おろして、マツチ賣りのむすめを見てわらいかけた。

いくぶん「幾分」(副) 1 いくぶん

九162 口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえるのさえあります。

いくら「幾」(名) 9 いくら

五6611 ところが、海へ帰してくれ、お礼はいくらでもあげるといったが、

六821 いくら一日でも、いやだ。

七4710 心がくもっていると、いくらなおしても、文章のくもりはとれません。

八108 ビオのゆうかんさや、りこうさや、〈略〉は、まだいくら書いても書ききれません。

八447 王さまは、ご病氣をなさって〈略〉、いくら手をつくしても、よくおなりになりません。

十一873 、「もういくらもういなくてもいいでしょう。」と、また、看護人が小声でいいました。

十二632 いくら飲んでものどのかわきがとまらなかつた。

十四7611 茶わんの湯のお話は、すればまだいくらでもあります、

十五468 、「いくらでしようか。」そのねだんのあまりに安いのおどろいた。

いくらか「幾」(副) 9 いくらか

七443 私も喜んで、いくらかのお金をそれにくわえた。

九77 「月」だけで思いだした心の絵とは、いく

らかちがつたものがあらわれてくるでしょう。

十一6411 母親は、〈略〉、長男にいくらかのお金を持たせ、父親の看病のために、ナポリへよこしたのでした。

十一699 病人はしげしげと少年をみつめて、いくらかわかつたようでしたが、

十一772 その日は、病人の目つきが、いくらかわかつたようにみえました。

十一779 医者はいくらかよくなつたように思うといいました。

十一781 いくらかわかるであろうと思うと、

十四6511 けむりの出るところからいくらかの高さまでは、まっすぐにありますが、

十四718 湯の中にうかんでいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずです。

いけ「池」(名) 11 いけ 池 ↓こいけ・こやまのいけ・とうのいけ

三352 、「いけには、きんぎよが三びきおよいでいます。」

四86 こは、水のきれいないけです。

四248 、「おとなりのまさこちゃん、あのいけのそばまで、さんぼしてきました。」

五63 ダムにせかれていけになり、水力電氣をおこし、〈略〉、川はだんだん大きくなる。

八437 、「では、庭のいけの水をすくって、こがねになったものにふりかけなさい。」

八439 王さまは、いそいで庭のいけの水をすくって、王女のからだにおふりかけになりました。

九710 この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、ちらちらと光るいけともなり、

九117 、「青さをいれやうればいけのふなはや青き葉のかげにきておる

十184 いけのおもてにははじける雨あし。

十一418 池にむすぶはうすごおり、庭に立ったはしも柱。

十二614 あの美しい田さえなく、みわたすかぎりさざなみがうちよせる大きな池となっていた。

いけがき「生垣」(名) 2 いけがき

七733 ぼさぼさのいけがきの上である。

十五106 、「いけがきのすぎの木ひくみとなり家の庭の植え木の青めふく見ゆ

いけださん「人名」 1 いけださん

五785 ひまわりの花は、いけださんが自分のうちにわから、持つてきてくれたのです。

いける「生」(下) 3 いける 《一ヶ》

三566 、「うたを わすれた カナリヤは、せどのこやぶに いけましょか。」

五781 、「だれがいてくれたのですか。」

十一435 正面のテーブルには、赤いうめの花をいけた、大きなびんがかざってありました。

いける「行」(下) 38 いける 行ける 《一ヶ・一ケル》

三602 みんなの心があわないと、どこへもいけません。

三6010 みんなの心があわないと、どこへもいけないうまいか。

三647 、「りよう方いつべんにはいけないうまい。」

三656 もうみんなはどこへもいけません。

三693 、「さあこれでいけるぞ。」

四3710 、「いやしいまねをしてはいけませんよ。」

四447 、「それはいけないうまい。」

四449 、「どうしていけないうまいの。」

四978 、「そんなことをしてはいけないうまい。」

四1167 、「この たまてばこは、どんな ことが

あつても、おあけになつてはいけませんよ。

四一七(一) これをあけてはいけないというので
すか。

五六四(一) こうして、まいにち、たっしやで生きて
いけるのは、だれのおかげだろう。

六八八(一) ここであそんではいけない。

七一八(一) そんなに実をとっちゃいけない。

七三二(一) 死ぬといけないから、ここからだして、
庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょうね。

八四四 西洋の子どもだらうなどと、早がつてんし
てはいけませんよ。

八八二(一) うぬぼれてはいけないよ。

九三九(一) 先生やみなさんといっしょに、この湖へ
つりにいけたらと、いつも思っています。

九四九(一) ちよまはふえる力の強い草なので、どん
な小さな根っこでも、すつかりとりのぞいておか
ないといけないといわれて、ほねをおりました。

九四九(一) たかぎ「いや、ぼくがいけなかったの
さ。」やまだ「ぼくもわるかったよ。」

九四九(一) 先生、まだすべつてはいけませんか。

一〇五(一) あの橋はあふないから、けつして渡つ
てはいけない。

一一三(一) ぼく、いけないんです。

一一八(一) いつも、ぼくがそばにいないといけな
いのです。

一二四(一) ケラーは、もうサリバン先生なしには、
生きていきません。

一四九(一) 心からおかあさんを愛しているからだ
と、こうお考えにならなければいけません。

一四九(一) そうしたら、おそばに行けます。

一四三(一) むかしのことはしばらくおき、これから
の人の心がまえは、大きくなくてはいいけません。

一四三(一) そういうちっぽけな考えでは、とても世
界の中にはたつていいけません。

一四三(一) そんなことにへこたれてはいけません。

一四三(一) ひくつになつてはいけません。

一四三(一) いまのお話の養分だつて、水にとけて
いるから、根から実まで運んでいけるのですよ。

一五三(一) だからまだ、ダイヤモンドを、まわし
てはいけませんよ。

一五三(一) それを受けてはいけません。

一五三(一) なにも受けてはいけませんよ。

一五三(一) 小さなおかしもいけないの。

一五三(一) それは、どうしてもいけませんよ。

一五三(一) それを妹にいつてはいけません。

いけん「意見」(名) 1 意見

一三三(一) わかいダルガスの意見を、実際にためし
てみると、そのとおりになりました。

いご「以後」(名) 1 以後

一三三(一) 植林が成功してから以後の農業は、すつ
かりかわりました。

いざ「感」1 いざ

一二四(一) いざ子ども走りあるかんたまあられ
いさましい「勇」(形) 6 勇ましい《一イーク》

一一三(一) だいこんの花にあかつきの 色ただよ
えば勇ましく、すき・くわ持つて野にいそぐ。

一二六(一) 里の人たちはおどろいたが、《略》、田植
え歌勇ましく、一心にはたらいだ。

一五三(一) そう思うと、勇ましいひつじかいはい、身
のあふないこともわすれて、思わず鳥のせにとび
ついたのでした。

一五三(一) さいわいにその勇ましい少年は、大わし
のせにとびつき、その上へ乗りうつて、

一五三(一) それからは、必死にとびかかる大わしと、

この勇ましい少年との戦いです。

一五三(一) まっ白な山までも、朝日の中のこの勇ま
しい少年をほめたたえているようでした。

いさましい「勇」(名) 1 勇ましいさ

九四九(一) 両手をひろげて高くとばれるすがたは、な
んという勇ましさであらう。

いさみたつ「勇立」(五) 1 勇みたつ《一チ》

一三八(一) 続くひよりに勇みたち、いねもことな
くとりいれた。

いさむ「話手」1 いさむ

三八二(一) いさむ「さあ、手をつなごう。」みんな「手
をつなごう。」

いざりあるき「膝行歩」(名) 1 いざり歩き

一二二(一) たった九十センチぐらいのところでも、
《略》、すぐに手をついて、いざり歩きになります。

いざりだす「膝行出」(五) 1 いざりだす《一
ス》

一二二(一) たいへんおそいようですが、いざりだす
となかなか早いものです。

いざる「膝行」(五) 1 いざる《一ツ》

一二二(一) かた足をなげだして、おしりでいざつて
歩くのです。

いし「石」(名) 23 石 じこいし・にわいし・はか
いし・ふみいし・わりいし

一五三(一) かっちゃん かっちゃん 石を切る。

一五三(一) めがねをかけて 石を切る、

一五三(一) 目もとをすえて 石を切る、

一五三(一) あせをながして 石を切る。

一五三(一) かっちゃん かっちゃん 石を切る。

一五三(一) 石より かいのみのさき、

一五三(一) のみより つよい うでさきで、かっちゃん
かっちゃん 石を切る。

三518 罎 のみの 手もととはくらくても、かっちゃん 石を切る。

三532 罎 こどもは 石の 上に 立ち、「〈略〉。」と いました。

五79 8 川の中の石が、のびたりちぢんだりして います。

五80 2 川の中の石と石とが、おどっています。

五80 2 川の中の石と石とが、おどっています。

六123 1 うさぎさんは、くるみをひろって、石で わってたべることにしました。

六124 1 罎 石でたたいて、わっているのさ。

九85 4 罎 石で作ったもの、それには石の矢じり、 おもりなどいろいろあります。

九85 4 罎 石の矢じり、おもりなど

十10 2 そのいなかの町には、ポンナフという石の 橋があって、

十二99 3 石の矢の根があります。

十二99 4 石のおももあります。

十四81 1 石の上にも三年。

十五30 12 少年は、〈略〉、その石を取るが早いか、

〈略〉、全身の力をこめて投げつけました。

十五31 6 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、

胸に、目に、ひしひしとあたります。

十五35 3 ぼうきや、石や、貝がらなどに、はも

のなどでしるしをつけてしめすことも行われた。

いじ 「意地」(名) 1 いじ

一53 8 罎 しんせつない 人が ひろうと、だい

やもんですが、いじの わるい けんかずきの

人が ひろうと、ただの いしころ になってしま

います。

いし いせんせい 「石井先生」(人名) 7 いし い先生

石井先生

九104 3 ぼくたち四十人は、のだ先生といし い先生

につれられて、山のスキー場へいった。

九105 4 のだ先生が先頭に立たれ、いし い先生は、

みんなのあとからこられた。

九106 1 いし い先生も、ずつとうしろの方から、

「略。」とさげばれた。

九108 2 「〈略〉。」と、いし い先生がうしろの方か

ら追いたてるようにいわれた。

九110 4 のだ先生がさきに、すぐつづいていし い先

生がすべられる。

九111 5 みんなそこへいくと、いま、いし い先生が

すべられるところである。

十五122 9 先生がたがみんなで、合唱してくださっ

た校歌や、石井先生の手品や、

いし うす 「石臼」(名) 2 石うす

四17 8 学校からかえったら、おかあさんが、石

うすを ひいて いらっしゃった。

四18 1 石うすは、ゴロンゴロンといった。

いしがき 「石垣」(名) 1 石がき

十10 12 三人の少女は、〈略〉、橋のたもとの石がき

のところへきては、遊んでいました。

いしころ 「石塊」(名) 7 いしころ 石ころ

一53 9 罎 いい 人が ひろうと、だいやもんですが

が、いじの わるい けんかずきの 人が ひろうと、

ただの いしころ になってしまいます。

一61 9 罎 でも、わたくしがもったら、ただの い

しころ になってしまわないかしら。

四49 3 かっちゃんは、十五ばんめからわきにそ

れたかと思うと、石ころかなにかのようにお

ちて きました。

六51 2 屋根も、木の葉も、石ころも、みんなきれ

いに光っていました。

九81 5 罎 貝や石ころは、どれか一つのかごにいれ

ておこう。

九119 9 水は大きなごろごろした石ころのあいだか

ら、ブツブツと音をたててわきだして、

十四54 11 罎 そこは、暗いところで、土もかたいし、

石ころなども、ごろごろしています。

いしだん 「石段」(名) 5 石だん いくじゅうくの

いしだん

十二57 6 ふしぎなことに、神山のほうには、昔か

ら九十九だんの石だんができています。

十二57 7 すばらしい大きな石だんで、とても人間

わざではない。

十二57 11 それは、おにが一夜のうちに百だんの石

だんをきずきあげること、

十二58 5 おには、これを承知して、ある夜、石だ

んをきずきだした。

十二58 8 みるみるうちに工事がはかどって、九十

九の石だんができた。

いしの (人名) 1 いしの

六64 8 (いしの)

いじ・める 「苛」(下) 2 いじめる 《一メ》

八86 5 子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、

あひるの子はまたいじめられるかと思つて、

八93 3 そのむかし、いじめられたり、あざけられ

たりしたときのことを考えた。

いしや 「医者」(名) 16 医者 ↓ おいしやさん

十一73 4 みると、医者が、ひとりの助手をつれて、

へやの向こうのはしにはいつてきました。

十一73 9 医者がすぐそばのベッドまできました。

十一73 10 医者は、せいの高い、すこしかがんだ、

まじめな顔をした老人でした。

十一73 11 医者が、まだとなりのベッドをはなれな

いうちに、少年は立ちあがりました。

1174 1 医者は少年をみました。

1174 5 医者は、手を少年のかたにかけました。

1174 12 すると、医者はちよつと考えてから、こ
ういしました。

1175 6 「略」と、医者は、もう一ど少年の
かたに手をかけながら答えました。

1176 1 医者はいつてしまいました。

1177 8 医者は二どきてみて、いくらかよくなっ
たように思うといいました。

1179 10 医者は、まったくだめだといわんばかり
に頭をふりました。

1188 8 夕がたの回しんのときに、医者は、
「略」といいました。

1189 4 光が窓から白くさしこんできたとき、医
者が、看護婦と看護人をつれてはいってききました。

1189 7 「略」と、医者はいいました。

1190 2 医者は、病人の上にしばらくのあいだう
つむいていましたが、

1190 8 「略」と、医者はいいました。

いしやさん 「石屋」(名) 1 石やさん

1150 5 石やさん かっちゃん かっちゃん 石を切る。
いじょう 「以上」(名) 3 以上 じいちメートルい

じょう・さんぶんのいちいじょう・じぶんたちい
じょう・それいじょう・はんぶんいじょう・ひつよ
ういじょう・ふたりいじょう・ゆめいじょう

1123 1 大もみがある大きさ以上に生長しない
のは、

1151 1 私たちは、(略)、私たちの影以上のも
のは見えないのです。

1151 4 私たちは、幸福なのですけれど、私た
ちのゆめ以上のものは、見られないのです。

いしよくて 「移植罫」(名) 1 移植こて

1176 4 めいめい、シャベルや移植こてを持っ
て、角のむきみ屋のところに集まっています。

いしよくじゅう 「衣食住」(名) 1 衣食住

1133 1 人間の衣食住というものは、みんなたいせ
つなものであるから、

いしよくする 「移植」(サ変) 1 移植する 「
シ」

1132 1 アルプス産の小みを移植してみたらど
うか、

いじりはじめる 「弄始」(下二) 1 いじりはじめ
る 「メ」

1179 男の子は、やがてしごと台の上のものをあ
れこれといじりはじめた。

いじる 「弄」(五) 4 いじる 《ツ・リール》

1113 そうして、一つのかいちゅう時計をだして
それをいじっていたが、

1120 6 でも、のりがかわかないうちにあまりい
じると、すぐはがれますよ。

1132 9 はたばかりいじっていて、おかしなやつ
だ。

1156 9 そうしたら、二年生の男の子が、ふくろう
のからだを手でいじりました。

いす 「椅子」(名) 18 いす じながいす・ゆりいす
1152 2 おかあさんが、いすに こしかけて、本を
よんで いらしやいます。

1171 5 そこで、デビッドはいすからおりて、つ
まんで みました。

1174 5 みんなはいすをおりて、その 光の中を
あるいていて、

1111 3 おとひめさまは、左の いすに こしかけま
す。

1139 11 王さまは、大喜びでねどこからとびおきて、
まず、いすにおさわりになりました。

1139 11 いすはたちまちこがねにかわりました。

1148 1 ぼくのいすは、小さなゆりいすで、その
下に、いつもかいねこのメリーがいた。

1171 5 少年は、いすをひきよせて、(略)、こし
をおろして待っていました。

1176 11 夜になると、少年は、へやのすみにいす
を二つならべて、その上でねむりました。

1179 11 少年は、いすにぐったりと身を落して、
すすりなきました。

1154 5 つくえやいすを重ねて、つかう人のかく
れるところを作り、まくでかくす。

1128 9 客のこしかける赤いすや、(略)を、
てんびんぼうでかついでやって来る。

1154 1 「いすによるマドンナ」といわれてい
ます。

1157 4 「いすによるマドンナ」は、おけのそ
こにかいたという小さな絵だが、

1154 1 「略」——といつて、すすめられた
いすにかけて、楽しそうに語りだした。

1154 10 博士は、(略)、かたわらにあつたいすを
すすめるのであった。

1157 6 そのいすにこしかけてごらん。

1157 2 ああ、満ぼうがいすにこしをかけて、
ペンをにぎっている。

いす 「出」(下二) 1 出づ 《一デ》

1151 8 ばらの木の赤きめをふくかきの上に
小さき虫の出でたと見ゆ

いすこ 「何処」(代名) 2 いすこ
1154 4 空にはなちし わがそ矢は、あわれ
いすこに 落ちにけん。

十五五ノ一(文) 空にとなえし わが歌は、あわれい
ずこに落ちにけん。

イスパニアじん (名) 1 イスパニア人

十二四四 コロンブスがアメリカを発見して帰った
とき、イスパニア人はたいへん喜びました。

いずみ (泉) (名) 15 いずみ 泉

五四九 山のてっぺんのすぐかいところ、小さい
たにまに、小さいいずみ、

九一九四 その帰りに、近道をして谷をおりてくると、
そこに小石でかこまれた美しい泉があった。

九一九五 父は、その泉の水を手ですくって、いくど
もうまそうに飲んでから、私にいった。

九一九七(四) これは、名高い泉なんだよ。

九二一 泉をあふれでた水は、さらさらと走って、
《略》すこし大きな川に流れこんでいた。

九二一六 なんとかしてうまい水のわきでる泉をさが
しだしたのと思った。

九二二 茶人は、この上流にいい泉があるのではな
いかと気がついた。

九二二六 茶人は、泉はどうしても支流のほうにはな
くて、遠い上流にあるのだとさった。

九二四二(四) きつと、泉はこの近くにある。

九二四九(四) 泉はまつ川の上流にある。

九二五三 岸にそって上流に向かって歩きながら、と
きどき水をふくんで泉をさがしていった。

九二六六 谷川をさらにさかのぼると、岩まからちよ
ろちよるとわきでる泉があつて、

九二六七 茶人は、そこをほりくぼめ、小石でどてを
つくり、泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、

十一一七九 おかあさまの胸に、わきあふれるなくさ
めの泉に、かなしみもいたみも、あとなくぬぐわ
れます。

十三五〇六 牧場の泉を、そうじに行つて来るよ。
いずみをもとめて《課名》2 泉を求めて

九三七 十一 泉を求めて……百十九

九三九 十一 泉を求めて

いずれ (何) (代名) 1 いずれ

十一一四 いずれも、八つばかりの子どもたちでした。
いずれ (何) (副) 1 いずれ

九八七(四) いずれ学校へ帰ってから、もう一ど整り
しましょう。

いせい (威勢) (名) 1 いせい

五九二(四) それ、このとおり、いせいいくのびるわ、
のびるわ。

いぜん (以前) (名) 1 以前 いぜん

十三二四三 ダルガスの植林以前は、ユートランドの
夏は、晝は暑く、夜はときに、しもさえ見るこ
とがあつたのです。

いそいそ (副) 3 いそいそ

九二五八 自分の家へいそいそと帰ってきたつばめを
むかえる人の心は、

十一三八六(四) 村道に立つ大のぼり、ゆききの人もえ
顔して、その足どりもいそいそと。

十五六二 一 いそいそとげんかんへ出かけて、《略》
大小二つのくつをちらと見た私は、

いそがしい (忙) (形) 8 いそがしい 《ーイ・
ーク》

三三六(四) トン、トン、ゴシゴシゴシ、スススス、
たいへんにぎやかで いそがしそうです。

五二七(四) いそがしいから、わからなかったかもし
れません。

五二七 いそがしように人々が通ります。

九二五九 きのはみないそがしように、ドッテコ
ドッテコと、へんな樂隊をつづけていました。

十二二五 姉が、いそがしいので、おしめカバーを
させたままほっておくと、

十二二六(四) いそがしいものだから、ついしつけが
できなくて。

十三三一〇 さるまわしは、さるをつかったり、せり
ふをいったり、《略》、なかなかいそがしい。

十五一〇四 二 ひら手でたたいたり、いそがしく足で
けつたりして氣ちがいのようにはねまわります。

いそぎ おおいそぎ

いそぐ (急) (四五) 27 いそぐ 急ぐ 《ーイ・
ガ・グ》いそぐ・ひたいそぐ

一四三八(四) いそいででかけよう。

一四四七 ふたりはいそいでえきにきました。

三二五 天人は、いそいでかぐやひめにはごろも
をきせました。

四六 一 いそぐ ときには、でんぼうをうってく
れます。

四六三 もつと いそぐ ときには、でんわをとり
ついでくれます。

四六三二 かっちゃんは、なかまの手をとって、い
そいでとんでかえりました。

四八七(四) からすがいそいでかえったよ。

六一四八 はとは、いそいで木の葉をとって、ありの
そばにおとしてやりました。

六一六八 ありは、いそいでかりうどのすねにはいの
ぼりました。

六二〇九 いそいで、おかあさんのところへいった。

七四〇四 私は、いそいで、さぶろうのあとを追いか
けました。

七五二 甲乙ふたり、いそいでたちさる。

八二六 茶のまにいたうちじゅうのものがびつくり
して、いそいでピオをひろいあげました。

八四九 王さまは、いそいで庭のいけの水をすくつて、王女のからだにおふりかけになりました。
 九二〇 へやはいそいであたためられ、〈略〉、つばめたちのとまるところがつくられました。
 九四四 〔目〕 いそぐ用事だったので、先生にだけお目にかかってすぐ帰りました。
 九四九 〔三〕 いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷川にそった小道を、上の方へ登っていきました。
 九四四 〔文〕 いもうとの小さき歩みいそがせてちよ紙かいにゆく月夜かな
 十四八 〔五〕 べつにいそぐこともありませんでしたので、妹の氣のすむようにして、つれていきました。
 十一三三 〔七〕 だいいこんの花にあかつきの 色ただよえば勇ましく、すき・くわ持つて野にいそぐ。
 十一四一 〔十〕 学校へいそぐ子どもらの、息はま白に舞いのぼる。
 十四二〇 〔三〕 みんなは急いでそうじをすませた。
 十四九〇 〔一〇〕 二台の荷馬車が来たので、それをさけるために、急いで道を横ぎったときに、
 十四四六 〔六〕 そうして、おばあさんが見えなくなつては困ると思つたので、急いで、たばの中にあつたマッチをみんな一時につけた。
 十五九〇 〔二〕 ぼくたちは、たいへん急いでいるのです。
 十五九八 〔一〕 あの子たちは、大急ぎに急いでいる。
 十五四九 〔九〕 方々から急いでかけよつて来た「喜び」たちは、
 いそしむ 〔勤〕 (五) 1 いそしむ 《—ム》
 十五五九 〔四〕 つくえのまん中にチョークで線をひき、向こうは日本、こちらはアメリカといつて、たがいに向かいあい、勉強にいそしむことにしたが、
 イソップ (人名) 1 イソップ

十二四九 〔五〕 イソップ物語はイソップという人が書いたお話ですが、
 イソップものがたり 〔課名〕 2 イソップものがたり
 六二二 〔二〕 イソップものがたり……十三
 六三二 〔一〕 イソップものがたり
 イソップものがたり 〔題名〕 3 イソップ物語
 十二四九 〔二〕 イソップ物語
 十二四九 〔三〕 三年生のときに習つたイソップ物語。
 十二四九 〔四〕 イソップ物語はイソップという人が書いたお話ですが、これをキリスト教の宣教師が日本に傳えたのは、三百五十年ほどまえのことです。
 いた 〔板〕 (名) 7 いた 板 ↓ かべいた・ゆかい
 五九一 〔一〕 のびて、のびて、とうとうえんの下のいたで、あたまをコツンとうつたのだよ。
 八四八 〔八〕 いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこすつてもみがらははじきました。
 八四八 〔八〕 いたといたのあいだにもみをいれ、
 九一七 〔四〕 すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。
 十二五三 〔一〇〕 ひとさし指を首の中にいれ、おや指とか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。
 十五一〇 〔四〕 荒れ庭にしきたる板のかたわらにふるばちならび赤き花さく
 十五三七 〔八〕 左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に関係のあることを表わし、
 いたい 〔痛〕 (形) 10 イタイ いたい 《—イ・—イ》
 三六三 〔三〕 白うさは いたくて たまりません。
 六九三 〔三〕 いたい、いたいとなっていた、たいも喜び、おめでたい。

六九三 〔三〕 いたい、いたいとなっていた、たいも喜び、おめでたい。
 七九三 〔三〕 しばらく動かないで、いたそうにしています。
 九三三 〔八〕 首がいたいらしく、手でさすっている。
 九八二 〔一〕 首、いたいのか。
 九八二 〔二〕 「いたかない。」
 九三三 〔二〕 それより、自分のからだははれてくるし、いたいし、苦しくてどうにもなりません。
 十二三〇 〔一〇〕 「チロイ、ワンワン、チップー」ワンワン、ゲタナイ、アンヨ、イタイ、イタイ。
 十二三〇 〔一〇〕 アンヨ、イタイ、イタイ。
 一四一 〔一〕 「偉大」(形状) 2 一四一
 一五八 〔四〕 一四一 ないなれよ。
 一五八 〔六〕 平ぼんにして一四一 ないなれよ。
 一四一 〔七〕 いたぎれ 〔板切〕 (名) 3 いたぎれ
 一四一 〔八〕 いたぎれ。
 一四一 〔九〕 いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切つて、まん中にあなをあける。
 一四一 〔一〇〕 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家を作つておく。
 一四一 〔一〕 一四一 《—イ》
 一四一 〔二〕 このとき、希望をいだいてたちあがつたひとりの軍人がありました。
 いたす 〔致〕 (五) 6 いたす 《—シ》 ↓ おいとまいたす・おいのりいたす・おおくりいたす・おかえしいたす・おなぐさめいたす・おはなしいたす・おかわびいたす・ごあんないいたす・ごしようかいたす・どういたしまして
 一四一 〔三〕 あなたの お力で、いのちびろいをいたしました。
 一四一 〔四〕 わたくしが また、おとを いたしま

しょう。

四131 2 國のたからにいたします。

九70 4 國 そのたびにお礼はいたします。

十73 9 次郎かじゃは力があまり、茶だなの湯飲

みをはねとぼして、こなみじんにいたしました。

十五119 4 私は、愛しあう人たちには、いつでも

しんせつにいたします。

いだす じみいだす

いたすら 〔悪戯〕(名) 1 いたすら

十65 3 かれらは、だんなのねこかぶりをあばいた

り、いたすらをしたり、

いたすら 〔徒〕(形状) 1 いたすら

十三12 知識によらず道理によらず、いたすらに

理由のないことを信ずる迷信は、

いたすら 〔悪戯〕(形状) 1 いたすら

十四59 9 すると、いたすらなはちがいしました。

いたすらざかり 〔悪戯盛〕(名) 1 いたすらざかり

十五60 9 ふつう「満ぼう」でとおっていた私は、

そのときちょうど四つのおいたすらざかりであった。

いだせる じみいだせる

いただき 〔頂〕(名) 4 いただき

九46 6 もう、遠くの山々のいただきに、白い雪

のぼうしがみえます。

十五19 8 ほとんどいただきまで高山植物のさきみ

だれているけいしや面を、

十五56 1 其のころ日本をたずねた外人の中で、

富士山や磐梯山のいただきをきわめたのは、

十五56 4 山のいただきに立った私は、小手をか

ざして足の下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ、

いただきか・ねる 〔頂兼〕(下) 1 いただきかね

る《ネ》
七45 5 せつかくのおこころざしですが、このお

金はいただきかねます。

いただきます 〔頂〕(感) 1 いただきます

十二89 8 食事のたびごとにいう「いただきます」

「ごちそうさま」にしても、

いただく 〔頂〕(五) 32 いただく 《イ・イー・キ・

ク》

一60 3 あなたの おうちに おいて いただいた

おかげで、しろちゃんほ、げんきなこになりま

した。

一65 5 あまの川の だいやもんど、おかあさん

のおみやげに いただいたの。

二13 2 おばさんの うちから、大きな りんごを

みつつ いただきました。

二53 9 この りんご、じろうに さんに いただ

いたの。

四103 6 このあいだ、たすけて いただいた かめ

で ございます。

四113 8 いや、もう じゅうぶん いただきました。

四116 6 でも、うちの ことも 氣に かかります

ので、かえらせて いただきます。

四116 2 いやいや、たいへん たのしい 思いを

させて いただきました。

四116 8 これは これは、おみやげまで いただき

まして、ありがとう ございます。

四117 3 いつまでも そのままに して おいて い

ただきと ございます。

四132 2 では、こちらへ いただきましよう。

五22 4 おじいさんにおあいして、おもちゃ、まっ

白に こなのふいたほしがきなどを いただいて、

五56 7 じゅんばんがきたので、みせて いただきま

した。
五90 10 それから、おかあさんのおちちをコッ

プロップといただいて、こんなにいいおぼうさん

になったのだよ。

六99 4 いつか、おじいさんに いただいた古いめが

ねのたまと、《略》小さな虫めがねがでてきた。

六99 4 古いめがねのたまと、おとうさんにかつて

いただいた小さな虫めがねがでてきた。

六114 2 おじさんからたこを いただきました。

六117 9 なが四角から、ま四角に切る切りかたは、

いつかおかあさんに 教えて いただきましたから、

七45 9 では、ありがたく いただきます。

七84 8 裁判官どの、それを、しらべて いただき

と ございます。

八47 11 ああ、せい いっぱいはたらいて、晩ごは

んも いただいた。

九113 7 午後は、先生について、ひとりひとり、正

しいすべりかたを 教えて いただいた。

十一44 5 みんな読みあげられてから、おめんじょ

うを いただく になりました。

十一45 7 だんを あがり、両手を ずつと さしのべて、

おめんじょを いただいて、

十二40 7 もうあ教育に経験のあるサリバン先生に

きて いただく になりました。

十二43 8 いつか おじいさんから いただいた 童話の

本に、

十二91 5 帰っておかあさんに ゆでて いただいた こ

と、みんな で たべたこと——

十三40 6 眞二を 呼んで いただきたいのです……

はい。

十三53 2 もとの先生から、一まいの絵はがきを い

ただきました。
十三55 2 先生から いただいた 絵はがきを だして 見

十五194 ベルンの町からながめると、まっ白に雪をいただく山々がならび立っています。

十五937 せつかくおまねきをいただきながら、そうあたふたとおいとますることもできません

ただける「頂」(下) 1 いただける《一ケ》

四1324 天人のまいをまっけて、みせていただけませんか。

いたって「至」(副) 1 いたって

十四109 いたってべんりにできています。

いたで「痛手」(名) 2 いたで

九235 オーストリアは第一次世界大戦のあとで、まだそのいたでがなおっていないころでした。

十五313 大わしは、この思わぬいたでにおどろいて、ぱつと一まず舞いましたでしたが、まだこりないでやって来ました。

いたみ「痛」(名) 4 いたみ

三472 するといたみがいつそうひどくなつて、とてもたまらなくなりました。

九1345 いいにおいをかいでいると、《略》苦し

十一1710 おかあさまの胸に、わきあふれるなぐさめの泉に、かなしみもいたみも、あとなくぬぐわれます。

十五298 大わしは《略》、きずのいたみもかまわず、《略》少年にとびかかって来ました。

いたみだす「痛出」(五) 1 いたみだす《一シ》

七149 「腹がいたみだした。」

いたむ「痛」(五) 3 いたむ《一ン》

二233 はねのいたんだ大きなちようちよが、けさも、ゆりの花にきていましたよ。

六124 小さなねじが一本いたんでいましたから、とりかえておきました。

十一294 金次郎は、《略》いねのなえをひろって、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。

いためる「痛」(下) 1 いためる《一メ》お

いためる

六587 そのひょうしに足をいためて、歩けなくなりました。

イタリア「地色」5 イタリア

十一641 去年、しごとをさがしにフランスへいったのですが、数日まえ、イタリアへ帰ってきて、

十三148 そのケプラーと同じころ、イタリアのピサに生まれたガリレオという学者がありました。

十三5310 これは、いまから五百年ほど前に、イタリアのラファエルという画家のかいたもので、『いすによるマドンナ』といわれています。

十三567 本物はね、いま、イタリアのフロレンスという町の絵画館にかざつてあるよ。

十五409 ローマ字は、アメリカ・イギリス・フランス・イタリア・《略》など、世界の大半につかわれている文字である。

いたる「至」(五) 1 いたる《一ル》

六1129 あとは、おしまいのパビブペボ、パビブペボにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。

いたるところ「至所」(名) 3 いたるところ

八47 北はほつかいどうから、南はきゆうしゅうやそのさきの島々まで、いたるところの山野に、

十三254 すたれた都市はふたたびおこり、新しい町村が、いたるところに生まれました。

十三256 道路・鉄道は、いたるところにしかれました。

いたわる「労」(五) 1 いたわる《一ル》

十一773 少年のいたわるような声のひびきをきくと、

いち「課名」30 (一) 一

一22 一 みんないいこ……四

一41 一 みんないいこ

二22 一 「あ」のつくことば……四

二41 一 「あ」のつくことば

三22 一 春の声……四

三41 一 春の声

四22 一 この町……四

四41 一 この町

五22 一 川のうた……四

五41 一 川のうた

六22 一 小さなねじ……四

六41 一 小さなねじ

七22 一 校門のかしの木……四

七41 一 校門のかしの木

八22 一 うちのほおじろ……四

八41 一 うちのほおじろ

九22 一 組みあわせ……四

九41 一 組みあわせ

十22 一 美しいもの……四

十41 一 美しいもの

十一22 一 川口の子どもたち……四

十一41 一 川口の子どもたち

十二22 一 小さな行……四

十二41 一 小さな行

十三22 一 しずかな午前……四

十三41 一 しずかな午前

十四22 一 おかあさん……四

十四41 一 おかあさん

十五22 一 まさに立つべし……四

十五41 一 まさに立つべし

いち	「二」〔話手〕3 一
九88 7	「よせよ、たかぎくん。」
九90 2	「もういいったら——。」
九91 7	「びっくりしたよ。」
いち	〔題名〕35 一
一43 3	十八 お月さんのくに (一)
二4 2	一「あ」のつくことば (一)
二16 2	三 ことばあそび (一)
二25 6	(一) いちろうさんのしたおはなし。
二44 2	七 かげえ (一)
二55 2	八 ゆめとつくえ (一)
二61 4	(一)
三4 2	一 春の声 (一)
四81 2	八 クリスマス (一)
五8 2	二 私の旅 (一)
五38 2	五 心と心 (一)
六3 5	九 ぼくの発見……九十九 (一)
六99 2	九 ぼくの発見 (一)
七2 5	三 もんしろちよう……十六 (一)
七3 1	四 汽車の中……三十四 (一)
七3 4	五 作文……四十七 (一)
七16 2	三 もんしろちよう (一)
七34 2	四 汽車の中 (一)
七47 2	五 作文 (一)
八2 4	二 あぶらぜみ……十四 (一)
八2 7	三 天の川……二十六 (一)
八3 6	六 みにくいあひるの子……六十 (一)
八14 2	二 あぶらぜみ (一)
八26 2	三 天の川 (一)
八60 2	六 みにくいあひるの子 (一)
九2 3	一 組みあわせ……四 (一)
九4 2	一 組みあわせ (一)

十2 8	四 あなたの思っていることは……二十
七 (一)	
十27 2	四 あなたの思っていることは (一)
十一63 2	九 父の看病 (一)
十二13 2	二 写生 (一)
十二31 2	四 光を求めて (一)
十二87 2	十 ことばのはたらき (一)
十四3 5	八 木もと竹うら……七十七 (一)
十四77 2	八 木もと竹うら (一)
いち	「二」(名) 18 一 (1) ありいち・あり
	いちに・ありいちにさん・うおいち・おとこのこ
	いち・おんなのこいち・きりぎりすいち・きりぎりす
	いちに・こがらすいち・こくごいち・こどもいち・
	さんぶんのいちいじよう・だいいちいせかいといせ
	ん・だいいつかい・だいいっせん・につぼんいち・
	のうりんいちごう・はんちよういち
四70 図	1
六31 4	1 はげしい風。
六64 図	1
六65 2	なぞ 一 世界じゅうで、いちばん力のつ
	よいものはなにあ。
八15 図	1
九88 5	たかぎには友だちの一、二、三、〈略〉、そ
	れぞれにわかれてふたりをひきとめている。
九91 3	一、二も、たかぎの落した物を集める。
九92 8 図	「一、二、三——」と数えながら舞台は
	しまできてとまる。
十18 2	1 黒い雲が流れてくる。
十一11 図	1 トップ
十一56 図	1
十二49 2	一 指人形の作りかた
十二49 3	1 材料。

十二49 7	(1)
十二52 2	(1)
十二52 9	(1)
十二53 9	1
十二54 5	1
いち	〔位置〕(名) 1 位置
十五13 5 図	照る月の位置かわりけん鳥かこの屋
	根にうつりし影なくなりぬ
いち	アールあまり (名) 1 一アールあまり
九34 5 図	ちよまを植えた一アールあまりのところ
	です。
いちいち	「二」(副) 4 いちいち
四4 8	学校にはいる 子どもも、いちいち 知ら
	せてくれます。
七84 4 図	きいてみれば、いちいち、もつともなこ
	とばかり。
十53 4	「オスワリシタ」と、いちいち、いぬの動
	作をことばにして喜びました。
十五89 8 図	わたしは、とてもいちいちしょうかい
	してはいられない。
いちおんいちおん	「二音一音」(名) 1 一音一音
十29 8	和音を耳にしたときは、組みあわされた一
	音一音のことも、心にうかべてみたいのです。
いちかいてん・する	「一回転」(サ変) 1 一回転す
	る『シ』
十三15 3	自轉といって、一晝夜に二どずつ、自分
	で西から東へ一回轉します。
いちかぞく	「二家族」(名) 1 一家族
十五20 5	ユングフラウの山中のホテルに、アメリ
	カ人の一家族が来て、しばらくとまっていた。
いちがつ	「二月」(名) 1 一月
四125 8	一月はお正月。

いちぎょう 「二行」(名) 3 一ぎょう
 六111 I みんな〈略〉、ナニヌネノという一ぎょうの中にはいつている音ばかりではないか。
 六111 II そうすると、ナニヌネノという一ぎょうは、ぜんぶはなの音でできていることがわかった。
 六112 3 この二つは、両方とも、マミムメモという一ぎょうの中にはいつている。
 いちぎょう いちぎょう 「二行一行」(名) 1 一ぎょう一ぎょう
 六113 6 一ぎょう一ぎょうは、なにか、ほかのぎょうとはちがった性質をもっているにちがいない。
 いちキログラム (名) 1 1 kg
 七86 6 白うさぎ 400 g、茶うさぎ 1 kg
 いちくみ 「二組」(名) 6 一くみ 一組
 三18 2 一くみは花の名をあつめました。
 三20 5 一くみの人たちに。
 四67 4 一組であつめた「早口あそび」。
 六56 4 かべ新聞第一号は、一組でつくることになりました。
 六56 7 私たち一組のものは、みんな集まって、どんなものにするかといういろいろ相談しました。
 六68 7 一組の人がみんな考えてこしらえたまんがです。
 いちげき 「二撃」(名) 1 一げき
 十五30 I 大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かって来ました。
 いちご 「葛」(名) 2 いちご ↓ やまいちご
 十一48 6 アカシヤの花が風にゆれ、畑では、いちごでさかりだった。
 十一57 4 園 はちみつやいちご、青うめ・わさび、にがい、にがいくすり、一つ一つしみる。
 いちこうねん 「二光年」(名) 1 一光年

八34 3 一光年は、光が発してから、一年かかってとどきよりをさしていいいます。
 いちごん 「二言」(名) 1 一言
 十五59 5 「略」と、一言のもとにしりぞけようとした。
 いちじ 「二事」(名) 1 一事
 十四81 2 一事が万事。
 いちじ 「二時」(名) 1 一時
 十二35 5 先生は失望して、一時やめていらつしゃいました。
 いちじに 「二時」(副) 1 一時に
 十四100 7 急いで、たばの中にあつたマッチをみんな一時につけた。
 いちしょうこう 「二将校」(名) 1 一しょうこう
 十五43 3 銀座通りをアメリカの一しょうこうが歩いてたが、ふと、ある店先で立ちどまった。
 いちだい 「二代」(名) 2 一代
 十一19 4 働くことがすきで、一代でりつばな身代をこしらえました。
 十二59 5 一代二代はいい人で、よくさかえたが、いちだい 「二台」(名) 5 一だい 一台
 五21 2 一だいの長い電車が、おきやくをいっばい乗せて、終点につきました。
 九21 8 その夜半には、また一台の貨物自動車が、五千ぼのつばめをつんできました。
 十35 12 佐吉は、〈略〉、いっしんに考えぬき、これならという一台の機械を作りあげた。
 十一52 2 やっと一台の電車がとまった。
 十三59 11 園 わたしが行ったとき、この絵の前には、一台の長いすがおいてあつたが、
 いちだん 「二段」(名) 2 一だん
 三31 8 一だん あがるごとに、あたりのよう

すが かわります。
 十二58 10 ところがいま一だんというところで、いちばんどりが鳴いて、東の空が明るくなった。
 いちだん 「二段」(副) 2 一だん
 九77 9 平らな畑やたんぼの向こうに、一だん高くなつたところがみえます。
 十五19 5 その中で、一だんと高くそびえているのが、このユングフラウの山です。
 いちちほう 「二地方」(名) 1 一地方
 十四67 12 陸地の上のどこかの一地方が、日光のために、特別にあたためられると、
 いちていりゅうじょごと 「二停留所毎」(名) 1 一停留所ごと
 十一52 9 一停留所ごとに、おる人と乗る人ともみくちやになつた。
 いちてんごセンチメートル (名) 1 1・5 cm
 七92 9 うさぎの毛の長さを計つてみたら、白は2 cm、黒も2 cm、茶は1・5 cmでした。
 いちてんはちなメートル (名) 1 一・八七メートル
 十二82 8 身長は一・八七メートル、〈略〉体格は、小さな清水選手のおよぶところではありません。
 いちど 「二度」(名) 25 一ど
 一11 10 園 もう一どやりましょう。
 一54 3 園 お月さんのくには、一ねんに一どたまひろいにこのかわらにきます。
 二18 4 園 いしゅうかんに一ど、赤いきものをきるものはなかに。
 二30 2 園 ぶうちゃんはしんぱいして、もう一どかぞえてみました。
 二52 1 六のばめん 一どくらくなり、またあかるくなると、

三104 2 一どでも かぐやひめを みた 人たちは、「略。」と思って、

四34 4 こう たずねられて、みんなは、もう 一ど、かずこさんの 文をよみなおしました。

四62 3 かっちゃんは、もう 一ど 林のおくをさがしに いきました。

五42 4 一どいってみたいと思います。

五68 10 もう一ど金のさかなのところへいって、家をもらっておいで。

六34 4 かかし、一どははねあげられるが、もんどりうって、また、ひげの中におちる。

六40 6 帰るといったって、あんな遠いところーでも、もう一どあの村に帰りたいなあ。

六82 2 一どつりがしたいのです。

七7 8 一どでいいから、風になりたい。

八63 7 わたしも、一どそれでだまされたことがあってね、そのひなには苦労したよ。

九39 8 一ど、すぎの木で、《略》高さ十五メートルに近い木にのぼったことがあります。

九44 8 この夏、一ど、用事でおばがそちらにでかけるとき、ぼくもついていったのです。

九86 8 いずれ学校へ帰ってから、もう一ど整りしましょう。

九137 3 わたし一どでいいから、お月さんのところへいきたいと思います。

十一75 6 《略。》と、医者、もう一ど少年のかたに手をかけながら答えました。

十三15 2 自轉といつて、一晝夜に一どずつ、自分で西から東へ一回轉します。

十三37 5 一どとぎれて、また鳴りはじめる。

十三38 7 ええ、一ど、三年のときだったか、遠足で行きました……

十四7 5 どうしても一どはおこらなければならぬことが、おこったいうにすぎないのです。

十五90 9 とにかく、そいつは、一どもわたしたちのテールにのぼったことはないようです。

いちどに「二度」(副) 4 いちどに 一どに 三112 5 お月さまが一どに十もでたかと思われ

るほど、あたりがあかるくなりました。

七5 11 学校じゅうは、いちどに花がさいようだ。

九74 11 やまねこの黄色のじんばおりも、ぎよしやも、きのこの馬車も、一どにみえなくなつて、

九109 10 みんなが急停止をすると、雪けむりが一どにあがった。

いちにセンチ (名) 1 一二センチ

八18 3 土の中は、たとえ一二センチ歩くにも、トンネルをほっていかなくてはなりません。

いちにち「二日」(名) 15 いちにち 1日 一日 二18 7 いちにちに二へんあるのに、いちねんに二へんしかないものはなかに。

五27 1 だって、電車のおかげで、あんな遠いところまで、一日でいって帰ってきたのですもの。

六12 1 一日おいて、町長さんがきた。

六81 3 きょう一日だけ、私につりをさせてくださいませんか。

六81 10 たった一日だけでいいのです。

六82 1 いくら一日でも、いやだ。

八7 8 まるで、一日の幸福を予言してくれるようです。

八32 6 では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう。

八103 4 花のさくのは、1日にすこしのあいだけだと思いました。

八103 7 花は、1日開きませんでした。

八109 2 のこっていたもみを、1日、日光にかかんほして、すぐにもみすりをしてみました。

九31 6 ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわすれたことはありません。

十一78 11 一日に二ど、看護婦が持ってきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、

十一88 5 そのつぎの日も、一日ずつとそばにいました。

十二60 2 長者は、なんと思つたか、なん千アールの田をきょう一日で植えてしまえといいつけた。

いちにちいちにち「二日一日」(名) 1 一日一日 十三52 8 わたしの日々が、自然をしたう心で、一日一日と、むすばれていくように。

いちにちじゅう「二日中」(名) 1 一日じゅう

五42 10 一日じゅうつたいをして、うちに帰るころは、もう、あたりはくらくくなっています。

いちにねん「二年」(名) 1 一、二年 九92 2 一、二年ぐらいの男の子、

いちにのさん「二三」(感) 1 一、二の三 六24 7 「一、二の三」と、かけ声をかけて持ちあげます。

いちにんまえ「一人前」(名) 1 一人まえ 十三8 5 一人まえの人として、自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことがらである。

いちねん「二年」(名) 6 いちねん 一ねん 一年

一54 3 お月さんのくには、一ねんに 一どたまひろいにこのかわらにきます。

二19 1 いちにちに二へんあるのに、いちねんに二へんしかないものはなかに。

三12 1 一年たちました。

八32 9 一年の月日がたつて、いよいよその日にな

ると、

八34 一光年は、光が発してから、一年かかってとどきよりをさしています。

十三15 だえん形のきまつた輪をえがいて、一年に一回、太陽のまわりをまわります。

いちねんいちねん 「二年」(名) 1 一年一年

十二19 一年一年とすんだことをかえりみて、いちねんさんかげつ 「二年三箇月」(名) 1 一年三ヶ月

十二24 5 めいの民ちゃんは、二つ、満でいえば一年三ヶ月で、まだ歩けません。

いちねんせい 「二年生」(名) 6 一年生

二60 5 こんど、みなさんが二年生になったら、あたらしい一年生がはいってきます。

六58 4 雪の降った朝、一年生の子が、学校にくだ道で、はき物に雪がついてこぼしました。

六112 1 ぼくは、五十音というものは、一年生のときにならったからよく知っているが、

七6 8 一年生だ。

七56 1 一年生の唱歌がきこえます。

十五13 8 なつかしい一年生。

いちねんはん 「二年半」(名) 2 一年半

十二40 1 ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、

十五52 5 私は、一年半の努力の結果、しゅびよく書きあげた論文を持って、

いちのぼめん (題名) 6 一のぼめん 一の場面

二47 5 一のぼめん いちろうがでてきます。

四96 2 十うらしまたろう 一のぼめん、

六17 7 ありときりぎりす 一のぼめん

六80 2 八つりぼりのゆくえ 一のぼめん

七3 9 七にげたらくだ……七十四 一の場面

七74 6 七にげたらくだ 一の場面

いちのひと 「二人」(話手) 8 一人の人

十四38 2 四 夜明け 一人の人「音がする。」

十四38 7 一人の人立ちあがって、「略。」

十四39 5 一人の人「わたしたちの、楽しい朝がくる。」

十四39 8 一人の人「なんとさわやかな夜明けだろう。」

十四40 7 一人の人「日本の朝。」

十四41 2 一人の人「友よ、友よ。」

十四41 7 一人の人「山はつきり見えてきた。」

十四41 9 一人の人「みんな、両手をのばせ。」

いちのひと 「一人」(名) 1 一人の人

十四38 3 ああ、いい音がする。「みんな「一人」

の見ている方を遠く見つめる。」

いちばん (場面) (名) 1 一場面

十二107 2 これは、鳥羽僧正という人がかいた動物絵巻の一場面であります。

いちばん 「一番」(名) 1 一ばん

四74 2 七いろはがた い——いの一ばん。

いちばん 「一番」(副) 80 いちばん 一ばん

一24 5 ここが 一ばん おもしろかったとおもいます。

二29 5 一ばんはじめに、ぶうちゃんがかぞえました。

三45 10 いちばんしまいにいたわにぞめが、白うさぎをつかまえて、

三116 5 天にいちばんちかい山はどこか。

三116 8 するがにある山がいちばんみやこにもちかく、天にもちかいそうでございます。

四44 10 ぼくは、きのうは 一ばん おしまいだっ

たもの。

四46 5 おとといは、一ばん せんとくにして

くれていったのに。

四47 1 ところが 一ばん 安全らしい。

四84 5 一ばんさきに、ねえさんが、エスさまのおたんじょうのお話をしました。

五10 10 いちばんさきのきかん車の中でさ。

五39 2 ほっかいどうは、いまがいちばんたのしいときです。

五98 5 いちばんはじめに、それをおかあさんがききつけました。

六10 10 しかし、いちばん喜んだのはねじであった。

六65 2 世界じゅうで、いちばん力のつよいものは、なかに。

六69 2 一ばん遠くから通っている子どもの名や家の場所も書きました。

七4 9 さあ、きょう、いちばんはじめてくるのは、だれかな。

七45 11 それでは、お礼にわたしのいちばんとくいな曲を、一曲ひきましよう。

七53 1 あいては、町の、いちばん強い学校だ。

七87 1 うさぎはどんな草を、いちばん喜んでたべるか、しらべてみることにしました。

八4 7 いたるところの山野に、いちばんたくさんいる鳥といわれるほおじろです。

八12 6 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばきの木の根もとにうめてやりました。

八40 6 さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん美しい庭をもつことができる。

八62 4 いちばん大きなたまごがまだのこっている。

八91 8 いちばん小さな子どもが、「略。」とさけんだ。

八九二 新しのが、いちばんきれいだ。

八九五 いまでは、すべての鳥の中で、いちばん美しいといわれる身のうえになったのである。

八〇一 八 いちばん多いので五本になりました。

八〇六 三 本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので、ほかのは、だいたい十二ぐらいでした。

九三二 二 この湖へつりにいくのが、いちばんの楽しみです。

九三五 九 それは、七月の二十八日でしたが、村でいちばんおおい植えつけでした。

九四二 七 いちばん小さな三つになる妹もつれて、うちじゅうがみんなでもほりをしました。

九五三 〇 くるみのいちばん上の枝がゆれ、

九六五 五 なんといったって、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。

九六七 七 わたくしがいちばんとがっています。

九六八 八 いちばんまるいのはわたしです。

九六九 九 大きなのがいちばんえらいんだよ。

九七〇 〇 わたしがいちばん大きいから、わたしがいちばんえらいんだよ。

九七二 二 わたしがいちばん大きいから、わたしがいちばんえらいんだよ。

九七三 三 なんといったって、頭のとがったものが、いちばんえらいんです。

九七四 四 この中で、いちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなっていないのがえらいとね。

九七五 五 この中で、いちばんばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていないのがえらいとね。

九七六 六 頭のつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。

九八四 四 これはじょうもん土器といって、貝づからでる物では、いちばん多い土器です。

九八五 五 じまん話をはじめると、自分がいちばんりっぱだと思ふんだね。

九八六 六 小学校のいちばん上の学年か、

九八七 七 いちばんちがうところは、

九八八 八 『ぶす』をたべて死ぬのが、いちばん早道と思ったのです。

九八九 九 いつもは、いちばんびりにいるばかりで、べつに用もないようだが、

九九〇 〇 これこそ、いちばんりっぱなものだと思ふ。

九九一 一 だがね、やっぱり、いちばんだいで、むずかしいのは、コックスだろう。

九九二 二 人の心の畑にさいた、いちばん美しい花、

九九三 三 天と地にかがやくものの中で、いちばん清らかな、すみきったたま、

九九四 四 いちばん下のは、そのとき二つでした。

九九五 五 じゃあ、第四号室のいちばん向こうのベッドだ。

九九六 六 私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな日は、サリバン先生がきてくださった日であります。

九九七 七 その中で、いちばんさわがしくて、大きな音をたててやって来るのは、さるまわしである。

九九八 八 なんといいても、いちばん耳に親しいものは、水運ぶ一輪車の音であらう。

九九九 九 おわかれしてから私がいちばんつらかったことは、

一〇〇〇 〇 おかあさんのおやさしさこそ、私にとって、いちばんとうとい宝なのです。

一〇〇一 一 古くから日本といちばん関係のふかかった大陸からは、

一〇〇二 二 生きものに、いちばんたいせつなものは、私たち水です。

一〇〇三 三 ぼくは、いちばんじみなものです。

一〇〇四 四 しかし、いちばんいい種を、来年もわずれずにまいてもらうことができさえすれば、

一〇〇五 五 雪國でいちばん楽しいものは、なんといっても、春さきの雪どけごろである。

一〇〇六 六 「色なべしま」といわれる、色のはいたものが、いちばんすぐれていたという。

一〇〇七 七 この地球の上でいちばんふとっている「幸福」(ぜいたく)たちが、

一〇〇八 八 あれがこの世の中でいちばんふとっただれの目にも見える「幸福」どもだよ。

一〇〇九 九 とうとう「いちばんふとった幸福」が、テーブルをはなれて、

一〇一〇 〇 「いちばんふとった幸福」チルチルの方へ手をさしだしながら、

一〇一一 一 わたしは、幸福なままでいちばんふとった「お金持の幸福」です。

一〇一二 二 さて、いちばんおしまいに、ここにいるのは、『はちきれそうなわらい』で、

一〇一三 三 子どもの幸福というものは、〈略〉、いちばん美しいものに見えるものだからね。

一〇一四 四 ぼくは、きれいではないが、いちばんたいせつなものです。

一〇一五 五 『善人であることの大きな喜び』で、いちばん幸福なのですが、いちばん悲しそうです。

一〇一六 六 いちばん悲しそうです。

一〇一七 七 ぼくたちのなから、いちばん美しいものがいなくなってしまうわけですからね。

一〇一八 八 『いちばん大きな喜び』の中に、『美しいものを見る喜び』があります。

十五109 1 画 『喜び』は、たぶんここでいちばん純潔なものでしょう。

十五112 1 画 おかあさんたちの愛は、喜びの中でもいちばん美しい喜びなんですよ。

十五115 9 画 いっただって、同じおかあさんで、いっただって、いちばん美しいおかあさんのだからね。

いちばんどりー「一番鶏」(名) 1 いちばんどりー

十二58 10 ところがいま一だんというところで、いちばんどりーが鳴いて、東の空が明るくなった。

いちばんぼし「一番星」(名) 2 一ばんぼし 一ばん星

一25 8 一ばんぼし みつけた。

五53 3 画 まさこちゃん、一ばん星 みつけたのね。

いちびょうかん「一秒間」(名) 1 一秒間
八34 5 光の速度は、一秒間に地球を七まわり半します。

いちぶ「一部」(名) 2 一部

十三60 12 画 あれは、ミケランジェロのかいた、てんじょう画の一部だ。

十四52 11 画 それは、花の一部であるめしべの根もとが、大きくふくれただけのものです。

いちぶぶん「二部分」(名) 3 一部分

十四33 5 この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。

十五39 6 かたかなは漢字の一部分をとって作ったもので、

十五39 8 ひらがなはかたかなのように漢字の一部分をとったのではなく、

いちへいほうメートル(名) 1 1平方m

八109 7 平年作は、1平方mに3・5dlのげん米がとれるのですから、

いちページ(名) 2 一ページ

六48 5 画 海 どこかでだれかがめくってる、大きなきれいなページ、生きた絵本のページ。

六48 6 画 生きた絵本のページ。

いちまい「一枚」(名) 20 一まい

三94 5 一まいの紙で、いろいろなものをとおることが出来ます。

三95 4 この一まいの紙が、いろいろなかたちになったり、ふくれたり、立ったりします。

三95 7 この一まいの紙に、えをかくことができます。

三96 6 また、この一まいの紙に、字をかくことができます。

三98 5 一まいの紙にかいたえを、どこにかざりましょう。

四52 7 ちょうど、一まいのもうふのようになつて、かっちゃんをささえながら、できるだけ早くとびました。

四83 3 「略」といって、一まいのえをだしました。

六101 4 その一まいをぐるぐるとまいた。

六101 9 つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐるとまいた。

七23 10 画 だいこんの葉を一まいとってきてね。

八49 5 画 わたしには、あいにく、一まいのシャツの持ちあわせもございません。

十一15 10 教室の高いところの窓ガラスが、一まいこわれていて、

十二49 4 古はがき一まい。

十二49 9 古新聞を二まいとも八つに切って、そのうち一まいだけを正方形にする。

十二50 1 正方形の一まいのりをつけてつつかぶせる。

十三53 2 もとの先生から、一まいの絵はがきをいただきました。

十三55 6 「略」といって、一まいの絵をひきだしからだして、見せてくださいました。

十三59 1 おじさんはそういって、同じひきだしから、一まいえらびだして、見せてくださいました。

十三60 5 ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、かべにかかっている一まいの絵を見ました。

十五46 3 ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵のはちを手にとって、かれは、びっくりした。

いちまいいちまい「一枚一枚」(名) 2 一まい一まい

九44 3 画 かきの葉を一まい一まいならべて、この色がよいとか、こちらの色がよいとかいって

十二51 2 日本紙を細長く切って、一まい一まいによくのりをつけてはりかためる。

いちまいのかみ「課色」2 一まいの紙
三3 6 十二 一まいの紙……九十四
三94 4 十二 一まいの紙

いちまいのしゃつ「題名」2 一まいのシャツ
八3 2 一まいのシャツ
八44 2 一まいのシャツ

いちまいめ「一枚目」(名) 1 一まいめ
十一26 6 その一まいめをめくって、くり返しくり返し読んでみると、

いちまんキロあまり(名) 1 一万キロあまり
九24 6 日本からオーストラリアまでは、一万キロあまりもあります。

いちまんこうねん「一万年」(名) 1 一万年
八35 9 百光年の星もあり、一千光年の星のむれもあり、一万光年の星もあります。

いちまんば「二万羽」(名) 1 一万ば

九2210 二十九日 飛行機で 一万は

いちメートル (名) 3 一メートル

八218 地表から一メートルほどのぼったところに、

小枝がわかれていました。

九813 罫 まず、一メートルぐらいのはばで、東西

に四五十メートルほってみることにしよう。

十二1017 赤色のすやきの土人形で、高さは一メー

トルほどあり、

いちメートルあまり (名) 1 一メートルあまり

九348 罫 それが、深いになると、一メートルあ

まりも根をはっていました。

いちメートルいじょう (名) 1 一メートル以上

十二448 罫 その人形などは、長さにすれば一メー

トル以上のものもあるが、

いちめん 「二面」 (名) 7 いちめん 一面 ↓かい

すいいちめん・そらいちめん

二5610 なの花が、いちめんにさいていました。

六458 かかしの目のまえに、風にそよぐ金色のい

ねが、いちめんにつづいている。

九378 罫 くまざさやいろいろな名も知らない雑草

がいちめんにえていて、なにかでできそうです。

九598 そのとき、風がどうとふいてきて、草はい

ちめんに波だち、

十233 いちめんの花。

十四876 一面の銀世界となった廣い野原を、第一

の人が歩いて行く。

十五304 わしの白い下羽が、綿のように一面にち

りました。

いちもんじ ↓まいちもんじ

いちや 「二夜」 (名) 2 一夜

十一415 罫 もちつきすませて、しめなわをはり、

一夜明ければうれしいはつ日。

十二5710 それは、おにが一夜のうちに百だんの石

だんをきずきあげることで、

いちょう 「銀杏」 (名) 4 いちょう

九1184 罫 金色の小さき鳥のかたちしていちょう

ちるなり丘の夕日に

十581 いちょうの葉

十582 算数の時間に、先生が、はしごでいちょう

の木にのぼって、

十583 先生が、(略)、いちょうの葉をたくさん落

してくださいました。

いちりんしゃ 「輪車」 (名) 2 一輪車

十三331 なんといても、いちばん耳に親しいも

のは、水運ぶ一輪車の音であらう。

十三333 大きな水おけをのせた一輪車が、(略)、

かん高いひびきをたてて。

いちれい 「一例」 (名) 1 一例

十四207 そうして、つぎのようなことばはその一

例だとおっしゃってこくばんにお書きになった。

いちれつ 「二列」 (名) 3 一列

四478 三十ばのがんは、一列になってとんで

いきました。

六4210 それがほぐれて、一列にビルディングをは

なれる。

九1056 はじめは二列ですすんだが、谷あいでは一

列になったので、ずいぶん列が長かった。

いちろ 「二路」 (副) 1 一路

十五602 りっぱな自動車に、ためらう私をおしこ

み、一路自たくへと車を走らせた。

いちろう (人名) 39 いちろう ↓かねたいちろうさ

ま・かねたいちろうとの

二469 である人 いちろう じろう いもうとのさ
ちこ おかあさん

二476 いちろうがでてきます。

二488 いちろうは、りんごをだして、じろうの

手にわたします。

二492 いちろうは、となりのへやへいきます。

二545 「(略)。」こういって、いちろうをよび

ます。

二546 いちろうが、走ってでてきます。

九472 おかしなながきが、ある土曜日の夕がた、

いちろうのうちにきました。

九479 けれども、いちろうはうれしくてたまりま

せんでした。

九489 けれども、いちろうが目をさましたときは、

もうすっかり明かくなっていました。

九493 いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷

川にそった小道を、上の方へ登っていきました。

九496 いちろうはくりの木をみあげて、「(略)。」

とききました。

九506 いちろうは、すこしいきますと、そこはも

う、「ふえふきのたき」でした。

九518 いちろうがまたすこしいきますと、

九511 いちろうは、からだをかがめて、「(略)。」

とききました。

九526 いちろうは、首をひねりました。

九5211 いちろうが、またすこしいくと、「(略)」、り

すが、ぴよんぴよんとんでいました。

九531 いちろうは、すぐ手まねきして、それをよ

びとめて、「(略)。」とたずねました。

九535 すると、りすは、木の上からひたいに手を

かざして、いちろうをみながら答えました。

九541 いちろうがすこしいきましたら、谷川に

そった道は、もうほそくなってきたてしまいまし

九54 5 いちろうは、その道を登っていきました。
 九54 8 いちろうは、顔をまっかにして、あせをぼとぼと落しながら、その坂を登りますと、
 九55 9 いちろうは、だんだんそばへいきましたが、びっくりしてたちどまってしまいました。
 九56 3 いちろうは、きみがわるかったのですが、なるべくおちついてたずねました。
 九56 7 その男は、横目でいちろうの顔をみて、口を曲げて、にやとわらっていました。
 九56 11 いちろうはぎよつとして、ひと足うしろにさがって、「略。」といいました。
 九57 1 窓 ええ、ぼく、いちろうです。
 九57 8 いちろうは氣のどくになって、「略。」といいました。
 九58 3 いちろうは、思わずわらいだしながら返事をしました。
 九58 9 いちろうはあわてていきました。
 九59 3 いちろうは、おかしいのをこらえて、「略。」とたずねますと、
 九59 10 いちろうは、おかしいと思ってふり返ってみますと、
 九61 3 そのとき、いちろうは、足もとでパチパチしおのはねるような音をききました。
 九67 10 やまねこがいちろうにそとと申しました。
 九68 1 いちろうはわらって答えました。
 九69 8 やまねこは、「略」、ひたいのあせをぬぐいながら、いちろうの手をとりました。
 九71 6 いちろうはわらっていました。
 九74 2 いちろうは、こがねのどんぐりをみ、やまねこは、とびけた顔つきで遠くをみていました。
 九74 11 いちろうは、自分のうちのまゐに、どんぐりをいれたますを持って立っていました。

九75 5 「略。」と書いてもいいといえはよかった、いちろうはときき思ひうのです。
 いちろうくん 「人名」 2 いちろうくん
 三39 6 ぼくがまん中で、右のかたにはいちろうくん、左のかたにはみよこさん。
 三41 3 いちろうくんが、右の方に まがっていつてしまいました。
 いちろうさん 「人名」 5 いちろうさん
 二25 3 きょうは、いちろうさんと、さだおさんと、
 「略」、この五人のぼんです。
 二25 7 いちろうさんのしたおはなし。
 五22 2 いちろうさんは、おかあさんのさとの、いなかにいきました。
 五22 7 いちろうさんが家に帰ると、おかあさんが、げんかにむかえにでました。
 九56 10 窓 きみは、いちろうさんだな。
 いちろうさん 「題名」 1 いちろうさん
 五22 1 いちろうさん いちろうさんは、おかあさんのさとの、いなかにいきました。
 いちろうにいさん 「人名」 1 いちろうにいさん
 二54 3 窓 ああ、そのりんご、いちろうにいさんからもらったのです。
 いちわ 「羽」 (名) 18 一わ
 四54 3 一わの がんが、みずうみの きれいな水をくむと、
 四54 4 これをうけとった一わが、きず口をていねいにあらってやりました。
 四58 9 けれども、もう一わがみえません。
 五94 3 その帰り道に、一わの小鳥のひなをひろいました。
 六14 7 それを一わのはとがみつきました。
 六16 6 木の上には、一わのはとがとまっています。

た。
 六84 5 窓 小鳥一わとれやしない。
 八5 9 そばにすえた小さなかごの中から、一わずつかみだしては指さきへとまらせたり、
 八6 3 私も、すっかりひきこまれて、しばらく見物したのち、その一わを買い、
 八13 10 たかが一わの小鳥のことをと、わらわないうでください。
 八60 8 みずうみの岸の、ごぼうのはえているところに、一わのあひるがすわっていた。
 八65 4 窓 ほかのものは、一わだってこんなすがたをしていない。
 八65 11 ひなたちも一わずつとびこんだ。
 八67 8 親あひるにつれられたひなたちが通っていくと、一わの鳥が、「略。」というと、
 八68 1 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくいあひるの子の首すじにかみついた。
 八68 9 窓 あの一わをのけたほかは、みんないい子だ。
 八73 5 「略。」と、その一わがいった。
 十五22 12 大きな一わのやまわしが、「略」、みんなの上へ舞いおりて來ます。
 いつ 「何時」 (代名) 43 いつ
 二56 5 こんなことを かんがえているうちに、いつのまにか、ねむってしまいました。
 三97 8 心に思ったことは、いつのまにかきえてしまいますが、
 四23 5 窓 にいさんは、こんど、いつ おふねからおかえりですか。
 四135 1 窓 いつのまにやら 天人は、春のかすみにつつまれて。
 五48 3 いつ通っても、いつもたのしい、この小道。

五90 6 ㊦ それでな、さどが島をうたうときには、いつでもおじぎをするのだよ。

五105 6 ㊦ 一つのまにか、しじゅうからは、どこかへ

いってしまいました。

六23 7 ㊦ いまあそばないで、いつあそばうという

のさ。

六24 3 ㊦ まあいいや、こんないいときにあそばないで、いつあそばうというんだね。

六55 6 ㊦ 空は一つのまにか、雲一つなく、きれいに

はれわたっていました。

六137 10 ㊦ そのうちに、しかさんは、一つのまにかは

ぐれてしまいました。

七65 1 ㊦ 一つのまにか、葉ばかりのさくらになって、

毎日のはれ。

八62 5 ㊦ いつまでかかるのだろう。

八96 7 ㊦ いつ、めがでるでしょう。

九41 10 ㊦ 一つのまにどこへ渡っていったのか、い

まはもういなくなりました。

九42 1 ㊦ そのかわりまた、一つのまにかがなが

渡ってきました。

九44 4 ㊦ 一つのまにか葉がすっかり落ちつくして

はだかになった木の上に、

九82 3 ㊦ 先生のかごの中には、一つのまにか、せき

ふらしい物《略》がたまっています。

九134 4 ㊦ いいにおいをかいでいると、一つのまにか、

《略》からだのいたみもきえていきました。

十62 ㊦ しかし、われわれは、いつでも、どこにで

も、その美しいものを、すなおに感じとる心を、

もちつづけたものである。

十68 11 ㊦ いつでもにげだせるかっこうで、

十一19 11 ㊦ 大水で、田や畑をみんな流されたりしま

したので、一つのまにかびんぼうになって、

十一66 2 ㊦ いつ入院したのですか。

十一85 5 ㊦ おじさんは、いつでもぼくをみていま

す。

十二29 9 ㊦ いつそんなことを覚えたんでしょう。

十二35 4 ㊦ 私は、いつまでたっても区別ができません

でした。

十二113 3 ㊦ 新しい学問をきり開いていくときは、い

つの時代でもなみなみのどりよくでなしとげられ

るものではありません。

十三39 2 ㊦ マンシェウの眞ちゃん、帰って来た

んですか……いつ……え、うちに来たんですか

十四15 4 ㊦ おかあさんがご用でしたら、いつでも

とんで行きます。

十四88 4 ㊦ おそらく、まっすぐに歩こうと思ったの

であろが、一つのまにか曲がってしまう。

十五7 4 ㊦ 息白しいつまで残る明星ぞ

十五26 4 ㊦ 少年はいつ鳥のせからふり落されないも

のでもない。

十五100 11 ㊦ ぼくたちは、いつだって、あなたのま

わりにいるのですよ。

十五102 10 ㊦ いつでもすこし悲しうにしているの

は、だれもふり向いてくれないからです。

十五103 2 ㊦ 外へ出ればいつでも、この『幸福』た

ちは見られます。

十五103 6 ㊦ みんな、いつでもあんなにきれいな

十五106 12 ㊦ 『もののわかる喜び』が立っています

が、あれは、いつでも、兄弟の『なにももののわ

からない幸福』をさがしているのです。

十五112 4 ㊦ 私は、いつだってこの着物を着ている

のよ。

十五114 1 ㊦ おまえのせわをしているときは、いつ

だってこんなに白くなって、光がさすのにな。

十五115 5 ㊦ おまえと私とが、かわいがりあうとき

は、いつでも天國にいるのですよ。

十五115 8 ㊦ いつだって、同じおかあさんで、いつ

だって、いちばん美しいおかあさんなのだからね。

十五115 8 ㊦ いつだって、いちばん美しいおかあさ

んなのだからね。

十五119 4 ㊦ 私は、愛しあう人たちには、いつでも

しんせつにいたします。

いっか 『一家』(名) 2 一家

八5 2 ㊦ 秋のはじめのある晩、一家そろって、ぎん

ざの大通りを歩いていましたら、

十一30 1 ㊦ やがて、金次郎は、親類の家からでて、

もとの自分の家に帰り、一家をふたたびおこすこ

とができました。

いっか 『五日』(名) 5 五日 ↓ がいついっか

八34 9 ㊦ 五日や二十日でもありません。

九22 13 ㊦ 五日 同じくのこりの三十九わ

十一66 3 ㊦ 五日ほどまえたと思います。

十一85 4 ㊦ ぼく、ここに五日のあいだいました。

十一92 10 ㊦ 五日のあいだ呼びなれていた名が、しぜ

んと口のにぼってきました。

いっか 『何時』(副) 12 いっか

六79 9 ㊦ ごろうは、いつか『こくこ』でならった

『あさがおの花』を思い出しました。

六99 3 ㊦ いっか、おじいさんにいただいた古いめが

ねのたまと、《略》ができました。

六100 11 ㊦ これで、いっか、おとうさんのお話にき

いた望遠鏡が、できるかもしれない。

六117 9 ㊦ なが四角から、ま四角に切る切りかたは、

いっかおかあさんに教えていただきましたから、

九63 6 ㊦ みると、やまねこは、もう、いっか黒い、

長いしゅすの服を着て、どんぐりどものまえにす

十二 85 8 相手をいきよにうちのめすぜつこうの

十五 7 1 文韻 冬の水一枝の影もあざむかず
いっしつ 二室 (名) 1 一室

る。
五 16 ポストにいれられると、友だちといっしょ
2

になりました。

五43 7 ㊦ ですから、花ばかりで、よくいっしょにうたいました。

五55 11 私ほ、〈略〉、はるおといっしょに、学校へいきました。

五78 10 きょう、先生といっしょに、学校のはたけのむこうを流れている小川のところにいきました。

五106 8 ㊦ きみも、いっしょにむこうへとんでいこよう。

五108 2 ㊦ ちっともこわいことはないから、いっしょにあそぼうよ。

六22 10 ㊦ ここでいっしょに音楽会をやるうじやないか。

六70 2 ごろうは、妹のはるえといっしょになって、大きな雪だるまを作りました。

六115 8 たこが青空で右や左にゆれると、自分もいっしょに首をふりながら、

七30 7 ㊦ さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。

七75 9 もし、もし。」甲乙が、いっしょにふり返って、甲乙「はいはい。

七79 3 ㊦ さあ、けいさつしよへ、いっしょにいってもらおう。

八66 5 みにくいあひるの子も、いっしょになっておよいだ。

八73 7 ㊦ どうだ、われわれといっしょににかけて、渡り鳥になる考えはないかね。

八77 9 中には、おばあさんが、ねことにわとりといっしょに住んでいた。

八86 4 子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、あひるの子はまたいじめられるかと思って、
九5 10 この音と、ほかの音とをいっしょにひいてみると、まえとはちがった感じがします。

九6 5 オルガンのほかに、〈略〉ほかの楽器を、

いっしょにあわせてひいてみたらどうでしょう。

九32 1 ㊦ おとなといっしょに畑にでたり、山へたきぎをとりにいったりするの、

九34 1 ㊦ 先生やみなさんといっしょに、この湖へつりにいけたらと、いつも思っています。

九78 5 しばらくして、その主人といっしょにでておいでになりました。

九79 7 ㊦ むかしの人は、貝がらといっしょに、いなくなったりこわれたりした道具や、たべたけものの骨や、角などを、ここへすてました。

九91 7 ㊦ いっしょに歩いているうちに、きゆうにつかみあいをはじめるんだもの。

九102 3 ㊦ いっしょにあやまろう、あした——
九130 8 風が思いだしたようにふいてくるので、あみがゆれ、くももいっしょにゆれました。

十12 11 ㊦ おいで、わたしといっしょにお話をしておくれ。

十22 7 ひとりの友だちは、その兄といっしょに種まきをしている。

十23 7 ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に乗っている。

十30 7 ぼくは、みんなといっしょにはたらかいたいと思います。

十64 7 能といっしょに、狂言というものが演じられます。

十74 2 きゆうに、にっこりわらい顔になって、次郎かじやといっしょに歌いだしました。

十一44 4 子どもと父兄と、いっしょに呼ばれているようです。

十一48 10 おとうさん、ぼくは、大きくなったら、また、おかあさんといっしょに北海道へいきます。

十一60 10 いっしょにその一本橋を渡りだした。

十二23 5 姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、

十二73 11 子どもたちのかけていく方に、自分もいっしょにかけだしたいと思いました。

十三41 3 ㊦ いっしょにつかえばいいよ……

十三41 8 ㊦ いっしょに読もう。

十三42 7 ㊦ いっしょに、そのマンシュウの子どもに、お礼の手紙を書こうね

十四11 10 ㊦ いっしょに小さなかさを送りました。

十四12 11 ㊦ 小包二つは、おそろくいっしょには着きますまい。

十四24 11 それは、外国と交通をして、日本になかった品物が、外国から伝えられたときに、そのことばもいっしょにはいつてきたので、

十四24 12 ラジオといっしょに、「ラジオ」ということばがはいり、

十四25 4 ものとことばが、いっしょになっているということは、あたりまえのことだが、

十四25 12 学問などが傳わってきたときに、そのことばもいっしょに傳わってきたのにちがいない。

十四26 10 コーラスとか、ソナタとかいうことばは、西洋音楽がはいってきたときに、いっしょに傳わってきたことばであらう。

十四100 8 ㊦ いっしょにつれて行ってください。

十四100 8 ㊦ いっしょにつれて行ってください。

十四101 7 おばあさんは、女の子をうでにかかえて、ふたりは、いっしょにふわりとまいあがった。
十五71 5 ㊦ いっしょにお寺へ行って来ましょう。
十五101 1 ㊦ ぼくたちは、あなたといっしょに、たべたり、飲んだり、〈略〉、くらしているのですもの。

十五105 ぼくたちは、よくいっしょに遊ぶので
すもの。
十五107 3 、『ふとった幸福』たちといっしょに、
不幸のなまにはいってしまつた。
いっしょう 11 「一生」(名) 5 一生 ↓ いっしょう
八13 11 この思いでは、おそらく一生なくならない
でしょう。
十45 8 名高くなつたかげには、幸吉一生の苦心が
ひそんでいる。
十二31 3 私の一生を通じて、わすれることのでき
ないいちばん大きな日は、
十二42 2 「略。」といのりながら、一生をケ
ラーのためにささげました。
十四8 1 一生の間、いくたびとなく、おとうさ
んのおことばを思いだすことにします。
いっしょうけんめい 「一生懸命」(形状) 13 いっ
しょうけんめい
三104 5 「略。」と 思って、みんな いっしょう
けんめいにおじいさんにたのみました。
五107 7 きかんしの人が、いっしょうけんめいに
走らせているからさ。
五101 6 「略。」と、早く、おそく、高く、ひく
く、いっしょうけんめいにまねをします。
六14 5 ありは、いっしょうけんめいにさげつづ
けました。
六116 11 けれども、いっしょうけんめいに作つたら、
できないことはないだろうと思ひました。
七48 8 ぼくも、せんしゅになつて、いっしょうけ
んめいにやつた。
九106 6 その声にはげまされて、ぼくたちは、いっ
しょうけんめいに登つていった。
十一28 8 そこへいってからは、いよいよいっしょ

うけんめいに働きました。
十一78 11 少年は看病にいっしょうけんめいになつ
ていました。
十二21 1 絵をかくことも、いっしょうけんめい
にけいこしなくちゃだめでしょね。
十二58 6 なにしろ、いっしょうけんめいであるか
ら、みるみるうちに工事がはかどつて、
十四100 10 「略。」と、女の子はいっしょうけん
めいにたのんだ。
十五23 12 その人は、いっしょうけんめいにわしの
せにしがみついて、
いっしょうけんめい 「一生懸命」(副) 3 いっしょ
うけんめい
九82 7 1 いっしょうけんめいやってみよう。
十二22 5 高い理想をめざして、いっしょうけん
めいけいこをするのだ。
十四56 12 こんなに大きなきずができていますが、
私は、いっしょうけんめいそれをなおして、
いっしん 「一身」(名) 1 一身
十五60 10 長男に生まれて父母の愛を一身に集めて
いた身にとっては、
いっしんに 「一心」(副) 14 いっしんに 一心に
四103 1 うらしまは、いっしんに つりを して い
るので、気がつきません。
六18 7 まん中に、しきしきがタクトをいっしんに
ふつています。
六140 9 うさぎさんたちは、いっしんになつて、神
さまにおいのりをしました。
七42 5 しかし、青年は、ひく手をやめないで、
いっしんにひきつづけていた。
七49 4 それで、内野の人はいっしんになつたので、
かえつて、ぼくたちのほうが勝つてしまつた。

八28 7 すると、さがしていたはたおりひめが、
いっしんにはたをおつていました。
十35 11 佐吉は、「略」、いっしんに考えぬき、これ
ならという一台の機械を作りあげた。
十一26 9 金次郎は、それを読むとうれしくなり、
いっしんに勉強がしたくなりました。
十一70 11 けれども、病人は、いっしんに少年をみ
つめたあとで、目を閉じました。
十一81 3 ちやうど、少年がそういうほかない希望
をもつて、いっしんに看護していたときでした。
十二22 3 3 どんな絵の大家だって、一心にけいこ
をして、じょうずになつたのだらう。
十二60 5 里の人たちはおどろいたが、「略」、田植
え歌勇ましく、一心にはたらいだ。
十二81 9 私はスタンドから一心におうえんしてい
る二少年のことを思つては、ふるいたつて戦ひ、
十三14 4 いっしんに観察したり研究したりして、
いっせつ 「一節」(名) 3 一せつ 一節
十19 6 「ことばの愛」のつぎの一節を読んでい
る声がきこえる。
十二39 8 これは、「わが生がい」の一せつを、
日本語になおしたものです。
十三34 10 れんは、めでたい文句や、詩の一節であ
るが、みな、りっぱな文字で書かれてある。
いっせん 「一銭」(名) 1 一銭
十四92 7 まだ一銭ももうけてはいないので、父親
が、きつとひどくしかるにきまつていた。
いっせんこうねん 「一千年」(名) 1 一千年
八35 9 百光年の星もあり、一千年年の星のむれも
あり、一万光年の星もあります。
いっセンチ (名) 1 一センチ
七59 6 土の上、一センチほどのところで。

いっせんろっぴゃっぱ 「二千六百羽」(名) 1 一千

六百

九二二 十月一日 飛行機で一千六百

いっそう 「二艘」(名) 3 一そう

三二七 なんか かつて、とうとう 一そうの

ふねが できあがりました。

十一一四 ふえが鳴って、ふいに一そうのボートが

近づいてきた。

十四五〇 やがて、一そうのボートが、やみをぬつ

て助けにきてくれました。

いっそう 「二層」(副) 11 いっそう

二六八 「しゅしゅしゅしゅ」を、いっそう げん

きよく

三四七 すると いたみが いっそう ひどくなつて、

とても たまらなくなりしました。

三〇九 あきがきて 月が うつくしく なると、か

ぐやひめの ようすは いっそう かなしそうに み

えました。

四一七 町のかげ口は、いっそうはげしくなり、

かれを 氣ちがいとよび、

七二四 このうえそんなんぼうをしては、いっ

そうしかられるじやないか。

十二九三 その場のようすが相手にみえないから、

ことばづかいやいいあらわしかたには、いっそう

氣をつけなくてはならない。

十三三二 その文字の意味がわかつてくると、いっ

そうその美しさが胸にきざまれる。

十三五六一 おじさんで見ると、いっそう生き生き

として、(略)美しいのにおどろかされました。

十四二八 外來語辞典というものもあるから、そ

れを調べると、なおいっそうよくわかるだろう。

いっそうはげしく鳥の腹をしめつけました。

十五三〇 鳥はさけび声をたてて、苦しまぎれに、

いっそうするどくとびかかります。

いったい 「一体」(副) 16 いったい

六三八 どうしたの、いったい

六四四 うん——だけど、いったいだれがつれて

帰ったんだらうね。

六五三 いったいどっちなんだらう。

六七二 いったい、あの雪だるまは、死んでいるの

か、生きているのか。

七〇二 いったい、どういうことなのか、くわし

く話さない。

八三六 このきそく正しいちつじよは、いったいど

うしてたもたれているのでしょうか。

九五九 いったい、あなたはたれですか。

九一〇 いったい、なんでけんかははじめたんだ

らう。

七三二 いったい、ふたりともどうしたのだ。

一一七一 いったい、どうしたんですか。

一一八三 チチロ、これはいったいどうしたのだ。

十四四五 助け船は、いったい、なにをしているの

だらう。

十四五七 いったい、かぼちゃは熱帯地方のもの

です。

十四八〇 いったい、だれが、そのことを発見した

のでしょうか。

十四九八 かがやく小さな星よ、おまえはいった

いなんだらうか。

十五〇二 このらんぼうなやつ、いったいなんだ

いったん 「一旦」(副) 2 いったん

六九七 では、そのかたをこちらへごあんないしな

さい。」女の人は、いったんさがる。

十二九五 いったん読まれてしまうと、読み手の思

いでや心持にとかされて、

いっちょや 「一昼夜」(名) 1 一昼夜

十三一五 自轉といつて、一晝夜に一どずつ、自分

で西から東へ一回轉します。

いっちょ (名) 1 いっちょ

十二二八 さあ、いっちょにいきましようね。

いっちょせん 「一直線」(名) 1 一直線

十四八八 その一すじの道をながめると、一直線で

はなく、くねくねとゆがんでいる。

いっつ 「五」(名) 8 いっつ 五つ

一一二 ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いっ

つ、むつつ、ななつ、やつつ、このつ、とお、

一一六 ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、いっ

つ、むつつ、ななつ、やつつ、このつ、とお、

一三八 あさがおのはなが いっつ さきました。

一三九 うすもいろのあさがおのはなが、いっ

つかきねにさきました。

三四九 「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ。」と

かぞえながら、わたって きました。

六六三 「雪のかたち」を五つばかり、きれいに写

生しました。

十二二四 おいの正男^{まさお}ちゃんは、五つですから、も

うひとり遊びができますが、

十五七二 勝海舟^{かつかいしゅう}の筆になる「新島襄^{にいしまのり}之墓^{はか}」とい

う五つの文字をきざんだそのおくつき。

いっつ 「一通」(名) 1 一通

一一六 ナポリの大きな病院の門ばんのまえへ

いって、一通の手紙をみせ、父親をたずねました。

いっとう 「二等」(副) 2 いっとう

十五〇四 それから、ぼくは、まだなかまのうち

でいっといいのをしようかいしませんでした。
十五104 7 図 それは、ぼくたちのなかまでいっとう
快活なのです。

いっばい 〔二杯〕(名) 4 いっばい

六90 2 図 すみませんが、そのいどの水を一ぱいく
ださい。

八43 1 図 あなたは、こがねと一ぱいの水と、どち
らをえらびますか。

八43 2 図 一ぱいの水です。

十四62 7 図 ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現象を
観察し、研究することの好きな人には、なかなか
おもしろい見ものです。

いっばい 〔二杯〕(形状) 10 いっばい ↓せいはい

はい・ちからいっばい・みせいはい・わがまま
いっばい

三79 10 図 雨に ぼくの いどを いっばいに して
もらうんだから。

三112 1 家のまわりは、弓矢をもった人たちで、
いくえにもとりかこまれ、やねの上まで、人で
いっばいになりました。

六100 6 どこかの屋根が、めがねのたまいっばいに
ひろがって、

七34 3 汽車の中は、人でいっばいでした。

七49 10 ぼくは、うれしさでいっばいになった。

九79 2 土はやわらかで、ずぶずぶと、ステッキの
たけいっばいにはいります。

十26 7 日の光をいっばいに受けた、はればれとし
た父と子。

十一53 4 乗客はおたがいにおしあつて、しゃし
う台までいっばいになってしまった。

十二81 3 この二少年が、《略》いのつてくれてい
ることを知って、胸がいっばいになりました。

十四21 12 とうとう、こくぼんがいっばいになって
しまった。

いっばい 〔二杯〕(副) 18 いっばい

一40 3 まっかなつつじがいっばい。

四53 8 あせをいっばいかいている がんたちに
は、

五21 3 一だいの長い電車が、おきやくをいっばい
乗せて、終点につきました。

五48 8 まどをあけると、いまのぼったばかりの日
の光が、さつといっばいながれこんできた。

六142 10 野原には、日の光がいっばいさしています。

七95 8 その中に、わたのようなふわふわした毛が、
いっばいはいっていました。

八94 8 水をいっばいいいれ、ふたをして日かげにお
き、ときどき水をと리카えました。

十二38 7 私の目にはなみだがいっばいたましまし
た。

十二87 7 庭で植え木の手入れをしている父にこう
いわれたら、バケツか、じょうろに水をいっばい
いれて持つていくだろう。

十二88 1 ふる場の中で湯をかきまわしている父に
こういわれたら、手おけに水をいっばいくんで
持つていくだろう。

十二95 1 赤とんぼはとらずに、花を手にいっばい
つんで帰ったことを思う。

十四62 3 中には、熱い湯がいっばいはいっており
ます。

十五82 8 金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭に
いっばいつけています。

十五92 12 口にいっばい物を入れながら、

十五101 11 図 戸や窓のやぶれるほど、いっばい『幸
福』でつまっているじゃないの。

十五103 12 図 『雨の幸福』で、眞珠をいっばいつけ
ています。

十五113 4 図 おかあさんの目の中には、星がいっば
いある。

十五119 10 図 でも、どうしてみんな、目にいっばい
なみだをためているの。

いっぴき 〔二匹〕(名) 32 1 ぴき 1 ぴき

二27 6 図 『《略》』と、一ぴきの やぎが いいま
した。

二29 7 図 一ぴき、二ひき、三ひき、四ひき、五
ひき、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、十ひき、

二30 1 図 一ひきたりない。

二30 4 図 一ひき、二ひき、三ひき、四ひき、五
ひき、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、十ひき、

二31 4 図 けれども、やっぱり 一ひきたりません。

二31 7 図 一ひきたりない。

二31 8 図 一ひきたりない。

四20 6 手 ねこの 一ぴきは、わたくしです。

四96 5 四人の 子どもが、一ぴきのかめを とり
まいて、あそんでいます

六13 3 一ぴきの ありがいました。

六67 2 あるところに、一ぴきの子ぐまが住んでい
ました。

六67 5 すると、一ぴきのさるにであいました。

六83 3 図 朝から一ぴきもつれないなんて——おや、
ひく、ひく。

六128 9 一ぴきのうさぎさんが、あわててにげたの
で、トンネルのさか道を足をすべらせて、

六140 7 とらさんが手をのぼして、一ぴきのうさぎ
さんのせなかをおさえました。

六141 3 それは、もう一ぴきのとらさんでした。

六141 11 一ぴきのとらさんが、いきなり、もう一ぴ

きのとらさんにとびかりました。

六四一 いきなり、もう一びきのとらさんにとびかりました。

七八九 白うさが九ひきと、黒うさを一ひきもらいました。

七八九 茶うさが一ひき

七九三 一びきの白いうさと、茶色のうさは、おくへはいってでてこないで、

七九六 一びきは白で、あとは黒っぽい色をしていました。

七九六 一びきのこらず、じょうぶにそだてたいと思います。

七九六 七ひきの子うさぎのうち、五ひきはねずみ色、一ひきは白、もう一ひきは黒でした。

七九六 赤いぬの一ひきゆけばこの町のそこここよりぞいぬのあらわる

九一七 一びきのくもがいました。

一五〇 家からでてしばらくいくと、道のまん中に、黒いぬが一びきすわっていました。

一五四 きんぎょが一びき、すいすいとういてきたかと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。

一二五 そのくちた草をとりのけようとすると、大きなえんまこおろぎが一びき頭をだしていた。

一三九 あぶが一びきとんで来る。

一四八 一びきのこん虫をながねんかかって調べ

いっぴきのくも (課名) 2 一びきのくも

九三八 一二 一びきのくも……百二十七
九一七 一二 一びきのくも
いっぴつけいじょう (感) 1 いっぴつけいじょう
八八五 「いっぴつけいじょう」と歌ったり、「ツ

ンツンつころぼし」とさえずつたり——

いっぴょう (一俵) (名) 2 一びょう
四六八 うらの小山の小さいけに子猫が二百、こ米が一びょう、

一二九 この一びょうをもとにして、困っている人にかしてやつたり、

いっぴょうあまり (一俵余) (名) 1 一びょうあまり

一二九 すると、秋の終りには、一びょうあまりの米を自分のものにする事ができました。

いっぶんかん (二分間) (名) 1 一分間
一四六 たって以来、一分間も、おかあさんのことを考えないでいらませんでした。

いっぶんはん (二分半) (名) 1 一分半
九七〇 これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。

いっぺん (一遍) (名) 1 一ぺん ひとおりいっぺん

一一九 いちにちに二へんあるのに、いちねんに一ぺんしかないものはなかに。

いっぺんに (一遍) (副) 4 いっぺんに
三六四 りょう方 いっぺんにはいけないよ。

五四〇 こちらでは、さくらの花も、(略)、りんごの花も、いっぺんにさきだします。

五八八 (略)。「とわらわいでしたので、みんな、いっぺんにわらってしまいました。

七五四 校庭のつゆもいっぺんに光った。

いっぼう (一方) (名) 12 一方
六四六 たまがはまるくらの大きさにまいて、その一方のはしに、めがねのたまをはめた。

八九〇 おくびょうもののようにも思えましようが、どうして、一方では、とてもむてつぼうなきかん

ぼうでした。

九一〇 水は大きなころろした石ころのあいだから、ブツブツと音をたててわきだして、一方のかけたところから、さらさらと流れだしていた。

一六九 少年は(略)、一方の手で、ふとんの上におかれたまま動かずにいる、うでをつかみました。

一八八 一方の手にあつくほうたいをしたひとりの男が、

一九一 (略)。「と、少年はいつて、一方の手で花たばを取りながら、一方の手で目をふきました。

一九一 一方の手で目をふきました。

一四四 光が一方のはしから、向こうのはしまでとどくの、二十億年も、かかるほどの長さ

一四八 割ろうとすると、(略)、とちゅうから横の方へそれてしまつて、一方は太く、一方は細くなつて、

一四八 一方は太く、一方は細くなつて、

一四九 まるやきの鳥が、ほかほかとあたたかい

一五七 一方が先に生まれ、他方があとから生まれたというだけのこと、

いっぼう (一方) (副) 1 一方
一五八 もとの中国の発音にしたがった読みかたをしたが、一方、「山」を「やま」、「海」を「うみ」などにつかつて、

いっぼん (一本) (名) 35 一本 一本
一六二 むかし、あるところに、一本のくすのき

一六二 むかし、あるところに、一本のくすのき

一六二 むかし、あるところに、一本のくすのき

一六二 むかし、あるところに、一本のくすのき

一六二 むかし、あるところに、一本のくすのき

三101 ねもとの ぴかりと 光る 竹が 一本 ありました。
 四122 8 ただ 一本の マッチでも、〈略〉、どれほど 手か ずが かかって いる こと でしょう。
 六124 4 小さな ねじが 一本 いたん で いました から、 とりか えて おき ました。
 六101 8 これで、 一本の つつが でき あが った。
 七206 6 そのうち、 たねを とる ために、 一本 だけ のこ して おき ましたら、
 七75 6 6 木 一本 も みえ ない。
 七77 2 2 左の 足が 一本 短く て――
 八21 6 一本の ささ だけ が は えて いた ました。
 八99 4 1 かぶに 3 本 ずつ 植 えた のと、 1 本 ずつ 植 えた のと 二と おり に して、
 八100 5 1 本 の なえ の まん 中 から だ 新し い 葉 が、 5 cm ぐら い に なり ました。
 八101 6 1 本 ずつ 植 えた な え が、 だ い たい 7 本 ぐら い に ふ え ました。
 八106 2 1 本 ずつ 植 えた かぶ に は、 ほ が 10 ぐら い つ い て いた ました。
 八106 6 1 本 の ほ に、 多 い の は 180 ぐら い ず つ い て いた ました。
 九51 8 一本 の ぶ な の 木 の 下 に、
 九52 11 一本 の くる み の 木 の こ ず え を、
 九88 1 舞 台 の 中 ほ ど に 大 き な 木 が 一 本 立 っ て いる。
 十173 3 3 えん び つ 一 本 買 い に い く に も、 日 本 の こ と ば で は 通 じ ま せ ン。
 十61 1 うち の お 庭 に、 た け の こ が 一 本 は えて き ま した。
 十16 12 12 トッ プ、 バッ ク 一 本。
 十17 3 3 トッ プ、 バッ ク 一 本。
 十17 4 4 ぼく が 力 を い れ て、 一 本 バッ ク を や る

と、 ポー ト は 向 き を か えて、
 十二13 5 そ こ に は 一 本 の さ ぐ ろ の 木 が あ っ て、 夏 じ ゅ う 美 し い 花 を つ け て い た が、
 十三27 4 ホー ト ン は 一 本 の ト ン ネ ル の よ う に な っ て、 ど こ ま で も つ な が っ て いる 感 じ が す る。
 十四48 7 一 本 の 大 き な ま る た に、 な ん 人 か の 婦 人 が つ か ま っ て、 立 ち お よ ぎ を し て い ま し た。
 十四86 2 野 原 の 中 で、 一 本 の 草 花 を 見 い だ し て、 そ れ を た ん ね ん に 写 生 す る の も、
 十四94 11 そ の 両 手 を あ た た め る た め に、 一 本 の マ ッ チ で―― ほ ん の た っ た 一 本 の マ ッ チ で、 火 を と も す こ と が で き た な ら ば、 ど ん な に よ か ろ う か。
 十四94 11 ほ ん の た っ た 一 本 の マ ッ チ で、
 十四95 1 女 の 子 は 一 本 の マ ッ チ を と り だ し た。
 十四96 6 女 の 子 は、 ま た そ う し な い で は い ら れ な く な っ て、 も う 一 本 の マ ッ チ を と っ て か べ で こ す っ た。
 十四97 10 女 の 子 は、 も う 一 本 の、 第 三 番 め の マ ッ チ を す っ た。
 十四97 11 そ う し て、 こ ん ど は、 女 の 子 は、 一 本 の ク リ ス マ ス の 木 の 下 に す わ っ て い た。
 十四99 9 女 の 子 は、 ま た も う 一 本 の マ ッ チ を、 そ ば の た ば の 中 か ら ひ き だ し た。
 十五36 8 数 と い う 形 の な い も の を 表 わ す の に、 線 を 横 に 一 本 引 い た り、 二 本 引 い た り し た。
 い っ ぽ ん す ぎ 「一 本 杉」 (名) 1 一 本 す ぎ
 九104 8 集 合 地 は、 村 は ず れ の 一 本 す ぎ の そ ば で あ っ た。
 い っ ぽ ん ば し 「一 本 橋」 (名) 2 一 本 橋
 十一60 3 と ち ゅ う に、 か な り 深 い 小 川 に か け 渡 し た 一 本 橋 が あ る。
 十一60 10 い っ し ょ に そ の 一 本 橋 を 渡 り だ し た。

い っ ぽ ん み ち 「一 本 道」 (名) 1 一 本 道
 四27 6 6 林 の む こ う の 一 本 道 ま で、 か け つ こ を し ょ う ね。
 い つ ま で も 「何 時 迄」 (副) 16 い つ ま で も
 三97 10 紙 に か い た も の は、 い つ ま で も の こ り ま す。
 三98 3 紙 に か い た お は な し は、 い つ ま で も の こ り ま す。
 三104 10 10 い つ ま で も お じ い さ ん と お ば あ さ ん の お そ ば に い た い と 思 い ま す。
 三113 8 8 い つ ま で も お そ ば に い て、 こ う こ う を し た い と 思 い ま し た の に、
 三116 1 み か ど は、 そ の の ち い つ ま で も、 か ぐ や ひ め を お わ す れ に な る こ と が で き ま せ ん で し た。
 三117 8 け む り が、 山 の 上 か ら い つ ま で も い つ ま で も た ち の ぼ っ て い ま し た。
 三117 8 い つ ま で も い つ ま で も た ち の ぼ っ て い ま し た。
 四117 2 2 い つ ま で も そ の ま ま に し て お い て い た だ き と う ご ざ い ま す。
 五79 5 お な じ と こ ろ で、 い つ ま で も 高 く 鳴 っ て い ま す。
 五93 9 り ょ う か ん さ ん は、 い つ ま で も 月 に み と れ て い ま し た。
 五100 3 3 い つ ま で も か わ い が っ て や る よ。
 五105 2 ひ わ は、 感 心 し た よ う に、 い つ ま で も そ の 声 を き い て い ま し た。
 五107 2 2 こ う し て い つ ま で も、 こ こ に いる よ り し か た が ない の さ。
 八25 7 あ の ぬ け が ら だ け は、 い つ ま で も さ さ だ け に か た く す が り つ い て い ま す。

十一 13 10 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよう。

十三 23 2 大もみがある大きさに生長しないのは、きっと、小もみをいつまでも、大もみのそばにならべておくからです。

いつも「何時」(副) 44 いつも

四 39 10 可愛い ことばは、いつも、あなたがたのいいお友だちになったり、

四 74 8 へ――返事はいつもはつきりと。

四 76 2 か――からだはいつもきれいに。

四 111 8 駅の人たちは、いつも氣をつけているよ。

五 31 2 これも、いつもやりたいと思います。

五 47 2 いつも通るこの小道、たのしい小道だ。

五 48 3 いつも通っても、いつもたのしい、この小道。

五 105 7 しじゅうからは、どこかへいってしまいましたが、ひわは、いつもそのまねをして

六 49 3 書いても書いても書きたりぬ、わたしの心の小人たち、いつもでてる小人たち。

七 43 4 わたしは、終戦後、いつも心ざびしい旅をしていました。

七 87 6 いつも、どこかを動かしています。

八 17 11 まえ足は、いつもトンネルをほるのにつかいますから、たいへんかたく、じょうぶになります。

八 85 10 あひるの子は、あながおおってしまったように、いつも足をつかっているかならな

九 34 2 先生やみなさんといっしょに、この湖へ

つりにいけたらと、いつも思っています。

十 30 9 父や母のために、いつもすなおな子どもに

なりたいたいです。

十 32 4 いつも、全体の中の部分、部分があつての全体、というつながりをわすれないで、

十 41 9 うめは、いつもこのわりの口のたてとなって、

幸吉をかばい、

十 51 1 なによりおもしろいのは、大学のボート

がいつもここで練習していることだ。

十 52 川口の子どもたちは、いつも砂原で、

〈略〉、おにごっこをしたりして遊んでいるが、

十 65 6 いつもは、いちばんびりにいるばかりで、べつに用もないようだが、

十 91 1 ただ、わかつているだけではなしに、

いつもそのうえを考えていて、

十 26 10 いつもその本を手からはなさず、くり返

しくり返し、大声で読みながら歩きました。

十 46 10 じゃがいも畑のうねの向こうに、いつも

ぽっかりとういていたえぞ富士。

十 47 11 おかあさんがパンをやくそばで、ぼくは、

いつも本を読んでいた。

十 48 3 ぼくのいすは、小さなゆりいすで、その

下に、いつもかいねこのメリーがいた。

十 85 6 いつも、ぼくがそばにいないといけな

いのです。

十 20 2 このごろでは、いつも美しい実をなら

せることができるようになりました。

十 23 3 せまい家なので、兄は氣のどくだといっ

て、いつもえんりよがちにしています。

十 61 10 それからというものは、いり用のときは

いつもこへきて、岩屋の入口で頼んだ。

十 67 9 のこぎりは、いつもやすりをかけて

右と左によじっておかないと、

十 69 3 しかし、いつも勉強してみがきをかけて

いないと、じき、役にたたなくなる。

十二 72 10 どれも身なりはきれいではないのですが、

芭蕉は、いつも遊び友だちにしています。

十三 14 7 そういう星〈略〉の空にえがく道は、だ

えん形であつて、太陽はいつもその焦点にいるも

のだ、

十四 7 12 おとうさんのお写真を、私は、いつも

自分のそばのつくえの上におきます。

十四 16 4 いつもこう思っていてください。

十四 53 8 私が、いつも日あたりのいいところに

出て、〈略〉、せつせと養分をこしらえて、

十四 100 1 おばあさんは、いつものように、やさし

く、しんせつなようすをしていた。

十五 21 7 ある朝、このアメリカ人の家族は、いつ

ものように散歩に出ました。

十五 79 11 私のつくえの上には、日本のみなさんが

書いたあつい絵の本が、いつもおかれています。

十五 91 4 それは、いつもしごとをしなないこと

です。

十五 106 1 『正義であることの大きな喜び』で、

不正がしかえしされたときに、いつもにっこりし

ています。

十五 112 1 いつもそれをどこにしまつてあるの。

十五 116 1 人間が地上に住みついてからこのかた、

いつもたずねあぐんでいた道が、

いで、いもうしいで

いでる、いおいでくださる・おいでなさる・おいでる

いてん「移転」(名) 1 移転

十三 10 4 たえば、移転するのに、方角がよい

とかわるいとかいい、

いでんがくじょう「遺伝学上」(名) 1 いでん学上

十五 74 4 兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力

のちがいは別として、

いと「糸」(名) 13 糸 引けいと・たこいと・たていと・よこいと

四68 世界じゅうの人の心をつなぐ糸を、まいにちあつかうところです。

四1217 光っている、ほそい糸のようなものはなんでしょう。

五657 おじいさんは、あみでさかなをとり、おばあさんは、糸をつむいでくらしていました。

六328 糸の切れたたこのように、空にすいこまれていくかし。

六8310 糸がぶつとりと切れて、魚はにげる。

六1017 きちんとはまったとき、まいた紙を糸できりきりとまいて、動かないようにした。

六1153 糸 ちよつと糸を持たせて。

六1155 糸を持ったただしちゃんは、「略。」といてにこにこしました。

六1158 しっかり糸をにぎっています。

九973 やまだ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする。

十二4512 指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろ種類がある。

十二535 手は、手さきのほうをいれて、穴に糸を通してぬいつける。

十二686 糸のこは糸のように細く、ひきまわしはひじょうにせまい。

いと「井戸」(名) 9 いど

三792 すなで、トンネルや、いどや、家や、道をこしらえています。

三7910 雨にぼくの いどを いっぱいにしてもらうんだから。

六879 園 そのごてんの門のそばにいどがあって、そのそばには、大きな木が立っています。

六893 園 おや、あんなところにいどがある。

六896 そこへ女の人がでてきて、いどの水をくもうとする。

六897 いどの水をみて、女「まあ、りっぱなかが、水にうつっているわ。」

六902 園 すみませんが、そのいどの水を一ぱいください。

十二364 ふたりは、いどの小屋をおおっているすいかずらのあまいにおいにひかれて、

十二711 芭蕉のおきないうちに、いどから水をくみあげたり、ごはんをたいりしました。

いとうくん (人名) 1 いとうくん

五846 いとうくんは、海岸のおじさんの家で、海の作文を書くんだといって、よろこんでいました。

いとおしむ (四) 1 いとおしむ 《ム》

九1182 園 ふくじゅそうのつぼみいとおしむおさな子や夜はいろりの火にあてており

いとくず「糸屑」(名) 1 糸くず

十四717 湯の中にうかんでいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずです。

いとぐち「糸口」(名) 1 いとぐち

十二9810 このように、古い時代のことがはっきりわかるいとぐちとなったのは、

いとたば「糸束」(名) 1 糸たば

十三298 黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげられ、にぎやかな話が続く。

いとこの「糸鋸」(名) 1 糸のこ

十二686 糸のこは糸のように細く、ひきまわしはひじょうにせまい。

いとどばた「井戸端」(名) 2 いとどばた

五936 「略。」といって、手おけをさげて、うらのいとどばたに立ちました。

五1019 鳥かごは、おひるまえは、水道のあるいどばたの高いところにかけますが、

いとま 引おいとまいたす・おいとまする

いどみず「井戸水」(名) 1 いど水

九1219 日本じゅうを歩きまわって、うまそうな水や名高いいど水をためてみたけれども、

いとめ「糸目」(名) 1 糸目

六1209 園 かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃんのところへ持って行ってあげるんだ。

いとや「糸屋」(名) 1 糸屋

十三294 糸屋が来る。

いとやさん「糸屋」(名) 1 糸屋さん

十三297 どこからともなく、女の人たちが集まって来て、糸屋さんを取りまく。

いな「鱈」(名) 1 いな

九333 園 こいもいます。いなもいます。

いなか「田舎」(名) 18 いなか

三528 園 いなかのやねのべんべんぐさは、「略。」といいました。

五222 いちろうさんは、おかあさんのさとの、いなかにいきました。

八136 ことに、町はずれの野原を歩いたりいなかのしものふかい朝の野にでたとき、

八603 いなかは、いいお天気であった。

十73 おとうさんが、フランスのいなかへいったときは、子どもが大ぜい、めずらしそうについてきて困りました。

十74 そういういなかへは、めったに日本人もい

かないのです。

十85 二月半ばかり、いなかでくらすうちに、

十911 木の葉が黄色くなるころで、いなかの子ど

もにとっては、もっとも楽しい季節でした。

十102 そのいなかの町には、ポンナフという石の橋があつて、

十138 少女たちは、〈略〉テーブルをかこんで、

いなかの歌を歌ってきかせてくれました。

十1310 あんないなかはつまらないと、わるくいう旅人もありますが、

十144 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。

十162 フランスのいなかの子どもから、自分の國のことをきかれたときは、

十1466 じゃがいもをみると、ぼくは、北海道ほっかいどうのいなかを思いだす。

十1633 いなかの人らしいひとりの少年が、

十1707 窓 チチロがいなかからでてきたんですよ。

十1742 窓 きょう、いなかからきたのでござい

す。」と、看護婦がいました。

十1864 窓 「あなたと同じように、いなかのかたですがね。」と、看護婦が答えました。

いなかまち 「田舎町」(名) 2 いなか町

十1312 おとうさんがそのいなか町がすきになったのも、

十148 その少年は、〈略〉、そのいなか町にある商業学校の下の学年ぐらいでしたでしょう。

いなか 「稲子」(名) 2 いなか

二173 ちくおんききしやししんや やさいい

なごごままつつくえ

八1046 いねの害虫——いなが6びきほどいました。

いなさる 「居」(五) 1 いなさる 《—イ》

三754 窓 ほら、どうなるか、きをつけてみて

いなさい。

いなずま 「稲妻」(名) 1 いなずま

十1356 圓 まばゆく光るいなずまに、続いてひびくらの音。

いなか 「稲田」(名) 1 いな田

六407 村の子どもや、森や、小川や、いな田などの、きれいな、楽しかった思い出が、

いぬ 「犬」(話手) 2 いぬ

十五844 なんてきれいなおかしでしょう。」いぬ

「それに、あんなに肉がある。

十五934 チロー、おまえもすぐ来い。」いぬ ぶつ

ぶついいながら、テーブルのすみで、「〈略〉。」

いぬ 「犬」(名) 33 いぬ ♀ あかいぬ・かりいぬ・くろいぬ・こいぬ

一382 いぬがはしつてきます。

一383 しろい いぬがはしつてきます。

二446 窓 さあ、いぬだよ。

三911 いぬも走つていきます。

四721 これにあたった人には、おもちゃのね

こと、いぬとをあげます。

六779 いぬは動くし、いきをするから命がある。

八45 いぬでもねこでもありません。

八509 この「幸福」が、いろいろな家をたずねて

いきますと、いぬのかつてある家がありました。

八518 おまけに、その家にかつてあるいぬが、

おそろしい声で追いたてるように鳴きました。

八7410 ところが、ちょうどそのとき、おそろしい

大きないぬがそのすぐそばに立っていた。

八757 窓 自分がみにくいので、いぬもかみつこう

としない。

九303 窓 たいそぐいぬにあいけり木のめ道

九1155 窓 赤いぬの一びきゆけばこの町のそここ

こよりぞいぬのあらわる

十501 家からでてしばらくいくと、道のまん中に、

黒いぬが一びきすわっていました。

十503 その黒いぬに近づいてみると、ひふ病にかかっている、

十506 黒いぬは、まえ足をあげたかと思うと、

その足をなめたので、妹はびっくりして、

十508 いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかを

かくようなかっこうをしました。

十5010 そのとき、いぬは、くしゃみのようなこと

をして、「フツ」と息をはきました。

十513 母がこしらえてくださったパンを、ふくろ

からとりだして、いぬにやりながら、

十515 いぬは、まばたきをしたきりで、そのパン

をたべようとしません。

十517 「イライノ」といって、いぬにたずねて

いるのです。

十518 やはり、いぬは、ふり向かないので、

十531 すると、さっきの黒いぬが、ごろんと、

地べたに横になつてねそべっていました。

十533 「ワンワンチャン ネテルワ」といって

ると、いぬがもつくりおきました。

十534 「オスワリシタ」と、いちいち、いぬの動

作をことばにして喜びました。

十538 いぬが氣にかかるのか、ふり向くと、

十539 ふり向くと、いぬは、立ちあがって、のそ

りのそりと、どこかへいくところでした。

十2304 おとなりで、このごろ白いぬをかうよ

うになりましたが、

十2674 のこぎりののはは、いぬの歯のようにと

がって、

十29011 天氣のよかつたこと、山へいったこと、

弟やいぬをつれていったこと、

十21023 はにわには、このほか、うまや、いぬや、

鳥などをこしらえたものがあります。

十五 82 10 チルチルとミチルと、いねと、パンと、さとうとは、

十五 92 1 「ふとった幸福」どもは、せつせと、いねと、さとうと、パンをときつけて、

いね 「稲」(名) 19 いね

六 31 4 いねが波のようにゆれる。

六 32 7 いねが大きく波うつ。

六 39 9 ⑤ なかまがわるい虫をとってそだてたいねを、こんどは、あなたがたがまゐるんですもの。

六 45 8 かかしの目のまえに、風にそよぐ金色のいねが、いちめんにつづいている。

八 98 4 いねがよく根をはって育つように、小石をひろい、土のかたまりをくだいて

八 102 1 いねのほのさがふくらんで、いまにもほがでそうです。

八 102 3 いねのほがではじめました。

八 104 1 いねの花のすんだあとをさわってみると、

「略」さが、ふくれてかたくなっていました。

八 104 6 9月21日 ⑤ 晴 27度 いねの害虫——いねこが6びきほいました。

八 105 2 いねは、だんだん黄色くなっています。

八 105 4 病気でせいのびないいねが、5かぶありました。

八 105 5 このいねは、いもち病という病氣にかかったのだとおっしゃいました。

八 105 8 どのいねのほも、すっかり黄色になつておじぎをしています。

八 106 10 いねを根もとからかりとりました。

八 108 1 ぼうのあいだにいねをはさんでこいたらよくとれました。

十一 29 3 金次郎は、また、人がすてておたいいね

のなえをひろって、「略」植えてみました。

十一 34 10 ⑤ つゆ晴れ空はみどりにすんで、日ましに目ざしが強くなり、いねはそだつし、

十一 36 3 ⑤ 日はまた照って水たつぷりと、いねのかぶばりこのうえもなく、秋のみのりも思われる。

十一 38 2 ⑤ 続くひよりに勇みたち、いねもことなくとりいれた。

いねかけ 「稲刈」(名) 1 いねかけ

八 107 1 じょうぶに作りたいいねかけに、日がよくあたるようにきちんとかけました。

いねかり 「稲刈」(名) 1 いねかり

八 106 10 10月25日 ⑤ 晴 23度 いねかりをししました。

いねこき 「稲扱」(名) 2 いねこき

八 107 4 11月10日 ⑤ 晴 19度 いねこきをししました。

八 108 1 いねこききかいをつかわずに、手でいねこきをした人もいました。

いねこききかい 「稲扱機械」(名) 1 いねこききかい

八 107 4 いねこききかいをつかわずに、手でいねこきをした人もいました。

いねをそだてて 「課名」 2 いねを育てて

八 3 10 七 いねを育てて……九十四

八 94 1 七 いねを育てて

いのうえさん 「人名」 2 いのうえさん

五 84 8 いのうえさんは、國語の本にでていることばを、五十音にわけてみるといいました。

五 84 10 ⑤ いのうえさんの字びきができますね。」

と、先生がおっしゃいました。

いのしし 「猪」(名) 1 いのしし

九 84 11 ⑤ いのししやしかの角などに手を加えて、

なにかの道具につかった物があつたでしょう。

いのち 「命」(名) 19 いのち 命

一 58 6 ⑤ あなたはいのちのおんじんです。

六 74 2 ⑤ 生きているものには、みんな命というものがあつたよ。

六 74 5 ⑤ 命って、動くものでしょうか。

六 74 10 たとえ動いても、それだけでは命があるとはいえないと、ごろろは思ひつきました。

六 75 2 ⑤ どうだ、ゆうべの命のこと、わかつたかい。

六 76 6 この手が動かないから、やはり雪だるまは命がないのかと思ひました。

六 77 9 いねは動くし、いきをするから命がある。

六 77 11 風や、自動車や、水車は、動いていても息をしないから、命がないんだと、

六 78 3 ⑤ 命のあるものは、日に日にそだっていく。

六 78 4 ⑤ たとえ動かない木でも、草でも、命をもっているのだよ。

六 78 5 ⑤ とにかく、命のことはむずかしい大きな問題だね。

九 139 7 ⑤ わたし、おかあさんにひと目あつたら、もう、命はほしいとは思ひません。

九 139 10 ⑤ それまで、命を助けておいてください。

九 147 9 ⑤ 自分の命は、つばめさんにあげよう。

十 73 10 ⑤ あまりの申しわけなさに、ふたりとも、命をすてておわびをしようと考え、

十一 18 3 流れやまぬ愛のしみずに、うるおされ、やしなわれて、のびていく命のわか葉。

十一 62 7 ⑤ ひよつとすると命を失うようなあふないときでも、

十二 47 5 ⑤ 命のない人形を思うままに動かして、喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台

にあらわそうとする望みもあるのだ。

十三46 細い、細い小枝のあみ目の先にも、はやふつくらと、季節の命はわきあがって、

いのちがけ 「命懸」(名) 1 命がけ

十二412 命が命がけでせわをすれば、ケラーさんがすぐわれるのです。

いのちびろい 「命拾」(名) 1 いのちびろい

四1042 命 あなたのお力で、いのちびろいをいたしました。

いのり ↓おいのり

いのる 「祈」(五) 5 いのる 《一ツ—リ》 ↓おいのりいたす

七36 私はどういう、どうぞふじにつきますようにと、心の中でいのっていました。

十二422 「略」(名) 1 いのりながら、一生をケラーのためにささげました。

十二812 この二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをいのつてくれていることを知って、

十四153 力をとりなおしてくださいようにといのっています。

十五801 私たちの時代がはるかしく思われるようになることをいのります。

いばら 「茨」(名) 1 いばら

十一173 わたしのためには、いばらの道をもふみわけたその足。

いばる 「威張」(五) 3 いばる 《一ツ—ラ》

八932 ほんとうに幸福であったが、すこしもいばらなかった。

九641 「略」(名) やまねこがすこし心配そうに、

それでもむりにいばっていますと、

十655 めうえのいばったものに対してもおそれず、

そうかといって、なにをしてもにくまれない、

いびき ↓たかいびき

いま 「今」(名) 152 いま ↓ただいま

—221 いま、「おててつないで」のうたをうたいました。

二557 いまはおいでになりませんが、まえにはおいでになったにちがいありません。

三225 くすのきは、いままで みた こともきいた こともないほど、大きな木になりました。

三272 いままで みた こともきいた こともない、大きなふねでした。

三467 白うさが いままでの ことを はなしますと、

三484 白うさは いままでの ことを はなしました。

三749 お目さまが 光りながら、いま、丘の かげへしむところでした。

三1102 いままで だまっていたが、

四287 いま、わたくしが したい と思う ことは、

四4910 かっちゃん、いまの てっぽうで やられたと いうことが わかりました。

四512 はなれて とべば 安全なのですが、いまは、

四642 いままでの わがまま、ごめんね。

四1203 いままで くらかった へやが、あかるくなり

ました。

五153 私、いまから 旅に 出かけます。

五269 はる さん、いま 改札口の人 がありがとう

うって いったのは、どう いうわけ。

五377 大むかしの たいようの ねつが、かたちを かけ

え、石炭の中 にかくえ られていて、いまそれが、

私たちの ために、 生き返って

五392 ほっかいどうは、いまが いちばん なの

いときです。

五406 いま、たくさん さいています。

五487 まどを あけると、いまの ぼったばかりの 日

の 光が、さつと いっぱい ながれ こんで きた。

五594 私は、いままで きた 土星を、紙に てい ねい

にかいて おこう と思いました。

五639 立つ ように なり、ある くらゐ になっ

て、いまは、もう こんなに 大きくなっ

た。

五901 りょう かんさん、いま、『さどが 島』と

おうたい になっ

たとき、おじぎを なさい ましたね。

六101 そのとき、いままで 雲に かくれて いた たい

ようが かおを だした ので、

六116 いままで 死んだ ように なっ

て いた かい ちゅう 時計が、《略》音を たて はじめ

た。

六231 いま あそ ば ないで、いつ あそ ば う とい

う のさ。

六274 その おかげで、いま こうして あた

た まる ことも でき

る し、

六418 さあ、かかし さん、いまから 帰る のよ。

六522 月はいま 雲から でて、だい

いそぎで はな

れて います。

六712 いま、この 雪だるまが、お話を

すれば い

って、いつ いた ところよ。

六932 それで、いま こへ やっ

て きた ところ

です。

六108 ぼくは、いままで、《略》を、考

えた こと

が なか

った。

六113 いままでは、「ちがった

かなを

ならべ

たも

の」ぐ

らいに

思っ

て、

六113

それが

いま、

一つ

一つの

音の

性質を

考

え

た

う

えで

作

った

もの

であ

る

こと

が

わ

か

っ

て、

六四八(会) いま、きつねに追いかけられているんだ。
 六四七(会) おれが、いまたべようとしていたところだ。

七二〇(会) 一本だけのこしておきましたら、それが、いまちょうど、こんな白い花をつけています。

七三〇(会) いま、にさんに日記をよんでもらったところよ。

七三三(会) 兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちゅうちよを、しいくびんからとります。

七三八(会) さあ、いまのうちに、さきの方へいらっしやい。

七五五(会) おかあさん、いま、柱時計がとまりました。

七七四(会) いま、まっぶたつになるすいかだ。

七八五(会) けれども、いまの答で、知っていたわけがはっきりしたでしょう。

八一三(会) それから十年、いまも、私はピオのことがわすれられません。

八二〇(会) あたかさと、かわきかたで、いまが夏だということや、〈略〉などを知ります。

八四九(会) 王子は、いままでのわけをこの男に話しました。

八五五(会) 小船にいきついて、それにもたれて、いま歩いてきた足あとを見ると、

八五八(会) いままでのぼってきた方をふり返ってみると、

八六六(会) いままでだいていたのだし、あと四五日はすわることもできませんから。

八八五(会) しかし、いままでにだれをなつかしく思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。

八九三(会) いまは、その身をとりまくりっぱなものの中に、しみじみと幸福をさつたのである。

八九四(会) いまでは、すべての鳥の中で、いちばん美

しいといわれる身のうえになったのである。

八四一(会) さわつてみると、いままでべしやんこだったさが、ふくれてかたくなっていました。

九一四(会) きたときは夏の暑いさかりでしたが、いまはもうかきの葉もすっかり落ちつくして、

九一六(会) ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわすれたことはありません。

九二五(会) ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、

九四一(会) 村へきたころは、湖には美しい白さがたくさんまいおりました。

九四九(会) 兄は、大きくなって農業をするために、いま知りあいの家でみならいをしています。

九四九(会) まわりの山は、みんな、たつたいまできたばかりのように、きれいにありあがって、

九五九(会) やまねこさまは、いますぐにここへもどつておいでになるよ。

九七二(会) それでは、もんくはいままでのとおりにしましよう。

九七二(会) いまでもこうやって、人は目をたべています。

九八〇(会) いま考えるとほずかしい気持ち。

九八五(会) みんなそこへいくと、いま、いしい先生がすべられるところである。

九八五(文) いまの鳥はこの木にいるにちがいなしひそかに枝葉の中をみあぐる

九八五(会) それで茶をたててみると、いままで味わったこともないような、ふしぎな味が感じられた。

九八六(会) 求め求めて、いつか、いまのしずおか縣のさかいもすぎ、ながの縣にはいった。

九八六(会) はじめの八キロほどは、村ざとがあつて川

べりに道もあつたが、いまはそれもなくたって、

九四四(会) いつのまにか、いままで苦しかったからだのいたみもきえていきました。

九四九(会) いまのぼりかけたばかりの月が、しずかに光っていました。

九四九(会) いま、ちゅうちよに、「〈略〉。」といわれて、きゅうになつかりました。

九四九(会) くもは、いまみたばかりのゆめを、なんともなんとも思い返しました。

九四九(会) いままた、ばらの花のやさしいことをきくこともできた。

九四九(会) いままでにこの手で、この足で——くもは、自分ながら自分のからだだが、そろそろしく

九四九(会) いまのいままでも、みにくいと思つていた自分のからだも、

九四九(会) いまのいままでも、みにくいと思つていた

九四九(会) いまも、美しいものはどこにでもある。

九四九(会) 美しいものは、いまも、どこにでもある。

九四九(会) ぼくは、いまままでに学んだ「自然の観察」を、ずつとつづけていきたいと思ひます。

九四九(会) いまのようなぬの織りかたをしていたのでは、やがて、困るときがくるにちがいない。

九四九(会) そのために、いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければならない、

九四九(会) いままでの失敗のもとをとりぞいて、新しい設計図をこしらえあげた。

九四九(会) かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめのれいにささげて、その成功をしらせた。

九四九(会) そのとき、いままでかたにかけていたすいとうをはずして、手に持つといひます。

九四九(会) 私も、ここで、いままでの作文のからをぬぎさつて、

十五359 いまから五六千年ぐらいまえに、
十五364 漢字は、いまいったように、はじめ、事物の形をうつしたのから発達したものであるが、
十五374 いまの「本」「末」とかいふ字はそれである。

十五404 しかし、いまでは漢字の長所をいかして、かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文章のふつうの書き表わしかたとなっている。

十五424 いま日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種の文字をつかっており、
十五464 いままで見たこともないみごとな焼物であつたからである。

十五476 有田に焼物がはじめられたのは、いまから三百三十年ばかりまえのことである。

十五485 いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、
十五511 祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年の月日をへだてて、いま、まごたちによってふたび結ばれることになった。

十五542 いまその大先生にお会いすることができた私は、なんというしあわせ者であろう。
十五655 新島のおじさんと、〈略〉新島のおばさんとの思い出は、いま私の胸にやきついていて、
十五6911 いまその写真の主が、こうしておじさんを見あげているのに、

十五763 ああ、新島のおじさんが、いまなお満ほうを守っていてくださったのだ。
十五943 会 いまだよ。「チルチルは、「光」のいうように、ダイヤモンドをまわします。

十五10812 会 いま来ようとする新しい『喜び』をむかえているのですよ。
十五1154 会 チルチルや、おまえは、いまだけ天國

に來ていると思っているけれど、
十五1231 なぜいままで、もつと先生がたとしたしくしなかったのだらうと、ざんねんに思いました。
いま〔今〕(副) 5 いま
七134 いますこし、手をいれてみよう。
十469 会 一つは、ダイヤモンドであり、いま一つは、眞珠でした。

十二589 ところがいま一だんというところで、いちばんどりが鳴いて、東の空が明るくなった。
十三97 おしべのかふんがめしべにつかないようなくふうと、いま一つ、よくつくようなくふうをして、
十四866 いますこしふかく考えれば、さらにももしろい場面が発見されるように思われる。

いまえもん 〔今右衛門〕〔人名〕3 今右衛門
十五488 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考え、
十五507 これを耳にした今右衛門は、「〈略〉。」と決心し、いよいよこのしごとに熱情をこめた。
十五519 会 じつは、私は今右衛門のまごにあたるものです。

いまえもんさん 〔今右衛門〕〔人名〕1 今右衛門さん
十五505 会 どうか、私のことを今右衛門さんに傳えてください。
いまえもんやき 〔今右衛門焼〕(名) 1 今右衛門焼
十五441 会 あれは今右衛門焼じやありませんか。

いまごろ 〔今頃〕(名) 1 いまごろ
十二9411 正男は、きよ年のいまごろのことをふと思いだす。
いましがた 〔今方〕(名) 1 いましがた
九1303 会 いましがた、みつばちにさされて、苦し

んだことも知っています。
いましめあ・う 〔戒合〕(五) 1 いましめあう
《一ツ》
四433 がんは、おたがいに いましめあつて、きょうきよく空をとびました。
いまに 〔今〕(副) 7 いまに
三929 みにきた人が一本ずつおってしまえばいまにみんななくなってしまうでしょう。
五964 会 いまにいい声でさえずりますよ。
七607 いまに、一つもなくなるだろう。
十一717 会 「いまに、お医者さんがみにきてくださるだろう。」と、少年は考えました。
十二2511 会 いまにもう失敗もなくなるようにしてみせます。

十五927 会 でないと、いまに困ることになるから。
十五11810 会 でも、いまにきつと来るでしょう。
いまにも 〔今〕(副) 4 いまにも
八4811 ひとりの男が、いまにもごろりと横になろうとしているところでした。
八1021 いねのほのさがふくらんで、いまにもほがでそうです。

九446 手 じゅくした実がすずなりになっているのを見ると、いまにもものぼつてとりたくなります。
十二856 いまにもころびそうになりました。
いままでどおり 〔今迄通〕(名) 1 いままでどおり
十一752 会 いままでどおりのてあてを続けなさい。
いま 〔意味〕(名) 7 いま 意味
七136 このやうなときの「手」は、どんないみにつかわれているでしょう。

十4911 そのときのいきさつを知っている私には、このことばの意味がよくわかります。
十二76 道灌は、その花の枝を手にはしましたが、

なんのことだからその意味がわかりません。

十二883 ことばは、〈略〉、ゆきがありや、音声や身ぶりによって、いろいろにその意味がかわる。

十三352 だんだん大きくなって、文字であることがわかり、その文字の意味がわかってくると、

十五382 「海」を「うみ」などつかって、その漢字の意味にあった日本語をあてて読むこともした。

十五7511 博士は、そのことばの意味をときかねていた私のようすを見て、大きな声でわらわれ、

いも「芋」(名) 6 いも ↓さつまいも・じゃがいも・じゃがいもばたけ・じゃがいもをつくりに・やまのいも

二171 ろばたたいいももち ——

二241 先生、いものはのつゆは、あれ、ただの水でしょうか。

九424 煙 かきの色づくころ、煙のいもをほりおこしました。

九426 苦勞してかいこんした煙のいもをほりおこすのは、楽しく、うれしいことでした。

九4211 母やおばがくわをいれるあとから、ぼくたちはむちゅうになっていもをひろいました。

十一374 さやまめ・とうきびよくみのり いももふとってくるようす。

いもうと「妹」(名) 26 いもうと 妹 ↓わたくしのいもうと

二472 である人 いちろうじろう いもうとのさちこ おかあさん

四242 「いもうと」にあてて書きました。

四8410 すると、みきこさんのいもうとの たつこさんが、それにあわせておどりました。
六702 ごろうは、妹のはるえといっしょになって、

大きな雪だるまを作りました。

九346 母と、おぼと、兄と、妹と、ぼくの五人で、三日間かかりました。

九371 小さい妹のために、くわの葉につつんで持つて帰ったこともありました。

九427 いちばん小さな三つになる妹もつれて、うちじゅうがみんなでもいもほりをしました。

九441 妹は、かきの葉を「略」といってひろい集めては、ままごとをして遊びます。

九1142 いもうとの小さき歩みいそがせてちよ紙かいにゆく月夜かな

十2211 ひとりの友だちは、妹をつれて、つつみの上でつみ草をしている。

十302 もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、

十476 私は、きのう、〈略〉二年三ヶ月になる妹をつれて、さんぽにでました。

十479 ところが、私たちの足では十三分のところですが、妹にはそうはいきませんでした。

十485 べつにいそぐともありませんでしたので、妹の気のすむようにして、つれていきました。

十488 ためしに、私は、妹のいつていることばを、紙きれに書きとめてみたのです。

十507 黒いぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたので、妹はびつくりして、

十5011 妹は、わらいながら、「フツテ」と、ひとりごとをいいました。

十528 妹は、また、ちよこちよこ歩きだしました

十5312 妹は、そこへいって、水おけのふちにつかまって、水の中をのぞきました。

十549 妹は、ここであた、いろいろなものをながめるのです。

十5412 わずかのことばですが、この中には、妹のすがたが、ありありとうかんでいます。

十552 ことばの記ろくは、妹の心の写真になるのではないかと、ふと、こんなことを考えました。

十5511 あるとき、なにげなく妹の作文をみました。

十二3811 「父」「母」「妹」「先生」などのことばがあったことを思い出します。

十四9311 なぜかといえば、妹にしても、私にしても、心からおかあさんを愛しているからだ、

十五1076 でも、それを妹にいつてはいけません。

いもうとたち「妹達」(名) 2 妹たち

十一782 母親のことや、妹たちのことや、父親の帰りを待ちこがれていたことなどを——

十五1208 かわいい弟たちよ、妹たちよ。

いもうとのことば「題名」 2 妹のことば

十35 妹のことば

十474 妹のことば

いもうとのさくぶん「題名」 2 妹の作文

十37 妹の作文

十566 妹の作文

いもちびよう「稲熟病」(名) 1 いもち病

八105 先生におききたら、このいねは、いもち病という病氣にかかったのだとおっしゃいました。

いもなえ「芋苗」(名) 1 いもなえ

九356 いもなえは、ぜんぶで三百五十本ありました。

いもほり「芋掘」(名) 2 いもほり

四294 おばさんのうちへいって、いもほりのでつだいをする ことかな。

九428 いちばん小さな三つになる妹もつれて、うちじゅうがみんなでもいもほりをしました。

いや「嫌」(形状) 24 いや

二七八 会 いやだよ。
 三七八 会 よその子どもたちが わたしのお日さまをとってしまふのはいや。
 三〇九 会 どこへいくのもいやでございます。
 五七三 会 ひやくしようなんか、もういやになったから、お金持のおくさんになりたいって。
 五七〇 会 もうひやくしようはいやになったから、お金持のおくさんになりたいというのです。
 五七二 会 わたしは金持のおくさんになった、女王になりたいってたのでおくれ。
 五七六 会 おばあさんは、もう金持のおくさんはいやだ、女王になりたいといっています。
 五七五 会 わたしは女王もいやになった。
 五七五 会 うちのおばあさんは、もう女王はいやだといっています。
 六二六 会 ふぶきはいやだから。
 六八八 会 そんなこと、いやだよ。
 六八二 会 いくら一日でも、いやだ。
 八五二 会 「幸福」がきたとは知らなかったとみえて、いやなものでも家のまえに立ったように
 八八二 会 だから、おまえさんとおつきあいするのがいやなのさ。
 八八二 会 いやなことをいうようだが、それは、い友だちはみんなそうしたものだよ。
 九五八 会 すると、男はまたいやな顔をしました。
 九八八 会 いやだ。」と、たかぎをにらみつける。
 九八八 会 ぼくだっていやだ。」と、つかまれている手をふりはなそうとする。
 九八八 会 いやだな、けんかしたあとの気持ちで。
 一〇八 会 ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやなことなど、きみはなんでもよくわかってる。
 一四〇 会 もう行っちゃいや。

一五二 会 おじさんたちと行くのがいやなのか。
 一五二 会 ぼくらのくつはほりだから、行くのはいやだといっているのですよ。
 一五九 会 さあ、みんな、力づくで、いやでも幸福にしてしまおうじゃないか。
 一六〇 会 「否」(感) 28 いや
 二二二 会 いや、目でみなくても、手でさわったことがあるかい。
 二二二 会 するとみんなは、『いや、まだ、さわってみたこともない。
 二二八 会 いや、ふしぎでもなんでもない。
 三二八 会 いや、みずうみへおりようよ。
 四一〇 会 うらしま「いや、ちようどとおりがかったところでしたので。」
 四一〇 会 うらしま「いや、もうじゆうぶんいたきました。」
 四一四 会 うらしま「いや、おとひめさま、なにもかもじゆうぶんでございます。
 四二二 会 どうなさるのでございますか。」りょうし「いや、これは、わたしがひろったのです。
 四二二 会 どうぞ、お返しくださいます。」りょうし「いや、返せません。」
 五二九 会 いや、たけのこにごはんつぶがついているのが、たけのこごはんだよ。
 六八六 会 にいさん、ゆるしてください。」ほり「いや、ゆるすことはできない。」
 六九三 会 海の神「それはおかしい。いや、たしかにあるはずだ。
 七二八 会 旅人「いや、わたしは、そのらくだをみたのではありません。」
 七二八 会 甲「いや、あちらで、あかしをたててもらおう。」ふたりは、旅人の両手をとる。

八四二 会 いや、いや、わたしは、こんなかなしいことはありません。
 八四二 会 いや、いや、わたしは、こんなかなしいことはありません。
 八六二 会 いや、みんなではない。
 八六六 会 いや、しちめんちようではない。
 八六九 会 ほかのものと同じようによろしく、いや、ほかのものよりよくおようといてもいい。
 九六五 会 いや、ちがうよ。
 九六五 会 やまだ「かんにんするかい。」たかぎ「いや、ぼくがいけなかったのさ。」
 九六六 会 いや、もう、おまえさんをたべやしないよ。
 一二九 会 いや、わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがっておいでだろうと思いました
 一四二 会 いや、いまは日本語にちがいないが、もとは、外国のことばさ。
 一四四 会 いや、どうか根さんから。
 一五四 会 いや、これは失礼しました。
 一五八 会 この廣間のなものをおさえている。
 一五八 会 いや、どこのなものをおさえている。
 一五八 会 それから、これは、いや、まったくおせいすぎますね。
 一六二 会 「否」(感) 2 いやいや
 一六二 会 いやいや、たいへんたのしい思いをさせていただきました。
 一五九 会 いやいや、時代がちがう。
 一五九 会 「嫌」(五) 3 いやがる 《一ツ・ール》
 一二九 会 いや、わたしはあんまりへたなので、耳ざわりでいやがっておいでだろうと思いました

十二25 8 はじめはいやがっていた民ちゃんも、よ
 ぐれていないほうが氣持がいいので、
 十五93 12 ふとった幸福どもは、喜びの声をあげな
 がら、いやがる子どもたちをひきずって行こうと
 する。

いやしい「卑」(形) 1 いやしい「—イ」
 四37 10 会 いやしいまねをしてはいけませんよ。
 いやしめる「卑」(下二) 1 いやしめる「—メ
 ル」

十二89 12 それは自分の生活を軽はくにし、相手の
 人をいやしめることにもなるからである。

いやはや(感) 1 いやはや

十五91 5 会 すこしの休みもなく、飲む、たべる、
 ねむる、いやはや目がまわるようだ。

いよいよ「愈」(副) 19 いよいよ

三11 8 いよいよ十五夜になりました。

六25 8 会 楽しみはいよいよくわり、喜びはさら
 にたかまる。

七50 2 いよいよ、ドッジボール大会がはじまった。

七77 8 ふたりは、いよいよびっくりして、乙「そ
 れにちがひありません。」

八32 9 一年の月日がたって、いよいよその日にな
 ると、

八98 9 いよいよきょうは田植えでしたので、みん
 なうれしそうでした。

九107 7 いよいよ、スキー場に着いた。

十36 2 だれひとりあいてしてくれなくなり、ま
 ずしさはいよいよせまってくる。

十68 9 それで、いよいよ、おしれをあげるとき
 になると、

十一28 8 そこへいってからは、いよいよいっしょ
 うけんめいに働きました。

十一88 7 顔はむらさき色になり、呼吸はいよいよ
 困難になりました。

十一88 9 チチロは、いよいよよくせわをして、
 ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでし
 た。

十一89 6 会 「いよいよりんじゅうだ。」と、医者
 はいいました。

十二14 7 いよいよ下がきをかきはじめた。

十二77 3 メキシコのテニス選手キンゼーと私とが、
 いよいよ試合をする日のことでした。

十二85 1 見物人は、いよいよ手にあせをにぎりま
 した。

十四22 11 カボチャも、外国語であつたとお話しに
 なつたので、私たちは、いよいよおどろいた。

十五50 10 「略」と決心し、いよいよこのしご
 とに熱情をこめた。

十五118 8 光 いよいよペールをかぶって、

いよいよ「愈」(副) 2 いよいよ

十五155 5 文 会 ひるすぎていよよにあかきばらの花

いよよに重くかたむきふかむ
 十五155 5 文 会 ひるすぎていよよにあかきばらの花
 いよよに重くかたむきふかむ

いらい「以来」(副) 1 以来

十四66 6 手 たつて以来、一分間も、おかあさんの
 ことを考えないではいられませんでした。

いらっしやる(五) 52 いらっしやる いらっしや
 る「—イ—ツ—ル—イ—ラッシ」

—44 4 会 ふたりでいっていらっしやい。

—46 6 会 さあ、あちらのへやへいらっしやい。

—57 5 会 たろうさん、よくいらっしやいました。

二52 2 おかあさんが、いすにこしかけて、本を
 よんでいらっしやいます。

二70 7 会 はやくいらっしやあい。

三10 2 上と 下とを ゆびさして、 お立ちに
 なっていらっしやる。

三30 5 会 じぶんの かきたいところへ いって、
 そこで かいていらっしやい。

三47 6 そこへ、 おおくにぬしのみことが いらっ
 しいました。

三48 1 にいさまがたの おもい ふくろを せおっ
 て いらっしやったので、

三83 3 そのとき、 おかあさんが えんがわに で
 て いらっしやいました。

四17 9 学校から かえつたら、 おかあさんが、 石
 うすを ひいて いらっしやった。

四85 4 そのとき、 おかあさんが、 かごに みかん
 を いれて、 もって いらっしやいました。

四110 3 会 あなたが うらしまさんで いらっしやい
 ますか。

五14 7 会 じろうちゃん、 いらっしやい。

五34 7 おかあさんが、 だいどころで、 ごはんの し
 たくをして いらっしやいます。

五38 4 そのかたは、 ほっかいどうで、 やはり先生
 をして いらっしやるのです。

五82 9 七月十五日 金 先生のお友だちが、 学校
 をみに いらっしやいました。

六36 4 会 根の方へおいて いらっしやい——

六40 1 会 心配しないで まって いらっしやい。

六80 5 会 にいさんは 毎日海へで、 魚をとって いら
 っしやるが、

六81 7 会 そのかわり、 にいさんは 山へ いらっ
 して。

六82 10 会 にいさんは この弓と矢を持って いらっ
 しい。

六八七(一) ー もしも、あなたは、どうしてないていらっしやるのですか。
 六八七(二) ー あなたは、その大きな木にのぼって、まっぴらっしやい。
 六九〇 ー 六のぼめん 正面に、海の神がこしをかけていらっしやる。
 六九三(一) ー 門の木の上に、りっぱなかがいらっしやいます。
 六九三(二) ー あなたは、どなたでいらっしやいますか。
 六九四 ー やつとできたので、おかっぴらっしやるおかあさんのところへとんでいって、
 七二四(一) ー 先生も、あおむしをかっていらっしやるって。
 七三六(一) ー もうすこし、がまんしていらっしやい。
 七三六(二) ー さあ、いまのうちに、さきの方へいらっしやい。
 七六四(一) ー あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていらっしやるではありませんか。
 七六五 ー 先生が、黒いうさぎと、《略》を、かごにいて持っていらっしやいました。
 八二九 ー 天帝は、《略》、また馬車を走らせて、天の川の西の岸を通っていらっしやいました。
 八三七 ー あるところに、金持の王さまがいらっしやいました。
 八四二 ー そうおっしやって、おくやみになっぴらっしやると、
 八四四 ー あるところに、ひとりの王さまがいらっしやいました。
 十六〇 ー おかあさんが、あかちゃんをだっこして、おもての通りへでていらっしやった。
 十一七二(一) ー 心配しないでいらっしやい。
 十一九一(一) ー これを病院の記念に持っていらっしや

い。
 十二一九(一) ー ピアノの先生が、散歩にいらっして、
 十二三五 ー 先生は失望して、一時やめていらっしやいました。
 十三五四 ー ちょうど、おじさんは、用事がなく、しよさいで、本を読んでいらっしやいました。
 十四六九(一) ー いちばんつかったことは、おかあさんがかなしがっていらっしやると思うことでした。
 十四八八(一) ー それは、おかあさんがかなしがっていらっしやるということです。
 十四七三(一) ー どんなにしていらいっしやいますか、お知らせください。
 十四七五(一) ー どの時間になにをしていらっしやるか、この私にはわかるのです。
 十四九二 ー そこへ先生がいらっしやった。
 十四五八(一) ー さつき、葉さんと根さんは、養分のことをいっていらっしやいましたが、
 十五六五 ー 日がさをさしかけながらついていらっしやった新島のおばさんとの思い出は、
 十五七四(一) ー みなさん、いらっしやいよ。
 十五七四(二) ー みんな早くいらっしやいよ。
 一五 ー えいり・でいりぐち・なまみり・ひとねいりする
 いりえ「入江」(名) 1 いりえ
 九七八(一) ー むかし、このへんは、波のおだやかな海のいりえだったのです。
 一五二 ー 「入口」(名) 9 いり口 入口
 三二五 ー ごてんのいり口まで きますと、
 三二六 ー おじいさんは、そのいり口で ばんをしていました。
 五七四 ー 入口におばあさんがすわっていました。
 六二四 ー トンネルの入口のところで、だれかの声が

します。
 八七七 ー 小屋の入口の戸がすこしあいているのをみつけたので、そこから中へはいっていった。
 十一五四(一) ー 「入口ふさがず乗った中へ。」
 十一五四(二) ー 「え顔の入口、感謝の出口。」
 十二六一 ー それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口で頼んだ。
 十二七五 ー トントン、トントンと入口をたたく者があります。
 いりこ・む「入込」(五) 1 いりこむ 《一ミ》
 十三八 ー 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものがいりこみ、それに、貝のだす眞珠質がまきつき、いりみだれる「入乱」(下) 2 入りみだれる
 《一レ》
 十四六六 ー けむりが《略》だんだんに廣がり、入りみだれて、しまいに見えなくなっぴらいます。
 十四七二 ー 湯の、中までも熱いところと、わりあいにぬるいところが、いろいろに入りみだれていりよう「入用」(名) 1 いり用
 十二六一 ー それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口で頼んだ。
 一五 ー 「入」(四五) 5 いる 《一ッ・一ラール》↓ききいる・こみいりすぎる・みいる
 八二二 ー なにか氣にいらなかつたりおこつたりすると、赤い口をあけて、
 八七三(一) ー きみはじつにみにくいから、氣にいったよ。
 九二九 ー うまそうな水や名高いいど水をためてみたけれども、どうも氣にいらなかつた。
 十四一六(一) ー ランプがお氣にいて、うれしく思いました。
 十五五八(一) ー 慶應三年九月二十一日、マサチュセツ

ツ州アマスト大学に入學、北側の第八号室に入る。
いる「要」(五) 16 イル いる《ラー・リー
ル》

二192 会 いるときにいらなくて、いらな
きに いるものはなかに。

二192 会 いるときにいらなくて、いら
なきに いるものはなかに。

五116 会 そんな心配はいらない。

五157 会 これは、汽車の旅にきつぷが
いるのと、おなじことです。

六133 会 なにもいらなや。

八427 会 もし、ひめが生き返るなら、
わしはもうこがねなどはいらない。

九706 会 お礼なんかありませんよ。

九798 会 いらなくなったりこわれたりした
道具や、

十492 会 ハイ——イライナイ——

十517 会 「イライナイ」といって、いぬ
にたずねているのです。

十一108 会 さあというときに、ひとり
で責任を

十一2810 夜の勉強には油がいら
います。

十一626 会 『いいえ』というき
るには、ほんとう

の勇氣がある。

十二409 わけのわからないケラーを
しつけていく

のには、なみなみならぬどりが
いりました。

十三386 会 (わらって) いら
ない。

十三423 会 え、ばくに……いら
ないよ。

いる「居」(上二) 1759 いる 《イ
イル・イレ》↓あ

なたのおもっていることは・お
うちにいるこうふく

ども・かきおとしいる・ここ
ろにいきていること

ば・ゆれいる

一376 す。川がながれていま
す。川が、さらさ

一377 らさらとながれていま
す。ちいさな川

一381 らさらとながれていま
す。いぬがはし

一422 なかに、わたしがいま
すよ。みんなも

一423 みんなもうごいていま
すよ。木もはえ

一424 すよ。木もはえていま
すよ。せんせいの

一436 がそばにたつていま
した。「略」。「へ

一4410 くせいきがよんでいま
す。「略」。「略

一4510 ちものをしらべていま
す。かたなだの、

一468 をかけてまっています
と、おおきな

一479 とうさんのもつていた
四かくなかみに

一485 会 きしやはすいていま
す。ごじゅんに

一523 な川がながれていま
した。「略」。「ひ

一527 会 ほしがひかつていま
す。おと

一557 会 たまをもつていま
すか。「略」。

一558 会 「ここにもつていま
す。」といつて、

一567 やはもうつていま
した。まどのと

一5610 たくさんならんでいま
した。しろちゃん

一573 わたくしのうちにいた
きようだいす。

一585 会 ら、どうなつていた
かわかりません。

一594 きみそのさいていま
はおはなばたけの

一612 会 ですね。ここにいま
るものは、みんな

一648 会 んのよくねていま
ること。おあさ

一658 会 ふたつひかつていま
すよ。」といつて

一95 会 ごちやになつていま
す。なんとかし

二117 みました。わけていま
るうちに、そのわ

二135 みどりをしています
。おさらに

二192 会 略。「略」。「いま
るときにいらなく

二192 会 いないときにいま
るものはなかに。

二194 会 略。「ねむつていま
ても、みえるもの

二213 会 がすをかけていま
した。しまいまで

二214 会 しまいまでみていた
いと、おもしろ

二231 会 、はとをだいていた
ら、たいへんあ

二235 会 りの花にきていま
したよ。「略」。

二244 会 とぶらさがつていま
した。あんまり

二245 会 りいろがにいていま
す。よく、はじ

二247 会 くさんとまつていま
す。これからう

二283 会 のをおしあつていま
した。そのうちに

二2910 会 、十一ぴきしか
ない。一ぴきたり

二306 会 り十一ぴきしか
いません。「略」。

二311 会 り十一ぴきしか
いません。「略」。

二337 会 はなしをしていま
ると、どしんどしん

二361 会 うちわにいていま
るよ。」といいま

二376 会 、ゆきがふつていま
るのをみつけれ

二461 会 むまりをのせていま
るね。「略」。「へ

二479 りんごをもつていま
す。うれしそうに

二564 ことをかんがえていま
るうちに、いつの

二571 いちめんにさいていま
した。ちようちよ

二573 ようちよもとんでいま
した。わたくしは

二589 会 さんのつかつていま
るつくえも、こし

二661 会 みがたなびいていま
る。「みんな「た

二662 会 んな「たなびいていま
る、きれいな

二689 、ひくくつづいていま
る。(三) しや

三112 かというでしがいま
した。はんたかは

三152 の中にまじつていま
した。ごてんの

三169 会 は、門のそとにいま
すので、このは

三178 いな光がさしていま
した。三 こと

三212 人たちに。「川にいま
る魚と海にいま

三212 にいる魚と海にいま
る魚とをわけな

三231 どこまでつづいていま
るのか、わからない

三282 どうたちも、みていま
る人々もいまし

三295 なつてこまつていた
たたくさんの村々

三311 会 つすぐになつていま
す。右がわはき

三313 会 まどがならんでいま
す。まどから光

三314 会 かけがならんでいま
す。「略」。「へ

四54 9 つねをうたれていました。かつちゃん
四55 5 をするよ。ねて いるうちに、いいこ
四58 7 んは たのしんで いました。二十九わの
四59 1 会 「「みはりばんがない。」二十九わの
四61 1 びつしよりぬれていました。いんそつが
四62 2 た。みんなのねて いるひまに、かつち
四62 6 として、もがいて いるところ。か
四65 6 やかに たなびいて いました。がんの列
四84 1 会 がぶらんこして いるよ。」といったの
四86 4 もられて、だまて いる。だいこんをぬ
四86 5 だいこんをぬいて いると、みそざいが
四87 8 上に、雲がでて います。あの 白い雲
四88 1 かが、ちぢまって いるようです。ちら
四90 1 どんなに つもて いても、おかつてから
四91 8 あせが つたわて いる。けれども、おじ
四94 4 いものが とんで いる。あばれまわって
四95 1 。あばれまわて いる。ひろがつたり、
四95 4 るものだ。降って いる 雪を上からみ
四95 6 かたちは きまって いない。風に ふかれ
四96 6 ふかれて とんで いるうちに、いつしよ
四96 6 まいて、あそんで います。子ども「この
四97 6 会 めを ころがして いるのです。」うらし
四102 5 べで つりをして います。そこへ かめ
四103 2 んに つりをして いるので、気が つき
四109 3 しさに おどろいて います。かめ「さあ、
四121 2 人が、はたらいて いる ことでしょう。
四121 7 でしょう。光って いる、ほそい 糸のよ
四122 9 手かずが かかて いる ことでしょう。」「
四123 6 会 ました。もえて いる 火をもつて あ
四127 5 れながら あるいて いますと、どこからか
四127 8 ものが、かかて います。りようし「あ
五10 7 会 んめいに 走らせて いるからさ。」「略。」「

五10 9 会 「どこで 走らせて いるの。」「略。」「ビ
五11 8 会 いつも 氣をつけて いるよ。ほら、あそこ
五13 3 会 まちが つかって 乗っている 人がいないか、し
五13 3 会 て 乗っている 人がいないか、しらべるの
五13 4 会 たち、まちが つかっていないの。」「略。」「
五17 11 会 ゆくさきは 知って いるが、うそ字だから
五18 1 会 て、びくびくして いるところだよ。」「そ
五19 9 されて、ほつとして いると、こんどは、ま
五20 5 花のきれいに さいて いる家に、はいりまし
五21 5 した。あまり こんで いましたので、みんな
五23 4 会 車は とも こんで いたんです。それで、
五23 6 会 、もたれ かかて いると、こしを かけて
五23 7 会 と、こしを かけて いた 知らない おじさん
五24 2 会 いた、わかい 人が いるんです。ぼくは、
五25 5 会 ならめつこを している ようだったのに、
五25 10 と、でむかえに きて いた おねえさんを みつ
五28 4 そろばんを は じて いました。」「略。」「へ
五29 5 会 ふきふき あるいて いました。一つは 大き
五30 11 会 やりたい と思っ て いました。が、なかなか
五32 3 「——」 汽車が 走って います。まっ 黒なけむ
五32 5 て、どんどん 走って います。おや、むこう
五32 8 を、たくさん つかんで います。この 汽車は、
五32 10 なにを たいて 走っている のでしょう。これ
五33 3 、荷物をつみ こんで います。この 荷物の 中
五33 5 じゅなどが はいって います。船は、なんの
五33 7 つが たくさん 立って います。どの えんとつ
五33 9 むくと たちの ぼつて います。ここは 工場町
五34 3 せつな 品物を作っ て います。この 工場の き
五34 5 のきかいを 動かして いる力は、なんで しょ
五34 10 ら、ゆげが ふきで います。ガス こんろの
五35 1 火は、ガスが もえて いるのです。あの ガス
五35 3 しょう。なにを している ところでしょう。」「

五35 4 れは、石炭を ほつて いる ところ。まわ
五35 6 かべに、石炭が できて います。さかんに、き
五35 7 炭をくずして とつて います。とれた 石炭は
五36 1 山のように つまれて います。この 石炭が、
五37 7 中に たくわえられて いて、いまそれが、私
五37 9 き返つて はたらいて いるのです。五 心
五38 6 年 生を受け 持つて いる。こんど、ぼくの
五39 4 会 まだ 雪が のこつて います。けれども、中
五40 6 会 、たくさん さいて います。」「略。」「
五40 8 会 、うしが 十三とう います。白黒ぶちの ち
五40 10 会 、子うしが 三とう います。けさも、まき
五41 4 会 しそうに あるいて いました。子うしは、
五42 8 会 なえは こびを しています。つばめが、私
五43 2 会 りは くらくなつて います。きのう、はじ
五43 4 会 へおよめ に いて います。ぼくは ねえさ
五46 10 たら、もう 鳴いて は いなかった。たのし
五47 6 。たんぼが さいて いたり、すみれが さい
五47 7 り、すみれが さいて いたり、名まえは 知ら
五47 9 きれいな 花が さいて いたり。おや、こんな
五53 2 、大きな 星が 光つて いました。」「略。」「と
五53 9 、南東の 空で 光つて いました。」「略。」「そ
五54 1 星が ちらちら 光つて いました。」「略。」「へ
五54 8 、大きな 星が 光つて いました。それから、
五55 2 分ぐらい しか たつて いなかったのに、もう
五55 3 っかり くらくなつて いて、空い ちめんに、
五55 3 ちめんに、星が でて いました。」「略。」「と
五56 1 人々が、あつまつて いました。」「略。」「私
五56 2 会 こに 大きく 光つて いる 星ですよ。」「私は、
五57 2 はるおは、のぞいて いました。が、かげんが
五58 1 会 あんまり 長く みて いないで、さあ、おか
五58 3 はるおは、まだ みて いたい ようでしたが、
五58 6 会 い水の中に いて いる ようだ。」「略。」「

五60³ ⑤ しんきゆうしているようにみえますね
 五63⁸ ⑤ きは、ねてばかりいたのが、ほうように
 五65³ ⑤ ばあさんが、住んでいました。ふたりは、
 五65⁵ ⑤ い小さな家に住んでいました。おじいさん
 五65⁸ ⑤ つむいでくらしていました。ある日、お
 五67⁶ ⑤ こわれてしまっているんだもの。」とい
 五67⁹ ⑤ 海はすこしあれていました。おじいさん
 五68³ ⑤ がほしいといっています。「略」お
 五68⁷ ⑤ しいおけができていますよ。「略」お
 五68⁹ ⑤ 新しいおけを持っています。ところが、
 五69¹ ⑤ した。海はにごっていました。おじいさん
 五69⁸ ⑤ はちゃんとできていますから。「おじい
 五69¹¹ ⑤ りっぱな家がたっていました。おばあさん
 五70⁶ ⑤ ました。海はあれていました。おじいさん
 五71⁶ ⑤ 、赤いくつをはいていました。めしつかい
 五71⁶ ⑤ 。めしつかいたちもいました。おじいさん
 五73¹ ⑤ つ黒になってあれていました。おじいさん
 五73⁶ ⑤ なりたいといっています。「略」と
 五73¹¹ ⑤ んとごてんができていて、おばあさんは女
 五73¹¹ ⑤ さんは女王になっていて、おばあさんは女
 五74² ⑤ ばなけらいもついています。おじいさんは
 五75¹¹ ⑤ ゴーゴーとうなっています。おじいさんは
 五76⁵ ⑤ はいやだといっています。海のぬしにな
 五76⁸ ⑤ したいといっています。「金のさかな
 五77³ ⑤ ると、まえに住んでいた、ふるい小さな家
 五77⁴ ⑤ い小さな家がたっていました。入口におば
 五77⁴ ⑤ ばあさんがすわっていました。こわれたお
 五77⁵ ⑤ が一つ、ころがっていました。十 学級
 五79¹ ⑤ けのむこうを流れている小川のところに
 五79⁴ ⑤ り高く鳴ったりしています。「略」
 五79⁵ ⑤ つまでも高く鳴っています。「略」
 五79⁸ ⑤ たちちんだりにしています。「略」

五79⁹ ⑤ 魚のようにおよいでいます。「略」
 五80² ⑤ と石とが、おどっています。「略」
 五80³ ⑤ っ、とんではねています。「略」
 五80⁴ ⑤ 。「水の音をきいていたら、せなかがあつ
 五84⁷ ⑤ いて、よるこんでいました。いのうえさ
 五84⁸ ⑤ は、國語の本にでていることばを、五十音
 五85⁸ ⑤ や、おまつさんがいない。どうしたのか
 五87⁴ ⑤ もあるかと思っていたよ。あはははは。
 五87¹⁰ ⑤ 赤いおびをしめている。いいおびだ。わ
 五91⁵ ⑤ をやぶって、のびているたけのこがありま
 五92⁵ ⑤ はんつぶがついているだろう。それぞれ
 五92⁸ ⑤ けのこのはいつているのが、たけのこ
 五92⁹ ⑤ はんつぶがついているのが、たけのこ
 五93⁹ ⑤ までも月にみとれていました。十一 ひ
 五94⁵ ⑤ ようになつておちていたのです。「略」
 五96³ ⑤ わ、ひわといっています。いまにいい声
 五96⁷ ⑤ の中をとびまわっていました。「略」
 五97² ⑤ 「略」そういつているうちに、秋になり
 五98⁹ ⑤ はなそうと思つていのです。「そのぼ
 五99¹ ⑤ ひわをとろうとしていました。「略」と
 五99⁴ ⑤ をして、ころがっていました。さんちゃん
 五99⁸ ⑤ の中をとびまわっていました。「略」
 五102⁵ ⑤ 、音をたてて流れているのをきいて、ひわ
 五105² ⑤ でもその声をきいていました。しじゅうか
 五105⁸ ⑤ 、ひとりよろこんでいました。「略」
 五107² ⑤ つまでも、ここにいろよりしかたがない
 五107⁴ ⑤ 「略」ここにいて、なにか、おもし
 五109¹ ⑤ 、こまつたといっていました。しかし、ひ
 六4² ⑤ 中にしまひこまれていた、小さな鉄のねじ
 六4⁸ ⑤ た。自分のおかれています、しごと台の
 六4⁹ ⑤ ごと台の上ののっている小さなふたガラス
 六5² ⑤ まいなどがならんでいる。きりや、ねじま

六5⁶ ⑤ の上によこたわっている。まわりのかべや
 六5⁸ ⑤ がたくさんならんでいる。カチカチと氣ぜ
 六6⁴ ⑤ だらうなどと考えているうちに、ふと、自
 六6⁸ ⑤ れぞれちがつてはいるが、どれをみても
 六7⁷ ⑤ そらをみまわしていたが、男の子は、や
 六7¹¹ ⑤ ただじつとみつめていたが、やがてこの小
 六9⁹ ⑤ ねじは、「ここにいます。」とさげびた
 六10² ⑤ ままで雲にかくれていたようにうかがおを
 六10⁸ ⑤ こんで下をみつめていた女の子が、思わず
 六11³ ⑤ してそれをいじつていたが、やがて、ピン
 六11⁶ ⑤ 死んだようになっていたかいう時計が
 六12⁴ ⑤ じが一本いたんでいましたから、とりか
 六12¹⁰ ⑤ とうに役にたっているのだ。」と、心か
 六13³ ⑤ と 一びきのありがいました。あつい日中
 六13⁵ ⑤ そばに小川が流れていました。ありは、川
 六15¹¹ ⑤ たら、どうなつていたかしれない。「あ
 六16⁶ ⑤ わのはとがとまっていた。はとは、ね
 六16⁷ ⑤ はとは、ねらわれていることを知らずにい
 六16⁷ ⑤ いることを知らずにいました。ありは、い
 六17³ ⑤ うどが矢をつがえていて、ありませんか
 六18¹ ⑤ っ、音楽会をしています。あるきりぎり
 六18¹ ⑤ パイオリンをひいています。あるきりぎり
 六18² ⑤ すはチェロをひいています。あるきりぎり
 六18³ ⑤ りすはふえをひいています。そのほか、ハ
 六18³ ⑤ ハーモニカをふいているもの、オルガンを
 六18⁴ ⑤ 、オルガンをひいているもの、たいこをた
 六18⁴ ⑤ 、たいこをたたいているもの、シロフォン
 六18⁵ ⑤ ロフォンをたたいているもの、そのうしろ
 六18⁶ ⑤ で、うたをうたっています。まん中に、し
 六18⁷ ⑤ をいっしんにふつています。しばらく音楽
 六21⁵ ⑤ みんな喜んできいています。そのとき、し
 六24¹ ⑤ くやくそくをしています。「チェロ

六24 4 ㊦ しむために生きているんじゃないか。」
 六26 1 半分はそとになっっています。雪がちらちら
 六26 2 雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近いこ
 六28 3 ず、がいとうもきていません。きりぎりす
 六29 1 、二が戸の方をみています。あり三「おは
 六31 8 風に向かって立っている。きものすそが
 六33 3 の雲が風に流されている。13 風を受ける
 六34 10 口をもぐもぐさせている——声がでないの
 六36 11 夕やけ雲がうかんでいる。22 ビルディン
 六37 1 ングが立ちならんでいる町。ラジオの音楽
 六37 3 屋根にひっかかっているかし。24 顔の
 六37 11 りなしにゆききしている。26 立ちならぶ
 六38 6 ㊦ の屋根にとまっているのは。」親つばめ
 六39 3 ㊦ え。きみ、どこにいたの。」かし「あの
 六42 11 のまん中にはいっている。37 しずんでい
 六44 1 木の枝にとまっている。二わの子がらす。
 六44 3 ㊦ のかしが帰っているだろう。」子がら
 六45 3 ㊦ んべんもさけんでいたよ。」43 「へのへ
 六45 6 たんぽをみわたしている。かかしの目のま
 六45 9 いちめんにつづいている。四 空のうた
 六51 3 んなきれいに光っていました。ふみおと、
 六51 4 げふみをして遊んでいました。そのうちに
 六51 9 ㊦ さまが早く走っているね。」と、よしお
 六52 7 じつと月をみつめていると、月は動かない
 六52 11 ㊦ いわ。雲が走っているのよ。」と、みち
 六53 3 ㊦ お月さまが走っているといったね。みち
 六53 4 ㊦ さんは雲が走っているっていうの。」へ
 六53 5 ㊦ さまをじつとみていてごらんさない。雲
 六53 7 ㊦ 、雲をじつとみていてごらん。お月さま
 六53 9 ㊦ 。お月さまをみていると雲が動いていく
 六53 10 ㊦ いくし、雲をみているとお月さまが動い
 六54 2 ㊦ 略。」といいあっているのをききながら、

六54 5 く枝ごしに月をみていましたが、「略。」
 六54 11 あいだにじつとしていますが、雲はさっさ
 六55 2 ㊦ っぱり雲が走っているんだね。」略。
 六55 7 れいにはれわたっていました。ふみおはさ
 六55 10 とはずれてしまっていました。六 かべ
 六59 8 が、五か七になっているのです。「空のう
 六62 3 一口話 川が流れていました。くつが流れ
 六63 5 はゆたんぽをいれている。わたしもせきが
 六67 3 きの子ぐまが住んでいました。お友だちと
 六69 2 ばん遠くから通っている子どもの名や家の
 六70 9 へ、中学校に通っているねえさんが、帰っ
 六71 2 ㊦ いいって、いつていたところよ。」これ
 六72 6 雪だるまは、死んでいるのか、生きている
 六72 6 ているのか、生きているのか。もちろん生
 六72 7 か。もちろん生きているとは思われないが、
 六72 7 思われないが、死んでいるとも思えない。死
 六72 8 も思えない。死んでいたら、ころがってた
 六72 10 のいい顔つきもしてはいないはずだ——へ
 六72 11 ㊦ なにを考えてこんでいるんだね。」おとう
 六73 7 ㊦ 雪だるまは生きているのでしょうか、死
 六73 8 ㊦ しょうか、死んでいるのでしょうか。」
 六74 2 ㊦ ろうさん。生きているものには、みんな
 六75 8 ㊦ 、おまえが生きているんだから、わかり
 六76 9 ㊦ するから、生きているんですよ。」へ
 六77 2 ㊦ ら、それを考えているんです。ぼくたち
 六77 3 ㊦ なるから、生きているんですよ。」へ
 六77 4 ㊦ きくなったりしているものは、みんな生
 六77 6 ㊦ ないし、息もしていませんね。」略。
 六77 10 や、水車は、動いていても息をしないから
 六78 4 ㊦ でも、命をもっているのだよ。とにかく
 六79 3 ㊦ きんどきんやっているでしょう。しんぞ
 六79 5 ㊦ と思って動かしているの。ちがうでしょ

六79 7 ㊦ あなたがねむっているときでも、きん
 六79 8 ㊦ きんどきんやっていますよ。」ごろうは、
 六80 6 ㊦ やけものをとっていますね。」みどりの
 六86 8 とは、海べでないている。そこへひとりの
 六87 4 ㊦ し、困っていないのです。」年より、
 六87 10 ㊦ 大きな木が立っています。あなたは、そ
 六88 7 、大きな木が立っている。ほおりのみこと
 六89 9 ㊦ が、水にうつっているわ。」女の人は木
 六92 6 ㊦ 、海でつりをしていたら、つりばりをと
 六95 6 ㊦ だ。だれか知っているものはないか。」
 六96 7 ㊦ たいへん苦しんでいるところでございま
 六98 3 ㊦ いたいとなっていた、たいも喜び、
 六99 3 きだしをかたづけていると、いつか、おじ
 六99 8 きをのぞいたりしていた。そのうちに、ふ
 六100 9 メートルもはなれていく、向こうの家の屋
 六101 2 、もう、じつとしていられなくなった。ぼ
 六102 6 めたり、かげんしているうちに、はつきり
 六102 9 いだから顔をだしている。いそいで、おか
 六104 3 ㊦ 人がこつちをみている。森の木のきれ
 六104 8 つはないので、ねているわけではない。た
 六104 8 だ、はながつまっているだけだが、そのた
 六106 7 りはないかと思っていたら、ちようど、空
 六107 5 弟ははながつまっているために、あること
 六107 6 発音できなくなっている。しかし、どんな
 六109 7 もはなから声がでているような気がする。
 六109 11 るで「ダ」といつているようだ。弟は、こ
 六110 1 、「はな」といつているんだと思うと、
 六111 2 ようの中にはいつている音ばかりではない
 六111 4 「という音がぬけているだけである。そこ
 六111 7 はなから声がぬけているようだ。ねんのた
 六111 11 ぶはなの音でできていることがわかった。
 六112 3 ようの中にはいつている。ここで、もしや

六113 1 ったからよく知っているが、いままでは、
 六113 7 がった性質をもっているにちがいない。ぼ
 六114 3 骨が二本しかついているにいたことです。はじ
 六115 8 っかり糸をにぎっています。「略。」と、
 六119 1 すじがたてについています。そのすじにあ
 六119 7 けるのも、まがつているのでめんどろでし
 六121 2 ひきのうさぎさんがいました。ある日のこ
 六122 10 、ころろと落ちていました。うさぎさん
 六123 6 ン、カチンとわっていると、そこへちよろ
 六123 9 会 ぎさん、なにしているの。「略。」「へ
 六123 10 会 「くるみをわっているんだよ。」「略。」
 六124 1 会 たいて、わっているのさ。」「略。」
 六128 7 りました。かくれているうさぎさんたちは
 六129 4 してなにかあわてています。「略。」「略」
 六129 8 会 に追いかけてられているんだ。きつねがお
 六129 11 会 でわいわいやつていては、すぐぼくが、
 六130 3 会 っとしずかにしたいんだよ。」たぬ
 六131 3 会 に追われてなんかいやしないんだ。この
 六136 2 うさぎさんも負けてはいません。角をふりた
 六136 11 うさぎさんたちはいませんでした。そう
 六137 5 会 ひとをばかにしている。ようしやはなら
 六138 7 とらさんがねむっていたのです。うさぎさ
 六138 9 さんは、晝ねをしていたのですが、うさぎ
 六139 5 、足をもんだりしていました。とらさんは
 六141 7 会 またべようとしていたところだ。よこど
 六142 10 光がいつぱいさしています。クローバーの
 六142 11 が、まっ白にさいっていました。おなかのす
 七5 5 、光の中をおよいでいたが、こんどは、思
 七5 8 会 ぼうしをかぶっているな。赤い運動ぼう
 七6 7 風もないのにゆれている。「もう帰る子が
 七8 5 、さっと、学校からいなくなっちゃった
 七8 9 やけの空をながめている。しゅくちよく室

七9 3 会 、どこにどうしているだろう。もう、四
 七9 11 ろ月が空にかかっている。さくらの花が、
 七11 2 ば「手がよこれていきますよ。」「略。」
 七11 9 、てのひらをさしています。「手をうつ」
 七12 5 、あさがおのだしている手のことではあり
 七12 11 を書くことをさしていますが、どうして、
 七13 6 ないみにつかわれているのでしょうか。それ
 七14 2 、まつの木が立っています。「略。」「へ
 七14 11 略。」「腹に思っていることと、いうこと
 七16 5 どもたちが集まっている。子ども先生、早
 七17 1 会 、たくさんとんでいるでしょう。」「先生
 七17 2 会 生「よくおぼえていたね。風の日は
 七17 7 会 、なの花がへつっているわ。」「女の子「そ
 七19 5 会 、どこにかくれているんですか。」「先生
 七19 7 会 の中に、かくれているのさ。」「子どもた
 七19 11 会 か。」「先生「知っている人——」子どもは
 七20 4 会 うだ。よく知っているね。きしもと「私
 七20 8 会 な白い花をつけています。」「先生「それで
 七20 9 会 生「それで知っているんだね。」「女の子
 七21 3 会 先生」とまっているちようちよが、ど
 七21 9 たりで、本をよんでいる。日曜日のはれた
 七22 1 会 ずかにして、みていてごらん。」「すずめ
 七22 3 会 いこんの葉をみているよ。」「ささやくよ
 七23 6 会 のことを、話していたんですよ。」「母「そ
 七23 9 会 兄「あ、わすれていた。もう、おさらい
 七25 3 会 なん日ほどたっているかしら。」「兄「ちよ
 七25 6 会 に、七日かかっています。それから十日
 七26 10 会 んな色にかわっている。」「兄「ほんとうだ
 七27 8 会 、「これ、死んでいるの。」「母「いいえ、
 七27 9 会 「いいえ、生きていますよ。これから、
 七28 4 会 、おもてで遊んでいますよ。」「兄「おかあ
 七29 6 会 同じ色にかわっていた。それは、すずめ

七29 8 会 かくれみのをきているようなものだと思
 七29 11 会 さなぎにかわっていた。弟が、ぼくより
 七30 3 会 いちゃん、帰っていたの。まだかと思っ
 七30 4 会 をよんでもらっていたところよ。きよう
 七32 3 会 「羽をふるわせている。」「母「空気にふれ
 七33 6 日光が降りそそいでいる。母は、ふたりの
 七33 7 りの兄弟をながめている。明かるい音楽。
 七34 7 ふまれて、おこっている女の人もありまし
 七35 1 らだにすがりついていました。それでも、
 七36 6 、心の中でのつていました。「略。」頭
 七36 7 会 「ここに子どもがいる。かわいいそうだ。
 七37 11 でまどわくをおしています。私たちのため
 七38 1 をこしらえてくれていたのです。私は、思
 七38 8 し、弟の手をひいていたので、ひとあし
 七39 10 そうに私の方をみていましたが、三人め、
 七40 3 そうに、みおくっていました。私は、いそ
 七40 7 、私を手まねきしています。私は、さぶろ
 七41 3 て、汽車でねむっていた。ふいに、はくし
 七41 5 とりの青年が立っていた。かれは、むねに
 七41 7 、かなり早く走っているの、青年のから
 七41 8 年のからだはゆれていたが、ひく手にくる
 七42 6 しんにひきつづけていた。トンネルをでた
 七43 4 会 さびしい旅をしていました。けれども、
 七43 11 は、自分のかぶっていたぼうしを、そばの
 七45 2 会 ろうとは、思っていました。また
 七46 7 中学生、たがやしている父と子、きりの花
 七47 3 作文（二） 思っていることを、はつきり
 七47 8 心がはつきりとしていますと、文章も、だ
 七47 9 ます。心がかくもっている、いくらおし
 七52 5 。むちゅうでやっていると、「略。」と鳴
 七52 7 と思つて、心配していると、十一たい十で
 七54 8 、胸がどきどきしていた。式をすませても

八五三 ざの大通りを歩いていましたら、あるデパ
 八五四 、大ぜい人が立っているの、なんだろう
 八五五 が、夜店をひろげていました。小鳥屋とい
 八五七 じろだけしか賣っていませんでした。ですから
 八七一 しました。客がきていたときなど、あまり
 八八九 うなことばをもっているのだそうです。な
 八九三 とまらせても長くはいません。私たちの家
 八九五 ように――庭さきにいるとき、とつぜん、
 八九七 み、そこにすわっている私のひざのあいだ
 八〇二 のです。うちの中にかくる、こわいも
 八〇五 うかすると、歩いているとき、追いかけて
 八〇九 さなかつこうをしているが、毎日なにか
 八一二 でむじやきに遊んでいたピオを、かた足で
 八一一 りでなく、茶のまにいたうちじゅうのもの
 八三二 も、信用してくれていたものを、あやまち
 八三三 略。』だのと鳴いているほおじろの声をき
 八三六 さなりあつてはえています。あおぎりの根
 八四二 りの木の根ものびています。だから、虫た
 八四七 とがつた口をもっています。その口のさき
 八五二 ようなかたちをしています。大きくなる
 八五七 をわずかずつすっているせみの子たちは、
 八六二 にはあさいところについて、ほそい木の根の
 八六七 根のしるをすっています。大きくなる
 八七二 よい天氣がつづいていますが、自由だし、目も
 八七七 す。皮がこわばって不自由だし、目も
 八八二 のささだけがはえていました。せみは、さ
 八八七 に、小枝がわかれていました。虫は、それ
 八九二 だけが皮にかくれています。虫はぐつとそ
 八九七 かり皮からはなれていました。みるまに、
 九〇二 思うと、その鳴いているなかまのそばへ、
 九〇七 かしの人があつていますが、そのとおり
 九一二 かたくすがりついています。三 天の川

八六九 、草花のさきみちている野原へおりてきま
 八七四 をしたりして遊んでいました。天帝は、あ
 八七九 うがしずかにういていました。川岸にそつ
 八八四 すると、さがしていたはたおりひめが、
 八八九 しんにはたをおつていました。そのおり物
 八九四 は、野原で遊んでいるのに、うちのむす
 八九九 けだかさがこもっています。「略。」天帝
 九〇四 ふえをふきつづけていました。黒うしは、
 九〇九 えに心をうばわれていました。天帝は、男
 九一四 ような光をはなっているようにみえるので
 九一九 年のところに光っている星があります。百
 九二四 年の星もちらばっています。夜になって天
 九二九 そく正しく運行しているということです。四
 九三四 どうしたもたれていくのでしょうか。四
 九三九 。庭の草木は、みているうちに、ぴかぴか
 九四四 たいこがねになつていたのです。王さまは
 九四九 て、その人の着ているシャツを王さまに
 九五四 自由もなくくらししているかと思うと、友だ
 九五九 と思うと、友だちがいなかったりしました
 九六四 、さがしもとめていた人だ。」と喜んで、
 九六九 いひが一つともっているだけでした。ひと
 九七四 と横になろうとしていたところでした。王
 九七九 まずしいなりをしていても、それでも、自
 九八四 なものが家のまえにいろのをみて、「略」
 九八九 などは、にわたりのいる家のまえへいつて
 九九四 が、おもてに立っていました。その家の
 九九九 しそうに晝ねをしていました。「幸福」に
 一〇〇四 、足あとが曲がっている。そこで、向こう
 一〇〇九 あたりが横にそれている。こんどは三どめ
 一〇一四 した足あとがついている。ぼくはうちへ帰
 一〇一九 て、ずつとづついている。下をみると、大

八五九 一 な川が遠くへ流れている。ぼくは、みはら
 八五九 三 山の谷まにのこっている雪が目についた。
 八五九 六 とおるようにすんでいる。飛行機の上から
 八六〇 五 をして歩きまわっていた。田や野原のまわ
 八六〇 八 の、ごぼうのはえているところに、一わの
 八六〇 九 のあひるがすわっていた。それは、たまご
 八六〇 九 、たまごをかえしているものであった。けれ
 八六一 一 、もうつかれきつていた。それに、たずね
 八六一 二 が世界だと思つてゐるのかい。世界は庭
 八六一 二 がわまで廣がつているのだよ。さあ、み
 八六一 五 がまだのこつてゐる。いつまでかかる
 八六一 五 ぬなすがたをしていない。ほんとうにし
 八六一 五 ぼうの上をたてらしていた。親あひるは、そ
 八六一 七 のことであらそつていた。そうして、親あ
 八六一 七 がいい。あそこにいるあひるの子をさ。
 八六一 七 中にあんまり長いので、あんなふう
 八六一 七 ひるの子は、立つていたほうがいいか、歩
 八六一 七 うがいいか、歩いていたほうがいいか、さ
 八六一 七 、遠いところにくれさえすればいい
 八六一 七 。
 八六一 七 こにはかまが住んでた。あひるの子は、
 八六一 七 れて、気がしずんでた。朝がた、かもが
 八六一 七 こにそつとかくれていた。すると、そこへ
 八六一 七 りにまぢぶせをしていた。あしの上に廣が
 八六一 七 あしの上に廣がつてゐる木の枝にもぼつ
 八六一 七 木の枝にもぼつてゐた。青いけむりが、
 八六一 七 のすぐそばに立つてゐた。したは口からた
 八六一 七 目はみにくく光つてゐた。はなをあひるの
 八六一 七 じつとすかしてゐた。そのあいだも、
 八六一 七 小屋はひどくあれていて、どっちにたおれ
 八六一 七 の戸がすこしあいてゐるのをみつけたので

八七〇 といっしょに住んでいた。ねこは、せなか
 八七五 がつた考えをもってた。にわとりは、「へ
 八八四 ちがものをいっているときに、自分の考
 八八六 こにすわってばかりいた。そこへ、さわや
 八八〇 さん、なにを考えているの。」と、にわと
 八八〇 さんは、私のいっていることがおわかりに
 八八三 しいとは思っていないだろうね。うぬ
 八八九 さんのためを思っているのですよ。いやな
 八八二 へでたいと思っているのです。」「略」。
 八八三 なってひくくたれていた。ある夕ぐれ、太
 八八四 く曲がる首をもっていた。それははくちよ
 八八五 て、あの鳥のもっているような美しさをも
 八八五 いつも足をつかっているような美しさなかつ
 八八七 おりよく戸があいていたので、あひるの子
 八八七 れきって横になっていた。あひるの子が、
 八八二 らの中で横になっていた。美しい春であつ
 八八六 大きな庭の中にきていた。そこには、たく
 八八七 れる水の上にのびていた。ここは、ほんと
 八八八 喜びがみちあふれていた。ところが、木の
 八八八 く水の上をおよいでいた。あひるの子は、
 八八九 みごとな鳥を知っていた。そうして、なん
 八九〇 のすがたのうつっているのをみた。それは
 八九一 すこに新しいのがいるよ。」とさげんだ。
 八九四 がすこしふくらんでいました。五月五日
 八九六 えも生き生きとしています。根が横へはる
 八〇二 ました。葉のついているものとところから
 八〇二 のがたくさんはえていました。花のさいて
 八〇二 ました。花のさいているほもみつけました
 八〇三 したら、まださいていませんでした。三時
 八〇四 もう閉じてしまっていました。花のさくの
 八〇四 かれてかたくなっていました。二つにわっ
 八〇四 がまるくふくらんでいました。これが、き

八〇四 いなごが6びきほじりました。葉のうらに
 八〇四 ざが生みつけられていました。先生におき
 八〇五 なつておじぎをしています。1かぶのくき
 八〇六 ほが10ぐらいついています。3本ずつ植
 八〇六 10ぐらいずつついています。ですから、
 八〇八 いねこきをした人もいました。ぼうのあい
 八〇九 18度 のこつていたもみを、1日、日
 八〇九 た。どんどんすつていたら、こんどはすぐ
 八〇九 ある感じがこもっているものです。この音
 八一一 せる波の音をきいているようであつた。つ
 八一一 ことばであらわしているが、それをたいこ
 八一二 しろい。よくきいていると、たしかに風の
 八一二 せんたく物をふいている風である。風の音
 八一二 しんと降りしきっているような気がした。
 八一二 ばいで、ゆめをみていた人が、にわかに目
 八一二 だけの心持をもっていないからであらう。
 八一二 いならんでとまっているのを、よくみかけ
 八一二 、ずらりとならんでいることがあります。
 八一二 中には、親つばめもいますが、こし生ま
 八一二 、たくさんまじっています。もう大ききだ
 八一二 つばめが、ならんでいるのをみると、なに
 八一二 かしら相談でもしているようにみえます。
 八一二 、なごりをおしんでいるのかもしれない
 八一二 ことを、話しかつていられるのかもしれない
 八一二 ぞくのいたがついていました。それによる
 八一二 子つばめがたくさんいます。また、ときに
 八一二 氣のために苦しんでいるつばめのせわをす
 八一二 て、つばめを集めていることを知らせてき
 八一二 にも、よわりきついているつばめたちを運ん
 八一二 、そのとき、あいていた家がけんあつた
 八一二 やみなく雨が降っていました。晩の十時に
 八一二 のいたでがなおっていないころでした。し

九二八 に高い教養をもっているかを世界じゅうに
 九二八 ことだといわずにはいられません。むかし
 九二八 ってくるといわれています。つまり、こと
 九二八 しさを思いうかべているのでしよう。あ
 九二八 ののをまちこがれています。ちらりとつば
 九二八 ールの水がゆれている 草原に一本あ
 九二八 う火花のゆれている 大空にのびかた
 九二八 らくごぶさたしています。こちらへきて
 九二八 した。ぼくがいまいる家は、山のふもと
 九二八 。ふながたくさんいます。四五センチ
 九二八 ンチもあるこいもいます。いなもいます
 九二八 もいます。いなもいます。それから、ら
 九二八 から、らいぎよもいます。らいぎよがふ
 九二八 といろいろな魚がいたそうです。このほ
 九二八 と、いつも思っています。せめて、貝だ
 九二八 せたいと思っています。せんだつて、
 九二八 七本も八本もでていて、それが、深い
 九二八 まりも根をはっていました。また、ちょ
 九二八 、深い谷になつています。ここからは美
 九二八 湖にまでつづいています。夏のあいだ、
 九二八 いちめんにはえていて、なにかでてきそ
 九二八 ぎやまつのはえています。ころは、晝でも
 九二八 とのようになつています。かれ枝ならば
 九二八 よいことになつています。高くて手のと
 九二八 のたくさんついている高い木をみつけれ
 九二八 根もとからかれていた高さ十五メートル
 九二八 ばかり顔をみせていました。また、下の
 九二八 くさんまいおりにいましたが、いつのま
 九二八 のか、いまはもういなくなりました。そ
 九二八 い小鳥がたくさんいます。かきの色づく
 九二八 はだが地われしているのをほりおすと
 九二八 ぼくたちのかりているやしきのまわりに

九四三 二つ三つ落ちているのをみたときは、
 九四四 かいってながめています。いつのまにか
 九四五 ずすなりになっているのを見ると、いま
 九四六 とうさんのやっていたパン屋のしごとを
 九四七 にやろうと思っっています。兄は、大きく
 九四八 でみないをしています。「小公子」の
 九四九 よのことを話していますけれど、ぼく
 九五〇 、ゆかいに遊んでいられるだろうと思います
 九五一 かり明かくなっています。おもてに
 九五二 な空の下にならんでいます。いちろうは
 九五三 小さなあながあいていて、そこから水がふ
 九五四 ウゴウと谷に落ちていました。「略」た
 九五五 へんな樂隊をやっていました。いちろうは
 九五六 んな樂隊をつづけていました。いちろうが
 九五七 よんぴよんとんでいました。いちろうは
 九五八 「略」。りすはもういませんでした。ただ
 九五九 い小さな道がついていました。いちろうは
 九六〇 木の森でかこまれていました。その草地の
 九六一 まってこつちをみていたのです。いちろう
 九六二 してそれを知っていますか。」といいま
 九六三 んまるにして立っていました。やっぱりや
 九六四 耳は立ってとがっているな、と思いながら
 九六五 、と思いながらみていると、やまねこは、
 九六六 が、ぴかぴか光っているのです。よくみ
 九六七 みんななにかいっているのです。「略」。
 九六八 もうワアワアいっていました。ぎよしやは
 九六九 ものまえにすわっていました。ぎよしやは
 九七〇 て、頭のとがっているのがいちばんえら
 九七一 いちばんとがっています。「略」。「へ
 九七二 目をばちばちさせていましたが、とうとう
 九七三 ったまま下を向いていましたが、やっとう
 九七四 たちのうまがついています。「略」。「やま

九七五 顔つきで遠くをみていました。馬車がすす
 九七六 どんぐりにかわっていました。そうして、
 九七七 ますを持って立っていました。それからあ
 九七八 ままでいって、待っているようにとおしや
 九七九 のところに集まっていました。おかみさん
 九八〇 、むきみをつくっていました。みるまに、
 九八一 、人は目をたべています。むかしといっ
 九八二 どをおもにたべていたときがあつたらし
 九八三 からよくお話していた貝づかです。この
 九八四 の上に白くみえているのは、むかし海の
 九八五 、むかし海の中にいたいろいろな貝のか
 九八六 たくてうずうずしていました。「略」。「へ
 九八七 な物などがたまっています。「略」。「略
 九八八 まっかにしてほっています。先生のふえが
 九八九 るつるみがかれていないから、ただのわ
 九九〇 きな木が一本立っている。「略」。「略
 九九一 ふたりをひきとめている。「よせよ、た
 九九二 。と、つかまれている手をふりはなそう
 九九三 の友だちが、落ちていいるやまだのかばんや
 九九四 いっしょに歩いていいるうちに、きゆうに
 九九五 たちどまって待っている。勝った子が、「
 九九六 しく、手でさすっている。そのうちに新し
 九九七 おあたりをさがしている。そこへやまだが
 九九八 知らないふりをしている。たかぎしはら
 九九九 しばらくして持っているすみに気がつき、
 一〇〇〇 かぎの手もとをみている。さがしていたす
 一〇〇一 みている。さがしていたすみである。受け
 一〇〇二 けとりにくい氣持でいるが、やがて思いき
 一〇〇三 場にぼんやり立っている。やまだちよっ
 一〇〇四 やが、長くつづいている。「略」。「略
 一〇〇五 空中かっそうをしているようだ。ふもとへ

一〇〇六 べりぶりにみとれていいると、先生たちは、
 一〇〇七 わるジャンプをしている。「略」。「と、だ
 一〇〇八 九一五 文 鳥はこの木ににいるにちがいないしそ
 一〇〇九 九一六 文 くれて歩かされいし女の子ばたんとた
 一〇一〇 九一七 文 い遊ぶ赤きかにいてすぎの山しずか
 一〇一一 九一八 文 らざらと流れだしていた。私は手をいれて
 一〇一二 九一九 文 。「そこに流れているのがまつ川だ。私
 一〇一三 九二〇 文 きな川に流れこんでいた。帰り道で、父は
 一〇一四 九二一 文 ほど水かさかへつていた。ここで茶人のし
 一〇一五 九二二 文 ゆう川に流れこんでいるところの近くまで
 一〇一六 九二三 文 岸のほとりを流れていた。ためしにまつ川
 一〇一七 九二四 文 も、一びきのくもがいました。黄色と黒の
 一〇一八 九二五 文 やんのなき声がしています。子もり歌もき
 一〇一九 九二六 文 、光る星をみあげていました。そのとき、
 一〇二〇 九二七 文 プンブンいっているところでした。くも
 一〇二一 九二八 文 息をころして待っていると、みつばちは、
 一〇二二 九二九 文 した。ぐずぐずしていると、そのままたべ
 一〇二三 九三〇 文 もが、手でさすっているあいだに、みつば
 一〇二四 九三一 文 うしろすがたをみていましたが、くもはど
 一〇二五 九三二 文 ぶつてしずかにしていると、また、パタパ
 一〇二六 九三三 文 が、たくさんさいていたのです。いいにお
 一〇二七 九三四 文 いいにおいをかいていいると、いつのまにか
 一〇二八 九三五 文 のぼらの花が動いています。おかしいなと
 一〇二九 九三六 文 が、しずかに光っていました。「略」。「
 一〇三〇 九三七 文 をちゃんと知っています。いましがた、
 一〇三一 九三八 文 んだことも知っています。だから、わた
 一〇三二 九三九 文 てもいいと思っっているんだけど。「略
 一〇三三 九四〇 文 は、おなががすいているのに気がつき、ま
 一〇三四 九四一 文 て、じつとすわっていました。あたりに
 一〇三五 九四二 文 の花のおいがしていました。くもは、う
 一〇三六 九四三 文 、くもの頭をなでています。上をみると、
 一〇三七 九四四 文 をみると、わらっているではありませんか

九一三 一 もう頭の上までできていました。つゆが木の
九一四 一〇 、そのままだまっていたいました。自分は、こ
九一四 四 一つ一つ思いだしているうちに、心持が、
九一四 七 ずかなくらしをしているのだから。なんと
九一四 八 やかなくらしをしているのだから。それに
九一四 九 つばいくらしをしていることだろう。あみ
九一四 一〇 みをはり、かくれていて、ほかの虫がひっ
九一五 九 てくる夜つゆをみていると、風がふいてき
九一七 一 一、みにくく思っていた自分のからだも、
九一七 一 一、空の中にとけこんでいる。じつに美しい。
九一八 一 しい。小鳥が鳴いている。風が、かすかに
九一九 一 、われわれは失っている。毎日の生活のら
九二〇 一 中に、それを失っている。しかし、われわ
九二一 一 ねとびをして遊んでいたりしますと、その
九二二 一 も、遊びたわむれている子どもにあいまし
九二三 一 が、その下を流れていました。岸にある丘
九二四 一 ろへきては、遊んでいました。おとうさん
九二五 一 をわかってもらっていますと、きまって、
九二六 一 女たちも遊びにきています。いずれも、八
九二七 一 んは、きいて知っていましたから。少女た
九二八 一 うさんのこしかけているそばで、コーヒー
九二九 一 わいらしい子どもがいて、なかよしになっ
九三〇 一 んでせんたくをしていました。フランスの
九三一 一 、川の水にうつっていました。その川の岸
九三二 一 で、きょとんとしているあまがえる。3
九三三 一 で、雨やどりをしているにわとりのむれ。
九三四 一 とばの愛」を読んでいる声が、きこえてく
九三五 一 、立って本を読んでいる。友だちの顔、顔
九三六 一 つぎの一節を読んでいる声がきこえる。も
九三七 一 まま、点字を読んでいる。ほかの生徒の指
九三八 一 形のじがかかっている。「にじの歌」を
九三九 一 などが、風にゆれている。その下を、あひ

十二一 六 婦がもうふをほしている。男の子がベッド
十二一 七 がベッドにすわっている。「略」窓に花
十二一 一〇 かん、にじがでているよ。」窓をのぞく
十二二 二 友だち、どうしているかな。」12 ひとり
十二二 四 えのぐで写生をしている。光る白い雲、遠
十二二 八 しょに種まきをしている。きれいにたがや
十二二 一〇 た畑。田をならしている農夫。14 ひとり
十二二 一二 の上でつみ草をしている。「春の小川」の
十二三 七 しょに汽車に乗っている。窓からみえる村
十二四 二 な車輪が、まわっている。トロツコをおし
十二四 七 っ、石炭をほっている。19 あせまみれ
十二五 二 しらべたいと思っています。たとえば、毛
十二六 一 単位からなりたっているか、それをさがし
十二七 一 と考えます。ぼくがいるために、うちの中
十二八 一 でしょうか。ぼくがいるので、みんな楽し
十二九 一 いし、自分のもっているいいところを、え
十三〇 一 たばかりいじっている、おかしなやつだ
十三一 一 を助けてはたらいでいたが、ひまさえあれ
十三二 一 とをしらべつづけていたのである。村じゅ
十三三 一 のの織りかたをしていたのでは、やがて、
十三四 一 もののように動いていた。かれは、そのり
十三五 一 、もう、じつとしていられなくなり、設計
十三六 一 きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者
十三七 一 もとのままになっていた。同じことをなん
十三八 一 母目の中をしらべているうちに、一つの半
十三九 一 眞円眞珠が、光っているではないか。幸吉
十四〇 一 らがの老人になっていた。よる年なみにも
十四一 一 眞円眞珠がやどっていた。第二、第三と母
十四二 一 よらかにかがやいているではないか。大き
十四三 一 生の苦心がひそんでいる。かつて、パリー
十四四 一 日ごろそんけいしていたエジソンのもとを
十四五 一 、私は、妹のいっていることを、紙きれ

十四九 一 一 のいきさつを知っている私には、このこと
十五〇 二 ぬがびきすわっていました。「クロイワ
十五〇 四 、ひふ病にかかっていた、顔のあたりの毛
十五一 一 たちの毛が、ぬけていました。「キタナイ
十五二 一 て、いぬにたずねていたのです。やはり、
十五二 三 ャット」ここで遊んでいたと、私にねだっ
十五二 四 といひだしたりしていましたが、やっと歩
十五三 二 になつてねそべっていました。「ワンワン
十五三 二 ネテルワ」といっていると、いぬがもっく
十五三 六 ままでかたにかけていたすいとうをはずし
十五四 一 ど、きれいにさいていました。妹は、そこ
十五四 五 とをいいあらわしています。自分で、「イ
十五四 七 きで、たき火をしていました。そのけむり
十五五 一 ありありとうかんでいます。七五三の記念
十五五 七 たり、考えたりしていることは、ちがつ
十五六 一 がどんどんと書いていたまえのころが、う
十五六 一 、すらすらと書いていたことでしょうか。す
十五六 二 んぐんと書きつけているその力に、おどろ
十五六 四 竹がによつくりでいたので、びっくりし
十五六 五 なつて、風にゆれていました。七 ぶす
十五六 一 らべて、研究されています。日本の絵画や
十五六 四 のあるものとなっています。みなさんも、
十五六 五 分たちの國が持っているこのよい藝術を味
十五六 一〇 かしなどで、できているといつてもよく、
十五六 一〇 もよく、それをみていると、世の中のうら
十五六 一 しろい人物になっています。狂言「ぶす
十五六 一 、ひとりぐらししていました。あるとき、
十五六 一 いどくがはいっています。そちらからふい
十五六 二 向けないようにしていました。でも、こわ
十五六 一 て、あおぎつづけていました。そのうちに
十五六 五 「なにかはいっている」とみえて、重たい
十五六 七 にあたって死んでいるはずじゃないか。

十 69 11 会 う。ぐずぐずしているうちに、どつきに
 十 70 4 ばいものはいっていました。「略。」「へ
 十 71 6 い、うまいと名めているうちに、つばが、
 十 72 7 会 ながだいいじにしているあの湯飲み茶わん
 十 73 6 会 うをとって遊んでいました。私が負けて
 十 74 1 までおいおいいたくせに、きゅうに
 十 4 7 、なん本も立っているのがみえる。長い
 十 5 1 もここで練習していることだ。川口の子
 十 5 3 したりして遊んでいるが、それにあきる
 十 5 5 話に花をさかせている。ついせんだつて
 十 5 6 むちゅうになつているのである。「略」
 十 6 6 会 いちばんびりにいるばかりで、べつに
 十 8 2 会 と、乗り組んでいる者が、みんなそろ
 十 8 6 会 きみはだまつているけれど、ぼくはき
 十 8 9 会 持をよく知っている。ぼくらのほりき
 十 8 10 会 らのはりきつているとき、ぼくらのつ
 十 8 10 会 くらつかれているとき、ぼくらのし
 十 8 12 会 もよくわかつていゐる。ただ、わかつて
 十 9 1 会 ただ、わかつていゐるだけではなしに、
 十 9 2 会 のうえを考へていて、いいことをはつ
 十 10 5 会 四ばんをこいでいる、ぼくたち強い男
 十 10 9 会 ることにきめていゐるのさ。「略。」「
 十 12 9 陽の下でわらつていゐる。休みもなく、は
 十 13 10 の鳴く声をきいていゐる。あれは、あわ
 十 14 6 めいの歌を歌つていゐる。一つの太陽の下
 十 15 10 、一まいこわれていて、やがて、小鳥た
 十 17 4 、わたしが知つていゐるいいことと、正し
 十 19 3 えもんという人がいました。働くことが
 十 20 2 と、ほねをおつていました。そういうと
 十 21 3 父親が病氣でねていましたので、金次郎
 十 21 5 たし、働きつけていゐるので、役にたたな
 十 21 7 だりむだ話をしていゐるのに、金次郎は、

十 21 12 きでつかれきつていながら、わらをたた
 十 22 3 、わらじの切れていゐる人もあります。金
 十 23 4 も、父親の生きていゐるあいだは、みんな
 十 27 2 会 は、どうかしてゐるのではないだろう
 十 27 11 ころして、だれもないふうをしていま
 十 27 11 いないうふうをしていました。金次郎のう
 十 28 2 ふれて、のこつていたわずかの田や畑も
 十 29 8 とにして、困つていゐる人にかしてやつた
 十 43 8 なしくこしかけています。園長さんが、
 十 44 4 つしよに呼ばれていゐるようです。みんな
 十 46 10 ぽっかりとういていたえぞ富士。あの山
 十 47 5 とふたりで立つていた。北海道の家には
 十 47 6 には、うしが四頭いた。みんなちうし
 十 47 7 ぼくによくなれていた。うちではバター
 十 47 11 いつも本を読んでいた。ぼくのいすは、
 十 48 4 いねこのメリーがいた。アカシヤの花が
 十 51 3 つてもまだ続いていた。庭のあさがおの
 十 51 9 のくるのを待つていた。電車は、くるに
 十 53 6 会 みだをこぼしてゐます。そんなにおさ
 十 53 10 た心でおしあつていた人たちも、きゅう
 十 54 2 語がかかげられてゐるのをみた。「略」
 十 54 9 会 みだをこぼしてゐます。」といった、
 十 58 6 くどもくり返してゐるうちに、太郎は、
 十 59 3 会 ことばを知つてゐるよ。」と答へた。「
 十 60 6 かたくとめられていたのである。が、い
 十 61 1 近くの田で働いてゐた村の人たちに助け
 十 61 7 、太郎はだまつていた。その夜、また父
 十 61 11 会 は、とめられてゐるから渡らない。』
 十 63 3 (一) 雨の降つてゐる三月のある朝、い
 十 63 8 かそうな目をしてゐました。少年は、ナ
 十 66 4 、しばらく考へてゐましたが、ふと思ひ
 十 67 5 が二列にならんでゐました。「略。」と

十 67 12 せこけた顔をしてゐる病人たちをみまわ
 十 68 2 と空間をみつめてゐる者もありました。
 十 68 3 のようにうなつてゐる者もありました。
 十 68 5 おいがただよつてゐました。看護婦がふ
 十 68 6 やを歩きまわつてゐました。その大きな
 十 69 2 れたまま動かずにゐる、うでをつかま
 十 70 2 切れそうになつてゐました。ただ、ひた
 十 71 4 そうに息を續けてゐました。少年は、い
 十 71 6 をおろして待つてゐました。「略。」と
 十 71 11 いろと思ひ返してゐました。去年、みお
 十 72 1 しい希望をかけてゐたことや、手紙の着
 十 73 6 看護人とがついてゐました。その人たち
 十 73 8 りました。待つてゐるそのあいだが、少
 十 75 8 会 なさい。きみがいれば、きつとよくな
 十 75 11 会 力をおとさずにゐるがいいよ。」少年
 十 76 8 カチを目にあててゐるときには、じつと
 十 76 9 、じつとみつめてゐました。こうして第
 十 78 3 りを待ちこがれてゐたことなどを――そ
 十 78 8 と耳をかたむけてゐるようになつたから
 十 78 11 けんめいになつてゐました。一日に二ど
 十 79 7 えすはらはらしてゐました。ところが、
 十 80 6 いおうとでもしてゐるうちに、いくども
 十 81 3 つしんに看護してゐたときでした。その
 十 83 6 会 につかりしてゐたかわからないよ。
 十 83 7 会 おまえはここにゐたのだね。どうして
 十 83 10 会 さんはどうしてゐるの。それから、コ
 十 83 11 会 みんなどうしてゐる。わたしは、いま
 十 85 4 会 あのおじさんがいます。ぼく、ここに
 十 85 5 会 に五日のあいだゐました。おじさんは
 十 85 5 会 でもぼくをみてゐます。ぼく、あの人
 十 85 7 会 、ぼくがそばにいないといけなないので
 十 85 10 会 うすこしここにいさせてください。ほ

11 85 10 ㊤ なにほくをみています。どうか、ここ
 11 85 11 ㊤ どうか、ここにいさせてください。ね
 11 85 12 ㊤ と少年をみつめていましたが、やがてま
 11 86 8 ㊤ からなくなっていて、口もきけなかつ
 11 86 10 ㊤ らいのむすこがいるらしく、自分のむ
 11 86 11 ㊤ だと思ひこんでいるようです。」
 11 86 12 ㊤ と少年の方をみていました。父親はチチ
 11 87 3 ㊤ 「もういくらでもないでもないでしよ
 11 88 5 ㊤ ずっとつきそっていました。そのつぎの
 11 88 6 ㊤ 一日ずっとそばにいました。しかし、病
 11 89 3 ㊤ 病人をみまもっていました。あかつきの
 11 90 2 ㊤ あいだうつむいていましたが、やがてか
 11 90 12 ㊤ きのようにいつていた看護婦が、小さな
 11 92 10 ㊤ 呼ぼうかと思っているうち、五日のあい
 11 92 11 ㊤ あいだ呼びなれていた名が、しぜんと口
 11 93 3 ㊤ 。夜は明けかけていました。 1 トッ
 12 7 3 ㊤ と庭さきにさいていた黄色なやまぶきの
 12 8 3 ㊤ て勉強にでかけていましたが、ある日の
 12 8 8 ㊤ 母ははたを織っていました。孟子の顔
 12 8 10 ㊤ 子がびっくりしていると、母は、いまま
 12 8 11 ㊤ ねんに織り続けていたぬのを、小がたな
 12 10 3 ㊤ ポケットにいれていました。そのようす
 12 10 4 ㊤ そのようすをみていたじゅんさが、老人
 12 10 6 ㊤ なにをひろっているのですか。」とた
 12 11 3 ㊤ の廣場で遊んでいる子どもたちをこら
 12 11 4 ㊤ 。くつをはいている子どもはひとりも
 12 11 4 ㊤ どもはひとりもいません。もしげがで
 12 11 9 ㊤ リカを探けんしていたときの話です。あ
 12 11 10 ㊤ げで書物を読んでいた。それをみた
 12 12 1 ㊤ らしい力をもっているものと考えまし
 12 13 7 ㊤ 美しい花をつけていたが、あらかちっ
 12 13 9 ㊤ つかの実がなっていた。それが、めきめ

12 14 4 ㊤ ら大きくのぞいているのもいい。だが、
 12 14 5 ㊤ たまつてしだれているところもいい。文
 12 14 6 ㊤ あれこれと考えていたが、根もとをかこ
 12 14 9 ㊤ 、すっかりくちていた。文雄はそれが氣
 12 15 2 ㊤ 一びき頭をだしていた。そうして、文雄
 12 16 4 ㊤ に木炭を動かしていた。下がきがすむと
 12 17 10 ㊤ りたいと思っているのですが――あな
 12 18 1 ㊤ ツピッと鳴いていたときには、ほんと
 12 18 7 ㊤ と思つてやっているうちに、だんだん
 12 18 12 ㊤ る。毎晩鳴いているうちに、すこしづ
 12 19 4 ㊤ いへん感心していましたよ。」「略。
 12 19 9 ㊤ なん年も生きていますからね。一年一
 12 20 5 ㊤ は黄色くほけているでしょう。わたし
 12 20 8 ㊤ こで絵をかいている文雄さんがいつて
 12 21 11 ㊤ しい氣持がでているので、人の心を動
 12 23 2 ㊤ 長いこと外地にいた姉たちがひきあげ
 12 23 4 ㊤ んりよがちにしていますが、母をはじめ
 12 23 6 ㊤ うが歎声をあげているといつても、いい
 12 23 10 ㊤ 菜を作ったりしていたので、さしあたり
 12 24 6 ㊤ たいへんおくれていて、かわいそうです
 12 24 12 ㊤ ものをいいかけていますが、ちよつとき
 12 25 1 ㊤ なことをいっています。わたしも早く
 12 25 5 ㊤ らをはいまわっています。わたしは時間
 12 25 8 ㊤ じめはいやがっていた民ちゃんも、よご
 12 25 8 ㊤ ちゃんも、よごれていないほうが氣持が
 12 26 10 ㊤ の用意などをしていると、とりついでぐ
 12 27 5 ㊤ です。いまそこにはいたかと思うと、もう
 12 27 5 ㊤ のへやにはいつていっているように、す
 12 29 3 ㊤ しらえて持たせているうちに、民ちゃん
 12 29 5 ㊤ 姉が大さわぎしていました。「略。」「へ
 12 29 8 ㊤ けて道まででていたのよ。」「略。」「
 12 31 8 ㊤ かにたたずんでいました。午後の日光

12 31 10 ㊤ 顔に降りそそいでいました。もう、めば
 12 32 1 ㊤ をわすれてなでていました。私は、どの
 12 32 2 ㊤ しぎが私を待っているのか、すこしも知
 12 33 4 ㊤ その人形と遊んでいますと、先生は、私
 12 33 12 ㊤ ことをつかつていることや、そんなも
 12 34 9 ㊤ 形を持つて遊んでいますと、サリバン先
 12 35 3 ㊤ その中にはいつていっているものであること
 12 35 11 ㊤ ておいでになつていようすを感じまし
 12 36 5 ㊤ の小屋をおおっているすいかずらのあま
 12 36 11 ㊤ が水をくみあげていましたので、先生は
 12 36 12 ㊤ きおいよく流れているあいだに、別の手
 12 37 3 ㊤ の動きにそそいでいました。ところがと
 12 37 4 ㊤ にかしらわすれていたものを思いだすよ
 12 37 7 ㊤ た手の上を流れているふしぎな冷たいも
 12 37 12 ㊤ 命をもつて動いているように感じはじめ
 12 38 11 ㊤ た。全部覚えてはいませんが、その中に
 12 39 2 ㊤ 喜びを思い返していたときの私ほど幸福
 12 43 10 ㊤ あとで、動いているのかもしれないよ
 12 44 9 ㊤ しいがはいっているように動くよ。」「
 12 44 11 ㊤ といわれる人がいて、ものによつては
 12 45 1 ㊤ ぞれ手わけしているんだが、まゆ毛も
 12 45 4 ㊤ り説明がついている。ほら、分家のお
 12 45 8 ㊤ ちがつて、みていると別世界にいつた
 12 46 7 ㊤ しばいのできています。ジャワのものは
 12 47 3 ㊤ んなにちがつていても、心にあること
 12 47 4 ㊤ だから、人間がいるところには、かな
 12 55 6 ㊤ だにおりこまれていからである。傳説
 12 55 9 ㊤ で語り傳えられているだけで、そういう
 12 56 8 ㊤ という大きな男がいた。みそ五郎は、雲
 12 56 10 ㊤ のを樂しみにしていた。雲仙岳の中ほど
 12 57 6 ㊤ の石だんができています。すばらしい大
 12 57 8 ㊤ くににおにが住んでいて、毎年村にあらわ

十二59 5、この里に長者がいた。一代二代はいい
十二60 6て、得意になっていた。ところで、もう
十二60 9、高どのに立っていた長者は、日のまる
十二61 5大きな池となっていた。家具の岩屋
十二61 11そろってならんでいた。そのことが評判
十二62 2の中にわるい人がいて、かりた家具をか
十二62 7ひとりの木こりがいた。名を八郎といっ
十二62 8山でしごとをしていると、のどがかわい
十二62 11い小魚がおよいでいる。八郎はその魚を
十二64 5きは高くそびえているが、根はちつとも
十二67 6十も三十も続いている。五十も六十も続
十二67 7十も六十も続いている。のこぎりののは
十二68 3、あつみをもっている。大きな木
十二68 8廣いはばをもっている。こびきの大のこ
十二68 10しわたしをもっている。はたらきのある
十二69 2たのこぎりにてゐる。しかし、いつも
十二69 3てみがきをかけていないと、じき、役に
十二70 2という人が住んでいました。曾良は、信
十二70 6たひとりて住んでいて、なにかにつけて
十二70 9とりしずかにしているのがすきだとい
十二71 5た。先生の近くにいればこそ、毎日教え
十二71 10と待ち遠しがっていました。そのあたり
十二71 11のあたりに遊んでいる子どもたちも、同
十二72 3と、はやしたてていました。芭蕉は、子
十二72 5た。そのあたりにいるのは、川べりにあ
十二72 10遊び友だちにはいました。「略」。「へ
十二73 4「略」。「話をしていううちに、パラパラ
十二73 10りわらって立っていました。子どもた
十二75 8、毎日ききなれている曾良の声です。芭
十二75 11とりでどうしていられるかと思うと、
十二75 12してもこずにはいられませんでした。
十二77 5の戦いを物語っています。スタンドには

十二78 2その少年の持っていたペンをかりて、サ
十二78 9たので、よくみていますと、どこかしら
十二79 3日本語を知っているの。」「略」。「へ
十二80 12う色があらわれていました。日本とい
十二81 3をいのつてくれていることを知って、胸
十二81 10心におうえんしている二少年のことを思
十二83 3んと降りそそいでいました。そこへ両選
十二83 3のんで試合をみているうちに、早くも、
十二84 3、もうあきらめていたときでした。清水
十二85 11木の手入れをしている父にこういわれた
十二87 6湯をかきまわしている父にこういわれた
十二87 10相手の人のいっていることをよくきき
十二88 12のようにとなえていたのでは、そのこと
十二90 3まな氣持をこめているにちがいない。天
十二90 10がたくさん落ちていたこと、カサカサと
十二91 2と、小鳥が鳴いていたこと、帰っておか
十二91 4にたたみこまれていたことにちがいない。秋
十二91 9にたたみこまれていたことは、太郎とは
十二92 1太郎とはちがっている。となりの友だち
十二92 1ことがふくまれている。ほかの人がこれ
十二92 5、たたみこまれているなかみはそれぞれ
十二92 11通じる力をもっている。そこにことごと
十二93 1赤とんぼがとんでいる「赤とんぼ」と
十二94 1きだす。「とんでいる。」で動いている
十二94 3「略」。「動いているようすがすぐわか
十二94 4ぼ」「が」「とんでいる。」——このよう
十二94 5ぼがむれてとんでいる景色を思い、すず
十二94 9に野はぎがさいていたの、赤とんぼは
十二95 1りと校庭に立っていると、赤とんぼが自
十二95 6のまわりをとんでいた。「略」。「こんな
十二95 7赤とんぼがとんでいる。」「こんな短い文
十二95 8さんの写真がでていたり、あなたがたの
十二96 5

十二98 2をたくさんたべていたようです。このほ
十二100 11んよくまとまっています。この式の土器
十二101 2まえがつけられています。はにわこ
十二101 9がたをあらわしています。手首やむねな
十二103 1からたつとばれている作品です。はじ
十二103 4す。いまつかっているお金とずいぶんち
十二103 5角なあながあいていたり、クロスワーズ
十二104 6ほうおうがついているからだといわれて
十二104 7からだといわれていますが、屋根の形や
十二104 10がたがあらわれていることに氣がつくこ
十二105 4もをふたりつれていきます。この人たちの
十二105 6ずいぶんちがっています。向こうがわに
十二106 1かきあらわされています。絵巻物 四
十二106 11も、力があふれています。仁王さまは寺
十二107 11運慶だといわれています。ふたつとも鎌
十二108 6國から渡ってきていましたから、こんな
十二109 9、茶だんすにしています。そうではあ
十二110 5貝が光をはなっているのは、なんともい
十二110 11らだがどうなっているか、ほとんど知ら
十二112 10ほとんど知られていなかったのですが、
十二112 11日に日に進歩しています。そうして、速
十二113 11してしずかにしている、子どもたちのむ
十二115 4ささやかかわしているけはい。春は、は
十二117 1ようにたなびいている、のどかな午前。
十二117 3のおくで、鳴いているからすの声も、ほ
十二117 7た考えがのこっている。たとえば、移轉
十二117 10命をきめたりしている。しかし、よいと
十二118 6へん不幸になっている。漢字で名まえを
十二118 8も、まだ知られていないことはたくさん
十二111 10係を調べきわめている。よいことやわる
十二112 3れほど害をなしているかしのれない。知識
十二12 10から西へまわっているように思われます

十四163(手) す。私がそばにいないことなど、すつ
十四164(手) つもこう思っていてください。あなた
十四167(手) のことを思っていると。ランプがお氣
十四169(手) こみいりすぎているとお考えではない
十四1610(手) いかと心配していました。パリーにあ
十四182(手) で、そうじをしているとき、高山くんが
十四187(手) 窓ガラスをふいていた田中^{たなか}さんが、「略
十四1810(手) た。これを聞いていた野村^{のむら}さんが、「略
十四191(手) 、なんといっていたんでしょ。」と
十四195(手) が答えられないでいると、高山くんが、
十四204(手) 私たちのつかっていることばの中で、外
十四205(手) いろいろまじっていることをくわしく話
十四211(手) んながおどろいていたが、先生は、つぎ
十四224(手) とばかり思っていました。」と、さも
十四228(手) 長い間つかっているうちに、すっかり
十四238(手) ろはいってきいている。たとえば、ここ
十四242(手) 語だといわれている。そのほかのこと
十四243(手) 生のお話を聞いているうちに、私は、ど
十四254(手) いっしょになっているということは、あ
十四277(手) あいだつかっているうちに、もともと
十四296(手) 、空にかがやいている星です。どうも日
十四297(手) に親しみをもっているなかつたようです。
十四299(手) 花がたえずさいていたために、天上の花
十四307(手) さな島國に住んでいたために、氣持まで
十四313(手) すことをわすれていたのは、よくないこ
十四323(手) りにかけはなれているために、自分たち
十四324(手) んがないと思っている人もあるでしょう
十四3211(手) 星によって生きていっているといってもいい
十四331(手) 心として回轉していることを知っています
十四331(手) いることを知っています。この一むれの
十四333(手) う太陽系とよんでいます。しかし、この
十四338(手) 地球をとりまいている天の川の内がわに

十四3412(手) 地球の上に住んでいる人間などは、バク
十四3511(手) 空の星をながめていると、はてしのない
十四373(手) つらい思いをしています。そんなこと
十四383(手) 「一人の人」の見ている方を遠く見つめる
十四403(手) 空がほおえんでいる。ばら色にわらっ
十四404(手) ら色にわらっている。「三人の人」におお
十四442(手) やみ、苦しんでいる他人のために。
十四443(手) なにほがらかでいられるのか、それを
十四452(手) ことです。乗っていた百四人のうち、乗
十四456(手) 波の間をおよいでいました。助け船は、
十四456(手) たい、なにをしているのだろう。かれは
十四461(手) 、調子もみだれていなければ、ふるえて
十四462(手) れば、ふるえてもいけません。まるで、大
十四463(手) て、客間で歌っているのと、ちつともち
十四467(手) の歌に聞きほれていました。かれは、い
十四4611(手) 水の中にひたつていいることも、わすれて
十四472(手) りました。歌っている人は、どういう人
十四4712(手) なんか、およいでいるだけがせいぜいな
十四488(手) 立ちおよぎをしていました。歌を歌って
十四488(手) した。歌を歌っているのは、その中のひ
十四4811(手) 平氣で歌を続けていました。助け船のく
十四492(手) して元氣をつけていたのです。「略。」
十四496(手) 、この歌を知っていたかどうか知りませ
十四504(手) 、その歌を歌っていたおじょうさんも、
十四541(手) ちゃの花を見えています。あれは、私た
十四5410(手) の上でくらししているかたには、土の中
十四5412(手) 、ごろごろしています。そこへ細い根
十四557(手) ほかに、だれもいませんから、私が申
十四569(手) 、それについている葉でも、花でも、
十四569(手) も、なりかけている実でも、みんなか
十四5612(手) なきずができていますが、私は、いつ
十四576(手) 戸の外で聞いていると、あなたたちは

十四577(手) なことをいつていましたね。あなたが
十四5810(手) て、水にとけているから、根から実ま
十四594(手) し、土にはえていないかぼちやなんて
十四596(手) ら問題になっている養分だつて、みん
十四6010(手) をひねって考えていました。しばらくし
十四611(手) し、あの人間がいなかったら、また、
十四625(手) く氣をつけて見っていると、だんだんに、
十四6210(手) 白い湯げがたつています。これは、いう
十四632(手) 無数にむらがつていいるので、ちようど雲
十四638(手) や青の色がつていいます。これは、白い
十四646(手) にたくさんういていいるのです。空中にう
十四647(手) 。空中にうかんでいた雲が消えてしまっ
十四648(手) ばかりがのこつていて、飛行機などで、
十四6410(手) けむりが廣がつていいるように見えるそう
十四659(手) がまた、よく見えていると、なかなかおも
十四672(手) て、土のしめつていいるところへ日光があ
十四674(手) く氣をつけて見ていてごらんさい。湯
十四6712(手) 、空中におこつていいる大きなうずです。
十四699(手) 茶わんにはいつていいる湯は、日かげで見
十四702(手) ゆるやかに動いていいるのに氣がつくでし
十四717(手) 湯の中にうかんでいる小さな糸くずなど
十四718(手) どの動くのを見ても、いくらかわか
十四723(手) には、水のおりていいるところと、のぼつ
十四724(手) ころと、のぼつていいるところとがほうぼ
十四7211(手) す。目のあたつていいるかべや屋根をすか
十四7311(手) まりよくわかつていいるかべや屋根をすか
十四759(手) 、森ではくだつていいます。それで、畑の
十四764(手) 海陸風とよばれていいるもので、書間は海
十四765(手) 反対の風がふいていいます。これと同じよ
十四767(手) 風と名づけられていいます。これが、もう
十四774(手) しらえようとしていいると、祖父が来て、
十四7810(手) さんなどのやつていいるところを見ると、

十四 79 2 、みごとに割っていました。木のほうは
 十四 79 10 なことを、知っているのといないのでは
 十四 79 10 、知っているのといないのでは、たいへ
 十四 80 5 らしい伝えられているものもあるかもしれ
 十四 83 4 たちが雪と戦っているようすを、映画に
 十四 83 6 雪の中で生活している人々、春の光がさ
 十四 83 8 うれしそうに見えている雪國の子どもなど
 十四 84 2 きれいな形をしていること、しかも、一
 十四 84 3 けっしょうをしていること、その美しい
 十四 84 5 ことなどを写している。また、どうして
 十四 88 3 ねくねとゆがんでいる。歩く人は、おそ
 十四 88 7 で考えごとをしている、思わず方向がち
 十四 88 12 も雪にとざされていた地上に、ぼちっと
 十四 90 8 を足にひっかけていた。その上ぐつは、
 十四 92 1 赤く、青くなっていた。おおみそかの晩
 十四 92 4 すこしも賣ってはいなかった。一はこも
 十四 92 5 一はこも賣ってはいなかった。思いきつ
 十四 92 8 一銭ももうけてはいないので、父親が、
 十四 92 10 しかるにきまつていた。かわいそうに、
 十四 92 12 ひきずって歩いていった。その子のきれい
 十四 93 11 たばを一つ持っていた。ぼろぼろの前だ
 十四 93 12 たくさんはいっていた。女の子は、どん
 十四 94 10 ほとんどどこえていた。その両手をあた
 十四 95 9 それがもえ続けている間、大きなるの前
 十四 95 10 ろの前にすわっていた。そのろの中には
 十四 96 5 氣そうにすわっていた。女の子は、また
 十四 96 6 たそうしないではいられなくなつて、も
 十四 97 9 かべしかのこつていかなかった。女の子は
 十四 97 12 木の下にすわっていた。いかにも大きな
 十四 98 1 美しくかざられていた。たくさんの小さ
 十四 98 10 そくはもえ続けていて、それが、高く、
 十四 99 2 。じっと見つめているうちに、一つの明

十四 100 2 つなようすをしていた。けれども、前よ
 十四 100 3 うなようすをしていた。「略」と、女
 十四 102 8 、元日をむかえているかを知らないのだ
 十五 10 1 文 づつみて子といえる母の黒いこうもり
 十五 19 5 々がならび立っています。その中で、一
 十五 19 5 んと高くそびえているのが、このユング
 十五 19 8 物のさきみだれているけいしや面を、あ
 十五 19 9 の流れをきざさんでいる深い深い谷の上を
 十五 20 2 こかしこに立っています。ある夏のこ
 十五 20 5 しばらくとまつていました。両親と子ど
 十五 20 8 家庭教師がついていました。朝の十時と
 十五 21 5 けた少女の立っているようなけわしい山
 十五 21 6 うようにそびえているのでした。ある朝
 十五 21 9 そろそろと歩いていました。男の子は、
 十五 21 12 もしろそうに見ていました。女の子は、
 十五 22 1 の方にちらばっているひつじのむれを追
 十五 22 4 て行きそうにしていきました。そのとき、
 十五 23 5 まで先生のそばにいた女の子のすがたが
 十五 23 8 子はばたばたしているではありませんか
 十五 24 1 つけるようにしています。だれでしょう
 十五 24 4 に、草のしげっている場所を見つけて、
 十五 24 4 つれておりて来ていますと、急に目の前
 十五 25 2 大づめでつかんでいる女の子のからだ
 十五 26 11 を上からさがしているような氣持で、少
 十五 26 12 、とくに下の方にいる女の子を元氣づけ
 十五 27 2 へ。」といわずにはいられませんでした。
 十五 27 3 、下につかまれている女の子は、あきら
 十五 27 5 せず、じっとしています。もう呼吸もな
 十五 27 11 へ略」といっている人々の目には、小
 十五 28 9 分のこしにさしていた短刀をぬいて、鳥
 十五 29 3 とともに、つかんでいた女の子をはなして
 十五 29 12 手を待ちかまえていました。大わしは、

十五 32 1 しい戦いを続けていました。そのとき、
 十五 32 3 ちが、そのへんにいたひつじかいたちを
 十五 32 5 と少年との戦っている岩角近くまで來ま
 十五 32 6 けれども、戦っている人と鳥とはむちゅ
 十五 32 7 てきを相手にしているものには、なんに
 十五 32 9 けてとびかかっていた大わしは、空中を
 十五 33 3 へ手をさしだしていました。そのときの
 十五 33 10 年をほめたたえているようでした。三
 十五 34 5 、それをその場にいない人や、遠くに
 十五 34 5 ない人や、遠くにいる人に知らせるため
 十五 36 2 なったといわれている。漢字 漢字は
 十五 39 3 た漢字をつかっているうちに、その漢字
 十五 40 5 わしかたとなつていく。ローマ字 ロ
 十五 40 10 大半につかわれている文字である。ロー
 十五 41 8 、発音のちがつている多くの國々のこと
 十五 41 9 が書き表わされている。日本のことばも
 十五 42 6 教育にも努力している。しかし、考えて
 十五 42 8 の文字をつかっている國があろうか。日
 十五 43 4 ようこうが歩いていったが、ふと、ある店
 十五 46 1 ひとりで散歩していた。ひくい屋根も、
 十五 46 2 のき先にかかっているおもしろいかんば
 十五 46 3 小さな店先に出ている一まいの赤絵のは
 十五 47 9 物とかを作らせていたが、そのお庭焼の
 十五 47 11 いちばんすぐれていたという。このお庭
 十五 48 1 数人かかえられていた。そのほかに、色
 十五 48 4 うに、保護されていた。ところが明治に
 十五 48 6 れてしごとをしていたため、ひとりでこ
 十五 49 8 ものは、ほとんどいかなかった。ただわす
 十五 52 5 ード大学に学んでいた私は、一年半の努
 十五 53 11 クをすえ、そばにいるタイピストになに
 十五 53 12 いながらうたせているしらがの老しん士
 十五 54 1 代からそんな敬していたあの有名な「ちょ

1554 4 よる私が手にしているしょうかい状に目
 1554 7 会 からいつてきている日本の学徒、大島
 1554 12 がだれものぞんでいるカーネギー博物館
 1555 2 からすすめられていた。あいさつを終つ
 1555 3 、話に聞きいつていたホランド博士は、
 1555 12 会 もよおしをしていたものだ。そのころ
 1556 3 会 測量が行われていなかったで、富士
 1556 12 会 助手をつとめていたころ、寄宿舎で二
 1557 1 会 の室をつかっていた。ところがある日
 1557 2 会 を二つももっているようだが、その一
 1557 11 会 チャンになっていて、ある日のこと
 1558 6 思い出にふけていられるようすだった
 1559 1 会 私はよく知っています。私は小さいと
 1559 4 会 みたちが知っています。私はずがない。」と、
 1559 6 あくほど見つめていた博士は、つと立ち
 1559 12 あつけにとられていたタイプストをしり
 1560 4 てはぐくみ育てていた新島のおじさんが
 1560 4 のこう外に養っていたのは、明治二十年
 1560 6 の精神のやどつていた札幌独立教会をつ
 1560 7 会 をつかさどつていた私の父とは、心を
 1560 9 ぼう」でとおつていた私は、そのとき
 1560 11 愛を一身に集めていた身にとつては、天
 1561 1 ばいにふるまっていた。新島のおじさん
 1562 11 会 のくつは光っているのに、ぼうやのく
 1562 12 会 いやだといつていいるのですよ。なんと
 1563 5 は、きちんと着ていた上着をかなぐりす
 1565 6 の胸にやきついている。秋たけてりんご
 1567 5 のを待ちかまえていた老婦人が、「略」
 1568 10 会 じさんが生きていたら、どんなにか喜
 1569 7 日夜ふでをとつていられたという大きな
 1569 10 ことに、どうしているかとたずねられた
 1569 12 じさんを見あげているのに、おじさんの

1571 3 会 ペンをにぎっている。このすがたをお
 1573 4 思い出にうたれていいる私の目の前で、博
 1573 9 中はがらんとしていた。やがてお晝とき
 1573 12 その名を知られていた老博士は、きよう
 1574 3 どんなにちがうていようとも、かわい
 1575 11 意味をときかなくて私のようすを見て
 1576 3 お満ぼうを守つていくでさつたのだ。
 1578 1 の考えとちがうていても、その発表をた
 1579 8 いうことを学んでいいる日本の子どもさん
 1582 4 いちばんふとつていいる「幸福」(ぜいた
 1582 7 むりこけたりしていいます。みんなびっく
 1582 7 いほど、ふとつていて、びろうどや、に
 1582 9 につぱいつていいます。チルチルとミ
 1583 3 会 れしそうにしていいるふとつた人たちは
 1583 7 会 にまよいこんでいらないともかぎらない
 1585 2 会 の光栄になつていいるさとうがしを。い
 1585 3 会 のをもおさえていいる。いや、どこのな
 1585 4 会 のをもおさえていいる。あのさとうがし
 1585 7 会 そうな顔をしていいるな。あれ、「キ
 1585 7 会 ャツ」といつていいる。わらいこけてい
 1585 8 会 る。わらいこけていいる。歌を歌つてい
 1585 8 会 る。歌を歌つていいる。なんだか、あの
 1587 1 会 、ぼくを知つていいるの。あなた、どな
 1587 6 会 なおなかをしていいます。これが『みた
 1587 8 会 がつた顔をしていいます。(略)』「
 1587 9 会 のどのかわいていいないときに物を飲む
 1588 6 会 まいに、ここにいいるのは、『ほちきれ
 1588 7 会 は耳までさけていいるし、だれもそれに
 1588 10 し横の方に立つていいるひとりの「幸福」
 1588 12 会 せなかをむけていいるのはだれです。」
 1589 6 会 さんがたを待つていたのです。あのと
 1589 7 会 たを呼びたてていいるでしょう。わたし

1589 9 会 ようかいしてはいられない。なにしろ
 1590 2 会 たいへん急いでいいるのです。青い鳥を
 1590 3 会 い鳥をさがしていいるのです。たぶん、
 1590 4 会 どこにかくれていいるか、ごぞんじない
 1590 7 会 そんな話をしていつた。なんでも、
 1592 1 会 「こんな話をしていいるまに、「ふとつた
 1592 4 ねまわつたりしていつた。チルチル」
 1592 11 会 こでなにをしていいるんだ。」パン口に
 1593 3 会 おまえについていいるな。それから、チ
 1593 4 会 「物をたべていいるときは、だれにも
 1593 5 会 れにもかまていられません。なにも
 1593 9 会 、きみを待つていいるのだ。おことわり
 1594 11 会 「同じところにいいるのだよ。ちがつた
 1595 10 会 子たちを知つていいるの。」光「みんな知
 1595 11 会 「みんな知つていいるよ」チルチル「な
 1595 12 会 なんてたくさんいいるのだろう。」光も
 1596 1 会 つと、たくさんいたものだ。それを
 1596 3 会 あれだけ残つていればいいや。」光「こ
 1596 9 会 者にまで会つていいるひまはないよ。」
 1597 9 会 ほつべたをしていいるのだろう。なんて
 1597 10 会 らしい服を着ていいるのだろう。このへ
 1598 2 会 にびんぼう人がいいるの。」光「それを見
 1598 9 会 青い鳥を持つていいないことは、わかっ
 1598 10 会 とは、わかつていいるのだからねえ。そ
 1598 11 会 大急ぎに急いでいいる。ごらん、もう行
 1599 3 会 て、「みんないいる、みんないいる、こ
 1599 3 会 いる、みんないいる、こち見た。こ
 1599 6 会 、ぼくを知つていいる子がいいる。(光に
 1599 6 会 知つていいる子がいいる。(光に) ぼくは
 1599 9 会 ないの。ここにいいる子をだれも知らな
 1599 11 会 あなたの知つていいるのは、ぼくたちだ
 1599 12 会 なたのまわりにいいるのですよ。ぼくた

十五101 2 会 して、くらしているのですもの。」チ
十五101 8 会 にも『幸福』がいるの。」「幸福」たち
十五101 10 会 ちに『幸福』がいるかつてさ。戸や窓
十五101 12 会 福』でつまっているじゃないの。ぼく
十五102 2 会 びをこしらえているのですよ。でも、
十五102 3 会 ちがなにをしているの、あなたは、
十五102 9 会 どすきとおっています。これは、『両
十五102 11 会 悲しそうにしているのは、だれもふり
十五103 1 会 色の着物を着ていますし、これは、『
十五103 2 会 りの着物を着ています。外へ出ればい
十五103 4 会 色の着物を着ていますし、これは、『
十五103 5 会 たまの色をしています。』「チルチル」そ
十五103 11 会 物を着てついています。それからお天
十五103 12 会 いっぱいつけています。それから、『
十五106 1 会 もにっこりしています。でもぼくは、
十五106 3 会 せん。その後にいるのは、『善人であ
十五106 10 会 び』のとなりになります。その後、『
十五106 11 会 喜び』が立っています。それは、『
十五107 1 会 福』をさがしているのです。」「チルチ
十五107 5 会 まとつきあっていたものだから、すっ
十五107 9 会 ん美しいものがいなくなってしまうわ
十五107 11 会 を見る喜び』があります。それは、『毎
十五108 2 会 らいのところにいる人、だれなの。』
十五108 9 会 がまだ知らずにいる『喜び』たちです
十五108 10 会 をしようとしているの。なぜ横ちょ
十五108 11 会 を向いたままです。」「幸福」いま来
十五108 12 会 び』をむかえているのですよ。その『
十五109 6 会 、あなたを見えています。それ、手をひ
十五109 12 会 えたち、ここにいたの。思いもかけな
十五110 1 会 きよう、ここにいて、それはさびしか
十五110 4 会 かあさんににているけれども、ずっと
十五110 9 会 すよ——うちにいると、それが見えな

十五112 3 会 の中にはいつているの。」「母の愛、いい
十五112 4 会 この着物を着ているのよ。けれど、人
十五112 6 会 は、目を閉じていると、なんにも見え
十五112 12 会 そうな顔をしているときでも、ほおず
十五113 6 会 な指をはめていて。おまけに、いつ
十五113 9 会 こでは、うちにいるときのように、し
十五113 12 会 えのせわをしているときは、いつだっ
十五114 4 会 。でも、うちにいるときよりか、ずっと
十五114 5 会 母の愛、うちにいるとね、あんまり用
十五114 8 会 りの着物を着ても、わかるだろう
十五114 9 会 あさん、ここにいないなら、ぼくもこ
十五114 10 会 、ぼくもここにいたいや。」「母の愛、で
十五115 4 会 だけ天國に來ていて思っているけれ
十五115 4 会 ていると思っているけれど、おまえと
十五115 6 会 いつでも天國にいますのですよ。おかあ
十五116 1 会 たずねあぐんでいた道が、どうしてわ
十五116 3 会 くすこしがっている「光」を指さしな
十五116 10 会 に顔をかくしているの。あの人、顔を
十五116 12 会 っ、心配しているのですよ。」「母の
十五117 2 会 ぶん待ちわびていることを、知らない
十五117 11 会 あなたを求めている『正義であること
十五118 3 会 あなたをすいている『美しいものを見
十五118 9 会 いつけを守っているのです。ときはま
十五119 7 会 はなみだが光っていました。チルチル
十五119 8 会 どうしてないているの。」「ほかの「喜
十五119 9 会 、みんなないているのだな。でも、ど
十五119 11 会 なみだをためているの。」「光」まあ、だ
十五120 2 会 生のお話を聞いていると、ずっとまえの
十五120 4 会 がすこしも書いていないことに気がつい
十五121 6 会 と思つた。読んでいるうちに先生がたに
いる (下二) のりい
いれ 「入」 ↓コーヒーいれ・こめいれ・たまいれ・

ていれ・とりいれ・とりいれまつりのよる・ふでい
れ・ゆうびんないれぐち
いれかえる 「入替」 (下二) 1 いれかえる 《一
エ》
十33 7 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、
佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。
いれかわり 「入代」 (名) 1 入れかわり
十四68 4 あたたかい空氣がのぼっていくあとへ、
入れかわりに、そのつめたい空氣が下からふきこ
んできて、大きなうずができます。
いれもの 「入物」 (名) 1 入れ物
十二74 10 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重
いので、二三日は困ることもあります。
いれやる 「入遣」 (四) 1 いれやる 《一リ》
九117 1 文 籠 青ざさをいれやりたればいけのふなは
や青き葉のかげにきておる
いれる 「入」 (下二) 72 いれる 入れる 《一レ・
一レル》 ↓うけいれる・おいれる・さしいれる・と
りいれまつり・とりいれる・ひきいれる
一54 5 会 そうして、たまがひろえたら、お月さ
んのくにのなかにいれてもらえます。
一55 4 会 きれいなたまがひろえたら、またお
月さんのくにへいれてもらえます。
三33 8 会 お米や「豆をいれた、みほんのまるい
びんも ありました。
三91 8 会 うちの人の かいたたがみや はがきを、
ここに いれます。
三92 1 会 きんじよの人たちも このポストに いれ
ます。
三92 2 会 くさを ちぎって いれたり、 かみきれを
いれたりする 小さな子が いたら、とめてや
りましょう。

三922 かみきれをいれたりする
 三1022 そうして、かごの中にいれて、おばあさんとふたりでだいにそだてました。
 四853 そのとき、おかあさんが、かごにみかんをいれて、もっていらっしやいました。
 四1141 ⑤ では、にぎやかなおどりをして、ごらんにいれましょう。
 五610 水車をくるくるまわし、たんぼに水をいれ、はたけにも水をまいていく。
 五162 ポストにいれられると、友だちといっしょになりました。
 五165 私たちをみんなかばんにいれました。
 五1810 そこで、私たちは、じょうぶなふくろにいれられて、かぎをかけられました。
 五1910 ふくろの中からだされて、〈略〉、また、かばんの中にいれられました。
 六112 時計屋さんは、〈略〉ねじをはさみあげて、だいにものふたガラスの中へ入れた。
 六304 あり一が、おくの方からみつをびんにいれてもってきます。
 六635 弟がせきがでるので、おかあさんはゆたんぽをいれている。
 六687 まんがもいれました。
 六1321 ⑤ ぼくも、かけっこのなかまにいれてくれたまえ。
 七134 いますこし、手をいれてみよう。
 七143 すばらしいものを手にいれたね。
 七361 ⑤ もうすこし、中へいれてくださいませんか。
 七369 ⑤ どうかして、中へいれてやれませんかしら。
 七554 はんたいに、ふでをいれるほど、かえって、

文章がみじかくなっていくことがあります。
 七864 先生が、黒いうさぎと、〈略〉を、かごにいて持っていらっしやいました。
 七888 うさぎは、新しい草をいれてやると、そればかりたべて、
 七910 うさぎのふんを、水の中へいれてみたらうきました。
 七924 茶色のうさぎは、おくへはいってでてこないで、小屋へ頭をいれて、だきあげて、
 七931 首のところを持って、かごの中へいれたら、キューと、高く鳴きました。
 七947 あと足を長くのばして、まえ足を胸の下にいていました。
 八63 その一わを買い、小さなボールばこにいれてもらって、だいに持って帰りました。
 八125 小ばこにいれて、庭さきの、〈略〉、つばきの木の根もとにうめてやりました。
 八656 ⑤ なにしろ、水にいてやらなければなるまい。
 八749 頭をねじ曲げてつばさの中にいれた。
 八868 そこで、あひるの子は、バターのいれてあるたの中へとびおり、
 八948 水をいっぱいいいれ、ふたをして日かげにおき、ときどき水をとりかえました。
 八1088 いたいたのあいだにもみをいれ、ゴリゴリこすつてもみがらはじきました。
 九321 ⑤ 山のすがたが、〈略〉、かくにいた油絵のように美しくかがやいてみえます。
 九361 ⑤ 手にとって口へいれると、つめたくてあまい味がしました。
 九387 ⑤ 高くて手のとどかないかれ枝は、〈略〉、下から力をいれてひきおろします。

九4210 ⑤ 母やおばがくわをいれるあとから、ぼくたちはむちゅうになっていもをひろいました。
 九581 着物のえりを廣げて、からだに風をいれながら、
 九729 ぎよしやは、さっきのどんぐりをますにいて、はかつてさげました。
 九7310 ふたりは馬車に乗り、ぎよしはどんぐりのますを馬車の中にいれました。
 九751 いちろうは、自分のうちのまえに、どんぐりをいれたますを持って立っていました。
 九816 ⑤ 貝や石ころは、どれか一つのかごにいれておこう。
 九8310 ⑤ あとでよくみてあげるから、かごにいれてとおきなさい。
 九863 四人が話しあってしらべ、へんだと思う物は、みなかごの中にいておきました。
 九964 だまってそれを取り、かばんにいれる。
 九1203 私は手をいれて、それをすくおうとすると、
 十159 おとうさんが、力をいれて答えました。
 十174 ⑤ ぼくが力をいれて、一本バックをやるど、ボートは向きをかえて、
 十一274 村の人たちは、こう、うわさをしました。が、金次郎は耳にもいれず、それを続けました。
 十二103 老人が、〈略〉、なにかさがしては、それをひろってポケットにいれていました。
 十二109 老人は、ほおえみながらポケットに手をいれましたが、
 十二532 顔は、着物のすそからさかさにいれて、首を着物にぬいつける。
 十二534 手は、手さきのほうをいれて、穴に糸を通してぬいつける。
 十二539 ひとさし指を首の中にいれ、

十二53 10 ひとさし指を首の中にいれ、おや指となか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。
 十二76 8 なんてんの実が、赤く、うさぎの目らしくいれてありました。
 十二80 9 ことに「ジャパン」ということばに力を入れて答えました。
 十二87 7 庭で植え木の手入れをしている父にこういわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱいいて持っていくだろう。
 十二87 9 すずりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持っていくだろう。
 十二93 8 文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんども書きなおすことができる。
 十二99 10 これは、食物をいれるためのものですが、
 十三28 10 道具を入れた赤いこを、
 十三29 10 これも、いろいろな道具を入れた荷をかついでいる。
 十三31 9 さるまわしは、さるをつかったり、〈略〉、はやしをいれたりしなければならぬので、
 十四13 2 手 どこまでコーヒーを入れていい
 十四78 1 はじめにまん中になたをいれても、きつと、とちゅうから横の方へそれてしまつて、
 十五92 12 口にいっぱい物を入れながら、
 いろ「色」(名) 59 いろ 色 ↓ あいいろ・あおいろ・あかいろ・あめいろ・うすべにいろ・うすもいろ・オリブいろ・きいろ・きいろがかる・きんいろ・ぎんいろ・こがねいろ・そらいろ・だいたいいろ・ダイヤモンドいろ・ちやいろ・といろ・ないろ・ねいろ・ねずみいろ・はいいろぐも・ばらいろ・まつきいろ・みどりいろ・むらさきいろ・ももいろ
 十二24 5 会 あんまりいろがにているので、ぼく、

はじめはきがつきませんでした。
 二37 10 会 空は、ほんとうに青い色でした。
 三53 3 会 山のあの色。
 三19 6 手わけして、そのかたちや色をよくしらべることにしました。
 三81 6 会 「赤い色、みえた。」
 三82 2 会 「青い色、みえた。」
 五60 2 会 いい色ですこと。
 五62 3 会 花の色を空色にそめてくれたのは、だれでしょう。
 六43 8 美しい空の色。
 六48 8 会 ふと、そんなこと思わせる、あのまつさおな海の色。
 六118 2 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、
 七25 9 会 はっぱと同じ色になったのね。
 七25 10 会 どうして、はっぱと同じ色になるのか、わかりますか。
 七26 10 会 あおむしが、へんな色にかわっている。
 七29 5 会 黒っぽい、かわいいあおむしは、だいこんのはっぱと同じ色にかわっていた。
 七95 10 1 ぴきは白で、あとは黒っぽい色をしていました。
 八23 9 みるまに、羽はすらりとのび、からだの色もこくなつていきます。
 八24 2 せみの羽は、ぶるぶるとふるえて、色も、もようも、はっきりとしてきます。
 九43 3 白い紙に赤い色をぬりますと、明かるい感じになります。
 九44 4 この赤い色のそばに黄色をぬりますと、
 九45 5 そばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは感じられなかった明かるさがあらわれます。

九53 これは二つの色の組みあわせですが、
 九69 9 色の組みあわせが、さまざまの感じをあらわすのと同じように、
 九82 2 色の組みあわせも、音の組みあわせも、
 九96 6 これは色のばあいでも、音のばあいでも同じことです。
 九44 3 手 かきの葉を一まい一まいならべて、この色がよいとか、こちらの色がよいとかいって九44 4 手 こちらの色がよいとかいってながめていきます。
 十15 7 会 日本の海はどんな色ですか。
 十15 8 会 それはすきとおった青い色ですよ。
 十15 12 会 ああ、すきとおった青い色ですか。
 十20 10 会 白っぽくみえる太陽の光線ですが、わけてみると、こんなにさまざまな色になります。
 十27 8 庭の木に小鳥がくれば、〈略〉、羽の色や、形などを、こまかにしらべたいのです。
 十一33 6 会 だいこんの花にあかつきの色ただよえば勇ましく、すき・くわ持つて野にいそぐ。
 十一63 7 少年は、色のあさ黒い、おも長な顔で、考えぶかそうな目をしていました。
 十一77 4 感謝するような色が、そのひとみに、ちよつとのあいだうかぶようにみえました。
 十一80 4 病人は、〈略〉、うれしそうな色を顔にうかべながら、
 十一88 12 また、やさしい色がその目にうかぶこともありました。
 十二14 1 このごろは、きわだつて美しいつやつやしたしゅの色がさしてきた。
 十二16 6 下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。
 十二16 8 いい色の絵のぐがたくさんあった。

- 十二1610 カンパスの上にぬりつけてみると、思いもよらない色になってしまふ。
- 十二172 ㊦ あのだくろの色もかけてないや。
- 十二177 ㊦ たいへんいい色になりましたね。
- 十二2012 ㊦ あれがあれば、どんなかげのところでも、美しい色にできますがねえ。
- 十二469 ㊦ 牛皮を切りぬいて、美しい色がつけてある。
- 十二472 ㊦ 顔の色やくらしかたがどんなにちがつていても、
- 十二8011 「略。」という色があらわれていました。
- 十三562 生き生きとして、その着物やはだの色の美しいのにおどろかされました。
- 十三5712 ㊦ 絵は、写真で見ただけでは、明暗はかなりわかるが、色がわからない。
- 十三581 ㊦ 色のあるのは、その点はよいが、すりやうましくないから、また困る。
- 十四637 日光にすかして見ると、湯げの中に、にじのような、赤や青の色がついています。
- 十四639 この色については、お話することがどっさりありますが、
- 十四737 湯のおもてに、にじの色のついた、きりのようなものがひと皮かぶさっており、
- 十五348 その結びかたや、なわの色や、なわの太さなどによって、いろいろな考えを表わした。
- 十五351 色のちがった貝や、じゅずだまを結びつけることも行われた。
- 十五4710 「色なべしま」といわれる、色のはいたものが、いちばんすぐれていたという。
- 十五10212 ㊦ 『青空の幸福』で、もちろん青い色の着物を着ていますし、

- 十五1035 ㊦ 『春の幸福』で、きらきら光る青いたまの色をしています。
- 十五1138 ㊦ でも、ずっと色が白いな。
- いろいろ 「色色」(形状) 56 いろいろ
- 一287 ひとつのかおが、わらったり、ないたり、
- 〈略〉、いろいろにかかります。
- 二117 わけているうちに、そのわけかたが、いろいろにかわっていききました。
- 三945 一まいの紙で、いろいろなものをおろすことができます。
- 三954 この一まいの紙が、いろいろなかたちになったり、ふくれたり、立ったりします。
- 四1083 である人うらしまたろう たいえび そのほかいろいろな魚
- 四1099 いろいろな魚がでてきてならぶと、
- 五364 ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろいろのくすりも石炭からとれます。
- 五1031 かえでの木につるしておく、いろいろな鳥がやってきました。
- 六44 いろいろな音や、みたこともないような物が、ごたごたと耳にはいり、目にはいるばかりで、
- 六57 まわりのかべやガラス戸だには、いろいろな時計がたくさんならんでいる。
- 六66 ㊦ あのような道具、たくさん時計、
- 六1198 まがっているのめんどろうでしたが、いろいろにくふうして、うまくなりつけました。
- 七96 ㊦ アラビアンナイトのように、いろいろな話がある。
- 七115 同じ「手」ということばにも、いろいろなつかいかたがあります。
- 七153 「腹」ということばを、いろいろにつかったばあいを、しめたものです。

- 七158 私たちのからだの名まえに、このような、いろいろなつかいかたがあるのは、
- 七686 やりかたはいろいろですが、ねらいどころは一つです。
- 八498 「幸福」が、いろいろな家へたずねていききました。
- 八509 この「幸福」が、いろいろな家をたずねていきますと、
- 八836 すがたがみつともないので、いろいろな動物たちからのけものあつかいにされた。
- 九611 音の組みあわせも、いろいろな氣持をあらわします。
- 九89 「風」を「朝風」として、これにいろいろなことばをつけてみましょう。
- 九811 「絵はがき」「港」「友だち」など、いろいろなことばを組みあわせてみましょう。
- 九104 たいこのたたきかたによって、いろいろな心持をあらわすことができますし、
- 九244 近年になって、いろいろな方法でこのことをしらべてみますと、
- 九336 ㊦ まえは、もっともといろいろな魚がいたそうです。
- 九377 ㊦ くまざやいろいろな名も知らない雑草がいちめんにはえていて、
- 九795 ㊦ この土の上に白くみえているのは、むかし海の中にいたいろいろな貝のからです。
- 九8410 ㊦ みなさん自身で、だんだんいろいろなことを知ってくると思います。
- 九1210 茶人は、いろいろな困難をしのいで、みんなをばげましては上流へたどっていった。
- 十549 妹は、ここでも、いろいろなものをながめるのです。

十一54 そのボートをながめては、いろいろな話をしあって楽しむ。

十一302 いろいろのことを身につけて、やがて、村をすく、

十一782 いろいろのことを——母親のことや、妹たちのことや、〈略〉などを——

十二883 ことばは、〈略〉、ゆきがかや、音声や身ぶりによって、いろいろにその意味がかわる。

十二1004 形も、かめや、はちや、いろいろのものがあります。

十二1018 赤色のすやきの土人形で、〈略〉、男や女のいろいろなすがたをあらわしています。

十二10811 このお面は、生きもののように、いろいろな表情をあらわします。

十二1145 みなさんがたの代表が、全国からここに集まって、いろいろなことを相談します。

十三119 それは、学者がいろいろに考えて、原因と結果との関係を調べきわめている。

十三149 わかいころからいろいろな発見や発明をしました。

十三285 遠くの方からひびいてくる、いろいろなもの音に、耳をかたむけたりしているのである。

十三287 もの音には、いろいろなものがある。

十三2910 これも、いろいろな道具を入れた荷をかついでいる。

十三3212 いろいろなもの音がひびくが、

十四244 どうしてこんなにたくさんのことばが、いろいろな國からはいってきて、

十四626 よく氣をつけて見ていると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、

十四658 つぎに、湯げがのぼるときには、いろいろのうずができます。

十四689 しくみがずっと大きくて、〈略〉、そういう、いろいろなかわったことがおこるのです。

十四725 熱いところと、わりあいぬるいところとが、いろいろに入りみだれてできてきます。

十四749 そうなると、いろいろの実用上の問題とえんがつながつてきます。

十四8511 一ひらの雪をとらえて、それをいろいろな角度からながめてみることは、

十五349 それで大昔には、なわを結んで、〈略〉、いろいろな考えを表わした。

十五5012 プリンクリーは、日本の美しい焼物にひきつけられていろいろの焼物を集めた。

十五5012 日本についていろいろの研究を進め、

十五801 歴史の上で、いろいろな國の人々の間に、友だちとして心のかよったおつきあいができるようになったのは、われわれが最初であります。

いろいろ「色色」(副) 24 いろいろ

二98 みんなは、いろいろ かんがえました。

二127 いろいろ かえて ならべました。

三118 そこで、まいにち かしこい でしを ひとりずつ、はんだかのところへ やって、いろいろ とものおしえる ことにしました。

三1111 ふたりは いろいろ かんがえました。

四403 〇 あなたがたは、これから、りっぱな ことばに いろいろ であうでしょう。

五389 〇 そうすれば、こちらのようすが、いろいろとわかるだろう。

五1075 〇 いろいろあるよ。

六568 私たち一組のものは、みんな集まって、どんなものにしようかという相談しました。

六1171 いろいろ考えましたが、ただしちゃんのわら顔をかくことにしました。

六119 紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ、ちょうどいい長さにひごを切りました。

九825 〇 先生のところは、いろいろでるらしいぞ。

九854 〇 石で作ったもの、それには石の矢じり、おもりなどいろいろあります。

十633 かぶきや、ほかのしはいとも、いろいろちがうところがあります。

十一4611 あの山のすがたが、小さいころのことを、いろいろと思いださせる。

十一7111 少年は、〈略〉、やさしい父親のことをいろいろと思い返していました。

十一723 それからそれへと、いろいろ考えました。

十二461 〇 指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろ種類がある。

十二707 なにかにつけて不自由であろうから、いろいろお手傳いをしてあげたい。

十四57 おさないころから、人の世の苦しみをいろいろとなめていたからのことでした。

十四102 〇 ランプについては、いろいろいいことを教えてくれました。

十四205 外國からはいってきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してください。

十四238 〇 英語だけではなく、ほかの國からも、いろいろはいってきている。

十四654 湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろいろ自分でためしてみると、おもしろいでしょう。

十五529 いろいろではずしておいたから、

いろいろなあいて「課色」2 いろいろなあいて四24 三 いろいろなあいて……十九四191 三 いろいろなあいていろえ「色絵」(名) 1 色絵十五482 色絵をつける赤絵屋もあったが、

いろがみ 「色紙」(名) 2 いろがみ 色紙
 一四五 ちようめん二さつ、いろがみ五まい、く
 れよん ひとつはこ、ふでいれひとつ、
 四八七 まつの木の枝を立てて、色紙で おった
 つるや、ふうせんをさげました。
 いろづく 「色付」(五) 3 色づく 《イー・キ・キ》
 九四四 かりの 色づくころ、畑のいもをほりおこ
 しました。
 一三二 かなんすぎれば風あたたかく、木々の
 つばみも草のめも、日々に色づきふとりだす。
 一三九 かねでにうるし、はじの葉も、赤く黄
 色く色づいて、
 いろどり 「彩」(名) 1 色どり
 一三三 子どもたちは、そのあざやかな色どりに、
 正月氣分を味わう。
 いろなべしま 「色鍋島」(名) 1 色なべしま
 一五七 「色なべしま」といわれる、色のはいっ
 たものが、いちばんすぐれていたという。
 いろは (名) 2 いろは
 四七〇 いろはの『い』の字と かけて、なんと
 とく。
 四七四 いろはの『ろ』の字と かけて、なんと
 とく。
 いろはあそび (名) 1 いろはあそび
 二二二 先生、わたしたち、もみじのはっぱで、
 いろはあそびをしました。
 いろはがらた 「課名」 2 いろはがらた
 四三 いろはがらた……七十四
 四七四 いろはがらた
 いろはがらた (名) 2 いろはがらた
 四七三 「いろはがらた」を考えました。

六六一 いろはがらたやことわざの中にも、このこ
 とのあてはまるものがみつかりました。
 いろはにほ (名) 1 いろはにほ
 二二四 よしこさんののは、『いろはにほ』しか
 ないのに、わたくしのは、『いろはにほへ』まで
 もありました。
 いろはにほへと (名) 1 いろはにほへと
 二二六 『いろはにほへ』でもありました。
 いろり 「いろり」(名) 4 いろり
 九八三 ふくじゅそうのつばみいとおしむおさ
 な子や夜はいろりの火にあてており
 一三三 先生がかけるいろりのかたすみにはき
 よせておいでになっているようすを感じ
 一三三 かわした人形のことを思いだして、いろ
 りのかたすみへ走りよってかけらをひろいあげ、
 一三七 やがていろりには、パチパチとしばがも
 えあがります。
 いろりボン (名) 1 いろりボン
 三八四 すると、いろりボンのような にじが 空に
 かかりました。
 いろんな 「色」(連体) 2 いろんな
 一四七 人形しばいって、いろんな國にいろん
 なものがあるんですね。
 一四七 人形しばいって、いろんな國にいろん
 なものがあるんですね。
 いわ 「石」(名) 11 いわ 岩
 五四 水をふくんだ草のうた、こけのうた、土の
 うた、いわのうた。
 五五 小石をころころ、ころがして、いわの上か
 らとびおきて、川は山からかけおきる。
 六三 ながて、うさぎさんたちは、大きな岩のと
 ころにでました。

六三六 ところが、この大きな岩のかけに、とらさ
 んがねむっていたのです。
 九三六 大きな岩と岩とのあいだを
 流れ落ちるしみずが、せかれて、たきになり
 九三六 かこうがんの岩と岩とのあいだを
 九五八 まっ白な岩のかけの中ほどに、小さなあな
 があいていて、
 九六六 ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤き
 かにいてすぎの山しずか
 九六八 大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、ま
 つ林におおれた道もない谷まになった。
 一三六 その細いやわらかなものが、地をうがち
 岩をおしわけ、深く廣くのびていく。
 一五三 ちようどそこに、手ごろなとがった岩の
 かけらが目にはいりました。
 いわい ↓ぜんかいいわい
 いわえる 「結」(下) 1 いわえる 《エ》
 一五七 うちに帰って、十まいづつたばにして、赤
 いひもでいわえて数えました。
 いわかど 「岩角」(名) 2 岩角
 一五八 鳥は、ある岩角のすこしあき地の
 あるところを目掛けておりて行きました。
 一五九 少年が女の子を後にかばうようにして、
 すこしあかずさって、岩角へ身をよせかけたとき、
 いわかどちかく 「岩角近」(名) 1 岩角近
 一五九 ようやく道を見つけて、この鳥と少年と
 の戦っている岩角近くまで来ました。
 いわま 「岩間」(名) 1 岩ま
 九六五 そこで、谷川をさらにさかのぼると、岩ま
 からちよろちよろとわきでる泉があつて、
 いわや 「岩屋」(名) 2 岩屋 しかくのいわや
 一六二 ふとしたことから、この岩屋からぜんや

わんなどの家具のであることを知った。

十二6110 それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口で頼んだ。

いわゆる「所謂」(連体) 2 いわゆる

十三133 天は動き、地はじっとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。

十四769 これが「略」アジア大陸と太平洋との間におけると、それがいわゆる季節風(モンスーン)で、

いわれ「謂」(名) 1 いわれ

十三353 文字の國といわれるのも、いわれのなことではない。

いん「眞」↓のりくみいん

いん「院」↓びようどういん

インキ ↓あかインキ

いんき「陰気」(形状) 1 いん氣

十四965 女の子は、手にもえつくしたマッチを持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。

いんさつき「印刷機」(名) 1 いんさつ機

十二1008 いんさつ機も外國から渡ってきていましたから、こんなりっぱな本ができました。

いんそつがかり「引率係」(名) 1 いんそつがかり
四612 いんそつがかりのがらが、口をひらいて、「略」。

インドネシア「地名」 1 インドネシア

十五409 ローマ字は、アメリカ・イギリス・フランス・イタリア・トルコ・インドネシア・フィリピンなど、世界の大半につかわれている文字である。

いんりよく「引力」(名) 1 引力

十四355 そのバクテリアにもおとる小さな人間が、引力の法則を発見したり、

う

う (助動) 653 ウ う 《ウ》

一107 会 をかぞえましよう。さきに、しろい

一111 会 をかぞえましよう。「略」。「略」。

一115 会 をかぞえましよう。「略」。「略」。

一110 会 一どやりましよう。五 かくれん

一166 ります。なんでしよう。八 あさのこ

一175 が かかれるでしよう。どんなじが かか

一176 が かかれるでしよう。だれが かくでし

一177 だれが かくでしよう。だれが よむでし

一178 だれが よむでしよう。せみがどこかで

一308 にをもったでしよう。この手で、なに

一312 なにをもつでしよう。この足で、どこ

一314 こへいったでしよう。この足で、どこ

一316 どこへいくでしよう。十四 ひとつの

一515 会 「さあねましよう。」よにんはもたれ

一524 会 んという川だろう。「ひとりごとをい

一527 会 っているでしよう。」おとうさんも目

一44 会 つめてみましよう。「あたま 足

一76 会 つめてみましよう。「あさがお—あ

一154 とができるでしよう。三 ことばあそ

一232 会 ではないでしようか。「略」。「略」

一241 会 ただの水でしようか。「略」。「略」

一308 会 どうしたのだらう。『略』。とんち

一397 会 た。すこし休もうか。「たろう」ええ、

一398 会 ええ、休ましよう。「たろうは、あせ

一434 会 とあやまるだらう。「たろう」おとうさ

一436 会 うすこしのぼらう。「たろう」のぼらう

二437 会 「たろう」のぼらう。「たろうはげんき

二456 会 やってみましようか。「略」。「略」

二4510 会 「さあ、なんだらう。手の上にごむま

二465 会 「ちきゅうだらう。」「略」。(二)

二483 会 なのへやへいこうとして、きゅうに

二562 会 かただったでしよう。こんなことをか

二607 会 けてやりましようね。「九 春をむ

二613 会 がえて、やりましよう。(二) しょう

二616 会 にでかけましよう。「みんな」でかけま

二617 会 な「でかけましよう。」しょう「みんな

二681 会 だ。はやくいこう。」みんな「はやく、

二82 会 あ、手をつなごう。」みんな「手をつ

二83 会 んな「手をつなごう。」たつお「わにな

二84 会 たつお「わにならう。」みんな「わにな

二85 会 みんな「わにならう。大きな大きなわ

二165 会 。だれの手だらう。」とおし「いま

二255 会 いいものでしようか。」といいますと

二2710 会 う早いふねだらう。」「略」。(二) せ

二387 会 い学校にしましよう。きれいなきよう

二388 会 うしつにしましよう。」とおかきにな

二439 会 はおもしろかろう。」といつて、すぐ

二451 会 足でりくへあがらうというとき、白う

二604 会 て、「どこへいこうかね。」とおききに

二617 会 みずうみへいこうよ。」といいました

二641 会 「どちらへいこうか。」おとうさんは

二743 会 がしてみましよう。」と、おかあさん

二892 会 きてみてみましよう。ていしやばでは、

二893 会 がきこえるでしよう。学校では、どんな

二894 会 な音がするでしよう。かいがんではど

二895 会 んではどうでしよう。こうばではどう

二896 会 ばではどうでしよう。みなとはどう

二897 会 とではどうでしよう。風の日にはどん

五54 よう、町にでましよう。川は大きくなる
五84 あ、改札口へいこう。」「パチン、パチン。
五123 すよ。おりましよう。どうもありがとう
五2210 ださったのでしろう。」「〈略〉。」「〈略〉。
五299 でになるのでしろう。ついでですから、
五2910 いってあげましよう。』といいました。『
五3210 走っているでしろう。これは貨物船です
五336 の力で走るでしろう。えんとつがたくさ
五345 る力は、なんでしろう。おかあさんが、だ
五352 にかから作るでしろう。なにをしていると
五353 ているところでしろう。これは、石炭をほ
五368 してできたでしろう。みなれない木や、
五389 いろとわかるだろう。」「(二)「〈略〉」
五446 よくとんであそぼうよ。明かい世界
五448 和のうたをうたおうよ。ぼくら、日本
五456 界の花ぞのかざろうよ。ぼくら、日本
五462 しずかな空で光ろうよ。やぶうぐいす
五469 まく鳴けないのだろう。帰りに、また通つ
五595 いねにかいておこうと思ひました。八
五623 のは、だれでしろう。」「あやこは、なん
五641 くなつたでしろうが、わたしは、おと
五6410 だれのおかけだろう。さあ、考えてごら
五7110 もまんぞくでしろう。』といひますと、
五7310 みると、どうでしろう、ちゃんとてんが
五745 くでございましよう。』といひました。
五783 に、写真しましよう。』とおつしやいま
五821 に休んだでしろう。みんな、からだに
五853 にそうじておこう。」「りようかんさん
五8610 、かわいいでしろう。」「〈略〉。」「〈略〉。
五883 ると、へんでしろう。」「〈略〉。」「〈略〉。
五925 がついているだろう。それそれ、たけの
五935 うごはんでたこうかな。』といひて、

五94 6 会 「なんのひなだろ。」「略。」「略。」
 五95 9 会 かってやりましょうね。」さんちゃん
 五96 9 会 がしてやりましょうか。」「略。」「略」
 五98 7 会 いたらいでしよう。」「略。」「略」
 五98 8 会 ていって、はなそうと思ってるんです
 五99 1 会 こんで、ひわをとろうとしていました。「
 五106 8 会 こうへとんでいこうよ。空はひろくてお
 五108 3 会 いっしょにあそぼうよ。」かこの中のひ
 六6 3 人の役にたつのだろ、これはほんとこ
 六6 4 ろにおかれるのだろなどと考えている
 六6 6 会 けない自分であらう。あのいろいろな道
 六7 2 会 い身のうえであらう。」ふいにバタバタ
 六8 3 さきでそれをつまもうとしたが、あまり小
 六13 6 うつむいて水をのもうとしました。もうす
 六20 2 会 の夏の日を樂しもうではないか。」うた
 六22 10 会 よに音楽会をやるうじやないか。」あり
 六23 1 会 ぎりす「いいだろ。いまあそばないで
 六23 1 会 いで、いつあそぼうというのさ。わるい
 六23 7 会 て、「いい音だろ。きれいな音だろ
 六23 8 会 。きれいな音だろ。」きりぎりす たいこ
 六24 3 会 いで、いつあそぼうというんだね。樂し
 六25 6 会 、おおいにうたおう。」きりぎりす
 六25 7 会 りぎりす「うたおう、うたおう。」オル
 六25 7 会 うたおう、うたおう。」オルガンの「樂しみ
 六27 10 会 あじわえないだろ。」あり「たしかに
 六28 7 会 なんとかなるだろ。」きりぎりす「が、
 六33 11 会 んぼはどこでしょう。」雲「山のかげにか
 六35 2 会 ぼうな風なんだろ。おじさん、大風っ
 六38 5 会 さん、なんでしょう。あの屋根にとまっ
 六44 3 会 が帰っているだろ。」子がらす「うん
 六44 5 会 来て帰ったんだろね。」子がらす「お
 六44 10 会 らす」「なんだろうな、それ。」子がら

六53 6 会 とんでいくでしよう。」「略。」「略」
 六53 11 会 いどっちなんだろ。」ふみおは、こう
 六61 9 度を書きつけましよう。」「略。」「略」
 六64 5 、ねむくなるのだろ。どうしてだろ。
 六64 6 会 ろう。どうしてだろ。だれがねむくす
 六64 8 会 がねむくするのだろ。(いしの) なぞ
 六66 6 会 をつづけてみましよう。どんなふうにお話
 六67 3 会 た。お友だちと遊ぼうと思って、山の谷を
 六67 8 会 さん。遊びましよう。」と、子ぐまがい
 六70 8 会 なお話をするだろ。」そこへ、中学校
 六72 9 会 つぶつてしまうだろ、あんなに元氣の
 六73 7 会 きていのでしうか、死んでいるので
 六73 8 会 んでいのでしうか。」「略。」「略」
 六74 5 会 、動くものでしうか。」「略。」「略」
 六76 10 会 きていのでしうか。」「略。」「略」
 六77 3 会 きていのでしうか。」「略。」「略」
 六78 8 会 かなくなるでしう。けれども、息はす
 六78 8 会 、息はするでしう。だれがそうさせる
 六79 3 会 やっているでしう。しんぞうのこどう
 六79 5 会 が、それを動かそうと思って動かしてい
 六79 6 会 の。ちがうでしう。息と同じように、
 六82 6 会 わたしは山へいこう。」ほおりの「ほんと
 六83 3 会 てつれないのだろ。朝から一ぴきもつ
 六87 5 会 教えてあげましよう。そこに船がある。
 六87 7 会 てんにつくでしう。」ほおりの「なんの
 六88 4 会 てくでさるでしう。さあ、早く船にお
 六89 6 会 て、いどの水をくもうとする。いどの水
 六92 4 会 用でございましようか。」ほおりの「じつは
 六93 4 会 れはお困りでしう。では、さっそくさ
 六93 5 会 がさせてみましよう。」女の人に向かっ
 六96 4 会 用でございましようか。」海の神「おまえ
 六104 1 会 よくみえるでしう。」「略。」「略」

六106 6 とつまねをしてやろうと思った。なにかよ
 六108 1 とぼとがあるのだろ、と考えてみた。そ
 六109 2 声の音なのだろ。弟は、「はな」
 六109 5 からでる音なのだろ。そう思って、「ナ」
 六111 9 会 んで、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦
 六113 9 会 なをわらわせてやろうなどという氣持は、
 六113 11 会 びつくりさせてやろうと考えたからである
 六117 1 会 ないことはないだろと思いました。うち
 六117 11 会 「なんの絵をかこうか。」と、いろいろ
 六120 5 会 ん、大喜びでしう。でも、のりがかわ
 六123 11 会 まくわれないだろ。」「略。」「略」
 六126 1 会 をこしらえて遊ぼうよ。」「略。」「五ひ
 六131 2 会 ひとがいいんだろ。ぼくはきつねに追
 六131 8 会 はなををして遊ぼう。」「略。」「略」
 六132 1 会 へ。」「よし、やろう。」かけっこは、う
 六132 7 会 へ。」「略。」といおうとすると、うさぎさ
 六134 10 会 、なんになりましよう。ちつともいいこと
 六140 1 会 、ごちそうになろうかな。」のそり、の
 七9 4 会 どうしているだろ。もう、四十五年に
 七9 6 会 、いくつあるだろ。アラビアンナイト
 七12 3 会 おに手をやりましよう。」というときの「
 七12 9 会 らいをはじめましよう。」「略。」「このと
 七13 2 会 なってきたでしう。」「略。」「略」
 七13 7 会 われているでしう。それとよくにたつ
 七14 1 会 なつかいかたでしうか。」「略。」「略」
 七16 6 会 早くでかけましよう。」先生「じゃあ、で
 七17 1 会 とんでいのでしう。」先生「よくおぼえ
 七17 10 会 じめたからでしう。」女の子四「先生、
 七27 7 会 つけていまましようね。」はおさなき
 七27 10 会 どうかわるでしうね。」兄「観察日記に
 七27 11 会 れを写生しておこう。」(五) きし
 七29 2 会 「よんでみましようか。」母「よんでちょ

七三〇 七、いっしょに遊ぼう。」立ちあがりなが
 七三三 一、つしてやりましょうね。」母「それがいい
 七三三 三、ちゃん、早くいこう。」兄「きつと、とび
 七三四 六、」むりにわりこもうとする男の人もあり
 七三八 六、だをかきわけていこうとしました。しかし
 七四三 九、ん、いかがでしょう。」はくしゅが四方
 七四五 二、こんなことになろうとは、思っています
 七四六 一、一、一曲ひきましよう。」これをきいて、
 七四七 四、つきり書きあらわそうとすると、文章が、
 七五三 三、つぎはどうでしょう。なにかの花びらが
 七六〇 七、一つもなくなるだろう。またしても、ポト
 七七〇 九、なんの木の花だろう。にわか雨は、ぐっ
 七七五 一、こへいったのだらうね。」乙「ちよつとの
 七七八 三、その荷は麦でしょう。」甲「たしかに、た
 七九四 四、よにいつてもらおう。」旅人「そんな。」
 七九六 六、しをたててもらおう。」ふたりは、旅人
 七八六 六、わかつたのでしよう。」乙「そうです。そ
 七八八 八、わかつたのでしよう。裁判官どの、それ
 七八八 八、つきりしたでしよう。もう、うたがいは
 七八八 八、さき、さきいなのでしよう。茶うさぎ 一、び
 七八八 八、さが、ちちをのうとして、親うさぎの
 七九八 一、せたくないのでしようか。 11月29日 休
 八四四 四、西洋の子どもだらうなどと、早がつてん
 八五四 四、いるので、なんだらうとのぞいてみると、
 八八八 八、きかたのちがいだらうと思う人もありまし
 八八八 八、思う人もありましようが、そればかりでな
 八八八 八、けいのふかい鳥だらうと、それを知ってか
 八八九 一〇、ようにも思えましようが、どうして、一方
 八九〇 一、ろか、向かつていこうとさえるのです。
 八九一 一、なくならないでしよう。一一 あぶらぜみ
 八九二 二、とができるのでしよう。それは、だれも教
 八九九 九、う氣長なことでしょう。せみの子たちは、

八二九 一、こをさがしてやろう。」こうお考えにな
 八三〇 八、天の川へ落ちこもうとしましたが、その
 八三二 七、とをゆるしてやろう。」とおっしゃいま
 八三五 二、よりにあるのでしよう。二十光年の星もあ
 八三六 六、たれているのでしよう。四 幸福 こが
 八三九 六、にしてあげましよう。」「略。」「略。」
 八三九 八、ようになるでしよう。」み知らぬ人は、
 八四〇 一、ごはんをめしあがろうとなさいました。ま
 八四一 一、ヒーをおのみになろうとすると、コーヒー
 八四二 二、さかなをめしあがろうとなさんと、これも
 八四三 八、おりになるでしよう。」王さまは、いそ
 八四七 五、もうしばらくさがそうと、歩いていきまし
 八四九 一、もごろりと横になろうとしているところで
 八五二 二、かと思つたのでしよう。「略。」と、そこ
 八五八 八、その元氣でのぼらう。」とおっしゃつて、
 八五九 五、けしきが見えるだらう。山の上には、青い
 八五九 八、けしきが見えるだらうと思つた。そのこと
 八六二 二、みんなそろつたらうね。」といいながら、
 八六二 五、までかかるのだらう。わたしは、もうほ
 八六六 六、しだいてみましよう。いままでだいてい
 八六七 一、いうかつこうだらう。」という、もう
 八六八 八、しくもなるでしよう。たまごの中にあん
 八七五 八、いぬもかみつこうとしない。」しぼら
 八八二 四、思っていないだらうね。うぬぼれてはい
 八八五 五、ちはいっしょに遊ぼうとしたが、あひるの
 八八八 三、ころへとんでいこう。私のようなみつと
 八九三 一、こんな幸福があらうなどは、ゆめにも
 八九五 八、にめになるのでしようか。 5月7日 明
 八九六 七、つ、めがでるでしよう。 5月15日 火
 八九七 七、うに氣をつけましよう。 7月12日 木
 八九九 七、だいじようぶでしよう。 7月13日 金
 九〇四 四、と実になるのでしよう。 9月21日 金

九五一 一、ら、どうなるでしよう。むらさきのかわり
 九五二 二、ら、どうなるでしよう。これは二つの色の
 九五六 六、たふかくなるでしよう。(二) オルガ
 九六六 六、てみたらどうでしよう。音をうまくあわせ
 九七六 六、らわてくるでしよう。この「水」は、さ
 九八八 一、加えたらどうでしよう。色の組みあわせも
 九八八 八、ばをつけてみましよう。「風」を「朝風」
 九八八 一〇、ばをつけてみましよう。おしまいに、「山」
 九八九 一、みあわせてみましよう。二つか、三つのこ
 九九八 八、ていないからであらう。もし、きく人の心
 九九八 一〇、きてくることにならう。三 つばめ 夏
 九一六 七、せん。これからいこうとする遠い國のこと
 九二四 一〇、かべているのでしよう。あの家ののき下
 九二五 一、なつかしいのでしよう。春になると、だれ
 九二五 一〇、うれしいことでしょう。四 夕やけ か
 九四七 七、しんけんやらうと思つています。兄
 九四九 九、に遊んでいるだらうと思つて。先生、
 九五七 四、はがきをみたらう。」「略。」「略。」
 九五七 六、ぶんへただったらう。」と、男は、下を
 九五八 五、は書けないでしよう。」すると、男はま
 九五八 七、学校の四年生だらう。」その声が、あん
 九六二 二、もがまいるでしよう。どうも、毎年この
 九六七 一、したらいでしよう。」いちろうはわら
 九六八 三、したらいでしよう。この中で、いちば
 九七一 五、書いていいでしようか。」いちろうはわ
 九七一 八、ほうがいいでしよう。」やまねこは、ど
 九七二 一、とおりにしまししよう。そこできょうのお
 九七三 八、送りたしまししよう。」やまねこがい
 九七八 二、らとみえるでしよう。あれが貝つかです
 九八〇 一、ることにしまししよう。」私たちは、もう、
 九八〇 三、とにかくしまししよう。まずどんなふう
 九八六 六、んなところでしょう。」「——」「略。」

十一 80 7 くちびるを動かそうとしました。それが
 十一 83 8 会 おこったのだろう。わたしは、これこ
 十一 83 12 会 だ。さあ、いこう。まあ、ほんとうに
 十一 84 3 族のようすを話そうとしましたが、「略
 十一 84 6 会 」。さあ、いこう。晩には家に着ける
 十一 86 9 会 があるのしょう。どうやら、あなた
 十一 87 3 会 てもいいのしょう。」と、また、看護
 十一 90 10 会 てくださるだろう。さようなら。」そ
 十一 92 10 会 名をなんと呼ぼうかと思っているうち
 十二 5 1 会 どの手がらだろうか。」といってあざ
 十二 5 9 会 が、もとより立とうはずがありません。
 十二 6 1 会 でございましょう。」やまぶきの一
 十二 14 6 が、根もとをかくとうと決心した。そうし
 十二 14 11 会 かたづけてやろうか。」ひとりごとを
 十二 15 8 会 しておいてやろう。」文雄は、それを
 十二 19 6 会 っておいでだろうと思いましたが——あ
 十二 19 7 会 りだったでしようね。」「略。」「略
 十二 20 5 会 けているでしよう。わたしはこんなと
 十二 20 9 会 に美しいんだらうって。」「略。」「へ
 十二 21 2 会 ちゃだめでしようね。」「略。」「略
 十二 22 4 会 になったのだろう。そうだ、けいこだ
 十二 27 10 会 校へいきましようね。」といって、民
 十二 28 7 会 よにいきましようね。」たもとをひい
 十二 29 9 会 覚えたんでしよう。たいへんな進歩じ
 十二 29 12 会 ゃんをだいてやろうとすると、かぶりを
 十二 30 7 会 とをいうののしょう。」「略。」「民ちゃん
 十二 39 4 会 むずかしいでしよう。私は、生まれては
 十二 44 10 会 動かすんでしよう。」「略。」「略。
 十二 45 7 会 もしろいでしようね。」「略。」「略
 十二 47 3 会 ものであらわそうとする氣持がある。
 十二 47 7 会 舞台にあらわそうとする望みもあるの
 十二 47 9 会 れに便利でしよう。」「略。」「略。

十二 62 10 てきた。水を飲もうと思って小川の岸に
 十二 70 7 けて不自由であらうから、いろいろお手
 十二 87 7 持っていくだろう。手紙を書こうとし
 十二 87 8 ろう。手紙を書こうとして、すずりばこ
 十二 87 9 持っていくだろう。ふる場の中で湯を
 十二 88 1 持っていくだろう。ことばは、そのと
 十二 89 7 わってくるであらう。食事のたびごと
 十二 92 7 と同じではなからう。それは、めいめい
 十二 96 3 眞帳があるでしよう。それにはあなたが
 十二 96 6 などもあるでしよう。その写真帳をひろ
 十二 96 8 いだされるでしよう。なつかしいことや
 十二 96 9 などもあるでしよう。次の写真帳は、な
 十二 97 1 んの写真帳でしようか。これをみて、ど
 十二 97 2 とを感じるでしよう。貝づか、ここに
 十二 99 3 ならべてみましょう。石の矢の根があり
 十二 100 1 かったことでしよう。土器には、なわ目
 十二 104 11 がつくことでしよう。大和絵、絵の中
 十二 107 4 さきが勝つでしようか、かえるが勝つで
 十二 107 4 えるが勝つでしようか。仁王さま、こ
 十二 115 4 いけばいいでしようか。それは、民主主
 十二 115 9 ことがでましよう。30センチ 4セ
 十二 116 4 びかい、歌うだろう。すみれ、たんぽぽ
 十二 12 6 だ進むことであらう。ガリレオ 朝に
 十二 18 7 ぐれた國民でしよう。國のおこるかほろ
 十二 19 2 、すきでとり返そうと決心したのです。
 十二 20 12 れ地にも育つだろうと思つて、実際に試
 十二 32 10 、鳴りものであらうと、呼び声であらう
 十二 32 10 と、呼び声であらうと、トンネルのよう
 十二 32 10 一輪車の音であらう。水に不便なペキン
 十三 33 1 といったらよからう。ときには、ホート
 十三 33 12 は、それをつかもうとして追いかける。
 十三 36 8 じゃないでしようか。げんかんがしま

十三 39 4 会 なんだたでしようね……四十日も……
 十三 39 9 会 てもいいでしよう……はい、はい。」
 十三 40 5 会 、おいででしようか。はい、眞ちゃん
 十三 40 12 会 やつかれただらう……うん、読んだ。
 十三 41 8 会 いっしょに読もう。ああ、リックサツ
 十三 41 12 会 今晩来るんだらう。六時ごろ……もっ
 十三 42 8 会 札の手紙を書こうね……うん、おみや
 十三 42 9 会 うはとまるだらう……うん、楽しみに
 十三 44 7 会 です。そうでしよう。電話のはじめの人
 十三 50 3 手をつなぎましよう。うれしいハ・ハ・
 十三 50 4 会 を、合唱しましよう。牧場、牧場の泉
 十三 54 10 になつていだろうと、思つたからです
 十三 59 8 会 じゃないでしようか。」「略。」「ぼく
 十三 60 8 会 洋の名画でしよう。ぼくには、そのう
 十三 61 2 会 さは、どうだろう。でも、ラファエル
 十三 61 3 会 にもわかるだらうね。なんといつても
 十三 61 10 会 ださつたんだらう。」もくろく、一
 十四 4 5 会 です。なぜでしよう。それは、フィリッ
 十四 7 11 会 ことにしましよう。おとうさんのご一
 十四 7 12 会 てくれるでしよう。おとうさんのお写
 十四 8 9 会 わすれてしまおうと思ひになるには
 十四 10 11 会 さしあげましよう。それほど、たえず
 十四 11 11 会 でこわれるだらうということでしたが
 十四 12 2 会 になれるでしよう。それに、ランプは
 十四 13 6 会 でおいででしようか、お知らせくださ
 十四 15 11 会 ことにしましよう。そうすれば、おあ
 十四 15 12 会 早くたつでしようから。たとい、から
 十四 16 4 会 すれ願いましよう。いつもこう思つて
 十四 17 8 会 たはじめましよう。さようなら。あな
 十四 19 2 会 ていたんでしよう。」とたすねた。「へ
 十四 19 10 会 れではなんだらう。」「略。」「そこへ
 十四 22 9 会 考えていいだろう。」とおっしゃつた。

十四233 会 ばだったのだろう。」とおっしゃった
 十四245 語になったのだからと、ふしぎになっ
 十四248 会 ったのでしよう。」とおたずねした。
 十四267 ったことばであろう。また、音楽の時間
 十四261 きたことばであろう。また、図画工作の
 十四273 いったきたのだからかと思った。それで
 十四286 会 よくわかるだろう。」私は、なにか大
 十四2910 しまったのだからという人もあります
 十四309 しまったのでしようか。むかしのことは
 十四325 人もあるでしよう。けれども、星をこ
 十四353 小さなものでしよう。しかし、それだか
 十四358 とができるでしよう。みなさん、ごらん
 十四3510 うしずけさでしよう。なんとという美しさ
 十四3510 いう美しさでしよう。なんとというおごそ
 十四3511 かなすがたでしよう。じいっと大空の星
 十四398 会 かな夜明けだろう。」二人の人はるか遠
 十四424 会 、あらしがふこうが、雪がふろうが。
 十四424 会 うが、雪がふろうが。天には雲、地に
 十四426 会 いがたえなからうが、心に太陽をもて
 十四457 をしているのだろう。かれは、気が気で
 十四475 されたものでしよう。たいていの人は、
 十四4712 ほがらかな人だろう。自分なんか、およ
 十四499 人は少ないでしよう。このおじょうさん
 十四517 会 おもしろいだろうと思います。」こう
 十四5411 会 からしないでしよう。そこは、暗いとこ
 十四598 会 なれないでしよう。」すると、いたず
 十四619 会 が、どうでしようか。「略」と、
 十四6311 のときにしめしよう。すべて、まったく
 十四655 おもしろいでしよう。もちろん、これは
 十四657 うは、わかるだろうと思います。つぎに
 十四679 ことがあるでしよう。茶わんの上や、庭
 十四698 ることにしめしよう。白い茶わんにはい

十四703 に気がつくでしよう。これは、夜、電燈
 十四7312 けはたしかでしよう。湯がひえるときに
 十四7612 にしておきましよう。八 木もと竹う
 十四7710 とのほうから割ろうとすると、たとい、
 十四801 発見したのでしようか。ことによると、
 十四865 心の現われであろう。「雪國」の映画も、
 十四883 、まっすぐに歩こうと思ったのであろう
 十四884 と思ったのであろうが、いつのまにか曲
 十四885 かれたからであらうか。足がつめたくな
 十四886 まったためであらうか。それとも、心の
 十四888 がったものであらうか。雪國でいちばん
 十四894 かも音でも聞こうとしたりする。こん
 十四896 編集できないだろうか。同じ題の作文で
 十四904 会 い、寒い夜だろう。」と、小さなマッ
 十四917 と思ったのであろう。そこで、その女の
 十四938 会 れはやく鳥だろうか。」ひもじいので、
 十四9310 、満足したのであろう。女の子は、手にマ
 十四942 たかったことだろう。女の子は、二つの
 十四9412 、どんなにようからうか。女の子は一本の
 十四952 うれしいことだろう。明かるい、赤いほ
 十四956 ま法のマツチだろうかとさえ思った。そ
 十四969 ふしぎなことだろう。その火の光のさす
 十四974 、まあ、どうだろう。そのやいた鳥は、
 十四9812 会 ったいなんだろうか。」女の子はねむ
 十五82 会 ん みかんむこうと手ぶくろをぬぐ山
 十五229 した。なんでしよう。みんなが、おどろ
 十五2312 ます。だれでしようか。その人は、いっ
 十五242 ます。だれでしよう。それは、十五六に
 十五263 の上へでもとまろうものなら、それこそ
 十五301 少年の頭をくだこうと、向かって来まし
 十五422 ようになるであらう。日本語の書き表
 十五428 っている國があらうか。日本のことばを

十五4210 がないものであらうか。私たちは、この
 十五468 会 「いくらでしようか。」そのねだんの
 十五504 会 買いうけましよう。ほかの外國人にも
 十五505 会 してあげましよう。どうか、私のこと
 十五543 しあわせ者であらう。博士は、しずかに
 十五548 会 大島くんでしよう。まあ、かけたまえ
 十五559 会 をさせてもらおう。私が日本をおとず
 十五562 会 がはじめてだろう。そのときは、まだ
 十五5610 会 一号ともいおうか、私のはじめて会
 十五593 、ありし昔を語ろうとした。すると博士
 十五5911 会 あ、うちへ行こう。」と、あつけにと
 十五615 されかたがわからう。そのころ、新島の
 十五6312 会 れいになつたらう。さあ、行こうぜ。
 十五6312 会 う。さあ、行こうぜ。」だされたくつ
 十五6810 会 なにか喜ぶだろうに——」といいなが
 十五7010 会 いてあるでしよう。おじさんは、年と
 十五715 会 行って来ましよう。そうしておじさん
 十五716 会 を喜ばせましようね。」とおっしゃっ
 十五786 かたができるだろう。ひとりの人間にと
 十五833 会 ちは、だれだろう。」光「あれがこの世
 十五843 会 なおかしでしよう。」いぬ「それに、あ
 十五861 会 ごちそうによぼうというのだろう。そ
 十五862 会 うというのだろう。それを受けてはい
 十五875 会 いいたしめしよう。これが、わたしの
 十五898 会 てているでしよう。わたしは、とても
 十五905 会 んじないでしようね。」「ふとった」青い鳥
 十五9011 会 まあいいでしよう。もつといいものが
 十五918 会 ずはないでしよう。それがこの世のす
 十五9311 会 福にしてしまおうじゃないか。」ふと
 十五941 をひきずって行こうとする。その間に、
 十五947 会 もないさまだらう。みんなどこへ行く
 十五949 会 いなところだろう。どこへ来たのかし

十五95 12 ㊦ さんいるのだろう。「光」もつともつと
 十五96 7 ㊦ けて行つて会おうよ。」光「むだなこと
 十五97 2 ㊦ 出て来たのだろう。だれなのだろう。
 十五97 2 ㊦ 。だれなのだろう。」光「あれは『子ど
 十五97 9 ㊦ しているのだろう。なんてかわいらし
 十五97 10 ㊦ 着ているのだろう。このへんでは、み
 十五100 3 ㊦ んな、聞いたろう。この人、まだぼく
 十五102 8 ㊦ 、わかるでしよう。これは、『清い空
 十五104 8 ㊦ もうよしましよう。なによりも、まず
 十五104 9 ㊦ びにやりましよう。』と、見るまに、
 十五107 4 ㊦ あ、そうでしよう。あれはわるくなっ
 十五109 2 ㊦ 潔なものでしよう。』幸福「あなた、あ
 十五114 8 ㊦ も、わかるだろうね。」チルチル「ぼく
 十五116 12 ㊦ がこわがるだろうって、心配している
 十五117 3 ㊦ 知らないのだろう。(ほかの「略」)
 十五118 10 ㊦ つと来るでしよう。そうしたら、私は
 十五118 12 ㊦ お別れしましよう。ほどなくあらわれ
 十五122 5 ㊦ 日記のふでをおこう。——高橋——
 十五123 1 ㊦ しなかったのだろうと、さんねんに思い
 う 2 う
 二87 「う」のつくことばと、「え」のつく
 ことばをあつめました。
 四77 4 う——うれいときは、どんなとき。
 ウィーン 〔地名〕2 ウィーン
 九18 10 しょうわ六年の秋、オーストリアの都
 ウィーンでのごきごきです。
 九19 6 ウィーンの動物協会に、〈略〉、電話で
 このことを知らせてきました。
 ウィンド (名) 1 ウィンド
 十五43 4 ウィンドにかざられてあるさらやはちを、
 しげしげとのぞきこみながら、
 うえ 〔上〕(名) 217 うえ 上↑おかとうえ・その

うえ・みのうえ・めうえ
 一88 ㊦ てをうって、むすんで、またひらいて、
 てをうって、そのてをうえに。
 一23 10 「はれた おそらくくつがなる」では、
 てをうえにさしあげました。
 一62 8 みまわすと、山のうえから、おおきなお
 月さんがでるところでした。
 一65 9 おかあさんは、わたくしをひざのうえに
 だきあげてくれました。
 二18 2 ㊦ 上は大みず、下は大かじ、なかに。
 二28 2 ㊦ やぎとやぎと、せまいはしの上で、
 つのを おしあっていました。
 二45 10 ㊦ 手の上にごむまりをのせているね。
 二49 7 ㊦ 上にながてはうけ、うけては上になげ
 て、よろこびます。
 二49 8 ㊦ 上にながてはうけ、うけては上になげ
 て、よろこびます。
 三10 1 ㊦ 上と 下とを ゆびさして、 お立ちに
 なっていらつしやる。
 三44 5 ㊦ ぼくが、きみたちのせなかの上を、か
 ぞえながらとんでいくから、
 三48 7 ㊦ 川の水で からだを あらって、 がまの
 ほをしいて、その上にねるがよい。
 三53 2 ㊦ こどもは石の上に立ち、「略。」と
 いいました。
 三58 3 五人の子どものおうち、丘の上にあ
 るのでも、ふもとにあるのでもありません。
 三60 6 ㊦ この丘の上の大きな木のところ。
 三70 2 ㊦ そのとき、ピーターはふと、ゆかの上に
 なにか あるのをみつめました。
 三70 7 ㊦ ゆかのうえに、なにか、長い、光った、び
 かびかしたものがあつます。

三74 7 ㊦ あの丘の上を。
 三76 2 ㊦ みんなで さがしまわりましたが、ゆかの
 上にはもうみえませんでした。
 三79 4 ㊦ だれひとり、上を みたりまわりをみた
 りする ひまもありませんでした。
 三103 10 ㊦ かきねの上からのびあがつて みたり、
 へいのすきまからのぞきこんだり
 三111 10 ㊦ やねの上まで、人で いっぱいになりま
 した。
 三117 3 ㊦ その山の上で、ふしのくすりと手紙
 をやきすてよ。
 三117 8 ㊦ けむりが、山の上から いつまでもいつ
 までもたちのぼっていました。
 四18 1 ㊦ おかあさんの手の上につかまってひい
 た。
 四18 9 ㊦ そこで、おかあさんの手の上で、力いっ
 ぱいひいた。
 四26 6 ㊦ まっ白なおさらの上では、おひめさま
 のようですね。
 四48 5 ㊦ 山の上を高くとびこえて、たににさし
 かかったとき、
 四66 6 ㊦ 上からよんでも下からよんでも、
 四71 3 ㊦ 『ろ』の上にある。
 四71 6 ㊦ 『は』の上にある。
 四87 7 ㊦ すみがまの上に、雲がでています。
 四95 4 ㊦ 降っている雪を上からみると、白くて、
 黒くはない。
 五58 ㊦ 小石をころころ、ころがして、いわの上か
 らとびおれて、〈略〉、川は山からかけおる。
 五41 3 ㊦ のびはじめた草の上を、うれしそうにあ
 るいていました。
 五107 9 ㊦ 旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木

の上へにげていきましたが、

六49 自分のおかれているのは、しごと台の上ののっている小さなふたガラスの中で、

六55 さまざまの道具も、おなじ台の上によこたわっている。

六79 男の子は、やがてしごと台の上のものをあれこれといじりはじめた。

六89 しごと台の上をみて、だしておいたねじのないのに気がついた。

六81 だれだ、しごと台の上をかきまわしたのは。

六155 そうしてその上に乗りました。

六165 そのかりうどは、きゆうに歩くのをやめて、弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

六166 木の上には、一わのはとがとまっています。

六361 大すぎの上にとまったらかし。

六428 つばめのむれ、屋根の上にひとかたまりになる。

六431 しずんでいくお日さまをおって、町の上を列車のようにとぶつばめのむれ。

六433 山や、みずうみや、はたけの上をひとかたまりになってとぶつばめのむれ。

六637 手をあらって、しゃぼんを水の上へおいたら、つるつとすべった。

六654 上にすれば下になり、下にすれば上になるものはなあに。

六654 下にすれば上になるものはなあに。

六681 「(略)」といって、木の上にするするとのぼっていったしまいました。

六913 門の木の上に、りっぱなかがいらっやいます。

六914 木の上に、りっぱなかが。

六997 ぼくは、この二つをかさねたりべつべつにしたりして、つくえの上をみたり

六1133 それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作ったものであることがわかって、

六1192 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。

六1194 よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりにまげるのですから、めんどうでした。

六1195 紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ、ちようどいい長さにひごを切りました。

六1208 ぼくは、だいに本はこの上にのせておきました。

六1422 上になったり、下になったりしました。

七368 頭の上で声がしました。

七379 ふと上を向くと、

七405 三郎は、だれかにゆずってもらった座席の上に立って、

七582 たんぼの上で、つばめがちゆう返りをした。

七596 土の上、一センチほどのところで。

七714 めまの上を、にわか雨が通る。

七733 ぼさぼさのいけがきの上である。

七821 私がかさばくを旅していますと、砂の上からくだの足あとがつづいていました。

七918 私が麦をやったら、白いうさぎは、(略)、黒いうさぎの上に乗って、たべました。

八67 だんだんなれて、指さきへもかたへもとまるようになったばかりか、頭の上にも乗り、

八610 「(略)」とよんでひざをたたくと、ひざの上にとび乗ったり、

八611 三ど三どの食事に、テーブルの上でおしよるばんしたりしました。

八771 客がきているときなど、あまりテーブルの上でぎょうぎのわるいまねをすると、

八95 とつぜん、上へ飛行機でもとんでくると、

八186 このうえなくふべんですが、

八192 こえ土の中に生みつけられて、(略)、皮をぬぎかえて地の上へでていきます。

八206 上からつたわってくるあたたかさと、かわきかたで、いまが夏だということや、

八241 朝日が山の上のぼって、

八564 ぼくは、砂地の上になっすぐな足あとをつけてみようと思って歩きだした。

八596 山の上には、青い空がすきとおるようになります。

八597 飛行機の上からは、もともともっと大きなけしきが見えるだろうと思った。

八658 あくる日はいいお天気で、太陽は、ごぼろの上をてらしていた。

八661 水はひなたの頭の上を流れたが、すぐにうかびあがつてきて、うまくおいだ。

八745 あしの上に廣がっている木の枝にものぼっていた。

八814 でも、水の上をおよぐのは、いい氣持ですからね。

八817 水の上をおよいだり、もぐったりするのがいい氣持かどうか。

八846 あひるの子は、水の上を車のようにくるくるまわり、

八887 たくさんの木がかんばしくにおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上にのびていた。

八8811 はくちようは、つばさをサラサラと鳴らし、かるく水の上をおよいでいた。

八905 かわいそうにあひるの子は、ころされるも

のと思いながら、水の上に頭をたれた。

八907 そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのを見た。

八1084 もみをむしろの上にひろげてほしました。

九264 文 子もりするしずかなる月なの上に

九281 文 二重にじ青田の上にうすれゆく

九393 三 八九メートルもある木の上で、なただで枝をおろすのは氣がつかれます。

九395 手 上の方のかれ枝をじゅんじゅんにたたき落し、

九445 手 はだかになった木の上に、まっかにじゅくした実がすずなりになっているのを見ると、

九494 いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷川にそった小道を、上の方へ登っていきました。

九534 すると、りすは、木の上からひたいに手をかざして、いちろうをみながら答えました。

九5310 ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、

九794 文 この土の上に白くみえているのは、むかし海の中にいたいろいろな貝のからです。

九1081 文 待て、待て、もうすこし上までいこう。

九1096 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえがきながら、小鳥のようにおりてくる。

九10911 先生は、ふたりとも、まだ上へ上へと登っていかれたが、

九10911 まだ上へ上へと登っていかれたが、

九11211 お書になったので、雪の上で楽しくおべんとうをたべた。

九1177 文 文 ふくじゅそうのはちをおきかうるおさな子やえんがわの上にうつる日を追いて

九1369 「なんだって、お月さん——」くもは、首をねじって上の方をみあげました。

九1419 上をみると、わらっているではありません

か。

九1431 月はもう頭の上までできていました。

九1475 つばめは、麦畑らしい土地の上をとびました。

十104 岸にある丘の上には、センチチェヌヌというお寺の高いともみえました。

十147 小学校のいちばん上の学年か、

十199 ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上をすべっていく。

十201 村の林の上に、大きな半円形のにじがかかっている。

十2212 ひとりの友だちは、妹をつれて、つつみの上でつみ草をしている。

十5910 えんがわにつくえをだして、その上にすすきをかざった。

十724 文 このうえそんらんぼうをしては、いっそうしかられるじやないか。

十729 大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

十191 文 ただ、わかつているだけではなしに、いつもそのうえを考えていて、

十1139 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよう。

十1159 ちがつた形の小鳥が、はばたいてでて、《略》、ぼくたちの頭の上を、まわりはじめる。

十1278 中には、正月だというので、そのうえに十二文はすむ者もありましたが、

十1326 文 麦のはしりほかがやく上を、海こえてきたつばくろが、すうい、すういとびまわる。

十1363 文 日はまた照って水たつぷりと、いねのかぶばりこのうえもなく、秋のみのりも思われる。

十1424 文 もうそうちくも重荷にたえず、つばき

の上にぼたぼた落す。

十1439 園長さんが、だんの上にお立ちになりました。

十1523 車内はむし暑いうえに、おたがいがぬれたからだで、おしたりおされたり

十1526 だれかのかさのしずくが、私のくつの上にぼたぼたと落ちてきたりした。

十1692 ふとんの上におかれたまま動かずにいるうでをつかみました。

十17112 去年、みおくっていつて、最後に船の上でわかれを告げたことや、

十1746 病人の上にかがんで、みやくをみたり、

十17612 夜になると、少年は、へやのすみにいすを二つならべて、その上でねむりました。

十17711 少年はそのふくれあがつた顔の上に、きわめてかすかなほおえみがうかんだのをみた

十1804 病人は、だんだんしつかりした目を少年の上にすえて、

十1902 医者は、病人の上にしばらくのあいだうつむいていましたが、

十1912 看護婦が、小さなすみれの花たばを、ベッドの上のコップの中から取ってきました。

十1923 すみれをベッドの上にちらしながら、

十1953 これをきいたコロンブスは、つと立って、テーブルの上のゆでたまごをとり、

十1955 文 みなさん、こころみにこのたまごをテーブルの上に立ててごらんさい。

十1965 下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。

十1968 パレットの上でみたときは、ずいぶん美しくみえるが、

十1969 カンパスの上にぬりつけてみると、思い

もよらない色になってしまふ。

十二3110 そのなつかしい葉や、花の上を、私の指はまったくわれをわすれてなでていました。

十二3410 サリバン先生が、ほかの大きな人形を私のひざの上において、

十二377 「水」はいま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいもの名であることを

十二505 首のところだけのこして、もんだ紙にのりをつけないで、上から上からかぶせる。

十二505 上から上からかぶせる。

十二5410 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家を作っておく。

十二605 長者は、高どの上からこのありさまをながめて、得意になっていた。

十二669 深く長い根の上に、みごとな草や木がしげっていく。

十二767 それは、赤いおぼんの上に、雪をまるめてこしらえたうさぎでした。

十二8310 目にもとまらぬボールが、ネットの上を右に左にと、ゆききました。

十二1109 まき絵というのは、うるしをぬったうえに、金や銀のこなをまいて、

十二2411 木材があたえられたうえに、いい氣候があたえられました。

十二271 土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、ねむのきの枝などが、ずっとのびだしている。

十二2911 前の荷の上に、小さなだらをぶらさげ、その両がわに、ふんどうをつるしておく。

十三395 手紙が、はい……二番めのひきだしの上……はい。

十三533 絵は、はがきの上の方に、まるく原色ですってあります。

十四8111 おとうさんのお写真を、私は、いつも自分のそばのつくえの上におきます。

十四83111 それは私にとって、このうえもないいせつなことばです。

十四133111 それは、コップの上からコーヒーこしをとったとき、それをのせるためなのです。

十四131111 おふたりの写真は、いま、この手紙を書いているつくえの上、私の前においてあります。

十四141111 おとうさんに対しては、このうえなくまめやかな、このうえもなく純真な思い出がのこっています。

十四142111 このうえもなく純真な思い出が

十四3412 その地球の上に住んでいる人間などは、十四5410 明かるい地の上でくらしているかたには、土の中のことばわからないでしょう。

十四666 茶わんの湯げなどのばあいだと、もう、茶わんのすぐ上から大きなうずができて、

十四6611 これとよくにたらずで、もっと大きなのが、庭の上などにできることがあります。

十四6710 茶わんの上や、庭さきでおこるうずのようなもので、もっと大じかけなものがあります。

十四6712 陸地の上のどこかの一地方が、日光のために、特別にあたためられると、

十四695 関係のないようなことがらが、原理のうえからは、おたがいによくにたものである

十四706 夕ごはんのおぜんの上でもやれますから、よく見てごらんさい。

十四713 茶わんのまん中の方では、ぎやくに上の方へのぼって、

十四7510 畑の上からとんできて、森の上へかかると、飛行機は、しぜんと下の方へおしおろされるかたむきがあります。

十四7510 森の上へかかると、

十四793 木のほうは、これと反対に、もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、けっしてそれることがありません。

十四793 上からはものをうちこむと、

十四811 石の上にも三年。

十四892 子どもたちは、この黒い土の上に集まって、足でトントンとふんでみたり、

十四953 女の子は、その上へ、小さなつめたい両手をさしのべた。

十四976 そのやいた鳥は、〈略〉、テーブルからとびおりに、ゆかの上をよたよた歩いて、

十四985 たくさんのおさなろうそくが、〈略〉、ちかちか、ちかちかと女の子の上を照らし、

十四1019 うれしそうに、楽しそうに、上の方へ、十四10112 上の方へと、神さまのおそばへ行くかのようにのぼって行った。

十五108 ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でとぶ見ゆ

十五125 ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

十五199 深い深い谷の上を、登山電車がわれわれを運んでいってくれます。

十五214 高山植物のかおり、その上に、〈略〉けわしい山が、〈略〉、わらうようにそびえて

十五219 ふたりの子どもは家庭教師につれられて、〈略〉、がけの上をそろそろと歩いていました。

十五2112 女の子は、あふない足どり、山の上の方に、〈略〉はなれて行きそうにいました。

十五226 みんなの頭の上が暗くなって、なんだか大きなあらしがふき起ったような音がしました。

十五232 大きな一わのやまわしが、〈略〉、みんな

の上へ舞いおりて來ます。

十五23 3 みんな草の上へひれふすように、思わずたおれてしまいました。

十五23 11 だれか、その大わしのせの上へ、がけの中ほどからとびついたものがあります。

十五24 12 少年は、大わしのせにとびつき、その上へ乗りうつって、両足で鳥の腹をしめつけ、

十五25 5 からだの重さで上からぎゅうぎゅうとおしつけ、

十五25 10 さすがの大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなつて、

十五26 3 もしこのわしが、その舞いおるとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、

十五26 11 飛行機乗りが、安全な着陸地を上からさがしているような氣持で、

十五27 10 がけの上で「あれあれ。」といっている人々の目には、

十五36 8 「うえ」「した」という考えを表わすのには、線を横に引いて、「・」をその線のうえに

おいたり、したにおいたりして表わした。

十五36 9 「・」をその線のうえにおいたり、

十五36 10 「上」「下」とかいふ字の起りである。

十五48 5 明治になって、はん主の保護がなくなつたうえに、〈略〉、ひとりでこの焼物を作るとは、

むずかしいことであつた。

十五52 9 博士は、別れに際して、〈略〉しようかい状をくださったうえ、〈略〉とおっしゃった。

十五62 2 ふみ石の上にそろえてある大小二つのくつをちらと見た私は、

十五69 5 ㊦ 「つくえの上をごらん。」

十五69 7 つくえの上に、くつをみがかせた満ぼろ時代の私の写真がかざられてあるではないか。

十五79 10 私のつくえの上には、日本のみなさんが

書いたあつてい絵の本が、いつもおかれてあります。十五80 1 歴史の上で、いろいろな國の人々の間に、

友だちとして心のかよつたおつきあいができるようになったのは、

十五81 2 天は、人のうえに人をつくらず、人のしたに人をつくらず。

十五82 3 この地球の上でいちばんふとっている「幸福」(ぜいたく)たちが、

十五98 4 ㊦ 子どもの幸福というものは、地の上でも、天の上でも、いちばん美しいものに見えるものだからね。

十五98 4 ㊦ 地の上でも、天の上でも、十五114 12 ㊦ おまえたちがこの上まであがつて來たのは、

うえ「植」↓たうえ・たうえうた

うえき「植木」(名) 2 植え木

十二87 6 庭で植え木の手入れをしている父にこういわれたら、

十五10 6 ㊦ ㊦ いけがきのすぎの木ひくみとなり家の庭の植え木の青めふく見ゆ

うえつけ「植付」(名) 2 植えつけ

九35 10 ㊦ ㊦ それは、七月の二十八日でしたが、村で

いちばんおそい植えつけでした。

十一42 9 ㊦ ㊦ どれ植えつけの用意をしよう。

ヴェニス (地名) 1 ヴェニス

九22 2 つばめをのせた飛行機は、〈略〉、アルプスをこえてヴェニスへとんでいきました。

ヴェニスいき (名) 1 ヴェニスいき

九22 4 それでも運びきれなくて、九月十九日の晩には、ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたたかくした貨車をつつつけて送ったほどでした。

うえのもり 「上野森」(地名) 1 上野の森

十五13 7 ㊦ ㊦ 月照らす上野の森を見つあれば家ゆるがして汽車ゆきかえる

うえぼうそう「植抱瘡」(名) 1 うえぼうそう

四4 5 うえぼうそうの知らせは、ここからきま

す。

うえる「飢」(下二) 1 うえる 《―エ》

九19 4 おりから南へ飛行中だったつばめは、食に

うえ、つめたい雨にずぶぬれになって、

うえる「植」(下二) 26 うえる 植える 《―エ・―エル》

四8 8 まわりには、さくらの木がたくさんうえてあります。

七9 3 ㊦ わたしをうえてくれた卒業生たちは、どこにどうしているだろう。

七20 5 ㊦ 私のうちでは、だいこんを、庭に二十本

うえたんです。

七65 5 どんどん、どんどん、うえていく。

七65 5 みんなそろつて、うえていく。

八99 3 あいだを30cmぐらいずあけ、きそく正しく植えました。

八99 3 1かぶに3本ずつ植えたのと、1本ずつ植

えたのと二とおりにして、

八99 4 1かぶに3本ずつ植えたのと、1本ずつ植

えたのと二とおりにして、

八99 6 やく12平方mに150かぶばかり植えまし

た。

八101 4 みんなで植えたなえが、いきおいよく育つていきます。

八101 6 1本ずつ植えたなえが、だいたい7本ぐら

いにふえました。

八101 7 3本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえま

したが、

八〇六 2 1本ずつ植えたかぶには、ほか10ぐらいついでにいました。

八〇六 3 3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので16、ほかのは、だいたい12ぐらいでした。

九三4 5 ちよまを植えた一アールあまりのところです。

九三5 6 近所からわけてもらったさつまいものなえを、手わけして植えていきました。

一〇七 9 トマトが畑に植えてあれば、

一〇九 4 金次郎は、また、人がすてておいたいねのなえをひろって、〈略〉植えてみました。

一一二 8 この一ぴょうをもとにして、〈略〉植えるところをふやしていたりするうちに、

一一四 8 やぎ小屋のまわりには、おかあさんのおすきなライラックを植えましょう。

一二六 3 長者は、なんと思っただか、なん千アールの田をきょう一日で植えてしまえといいつけた。

一二六 3 きょう植えたなん千アールのあの美しい田さへなく、

一三〇 7 これを生かすのは、〈略〉、じゃがいもか牧草を植えることにありますが、

一三〇 8 もっともむずかしいのは、あれ地に木を植えることです。

一三二 9 これをノルウェー産のもの間に植えてみると、両種のもみは、たがいにならんで生長し、

一三二 26 アルプス産の小もみを植えたので、かれのはふせがれましたが、

うお 「魚」(名) 17 魚 ↓ ころお

一三八 4 三くみは魚の名をあつめました。

一三九 3 魚の名は十三あつまりました。

一三二 2 川にいる魚と海にいる魚とをわけな

さい。

一三二 2 川にいる魚と海にいる魚とをわけなさい。

一四〇 3 である人 うらしまたろうたいえびそのほかいろいろな魚

一四〇 9 いろいろな魚がでてきてならぶと、そのうしろから、おとひめさまがあらわれます。

五七九 葉のかげぼうしが、魚のようにおよいでいます。

六八〇 5 二 いさんは毎日海へでて、魚をとっていらつしやるが、

六八三 6 大きな魚らしい。

六八四 1 糸がぶつとつりと切れて、魚はにげる。

六八五 3 三 つりばりを魚にとられてしまいました。

六八七 3 三 つりばりは魚にとられてしまおうし、

九三三 5 三 らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだんへつてきたそうです。

九三三 6 三 まえは、もっともつといろいろな魚がいたそうです。

一二六 2 八郎はその魚をとってやいてたべた。

一二九 8 4 このほか魚では、たい、さば、まぐろ、かつおなどをたべました。

一五八 8 1 二 なんにも知らないという幸福で、みんな魚のようにつんぽだし、

うお いち 「魚」(話し) 1 魚一

六九四 10 だれか、このかたのつりばりをとっていったものはないか。魚「ぞんじません。」

うお さん 「魚」(話し) 1 魚三

六九五 1 魚三「ちつともぞんじません。」

うお たち 「魚達」(話し) 1 魚たち

六九五 7 だれか知っているものはないか。魚たち「ほんとうです。」海の神「おかしいな。」

うお たち 「魚達」(名) 4 魚たち

四一四 5 魚たちはごちそうをはこんできます。

四一四 2 魚たちが、たくさんでてきて、にぎやかなおんがくにあわせておどりはじめます。

六九三 9 女の人は、魚たちをたくさんつれてでてる。

六九七 10 魚たちが合唱をする。

うお ども 「魚共」(名) 2 魚ども

六九三 7 魚どもを、みんなこへよび集めるように。

六九三 10 魚どもをよんでまいりました。

うお に 「魚」(話し) 1 魚一

六九四 11 魚一「ぞんじません。」魚二「とりません。」

うお ン うお ン うお ン (感) 1 ウォン、ウォン、ウォン

三八八 3 はげしくまわる。すべる、すべる、ながれる。ウォン、ウォン、ウォン。

うか が う 「伺」(五) 3 うかがう 《一いつ》

九六〇 11 ちよつと裁判に困りましたので、あなたのお考えをうかがいたいと思いましたのです。

一七三 11 大どくとうかがいました、おそろしい『ぶす』をたべて死ぬのが、いちばん早道と

一四二 6 3 そののちはドイツ医学がおもに傳わったとうかがったが、

うか が う 「窺」(五) 1 うかがう 《一ワ》

一四六 1 それは、かれが、〈略〉母へ送ったつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。

うが っ 「穿」(五) 1 うがつ 《一チ》

一四六 4 その細いやわらかなものが、地をうがち岩をおしわけ、深く廣くのびていく。

うか び あ が ー 「浮上」(五) 1 うかびあがる 《一ツ》

八66 2 水はひなたたちの頭の上を流れたが、すぐにうかびあがってきて、うまくおよいだ。

うかぶ「浮」(五) 18 うかぶ《一ブーン》

三63 5 みずうみにはボートがうかんでいました。

五89 7 韻会 うらの山から海べをみれば、波にうかんださが鳥。

六36 11 夕やけ雲がうかんでいる。

六40 8 小川や、いな田などの、きれいな、楽しかった思い出が、うかんできえていく。

六110 9 そのとき、新しいことがあたまにうかんだので、

七9 11 さくらの花が、白くうかんでみえる。

七66 3 雲一つうかんでいる。

八13 9 ほおじろの声をきくと、ピオのすがたがありありとうかんできて、

九110 7 雪けむりがきえて、先生のお顔がうかぶ。

九111 8 先生のからだは、ちゆうにうかんだ。

十54 12 わずかのことですが、この中には、妹のすがたが、ありありとうかんでいます。

十一77 4 感謝するような色が、そのひとみに、ちよつとのあいだうかぶようにみえました。

十一77 11 そのふくれあがった顔の上に、きわめてかすかなほおえみがうかんだのを

十一89 1 やさしい色がその目にうかぶこともありましたが、

十四25 3 私は、このお話から、さまざまなこと心にうかんできた。

十四64 7 空中にうかんでいた雲が消えてしまったあとには、

十四71 7 湯の中にうかんでいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずです。

十五120 4 はじめてこの学校の門をくぐったときのこと、はつきりうかんできた。

うかべる「浮」(下一) 5 うかべる《一ベーベレ》おもしろうかべる

一36 1 6 うみになって、せかいじゅうのおふねをうかべたいからです。

三27 4 海にうかべて、大ぜいのせんだうがりこみました。

三57 6 韻会 うたをわすれたカナリヤは、ぞうげのふねにぎんのかい、月夜の海にうかべれば、

わすれたうたを思い出す。

十29 9 和音を耳にしたときは、組みあわされた一音一音のことも、心にうかべてみたいのです。

十一80 4 病人は、(略)、うれしそうな色を顔にうかべながら、

うかれ ↓ おおうかれ
うがん「右岸」(名) 2 右岸

九122 4 右岸や左岸では、その味がきえてしまうことがあっても、

九126 2 そこで氣をつけてみると、右岸からさらさらと流れ落ちる小さな谷川がある。

うきあがる「浮上」(五) 1 うきあがる《一ッ》
六118 5 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、ただしちゃんの顔が、生き生きとうきあがっていました。

うきよえ「題名」1 浮世絵
十二111 5 浮世絵

うきよえ「浮世絵」(名) 2 浮世絵
十二111 8 この絵は北斎という江戸時代の人のかいたもので、浮世絵といえます。

十二111 9 この浮世絵は、版画で、絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人と

の共同作品なのです。

うく「浮」(五) 8 うく《一イーキ》
五58 6 韻会 なんだか、青い、青い水の中にういていようだ。

七5 4 白いちようが、ういたりしずんだりしながら、光の中をおよいでいたが、

七91 1 うさぎのふんを、水の中へいれてみたらうきました。

八28 3 川の水は銀色に光り、はくちようがしずかにういていました。

八94 5 ういたもみがあつたので、手ですくってみ

ますと、かるいもみともみがばかりでした。

十54 2 きんぎよが一びき、すいすいとういてきたかと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。

十一46 10 みわたすかぎりのじやがいも畑のうねの向こうに、いつもぽかりとういていたえぞ富士。

十四64 6 空気中には、それが、しぜんにたくさんういているのです。

うぐいす「鶯」(名) 2 うぐいす ↓ やぶうぐいす
三52 4 韻会 うぐいすはうめの木にとまり、「高い、高い。」といました。

五46 5 おつかいにいくとき、うらの竹やぶのそばを通ったら、おくの方でうぐいすの声がした。

うぐいすさん「鶯」(名) 3 うぐいすさん うぐいすさん

二69 8 韻会 まあ、うぐいすさんよ。

二69 9 韻会 うぐいすさん、うぐいすさあん。

二69 9 韻会 うぐいすさん、うぐいすさあん。

うけあう「請合」(五) 1 うけあう《一ッ》
七35 11 「だいじようぶです。(略)。」とうけあつて、さぶろうをつれてきたのです。

うけいれる「受入」(下一) 1 受けいれる《一レ

ル》

九148 いい音楽をきいても、それがわからないのは、その高さを受けいれるだけの心持をもっていないからであらう。

うけかえす「受返」(五) 1 受け返す 《―ス》

十二863 チルデン選手は、〈略〉、やわらかなボールだったので、無事に受け返すことができ、

うけつぐ「受継」(五) 1 うけつぐ 《―イ》

十五501 せつかくうけついでできたこのしごとは、ぜひ続けてください。

うけつづける「受付」(下二) 1 受けつける 《―ケ》

十3911 だいち、母貝は、その核をそこにはきだして、受けつけなかった。

うけとめる「受止」(下二) 3 うけとめる 受けとめる 《―メ》

四503 つよい がんが、三ばで、かっちゃんのおちていくのを、下からうけとめました。

七541 ぼくは、しっかり受けとめて、すぐセンターに渡した。

七545 ぼくはよこだきに受けとめた。

うけとり「受取」(名) 2 受けとり

五2810 むこうの店に品物をとどけて、受けとりをもって帰ってくるとちゅう、

五291 まあ、受けとりをおみせ。

うけとりにくい「受取悪」(形) 1 受けとりにくい 《―イ》

九9411 受けとりにくい氣持でいるが、〈略〉、たかぎのそばにより、だまったままそれを取りあげる

うけとる「受取」(五) 5 うけとる 受けとる

《―ッ・ーリ》 〇おうけとりくださる

二529 おかあさんは、本をおいて、りんごを手

にうけとります。

四544 一わのがんが、みずうみのきれいな水にくむと、これをうけとった一わが、

六1227 おさるさんは、きよろきよろしながら、まつかさを受けとりました。

七395 おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人に渡しました。

十四8412 空から降ってきた雪の一ひらを受けとって、それをくわしく観察してみると、

うけもち「受持」(名) 4 受持

五386 こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手紙を書いてもらって、

五387 きみの受持の子どもたちに、それを送ってあげよう。

五556 そこへ、受持のやまもと先生がおいでになって、「略」と、さそってくださいました。

十五1211 受持の佐藤先生と、教室でお別れをしたうけもち「受持」(五) 2 受け持つ 《―ッ・ーツ》

五386 ぼくも、三年生を受け持っている。

十二4412 からだ全体と右手を受け持つ人、左手だけの人、〈略〉手わけしているんだが、

うけやすい「受易」(形) 1 受けやすい 《―イ》

十二861 清水選手は、ボールをやわらかくして、しかも受けやすいところに、送ってやったので

うける「受」(下二) 16 うける 受ける 《―ケ・ケル》 〇おうけなさる・かいうける・ひきうける

二497 上にながてはうけ、うけては上にながて、よろこびます。

二498 うけては上にながて、よろこびます。

六105 ねじがその光を受けて、ピカリと光った。

六335 風を受けるたびに雲のからだのかっこうがかわる。

八704 しちめんちようは、風を受けた船のほう

うにからだをふくらませて向かってきた。

八912 はくちようは、その受けてきたまずしさとふしあわせとをかねて喜んだ。

十267 日の光をいっぱい受けた、はればれとした父と子。

十一2212 おとなの人たちはおどろいて、すぐには受けてくれませんでした、おしまいは、喜んではいてくれました。

十二738 子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようしますが、あらはその手にはならないで、顔にあたったり

十三2210 長男、フレデリック・ダルガスは、父の質を受けて、植物の研究がすきでしたが、

十三242 第一、ユートランドの氣候が、そのよい感化を受けました。

十三3512 はとにふえをむすびつけてとばすのであるが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。

十四3611 先生から、星をつかめといわれ、そのことばにふかい感動を受けたということだ。

十四769 それがいわゆる季節風(モンスーン)で、われわれが冬期に受ける北西の風と、夏季の南がかった風になるのです。

十五862 おまえさんたちを、ごちそうによぼうというのだらう。それを受けてはいけないよ。

十五862 なにも受けてはいけないよ。

うごかす「動」(五) 28 うごかす 動かす 《―シース・ーセ・ーソ》

一233 そこで、りようてをはねのようにうごかしました。

二642 りようてを車のようになうごかす。

二668 けれども、うごかすはやさにかわりは

ない。

五三四 この工場のきかいを動かしている力は、な
んでしよう。

五三六 この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場の
きかいを動かすのです。

六九五 あなたが、それを動かそうと思って動か
しているの。

六九五 動かそうと思って動かしているの。

七六四 夏の風がふきこんで、新聞など動かして、
ふきぬける。

七八七 いつも、どこかを動かしています。

一三四 横糸はおさによって、右から左、左から右
へといききするのであるが、これを人の手によら
ず、機械の力で動かすようにしたかった。

一三八 機械で動かせば、もっと早く織ることがで
きるし、

一三五 佐吉は、〈略〉、設計図をひいては組みたて、
組みたてては動かしてみた。

一五二 その足も動かすことはできなかった。

一七六 そうして、なにかいおうとでもするよう
に、すこしくちびるを動かしました。

一八〇 ものをいおうとでもしているように、
〈略〉、むりにくちびるを動かそうとしました。

一八八 病人は〈略〉、ときどきむりにくちびる
を動かして、なにかものをいいたげにしました。

二一六 そんなところをはつきりつかまえたのも
のだと思って、しきりに木炭を動かしていた。

二二七 はじめ短い羽を動かしてピッピッと鳴
いていたときには、

二二五 せんだって、ふと羽を動かしてみたら、
ピッピッという音がしました。

二二二 あなたの歌には、そのさびしい氣持が

でているので、人の心を動かすのだって、

二三四 ただ、さるの人まねのように指を動かす
だけでした。

二四六 もちろん人が動かすんだがね。

二四〇 へえ、そんな大きなものを、どうして
動かすんでしょう。

二四二 ものによつては、三人がかりで一つの
人形を動かすんだ。

二四六 命のない人形を思うままに動かして、
二四八 手がるでおもしろいし、自分で作って
自分で動かすのは楽しいものだ。

二五三 人形がかたむかないように、話すときは
人形の顔を前後に動かす。

二五二 私たちを心のそこから動かし、私たち自
身の生活を思わずふり返らせないではない強い
眞実の力が、こもっているのです。

うごき 「動」(名) 2 動き ↓みうごき

二七三 私は、身動きもせず、立ったままで、全
身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。

二四五 そこで、三郎くんの声と動きだけで、四
人とそれぞれ話をしているようすを、見せなくて
はなりません。

うごきかた 「動方」(名) 1 動きかた

二七八 小鳥がくれば、〈略〉、動きかたや、羽の色
や、形などを、こまかにしらべたいのです。

うごきだす 「動出」(五) 1 動きだす 《—シ》

二四三 このまの人の人形が、動きだしそうな氣
がするんだけど——

うごきのせいかい 「題名」 1 動きの世界

二四二 動きの世界
うごきまわる 「動回」(五) 1 動きまわる 《—
ラ》

一四六 しめきったへやで、人の動きまわらない
ときだと、ことによくわかります。

うごく 「動」(四五) 58 うごく 動く 《—イ—
カーキ—ク》 ↓ゆれうごく

一七三 まどのきのはが うごいてる。

一四三 みんなも うごいて いますよ。

五九四 ちつとも動かないじゃないか。

六三七 はなが動く。

六三八 口が動く。

六五二 月をみつめていると、月は動かないで、雲
が大いそぎでとんでいくようにもみえます。

六五八 お月さまがずんずん動いていくのがよく
わかるよ。

六五九 お月さまをみていると雲が動いていくし、
雲をみているとお月さまが動いていく。

六五九 動かないと思つてみた月は、もうさっきの
枝のあいだにはなくて、

六七五 命って、動くものでしょうか。

六七六 たとえ動いても、それだけでは命があると
はいえないと、ごろうは思いました。

六七六 この手が動かないから、やはり雪だるまは
命がないのかなと思ひました。

六七九 先生、ぼくたちは動いたり息をしたりす
るから、生きているんでしょう。

六七四 たしかに、動いたり大きくなったりして
いるものは、みんな生きものだね。

六七六 雪だるまは動きもしないし、息もしてい
ませんね。

六七九 いぬは動くし、いきをするから命がある。

六七〇 風や、自動車や、水車は、動いていても息

をしないから、命がないんだと、

六七八 木とえ動かない木でも、草でも、命をもっているのだよ。

六七八 ころろさん、あなたは、ねむってしまつたら動かなくなるでしょう。

六八八 きちんとはまったとき、まいた紙を糸できりきりとまいて、動かないようにした。

七三八 私と弟のさぶろうは、乗るには乗つたものの、動くことさえできません。

七六二 さきだけみえることし竹が、ざわざわと、動いている。

七九三 しばらく動かないで、いたそうにしています。

七九三 七ひきの生まれたばかりの子うさぎは、わらの中の毛の中で、元気に動いています。

八二二 虫は、それにとりつくと、《略》それにしがみついて、動かなくなっていました。

八二四 しばらくそのままのしせいで動きません。

九三九 のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず木にしがみついたりしました。

九四〇 木が動くので、かれ枝はなかなかたき落せませんでした。

九五二 みえない方の目は、白くびくびくうごき、

九六二 どうしても手足がうまく動きません。

九六六 目のまえのぼらの花が動いています。

一〇三 機械は、生きもののように動いていた。

一〇九 だが、思うように動くものは、なかなか生まれなかった。

一三六 ためしてみると、はたしてよく動いた。

一六二 一方の手で、ふとんの上におかれたまま動かずにいる、うでをつかみました。

一六九 病人は動きませんでした。

一六九 少年をみつめて、いくらかわかったように

でしたが、くちびるは動きませんでした。

一七二 私の手にふれるあらゆるものが、生命をもつて動いているように感じはじめました。

一八四 この人形だつて、みんながねしずまつたあとで、動いているのかもしれないよ。

一八四 でも、動く人形だつてあるよ。

二〇四 その人形などは、《略》、まるでたましいがはいっているように動くよ。

二〇五 まゆ毛も、目も、口も動くし、

二一四 「とんでいる。」で動いているようすがすぐわかる。

二二二 そうして、人は、道理によつて動かないればならない。

二二九 月も、東の空から西の空に向かって動き

ます。

二三二 天は動き、地はじつとしていて動かない

という、いわゆる天動説が行われていました。

二三三 地はじつとしていて動かないという、

二三四 天体を観察し、数学でこまかに計算した結果、《略》、天は動くものではない、地球が動く

のだということを、明らかにしました。

一三四 地球が動くのだということを、

一三五 地は動くといつても、それは一種ではあり

ません。

一三三 だから、車の動いている間、たえまなく「ギリギリ、リリリリ」がひびく。

一四〇 光った線や、うす暗い線が、不規則なも

ようなようになって、ゆるやかに動いているのに

一四二 湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、

その方へ向かつて動きます。

一四八 湯の中にうかんでいる小さな糸くずなど

の動くのを見ていると、

一五四 ただみればこれかりそのぼらの花

おどろきて見ればその花動く

一五六 私は、道のまん中で、無言でつっ立った

まま動かなくなった。

うごける「動」(下) 1 動ける《一ヶ》

一五三 そんなにぶらさがっちゃ、電車は動け

ませんよ。

うさぎ「兎」(名) 44 うさぎ ↓おやうさぎ・くろ

うさぎ・こうさぎ・しろうさぎ・ちゃうさぎ・はは

うさぎ

一八五 うさぎ、うさぎ、なにみてはねる。

一八六 うさぎ、うさぎ、なにみてはねる。

一八七 うさぎをかつてあるところにきまし

た。

一八八 白いうさぎが、はこの中でねそべっ

ています。

一八九 うさぎの目はもも色のかわいらしい

目です。

一九〇 となりのうちから、うさぎをもらつて

くることかな。

一九一 おれがさきにうさぎをみつけたのだ。

一九二 私たちは、うさぎをかうことになりました。

一九三 先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶

色のうさぎを、かごにいれて持っていらつしやい

ました。

一九四 黒いうさぎと、白いうさぎと、

一九五 白いうさぎと、茶色のうさぎを、

一九六 うさぎはどんな草を、いちばん喜んでたべ

るか、しらべてみることにしました。

一九七 うさぎは、すこしもじつとしていません。

一九八 うさぎは、にんじんを、とても喜んでたべ

じやんけんをして、おにをきめました。

六127 四ひきのうさぎさんたちは、とんとこ、とんとことトンネルの中を走っていききました。

六128 おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさんたちは、うまくにげました。

六129 かくれているうさぎさんたちは、〈略〉、「略」といって、うまくにげました。

六130 うさぎさんたちは、たぬきさんがかわいそうになりました。

六131 うさぎさんたちは、そのまま向こうのやぶの方へいってしまいました。

六132 うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、まるくならんで、話をしました。

六133 かけっこは、うさぎさんたちのおとくいです。

六134 うさぎさんたちのまえに、大きなしかさんがあらわれました。

六135 もし自分が勝ったら、このしかの角で、うさぎさんたちをつきあげるといのです。

六136 うさぎさんたちは、困ってしまいました。

六137 ちつともいいことではないと、うさぎさんたちは話しあいました。

六138 うさぎさんたちは、しかさんとならびました。

六139 そこには、もううさぎさんたちはいませんでした。

六140 しかさんは、うさぎさんたちのあとを、どんどん追いかけてました。

六141 うさぎさんたちは、谷をわたり、みねをつこえました。

六142 やがて、うさぎさんたちは、大きな岩のところにでました。

六135 五ひきのうさぎさんたちは、ここでゆっくり休むことにしました。

六136 うさぎさんたちは、そのことをすこしも知りませんでした。

六137 とらさんは、晝ねをしていたのですが、うさぎさんたちがあまりガヤガヤ話をするので、

六138 とらさんは、そつと首をのびして、うさぎさんたちの方をのぞきました。

六139 五ひきのうさぎさんたちは、あせをふいたり、ねころんだり、足をもんだりしていました。

六140 うさぎさんたちは、もうにげようと思ってもにげることはできません。

六141 うさぎさんたちは、いっしんになって、神さまにおいのりをしました。

六142 そのあいだに、うさぎさんたちは、手をつないで、そこをにげだしました。

六143 五ひきのうさぎさんたちは、みつばちさんのことばを、たいへんありがたく思いました。

うさぎたち「兎達」(名) 2 うさぎたち

六141 兎 うさぎたちは、なんてひとがいいんだろう。

六142 しかさん、私たちが勝ちましたよ。けれども、あなたの角はおりません。うさぎたち。

うさぎども「兎共」(名) 1 うさぎども

六139 兎 「こら、うさぎども。」と、われがねのような声をたてました。

うさぎにつき (課名) 2 うさぎ日記

七3 兎 うさぎ日記………八十六

七86 兎 うさぎ日記

六179 うしもうまもそうだ。

八309 そのせつな、けんぎゅうは、うしの首をかくボンボンとたたきました。

八310 うしは、うまくふみとどまって、おとなしく草をたべはじめました。

十一344 さんえ運ぶ子、うし追うおきな、家内そろって田植える。

十一476 北海道の家には、うしが四頭いた。

十四813 牛を追う。

十五72 兎 うしはしずかにおのおのの大きな耳をむけぬ

十五102 月が出る山の家にうしをつないだ木うじ「蛆」(名) 2 うじ

八1410 ニミリほどある、白いうじのようなうちゅうが、はいだして、

八179 虫は、はじめは、白い、よわよわしいうじのようなかたちをしています、が、

うしなう「失」(四五) 13 うしなう 失う「イ・ウ・ツ・フ」

十五10 ただ、その美しいものを、すなおに感じとる心を、われわれは失っている。

十六1 毎日の生活のらんざつとあわただしさの中に、それを失っている。

十一627 命を失うようなあぶないときでも、

十二402 ケラーは、〈略〉、大病にかかって、みるはたらき、きくはたらきを失いました。

十二89 ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。

十三182 もともとせまい、小さな國ですのに、そのもつともよい土地を失いました。

十三191 かれは、〈略〉、つるぎで失ったものを、すきでとり返そうと決心したのです。

十三258 戦いによって失われたシュレスウィヒとホルスタインとは、すでにつぐなわれて、
 十四511 父を失った直後、文学修業のためにパリーに出て、
 十四446 くだちるに歌をもて、勇氣を失うな。
 十四4812 助け船のくるのを待つ間、〈略〉、寒さに氣を失って、まるたから手をはなさないように、
 十五174 少女たちよ、〈略〉、つづれ着るとも、失うな、やさしく清き心が心。
 十五274 おどろいて氣でも失ったのか、すこしもさわがず、あばれもせず、じっとしています。
 うしろ〔後〕(名) 31 ウシロ うしろ 後
 一487 おとうさんは、うしろのおきやくさんのもつをもつてあげました。
 二484 うしろをふりかえって 手まねきをします。
 二502 うしろをふりかえって、手まねきをします。
 三216 できあがったものをうしろのかべにはりました。
 三563 なたをわすれたカナリヤは、うしろの山にすてましょか。
 三636 三人の男の子は、うしろにこしかけました。
 四1101 魚がでてきてならぶと、そのうしろから、おとひめさまがあらわれます。
 四1292 まつの木のうしろから、ひとりの女がでてきます。
 六185 オルガンをひいているもの、〈略〉、そのうしろに合唱隊がならんで、うたをうたっています。
 六326 顔のうしろを雲がとぶ。
 七368 すぐうしろのおばさんも、「〈略〉。」と、心

配そうにいました。
 七385 さきの方へいらっしゃい。」うしろのおばさんがいってくれましたので、
 七703 それがすむのをまっていたのか、すぐうしろに、月は、音もなく、のっそりとでていた。
 八75 だんだんとずさりして、うしろに氣づかず、テーブルのはしからころげ落ちたりしました。
 八232 虫はぐつとそり返るようになり、頭をうしろにさげました。
 九5611 いちろうはぎよつとして、ひと足うしろにさがって、「〈略〉。」といました。
 九925 うしろを向いてじゃんけんをする。
 九983 たかぎ、うしろの木をひとまわりして、そつとやまだに近づく。
 九1061 いい先生も、ずつとうしろの方から、「〈略〉。」とさげられた。
 九1082 「〈略〉。」と、いい先生がうしろの方から追いつたようにいわれた。
 十493 ワンワン——ミテルワウシロ——
 十5112 とうとう、くるつと、うしろを向いてしまったわけです。
 十6812 いつでもにげだせるかつこうで、こしをうしろにひき、
 十二1068 二ひきのうさぎが、うしろから手をふり足をふって、おうえんをはじめました。
 十五2812 鳥を後へひっくり返すようにするいきおいで、ぱつと、地面へすばやくとびおりました。
 十五309 少年が女の子の後にかばうようにして、
 十五3112 その中で、女の子の後にかばいながら、少年は苦しい戦いを続けていました。
 十五3211 少年ははつとして、思わず後へたおれかかりましたが、

十五1063 その後にいるのは、『善人であることの大きな喜び』で、
 十五10611 その後に、『もののわかる喜び』が立っていますが、
 十五1087 あすこに、ずつと後の方に、ペールをかぶったままで、ちつとも出て来ないのは。
 うしろあし〔後足〕(名) 3 うしろ足
 六1265 まえ足でほつては、うしろ足で土をはじきだしました。
 七906 うさぎがうしろ足で立ちました。
 十508 いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかをかくようなかつこうをしました。
 うしろがわ〔後側〕(名) 1 うしろがわ
 十二5310 ひとさし指を首のなかにいれ、おや指となか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。
 うしろすがた〔後姿〕(名) 3 うしろすがた
 四1019 うらしまは、かめのうしろすがたをみおくりまします。
 九965 そのうしろすがたをみて、「〈略〉。」
 九13211 にげていくみつばちのうしろすがたをみていましたが、くもはどうすることもできません。
 うず しいしうず
 うず〔渦〕(名) 10 うず
 四936 風にふかれて、うずをまいて、どんどん降ってくる。
 十四659 つぎに、湯げがのぼるときには、いろいろのうずができます。
 十四662 けむりがゆらゆらして、いくつものうずになり、
 十四667 茶わんのすぐ上から大きなうずができて、〈略〉まわりながら、のぼっていきます。
 十四6610 これとよくにたうずで、もっと大きなの

が、庭の上などにできることがあります。

十四676 大きなうずができ、それが、ちょうどつまきのようなものになって、

十四6710 茶わんの上や、庭さきでおこるうずのよ
うなもので、もっと大じかけなものがあります。

十四6712 それは、らい雨のときに、空中におこっ
ている大きなうずです。

十四685 あたたかい空気がぼっていくあとへ、
入れかわりに、そのつめたい空気が下からふきこ
んできて、大きなうずができます。

十四688 うずの高さも、四キロとか八キロとかい
うのですから、

うすあかい「薄赤」(形) 1 うす赤い《一ク》

六3610 それにつれて、空がうす赤くなってくる。

うすい「薄」(形) 5 うすい《一イーク》

五569 図 そのまわりに、うすい、大きな、麦わら
ぼうしのつばみたいなものもみえる。

八165 虫たちは、《略》、皮のうすい、しるの多い
木の根をさがしてあるきます。

九746 馬車がすすむにしたがつて、どんぐりはだ
んだん光がうすくなつて、

十二685 小さなやわらかい物を切るのこぎりは
は、小さくてうすい。

十四9610 その火の光のさすところは、かべがきぬ
のようにうすくなつて、

うずうずする(サ変) 1 うずうずする《一シ》

九802 私たちは、もう、ほつてみたくてうずうず
していました。

うすきみ「薄気味」(名) 1 うすきみ

九1453 ふしくれた手、とがった足、うすきみのわ
るいかたち、

うすぐも「薄雲」(名) 1 うす雲

十四638 これは、白いうす雲が月にかかったとき
に見えるのと、にたようなものです。

うすぐもり「薄曇」(名) 1 うすぐもり

七625 なの花ちらほらさきはじめ、うすぐもり。
うすぐらい「薄暗」(形) 5 うすぐらい うす暗
い《一イーク》

七374 人ごみのうすぐらい中で、さぶろうは、元
氣よくにこつと、私をみあげました。

八489 中には、うすぐらいひが一つともっている
だけでした。

九3711 図 なん十メートルもある高いすぎやまつの
はえているところは、晝でもうすぐらく、

十一684 大きなへやはうす暗く、あたりにははげ
しくすりのにおいがただよっていました。

十四6912 ゆらゆらした光った線や、うす暗い線が、
不規則なまのようなになって、

うすくらがり「薄暗」(名) 1 うすくらがり

八53 あるデパートのまえのうすくらがりに、大
ぜい人が立っているの、

うすぐろい「薄黒」(形) 1 うす黒い《一イ》

七613 うす黒い雲は、どこかへいってしまったの
に。

うすごおり「薄水」(名) 1 うすごおり

十一418 図 池にむすぶはうすごおり、庭に立った
はしも柱。

うすべにいろ「薄紅色」(名) 1 うすべに色

七56 こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこ
えて、うすべに色の空にきえた。

うすまる「埋」(五) 1 うすまる《一リ》

五373 このような木が、たおれて土にうすまり、
長いあいだかかって石炭になったのです。

うすむらさき「薄紫」(名) 3 ウスムラサキ うす

むらさき

四654 うすむらさきの雲が、おだやかにたなび
いていました。

六497 図 うすむらさきにほのぼのと、明かるくそ
まる朝の空。

六5910 図 ウスムラサキニ——七 ホノボノト——

五 アカルクソマル——七 アサノソラ——五
うすめる「埋」(下二) 1 うすめる《一メ》

十二753 その夜は、すべての音も雪にうすめられ
たようにならずかでした。

うすももいろ「薄桃色」(名) 1 うすももいろ

一391 うすももいろのあさがおのはなが、いつ
つかきねにさきました。

うずら「鶉」(名) 1 うずら

一5510 ぼけつとから うずらの たまごほど ある
だいやもんどをひとつとりだして、

うすれゆく「薄行」(四) 1 うすれゆく《一ク》

九281 文 二重にじ青田の上にうすれゆく
うせる ひきえうせる

うそ「嘘」(名) 3 うそ

二416 図 たろう「うそ つくな。」山びこ「うそつ
くな。」

二417 図 山びこ「うそ つくな。」

四132 図 天人は、うそという ことを知りませ
ん。

うそじ「嘘字」(名) 2 うそ字

五179 図 このわたしのをごらん。うそ字さ。
五171 図 わたしは、ちゃんとゆくさは知ってい
るが、うそ字だから、とんでもないところによら
れるかと思って、びくびくしているところだよ。

うた「歌」(名) 59 うた 歌 しかわのうた・くち
びるにうたをもて・こうた・こもりうた・そらのう

た・たうえうた・にじのうた・めいめいのうた・や
とうた・わらいのうた

— 216 罫 おてて つないで、のみちを いけば、

〈略〉、うたをうたえば、くつがなる。

— 221 「おてて つないで」の うたを うたいま
した。

— 222 それから、この うたの ゆうぎを、みんな
がかつてに かんがえて おどりました。

— 235 罫 「うたを うたえば」では、くちに てを
あてて、らっぱのように しました。

— 367 罫 たかい 木に とまつて、うたを うたい
たいから です。

— 362 罫 うたを わすれた カナリヤは、うしろの
山に すてましょか。

— 365 罫 うたを わすれた カナリヤは、せどの
こやぶに いけましょか。

— 371 罫 うたを わすれた カナリヤは、やなぎの
むちで ぶちましょか。

— 374 罫 うたを わすれた カナリヤは、ぞうげの
ふねに ぎんのかい、月夜の 海に うかべれば、

— 377 罫 月夜の 海に うかべれば、わすれた う
たを 思いだす。

— 545 水を ふくんだ 草のうた、こけのうた、土の
うた、いわのうた。

— 545 こけのうた、土のうた、いわのうた。

— 546 土のうた、いわのうた。

— 546 いわのうた。

— 543 罫 ぼくは ねえさんから、よく うたを おしえ
てもらいました。

— 544 罫 明かるい 世界の 空とんで、平和の うたを
うたおうよ。

— 586 罫 「略」と、うたのように ふしをつけて

よびながら、ひとりの 子どもが きます。

— 589 罫 こうして 右の手で だいてな、左の手で か
かえてさ、それから、うたを うたうの だよ。

— 618 罫 そのうしろに 合唱隊が ならんで、うたを う
たっています。

— 659 罫 うたうたは、なぜ うたい やすいかと 考え
ました。

— 659 罫 うたうたは、そのことばの 声のかずが、
五か七になつて いるのです。

— 672 罫 だるまさんの うたをつくつて、うたつて
あげようか。

— 134 それから、三人の 少女に、歌を 歌ってほし
いと頼みました。

— 138 少女たちは、〈略〉、いなかの 歌を 歌ってき
かせてくれました。

— 231 「春の小川」の 歌が ひびいてくる。

— 74 罫 「略」太郎かじやと 次郎かじやは、こ
んな 歌を 歌いながら にげ しました。

— 114 罫 小鳥たちは みんな めいめいの 歌を 歌う。

— 114 罫 一つの 太陽の下で、みんなが めいめいの
歌を 歌っている。

— 211 罫 あなたの 歌には、そのさびしい 氣持が
でているので、人の心を 動かすの だって、

— 246 罫 それが 音楽や 歌にあわせて しばいをす
るわけだ。

— 270 罫 曾良は、信州しんしゅうの人で、歌が たいそう
じょうず でした。

— 432 罫 くちびるに 歌をもて、ほがらかな 調子
で。

— 436 罫 日々の 苦勞に、よし 心配が たえなくと
も、くちびるに 歌をもて。

— 444 罫 くちびるに 歌をもて、勇氣を 失うな。

— 445 罫 しずけさの中から、とつぜん、まったく
思いがけなく、きれいな 歌が 流れ きました。

— 446 罫 マッケンナは、しばらく しんみりした 氣
持で、この 歌に 聞きほれて いました。

— 446 罫 かれは、いままで に どれだけ 歌を 聞いた
かしれませんが、

— 446 罫 このとき ぐらい、しみじみと 歌の ありが
たさを 味わったことは ありませんでした。

— 448 罫 どうせ 助からないもの なら、こういう 美
しい 歌に 送られて、死んで いきたいもの だと

— 448 罫 かれは、歌の 声を たよりに、その方にお
よいで 行きました。

— 448 罫 歌を 歌っているのは、その中の ひとり
でした。

— 448 罫 頭から 大波を かぶつても、平氣で 歌を 続
けて いました。

— 449 罫 「心に 太陽をもて、くちびるに 歌をも
て。」

— 449 罫 この おじょうさんは、この 歌を 知ってい
たかどうか 知りません。

— 449 罫 しかし、この おじょうさん くらい、この
歌の心を 生かした人は 少ないで しょう。

— 449 罫 この おじょうさんこそ、ほんとうに この
歌を 歌った人というべきです。

— 449 罫 おじょうさんの 歌を たよりに、マッケン
ナがおよいで 行ったように、

— 450 罫 その 歌を 歌っていた おじょうさんも、
〈略〉、みんな すくいあげられました。

— 450 罫 おしいことに、歌を 歌った おじょうさん
の名まえが わかりません。

— 450 罫 あの 美しい 歌は、いまも、われわれの 耳
に ひびいてくる ように 感じられる

十四864 ごくさいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

十五47〔文〕 空にとなえし わが歌は、あわれいずこに 落ちにけん。

十五56〔文〕 歌のもと末 ふたたびも、友の心にあられぬ。

十五826 「キャツキャツ」とさわいだり、歌を歌ったり、ぶつかったり、

十五858〔会〕 歌を歌っている。

十五975〔会〕 あれは、歌を歌ったり、おどりをおどったり、わらったりするけれど、

十五10112〔会〕 わらったり、歌を歌ったり、

十五1205 在校生たちがみんな、私たちのために送別の歌を歌ってくれた。

十五1206 その歌を耳にしながら、もつと下級生をかわいがっておけばよかったなと思った。

うたい 〔謡〕(名) 2 うたい

十六29 おじいさんやおとうさんがおうたいになるうたいを、きいたことがあるでしょう。

十六631 能は、そのうたいにつれて、役者が美しい舞を舞ったり、

うたいかた 〔歌方〕(名) 1 歌いかた

十四465 來客を前にして、客間で歌っているのとちつともちがわないうな歌いかたです。

うたいだす 〔歌出〕(五) 3 歌いだす 《—シー—ス》

八881 太陽がてりはじめ、ひばりが歌いだしたとき、

十七43 きゆうに、にっこりわらい顔になって、次郎かじやといっしょに歌いだしました。

十一347〔會〕 きのうの畑は水田となつて、晩にはかえるが歌いだす。

うたいやすい 〔歌易〕(形) 1 うたいやすい 《—イ》

六594 うたうたは、なぜうたいやすいかと考えました。

うたう 〔歌〕(五) 51 うたう 歌う 《—イ—ウ—エ—オ—ツ—ワ》 ↓うたをうたうきりぎりす・おうたう

—216〔會〕 おてて つないで、のみちを いけば、

《略》、うたをうたえば、くつがなる。

—221 「おてて つないで」のうたを うたいました。

—235〔會〕 「うたを うたえば」では、くちに てをあてて、らっぱのようにしました。

—367〔會〕 たかい 木にとまつて、うたを うたいたいからです。

—643 「みんな いい こ」を、おおきな こえてうたいました。

二379〔會〕 うたいながら、かえて いきました。

二575 「みんな いい こ」を うたいながら、あるいて いきました。

三382〔會〕 しょうかを うたっている 声が、オルガンに まじつて きこえて きます。

三404 きょう ならつたばかりの しょうかを、大声で うたいながら あるきました。

四817〔會〕 世界の子どもに うたわれて、きょうは、エスさま およろこび。

四8410 三ばんめに、すじむかいの みきこさんが、しょうかを うたいました。

五437〔會〕 ですから、花ばたけで、よくいっしょにうたいました。

五448〔會〕 明かい世界の空とんで、平和のうたをうたおうよ。

五891〔會〕 こうして右の手でだいてな、左の手でかかえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

五905〔會〕 それでな、さどが島をうたうときには、いつでもおじぎをするのだよ。

五1066 旅のひわも、大よろこびで、声をあわせてうたいました。

六186 そのうしろに合唱隊がならんで、うたをうたっています。

六201〔會〕 おおいにうたい、おおいにひいて、この夏の日を楽しもうではないか。

六256〔會〕 われわれは、おおいにうたおう。

六257〔會〕 うたおう、うたおう。

六257〔會〕 うたおう、うたおう。

六594 うたうたは、なぜうたいやすいかと考えました。

六597 うたうたは、そのことばの声のかずが、五か七になっているのです。

六722〔會〕 だるまさんのうたをつくつて、うたつてあげようか。

六986〔會〕 めでた、めでたとさかなたち、みんなでまうやら、うたうやら。

六1436 「《略》。」と、うたいながらいきました。

七74〔會〕 ならつたばかりの唱歌を、大きな声で歌っていく子ども、

八85 「いっぴつつけいじよう」と歌つたり、「ツンツンつっころばし」とさえずつたり——

八252 やがて死ぬけしきはみえずせみの声 と、むかしの人がうたつていますが、

八273 むすめたちが、樂しげに歌つたり、花つみをしたりして遊んでいました。

十134 それから、三人の少女に、歌を歌ってほしいと頼みました。

- 13 8 少女たちは、〈略〉、いなかの歌を歌ってきかせてくれました。
- 20 3 「にじの歌」を歌う子どもの声。
- 23 5 「くご」の文を大きな声で歌う。
- 74 9 「略」。太郎かじやと次郎かじやは、こんな歌を歌いながらにげしました。
- 11 14 小鳥たちはみんなめいめいの歌を歌う。
- 11 14 6 一つの太陽の下で、みんながめいめいの歌を歌っている。
- 13 6 4 ひばりやつばめも、やがて、遠い國からここに帰って来て、〈略〉、歌うだろ。
- 13 32 8 「略」。と歌う。
- 14 46 3 來客を前にして、客間で歌っているのと、ちつともちがわなような歌いかたです。
- 14 47 2 歌っている人は、どういふ人かわかりませんが、
- 14 48 8 歌を歌っているのは、その中のひとりでした。
- 14 49 11 このおじょうさんこそ、ほんとうにこの歌を歌った人というべきです。
- 14 50 4 歌を歌っていたおじょうさんも、そのほかの婦人たちも、みんなすくいあげられました。
- 14 50 7 おしいことに、歌を歌ったおじょうさんの名まえがわかりません。
- 15 82 6 歌を歌ったり、ぶつかったり、よろけたり、ねむりこけたりしています。
- 15 85 8 歌を歌っている。
- 15 97 5 歌を歌ったり、おどりをおどったり、わらったりするけれど、
- 15 99 4 「略」と歌い、子どもたちをとりまいて、陽氣なおどりをします。
- 15 101 12 歌を歌ったり、

- 15 120 5 在校生たちがみんな、私たちのために送別の歌を歌ってくれた。
- うたえる 「歌」(下一) 1 うたえる 《一エ》
- 6 59 5 どうして、ふだんの話がうたえないのかと考えました。
- うたがい 「疑」(名) 3 うたがい
- 7 85 8 もう、うたがいははれたことと思う。
- 14 53 1 だから、それは、私たち花のものだといふことはうたがいありません。
- 14 62 6 よく氣をつけて見ていると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、さまざまのうたがいがおこってくるはずです。
- うたがう 「疑」(五) 1 うたがう 《一ツ》
- 7 85 6 あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、わりはない。
- うたこえ 「歌声」(名) 1 歌声
- 11 36 7 夕風ふけばたいこ鳴り、清い歌声あちこちと、こよい楽しいばんおど。
- うたをうたうきりぎりす 「話手」 1 うたをうたうきりぎりす
- 6 20 3 この夏の日を樂しもうではないか。」
- うたをうたう 「そのとおり、そのとおり。」
- うち 「内」(名) 136 うち 1 おうち・おうちにいるこうふくども・そのうち・みるみるうちに
- 37 8 ちいさな川が、うちの まえを さらさらとながれています。
- 41 2 うちのなかではなした。
- 57 3 ぴよんちゃん、まきげちゃん、みんなわたくしのうちにいたきようだい。
- 59 1 それから、そろってしろちゃんのうちへいきました。
- 59 3 しろちゃんの うちは、〈略〉おはなばたけのなかにありました。

- 11 7 わけているうちに、そのわけがたが、いろいろにかわっていききました。
- 13 1 おばさんの うちから、大きなりんごをみつついただきました。
- 32 4 そのうちのひとりが、『略』といいました。
- 56 4 こんなことをかんがえているうちに、いつのまにか、ねむってしまいました。
- 20 1 えをかいっていくうちに、花の名も、鳥の名も、だんだんふえてきました。
- 22 5 なん年かたつうちに、このくすのきは、〈略〉、大きな木になりました。
- 31 7 うちの人のかいたてがみやはがきを、ここにいれます。
- 310 6 おじいさんの うちだんだんかねもちになりました。
- 4 8 3 まい子を うちまで おくりとどけてくれます。
- 42 1 うちこちまわっているうちに、ぴよいと中にはいりました。
- 42 9 ぼくの うちを かいただけです。
- 42 9 おばさんの うちへ いって、いもほりのでつだいをする ことかな。
- 42 9 となりの うちから、うさぎをもらってくる ことかな。
- 43 1 わたくしは、うちの にわに さいているコスモスの花をあげようと思います。
- 43 6 わたくしが、きのう、となりの うちにおつかいにいきました。
- 43 8 わたくしは、だまって うちへ かえってきました。
- 45 5 ねている うちに、いい こと 考えたん

だ。

四84 7 二ばんめに、となりのうちのひでおさんが、おもしろい紙しばいをしました。

四91 4 ひとはきはいて、うちにあがっておいでになると、ひたいからゆげがたつ。

四95 6 風にふかれてとんでいるうちに、いっしょになったりわかれたり、

四100 10 早くうちへおかえり。

四110 6 このあいだは、うちのかめをおたすけくださいまして、ありがとうございます。

四115 3 でも、うちのことにも気にかけますので、かえらせていただきます。

四128 7 だって、かえって、うちのたからにしよう。

四130 1 だって、かえって、うちのたからにしようと思えます。

五40 7 ぼくのうちには、うしが十三とういます。

五43 1 一日じゅうてつだいをして、うちに帰るころは、もう、あたりはくらくなっています。

五43 6 ぼくのうちは花屋です。

五66 9 おじいさんは、うちへ帰って、おばあさんに、このふしぎな話をしました。

五67 5 うちのおけは、もう、すっかりこわれてしまっているんだもの。

五69 5 うちのおばあさんは、家がほしいというのです。

五76 4 うちのおばあさんは、もう女王はいやだといっています。

五78 6 ひまわりの花は、いけださんが自分のうちのにわから、持ってきてくれたのでした。

五97 2 そういつているうちに、秋になりました。

五106 1 ある日、二三ばのひわが、さんちゃんのうち

ちのまつの木におりてきました。

六64 あれはなんの役にたつのだろう、〈略〉と考えているうちに、

六22 9 うちへ帰るところなんです。

六42 6 さあ、みなさん、日がくれきらないうちにおねがいします。

六102 6 二つのつつをのぼしたりちぢめたり、かげんしているうちに、はつきりした。

六117 2 うちへ帰って、そのたこをみて、作りかたを考えてみました。

六120 6 でも、のりがかわかないうちにあまりいじると、すぐはがれますよ。

七20 5 私のうちでは、だいこんを、庭に二十本うえたんです。

七20 6 そのうち、たねをとるために、一本だけのこしておきましたら、

七35 8 おばさんのうちへは、もう二どもいったことがあるのですもの。

七38 4 さあ、いまのうちに、さきの方へいらっしやい。

七39 11 高いところをメデシンボールのように送られていくうちに、にこにこ顔になり、

七67 1 方々のうちで、ふとんほしてある。

七80 4 とちゅうでひと休みしているうちに、つい、ねむってしまいました。

七85 10 早くいつてらくだをさがしなさい。あまり遠くへいかないうちに。

七96 6 7ひきの子うさぎのうち、5ひきはねずみ色、1ひきは白、もう1ひきは黒でした。

八42 ちやうど十年ほどまえ、私のうちに、ピオという、うちじゅうの人気がいました。

八49 どうして、ピオが私のうちにかわれるよう

になったかといえば、

八77 朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しいものです。

八94 私たちの家のうち、中でも茶のまほど、すきな、安心なところはないというように――

八10 1 うちの中にいるかぎり、こわいもの知らずで、

八28 10 ほかのむすめたちは、野原で遊んでいるのに、うちのむすめは、〈略〉感心なことだ。

八40 9 庭の草木は、みているうちに、ぴかぴかと光ったのがねになっていきました。

八51 6 『びんぼう』はうちじゃおことわりだ。

八52 8 『びんぼう』はうちじゃおことわりだ。

八57 7 ぼくはうちへ帰って、おじいさんにその話をしたら、

八81 8 うちのおばあさんにきいてごらん。

八86 3 あひるの子をみつけて、木ぐつでこおりをくだき、うちへつれて帰った。

八88 5 どうしてこんなになったのかわからないうちに、大きな庭の中にくていた。

九33 11 三ひきもとつてくると、うちの家族七人が、じゅうぶたべることができました。

九42 5 ぼくのうちでは、五日めごとにひとうねずつほりおすことにしました。

九43 9 うちのかきはしぶがきですから、

九47 2 おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、いちろうのうちにきました。

九51 5 西なら、ぼくのうちの方だ。

九53 6 やまねこなら、けさまだくらいうちに、馬車で、南の方へとんでいきましたよ。

九75 1 いちろうは、自分のうちのまえに、どんぐりをいれたますを持って立っていました。

九177 図 いっしょに歩いているうちに、きゆうにつかみあいをはじめるんだもの。
 九182 3 図 ねえ、きみ、うちによって、ねえさんにそのボタンをつけてもらわない。
 九144 4 これらのことを一つ一つ思いだしているうちに、心持が、しだいかわってきました。
 十8 6 二月半ばかり、いなかでくらすうちに、おとうさんには、子どものお友だちができました。
 十31 2 ぼくがいるために、うちの中が明かるくなるように、できないものでしょうか。
 十34 3 そのために、いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければならない。
 十41 11 あるとき、うめが、母目の中をしらべているうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。
 十58 6 うちに帰って、十まいずつたばにして、赤いひもでいわえて数えました。
 十61 1 うちのお庭に、たけのこが一本はえてきました。
 十69 11 図 ぐずぐずしているうちに、どつきにあたるにちがいない。
 十71 6 うまい、うまいと名めているうちに、つぼが、からっぽになってしまいました。
 十一24 11 母親は、〈略〉、その晩のうちにいって、子どもをつれてきました。
 十一25 4 金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうちからおきて、遠い山へいって、
 十一27 9 金次郎のうちでは、その十二文さえもありませんでした。
 十一27 12 金次郎のうちは、こんなにもびんぼうでした。
 十一29 9 植えるところをふやしていったりするうちに、三年めには、二十びょうの米をとることが

できました。
 十一47 8 うちではバターもつくったし、こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。
 十一58 6 いくどもくり返しているうちに、太郎は、〈略〉すらすらいえるようになった。
 十一73 11 医者が、まだとなりのベッドをはなれないうちに、少年は立ちあがりました。
 十一85 9 図 ぼく、あしたうちへ帰りますから、
 十一87 5 図 わたしは、これからすぐにうちへ帰って、おかあさんを安心させてあげよう。
 十一92 10 名をなんと呼ぼうかと思っているうち、五日のあいだ呼びなれていた名が、しぜんと口にのぼってきました。
 十二16 11 かきなおし、ぬりなおして、かいていくうちに、ひととおりできあがった。
 十二18 7 図 これが鳴るんだなと思ってやっているうちに、だんだんおもしろくなったのです。
 十二18 12 図 毎晩鳴っているうちに、すこしずつじょうずになっていくようです。
 十二23 4 母をはじめ、うちの人たちは大喜びです。
 十二29 4 こんなふうにして、毎朝おべんとうをこしらえて持たせているうちに、民ちゃんは三足四足と歩けるようになりました。
 十二49 9 古新聞を二まいとも八つに切って、そのうち一まいだけを正方形にする。
 十二57 10 それは、おにが一夜のうちに百だんの石だんをきずきあげること、
 十二71 1 芭蕉のおきないうちに、いどころ水をくみあげたり、ごはんをたいたりしました。
 十二73 4 話をしているうちに、パラパラと音がして、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、
 十二84 3 かたずをのんで試合をみているうちに、

早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、
 十三37 3 ところ 三郎のうちの一案
 十三39 2 図 眞ちゃんが、帰って来たんですか……いつ……え、うちに来たんですか……
 十三40 9 図 きょう、うちに来たんだって……
 十三41 7 図 それに、うちはやけなかったから、本だってたくさんある。
 十三56 12 図 美術の中心のフロレンスで、研究しているうちに、たいそう上達したのさ。
 十四17 8 図 が、近いうちにまたはじめましょう。
 十四22 8 図 それが長い間つかっているうちに、すっかりなれてしまって、日本語になった
 十四24 3 先生のお話を聞いているうちに、
 十四27 7 図 長いあいだつかっているうちに、もともとの日本語のように思われてきたのだ。
 十四45 2 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、船客十四人のゆくえがわからなくなりました。
 十四80 8 ほかの人々に傳えるうちに、あのような短くて調子のいい、氣のきいたものになった
 十四99 2 じつと見つめているうちに、一つの明かるい星が落ちるのを見た。
 十五19 2 アルプスの山々のうち、もっとも高い山の一つに、
 十五26 8 そんなことのないうちに、どこでもいいから、安全な場所へおりなければならぬと、
 十五28 11 鳥がそのあき地へ身をおろすかおろさないうちに、鳥のせ骨をさけて一つつき通し、
 十五39 3 漢字をつかっているうちに、その漢字から、日本語を表わすのに便利なかたかなや、ひらがなを作りだすようになった。
 十五54 9 私が一言も発しないうちに先手をうって、
 十五59 11 図 さあ、うちへ行こう。

十五645 十メートルとは行かないうちに、私は、道のまん中で、無言でつつ立ったまま動かなくなった。

十五1018 ぼくのうちに『幸福』がいるの。

十五10110 この人のうちに『幸福』がいるかってさ。

十五1043 それから、ぼくは、まだなかまのうちでいっとういのをしようかしませんでした。

十五1104 でも、あなたは、うちのおかさんにいてるけれども、ずっときれいだもの。

十五1109 うちにいると、それが見えないが、

十五1139 ここでは、うちにいるときのように、しごとをしないの。

十五1144 でも、うちにいるときよりか、ずっとお話がうまいな。

十五1145 うちにいるとね、あんまり用が多すぎて、ひまがないのだよ。

十五1149 ぼく、うちへ帰りたくないや。

十五1216 読んでいるうちに先生がたに対する感謝の念があふれてきた。

うち 「撃」 ↓とりうち・ねらいうち

うちあける 「打明」(下二) 2 うちあける ↑ケ

十一619 また父にきびしくただされて、太郎は、やつときょうのことを、ありのままにうちあけた。

十五5110 「略」と、自分のことをうちあけた。

うちおお・う 「打覆」(五) 1 うちおお・う 《一イ》

十一342 表のとりのいれことなくすめば、はい色雲が空うちおお・い、青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。

うちが「打甲斐」(名) 1 うちが 六194 こんなによくあうと、たいこのうちがいもあるよ。

うちかた 「打方」(名) 2 うちかた

九129 ただ一つのたいこが、そのうちかたによって、水の音にもなり、風の音にもなり、

十三304 同じ大きなのどらでも、そのうちかたによって、調子がちがう。

うちかた 「撃方」(名) 1 うちかた

十五459 日本政府から頼まれて、鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって来たもの、

うちか・つ 「打勝」(五) 1 うちか・つ 《一ツ》

十三188 苦しいときにうちか・つことのできる國民だけが、《略》、さかえるのであります。

うちがわ 「内側」(名) 2 うちがわ 内がわ

八112 ドアをあけて、ひよいとふみこんだとたん、うちがわでむじやきに遊んでいたピオを、かた足でふんでしまったのです。

十四338 このぎんが糸というのは、《略》天の川の内がわにあるたくさん星のむれなのです。

うちく・く 「打碎」(五) 1 うちく・く 《一イ》

九855 ここからでるのは、このとおりうちく・くいて作った物で、

うちこ・む 「打込」(五) 1 うちこ・む 《一ム》

十四794 もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、

うちじゅう 「内中」(名) 5 うちじゅう

八43 十年ほどまえ、私のうちに、ピオといううちじゅうの人氣者がいました。

八115 茶のまにいたうちじゅうのものがびっくりして、いそいでピオをひろいあげました。

九428 いちばん小さな三つになる妹もつれて、うちじゅうがみんなでもほりをしました。

九482 はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうを、とんだりはねたりしました。

十3011 そうして、うちじゅうの人たちに、めいわくをかけないようにしたいと考えます。

うちだす 「打出」(五) 1 うちだす 《一シ》

十二8411 もう然とたちなあって、電光のようなボールをうちだしました。

うちたてる 「打立」(下二) 1 うち建てる 《一テ》

十三264 祖國を生き返らせ、ついに、今日のような平和國家をうち建てました。

うちつける 「打付」(下二) 1 うちつける ↑ケ

十二510 コロンブスは、コッソリとたまごのはしをテーブルにうちつけて、なんの苦もなく立てて

うちつど・う 「打集」(四) 1 うちつど・う 《一ウ》

九1174 たべのこしのめしつばまけばうちつどうすずめの子らと日なたばこする

うちならす 「打鳴」(五) 1 うち鳴らす 《一ス》

九127 たいこを、ひくく、こまかくつつけてうち鳴らすのであるが、

うちのほおじる 「課名」 2 うちのほおじる

八22 1 うちのほおじる……四

八41 1 うちのほおじる

うちのめす 「打」(五) 1 うちのめす 《一ス》

十二858 相手をきよにうちのめすつこうのチャンスです。

うちむらんぞう 「内村鑑三」(人名) 1 内村鑑三

十五819 空氣または日光のごとく平ばんなれよ。 — 内村鑑三 —

うちゅう 「宇宙」(名) 7 うちゅう ↓だいうちゅう 八363 しかも、この大きなうちゅうは、だいたいきそく正しく運行しているということです。

十四343 こうなってくると、うちゅうというものは、どこまで廣いのか、想像がつきません。

十四345 うちゅうは、けっしてはてしのないものではありません。

十四346 博士の計算では、うちゅうのさしわたしは、およそ二十億光年ということです。

十四3410 この廣大なうちゅうにくらべては、太陽もごく小さなものです。

十四355 小さな人間が、引力の法則を発見したり、うちゅうの大きさを計算したり

十四357 人間の力というものは、うちゅうにも負けないくらい廣大で、

うちゅうぜんたい 「宇宙全体」(名) 1 うちゅう全体

十四375 人類全体を、そうして、うちゅう全体をながめわたす大きな目をもってください。

うちよせる 「打寄」(下二) 3 うちよせる 《一セル》

九118 大だいこの音は、ほんとうにうちよせる波の音をきいているようであった。

十2311 長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船、島。

十二614 みわたすかぎりさざなみがうちよせる大きな池となっていた。

うちわ 「団扇」(名) 1 うちわ

二361 団扇は、大きなうちわににているよ。うつつ 「打」(五) 19 うつつ 《ター・チー・ツツ》

みなみうちぎわ・なみうつ・もんどりうつ

一84 団扇むすんで、ひらいて、てをうって、むすんで、

一87 団扇またひらいて、てをうって、そのてをうえに。

三361 団扇かなづちで、くぎをうっている人もあります。

四61 いそぐときには、でんぼうをうってくれます。

五911 団扇のびて、のびて、とうとうえんの下のいたで、あたまをコツンとうったのだよ。

七119 「手をうつ」の「手」も、「手をあわせる」の「手」も、これと同じつかいかたです。

八313 天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにもらいました。

八362 夜になって天の川をみると、なんともいえない大きなふかい感じにうたれます。

八484 王子は手をうって、「略」と喜んで、つかつかと小屋の中へはいっていききました。

八8610 おかみさんは声をはりあげ、火ばしであひるの子をうった。

八884 まえより強く空気をうち、とぶことができた。

十289 観察すればするほど、自然のおもしろさもわかり、そのふしぎなことにうたれ、

十一132 休みもなく、はてしもなく、ゆるやかにうつ波の声は、

十一518 雨にうたれながら、電車のくるのを待っていた。

十二5611 雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をつたときにくわのあとで、

十四45 ルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもって、私たちの心をうつのです。

十五5311 タイピストになにごとかをいいながらうたせているしらがの老しん士のすがたであった。

十五549 「略」と、私が一言も発しないうち

に先手をうって、十五734 ふかい思い出にうたれている私の目の前で、

うつつ 「撃」(五) 1 うつつ 《ター》

四548 かっちゃんば、はねのつけねをうたれていました。

うつくしい 「美」(形) 100 うつくしい 美しい 《イ・イク》

三94 団扇すみれ、たんぼば、れんげそう、花のおやねが うつくしい。

三103 6 団扇 光るように うつくしい かぐやひめに、ひと目でも あいたい ものだ。

三107 7 団扇 ひょうばんよりも ずっと うつくしい。

三109 4 あきがきて 月が うつくしくなると、

三115 7 かぐやひめの すがたは、それは それは うつくしく かぐやきました。

四134 5 団扇 右に 左に ひらひらと、ゆれる たもとが うつくしい。

五40 2 団扇 きゅうにあたりが美しくなると、私は、

五96 1 あたまからせなかにかけて、き色がかった 美しい鳥になりました。

六21 2 団扇 美しいぶどうに、かがやくりんご、楽しいわれらきりぎりすの生活

六43 8 美しい空の色。

七31 9 団扇 白いえのぐにみどりをとかしたような、美しい羽ですこと。

七46 10 駅の名も美しくよまれた。

八77 朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しいものです。

八126 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばきの木の根もとにうめてやりました。

- 八287 そのおり物の美しい光に、天帝もすっかりおみとれになりました。
- 八406 図 さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん美しい庭をもつことができる。
- 八563 朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎり、美しい砂地がみわたされた。
- 八582 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけしきが目のまえにひらけてくる。
- 八691 図 あれは美しくありませんが、たちはほんとうにいいんです。
- 八698 図 大きくなれば美しくもなるでしょう。
- 八8310 ある夕ぐれ、太陽が美しくしずむときであつた。
- 八848 あひるの子は、あの美しい、しあわせなほくちようをわすれることはできなかった。
- 八882 美しい春であつた。
- 八889 ところが、木のしげみから、二三ぼの美しいはくちようがあらわれてきた。
- 八935 いまでは、すべての鳥の中で、いちばん美しいといわれる身のうえになつたのである。
- 九67 音をうまくあわせると、とけあつた美しいひびきとなつてきこえるにちがいありません。
- 九328 図 はるか下の方に美しい湖がみえます。
- 九331 図 山のすがたが、〈略〉、かくに隠れた油絵のように美しくかがやいてみえます。
- 九362 図 ここからは美しいかこうがながとれます。
- 九408 図 はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。
- 九419 図 この村へきたころは、湖には美しい白さがたくさんまいていました。
- 九423 図 そのほか、名のわからない美しい小鳥がたくさんいます。

- 九5411 その美しいこがね色の草地で、
- 九1125 先生のからだは、美しくちゅうをとんでいく。
- 九1194 その帰りに、近道をして谷をおりてくると、そこに小石でかこまれた美しい泉があつた。
- 十45 いまも、美しいものはどこにでもある。
- 十410 じつに美しい。
- 十57 美しいものは、いまも、どこにでもある。
- 十59 ただ、その美しいものを、すなおに感じとる心を、われわれは失っている。
- 十62 その美しいものを、すなおに感じとる心をもちつづけたものである。
- 十3710 図 美しい眞珠、〈略〉、これを、人工で作りますことはできないものだろうか。
- 十632 能は、そのうたいにつれて、役者が美しい舞を舞ったり、
- 十一162 人の心の畑にさいた、いちばん美しい花、〈略〉、それはおかあさまの愛です。
- 十二136 そこには一本のさくろの木があつて、夏じゅう美しい花をつけていたが、
- 十二141 このごろは、きわだって美しいつやつやしたしゅの色がさしてきた。
- 十二169 しかし、パレットの上でみたときは、ずいぶん美しくみえるが、
- 十二179 図 もっともっと美しくなりたいと思つてゐるのです——
- 十二197 図 あなただつてその実をそんなに美しくなさるには、ご苦心があたりだつたでしょうね。
- 十二202 図 このごろでは、いつも美しい実をならせることができるようになりました。
- 十二209 図 どうしてこのさくろはこんなに美しいんだらうって。

- 十二2012 図 あれがあれば、どんなかげのところで、美しい色にできますがねえ。
- 十二215 図 大きな木になつて、美しいりっぱな実をたくさんつけるようにしたいものです。
- 十二469 図 牛皮を切りぬいて、美しい色がつけてある。
- 十二473 図 人間には、〈略〉、心にあることを、なにか美しいものであらわそうとする気持がある。
- 十二476 図 喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。
- 十二613 きのお植えたなん千アールのあの美しい田さなく、
- 十二6210 水を飲もうと思つて小川の岸にでてみると、美しい小魚がおよいでいる。
- 十二647 花は美しく、実はうまい。
- 十二775 テニスコートには日本とメキシコの國旗が美しくひるがえつて、
- 十二1026 この美しい、りっぱなほとけさまは、いまから千三百年ばかりまえに作られたものであります。
- 十二1049 左右にのびたろうかのかっこうにも、ほうおうという鳥の美しいすがたがあらわれている
- 十二1159 歩調がそろつたときに、はじめて、日本が正しい、美しい國となることができましよう。
- 十三176 美しいおとぎばなしを、世界の子どもたちにおくつた、アンデルセンの
- 十三339 それだけに、空が美しい。
- 十三3310 月が出ていれば、出たで美しく、星の夜であれば、またさらに美しい。
- 十三3310 星の夜であれば、またさらに美しい。
- 十三3412 絵も字もわからないころから、ただ美しかざりのような氣持で、れんをながめている。

十三534 わかい、美しいおかあさんが、まるまる
とふとったかわいあちゃんをだいていて、
十三562 生き生きとして、その着物やはだの色の
美しいにおどろかされました。
十三572 ㊦ ミケランジェロとラファエルは、〈略〉、
美しいような像などを、たくさんかいた。
十三578 ㊦ そのマリアは、たいへん美しくて、い
かにもおかあさんらしいと思うのです。
十四412 ㊦ この美しい朝をむかえよう。
十四482 こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よ
くあんな美しい声がだせるものだと思いました。
十四483 どうせ助からないものなら、こういう美
しい歌に送られて、死んでいきたいものだ
十四503 やはり、その美しい声を手がかりにして。
十四509 あの美しい歌は、いまも、われわれの耳
にひびいてくるように感じられる
十四522 花は、美しいわかい女でした。
十四5910 ㊦ 花さん、あなたが、どんなに美しくさ
いたって、
十四844 その美しい雪が数かぎりなく、天上から
地上へ降ってくるなどを写している。
十四934 美しく火のともった家々の前を、そろそ
ろとかなしげに通って行きながら、
十四9511 そのろの中には、美しい火がもえあがり、
十四981 いかにも大きな木で、それが美しくかさ
られていた。
十四1012 おばあさんが、こんなにせいが高く、
りっぱで、美しく、そうして、しんせつに見えた
ことは、いままでなかったことであった。
十五193 ユングフラウという美しい山があります。
十五338 目の前の美しい、大きなユングフラウの

まっ白な山までも、朝日の中のこの勇ましい少年
をほめたたえているようでした。
十五437 ㊦ 美しい赤色だな。
十五503 ㊦ この焼物をやめれば、日本から美しい
ものが一つ消えてしまうことになります。
十五5011 プリンクリーは、日本の美しい焼物にひ
きつけられていろいろな焼物を集めた。
十五6610 私は、〈略〉、ひとり父につれられて、景
色の美しい京都に移った。
十五795 私は、あの美しいあなたがたのお國を親
しくおたずねして、
十五853 ㊦ いてみれば、すばらしく美しくて、
この廣間のなにもをもおさえている。
十五945 舞台は清らかな、こうごうしい、ばら色
の美しい光に照らされます。
十五984 ㊦ 子どもの幸福というものは、地の上で
も、天の上でも、いちばん美しいものに見える
十五1056 その高い、美しい、天使のようなすがた
をした者が、〈略〉、そろそろとやって來ます。
十五1079 ㊦ ぼくたちのなかまから、いちばん美し
いものがいなくなってしまうわけですからね。
十五10710 ㊦ 『美しいものを見る喜び』がいます。
十五11211 ㊦ おかあさんたちの愛は、喜びの中でも、
いちばん美しい喜びなんですよ。
十五1159 ㊦ いつだって、いちばん美しいおかあさ
んなのだからね。
十五1183 ㊦ 『美しいものを見る喜び』でございま
す。
うつくしいもの〔課名〕2 美しいもの
十二22 一 美しいもの……四
十四1 一 美しいもの
うつくしいものをみるよるこび〔美物見喜〕〔話手〕

1 美しいもの
十五1182 ㊦ 美しいもの「あなた、私をごんじですか。
うつくしさ」〔美〕(名) 16 うつくしさ 美しさ
三1029 その うつくしさは たとえようもなく、
家の すみずみまで 光りかがやくほどの、
四1092 うらしまは、あたりの うつくしさに おど
ろいています。
八855 どうして、あの鳥のもっているような美し
さをもったなどと望むことができよう。
九2410 その小さな胸には、わか葉のもえる日本の
春の美しさを思いうかべているのでしょう。
十四2 青空の美しさ、朝明けの空、夕やけの空の
美しさ、月の夜、星の夜の美しさ。
十四3 朝明けの空、夕やけの空の美しさ、
十四4 月の夜、星の夜の美しさ。
十六1 「〈略〉。」と、日本の海の美しさを、思い
うかべるようにいました。
十八10 観察すればするほど、自然の〈略〉美しさ
におどろくにちがいありません。
十六8 そうして、能が、美しさを現わそうとする
のところが、
十二4710 ㊦ 便利とか不便だけで物事を考えないと
ころに、人間の美しさやおもしろさが生まれてく
るのだ。
十二1111 黒うるしの中に、銀や貝が光をはなつて
いるのは、なんともいえない美しさです。
十二1121 三人がひとつに心をあわせた美しさは、
このとおりりっぱなものとなって生まれたのです。
十三3312 夜空に、なんきんだまのような星がばら
まかれて、一つ一つがかがやく美しさは、
十三353 その文字の意味がわかってくると、いっ
そうその美しさが胸にきざまれる。

十四35 10 なんとという美しさでしょう。

うっし ↓いきうっし・おおうっし

うっしだす 「映出」(五) 4 写しだす 《ーサー・ス》

七55 3 文章は、くわしくしさえすれば、はつきり写しだすことができるとはかぎりません。

七68 7 心に思ったことを、はつきりと写しだすということにほかなりません。

九10 5 たいこのたたきかたによって、《略》、さまざまな情景を写しだすこともできる

十20 7 「《略》。」という先生の声とともに、七色の光が写しだされる。

うっす 「写」(五) 10 うつつ 写す 《ーサー・シース》

五83 1 そのお友だちが、記念に写真を写したいとおっしゃいました。

五83 5 園 いいですか、写しますよ。

五83 10 そこをパチリと写されました。

十二115 2 これで、日本の面影を写した写真帳が終りました。

十四83 10 「雪」というのは、雪の景色を写したものではありません、

十四84 5 その美しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ降ってくることを写している。

十五35 5 これらの表わしかたとともに、事物の形を絵にうつすことも行われた。

十五36 5 漢字は、いまいったように、はじめ、事物の形をうつしたのから発達したものであるが、

十五37 2 木は、もともと形をうつしてできたものであるが、

十五40 1 このかなのおかげで、日本のことばを、たやすくしかも自由にうつすことができるように

なった。

うつつ 「映」(五) 1 写す 《ーシ》

十20 6 園 さあ、その白いかべに、プリズムでわけた光を写してみますよ。

うつつ 「移」(五) 4 うつつ 移す 《ーシース》

七24 10 兄は、二センチほどに大きくなったあおむしを、新しい葉にうつす。

七33 1 園 ここからだして、庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょうね。

十五66 9 父は、同志社を守り育てるために、北海の地をすてて、京都にすまいを移すことになった。

十五69 6 「つくえの上をこらん。」おぼさんのことばに目をうつすと、

うったえる 「訴」(下一) 1 うったえる 《ーエール》

十五62 9 小さな声でうったえる私のくりごを耳にしたおぼさんは、腹をかかえてわらいだした。

うっちゃる 「打遣」(五) 1 うっちゃる 《ーラ》

《略》、はじめなものになってしまふのです。

うつぶす 「俯」(五) 1 うつぶす 《ーシ》

六139 10 うさぎさんは、びっくりぎょうてん、みんな地面にべたんとうつぶしてしまいました。

うつむく 「俯」(五) 2 うつむく 《ーイ》

六13 6 ありは、川の岸で、うつむいて水をのもうとしました。

十一90 2 医者は、病人の上にしばらくのあいだうつむいていましたが、

うつらうつら (副) 1 うつらうつら
九141 3 くもは、うつらうつらとねむくなってきまして。
うつりさる 「移去」(五) 1 うつりさる 《ーール》

九29 2 園 下雲へ下雲へタやけうつりさる

うつる 「映」(四五) 11 うつつ 《ーッ・リール》

三35 3 園 白いくもが水にうつっています。

四17 1 バケツの中に月がうつっている。

六89 9 園 りっぱなかが、水にうつっているわ。

七57 6 おかあさんの鏡、庭のはっぱがうつっている。

八90 8 そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのをみた。

九32 1 園 秋晴れのすみきった空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中につつて、

十14 4 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。

十五11 7 園 ガラス戸の外にうつつりぬ

十五12 3 園 ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブリキの屋根に月うつる見ゆ

十五12 6 園 ガラス戸の外につくよをながむれどランプの影のうつりて見えず

十五13 5 園 照る月の位置かわりけん鳥かこの屋根にうつりし影なくなりぬ

うつる 「移」(四五) 6 うつつ 移る 《ーッ・リール》 ↓のりうつる

九117 7 園 ふくじゅそうのはちをおきかうるおさな子やえんがわの上につつる日を追いて

十二95 3 秋子は、おと年、この学校にうつってきたときのことを思いだす。

十三10 7 しかし、よいといった方角へ移って困った人もあれば、
十五41 3 このエジプト文字がフェニキアに移ってフェニキア文字となり、

十五415 そのギリシア文字がローマに移って、現在のような形になった。
 十五6611 十の春をむかえた私は、〈略〉、ひとり父につれられて、景色の美しい京都に移った。
 うで 「腕」(名) 8 うで じりよううで
 八301 天帝は、ひとつこの男のうでをためしてみようと考へて、黒うしのしっぽのあたりを一つきおつきになりました。
 十248 あせまみれになった工員の顔、胸、うで。
 十一168 わたしをまもるためには、どんな困難とも戦う、そのうで。
 十一692 一方の手で、ふとんの上におかれたまま動かずにいる、うでをつかみました。
 十一809 少年は〈略〉、いきなり病人のうでをつかんで、「略」といって力づけました。
 十一825 少年は、父親のうでの中にたおれましたが、胸がせまって息もつけませんでした。
 十四1016 おばあさんは、女の子をうでにかかえて、ふたりは、いっしょにふわりとまいあがった。
 十五331 父親のうでにだかれた女の子は、
 うでさき 「腕先」(名) 1 うでさき
 三513 腕のみより つよい うでさきで、かっちゃん かっちゃん 石を切る。
 うでまえ 「腕前」(名) 1 うでまえ
 八312 天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにもりました。
 うでわ 「腕輪」(名) 1 うでわ
 五715 おばあさんは、〈略〉、金のうでわをはめ、赤いくつをはいていました。
 うとうと・する (サ変) 2 うとうとする 《—シ—スル》
 一566 おべんとうを たべて、ちよつと うとうと

すると、きしやはもう ついて いました。
 一646 わたくしは、そこに あった こしかけにもたれて、うとうとしました。
 うどんこ 「饅頭粉」(名) 1 うどんこ
 十五8711 ふたりとも、足はうどんこです。
 うながす 「促」(五) 4 うながす 《—シ—ス》
 十一8410 「略」と、父親はあきれてうながしました。
 十三238 小もみは、ある大きさまでは、大もみの生長をうながす力をもっているが、
 十五474 プリンクリーは、まんぞくそうに赤絵のはちをながめながら、その話のさをうながした。
 十五621 「略」と、私をうながした。
 うなぎ 「鰻」(名) 1 うなぎ
 八677 そこには、二つの鳥の家族が、一つのうなぎの頭のことであらそっていた。
 うなずく 「頷」(五) 3 うなずく 《—イ—ク》
 九688 やまねこは、なるほどというようにうなずいて、
 十四614 つるも、うなずいて、「略」。
 十五879 「みたされたきよえいの幸福」ゆっくりとうなずく。
 うなる 「唸」(五) 5 うなる 《—ツ—ル》
 三889 こまのようにまわる。まわってうなる。
 五7511 海はまっ黒になって、波が高く、ゴーゴーとうなっています。
 九1092 すばらしい早さに、からだもスキーも一つになって、ビュウとうなる。
 十一683 また、子どものようにうなっている者もありました。
 十一764 病人のふとんをなおしたり、〈略〉、うな

うぬぼ・れる 「怠」(下二) 1 うぬぼれる 《—レ》
 八824 4 うぬぼれてはいけないよ。
 うね 「敵」(名) 3 うね じりとうね
 九352 煙がようやくかいこんされて、三日めにやつと、うねを十三本つくりました。
 九429 大きなうねのはだが地われしているのをほりおこすとき、胸がどきどきしました。
 十一468 みわたすかぎりのじやがいも煙のうねの向こうに、いつもぼっかりとういていたえぞ富士。
 うば・う 「養」(五) 1 うばう 《—ワ》
 八311 けんぎゅうは、やはりふえに心をうばわれていました。
 うばぐるま 「乳母車」(名) 1 うば車
 五526 ゆうごはんをまつあいだ、私は、まさこをうば車に乗せて、はるおと大通りにでました。
 うぶ 「初」(形状) 1 うぶ
 十三131 こういううぶな考えかたがもとになって、〈略〉天動説が行われていました。
 うふふ (感) 1 うふふ
 五837 4 「うふふ」とわらいだしたので、みんな、いっぺんにわらってしまいました。
 うま 「馬」(名) 8 うま じりうま
 六779 うしもうまもそうだ。
 七713 うまもうまかたも、同じように。
 七721 うまよ、そんな大きななりをして、子どものように、からだまであらってもらっているのか。
 七727 うまが、水のおいおいをかいでいる。
 九736 そうして、なんだかねずみ色のおかしな私たちのうまがついています。
 十二1023 はにわには、このほか、うまや、いぬや、鳥などをこしらえたものがあります。

十五92 〇 こともら手をつないだ中を日ぐれのう

まが通る

十五94 〇 うまよ人間のかさから耳をだして

うまい「甘」(形) 53 うまい《ー・ーイ・ーカッ・

ーク》

三453 〇 きみたちはうまくだまされたな。

三619 〇 こりゃあうまい かんがえだ。

三667 〇 そりゃあうまい かんがえだ。

四225 〇 そこを、わたくしがうまくつかまえた

した。

五469 〇 春になったばかりだから、うまく鳴けない

のだらう。

六825 〇 そううまくつれるものではないよ。

六1021 〇 二本のつつは、うまくはまりあって、長く

のぼしたりちぢめたりすることができる。

六1023 〇 うまくみえるかしら。」ぼくはこうひと

りごとをいいながら、そとをのぞいてみた。

六10511 〇 そうして、にいさんのまねのうまいのに感

心した。

六1076 〇 弟ははながつまっているために、あること

ばが、うまく発音できなくなっている。

六1108 〇 よし、あしたはうまくやって、みんなをわ

らわせてみせるぞと思ったが、

六11710 〇 切りかたは、いつかおかあさんに教えてい

ただきましたから、うまくできました。

六1198 〇 まがっているのでもんだうでしたが、いろ

いろにくふうして、うまくはりつけました。

六12311 〇 かくて、うまくわれないだろう。

六1283 〇 おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさん

たちは、うまくにげました。

六1288 〇 「略。」といって、うまくにげました。

八3010 〇 うしは、うまくふみとどまって、おとなし

く草をたべはじめました。

八663 〇 水はひなたの頭の上を流れたが、すぐに

うかびあがつてきて、うまくおよいだ。

八669 〇 あのうまく足をつかうようすや、あのし

せいのいいのをみてわかる。

八696 〇 ほかのものと同じようにおよくし、いや

ほかのものよりうまくおよくといってもいい。

九66 〇 音をうまくあわせると、とけあった美しい

ひびきとなってきこえるにちがいありません。

九579 〇 さあ、文章はなかなかうまいようでした

よ。

九582 〇 あの字もなかなかうまいか。

九585 〇 うまいですね。

九1195 〇 父は、その泉の水を手ですくって、いくど

もうまそうに飲んでから、私にいった。

九1207 〇 ちょっと歯にしみたが、うまかった。

九1216 〇 なんとかしてうまい水のわきでる泉をさが

しだしたいものと思った。

九1218 〇 日本じゅうを歩きまわって、うまそうな水

や名高いいど水をためてみたけれども、

九1246 〇 ためしにまつ川の水をにた飲んでみると、

たいへんうまかった。

九1264 〇 そこをくんで飲んでみると、それこそまぎ

れもないうまい水であった。

九1277 〇 今晩はうまいえさがかかるかな。

九1314 〇 あれが、うまくひつかかるといいな。

九1322 〇 どうしても手足がうまく動きません。

九1348 〇 うまいごちそうだ。

九1483 〇 うまくおかあさんにあえたかしら。

十397 〇 うまく目の中に核がのこり、真珠質がまき

つけば、成功するわけであったが、

十405 〇 それが、くる年もくる年も、うまいかな

かった。

十703 〇 べつにどつきもたらず、かえって、うまそ

うなあまいにおいがして、

十708 〇 なみたいていのどくではないから、か

えって、うまそうにみえるのだよ。

十716 〇 うまい、うまいとなめているうちに、つぼ

が、からっぽになってしまいました。

十716 〇 うまい、うまいとなめているうちに、

十721 〇 おれに、うまいくふうがある。

十1548 〇 どれもみなうまいことばだ。

十2478 〇 でも、生きた人間のほうがうまくやれ

るし、それに便利でしょう。

十2648 〇 花は美しく、実はうまい。

十3583 〇 色のあるのは、その点はよいが、すり

がうまいかないから、また困る。

十3611 〇 くらべてみて、うまさからいうと、ラ

ファエルのほうがうまいかもしれないが、

十4858 〇 「空からのお手紙」とは、うまいいった

ものだ。

十5832 〇 あんなにうまいものをたくさんたべて、

うれしそうにしているふとった人たちは、

十5848 〇 いかにうまそうだなあ。

十5849 〇 うまそうだなあ。

十5908 〇 なんでも、たべてはうまくない鳥だそ

うじゃないですか。

十5114 〇 でも、うちにいるときよりか、ずっと

お話がうまいな。

うまかた「馬方」(名) 1 うまかた

七713 〇 にわか雨は、ぐつしりとぬらした。うま

もうまかたも、同じように。

うまごや「馬小屋」(名) 1 うま小屋

五711 〇 おばあさんは、おじいさんをうま小屋のし

ごとにおいやりました。

うまさ 〔甘〕(名) 6 うまさ

九一四 茶のうまさは、お茶そのもののうまさにもよるが、たてる湯のうまさがいちいちである。

九一五 お茶そのもののうまさにもよるが、

九一六 たてる湯のうまさがいちいちである。

十三六〇 ぼくには、そのうまさがよくわからないけれど。

十三六二 くらべてみて、うまさからいうと、ラファエルのほうがうまいかもしれないが、

十三六三 でも、ラファエルのうまさは、普通の人にもわかるだろうね。

うまれ 〔生〕(名) 2 生まれ ↓セントルイスうまれ

八八一 〔どこの生まれだい。〕

八九一 生まれがはくちょうのたまごであってみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。

うまれかわる 〔生変〕(五) 2 生まれかわる 《リ》

十三二五 ユートランドは生まれかわりました。

十三二六 デンマルク人のたましいは、《略》、すっかり生まれかわりました。

うまれる 〔生〕(下) 45 うまれる 生まれる

《レ・レ》

三二四 きたない ことばは、きたない 心からうまれてくるものだ という ことが

三二五 きれいな ことばは、きれいな 心からうまれてくる ことも わかりました。

四四三 あかちゃんが生まれると、ここに知らせます。

四四八 生まれた 村に かえったら、だれも知らない 人ばかり。

四四二 〔とおいとおい 川の 水で 生まれたもの。〕

四四三 〔わたくしが この 世に 生まれてくるまでは、なん百年も、なん千年も、人々は 不自由な 思いをしました。〕

五四七 山から川のかんぼが生まれる。

五五八 小さいにまに、小さいながれ山から川のかんぼが生まれる。

五六三 生まれたときは、ねてばかりいたのが、

五六四 生まれたときからせわはしてきたが、

六三三 生まれてはじめての大風だ。

七三三 兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちょうちんを、しぐびんからとります。

七三九 朝、いつてみたら、右から四ばんめのへやに、うさが4ひき生まれていました。

七四〇 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

七五〇 うまるときはまるくなつて いました。

七六二 7ひきの生まれたばかりの子うさは、わらの毛の中で、元気に動いています。

七六七 ねずみ色の4ひきは、生まれてから12日めのきょう、みんな、目があき、

七六八 子うさが生まれてから、きょうで20日めです。

八九二 生まれがはくちょうのたまごであってみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。

九一五 この中には、親つばめもいますが、ことし生まれた子つばめが、たくさんまじっています。

九一七 しかし、その中には、ことし生まれた子つばめがたくさんいます。

十三一〇 だが、思うように動くものは、なかなか生まれなかった。

十一一八 わたしの幸福は、おかあさまのえ顔から生まれます。

十一一九 二宮金次郎の生まれたところは、神奈川

縣のかやま村といって、さかわ川にそった村です。

十一二〇 そういうときに、金次郎が生まれてきたのです。

十二三八 生まれてはじめて、くやむ心と悲しみとに胸をさされました。

十二三九 私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日待つことを知りました。

十二四〇 ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、

十二四一 便利とか不便だけで物事を考えないところに、人間の美しさやおもしろさが生まれてくるのだ。

十二五二 自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。

十二七五 どこで生まれたの。

十二八二 三人がひとつに心をあわせた美しさは、このとおりつばなものとって生まれたのです。

十三一〇 生まれた年によって、その人の性質や運命をきめたりしている。

十三一〇 日本には、毎年、約二百万人の人が生まれるが、

十三一四 そのケプラーと同じころ、イタリアのピサに生まれたガリレオという学者がいました。

十三一七 アンデルセンの生まれた国であります。

十三二五 すたれた都市はふたたびおこり、新しい町村が、いたるところに生まれました。

十三五八 ラファエルは、ウルビノというところ

で生まれ、早くから絵のけいこをして、

十四五六 フィリップ自身、中部フランスの小さな

町のまずしい木ぐつしの子に生まれ、

十四257 新しきものが世の中にできくると、こ

とばも、それにつれて、新しく生まれる

十四326 天文学が生まれたのです。

十五559 宮 きょうはきみがまだ生まれないころの

日本の話をさせてもらおう。

十五6010 ことに、長男に生まれて父母の愛を一身

に集めていた身にとっては、

十五745 一方が先に生まれ、他方があとから生ま

れたというだけのことで、

十五745 一方が先に生まれ、他方があとから生ま

れたというだけのことで、

うみ「海」(名) 81 うみ 海 ↓みずうみ

一357 宮 「まことさんは。」「うみになります。」

一361 宮 「どうして。」「うみになって、せかい

じゅうのおふねをうかべたいからです。」

三212 川に いる 魚と 海に いる 魚とを わけな

さい。

三274 海に うかべて、 大ぜいの せんどうが の

りこみました。

三291 そののち、はやとりは、たくさんの 米や、

麦や、豆をつんで、海をわたりました。

三392 海のような空で、ひばりが ないて いま

した。

三454 宮 ぼくは 海を わたって きたかったのだ。

三469 宮 それなら、海の水をあびて、ねてい

るがよい。

三471 白うさぎは すぐ 海の水をあびました。

三551 宮 山が あれた、海が あれた、かぜであ

れた。

三576 宮 うたを わすれた カナリヤは、ぞうげの

ふねに ぎんの かい、月夜の 海に うかべれば、

わすれたうたを思い出す。

四964 である人 うらしまたろう 子ども 四人と

ころ うみの そば

四1017 かめは、ていねいにおじぎをして、海

方へ いったて しまいます。

四1024 ところ うみべと うみの 中

五78 下水の水やうんがの水、きたないどぶ水を

ながして、海のとくすにすていく。

五910 宮 おばあちゃん、海がみえるよ。

五101 宮 きれいな海だこと、お船もみえますね。

五114 宮 島をとりまく 青い海、青い海。

五115 宮 島をとりまく 青い海、青い海。

五119 宮 海のはてから 白い雲、白い雲。

五659 ある日、おじいさんは、海にでてあみをな

げました。

五663 宮 おじいさん、わたしを海へはなしてくだ

さい。

五6610 宮 海へ帰してくれ、お礼はいくらでもあげ

るといったが、わしはお礼などもらわなかった。

五671 宮 そうして、青い海へはなしてやったよ。

五678 あくる日、おじいさんは海へやってきまし

た。

五678 海はすこしあれていました。

五691 おじいさんは海へやってきました。

五691 海はにごっていました。

五706 おじいさんは、また海へやってきました。

五706 海はあれていました。

五7210 宮 ぐずぐずいわずに海へいっておいで。

五7211 おじいさんは、とぼとぼと海へやってきま

した。

五7211 海はまっ黒になってあれていました。

五753 宮 こんどは、海のぬしになりたい。

五754 宮 あのひろい海で、金のさかなをけらいに

してやりたい。

五758 「略。」おじいさんは、口ごたえもでき

ず、力のない足どりで、海へやってきました。

五7510 海はまっ黒になって、波が高く、ゴーゴー

とうなっています。

五765 宮 海のぬしになりたい、

五766 宮 海のぬしになりたい、ひろい海で、あな

たをけらいにしたいといっています。

五7611 金のさかなは、なにもいわないで、〈略〉、

海の中へおよいでいってしまいました。

五846 いとうくんは、海岸のおじいさんの家で、海

の作文を書くんだといって、

六354 宮 ないだりあれたり、海みたいなのさ。

六483 海 どこかでだれかがめくってる、大きな

きれいなページ、生きた絵本のページ。

六488 宮 ふと、そんなこと思わせる、あのまっさ

おな海の色。

六805 宮 にいさんは毎日海へでて、魚をとって

らっしゃるが、

六879 宮 海の神のごてんです。

六883 宮 すると、海の神は、きつといいことを教

えてくださるでしょう。

六887 海のごてんの門のまえに、大きな木が立っ

ている。

六908 正面に、海の神がこしをかけていらつしや

る。

六911 宮 海の神さまに、申しあげます。

六925 宮 じつは、海でつりをしていたら、つりば

りをとられてしまったのです。

六931 宮 年をとったかたがあらわれて、私に海の

ごてんへいくようにと教えてくださいました。

- 六95 9 おかしいな。」海の神は、しばらくお考えになって、女の人に、「略。」
- 六97 3 女の人はずりばりを水であらって、海の神にさしあげる。
- 六97 5 たしかにつりばりだ。」海の神は、ほおりのみことのまえにさしだしながら、
- 七56 4 海がみえます。
- 九7 10 この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、「略」、また廣い海ともなります。
- 九17 1 つばめのゆくさは、遠い南の海のかなたです。
- 九17 9 さらに海をこえて、遠いオーストラリアまでいくのがあるということです。
- 九18 5 なん百キロの海をひといきにとぶのも、けつしてふしぎではありません。
- 九17 11 函 むかし、このへんは、波のおだやかな海のいりえだったのです。
- 九19 5 函 この土の上に白くみえているのは、むかし海の中にいたいろいろな貝のからです。
- 十15 7 函 日本の海はどんな色ですか。
- 十16 1 「略。」と、日本の海の美しさを、思ううかべるようにいいました。
- 十23 11 ひらけて、海。
- 十38 4 眞珠は、海の中からまれにひろいあげられる、ふしぎな宝石とされてきたが、
- 十42 6 眞珠貝にちょうどよい海水の温度や、海の深さのこともわかり、
- 十一12 9 まっさおな海は、太陽の下でわらっている。
- 十一14 9 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちょうも舞い、まっさおな海もわらい、
- 十一32 7 函 麦のはしりほかがよく上を、海こえて

- きたつばくろが、すうい、すういととびまわる。
- 十一47 4 津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆれて、
- 十二56 9 みそ五郎は、雲仙岳^{うんせんがけ}にこしかけて、「略」、まえの海で顔をあらうのを楽しみしていた。
- 十四6 2 老いた母を思う子の眞情は、遠く海をこえて、私たちの胸にまでせまってくる
- 十四48 1 こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。
- 十四74 5 湖や海の水が、冬になって、表面からひえていくときには、
- 十四76 3 同じような氣流のじゅんかんが、もっと大じかけに、陸地と海との間に行われております。
- 十四76 4 海陸風とよばれているもので、晝間は海から陸へ、夜は反対に陸から海へとふきます。
- 十四76 4 夜は反対に陸から海へとふきます。
- 十五37 12 「海」を「カイ」というようにもとの中國の発音にしたがつた読みかたをしたが、
- 十五38 1 「海」を「うみ」などにつかつて、その漢字の意味にあつた日本語をあてて読むこともした。
- 十五38 2 「海」を「うみ」などにつかつて、うみつける「産付」(下一) 4 生みつける《一ケ》
- 八14 3 夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に生みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。
- 八14 6 親ぜみが、「略」、かたい皮にあなをあけて、ていねいに生みつけておいてくれましたので、
- 八18 11 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、つみこえやこえ土の中に生みつけられて、
- 八104 9 葉のうらに、青黒いなかのたまごが生みつけられていました。

- うみなさ・る 「産」(五) 1 生みなさる 《一イ》
- 八81 2 函 のどを鳴らすか、たまごを生みなさい。
- うみのかみ 「海神」(話手) 19 海の神
- 六91 2 海の神さまに、申しあげます。」海の神「なんだね。」
- 六91 4 海の神「木の上に、りっぱなかがたが。」
- 六91 6 さようでございます。」海の神「では、そのかたをこちらへご案内しなさい。」
- 六91 9 海の神「さあ、どうぞこちらへ。」ほおりのみことは、こしをかける。
- 六91 11 海の神「あなたは、どなたでいらつしやいますか。」
- 六92 2 ほおりのみことです。」海の神「あ、さようでございましたか。」
- 六92 9 海でつりをしていたら、つりばりをとられてしまったのです。」海の神「つりばりを。」
- 六93 4 それで、いまここへやってきたところですよ。」海の神「そうでしたか。」
- 六93 7 女の人に向かって、海の神「魚どもを、みんなここへよび集めるように。」
- 六93 11 魚どもをよんでまいりました。」海の神「これでみんなか。」
- 六94 5 ただだけは、病氣でねておりますので、ここへはまいっております。」海の神「そうか。」
- 六95 3 ちっともぞんじません。」海の神「それはおかしい。」
- 六95 8 ほんとうです。」海の神「おかしいな。」
- 六96 5 海の神「おまえは、このかたのつりばりを知らないか。」
- 六96 8 つりばりをのどにかけまして、たいへん苦しんでいるところでございます。」海の神「あ、それにちがいない。」

六96 10 海の神「たいののどから、つりばりをとつておやり。」

六97 4 海の神「たしかにつりばりだ。」

六97 6 海の神「このつりばりではございませんか。」

六97 8 これです。「海の神」みつかつて、ほんとうによりしゅうございました。」

うみべ 「海辺」(名) 6 うみべ 海べ

四102 4 とろろ うみべとろろの中

四102 5 うらしまが、海べでつりをしています。

五50 5 海べ がけの下には 白いはま、白いはま。

五65 2 海べに、おじいさんとおばあさんが、住んでいました。

五89 6 鯛 鯛 うらの山から海べをみれば、波にうかんださが島。

六86 7 ほおりのみことは、海べでないている。

う・む 「産」(五) 5 生む 《マー・ム・ーン》

四15 6 たまごを生んで いるのをみていた。

八78 1 にわとりは、足はみじかいが、いいたまごを生んだ。

八79 4 しかし、たまごは生まなかつた。

八79 7 鯛 「おまえさんは、たまごを生むことができるかい。」と、あひるの子にたずねる。

八82 11 鯛 たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火花をだすことを、せいでして勉強するのだね。

うめ 「人名」 8 うめ

十40 10 あざけれられ、からかわれても、その助力者となつてくれたのは、つまのうめであつた。

十40 10 うめは、「略。」こういつて、失望にせずむ幸吉を、なんどもはげました。

十41 9 うめは、いつもこのわる口のたてとなつて、幸吉をかばい、

十41 10 あるとき、うめが、母貝の中をしらべているうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。

十42 4 幸吉とうめは、たがいはげましあつた。

十42 12 喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であつたうめが、この世をさつてしまった。

十43 12 鯛 うめ、おまえも喜んでくれ。

十44 1 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめのれいにささげて、その成功をしらせた。

うめ 「梅」(名) 6 うめ ↓あおうめ

三52 4 鯛 うぐいすは うめの 木に とまり、「略。」といいました。

四125 9 二月はうめの花。

五39 10 鯛 こちらでは、略、うめの花も、りんごの花も、いっぺんにさきだします。

七67 1 うめがさく。

十一42 7 鯛 すいせんにおい、うめもほころび、こちふけば、春も目さきに近づいた。

十一43 5 正面のテーブルには、赤いうめの花をいけた、大きなかびんがかざつてありました。

うめもどき 「梅擬」(名) 1 うめもどき

四24 9 鯛 おみやげに うめもどきをとつて きました。

う・める 「埋」(下) 1 うめる 《ーメ》

八12 8 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばき

の木の根もとにうめてやりました。

うやま・う 「敬」(五) 2 うやまう 《ーウーワ》

十32 5 あいての人をうやまうとともに、自分のつとめをはたすだけの勇気を、

十一30 3 やがて、村をすくい、多くの人からうやまわれるようになりました。

うら 「末」(名) 6 うら ↓きもとたけうら

十47 7 4 「木もと竹うら」ということわざを教え

てくれました。

十47 7 竹を割るときには、うらのほうから割るがいいという教えでした。

十47 8 3 うらのほう、いいかえると、竹の先のほうから割ってみると、

十47 8 12 はじめ、うらのほうをかるく四つに割つて、

十47 9 5 ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもとか、わからないことでした。

十47 9 10 「木もと竹うら」という簡単なことを、知っているのといないのでは、たいへんちがいます。

うら 「裏」(名) 8 うら ↓やねうら

四68 4 うらの小山の小さいけに子が二三百、こ米が一ぴょう、子もこ米かむ、かも米かむ。

五46 4 おつかいにいくとき、うらの竹やぶのそばを通つたら、おくの方でうぐいすの音がした。

五89 6 鯛 うらの山から海べをみれば、波にうかんださが島。

五93 6 手おけをさげて、うらのいどばたに立ちました。

六118 11 紙のうらには、まん中に、ま四角に切ったときにつけたすじがたてについています。

八104 8 葉のうらに、青黒いなかのたまごが生みつけられていました。

十一41 3 鯛 ふもとの小屋はみぞれして、うらの山には白雪つもる。

十三43 5 しばらくして、うらの方で、もの音がする。

うらおもて 「裏表」(名) 1 うらおもて

十64 11 それをみていると、世の中のうらおもてが、

よくわかります。

うらがえす 「裏返」(五) 1 裏返す 《一ス》

十二 53 6 顔と手をつけた着物を裏返すことができあがる。

うらがれ 「末枯」(名) 1 うらがれ

九 29 3 ㊦ うらがれにおろされ立てる子どもかなうらぎる 「裏切」(五) 1 うらぎる 《一ツ》

八 13 1 私は、ピオの信頼をうらぎったのが、かなしくてなりませんでした。

うらしま 「浦島」(話手) 33 うらしま

四 97 5 うらしま「これこれ、どうしたのだ。」

四 97 8 かめを ころがして いるのです。」うらし

ま「そんなことをしてはいけない。

四 98 1 だって、ぼくたちが つかまえたのでもの。」うらしま「でも、ゆるしておやり。」

四 98 4 うらしま「そうだ、わたしに この かめをうって くれないう。」

四 99 6 うらしま「うって くれるかね。」

四 100 4 うらしま「かめさん、かめさん。」

四 100 7 かめを だきおこして、せなかを さすって、

うらしま「かめさん、かめさん。」

四 100 10 うらしま「もう、だいじょうぶ。」

四 102 8 うらしまさん。「うらしま——」

四 103 5 うらしま「おや、だれかと思ったら、かめさんか。」

四 103 8 このあいだ、たすけて いただいた かめで

「ごさいます。」うらしま「あ、そうか。」

四 104 6 きょうは、お礼に あがりました。」うらし

ま「お礼には およばないよ。」

四 105 3 うらしま「なに、りゅうぐうだって。」

四 105 9 ほんとうに きれいな ところで 「ごさいま

す。」うらしま「それは おもしろい。」

四 106 5 うらしま「りゅうぐうは、まだとおいの。」

四 106 7 うらしま「いい お天気で 氣もちがいいな。」

四 107 1 むこうに 光った やねが みえるでしょ。

う。」うらしま「ああ、みえる、みえる。」

四 107 6 あれが りゅうぐうの ご門で 「ごさいま

す。」うらしま「赤や 景色で きれいだね。」

四 110 4 あなたが うらしまさんで いらっしやいま

すか。」うらしま「はい、そうです。」

四 110 8 うらしま「いや、ちょうど とおりかかった

ところでしたので。」

四 111 7 さあ、ごえんりょなくめしあがつてくだ

さい。」うらしま「どうも ごちそうさま。」

四 111 9 うらしま「すばらしい ところだな。」

四 112 6 うらしま「おもしろい、おもしろい。」手を

たたいて よろこびます。

四 113 8 うらしま「いや、もう じゅうぶん いただ

きました。」

四 114 2 では、にぎやかな おどりを して、ごらん

に いれましょう。」うらしま「あいがとう。」

四 114 5 うらしま「いや、おとひめさま、なにもか

も じゅうぶんで 「ごさいます。」

四 114 9 うらしま「あまり 長く なりますので、も

う、おいとましようと思ひます。」

四 115 3 うらしま「でも、うちの ことも 氣にかか

りますので、かえらせて いただきます。」

四 116 1 うらしま「いや いや、たいへん たのしい

思ひを させて いただきました。」

四 116 8 うらしま「これは これは、おみやげまで

いただきまして、あいがとう 「ごさいます。」

四 117 1 うらしま「これを あけては いけないとい

うのですか。」

四 117 4 そのままに して おいて いただきとうご

ざいます。」うらしま「よく わかりました。

四 117 8 おなごりおしゅう 「ごさいます。」うらしま

「さようなら。」

うらしま 「浦島」(人名) 14 うらしま

四 99 7 うらしまは、おかねを 子どもたちの 手に、

それぞれ わたして やります。

四 100 5 うらしまは、かめを だきおこして、せな

かを さすって、

四 101 9 うらしまは、かめの うしろすがたを みお

くります。

四 102 5 うらしまが、海べで つりを しています。

四 103 1 かめが よびかけても、うらしまは、《略》、

氣が つきません。

四 106 3 かめは、うらしまの 手をとって、そこら

を ぐるぐると あるきまわります。

四 108 6 そこへ、かめが うらしまを あんないして

はいつて きます。

四 109 1 うらしまは、あたりの うつくしさに おど

ろいて います。

四 109 7 うらしまは、右の こしかけに こしかけま

す。

四 113 3 うらしまは、父や 母の ことを 思いだし

て、きゆうに 家へ かえりたく なりました。

四 116 10 うらしまは、たまてばこを 手にもって、

四 118 3 かめが、うらしまの 手をとって、でて

いきます。

四 119 2 ㊦ とほうに くれた うらしまは、あけて

みました、たまてばこ。

四 119 5 ㊦ 白い けむりが たちのぼり、元氣で わ

かい うらしまは、みるみる しらがの おじいさ

ん。

うらしまさん 「浦島」(人名) 6 うらしまさん

四102 7 金 かめ「うらしまさん。」
 四102 9 金 かめ「うらしまさん。」
 四103 4 金 そばまで いって、大きな 声で、「うらしまさん。」といいます。
 四106 9 金 ごらんなさい。うらしまさん。
 四110 2 金 この かたが うらしまさんで ございませう。
 四110 3 金 おとひめ「あなたが うらしまさんでいらっしゃいますか。」
 うらしまたろう 「課名」2 うらしまたろう
 四3 4 十 うらしまたろう……九十六
 四96 1 十 うらしまたろう
 うらしまたろう 「浦島太郎」(人名) 4 うらしまたろう
 四96 3 でる 人 うらしまたろう 子ども 四人
 四97 4 そこへ うらしまたろう が おりかかります。
 四102 3 でる 人 うらしまたろう かめ
 四108 2 でる 人 うらしまたろう たい えび そのほか いろいろな 魚
 うらて 「裏手」(名) 1 うら手
 十三43 7 おかあさん、おかあさんの……(と、うら手に行く……声だけ続く。
 うらやま 「裏山」(名) 1 うら山
 七66 5 うら山に、みかんを持って遊びにきている。
 うらやまし・い 「羨」(形) 3 うらやまし 《一》
 八85 3 それは、うらやましく思ったのではない。
 九31 7 先生のことを思うと、みなさんがうらやましくなります。
 十55 9 思うことがどんどん書いていたまえのころが、うらやましくさなりました。

うり 「瓜」(名) 2 うり
 五89 3 高い山からたにそこみれば、うりやなすびの花ざかり。
 十四81 4 うり二つ。
 うり ↓アイスクリームうり・きんぎょううり・なえうり・なつめうり・ぶどううり・マッチうり・マッチうりのむすめ・ものうり
 うりだ・す 「売出」(五) 1 売ります 《一》
 十五49 11 作品を東京や箱根へ売りますことになしたのである。
 うりもの 「売物」(名) 1 売りのもの
 十五46 6 これは売りのものですか。
 うる 「売」(五) 8 うる 売る 《一》
 四98 5 そうだ、わたしに この かめを うって くないか。
 四99 2 この 人 に うって あげようか。
 四99 4 この かめを うりましよう。
 四99 6 うって くれる かね。
 八5 7 なぜなら、ほおじろ だけしか 売って いなかった のです から……。
 十四92 4 おおみそかの 晩だ というのに、その 子は、まだ マッチ を すこしも 売って はない かった。
 十四92 5 一は こも 売って はない かった。
 十五49 1 職人の ちんぎん や 材料 の お金 を はらう ために、家の 道具 を 賣ら なければ なら なかった。
 うる お・す 「潤」(五) 1 うる おす 《一》
 十一18 2 流れやまめ 愛の しみず に、うる おされ、やしなわ れて、のびて いく 命の わ 葉。
 うる さ・い 「煩」(形) 1 うる さい 《一》
 十七10 こんなに うる さく ついて ころれた ときには、おとう さん も 困りました ので、

うる し 「漆」(名) 2 うる し ↓くろうる し
 十一39 1 かえでに うる し、はじの 葉も、赤く 黄色く 色づいて、
 十二110 8 まき絵 というのは、うる し を ぬった うえに、金や 銀の こなを まいて、
 ウルビノ 「地名」1 ウルビノ
 十三56 8 ラファエルは、ウルビノ という ところ で 生まれ、早く から 絵の けいこ を して、
 うれしい 「嬉」(形) 55 うれしい 《一》
 カッ・ク
 一57 6 みんな げんきで うれしい な。
 二47 9 うれし そうに、その りんごを、高く さしあげ たり においを かいだ り します。
 四77 4 う——うれしい と きは、どんな とき。
 四91 9 けれども、おじい さん は うれし そう。
 五22 9 きょう、ぼく、とても うれし かった。
 五24 4 それで うれし かった の。
 五25 3 それで うれし かった のね。
 五25 7 ほんとうは、それで うれし かった んです。
 五28 5 ぼく、きょう、とても うれし い んです。
 五29 1 それから、うれし かった という のは ほん なこと かね。
 五31 1 ぼくには すこし おも かった んですが、とても うれし い んです。
 五31 10 それで、ほんとうに うれし い んです。
 五41 3 のびは じめた 草の上を、うれし そうに ある いて いました。
 五49 2 あさの 光に、身を きよめる のは うれしい。
 六9 4 ねじは これを きいて、とびあがる ほど うれ しかった。
 六11 10 ねじは、自分 が ここには いった ために、この 時計 ぜんたいが、ふたたび 活動 することが でき

たのだと思うと、うれしくてたまらなかった。
 六120 11 ぼくは、うれしくてたまりませんでした。
 七40 1 とうとう、うれしそくに、声をたててわらいました。
 七52 8 うれしいような、すまないような氣持がした。
 七54 8 ぼくは、うれしくて、胸がどきどきしていた。
 七85 4 もう帰ってもよろしい。」旅人は、うれしそくに立ちあがる。
 八23 11 虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれしそうです。
 八31 6 はたおりひめは、あまりうれしいので、はたをおることをわすれてしまいました。
 八55 6 それをうれしく思っ、その家へ、幸福をわけておいにきました。
 八98 9 いやいよきようは田植えでしたので、みんなうれしそうです。
 八101 2 ずっと日でりがつづいたので、水をやるとうれしそうです。
 九25 9 いそいそと帰ってきたつばめをむかえる人の心は、どんなにうれしいことでしょう。
 九38 10 10 ポキンという音がして、ガサガサと落ちてくると、うれしくなります。
 九42 7 苦勞してかいこんした畑のいもをほりおこすのは、楽しく、うれしいことでした。
 九47 9 けれども、いちろうはうれしくてたまりませんでした。
 九140 1 ちょうちょは、うれしそくに羽をととのえました。
 十16 3 自分の國のことをきかれたときは、おとうさんもうれしく思いました。

十26 6 ふたりのうれしそうな顔。
 十一7 8 10 ぼく、これがうれしんだよ。
 十一9 5 10 そういわれて、自信をもって、よしやろうということができた、うれしい。
 十一26 9 金次郎は、それを読むとうれしくなり、いっしんに勉強がしたくなりました。
 十一38 3 10 きようはうれしき豊年まつり。
 十一41 5 10 もちつきすませて、しめなわをはり、一夜明ければうれしき日。
 十一78 6 病人がなんだかうれしそくにその話す声に「略」耳をかたむけているように見えたから
 十一80 4 うれしそうな色を顔にうかべながら、
 十一84 4 10 ほんとうに、ぼく、うれしい。
 十二24 7 わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にものぼるほどうれしかったのです。
 十二28 1 民ちゃんはうれしそくにいつて、その包みを取りあげると、よちよちと立ちあがりました。
 十二71 6 先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、これがなによりうれしと、曾良は喜びました。
 十二76 9 曾良は、芭蕉の子どものらしい手ずさびがすっかりうれしくなりました、
 十二78 4 少年たちは、これを見て、うれしそくに、えい語で、「略。」といいました。
 十三50 4 うれしいハ・ハ・ヒを、合唱しましょう。
 十四16 8 10 ランプがお氣にいつて、うれしく思いました。
 十四83 7 雪だけ水が流れたところ、それをうれしそくにしている雪國の子どもなど、
 十四95 2 まあ、なんといううれしきことだろう。
 十四101 9 うれしそくに、楽しそくに、上の方へ、地面から高くはなれて、「略」のぼって行った。

十五83 2 10 うまいものをたくさんたべて、うれしそくにしているふとった人たちは、だれだろう。
 十五85 6 10 あの人たち、ずいぶんうれしそうな、幸福そうな顔をしているなあ。
 十五122 4 うれしいような、楽しいような、悲しいような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。
 十五122 11 森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合奏など、「略」うれしく思いました。
 うれしさ「嬉」(名) 3 うれしさ
 五22 5 しかし、きようのうれしさは、それだけではありません。
 七49 10 ぼくは、うれしさでいっぱいになった。
 十一5 6 大学生に頼んで乗せてもらったうれしさで、まだむちゅうになつているのである。
 うろろ (副) 1 うろろ
 十二10 1 みすばらしい身なりをした老人が、道路をうろろとみまわしながら、なにかさがしては、それをひろってポケットにいれていました。
 うわおび「上帯」(名) 2 上帯
 十五25 3 左手を長くのばして、鳥が大づめでつかんでいる女の子のからだの下へ落ちないように、その上帯をかたくにぎったのでした。
 十五28 7 左手は女の子の上帯にかけたままで、右手をはなして、
 うわぎ「上着」(名) 2 うわぎ 上着
 三114 3 かぐやひめは、「略」、きていたうわぎをぬいで、おばあさんにわたしました。
 十五63 5 おじさんは、きちんと着ていた上着をかなぐりすてて、
 うわぐつ「上靴」(名) 3 上ぐつ
 十四90 7 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。

十四908 その上ぐつは、母親のものだったので、この子にとっては大きすぎた。

十四9010 それをさけるために、急いで道を横ぎったときに、その上ぐつはぬげてしまった。

うわさ〔噂〕(名) 1 うわさ

十一273 村の人たちは、こう、うわさをしました。が、金次郎は耳にもいれず、それを続けました。

うわばき〔上履〕(名) 1 上ばき

九263 上ばきを自分でつくるわらしごと

うん〔運〕(名) 1 運

十三105 名まえの字画を数えて、運がよいとかわるいとかきめたり、

うん(感) 19 うん

四993 子ども「この人にうって あげようか。」みんな「うん、そうしよう。」

六444 みてごらんよ。ほんとうにあのかかしが帰っているだろう。」子がらす「うん——

六1164 ただしちゃんは喜んで、「うん、作って。」と、元氣のいい声でいいました。

九907 やまだくんをつれていけよ。」六「うん。」

十三408 あ、真ちゃん。ぼく、三郎……うん……よかったなあ。

十三409 きょう、うちに來たんだって……うん、うん……でもよかったよ。

十三4010 うん、うん……でもよかったよ。

十三4011 みんなで心配していた……うん、そう……そうだってね。

十三4012 四十日の旅じゃつかれただろう……うん、読んだ。

十三412 うん、うん……そんなこと……かまわ

ないよ。

十三412 うん、うん……そんなこと……かまわ

ないよ。

十三412 うん、うん……そんなこと……かまわ

ないよ。

十三412 うん、うん……そんなこと……かまわ

ないよ。

十三412 うん、うん……そんなこと……かまわ

ないよ。

十三414 なんでもあるよ。いっしょにつかえばいいよ……うん、氣のどく——そんな、

十三4112 いいじゃないか。帰ったばかりだから

お客さんさ……うん、うん。

十三4112 帰ったばかりだから、お客さんさ……

うん、うん。

十三425 せっかくの記念品だから、とっておいたほうがいいよ……うん、うん……

十三425 とっておいたほうがいいよ……うん、うん……

うん……

十三426 そう、二つあるのならもううん……うん……へえ……そんなにしんせつだったの。

十三428 いっしょに、そのマンシェウの子どもに、お札の手紙を書こうね……うん、おみやげより、早くきみの顔が見たいよ。

十三429 きょうはとまるだろう……うん、楽しみにしているよ……

うんか〔浮塵子〕(名) 1 うんか

八105 先生におきしますと、うんかのたまごだ

ということでした。

うんか〔運河〕(名) 1 うんか

五76 下水の水やうんかの水、きたないどぶ水を

ながして、海のおくにすていく。

うんけい〔運慶〕(人名) 1 運慶

十二108 右の仁王さまをほったのは運慶だといわ

れています。

うんこ(名) 1 うんこ

十二24 民ちゃんは、まだ、うんこもしっこい

えません。

うんこうする〔運行〕(サ変) 1 運行する

《—

シ》

八363 しかも、この大きなうちゅうは、だいたいきそく正しく運行しているということです。

うんぜんだけ〔雲仙岳〕(地名) 2 雲仙岳

十二568 みそ五郎は、雲仙岳にこしかけて、〈略〉

まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。

十二5611 雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をうったときのくわのあとで、

うんてん〔運転〕(名) 1 運轉

十一101 じゃあ、りっぱな調整は、りっぱな運轉をする人になるだろうね。

うんと(副) 2 うんと

九142 おかあさんときいて、くもは、手をうんと

のぼして、とりすがろうとしました。

十三421 話がうんとある。

うんどう〔運動〕(名) 1 運動

九201 「かわいそうなつばめをすくえ。」という

運動に全國民が、加わったほです。

うんどうかい〔運動会〕(名) 2 うんどうかい

二248 これからうんどうかいをするのですね。

四125 十月はうんどうかい。

うんどうじょう〔運動場〕(名) 7 運動場

五83 おひる休みのとき、私たちは、運動場にあ

つまって、先生をまん中にしてならびました。

七165 学校の運動場に、子どもたちが集まってい

る。

七503 どの学校のせんしゅも、みんな、運動場に

整列して、式をあげた。

七547 みんな、また運動場に集まって、終りの式

をした。

七5510 五年生が、運動場で、たいそうをしていま

す。

九468 ああ、あの廣い学校の運動場で、先生とみなさ

うんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。
 十五125 六か年の思い出を残してくれたこの運動場、この校舎、あの農園、みんなありがとう。
 うんどうぼう 「運動帽」(名) 1 運動ぼう
 七58 赤い運動ぼうだ。

うんめい 「運命」(名) 3 運命

十三106 生まれた年によって、その人の性質や運命をきめたりしている。

十三111 日本には、毎年、約二百万人の人が生まれるが、これらの人がみな同じ性質をもち、同じ運命をたどるとは、考えられない。

十四83 がおかあさん、運命にはしたがわなければなりません。

え

え 「重」ひいくえ・ななえやえ

え 「絵」(名) 53 え 絵 ひあかえ・あかえせいさく・あかえのはち・あかえまち・あかえや・あぶらえ・いろえ・うきよえ・かげえ・かげえめく・まきえ・やまとえ

一175 きょうは、どんなえがかれるでしょう。
 二154 あんな大きな、あかるいお月さまは、どうしたらえにかくことができるでしょう。

三195 あつめたことばにえをかきそえました。
 三201 えをかくていくうちに、花の名も、鳥の名も、だんだんふえてきました。

三325 あがったところの かべには、えがはってあります。

三957 この一まいの紙に、えをかくことが

できます。

三985 一まいの紙にかいたえを、どこにかざりましょう。

三991 どんなところでも、紙は、字やえをはこんでくれます。

三994 みなさんのかいたえでも、字でも、だいにじにしまっておきなさい。

四228 きのうえをかきました。

四228 なんのえか、あててごらんなさい。

四311 おてがみを書いてもいいし、えをかくてもいいと思います。

四734 これをあつ紙に書いて、えもつけて、あそべるようにこしらえることにしました。

四83 「略」といって、一まいのえをだしました。

四834 それはふじ山のえでした。

六117 なんの絵をかこうか。

九77 「月」だけで思いだした心の絵とは、いくらちがったものがあらわれてくるでしょう。

九94 あまりたくさん重ねると、「略」、まとまりがつかず、心の絵がみだれてしまいます。

十二166 これは、絵のすきだったおじさんからゆずってもらったもので、

十二208 ほら、そこで絵をかいている文雄さんがいってましたよ。

十二211 絵をかくことも、いっしょうけんめいにけいこしなくちゃだめでしょうね。

十二223 どんな絵の大家だって、一心にけいこをして、じょうずになったのだろう。

十二475 だから、人間がいるところには、かならず詩もあれば、絵もある。

十二472 わざわざ絵のぐをつかって時間をかけ

て絵をかくより、写真のほうがずっと便利なのだけれど、絵には絵のいいところがあるからね。

十二481 絵には絵のいいところがあるからね。

十二481 絵には絵のいいところがあるからね。

十二105 大和絵 絵の中ほどをごらんなさい。

十二116 浮世絵 おなじみの富士山の絵です。

十二117 この絵は北斎という江戸時代の人のかいたもので、浮世絵といえます。

十二119 この浮世絵は、版画で、絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人と、の共同作品なのです。

十三341 小さな子どもは、絵も字もわからないころから、「略」、れんをながめている。

十三532 絵は、はがきの上の方に、まるく原色ですってあります。

十三536 あかちゃんをだいていて、その右の方に、もうひとりの子どもがよりかかっている絵です。

十三543 ぼくは、その絵を見ると、そのあかちゃんがキリストで、そのおかあさんがマリアだということは、すぐにわかりました。

十三545 そうして、その絵がだいすきになりました。

十三548 おじさんは、絵かきではありませんが、絵がすきで、

十三549 だから、この絵も、本物をごらんになっているだろうと、思ったからです。

十三556 「略」といって、一まいの絵をひきだしからだして、見せてくださいました。

十三561 絵はがきでも、たいへんいい絵だなと思いましたが、

十三569 ラファエルは、「略」、早くから絵のけいこをして、たいへんじょうずであった。

十三575 会 『いすによるマドンナ』は、おけのそ

こにかいたという小さな絵だが、

十三577 会 おじさんは、〈略〉、ありありとその絵を

目の前に見るようなようすをなさいました。

十三577 会 絵は、写真で見ただけでは、明暗はか

なりわかるが、色がわからない。

十三592 会 これは、ドレスデンの美術館にある絵

で、『シストのマドンナ』といわれている。

十三595 会 せいの高いマリヤがキリストをだいて

立っていると、老人のぼうさんらしい人が、その

前にひれふしている絵でした。

十三596 会 その絵は、たいへん感じがちがいます

ね、おじさん。

十三5910 会 この絵は、たいへん大きなりっぱな絵

だよ。

十三5910 会 たいへん大きなりっぱな絵だよ。

十三5911 会 わたしが行ったとき、この絵の前には、

一台の長いすがおいてあったが、

十三606 会 ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、

かべにかかっている一まいの絵を見ました。

十五355 会 これらの表わしかたとともに、事物の形

を絵にうつすことも行われた。

十五357 会 この絵のだんだんりやくされてきたもの

が、文字というものの起りとなった。

十五7910 会 私のつくえの上には、日本のみなさんが

書いたあつい絵の本が、いつもおかれてあります。

え [餌] ↓すりえ

え (感) 11 え

七787 会 え、でも、そんなにくわしくごぞんじで

はありませんか。

十三381 会 だれかと思った……え、いま学校から

帰ったばかり……

十三383 会 え……でも、おばさんだって、このご

ろちつとも来てくだらないじゃないですか。

十三384 会 え、え、はい……そうですか。

十三384 会 え、え、はい……そうですか。

十三389 会 お客さん、ぼくの知っている人……だ

れかしら……じらさないでいて……え、おとう

さんが、そう……じゃあ、かわってください。

十三3812 会 え、おとうさん。

十三391 会 ぼく、三郎……はい……え……眞ちゃん

んが……マンシェウの眞ちゃんが、帰って来たん

ですか……

十三392 会 マンシェウの眞ちゃんが、帰って来た

んですか……いつ……え、うちに来たんですか

十三423 会 しんせつだね……え、ぼくに……いら

ないよ。

十五871 会 え、あなた、ぼくを知っているの。

え 7 エ え 江

二87 「え」のつくことばをあつめました。

四786 え——えんぴつをなめないように。

四799 え——「え」の字もこれから「え」をつ

つかう。

四799 「え」の字もこれから「え」をつかう。

四799 「え」の字もこれから「え」をつかう。

十五397 「江」から「エ」

と書くようになった。

十五397 「江」から「エ」

えい ↓だいいいひゃっかじてん

えいが [映画] (名) 7 映画 ↓ゆきのえいが

十四832 雪の映画を二つ見た。

十四835 「雪國」は、北國の人たちが雪と戦って

いるようすを、映画にしたものである。

十四841 「雪」というのは、〈略〉、雪の一ひらを

とらえて映画にしたものである。

十四855 「〈略〉」こんなことばによって、映画

は私たちに説明してくれた。

十四859 このように、二つの映画は、どちらも雪

にえんのあるものであるが、

十四8510 私はあとのほうの映画に心をひかれた。

十四866 「雪國」の映画も、けっしてわるいもの

とは思わないが、

えいがかする [映画化] (サ変) 1 映画化する

《—スル》

十四8611 このものすごいありさまを映画化するこ

とは、たやすいことではあるまいが、

えいがかん [映画館] (名) 1 えいがかん

四102 ここはえいがかんです。

えいがてきしゅうほう [映画的手法] (名) 1 映画

手法

十四8410 さまざまな条件によって、雪のけつしよ

うがちがうわけを、映画的手法によって、よくわ

かるようにしくんだものであった。

えいがどくとく [映画独特] (形状) 1 映画独特

十四895 こんな場面を、映画独特の手法によって、

おもしろく編集できないだろうか。

えいご [英語] (名) 7 えい語 英語

十二781 その少年たちは、じょうずにえい語をつ

かって頼みました。

十二784 少年たちは、これを見て、うれしそうに、

えい語で、「〈略〉。」といました。

十四184 会 バケツは、もとは英語だってね。

十四188 会 カーテンも英語じゃないかしら。

十四235 会 「英語です。」と、そくさに答えた。

十四237 会 外國からはいつてきたことばは、英語

だけではなく、

十四24② そのほかのことばは、みんな英語だ。
えいごきょうかしょ 『英語教科書』(名) 1 英語教科書

十五51② 辞書を作ったり、日本人のための英語教科書の編さんまでしたりした。

えいずる 『映』(サ変) 1 映ずる 『ジ』

十五53⑩ 室内にはいった私の目に映じたのは、
《略》しらがの老しん士のすがたであった。

えいや (感) 2 えいや

三27⑤ 「えいや、えいや。」とこぎました。

三27⑤ 「えいや、えいや。」とこぎました。

えいゆう 『英雄』(名) 1 英雄

十五29⑪ 少年は、右手に短刀をふりかざし、左手で女の子をかばい、昔の物語に出てくる英雄のように、《略》相手待ちかまえていました。

えいり 『絵入』(名) 1 絵入り

十二112⑥ 解体図 これは、オランダのターヘルア・ナトミアという人体のことを絵いりで説明した本を、《略》、日本で出版したものです。

ええ (感) 8 ええ

一54② ええ、いくどもひろいました。

二39⑧ ええ、休みましょう。

五25④ ええ、それでうれしかったのね。「ええ、

九57① ええ、ぼく、いちろうです。

九70⑪ ええ、かまいません。

十三38⑦ つれて行ってくださいよ……ええ、一

ど、三年のときだったか、遠足で行きました……

十五103⑦ ええ、ええ、そうですとも。

十五103⑦ ええ、ええ、そうですとも。

えがお 『笑顔』(名) 6 ええ

九110⑦ 雪けむりがきえて、先生のエ顔がうかぶ。

十一18⑤ わたしの幸福は、おかあさまのエ顔から

生まれます。

十一38⑤ 村道に立つ大のぼり、ゆききの人もエ顔して、その足どりもいそいそと。

十一41⑦ 廣場につどうたおとなりどうし、エ顔にほころびあいさつをする。

十一54④ 「エ顔の入口、感謝の出口。」

十五16⑧ 野にはたらきて、土ぼこり顔よごすとも、わするな、明かるくするながエ顔。

えかき 『絵描』(名) 2 絵かき

十二21③ 文雄さんがりっぱな絵かきになるころは、わたしも、ずっと大きな木になって、

十三54⑧ おじさんは、絵かきではありませんが、絵がすきで、

えがきだす 『描出』(五) 1 えがきだす 『一ス』

十二94③ 「赤とんぼ」という文字をとおして、
《略》赤とんぼを、心の中にえがきだす。

えがく 『描』(五) 7 えがく 『イ・カ・キ・ク』

七55⑦ 心にはつきりとえがかれた一つのかたちは、まじりけのない宝石のようなものであり

九109⑥ 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえがきながら、小鳥のようにおりてくる。

十38② 一つぶの天然眞珠をてのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわが者があった。

十二94⑨ すすきの野原を心にえがき、

十三13⑨ 火星や金星・木星などのような星は、太陽のまわりを、大きく輪をえがいて、まわっていることがわかり、

十三14⑥ そういう星——これをわく星といいます

が——の空にえがく道は、だえん形であって、

十三15④ だえん形のきまった輪をえがいて、一年

に一回、太陽のまわりをまわります。

えき 『駅』(名) 9 えき 駅

一44⑦ ふたりはいそいで えきに いきました。

四12① こは えきです。

五11⑥ 駅の人たちは、いつも氣をつけているよ。

五13⑦ このつぎの駅ですね。

五25⑨ 駅の出口までくると、でむかえにきていたおねえさんをみつけました。

五29⑧ おじさん、駅へおいでになるのでしょうか。

五30⑤ 駅につくと、その人は、『《略》』ときいたので、

七46⑩ 駅は、東北本線の「はないずみ」であった。

七46⑩ 駅の名も美しくよまれた。

えさ 『餌』(名) 7 えさ

五96⑩ 自分でえさをとったり、遠いところまでとんでいくことはできないよ。

七93⑥ 茶色のうさぎはいつているへやに、えさがなかったのか、かこいの鉄ぼうを、かじっていました。

八5⑪ てのひらで遊ばせたり、口さきにふくんだえさをとらせたり——

八6⑨ 自分から指さきやくちびるへとびあがり、とびついて、じょうずにえさをとったり、

八71⑧ にわとりにはこずきまわされ、えさをくれるむすめには足でけとばされた。

九127⑦ 今晩はうまいえさがかかるかな。

十42⑥ しおの流れの早さや、えさのよいわるいなども、はつきりしてきた。

エジソン (人名) 2 エジソン

十46① 幸吉は、『《略》』エジソンのもとをたずねて、養殖眞珠のつくりかたを、こまごまと話した。

十46② エジソンはたいへん喜んで、こういった。

エジプト〔地名〕1 エジプト

十五359 いまから五六千年ぐらいまえに、アフリカのエジプトには、そうした絵文字とよばれるものがあつた。

エジプトもじ(名)2 エジプト文字

十五412 ローマ字は、〈略〉、その大もとをたずねれば、エジプト文字から出たものである。

十五412 このエジプト文字がフェニキアに移ってフェニキア文字となり、

エスさま(人名)2 エスさま

四821 世界の子どもにうたわれて、きょうは、エスさま およろこび。

四845 一ばんさきに、ねえさんが、エスさまのおたんじょうのお話をしました。

えぞふじ〔蝦夷富士〕〔地名〕1 えぞ富士

十一4610 みわたすかぎりのじやがいも畑のうねの向こうに、いつもぽっかりとういていたえぞ富士。

えだ〔枝〕(名)29 えだ 枝 ↓かれえだ・こえだ・ひとえだ・やまぶきのひとえだ

三229 大きなえだは 四方にひろがって、

四397 ④ さくらの 枝を おろうとしたとき、おじさんの ことばに 気が ついて やめました。

四826 まつの 木の 枝を立てて、色紙で おった

つるや、ふうせんをさげました。

四839 それをまつの 枝の さきに つりさげると、

四863 ゆうがた、まつの 木の 枝は、まがるほど

雪に つもられて、だまっている。

四1277 みると、むこうの まつの 枝に、きれいな

ものが、かかっています。

五978 さんちゃんのおうちのまつの木にとまったり、かえでの枝で休んだりしていました。

六549 ④ ここに立って、お月さまを枝のあいだからみてごらん。

六5410 すると、月は枝のあいだにじつとしていますが、雲はさつさと走っていきます。

六559 動かないと思つてみた月は、もうさつきの枝のあいだにはなくて、

六7510 学校へいくとき、雪だるまのかたのところに、まつの枝をつけました。

八745 あしの上に廣がっている木の枝にものぼっていた。

八887 たくさんの木がかんばしくおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上にのびていた。

八936 にわとこの木でさえ、新しいはくちようのまえに枝をたれた。

九383 ④ かれ枝ならば、だれの山の木の枝でも、おつてよいことになっています。

九393 ④ 八九メートルもある木の上で、なで枝をおろすのは気がつかれます。

九396 ④ 上の方のかれ枝をじゅんじゅんにたたき落し、足もとの枝をおろして、

九5311 ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちよつと光っただけでした。

九546 かやの枝は、まっ黒にかさなりあつて、青空は一きれもみえず、

十47 高い木が大きく枝をはつて、

十1010 みあげるように高いプラタナスの枝からは、黄色い葉が、毎日のように落ちました。

十二75 道灌は、その花の枝を手にはしましたが、なんのことだかその意味がわかりません。

十二162 重みのかかった枝のつけね、ふわふわした軽い葉、

十二663 おおづなのようなたくましい根が、深く

のびてみきをささえ、廣くのびて枝をやしない、

十二924 りすをみつめて追いかけたこと、もみじの枝をとってきたこと――

十三272 土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、ねむのきの枝などが、ずつとのびだしている。

十四983 たくさんの小さなろうそくが、みどりの枝の間からかがやいて、

十五378 文字の左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に関係のあることを表わし、

えだごし〔枝越〕(名)1 枝ごし

六545 しばらく枝ごしに月をみていましたが、「略」と、手まねきをしました。

えだは〔枝葉〕(名)1 枝葉

九1151 ④ いまの鳥はこの木にいるにちがいないひそかに枝葉の中をみあぐる

えだぶり〔枝振〕(名)1 枝ぶり

九391 ④ 枝ぶりのよいかれ枝のたくさんついている高い木をみつけると、

えつこ(人名)1 えつ子

四157 えつ子がわたしのせなかでねんねした。

えどじだい〔江戸時代〕(名)2 江戸時代 江戸時代

十二1106 江戸時代にできたまき絵書だなです。

十二1117 この絵は北斎という江戸時代の人のかいたもので、浮世絵といえます。

えにつき〔課名〕2 えにつき

二23 二 えにつき……十二

二121 二 えにつき

えにつき〔絵日記〕(名)1 え日記

五843 たかぎくんは、え日記を書くといいました。

えのぐ〔絵具〕(名)7 えのぐ 絵のぐ ↓みずえのぐ

七319 ㊦ 白いえのぐにみどりをとくしたような、美しい羽です。

十二165 下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。

十二168 いい色の絵のぐがたくさんあった。

十二2010 ㊦ わたしはまた、あのような絵のぐがあればいいなと思いましたよ。

十二4711 ㊦ わざわざ絵のぐをつかって時間をかけて絵をかくより、

十二495 材料。古はがき一まい。〈略〉。絵のぐ。十二514 よくかわかしてから、絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬる。

えはがき「絵葉書」(名) 6 絵はがき

九811 「山」「けむり」「絵はがき」〈略〉など、いろいろなことばを組みあわせてみましょう。

十三532 もとの先生から、一まいの絵はがきをいただきました。

十三553 喜んでむかえてくださったので、先生からいただいた絵はがきをだして見せすと、

十三559 絵はがきをそのすりものとくらべてみると、ずいぶんちがっているのにおどろきました。

十三5512 絵はがきでも、たいへんいい絵だなと思いました。

十三618 ㊦ きつと先生も、そんなお気持ちで、この絵はがきを送ってくださいったんだらう。

えび「鰍」(名) 1 えび

四1139 えび「では、にぎやかな おどりを、して、ごらんにいれましょう。」

えび「鰍」(名) 1 えび

四1082 である人 うらしまたろう たい えび そのほかいろいろな魚

えほん「絵本」(名) 2 絵本

六486 ㊦ 海 どこかでだれかがめくってる、大きなきれいなページ、生きた絵本の一ページ。

十三282 遊ぶといっても、べつに、おもちゃや絵本などを持って遊ぶわけではない。

えまき ㊦ どうぶつえまき

えまきもの「絵巻物」(名) 1 絵巻物

十二1062 絵巻物 四つに組んだ大ずもう。

えみ ㊦ ほおえみ・ほほえみ

エミリ「人名」1 エミリ

十三498 メアリとスーザンとエミリとが、かわい

い口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわらう。

えむ ㊦ ほおえむ

えもじ「絵文字」(名) 2 絵文字

十五3510 いまから五六千年ぐらいまえに、アフリカのエジプトには、そうした絵文字とよばれるものがあつた。

十五3512 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、

えもの「獲物」(名) 1 えもの

六847 ㊦ にいさんもやつぱりえものがなかつたんですか。」ほてりの「おまえは、なにかつたか。」

えらい「偉」(形) 15 えらい 《ー・ー・ー・カッ》

四383 ㊦ それはえらかつた。

五533 ㊦ えらいわね。」といって、手をたたいてやりますと、

六68 ㊦ いろいろな道具、たくさん時計、〈略〉、どれをみても大きくてえらそうである。

九646 ㊦ なんといつたつて、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。

九648 ㊦ まるいのがえらいのです。

九6410 ㊦ 大きなのがいちばんえらいんだよ。

九6411 ㊦ わたしがいちばん大きいから、わたし

いちばんえらいんだよ。

九666 ㊦ なんといつたつて、頭のとがったものが、いちばんえらいんです。

九667 ㊦ まるいのがえらいのです。

九686 ㊦ この中で、いちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなつてないのがえらいとね。

九694 ㊦ この中で、いちばんばかで、〈略〉、頭のつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」

どんぐりどもは、しいんとしてしまいました。

十319 自分をえらそうにみせかけたり、人をだましたりしないで、ありのままのすがたで、つきあつていきたいのです。

十3610 ㊦ 「えらいものだ。」といつてほめたたえた。

十三615 ㊦ 自由にふでをふるつて、りっぱな作品をたくさんのはえらいよ。

十五616 そのころ、新島のおじさんがどんなにえらいかたであるかを知らなかつた私は、

えらびだす「選出」(五) 1 えらびだす 《ーシ》

十三591 おじさんはそういつて、同じひきだしから、一まいえらびだして、見せてくださいました。

えらぶ「選」(五) 4 えらぶ 選ぶ 《ービー・ン》

八431 ㊦ あなたは、こがねと一ぱいの水と、どちらをえらびますか。

十124 少女たちは、〈略〉とんでいつて、小さなのをえらんで、ひろつてきてくれました。

十二936 ことばを選び、〈略〉、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。

十三281 夏は夏で、ひんやりとした土べいの日かげを選び、風の通り場で遊んでいる。

えり「襟」(名) 2 えり

九5711 着物のえりを廣げて、からだに風をいれな

がら、「略。」とききました。

九68 10 やまねこは、〈略〉氣どったようすで、

しゅすの着物のえりを開いて、

える「得」(下) 2 得る 《エ・エル》 ↓ ころえる

十三8 8 深い、正しい知識を得るには、考えたり、調べたり、〈略〉、実験したりする。

十三16 3 ガリレオは、〈略〉、やむを得ず自分の説はあやまりであつたということにして、

エレベーター (名) 1 エレベーター

十24 2 エレベーターをあやつる大きな車輪が、まわっている。

えん「円」 ↓ しんえん・しんえんしんじゅ・にえん・はんえん・はんえんしんじゅ

えん「園」 ↓ オーストリアどうぶつえん・ぶどうえん・ようちえん

えん「縁」(名) 4 えん

十一40 6 園 南にかたむく日につれて、光はまともにえんにさす。

十四32 4 天上の星とあなたがたとは、あまりにかけはなれているために、自分たちとはえんがないと思っている人もあるでしょう。

十四74 10 そうなると、いろいろの実用上の問題とえんがつながってきます。

十四85 9 このように、二つの映画は、どちらも雪にえんのあるものであるが、

えんかい「宴会」(名) 2 えん会

十五89 4 園 みんなえん会のやりなおしをするところです。

十五92 2 「ふとった幸福」どもは、せつせと、いぬと、さとうと、パンをときつけて、えん会の中にひきずりこんでしまいました。

えんがわ「縁側」(名) 7 えんがわ

三61 2 おとうさんは えんがわに こしを おろして、どうきまるか おまちになりました。

三80 10 みんなは どうとう えんがわまで にげていきました。

三83 3 そのとき、おかあさんが えんがわにでていらつしやいました。

九117 6 文 園 ふくじゅそうのはちをおきかうるおさな子やえんがわの上にうつる日を追いて

十59 9 えんがわにつくえをだして、その上にすすきをかざった。

十二76 6 芭蕉は、えんがわにいつてなにか持ちだしてきました。

十四63 3 この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだして、日光を湯げにあて、

えんけい ↓ だえんけい・はんえんけい

えんじゅ「槐」(名) 1 えんじゅ

十三27 1 土べいの上から、えんじゅや、やなぎやねむのきの枝などが、ずつとのびだしている。

えんずる「演」(サ変) 3 演ずる 《ージ・ーズル》

九14 2 しばいで、ゆめをみていた人が、にわかに目をさます場面を演ずることがある。

十64 7 能といつしよに、狂言というものが演じられます。

十三31 7 さるは、〈略〉、とんでもないべつのことを演じたりする。

えんそく「遠足」(名) 4 遠足

八58 1 ある日、ぼくは遠足でみはらし台へいった。

十二92 9 みんなが「遠足」という同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれちがってくる

十二92 12 「遠足」ということばは、だれにでも同じようにわかり、

十三38 8 園 一ど、三年のときだったか、遠足で行きました……

えんちようさん「園長」(名) 3 園長さん

十一43 9 園長さんが、だんの上にお立ちになりました。

十一44 11 そうして、園長さんのまえに向いたとき、「略。」と、大声でいきました。

十一45 6 園長さんのまえにでて、だんをあげり、〈略〉、おめんじようをいただいて、

えんどう「豌豆」(名) 3 えんどう

七66 えんどうの花が、風もないのにゆれている。

十一31 9 園 えんどう・そらまめみな花つけて、羽音高くみつばちがとぶ。

十一39 7 園 冬 おおむぎ・こむぎの種まきすんで、そらまめ・えんどうみなまいた。

えんとつ「煙突」(名) 4 えんとつ

四94 3 えんとつからすすがとぶように、黒い、こまかいものがとんでいる。

五33 7 えんとつがたくさん立っています。

五33 8 どのえんとつからも、けむりが、むくむくとたちのぼっています。

十一46 川上の方をながめると、近くの町の工場

のえんとつが、なん本も立っているのがみえる。

えんのした「縁下」(名) 4 えんの下

四68 9 「この えんの 下の くぎ、ひきぬきにくい。」

五91 7 園 このたけのこが、えんの下にあたまをだしたので、

五91 11 園 のびて、のびて、とうとうえんの下のいたで、あたまをコッソんとうつたのだよ。

十四67 4 湯げは、えんの下やかきねのすきまから、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、

また、たちのぼります。

えんばく「燕麦」(名) 1 えんばく

十一492 それから、えんばくもつくりま。

えんびつ「鉛筆」(名) 5 えんびつ

一148 くれよんひととはこ、ふでいれひとつ、え

んびつ三ぼん、けしごむひとつ。

一163 えんびつもつかいます。

三964 えんびつでかくことも、ふででかくこ

ともできます。

四786 えんびつをなめないように。

十173 えんびつ一本買いにいくにも、日本のこ

とばでは通じません。

えんまこおろぎ「闇魔蝶餅」(名) 1 えんまこおろ

ぎ

十二151 そのくちた草をとりのけようとすると、

大きなえんまこおろぎが一ぴき頭をだしていた。

えんりよ じょえんりよ

えんりよがち「遠慮勝」(形状) 1 えんりよがち

十二233 せまい家なので、兄は氣のどくだといっ

て、いつもえんりよがちにしています。

えんりよ・する「遠慮」(サ変) 2 えんりよする

《一シ》

六423 南へひきあげるついでだから、えんりよ

しなくてもいいのよ。

十317 自分のもっているいいところを、えんりよ

しないであらわし、

お

お「尾」(名) 2 お

十一135 ふえの音は、長くおをひいて消えていく。

十四993 その星が落ちるとき、空を横ぎって長い

光のおをひいた。

お「緒」じはな

お2 お

二89 「お」のつくことばをあつめました。

四777 お——おにさんこちら、手のなる方へ。

おあい・する「御会」(サ変) 3 おあいする お会

いする《一シ・スル》

五223 ひさしぶりにおあいさんにおあいして、お

もちや、《略》をいただいて、

十四1511 手 そうすれば、おあいしに行く日のくる

まで、いままでより時間が早くたつてしょうから

十五542 いまその大先生にお会いすることができ

た私は、なんというしあわせ者であろう。

おあがりなさる「御上」(五) 1 おあがりなさる

《一イ》

六1435 安心して、ゆっくりおあがりなさい。

おあがる「御上」(五) 3 おあがる 《一リ》

六1246 おあがり。」りすさんは、両手に、くる

みをにぎって、おいしそうにたべました。

八547 「さあ、これをおあがり。」

十810 「日本人、くりをおあがり。」

おあがり・する「御上」(サ変) 1 おあがりする 《一

シ》

十四1411 自分としては、力のかぎりおあさ

んを幸福にしておあげしよう。

おあげなさる「御上」(五) 1 おあげなさる 《一

イ》

十一758 氣をつけておあげなさい。

おあ・ける「御開」(下一) 1 おあける 《一ケ》

あつても、おあけになつてはいけませんよ。

おあ・げる「御上」(下一) 1 おあげる 《一ゲ》

五97 じろう、せきをあげて、あのぼつちゃん

をかけさせておあげ。

おあそびなさる「御遊」(五) 1 お遊びなさる

《一イ》

七234 おさらいを早くすませてから、お遊びな

さい。

おある「御在」(五) 1 おある 《一リ》

十二197 あなただつてその実をそんなに美しく

なさるには、ご苦心がおありだつたでしょうね。

おある・く「御歩」(五) 1 お歩く 《一キ》

八589 「《略》。」とおっしゃって、さきに立つて

お歩きになった。

おい「甥」(名) 2 おい

十二243 わたしには、かわいいめいとおいにあた

ります。

十二244 おいの正男^{まさお}ちゃんは、五つですから、も

うひとり遊びができますが、

おい(感) 9 おい

四516 おい、こんどは、ぼくがかわつて、か

ついでいこう。

八734 「おい、きみ。」と、その一わがいった。

九521 おい、きのこ。

九533 おい、りす。

九622 おい、さあ早くベルを鳴らせ。

九882 「おい、よしたまえ。」

九9710 「おい。」たかき「なんだ。」

九985 おい、ボタンついたか。

十五1001 おい、みんな、聞いたらう。

おいといつけ「御言付」(名) 1 おいといつけ

十五1188 みなさん、私は神さまのおいといつけを

守っているのです。

おいしいつける 「御言付」(下一) 2 おいしいつける

《一ケ》

三117 5 手紙をやきすてよ。」とおいしいつけになりました。

八46 4 そのシャツをもらってくるように。」と、
おいしいつけになりました。

おいしい (副) 4 おいしい

十72 12 太郎かじやは、きゆうに両手で顔をおおい、

おおいお大声をあげてなきだしました。

十73 1 次郎かじやも、そのまねをして、おおい
なきだしました。

十73 4 太郎かじやは、なおも、おおいおいきなが
らいました。

十74 1 いままでおおいおいないでいたくせに、きゅ
うに、にっこりわらい顔になって、

おおい (感) 1 おおい

九51 2 会 おおい、ふえふき。

おいかける 「追掛」(下一) 10 おいかける 追い

かける 《一ケ・ケル》

四22 3 手 そとにいたねこが おいかけました。

六129 8 会 いま、きつねに追いかけていゐるんだ。

六129 9 会 きつねがおこつて、追いかけてくるんだ
よ。

六137 7 しかさんは、うさぎさんたちのあとを、ど
んどん追いかけました。

七40 4 私は、いそいで、さぶろうのあとを追いか
けました。

八10 5 どうかすると、歩いているとき、追いか
けてきて、かかとや足の指をつついたりする

八89 6 会 なかまに追いかけられたり、にわとり
ぶたれたり、女の子につきのけられたり、

十74 12 「略。」と追いかけました。

十二92 3 りすをみつつけて追いかけたこと、

十三36 8 子どもたちは、それをつかうとして追
いかける。

おいしい 「美味」(形) 11 おいしい 《一・一・
ク》

二47 7 会 このおいしそうなりんご。

四37 1 会 そこには、ぶどうが、たくさん おいし
そうにじゅくしていました。

四56 5 きず口も だんだんよくなり、《略》たべ
ものも、おいしくたべるようになりました。

四113 6 会 これは、まださしあげたことの無い、
おいしいごちそうで、ごさいます。

六90 6 会 ああ、おいしい水。

六124 7 りすさんは、両手に、くるみをぎって、
おいしそうにたべました。

六140 1 会 おいしい肉がたべられる。

十一47 9 うちではバターもつくつたし、こむぎこ
で、おいしい、やわらかいパンもやいた。

十三32 7 会 おいしい、おいしいアイスクリーム。

十三32 7 会 おいしい、おいしいアイスクリーム。

十四93 8 おいしそうなおいをかいた。

おいしげる 「生茂」(五) 1 おいしげる 《一ツ》

十三23 11 ユートランドのあれ地には、おいしげ
たもみの林が見られるようになりました。

おいしゃさん 「御医者」(名) 2 お医者さん

十一71 7 会 「いまに、お医者さんがみにきてくだ
さるだろう。」と、少年は考えました。

十一92 6 会 お医者さん、ありがとう。

おいたてる 「追立」(下一) 2 追いたてる 《一・テ
ル》

八51 8 おまけに、その家にかつてあるいぬが、

おそろしい声で追いたてるように鳴きました。

九108 3 「略。」と、おいしい先生がうしろの方か
ら追いたてるようにいわれた。

おいためる 「御痛」(下一) 1 おいためる 《一
メ》

十四9 7 手 かなしみのために、おからだをおいた
めになるなんて、

おいづめる 「追詰」(下一) 1 追いつめる 《一・メ
ル》

十二84 7 あの小さいからだ、まほうつかいのよ
うになって、大きなチルデン選手を追いつめるも
のすごさは、

おいでくださる 「御出下」(五) 1 おいでくださ
る 《一・イ》

四110 5 会 よくおいでくださいました。

おいでなさる 「御出」(五) 3 おいでなさる 《一
イ・一ツ》

五90 4 会 わしのおかあさんはな、ずっとまえに、
さどが島においでなさったことがあった。

九47 6 手 あした、めんどろな裁判をしますから、
おいでなさい。

十五89 3 会 (チルチルの手をにぎりながら) まあ、
おいでなさい。

おいでる 「御出」(下一) 51 おいでる 《一・デ》

一44 8 会 お月さんのくにへ おいでのかたは、
こちらへ おならびください。

二55 6 けれども、おじいさんの おとうさんは、
おいでになりません。

二55 7 いまはおいでになりませんが、まえには
おいでになったにちがいありません。

二55 8 まえには おいでになったにちがいあり
ません。

三603 そこへ ちょうど おとうさんが おいでになつて、
 三1046 その 中には、 みやさまがたも おいでになりました。
 四3510 おとうさんが おいでにならなくても、 かずこさんの 耳には、 おとうさんの ことばが、 ひびいて きたのです。
 四915 ひとときは いて、 うちに あがつて おいでになると、 ひたいから ゆげが たつ。
 五298 おじさん、 駅へおいでになるのでしょうか。
 五556 そこへ、 受持の やまもと 先生が おいでになつて、「略」と、 さそつてくたさいました。
 五6811 もう 一ど金の さかなの ところへいって、 家をもつておいで。
 五7210 おまえさん、 ぐずぐずいわずに 海へいっておいで。
 五752 金の さかなに たの んでおいで。
 五8210 そうして、 私たちの 教室にも おいでになりました。
 五888 さあ、 ここへおいで。
 五912 さあ、 みんなこちらへおいで。
 六2310 ここで 楽しく あそんでおいで。
 七233 そのとき、 おかあさんが おいでになる。
 七334 さあ、 はるお、 おいで。
 七7511 あなたが たは、 なにかさが して おいで の ようだが——「甲」そう です。」
 八265 中には 天帝が 乗つて おいで です。
 八279 それは、 天帝の ひとりむすめのは たおりひめ のすがたを、 もとめて おいで になる のでした。
 八375 もっと たくさん が ねを集めよう と 願つて おいで になりました。
 八381 ある日、 王さまは、 宝ぐら の中で、 宝物を

かぞえて おいで になると、
 八672 わたしについて おいで、 大きな 世界の 鳥小屋へ つれて いって あげる からね。
 八833 「どうぞ、 かつて おいでよ。」そこで、 あひるの子は かけて いった。
 九403 そんな 高いところ、 あぶないから、 早く おいで。
 九569 やまねこさまは、 いま すぐここへも どつて おいで になるよ。
 九769 先生が、 リヤカーに、 はこやかごなどを せて おいで になりました。
 九786 しばらくして、 その 主人といつしよに でおいで になりました。
 九821 先生は、〈略〉、 ひとりで たんねんに ほつて おいで になります。
 九842 先生が まわつて おいで になりました。
 十1211 おいで、 わたしといつしよに お話を しておくれ。
 十594 「ごはんを たべて から、 すすきを取つて おいで。」とおつしやつた。
 十一6611 わたしについて おいで。
 十一676 「おいで。」と、 看護人は、 くり返し ながら、 中へは いりました。
 十一7212 先生が、 いま じきに おいで になります からね。
 十一755 「心配 しないで おいで。」と、 医者は、 〈略〉 答えました。
 十一872 「じゃあ、 ここにおいで。」
 十二196 わたしは あんまり へたな ので、 耳ざわりで いやが つて おいで だろう と思ひました
 十二347 知つたのは、 先生が おいで になつて から いく週間も たつて からの ことでした。

十二3510 私は、 先生が かけらを いろいろのかたすみには きよせて おいで になつて いる ようすを感じ
 十二874 「水を持って おいで。」
 十二884 「水を持って おいで。」という 簡単なことばでも、
 十三405 きょう、 マンシュウから 来た 竹田さん、 おいで でしょうか。
 十三421 六時ごろ……もつと 早く おいでよ。
 十四136 夜を どうして すごして おいで でしょうか、 お知らせ ください。
 十四145 おとうさんのお写真は、〈略〉、 生きて おいで になつたとき その ままです。
 十五271 だいじょうぶだ、 安心して おいで、 私 が いま すぐ 出て あげる から。
 十五685 みんな 早く 出て おいで、 満ぼろ が 来たよ。
 十五11912 まあ、 だまつて おいでよ、 いい子 だから。
 おいとまいたす 「御暇」(五) 1 おいとまいたす
 《—シ—》
 四1174 それでは、 おいとまいたします。」おとひめ「おかえり になりますか。
 おいとま—する 「御暇」(サ変) 2 おいとまする
 《—シ—スル—》
 四1149 あまり 長く なりますので、 もう、 おいとましよう と思ひます。
 十五937 せっかくな おまねき を いただきながら、 そう あたふた とおいとま することも できません かね。
 おいのり 「御祈」(名) 2 おいのり
 四618 「略」と、 おいのりを しました。
 六1409 うさぎさんたちは、 いっしん になつて、 神

さまにおいのりをしました。

おいのりいたす 「御祈」 (五) 1 おいのりいたす

《一シ》

十五122 先生がたのご幸福をおいのりいたします。

おいやゝる 「追遣」 (五) 1 おいやる 《一リ》

五721 おばあさんは、おじいさんをうま小屋のし

ごとにおいやりました。

おいらせむら 「奥瀬村」 (地名) 1 奥瀬村

十二627 十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木

こりがいた。

おゝいる 「老」 (上) 2 老いる 《一イ》

十三522 やがて老いても、そのように。

十四61 老いた母を思う子の真情は、遠く海をこ

えて、私たちの胸にまでせまってくる

おゝれる 「御入」 (下) 1 おゝれる 《一レ》

九811 口々にこんなことをいうのを、先生は、耳

にもおゝれにならないで、

おう 「王」 ↓しんじゅうおう

おゝう 「追」 (四五) 14 おう 追う 《一イーウ・

ーッーウ》

一583 あのとき、たろうさんが くりいぬを

おってくださらなかつたら、どう なって いた

か

六431 しずんでいくお日さまをおって、町の上を

列車のようにとぶつばめのむれ。

六131 ぼくはきつねに追われてなんかいやしな

いんだ。

八74 「略。」としかつたり、それでもきかな

ければ、指で追つたりしました。

九117 文 ふうじゅそうのはちをおきかうるおさ

な子やえんがわの上にくる日を追いて

十一339 ぼたる追う夜も重なって、麦のとりい

れことなくすめば、

十一344 かなえ運ぶ子、うし追うおきな、家内

そろって田植える。

十一764 病人のふとんをなおしたり、ときどきそ

の手にさわつてみたり、はいを追つたり、

十三204 切りとるばかりで手入れをおこたつた

めに、土地は、年を追ってやせおとろえ、

十三487 とやへ追われて行く、白いレグホンたち。

十四813 牛を追う。

十四839 時間的に、じゅんじよをおって、とりあ

つかつたものである。

十五222 女の子は、《略》下の方にちらばつてい

るひつじのむれを追ひでもするように、

十五644 おじさんとおばさんはそのあとを追つて

出て來られたが、

おゝう 「負」 (五) 1 おう 《一イ》 ↓せおう

十五653 夏の日に、私をせにおいながら、あせを

ふきふき歩かれた新島のおじさんと、

おうい (感) 17 おうい

二404 「おうい、おうい。」とさげびます。

二404 「おうい、おうい。」とさげびます。

二406 「おうい。」とさげびます。

二408 「おうい。」山びこ「おうい。」

二409 「おうい。」たろう「だれだあい。」

三511 「おうい、おうい。」

三511 「おうい、おうい。」

三78 「おうい。」

三79 「おうい、おうい。」

三79 「おうい、おうい。」

四593 「おうい、おうい。」とさげびました。

四593 「おうい、おうい。」とさげびました。

四596 「おうい、おうい。」とこたえるだけで

した。

四596 「おうい、おうい。」とこたえるだけで

した。

九112 「おうい。」

十25 「おうい。」

十26 「おうい。」

おうえん 「応援」 (名) 2 おうえん

七539 おうえんの声が耳にひびいてくる。

十二106 二ひきのうさが、うしろから手をふり

足をふつて、おうえんをはじめました。

おうえんしゃたち 「応援者達」 (名) 1 おうえん者

たち

十二851 チルデン選手もおうえん者たちも、

もうあきらめていたときでした。

おうえんする 「応援」 (サ変) 2 おうえんする

《一シースル》

十二7912 「じゃあ、きょうのテニスの試合には、

どちらをおうえんするの。」

十二819 私はスタンドから一心におうえんしてい

る二少年のことを思つては、ふるいたつて戦い、

おうえんだん 「応援団」 (名) 1 おうえんだん

七510 みかたのおうえんだんが、「略。」と、大

声をとてる。

おうぎ 「扇」 (名) 1 おおぎ

十二610 高どのに立つていた長者は、日のまるの

おおぎをあげて、しずみかけた日をさしまねくと

おうけとりくださる 「御受取」 (五) 1 お受け

とりくださる 《一イ》

七449 「お受けとりください。」

おうけなさる 「御受」 (五) 1 お受けなさる 《一

イ》

六124 「お受けなさい。」うさぎさんたちは、ま

つかさを「略」おさるさんにながてやりました。

おうさま 「王様」(名) 27 王さま

三14 7 ある日、おしゃかさまは、王さまのおまねきに気づかりました。

三14 9 おしゃかさまは、たくさんのでしをつれて、王さまの「てん」にまいりました。

三16 4 王さまは、「略」とおっしゃいました。

三17 3 王さまは、すぐはんたかをおよびになりました。

八37 3 あるところに、金持の王さまがいらっしやいました。

八37 7 王女がこがね色のたんぽぽをつんでくると、王さまは、「略」とおっしゃいました。

八38 1 ある日、王さまは、宝ぐらの中で、宝物をかぞえておいでになると、

八38 3 王さま、あなたは金持ですね。

八39 10 王さまは、大喜びでねどこからとびおきて、まず、いすにおさわりになりました。

八40 2 王さまは、ねどこにおさわりになりました。

八40 5 王さまは、庭へおでになりました。

八40 11 王さまは、朝ごはんをめしあがろうとなさいました。

八41 10 「略」こういって、王さまにだきつきました。

八42 4 王さまは、おかなしみになりました。

八42 4 王女は、王さまにとっては、世界じゅうのこがねよりもたいせつであつたからです。

八42 10 王さま、満足なさいましたか。

八43 9 王さまは、いそいで庭のいけの水をすくつて、王女のからだにおふりかけになりました。

八44 1 「略」王女は、こういって、王さまにすがりつきました。

八44 3 あるところに、ひとりの王さまがいらっしやいました。

八44 5 王さまは、ご病氣をなさつて長いことお苦しみになりましたが、

八44 9 王さまは、「略」というおふれを、おだしになりました。

八45 4 みんなより集まつて、どうしたら王さまのご病氣をなおすことができるかと、

八45 6 そこへ、王さまの病氣をなおすというものがでてきました。

八45 9 ほんとうに幸福な人をつつけて、その人の着ているシャツを王さまにお着せするのです。

八45 11 これをきいて、王さまはたいへんお喜びになりました。

八49 4 王さまに、さしあげたいことはやまやまですが、

十五103 8 これが「日ぐれの幸福」で、世界じゅうの王さまのすべてよりもりつぽで、

おうじ 「王子」(名) 5 王子

八47 2 王子も、なんとかして父の病氣をなおしたいと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

八47 5 日がくれましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。

八47 10 王子はふと立ちどまつて、その声に耳をかたむけました。

八48 4 王子は手をうって、「略」と喜んで、つかつかと小屋の中へはいっていききました。

八49 1 王子は、いままでのわけをこの男に話しました。

おうじよ 「王女」(名) 9 王女

八37 4 かわいいひとりの王女もあつて、なにひとつ不足なことはありませんでしたが、

八37 7 王女がこがね色のたんぽぽをつんでくると、王さまは、「略」とおっしゃいました。

八41 6 そのとき、王女がはいってきました。

八42 2 「略」とおっしゃいましたが、王女はなんの返事もしませんでした。

八42 2 王女は、かたいこがねになつていたので、

八42 4 王女は、王さまにとっては、世界じゅうのこがねよりもたいせつであつたからです。

八43 5 王女は、「あ、あ、かわいいひめです。」

八43 9 王さまは、いそいで庭のいけの水をすくつて、王女のからだにおふりかけになりました。

八44 1 王女は、こういって、王さまにすがりつきました。

おうじよう ひたちおうじようさせる
おうたう 「御歌」(五) 2 おうたう
「い」

五90 1 『さどが島』とおうたいになったとき、おじぎをなさいましたね。

十62 9 おじいさんやおとうさんがおうたいになるうたいを、きいたことがあるでしょう。

おうち 「御内」(名) 5 おうち
一60 3 あなたの おうちに おいて いただいた おかげで、しろちゃん、げんきな こになりました。

三58 3 五人の子どもの おうちは、丘の上にあるのでも、ふもとにあるのでもありません。

五97 6 さんちゃんのおうちのまつの木にとまつたり、かえでの枝で休んだりしていききました。

九73 8 「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」やまねこがいきました。

十五101 6 ぼくは、あなたのおうちの幸福のかしらですよ。

おうちにいるこうふくども 「御内居幸福共」(名) 1

『おうちにいる幸福』ども

十五1017 会 これはみんな、『おうちにいる幸福』どもですよ。

おうむ 「鸚鵡」(名) 1 おうむ

十二902 どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのようになていたのでは、

おうよう 「鷹揚」(形状) 1 おうよう

六511 カチカチと氣ぜわしいのはおき時計で、カッターリカッターとおうようなのははしら時計である。

おお (感) 5 おお

五858 会 おお、みんなそろってきたな。

八421 会 おお、かわいいひめや。

十129 会 おお、こわい。

十一8212 会 おお、チチロ。

十五676 会 「おお、満ぼう。」とさげんで、しつ

かと私をだきしめた。

おおあばれ 「大暴」(名) 1 大あばれ

八305 黒うしは、おどろいて、大あばれにあばれだしました。

おおあめ 「大雨」(名) 1 大あめ

二137 大あめがふりました。

おおあらし 「大嵐」(名) 1 大あらし

十一512 ゆうべからの大あらしは、けさになってもまだ続いていた。

おおい 「多」(形) 16 多い 《イー・カッ・ク》

三436 会 きみの なかまと ぼくの なかまと、どっちが多いか、くらべてみようではないか。

三443 会 きみの なかまはずいぶん多いな。

五459 会 世界の空のかず多い、かがやく星のその一つ。

八165 虫たちは、〈略〉、手ごろな、皮のうすい、

しるの多い木の根をさがしてあるきます。

八1018 3本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえま

したが、いちばん多いので15本になりました。

八1063 3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いの

で16、ほかのは、だいたい12ぐらいでした。

八1066 1本のほに、多いのは180ぐらいずつつ

いていました。

九431 会 こちらはかきの木の多いところで、どこ

の家にも、二本や三本はあります。

九844 会 これはじょうもん土器といつて、貝つか

からでる物では、いちばん多い土器です。

十一256 そのお金は多くはありませんでしたが、

四人が生きていくにはじゅうぶんでした。

十二391 できごとの多かったこの日もくれて、

十二558 傳説には、〈略〉、昔からいい傳えられた

というだけのもののほうが多い。

十三109 同じ名まえの人も世の中には多いが、

十四222 私たちは、あまり多いのにおどろいた。

十四682 そこだけは、地面から蒸発する水蒸氣が、とくに多くなります。

十五981 会 ここだって、どこだって、やはり、お

金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

おおいそぎ 「大急」(名) 8 おおいそぎ 大いそぎ

大急ぎ

六175 「略。」といつて、大いそぎで木からと

びたつていきました。

六522 月はいま雲からでて、大いそぎではなれて

いきます。

六528 月は動かないで、雲が大いそぎでとんでい

くようにもえます。

六535 会 雲が大いそぎでとんでいくでしょう。

九209 協会では、おおいそぎで、その家をつばめ

たちのためにぐあいよくつくりなりました。

九626 やまねこは、大いそぎでぎょしゃにいいつ

けました。

十五324 少女の両親たちが、〈略〉、大急ぎでおり

て來たのです。

十五9810 会 それにあの子たちは、大急ぎに急いで

いる。

おおいつつむ 「覆包」(五) 1 おおい包む 《一

ム》

十五307 わしは、〈略〉、少年の周囲をおおい包む

いきおいでせまつて來ました。

おおいに 「大」(副) 3 おおいに

六201 会 おおいにうたい、おおいにひいて、この

夏の日を樂しもうではないか。

六201 会 おおいにうたい、おおいにひいて、

六256 会 われわれは、おおいにうたおう。

おおう 「覆」(四五) 6 おおう 《イー・エ・

ー・ツ・ワ》おおうおおう

九1259 大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、ま

つ林におおわれた道もない谷まになった。

十7212 太郎かじやは、きゆうに両手で顔をおおい、

おおいおおいをあげてなきだしました。

十二318 午後の日光は、げんかんをおおったすい

かざらのしげみをもれて、

十二364 ふたりは、いどの小屋をおおっているす

いかずらのあまいにおいにひかれて、

十四683 そういう地方のまわりに、わりあいにつ

めたい空氣におおれた地方があると、

十五128 会 紙をもてランプをおおえばガラス戸の

外のつくよの明らけく見ゆ

おおうかれ 「大浮」(名) 1 大うかれ

十一 318 圃 青い空にはかすみがかめて、ひばりは朝から大うかれ。

おおうつし 「大寫」(名) 2 大寫し

六 37 5 顔の大寫し。

六 40 4 のこされたかかしの大寫し。

おおかじ 「大火事」(名) 1 大かじ

二 18 2 上は大みず、下は大かじ、なかに。

おおかせ 「大風」(名) 4 大風

六 33 10 生まれてはじめての大風だ。

六 35 2 2 おじさん、大風ってこわいな。

六 39 2 2 かかし「ふきとばされたんです。きょうの大風に。」

九 128 2 ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、あみもはることはできませんでした。

おおかわ 「大川」(地名) 1 大川

十二 75 1 ふだんは〈略〉、大川の波の音がバサリバサリと、まくらにひびくのですが、

おおき 「大」(形状) 3 大

十五 14 2 2 大きなるべにばらのひと花思わぬをゆららにあかく開き満ちたる

十五 15 1 2 2 おどろきてわが身も光るばかりなり大きなるばらの花照りかえる

十五 15 7 2 2 大きなるなにごともなきばらの花ふとのはずみにくずれたりけり

おおきい 「大」(形) 68 おおきい 大きい 《イ・カッ・ク》 ↓かわはおおきくなる

一 63 4 2 2 それであんなにおおきいのです。

二 21 6 2 2 「先生、ゆうがおがこんなに大きくなりました。」

三 34 7 2 2 わたくしも、早く大きくなって、三 37 1 2 2 こづかいさんのおへやのものは、みんな大きいなおもいました。

三 99 6 2 2 みなさんが大きくなってから、四 23 9 2 2 ぼくは、大きくなったら、

五 6 2 2 川はだんだん大きくなる。

五 6 6 2 2 川はだんだん大きくなる。

五 7 3 2 2 川は大きくなると、ゆっくりとながれていく。

五 25 1 2 2 ぼくは、もう大きいんですから。

五 29 5 2 2 一つは大きくて、ぼくなんか、とても持てそうもない物、

五 56 2 2 2 あそこに大きく光っている星ですよ。

五 58 10 2 2 「ぼく、大きくなるまでに、どの星もみんなみてしまいたいな。」といいました。

五 63 10 2 2 ねてばかりいたのが、〈略〉、いまは、もうこんなに大きくなりました。

五 63 11 2 2 2 あさがおやきゅうりは、自分ひとりで、大きくなったのしょうが、

五 64 2 2 2 わたしは、おとうさんやおかあさんの力で、大きくなったと思います。

五 64 4 2 2 2 生まれたときからせわはしてきたが、日に日に大きくなったのは、

五 95 6 2 2 2 ひなは、みちがえるように元気がでて、だんだん大きくなりました。

六 6 8 2 2 2 どれをみても大きくなってえらそうである。

六 32 7 2 2 2 いねが大きく波うつ。

六 34 9 2 2 2 かかしの目だま、ぐるぐるまわりながら、大きくなったり、小さくなったりする。

六 69 5 2 2 2 そんなに大きくはありませんが、六 77 3 2 2 2 ぼくたちは、だんだん大きくなるから、生きているんですよ。

六 77 4 2 2 2 「たしかに、動いたり大きくなったりしているものは、みんな生きものだね。」六 84 2 2 2 2 大きいのをにがした。

六 100 3 2 2 2 そのさかさまにみえるけしきを、大きくしてみようと思つて、

七 24 9 2 2 2 兄は、二センチほどに大きくなったあおむしを、新しい葉にうつす。

七 25 2 2 2 2 あおむし、大きくなりましたね。

七 53 6 2 2 2 なんだか、向こうのせんしゅは、大きくて強そうだ。

七 58 1 2 2 2 雨がはれて、にじが大きくなりました。

八 17 10 2 2 2 虫は、〈略〉、大きくなるにつれて、六本の足がだんだん強くなり、

八 19 1 2 2 2 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、〈略〉、わずか二三ヶ月で大きくなって、

八 19 6 2 2 2 せみの子たちは、たいへん生長がおそくて、ように大きくなりません。

八 20 1 2 2 2 大きくなるにつれて、だんだん地のそこふかくもぐりこんでいきます。

八 20 4 2 2 2 七年の月日がたったころ、せみの子たちは、〈略〉、もう大きくなりきつたことを知ります。

八 69 7 2 2 2 2 大きくなれば美しくもなるでしょう。

九 40 6 2 2 2 2 なたをふりおろすたびに、すぎの木は大きくゆれました。

九 45 8 2 2 2 2 兄は、大きくなって農業をするために、いま知りあいの家でみならいをしています。

九 64 11 2 2 2 2 わたしがいちばん大きいから、わたしがいちばんえらいんだよ。

九 65 1 2 2 2 2 わたしのほうがよっぽど大きいって、きのう判事さんがおつしやったじゃないか。

九 73 2 2 2 2 やまねこは、大きくのびあがって、十 4 7 2 2 2 高い木が大きく枝をはって、

十 11 12 2 2 2 2 プラタナスの葉の大きいのは、やつでほどもありました。

十 38 8 2 2 2 2 それに、貝のだす眞珠質がまきつき、年と

ともに大きくなって、

十 61 11 たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きくなりま

十 64 5 みなさんも、大きくなったら、《略》よい

十 1 5 8 園 ぼくは、大きくなったら、三ばんか四

十 1 21 5 金次郎は、年のわりにからだが大きかつ

十 1 48 9 おとうさん、ぼくは、大きくなったら、

十 1 50 3 ぼくは、大きくなったら、どうしても北

十 1 68 2 大きくみ開いた目をあけて、じつと空間

十 2 13 10 それが、めきめきと大きくなり、

十 2 14 4 まだ青々とした木の葉の中から大きくの

十 2 68 4 大きなかたい物を切るのこぎりのはは、

十 3 13 8 星は、太陽のまわりを、大きく輪をえが

十 3 35 1 それが、だんだん大きくなって、文字で

十 3 55 4 園 「それなら、もうすこし大きいのがあ

十 4 30 11 むかしのことはしばらくおき、これから

十 4 31 10 あなたがたのものをみる目、ものを考え

十 4 37 4 心を大きくもってください。

十 4 52 11 園 それは、花の一部であるめしべの根も

とが、大きくふくれただけのものです。

十 4 61 3 園 私たちは、はえもしなければ、大きく

十 4 63 5 すかして見ると、しずくのつぶの大きい

十 4 63 6 つぶがあまり大きくないときには、

十 4 68 8 茶わんのばあいにくらべると、しくみが

十 5 8 4 文 園 かわずだまりて人の足大きくすぎる

十 5 75 2 老博士は、フィッシュナイフをにぎった

十 5 84 10 園 私よりよっぽど大きい。

十 6 7 園 それらはかたちも大きさもそれぞれち

十 6 9 4 かべ新聞の大きさは、わら半紙を四まいは

十 6 10 5 ちょうど、めがねのたまがはまるくらいの

十 6 10 11 そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、

十 9 15 6 もう大きさは親つづめと同じですが、

十 13 22 4 もみは、ある大きさまでのびると、そこ

十 13 23 1 園 大もみがある大きさ以上に生長しない

十 13 23 7 小もみは、ある大きさまでは、大もみの

十 13 30 3 同じ大きさのどらでも、そのうちかたに

十四 35 5 引力の法則を発見したり、うちゅうの大

おおきさ計算したりするではありませんか。

おおきさ：ぎる 「大過」(上二) 2 大きすぎる 《一

十四 90 9 その上ぐつは、母親のものだったので、

この子にとっては大きすぎた。

おおきな 「大」(連体) 222 おおきな 大きな

一 46 9 おおきな むしめがねをもった おじいさ

一 47 10 四かくな かみに、まるい おおきな はん

一 52 3 おおきな 川がながれていました。

一 52 6 園 そら、ところどころに、 おおきな ほし

一 62 8 山のうえから、 おおきな お月さんがで

一 62 10 園 「おおきな お月さん。」

一 64 2 「みんな いいこ」を、 おおきな こえで

一 13 1 おぼさんの うちから、 大きな りんごを

一 14 4 大きな にじでした。

一 15 3 あんな 大きな、あかるい お月さまは、ど

一 21 2 園 先生、 大きな くもがすを かけていま

一 23 3 園 はねの いたんだ 大きな ちょうちんが、

一 24 2 園 先生、 大きな あおがえるが、 とうもろ

「ねえ、大きな木のところまでの

「けさ、こんなに大きな花を、三つもさ

六1032(会) なんです、まさおさん。大きな声をして。

六127 3 五ひきのうさぎさんたちは、大きな声で

じやんけんをして、おにをきめました。

六131 6 うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、まるくならんで、話をしました。

六132 8 うさぎさんたちのまえに、大きなしきさんがあらわれました。

六134 7 自分たちは、あの大きなすどい角で、つきあげられてしまわなければなりません。

六138 1 やがて、うさぎさんたちは、大きな岩のところにでました。

六138 6 ところが、この大きな岩のかげに、とらさんがねむっていたのです。

七74 4 ならったばかりの唱歌を、大きな声で歌っていく子ども、

七227 4 あまり大きな声をだすから、にげちゃったよ。

七30 10 「略。」大きな声をたてる。

七30 11 4 「どうしたんです。そんな大きな声をだしたりして。」

七41 5 かれは、むねに、大きなびかびかしたアコードオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。

七42 10 「略。」と、大きな声をだした人があった。

七45 8 おしまいに、青年は、大きな声で、「略。」といって、おじぎをした。

七60 3 考え考え歩きまわるような、大きなあり。

七72 2 うまよ、そんな大きななりをして、

八26 7 馬車は、七色の大きなそり橋を音もなく渡って、

八28 2 やがて、大きな天の川にさしかかりました。

八34 1 もっと大きな単位をもたにして計ります。

八36 1 夜になって天の川をみると、なんともいえない大きなふかい感じにうたれます。

八36 3 しかも、この大きなうちゅうは、だいたいきそく正しく運行しているという事です。

八58 2 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなしきが目のまえにひらけてくる。

八58 11 下をみると、大きな川が遠くへ流れている。

八59 5 ああ山にのぼったら、もっと大きなしきが見えるだろう。

八59 7 飛行機の上からは、もっともっと大きなしきが見えるだろうと思った。

八59 10 高いところのぼるほど、大きな世界が見える。

八60 6 田や野原のまわりには、大きな森があり、森の中には深いみずうみがあった。

八62 4 4 いちばん大きなたまごがまだのこっている。

八64 10 それから三日して、とうとうその大きなたまごがわれた。

八65 1 それは、ひどく大きなからだで、たいへんみにくいものであった。

八65 4 4 これはまた、ひどく大きなひなだ。

八67 2 4 わたしについておいで、大きな世界の鳥小屋へつれていってあげるからね。

八72 3 こうして、大きなぬまのあるところへやってきた。

八74 10 ところが、ちょうどそのとき、おそろしい大きないぬがそのすぐそばに立っていた。

八84 1 草むらから、大きなりっぱな鳥の一むれがやってきた。

八84 8 あひるの子は、「略」、自分でもおどろくほどへんな大きな声をだした。

八88 5 どうしてこんなになったのかわからないうちに、大きな庭の中にきていた。

八91 6 大きなはくちようたちは、そばへおよいできて、くちばしでかるくなでてくれた。

八95 9 1 かぶのくきの数を数えてみますと、大きなかぶは30本もありました。

九23 8 どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた大きなできごとでした。

九33 6 6 このほかに、大きな、黒くてひらたい貝がとれますので、

九33 9 9 らいぎよは、大きなになると、三十センチあまりもあります。

九36 3 3 大きなこうがんの岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみずが、

九39 4 4 下からどんなに大きな声で話しかけられても、きこえないときがあります。

九42 9 9 大きなうねのはだが地われしているのをほりおこすとき、胸がどきどきしました。

九43 4 4 ぼくたちの木が三本あります。

九43 6 6 つやつやした大きな木が、ころころと二つ三つ落ちていくのをみたときは、

九62 8 こしから大きなかまをとりだして、

九64 10 4 大きなことだよ。

九64 10 4 大きなのがいちばんえらいんだよ。

九66 8 4 大きなことだよ。

九73 5 白い、大きなきこのでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。

九87 8 舞台の中ほどに大きな木が一本立っている。

九92 2 まもなく、一、二年ぐらいの男の子、大きな声で、「略。」と数えながら、

九106 1 「略。」と、大きな声をかけられる。

九106 11 みると、大きなうさぎが、ちょうど小まつの中へとびこんだところであった。

九119 9 水は大きなごろごろした石ころのあいだから、ブツブツと音をたててわきだして、
 九121 2 水は、さらさらと走って、やがて、すぐ下のすこし大きな川に流れこんでいた。
 九123 2 大きな支流が流れこむところへくると、ときどきあまい水の味がわからなくなってしまう。
 九125 7 大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、
 九127 3 黄色と黒のしまでもよりのついた大きなくもでした。
 九129 9 あみに大きなあなをあけてしまいました。
 九132 6 それにはさすがの大きなくもも、びっくりしました。
 九134 11 大きな口をあいてたべようとしたとき、ちようちょは、「へ略。」と頼みました。
 十20 1 村の林の上に、大きな半円形のじがかかっている。
 十23 5 「こくこ」の文を大きな声で歌う。
 十24 2 エレベーターをあやつる大きな車輪が、まわっている。
 十37 8 この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであろう。
 十38 2 大きなゆめをえがいていた、ひとりのわかけ者があった。
 十44 9 海水の温度に大きなかわりかたもなく、四年めになった。
 十45 1 大きなゆめは実現された。
 十62 3 二階の窓からそとをみたら、大きな竹がによつきりでていたので、びっくりしました。
 十72 8 大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。
 十144 4 大きな汽船がけむりをはいて、長いかけをひいて通っていくのがみえるし、

十197 ㊦ おきを大きな船が通っていくよ。
 十198 ㊦ 大きな船だね。
 十199 ㊦ 「あんな大きな船の船長と、コックスと、どっちがむずかしいだろうね。」
 十143 5 正面のテーブルには、赤いうめの花をいけた、大きなかびんがかざってありました。
 十150 2 ㊦ 「青年よ、大きな望みをもて。」
 十153 3 大きな声だが、雨や風の音のために、乗客の耳にきこえそうもない。
 十163 6 ひとりの少年が、へ略、ナポリの大きな病院の門ばんのまえへいって、
 十167 2 そうして、大きなへやの、開いたドアのまえまできますと、
 十168 4 大きなへやはうす暗く、あたりにははげしいくすりのにおいがただよっていました。
 十168 7 その大きなへやはしまでいくと、
 十115 1 大きなえんまこおろぎが一びき頭をだしていた。
 十214 ㊦ わたしも、ずっと大きな木になって、
 十231 3 私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな日は、
 十234 10 サリバン先生が、ほかの大きな人形を私のひざの上において、
 十244 10 ㊦ 「へえ、そんな大きなものを、どうして動かすんでしょう。」
 十256 8 昔、島原にみそ五郎という大きな男がいた。
 十257 7 すばらしい大きな石だんで、とても人間わざではない。
 十261 4 みわたすかぎりさざなみがうちよせる大きな池となっていた。
 十268 4 大きなたい物を切るのこぎりののは、

大きくてあつい。
 十268 10 製材所のまいるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。
 十274 10 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重いの、二三日は困ることもあります。
 十284 6 あの小さいからだだが、へ略、大きなチルデン選手を追いつめるものすごさは、
 十2105 2 大きなげたをはいた女の人が、おとをもふたりつれていきます。
 十2107 7 大きな目、のびた手さき、しつかりふまえた両足、どこをみても、力があふれています。
 十2184 4 これが、デンマルクの愛國者たちの心をくだいた、もつとも大きな問題でありました。
 十222 12 かれは、もみの生長について、大きな発見をしました。
 十228 11 かた手には、大きな毛ぬきのようなものを持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、
 十230 8 その中で、いちばんさわがしくて、大きな音をたててやって来るのは、さるまわしである。
 十231 12 朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ歩いて来る。
 十232 5 ㊦ 大きなきんぎよに小さなきんぎよ。
 十233 3 大きな水おけをのせた一輪車が、「キリキリ、リリリリ」とときしみながら、
 十259 10 ㊦ この絵は、たいへん大きなりっぱな絵だよ。
 十244 6 それは、フィリップの作品の中にみないぎっている大きな愛の氣持、
 十2287 私、なにか大きな楽しみをもったような氣持になって、家に帰ってきた。
 十2304 遠いもの、大きなものに心をくばることがたりなかったのは、

十四335 この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。

十四341 あのぎんが系に負けないほど大きな星の世界が、なおいくつかあるのです。

十四375 そうして、うちゅう全体をながめわたす大きな目をもってください。

十四487 船がしずむひょうしに流れ出たものらしい一本の大きなまるとに、

十四5210 こんな、十キロもあるような大きななばちやでも、

十四536 どのようにそのめしべの根もとがふくれて、そんな大きな実になったかということは、

十四5611 こんなに大きなきずができていますが、

十四588 こんな大きななばちやは、ずいぶんかたいうですが、やっぱり、この大部分は水です。

十四666 茶わんのすぐ上から大きなうずができて、それが、かなり早くまわりながら、

十四6611 これとよくにたうずで、もっと大きなのが、庭の上などにできることがあります。

十四676 そうして、大きなうずができ、それが、ちょうどたつまきのようなものになって、

十四6712 それは、らい雨のときに、空中におこっている大きなうずです。

十四685 入れかわりに、そのつめたい空気が下からふきこんできて、大きなうずができます。

十四955 その小さなほのおが、その子には、もえさかる大きなほのおのように思われた。

十四959 それがもえ続けている間、大きなろの前にすわっていた。

十四9712 いかにも大きな木で、それが美しくかざられていた。

十五72 文 うれしはずかにおのおの大きな耳

をむけぬ

十五227 なんだか大きなあらしがふき起ったような音がしました。

十五2212 三メートルもあるような羽をひろげた大きな一わのやまわしが、

十五237 そのがけの下の方へゆったりとんで行く大きなやまわしのつめにつかまれて、

十五245 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて来ました。

十五266 このわしが大きくちばしで女の子の頭でもつつけば、

十五2612 少年は、ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、

十五306 両羽をあおりたて、大きな風をまき起すようにして、少年の周囲をおおい包むいきおいで

十五308 その目、そのくちばし、その羽音、まったく大きなあくまでです。

十五338 目の前の美しい、大きなユングフラウのまっ白な山までも、

十五3911 かなは、日本の文化にとって、ほんとうに大きな発明で、

十五537 私は、しばしためらったのち、意を決して大きなドアをコツコツとノックした。

十五5310 廣いへやの窓ぎわに大きなデスクをすえ、

十五577 そこで、大きなつくえのまん中にチョークで線をひき、

十五638 かた手に大きなブラシをつかんで、力のかぎりみがきをかけた。

十五662 ご両人の名まえ入りの大きな写真を二まい、満ほうへと名ざして送ってください。

十五692 顔をあげてへき面を見あげると、おじさんの大きな写真があった。

十五697 おじさんが日夜ふでをとっていられたという大きなつくえの上に、

十五7512 博士は、そのことばの意味をときかねていた私のようすを見て、大きな声でわらわれ、

十五8510 「いちばんふとった幸福」が、テーブルをはなれて、大きなおなかを両手にかかえて、

十五1044 『大きな喜び』の兄弟ふんのようなものですからね。

十五1049 なによりも、まず『大きな喜び』を呼びにやりましょう。

十五1058 『あれは、『大きな喜び』ですよ。』

十五10512 『正義であることの大きな喜び』で、

十五1063 『善人であることの大きな喜び』で、いちばん幸福なのですが、いちばん悲しそうです。

十五10710 『いちばん大きな喜び』の中に、『美しいものを見る喜び』があります。

十五1084 『愛することの大きな喜び』ですよ。おおきなさる『御置』(五) 1 おおきなさる『イ』

六1207 そうとかわかしておおきなさい。

おおきなよろこびたち 『大喜達』(名) 1 「大きな喜び」たち

十五1173 (ほかの「大きな喜び」たちを呼ぶ。) みなさん、いらっしやいよ。

おおく「多」(名) 4 多く

十一303 やがて、村をすくい、多くの人からうやまわれるようになりました。

十二1021 夢殿の観音といって、いまでも、多くの人々からたつとばれている作品です。

十五418 発音のちがっている多くの國々のことばが書き表わされている。

十五669 母や多くの弟妹たちをあとに残し、ひとり父につれられて、景色の美しい京都に移った。
おおくにぬしのみこと 「大國主命」〔人名〕2 おおくにぬしのみこと

三475 そこへ、おおくにぬしのみことがいらっしやいました。

三482 おおくにぬしのみことも、「略。」とおたずねになりました。

おおくりいたす 「御送」(五) 1 お送りいたす
《一シ》

九738 「さあ、おうちへお送りいたしましょう。」やまねこがいました。

おおくりする 「御送」(サ変) 2 お送りする
《一シ》

五4310 「そのたねをこんどお送りします。」十四16 「たとい、からだはこちらにいても、このまごころを書いてお送りして、

おおけが 「大怪我」(名) 1 大けが

十五267 わしが大きなくちばしで女の子の頭でもつつけば、大けがをするか、殺される心配がある。

おおこえ 「大声」(名) 10 大声

三404 きょうならったばかりのしょうかを、大声でうたいながらあるきました。

三705 ピーターは大声でいました。

三7510 ピーターが大声をあげました。

六130 「略。」と、大声でわらいました。

七51 「略。」と、大声をたてる。

九106 「略。」と、大声にさげんだ。

十72 太郎かじやは、きゅうに両手で顔をおおい、おいおい大声をあげてなきました。

十一610 ひき返そうとしたりするときには、きつとコックスが大声でいうだろう。

十一26 「いつもその本を手からはなさず、くり返しくり返し、大声で読みながら歩きました。」
十一45 「略。」と、大声でいきました。

おおこる 「御怒」(五) 1 おおこる 《一リ》
八32 「それをみた天帝は、たいへんおおこりになって、

おおさか 「大阪」(地名) 1 おおさか

七37 「頭はとうきょう、足はおおさか。」といったので、みんながわつとわらいました。

おおさむこさむ 「大寒小寒」(感) 1 大さむ小さむ
二37 「大さむ小さむ。」

おおさわぎ 「大騒」(名) 2 大さわぎ
二31 「略。」と、いって、大さわぎをしました。

三26 「こんな大きな木のことで、切るのにも大さわぎでした。」

おおさわぎする 「大騒」(サ変) 1 大さわぎする
《一シ》

十二29 ある日、学校から帰ってくると、姉が大さわぎしていました。

おおじかけ 「大仕掛」(名) 2 大じかけ

十四76 氣流のじゅんかんが、もつと大じかけに、陸地と海との間に行われております。

十四767 これが、もうひとまわり大じかけになって、

おおじかけ 「大仕掛」(形状) 1 大じかけ

十四67 茶わんの上や、庭さきでおこるうずのよなもの、もつと大じかけなものがあります。

おおしまくん 「大島君」(人名) 1 大島くん
十五54 「きみは、大島くんでしょう。」

おおすぎ 「大杉」(名) 1 大すぎ

六36 大すぎの上にやつととまったかし。

おおすぎる 「多過」(上二) 2 多すぎる 《一ギル》
八82 「それなのに、おまえさんは口かずが多すぎる。」

十五114 「うちにいるとね、あんまり用が多すぎて、ひまがないのだよ。」

オーストラリア 「地名」 3 オーストラリア

九179 さらに海をこえて、遠いオーストラリアまでいくのがあるということです。

九246 日本からオーストラリアまでは、一万キロあまりありますが、

十454 今日、真珠の産地は、「略。」をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、

オーストラリア 「地名」 2 オーストラリア ↓ドイッ
オーストラリアにこく

九1810 しょうわ六年の秋、オーストラリアの都ウィーンのできごとです。

九234 オーストラリアは第一次世界大戦のあとで、まだそのいたでがなあっていないころでした。

オーストラリアどうぶつえん (名) 1 オーストラリア動物園

九231 このほかに、オーストラリア動物園の人たちがひき受けて送ったつばめを加えると、

おおずもう 「大相撲」(名) 1 大ずもう
十二106 絵巻物 四つに組んだ大ずもう。

おおぜい 「大勢」(名) 16 おおぜい 大ぜい

二708 この声はひとりではなく、大ぜいの声。

三2610 そこで、大ぜいのだいくをあつめて、ふねをつくることになりました

三274 海にうかべて、大ぜいのせんどうがのりこみました。

三44 「略。」と、いって、すぐになかまを大

ぜいつれてきました。

三465 そのとき、みなりのりっぱな かがたが
が大ぜい おとりに なって、

三113 そのうちに、空から大ぜいの 天人たちが、
雲に のって おりて きました。

六178 まくがあくと、きりぎりすが大ぜいあつ
まって、音楽会をしています。

八53 あるデパートのまえのうすくらがりに、大
ぜい人が立っているの、

九164 こうして、大ぜいのつばめが、ならんでい
るのを見ると、

九877 人 たかぎ・やまだ そのほか友だち大ぜ
い

十74 いなかへいったときは、子どもが大ぜい、
めずらしそうについてきて困りました。

十一4512 大ぜいの目のまえで、「略」とさけん
だ弟よ。

十三313 これを聞きつけて、子どもが大ぜい集ま
る。

十四462 まるで、大ぜいの來客を前にして、
十五3212 氣がつくと、もう自分のまわりには、お

おぜいのひつじかいが集まって來ており、
十五336 おおぜいの人たちのほめことば、それは

いまここであるまでもありません。
おおぜいすぎる 「大勢過」(上) 1 おおぜいす

ぎる 《一ギ》
十五1048 会 いや、まったくおおぜいすぎますね。

おおそうじ 「大掃除」(名) 1 大そうじ
五806 きようは大そうじをしました。

おおぞら 「大空」(名) 5 大空
九286 文 大空にのびかたむける冬木かな

十四3511 じいっと大空の星をながめていると、

十四403 会 大空がほおえんでいる。

十四9810 それが、高く、高く、しだいにのぼって、
大空の星のようにかがやくのを見た。

十五215 けわしい山が、むらさきがかった大空の
下に、わらうようにそびえているのでした。

おおだいこ 「大太鼓」(名) 1 大だいこ
九117 ドンドンドンとなる大だいこの音は、

おおたどうかん 「太田道灌」(人名) 1 太田道灌
十二63 ある日、太田道灌は、たかがりにでかけ

ました。
おおちがい 「大違」(名) 1 大ちがい

二368 会 みんな大ちがいだ。
おおづな 「大綱」(名) 1 おおづな

十二661 おおづなのようなたくましい根が、深く
のびてみきをささえ、廣くのびて枝をやしない、

おおづめ 「大爪」(名) 1 大づめ
十五252 左手を長くのばして、鳥が大づめでつか

んでいる女の子のからだ下が落ちないように、
おおどおり 「大通」(名) 4 大通り

五526 私は、まさこをうば車に乗せて、はるおと
大通りにでました。

六379 ずっと下にみえる夕やけの大通りを、
八52 一家そろって、ぎんざの大通りを歩いてい

ましたら、
十三369 大通りを、ぶたがぞろぞろと歩いて行く。

おおどく 「大毒」(名) 1 大どく
十7311 会 それには、大どくとうかがいました、お

そろしい『ぶす』をたべて死ぬのが、
オートバイ (名) 1 オートバイ

十四214 トラック、オートバイ、リヤカー、
おおなみ 「大波」(名) 2 大なみ 大波

三277 ふねは かなつの 大なみを のりきって、

鳥のとぶように 走るではありませんか。

十四4810 頭から大波をかぶっても、平氣で歌を続
けていました。

おおのこ 「大鯰」(名) 1 大のこ
十二689 こびきの大のこははが廣いし、

おおのぼり 「大磯」(名) 1 大のぼり
十一384 村道に立つ大のぼり、ゆききの人もえ

顔して、その足どりもいそいそと。
オーバー (名) 1 オーバー

十四2011 ポケット、ズボン、オーバー。
おおばこ 「大葉子」(名) 1 おおばこ

七885 はこべとおおばこをやったら、にんじんを
やったときのように、喜んでたべました。

おおはしゃぎ 「大燥」(名) 1 大はしゃぎ
十二339 私は子どもらしい喜びと得意さに大は

しゃぎで、二階から母のところへかけおり、
おおひろま 「大広間」(名) 1 大廣間

十五822 園の前の方に、高い大理石のまいる柱で
できた大廣間のようなものがあらわれます。

おおまけ 「大負」(名) 1 大まけ
十三328 会 におもさとも大まけだ。

おおまた 「大股」(名) 2 大また
九923 「略」と数えながら、大またでぴよん

ぴよんかけてきて、「十」でとまる。
十一4410 弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進

みました。
おおみず 「大水」(名) 4 大みず 大水

二182 会 「上は大みず、下は大かじ、なかに。」
十一1910 そのうえ、さかわ川の大水で、田や畑を

みんな流されたりしましたので、
十一294 いねのなえをひろって、大水でいたんだ

田の水たまりに植えてみました。

十五²³ だれか、その大わしのせの上へ、がけの
 10 中ほどからとびついたものがあります。

十五24 11 さいわいにその勇ましい少年は、大わしのせにとびつき、

十五25 9 さすがの大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなって、

十五27 9 大わしは、少年をせいのせ、

十五29 8 大わしはすぐにとび起きて、

十五30 1 大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かって來ました。

十五31 3 大わしは、この思わぬいたでにおどろいて、ぱつと一まず舞いたちましたが、

十五31 5 それから、必死にとびかかる大わしと、この勇ましい少年との戦いです。

十五32 9 少年目がけてとびかかっていた大わしは、空中をころぶように、くるくる舞いをして、

おおわしにのったはなし〔課名〕2 大わしに乗った話

十五2 10 二 大わしに乗った話……十九

十五19 1 二 大わしに乗った話

おおわらい〔大笑〕(名)2 大わらい

十六05 6 〔略。〕といって、みんなで大わらいをした。

十六07 3 〔略。〕といったので、みんなは、これで大わらいとなった。

おか〔丘〕(名)16 丘

三58 3 五人の子どものおうち、丘の上にあるので、ふもとにあるのでもありません。

三58 4 丘のちょうどなかほどにあるのです。

三60 6 〔この丘の上の大きな木のところ。〕ジュデーはこういいいます。

三60 8 〔みずうみ、みずうみ、この丘の下。〕デビットはこういいいます。

三61 6 〔あのねえ、丘の木のところまで、

ぼつてさ、

三63 2 いっしょになって、丘の大きな木のところまでのぼりました。

三63 3 そうして、そこで おもしろくあそんでから丘をおりて、みずうみへでました。

三74 7 〔まどからのぞいてごらん。あの丘の上を。〕

三74 9 お日さまが光りながら、いま、丘のかけへしずむところでした。

三75 6 そのうちに、赤いお日さまは丘のかけへしずんでいきました。

三76 8 〔丘をこえてね、よその國へいくんですよ。〕

九118 4 〔鱈〕 金色の小さき鳥のかたちしていちようちるなり丘の夕日に

十10 4 岸にある丘の上には、センチエンヌというお寺の高いともみえました。

十一4 3 近くには小高い丘があって、

十一13 9 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよう。

十三49 5 みどりの丘が、その声でわらいだす。

おかあさま〔題名〕2 おかあさま

十一2 6 おかあさま

十一16 1 おかあさま

おかあさま〔御母様〕(名)4 おかあさま

十一16 6 それはおかあさまの愛です。

十一17 6 いいこと、正しいことは、おかあさま、あなたの目から教えられました。

十一17 8 おかあさまの胸に、わきあふれるなぐさめの泉に、

十一18 5 わたしの幸福は、おかあさまのえ顔から生まれます。

おかあさん〔課名〕2 おかあさん

十四2 2 一 おかあさん……十四

十四4 1 一 おかあさん

おかあさん〔御母〕(名)113 おかあさん

一32 7 お日さま——おかあさん——かみ——

一44 1 〔おかあさんは、ときまですと、どこかで、〔略。〕というこえがしました。〕

一53 2 〔ひとつひろっていつておかあさんのおみやげにしたいな。〕

一61 6 〔どうぞ おかあさんのおみやげにしてください。〕といいました。

一62 1 〔あなたも、おとうさんも、おかあさんも、みんな いい人ですもの。〕

一64 9 おかあさんのこえで目がさめました。

一65 4 〔あまの川の だいやもんど、おかあさんのおみやげにいただいたの。〕

一65 9 おかあさんは、わたくしをひざのうえにだきあげてくれました。

二20 5 くつした おかあさん おとうさん

二47 3 である人 いちろうじろう いもうとのさちこ おかあさん

二52 1 おかあさんが、いすにこしかけて、本をよんでいらつしやいます。

二52 4 〔おかあさん、どこ。〕という、さちこの声がします。

二52 7 さちこが、おかあさんのそばにかけよります。

二52 8 大きなりんごを、おかあさんにあげます。

二52 9 おかあさんは、本をおいて、りんごを手にとります。

二53 3 さちこは、またおかあさんにあげます。

二53 5 どうとう、おかあさんは、さちこからり

んごをもらいます。

二五七 おかあさんの よこに、三人が立ちます。

二五七 おかあさんは、三人の あたまを、しずかになでて やります。

三二四 おかあさんが おっしゃいました。

三二四 おかあさんが おっしゃいました。

三二七 おかあさんは おきかえしになりました。

三三三 「略。」と、また おかあさんが おききになりました。

三三三 「略。」と、おかあさんが おっしゃいました。

三七八 おかあさんが おしえて くださいました。

三七八 おかあさんが おっしゃいました。

三八三 そのとき、おかあさんが えんがわに であらう しました。

四一六 おかあさんが、月に てらされて、水をくむ。

四一六 おかあさんの バケツが おもそうだ。

四一七 学校から かつたら、おかあさんが、石うすを ひいて いらつしました。

四一七 おかあさんの 手の上につかまって ひいた。

四一八 おかあさんに、「略。」と きいたら、「略。」とおっしゃった。

四一八 そこで、おかあさんの 手の上で、力いっぱい ひいた。

四二〇 まさおさんは、あいての 人を「おかあさん」に きめて、

四二九 それは、おかあさんの ことばでした。

四二九 おかあさんの ことばが とめたからです。

四二九 そのとき、おかあさんが、かごに みかんを 入れて、もって いらつしました。

四二八 「おかあさんの サンタクローズさん。」

と、大きな 声で いったので、

五二二 いちろうさんは、おかあさんの ことの、いなか いきました。

五二七 いちろうさんが 家に 帰ると、おかあさんが、げんかんに つかえに ました。

五三六 おかあさんが、だいどころで、ごほんの したくを して いらつします。

五四一 まさこを おかあさんに わたして、

五五〇 私は、おかあさんに この ことを いって、

五五九 「おかあさん、あさが おがきましたよ。」と いいました。

五六一 「でも—— って、なにか、おかあさん。」

五六一 「きれいな きゅうりね。おかあさん。」

五二二 たねは おかあさんが ました のだけれど、

五二二 こんな によく できた のは、おかあさんの 力では ありませんよ。

五三三 だって、おかあさん。

五三三 けれど、花が ついたり、みが なつたり したの は、おかあさんの せいでは ありませんよ。

五三三 わたしは、おとうさんや おかあさんの 力で、 大きくなつた と思います。

五三三 おまへひとりの 力でも なければ、おとうさんや おかあさんの 力でも ない。

五四九 おとうさんも、おかあさんも、こうして、まいにち、 たつしやで 生きて いくの は、

五四九 わしのおかあさんは、ずつと まえに、さどが 島に おいでな ことが あつた。

五九七 「おぼうさんにおかあさんがあるって、おかしいな。」

五九七 それから、おかあさんのおちを コツ

プ コップと いただいて、

五九八 いちばんはじめに、それをおかあさんが ききつけました。

五九八 でも、おかあさん。

五九八 さんちゃんのおかあさんが、せんたくを しますと「略。」と、ひわもまねを します。

五九八 さんちゃんのおかあさんも、ひわを ほめ ました。

六三三 おかあさん、なんでしょう。

六四四 おとうさんや おかあさんにも わからない んだって——

六四四 弟が せきが てるので、おかあさんは ゆたんぽを いてる。

六四四 おかあさんが、「略。」とおっしゃいました。

六四四 いそいで、おかあさんの ところへ いった。

六四四 おかあさん、きて ごらん さい。

六四四 おかあさんは、目を まるく して、

六四四 ぼくは、おかあさんを ひっぱる ように して、つれて きた。

六四四 ぼくと おかあさんは、かわるがわる この 望遠鏡を のぞいて 楽しんだ。

六四四 なが 四角から、ま 四角に 切る 切りかたは、いつか おかあさんに 教えて いただきましたから、

六四四 やつと できた ので、おかつて いらつしやる おかあさんの ところへ とんで いった。

六四四 おかあさんは、「略。」と、ほめて くださいました。

七二二 そのとき、おかあさんが おいでになる。

七二二 兄「おかあさん、あおむしの ことを、話して いたんですよ。」

七二二 ねえ、おかあさん。

七二七 ㊦ おかあさん。
 七二八 ㊦ おかあさん、ただいま。
 七二九 ㊦ 兄「おかあさん。」
 七三〇 ㊦ それは、すぐめたちにたべられないため
 だと、おかあさんが教えてくださった。
 七三一 ㊦ 兄「おやっ、おかあさん、おかあさん。」
 大きな声をたてる。
 七三二 ㊦ おやっ、おかあさん、おかあさん。
 七三三 ㊦ おかあさんも、こんなところをみるのは、
 はじめてですよ。
 七三四 ㊦ おかあさん、花よりきれいなね。
 七三五 ㊦ おかあさん、死ぬといけなから、〈略〉、
 うつしてやりましょうね。
 七三六 ㊦ 家をでるとき、おかあさんに、「略。」と
 うけあって、
 七三七 ㊦ おかあさんの鏡、庭のはっぱがうつってい
 る。
 七三八 ㊦ おかあさん、いま、柱時計がとまりました。
 八二九 ㊦ おかあさんのところへ走っていった、も
 らってきたパンやおかしをなげてよこした。
 九一〇 ㊦ 「おかあさんをさがしてくるのです。」
 九一一 ㊦ 「おかあさん。」
 九一二 ㊦ くもは、このおかあさんということばを、
 長いこと耳にしたことはありませんでした。
 九一三 ㊦ 「おかあさん。」といわれて、きゅうに
 なつかしくなりました。
 九一四 ㊦ 「そうか、おかあさんをさがしにいきた
 いのか、ちようちよさん。」
 九一五 ㊦ 「なんだか、わたしも、おかあさんをみ
 たくなったよ。」
 九一六 ㊦ 「わたし、おかあさんにひと目あったら、
 もう、命はほしいとは思いません。」

九一七 ㊦ 「わたしは、おまえのおかあさんじゃな
 いかね。」
 九一八 ㊦ おかあさんときいて、くもは、手をうんと
 のぼして、とりすがろうとしました。
 九一九 ㊦ うまくおかあさんにあえたかしら。「そ
 んなことをくもは思いました。」
 九二〇 ㊦ 「おかあさん、雨ははれてきれいなね。」
 九二一 ㊦ 「おかあさん、ただいま。」といつて、
 学校から帰ると、
 九二二 ㊦ 「〈略〉。」といつて、学校から帰ると、お
 かあさんが、「略。」とおっしゃった。
 九二三 ㊦ おかあさんに、「〈略〉。」といつたら、
 九二四 ㊦ おかあさんが、あかちゃんをだっこして、
 おもての通りへでていらつしやった。
 九二五 ㊦ 「どうしたのです。おかあさん。」
 九二六 ㊦ おかあさん、とみちゃんを返してもら
 いましょう。
 九二七 ㊦ ぼくは、船のかんばんに、おかあさんと
 ふたりで立っていた。
 九二八 ㊦ おかあさんがパンをやくそばで、ぼくは、
 いつも本を読んでいた。
 九二九 ㊦ おとうさん、ぼくは、大きくなったら、
 また、おかあさんといっしょに北海道へいきます。
 九三〇 ㊦ やぎ小屋のまわりには、おかあさんのお
 すきなライラックを植えましょう。
 九三一 ㊦ 北海道へじゃがいもをつくりにいこう。
 おかあさんをおつれして。
 九三二 ㊦ おかあさんがよこしたんです。
 九三三 ㊦ おかあさんから、「〈略〉。」って手紙が
 きたきり、おまえがこないから
 九三四 ㊦ それで、おかあさんはどうしているの。
 九三五 ㊦ 「わたしは、これからすぐにうちへ

帰って、おかあさんを安心させてあげよう。
 九三六 ㊦ 「おかあさん。」といつて、母のそば
 へかけよりました。
 九三七 ㊦ 「おかあさん、どうなさったのですか。」
 とたずねますと、
 九三八 ㊦ 小鳥が鳴いていたこと、帰っておかあ
 さんにゆでていただいたこと、みんなでたべたこと
 九三九 ㊦ おかあさん、配給物を取りに行ったん
 じゃないでしょうか。
 九四〇 ㊦ おかあさんに……はい。
 九四一 ㊦ おかあさん、おかあさんの……（と、
 うら手に行く……声だけ続く。）
 九四二 ㊦ おかあさん、おかあさんの……
 九四三 ㊦ おかあさん、真ちゃんが帰って来たん
 だってね。
 九四四 ㊦ そのあとはマンシェウから帰って来た真
 二くん、おしまにおかあさん。
 九四五 ㊦ まだわかい、美しいおかあさんが、まる
 まるとふとったかわいあかちゃんをだいていて、
 九四六 ㊦ そのおかあさんがマリアだということは、
 すぐにわかりました。
 九四七 ㊦ そのマリアは、たいへん美しくて、い
 かにもおかあさんらしいと思うのです。
 九四八 ㊦ いかにも、おかあさんの喜びという心
 持が、よく出ているね。
 九四九 ㊦ なんていうか、ただのおかあさんでは
 なくて、キリストのおかあさんという感じが、
 九五〇 ㊦ キリストのおかあさんという感じが、
 よく出ているんじゃないでしょうか。
 九五一 ㊦ パリー、千九百七年四月十日 おかあ
 さんとちよっとお話をしようと思います。
 九五二 ㊦ たって以来、一分間も、おかあさんの

ことを考えないではいられませんでした。

十四六八(手) なつかしいおかあさん、おわかれして

から私がいちばんつらかったことは、

十四六九(手) おかあさんがかなしがっていらつしや
ると思うことでした。

十四八三(手) が、おかあさん、運命にはしたがわな
ければなりません。

十四八八(手) それは、おかあさんがかなしがって
いらつしやるといふことです。

十四九一(手) なにしろ、おかあさんにしても、私に
しても、とてもわすれることのできないのは、

十四九二(手) おかあさんの生活や、私たちの生活の
ことをお考えになつて、

十四九三(手) なぜかといえ、妹にしても、私にし
ても、心からおかあさんを愛しているからだ、

十四九五(手) おかあさん、いま、おかあさんが力を
おとしておしまひになつたら、

十四九六(手) おかあさん、いま、おかあさんが力を
おとしておしまひになつたら、

十四九九(手) 私は、おかあさんが、ちゃんとして
てくださつて、

十四一〇一(手) では、おかあさん、さようなら。

十四一〇二(手) それほど、たえずおかあさんのことを
思っているのです。

十四一〇四(手) おかあさん、いま、ランプとコーヒ
ー入れを送らせました。

十四一〇五(手) おかあさんのことを思っております。

十四一〇六(手) おかあさんのことを思っています。

十四一〇七(手) そうして、おかあさん、あなたのこと
を思うとき、

十四一〇八(手) おかあさんと私とは、おたがい、
それほどはなれてはいないのだ、

十四一四一(手) 自分としては、力のかぎりおかあさ
んを幸福にしておあげしよう。

十四一五二(手) おかあさんが、もし、かなしいお氣持
になられたときには、

十四一五三(手) おかあさんがご用でしたら、いつでも
とんで行きます。

十四一五四(手) おかあさんのおやさしさこそ、私に
とっては、いちばんとうとい宝なのです。

十四一五八(手) が、おかあさんのおすきなようにな
さつてください。

十四一五九(手) おかあさん、これからたびたび手紙を
あげることにしましょう。

十四一六〇(手) あなたが私を思つてくださるとき、私
もおかあさんのことを思つていふと。

十四一六一(手) 私には、おかあさんのおすがたが、目
に見えるような氣がします。

十四一六二(手) では、おかあさん、さようなら。

十四一六三(手) あれが、あなたの『おかあさんの喜
び』です。

十四一六四(手) ふたりとも、おかあさんにだかれてお
くれ。

十四一六五(手) でも、あなたは、うちのおかあさんに
にているけれども、ずっときれいだもの。

十四一六六(手) ぼく、おかあさんがそんなお金持だと
は知らなかった。

十四一六七(手) もう、びんぼうなおかあさんでもなけれ
ば、きりょうのわるいおかあさんもないし、

十四一六八(手) きりょうのわるいおかあさんもないし、

十四一六九(手) 年をとったおかあさんもないのさ。

十四一七〇(手) おかあさんの目の中には、星がいっぱ
いある。

十四一七一(手) ほんとうにおかあさんの目だ。

十五一〇五(手) それから、これもおかあさんの手だ。

十五一〇六(手) ふしぎだな、おかあさん。

十五一〇七(手) おかあさん、ここにゐるなら、ぼくも
ここにいたいや。

十五一〇八(手) おかあさんに、ふたりはありませんよ。

十五一〇九(手) それは、いつだって、同じおかあさん
で、

十五一一〇(手) いつだって、いちばん美しいおかあさ
んなのだからね。

十五一一一(手) おまえたちは、おかあさんをよく覚え
て、だいにすることをわすれてはなりませんよ。

十五一一二(手) おかあさんがらす『御母鳥』(名) 1 おかあさんが
らす

十五一一三(手) おかあさんがらす、羽をさか立てて、子
がらすをすにひきもどす。

十五一一四(手) おかあさんたち『御母達』(名) 2 おかあさんたち
十五一一五(手) おかあさんたちの愛は、喜びの中でも、
いちばん美しい喜びなんですよ。

十五一一六(手) それに、おかあさんたちが悲しそうな
顔をしているときでも、ほおずりをしてもらえば、

十五一一七(手) おかいこさん『御蚕』(名) 1 おかいこさん
三〇八 くわのはが、やわらかで、光つていて、

十五一一八(手) おかいこさんでなくてもたべたいようです。

十五一一九(手) おかいなさる『御買』(五) 1 お買いなさる『
一』

十五一二〇(手) さあさあ、きんぎよをお買いなさい。

十五一二一(手) おかえし『御返』(名) 1 お返し
四一三(手) 天人のはごろもなら、なおさら お返し
はできません。

十五一二二(手) おかえしいたす『御返』(五) 1 お返しいたす
『一』

十五一二三(手) お氣のどくですから、はごろもをお返

しいたしましょう。

おかえしくださる「御返下」(五) 2 お返しくださる「一イ」

四130 5 会 どうぞ お返しく下さいませ。

四131 4 会 どうぞ、お返しく下さいませ。

おかえしする「御返」(サ変) 1 お返しする「一シ」

四132 7 会 はごろもをお返ししたら、あなたは、まわすにかえておしまいになるでしょう。

おかえり「御帰」(名) 1 おかえり

三107 2 会 ある日、かりのおかえりに、とつぜんおたちよりになりました。

おかえり「御帰」(感) 1 お帰り

五26 2 会 「おねえさん、ありがとう。」「お帰り。」おかえりなさる「御帰」(五) 4 お帰りなさる

「一イ」

五68 5 会 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。

五69 7 会 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。

五71 1 会 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。

五73 7 会 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。

おかえる「御帰」(五) 7 おかえる お帰る「一リ」

三108 6 「略」とお思ひになって、そのままおかえりになりました。

四23 5 手 にいさんは、こんど、いつ おふねからおかえりですか。

四100 10 会 早くうちへおかえり。

四101 5 会 さあ、元氣をだしておかえり。

四117 6 会 おかえりになりますか。

五66 7 会 「金のさかなさん、早くお帰り。」

十一90 7 会 「さあ、お帰り。」と、医者はいいました。

おかお「御顔」(名) 1 おかお

三12 10 はんたかは目をかがやかせて、おしゃかさまのおかおをみつめました。

おかく「御書」(五) 4 おかく お書く「一キ」

三20 3 先生が、くくぼんにつぎのようなことをおかきになりました。

三38 9 「略」とおかきになりました。

十四20 8 そうして、つぎのようなことばはその一例だとおっしゃってくくぼんに書きになった。

十四21 6 「略」とかいいいながら、先生のお書きになる文字に目をそそいだ。

おかげ「御陰」(名) 11 おかげ

一60 3 会 おかげで、しろちゃん、げんきなこになりました。

三29 3 そのおかげで、略村々は、だんだんゆたかになっていったということです。

五27 1 会 電車のおかげで、あんな遠いところまで、一日で帰ってきたのです。

五64 10 会 こうして、まいにち、たっしやで生きていけるのは、だれのおかげだろう。

六27 4 会 そのおかげで、いまこうしてあたたまることもできるし、

六107 4 しかし、ぼくは、このおかげで、おもしろいことに気がついた。

十二42 6 これは、ケラーのサリバン先生に対する信頼と、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、一つになったおかげです。

十二94 6 それは文字のおかげである。

十三23 10 このおかげで、略には、おいしげったもみの林が見られるようになりました。

十四59 1 会 あの雨のおかげで、かれるのが助かったことを考えてごらんさい。

十五40 1 このかなのおかげで、日本のことばを、

たやすく略うつすことができるようになった。おかけくださる「御掛下」(五) 1 おかけくださる「一イ」

四109 5 会 さあ、どうぞそのこしかけにおかけください。

おかげさま「御陰様」(名) 2 おかけさま

一60 8 会 おかけさまで、とおじいさんはおれいをいしました。

四103 10 会 おかけさまで、このとおりじょうぶになりました。

おかけなさる「御掛」(五) 3 おかけなさる「一イ」

五23 9 会 『ぼっちゃん、おかけなさい。』

五24 9 会 『ぼっちゃん、あなたもおかけなさいな。』

十四11 8 手 ランプはかべにおかけなさい。

おかさん(名) 1 おかさん

十五115 7 会 どんな子だって、おかさんはひとりぎりです。

おかし「御菓子」(名) 5 おかし

四16 1 おかしをしっかりと手にもってねんねした。

八92 5 おかあさんのところへ走って行って、もらってきたパンとおかしをなげてよこした。

十一17 おとうさんが、子どものすきそうなおかしを、一ふくろやったのがはじまりで、

十五84 2 会 なんてきれいなおかしでしょう。

十五86 5 会 小さなおかしもいけないの。

おかしい「可笑」(形) 22 おかしい「一イーク」

二30 7 会 おかしいな。

五87 6 会 おかしいわ。

五88 6 会 「あら、おかしいわよ。」

五907(会) 「おぼうさんにおかあさんがあるって、おかしいな。」

五908(会) なにおかしいものか、このわしも小さいときは、オギヤア、オギヤアとないたのだよ。

六579 おもしろいことも、おかしいことも書きま

す。

六953(会) それはおかしい。

六958(会) 「おかしいな。」海の神は、しばらくお

考えになって、女の人に、「略。」

六1049 ただ、はながつまっているだけだが、その

ために発音がすしおかしい。

六1102 「はな」といつているんだなと思うと、

きゆうにおかしくなった。

六1287 かくれているうさぎさんたちは、おかしい

のをがまんしながら、

七7811(会) どうもおかしい。あなたは、そのらくだ

を、どこかへつれていったのにそういない。

九501(会) 東なら、ぼくのいく方だねえ。おかしい

な。

九515(会) おかしいな。西なら、ぼくのうちの方だ。

九527(会) 南なら、あつちの山の中だ。おかしいな。

九538(会) 南へいったなんておかしいなあ。

九593 いちろうは、おかしいのをこらえて、

「略。」とたずねますと、

九5910 いちろうは、おかしいと思つてふり返つて

みますと、

九1346 おかしいなと、ふしぎに思つてよくみると、

それは白いちようちよでした。

九1421(会) 「わたしの顔ばかりみて、おかしいこと。」

十二181(会) ピッピッと囁いていたときには、ほん

とうにおかしいようでしたけれど——

十四199(会) 「バケツはね、手おけさ。」「手おけ、

手おけはちよつとおかしいわね。」

おかしさ「可笑」(名) 1 おかしさ

八107 ビオのゆうかんさや、りこうさや、ちゃめ

ぶりや、おかしさなどは、

おかしな「可笑」(連体) 9 おかしな

一651(会) まあ、おかしな人。

七325 はるお、おかしな声で、はるお「おや、ひ

げをはやして。」

八213 ひよつくりひよつくり歩いていくのは、ほ

んとうにおかしなものです。

九472 おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、

いちろうのうちにきました。

九555 せいのひくい、おかしなかつこうの男が、

ひざをまげて、手に皮のむちを持って、

九736 そうして、なんだかねずみ色のおかしな

たちのうまがついています。

十329(会) はたばかりいじつていて、おかしなやつ

だ。

十二8810 もし、そのわけにかなわないことをすれ

ば、たいへんおかしなことになるばかりでなく、

十五5511(会) 鹿鳴館というクラブがあり、おかしな

もよしをしていたものだ。

おかつて「御勝手」(名) 2 おかつて

四902 おかつてからはきはじめて、かいどうへ

ぬけて、おとなりまではいていく。

六1199 やつとできたので、おかつてにいらつしや

るおかあさんのところへとんでいって、

おかつてぐち「御勝手口」(名) 1 おかつて口

十二296(会) いま、民ちゃんがひとりでおかつて口

から地面におりて、わたしのげたをひっかけて、

おかなしむ「御悲」(五) 2 おかなしむ《一三三》

三1101(会) おふたりがどんなにおかなしみにな

るかと思つて、

八424 王さまは、おかなしみになりました。

おかね「御金」(名) 18 おかね お金ひはじめて

のおかね

四997 うらしまは、おかねを子どもたちの手に、

それぞれわたしやりませう。

七441 ぼうしは、つぎつぎと人々の手を渡り、お

金がその中にたまった。

七443 私も喜んで、いくらかのお金をそれにくわ

えた。

七455(会) せっかくのおこころざしですが、このお

金はいただきかねます。

九2111 航空会社では、お金をとらずにつばめを運

ぶことを申しでました。

十6510 おかみさんをもらえば、くらしにもお金が

かかり、

十一197 物をわけてやつたり、お金をかしてやつ

たりしました。

十一209 父親のすきなものをかうために、自分で

わらじを作つて、お金をもうけたりしました。

十一243(会) ひとりぐらい育てるお金は、わたしが

山へいって木を切つてきてもうけますよ。

十一256 そのお金は多くはありませんでしたが、

四人が生きていくにはじゅうぶでした。

十一6411 長男にいくらかのお金を持たせ、父親の

看病のために、ナポリへよこしたのです。

十二1033 これは、千二百年ほどまえに、はじめて

作られた日本のお金です。

十二1034 いまつかつているお金とずいぶんちがい

ます。

十二1037 クロスワードパズルのようにならんだ文

字があつたりして、おもしろいお金です。

十二103 7 お金がなかったときにくらべて、お金が出てからはどれほど便利になったか、
十二103 8 お金が出てからはどれほど便利になったか、考えることができますか。
十五48 12 職人のちんぎんや材料のお金をはらうために、家の道具を賣らなければならなかった。
十五50 8 8 「よし、どんなにお金に困っても、どんなに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。」
おかねもち 「御金持」(名) 9 お金持
五70 3 3 ひやくしようなんか、もういやになったから、お金持のおくさんになりたいって。
五70 11 11 「おばあさんは、(略)、お金持のおくさんになりたいというのです。」
五71 9 9 「お金持のおくさん、これであなたもまんぞくでしょう。」
八38 3 3 「王さま、あなたはお金持ですね。」と、そのみ知らぬ人がいました。
十五87 3 3 『お金持の幸福』です。
十五97 11 11 このへんでは、みんなお金持なの。
十五97 12 12 やはり、お金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。
十五112 12 12 ぼく、おかあさんがそんなお金持だとは知らなかった。
十五112 8 8 母親はだれだって、子どもをかわいがるときにはお金持なのですよ。
おかのうえ (題名) 2 丘の上
十一2 2 丘の上
十一12 2 2 丘の上
おがはんとお 「男鹿半島」(地名) 1 男鹿半島
十二57 4 4 秋田縣の男鹿半島に、神山、元山という二つの山がある。
おかまい 「御構」(名) 1 おかまい

四115 8 8 なんのおかまいもできませんでした。
おかまいなし 「御構無」(名) 2 おかまいなし
三80 8 8 雨は、みんなのいう ことには おかまいなしに、どんどんふりつづけます。
十四21 7 7 先生は、そんなことにはおかまいなしに、どんどんお続けになった。
おかみさん 「御上」(名) 4 おかみさん
八86 7 7 たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、おかみさんは手をたたいておこった。
八86 10 10 おかみさんは声をはりあげ、火ばしであるの子をうった。
九76 6 6 おかみさんが、店の人とふたりで、せっせと目をこじあけて、むきみをつくっていました。
十65 9 9 おかみさんをもらえば、くらしにもお金がかり、
おからだ 「御体」(名) 1 おからだ
十四9 7 7 かなしみのために、おからだをおいためになるなんて、
おがわ 「小川」(名) 11 小川はるのおがわ
三74 4 4 のぶこ「小川のながれ。」
五41 5 5 子うしは、小川の岸をとことこ走りまわった。
五79 1 1 きょう、先生といっしょに、学校のはたけのむこうを流れている小川のところにいきました。
六13 5 5 ちょうど、そばに小川が流れていました。
六40 7 7 森や、小川や、いな田などの、きれいな、楽しかった思い出が、うかんでほえていく。
九7 9 9 この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、ちらちらと光るいけともなり、
十23 2 2 小川の水、きらきら光る。
十一60 2 2 とちゅうに、かなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。

十二62 10 10 水を飲もうと思って小川の岸にでてみると、美しい小魚がおよいでいる。
十二63 10 10 八郎は思い切って、水ぞこにとびこむと、小川がひろがって、みるみるうちに湖となった。
十三49 3 3 みどりの森が、喜びの声でわらい、波だつ小川が、わらいながら走っていく。
おかわり 「御交」(名) 1 おかわり
九31 9 9 先生、おかわりありませんか。
おかわる 「御代」(五) 1 おかわる 《一リ》
五58 1 1 あんまり長くみていないで、さあ、おかわり。
おかながえ 「御考」(名) 1 お考え
九60 11 11 ちよつと裁判に困りましたので、あなたのお考えをうかがいたいと思いましたのです。
おかながえる 「御考」(下) 9 お考える 《一エ》
六95 9 9 海の神は、しばらくお考えになって、
八29 2 2 「(略)。」こうお考えになった天帝は、そのままそとへでて、また馬車を走らせて、
十四7 1 1 子どもたちのことをお考えになってください。
十四7 4 4 だから、自分はたしかにひとりぼっちではないのだと、お考えになってください。
十四8 12 12 けれども、力をだしてしごこのことをお考えになるのです。
十四9 1 1 おかあさんの生活や、私たちの生活のことをお考えになって、
十四9 4 4 心からおかあさんを愛しているからだと、こうお考えにならないといけない。
十四15 2 2 自分には子どもがあるということをお考えになって、
十四16 10 10 すこしこみいりすぎているとお考えで

はないかと心配していました。

おき〔沖〕(名) 4 おき

七65 7 もやのかかったおきの島、ボンボン船がでかけていく。

十23 11 長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船、島。

十一4 3 近くには小高い丘があって、そこからおきをながめると、大きな汽船がけむりをはいて、十一9 7 6 おきを大きな船が通っていくよ。

おき〔起〕↓あさおき

おき〔置〕↓こころおき・ひとつおき

おき〔御気〕(名) 2 お氣

四118 1 6 お氣をつけて。

十四16 8 7 ランプがお氣にいつて、うれしく思いました。

おきあい〔沖合〕(名) 1 おきあい

十四44 10 スコットランドの西岸のおきあい、おきあが・る〔起上〕(五) 5 おきあがる 起きあがる《↑ツ・ール》

三6 6 6 さちこおきあがる。」

三6 7 6 みんなおきあがる。」

八76 3 しかし、かわいそうにあひるの子は、おきあがる氣にもなれなかった。

九109 7 とちゅうでころんで、雪だるまになっておきあがるものもある。

十五118 12 6 みんな起きあがってお別れしましょう。おきかう〔置換〕(下二) 1 おきかう 《↑ウル》

九117 6 6 文 ふうじゅそうのはちをおきかうるおきな子やえんがわの上にくるる日を追いて

おききかえす〔御聞返〕(五) 1 おききかえす 《↑シ》

三72 7 おかあさんはおききかえしになりました。

おきき・する〔御聞〕(サ変) 2 おききする 《↑シ》

八104 10 先生におききしますと、うんかのたまごだということでした。

八105 5 先生におききたら、

おきく〔御聞〕(五) 13 おきく お聞く 《↑キ》

三60 5 「略。」とおききになりました。

三61 10 「略。」おとうさんはそうおっしゃって、ジュデーにおききになりました。

三64 2 おとうさんはおききになりました。

三66 10 おとうさんは女の子たちにおききになりました。

三67 4 おとうさんは男の子たちにおききになりました。

三68 6 おとうさんがおききになりました。

三73 1 「略。」と、またおかあさんがおききになりました。

三83 6 「略。」とおききになりました。

三106 2 かぐやひめのひょうばんが、だんだん高くなったのを、みかどがおききになって、

三111 4 みかどがこのことをおききになって、たいへんかわいそうに思いました。

五63 5 おとうさんは、この話をそばでおききになって、

七78 8 6 それとも、だれかにおききになったのですか。

十四19 12 みんなの話をお聞きになって、「略。」とおっしゃった。

おきせ・する〔御着〕(サ変) 1 お着せる 《↑スル》

八45 9 6 ほんとうに幸福な人をつつけて、その人の着ているシャツを王さまにお着せするのです。

おきだす〔起出〕(五) 1 おきだす 《↑シ》

八7 8 思わずおきだして、「略。」とほめたり、なでてやったり、

おきどけい〔置時計〕(名) 1 おき時計

六5 10 カチカチと氣ぜわしいのはおき時計で、

おきな〔翁〕(名) 1 おきな いたけとりのおきな

十一34 4 6 さなえ運ぶ子、うし追うおきな、家内

そろって田植えする。

おきなお・る〔起直〕(五) 1 おきなおる 《↑ツ》

八23 4 やがておきなおったかと思うと、からだはすっかり皮からはなれていました。

おきなさ・る〔置〕(五) 4 おきなさる 《↑イ》

三99 5 6 みなさんのかいたえでも、字でも、だいにしまつておきなさい。

九83 10 6 あとよくみてあげるから、かごにいれてとつておきなさい。

九84 5 6 とつておきなさい。

九85 11 6 これはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろつておきなさい。

おきのどく〔御氣毒〕(形状) 1 お氣のどく

四131 9 6 お氣のどくですから、はごろもをお返ししたしょう。

おき・める〔御決〕(下二) 1 おきめる 《↑メ》

十四9 11 7 しっかりとかくごをおきめになり、

おきもち〔御氣持〕(名) 2 お氣持

十三61 8 6 きつと先生も、そんなお氣持で、この

絵はがきを送つてくださったんだらう。

十四15 1 7 6 おかあさんが、もし、かなしいお氣持

になられたときには、

おぎゃあおぎゃあ(感) 1 オギヤア、オギヤア

五90 8 6 このわしも小さいときは、オギヤア、オギヤア

ギヤアとないたのだよ。

おきやく 「御客」(名) 2 おきやく お客

五二一 一だいの長い電車が、おきやくをいっぱい乗せて、終点につきました。

九二五 春になると、だれもが、このめずらしいお客の帰ってくるのをまちこがれています。

おきやくさん 「御客」(名) 7 おきやくさん お客さん

一四八 七 おとうさんは、うしろのおきやくさんのにもつをもつてあげました。

一五七 おとうさんも おきやくさんも、みんなわらいました。

八六三 「略」と、年よりのお客さんがいった。十三三八 八 お客さん、ぼくの知っている人……だ

れかしら……じらさないでいて……十三三九 八 だって、おぼさんたら、お客さんなん

ておっしゃるんだもの……十三四一 一〇 おぼさんがね、こんどの日曜、きみを

お客さんにして、ハイキングにつれて行くって……ねえ……

十三四一 一〇 帰ったばかりだから、お客さんさ……お・きる 「起」(上) 5 おきる 《一キ》↓とびお

きる・はねおきる十五三 「ワンワンチャン ネテルワ」といって

ると、いぬがもつくりおきました。十一二五 五 そのあくる日から、金次郎は、とりが鳴

くと、まだ暗いうちからおきて、遠い山へいって、十二七一 一 毎朝早くきては、芭蕉のおきないうちに、

いどから水をくみあげたり、十二八一 九 たおれてはおき、おきては戦いました。

十二八一 九 たおれてはおき、おきては戦いました。おく 「奥」(名) 16 おく

四六二 三 かっちゃんは、もう一ど林のおくをさ

がしにきました。

五四六 五 おつかいにくとき、うらの竹やぶのそばを通つたら、おくの方でうぐいすの声でした。

六七五 ふいにバタバタと足音がして、小さな子どもがふたり、おくからかけだしてきた。

六三〇 四 ありが、おくの方からみつをびんにいれ

てもつてきます。七九二 四 1びきの白いうさぎと、茶色のうさぎは、

おくへはいってでてこないの、七九五 六 よくみると、おくの方に、わらが巣のよう

にふくらんでいて、八五五 四 おむすび一つ、たくあん一きれにも、人の

心のおくは知れるものです。九九三 五 しかし、自分の物ではないので、それを舞

台のおくになげすめて、十六六 六 八 おくのへやのおしきれには、『ぶす』と

いって、おそろしいどくがはいっている。十六八 二 ふたりは、それをあいずのようにして、ぬ

き足さし足で、そつとおくのへやに近づき、十二六 一〇 こういって戸をたたきますと、おくから

ひとりの少女がでてきましたので、十二五七 八 昔、神山のおくにおにが住んでいて、

十三七 二 二 どこともしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、

十五六八 九 おぼさんは目になみだをためながら、しやにむに私をおく深くひき入れた。

十五八二 二 右手の方のおくへ向かって歩いて行って、十五九六 一 一 ふざけたり、わらいこけたりしながら、

みどりの園のおくからかけだして来て、おく 「置」(五) 86 おく 《一イ・カーキ・ク・

一ケ・一コ》↓おおきなさる・かいおく一六〇 三 八 あなたの おうちに おいて いただいた

おかげで、

二九 一 あつめた ことばを、みんな かきとめておきました。

二五二 九 おかあさんは、本をおいて、りんごを手にうけとります。

三二二 二 すると、しめきつて おいた くの 戸が

ひとりでに あきました。四六六 六 お正月までに、ことばあそびの たねを た

くさん こしらえて おきましょう。四八五 五 まん中に きれいな こしかけが 二つ おい

てあります。四二二 二 二 いつまでも そのままに しておいて

ただきとう ございます。五二〇 七 私 は、その家の げんかん におかれました。

五五九 四 私 は、いま みてきた 土星 を、紙 に ていねい にかいて おこう と思いました。

五八五 三 八 子ども たちが くる まに、そこら を きれいに そうじ しておこう。

五九八 七 七 この まま かって おいた らいい でしょう。五二一 一 一 おひる すぎ には、かえで の 木 に つる して お

きます。五二一 一 一 かえで の 木 に つる して おくと、いろいろ な 鳥 が やつて きます。

六四八 八 自分 の おか れて いる のは、しごと 台 の 上 に の っ ている 小 さ な ふ た ガ ラ ス の 中 で、

六六三 三 これは どん な ところ に お か れ る の だ ろ う な ど と 考 え て いる う ち に、

六八八 九 しごと 台 の 上 を み て、だ して お い た ね じ の な い の に 氣 が つ い た。

六二二 一 一 一日 お い て、町 長 さ ん が きた。六二五 五 小 さ な ね じ が 一 本 い た ん で い ま し た か ら、

と り か え て お き ま し た。

六二六 夏のあいだに、こんなにたぎぎをあつめておいて、よかったね。
 六三七 手をあらって、しゃぼんを水の上へおいたら、つるつとすべった。
 六八六 ほんとの「だいじなつりばりをなくしてしまふなんて。おまえからいいだしておいて。」
 六八八 ぼくは、だいじに本ばこの上にのせておきました。
 七二六 一本だけのこしておきましたら、それが、いまちやうど、こんな白い花をつけています。
 七二七 観察日記に、さっそく、これを写生しておこう。
 七二七 はじめ骨組みをこしらえておいて、それにねんどでだんだん肉つけをし、
 八四六 親ぜみが、〈略〉、ていねいに生みつけておいてくれましたので、
 八五八 その人のところへ幸福をわけておいてくるつもりでした。
 八五八 それをうれしく思って、その家へ、幸福をわけておいていきました。
 八六四 そんなものはほっておいて、ほかの子どもに、およくことを教えてやるがいいよ。
 八八三 ほっておいてください。
 八九一 おすでなければいいが、まあ、かつておいてみよう。」と、おばあさんがいった。
 八九三 そこで、あひるの子は、三週間ばかりためしにおいてもらった。
 八九八 水をいっぱいいいれ、ふたをして日かげにおき、ときどき水をとりかえました。
 八九六 ひたさない種もみをまいたところには、べつにしるしをつけておきました。
 九三四 小さな小さな根っこでも、すっかりとり

のぞいておかないといけなさいといわれて、
 九八六 貝や石ころは、どれか一つのかごにいれておこう。
 九八六 四人が話しあってしらすべ、へんだと思う物は、みなかごの中にいれておきました。
 九八八 それまで、命を助けておいてください。
 一〇二六 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。
 一〇三六 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國にのこしておいてきました。
 一〇三八 コーヒー茶わんのおいてあるテーブルを、かこんで、
 一〇三九 窓に花のはちをおきながら、「略。」
 一〇三八 果のはりかたなどを、しらべておきたいと思ひます。
 一〇三六 ぬのを織るしごと、けつしてゆるがせにしてはおかれなさい。
 一〇三六 いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければならない、というのである。
 一〇四二 これは、まえにさしいれておいた核によつて発生した半円眞珠であることが、わかった。
 一〇四六 さあ、もとの場所において、あつちへいこう。
 一〇四六 まあ、まかせておけ。
 一〇四八 かわらへいって、あき地にまいておきました。
 一〇五三 金次郎は、また、人がすてておきたいねのなえをひろって、
 一〇六一 まえからあぶないといっておいた、あの橋を渡ったのではないかね。
 一〇六九 少年は包みを下におくと、頭を病人のかたのところへさげて、

一一六九 一方の手で、ふとんの上におかれたまま動かずにいる、うでをつかみました。
 一一八六 じゃあ、ここに二円だけおいていくから、こづかいにしないさい。
 一二一四 夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいたかれ草が、すっかりくちていた。
 一二一五 そのままにしておいてやろう。
 一二二五 おしめカバーをさせたままほっておくと、民ちゃんはずいぶん平気でそこらをはいまわっています。
 一二三六 サリバン先生が、ほかの大きな人形を私のひざの上において、
 一二四九 ほかのはよくもんでのぼしておけ。
 一二五〇 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家を作っておく。
 一二五二 おじいさんやおばあさんから聞いた話を思いだして、書きのこしておくということは、
 一二六〇 いつもやすりをかけて右と左によじつておかないと、なんの役にもたない。
 一二七四 曾良が水をたくさんくんでおいてくれたし、まきもたくさんとってきてくれてあるし、
 一二八二 きつと、小もみをいつまでも、大もみのそばにならべておくからです。
 一二九二 前の荷の上に、小さなどらをぶらさげ、その両がわに、ふんどうをつるしておく。
 一三〇二 はげしくたたいておいて、てのひらで、きゆうにどらをおさえるので、
 一三二四 せっかくの記念品だから、とっておいたほうがいいよ……
 一三二七 さようなら。」(受話器をおく。)
 一三三九 わたしが行ったとき、この絵の前には、一台の長いすがおいてあったが、
 一四〇八 おとうさんのお写真を、私は、いつも

自分のそばのつくえの上におきます。

十四 13 11 手 私の前においてあります。

十四 30 10 むかしのことはしばらくおき、これから
の人の心がまえば、大きくなくてはいけません。

十四 59 7 窓 水だつて、ためておいてあげたのです。

十四 63 4 向こうがわに黒いぬのでもおいてすかし
て見ると、

十四 70 11 もし、表面にちゃんとふたでもしておけ
ば、

十四 71 9 しかし、茶わんの湯を、ふたをしないで
おいたばあいには、湯は表面からもひえます。

十四 76 12 ここでは、これくらいにしておきましょ
う。

十四 97 3 やいた鳥が〈略〉ほかほかとあたたかい
いきをたてて、テーブルの一方におかれてあつた。

十五 36 10 「・」をその線のうえにおいたり、した
においたりして表わした。

十五 36 10 したにおいたりして表わした。

十五 37 9 「支・反」をおいて、「シ・ハン」とい
う音をしめしたりした。

十五 52 10 いろいろではずをしておいたから、

十五 70 9 窓 そこに赤インキがおいてあるでしょう。

十五 79 11 私のつくえの上には、日本のみなさんが
書いたあつてい絵の本が、いつもおかれてあります。

十五 120 6 その歌を耳にしながら、もっと下級生を
かわいがつておけばよかったなと思った。

十五 122 5 うれしいような、楽しいような、悲しい
ような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。

おくざしき 「奥座敷」(名) 1 おくざしき

五 91 3 「〈略〉。」と、おくざしきにつれていきま
した。

おくさん 「奥」(名) 5 おくさん

五 70 4 窓 ひやくしようなんか、もういやになった
から、お金持のおくさんになりたいって。

五 70 11 窓 お金持のおくさんになりたいというので
す。

五 71 9 窓 「お金持のおくさん、これであなただ
んぞくでしょう。」

五 72 4 窓 わたしは金持のおくさんもいやになった、

五 73 5 窓 おばあさんは、もう金持のおくさんはい
やだ、女王になりたいといっています。

おくすり 「御薬」(名) 1 おくすり
十一 85 6 窓 ぼく、あの人におくすりを飲ませてあ
げるのです。

おくつき 「奥津城」(名) 1 おくつき
十五 72 2 「新島襄之墓」という五つの文字をき
ざんだそのおくつき。

おくに 「御國」(名) 2 おくに お國
一 63 3 窓 いいえ、あれはたろうさんたちのおく
にですよ。

十五 79 6 といひますのは、私は、あの美しいあな
たがたのお國を親しくおたずねして、

おくのて 「奥手」(名) 1 おくのて
十五 62 6 窓 やえ子、満ぼうがまた、おくの手をだ
したよ、よかったなあ。

おくびょうもの 「臆病者」(名) 4 おくびょうもの
おくびょう者

八 9 9 といえは、いかにもおくびょうものよう
にも思えましようが、

十 68 8 次郎かじやのほうが、太郎かじやよりも、
ずっとおくびょう者でした。

十 71 2 おくびょう者が、きゆうにいきおいづき、
十 71 10 おくびょう者の次郎かじや、心配になり
ました。

おくまる 「奥」(五) 1 おくまる 《一ツ》

十五 53 6 守衛にみちびかれておくまった館長室の
前に立った私は、

おくめん 「臆面」(名) 1 おくめん

八 89 4 窓 私のようなみつももないものが、おくめ
んもなく近づいていくのだから、

おくやま 「奥山」(名) 1 おく山

九 120 4 おく山の雪がとけてそのまましみてきたか
と思われるようにつめたかった。

おくやむ 「御悔」(五) 1 おくやむ 《一ミ》
八 42 8 おくやみになっていらつしやると、きのう
の、み知らぬ人があらわれました。

おくらす 「御暮」(五) 1 おくらす 《一シ》
十一 90 9 窓 帰つてしあわせにおくらし。

おくりとどける 「送届」(下) 1 おくりとどけ
る 《一ケ》

四 8 3 まい子をうちまで おくりとどけてくれ
ます。

おくりもの 「贈物」(名) 1 おくりもの
十五 47 9 自分の家でつかう食器とか、おくりもの
にする焼物とかを作らせていたが、

おくる 「送」(五) 29 おくる 送る 《一ツ・一ラ》
一リール》 〇おくりいたす・おおくりする・ふ
きおくる・みおくる

三 98 7 紙にかいた字を、どこへ おくつてあげ
ましよう。

四 5 9 手紙や 小づつみなどを おくつてくれま
す。

五 38 8 窓 きみの受持の子どもたちに、それを送っ
てあげよう。

七 39 8 「それっ。」と、送つてくれました。

七 39 11 高いところをメデシンボールのように送ら

れていくうちに、にこにこ顔になり、

九二五 ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたた

かくした貨車をつつて送ったほどでした。

九二六 汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつ

ぎのとおりです。

九三二 このほかに、オーストリア動物園の人たち

がひき受けて送ったつばめを加えると、

十一八九 ひとりの男が、看護婦に送られながら、

そのへやにはいつてきました。

十二八三 スタンドの人たちは、われるようなはく

手をふたりに送りました。

十二八六 ボールをやわらかくして、しかも受けや

すいところに、送ってやったのであります。

十三六一 きつと先生も、そんなお氣持で、この

絵はがきを送ってくださったんだろう。

十四五二 ふるさとのこした母へ送ったつぎの手

紙の中にもよくかがわれます。

十四一〇 ランプとコーヒー入れとは、あず、送

らせます。

十四一五 おかあさん、いま、ランプとコーヒ

入れとを送らせました。

十四二二 いっしょに小さなかさを送りました。

十四四三 こういう美しい歌に送られて、死んでい

きたいものだと思います。

十四五三 私が、〈略〉、せつせと養分をこしらえ

て、送ってあげたからです。

十四五九 それは、大部分、根の私が、土の中か

ら吸いとして、送ってあげたものです。

十四五五 水と養分とを吸いとして、夜も晝も

送ってあげるの、たいへんなほねおです。

十四五七 それがこの日本でできるためには、私

が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。

十五六一 京都^{きょうと}に帰ってから父に送った手紙のど

れにも、

十五六九 車のついたみごなおもちやを私に送っ

てくださった。

十五七二 これから車のついたものは送ってくださ

るなど、くじょうの手紙を京都へ送ったりした。

十五八六 くじょうの手紙を京都へ送ったりした。

十五八八 ご両人の名まえ入りの大きな写真を二ま

い、満ぼうへと名ざして送ってくださった。

十五九六 私は、停車場まで送ってくださった博士

のこう意をふかく謝して、

十五九九 私には、〈略〉、このあいさつを送るだけ

の特別の権利があると信じます。

十五九九 そう思いながら、年よりの私は、日本の

小学校のみなさんに、はるかなあいさつを送り、

おくる〔贈〕(五) 1 おくる 《一ツ》

十三七六 美しいおとぎばなしを、世界の子どもた

ちにおくった、アンデルセンの生まれた國で

おくるしむ〔御苦〕(五) 1 お苦しむ 《一ミ》

八四六 王さまは、ご病氣をなさって長いことお苦

しみになりましたが、

おくる〔遅〕(下二) 3 おくれる 《一レ・一レ

ル》 四五六 ぼくたちのたびが、あんまり おくれる

から。

九七九 先生について、五十人のなかまが、おくれ

ないように歩いていきました。

十二二四 発育がたいへんおくれていて、かわいそ

うです。

おくる〔御呉〕(下二) 9 おくれる 《一レ》

五七二 金のさかなのところへいって、たのんで

おくれ。

五七五 わたしは金持のおくさんいやになった、

女王になりたいってたのんでおくれ。

五八二 ちよつかしておくれ。

六四六 うさぎさん、かくしておくれ。

六四九 ちよつかしておくれ。

七二二 おいで、わたしといっしょにお話をして

おくれ。

七二六 まあ、火をたきつけておくれ。

七四七 やえ子、ぼくのステッキを持っておく

れ。

七五二 ふたりとも、おかあさんにだかれてお

くれ。

おけ〔桶〕(名) 8 おけ じこなおけ・ておけ・み

ずおけ

七六四 せめて、おけの一つも、もらってくれ

よかったのに。

七六五 うちのおけは、もう、すっかりこわれて

しまっているんだもの。

七六八 「金のさかなさん、おばあさんが、新し

いおけがほしいといっています。」

七六九 帰るまでには、新しいおけができていま

すよ。

七六八 おじいさんが帰ってみると、おばあさんは、

新しいおけを持っていました。

七六九 こんなおけなんて、とくにもならない。

七七〇 こわれたおけが一つ、ころがっていました。

七七一 『いすによるマドンナ』は、おけのそ

こにかいたという小さな絵だが、

おけいこ〔御稽古〕(名) 1 おけいこ

七六三 おけいこがじまった。

おけやさん〔桶屋〕(名) 1 おけ屋さん

七六九 そのち、氣をつけて、おけ屋さんなど

のやっているとところを見ると、

おける ↓における

おげんき 「御元氣」(形状) 3 お元氣

六296 〇 お元氣ですか。

六297 〇 お元氣どころか、このとおりすっかりよ

わって。

九319 〇 みなさんもお元氣ですか。

おこぐ 「御漕」(五) 1 おこぐ 《一ギ》

三639 まん中には、おとうさんが こしかけて、

ボートをおこぎになりました。

おこころさし 「御志」(名) 1 おこころさし

七454 〇 せっかくのおこころさしですが、このお

金はいただきかねます。

おこさん 「御子」(名) 2 おこさん

一475 〇 これはいい おこさんだ。

一476 〇 げんきない おこさんだ。

おこしらえる 「御拵」(下二) 1 おこしらえる

《一エ》

十四564 〇 葉さんが、《略》、空氣をお吸いになっ

て、養分におこしらえになったものでも、

おこす 「起」(五) 7 おこす 《一サ・一シ・一ス》

↓だきおこす・ふるいおこす・ほりおこす・まきお

こす

五64 水力電氣をおこし、水道の水にもなり、川

はだんだん大きくなる。

九86 ことばの組みあわせも、それぞれがった

新しい思いをおこさせます。

十一301 やがて、金次郎は、親類の家からでて、

《略》、一家をふたたびおこすことができました。

十一695 少年は、身をおこして父親の方をみまし

た。

十二357 とうとうかんしゃくをおこして、新しい

人形を手にとって、ゆかにたたきつけました。

十三336 夏の日には、この音がすずしい氣持をお

こさせ、

十三337 冬の日には、いかにもさむざむとした氣

持をおこさせる。

おごそか 「敵」(形状) 4 おごそか

六509 〇 きたないこともきえそうな、ああ、おご

そかな夜の空。

十三599 〇 きちんとした、おごそかな感じがする

ね。

十四3511 なんとのおごそかなすがたでしょう。

十四406 〇 みんな「おごそかな朝。」

おこたえる 「御答」(下二) 1 お答える 《一エ》

八389 「《略》。」と、お答えになりました。

おこたる 「怠」(五) 1 おこたる 《一ツ》

十三203 しかし、切りとるばかりで手入れをおこ

たつたために、土地は、年を追ってやせおとろえ

おこづかい 「御小遣」(名) 1 おこづかい

十6510 着物をきせたり、おこづかいをやったりし

なければならぬので、

おことば 「御言葉」(名) 1 おことば

十四82 〇 一生の間、いくたびとなく、おとうさ

んのおことばを思いだすことにします。

おことわり 「御断」(名) 2 おことわり

八516 〇 『びんぼう』はうちじゃおことわりだ。

十五939 〇 ほら見たまえ。さあ、きみを待ってい

るのだ。おことわりはできませんよ。

おこない ↓ちいさなおこない

おこなう 「行」(五) 6 行う 《一ウ・一ワ》

十二1157 ことばを生かすということは、身に行う

ということだ。

十四763 これと同じような氣流のじゅんかんが、

《略》、陸地と海との間に行われております。

十五352 色のちがった貝や、じゅずだまを結びつ

けることも行われた。

十五354 ぼうきや、石や、貝がらなどに、はも

のなどでしるしをつけてしめすことも行われた。

十五356 これらの表わしかたとともに、事物の形

を絵にうつすことも行われた。

十五563 〇 そのときは、まだ三角測量が行われて

いなかったので、富士山の高さも不明であった。

おこなわれる 「行」(下二) 3 行われる 《一レ・

一レル》

十三94 ものごとの原因と結果との関係や、その

間に行われる法則を知って、

十三910 知識が開けず、科学の進まないところに

は、迷信が行われる。

十三133 天は動き、地はじっとしていて動かない

という、いわゆる天動説が行われていました。

おこまる 「御困」(五) 1 お困る 《一リ》

六934 〇 それはお困りでしよう。

おこめ 「御米」(名) 4 お米

三238 〇 「お米がはんぶんもできない。」

三338 〇 お米や 豆を 入れた、みほんの まるい

びんも ありました。

五327 材木や、石炭や、お米を、たくさんつんで

います。

八1089 きれいなお米ができました。

おこり 「起」(名) 3 おこり 起り

十二6311 それが十和田湖のおこりだということだ

ある。

十五358 この絵のだんだんりやくされてきたもの

が、文字というものの起りとなった。

十五371 「上」「下」とかいう字の起りである。

おこる [怒] (五) 14 おこる 《ーッーリ》 ↓ お

おこる

一 28 4 ひとつのかおが、わらったり、ないたり、

おこったり、よろこんだり、かんがえたり、

三 45 9 わにぎめはそれをきくと、たいそうおこりました。

六 64 1 つかまえて、たなにあげたら、あぶくをだしておこった。

六 129 8 国 きつねがおこって、追いかけてくるんだよ。

六 136 6 しかさんがおこって走ると、こんどはたおれた木のみきにトンとけつまずいて、

六 136 9 ぶんぶんおこりながら、びっこをひきひき、

てっぺんにとどりつきました。

七 34 6 足をふまれて、おこっている女の人もありました。

八 10 3 なにか氣にいらなかったりおこったりすると、

八 86 7 たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、

おかみさんは手をたたいておこった。

九 95 10 やまだ、おこっていきかけるが、思いなおして、さつきすてたじょうぎをひろってくる。

十 57 2 男の子は、「おこった、おこった。」と

いって喜びました。

十 57 2 国 「おこった、おこった。」

十 74 10 だんなは、おこって、「略」と追いかけて

ました。

十五 105 2 チルチル びっくりしてひどくおこって、

おこる [起] (五) 19 おこる 起る 《ーッーラー

ーリーール》 ↓ ふきおこる

四 7 6 火事が、おこらないように、また、わるい

きょうきがはやらないように、

七 41 4 ふいに、はくしゅがおこった。

七 43 10 はくしゅが四方からおこった。

七 54 3 「略」という声がおこった。

七 54 6 はくしゅがおこった。

九 60 10 じつは、おとといからめんどうなあらそいがおこって、ちょっと裁判に困りましたので、

十一 83 8 どうしてこんなまちがいがおこったの

だろう。

十三 18 7 國のおこるかほろびるかは、このときに

さだまり、

十三 25 4 すたれた都市はふたたびおこり、新しい

町村が、いたるところに生まれました。

十四 7 6 どうしても一どはおこらなければなら

ないことが、おこったというにすぎないのです。

十四 7 7 どうしても一どはおこらなければなら

ないことが、おこったというにすぎないのです。

十四 62 7 さまざまのうたがいがおこってくるはず

です。

十四 67 10 茶わんの上や、庭さきでおこるうずのよ

うなもので、もっと大じかけなものがあ

ります。十四 67 12 それは、らい雨のときに、空中におこっ

ている大きなうずです。

十四 68 10 そういう、いろいろなかわったことがお

こるのです。

十四 71 5 だいたい、そういうふうなじゅんかんが

おこります。

十四 74 7 どんな流れがおこるかというようなこと

にも関係してきます。

十四 76 8 アジア大陸と太平洋との間におこると、

それがいわゆる季節風(モンスーン)で、

十五 35 12 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文

字から起り、これがだんだん変わって、

おさ [成] (名) 1 おさ

十 34 6 横糸はおさによって、右から左、左から右

へといききするのであるが、

おさ・える [押] (下) 9 おさえる 《ーエーエ

ル》

四 37 8 そのとき、わたくしの口をおさえた

ものがありました。

五 57 4 私は、こういって、はるおのかたをそつと

おさえました。

六 140 8 とらさんが手をのぼして、一びきのうさぎ

さんのせなかをおさえました。

十一 81 7 のどまででかけたさげびを、じつとおさ

えながら。

十三 31 1 はげしくたいておいて、てのひらで、

きゅうにどらをおさえるので、

十五 67 11 おどる胸をおさえながらたどりついたげ

んかんには、

十五 85 3 いってみれば、すばらしく美しくて、

この廣間のなにもをもおさえている。

十五 85 4 いや、どのなにもをもおさえてい

る。

十五 94 2 「はちきれそうなわらい」は、光のこし

のあたりを、力まかせにおさえました。

おさき [御先] (名) 1 おさき

十四 54 7 「いや、どうか根さんから。」では、

おさきに申します。《略》」

おさな・い [幼] (形) 2 おさない 《ーイ》

十三 51 9 わたしの心は、にじを見るとおどる。お

さないころにそうだった。

十四 5 6 おさないころから、人の世の苦しみをい

ろいろとなめていたからのことでした。

おさなご [幼子] (名) 4 おさな子

九117 6 文 備 ふくじゅそうのはちをおきかうるおさ

な子やえんがわの上にうつる日を追いて

九118 2 文 備 ふくじゅそうのつぼみとおしむおさ

な子や夜はいろりの火にあてており

十一16 9 ひくく、かほそい、おさな子のささやきも、ききもらさない、その耳。

十三52 4 おさな子はおとなの父だ。

おさなごころ 「効心」(名) 1 おさな心

十七10 合 おまえたちは、おさな心にも、ことばを愛することを知って、

おさばき 「御裁」(名) 1 おさばき

七82 5 合 どうぞ、おさばきをお願いします。

おさまる 「収」(五) 1 おさまる 《一ツ》

十一36 5 合 ひと日のあせもおさまって、夕風ふけばたいこ鳴り、清い歌声あちこちと、

おさ・める 「収」(下) 1 おさめる 《一メ》

七46 9 青年は、すわって、アコーデオンを黒ぬりのケースにおさめた。

おさら 「御皿」(名) 3 おさら

二13 6 おさらのにせてかざりました。

四26 6 手 まっ白なおさらの上では、おひめさまのようですね。

六20 11 テーブルには、お茶が用意してあり、くだものが、たくさんおさらにもってあります。

おさらい 「御浚」(名) 2 おさらい

七23 4 合 おさらいを早くすませてから、お遊びなさい。

七23 9 合 もう、おさらいがすんだから、あおむしのせわをしよう。

おさるさん 「御猿」(名) 4 おさるさん

六121 9 そこへ、おさるさんがやってきました。

六122 2 うさぎさんたちは、おさるさんにみんなな

つかさをあげようと、話しあいました。

六122 5 うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、

ぼんぼんとおさるさんにながてやりました。

六122 7 おさるさんは、きよろきよろしながら、まつかさを受けとりました。

おさわる 「御触」(五) 2 おさわる 《一リ》

八39 11 王さまは、大喜びでねどこからとびおきて、まず、いすにおさわりになりました。

八40 2 王さまは、ねどこにおさわりになりました。

おしあい 「押合」(名) 1 おしあい

九65 5 合 おしあいの強いものだよ。

おしあい・する 「押合」(サ変) 1 おしあいする

《一シ》

九65 5 合 おしあいしてきめるんだよ。

おしあ・う 「押合」(五) 3 おしあう 《一ツ》

二28 2 合 やぎとやぎと、せまいはしの上で、

つのを おしあっていました。

十一53 4 乗客はおたがいにおしあって、しやしうう台までいっばいになってしまった。

十一53 10 ひどくとげとげした心でおしあっていた人たちも、きゆうになごやかな気分になった。

おしあ・ける 「押開」(下) 1 おしあける 《一ケ》

十五43 10 かれは、かるくドアをおしあけながら、

「略。」と、じょうずな日本語で話しかけた。

おし・い 「惜」(形) 3 おしい 《一イ》↓おなごり

おしい おしいことに、歌を歌ったおじょうさんの

の名まえがわかりません。

十五50 4 合 それはおしいことです。

十五98 12 合 やはり時間がおしいのだよ。

おじいさん 「御爺」(名) 87 おじいさん ↓ひいお

じいさん

一46 9 おおきな むしめがねをもった おじいさ

んが、やつぱりながい みをふりふり、

一47 2 おじいさんは、わたくしを むしめがねで

のぞいてみながらいいました。

一59 7 おじいさんも、おばあさんも、きょうだい

も、みんなよろこんで、

一60 9 「略。」と、おじいさんは おれいをい

いました。

一61 4 おじいさんが こういうと、

一63 6 「略。」と、おじいさんが いいました。

二55 5 わたくしには、おとうさんも あります。

おじいさんも あります。

二55 6 けれども、おじいさんの おとうさんは、

おいでになりません。

二57 7 そこへ、ひとりの おじいさんが でき

ました。

二57 10 みると、わたくしの おじいさんに よく

にた かたでした。

二58 3 合 「おじいさん。」と いいますと、

二58 5 合 「わたしは、おまえの おじいさんの お

とうさんだよ。」

三25 2 ある ちえのある おじいさんが いいまし

た。

三25 6 「略。」と いいますと、おじいさんは、

「略。」と いいました。

三26 6 すると、あの ちえのある おじいさんが、

「略。」と いいました。

三28 3 すると、あの ちえのある おじいさんが、

「略。」と いいました。

三100 2 「竹とりの おきな」という おじいさんが

すんで いました。

三〇四 おじいさんはまいにち、のや山へ竹を
とりにいきました。
三〇六 おじいさんが、だれよりも はやく 山に
いって、
三〇五 おじいさんは よろこんで、「略。」と、
てのひらにのせて かえりました。
三〇四 それからと、いうものは、 おじいさんの
とる竹の中には、
三〇五 おじいさんの うち は だんだん かねもち
になりました。
三〇三 おじいさんは、きもちのわるいときでも、
はらの たつときでも、
三〇八 おじいさんの 家の まわりを とりまきま
した。
三〇五 「略。」と 思って、みんな いっしょう
けんめいにおじいさんに たのみました。
三〇四 三 いつまでも おじいさんとおばあさんの
おそばにいたいと思います。
三〇六 それで、おじいさんに、「略。」とおっ
しゃいました。
三〇七 おじいさんは、かぐやひめに この ことを
つたえて たびたび すすめましたが、
三〇七 みかどは、 おじいさんと ごそうだんに
なって、
三〇九 おじいさんとおばあさんは おどろいて、
その わけを たずねました。
三〇九 思いがけないことをきいて、 おじいさ
んも おばあさんも びっくりしました。
三〇九 おじいさんの 家の まわりは、 弓矢を
もった 人たちで、いくえにも とりかこまれ、
三〇九 おじいさんは、その いり口で ばんをし
ていました。

三〇七 かぐやひめは、 おじいさんとおばあさん
に、「略。」といつて、
四〇八 サンタクロースの おじいさんが できあが
りました。
四〇九 あさ 早く はねおきて、そとに とびだし
て、雪かきをなさる おじいさん。
四〇九 けれども、おじいさんは うれしそう。
四〇九 元氣で わかい うらしまは、みるみる
しらが おじいさん。
五二二 ひさしふりにおじいさんにおあいして、
五二二 三 「おじいさんが、かわいがつてくださ
たのでしよう。」
五二二 海べに、おじいさんとおばあさんが、住ん
でいました。
五二二 おじいさんは、あみでさかなをとり、おば
あさんは、糸をつむいでくらしていました。
五二二 ある日、おじいさんは、海にでてあみをな
げました。
五二二 おじいさん、わたしを海へはなしてくだ
さい。
五二二 おじいさんは、「略。」とやさしくいつて、
はなしてやりました。
五二二 おじいさんは、うちへ帰って、おばあさん
に、このふしぎな話をしました。
五二二 あくる日、おじいさんは海へやってきまし
た。
五二二 おじいさんが金のさかなをよびますと、す
ぐでてきて、「略。」とききました。
五二二 「なんの用ですか、おじいさん。」
五二二 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。
五二二 おじいさんが帰ってみると、おばあさんは、
新しいおけを持っていました。

五二二 おじいさんは海へやってきました。
五二二 おじいさんが金のさかなをよびますと、お
よいでてきました。
五二二 「なんの用ですか、おじいさん。」
五二二 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。
五二二 おじいさんが帰ると、りっぱな家がたつて
いました。
五二二 おじいさんは、また海へやってきました。
五二二 おじいさんが金のさかなをよびますと、金
のさかながおよいできました。
五二二 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。
五二二 おじいさんがおばあさんのところへ帰りま
すと、おばあさんは、けがのふくをきて、
五二二 おじいさんが、「略。」といひますと、
五二二 おばあさんは、おじいさんをうま小屋のし
ごとにおいやりしました。
五二二 それから三日ほどたつて、おばあさんはお
じいさんにいました。
五二二 おじいさんはびっくりして、
五二二 おじいさんは、とぼとぼと海へやってきま
した。
五二二 おじいさんが金のさかなをよびますと、金
のさかなは、「略。」とたずねました。
五二二 金のさかなは、「なんの用ですか、おじ
いさん。」とたずねました。
五二二 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。
五二二 おじいさんが帰ってみると、どうでしょう、
五二二 おじいさんは、「略。」といひました。
五二二 おばあさんは、おじいさんには目もくれな
いで、
五二二 それから一週間もたつたころ、おばあさん

は、おじいさんをよんでいました。

五七五 おじいさんは、口ごたえもできず、力のない足どりで、海へやってきました。

五七六 おじいさんは金のさかなをよびました。

五七三 「なんの用ですか、おじいさん。」

五七二 おじいさんは、すぐごと、おばあさんのところへ帰りました。

六九九 いつか、おじいさんにいただいた古いめがねのたまと、

八五七 ぼくはうちへ帰って、おじいさんにその話をしたら、

八五七 おじいさんにその話をしたら、おじいさんは、「略。」とおっしゃった。

十二三 新しい家のたつた町、ふみきりばんのおじいさん。

十五七 いまはきれいだけれど、コスモスは、おじいさんになるとかわいそうね。

十六二 おじいさんやおとうさんがおうたいになるうたいを、きいたことがあるでしょう。

十六三 ふつうのしびいでは、役者がおじいさんになったり、むすめになったり、

十六三 おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わかい女のめん、と、

十二四五 ほら、分家のおじいさんの大すきなじょうりさ。

十二五六 おじいさんやおばあさんからきいた話を思いだして、書きのこしておくことは、

十二九六 それにはあなたがたのおとうさんや、おじいさんや、ひいおじいさんの写真がでていたり、

おいしい 「押入」(名) 3 おしいれ

十六六 おくのへやのおしいれには、『ぶす』と

いって、おそろしいどくがはいっている。

十六八 それで、いよいよ、おしいれをあけるときになると、

十六九 おしいれのたなのすみに、だいいそうにしまつてあった、一つのまるいつばをみつつけ、

おしえ 「教」(名) 3 教え

十四三六 まことに、星の光は、声のないことばです。〈略〉。教えを説かない教えです。

十四三七 教えを説かない教えです。

十四七八 竹を割るときには、うらのほうから割るがいいという教えでした。

おしえる 「教」(下) 32 おしえる 教える 『エーエル』

三二八 いろいろなものをおしえることにしました。

三三四 おしやかさまの おしえて くださったことは、

三七八 おかあさんがおしえてくださいました。

五四三 ぼくはねえさんから、よくうたをおしえてもらいました。

五九六 「略。」と、となりのおじいさんがおしえてくれました。

六八五 では、私がいいことを教えてあげましょう。

六八八 すると、海の神は、きつといいことを教えてくださるでしょう。

六九二 私に海のごてんへいくようにと教えてくださいました。

六九三 なが四角から、ま四角に切る切りかたは、

七二七 先生は、あおむしがさなぎになるって、

七二九 それは、すぐめたちにあたべられないため

だと、おかあさんが教えてくださった。

七五五 どこにいるか、早く教えてください。

八七二 それは、だれも教えてくれたことではありません。

八六三 『略』といったりして教えたのだが、だめだった。

八六五 そんなものはほっておいて、ほかの子どもに、およくことを教えてやるがいいよ。

八八二 ものごとを教えてもらえる人たちのななまいるをしたんだもの。

九一三 午後は、先生について、ひとりひとり、正しいすべりかたを教えていただいた。

十一一七 おかあさま、あなたの目から教えられました。

十二一八 ぼくにはだれも教えてくれるものがありません。

十二三五 「水」がその中にはいつているものであることを、はつきり教えるために

十二四八 簡単な人形の作りかたを教えてあげよう。

十二七五 先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、

十三八三 知識は、人から教えられたり、〈略〉、考えたり、調べたりして、しだいにましていく。

十三一五 ガリレオを呼びだし、その説を人に教えるはならない、といいました。

十四一〇 ランプについては、いろいろなことを教えてくれました。

十四一七 これは、私の友だちで、母親が十年このかた、この式のランプをつかっているというのが教えてくれたことなのです。

十四七五 「木もと竹うら」ということわざを教え

てくれました。

十四79 9 「略。」と教えてくれました。

十四80 4 または、自分たちの祖先が発見したのではなく、よその民族から教えられて、

十五45 9 鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって来たのも、そのころのことであった。

十五52 7 眞心こめて教えてくださった世界的魚類学者デビッド・スター・ジョルダン博士は、

十五58 1 図 そのかわり日本語を教えてくださいと、

おしおろす 「押降」(五) 1 おしおろす 《一サ》

十四75 12 森の上へかかると、飛行機は、しぜんとなの方へおしおろされるかたむきがあります。

おじぎ 「御辞儀」(名) 11 おじぎ

四100 8 かめは、手でなみだをふきながら、なんどもおじぎをします。

四101 6 かめは、ていねいにおじぎをして、海の方へいってしまいます。

五90 2 図 いま、『さどが島』とおうたいになったとき、おじぎをなさいましたね。

五90 6 図 それでな、さどが島をうたうときには、いつでもおじぎをするのだよ。

六29 5 きりぎりす ていねいにおじぎをしながら、「略。」

六90 1 女の人は木をみあげながら、おじぎをする。

七45 10 おしまいに、青年は、大きな声で、「略。」といって、おじぎをした。

八105 8 どのいねのほも、すっかり黄色になっておじぎをしています。

九59 9 きよしやはきゆうにていねいなおじぎをしました。

十五87 12 ふたり、よろよろしながらおじぎをする。

十五88 9 「はちきれそうなわらい」が、腹をかか

えながらおじぎをする。

おしごと 「御仕事」(名) 1 おしごと

七10 5 図 先生のおしごとは、渡しもりのようなものだ。

おしこむ 「押込」(五) 1 おしこむ 《一ミ》

十五60 1 げんかんに出て、横づけにしていたりっぱな自動車に、ためらう私をおしこみ、

おじさん 「伯父」(名) 69 おじさん

一52 「略。」ひとりごとをいうと、となりのおじさんが、「略。」

二44 3 図 「おじさん、こんやもまた、かげえをして、みせてください。」

二45 6 図 「おじさん、こんどは、わたくしがやってみましょうか。」

四29 1 ぶどうえんの おじさんのところへ行って、あそんでくることかな。

四39 8 図 さくらの枝をおろうとしたとき、おじさんのことばに気がついてやめました。

四99 4 図 おじさん、おじさん。このかめをうりましょう。

四99 4 図 おじさん、おじさん。

四99 9 図 みんな「ありがとう、おじさん。」

五23 8 図 こしをかけていた知らないおじさんが、五29 4 図 どこかのおじさんが、荷物を二つ持って、あせをふきふきあるいていました。

五29 8 図 おじさん、駅へおいでになるのでしよう。

五84 6 図 いとうくんは、海岸のおじさんの家で、海の作文を書くんだといって、

五96 5 「略。」と、となりのおじさんがおしえてくれました。

六33 9 図 かかし「助けて——雲のおじさん。」

六33 11 図 雲のおじさん、わたしのたんぽほどこで

しよう。

六35 2 図 おじさん、大風ってこわいな。

六114 2 おじさんからたこをいただきました。

七39 2 いきなりさぶろうをだきあげ、となりのおじさんの目のまえへ、つきだしました。

七39 4 おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人に渡しました。

十一22 6 図 おじさん、これをはいてください。

十一85 4 図 ここにあのおじさんがいます。

十一85 5 図 おじさんは、いつでもぼくをみています。

十二16 6 これは、絵のすきだったおじさんからゆずってもらったもので、

十二43 5 図 ねえ、おじさん。

十二43 8 図 おじさんからいただいた童話の本に、人形が夜中に集まっておどります話がありましたよ。

十二44 2 図 「ほんとう、おじさん。」

十二46 2 図 おじさんの子どものころ、よくみたものだよ。

十二73 3 図 「じゃあ、おじさんも手傳ってあげよう。」

十三42 10 図 おじさんやおばさんによろしく。

十三54 7 図 それで、すぐに、おとなりのおじさんのところへ行きました。

十三54 8 図 おじさんは、絵かきではありませんが、

十三54 11 図 ちょうど、おじさんは、用事がなく、しよさいで、本を読んでいらつしやいました。

十三56 1 図 絵はがきでも、たいへんいい絵だなと思いましたが、おじさんで見ると、いっそう

十三56 6 図 そんなにちがうのですか、おじさん。

十三57 6 おじさんは、そういうながら、

十三585 〔「じゃあ、やっぱり、おじさんみたい
に、旅行して来なくちゃだめですね。」

十三5812 おじさんはそういつて、同じひきだし
から、一まいえらびだして、見せてくださいました。
十三596 〔その絵は、たいへん感じがちがいます
ね、おじさん。〕

十五591 〔新島のおじさんなら、私はよく知って
います。〕

十五604 新島のおじさんが、やまいを札幌のこ
う外に養っていたのは、

十五612 新島のおじさんとお婆さんは、

十五616 そのころ、新島のおじさんがどんなにえ
らいかたであるかを知らなかった私は、

十五619 おじさんとお婆さんが外出の用意をと
のえて、「略」と、私をうながした。

十五627 〔「略。」といつて、おじさんはお婆
さんに助け船を求められた。〕

十五6211 〔おじさんのくつは光っているのに、ぼ
うやのくつはほこりだらけだから、

十五634 おじさんは、きちんと着ていた上着をか
なぐりすてて、

十五6311 〔おじさんのようにきれいになつたらう
十五644 おじさんとお婆さんはそのあとを追つて
出て来られたが、

十五648 おじさんは道ばたにしゃがんで、自分の
せをたたきながら、

十五6411 見るなり私は、おじさんの廣いせなかに
とびついた。

十五651 〔「おじさん、早く歩いてよ。」と命令
した。〕

十五654 私をせにおいながら、あせをふきふき歩
かれた新島のおじさんと、

十五657 りんごのみのころ、おじさんとお婆
さんは京都へひきあげられたが、

十五666 満ぼうの心から、どうして新島のおじ
さんのすがたが消えうせよう。

十五667 なくなった新島のおじさんがいい残され
た願ひによつて、

十五6810 〔「おじさんが生きていたら、どんなに
か喜ぶだろうに——」

十五6812 〔「ここがおじさんのおへやですよ。
十五691 顔をあげてへき面を見あげると、おじ
さんの大きな写真があった。〕

十五696 おじさんが日夜ふでをとつていられたと
いう大きなつくえの上に、

十五699 ああ、新島のおじさんは、私を京都まで
もつて来て、朝夕かわいがつてくださったのだ。

十五6912 その写真の主が、こうしておじさんを見
あげているのに、おじさんの声は聞えないのだ。

十五6912 おじさんの声は聞えないのだ。

十五701 じつとおじさんの写真に見入りながら、
私は無言で頭をびよこんとさげた。

十五7010 〔おじさんは、年とられてから目がわる
くなつてね、

十五711 〔おじさんのつかいなれたペンですよ。
十五713 〔このすがたをおじさんがごらんになつ
たら——〕といつて、お婆さんは声をくもらせた。

十五715 〔「おじさん、おじさん」を喜ばせましようね
十五726 〔「おじさん。」と呼びかけようとした
が、声が出なかった。〕

十五763 ああ、新島のおじさんが、いまなお満
ぼうを守つていてくださったのだ。

おじさんたち 〔伯父達〕(名) 1 おじさんたち
十五624 〔おじさんたちと行くのがいやなのか。〕

おしすすめる 〔推進〕(下) 1 おし進める 〔
メ〕

十三91 すでに知つたことを材料として、考えを
おし進め、種々のことからの関係を明らかにして、

おしだす 〔押出〕(五) 1 おしだす 〔「サ」
十251 おしだされてくるトロッコ。〕

おしつける 〔押付〕(下) 3 おしつける 〔
ケ〕

一624 〔「略。」といつて、わたくしの手にた
まをおしつけました。〕

十二261 とりついてぐんぐんおしつていつて、か
べぎわにおしつけてしまつたりします。

十五256 そうして、からだの重さで上からぎゅう
ぎゅうとおしつけ、

おしとめる 〔押し止〕(下) 1 おしとめる 〔「メ
ル」〕

九901 みんなでそれをおしとめる。

おしば 〔押葉〕(名) 2 おしば おし葉

五844 たなかさんは、おしばをたくさん作るとい
いました。

十5812 私は、のこつたのをおし葉にしました。

おしはかる 〔推算〕(五) 1 おしはかる 〔「ル」
八338 ただ「遠い」といつ考えただけでは、この遠
いきよりは、おしはかることはできません。〕

おしべ 〔雄蕊〕(名) 2 おしべ

十三95 たとえば、花のおしべとめしべとの関係
についていつと、

十三96 おしべのかふんがめしべにつかないよう
なくふうと、

おしまい 〔御仕舞〕(名) 19 おしまい

二89 おしまいに、「お」のつくことばをあつ
めました。

- 二36 ㊦ おしまいのめくらは、しつぽをもつていいました。
- 四44 ㊦ ぼくは、きのうは一ばんおしまいだったもの。
- 四44 ㊦ おしまいはつらいよ。
- 四45 ㊦ かっちゃんがおしまいにしてくれていったから、そうしたんじゃないか。
- 四45 ㊦ おしまいは気がらくでいいからって、いったじゃないか。
- 四85 ㊦ おしまいに、みんなでトランプあそびをしました。
- 五104 ㊦ おしまいに、「略。」と、本をよむようなひとりごとをいいました。
- 六36 ㊦ 点になって、おしまいにはみえなくなってしまう。
- 六112 ㊦ あとは、おしまいのパビブベボ、パビブベボにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。
- 七35 ㊦ おしまいには、私とさぶろうとは、まるで、一つからだになってしまいかと、思われるほど。
- 七45 ㊦ おしまいに、青年は、大きな声で、「略。」といって、おじぎをした。
- 八71 ㊦ おしまいには、自分の兄や姉からまで、「略。」といわれた。
- 九8 ㊦ おしまいに、〈略〉など、いろいろなことばを組みあわせてみましょう。
- 九11 ㊦ おしまいに、海岸で波のくだけるところをきかせてくれた。
- 十一23 ㊦ おしまいには、喜んではいってくれました。
- 十二63 ㊦ そのうちからだがだんだん長くのびて、おしまいにへびになってしまった。
- 十三44 ㊦ そのあとはマンシユウから帰って来た眞

- 二くん、おしまいにおかあさん。
- 十五88 ㊦ さて、いちばんおしまいに、ここにいろのは、『はちきれそうなわらい』で、おしまいのことば〔題名〕1 おしまいのことば十二115 ㊦ おしまいのことば
- おしま・う〔御仕舞〕(五)3 おしま・う
- 四132 ㊦ あなたは、まわずにかえっておしまになるでしょう。
- 八32 ㊦ けんぎゅうを西の岸に帰しておしまになりました。
- 十四95 ㊦ おかあさん、いま、おかあさんが力を
- おとしむ〔惜〕(五)2 おしむ『ミーン』
- 九16 ㊦ まもなくさつていかなければならない日本に、なごりをおしんでいるのかもしれない。
- 十二86 ㊦ 見物人たちは、しばらく、あらしのよう
- なはく手をおしきませんでした。
- おしめカバー(名)1 おしめカバー
- 十二25 ㊦ おしめカバーをさせたままほっておくと、民ちゃんは平氣でそこらをはいまわっています。
- おし・める〔御締〕(下)1 おしめる『メ』
- 五88 ㊦ 「でも、おぼろさんが赤いおびをおしめになると、へんでしょう。」
- おしもんどう〔押問答〕(名)1 おし問答
- 七45 ㊦ それから、二三どのおし問答が、ふたりのあいだにとりかわされた。
- おし・やかさま〔御釈迦様〕(人名)13 おし・やかさま
- 三96 ㊦ あまちゃんの中からひよっこりと、おでになったか、おし・やかさま。
- 三105 ㊦ 小さなひしゃくで おちゃんくんで、かけてあげましよ、おし・やかさま。
- 三112 ㊦ おし・やかさまにはんたかというでしが

- いました。
- 三115 ㊦ おし・やかさまは、どうかしてはんたかを
- りっぱな人にしてやりたいと、
- 三124 ㊦ おし・やかさまは、「略。」とおし・や
- つて、はんたかを およびになりました。
- 三1210 ㊦ はんたかは 目をかがやかせて、おし・
- かさまのおかおをみつめました。
- 三144 ㊦ おし・やかさまの おしえて くださった
- ことは、
- 三147 ㊦ ある日、おし・やかさまは、王さまのおま
- ねきに あずかりました。
- 三149 ㊦ おし・やかさまは たくさんの でしをつれ
- て、王さまのごてんにまいりました。
- 三151 ㊦ はんたかも おし・やかさまの はちをもつ
- て、でしの中にまじっていました。
- 三158 ㊦ ごてんでは、おし・やかさまがせきにおつ
- きになりました。
- 三161 ㊦ はちをもった手が、するすると おし・
- かさまの 目のまえにのびてきました。
- 三167 ㊦ おし・やかさまは、「略。」とおし・や
- しました。
- おし・やん〔御写真〕(名)2 お写真
- 十四712 ㊦ おとうさんのお写真を、私は、いつも
- 自分のそばのつくえの上におきます。
- 十四143 ㊦ おとうさんのお写真は、ほんとうに生
- き写しで、
- おしょうがつ〔御正月〕(名)3 お正月
- 四67 ㊦ お正月までに、ことばあそびのたねをた
- くさんこしらえて おきましよう。
- 四125 ㊦ 一月は お正月。
- 十一27 ㊦ お正月がくると、例年のことで、だいか
- ぐらがまわってききました。

おしょうさん 「和尚」(名) 1 おしょうさん

五86 3 ㊦ 「りようかんさん、りようかんさん、おしょうさんのりようかんさん。」

おじょうさん 「御嬢」(名) 7 おじょうさん

十四48 10 まだわかいおじょうさんです。

十四49 5 このおじょうさんは、この歌を知っていたかどうか知りません。

十四49 7 しかし、このおじょうさんくらい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。

十四49 9 このおじょうさんこそ、ほんとうにこの歌を歌った人というべきです。

十四49 12 おじょうさんの歌をたよりに、マッケンナがおよいで行ったように、

十四50 4 歌を歌っていたおじょうさんも、そのほかの婦人たちも、みんなすくいあげられました。

十四50 7 おしいことに、歌を歌ったおじょうさんの名まえがわかりません。

おじょうず 「御上手」(形状) 1 おじょうず

十五93 6 さとう おじょうずらしく、「ごめんくださいまし。せっかくおまねきをいただきながら、

おしょうばん・する 「御相伴」(サ変) 1 おしょうばんする 「一シ」

八6 11 三ど三どの食事に、テーブルの上でおしょうばんしたりしました。

おしよ・せる 「押寄」(下一) 1 おしよせる 「一セ」

十三6 10 やがて、かれらもせいぞろいして、かげろうのたいまつをたいて、おしよせて来る。

おしらせくださる 「御知下」(五) 3 お知らせくださる 「一イ」

六58 1 どうぞ、みなさんの気づいたことは、なんでも、かかりのものにお知らせください。

十四13 6 ㊦ 夜をどうしてすごしておいででしょうか、お知らせください。

十四17 3 ㊦ どんなにしていらいしますか、お知らせください。

おしらせ・する 「御知」(サ変) 1 お知らせする 「一シ」

六57 5 これには、みんなにお知らせしたいことを書きます。

おしらべなさる 「御調」(五) 1 おしらべなさる 「一イ」

九86 7 ㊦ それから、道具を集めて、めいめい持ってきた物があるか、おしらべなさい。

おしり 「御尻」(名) 1 おしり

十二27 3 かた足をなげだして、おしりでいざって歩くのです。

おしろい 「白粉」(名) 1 おしろい

十63 6 役者が〈略〉、わかい男になったりするときには、おしろいやべにでけしようにして、

おしわける 「押分」(下二) 1 おしわける 「一ケ」

十二65 4 その細いやわらかなものが、地をうがち岩をおしわけ、深く廣くのびていく。

おす 「雄」(名) 1 おす

八79 1 ㊦ おすでなければいいが、まあ、かつておいてみよう。

お・す 「押」(五) 15 おす 「一サ・一シ」

一48 1 四かくな かみに、まるい おおきな はんを おして くれました。

六88 5 ㊦ さあ、早く船にお乗りなさい。おしてあげますから。

七34 5 ㊦ そんなにおしたって、だめですよ。

七35 2 汽車がゆれるたびに、前後からおされて、

さぶろうは、だんだん頭を私によせ、

七37 10 わかい男の人が、ただひとり、わらいもせずに、両方の手でまどわくをおしています。

九86 9 帰りは、みんなかわるがわるリヤカーをおして歩きました。

九90 11 もういいったら——と、やまだのせなかをおしながらさる。

十24 3 トロッコをおして、炭坑にはいっていく工員。

十一52 4 おたがいぬれたからだで、おしたりおされたりしなければならなかった。

十一52 4 おしたりおされたり

十一53 6 ㊦ そんなにおささないでください。

十二26 11 とりついてぐんぐんおしていつて、かべぎわにおしつけてしまったりします。

十二84 9 このままおされるものではありません。

十五25 10 さすがの大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなつて、

十五72 10 ドアをおして、つかつかと中にすすんだホランド博士は、

おす・う 「御吸」(五) 1 お吸う 「一イ」

十四56 3 ㊦ 葉さんが、〈略〉、空気を吸いになつて、養分におこしらえになったものでも、

おすがた 「御姿」(名) 1 おすがた

十四17 4 ㊦ 私には、おかあさんのおすがたが、目に見えようような気がします。

おすき 「御好」(形状) 5 おすき

九72 3 ㊦ あなたは、こがねのどんぐり二リットルと、しおぎの頭と、どちらがおすきですか。

十一49 7 やぎ小屋のまわりには、おかあさんのおすきなライラックを植えましょう。

十四15 8 ㊦ おかあさんのおすきなようになさって

ください。

十四567㊦ 高いところがおすきなようですが、そこへつれて行ってあげるのは、この私です。

十五449㊦ たいへん焼物がおすきのようですが、おすわりする「御座」(サ変) 2 オスワリスル

《—シ》

十496㊦ ワンワンチャン ネテルワ—ワンワン
チャン タッチシタ— オスワリシタ—

十534㊦ 「オスワリシタ」と、いちいち、いぬの動作をことばにして喜びました。

おせっかい「御節介」(名) 1 おせっかい

九959㊦ よけいなおせっかひさ。

おせわ「御世話」(名) 1 おせわ

四1146㊦ 長いあいだ、ほんとうに おせわになりました。

おぜん「御膳」(名) 1 おぜん

十四706 夕ごはんのおぜんの上でもやれますから、よく見てごらん下さい。

おそい「遅」(形) 9 おそい 《—イ—ク》

三481 おもい ふくろを せおって いらっしやったので、おそくおなりになったのです。

五1016 「略」と、早く、おそく、高く、ひくく、いっしょうけんめいにまねをします。

六246㊦ さあ、おそくなるからでかけよう。

八195 せみの子たちは、たいへん生長がおそくて、ように大きくなりません。

九3510㊦ それは、七月の二十八日でしたが、村でいちばんおそい植えつけでした。

十482 これは、足がおそいというためばかりでなく、

十一249㊦ 「もうおそいから。」というのに、その晩のうちにいって、子どもをつれてきました。

十一289 そのうえ、夜おそくこつそりと勉強を続けた。

十二274 たいへんおそいようですが、いざりだすとなかなか早いものです。

おそうじ「御掃除」(名) 1 おそうじ

二229㊦ すの おそうじをするので、はとをだいていたら、たいへんあついとおもいました。

おそく「遅」(名) 1 おそく

九487 そのめんどろだという裁判のようすなどを考えて、おそくまでねむれませんでした。

おそと「御外」(名) 1 オソト

十二301㊦ 「オソト、ワンワン、チロイ。」

おそば「御側」(名) 5 おそば

三10410㊦ いつまでも おじいさんと おばあさんのおそばにいたいと思います。

三1138㊦ いつまでも おそばにいて、こうこうをしたいと思いましたが、

十四111㊦ そうしたら、おそばに行けます。

十四1001 そのマッチの火の中で、もうとくにおかれて神さまのおそばへ行ったらおばあさんを見た。

十四1021 上の方へと、神さまのおそばへ行くかのようにのぼって行った。

おそら「御空」(名) 1 おそら

一239㊦ 「はれた おそらにくつがなる」では、てをうえにさしあげました。

おそらく「恐」(副) 6 おそらく

八1311 この思いでは、おそらく一生なくならないでしょう。

十4910 よその人には、なんのことか、おそらくわからないうえに、

十二927 同じ文を書いたとしても、そのなみは、おそらく、太郎や秋子と同じではなからう。

十四1211㊦ 小包二つは、おそらくいっしょには着きません。

十四473 おそらくは、自分と同じように、船からなげだされたものでしょう。

十四883 歩く人は、おそらく、まっすぐに歩こうと思っただけであらうが、

おそる「恐」(下二) 1 おそる 《—ル》

十五6011 天下におそるべきなものもなく、わがままいっぱいにふるまっていた。

おそるおそる「恐恐」(副) 1 おそるおそる

二349㊦ 六人のめくらたちは、おそるおそるぞうのそばによってきました。

おそれあう「恐合」(五) 1 おそれあう 《—ツ》

十五807 実際は、たがいににくみあったり、おそれあったりしてきました。

おそれる「恐」(下二) 4 おそれる 《—レ》

八7110 すると、草むらにいた小鳥がおそれてとびたつた。

九212 いく千というつばめたちは、人をおそれず、

十656 めうえのいばつたものに対してもおそれず、

十11811㊦ そうしたら、私は、もうなにもおそれず帰って来ます。

おそろしい「恐」(形) 7 おそろしい 《—イ》↓
そらおそろしい

八518 おまけに、その家にかつてあるいぬが、

八749 とこが、ちょうどそのとき、おそろしい大きないぬがそのすぐそばに立っていた。

十666㊦ 『ぶす』といって、おそろしいどくがは

十6612 そんなおそろしいどくで、死ぬようなこと

になつてはつまらないから、

十73 11 園 おそろしい『ぶす』をたべて死ぬのが、いちばん早道と思つたのです。

十五27 4 下につかまれている女の子は、あきらめたのか、おそろしいのか、

十五29 8 大わしはすぐにとび起きて、〈略〉、おそろしいきおいで少年にとびかかつて來ました。

おそろしさ 〔恐〕(名) 2 おそろしさ

八86 6 またいじめられるかと思つて、おそろしさのあまり、牛乳なべの中へとびこんだ。

十一65 5 わるい知らせをききはしまいかと、おそろしさにふるえながら、その名をいいました。

おたがい 〔御互〕(名) 11 おたがい

四43 3 がんは、おたがいに いましめあつて、ぎょうぎよく空をとびました。

五18 9 おたがいに、であつたと思つたら、すぐおわかれでした。

九8 3 色の組みあわせも、音の組みあわせも、おたがいにとけあつて、

十一52 4 おたがいがぬれたからだで、おしたりおされたりしなければならなかつた。

十一53 4 乗客はおたがいにしあつて、しゃしゅう台までいっばいになつてしまつた。

十一54 6 園 おたがいにつめて、座席にもうひとり十三5 2 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木のめむれは、おたがいにひじをつつきあつて、

十四14 8 手 園 おかあさんと私とは、おたがいに、それほどはなれてはいないのだ、

十四69 5 まつた関係のないようなことがら、原理のうえからは、おたがいによくにたものであるという一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

十五80 3 それ以前は、おたがいに他の國々のこと

はわからず、

十五122 1 園 おたがいに、信じあへ。おたす 〔御出〕(五) 2 おたす 〔一シ〕

五14 6 園 「きつぷを改札口でおだし。」八45 2 〔略〕。というおふれを、おだしになりました。

おたすくださいる 〔御助下〕(五) 1 おたすくださいる 〔一イ〕

四110 6 園 このあいだは、うちのかめをおたすくださいまして、ありがとうございました。

おたすね 〔御尋〕(名) 1 おたすね

十五55 7 園 まあ、そのようなありさまで、せつかくのおたすねもむだになるようなわけだが、

おたすねする 〔御尋〕(サ変) 6 おたすねする 〔一シ・スル〕

九83 4 園 ぼく、先生におたすねしてみよう。九83 7 私はかけていって、先生におたすねしますと、〔略〕。と、しずかにおっしゃいました。

十四24 9 それで、私は、〔略〕。とおたすねした。十四27 4 それで、先生にそのことをおたすねすると、先生は、〔略〕。とおっしゃつた。

十四28 1 そこで、〔略〕。とおたすねした。十五79 6 といいますのは、私は、あの美しいあなたがたのお國を親しくおたすねして、

おたすねる 〔御尋〕(下一) 4 おたすねる 〔一ネ〕

二9 7 先生が、それをごらんになつて、〔略〕。とおたすねになりました。

三46 7 〔略〕。とおたすねになりました。

三48 4 おおくにぬしのみことも、〔略〕。とおたすねになりました。

三116 6 〔略〕。と、おつきのものにおたすね

になりました。

おたちよる 〔御立寄〕(五) 1 おたちよる 〔一リ〕

三107 2 ある日、かりのおかえりに、とつぜんおたちよりになりました。

おたつ 〔御立〕(五) 2 お立つ 〔一チ〕

三102 園 上と 下とを ゆびさして、お立ちになつていらつしやる。

十一43 9 園長さんが、だんの上にお立ちになりました。

おたてる 〔御立〕(下一) 1 お立てる 〔一テ〕

九78 11 そこへ着くと、先生はステッキを深く土の中へお立てになりました。

おだやか 〔穩〕(形状) 4 おだやか

四65 5 うすむらさきの雲が、おだやかにたなびいていました。

八93 7 太陽はあたたかく、おだやかにてらした。九77 11 園 むかし、このへんは、波のおだやかな海のいりえだつたのです。

九144 7 なんとおだやかなくらしをしているのだろう。

おたる 〔小樽〕(地名) 1 小樽

十五65 8 その道すがら、小樽で目についたといつて、

おだんご 〔御団子〕(名) 3 おだんご

一59 9 めいぶつのおだんごや、おもちを、ごちそうしてくれました。四57 7 かっちゃんのすきな おだんごを作りました。十三28 4 あなをほったり、土でおだんごのようなものをこしらえたり、おたんじょう 〔御誕生〕(名) 3 おたんじょう

四八五 一ばんさきに、ねえさんが、エスさまのおたんじょうのお話をしました。
 七三二 〇もんしろちょうのおたんじょうね。
 一四二五八 「ことばのおたんじょう」などというお話が、つくれそうな気がしてきた。
 おちかかる 「落掛」(五) 1 落ちかかる 《一ル》
 一三五五 春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ日のしま目もようにもちらちらとして、
 おちから 「御力」(名) 1 お力
 一四〇四二 〇あなたのお力で、いのちびろいをいたしました。
 おちくる 「落来」(カ変) 1 落ちくる 《一クル》
 一三三三八 〇たきと落ちくる大ゆうだちに、いまの暑さはどこへやら。
 おちこむ 「落込」(五) 3 落ちこむ 《一ム・一モ・一ン》
 一八三〇八 〇黒うしは、にわかにかげだし、天の川へ落ちこもうとしましたが、
 一六一一 〇すると、橋はまん中からおれて、三人は、川の中へドボンと落ちこんだ。
 一五二四一〇 〇一つまちがえば、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落ちこむでした。
 おちだす 「落出」(五) 1 落ちだす 《一シ》
 一三三六六 〇あまがき・しぶがき赤くなり、くりもばらばら落ちだした。
 おちち 「御乳」(名) 3 おちち
 一五九〇一〇 〇それから、おかあさんのおちちをコップとコップといたでいて、
 一三二四一 〇おちちがはって困るの。
 一五七一〇 〇べにばら野ばら、さんしょの木め、めやぎのおちち、一つ一つかかる。
 おちつきはらう 「落着払」(五) 1 おちつきはらう

う 《一イ》
 一七一七 〇太郎かじやのほうは、気が強いばかりでなく、わるぢえがあつたから、おちつきはらい、
 おちつく 「落着」(五) 7 おちつく 《一イ》
 一六四七 〇しかし、だんだんおちついてみると、ここは時計屋の店であることがわかった。
 一七六七 〇旅人は、おちついたことばつきで、旅人「そのらくだは、かた目ではありませんか。」
 一八三〇七 〇けれども、けんぎゅうはおちついて、ふえをふきつづけていました。
 一四〇七三 〇すこし気がおちついてから、ぼくはあたりをみまわしますと、
 一五五六四 〇いちろうは、きみがわるかったのですが、なるべくおちついてたずねました。
 一八〇三三 〇まあ、おちついて、ゆっくりしごとにかかりましょう。
 一四四七一〇 〇きけんのせまつた中で、なんというおちついた、またなんというほがらかな人だろう。
 おちつくす 「落尽」(五) 2 落ちつくす 《一シ》
 一三九一四 〇いまはもうかきの葉もすっかり落ちつくして、秋も終り近くなりました。
 一四四四五 〇いつのまにか葉がすっかり落ちつくしてはだかになった木の上に、
 おちつける 「落着」(下二) 1 おちつける 《一ケ》
 一五二四〇五 〇あなたの二つの目をたましいのどん底におちつけて、よくごらんなさい。
 おちば 「題名」 1 おちば
 一六四六二 〇おちば
 おちば 「落葉」(名) 7 おちば 落ち葉
 一六四六四 〇北風、からかぜ、寒いのに、おちばの、おちばの子どもたち、

一六四六四 〇おちばの子どもたち、
 一六四七一 〇おちばの、おちばの子どもたち、ちよんちよんすめとどこへいく。
 一六四七一 〇おちばの、おちばの子どもたち、
 一三二一〇 〇ひろい集めた落ち葉を持ってきて、おとうさんにくれるようになりました。
 一三二九一 〇くりがたくさん落ちていたこと、カサカサと落ち葉をふんでいったこと、
 一三二五〇七 〇ちよつと落ち葉をかきのけるだけだ。
 おちち 「御茶」(名) 4 おちち お茶
 一三二一〇三 〇小さなひしゃくで おちちくん、かけてあげましょ、おしやかさま。
 一五三三 〇この荷物の中に、おり物や、お茶や、しんじゆなどがはいっています。
 一六二〇一〇 〇テーブルには、お茶が用意してあり、くだものが、たくさんおさらにもってあります。
 一四二二 〇舟をやとってこぎのぼりながら、ところどころでその水でお茶をたてる。
 おちちそのもの 「御茶其物」(名) 1 お茶そのもの
 一四二一四 〇茶のうまさは、お茶そのもののうまさにもよるが、たてる湯のうまさがだいじである。
 おちち 「落」(上二) 45 おちち 落ちる 《一チ・一ナル》
 一四二二 〇こぼれおちちる・ころげおちちる・すべりおちちる・ながれおちちる
 一三二八四 〇そのうちに、二ひきとも、どふんとおちてしまいました。
 一四四九四 〇わきにそれたかと思つと、石ころかなにかのようにおちていきました。
 一四五〇二 〇力のつよいがなが、三ばで、かつちゃんのおちていくのを、下からうけとめました。
 一四五二四 〇おんぶしているがなんもおちそうになりません。

四952 あつまったり、ふわふわとながれたりして、だんだん下におちてくる。

五191 こんなにだいいじにしてくれまますから、おちる心配はありません。

五809 むずびめがとけて、ほうきがおちました。

五945 ひなはたいそう小さくて、元氣がなく、死んだようになっておちていたのです。

六138 「あつ。」というまに、川の中におちてしまいました。

六347 かかし、一どはねあげられるが、もんどりうって、また、ひげの中におちる。

六3510 くるくるまいながらおちていくかかし。

六1210 そこには、くるみの実が、ころころと落ちていました。

七109 かしの木は、あくびを一つして、《略》、それから、ねむりにおちていった。

七191《 》「あぶないよ。川に落ちないように。」

七563 根もとに、ぼたぼた落ちていきます。

七606 よく落ちるかきの実。

八7311 そうして二わのがんは、ぬまの中に死んで落ちた。

九191 約十万ばのつばめが、きゆうに落ちてきたことがあります。

九365《 》流れ落ちるしみずが、《略》、村の中を通り、田んぼに落ち、湖にまでつづいています。

九389《 》ポキンという音がして、ガサガサと落ちてくると、うれしくなります。

九437《 》大きなかきが、ころころと二つ三つ落ちてくるのをみたときは、思わず手にとりあげます。

九511 水がふえのように鳴ってとびだし、すぐたきになって、ゴウゴウと谷に落ちていました。

九912 そのほかの友だちが、落ちていたやまだの

かばんやぼうしをひろってあとにつづく。

九1311 あみは、すっかりやぶれて、くもはそのまま地面に落ちました。

九1433 たまったつゆが、しずくになって、ポタリポタリと落ちてきました。

九1458 月の光にちりちりりと光りながら落ちてくる夜つゆをみてみると、風がふいてきました。

十91 あのとげとげしたいががわれて、じゅくしたくりの実の落ちるころでしたから。

十1011 みあげるように高いプラタナスの枝からは、黄色い葉が、毎日のように落ちました。

十189 わら屋根ののきから、たきのように落ちる雨水。

十一526 だれかのかさのしずくが、私のくつの上にぼたぼたと落ちてきたりした。

十二571 そのとき落ちた土くれが、有明海の中にある湯島^{ゆま}である

十二735 話をしているうちに、パラパラと音がして、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、

十二735 子どもたちや、芭蕉の足もとに落ちて、はね返ったりころがったりします。

十二866 夕日はすっかりおちてしまいました。

十二912 山へいったこと、弟やいぬをつれていったこと、くりがたくさん落ちていたこと、

十四5312《 》とちゅうから、黄色くなつて落ちてしまったたくさんのかぼちゃの花を見えています。

十四818 さるも木から落ちる。

十四992 じつと見つめているうちに、一つの明かりの星が落ちるのを見た。

十四993 その星が落ちるとき、空を横ぎって長い光のおをひいた。

十四996 星の落ちるときは、なにかのたましいが

神さまのところへのぼっていくのだと、

十五2111 それがコトコトと音をたてて下の方まで落ちていくのを、おもしろそうに見ていました。

十五253 鳥が大づめでつかんでいる女の子のからだの下へ落ちないように、

十五2512 羽ばたきも苦しげに、しだいしだいに、下の方へ落ちるように舞いおりて行きました。

十五279 大わしは、少年をせにのせ、少女を下にさげて、ずんずん、落ちるように、下へ下へと

十五3210 空中をころぶように、くるくる舞いをして、下の方へ、谷の中へ落ちて行きました。

おつ 《話手》 13 乙

七752 乙「ちょっとのまに、いなくなってしまうた。」

七756 乙「木一本もみえない。」

七762 乙「さきほどから、さがしつづけているのですが。」

七7611 乙「かた目なんですよ。」

七779 乙「それにちがいありません。」

七785 乙「どこにいるか、早く教えてください。」

七788 乙「それとも、だれかにおききになったのですか。」

七793 乙「あやしい。」

七807 乙「目がさめてみると、らくだがいまません。」

七812 乙「それに、もっとあやしいことは、

七815 乙「だいいち、らくだがかた目であることを知っていました。」

七811 乙「はい、知っていました。」

七847 乙「そうです。」

おつ 《乙》 1 乙 ↓こうおつ・こうおつふたり

七747 一の場合 人 甲と乙、ほかに、ひとりの

旅人。

おつ「落」(上) 2 落つ 《一チ》

十五44文 空にはなしし わがそ矢は、あわれ
いづくに落ちにけん。

十五51文 空にとなしし わが歌は、あわれい
づくに落ちにけん。

おつかい「御使」(名) 2 おつかい

四369文 わたくしが、きのう、となりのうちに
おつかいにいきました。

五464 おつかいにいくとき、うらの竹やぶのそば
を通つたら、おくの方でうぐいすの声でした。

おつかう「御使」(五) 2 おつかう 《一イ》

十四116文 このランプは、石油でもきはつ油でも、
どちらをおつかいになってもかまいません。

十四117文 が、きはつ油をおつかいになったほう
がよいのです。

おつかける「追掛」(下) 2 おつかける 追っ
かける 《一ケ》

四4510文 あとからなにか おつかけて きやしな
いかと思つてね。

十二298文 民ちゃんがひとりで 《略》、正男のあ
とを追つかけて道まででていたのよ。

おつき「御付」(名) 3 おつき

三1166 「《略》。」と、おつきのものに おたずね
になりました。

三1167 おつきのものは、《略》。」ともしあげ
ました。

三1176 おつきのものはそのとおりにしました。
おつきあい「御付合」(名) 1 おつきあい

十五802 いろいろな國の人々の間に、友だちとし
て心のかよつたおつきあいができるように

おつきあいする「御付合」(サ変) 1 おつきあい

する 《一スル》

八828文 だから、おまえさんとおつきあいするの
がいやなのさ。

おつきさま「御月様」(名) 16 おつきさま お月さ
ま

一191文 十五やおつきさま みてはねる。
一323 お日さま—おつきさま—おほしさま

二152 まんまるい お月さまがのぼりました。
二153 大きな、あかるい お月さまは、どうした

らえに かくことができるでしょう。
二466文 「いいえ、これは、お月さまが、くもか

らでてくるところです。」
三941 お月さまも みんなのもの。

三1125 お月さまが 一どに十もでたかと思われ
るほど、あたりがあかるくなりました。

五938文 「ああ、きれいなお月さま。」りようか
んさんは、いつまでも月にみとれていました。

六519文 「お月さまが早く走っているね。」と、
よしおがいました。

六5210文 お月さまじゃないわ。
六533文 よしおくんはお月さまが走っていると

いったね。
六535文 お月さまをじつとみていてごらんさい。

六537文 お月さまがずんずん動いていくのがよく
わかるよ。

六539文 お月さまをみていると雲が動いていくし、
雲をみているとお月さまが動いていく。

六5310文 雲をみているとお月さまが動いていく。
六549文 「ここに立って、お月さまを枝のあいだ

からみてごらん。」
おつきさん「御月」(名) 14 お月さん

一395 おとうさんと きしやに のつて、お月さん

のところへいったゆめをみました。

一437文 さあ、お月さんのくにへいくんだよ。
一448文 「お月さんのくにへ おいでのかたは、

こちらへ おならびください。」
一505文 お月さんのくにの きしやだもの。

一542文 この お月さんの くにでは、一ねんに
一どたまひろいにこのかわらに きます。

一544文 そうして、たまが ひろえたら、お月さ
んのくにの なかまに いれてもらえます。

一553文 きれいな たまが ひろえたら、また お
月さんの くにへ いれてもらえます。

一629 山の うえから、おおきな お月さんがで
るところでした。

一6210文 「おおきな お月さん。」
九1367文 「くもさん、あんないいお月さん、みえ

ないの。」
九1368文 「なんだって、お月さん——くもは、

首をねじつて上の方をみあげました。
九13611文 「くもさん、あのお月さんのところへ

いつてみたいと思いませんか。」
九1373文 「わたし一どでいいから、お月さんのと

ころへいきたいと思います。」
九1482文 お月さんのところへとんでいったあの白

いちようちよは、どうしたろう。
おつきさんのくに《課名》 2 おつきさんのくに

一310 十八 お月さんのくに……四十三
一431 十八 お月さんのくに

おつきみ「御月見」(名) 2 お月み お月見
四1253 九月は お月み。

十591 お月見
おつく「御突」(五) 1 おつく 《一キ》

八304 天帝は、《略》、黒うしのしっぽのあたりを

一つきおつきになりました。

おつく「御着」(五) 1 お着く《一キ》

十二332 サリバン先生は、お着きになったあくる朝、私をおへやに呼んで、

おつく「御就」(五) 1 おつく《一キ》

三158 ごてんでは、おしやかさまがせきにおつきになりました。

おっしやる「仰」(五) 59 おっしやる おっしやる《イ・ツ・ール》

二435 先生はおとうさんのおっしやるとおりですね。

二603 先生は、つづけておっしやいました。

三126 おしやかさまは、「略」とおっしやって、はんたかをおよびになりました。

三166 王さまは、「略」とおっしやいました。

三172 おしやかさまは、「略」とおっしやいました。

三306 「略」と、先生がおっしやいました。

三4610 そのかたがたは、「略」とおっしやいました。

三6110 「略」とおとうさんはそう おっしやって、ジューデーにおきになりました。

三679 「略」と、おとうさんがおっしやったので、みんなは空をみあげました。

三694 おとうさんはおっしやいました。

三714 おかあさんがおっしやいました。

三7110 おかあさんがおっしやいました。

三744 「略」と、おかあさんがおっしやいました。

三765 おかあさんがおっしやいました。

三999 先生が、「略」とおっしやいました。

三1067 それで、おじいさんに、「略」とおっしやいました。

三1083 「略」とおっしやいますと、かぐやひめは、またすがたをあらわしました。

四188 おかあさんに、「略」ときいたら、

「略」とおっしやった。

四196 「略」先生がこうおっしやったので、

四2010 先生が、「略」とおっしやいました。

五784 先生が、「略」とおっしやいました。

五825 それから——と、先生がおっしやいました。

五831 そのお友だちが、記念に写真を写したいとおっしやいました。

五836 先生のお友だちが、「略」とおっしやったとき、

五8411 「略」と、先生がおっしやいました。

五954 おとうさんが、「略」とおっしやって、

六744 おかあさんが、「略」とおっしやいました。

六786 すると、おとうさんは、「略」とおっしやいました。

七275 先生は、いいことをおっしやいましたね。

七328 天帝は、このようすをごらんになって、「略」とおっしやいました。

八379 王さまは、「略」とおっしやいました。

八408 こんなひとりごとをおっしやって、そこらの木の葉や花にみんな手をおふれになりました。

八422 「略」とおっしやいましたが、王女はなんの返事もしません。

八428 そうおっしやって、おくやみになっていらつしやる、

八5710 おじいさんにその話をしたら、おじいさん

は、「略」とおっしやった。

八589 先生は、「略」とおっしやって、さきに立ってお歩きになった。

八5911 先生は、「略」とおっしやった。

八1056 先生におききたら、このいねは、いもち病という病氣にかかったのだとおっしやいました。

九652 わたしのほうがよっぽど大きいって、きのう判事さんがおっしやったじゃないか。

九763 先生が、町角までいって、待っているようにとおっしやったので、

九8311 先生におたずねしますと、「略」と、しずかにおっしやいました。

十595 おかあさんが、「略」とおっしやった。

十606 そうして、「略」とおっしやった。

十一501 さつぽろに農学校をつくられたクラーク先生もおっしやった。

十二218 ざくろさんが、来年とか、「略」、それからもつとさきのおっしやったりすると、

十二2112 ピアノの先生がおっしやいましたよ。

十三399 だって、おばさんたら、お客さんなんておっしやるんだもの……

十四1612 なにかそういったものがご入用のときは、ごえんりょなくおっしやってください。

十四202 「略」とおっしやった。

十四207 そうして、つぎのようなことばはその一例だとおっしやってくくばんにお書きになった。

十四2210 「略」とおっしやった。

十四234 「略」とおっしやったので、みんなは口々に、「略」と、そくぎに答えた。

十四279 みんなの話を聞きになって、「略」とおっしやった。

十四547 さつき、葉さんは養分のことをおっ

しゃいましたが、

十五 52 ㊦ ぜひカーネギー博物館に館長ホランド博士をたずねるようにおつしやった。

十五 70 ㊦ せきあえぬなみに目をくもらせたおぼさんが、「略。」とおつしやった。

十五 71 ㊦ それから、「略。」とおつしやった。

十五 123 ㊦ 先生は、「略。」とおつしやった。

おつたえする「御伝」(サ変) 1 おつたえする

《一スル》

五 20 10 私、ぶじに、としおさんの心を、そのま

まみつおさんにおつたえすることができました。

おつづける「御統」(下一) 1 お続ける《一ケ》

十四 21 ㊦ 先生は、そんなことにはおかまいなしに、

どんどんお続けになった。

おつれする「御連」(サ変) 2 おつれする《一

シ》

四 104 ㊦ お礼に りゆうぐうへ おつれしようと

思つて、ここまでまいりました。

十一 50 ㊦ 北海道へじゃがいもをつくりにいこう。

おかあさんをおつれして。

おてがみ「御手紙」(名) 7 おてがみ お手紙

三 108 ㊦ そののち、みかどからたびたび お手紙

をくださいましたので、

四 30 ㊦ おてがみを書いていいし、えをか

いてもいいと思います。

五 41 10 ㊦ このあいだは、お手紙ありがとうござい

ました。

五 42 ㊦ けれども、お手紙でよくわかります。

十四 10 11 ㊦ 少なくとも、一週間ごとにお手紙をさ

しあげましょう。

十四 85 ㊦ 「雪は、空からのお手紙です。」

十四 85 ㊦ 「空からのお手紙」とは、うまくいっ

たものだ。

おてつだい「御手伝」(名) 2 おてつだい お手傳

い

九 34 ㊦ せんだつて、はじめて畑のかいこんのお

てつだいをしました。

十二 70 ㊦ なにかにつけて不自由であろうから、い

ろいろお手傳いをしてあげたい。

おてて「御手」(名) 2 おてて

一 21 ㊦ おててつないで、のみちをいけば、

一 22 ㊦ 「おててつないで」のところで、おと

もだちとてをつなぎました。

おててつないで「題名」1 おててつないで

一 22 ㊦ 「おててつないで」のうたをうたいま

した。

おてら「御寺」(名) 3 お寺

八 58 ㊦ 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺

の屋根や停車場が目についた。

十 10 ㊦ 岸にある丘の上には、センチチェンヌとい

うお寺の高いともみえました。

十五 71 ㊦ いっしょにお寺へ行つて来ましょう。

お・でる「御出」(下一) 2 おでる《一デ》

三 9 ㊦ あまちゃんの中からひよつこりと、おで

になつたか、おしゃかさま。

八 40 ㊦ 王さまは、庭へおでになりました。

おてんき「御天気」(名) 7 お天気

四 106 ㊦ いいお天気で、氣もちがいいな。

四 127 ㊦ きょうはいいお天気だ。

八 60 ㊦ いなかは、いいお天気であつた。

八 65 ㊦ あくる日はいいお天気で、太陽は、ごぼろ

の上ををらしていた。

八 96 ㊦ きょうは、お天気がいいので、もみまきを

しました。

八 99 ㊦ よいお天気で、風もなくあついでした。

十五 103 ㊦ それからお天気が変わると、これが、

『雨の幸福』で、眞珠をいっばいつけています。

おてんとうさま「御天道様」(名) 1 おてんとうさ

ま

三 53 ㊦ おてんとうさまは空にてり、「略。」

といました。

おと「音」(名) 106 おと 音 ↓ あしおと・は

と・はねおと・まちのおと・ものおと

二 33 ㊦ こんなはなしをしていると、どしん

どしんというおとがしてきました。

三 79 ㊦ にわかにバラバラバラ、ポトポトポ

トというおとがきました。

三 89 ㊦ 学校では、どんな音がするでしょう。

三 90 ㊦ 風の日にはどんな音。

三 90 ㊦ 雨の日にはどんな音。

四 49 ㊦ 下の方から、てつぼうの音がひびいて

きました。

四 50 ㊦ 二はつめの てつぼうの音が、ひびいて

きました。

四 55 ㊦ かさかさという木の音の音がしまし

たが、

四 55 ㊦ それは、小鳥たちが、ねぼけてとびまわ

る音でした。

四 62 ㊦ しずかな やぶの ところで、はばたきの

音がきこえます。

四 89 ㊦ すずめ親子のねたあとは、さらさら

さらと雪の音。

五 76 ㊦ 金のさかなは、なにもいわないで、しつぽ

でピシャリと音をさせて、

五 80 ㊦ 「水の音をきいていたら、せなかがあつく

なつてきました。」

五98 10 バタバタと音がしましたので、みんながとびおきてみると、

五102 4 水が、ジャー、ジャー、ジャージャーと、音をたてて流れているのをきいて、

五108 10 製材所ができて、のこぎりのやかましい音が、あさからばんまでひびきました。

六4 4 いろいろな音や、みたこともないような物が、ごたごたと耳にはいり、

六11 7 かいちゅう時計が、たちまち、ゆかいそうにカチカチと音をたてはじめた。

六23 7 ㊦ いい音だろう。

六23 8 ㊦ きれいな音だろう。

六32 7 はげしい風の音。

六36 7 はげしい風の音。

六36 10 風の音がよくなる。

六49 5 ㊦ ふと、そんなこと思わせる、あのまっ白な波の音。

六100 4 はながつまつたために発音ができなくなるような音は、

六100 5 もともとはなから声のでるような音にちがいない。

六100 7 そうして、はながつまつても発音できるような音は、はなから声がでない音のほずである。

六100 8 はなから声がでない音のほずである。

六109 2 では、なんという音が、はなから声のでる音なのだろうか。

六109 2 はなから声のでる音なのだろうか。

六109 5 すると、これらははなからでる音なのだろう。

六109 9 はなから声のでる音であることはたしかになった。

六110 11 弟がいえない音の中で、「ナ」、「ノ」、「ネ」、

「ニ」は、

六111 2 五十音の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中にはいつている音ばかりではないか。

六111 4 ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだけである。

六111 11 そうすると、ナニヌネノという一ぎょうは、ぜんぶはなの音でできていることがわかった。

六112 5 「モ」といつてみたら、これらもはなの音であることがわかった。

六112 7 ふしぎふしぎ、はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメモの二ぎょうだけで、

六112 10 パピプペポにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。

六113 3 それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作ったものであることがわかって、

七8 4 バケツの音もする。

七8 4 水の音もする。

七59 7 ボタンと音がして、まりが、そこからとびこんできた。

七60 8 またしても、ボタンと音がする。

七65 2 波の音がきこえている。

七67 2 炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになつて

七70 4 いる。それがすむのをまっていたのか、すぐうしろに、月は、音もなく、のっそりとでていた。

八26 8 馬車は、七色の大きなそり橋を音もなく渡つて、

八28 5 車を走らせていくと、林の中にこてんが

あつて、中から、はたをおる音がひびいてきます。

八74 2 また音がひびいた。

八75 11 たまの音はあしのあいだに鳴りひびき、てっぽうはひきつづいて火ぶたをきった。

八93 8 つばさがサラサラと音をたてた。

九5 8 オルガンで一つの音だけひいてきいても、その音には、ある感じがこもっているものです。

九5 8 オルガンで一つの音だけひいてきいても、その音には、ある感じがこもっているものです。

九5 10 この音と、ほかの音とをいっしょにひいてみると、まえとはちがつた感じがします。

九5 10 ほかの音とをいっしょにひいてみると、

九6 6 音をうまくあわせると、とけあつた美しいひびきとなつてきこえるにちがいありません。

九6 10 音の組みあわせも、いろいろな氣持をあらわします。

九8 2 色の組みあわせも、音の組みあわせも、おたがいにとけあつて、

九9 6 これは色のばあいでも、音のばあいでも同じことです。

九10 8 その例として、まず、水の音をとりあつ

九10 9 かった。

九10 9 水の音をたいこであらわすことなどは、ちよつと考えられないが、

九11 2 じつさいにきいてみると、たしかに水の音である。

九11 3 はじめに、川の水の音をたたいてきかせて

九11 6 くれた。

九11 6 それから、水の中にドブンととびこんだとき

九11 7 の音もあらわした。

九11 7 ドドンとなる大だいこの音は、ほんとうに

九11 8 うちよせる波の音をきいているようであつた。

九11 8 ドドンとなる大だいこの音は、ほんとうに

九11 9 うちよせる波の音をきいているようであつた。

九11 9 つぎに、風の音をたたいた。

九12 1 よくきいていると、たしかに風の音になる。

- 912 5 風の音よりも、もっとおもしろいと思ったのは、
- 912 9 ただ一つのたいこが、そのうちかたによつて、水の音にもなり、風の音にもなり、
- 912 10 水の音にもなり、風の音にもなり、
- 914 3 ゆめからさめるときには、音などはけつしてするものではないが、やはりたいこをたたく。
- 914 5 音というものは、情景をあらわすばかりでなく、
- 927 3 罎 すみきったボールの音や秋の風
- 938 9 罎 ポキンという音がして、ガサガサと落ちてくると、うれしくなります。
- 961 5 そのとき、いちろうは、足もとでパチパチしおのはねるような音をききました。
- 9105 9 スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくきこえる。
- 9120 1 水は大きなごろごろした石ころのあいだから、ブツブツと音をたててわきだして、
- 124 5 その流れのかすかな音。
- 1262 2 きう、風がふいて、ガサガサ音がしたから、
- 135 7 罎 まばゆく光るいなすまに、続いてひびくらしいの音。
- 137 2 罎 はぎの花ふく朝風も、音さえすずしくなってきた。
- 152 8 電車は、齒ぎしりでもするように車の音をたてて、あらしの中をつき進んでいく。
- 153 3 大きな声だが、雨や風の音のために、乗客の耳にきこえそうもない。
- 173 3 半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。
- 1218 5 罎 せんだって、ふと羽を動かしてみたら、

- ピッピッという音がしました。
- 1218 10 罎 おとなりの草むらでも、遠くの草むらでも、ピッピッという音がする。
- 1273 4 話をしているうちに、バラバラと音がして、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、
- 1275 2 大川の波の音がバサリバサリと、まぐらにひびくのでしたが、
- 1275 3 その夜は、すべての音も雪にうずめられたようなしずかさでした。
- 1328 8 まず、もの賣りが鳴らして来る鳴りものの音がおもしろい。
- 1329 6 「チャカチャン、チャカチャン」と、かるやかな、はずむような音をたてる。
- 1330 1 「ボーン」と、かわいらしい音をたてる。
- 1330 4 罎 「あの音は、おもちゃ屋さんだ。」
- 1330 8 その中で、いちばんさわがしくて、大きな音をたててやってくるのは、さるまわしである。
- 1333 1 なんといいっても、いちばん耳に親しいものは、水を運ぶ一輪車の音であらう。
- 1333 6 夏の日には、この音がすずしい氣持をおこさせ、
- 1336 11 花よめ行列のラッパの音が、どこかでひびく。
- 1438 2 罎 「音がする。ああ、いい音がする。」
- 1438 2 罎 ああ、いい音がする。
- 1521 11 それがコトコトと音をたてて下の方まで落ちていくのを、おもしろそうに見ていました。
- 1522 8 なんだか大きなあらしがふき起ったような音がしました。
- 1522 10 みんなが、おどろいてその音の方へ顔を向けて見ると、
- 1532 8 ふいに「ドン。」という鉄ぼうの音がし

- たかと思うと、
- 1568 3 音もなくドアがあいて、
- おとうさま 「御父様」(名) 2 おとうさま
- 841 8 罎 「おとうさま、おはようございます。」
- こういって、王さまにだきつきました。
- 843 11 罎 「おとうさま。」王女は、こういって、王さまにすがりつきました。
- おとうさん 「御父」(話手) 6 おとうさん
- 239 5 おとうさん「よくここまで のぼった。
- 241 10 おとうさん「これこれ、たろう。
- 242 4 おとうさん「おまえが、口ぎたなく、いうからだよ。
- 242 9 おとうさん「ほんとうだとも。
- 243 4 おとうさん「ほら、ちゃんとあやまるだろう。」
- 243 6 おとうさん「さあ、もうすこしのぼろう。」
- おとうさん 「御父」(名) 12 おとうさん
- 39 5 おとうさんときしやにのって、お月さんのところへいったゆめをみました。
- 43 5 よなかに 目を あけると、おとうさんがそばに たっていました。
- 47 8 おとうさんの もって いた 四かくなかみに、
- 48 7 おとうさんは、うしろの おきやくさんの にもつをもつて あげました。
- 50 7 おとうさんも おきやくさんも、みんな わらいました。
- 52 8 おとうさんも 目を あけました。
- 54 8 おとうさんが ききました。
- 62 1 罎 あなたも、おとうさんも、おかあさんも、みんな いい 人ですもの。
- 63 10 おとうさんも、わたくしも、わの なかに はいて、
- 220 6 おかあさん おとうさん に いさん

二38 4 である人 たろう おとうさん 山びこ（声ばかり）ところ 山の中
 二39 1 たろうと おとうさんが、山へ のぼってきます。
 二39 3 ㊦ おとうさん、ここは、ずいぶん高いね。
 二42 8 ㊦ たろう「ほんとう、おとうさん。」
 二43 5 ㊦ たろう「おとうさんの おっしゃるとおりですね。」
 二55 5 わたくしには、おとうさんもあります。
 二55 6 けれども、おじいさんの おとうさんは、おいでになりません。
 二58 5 ㊦ 「わたしは、おまえの おじいさんの おとうさんだよ。」
 二60 3 そこへ ちょうど おとうさんが おいでになつて、
 二61 2 そこで おとうさんは えんがわに こしをおろして、
 二61 10 おとうさんは そう おっしゃって、ジュデーにおききになりました。
 二63 8 まん中には、おとうさんが こしかけて、ボートをおききになりました。
 二64 2 おとうさんは おききになりました。
 二65 4 おとうさんは、ボートを こいでぐるぐるぐるぐる おまわりになりました。
 二66 2 「略。」おとうさんは そう いって、またぐるぐるまわりを なさいました。
 二66 10 おとうさんは 女の子たちに おききになりました。
 二67 4 おとうさんは 男の子たちに おききになりました。
 二67 9 「略。」と、おとうさんが おっしゃったので、みんなは空を みあげました。

三68 6 おとうさんが おききになりました。
 三69 4 おとうさんは おっしゃいました。
 三95 9 おとうさんの かおも、先生の つくえもかくことができます。
 四33 1 ㊦ 「略。」という おとうさんの ことばを思い出しました。
 四34 7 ㊦ 「先生は、かずこさんの おとうさんの ことばに、気が つきました。」
 四35 8 ㊦ 「おとうさんの ことばです。」
 四35 10 ㊦ おとうさんが おいでにならなくても、
 四36 1 ㊦ かずこさんの 耳には、おとうさんの ことばが、ひびいて きたのです。
 四87 3 おとうさんは、町へ いって、まだ かえらない。
 五28 3 しんきちくんのおとうさんは、店でそろばんをはじいていました。
 五63 5 おとうさんは、この話をそばでおききになつて、
 五64 1 ㊦ わたしは、おとうさんやおかあさんの 力で、大きくなつたと思います。
 五64 6 ㊦ おまえひとりの 力でもなければ、おとうさんやおかあさんの 力でもない。
 五64 9 ㊦ おとうさんも、おかあさんも、こうしてまいにち、たっしやで生きていけるのは、
 五95 2 おとうさんが、「略。」とおっしゃって、
 五95 8 ㊦ おとうさん、ひとりでとべるようになるまで、かってやりましようね。
 五96 8 ㊦ おとうさん、ひわは自由にとべるようになりましね。
 五100 1 おとうさんにいわれて、よくみると、
 五100 8 おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃん、ますますひわがかわいくなりました。

六44 6 ㊦ おとうさんやおかあさんにもわからないんだって——
 六73 1 おとうさんにたずねられて、
 六73 6 ㊦ ね、おとうさん。
 六75 1 あくる朝、おとうさんから、「略。」ときかれて、
 六78 1 その夜、ごろうはおとうさんに、この考えついたことを話しました。
 六78 2 すると、おとうさんは、「略。」とおっしゃいました。
 六99 4 おとうさんにかつていただいた小さな虫めがねがでてきた。
 六100 1 ㊦ 「これで、いつか、おとうさんのお話にきいた望遠鏡が、できるかもしれない。」
 九45 6 ㊦ ぼくは、おとうさんのやっていたパン屋のしごとを、しんけんに行ろうと思っています。
 十7 3 おとうさんが、フランスのいなかへいったときは、
 十7 6 日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。
 十7 7 おとうさんの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけていって、
 十7 8 てんでに、おとうさんの顔をのぞきこむようにしました。
 十7 10 こんなにうるさくついてこられたときには、おとうさんも困りましたので、
 十8 1 しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶことがすきですから、
 十8 6 二月半ばかり、いなかでくらすうちに、おとうさんには、子どものお友だちができました。
 十8 9 そういう子どもの中には、道でおとうさんを呼びとめて、

十8 11 「〈略〉。」といいながら、おとうさんにお
 けてくれる少女もありました。
 十9 3 おとうさんは、〈略〉、こんなに親しみをも
 つことができるものかと思いました。
 十10 7 橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんも
 よくいつてこしかけました。
 十10 9 プラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、
 三人のかわいらしい少女にもあいました。
 十10 12 おとうさんが、休み茶屋のまえにこしかけ
 て、コーヒーをわかせてもらっていますと、
 十11 6 おとうさんが、子どものすきそうなおかし
 を、一ふくろやったのはじまりで、
 十11 9 その少女たちは、おとうさんのそばへくる
 ようになりました。
 十11 11 ひろい集めた落ち葉を持ってきて、おとう
 さんにくれるようになりました。
 十12 3 「〈略〉。」と、おとうさんが頼みましたら、
 少女たちは、手をとりあってとんでいつて、
 十12 5 こうして、ずんずんおとうさんのそばへき
 て、
 十12 7 お友だちにさそわれても、どうしてもおと
 うさんのそばへこない女の子もありました。
 十12 10 「おお、こわい。」と、ひとりの少女が、
 おとうさんをみてそういいました。
 十13 3 おとうさんがいいました。
 十13 5 方言でできた小歌のあることを、おとうさ
 さんは、きいて知っていましたから。
 十13 7 少女たちは、おとうさんのこしかけている
 そばで、
 十13 11 おとうさんがそのいなか町がすきになった
 のも、
 十14 5 その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少

年にもあいました。
 十14 9 おとうさんのそばへきて、あいさつをして
 から、〈略〉。」とたずねました。
 十15 1 この少年の間には、ちよつとおとうさんも
 困りました。
 十15 4 おとうさんがしょうじきにその答をしまし
 たら、少年は、さらにこんなことをいいました。
 十15 9 「〈略〉。」と、おとうさんが、力をいれて
 答えました。
 十16 3 自分の國のことをきかれたときは、おとう
 さんもうれしく思いました。
 十16 6 会 「おとうさん。」と、太郎がそばへきて、
 十16 9 「〈略〉。」と、おとうさんがいつてきかせ
 ました。
 十17 1 「〈略〉。」と、また太郎がたずねましたの
 で、おとうさんは答えました。
 十25 10 会 「おとうさん。」と呼ぶ声。
 十26 1 会 また、「おとうさん。」とさけぶ。
 十62 9 おじいさんやおとうさんがおうたいになる
 うたいを、きいたことがあるでしょう。
 十148 8 おとうさん、ぼくは、大きくなったら、
 また、おかあさんといっしょに北海道へいきます。
 十149 3 ぼくは、おとうさんと同じように、ちち
 うしをかって、自分でバターをつくります。
 十149 9 おとうさんに、負けないように働きます。
 十158 10 会 「おとうさん、こんないいにくいこと
 ばは、ほかにないでしょう。」
 十159 3 会 「おとうさんは、もつといいにくいこ
 とばを知っているよ。」と答えた。
 十165 3 会 「おとうさんの名はなんというの。」
 と、看護人がききました。
 十168 9 会 カーテンをあけて、「これが、きみの

おとうさんですよ。」といいました。
 十170 5 会 「おとうさん、おとうさん。」と、少
 年はいいました。
 十170 5 会 「おとうさん、おとうさん。」
 十171 1 会 おとうさん、おとうさん。いったい、
 どうしたんですか。
 十171 1 会 おとうさん、おとうさん。
 十171 2 会 ぼくは、おとうさんの子どもですよ。
 十171 2 会 おとうさんの子どものチチロですよ。
 十171 9 会 「そうすれば、おとうさんのようすも
 なんとかわかるだろう。」
 十172 8 会 「このかた、あなたのおとうさんです
 か。」と、看護婦はやさしくいいました。
 十180 10 会 おとうさん、しっかりするんですよ。
 十185 3 会 いいえ、おとうさん。待つてください。
 十185 11 会 どうか、ここにいさせてください。ね
 え、おとうさん。
 十192 12 会 「さようなら、おとうさん。」
 十296 4 それにはあなたがたのおとうさんや、お
 じいさんや、ひいおじいさんの写真がでいたり、
 十338 9 会 え、おとうさんが、そう……じゃあ、
 かわってください。
 十338 12 会 え、おとうさん。
 十344 8 電話のはじめの人は、三郎くんのおばさ
 ん、それからおとうさん、
 十477 8 手 私たちは、おとうさんのために、心か
 らの思い出をまもることにしましょう。
 十477 11 手 おとうさんのご一生は、私たちにとつ
 ての手本になってくれるでしょう。
 十477 12 手 おとうさんのお写真を、私は、いつも
 自分のそばのつくえの上におきます。
 十488 1 手 一生の間、いくたびとなく、おとうさ

んのおことを思いだすことにします。

十四141 弟 おとうさんに対しては、このうえなく
まめやかな、このうえもなく純真な思い出が

十四143 弟 おとうさんのお写真は、ほんとうに生
き写しで、

十四157 弟 おとうさんのおはかについては、どう
したものか、ちょっと私にはわかりかねます。

十五112 弟 それは、おとうさんがかぎをかけたあ
の戸だなの中にはいつているの。

おとうと 「弟」(名) 37 弟

四831 弟が、「略」といって、一まいのえを
だしました。

四8310 弟は、「略」といって、ねえさん
がわらいました。

四857 弟が、「略」と、大きな声でいったの
で、みんながわらいました。

六634 弟がせきがでるので、おかあさんはゆたん
ぽをいれている。

六921 弟は、ほでりのみことの弟、ほおりのみ
ことです。

六1047 弟は、二三日まえから、かぜがみである。
六1057 弟のことばをまねて、「はなをかむのか
い。」といったのである。

六1061 弟は、まえに、「略」ということばを、
そのようにいったことがあるのではない。

六1063 「ハダヲカブ」というのが、いかにも弟
のいいようなことばつきである。

六1064 その、弟がまだいわないことばを、さきに
いったから感心したのである。

六1068 弟のだいすきな飛行機である。
六1071 弟が、「略」といったので、みんなは、
これで大わらいとなった。

六1075 弟ははながつまっているために、あること
ばが、うまく発音でなくなっている。

六1093 弟は、「はな」の「ナ」「あのね」の「ノ」
と「ネ」「略」がいいにくいらしい。

六10911 弟は、こんなふうにして、「はな」といっ
ているんだと思うと、

六1102 これなら、弟のまねなんかわけはないぞと
思った。

六1105 「ダンダ」といってみると、いかにも弟の
いいかたそっくりになった。

六11010 弟がいえない音の中で、
六1122 このほかに、弟は「ミ」「ム」がいえな
かった。

六1138 弟のまねをしてみんなをわらわせてやろう
などという気持は、どこかへふつとんでしまった。

七218 きしもとくんが、弟のはるおくと、ふた
りで、本をよんでいる。

七301 弟が、ぼくよりさきに、それをみつけた。
七348 私と弟のさぶろうは、乗るには乗ったもの
の、動くことさえできません。

七387 しかし、弟の手をひいているので、ひとあ
しすむにも、よいいではありません。

十302 もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、
十123 金次郎の下にふたりの弟がありました。

十1285 ふたりの弟は母親のさにと、「略」、あず
けられることになりました。

十1434 弟が卒業するので、私が、母にかわって
でました。

十1448 弟の名でした。

十14410 弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進
みました。

十1453 弟は、さっさと自分の席にもどり、

そこからでおして進みました。

十14510 そうして、弟の心持を頼もしく思いまし
た。

十14511 すこしぐらいのことだからといって、ご
まかさなかつた弟よ。

十1462 「略」とさげんだ弟よ。

十129011 天気よかったこと、山へいったこと、
弟やいぬをつれていったこと、

十129411 弟にせがまれて、赤とんぼをとりにでか
けたが、

十五744 兄と弟とのちがいは、
おとうとさん 「弟」(名) 1 おとうとさん

三478 このかたは、さきほどおとおりになつた
かたがたのおとうとさんです。

おとうとたち 「弟達」(名) 2 弟たち
十308 家では、弟たちのめんどうをみてやり、兄
や姉の手助けになりたいと思います。

十五1208 かわいいたちよ、妹たちよ。
おどおどする 「怖怖」(サ変) 1 おどおどする

《一シ》
十16710 その後からついていきながら、おどおど
した目を右に左に向けて、

おとる 「御通」(五) 2 おとる 《一リ》
三465 そのとき、みなのりっぱなかたがた
が大ぜいおとおりになって、

三477 このかたは、さきほどおとおりになつた
かたがたのおとうとさんです。

おとぎばなし 「御伽話」(名) 2 おとぎばなし お
とぎ話

十三176 美しいおとぎばなしを、世界の子もた
ちにおくった、アンデルセンの

十四298 ですから、星のおとぎ話は、日本にはあ

ありません。

おとくい 「御得意」(名) 1 おとくい

六132 かけっこは、うさぎさんたちのおとくいで
す。

おとこ 「男」(名) 53 男

三63 6 三人の男の子は、うしろに こしかけまし
た。

四31 8 手 むこうで ようちえんの 男の子が ない
て いました。

四32 2 手 男の子は、げたの はなおが 切れて あ
る けなかつたのです。

四33 3 手 男の子は、それを はいて、元氣よく か
けて いった しまいました。

五24 6 手 『男の人は 立って ください。』

六7 5 男の子と女の子である。

六7 8 男の子は、やがて しごと 台の上のものを あ
れこれ といじりはじめた。

六8 3 男の子は ゆびさきで それをつまもうと した
が、あまり 小さいので つまめなかつた。

七5 2 手 かばんを カチャカチャ 鳴らして、走って
くる 男の子 かな。

七5 7 手 やっぱり あの子 だった。

七34 6 男の子は、むりに わりこもうと する 男の人 もあり、足
を ふまれて、おこつて いる 女の人 もありました。

七37 9 男の子は、ふと 上を 向くと、私の よこのわ
かい 男の人が、ただ ひとり、

七38 10 男の子は、その わかい 男の人が、「略」と いった か
と思うと、いきなり さぶろうを だきあげ、

七82 4 手 らくだを ぬすんだのは、この 男に ちがひ
ありません。

八29 4 すると、黒うしに またがり、ふえを ふいて
くる、わかい 男に であいました。

八29 8 天帝は、その 男に たずねました。

八30 1 天帝は、ひとつこの 男の うでを たためして み
ようと 考えて、

八48 11 ひとりの 男が、いまにも ごろりと 横になろ
うと している ところでした。

八49 2 王子は、いままでの わけを この 男に 話しま
した。

八49 3 すると、その 男は、「略」と 答えました。

九40 10 手 男が 女が かわからないが、下を 向いて 登っ
てくる のが みえます。

九55 5 せいひの ひくい、おかしなかつた 男が、
ひざを まげて、手に 皮の むちを 持って、

九56 1 男は、その 男は、横目で いちろうの 顔を
みて、

九57 3 すると、その きたいな 男は、
九57 7 「略」と、男は、下を 向いて、かなし
そうに いいました。

九57 10 男は、喜んで、息を ハアハア させて、耳の
あたりまで まつかに なり、

九58 6 すると、男は またいやな 顔を しました。

九58 11 すると、男は、また 喜んで、顔じゅう 口の
ように して、にたに たわらつて いいました。

九59 5 「略」と たずねますと、男は、きゆう
に まじめに なつて、「略」と いいました。

九92 2 まもなく、一、二年 ぐらいの 男の子、大き
な 声で、「略」と 数えながら、

十21 7 男の子が ベッドに すわっている。

十26 4 男の子が、むちゆうに なつて かけてくる。

十26 5 工員は 男の子を だきあげる。
十32 9 手 「はたばかり いじつて いて、おかしなや
つだ。男の くに。」

十56 9 そうしたら、二年生の 男の子が、ふくろう
の からだを 手で いじりました。

十57 2 男の子は、「おこつた。おこつた。」といっ
て 喜びました。

十63 5 役者がお じいさんになつたり、むすめに
なつたり、わかい 男になつたり するときには、

十63 9 わかい 男の めん、わかい 女の めんと、それ
ぞれの 人物によつて、それぞれ めんが あります。

十一10 6 手 「それは ぼくたちだ。三ばん、四ばん
を こいで いる、ぼくたち 強い 男の子だ。」

十一10 9 手 「もちろんさ。そういう 男には、ぼく
が なる ことに きめて いる のさ。」

十一21 1 どの 家からも、おとなの 男の人が、毎日
ひとりずつで 働く ことになりました。

十一81 8 一方の 手にあつく ほうたいを した ひとり
の 男が、看護婦に 送られながら、

十一81 11 男は みまわして、ひと目 少年を みると、
こんどは かがさけびを 発しました。

十一82 3 男は そういって、少年の方へ とんできま
した。

十二4 9 ひとりの 男が、「略」と いって あざわ
らいました。

十二56 8 昔、島原に みそ五郎 という 大きな 男が い
ました。

十二101 8 赤色の すやきの 土人形で、略、男や 女
の いろいろ ながたを あらわしています。

十四91 4 もう 一つの ほうは、どこかの 男の子が ひ
ろつて 行つて しまった。

十四91 5 その 男の子は、これは 人形の ゆりかごに
はもつて こんだと思つたのであろう。

十五20 6 ひとりは 男の子で 八つ、ひとりは 女の子
で 四つになる かわいい 子どもたち でした。

十五219 男の子は、小石を見つけては深い谷の中へなげこんで、

十五89 ㊦ ああ男のことは、きかないほうがよろしい。

おとこのこいち 「男子二」(話手) 1 男の子一

七195 男の子一「先生、風の日は、ちようちよは、どこにかくれているんですか。」

おとこのこさん 「男子三」(話手) 2 男の子三

七192 男の子三「このまえきたときは、風が強かったから、ちようちよがでなかったんですね。」

七201 男の子三「白いちようちよが、白い花にしまった。」

おとこのこし 「男子四」(話手) 2 男の子四

七199 男の子四「先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。」

七217 男の子四「あつ、こっちにも。」

おとこのこたち 「男子達」(名) 4 男の子たち

三646 「左の方。」と、男の子たちがいました。

三653 「左。」と、男の子たちがいました。

三674 「それでいいかい。」おとうさんは 男の子たちに おききになりました。

三676 「はい。」男の子たちもいました。

おとこのこに 「男子二」(話手) 1 男の子二

七189 男の子二「ああ、とんでる、とんでる。」

おとこらしい 「男」(形) 1 男らしい 《一イ》

八312 天帝は、男らしいうでまえにうたれて、むすめのむこにもりました。

おとす 「落」(四五) 16 おとす 落す 《一サ・一シ・一ス》 ㇿかきおとしいる・たたきおとす・ふり

おとす 六85 やつとつまんだと思うと、すぐにおとしてしまった。

六1410 はとは、いそいで木の葉をとって、ありのそばにおとしてやりました。

九284 ㊦ ほし草にかけおとしとぶとんぼかな

九496 すきとおった風がザアツとふくと、くりの木はパラパラと実を落しました。

九505 くりの木は、だまってまた実をパラパラと落しました。

九549 いちろうは、顔をまっかにして、あせをほとほと落しながら、その坂を登りますと、

九913 一、二も、たかぎの落した物を集める。

九968 ㊦ 「これきみが落したボタンだろう。」

九9610 ㊦ 「落したんじゃない。きみがむしりとったんじゃないか。」

十584 先生が、はしごでいちようの木にのぼって、いちようの葉をたくさん落してくださいました。

十一424 ㊦ もうそうちくも重荷にたえず、つばきのの上にばたばた落す。

十一722 手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど――

十一751 ㊦ 力をおとさずにいるがいいよ。

十一7912 少年は、いすにぐったりと身を落して、すすりなきしました。

十四95 ㊦ おかあさん、いま、おかあさんが力を おとしておしまいになったら、

十四4812 助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人たちが力をおとさないように、

おとす 「舊」(五) 1 おとす 《一シ》 八103 おこったりすると、赤い口をあけて、私たちをおどしたりかんだりします。

おとすれ 「訪」(名) 1 おとすれ

十四409 ㊦ 三人「新しい世界のおとすれ。」

おとす・れる 「訪」(下二) 2 おとすれる 《一レ》

十五5510 ㊦ 私が日本をおとすれたころは、西洋の文化をとり入れることがさかんときで、

十五6711 そのことのあったあくる日、私は、ひさしぶりで窓のあけはなれた新島家をおとすれた。

おとせる ㇿたたきおとせる

おととい 「昨日」(名) 3 おととい

四465 ㊦ おとといは、一ばん せんとうに してくれていったのに。

四467 ㊦ 「おとといは、そんな 氣もちだったけれど、きょうは ちがうんだよ。」

九609 ㊦ じつは、おとといからめんどうなあらそいがおこって、ちよつと裁判に困りましたので、

おとというもの 「課名」 2 音というもの

九26 二 音というもの……十

九101 二 音というもの

おとし 「昨年」(名) 1 おとし

十二953 秋子は、おとし、この学校にうつってきたときのことを思いだす。

おとな 「大人」(名) 8 おとな 九321 ㊦ ぼくは、こちらへきてから、おとなといっしょに畑にでたり、

九4010 ㊦ また、下の方の山道を、しよいこをつけ たおとなの人が、

十一211 どの家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで働くことになりました。

十一218 すこしも休まず働くので、かえって、おとなよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十二2211 おとなの人たちはおどろいて、すぐには受けてくれませんでした、

十三521 おとなになつて、いまもそうだ。

十三524 おさな子はおとなの父だ。

十四559 おとなのつるは、しずかにいました。

「私は、こんなに長いばかりで、

おとなしい『温和』(形) 2 おとなしい『一く』

八30 うしは、うまふみとどまつて、おとなしく草をたべはじめました。

十一437 ようち園の子どもたちは、そのまえにおとなしくこしかけています。

おとなびる『大人』(上) 1 おとなびる『一く』

十5210 「ゴメンクダサイッテ ハイッテクノヨ」と、おとなびたことをいいました。

おとなり『御隣』(名) 6 おとなり
四247 国 おとなりのまさこちゃんと、あのいけ

のそばまでさんぼしてきました。
四904 おかっから はきはじめて、かいどうへぬけて、おとなりまではいていく。

十5810 おとなりのよし子ちゃんと、なお子ちゃんに、三たばずつあげました。

十二188 国 おとなりの草むらでも、遠くの草むらでも、ピッピツという音がする。

十二303 おとなりで、このごろ白いぬをかうようになりましたが、

十三547 それで、すぐに、おとなりのおじさんのところへ行きました。

おとなりどうし『御隣同士』(名) 1 おとなりどうし

十一416 国 廣場につどうたおとなりどうし、え顔にほころびあいさつをする。

おとひめ『乙姫』(話手) 14 おとひめ
四1103 おとひめ「あなたが うらしまさんで い

らっしゃいますか。」

四1105 おとひめ「よくおいでくださいました。
四1110 おとひめ「ほんとうに お礼の 申しようも

ございません。

四116 おとひめ「さあ、ごえんりよなく めしあがってください。」

四1110 おとひめ「では、みんなに おもしろいおどりを おどってもらいましょう。」

四1143 おとひめ「それでは、なにか かかったことをして、おなぐさめいたしましょう。」

四1148 おとひめ「どうか なさいましたか。」
四1151 おとひめ「まあ、よろしいではございせんか。」

四1157 おとひめ「さようで ございますか。」
四1163 おとひめ「では、おみやげに たまてばこを

さしあげましょう。」
四1166 おとひめ「この たまてばこは、どんなことが あっても、おあけになつてはいけませんよ。」

四1172 おとひめ「そうです。」
四1176 おとひめ「おかえりになりますか。」

四1181 おとひめ「ごきげんよう。」
おとひめさま『乙姫様』(人名) 3 おとひめさま

四1101 いろいろな魚がでてきて ならぶと、そのうしろから、おとひめさまがあらわれます。

四1113 おとひめさまは、左の いすに こしかけます。

四1145 国 いや、おとひめさま、 なにもかも じゅうぶんで ございます。

おとめ『乙女』(名) 1 おとめ
十二604 おとめの数をまして、田植え歌勇ましく、

一心にはたらいだ。

おとめたち『乙女達』(名) 1 おとめたち
十二5910 里のおとめたちは、赤いたすきもかいがいしく、朝から集まってきた。

おとも『御供』(名) 4 おとも

四11710 国 かめ「わたくしが また、 おともを いたしましょう。」

五10611 国 ぼくはおともができないのさ。
十二1053 大きなげたをはいた女の人が、おともをふたりつれていきます。

十五1039 国 おともに『星の出を見ることの幸福』が、(略)、金びかの着物を着てついています。

おともだち『御友達』(名) 14 おともだち お友だち

一225 「おてて つないで」のところで、おともだちと てをつなぎました。

一607 国 まきげちゃんも、おともだちと なかのいい、やさしい こになりました。

二588 国 「お友だちの なを かんがえて、ごらん なさい。」「あつしさん—— あきらさん——」

四401 国 ただししい ことばは、いつも、あなたが たのいい お友だちになつたり、

四843 その つぎの 日の 夜、お友だちがあつたりしました。

五383 けさ、先生に、先生のお友だちから手紙がきました。

五829 先生のお友だちが、学校をみにいらつしやいました。

五8210 そのお友だちが、記念に写真を書したいとおっしゃいました。

五834 先生のお友だちが、「(略)」とおっしゃったとき、

六673 お友だちと遊ぼうと思つて、山の谷を歩いていきました。

十87 二月半ばかり、いなかでくらすうちに、おとうさんには、子どものお友だちができました。

十126 お友だちにさそわれても、どうしてもおと
うさんのそばへこない女の子もありました。

十222 〔お友だち、どうしているかな。〕

十二48 〔お友だちとやってごらん。〕

おどり 〔踊(名) 8 おどり ↓ ほんおどり

一626 よるになると、おどりがはじまりました。

二514 きゆうにおどりをやめて、しずかにな
ります。

四111 〔おどろく〕では、みんなに おもしろい おどりを
おどってもらいましょう。

四113 〔おどろく〕では、にぎやかな おどりを、ごら
んにいれましょう。

四114 〔おどろく〕ありがとう。おどりももう たくさんで
す。

六9710 みことは、それにあわせておどりをおどる。
十五975 〔おどろく〕あれは、歌を歌ったり、おどりを
おどったり、わらったりするけれど、

十五994 もう一つの「幸福」のむれ、(略)、子ど
もたちをとりまいて、陽気なおどりをします。

おどりがあがる 〔踊上(五) 2 おどりがあがる
《ツ・ーリ》

十二362 私は暖かい日なたにでかけるのだと知っ
て、おどりがあがりました。

十四961 ほのおは、その小さなマツチ賣りのむす
めを喜びむかえるようにおどりがあがった。

おどりとくさる 〔御取下(五) 1 おどりとくさる
《ーイ》

十五1186 〔おどろく〕さあ、そのベールをおどりとくささい。
おどりとくさす 〔踊出(五) 2 おどりとくさす 《ーシ・

ーイ》

十二437 〔おどろく〕おどりとくさすにみえるね。

十二439 〔おどろく〕おじさんからいただいた童話の本に、

人形が夜中に集まっておどります話がありました
よ。

おどりとくさる 〔御取(五) 1 おどりとくさる 《ー

イ》

四855 〔おどろく〕「はい、三つずつ おどりとくささい。」みん
なはよろこんで もらいました。

おどりはじめる 〔踊始(下) 1 おどりはじめ
る 《ーメ》

四1125 魚たちが、たくさんでてきて、にぎやか
なおどりがあがりました。

おどりがあがる 〔踊上(五) 2 おどりがあがる
《ツ・ーリ》

一641 おどろくさん、わたくしも、わの なかに
はいて、おはなばたけをおどりました。

八923 子どもたちは、手をたいておどりました。

おどろく 〔劣(五) 2 おどろく 《ール》

十四353 たしかに、人間は、バクテリアにもおど
るほどの小さなものではない。

十四355 そのバクテリアにもおどる小さな人間が、
引力の法則を発見したり、

おどろく 〔御取(五) 1 おどろく 《ーリ》

八414 たまごをおどりにしました。

おどろく 〔踊(五) 13 おどろく 《ーツ・ーリ・ール・

ーレ》↓わたしのころはにじをみるとおどろく
一223 それから、このうたのゆうぎを、みんな
がかつてに かんがえて おどりました。

一242 〔おどろく〕二ばんの「はねて おどれば」のところ
は、びよんびよんとびました。

一639 おどろくにつれて、みんなが 手をとっ
て おどりました。

二513 さちは、りんごをだいたり、ほおにつ

けたり、おどったりします。

四851 すると、みきこさんの いもうとの たつこ
さんが、それにあわせて おどりました。

四1110 〔おどろく〕では、みんなに おもしろい おどりを
おどってもらいましょう。

五802 川の中の石と石とが、おどっています。

六9711 みことは、それにあわせておどりをおどる。
十三518 わたしの心は、にじを見るとおどる。

十五6711 おどる胸をおさえながらたどった
んかんには、

十五9612 小さな「幸福」のむれ、(略)、子どもた
ちのまわりで、わになっておどります。

十五975 〔おどろく〕あれは、歌を歌ったり、おどりを
おどったり、わらったりするけれど、

十五986 〔おどろく〕ぼく、あの子たちとおどりたいなあ。
おどろく 〔衰(下) 2 おどろく 《ーエ》

↓やせおどろく

十三186 戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣
はしずみ、その活動はおどろえました。

十三261 敗戦のために意氣のおどろえた國民は、
希望をとり返し、

おどろく 〔驚(五) 1 おどろく 《ーサ》

十三562 いっそう生き生きとして、その着物やは
だの色の美しいのにおどろかれました。

おどろく 〔驚(名) 1 おどろく

十二322 私は、どのようなおどろきとふしぎが私
を待っているのか、すこしも知りませんでした。

おどろく 〔驚(四五) 32 おどろく 《ーイ・ーカ・

ーキ・ーク》

三275 おどろいたのは、その ふねの 早い こと
です。

三1098 おじいさんと おばあさんは おどろいて、

い。」

四66 8 上からよんでも 下からよんでも、おなじになることを考えたすあそびです。

四113 2 四のばめん である人も ところも、三のばめんと おなじ。

五62 9 四 「このきゅうりだって、あさがおとおなじですよ。」

五63 6 四 「あやこも、このきゅうりも、あさがおの花もおなじだよ。」

七9 2 星のちらばった青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ。

七12 8 「きゅうりの手」や「豆の手」なども、同じです。

七26 3 四 はっぱと同じになるのは、鳥などに、すぐみつからないためですよ。

七68 5 あとのやりかたは、文章をきりつめていくのと同じです。

九15 6 もう大きさは親つばめと同じですが、九82 10 四 「それ、これはせきふらしいぞ。」「そうだ、略。先生のところにあるのと同じだね。」

十45 11 世界の学者の研究によって、天然真珠とまったく同じであることが、明らかにされた。

十二92 7 ほかの人がこれと同じ文を書いたとしても、そのなかみは、おそらく、太郎や秋子と同じではなからう。

十二92 8 それは、めいめいの生活や経験が同じでないためである。

十四71 10 そのひえかたがどこも同じではないのと、ところどころ特別につめたいむらができます。

十五74 3 自分の子女は、その性質がどんなにかつていようと、かわいいことはみな同じで

おなじ [同] (連体) 68 おなじ 同じ

一27 7 だれも だれも おなじ かお、だれも だれも ちがつた かお。

四19 2 四 文を書くことは、お話をすることとおなじことです。

四44 3 四 「きょうも、きのうと おなじ じゅんばんに ならんで とぶ ことにしよう。」

五15 7 これは、汽車の旅にきつぷがいてのと、おなじことです。

五79 5 おなじところで、いつまでも高く鳴っています。

六5 5 ピンセットや、小さなつちや、さまざまな道具も、おなじ台の上によこたわっている。

六79 6 四 息と同じように、あなたがねむっているときでも、どきんどきんやっていますよ。

七11 5 同じ「手」ということばにも、いろいろなつかいかたがあります。

七11 10 「手をあわせる」の「手」も、これと同じつかいかたです。

七14 7 同じことばで、ちがつたつかいかたがあるのは、「手」だけではありません。

七25 9 四 はっぱと同じ色になったのね。

七25 9 四 どうして、はっぱと同じ色になるのか、わかりますか。

七29 5 四 黒つばい、かわいいあおむしは、だいこんのはっぱと同じ色にかわっていた。

七71 3 にわか雨は、ぐっしりとぬらした。うまもうまかたも、同じように。

八8 3 同じ日本の中でも、土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。

八17 5 人間のあかんぼが、したのさをじょうずにつかってちちをのむのと同じように、八18 9 同じ地中に住むものでも、こがねむしや、

かぶとむしの子どもたちは、

八69 4 四 ほかのものと同じようにおよぐし、いや、ほかのものよりうまくおよぐといってもいい。

九6 10 色の組みあわせが、さまざまな感じをあらわすのと同じように、

九8 4 色の組みあわせも、音の組みあわせも、おたがいにとけあって、一つの感じをつくりあげるのと同じように、

九9 6 これは色のばあいでも、音のばあいでも同じことです。

九18 1 日本のつばめは、こんなふうに渡っています。ヨロツパのつばめも同じように、

九19 3 九月の中ごろ、きゅうに十二月の氣候と同じ寒さになり、雨が降りつづきました。

九24 1 むかしから、つばめは、同じ家に帰ってくるといわれています。

九24 3 ことしある家のきで巣をつくったつばめは、来年また、同じ巣へもどてくるという

十12 12 四 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國にのこしておいてきました。

十29 1 私は、同じものをみるにしても、どうしてそのものがこうなったかということを、

十40 3 同じことをなんどもくり返してみたところ、かわりのあるはずはない。

十62 5 もう、親竹と同じくらいに高くなって、風にゆれていました。

十63 12 そのために、能は、めんの藝術ともいわれ、ヨーロッパの大むかしにさかえた、ギリシアの、

同じめんの藝術とくらべて、研究されています。

十一10 12 四 船ばかりではなく、あの町でも、あの工場でも、また、日本の國全体だって、同じことだと思ふ。

- 十一493 ぼくは、おとうさんと同じように、ちうしをかって、自分でバターをつくります。
- 十一864 ㊦ 「あなたと同じように、いなかのかたですがね。」と、看護人が答えました。
- 十一867 ㊦ ちようどあなたが入院したと同じ日に、入院したんです。
- 十一8610 ㊦ どうやら、あなたのむすこさんと同じ年ぐらいのむすこがいるらしく、
- 十二98 ㊦ ちゅうとで家に帰ってくるのは、ちようど、織物をちゅうとでたち切るのと同じことです。
- 十二235 ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、
- 十二3411 二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。
- 十二356 こんどは、二つの人形が同じ名まえであることをわからせようとなさいました。
- 十二7111 そのあたりに遊んでいる子どもたちも、同じ氣持でした。
- 十二9110 秋子も同じように、「くりひろいにいった。」と書いた。
- 十二9112 太郎と同じ文であるが、その中にたみこまれていることは、太郎とはちがっている。
- 十二926 ほかの人がこれと同じ文を書いたとしても、
- 十二929 みんなが「遠足」という同じ文題で書いても、
- 十二931 「遠足」ということばは、だれにでも同じようにわかり、
- 十二9311 だれにでも同じようにわかり、同じように通じる力をもっている。
- 十三108 同じ名まえの人も世の中には多いが、

- 十三111 これらの人がみな同じ性質をもち、同じ運命をたどるとは、考えられない。
- 十三1111 同じ運命をたどるとは、考えられない。
- 十三1310 火星などと同じように、太陽のまわりをまわっている星の一つだ、ということも
- 十三148 そのケブラーと同じころ、イタリアのピサに生まれたガリレオという学者がありました。
- 十三303 同じ大きなさのどらでも、そのうちかたによつて、調子がちがう。
- 十三5812 おじさんはそういつて、同じひきだしから、一まいえらびだして、見せてくださいました。
- 十四474 おそらくは、自分と同じように、船からなげだされたものでしょう。
- 十四632 ちようど雲やきりと同じようなものです。
- 十四716 アルコールランプで熱したときの水の流れと、同じようなものになるわけです。
- 十四728 光が曲がるために、その光が同じようにならず、むらになって、
- 十四762 これと同じような氣流のじゅんかんが、
- 十四766 これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。
- 十四865 ごくささいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。
- 十四8711 やがて第三の人も通り、第四、第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。
- 十四897 同じ題の作文でも、《略》人によつて、文章は、どのようにも書きあらわされる。
- 十五748 親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、
- 十五748 同じ機会を與えて、
- 十五9411 ㊦ 同じところにいるのだよ。ちがったように思うのは目のせいです。

- 十五11311 ㊦ いいえ、それは同じことですよ。
- 十五11411 ㊦ でも、それは同じことですよ。私も下へ行くのですよ。
- 十五1158 ㊦ それは、いつだって、同じおかあさんで、
- おなじく 「同」(副) 3 同じく
- 九228 九月二十四日 飛行機で二千ば二十五日 同じく二万五千ば
- 九2212 十月一日 飛行機で一千六百ば二日 同じく九百九十ば五日 同じくのこりの三十九わ
- 九2213 五日 同じくのこりの三十九わ
- おなじみ 「御馴染」(名) 1 おなじみ
- 十二1116 おなじみの富士山の絵です。
- おならびくださる 「御並下」(五) 1 おならびくださる 《一い》
- 一448 ㊦ 「お月さんのくにへおいでのかたは、こちらへおならびください。」
- おなる 「御成」(五) 4 おなる 《一り》
- 三481 おもいふくろをせおっていらつしやったので、おそくおなりになったのです。
- 八448 王さまは、ご病氣をなさつて《略》、いくら手をつくしても、よくおなりになりません。
- 十二1711 ㊦ あなたの声もたいそうよくおなりではありませんか。
- 十五7012 ㊦ 手紙でもなんでも赤インキで書かなくては見えないようにおなりになったのですよ。
- おに 「鬼」(名) 14 おに
- 四154 かくれんぼしたら、わたしがおにになった。
- 六1274 五ひきのうさぎさんたちは、大きな声でじゃんけんをして、おにをきめました。
- 六1275 おにが、目をつぶつて、「もう、いいか

い。」とさげびました。

六二八 におも、とんとこ、とんとことさがしにでかけました。

六二九 おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさんたちは、うまくにげました。

六三〇 おにがあらからくると、こちらへかくれ、六三二 新しいおにがきまって、またはじめようと

したとき、
六三三 昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、

六三九 村の人たちは困りはて、おにに向かって、一つの難題をもちだした。

六四〇 それは、おにが一夜のうちに百だんの石だんをきずきあげること、

六四二 もしそれができたら、毎年ひとりずつ、おにに人間をくわせてやるというのであった。

六四四 おには、これを承知して、ある夜、石だんをきずきだした。

六四八 おにはおどろいてすがたを消してしまつた。

六五〇 おには約そくをまもって、そののちはもう田畑を荒らすようなことはなくなった。

おにいさん 「御兄」(名) 1 おにいさん
六五二 もう、たけのこは、私のせいをすぎて、おにいさんのせいより高くなりました。

おにいちゃん 「御兄」(名) 1 おにいちゃん
六五五 「おにいちゃん、ありがとう。」

おにごっこ 「鬼」(名) 1 おにごっこ
六五七 川口の子どもたちは、いつも砂原で、すもうをとったり、おにごっこをしたりして

おにさん 「鬼」(名) 1 おにさん
六五九 お——おにさんこちら、手のなる方へ。

おにわ 「御庭」(名) 1 お庭

六六一 うちのお庭に、たけのこが一本はえてきました。

おにわやき 「御庭焼」(名) 3 お庭焼
六六三 佐賀はん主は、お庭焼といって、自分の家でつかう食器とか、おくりものにする焼物とかを作らせていたが、

六六五 そのお庭焼の中でも、「色なべし」といわれる、色のはいたものが、いちばんすぐれていたという。

六六九 このお庭焼のために、細工人、画工、ちようこく師、下ばたらきの者などが、

六七一 おにんぎよう 「御人形」(名) 4 おにんぎよう
六七三 「りようかんさん、このおにんぎよう、かわいいでしょ。」

六七五 「どのおにんぎようでも、目は二つですよ。」

六七七 このおにんぎようは、きれいな赤いおびをしめている。

六七八 きようは、おにんぎようのおもりのしかたをしてみせてあげよう。

六八〇 「尾根」(名) 1 おね
六八二 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけしきが目のまえにひらけてくる。

六八四 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけしきが目のまえにひらけてくる。

六八六 駅の出くまでくると、でむかえにきていたおねえさんをみつけました。

六八八 「おねえさん、ありがとう。」

六九〇 「御願」(名) 4 おねがい お願い
六九二 『おねがいです。』

六九四 にいさん、お願いがあります。

六九六 お願いがあるのです。

八七九 「じゃあ、お願いだから口をださないでほしいね。」

おねがいする 「御願」(サ変) 4 おねがいする
八八〇 お願いする『—シ』

八八二 まあ、おねがいでみよう。

八八四 さあ、みなさん、日がくれきらないうちにおねがいます。

八八六 助けてくださいと、お願いしたところで、ゆるしてくるみこみありません。

八八八 どうぞ、おさばきをお願いします。

八九〇 「斧」(名) 1 おの
八九二 石のおもあります。

八九四 石のおの「各各」(名) 1 おのおの
八九六 うしはしずかにのおのの大きな耳をむけぬ

八九八 小路は、おのずから高い土べい続きになつてゐる。

九〇〇 ふえの音がおのずから和音をふくみ、それこそ天上の音楽である。

九〇二 どんな天空を旅して降ってきたか、おのずから知ることができるといふのである。

九〇四 「御飲」(五) 2 おのむ『—ミ』

九〇六 ほおりのみことは、ぐつとおのみになつて、ほおりの「ああ、おいしい水。

九〇八 コーヒーはこがねにかかりました。

九一〇 おのりくださる「御乗下」(五) 2 おのりくださる
九一二 お乗りにくださる『—イ』

九一四 ごじゅんにゆつくりおのりください。

九一六 「おりのかたがすんでから、ごじゅんにお乗りください。」

おのりなさん 「御乗」(五) 2 お乗りなさん 《一

イ》

六八七(六) あれにお乗りなさい。

六八八(六) さあ、早く船にお乗りなさい。

おのる 「御乗」(五) 1 お乗る 《一リ》

五八九(六) 「さあ、じろう、お乗り。」ポ、ポー、

シュ、シュ、シュ、シュ。

おば 「伯母」(名) 7 おば

九三四(五) 母と、おばと、兄と、妹と、ぼくの五人

で、三日間かかりました。

九三九(五) 下では、兄や、母や、おばが、「略。」

とか、「略。」などいわれたが、

九四二(五) 母やおばがくわをいれるあとから、ぼく

たちはむちゅうになつていもをひろいました。

九四四(五) 母やおばまで子どものように、かきの葉

をまいまいならべて、

九四八(五) この夏、一ど、用事でおばがそちらにで

かけるとき、ぼくもついていったのでした。

九四五(五) おばに、「小公子」をよんでもらいまし

た。

九四五(五) おばは、「略」、子どものころから、世の

中のことに注意を向けるようにといわれました。

おばあさん 「御婆」(名) 48 おばあさん

一四八 わたくしは、おばあさんの 手をとって

あげました。

一五九 おじいさんも、おばあさんも、きょうだい

も、みんなよろこんで、

三〇二 そうして、かごの中にいれて、おばあさ

んとふたりでだいにそだてました。

三〇四(六) いつまでもおじいさんとおばあさんの

おそばにいたいと思います。

三〇八 おじいさんとおばあさんはおどろいて、

そのわけをたずねました。

三一一 この思いがけないことばをきいて、お

じいさんも おばあさんもびっくりしました。

三一二 おばあさんは、しめきつたくらの中で、

しつかりとかぐやひめをだいていました。

三二三 おばあさんがだいていた かぐやひめの

からだは、すうつとそとへでてしまいました。

三三三 かぐやひめは、おじいさんとおばあさん

に、「略。」といって、

三三九 「略。」といって、きていたうわぎを

ぬいで、おばあさんにわたしました。

五九三(六) どこかのおばあさんとぼっちゃんが、

乗ってきたよ。

五二五(六) それで、どこかのおばあさんのよこのと

ころに、もたれかかっていると、

五五二 海べに、おじいさんとおばあさんが、住ん

でいました。

五五七 おじいさんは、あみでさかなをとり、おば

あさんは、糸をつむいでくらしていました。

五六九 おじいさんは、うちへ帰って、おばあさん

に、このふしぎな話をしました。

五七三 おばあさんは、「略。」といました。

五八二(六) 「金のさかなさん、おばあさんが、新し

いおけがほしいといっています。」

五八八 おじいさんが帰ってみると、おばあさんは、

新しいおけを持っていました。

五八九 ところが、おばあさんは、「略。」おじい

さんは海へやってきました。

五九五(六) 「うちのおばあさんは、家がほしいとい

うのです。」

五七〇 おばあさんは、「略。」といました。

五七〇(六) 「おばあさんは、略」、お金持のおくさ

んになりたいというのです。」

五七二 おじいさんがおばあさんのところへ帰りま

すと、

五七二 おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴか

ぴか光るずきんをかぶり、金のうでわをはめ、

五七二 おばあさんは、おじいさんをうま小屋のし

ごとにおいやりました。

五七二 それから三日ほどたつて、おばあさんはお

じいさんにいました。

五七二(六) おばあさん、氣でもちがったかね。

五七五(六) おばあさんは、もう金持のおくさんはい

やだ、女王になりたいといっています。

五七五(六) おばあさんは女王になりますよ。

五七五(六) ちゃんとごてんができていて、おばあさん

は女王になっているではありませんか。

五七五(六) おばあさんは、おじいさんには目もくれな

いで、けらいに、「略。」といいつけました。

五七五(六) それから一週間もたつたころ、おばあさん

は、おじいさんをよんでいました。

五七五(六) うちのおばあさんは、もう女王はいやだ

といっています。

五七五(六) おじいさんは、すぐごと、おばあさんの

ところへ帰りました。

五七五(六) 入口におばあさんがすわっていました。

五七五(六) 中には、おばあさんが、ねことにわとりと

いっしょに住んでいた。

五七五(六) おばあさんは、それを自分の子のようにか

わいがった。

五七五(六) 「略。」と、おばあさんがいった。

五七五(六) それから、うちのおばあさんにきいてご

らん。

五七五(六) おまえさん、ねこやおばあさんよりかし

こいとは思っていないだろうね。

1563 9 おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わかい女のめんと、

1562 1 おじいさんやおばあさんからきいた話を

思い出して、書きのこしておくということは、

1562 5 この子にとって、ただひとりのしんせつ

な人であつたおばあさんが、

1562 1 そのマッチの火の中で、もうとつくにわ

かれて神さまのおそばへ行つたおばあさんを見た。

1562 1 おばあさんは、いつものように、やさし

く、しんせつなようすをしていた。

1562 5 おばあさんが見えなくなつては困ると思つたので、

1562 1 おばあさんが、こんなに〈略〉、しんせつ

つに見えたことは、いままでなかったことであつた。

1562 6 おばあさんは、女の子をうでにかかえて、

ふたりは、いっしょにふわりとまいあがつた。

おばあちゃん

59 10 〔御祖母〕(名) 4 おばあちゃん

59 10 〔おばあちゃん、海がみえるよ。〕

59 10 〔おばあちゃん、まっくらになった。〕

1562 4 〔おばあちゃん、わたしのおばあちゃん。もう行っちゃいや。〕

1562 4 わたしのおばあちゃん。

おはいる 〔御人〕(五) 3 おはいる 《一り》

62 2 〔おはいり。〕戸をあけて、きりぎりす

一、二がはいってきます。

62 1 〔いいよ。おはいり。〕

82 6 天帝は、そつとごてんの中へおはいりになりました。

おはか 〔御墓〕(名) 2 おはか

1562 7 おとうさんのおはかについては、どう

したものか、ちょっと私にはわかりかねます。

1571 9 町の東にある寺の一角に、こけむす一つ

のおはか、

おばさん 〔伯母〕(名) 36 おばさん

23 1 おばさんのうちから、大きなりんごを

みつittedきました。

29 3 おばさんのうちへいって、いもほりの

てつだいをすることかな。

37 5 思いついて、となりのおばさんに、

54 8 〔おばさん、こんにちわ。〕

54 9 〔おばさん、わざわざきてくださつて、すみません。〕

62 2 すぎの木のおばさん、助けて。

35 8 おばさんのうちへは、もう二どもいった

ことがあるのですもの。

36 8 すぐうしろのおばさんも、〈略〉と、心配そうにいました。

38 5 〔略。〕うしろのおばさんがいつてくれましたので、

52 5 五六歩いったかと思うと、よそのおばさんが、あかちゃんをおんぶして、そばを通りました。

28 11 その油を自分でとりたいたいと思ひ、となり

のおばさんから一にぎりのあぶらな種をかりて、

37 9 あ、おばさん。

38 3 おばさんだつて、このごろちつとも来てく

でくさらないじゃないですか。

39 8 だつて、おばさんたら、お客さんなんてお

おしやるんだもの……

41 9 おばさんがね、こんどの日曜、きみをお客

さんにして、ハイキングにつれて行くつて……

42 10 うん、楽しみにしているよ……おじさん

やおばさんよろしく。

1344 8 電話のはじめの人は、三郎くんのおばさん、

それからおとうさん、

1561 2 新島のおじさんとおばさんは、〈略〉。

といつて私をかわいがつた。

1561 9 ある日のこと、おじさんとおばさんが外出

の用意をととのえて、

1562 7 〔略。〕といつて、おじさんはおばさんに

助け船を求められた。

1562 8 〔満ぼう、なにが氣にさつたの、お

ばさんにいつてごらん。〕

1562 9 小さな声でうったえる私のくりごとを耳

にしたおばさんは、腹をかかえてわらいだした。

1564 4 おじさんとおばさんはそのあとを追つて

出て來られたが、

1565 5 日がさをさしかけながらついでにいらつ

しやつた新島のおばさんと思ひ出は、

1565 7 りんごのみのころ、おじさんとおばさんは

京都へひきあげられたが、

1566 11 そのころは、新島のおばさんは廣島にお

られて、

1567 8 ああ、なつかしい新島のおばさんだつた。

1568 2 〔新島のおばさん。〕とよんだつもり

で、私はかねをカーンとたたいた。

1568 8 なつかしい新島のおばさん、おばさんは

目になみだをためながら、

1568 8 おばさんは目になみだをためながら、

しやにむに私をおく深くひき入れた。

1569 6 おばさんのことばに目をうつすと、

1570 5 せきあえぬなみだに目をくらめたおばさんが、

1571 4 このすがたをおじさんがごらんになつたら

ら——といつて、おばさんは声をくらめた。

十五118 人力車に乗ったおぼさんは、昔のように私をひざにのせた。

十五7110 町の東にある寺の一角に、こけむす一つのおはか、その前に立ったおぼさんは、

十五724 「〈略〉。」と、おぼさんはふたたび呼びかけた。

おはじめなさる「御始」(五) 1 おはじめなさる

《一イ》

十四521 園 「では、花さんからおはじめなさい。」

花は、美しいわかい女でした。

おはな「御花」(名) 2 おはな お花

一42 園 おはなをかざる、みんないいこ。

四255 園 お花をかざると、そこにすわっているようです。

おはなし「課名」2 おはなし

二31 五 おはなし……二十五

二251 五 おはなし

おはなし「御話」(名) 40 おはなし お話

二252 じゅんぽんに、おはなしをしました。

二257 いちろうさんのした おはなし。

二268 さだおさんのした おはなし。

二287 すみこさんのした おはなし。

二322 くにおさんのした おはなし。

二374 たけこさんのした おはなし。

二588 先生が、こんなおはなしをなさいました。

二601 こちまで おはなしをきいたとき、

三983 紙にかいた おはなしは、いつまでものこります。

四192 園 文を書くことは、お話をするのとお

なじことです。

四194 園 お話が あいて なしには できないよう

に、

四254 園 お話をする、みっちゃん、そばに

くるような気がします。

四261 「りんご」にお話をするつもりで書き

ました。

四772 ら——ラジオのお話 ききましよう。

四846 一ばんさきに、ねえさんが、エスさまの

おたんじょうのお話をしました。

六663 第二号をつくる人たちは、このお話のつづ

きを書いてください。

六666 そのようにして、どこまでもお話をつづけ

てみましょう。

六667 どんなふうにお話がすすんでいくか、楽し

みではありませんか。

六668 お話の題はべつにきめませんから、かつて

につきを考えてください。

六707 園 お話したら、なおもしろいわねえ。

六708 園 雪だるま、どんなお話をするだろう。

六712 園 「いま、この雪だるまが、お話をすれば

いいって、いつていたところよ。」

六715 園 「口があるから、お話もするかもしれま

せんよ。」

六7110 園 雪だるまはお話はしないけれども、はる

えさんが、なにかお話をしあげたらどう。

六7111 園 なにかお話をしあげたらどう。

六10011 園 「これで、いつか、おとうさんのお話に

きいた望遠鏡が、できるかもしれない。」

九449 園 ぼくはみなさんであつてお話がしたいと

思いました。

十1211 園 おいで、わたしといっしょにお話をし

ておくれ。

十二106 園 イソップ物語はイソップという人が書い

たお話ですが、

十四65 園 おかあさんちよつとお話をしようと思

います。

十四177 園 きょうはこれでお話をやめます。

十四243 先生のお話を聞いているうちに、

十四253 私は、このお話から、さまざまなことが

心にうかんできた。

十四258 「ことばのおたんじょう」などというお

話が、つくれそうな気がしてきた。

十四5810 園 いまのお話の養分だって、水にとけて

いるから、根から実まで運んでいけるのですよ。

十四697 湯げのお話はこのくらいにして、こんど

は、湯のほうを見ることにしましょう。

十四7611 茶わんの湯のお話は、すればまだいくら

でもありますが、

十五976 園 おどりをおどったり、わらったりする

けれど、まだ、お話はできないのだよ。

十五1144 園 でも、うちにいるときよりか、ずっと

お話がうまいな。

十五1202 校長先生のお話を聞いていると、ずっと

まえのことが思い出されてきた。

おはなしいたしおる「御話致居」(五) 1 お話

たしおる《一リ》

十五614 園 「ちかごろ、満ほう先生はいかが、毎

日お話いたしおります。」

おはなしする「御話」(サ変) 7 オハナシスル

お話しする お話する《一シ・スル》

四253 園 みっちゃんのことを、みんなでお話し

しない日はありません。

九463 園 「小公子」をみなさんにお話してあげて

ください。

九793 園 ここが、このあいだからよくお話してい

た貝つかです。

十492 会 — ハイ——イライノ——オハナシシ

テ——ワンワン——ミテルワウシロ——

十5110 「オハナシシテ」という心らしいのです。

十一187 これから、私の調べた二宮金次郎のことをお話しします。

十四639 この色については、お話することがどうさあります。

おはなす 「御話」(五) 1 お話す 《—シ》

十四2211 それから、タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、外国語であつたとお話しになったので、

おはなばたけ 「御花畑」(名) 2 おはなばたけ

一595 しろちゃんのうちは、つきみそうのさいている おはなばたけのなかにありました。

一641 おとうさんも、わたくしも、わの なかにはいって、おはなばたけをおどりまわりました。

おはよう 「御早」(感) 2 おはよう

一72 会 「おはよう。」

一73 会 「おはよう。」

おはようございます 「御早御座」(感) 1 おはようございます

八418 会 「おとうさま、おはようございます。」

こういって、王さまにだきつきました。

おび 「帯」(名) 7 おび じうわおび

三553 会 おびになって、ひもになって、がんがかえる。

五879 会 このおにんぎょうは、きれいな赤いおびをしめている。

五8710 会 いいおびだ。

五882 会 「でも、おぼうさんが赤いおびをおしめになると、へんでしょう。」

五884 会 黒いころもに赤いおび——かわいいよ。

六448 会 ぼくが目をさましたときには、おびみた

いなものが向こうの山の方へとんでいったんだよ。

十四815 会 おびに短し、たすきに長し。

おひく 「御弾」(五) 1 おひく 《—キ》

十一151 先生がオルガンをおひきになると、おひさま (題名) 1 おひさま

三698 おひさま

おひさま 「御日様」(名) 26 おひさま

一318 おひさまという ひとつのことばから、おもいだしたことばを、

一323 おひさま——おつきさま——おほしさま

一327 おひさま——おかあさん——かがみ——

一333 おひさま——にじ——あか——あお——

一336 おひさま——はな——ことり——とぶ——

三59 会 ともお「ああ、おひさま。」

三510 会 みんな「おひさまの光、光。」

三738 会 「おひさまの光かしら。」

三749 おひさまが光りながら、いま、丘のかけへしむところでした。

三751 会 「おひさまの光は おひさまからやってきたのね。」

三751 会 おひさまからやってきたのね。

三755 そのうちに、赤い おひさまは丘のかけへしむでいきました。

三758 会 「おや、さっきのおひさまの光、どこへいったの。」

三764 会 「おひさまがつれて いって しまったのよ。」

三766 会 「おかあさんが おしやいました。」

三766 会 「おひさまってどこへ いくのかなあ。」

と、デビッドが たずねます。

三769 会 「じゃあ、おひさまはよその 國でなにをするの。」

三773 会 おひさまは 一つしかないから、みんな

でかわりばんこに お目にかかるのです。

三775 会 おひさまは、よその 國の子どもがあそべるように、光を あげにいくのです。

三777 会 それから、あさになって、おひさまがあなたたちのところへ かえってくるのです。

三7710 会 「あしたの あさも、おひさまはきつとかえって きてくれるの。」

三783 会 「よその 子どもたちが わたしの おひさまをとって しまふのは いや。」

三786 会 おひさまは まいあさ かえってきますよ。

三786 会 だれにも おひさま はとられません。

三813 そこへ おひさまの 光が さしはじめました。

三8310 会 「おひさまが、雨の つぶつぶを しゃばんだみたい に 光らせるのよ。」

六431 しずんでいく おひさまをおって、町の上を列車のように とぶつばめのむれ。

おびたしい 「影」(形) 2 おびたしい 《—イーク》

十412 ある年のこと、赤しおが、おびたしく 発生した。

十五899 会 なしろ、おびたしい数ですからね。

おひとり 「御一人」(名) 2 おひとり

十二7511 会 先生は、おひとりですらいられるかと思うと、

十四171 会 おひとりですら すぎるとは、お思ひになりませんか。

おひめさま 「御姫様」(名) 4 おひめさま

三1012 その 竹を 切つて みますと、小さな、きれいな おひめさまが すわっていました。

三1027 小人のようだった おひめさまは、三月は

どのあいだに、すすくとせいがのびて、
三〇七五 家にはいつてごらんになると、光の中
にきれいな おひめさまが すわっています。
四二六六 真っ白なおさらの上では、おひめさま
のようですね。

おひる 「御昼」(名) 3 お晝

七九四 お晝に、うさぎのところへいつてみたら、
暑いのでねむっていました。

八〇三三 三時間の終りに開きはじめましたがお晝
の時間には、もう閉じてしまっていました。

九一〇二 お晝になったので、雪の上で楽しくおべん
とうをたべた。

おひるころ 「御昼頃」(名) 1 お晝ころ

七九八 お晝ころみたら、子うさぎは、7ひきとも、
巣からでて歩いていました。

おひるすぎ 「御昼過」(名) 1 おひるすぎ

五〇一〇 おひるすぎには、かえでの木につるしてお
きます。

おひるどき 「御昼時」(名) 1 お晝どき

一五七三 やがてお晝どきになったので、廣い食堂
にみちびかれ、

おひるまえ 「御昼前」(名) 1 おひるまえ

五〇一八 鳥かごは、おひるまえは、水道のあるいど
ぼたの高いところにかけますが、

おひるやすみ 「御昼休」(名) 1 おひる休み

五八三 おひる休みのとき、私たちは、運動場にあ
つまつて、先生をまん中にしてならびました。

オフコース フォアジャパン (感) 1 オフコース、
フォアジャパン

一八八五 オフ コース、フォア ジャパン。サー。
おふたり 「御一人」(名) 3 おふたり

三二〇一 おふたりがどんなにおかなしみにな

るかと思つて、いままでだまつていましたが、
一四一三 あなたがたのおふたりの写真は、いま、
《略》、私の前においてあります。
一五八九 おふたりのために、ちゃんと席がとつ
てありますよ。

おふね 「御舟」(名) 3 おふね お船

一三六一 「うみになって、せかいじゅうのおふ
ねをうかべたいからです。」

四二五三 いきさんは、こんど、いつ おふねから
おかえりですか。

五〇一〇 きれいな海だこと、お船もみえますね。
おふりかける 「御振掛」(下二) 1 おふりかける

《ケ》

八四一〇 王さまは、いそいで庭のいけの水をすくつ
て、王女のからだにおふりかけになりました。

おふれ 「御触」(名) 1 おふれ

八四五二 王さまは、《略》というおふれを、おだ
しになりました。

おふれる 「御触」(下二) 1 おふれる 《レ》

八四〇九 こんなひとりごとをおっしゃって、そこら
の木の葉や花にみんな手をおふれになりました。

おふる 「御風呂」(名) 1 おふる

四一七五 わたしが 手ぬぐいをもって、おふるへ
いくのがみえるの。

おへや 「御部屋」(名) 6 おへや

一三二八 手ぬぐい——ふきん——おへや——
一三五四 「きれいな はなになって、おへやを
かざりたいからです。」

三三六四 こづかいさんのおへやはあたたかです。

三三七七 こづかいさんのおへやのものは、みん
な大きいなおもいました。

一三三二 サリバン先生は、お着きになったあくる

朝、私をおへやに呼んで、
一五八二 ここがおじさんのおへやですよ。

オペラ (名) 1 オペラ

七四六 名高いオペラの序曲である。

おべんきょう 「御勉強」(名) 1 お勉強
七二七 そう、それもお勉強ですね。

おべんとう 「御弁当」(名) 5 おべんとう
一五六 おべんとうをたべて、ちよつとうとうと
すると、きしやはもうついていた。

七六二 みんな、おべんとうをたべている。
九一〇二 お晝になったので、雪の上で楽しくおべん
とうをたべた。

一三二七 それで、わたしはおべんとうの包みをこ
しらえて、

一三二九 こんなふうにして、毎朝おべんとうをこ
しらえて持たせているうちに、

おぼうさん 「御坊」(名) 4 おぼうさん
五八二 「でも、おぼうさんが赤いおびをおしめ
になると、へんでしょう。」

五九七 「おぼうさんにおかあさんがあるって、
おかしいな。」

五九一 おちをコップコップといただいて、こ
んなにいいおぼうさんになったのだよ。

五九二 「わからないおぼうさん——」
おぼえ 「覚」(名) 1 おぼえ しみおぼえ・ものお
ぼえ

一五九二 ほんとうに、ぼく知らない。会ったお
ぼえがないもの。

おぼえなさる 「覚」(五) 1 おぼえなさる 《一
イ》

一三二八 ただひとことをしっかりと おぼえな
さい。

おぼえる 「覚」(下) 14 おぼえる 覚える 《—エ》

三121 けれども、なにも おぼえません。

三122 まだ なにも おぼえません。

三127 ほんたか、おまえは たくさん の ことを

おぼえなくても よろしい。

五106 小島でも 感心な ものだ、新しい ことを

どんどん おぼえて いく。」

七172 よく おぼえて いたね。

十一65 「略」と、少年は、ますます 不安を

おぼえながら 答えました。

十二25 わたしも 早く それを 覚えたい と思います。

十二29 でも、いつ そんな ことを 覚え たんて

しょう。

十二34 「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たく

さんの ことば を つづる ことを 覚え、

十二35 ただ、腹 だちの 原因 が とりの ぞか れたと

いう 満足を 覚え たばかり でした。

十二38 私は その 日、たくさん の ことば を 覚え ま

した。

十二38 全部 覚えて は いま せんが、

十五45 ある 日、ブリン クリー は、どう やら 覚え

た 日本語 で、町を ひとり で 散歩 して いた。

十五115 おまえ たちは、おかあ さんを よく 覚え

て、だいい じに する ことを わす れて は ない ませ んよ。

おほしさま 「御星様」(名) 1 おほしさま

一32 お日さま——おつきさま——おほしさま

おほしさん 「御星」(名) 1 お星さん

四173 お星さん、よく 光る ね。

おぼろつき 「朧月」(名) 1 おぼろ月

七91 おぼろ 月が 空に かか っている。

おぼん 「御盆」(名) 1 おぼん

十二76 それは、赤い おぼん の 上に、雪を まるめ

て こしら えた うさぎ でした。

おまえ 「御前」(代名) 37 おまえ

二42 おまえ が 口ぎ た なく いう から だよ。

二42 おまえ が きれい な ことば で いえ ば、

あち らだ っ て、きれい に いう さ。

二58 「わたしは、おまえの おじい さん の お

とう さん だよ。」

三127 ほんたか、おまえは たくさん の ことを

おぼえ なく て も よろ しい。

三46 「おまえは なぜ ない て いる のか。」と

おた ずね に なり ました。

三106 もし、かぐ や ひめ を ごて ん に つれ て

きた ら、おまえ に くら い を さ ず けて や ろ う。

五60 おまえ が、たね を まい た の で し た ね。

五64 日 に 日 に 大 き くな っ た の は、おまえ ひ と

りの 力 で も な け れ ば、

五91 おまえ は 水 が ほ しい の か。

六75 「だいい ち、おまえ が 生 き て いる ん だ か

ら、わ か り そ う な も の が な。」

六84 ほんたか、おまえは、なにか つたか。」

六85 おまえ から い だ して おい て。

六96 おまえは、この かた の つり ば り を 知 ら な

い か。

八71 「ピオ、いい 声 だ な あ、おまえ は。」

八74 「おまえ な ん か は、ね こ に く わ れ て し ま

え ば い い。」と い わ れ た。

九42 「まあ、おまえは、わたしを わす れ た の

かい。」

九45 「わたしは、おまえのおかあ さん じや な

い か ね。」

十34 おまえは 大工 の せ が れ だ。

十43 うめ、おまえ も 喜 ん で く れ。

十67 次郎 か じや、おまえ は、せ ん す で あ お い

で、風 を 向 こ う へ や っ て く れ。

十72 おまえは、だん な が だ い じ に して いる あ

の 湯 飲 み 茶 わ ん を、庭 石 に た た き つ け ろ。

十一61 おまえは どう した の だ。

十一62 おまえ の よう な よ わ 虫 に は、

十一83 おまえ は べ つ の 人 の と こ ろ へ つ れ て い

か れ た の だ な。

十一85 手紙 が き た き り、おまえ が こ ない か ら、

だん な に が っ か り して いた か わ か ら ない よ。

十二87 い く 日 おまえ は こ こ に いた の だ ね。

十二95 おまえ が 学 問 の ち ゅ う と で 家 に 帰 っ て

く る の は、

十三22 「ダルガス、おまえ が くれ る と い っ た

材 木 を、さ あ 早 く も ら い た い。」

十四98 「かが や く 小 さ な 星 よ、おまえ は い っ

た い な ん だ ろ う か。」

十五86 おまえ の 氣 持 を く じ い て し ま う よ。

十五93 なにか おまえ に つ い て いる な。

十五93 それから、チロー、おまえ も すぐ 来 い。

十五110 おまえ が に っ こ り す る た び に、わ か く

な る の で す よ——

十五113 まあ、おまえ、見 た こ と が な か っ た か

い。

十五113 この 手 で おまえ の せ わ を して いる と き

は、い つ だ っ て こ ん な に 白 く な っ て、

十五114 チル チル や、おまえ は、い ま だ け 天 國

に 来 て いる と 思 っ て いる け れ ど、

十五115 おまえ と 私 と が、か わ い が り あ う と き

は、い つ で も 天 國 に いる の で す よ。

おまえさん 「御前」(代名) 18 おまえさん

三154 会 「おまえさんのような おろかものは、ここをとすことはできない。」

五72 10 会 「おまえさん、ぐずぐずいわずに海へいっておいで。」

八51 3 会 「おまえさんはだれですか。」とたずねました。

八52 3 会 「おまえさんはだれですか。」

八53 8 会 「おまえさんはだれですか。」

八72 7 会 「おまえさん、おまえさんはずいぶんみにくいね。」と、かもがいった。

八72 7 会 おまえさんはずいぶんみにくいね。

八79 7 会 「おまえさんは、たまごを生むことができるかい。」と、あひるの子にたずねる。

八80 1 会 「おまえさん、〈略〉、のどを鳴らしたり、火花をだしたりすることができるかい。」

八80 10 会 「おまえさん、なにを考えているの。」と、にわとりがさげんだ。

八81 1 会 おまえさんは、することがないから、そんなことを考えるのだよ。

八81 6 会 おまえさん、氣がくるったのだよ。

八82 1 会 おまえさんのいうことがわからないって。

八82 2 会 おまえさん、ねこやおばあさんよりかしこいとは思っていないだろうね。

八82 7 会 おまえさんは口がすすぎる。

八82 8 会 だから、おまえさんとおつきあいするのがいやなのさ。

八82 9 会 おまえさんのためを思っているのですよ。

九139 6 会 もう、おまえさんをたべやしないよ。

おまえさんがた 「御前方」(代名) 2 おまえさんがた

十五89 6 会 わたしたちは、ただもう、おまえさんがたを待っていたのです。

十五89 7 会 あのとおり、さわぎやどもが、おまえさんがたを呼びたてているでしょう。

おまえさんたち 「御前達」(代名) 2 おまえさんたち

十五84 11 会 だが、おまえさんたちは、あのだうがしをわすれたのじゃないかな。

十五86 1 会 きつと、おまえさんたちを、ごちそうによぼうというのだろう。

おまえたち 「御前達」(代名) 10 おまえたち

十17 7 会 こうしておまえたちに話さうなことが、思うぞんぶんつかってみたいくなります。

十17 10 会 おまえたちは、おさな心にも、ことばを愛することを知って、

十五109 11 会 まあおまえたち、ここにいたの。

十五111 2 会 いいえ、これは、おまえたちのほおずりと、おめめと、だつこと織つたのですよ。

十五111 6 会 おまえたちがほおずりをするたびに、私の着物に、月と日の光がさしてきてね。

十五114 6 会 さあ、これで、おまえたち、私に会ったのだから、〈略〉、わかるだろうね。

十五114 12 会 おまえたちがこの上まであがって来たのは、

十五115 9 会 おまえたちは、おかあさんをよく覚えて、だいにじにすることをわすれてはなりませんよ。

十五115 11 会 でも、おまえたちは、どうしてここまであがって来られたの。

十五116 7 会 あの人、おまえたちふたりをかわいがって、たいへんしんせつにしてくれるそうだね。

おまけに 「御負」(接) 4 おまけに

いました。

十一28 2 会 おまけに、さかわ川がまたあふれて、のこつていたわずかの田や畑も、流されてしましました。

十五113 6 会 指わをはめている。おまけに、いつかランプをつけるときやけどをしたあとであるよ。

おまごさん 「御孫」(名) 1 おまごさん

十五51 8 会 すると、あなたは、そのプリンクリーさんのおまごさんでしたか。

おまちくくださる 「御待下」(五) 2 おまちくくださる 《一イ》

三115 2 会 「もうすこしおまちくください。」

四132 3 会 おまちくください。

おま・つ 「御待」(五) 1 おまつ 《一チ》

三61 3 会 おとうさんは、えんがわにこしをおろして、どうきまるかおまちになりました。

おまつさん 「人名」 3 おまつさん

五85 8 会 おや、おまつさんがいない。

五85 10 会 「おまつさんはあとからきますよ。」

五86 8 会 「おまつさんか、あなたがみえなかったから、かぜでもひいたかと思って。」

おまねき 「御招」(名) 2 おまねき

三14 7 会 ある日、おしやかさまは、王さまのおまねきにあずかりました。

十五93 6 会 おまねきをいただきながら、そうあたふたとおいとますることもできませんからね。

おまもりりくださる 「御守下」(五) 1 おまもりりくださる 《一イ》

十二42 1 会 どうぞ神さま、おまもりりください。

おまもり・する 「御守」(サ変) 1 おまもりする

《一シ》

十二108 3 会 仁王さまは寺の門に立って、ほとけさま

をおまもりします。

おまわる〔回〕(五) 1 おまわる 《一リ》

三六五 そこで、おとうさんは、ボートを こいで
ぐるぐるぐるぐる おまわりになりました。

おみこし〔御神輿〕(名) 1 おみこし

十五六三〔回〕 なんとかしなければ、おみこしはあが
りませんよ。

おみせ・する〔御見〕(サ変) 3 おみせする 《一
シ》

五三九〔回〕 このきれいなけしきを、みなさんにおみ
せしたいと思います。

六四一 「〈略〉。」といっておみせしました。

九四二〔回〕 せめて、貝だけでもおみせしたいと思っ
ています。

おみせなさる〔御見〕(五) 1 おみせなさる 《一
イ》

五五二〔回〕 ごろうさんにおみせなさい。

おみ・せる〔御見〕(下二) 1 おみせる 《一セ》

五二九〔回〕 まあ、受けとりをおみせ。

おみつ・ける〔御見〕(下二) 1 おみつける 《一
ケ》

十四四二〔回〕 もしこわれたら、そちらでわけなくか
わりをお見つけになれるでしょう。

おみと・れる〔御見蕩〕(下二) 1 おみとれる 《一
レ》

八二八 そのおり物の美しい光に、天帝もすっかり
おみとれになりました。

おみまい〔御見舞〕(名) 1 おみまい

四三〇〔回〕 それで、みんなで なにか おみまいを
しようでは ありませんか。

おみみ〔御耳〕(名) 1 おみみ

一五八〔回〕 「やっぱり おみみなおらないのね。」

おみやげ〔御土産〕(名) 7 おみやげ

一五三〔回〕 「ひとつ ひろって いった おかあさん
のおみやげにしたいな。」

一六七〔回〕 どうぞ おかあさんのおみやげにして
ください。

一六四〔回〕 「あまの川の だいやもんど、おかあさ
んのおみやげにいただいたの。」

四二四〔回〕 おみやげに うめもどきをとって きま
した。

四一六〔回〕 では、おみやげに たまてばこを さしあ
げましょう。

四一八〔回〕 これは これは、おみやげまで いただき
まして、ありがとうございます。

十三四二〔回〕 うん、おみやげより、早くきみの顔が
見たいよ。

おむすび〔御結〕(名) 3 おむすび

八五四 台所の方からおむすびを一つにぎってきて、
八五九 黄色なたくあんまで、そのおむすびにそえ
てくれました。

八五三 おむすび一つ、たくあん一きれにも、人の
心のおくは知れるものです。

おめ〔御目〕(名) 4 お目

三七四〔回〕 お日さまは 一つしかないから、みんな
でかわりばんこに お目にかかるのです。

九四四〔回〕 いそぐ用事だったので、先生にだけお目
にかかってすぐ帰りました。

十四一三〔回〕 もうじきお目にかかれます。

十五七九 日本の子どもさんたちにも、お目にか
かったことがあるからです。

おめでたい(形) 1 おめでたい 《一イ》

六九四〔回〕 いたい、いたいとなっていた、たいも
喜び、おめでたい。

おめめ〔御目〕(名) 1 おめめ

十五三三〔回〕 いいえ、これは、おまえたちのほおず
りと、おめめと、だつこで織ったのですよ。

おめん〔御面〕(名) 2 お面

十二四九 これは能につかうお面です。

十二四〇 このお面は、生きもののよう、いろい
ろな表情をあらわします。

おめんじよう〔御免状〕(名) 2 おめんじよう

十一四四 みんな読みあげられてから、おめんじょ
うをいただくことになりました。

十一四五 おめんじようをいただいて、ささげ持っ
ようにしながら、席に着きました。

おも〔主〕(形状) 2 おも

十五五二 私がこの博物館をたずねたおもな用事は、
十五八四 失礼ですが、この中のおもなものをこ
しょうかいいたしましょう。

おもい〔思〕(名) 12 思い

四一六〔回〕 いやいや、たいへんたのしい 思いを
させて いただきました。

四二四〔回〕 なん百年も、なん千年も、人々は 不
由な 思いをしました。

八八九 そうして、なんだかなしい思いがこみあ
げてきた。

八八九 冬じゅうひもじい思いをしたりするより
は、あの鳥にころされたほうがましだ。

九八六 こぼの組みあわせも、それぞれちがった
新しい思いをおこせます。

十三五五 かれは、〈略〉、感心するとともに、なんと
もいえないかた身のせまい思いがした。

十一七二 かなしい思いにせずみながら、やさしい
父親のことをいろいろと思い返していました。

十二七二 「〈略〉」という古歌に、少女の思いをた

くしたものでありました。

十二1610 カンパスの上にぬりつけてみると、思いもよらない色になってしまふ。

十四96㊦ あなたのルイは、たいへんかなしい思いをしなければなりません。

十四372 みなさん、あなたがたは、いま、日々の生活にもつらい思いをしていますか、

十五10912㊦ 思いもかけなかったよ。

おもい「重」(形) 12 おもい 重い 《—い—カッター》

三4710 にいさまがたの おもい ふくろを せおつていらつしやったので、

四168 おかあさんの バケツが おもそうだ。

四521 おもい かっちゃんを かつきながら 空をとぶのは、よいいな ことでは ありません。

五304㊦ その荷物は小さいわりに、なかなかおもかったのですが、

五311㊦ ぼくにはすこしおもかったんですが、とてもうれしんです。

六254 ありはなんにもいわないで、おもい足どりでかみてにさつていきます。

七989 子うさぎは、おもいので320g、かるいので260gでした。

八839 雲は、あられや雪で重くなってひくくたれていた。

十537 かたにかけると重いから手に持つのだと、ませたことをいって、歩きだしました。

十728 ずつしりと重い、大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

十二7411 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重いの、二三日は困ることもありません。

十四711 そうなると、茶碗に接したところでは、

湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、

おもいうかべる「思浮」(下二) 6 思いうかべる 《—べ—ベル》

七410 かしの木は、子どもたちのことを、まず思いうかべる。

九93 二つか、三つのことばの組みあわせだと、すぐ心にものを思いうかべることができですが、

九2410 その小さな胸には、わか葉のもえる日本の春の美しさを思いうかべているのでしょうか。

十1611 「略」と、日本の海の美しさを、思いうかべるようにしていました。

十二9510 読み手によって、三人三よう、それぞれちがったことを心の中に思いうかべる。

十三217 そうして、かれがふと思いうかべたのは、おもいおもい「思思」(副) 2 思い思い

八154 地面におりた虫たちは、やがて、思い思いにやわらかいところをさがして、

九1095 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえがきながら、小鳥のようにおりてくる。

おもいかえす「思返」(五) 3 思い返す 《—シ》九14210 「略」と、くもは、いまみたばかりのゆめを、なんどもなんども思い返しました。

十一7111 かなしい思いにしずみながら、やさしい父親のことをいろいろと思い返していました。

十二392 自分にもたらした喜びを思い返していたときの私ほど幸福な子どもを発見することは、

おもいがけない「思掛」(形) 6 思いがけない 《—い—ク》

三1107 この思いがけない ことばをきいて、おじいさんも おばあさんも びっくりしました。

七522 思いがけなく、ぼくたちの勝となった。

九188 ときには、あらしや、そのほかの思いがけ

ないさいなんに、あわないともかぎりません。

十一7810 すこしよくなるかと思えば、思いがけなくまたわるくなったりで、

十一8312㊦ まあ、ほんとうに思いがけないこともあるものだ。

十四4511 とつぜん、まったく思いがけなく、きれいな歌が流れてきました。

おもいきり「思切」(副) 1 思いきり

七55 白いちやうが、(略)、思いきり高くとんで、屋根をこえて、うすべに色の空にきえた。

おもいきる「思切」(五) 9 思いきる 思い切る 《—ツ》

四374㊦ 思いきって、となりの おばさんに、八2010 くらくなしかけた夕ぐれをみはからって、

思いきって土をかきわけて地上にはいだします。

八6311㊦ どんなにしても思いきってはいえるようにしてやるのができなかった。

九951 やがて思いきって、たかぎのそばにより、だまったままそれを取りあげる。

十682 さきに立った太郎かじゃが、思いきって、からかみをひきあげました。

十702 思いきって、ふたをあけてみました。

十一463 まちがったとき、思いきってやりなおした、その勇気を頼もしく思いました。

十二639 八郎は思い切って、水ぞこにとびこむと、小川がひろがって、みるみるうちに湖となった。

十四925 思いきって、その屋根うらの家へ帰ることもできなかった。

おもいきれる「思切」(下二) 1 思いきれる 《—レ》

十一858㊦ ぼく、とても思いきれないんです。

おもいこむ「思込」(五) 2 思いこむ 《—ン》

- 十一 86 11 同い年ぐらいのむすこがいるらしく、自分のむすこだと思ひこんでいるようですよ。
- 十二 32 6 私は、近づいてくる足音を感じましたので、それが母だとばかり思ひこんで、おもいだす「思出」(五) 42 おもいだす 思ひだす 思ひ出す 《「サ・シ・ス」
- 一 32 1 お日さまというひとつのことばから、おもいだしたことを、
- 二 60 2 おはなしをきいたとき、わたくしは、ふと、ゆうべのゆめをおもいだしました。
- 三 57 7 ぞうげのふねにぎんのかい、月夜の海にうかべれば、わすれたうたを思ひだす。
- 三 114 1 せめて 月夜には 月をみて、わたくしのことを思ひだしてください。
- 四 33 2 「略」というおとうさんのことをおもいだしました。
- 四 35 7 「そのとき、ふと思ひだしたことをおもいだすね。」
- 四 39 2 ここまで話がすすむと、みんなは、めいめいじぶんのことが思ひだされてきました。
- 四 39 5 ありをころそうとしたとき、にいさんのことを思ひだして、ころしませんでした。
- 四 113 4 うらしまは、父や母のことを思ひだして、きゅうに家へかえりたくなくなりました。
- 六 55 8 ふみおはさつきのことを思ひだして、また、にわの木の下へいってみました。
- 六 60 8 それから、まえにならったのを思ひだして書いてみました。
- 六 71 9 はるえは、まえに「こくご」でならった「よみかき」のころを、ふと思ひだしました。
- 六 79 10 ごろうは、いつか「こくご」でならった「あさがおの花」を思ひだしました。

- 七 77 1 旅人は、思ひだすようなふうをして、
- 七 77 11 旅人は、それには答えなくて、また思ひだしながら、
- 九 7 4 このことを耳にしたり、文字でよんだりしますと、夜のしずかなけしきを思ひだします。
- 九 7 6 「水」ということばをええたら、どういふけしきを思ひだしますか。
- 九 7 6 「月」だけで思ひだした心の絵とは、いくらちがったものがあらわれてくるでしょう。
- 九 46 7 なつかしいそちらの山々の景色を思ひだします。
- 九 130 6 風が思ひだしたようにふいてくるので、あみがゆれ、くももいつしよにゆれました。
- 九 138 2 くもの小さなときのことが、ゆめでもみるように思ひだされてきました。
- 九 144 4 これらのことを一つ一つ思ひだしているうちに、心持が、しだいにかわってきました。
- 十一 46 7 じゃがいもをみると、ぼくは、北海道のいなかを思ひだす。
- 十一 47 1 あの山のすがたが、小さいころのことを、いろいろと思ひださせる。
- 十一 66 4 看護人は、しばらく考えていましたが、ふと思ひだしたように、
- 十二 27 8 物を持たせると立つことができると、だれかがいったことを思ひだしました。
- 十二 37 4 私は、なにかしらわすれていたものを思ひだすような、《略》ふしきなものを感ぜました。
- 十二 38 4 へやに帰るとすぐ、私は、自分がこわした人形のことを思ひだして、
- 十二 38 12 「父」「母」「妹」「先生」などのことがあったことを思ひだします。
- 十二 56 1 おじいさんやおばあさんからきいた話を

- 思ひだして、書きのこしておくということは、
- 十二 94 8 ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいちがったものが思ひだされてくる。
- 十二 94 11 正男は、きよ年のいまごろのことをふと思ひだす。
- 十二 95 4 秋子は、おと年、この学校にうつってきたことを思ひだす。
- 十二 96 8 あなたがたの家の昔からいままでのことがさまざまに思ひだされるでしょう。
- 十二 97 8 四年生のとき習った貝つかのことを思ひだしてください。
- 十四 8 2 一生の間、いくたびとなく、おとうさんのおこばを思ひだすことにします。
- 十四 18 2 高山くんが、思ひだしたように、「略」といった。
- 十四 60 12 ああ、やっと思ひだした。
- 十五 58 5 遠い昔を思ひ出して、ひとりそのときの思ひ出にふけていられるようすだった。
- 十五 90 6 そうそう、思ひ出した。
- 十五 101 3 思ひ出したよ。
- 十五 120 3 校長先生のお話を聞いていると、ずっとまえのことが思ひ出されてきた。
- おもいだせる「思出」(下) 1 思ひだせる《「セ」
- 十一 65 7 しかし看護人は、そういう名を思ひだせませんでした。
- おもいつく「思付」(五) 6 おもいつく 思いつく 《「イ・キ・ク」
- 二 7 3 よくおもいつきましたね。
- 二 19 6 おもいついたことを、じゅんじゅんにつづけて、あそびました。
- 六 74 11 たとえ動いても、それだけでは命があると

はいえないと、ごろろは思いつきました。

六〇二 こう思いつくと、ぼくは、もう、じつとしていられなくなった。

六二〇 それよりも、五十音について、新しく思いついたことをみんなに話して、

七三〇 そこで思いついたのは、ノルウェー産のみの木でありました。

おもいで 「思出」(名) 11 思いで 思い出

六四八 きれいな、楽しかった思い出が、うかんできえていく。

八三二 この思いでは、おそらく一生なくならないでしょう。

一五五 七五三の記念写真も、思いではななるでしょうが、

一二九 読み手の思いでや心持にかかれて、その人その人の生活や経験によって生かされてくる。

一三二 かけがえのない、楽しい遊び場所であり、なつかしい思い出の天地である。

一四七 私たちは、おとうさんのために、心からの思い出をまもることにしましょう。

一四四 このうえなくまめやかな、このうえもなく純真な思い出がのこっています。

一五八 遠い昔を思い出して、ひとりそのときの思い出にふけていられるようすだった。

一五五 新島のおぼさんとの思い出は、いまでも私の胸にやきついていてる。

一五七 ふかい思い出にうたれている私の目の前で、博士は、「略」といって、

一五三 楽しい六か年の思い出を残してくれたこの運動場、この校舎、あの農園、

おもいで おり 「思通」(名) 3 思いどおり

一三六 そこでやっと、思いどおりの機械ができた

がった。

四二八 半円真珠が思いどおりに取れるようになったので、

一五九 やがて、思いどおりのものを作ることのできる日がきた。

おもいな おす 「思直」(五) 1 思いなおす「シ」

九九〇 やまだ、おこっていきかけるが、思いなおして、さつきすてたじょうぎをひろってくる。

おもいなし 「思倣」(名) 1 思いなし

一五九 きずのあるみけんの下にかがやく目は、思いなしがやわらいで見え、

おもな 「思」(四五) 三〇 おもう 思う 《—イ—ウ—エ—ツ—ワ》 ↓あなたのおもっていることは・おもう

一九六 た。ひらいたとおもったら、みる

二〇四 だ。つぼんだとおもったら、みる

二四六 おもしろかったとおもいます。十一

一三四 なってみたいとおもいますか。「略

一三五 ぜになりたいとおもいますか。「略

一六二 でもついたかとおもってみまわすと、

二〇六 わけたらいいとおもいます。」といい

二一〇 わけたらいいとおもいます。」といい

二二九 めはむずかしいとおもいましたが、だん

二二四 みていたいとおもいましたが、かね

二三二 いへんあついとおもいました。びよう

二〇八 な虫がいい虫とおもいますか。三

三四八 花をかきたいとおもいました。「略

三七二 んな大きいなとおもいました。「略

四三三 いってみたいとおもいました。ある日、

三九八 もできます。心に思ったことは、いつ

三〇一 ました。ふしぎに思って、その竹を切

三〇五 ちは、「略」と思って、みんないっ

三〇九 そばにいたいとおもいます。」といって

三一一 しみになるかと思つて、いままです

三二六 に十もでたかと思われるほど、あたり

三三九 こうをしたいとおもいましたのに、ほん

四二〇 はたきたいとおもいます。」すみこさ

四二五 うと、ときどき思います。でも、雨が

四二八 休んでいとおもいます。さようなら

四三二 たくしがしたいとおもうことは、なんだ

四三六 かいてもいいとおもいます。わたくしは

四四〇 花をあげようとおもいます。「かずこさ

四四四 のこされるかと思つてさ。それに、き

四四八 きやしないかと思つてね。「略」

四四九 させるのだからと思つて、べつに氣に

四九三 わきにそれかと思つと、石ころかな

四九七 どもたちのことを思つて、おもてのと

四九八 する人のことを思つて、ゆうびんなげ

四九八 「おや、だれかと思つたら、かめさんか

四九八 おつれしようと思つて、ここまでま

四九八 いとましようと思つています。」おとひめ

四九八 からにしようと思つています。」女「それは

五一一 ようとつしたかと思つた。「略」

五一一 ろにやられるかと思つて、びくびくして

五一一 がいに、であつたと思つたら、すぐおわ

五二四 とうといたいと思つたけれど、いうと

五二七 らも、やりたいと思つていました。な

五三〇 いつもやりたいと思つています。」とい

五三二 におみせたいと思つています。「略」

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五三六 れいなところだと思つています。ほんとうに

五42 5 手 どういてみたいと思います。「略。」
 五55 4 ました。「略。」と思って、西の空をみま
 五59 5 いにかいておこうと思いました。八あ
 五64 2 会 、大きくなったと思います。「略。」
 五86 9 会 ぜでもひいたかと思って。「略。」
 五87 4 会 も四つもあるかと思っていたよ。あはは
 五98 1 なかまの鳴き声だと思いました。そうして
 五98 9 会 って、はなそうと思っているのです。
 六8 4 。やつつまんだと思うと、すぐにおとし
 六11 9 ことができたのだと思うと、うれしくてた
 六22 5 会 「あ、だれかと思ったら、きりぎりす
 六48 7 会 ふと、そんなこと思わせる、あのまっ
 六49 4 会 ふと、そんなこと思わせる、あのまっ
 六51 7 、雲にはいったかと思うとすぐで、でたか
 六51 7 とすぐで、でたかと思うとまたすぐはいり
 六55 9 ました。動かないかと思ってみた月は、もう
 六67 4 お友だちと遊ぼうと思って、山の谷を歩い
 六72 7 ろん生きているとは思われないが、死んでい
 六76 7 は命がないのかと思いました。ごろろが
 六79 1 きいて、なるほどと思いました。「略。」
 六79 5 会 それを動かそうと思って動かししているの
 六79 11 ん近いもののように思われました。八
 六99 6 てきた。「略。」と思いながら、ぼくは、
 六100 3 大きくしてみようと思って、右の手に虫め
 六106 6 まねをしてやろうと思った。なにかよいお
 六106 7 よいおりはないかと思っていたら、ちょう
 六106 9 。ぼくは、ここだと思って、「略。」とい
 六106 11 こしふしぜんだなと思った。みんなもあま
 六109 1 もしろいぞとぼくは思った。では、なんと
 六109 5 音なのだろう。そう思って、「ナ」「ノ」、
 六110 1 いっているんだなと思うと、きゅうにおか
 六110 3 ンかわけはないぞと思った。なんでも、「

六110 9 らわせてみせるぞと思ったが、そのとき
 六112 4 。ここで、もしやと思って、はなをつまん
 六113 2 べたもの」ぐらいに思って、それ以上ふか
 六117 1 ことはないだろうと思いました。うちへ帰
 六140 3 は、もうにげようと思ってもにげることは
 六143 9 たいへんありがたく思いました。へのへ
 七14 11 へ。「略。」腹に思っていることと、い
 七29 8 会 るようなものだと思った。ぼくは、学校
 七30 3 会 いたの。まだかと思った。「母」いま、に
 七35 4 なってしまふかと、思われるほどでした。
 七39 1 略。」といったかと思うと、いきなりさぶ
 七43 7 会 とうにありがたく思います。はなはだで
 七44 8 会 たいへん失礼だと思いましたが、これは、
 七45 2 会 とになろうとは、思っていませんでした
 七46 3 ぐつとひろげたかと思うと、しずかにひき
 七47 3 五 作文 (一) 思っていることを、は
 七52 6 どちらが勝ったかと思って、心配している
 七68 7 ろは一つです。心に思ったことを、はっき
 七73 4 もさいているのかと思ったら、まあ、子ど
 七83 2 会 のではないかと、思ったのです。裁判
 七85 9 会 いははれたことと思う。早くいつてらく
 七92 10 。そうじをしようと思って、首のところを
 七96 4 うぶにそだてたいと思います。11月22日
 八8 8 たのちがいだろうと思う人もありましょ
 八23 5 ておきなあったかと思うと、からだはすっ
 八24 8 っととびあったかと思うと、その鳴いてい
 八46 7 りません。金持だかと思うと、友だちがよ
 八46 9 くくらしているかと思うと、友だちがいな
 八53 2 でいきはしないかと思ったのでしよう。「へ
 八55 6 す。それをうれしく思って、その家へ、幸
 八56 4 とをつけてみようと思って歩きだした。す
 八59 8 きがみえるだろうと思った。そのことを先

八62 1 会 「これが世界だと思っているのかい。世
 八70 10 みじみとなさけなく思った。(一) そ
 八72 1 」と、あひるの子は思った。そうして、目
 八72 9 になって休みたいと思った。また、ぬまの
 八72 10 せてもらいたいとも思ってたが、それもゆる
 八82 3 会 よりかしこいとは思っていないだろうね
 八82 9 会 まえさんのためを思っているのですよ。
 八83 2 会 い世界へでたいと思っているのです。「
 八85 3 にだれをなつかしく思ったよりも、あの鳥
 八85 3 あの鳥をなつかしく思った。それは、うら
 八85 4 れは、うらやましく思ったのではない。ど
 八86 5 たいじめられるかと思って、おそろしさの
 八90 4 、ころされるものかと思いつて、水の上に
 八93 11 会 どとは、ゆめにも思わなかった。」七
 八100 7 ほうが育ちがよいと思いました。7月18
 八103 5 しのあいだだけだと思いました。9月7
 八109 5 するものではないかと思いましたが、やく12平
 九12 5 もつとおもしろいと思ったのは、雪の降っ
 九24 8 。日本に春がくると思うと、もう矢もたて
 九31 7 手 ん。先生のことを思うと、みなさんがう
 九34 2 手 けたらと、いつも思っています。せめて
 九34 3 手 もおみせしたいと思っています。せんだ
 九44 10 手 てお話がしたいと思いましたが、いそぐ
 九45 8 手 んけんにやろうと思っています。兄は、
 九46 9 手 んでいるだろうと思います。先生、みな
 九59 10 ろうは、おかしいかと思つてふり返つてみま
 九60 2 とがっているな、と思いながらみていると
 九60 11 会 をうかがいたいと思いましたが、ま
 九75 5 いちろうはときどき思うのです。七 月
 九80 11 会 ないと、だめだかと思つてやめてしま
 九81 2 会 ていくのがいいと思います。「略。」
 九84 11 会 とを知つてくると思っています。みなさんの

九八五 ⑨ 物のかけらがと思うような物ですが、
 九八六 ② てしらべ、へんだと思う物は、みながこの
 九八六 ⑤ ひじょうにみじかく思われました。「略」
 九一〇 ⑨ ぼくも負けまいと思っただ。じまん話
 九一〇 ⑩ ちばりつぱだと思うもんだね。なんだ
 九二〇 ⑤ まましみてきたかと思われようにつめた
 九二一 ⑦ がしだしたいものと思つた。茶人は、日本
 九三三 ⑨ たいへんと、くもが思つたとたんに、ぼさ
 九三三 ⑦ しいなど、ふしぎに思つてよくみると、そ
 九三六 ⑪ ⑨ へいつてみたいと思いませんか。「——
 九三六 ③ ころへいきたいと思つてゐるんだけど。
 九三九 ⑤ ⑨ をたべてもいいと思つてゐるんだけど。
 九三九 ⑧ ⑨ 、命はほしいとは思いません。「——」
 九四〇 ③ な羽をひろげたかと思うと、ひらりひらり
 九四五 ⑤ が、それおそろしく思われてきました。白
 九四九 ⑤ いてきました。風と思つたのは、そうでは
 九四九 ⑪ ままで、みにくいと思つていた自分のから
 九四九 ④ そんなことをくもは思いました。もくろ
 九四九 ⑥ とができるものかと思ひました。その少女
 九四九 ③ とくさんもうれしく思ひました。かしこそ
 九四九 ④ つづけていきたく思ひます。わざわざ遠
 九四九 ⑥ えを、つくりたいと思ひます。庭の木に小
 九四九 ⑩ たんねんにみようと思ひます。また、くも
 九四九 ② しらべておきたいと思ひます。こんな動植
 九四九 ⑥ しらべていきたく思ひます。観察すれば
 九四九 ② 考へてしらべたいと思つてゐます。たとえ
 九四九 ⑤ よく考へてみたいと思ひます。また、一つ
 九四九 ① をさがしてみようと思ひます。もし、弟や
 九四九 ③ えていつてみようと思ひます。このように
 九四九 ⑤ がけを、もちたいと思ひます。(三)
 九四九 ⑦ よにはたかたきたいと思ひます。家では、弟
 九四九 ⑨ 手助けとなりたく思ひます。父や母のた

十三一 ⑥ けあつていきたく思ひます。かげで人の
 十三一 ⑧ に学んでいきたく思ひます。自分をえら
 十三一 ⑨ かしてみた。だが、思うように動くものは
 十三七 ⑨ こへつていこうと思つたのです。ところ
 十三七 ⑧ ったのではないかと思ひました。これは、
 十三七 ⑥ まえ足をあげたかと思うと、その足をなめ
 十三七 ⑤ 。五六歩いったかと思うと、よそのおぼさ
 十三七 ② いとういてきたかと思うと、また、すぐ水
 十三七 ⑥ 、自分がほんとうに思つたり、感じたり、
 十三七 ⑧ てきたのでしよう。思うことがどんどんと
 十三七 ⑤ ふみだしていこうと思ひます。妹の作文
 十三七 ③ から、なんだろうと思つて、二階の窓から
 十三七 ⑥ とを、喜ぶだろうと思ひます。能といつし
 十三七 ⑫ ⑨ 、いちばん早道と思つたのです。が……
 十三七 ③ しまう。それ思うと、ぼくは胸がわ
 十三七 ④ っぱなものだと思う。「略」。「略」
 十三七 ③ いじょうぶだと思ふんだ。「略」。「
 十三七 ⑫ ⑨ 、同じことだと思ふ。いいコックスが
 十三七 ⑩ ⑨ たちにすまないと思ひました。そこで、
 十三七 ① ⑨ したらなあとと思ふけれど。「略」。
 十三七 ⑩ ⑨ 自分でとりたく思ひ、となりのおばさ
 十三七 ④ ⑨ 秋のみのりも思われる。ひと日の
 十三七 ⑩ ⑨ の心持を頼もしく思ひました。すこしぐ
 十三七 ④ ⑨ の勇氣を頼もしく思ひました。じゃが
 十三七 ③ ⑨ 北海道へいこうと思ふ。北海道へじゃが
 十三七 ③ ⑨ 日ほどまえだと思ひます。「看護人は、
 十三七 ⑫ ⑨ ろうとは、とても思われませんでした。
 十三七 ③ ⑨ にはたいへん長く思われませんでした。医者が
 十三七 ③ ⑨ よくなたつたように思ふといひました。夕
 十三七 ① ⑨ わかるであらうと思ふと、いろいろのこ
 十三七 ⑩ ⑨ こしよくなるかと思へば、思ひがけなく
 十三七 ⑩ ⑨ なんて呼ぼうかと思つてゐるうち、五日

十三七 ⑤ ⑨ いいだしたのかと思ひながらやつてみま
 十三七 ⑦ ⑨ た。少女はなにを思つたのか、ふと庭さ
 十三七 ③ ⑨ まえたいものだと思つて、しきりに木炭
 十三七 ⑩ ⑨ しくなりたく思つてゐるのです。が
 十三七 ⑦ ⑨ が鳴るんだなと思つてやつてゐるうち
 十三七 ⑩ ⑨ のなかまだなと思つてよくきいてみる
 十三七 ⑥ ⑨ おいでだろうと思ひました。あなた
 十三七 ⑥ ⑨ す。けれども、思うようにいきません
 十三七 ⑩ ⑨ あればいいなと思ひましたよ。あれが
 十三七 ② ⑨ それを覚えたいと思ひます。学校から帰
 十三七 ⑤ ⑨ まそこにいitかと思ふと、もう次のへや
 十三七 ③ ⑨ ながら、ゆかいに思ひました。私は、先
 十三七 ⑤ ⑨ 先生のクラスを思う愛情とが、一つに
 十三七 ⑤ ⑨ 命のない人形を思うまに動かし、
 十三七 ② ⑨ 長者は、なんと思つたか、なん千ア
 十三七 ⑩ ⑨ た。水を飲もうと思つて小川の岸にてて
 十三七 ⑥ ⑨ めました。曾良は思ひました。芭蕉はた
 十三七 ⑩ ⑨ にかけたしたいと思ひました。いざ子ど
 十三七 ⑦ ⑨ ていられるかと思ふと、どうしてもこ
 十三七 ⑦ ⑨ ければならぬと思ひました。火のでる
 十三七 ⑩ ⑨ 二少年のことを思つては、ふるいたつ
 十三七 ⑨ ⑨ とんでゐる景色を思ひ、すすきの野原を
 十三七 ⑩ ⑨ とんでみたいと思ふ。正男は、きよ年
 十三七 ② ⑨ んで帰つたことを思ふ。秋子は、おと年
 十三七 ⑩ ⑨ わつてゐるように思われまふ。こういう
 十三七 ⑩ ⑨ にも育つだろうと思つて、実際に試験し
 十三七 ⑩ ⑨ の中の声のように思われる。春は、なえ
 十三七 ⑩ ⑨ さん。だれかと思つた……え、いま学
 十三七 ⑩ ⑨ う。だれかと思つたんですよ。だつ
 十三七 ⑩ ⑨ れを見て、どう思ひますか。「ぼくは、
 十三七 ⑩ ⑨ ているだろうと、思つたからです。ちょ
 十三七 ⑩ ⑨ へんいい絵だなと思ひましたが、おじさ

十三 57 9 会 あさんらしいと思うのです。「へ略」。
 十三 57 10 会 「へ略」。「そう思うかね。いかにも、
 十三 59 3 会 る。これはどう思うかね。」それは、
 十三 59 9 会 「ふふん、そう思うかい。きちんとし
 十四 6 1 ます。老いた母を思う子の眞情は、遠く
 十四 6 5 会 お話をしようと思います。私は短い旅
 十四 6 9 会 いらっしやると思うことでした。子ど
 十四 9 12 会 もたちのことを思って、安らかに生き
 十四 9 12 会 ださるのだと、思いたいのです。ラン
 十四 10 8 会 になるといいと思います。ちっともむ
 十四 10 12 会 あさんのことを思っているのです。じ
 十四 13 5 会 あさんのことを思っております。夜を
 十四 13 7 会 ます。あなたを思うすべての心をかた
 十四 13 10 会 あさんのことを思っています。あなた
 十四 14 7 会 あなたのことを思うとき、「へ略」。「と
 十四 14 12 会 、こんなことが思われてくるのです。
 十四 16 2 会 さめにしたいたいと思っています。私がそ
 十四 16 4 会 う。いつもこう思っていてください。
 十四 16 5 会 。あなたが私を思ってくださいるとき、
 十四 16 6 会 あさんのことを思っていると。ランブ
 十四 16 8 会 って、うれしく思いました。すこしこ
 十四 22 4 会 本語だとばかり思っていました。」と、
 十四 25 5 会 なかおもしろいと思った。だから、これ
 十四 27 3 きたのだらうかと思った。それで、先生
 十四 27 8 会 日本語のように思われてきたのだ。」
 十四 27 11 会 ん調べてみたいと思った。そこで、「へ略
 十四 28 4 会 らきたことばとっていい。たくさん
 十四 30 1 会 、そればかりとも思われません。かりに
 十四 30 6 会 んねんなことだと思えます。小さな島國
 十四 32 4 会 とはえんがないと思っている人もあるで
 十四 35 6 会 ませんか。これを思えば、人間の力とい
 十四 48 2 会 がだせるものだと思います。そうして

十四 48 4 会 いきたいものだと思います。かれは、
 十四 51 7 会 しろいだらうと思います。「こいうい
 十四 54 3 会 部私のものだと思えます。」「へ略」。「
 十四 55 5 会 、私のものだと思えます。」「へ略」。
 十四 57 2 会 部私のものだと思えます。」「つるがこ
 十四 57 10 会 ら、どうなると思えます。いつたい、
 十四 61 9 会 しつかえないと思えますが、どうでし
 十四 65 7 会 、わかるだらうと思えます。つぎに、湯
 十四 68 12 会 どよくにたものと思つてさしつかえあり
 十四 70 10 会 がにげるためだと思つていいのです。も
 十四 79 12 会 たようなものだと思ひました。いつたい
 十四 80 3 会 ことではないかと思ひます。または、自
 十四 80 7 会 う一つの眞理だと思ひたので、そのこ
 十四 86 6 会 てわるいものとは思われないが、いますこ
 十四 86 8 会 発見されるように思われる。たとへば、
 十四 87 6 会 も、おもしろいと思う。一面の銀世界と
 十四 88 3 会 つすぐに歩こうと思つたのであろうが、
 十四 90 6 会 こちら歩きながら思つた。女の子は、つ
 十四 91 7 会 はもつてこいだと思つたのであろう。そ
 十四 93 9 会 で、そんなことを思つた。ただひと目で
 十四 95 6 会 なほのおのように思われた。これは、ま
 十四 95 6 会 ちだらうかとさえ思つた。そればかりで
 十四 96 3 会 方へのぼした。と思うと、そのとき、ほ
 十四 99 4 会 べ。」と、女の子は思つた。この子にとつ
 十四 100 6 会 くなつては困ると思つたので、急いで、
 十四 100 12 会 明かるくはないと思われるくらいであつ
 十五 14 2 会 圖 ばらのひと花思わぬをゆららにあか
 十五 24 7 会 かりません。そう思うと、勇ましいひつ
 十五 26 9 会 らないと、少年は思ひました。ちやうど
 十五 28 1 会 羽音をさせたかと思うと、もうたまらな
 十五 30 5 会 し舞いたつたかと思うと、こんどは両羽
 十五 31 3 会 。大わしは、この思わぬいでにおどろ

十五 32 8 会 うの音がしたかと思うと、いままでむち
 十五 55 4 会 、戦争中で費用が思うようにつかえない
 十五 80 9 会 ますように。そう思いながら、年よりの
 十五 80 12 会 時代がはずかし思われるようになるこ
 十五 90 11 会 あまり上等とは思われないからです。だ
 十五 91 10 会 「あなたはそう思うの。」ふとつた幸
 十五 94 11 会 ちがつたように思うのは目のせいです
 十五 96 4 会 の中には、人が思うよりもつとたくさ
 十五 115 4 会 國に来ていて思つてゐるけれど、お
 十五 120 7 会 けばよかったなと思つた。「へ略」。「私
 十五 121 3 会 んだ。けれども、思うことがすこしも書
 十五 121 6 会 これもいいなと思つた。読んでゐるう
 十五 122 11 会 んとうにうれしく思ひました。なぜいま
 十五 123 2 会 うと、さんねんに思ひました。先生がた
 おもろぞんぶん 「思存分」(副) 3 思うぞんぶん
 十一 17 7 会 こうしておまえたちに話すようなことば
 が、思うぞんぶんつかつてみたくなります。
 十一 5 11 会 その体格で、思うぞんぶん、長いオー
 ルをこいだら、オールがぎゅうぎゅうとなつて、
 十五 61 8 会 家につれられて行つても、思うぞんぶん
 にふるまつた。
 おもええる 「思」(下二) 4 思える 《一エ》
 六 72 8 会 もちろん生きてゐるとは思われないが、死ん
 でいるとも思えない。
 八 9 9 会 といへば、いかにもおくびようものよう
 にも思えましようが、
 九 140 1 会 みにくくと思つてゐた自分のからだも、も
 うみにくくとは思えなくなりました。
 十五 82 7 会 みんなびつくりするほど、とてもほんと
 うと思えないほど、ふとつていて、
 おもかげ 「面影」(名) 2 面影
 十二 90 5 会 話すことばは、その場その場にあらわれ

るその人の面影ということもできよう。
十二115 2 これで、日本の面影を写した写真帳が終りました。

おもさ「重」(名) 3 おもさ 重さ

五50 3 罫 のたりのたりとわたし船、おもさにゆれゆれ岸をでる。

十五25 5 そうして、からだの重さで上からぎゅうぎゅうとおしつけ、

十五25 10 大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなって、

おもし「重」(形) 1 重し「一重」

十五15 5 罫 ひるすぎていよよにあかきばらの花いよよに重くかたむきふかむ

おもしろい「面白」(形) 62 おもしろい「一・一・イ・カッ・カロ・ク」

一24 5 ここが「ばん おもしろかったと おもいます。

一39 4 ゆうべ、おもしろいゆめをみました。
二11 10 はじめはむずかしいとおもいましたが、

だんだん おもしろくなりました。
三43 9 罫 「それはおもしろかるう。」といって、

すぐに なかまを 大ぜい つれてきました。
三63 3 そうして、そこで おもしろく あそんでか

ら丘をおりて みずうみへ きました。
三69 7 それから みんなは おもしろく あそびま

した。
四73 2 たくさん おもしろいのが できました。

四84 7 二ばんめに、となりのうちの ひでおさんが、おもしろい紙しばいをしました。

四97 6 罫 おもしろいから、かめをころがしているのです。

四105 9 罫 それは おもしろい。

四111 10 罫 では、みんなに おもしろい おどりを おどってもらいましょう。
四112 6 罫 「おもしろい、おもしろい。」手をたたいて よろこびます。

四112 6 罫 「おもしろい、おもしろい。」

五14 5 罫 「おもしろかった。」
五84 10 罫 それはおもしろい。

五106 9 罫 空はひろく おもしろいよ。
五107 4 罫 「ここにいて、なにか、おもしろいことがあるのかい。」

六57 9 おもしろいことも、おかしいことも書きま

す。
六59 3 私は、きのう、おもしろいことに気がつき

ました。
六61 4 これがわかったとき、私はおもしろくてな

りませんでした。
六70 6 罫 「ほんとに歩くとおもしろいな。」

六70 7 罫 お話したら、なおおもしろいわねえ。
六84 5 罫 おもしろくなかった。

六99 9 そのうちに、ふと、おもしろいことを発見

した。
六107 5 しかし、ぼくは、このおかげで、おもしろ

いことに気がついた。
六108 11 これはおもしろいぞとぼくは思った。

六126 2 罫 それはおもしろい。
六133 8 罫 ただ遊ぶんじゃ、おもしろくない。

七15 9 このような、いろいろなつかいかたがある

のは、おもしろいではありませんか。
七40 2 乗客は、高いところを渡っていくさぶろう

を、おもしろそうに、みおくらっていました。
八57 9 罫 それはおもしろい。

九10 6 また、さまざまな情景を写しだすこともで

きるという話がおもしろかった。
九11 11 それをたいこであらわすというのだからお

もしろい。
九12 5 風の音よりも、もっとおもしろいと思った

のは、
十54 8 そのけむりやほのおがおもしろいらしく、

十64 3 外国とはおもむきのちがったおもしろいもの

のが、たくさんありますが、
十65 7 なにをしてもにくまらない、おもしろい人

物になっています。
十一4 10 なによりおもしろいのは、大学のボート

がいつもここで練習していることだ。
十一27 7 百文はらうと、おもしろい藝をしてみせ

てくれます。
十二18 8 罫 これが鳴るんだなと思ってやっている

うちに、だんだんおもしろくなったのです。
十二33 6 私は、すぐこの指の遊びがおもしろく

なって、それをまねようと思いました。
十二45 7 罫 「おもしろいでしょうね。」

十二45 8 罫 そりゃ、おもしろいさ。
十二48 6 罫 そのうえ、手がるでおもしろいし、自

分で作って自分で動かすのは楽しいものだよ。
十二103 7 クロスワードパズルのようにならんだ文

字があったりして、おもしろいお金です。
十三28 8 まず、もの賣りが鳴らして来る鳴りもの

の音がおもしろい。
十三31 8 それが、見ている人には、かえっておも

しろい。
十三55 1 罫 なにかおもしろいことでもあるのか。

十四25 5 あたりまえのことだが、なかなかおもしろ

いと思った。
十四51 7 罫 『略』』という話しあいをやってみ

たら、おもしろいだろうと思います。

十四628 自然の現象を観察し、研究することのす
きな人には、なかなかおもしろい見ものです。

十四655 湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろ
ろ自分でためしてみると、おもしろいでしょう。
十四6510 これがまた、よく見ていると、なかなか
おもしろいものです。

十四867 いますこしふかく考えれば、さらにおも
しろい場面が発見されるように思われる。

十四875 ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情
をあつかっても、おもしろいと思う。

十四895 こんな場面を、映画独特の手法によって、
おもしろく編集できないだろうか。

十五2111 それがコトコトと音をたてて下の方まで
落ちていくのを、おもしろそうに見ていました。

十五462 ひくい屋根も、あけはなした店も、のき
先にかかっているおもしろいかんばんも、

十五575 ものずきな私は、それはおもしろいと、
教授の申し出でをさっそく承知して、

十五917 それがおもしろいの。
十五918 がおもしろくないはずはないでしょう。

十五1112 がおもしろいなあ。
おもしろがる。〔面白〕(五) 1 おもしろがる

《一ツ》
三217 みんなおもしろがってみました。

おもしろさ。〔面白〕(名) 4 おもしろさ
八511 — そのめずらしさ、おもしろさに、黒山

の人ばかりだったのです。
十288 観察すればするほど、自然のおもしろさも

わかり、そのふしぎなことにうたれ、
十二4711 人間の美しさやおもしろさが生まれて

くるのだ。

十二932 そこにことばとしての性質があり、おも
しろさがある。

おもしろみ。〔面白〕(名) 2 おもしろみ
十二562 ただおもしろみがあるばかりでなく、と
うといことである。

十四624 ただそれだけでは、なんのおもしろみも
なく、ふしぎもないようですが、

おもた。い。〔重〕(形) 2 オモタイ 重たい。《一
イ》

十496 〇オモタイカラ モッテ イッテ アゲ
ルノヨ

十695 なにかはいっているときみえて、重たい。
おもち。〔御餅〕(名) 2 おもち

一5910 みんなよろこんで、めいぶつのおだんご
や、おもちを、ごちそうしてくれました。

五223 おじいさんにおあいして、おもちや、まっ
白にこなふいたほしがきなどをいただいたいて、

おもちゃ。〔玩具〕(名) 5 おもちゃ
四719 これにあたった人には、おもちゃのね
こと、いぬとをあげます。

五5710 おもちゃみだいた。
八585 すると、おもちゃのように小さな汽車が、

けむりをはいて走ってくる。
十三282 遊ぶといつても、べつに、おもちゃや絵

本などを持って遊ぶわけではない。
十五659 車のついたみごとなおもちゃを私に送っ
てくださった。

おもちゃやさん。〔玩具屋〕(名) 1 おもちゃ屋さん
十三305 「あの音は、おもちゃ屋さんだ。」

おも。つ。〔御持〕(五) 1 おもつ 《一チ》
一622 どなたが、おもちになっても、たまは

やっぱりたまです。

おもて。〔表〕(名) 5 おもて。ひうらおもて

四907 学校へ かよう子どもたちのことを思っ
て、おもてのとおりをさつさとほく。

七284 はるおは、さつきから、おもてで遊んで
いますよ。

八541 まずしいこじきのようなものが、おもてに
立っていました。

九491 おもてにでてみると、まわりの山は、みん
な、たつたいまできたばかりのように、

十603 おかあさんが、あかちゃんをだっこして、
おもての通りへでていらつしやった。

おもて。〔面〕(名) 3 おもて
八856 あひるの子は、水のおもてがすっかりこ
おってしまったように、

十184 いけのおもてにはじける雨あし。
十四737 湯のおもてに、にじの色のついた、きり

のようなものがひと皮かぶさっており、
おもなが。〔面長〕(形状) 1 おも長

十一637 少年は、色のあざ黒い、おも長な顔で、
考えぶかそうな目をしていました。

おもに。〔重荷〕(名) 2 重荷
十一423 もうそうちくも重荷にたえず、つばき

の上にばたばた落す。
十五282 もうたまらなくなったのか、その重荷を

ふり落すように、
おもに。〔主〕(副) 3 おもに

九774 むかしといつても大むかしのことだが、
貝などをおもにたべいたときがあったらしい。

十四262 はじめオランダからはいり、そののちは
ドイツ医学がおもに傳わったとうかがったが、

十四7012 ひやされるのは、おもに、まわりの茶わ
んにふれた部分だけになります。

おもみ〔重〕(名) 1 重み

十二162 力のこもった角、まるみのある面、重みのかかった枝のつけね、ふわふわした軽い葉、

おもむき〔趣〕(名) 3 おもむき

十642 日本の絵画や、庭園や、建築にも、外国とはおもむきのちがったおもしろいものが、
十二554 なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。

十五6712 たどりついたげんかんには、おもむきのあるかねがつるしてあって、

おもらう〔御貰〕(五) 1 おもらう 《ーイ》

十四1077 よく説明しておもらいになるといいと思います。

おもり〔重〕(名) 1 おもり

九854 石で作ったもの、それには石の矢じり、おもりなどいろいろあります。

おもり〔御守〕(名) 1 おもり

五887 金 きょうは、おにんぎょうのおもりのしかたをしてみせてあげよう。

おもわず〔思〕(副) 25 おもわず 思わず

一649 おもわず ぼけつとをさぐりました。

二582 わたくしは、おもわず、「略」といいますと、

六85 子どもたちは思わずかおをみあわせた。

六108 ふさぎこんで下をみつめていた女の子が、思わず「略」とさげんだ。

六1106 それでぼくは、思わず声をたててわらってしまった。

七117 じょうずなできばえをみたとき、感心して思わず手をたたきます。

七381 私は、思わず、「略」と、頭をさげました。

八78 思わずおきだして、「略」とほめたり、

なでてやったり、

八139 ほおじろの声をきくと、ピオのすがたがありありとうかんできて、思わずなみだぐみます。

八808 あひるの子は、きゆうにおよぎたくなったので、にわとりに思わずその話をした。

九3910 木のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず木にしがみついたりしました。

九438 大きなかきが、ころころと二つ三つ落ちているのをみたときは、思わず手にとりあげます。

九583 いちろうは、思わずわらいだしながら返事をしました。

九1006 やまだ、思わずわらいだす。

九1111 みんなは思わず手をたたいた。

九137 思わずそちらをみると、こうもりは、ひょうきんなかつこうをして、

十一539 そのことばをきいて、そこらの乗客は思わずほおえんだ。

十一816 少年は、思わずはつとどびあがりました。

十四52 私たち自身の生活を思わず振り返らせないではない強い真実の力が、

十四887 それとも、心の中で考えごとをしていて、思わず方向がちがったものであろうか。

十五233 みんな草の上へひれふすように、思わずたおれてしまいました。

十五248 ひつじかいは、身のあぶないこともわすれて、思わず鳥のせにとびついたのでした。

十五292 すると、鳥は、不意のしゅうげきにおどろいて、思わず羽ばたきするとともに、

十五3211 少年はほっとして、思わず後へたおれかかりましたが、

十五686 「略」と、家の人によびかけながら、

おもわずとびこんだ私をだきしめた。

おもわぬ〔思〕(連体) 1 思わぬ

九411 思わぬところに炭やき小屋があつて、ゆるいけむりのあがるのがみえました。

おや〔親〕(名) 5 親 じいちゃん・ははおや

七972 白の子うさは、親について、はじめて、巣からはいだしてきました。

八197 あぶらぜみでは、七年もかからないと、親になることができないといいます。

九283 親のまたくぐる子うしや草の花

十五742 親の目から見れば、自分の子女は、その性質がどんなにちがっていても、

十五747 親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、

おや(感) 20 おや おやつ

一119 おや、どちらもおなじでしたね。

二2910 おや、十一ぴきしかない。

二679 おや、ひばりさんだ。

三758 「おや、さっきのお日さまの光、どこへいったの。」

四1035 おや、だれかと思つたら、かめさんか。

五325 おや、むこうからも長い、長い貨物列車がやってきます。

五481 おや、こんな花が——またみつけた、きれいな花を。

五858 おや、おまつさんがいない。

六2810 おや、だれかたずねてきたらしい。

六337 おや、かしくんじゃないか。

六835 朝から一ぴきもつれないなんて——おや、ひく、ひく。

六892 おや、あんなところにいどがある。

六1028 おや、だれかが、しょうじのあいだから顔

をだしている。

七30 9 会 おやつ、おかあさん、おかあさん。

七32 6 会 おや、ひげをはやしてろ。

九83 1 会 おや、これはなんだろう。

十五59 8 会 おや、これはまた意外だ。

十五92 5 会 おや、光さん、ごらんよ。

十五101 3 会 おや、そうなの。

十五119 9 (ほかの「喜び」たちを見ながら) おや、みんなないているのだな。

おやあひる 「親家鴨」(名) 11 親あひる

八60 10 けれども、親あひるは、ひながでてくるまえに、もうつかれきっていた。

八61 5 「略。」と親あひるがいうと、ひなたちはすぐとびだしてきた。

八61 8 みどりは目のためにいいから、親あひるはみただけみさせてやった。

八62 3 「略。」といいながら、親あひるは立ちあがった。

八65 3 親あひるは、じっとその子をながめた。

八65 9 親あひるは、そのひなをみんなつれて、水のところへおりていった。

八66 8 「略。」と、親あひるはいった。

八67 8 そうして、親あひるにつれられたひなたちが通っていくと、

八68 5 「略。」と、親あひるがいった。

八68 11 すると親あひるは、「略。」といってかばった。

おやうさぎ 親あひるですら、「略。」といった。
七95 図 うまれるときはまるくなっていました。おやうさぎがしたのです。
七97 8 黒の子うさぎが、ちちをのもうとして、親

うさぎのちちにすがりつきますと、

七97 9 親うさぎは、足でけて、のませませんでした。

七98 3 子うさぎは巣の中でねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。

おやおや (感) 2 おやおや

六21 10 会 おやおや、ありさんがきたよ。
十五94 6 会 おやおや、なんてみともないざまだろ。

おやく 「御役」(名) 1 お役
十一22 8 会 わたしがみなさんのお役にたたないで、すみません。

おやく 「親子」(名) 4 親子 ↓ すずめおやく・ダ
ルガスおやく

六9 8 親子はそうがかりでさがしはじめた。

六38 2 立ちならぶビルディングのあいだから、とびあがつてくる親子のつばめ。

六38 8 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどってきかしの近くにとまる。

十一25 1 会 「どんなことがあっても、親子四人、わかれないうちにしましうね。」

おやさしさ 「御優」(名) 1 おやさしさ

十四15 5 手 おかあさんのおやさしさこそ、私にとっては、いちばんとうとい宝なのです。

おやすしい 「御易」(形) 1 おやすい 《—イ》

十五57 12 会 それはおやすいご用だ。
おやすずめ 「親雀」(名) 1 親すずめ

四89 3 会 「略。」と親すずめ。
おやすみ 「御休」(名) 1 おやすみ

十二75 7 会 「先生、もうおやすみですか。」その声は、毎日ききなれている曾良の声です。
おやすみくださる 「御休下」(五) 2 おやすみく

ださる お休みくださる 《—イ》

一51 4 会 みなさん、どうかゆっくり おやすみください。

九61 1 会 まあ、ゆっくりお休みください。
おやすみなさる 「御休」(五) 3 おやすみなさる

《—イ》
一26 3 会 「おやすみなさい。」
一26 4 会 「おやすみなさい。」ことりもねむりま

した。
九143 7 会 おやすみなさいな。

おやせみ 「親蟬」(名) 2 親せみ

八14 5 親せみが、あのほそくどがった口のさきで、かたい皮にあなをあけて、

八16 6 虫は、小さいけれど、親せみによくにて、ほそいとがった口をもっています。

おやだけ 「親竹」(名) 1 親竹

十62 5 もう、親竹と同じくらいに高くなって、風にゆれていました。

おやたち 「親達」(名) 1 親たち

八18 7 そのかわり、親たちの大てきのすずめもねこもやってこないから、安全です。

おやつばめ 「親燕」(話手) 6 親つばめ

六38 7 親つばめ「さあ——」

六38 11 親つばめ「まあまあ、かかしさんですね。

六39 7 親つばめ「でも、村に帰らなくちゃ。

六40 1 親つばめ「ああ、いい考えがある。
六41 8 親つばめ「さあ、かかしさん、いまから帰るのよ。」
六42 2 親つばめ「南へひきあげるついでだから、
おやつばめ 「親燕」(名) 5 親つばめ
六40 3 親つばめ、子つばめをつれてさる。
六41 6 親つばめと子つばめが、かかしのそばにと

まる。

九15 5 この中には、親つばめもいますが、ことし

生まれた子つばめが、たくさんまじっています。

九15 6 もう大きさは親つばめと同じですが、

九16 1 まだ、口ばしの下の赤色が、親つばめほど

くくありません。

おやね 「御屋根」(名) 1 おやね

三9 4 鯛 すみれ、たんぽぽ、れんげそう、花の

おやねがうつくしい。

おやゆび 「親指」(名) 1 おや指

十二53 9 ひとさし指を首の中にいれ、おや指とな

か指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。

おや・る 「御遣」(五) 3 おやる 《一リ》

四97 9 かいそうだから、はなして おやり。

四98 1 会 でも、ゆるしておやり。

六96 10 会 たいののどから、つりばりをとっておや

り。

おゆ 「御湯」(名) 3 おゆ お湯

三36 6 会 おゆがわいています。

十四70 7 それも、お湯が熱いほど、もようがはっ

きりします。

十四70 9 つぎに、茶わんのお湯がだんだんにひえ

るのは、

およぎ ひたちおよぎ・みずおよぎ

およぎまわ・る 「泳回」(五) 3 およぎまわる 《一

ラール》

八61 2 ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎま

わるほうがすきであったからである。

八85 7 あひるの子は、《略》ように、水の中をお

よぎまわらなければならなかった。

八85 8 しかし、一晚ごとに、そのおよぎまわるあ

ながだんだん小さくなっていった。

およ・ぐ 「泳」(四五) 24 およぐ 《一イーギ・一

グ》

三35 3 会 いけには、きんぎよが三びき およいで

います。

五69 2 おじいさんが金のさかなをよびますと、お

よいできてきました。

五70 8 おじいさんが金のさかなをよびますと、金

のさかながおよいできました。

五76 11 しっぽでビシャリと音をさせて、海の中へ

およいでいつてしまいました。

五79 9 「葉のかげぼうしが、魚のようにおよいで

います。」

七5 5 白いちようが、ういたりしずんだりしながら、

光の中をおよいでいたが、

八64 5 会 そんなものはほつておいて、ほかの子ど

もに、およぐことを教えてやるがいいよ。

八66 3 水はひなたたちの頭の上を流れたが、すぐに

うかびあがってきて、うまくおよいだ。

八66 5 みにくいあひるの子も、いつしよになって

およいだ。

八69 4 会 それに、ほかのものと同じようにおよぐ

し、

八69 6 会 いや、ほかのものよりうまくおよぐと

いってもいい。

八80 8 あひるの子は、きゆうにおよぎたくなった

ので、にわとりに思わずその話をした。

八81 4 会 でも、水の上をおよぐのは、いい氣持で

すからぬ。

八81 7 会 水の上をおよいだり、もぐったりするの

がいい氣持かどうか。

八83 4 そうして、およいだりもぐったりした。

八88 11 はくちようは、つばさをサラサラと鳴らし、

かるく水の上をおよいでいた。

八89 9 「略。」そういつて、水の中にとびこみ、

はくちようのほうへおよいでいった。

八91 6 大きなはくちようたちは、そばへおよいで

きて、くちばしでかるくなでてくれた。

十二62 10 水を飲もうと思つて小川の岸にでみる

と、美しい小魚がおよいでいる。

十四45 6 しずんでいく船からほうりだされて、黒

い波の間をおよいでいました。

十四47 12 自分なんか、およいでいるだけがせいぜ

いなのに、

十四48 5 かれは、歌の声をたよりに、その方にお

よいで行きました。

十四50 1 さて、おじようさんの歌をたよりに、

マッケンナがおよいで行ったように、

十五6 5 会 六つほどの子がおよぐゆえ水わかな

およそ 「凡」(副) 1 およそ

十四34 6 博士の計算では、うちゅうのさしわたし

は、およそ二十億光年ということだ。

およ・ぶ 「及」(五) 4 およぶ 《一ビーブーン》

ひかんがえおよぶ

四104 6 会 お礼には およばないよ。

十四43 3 その数は、じつに八十五万にもおよんだ。

十二82 9 みるからにりつばな体格は、小さな清水

選手のおよぶところではありません。

十四8 10 会 なにも、勇氣をだしてわすれてしまお

うとお思ひになるにはおよびません。

およ・ぶ 「御呼」(五) 2 およぶ 《一バービ》

三12 6 「略。」とおつしやつて、はんたかを

およびになりました。

三17 3 王さまは、すぐはんたかを およびにな

りました。

およみあ・げる 「御読上」(下) 1 お読みあげる

《一ゲ》

十一4310 女の先生が、卒業する子どもの名をお読みあげになりました。

およめ 「御嫁」(名) 4 およめ

三1043 〇 「どうかして、あんなにきれいな人がおよめにもらいたいものだ。」

三1049 〇 わたくしはだれのところにもおよめにいきません。

三1058 〇 それができたらおよめにいくといいました。

五434 〇 ぼくのねえさんは、あさひがわへおよめにいっています。

およろこ・ぶ 「御喜」(五) 3 およろこぶ お喜ぶ

《一ビ》

四821 〇 世界の子どもにうたわれて、きょうは、エスさま およろこび。

六982 〇 〇 だいじなだいじなつりばりが、できて神さまお喜び。

八4511 〇 これをきいて、王さまはたいへんお喜びになりました。

オランダ (地名) 2 オランダ

十二1124 〇 オランダのターヘルアナトミアという人体の絵をきいて説明した本を、

十四262 〇 日本にはいつてきた西洋医学は、はじめオランダからはいり、

オランダいがく (名) 1 オランダ医学

十四264 〇 このことから考えあわせてみると、コレラは、オランダ医学がいつてきたときに、

オランダこ (名) 1 オランダ語

十四2311 〇 ズボンフランス語、ゴム、ランドセル、コーヒー、コレラ、アルコールはオランダ語、

おり 「折」(名) 1 おり ↓ ほねおり・ゆびおり

六1067 〇 なにかよいおりはないかと思っていたら、

おり 「織」 ↓ はたおり・はたおりぼし

おり 「居」(ラ変) 2 おり 《一リ》

九294 〇 〇 かやごしの電燈のたまみておりぬ

九1183 〇 〇 ふくじゅそうのつばみいとおしむおさな子や夜はいろりの火にあてており

オリブいろ (名) 1 オリブ色

九552 〇 まわりは、りっぱなオリブ色のかやの木

の森でかこまれていました。

おりかた 「織方」(名) 1 織りかた

十341 〇 いまのようなぬのの織りかたをしていたのは、やがて、困るときがくるにちがいない。

おりから 「折」(副) 2 おりから

九193 〇 おりから南へ飛行中だったつばめは、食にうえ、つめたい雨にずぶぬれになって、

十一134 〇 おりから、港の方でふえが鳴る。

おりこ・む 「織込」(五) 1 おりこむ 《一マ》

十二555 〇 子どものときからききなれた傳説が、そのあいだにおりこまれていたからである。

おりす・てる 「折捨」(下) 1 おりすてる 《一テ》

十五95 〇 〇 まんじゅしやげおりすてである道のまんじゅしやげさき続く

曲げるためなのです。

おりもの 「織物」(名) 3 おり物 織物

五334 〇 この荷物の中に、おり物や、お茶や、しんじゅなどがはいっています。

八287 〇 そのおり物の美しい光に、天帝もすっかりおみとれになりました。

十二97 〇 〇 ちょうど、織物をちゅうとでたち切るのと同じことです。

おりよく 「折良」(副) 1 おりよく

八872 〇 おりよく戸があいていたので、あひるの子は、雪の中の草むらへはいりこんだ。

おりる 「降」(上) 51 おりる 《一リ・リル・リレ》 ↓ かけおりる・すべりおりる・とびおりる・まいおりる

三585 〇 おりればみずうみへでられますし、のぼれば大きな木のあるところへでられます。

三594 〇 〇 「いや、みずうみへ、おりようよ。」

三633 〇 そうして、そこで おもしろくあそんでから丘をおりてみずうみへでました。

三715 〇 〇 ところで、デビッドはいすからおりて、つまんでみました。

三745 〇 〇 それで、みんなはいすをおりて、その光の中をあるいていて、

三1132 〇 そのうちに、空から大ぜいの天人たちが、雲にのっておりてきました。

四542 〇 〇 がんのなかまは、この林の中におりました。

五443 〇 〇 山に雨が降る、きりがおりる、夜は夜つゆがおりる。

五444 〇 〇 夜は夜つゆがおりる。

五67 〇 〇 川は野原におりてくる。

五88 〇 〇 「おりるかたがすんでから、ごじゅんに

お乗りください。」
 五123 〇 おりましょう。
 五141 〇 「とまってから、おりるんだよ。」
 五143 〇 「にいいさん、もうおりていいの。」
 五238 〇 知らないおじさんが、おりるとき、『略』。』といって、かけさせてくれたんです。
 五279 しんきちくんは、電車をおりてから、元氣にあるいて帰りました。
 五106 〇 ある日、二三ぼのひわが、さんちゃんのうちまつの木におりてきました。
 五108 〇 おりてこないかい。
 六18 〇 さもまんぞくそうにしき台をおりてきて、あせをふきます。
 六36 〇 根の方へおりていらっしやい——
 七10 〇 夜つゆがおりてきた。
 七21 〇 また、すずめがおりてきたよ。
 八15 〇 地面に向かつて、すべったところがったりしておりていきました。
 八15 〇 地面におりた虫たちは、やがて、思い思いにやわらかいところをさがして、
 八26 〇 七色の大きなそり橋を音もなく渡って、草花のさきみちている野原へおりてきました。
 八65 〇 親あひるは、そのひなをみんなつれて、水のところへおりていった。
 九36 〇 夏のあいだ、たきぎをせおって山からおりるとき、
 九39 〇 足もとの枝をおろして、やっとおりてくると、からだじゅうがあせです。
 九40 〇 「そんな高いところ、あぶないから、早くおりておいで。」
 九40 〇 「略」。』などいわれたが、ぼくはがんばっておりませんでした。

九109 〇 思い思いに、スキーのあとを雪の上に見えるきながら、小鳥のようにおりてくる。
 九109 〇 にこにこわらいながらおりてくるもの、まじめな顔でやってくるものなどさまざまである。
 九110 〇 「さあ、おりるよ。」というあいずをされた。
 九110 〇 それから、ぼくたちは、登っていつてはすべり、おりてはまた登った。
 九119 〇 その帰りに、近道をして谷をおりてくると、そこに小石でかこまれた美しい泉があった。
 十56 〇 ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり木の下におりていつてしまいました。
 十一52 〇 一停留所ごとに、おりる人と乗る人ともみくちゃになった。
 十二29 〇 いま、民ちゃんがひとりでおかて口から地面におりて、わたしのげたをひっかけ、
 十二36 〇 すいかずらのあまいにおいにひかれて、庭の小道をおりていきました。
 十三24 〇 夏、しもがおりるのはまったくやみ、
 十四71 〇 そういう部分からは、ひえた水が下へおり、
 十四72 〇 それが、おりた水のとどくじぶんにはひえて、そこからおります。
 十四72 〇 そこからおります。
 十四72 〇 湯の表面には、水のおりているところと、のぼっているところがほうぼうにできます。
 十五24 〇 草のしげついている場所を見つけて、そこへひつじをつれておりて来ますと、
 十五26 〇 一こも早く谷底の地面へおりてしまわなければならぬ。
 十五26 〇 どこでもいいから、安全な場所へおりなければならぬと、少年は思いました。

十五27 〇 ずんずん、落ちるように、下へ下へとおりて行きました。
 十五28 〇 ある岩角のすこしあき地のあるところを目がけておりて行きました。
 十五32 〇 少女の両親たちが、そのへんにいたひつじかいたちを頼んで、大急ぎでおりて来たのです。
 十五67 〇 私がだんをおりるのを待ちかまえていた老婦人が、
 おる『折』(五) 17 おる『ツ・ラ・リール・ロー』
 三92 〇 花を おらないでください。
 三92 〇 みにきた人が一本ずつ おってしまえばいまにみんななくなってしまうでしょう。
 三93 〇 どうぞおらないでください。
 三94 〇 一まいの紙で、いろいろなものを おることが出来ます。
 三94 〇 ふねを おることも出来ます。
 三95 〇 ピアノや ふくすけを おることも出来ます。
 三95 〇 きつねや、だましふねや、紙ふうせんなども おることが出来ます。
 四39 〇 さくらの 枝を おろうとしたとき、おじさんの ことばに 氣がついて やめました。
 四82 〇 まつの 木の 枝を立てて、色紙で おったつるや、ふうせんを 上げました。
 六13 〇 「そのかわり、ぼくが負けたら、この角を、おってしまってもいい。」
 六13 〇 しかさんに勝ったところで、あの角を おるなどということではできません。
 六13 〇 けれども、あなたの角はおりません。
 九34 〇 すっかりとりのぞいておかないといけないといわれて、ほねをおりました。

九38 3 〔手〕 かれ枝ならば、だれの山の木の枝でも、おってよいことになっています。

十一20 2 からだをしようぶにして、身代をもとのようにしたいものだ、ほねをおっていました。

十二7 3 庭さきにさいていた黄色なやまぶきの一枝をおってきて、それをしずかにさしました。

十四86 9 風にあおられた雪のむれが、道を消し、木をおり、汽車を立ちおうじようさせ、

おる〔居〕(五) 15 おる 《ラー・リール》 ↓ おはなしいたしおる

三108 10 かぐやひめも、そのたびに ごへんじをさしあげておりました。

六94 2 〔会〕 ただけは、病気でねておりますので、ここへはまいっております。

六94 4 〔会〕 ここへはまいっております。

七43 5 〔会〕 けれども、きょうは、楽しい旅行をしております。

七81 3 〔会〕 この人は、私どものらくだのことについて、それはよく知っております。

九117 2 〔文〕 青さをいれやればいけのふなはや青き葉のかげにきておる

十二7 1 〔会〕 雨で困っております。

十四13 5 〔手〕 おかあさんのことを思っております。

十四62 3 中には、熱い湯がいっぱいはいっております。

十四73 8 湯のおもてに、にじの色のついた、きりのようなものがひと皮かぶさっております。

十四76 3 同じような氣流のじゅんかんが、もっと大じかけに、陸地と海との間に行われております。

十五33 1 氣がつくと、もう自分のまわりには、おぜいのひつじかいが集まって来ており、

十五42 5 いま日本では、漢字と、かたかなと、ひ

らがなとの三種類の文字をつかっており、十五66 11 そのころは、新島のおぼさんは廣島ひろしまにおられて、

十五73 1 しきりにさがしものをしておられたが、やがてすがたをあらわした博士の手には、

おる〔織〕(五) 13 おる 織る 《ツツ・ラー・リール》 ↓ はたおりひめ

八28 5 林の中にごてんがあつて、中から、はたをおる音がひびいてきます。

八28 7 すると、さがしていたはたおりひめが、いっしんにはたをおっていました。

八31 7 ところが、はたおりひめは、あまりうれしいので、はたをおることをわすれてしまいました。

八32 4 はたおりひめは、毎日のはたをおりながらなきました。

十33 12 むのを織るしごと、けつしてゆるがせにしてはおかれない。

十34 5 はじめに目をつけたのは、むのを織るとき、たて糸のあいだをぬつていく横糸であつた。

十34 9 機械で動かせば、もっと早く織ることができし、

十34 10 もっと早く織ることができし、ひとりでに、ぬのがずんずん織られていくからである。

十36 7 村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎな機械に目をみはりながら、

十36 12 試運轉の日、その織機をあやつつて、りつぱにぬのを織つてみせたのは、佐吉の母であつた。

十二8 8 そのとき、母ははたを織っていました。

十五7 6 〔文〕 影絵めく牛馬朝日を織るあきつ十五11 5 〔会〕 いいえ、これは、おまえたちのほおずりと、おめめと、だつこと織つたのですよ。

おる〔折〕(下二) 1 おる 《ーレ》

十五5 5 〔文〕 遠くそののち かの木に、矢はまだおれで とどまりぬ。

オルガン (名) 9 オルガン

三38 2 〔会〕 しょうかをうたっている 声が、オルガンにまじつて きこえて きます。

六18 4 そのほか、ハーモニカをふいているもの、オルガンをひいているもの、

七6 2 オルガンがひびく。

九5 8 オルガンで一つの音だけひいてきいても、九6 4 オルガンのほかに、パイオリンとか、フルートとか、ほかの樂器を、いっしょにあわせて

十一19 10 オルガンがひびいてくる。

十一15 1 先生がオルガンをおひきになると、十一15 2 オルガンのキイから、赤い、青い、金色の、ちがった形の小鳥が、はばたいてで、

十四20 10 ピアノ、オルガン、パイオリン、オルガンのきりぎりす (〔話手〕 4 オルガンのきりぎりす)

六19 6 オルガンの「みどりの木の葉は喜びにみち、きりぎりす」

六21 2 オルガンの「美しいぶどうに、きりぎりす」

六25 1 オルガンの「小さなからだに大きな荷物。きりぎりす」

六25 8 オルガンの「楽しみはいよいよくわわり、きりぎりす」

おるす〔御留守〕(名) 1 おるす

十73 5 〔会〕 じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうをとって遊んでいました。

おるすい〔御留守居〕(名) 1 おるすい

一44 3 〔会〕 たろうさん、わたし おるすいよ。

おれ〔俺〕(代名) 4 おれ

六141 4 〔会〕 おれがさきにうさをみつけたのだ。

六141 7 〔会〕 おれが、いまたべようとしていたところだ。

十70 9 〔会〕 「かまわない、おれはたべてやる。」

十72 1 〔会〕 「おれに、うまいふうがある。」

おれい「御礼」(名) 21 おれい お礼

一58「略。」と、おれいをいいました。

一60「略。」と、おじいさんはおれいをいいました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

四104「略。」と、おれいにお礼をいきました。

間にあげてしまっても、

おれる「折」(下) 3 おれる「レール」

六36「おれるようにあたたまを地につけるすぎの木。」

八18「それでたいそうほねが割れて、このうえな」

くふべんですが、

十一60「すると、橋はまん中からおれて、三人は、」

川の中へドボンと落ちこんだ。

おろかもの「愚者」(名) 1 おろかもの

三15「おまえさんのような おろかものは、」

ここをとおすことはできない。」

おろし「おろし」

おろす「降」(四五) 12 おろす「サーシー」

ス「おろしおろす・ひきおろす・ふりおろす・みお」

ろす

三61「おとうさんは えんがわに こしを おろし」

て、どうきまるか おまちなりました。

三61「ほかの子どもたちも、こしを おろして、」

まっています。

五19「二日めのあさ、やっと汽車からおろされ、」

自動車につまこまれて、

七90「が、すぐ、まえ足をおろしてしまいました。」

八62「略。」と、ひとりごとをいって、こし」

をおろした。

九29「うらがれにおろされ立てる子どももかな」

九39「八九メートルもある木の上で、なただ枝」

をおろすのは気がつかれます。

九39「足もとの枝をおろして、やっとおりてく」

ると、からだじゅうがあせです。

十一71「いすをひきよせて、目を父親の顔からは」

なさないで、こしをおろして待っていました。

十三28「そのへんを走ったり、地面にこしをおろ」

して、あなをほったり、

十五28「鳥がそのあき地へ身をおろすかおろさな」

いうちに、鳥のせをさけて一つつき通し、

十五28「身をおろすかおろさないうちに、」

おわかれ「御分」(五) 3 おわかれ「一り」

八10「あなたは、私のいつていることがおわ」

かりにならないのです。」

十四13「どこまでコーヒーを入れていいの、」

おわかりになります。

十五17「あなた、この私がおわかりですか。」

おわかれ「御別」(名) 3 おわかれ お別れ

三15「略。」と、いって、みかどへ おわかれ」

の手紙とふしのくすりをのこしました。

五18「おたがい、であったと思つたら、すぐお」

わかれでした。

十五12「受持の佐藤先生と、教室でお別れをした。」

おわかれ「御別」(サ変) 2 おわかれする

お別れする「一し」

十四6「なつかしいおあさん、おわかれして」

から私がいばんづらかったことは、

十五12「みんな起きあがってお別れしましょう。」

おわすれねがう「御忘願」(五) 1 おわすれ願う

「一い」

十四16「私がそばにいないことなど、すっかり」

おわすれ願いますよ。

おわすれる「御忘」(下) 2 おわすれる「一」

レ」

三16「そののちいつまでも、かぐやひめをお」

わすれにすることができませんでした。

十四59「ほかのことはわすれても、この土のこ」

とは、かたときもおわすれにできないでしょう。」

おわび「御詫」(名) 1 おわび

十73「あまりの申しわけなさに、ふたりとも、」

命をすてておわびをしようと考え、

おわびいたす「御託」(五) 1 おわびいたす「シ」

六八五〇 〇 どんなことでもして、おわびいたします。

おわらう「御笑」(五) 1 おわらう「イ」

五六三「略」といって、おわらいになりました。

おわり「終」(名) 8 おわり 終り

二一九 おわりに、略、おもいついた ことばを
じゅんじゅんにつづけて、あそびました。

七五七 みんな、また運動場に集まって、終りの式
をした。

八四三 夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に生
みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。

八〇三 三時間めの終りに開きはじめました、お
晝の時間には、もう閉じてしまっていました。

九二四 茶人は、長い探求の旅が終りに近づいたこ
とを知って喜んだ。

九二六 岩まからちよろちよろとわきでる泉があつ
て、それでも終りであった。

一一二五 すると、秋の終りには、一びようあまり
の米を自分のものにすることができました。

一二〇二 平安時代の終りから鎌倉時代にかけての
藝術の中で、

おわりころ「終頃」(名) 1 終りころ

九一五 夏の終りころ、つばめが電線や物ほしざお
に五六ばぐらいならんでとまっているのを、

おわりちかい「終近」(形) 1 終り近い「ク」
九三十四 いまはもうかきの葉もすっかり落ちつく
して、秋も終り近くなりました。

おわる「終」(五) 5 終る「ーリール」↓
よみおわる・わたしおわる

六八七 しばらく音楽がつづいてから終ります。

七四八 そこを自轉車に乗って走る中学生、たがや
している父と子、きりの花——曲は終った。

一二一五 これ、日本の面影を写した写真帳が終
りました。

一三三三 三郎の音が終るころ、しずかにまく。

一五五二 あいさつを終って、用事をきりだすと、

おん「音」(名) 4 音 ↓ いちおんいちおん・ご

じゅうおん・さんおん・しおん・わおん

一五三七 「シ・ハン」という音をしめしたりした。

一五三八 中國の発音にもとづいた漢字の読みかた
を「音」といい、

一五三八 それで、たいていの漢字には、この音と
訓のふたとりの性質のちがった読みかたがある。

一五三八 字によっては、いくつかの音のあるもの
があり、またいくつかの訓のあるものもある。

おんがく「音楽」(名) 24 おんがく 音楽 ↓ げき
じょうおんがく・せいじょうおんがく

一六三 おんがくに つれて、みんなが 手をとつ
ておどりました。

四一六 こくご、しゃかい、さんすう、りか、おん
がく、ずがこうさく、たいいくなどの

四二四 魚たちが、たくさんでてきて、にぎやか
なおんがくに あわせておどりはじめます。

六八七 しばらく音楽がつづいてから終ります。

六九八 みどりの木の葉は喜びにみち、きよらか
な風は、われわれの音楽をはめてくれる。

六二五 みんなにぎやかに音楽をはじめます。

六三七 ラジオの音楽。

七一六 「略」の音楽が、ひびいてくる。
七三三 しずかな音楽がはじまる。
七三五 なごやかな音楽がつづく。

七三三 明かるい音楽。

七四六 楽しい音楽をきかせてくださる心持を、
ほんとうにありがたく思います。

七五八 あさがおの花が、ラジオの音楽をきいてい
ます。

九一四 いい音楽をきいても、それがわからないの
は、

九二九 もし、きく人の心が高ければ、それだけ音
樂のねうちが生きてくることになる。

一五三 耳をすますと、なにか、かすかな音楽がき
こえてくるようだ。

一四九 たくましい音楽。

一二四六 それが音楽や歌にあわせてしばいをし
るわけだ。

一二四七 音楽もある。

一三三六 ふえの音がおのずから和音をふくみ、そ
れこそ天上の音楽である。

一四二六 音楽の時間によくつかう、リズムとか、
略、ソナタとかいうことは、

一四三八 ああ、聞える、夜明けの音楽が聞える。
一四四一 美しい音楽がひびく。

一四八六 ばんそうの音楽や、場面の組みあわせと
説明のことばなどによって、

おんがくかい「音楽会」(名) 3 音楽会

六一七 まくがあくと、きりぎりすが大ぜいあつ
まって、音楽会をしています。

六二二 ここでいっしょに音楽会をやろうじゃな
いか。

八二四 そこへなかが集まってきて、にぎやかな
音楽会のようになりました。
おんし「恩師」(名) 2 恩師
一五五 恩師ジョルダン博士は、そのためのでは

ずを早くからすすめられていた。

十五606 恩師クラーク博士の精神のやどっている
札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、

おんじん 「恩人」(名) 1 おんじん

一587 ㊦ あなたはいのちのおんじんです。

おんせい 「音声」(名) 1 音声

十二882 まわりのようすや、ゆきがかりや、音声
や身ぶりによって、いろいろにその意味がかわる。

おんど 「温度」(名) 9 温度

六618 けさの温度は五度です。

六619 毎朝、このらんに、その日の朝の温度を書
きつけましょう。

十426 眞珠貝にちょうどよい海水の温度や、海の
深さのこともわかり、

十449 海水の温度に大きなかわりかたもなく、四
年めになった。

十四651 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、ま
わりの空気にくらべてずっとかるいために、

十四654 湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろ
いろ自分でためしてみると、おもしろいでしょう。

十四656 これは、まわりの空気の温度によっても
ちがいますが、

十四7312 しかし、それも、前の温度のむらとなに
か関係があることだけはたしかでしょう。

十四848 空中の温度の変化、風の関係、水蒸気の
量、高度など、さまざまな条件によって、

おんな 「女」(話手) 12 女

十四95 女もし、それは、

十四933 女それは、天人のはごろもと 申しまし
て、

六898 いどの水をみて、女「まあ、りっぱなかた
が、水にうつっているわ。」

六903 女「はい。」

六911 女「海の神さまに、申しあげます。」

六913 女「門の木の上に、

六915 女「さようでございます。」

六938 女「はい。」

六9310 女「魚どもをよんでまいりました。」

六941 女「はい。」

六962 女「はい。」

六9611 女「はい。」

おんな 「女」(名) 93 おんな 女

一459 しろいきものをきた おんなの人たちが、
ながい みをふりふり、

一467 おんなの人がやさしくいいました。

三637 ふたりの 女の子は、まえに こしかけまし
た。

四319 ㊦ どこかの 中学校の 女の 生徒さんがき
て、なっている わけを ききました。

四335 ㊦ 女の 生徒さんはわたくしに、

四353 ㊦ 中学校の 女の 生徒さんが 子どもの け
たのはなをすげるあいだ、

四923 まつの 木のうしろから、ひとりの 女が
でてきます。

五247 ㊦ みんなを立たせ、不自由な人や、女や、
子どもたちをすわらせました。

五248 ㊦ そのとき、どこかの 女の人が、ぼくに 氣
がついて、

五264 はるこさんは、きつぷを改札の 女の人にわ
たしながら、

六76 男の子と 女の子である。

六710 女の子はただじつとみつめていたが、やが
てこの小さなねじをみつめて、

六108 ふさぎこんで下をみつめていた 女の子が、

思わず「へ略。」とさげんだ。

六895 そこへ 女の人がでてきて、いどの水をくも
うとする。

六8911 女の人 は木をみあげながら、おじぎをする。

六904 女の人 は、水をくんで、ほおりのみことに
さしあげる。

六909 そこへ、さっきの 女の人がでてくる。

六917 女の人 は、いったんさがる。

六936 女の人 に向かって、海の神「魚どもを、み
んなここへよび集めるように。」

六939 女の人 は、魚たちをたくさんつれてでてく
る。

六9510 海の神は、しばらくお考えになって、女の
人に、「へ略。」

六963 女の人 は、たいをつれてでてくる。

六969 女の人 に向かって、海の神「たいののどか
ら、つりばりをとっておやり。」

六973 女の人 はつりばりを水であらって、海の神
にさしあげる。

七51 ㊦ あの白いブラウスの 女の子かな。

七347 むりにわりこもうとする 男の人 もあり、足
をふまれて、おこっている 女の人 もありました。

八111 ある土曜の午後、おなかをすかして 学校か
ら帰ってきた うえの 女の子 が、

八115 女の子 ばかりでなく、茶のまにいたうち
じゅうのものがびっくりして、

八122 みんなないて——ことに、うえの 女の子 な
どは、目をなきはらしましたが、

八896 ㊦ なかまに追いかけられたり、にわとり に
ぶたれたり、女の子 につきのけられたり、

九4010 ㊦ 男か女かわからないが、下を向いて登っ
てくるのがみえます。

九二 一 そのあと、学校帰りの女の子ふたり、通りすぎる。

九二五 三 文 着ぶくれて歩かされいし女の子ばたとたおれそのまもなくも

一二七 お友だちにさそわれても、どうしてもおとうさんのそばへこない女の子もありました。

一九一 窓をあける女の先生。

二三四 ひとりの女の子が、「略。」と、「こく。」の文を大きな声で歌う。

六三〇 おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わかい女のめんと、

一四三 女の先生が、卒業する子どもの名をお読みあげになりました。

二二七 これは、ヘレン・ケラーというアメリカの女が書いた「わが生がい」の一せつを、

二二八 高さは一メートルほどあり、男や女のいろいろなすがたをあらわしています。

二二九 大きなげたをはいた女の人が、おともをふたりつれています。

二四四 それは女の声で、しかも、調子もみだれていなければ、ふるえてもいません。

二五二 花は、美しいわかい女でした。

二五五 「略。」と、小さなマッチ賣りの女の子は、町をあらこち歩きながら思った。

二六〇 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。

二六八 そこで、その女の子は、まったくはだしになつてしまった。

二七三 女の子は、窓々をとおして、ちらちらとかがやくとしびの光を見た。

二八二 女の子は、手にマッチの小さなたばを一つ持っていた。

二九三 女の子は、どんなにか、それで火をともしてみたかったことだろう。

二九四 女の子は、二つの家の間に、ちよつとした、身をかくす場所を見つけた。

二九六 女の子は、両足を——そのあわれな、小さな、赤く、青くなった両足をそろえて、

二九五 一 女の子は一本のマッチをとりだした。

二九六 二 女の子は、その上へ、小さなつめたい両手をさしのべた。

二九七 二 女の子は、小さな、つめたい足を、かがやくほのおの方へのぼした。

二九八 四 女の子は、手にもえつくしたマッチを持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。

二九九 五 女の子は、またそうしないではいられなくなつて、もう一本のマッチをとつて

三〇〇 六 女の子は、中のへやをすつかり見とおすことができた。

三〇一 六 ゆかの上をよたよた歩いて、その女の子の方へずつとよってくるではないか。

三〇二 八 女の子のそばには、あつい、かたいかべしかのこつていなかった。

三〇三 一〇 女の子は、もう一本の、第三番めのマッチをすった。

三〇四 一七 そうして、こんどは、女の子は、一本のクリスマスの木の下にすわっていた。

三〇五 四 ちかちかと女の子の上を照らし、

三〇六 七 女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。

三〇七 一 女の子はねむそうにつぶやいた。

三〇八 四 「略。」と、女の子は思った。

三〇九 九 女の子は、またもう一本のマッチを、そばのたばの中からひきだした。

三一〇 五 「略。」と、女の子は、声をあげた。

三一〇 一〇 「略。」と、女の子はいっしょうけんめいにたのんだ。

三一〇 六 おばあさんは、女の子をうでにかかえて、ふたりは、いっしょにふわりとまいあがった。

三一〇 五 人々は、女の子がおおみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。

三一〇 六 ひとり男の子で八つ、ひとり女の子で四つになるかわいい子どもたちでした。

三一〇 八 それに、この子どもたちをせわする、ひとりの女の家庭教師がついていました。

三一〇 一二 女の子は、あぶない足どりで、

三一〇 一五 ふと氣がついてみると、いままで先生のそばにいた女の子のすがたが見えません。

三一〇 一八 大きなやまわしのつめにつかまれて、女の子はばたばたしているではありませんか。

三一〇 二四 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて來ました。

三一〇 二六 いまそれをとめなければ、もうその女の子は、どこへ持って行かれるかわかりません。

三一〇 二八 鳥が大づめでつかんでいる女の子のからだの下へ落ちないように、

三一〇 三〇 このわしが大きくなりばしで女の子の頭でもつつけば、

三一〇 三二 下の方にいる女の子を元氣づけるために「略。」といわずにはいられませんでした。

三一〇 三三 ところが、下につかまれている女の子は、あきらめたのか、おそろしいのか、

三一〇 三六 左手は女の子の上帯にかけたままで、

三一〇 三九 つかんでいた女の子をはなして、あおむけにたおれかかりました。

三一〇 四一 いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつた短刀があります。

十五29 6 少年は、必死のかくごで、すばやく女の
 子を自分のせなかにかくしました。
 十五29 10 少年は、右手に短刀をふりかざし、左手
 で女の子をかばい、
 十五30 9 少年が女の子の後にかばうようにして、
 すこしあらずさつて、岩角へ身をよせたとき
 十五31 12 その中で、女の子の後にかばいながら、
 少年は苦しい戦いを続けていました。
 十五33 2 父親のうでにだかれた女の子は、にこに
 こわらつて、
 十五33 5 そのときの女の子の両親の喜び、
 十五91 12 ㊦ 「あの、育ちのわるいわかい女はだれ
 だね。」
 十五107 7 ㊦ あの女はさがしに行きたがつて、
 十五109 3 ㊦ あなた、あの女の人を知らないのです
 か。
 おんなのこいち 「女子二」〔話手〕3 女の子一
 七17 7 女の子一「このまえより、なの花がへつて
 いるわ。」
 七17 9 女の子一「なぜかしら。」
 七18 8 女の子一「あら、そうですか。」
 おんなのこさん 「女子三」〔話手〕2 女の子三
 七17 10 女の子三「花がちつて、
 七20 10 女の子三「あつ、
 おんなのこし 「女子四」〔話手〕2 女の子四
 七18 1 女の子四「先生、
 七21 2 女の子四「あつちにも。」
 おんなのこたち 「女子達」〔名〕4 女の子たち
 三64 4 「略。」と、女の子たちがいました。
 三65 1 「略。」と、女の子たちがいうと、
 三66 10 おとうさんは 女の子たちにおききな
 りました。

三67 2 女の子たちはいました。
 おんなのこに 「女子二」〔話手〕2 女の子二
 七17 8 女の子二「そうね。」
 七19 4 女の子二「それに寒かったし。」
 おんなのひとたち 「女人達」〔名〕2 女の人たち
 十14 3 手ぬぐいのようなものをかぶった女の人た
 ちが、ならんでせんたくをしていました。
 十三29 7 どこからともなく、女の人たちが集まっ
 て来て、糸屋さんをとります。
 おんぶする 「負」〔サ変〕5 おんぶする 《―シ・
 ―スル》
 四51 7 ㊦ 「わたしがおんぶしましょう。」
 四52 3 おんぶしている がんも おちそうになり
 ます。
 六41 10 ㊦ みんなできみをおんぶするんだ。
 六58 9 そこを通りかかった人が、おんぶして学校
 まです。
 十52 6 よそのおばさんが、あかちゃんをおんぶし
 て、そばを通りました。

か

か 「化」 ㄱ えいがかする
 か 「火」 ㄱ 火
 五78 9 七月十二日 火
 七87 7 五月一日 ㄱ くもり 19度
 七89 2 五月二十二日 ㄱ くもり 16度
 七90 1 五月二十九日 ㄱ くもり 24度
 七92 7 七月二十四日 ㄱ くもり 19度
 七94 9 十月二十三日 ㄱ 雨 20度

七96 1 十一月十三日 ㄱ 晴 12度
 七99 4 十二月四日 ㄱ 晴 14度
 八96 8 五月十五日 ㄱ 晴 20度
 八101 3 八月七日 ㄱ くもり 25度
 八103 1 九月四日 ㄱ 晴 29度
 か 「架」 ㄱ じゅうじかぞう
 か 「家」 ㄱ けうそうか・ひこうか
 か 「箇」 ㄱ いちねんさんかげつ・ごかげつ・さんか
 げつまえ・じゅういつかこく・にさんかげつ・にね
 んさんかげつ・はちかげつ・よんかげつ・ろっかね
 ん
 か 「課」 ㄱ だいいつか
 か 「彼」 ㄱ 代名 2 か
 四114 5 ㊦ いや、おとひめさま、なにもかもじゅ
 うぶんでございます。
 十五110 10 ㊦ うちにいると、それが見えないが、こ
 こでは、なにもかも見えるのですからね。
 か (副助) ㄱ か ㄱ いくらか・いつか・それどころ
 か・どうにかこうにか・どころか・なにか・なんだ
 か・なんとか
 一17 9 よう。せみがどこかでなきでした。
 一44 2 ききますと、どこかで、「略。」とい
 一58 5 ㊦ どうなっていたかわかりません。あ
 一65 1 ㊦ かしな人。どうかしたの。「略。」
 二40 2 ながめます。どこかで、かつこうが、「へ
 二42 2 ㊦ う「だって、だれかがぼかにするんだ
 二56 6 ちに、いつのまにか、ねむってしまい
 二66 10 ㊦ ない。しやう」どこかで、春の 声がする
 三22 5 いきました。なん年かたつうちに、この
 三23 1 でつづいているのか、わからないほどに
 三27 1 なりました。なん年かかかって、とうと
 三43 7 ㊦ 、どっちが多いか、くらべてみよう

三44 4 合 のほうがまけるかもしれない。ぼく
三60 1 ちは、どうきまるかまっています。み
三61 3 して、どうきまるかおまちになりまし
三64 9 合 右か左かどちらかへやらなければ。」
三66 5 合 へいったらいいか、風にきいてみよ
三67 8 合 らへふいているか、みてごらん。」と
三70 2 合 、ゆかの上に なにかあるのを みつけま
三70 7 合 ゆかの上に、なにか、長い、光った、ぴ
三70 10 合 ります。「なんだかつまんで みよう。
三75 3 合 ほら、どうなるか、きをつけてみて
三97 9 合 とは、いつのまにかきえてしまします
三105 5 合 ない人が、なんんかのこりしました。そ
四22 8 手 した。なんのえか、あててごらんな
四25 8 手 がふると、どこかで休んでいると
四30 8 手 、みんなで なにかおみまいをしよう
四31 8 手 いました。どこかの 中学校の 女の
四34 2 合 いた文で、 なにか 氣の ついたこと
四35 1 合 だ、なんの ことだかわかりません。「へ
四45 10 合 。あとから なにか おつけてきや
四52 2 合 ありません。どうかすると、するりと
四83 5 合 、赤いきれで なにか こしらえはじめま
四88 1 合 の 白い 雲に、だれかが、ちぢまってい
四92 2 合 。まっ黒くは ないかも しれないが、ど
四114 3 合 「それでは、 なにか かわったことを
四114 8 合 。

四127 6 合 「おとひめ」どうか なさいましたか。」
五9 3 合 いますと、どこからか、よいにおいがし
五13 3 合 ュ、シュ。「どこかのおばあさんとぼっ
五23 5 合 ている人がいないか、しらべるのさ。」
五24 8 合 す。それで、どこかのおばあさんのよこ
五27 2 合 。そのとき、どこかの女の人が、ぼくに
五27 6 合 のですもの。どこかでありがとうとい
五27 6 合 、わからなかったかもしれせん。でも

五29 3 合 こしくると、どこかのおじさんが、荷物
五60 11 合 も——って、 なにか、おかあさん。」「で
五62 4 合 んとこたえていいの、わからなくなつて
五83 6 合 しゃったとき、だれかが、「略。」とわら
五84 2 合 夏休みになにをするか、みんなで話しあい
五94 8 合 「略。」「ひばりかもしれないよ。」「へ
五98 11 合 おきてみると、どこかのねこが、しのびこ
五104 7 合 れました。どこからか、しじゅうからがや
五105 6 合 ました。いつのまにか、しじゅうからは、
五105 6 合 じゅうからは、どこかへいつてしましまし
五107 4 合 ここにいて、 なにか、おもしろいことが
六15 11 合 、どうなつていたかしかない。」「ありは、
六26 4 合 「今夜はつものかもしれない。」「あり
六28 10 合 り」「おや、だれかたずねてきたらしい
六29 8 合 りぎりす」「なにかめぐんでください。
六48 4 合 かり。海 どこかでだれかがめぐって
六48 4 合 海 どこかでだれかがめぐって、大
六55 6 合 と、空はいつのまにか、雲一つなく、きれ
六66 7 合 お話がすすんでいくか、楽しみではありま
六69 8 合 がどんなふうになるか、楽しみです。七
六71 5 合 から、お話もするかもしれないよ。」「
六71 11 合 るえさんが、 なにか お話を してあげたら
六73 10 合 「ぼく、どつちだかわからなくなつちゃ
六84 8 合 「おまえは、 なにか かつたか。」「ほおり
六92 3 合 いましたか。 なにか ご用でございましょ
六94 7 合 たずねるが、だれか、このかたのつりば
六95 5 合 あるはずだ。だれか知っているものはな
六96 4 合 くる。たい「なにか ご用でございましょ
六100 5 合 のぞいてみた。どこかの屋根が、めがねの
六101 1 合 望遠鏡が、できるかもしれない。」「こう
六102 8 合 うじだ。おや、だれかが、しょうじのあい
六106 6 合 ろうと思つた。 なにか よいおりはないかと

六113 6 合 う一きょうは、 なにか、ほかのぎょうとは
六113 9 合 という氣持は、どこかへふつとんでしまつ
六129 3 合 口のところで、だれかの声がします。それ
六129 4 合 は毛をぬらして なにか あわてています。「へ
六130 1 合 しまうから、どこかへいつてくれたまえ
六133 6 合 げました。「なにか かけようじやないか
六133 8 合 しろくない。 なにか かけよう。」「略。」「
六137 11 合 さんは、いつのまにかはぐれてしましまし
七4 4 合 とあられる。どこかで小鳥が鳴いた。チ
七21 4 合 して、みつをすうか、よくごらん。ひと
七25 10 合 と同じ色になるのか、わかりますか。」「
七26 7 合 それから、いく日かたつたある日の午後
七27 4 合 いいえ、どうなるか、みんな自分でしら
七37 6 合 みあげました。だれかが、「略。」「とい
七40 5 合 した。三郎は、だれかにゆずつてもらつた
七43 6 合 す。どこのどなたかはぞんじませんが、
七43 8 合 はだですぎたことかもしれないせんが、こ
七59 4 合 どうでしょう。 なにか の花びらが、くもの
七61 3 合 うす黒い雲は、どこかへいつてしまったの
七65 1 合 さ書く。いつのまにか、葉ばりのさくら
七70 2 合 むのをまっていたのか、すうしろに、月
七74 9 合 まわしながら、 なにか、ものをさがして歩
七75 11 合 なたがたは、 なにか さがしておいでなのよ
七77 4 合 がみてとつて、 なにか、こそこそささやき
七78 5 合 。

七78 8 合 「どこに いるか、早く 教えてくださ
七78 8 合 。

七78 8 合 「それとも、だれかにおききになったの
七78 11 合 のらくだを、どこかへつれていったのに
七80 2 合 どういうことなのか、くわしく話しな
七82 8 合 て、裁判官「なにか、そちらにも、いい
七83 2 合 このらくだはどこからにげてきたので
七84 10 合 れについて、 なにか。」「旅人「それはほか
七87 1 合 ちばん喜んでたべるか、しらべてみることに

七876 せん。いつも、どこかを動かしています。
 七918 は、早くたべたいのか、黒いうさぎの上に
 八56 といったほうがいいかもしれません。なぜ
 八67 ようになったばかりか、頭の上にも乗り、
 八93 きます。ろじどころか、庭の木にとまらせ
 八102 もの知らずで、なにか氣にいらなかったり
 八105 りです。また、どうかすると、歩いている
 八109 いながら、毎日なにか変わったことをし
 八163 んでいても、なにかの木の根にいきあた
 八164 は、においで知ること、なんで知ること、
 八164 のか、なんで知ること、手ごろな、皮のう
 八275 をみまわして、なにかさがすようになり
 八399 人は、そのままだこかへいつてしまいま
 八503 りをしました。だれかがきいたら、自分は
 八649 、そういつて、どこかへいつてしま
 八738 しいあわせにあうかもしれないよ。」こ
 八753 ヤ、ピシャと、どこかへいつてしま
 八7610 、どっちにたおれるかわからなかった。風
 八8710 、どんなに苦しんだか、ここで話すにはあ
 八885 てこんなになったのかわからないうちに、
 八895 から、ころされるかもしれない。しかし
 八931 た。どうしていいかわからないので、つ
 八1048 うらに、青黒いなかのたまごが生みつけ
 九166 りをおしんでいるのかもしれない。これ
 九168 、話しあっているのかもしれない。やが
 九238 い教養をもっているかを世界じゅうに知ら
 九379 はえていて、なにかでできそうです。な
 九411 へ渡っていったのか、いまはもういなく
 九421 また、いつのまにかがなが渡ってきまし
 九445 ます。いつのまにか葉がすっかり落ちつ
 九611 アワとみんななにかいつているのです。
 九656 って、なにがなんだか、まるでちの巣を

九669 また、なにがなんだかわからなくなりまし
 九711 まねこは、まだなにかいいように、しば
 九809 、ぐあいよくなにかをほりあてたらしい
 九811 「ぼくは、どこか一つのところをきめ
 九815 や石ころは、どれか一つのかごにいれて
 九823 中には、いつのまにか、せきふらしい物、
 九826 ここからも、でるかもしれないぞ。」へ
 九851 手を加えて、なにかの道具につかった物
 九867 ってきた物があるか、おしらべなさい。
 九106 っていくとき、だれかが、「略。」と、大
 九111 「略。」と、だれかがさげんだ。みんな
 九112 「略。」と、だれかがさげんだ。四十メ
 九129 「略。」と、だれかがさげんだ。四十メ
 九129 りだしました。どこかであかちゃんの名き
 九134 ると、いつのまにか、いままで苦しかっ
 九141 目をつむると、だれかが、くもの頭をなで
 九143 して返事をしたいかわからないので、そ
 九147 落ちることができたかもしれない。けれ
 九153 耳をすますと、なにか、かすかな音楽がき
 九156 もないが、どこからかきこえてくる。美し
 九294 たはどんなあみかたか、なぜ、このような
 九295 ればならなかったのか、よく考えてみたい
 九2912 からなりたっているか、それをさがしてみ
 九303 そんなことになったか、そのわけをよく考
 九4110 みにたえて、なん年かをすごした。あると
 九4910 人には、なんのことか、おそらくわからな
 九539 いぬが氣にかかると、ふり向くと、いぬ
 九5310 そりのそりと、どこかへいくところでした
 九695 きました。「なにかはいつているとみえ
 九718 な目にあわされるかわからない。」おく
 九119 ので、いつのまにかびんぼうになつて、
 九127 あの子は、どうかしているのではない

十一526 らなかった。だれかのかさのしずくが、
 十一709 せんか。なんとかひとこといつてくだ
 十一722 、母親がどんなにか力をおとしたことな
 十一7512 年は、もつとなにかききたかったが、い
 十一765 て、看護婦がなにか飲み物を持ってくる
 十一775 。そうして、なにかいおうとでもするよ
 十一806 した。また、なにかものをいおうとでも
 十一836 っかりしていたかわからないよ。これ
 十一888 今夜はもうだめかもしれない。」とい
 十一8812 を動かして、なにかものをいいたげにし
 十二72 はなにを思ったのか、ふと庭さきにさい
 十二75 が、なんのことだかその意味がわかりま
 十二102 わしながら、なにかさがしては、それを
 十二111 というものはなにかすばらしい力をもつ
 十二138 て、あとにいくつかの実がなつていた。
 十二265 ーブルとか、なにかとりつく物があると
 十二278 ができると、だれかがいつたことを思い
 十二322 私を待っているのか、すこしも知りませ
 十二328 だしました。だれかがそれをとらえまし
 十二343 。それからいく日かのあいだに、なんの
 十二3610 いきました。だれかが水をくみあげてい
 十二441 動いているのかもしれないよ。」へ
 十二473 ることを、なにか美しいものであらわ
 十二566 ある。次にいくつかの例をあげてみよう
 十二602 は、なんと思つたか、なん千アルの田
 十二766 がわにいつてなにか持ちだしてきました
 十二854 、どうしたはずみか、チルデン選手はか
 十二103 ほど便利になったか、考えることができ
 十二105 の店らしく、なにかの毛皮がひろげてあ
 十二112 がどうなっているか、ほとんど知られて
 十二113 どれほど苦心したかわかりません。新し
 十二53 とばで、なにごとか、ささやきかわして

十三 12 3 ど害をなしているかしかない。知識を廣
 十三 29 2 、そこでは、どこかの子どもが、もう、
 十三 36 11 ツパの音が、どこかでひびく。子どもた
 十三 38 8 (会) 年のときだったか、遠足で行きました
 十三 45 4 に、あいてがなにかいっているわけです
 十三 50 8 すむまで見ているかもしれない。すぐ帰
 十三 54 6 その氣持を、だれかに話してみたくてた
 十三 55 1 (会) く来たね。なにかおもしろいことでも
 十三 61 1 (会) のほうがうまいかもしれないが、深み
 十四 13 2 (手) を入れているのか、おわかりになりま
 十四 15 7 (手) 、どうしたものか、ちょっと私にはわ
 十四 16 11 (手) ーにある、なにかそういったものがご
 十四 17 5 (手) ていらつしやるか、この私にはわかる
 十四 28 7 略。」私は、なにか大きな楽しみをもつ
 十四 29 3 どというと、どこかにしまつてあるもの
 十四 29 4 ののよう聞えるかもしれないが、こ
 十四 31 1 別の國でもあるかのように考えて、世
 十四 32 2 「という人があるかもしれない。天上
 十四 34 1 界が、なおいくつあるのです。こうな
 十四 34 4 、どこまで廣いのか、想像がつきませ
 十四 35 1 ものに感じられるかもしれない。大う
 十四 44 3 (圖) かでいられるのか、それを、こう話
 十四 46 8 れだけ歌を聞いたかもしませんが、この
 十四 46 12 、つかれも、どこかへけしとんでしま
 十四 47 3 人は、どういう人かわかりませんが、お
 十四 48 7 まるたに、なんんかか婦人がつかまつて
 十四 60 7 (会) 地面にはえたのか、考えたことがあり
 十四 61 3 (会) もならなかったかもしれない。」つる
 十四 64 1 、かならず、なにか、そのしずくのしん
 十四 67 12 。陸地の上のどこかの一地方が、日光の
 十四 73 12 温度のむらとなにか関係があることだけ
 十四 77 3 ったりして、なにかこしらえようとして

十四 80 5 れているものもあるかもしれない。それ
 十四 84 6 つしようができるか、どんなばあいに、
 十四 84 8 けつしようになるか、空中の温度の變化
 十四 85 1 ようにしてできたか、どんな天空を旅し
 十四 85 2 旅して降ってきたか、おのずから知るこ
 十四 88 4 うが、いつのまにか曲がってしまう。ど
 十四 89 4 に近づけて、なにかもの音でも聞こうと
 十四 91 2 うはどこへいったか、つい見いだせな
 十四 91 4 つのほうは、どこかの男の子がひろって
 十四 94 1 の子は、どんなにか、それで火をともし
 十四 99 4 (会) ひいた。「なにかが、神さまのところ
 十四 99 6 ちるときは、なにかのたましいが神さま
 十四 102 1 まのおそばへ行くかのようにのぼって行
 十四 102 8 日をむかえているかを知らないのだ。
 十五 20 1 ちゅうにはいくつかの停車場があつて、
 十五 23 10 、そのとき、だれか、その大わしのせの
 十五 24 7 へ持つて行かれるかわかりません。そう
 十五 28 2 まらなくなったのか、その重荷をふり落
 十五 30 12 の石を取るが早いのか、目の前二メートル
 十五 38 9 よつては、いくつかの音のあるものがあ
 十五 38 9 あり、またいくつかの訓のあるものもあ
 十五 53 11 ピストになにごとかをいいながらうたせ
 十五 56 10 (会) 号とでもいおうか、私のはじめて会っ
 十五 61 6 えらいかたであるかを知らなかつた私は
 十五 68 10 (会) たら、どんなにか喜ぶだらうに——」
 十五 69 3 く目は、思いなしかやわらいで見え、そ
 十五 73 9 たちは暑さをどこかにさけて、家の中は
 十五 78 4 かつてもらえないかもしれない。けれど
 十五 90 4 (会) にかくれているか、ごぞんじないでし
 十五 90 7 (会) 出した。だれだか、いつかそんな話を
 十五 93 2 (会) をいうな。なにかおまえについている
 十五 104 11 声をたてて、なにかにぶつかりながら、

十五 114 4 (会) にいるときよりか、ずっとお話がうま
 十五 115 2 (会) ければならないか、それを、はつきり
 十五 115 2 (会) か (並助) 42 か
 三 64 9 (会) はじめに 右か 左か どちらかへ やらな
 ければ。
 三 64 9 (会) はじめに 右か 左か どちらかへ
 四 49 3 (会) わきに それたかと思つと、石ころかな
 にかのようにおちていきました。
 四 49 3 (会) 石ころかなにかのよう
 六 59 7 (会) うたうたは、そのことばの声のかずが、
 五か七になつてゐるのです。
 六 108 10 (会) ものをいうときに、声はなからでるか
 ないかということ、考えたことがなかつた。
 六 108 11 (会) はなからでるかでないかということ、
 八 70 7 (会) あひるの子は、立つていたほうがいいか、
 歩いていたほうがいいかさえも、わからなかつた。
 八 70 8 (会) 歩いていたほうがいいかさえも、
 八 81 2 (会) のどを鳴らすか、たまごを生みなさい。
 八 81 7 (会) 水の上をおよいだり、もぐつたりするの
 がいい氣持かどうか。
 八 81 8 (会) もぐつたりするのがいい氣持かどうか。
 八 82 11 (会) たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火
 花をだすことを、せいでして勉強するのだね。
 九 9 2 (会) 二つか、三つのことばの組みあわせだと、
 すぐ心にものを思ひうかべることができませんが、
 九 39 2 (会) 高い木をみつけると、兄かぼくのぼる
 役をひきうけました。
 九 40 10 (会) 男か女かわからないが、
 九 40 10 (会) 男か女かわからないが、
 十 14 7 (会) 小学校のいちばん上の学年か、《略》商業
 学校の下の学年ぐらいでしたしょう。
 十 15 8 (会) ぼくは、大きくなつたら、三ばんか四

ばんをこぐんだ。

十二877 父にこういわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱい持って持っていくだろう。

十三187 國のおこるかほろびるかは、このときにさだまり、

十三188 國のおこるかほろびるかは、

十三207 平野の雑草をかりとり、じゃがいもか牧草を植えることにありますが、

十三209 このあれ地に育つ木があるかないか、まず、このことについて研究を重ねました。

十三209 このあれ地に育つ木があるかないか、十三613 ㊦ なんといいても、二十二か三のわかさで、せんばいをしていので大家になり、

十四496 このおじょうさんは、この歌を知っていたかどうか知りません。

十四496 この歌を知っていたかどうか知りません。十四641 茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。

十四641 湯が熱いかぬるいかが、

十四796 ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもとか、わからないことでした。

十四796 どっちがうらかもとか、

十四912 自分の足だか、ひとの足だか、わからないくらいだった。

十四912 自分の足だか、ひとの足だか、

十五267 大きなくちばしで女の子の頭でもつつけば、大けがをするか、殺される心配がある。

十五273 下につかまれている女の子は、あきらめたのか、おそろしいのか、

十五274 あきらめたのか、おそろしいのか、それともおどろいて氣でも失ったのか、

十五274 それともおどろいて氣でも失ったのか、

すこしもさわがず、あばれもせず、

十五271 人々の目には、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなっていました。

十五272 黒い点かなにかのようにしか

十五2810 鳥がそのあき地へ身をおろすかおろさないうちに、鳥のせ骨をさけて一つきつき通し、

十五346 文字に書くか、またほかに特別の表わしかたをしなければならぬ。

か(終助) 503 かゝはだをかぶのかい・ものか・も

んか

一126 ㊦ しょ。もういいかい。まあだだよ。

一132 ㊦ だよ。もういいかい。まあだだよ。

一134 ㊦ だよ。もういいかい。もういいよ。

一288 ㊦ なにをみましたか。「略」。十三

一289 ㊦ にをきましたか。「略」。十三

一306 ㊦ ほかにありませんか。この手で、なに

一343 ㊦ いとおもいますか。「略」。「略」。

一346 ㊦ いとおもいますか。「略」。「略」。

一351 ㊦ なになにですか。「略」。「略」。

一365 ㊦ それはなぜですか。「略」。十八

一504 ㊦ ぎさんじゃないか。「略」。「略」。

一541 ㊦ ことがありませんか。「略」。「略」。

一547 ㊦ 、どうなりますか。「略」。「略」。

一557 ㊦ をもっていますか。「略」。「略」。

一628 ㊦ とうでもついたのかとおもってみまわ

一522 ㊦ 「ふるあめですか。たべるあめです

一533 ㊦ たべるあめですか。「略」。「略」。

一96 ㊦ とはできませんか。「略」。「略」。

一228 ㊦ た。どうしてですか。「略」。「略」。

一232 ㊦ はないでしうか。「略」。「略」。

一241 ㊦ だの水でしうか。「略」。「略」。

一326 ㊦ みたことがあるかい。』といたしました

二332 ㊦ ったことがあるかい。』と、またたず

二343 ㊦ せてくれませんか。』「略」。』と、六

二356 ㊦ たものじゃないか。』三人めのめくら

二364 ㊦ おなじじゃないか。』といたしました。

二397 ㊦ 。すこし休もうか。』たろう「ええ、休

二457 ㊦ ってみましようか。』「略」。「略」。

二458 ㊦ う、なにをやるかな。』「略」。「略」。

二459 ㊦ これはなんですか。』「略」。「略」。

二463 ㊦ 略。』「ふうせんかな。』「略」。「略」。

二618 ㊦ んなのりましたか。』みんな「のりまし

二622 ㊦ んはのりましたか。』ぼち「わんわん、

二96 ㊦ おでになったか、おしゃかさま。

二135 ㊦ とだよ。わかったかい。』はんたかは、

二206 ㊦ んな花がすきですか。』二くみの人たち

二208 ㊦ い虫とおもいますか。』三くみの人たち

二239 ㊦ かならないものかなあ。』あちらの村

二255 ㊦ いものでしうか。』といますと、

二265 ㊦ た木を、どうするかということにな

二279 ㊦ るではありませんか。』「略」。「略」。

二437 ㊦ みようではないか。』といたしました。

二466 ㊦ ぜなっているのか。』とおたずねに

二483 ㊦ ぜなっているのか。』とおたずねに

二563 ㊦ 山にすてましようか。』ええいえ、そ

二566 ㊦ ぶにいましようか。』ええいえ、そ

二572 ㊦ ちでぶちましようか。』ええいえ、そ

二604 ㊦ 「どこへいこうかね。』とおききに

二611 ㊦ けないじゃないか。』そこでおうさ

二622 ㊦ た。』それでいいかい。』「略」。「略」。

二625 ㊦ ジュ

二641 ㊦ ドもそれでいいかい。』「略」。「略」。

二669 ㊦ どちらへいこうか。』おとうさんはお

二673 ㊦ た。』それでいいかい。』おとうさんは

三76 6 会 てどこへいくのかなあ。」と、デビッ
三82 10 会 もいいじゃないか。」デビッドがいい
三110 1 会 かなしみになるかと思つて、いまま
三110 10 会 ふうはあるまいか。」と、ふたりはい
三112 5 会 一どに十もでたかと思われるほど、
三116 5 会 ちかい山はどこか。」と、おつきのも
四20 9 手 意はいいですか。」とおっしゃいま
四21 5 手 をつかまえようかと考えました。ね
四23 6 手 らおかえりですか。そのときは、山
四28 2 手 のせてくれないうか。ふわふわとし
四29 1 手 ひろいをするこことかな。ぶどうえんの
四29 3 手 あそんでくるこことかな。おぼさんのう
四29 5 手 つだいをすることかな。となりのうち
四29 7 手 もらってくるこことかな。じぶんでじぶ
四30 9 手 ではありませんか。おてがみを書い
四34 3 会 とはありますか。」先生にこうた
四36 2 会 です。わかりますか。そこにいなくて
四36 4 会 とが、わかりますか。」みんなは、しば
四42 8 会 やだめじゃないか。」「略。」「略。」
四45 3 会 したんじやないか。」「略。」「略。」
四45 6 会 いったじやないか。」「略。」「略。」
四45 9 会 「とりのこされるかと思つてさ。それ
四46 1 会 けてきやしないかと思つてね。」「略
四47 4 会 しようじやないか。」みんなはそう
四49 2 会 からわきにそれたかと思つと、石ころ
四56 3 会 「略。」「いいのかい。」きず口もだん
四56 10 会 。「だいいようぶかい。」「略。」かっ
四59 10 会 みかけなかったかい。」「略。」「略
四60 2 会 まをみなかったかい。」「略。」「略
四60 4 会 さん、知りませんか。」「略。」「そのう
四63 8 会 、どうならぼうか、かつちゃん。」こ
四87 6 会 雪が降るのだろうか。風がふいてきた

四98 6 会 うつてくれないか。」子ども四「どう
四99 2 会 うつてあげようか。」みんな「うん、そ
四99 6 会 ま」うつてくれるかね。それはありが
四103 5 会 しま「おや、だれかと思つたら、かめ
四103 5 会 たら、かめさんか。」かめ「このあいだ
四103 8 会 らしま「あ、そうか。あのかめさんか
四103 8 会 。あのかめさんかい。もうすっかり
四106 1 会 いてもらおうかな。」かめ「あんな
四110 3 会 いらつしやいますか。」うらしま「はい、
四114 8 会 かなさいましたか。」うらしま「あまり
四115 2 会 はございせんか。」うらしま「でも、
四115 8 会 うでございせんか。なんのおかまい
四117 1 会 いというのですか。」おとひめ「そうう
四117 6 会 えりになりますか。おなごりおしゅう
四129 9 会 のでございせんか。」りょうし「いや、
四132 4 会 いただけせんか。」天人「それでは、
五11 5 会 「しようとしたかと思つた。」「略。」
五13 9 会 わすれものはないか、じろう。」「略。」
五18 1 会 とこにやられるかと思つて、びくびく
五28 2 会 略。」「しんきちか、早かつたね。」し
五28 8 会 略。」「先生からかい。」「略。」「略
五29 2 会 うのはどんなことかね。」「それはこうな
五30 8 会 いうことをやるのかね。」ときいたので、
五43 3 手 ほたるはとびますか。」「略。」六
五55 8 会 。いつてみせんか。」と、さそつてく
五58 8 会 みつけた二ばん星かなあ。私たちは、
五63 2 会 たじやありませんか。」「略。」おとう
五67 11 会 、なんの用ですか、おじいさん。」と
五69 4 会 。「なんの用ですか、おじいさん。」「へ
五72 7 会 、氣でもちがつたかね。女王さまのよう
五73 3 会 、「なんの用ですか、おじいさん。」と
五74 1 会 いるではありませんか。そばには、りつぱ

五76 3 会 。「なんの用ですか、おじいさん。」「へ
五78 2 会 けてくれたのですか。ごこのすが工作の
五83 5 会 ちが、「いいですか、写しますよ。」と
五85 9 会 ない。どうしたのかい。」「略。」「略
五86 1 会 へ。」「ああ、そうか。」そのとき、下
五86 8 会 て、「おまつさんか、あなたがみえなか
五86 9 会 、かぜでもひいたかと思つて。」「略。」
五87 4 会 三つも四つもあるかと思つていたよ。あ
五90 2 会 れはどうしてですか。」とたずねました。
五91 8 会 えは水がほしいのか。」とたずねると、『
五93 5 会 ごはんでもたこうかな。」といつて、手
五94 9 会 動かないじやないか。」「略。」「さんち
五96 9 会 してやりましようか。」「略。」「略。」
五107 4 会 ろいことがあるのかい。」「略。」「そ
五108 1 会 み。おりてこないかい。ぼくの友だちの
六12 2 会 計はなりましたか。」「略。」「とい
六17 3 会 いるではありませんか。」「略。」「とい
六20 2 会 樂しもうではないか。」「うたをうたう」その
六20 6 会 うではありませんか。」みんな「そうしよ
六22 5 会 あり「あ、だれかと思つたら、きりぎ
六22 5 会 ぎりすさんでしたか。」あり二、「三」きり
六22 10 会 をやろうじやないか。」あり一、「二」「三」
六23 6 会 い。いいじやないか。」きりぎりの、パイ
六24 4 会 ているんじやないか。」あり三「でも、わ
六25 1 会 荷物。荷物があるか、ありが荷物か。」
六25 2 会 りか、ありが荷物か。」みんな「はははは
六26 6 会 夕ごはんにしようか。」あり二、「三」そ
六29 4 会 りすさんじやないか。」「二」ていね
六29 6 会 り「お元氣ですか。」きりぎりす「お
六33 8 会 かかしくんじやないか。」かかし「助けて
六35 1 会 雲、だいいようぶかい。」かかし「なんて
六51 7 会 月は、雲にはいったかと思つとすぐで、で

六五七 思うとすぐで、でたかと思うとまたすぐは
 六五八 どんなものにしようかといういろいろ相談しま
 六五九 、なぜうたいやすいかと考えました。どう
 六六〇 の話がうたえないのかと考えました。その
 六六一 しみではありませんか。お話の題はべつに
 六六二 うたってあげようか。「略」。その日、
 六六三 まは、死んでいるのか、生きているのか。
 六六四 のか、生きているのか。もちろん生きてい
 六六五 ているのでしょうか、死んでいるのでし
 六六六 ているのでしょうか。「略」。「略」。
 六七〇 「さ、どっちなか。」「略」。「おか
 六七二 動くものでしょうか。」とおっしゃいま
 六七四 のこと、わかったかい。」ときかれて、
 六七六 だるまは命がないのかなと思いました。ご
 六七八 てくださいませんか。そのかわり、にい
 六八〇 につりがしたいのか。「みこと」「あの大き
 六八二 がなかったんですか。」「みこと」「おまえは
 六八四 は、なにかあったか。」「みこと」「いいえ、
 六八六 らっしゃるのですか。」「みこと」「つりばり
 六八八 なんのごてんですか。」年より「海の神の
 六九〇 木のぼるのですか。」年より「そうです
 六九二 いらいしやいますか。」「みこと」「私は、ほ
 六九四 うでございましたか。なにかご用でござ
 六九六 ございましたか。」「みこと」「じつは、
 六九八 の神「そうでしたか。それはお困りでし
 七〇〇 神「これでみんなか。」女「はい。たいだ
 七〇二 ん。」海の神「そうか。みんなのものにたず
 七〇四 いったものはないか。」魚「ぞんじませ
 七〇六 ているものはないか。」魚たち「ほんとう
 七〇八 んできてくれないうか。」女「はい。」女の
 七一〇 でございますか。」海の神「おまえは

六九六 りばりを知らないか。」たい「このあいだ
 六九八 ではございせんか。」「みこと」「あ、これ
 七〇〇 うにみえるではないか。それは、ここから
 七〇二 、「はなをかむのかい。」といったので
 七〇四 にかよいおりはないかと思っていたら、ち
 七〇六 のでる音なのだろうか。弟は、「はな」の
 七〇八 る音ばかりではないか。ただ一つ「又」と
 七一〇 「作ってあげようか。」といひますと、
 七一二 「きみ、作れるかい。」とききました。
 七二四 なんの絵をかこうか。」と、いろいろ考
 七二六 つかさをくれないうか。」うさぎさんたち
 七二八 だから、あげようか。」「略」。「略」。
 七三〇 は、なにをしようか。」「略」。「略」。
 七三二 「略」。「トンネルか。それはおもしろい
 七三四 あなとつづけようか。」「略」。「トンネ
 七三六 て、「もう、いいかい。」とききまし
 七三八 た。「もう、いいかい。」「「略」
 七四〇 「「もう、いいかい。」「略」」おに
 七四二 んにしよう。いいかい。」「略」。「略」
 七四四 あ山のてっぺんか。わかった。」しか
 七四六 かけようじゃないか。」「略」。「略」。
 七四八 はじめよう。いいかい。」うさぎさんたち
 七五〇 ごちそうになろうかな。」のそり、のそ
 七五二 りくるのは、だれかな。」かしの木は、
 七五四 ブラウスの女の子かな。かばんをカチャ
 七五六 走ってくる男の子かな。「朝日の光がな
 七五八 つかいかたでしようか。」「略」。「略」。
 七六〇 ろいではありませんか。三 もんしろち
 七六二 にんずをかぞえたかね。」「はん長「はい」。
 七六四 なににするんですか。」先生「そんなに実
 七六六 「あら、そうですか。」男の子「ああ、
 七六八 くていっているんですか。」先生「しげた草

七一九 なんのはたけですか。」先生「知っている
 七二一 、とりかえましたか。」兄「あ、わすれて
 七二三 のか、わかりますか。」兄「どうしてかし
 七二五 ん、わからないのかい。」兄「なまいき
 七二七 よ。」兄「あ、そうか。」（四）それから
 七二九 よんでみましょうか。」母「よんでちよう
 七三一 っていたの。まだかと思った。」母「いま
 七三三 中へはいれませんか。」「略」。「むりに
 七三五 らだになつてしまふかと、思われるほどで
 七三七 てくださいませんか。」「略」。「私は、
 七三九 「略」。」といったかと思うと、いきなり
 七四一 手でぐつとひろげたかと思うと、しずかに
 七四三 た。どちらが勝ったかと思って、心配して
 七四五 ってもらっているのか。あ、ほたるだ。だ
 七四七 んでもさいているのかと思ったら、まあ、
 七四九 いはい。なんですか。」旅人「あなたがた
 七五一 のではありませんか。」ふたりは、びつ
 七五三 目ではありませんか。」ふたりは、なお
 七五五 めけてはいませんか。」ふたりは、いよ
 七五七 「どこでみましたか。」旅人は、それに
 七五九 じではありませんか。」乙「それとも、だ
 七六一 きになつたのですか。」旅人「いいえ、み
 七六三 がしたのではないか。」と、たずねるの
 七六五 を、知っているのかね。」乙「だいいち、
 七六七 まだ、知っていたかね。」乙「はい、知っ
 七六九 るじゃありませんか。」甲乙「らくだをぬ
 七七一 、いぶんがあるかね。もしあるなら、
 七七三 てきたのではないかと、思ったのです。
 七七五 うしてわかったのかね。」旅人「それは、
 七七七 、なぜわかったのか。」旅人「草をくいと
 七七九 たくないのでしょうか。 11月29日 休
 七八一 われるようになったかといえは……。秋の

八23 5 やがておきなおったかと思うと、からだは
 八24 8 、すつととびたつたかと思うと、その鳴い
 八29 7 会 はなんといえますか。「天帝は、その男
 八29 10 会 ゆうというのですか。」「略。」「天帝は、
 八38 11 会 ないというのですか。」「略。」「略。」「
 八39 2 会 満足なさるのですか。」「略。」「略。」「
 八39 4 会 略。」「そうですか。たしかにそうです
 八39 4 会 たしかにそうですか。」「略。」「略。」「
 八39 7 会 略。」「ほんとうか。」「略。」「み知ら
 八42 10 会 満足なさいましたか。」「略。」「略。」「
 八43 1 会 ちらをえらびますか。」「略。」「略。」「
 八45 4 会 なおすことができるかと、相談をはじめま
 八46 9 会 もなくくらししているかと思うと、友だちが
 八51 3 会 えさんはだれですか。」「とたずねました。
 八51 6 会 あ、『びんぼう』か、『びんぼう』はう
 八52 3 会 えさんはだれですか。」「とたずねました。
 八52 7 会 あ、『びんぼう』か、『びんぼう』はう
 八53 2 会 すんでいきはしないかと思つたのでし
 八53 8 会 えさんはだれですか。」「略。」「略。」「
 八53 10 会 あ、『びんぼう』か。」「いいました
 八62 1 会 だと思つているのかい。世界は庭の向こ
 八63 2 会 うたまごはどれかね。」「と、年よりの
 八73 7 会 になる考えはないかね。きみはみつとも
 八79 7 会 生むことができるかい。」「と、あひるの
 八80 2 会 することができかい。」「略。」「略。」「
 八82 2 会 、だれにわかるかね。わたしのことは
 八85 1 会 こへとんでいったのかというとも知らな
 八86 5 会 はまたいじめられるかと思つて、おそろし
 八95 8 会 めになるのでしょうか。5月7日(月)
 九7 6 しきを思い出しますか。「月」だけで思い
 九31 9 手 かわりありませんか。みなさんもお元氣
 九31 9 手 さんもお元氣ですか。ぼくは、こちらへ

九49 7 会 こを通らなかつたかい。」「とききました。
 九51 2 会 こを通らなかつたかい。」「たきがピーピ
 九52 1 会 こを通らなかつたかい。」「とききました。
 九53 3 会 こを通らなかつたかい。」「とたずねまし
 九56 6 会 ねこを知りませんか。」「すると、その男
 九57 2 会 れを知っていますか。」「いいました。
 九58 2 会 もなかなかうまいか。」「とききました。
 九59 4 会 あなたはたれですか。」「とたずねますと、
 九65 2 会 しゃつたじゃないか。」「略。」「略。」「
 九70 3 会 てくださいませんか。そのたびにお礼は
 九70 10 会 、ようございしますか。」「略。」「いい
 九71 5 会 いていいでしょうか。」「いちはろはわら
 九72 3 会 ちらがすすきですか。」「略。」「やまね
 九80 4 会 なふうにはりますか。」「略。」「略。」「
 九84 1 会 のがあるじゃないか。」「先生がまわつて
 九84 3 会 りました。」「これかね。これはじょうも
 九89 2 会 。」「まだやるのか。」「たかぎやるとも
 九90 3 会 校の帰りじゃないか。」「たかぎく
 九91 9 会 もういいじゃないか、そんな話——たか
 九95 9 会 つていいじゃないか。よけいなおせつか
 九96 10 会 とつたんじゃないか。」「と、ボタンをと
 九98 1 会 だ、首、いたいのか。」「たかぎぶつきら
 九98 5 会 い、ボタンついたか。」「やまだ「つかなく
 九98 9 会 てやつたじゃないか。」「やまだ「ぼくだつ
 九98 10 会 てやつたじゃないか。」「たかぎ「だから、
 九101 3 会 だ「かんにんするかい。」「たかぎ「いや、
 九102 5 会 んかの話をするのかい。」「たかぎ「しても
 九107 9 会 ってはいけませんか。」「略。」「と、み
 九120 5 会 そのまましみてきたかと思われるようにつ
 九122 2 会 泉があるのではないかと気がついた。舟を
 九127 7 会 まいえさがかるかな。この二三日とい
 九134 8 会 んだ。ちようちよか。ちようどいいや。

九136 6 会 んだい、なんの用かね。」「略。」「なん
 九137 1 会 たいと思いませんか。」「略。」「
 九138 4 会 きました。」「そうか、おかあさんをさが
 九138 5 会 がしにいきたいのか、ちようちよさん。
 九140 2 会 つ白な羽をひろげたかと思うと、ひらりひ
 九141 6 会 むることにしようかな。」「くもはからだ
 九141 10 会 いるではありませんか。くもは、ふしぎな
 九142 3 会 たしをわすれたのかい。」「略。」「略。」「
 九142 5 会 かあさんじゃないかね。」「おかあさんと
 十9 6 会 つことができるものかと思いました。その
 十12 2 会 な葉をくれませんか。」「と、おとうさん
 十13 10 会 たちではありませんか。あんないなかはつ
 十14 10 会 ちらがきれいですか。」「とたずねました。
 十15 7 会 海はどんな色ですか。」「略。」「と、お
 十15 12 会 おつた青い色ですか。」「と、日本の海の
 十16 7 会 どんなことを話をすかとたずねるのです
 十22 2 会 ち、どうしているかな。」「12ひとりの友
 十29 2 会 のものがこうなつたかというのを、考え
 十31 3 会 きないものでしょうか。ぼくがいるので、
 十31 4 会 きないものでしょうか。学校では、組の友
 十35 7 会 んなことでもいいのか。日本のゆくすえを
 十35 7 会 すえをどうするのか。」「佐吉は、もう、
 十38 1 会 きないものだろうか。」「一つぶの天然眞
 十43 8 会 光っているではないか。幸吉は、それこそ
 十45 1 会 やいていてではないか。大きなゆめは実現
 十48 1 会 かつたのではないかと思ひました。これ
 十50 6 会 は、まえ足をあげたかと思うと、その足を
 十52 5 会 した。五六歩いったかと思うと、よそのお
 十54 2 会 いすいというてきたかと思うと、また、す
 十55 2 会 眞になるのではないかと、ふと、こんなこ
 十62 8 会 みたことがありますか。能を知らない人で
 十65 6 会 てもおそれず、そうかといって、なにをし

十 66 9 会 ことだ。わかったか。「略」。太郎か
 十 68 10 会 「、だいたいようぶかい、あぶなくはない
 十 68 10 会 、あぶなくはないかい。」と、ふるえ声
 十 69 8 会 いるはずじゃないか。それが、死なない
 十 69 9 会 たを取ってみようか。「略」。「略」。
 十 70 6 会 てみようじゃないか。「略」。「略」。
 十 72 5 会 かられるじゃないか。「略」。「略」。こ
 十 72 2 会 ではないだろうか。村の人たちは、
 十 59 5 会 いうことばですか。「略」。「略」。
 十 59 7 会 ではありませんか。「略」。「略」。あくる
 十 61 6 会 ったのではないかね。」とたずねた。
 十 61 12 会 わらなかつたのか。「とせめた」。「略」
 十 62 12 会 ことばではないか。「九 父の看病
 十 65 5 会 せをききしまいかと、おそろしさにふ
 十 65 8 会 でかそげ人ですか、外国から帰ってき
 十 66 2 会 入院したのですか。「略」。「看護人
 十 66 8 会 るいのでしょうか。どうなんでしょう
 十 66 8 会 うなんでしょうか。」と、少年は心配
 十 69 11 会 わればかわるものか——これが父親であ
 十 70 7 会 。わかりませんか。チチロですよ。チ
 十 70 9 会 がわかりませんか。なんとかひとこと
 十 71 1 会 どうしたんですか。ぼくは、おとうさ
 十 72 8 会 おとうさんですか。」と、看護婦はや
 十 78 10 会 すこしよくなるかと思えば、思いがけ
 十 84 9 会 「さあ、いくのか、いかないのかね。
 十 84 9 会 か、いかないのかね。」と、父親はあ
 十 86 2 会 た。「だれですか、あの人は。」と、
 十 92 10 会 名をなんと呼ぼうかと思っているうち、
 十 51 1 会 の手がらだらうか。」と、いつてあざわ
 十 58 2 会 とをいいたのかと思ひながらやつて
 十 93 3 会 なさつたのですか。」とたずねますと、
 十 106 6 会 っているのですか。」とたずねました。

十二 11 1 会 どうするのですか。」とききました。
 十二 14 11 会 たづけてやろうか。」ひとりごとをい
 十二 17 9 会 おろぎさんですか。まだだめです。も
 十二 17 11 会 ではありませんか。はじめ短い羽を動
 十二 20 10 会 」。「そうですか。わたしはまた、あ
 十二 27 5 会 いまそこにいるかと思うと、もう次の
 十二 39 11 会 とではありませんか。クラーは、生まれ
 十二 44 4 会 みたことがあるかね。「略」。「略」。
 十二 44 5 会 いをするんですか。「略」。「略」。
 十二 45 10 会 まだあるんですか。「略」。「略」。
 十二 46 4 会 形のしぼいですか。「略」。「略」。
 十二 75 7 会 うおやすみですか。」その声は、毎日
 十二 75 11 会 うしていられるかと思うと、どうして
 十二 76 4 会 句はいかがですか。「略」。「芭蕉は、
 十二 76 5 会 」。略。「句か、まだできない。だ
 十二 78 10 会 ちは日本人ですか。」とたずねました。
 十二 79 2 会 「そうだったのかい。きみたちは、日
 十二 80 11 会 なことをきくのか。」という色があら
 十二 97 1 会 の写真帳でしょうか。これをみて、どん
 十二 102 2 会 るではありませんか。はにわには、この
 十二 103 9 会 ることができますか。ほうおう堂 こ
 十二 107 4 会 ぎが勝つでしょうか。かえるが勝つでし
 十二 107 4 会 るが勝つでしょうか。仁王さま こん
 十二 113 7 会 車ではありませんか。これは、汽車第一
 十二 115 4 会 けばいいでしょうか。それは、民主主義
 十二 136 6 会 かえてしまったのかというと、そんなこ
 十二 138 3 会 もとどおりにするか、これが、デนมール
 十二 21 8 会 植してみたらどうか、ということであり
 十三 37 9 会 おぼさん。だれかと思つた……え、い
 十三 38 2 会 やないでしょうか。げんかんがしまつ
 十三 38 4 会 いじゃないですか。え、え、はい……
 十三 38 5 会 い……そうですか。ほんとう……こん

十三 39 2 会 って来たんですか……いつ……え、う
 十三 39 3 会 ちに来たんですか……へえ……はい……
 十三 39 6 会 晩……そうですか。あいたいな、早く
 十三 39 7 会 わらう。だれかと思つたんですよ。
 十三 40 4 会 千二十五番ですか。きょう、マンシェ
 十三 40 5 会 おいででしょうか。はい、眞ちゃん……
 十三 41 11 会 いいじゃないか。帰ったばかりだか
 十三 43 2 会 て来ました——か。(顔をあげて、そ
 十三 44 5 会 はしぼいではないかという、そうでは
 十三 54 2 手 、どう思いますか。ぼくは、その絵
 十三 55 1 会 ことでもあるのか。」そういつて、喜
 十三 56 6 会 にちがうのですか、おじさん。「略」
 十三 57 10 会 」。「そう思うかね。いかにも、おか
 十三 59 3 会 これはどう思うかね。」それは、せい
 十三 59 7 会 ん。なんていうか、ただのおかあさん
 十三 59 8 会 やないでしょうか。「略」。「ぼくは、
 十三 59 9 会 ふん、そう思うかい。きちんとした、
 十三 60 11 会 」。ああ、あれか。あれは、ミケラン
 十四 6 3 会 るではありませんか。パリ、千九百
 十四 9 2 手 っている、なぜかといえ、妹にして
 十四 13 6 手 おいででしょうか、お知らせください
 十四 16 10 手 お考えではないかと心配してました
 十四 17 1 手 すぎはしませんか。おひとりでさびし
 十四 17 2 手 いになりませんか。どんなにしていら
 十四 17 3 手 らっしゃいますか、お知らせください
 十四 20 1 会 なって、「そうか。そうじがすんだら
 十四 21 5 会 「あれもそうか。」とかいいながら、
 十四 24 5 会 になったのだからと、ふしぎになつて
 十四 27 3 会 ってきたのだからと思つた。それで、
 十四 27 12 会 が調べられますか。」とおたずねした。
 十四 30 9 会 まつたのでしょうか。むかしのことはし
 十四 33 11 会 、星の世界の全部かという、なかなか

十四¹⁵8^手 おとうさんのおはかについては、どうしたものか、ちよつと私にはわかりかねます。が、おかあさんのおすきなようになさってください。十四¹⁷8^手 きょうはこれでお話をやめます。が、近いうちにまたはじめましょう。

十五⁵⁹5 一言のもとにしりぞけようとした。が、ことばみじかにその関係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、〈略〉、一路自たくへと車を走らせた。

が
(格助) 3492 ガ が じさどがしま・ところが・わ

—17³ な。まどのきのはがうこいてる。きよ
—17⁵ ようは、どんなえがかかれるでしょう。
—17⁶ しょう。どんなじがかかれるでしょう。
—17⁷ れるでしょう。だれがかくでしょう。だ
—17⁸ かくでしょう。だれがよむでしょう。せ
—17⁹ よむでしょう。せみがどこかでなきだし
—21⁷ 鯛 うたえば、くつがなる。——
—22² ゆうぎを、みんながかつてにかんがえ
—23⁷ 鯛 しました。「くつがなる」では、あし
—23⁹ 鯛 たおそらにくつがなる」では、てを
—24⁴ とびました。ここが 一ばん おもしろか
—26² つけた。こもりうたがきこえます。「〈略〉
—28¹ お。ひとつのかおが、わらったり、ない
—34² 会 にでもなることができるなら、ただ
—37² わしくなる かげがふきます。かげが
—37³ がふきます。かげがそよそよと ふきま
—37⁴ ふきます。あさかげが、そよそよとのほ
—37⁶ らをふきます。川がながれています。
—37⁷ がれています。川が、さらさらとなが
—37⁸ ます。ちいさな川が、うちのまえをさ
—38² れています。いぬがはしってきます。

—38³ ます。しろいいぬがはしってきます。
—38⁵ す。しろいいぬが、むこうからころ
—38⁷ 。あさがおのはながさきました。あさ
—38⁸ 。あさがおのはながいつつさきました
—39¹ のあさがおのはなが、いつつかきねに
—40² つじ 山のつつじがさいた。まっかな
—40³ 。まっかなつつじがいっぱい。かつこ
—40⁴ いっぱい。かつこうがないてる。「〈略〉
—42² のなかに、わたしがいますよ。みんな
—43⁵ けると、おとうさんがそばにたつてい
—44⁵ 略。」「というこえがしました。(二)
—44¹⁰ 〈略〉。」「かくせいきがよんでいます。「へ
—45¹ 会 います。「けんさがあるようですね。」
—45⁴ 略。」「こんなこえがきこえます。だん
—45⁷ たくしたちのぼんがちかづきました。
—45⁹ たおんなの人たちが、ながいみみをふ
—46⁴ たくしたちのぼんがきました。かばん
—46⁷ 略。」「おんなの人がやさしくいいまし
—46⁹ もったおじいさんが、やつぱりながい
—48³ た。(四) きしやがきました。かくせ
—48⁴ かくせいきのこえが、またひびきまし
—48¹⁰ あげました。よにんがむきあつて、なか
—49² は、きれいなはながかざつてありまし
—49⁴ と、しゃしようさんがふえをふきました
—49⁸ ました。(五) きがついてみると、さ
—50⁵ 会 略。」「やつときがついたの。お月さ
—50⁹ た。しゃしようさんがまわつてきてい
—51¹⁰) すずしいかげがふきこんできたの
—52¹ んできたので、目がさめました。もう
—52³ した。おおきな川がながれていました
—52⁵ となりのおじいさんが、「〈略〉。」「おとうさ
—52⁷ 会 、おおきなほしがひかつているでし

—53⁴ 略。」「と、わたくしがいったとき、しゃ
—53⁴ き、しゃしようさんがきました。(七)
—53⁸ 会 んせつないいい人がひろうと、だいや
—53⁹ 会 けんかずきの人がひろうと、ただの
—54¹ 会 、ひろったことがありますか。」「〈略〉
—54⁴ 会 。そうして、たまがひろえたら、お月
—54⁷ 会 。」「〈略〉。」「たまがひろえなかつたら、
—54⁸ 〈略〉。」「おとうさんがきました。「〈略〉
—55² 会 、きれいなたまがひろえたら、また
—56⁹ おぼえのあるかおが、たくさんならん
—58² 会 とき、たろうさんがくろいぬをおつて
—61⁴ 〈略〉。」「おじいさんがこういうと、しろ
—61⁹ 会 「でも、わたくしがあったら、ただの
—62² 会 ですもの。どなたがおもちになつても
—62⁶ になると、おどりがはじまりました。
—62⁷ 。きゆうにあたりがあかるくなりました
—62⁹ おおきなお月さんがでるところでした
—63⁶ 会 。」「と、おじいさんがいいました。おん
—63⁹ につれて、みんなが手をとつておど
—64⁹ あさんのこえで目がさめました。おも
—66⁸ ととき、とみこさんが、「〈略〉。」「いい
—66¹¹ すると、まさおさんが、「〈略〉。」「いい
—8¹ 「——よしこさんが、「〈略〉。」「と、へん
—9³ した。(三) 先生が、それをごらん
—9⁴ 会 あつめたことばが、ごちゃごちゃに
—11⁷ に、そのわけかたが、いろいろにかわ
—13⁷ ざりました。大あめがふりました。にわ
—14¹ ました。にわに川ができました。あめ
—14² できました。あめがやんで、にじがで
—14² めがやんで、にじができました。大きな
—14⁸ やむらさきのたまができました。ふた
—15² んまるいお月さまがのぼりました。あ

二154 二163 二196 二212 二214 二216 二234 二236 二242 二245 二246 二247 二261 二262 二263 二264 二269 二271 二276 二2710 二288 二296 二309 二310 二312 二313 二323 二324 二325 二3210 二331 二338
 らえにかくことができるでしょう。
 たのおさんたちが、ことばあそびを
 おわりに、ひとりがいったことばから
 生、大きなくもがすをかけていま
 いましたが、かねがなったので、やめ
 「先生、ゆうがおがこんなに大きく
 きなちようちよが、けさも、ゆりの
 す。だりやの花が、さきかけてしほ
 きな あおがえるが、とうもろこしの
 。あんまりいろがにているので、ぼ
 く、はじめはきがつきませんでした。
 んせんに、つぼめがたくさんとまっ
 るところに、川がありました。くつ
 ありました。くつがながれてきました
 ました。きゅうりが、くつの中にはい
 し。「せまいはしがありました。二ひ
 。二ひきのやぎが、そのはしのまん
 、一ひきのやぎがいました。『略
 と、べつのやぎがいました。やぎ
 十二ひきのぶたが、そろって川をわ
 めに、ぶうちゃんがかぞえました。『へ
 それでは、わたしがかぞえてみよう。
 略。』とんちゃんがかぞえてみました
 『こんどは、ぼくがかぞえてみよう。
 略。』ころちゃんがかぞえてみました
 、六人のめくらがありました。その
 のうちのひとりが、『略。』とい
 ものをみたことがあるかい。』とい
 と、ほかのものがいました。『略
 でさわったことがあるかい。』と、ま
 しんというおとがしてきました。『へ

二3310 二341 二345 二3610 二376 二378 二391 二402 二404 二414 二422 二424 二425 二432 二438 二456 二466 二476 二486 二504 二522 二525 二527 二542 二546 二547 二5610 二578 二588 二604 二605 二651
 ください。ぞうがとおりますから。』
 二と、ぞうつかいがいました。『略
 二六人のめくらが、ぞうつかいにた
 二『略。』めくらが、ひとりびとりか
 二いの山に、ゆきがふっているのを
 二山から小ぞうがとんできた。』
 二ろうとおとうさんが、山へのぼってき
 二どこかで、かつこうが、『略。』となき
 二なきます。たろうが、大きな声で、『へ
 二う。』たろうがぼくがたろうだよ。』山
 二『だつて、だれかがばかにするんだも
 二の。』おとう『おまえが口ぎたなくいうか
 二からだ。』おまえがきれいなことばで
 二ね。』たろう『ぼくがわるかったよう。』
 二だします。かつこうが、とおくでしずか
 二んでは、わたしがかぞえてみよう
 二これは、お月さまが、くもからでてく
 二ぼめん いちろうがでてきます。『略
 二ん そこへ、じろうがでてきます。『略
 二のぼめん さちこが、走ってでてきま
 二なると、おかあさんが、いすにこしかけ
 二いう、さちこの声がします。『略。』
 二す。『略。』さちこが、おかあさんのそ
 二きします。じろうが、走ってでてきま
 二よびます。いちろうが、走ってでてきま
 二んのよこに、三人が立ちます。おかあ
 二みました。なの花が、いちめんにさい
 二とりのおじいさんがでてきました。み
 二た。二先生が、こんなおはなし
 二こんど、みなさんが二年生になったら
 二たらしい一年生がはいってきます。
 二『あたにかい かげがふいてくる。』み

二657 二6510 二6610 二678 二692 二708 二713 二94 二112 二113 二113 二113 二125 二141 二153 二156 二158 二161 二177 二203 二206 二208 二222 二233 二234 二235 二237 二238 二252 二253 二258 二262 二264
 ゆ……』ぼち「空があかるくなって
 け「やあ、かすみきたなびいている。
 こかで、春の音がするよ。』みんなは
 『略。』という音がする。ぶた「おや、
 たしかに春の音がきこえる。』その
 『略。』という音がする。この声は
 走るきもち。それがだんだんととおく
 、花のおやねがうつつく。あ
 んたかというでしがいました。はんだ
 たかはそのおほえがわるく、そのうえ、
 く、そのうえ、ものがよく見えませんで
 、では、わたしがはなしをしてみ
 ものだということがわかりました。き
 きますと、門ぼんがはんだかを見て、
 くれません。しかたがありませんから、
 では、おしやかさまがせきにおつきに
 、はちをもった手が、するするとおし
 から、きれいな光がさしていました。
 てきました。先生が、こくばんにつぎ
 たちに。『どんな花がすきですか。』二く
 たちに。『どんな虫がいい虫とおもい
 、一本のくすのきのはえました。たい
 した。まいあさ日がでると、この木の
 なん十という村々が、日かげになりま
 なん十という村々が、日かげになりま
 になります。『日があたらないで、こ
 二『略。』「お米がはんぶんもできな
 二のあるおじいさんがいました。『略
 ました。『しかたがない。この木を
 りほかにしかたがあるまい。』とい
 百人というきこりが、切りはじめました
 と切りたおすことができました。こん

三267 のあるおじいさんが、「略。」といい
 三268 て、ふねをつくるがよい。」といいま
 三272 とう一そのふねができあがりました。
 三274 大ぜいのせんどうがのりこみました。
 三283 のあるおじいさんが、「略。」といい
 三286 きおいのいいのがあたりまえさ。鳥
 三306 。「略。」と、先生がおっしゃいました。
 三312 左がわにはまどがならんで います。
 三313 す。まどから光がさしこんで きます
 三314 ます。ぼうしかけがならんで います。
 三317 きれいにそうじがしてあります。一
 三321 あたりのようすがかわります。てす
 三325 のかべには、えがはってあります。
 三329 口には、げたばこがたくさんあります
 三332 います。はきものがきちんとそろって
 三335 びんに、さかながはいって いました
 三336 の大きなもけいがありました。青色
 三337 色のくすりびんが、たくさんならん
 三339 すみに、かれ木が立っていました。
 三341 はくせいのおりが、二ひきのついで
 三342 タリンのにおいがしてきます。「へ
 三345 びんに、赤い花がさしてありました
 三346 りました。みんながそのまわりにあ
 三351 り、とうもろこしがたくさんはえて
 三352 けには、きんぎょが三びきおよいで
 三353 ます。白いくもが水にうつって
 三354 ところ、すずめがなっています。そ
 三355 います。その声がよくひびきます。
 三356 しつでは、六年生が、はこのようなも
 三365 。大きなかまどがふたつもあります
 三366 もあります。火がもえています。お
 三366 ています。おゆがわいています。ゆ

三367 ています。ゆげがもうもうと たって
 三368 、大きなやかんがかかっています。
 三375 た。白いうさが、はこの中でねそ
 三382 うたっている声が、オルガンにまじ
 三384 た。「略。」先生がこくぼんに、「略
 三392 うな空で、ひばりがなっていました。
 三395 かえりました。ぼくがまん中で、右のか
 三406 ばたけのくわのはが、やわらかで、光つ
 三409 たいようです。かぜがふくと、くわのは
 三411 くわのはのにおいがふんとします。「へ
 三413 略。」いちろうくんが、右の方にまがつ
 三417 た。たんぼぼのみが、小人になつてと
 三422 「略。」みよこさんが、左のかたからは
 三432 白うさが 白うさが、島からむこうの
 三434 みると、わにぎめがいましたので、こ
 三436 なかまと、どっちが多いか、くらべて
 三444 。ぼくらのほうがまけるかもしれな
 三444 しれない。ぼくが、きみたちのせな
 三461 いにいたわにぎめが、白うさをつか
 三465 りっぱな かたがたが 大ぜい おとりに
 三467 りました。白うさが いままでのことを
 三469 びて、ねているがよい。」とおっし
 三472 た。するといたみが いっそうひどく
 三476 おくにぬしのみことがいらつしやいまし
 三487 、その上にねるがよい。」白うさが
 三489 。「略。」白うさが そのとおりにし
 三493 かぼちやの花がさきました、あ
 三501 かぼちやの花がさきました、は
 三503 なかなぜみも目がさめて、かぜに
 三515 ちんかつちん日がくれて、火花が
 三516 くれて、火花がみえるのみのさ
 三542 た。がん がんがかえる、がんが

三543 かえる、がんがかえる、がんが
 三544 かえる、がんがかえる。 たすき
 三546 ならんで、がんがかえる。 山があ
 三547 が かえる。 山が あれた、海があ
 三551 が あれた、海が あれた、かぜで
 三555 なって、がんがかえる。 カナリ
 三593 略。」と、ジュデーが います。「略」。
 三596 略。」と、デビッドが います。「略」。
 三598 略。」と、ジュデーが います。「略」。
 三5910 略。」と、デビッドが います。ほかの
 三602 ます。みんなの心があわないと、どこ
 三603 ようどおとうさんがおいでになつて、
 三6010 す。「みんなの心があわないと、どこ
 三615 のとき、マイクルが、「略。」といい
 三631 した。みんなの心があいましたから、
 三635 ずうみにはボートがうかんで いました
 三638 中には、おとうさんが こしかけて、ボー
 三644 へ。」と、女の子たちが いました。「略
 三646 へ。」と、女の子たちが いました。「略
 三651 へ。」と、女の子たちが いうと、「略」。
 三653 へ。」と、女の子たちが いました。また、
 三654 いました。また、心があわなくなりまし
 三658 。「略」。「バーバラが いました。「略
 三6510 。「略」。「マイクルが いました。「略
 三661 いいました。「心があわなくて はだめ
 三664 のとき、ピーターが、「略。」と、いい
 三668 略。」と、ジュデーが いました。「略
 三677 ん。そうして、風が どちらへふいて
 三679 へ。」と、おとうさんが おっしゃったので、
 三681 、小さな、白い雲が とんで いました。
 三686 「略」。「おとうさんが おきになりました
 三6810 。「略」。「バーバラが いました。「略

三116 8 会 するがにある山が いちばん みやこに
三117 7 会 りをやいたけむりが、山の上からいつ
四4 3 会 ばです。あかちゃんが生まれると、ここ
四5 3 会 くれます。もし、人がなくなつたときに
四6 6 会 と声をかけて、話が出来ます。世界じ
四7 6 会 てくれます。火事がおこらないように、
四7 8 会 、わるいびょうきがはやらないように、
四8 8 会 には、さくらの木がたくさんうえて
四11 3 会 町じゅうの友だちがみんなあつまつて
四12 5 会 い町へいくことができます。とおい
四12 8 会 からだいじなものがここにとどきます
四13 5 会 います。町ぜんたいが、ひとつになつて
四14 2 会 にわとり にわとりが、かぶのはっぱを
四14 4 会 をたべている。風がふくと、にわとり
四14 4 会 ふくと、にわとりがふわふわふくれる
四15 1 会 ところから、小鳥がとびつた。「へ略
四15 2 会 かに——よしきりがなくから」みんな
四15 4 会 んぼしたら、わたしがおになつた。み
四15 7 会 みていた。えつ子がわたしのせなかで
四16 2 会 ねんねした。せなかがほかほかあたたか
四16 4 会 でした。おかあさんが、月にてらされて、
四16 6 会 くむ。くろいかげがついてる。おか
四16 8 会 かあさんのバケツがおもそうだ。バケ
四17 1 会 。

四20 8 会 たくしです。先生が、「へ略。」とおつ
四22 3 会 そとにいたねがおいかけた。そ
四22 5 会 こそを、わたしがうまくつかまえた。
四24 4 会 た。「みっちゃんがいなくなつてから
四25 4 会 ると、みっちゃんがそばにくるような
四25 5 会 にくるような気がします。お花をか
四25 6 会 しは、みっちゃんが空をとんでい
四25 8 会 います。でも、雨がふると、どこかで
四28 3 会 として、氣もちがいいだらうな。」き
四28 5 会 に書くことに、氣が つきました。「略
四28 7 会 。「いま、わたしがしたいと思うこ
四31 6 会 かえるとき、雨がふっていました。
四31 7 会 ました。わたしが かさをさしてい
四31 8 会 ちえんの男の子が ないていました。
四31 9 会 の女の生徒さんがきて、ないてい
四32 3 会 、げたのはなかが切れてあるけな
四32 7 会 やりました。雨がびしゃびしゃふる
四33 3 会 しました。はなかができあがると、男
四34 6 会 れども、べつに氣が つきました。「略
四34 7 会 の ことばに、氣が つきました。「こ
四35 3 会 の女の生徒さんが 子どものげたの
四35 7 会 いだした ことばが ありますね。「へ略
四35 9 会 生は、そこに氣が ついたのです。お
四35 10 会 です。おとうさんがおいでにならな
四36 1 会 うさんの ことばが、ひびいてきたの
四36 3 会 その人の ことばが、生きていとい
四36 3 会 いると いうことが、わかりますか。」
四36 6 会 とき、たろうさんが、「へ略。」とい
四36 7 会 生、こんなことが ありました。」と
四36 9 会 した。「わたしは、きのう、となりの
四37 1 会 そこには、ぶどうが、たくさんおいし
四37 3 会 べたくて しょうが ありませんでした。

四37 8 会 をおさえたものがありました。それ
四38 8 会 あさんの ことばがとめたからです。」
四39 1 会 略。」ここまで 話が すすむと、みんな
四39 2 会 めいじぶんの ことが 思いだされてき
四39 9 会 んの ことばに 氣がついて やめました
四45 2 会 った、かっちゃんがおしまいにし
四45 5 会 。おしまいは 氣がらくで いいから
四45 7 会 へ。「へ略。」「氣がらくには なくさ
四45 8 会 へ。「へ略。」「なにが つらいの。」「へ略
四46 5 会 ままは もう よすが いいよ。おととい
四47 1 会 「へ略。」「まん中が いいな。十五ば
四47 1 会 ばんめだ。そこらが 一ばん 安全らしい
四47 3 会 へ。「かっちゃん が そういふなら、十
四48 2 会 とには、大きな木が しげっているの
四48 6 会 とき、かっちゃんが、「へ略。」と、声
四49 7 会 ら、てつぼうの 音が ひびいて きました
四49 10 会 ました。かっちゃんが、いまの てつぼう
四50 1 会 られたと いうことが わかりました。力
四50 2 会 。力の つよい さんが、三ばで、かっ
四50 10 会 めの てつぼうの 音が、ひびいて しま
四51 6 会 、こんどは、ぼくが かわつて、かつ
四51 7 会 「へ略。」「わたしが おんぶ しまし
四51 10 会 ちゃんは、とぶ力が なくなつて しま
四53 1 会 に、高い、高い山が そびえて しま
四53 5 会 した。「みずうみが みえた。」「へ略。」
四53 7 会 みの ほうから、風が ふいて きました。
四53 8 会 たちには、この 風が なんと いえない
四53 10 会 こんもりとした 林が ありました。が
四54 3 会 した。一わの がんが、みずうみの き
四54 4 会 をうけとった一わが、きず口を てい
四54 6 会 もつて いた がんが、手早く くるくる
四54 9 会 かっちゃん は ねつが できたので、み

四54 10 てきたので、みんながかわるがわる、つ
四55 2 んが、大きなへびがやってくる
四55 3 やってくる。やってくる。そこで、
四55 3 で、目ざといがが五六は、あちこち
四55 7 いう木のはの音がしました。それ
四55 8 、それは、小鳥たちが、ねぼけてとびま
四55 9 かっちゃん、ねつがずつとさがって、
四56 1 合 た。「かっちゃんが、気がついたよ。」
四56 1 合 かっちゃんが、気がついたよ。」「略」
四56 4 よくなり、みんながはこんでくるた
四56 9 合 ぼくたちのたびが、あんまりおくれ
四57 2 合 「略」。かっちゃんが、立ちあがって
四57 9 た。すっかり用意ができる、みはり
四58 8 。二十九わのかおがそろいました。け
四58 9 れども、もう一わがみえません。」「略
四59 1 合 」。」「みはりばんがない。」「二十九
四59 5 合 けびました。山びこがむこうで、「略」
四59 8 合 た。「よし、ぼくがさがしてくる。」
四60 8 まいました。しかたがないので、二十九
四60 10 、夜つゆでからだがびつしよりぬれて
四61 2 そつがかりのがが、口をひらいて、「
四61 9 。二十九わのがが、食事をすませる
四62 1 合 出発がかりのがが、みんなを元氣づ
四62 4 合 で、はばたきの音がきこえます。みる
四62 5 と、なかまのがが、へびからぬけだ
四62 8 のへびも、いきがくるしくなったの
四64 4 合 「略」。かっちゃんが、わぶるようにち
四64 10 合 う。まだ、からだかじゅうぶんではな
四65 1 合 ら、あとのものがじゅんじゅんにた
四65 5 合 うすむらさきの雲が、おだやかにた
四67 9 合 口あそび。」「かえるがひとひよこ、ふた
四68 5 合 の小さい子が二百ば、こ米が一

四68 6 もが二百ば、こ米が一びよう、子かも
四69 5 合 」。」「略」。」「ダンスがすんだ。」「略」
四70 2 合 く。こころは、ふりがやむと、なりもと
四72 10 合 」。」「略」。これがあつた人には、
四73 3 合 さんおもしろいのができました。これ
四76 5 合 れ——れんげの花がひらいた。そ——
四83 1 合 も立てました。弟が、「略」。といっ
四83 5 合 えでした。ねえさんが、赤いきれでな
四83 9 合 ーズのおじいさんができあがりました。
四84 1 合 ンタクローズさんがぶらんこして
四84 2 合 ったので、ねえさんがわらいました。そ
四84 3 合 日の夜、お友だちがあつまりました。
四84 5 合 んさきに、ねえさんが、エスさまのおた
四84 7 合 うちのひでおさんが、おもしろい紙し
四84 9 合 かいのみきこさんが、しょうかをうた
四85 1 合 うとのたつこさんが、それにあわせて
四85 3 合 ととき、おかあさんが、かごにみかんを
四85 7 合 もらいました。弟が、「略」。と、大き
四85 9 合 いったので、みんながわらいました。
四86 6 合 いると、みそささいが、「略」。とない
四87 1 合 」。」「とない。冬がきたので、よろこ
四87 5 合 らない。さむい。雪が降るのどううか。
四87 6 合 降るのどううか。風がふいてきた。すみ
四87 7 合 みがまの上に、雲がでています。あの
四88 1 合 白い雲に、だれかが、ちぢまつている
四88 3 合 ちらちらと雪が降る。すずめ親
四88 7 合 くれる。からすがいそいでかえつた
四89 4 合 」。」「と、子すずめが、「略」。すず
四91 6 合 、ひたいからゆげがたつ。ほおにはあ
四91 7 合 つ。ほおにはあせがつたわっている。
四92 4 合 ものではない。雪が降りだすと、ぼく
四94 1 合 はみんな黒い。雪がかおにかかるのも

四94 3 えんとつからすがとぶように、黒い、
四94 4 合 い、こまかいものがとんでいる。あば
四95 3 合 あんなに雪のたねがあるものだ。降つ
四96 5 合 そば四人の子どもが、一びきのかめを
四97 4 合 へうらしまたろうがとおりがかります。
四97 10 合 だって、ぼくたちがつかまえたのでも
四102 5 合 うみの中うらしまが、海べでつりをし
四102 6 合 ます。そこへかめがでてきます。かめ
四103 1 合 らしませんが。」「かめがよびかけても、う
四103 2 合 している。」「かめがつかません。かめ
四106 7 合 お天氣で氣もちがいいな。波もしず
四106 10 合 うに光つたやねがみえるでしょう。」「
四107 3 合 える。」「かめ「あれがりゅうぐうのご門
四108 5 合 きれいなこしかけが二つおいてありま
四108 6 合 ます。そこへ、かめがうらしまをあんな
四108 8 合 ます。かめ「こがりゅうぐうでござ
四109 9 合 す。いろいろな魚がでてきてならぶ
四110 1 合 から、おとひめさまがあらわれます。か
四110 2 合 。かめ「このかたがうらしまさんでこ
四110 3 合 おとひめ「あなたがうらしまさんで
四112 2 合 ましょう。」「魚たちが、たくさんでてき
四116 5 合 げましよう。」「かめがたまてばこをもつ
四116 6 合 は、どんなことがあっても、おあけ
四117 10 合 」。」「かめ「わたくしがまた、おともをい
四118 3 合 氣をつけて。」「かめが、うらしまの手を
四119 4 合 」。」「白いきけむりがたちのぼり、元
四120 2 合 ものでもでんとうがつきました。いま
四120 3 合 でくらかったへやが、あかるくなりま
四120 4 合 た。みんなのかおがみえます。本もよ
四121 1 合 ほどたくさんの人が、はたらいにいる
四121 3 合 ものです。」「かめが、はたらいに
四121 9 合 なんです。光がでるのはなぜでし

四二二五 会 このでんきゅうがないと、光ること
四二二六 会 いと、光ることができません。でん
四二二九 会 、どれほど手かすがかかっているこ
四二三一 会 チです。わたくしがこの世に生まれ
四二六五 会 まつ原に、波がよったりかえった
四二七一 会 ひとりのりょうしが、みほのまつ原へ
四二七六 会 らか、よいにおいがしてきます。みる
四二七七 会 に、きれいなものが、かかっています。
四二八五 会 のは、みたことがない。もってかえ
四二九三 会 から、ひとりの女がでてきます。女「
四三〇一 会 、これは、わたしがひろったのです。
四三〇三 会 ます。」天人「それがないと、天へかえ
四三〇六 会 天へかえることができません。どう
四三〇九 会 、そのはごろもがないと、まうこと
四三二六 会 いと、まうことができません。」りょ
四三三六 会 ゆれるたもとがうつくしい。白
四三三七 会 まつ原に、波がよったり、かえつ
四四三 会 のあかんぼ 山に雨が降る、きりがおる
五四三 会 山に雨が降る、きりがおる、夜は夜つゆ
五四四 会 おりる、夜は夜つゆがおる。水をふくん
五四七 会 山から川のおかんぼが生まれる。山のてっ
五五一 会 山から川のおかんぼが生まれる。川のおか
五五五 会 ていく。汽船や荷船がおる。下水の水や
五五八 会 「にいさん、汽車がはいってきたよ。」
五五九 会 「おりるかたがすんでから、ごじゅ
五九四 会 さんとぼっちゃん、乗ってきたよ。じ
五九一〇 会 おばあちゃん、海がみえるよ。」「略」。
五九一七 会 「きかんしの人が、いっしょうけんめ
五九二一 会 あれをみて、汽車が、とまったりとおっ
五九三三 会 って乗っている人がいないか、しらべる
五九五 会 私は、としおさんが、みつおさんにあて
五九六 会 、汽車の旅にきつぷがいのと、おなじこ

五九五 会 いによって、ねだんがちがいますが、私は
五九五 会 へでも旅をすることが出来ます。「略」。
五九六三 会 へ、配たつをする人がきて、「略」とい
五九七三 会 けど、あて名の字がそまつなので、わか
五九八二 会 うちに、きよくの人が、私たちをかたはし
五九八八 会 しおくんから手紙がきたよ。」みつおさ
五九九 会 「略」。「みつおさんがよろこんで、私を手
五九九 会 におつたえすることができました。三
五九九 会 。一だいの長い電車が、おきやくをいっば
五九九 会 帰っていった子どもがありました。いち
五九九 会 せん。いちろうさんが家に帰ると、おかあ
五九九 会 帰ると、おかあさんが、げんかんにむかえ
五九九 会 へ。」「おじいさんが、かわいがってくだ
五九九 会 知らないおじいさんが、おりるとき、「略
五九九 会 ついた、わかい人がいるんです。ぼくは
五九九 会 たら、ひとりの人が立ちあがって、「略
五九九 会 、どこかの女の人が、ぼくに気がついて
五九九 会 の人が、ぼくに気がついて、「略」。」と
五九九 会 れど、いうところがなかったものだから
五九九 会 どこかのおじいさんが、荷物を二つ持って
五九九 会 いい子どものことが書いてありますよ。
五九九 会 、ポッポ——」汽車が走っています。まっ
五九九 会 長い、長い貨物列車がやってきます。材木
五九九 会 かんぼんのクレーンが、あがつたりさがつ
五九九 会 茶や、しんじゅなどがはいっています。船
五九九 会 でしょう。えんとつがたくさん立っています
五九九 会 とつからも、けむりが、むくむくとたちの
五九九 会 しょう。おかあさんが、だいどころで、ご
五九九 会 まやなべから、ゆげがふきでています。ガ
五九九 会 ろの青い火は、ガスがもえているのです。
五九九 会 わりのかべに、石炭がでています。さかん
五九九 会 。ほりだされた石炭が、山のようにつまれ

五九六二 会 ています。この石炭が、汽車や汽船を走ら
五九六六 会 しには、くらすことができます。では、
五九六九 会 い木や、草や、動物がみえますね。これは
五九七二 会 です。このような木が、たおれて土にうず
五九七六 会 しのたいようのねつが、かたちをかえ、石
五九七八 会 れていて、いまそれが、私たちのために、
五九八三 会 のお友だちから手紙がきました。そのかた
五九八五 会 の中に、こんなことが書いてありました。
五九八九 会 、こちらのようすが、いろいろとわかる
五九九二 会 かいどうは、いまがいちばんのしいと
五九九三 会 しいときです。冬がすぎて、春がきたか
五九九四 会 冬がすぎて、春がきたからです。山の
五九九五 会 べんには、まだ雪がのこっています。け
五九九六 会 ほどから下は、雪がありません。山の木
五九九七 会 せん。山の木のがではじめました。ふ
五九九八 会 っ、木のみどりがこくなってみえます
五九九九 会 。きゅうにあたりが美しくなると、私は
五九九 会 るほどたのしい氣がします。私のすきな
五九九 会 い花です。この花がよくさく年は、ほう
五九九 会 のうちには、うしが十三とういます。白
五九九 会 。なかに、子うしが三とういます。けさ
五九九 会 ちらでは、田うえがはじまりました。私
五九九 会 ています。つばめが、私のすぐ目のまえ
五九九 会 の方でうぐいすの声がした。「略」とい
五九九 会 ちどまると、鳴き声がやんだ。しばらくす
五九九 会 るときも。たんぼぼがさいいていたり、すみ
五九九 会 いていたり、すみれがさいいていたり、名ま
五九九 会 ないが、きれいな花がさいいていたり。おや
五九九 会 り。おや、こんな花が——またみつけた、
五九九 会 ったばかりの日の光が、さっといっぱいな
五九九 会 んできた。いい氣持がして、たのしくなっ
五九九 会 をでる。子うしが水のむ岸をでる。

五17 圃 きも鳴らさず 船がいく 船がいく。
 五18 圃 ず 船がいく 船がいく。海のはてか
 五27 いそがしそうに人々が通ります。「略」。
 五29 もあります。まさこが、「略」。「略」。
 五31 西の方をみると、日がしずんでまもない空
 五32 ない空に、大きな星が光っていました。「へ
 五37 大きな声で、はるおが、東の空をみながら
 五310 圃 ん星は、ねえさんがみつきたいわ。」そ
 五311 をみると、小さな星がちらちら光っていま
 五45 圃 、はるおさんは目が早いね。」そこへ、
 五46 となりのごろうさんが、かけよってきて、
 五48 まん中に、大きな星が光っていました。そ
 五53 、空いちめんに、星がでていました。「略
 五56 受持のやまと先生がおいでになって、「へ
 五61 、子どもや町の人々が、あつまっていまし
 五67 圃 「略」。「じゅんばんがきたので、みせてい
 五68 圃 るいきれいなたまがみえる。そのまわり
 五72 いましたが、かげんがわからないようです
 五76 たので、あたりの人がわらいました。「略
 五78 圃 「ねえさん、あれが星なの。」「略」。「
 五711 圃 略」。「また、みんながわらいました。「略
 五78 圃 「略」。「あれが、ぼくのみつけた二
 五79 きねにあさがおの花が、三つはじめてさき
 五910 圃 あさん、あさがおがさきましたよ。」と
 五63 圃 「あの三つの花が、そろってしんこき
 五65 圃 てごらん。おまえが、たねをまいたので
 五612 圃 、そのたねからめがでなかつたら——」
 五614 圃 たら——」「めがでないことはありま
 五615 圃 りません。わたしが水をやったんですも
 五618 圃 しら。あやこさんがひっぱったの。」「へ
 五6210 圃 たねはおかあさんがまいたのだけれど、
 五633 圃 た。けれども、花がついたり、みがなっ

五633 圃 花がついたり、みがなったりしたのは、
 五638 圃 ねてばかりいたのが、はうようになり、
 五653 いさんとおばあさんが、住んでいました。
 五661 すると、金のさかながかかってきました。
 五6610 圃 をとったよ。それが、海へ帰してくれ、
 五679 ました。おじいさんが金のさかなをよびま
 五682 圃 さん、おばあさんが、新しいおけがほし
 五683 圃 んが、新しいおけがほしいといっていま
 五687 圃 には、新しいおけができていますよ。」「
 五688 圃 「略」。「おじいさんが帰ってみると、おば
 五692 圃 ました。おじいさんが金のさかなをよびま
 五695 圃 おばあさんは、家がほしいといのです
 五6910 圃 「略」。「おじいさんが帰ると、りっぱな家
 五6911 圃 帰ると、りっぱな家がたっていました。お
 五708 圃 ました。おじいさんが金のさかなをよびま
 五708 圃 ますと、金のさかながおよいできました。
 五712 圃 「略」。「おじいさんがおばあさんのところ
 五718 圃 ました。おじいさんが、「略」。「いいま
 五731 圃 ました。おじいさんが金のさかなをよびま
 五7310 圃 ました。おじいさんが帰ってみると、どう
 五7311 圃 う、ちゃんとごてんができていて、おばあ
 五7510 圃 まっ黒になって、波が高く、ゴーゴーとう
 五773 た、ふるい小さな家がたっていました。入
 五774 圃 。入口におばあさんがすわっていました。
 五775 圃 した。こわれたおけが一つ、ころがつてい
 五778 圃 大きな花です。先生が、「略」。「とおし
 五779 圃 大きな花です。先生が、「略」。「とおし
 五781 圃 れいです。だれがいてくれたのです
 五785 圃 の花は、いけださんが自分のうちのわか
 五787 圃 でした。これで教室が明るくなりました
 五793 圃 た。つぎのような文が、はりだされました
 五798 圃 略」。「川の中の石が、のびたちちんだ

五799 圃 。「葉のかげぼうしが、魚のようによい
 五7910 圃 「略」。「川から水がわきあがってくるよ
 五7911 圃 略」。「略」。「波が、すべりだいをすべ
 五802 圃 「川の中の石と石とが、おどっています。
 五803 圃 略」。「略」。「水が光って、とんではね
 五804 圃 いていたら、せながあつくなってきました
 五808 圃 いました。むすびめがとけて、ほうきがお
 五809 圃 めがとけて、ほうきがおちりました。それが
 五809 圃 がおちりました。それが、にしみりさんのせ
 五812 圃 った、そとのけしきがよくみえました。
 五825 圃 から——」と、先生がおっしゃいました。
 五829 圃 金 先生のお友だちが、学校をみにいらっ
 五831 圃 した。そのお友だちが、記念に写真を写し
 五834 圃 た。先生のお友だちが、「略」。「とおし
 五836 圃 やったとき、だれかが、「略」。「とわらい
 五8410 圃 うえさんの字びきができますね。」と、
 五8411 圃 「略」。「と、先生がおっしゃいました。
 五852 圃 ん 「子どもたちがくるまでに、そこら
 五855 圃 へ、村の子どもたちが、「略」。「略」。
 五858 圃 おや、おまつさんがいない。どうしたの
 五866 圃 ら、ひとりの子どもがきます。りょうかん
 五868 圃 つさんか、あなたがみえなかったから、
 五8611 圃 だ。黒いかみのけがふさふさして、まる
 五871 圃 さして、まるい目が二つあって。「略
 五876 圃 「おかしいわ。目が四つもあったら。」「
 五882 圃 でも、おぼうさんが赤いおびをおしめに
 五889 圃 「略」。「子どもたちが、みんな、りょうか
 五8910 圃 「ひとりの子どもが、「略」。「とたずね
 五905 圃 いでなかつたことがあった。それでな、
 五907 圃 さんにおかあさんがあつて、おかしい
 五908 圃 」。」「略」。「なにがおいしいのか、こ
 五916 圃 のびているだけのことがありました。「略」

五九一七 〇。「このたけのこが、えんの下にあたたま
五九一八 で、『おまえは水がほしいのか。』とた
五九一〇 やると、たけのこがよろこんで、のびる
五九二五 のこにごはんつぶがついているだろう。
五九二六 こにごはんのつぶが——こりゃあ、たけ
五九二八 のはいっているのが、たけのこはんで
五九二九 のこにごはんつぶがついているのが、た
五九三〇 ぶがついているのが、たけのこはんだ
五九三二 の山から、大きな月がのぼってくる
五九四二 わの子 さんちゃんが、友だちと、山へお
五九四四 そう小さくて、元気がなく、死んだように
五九五二 〈略〉。さんちゃんがひろって帰ると、お
五九五二 帰ると、おとうさんが、「〈略〉。」とおっし
五九五六 ちがえるように元気がでて、だんだん大き
五九六五 、となりのおじさんがおしえてくれました
五九六六 くれました。夏休みがすむころには、ひな
五九七四 ち、わたり鳥のむれがとんできます。その
五九八一 「ひわの子は、それが自分のなかまの鳴き
五九八五 、それをおかあさんがききつけました。」「
五九八六 けました。「ひわが、いい声でさえずり
五九八八 した。パタパタと音がしましたので、みん
五九八八 ましたので、みんながとびおきてみると、
五九八八 ると、どこかのねこが、しのびこんで、ひ
五九八八 た。さんちゃんたちが水をふきかけたり、
五九八八 こにひっかかれた羽がふらりとなって、半
五九八八 ました。さんちゃんがべんきょうをはじめ
五九八八 ねます。さんちゃんが、ハーモニカをふき
五九八八 るしておきます。人がときどききて、水道
五九八八 道をつかいます。水が、ジャー、ジャー、
五九八八 ちゃんのおかあさんが、せんたくをします
五九八八 くと、いろいろな鳥がやってきます。すず
五九八八 ってきます。すずめがきたとき、ひわが、

五九三二 めがきたとき、ひわが、「〈略〉。」と鳴いて
五九三二 と鳴きました。ひわが、「〈略〉。」と、さわ
五九三二 ました。みそさざいが、くらしい木の中から
五九三二 からきたので、ひわが、「〈略〉。」と鳴きま
五九三二 らか、しじゅうからがやってきて、「〈略〉」
五九三二 、すっかりそのまねができるようになりま
五九三二 は、いくつものうがいができるのね。」さん
五九三二 と、また、わたり鳥がやってきました。あ
五九三二 る日、二三ぼのひわが、さんちゃんのうち
五九三二 いました。旅のひわが、「〈略〉。」といいま
五九三二 う。ぼくはおともができるのさ。」「
五九三二 略〉。」「ほら、羽がだめだから。こうし
五九三二 にいるよりしかたがないのさ。」「〈略〉。
五九三二 略〉。」「おもしろいことがあるのかい。」「〈略
五九三二 そこへ、さんちゃんが学校から帰ってきた
五九三二 近いところに製材所ができて、のこぎりの
五九三二 ぎりのやかましい音が、あさからばんまで
五九三二 んは、ますますひわがかわいくなりました
五九三二 た、小さな鉄のねじが、ふいにピンセット
五九三二 こともないような物が、ごたごたと耳には
五九三二 いるばかりで、なにがなにやら、さつぱり
五九三二 計屋の店であることがわかった。自分のお
五九三二 車や、ぜんまいなどがならんでいる。きり
五九三二 は、いろいろな時計がたくさんならんでい
五九三二 る。ただ自分だけがこのように小さくて
五九三二 いにパタパタと足音がして、小さな子ども
五九三二 して、小さな子どもがふたり、おくからか
五九三二 き、父の時計屋さんがはいってきた。時計
五九三二 たねじのないのに気がついた。「〈略〉。」「ね
五九三二 がついた。「ねじがない。だれだ、しご
五九三二 かないのだ。あれがないと、町長さんの
五九三二 のかいちゅう時計がなおせない。さがせ

六九五五 も、役にたつことがあるのかしら。』と
六九五五 「〈略〉。」と、それがまた心配になってき
六九五五 くれていたたいようがおおだしたので、
六九五五 をだしたので、日光が店いっぱいさしこ
六九五五 きた。すると、ねじがその光を受けて、ピ
六九五五 みつめていた女の子が、思わず「〈略〉。」「
六九五五 いたかいちゅう時計が、たちまち、ゆかい
六九五五 めた。ねじは、自分がここにはいなかった
六九五五 、この時計ぜんたいが、ふたたび活動する
六九五五 たたび活動することができたのだと思うと
六九五五 日おいて、町長さんがきた。「〈略〉。」「〈略
六九五五 した。小さなねじが一本いたんでいまし
六九五五 はと 一ぴきのありがいました。あつい日
六九五五 歩いてくると、のどがかわきました。ちょ
六九五五 ようど、そばに小川が流れていました。あ
六九五五 た。もうすこしで口が水にとどきそうにな
六九五五 うになったとき、足がつるりとすべって、
六九五五 。それを一わのはとがみつきました。はと
六九五五 じに岸にあがることができました。「〈略〉」
六九五五 、あの木の葉の船が流れてこなかったら
六九五五 をひとりのかりうどが弓矢を持って通りま
六九五五 上には、一わのはとがとまっていた。ま
六九五五 の声をきいて、はとが下の方をみますと、
六九五五 みますと、かりうどが矢をつがえている
六九五五 一のぼめん まくがあくと、きりぎりす
六九五五 あくと、きりぎりすが大ぜいあつまって、
六九五五 そのうしろに合唱隊がならんで、うたをう
六九五五 まん中に、しきしきがタクトをいっしんに
六九五五 ます。しばらく音楽がつづいてから終りま
六九五五 テーブルには、お茶が用意してあり、くだ
六九五五 してあり、くだものが、たくさんおさらに
六九五五 、しもてから、ありが三びき、ゆつくりで

六21 10 ㊦ やおや、ありさんがきたよ。」バイオリ
六22 2 ても、ありたちは気がつきません。シロフ
六22 4 りたちははじめて気がついて、あり「あ、
六23 9 ㊦ たたいて、「ぼくがひょうしをとってあ
六25 1 ㊦ 大きな荷物。荷物があか、ありが荷物
六25 1 ㊦ 物があか、ありが荷物か。」みんな「は
六26 2 になっていきます。雪がちらちら降っていて
六26 3 ㊦ そとをみて、「雪が降ってきた。」あり
六26 5 ㊦ ない。」あり「三風がでてなければいい
六28 2 そとに、きりぎりすが二ひきたずねてきま
六28 8 う。」きりぎりす一、戸をトントンとた
六29 1 しい。」あり一、二が戸の方をみています
六29 3 、きりぎりす一、二がはいってきます。あ
六30 4 あげよう。」あり一、おくの方からみつ
六30 7 てたちざります。雪がたくさん降ってきま
六31 4 はげしい風。いねが波のようにゆれる。
六31 6 ゆれる。2 かかしが、「へのへのもへ」
六31 8 いる。きものすそが風にあおられる。3
六31 10 あおられる。3 雲がちぎれてとぶ。4
六32 1 ぎれてとぶ。4 木が大ゆれにゆれる。木
六32 1 れにゆれる。木の葉がとぶ。5 かかしの
六32 2 。5 かかしのまゆがまっすぐにのびる。
六32 2 目だまの「の」の字がくるくるまわる。口
六32 3 る。口の「へ」の字がのびたちちんだり
六32 5 7 かかしの顔に葉がとびかかる。てっぺ
六32 6 けたかんかんぼうしがふきとばされる。顔
六32 6 る。顔のうしろを雲がとぶ。8 いねが大
六32 7 雲がとぶ。8 いねが大きく波うつ。はげ
六32 8 風の音。9 かかしが風にまきあげられる
六32 10 し。10 からすの子が、びっくりしてすか
六33 1 おかあさんがらす、羽をさか立てて、
六33 3 。12 白いひげの雲が風に流されている。

六33 6 のからだのかっこうがかわる。雲「おや、
六34 3 みえないよ。」14 風がふく。雲のひげがあ
六34 3 風がふく。雲のひげがあおられて長くのび
六34 10 ぐさせている——声がでないのである。雲
六35 6 ㊦ 、また、すごいのがくるぞ。」16 また、
六36 10 しまう。21 風の音がよくなる。それに
六36 10 。それにつれて、空がうす赤くなってくる
六36 11 ってくる。夕やけ雲がうかんでいる。22
六37 1 。22 ビルディングが立ちならんでいる町
六37 7 だれのようななみだがこぼれおちる。はな
六37 7 こぼれおちる。はなが動く。口が動く。25
六37 8 る。はなが動く。口が動く。25 ずつと下
六37 11 ほどの自動車や電車が、ひっきりなしにゆ
六38 3 ばめ。27 子つばめがかかしをみつける。
六39 8 ㊦ たしたちのなまかがわるい虫をとってそ
六39 9 ㊦ どは、あなたがたがまもるんですもの。
六40 1 ㊦ 「ああ、いい考えがある。心配しないで
六40 8 、楽しかった思い出が、うかんできえて
六40 10 きえていく。32 日がくれかかる。夕やけ
六40 10 くれかかる。夕やけがばら色にくくなる。
六41 1 どに、一つ二つと火がつく。34 ビルディ
六41 4 かったつばめのむれが、かかしの方へと
六41 6 親つばめと子つばめが、かかしのそばにと
六42 5 ㊦ あ、みなさん、日がくれきらないうちに
六42 9 たまりになる。それがほぐれて、一列にビ
六42 11 をはなれる。かかしが列のまん中とはいっ
六43 6 のむれ。39 その列が空にすいこまれてい
六43 7 つつむようにして日がくれる。美しい空の
六44 3 ㊦ とうにあのかかしが帰っているだろう。
六44 4 ㊦ ど、いったいだれがつれて帰ったんだろ
六44 7 ㊦ なんだって——ぼくが目を見ましたときに
六44 8 ㊦ おびみないなものが向こうの山の方へと

六45 4 へのもへ」のかかしが、むねをはって、目
六45 8 にそよぐ金色のいねが、いちめんにつづい
六47 5 ㊦ かきの秋 やまが、草屋ののきまでた
六48 4 ㊦ どこかでだれかがめくってる、大き
六49 9 ㊦ 空。楽しいことがあるような、ああ
六51 4 おと、みちこの三人が、かげふみをして遊
六51 5 そのうちに、あたりがきゅうにくらくなつ
六51 5 くらくなつて、かげがみえなくなりました
六51 9 ㊦ ます。「お月さまが早く走っているね。
六52 1 ㊦ 略。」と、よしおがいました。月はい
六52 8 月は動かないで、雲が大いそぎでとんで
六52 11 ㊦ まじやないわ。雲が走っているのよ。」
六53 1 ㊦ 略。」と、みちこがいました。ふみお
六53 3 ㊦ おくんはお月さまが走っているといつた
六53 4 ㊦ 。みちこさんは雲が走っているという
六53 5 ㊦ ごらんさない。雲が大いそぎでとんでい
六53 7 ㊦ ごらん。お月さまがずんずん動いていく
六53 8 ㊦ ずん動いていくのがよくわかるよ。」「へ
六53 9 ㊦ まをみていると雲が動いていくし、雲を
六53 10 ㊦ ているとお月さまが動いていく。いった
六54 2 ㊦ た。よしおとみちこが「略。」「略。」
六54 2 ㊦ おとみちこが「月が走る。」「略。」と
六54 2 ㊦ こが「略。」「雲が走る。」といいあつ
六54 4 た。ふみおはふと気がついて、まえの方に
六55 1 ていきます。よしおが大きな声をだしまし
六55 2 ㊦ た。「やっぱり雲が走っているんだね。
六55 6 ㊦ 帰りました。ふみおがねるまえにそとをみ
六56 9 とつぎのようなものができあがりました。
六57 7 を書きます。みんなが喜ぶようなことを書
六58 5 った朝、一年生の子が、学校にくる道で、
六58 6 る道で、はき物に雪がついてころびました
六58 8 こを通りかかった人が、おんぶして学校ま

六五九三 おもしろいことに気がつきました。それは
 六五九五 うして、ふだんの話がうたえないのかと考
 六五九六 えました。そのわけがわかりました。うた
 六五九七 のことばの声のかずが、五か七になつてい
 六六〇四 五 タノシイコトガ——七 アルヨウナ
 六六〇九 七 カボチャノハナガ——七 サキマシタ
 六六一三 とのあてはまるものがみつかりました。こ
 六六一四 つかりました。これがわかったとき、私は
 六六二三 「略」。一口話 川が流れていました。く
 六六二四 れていました。くつが流れてきました。そ
 六六二五 た。そこへきゅうりが流れてきました。き
 六六二六 きました。きゅうりがくつの中にはいりま
 六六三〇 、アルコールのびんがきらつと光った。ア
 六六三四 コールは銀の水。弟がせきがでるので、お
 六六三四 は銀の水。弟がせきがでるので、おかあさ
 六六三六 いる。わたしもせきがでたらいいなあ。手
 六六四一 うしてだろう。だれがねむくするのだろう
 六六五八 あに。このなぞの答がわかった人は、紙に
 六六六二 。どんなふうにお話すすんでいくか、樂
 六六七二 に、一ぴきの子ぐまが住んでいました。お
 六六七九 「略」。と、子ぐまがいうと、さるは子ぐ
 六六八七 れました。一組の人がみんな考えてこし
 六六八八 ことでした。第一号がどんなふうになるか
 六六九〇 通っているねえさんが、帰ってきました。
 六六九二 ま、この雪だるまが、お話をすればいい
 六六九五 らいました。「口があるから、お話もす
 六六九六 ども、はるえさんが、なにかお話をして
 六六九七 だしたので、みんながわらいました。「略
 六六九八 「略」。」おかあさんが、「略」。とおし
 六六九九 んな命というものがありますよ。それを
 六七〇〇 も、それだけでは命があるとはいえないと
 六七〇一 、「まだけんとうがつきません。」と答

六七〇七 だいいち、おまえが生きているんだから
 六七〇八 いいながら、この手が動かないから、やは
 六七〇九 やはり雪だるまは命がないのかと思いま
 六七一〇 思いました。ごろうが学校で、「略」。「ハ
 六七一一 、いきをするから命がある。うしもうまも
 六七一二 息をしないから、命がないんだと、ごろう
 六七一三 。そばからねえさんが、「略」。といいま
 六七一四 るでしよう。だれがそうさせるのかしら
 六七一五 うですよ。あなたが、それを動かそうと
 六七一六 じように、あなたがねむっているときで
 六七一七 分とあさがおの花とが、たいへん近いもの
 六七一八 におさん、お願いがあります。」ほで
 六七一九 ほおりの「お願いがあります。」ほで
 六七二〇 みこと「一どつりがしたいのです。」ほ
 六七二一 と「そんなにつりがしたいのか。」ほお
 六七二二 ども、つてみるがいいさ。わたしは山
 六七二三 ざおを持つていくがいい。」ほおりの「
 六七二四 おをひきあげる。糸がぶつりと切れて、
 六七二五 もやっぱりえものがなかったんですか。
 六七二六 みこと「申しわけがありません。どんな
 六七二七 こへひとりの年よりがでてくる。年より」
 六七二八 年より「では、私がいいことを教えてあ
 六七二九 しょう。そこに船がある。あれにお乗り
 六七三〇 の門のそばにいどがあつて、そのそばに
 六七三一 ぼには、大きな木が立っています。あな
 六七三二 のまえに、大きな木が立っている。ほおり
 六七三三 んなどここにいどがある。きれいな水だ
 六七三四 な。」そこへ女の人がでてきて、いどの水
 六七三五 あ、りっぱなかが、水にうつっている
 六七三六 六九八 正面に、海の神がこしをかけていらっ
 六七三七 へ、さっきの女の人がでてくる。女「海の
 六七三八 に、りっぱなかがいらつしやいます。

六九一四 に、りっぱなかが。」女「さようでござ
 六九一五 へ年をとったかたがあらわれて、私に海
 六九一六 りがとう。」魚たちが合唱をする。みこと
 六九一七 いじなつりばりが、でてきて神さま
 六九一八 いた小さな虫めがねがでてきた。「略」。
 六九一九 これは、いいものがみつかった。」と思
 六九二〇 と、向こうのけしきが、小さく、さかさま
 六九二一 みた。どこかの屋根が、めがねのたまいっ
 六九二二 話にきいた望遠鏡が、できるかもしれない
 六九二三 うど、めがねのたまがはまるくらいの大き
 六九二四 これで、一本のつづができた。つぎ
 六九二五 ちぢめたりすることができ。「略」。ぼ
 六九二六 ぞいてみた。長い物がぼんやりみえる。二
 六九二七 電柱だ。はりがねが六本あることまでわ
 六九二八 じだ。おや、だれかが、しょうじのあいだ
 六九二九 えますよ。あ、人がこつちをみている。
 六九三〇 はない。ただ、はながつまっているだけだ
 六九三一 が、そのために発音がすこしおかしい。「
 六九三二 あねえ」というのが、「アドデエ」とき
 六九三三 「略」。というのが、「略」。ときこえ
 六九三四 えたので、にさんが、「略」。といつて
 六九三五 のようにいったことがあるのではない。し
 六九三六 「略」。というのが、いかにも弟のいい
 六九三七 きである。その、弟がまだいいわなことば
 六九三八 ルンというばくおんがきこえてきた。弟の
 六九三九 らつてくれない。弟が、「略」。といった
 六九四〇 おもしろいことに気がついた。弟ははなが
 六九四一 がついた。弟ははながつまっているために
 六九四二 ために、あることばが、うまく発音できな
 六九四三 、できないことばがある、ということに
 六九四四 る、ということに気がついたのである。ぼ
 六九四五 ひとりで、なぜはながつまるといえなくな

六107 なることばと、はながつまってもいえるこ
六108 てもいえることばがあるのだろう、と考
六108 けは、すぐけんとうがついた。はながつま
六108 とうがついた。はながつまつたために発音
六108 つまつたために発音ができなくなるような
六108 い。そうして、はながつまつても発音でき
六108 な音は、はなから声がない音のほずであ
六108 のをいうときに、声はなからでるかでな
六108 ことを、考えたことがなかった。これはお
六109 では、なんとという音が、はなから声のでる
六109 「、かむ」の「ム」がいいにくいらしい。
六109 いかにもはなから声のでているような気が
六109 がでているような気がする。そこでぼくは
六109 、はなのあなから息がもれないようにして
六109 苦しい。はなから声のでる音であることは
六110 「ノ」のつくことばがあったら、「ダ」や
六110 のとき、新しいことがあたまにうかんだの
六110 なつてしまった。弟がいえない音の中で、
六111 一つ「ヌ」という音がぬけているだけであ
六111 。これもはなから声がぬけているようだ。
六112 音のできていることがわかった。このほか
六112 、弟は「ミ」、「ム」がいえなかった。この
六112 はなの音であることがわかった。そうして
六112 である音ではないことがわかった。ぼくは、
六113 とはなかった。それがいま、一つ一つの音
六113 つたものであることがわかって、びっくり
六114 した。ま四角で、骨が二本しかついでいな
六114 ったときに、みんなが、「略」といって
六114 だな。こんなものがあるものか。」と
六115 した。ただしちゃんが、そばから、「略」
六115 にこしました。たこが青空で右や左にゆれ
六115 」と、ただしちゃんがいました。ほんと

六116 ました。たろうさんが、わきから、「略」
六117 くねると、いいのりができました。はじめ
六118 、ただしちゃんの顔が、生き生きとうきあ
六119 たときにつけたすじがたてについています
六120 よう。でも、のりがかわかないうちにあ
六121 五ひきのうさぎさんがいました。ある日の
六121 そこへ、おさるさんがやってきました。「へ
六122 こには、くるみの実が、ころころ落ちて
六123 ちよろと、りすさんがきました。「略」。
六124 すさんは、くるみがいすきだそうだが
六125 をきめました。おにが、目をつぶって、「へ
六126 くにげました。おにがあらからくると、
六126 一ひきのうさぎさんが、あわててにげたの
六126 「略」。新しいおにがきまって、またはじ
六129 ころで、だれかの声がします。それはたぬ
六129 いるんだ。きつねがおこって、追いか
六129 いては、すぐぼくが、きつねにみつかつ
六130 「略」。たぬきさんが、ま顔になつていう
六130 たちは、たぬきさんがかわいそうになりま
六131 ちは、なんてひとがいいんだろう。ぼく
六131 だ。このトンネルがほしかったのさ。こ
六132 に、大きなしさがあらわれた。「へ
六134 かさんは、もし自分が勝つたら、このしか
六134 そのかわり、ぼくが負けたら、この角を
六136 ぶどうのつるに、角がひっかかりました。
六136 「略」。しさがさんがおこって走ると、こ
六136 「このくされ木めが。」ぶんぶんおこり
六137 つぎのようなことが、赤いクレヨンで書
六137 しかさん、私たちが勝ちましたよ。けれ
六138 のかげに、とらさんがねむっていたのです
六138 が、うさぎさんたちがあまりガヤガヤ話を

六139 。「いいごちそうができた。」とらさん
六139 てくれた。おなかのぺこぺこなところだ
六140 ろだ。おいしい肉がたべられる。どれ、
六140 りません。とらさんが手をのぼして、一ぴ
六141 かみなりのような声がびきました。それ
六141 んでした。「おれがさきにうさぎをみつ
六141 「略」。「おれが、いまたべようとし
六141 「一ひきのとらさんが、いきなり、もう一
六142 。二ひきのとらさんが、つかみあいをはじ
六142 。野原には、日の光がいっぱいさしていま
六142 す。クロバーの花が、まっ白にさいてい
六143 した。みつばちさんがとんできて、「略」
六143 の木 夜明けの風が流れてくる。中庭の
六143 る。中庭のキャベツが、なたねが、やぎ小
六143 キャベツが、なたねが、やぎ小屋が、ぼう
六143 なたねが、やぎ小屋が、ぼうとあらわれ
六144 れる。どこかで小鳥が鳴いた。チチ、チチ
六144 まどは、まだねむりがふかい。校門のかし
六144 「略」。「朝日の光がななめにさしてきた
六144 きた。校舎の半分が光った。校庭のつゆ
六144 光った。白いちようが、ういたりしずんだ
六144 ぎへと、子どもたちがやってくる。学校じ
六144 ゆうは、いちどに花がさいたようだ。あち
六144 だ。あちこちのまどがあいて、教室も目が
六144 があいて、教室も目がさめた。わらい声が
六144 がさめた。わらい声はじける。オルガン
六144 はじける。オルガンがびく。カラン、カ
六144 、カラン。おけいこがはじまった。「略」
六144 略」。えんどうの花が、風もないのにゆれ
六144 る。「もう帰る子がある。一年生だ。手
六144 てみたり、みんなが勉強する教室にはい
六144 とを考えた。そうじがはじまった。渡りろ

七三〇 かわつていた。弟が、ぼくよりさきに
 七三二 「そこへ、はるおが帰ってくる。はるお
 七三三 あ。」しずかな音楽がはじまる。母「白い
 七三一 ち、きれいなしるがでそうね。」母「おか
 七三二 」。なごやかな音楽がつづく。はるお、お
 七三二 ち。あんななおおむしが。」兄「おかあさん、
 七三二 ち。ようね。」母「それがいいわ。」はるお「に
 七三三 いで。」兄弟ふたりが、いま生まれたばか
 七三三 ち。だす。庭には、日光が降りそそいでいる。
 七三六 た。それでも、汽車がゆれるたびに、前後
 七三五 ち。二ともいったことがあるのですもの。そ
 七三六 ち。。「ここに子どもがいる。かわいそうだ
 七三六 ち。《略》。」頭の上で声がしました。すぐうし
 七三六 ち。、なんだか、まわりがすこしゆるやかに
 七三七 ち。やかになり、からだがらくになったよう
 七三七 ち。くになったような気がしました。私は、さ
 七三七 ち。あげました。だれかが、「略。」といった
 七三七 ち。いったので、みんながわつとわらいまし
 七三七 ち。よこのわかい男の人が、ただひとり、わ
 七三七 ち。「うしろのおばさんがいてくれましたの
 七三八 ち。、そのわかい男の人が、「略。」とい
 七四一 ち。ふいに、はくしゅがおこった。目をさ
 七四一 ち。の席にひとりの青年が立っていた。かれは
 七四二 ち。大きな声をだした人があった。みると、し
 七四三 ち。《略》。」はくしゅが四方からおこった。
 七四四 ち。々の手を渡り、お金がその中にたまつた。
 七四四 ち。私のまえにもぼうしがきた。私も喜んで、
 七四五 ち。、二三どのおし問答が、ふたりのあいだに
 七四七 ち。そうとすると、文章が、だんだんくわしく
 七四八 ち。ようなものです。心がはつきりとしてい
 七四九 ち。はつきります。心がくもっていると、い
 七五〇 ち。ル大会」という文章が、二へんあります。

七四八 きりと、そのようすがわかります。ドッ
 七四七 のドッジボール大会があった。ぼくも、せ
 七四六 のほうは、センターが外野へでしまった
 七四五 、あいてのセンターが、「略。」とさわい
 七四四 て、ぼくたちのほうが勝ってしまった。第
 七四三 、ドッジボール大会がはじまった。どの学
 七四二 とひがし村の学校とが、しあいをするこ
 七四一 った。たかやま先生が、「略。」と、「元氣
 七四〇 へ。」と、用意のふえが鳴った。しんぼんの
 七三九 た。しんぼんの先生が、「略。」といわれ
 七三八 ことになった。ふえがまた「略。」と鳴
 七三七 らと鳴って、しあいがはじまった。ぼくら
 七三六 村の学校のセンターが、喜んで、「略。」
 七三五 さげんだ。ぼくは氣が氣ではない。みかた
 七三二 かのたのおうえんだんが、「略。」と、大声
 七三一 てる。のこったものがふんとうした。やが
 七三〇 「略。」と、ふえがひびいた。思いがけ
 七二九 。すぐまた、しあいがはじまった。むちゅ
 七二八 「と鳴った。どちらが勝ったかと思つて、
 七二七 十で、ぼくらのほうが勝った。うれしいよ
 七二六 すまないような氣持がした。第二回めは、
 七二五 ぐらのほうのボールが、よくあいてにあた
 七二四 あいだに、勝つことができた。こんどは、
 七二三 校だ。たかやま先生が、「略。」と、はげ
 七二二 、「さあ、こんどがだいじだ。みんな元
 七二一 略。」おうえんの声が耳にひびいてくる。
 七二〇 いてくる。センターが、外野のセンターに
 七一九 をねらった。ボールがピュッととんできた
 七一八 「略。」という声がおこった。ふいに、
 七一七 た。ふいに、ボールが、ぼくのところにと
 七一六 「略。」はくしゅがおこった。ぼくたち

七五八 は、うれしくて、胸がどきどきしていた。
 七五七 つきり写しだすことができるとはかぎりま
 七五六 ど、かえって、文章がみじかくなつていく
 七五五 なくなつていくことがあります。心にはつ
 七五四 なりません。五年生が、運動場で、たいそ
 七五三 ます。一年生の唱歌がきこえてきます。つ
 七五二 きます。つばきの花がまっかにさいていま
 七五一 た落ちています。海がみえます。家と家と
 七五〇 です。そこで、虫が鳴いています。つむ
 七四九 ています。つむじ風が、わたしのまえを走
 七四八 えを走っていく。紙が、くるくるまいをし
 七四七 たら、ふつと、風がふいてきた。おかあ
 七四六 んの鏡、庭のはつばがうつっている。ほた
 七四五 つかまえました。雨がはれて、にじが大き
 七四四 雨のはれて、にじが大きくでました。た
 七四三 んぼの上で、つばめがちゅう返りをした。
 七四二 した。あさがおの花が、ラジオの音楽をき
 七四一 ています。ほそい雲が、ますますほそくな
 七四〇 さん、いま、柱時計がとまりました。黄色
 七三九 花に、黄色いちょうがとまっています。こ
 七三八 う。なにかの花びらが、くもの巣にかかっ
 七三七 ころで。ボタンと音がして、まりが、そと
 七三六 ンと音がして、まりが、そこからとびこん
 七三五 ちゃんたちの話し声がする。考え考え歩き
 七三二 しても、ポトンと音がする。さきだけみえ
 七三一 だけみえることし竹が、ざわざわと、動い
 七三〇 のに。まよったせみが、かきの木につきあ
 七二九 ととととと、からすが鳴くと、あつちでも
 七二八 。こんなに、からすがいるのかしら。すみ
 七二七 ている。めじろの声がきこえている。雨が
 七二六 がきこえている。雨が降る。風がふく。さ
 七二五 いる。雨が降る。風がふく。さくらの木が

七六二 がふく。さくらの木が、ぬれてゆれている
 七六一 空を向いている。日がたっている。なの花
 七六〇 すぐもり。小さな虫がたまつて、顔のと
 七五九 がた。ばくちく火花が、パンパン、もうく
 七五八 っている。豆のつるがまきついて、まきつ
 七五七 いて、まきつくものがなくなつた豆のつる
 七五六 た豆のつる。夏の風がふきこんで、新聞な
 七五五 ぬける。しずかに波がよせている。みんな
 七五四 、毎日はれ。波の音がきこえている。子ど
 七五三 っている。子どもの声がきこえている。あつ
 七五二 。麦のとりのいれ、日がてりつける。どんど
 七五一 き、島の、ポンポン船がでかけていく。雨あ
 七五〇 かけていく。もみじがまっかで、山のいも
 七四九 いもをほっている人が二三人。ふろからみ
 七四八 る。よい天気。うめがさく。方々のうちで
 七四七 に、二つのやりかたがあります。一つは、
 七四六 たの庭そうじ、それがすむのをまつていた
 七四五 りとでていた。もやが深いから、遠いよう
 七四四 まの上を、にわか雨が通る。そのずつと高
 七四三 ところでは、ひばりが一つ、さえずってい
 七四二 あれもない。うまが、水のにおいをかい
 七四一 たら、まあ、子どもがわらつていたんだよ
 七四〇 くの中。甲乙ふたりが、あちこちをみまわ
 七三九 こへ、ひとりの旅人がやつてくる。旅人「
 七三八 「もし、もし。」甲乙が、いっしょにふり返
 七三七 そうして、左の足が一本短くて——それ
 七二六 うすを、甲乙ふたりがみてとつて、なにか
 七二五 らくだは、まえ歯が二三本ぬけてはいま
 七二四 れから、つけた荷がありましたね。」甲
 七二三 法廷。旅人と甲乙が、ならんでいる。裁
 七二二 らんでいる。裁判官がはいってくる。裁判
 七二一 どうした。」乙「目がさめてみると、らく

八四五 ありました。親ぜみが、あのほそくとがっ
 八四七 冬もぶじにこすことができました。春がき
 八四八 とができました。春がきてても、たまごはそ
 八四八 ままでした。暑い夏がやってくると、たま
 八四一〇 のようなうちゅうが、はいだして、あお
 八四五 一 から、大小の木の根が、からみあい、かさ
 八四六 二 す。だから、虫たちが、いいかげんにすす
 八四六 三 もので、とりついたがさいご、ようににそ
 八四七 一 どうしてこんなことができるのでしょうか。
 八四七 二 人間のあかんぼが、したのさきをじょ
 八四七 三 につれて、六本の足がだんだん強くなり、
 八四八 五 それでたいそうほねがおれて、このうえな
 八四八 六 ちは、たいへん生長がおそくて、ようにい
 八四八 七 いと、親になることができます
 八四九 三 きます。七年の月日がたったころ、せみのの
 八四九 四 わきかたで、いまが夏だということや、
 八四九 五 うことや、よい天気がつづいていることな
 八五〇 二 色をした六本足の虫が、こしを高くして、
 八五〇 三 かしなものです。皮がこわばっていて不自
 八五一 六 は、一本のささだけがはえていました。せ
 八五一 七 ったところに、小枝がわかれていました。
 八五一 八 なかに、たてのすじがはいり、われめがで
 八五二 三 じがはいり、われめができました。すると
 八五二 四 かい、せみのからだはみだしてきました
 八五二 五 てきました。せなかがでます。頭がでます
 八五二 六 せなかでます。頭がでます。羽がぶらり
 八五二 七 す。頭がでます。羽がぶらりとさがりまし
 八五二 八 、腹の下のはうだけが皮にかくれています
 八五三 一 しい夜風にあたるのが、うれしそうです。
 八五三 二 れしそうです。朝日が山の上のぼって、
 八五三 三 ぼって、明かるい光がさつとさすころにな
 八五四 六 、ほかのあぶらぜみが「略。」と鳴きは

八24 10 した。そこへなかが集まってきて、にぎ
八25 2 声と、むかしの人がうたつていますが、
八25 6 死がいは、ありたちがよつてたかつてひい
八26 4 いな四頭びきの馬車が走つてきます。中
八26 5 きます。中には天帝が乗つておいでです。
八27 2 をつけたむすめたちが、楽しげに歌つたり
八28 3 に光り、はくちようがしずかにういていま
八28 4 と、林の中にごてんがあつて、中から、は
八28 5 から、はたをおる音がひびいてきます。天
八28 7 ていたはたおりひめが、いっしんにはたを
八29 6 ぶんのないけだかさがこもつています。「へ
八32 9 ました。一年の月日がたつて、いよいよそ
八32 11 川で楽しくあうことができました。(二)
八33 2 ん千なん万という星がかさなりあつて、あ
八33 5 この星は、一つ一つがはつきりとみえない
八33 6 ずいぶん、遠いことがそうぞうされます。
八34 3 です。一光年は、光が発してから、一年
八34 6 、太陽から発した光が、地球にとどくまで
八35 8 ころに光っている星があります。百光年の
八37 3 ろに、金持の王さまがいらつしやいました
八37 7 になりました。王女がこがね色のたんぽぽ
八37 8 さまは、「この花が、みたとおりのこが
八38 2 になると、み知らぬ人がはいつてきました。
八38 5 と、そのみ知らぬ人がいきました。「へ略」
八39 3 手にさわつたものが、みんなこがねにな
八40 7 しい庭をもつことができます。「こんなひ
八41 6 た。そのとき、王女がはいつてきました。
八42 6 った。もし、ひめが生き返るなら、わし
八42 9 のうの、み知らぬ人があらわれしました。「へ
八44 4 に、ひとりの王さまがいらつしやいました
八45 4 ご病氣をなおすことができるかと、相談を
八45 6 をなすというものができました。その

八46 7 持だと思ふとからだがよわかつたり、から
八46 7 わかつたり、からだがつようぶだとちえが
八46 8 がじようぶだとちえがたりなかつたり、金
八46 9 かと思ふと、友だちがいなかつたりしまし
八47 5 しかかりました。日がくれましたが、王子
八47 7 まつな一けんの小屋がありました。その小
八47 8 した。中から人の声がきこえてきます。王
八48 9 には、うすぐらいひが一つともっているだ
八48 11 でした。ひとりの男が、いまにもごろりと
八49 8 た。幸福「幸福」が、いろいろな家へた
八50 2 も、それでは人の心がよくわかりません。
八50 3 をしました。だれかがきいたら、自分は「
八50 7 くむかえてくれる人があつたら、その人の
八50 9 した。この「幸福」が、いろいろな家をた
八50 10 いぬのかつてある家がありました。その家
八50 10 にいつて、「幸福」が立ちました。その家
八51 1 家の人は、「幸福」がきたとは知りません
八51 1 こじきのようなものが家のまえにいるのを
八51 2 家にかつてあるいぬが、おそろしい声で追
八51 8 家の人も、「幸福」がきたとは知らなかつ
八52 1 こじきのようなものがきて、にわとりをぬ
八53 1 たが、その家の人がでてみると、まずし
八53 11 こじきのようなものが、おもてに立つてい
八54 1 の家の人も「幸福」がきたとは知らないよ
八54 3 、その家の人の心がよくわかりました。
八55 3 かぎり、美しい砂地がみわたされた。ぼく
八56 3 ってみると、足あとが曲がつている。そこ
八56 6 波うちぎわのともめが目について、それに
八56 8 わきみをしたあたりが横にそれている。こ
八56 9 ひきあげてある小船がある。よし、あれを
八57 3 しっかりした足あとがついている。ぼくは
八57 6 美しい大きなけしきが目まえにひらけて

八58 4 お寺の屋根や停車場が目についた。すると
八58 5 のように小さな汽車が、けむりをはいて走
八58 10 目のまえに高い山々がそびえて、ずつとつ
八58 11 をみると、大きな川が遠くへ流れている。
八59 3 まにのこつていける雪が目についた。あの山
八59 5 もつと大きなけしきが見えるだろう。山の
八59 6 山の上には、青い空がすきとおるようす
八59 7 もつと大きなけしきが見えるだろうと思つ
八59 10 ほど、大きな世界がみえる。」とおつし
八60 4 た。野原にはかれ草がつみあげられ、こう
八60 6 わりには、大きな森があり、森の中には深
八60 7 中には深いみずうみがあつた。みずうみの
八60 9 ろに、一わのあひるがすわつていた。それ
八60 10 、親あひるは、ひながでてくるまえに、も
八61 2 でおよぎまわるほうがすきであつたからで
八61 4 う、一つ一つたまごがわれた。「へ略」と
八61 5 らも小さなひなの首がでた。「へ略」と親
八61 6 へ略」と親あひるがいうと、ひなたちは
八62 1 へ略」と親あひるがいうと、ひなたちは
八62 4 へ略」と親あひるがいうと、ひなたちは
八62 9 きた年よりのあひるがいつた。「へ略」
八63 3 、年よりのお客さんがいつた。「へ略」
八63 8 へ略」でだまされたことがあつてね、そのひな
八64 1 うにしてやるのできなかつた。わた
八64 5 ことを教えてやるがいいよ。「へ略」
八64 10 うその大きなたまごがわれた。「へ略」と
八67 7 は、二つの鳥の家族が、一つのうなぎの頭
八67 8 つれられたひなたちが通つていくと、一わ
八67 9 ていくと、一わの鳥が、「へ略」というと
八67 10 が、「あれをみるがいい。あそこにいる
八68 1 うと、もう一わの鳥がとんできて、そのみ
八68 5 へ略」と、親あひるがいつた。「へ略」年

八七〇 七 は、立っていたほうがいいか、歩いていた
 八七〇 八 か、歩いていたほうがいいかさえも、わか
 八七〇 八 らなかった。すがたがみつともないばかり
 八七〇 一〇 、草むらにいた小鳥がおそれとびたつた
 八七〇 一〇 た。「これも自分がみにくいばかりに
 八七二 四 きた。そこにはかみが住んでいた。あひる
 八七二 五 った。つかれて、気がしずんでいた。朝が
 八七二 六 いた。朝がた、かみがとびおきた。そうし
 八七二 八 「略。」と、かみがいった。あひるの子
 八七三 二 、そこへ二わのがながやってきた。どちら
 八七三 五 略。」と、その一わがいった。「略。」こ
 八七四 一 鳴った。がんのむれが、そろってあしのあ
 八七四 二 とびたつた。また音がひびいた。ものすこ
 八七四 二 。ものすこい鳥うちがはじまったのである
 八七四 五 ていた。青いけむりが、くらい木のあいだ
 八七四 七 のぼった。かりいぬが、ピシヤ、ピシヤと
 八七四 一〇 そろしい大きないぬがそのすぐそばに立つ
 八七五 七 をついた。「自分がみにくいので、いぬ
 八七六 一〇 わからなかった。風がひどいので、あひる
 八七七 五 は、小屋の入口の戸がすこしあいているの
 八七七 八 中には、おばあさんが、ねことにわとりと
 八七九 二 へ。」と、おばあさんがいった。そこで、あ
 八七九 七 たまごを生むことができるかい。」と、
 八七九 一〇 略。」すると、ねこがいう。「略。」「略
 八八〇 二 だしたりすることができるとかい。」「略
 八八〇 四 かしこいものたちがものをいっている
 八八〇 七 やかな空気と日の光が流れてきた。あひる
 八八〇 一〇 略。」と、にわとりがさげんだ。「略。」
 八八一 一 さんは、することがないから、そんなこ
 八八一 六 「おまえさん、気がくるつたのだよ。ね
 八八一 七 もぐったりするのがいい氣持かどうか。
 八八一 一〇 のいっていることがおわかりにならない

八八二 一 えさんのいうことがわからない。じ
 八八二 四 はいけないよ。人がしんせつにしてあげ
 八八二 七 まえさんは口かすが多すぎる。だから、
 八八二 八 おつきあいするのがいいやなのさ。ほんと
 八八三 五 けれど、すがたがみつともないので、
 八八三 八 された。(四) 秋がきた。森の木の葉が
 八八三 八 がきた。森の木の葉ががね色や茶色にな
 八八三 一〇 。ある夕ぐれ、太陽が美しくしむるときで
 八八四 一 りっぱな鳥の一むれがやってきた。まぶし
 八八四 一〇 て、はくちようたちがみえなくなると、す
 八八五 五 たらなど望むことができるよう。そのうち
 八八五 六 。そのうちに寒い冬がきた。あひるの子は
 八八五 六 の子は、水のおもてがすっかりこおってし
 八八五 九 のおよぎまわるあながだんだん小さくなっ
 八八五 九 あひるの子は、あながこおってしまった
 八八六 二 早く、ひとりの農夫が通りかかった。あひ
 八八六 七 だ。たちまち、牛乳がへやの中に流れたの
 八八七 二 りした。おりよく戸があいていたので、あ
 八八七 八 ていた。あひるの子が、きびしい冬のあい
 八八八 一 いそうである。太陽がてりはじめ、ひばり
 八八八 一 てりはじめ、ひばりが歌いだしたとき、あ
 八八八 四 をばたつかせることができた。まえより強
 八八八 四 氣をうち、とぶことができた。どうしてこ
 八八八 六 には、たくさんの木がかんばしくにおい、
 八八八 八 きれいで、春の喜びがみちあふれていた。
 八八八 九 の美しいはくちようがあらわれてきた。は
 八八九 一 んだかなしい思いがこみあげてきた。「へ
 八八九 四 みつともないものが、おくめもなく近
 八八九 八 にくろされたほうがましだ。」そういつ
 八九一 一 うであった。生まれがはくちようのたまご
 八九一 八 れた。小さな子どもがきて、水にパンや麦
 八九一 九 ちぼん小さな子どもが、「略。」とさげん

八九一 一〇 あすこに新しいのがあるよ。」とさげん
 八九二 一 そうだ。新しいのがきた、きた。」と喜
 八九二 七 なは、「新しいのが、いちばんきれいだ
 八九二 一〇 をとったはくちようが、新しいはくちよう
 八九三 四 ことを考えた。それが、いまでは、すべて
 八九三 七 た。すると、つばさがサラサラと音をたて
 八九三 一〇 にさげんだ。「私がまだみにくいあひる
 八九四 一〇 とき、こんな幸福があらうなどとは、ゆ
 八九四 五 ました。ういたもみがあったので、手です
 八九四 一〇 まいてから、早くめがでるということです
 八九五 三 らもみのもとのほうがすこしふくらんでい
 八九五 七 白いめのようなものができました。これが、
 八九五 七 のができました。これが、ほんとうにめにな
 八九六 一 きようは、お天気がいいので、もみまき
 八九六 四 まり深くほると、根が下へのびすぎて、あ
 八九六 四 すぎて、あとでなえがよくとれないそうで
 八九六 七 きました。いつ、めがでるでしょう。5
 八九六 九 みから黄みどりのめができました。ひたさな
 八九六 一〇 ないほうは、まだめができません。5月21
 八九七 二 18度 もう、なえが、2 cmから3 cmにの
 八九七 四 みからも、やつとめがでてきました。水に
 八九七 五 。水にひたしたほうが、1週間早くでまし
 八九七 八 ぬ 晴 27度 なえが朝風にゆられるよう
 八九八 一 みどりの新しいなえが、だんだん育ってい
 八九八 四 きをしました。いねがよく根をはって育つ
 八九八 六 した。これから、水がきれないように氣を
 八九九 二 こしずつ新しいなえがでてきました。これ
 八九九 五 中からでた新しい葉が、5 cmぐらいになり
 九〇〇 六 きとしています。根が横へはるので、廣
 九〇〇 七 、廣いところのほうが育ちがよいと思いま
 九〇〇 七 ところのほうで育ちがよいと思いました。
 九〇〇 九 いだから、新しい葉がたくさんでてきまし

八101 ます。ずっと日でりがつづいたので、水を
八101 みんなで植えたなえが、いきおいよく育っ
八101 1本ずつ植えたなえが、だいたい7本ぐら
八102 度 いねのほのさがふくらんで、いまに
八102 らんで、いまにもほがでそうです。8月
八102 晴 28度 いねのほがではじめました。葉
八102 から、黄みどりのほがでました。田植えを
八102 くり 25度 ほがでそろいました。ほ
八102 と、毛のようなものがたくさんはえていま
八102 しゃんこだったさが、ふくれてかたくな
八104 ら、中に、青いものがまるくふくらんでい
八104 んでいました。これが、きつと実になるの
八104 ねの害虫——いなこが6びきほどもいました
八104 黒いなかのたまごが生みつけられていま
八105 せいなのびないねが、5かぶありました
八106 植えたかぶには、ほが10ぐらいついていま
八106 まりがわかないことがわかりました。もみ
八106 1500つぶもみができたわけです。
八107 ったいねかけに、日がよくあたるようにき
八108 2日ほしたら、もみがよくかわきました。
八108 をしました。きかいがないのでくふうしま
八108 した。きれいなお米ができました。11
八109 地で、4ℓのげん米がとれました。平年作
八109 に3・5dlのげん米がとれるのですから、
八109 れなかった明かるさがあらわれます。黄色
八109 また、ちがった感じがします。みどり色の
八109 もっとちがった感じがするにちがいありま
八109 の音には、ある感じがこもっているもので
八109 えとはちがった感じがします。三音、四音
八109 さらにちがった氣持がします。オルガンの
八109 ん。色の組みあわせが、さまざまの感じを
八109 という一つのことばがあります。このこと

九77 くらがちがったものがあらわれてくるでし
九93 を思いうかべることができですが、あまり
九94 になって、まとまりがつかず、心の絵がみ
九94 りがつかず、心の絵がみだれてしまします
九10 心持をあらわすことができるし、また、さ
九10 ともできるという話がおもしろかった。そ
九11 かせてくれた。川波がザワザワとたちさわ
九12 あるが、いかにも雪がしんと降りしき
九12 きっているような氣がした。ただ一つのた
九12 。ただ一つのたいこが、そのうちかたによ
九14 、ゆめをみていた人が、にわかに目をさま
九14 す場面を演ずることがある。こんなときに
九14 持まであらわすことができるものらしい。
九14 樂をきいても、それがわからないのは、そ
九14 。もし、きく人の心が高ければ、それだけ
九14 れだけ音楽のねうちが生きてくることにな
九15 の終りごろ、つばめが電線や物ほしざおに
九15 とならんでいることがあります。この中に
九15 し生まれた子つばめが、たくさんまじって
九16 、口ばしの下の赤色が、親つばめほどこく
九16 ん。口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえ
九16 て、大ぜいのつばめが、ならんでいるのを
九17 十月のすえ、子どもがつばめをつかまえま
九17 小さな金ぞくのいたがついていました。そ
九17 たものだということがわかりました。しか
九17 トラリアまでいくのがあるというこです
九18 はんしよくしたものが、秋には、南ヨーロ
九18 し生まれた子つばめがたくさんいます。ま
九18 。約十万ばのつばめが、きゅうに落ちてき
九18 うに落ちてきたことがあります。その年は
九18 ます。その年は氣候がわるくて、九月の中
九18 同じ寒さになり、雨が降りつづきました。

九20 という運動に全國民が、加わったほどです
九20 す。協会へは、電話が、ひっきりなしにか
九20 とき、あいていた家がけんあつたので、
九20 たくさんのはりがねがはりまわされて、つ
九21 たちのとまるところがつくられました。い
九21 やにはいつてくる人があると、たちまち、
九21 。たくさんつばめがはじめて運ばれてき
九21 まで、こやみなく雨が降っていました。晩
九21 に、二千ばのつばめが着きました。その夜
九21 一台の貨物自動車、五千ばのつばめを
九22 リア動物園の人たちがひき受けて送ったつ
九23 で、まだそのいたでがなおっていないこ
九23 かし、この國の人々が、あわれなこの小鳥
九23 持は、この國の人々が、どんなに高い教養
九23 機という文明の利器が、このしごとにつか
九24 はりそうであることがわかりました。日本
九24 れません。日本に春がくると思うと、もう
九25 き下につくった古果がなつかしいのでし
九25 春になると、だれもが、このめずらしいお
九26 夕やけ かあさんがぼんやりみえるかや
九27 秋風にプールの水がゆれている 草原に
九27 思うと、みなさんがうらやましくなりま
九27 てきました。ぼくがいまいる家は、山の
九28 下の方に美しい湖がみえます。秋晴れの
九28 下に、山のすがたが、さかさまに湖の中
九28 湖へつりにいくのが、いちばんの楽しみ
九28 楽しみです。ふながたくさんいます。四
九28 います。らいぎやがふえてからは、ほか
九28 からは、ほかの魚がだんだんへつてきた
九28 っというろいなる魚がいたそうです。この
九28 黒くてひらいたい貝がとれますので、なん
九28 した。村の子どもがきょうそうでとりに

九三三(手) 、うちの家族七人が、じゅうぶんたべる
 九三二(手) うぶんたべることが出来ます。ぼくは、
 九三八(手) もでていて、それが、深いになると、
 九三五(手) さなぼくたちの畑がようやくかいこんさ
 九三六(手) 美しいかがんがとれます。大きな
 九三六(手) 流れ落ちるしみずが、せかれて、たきに
 九三六(手) から水をあびるのが楽しみでした。また
 九三六(手) しい山いちごの実が、こぼれたように難
 九三六(手) めたくてあまい味がしました。小さい妹
 九三六(手) ぎをとりにいくのが、すきではありませ
 九三六(手) めじめした足もとがきみがわるく、その
 九三六(手) した足もとがきみがわるく、そのうえ、
 九三六(手) 名も知らない雑草がいちめんにはえてい
 九三八(手) もうすぐらく、日があたらないので、雨
 九三八(手) 。ポキンという音がして、ガサガサと落
 九三九(手) けると、兄かぼくがのぼる役をひきうけ
 九三九(手) 枝をおろすのは気がつかれます。下から
 九三九(手) 、きこえないときがあります。上の方の
 九三九(手) と、からだじゅうがあせです。一ど、す
 九三九(手) 木にのぼったことがあります。のぼる
 九三九(手) 兄や、母や、おばが、「略。」とか、「へ
 九四〇(手) ませんでした。木が動くので、かれ枝は
 九四〇(手) ました。すこし気がおちついてから、ぼ
 九四〇(手) しから、美しい湖が半分ばかり顔をみせ
 九四〇(手) つけたおとなの人が、男か女かわかな
 九四〇(手) いて登ってくるのがみえます。道もない
 九四〇(手) 、木こりのすがたがあらわれます。思わ
 九四一(手) ころに炭やき小屋があつて、ゆるいけむ
 九四一(手) けむりのあがるのがみえました。秋にな
 九四一(手) ぼくは山へいくのが楽しみになりました。
 九四一(手) 、めずらしい小鳥がみつかるからです。
 九四一(手) らです。ぼくたちがこの村へきたころは

九四一(手) には美しい白さがたくさんまいおりて
 九四二(手) いつのまにかががが渡ってきました。か
 九四二(手) 、つぐみや、ひわがきました。そのほか
 九四二(手) らない美しい小鳥がたくさんいます。か
 九四二(手) れて、うちじゅうがみんなでもほりを
 九四二(手) 大きなうねのはだが地わねしているのを
 九四二(手) りおこすとき、胸がどきどきしました。
 九四二(手) ました。母やおばがくわをいれるあとか
 九四三(手) 、大きなかきの木が三本あります。朝早
 九四三(手) やした大きなかきが、ころころと二三
 九四三(手) にするために、母がかわをむいて竹ぐし
 九四三(手) ならべて、この色がよいとか、こちらの
 九四四(手) とか、こちらの色がよいとかいってなが
 九四四(手) 。いつのまにか葉がすっかり落ちつくし
 九四四(手) かにじゅくした実がすずなりになってい
 九四四(手) 一ど、用事でおばがそちらにでかけると
 九四四(手) さんにあつてお話がしたいと思いました
 九四六(手) 、白い雪のぼうしがみえます。なつかし
 九四六(手) 、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでい
 九四七(手) こ おかしなはがきが、ある土曜日の夕が
 九四八(手) けれども、いちろうが目を見ましたときは
 九四八(手) た。すきとおった風がザアツとふくと、く
 九四九(手) りの木。やまねがここを通らなかつた
 九五〇(手) ほどに、小さなあながあいていて、そこか
 九五〇(手) ていて、そこから水がふえのように鳴って
 九五〇(手) えふき。やまねがここを通らなかつた
 九五一(手) した。「略。」たきがピーピー答えました
 九五一(手) けました。いちろうがまたすこしいきます
 九五一(手) くさんの白いきのこが、ドッテコッテコ
 九五二(手) きのこ。やまねがここを通らなかつた
 九五二(手) いました。いちろうが、またすこしいくと
 九五三(手) 木のこずえを、りすが、びよんびよんと

九五三(手) 、りす。やまねがここを通らなかつた
 九五三(手) みのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶな
 九五三(手) 、となりのぶなの葉がちよつと光っただけ
 九五四(手) けでした。いちろうがすこしいきましたら
 九五四(手) へ、新しい小さな道がついていました。い
 九五四(手) 明かるくなって、目がちくつとしました。
 九五五(手) かしなかつたこの男が、ひざをまげて、手
 九五五(手) 。いちろうは、きみがわるかつたのですが
 九五五(手) た。「略。」その声が、あんまり力がなく
 九五八(手) の声が、あんまり力がなく、あわれにきこ
 九五八(手) のはがきは、わしが書いたのだよ。」い
 九五八(手) した。そのとき、風がどうとふいてきて、
 九五九(手) 、そこに、やまねが、黄色なじんばおり
 九五九(手) んどうなあらそいがおこつて、ちよつと
 九六〇(手) き、どんぐりどもがまいるでしょう。ど
 九六一(手) がね色のまるいものが、ぴかぴか光ってい
 九六一(手) きようは、そこが日あたりがよいよう
 九六二(手) 、そこが日あたりがよいようだから、そ
 九六二(手) から、どんぐりどもがぎらぎら光つてとび
 九六二(手) 、「略。」やまねがすこし心配そうに、
 九六四(手) のとがつているのがいちばんえらいので
 九六四(手) うして、わたくしがいちばんとがつてい
 九六四(手) います。まるいのがえらいのです。いち
 九六四(手) とだよ。大きなのがいちばんえらいんだ
 九六四(手) いんだよ。わたしがいちばん大きいから
 九六四(手) きいから、わたしがいちばんえらいんだ
 九六五(手) よ。わたしのほうがよっぽど大きいって
 九六五(手) 、きのう判事さんがおつちやつたじやな
 九六五(手) ヤガヤいって、なにがなんだか、まるで
 九六五(手) ついたように、わけがわからなくなりまし
 九六五(手) 。そこで、やまねがさけびました。「略
 九六五(手) 、「略。」ぎよしゃがむちをヒュウパチツ

九六六 頭のとがったものが、いちばんえらい
 九六六 います。まるいのがえらいのです。「へ
 九六六 ヤガヤ、また、なにがなんだかわからなく
 九六六 りました。やまねこがさげびました。「略
 九六六 」。ぎよしやが、むちをヒュウパチ
 九六六 しました。やまねこが、ひげをひねって
 九六六 頭のとがったのが——」ガヤガヤ、ガ
 九六六 ヤガヤ——やまねこがさげびました。「略
 九六六 」。ぎよしやがむちをヒュウパチッ
 九六六 りました。やまねこがいちろうにそと申
 九六六 るでなつてないのがえらいとね。「やま
 九六六 ぶれたようなやつが、いちばんえらいの
 九六六 れからも、はがきがいったら、どうかき
 九六六 れは、やめたほうがいいでしょう。」や
 九六六 は、どうもいろいろがまずかった、いかに
 九六六 けの頭と、どちらがおすすですか。「へ
 九六六 こがねのどんぐりがすすです。」やまね
 九六六 まねこのじんばおりが、風にバタバタ鳴り
 九六六 こでこしらえた馬車が、ひっぱりだされま
 九六六 かしなかつたのうまがついています。「略
 九六六 」。やまねこがいました。ふたり
 九六六 れました。木ややぶが、けむりのようにぐ
 九六六 みていました。馬車がすすむにしたがつて
 九六六 んぐりはだんだん光がうすくなって、まも
 九六六 って、まもなく馬車がとまったときは、茶
 九六六 へいきました。先生が、町角までいって、
 九六六 ました。おかみさんが、店の人とふたりで
 九六六 るまに、貝がらの山が家のまえにできます
 九六六 えにできます。先生が、リヤカーに、はこ
 九六六 にたべていたときがあったらしい。その
 九六六 らをすてたところが、きょうこれからい

九七七 て、五十人のなかまが、おくれないように
 九七七 ん高くなったところがみえます。「略」
 九七七 ところに、白い物がちらちらとみえるで
 九七七 しょう。あれが貝づかです。「もう
 九七七 いります。「ここが、このあいだからよ
 九七七 と、そういうものがみつかることがあ
 九七七 るのがみつかることがあるのです。ひとつ
 九七七 めてしまおう。これがふつです。「略
 九七七 深くほつていくのがいいと思います。「
 九七七 」。「略」。「それがよさそうだね。それ
 九七七 り石のような物などがたまっています。「へ
 九七七 けらみたいなのがあるじゃないか。」
 九七七 した。「略」。「先生がまわっておいでにな
 九七七 います。先生のふえが鳴りました。みんな
 九七七 道具につかつた物があつたでしょう。そ
 九七七 な針や、もりなどがあつた。石で作つ
 九七七 せもののかけらがと思うような物です
 九七七 ませんでした。四人が話しあつてしらべ、
 九七七 ピリピリッとふえが鳴りました。あとの
 九七七 めい持つてきた物があるか、おしらべな
 九七七 の中ほどに大きな木が一本立っている。「へ
 九七七 ーけんかをとめる声がつづく。まくがあく
 九七七 る声がつづく。まくがあく。たかぎとやま
 九七七 く。たかぎとやまが左右にひきわけられ
 九七七 、六、そのほか数人が、それぞれにわか
 九七七 なかのいいふたりが。「五へんだよ。ふ
 九七七 「いいとも、だれがきみなかと遊ぶも
 九七七 。そのほかの友だちが、落ちてくるやまだ
 九七七 っている。勝った子が、「一、二、三——」
 九七七 うすででてる。首がいたいらしく、手で
 九七七 いる。そこへやまだが帰ってくる。両方と
 九七七 両方ともあいてに氣がつくが、わざと知ら

九九四 持つているすみに氣がつき、ちよつとた
 九九四 、「きみの名まえが書いてある。」たか
 九九四 のあいだに、やまだがいきかける。そのう
 九九四 くる。「これきみが落したボタンだらう
 九九四 んじゃない。きみがむしりとつたんじや
 九九四 だ。」やまだ「なにがあいだ。」たかぎ
 九九四 かぎ「いや、ぼくがいけなかつたのださ。
 九九四 ないことさ。ぼくがあんまりじまん話を
 九九四 はじめると、自分がいちばんりっぱだと
 九九四 まえの日に、こな雪がたくさん降つたので
 九九四 略」と、のだ先生が先頭に立たれ、いし
 九九四 たので、ずいぶん列が長かつた。だんだん
 九九四 坂になると、からだはほつてあせがでる
 九九四 らだがほつてあせがでる。みんなだま
 九九四 の雪をすべる音だけが、氣持よくきこ
 九九四 えの方で、のだ先生が、「略」と、大き
 九九四 ていくとき、だれかが、「略」と、大声
 九九四 ると、大きなうさが、ちようど小まつの
 九九四 であつた。「あれがスキー場だ。もうひ
 九九四 略」と、のだ先生がつえでさされる方を
 九九四 よさそうないしやが、長くつづいてい
 九九四 略」と、みんながいうと、「略」と
 九九四 、「と、いい先生がうしろの方から追
 九九四 ど登つたとき、ぼくが、「略」とい
 九九四 すると、のだ先生が、「略」といわれ
 九九四 と、ぱつと雪けむりが立ち、あせばんだ
 九九四 んだ顔に、雪のこなが降りかかると、雪
 九九四 ざまである。みんなが急停止をすると、雪
 九九四 をすると、雪けむりが一どにあがつた。先
 九九四 に答えた。のだ先生がさきに、すぐつづ
 九九四 つづいていい先生がすべられる。そのみ
 九九四 もうもうと雪けむりが立つ。雪けむりがき

九一〇 七 りが立つ。雪けむりがきえて、先生のお顔
 九一〇 七 きえて、先生のお顔がうかぶ。それから、
 九一〇 八 、じょうずな人たちが、かわるがわるジャ
 九一一 二 ン。」「おうい。先生がジャンプをなさるそ
 九一一 四 へ略。」「と、だれかがさげんだ。みんなそ
 九一一 六 、いま、いしい先生がすべられるところで
 九一二 二 こんどは、のだ先生がとばれるほんである
 九一二 七 へ略。」「と、だれかがさげんだ。」「略。」「
 九一二 九 へ略。」「と、だれかがさげんだ。四十メー
 九一三 四 かこまれた美しい泉があった。父は、その
 九一四 四 すると、おく山の雪がとけてそのましまし
 九一五 四 こに流れているのがまつ川だ。私たちの
 九一六 四 かし、ひとりの茶人があった。茶のうまさ
 九一七 五 、たてる湯のうまさがいちいちである。な
 九一八 五 ような、ふしぎな味が感じられた。茶人は
 九一九 五 、この上流にいい泉があるのではないかと
 九二〇 五 るのではないかと気がついた。舟をやとつ
 九二一 五 や左岸では、その味がきえてしまうことが
 九二二 五 がきえてしまうことがあっても、中ほどで
 九二三 五 いった。大きな支流が流れこむところへく
 九二四 五 きどきあまい水の味がわからなくなつてし
 九二五 五 う川もよほど水かさが増えていた。ここで
 九二六 五 まぎれもないいい味がはつきりと感じられ
 九二七 五 人にいった。まつ川がてんりゅう川に流れ
 九二八 五 人は、長い探求の旅が終りに近づいたこと
 九二九 五 キロほどは、村ざとがあつて川べりに道も
 九三〇 五 くなつて、大きな岩がごろごろとゆくてを
 九三一 五 れ落ちる小さな谷川がある。そこをくんで
 九三二 五 ちよるとわきでる泉があつて、それでもう
 九三三 五 くも 一ぴきのくもがいました。黄色と黒
 九三四 五 今晩はうまいえさがかかるかな。この二
 九三五 五 ったから、おなががすいてしまった。」「

九三六 二 「ここ四五日は大風がふくし、雨は降るし
 九三六 二 きませんでした。星が光りだしました。ど
 九三六 二 あかちゃんのみき声がしています。子もり
 九三六 二 た。そのとき、あみがにわかによれまし
 九三六 二 みた。あぶが、足をひつかけて、
 九三六 二 るところでした。くもが、いきなりとびか
 九三六 二 えませんでした。風が思いだしたようにふ
 九三六 二 いてくるので、あみがゆれ、くももいっし
 九三六 二 、遠いところで羽音がしました。それは、
 九三六 二 みつばちであることが、くもにはすぐわか
 九三六 二 ンブンブン、羽音がだんだん近づいてき
 九三六 二 てきます。」「あれが、うまくひつかかる
 九三六 二 ます。」「略。」「くもが、じいっと息をこ
 九三六 二 が、どうしても手足がうまく動きません。
 九三六 二 した。」「略。」「くもが、手でさすっている
 九三六 二 より、自分のからだははれてくるし、いた
 九三六 二 パタパタという羽音がきこえてきました。
 九三六 二 したいへんと、くもが思ったとたん、ぼ
 九三六 二 した。」「略。」「くもが気がついてみると、
 九三六 二 。」「略。」「くもが気がついてみると、あ
 九三六 二 あたりにはいいにおいがします。まつ白なば
 九三六 二 ます。まつ白なばらが、たくさんさいてい
 九三六 二 目のまえのばらの花が動いています。おか
 九三六 二 りかけたばかりの月が、しずかに光ってい
 九三六 二 の小さなときのこと、ゆめでもみるよう
 九三六 二 へ略。」「あなたが、この四五日、なん
 九三六 二 、早くとんでいくがいい。」「ちようちよ
 九三六 二 ちようど白ばらの花がとんでいくように。
 九三六 二 九四七 ちよとさんは、羽があるからいいな。」「
 九四八 九 た。くもは、おなががすいているのに気が
 九四九 九 がすいているのに気がつき、また、あみを
 九五〇 九 れども、なんだか気がすきません。それ

九五二 二 りばらの花のおいがしていました。くも
 九五二 二 をつむると、だれかが、くもの頭をなで
 九五二 二 うしに、くもは、目がさめました。」「略
 九五二 二 きていました。つゆが木の葉にたまりまし
 九五二 二 した。たまつたつゆが、しずくになって、
 九五二 二 ました。くもは、目がさえてなかなかねむ
 九五二 二 ようちよにあることができた。それから、
 九五二 二 ているうちに、心持が、しだいにかわつて
 九五二 二 れていて、ほかの虫がひっかかると、いき
 九五二 二 ながら自分のからだ、そらおそろしく思
 九五二 二 たのでしよう。くもが、月の光にちりち
 九五二 二 ゆをみていると、風がふいてきました。風
 九五二 二 ではなくて、つばめがすいとんできたの
 九五二 二 らころげ落ちることができたかもしれませ
 九五二 二 とびました。夜明けが近づいて、東の空が
 九五二 二 が近づいて、東の空が、ほんのりとしらみ
 九五二 二 。」「略。」「こう決心がつくと、くもは、す
 九五二 二 にでもある。高い木が大きく枝をはって、
 九五二 二 かけたこずえのさが、かすんだ空の中に
 九五二 二 じつに美しい。小鳥が鳴いている。風が、
 九五二 二 鳥が鳴いている。風が、かすかに耳もとを
 九五二 二 にか、かすかな音楽がきこえてくるようだ
 九五二 二 に、楽しくすることができ。一一 こと
 九五二 二 ・少女 おとうさんが、フランスのいな
 九五二 二 ったときは、子どもが大だい、めずらしそ
 九五二 二 。日本人をみたことがない子どもたちは、
 九五二 二 たちは、おとうさんが通るたびに、目をま
 九五二 二 、子どもと遊ぶことがすきですから、道で
 九五二 二 ら、道で子どもたちが、なわとびをして遊
 九五二 二 、子どものお友だちができました。そうい
 九五二 二 のとげとげしいがわれて、じゅくした
 九五二 二 に親しみをもつことができるものかと思

十 9 11 タナスという木の葉が黄色くなることで、
 十 10 2 ナフという石の橋があつて、イエヌと
 十 10 3 、イエヌという川が、その下を流れてい
 十 10 10 枝からは、黄色い葉が、毎日のように落ち
 十 11 1 ました。おとうさんが、休み茶屋のまえに
 十 11 6 のこと、おとうさんが、子どものすきそう
 十 11 8 、一ふくろやつたのはじまりで、その少
 十 12 3 、「と、おとうさんが頼みましたら、少女
 十 12 10 、「と、ひとりの少女が、おとうさんをみて
 十 13 3 、「略。」おとうさんがいいました。それか
 十 13 12 ますが、おとうさんがそのいなか町がすき
 十 13 12 さんがそのいなか町がすきになったのも、
 十 14 1 かわいらしい子どもがいて、なかよしにな
 十 14 3 かぶった女の人たちが、ならんでせんたく
 十 14 4 赤いかわら屋根の家が、川の水にうつつて
 十 14 10 ンスとは、どちらがきれいですか。」と
 十 15 4 すから。おとうさんがしょうじきにその答
 十 15 9 、「と、おとうさんが、力をいれて答えま
 十 16 7 、「略。」と、太郎がそばへきて、外國で
 十 16 9 、「と、おとうさんがいつてきかせました
 十 17 1 略。」と、また太郎がたずねましたので、
 十 17 5 だれもわかるものがありません。そうい
 十 17 6 自分國のことばがこいしくなります。
 十 17 7 話すようなことばが、思うぞんぶんつか
 十 18 2 日の光 1 黒い雲が流れてくる。はげし
 十 19 2 のかわら屋根から雨がしたたる。だんだん
 十 19 3 愛」を読んでいる声が、きこえてくる。5
 十 19 4 5 ひとりの子どもが、立って本を読んで
 十 19 6 一節を読んでいる声がきこえる。もうあ学
 十 19 8 ある。ひとりの生徒が、席にすわったまま
 十 19 9 ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上
 十 19 10 いく。7 オルガンがひびいてくる。窓を

十 20 1 大きな半円形のにじがかかっている。「に
 十 20 7 とともに、七色の光が写しだされる。「略
 十 21 1 ふや、ハンケチなどが、風にゆれている。
 十 21 2 。その下を、あひるがならんで通っていく
 十 21 3 から、小さな子どもが、よちよちと歩いて
 十 21 4 と歩いてくる。母親が、両手をのぼしてつ
 十 21 6 院の庭さき。看護婦がもうふをほしている
 十 21 7 ほしている。男の子がベッドにすわってい
 十 21 8 、「おおかさん、雨がはれてきれいなね。」
 十 21 10 、「ごらん、にじがでているよ。」窓を
 十 23 1 、「春の小川」の歌がひびいてくる。小川
 十 23 4 花。ひとりの女の子が、「略。」と、「こ
 十 23 6 轉車に乗った中学生が、ふたりづれでなか
 十 24 2 あやつる大きな車輪が、まわっている。ト
 十 25 3 。21 ひとりの工員がしごとをすませて、
 十 26 4 りだす。24 男の子が、むちゅうになつて
 十 27 7 ます。庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声
 十 27 9 たいのです。トマトが畑に植えてあれば、
 十 27 11 います。また、くもがのきに巣をかけるこ
 十 27 11 きに巣をかけることがあれば、果のほりか
 十 29 1 、「どうしてそのものがこうなつたかとい
 十 29 3 えば、毛糸のあみ物があれば、そのあみか
 十 29 11 きには、そのもようが、どんな単位からな
 十 30 2 ます。もし、弟や妹がけんかでもはじめた
 十 31 2 いと考えます。ぼくがいるために、うちの
 十 31 2 るために、うちの中が明るくなるように
 十 31 3 のでしようか。ぼくがいるので、みんな樂
 十 32 4 体の中の部分、部分があつての全体、とい
 十 34 2 、やがて、困るときがくるにちがいない。
 十 34 5 いうのである。佐吉が、はじめに目をつけ
 十 34 9 もっと早く織ることができるし、ひとりで
 十 34 9 、ひとりで、ぬのがずんずん織られてい

十 35 1 、東京にはくらん会が開かれた。佐吉は、
 十 35 5 かた身のせまい思いがした。機械は、どれ
 十 36 5 、思いどおりの機械ができた。ため
 十 37 1 明治二十三年、佐吉が二十四才のときのこ
 十 37 4 に、七年間のくふうがつづけられ、みごと
 十 37 5 みごとに、自動織機ができた。これ
 十 37 5 できあがつた。これが、日本における自動
 十 37 7 ても、この自動織機が、どれほど大きな役
 十 38 3 た、ひとりのわか者があつた。眞珠は、海
 十 38 7 のような小さなものがいりこみ、それに、
 十 38 8 に、貝のだす眞珠質がまきつき、年ととも
 十 38 9 天然眞珠となることがわかつたからである
 十 39 4 、「をさしいれることができた、眞珠が発
 十 39 4 できた、眞珠が発生するにちがいな
 十 39 7 。うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がま
 十 39 7 核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功す
 十 40 5 四年はかかる。それが、くる年もくる年も
 十 40 11 、「と、あなたの願いがかないます。」こう
 十 41 2 る年のこと、赤しおが、おびただしく発生
 十 41 3 は、ある小さな生物が、海水いちめんによ
 十 41 3 めんにふえて、海水が茶色にかわるほどに
 十 41 10 た。あるとき、うめが、母貝の中をしらべ
 十 42 1 半円眞珠であることが、わかつた。「略」
 十 42 2 、「わかつた。「半円が眞円になれば成功す
 十 42 5 貝養殖の科学的研究がつづけられた。眞珠
 十 42 8 してきた。半円眞珠が思いどおりに取れる
 十 42 12 助力者であつたうめが、この世をさつてし
 十 43 1 、ふたたび、赤しおがよせてきた。そのた
 十 43 8 れられない眞円眞珠が、光っているではな
 十 43 10 、五つぶの眞円眞珠が現われた。八十五万
 十 43 11 万から五つぶの眞珠が取れたわけである。
 十 43 12 、「やと眞円眞珠ができたよ。」かれは、

十 69 8 会 じゃないか。それが、死なないのだから
 十 70 3 そうなあまににおいがして、黒っぽいもの
 十 70 3 して、黒っぽいものはいっていました。
 十 71 2 略。』おくびよう者が、きゆうにいきおい
 十 71 6 ているうちに、つぼが、からつぽになつて
 十 71 8 会 は困つた。だんなが帰つたら、どんな目
 十 71 11 かじやのほうは、氣が強いばかりでなく、
 十 71 11 りでなく、わるぢえがあつたから、おちつ
 十 72 1 会 に、うまいくふうがある。」といいなが
 十 72 6 会 おまえは、だんながだいじにしているあ
 十 72 11 た。そこへ、だんなが帰つてきました。す
 十 73 6 会 んでいました。私が負けて、ドサリとと
 十 73 8 会 。次郎かじやは力があまり、茶だなの湯
 十 73 12 会 』をたべて死ぬのが、いちばん早道と思
 十 1 4 3 近くには小高い丘があつて、そこからお
 十 1 4 4 ると、大きな汽船がけむりをはいて、長
 十 1 4 5 いて通つていくのがみえるし、川上の方
 十 1 4 7 の工場のえんとつが、なん本も立ってい
 十 1 4 7 本も立っているのがみえる。長いいかだ
 十 1 5 1 は、大学のボートがいつもここで練習し
 十 1 5 12 会 いだら、オールがぎゅうぎゅうとしな
 十 1 6 4 会 うと、ぼくは胸がわくわくする。」「へ
 十 1 6 5 会 「ぼくはトップがこぎたいな。いつも
 十 1 6 10 会 きつとコックスが大声でいうだろう。
 十 1 7 4 会 。『略。』ぼくが力をいれて、一本バ
 十 1 7 8 会 く。ぼく、これがうれしんだよ。」「
 十 1 7 9 会 くは、こぎかたがじょうずになつて、
 十 1 7 10 会 なつて、みんながさせてくれたら、コ
 十 1 8 2 会 り組んでいる者が、みんなそろつて、
 十 1 9 4 会 ろうということができたら、うれしい
 十 1 9 7 会 おきを大きな船が通つていくよ。あれ
 十 1 9 9 会 クスと、どっちがむずかしいだろうね

十一 9 11 ㊦ あ、船長のほうがむずかしいだろう。
十一 10 3 ㊦ 「では、実力があって、力いっぱい
十一 10 4 ㊦ 船員には、だれがなるのさ。」「へ略」。
十一 10 9 ㊦ う男には、ぼくがなることにきめてい
十一 10 12 ㊦ 。いいコックスが日本を正しい方へつ
十一 11 2 ㊦ へ。」「いい整調が、りっぱに日本じゅ
十一 11 4 ㊦ へ略」と、ふえが鳴って、ふいに「そ
十一 11 4 ㊦ に一そのボートが近づいてきた。」「へ略
十一 12 3 ㊦ の歌 丘の上 春がさって夏がくる。た
十一 12 3 ㊦ 上 春がさって夏がくる。たんぽぽのわ
十一 12 4 ㊦ たんぽぽのわた毛が遠くとんでいく日だ
十一 12 5 ㊦ 。あげはのちようが、まつのかげから舞
十一 12 7 ㊦ 、きようからせみが鳴きはじめた。まっ
十一 13 4 ㊦ ら、港の方でふえが鳴る。ふえの音は、
十一 14 6 ㊦ 陽の下で、みんながめいめいの歌を歌っ
十一 15 1 ㊦ く。唱歌 先生がオルガンをおひきに
十一 15 6 ㊦ ちがった形の小鳥が、はばたいでで、
十一 15 10 ㊦ とこの窓ガラスが、一まいこわれてい
十一 17 4 ㊦ 足。いま、わたしが知っているいいこと
十一 19 3 ㊦ んえもんという人がいました。働くこと
十一 19 3 ㊦ しました。働くことがすきで、一代でりっ
十一 19 5 ㊦ りえもんという人がありましたが、たい
十一 19 6 ㊦ した。村の人たちが困って頼みにくると
十一 19 8 ㊦ しました。この人が金次郎の父親でした
十一 19 9 ㊦ えもんは、からだがよくて、よく働け
十一 20 3 ㊦ うときに、金次郎が生まれてきたのです
十一 20 12 ㊦ しました。金次郎が十二のころです。さ
十一 20 12 ㊦ 川のていぼう工事があって、どの家から
十一 21 1 ㊦ 、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで
十一 21 3 ㊦ 。そのとき、父親が病気でねていました
十一 21 3 ㊦ したので、金次郎が、そのかわりにでる
十一 21 5 ㊦ 年のわりにからだが大きかったし、働き

十一 21 9 ㊦ どもです。しごとがじゅうぶんできない
十一 22 7 ㊦ ださい。わたしがみなさんのお役にた
十一 23 2 ㊦ れました。金次郎が十四のとき、父親が
十一 23 2 ㊦ 十四のとき、父親がなくなりました。金
十一 23 3 ㊦ の下にふたりの弟がいました。いちば
十一 24 1 ㊦ 略。」「おちちがはって困るの。二三
十一 24 3 ㊦ お金は、わたしが山へいって木を切っ
十一 24 9 ㊦ 「母親は、金次郎が、「略」というの
十一 25 1 ㊦ 「、どんなことがあっても、親子四人
十一 25 4 ㊦ 、金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いう
十一 25 7 ㊦ んでしたが、四人が生きていくにはじゅ
十一 26 9 ㊦ 、いっしんに勉強がしたくなりました。
十一 27 5 ㊦ けました。お正月がくると、例年のこと
十一 27 5 ㊦ とで、だいかぐらがまわってきました。
十一 27 10 ㊦ そんなわずかな金がないというこは
十一 28 1 ㊦ のつぎの年、母親が、四五日の病気で死
十一 28 2 ㊦ まけに、さかわ川がまたあふれて、のこ
十一 28 10 ㊦ 夜の勉強には油がいらいます。その油を
十一 29 1 ㊦ 年の春、黄色い花がさいて、たくさん
十一 29 1 ㊦ て、たくさんの実ができました。これを
十一 29 3 ㊦ 次郎は、また、人がすてておいたいね
十一 29 6 ㊦ のものにすることができました。この一
十一 29 11 ㊦ うの米をとることができました。やがて
十一 30 1 ㊦ たたびおこすことができました。それば
十一 31 3 ㊦ ひよりにさくらがさいて、野山をか
十一 31 7 ㊦ い空にはかすみがかめて、ひばりは
十一 31 10 ㊦ 音高くみつばちがとぶ。しとしと
十一 32 3 ㊦ おうとででむしが、つのをふりあげ
十一 32 5 ㊦ やなぎのはわたがとんで、麦のはし
十一 32 7 ㊦ てきたつばくろが、すうい、すうい
十一 32 9 ㊦ わる。げんげがさいて、なの花ちっ
十一 34 2 ㊦ ば、はい色雲が空うちおおい、青

十一 34 7 ㊦ 晩にはかえるが歌いだす。つゆ晴
十一 34 9 ㊦ 日ましに日ざしが強くなり、いねは
十一 35 5 ㊦ 書の休みもあせがでる。まばゆく光
十一 38 9 ㊦ 山にはまつたけが、かおりも高くは
十一 40 9 ㊦ こ。はい色雲がたちこめて、さと
十一 41 1 ㊦ さとはしづれがしとしと降るに、
十一 43 3 ㊦ ようち園の卒業式がありました。弟が卒
十一 43 4 ㊦ がありました。弟が卒業するので、私が
十一 43 4 ㊦ 卒業するので、私が、母にかわってでま
十一 43 6 ㊦ た、大きなびんがかざってありました
十一 43 9 ㊦ います。園長さんが、だんの上にお立ち
十一 43 10 ㊦ ました。女の先生が、卒業する子ども
十一 44 7 ㊦ ました。総代の名が、ひときわ高く呼ば
十一 44 9 ㊦ した。私は、自分が呼ばれたような気が
十一 44 9 ㊦ 呼ばれたような気がしました。弟は、す
十一 46 11 ㊦ 。あの山のすがたが、小さいころのこと
十一 47 2 ㊦ いださせる。ぼくが津軽海峡をこえて内
十一 47 4 ㊦ 津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆ
十一 47 6 ㊦ 道の家には、うしが四頭いた。みんなち
十一 47 10 ㊦ いた。おかあさんがパンをやくそばで、
十一 48 4 ㊦ かいねこのメリーがいた。アカシヤの花
十一 48 5 ㊦ た。アカシヤの花が風にゆれ、畑では、
十一 48 6 ㊦ 、畑では、いちごがでさかりだった。お
十一 51 7 ㊦ けた。しかし、風がはげしいので、すぐ
十一 52 2 ㊦ やっと一台の電車がとまった。あふれそ
十一 52 3 ㊦ へもぐりこむことができた。車内はむし
十一 52 4 ㊦ うえに、おたがいぬれたからだで、お
十一 52 6 ㊦ かのかさのしずくが、私のくつの上にと
十一 52 9 ㊦ りる人と乗る人ともみくちやになった
十一 54 1 ㊦ のようなひょう語がかかげられているの
十一 54 10 ㊦ ばをわすれることができない。七
十一 59 12 ㊦ へ略」と、正男がいうと、一雄はすぐ

十一 60 3 かけ渡した一本橋がある。太郎は、まえ
 十一 62 2 会 「はじめ、ぼくがことわると、よわ虫
 十一 62 3 会 のくらのことがこわいものかと、自
 十一 62 6 会 ほんとうの勇氣がいる。おまえのよう
 十一 62 11 会 なんだか氣まりがわるくて、そういえ
 十一 63 4 しいひとりの少年が、どろまみれにぐっ
 十一 64 11 、家をおけることができないので、長男
 十一 65 4 略」と、看護人がきました。少年は
 十一 65 9 「と、看護人がきました。「略」
 十一 67 4 その中にはベッドが二列にならんでいま
 十一 68 5 いくすりのにおいがただよっていました
 十一 68 5 いました。看護婦がふたり、手にくすり
 十一 68 9 会 あけて、「これが、きみのおとうさん
 十一 69 11 のものか——これが父親であらうとは、
 十一 70 7 会 ですよ。チチロがいなかからでてきた
 十一 70 8 会 よ。おかあさんがよこしたんです。よ
 十一 70 9 会 ください。ぼくがわかりませんか。な
 十一 71 7 会 に、お医者さんがみにきてくださるだ
 十一 72 1 ことや、家族の者が、その旅に楽しい希
 十一 72 2 いたときに、母親がどんなにか力をおと
 十一 72 4 少年は、かるい手がふとかたにさわった
 十一 72 10 会 す。それでぼくがきたのですが、どこ
 十一 72 10 会 のですが、どこがわるいのでしょうか。
 十一 72 12 会 っしやい。先生が、いまじきにおいで
 十一 73 3 と、ベルの鳴る音がきこえました。みる
 十一 73 4 た。みると、医者が、ひとりの助手をつ
 十一 73 5 ひとりの看護人とがついていました。そ
 十一 73 8 ているそのあいだが、少年にはたいへん
 十一 73 9 われました。医者がすぐそばのベッドま
 十一 73 11 老人でした。医者が、まだとなりのベッ
 十一 74 4 略」と、看護婦がいました。医者は
 十一 75 7 会 た。「たんどくが顔にでたのです。だ

十一 75 8 会 れど、まだ望みがある。氣をつけてお
 十一 75 8 会 げなさい。きみがいれば、きつとよく
 十一 75 10 会 、ぼくってことがわからないんです。
 十一 75 11 会 おとさずにいるがいいよ。」少年は、
 十一 76 5 そうして、看護婦がなにか飲み物を持っ
 十一 77 2 は、病人の目つきが、いくらかわかりか
 十一 77 4 感謝するような色が、そのひとみに、ち
 十一 77 11 かすかなほおえみがうかんだのをみたよ
 十一 77 12 のをみたような氣がしました。そこで、
 十一 78 6 たとしても、病人がなんだかうれしそ
 十一 78 12 日に二ど、看護婦が持つてきてくれる、
 十一 80 1 をなぐさめることがありました。それは
 十一 80 1 それは、ようだいがわるくなつたにもか
 十一 80 2 かかわらず、病人が、しだいに、すこし
 十一 80 2 、すこしずつものがわかりかけるように
 十一 80 7 としました。それが、ときにはいかに
 十一 81 2 。ちょうど、少年がそういうほかない希
 十一 81 4 ドアのそとに足音がきこえて、やがて、
 十一 81 5 「略」という声がきこえました。少年
 十一 81 8 をしたひとりの男が、看護婦に送られな
 十一 81 11 と、こんどはかれがさげびを發しました
 十一 82 6 おれましたが、胸がせまって息もつけま
 十一 82 9 、看護人や、助手がかけよってきまし
 十一 82 11 まだ声をだすことができませんでした。
 十一 83 5 略。』って手紙がきたとき、おまえが
 十一 83 5 会 たきり、おまえがこないから、どんな
 十一 83 8 会 こんなまちがいがおこつたのだろう。
 十一 85 1 ら、どつとことばがほとぼしりでした
 十一 85 4 会 にあのおじさんがいます。ぼく、ここ
 十一 85 6 会 。いつも、ぼくがそばにいないといけ
 十一 86 5 略」と、看護人が答えました。「略」
 十一 86 6 会 ちょうどあなたが入院したと同じ日に

十一 86 8 会 うすっかりわけがわからなくなってい
 十一 86 9 会 いとこに家族があるのでしよう。ど
 十一 86 10 会 ぐらいのむすこがいるらしく、自分の
 十一 87 4 と、また、看護人が小声でいきました。
 十一 87 10 た。(四) 少年がベッドのそばの
 十一 88 12 また、やさしい色その目にうかぶこと
 十一 89 4 た。あかつきの光が窓から白くさしこん
 十一 89 5 できたとき、医者が、看護婦と看護人を
 十一 89 10 き、少年は、病人が自分の手をにぎりし
 十一 89 11 りしめたような氣がしました。「略」
 十一 90 3 てました。看護婦が十字かざうをかべか
 十一 90 10 会 な子だ。神さまがきみをまもってくだ
 十一 90 12 いっていた看護婦が、小さなすみれの花
 十一 91 5 会 にもあげるものがあります。これを
 十一 92 11 呼びなれていた名が、しげんと口のにぼ
 十一 94 3 まご コロンブスがアメリカを發見して
 十一 94 7 賀会の席で、人々がかわるがわる立つて
 十一 94 9 すと、ひとりの男が、「略」といって
 十一 95 1 会 地にであつたのが、それほどの手がら
 十一 95 9 とより立とうはありますが。このと
 十一 96 5 すると、にわか雨が降りだしたので、近
 十一 96 10 からひとりの少女がでてきましたので、
 十一 97 6 ことだかその意味がわかりません。少女
 十一 97 8 、道灌は少女の心がわかりました。それ
 十一 98 2 はた織り 孟子がまだ子どものころで
 十一 98 4 る日のこと、母親がなつかしくなり、会
 十一 98 10 あげました。孟子がびつくりしている
 十一 99 5 会 母は、「おまえが学問のちゅうとで家
 十一 10 1 身なりをした老人が、道路をうろうろと
 十一 10 4 みていたじゅんさが、老人のそばによつ
 十一 11 9 リビングストーンが南アフリカを探けん
 十一 11 10 、リビングストーンが木かげで書物を読ん

十二¹¹ みた土人のひとりが、書物というものは
十二¹² 、リビングストーンがちよつとそとでか
十二¹³ 一本のざくろの木があつて、夏じゅう美
十二¹³ とにいくつかの実がなつていた。それが
十二¹³ なつていた。それが、めきめきと大きく
十二¹⁴ つやしたしゅの色がさしてきた。文雄は
十二¹⁴ た。文雄は、それがかきたかつた。高い
十二¹⁴ ねておいたかれ草が、すっかりくちてい
十二¹⁴ いた。文雄はそれが氣になつてしかたが
十二¹⁴ 氣になつてしかたがなかつた。「略。」
十二¹⁴ をいいながら文雄が、そのくちた草をと
十二¹⁵ なえんまこおろぎが一びき頭をだしてい
十二¹⁵ 。そうして、文雄が手をのぼすと、すば
十二¹⁶ していた。下がきがすむと、パレットの
十二¹⁶ 。いい色の絵のぐがたくさんあつた。し
十二¹⁷ すこしも立体感がない。あのざくろの
十二¹⁸ えてくれるものがありません。せんだ
十二¹⁸ ツピツという音がしました。ははあ、
十二¹⁸ 。ははあ、これが鳴るんだと思つて
十二¹⁸ ツピツという音がする。みんな自分た
十二¹⁹ 、ピアノの先生が、散歩にいらつして
十二¹⁹ るには、ご苦心があたりだつたでしよ
十二¹⁹ いと考えることができます。ですから
十二¹⁹ 、青い小さな実が、ほんの二つ三つ、
十二²⁰ をならせることができるようになります
十二²⁰ はこんなところがすこしもないよう
十二²⁰ ている文雄さんがいつてましたよ。ど
十二²⁰ のような絵のぐがあればいいと思ひ
十二²¹ ましたよ。あれがあれば、どんなかけ
十二²¹ です。文雄さんがりつばな絵かきにな
十二²¹ 。

十二²¹ のピアノの先生がおつしやいましたよ
十二²² 外地にいた姉たちがひきあげてきました
十二²³ から、家内じゅうが歓声をあげていると
十二²³ りません。やしきがすこし廣いし、父が
十二²³ すこし廣いし、父がまえからそういうと
十二²⁴ 、もうひとり遊びができますが、めいの
十二²⁴ 歩けません。発育がたいへんおくれとい
十二²⁵ ひき受けます。姉が、いそがしいので、
十二²⁵ ごれていないほうが氣持がいいので、と
十二²⁵ いないほうが氣持がいいので、ときどき
十二²⁶ ら、ついしつけがでななくて。「民
十二²⁶ なにかとりつく物があるとすぐに立ちあ
十二²⁷ 、すこしもゆだんができません。立ちあ
十二²⁷ たせると立つことができます。だれかが
十二²⁷ できると、だれかがいったことを思いだ
十二²⁹ 帰つてくると、姉が大さわぎしていまし
十二²⁹ した。「ゆだんがでないわ。いま、
十二²⁹ いま、民ちゃんがひとりでおかつて口
十二³¹ は、サリバン先生がきてくださった日
十二³¹ 年の三月三日、私が満七さいになる三ヶ
十二³² おどろきとふしぎが私を待っているのか
十二³² ましたので、それが母だとばかり思いこ
十二³² しました。だれかがそれをとらえました
十二³³ ださいました。私がしばらくその人形と
十二³³ すぐこの指の遊びがおもしろくなって、
十二³⁴ とや、そんなものがこの世にあることさ
十二³⁴ 知つたのは、先生がおいでになつてから
十二³⁴ した。ある日、私が新しい人形を持って
十二³⁴ と、サリバン先生が、ほかの大きな人形
十二³⁵ 生は、「ゆのみ」が道具で、「水」がそ
十二³⁵ が道具で、「水」がその中にはいって
十二³⁵ までたつても区別ができませんでした。

十二³⁵ どは、二つの人形が同じ名まえであるこ
十二³⁵ した。私は、先生がかけらをいろりのか
十二³⁵ だ、腹だちの原因がとりのぞかれたとい
十二³⁶ ばらくして、先生がぼうしを持ってきて
十二³⁶ きました。だれかが水をくみあげていま
十二³⁶ ました。冷たい水がいきおいよく流れて
十二³⁷ この生きた一ことが、私のたましいを目
十二³⁷ 名まえのあることがわかつたのです。私
十二³⁸ れるあらゆるものが、生命をもつて動い
十二³⁸ た。それは、先生が與えてくださった新
十二³⁸ すぐ、私は、自分がこわした人形のこと
十二³⁸ 私の目にはなみだがいっぱいいたまりまし
十二³⁸ 。自分のしたことがわかつたので、生ま
十二³⁸ 生」などのことがあつたことを思いだ
十二³⁹ りながら、この日が自分にもたらした喜
十二³⁹ アメリカの女の人を書いた「わが生がい
十二³⁹ んなりつばな文章が書けるといふことは
十二⁴⁰ きないの、氣持があらあらしくなり、
十二⁴⁰ た。サリバン先生が、このあらあらしい
十二⁴⁰ みならぬどよりよくがいました。しかし
十二⁴⁰ た。だんだんちえがつき、もの心がつい
十二⁴⁰ えがつき、もの心がついて、学校にい
十二⁴¹ をひかれ、ふたりがひとりのようになつ
十二⁴¹ 。先生も、「私が命がけでせわをすれ
十二⁴¹ ば、ケラーさんがすくわれるのです。
十二⁴² ラーを思う愛情とが、一つになつたお
十二⁴³ 「略。」「なにが。」「ねえ、おじさん
十二⁴³ とこのまの人形が、動きだしそうな氣
十二⁴³ きだしそうな氣がするんだだけ——」
十二⁴³ 話の本に、人形が夜中に集まつておど
十二⁴³ ておどります話がありましたよ。「へ
十二⁴³ だって、みんながねしずつあつたあとで

十二444 ㊦ ばいをみたことがあるかね。」「へ略。」「
 十二445 ㊦ ばいって、人形がしばいをするんです
 十二446 ㊦ だ。もちろん人が動かすんだがね。日
 十二447 ㊦ ばな人形しばいがある。その人形など
 十二448 ㊦ まるでたましいがはいっているように
 十二449 ㊦ いといわれる人がいて、ものによって
 十二450 ㊦ たをだしたり鼻がてんぐのようにとび
 十二451 ㊦ そのかわり説明がついている。ほら、
 十二452 ㊦ ような楽しい氣がするよ。」「へ略。」「
 十二453 ㊦ 、いろいろ種類がある。あやつりは文
 十二454 ㊦ ばな影絵しばいができている。ジャワ
 十二455 ㊦ いて、美しい色がつけてある。これに
 十二456 ㊦ でてくる。それが音楽や歌にあわせて
 十二457 ㊦ にいろんなものがあるんですね。」「へ
 十二458 ㊦ 色やくらしかたがどんなにちがつてい
 十二459 ㊦ そうとする氣持がある。だから、人間
 十二460 ㊦ 。だから、人間がいるところには、か
 十二461 ㊦ きた人間のほうがうまくやれるし、そ
 十二462 ㊦ さやおもしろさが生まれてくるのだ。
 十二463 ㊦ り、写真のほうがいいと便利なわけだ
 十二464 ㊦ 絵のいいところがあるからね。ところ
 十二465 ㊦ つかう人の顔や頭がみえないようにする
 十二466 ㊦ する。3 人形がかたむかないように
 十二467 ㊦ むきのある川などがあるためばかりでは
 十二468 ㊦ らききなれた傳説が、そのあいだにおり
 十二469 ㊦ だけのもののほうが多い。また、文章に
 十二470 ㊦ 、ただおもしろみがあるばかりでなく、
 十二471 ㊦ よくにたようなのが、あちらこちらで発
 十二472 ㊦ 郎という大きな男がいた。みそ五郎は、
 十二473 ㊦ の池は、みそ五郎が畑をうったときのく
 十二474 ㊦ とき落ちた土くれが、有明海の中にある
 十二475 ㊦ 山という二つの山がある。どちらもけつ

十二576 十九だんの石だんができています。すばら
 十二577 ㊦ 神山のおくにおにが住んでいて、毎年村
 十二578 ㊦ た。それは、おにが一夜のうちに百だん
 十二579 ㊦ ことで、もしそれができなかったら、こ
 十二580 ㊦ らない、もしそれができたら、毎年ひと
 十二581 ㊦ るみるうちに工事がはかどって、九十九
 十二582 ㊦ 、九十九の石だんができた。とこ
 十二583 ㊦ で、いちばんどりが鳴いて、東の空が明
 十二584 ㊦ が鳴いて、東の空が明かるくなった。お
 十二585 ㊦ わり十二キロの湖がある。これが湖山の
 十二586 ㊦ の湖がある。これが湖山の池である。昔
 十二587 ㊦ 昔、この里に長者がいた。一代二代はい
 十二588 ㊦ すかぎりさざなみがうちよせる大きな池
 十二589 ㊦ 具の岩屋というのがある。昔、あるま
 十二590 ㊦ 、あるまじい人が、ふとしたことから
 十二591 ㊦ ると、頼んだ品物がちゃんとそろってな
 十二592 ㊦ っていた。そのことが評判になって、だれ
 十二593 ㊦ その中にわるい人がいて、かりた家具を
 十二594 ㊦ そのちは、だれがなんと頼んでも、か
 十二595 ㊦ 、ひとりの木こりがいた。名を八郎とい
 十二596 ㊦ る日のこと、八郎が山でしごとをしてい
 十二597 ㊦ している、のどがかわいてきた。水を
 十二598 ㊦ ると、美しい小魚がおよいでいる。八郎
 十二599 ㊦ かった、のどがかわいてたまらない
 十二600 ㊦ でものどのかわきがとまらなかつた。そ
 十二601 ㊦ そのうちからだんだん長くのびて
 十二602 ㊦ 家にはひとりの母がある。母にそのから
 十二603 ㊦ とびこむと、小川がひろがって、みるみ
 十二604 ㊦ 湖となった。それが十和田湖のおこりだ
 十二605 ㊦ いやわらかなものが、地をうがち岩をお
 十二606 ㊦ うなたくましい根が、深くのびてみきを
 十二607 ㊦ れからでた細い根が、つなのようにから

十二6610 、みごとな草や木がしげっていく。の
 十二6611 のこぎりには、はがある。のこぎりの
 十二6612 きの大のこははが廣いし、製材所のま
 十二6613 だんなにはたらきがあつても、それにあ
 十二6614 れにあつみと廣さがなかつたら、正しく
 十二6615 の中をわたることができない。八 雪
 十二6616 に、曾良という人が住んでいました。曾
 十二6617 、信州の人で、歌がたいそうじょうずで
 十二6618 ずかにしているのがすきだというし、家
 十二6619 した。また、まきが少ないと、近所へ木
 十二6620 らえるので、これがなによりうれい
 十二6621 。そのうちに、冬がきて、くもった空が
 十二6622 きて、くもった空がひくくたれる日が続
 十二6623 がひくくたれる日が続きました。芭蕉は
 十二6624 た。芭蕉はからだがいよいよ、寒さは
 十二6625 たが、雪をみるのが楽しみでした。芭蕉
 十二6626 あおぎながら、雪が早く降るといいな
 十二6627 芭蕉は、子どもが大すきでした。その
 十二6628 「みんなは、雪が降ったら、なにをし
 十二6629 に、パラパラと音がして、白い小さな
 十二6630 なつぶつぶのものが落ちてきて、子ども
 十二6631 の待ちに待った雪が、とうとうくれがた
 十二6632 りました。曾良が水をたくさんくんで
 十二6633 だんなは筑波おろしがさわがしく、雨戸を
 十二6634 り、大川の波の音がバサリバサリと、ま
 十二6635 と入口をたたく者があります。」「へ略。」「
 十二6636 略。」「友だちがほしくなるのはやは
 十二6637 が、みせるものがあるよ。」「芭蕉は、
 十二6638 た。なんてんの実が、赤く、うさぎの目
 十二6639 もらしい手すきびがすつかりうれしくな
 十二6640 手キンゼーと私とが、いよいよ試合をす

十二 77 4 とメキシコの國旗が美しくひるがえつて
十二 77 6 物人でした。時間がせまつたので、私は
十二 79 10 略。」「友だちがないから。」「略」。
十二 80 3 「略」。こう、私がたたみかけるように
十二 80 11 「略」。という色があらわれていました
十二 81 2 せないこの二少年が、遠い母國の選手の
十二 81 3 ことを知って、胸がいっぱいになりました
十二 81 4 からまもなく試合がはじまりました。キ
十二 81 7 うなはげしい試合が続きました。三時間
十二 81 11 セットで勝つことができました。私はい
十二 81 12 とをわすれることができました。やわ
十二 82 4 決勝戦に勝つことができました。世界のほ
十二 82 11 、方々の國の人々が、そのコートを目が
十二 83 2 ートには、日ざしがさんさんと降りそそ
十二 83 4 た。そこへ両選手があらわれました。ス
十二 83 8 た。「略」。試合がはじまりました。目
十二 83 9 もとまらぬボールが、ネットの上を右に
十二 84 4 七―五で清水選手が勝ち、第二回もや
十二 84 6 あの小さいからだだが、まほうつかいのよ
十二 84 8 ではあらわすことができます。しかし
十二 86 3 事に受け返すことができ、試合はふたた
十二 87 3 たらき（一）父が、「略」という。
十二 88 3 ろいろにその意味がかわる。「略」と
十二 88 11 なく、そのことばがわかつたとはいえな
十二 89 2 満足を與えることができないし、また目
十二 89 3 も通じない。自分が話をするときには、
十二 89 9 きそのときの心持があらわれるはずであ
十二 89 11 えば、ことばの力がうしなわれていく。
十二 90 9 「略」。太郎が、こういう短い文を
十二 91 1 いったこと、くりがたくさん落ちていた
十二 91 4 いったこと、小鳥が鳴いていたこと、帰
十二 91 7 たささまざまなことが、こまかに、この文

十二 92 3 そのかわりきのことがたくさんあったこと
十二 92 4 と――そんなことがふくまれている。ほ
十二 92 6 ている。ほかの人がこれと同じ文を書い
十二 92 8 めいの生活や経験が同じでないためであ
十二 92 9 めである。みんなが「遠足」という同じ
十二 92 9 も、書かれたことがそれぞれちがつてく
十二 93 2 とばとしての性質があり、おもしろさが
十二 93 2 あり、おもしろさがある。書くことは、
十二 93 3 、その場のようすが相手にみえないから
十二 93 7 にくふうすることがたいせつである。文
十二 93 9 も書きなおすことができる。文をなおす
十二 93 10 練るほど、ことばがみがかれてくる。
十二 94 1 （三）「赤とんぼがとんでいる」「赤と
十二 94 4 動いているようすがすぐわかる。」「赤と
十二 94 5 る。」「赤とんぼ」「が」「略」。――この
十二 94 6 、すぐにそのわけがわかる。それは文字
十二 94 8 めいちがったものかと思いだされてくる。
十二 94 8 青い空を赤とんぼがむれてとんでいる景
十二 94 12 、道ばたに野はぎがさいていたので、赤
十二 95 5 。だれも話し相手がないので、しょんぼ
十二 95 6 いると、赤とんぼが自分のまわりをとん
十二 95 8 いた。「赤とんぼがとんでいいる。」こん
十二 96 3 たの家に、写真帳があるでしょう。それ
十二 96 5 おじいさんの写真がでていたり、あなた
十二 96 8 らいままでのことがさまざまに思いださ
十二 97 4 か。ここに貝がらがあります。みたこと
十二 98 9 、古い時代のことがはつきりわかるいと
十二 98 11 ールスという学者が、東京の大森の貝づ
十二 99 3 よう。石の矢の根があります。石のおの
十二 100 2 、なわ目のものがあるのです。じょうも
十二 100 5 、いろいろのものがあります。じょうも
十二 100 9 い式土器というのがあります。それは、

十二 101 2 土器という名まえがつけられています。
十二 101 11 ま、まるたまなどがかざってあります。
十二 102 2 代の人たちの氣持がよくわかるではあり
十二 102 4 をこしらえたものがあります。夢殿の
十二 103 5 ます。四角なあながあいていたり、クロ
十二 103 6 うにならんだ文字があつたりして、おも
十二 103 7 いお金です。お金がなかったときにくら
十二 103 8 にくらべて、お金ができてからはどれほ
十二 103 9 たか、考えることができますか。ほう
十二 104 6 かざりにほうおうがついているからだ
十二 104 10 鳥の美しいすがたがあらわれていること
十二 104 11 れていることに氣がつくことでしよう。
十二 105 3 たをはいた女の人が、おともをふたりつ
十二 105 7 。向こうがわに店がみえます。皮ざいく
十二 105 8 く、なにかの毛皮がひろげてあります。
十二 106 8 た二ひきのうさぎが、うしろから手をふ
十二 106 11 は、はぎやすきがさきみだれた秋の野
十二 107 1 鳥羽僧正という人がかいた動物絵巻の一
十二 107 4 す。さあ、うさぎが勝つでしようか、か
十二 107 4 しょうか、かえるが勝つでしようか。
十二 107 10 どをみても、力があふれています。仁
十二 109 5 イソツプという人が書いたお話ですが、
十二 109 6 リスト教の宣教師が日本に傳えたのは、
十二 109 9 こんなりっぱな本ができました。日本の
十二 110 1 す。外國から書物が新しくはいってくる
十二 110 1 とは、外國人の心が傳わることで、日本
十二 110 11 のの中に、銀や貝が光をはなっているの
十二 111 1 品なのです。三人がひとつに心をあわせ
十二 112 10 で、人間のからだがどうなっているか、
十二 114 2 さくなるような氣がします。議事堂
十二 114 4 なさんがたの代表が、全國からここに集
十二 115 2 影を写した写真帳が終りました。このよ

十二¹¹⁵八 て、みんなの歩調がそろったときに、は
 十二¹¹⁵九 、はじめて、日本が正しい、美しい國と
 十二¹¹⁵九 しい國となることができましょう。 30
 十三⁵七 水には、あしのめがすすくと、するど
 十三⁸七 いものと深いものがあるが、その深く進
 十三⁹六 、おしべのかふんがめしべにつかないよ
 十三⁹八 験を重ね、かふんがめしべにつくときは
 十三⁹十 ものである。知識が開けず、科学の進ま
 十三⁹十 ところには、迷信が行われる。むかしは
 十三⁹十 星を見て世の中がみだれるといったり
 十三⁹十二 たり、でんせん病がはやると、ほうき星
 十三¹⁰十二 やると、ほうき星が出たからだといった
 十三¹⁰一 あるいは、きつねがつくとか、からすの
 十三¹⁰一 、からすの鳴き声がわるいから不幸があ
 十三¹⁰一 がわるいから不幸があるなどといった。
 十三¹⁰三 だ、そうした考えがのこっている。たと
 十三¹⁰四 をするのに、方角がよいとかわるいとか
 十三¹⁰五 字画を数えて、運がよいとかわるいとか
 十三¹⁰十二 、約二百万人の人が生まれるが、これら
 十三¹¹一 るが、これらの人がみな同じ性質をもち
 十三¹¹九 が、それは、学者がいろいろに考えて、
 十三¹²十 なもので、日や月が、東から西へまわっ
 十三¹³一 ううぶな考えかたがもとなつて、東洋
 十三¹³三 、いわゆる天動説が行われていました。
 十三¹³六 かないようなことが、目についてきたの
 十三¹³六 です。熱心な学者が、だんだんそれを発
 十三¹³九 まわっていることがわかり、また、地球
 十三¹³十二 は反対に、地動説が出てきました。これ
 十三¹⁴三 ケプラーという人が出ました。この人は
 十三¹⁴九 リレオという学者がありました。わかい
 十三¹⁴十二 のではない、地球が動くのだということ
 十三¹⁵五 これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏

十三¹⁷三 のほかには、鉱山があるのでもなく、い
 十三¹⁷四 でもなく、いい港があるのでもなく、わ
 十三¹⁸三 りにするか、これが、デンマルクの愛國
 十三¹⁸九 のできる國民だけが、國の建ておしと
 十三¹⁸十 ったひとりの軍人がありました。戦場か
 十三¹⁹十 その三分の一以上が、作物のできない土
 十三¹⁹十 えた土地とするのが、ダルガスのゆめで
 十三²⁰三 よくしげった森林がありました。しかし
 十三²⁰九 のあれ地に育つ木があるかないか、まず
 十三²¹四 スの誠実は、これがためにくじかれるこ
 十三²¹七 。そうして、かれがふと思ひうかべたの
 十三²¹十 らんで生長し、年がたつてもかれないで
 十三²¹十 とに、みどりの野が廣がりました。ダル
 十三²²八 ルガス、おまえがくれるといった材木
 十三²²十 けて、植物の研究がすすきましたが、かれ
 十三²³一 父に、「大もみがある大きさ以上に生
 十三²³九 、植物学上の事実が、ダルガス親子によ
 十三²³十 しいげったもみの林が見られるようになり
 十三²⁴一 ートランドの氣候が、そのよい感化を受
 十三²⁴四 しもさえ見ることがあったのです。その
 十三²⁴七 んでしたが、植林が成功してから以後の
 十三²⁴八 ました。夏、しもがおりののはまったく
 十三²⁴十 地は、大もみの林がしいげったために、こ
 十三²⁴十 になりました。木材があたえられたうえに
 十三²⁴十二 うえに、いい氣候があたえられました。
 十三²⁵三 のうえ、大水の害がのぞかれたので、す
 十三²⁵四 こり、新しい町村が、いたるところに生
 十三²⁵五 た。土地のねだんがあがつて、あるとこ
 十三²⁵十 も、とうといものが生き返りました。そ
 十三²⁶六 町には、ホートンが、あみの目のように
 十三²⁷三 ねむのきの枝などが、ずつとこのびだして
 十三²⁷六 ながっている感じがする。一見、なんの

十三²⁷十 場に、子どもたちがたむろして、日だま
 十三²⁸七 、いろいろなものがある。まず、もの賣
 十三²⁸七 。まず、もの賣りが鳴らして来る鳴りも
 十三²⁸八 来る鳴りものの音がもしろい。床屋が
 十三²⁸九 おもしろい。床屋が通る。客のこしかけ
 十三²⁹一 ひくようなびびきがする。その「ビュ
 十三²⁹一 その「ビュン」がとまると、そこでは
 十三²⁹二 、どこかの子どもが、もう、頭をつるつ
 十三²⁹二 られている。糸屋が来る。荷車をひきな
 十三²⁹四 なく、女の人たちが集まって来て、糸屋
 十三²⁹七 赤や、白の糸たばがくりひろげられ、に
 十三²⁹八 れ、にぎやかな話が続く。いかけ屋が来
 十三²⁹十 が続く。いかけ屋が来る。これも、いろ
 十三²⁹十 。歩いて行くと荷がゆれて、しぜんにふ
 十三³⁰一 しぜんにふんどうがどらにあたる。「ボ
 十三³⁰一 たによつて、調子がちがう。「略」。「ハ
 十三³⁰四 きつて、子どもが大ぜい集まる。まる
 十三³¹三 たその中で、さるがさまざま藝をする
 十三³¹四 じたりする。それが、見ている人には、
 十三³¹七 る。まんじゅう屋がそうだ。朝早く、大
 十三³¹十二 て来る。やつと目がさめたころ、遠いと
 十三³²一 。春は、なえ賣りがやつて来る。夏は、
 十三³²三 は、きんぎょ賣りがやつて来る。「略」
 十三³²四 イスクリーム賣りがやつて来る。「略」
 十三³²七 には、なつめ賣りがやつて来る。ぶどう
 十三³²九 ートンには、それが、ふしぎなほどよく
 十三³²十二 いろいろなものがひびくが、なんとい
 十三³³三 けをのせた一輪車が、「キリキリ、リリ
 十三³³五 キリ、リリリ」がひびく。夏の日には
 十三³³六 の日には、この音がすずしい氣持をおこ
 十三³³九 。それだけに、空が美しい。月が出てい
 十三³³九 、空が美しい。月が出ていれば、出てい

十三502 げで、きれいな鳥がわらっている。さあ
十三508 だけだ。でも、水がすむまで見ているか
十三513 んほうで、母うしがしたでなめると、よ
十三526 い、わたしの日々が、自然をしたう心で
十三534 美しいおかあさんが、まるまるとふとっ
十三535 うひとりの子どもがよりかかっている絵
十三543 、そのあかちゃんがキリストで、そのお
十三544 、そのおかあさんがマリアだということ
十三545 そうして、その絵がだいすきになりました
十三548 ありませんが、絵がすきで、それに、わ
十三5411 おじさんは、用事がなく、しょいって、
十三5555 すこし大きいがあるよ。」といって、
十三5746 の像をかくことが得意だった。その『
十三5710 喜びという心持が、よく出ているね。
十三5712 りわかるが、色がわからない。赤いと
十三5712 い。赤いところが黒くなったりするの
十三5836 はよいが、すりがうまうまいかないから
十三594 せいの高いマリアがキリストをだいて立
十三595 ほうさんらしい人が、その前にひれふし
十三5966 、たいへん感じがちがいますね、おじ
十三5986 さんという感じが、よく出ているんじ
十三5996 おごそかな感じがするね。この絵は、
十三5910 絵だよ。わたしが行ったとき、この絵
十三5911 、一台の長いすがおいてあったが、見
十三5912 たが、見物の人が、かわりばんこにや
十三6016 あいているときがなかったよ。」ぼく
十三6010 は、そのうまさがよくわからないけれ
十三6116 ファエルのほうがうまいかもしれない
十四53 ない強い真実の力が、こもっている
十四510 さ、それは、かれが、父を失った直後、
十四686 かれてから私がいちばんつらかった
十四696 は、おかあさんがかなしがつていらっ

十四72(手) まだ子どもたちのこっている、子ど
 十四77(手) ばならないことが、おこったというに
 十四86(手) ら。私には決心がきました。つらい
 十四87(手) のできないことがあるとしたら、それ
 十四88(手) は、おかあさんがかなしがつていらっ
 十四92(手) には、まだ幸福がのこっている、なぜ
 十四95(手) ま、おかあさんが力をおとしておしま
 十四99(手) は、おかあさんが、ちゃんとしていて
 十四103(手) ようにしたほうがいいとか、調節がで
 十四103(手) いいとか、調節ができるとか、ほのお
 十四104(手) るとか、ほのおがゆれたりしないとか
 十四105(手) めに小さなかさがあるとか——それに
 十四107(手) 小さな書きつけがついているはずで
 十四118(手) いになったほうがいいのです。ランブ
 十四125(手) 友だちで、母親が十年このかた、この
 十四126(手) ているというのが教えてくれたことな
 十四131(手) りのようなものがついでいて、どこま
 十四133(手) に、小さなさざらがあります。それは、
 十四142(手) く純真な思い出がのこっています。お
 十四142(手) と、こんなことが思われてくるのです
 十四151(手) す。おかあさんが、もし、かなしいお
 十四152(手) 自分には子どもがあるということをお
 十四154(手) す。おかあさんがご用でしたら、いつ
 十四1512(手) ままでより時間が早くたつでしょう
 十四162(手) つています。私がそばにいないことな
 十四165(手) ださい。あなたが私を思ってください
 十四168(手) いると。ランブがお氣にいて、うれ
 十四1612(手) そういったものがご入用のときは、ご
 十四171(手) てください。夜が長すぎはしませんか
 十四174(手) さんのおすがたが、目に見えるよう
 十四174(手) 見えるような氣がします。どの時間
 十四182(手) るとき、高山く^{たかみ}くんが、思いだしたように

十四187(手) いていた田中^{たなか}さんが、「略。」といった
 十四1810(手) いていた野村^{のむら}さんが、「略。」とたずね
 十四195(手) 「略。」田中さんが答えられないでいる
 十四195(手) いると、高山く^{たかみ}くんが、「略。」「略。」
 十四1912(手) 略。」そこへ先生がいっしょだった。み
 十四201(手) そうか。そうじがすんだら、そのこと
 十四204(手) すませた。みんなが席につくと、先生は
 十四205(手) いってきたことが、いろいろまじって
 十四211(手) といって、みんながおどろいていたが、
 十四2112(手) うとう、こくぼんがいっぱいになってし
 十四223(手) ろいた。佐藤^{さとう}さんが、「略。」と、さも
 十四228(手) ことばさ。それが長い間つかっている
 十四231(手) おどろいた。先生が、「略。」とおし
 十四244(手) たくさんのことばが、いろいろな國から
 十四247(手) 本になかった品物が、外國から傳えられ
 十四2410(手) オ」ということばがはいり、タバコと
 十四2412(手) コ」ということばが、傳えられたという
 十四251(手) られたということがわかった。私は、こ
 十四252(手) 、さまざまなが心がうかんできた。
 十四253(手) た。ものとことばが、いっしょになって
 十四254(手) ちも、新しいものが世の中にできてくる
 十四256(手) るものであることが、考えられる。「こ
 十四258(手) 」などというお話が、つくれそうな氣が
 十四259(手) 、つくれそうな氣がしてきた。それから
 十四2510(手) ら、外國のことばがはいってきたのは、
 十四2511(手) 、外國の学問などが傳わってきたときに
 十四262(手) のちはドイツ医学がおもに傳わったと
 十四264(手) は、オランダ医学がはいってきたときに
 十四266(手) ムは、ドイツ医学がはいってきたときに
 十四2610(手) とばは、西洋音楽がはいってきたときに
 十四2612(手) ばも、西洋の油絵がはいってきたときに

十四271(手) たのだということが想像される。それか
 十四273(手) は、どんなことばがはいってきたのだろ
 十四276(手) ことばだ。それが、あまり古い時代に
 十四2712(手) からきたことばが調べられますか。」
 十四292(手) てもらいたいものがあるのです。見ても
 十四299(手) 色のよい國で、花がたえずさいいたた
 十四302(手) せん。かりにそれがほんとうのことだと
 十四305(手) に心をくばることがたりなかったのは、
 十四3012(手) 日本と、日本だけが特別の國でもある
 十四3110(手) 、ものを考える力が大きくなっていけば
 十四322(手) 「略。」という人があるかもしれませ
 十四324(手) 自分たちとはえんがなと思っています人
 十四325(手) たことから、農業が進歩したのです。こ
 十四326(手) たのです。こよみが作られたのです。天
 十四326(手) たのです。天文学が生まれたのです。数
 十四327(手) れたのです。数学が発達したのです。航
 十四327(手) たのです。航海術がさかんになったので
 十四329(手) は、たいして関係がなさそうですが、じ
 十四3210(手) 、ふかいつながりがあるのです。人間は
 十四3212(手) 金星などのわく星が、太陽を中心として
 十四3310(手) このぎんが系全体が、星の世界の全部か
 十四341(手) ど大きな星の世界が、なおいくつもある
 十四344(手) で廣いのか、想像がつきません。しかし
 十四347(手) わかりますか。光が一方のはしから、向
 十四355(手) おとる小さな人間が、引力の法則を発見
 十四358(手) ものだということができるでしょう。み
 十四3512(手) こまれるような氣がします。まことに、
 十四376(手) そうすれば、人間がだいいちにしなければ
 十四378(手) やするようないことがあったら、どうか天
 十四382(手) け 一の人「音がする。ああ、いい音
 十四382(手) ああ、いい音がする。」みんな「一
 十四384(手) 、夜明けの音楽が聞える。」二の人そ

十四 38 7 会 あがつて、「夜が明ける。」二の人「東
 十四 38 8 会 二の人「東の空が明かるくなってくる
 十四 38 9 会 三の人「朝が近づく。」みんな「夜
 十四 39 1 会 人「暗いとぼりが、たち切られる。」
 十四 39 2 会 五の人「ゆめがさめた。長いゆめが
 十四 39 2 会 めた。長いゆめがさめた。」三の人「夜
 十四 39 3 会 た。」三の人「夜が明ける。」みんな「み
 十四 39 4 会 な「みんなの朝がくる。」一の人「わた
 十四 39 5 会 ちの、楽しい朝がくる。」五の人「深呼
 十四 40 3 会 。」二の人「大空がほおえんでいる。ば
 十四 40 11 会 平和と自由の光がさしてくる。」みん
 十四 41 5 会 まって、「朝日が、朝日がのぼる。」
 十四 41 5 会 「朝日が、朝日がのぼる。」二の人「朝
 十四 41 6 会 。」二の人「朝風がふいてきた。」一の
 十四 41 8 会 たちの前に、朝がきた。」一の人「みん
 十四 41 11 会 おぐ。美しい音楽がひびく。五 心に
 十四 42 4 会 をもて、あらしがふこうが、雪がふろ
 十四 42 4 会 がふこうが、雪がふろうが。天には雲
 十四 42 6 会 地にはあらそいがたえなかるうが、心
 十四 42 8 会 うすりや、なにがこようと、平氣じゃ
 十四 43 1 会 日だって、それが明かるくしてくる
 十四 43 5 会 労に、よし心配がたえなくとも、くち
 十四 43 7 会 うすりや、なにがこようと、平氣じゃ
 十四 43 10 会 日だって、それが元氣にしてくれる。
 十四 44 11 会 という小さな汽船が、十ばいもある定期
 十四 45 3 会 客十四人のゆくえがわからなくなりまし
 十四 45 7 会 ろう。かれは、氣が氣ではありませんで
 十四 45 9 会 た。すべてのものが、ことごとく波にの
 十四 45 10 会 に、死のしずけさがあたりに廣がりまし
 十四 45 12 会 なく、きれいな歌が流れてきました。そ
 十四 46 10 会 持になって、自分が水の中にひたつてい
 十四 48 1 会 およいでいるだけがせいぜいののに、こ

十四 48 2 会 くあんな美しい声がだせるものだと思
 十四 48 6 会 づいてみると、船がしずむひょうしに流
 十四 48 7 会 、なんんかの婦人がつかまって、立ちお
 十四 48 12 会 、ほかの婦人たちが力をおとさないよう
 十四 50 1 会 りに、マッケンナがおよいで行ったよう
 十四 50 2 会 、一そうのボートが、やみをぬって助け
 十四 50 8 会 ようさんの名まえがわかりません。しか
 十四 52 5 会 のです。私の花がさかなかつたら、実
 十四 52 8 会 とりわけ、め花がさいて、はじめて、
 十四 52 9 会 、かぼちゃの実がつくのです。こんな
 十四 52 11 会 めしべの根もとが、大きくふくれただ
 十四 53 6 会 めしべの根もとがふくれて、そんな大
 十四 53 8 会 ね。それは、私が、いつも日あたりの
 十四 53 11 会 は、せっかく花が開いても、とちゅう
 十四 54 2 会 に、あなたがたが、かつてに花をさか
 十四 54 8 会 大部分、根の私が、土の中から吸いと
 十四 55 8 会 ませんから、私が申します。」おとな
 十四 56 2 会 しかし、根さんが、せっかく吸つてく
 十四 56 3 会 分でも、葉さんが、それを日の光にあ
 十四 56 4 会 たものでも、私が運んであげなかつた
 十四 56 7 会 や、高いところがおすきなようですが
 十四 56 8 会 もし、つるの私がとちゅうで切れたり
 十四 56 11 会 なに大きなきずができています、私
 十四 57 1 会 て、あなたがたがかれないうようにして
 十四 57 3 会 思います。」つるがこういったとき、高
 十四 57 4 会 はいってきたものがあります。それは、
 十四 57 5 会 たちだといふことがわかりました。「略
 十四 57 9 会 私、つまり太陽がなかったら、どうな
 十四 57 11 会 ものです。それがこの日本でできた
 十四 57 12 会 るためには、私が熱と光とをゆたかに
 十四 58 3 会 考えてみたことがありますか。」水が
 十四 58 5 会 した。「略。」水が続いていました。

十四 58 7 会 たち水です。水がなかったら、なんで
 十四 59 1 会 げで、かれるのが助かったことを考え
 十四 59 3 会 した。「略。」土が立ちました。「略」
 十四 59 5 会 なんて見たことがない。さつきから問
 十四 59 6 会 って、みんな私がわけてあげたのです
 十四 59 9 会 、いたずらなはちがいました。「略」
 十四 59 10 会 花さん、あなたが、どんなに美しくさ
 十四 59 11 会 いたって、ぼくがとびまわって、かふ
 十四 60 7 会 か、考えたことがありますか。」花も、
 十四 60 11 会 しばらくして、根がいました。「略」
 十四 61 1 会 いだした。人間が来て、まいてくれた
 十四 61 1 会 もし、あの人間がいなかったら、また
 十四 61 2 会 また、その人間がせわをしてくれなか
 十四 61 7 会 いてもらうことができさえすれば、こ
 十四 61 11 会 や、土や、水などがいました。花も、
 十四 62 2 会 ここに、茶わんが一つあります。中に
 十四 62 3 会 中には、熱い湯がいっぱいはいって
 十四 62 6 会 ろのこまかいことが目につき、さまざま
 十四 62 7 会 まざまのうたがいがおこってくるはずで
 十四 62 10 会 からは、白い湯げがたっています。これ
 十四 63 1 会 なく、熱い水蒸氣がひえて、小さなしず
 十四 63 2 会 しずくになったのが、無数にむらがつて
 十四 63 5 会 のつぶの大きいのが、ちらちらと目に見
 十四 63 6 会 あいにより、つぶがあまり大きくないと
 十四 63 7 会 うな、赤や青の色がついています。これ
 十四 63 8 会 れは、白いうす雲が月にかかったときに
 十四 63 9 会 は、お話することがどつさりありますが
 十四 63 12 会 明なガス体の蒸氣が、しずくになるとき
 十四 64 1 会 のしんになるものがあって、そのまわり
 十四 64 2 会 のまわりに、蒸氣がこってくつつかの
 十四 64 3 会 し、そういうしんがなかったら、きりは
 十四 64 3 会 きないといふことが、学者の研究でわか

十四646 空気中には、それが、しぜんにたくさん
 十四647 にかんではいた雲が消えてしまったあと
 十四648 ようなものばかりがのこっていて、飛行
 十四649 ちやうど、けむりが廣がっているように
 十四6411 をよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、
 十四6411 が熱いかぬるいかが、おおよそわかりま
 十四652 すと、湯げの温度が高くて、まわりの空
 十四653 ます。反対に、湯がぬるいと、いきおい
 十四654 るいと、いきおいがよいわけです。湯
 十四654 温度を計る寒暖計があるなら、いろいろ
 十四658 す。つぎに、湯げがのぼるときには、い
 十四659 いろいろのうづがでます。これがま
 十四659 ができる。これがまた、よく見ている
 十四661 れ以上は、けむりがゆるゆらして、いく
 十四662 うずになり、それがだんだんに廣がり、
 十四667 上から大きなうづができて、それが、か
 十四667 ずができて、それが、かなり早くまわり
 十四6611 、もっと大きなのが、庭の上などにでき
 十四6612 などにあることがあります。春さきな
 十四672 いるところへ日光があたって、そこから
 十四672 そこから白い湯げがたつことがよくあり
 十四673 い湯げがたつことがよくあります。そう
 十四673 から、つめたい風がふきこむたびに、横
 十四676 して、大きなうづができて、それが、ちよ
 十四676 うづができ、それが、ちやうどたつまき
 十四678 するのを見ることがあるでしょう。茶わ
 十四6711 と大じかけなものがあります。それは、
 十四6712 のどこかの一地方が、日光のために、特
 十四682 ら蒸発する水蒸気が、とくに多くなりま
 十四683 におおわれた地方があると、あたたかい
 十四684 、あたたかい空気が下からふきこんで
 十四685 そのつめたい空気が下からふきこんで

十四685 きて、大きなうづができます。そうして
 十四686 そうして、ひょうが降ったり、かみなり
 十四686 ったり、かみなりが鳴ったりします。こ
 十四688 らべると、しくみがずっと大きくて、う
 十四6810 ろなかわったことがおこるのです。しか
 十四695 いようなことがらが、原理のうえからは
 十四6912 線や、うす暗い線が、不規則なものは
 十四702 動いているのに気がつくでしょう。これ
 十四707 い。それも、お湯が熱いほど、もようが
 十四708 熱いほど、もようがはっきりします。つ
 十四709 に、茶わんのお湯がだんだんにひえるの
 十四710 のまわりから、熱がにげるためだと思っ
 十四715 ふうなじゅんかんがこります。よく理
 十四7110 て、そのひえかたがどこも同じではない
 十四7111 別につめたいむらができます。そうい
 十四7112 からは、ひえた水が下へおり、そのまわ
 十四721 いに熱い表面の水が、そのあとへ向かっ
 十四721 かって流れ、それが、おりた水のとへ
 十四721 っているところがほうほうにできます
 十四724 にぬるいところが、いろいろに入りみ
 十四725 とのさかいで、光が曲がるために、その
 十四727 るために、その光が同じようにならず、
 十四728 ったようなものが見えるのです。日の
 十四729 ちらちらしたのが見えることがあります
 十四7212 ものが見えることがあります。あの「か
 十四7212 あ」の「かげろう」がたつのは、かべや屋
 十四731 のは、かべや屋根が熱せられると、それ
 十四732 それに接した空気がふくれてのぼる、そ
 十四733 できる氣流のむらが、光をおり曲げるた
 十四738 きりのようなものがひと皮かぶさってお
 十四738 さっており、それが、ちやうどさけめの
 十四739 ぶれて、そこだけがとう明に見えます。

十四7310 のふしぎなようなのであるかという
 十四7312 むらとなにか関係があることだけはたし
 十四741 しかでしよう。湯がひえるときにできる
 十四742 つめたさとのむらが、どうなるかとい
 十四745 え、湖や海の水が、冬になって、表面
 十四747 には、どんな流れがおこるかというよう
 十四7410 用上の問題とえんががつてきます。
 十四7412 ます。地面の空気が、日光のためにあた
 十四754 とつ風というものがそれです。たとえば
 十四756 ですと、畑のほうが、森よりも、日光の
 十四758 ので、畑では空気がのぼり、森ではくだ
 十四761 るされるかたむきがあります。これがあ
 十四761 があります。これがあまりはげしくなる
 十四762 氣流のじゅんかんが、もっと大じかけに
 十四765 るでは、反対の風がふいています。これ
 十四766 と同じようなことが、山腹と谷との間に
 十四767 れています。これが、もうひとまわり大
 十四769 におこると、それがいわゆる季節風（モ
 十四769 ン）で、われわれが冬期に受ける北西の
 十四773 竹うら（一）私が、木を割ったり、竹
 十四774 しているとき、祖父が来て、「木もと竹う
 十四777 とのほうから割るがいい、竹を割るとき
 十四777 らのほうから割るがいい」という教えでし
 十四783 つすぐに割ることができなかったのに、
 十四787 つすぐに割ることができました。そのの
 十四795 つしてそれることがありません。ただ、
 十四795 あいには、どつちがうらかもとか、わか
 十四798 ぬ。しずむほうがもとだよ。」と教え
 十四7911 ちやうど、「二三が四」という算数の九
 十四801 。いったい、だが、そのことを発見し
 十四803 、自分たちの祖先が発見したのではなく
 十四812 上にも三年。一事が万事。牛を追う。う

十四 83 4 は、北國の人たちが雪と戦っているよう
 十四 83 5 たものである。雪が降りだしてから、だ
 十四 83 7 いる人々、春の光がさしそめて、雪どけ
 十四 83 7 そめて、雪どけ水が流れだすところ、そ
 十四 84 3 一ひら一ひらの雪が、それぞれがった
 十四 84 4 と、その美しい雪が数かぎりなく、天上
 十四 84 6 て雪のけっしょうができるか、どんなば
 十四 84 10 、雪のけっしょうがちがうわけを、映画
 十四 85 1 てみると、その雪が、どこで、どのよう
 十四 85 2 のずから知ることができるといふのであ
 十四 85 6 高い天空のようすが、こまごまとわかる
 十四 86 7 におもしろい場面が発見されるように思
 十四 86 9 おられた雪のむれが、道を消し、木をお
 十四 87 2 きと表現することができそうである。ふ
 十四 87 8 野原を、第一の人が歩いて行く。その人
 十四 87 9 るべに、第二の人が歩いて行く。やがて
 十四 88 1 とした足あとが、廣野を横きる一す
 十四 88 5 らであろうか。足がつめたくなって、立
 十四 88 7 いて、思わず方向がちがったものであろ
 十四 89 1 、ぼちっと黒い土が見えはじめたとき
 十四 89 1 びは、たとえようがない。子どもたちは
 十四 89 9 でも、読む人の心がひかれるのは、もの
 十四 90 9 た。二台の荷馬車が来たので、それをさ
 十四 91 4 、どこかの男の子がひろって行ってしま
 十四 92 1 らいだった。寒さがしみこんで、足は赤
 十四 92 9 いないので、父親が、きつとひどくしか
 十四 92 11 その子は、おなかがすいて、こごえて、
 十四 94 12 、火をとすことができたならば、どん
 十四 95 3 るい、赤いほのおがかがやきだした。女
 十四 95 5 その小さなほのおが、その子には、もえ
 十四 95 8 りではない。それがもえ続けている間、
 十四 95 11 中には、美しい火がもえあがり、ほのお

十四 96 8 でこすった。それがゆらゆらともえあが
 十四 96 9 すところは、かべがきぬのようになうすく
 十四 96 11 かり見とおすことができた。雪のように
 十四 97 1 ならべたテーブルが見えた。やいた鳥が
 十四 97 1 見えた。やいた鳥が——それこそほんと
 十四 97 2 うのまるやきの鳥が、ほかほかとあたた
 十四 97 11 をすった。ほのおが明かるくもえあがっ
 十四 98 1 大きな木で、それが美しくかざられてい
 十四 98 2 の小さなろうそくが、みどりの枝の間か
 十四 98 6 百もの小さな人形が見おろして、マツチ
 十四 98 10 続けていて、それが、高く、高く、しだ
 十四 99 2 一つの明かるい星が落ちるのを見た。そ
 十四 99 3 のを見た。その星が落ちるとき、空を横
 十四 99 4 いた。「なにかが、神さまのところへ
 十四 99 6 あったおばあさんが、星の落ちるときは
 十四 99 6 なにかのたましいが神さまのところへの
 十四 99 8 してきかせたことがあった。女の子は、
 十四 100 5 して、おばあさんが見えなくなつては困
 十四 101 1 った。おばあさんが、こんなにせいが高
 十四 101 2 が、こんなにせいが高く、りっぱで、美
 十四 102 2 た元日の朝、人々が、マツチ賣りのむす
 十四 102 5 人々は、女の子がおおみそかの晩に見
 十四 102 7 人々は、女の子がどんなに幸福に、神
 十五 6 5 文 六つほどの子がおよぐゆえ水わかな
 十五 8 3 文 さくらさくら人が人が子を歩かせて
 十五 8 3 文 らさくら人が人が子を歩かせて かわ
 十五 9 2 文 を日ぐれのうまが通る はまの子ら火
 十五 9 7 文 日の第一線が燈台の高きに れん
 十五 10 2 文 いこうもり 月が出る山の家にうしを
 十五 14 4 文 らの木にばらがまつかにさいてける
 十五 16 8 文 るくすめるながえ顔。少女たちよ、
 十五 17 6 文 さしく清きなが心。わが祖國、やが

十五 19 3 ウという美しい山があります。スイスの
 十五 19 4 雪をいただく山々がならび立っています
 十五 19 5 くそびえているのが、このユングフラウ
 十五 19 7 トルばかりの高さがありますが、そのほ
 十五 19 9 、あるいは、氷河が無言の流れをきざん
 十五 19 10 の上を、登山電車がわれわれを運んでい
 十五 20 1 いくつかの停車場があつて、そこには、
 十五 20 2 い、小さなホテルがここかしこに立つて
 十五 20 5 メリカ人の一家族が来て、しばらくとま
 十五 20 8 りの女の家庭教師がついていました。朝
 十五 20 12 見るもの聞くものがごとくめずらし
 十五 21 5 ようなけわしい山が、むらさきがかつた
 十五 21 10 なげこんで、それがコトコトと音をたて
 十五 22 6 、みんなの頭の上が暗くなって、なんだ
 十五 22 7 だか大きなあらしがふき起つたような音
 十五 22 8 き起つたような音がしました。なんでし
 十五 22 9 でしょう。みんなが、おどろいてその音
 十五 23 1 な一わのやまわしが、サアツという羽音
 十五 23 4 らくして、ふと氣がついてみると、いま
 十五 23 5 た女の子のすがたが見えませんか。先生が
 十五 23 5 見えません。先生が第一にさわぎだす、
 十五 23 6 さわぎだす、両親があわててあたりをか
 十五 23 11 らとびついたものがあります。だれでし
 十五 24 5 前へ、大きなわしがひとりの女の子をつ
 十五 25 2 長くのばして、鳥が大づめでつかんでい
 十五 25 3 る女の子のからだ下が下へ落ちないように
 十五 26 2 ど、もしこのわしが、その舞いおりると
 十五 26 6 ゆうで、このわしが大きなくちばしで女
 十五 26 7 か、殺される心配がある。そんなことの
 十五 26 10 できた飛行機乗りが、安全な着陸地を上
 十五 27 1 文 しておいで、私がいますくつてあげる
 十五 27 6 のかと、そのことがまた、少年の氣にか

十五 28 5 は、あぶないことが近づいたと感じたの
 十五 28 10 短刀をぬいて、鳥がそのあき地へ身をお
 十五 29 4 の左手には女の子が、右手には血にそま
 十五 29 5 血にそまった短刀があります。少年は、
 十五 30 4 。わしの白い下羽が、綿のように一面に
 十五 30 9 あくまです。少年が女の子の後にかばう
 十五 30 11 がった岩のかげらが目にはいりました。
 十五 30 12 で、その石を取るが早いか、目の前二メ
 十五 31 9 ます。羽風で空気がゆれ動き、ちよつと
 十五 31 11 には、鳥の白い羽が雪のようにとびちり
 十五 32 2 ヤガヤという人声が聞えてきました。少
 十五 32 3 。少女の両親たちが、そのへんにいたひ
 十五 32 8 という鉄ぼうの音がしたかと思うと、い
 十五 32 12 かりましたが、気がつくともう自分の
 十五 33 1 ぜいのひつじかいが集まって来ており、
 十五 35 7 くされてきたものが、文字というものの
 十五 35 10 字とよばれるものがあつた。中部アラビ
 十五 35 11 、これにいた文字があつた。漢字も、も
 十五 35 12 字から起り、これがだんだん変わって、
 十五 36 6 法では表わすことができない。そこでた
 十五 37 6 をあわせて「明」が作られ、「木」を一
 十五 37 7 三つ重ねて「森」が作られた。「枝・板」
 十五 37 11 したりした。漢字が中國から日本に傳え
 十五 38 8 ちがった読みかたがある。しかも、字に
 十五 38 9 かの音のあるものがあり、またいくつか
 十五 38 11 けでも、このことがすぐ理解されよう。
 十五 40 2 自由にうつすことができるようになった
 十五 40 5 きとうにまぜるのが、文章のふつうの書
 十五 41 2 このエジプト文字がフェニキアに移って
 十五 41 4 のフェニキア文字がギリシアに傳わって
 十五 41 5 そのギリシア文字がローマに移って、現
 十五 41 9 くの國々のことばが書き表わされている

十五 41 10 ーマ字で書くことができる。ローマ字を
 十五 41 11 をつかうと、字数が少なくてすむばかり
 十五 41 12 で書き表わすことができる。標準語の教
 十五 42 2 あるから、日本語が世界の人々に親しま
 十五 42 8 をつかっている國があるろうか。日本のこ
 十五 42 9 に書き表わす方法がないものであろうか
 十五 43 4 カの一しようこうが歩いていたが、ふと
 十五 44 9 ㊦「たいへん焼物がおすきのようですが
 十五 44 12 ㊦クリーじいさんがねー」といって、
 十五 45 3 代の長いしきたりが、明治になってすつ
 十五 45 8 たるプリンクリーが、日本政府から頼ま
 十五 46 10 ㊦「こんなものが、まだほかにもあり
 十五 47 6 した。有田に焼物をはじめられたのは、
 十五 47 10 色のはいったものが、いちばんすぐれて
 十五 48 1 ばたらきの者などが、三十数人かかえら
 十五 48 3 された十六人だけが、有田に赤絵町を作
 十五 48 4 の赤絵製作の方法が他にもれないように
 十五 48 5 て、はん主の保護がなくなつたうえに、
 十五 48 6 、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをし
 十五 48 10 焼けるはずのものが黒くなつたり、黄色
 十五 49 5 ることのできる日がきた。しかし、この
 十五 49 9 だわずかに外國人がこれに目をとめて買
 十五 49 11 をとめて買うことがあるというのを聞
 十五 50 3 ㊦から美しいものが一つ消えてしまふこ
 十五 50 4 ㊦です。品物は私が買い上げましょう。
 十五 51 4 美術に対する愛着がふかく、日本美術工
 十五 51 10 の間に結ばれた心が、なん十年の月日を
 十五 52 3 、第一次世界大戦がたけなわであつたこ
 十五 54 3 ㊦にお会いすることができた私は、なんと
 十五 54 4 ㊦ずかに歩みよる私が手にしているしやう
 十五 54 6 ㊦うには見おぼえがある。わかつた、わ
 十五 54 9 、「略」と、私が一言も発しないうち

十五 54 11 るのであつた。私がこの博物館をたずね
 十五 54 11 事は、世界の学者がだれものぞんでいる
 十五 55 4 は、戦争中で費用が思うようにつかえな
 十五 55 8 ㊦、きょうはきみがまだ生まれないころ
 十五 55 9 ㊦でもらおう。私が日本をおとずれたこ
 十五 55 10 ㊦とり入れることがさかんときで、鹿
 十五 55 11 ㊦館というクラブがあり、おかしなもよ
 十五 56 2 ㊦会員であつた私をはじめでたらう。そ
 十五 56 2 ㊦、まだ三角測量が行われていなかった
 十五 56 8 ㊦とはふかい関係があるのだが、きょう
 十五 56 10 ㊦もいおうか、私をはじめて会つた日本
 十五 56 11 ㊦昔になるが、私がまだわかつてアマス
 十五 57 2 ㊦せんばいの教授がやつて来て、きみは
 十五 59 4 ㊦いやいや、時代がちがう。きみたちが
 十五 59 4 ㊦がう。きみたちが知っているはずがな
 十五 59 4 ㊦知っているはずがない。」と、一言の
 十五 59 8 ㊦ずらしい日本人が舞いこんで来たもの
 十五 59 10 ㊦ばならないものがたくさんある。きよ
 十五 60 4 ㊦新島のおじさんが、やまいを札幌さっぽろのこ
 十五 61 5 、その愛されかたがわかつた。そのころ
 十五 61 6 、新島のおじさんがどんなにえらいかた
 十五 61 9 ㊦じさんとおじさんが外出の用意をととの
 十五 62 4 ㊦んたちと行くのがいやなのか。なに、
 十五 62 5 ㊦したのだ。なにが氣にさわつたのか
 十五 62 6 ㊦やえ子、満ぼうがまた、おくの手をだ
 十五 62 8 ㊦「満ぼう、なにが氣にさわつたの、お
 十五 65 11 ㊦またたけてしかたがない。そこで、たま
 十五 65 12 ㊦りかねた家の書生が、これから車のつい
 十五 66 4 ㊦たつても、せつぐくることにその人形
 十五 66 6 ㊦おじさんのすがたが消えうせよう。なく
 十五 66 7 ㊦た新島のおじさんがいい残された願いに
 十五 67 2 ㊦にクリスマスの日がめぐつてきた。新島

十五 67 4 きをふいたが、私がだんをおりるのを待
 十五 67 5 まえていた老婦人が、「略。」とさけん
 十五 67 9 まのようなみだが流れ出た。そのこと
 十五 67 12 もむきのあるかねがつるしてあって、こ
 十五 68 1 ように、しゅもくがそえてあった。「略
 十五 68 4 た。音もなくドアがあいて、半身をだし
 十五 68 4 身をだした老婦人が、「略。」と、家の
 十五 68 5 人が、「満ぼうが来た。みんな早く出
 十五 68 5 おいで、満ぼうが来たよ。」と、家の
 十五 68 10 て、「おじさんが生きていたら、どん
 十五 68 12 びいた。「ここがおじさんのおへやで
 十五 69 2 さんの大きな写真があった。きずのある
 十五 69 3 見え、その口もとがほころんで声さわや
 十五 69 6 つすと、おじさんが日夜ふでをとって
 十五 69 8 う時代の私の写真がかざられてあるでは
 十五 69 11 いまその写真の主が、こうしておじさん
 十五 70 5 もらせたお婆さんが、「略。」とおっし
 十五 70 9 そこに赤インキがおいてあるでしやう
 十五 70 11 とられてから目がわるくなつてね、手
 十五 71 2 。ああ、満ぼうがいすにこしをかけて
 十五 71 3 がたをおじさんがごらんになったらー
 十五 71 11 んは、「満ぼうがまいりましたよ。」
 十五 72 7 ようとしたが、声が出なかった。しずか
 十五 73 3 かしい数々の写真があった。ふかい思
 十五 74 2 子女は、その性質がどんなにちがつて
 十五 74 5 は別として、一方が先に生まれ、他方が
 十五 74 5 先に生まれ、他方があとから生まれたと
 十五 74 6 、それによって兄が特権を與えられねば
 十五 74 9 に巢だたせたいのが念願である。神の目
 十五 74 12 間平等という理念が、ここからわいてく
 十五 75 9 手をかけた老博士が、さらに、「略。」
 十五 76 3 、新島のおじさんが、いまなお満ぼうを

十五 76 9 。そうして、これが新島からならった日
 十五 78 1 きみたちの考えが、たとい世間の考え
 十五 78 6 ほどなく、みかたができるだらう。ひと
 十五 79 4 だけの特別の権利があると信じます。と
 十五 79 9 目にかかったことがあるからです。私の
 十五 79 10 、日本のみなさんが書いたあつてい絵の本
 十五 79 11 いたあつてい絵の本が、いつもおかれてあ
 十五 80 2 よったおつきあいができるようにした
 十五 80 2 たのは、われわれが最初であります。そ
 十五 80 8 した。友愛の精神が、もつともつとひろ
 十五 80 11 あなたがたの時代がきたときには、私た
 十五 80 12 は、私たちの時代がはずかしく思われる
 十五 82 2 福の園 雲のまぐがあがると、園の前の
 十五 82 3 廣間のようなものがあらわれます。テー
 十五 82 4 (ぜいたく)たちが、けだものの肉や、
 十五 83 4 ろう。「光」あれがこの世の中でいちば
 十五 84 4 に、あんなに肉がある。ちようづめも
 十五 85 10 んふとった幸福」が、テーブルをはなれ
 十五 86 8 きせいにする心がなければならぬ
 十五 87 5 ましやう。これが、わたしのむこの『
 十五 87 6 ています。これが『みたされたきよえ
 十五 88 3 もりのように目が見えない。このかた
 十五 88 9 れそうならい」が、腹をかえながら
 十五 89 1 、「きかないほうがよろしい。あれはす
 十五 89 7 、さわぎやどもが、おまえさんがたを
 十五 89 11 に、ちゃんと席がとってありますよ。
 十五 90 12 もつといいものがありますよ。わたし
 十五 91 6 る、いやはや目がまわるようだ。」チ
 十五 91 7 チルチル「それがおもしろいの。」
 十五 91 8 でしやう。それがこの世のすべてです
 十五 92 2 ました。チルチルがふと見ると、かれら
 十五 92 10 、パンも、だれが行けといった。そこ

十五 94 6 とった幸福」どもがにげて行くのを見な
 十五 94 12 眞実を見ることができるとだよ。ダイ
 十五 95 6 はくのつゆ」などがあらわれます。光
 十五 95 8 らしい幸福たちがやって来た。私たち
 十五 96 2 った幸福」どもが、ひどい目にあわせ
 十五 96 4 世の中には、人が思うよりもっとたく
 十五 96 6 人間には、それが見つけられないのだ
 十五 96 7 チル「小さな子がやって来た。かけて
 十五 98 1 んぼう人のほうが、ずっと多いのだよ
 十五 98 2 こにびんぼう人がいるの。」光「それ
 十五 98 6 チルチル「まんがでなくなつて、へ
 十五 98 8 ンよ。もう時間がないのだからね。あ
 十五 98 9 ね。あの子たちが青い鳥を持っていな
 十五 98 12 た。やはり時間がおしいのだよ。なに
 十五 99 2 すこしせの高いのが、廣間の中につけこ
 十五 99 6 を知っている子がいる。(光に) ぼく
 十五 99 12 。会ったお婆さんがいないもの。」幸福「お
 十五 100 6 ちに会ったことがないんだってさ。(へ
 十五 101 8 ちにも「幸福」がいるの。」「幸福」た
 十五 101 10 うちに「幸福」がいるかってさ。戸や
 十五 102 2 でも、ぼくたちがなにをしていても、
 十五 103 8 になると、これが「日ぐれの幸福」で
 十五 103 10 ることの幸福」が、むかしの神さまの
 十五 103 11 それからお天気が変わると、これが、
 十五 103 11 変わると、これが、「雨の幸福」で、
 十五 104 10 こぞうのようなのが、聞きとれないさけ
 十五 105 6 なすがたをした者が、きらきら光る着物
 十五 105 12 喜び」で、不正がしかえしされたとき
 十五 106 2 うのを見たことがあります。その後
 十五 106 5 そうです。あれが「不幸」に行くのを
 十五 106 6 さめてやるのが好きなのですから。
 十五 106 10 しあげる喜び」が、『考えることの喜

十五106 11 会 のわかる喜び」が立っていますが、あ
 十五107 9 会 ばん美しいものがいなくなってしまう
 十五107 11 会 のを見る喜び」がいます。それは、毎
 十五108 5 会 あ、どうあなたがやってみたって、あ
 十五108 9 会 福「あれは、人がまだ知らずにいる」
 十五109 7 会 けてくる。あれが、あなたの「おかあ
 十五110 2 会 ておくれ。なにが幸福といつて、これ
 十五110 8 会 わかさと幸福とがますのですよ。おま
 十五110 8 会 ですよ。おまえがにっこりするたびに
 十五110 9 会 いると、それが見えないが、ここで
 十五111 7 会 よ。おまえたちがほおずりをするたび
 十五111 10 会 に、月と日の光がさしてきてね。」チ
 十五111 12 会 く、おかあさんがそんなお金持だとは
 十五112 2 会 は、おとうさんがかぎをかけたあの戸
 十五112 12 会 おかあさんたちが悲しそうな顔をして
 十五113 4 会 目の中には、星がいっぱいある。ほん
 十五113 8 会 でも、ずっと色が白いな。その中から
 十五113 8 会 。その中から光が流れだすようだよ。
 十五113 12 会 まえ、見たことがなかったかい。この
 十五114 1 会 白くなって、光がさすのにね。」チル
 十五114 4 会 か、ずっとお話がうまいな。」母の愛
 十五114 5 会 ね、あんまり用が多すぎて、ひまがな
 十五114 5 会 多すぎて、ひまがないのだよ。さあ、
 十五114 7 会 家に帰って、私がぼろぼろの着物を着
 十五114 12 会 よ。おまえたちがこの上まであがつて
 十五115 5 会 、おまえと私とが、かわいがりあうと
 十五115 12 会 られたの。人間が地上に住みついてか
 十五116 2 会 あぐんでいた道が、どうしてわかった
 十五116 3 会 がら、「あの人がつれて来てくれたの
 十五116 7 会 の人を見たことがなかったよ。あの
 十五116 12 会 、『幸福』たちがこわがるだろうって
 十五117 2 会 あの人、私たちが、あの人をずいぶん

十五117 5 会 やいよ。『光』がとうとう来てくれま
 十五117 7 会 あなた、この私がおわかりですか。私
 十五119 7 会 りの目にはなみだが光っていました。チ
 十五120 2 会 きようは修業式があった。校長先生の
 十五120 3 会 ずっとまえのことが思い出されてきた。
 十五120 4 会 ぐったときのこと、はつきりうかん
 十五120 5 会 きた。在校生たちがみんな、私たちの
 十五121 2 会 った。「略。」私が答辞を読んだ。けれ
 十五121 3 会 れども、思うことがすこしも書けていな
 十五121 4 会 ていないことに気がついた。あれもいい
 十五121 8 会 に対する感謝の念があふれてきた。それ
 十五122 1 会 きていけ。これがこの級の最後のこと
 十五122 7 会 十五122 9 会 せん——高橋さんが、きょうの日記当番
 十五122 9 会 せん——先生がたがみんな、合唱して
 が（援助）363 が
 一53 8 会 だいやもんどですが、いじのわるいけ
 二11 9 会 いとおもいましたが、だんだんおもし
 二13 3 会 つはまっかでしたが、ひとつは、ほんぶ
 二21 4 会 とおもいましたが、かねがなったの
 二55 7 会 いでになりましたが、まえにはおいで
 三76 2 会 さがしまわりましたが、ゆかのの上にはも
 三97 9 会 きえてしまいましたが、紙にかいたもの
 三98 3 会 えてなくなりますが、紙にかいたものは
 三105 4 会 めてしまいましたが、さいごまでどう
 三106 8 会 たびすすめました、「略。」といっ
 三110 2 会 まつていました、ほんとうは、わた
 四47 9 会 とんでいきましたが、やがて、まつばの
 四51 2 会 べば安全なのですが、いまは、かっちゃ
 四52 10 会 とおりすぎましたが、目のまえに、高
 四55 2 会 りうどはきませんが、大きなへびがや
 四55 7 会 はの音がしましたが、それは、小鳥たち
 四92 2 会 ないかもしれないが、どうしても、白い

四120 8 会 つの でんとうですが、この光をだす
 四121 2 会 な小さなものですが、これができあが
 五15 8 会 ねだんがちがいますが、私は、三十銭でど
 五17 11 会 さきは知っているが、うそ字だから、と
 五30 4 会 おもったのですが、ぼくは、かたへの
 五30 11 会 と思つていましたが、なかなかできな
 五31 1 会 おもったんですが、とてもうれし
 五47 8 会 、名まえは知らないが、きれいな花がさい
 五54 9 会 りをみまわしましたが、空は、まだ、ほん
 五55 5 会 、西の空をみましたが、わがやみません
 五57 2 会 、のぞいていましたが、かげんがわからな
 五58 3 会 ていたようでしたが、やと目をはなし
 五64 1 会 なったのでしょうが、わたしは、おとう
 五64 4 会 らせわはしてきたが、日に日に大きな
 五66 11 会 もあけるといったが、わたしはお礼なども
 五96 3 会 ひわというのですが、ふつうは、ひわ、
 五99 3 会 いってしまいましたが、ひわは、かたのと
 五101 10 会 いとところにかけますが、おひるすぎには、
 五105 7 会 いってしまいましたが、ひわは、いつもそ
 五107 10 会 へにげていきましたが、かごのひわは、大
 六4 4 会 あたりをみまわしたが、いろいろな音や、
 六6 8 会 れちがつてはいるが、どれをみても大き
 六7 7 会 らをみまわしていたが、男の子は、やがて
 六7 11 会 じつとみつめていたが、やがてこの小さな
 六8 3 会 れをつまもうとしたが、あまり小さいので
 六9 6 会 。「略。」と喜んだが、「略。」と、それ
 六9 11 会 ざんさがしまわったが、みつからないので
 六11 3 会 それをいじっていたが、やがて、ピンセツ
 六23 11 会 「せつかくですが、わたしたちはみんな
 六34 5 会 どはねあけられるが、もんどりうって、
 六54 5 会 に月をみていましたが、「略。」と、手ま
 六54 11 会 にじつとしていますが、雲はさっさと走っ

九三九 すみをひろいあげるが、自分の物ではない
 九三二 もあいてに気がつくが、わざと知らないふ
 九五五 りにくい氣持でいるが、やがて思いきつて
 九五二 さっさといきかけるが、舞台はしで足をと
 九五六 とやまだの方をみるが、返事をしないでさ
 九五〇 おこつていきかけるが、思いなおして、さ
 九六三 、それだ。」と喜ぶが、やまだの顔をみる
 九〇六 めは二列ですんだが、谷あいでは一列に
 九〇九 へと登つていかれたが、三百五十メートル
 九二〇 ちよつと歯にしみたが、うまかった。あま
 九二五 のうまさにもよるが、たてる湯のうまさ
 九二六 川べりに道もあつたが、いまはそれもなく
 九三二 にげようとしたが、どうしても手足が
 九三二 がたをみていましたが、くもはどうするこ
 九四一 からたたき落されたが、たまたま、あの白
 九五五 らきこえるともないが、どこからかきこえ
 一〇三 いう旅人もありますが、おとうさんがその
 一〇九 太陽の光線ですが、わけてみると、こ
 一〇九 けてはたらいていたが、ひまさえあれば、
 一三三 《略》。」とさとしたが、佐吉のもえるよう
 一三六 いききするのであるが、これを人の手によ
 一四一 いに高まつていったが、小学校をただけ
 一四三 われるようになったが、かれは、これに満
 一四三 な宝石とされてきたが、しらべてみると、
 一四三 功するわけであつたが、理論と実際とは、
 一四三 や南洋の島々であるが、日本産のものは、
 一四三 二三分のところですが、妹にはそうはいき
 一四三 わからないでしようが、そのときのいきさ
 一四三 したりしていましたが、やつと歩きはじめ
 一四三 よこ歩きだしましたが、よその家の門の中
 一四三 わずかのことでありますが、この中には、妹の
 一四三 ではないなでしようが、ことばの記ろくは

一六三 したりするものですが、かぶきや、ほかの
 一六三 しらえあげるのですが、能のほうでは、め
 一六三 、たくさんありますが、能は、その中でも
 一六三 、能は、ゆう美ですが、狂言はそうではあ
 一六三 いあのへやにはいるが、べつに、からだに
 一六三 りして遊んでいるが、それにあきると、
 一六三 用もないようだが、ボートの向きをか
 一六三 う人がありました、たいへん情ぶかい
 一六三 くれませんでした、おしまいは、喜
 一六三 りぬけてきました、いまはどうにもな
 一六三 ありませんでしたが、四人が生きていく
 一六三 うわさをしましたが、金次郎は耳にもい
 一六三 む者もありましたが、金次郎のうちでは
 一六三 ない金次郎でしたが、そこへいつてから
 一六三 は、くるにはくるが、みな満員の札をさ
 一六三 んだ。大きな声だが、雨や風の音のため
 一六三 やさしいようだが、なかなかいいにく
 一六三 スへいったのですが、数日まえ、イタリ
 一六三 がっかりしましたが、自分たちのみ子も
 一六三 ではないのですが、外国から帰ってき
 一六三 く考えていましたが、ふと思ひだしたよ
 一六三 かったようでしたが、くちびるは動きま
 一六三 ぐがきたのですが、どこがわるいので
 一六三 にかききたかったが、いえませんでした
 一六三 年の方をみましたが、わかつたようなよ
 一六三 中におれましたが、胸がせまつて息も
 一六三 話そうとしましたが、「略。」とだけ、
 一六三 みつめていましたが、やがてまた、病人
 一六三 こともありました、それも、だんだん
 一六三 つむいていましたが、やがてからだをま
 一六三 らやつてみましたが、もとより立とうは
 一六三 を手にはしましたが、なんのことだかそ

一八三 でかけていましたが、ある日のこと、母
 一八三 を織っていました、孟子の顔を見ると
 一八三 に手をいれました、とりだしてみせた
 一八三 い花をつけていたが、あらかたちって、
 一八三 これと考えていたが、根もとをかこうと
 一八三 ぶん美しくみえるが、カンパスの上にぬ
 一八三 がちにしています、母をはじめ、うち
 一八三 とつてのことですが、わたしには、かわ
 一八三 り遊びができます、めいの民ちゃん
 一八三 いいかけていますが、ちよつときいても
 一八三 んおそいようですが、いざりだすとなか
 一八三 ようになりました、民ちゃんは、その
 一八三 苦しめたのですが、私は、いつまでた
 一八三 らつしやいましたが、こんどは、二つの
 一八三 うすを感じましたが、ただ、腹たちの原
 一八三 せようとしたがだめでした。私の目
 一八三 覚えてはいませんが、その中には、「父」
 一八三 上のものもあるが、まるでたましいが
 一八三 けしているんだが、まゆ毛も、目も、
 一八三 ものをいわないが、そのかわり説明が
 一八三 手をつかうのだが、そのほか、指でつ
 一八三 かんでなかつたが、アジアでもヨーロ
 一八三 してみせるのだが、人間ばかりでなく
 一八三 で人形しばいだ、これは人間にでき
 一八三 づいたものもあるが、昔からいい傳えら
 一八三 なつたものもあるが、ただ人々のあいだ
 一八三 やすくは登れないが、ふしぎなことに、
 一八三 で、よくさかえたが、三代めの長者は、
 一八三 たちはおどろいたが、いいだしたことは
 一八三 高くそびえているが、根はちつともみえ
 一八三 えない。みえないが深く長い。深く
 一八三 うじようずでしたが、芭蕉のことをきい

十二 71 9 身にこたえましたが、雪をみるのが楽し
十二 72 9 いではないのですが、芭蕉は、いつも遊
十二 73 9 受けようと思いますが、あられはその手に
十二 73 11 て立っていました、子どもたちのかけ
十二 74 6 ちにつもりましたが、曾良が水をたくさ
十二 75 2 にひびくのでしたが、その夜は、すべて
十二 81 5 的名手でありましたが、私もどうしても勝
十二 86 2 いではありましたが、やわらかなボール
十二 91 12 郎と同じ文であるが、その中にたたみこ
十二 94 12 をとりでかけたが、道ばたに野はぎが
十二 95 9 んな短い文であるが、読み手によって、
十二 97 5 わりもない貝ですが、いまから三四千年
十二 97 10 類にものぼりますが、古代の人は、はい
十二 99 10 るためのものですが、もちろん、水をく
十二 104 7 といわれていますが、屋根の形や左右に
十二 106 6 いにこらえましたが、たおれそうです。
十二 109 6 が書いたお話ですが、これをキリスト教
十二 110 5 んすにしています、そうではありませ
十二 112 11 いなかったのですが、この本によって、
十二 8 7 と深いものがあるが、その深く進んだも
十三 9 9 ときはよくみのるが、つかないときはみ
十三 10 9 も世の中には多いが、ある人は、幸福な
十三 10 12 人の人が生まれるが、これらの人がみな
十三 11 9 とはたくさんあるが、それは、学者がい
十三 15 10 を続けていましたが、だまっていられず
十三 19 5 味を研究しましたが、こんどは、のこっ
十三 20 7 ることにありますが、もっともむずかし
十三 21 1 もみの木ははえるが、数年ならずしてか
十三 22 3 どのの野はできたが、ユートランドのあ
十三 22 6 はふせがれましたが、その生長は、これ
十三 22 11 研究がすきでしたが、かれは、もみの生
十三 23 8 す力をもっているが、それをこえと、

十三 24 6 すきませんでした、植林が成功してか
十三 27 9 ホートンではあるが、ここに住んでいる
十三 31 5 やるつもりなのだが、さるは、とちゅう
十三 32 12 なもの音がひびくが、なんといっても、
十三 34 11 、詩の一節であるが、みな、りっぱな文
十三 35 12 てとばすのであるが、とぶと、風を受け
十三 51 2 ばに立ってるんだが、まだあかんぼううで
十三 54 8 きではありませんが、絵がすきで、それ
十三 56 1 だなと思いましたが、おじさんで見
十三 57 5 いう小さな絵だが、じつによくかけて
十三 57 8 ぐわかりませんが、そのマリアは、た
十三 57 12 はかなりわかるが、色がわからない。
十三 58 2 、その点はよいが、すりがうまいか
十三 59 12 がおいてあったが、見物の人が、かわ
十三 61 1 いかもしれないが、深みやしんけんさ
十四 12 1 いうことでしたが、もしこわれたら、
十四 21 1 がおどろいていたが、先生は、つぎつぎ
十四 22 7 語にちがいないが、もとは、外国のこ
十四 25 5 たりまえのことだが、なかなかおもしろ
十四 26 3 ったとうかがったが、このことから考え
十四 29 4 るかもしれないが、これはけつしてそ
十四 30 1 いう人もありますが、そればかりと思
十四 32 1 うにすすめましたが、中には、「略略」
十四 32 9 係がなさそうですが、じつは、ふかいつ
十四 36 12 まなかつたのですが、その感動から研究
十四 37 3 思いをしています、そんなことにへこ
十四 42 4 あらしがふこうが、雪がふろうが。天
十四 42 4 が、雪がふろうが。天には雲、地には
十四 42 6 がたえなからうが、心に太陽をもて。
十四 46 8 いたかしれませんが、このときぐらい、
十四 47 3 人かわかりませんが、おそろくは、自分
十四 50 7 かなったのですが、おいしいことに、歌

十四 52 7 やはありますが、それだけでは実は
十四 54 8 つしやいました、それは、大部分、
十四 56 7 すきなようですが、そこへつれて行っ
十四 56 12 ができています、私は、いっしょう
十四 57 9 えないうですが、もし、私、つまり
十四 58 2 つしやいました、それを養分につく
十四 58 9 かないようですが、やっぱり、この大
十四 61 9 ないと思いますが、どうでしょうか。
十四 62 5 ぎもないようですが、よく氣をつけて見
十四 63 10 どつきありますが、それは、また、い
十四 65 6 ってもちがいますが、おおよそのけんと
十四 65 12 すぐにあがりますが、それ以上は、けむ
十四 69 3 べるのはむりですが、ただ、ちょっと見
十四 69 10 なにもありませんが、それを日なたへ持
十四 76 11 くらでもありますが、ここでは、これく
十四 77 9 ためしてみましたが、ほんとにそのと
十四 84 1 ひらの雪ではあるが、よく見ると、まこ
十四 85 10 のあるものであるが、私はあとのほうの
十四 86 6 ものととは思われない、いますこしふかく
十四 86 12 ことではあるまいが、ばんそうの音楽や
十四 88 4 思ったのであろうが、いつのまにか曲が
十四 90 2 。寒いことも寒いが、また暗さも暗かつ
十五 19 7 の高さがありますが、そのほとんどいた
十五 31 4 ず舞いたちましたが、まだこりないでや
十五 32 12 おれかかりましたが、氣がつくと、もう
十五 36 6 達したものであるが、形のないものは、
十五 37 2 できたものであるが、それに線を加えて
十五 37 12 年ほどまえであるが、日本では、「山」
十五 38 1 た読みかたをしたが、一方、「山」を「
十五 38 5 おりに読んでいたが、中國の発音にもと
十五 43 4 こうが歩いていて、ふと、ある店先で
十五 44 9 すきのようですが、あなたは——」と

十五441(会) というものですが、じつは、私のプリ
 十五472(会) 持って来ますが、なにぶん作るのに
 十五479(会) かを作らせていたが、そのお庭焼の中で
 十五482(会) る赤絵屋もあったが、これははん主から
 十五558(会) るようなわけだが、それはそれとして
 十五566(会) 上計算してみたが、その際算出した高
 十五568(会) 関係があるのだが、きょうは、はるば
 十五5611(会) 十年の昔になるが、私がまだわかくて
 十五573(会) っているようだが、その一つに日本の
 十五576(会) 年をひきとつたが、室は二つあっても
 十五5710(会) しむことにしたが、その日本の青年は
 十五5711(会) ンになっていたが、ある日のこと、せ
 十五584(会) 生というわけだが、かれこそ、のちに
 十五644(会) 出て来られたが、門を出て十メートル
 十五658(会) へひきあげられたが、その道すがら、小
 十五674(会) の銀てきをふいたが、私がだんをおりる
 十五727(会) びかけようとしたが、声が出なかった。
 十五731(会) のをしておられたが、やがてすがたをあ
 十五7311(会) ずに食事をしたが、平和主義の旗がし
 十五874(会) です。失礼ですが、この中のおもなも
 十五901(会) うにすみませんが、ちよつとのまも行
 十五1027(会) きれいではないが、いちばんたいせつ
 十五1064(会) ん幸福なのですが、いちばん悲しそ
 十五10611(会) が立っています、あれは、いつでも
 十五11010(会) それが見えないが、ここでは、なにも
 十五1227(会) うの日記当番ですが、私にも書かせてく
 が (終助) 10 が
 六759(会) 「だいいち、おまえが生きているんだか
 ら、わかりそうなものだがな。」
 七7511(会) あなたがたは、なにかさがしておいで
 ようだが――
 七762(会) さきほどから、さがしつづけているので

すが。
 八378(会) 「この花が、みたとおりのこがねならば、
 わしもつむのだが。」
 十一864(会) 「あなたと同じように、いなかのかた
 ですがね。」
 十二71(会) 雨具をかりたいのですが。
 十二1710(会) もっともつと美しくなりたいたいと思っ
 ているのですが――
 十二2012(会) あれがあれば、どんなかげのところで
 も、美しい色にできますがねえ。
 十二446(会) もちろん人が動かすんだがね。
 十三146(会) そういう星――これをわく星といいま
 が――の空にえがく道は、だえん形であって、
 かあかあ (感) 2 かあかあ
 三854(会) かあかあ、かあかあ。
 三854(会) かあかあ、かあかあ。
 があがあ (感) 3 ガア、ガア
 八615(会) 「ガア、ガア。」と親あひるがいうと、
 八705(会) 「ガア、ガア。」といって、顔をまっか
 にしてやってきた。
 十三3610(会) 「ガア、ガア」とさわいで行く。
 かあかあかあかあ (感) 1 かあかあ、かあかあ
 二627(会) からす「かあかあ、かあかあ。」
 かあさま ↓おかあさま
 かあさん 「母」(名) 1 かあさん ↓おかあさん・
 おかあさんがらす・おかあさんたち
 九262(会) かあさんがぼんやりみえるかやの中
 ガーゼ (名) 2 ガーゼ
 十四2111(会) トラホーム、アルコール、ガーゼ。
 十四2312(会) コレラ、アルコールはオランダ語、チ
 フス、トラホーム、ガーゼ、スキーはドイツ語。
 カーテン (名) 5 カーテン

七810(会) 白いカーテンが黄色くみえる。
 十一688(会) カーテンをあけて、
 十四188(会) 「カーテンも英語じゃないかしら。」
 十四191(会) 「では、バケツやカーテンなどは、日
 本語で、なんといっていたんでしょ。」
 十四1916(会) 「カーテンは、まどかけさ。」
 カーネーション (名) 1 カーネーション
 五4310(会) それから、まっかなカーネーションです。
 カーネギー (名) 1 カーネギー
 十五761(会) 「きみの論文を、カーネギーで出版す
 ることは、ひきうけたよ。」といったされた。
 カーネギーはくぶつかん (名) 3 カーネギー博物
 館
 十五5210(会) ぜひカーネギー博物館に館長ホランド博
 士をたずねるようにとおっしゃった。
 十五533(会) カーネギー博物館のあるピッツバーグに
 着いたのは、暑い真夏の日の朝であった。
 十五5412(会) 用事は、《略》カーネギー博物館の刊行
 物として自分の論文を出版してもらうことで、
 かーん (感) 1 カーン
 十五683(会) 私はかねをカーンとたたいた。
 かい (会) ↓アメリカさんがくかいかいいん・うん
 どうかい・おんがくかい・かんしゃかい・しゆくが
 かい・はくらんかい
 かい (回) ↓いっかい・だいいっかい・だいいっか
 いめ・だいさんかいめ・だいにかいめ・だいよんか
 いめ・なんかい・にかいめ
 かい (貝) (名) 16 貝 ↓しにがい・しんじゅが
 い・しんじゅがいようしよく・しんじゅぼがい・ぼ
 がい
 九337(会) このほかに、大きな、黒くてひらたい貝
 がとれますので、

九34② せめて、貝だけでもおみせしたいと思っています。

九76 おかみさんが、店の人とふたりで、せつせと貝をこじあけて、むきみをつくっていました。

九77② いまでもこうやって、人は貝をたべています。

九77④ むかしといっても大むかしのことだが、貝などをおもにたべていたときがあったらしい。

九79⑥ この土の上に白くみえているのは、むかし海の中にいたいろいろな貝のからだです。

九81⑤ 貝や石ころは、どれか一つのかごにいておこう。

九81⑩ 「先生、ここは貝ばかりですよ。」

十38 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものがいりこみ、それに、貝のだす眞珠質がまきつき、

十39⑦ うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功するわけであったが、

十二97⑤ みたところ、なんのかわりもない貝ですが、いまから三四千年もまえの貝です。

十二97⑥ いまから三四千年もまえの貝です。

十二97⑨ 貝づかからでる貝は、三百種類にもほりますが、

十二110⑩ また、なまりや貝などをほめこんだものもあります。

十二110⑪ 黒うるしの中に、銀や貝が光をはなっているのは、なんともいえない美しさです。

十五35② 色のちがった貝や、じゅうだまを結びつけることも行われた。

かい 海 ↓ありあけかい

かい 階 ↓にかい

かい 飼 ↓ひつじかい・ひつじかいたち

かい 権 (名) 2 かい

三27⑥ かいをそろえてひとかき水をかくと、ふねはななつの大なみをのりきつて、鳥のつぶように

三57⑤ なたをわすれたカナリヤは、ぞうげのふねにぎんのかい、月夜の海にうかべれば、

かい 甲斐 ↓うちがい

かい 1 カイ

十五37⑫ 「海」を「カイ」というようにもとの中国の発音にしたがった読みかたをしたが、

がい 害 (名) 2 害

十三12③ 迷信は、今日、世の中にどれほど害をなしているかしかない。

十三25③ しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水の害がのぞかれたので、

かいいん ↓アメリカさんがくいかいかいいん
かいうける 買受 (下) 1 買いうける

十五50④ 品物は私が買いうけましょう。

かいく 飼置 (四) 1 かいく 《一ク》
十五11⑥ ガラス戸の外にかいく鳥の影のガラス戸すきてたみにうつりぬ

かいが 絵画 (名) 1 絵画
十64② 日本の絵画や、庭園や、建築にも、《略》

かいがい 海外 (名) 1 海外
おもしろいものが、たくさんありますが、

六11④ ただしちゃんは、海外からひきあげてきた子で、来年少学校へあがります。

かいがい 甲斐甲斐 (形) 1 かいがい しい

《一ク》

十二59⑪ 里のおとめたちは、赤いたすきもかがいしく、朝から集まってきた。

かいがかん 絵画館 (名) 1 絵画館

十三56⑦ 本物はね、いま、イタリアのフロレンスという町の絵画館にかざってあるよ。

かいかつ 快活 (形状) 1 快活

十五10⑦ それは、ぼくたちのなかまでいっとう快活なのです。

かいがら 貝殻 (名) 5 貝がら

九76⑦ みるまに、貝がらの山が家のまえにできま

九77⑤ その貝がらをすてたところが、きょうこれからいく貝づかですよ。

九79⑦ むかしの人は、貝がらといっしょに、《略》、角などを、ここへすてました。

十二97④ ここに貝がらがあります。

十五35③ ぼうきや、石や、貝がらなどに、はものなどでするしをつけてしめすことも行われた。

かいがん 海岸 (名) 4 かいがん 海岸
三89⑤ かいがんではどうでしょう。

五84⑥ いとうくんは、海岸のおじさんの家で、海の作文を書くんだといって、よろこんでいました。

九11⑥ おしまいに、海岸で波のくだけるところをきかせてくれた。

十三24⑫ そればかりでなく、しげった林は、海岸からふき送る砂ぼりをふせぎ、

かいがんせん 海岸線 (名) 2 海岸線
十23⑪ 長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船、島。

十五56⑤ 私は、小手をかざして足の下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ、

かいがんちかく 海岸近 (名) 1 海岸近く
十三25② 北海岸特有の砂丘を、海岸近くでくいと

かいきょう ↓つがるかいきょう

かいけつする 「解決」 (サ変) 1 解決する 『

シ』

十三215 画 「自然は、このむずかしい問題を、かならず解決してくれるにちがいない。」

かいけん 「会見」 (名) 1 会見

十五75 画 日本へ帰ったら、新島夫人にきょうのゆかいな会見のてんまつを伝えてくれといひながら、

かいこ 「蚤」 (名) 1 かいこ ↓ おかいこさん

十56 3 かいこが、皮をぬいで新しく成長していくように、

がいこく 「外国」 (名) 19 外国

十16 7 太郎がそばへきて、外国ではどんなことばを話すかとたずねるものだから、

十17 8 画 外国でくらしみて、つくづく、自分の國のことばのありがたみを知りました。

十64 2 庭園や、建築にも、外国とおもむきのちがつたおもしろいものが、たくさんありますが、

十一65 8 画 「年よりのでかせぎ人ですか、外国から帰ってきた——」

十一65 12 画 「そんなに年よりではないのですが、外国から帰ってきたのです。」

十一86 6 画 外国から帰ったばかりで、ちょうどあなが入院したと同じ日に、入院したんです。

十二109 8 画 いんさつ機も外国から渡ってきていたから、こんなりっぱな本ができました。

十二110 1 画 外国から書物が新しくはいってくることは、外国人の心が傳わることで、

十四20 5 画 外国からはいってきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してください。

十四22 7 画 いや、いまは日本語にちがいないが、もとは、外国のことばさ。

十四23 7 画 外国からはいってきたことばは、英語

だけではなく、

十四24 7 画 「先生、どうして、そんなにたくさん

の外国のことばが、日本語になったのでしょうか。」

十四24 10 画 外国と交通をして、日本になかった品物が、外国から傳えられたときに、

十四24 10 画 外国から傳えられたときに、

十四25 10 画 それから、外国のことばはいってきたのは、品物からだけではなく、

十四25 11 画 外国の学問などが傳わってきたときに、

十四27 10 画 外国からきたことばの中で、西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと

十四27 12 画 「どうすれば、外国からきたことばが調べられますか。」

十五45 6 画 そこで、日本の手工業も、外国から新しい方法を学んで、

がいこくからきたことば 「課名」 2 外国からきたことば

十四2 3 二 外国からきたことば……十八

十四18 1 二 外国からきたことば

がいこくこ 「外国語」 (名) 1 外国語

十四22 11 画 それから、タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、外国語であつたとお話しになったので、

がいこくじん 「外国人」 (名) 4 外国人

十二110 1 画 外国から書物が新しくはいってくることは、外国人の心が傳わることで、

十二111 3 画 まき絵は、日本のすぐれた工藝品の一つで、古くから外国人にもはやされてきました。

十五49 9 画 ただわずかに外国人がこれに目をとめて買うことがあるというのを聞いて、

十五50 4 画 ほかの外国人にも話してあげましょう。がいこくじんどうし 「外国人同士」 (名) 1 外国人 どうし

十9 4 知らない外国人どうしても、こんなに親し

みをもつことができるものかと思いました。

かいこん 「開墾」 (名) 1 かいこん

九34 4 画 せんだって、はじめて畑のかいこんのおつたいをしました。

かいこんする 「開墾」 (サ変) 3 かいこんする

《一サ・シ》

九35 1 画 ぼくたちの畑がようやくかいこんされて、三日めにやつと、うねを十三本つくりました。

九42 6 画 苦労してかいこんした畑のいもをほりおこすのは、楽しく、うれしいことでした。

十二23 9 画 荒地を三十アールばかりかいこんして、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、

かいさつ 「改札」 (名) 1 改札

五26 4 画 それから、はるこさんは、きつぷを改札の女の人にわたしながら、

かいさつぐち 「改札口」 (名) 3 改札口

五8 4 画 さあ、改札口へいこう。

五14 6 画 「きつぷを改札口でおだし。」

五26 9 画 「はるこさん、いま改札口の人にありがとうつていったのは、どういうわけ。」

かいしゅ 「アイリッシュユナショナルほけんがいしゅ・こうくうがいしゅ

かいしゅう しかつかいしゅう

がいしゅつ 「外出」 (名) 1 外出

十五61 9 画 ある日のこと、おじさんとおばさんが外出の用意をととのえて、

かいじょう 「階上」 (名) 1 階上

九116 2 画 階上のわが電燈のきえにけりみわたす家々みなまくらなり

かいしん 「回診」 (名) 1 回しん

十一88 8 画 タがたの回しんのときに、医者

「略。」といいました。

がいじん 「外人」(名) 1 外人

十五5512 図 そのころ日本をたずねた外人の中で、
〔略〕のいたたきをきわめたのは、

かいつい 「海水」(名) 3 海水

十四43 ある小さな生物が、海水いちめんによつて、
海水が茶色にかわるほどになるのである。

十四42 眞珠貝にちようどよい海水の温度や、海の
深さのこともわかり、

十四49 海水の温度に大きなかわりかたもなく、四
年めになった。

かいつい いちめん 「海水一面」(名) 1 海水いちめ
ん

十四43 ある小さな生物が、海水いちめんによつて、
海水が茶色にかわるほどになるのである。

かいつい 「題名」1 かいとい

十二112 9 「かいとい」と読みます。

かいつい 「解体図」(名) 2 解体図 解体圖

十二112 図 解体圖

かいだん 「階段」(名) 3 かいだん

三三15 図 わたくしはかいだんをかきます。

三三15 図 かいだんははじめに十五だん あがつ
て、

七七10 図 ろうかをすうと通つてみたり、かいだ
んをトントンあがつてみたり、

がいち 「外地」(名) 1 外地

十二23 2 長いこと外地にいた姉たちがひきあげて
きました。

かいちゅう 「海中」(名) 1 海中

十四48 幸吉は、自信をもつて母貝を海中にはなつ
た。

がいちゅう 「害虫」(名) 1 害虫

八104 6 いねの害虫——いなが6びきほいまし
た。

かいつい ちうどけい 「懷中時計」(名) 3 かいちゅう
時計

六92 図 あれがないと、町長さんのかいちゅう時
計がなおせない。

六113 そうして、一つのかいちゅう時計をだして
それをいじつていたが、

六116 かいちゅう時計が、たちまち、ゆかいそう
にカチカチと音をたてはじめた。

かいつか 「課名」2 貝づか

九33 七 貝づか……七十六

かいつか 「題名」1 貝づか

十二97 3 貝づか

かいつか 「貝塚」(名) 10 貝づか

九76 2 みんなで、学校から四キロほどある貝づか
へいきました。

九77 6 図 その貝がらをすてたところが、きようこ
れからいく貝づかです。

九78 2 図 あれが貝づかです。

九78 4 もうすこしで貝づかに着くというところで、
先生は一けんの農家にたちよられました。

九79 4 図 ここが、このあいだからよくお話しして
いた貝づかです。

九84 3 図 これはじようもん土器といつて、貝づか
からでる物では、いちばん多い土器です。

十二97 7 四年生のとき習つた貝づかのことを思い
だしてください。

十二97 9 貝づかからでる貝は、三百種類にものぼ
ります。

十二98 11 大森の貝づかを発見してからのことであ
ります。

十二99 2 貝づかからでたものをならべてみましょ
う。

かいてん じいちかいてんする

かいてん する 「回転」(サ変) 2 回転する 《一
シースル》

十四33 1 地球や金星などのわく星が、太陽を中心
として回転していることを知っています。

十四67 8 大きなうずがで、〔略〕、たいへんな早
さで回転するのを見ることがあるでしょう。

かいつか 「街道」(名) 2 かいどう かい道

四90 3 おかてから はきはじめて、かいどうへ
ぬけて、おとなりまではいていく。

九29 1 図 かい道をきちきちととぶつたかな
がいつか 「外套」(名) 1 がいつか

六28 3 ぼうしもかぶらず、がいつともきていませ
ん。

がいつか 「外套膜」(名) 1 がいつか

十四45 ほかの母貝のがいつかを切り取つてき
て、一種の手術をほどこすことを発見した。

かいねこ 「飼猫」(名) 1 かいねこ

十一48 3 ぼくのいすは、小さなゆりいで、その
下に、いつもかいねこのメリーがいた。

かいふく じこくうんかいふく

かいふん 「回文」(名) 1 かいふん

四69 1 二組のあつめた「かいふん」。

かいふん あそび 「回文遊」(名) 1 かいふんあそび

四66 6 「かいふんあそび」これは、上からよん
でも下からよんでも、おなじになることばを
かいもとめる「買求」(下) 1 買い求める 《一
メル》

十五496 しかし、このような美術品を買い求める
ようなものは、ほとんどいなかった。

がいや「外野」(名)3 外野

七491 ぼくのほうは、センターが外野へでてし
まったので、

七516 ぼくらのほうが、どんどんあてられて、セ
ンターまで、外野にでてしまった。

七5310 センターが、外野のセンターにれんらくを
とって、どんどん、あてにあてた。

がいらいごじてん「外來語辞典」(名)1 外來語辞
典

十四284 外來語辞典というものもあるから、そ
れを調べると、なおいつそうよくわかるだろう。

かいりくふう「海陸風」(名)1 海陸風
十四763 海陸風とよばれているもので、晝間は海
から陸へ、夜は反対に陸から海へとふきます。

かいわ「会話」(名)1 会話
十三443 しばいは、かならず、ふたり以上の会話
から組み立てられています。

かう「交」↓とびかう
かう「買」(五)9 かう 買う 《イー・ウ・

ーッ》↓おかいなさる
五83 かい 「にいさん、汽車のきつぷかったの。」

五84 かい かったよ。
六994 おとうさんにかつていただいた小さな虫め

がねがでてきた。
八63 私も、すっかりひきこまれて、しばらく見

物したのち、その一わを買い、
九1142 かい いもうとの小さき歩みいそがせてちよ

紙かいにゆく月夜かな
十173 かい えんぴつ一本買いにいくにも、日本のこ

とばでは通じません。

十一208 父親のすきなものをかうために、自分で
わらじを作つて、お金をもうけたりしました。

十一256 遠い山へいって、しばをかつたり木を
切つたりして、村の人に買つてもらいました。

十五4910 ただわずかに外國人がこれに目をとめて
かうことがあつたというのを聞いて、

かう「飼」(五)15 かう 《イー・ウ・ツ・ワ》
三373 かい うさぎをかうところ、きまし

た。
五951 かい 「かわいそうだもの、ひろつていつて、
かつてみよう。」

五959 かい おとうさん、ひとりだとべるようになる
まで、かつてやりましようね。

五986 かい このままかつておいたらいいでしよう。
七2411 かい 先生も、あおむしをかつていらつしや

るつて。
七863 私たちは、うさぎをかうことになりました。

八49 どうして、ピオが私のうちにかわれるよう
になつたかといえは……。

八5010 この「幸福」が、いろいろな家をたずねて
いきますと、いぬのかつてある家がありました。

八518 おまけに、その家にかつてあるいぬが、
おそろしい声で追いつたように鳴きました。

八5211 それから、かつてあるにわとりに氣をつけ
ました。

八537 こんどは、うさぎのかつてある家のまえへ
いつて立ちました。

八791 かい おすでなければいいが、まあ、かつてお
いてみよう。

十一493 ぼくは、おとうさんと同じように、ちち
うしをかつて、自分でバターをつくります。

十一495 やぎもかいます。

十二304 おとなりで、このごろ白いいぬをかうよ
うになりましたが、

かう(下)↓おきかう

かえ ↓かけがえ・のりかえ
かえし ↓おかえし・くりかえし・しかえしする

かえす「返」(五)7 かえす 返す 《ーサ・ーシ・

ース》↓うけかえす・うらがえす・おかえしいた
す・おかえしくださる・おかえしする・おききかえ

す・おもいかえす・くりかえす・とりかえす・ひき
かえす・ひつくりかえす・よびかえしなさる

二532 けれども、またさちこに、りんごを かえ
します。

四132 りょうしははごろもを返します。
六846 かい さ、弓矢を返すよ。

七456 そういつてから、老人にぼうしを返した。
十一242 かい おかあさん、とみちゃんを返してもら

いましよう。
十一247 かい 「そんなら、今夜いつて、返しても
らつてきましよう。」

十二623 その中にわるい人がいて、かりた家具を
かりつばなしにして返さなかつた。

かえす「帰」(五)2 帰す 《ーシ》
五6611 かい 海へ帰してくれ、お礼はいくらでもあげ

るといつたが、
八323 けんぎゅうを西の岸に帰しておしまにな

りました。
かえす「解」(五)1 かえす 《ーシ》

八609 それは、たまごをかえしているのであつた。
かえせる「返」(下)1 返せる 《ーセ》

四1315 かい いや、返せません。
かえつて「反」(副)13 かえつて

三1163 ふしのくすりと手紙は、かえつて かな

しみをます たねになるばかりでしたので、

七49 4 内野の人はいっしんになったので、かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。

七55 5 ふでをいれるほど、かえって、文章がみじかくなっていくことがあります。

八91 3 はくちようは、その受けてきたまじさとふしあわせをかえって喜んだ。

十67 3 でも、こわいものはかえってみたくありません。

十70 3 べつにどつきもたたず、かえって、うまそうなあまいにおいがして、

十70 8 ㊦ なみたいていのどくではないから、かえって、うまそうにみえるのだよ。

十一21 7 すこしも休まず働くので、かえって、おとなよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十一25 10 すこしもつかれたようすもなく、かえって、その体格もりっぱになっていきました。

十三23 8 小もみは、ある大きさまでは、大もみの生長をうながす力をもっているが、それをこえる

と、かえってさまたげになる

十三31 8 とんでもないべつのことを演じたりする。それが、見ている人には、かえっておもしろい。

十四4 9 フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

十四47 8 しょうとつのとときにあわてふためいて、そのためにかえって波にのまれてしまったのに、

かえで [楓] (名) 4 かえで

五97 7 さんちゃんのおうちのまつの木にとまったり、かえでの枝で休んだりしていきました。

五101 10 おひるすぎには、かえでの木につるしておきます。

五103 1 かえでの木につるしておく、いろいろな

鳥がやってきます。

十一39 1 ㊦ かえでにうるし、はじの葉も、赤く黄色く色づいて、冬のしたくをとりいそぐ

かえり [返] ↓ちゅうがえり

かえり [帰] (名) 7 帰り ↓いきかえり・おかえり・がっこうがえり

五23 3 ㊦ あかね、帰りの電車はともこんでいたんです。

五46 10 帰りに、また通ったら、もう鳴いてはいなかった。

九86 9 帰りは、みんなかわるがわるリヤカーをおして歩きました。

九90 3 ㊦ 学校の帰りじゃないか——

九113 8 帰りは、村までくだりの坂道だ。

九119 3 その帰りに、近道をして谷をおりてくると、そこに小石でかこまれた美しい泉があった。

十一78 3 父親の帰りを待ちこがれていたことなどを——それからそれへと長々と話しかけて、

かえりみち [課名] 2 かえり道

三2 7 六 かえり道……三十九

三39 1 六 かえり道

かえりみち [帰道] (名) 3 帰り道

五94 3 その帰り道に、一わの小鳥のひなをひろいました。

九87 4 ところ 学校の帰り道

九121 3 帰り道で、父は次のような話をしてくれた。

かえり・みる [顧] (上二) 1 かえりみる 《一ミ》

十二19 10 ㊦ 一年一年とすんだことをかえりみて、かえる [蛙] (名) 4 かえる ↓あおがえる・あまがえる

四67 9 かえるがひとひよこ、ふたひよこみひよこ、あわせてひよこみひよこむひよこひよこ。

十一34 7 ㊦ きこの煙は水田となつて、晩にはかえるが歌いだす。

十二106 3 かえるは、うさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。

十二107 4 さあ、うさぎが勝つてしようか、かえるが勝つてしようか。

かえる [返] (五) 2 かえる 《一ツ》 ↓いきかえる・そりかえる・てりかえる・はねかえる・ひっく

四126 5 ㊦ 白い はまべの まつ原に、波がよつたり かえつたり。

四134 7 ㊦ 波がよつたり、かえつたり。

かえる [帰] (五) 132 かえる 帰る 《一ツ・一ラ・一リール・一ロ》 ↓おかえりなさる・おかえる・ゆきかえる

二37 5 ㊦ きこのう、学校からかえるとき、

二37 9 ㊦ うたいながら、かえっていきました。

三33 3 ㊦ はきものがきちんとそろって、わたしたちのかえるのをまっています。

三39 4 ぼくらはくさはら道を あるいて かえりました。

三40 3 ぼくらは かたを くんで、くさはら道を あるいて かえりました。

三42 3 みよこさんが、左のかたからはなれて、麦ばたけのよこ道を かえりました。

三42 8 ぼくは、学校どうぐをわきにかかえて、

三54 2 ㊦ 走って かえりました。

三54 2 ㊦ がんがかえる、がんがかえる、がんがかえる。

三54 3 ㊦ がんがかえる、

三54 4 ㊦ がんがかえる。

- 三54 6 鯛 たすきにならんで、がんが かえる。
 三55 5 鯛 おびになつて、ひもになつて、がんが かえる。
 三77 8 鯛 あさになつて、お日さまがあなたたちのところへかえってくるのです。
 三77 10 鯛 「あしたのあさも、お日さまはきつとかえってきてくれるの。」
 三78 6 鯛 お日さまはまいあさ かえって きますよ。
 三91 2 わたくしは、学校へいくときと かえるときにここをとおります。
 三102 1 てのひらにのせてかえりました。
 三107 8 「略。」とお思ひになつて、すぐごしょにつれてかえろうと なさいました。
 三110 4 鯛 この十五夜には、月の國からむかえがきて、かえらなければなりません。
 四17 7 学校からかえったら、おかあさんが、石うすをひいていらつしゃった。
 四31 6 手 きのう、学校からかえるとき、雨がふっていました。
 四38 1 鯛 わたくしは、だまつてうちへかえって きました。
 四63 3 かっちゃんは、なかまの手をとつて、いそいでとんでかえりました。
 四87 4 おとうさんは、町へいって、まだかえらない。
 四88 7 鯛 からすがいそいでかえつたよ。
 四113 4 うらしまは、父や母のことを思いだして、きゆうに家へかえりたくなりました。
 四115 5 鯛 でも、うちのことにも氣にかかりますので、かえらせていただきます。
 四118 8 鯛 五のぼめん 生まれた村にかえつた

- ら、だれも知らない人ばかり。
 四128 6 鯛 もつて かえつて、うちのたからにしよう。
 四130 1 鯛 もつてかえつて、うちのたからにしようと思ひます。
 四131 3 鯛 それがないと、天へかえることができません。
 四132 8 鯛 はごろもをお返ししたら、あなたは、まわずにかえつておしまいになるでしょう。
 五21 9 しかし、その中に三人だけ、たいへんよるこんで帰つていった子どもがありました。
 五22 7 いちろうさんが家に帰ると、おかあさんが、げんかんにむかえにできました。
 五25 9 はるこさんも、にこにこして帰ってきました。
 五27 2 鯛 だつて、電車のおかげで、あんな遠いところまで、一日でいつて帰ってきたのですもの。
 五27 9 しんきちくんは、電車をおりてから、元氣にあるいて帰りました。
 五28 10 鯛 受けとりをもらつて帰ってくるとちゅう、よその人からもらつたんです。
 五43 1 手 一日じゆうてつだいをして、うちに帰るころは、もう、あたりはくらくなっています。
 五58 9 私たちは、まもなく帰ってきました。
 五66 9 おじいさんは、うちへ帰つて、おばあさんに、このふしぎな話をしました。
 五68 6 鯛 帰るまでには、新しいおけができていますよ。
 五68 8 おじいさんが帰つてみると、おばあさんは、新しいおけを持っていました。
 五69 10 おじいさんが帰ると、りっぱな家がたつていました。

- 五71 2 おじいさんがおばあさんのところへ帰りますと、
 五73 10 おじいさんが帰つてみると、
 五77 2 おじいさんは、すぐごと、おばあさんのところへ帰りました。
 五93 3 子どもたちは、みんな帰っていききました。
 五93 4 りようかんさんは、帰っていく子どもたちをみおくつてから、
 五95 2 さんちゃんがひろつて帰ると、
 五107 8 そこへ、さんちゃんが学校から帰ってきました。
 六22 9 鯛 うちへ帰るところなんです。
 六39 7 鯛 でも、村に帰らなくちゃ。
 六40 2 鯛 すぐ帰ってきますから。
 六40 5 鯛 帰るといつたつて、あんな遠いところ——でも、もう一どの村に帰りたいなあ。
 六40 6 鯛 もう一どの村に帰りたいなあ。
 六41 9 鯛 さあ、かかしさん、いまから帰るのよ。
 六44 3 鯛 ほんとうにあのかかしが帰っているだろう。
 六44 5 鯛 いったいだれがつれて帰つたんだろうね。
 六55 5 それから、三人はわかれて、それぞれ家へ帰りました。
 六70 9 そこへ、中学校に通っているねえさんが、帰ってきました。
 六117 2 うちへ帰つて、そのたこをみて、作りかたを考へてみました。
 七6 8 鯛 もう帰る子がある。
 七7 7 鯛 なんとも手をふりながら、先生にさようならをして走つて帰る子ども。
 七28 2 きしもとくんが学校から帰ってくる。
 七29 9 鯛 ぼくは、学校から帰ると、だいこんの

はっぱを、とりかえてやるのが楽しみだ。

七29(金) きのう、学校から帰ってみると、あおむ

しは、もう黄色なさなぎにかわっていた。

七30(土) そこへ、はるおが帰ってくる。

七30(金) にいちゃん、帰っていたの。

七6(土) スリッパのへりをひとまわりして、帰って

いった。

七8(土) もう帰ってもよろしい。

八6(土) その一わを買い、小さなボールばこにいれ

てもらって、だいに持って帰りました。

八10(土) ところが、ある土曜の午後、おなかをすか

して学校から帰ってきたすえの女の子が、

八5(土) ぼくはうちへ帰って、おじいさんにその話

をしたら、

八8(土) あひるの子をみつめて、木ぐつでこおりを

くだし、うちへつれて帰った。

九2(土) むかしから、つばめは、同じ家に帰ってく

るといわれています。

九2(土) 春になると、だれもが、このめずらしいお

客の帰ってくるのをまちがれています。

九2(土) わけても、自分の家へいそいそと帰ってき

たつばめをむかえる人の心は、

九3(土) 小さい妹のために、くわの葉につつんで

持って帰ったこともありまし。

九4(土) いそぐ用事だったので、先生にだけお目

にかかってすぐ帰りました。

九8(土) いずれ学校へ帰ってから、もう一ど整理

しましょう。

九9(土) ふたりとも——さあ、いいかげんにして

帰ろうよ。

九4(土) たかぎくん、帰ろうよ。

九3(土) そこへやまだが帰ってくる。

九12(土) つれの人は、この茶人ほど熱心ではないか

ら、やめて帰ろうといった。

十2(土) 坂道を、ゆっくりとした足どりで、家に

帰ってくる。

十8(土) うちに帰って、十まいずつたばにして、赤

いひもでいわれて数えました。

十9(土) 学校から帰ると、

十1(土) だんなが帰ったら、どんな目にあわされ

るかわからない。

十2(土) そこへ、だんなが帰ってきました。

十2(土) 毎晩、家に帰ってくると、〈略〉、わらを

たたいてわらじを作ることになりました。

十3(土) やがて、金次郎は、親類の家からで、

もとの自分の家に帰り、

十9(土) 学校から帰るときのことであつた。

十1(土) みんな、ぬれねずみのようになって家に

帰った。

十4(土) 数日まえ、イタリアへ帰ってきて、ナポ

リに上陸しました。

十6(土) 家族の者にかんたんな手紙を書いて、

帰ったことと、病院にはいったことを知らせまし

た。

十8(土) 「年よりのでかせぎ人ですか、外國か

ら帰ってきた——」

十12(土) 「そんなに年よりではないのですが、

外國から帰ってきたのです。」

十9(土) ぼく、あしたうちへ帰りますから、も

うすこしここにいさせてください。

十6(土) やはり外國から帰ったばかりで、

十7(土) わたしは、これからすぐにうちへ帰っ

て、おかあさんを安心させてあげよう。

十7(土) 少年がベッドのそばのものと場所に帰る

と、病人はほつとしたようにみえました。

十9(土) 帰ってしあわせにおくらし。

十4(土) コロンブスがアメリカを発見して帰った

とき、イスパニア人はたいへん喜びました。

十6(土) おまえが学問のちゅうとで家に帰って

くるのは、

十3(土) 学校から帰ってくると、わたしは民ちゃ

んの子もりをひき受けます。

十9(土) ある日、学校から帰ってくると、姉が大

さわぎしていました。

十8(土) へやに帰るとすぐ、私は、自分がこわし

た人形のことを思いだして、

十4(土) くりがたくさん落ちていたこと、〈略〉、

帰っておかあさんにゆでていただいたこと、

十9(土) 赤とんぼはとらずに、花を手にいっぱい

つんで帰ったことを思う。

十5(土) 長くかなしみにしずんだものにも、春は、

希望の帰ってくるとき。

十6(土) ひばりやつばめも、やがて、遠い國から

ここに帰って来て、私たちの頭上にとびかい、

十8(土) 戦場から帰ったダルガスです。

十8(土) ……え、いま学校から帰ったばかり

……

十3(土) マンシウの眞ちゃんが、帰って来た

んですか……

十3(土) 早く帰ってくださいね……

十4(土) 帰ったばかりだから、お客さんさ……

十3(土) 生きて帰って来ました——か。

十3(土) (顔をあげて、そのことばを味わう

ように) 生きて帰って来ました……

十3(土) おかあさん、眞ちゃんが帰って来たん

だってね。

- 十三44 9 そのあとはマンシユウから帰って来た眞二くん、おしまいにおかあさん。
- 十三50 9 すぐ帰って来るんだから、きみも来たまえ。
- 十三51 5 すぐ帰って来るんだから、きみも来たまえ。
- 十四28 8 私は、なにか大きな楽しみをもったような氣持になって、家に帰ってきた。
- 十四92 6 思いきって、その屋根うらの家へ帰ることもできなかった。
- 十五61 3 京都^{きょうと}に帰ってから父に送った手紙のどれにも、
- 十五75 7 日本へ帰ったら、新島夫人にきょうのゆかいな会見のてんまつを伝えてくれといいながら
- 十五114 7 家の小さな家に帰って、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだろうね。
- 十五114 9 ぼく、うちへ帰りたくないや。
- 十五114 12 小さな家に帰るのですよ。
- 十五115 1 これから下へ帰ってから、どういうように私を見なければならぬか、
- 十五118 11 会 そうしたら、私は、もうなにもおそれず帰って来ます。
- かえる [解] (五) 1 かえる 《—リ》
- 八14 9 暑い夏がやってくると、たまごは、はじめてかえりました。
- かえる [代] (下) 1 かえる 《—エ》 1 いいかえる・いれかえる・とりかえる・ぬぎかえる・もちかえる
- 十一29 1 これを油にかえて、本を読み続けました。
- かえる [変] (下) 7 かえる 変える 《—エ》
- 二12 7 いろいろかえてならべました。
- 四42 4 列の かたちを かえても、ばらばらに

- なってしまうことはありませんでした。
- 五37 6 大むかしのたいようのねつが、かたちをかえ、石炭の中にたくわえられていて、
- 十一68 8 ポートの向きをかえたりひき返そうとしたりするときには、
- 十一75 8 ポートは向きをかえて、あぶないところからぬけだして、新しい方向に進んでいく。
- 十三16 5 では、ガリレオは、はく害のため、考えをかえてしまったのかという、
- 十五45 4 長いしきたりが、明治になってすっかりようすを変えてしまったので、
- かえる [帰] (下) 2 かえる 帰れる 《—レ》
- 四38 5 たらうさんは、なぜぶどうをもらわないで、かえたのでしょうか。
- 六39 5 山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。
- かお [顔] (名) 100 かお 顔 1 あさがお・あさがおにつき・あさがおのはな・えがお・おかお・ここにこがお・ひとのかお・まがお・ゆうがお・よこがお・わらいがお
- 一27 7 だれもおなじかお、だれもだれもちがったかお。
- 一27 8 だれもだれもちがったかお。
- 一28 1 ひとつのかおが、わらったり、ないたり、おこったり、よろこんだり、かんがえたり、
- 一56 9 まどの中に、みおぼえのあるかおが、たくさんならんでいました。
- 三95 9 おとうさんのかおも、先生のつくえもかくことができます。
- 三103 3 はらの たつときでも、この かぐやひめのかおをみると、すくなおりました。

- 四15 8 わたしのせなかに かおをつけてねんねした。
- 四26 4 りんごさんの かおの まるいこと。
- 四58 3 かっちゃん、みんなのかおをみて、ここにこしました。
- 四58 8 二十九わのかおがそろいました。
- 四92 4 雪が降りだすと、ぼくはまどからかおをだして空のほうをみあげて、
- 四94 1 雪が かおに かかるのも わすれて、高い空のまん中をみあげる。
- 四120 4 みんなのかおがみえます。
- 四127 7 でんきゆうはわたくしの かおです。
- 四131 6 天人は、かなしそうなかおをして、空をみあげます。
- 五77 9 かおよりも大きな花です。
- 六8 5 子どもたちは思わずかおをみあわせた。
- 六10 2 そのとき、いままでも雲にかくれていたたいようがかおをだしたので、
- 六31 7 「へのへのもへ」の顔で、風に向かって立っている。
- 六32 5 かかしの顔に葉がとびかかる。
- 六32 6 顔のうしろを雲がとぶ。
- 六37 5 顔の大写真。
- 六40 11 かかしの顔まで赤くなる。
- 六47 8 ませたくびだす子うまの顔に、かきはすずなり、夕明かり。
- 六102 9 おや、だれかが、しょうじのあいだから顔をだしている。
- 六118 4 ただしちゃんの顔が、生き生きとうきあがつてきました。
- 七98 8 なん百人の子どもの顔、なん千人の子どもの心。

七63 小さな虫がかたまって、顔のところとんでいくれた。

七64 人の顔をちょうこくするの、二つのやりかたがあります。

七67 それにねんどでだんだん肉づけをし、しだいに、その人の顔ににせていくやりかたです。

七68 けずっていった、だんだん、その人の顔ににせていくやりかたであります。

七75 ふたりは、びっくりした顔で、
七78 ふたりは、また顔をみあわせていたが、
七90 よくみていたら、ねこが顔をあらうように、うさぎも、まえ足で、耳や顔をなでていました。

七93 まえ足で、耳や顔をなでていました。
八52 いやなものでも家のまえに立ったように顔をしかめて、「略」とたずねました。

八70 「略」といって、顔をまっかにしてやってきました。

九40 是はるか向こうの山のはしから、美しい湖が半分ばかり顔をみせていました。

九48 やまねこのにやあとした顔や、そのめんどうだという裁判のようすなどを考えて、
九54 いろいろは、顔をまっかにして、あせをぼとぼと落しながら、その坂を登りますと、
九56 その男は、横目でいろいろの顔をみて、口を曲げて、にやとわらっていました。

九58 すると、男はまたいやな顔をしました。
九84 だれもかれも、あせを流し、顔をまっかにしてほっています。

九94 やまだ わざとたかぎの顔をみないようにして、「略」。

九96 やまだの顔をみると、きゆうにまたつんと
なつて、だまつてそれを取り、かばんにいれる。

九99 急停止すると、ぱつと雪けむりが立ち、あせばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。

九99 にこにこわらいながらおりてくるもの、まじめな顔でやってくるものなどさまざまである。

九106 屋根の雪かきおとしいる少年の顔の明かるさ日のでる中に
九140 くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげとみつめました。

九142 わたしの顔ばかりみて、おかしいこと。
十78 おとうさんの顔をのぞきこむようにしました。

十19 友だちの顔、顔、顔。
十19 友だちの顔、顔、顔。

十19 友だちの顔、顔、顔。
十19 友だちの顔、顔、顔。

十21 窓をのぞく子どものはればれした顔。
十24 あせまみれになった工員の顔、胸、うで。

十25 その声をきいて、にっこりとわらう顔。
十26 ふたりのうれしそうな顔。

十50 ひふ病にかかっている、顔のあたりの毛が、ぬけていました。

十63 おしろいやべにでけしょうをして、その役らしく顔をこしらえあげるのが、
十67 はじめは、そのへやの方へは、顔も向けなようにしていました。

十72 太郎かじやは、きゆうに両手で顔をおおい、
おいおい大声をあげてなきだしました。

十一63 少年は、色のあざ黒い、おも長な顔で、
考えぶかそうな目をしていました。

十一67 青ざめた、やせこけた顔をしている病人たちをみまわしました。

十一70 かみの毛は白くなり、ひげはのび、顔ははれあがつてどんより赤く、

十一71 いすをひきよせて、目を父親の顔からはなさないで、こしをおろして待っていました。

十一73 医者は、せいの高い、すこしかがんだ、まじめな顔をした老人でした。

十一75 たんどくが顔にでたのです。
十一77 ふくれあがつた顔の上に、きわめてかすかなほおえみがうかんだのを
十一80 だんだんしつかりした目を少年の上にすえて、うれしそうな顔を顔にうかべながら、
十一88 顔はむらさき色になり、呼吸はいよいよ困難になりました。

十二88 そのとき、母ははたを織っていましたが、孟子の顔を見ると、つと立って、
十二31 午後の日光は、《略》、みあげる私の顔に降りそそいでいました。

十二47 顔の色やくらしかたがどんなにちがっていても、
十二49 顔の作りかた。

十二51 よくかわかしてから、絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬる。

十二53 顔は、着物のすそからさかさにいれて、首を着物にぬいつける。

十二53 顔と手をつけた着物を裏返すことができあがる。

十二53 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔や頭がみえないようにする。

十二54 人形がかたむかないように、話すときは人形の顔を前後に動かす。

十二56 ひなたぼっこをしながらか、まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。

十二73 あらははその手にはのらないで、顔にあたりふところにとびこんだります。

十二102 1 このやさしいのびのびした顔をごらん
さい。

十三19 1 かれは、その胸に國運回復の計画をたて、
その顔にはほえみをたたえて、

十三42 9 ㊦ おみやげより、早くきみの顔が見たい
よ。

十三43 2 (顔をあげて、そのことばを味わうよう
に、)生きて帰って来ました……

十三45 10 顔の表情がよく見えるようにすることも、
たいせつなことです。

十四93 2 雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわ
りを、花かんむりのようにくまどった。

十五16 5 ㊦ 野にはたらきて、土ほこり顔よごす
とも、わするな、明かるくするながえ顔。

十五22 10 みんなが、おどろいてその首の方へ顔を
向けて見ると、

十五59 6 が、ことばみじかにその関係を物語る私
の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、

十五67 8 そのなつかしい顔をあおいだ私の目から
は、たまのようなみだが流れ出た。

十五69 1 指さされるままに、顔をあげてへき面を
見あげると、おじさんの大きな写真があった。

十五85 6 ㊦ あの人たち、ずいぶんうれしそう
な、幸福そうな顔をしているなあ。

十五87 8 ㊦ このとおり、りっぱな、ふくれあが
った顔をしています。

十五112 12 ㊦ おかあさんたちが悲しそうな顔をして
いるときでも、

十五116 9 ㊦ でも、なんで、あんなに顔をかくして
いるの。

十五116 10 ㊦ あの人、顔を見せることはないの。
十五116 11 ㊦ あんまりはつきり顔を見せると、『幸

福』たちがこわがるだろうって、

十五119 7 やがてはなれて顔をあげますと、ふたり
の目にはなみだが光っていました。

かおじゅう 顔中(名) 1 顔じゅう

九58 11 すると、男は、また喜んで、顔じゅう口の
ようにして、にたにたわらっていました。

かおつき 顔付(名) 2 顔つき
六72 9 目だつてつぶつてしまいうしろし、あんな
に元氣のいい顔つきもしていないはずだ――

九74 3 いちろうは、こがねのどんぐりをみ、やま
ねこは、とぼけた顔つきで遠くをみていました。

かおり 香(名) 2 かおり
十一38 10 ㊦ しとしと降る秋雨に、ちれば山には
まつたけが、かおりも高くはえてくる。

十五21 4 朝風にひびくすずの音、日光にかがやく
高山植物のかおり、

かおる 薫(五) 2 かおる 《―ル》
十一56 8 ㊦ ことばはかおる。

十一57 2 ㊦ べにばら野ばら、さんしよの木め、
めやぎのおちち、一つ一つかおる。

か 画架(名) 1 が
十二13 3 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、
がかを立てて写生をはじめた。

か 画家(名) 1 画家
十三53 10 ㊦ これは、いまから五百年ほど前に、イ
タリアのラファエルという画家のかいたもので、

かかえる 抱(下) 12 かかえる 《―エ》 ㊦ だ
きかかえる

三42 7 ぼくは、学校どうぐをわきにかかえて、
どんでん走つてかえりました。

五88 11 ㊦ こうして右の手でだいてな、左の手でか
かえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

七15 1 「腹をかかえてわらった。」

九100 5 たかぎ、頭をかかえてにげるまねをする。
十69 4 だいじそうにしまってあった、一つのまる
いつばをみつ、へやのまん中にかかえてきまし
た。

十一63 5 わきの下に着物の包みをかかえながら、
十一93 1 そういつて、少年は、その小さな着物の
包みを小わきにかかえました。

十四101 7 おばあさんは、女の子をうでにかかえて、
ふたりは、いっしょにふわりとまいあがった。

十五48 1 細工人、画工、ちようこく師、下ばたら
きの者などが、三十数人かかえられていた。

十五62 10 小さな声でうったえる私のくりごを耳
にしたおばさんは、腹をかかえてわらいだした。

十五85 11 大きなおなかを両手にかかえて、たいぎ
そうに、子どもたちの方へやって来ました。

十五88 9 「はちきれそうなわらい」が、腹をかか
えながらおじぎをする。

かがく 化学(名) 1 化学
十五58 9 ㊦ 室友ホランド先生、(略)、化学、生理、
植物、鉱物、地質等をこのんで勉学す。

かがく 科学(名) 2 科学 ㊦ しぜんかがく
十三9 10 知識が開けず、科学の進まないところ
には、迷信が行われる。

十四32 8 宗教も、科学も、哲学も、ふかまつて
いったのです。

かがくしゃ 科学者(名) 1 科学者
十三19 8 かれは、科学者であり、理想を実現する
誠意にみちていました。

かがくてきけんきゅう 科学的研究(名) 3 科学
的研究
十42 5 それから、眞珠目養殖の科学的研究がつづ

けられた。

十三117 むずかしいものは、科学的研究によって調べられる。

十三118 もとより世の中には、科学的研究によつても、まだ知られていないことはたくさんあるが、かがくてきちしき「科学的知識」(名) 1 科学的知識

十三88 知識には、浅いものと深いものがあるが、その深く進んだものを科学的知識という。

かがける「掲」(下) 2 かかげる「ゲ—ゲ—ゲル」

十一541 このごろ、電車の中に、つぎのようなひょう語がかかげられているのをみた。

十三61 新しい勇氣や空想をもって、春は、また、楽しい船出のほぬのを、高くかかげる季節。

かかし「課名」2 かかし

六26 三 かかし……三十一

六311 三 かかし

かかし「案山子」(話手) 9 かかし

六339 かかし「助けて——雲のおじさん。」

六3310 かかし「ああ、おどろいた。」

六352 かかし「なんてらんぼうな風なんだろう。」

六362 かかし「すぎの木のおぼさん、

六392 かかし「ふきとばされたんです。

六394 かかし「あの山のかげの、

六3911 かかし「そりやそうだけど——」

六405 かかし「帰るといったって、

六421 かかし「みなさんで。」

かかし「案山子」(名) 25 かかし

六316 かかしが、「へのへのもへ」の顔で、風に向かつて立っている。

六322 かかしのまゆがまっすぐにのびる。

六325 かかしの顔に葉がとびかかる。

六328 かかしが風にまきあげられる。

六329 糸の切れたたこのように、空にすいこまれていくかかし。

六344 かかし、一どはねあげられるが、もんどりうって、また、ひげの中におちる。

六348 かかしの目だま、ぐるぐるまわりながら、大きくなったり、小さくなったりする。

六357 かかしのつかまつたひげ、のびるだけのびてちぎれてしまう。

六3511 くるくるまいながらおちていくかかし。

六361 大すぎの上にやっととまつたかかし。

六363 案 あら、子どものかかしだね。

六368 高くふきあげられて、空にきえていくかかし——

六374 そのビルディングの一つ——とがった屋根にひっかかっているかかし。

六383 子つばめがかかしをみつける。

六389 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどってきてかかしの近くにとまる。

六404 のこされたかかしの大写真。

六407 かかしのまわりに、〈略〉、楽しかった思い出が、うかんではきていく。

六4010 かかしの顔まで赤くなる。

六414 列をつくったつばめのむれが、かかしの方へとんでくる。

六416 親つばめと子つばめが、かかしのそばにとまる。

六4211 かかしが列のまん中にはいつている。

六442 案 ほんとうにあのかかしが帰っているだろう。

六4411 案 さあ、あのかかしったら、『さような

ら。』とか『ありがとう。』とか、〈略〉さげんでいたよ。

六454 「へのへのもへ」のかかしが、むねをはって、目をむいて、たんぽをみわたしている。

六457 かかしの目のまえに、風にそよぐ金色のいねが、いちめんにつづいている。

かかしくん「案山子」(名) 1 かかしくん

六337 おや、かかしくんじゃないか。

かかしさん「案山子」(名) 2 かかしさん

六3811 案 まあまあ、かかしさんですね。

六418 案 さあ、かかしさん、いまから帰るのよ。

かかと「踵」(名) 1 かかと

八105 歩いているとき、追いかけてきて、かかとや足の指をつついたりするのです。

かがみ「鏡」(名) 5 かがみ 鏡

一327 ——おかあさん——かがみ——くし——

四91 よくみがいたまるいかがみを、この町にはめこんだようです。

四694 「みがかぬかがみ。」

七478 文章は、心の鏡のようなものです。

七575 おかあさんの鏡、庭のはっぱがうつっている。

かがむ「屈」(五) 4 かがむ「—ン」

九616 びっくりしてかがんでみますと、

十一7310 医者ほ、せいの高い、すこしかがんだ、まじめな顔をした老人でした。

十一747 それから、病人の上にかがんで、みやくをみたり、ひたいにさわってみたりして、

十一764 ときどきその手にさわってみたり、はいを追ったり、うなるたびごとにかがんでみたり、

かがめる「屈」(下) 1 かがめる「—メ」

九5111 いろいろは、からだをかがめて、「〈略〉。」

とききました。

かがやかしい「輝」(形) 1 かがやかしい「

イ」

14612 養殖真珠発明の、かがやかしい、あなたの
の光明を太陽とするならば、

かがやきだす「輝出」(五) 1 かがやきだす「

シ」

14953 明かるい、赤いほのおがかがやきだした。

かがや・く「輝」(五) 19 かがや・く「イ・カ・

キ・ク」ひひかりかがや・く

1210 はんたかは 目を かがやかせて、おしやか

さまのおかおをみつめました。

1157 かがやひめのすがたは、それは それは

うつくしくかがやきました。

54510 世界の空のかず多い、かがやく星のその

一つ。

6212 美しいぶどうに、かがやくりんご、楽し

いわれらきりぎりすの生活——

9331 手がくにいれた油絵のように美しくかがや

いてみえます。

14412 第二、第三と母貝を開いていくと、どれに

も真珠が、きよらかにかがやいているではないか。

11164 天と地にかがやくものの中で、いちばん

清らかな、すみきったたま、

11326 岸のやなぎのほわたがとんで、麦のは

しりほかがやく上を、海こえてきたつばくろが、

11353 空にくずれる雲のみね、庭にかがやく

ひまわりの花、あぶらぜみの声さがしく、

13332 一つ一つがかがやく美しさは、なんと

いったらよからう。

14296 それは、空にかがやいている星です。

14414 喜びにみちてかがやく光。

14937 女の子は、窓々とおして、ちらちらと

かがやくともしびの光を見た。

14962 女の子は、小さな、つめたい足を、かが

やくほのおの方へのぼした。

14983 たくさんの小さなろうそくが、みどりの

枝の間からかがやいて、

149811 それが、高く、高く、しだいにのぼって

大空の星のようにかがやくのを見た。

149812 「かがやく小さな星よ、おまえはいっ

たいなんだらうか。」

15213 日光にかがやく高山植物のかおり、

15692 きずのあるみけんの下にかがやく目は、

思いなしかわらいで見え、

かかり「係」(名) 1 かかり ひいんそつがかり・

ガスがかり・かべしんぶんがかり・しゅつばつが

り

6581 どうぞ、みなさんの気づいたことは、なん

でも、かかりのものにお知らせください。

かかり「掛」 ひさんにながかり・そうがかり・てが

かり・ゆきがかり

かかる「掛」(五) 47 かかる 《ツ・ーラ・リ・

ール》 ひあおみがかかる・おちかかる・きいろが

かる・きみがかる・くれかかる・さしかかる・たおれ

かかる・とおりかかる・とびかかる・とりかかる・

ひつかかる・ふりかかる・みなみがかかる・むらさき

がかる・もたれかかる・よりかかる

3263 長い あいだ かかって、やっと切りたお

すことができました。

3271 なん年か かかって、とうとう 一そうの

ふねが できあがりました。

3368 大きなろに、大きなやかんが かかっ

ています。

3774 お日さまは 一つしかないから、みんな

でかわりばんこに お目にかかるとです。

3814 すると、色リボンのような にじが 空に

かかりました。

4941 雪が かおにかかるとも わすれて、高い

高い 空のまん中を みあげる。

41154 でも、うちの ことも 氣に かかります

ので、かえらせて いただきます。

4129 これを作りあげるまでには、どれほど 手

かずがかかっている ことでしょう。

4127 みると、むこうの まつの 枝に、きれいな

ものが、かかっています。

5374 このような木が、たおれて土にうずまり、

長いあいだかかって石炭になったのです。

5661 すると、金のさかながかかってきました。

7911 おぼろ月が空にかかっている。

7256 たまごから小さい虫になるのに、七日か

かっています。

7595 なにかの花びらが、くもの巣にかかってゆ

れている。

7657 もやのかかったおきの島、ポンポン船がで

かけていく。

8197 あぶらぜみでは、七年もかからないと、親

になることができないといいます。

8344 一光年は、光が発してから、一年かかっ

てとどくきよりをさしています。

8347 太陽から発した光が、地球にとどくまでに

は、やく八分二十秒ばかりかかることになります。

8625 いつまでかかるのだろう。

86210 一つのたまごに長くかかるのですよ。

9203 協会へは、電話が、ひっきりなしにかかっ

て、つばめを集めていることを知らせてきました。

九346 母と、おぼと、兄と、妹と、ぼくの五人で、三日間かかりました。

九441 今そぐ用事だったので、先生にだけお目にかかってすぐ帰りました。

九803 まあ、おちついて、ゆっくりしごとにかかりましょう。

九105 きゆうな坂にかかると、まえの方で、のた先生が、「略。」と、大きな声をかけられる。

九127 今晩はうまいえさがかかるかな。

九129 この三日というものは、ちっともかからなかったから、おなががすいてしまった。

十201 村の林の上に、大きな半円形のにじがかっている。

十405 しかも、核をさしいれてから、眞珠になるまでには、少くとも四年はかかる。

十416 かれは、新しく母貝を求めてきて、やりなおしにかかった。

十481 四十分もかかったのではないかと思いました。

十538 まだ、いぬが氣にかかるのか、

十651 おかみさんをもらえば、くらしにもお金がかかり、

十一761 そこで、少年は看病にかかりました。

十二1510 文雄は、それをとりのけるのをやめて、また下がきにかかった。

十二162 かげになったところ、力のこもった角、まるみのある面、重みのかかった枝のつけね、

十三406 電話のかかるのを待っている。

十三604 ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、かべにかかっている一まいの絵を見ました。

十四348 光が一方のはしから、向こうのはしまでとどくの、二十億年も、かかるほどの

十四638 これは、白いうす雲が月にかかったときに見えるのと、にたようなものです。

十四7511 森の上へかかると、飛行機は、しぜんと下の方へおしおろされるかたむきがあります。

十四863 一びきのこん虫をながねんかかって調べもの、

十五276 もう呼吸もなくなったのかと、そのことがまた、少年の氣にかかってきました。

十五462 ひくい屋根も、あけはなした店も、のき先にかかっているおもしろいかんぼんも、

十五472 とどき焼いては、この店に持って来ますが、なぶん作るのにてまのかかるもので。

十五582 その申し出でを承知して、私はすぐに授業にかかった。

十五799 日本の子どもさんたちにも、お目にかかったことがあるからです。

かかる「罹」(五) 4 かかる「一ツ」

八1055 先生におきしたら、このいねは、いもち病という病氣にかかったのだとおっしゃいました。

十503 黒いいぬに近よってみると、ひふ病にかかっていて、顔のあたりの毛が、ぬけていました。

十一642 ところが、にわか病氣にかかって入院したので、家族の者にかんたんな手紙を書いて、

十二401 ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、

かかる「掛」(下) 1 かかれる「一レ」

十四136 もうじきお目にかかれます。

かかる「係」(五) 1 かかわる「一リ」↓にもかかわらず

九707 わたしの人格にかかわりますから。

かき「垣」(名) 1 かき↓いけがき・いしがき

十五108 ぼらの木の赤きめをふくかきの上に

小さき虫の出でてとぶ見ゆ

かき「柿」(名) 14 かき↓あまがき・しぶがき・ほしがき

二203 まりりんご かきからす かぜ

六476 やまが、草屋ののきまでたれて、かきはすずなり、夕がらす。

六481 ませたくびだす子うまの顔に、かきはすずなり、夕明かり。

七606 よく落ちるかきの実。

七614 まよったせみが、かきの木につきあたって、

九314 いまはもうかきの葉もすっかり落ちつくして、秋も終り近くなりました。

九424 かきの色づくころ、畑のいもをほりおこしました。

九431 こちらはかきの木の多いところで、この家にも、二本や三本はあります。

九434 ぼくたちのかりているやしきのまわりに、大きなかきの木が三本あります。

九436 つやつやした大きなかきが、ころころと二つ三つ落ちてくるのをみたときは、

九439 うちのかきはしぶがきですから、

九441 妹は、かきの葉を「略。」といつてひろい集めては、ままごとをして遊びます。

九443 母やおばまで子どものように、かきの葉を一まい一まいならべて、

十一331 げんげがさいて、なの花ちつて、かきのわか葉に日の照るころは、

かき「書」(名) 1 書き↓えかき・したがき・よみかき

四763 よーよみ 書きそろばん。

かき「搔」↓しろかき・ひとかき・ゆきかき

かき 「牡蛎」(名) 1 かき

十二97 古代の人は、はいがい、はまぐり、かき、
《略》などをたくさんたべていたようです。

かき 「夏季」(名) 1 夏季

十四76 われわれが冬期に受ける北西の風と、夏
季の南がかった風になるのです。

かき 「鍵」(名) 2 かき

五18 ところで、私たちは、じょうぶなふくろにい
れられて、かぎをかけられました。

十五112 それは、おとうさんがかぎをかけたあ
の戸だなの中にはいつているの。

かき あ・げる 「書上」(下一) 1 書きあげる 《一
ゲ》

十五52 私、一年半の努力の結果、しゅびよく
書きあげた論文を持って、

かき あらわしかた 「書表方」(名) 1 書き表わしか
た ↓ につぼんごのかきあらわしかた

十五40 かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文
章のふつうの書き表わしかたとなっている。

かき あらわす 「書表」(五) 6 かきあらわす 書
きあらわす 書き表わす 《「サ・ス・ソ」》

七47 思っていることを、はっきり書きあらわそ
うとすると、

十二106 平安時代の町の風景で、大和絵でやわら
かにかきあらわされています。

十四89 それをとりあつかう人によって、文章は、
どのようにも書きあらわされる。

十五41 ローマ字を利用して、発音のちがつてい
る多くの國々のことばが書き表わされている。

十五412 ローマ字をつかうと、《略》、発音のこま
かなところまで書き表わすことができて、

十五42 日本のことばをもっとも正しく、もっと

も簡単に書き表わす方法がないものであろうか。
かきおとし・いる 「揺落居」(上一) 1 かきおとし
いる 《「イル」》

九116 屋根の雪かきおとしする少年の顔の明
かるさ日のでる中に

かき きれ 「書切」(下一) 1 書ききれぬ 《「レ」

八108 まだいくら書いても書ききれません。
かきくけこ 3 カキクケコ

六110 みんなアイウエオ、カキクケコ——という
五十音の中で、

六112 そうして、こんどは、アイウエオ、カキク
ケコから、じゅんじゅんにいつてみたところが、

六113 カキクケコでも、サシスセソでも、かんた
んにはわからないが、

かき そ・える 「書添」(下一) 2 かきそえる 書き
そえる 《「エ」》

三19 あつめたことばにえをかきそえました。
十五61 《「略」》と、必ず書きそえてあつたの
を見て、その愛されかたがわがらう。

かき た・す 「書足」(五) 3 書きたす 《「シ・ス」

七47 どこまで書きたしても、
七48 二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人
に、はつきりと、そのようすがわかります。

七68 まえのやりかたは、ちょうど、文章をくわ
しく書きたすのになています。

かき た・す 「書出」(五) 1 書きたす 《「シ」

九46 ぼくは、この手紙を数日もまえから、喜
んで書きたしました。

かき た・りる 「書足」(上一) 1 書きたりる 《「
リ」》

六49 書いても書いても書きたりぬ、わたしの
心の小人たち、いつもでてくる小人たち。

かき つけ 「書付」(名) 1 書きつけ

十四107 それには、つかいかたを書いた小さな
書きつけがついているはずです。

かき つ・ける 「書付」(下一) 3 かきつける 書き
つける 《「ケ」》

二115 そこで、みんなは、小さなかみに、ひと
つひとつことばをかきつけました。

六619 毎朝、このらんに、その日の朝の温度を書
きつけましょう。

十56 すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書き
つけているその力に、おどろきました。

かき つづ・ける 「書続」(下一) 1 書き続ける 《「
ケ」》

十四21 といって、みんながおどろいていたが、
先生は、つぎつぎと書き続けられた。

かき つづ・る 「書綴」(五) 1 書きつづる 《「ラ」

十二55 また、文章に書きつづられて有名になっ
たものもあるが、

かき と・める 「書留」(下一) 2 かきとめる 書き
とめる 《「メ」》

二91 あつめたことばを、みんな かきとめて
おきました。

十48 ために、私は、妹のいつていることばを、
紙きれに書きとめてみたのです。

かき とる 「書取」(五) 1 かきとる 《「ツ」

三89 じぶんの耳で きいた ひびきを、かき
とってみましょう。

かき なおす 「書直」(五) 2 かきなおす 書きな
おす 《「シ・ス」

十二16 かきなおし、ぬりなおして、かいてい
くうちに、ひととおりできあがった。

十二93 文を書くときには、よく手をいれること

もできるし、なんども書きなおすことができる。

かきなさる「書」(五) 1 かきなさる《一イ》

三二四 なき声のわかるものは、そのなき声をかきなさい。

かぎなり「鉤形」(名) 1 かぎなり

四四七 ときには、かぎなりになって、空をひっかけるようになりました。

かきね「垣根」(名) 8 かきね

一三九 うすもいろいろのあさがおのはなが、いつつかきねにさきました。

三〇三 かきねの上からのびあがって、みたり、へいのすきまからのぞきこんだりしました。

四七九 と——とんぼ、とんぼ、かきねにとまれ。

五五七 かきねにあさがおの花が、三つはじめてさきました。

八七九 そこで、みにくいあひるの子は、かきねをとびこえてにげだした。

一一一 野山をかざると、もも赤く、畑にさいて、れんぎょうは、かきねを黄色にそめていく。

一三八 かきねにおうきんもくせい、しとしとと降る秋雨に、

一四六 湯げは、えんの下やかきねのすきまから、《略》、たちのぼります。

かきのあき「題名」 1 かきの秋

六四四 かきの秋「掻除」(下一) 1 かきのける《一ケル》

一三〇 ちよつと落ち葉をかきのけるだけだ。

かきのこす「書残」(五) 2 書きのこす《一シ》

一五二 おじいさんやおばあさんから聞いた話を思いだして、書きのこしておくということは、

一四〇 眞ちゃんが書きのこしていった手紙を、

とりだして読む。

かきはじめる「書始」(下一) 2 かきはじめる《一メ》

一四七 そうして、いよいよ下がきをかきはじめた。

一七四 文雄は、三きやくにこしかけて、またふでをとってかきはじめた。

かきまわす「掻回」(五) 2 かきまわす《一シ》

六八 だれだ、しごと台の上をかきまわしたの

は。十二八 ふう場の中で湯をかきまわしている父に

こういわれたら、かきゆうせい「下級生」(名) 1 下級生

一五二 その歌を耳にしながら、もつと下級生をかわいがっておけばよかったなと思った。

かぎり「限」(名) 7 かぎり

一〇二 うちの中にかぎり、こわいもの知らずで、

一五二 朝早くはまにでてみると、目のとどくかぎり、美しい砂地がみわたされた。

一四八 みわたすかぎりのじゃがいも畑のうねの向こうに、

一六一 ああ美しい田さえなく、みわたすかぎりさざなみがうちよせる大きな池となっていた。

一四四 自分としては、力のかぎりおあさんを幸福にしておあげしよう。

一四八 その美しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ降ってくることを写している。

一五三 かた手に大きなブラシをつかんで、力のかぎりみがきをかけた。

かぎる「限」(五) 4 かぎる《一ラ一リ》

写しだすことができるとはかぎりません。

九八九 ときには、あらしや、そのほかの思いがけないさいなんに、あわないともかぎりません。

一二九 汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、日に日に進歩しています。

一五八 青い鳥だって、《略》、この人たちのなかまにまよいこんでいないともかぎらない。

かきわける「掻分」(下一) 2 かきわける《一ケ》

七三六 私は、人と人のあいだをかきわけていこうとしました。

八二〇 くらくなりかけた夕ぐれをみはからって、思いきって土をかきわけて地上にはいだします。

かく「核」(名) 8 核

一三三 「もし、母貝の中に、核をさしいれることができたなら、真珠が発生するにちがいない。」

一三五 幸吉は、あわつぼほどの核をこしらえて、それを、母貝の体内にさしいれてみた。

一三九 うまく貝の中に核がのこり、真珠質がまきつけば、成功するわけであったが、

一四一 だいいち、母貝は、その核をそとにはきだして、受けつけなかった。

一四二 また、核をさしいれたために死ぬものもあつた。

一四四 しかも、核をさしいれてから、真珠になるまでには、少くとも四年はかかる。

一四六 これは、まえにさしいれておいた核によって発生した半円真珠であることが、わかった。

一四八 ついに核をさしいれるときに、《略》一種の手術をほどこすことを発見した。

かく「核」(五) 2 かく《一イ》

一五八 あせをいっばいかいて いる がんたちに

は、

ハ551 「〈略〉。」と、うさぎは、高いびきをかいて、さも楽しそうに晝ねをしていました。

かく「書」(五) 153 かく 書く 《イー・カー・キーク・ケーク》 ↓ おかく

161 じをかくときには、てをつかいます。

175 きょうは、どんなえがかれるでしょう。

176 どんなじがかれるでしょう。

177 だれがかくでしょう。

321 おもいだしたことを、つぎつぎとかいてみました。

322 ただおさんのかいたことば。

326 みちこさんのかいたことば。

332 まことさんのかいたことば。

335 よしこさんのかいたことば。

154 あんな大きな、あかるいお月さまは、どうしたらえにかくことができるでしょう。

201 えをかいていくうちに、花の名も、鳥の名も、だんだんふえてきました。

304 かい 「じぶんのかきたいところへいって、そこでかいていらつしやい。」

304 かい そこでかいていらつしやい。

315 かい わたくしはかいだんをかきます。

327 かい 《略》。と かいてあります。

348 かい わたくしも、早く大きくなって、あんなきれいな花をかきたいとおもいました。

917 うちの人のかいたてがみやはがきを、ここにいれます。

957 この一まいの紙に、えをかくことができます。

961 おとうさんのかおも、先生のつくえもかくことができます。

3963 にわの花も、空の雲も、とおい山も、ちかい家も、かくことができます。

3964 クレヨンでかくこともできます。

3964 えんぴつでかくことも、ふででかくこともできます。

3965 ふででかくこともできます。

3967 また、この一まいの紙に、字をかくことができません。

3969 大きな字でも、小さな字でも、かくことができます。

3971 はやくかくことも、ゆっくりかくこともできます。

3971 ゆっくりかくこともできます。

3973 ひらがなをかくことも、かたかなをかくこともできます。

3974 かたかなをかくこともできます。

3975 かん字をかくこともできます。

3976 ローマ字をかくこともできます。

39710 紙にかいたものは、いつまでものこります。

3983 紙にかいたおはなしは、いつまでものこります。

3985 一まいの紙にかいたえを、どこにかざりましょう。

3987 紙にかいた字を、どこへおくってあげましょう。

3994 かい みなさんのかいたえでも、字でも、だいにじにしまっておきなさい。

4192 かい 文を書くことは、お話をするのとおなじことです。

4197 みんなはそれぞれあいての人をきめてから、文を書きました。

4202 まさおさんは、あいての人を「おかあさん」にきめて、つぎのような文を書きました。

4227 たつおさんは、「にいさん」にあてて文を書きました。

4228 かい きのを かきました。

4229 かい ぼくのうちをかいたのです。

4231 かい やねも、かべも、はしらも かきました。

4231 かい まども かきました。

4243 すみこさんは、「いもうと」にあてて書きました。

4261 のぶこさんは、「りんご」にお話をするつもりで書きました。

4268 たみおさんは、「きりぎりす」をあいてに書きました。

4274 たろうさんは、「ボチ」あてに書きました。

4278 としおさんは、「雲」に話をするつもりで書きました。

4285 きよしさんは、じぶんをあいてに書くことに、気がつきました。

4303 せつこさんは、「くみの人みんな」にきいてもらいたいといって、文を書きました。

43010 かい おてがみを書いてもいいし、えをかくてもいいと思います。

4311 かい えをかいてもいいと思います。

4315 「みんな」に知らせたいといって、つぎのような文を書きました。

4342 かい 「かずこさんの書いた文で、なにか気のついたことはありませんか。」

4734 これをあつ紙に書いて、えもつけて、あそべるようにこしらえることにしました。

5152 私は、としおさんが、みつおさんにあてて書いた手紙です。

五15 4 ゆくさはむねのところに書いてありますから、まちがいはありません。

五31 7 ㊦ これには、きみのようないい子どものことが書いてありますよ。

五38 5 手紙の中に、こんなことが書いてありました。

五38 7 ㊦ こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手紙を書いてもらって、

五59 4 私は、いまみてきた土星を、紙にいていねいにかいておこうと思いました。

五79 2 そうして、川をみて氣のついたことを書きました。

五84 3 たかぎくんは、え日記を書くといいました。五84 6 とうくんは、海岸のおじさんの家で、海の作文を書くんだといって、よろこんでいました。

六49 1 ㊦ 書いても書いても書きたりぬ、わたしの心の小人たち、いつもでてくる小人たち。

六49 1 ㊦ 書いても書いても書きたりぬ、

六57 6 これには、みんなにお知らせしたいことを書きます。

六57 7 みんなが喜ぶようなことを書きます。

六57 9 おもしろいことも、おかしいことも書きます。

六60 8 それから、まえにならったのを思いだして書いてみました。

六65 8 このなぞの答がわかった人は、紙に書いてかべ新聞がかりのものにだしてください。

六66 2 この第一号に、つづき話の第一かいめを書きます。

六66 3 第二号をつくる人たちは、このお話のつづきを書いてください。

六66 5 第三号をつくる人は、またそのつづきを書く

のです。

六68 6 それは、むしめがねでよくみながら書いたのです。

六69 1 ことば遊びも書きました。

六69 3 この学校の子どものかずや、一ばん遠くから通っている子どもの名や家の場所も書きました。

六117 1 ㊦ 「なんの絵をかこうか。」

六118 1 「略」と、いろいろ考えましたが、ただしちゃんのをいい顔をかくことにしました。

六137 2 そうして、木の切りかぶに、つぎのようなことが、赤いクレヨンで書いてありました。

七12 1 1 このときの「手」は、文字を書くことをさしています。

七13 1 「手」ということばが、文字を書くことになってきたでしょう。

七28 9 ㊦ あおむしがさなぎになったところを書いたのが、よくできた。

七29 1 ㊦ どんなふうにしたの。

七48 2 はじめに書いたのと、二回めに書いたのとを、くらべてごらんさい。

七48 2 二回めに書いたのとを、

七64 5 毎日書いてきたあさがお日記。

七64 6 はつ花のさいたこと、けさ書く。

七74 3 そうして、ぐるりとわをかけ。

八10 8 まだいくら書いても書ききれません。

八12 9 「ピオのはか」と書いた、小さなせきひを立ててやりました。

九59 2 ㊦ 「あのはがきは、わしが書いたのだよ。」

九70 9 ㊦ そうして、これからは、はがきに、かねたいちろうどのと書いて、

九71 5 ㊦ これからは、用事これあるにつき、明日出頭すべし、と書いていいでしょう。

九75 4 「略」と書いてもいいといえよ

九96 2 ㊦ 「きみの名まえが書いてある。」

十55 6 むりに書く、略とは、ちがったものになります。

十56 1 なんと、わけもなく、すらすらと書いていくことでしよう。

十一26 2 それは「大学」といって、かん文で書いたむずかしい本でした。

十一26 7 りっぱな人になるためには、学問をしなくてはならないと書いてありました。

十一64 4 家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。

十二14 2 文雄は、それがかきたかった。

十二14 6 文雄は、あれこれと考えていたが、根もとをかこうと決心した。

十二16 11 かきなおし、ぬりなおしして、かいていくうちに、ひととおりできあがった。

十二20 8 ㊦ ほら、そこで絵をかいている文雄さんがいってましたよ。

十二21 1 ㊦ 「絵をかくことも、いっしょうけんめいにけいこしなくちゃだめでしょうね。」

十二37 1 「水」という字を書いてくださいました。

十二39 7 これは、ヘレン・ケラーというアメリカの女の人が書いた「わが生がい」の一せつを、

十二41 4 手のひらに文字を書くことから、

十二47 12 ㊦ たとえば、わざわざ絵のぐをつかって時間をかけて絵をかくより、

十二51 4 よくかわかしてから、絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬる。

十二87 8 手紙を書くとして、すずりばこをあけ

た父にこういわれたら、

十二90 9 太郎が、こういう短い文を書いた。

十二91 11 「略。」と書いた。

十二92 6 ほかの人がこれと同じ文を書いたとしても、

十二92 9 みんなが「遠足」という同じ文題で書いても、

十二92 9 書かれたことがそれぞれがってくるのも、やはりこのためである。

十二93 3 書くことは、話すこととちがつて、その場のようすが相手にみえないから、

十二93 8 文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんでも書きなおすことができる。

十二107 1 これは、鳥羽僧正という人がかいた動物絵巻の一場面であります。

十二109 5 イソップ物語はイソップという人が書いたお話ですが、

十二109 11 日本のことばになおしてローマ字で書いてあります。

十二111 8 この絵は北斎という江戸時代の人のかいたもので、浮世絵といえます。

十二111 9 絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人との共同作品なのです。

十三10 10 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、本を書いて、地動説を強くとなえました。

十三34 10 「れん」が書かれてある。

十三34 11 れんは、めでたい文句や、詩の一節であるが、みな、りっぱな文字で書かれてある。

十三41 1 電話番号が書いてあったもんだから……

……

十三42 8 図 いっしょに、そのマンシュウの子どもに、お礼の手紙を書こうね……

十三53 8 その下の白いところに、先生の手で、こう書いてありました。

十三54 1 図 これは、いまから五百年ほど前に、イタリアのラファエルという画家のかいたもので、

十三57 2 図 そこからローマに出て、へき画をかい

たり、美しいしょう像などを、たくさんかいた。

十三57 3 図 そこからローマに出て、へき画をかい

たり、美しいしょう像などを、たくさんかいた。

十三57 3 図 中でも、ラファエルは、マドンナの像をかくことが得意だった。

十三57 5 図 『いすによるマドンナ』は、おけのそこにかいたという小さな絵だが、

十三58 9 図 それはそうとして、ラファエルのかいたマドンナのかわったのを見せてあげよう。

十三60 11 図 あれは、ミケランジェロのかいた、てんじょう画の一部だ。

十四10 6 図 それには、つかいかたを書いた小さな書きつけがついているはずだ。

十四13 11 図 おふたりの写真は、いま、この手紙を書いているつくえの上、私の前においてあります。

十四16 1 図 たとい、からだはこちらにいても、このまごころを書いてお送りして、

十四28 3 図 その中で、かたかなで書いてあることばは、たいいてい西洋からきたことばと思ってい

十四89 10 読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたくながめた人によって書かれた文である。

十五34 6 文字に書くか、またほかに特別の表わしかたをしなければならぬ。

十五37 8 「枝・板」など、その文字の左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、

十五39 7 「加」から「カ」などと書くようになった。

十五40 3 源氏物語や枕草子などは、すべてこのかなによって書かれた作品である。

十五41 10 日本のことばも、ローマ字で書くことができる。

十五51 1 また、日本についていろいろの研究を進め、日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、

十五70 12 図 手紙でもなんでも赤インキで書かなくては見えないようにおなりになったのですよ。

十五79 10 私のつくえの上には、日本のみなさんが書いたあつい絵の本が、いつもおかれてあります。

十五122 7 高橋さんが、きょうの日記当番ですが、私にも書かせてください。

かく「掻」(五) 2 かく《一ク》ひひかく

三27 7 かいをそろえてひとかき水をかくと、ふねはななつの大なみをのりきって、

十50 8 いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかをかくようなかつこうをしました。

かく「家具」(名) 2 家具

十二61 9 ふとしたことから、この岩屋からぜんやわんなどの家具のであることを知った。

十二62 2 その中にわるい人がいて、かりた家具をかりっぱなしにして返さなかった。

かく「嗅」(五) 5 かく《一イ》

二48 2 うれしそくに、そのりんごを、高くさしあげたりにおいをかいだりします。

七73 2 うまが、水のおいをかいでいる。

九134 4 いいにおいをかいでいると、

十四89 3 足でトントんとふんでみたり、しゃがんで土のおいをかいだり、

十四93 8 おいしそうなにおいをかいだ。かく、ひいでんがくじよう・しょくぶつがくじよう・てんもんがく

かく 〔類〕(名) 1 かく

九三二 〔註〕 さかさまに湖の中にうつて、かくにいられた油絵のように美しくかがやいてみえます。

かくこ 〔覚悟〕(名) 2 かくこ

十四九 〔註〕 さけることのできなかつたことに對して、しっかりとかくこをおきめになり、

十五二六 少年は、必死のかくこで、すばやく女の子を自分のせなかにかくしました。

かくしゃ 〔学者〕(名) 7 学者 くだいがくしゃたち

十四五 世界の学者の研究によつて、天然眞珠と

まかつた同じであることが、明らかにされた。

十二九八 〔註〕 アメリカのモールズという学者が、《略》

の貝づかを発見してからのことであります。

十三一一 それは、学者がいろいろに考へて、原因

と結果との關係を調べきわめてゐる。

十三一三 熱心な学者が、だんだんそれを発見しました。

十三一四 〔註〕 そのケブラーと同じころ、イタリアのピ

サに生まれたガリレオという学者がありました。

十四六四 〔註〕 もし、そういうしんがなかつたら、《略》

ことが、学者の研究でわかつてきました。

十五五四 〔註〕 おもな用事は、世界の学者がだれものそ

んでゐるカーネギー博物館の刊行物として自分の

論文を出版してもらふことで、

かくす 〔隠〕(五) 9 かくす 《—シース》

六二四 〔註〕 うさぎさん、かくしておくれ。

六二四 〔註〕 ちょっとかくしておくれ。

八三二 どうしていいのかわからないので、つばさ

の中に頭をかくした。

九七六 やまだ、みせまいとしてからだをねじつて

かくす。

十二五四 つくえやいすを重ねて、つかう人のかく

れるところを作り、まくでかくす。

十四九四 女の子は、二つの家の間に、ちよつとし

た、身をかくす場所を見つけた。

十五二九 少年は、必死のかくこで、すばやく女の子を自分のせなかにかくしました。

十五八三 〔註〕 おくへ向かつて歩いて行つて、黒いまく

をあけて、すがたをかくしてしまひます。

十五一六 〔註〕 でも、なんで、あんなに顔をかくして

ゐるの。

かくせい 〔学生〕(名) 1 学生

十四三六 キュリー夫人は、まづしい学生であつ

たとき、

かくせいき 〔拡声器〕(名) 2 かくせいき

一四四 かくせいきがよんでゐます。

一四八 かくせいきのこえが、またひびきました。

かくせいじだい 〔学生時代〕(名) 1 学生時代

十五五四 学生時代からそん敬してゐたあの有名な

「ちようるいずふ」の著者ダブリュー・ジェー・

ホランド博士、

かくたい 〔楽隊〕(名) 2 楽隊

九五一 たくさんの白いきのこが、ドッテコドッテ

コと、へんな樂隊をやつてゐました。

九五二 きのこはみんないそがしそくに、ドッテコ

ドッテコと、へんな樂隊をつづけてゐました。

かくち 〔各地〕(名) 1 各地

十五五二 別れに際して、各地の大学者たちへのて

いねいなしよかい状をくださつたうえ、

かくど 〔角度〕(名) 2 角度

十四八六 一ひらの雪をとらえて、それをいろいろ

な角度からながめてみることは、

十五五六 〔註〕 駿河湾の海岸線をながめ、その角度を

目算して紙上計算してみたが、

かくと 〔学徒〕(名) 1 学徒

十五五八 〔註〕 ジョルダン博士からいつてきてゐる日

本の学徒、大島くんでしょう。

かくねん 〔学年〕(名) 2 学年

十四七 少年は、小学校のいちばん上の学年か、

《略》商業学校の下の学年ぐらいでしたでしょう。

十四八 または、そのいなか町にある商業学校の下

の学年ぐらいでしたでしょう。

かぐのいわや 〔題名〕 1 家具の岩屋

十二六一 家具の岩屋

かぐのいわや 〔家具の岩屋〕(名) 1 家具の岩屋

十二六一 徳島縣の津峯山に、家具の岩屋というの

がある。

かぐもん 〔学問〕(名) 5 学問

十一二六 〔註〕 りっぱな人になるためには、学問をしな

くてはならないと書いてありました。

十二九五 〔註〕 おまえが学問のちゆうとで家に帰つて

くるのは、

十二一三 新しい学問をきり開いていくときは、

十三一四 知識を廣め、学問を研究して、迷信を

まかつたとり去つてしまふようになれば、

十四二五 外國の学問などが傳つてきたときに、

かぐやひめ 〔課名〕 2 かがやひめ

三三七 十三 かがやひめ……百

三三〇 十三 かがやひめ

かぐやひめ 〔人名〕 27 かがやひめ

三三〇 〔註〕 「かがやひめ」という名をつけました。

三三三 はらのたつときでも、このかがやひめ

のおおをみると、すぐなおりました。

三三六 〔註〕 「光るようにうつくしいかがやひめに、ひと目でもあいたいものだ。」

六126 10 ㊦ 「ここで、かくれんぼしよう。」

かけ 〔掛〕 ↓ あしかけ・いねかけ・おおじかけ・こころかけ・こしかけ・ぼうしかけ・まえかけ・まどかけ・よびかけ

かけ 〔賭〕 ↓ いのちかけ

かけ 〔陰〕 (名) 22 かけ ↓ おかけ・おかげさま・こかげ・はかげ・ひかけ・ものかげ

一41 5 はしらの かげで、ぴかり、ぴかり、ひかった。

二67 5 そのとき、かげの ほうで、「略。」という 声 する。

二69 4 そのとき、かげの ほうで、

二70 5 すこしたって、かげの ほうで、

三74 10 お日さまが 光りながら、いま、丘の かげ

へしずむ ところでした。

三75 6 そのうちに、赤い お日さまは 丘の かげ

へしずんで いきました。

四48 3 よく 木の かげから ねらいうちを される

からです。

五104 6 「略。」と 鳴いて、 木の かげにかくれま

した。

六8 6 ねじは、しごと台のあしのかげにころがつ

ていった。

六34 1 ㊦ 山のかげにかくれて、ここからはみえな

いよ。

六39 4 ㊦ あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけ

ど、ぼく、もう帰れないんだ。

六138 6 ところが、この大きな岩のかげに、とらさ

んがねむっていたのです。

七5 9 かばんをカチャカチャ鳴らして、げたぼこ

のかげにかくれた。

九17 2 ㊦ 青ざさをいれやりたればいけのふなは

や青き葉のかげにきておる

九141 5 ㊦ 「今夜は、ばらのかげでねむることにしようかな。」

十31 6 かげで人のわる口をいわないようにしたいし、

十45 7 名高くなつたかげには、幸吉一生の苦心が

ひそんでいる。

十一12 5 あげはのちようが、まつのかげから舞つ

てでる。

十二16 1 日のあたるところ、かげになつたところ

力のこもつた角、まるみのある面、

十二20 5 ㊦ この実のかげは黄色くぼけているで

しょう。

十二20 11 ㊦ あれがあれば、どんなかげのところ

も、美しい色にできますがねえ。

十三50 2 その木のかげで、きれいな鳥がわらつて

いる。

かけ 〔影〕 (名) 14 かけ 影 ↓ おもかけ・つきか

げ・ゆうひかけ

四16 6 くらい かげがついている。

五50 4 ㊦ かけをちらして岸をでる。

五51 1 ㊦ あみひく人の 黒いかげ 黒いかげ。

五51 2 ㊦ あみひく人の 黒いかげ 黒いかげ。

六51 5 そのうちに、あたりがきゆうにくらくなつ

て、かげがみえなくなりました。

九28 4 ㊦ ほし草にかけおとしとぶとんぼかな

十一4 4 大きな汽船がけむりをはいて、長いかけ

をひいて通っていくのがみえるし、

十一56 4 ㊦ ことばは光る、プリズムのかげよ。

十三47 8 そのせなかにその角のかげ。

十五7 1 ㊦ 冬の水一枝の影もあざむかず

十五11 6 ㊦ ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガ

ラス戸すきてたみにうつりぬ

十五12 6 ㊦ ガラス戸の外につくよをながむれど

ランプの影のうつりて見えす

十五13 5 ㊦ 照る月の位置かわりけん鳥かこの屋

根にうつりし影なくなりぬ

十五118 1 ㊦ やはり、私たちの影以上のものは見え

ないのです。

かけ 〔崖〕 (名) 8 かけ

五50 6 ㊦ かけの下には 白いはま、白いはま。

九50 8 まっ白な岩のかけの中ほどに、小さなあな

があいていて、

十五21 9 めずらしい草花をつみながら、かけの上

をそろそろ歩いていました。

十五23 6 見ると、そのかけの下の方へゆつたりと

んで行く大きなやまわしのつめにつかまれて、

十五23 11 だれか、その大わしのせの上へ、かけの

中ほどからとびついたものがあります。

十五24 3 このひつじかいは、かけの中ほどのあき

地に、草のしげっている場所を見つけて、

十五27 10 かけの上で「略。」といっている人々

の目には、

十五32 2 そのとき、かけの中ほどから、ガヤガヤ

という人声が聞えてきました。

かけえ 〔課名〕 2 かけえ

二3 3 七 かけえ……四十四

二44 1 七 かけえ

かけえ 〔影絵〕 (名) 6 かけえ かげ絵 影絵

二44 3 ㊦ 「おじさん、こんやも また、 かけえを

して、みせてください。」

十二46 3 ㊦ あのころは影絵もあつたよ。

十二46 4 ㊦ 影絵ってやつぱり人形のしぼいですが、

十二46 10 ㊦ これに光をあてて影絵にしてみせるの

だが、人間ばかりでなく、動物などもでてくる。
十三342 ホートンの廣場などに、かけ絵の舞台を
こしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。
十三344 ほのぼのとゆれ動くかけ絵は、子どもの
心をひきつけてやまない。

かけえしばい 「影絵芝居」(名) 1 影絵しばい

十二467 文 図 アジアでもヨーロッパでも、りっぱな
影絵しばいができている。

かけえめく 「影絵」(五) 1 影絵めく 《一ク》

十五76 文 図 影絵めく牛馬朝日を織るあきつ
かけお・りる 「駆降」(上一) 5 かけお・りる 《一
リール》

一574 きしゃから かけお・りて、手をとりあいま
した。

三617 文 木のところまでのぼってさ、それから
さつさと かけお・りてみずうみへいこうよ。

五56 川は山からかけお・りる。

五510 いわの上からとびお・りて、さかなとジャブ
ジャブはしゃいで、川は山からかけお・りる。

十二3310 二階から母のところへかけお・り、指さき
で人形という字をつづつてみせました。

かけがえ 「掛替」(名) 2 かけがえ

十322 この学校では、かけがえのないひとりであ
ることを、ほこるようになりたいものです。

十三279 ここに住んでいる子どもたちにとっては、
かけがえのない、楽しい遊び場所であり、

かげぐち 「陰口」(名) 1 かげぐち

十417 町の人のかげ口は、いっそうはげしくなり、
かけこえ 「掛声」(名) 2 かけ声

四972 かけ声を かけながら、みんなで かめを
ころがします。

六248 「略」と、かけ声をかけて持ちあげま

す。

かけこむ 「駆込」(五) 1 かけこむ 《一ン》

十五992 もう一つの「幸福」のむれ、まえよりは
すこしせの高いのが、廣間の中にかげこんで来て、
かけだす 「駆出」(五) 4 かけだす 《一シ》

六75 ふいにバタバタと足音がして、小さな子ど
もがふたり、おくからかけだしてきた。

八308 黒うしは、にわかにかげだし、天の川へ落
ちこもうとしましたが、

十二7311 子どもたちのかけていく方に、自分も
いっしょにかけだしたいと思いました。

十五9612 ふざけたり、わらいこけたりしながら、
みどりの園のおくからかけだして来て、

かけたまう 「掛給」(五) 1 かけたまう 《一エ》

十五548 文 まあ、かけたまえ。
かけっこ 「駆」(名) 6 かけっこ

四275 文 あしたのあさも、また かけっこをし
ようね。

四276 文 林のむこうの一本道まで、かけっこを
しようね。

四7610 ね——ねずみとねこの かけっこ。
六1319 文 「かけっこだ。」

六1322 かけっこは、うさぎさんたちのおとくいで
す。

六13210 文 「ぼくも、かけっこのなかにいれてく
れたまえ。」

かけぬける 「駆抜」(下一) 1 かけぬける 《一
ケ》

十777 おとうさんの歩いていくそばを、足ばやに
かけぬけていって、

かけはじめ 「掛始」(下一) 1 かけはじめ
《一メ》

十一7712 そこで、少年は、自分をなぐさめて望み
を かけはじめました。

かけはなれる 「掛離」(下一) 1 かけはなれる
《一レ》

十四323 天上の星とあなたがたととは、あまりにか
けはなれているために、

かげふみ 「影踏」(名) 1 かげふみ

六514 ふみおと、よしおと、みちこの三人が、か
げふみをして遊んでいました。

かげぼうし 「影法師」(名) 1 かげぼうし

五799 「葉のかげぼうしが、魚のようにおよいで
います。」

かけまわる 「駆回」(五) 2 かけまわる 《一リ
ール》

十二842 一つのボールを中心にして、両選手はと
ぶ鳥のようにかけまわりました。

十五236 先生が第一にさわぎだす、両親があわて
てあたりを かけまわる。

かけもの 「掛物」(名) 2 かけもの

十722 いきなり、とこのまのりっぱなかけものを
ひきさきました。

十737 文 たおれたはずみに、あのだいせつなかけ
ものを、あのとおりひきさいてしまいました。

かけよる 「駆寄」(五) 5 かけよる 《一ツ・一リ》

二527 さちこが、おかあさんのそばに かけより
ます。

五546 そこへ、となりのごろうさんが、かけよっ
てきて、「略。」

十一829 看護婦や、看護人や、助手がかけよって
きました。

十二87 「略。」と、母のそばへかけよ
りました。

十五 109 9 方々から急いでかけよって来た「喜び」たちは、

かけら「欠片」(名) 8 かけら ↓ ガラスのかけら

九 84 1 1 会 「せともののかけらみたいなものがあるじゃないか。」

九 85 9 1 会 じょうもん土器という種類で、こんなただのせともののかけらがと思うような物ですが、九 85 10 1 会 これはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろっておきなさい。

十二 110 10 ポケットに手をいれましたが、とりだしてみせたものは、ガラスのかけらばかりでした。十二 35 9 1 会 そうして私は、くだけた人形のかけらを足さきを感じながら、ゆかいに思いました。

十二 35 10 1 会 先生がかけらをいろいろのかたすみにはきよせておいでになっているようすを感じましたが、十二 38 5 1 会 こわした人形のことを思いだして、いろいろのかたすみに走りよってかけらをひろいあげ、十五 30 11 1 会 ちょうどそこに、手ごろなことがった岩のかけらが目にはいりました。

か・ける「欠」(下二) 1 かける 《一ケ》

九 120 1 1 会 水は《略》音をたててわきだして、一方のかけたところから、さらさらと流れだしていた。か・ける「書」(下二) 9 かける 書ける 《一ケ・一ケル》

四 19 5 1 会 文もあいてなしには書けるものではないありません。

四 120 6 1 会 字も書けます。

九 58 5 1 会 四年生だってあんなには書けないでしょう。

十 55 5 1 会 このごろ、私は、作文がすらすらと書けなくなりました。

十 55 9 1 会 思うことがどんどん書けていたまえのこ

ろが、うらやましくさえなりました。

十二 17 2 1 会 あのさくろの色もかけてないや。

十二 39 10 1 会 こんなりっぱな文章が書けるということは、なんとすばらしいことではありませんか。

十三 57 5 1 会 おけのそこにかいたという小さな絵だが、じつによくかけている。

十五 121 3 1 会 けれども、思うことがすこしも書けていないことに気がついた。

か・ける「掛」(下二) 61 かける 《一ケ・一ケル》

↓ あけかける・あるきかける・いいかける・いきかける・おいかける・おかけくださる・おかけなさる・おっかける・おふりかける・こしかける・さきかける・さしかける・しずみかける・しらみかける・だしかける・たたみかける・つくろいかける・つかける・でかける・なりかける・のぼりかける・はなしかける・ひっかける・ふきかける・ふりかけなさる・みかける・みせかける・めがける・やりかける・よせかける・よびかける・わかりかける・わらいかける

一 46 8 1 会 つぎのへやで、こしをかけてまっていますと、

一 48 10 1 会 よにんが むきあって、なかよく こしをかけました。

二 21 2 1 会 先生、大きなくもがすをかけていました。

三 10 5 1 会 小さなひしゃくでおちゃくんで、かけてあげましょ、おしゃかさま。

三 50 7 1 会 めがねをかけて 石を切る、目もとをすえて 石を切る、

三 83 8 1 会 「あんなところにだれがかけたの。」

四 6 5 1 会 「《略》。」と声をかけて、話ができます。

四 48 10 1 会 ほかの がんは、《略》》と思って、べつに

氣にも かけないでとびつづけました。

四 69 8 1 会 ゆうだちと かけて、なんととく。

四 70 4 1 会 ラジオと かけて、なんととく。

四 70 7 1 会 すずと かけて、なんととく。

四 70 10 1 会 『い』の字と かけて、なんととく。

四 71 4 1 会 『ろ』の字と かけて、なんととく。

四 97 2 1 会 かけ声を かけながら、みんなで かめをころがします。

五 9 6 1 会 じろう、せきをあけて、あのぼっちゃんを かけさせておあげ。

五 18 11 1 会 そこで、私たちは、じょうぶなふくろにいれられて、かぎを かけられました。

五 23 7 1 会 こしを かけていた知らないおじさんが、五 23 10 1 会 『《略》。』といって、 かけさせてくれたんです。

五 25 2 1 会 『《略》。』といって、とうとう かけなかつたの。

五 34 9 1 会 ガスこんろに かけたかまやなべから、ゆげが ぶきでています。

五 91 9 1 会 それで、手おけの水を かけてやると、たけのこがよろこんで、のびるわ、のびるわ。

五 96 1 1 会 あたまからせなかに かけて、き色がかつた美しい鳥になりました。

五 101 9 1 会 鳥かごは、おひるまえは、水道のあるいどばたの高いところに かけますが、

六 24 8 1 会 「《略》。」と、 かけ声を かけて持ちあげます。

六 90 8 1 会 正面に、海の神がこしを かけていらつしやる。

六 91 10 1 会 ほおりのみことは、こしを かける。

六 96 6 1 会 つりばりをのどに かけまして、たいへん苦しんでいると ございます。

- 六134 6 どうせ、足の早いことにかけては、しかさ
んにかないません。
- 六135 5 「略。」と、元氣のいい声をかけました。
- 七37 2 私は、さぶろうのかたに手をかけて
「略。」ときいてみました。
- 八107 2 じょうぶに作ったいねかけに、日がよくあ
たるようにきちんとかけました。
- 九106 1 「略。」と、大きな声をかけられる。
- 九110 6 はげしい制動をかけられると、もうもうと
雪けむりが立つ。
- 九127 6 ある日の夕がた、このくもは、木と木のあ
いだに、巣をかけました。
- 九140 10 くもは、おなががすいているのに気がつき、
また、あみをかけようと考えました。
- 十27 11 くもがのきに巣をかけることがあれば、巣
のはりかたなどを、しらべておきたいと思います。
- 十30 11 そうして、うちじゅうの人たちに、めいわ
くをかけないようにしたいと考えます。
- 十44 10 幸吉は、望みをかけた第一の母貝を開いて
みた。
- 十53 6 そのとき、いままでかたにかけていたすい
とうをはずして、手に持つといいます。
- 十53 7 かたにかけると重いから手に持つのだと、
ませたことをいって、歩きだしました。
- 十一52 12 「略。」と、声をかけた。
- 十一72 1 船の上でわかれを告げたことや、家族の
者が、その旅に楽しい希望をかけていたことや、
十一74 5 医者は、手を少年のかたにかけました。
十一75 6 医者は、もう一ど少年のかたに手をかけ
ながら答えました。
- 十二47 12 図 たとえば、わざわざ絵のぐをつかって
時間をかけて絵をかくより、
- 十二59 7 三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけ
て、わがまををしはじめた。
- 十二67 9 のこぎりののはは、いつもやすりをかけて
右と左によじっておかないと、
- 十二69 3 しかし、いつも勉強してみがきをかけて
いないと、じき、役にたたなくなる。
- 十二107 2 平安時代の終りから鎌倉時代にかけての
藝術の中で、
- 十三19 3 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたたり、
道路をつくったり、みぞをほったりするときに、
- 十三39 11 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つ
くえの方へ走りよって、ひきだしをあげる。
- 十三40 3 読み終ると、また電話口に行き、電話を
かける。
- 十四10 2 図 くぎへかけるようにしたほうがいいと
か、調節ができるとか、
- 十四96 12 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴ
か光るさらをならべたテーブルが見えた。
- 十五28 7 少年は、略、左手は女の子の上帯にか
けたままで、右手をはなして、
- 十五45 1 すすめられたいすにかけて、楽しそうに
語りだした。
- 十五63 10 かた手に大きなブラシをつかんで、力の
かぎりみがきをかけた。
- 十五71 2 図 ああ、満ぼうがいすにこしをかけて、
ペンをにぎっている。
- 十五75 8 会見のてんまつを伝えてくれといいな
がら、自動車のドアに手をかけた老博士が、
- 十五109 12 図 思いもかけなかったよ。
- 十五112 2 図 それは、おとうさんがかぎをかけたあ
の戸だなの中にはいつているの。
- かける 「駆」(下) 12 かける 《一ケ》
- 四33 4 男の子は、それをはいて、元氣よくか
けていってしまいました。
- 六46 6 図 おちばの、おちばの子どもたち、じゃん
けんばらばら かけていく。
- 六46 7 図 からから、かけかけ、どこへいく。
- 六46 7 図 からから、かけかけ、どこへいく。
- 七66 1 雨あがりの麦のほ、子どもと子どもとかけ
ていく。
- 九83 6 私はかけていって、先生におたずねしま
すと、「略。」と、しずかにおっしゃいました。
- 九92 4 「略。」と数えながら、大またでびよ
んびよんかけてきて、「十」ととまる。
- 十26 4 男の子が、むちゅうになつてかけてくる。
- 十一11 8 子どもたちは、いっさんにボートの方へ
かけていった。
- 十二73 11 子どもたちのかけていく方に、自分も
いっしょにかけだしたいと思いました。
- 十五96 7 図 かけて行つて会おうよ。
- 十五109 6 図 そら、手をひろげてこちらへかけてく
る。
- かける 「翔」(下) 1 かける 《一ケル》
- 十一37 7 図 こすえをかけるもずの音も、すむ秋空
によくひびく。
- かける 「賭」(下) 2 かける 《一ケ》
- 六133 6 図 「なにかかけようじゃないか。」
- 六133 8 図 なにかかけよう。
- かげろう 「陽炎」(名) 2 かげろう
- 十三6 9 やがて、かれらもせいぞろいして、かげ
ろうのたいまつをたいて、おしよせて来る。
- 十四72 12 図 ああ「かげろう」がたつのは、略、氣
流のむらに、光をおり曲げるためなのです。
- かけわたす 「掛渡」(五) 1 かけ渡す 《一シ》

十一 602 とちゅうに、かなり深い小川にかけ渡し
た一本橋がある。

かげん「加減」(名) 1 かげん じいがかげん

五 572 はるおは、のぞいていましたが、かげんが
わからないようです。

かげん・する「加減」(サ変) 1 かげんする「
シ」

六 1026 二つのつつをのぼしたりちぢめたり、か
げんしているうちに、はつきりした。

かこ「竈」(名) 20 かこ じとりかこ・ゆりかこ
一 106 にかこにはいったたまを かぞえましょ
う。

三 1021 そうして、かこの 中にいれて、おぼあ
さとふたりで だいにそだてました。

四 272 もうしばらく ないてくれたら、かこ
からはなして あげるよ。

四 853 そのとき、おかあさんが、かこに みかん
をいれて、もっていらっしやいました。

五 966 夏休みがすむころには、ひなはもう、かこ
の中をとびまわっていました。

五 969 にかこからだして、にがしてやりましょ
う。

五 997 二三日すると、ひわは、もとのように元氣
になって、かこの中をとびまわっていました。

五 10710 かこのひわは、大よろこびで、「略」を
はじめました。

五 1084 かこの中のひわは、なかまをよびました。
七 121 「かこの手」とか、「なべの手」となると、
人の手ではありません。

七 864 黒いうさぎと、白いうさぎと、茶色のうさ
ぎを、かこにいれて持っていらっしやいました。

七 931 そうじをしようと思って、首のところを

持って、かこの中へいれたら、

八 599 そばにすえた小さなかこの中から、一わ
ず

つかみだしては指さきへとまらせたり、

九 768 先生が、リヤカーに、はこやかこなどを
せておいでになりました。

九 789 主人も、くわや、ふごや、かこなどを持
てきて、かしてくれました。

九 816 貝や石ころは、どれか一つのかこにい
れておこう。

九 823 ぼくらは、ときどき手をとめて、そこを
ぞきにいつてみると、先生のかこの中には、

九 839 あとでよくみてあげるから、かこにい
れとっておきなさい。

九 862 四人が話しあってしらべ、へんだと思う物
は、みなかこの中にいれておきました。

九 866 にかこをこのリヤカーにつみなさい。
かこい「冊」(名) 1 かこい

七 937 うさぎがはいっているへやに、えさがな
かったので、かこいの鉄ぼうを、かじっていました。

かこい「画工」(名) 1 画工
十五 4711 細工人、画工、ちようこく師、下ばたら

きの者などが、三十数人かかえられていた。
かこい「花崗岩」(名) 2 かこい「がん」

九 363 ここからは美しいかこい「がん」がとれます。
九 363 大きなかこい「がん」の岩と岩とのあいだを
流れ落ちるしみずが、せかれて、たきになり

かこい「加工」(サ変) 1 加工する「
シ」

十 429 ひとまずこれを加工して、かざり物として、
ともかく、世にだすようになった。

かこい「鹿兒島」(地名) 1 かこい「しま
五 169 「わたしは、かこいしままで。」

かこい「冊」(五) 5 かこい「
マ・ミーン」

じとりかこい

九 553 まわりは、りっぱなオリブ色のかやの木
の森でかこまれていました。

九 904 やまだをかこんでいる友だちに、「略」。
九 911 友だち、たかぎをかこみながらさる。

九 1194 その婦りに、近道をして谷をおりてくると、
そこに小石でかこまれた美しい泉があった。

十 138 少女たちは、「略」、コーヒー茶わんのおい
であるテーブルをかこんで、

かさ「笠」(名) 3 かさ じまつかさ
十四 105 光をずっとやわらかくするために小
なかがあるとか

十四 1110 いっしょに小さなかさを送りました。
十四 123 かさは、光をへいきんさせ、もつとや
わらかくするためなのです。

かさ「傘」(名) 8 かさ じひがさ
二 204 ゆきあめ かさまんとごむぐつ

四 317 わたくしが かさをさして いくと、
四 328 雨が びしゃびしゃ ふるので、わたくし
は、かさをさしかけて あげました。

四 354 子どもの げたのはなをおを すげる あい
だ、かさをさして あげたのですね。

十一 516 私は、かさをさして電車の停留所まで
かけた。

十一 518 しかし、風がはげしいので、すぐかさを
つぼめてしまった。

十一 526 だれかのかさのしずくが、私のくつの上
にばたばたと落ちてきたりした。

十五 94 うまよ人間のかさから耳をだして
かさ「嵩」 じみずかさ

かさかさ (副) 2 カサカサ かさかさ

かさかさ (副) 2 カサカサ かさかさ

四557 かさかさという木の音の音がしまし
たが、

十二912 くりがたくさん落ちていたこと、カサカ
サと落ち葉をふんでいったこと、

がさがさ (副) 2 ガサガサ

九389 (註) ポキンという音がして、ガサガサと落ち
てくると、うれしくなります。

十622 風がふいて、ガサガサ音がしたから、なん
だろうと思って、二階の窓からそとをみたら、

がさがさする (サ変) 1 がさがさする 《ーシ》

九478 字はへたで、すみもがさがさして指につく
くらいでした。

かざす [贅] (五) 2 かざす 《ーシ》 ↓ふりかざ
す

九535 すると、りすは、木の上からひたいに手を
かざして、いちろうをみながら答えました。

十五564 (金) 小手をかざして足の下にひろがる駿河
湾の海岸線をながめ、

かざなし [立無] (名) 1 かざなし

十四122 (註) それに、ランプは、かざなしでもりっ
ぱに役にたちます。

かざなりあ・う [重合] (五) 3 かざなりあう
《ーッ》

八161 そこは木の下ですから、大小の木の根が、
からみあい、かざなりあつてはえています。

八332 天の川は、なん千なん万という星がかざな
りあつて、

九546 かやの枝は、まっ黒にかざなりあつて、
かざなる [重] (五) 1 重なる 《ーッ》

十一339 (金) ほたる追う夜も重なる、麦のとりい
れことなくすめば、はい色雲が空うちおおい、

かざ・ねる [重] (下) 1 9 かざねる 重ねる 《ー

ネーネル》 ↓つみかさねる

六997 ぼくは、この二つをかざねたりべつべつに
したりして、

九93 あまりたくさん重ねると、ごちゃごちゃに
なつて、まとまりがつかず、

十444 よる年なみにも負けず、研究を重ねたすえ、
十二546 つくえやいすを重ねて、つかう人のかく

れるところを作り、まくでかくす。

十三98 つかないようなくふうと、いま一つ、よ
くつくようなくふうをして、その実験を重ね、

十三2010 このあれ地に育つ木があるかないか、ま
ず、このことについて研究を重ねました。

十四948 両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で
重ねて、どうかして、あたためようとした。

十五377 「木」を二つならべて「林」、三つ重ね
て「森」が作られた。

十五4811 黒くなったり、黄色くなったりして、失
敗に失敗を重ねていった。

かざり [飾] (名) 2 かざり

十二1046 ほうおう堂という名まえは、屋根のかざ
りにほうおうがついているからだといわれて

十三3412 絵も字もわからないころから、ただ美し
いかざりのような氣持で、れんをながめている。

かざりもの [飾物] (名) 1 かざり物

十429 ひとまずこれを加工して、かざり物として、
ともかく、世にだすようになった。

かざる [飾] (五) 22 かざる 《ーッーラーリー・
ルーレーーロー》

一42 (金) おはなを かざる、みんないいこ。
一355 (金) 「きれいな はなになって、おへやを
かざりたいからです。」

一492 へやには、きれいな はなが かざつてあ

りました。

二136 おさらにのせて かざりました。

三985 一まいの紙にかいたえを、どこにかざ
りましょう。

四251 (手) みっちゃんのにしゃしんのまえにかざ
りました。

四255 (手) お花を かざると、そこにすわってい
るようです。

四578 くだものをあつめたり、花を かざつたり
しました。

四816 (金) あかるく かざったクリスマス。
五456 (金) みんななかよくさきそらい 世界の花ぞ
のかざろうよ。

五779 先生のつくえのかびんに、大きなひまわり
の花が、三本かざつてありました。

八263 たまにかざつた、きれいな四頭びきの馬車
が走ってきます。

十5911 えんがわにつくえをだして、その上にす
きをかざつた。

十一314 (金) 続くひよりにさくらがさいて、野山を
かざると、もも赤く 畑にさいて、

十一436 正面のテーブルには、赤いうめの花をい
けた、大きなかびんがかざつてありました。

十二1011 手首やむねなどには、まがたま、まるた
まなどがかざつてあります。

十三568 (金) 本物はね、いま、イタリアのプロレン
スという町の絵画館にかざつてあるよ。

十四981 いかに大きな木で、それが美しくかざ
られていた。

十五435 ウィンドにかざられてあるさらやはちを、
しげしげとのぞきこみながら、

十五664 それからいく年たつても、せつくがくる

ごとにその人形をかざって、

十五 69 8 つくえの上に、くつをみがかせた満ぼろ時代の私の写真がかざられてあるではないか。

十五 123 10 「心に花をかざれ。」

かし「櫛」(名) 6 かし↓こうもんのかしのき

七 4 7 校門のかしの木は、目をさまして、しずかにしんこきゅうをした。

七 4 10 かしの木は、子どもたちのことを、まず思いうかべる。

七 8 2 かしの木は、きょうもそんなことを考えた。

七 10 8 かしの木は、あくびを一つして、しめっぽくなつた葉をふるわせ、

十五 5 4 文 遠くそののち かしの木に、矢はまだおれでとどまりぬ。

十五 124 4 校門のかしの木よ、母校よ、ばんざい。

かし ↓おかし・さとうがし

かし「華氏」(名) 1 F

六 61 図 F C

かじ「火事」(名) 1 火事 ↓おおかじ

四 7 6 火事がおこらないように、また、わるいびようきがはやらないように、氣をつけて

かしこ ↓ここかしこ

かしこい「賢」(形) 5 かしこい 《ーイーーク》

三 11 7 そこで、まいにち かしこいでしをひとりずつ、はんたかのところへやって、

三 12 3 やはり かしこくなりません。

八 80 4 かしこいものたちがものをいっているときに、自分の考えなどはいえないのだよ。

八 82 3 会 おまえさん、ねこやおばあさんよりかしこいとは思っていないだろうね。

十 16 3 かしこそうな目つきの少年でした。

かしこさ「賢」(名) 2 かしこさ

八 17 6 しぜんにそなわつたかしこさで、これではじょうずに生きていくのです。

八 20 4 せみの子たちは、れいのふしぎなかしこさで、もう大きくなりきつたことを知ります。

かし「貨車」(名) 1 貨車

九 22 5 ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたたくした貨車を一つつけて送ったほどでした。

かじ「鍛冶屋」(名) 1 鍛冶屋

十五 7 3 会 みんなでききりの中鉄のひびきのかじ屋の火

かじやさん「鍛冶屋」(名) 1 かじやさん

四 9 4 ここは、町でもひょうばんのかじやさんです。

かしら「頭」(名) 1 かしら ↓はたがしら

十五 101 6 会 ぼくは、あなたのおうちの幸福のかしらですよ。

かしら(終助) 26 かしら ↓どこかしら・なにかしら

一 61 10 会 「でも、わたくしがもったら、ただのいしころになつてしまわないかしら。」

三 72 6 会 「白いひもかしら。」

三 72 10 会 「ぎんのリボンかしら。」

三 73 4 会 「きらきらした水かしら。」

三 73 6 会 「ぴかぴかのかみかしら。」

三 73 8 会 「お日さまの光かしら。」

四 18 5 会 「ぼくが いっしょに ひくと、かるくなるかしら。」

五 11 10 会 あれ、なにかしら。

五 27 5 会 「でも、あのかた、わかつたかしら。」

五 55 4 会 さつきみつけた星は、どれだったかしら。

五 61 7 会 それでも、まいにちあつるのをぼした

の、だれかしら。

六 9 5 会 「それでは、自分のようなものでも、役にたつことがあるのかしら。」

六 78 9 会 だれがそうさせるのかしら。

六 102 3 会 うまくみえるかしら。

七 17 9 会 なぜかしら。

七 25 3 会 たまごをとってしらべてから、なん日はどたっているかしら。

七 25 11 会 どうしてかしら。

七 36 9 会 「どうかして、中へいれてやれませんかしら。」

七 61 8 こんなに、からすがいるのかしら。

七 75 3 会 さて、どこへいったものかしら。

八 65 6 会 ほんとうにしちめんちようのひなかしら。

九 148 3 会 うまくおかあさんにあえたかしら。

十二 48 9 会 「できるかしら。」

十三 38 9 会 お客さん、ぼくの知っている人……だ

れかしら……

十四 18 8 会 「カーテンも英語じゃないかしら。」

十五 94 10 会 どこへ来たのかしら。

かじ「蓄」(五) 1 かじる 《ーッ》

七 93 7 へやに、えさがなかったので、かこいの鉄

ぼうを、かじっていました。

かす「貸」(五) 6 かす 《ーシ》

四 69 3 「たしかにかした。」

五 87 11 会 ちよつとかしておくれ。

九 78 9 主人も、くわや、ふこや、かごなどを持っ

てきて、かしてくれました。

十一 19 7 困って頼みになると、氣持よく、物をわ

けてやったり、お金をかしてやったりしました。

十一 29 8 困っている人にかしてやったり、植える

ところをふやしていったりするうちに、
十二624 そののちは、だれがなんと頼んでも、か
してくれなくなつたという。

かず「数」(名) 17 かず 数 ↓くちかず・ことば
かず・てかず

二293 罇 きしにあがつてから、かずをかぞえて
みました。

五459 罇 世界の空のかず多い、かがやく星のその
一つ。

六594 それはことばの声のかずのことです。

六597 うたうたは、そのことばの声のかずが、
五か七になっているのです。

六692 この学校の子どものかずや、一ばん遠くか
ら通っている子どもの名や家の場所も書きました。

八994 二とおりにして、くきの数のふえるようす
をみることにしました。

八1059 1かぶのくきの数を数えてみますと、大き
なかぶは30本もありました。

八1061 こんどは1かぶのほの数をみんなでしらべ
てみました。

八1066 もみの数をしらべてみました。

九55 四色、五色と数をましていけば、その感じ
はまたふかくなるでしょう。

九226 汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつ
ぎのとおりです。

九619 みんな赤いズボンをはいたどんぐりで、そ
の数といったら、三百でもきかないほどでした。

十432 その数は、じつに八十五万にもおよんだ。
十二604 おとめの数をまして、田植え歌勇ましく、
一心にはたらいだ。

十四844 その美しい雪が数かぎりなく、天上から
地上へ降ってくるなどを写している。

十五367 数という形のないものを表わすのに、線
を横に一本引いたり、二本引いたりした。

十五899 罇 なしろ、おびたしい数ですからね。
ガス(名) 3 ガス

五351 ガスこんろの青い火は、ガスがもえている
のです。

五352 あのガスは、なにかから作るのでしょうか。
五363 ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろ
いろのくすりも石炭からとれます。

かずお「二雄」(人名) 2 一雄 一雄

十一599 太郎は、友だちの正男と一雄と三人づれ
で、

十一5912 「略」と、正男がいうと、一雄はす
ぐ賛成した。

かずおくん「二雄」(人名) 1 一雄くん
十二444 罇 一雄くんは、人形しばいをみたことが
あるかね。

かずおのてちうから「題名」1 一雄の手帳から
十二491 一雄の手帳から

かずか「幽」(形状) 4 かすか

十五2 風が、かすかに耳もとをすぎる。

十五3 耳をすますと、なにか、かすかな音楽がき
こえてくるようだ。

十245 その流れのかすかな音。
十一771 顔の上に、きわめてかすかなほおえみが
うかんだのをみたような気がしました。

ガスがかり(名) 1 ガス係

十四512 文学修業のためにパリーに出て、市役所
のガス係という職についたとき、

かずか「数数」(名) 1 数々

十五733 古ぼけたアムスト時代のもの、京都時代
のもの、なつかしい数々の写真があった。

かずこさん(人名) 6 かずこさん

四314 かずこさんも、やはり、「みんな」に知ら
せたいといって、

四342 罇 「かずこさんの書いた文で、なにか
氣のついたことはありませんか。」

四345 みんなは、もう一ど、かずこさんの文を
よみなおしました。

四347 罇 「先生は、かずこさんのおとうさんの
ことばに、氣がつかしました。」

四353 罇 かずこさんは、「略」はなおを 上げる
あいだ、かさをさしてあげたのですね。

四3510 罇 かずこさんの耳には、おとうさんのこ
とばが、ひびいてきたのです。

ガスこんろ(名) 2 ガスこんろ

五349 ガスこんろにかけたかまやなべから、ゆげ
がふきでています。

五351 ガスこんろの青い火は、ガスがもえている
のです。

ガスたい(名) 1 ガス体

十四6312 まったくとう明なガス体の蒸氣が、しず
くになるときは、

かすみ「霞」(名) 7 かすみ

二6510 罇 やあ、かすみがたなびいている。
二663 罇 たなびいている、きれいな かすみ。

三610 罇 たなびく かすみ。

三71 罇 かすみになくひばり。

四1352 罇 いつのまにやら 天人は、春の かすみ
につつまれて。

十一317 罇 青い空にはかすみがかめて、ひばりは
朝から大うかれ。
十三71 さかなな春のきざしは、よみにあらわれ
て、目に見えぬかすみのようにたなびいている、

かすむ〔霞〕(五) 2 かすむ《—ン》

四二六 空にかすんだふじの山。

一四九 わかめをだしかけたこずえのさがが、かすんだ空の中にとけこんでいる。

かすむ ↓すいかすむ

かぜ〔風〕(名) 一〇九 かぜ 風 ↓あきかぜ・あさかぜ・おおかぜ・からかぜ・きたかぜ・すずかぜ・そよかぜ・つむじかぜ・はかぜ・はるかぜ・ゆうかぜ・よかぜ

一三二 — くも — かぜ — あめ — ゆき —

一三四 〔かぜになります。〕

一三四 〔なぜ、かぜになりたいとおもいますか。〕

一三四 〔かぜになって、どこでも どんどん

ふきまわってみたいのです。〕

一三七 かぜが ふきます。

一三七 かぜが そよそよと ふきます。

一五〇 すずしい かぜが ふきこんで きたので、

目が さめました。

二二四 かき からす かぜ ゆき あめ かさ

二六五 〔あたたかい かぜが ふいてくる。〕

二六四 ふいてくる、あたたかい かぜ。

二五五 あたたかな かぜ。

二五五 かぜの手ざわり。

二四九 かぜが ふくと、くわのはの においがぶんと します。

二五〇 かなかなぜみも 目が さめて、 かぜに

ゆれゆれ さきました。

二五五 山が あれた、海が あれた、 かぜであ

れた。

二六五 〔どっちへ いったら いいか、 風にき

いて みようよ。〕

二六七 〔そうして、 風が どちらへ ふいて いるか、みて ごらん。〕

二六五 〔風は なんて いってるの。〕

二九〇 風の日には どんな 音。

二九四 よるの ほしも、あさの 風も、 みんなの

ものです。

四一四 風が ふくと、にわとりが ふわふわ ふく

れる。

四四六 あさの 風は、 氣もちよく、 がんの むなげ

にあたりました。

四五七 みずうみの ほうから、 風が ふいて きま

した。

四五八 〔あたちには、この 風が なんと も いえ

ない いい 氣もちでした。〕

四五五 その 夜は、 さいわい、 雨も ふらず、 風も

ふかない、 しずかな、 星の 光る 夜でした。

四七三 ふ — ふけ ふけ 風よ、 たこ あがれ。

四八六 風が ふいて きた。

四九六 風に ふかれて、 うずを まいて、 どんどん

降ってくる。

四九六 風に ふかれて とんで いるうちに、

六一九 〔みどりの 木の 葉は 喜びに みち、 きよらか

な 風は、 われわれの 音楽を ほめて くれる。〕

六二五 風が でて こなければ いいね。

六二四 はげしい 風。

六二七 〔へ の へ の へ〕の 顔で、 風に 向かって

立っている。

六三九 きもの のすそが 風にあおられる。

六四四 〔これぐらいの 風に まけるものか。〕

六四七 はげしい 風の 音。

六四八 かかしが 風に まきあげられる。

六五三 白い ひげの 雲が 風に 流されている。

六五五 風を受ける たびに 雲の からだの かっこうが

かわる。

六六三 風が ふく。

六六五 〔なんて らんぼうな 風なんだろう。〕

六六七 また、 風。

六六八 はげしい 風の 音。

六六九 風の 音が よくなる。

六七〇 かかしの 目の まえに、 風に そよぐ 金色の い

ねが、 いちめんにつづいて いる。

六八〇 〔子どもは 風の子。〕

六八四 〔風なんかも。〕

六八七 風や、 自動車や、 水車は、 動いて いても 息

を しないから、

六八八 五ひきの うさぎさんと、 しかさんとは、 風

のように 走り だしました。

七〇二 夜明けの 風が 流れて くる。

七〇六 えんどうの 花が、 風もないのに ゆれている。

七〇八 一どでいいから、 風に なりたい。

七〇九 風になつたら、 学校の中を、 ちよつと ひ

とまわり するのだ。

七一一 先生、 きようは 風が ありませんから、

ちようちよが、 たくさん とんで いるでしよう。

七一二 風のない 日は、 ちようちよが よく でのの

だったね。

七二二 この まえきたときは、 風が 強かったから、

ちようちよが できなかった ですね。

七二三 先生、 風の 日は、 ちようちよは、 どこに

かくれている んですか。

七二四 ろうかを 曲がつたら、 ふっと、 風が ふいて

きた。

七二五 風が ふく。

七二六 夏の 風が ふきこんで、 新聞など 動かして、

ふきぬける。
 八七〇 ちめんちようは、風を受けた船のほのうにからだをふくらませて向かってきた。
 八七六 風がひどいので、あひるの子は立つこともできず、
 八九九 よいお天気で、風もなくあつい日でした。
 八八〇 風のくる場所で、目の高さぐらいのところからごみをふきとばさせます。
 九八七 「風」ということばに、ほかのことばをつけてみましょう。
 九八九 「風」を「朝風」として、これにいろいろなことばをつけてみましょう。
 九一一 つぎに、風の音をたいた。
 九一一 風といえば、〈略〉とか、「ビュウビュウ」とかいうことばであらわしているが、
 九一二 よくきいていると、たしかに風の音になる。
 九一二 とうげ道にさしかかったとき、さつとふいてくる風であり、竹やぶを流れてくる風であり、
 九一二 竹やぶを流れてくる風であり、
 九二四 町の通りを、電線を、はたを、せんたく物をふいている風である。
 九二五 風の音よりも、もっとおもしろいと思ったのは、
 九二六 ただ一つのたいこが、そのうちかたによつて、水の音にもなり、風の音にもなり、
 九二七 すすきとつたボールの音や秋の風
 九四九 すきとおつた風がザアツとふくと、くりの木はバラバラと実を落しました。
 九五四 そこは美しいこがね色の草地で、草は風にザワザワ鳴り、
 九五七 着物のえりを廣げて、からだに風をいれながら、「略。」とききました。

九五八 そのとき、風がどうとふいてきて、草はちめんちに波だち、
 九七三 やまねこのじんばおりが、風にバタバタ鳴りました。
 九八八 けれども、流れは急流だし、雨の日も風の日もある。
 九八六 風が思いだしたようにふいてくるので、あみがゆれ、くももいっしょにゆれました。
 九八九 月の光にちりちりりと光りながら落ちてくる夜つゆをみていると、風がふいてきました。
 九八九 風と思つたのは、そうではなくて、つばめがすいとんとできたのでした。
 九五二 風が、かすかに耳もとをすぎる。
 九二一 まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。
 九二二 風がふいて、ガサガサ音がしたから、なんだろうと思つて、二階の窓からそとをみたら、
 九二五 もう、親竹と同じくらいに高くなって、風にゆれていました。
 九二六 そちらからふいてくる風にあたっても、たちまち死ぬといわれるくらいだ。
 九二六 風がどつきを運んできてはたいへんだから、
 九二七 次郎かじや、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやってくれ。
 九三〇 ひがすぎれば風あたたくく、木々のつぼみも草のめも、日々に色づきふとりだす。
 九四八 アカシヤの花が風にゆれ、畑では、いちごがでさかりだった。
 九五七 しかし、風がはげしいので、すぐさをさつぽめてしまった。
 九五三 大きな声だが、雨や風の音のために、乗

客の耳にきこえそうもない。
 一三二 夏は夏で、ひんやりとした土べいの日かげを選び、風の通り場で遊んでいる。
 一三五 はとにふえをむすびつけてとばすのであるが、とぶと、風を受けてそのふえが鳴る。
 一三六 ふわふわとまろくなつて、風がふいてくると、ころころと音がります。
 一四六 湯げは、〈略〉つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、また、たちのぼります。
 一四七 すこし高いところでは、反対の風がふいています。
 一四八 われわれが冬期に受ける北西の風と、夏季の南がかつた風になるのです。
 一四九 夏季の南がかつた風になるのです。
 一五〇 空中の温度の変化、風の関係、水蒸気の高さ、高度など、さまざまな条件によって、
 一五〇 風にあおられた雪のむれが、道を消し、木をおり、汽車を立ちおろじようさせ、
 一五二 風にふかれたからであらうか。
 一五三 風くればばらはたちまち火となれりゆれにゆるるか照りそう風に
 一五四 風くればばらはたちまち火となれりゆれにゆるるか照りそう風に
 一五五 一わのやまわしが、〈略〉、空中に風をまき起して、みんなの上へ舞いおりて来ます。
 一五六 舞いたったかと思うと、こんどは両羽をあおりたて、大きな風をまき起すようにして、
 一五七 「風邪」(名) 1 かぜ
 一五八 「おまつさんか、あなたがみえなかったから、かぜでもひいたかと思つて。」
 一五九 「風当」(名) 1 風あたり
 一六〇 冬は冬で、風あたりの少いホートンの廣

場に、子どもたちがたむろして、

かせい「[火星] (名) 2 火星

十三13 8 火星や金星・木星などのような星は、太陽のまわりを、大きく輪をえがいて、

十三13 10 火星などと同じように、太陽のまわりをまわっている星の一つだ、ということも

かぜぎみ「[風邪気味] (名) 1 かぜぎみ

六104 7 弟は、二三日まえから、かぜぎみである。

かぜぐ ぐでかぜぎにん

かぞえる「[数] (下一) 20 かぞえる 数える

「エーエル」
一107 7 かごにはいった たまを かぞえましよう。

一111 1 会 さきに、しろい たまを かぞえましよう。

一115 5 会 「こんどは、あかい たまを かぞえましよう。」

二29 4 会 きしに あがつてから、かづを かぞえてみました。

二29 6 会 一ばんはじめに、ぶうちやんがかぞえました。

二30 2 会 ぶうちやんは しんぱいして、もう 一ど かぞえて みました。

二30 9 会 それでは、わたしが かぞえて みよう。

二30 10 会 とんちやんがかぞえて みました。

二31 2 会 こんどは、ぼくがかぞえて みよう。

二31 3 会 ころちやんがかぞえて みました。

三44 5 会 ぼくが、きみたちの せなかの上を、かぞえながら とんで いくから、

三44 9 「[略]。」と かぞえながら、わたって きました。

七16 8 会 はん長は、めいめいのはんのにんずをか

ぞえたかね。

八38 1 ある日、王さまは、宝ぐらの中で、宝物を

かぞえておいでになると、

八105 9 1 かぶのくきの数を数えてみますと、大きなかぶは30本もありました。

九92 3 「[略]。」と数えながら、大またでびよん

びよんかけてきて、「十」でとまる。

九92 9 「一、二、三——」と数えながら舞台はしまできてとまる。

十58 7 うちに帰って、十まいずつたばにして、赤いひもでいわえて数えました。

十三10 5 名まえの字画を数えて、運がよいとかわるいとかきめたり、

十五56 11 会 指おり数えると数十年の昔になるが、かぞく「[家族] (名) 8 家族 ぐいちかぞく

八64 4 その晩から家族のひとりになり、あくる日、ピオという名がつけられました。

八67 7 そこには、二つの鳥の家族が、一つのうなぎの頭のことであらそっていた。

九33 11 会 三びきもとつてくると、うちの家族七人が、じゅうぶんたべることができます。

十一64 2 にわかに病氣にかかって入院したので、家族の者にかんたんな手紙を書いて、

十一72 1 家族の者が、その旅に楽しい希望をかけていたことや、

十一84 2 少年は二こと三ことばをはさんで、家族のようすを話そうとしましたが、

十一86 9 会 たぶん、遠いところに家族があるのでしよう。

十五21 7 ある朝、このアメリカ人の家族は、いつものように散歩に出ました。

かぞくたち「[家族達] (名) 1 家族たち

十五73 8 ちょうどそのころは真夏であつたので、博士の家族たちは暑さをどこかにさけて、

かた「[方] (名) 23 かた ぐあいされかた・あさが

た・あなたがた・あみかた・あらわしかた・あるきかた・あわてかた・いいあらわしかた・いいかた・

いましがた・うごきかた・うたいかた・うちかた・うまかた・おまえさんがた・おりかた・かきあらわ

しかた・かわきかた・かわりかた・かんがえかた・ききかた・きりかた・くらしかた・くれがた・こぎ

かた・こたえかた・このかた・さきかた・さしかた・しかた・じゅうねんこのかた・すべりかた・せ

んせいがた・たたきかた・つかいかた・つくりかた・つけかた・できかた・とまりかた・なきかた・

なりかた・にいさまがた・にぎりかた・につぼんごのかきあらわしかた・のびかた・はりかた・ひえか

た・みかた・みなさんがた・みやまがた・むすびかた・やりかた・ゆうがた・よみかた・わけかた

一44 8 会 「お月さんのくにへおいでのかたは、こちらへおならびください。」

二56 1 それは、どんなかただったでしょう。

二58 1 みると、わたくしの おじいさんによく にかたでした。

二58 4 そのかたは、「[略]。」といって、にこにこ なさいました。

三47 7 このかたは、さきほど おとおりに なったかたがたのおとうさんです。

四110 2 会 このかたが うらしまさんで ございます。

五8 8 会 「おりるかたがすんでから、ごじゅんにお乗りください。」

五27 5 会 「でも、あのかた、わかったかしら。」

五38 4 そのかたは、ほっかいどうで、やはり先生

をしていらつしやるのです。

六八八 〇 まあ、りっぱなかたが、水にうつっているわ。

六九三 〇 門の木の上に、りっぱなかたがいらつしやいます。

六九四 〇 木の上に、りっぱなかたが。

六九六 〇 では、そのかたをこちらへごあんないしなさい。

六九七 〇 年をとったかたがあらわれて、私に海のごてんへいくようにと教えてくださいました。

六九八 〇 みなものものにたずねるが、だれか、このかたのつりばりをとっていったものはないか。

六九五 〇 おまえは、このかたのつりばりを知らないか。

九七八 〇 「きようは、このかたの畑をすこしほらせてもらうことにします。」

一七二八 〇 このかた、あなたのおとうさんですか。

一七四二 〇 このかたは、この病人のむすこさんです。

一八六四 〇 「あなたと同じように、いなかのかたですがね。」

二二三三 〇 私を愛するためにきてくださった——そのかたの両うでの中に強くだきあげられました。

二四五四 〇 明かるい地の上でくらしているかたには、土の中のことわからないでしょう。

二五六一 〇 そのころ、新島のおじさんがどんなにえらいかたであるかを知らなかった私は、

かた「形」↓あとかた・たんざくがた・ゆみがたかた「肩」(名) 21 かた↓りようかた

三三九 〇 ぼくがまん中で、右のかたにはいちろうくん、左のかたにはみよこさん。

三三九 〇 左のかたにはみよこさん。

三四二 〇 ぼくらは かたを くんで、くさはら道を

あるいて かえりました。

三四二 〇 みよこさんが、左のかたからはなれて、麦ばたけのよこ道を かえりました。

五三〇 〇 なかなかおもかったのですが、ぼくは、かたへのせて持っていきました。

五七四 〇 私は、こういって、はるおのかたをそっとおさえました。

五九三 〇 ひわは、かたのところにけがをして、ころがっていました。

六七五 〇 学校へいくとき、雪だるまのかたのところに、まつ枝をつけました。

七七一 〇 手をつないで校門をでていく子ども、かたを組んで話しながらでていく子ども、

七三七 〇 私は、さぶろうのかたに手をかけて、「略」ときいてみました。

八五〇 〇 つかみだしては指さきへとまらせたり、かたへ乗せたり、てのひらで遊ばせたり、

八六六 〇 だんだんなれて、指さきへもかたへもまるとうになつたばかりか、頭の上にも乗り、

九二一 〇 へやにはいつてくる人があると、たちまち、そのかたや、頭や、手にとまりました。

九三三 〇 ふたり、なかよくかたを組みながらさる。

一〇三六 〇 そのとき、いままでかたにかけていたすいとうをはずして、手に持つといひます。

一〇五七 〇 かたにかけると重いから手に持つのだと、ませたことをいって、歩きだしました。

一一六九 〇 少年は包みを下におくと、頭を病人のかたのところへさげて、

一一七四 〇 そのとき、少年は、かるい手がふとかたにさわったので、びっくりしてとびあがりました。

一一七五 〇 医者は、手を少年のかたにかけました。

一一七五 〇 「略」と、医者は、もう一ど少年のかたに手をかけながら答えました。

一三七五 〇 鳴いているからすの声も、略、白雲をかたにまとった小山をめぐるって、聞えてくる。

かたあし「片足」(名) 3 かた足

八一一 〇 うちがわでむじやきに遊んでいたピオを、かた足でふんでしまったのです。

一二二七 〇 かた足をなげだして、おしりできざって歩くのです。

一二八五 〇 どうしたはずみか、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。

かた「堅」(形) 16 かない「イー・ク」

三五一 〇 石より かない のみの さき、のみより つよい うでさきで、

六二二 〇 「かたくて、うまくわれないだろう。」

八四五 〇 親せみが、あのほそくがった口のさきで、かない皮にあなをあけて、

八八二 〇 ことにまえ足は、略、たいへんかたく、じょうぶになります。

八二一〇 〇 虫は、それにとりつくとも、まえ足のつめでかたくそれにしがみついて、

八二五七 〇 あのぬけがらだけは、いつまでもささだけにかたくすがりついています。

八四二 〇 王女は、かないこがねになっていたのです。

八四二 〇 いままでべしやんこだったさがが、ふくれかたくなっていました。

一一六〇 〇 「略」とかたくとめられていたのがある。

一二六八 〇 大きなかない物を切るのこぎりののはは、大きくてあつち。

一二八八 〇 ネットをはさんで、両選手はかないあく手をかわしました。

十四54 17 窓 そこは、暗いところで、土もかたいし、石ころなども、ごろごろしています。

十四58 9 窓 この大きなかぼちゃは、ずいぶんかたいようですが、やっばり、この大部分は水です。

十四97 8 女の子のそばには、あつい、かたいかべしかのこっていません。

十五25 4 女の子のからだ下が下へ落ちないように、その上帯をかたくにぎったのです。

十五67 2 学校のいきかえりにその門前を通っても、新島家の窓は、かたくとざされてあった。

かたい 難 1 ありがたい

かたがた 1 方方 5 かたがた

三46 5 そのとき、みなのりっぱな かたがたが大ぜいおとおりになって、

三46 8 いままでのことをはなしますと、そのかたがたは、「略」とおっしゃいました。

三47 8 このかたは、さきほどおとおりになったかたがたのおとうとさんです。

十四31 7 あなたがたは、これからの日本にとってだいじなかがたです。

十五88 3 窓 このかたがたは、『なんにもしないという幸福』と、『略』という幸福』でね、

かたがた 副助 1 かたがた

十五52 6 書きあげた論文を持って、その出版の用事かたがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった。

がたがた 感 1 ガタガタ

三36 1 窓 ガタガタ、トン、トン、ゴシゴシ

かたかな 片仮名 6 かたかな

三97 3 ひらがなをかくことも、かたかなをかくこともできます。

十四28 3 窓 その中で、かたかなで書いてあること

ばは、たいてい西洋からきたことばと思ってい

十五39 4 漢字から、日本語を表わすのに便利なか

たかなや、ひらがなを作りだすようになった。

十五39 6 かたかなは漢字の一部分をとって作った

もので、

十五39 7 ひらがなはかたかなのように漢字の一部

分をとったのではなく、

十五42 4 いま日本では、漢字と、かたかなと、ひ

らがなとの三種の文字をつかっており、

かたがわ 片側 1 かたがわ

七83 5 道のかたがわの草ばかりたべてあったか

らず。

かたず 固唾 1 かたず

十二84 3 かたずをのんで試合をみているうちに、

早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、

かたすみ 片隅 4 かたすみ

十二13 3 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、

がかを立てて写生をはじめた。

十二35 10 先生がかけらをいろいろのかたすみにはき

よせておいでになっているようすを感じましたが

十二38 5 いろいろのかたすみに走りよってかけらを

ひろいあげ、それをつぎあわせようとしたが

十三36 6 小さな光ったわたが、土べいのかたすみ

かたち 形 35 かたち 形

二12 4 かたちのにたものをならべてみました。

三19 6 手わけして、そのかたちや色をよくし

らべることにしました。

三95 5 この一まいの紙が、いろいろなかたち

になったり、ふくれたり、立ったりします。

四42 4 列のかたちを かえても、ばらばらに

なってしまうことはありませんでした。

四47 9 一列になってとんで いきましたが、や

がて、まっばのようなかたちになりました。

四95 5 大きな雪、小さな雪、雪のかたちはき

まってい

五37 6 大むかしのたいようのねつが、かたちをか

え、石炭の中にたくわえられていて、

六6 7 窓 いろいろな道具、たくさん時計、それ

らはかたちも大きさもそれぞれが違ってはいるが、

六68 3 「雪のかたち」を五つばかり、きれいに写

生しました。

七55 7 心にはつきりとえがかれた一つのかたちは、

まじりけのない寶石のようなものであります

八17 9 虫は、はじめは、白い、よわよわしいうじ

のようなかたちをしています、

九56 3 ことに、その足さきは、しゃもじのような

かたちだったのです。

九73 6 そうして、なんだかねずみ色のおかしな

たちのうまがついています。

九118 4 窓 金色の小さな鳥のかたちしていちよう

ちるなり丘の夕日に

九145 3 ふしくれた手、とがった足、うすきみのわ

るいかたち、

十27 8 とまりかたや、動きかたや、羽の色や、形

などを、こまかにしらべたいのです。

十一15 6 オルガンのキイから、赤い、青い、金色

の、ちがった形の小鳥が、はばたいてで、

十二15 11 だいたい形の形をしっかりとつかんで、

十二50 12 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で

作って、のりどめる。

十二52 10 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十

センチぐらいにつきあわせて、図の形に切る。

十二100 3 形も、かめや、はちや、いろいろのもの

があります。

十二100 10 それは、もようもごくかんたんで、形もたいへんよくまとまっています。

十二104 8 屋根の形や左右にのびたろうかのかっこうにも、ほうおうという鳥の美しいすがたが

十三13 10 また、地球もまるい形をしたもので、

十四67 8 地面からなんメートルもある、高い柱の形になり、

十四84 2 ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、まことにきれいな形をしていること、

十五35 5 これらの表わしかたとともに、事物の形を絵にうつすことも行われた。

十五35 12 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、

十五36 1 これがだんだん変わって、しだいに形のきまつたものとなり、

十五36 5 漢字は、いまいったように、はじめ、事物の形をうつしたのから発達したものであるが、

十五36 6 形のないものは、この方法では表わすことができない。

十五36 7 数という形のないものを表わすのに、線を横に一本引いたり、二本引いたりした。

十五37 2 木は、もともと形をうつしてできたものであるが、

十五41 5 それから、そのギリシア文字がローマに移って、現在のようになつた。

十五83 9 ㊦ ほんの形だけでも、廣間の方をさがしてみよう。

かたづく・く「片付」(五) 1 かたづく 《一カ》

十三13 5 しかし、この天動説では、どうしてもかたづかないようなことが、目についてきたのです。

かたづける「片付」(下一) 2 かたづける 《一

ケ》とりかたづける

六99 3 つくえのひきだしをかたづけていると、九70 1 ㊦ これはどのひどい裁判を、まるで一分半

でかたづけてくださいました。

かたて「片手」(名) 6 かた手 十二37 7 「水」はいま自分のかた手の上を流れて

いるふしぎな冷たいものの名であることを

十三28 10 かた手には、大きな毛ぬきのようなものを持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、

十三28 11 かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、ときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく。

十三40 7 その間、かた手に持ったさっきの手紙をくり返して読む。

十五63 6 かた手に小さなくつを持ち、かた手に大きなブラシをつかんで、

十五63 7 かた手に大きなブラシをつかんで、力のかぎりみがきをかけた。

かたとき「片時」(名) 1 かたとき 十四59 8 ㊦ ほかのことはわすれても、この土のことは、かたときもおわすれにされないでしょう。

かたな「刀」(名) 1 かたな ㊦ こがたな 一46 1 かたなだの、てっぽうだの、あぶないものはみんなとりあげられてしまいました。

かたはし「片端」(名) 1 かたはし 五18 2 そのうちに、きよくの人が、私たちをかたはしからしらべていって、

かたほう「片方」(名) 3 かたほう かた方 一57 9 わたくしは、かたほう だらりとさがった

しろちゃんのみみをみてきました。

七83 8 ㊦ それは、かた方の足あとが、一つおきにあさくなっていました。

十四91 1 かたほうはどこへいったか、つい見いだ

せなかつた。

かたまり「固」(名) 1 かたまり ㊦ ひとかたまり 八98 5 よく根をはって育つように、小石をひろい、土のかたまりをくだいてこまかくしました。

かたまる「固」(五) 4 かたまる 《一ツ》 七63 1 小さな虫がかたまつて、顔のところでとんでいくれた。

十二14 5 だが、根もとのところに三つ四つかたまってしだれているところもい。

十四41 5 みんな、かたまつて、「略」。

十五82 11 すこしはにかんで、みんな右手の前方に、光をとりまいてかたまつてしまします。

かたみ「肩身」(名) 1 かた身 十35 4 りっぱな機械をみて、感心するとともに、

なんともいえないかた身のせまい思いがした。

かたむき「傾」(名) 2 かたむき 十四75 12 森の上へかかると、飛行機は、しぜんと

下の方へおしおろされるかたむきがあります。

十五15 5 ㊦ ひるすぎていよよにあかきばらの花いよよに重くかたむきふかむ

かたむく「傾」(四五) 4 かたむく 傾く 《一イーカークーケ》

九28 6 ㊦ 大空にのびかたむける冬木かな 十一40 5 ㊦ 南にかたむく日につれて、光はまとも

にえんにさす。

十二54 2 人形がかたむかないように、話すときは人形の顔を前後に動かす。

十二60 8 もうあとわずかというところで、日ははや西の山に傾いて、くれそうになつてきた。

かたむける「傾」(下一) 5 かたむける 《一ケ》 八47 10 王子はふと立ちどまつて、その声に耳をかたむけました。

十一78 しみじみとしたそのちょうしに、じつと耳をかたむけているようにみえたからです。

十二194 ④ ピアノの先生が、散歩にいらっして、

あなたの鳴く声に耳をかたむけて、

十三285 遠くの方からひびいてくる、いろいろな

ものの音に、耳をかたむけたりしているのである。

十四137 ④ あなたを思うすべての心をかたむけて、

さようなら。

かため ④ 片目 (名) 6 かた目

七768 ④ そのらくくは、かた目ではありませんか。

七7611 ④ かた目なんですよ。

七815 ④ だいいち、らくだがかた目であることを

知っていました。

七816 ④ そのとおり、私どものらくくは、かた目

でございます。

七833 ④ それから、そのらくくがかた目だという

ことは、どうしてわかったのかね。

九561 ④ その男はかた目でした。

かためる ④ (下) 1 かためる 《一メ》 ④ は

りかためる

九1002 ④ もう一つなぐってやる。」と、げんこをか

ためて右手をふりあげる。

かたり ④ イソップものがたり・げんじものがたり・

たなばたものがたり・むかしものがたり・ものがた

り

かたりだす ④ 「語出」(五) 2 語りだす 《一シ》

十五451 ④ すめられたいすにかけて、楽しそうに

語りだした。

十五474 ④ 店の主人は、きかれるままに語りだした。

かたりつたえる ④ 「語伝」(下) 1 語り伝える

《一エ》

十二559 ④ 人々のあいだで語り伝えられているだけ

で、《略》消えていってしまうものもある。

かたりつづける ④ 「語統」(下) 1 語り続ける

《一ケ》

十五5812 ④ なお語り続けようとする博士をさえぎっ

て、《略》と、ありし昔を語ろうとした。

かたる ④ 「語」(五) 4 語る 《一ツ・一ラ・一ロ》 ④

ものがたる

十五556 ④ そうしてつぎのように語った。

十五593 ④ ありし昔を語ろうとした。

十五741 ④ 老博士は、きょうに乗じて、アメリカカ

を考えかたについて熱意をこめて語られた。

十五755 ④ ああ、忘れもしない、満面べにをさ

して語られたホランド博士のあの熱情のことば。

かたわら ④ 「傍」(名) 2 かたわら

十五104 ④ 荒れ庭にきたる板のかたわらにふ

るばちならび赤き花さく

十五549 ④ 私が一言も発しないうちに先手をうって、

かたわらにあつたいすをすめるのであった。

かち ④ 「勝」(名) 5 勝

七522 ④ 思いがけなく、ぼくたちの勝となった。

七546 ④ ぼくたちの勝である。

十二844 ④ 第一回は七―五で清水選手が勝ち、第二

回めもやはり清水選手の勝となりました。

十二8411 ④ 第三回はチルデン選手の勝、続いて第

四回めもチルデン選手の勝となりました。

十二8412 ④ チルデン選手の勝となりました。

かち ④ えんりよがち・なりがち・びょうきがち

かちかち (副) 3 カチカチ

六59 ④ カチカチと氣ぜわしいのはおき時計で、

六117 ④ かいちゅう時計が、たちまち、ゆかいそう

にカチカチと音をたてはじめた。

十五62 ④ だいいは実をたれ時計はカチカチと

かちかちかち (感) 1 カチ、カチ、カチ

三869 ④ カチ、カチ、カチ。

かちかち (副) 2 カチカチカチ

七51 ④ かばんをカチカチカチカチ鳴らして、走って

くる男の子かな。

七59 ④ かばんをカチカチカチカチ鳴らして、げたぼこ

のかげにかくれた。

がちゃん (副) 1 ガちゃん

十729 ④ 大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガ

チャンとくだいてしまいました。

かちんかちん (副) 1 カチン、カチン

六125 ④ そういいながら、カチン、カチンとわって

いと、

かつ ④ 「勝」(五) 24 勝つ 《一タ・一チ・一ツ・一ツ》

④ うちかつ

六13310 ④ 勝つたものになにもないなんて話はない。

六1341 ④ もし自分が勝つたら、このしかの角で、う

さぎさんたちをつきあげるといいます。

六1349 ④ しかさんに勝つたところで、あの角をおる

などということはできません。

六1373 ④ しかさん、私たちが勝ちましたよ。

七492 ④ 「勝つ、勝つ。」とさわいだ。

七492 ④ 「勝つ、勝つ。」とさわいだ。

七495 ④ それで、内野の人はいっしんになったので、

かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。

七496 ④ これも勝った。

七499 ④ あぶなかったが、わずかのちがいで勝った。

七519 ④ 「勝つ、勝つ。」とさけんだ。

七519 ④ 「勝つ、勝つ。」とさけんだ。

七526 ④ どちらが勝ったかと思つて、心配している

と、十一たい十で、ぼくらのほうが勝った。

七527 ④ 十一たい十で、ぼくらのほうが勝った。

ついでいる。

がっこ (名) 2 ガッコ

十二2712 会 「ガッコ、ガッコ。」民ちゃんはうれしそうにいて、その包みを取りあげると、

十二2712 会 「ガッコ、ガッコ。」

かっこう 「格好」(名) 12 かっこう ↓ぶかっこう
六336 風を受けるたびに雲のからだのかっこうがかわる。

七213 会 とまっているちようちよが、どんなかっこうをして、みつをすうか、よくごらん。

八104 そのかっこうは、さるそっくりです。

八109 小さな家で、小さなかっこうをしていながら、毎日なにかかわったことをしてかしては、

八217 せみは、さっそく、ぶさいくなかっこうをして、それにはいあがっていきました。

八6711 会 なんというかっこうだろう。

九555 その草地のまん中に、せいのひくい、おかしなかっこうの男が、ひざをまげて、

九137 そちらをみると、こうもりは、ひょうきんなかっこうをして、こちらにとんできます。

十509 いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかをかくようなかっこうをしました。

十6811 ふるえ声でいいながら、いつでもにげさせるかっこうで、こしをうしろにひき、

十二104 屋根の形や左右のびたろうかのかっこうにも、ほうおうという鳥の美しいすがたが

十四385 二人の人そのままでのかっこうで、「略」。

かっこう 「郭公」(名) 3 かっこう

一404 かっこうがないてる。

二402 どこかで、かっこうが、「略。」となきます。

二438 かっこうが、とおくでしずかになきます。

かっこう (感) 7 かっこう

一405 「かっこう。」

一406 「かっこう。」つつじからないてる。

一408 「かっこう。」

一409 「かっこう。」ほたる。

二402 「かっこう、かっこう。」となきます。

二402 「かっこう、かっこう。」

二403 「かっこう。」となきます。

がっこう 「課名」2 学校

三26 五 学校……三十三

三301 五 学校

がっこう 「学校」(名) 63 がっこう 学校 ↓さつ

ぼろのうがっこう・しょうがっこう・しょうぎょうがっこう・ちゅうがっこう・にちようがっこう・の

うがっこう・もうあがっこう

一549 会 はなればしにある がっこうにはいて、ペンきようしてくるのです。

二375 会 きのも、学校からかえるとき、

三302 「学校」というだけで、作文をするこ

とになりました。

三385 みんなの 学校。

三387 たのしい 学校にしましろう。

三894 学校では、どんな音がするでしょう。

三912 わたくしは、学校へいくときと かえる

ときに こをとおります。

四47 学校にはいる 子どもも、いちいち 知ら

せてくれます。

四112 ここはわたくしたちの 学校です。

四177 学校から かえったら、おかあさんが、石

うすをひいていらっしやった。

四316 手 きのも、学校から かえる とき、雨が

ふっていました。

四782 け——けっせきしないで 学校へ。

四906 学校へ かよう 子どもたちの ことを思っ

て、おもてのとおりをさつさと はく。

五557 会 今夜、学校のにわで、ぼうえんきようで

星をみせますよ。

五5511 私は、(略)、ごろうさんをさそつて、はる

おといっしよに、学校へいきました。

五7810 先生といっしよに、学校のはたけのむこう

を流れている小川のところにいきました。

五829 先生のお友だちが、学校をみにいらっしや

いました。

五1078 そこへ、さんちゃんが学校から帰つてきま

した。

六585 雪の降つた朝、一年生の子が、学校にくる

道で、はき物に雪がついてころびました。

六589 そこを通りかかった人が、おんぶして学校

までつれてきました。

六692 この学校の子どものかずや、一ばん遠くか

ら通っている子どもの名や家の場所も書きました。

六7510 学校へいくとき、雪だるまのかたのところ

に、まつ枝をつけた。

六768 ごろうが学校で、「略」。

七78 会 風になったら、学校の中を、ちよつとひ

とまわりするのだ。

七84 学校のおいがしてくる。

七85 しおがひくように、子どもたちが、さつと、

学校からいなくなつてしまつた。

七165 学校の運動場に、子どもたちが集まつてい

る。

七282 きしもとくんが学校から帰ってくる。

七299 会 ぼくは、学校から帰ると、だいこんのはっぱを、とりかえてやるのが楽しみだ。

七29 ㊦ きのう、学校から帰ってみると、おおむしは、もう黄色なさなぎにかわっていた。
七48 10 はじめに、ひがし村の学校とやった。
七49 6 第二回めには、にし村の学校としあいをした。

七49 8 さいごに、町の学校とやることになった。
七50 3 どの学校のせんしゅも、みんな、運動場に整列して、式をあげた。

七50 5 はじめに、ぼくの学校とひがし村の学校とが、しあいをするようになった。

七50 5 ぼくの学校とひがし村の学校とが、

七51 8 ひがし村の学校のセンターが、喜んで、「略。」とさげんだ。

七52 9 第二回めは、にし村の学校とやることになった。

七53 2 あいては、町の、いちばん強い学校だ。
八10 11 ある土曜の午後、おなかをすかして学校から帰ってきたすえの女の子が、

九46 8 ㊦ あの廣い学校の運動場で、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。

九48 1 はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうを、とんだりはねたりしました。

九76 2 みんなで、学校から四キロほどある貝づかへいきました。

九86 8 ㊦ いずれ学校へ帰ってから、もう一ど整りしましょう。

九87 4 ところ 学校の帰り道

九90 3 ㊦ 学校の帰りじゃないか――

十31 5 学校では、組の友だちとなかよくして、助けあっていたいと思います。

十31 11 ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、

十32 2 この学校では、かけがえのないひとりであることを、ほこるようになります。
十59 2 「略。」といって、学校から帰ると、
十一41 10 ㊦ 学校へいそぐ子どもらの、息はま白に舞いのぼる。

十一59 9 三人づれで、学校から帰るときのことであった。

十二8 4 母親がなつかしくなり、会いたくなったので、学校から家へもどってきました。

十二25 3 学校から帰ってくると、わたしは民ちゃんの子もりをひき受けます。

十二27 10 ㊦ 「民ちゃん、これ持って学校へいきましようね。」

十二29 5 ある日、学校から帰ってくると、姉が大さわぎしていました。

十二40 12 だんだんちえがつき、もの心がついて、学校にいくようになりました。

十二95 3 秋子は、おと年、この学校にうつってきたときのことを思い出す。

十三38 1 ㊦ え、いま学校から帰ったばかり……
十四18 2 学校で、そうじをしているとき、

十五67 1 学校のいきかえりにその門前を通っても、新島家の窓は、かたくとざされてあった。

十五120 3 はじめてこの学校の門をくぐったときのこと、はつきりうかんできた。

十五120 8 ㊦ みんな元気で、この学校を愛してくれ。がつこうがえり

九92 1 そのあと、学校帰りの女の子ふたり、通すぎる。

がつこうじゅう 「学校中」(名) 1 学校じゅう

七510 学校じゅうは、いちどに花がさいたようだ。がつこうどうぐ

「学校道具」(名) 1 学校どうぐ

三42 7 ぼくは、学校どうぐをわきにかかえて、どんどん走ってかえりました。
がつしょう 「合唱」(名) 1 合唱
六97 10 魚たちが合唱をする。
がつしょうする 「合唱」(サ変) 2 合唱する

十三50 4 うれしいハ・ハ・ヒを、合唱しましょう。

十五122 9 先生がたがみんな、合唱してくださった校歌や、石井先生の手品や、

がつしょうたい 「合唱隊」(名) 1 合唱隊
六18 5 そのうしろに合唱隊がならんで、うたをうたっています。

かつそう ぐくうちゅうかつそう

がつそう 「合奏」(名) 1 合奏
十五122 10 森田先生と西野先生のバイオリンとピアノ合奏など、

かつたりかつたり (副) 1 カッターカッター
六510 カッターカッターとおうようなのははしら時計である。

かつちゃん (名) 37 かつちゃん

四44 8 「略。」といったのは、かつちゃんでした。

四45 2 ㊦ かつちゃんがおしまいにしてくれていったから、そうしたんじゃないか。

四46 2 ㊦ 「じゃあ、かつちゃん、きょうはどこにならびたいというの。」

四47 3 ㊦ かつちゃんがそういうなら、十五ぼんめにして、とぶことにしようじゃないか。

四48 6 たににさしかかったとき、かつちゃんが、「略。」と、声をたてました。

四49 2 かつちゃんは、十五ぼんめからわきにそれたかと思うと、

四四九 二十九わの がんは、あわてて かっちゃん
のところへあつまりました。
四四九 十 かっちゃん、いまの てっぼうで やられ
たということがわかりました。
四四二 力の つよい がんが、三ばで、かっちゃん
のおちていくのを、下からうけとめました。
四四四 ほかの がんは、右や 左から かっちゃん
を だきかかえました。
四四五 会 「かっちゃん、しっかりしろ。」
四四六 会 「かっちゃん、元氣をだせ。」
四五一 二 はなれてとべば 安全なのですが、いまは、
かっちゃんを たすけなければなりません。
四五一 十 かっちゃんは、とぶ 力が なくなつてし
まいました。
四五一 一 おもい かっちゃんを かつきながら 空を
とぶのは、よいなことではありません。
四四二 八 ちょうど、一まいの もうふの ようになつ
て、かっちゃんを ささえながら、
四四八 八 かっちゃんは、はねの つけねを うたれて
いました。
四四九 九 かっちゃんは ねつが でてきたので、
四四九 九 つぎの 日の あさ、かっちゃんは、ねつが
ずっと さがって、
四四六 一 会 「かっちゃんが、氣がついたよ。」
四四六 二 会 「かっちゃん。」
四四六 七 会 「ほんとによかったね、かっちゃん。」
四四七 二 かっちゃんが、立ちあがつて はばたきを
したので、みんなは 大よろこびでした。
四四七 四 その 日の ばんは、かっちゃんの 全快い
わいをしようという ことになりました。
四四七 七 かっちゃんの すきな おだんごを 作りま
した。

四四八 三 かっちゃんは、みんなの かおをみて、に
こにこしました。
四四八 七 かっちゃんは たのしんで いました。
四四九 九 かっちゃんは、どんどん でかけました。
四六一 六 かっちゃんは、「略。」と、おいのりを
しました。
四六二 二 かっちゃんは、もう 一ど 林の おくを さ
がしに いきました。
四六二 七 かっちゃんは、いきなり へびの くびに
かみつきました。
四六三 二 かっちゃんは、なかまの 手をとって、い
そいで とんで かえりました。
四六三 八 会 「きょうは、どう ならほか、かっ
ちゃん。」
四六三 九 こう いわれて、かっちゃんは、きまりわ
るそうに にこにこ していました。
四六四 一 会 「どうだい、かっちゃん。」
四六四 四 かっちゃんが、わびる ように ちょこんと
あたまを 上げたので、みんなも わらいました。
四六四 八 会 じゃあ、かっちゃんは、三ばんめに し
よう。
かっちゃんかっちゃん (副) 五 かっちゃんかっちゃん
三五六 副 かっちゃんかっちゃん 石を 切る。
三五一 一 副 かっちゃんかっちゃん 石を 切る。
三五一 四 副 のみより つよい うでさきで、かっちゃん
かっちゃん 石を 切る。
三五一 五 副 かっちゃんかっちゃん 日が くれて、火花
が みえる のみの さき。
三五一 八 副 のみの 手もととは くらくても、かっちゃん
かっちゃん 石を 切る。
かっちゃん (名) じおかって・おかってぐち
かっちゃん (形状) 6 かっちゃん じおかって・じ
おかって

ぶんかって・みがって
一四二 二 それから、この うたの ゆうぎを、みんな
が かってに かんがえて おどりました。
二四六 一 会 めくらが、ひとりひとり かってな こと
を いうので、
六六八 八 お話の 題は べつに きめませんから、かって
に つぎを 考えてください。
八八三 三 会 「どうぞ、かってに おいでよ。」そこで、
あひるの子は かけて いった。
一四四 五 二 養分を こしらえる 力を かまわずに、あ
なたが たが、かってに 花を さかせた からですよ。
一四四 七 七 戸の外で 聞いていると、あなたたちは、
ずいぶん かってな ことを していましたね。
かっちゃん (副) 一 かって
一四五 九 かって、バリーの 眞珠商 たちが、幸吉の 手
になる 養殖眞珠は、まがいものである といった。
がつてん じは やがつてん する・ひとりがつてん
かつてん (活動) (名) 一 活動
一三三 八 五 戦いは 敗れ、國は けずられ、國民の 意氣
は けずみ、その 活動は おとろえました。
かつてん・する (活動) (サ変) 一 活動する 《一ス
ル》
六四九 九 この 時計 ぜんたいが、ふたたび 活動する こ
とが できたのだ と思うと、
カップ じデビスカップ
かていきょうし 「家庭教師」(名) 四 家庭教師
一五二 八 八 それに、この 子どもたちを せわする、ひ
とりの 女の 家庭教師 が ついて いました。
一五二 一〇 この ふたりの 子どもたちは、両親や 家庭
教師 に つれられて、散歩に 出て 来る のでした。
一五二 一八 ふたりの 子どもは 家庭教師 に つれられて、
めずらしい 草花を つみながら、

十五223 われを追いてもするように、とかく家庭教師の手からはなれて行きそうにしてみました。
 かど「角」(名) 2 角 ↓ いわかど・いわかどちかく・ひとかど・まちかど
 九七6 めいめい、シャベルや移植ごてなどを持って、角のむきみ屋のところに集まっていた。
 十二16 日のあたるところ、かげになったところ、力のこもった角、まるみのある面、
 かとう「下等」(形状) 1 下等
 十五83 1 窓 あの人たちは下等でもあり、たいていはまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、
 かどで「門出」(名) 1 門出
 十五124 2 新しい旅の門出、希望をもって。
 かな「題名」 2 かな
 十五33 かな
 十五39 1 かな
 かな「仮名」(名) 5 かな ↓ かたかな・ひらがな
 六113 1 「ちがったかなをならべたもの」ぐらいに思っ、
 十五39 1 かなは、日本の文化にとって、ほんとうに大きな発明で、
 十五40 1 このかなのおかげで、日本のことばを、〈略〉自由になつていけるようになった。
 十五40 3 あの有名な〈略〉などは、すべてこのかなによって書かれた作品である。
 十五40 4 かなに漢字をてきとよにまぜるのが、文章のふつうの書き表わしかたとなっている。
 かな(終助) 8 かな
 九28 4 1 窓 ほし草にかげおとしとぶとんぼかな
 九28 6 1 窓 大空にのびかたむける冬木かな
 九29 1 1 窓 かい道をきちきちとぶばったかな
 九29 3 1 窓 うらがれにおろされ立てる子どもかな

九114 3 1 窓 いもうとの小さき歩みいそがせてちよ紙かいにゆく月夜かな
 十四82 1 1 窓 世の中は、三日見ぬまのさくらかな
 十五6 4 1 窓 家を出て手をひかれたるまつりかな
 十五6 5 1 窓 六つほどの子がおよくゆえ水わかな
 かなあみ「金網」(名) 1 かなあみ
 三37 6 1 窓 かなあみにからだをつけるようにして、ねています。
 かない「家内」(名) 1 家内
 十一34 5 1 窓 さなえ運ぶ子、うし追うおきな、家内そろって田植えする。
 かないじゅう「家内中」(名) 1 家内じゅう
 十二23 6 家内じゅうが歓声をあげているといつても、いいすぎではありません。
 かなう「適」(五) 5 かなう 《イ・ウ・ワ》
 六134 6 どうせ、足の早いことにかけては、しかさんかないません。
 九18 5 汽車や自動車もかなわないくらいの早さですから、
 十四12 1 窓 世界のために、きつと、あなたの願いがかないます。
 十二88 7 人のいうことばのわけをよくききわけて、それによくかなうようにしなくてはならない。
 十二88 9 もし、そのわけにかなわないことをすれば、たいへんおかしいことになるばかりでなく、
 かなえ「鼎」(名) 1 かなえ
 十五82 5 ふしぎなくだものを、水がめや、ひっくりかえったかなえなどの間で、たべたり、
 かなかなぜみ「蟬」(名) 1 かなかなぜみ
 三50 3 1 窓 かなかなぜみも 目がさめて、かぜにゆれゆれさきました。
 かながわけん「神奈川県」(地名) 1 神奈川縣かながわけん

十一19 1 生まれたところは、神奈川縣のかやま村といつて、
 かなぐりすてる「捨」(下) 1 かなぐりすてる
 《一テ》
 十五63 5 おじさんは、きちんと着ていた上着をかなぐりすてて、かた手に小さなくつを持ち、
 かなし「悲」(形) 1 悲し 《一シキ》
 十二7 10 1 窓 「七重八重花はさけどもやまぶきのみひとつだになきぞ悲しき」
 かなしい「悲」(形) 15 かなしい 悲しい 《一イーク》
 三109 5 月がうつしくなると、かぐやひめのようすはいつそうかなしそうにみえました。
 四131 6 天人は、かなしそうなかおをして、空をみあげます。
 八13 1 私は、ピオの信頼をうらぎったのが、かなしくてなりませんでした。
 八42 1 1 窓 「いや、いや、わたしは、こんなかなしいことはありません。」
 八89 1 そうして、なんだかなしい思いがこみあげてきた。
 九57 7 男は、下を向いて、かなしそうにいました。
 十一69 6 すると、かなしくなってきたしました。
 十一71 10 少年は、かなしい思いにしずみながら、
 十二96 9 なつかしいことや、楽しいことや、ときには悲しいことなどもあるでしょう。
 十四9 6 1 窓 あなたのルイは、たいへんかなしい思いをしなればなりません。
 十四15 1 1 窓 おかあさんが、もし、かなしいお氣持になられたときには、
 十五102 10 1 窓 いつでもすこし悲しそうにしているの

は、だれもふり向いてくれないからです。

十五106 4 〔善人であることの大きな喜び〕で、

いちばん幸福なのですが、いちばん悲しそうです。

十五112 12 〔それに、おかあさんたちが悲しそうな顔をしているときでも、ほおずりをしてもらえば、

十五122 4 うれしいような、楽しいような、悲しい

ような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。

かなしがる 〔悲〕(五) 2 かなしがる 《ーッ》

十四69 9 〔いちばんつらかったことは、おかあさん

十四88 8 〕それは、おかあさんがかなしがっていら

かなしげ 〔悲〕(形状) 2 かなしげ

十四93 2 雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわ

十四93 5 美しく火のともった家々の前を、そろそ

かなしみ 〔悲〕(名) 7 かなしみ 悲しみ

三116 3 ふしのくすりと手紙は、かえってかな

十一17 10 わきあふれるなぐさめの泉に、かなしみ

もいたも、あとなくぬぐわれます。

十一78 7 愛情とかなしみとのまじりあった、しみ

じみとしたそのちようしに、

十二38 8 生まれてはじめて、くやむ心と悲しみに

に胸をさされました。

十二47 6 喜びや、悲しみや、傳説や、歴史やを

美しく舞台にあらわそうとする望みもあるのだ。

十三5 9 長くかなしみにしずんだものにも、春は、

希望の帰ってくるとき。

十四9 7 かなしみのために、おからだをおいた

めになるなんて、

かなしむ 〔悲〕(五) 1 かなしむ 《ーム》 1 おか

なしむ

十四35 4 しかし、それだからといって、すこしも

かなしむことはありません。

かなた 〔彼方〕(代名) 1 かなた

九17 1 つばめのゆくさきは、遠い南の海のかなた

です。

かなづち 〔金槌〕(名) 1 かなづち

三35 9 かなづちで、くぎをうっている人も

あります。

かならず 〔必〕(副) 5 かならず 必ず

十二47 4 〔だから、人間がいるところには、かな

らず詩もあれば、絵もある。

十三21 5 〔自然は、このむずかしい問題を、か

ならず解決してくれるにちがいない。〕

十三44 3 しはいは、かならず、ふたり以上の会話

から組みたてられています。

十四64 1 しづくになるときは、かならず、なに

か、そのしづくのしんになるものがあって、

十五61 5 〔「略。』と、必ず書きそえてあったの

を見て、その愛されかたがわかる。〕

かなり 〔可成〕(副) 7 かなり

七41 7 汽車は、かなり早く走っているの、青年

のからだはゆれていたが、

十一60 2 近道というのは、田のあぜ道で、とちゅ

うに、かなり深い小川にかけ渡した一本橋がある。

十二74 10 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重

いので、二三日は困ることもあります。

十三57 11 絵は、写真で見ただけでは、明暗はか

なりわかるが、色がわからない。

十四66 7 すぐ上から大きなうずができて、それが、

十四87 1 説明のことばなどによって、かなり生き

生きと表現することができそうである。

十五60 8 心をゆるした間がらのこととて、両者の

つきあいはいかなりひんぱんであった。

カナリヤ 〔題名〕1 カナリヤ

三56 1 カナリヤ

カナリヤ 〔名〕4 カナリヤ

三56 2 〔うたをわすれたカナリヤは、うしろの

山にすてましょか。〕

三56 5 〔うたをわすれたカナリヤは、せどの

こやぶに いけましょか。〕

三57 1 〔うたをわすれたカナリヤは、やなぎの

むちで ぶちましょか。〕

三57 4 〔うたをわすれたカナリヤは、どうげの

ふねに ぎんのかい、月夜の海にうかべれば、

かに 〔蟹〕(名) 1 かに

九116 6 〔ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤き

かにいてすぎの山しずか

かね 〔金〕(名) 2 金 1 おかね・こがね・こがね

いろ・はじめてのおかね・はりがね

八46 8 金もあり、からだもりっぱで、なんの不自

由もなくくらししているかと思うと、

十一27 10 そんなわずかな金がないということはい

えません。

かね 〔鐘〕(名) 3 かね 1 つりがね・われがね

二21 4 〔しまいまでみていたいとおもいまし

たが、かねがなつたので、やめてきました。〕

十五67 12 たどりついたげんかんには、おもむきの

あるかねがつるしてあって、

十五68 3 〔「略。』とよんだつもりで、私はかね

をカーンとたたいた。〕

かねがね 〔予〕(副) 1 かねがね

十五547 園 きみは、かねがねジョルダン博士から
いつてきている日本の学徒、〈略〉くんでしょう。
かねたいちろうさま 「人名」 1 かねたいちろうさ
ま

九474 園 かねたいちろうさま。

かねたいちろうどの 「人名」 1 かねたいちろうど
の

九708 園 これからは、はがきに、かねたいちろう
どのと書いて、こちらを裁判所としますが、

かねもち 「金持」(名) 5 かねもち 金持 ↓おか
ねもち

三1026 おじいさんの うち は だんだん かねもち
になりました。

五724 園 わたしは金持のおくさんになりました、
女王になりましたってたのんでおくれ。

五735 園 おばあさんは、もう金持のおくさんはい
やだ、女王になりたいといっています。

八373 あるところに、金持の王さまがいらつしや
いました。

八467 金持だと思ふとからだがよわかったり、か
らだがじょうぶだとちえがたりなかったり、

かねる ↓いただきかねる・ことわりかねる・たまり
かねる・ときかねる・まちかねる・わかりかねる

かば ↓しらかば

カパー ↓おしめカパー

かばこ 「庇」(五) 6 かばう 《イ・ウ・ツ》
七355 私は、ありつたけの力をだして、さぶろう

をかばうように両手をつっぱりました。

八701 「略。」といつてかばった。

十419 うめは、いつもこのわる口のためとなつて、
幸吉をかばい、苦しみにたえて、

十五2917 少年は、右手に短刀をふりかざし、左手

で女の子をかばい、

十五309 少年が女の子を後にかばうようにして、
すこしあとずさつて、岩角へ身をよせかけたとき、
十五312 その中で、女の子を後にかばいながら、
少年は苦しい戦いを続けていました。

かばん 「鞆」(名) 10 かばん

一465 かばんをあけてなかをみせますと、
五164 園 「さあ、このかばんにはいるんだよ。」
といつて、私たちをみんなかばんにいれました。

五165 「略。」といつて、私たちをみんなかば
んにいれました。

五1610 こんな話で、かばんの中はにぎやかです。
五1910 ふくろの中からだされて、ほつとしてい
ると、こんどは、また、かばんの中にいれられまし
た。

七51 園 かばんをカチャカチャ鳴らして、走つて
くる男の子かな。

七59 かばんをカチャカチャ鳴らして、げたばこ
のかげにかくれた。

九481 はがきをそつと学校のかばんにしまつて、
うちじゅうを、とんだりはねたりしました。

九912 そのほかの友だちが、落ちていゝるやまだの
かばんやぼうしをひろつてあとにつづく。

九964 やまだの顔を見ると、きゆうにまたつんと
なつて、だまつてそれを取り、かばんにいれる。

かびをちょうだい 1 カビヲチョウダイ

六1053 園 「カビヲチョウダイ。」ときこえたので、
〈略〉、みんなで大わらいをした。

かびん 「花瓶」(名) 3 かびん

三344 園 まつ白な かびんに、赤い 花が さして
ありました。

五778 先生をつくえのかびんに、大きなひまわり

の花が、三本かざつてありました。

十一435 正面のテーブルには、赤いうめの花をい
けた、大きなかびんがかざつてありました。

かぶ 「株」(名) 3 かぶ ↓きりかぶ・ごかぶ・ひ
とかぶ・ひやくごじつつかぶ

八1059 1かぶのくきの数を数えてみますと、大き
なかぶは30本もありました。

八1062 1本ずつ植えたかぶには、ほか10ぐらいつ
いていました。

八1063 3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いの
で16、ほかのは、だいたい12ぐらいでした。

かぶ 「蕪」(名) 1 かぶ

四142 にわとりが、かぶのはつばを たべてい
る。

かぶき 「歌舞伎」(名) 1 かぶき

十633 能は、〈略〉、かぶきや、ほかのしはいとも
いろいろちがうところがあります。

かぶさる 「被」(五) 1 かぶさる 《ーツ》

十四738 湯のおもてに、にじの色のついた、きり
のようなものがひと皮かぶさつており、

かぶせる 「被」(下二) 3 かぶせる 《ーセーセ
ル》

十二502 正方形の一まいにのりをつけてつつか
ぶせる。

十二506 首のところだけのこして、もんだ紙にの
りをつけないで、上から上からかぶせる。

十二507 首のほうからもかぶせてまるくしてから、
細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。

かぶとむし 「兜虫」(名) 1 かぶとむし

八1810 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、
つみごえやこえ土の中に生みつけられて、

かぶばり 「株張」(名) 1 かぶばり

十一 363 園 日はまた照って水たつぷりと、いねのかぶりここのうえもなく、

かぶり じねこかぶり

かぶり 〔頭〕(名) 1 かぶり

十二 29 民ちゃんをだいてやろうとすると、かぶりをふって、「略」というのでした。

かぶりもの 〔被物〕(名) 1 かぶりもの

十二 105 4 この人たちの着物やかぶりものなども、いまのものといふんちがっています。

かぶる 〔被〕(五) 10 かぶる 《ツ・ラーリ》

四 83 7 赤いふくをきて、三かくぼうしをかぶり、まっ白なあごひげをつけた

五 71 4 おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴかぴか光るずきんをかぶり、金のうでわをはめ、

六 28 3 ぼうしもかぶらず、がいとうもきていません。

七 5 8 園 きょうは、ぼうしをかぶっているな。

七 43 11 そこで、老人は、自分のかぶっていたぼうしを、そばの人の手に渡した。

十 14 2 手ぬぐいのようなものをかぶった女の人のちが、ならんでせんたくをしていました。

十三 37 7 三郎が、ぼうしをかぶったままとびこんで来て、受話器をとる。

十四 48 10 頭から大波をかぶっても、平気で歌を続けていました。

十五 108 7 園 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

十五 118 8 光いよいよペールをかぶって、「略」。

かふん 〔花粉〕(名) 5 かふん

五 49 8 園 のたりのたりとわたし船、かふんやそよ風のせてでる。

七 41 2 ちょうど、かふんにまみれたみつばちのよ

うになって、汽車でねむっていた。

十三 9 6 おしべのかふんがめしべにつかないようなくふうと、

十三 9 8 かふんがめしべにつくときはよくみのが、つかないときはみられないことを、

十四 59 11 園 ぼくがとびまわって、かふんをなかだちしてあげなかったら、

かべ 〔壁〕(名) 19 かべ

二 35 3 園 はあ、ぞうはかべとおなじだ。

三 21 6 できあがったものをうしろのかべにはりました。

三 32 4 園 あがった ところの かべには、 えがはってあります。

四 23 1 園 やねも、かべも、はしらもかきました。

五 35 5 まわりのかべに、石炭がでています。

六 5 6 まわりのかべやガラス戸などには、いろいろな時計がたくさんならんでいる。

十 20 5 園 「さあ、その白いかべに、プリズムでわけた光を写してみますよ。」

十一 90 4 看護婦が十字かぞうをかべからはずしました。

十三 37 4 右がわのかべに、電話がとりつけてある。

十三 60 4 ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、かべにかかっている一まいの絵を見ました。

十四 11 8 園 ランプはかべにおかけなさい。

十四 72 11 日のあたっているかべや屋根をすかして見ると、

十四 72 12 かべや屋根が熱せられると、

十四 81 6 園 かべに耳あり。

十四 95 1 かべにこすりつけて、火をつけた。

十四 96 6 女の子は、「略」、もう一本のマッチをとってかべでこすった。

十四 96 9 その火の光のさすところは、かべがきぬのようにうすくなって、

十四 97 8 女の子のそばには、あつい、かたいかべしかのこっていないかった。

十五 102 1 園 かべをたたき落し、屋根をもちあげるほどの喜びをこしらえているのですよ。

かべいた 〔壁板〕(名) 1 かべいた

五 80 7 かべいたもふきました。

かべぎわ 〔壁際〕(名) 1 かべぎわ

十二 26 11 とりついてぐんぐんおしていつて、かべぎわにおしつけてしまったりします。

かべしんぶん 〔課名〕2 かべ新聞

六 3 1 六 かべ新聞……五十六

かべしんぶん 〔壁新聞〕(名) 4 かべ新聞

六 56 2 私の学級では、来週から、かべ新聞を発行することになりました。

六 57 3 こんど私たちの学級で、かべ新聞を発行することになりました。

六 58 2 「楽しい学級は、かべ新聞から。」

六 69 4 かべ新聞の大きさは、わら半紙を四まいはりあわせたものです。

かべしんぶんがかり 〔壁新聞係〕(名) 1 かべ新聞がかり

六 65 8 このなぞの答がわかった人は、紙に書いてかべ新聞がかりのものにだしてください。

かべしんぶんだいいちごう 〔題名〕1 かべ新聞第一号

六 57 1 かべ新聞 第一号

かべしんぶんだいいちごう 〔壁新聞第一号〕(名) 1

かべ新聞第一号

六 56 4 かべ新聞第一号は、一組でつくることにな

りました。

かぼそい「細」(形) 1 かぼそい《—イ》

十一 169 ひく、かぼそい、おさな子のささやきも、ききもらさない、その耳。

かぼちゃ「南瓜」(名) 23 カボチャ かぼちゃ

三 493 圃 かぼちゃの花がさきました、あんなところにさきました。

三 501 圃 かぼちゃの花がさきました、はかげにふたつさきました。

六 609 圃 カボチャノハナガ—七 サキマシタ—

—五 アンナトコロニ—七

十一 407 圃 ほしたかぼちゃは赤やら黄やら、にわとりどもはひなたぼこ。

十四 2210 それから、タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、外国語であつたとお話しになったので、

十四 241 圃 タバコ、カルタはポルトガル語、キセルとカボチャはカンボジア語だといわれている。

十四 512 ある家の、かぼちゃのとりいれまつりの晩のことでした。

十四 515 圃 このかぼちゃはだれのものか。

十四 524 圃 もちろん、このかぼちゃは私のものです。

十四 526 圃 根や、つるや、葉のないかぼちゃはありませんが、それだけでは実はずきません。

十四 528 圃 花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。

十四 5210 圃 こんな、十キロもあるような大きなかぼちゃでも、

十四 5312 圃 とちゅうから、黄色くなって落ちてしまったたかぼちゃの花を見えています。

十四 543 圃 だから、このかぼちゃは、全部私のものだと思います。

十四 554 圃 だから、私は、やつぱりそのかぼちゃは、私のものだと思います。

十四 565 圃 私が運んであげなかったら、りっぱなかぼちゃの実にはなりません。

十四 572 圃 だから、私は、そのかぼちゃは、全部私のものだと思います。

十四 5711 圃 いったい、かぼちゃは熱帯地方のものです。

十四 588 圃 この大きなかぼちゃは、ずいぶんかたいうようですが、やつぱり、この大部分は水です。

十四 595 圃 しかし、土にはえていないかぼちゃなんて見たことがない。

十四 601 圃 だから、あのかぼちゃは、みんなぼくのものだといってもいいのです。

十四 615 圃 このかぼちゃは、だれのものとも、簡単にはいえませんが。

十四 618 圃 このかぼちゃは、お礼に、すっかり人間にあげてしまつても、

かぼちゃのはな「題名」 1 かぼちゃの花

三 492 かぼちゃの花

かま「釜」(名) 1 かま

五 349 ガスこんろにかけたかまやなべから、ゆげがふきでています。

かま「鎌」(名) 3 かま

九 386 圃 長い竹ざおのさきにかまをくくりつけて、ひっかけるようにして、

九 3811 圃 母たちもぼくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけてやる方法を知らなかったで、

九 628 大きなかまをとりだして、ザックザックとやまねこのまへのところの草をかりました。

三 487 圃 早く川の水でからだをあらつて、がまのほをしいて、その上にねるがよい。

かまい「おおかまい・おかまいなし」

かま「う」(構) (五) 8 かまう《—イ—ツ—ワ》

八 895 圃 しかし、かまわない。

九 7011 圃 「ええ、かまいません。」

十 709 圃 「かまわない、おれはたべてやる。」

十三 412 圃 そんなこと……かまわないよ。

十四 117 圃 このランプは、石油でもきはつ油でも、どちらをおつかいになつてもかまいません。

十四 542 圃 養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがたが、かつてに花をさかせたからです。

十五 298 きずのいたみもかまわず、おそろしいきおいで少年にとびかかつて來ました。

十五 935 圃 物をたべているときは、だれにもかまえてもらいません。

かま「え」(名) 1 かま

かま「え」(名) 1 かま

かま「え」(名) 1 かま

三 364 圃 大きなかまどがふたつもあります。

十五 986 チルチルがまんがでなくなつて、

「略」。

がまんする「我慢」(サ変) 3 がまんする《—シ》

- 六二七 かくれているうさぎさんたちは、おかしいのをがまんしながら、「略」といって、
 七三六 図 「さぶろうさん、もうすこし、がまんしていらつしやい。」
 四八六 図 つらいのをがまんして生きていきます。がまんづよい「我慢強」(形) 1 がまん強い「一イ」
 十三二六 誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、
 かみ「上」じかわかみ
 かみ「神」(名) 8 神じうみのかみ
 六八七 図 海の神のごてんです。
 六八三 図 すると、海の神は、きつといいことを教えてくださるでしょう。
 六九八 正面に、海の神がこしをかけていらつしやる。
 六九五 海の神は、しばらくお考えになって、女の人に、「略」。
 六九三 女の人はずりばりを水であらって、海の神にさしあげる。
 六九五 海の神は、ほおりのみことのまえにさしだしながら、
 十五七四 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、
 十五七五 図 神は、みずから助くる者を助く。
 かみ「紙」(名) 30 かみ紙じあつがみ・いちまいのかみ・いろがみ・おてがみ・からかみ・ぎんがみ・ちよがみ・てがみ
 一六四 かみもつかいます。
 一四七 図 おとうさんのもっていた四かくなかみに、まるいおおきなはんをおしてくれました。
 二一四 そこで、みんなは、小さなかみに、ひと

- つひとつことばをかきつけました。
 三三六 図 「びかびかのかみかしら。」
 三九四 一まいの紙で、いろいろなものをおることができます。
 三九四 この一まいの紙が、いろいろなかたちになったり、ふくれたり、立ったりします。
 三九五 この一まいの紙に、えをかくことができます。
 三九六 また、この一まいの紙に、字をかくことができます。
 三九七 心に思ったことは、いつのまにかきえてしましますが、紙にかいたものは、いつまでものこります。
 三九八 紙にかいたおはなしは、いつまでものこります。
 三九五 一まいの紙にかいたえを、どこにかざりましょう。
 三九七 紙にかいた字を、どこへおくつてあげましょう。
 三九九 どんなところでも、紙は、字やえをはこんでくれます。
 五九四 私は、いままできた土星を、紙にいていにかいておこうと思いました。
 六六八 このなぞの答がわかった人は、紙に書いてかべ新聞がかりのものにだしてください。
 六九七 きちんとはまったとき、まいた紙を糸でできりきりとまいて、動かないようにした。
 六九五 図 「紙をちょうだい。」というのが、「略」。
 ときこえたので、
 六九三 「紙」の「ミ」、「かむ」の「ム」がいいにくらいしい。
 六九四 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹

- 二本と、それに、たこ糸やのりなどです。
 六九四 紙は半紙でいいし、骨は工作のあまりのひごでまにあわせました。
 六九四 紙のうらには、まん中に、ま四角に切ったときにつけたすじがたてについています。
 六九四 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。
 六九五 じっさいに紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ、ちょうどいい長さにひごを切りました。
 七五二 紙が、くるくるまいてとんでいく。
 九四三 白い紙に赤い色をぬりますと、明かるい感じになります。
 一二五〇 首のところだけのこして、もんだ紙のりをつけないで、上から上からかぶせる。
 一二五四 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家を作っておく。
 一二五五 絵をかく人と、それを木にはりつける人と、紙にすりあげる人との共同作品なのです。
 一三三六 正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。
 一五二八 図 紙をもてランプおおえばガラス戸の外をつくの明らけく見ゆ
 かみきれ「紙切」(名) 2 かみきれ 紙きれ
 三九二 くさをちぎっていれたり、かみきれをいれたりする小さな子がいたら、
 一四八 ために、私は、妹のいっていることばを、紙きれに書きとめてみたのです。
 かみきれ「嚙切」(下一) 1 かみきれる「一レ」
 七八四 図 草をくいとったあとをみますと、かみきれないで、のこっている葉がありました。
 かみころす「嚙殺」(五) 1 かみころす「一ス」

九四四 かくれていて、ほかの虫がひっかかると、

いきなりとびついてかみころすなんて、

かみさま「神様」(名) 13 かみさま 神さま

四六七 四 「かみさま、どうぞなまを たすけて

ください。」と、おいのりをしました。

六九一 海(海)の神さまに、申しあげます。

六九二 だいいじなだいいじなつりばりが、できて

て神さまお喜び。

六四九 うさぎさんたちは、いっしんになって、神

さまにおいのりをしました。

十一九〇 神さまがきみをまもってくださいるだろ

う。

十二四二 どうぞ神さま、おまもりください。

十四九九 「なにかが、神さまのところへ行くの

だ。」と、女の子は思った。

十四九九 星の落ちるときは、なにかのたましいが

神さまのところへぼつていくのだと、

十四九九 そのマッチの火の中で、もうとつくにわ

かれて神さまのおそばへ行つたおばあさんを見た

十四一〇 上の方へと、神さまのおそばへ行くかの

ようにのぼつて行つた。

十四一〇 その子がどんなに幸福に、神さまの樂園

の中で、元日をむかえているかを知らないのだ。

十五一〇 むかしの神さまのような、金びかの着

物を着てついています。

十五一〇 みなさん、私は神さまのおいつけを

守っているのです。

かみさん「上」↓おかみさん

かみしばい「紙芝居」(名) 1 紙しばい

四八四 二ばんめに、となりのうちのひでおさん

が、おもしろい紙しばいをしました。

かみつ・く「囃付」(五) 5 かみつ・く《一・イ・カ・

ーキー・コ》

四六二 かつちゃんは、いきなりへびのくびに

かみつきました。

八六二 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくい

あひるの子の首すじにかみついた。

八六六 「あんまり大きすぎてみつともないから、

かみつきたくなるんだよ。」

八七一 あひるにはかみつかれ、にわとりにはこず

きまわされ、

八七五 「自分がみにくいので、いぬもかみつこ

うとしない。」

かみて「上手」(名) 1 かみて

六二四 ありはなんにもいわないで、おもい足どり

でかみてにさつていきます。

かみてはんぶん「上手半分」(名) 1 かみて半分

六二六 かみて半分はありのいえの中、しもて半分

はそとになっています。

かみなり「雷」(名) 3 かみなり

四七〇 すずとかけて、なんととく。かみなりと

とく。

六四二 「略。」という、それこそかみなりのよ

うな声がひびきました。

十四六六 そうして、ひょうが降つたり、かみなり

が鳴つたりします。

かみのけ「髪毛」(名) 4 かみのけ かみの毛

三一一 あまりしんぱいしましたので、かみのけ

が白くなり、こしもまがつてしまいました。

五八六 黒いかみのけがふさふさして、まるい目

が二つあって。

十一六九 かみの毛は白くなり、ひげはのび、

十四九三 その子のきれいなかみの毛は、両かたに

まつわりつき、

かみふうせん「紙風船」(名) 1 紙ふうせん

三九二 きつねや、だましづねや、紙ふうせんなど

もおるができます。

かみやま「神山」(地名) 3 神山 神山

十二五七 秋田縣の男鹿半島に、神山、本山という

二つの山がある。

十二五五 ふしぎなことに、神山のほうには、昔か

ら九十九だんの石だんがでている。

十二五八 昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎

年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、

かむ「噛」(五) 5 かむ《一・ム》

四六八 子が二三百、こ米が一びょう、子が

もこ米かむ、かも米かむ。

四六八 子かむこ米かむ、かも米かむ。

六一六 小さなありでも、力まかせにかんだので、

かりうどもびつくりして、

七九二 ほかのうさぎがかんだのです。

八一〇 おこつたりすると、赤い口をあけて、私た

ちをおどしたりかんだらします。

かむ「五」3 かむ《一・ム》

六〇八 「はなをかむのかい。」といったのであ

る。

六〇八 「はなをかむ。」ということばを、その

ようにいったことがあるのではない。

六〇八 「かむ」の「ム」がいにくいらしい。

カムイン(感) 1 カムイン

十五五三 「カムイン」と答える、ひくい、し

かも力強い声に、

かめ「亀」(話手) 15 かめ

四〇七 かめ「うらしまさん。」

四〇九 かめ「うらしまさん。」

四〇六 かめ「このあいだ、たすけて いただいた

かめでございます。

四103 10 かめ「おかげさまで、このとおりじょうぶになりました。」

四104 9 かめ「お札に りゅうぐうへ おつれしようと

四105 5 かめ「さようでございます。」

四106 2 かめ「ごあんないいたしましたししょう。」

四106 6 かめ「もうじきでございます。」

四106 9 かめ「ごらんさい。」

四107 3 かめ「あれがりゅうぐうの ご門でございます。

四108 8 かめ「ここがりゅうぐうでございます。」

四109 4 かめ「さあ、どうぞその こしかけにおかけください。」

四110 2 かめ「この かが うらしまさんでございます。」

四111 8 かめ「りゅうぐうは いつも こうなのですよ。」

四117 10 かめ「わたくしが また、おともを いたしませう。」

かめ「瓶」(名) 1 かめ びんみずがめ
十二100 4 形も、かめや、はちや、いろいろのもの
があります。

かめ「亀」(名) 22 かめ

二16 8 すずめめだかかめめじろ ——

四96 5 四人の子どもが、一びきのかめをとり
まいて、あそんでいます

四96 7 10 このかめをころがしてあそぼう。

四97 2 かけ声を かけながら、みんなで かめを
ころがします。

四97 6 10 おもしろいから、かめをころがしてい
るのです。

四98 5 10 そうだ、わたしに この かめを うって
くれないか。

四99 4 10 この かめを うりましょう。

四100 5 うらしまは、かめを だきおこして、せな
かを さすって、

四100 8 かめは、手で なみだを ふきながら、なん
ども おじぎを します。

四101 6 かめは、ていねいにおじぎをして、海の
方へ いったしてしまいます。

四101 9 うらしまは、かめの うしろすがたを みお
くります。

四102 3 である人 うらしまろう かめ

四102 6 そこへ かめがでてきます。

四103 1 かめがよびかけても、うらしまは、〈略〉
ので、気がつきません。

四103 3 かめは、すぐそばまで いった、大きな
声で、〈略〉。と います。

四103 6 10 このあいだ、たすけて いただいたかめ
でございます。

四106 3 かめは、うらしまの手をとって、そこら
をぐるぐると あるきまわります。

四108 6 そこへ、かめが うらしまを あんないして
は いてきます。

四110 6 10 このあいだは、うちのかめをおたすけ
くださいまして、ありがとうございます。

四111 4 かめはそのそばにならびます。

四116 5 かめが たまたまばこをもってきました。

四118 3 かめが、うらしまの手をとって、でて
いきます。

かめさん「亀」(名) 6 かめさん

四100 4 10 かめさん、かめさん。

四100 4 10 かめさん、かめさん。

四100 7 10 かめさん、かめさん。

四100 7 10 かめさん、かめさん。

四103 5 10 おや、だれかと思ったら、かめさんか。

四103 8 10 あのかめさんかい。

かも「鴨」(名) 5 かも かもがも

四68 7 子がもが 二百ば、こ米が 一ぴょう、子
も こ米 かむ、かも 米 かむ。

八72 4 そこにはかもが住んでいた。

八72 6 朝がた、かもがとびおきた。

八72 8 「略」。と、かもがいった。

九42 1 10 かももきました。

かも(終助) 1 かも

十五14 5 10 目をあけてつくづく見ればばらの木
にばらがまっかにさいてけるかも

かもつじどうしゃ「貨物自動車」(名) 1 貨物自動
車

九21 8 その夜半には、また一台の貨物自動車が、
五千ばのつばめをつんできました。

かもつせん「貨物船」(名) 1 貨物船

五33 1 これは貨物船です。

かもつれっしゃ「貨物列車」(名) 1 貨物列車

五32 6 おや、むこうからも長い、長い貨物列車が
やってきました。

かもめ「鷗」(名) 3 かもめ

四126 6 10 かもめ すいすいとんで いく。

四135 3 10 かもめ すいすいとんで いく、空には
んのり ふじの山。

八56 8 波うちぎわのかもめが目について、それに
氣をとられて、

かや「樗」(名) 4 かや

九54 3 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木
の森の方へ、新しい小さな道がついていました。

九54 6 かやの枝は、まつ黒にかさなりあって、青空は一きれもみえず、
 九55 2 まわりは、りっぱなオリブ色のかやの木
 の森でかこまれていました。
 九63 4 すずの音は、かやの森にガララン、ガララン、とびびき、
 かや「蚊帳」(名) 1 かや
 九26 2 罫 かあさんがぼんやりみえるかやの中
 がやがや (副) 2 ガヤガヤ
 六139 1 うさぎさんたちがあまりガヤガヤ話をするので、目をさましてしまいました。
 十五32 2 そのとき、がけの中ほどから、ガヤガヤという人声が聞えてきました。
 がやがやがやがや (感) 3 ガヤガヤ、ガヤガヤ
 九65 6 もうみんなガヤガヤ、ガヤガヤいって、
 九66 9 ガヤガヤ、ガヤガヤ、また、なにがなんだかわからなくなりました。
 九67 7 頭のとがったのが——「ガヤガヤ、ガヤガヤ——やまねこがさげびました。
 かやこし「蚊帳越」(名) 1 かやこし
 九29 4 罫 かやこしの電燈のたまておりぬ
 かやまむら「栢山村」(地名) 1 かやま村
 十一19 1 二宮金次郎の生まれたところは、神奈川縣のかやま村といって、さかわ川にそった村です。
 かゆい ↓はがゆい
 かよう「通」(五) 5 かよう 通う 《「ウーッ」
 四90 6 学校へ かよう 子どもたちのことを思つて、おもてのとおりをさつさとほく。
 六69 2 一ばん遠くから通っている子どもの名や家の場所を書きました。
 六70 9 そこへ、中学校に通っているねえさんが、帰ってきました。

十35 2 佐吉は、上京して機械館へ毎日かよった。
 十五80 2 人々の間に、友だちとして心のかよったおつきあいができるようになったのは、
 がようし「画用紙」(名) 2 画用紙
 六101 4 ぼくは画用紙をとりだした。
 六101 9 つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐる
 とまいた。
 から「殻」(名) 2 から ↓かいがら・なきがら・ぬけがら・もみがら
 九79 6 罫 この土の上に白くみえているのは、むかし海の中にいたいろいろな貝のからです。
 十56 4 ここで、いままでの作文のからをぬぎさつて、新しい世界にふみだしていこうと思います。
 から(格助) 690 から ↓あさからよるまで・おりから・がいこくからきたことば・かずおのてちょうから・がつきゅうにつきから・それから・ひとつのことばから・みるから・やぶからぼう
 一31 8 うひとつのことばから、おもいだした
 一38 5 こいぬが、むこうからころげるように
 一40 7 「へ略」つじから ないでる。「へ略
 一55 9 いって、ぼけつとからうずらのたまご
 一57 4 うだいです。きしゃから かけおいて、手
 一61 4 ろちゃんふくろから だいやもんどを
 一62 8 わすと、山のうえから、おおきな お月
 二13 1 。おぼさんのうちから、大きなりんご
 二17 6 罫 そびました。「口から たべて、おなか
 二17 6 罫 たべて、おなかからだすものはな
 二19 6 りがいったことばから、おもいついた
 二24 8 罫 ています。これから うんどうかいを
 二29 3 罫 きしにあがってから、かすを かぞえ
 二37 5 罫 。「きのう、学校から かえるとき、く
 二37 8 罫 小さむ。山から 小ぞうが とんで

二46 7 罫 お月さまが、くもから でてくるとこ
 二53 6 かあさんは、さちこから りんごをもらい
 二54 3 罫 いちろうにいさんからもらったのです。
 二55 3 ねどこにはいつてから、こんなことを
 三9 5 罫 あまちゃんの中から ひよっこりと、
 三13 10 ばは、きたない 心から うまれてくる
 三14 2 ばは、きれいな 心から うまれてくる
 三17 6 はんたかの からだから、きれいな 光が
 三23 1 ひろがって、どこから どこまで つづい
 三31 3 罫 ています。まどから 光が さしこんで
 三42 2 さんが、左のかたからはなれて、麦ば
 三43 2 ぎ 白うさが、鳥から むこうの りくへ
 三63 3 もしろく あそんでから 丘を おりて み
 三71 5 、デビッドは いすから おりて、つまん
 三72 1 パラは、だいどころから ほうきをもつて
 三74 1 罫 た。「これ、どこから やつてきたの。
 三74 7 罫 でした。「まどからのぞいて ぐらん
 三75 2 罫 の光は お日さまから やつてきたのね
 三99 6 罫 が 大きく なって から、それをみるの
 三102 4 そだてました。それから というものは、
 三103 10 して、かきねの上からのびあがつて み
 三104 1 り、へいのすきまからのぞきこんだり
 三108 8 そののち、みかどから たびたび お手紙
 三109 1 年の 春のころから、月のきれいな
 三110 4 罫 夜には、月の 國から むかえがきて、
 三113 1 た。そのうちに、空から 大ぜいの 天人た
 三117 8 けむりが、山の上から いつまでもいつ
 四4 6 の知らせは、ここから きます。学校に
 四9 5 じやさんです。あさから ばんまで、トッ
 四12 4 たりします。ここから、とおいとおい
 四12 7 。とおいとおい 町から だいじなものか
 四14 7 さしているところから、小鳥が とびた

四一七 が見えるの。学校からかえったら、お
四一九 いての人をきめてから、文を書きまし
四二三 した。あのまどから、にいさんとよ
四二五 ど、いつおふねからおかえりですか。
四二五 がいなくなつてから、もう半年もた
四二七 くれたら、かごからはなしてあげる
四二九 な。となりのうちから、うさぎをもら
四三六 手。「きのう、学校からかえるとき、雨
四四〇 なたがたは、これから、りっぱなこと
四四三 した。けさも早くから、三十ばのが
四四五 ンぼんだよ。あとからなにかおっかけ
四四八 た。よく木のかげからねらいうちをさ
四四九 ゃんは、十五ばんめからわきにそれたか
四四六 。「略」。下の方から、てっぽうの音
四五〇 ちていくのを、下からうけとめました。
四五四 のがんは、右や左からかつちゃんをだ
四五一 いてきました。下からねらわれている
四五三 。「みずうみのほうから、風がふいてき
四六五 まのがんが、へびからぬけだそうとし
四六六 そび」。これは、上からよんでも下から
四六六 上からよんでも下からよんでも、おな
四七五 「ゐ」の字はこれから「い」をつかう
四七九 「ゑ」の字もこれから「え」をつかう
四九二 いても、おかつてからはきはじめて、
四九六 になると、ひたいからゆげがたつ。ほ
四九二 すと、ぼくはまどからかおをだして
四九四 もくと、えんとつからすがとぶよう
四九四 っている雪を上からみると、白くて、
四九四 ぶと、そのうしろから、おとひめさまが
四九四 ていますと、どこからか、よいにおい
四九四 まつの木のうしろから、ひとりの女が
五〇七 た、いわのうた。山から川のかんぼが生

五五二 に、小さいながれ山から川のかんぼが生
五五二 大きくなる 川は山からかけおりる。小石
五五八 ろがして、いわの上からとびおりて、さか
五五八 はしゃいで、川は山からかけおりる。川は
五八八 りるかたがすんでから、ごじゅんにお乗
五八八 乗「略」。「むこうからきた汽車とすれち
五八八 略」。「とまてから、おりるんだよ。
五八八 紙です。私も、いまから旅にでかけます。
五八八 、私たちをかたはしからしらべていって、
五八八 のあさ、やつと汽車からおろされ、自動車
五八八 ました。ふくろの中からだされて、ほつと
五八八 た。「としおくんから手紙がきたよ。」
五八八 だったのに、それからは、みんなにこに
五八八 ンは、電車をおりてから、元氣にあるいて
五八八 。「略」。「先生からかい」。「略」。「
五八八 ちゅう、よその人からもらったんです。
五八八 じめてです。まえからも、やりたいと思
五八八 しいんです。これからも、いつもやりたい
五八八 の人は、トランクからこの本をだして、
五八八 ます。おや、むこうからも長い、長い貨物
五八八 ます。どのえんとつからも、けむりが、む
五八八 にかけたかまやなべから、ゆげがふきで
五八八 。あのガスは、なにかから作るのでしよう。
五八八 のです。ガスも石炭からとれるし、そのほ
五八八 いろのくすりも石炭からとれます。私たち
五八八 に、先生のお友だちから手紙がきました。
五八八 けれど、中ほどから下は、雪がありま
五八八 。ぼくはねえさんから、よくうたをおし
五八八 いく。海のはてから 白い雲、白い
五八八 て、食事をすませてから、またちよつと、
五八八 でもね、そのたねからめがでなかつたら
五八八 。「生まれたときからせわはしてきたが

五七二 いやりました。それから三日ほどたつて、
五七二 いつけました。それから一週間もたつたこ
五七二 が自分のうちのにわから、持ってきてくれ
五七二 略」。「略」。「川から水がわきあがつて
五八八 おまつさんはあとからきますよ」。「略
五八八 」そのとき、下の方から、「略」と、う
五八八 だよ。高い山からたにそこみれば、
五八八 い。うらの山から海をみれば、
五八八 。「略」。こういつてから、りようかんさん
五八八 もたちをみおくつてから、「略」といっ
五八八 ました。むこうの山から、大きな月がのぼ
五八八 せんでした。あたまかせななにかけて、
五八八 りましたね。かごからだして、にがして
五八八 。「ひわさん、これからぼくの子だよ。い
五八八 いが、くらしい木の中からきたので、ひわが
五八八 かくれました。どこからか、しじゅうから
五八八 むまねなどを、つきからつきへときかせま
五八八 、さんちゃんが学校から帰ってきました。
五八八 かましい音が、あさからばんまでひびきま
五八八 どもがふたり、おくからかけだしてきた。
五八八 ちよつと耳にあててから、ガラス戸だなの
五八八 は、「略」と、心からまんぞくした。
五八八 略」。ありは、心から木の葉におれいを
五八八 って、大いそぎで木からとびたつていきま
五八八 らく音楽がつづいてから終ります。しきし
五八八 。そのとき、しもてから、ありが三びき、
五八八 ころ。あり一まどからそとをみて、「略
五八八 あり一が、おくの方からみつをびんにいれ
五八八 が、びつくりしてすからとびだし、空をみ
五八八 にかくれて、ここからはみえないよ」。
五八八 「の字のはねたさきから、雨だれのような
五八八 ルディングのあいだから、とびあがつてく

六398 ㊦ たのしごととはこれからよ。わたしたちの
六412 ルディングのあいだから、つむじ風のように
六419 ㊦ かかしさん、いまから帰るのよ。」子つ
六522 ました。月はいま雲からでて、大いそぎで
六549 ㊦ さまを枝のあいだからみてごらん。」ふ
六562 私の学級では、来週から、かべ新聞を発行
六582 い学級は、かべ新聞から。」雪の朝、こ
六692 かずや、一ばん遠くから通っている子ども
六749 「こんなことをつぎからつぎへと考えまし
六751 くる朝、おとうさんから、「略。」ときか
六772 ㊦ 「略。」「きのうから、それを考えてい
六786 しゃいました。そばからねえさんが、「略
六833 ㊦ ないのだろう。朝から一びきもつれない
六861 ㊦ うなんて。おまえからいいだしておいて
六966 ㊦ たい「このあいだから、つりばりをのど
六9610 ㊦ の神「たいののどから、つりばりをとつ
六9910 のたまを持つて、目から遠くはなした。す
六1008 いか。それは、ここから百メートルもはな
六1029 、しょうじのあいだから顔をだしている。
六1047 弟は、二三日まえから、かぜぎみである
六1067 たら、ちようど、空からブルン、ブルンと
六10611 「といった。いつてから、すこしふしぜん
六10710 夜、勉強をすましてから、ひとりで、なぜ
六1084 音は、もともとはなから声のような音
六1087 音は、はなから声がでない音の
六10810 うときに、声ははなからでるかでないかと
六1092 んという音が、はなから声の音なのだ
六1094 ると、これらははなからでる音なのだ
六1096 ると、いかにもはなから声でているよう
六1098 まんで、はなのあなから息がもれないよう
六1099 みた。苦しい。はなから声がでる音である
六1117 てみた。これもはなから声がぬけているよ

六1126 ウエオ、カキケコから、じゅんじゅんに
六1127 ふしぎふしぎ、はなからでる音は、ナニヌ
六1129 るまで、みんなはなから声の音ではな
六1142 十たこ おじさんかたこをいただきま
六1152 だしちゃん、そばから、「略。」といい
六1154 だしちゃん、海外からひきあげてきた子
六1166 たらうさんが、わかから、「略。」ときき
六1178 りました。なが四角から、ま四角に切る切
六11811 です。まず、たて骨からはじめました。紙
六1284 した。おにがあらからくると、こちらへ
六1285 らへかくれ、こちらからまわっていくと、
六1415 ㊦ つけたのだ。そこから、あとをつけてき
七510 げにかくれた。つぎからつぎへと、子ども
七85 ちが、さつと、学校からいなくなつてしま
七91 黄色くみえる。そこからラジオがきこえて
七94 ㊦ にもなる。あの日からきょうまで、わた
七910 ㊦ が、わたしのそばからさつていった。」
七103 ㊦ ると、こつちの岸から向こうの岸へ、船
七185 ㊦ い。よくみのつてから、油をとるんだか
七234 ㊦ いを早くすませてから、お遊びなさい。
七253 ㊦ をとつてしらべてから、なん日ほどたつ
七256 ㊦ がら、兄「たまごから小さい虫になるの
七257 ㊦ っています。それから十日すぎて、から
七267 か。」(四) それから、いく日かたつた
七279 ㊦ ていますよ。これから、どうかわるでし
七282 きしもとくんが学校から帰ってくる。兄「
七284 ㊦ はるおは、さつきから、おもてで遊んで
七299 ㊦ た。ぼくは、学校から帰ると、だいこん
七2910 ㊦ だ。きのう、学校から帰ってみると、あ
七3211 ㊦ けないから、ここからだして、庭のだい
七336 ㊦ ちよを、しくびんからとりだす。庭には
七352 ゆれるたびに、前後からおされて、さぶろ

七396 た。それから、つぎからつぎへ、「略。」
七411 、D・D・Tを、頭から、首すじから、せ
七411 を、頭から、首すじから、せなかから、腹
七411 首すじから、せなかから、腹までふりまか
七419 持よく、車中のすみからすみまで流れた。
七4310 ㊦ 「はくしゅが四方からおこった。そこで
七456 ㊦ 「略。」そういつてから、老人にぼうしを
七465 。私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそ
七598 して、まりが、そとからとびこんできた。
七663 ㊦ る人が三人。ふろからみて十三夜さん
七762 ㊦ す。」乙「さきほどから、さがしつづけて
七773 から——」といつてから、ちよつと考える
七8011 ㊦ 「すると、向こうから、「略。」と、た
七832 ㊦ のらくだはどこからにげてきたものでは
七922 ㊦ じをしました。小屋からだすとき、みんな
七933 、いつてみたら、右から四ばんめのへやに
七938 さぎの生まれた、右から四ばんめのへやに
七967 4ひきは、生まれてから12日めのきょう、
七972 いて、はじめて、果からはいだしてしまし
七976 ㊦ ぎが、きょうは、果からでて歩いていまし
七985 は、7ひきとも、果からでて歩いていまし
七987 ㊦ 子うさが生まれてから、きょうで20日め
八46 、北はほっかいどうから、南はきゅうしゅ
八59 えた小さなかごの中から、一わずつつかみ
八64 ㊦ 帰りました。その晩から家族のひとりにな
八68 それどころか、自分から指さきやくちびる
八76 ㊦ ず、テーブルのはしからころげ落ちたりし
八811 うと、それを知つてから、よけいにピオが
八1011 なかをすかして学校から帰ってきたすえの
八117 われにも、くちばしから血をだして、目さ
八135 いものでした。それから十年、いまも、私
八169 めます。これは、木からいうとめいわくし

八1610 とですが、せみの子からいえば、母親のち
八1611 いご、ようにそれからはなれません。虫
八193 、ほそいくだのさきから、木の根のしるを
八206 日をまつのです。上からつたわってくるあ
八218 ていきました。地表から一メートルほどの
八224 ました。すると、中から、みずみずしい、
八236 からだはすっかり皮からはなれていました
八284 ごてんがあつて、中から、はたをおる音が
八343 年は、光が出発してから、一年かかってと
八346 計算しますと、太陽から発した光が、地球
八351 て、空の星は、地球からのくらしいのきよ
八398(会) 略。」「あすの朝から、たしかにそのよ
八3910 は、大喜びでねどこからとびおきて、まず
八478 ったときでした。中から人の声がきこえて
八545 とみえて、台所の方からおむすびを一つに
八565 した。すこし歩いてからふり返ってみると
八597 ている。飛行機の上からは、もつともつと
八615 へ。」と、どのたまごからも小さなひなの首
八6410 ってしまった。それから二三日して、とう
八702 は、あひるのなかまからわる口をいわれる
八703 りでなく、にわとりからもぶたれたり、つ
八709 いばかりに、みんなからしかりとばされる
八712 思った。(二)それからのちは、わるくな
八713 には、自分の兄や姉からまで、「略。」と
八731 うもなかった。それから二日間、ここにそ
八732 た。どちらもたまごからはいだしてまもな
八741 ろつてあしのあいだからとびたつた。また
八746 、くらしい木のあいだから雲のようにたちの
八7410 っていた。したは口からたれて、目はみに
八764 。なん時間もたつてから、ようやくあたり
八777 みつけたので、そこから中へはいっていつ
八784 。朝になって、よそからきたあひるの子は

八7810(会) けものだよ。これからはあひるのたまご
八836 いろいろな動物たちからのけものあつかい
八8310 きであつた。草むらから、大きなりっぱな
八843 を廣げ、この寒い國からあたたかい國、廣
八889 ころが、木のしげみから、二三ぼの美しい
八939 をあげて、心のそこから喜ばしうにさけ
八949 、なわしろにまいてから、早くめがでると
八956 もみのものこのほうから、はりのようにほ
八962 種もみひたしをしてから、ちようど10日め
八969 晴 20度 種もみから黄みどりのめがで
八972 もう、なえが、2cmから3cmにのびました
八974 。ひたさない種もみからも、やつとめがで
八991 日でした。なわしろからとつたなえをみん
八996 り植えました。これから、水がきれないよ
八1002 晴 28度 どのなえからも、すこしずつ新
八1005 1本のなえのまん中からでた新しい葉が、
八1009 度 葉と葉のあいだから、新しい葉がたく
八1024 ているものとところから、黄みどりのほが
八1024 た。田植えをした日から、ちようど60日め
八1067 ら、1つぶの種もみから、やく1500つ
八10610 した。いねを根もとからかりとりました。
八1083 高さぐらいのところからごみをふきとばさ
八143 いこをつかう。ゆめからさめるときには、
八167 もしれません。これからいこうとする遠い
八172 たです。とうきようから四千キロもあるフ
八179 のです。南洋の島々から、さらに海をこえ
八197 ドルフというところから、はじめて、電話
八216 いあらしの日で、朝から晩まで、こやみな
八222 せた飛行機は、それから毎日のように、ア
八241 られません。むかしから、つばめは、同じ
八246 わかりました。日本からオーストラリアま
九312(手) す。こちらへきてから、もう四ヶ月にな

九321(手) は、こちらへきてから、おとなといっし
九334(手) らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだ
九348(手) 足のようになかぶから七本も八本もでて
九354(手) 。そうして、近所からわけてもらつたさ
九361(手) く山は、ぼくの家からは十五六分ほど登
九362(手) っています。ここからは美しいかがうが
九367(手) きぎをせおつて山からおるとき、この
九368(手) れにはいって、頭から水をあびるのが樂
九387(手) るようにして、下から力をいれてひきお
九394(手) がつかれます。下からどんなに大きな声
九398(手) ぎの木で、根もとからかかっている高さ十
九407(手) し氣がおちついてから、ぼくはあたりを
九408(手) 向こうの山のはしから、美しい湖が半分
九4011(手) 。道もないところから、木こりのすがた
九4210(手) くわをいれるあとから、ぼくたちはむち
九453(手) に、子どものころから、世の中のことに
九465(手) 手紙を数日もまえから、喜んで書きだし
九484 。ねどこにもぐつてからも、やまねこのに
九5010 があいていて、そこから水がふえのように
九534 と、りすは、木の上からひたいに手をかざ
九609(会) じつは、おとといからめんどうなあらそ
九628 へんあわてて、こしから大きなかまをとり
九6211 その四方の草の中から、どんぐりどもが
九701(会) した。どうかこれから、わたしの裁判所
九703(会) てくください。これからは、はがきがいっ
九708(会) 。そうして、これからは、はがきに、か
九714(会) んくですが、これからは、用事これある
九753 っていました。それからあと、「やまねこ
九762 か みんなで、学校から四キロほどある貝
九776(会) ろが、きようこれからいく貝づかですよ
九793(会) こが、このあいだからよくお話ししていた
九801(会) です。ひとつこれからほつてみることに

九二六 〇。「略」。「ここからも、できるかもしれ
九四三 〇 といつて、貝づかからでる物では、いち
九八五 〇 あります。ここからでるのは、このと
九八八 〇 ずれ学校へ帰ってから、もう一ど整りし
九八九 〇 なって、友だちの手からぬけだそうともが
九六八 〇 たかぎ 舞台のすみからボタンをひろつて
九一〇 〇 生は、みんなのあとからこられた。はじめ
九〇六 〇 、ずっとうしろの方から、「略」。「とさけ
九〇二 〇 先生がうしろの方から追いたてるように
九〇八 〇 、「ようし、ここからすべりたいものは
九一六 〇 もうまそうに飲んでから、私にいった。「へ
九一八 〇 した石ころのあいだから、ブツブツと音を
九二〇 〇 一方のかけたところから、さらさらと流れ
九二二 〇 水も、このまつ川からひいてあるのだ。
九二四 〇 谷まになった。そこからさらに、すこしさ
九二六 〇 つけてみると、右岸からさらさらと流れ落
九二八 〇 さかのぼると、岩まからよろよろとわ
九三〇 〇 人と茶をたてて、心から楽しんだというこ
九三二 〇 ために、高いところからたたき落されたが
九三四 〇 、つばめのくちばしからころげ落ちること
九三六 〇 てるようだ。どこからきこえるともない
九三八 〇 るともないが、どこからきこえてくる。
九四〇 〇 りは、むじやきな心からでた、子どもらし
九四二 〇 高いプラタナスの枝からは、黄色い葉が、
九四四 〇 て、あいさつをしてから、「略」。「とたず
九四六 〇 スのいなかの子どもから、自分の國のこと
九四八 〇 雨あし。竹の葉さきからしたたるしずく。
九五〇 〇 3 わら屋根ののきから、たきのように落
九五二 〇 小学校のかわら屋根から雨がしたたる。だ
九五四 〇 っていく。そのあとから、小さな子どもが
九五六 〇 車に乗っている。窓からみえる村の家、ま
九五八 〇 とをすませて、坑内から地上にてでてる。

九二九 〇 ようが、どんな単位からなりたっているか
九三〇 〇 田佐吉は、村の人々から、こういってあざ
九三二 〇 ある。村じゅうの者から気持ちがいつかい
九三四 〇 はおさによつて、右から左、左から右へと
九三六 〇 失敗であつた。世間からはますますわらわ
九三八 〇 とである。あくる年から、豊田式人力織機
九四〇 〇 、世界じゅうの人から愛される眞珠、こ
九四二 〇 眞珠は、海のそこからまれにひろいあげ
九四四 〇 も、核をさしいれてから、眞珠になるまで
九四六 〇 らつた。まわりの者から、どんなにあざけ
九四八 〇 げましあつた。それから、眞珠貝養殖の科
九五〇 〇 つかのま、幸吉の心からの助力者であつた
九五二 〇 現われた。八十五万から五つぶの眞珠が取
九五四 〇 たえたことに、心から敬意をささげます
九五六 〇 んぽにでました。家から十二三分ばかり歩
九五八 〇 よくわかります。家からでてしばらくいく
九六〇 〇 ったパンを、ふくろからとりだして、いぬ
九六二 〇 とをいきました。門からもどつてきて、道
九六四 〇 へ」といって、学校から帰ると、おかあさ
九六六 〇 「ごはんをたべてから、すすきを取つて
九六八 〇 た。ごはんをたべてから、山の方へいって
九七〇 〇 と思つて、二階の窓からそとをみたら、大
九七二 〇 十 667 〇 っている。そちらからふいてくる風にあ
九七四 〇 十 679 〇 次郎かじやは、こしからぬきとつたせんす
九七六 〇 十 143 〇 丘があつて、そこからおきをながめると
九七八 〇 十 149 〇 、材木を遠くの山から運んでくるのもみ
九八〇 〇 十 176 〇 あぶないところからぬけだして、新し
九八二 〇 十 186 〇 だろ。さつきから、きみはだまつて
九八四 〇 十 125 〇 うが、まつのかげから舞つてでる。まつ
九八六 〇 十 127 〇 の木では、きょうからせみが鳴きはじめ
九八八 〇 十 137 〇 れみんな、遠い國から旅してきた旅人の

九一五 〇 、オルガンのキイから、赤い、青い、金
九一七 〇 小鳥たちは、そこから遠い空へにげてい
九一九 〇 さま、あなたの目から教えられました。
九二一 〇 十 17 〇 おかあさまのえ顔から生まれます。三
九二三 〇 十 18 〇 二宮金次郎、これから、私の調べた二宮
九二五 〇 十 187 〇 は、子どものときから、家の手つだいを
九二七 〇 十 20 〇 があつて、どの家からも、おとなの男の
九二九 〇 十 21 〇 もをよそへやつてから、夜になると、た
九三一 〇 十 23 〇 た。そのあくる日から、金次郎は、とり
九三三 〇 十 25 〇 と、まだ暗いうちからおきて、遠い山へ
九三五 〇 十 25 〇 いつもその本を手からはなさず、くり返
九三七 〇 十 26 〇 こをたいて、家から家へやつてきます
九三九 〇 十 27 〇 が、そこへいってからは、いよいよいっ
九四一 〇 十 28 〇 となりのおばさんから一にぎりのあぶら
九四三 〇 十 28 〇 次郎は、親類の家からでて、もとの自分
九四五 〇 十 29 〇 すくい、多くの人からうやまわれるよう
九四七 〇 十 30 〇 、ひばりは朝から大うかれ。えん
九四九 〇 十 31 〇 な読みあげられてから、おめんじょうを
九五一 〇 十 44 〇 席にもどり、そこからでなおして進みま
九五三 〇 十 45 〇 席の中 ゆうべからの大あらしは、け
九五五 〇 十 51 〇 雨の中 三人づれで、学校から帰るときので
九五七 〇 十 59 〇 三人づれで、学校から帰るときので
九五九 〇 十 60 〇 る。太郎は、まえから父に、「略」。「と
一〇〇一 〇 十 60 〇 が、いま、友だちからすすめられて、こ
一〇〇三 〇 十 60 〇 ると、橋はまん中からおれて、三人は、
一〇〇五 〇 十 60 〇 したのだ。まえからあぶないといつて
一〇〇七 〇 十 61 〇 ものかと、自分からさきになつて渡つ
一〇〇九 〇 十 62 〇 リの近くにある村からきたのでした。少
一〇一一 〇 十 63 〇 手紙をひと目みてから、看護人と呼んで
一〇一三 〇 十 65 〇 人ですか、外國から帰つてきた——」
一〇一五 〇 十 65 〇 のですが、外國から帰つてきたのです
一〇一七 〇 十 67 〇 おこして、その後からついていきながら
一〇一九 〇 十 70 〇 チチロがいなかからでてきたんですよ

十一 71 5 て、目を父親の顔からはなさないで、こ
 十一 72 3 ことなど——それからそれへと、いろいろ
 十一 74 2 会 きょう、いなかからきたのでございま
 十一 74 12 はちよつと考えてから、こういいました
 十一 76 6 さじなりをその手から取って、看護婦に
 十一 78 3 となどを——それからそれへと長々と話
 十一 80 5 すりを、少年の手からでなければ飲まな
 十一 83 2 年にはおずりしてからいいました。「へ略
 十一 83 4 会 た、おかあさんから、『略。』って手
 十一 85 1 のたましいのそこから、どつとことばが
 十一 86 6 会 。「やはり外国から帰ったばかりで、
 十一 87 5 会 わたしは、これからすぐにうちへ帰つ
 十一 88 10 のまも、目を病人からはなしませんでし
 十一 89 4 あかつきの光が窓から白くさしこんで
 十一 90 4 十字かぞうをかべからはずしました。「へ
 十一 91 2 の上のコップの中から取ってきました。
 十一 96 10 たきますと、おくからひとりの少女がで
 十一 7 8 かりでした。それからのちになって、道
 十一 8 4 なったので、学校から家へもどってきま
 十一 14 3 った。高いところからたれさがったのも
 十一 14 4 とした木の葉の中から大きなぐのぞいて
 十一 16 5 トの上にチューブから絵のぐをだして、
 十一 16 6 きだったおじさんからゆずってもらった
 十一 16 12 しはなれたところからじつとみつめた。
 十一 23 8 廣いし、父がまえからそういうときのこ
 十一 25 3 と思います。学校から帰ってくる、わ
 十一 27 1 ころでも、こつちからあつちへいくとな
 十一 29 5 た。ある日、学校から帰つてくると、姉
 十一 29 7 会 りでおかつかって口から地面におりて、わ
 十一 33 10 はしやぎで、二階から母のところへかけ
 十一 34 3 だけでした。それからいく日かのあいだ
 十一 34 7 がおいでになってからいく週間もたつて

十二 34 8 いく週間もたつてからのことでした。あ
 十二 41 4 に文字を書くことから、進んで、手と手
 十二 43 8 会 つかおじさんからいただいた童話の
 十二 46 1 会 よりもつと古くからあつたし、おじさ
 十二 50 5 をつけないで、上から上からかぶせる。
 十二 50 5 ないで、上から上からかぶせる。(5) 首
 十二 50 7 る。(5) 首のほうからもかぶせてまゐる
 十二 50 8 ぶせてまゐるくしてから、細長く切った古
 十二 51 4 (8) よくかわかしてから、絵のぐで、顔を
 十二 53 1 顔は、着物のすそからさかさにいれて、
 十二 55 5 い。子どものときからききなれた傳説が
 十二 55 7 ものもあるが、昔からいい傳えられたと
 十二 56 1 さんやおばあさんからきいた話を思いだ
 十二 57 6 山のほうには、昔から九十九だんの石だ
 十二 58 1 なかつたら、これからのちは、けつして
 十二 59 11 かいがいしく、朝から集まつてきた。長
 十二 60 5 者は、高どのの上からこのありさまをな
 十二 61 8 が、ふとしたことから、この岩屋からぜ
 十二 61 8 とから、この岩屋からぜんやわんなどの
 十二 61 9 とを知った。それからというものは、い
 十二 66 4 をやしない、それからでた細い根が、つ
 十二 70 4 蕉のことをきいてから、その弟子になり
 十二 71 1 ないうちに、いだから水をくみあげたり
 十二 74 4 とうとうくれがたから降ってきました。
 十二 77 6 は、はじまるまえからたいへんな見物人
 十二 77 8 り手ならしをしてから、休けい場にもど
 十二 81 4 なりました。それからまもなく試合がは
 十二 81 9 た。私はスタンドから一心におうえんし
 十二 96 7 なたがたの家の昔からいままでのことが
 十二 97 6 い目ですが、いまから三四千年もまえの
 十二 97 9 ください。貝づかからでる貝は、三百種
 十二 98 11 貝づかを発見してからのことであります

十二 99 2 器と土器 貝づかからでたものをならべ
 十二 100 12 、東京のやよい町から発見されたので、
 十二 101 5 って古代人のはからほりだされたもの
 十二 102 8 とけさまは、いまから千三百年ばかりま
 十二 102 11 でも、多くの人々からたつとばれている
 十二 103 8 て、お金ができてからはどれほど便利に
 十二 106 8 うさが、うしろから手をふり足をふつ
 十二 107 2 。平安時代の終りから鎌倉時代にかけて
 十二 109 8 いんさつ機も外国から渡ってきていまし
 十二 110 1 てあります。外国から書物が新しくはい
 十二 111 3 品の一つで、古くから外国人にもてはや
 十二 112 6 明した本を、いまから百八十年まえに、
 十二 114 5 たの代表が、全国からここに集まつて、
 十二 115 3 きた日本を、これからどうもりたててい
 十二 116 2 、やがて、遠い國からここに帰つて来て
 十二 118 3 迷信 知識は、人から教えられたり、自
 十二 118 8 ると、日は東の空からのぼり、夕がたに
 十二 119 9 す。月も、東の空から西の空に向かって
 十二 121 10 で、日や月が、東から西へまわっている
 十二 124 9 した。わかいところからいろいろな発見や
 十二 131 2 どずつ、自分で西から東へ一回轉します
 十二 131 5 本國と、三つの島からなっている、小さ
 十二 131 12 ありました。戦場から帰ったタルガスで
 十二 132 3 トラランドのあれ地から建築用材を求める
 十二 132 7 、植林が成功してから以後の農業は、す
 十二 133 1 げった林は、海岸からふき送る砂ほり
 十二 133 1 がわの土べいの上から、えんじゅや、や
 十二 133 5 えたり、遠くの方からひびいてくる、い
 十二 133 7 音をたてる。どこからともなく、女の人
 十二 133 12 もわからないところから、ただ美しいかざ
 十二 133 10 と、はとぶえが天から鳴つてきて、ホー
 十二 136 5 ぎのわたが、どこからともなくたくさん

十三三八一(会) ……え、いま学校から帰ったばかり……
 十三三九一(会) 器をかけ、電話口から、つくえの方へ走
 十三四〇四(会) う、マンシユウから来た竹田さん、お
 十三四四三(会) ふたり以上の会話から組み立てられてい
 十三四四九(会) あとはマンシユウから帰って来た眞二く
 十三五三二(会) 画像 もとの先生から、一まいの絵はが
 十三五三九(手) 「これは、いまから五百年ほど前に、
 十三五五二(会) さったので、先生からいただいた絵はが
 十三五五七(会) いの絵をひきだしからだして、見せてく
 十三五五九(会) で生まれ、早くから絵のけいこをして
 十三五七一(会) 前後して、そこからローマに出て、へ
 十三五九一(会) て、同じひきだしから、一まいえらびだ
 十三六〇二(会) てみて、うまさからいうと、ラファエ
 十四四六(会) な愛の氣持、そこからさしてくるとどうと
 十四五二(会) 私たちを心のそこから動かし、私たち自
 十四五六(会) れ、おさないころから、人の世の苦し
 十四六八(手) 、おわかれしてから私がいちばんつら
 十四七九(手) んのために、心からの思い出をまもる
 十四九三(手) 私にしても、心からおかあさんを愛し
 十四一〇二(手) 。あなたのルイから パリー、千九百
 十四一三三(手) は、コップの上からコーヒーこしをと
 十四一五〇(手) かあさん、これからたびたび手紙をあ
 十四二〇五(手) とばの中で、外国からはいってきたこと
 十四二三七(会) 先生は、「外国からはいってきたこと
 十四二三八(会) なく、ほかの國からも、いろいろはい
 十四二四四(会) が、いろいろな國からはいってきて、日
 十四二四〇(会) った品物が、外国から傳えられたときに
 十四二五三(会) 。私は、このお話から、さまざまなこと
 十四二五六(会) た。だから、これからのちも、新しいも
 十四二五〇(会) てきたのは、品物からだけではなく、外
 十四二六一(会) このあいだ、先生から、日本にはいつて
 十四二六二(会) 、はじめオランダからはいり、そののち

十四二六三(会) ったが、このことから考えあわせてみる
 十四二七二(会) から、ふと、古くから日本といちばん関
 十四二七三(会) のふかった大陸からは、どんなことば
 十四二七六(会) 、たいいてい大陸からきたことばだ。そ
 十四二七七(会) ちに、もともとからの日本語のように
 十四二七〇(会) 自由研究で、外国からきたことばの中で
 十四二七〇(会) とばの中で、西洋からきたことばをでき
 十四二七二(会) うすれば、外国からきたことばが調べ
 十四二八三(会) 、たいいてい西洋からきたことばと思っ
 十四二九五(会) 。だれでも、どこからでも、自由に見ら
 十四二九七(会) 日本人は、むかしから、あまり星に親し
 十四三〇一〇(会) ばらくおき、これからの人の心がまえば
 十四三〇一六(会) なたがたは、これからの日本にとってだ
 十四三二五(会) かく觀察したことから、農業が進歩した
 十四三四八(会) 。光が一方のはしから、向こうのはしま
 十四三五二(会) せん。大うちゅうから見たら、たしかに
 十四三六三(会) 教えます。むかしからすぐれた人たちは
 十四三六四(会) ちは、星の光の中からふかい思想を読み
 十四三六九(会) 理の時間に、先生から、星をつかめとい
 十四三七一(会) ですが、その感動から研究を進めて、つ
 十四四五五(会) 、しずんでいく船からほうりだされて、
 十四四五七(会) るいしずけさの中から、とつぜん、まっ
 十四四七四(会) と同じように、船からなげだされたもの
 十四四八〇(会) ようさんです。頭から大波をかぶっても
 十四四八二(会) を失って、まるたから手をはなさないよ
 十四五二一(会) 「では、花さんからおはじめなさい。
 十四五二三(会) のご指名で、私から申します。もちろ
 十四五三三(会) ても、とちゅうから、黄色くなつて落
 十四五四六(会) 、どうか根さんから。」「へ略。」「略
 十四五四八(会) の私が、土の中から吸いとって、送っ
 十四五八二(会) ているから、根から実まで運んでいけ
 十四五八二(会) 。それから、空から降る雨、あれだっ

十四五八五(会) がない。さつきから問題になっている
 十四六二〇(会) 第一に、湯の表面からは、白い湯げがた
 十四六四九(会) 飛行機などで、横からすくして見ると、
 十四六四九(会) そうです。茶わんからあがる湯げをよく
 十四六五二(会) むりの出るところからいくらかの高さま
 十四六六六(会) 、茶わんのすぐ上から大きなうずができ
 十四六七二(会) があたって、そこから白い湯げがたつこ
 十四六七四(会) やかきねのすきまから、つめたい風がふ
 十四六七七(会) のになつて、地面からなんメートルもあ
 十四六八一(会) そこだけは、地面から蒸発する水蒸氣が
 十四六八五(会) つめたい空氣が下からふきこんできて、
 十四六八五(会) らが、原理のうえからは、おたがいによ
 十四七〇一〇(会) の茶わんのまわりから、熱がにげるため
 十四七〇一三(会) へのぼつて、表面から外がわに向かつて
 十四七〇一三(会) いには、湯は表面からもひえます。そう
 十四七〇一三(会) す。そういう部分からは、ひえた水が下
 十四七二二(会) にはひえて、そこからおります。こんな
 十四七四六(会) 冬になつて、表面からひえていくときに
 十四七五〇(会) 。それで、畑の上からとんできて、森の
 十四七六四(会) もので、晝間は海から陸へ、夜は反対に
 十四七六四(会) へ、夜は反対に陸から海へとふきます。
 十四七七六(会) には、もとのほうから割るがいい、竹を
 十四七七七(会) には、うらのほうから割るがいいという
 十四七七七(会) とき、もとのほうから割ろうとすると、
 十四七八一(会) きつと、とちゅうから横の方へそれてし
 十四七八五(会) と、竹の先のほうから割ってみると、も
 十四七九三(会) うを上にして、上からはものをうちこむ
 十四八〇二(会) なん百年という前からつくられて、子に
 十四八〇四(会) なく、よその民族から教えられて、それ
 十四八〇四(会) 教えられて、それからいい傳えられてい
 十四八〇八(会) のつえ。さるも木から落ちる。親しきな
 十四八二六(会) くて七くせ。二階から目ぐすり。ぬかに

十四836 。雪が降りだしてから、だんだんつもる
 十四844 かぎりなく、天上から地上へ降ってくる
 十四8412 ものであった。空から降ってきた雪の一
 十四854 〇。雪は、空からのお手紙です。」
 十四857 れば、たしかに空からの手紙にちがいな
 十四857 〇。雪は、空からのお手紙」とは、
 十四8511 降ってくる雪の中から、一ひらの雪をと
 十四861 をいろいろな角度からながめてみるこ
 十四975 たまま、テーブルからとびおりて、ゆか
 十四983 、みどりの枝の間からかがやいて、ちか
 十四9910 、そばのたばの中からひきだした。その
 十四10110 、上の方へ、地面から高くはなれて、も
 十五94 〇 まよ人間のかさから耳をだして まん
 十五194 首府のベルンの町からながめると、まっ
 十五212 した。朝ぎりの中から、白い雲のわきた
 十五223 かく家庭教師の手からはなれて行きそう
 十五2311 へ、がけの中ほどからとびついたものが
 十五256 からだの重さで上からぎゅうぎゅうとお
 十五2510 十五六の少年に上からおされるので、そ
 十五264 少年はいつ鳥のせからふり落されないう
 十五2611 安全な着陸地を上からさがしているよう
 十五315 て来ました。それから、必死にとびか
 十五322 き、がけの中ほどから、ガヤガヤとい
 十五359 りとなった。いまから五六千年ぐらいま
 十五3512 を表わした絵文字から起り、これがだん
 十五365 形をうつしたのから発達したものであ
 十五3711 した。漢字が中国から日本に伝えられた
 十五392 日本では、中国から伝わった漢字をつ
 十五393 うちに、その漢字から、日本語を表わす
 十五397 たとえば、「江」から「エ」、「加」から
 十五397 から「エ」、「加」から「カ」などと書く
 十五3910 体をくずしたものから作りだしたもので

十五412 ば、エジプト文字から出たものである。
 十五456 の手工業も、外国から新しい方法を学ん
 十五458 リーが、日本政府から頼まれて、鉄ぼう
 十五476 られたのは、いまから三百三十年ばかり
 十五482 が、これはほん主からゆるされた十六人
 十五489 まず、焼くしごとからはじめた。しかし
 十五503 〇 やめれば、日本から美しいものが一つ
 十五5011 こめた。そのときから、プリンクリーは
 十五541 あった。学生時代からそんな敬していたあ
 十五547 〇 ジョルダン博士からいつてきていた日
 十五552 めのてはずを早くからすすめていた
 十五585 島襄だよ。」自分から話したホラン
 十五613 た。京都に帰ってから父に送った手紙の
 十五6510 んだ私は、朝早くからそれをガラガラと
 十五6512 家の書生が、これから車のついたものは
 十五664 くださった。それからいく年たっても、
 十五665 かった満ぼうの心から、どうして新島の
 十五678 をあおいだ私の目からは、たまのような
 十五7011 〇 は、年とられてから目がわるくなって
 十五742 〇 親の目から見れば、自分の子
 十五745 まれ、他方があとから生まれたというだ
 十五749 願である。神の目から見れば世界の人類
 十五7412 という理念が、ここからわいてくるのだ
 十五769 して、これが新島からならった日本語の
 十五797 た、そうした風景から、自分の國を愛す
 十五895 〇 す。これでけさから十二どめです。わ
 十五9611 みどりの園のおくからかけだして来て、
 十五971 〇 しいのだ。どこから出て来たのだろう
 十五1054 〇 不幸のほらあなからにげて来た『とて
 十五1078 〇 くだちのなかまから、いちばん美しい
 十五1099 〇 びです。』方々から急いでかけよって
 十五1138 〇 白いな。その中から光が流れだすよう

十五1151 〇 来たのは、これから下へ帰ってから、
 十五1151 〇 から下へ帰ってから、どういうように
 十五1161 〇 上に住みついてからこのかた、いつも
 から（接助）248 カラ から ↓それだから・だか
 ら・ですから
 一355 〇 「きれいな はなになんて、おへやを
 かざりたいからです。」
 一362 〇 「うみになんて、せかいじゅうのおふ
 ねをうかべたいからです。」
 一367 〇 「たかい 木にとまって、うたをうた
 いたいからです。」
 二291 〇 きをつけてわたりましたから、みんな
 むこうの きしにつきました。
 二3310 〇 ぞうが とおりますから。
 二424 〇 おまえが 口ぎたなくいうからだよ。
 三157 〇 しかたがありませんから、はんたかは門
 の そとにの こりました。
 三261 〇 こんな 大きな 木の ことですから、切る
 のにも 大さわざでした。
 三286 〇 鳥のように 早い ふねだから、はやとり
 という 名をつけよう。
 三445 〇 ぼくが、きみたちの せなかの上を、か
 ぞえながら とんで いくから、むこうの りくま
 でならんで みたまえ。
 三631 〇 みんなの 心が あいましたから、いっしょ
 になんて、
 三773 〇 お日さまは 一つしか ないから、みんな
 で かわりばんこに お目にかかれます。
 三801 〇 雨に ぼくの いどを いっぱいにして
 もらうんだから。
 三832 〇 「ぼくは だいだい色にするからね。」
 四152 〇 「みんな、しずかに——よしきりがな

くから。」

四38㉔ 「おかあさんのことがとめたからです。」

四45㉔ かっちゃんがおしまいにしてくれていったから、そうしたんじゃないか。

四45㉔ おしまいは氣がらくでいいからって、いったじゃないか。

四48㉔ よく木のかげからねらいうちをされるからです。

四56㉔ ぼくたちのたびが、あんまりおくれるから。

四65㉔ からだがじゅうぶんではないから、あとのものがじゅんじゅんにたすけていこう。

四97㉔ おもしろいから、かめをころがしているのです。

四97㉔ かわいそうだから、はなしておやり。

四131㉔ お氣のどくですから、はごろもをお返ししましょう。

五10㉔ 「きかんしの人、いっしょうけんめいに走らせているからさ。」

五15㉔ ゆくさはむねのところに書いてありますから、まちがいはありません。

五17㉔ 「わたしのはこんな小さな字だから、なお心配ですよ。」

五17㉔ ゆくさは知っているが、うそ字だから、とんでもないところにやられるかと思って、

五18㉔ こんなにだいじにしてくれますから、おちる心配はありません。

五25㉔ ぼくは、もう大きいんですから。

五27㉔ いうところがなかったものだから、それであの人にいったのよ。

五27㉔ いそがしいから、わからなかったかもしれ

れません。

五29㉔ ついでですから、一つ持っていってあげましょう。

五30㉔ しかし、きみは小さいから、まあいいよ。

五30㉔ ぼくにも持てそうですから。

五39㉔ 冬がすぎて、春がきたからです。

五46㉔ 春になったばかりだから、うまく鳴けないのだろう。

五60㉔ たねをまいたから、こんなにさいたのですね。

五69㉔ 家はちゃんとできていますから。

五70㉔ ひやくしようなんか、もういやになったから、お金持のおくさんになりたいって。

五70㉔ もうひやくしようはいやになったから、お金持のおくさんになりたいのです。

五86㉔ 「おまつさんか、あなたがみえなかったから、かぜでもひいたかと思って。」

五107㉔ ほら、羽がだめだから。

五108㉔ ちっともこわいことはないから、いっしょにあそぼうよ。

六12㉔ 小さなねじが一本いたんでいましたから、とりかえておきました。

六24㉔ さあ、おそくなるからでかけよう。

六26㉔ ふぶきはいやだから。

六29㉔ すこしでもいいから、わけてください。

六40㉔ すぐ帰ってきますから。

六42㉔ 南へひきあげるついでだから、えんりょしないでいいのよ。

六75㉔ 「だいいち、おまえが生きているんだから、わかりそうなものだから。」

六76㉔ この手が動かないから、やはり雪だるまは命がないのかなと思いました。

六76㉔ 「先生、ぼくたちは動いたり息をしたりするから、生きているんですよ。」

六77㉔ ぼくたちは、だんだん大きくなるから、生きているんですよ。

六77㉔ 「雪だるま、雪だるまは生きものではないからね。」

六77㉔ いぬは動くし、いきをするから命がある。

六77㉔ 風や、自動車や、水車は、動いていても息をしないから、命がないんだと、

六88㉔ おしてあげますから。

六103㉔ なんでもいいから、きてください。

六106㉔ その、弟がまだいわないことを、さきにいったから感心したのである。

六112㉔ ぼくは、五十音というものは、一年生のときになつたからよく知っているが、

六113㉔ 新しく思いついたことをみんなに話して、びっくりさせてやろうと考えたからである。

六117㉔ 切りかたは、いつかおかあさんに教えていただきましたから、うまくできました。

六119㉔ よこ骨はまっすぐではなく、上へ弓なりにまげるのですから、めんどうでした。

六124㉔ 「りすさんは、くるみがだいすきだそうだから、あげようか。」

六130㉔ すぐぼくが、きつねにみつかつてしまうから、どこかへいってくれたまえ。

七7㉔ 一どでいいから、風になりたい。

七16㉔ 先生、きょうは風がありませんから、ちようちよが、たくさんとんでいるでしょう。

七17 花がちって、実がつきはじめたからでしょう。

七18 よくみのつてから、油をとるんだからね。

七19 このまえきたときは、風が強かったから、ちようちよがでなかったんですね。

七22 はるお、あまり大きな声をだすから、にげちゃったよ。

七23 もう、おさがりがすんだから、あおむしのせわをしよう。

七24 ぼくは、びんの中をそうじして、砂に水をやるから。

七25 日記帳をみますから。

七32 死ぬといけないから、ここから出して、庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょうね。

七35 それに、乗るかえもないし、二時間ほどでつくのですから。

七55 心にはつきりとえがかれた一つのかたちは、まじりけのない宝石のようなものでありますから、

七70 もやが深いから、遠いような、近いような、月明かりだ。

七83 道のかたがわの草ばかりたべてあったからです。

七85 道に、麦がこぼれていたからです。

八58 ほおじろだけしか賣っていなかったのですから……。

八123 もうどうすることもできませんから、つめたくなったからだをわたにつつんで、

八151 そこは木の下ですから、大小の木の根が、からみあい、かさなりあってはえています。

八181 ことにまえ足は、いつもトンネルをほるのにつかいますから、たいへんかたく、

八188 そのかわり、親たちの大てきのすずめもね

こもやってこないから、安全です。

八336 一つ一つがはつきりとみえないのですから、ずいぶん、遠いことがそうぞうされます。

八355 あなたなばたものがたりのはたおり星は、二九・五光年ですから、

八425 王女は、王さまにとっては、世界じゅうのがねよりもたいせつであつたからです。

八499 だれでも幸福のほしくない人はありませんから、

八511 「幸福」がきたとは知りませんから、

八613 ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎまわるほうがすきであつたからである。

八618 みどりは目のためにいいから、親あひるはみただけみさせてやった。

八6310 なにしろ、水をこわがるのだから、〈略〉はいるようにしてやるのができなかった。

八647 いままでだいていたのだし、あと四五日はすわることもできますから。

八673 わたしについておいで、大きな世界の鳥小屋へつれていってあげるからね。

八684 だれにもわるいことをしなないのでから、

八686 「あんまり大きすぎてみつももないから、かみつきたくなるんだよ。」

八736 きみはじつにみにくいから、氣にいったよ。

八738 きみはみつともないから、いいしあわせにあうかもしれないよ。

八7910 「じゃあ、お願いだから口をださないでほしいね。」

八811 おまえさんは、することがないから、そんなことを考えるのだよ。

八814 でも、水の上をおよぐのは、いい氣持で

すからね。

八819 世界じゅうで、あの人ほどころな人はありはしないから。

八895 みつともないものが、おくめんもなく近づいていくのだから、ころされるかもしれない。

八1097 1平方mに3・5dlのげん米がとれるのですから、これは平年作ということになります。

九1111 それをたいこであらわすというのだからおもしろい。

九148 わからないのは、その高さを受けいれるだけの心持をもっていないからであらう。

九185 汽車や自動車もかなわなくらいの早さですから、〈略〉、けつしてふしぎではありません。

九403 「そんな高いところ、あぶないから、早くおりておいで。」

九417 山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつかるからです。

九439 うちのかきはしぶがきですから、ほしがきにするために、

九476 あした、めんどろな裁判をしますから、おいでなさい。

九624 きょうは、そこが日あたりがいいようだから、そこんとこの草をかれ。

九641 わたしがいちばん大きいから、わたしがいちばんえらいんだよ。

九708 わたしの人格にかかわりますから。

九839 あとでよくみてあげるから、かごにいれてとっておきなさい。

九856 つるつるみがかれていないから、たのわり石のようにみえる物もあります。

九8510 これはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろっておきなさい。

九 90 9 ㊦ 「もうきみとは遊ばないからな。」

九 97 1 ㊦ 首をひっかいたからさ。

九 101 8 ㊦ ぼくがあんまりじまん話をするもんだから――

九 122 10 ㊦ つれの人は、この茶人ほど熱心ではないから、やめて帰ろうといった。

九 127 9 ㊦ この二三日というものは、ちっともかからなかったから、おなかですいてしまった。

九 137 3 ㊦ 「わたし一どでいいから、お月さんのところへいきたいと思います。」

九 140 7 ㊦ 「ちようちよさんは、羽があるからいいな。」

十 8 1 ㊦ おとうさんは、子どもと遊ぶことがすきですから、

十 9 2 ㊦ あのとげとげしたいがわれて、じゅくしたくりの実の落ちるころでしたから。

十 10 7 ㊦ そのあたりは、フランスの國道にそった景色のよいところですから、

十 13 6 ㊦ 方言でできた小歌のあることを、おとうさんは、きいて知っていましたから。

十 14 1 ㊦ 一つは、そういうかわいらしい子どもがいて、なかよしくなってくれたからです。

十 15 4 ㊦ きれいなところもあり、きたないところもあり、日本も、やはりそのとおりですから。

十 16 8 ㊦ 外國ではどんなことばを話すかとたずねるものですから、〈略〉いつてきかせました。

十 33 12 ㊦ 人間の衣食住というものは、みんなたいせつなものであるから、

十 34 10 ㊦ もっと早く織ることができるし、ひとりでも、ぬのがずん織られていくからである。

十 35 6 ㊦ 機械は、どれひとつとして、日本製のものはない、なかったからである。

十 38 9 ㊦ 年とともに大きくなって、天然眞珠となることがわかったからである。

十 48 4 ㊦ それに話しかけたり、そこで遊んだりしたからでした。

十 49 7 ㊦ ――オモタイカラ モツテ イッテ アゲルノヨ――

十 53 7 ㊦ かたにかけると重いから手に持つのだと、ませたことをいって、歩きだしました。

十 62 2 ㊦ 風がふいて、ガサガサ音がしたから、なんだろうと思って、二階の窓からそとをみたら、

十 67 1 ㊦ そんなおそろしいどくで、死ぬようなことになってはつまらないから、

十 67 4 ㊦ べつに、からだにさわりもしないのだから、自分たちも、そつといってみよう

十 67 6 ㊦ 風がどつきを運んできてはたいへんだから、〈略〉あおいで、風を向こうへやってくれ。

十 69 8 ㊦ それが、死なないのだから、『ぶす』ではない。

十 70 7 ㊦ なみたいていのどくではないから、かえって、うまそうにみえるのだよ。

十 71 11 ㊦ 太郎かじやのほうは、氣が強いはかりでなく、わるぢえがあったから、

十 124 10 ㊦ 「もうおそいから。」というのに、

十 145 11 ㊦ すこしぐらいのことだからといって、ごまかさなかつた弟よ。

十 152 11 ㊦ 「あんまり乗らないでください、満員ですから。」

十 159 11 ㊦ 「本道は遠いから、近道をしょう。」

十 160 5 ㊦ 「あの橋はあぶないから、けつして渡ってはいけない。」

十 161 11 ㊦ ぼくは、とめられているから渡らない。

十 173 1 ㊦ 先生が、いまじきにおいでになりますからね。

十 175 9 ㊦ きみがいれば、きつとよくなるから。

十 176 2 ㊦ が、ほかになにといつてすることもできませんでしたから、病人のふとんをおしたり、

十 178 8 ㊦ しみじみとしたそのちょうしに、じつと耳をかたむけているようにみえたからです。

十 180 11 ㊦ もうすこしのあいだですから。

十 183 6 ㊦ 手紙がきたたり、おまえがこないから、どんなにがつかりしていたかわからないよ。

十 184 6 ㊦ 晩には家に着けるから。

十 185 8 ㊦ あの人、いま、ひどくわるいんですから、ゆるしてください。

十 185 9 ㊦ ぼく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにさせてください。

十 187 6 ㊦ じゃあ、ここに二円だけおいていくから、こづかいにしないさい。

十 192 1 ㊦ 「だけど、ぼく、遠い道を歩いていくんですから、しぼんでしまいます。」

十 211 5 ㊦ もしけがでもしてはかわいそうですからね。

十 219 9 ㊦ わたしはなん年もなん年も生きていますからね。

十 223 6 ㊦ ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、

十 224 4 ㊦ おいの正男^{まなぶ}ちゃんは、五つですから、もうひとり遊びができますが、

十 226 1 ㊦ いそがしいものだから、ついしつけができなくて。

十 238 3 ㊦ それは、先生が與えてくださった新しい目で、すべてをみるようになったからです。

十 248 1 ㊦ 写真のほうがずっと便利なわけだけけれど、絵には絵のいいところがあるからね。

十二484 それに、人間みたいに不平やわがままをいわないからね。

十二488 こうえんでも教室でも、どこでもやるからね。

十二556 子どものときからきかれた傳説が、そのあいだにおこまれているからである。

十二587 なにしろ、いっしょうけんめいであるから、みるみるうちに工事がはかどって、

十二707 なにかにつけて不自由であろうから、いろいろお手傳いをしてあげたい。

十二7910 「友だちがないから。」

十二8912 それは自分の生活を整はくにし、相手の人をいやしめることになるからである。

十二904 そのことばは、すこしの力も発きしないからねんぶつである。

十二934 その場のようすが相手にみえないから、《略》、いっそう氣をつけなくてはならない。

十二1047 《略》いう名まえは、屋根のかざりにほうおうがついているからだといわれていますが、

十二1099 いんさつ機も外國から渡ってきていましたから、こんなりっぱな本ができました。

十三912 でんせん病がはやると、ほうき星が出たからだといったり、

十三101 あるいは、きつねがつくとか、からすの鳴き声がわるいから不幸があるなどといった。

十三232 きっと、小もみをいつまでも、大もみのそばにならべておくからです。

十三243 しげた木のない土地は、熱しやすくさめやすいから、

十三361 ふえには大小があるから、《略》、ふえの音がおのずから和音をふくみ、

十三383 げんかんがしまっていたから……

十三411 電話番号が書いてあったもんだから……

十三417 それに、うちはやけなかったから、本だってたくさんある。

十三411 帰ったばかりだから、お客さんさ……

十三424 せっかくの記念品だから、とっておいたほうがいいよ……

十三509 すぐ帰って来るんだから、きみも来たまえ。

十三515 すぐ帰って来るんだから、きみも来たまえ。

十三5410 だから、この絵も、本物をごらんになっているだろうと、思ったからです。

十三583 色のあるのは、その点はよいが、すりがうましくないから、また困る。

十四57 おさないころから、人の世の苦しみをいろいろとなめていたからのことでした。

十四85 なにしろ、私たちよりふかいものなんですから。

十四812 私にしても、とてもわすれることのできないのは、わかりきっているのですから。

十四94 なぜかといえば、妹にしても、私にしても、心からおかあさんを愛しているからだ、

十四1512 そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早くたつでしょうから。

十四285 外來語辞典というものもあるから、それを調べると、なおいっそうよくわかるだろう。

十四5310 暑い日に照らされながら、せっせと養分をこしらえて、送ってあげたからですよ。

十四542 養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがあたが、かつてに花をさかせたからですよ。

十四557 「ほかに、だれもいませんから、私が

申します。」

十四581 それがこの日本でできるためには、私が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。

十四5810 いまのお話の養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。

十四689 しくみがずっと大きくて、うずの高さも、四キロとか八キロとかいうのですから、

十四707 夕ごはんのおぜんの上でもやれますから、よく見てごらんさい。

十四885 風にふかれたからであろうか。

十五268 どこでもいいから、安全な場所へおりなければならぬと、少年は思いました。

十五272 「だいじょうぶだ、安心しておいで、私がいますぐってあげるから。」

十五421 ローマ字は世界的の文字であるから、日本語が世界の人々に親しまれるようになる

十五465 いままで見たこともないみごとな焼物であつたからである。

十五5210 いろいろではずしておいたから、《略》ホランド博士をたずねるようにおしやった。

十五592 私はいささいとき、その新島裏にたいそうかわいがられたのですから。

十五611 《満ぼう、いいところへつれて行ってあげるから、さあ、出かけよう。》

十五6212 ぼうやのくつはほこりだらけだから、行くのはいやだといっているのですよ。

十五7410 人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別など、あるべきはずはない。

十五788 ひとりの人間にとって眞実であるものは、他人にとっても眞実だからである。

十五799 日本の子どもさんたちにも、お目にかかったことがあるからです。

十五85¹² ㊦ あいそのいい人たちだからね。
 十五86⁴ ㊦ でないと、かんじんな用むきをわすれ
 てしまうからね。
 十五89⁹ ㊦ なにしろ、おびただし数ですからね。
 十五90¹¹ ㊦ というのは、その鳥をあまり上等とは思
 わないからです。
 十五92⁷ ㊦ でないと、いまに困ることになるから。
 十五93⁸ ㊦ おまねきをいただきながら、そうあた
 ふたとおいとますることもできませんからね。
 十五96⁵ ㊦ この世の中には、人が思うよりもつと
 たくさん、幸福はあるのだから。
 十五96⁹ ㊦ 私たちに用のあるものは、どうせこっ
 ちを通るのだから。
 十五98⁵ ㊦ 地の上でも、天の上でも、いちばん美
 しいものに見えるものだからね。
 十五98⁹ ㊦ もう時間がないのだからね。
 十五98¹⁰ ㊦ あの子たちが青い鳥を持っていな
 いこ
 とは、わかってるのだからねえ。
 十五99¹ ㊦ なにしろ、子どもの時代は、ごく短い
 のだからね。
 十五102¹¹ ㊦ いつでもすこし悲しそうにしているの
 は、だれもふり向いてくれないからです。
 十五104⁵ ㊦ 『大きな喜び』の兄弟ぶんのような
 のですからね。
 十五106² ㊦ でもぼくは、まだわかいから、あの人
 のわらうのを見たことがあります。
 十五106⁷ ㊦ 『不幸』をなぐさめてやるのがすき
 なのですから。
 十五107⁵ ㊦ わるいなかまとつきあっていたものだ
 から、すっかりくさってしまったのですね。
 十五107⁹ ㊦ ぼくたちのなかまから、いちばん美し
 いものがいなくなってしまうわけですからね。

十五110⁷ ㊦ 私は、もう年をとることはないのだからね。
 十五110¹⁰ ㊦ うちにいとると、それが見えないが、こ
 こでは、なにかも見えるのですからね。
 十五112⁶ ㊦ 人間というものは、目を閉じていると、
 なんにも見えないのだからね。
 十五114⁷ ㊦ 私に会ったのだから、〈略〉、私がぼろ
 ぼろの着物を着ていても、わかるだろうね。
 十五115³ ㊦ どういうように私を見なければならな
 いか、それを、はつきりととるためだからね。
 十五115⁹ ㊦ いつだって、同じおかあさんで、いつ
 だって、いちばん美しいおかあさんなのだからね。
 十五119¹² ㊦ まあ、だまっておいでよ、いい子だか
 ら。
 がら ㊦ あいだがら・ことがら
 がら (感) 1 ガラ
 三85⁷ ㊦ ガラガラガラ、ガラ、トン。
 からい ㊦ しおからい
 からかう (五) 1 からかう 《ワ》
 十40⁹ ㊦ まわりの者から、どんなにあざけられ、か
 らかれても、
 からかせ (空風) (名) 1 からかせ
 六46³ ㊦ 北風、からかせ、寒いのに、おちぼの、
 おちぼの子どもたち、
 からかみ (唐紙) (名) 1 からかみ
 十68³ ㊦ さきに立った太郎かじゃが、思いきって、
 からかみをひきあげました。
 からから (副) 2 からから
 六46⁷ ㊦ からから、かけかけ、どこへいく。
 十一33² ㊦ かきのわか葉に日の照るころは、矢車
 からからこいのぼり、村のわら屋の庭に立つ。
 がらがら (副) 1 ガラガラ

十五65¹⁰ ㊦ 喜んだ私は、朝早くからそれをガラガラ
 とひきまわすので、
 がらがらがら (感) 1 ガラガラガラ
 三85⁷ ㊦ ガラガラガラ、ガラ、トン。
 からす (鳥) (話手) 2 からす
 二62⁷ ㊦ からす「かあかあ、かあかあ。」
 二65¹ ㊦ からす「あたにかい、かぜがふいてくる。
 からす (鳥) (名) 10 からす ㊦ おかあさんがら
 す・こがらす・こがらすいち・こがらすに・ゆうが
 らす
 二16⁷ ㊦ ぼうししかからすすすめめだか
 二20³ ㊦ りんごかきからすかせゆき
 四77⁸ ㊦ く——くじやくのまねをする からす。
 四88⁷ ㊦ からすがいそいで かえったよ。
 四88⁹ ㊦ からすのかんたはさむかろう。
 六32¹⁰ ㊦ からすの子が、びっくりしてすからとびだ
 し、空をみあげる。
 七61⁶ ㊦ ひとところで、からすが鳴くと、あっちで
 もこっちでも鳴く。
 七61⁸ ㊦ こんなに、からすがいるのかしら。
 十三7³ ㊦ 遠い、はるかな空のおくで、鳴いている
 からすの声も、ほんとうにのんびりとして、
 十三10¹ ㊦ あるいは、きつねがつくとか、からすの
 鳴き声がわるいから不幸があるなどといった。
 ガラス (名) 3 ガラス ㊦ ふたガラス・まどガラス
 四121⁵ ㊦ でんとうの まるい ガラスは、どうして
 こしらえたのでしょう。
 五81¹ ㊦ ガラスもきれいになって、そとのけしきが
 よくみえました。
 十二10¹⁰ ㊦ ポケットに手をいれましたが、とりだし
 てみせたものは、ガラスのかけらばかりでした。
 からすさん (鳥) (名) 1 からすさん

二62 6 窓 からすさんは。
ガラスド (名) 9 ガラス戸

十五11 2 窓 人の家にさえずるすずめガラス戸の外に來て鳴け病む人のために

十五11 6 窓 ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガラス戸すきてたみにうつりぬ

十五11 6 窓 ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガラス戸すきてたみにうつりぬ

十五12 1 窓 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸のとのを見ればよきつくよなり

十五12 3 窓 ガラス戸の外にすえたる鳥かこのブリキの屋根に月うつる見ゆ

十五12 5 窓 ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

十五12 6 窓 ガラス戸の外につくよをながむれどランプの影のうつりて見えす

十五12 8 窓 紙をもてランプおおえばガラス戸の外につくよの明らけく見ゆ

十五13 3 窓 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸の外明らかに月ふけわたる

ガラスとだな (名) 2 ガラス戸だな
六5 7 まわりのかべやガラス戸だには、いろいろな時計がたくさんならんでいる。

六11 11 時計屋さんは、しあげた時計をちよつと耳にあててから、ガラス戸だの中につりさげた。

ガラスのかから (題名) 1 ガラスのかから
十二9 10 ガラスのかから

からすむぎ 「鳥麦」 (名) 1 からすむぎ
八60 3 麦はたけは黄色く、からすむぎはみどりであった。

からだ 「体」 (名) 63 からだ ↓おからだ・ひとつからだ

三17 6 はんたかの からだから、きれいな 光がさして いました。

三37 7 窓 かなあみに からだをつけるようにして、ねて います。

三46 1 白うさぎを つかまえて、からだの けをみんなむしりとしてしまいました。

三48 6 窓 早く川の水で からだをあらって、がまのほをして、その上にねるがよい。

三48 9 白うさぎが そのとおりに しますと、からだは すぐもとのようになり ました。

三113 4 おばあさんが だいて いた かぐやひめの からだは、すうっとそとへ でて しまいました。

四7 3 もっとたいせつな からだを まもって くれます。

四60 10 どの がんも どの がんも、夜つゆで からだが びつしよりぬれて いました。

四64 10 窓 まだ、 からだが じゅうぶんではないから、

四76 2 か—— からだは いつも きれいに。
五82 2 窓 みんな、 からだに 氣をつけて ください。

六25 1 窓 小さな からだに 大きな 荷物。
六33 5 風を受ける たびに雲の からだの かっこうがかわる。

七15 8 私たちの からだの名まえに、 この ような、いろいろな なつかい かが あるのは、

七25 7 窓 それから十日すきて、 からだが 黒っぽかったのが、青く かわって きたん ですよ。

七35 1 私は、さぶろうの手を しっかりとにぎり、さぶろうは、私の からだに すがりついて いました。

七36 11 なんだか、まわりが すこしゆるやかに なり、 からだが らしく なった ような 氣が しました。

七41 7 汽車は、 かなり 早く 走っている ので、 青年

の からだは ゆれて いたが、
七72 4 うまよ、 そんな 大きな 子を して、 子どもの ように、 からだ まで あらって もらっている のか。

七96 8 みんな、 目が あき、 からだ には、 すっかり 毛が はえ ました。

八11 8 目さえ あけ たり と じたり して、 からだ を ふる わせて も う 虫の 息 です。

八12 4 つめ たくさん った からだ を わた に つつ んで、 小ばこ に いれて、

八22 6 すると、 中から、 みずみずしい、 やわらかい、 せみの からだ が はみ だして きました。

八23 5 やがて おきな おった かと思 うと、 からだ は すっかり 皮から はなれて いました。

八23 9 みるまに、 羽は すらり とのび、 からだ の 色 も こく なくなっ て い きます。

八43 9 王さまは、 いそいで 庭の いけの 水を すく っ て、 王女 の からだ に おふり かけ になりました。

八46 7 金持だと思 うと からだ が よわ かった り、
八46 7 金持だと思 うと からだ が よわ かった り、 からだ が じょうぶ だと ちえ が たり な かった り、

八46 8 金もあり、 からだ も り っぽ で、 なんの 不自由 も なく くら している かと思 うと、

八65 1 それは、 ひどく 大きな からだ で、 たいへん みにくい もの で あつ た。

八70 4 しちめん ちよう は、 風 を 受けた 船の ほの ように からだ を ふくら ませ て 向か っ て きた。

九32 3 窓 たきぎ を とりに い っ た り する ので、 まえより 元氣 で、 からだ も し っ か り して きました。

九51 11 いちろう は、 からだ を か が めて、「略。」と きき ました。

九57 11 着物の えり を 廣 げて、 からだ に 風 を いれ ながら、「略。」と きき ました。

九57 11 着物の えり を 廣 げて、 からだ に 風 を いれ ながら、「略。」と きき ました。

九75 やまだ、みせまいとしてからだをねじってかす。
 九105 7 だんだんのぼり坂になると、からだがつてあせがでる。
 九109 1 すばらしい早さに、からだもスキーも一つになって、ビュウとうなる。
 九111 7 たちまち先生のからだは、ちゅうにうかんだ。
 九112 5 先生のからだは、美しくちゅうをとんでいく。
 九131 11 くもは、ふといつなをとりだして、みつばちのからだをしぼりつけようとした。
 九132 3 そのうちにみつばちのからだも、つなにかれそうになりました。
 九133 2 それより、自分のからだははれてくるし、いたいし、苦しくてどうにもなりません。
 九134 5 いつのまにか、いままで苦しかったからだのいたみもきえていきました。
 九141 7 くもはからだを小さくするめて、ころっと横になりました。
 九145 4 くもは、自分ながら自分のからだは、そろそろしく思われてきました。
 九147 11 みにくいと思っていた自分のからだも、もうみにくいとは思えなくなりました。
 九156 9 そうしたら、二年生の男の子が、ふくろうのからだを手でいじりました。
 九167 4 だんなは、ちよいちよいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、
 九115 11 ぼくは、父にいたら、せいの高いりっぱなからだになるだろう。
 九118 1 ぼくはからだもいいし、息もつづく。
 九119 9 りえもんは、からだがよくて、よく働

けませんでした。
 十一20 1 なんとかして、からだをじょうぶにして、身代をもとのようにしたいものだ、と、
 十一21 4 金次郎は、年のわりにからだが大きかったし、働きつけていたので、
 十一52 4 おたがいがぬれたからだで、おしたりおされたりしなければならなかった。
 十一90 3 しばらくのあいだうつむいていましたが、やがてからだをまっすぐに立てました。
 十二63 4 そのうちからだだんだん長くのびて、おしまいにへびになってしまった。
 十二63 6 母にそのからだをみせるにはしのびない。
 十二71 8 芭蕉はからだがよくいので、寒さは身にこたえましたが、雪をみるのが楽しみでした。
 十二84 6 あの小さいからだは、まほうつかいのようになつて、
 十二112 10 そのころまで、人間のからだはどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、
 十四15 12 たい、からだはこちらにいても、このまごころを書いてお送りして、
 十五25 2 鳥が大づめでつかんでいる女の子のからだは、下へ落ちないように、
 十五25 5 からだの重さで上からぎゅうぎゅうとおしつけ、
 からだじゅう 「体中」(名) 1 からだじゅう
 九39 7 足もとの枝をおろして、やつとおりとくると、からだじゅうがあせです。
 からだぜんたい 「体全体」(名) 1 からだ全体
 十二44 12 からだ全体と右手を受け持つ人、〈略〉、それぞれ手わけしているんだが、
 からっぱ 「空」(形状) 1 からっぱ
 十一71 6 うまい、うまいとなめているうちに、つば

が、からっぱになつてしまいました。
 からみあう 「絡合」(五) 2 からみあう
 ーッ
 八15 11 そこは木の下ですから、大小の木の根が、からみあい、かさなりあつてはえています。
 十二66 5 それからでた細い根が、つなのようにからみあつて、葉を育て花をさかせる。
 がらんがらん (副) 4 ガランガラン
 九63 3 ぎよしゃは、こんどは、すずをガランガラン、ガランガランとふりました。
 九63 3 ガランガランとふりました。
 九63 4 すずの音は、かやの森にガランガラン、ガランガランとひびき、
 九63 4 ガランガラン、ガランガランとひびき、
 からんからんからん (感) 1 カラン、カラン、カラン
 七6 3 カラン、カラン、カラン。
 がらんと (副) 1 がらんと
 十五73 9 眞夏であつたので、博士の家族たちは暑さをどこかにさけて、家の中はがらんとしていた。
 かり 「刈」 刈いねかり
 かり 「狩」(名) 1 かり かりかがり
 三107 2 ある 日、かりのおかえりに、とつぜんおたよりになりました。
 かりいぬ 「狩犬」(名) 1 かりいぬ
 八74 7 かりいぬが、ピシャ、ピシャとぬま地へはいつてきた。
 かりそめ 「仮初」(名) 1 かりそめ
 十五15 3 図 だみればこれかりそめのぼらの花おどろきて見ればその花動く
 かりっぱなし 「借放」(名) 1 かりっぱなし
 十二62 2 その中にわるい人がいて、かりた家具を

かりっぱなしにして返さなかった。

かりとる「刈取」(五) 2 かりとる《一リ》

八〇六¹⁰ いねを根もとからかりとりました。

一三二〇⁷ これを生かすのは、みぞをほって水をそ

そぎ、平野の雑草をかりとり、

かりに「仮」(副) 1 かりに

一四三〇² かりにそれがほんとうのことだとしても

かりゅうど「狩人」(名) 7 かりゅうど

四五五² 島には かりゅうどは きませんが、大きな

へびがやってくる ことがあります。

六一六² そのとき、ありのまえをひとりのかりゅうど

が弓矢を持って通りました。

六一六⁴ そのかりゅうどは、きゅうに歩くのをやめて

弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

六一六⁸ ありは、いそいでかりゅうどのすねにはいの

ぼりしました。

六一六¹⁰ 小さなありでも、力まかせにかんだので、

かりゅうどもびっくりして、

六一七² 声をきいて、はとが下の方をみますと、か

りゅうどが矢をつがえているではありませんか。

八七四⁴ かりゅうどは、ぬまのまわりにまちぶせをし

ていた。

か・りる「借」(上) 8 かりる《一リ・一ル》

九四三² ぼくたちのかりているやしきのまわりにも、

大きなかきの木が三本あります。

一一二八¹¹ その油を自分でとりたいたいと思い、となり

のおばさんから一にぎりのあぶらの種をかりて、

一二六⁶ すると、にわか雨が降りだしたので、近

くの家をたずねて雨具をかりることにしました。

一二七⁷ 雨具をかりたいのですが。

一二六² そのことが評判になって、だれもかれも

かりにいくようになった。

一二六² その中にわるい人がいて、かりた家具を

かりっぱなしにして返さなかった。

一二七〇¹⁰ 家もせまいので、自分は、その近所に別

に家をかりて住むことにしました。

一二七八² 私は、その少年の持っていたペンをかり

て、サインをしてやりました。

ガリレオ「人名」 6 ガリレオ

一三二四⁸ そのケブラーと同じころ、イタリアのピ

サに生まれたガリレオという学者がありました。

一三二五⁸ ガリレオを呼びだし、その説を人に教え

てはならない、といいました。

一三二九⁹ ガリレオも、十三年ばかりは、だまって

研究を続けていましたが、

一三二五¹² そのため、ガリレオは、ローマに呼びだ

されて、

一三二六¹ ガリレオは、年をとってもいたし、めく

らにもなりかけていたので、

一三二六⁵ では、ガリレオは、はく害のため、考え

をかえてしまったのかというと、

ガリレオ「題名」 2 ガリレオ

一三二五⁵ ガリレオ

一三二七⁷ ガリレオ

か・る「刈」(五) 3 かる《一ッ・一リ・一レ》

九六二⁵ きょうは、そこが日あたりがいいようだ

から、そこそここの草をかれ。

九六二¹⁰ 大きなかまとりだして、ザックザックと

やまねこのまえのところの草をかりました。

一一二五⁵ 遠い山へいって、しばをかったり木を

切ったりして、村の人に買ってもらいました。

かる いいやがる・おもしろがる・かなしがる・かわ

いがりあう・かわいがる・こわがる・さみしがり

や・まちどおしがる

かるい「軽」(形) 14 かるい 軽い《一・一イ・一ク》

四一八⁵ 「ぼくが いっしょに ひくと、 かるく

なるかしら。」

四一八⁷ 「ああ、かるいよ。」とおっしゃった。

五二六⁷ といって、 かるくあたまをさげて、そこを

でました。

五二九⁶ 一つは大きくて、《略》持てそうもない

物、一つは小さくてかるそうな物です。

七九八⁹ 母うさぎは4kg、子うさぎは、おもいの

で320g、かるいので260gでした。

八三〇⁹ そのせつな、けんぎゅうは、うしの首をか

るくポンポンとたたきました。

八八二¹¹ はくちようは、つばさをサラサラと鳴らし、

かるく水の上をおよいでいた。

八九一⁷ 大きなはくちようたちは、そばへおよいで

きて、くちばしでかるくなでてくれた。

八九六⁶ ういたもみがあつたので、手ですくってみ

ますと、かるいもみともみがらばかりでした。

一一七二⁴ そのとき、少年は、かるい手がふとかた

にさわったので、びっくりしてとびあがりました。

一二一六² 力のこもった角、まるみのある面、重み

のかかった枝のつけね、ふわふわした軽い葉、

一四六五² まわりの空気にくらべてずっとかるいた

めに、どんととさかんにたちのぼります。

一四七八¹² うらのほうをかるく四つに割って、

一五四三¹⁰ かれは、かるくドアをおしあけながら、

「略。」と、じょうずな日本語で話しかけた。

かるた「歌留多」(名) 2 カルタ いろいろはるた

一四二二¹⁰ それから、タバコ、キセル、カルタ、カ

ボチャも、外国語であつたとお話しになったので、

一四二三¹² タバコ、カルタはポルトガル語、キセ

ルとカボチャはカンボジア語だといわれている。

かるやか 「軽」(形状) 2 かるやか

七418 かるやかなしらは、朝の光のように氣持よく、車中のすみからすみまで流れた。

十三296 「チャカチャン、チャカチャン」と、かるやかな、はずむような音をたてる。

かれ 「枯」 ↓うらがれ

かれ 「彼」(代名) 27 かれ

七415 かれは、むねに、大きなびかびかしたアコードオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。九846 だれもかれも、あせを流し、顔をまっかにしてほっています。

十3412 小学校をでただけのかれには、手のとどきそうもない空想になりがちであった。

十353 かれは、そのりっぱな機械をみて、感心するとともに、

十363 かれは、勇氣をふるいおこして、夜も晝もなく考えとおし、

十373 かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械を作ることにとりかかった。

十416 かれは、新しく母貝を求めてきて、やりなおしにかかった。

十417 かれを氣ちがいとよび、やましとさえののしるようになった。

十435 すると、かれはきゆうにとびあがった。

十441 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめのれいにささげて、その成功をしらせた。

十一811 男はみまわして、ひと目少年をみると、こんどはかれがさげびを發しました。

十二621 そのことが評判になって、だれもかれもかりにいくようになった。

十三1812 かれは、その胸に國運回復の計画をたて、

十三198 かれは、科学者であり、理想を実現する誠意にみちていました。

十三216 かれがふと思いかべたのは、

十三229 「略」といって、かれにせまりました。

十三2211 かれは、もみの生長について、大きな発見をしました。

十四510 かれが、父を失った直後、文学修業のためにパリに出て、

十四457 かれは、氣が氣ではありませんでした。

十四467 かれは、いままでにどれだけ歌を聞いたかしれませんが、

十四485 かれは、歌の声をたよりに、その方におよいで行きました。

十五4310 かれは、かるくドアをおしあけながら、「略」と、じょうずな日本語で話しかけた。

十五462 かれには、みなめずらしいものばかりであった。

十五464 ある小さな店先に出ていた一まいの赤絵のはちを手にとつて、かれは、びっくりした。

十五582 僕はかれのギリシア語の先生で、

十五583 つまり、私はかれのギリシア語の先生で、かれは私の日本語の先生というわけだが、

十五584 かれこそ、のちに名をなした新島襄だよ。

かれえだ 「枯枝」(名) 5 かれ枝

九382 かれ枝ならば、だれの山の木の枝でも、おつてよいことになっています。

九385 高くて手のとどかないかれ枝は、「略」、下から力をいれてひきおろします。

九391 枝ぶりのよいかれ枝のたくさんついてい

る高い木をみつけると、

九395 上の方のかれ枝をじゅんじゅんにたたき

落し、足もとの枝をおろして、

九405 木が動くので、かれ枝はなかなかたたき落せませんでした。

かれき 「枯木」(名) 2 かれ木

十三339 へやの すみに、かれ木が立っていました。

十三42 ごらん、まだこのかれ木のまもの、高いけやきのこずえの方を。

かれぎく 「枯菊」(名) 1 かれぎく

十三486 かれぎくをたいしている。

かれくさ 「枯草」(名) 2 かれ草

八604 野原にはかれ草がつみあげられ、こうのと

りは、長い赤い足をして歩きまわっていた。

十二149 地面には、夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいたかれ草が、すっかりくちていた。

かれら 「彼等」(代名) 4 かれら

十653 かれらは、だんなのねこかぶりをあばいたり、いたずらをしたり、

十三53 ことばのないかれらのことばで、なにごとか、ささやかわしているけはい。

十三69 やがて、かれらもせいぞろいして、かげろうのたいまつをたいて、おしよせて来る。

十五923 チルチルがふと見ると、かれらはみんなとなかよくテーブルについて、

かれる 「枯」(下) 10 かれる 《レーレル》

七246 かねないようにさ。

九398 根もとからかれていた高さ十五メートルに近い木にのぼったことがありました。

十一404 夕ぐれ寒くふくこがらしは、黄色くか

れたくぬぎ葉鳴らす。

十三211 実際に試験してみると、もみの木ははえ

るが、数年ならずしてかれてしまいました。

十三21 両種のもみは、たがいにならんで生長し、年がたつてもかれないで、よくしげりました。

十三22 アルプス産の小もみを植えたので、かれるのはふせがれましたが、

十四56 葉でも、花でも、なりかけている実でも、みんなかれて、くさってしまいます。

十四57 いっしょうけんめいそれをなおして、あなたがたがかれないようにしてあげたのです。

十四58 水がなかったら、なんでもすぐ、かれたり死んだりしてしまいます。

十四59 あの雨のおかげで、かれるのが助かったことを考えてごらんさい。

かわ 〔川〕 (名) 46 川 ↓あさひがわ・あまのがわ・おおかわ・おがわ・さかわがわ・そうせいかわ・たにがわ・てんりゅうがわ・はるのおがわ・まつかわ

一376 川がながれています。

一377 川が、さらさらとながれています。

一378 ちいさな川が、うちのまえをさらさらとながれています。

一523 おおきな川がながれていました。

一524 「これはなんと川だろう。」

二141 にわに川ができました。

二208 よるゆめ山川さかなふねなみ

二261 あるところに、川がありました。

二288 十二ひきのぶたが、そろって川をわたりました。

三212 川にいる魚と海にいる魚とをわけなさい。

三486 早く川の水でからだをあらって、がまのほをして、その上にねるがよい。

四121 とおいとおい川の水で生まれたものです。

五47 山から川のかんぼが生まれる。

五51 小さいなまに、小さいながれ山から川のかんぼが生まれる。

五52 川のかんぼ、チョチ、チョチ、アワワ。

五56 川は山からかけおりる。

五10 いわの上からとびおりて、さかなとジャブジャブはしゃいで、川は山からかけおりる。

五61 川は友だちとあくしゅして、川はだんだん大きくなる。

五62 川は友だちとあくしゅして、川はだんだん大きくなる。

五66 水力電氣をおこし、水道の水にもなり、川はだんだん大きくなる。

五67 川は野原にのびてくる。

五73 川は大きくなると、ゆっくりとながれていく。

五79 川はだまってはたらく。

五203 しげた竹やぶの小道をとおりたり、すずしい川のきしを走ったりしました。

五791 そうして、川をみて氣のついたことを書きました。

五798 「川の中の石が、のびたりちんだりしています。」

五7910 川から水がわきあがってくるようです。

五802 川の中の石と石とが、おどっています。

六136 ありは、川の岸で、うつむいて水をのうとしました。

六138 「あつ。」というまに、川の中におちてしまいました。

六156 波に流されて、川の岸につきましたので、

ありは、ぶじに岸にあがることができました。

六623 川が流れていました。

七191 川に落ちないように。

七694 たつぷりと、春は、小さな川にまで、あふれている、あふれている。

八282 川の水は銀色に光り、はくちようがしずかにういていました。

八333 天の川は、(略)、ぼうっとした銀の川のような光をはなっているようにみえるのです。

八5811 下をみると、大きな川が遠くへ流れている。

九113 はじめに、川の水の音をたいてきかせてくれた。

九1212 水は、さらさらと走って、やがて、すぐ下のすこし大きな川に流れこんでいた。

十103 ポンナフという石の橋があつて、イエンヌという川が、その下を流れていました。

十142 ビエンヌという川の岸には、

十144 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。

十145 その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少年にもあいました。

十一6012 すると、橋はまん中からおれて、三人は、川の中へドボンと落ちこんだ。

十二554 なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。

十二632 そこでまた川の水を飲んだ。

かわ 〔皮〕 (名) 12 かわ 皮 ↓けがわ・つりかわ・ひとかわ

八143 せどのあおぎりの木の皮に生みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。

八145 口のさきで、かたい皮にあなをあけて、ていねいに生みつけておいてくれましたので、

八16 5 虫たちは、〈略〉、手ごろな、皮のうすい、しるの多い木の根をさがしてあるきます。

八19 1 わずか二三ヶ月で大きくなって、皮をぬぎかえて地の上へでていきます。

八20 5 そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をまつのです。

八21 4 皮がこわばっていて不自由だし、目もよくはみえないらしいので、

八22 10 ただ、腹の下の方だけが皮にかくれています。

八23 6 やがておきなおったかと思うと、からだはすっかり皮からはなれていました。

九43 11 手 ほしがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしにとおし、のき下につるしてくれまう。

九55 6 せいひのひくい、おかしなかつこうの男が、ひぎをまげて、手に皮のむちを持って、

十56 3 かいこが、皮をぬいで新しく成長していくように、

十五35 1 また、木の皮や、あさなわなどであんだひももつかい、

かわ 〔側〕 じろろがわ・うちがわ・えんがわ・わたがわ・きたがわ・そとがわ・にしがわ・ひしがわ・ひだりがわ・みぎがわ・むこうがわ・りようがわ

かわい 〔可愛〕 (形) 22 かわいい 《イ・イク》

一21 4 〔側〕 おてて つないで、のみちをいけば、みんな かわいい ことりになって、

一23 2 〔側〕 「みんな かわいい ことりになって」のところはこまりました。

五86 10 〔側〕 「りようかんさん、このおにんぎよう、かわいいでしょう。」

五86 11 〔側〕 これはかわいいにんぎようだ。

五88 4 〔側〕 黒いころもに赤いおび——かわいいよ。

五109 9 おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃん は、ますますわがわがかわいくなりました。

六8 2 〔側〕 「まあ、かわいいねじ。」

七29 5 〔側〕 自轉車のチューブのようにふわふわした、黒っぽい、かわいいあおむしは、

八12 11 かわいいものをなくしたばかりでなく、私は、ピオの信頼をうらぎったのが、かなしくて

八37 3 かわいいひとりの王女もあって、なにひとつ不足なことはありませんでしたが、

八42 1 〔側〕 「おお、かわいいひめや。」

八43 6 〔側〕 「ああ、かわいいひめです。」

十二24 3 わたしには、かわいいめいとおいにあたります。

十二78 8 あまりかわいい少年だったので、よくみていますと、

十二94 2 すいすいととびまわるかわいい赤とんぼを、心の中にえがきます。

十二113 6 なんとかわいい汽車ではありませんか。

十三49 9 メアリとスーザンとエミリとが、かわいい口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわらう。

十三53 4 まだわかい、美しいおかあさんが、まるまるとふとったかわいいあかちゃんをだいていて

十五20 7 ひとり男の子で八つ、ひとり女の子で四つになるかわいい子どもたちでした。

十五64 3 〔側〕 「かわいいぼうやだな。」

十五74 3 自分の子女は、その性質がどんなにかがっていいようと、かわいいことはみな同じで

十五120 8 〔側〕 かわいい弟たちよ、妹たちよ。

かわいがりありあう 〔可愛合〕 (五) 1 かわいがりありあう 《ウ》

十五115 5 〔側〕 おまえと私とが、かわいがりあうとき

は、いつでも天國にいるのですよ。

かわいがる 〔可愛〕 (五) 13 かわいがる 《ツ・ラール・レ》

二60 6 〔側〕 ですから、このつくえや こしかけを、かわいがってやりましょうね。

三93 9 「よござすに かわいがってください。」

四75 1 ち——小さな人を かわいがれ。

五22 5 まっ白にこなふいたほしがきなどをいただいて、たいへんかわいがられました。

五22 10 〔側〕 「おじいさんが、かわいがってくださいたのでしょ。」

五100 3 〔側〕 いつまでもかわいがってやるよ。

八78 3 おばあさんは、それを自分の子のようにかわいがった。

十五59 2 〔側〕 私は小さいとき、その新島裏にたいそうかわいがられたのですから。

十五61 3 〔側〕 「〈略〉。」といって私をかわいがった。

十五69 10 ああ、新島のおじいさんは、私を京都までもつれて来て、朝夕かわいがってくださいだしたのだ。

十五112 7 〔側〕 母親はだれだって、子どもをかわいがるときにはお金持なのですよ。

十五116 8 〔側〕 あの人、おまえたちふたりをかわいがって、たいへんしんせつにくれるそうだね。

十五120 6 その歌を耳にしながら、もっと下級生をかわいがってあげばよかったなと思った。

かわいそう 〔可哀相〕 (形状) 18 かわいそう

三48 6 〔側〕 それは かわいそうだ。

三111 5 みかどがこのことをおききになって、たいへん かわいそうに お思いになりました。

四97 8 〔側〕 かわいそうだから、はなして おやり。

四98 10 〔側〕 でも かわいそうだな。

五94 10 〔側〕 「かわいそうなもの、ひろっていった、

かってみよう。」

六302 ㊦ かわいそうだね。

六363 ㊦ かわいそうに。

六1306 ㊦ うさぎさんたちは、たぬきさんがかわいそうになりました。

七367 ㊦ かわいそうだ。

八762 ㊦ しかし、かわいそうにあひるの子は、おきあがる氣にもなれなかった。

八8711 ㊦ きびしい冬のあいだ、どんなに苦しんだか、ここで話すにはあまりにもかわいそうである。

八903 ㊦ かわいそうにあひるの子は、ころされるものと思ひながら、水の上に頭をたれた。

九201 ㊦ 「かわいそうなつばめをすくえ。」

十579 ㊦ いまはきれいだけれど、コスモスは、おじいさんになるとかわいそうね。

十二114 ㊦ もしげがでもしてはかわいそうですからね。

十二246 ㊦ 発育がたいへんおくられていて、かわいそうです。

十四9211 ㊦ かわいそうに、その子は、おなががすいて、ここえて、身をひきずって歩いてた。

十四1024 ㊦ かわいそうな子だ。

かわいらしい「可愛」(形) 10 かわいらしい《イ》

三381 ㊦ うさぎの目はもも色のかわいらしい目です。

九369 ㊦ まっかな、かわいらしい山いちこの実が、こぼれたように雑草の中にありました。

十109 ㊦ プラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。

十三130 ㊦ なんとかわいらしい子どもたちではありませんか。

十三132 ㊦ そういうかわいらしい子どもがいて、なかよしになってくれたからです。

十三301 ㊦ 「ボーン」と、かわいらしい音をたてる。

十五957 ㊦ かわいらしい幸福たちがやって来た。

十五971 ㊦ まあ、なんてかわいらしいのだ。

十五979 ㊦ なんてかわいらしいほつぺたをしているのだろう。

十五9710 ㊦ なんてかわいらしい服を着ているのだろう。

かわかす「乾」(五) 2 かわかす《シ》

六1206 ㊦ そうつとかわかしておきなさい。

十二514 ㊦ よくかわかしてから、絵のぐで、顔をかいたり頭の毛をぬる。

かわかみ「川上」(名) 1 川上

十一45 ㊦ 川上の方をながめると、近くの町の工場

のえんとつが、なん本も立っているのがみえる。

かわき「乾」(名) 1 かわき

十二632 ㊦ いくら飲んでもののどかわきがとまらな

かった。

かわきかた「乾方」(名) 1 かわきかた

八206 ㊦ 上からつたわってくるあたかさと、かわ

きかたとで、《略》ことなどを知ります。

かわききる「乾切」(五) 1 かわききる《ツ》

十四5812 ㊦ あのかわききった夏のさいちゅうに、

かわぎし「川岸」(名) 1 川岸

八283 ㊦ 川岸にそって車を走らせていくと、林の中

にごてんがあって、

かわく「乾」(四五) 10 かわく《イーカー

キーク》

二177 ㊦ 「ぬれたきものをきて、かわくとぬ

ぐものはなかに。」

六134 ㊦ あついで日中の道を、ものを運びながら歩い

てくると、のどがかわきました。

六1205 ㊦ でも、のりがかわかないうちにあまりい

じると、すぐはがれますよ。

六1209 ㊦ 早くかわくといいな。

六1209 ㊦ かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃんのところへ持って行ってあげるんだ。

八1086 ㊦ 天氣のよい日に2日ほしたら、もみがよく

かわきました。

九271 ㊦ ㊦ こがらしや子ぶたのはなもかわきけり

十二629 ㊦ ある日のこと、八郎が山でしごとをして

いると、のどがかわいてきた。

十二631 ㊦ 小魚はしおからかったので、のどがかわ

いてたまらない。

十五879 ㊦ 『のどかわいていないときに物を飲む幸福』と、

かわぐち「川口」(名) 2 川口

十一42 ㊦ 川口はいいところだ。

十一52 ㊦ 川口の子どもたちは、いつも砂原で、す

もうをとったり、

かわぐちのこどもたち「課名」 2 川口の子どもた

ち

十一22 ㊦ 一 川口の子どもたち……四

十一41 ㊦ 一 川口の子どもたち

かわざいく「皮細工」(名) 1 皮ざいく

十二1057 ㊦ 皮ざいくの店らしく、なにかの毛皮がひ

ろげてあります。

かわしも「川下」(名) 1 川しも

九337 ㊦ ㊦ 黒くてひらいた貝がとれますので、なん

ども湖に近い川しもの方へとりにいきました。

かわす「交」(五) 1 かわす《シ》↓ささやき

かわす・とりかわす

十二868 ㊦ ネットをはさんで、両選手はかたいあく

手をかわしました。

かわす「簪」(五) 2 かわす 《—シ—ス》

十五302 ひらりと身をかわした少年は、身をかわすと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。

十五303 身をかわすと同時に、

かわす「蛙」(名) 2 かわす

九1186 蛙 おおずきを口にふくみて鳴らすごとかわすは鳴くも夏のあさ夜を

十五84 文 かわすだまりて人の足大きくすぐる

かわなみ「川波」(名) 1 川波

九113 川波がザワザワとたちさわぐところである。

かわのあかんぼ「題名」1 川のあかんぼ

五42 川のあかんぼ

かわのうた「課名」2 川のうた

五22 一 川のうた……四

五41 一 川のうた

かわはおおきくなる「題名」1 川は大きくなる

五55 川は大きくなる

かわははたらく「題名」1 川ははたらく

五72 川ははたらく

かわべり「川縁」(名) 2 川べり

九1255 はじめの八キロほどは、村ざとがあつて川

べりに道もあつたが、いまはそれもなくなつて、

十二725 そのあたりにいるのは、川べりにある船

大工の子どもや、略りようしの子どもたちで、

かわら「河原」(名) 3 かわら

一529 河 「かわらの すなは、みんな ちいさな

ほしみたいですね。」

一543 河 この お月さんの くには、一ねんに

一どたまひろいにこの かわらに きます。

十一2811 一にぎりのあぶらの種をかりて、かわ

らへいって、あき地にまいておきました。

かわらやね「瓦屋根」(名) 2 かわら屋根

十144 フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつっていました。

十192 小学校のかわら屋根から雨がしたる。

かわり「代」(名) 15 かわり いれかわり

四127 代 もえて いる 火を もつて あるく かわ

りに、わたくしをもつてあるきます。

六816 代 そのかわり、にいはんは山へいらつ

しやうて。

六1105 「なんだ」というかわりに、「ダンダ」と

いってみると、

六1343 代 「そのかわり、ぼくが負けたら、この角

を、おつてしまつてもいい。」

八187 たいそうほねがおれて、このうえなくふべ

んですが、そのかわり、親たちの大てきのすずめ

もねこもやつてこないから、安全です。

九47 黄色のかわりに、みどり色をぬつてみると、

また、ちがった感じがします。

九49 みどり色のかわりに、むらさきをぬつたら、

どうなるでしょう。

九52 むらさきのかわりに、茶色をぬつたら、ど

うなるでしょう。

九421 代 そのかわりまた、いつのまにかがなが

渡つてきました。

十一214 父親が病気でねていましたので、金次郎

が、そのかわりにでることになりました。

十一229 代 どうかそのかわりにはいってください。

十二454 代 人形はものをいわないが、そのかわり

説明がついている。

十二923 くりはあんがい少なかったこと、そのか

わりきのこがたくさんあったこと、

十四121 手 もしこわれたら、そちらでわけなくか

わりをお見つけになれるでしょう。

十五581 手 そのかわり日本語を覚えてくれと、そ

の申し出でを承知して、

かわり「変」(名) 4 かわり いおかわり

二668 けれども、うごかす はやさに かわりは

ない。

十403 同じことをなんどもくり返してみたところ

で、かわりのあるはずはない。

十一741 手 「べつにかわりはございません。」

十二975 みたところ、なんのかわりもない貝です

が、いまから三四千年もまえの貝です。

かわりかた「変方」(名) 1 かわりかた

十449 海水の温度に大きなかわりかたもなく、四

年めになった。

かわりばんこ「代番」(名) 3 かわりばんこ

三773 代 お日さまは一つしかないから、みんな

で かわりばんこに お目にかかるのです。

十715 「略」ふたりは、かわりばんこに指を

つつこみました。

十三591 代 一台の長いすがおいてあつたが、見物

の人が、かわりばんこにやつて来て、

かわる「変」(四五) 29 かわる 変わる 《—ツ—

リ—ル—レ—

一287 ひとつの おが、わらったり、略、か

んがえたり、いろいろに かわります。

二118 わけて いるうちに、その わけかたが、

いろいろに かわつて いきます。

三321 代 一だん あがる ごとに、あたりの よう

すが かわります。

四1143 代 それでは、なにか かわつた ことをし

て、おなぐさめ いたし しょう。

六三六 風を受けるたびに雲のからだのかっこうがかわる。

七二五 〇 それから十日すぎて、からだが黒っぽかったのが、青くかわってきたんですよ。

七二六 〇 あおむしが、へんな色にかわっている。

七二七 〇 これから、どうかわるでしょうね。

七二九 〇 黒っぽい、かわいいあおむしは、だいこんのはっぱと同じ色にかわっていた。

七二九 〇 きのもう、学校から帰ってみると、あおむしは、もう黄色ななぎにかわっていた。

八一〇 〇 毎日なにかかわったことをしでかしては、みんなをおどろかせたり感心させたりします。

八四〇 〇 いすはたちまちこがねにかわりました。

八四一 〇 まずコーヒーをおのみになろうとすると、コーヒーはこがねにかわりました。

九七四 〇 光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、茶色のどんぐりにかわっていました。

九四四 〇 これらのことを一つ一つ思いだしているうちに、心持が、しだいにかわってきました。

一四一 〇 ある小さな生物が、海水いちめんにふえて、海水が茶色にかわるほどになるのである。

一一六九 〇 こうもかわればかわるものか——これが父親であろうとは、とても思われませんでした。

一一六九 〇 こうもかわればかわるものか——

一一八八 〇 その熱心とそのしんぼう強さは、まえとすこしもかわりませんでした。

一二八八 〇 ことばは、〈略〉や、音声や身ぶりによって、いろいろにその意味がかわる。

一二八九 〇 ほんとうに感謝の心持をこめていうときと、ただとおりのあいさつとしていうときとでは、いいかたもかわってくるであろう。

一三二四 〇 植林が成功してから以後の農業は、すっ

かりかわりました。

一三二七 〇 一見、なんのかわったところもないような、このホートンではあるが、

一三三八 〇 それはそうとして、ラファエルのかいたマドンナのかわったのを見せてあげよう。

一四六八 〇 そういう、いろいろなかわったことがおこるのです。

一四六九 〇 日かげで見ても、べつにかわったようすはなにもありませんが、

一五一三 〇 照る月の位置かわりけん鳥かごの屋根にうつりし影なくなりぬ

一五三六 〇 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、これがだんだん変わって、

一五三六 〇 それからお天気が変わると、これが、『雨の幸福』で、眞珠をいっぱいつけています。

かわる 〔代〕 〔五〕 4 かわる 《ーッ》 ↓ うまれかわる・おかわる

四五一 〇 「おい、こんどは、ぼくがかわって、かついでいこう。」

一四四 〇 弟が卒業するので、私が、母にかわってました。

一一七六 〇 コップなりさじなりをその手から取って、看護婦にかわってそれを飲ませたりしました。

一三三八 〇 え、おとうさんが、そう……じゃあ、かわってください。

かわるがわる 〔交代〕 〔副〕 5 かわるがわる

四四四 〇 みんながかわるがわる、つめたい水で、あたまをひやしてやりました。

六四四 〇 ぼくとおかあさんは、かわるがわるこの望遠鏡をのぞいて楽しんだ。

九八六 〇 帰りは、みんなかわるがわるリヤカーをおして歩きました。

九一〇 〇 ジャンプ台では、じょうずな人たちが、かわるがわるジャンプをしている。

一二四 〇 ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立ってコロンブスの成功を祝しますと、

かん 〔官〕 ↓ さいばんかん・さいばんかんの

かん 〔巻〕 ↓ じゅうにかん

かん 〔聞〕 ↓ いちびようかん・いっしゅうかんごと・いっぶんかん・しちねんかん・とうきょうよこはまかん・ふつかかん・みつかかん

かん 〔感〕 ↓ りたいかん

かん 〔館〕 ↓ えいがかん・カーネギーはくぶつかん・かいがかん・きかいかん・としょかん・はくぶつかん・びじゅつかん・メトロポリタンはくぶつかん・ろくめいかん

がん 〔題名〕 1 がん

三五一 〇 がん

がん 〔岸〕 ↓ ほっかいがんとくゆう

がん 〔岩〕 ↓ かがうがん

がん 〔雁〕 〔名〕 39 がん

三五四 〇 がんがかえる、がんがかえる、がんがかえる。

三五四 〇 がんがかえる、がんがかえる。

三五四 〇 たすきにならんで、がんがかえる。

三五四 〇 おびになつて、ひもになつて、がんがかえる。

四四二 〇 三十ばの がんは、まいにちまいにち、北へむかつてたづねをつけていました。

四四三 〇 がんは、おたがいに いましめあって、ぎょうぎよく空をとびました。

四四七 〇 けさも 早くから、三十ばの がんは 目をさました。

四44 2 どうぼんの がんは、大きな声でさげば
ました。
四47 6 あさの 風は、氣もちよく、がんのむなげ
にあたりました。
四47 8 三十ぼの がんは、一列になってとんで
いきましたが、
四48 9 ほかの がんは、また、みんなをだまして
びっくりさせるのだろうと 思って、
四49 8 二十九わの がんは、あわてて かつちゃん
のところへ あつまりました。
四50 2 力の つよい がんが、三ぼで、かつちゃん
のおちていくのを、下からうけとめました。
四50 3 ほかの がんは、右や 左から かつちゃん
をだきかかえました。
四52 3 おんぶして いる がんも おちそうになり
ます。
四52 6 二十九わの がんは、列を きれいに つく
る ところでは ありません。
四53 2 がんの なかまは、〈略〉みずうみの とこ
ろへ いこうと 話しあいました。
四54 1 がんの なかまは、この 林の 中におりま
した。
四54 3 一わの がんが、みずうみの きれいな 水
をくむと、
四54 6 ほうたいをもつて いた がんが、手早く
くるくると まきつけました。
四55 3 そこで、目ざとい がんが 五六は、あちこ
ちで みはりばんを しました。
四59 2 二十九わの がんは、〈略〉と さげびま
した。
四59 10 ㊦ 「りすさん、がんの なかまを みかけな
かったかい。」

四60 2 ㊦ 「ふくろうさん、がんの なかまを みな
かったかい。」
四60 9 しかたがないので、二十九わの がんは、
テーブルの まわりに あつまりました。
四60 10 どの がんも どの がんも、夜つゆで から
だが びっしり ぬれて いました。
四60 10 どの がんも どの がんも、
四61 2 いんそつがかりの がんが、口を ひらいて、
「〈略〉。」
四61 9 二十九わの がんが、食事を すませると、
四62 1 「〈略〉。」と、出発がかりの がんが、みん
なを 元氣つけました。
四62 5 みると、なかまの がんが、へびから ぬけ
だそうとして、もがいて いる ところ です。
四62 9 その ひまに なかまの がんは、するりと
ぬけ だしました。
四65 3 三十ぼの がんは、みずうみの 島を とび
たちました。
四65 6 がんの 列は、その きれいな 雲の 中に、
みえなく なって いました。
八73 2 すると、そこへ二わの がんが やってきた。
八73 11 そうして二わの がんは、ぬまの 中に 死んで
落ちた。
八74 1 がんの むれが、そろってあしの あいだから
とび たった。
九42 1 ㊦ そのかわりまた、いつのまにか がんが
渡って きました。
かんか 「感化」(名) 1 感化
十三24 2 第一、ユートランドの 氣候が、そのよい
感化を受けました。
かんがえ 「考」(名) 27 かんがえ 考え ↓おかん
がえ

三61 9 ㊦ 「こりやあうまい かんがえだ。」
三66 7 ㊦ 「そりやあうまい かんがえだね。」
六40 1 ㊦ ああ、いい 考えがある。
八33 7 ただ「遠い」という 考え だけでは、この 遠
いきよりは、おしはかることは できません。
八45 5 けれども、これという 考えは できませんで
した。
八73 7 ㊦ どうだ、われわれと いっしょに にかけて、
渡り鳥になる 考えは ないかね。
八79 5 そればかりでなく、ねこやに とりとは
まったく ちがった 考えをもつて いた。
八80 5 ㊦ かしいもの たちが もの を いて いると
きに、自分の 考えなどはいえないの だよ。
十32 1 無責任な、ひきょうな 考えをもちたくはあ
りません。
十33 11 佐吉の 考えは こうである。
十34 11 佐吉の 考えは、しだいに 高まって いったが、
十40 8 村や町の 者は、幸吉の むだばねを あざけり、
その ゆめの ような 考えを わらった。
十一24 5 金次郎は、自分の 考えを くり返し 話して、
母親に すすめました。
十三9 1 これを いくども くり返して たしかめ、す
でに 知ったことを 材料として、考えを おし進め、
十三10 3 今日でも、まだ、そうした 考えが のこっ
ている。
十三10 11 漢字で 名まえを 書かぬ 國の人々などには、
この 考えの まったくあてはまらぬことは、いうま
でもない。
十三16 5 では、ガリレオは、はく害のため、考え
をかえて しまったのか という と、
十四9 8 ㊦ どうあっても 考えの たりのない ことです。
十四31 4 そういう ちっぽけな 考えでは、とても 世

界の中にはたっていないません。
十四318 あなたがたの考えひとつで、日本はよくもわるくなるのです。

十五343 私たちは、自分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。

十五349 その結びかたや、なわの色や、なわの太さなどによって、いろいろな考えを表わした。

十五369 「うえ」「した」という考えを表わすのには、

十五373 「すえ」とかいう考えを表わすことにした。

十五781 きみたちの考えが、たとい世間の考えとちがっていても、その発表をためらってはならない。

十五781 たとい世間の考えとちがっていても、十五1046 ㊦ 『むじゃ氣な考えの幸福』です。

かんがえあわせる 「考合」(下二) 1 考えあわせる 《一せ》

十四263 このことから考えあわせてみると、かんがえおよぶ 「考及」(五) 1 考えおよぶ 《一ン》

六64 「略」などと考えているうちに、ふと、自分のことに考えおよんだ。

かんがえかた 「考方」(名) 3 考えかた

十三131 こういうふうな考えかたがもとになって、十五454 それまでのものの考えかたや商賣では、

ふだんの生活さえむずかしくなってきた。

十五7312 老博士は、きょうに乗じて、アメリカの考えかたについて熱意をこめて語られた。

かんがえこと 「考事」(名) 2 考えこと
六504 ㊦ 考えこともできそうな、ああ、おおらかな晝の空。

十四886 それとも、心の中で考えことをして、思わず方向がちがったものであろうか。

かんがえこむ 「考込」(五) 2 かんがえこむ 考えこむ 《ムーン》

三1093 空をながめてはためいきをつき、じつとかんがえこむようになりまし。

六7211 ㊦ 「ごろう、なにを考えこんでいるんだね。」

かんがえだす 「考出」(五) 1 考えだす 《一ス》

四671 上から よんでも 下から よんでも、おなじになることを考えだす あそびです。

かんがえつく 「考付」(五) 3 考えつく 《一イ・一キ》

六7711 風や、《略》は、動いていても息をしないから、命がないんだと、ごろうは考えつきました。

六781 その夜、ごろうはおとうさんに、この考えついたことを話しました。

十一2111 金次郎はいいことを考えつきました。

かんがえとおす 「考通」(五) 1 考えとおす 《一シ》

十363 かれは、勇氣をふるいおこして、夜も晝もなく考えとおし、

かんがえどおり 「考通」(名) 2 かんがえどおり

二112 ㊦ 「では、めいめいの かんがえどおりに、わけてごらんさい。」

二115 そうして、ひとりびとりの かんがえどおりにわけてみました。

かんがえぬく 「考抜」(五) 1 考えぬく 《一キ》

十3511 佐吉は、一けんの小屋に閉じこもって、いっしんに考えぬき、

十一637 少年は、色のあさ黒い、おも長な顔で、考えぶかそうな目をしていました。

かんがえもの 「考物」(名) 1 かんがえもの

二175 かんがえものをして あそびました。

かんがえる 「考」(下二) 100 かんがえる 考える 《一エ・エル・エレ》 おかんがえる

一223 それから、このうたのゆうぎを、みんながかってに かんがえておりました。

一286 ひとつのかおが、わらったり、ないたり、おこったり、よろこんだり、かんがえたり、

二58 ㊦ 「お友だちのなを かんがえて、ごらんさい。」

二65 ㊦ よく かんがえてごらんさい。

二98 みんなは、いろいろ かんがえました。

二501 けれども、それをやめて、しばらく かんがえます。

二553 ゆうべ、ねどこにはいつてから、こんなことを かんがえました。

二563 こんなことを かんがえているうちに、いつのまにか、ねむってしまいました。

二613 みんなで かんがえて、やりましょう。

三1111 「《略》。」と、ふたりはいろいろ かんがえました。

四215 ㊦ ねこの わたくしは、どの ねずみをつかまえようかと 考えました。

四365 みんなは、しばらく 考えて いました。

四586 ㊦ ねているうちに、いいこと 考えたんだ。

四732 「いろはがるた」を考えました。

五6411 ㊦ さあ、考えてごらん。

六644 これはどんなところにおかれるのだろうか、と考えているうちに、

- 六59 うたうたは、なぜうたいやすいかと考えました。
- 六59 6 どうして、ふだんの話がうたえないのかと考えました。
- 六66 お話の題はべつにきめませんから、かつてにつきを教えてください。
- 六68 7 一組の人がみんな考えてこしらえたまんがです。
- 六72 4 その日、晩ごはんをたべながら、ごろうはこんなことを考えました。
- 六74 3 ㊦ それを考えたならわかるじゃありませんか。
- 六74 10 こんなことをつきからつきへと考えました。
- 六77 2 ㊦ きのうから、それを考えているんです。
- 六78 3 ㊦ よく考えた。
- 六108 1 なぜはながつまるといえなくなることばとはながつまってもいえることばとがあるのだろうか、と考えてみた。
- 六108 11 ものをいうときに、声はなからでるかでないかということを、考えたことがなかった。
- 六113 2 それ以上ふかく考えてみたことはなかった。
- 六113 3 それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作ったものであることがわかって、
- 六113 8 ぼくは、こう考えると、〈略〉などという氣持は、どこかへふっとんでしまった。
- 六113 11 新しく思いついたことをみんなに話して、びっくりさせてやろうと考えたからである。
- 六117 3 うちへ帰って、そのたこをみて、作りかたを考えてみました。
- 六117 11 「〈略〉。」と、いろいろ考えましたが、ただしちゃんのわらい顔をかくことにしました。
- 七8 2 かしの木は、きょうもそんなことを考えた。
- 七60 2 考え考え歩きまわるような、大きなあり。

- 七60 2 考え考え歩きまわるような、大きなあり。
- 七77 3 そうして、左の足が一本短くて——それから——といつてから、ちよつと考える。
- 七84 3 ㊦ それで、齒が二三本ぬけているにちがいないと、考えました。
- 八25 3 死ぬことなど考えられないほどにぎやかに鳴きだしたせみも、
- 八30 2 天帝は、ひとつこの男のうでをためしてみようと考えて、
- 八47 2 王子も、なんとかして父の病氣をなおしたいと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。
- 八80 10 ㊦ おまえさん、なにを考えているの。
- 八81 1 ㊦ おまえさんは、することがないから、そんなことを考えるのだよ。
- 八81 3 ㊦ そうすれば、そんなことは考えなくなってしまうよ。
- 八93 4 そのむかし、いじめられたり、あざけられたりしたときのことを考えた。
- 九11 1 水の音をたいこであらわすことなどは、ちよつと考えられないが、
- 九48 7 そのめんどろだという裁判のようすなどを考えて、おそくまでねむれませんでした。
- 九101 11 ㊦ なんだから、いま考えるとはずかしい氣持さ。
- 九140 10 くもは、おなががすいているのに氣がつき、また、あみをかけようと考えました。
- 十29 2 どうしてそのものがこうなったかというところを、考えてしらべたいと思っています。
- 十29 5 なぜ、このようなあみかたをしなければならなかったのか、よく考えてみたいと思います。
- 十30 3 どうしてそんなことになったか、そのわけをよく考えていてみようと思います。

- 十31 1 そうして、うちじゅうの人たちに、めいわくをかけないようにしたいと考えます。
- 十32 6 自分のつとめをはたすだけの勇氣を、もちたいと考えます。
- 十33 4 ㊦ ほかのことを考えないで、みっちりしごとをやってくれ。
- 十41 5 これは、まったく考えてもみなかったことである。
- 十55 3 ことばの記ろくは、妹の心の写真になるのではないかと、ふと、こんなことを考えました。
- 十55 6 思ったり、感じたり、考えたりしていることは、ちがったものになります。
- 十73 11 ㊦ あまりの申しわけなさに、ふたりとも、命をすてておわびをしようと考え、
- 十一 9 1 ㊦ いつもそのうえを考えていて、いいことをはつきりきめる。
- 十一 66 4 看護人は、しばらく考えていましたが、
- 十一 71 8 「〈略〉。」と、少年は考えました。
- 十一 72 3 それからそれへと、いろいろ考えました。
- 十一 74 12 すると、医者ほちよつと考えてから、こいういしました。
- 十二 12 1 土人のひとりが、書物というものはなにかすばらしい力をもっているものだと考えました。
- 十二 14 6 文雄は、あれこれと考えていたが、根もとをかこうと決心した。
- 十二 19 10 ㊦ すんだことをかえりみて、來年はもっともつとよくしたいと考えることができます。
- 十二 22 7 文雄はこう考えた。
- 十二 23 9 父がまえからそういうときのことを考えて、
- 十二 47 10 ㊦ 便利とか不便だけで物事を考えないところに、人間の美しさやおもしろさが生まれてく

るのだ。

十二75 5 そのしんとしたしずかさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の句を考えました。

十二93 5 前後の続きぐあいをよく考えて、ことばを選び、

十二103 9 お金ができてからはどれほど便利になったか、考えることができますか。

十三7 7 ああ、季節のこういふのどかなとき、こういふしずかな午前にあつて考える、

十三8 4 知識は、〈略〉、自分で本を読んだり、考えたり、調べたりして、しだいにましていく。

十三8 8 深い、正しい知識を得るには、考えたり、調べたり、〈略〉たり、実験したりする。

十三11 1 これらの人がみな同じ性質をもち、同じ運命をたどるとは、考えられない。

十三11 9 それは、学者がいろいろなに考えて、原因と結果との関係を調べきわめている。

十三11 12 まっすぐなことや曲がつたことは、知識をもととして考えなければならぬ。

十三45 5 ですから、文字にあらわれていないあいつてのことばを考えて、

十三61 6 6 こんなことを考えて、きみも勉強を続けるんだね。

十四6 7 7 たつて以来、一分間も、おかあさんのことを考えないではいられませんでした。

十四22 9 9 つかっているうちに、すっかりなれてしまつて、日本語になつたと考えていいだろう。

十四25 8 ことばも、それにつれて、新しく生まれるものであることが、考えられる。

十四31 1 なんでも日本、日本と、日本だけが特別の國でもあるかのように考えて、

十四31 10 あなたがたのものを見る目、ものを考え

る力が大きくなつていけば、

十四57 8 8 あなたがたは、自分のことしか考えないようですが、

十四58 3 3 そういうことを考えてみたことがありますか。

十四59 1 1 ああ、雨のおかげで、かれるのが助かったことを考えてもらなさい。

十四60 7 7 あなたがたは、どうして地面にはえたのか、考えたことがありますか。

十四60 10 花も、葉も、つるも、首をひねつて考えていました。

十四80 9 あのような、短くて調子のいい、氣のきいたものになつたものとも考えられます。

十四86 7 7 いますこしふかく考えれば、さらにももしろい場面が発見されるように思われる。

十四93 4 その小さなマッチ賣りのむすめは、自分のまき毛のことも、雪のことも考えなかつた。

十四93 6 その小さなマッチ賣りのむすめの考えたことはそれであつた。

十五38 10 「上・下・生」などの読みかたをちよつと考えてみただけでも、

十五42 7 考えてみると、世界のどこに、こんなに〈略〉文字をつかっている國があるうか。

十五42 10 私たちは、この問題をもつとよく考えてみよう。

十五48 8 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考へ、

十五106 10 10 『考えることの喜び』のとなりにいます。

かんかん (副) 2 かんかん
五82 6 日のかんかんてるところで長くあそばないことなどを、話しあいました。

八109 2 のこつていたのみを、1日、日光にかんかんほして、すぐにもみすりをしてみました。

かんかんかんかん (感) 1 ガン、ガン、ガン、ガン

三88 5 ガン、ガン、ガン、ガン。

かんかんぼうし (名) 1 かんかんぼうし
六32 5 てっぺんのぬけたかんかんぼうしがふきとばされる。

かんき (寒氣) (名) 1 寒氣

九19 9 すぐに、寒氣のために苦しんでいるつばめのせわをするを、新聞に廣告しました。

かんけい (関係) (名) 15 かんけい 関係
八8 10 なんとりこうな、土地にかんけいのふかい鳥だろうと、

十三9 2 種々のことからの関係を明らかにして、きまつた法則を知る。

十三9 3 いいかえれば、ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知つて、

十三9 6 たとえば、花のおしべとめしべとの関係についていうと、

十三11 4 原因と結果との関係もないのに、一つのことは他のことの原因であると、信ずるのである。

十三11 6 原因・結果の関係の簡単なものは、普通の知識によつて知られ、

十三11 10 それは、学者がいろいろなに考えて、原因と結果との関係を調べきわめている。

十四27 2 日本といちばん関係のふかつた大陸からは、どんなことばがはいつてきたのだろうか

十四32 9 星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、じつは、ふかいつながりがあるのです。

十四69 4 ちよつと見ただけでは、まったく関係のないようなことがら、

十四73¹² しかし、それも、前の温度のむらとなにか関係があることだけはたしかでしょう。

十四84⁸ 空中の温度の変化、風の関係、水蒸気の量、高度など、さまざまな条件によって、

十五37⁹ 「木」に關係のあることを表わし、

十五56⁸ 図 そんなわけで、私と日本とはふかい関係があるのだが、

十五59⁶ が、ことばみじかにその關係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、

かんけいする「關係」(サ変) 1 關係する《—シ》

十四74⁸ どんな流れがおこるかというようなことにも關係してきます。

かんこ「看護」(名) 1 看護

十一87¹¹ で、チチロはまた看護をはじめました。

かんこ「漢語」(名) 2 漢語

十四27⁵ 図 漢語をつかう。

十四27⁵ 図 「略。」などというときの漢語は、

たいてい大陸からきたことばだ。

かんこう「刊行」(名) 1 刊行物

かんこうぶつ「刊行物」(名) 1 刊行物

十五54¹² 用事は、《略》カーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらうことで、

かんこする「看護」(サ変) 1 看護する《—シ》

十一81³ ちょうど、少年がそういうのはかない希望をもって、いっしんに看護していたときでした。

かんごにん「看護人」(名) 14 看護人

十一65¹ 看護人と呼んで、少年をその父親のところへつれていくようにしていました。

十一65⁴ 「略。」と、看護人がきました。

十一65⁶ しかし看護人は、そういう名を思いだせませんでした。

十一65⁹ 「年よりのでかせぎ人ですか、外国から帰ってきた——」と、看護人がきました。

十一66⁴ 看護人は、しばらく考えていましたが、ふと思いだしたように、

十一66¹⁰ 看護人は、少年をながめて、

十一67⁷ 「略。」と、看護人は、くり返しながら、中へはいりました。

十一68⁷ その大きなへやのはしまでいくと、看護人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまって、

十一73⁵ さっきの看護婦と、もうひとりの看護人とがついていました。

十一77⁸ 目を開いたときに、その小さな看護人をさがすようにみえました。

十一82⁸ 看護婦や、看護人や、助手がかけよってきました。

十一86⁵ 「略。」と、看護人が答えました。

十一87⁴ 「略。」と、また、看護人が小声でいいました。

十一89⁵ 医者が、看護婦と看護人をつれてはいってきました。

かんこふ「看護婦」(名) 17 看護婦

十一21⁶ 看護婦がもうふをほしている。

十一68⁵ 看護婦がふたり、手にくすりびんを持って、へやを歩きまわっていました。

十一72⁵ それは看護婦でした。

十一72⁹ 「略。」と、看護婦はやさしくいいました。

十一73² 看護婦は、ほかにはなんにもいわずにいってしまいました。

十一73⁵ さっきの看護婦と、もうひとりの看護人とがついていました。

十一74⁴ 「略。」と、看護婦がいました。

十一74⁹ そうして、二こと三こと看護婦にたずねました。

十一74¹² 「略。」と、看護婦は答えました。

十一76⁵ 看護婦がなにか飲み物を持ってくると、コップなりさじなりをその手から取って、

十一76⁶ コップなりさじなりをその手から取って、看護婦にかわってそれを飲ませたりしました。

十一78¹² 一日に二ど、看護婦が持ってきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、

十一81⁸ ひとりの男が、看護婦に送られながら、そのへやにはいつてきました。

十一82⁸ 看護婦や、看護人や、助手がかけよってきました。

十一89⁵ 医者が、看護婦と看護人をつれてはいってきました。

十一90³ 看護婦が十字かぞうをかべからはずしました。

十一90¹² 看護婦が、小さなすみれの花たばを、ベッドの上のコップの中から取ってきました。

かんこふさん「看護婦」(名) 2 看護婦さん

十一81⁵ 図 「さようなら、看護婦さん。」

十一92⁵ 図 看護婦さんありがとう。

かんさつ「観察」(名) 1 観察

十27³ ぼくは、いままでに学んだ「自然の観察」を、ずっとつづけていきたいと思っています。

かんさつする「観察」(サ変) 7 観察する《—シ—スレ》

十28⁷ 観察すればするほど、自然のおもしろさもわかり、そのふしぎなことにうたれ、

十三8⁹ また、種々の器械をつかって観察したり、実験したりする。

十三14⁵ いっしんに観察したり研究したりして、

《略》、ということを見ました。

十三14 自分で望遠鏡を組み立てて、それで天体を観察し、数学でこまかに計算した結果、

十四32 けれども、星をこまかく観察したことから、農業が進歩したのです。

十四62 自然の現象を観察し、研究することのすきな人には、なかなかおもしろい見ものです。

十四85 空から降ってきた雪の一ひらを受けとって、それをくわしく観察してみると、

かんさつにつき 「観察日記」(名) 1 観察日記
七27 観察日記に、さっそく、これを写生しておこう。

かんじ 「題名」 2 漢字

十五32 漢字

十五36 漢字

かんじ 「感」(名) 14 感じ

八36 夜になって天の川をみると、なんともいえない大きなふかい感じにうたれます。

九43 白い紙に赤い色をぬりますと、明かるい感じになります。

九48 黄色のかわりに、みどり色をぬってみると、また、ちがった感じがします。

九54 二色のときよりも、もっとちがった感じがするにちがいません。

九55 四色、五色と数をましていけば、その感じはまたふかくなるでしょう。

九59 オルガンで一つの音だけひいてきいても、その音には、ある感じがこもっているものです。

九61 この音と、ほかの音とをいっしょにひいてみると、まえとはちがった感じがします。

九69 色の組みあわせが、さまざまの感じをあらわすのと同じように、

九83 おたがいにとけあって、一つの感じをつくりあげると同じように、

十二55 自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。

十三27 ホーントンは一本のトンネルのようになって、どこまでもつながっている感じがする。

十三59 その絵は、たいへん感じがちがいますね、おじさん。

十三59 キリストのおかあさんという感じが、よく出ているんじゃないでしょうか。

十三59 きちんとした、おごそかな感じがするね。

かんじ 「漢字」(名) 17 かん字 漢字

三97 かん字をかくこともできます。

十三10 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、この考えのまったくあてはまらぬことは、

十五35 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、

十五36 漢字は、《略》、はじめ、事物の形をうつしたのから発達したものであるが、

十五37 漢字が中國から日本に伝えられたのは、千七百年ほどまえであるが、

十五38 「うみ」などをつかって、その漢字の意味にあつた日本語をあてて読むこともした。

十五38 このように、日本では一つの漢字をふたとおりに読んできたが、

十五38 中國の発音にもとづいた漢字の読みかたを「音」といい、

十五38 それで、たいていの漢字には、この音と訓のふたとおりの性質のちがった読みかたがある。

十五39 中國から傳つた漢字をつかつているうちに、

十五39 その漢字から、日本語を表わすのに便利なかたかなや、ひらがなを作りだすようになった。

十五39 かたかなは漢字の一部分をとって作ったもので、

十五39 ひらがなはかたかなのように漢字の一部をとったのではなく、

十五39 「に」は「仁」というように、漢字の全体をくずしたものから作りだしたものである。

十五40 しかし、いまでは漢字の長所をいかして、かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文章のふつうの書き表わしかたとなっている。

十五42 いま日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種の文字をつかつており、

がんにつ 「元日」(名) 2 元日

十四42 元日の朝、人々が、マッチ賣りのむすめの、ひえきった小さなきながらを見つけたとき、

十四42 その子がどんなに幸福に、神さまの樂園の中で、元日をむかえているかを知らないのだ。

かんじとる 「感取」(五) 2 感じとる 《ール》

十五10 ただ、その美しいものを、すなおに感じとる心を、われわれは失っている。

十六3 その美しいものを、すなおに感じとる心を、もちつづけたいものである。

かんじはじめる 「感始」(下) 1 感じはじめる 《一メ》

十二38 私の手にふれるあらゆるものが、生命をもって動いているように感じはじめました。

かんしゃ 「感謝」(名) 4 かんしゃ 感謝

七43 すぎたことかもしれないませんが、このかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。

十一54 「え顔の入口、感謝の出口。」

十二89 感謝の心持をこめていうときと、ただと

おりーべんのあいさつとしていうときとは、
十五121 7 読んでいるうちに先生がたに対する感謝
の念があふれてきた。

かんしゃかい 「感謝会」(名) 1 感謝会

十五122 7 きょうの感謝会はわすれることはできま
せん—

かんしゃく 「痼癪」(名) 1 かんしゃく

十二35 7 とうとうかんしゃくをおこして、新しい
人形を手にとつて、ゆかにたたきつきました。

かんしゃくもち 「痼癪持」(名) 1 かんしゃくもち

十二40 4 氣持があらあらしくなり、かんしゃくも
ちになったのもむりはありません。

かんしゃくする 「感謝」(サ変) 1 感謝する 《—ス
ル》

十一77 3 感謝するような色が、そのひとみに、
ちよつとのあいだうかぶようにみえました。

かんじよう 「感情」(名) 1 感情

十四86 4 ごくさいな感情をひろいあげて、一首
の歌をよむのも、同じ心の現われであらう。

かんじる 「感」(上二) 13 感じる 《—ジ—シル》

九45 そばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは
感じられなかった明かるさがあらわれます。

九122 1 それで茶をたててみると、いままで味わっ
たこともないような、ふしぎな味が感じられた。

九122 4 すると、いい味は、もっと遠いところで感
じられる。

九124 1 ここで茶人のしたには、まぎれもないいい
味ははつきりと感じられるようになった。

十五56 ほんとうに思ったり、感じたり、考えたり
していることは、ちがったものになります。

十二32 5 私は、近づいてくる足音を感じましたの
で、それが母だとばかり思いこんで、

十二35 9 そうして私は、くだけた人形のかけらを
足さきに感じながら、ゆかにに思いました。

十二35 11 先生がかけらをいろいろのかたすみにはき
よせておいでになっているようすを感じましたが、

十二37 6 めばえてこようとすの心のはたらきと
いったようなあるふしぎなものを感しました。

十二97 2 これをみて、どんなことを感じるでし
ょう。

十四35 1 人間などは、バクテリアよりも、もっと
もっと小さなものに感じられるかもしれません。

十四50 10 美しい歌は、いまも、われわれの耳にひ
びいてくるように感じられるではありませんか。

十五28 6 少年は、あぶないことが近づいたと感じ
たので、

かんしん 「感心」(形状) 3 感心

五109 6 小鳥でも感心なものだ、新しいことを
どんどんおぼえていく。

八28 11 うちのむすめは、こうしてはたらきつづ
けているのは感心なことだ。

十一90 10 ほんとうに感心な子だ。

かんじん 「肝心」(形状) 2 かんじん

十二26 12 けれども、かんじんの歩くことはまだで
きません。

十五86 3 でないと、かんじんな用むきをわすれ
てしまうからね。

かんしんさ・せる 「感心」(下二) 1 感心させる

《—セ》
八10 10 毎日なにかかわったことをしてかしては、
みんなをおどろかせたり感心させたりします。
かんしん・する 「感心」(サ変) 9 感心する 《—
シ—スル》

五105 1 ひわは、感心したように、いつまでもその
声をきいていました。

六55 4 「略」と、みちこも感心しました。

六106 1 そうして、にいさんのまねのうまいのに感
心した。

六106 5 その、弟がまだいわないことばを、さきに
いったから感心したのである。

六115 1 「略」といって感心しました。

七117 7 じょうずなできばえをみたとき、感心して、
思わず手をたたきます。

七24 7 はるお感心したように、「略」。

十35 4 りっぱな機械をみて、感心するとともに、
なんともいえないかた身のせまい思いがした。

十二19 4 あなたの鳴く声に耳をかたむけて、た
いへん感心していましたよ。

かんせい 「歓声」(名) 1 歓声

十二23 6 家内じゅうが歓声をあげているといつて
も、いいすぎではありません。

かんぞう 「人名」↓うちむらんかんぞう

かんぞう 「肝臓」(名) 1 かんぞう

十五84 7 小ひつじの足に、小うしのかんぞうも
ある。

かんた (名) 1 かんた

四88 9 からのかんたはさむからう。
かんたかい 「甲高」(形) 1 かん高い 《—イ》
十三33 4 「キリキリ、リリリリ」ときしみながら、
かん高いひびきをたてる。
がんたち 「雁達」(名) 2 がんたち
四53 8 がんたちには、この風がなんともいえ
ないいい氣もちでした。
四57 10 すっかり用意ができると、みはりばんの
がんたちもあつめました。
かんたん 「簡単」(形状) 12 かんたん 簡単

- 六113 5 かんたんにはわからないが、
 十一64 3 家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰ったことと、病院にはいったことを知らせました。
 十二48 10 簡単な人形の作りかたを教えてあげよう。
 十二88 5 「略」という簡単なことばでも、
 十二89 5 ごく簡単な「ありがとう」というあいさつにしても、
 十二100 10 それは、もようもごくかんたんで、形もたいへんよくまとまっています。
 十三11 6 原因・結果の関係の簡単なものは、普通の知識によつて知られ、
 十四61 5 会 このかばちゃは、だれのものとも、簡単にはいえませんね。
 十四77 6 この簡単なことわざは、
 十四79 10 「略」という簡単なことを、知っているのといないのでは、たいへんちがいます。
 十五42 9 日本のことばをもっとも正しく、もっとも簡単に書き表わす方法がないものであろうか。
 十五48 10 しかし、そのしごとでも簡単にできあがるものではなく、
 かんたんけい 「寒暖計」(名) 2 寒暖計
 六61 7 寒暖計
 十四65 4 湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろいろ自分でためてみると、おもしろいでしょう。
 かんちょう 「館長」(名) 1 館長
 十五52 10 ぜいカーネギー博物館に館長ホランド博士をたずねるようにとおっしゃった。
 かんちょうしつ 「館長室」(名) 1 館長室
 十五53 6 博物館に自動車を乗りつけ、守衛にみちびかれておくまった館長室の前に立った私は、

- かんどう 「感動」(名) 2 感動
 十四36 10 星をつかめといわれ、そのことばにふかい感動を受けたということです。
 十四37 1 その感動から研究を進めて、ついにラジウムを発見したのです。
 かんな 「飽」(名) 1 かんな
 三35 7 かんなをつかっている人もあります。
 かんにんする 「堪忍」(サ変) 1 かんにんする
 《一スル》
 九101 3 かんにんするかい。
 がんのなかま 「課名」 2 がんのなかま
 四2 6 五 がんのなかま……四十一
 四41 1 五 がんのなかま
 かんばしい 「芳」(形) 1 かんばしい 《一ク》
 八88 6 たくさんのお木がかんばしくにおい、その長いみどりの枝は、流れる水の上にのびていた。
 カンパス (名) 1 カンパス
 十二16 9 カンパスの上にぬりつけてみると、思いもよらない色になってしまふ。
 がんばる 「頑張」(五) 1 がんばる 《一ツ》
 九40 4 四 「略」などいわれたが、ぼくはがんばっておりませんでした。
 かんばん 「看板」(名) 1 かんばん
 十五46 2 おもしろいかんばんも、かれには、みなめずらしいものばかりであった。
 かんばん 「甲板」(名) 2 かんばん
 五33 1 かんばんのクレーンが、あがつたりさがったりして、荷物をつみこんでいます。
 十一47 5 ぼくは、船のかんばんに、おかあさんとふたりで立っていた。
 かんびよう 「看病」(名) 5 看病 じちちのかん

- びよう
 十一64 12 長男にいくらのお金を持たせ、父親の看病のために、ナポリへよこしたのです。
 十一76 1 そこで、少年は看病にかかりました。
 十一77 1 そうして、朝になると、また看病をはじめました。
 十一78 11 少年は看病にいっしょうけんめいになっていました。
 十一90 9 看みの看病はすんだ。
 かんぶん 「漢文」(名) 1 かん文
 十一26 1 それは「大学」といって、かん文で書いたむずかしい本でした。
 カンボジア (名) 1 カンボジア語
 十四24 1 会 タバコ、カルタはポルトガル語、キセルとカボチャはカンボジア語だといわれている。
 かんむり 「冠」(名) 1 かんむり じはなかんむり
 八27 1 星のかんむりをつけたむすめたちが、樂しげに歌ったり、
 き
 き 「木」(名) 185 き 木 じうえき・かれき・くさき・くされぎめ・くすのき・こうもののかしのき・とまりぎ・なみき・ねむのき・ふゆき・まつなみき
 一64 四 なのはな、なのはな、まつのき。
 一17 3 まどのきのはがうこいてる。
 一26 7 くさもきもねむりました。
 一36 6 会 「たかい木にとまて、うたをうたいたいからです。」
 一42 4 木もはえていますよ。

- 二122 木のはをならべてみました。
- 二364 ㊦ ぞうは、木のみきとおなじじゃないか。
- 三226 くすのきは、いままでみたこともきいたこともないほど、大きな木になりました。
- 三233 まいあさ日がでると、この木の西がわのなん十という村々が、日かげになります。
- 三251 あちらの村でもこちらの村でも、こういつて、この大きな木をみあげました。
- 三253 ㊦ この木を切ることにしよう。
- 三255 ㊦ 「こんな大きな木を、切っていいものでしょうか。」
- 三261 こんな大きな木のことですから、切るのにも大さわざでした。
- 三265 こんどは、切りたおした木を、どうするかということになりました。
- 三524 ㊦ うぐいすはうめの木にとまり、「略。」といいました。
- 三526 ㊦ りすはしらかばの木にはねて、「略。」といいました。
- 三586 おりればみずうみへでられますし、のぼれば大きな木のあるところへでられます。
- 三591 ㊦ 「ねえ、大きな木のところまでぼつてみよう。」
- 三606 ㊦ 「この丘の上の大きな木のところ。」
- 三616 ㊦ 丘の木のところまでのぼつてさ、それからさつさとかけおりてみずうみへいこうよ。
- 三632 いっしょになって、丘の大きな木のところまでのぼりました。
- 四87 まわりには、さくらの木がたくさんうえてあります。

- 四482 その山のふもとには、大きな木がしげっているの、そこをよけてとびました。
- 四483 よく木のかげからねらいうちをされるからです。
- 四557 かさかさという木のはの音がしました、
- 四826 まつの木の枝を立てて、色紙でおったつるや、ふうせんをさげました。
- 四862 ゆうがた、まつの木の枝は、まがるほど雪につもられて、だまっている。
- 四122 まつの木のうしろから、ひとりの女がでてきます。
- 五369 みなれない木や、草や、動物がみえますね。
- 五372 このような木が、たおれて土にうずまり、長いあいだかかって石炭になったのです。
- 五395 ㊦ 山の木のめがではじめました。
- 五396 ㊦ ふもとなるにしたがつて、木のみどりがこくなつてみえます。
- 五397 ㊦ 茶色の木のもみえます。
- 五854 りようかんさんはこういいながら、ほうきを持って、木の葉をはきよせました。
- 五977 さんちゃんのおうちのまつの木にとまつたり、かえでの枝で休んだりしていました。
- 五1010 おひるすぎには、かえでの木につるしておきます。
- 五1031 かえでの木につるしておく、いろいろな鳥がやってきます。
- 五1041 みそさざいが、くらい木の中からきたので、ひわが、「略。」と鳴きました。
- 五1046 「略。」と鳴いて、木のかげにかくれました。
- 五1061 ある日、二三ばのひわが、さんちゃんのうち

- ちのまつの木におりてきました。
- 五1079 旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の上へにげていきましたが、
- 六148 はとは、いそいで木の葉をとって、ありのそばにおとしてやりました。
- 六1411 木の葉は船のようになって、ありのそばを流れました。
- 六153 ありはそういつて、すぐ木の葉の船につかりました。
- 六156 木の葉の船は波に流されて、
- 六159 ㊦ もし、あの木の葉の船が流れてこなかったら、どうなっていたかしのれない。
- 六161 ありは、心から木の葉のおれいをいいました。
- 六165 そのかりうどは、きゆうに歩くのをやめて、弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。
- 六166 木の上には、一わのはとがとまっています。
- 六175 「略。」といつて、大いそぎで木からとびたつていきました。
- 六196 ㊦ みどりの木の葉は喜びにみち、きよらかな風は、われわれの音楽をほめてくれる。
- 六321 木が大ゆれにゆれる。
- 六321 木の葉がとぶ。
- 六362 ㊦ すぎの木のおばさん、助けて。
- 六366 おれるようにあたまを地につけるすぎの木。
- 六441 木の枝にとまっている二わの子がらす。
- 六512 屋根も、木の葉も、石ころも、みんなきれいに光っていました。
- 六544 ふみおはふと気がついて、まえの方にある木の下へいきました。
- 六548 ふたりは木のそばへ走っていきました。

- 六55 8 ふみおはさっきのことを思いだして、また、
にわの木の下へいってみました。
六55 10 月は、もうさっきの枝のあいだにはなくて、
木をずっとはずれてしまっていました。
六68 1 「略。」といって、木の上にするすると
のぼってしまいました。
六78 4 園 たとえ動かない木でも、草でも、命を
もっているのだよ。
六87 10 園 そのごてんの門のそばにいどがあつて、
そのそばには、大きな木が立っています。
六87 11 園 あなたは、その大きな木にのぼって、
まっていっちゃい。
六88 2 園 木にのぼるのですか。
六88 7 海のごてんの門のまえに、大きな木が立っ
ている。
六88 8 ぼりのみことは、木をみあげて、
六88 9 園 はあ、この木だな。
六89 1 木にのぼって、下をみる。
六89 11 女の方は木をみあげながら、おじぎをする。
六91 3 園 門の木の上に、りっぱな木がいらっ
しゃいます。
六91 4 園 木の上に、りっぱな木が。
六104 3 園 森の木のきれいなこと。
六122 9 うさぎさんたちは、くるみの木の下で遊び
ました。
六136 6 こんどはたおれた木のみきにトンとけつま
ずいて、すってんころりところげました。
六137 1 そうして、木の切りかぶに、つぎのような
ことが、赤いクレヨンで書いてありました。
七4 7 校門のかしの木は、目をさまして、しずか
にしんこきゅうをした。
七4 10 かしの木は、子どもたちのことを、まず思

- いうかべる。
七8 2 かしの木は、きょうもそんなことを考えた。
七10 8 かしの木は、あくびを一つして、しめっぽ
くなった葉をふるわせ、
七12 7 あさがおのつるがまきつくように立ててあ
る、竹や木のことをいうのです。
七14 2 ゆく手に、まつの木が立っています。
七61 4 まよったせみが、かきの木につきあつて、
バタバタやって、にげていった。
七62 2 さくらの木が、ぬれてゆれている。
七70 9 なんの木の花だろう。
七75 6 園 木一本もみえない。
八9 3 ろじどころか、庭の木にとまらせても長く
はいません。
八12 7 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つば
きの木の根もとにうめてやりました。
八14 3 せどのおおぎりの木の皮に生みつけられた、
あぶらぜみのたまごがありました。
八15 10 そこは木の下ですから、大小の木の根が、
からみあい、かさなりあつてはえています。
八15 11 大小の木の根が、からみあい、
八16 2 あおぎりの根ばかりではなく、あたりの木
の根ものびています。
八16 3 だから、虫たちが、いいかげんにすんで
いても、なにかの木の根にいきあたります。
八16 5 なんて知るか、手ごろな、皮のうすい、
しるの多い木の根をさがしてあるきます。
八16 8 その口のさを根の中につきさして、木の
しるをすいはじめます。
八16 9 これは、木からいうとめいわくしごくなこ
とですが、
八19 3 ほそいくだのさきから、木の根のしるをわ

- ずかずつつっているせみの子たちは、
八19 11 せみの子たちは、はじめにはあさいところ
にいて、ほそい木の根のしるをすっています。
八24 5 れいのおおぎりの木でも、ほかのあぶらぜ
みが「略。」と鳴きはじめました。
八40 8 こんなひとりごとをおっしゃって、そこら
の木の葉や花にみんな手をおふれになりました。
八56 7 そこで、向こうにみえるまつの木を目あて
にして歩きだした。
八74 5 あしの上に廣がつている木の枝にものぼっ
ていた。
八74 6 青いけむりが、くらい木のあいだから雲の
ようにたちのぼった。
八83 8 森の木の葉がこがね色や茶色になった。
八88 6 たくさんの木がかんばしくにおい、その長
いみどりの枝は、流れる水の上ののびていた。
八88 9 ところが、木のしげみから、二三ぼの美し
いはくちようがあらわれてきた。
八93 6 にわとこの木でさえ、新しいはくちようの
まえに枝をたれた。
九38 2 園 かれ枝ならば、だれの山の木の枝でも、
おつてよいことになっています。
九39 2 園 高い木をみつけると、兄かぼくがのぼる
役をひきうけました。
九39 3 園 八九メートルもある木の上で、なたで枝
をおろすのは気がつかれます。
九39 8 園 一ど、すぎの木で、根もとからかれてい
る高さ十五メートルに近い木にのぼったことがあ
りました。
九39 9 園 高さ十五メートルに近い木に
九39 10 園 のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず
木にしがみついたりしました。

九404 木が動くので、かれ枝はなかなかたたき落せませんでした。

九406 なたをふりおろすたびに、すぎの木は大きくゆれました。

九431 どちらがかきの木の多いところで、どこかの家にも、二本や三本はあります。

九434 ぼくたちのかりているやしきのまわりにも、大きなかきの木が三本あります。

九445 はだかになった木の上に、まっかにじゅくした実がすずなりになっているのを見ると、

九495 すきとおった風がザアツとふくと、くりの木はバラバラと実を落しました。

九496 いちろうはくりの木をみあげて、「略。」とききました。

九497 くりの木、くりの木。

九497 くりの木、くりの木。

九498 くりの木は、ちよつとしずかになって、「略。」と答えました。

九502 くりの木、ありがとう。

九504 くりの木は、だまってまた実をバラバラと落しました。

九518 一本のぶなの木の下に、たくさんの白いきのこが、略、へんな樂隊をやっていました。

九521 一本のくるみの木のこずえを、りすが、びよんぴよんととんでいました。

九534 すると、りすは、木の上からひたいに手をかざして、いちろうをみながら答えました。

九543 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木の森の方へ、新しい小さな道がついていました。

九552 まわりは、りっぱなオリーブ色のかやの木の森でかこまれていました。

九7311 木ややぶが、けむりのようにぐらぐらゆれ

ました。

九878 舞台の中ほどに大きな木が一本立っている。

九983 たかぎ、うしろの木をひとまわりして、そつとやまだに近づく。

九1151 文 いまの鳥はこの木ににいるにちがいない。ひそかに枝葉の中をみあぐる

九1275 ある日の夕がた、このくもは、木と木のあいだに、巣をかけました。

九1276 木と木のあいだに、巣をかけました。

九1431 つゆが木の葉にたまりました。

十47 高い木が大きく枝をはって、

十911 ちようど、プラタナスという木の葉が黄色くなるころで、

十234 文 「なのはな、なのはな、まつとき。」

十277 庭の木に小鳥がくれば、

十583 算数の時間に、先生が、はしごでいちようの木にのぼって、

十一127 まつの木では、きようからせみが鳴きはじめた。

十一243 ひとりぐらい育てるお金は、わたしが山へいって木を切ってきてもうけますよ。

十一255 遠い山へいって、しばをかつたり木を切ったりして、村の人に買ってもらいました。

十一5610 べにばら野ばら、さんしよの木のめ、めやぎのおちち、一つ一つかおる。

十二135 そこには一本のざくろの木があって、夏じゅう美しい花をつけていたが、

十二143 まだ青々とした木の葉の中から大きくのぞいているのいい。

十二214 文 雄さんがりっぱな絵かきになるころは、わたしも、ずっと大きな木になって、

十二5410 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家を作っておく。

十二6610 深くて長い根の上に、みことな草や木がしげつていく。

十二713 また、まきが少ないと、近所へ木をひろいにいったりしました。

十二1110 絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人との共同作品なのです。

十三49 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木のめのむれは、おたがいひじをつつきあって、

十三201 その第一は水で、その第二は木でありました。

十三208 もっともむずかしいのは、あれ地に木を植えることです。

十三209 このあれ地に育つ木があるかないか、まず、このことについて研究を重ねました。

十三2211 そこで思いついたのは、ノルウェー産のみの木でありました。

十三211 実際に試験してみると、みの木ははえるが、数年ならずしてかれてしまいました。

十三212 あれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていませんでした。

十三242 しげた木のない土地は、熱しやすくさめやすいから、

十三502 その木のかげで、きれいな鳥がわらっている。

十四773 私が、木を割ったり、竹を割ったりして、なにかこしらえようとしていると、

十四774 「木もと竹うら」ということわざを教えてくださいました。

十四776 木を割るときには、もとのほうから割るがいい、

十四793 木のほうは、これと反対に、もとのほう

を上にして、

十四79 5 ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもとか、わからないことでした。

十四79 10 「木もと竹うら」という簡単なことを、知っているのといないのでは、

十四81 8 さるも木から落ちる。

十四86 9 風にあおられた雪のむれが、道を消し、木をおり、汽車を立ちおうじようさせ、

十四97 12 そうして、こんどは、女の子は、一本のクリスマスの木の下にすわっていた。

十四97 12 いかにも大きな木で、それが美しくかざられていた。

十五54 文 遠くそののち かの木に、矢はまだおれで とどまりぬ。

十五10 2 月が出る山の家にうしをつないだ木

十五10 6 文 いけがきのすぎの木ひくみとなり家の庭の植え木の青めふく見ゆ

十五10 8 文 ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でてとぶ見ゆ

十五14 4 文 目をあけてつくづく見ればばらの木にばらがまっかにさいてけるかも

十五26 3 舞いおりるとちゆうで、高い木の上へでもとまろうものなら、それこそたいへんです。

十五35 1 また、木の皮や、あさなわなどであんだひももつかい、

十五37 2 木は、もともと形をうつしてできたものであるが、

十五37 6 「木」を二つならべて「林」、三つ重ねて「森」が作られた。

十五37 8 左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に関係のあることを表わし、
十五37 9 「木」に関係のあることを表わし、

十五124 4 校門のかしの木よ、母校よ、ばんざい。
き 「氣」(名) 97 き 氣

一49 8 きがついてみると、さっきの人たちも、しやしうさんたちも、ぼーいさんたちも、

一50 5 会 やつときがついたの。

二24 6 会 あんまりいろがにているので、ぼくははじめはきがつきませんでした。

二29 1 会 きをつけてわたりましたから、みんなむこうのきしにつきました。

三75 3 会 「ほら、どうなるか、きをつけてみていなさい。」

四7 9 また、わるいびようきはやらないように、氣をつけてくれます。

四25 5 手 お話をすると、みっちゃんがそばにくるような氣がします。

四28 5 きよしさんは、じぶんをあいてに書くことに、氣がきました。

四34 2 会 「かずこさんの書いた文で、なにか氣のついたことはありませんか。」

四34 6 けれど、べつに氣が付きません。

四34 7 会 「先生は、かずこさんのおとうさんのことばに、氣がきました。」

四35 9 会 先生は、そこに氣がついたのです。

四39 9 会 さくらの枝をおろうとしたとき、おじさんのことばに氣がついてやめました。

四45 5 会 おしまいは氣がらくでいいからって、いったじやないか。

四45 7 会 氣がらくにはらくさ。
四48 10 ほかのがんは、〈略〉と思って、べつに氣にもかけないでとびつづけました。
四56 1 会 「かつちゃんが、氣がついたよ。」
四75 7 る——るすいはしっかり氣をつけて。

四103 2 かめがよびかけても、うらしまは、いっしんにつりをしてるので、氣が付きません。

四115 4 会 でも、うちのことも氣にかりますので、かえらせていただきます。

五117 会 駅の人たちは、いつも氣をつけているよ。

五24 8 会 そのとき、どこかの女の人が、ぼくに氣がついて、

五40 3 手 あたりが美しくなると、私は、なんだか、ぼんやりするほどたのしい氣がします。

五72 7 会 おばあさん、氣でもちがったかね。

五79 2 そうして、川をみて氣のついたことを書きました。

五82 2 会 みんな、からだに氣をつけてください。

六8 10 しごと台の上をみて、だしておいたねじのないのに氣がついた。

六22 2 よばれても、あたりたちは氣が付きません。

六22 4 ありたちははじめて氣がついて、

六54 4 ふみおはふと氣がついて、まえの方にある木の下へいきました。

六59 3 私は、きのう、おもしろいことに氣が付き

六107 5 しかし、ぼくは、このおかげで、おもしろいことに氣がついた。

六107 8 発音できることばと、できないことばとがある、ということに氣がついたのである。

六109 7 「ム」と自分で声をだしていつてみると、いかにもはなから声がでているような氣がする。
七37 1 なんだか、まわりがすこしゆるやかになり、からだがらくになったような氣がしました。
七51 10 ぼくは氣が氣ではない。
七51 10 ぼくは氣が氣ではない。
八9 1 ピオのほうでも、その氣になったらしく、

八102 こわいもの知らずで、なにか氣にいらなかったりおこったりすると、
 八531 それから、かつてあるにわとりに氣をつけました。
 八569 かもめが目について、それに氣をとられて、わきみをしたあたりが横にそれている。
 八674 人にふまれないように、それからねこに氣をつけてね。
 八725 つかれて、氣がしずんでいた。
 八736 しみはじつにみにくいから、氣にいったよ。
 八763 しかし、かわいそうにあひるの子は、おきあがる氣にもなれなかった。
 八816 おまえさん、氣がくるったのだよ。
 八996 これから、水がきれないように氣をつけましょう。
 九128 いかにも雪がしんと降りしきっているような氣がした。
 九394 八九メートルもある木の上で、なただ枝をおろすのは氣がつかれます。
 九401 足もとをよくみて、氣をつけてね。
 九407 すこし氣がおちついてから、ぼくはあたりをみまわしますと、
 九931 両方ともあいてに氣がつくが、わざと知らないふりをしている。
 九944 しばらくして持っているすみに氣がつき、ちよつとためらったのち、「略」。
 九120 あまいような、すずしいような、氣の晴れ晴れするような味だった。
 九129 うまそうな水や名高いいど水をためてみたけれども、どうも氣にいらなかった。

九122 茶人は、この上流にいい泉があるのではないかと氣がついた。
 九1262 そこで氣をつけてみると、右岸からさらさらと流れ落ちる小さな谷川がある。
 九1342 くもが氣がついてみると、あたりにいいにおいがします。
 九1409 くもは、おなががすいているのに氣がつき、また、あみをかけようと考えました。
 九14011 けれども、なんだか氣がすすみません。
 十485 べつにいそぐともありませんでしたので、妹の氣のすむようにして、つれていきました。
 十538 まだ、いぬが氣にかかるのか、
 十711 太郎かじやのほうは、氣が強いばかりでなく、わるぢえがあったから、
 十一449 私は、自分が呼ばれたような氣がしました。
 十一758 氣をつけておあげなさい。
 十一772 顔の上に、きわめてかすかなほおえみがうかんだのをみたような氣がしました。
 十一793 父親のちよつとしたため息にも、ちよつとした目つきにも、ふるえながら氣をもんで、
 十一8910 そのとき、少年は、病人が自分の手をにぎりしめたような氣がしました。
 十二149 文雄はそれが氣になってしかたがなかった。
 十二435 とこのまの人形が、動きだしそんな氣がするんだけど――
 十二459 人間のしばいとちがつて、みていると別世界にいったような楽しい氣がするよ。
 十二894 話をするときには、その場のようすによくあうように、氣をつけて話さなければならぬ。
 十二935 ことばづかいやいいあらわしかたには、

いっそう氣をつけなくてはならない。
 十二10411 ほうおうという鳥の美しいすがたがあらわれていることに氣がつくことでしよう。
 十二1142 そうして、遠いところも近くなり、世界はだんだん小さくなるような氣がします。
 十三346 ふと氣がついて、子どもたちは、あわてて家にもどって行ったりする。
 十三436 三郎、それに氣がついて、
 十四174 私には、おかあさんのおすがたが、目に見えるような氣がします。
 十四259 「ことばのおたんじょう」などというお話が、つくれそうな氣がしてきた。
 十四3512 大空の星をながめていると、はてしのない、遠い世界にひきこまれるような氣がします。
 十四457 かれは、氣が氣ではありませんでした。
 十四457 氣が氣ではありませんでした。
 十四4812 寒さに氣を失って、またから手をはなさないように、こうして元氣をつけていたのです。
 十四625 よく氣をつけて見ていると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、
 十四673 そういうときに、よく氣をつけて見ていてごらんなさい。
 十四702 線が、不規則なまのようなようになって、ゆるやかに動いているのに氣がつくでしょう。
 十四788 そのち、氣をつけて、おけ屋さんなどのやっているところを見ると、
 十四809 短くて調子のいい、氣のきいたものになったものとも考えられます。
 十五234 ふと氣がついてみると、いままで先生のそばにいた女の子のすがたが見えません。
 十五274 おどろいて氣でも失ったのか、すこしもさわがず、あばれもせず、じっとしています。

十五276 もう呼吸もなくなったのかと、そのことがまた、少年の氣にかかってきました。

十五310 ちょっとでも氣をゆるめると、鳥のくちばしでつき殺されます。

十五3212 氣がつくと、もう自分のまわりには、おぜいのひつじかいが集まって来ており、

十五625 なにが氣にさわったのかなあ。

十五628 満ぼう、なにが氣にさわったの、おばさんについてごらん。」

十五1214 けれども、思うことがすこしも書けていないことに氣がついた。

き [来] ↓いききする・ゆきき・ゆききする
き [記] ↓さいゆうき

き [黄] (名) 1 黄
十一407 ほとしかぼちゃは赤やら黄やら、にわとりどもはひなたぼこ。

き [着] ↓うわぎ
き [器] ↓かくせいき・じゅわき・せんめんき

き [機] ↓いんさつき・さくがんき・だっこき・ちくおんき・はつどうき・ひこうき・ひこうきのり

き (助動) 7 き 《シ》 ↓ありし
九265 麦ふみやみだれし麦の夕日かげ

九272 月の夜をわが家のありしあたりまで

九285 持ちかえしせんこう花火のゆれている

九1153 着ぶくれて歩かされいし女の子ばたとたおれそのままなくも

十五43 空にはなし わがそ矢は、あわれいずこに落ちにけん。

十五47 空にとえし わが歌は、あわれいずこに落ちにけん。

十五135 照る月の位置かわりけん鳥かこの屋根にうつりし影なくなりぬ

き 1 き

四792 き——きしゃときせん。

キイ (名) 1 キイ

十一152 オルガンのキイから、赤い、青い、金色の、ちがった形の小鳥が、はばたいでで、

ぎいちらこ (感) 2 ギイチラコ
三864 ギイチラコ、ギイチラコ。

三864 ギイチラコ、ギイチラコ。

きいろ [黄色] (名) 13 きいろ 黄色 ↓まっきいろ
— 334 — あか — あお — きいろ — まる —

三829 「き色でもいいじゃないか。」
四1076 赤やき色できれいだね。

七271 黄色になっちゃった。
八1058 どのいねのほも、すっかり黄色になっておじぎをしています。

九44 そばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは感じられなかった明かるさがあらわれます。

九47 黄色のかわりに、みどり色をぬってみると、また、ちがった感じがします。

九162 口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえるのさえあります。

九681 氣どつたようすで、しゅすの着物のえりを開いて、黄色のじんばおりをちよつとだして、

九749 やまねこの黄色のじんばおりも、ぎよしやも、きのこの馬車も、一どにみえなくなつて、

九1272 黄色と黒のしまもようのついた大きなくもでした。

十一316 野山をかざると、もも赤く 畑にさいて、れんぎょうは、かきねを黄色にそめていく。

十三298 黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげられ、にぎやかな話が続く。

きいろ [黄色] (形状) 4 黄色

七2911 きのう、学校から帰ってみると、あおむしは、もう黄色なさなぎに変わっていた。

八548 黄色なたくあんまで、そのおむすびにそえてくれました。

九5911 やまねこが、黄色なじんばおりのような物を着て、

十二73 庭さきにさいていた黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、それをしずかにさしました。

きいろい [黄色] (形) 13 黄色い 《イイ・ク》
七810 白いカーテンが黄色くみえる。

七586 黄色いやまぶきの花に、黄色いちようがとまっています。

七586 黄色いちようがとまっています。
八603 麦ばたけは黄色く、からすむぎはみどりであつた。

八1052 いねは、だんだん黄色くなつていきます。
十911 ちようど、プラタナスという木の葉が黄色くなるころで、

十1010 みあげるように高いプラタナスの枝からは、黄色い葉が、毎日のように落ちました。

十一2812 あくる年の春、黄色い花がさいて、たくさんの実がつきました。

十一392 かえでにうるし、はじの葉も、赤く黄色く色づいて、

十一404 夕ぐれ寒くふくこがらしは、黄色くかれたくぬぎ葉鳴らす。

十二205 この実のかげは黄色くぼけているでしよう。

十四5312 とちゅうから、黄色くなつて落ちてしまったたくさんのかぼちゃの花を見えています。

十五4811 白く焼けるはずのものが黒くなつたり、

黄色くなったりして、失敗に失敗を重ねていった。
きいろがかる [黄色掛] (五) 1 き色がかる

《↑》

五九六 あたまからせなかにかけて、き色がかった
美しい鳥になりました。

きいん (感) 1 キイン

三八七 キイン。

きえう・せる [消失] (下二) 1 消えうせる 《↑

セ》

十五六六 満ぼうの心から、どうして新島のおじさ
んのすがたが消えうせよう。

き・える [消] (下二) 20 きえる 消える 《↑エ・

―エル》

三八二 だんだんにしも きえていきます。

三九七 心に思ったことは、いつのまにか きえ
てしましますが、

三九八 口ではなしたことは、そのまま きえて
なくなりますが、

六三六 高くふきあげられて、空にきえていくかか
し――

六四〇 森や、小川や、いな田などの、きれいな、
楽しかった思い出が、うかんではきえていく。

六五〇 きたないこともきえそうな、ああ、おこ
そかな夜の空。

七五六 こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこ
えて、うすべに色の空にきえた。

七一〇 しくちよく室のひがきえた。

九五二 いちろうがすこしいきましたら、谷川に
そった道は、もうほそくなってきえてしまいまし
た。

九一〇 雪けむりがきえて、先生のお顔がうかぶ。

九二四 左岸では、その味がきえてしまうことが

あっても、中ほどでは、いい味はたえなかった。
九三六 一つのまにか、いままで苦しかったからだ
のいたみもきえていきました。

一一一 三 ぶえの音は、長くおをひいて消えていく。
一二五 十 そういう人たちのなくなるにつれて、
順々に消えていってしまうものもある。

一二六 二 ところが、そのあくる朝ながめると、高
どのは消えてしまつてあとかたもなく、

一三二 三 しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水
の害がのぞかれたので、

一三七 三 はちの羽音が、チューリップの花に消え
る。

一四四 七 空中にうかんでいた雲が消えてしまつた
あとには、

一四九 三 と思うと、そのとき、ほのおは消えてし
まい、ろはなくなつてしまつた。

一五五 三 焼物をやめれば、日本から美しい
ものが一つ消えてしまうことになります。

きおく [記憶] (名) 1 記おく

一五七 七 これは、記おくのためにも必要な方法で
ある。

きかい [器械] (名) 1 器械

一三八 九 正しい知識を得るには、〈略〉、種々の器
械をつかつて観察したり、実験したりする。

きかい [機会] (名) 1 機会

一五八 八 すべて同じ教育をほどこし、同じ機会を
與えて、社会に果たしたいのが念願である。

きかい [機械] (名) 14 きかい 機械 しいねこき
きかい・どろりよくきかい

一六二 二 ここで、きかいや、ひりょうなど、たいせ
つな品物を作っています。

んでしょう。
五三六 さかんに、きかいで石炭をくずしてとつて
います。

五三六 二 この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場の
きかいを動かすのです。

六一四 やがて、ピンセットでねじをほさんで、き
かいのあなにさしこみ、

八〇七 きかいがないのでくふうしました。

一三八 これを人の手によらず、機械の力で動かす
ようにしたかった。

一四八 機械で動かせば、もっと早く織ることがで
きるし、

一五二 銀色に光つた、たくさんの機械は、生きも
ののように動いていた。

一五三 三 りっぱな機械をみて、感心するとともに、
なんともいえないかた身のせまい思いがした。

一五五 機械は、どれひとつとして、日本製のもの
は、なかったからである。

一五七 小屋に閉じこもつて、いっしんに考えぬき、
これならという一台の機械を作りあげた。

一六五 そこでやつと、思いどおりの機械ができあ
がつた。

一六七 村の人たちは、ぬのをみごとに織つていく、
ふしぎな機械に目をみはりながら、

きかいかん [機械館] (名) 1 機械館

一六八 二 佐吉は、上京して機械館へ毎日かよつた。
きか・せる [聞] (下二) 9 きかせる 聞かせる

《↑セ》

一七〇 五 さんちゃん、ひわによくいつてきかせま
した。

一七二 七 ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよ
むまねなどを、つきからつぎへときかせました。

七43 楽しい音楽をきかせてくださる心持を、ほんとうにありがたく思います。

九113 はじめに、川の水の音をたたいてきかせてくれた。

九117 おしまいに、海岸で波のくだけるところをきかせてくれた。

十139 テーブルをかこんで、いなかの歌を歌ってきかせてくれました。

十1610 「略。」と、おとうさんがいつてきかせました。

十四998 おばあさんが、「略」と、話してきかせたことがあった。

十五1044 でも、きみたちの名まえを聞かせてくれたまえ。

きかんし「機関士」(名) 1 きかんし
五107 「きかんし」の人が、いっしょうけんめいに走らせているからさ。

きかんし「機関車」(名) 1 きかん車
五1010 いちばんさきのきかん車の中でさ。

きかんぼう「利坊」(名) 1 きかんぼう
八910 どうして、一方では、とてもむてつぼうなきかんぼうでした。

きぎ「木木」(名) 1 木々
十一311 ひがんすぎれば風あたたかく、木々のつばみも草のめも、日々に色づきふとります。

ききい「聞入」(五) 1 聞きい「一ツ」
十五553 用事をきりだすと、話に聞きいつていたホランド博士は、「略」についてくわしく話し、

ききかえす じおききかえす
ききかた「利方」(名) 1 ききかた
五728 女王さまのようなあるきかたも、口のききかたも知らないで――

ききかた「聞方」(名) 1 ききかた
八87 それは、鳴きかたのちがいでなく、ききかたのちがいでろうと思う人もありましようが、

ききつ「聞付」(下二) 2 ききつける 聞きつける「一ケ」
五985 いちばんはじめに、それをおかあさんがききつけました。

十三313 これを聞きつけて、子どもが大ぜい集まる。

ききとれる「聞取」(下二) 1 聞きとれる「一レ」
十五104 黒の肉じゅばんを着たわんぱくこぞうの

ききなれる「聞慣」(下二) 2 ききなれる「一レ」
十二555 子どものときからききなれた傳説が、そのあいだにおこまれているからである。

十二758 「略。」その声は、毎日ききなれている曾良の声です。

ききほれる「聞惚」(下二) 1 聞きほれる「一レ」
十四467 マッケンナは、しばらくしんみりした氣持で、この歌に聞きほれていました。

ききみみ「聞耳」(名) 1 きき耳
二687 みんな、きき耳をたてる。

ききもらす「聞漏」(五) 1 ききもらす「一サ」
十一171 ひくく、かほそい、おさな子のささやきも、ききもらさない、その耳。

きぎれ「木切」(名) 1 木ぎれ
十四791 十文字の小さな木ぎれをはさんで、チョンチョンとたたいて、みごとに割っていました。

ききわける「聞分」(下二) 2 ききわける「一ケ」
十二886 簡単なことばでも、相手の人のいうことばのわけをよくききわけて、

十二8812 話をきくときには、相手の人のいつてい

ることばをよくききわけ、

きく「菊」(名) 2 きく じかれぎく
四706 ラジオと かけてなんととく。あきの花

ばたけととく。こころは、きくばかり。
四1255 十一月は きくの花。

きく「利」(五) 4 きく「一イ・一カ・一ク」
九6110 みんな赤いズボンをはいたどんぐりで、その数と

九861 もう、むだ口をきく人は、ひとりもありませんで

十四809 短くて調子のいい、氣のきいたものにな

十五8212 ねこは、ひとことも口をきかず、これも、

右手の方のおくへ向かつて歩いて行つて、

きく「聞」(五) 皿 きく 聞く「一イ・一カ・一キ・一ク・一コ」じおききする・おきく

一289 「きのう、その みみで なにを ききま

したか。」

一442 「略。」と ききますと、どこかで、

「略。」という こえがしました。

一548 おとうさんが ききました。

一5710 わたくしは、かたほうだらりと さがった

しろちゃんのみみをみて ききました。

二601 おはなしをきいたとき、わたくしは、ふ

と、ゆうべのゆめをおもいだしました。

三226 くすのきは、いままで みた ことも きい

た ことも ないほど、大きな 木になりました。

三273 いままで みた ことも きいた ことも な

い、大きなふねでした。

三45 8 わにざめはそれをきくと、たいそうおこりました。

三66 5 ㊦ 「どっちへいったらいいか、風にきてみようよ。」

三78 2 「略。」と、デビッドがききますと、

「略。」と、ジューデーがいます。

三83 9 「略。」と、マイクルがききました。

三89 1 じぶんの耳できいたひびきを、かきとってみましょう。

三106 10 「略。」と、いって、かぐやひめはやっぱりききませんでした。

三110 7 この思いがけないことばをきいて、おじいさんもおばあさんもびっくりしました。

四18 6 「略。」ときいたら、「略。」とおっしゃった。

四29 8 じぶんでじぶんにきいてみても、なかなかはっきりした返事をしてくれない。

四30 2 「くみの人みんな」にきいてもらいたいって、文を書きました。

四32 1 ㊦ どこかの中学校の女の生徒さんがきて、なっているわけをききました。

四77 2 ㊦ ラジオのお話ききましょう。

五30 9 ㊦ 駅につくと、その人は『略。』ときいたので、

五68 1 「略。」とききました。

五69 3 おじいさんが金のさかなをよびますと、およいできてききました。

五80 4 「水の音をきいていたら、せながあつくなってきました。」

五102 5 水が、ジャー、ジャー、ジャージャーと、音をたてて流れているのをきいて、

五105 2 ひわは、感心したように、いつまでもその声をきいていました。

五109 8 おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃん、ますますひわがかわいくなりました。

六9 4 「略。」ねじはこれをきいて、とびあがるほどうれしかった。

六17 2 その声をきいて、はたと下の方をみますと、かりうどが矢をつがえているではありませんか。

六21 4 こんなことばをみんな喜んできいています。

六53 2 ふみおは、両方のいうことをきいていました。

六54 3 よしおとみちこが「略。」「略。」とい

いあっているのをききながら、

六71 4 「略。」これをきいて、ねえさんはわらいました。

六75 3 「略。」ときかれて、ごろうは、「略。」と答えました。

六76 4 「略。」とききました。

六76 11 ㊦ 「なんだい、ごろうくんは。きゅうにそんなことをきいたりして。」

六78 11 ごろうは、息をすることも自分の力ではないことをきいて、なるほどと思いました。

六100 11 ㊦ 「これで、いつか、おとうさんのお話にきいた望遠鏡が、できるかもしれない。」

六109 11 「ナ」といいながら、耳できいてみると、まるで「ダ」といっているようだ。

六116 8 「略。」とききました。

六128 3 おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさんたちは、うまくにげました。

七9 5 ㊦ あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。

七37 4 「略。」ときいてみました。

七42 1 ごくありふれた曲であったが、旅をしてきた私には、しみじみときかれた。

七46 2 「略。」これをきいて、みんなは、またはくしゅをした。

七58 3 あさがおの花が、ラジオの音楽をきいています。

七78 9 ㊦ いいえ、みたのでも、きいたのでもありません。

七84 4 ㊦ きいてみれば、いちいち、もっともなことばかり。

八7 4 「略。」としかったり、それでもきかなければ、指で追ったりしました。

八8 2 「略。」と、きいてみたりするのです。

八13 8 ほおじろの声をきくと、ピアノのすがたがありありとくんできて、思わずなみだぐみず。

八45 3 これをきいて、ちえのある人たちは、略かと、相談をはじめました。

八45 11 これをきいて、王さまはたいへんお喜びになりました。

八50 4 だれかがきいたら、自分は「幸福」だといわずに、「びんぼう」だというつもりでした。

八81 6 ㊦ ねこにきいてごらん。

八81 8 ㊦ それから、うちのおばあさんにきいてごらん。

九5 8 オルガンで一つの音だけひいてきいても、その音には、ある感じがこもっているものです。

九10 2 「劇場音楽の話」をきいた。

九11 1 じっさいにきいてみると、たしかに水の音である。

九11 8 大だいこの音は、ほんとうにうちよせる波の音をきいているようであった。

九12 1 よくきいていると、たしかに風の音になる。

九一四 七 いい音楽をきいても、それがわからないのは、〈略〉からであろう。

九一四 九 もし、きく人の心が高ければ、それだけ音楽のねうちが生きてくることになるう。

九四八 八 「略。」とききました。

九五二 二 「略。」とききました。

九五八 三 「略。」とききました。

九六一 五 そのとき、いちろうは、足もとでパチパチしおのはねるような音をききました。

九四二 六 おかあさんときいて、くもは、手をうんとおぼして、とりすがろうとしました。

九四三 三 いままた、ばらの花のやさしいことばをきくこともできた。

一三三 五 方言でできた小歌のあることを、おとうさんは、きいて知っていましたから。

一三六 二 フランスのいなかの子どもから、自分の國のことをきかれたときは、

一三五 一 一 その声をきいて、につこりとわらう顔。

一三六 一 おじいさんやおとうさんがおうたいになるうたいを、きいたことがあるでしょう。

一三三 一〇 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥の鳴く声をきいていよう。

一五三 九 そのことばをきいて、そこらの乗客は思わずほおえんだ。

一六五 四 「略。」と、看護人がききました。

一六五 五 少年は、もしやわるい知らせをききはしまいかと、〈略〉ながら、その名をいいました。

一六五 九 「年よりのでかせぎ人ですか、外國から帰ってきた——」と、看護人がききました。

一六六 九 「略。」と、少年は心配そうにききました。

一二七 二 「略。」と、少年は口早にききました。

一一七五 一二 少年は、もつとなにかききたかったが、いえませんでした。

一一七三 三 少年のいたわるような声のひびきをきくと、

一二五 三 これをきいたコロンブスは、つと立って、

テーブルの上のゆでたまごをとり、

一二一一 二 「略。」とききました。

一二一八 一〇 よくきいてみると、じょうずなものもあるし、へたなものもある。

一二二四 一二 民ちゃんは、ぼつぼつものをいいかけています、ちよつときいてもわかりません。

一二四〇 二 ケラーは、〈略〉、大病にかかって、みるはたらき、きくはたらきを失いました。

一二四〇 三 みることもできず、きくこともできず、話すこともできないので、

一二四四 三 〇 さあ、人形にきいてごらん。

一二五六 一 おじいさんやおばあさんからきいた話を思いだして、

一二七〇 四 曾良は、信州しんしゅうの人で、〈略〉、芭蕉のことをきいてから、その弟子になりました。

一二七四 四 このようにして芭蕉につかえながら、はい句の話をきくのでした。

一二八〇 一〇 〇 「なぜ、そんなことをきくのか。」という色があらわれていました。

一二八八 一二 話をきくときには、相手の人のいつていることばをよくききわけ、

一三三二 二 遠いところを通るその声を聞くのは、

一三四五 七 あいてのいうことを聞いて、それから三郎くんのことばをいい、

一三四七 一〇 はるかな谷川を聞いているその耳もとに、

一三六〇 三 ぼくは、それを聞きながら、目をあげて、

一四一八 四 〇 〇 ゆうべ、にいさんに聞いたよ。

一四一八 一〇 これを聞いていた野村のむらさんが、〈略〉とたずねた。

一四二四 三 先生のお話を聞いているうちに、

一四三六 七 聞くところによると、

一四四六 八 かれは、いままでにどれだけ歌を聞いたかしれませんが、

一四五七 六 〇 いま、戸の外で聞いていると、

一四八九 四 耳を地べたに近づけて、なにかもの音でも聞こうとしたりする。

一五二〇 一二 このヨーロッパの高い山の中の生活は、見るもの聞くものがごとくめずらしく、

一五四七 四 店の主人は、きかれるままに語りだした。

一五四九 一 一 ただわずかに外國人がこれに目をとめて、買うことがあるというのを聞いて、

一五八九 一 〇 〇 あの男のことは、きかないほうがよろしい。

一五九〇 二 〇 おい、みんな、聞いたらう。

一五九一 一〇 〇 みんな聞いたかい。

一五九二 二 〇 校長先生のお話を聞いていると、ずっとまえのことが思い出されてきた。

きぐつ 「木杢」(名) 一 木ぐつ

八八六 三 〇 あひるの子をみつめて、木ぐつでこおりをくだき、うちへつれて帰った。

きぐつし 「木杢師」(名) 一 木ぐつし

一四五六 フィリッパ自身、中部フランスの小さな町のまじしい木ぐつしの子に生まれ、

きける 「利」(下) 一 〇 〇 きける 《一ヶ》

一一八六 八 〇 〇 ここへつれてきたときには、もう〈略〉、口もきけなかったのですよ。

きけん 「危険」(名) 一 〇 〇 きけん

一四四七 九 〇 〇 こんなきけんのせまった中で、なんというおちついた〈略〉ほがらかな人だろう。

- きけん「危険」(形状) 3 きけん
 四52 5 ㊦ きけんなところを早くはなれよう。
 四52 10 きけんなところは、どうやらとおりにすぎましたが、
 四76 1 これがあまりはげしくなると、きけんになるのです。
 きげん「機嫌」↓きげん
 きけんせんばん「危険千万」(形状) 1 きけんせんばん
 四45 9 ㊦ それに、きけんせんばんだよ。
 きこう「氣候」(名) 4 氣候
 九19 2 その年は氣候がわるくて、
 九19 3 九月の中ごろ、きゆうに十二月の氣候と同じ寒さになり、雨が降りつづきました。
 十三24 1 第一、ユートランドの氣候が、そのよい感化を受けました。
 十三24 11 木材があたえられたうえに、いい氣候があたえられました。
 きこえる「聞」(下二) 53 きこえる 聞える「エーエル」
 一26 2 こもりうたが きこえます。
 一45 4 「略」。こんなこえが きこえます。
 二68 5 ㊦ きこえる、きこえる。
 二68 5 ㊦ きこえる、きこえる。
 二69 2 ㊦ たしかに春の音が きこえる。
 三38 3 ㊦ しょうかをうたっている音が、オルガンにまじって きこえて きます。
 三79 6 にわかにパラパラポトポトというおとが きこえました。
 三89 3 ていしゃばでは、どんなひびきが きこえるでしょう。
 四62 4 しずかなやぶのところで、はばたきの

- 音が きこえます。
 五46 6 「略」というようにきこえた。
 六104 10 「アドデエ」ときこえる。
 六105 4 「略」ときこえたので、
 六106 8 ちょうど、空からブルン、ブルンというばくおんがきこえてきた。
 七8 3 渡りろうかをとる足音がきこえる。
 七9 1 そこからラジオがきこえてくる。
 七17 4 「略」の唱歌が、きこえてくる。
 七56 1 一年生の唱歌がきこえてきます。
 七62 1 めじろの音がきこえている。
 七65 2 波の音がきこえている。
 七65 2 子どもの声がきこえている。
 八47 8 中から人の声がきこえてきます。
 九6 8 音をうまくあわせると、とけあった美しいひびきとなってきこえるにちがいありません。
 九39 5 ㊦ 下からどんなに大きな声で話しかけられても、きこえないときがあります。
 九58 8 その声が、あんまり力がなく、あわれにきこえたので、
 九105 9 スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくきこえる。
 九129 2 子もり歌もきこえてきます。
 九130 5 あかちゃんのみき声も、子もり歌もきこえませんでした。
 九133 5 しずかにしていると、また、パタパタという羽音がきこえてきました。
 十五4 耳をすますと、なにか、かすかな音楽がきこえてくるようだ。
 十五5 どこからきこえるともないが、どこからかきこえてくる。
 十五6 どこからかきこえてくる。

- 十一9 3 「ことばの愛」を読んでいる声が、きこえてくる。
 十一19 6 「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる声がきこえる。
 十一7 1 ㊦ それでもきこえなければ、また、どなる。
 十一13 3 ゆるやかにうつ波の声は、われわれの心をあらうようにきこえる。
 十一53 3 大きな声だが、雨や風の音のために、乗客の耳にきこえそうもない。
 十一73 3 半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。
 十一81 4 ドアのそとに足音がきこえて、
 十一81 5 「略」という声がきこえました。
 十三7 5 からすの声も、ほんとうにのんびりとして、ゆめのように、(略)、聞えてくる。
 十三31 2 「ジャン、ジャン、ジャツ」というように聞える。
 十三44 12 ところが、この四人の声は、見ている人には聞えませんが、
 十四29 3 見てもらいたいなどというと、どこかにしまつてあるもののように聞えるかもしれません。
 十四38 4 ㊦ ああ、聞える、夜明けの音楽が聞える。
 十四38 4 ㊦ 夜明けの音楽が聞える。
 十四38 5 ㊦ 「聞える、わたしにも聞える。」
 十四38 5 ㊦ 「聞える、わたしにも聞える。」
 十四45 8 助けを求めてなききけぶ声も、いつか聞えなくなりました。
 十五32 2 そのとき、がけの中ほどから、ガヤガヤという人声が聞えてきました。
 十五69 12 こうしておじさんを見あげているのに、

おじさんの声は聞えないのだ。

十五929 来いというのに聞えないのかい。

十五935 なにも聞えませんよ。

十五1024 ぼくたちがなにをしても、あなたには、〈略〉、なんにも聞えないんだなあ。

きこり 〔樵(名) 3 きこり 木こり

3262 なん十人、なん百人というきこりが、切りはじめました。

九401 道もないところから、木こりのすがたがあらわれます。

十二627 十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木こりがいた。

きざし 〔兆(名) 1 きざし

十三611 ああ、そのさかな春のきざしは、よもにあらわれて、

きざ・む 〔刻(五) 3 きざむ 《マー・ン》

十三353 その文字の意味がわかってくると、いっそうその美しさが胸にきざまれる。

十五199 氷河が無言の流れをきざんでいる深い深い谷の上を、

十五721 「新島襄之墓」という五つの文字をきざんだそのおくつき。

きし 〔岸(名) 26 きし 岸 ↓かわぎし・むこうぎし

二292 岸を つけて わたりましたから、みんなむこうの きしに つきました。

二293 岸に あがって から、 かずを かぞえて みしました。

四438 ゆうべは、ぬまの きしの、よしの きれいに しげった ところで、ねむった のでした。

五203 しげった 竹やぶの 小道を とおったり、すずしい 川の きしを 走ったり しました。

五415 子うしは、小川の岸をとことこ走りました。

五495 岸の 花ざかりの たりと わたし 船、

五496 岸の 子うしが 水の む 岸を する。

五503 岸の たりと わたし 船、 おもさ に ゆれ ゆれ 岸を する。

五504 岸の かげを ちらして 岸を する。

六136 ありは、川の岸で、うつむいて水をのうとしました。

六156 木の葉の船は波に流されて、川の岸につきましたので、

六157 ありは、ぶじに岸にあがることができました。

七103 渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、こちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。

七103 渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、こちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。

八293 天帝は、〈略〉、天の川の西の岸を通っていらつしやいました。

八322 天帝は、〈略〉、はたおひめを天の川の東の岸のごてんにもどしてしまい、

八323 天帝は、〈略〉、けんぎゅうを西の岸に帰しておしまになりました。

八608 みずうみの岸の、ごぼうのはえているところに、一わのあひるがすわっていた。

九124 近くまでくると、いい味の水は、左の岸のほとりを流れていた。

九125 茶人たちは、ここで船をすてて、岸にそって上流に向かって歩きながら、

十104 岸にある丘の上には、センチチェンヌというお寺の高いともみえました。

十142 ビエンヌという川の岸には、〈略〉女の人

たちが、ならんでせんたくをしていました。

十145 その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少年にもあいました。

十一325 岸のやなぎのほわたがとんで、

十二6210 水を飲もうと思つて小川の岸にでてみると、美しい小魚がおよいでいる。

十五617 札幌の創成川の岸にあった家につれられて行つても、

きじどう 〔題名 1 議事堂

十二1143 議事堂

きしべ 〔岸辺(名) 1 岸べ

九1475 湖の岸べをとおりました。

きし・む 〔軋(五) 1 きしむ 《ーミ》

十三334 「キリキリ、リリリリ」ときしみながら、かん高いひびきをたてる。

きしもと 〔話手 2 きしもと

七203 きしもとくん。きしもと「だいこんばけです。」先生「そうだ。

七205 きしもと「私のうちでは、だいこんを、庭に二十本うえたんです。

きしもとくん (人名) 4 きしもとくん

七202 岸のきしもとくん。きしもと「だいこんばけです。」先生「そうだ。

七218 (三) きしもとくんの家。

七218 きしもとくんが、弟のはるおくと、ふたりで、本をよんでいる。

七282 きしもとくんが学校から帰ってくる。

きしゃ 〔汽車(名) 41 きしゃ 汽車

一255 いえをたてる人、さかなをとる人、き

しゃをはしらせる人。

— 39 5 おとうさんと きしゃに のって、お月さんのところへ いった ゆめを みました。

— 48 3 きしゃが きました。

— 48 5 〇 きしゃは すいて います。

— 49 5 きしゃは すぐ はっしやしました。

— 50 6 〇 お月さんの くにの きしゃだもの。

— 51 1 〇 きしゃは、まもなく くもの とんねるに はいります。

— 56 7 おべんとうを たべて、ちよつとうとうと すると、きしゃは もう ついて いました。

— 57 4 きしゃから かけおいて、手を とりあいま した。

— 二 17 2 ちくおんき きしゃ しんや やさいい なごごまつ つくえ

— 四 79 2 き——きしゃと きせん。

— 五 8 3 〇 にいさん、汽車のきつぷかつたの。

— 五 8 6 〇 にいさん、汽車がはいってきたよ。

— 五 11 3 〇 むこうからきた汽車とすれちがつたのさ。

— 五 12 1 〇 あれをみて、汽車が、とまったりとおつ たりするのだ。

— 五 15 6 これは、汽車の旅にきつぷがいるのと、お なじことです。

— 五 15 7 汽車のきつぷは、遠い、近いによって、ね だんがちがいますが、

— 五 19 2 私たちは、汽車につまれて、どんだん、南 へはこばれました。

— 五 19 4 二日めのあさ、やつと汽車からおろされ、 自動車につまこまれて、

— 五 32 3 「シュッシュッ、ポッポ、シュッシュッ、 ポッポ——」汽車が走っています。

— 五 32 9 この汽車は、なにをたいて走っているの

しょう。

— 五 36 2 この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場の きかいを動かすのです。

— 六 74 9 〇 「汽車は。」「自動車は。」

— 七 34 3 汽車の中は、人でいっぱいでした。

— 七 35 1 汽車がゆれるたびに、前後からおされて、 さぶろうは、だんだん頭を私によせ、

— 七 41 3 ちようど、かふんにまみれたみつばちのよ うになって、汽車でねむっていた。

— 七 41 7 汽車は、かなり早く走っているの、

— 七 42 2 汽車はトンネルにはいった。

— 七 46 5 私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそと をながめた。

— 七 46 8 ちようど、汽車もとまった。

— 八 58 5 すると、おもちゃのように小さな汽車が、 けむりをはいて走ってくる。

— 八 58 6 「わあっ。」と、汽車によびかけた。

— 九 18 4 汽車や自動車もかなわないくらいの早さで すから、

— 九 22 4 それでも運びきれなくて、〈略〉、ヴェニス いきの汽車に、とくべつにあたたかくした貨車を 一つつけて送ったほどでした。

— 九 22 6 汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつ ぎのとおりです。

— 九 22 9 二十六日 汽車で 五万ば

— 十 23 7 ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に 乗っている。

— 十二 113 6 汽車第一号 なんとかかわいい汽車ではあ りませんか。

— 十二 113 9 汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、 日に日に進歩しています。

— 十四 86 9 風にあおられた雪のむれが、道を消し、

木をおり、汽車を立ちおうじようさせ、

— 十五 13 7 〇 月照らす上野の森を見つあれば家 ゆるがして汽車ゆきかえる

きしゃけむり 「汽車煙」(名) 1 汽車けむり

— 十五 7 5 〇 さい晩や火のこ豊かの汽車けむり

きしゃだいいちこう (題名) 1 汽車第一号

— 十二 113 5 汽車第一号

きしゃだいいちこう 「汽車第一号」(名) 1 汽車第 一号

— 十二 113 7 これは、汽車第一号で、明治五年九月十 二日、はじめて日本で東京横濱間を走ったもので あります。

きしゃのなか (課名) 2 汽車の中

— 七 2 10 四 汽車の中……三十四

— 七 34 1 四 汽車の中

きしゆくしゃ 「寄宿舎」(名) 1 寄宿舎

— 十五 56 12 〇 アマスト大学の助手をつとめていたこ ろ、寄宿舎で二間続きの室をつかっていた。

ぎじゅつ 「技術」(名) 2 技術

— 十五 48 8 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどう かして残したいと考え、

— 十五 50 9 〇 どんなにお金に困っても、どんなに苦 しんでも、この赤絵の技術を続けよう。

きしり「軋」ひはきしり

— 十四 56 11 〇 大きなきずができていますが、私は、 いっしょうけんめいそれをなおして、

— 十五 29 8 大わしはすぐにとび起きて、きずのいた みもかまわず、おそろしいいきおいで少年にとび かかって來ました。

— 十五 69 2 きずのあるみけんの下にかがやく目は、

思いなしかわらいで見え、

きずきあげる 「築上」 (下一) 1 きずきあげる

《一ゲル》

十二5711 それは、おにが一夜のうちに百だんの石だんをきずきあげることで、

きずきだす 「築出」 (五) 1 きずきだす 《一シ》

十二585 おには、これを承知して、ある夜、石だんをきずきだした。

きずく 「築」 (五) 1 きずく 《一ク》

十二1148 平和な國日本を作るために、また、文化國家をきずくために。

きずぐち 「傷口」 (名) 2 きずぐち

四545 これをうけとった一わが、きずぐちをていねいにあらってやりました。

四564 きずぐちもだんだんよくなり、

ぎせい 「犠牲」 (名) 1 ぎせい

十五868 人というものは、自分のしなければならぬつとめのためには、なにかしらぎせいにする心がなければならぬものだ。

きせつ 「季節」 (名) 4 季節

十九12 いなかの子どもにとっては、もっとも楽しい季節でした。

十三46 細い小枝のあみ目の先にも、はやふつくらと、季節の命はわきあがって、

十三61 春は、また、楽しい船出のほぬのを、高くかかげる季節。

十三76 ああ、季節のこういうのどかなとき、こいういしずかな午前にあって考える、

きせつふう 「季節風」 (名) 1 季節風

十四769 これが、《略》、アジア大陸と太平洋との間におこると、それがいわゆる季節風 (モンスーン) で、

きせる 「煙管」 (名) 2 キセル

十四2210 タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、

外國語であつたとお話しになったので、

十四241 〇 キセルとカボチャはカンボジア語だといわれている。

き・せる 「着」 (下一) 3 きせる 《一セ》 ↓ おきせる

三1147 天人がはごろもを きせようとすると、

かぐやひめは、

三1156 天人は、いそいで かぐやひめにはごろもをきせました。

十6510 おかみさんをもらえば、くらしにもお金がかかり、着物をきせたり、おこづかいをやったり

しなければならぬので、

きぜわしい 「氣忙」 (形) 1 氣ぜわしい 《一イ》

六59 カチカチと氣ぜわしいのはおき時計で、

きせん 「汽船」 (名) 5 きせん 汽船

四792 き——きしやときせん。

五75 汽船や荷船がとおる。

五362 この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場の

きかいを動かすのです。

十一44 大きな汽船がけむりをはいて、長いかけ

をひいて通っていくのがみえるし、

十四4411 ローマン号という小さな汽船が、十ばいもある定期船につきあたって、

きそく ↓ ふきそく

きそくだしい 「規則正」 (形) 3 きそく正しい

《一イ・一ク》

八363 この大きなうちゅうは、だいたいきそく正しく運行しているということです。

八365 このきそく正しいちつじよは、いったいどうしてたもたれているのでしょうか。

八993 あいだを30㍉ぐらいずつあけ、きそく正しい

く植えました。

きた 「北」 (名) 7 きた 北

一324 きた——みなみ——にし——ひがし——

みちこさんの かいしたことば。

三810 〇 みんな「北の 友だち。」

四413 三十ばのがんは、まいにちまいにち、北へむかってたびをつづけていました。

五183 きよくの人が、私たちをかたはしからしらべていて、北の方へいく友だちと、《略》を、

それぞれひとかたまりにわけて

八46 北はほっかいどうから、南はきゅうしゅう

やそのさきの島々まで、

九181 ヨーロッパの北の方ではんしよくしたものが、

九248 日本に春がくると思うと、もう矢もたても

たまらず、北をさしてすすむのです。

きたい 「奇体」 (形状) 1 きたい

九573 すると、そのきたいな男は、「《略》。」

きたかせ 「北風」 (名) 1 北風

六463 〇 北風、からかせ、寒いのに、おちばの、おちばの子どもたち、

きたがわ 「北側」 (名) 1 北側

十五588 〇 九月二十一日、マサチュセッツ州アマ

スト大学に入学、北側の第八号室に入る。

きたぐに 「北国」 (名) 1 北国

十四834 「雪國」は、北國の人たちが雪と戦っているようすを、映画にしたものである。

きたない 「汚」 (形) 9 キタナイ きたない 《一イ》 ↓ くちきたない

二4110 〇 そんな きたない ことばをつかうもの

ではないよ。

三133 〇 その ひとことと いうのは、 きたない

ことばをつかわないということだよ。

三139 きたない ことばは、きたない 心からう

まれてくるものだという ことが

三130 きたない ことばは、きたない 心からう

まれてくるものだという ことが

五77 下水の水やうんがの水、きたないどぶ水を

ながして、海のおくにするにいく。

六508 きたないこともきえそうな、ああ、おご

そかな夜の空。

十153 フランスだって、きれいなところもあり、

きたないところもあり、

十4811 クロイワンワン——キタナイワンワン

チャン——アンヨナメテルワ——

十504 、「キタナイワンワンチャン」といった

のは、そのためです。

きたまう「来給」(五) 2 来たまう 《一エ》

十三509 きみも来たまえ。

十三515 きみも来たまえ。

きたヨローロッパさん (名) 1 北ヨローロッパ産

十三249 こむぎ・さとうだいこんなど、北ヨー

ロッパ産の農作物で、できないものはないまでに

なりました。

きたる「来」(四) 1 きたる 《ール》

十二394 私は、生まれてはじめて、きたるべき新

しい日待つことを知りました。

きちがい「氣違」(名) 3 氣ちがい

十417 町の人のかげ口は、いっそうはげしくなり、

かれを氣ちがいとよび、

十439 幸吉は、それこそ氣ちがいのようになって、

死目をどんどんみていった。

十五10412 いそがしく足でけつたりして氣ちがいの

きちがいあつかい「氣違扱」(名) 1 氣ちがいあつ

かい

十333 村じゅうの者から氣ちがいあつかいにされ

るのをみて、

きちきち (感) 1 きちきち

九291 かい道をきちきちとどぶばったかな

きちんと (副) 8 きちんと

三332 はきものがきちんとそろって、わたく

したちのかえるのをまっています。

四81 こんざつする町かどでは、きちんとせい

りしてくれます。

四415 ものさしできちんとそろえたようになっ

てとんだり、

五823 夜は、はらまきをきちんととして、ねびえ

をふせぐこと、

六1017 きちんとはまったとき、また紙を糸でき

りきりとまいて、動かないようにした。

八1071 じょうぶに作ったいねかけに、日がよくあ

たるようにきちんとかけました。

十三599 きちんとした、おごそかな感じがする

ね。

十五634 おじさんは、きちんと着ていた上着をか

なぐりすてて、

きづく「氣付」(五) 2 氣づく 《イーカ》

六5710 みなさんの氣づいたことは、なんでも、か

かりのものにお知らせください。

八75 だんだんとささりして、うしろに氣づか

ず、テーブルのはしからころげ落ちたりしました。

きつて ①アメリカきつて

きつて「切手」(名) 1 切手

十五16 切手をはってもらうのです。

三7710 あしたの あさも、お日さまは きつと

かえってきてくれるの。

六723 雪だるま、きつと喜びますよ。

六883 すると、海の神は、きつといいことを教

えてくださるでしょう。

七334 きつと、とびだすよ。

八438 きつともとどおりになるでしょう。

八635 きつとしめんちようのたまごだよ。

八1044 これが、きつと実になるのでしょう。

九255 ちらりとつばめのすがたをみた人は、きつ

と、「略」といって喜びます。

九1242 「きつと、泉はこの近くにある。」茶人

はつれの人にいった。

九1244 くもは、きつとなってその方を見つめまし

た。

十4011 きつと成功します。

十4011 世界のために、きつと、あなたの願いが

かないます。

十一610 ひき返そうとしたりするときには、

きつとコックスが大声でいうだろう。

十一988 きつと遠くへいくだろう。

十一758 きみがいれば、きつとよくなるから。

十二785 きようは、きつと勝ってください。

十三231 大もみがある大きさ以上に生長しない

のは、きつと、小もみをいつまでも、大もみのそ

ばにならべておくからです。

十三617 きつと先生も、そんなお氣持で、この

絵はがきを送ってください。あなたに力をあたえ

てくれるにちがいありません。

十四379 星は、きつと、あなたがたに力をあたえ

てくれるにちがいありません。

十四781 竹を割るとき、もとのほうから割ろうと

すると、(略)、きつと、とちゅうから横の方へそ

れてしまつて、

十四92 9 まだ一銭もうけてはいないので、父親が、きつとひどくしかるにきまつていた。

十五86 1 園 きつと、おまえさんたちを、ごちそうによぼうというのだらう。

十五118 10 園 でも、いまにきつと来るでしょう。

きつね 〔狐〕(名) 7 きつね

二44 8 園 七 かげえ(略)「こんどはきつね。

三95 1 きつねや、だましぶねや、紙ふうせんなどもおることが出来ます。

六129 8 園 いま、きつねに追いかけていゐるんだ。

六129 8 園 きつねがおこつて、追いかけてくるんだよ。

六130 1 園 きみたちが、ここでわいわいやつていては、すぐぼくが、きつねにみつかつてしまうから、

六131 2 園 ぼくはきつねに追われてなんかいやしないんだ。

十三9 12 あるいは、きつねがつくとか、からすの鳴き声がわるいから不幸があるなどといった。

きつぱり (副) 2 きつぱり

十一61 12 園 なぜ、そのとき、『略。』と、きつぱりことわらなかつたのか。

十五86 9 園 ていねいに、しかしきつぱりと、ことわりなさい。

きつぶ 〔切符〕(名) 7 きつぶ

五8 3 園 にいさん、汽車のきつぶかつたの。

五12 8 園 きつぶをはいけんさせてもらいます。

五13 2 園 どうして、きつぶをみるの。

五14 6 園 きつぶを改札口でおだし。

五15 6 園 これは、汽車の旅にきつぶがいるのと、おなじことです。

五15 7 園 汽車のきつぶは、遠い、近いによって、ね

だんがちがいます、

五26 4 園 はるこさんは、きつぶを改札の女の人にわたしながら、「ありがとう」ございました。

きてき 〔汽笛〕(名) 1 きてき

五51 6 園 きてきも鳴らさず 船がいく 船がいく。

きどる 〔気取〕(五) 1 氣どる『一ッ』

九68 9 やまねこは、(略)、いかにも氣どつたようすで、しゅすの着物のえりを開いて、

きなが 〔氣長〕(形状) 1 氣長

八19 9 なんと氣長なことでしょう。

きぬ 〔絹〕(名) 2 きぬ

十四96 9 その火の光のさすところは、かべがきぬのようになつて、

十五110 12 園 きぬなの、銀なの、それとも眞珠なの。

きねん 〔記念〕(名) 4 記念

五83 1 そのお友だちが、記念に写真を写したいとおっしゃいました。

十12 1 園 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。

十一91 6 園 これを病院の記念に持っていらつしやい。

十一92 4 園 ぼく、記念に、この死んだ人にのこしていきます。

きねんしゃしん 〔記念写真〕(名) 1 記念写真

十55 1 七五三の記念写真も、思いではななるでしょうが、

きねんひん 〔記念品〕(名) 1 記念品

十三42 4 園 せっかくの記念品だから、とっておいたほうがいいよ……

きのう 〔昨日〕(名) 18 きんのう

一28 9 園 きんのう、そのみみでなにをききましたか。

二37 5 園 きんのう、学校からかえるとき、

四22 8 園 きんのう、えをかきました。

四24 6 園 きんのうのゆうがた、(略)、あのいけのそばまでさんぽしてきました。

四31 6 園 きんのう、学校からかえるとき、雨がふっていました。

四36 9 園 わたくしが、きのう、となりのうちに

おつかいにいきました。

四44 3 園 きょうも、きのうとおなじじゅんぱん

にならんとぶことにしよう。

四44 10 園 ぼくは、きのうは一ばんおしまいだつ

たもの。

五43 2 園 きんのう、はじめてほたるをみかけました。

六59 3 園 私は、きのう、おもしろいことに氣がつきました。

六77 2 園 きんのうから、それを考えているんです。

七29 10 園 きんのう、学校から帰ってみると、あおむ

しは、もう黄色ななぎにかわつていた。

八42 8 園 おくやみになつていらつしやると、きのうの、み知らぬ人があらわれました。

九65 1 園 わたしのほうがよっぽど大きいって、きのうの判事さんがおつしやつたじゃないか。

十47 5 園 私は、きのう、(略)二年三月になる妹をつれて、さんぽにでました。

十62 2 園 きんのう、風がふいて、ガサガサ音がしたから、(略)、二階の窓からそとをみたら、

十一34 6 園 きんのうの畑は水田となつて、晩にはかえるが歌いだす。

十二61 3 園 そのあくる朝ながめると、(略)、きのう

植えたなん千アールのあの美しい田さえなく、

きのこ 〔茸〕(名) 8 きんのこ

九51 9 園 たくさんの白いきのこが、ドツテコドツテ

きはつゆ
〔揮発油〕(名) 3 きはつ油

希望の帰ってくるとき。

十四
92
9
まだ一錢ももうけてはいないので

が、きつとひどくしかるにきまつていた。

十五 36 1 絵文字から起り、これがだんだん変わって、しだいに形のきまつたものとなり、

きみ「気味」(名) 3 きみ ↓ うすきみ・かぜきみ

九 37 6 1 じめじめした足もとがきみがわるく、

九 56 4 いちろうは、きみがわるかったのですが、なるべくおちついてたずねました。

十四 45 10 そのきみのわるいしずけさの中から、と

つぜん、(略)、きれいな歌が流れてきました。

きみ「黄身」(名) 1 きみ

五 95 4 たまごのきみですりえをこしらえて、

きみ「君」(代名) 66 きみ

二 27 4 4 きみ、どいてくれたまえ。

二 27 8 4 きみこそどいてくれたまえ。

三 43 6 4 きみの なかまと ぼくの なかまと、

どっちが多いか、

三 44 3 4 きみの なかまはずいぶん多いな。

四 26 9 9 きみはよくなくね。

四 26 9 9 きみの だいすきなきゅうりをあげよう。

四 42 7 4 きみ、列をはなれちゃだめじゃないか。

四 42 10 4 きみ、きみ、じぶんかつてに早くとんで

でいっちゃあこまるよ。

四 42 10 4 きみ、きみ、

五 16 6 4 「きみは、どこへいくの。」

五 17 2 4 ねえ、きみ。

五 30 1 4 しかし、きみは小さいから、まあいいよ。

五 30 8 4 きみは、ときどき、こういうことをやる

のかね。

五 31 6 4 これには、きみのようないい子どものことが書いてありますよ。

五 38 7 7 こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手

紙を書いてもらって、きみの受持の子どもたちに、

五 106 8 4 きみも、いっしょにむこうへとんでいこうよ。

五 108 1 4 きみ、きみ。

五 108 1 4 きみ、きみ。

六 39 3 4 きみ、どこにいたの。

六 41 10 4 子つばめ「みんなできみをとおぶするんだ。」

六 116 7 4 「きみ、作れるかい。」とききました。

八 73 4 4 「おい、きみ。」と、その一わがいった。

八 73 6 4 きみはじつにみにくいから、氣にいったよ。

八 73 8 4 きみはみつともないから、いいしあわせ

にあうかもしれないよ。

九 56 10 4 きみは、いちろうさんだな。

九 88 2 4 「だめだよ、きみ。」——けんかをとめる声がつづく。

九 90 9 4 「もうきみとは遊ばないからな。」

九 90 10 4 いいとも、だれがきみなんかと遊ぶもんか——

九 94 6 4 「これ、きみのだらう。」

九 95 4 4 「きみはなにをなくしたんだ。」

九 96 1 4 「きみの名まえが書いてある。」

九 96 8 4 これきみが落したボタンだらう。

九 96 10 4 きみがむしりとったんじゃないか。

九 99 1 4 でも、きみはひどいよ。

九 99 8 4 でも、ぼくは二つなぐられて、三つきみを

をなくった。

九 101 2 4 きみ、もうよそうよ。

九 102 3 4 ねえ、きみ、うちによって、ねえさんに

そのボタンをつけてもらわない。

十一 5 10 4 ぼくもきみに賛成だ。

十一 8 6 4 さっきから、きみはだまつているけれど、

十一 8 7 4 さっきから、きみはだまつているけれど、

十一 8 8 4 ぼくはきみをコックスにすいせんする。

十一 8 9 4 ほんとうにきみのいうとおりだ。

十一 8 11 4 きみは、ぼくらの心持をよく知っている。

十一 8 11 4 ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやなことなど、

十一 9 2 4 ぼくらは、きみについていきさえすれば、

十一 68 9 4 だが、だいじょうぶだと思ふんだ。

十一 75 8 4 だが、きみのおとうさんですよ。

十一 90 9 4 きみがいれば、きつとよくなるから。

十一 90 10 4 きみの看病はすんだ。

十二 48 8 4 きみがきみをまもってくださるだろう。

十二 76 11 4 きみ火をたけよきものみせん雪まろ

げ

十三 41 10 4 おぼさんがね、こんどの日曜、きみを

十三 42 2 4 お客さんにして、ハイキングにつれて行くって……

十三 42 9 4 見せたいものだって……なにを……それきみに

十三 50 9 4 おみやげより、早くきみの顔が見たいよ。

十三 51 5 4 きみも来たまえ。

十三 61 6 4 きみも来たまえ。

十五 8 5 4 きみわれ口そそぐ朝のそここの小

けるんだね。

きみわれ口そそぐ朝のそここの小

けるんだね。

きみわれ口そそぐ朝のそここの小

けるんだね。

きみわれ口そそぐ朝のそここの小

けるんだね。

流れ

十五547 ㊦ きみは、かねがねジョルダン博士から

いつてきている日本の学徒、大島くんでしょう。

十五558 ㊦ それはそれとして、きょうはきみがまだ生まれないころの日本の話をさせてもらおう。

十五572 ㊦ せんばいの教授がやって来て、きみは室を二つもっているようだが、

十五5910 ㊦ 裏の写真やら、当時の日記やら、きみに見せなければならぬものがたくさんある。

十五761 ㊦ きみの論文を、カーネギーで出版することは、ひきうけたよ。

十五939 ㊦ さあ、きみを待っているのだ。

十五998 ㊦ (幸福に向かい) きみはだれなの。

十五999 ㊦ きみ、ぼくを知らないの。

十五1059 ㊦ きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。

きみがかる [黄] (五) 1 黄みがかる 《一ツ》

七465 ㊦ 黄みがかった麦ばたけ、縣道らしい白っぽい道、そこを自轉車に乗って走る中学生、

きみたち [君達] (代名) 14 きみたち

三444 ㊦ ぼくが、きみたちのせなかの上を、かぞえながらとんでいくから、むこうのりくまでならんでみたまえ。

三453 ㊦ きみたちはうまくだまされたな。

六227 ㊦ きみたち、どこへいくの。

六12911 ㊦ きみたちが、ここでわいわいやっていては、すぐぼくが、きつねにみつかつてしまうから、

九906 ㊦ さあ、きみたち、やまだくんをつれていけよ。

十二7810 ㊦ 「きみたちは日本人ですか。」

十二792 ㊦ きみたちは、日本語を知っているの。

十五179 ㊦ ㊦ きみたちのそのまともなるひとみも

で。

十五183 ㊦ ㊦ きみたちのそのやわらかきたなころもて。

十五594 ㊦ きみたちが知っているはずがない。

十五781 ㊦ きみたちの考えが、たとい世間の考えとちがっていても、

十五783 ㊦ はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。

十五785 ㊦ けれども、きみたちは、ほどなく、みかたができるだろう。

十五1014 ㊦ でも、きみたちの名まえを聞かせてくれたまえ。

きみどり [黄緑] (名) 3 黄みどり

八969 ㊦ 種もみから黄みどりのめができました。

八979 ㊦ 黄みどりの新しいなえが、だんだん育っていきます。

八1024 ㊦ 葉のついているものところから、黄みどりのほができました。

きめる [決] (下二) 15 きめる 《一メーメル》

↓おきめる

四197 ㊦ みんなはそれぞれあいての人をきめてから、文を書きました。

四201 ㊦ まさおさんは、あいての人を「おかあさん」にきめて、

四475 ㊦ みんなはそうきめました。

六566 ㊦ それから、二組、三組と、じゅんじゅんにへんしゅうをするのにきめました。

六668 ㊦ お話の題はべつにきめませんから、かっぺにつきぎを考えてください。

六1274 ㊦ 五ひきのうさぎさんたちは、大きな声でじゃんけんをして、おにをきめました。

八963 ㊦ はんごになわしろをきめ、そのさかいに

しるしをつけました。

九655 ㊦ おしあいしてきめるんだよ。

九811 ㊦ ぼくは、どこか一つのところをきめて、

廣く深くはつていくのがいいと思います。

十546 ㊦ 「イコウ」ときめてあるきかけると、道の

わきで、たき火をしていました。

十一92 ㊦ わかっているだけではなしに、いつも

そのうえを考えていて、いいことをはつきりきめる。

十一109 ㊦ そういう男には、ぼくがなることにき

めているのさ。

十二705 ㊦ そうして、はい句を勉強することに心を

きめました。

十三105 ㊦ 名まえの字画を数えて、運がよいとかわる

いとかきめたり、

十三106 ㊦ 生まれた年によって、その人の性質や運

命をきめたりしている。

きも [胆] (名) 1 きも

八748 ㊦ あわれなあひるの子はきもをつぶした。

きもち [氣持] (名) 53 きもち 氣もち 氣持 ↓

おきもち

二713 ㊦ いきおいよく走る きもち。

三1032 ㊦ おじいさんは、きもちのわるいときでも、

はらの たつときでも、この かぐやひめのかお

をみると、すぐなおりました。

四283 ㊦ ㊦ ふわふわとして、氣もちがいいだろう

な。

四467 ㊦ おとといは、そんな 氣もちだったけれど、

きょうは ちがうんだよ。

四476 ㊦ あさの 風は、氣もちよく、がんの むなげ

にあたりました。

四539 ㊦ ㊦ がんたちには、この 風が なんとも いえ

ない 氣もちでした。

四〇六 〇七 〇八 いいお天気で、気持ちがいいな。
 五九 一〇 一一 いい氣持がして、たのしくなった。
 六九 二〇 二一 ほんとうにいい氣持だ。
 七九 三〇 三一 みんなをわらわせてやろうなどという氣持は、どこかへふっとんでしまった。
 八四 四〇 四一 かるやかなしらべは、朝の光のように氣持よく、車中のすみからすみまで流れた。
 九四 五〇 五一 すぎたことかもしれませんが、このかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。
 一〇四 六〇 六一 うれしいような、すまないような氣持がした。
 一一四 七〇 七一 でも、水の上をおよぐのは、いい氣持ですからね。
 一二四 八〇 八一 水の上をおよいだり、もぐったりするのがいい氣持かどうか。
 一三四 九〇 九一 あひるの子は、それを見て、ふしぎな氣持になった。
 一四四 一〇〇 一〇一 三音、四音と組みあわせてみると、さらにちがった氣持がします。
 一五四 一一〇 一一一 音の組みあわせも、いろいろな氣持をあらわします。
 一六四 一二〇 一二一 この國の人々が、あわれなこの小鳥たちにしめしたもっとも人間らしいあたたかい氣持は、
 一七四 一二〇 一二一 受けとりにくい氣持でいるが、
 一八四 一二〇 一二一 でも、いやだな、けんかしたあとの氣持って。
 一九四 一二〇 一二一 なんだか、いま考えるとほろろしい氣持さ。
 二〇四 一二〇 一二一 スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくきこえる。
 二一四 一二〇 一二一 こう決心がつくと、くもは、すっかりくなく氣持になりました。

二二四 一二〇 一二一 ぼくがいるので、みんな楽しい氣持になるようにできないものでしょうか。
 二三四 一二〇 一二一 ああ、われわれみんな、遠い國から旅してきた旅人のような氣持のする日だ。
 二四四 一二〇 一二一 村の人たちが困って頼みになると、氣持よく、物をわけてやったり、
 二五四 一二〇 一二一 ひどくとげとげした心でおしあっていた人たちも、きゆうになごやかな氣持になった。
 二六四 一二〇 一二一 ゆずられたときの氣持でゆずりました。
 二七四 一二〇 一二一 でも、あなたの歌には、そのさびしい氣持がでているので、人の心を動かすのだって、
 二八四 一二〇 一二一 はじめはいやがついていた民ちゃんも、よごれていないほうが氣持がいいので、
 二九四 一二〇 一二一 この日の午後、私はなんとなくものを待つ氣持で、じつとげんかんにたたずんでいました。
 三〇四 一二〇 一二一 きくこともできず、話すこともできないので、氣持があらあしくなり、
 三一四 一二〇 一二一 心にあることを、なにか美しいものであらわそうとする氣持がある。
 三二四 一二〇 一二一 そのあたりに遊んでいる子どもたちも、同じ氣持でした。
 三三四 一二〇 一二一 太郎はこの「くりひろい」の中に、さまざまな氣持をこめているにちがいない。
 三四四 一二〇 一二一 これをみても、平和を愛した古代の人たちの氣持がよくわかるではありませんか。
 三五四 一二〇 一二一 夏の日には、この音がすずしい氣持をおこさせ、
 三六四 一二〇 一二一 冬の日には、いかにもさむざむとした氣持をおこさせる。
 三七四 一二〇 一二一 小さな子どもは、〈略〉、ただ美しいかざりのような氣持で、れんをながめている。

三八四 一二〇 一二一 その氣持を、だれかに話してみたくてたまらなくなりました。
 三九四 一二〇 一二一 それは、フィリップの作品の中にみながっている大きな愛の氣持、そこからさしてくるとうとい光のためなのです。
 四〇四 一二〇 一二一 私は、なにか大きな楽しみをもったような氣持になって、家に帰ってきた。
 四一四 一二〇 一二一 小さな島國に住んでいたために、氣持までちっぽけなものになってしまったのでしようか。
 四二四 一二〇 一二一 みんな氣持よく、のびのびと深呼吸をする。
 四三四 一二〇 一二一 マッケンナは、しばらくしんみりした氣持で、この歌に聞きほれていました。
 四四四 一二〇 一二一 いい氣持になって、自分が水の中にひたっていることも、わすれてしまったほどでした。
 四五四 一二〇 一二一 すっかり、よみがえったような氣持になりました。
 四六四 一二〇 一二一 そこには、氣持のいい、小さなホテルがここかしこに立っています。
 四七四 一二〇 一二一 飛行機乗りが、安全な着陸地を上からさがしているような氣持で、
 四八四 一二〇 一二一 おまえの氣持をくいてしまおうよ。
 四九四 一二〇 一二一 それはなんともいえない、せつない氣持であった。
 五〇四 一二〇 一二一 うれしいような、楽しいような、悲しいような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。
 五一四 一二〇 一二一 きもとたけうら「課名」2 木もと竹うら
 五二四 一二〇 一二一 木もと竹うら……七十七
 五三四 一二〇 一二一 木もと竹うら
 五四四 一二〇 一二一 きもの「着物」(名) 32 きもの 着物
 五五四 一二〇 一二一 しろいきものをきたおんなの人たちが、
 五六四 一二〇 一二一 ぬれたきものをきて、かわくとぬぐ

ものはなかに。

二185 ⑤ 一しゅうかんに 一ど、赤い きものを

きるものはなかに。

四128 3 ⑤ きものだ。

四128 4 ⑤ こんなきれいな きものは、みた ことがない。

四128 9 りようしは、その きものをもつて いこうとします。

四129 6 ⑤ もし、それは、わたくしの きものでございませう。

六31 8 きもののすそが風にあおられる。

八40 3 着物を着ようとなさいました。

八40 3 着物もこがねになりました。

九57 11 着物のえりを廣げて、からだに風をいれながら、

九68 10 いかにも氣どつたようすで、しゅすの着物のえりを開いて、

十65 10 おかみさんをもらえば、くらしにもお金がかかり、着物をきせたり、おこづかいをやったりしなければならぬので、

十一63 5 ひとりの少年が、〈略〉、わきの下に着物の包みをかかえながら、

十一93 1 そういつて、少年は、その小さな着物の包みを小わきにかかえました。

十二52 7 着物の作りかたと手のつけかた。

十二53 1 (3) 顔は、着物のすそからさかさにいれて、首を着物にぬいつける。

十二53 2 首を着物にぬいつける。

十二53 6 (5) 顔と手をつけた着物を裏返すことができあがる。

十二105 4 この人たちの着物やかぶりものなども、いまのものとずいぶんちがっています。

十三56 2 いっそう生き生きとして、その着物やはその色の美しいのにおどろかされました。

十四94 8 女の子は、〈略〉両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で重ねて、

十五102 10 ⑤ 両親を愛する幸福』で、ねずみ色の着物を着て、いつでもすこし悲しそうにしているのは、だれもふり向いてくれないからです。

十五102 12 ⑤ 『青空の幸福』で、もちろん青い色の着物を着ていますし、

十五103 1 ⑤ 『森の幸福』で、みどりの着物を着ています。

十五103 4 ⑤ 『ひなたの幸福』で、ダイヤモンド色の着物を着ていますし、

十五103 10 ⑤ 『星の出を見ることの幸福』が、〈略〉、金びかの着物を着てついでにいます。

十五105 6 天使のようなすがたをした者が、きらきら光る着物を着て、そろそろとやって來ます。

十五110 11 ⑤ それに、このきれいな着物は、まあ、なんでこしらえたの。

十五111 9 ⑤ おまえたがほおずりをするたびに、私の着物に、月と日の光がさしてきてね。

十五112 4 ⑤ 私は、いつだってこの着物を着ているのよ。

十五114 8 ⑤ あの小さな家に帰って、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだろうね。

きやあ (感) 1 キヤア

五80 10 「キヤア。」と喋ってとびあがったので、みんなわらいました。

きやく (客) (名) 3 客 ↓ おきやく・おきやくさん

八7 1 客がきているときなど、あまりテーブルの上でぎょうぎのわるいまねをすると、

十三28 9 客のこしかける赤いすや、〈略〉赤いはこを、てんびんぼうでかついでやって來る。

十三47 5 そよ風の中にひっそりと、客をむかえた赤いへや。

きやく (逆) (名) 1 ぎやく

十四71 3 その反対に、茶わんのまん中の方では、ぎやくに上の方へのぼつて、

きやくま 「客間」 (名) 2 客間

十四46 3 來客を前にして、客間で歌っているのと、ちつともちがわぬような歌いかたです。

十五72 11 ドアをおして、つかつかと中にすすんだホランド博士は、客間に私をみちびき、

きやく (感) 1 きやく

四21 10 「きやく。」と喋ってしゃがみます。

きやくきやく (感) 3 キヤッキヤッ きやく、きやく

六67 10 ⑤ 「きやく、きやく。」と喋って、木のうにすするとのぼつて喋ってしまいました。

十五82 5 「キヤッキヤッ」とさわいんだり、歌を歌ったり、〈略〉、ねむりこけたりしています。

十五85 7 ⑤ 『キヤッキヤッ』と喋っている。

キヤベツ (名) 2 キヤベツ

七4 2 中庭のキヤベツが、なたねが、やぎ小屋が、ぼうつとあらわれる。

十四21 3 ミルク、コーヒ、ジャム、トマト、キヤベツ、バス、トラック、オートバイ、

きやく (消) (下二) 1 きやく 《一エ》

九116 2 ⑤ 階上のわが電燈のきえにけりみわたす家々みなまくらなり

きゅー (感) 1 キュー

七93 1 首ののこりを持って、かごの中へいれたら、キユーと、高く鳴きました。

きゅう〔級〕(名) 1 級

十五122〔急〕これがこの級の最後のことばだ。

きゅう〔急〕(形状) 32 きゅう 急

一626 きゅうにあたりがあかるくなりました。

二483 それから、となりのへやへいこうとして、きゅうにたちどまります。

二514 きゅうにおどりをやめて、しずかになります。

二516 そうして、きゅうに走ってたちざります。

二667 「しゅしゅしゅしゅ」を、きゅうにしずかにいう。

三107 すると、かぐやひめのすがたがきゅうにみえなくなりました。

四113 うらしまは、父や母のことを思いだして、きゅうに家へかえりたくなりました。

五402 きゅうにあたりが美しくなると、〈略〉、ぼんやりするほどたのしい氣がします。

六164 そのかりうどは、きゅうに歩くのをやめて、弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

六515 そのうちに、あたりがきゅうにくらくなつて、かげがみえなくなりました。

六761 きゅうにそんなことをきいたりして、六110 「はな」といっているんだと思うと、きゅうにおかしくなった。

八247 このわかいあぶらぜみは、きゅうに元氣になつて、そろそろと歩きだしました。

八808 あひろの子は、きゅうにおよぎたくなつたので、にわとりに思わずその話をした。

九191 約十万ばのつばめが、きゅうに落ちてきたことがあります。

九192 その年は氣候がわるくて、九月の中ごろ、きゅうに十二月の氣候と同じ寒さになり、

九547 道はたいへんきゅうな坂になりました。

九595 「〈略〉。」とたずねますと、男は、きゅうにまじめになつて、

九599 そのとき、〈略〉、ぎょしゃはきゅうにていねいなおじぎをしました。

九917 いっしょに歩いていううちに、きゅうにつかみあいをはじめのんだもの。

九963 あつ、それだ。」と喜ぶが、やまだの顔をみると、きゅうにまたつんとなつて、

九105 きゅうな坂にかかると、九107 みんなは喜んで、きゅうに元氣をだした。

九137 「おかあさん。」といわれて、きゅうになつかしくなりました。

十435 すると、かれはきゅうにとびあがつた。

十712 おくびよう者が、きゅうにいきおいづき、〈略〉、自分も指をつっこみました。

十712 すると、太郎かじやは、きゅうに両手で顔をおおい、おいおい大声をあげてなきだしました。

十742 いままでおいおいいたくせに、きゅうに、にっこりわらい顔になつて、

十一530 ひどくとげとげた心でおしあつていた人たちも、きゅうになごやかな氣持になつた。

十三311 はげしくたいていて、てのひらで、きゅうにどらをおさえるので、

十三484 「ます」小屋のランプが、きゅうに暗くなりしました。

十五245 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて來ました。

きゅうぎゅう(副) 2 きゅうぎゅう
十一512 その体格で、思うぞんぶん、長いオー

ルをこいだら、オールがぎゅうぎゅうとしなつて、十五256 からだの重さで上からぎゅうぎゅうとお

しつけ、

きゅうくつ〔窮屈〕(形状) 4 きゅうくつ

二265 きゅうくつ きゅうくつ。

二265 きゅうくつ きゅうくつ。

六626 「きゅうくつ、きゅうくつ。」といいました。

六626 「きゅうくつ、きゅうくつ。」

きゅうけいじょう〔休憩場〕(名) 1 休けい場

十二778 休けい場にもどつてくると、中國人らしい十二の兄弟にサインを頼まれました。

きゅうしゅう〔九州〕(地名) 3 きゅうしゅう九州

八46 北はほっかいどうから、南はきゅうしゅうやそのさきの島々まで、

十三174 デンマルクは、〈略〉、わが九州ほどの本國と、三つの島からなっている、小さな、しずかな國であります。

十五471 「どこで作りますか。」九州の有田です。

きゅうセンチ(名) 1 九センチ
十二522 いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切つて、まん中にあなをあける。

きゅうていし〔急停止〕(名) 1 急停止
九109 みんなが急停止をすると、雪けむりが一どにあがつた。

きゅうていしする〔急停止〕(サ変) 1 急停止する
九109 ふもとへきて、急停止すると、ぱつと雪けむりが立ち、

きゅうにゅう〔牛乳〕(名) 1 牛乳
八867 たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、

おかみさんは手をたいておこつた。

ぎゅうにゅうなべ 「牛乳鍋」(名) 1 牛乳なべ

八86 あひるの子は〈略〉、おそろしさのあまり、牛乳なべの中へとびこんだ。

ぎゅうば 「牛馬」(名) 1 牛馬

十五76 文 影絵めく牛馬朝日を織るあきつ

ぎゅうひ 「牛皮」(名) 1 牛皮

十二468 牛皮を切りぬいて、美しい色がつけてある。

きゅうり 「胡瓜」(名) 11 きゅうり

二263 ぎゅうりがながれてきました。

二264 ぎゅうりが、くつの中にはいりました。

四271 手 きみのだいすきなきゅうりをあげよう。

五626 あさごはんのとき、はたけではじめてとれたきゅうりをたべました。

五628 きれいなきゅうりね。

五629 このきゅうりだって、あさがおとなじですよ。

五636 あやこも、このきゅうりも、あさがおの花もおなじだよ。

五637 あさがおやきゅうりは、自分ひとりで、大きくなったのでしようが、

六624 そこへきゅうりが流れてきました。

六625 きゅうりがくつの中にはいりました。

七128 「きゅうりの手」や「豆の手」なども、同じです。

キョーリーふじん (人名) 1 キョーリー夫人

十四367 キョーリー夫人は、〈略〉、物理の時間に、先生から、星をつかめといわれ、

きゅうりゅう 「急流」(名) 1 急流

九128 けれども、流れは急流だし、雨の日も風の日もある。

きゅっと (副) 1 きゅっと

四42 ゴムのように のびる ことも あるし、きゅっとちぢむ こともありました。

きよい 「清」(形) 2 清い 《イ》

十一367 夕風ふけたいこ鳴り、清い歌声あちこちと、こよい楽しいぼんおどり。

十五1028 『清い空気の幸福』で、ほとんどすきとおっています。

きょう 「峽」 ↓てんりゅうきょう

きょう 「教」 ↓キリストきょう

きょう 「興」(名) 1 きょう

十五732 老博士は、きょうに乗じて、アメリカの考えかたについて熱意をこめて語られた。

きょう 「鏡」 ↓けんびきょう・ぼうえんきょう
きょう 「今日」(名) 76 きょう

一174 きょうは、どんなえがかれるでしょう。

二253 きょうは、いちろうさんと、さだおさんと、〈略〉、この五人のぼんです。

三108 ちやうも小鳥もたのしそう、きょうはあなたの花まつり。

三404 きょうならったばかりのしょうかを、大声でうたいながらあるきました。

四305 手にしださんは、きょうもびょうきで休んでいます。

四443 きょうも、きのうとおなじじゅんばん

四462 じゃあ、かつちゃん、きょうはどこにならんだというの。

四467 おとといは、そんな 氣もちだったけれど、きょうはちがうんだよ。

四469 さあ、きょうは、どのへんにならんだというんだね。

四638 きょうは、どう ならぼうか、かつちゃん。

四813 きょうはたのしいクリスマス。

四821 世界の子どもにうたわれて、きょうは、エスさま およろこび。

四1044 きょうは、お札にあげました。

四1273 きょうはいいお天気だ。

五225 しかし、きょうのうれしさは、それだけではありません。

五229 きょう、ぼく、とてもうれしかった。

五285 ぼく、きょう、とてもうれいんです。

五6610 わしは、きょう、金のさかなをとったよ。

五7810 きょう、先生といっしょに、学校のはたけのむこうを流れている小川のところにいきました。

五806 きょうは大そうじをしました。

五814 きょうは五人も休みました。

五821 どうして、きょうはこんなに休んだのでしょう。

五887 きょうは、おにぎょうのおもりのしかたをしてみせてあげよう。

六392 かかし「ふきとばされたんです。きょうの大風に。」

六813 きょう一日だけ、私につりをさせてくださいませんか。

七49 「さあ、きょう、いちばんはじめにるのは、だれかな。」

七57 きょうは、ぼうしをかぶっているな。

七82 かしの木は、きょうもそんなことを考えた。

七94 あの日からきょうまで、わたしのみたこと、きいたことを話したら、いくつあるだろう。

七1610 先生、きょうは風がありませんから、ちようちよが、たくさんとんでいるでしょう。

九20 協会では、おおいそぎで、その家をつばめたちのためにぐあいよくつくりなおしました。

きょうかい 「教会」(名) 2 教会 ↓さつぽろどくりつきょうかい

十三157 しかし、そのころの教会のほうさんたちは、天動説を信じていましたので、

十五673 新島家のとなりにあった教会の日曜学校の生徒であつた私は、

きょうかしよ ↓えいごきょうかしよ
きょうぎ 「行儀」(名) 4 きょうぎ

三331 会 でいり口には、げたばこがたくさんあります。きょうぎよくむかいあつています。

四434 がんは、おたがい いましめあつて、きょうぎよく空をとびました。

八71 客がきているときなど、あまりテーブルの上できょうぎのわるいまねをする、と、

十五9212 会 きょうぎのいいことばをつかつてもらいたいのですね。

きょうげん 「狂言」(名) 6 狂言 ↓のうときょうげんについて

十647 能といっしょに、狂言というものが演じられます。

十647 狂言はめんをつけません。

十649 狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきや、《略》で、できているといつてもよく、

十6412 ことばも、能は、ゆう美ですが、狂言はそうではありません。

十651 つぎの「ぶす」は、狂言の中の有名なものです。

十652 狂言には、よく、太郎かじやと次郎かじやが、現われます。

きょうげんぶす 「題名」2 狂言「ぶす」

十310 狂言「ぶす」

十658 狂言「ぶす」

きょうし 「教師」(名) 1 教師 ↓かていきょうし
十五605 当時、母校札幌農学校の教師をしながら、

《略》札幌独立教会をつかさどつていた私の父

きょうしつ 「教室」(名) 14 きょうしつ 教室
三312 会 右がわはきょうしつで、左がわにはま

どがならんでいます。

三343 会 五年生のきょうしつでは、花のしやせいをしていました。

三386 みんなのきょうしつ。

五787 これで教室が明るくなりました。

五8210 私たちの教室にもおいでになりました。

七45 教室のまどは、まだねむりがふかい。

七61 あちこちのまどがあいて、教室も目がさめた。

七711 会 こうどうをのぞいてみたり、みんなが勉強する教室にはいつて、こしかけてみたり——

七86 教室のまどは、どこもまぶたをとじる。

十197 もうあ学校の教室である。

十11510 教室の高いところの窓ガラスが、一まいこわれていて、

きょうそう 「競争」(名) 1 きょうそう

九338 村の子どもがきょうそうでとりいくので、たいそうにぎやかです。

きょうだい 「兄弟」(名) 7 きょうだい 兄弟
一573 しろちゃん、はねちゃん、《略》、みんな

わたくしのうちにいたきょうだいです。

一598 おじいさんも、おばあさんも、きょうだいも、みんなよろこんで、

七335 兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちやうちよを、しくびんからとりだす。

七337 母は、ふたりの兄弟をながめている。

十二779 休けい場にもどつてくると、中國人らしい十一の兄弟にサインを頼まれました。

十五10612 会 『ものわかる喜び』が立っています

が、あれは、いつでも、兄弟の『なにもものわからない幸福』をさがしているのです。

十五1072 会 だって、ぼく、その兄弟にあつたよ。

きょうだいしまい 「兄弟姉妹」(名) 1 兄弟姉妹
十五7411 四海の民すべて兄弟姉妹である。

きょうだいぶん 「兄弟分」(名) 1 兄弟ぶん
十五1044 会 『大きな喜び』の兄弟ぶんのようなの

ですからね。

きょうつう 「共通」(形状) 1 共通
十二565 六 傳説《略》その中には、世界に共通

なものさえある。

きょうてん ↓びつくりきょうてん
きょうと 「京都」(地名) 6 京都 京都

十五613 京都に帰つてから父に送った手紙のど

れにも、

十五657 秋たけてりんごのみのころ、おじさん

とおばさんは京都へひきあげられたが、

十五661 そこで、たまりかねた家の書生が、《略》、

くじょうの手紙を京都へ送つたりした。

でわかれを告げたことや、
十二9411 正男は、きよ年のいまごろのことをふと思いだす。

きよめる「清」(下) 1 きよめる 《一メル》

五492 あさの光に、身をきよめるのはうれしい。

きよらか「清」(形状) 4 きよらか 清らか

六197 窓 みどりの木の葉は喜びにみち、きよらかな風は、われわれの音楽をほめてくれる。

十4412 第二、第三と母目を開いていくと、どれにも眞珠が、きよらかにかがやいているではないか。

十一165 天と地にかがやくものの中で、いちばん清らかな、すみきったたま、それはおかあさまの愛です。

十五944 舞台は清らかな、こうごうしい、ばら色の美しい光に照らされます。

きよ「距離」(名) 8 きよ

八337 ただ「遠い」という考えだけでは、この遠いきよりは、おしはかることはできません。

八339 ふだん、私たちは、メートルという単位を用いてきよりを計りますが、

八3310 星のきよりになりますと、これでは、もうまにあいません。

八344 一光年は、光が発してから、一年かかってとどきよりをさしていいいます。

八349 光のとどき時間ではかると、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。

八3411 「光年」を単位として計算しなければならぬほど、遠いきよりであります。

八351 さて、空の星は、地球からどのくらいのかよりにあるのでしょうか。

九11310 林をぬって長いきよりをすべるのは、ほんとうにゆかいであった。

きよるいがくしゃ じせかいてきよるいがくしゃ
きよるきよるする (サ変) 2 きよるきよるする

《一シ》

四216 団 ねずみたちは、わの 中で きよるきよるしています。

六127 おさるさんは、きよるきよるしながら、まつかさを受けとりました。

七89 うさぎでも、くもった日や雨降りの日は、きらいなのでしょう。

きらい「嫌」(形状) 1 きらい

きらきら (副) 4 きらきら

五461 園 みんななかよくきらきらと、しずかな空で光ろうよ。

十232 小川の水、きらきら光る。

十五1035 園 これは、『春の幸福』で、きらきら光る青いたまの色をしています。

十五1056 天使のようなすがたをした者が、きらきら光る着物を着て、そろそろとやって来ます。

きらきら (副) 1 きらきら

九631 そこへ四方の草の中から、どんぐりどもがきらきら光つてとびだして、

きらきらする (サ変) 1 きらきらする 《一シ》
三734 園 「きらきらした 水かしら。」

きらっと (副) 1 きらっと

六632 朝日の光で、アルコールのびんがきらっと光った。

きり「題名」 2 きり

十三35 きり

十三481 きり

きり「切」 じおもいきり・ふみきりばん
きり「桐」(名) 1 きり じあおぎり

七467 そこを自轉車に乗って走る中学生、たがや

している父と子、きりの花——曲は終わった。

きり「雛」(名) 1 きり

六52 きりや、ねじまわしや、ピンセットや、《略》も、おなじ台の上によこたわっている。

きり「霧」(名) 5 きり じあさぎり

五43 山に雨が降る、きりがおきる、夜は夜つゆがおきる。

十四632 雲やきりと同じようなものです。

十四643 しんになるものがあつて、そのまわりに、蒸気がこつてくつので、もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできない

十四738 湯のおもてに、にじの色のついた、きりのようなものがひと皮かぶさっており、

十五73 園 みんなてききりの中鉄のひびきのかじ屋の火

きり「副助」 2 きり

十515 いぬは、まばたきをしたきりで、そのパンをたべようとしません。

十一835 園 『チチロをやりました。』って手紙がきたきり、おまえがこないから、

きり「副助」 1 きり

十五1157 園 どんな子だって、おかさんはひとりきりです。

きりかた「切方」(名) 1 切りかた

六1179 なが四角から、ま四角に切る切りかたは、いつかおかあさんに教えていただきましたから、

きりかぶ「切株」(名) 1 切りかぶ

六1371 そうして、木の切りかぶに、つぎのようなことが、赤いクレヨンで書いてありました。

きりきり (副) 1 きりきり

六1017 きちんとはまったとき、まいた紙を糸できりきりとまいて、動かないようにした。

きりぎりす (名) 9 きりぎりす ありとぎりぎり

す・うたをうたうきりぎりす・オルガンのきりぎりす・しきしゃのきりぎりす・シロフォンのきりぎりす・たいこのきりぎりす・チェロのきりぎりす・ハーモニカのきりぎりす・パイオリンのきりぎりす・ふえのきりぎりす

四267 「きりぎりす」をあいてに書きました。

六178 まくがあくと、きりぎりすが大ぜいあつまって、音楽会をしています。

六181 あるきりぎりすはパイオリンをひいています。

六182 あるきりぎりすはチェロをひいています。

六182 あるきりぎりすはふえをふいています。

六213 美しいぶどうに、かがやくりんご、楽しいわれらきりぎりすの生活——

六281 このとき、戸のそとに、きりぎりすが二ひきたずねてきます。

六305 それをきりぎりすにわたします。

十三497 牧場が、生き生きしたみどりでわらい、きりぎりすが、楽しい景色の中でわらう。

きりぎりすいち 「二」(話手) 3 きりぎりす一

六285 きりぎりす「まあ、おねがいしてみよう。」

六297 きりぎりす「お元氣どころか、このおりすっかりよわって。」

六299 きりぎりす「すこしでもいいから、わけてください。」

きりぎりすいち 「二」(名) 1 きりぎりす一

六288 きりぎりす一が、戸をトントンとたたきます。

きりぎりすいちに 「二」(話手) 3 きりぎりす

六295 きりぎりす 一、二 いねいにおじぎをしながら、

「略。」

六2911 きりぎりす「どうかたのみます。」

六306 きりぎりす「ありがとうございます。」 なんだもお礼をいってたちさります。

きりぎりすいちに 「二」(名) 1 きりぎりす一、二

六293 戸をあけて、きりぎりす一、二がはいってきます。

きりぎりすさん (名) 3 きりぎりすさん

六225 あ、だれかと思つたら、きりぎりすさんでしたか。

六226 きりぎりすさん、こんにちば。

六294 きりぎりすさんじゃないか。

きりぎりすに 「二」(話手) 2 きりぎりす二

六286 きりぎりす二「ふたりでたのめば、なんとなかなるだろう。」

六298 きりぎりす二「なにかめぐんでください。」

きりぎりりりり (感) 2 キリキリ、リリリリ

十三333 一輪車が、「キリキリ、リリリリ」ときしみながら、かん高いひびきをたてる。

十三335 「キリキリ、リリリリ」がびく。

きりこむ 「切込」(五) 1 切りこむ 《一》

十二524 あなの両わきを切りこんで、手さきをまめるめ、指の線をほる。

ギリシア (地名) 2 ギリシア

十6312 能は、めんの藝術ともいわれ、ヨーロッパの大むかしにさかえた、ギリシアの、同じめんの藝術とくらべて、研究されています。

十五414 そのフェニキア文字がギリシアに伝わってギリシア文字となり、

ギリシア (名) 2 ギリシア語

十五5712 ある日のこと、せい書をギリシア語で

読みたいといひだした。

十五583 私はいかのギリシア語の先生で、

ギリシアもじ (名) 2 ギリシア文字

十五414 そのフェニキア文字がギリシアに伝わってギリシア文字となり、

十五415 それから、そのギリシア文字がローマに移って、現在のようになつた。

キリスト (人名) 3 キリスト

十三543 ぼくは、その絵を見ると、そのあかちゃんキリストで、そのおかあさんがマリアだということ、すぐにわかりました。

十三594 せいの高いマリアがキリストをだいて立っていると、

十三597 キリストのおかあさんという感じが、よく出ているんじゃないでしょうか。

キリストきょう (名) 1 キリスト教

十二1006 イソップ物語はイソップという人が書いたお話ですが、これをキリスト教の宣教師が日本に傳えたのは、三百五十年ほどまえのことです。

きりたおす 「切倒」(五) 2 切りたおす 《一》

三263 長いあいだかかって、やっと切りたおすことができました。

三265 こんどは、切りたおした木を、どうするかということになりました。

きりだす 「切出」(五) 1 きりだす 《一》

十五553 あいさつを終って、用事をきりだすと、きりつめる 「切詰」(下) 1 きりつめる 《一》

七684 あとのやりかたは、文章をきりつめていくのと同じです。

きりとる 「切取」(五) 3 切りとる 切り取る

《ツ・ール》

六68 4 それを切りとって新聞にはりつけました。
 十44 5 ほかの母貝のがいとまよく切り取ってき
 て、一種の手術をほどこすことを発見した。

十三20 3 しかし、切りとるばかりで手入れをおこ
 たつたために、土地は、年を追ってやせおとろえ
 きりぬく《切抜》(五) 1 切りぬく 《イ》

十二46 8 牛皮を切りぬいて、美しい色がつけて
 ある。

きりぬける《切抜》(下二) 1 切りぬける 《
 ケ》

十一23 5 父親の生きているあいだは、《略》、どう
 にかこうにか切りぬけてきましたが、

きりはじめる《切始》(下二) 1 切りはじめる
 《メ》

三26 3 なん十人、なん百人というきこりが、切
 りはじめました。

きりはらう《切払》(五) 1 切りはらう 《ツ》
 十三23 3 もある時期になって、小もみを切り
 はらってしまったら、大もみは土地をひとりじめ
 して、生長するにちがいありません。

きりひらく《切開》(五) 1 切り開く 《イ》
 十二113 3 新しい学問をきり開いていくときは、

きりゆう《氣流》(名) 2 氣流
 十四73 3 「かげろう」がたつのは、かべや屋根が
 熱せられると、それに接した空気がふくれてのぼ
 る、そのときできる氣流のむらに、光をおり曲げ
 るためなのです。

十四76 2 同じような氣流のじゅんかんが、もつと
 大じかけに、陸地と海との間に行われております。

きりよう《器量》(名) 1 きりよう
 十五112 9 もう、びんぼうなおかあさんもなけれ

ば、きりようのわるいおかあさんもないし、
 きる《切》(五) 32 きる 切る 《ツ・ール》

ル》ひいきる・うらぎる・おもいきる・かわきき
 る・くいきる・くぎる・くれきる・しめきる・すみ
 きる・たちきる・つかれきる・なりきる・のりき
 る・はりきる・ひえきる・まんぞくしきる・よこぎ
 る・よわりきる・わかりきる

三25 3 この木を切ることにしよう。
 三25 5 こんな大きな木を、切っていいもの
 でしょうか。

三25 7 日の あたるようにするには 切るより
 ほかにしかたがあるまい。

三25 10 そこで、切る ことになりました。
 三26 1 こんな 大きな 木の ことですから、切る
 のにも 大さわぎでした。

三50 6 石やさん かっちゃん かっちゃん 石を 切
 る。

三50 7 めがねを かけて 石を 切る、 目もとを
 すえて 石を 切る、 あせを ながして 石を 切る。

三50 8 目もとを すえて 石を 切る、
 三50 9 あせを ながして 石を 切る。

三51 1 かっちゃん かっちゃん 石を 切る。
 三51 4 のみより つよい うでさきで、 かっちゃん
 かっちゃん 石を 切る。

三51 8 のみの 手もととは くらくても、 かっちゃん
 かっちゃん 石を 切る。

三101 2 その 竹を 切って みますと、 小さな、 き
 れいな おひめさまが すわって いました。

六117 8 はじめに半紙をま四角に切りました。
 六117 9 なが四角から、ま四角に切る切りかたは、
 いくつかおかあさんに教えていただきましたから、
 六119 1 紙のうらには、まん中に、ま四角に切った

ときにつけたすじがたてについています。
 六119 2 そのすじにあわせてひごを切り、
 六119 7 紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ、
 ちょうどいい長さにひごを切りました。

七45 1 ここで、ちよつとことばを切った。
 七67 2 炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになつて
 いる。

八76 1 てっぽうはひきつづいて火ぶたをきった。
 十一24 3 ひとりぐらゐ育てるお金は、わたしが
 山へいって木を切ってきてもうけますよ。

十一25 5 遠い山へいって、しばをかったり木を
 切ったりして、村の人に買ってもらいました。

十二49 9 古新聞を二まいとも八つに切って、その
 うち一まいだけを正方形にする。

十二50 9 細長く切った古新聞のりをつけてとめ
 る。

十二51 2 日本紙を細長く切って、
 十二52 2 いたぎれを、はば二センチ、長さ九セン
 チくらいに切って、まん中にあなをあける。

十二52 10 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十
 センチぐらいにつきあわせて、図の形に切る。

十二68 4 大きなかたい物を切るのこぎりのはは、
 大きくてあつい。

十二68 5 小さなやわらかい物を切るのこぎりのは
 は、小さくてうすい。

十二68 8 まっすぐに長く切るのこぎりは、廣いは
 ばをもっている。

十四97 4 そのやいた鳥は、肉を切るナイフとホー
 クとをせなかに立てたまま、

きる《着》(上二) 26 きる 《キ・キル》
 一45 9 しろいきものをきたおんなの人たちが、
 二17 7 ぬれたきものをきて、かわくとぬぐ

ものはなにあに。

二185㊦ 一しゅうかんに 一ど、赤い きものを
きるものはなにあに。

三114㊦ 「略」といって、きていたうわぎを
ぬいで、おばあさんにわたしました。

四83㊦ 赤い ふくを きて、三かくぼうしを かぶ
り、

四132㊦ 天人は、それを きて、しずかにまいます。
五71㊦ おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴか
ぴか光るずきんをかぶり、

六28㊦ ぼうしもかぶらず、がいとうもきていませ
ん。

七29㊦ ぼくは、あおむしは、かくれみのをきて
いるようなものだと思った。

八40㊦ 着物を着ようとなさいました。

八45㊦ ほんとうに幸福な人を見つけて、その人
の着ているシャツを王さまにお着せするのです。

九59㊦ やまねこが、黄色なじんぱおりのような物
を着て、

九63㊦ やまねこは、〈略〉しゅすの服を着て、ど
んぐりどものまえにすわっていました。

十四82㊦ ぼろを着ても心はにきき。

十五17㊦ 少女たちよ、〈略〉、つづれ着るとも、

失うな、やさしく清き心が心。

十五63㊦ おじさんは、きちんと着ていた上着をか
なぐりすてて、

十五97㊦ なんてかわいらしい服を着ているのだ
ろう。

十五102㊦ これは、『両親を愛する幸福』で、ね
ずみ色の着物を着て、

十五103㊦ これは、『青空の幸福』で、もちろん
青い色の着物を着ていますし、

十五103㊦ これは、『森の幸福』で、みどりの着
物を着ています。

十五103㊦ これは、『ひなたの幸福』で、ダイヤ
モンド色の着物を着ていますし、

十五103㊦ 『星の出を見ることの幸福』が、〈略〉、
金びかの着物を着てついています。

十五104㊦ 黒の肉じゅばんを着たわんぱくこぞうの
ようなのが、聞きとれないさけび声をたてて、

十五105㊦ 天使のようなすがたをした者が、きらき
ら光る着物を着て、そろそろとやって来ます。

十五112㊦ 私は、いつだってこの着物を着ている
のよ。

十五114㊦ あの小さな家に帰って、私がぼろぼろ
の着物を着ていても、わかるだろうね。

きれ「切」(名) 1 きれ じいたぎれ・かみきれ・

きぎれ・ひときれ・ふるぎれ・ぼうぎれ
四83㊦ ねえさんが、赤いきれで なにか こしら
えはじめました。

きれい「奇麗」(形状) 108 きれい

一51㊦ きれいな ことば、みんな いいこ。
一17㊦ あさの こくばん きれいだな。

一35㊦ きれいな はなになって、おへやをか
ざりたいからです。

一49㊦ へやには、きれいな はなが かざって あ
りました。

一55㊦ つぎの としの たまひろいで、きれいな
たまが ひろえたら、

二42㊦ おまえが きれいな ことばで いえば、

あちらだって、きれいにいうさ。

二42㊦ あちらだって、きれいにいうさ。

二50㊦ 「まあ、きれいなりんご。」

二66㊦ たなびいている、きれいな かすみ。

三14㊦ きれいな ことばは、きれいな 心からう
まれてくることもわかりました。

三14㊦ きれいな ことばは、きれいな 心からう
まれてくることもわかりました。

三14㊦ 「おしゃかさまのおしえてくださった
ことは、きれいな 心になれという ことにち
がいない。」とさとりました。

三17㊦ はんたかの からだから、きれいな 光が
さしていました。

三31㊦ きれいに そうじが あります。

三34㊦ わたくしも、早く 大きくなって、あんな
きれいな 花を かきたいとおもいました。

三38㊦ きれいな きょうしつに しましよう。

三92㊦ こうえんに さいた きれいな 花は、みんなの
心を たのしませてくれます。

三101㊦ その 竹を 切ってみますと、小さな、きれいな
おひめさまが すわっていました。

三104㊦ どうかして、あんなに きれいな 人が
およめにもらいたいものだ。

三106㊦ 「それほど きれいなのなら、ごてんに
よびたい。」とお思いになりました。

三107㊦ 家にはいってごらんになると、光の中
にきれいな おひめさまが すわっています。

三109㊦ 月の きれいな ばんになると、

四8㊦ ここは、水の きれいな いけです。

四26㊦ りんごさんは、どこへいっても きれい
ね。

四28㊦ 白い 雲さん、光って きれいだな。

四43㊦ ゆうべは、ぬまの きしの、よしの きれい
にしげったところで、ねむったのです。

四52㊦ 二十九わの がんは、列を きれいにつく
るどころでは ありません。

四54 3 一わの がんが、みずうみの きれいな水
をくむと、
四65 7 がんの 列は、その きれいな 雲の 中に、
みえなくなつていきました。
四74 5 は——花のように きれいな 心。
四74 7 ほ——星の きれいな 夜空。
四76 2 か——からだは いつも きれいに。
四81 4 星の きれいな この よるを、みんなで
なかよく あそびましょう。
四105 7 里ゆうぐうは、ほんとうに きれいなと
ころで ございます。
四107 6 赤や 景色で きれいだね。
四108 5 とこり りゆうぐう まん中に きれいな
こしかけが二つ おいてあります。
四127 7 みると、むこうの まつの 枝に、きれいな
ものが、かかつています。
四128 4 こんな きれいな きものは、みた こと
がない。
五10 1 きれいな海だこと、お船もみえますね。
五10 5 あ、あそこにきれいなさくら。
五20 5 なしの花のきれいにさいている家に、はい
りました。
五39 7 このきれいなけしきを、みなさんにおみ
せしたいと思ひます。
五42 3 ひろびろとした、きれいなところだと思
ひます。
五45 2 きれいな花だ。
五45 4 世界のそのにさきにおう、きれいな花の
その一つ。
五47 9 すみがさいていたり、名まえは知らない
が、きれいな花がさいていたり。
五48 2 おや、こんな花が——またみつけた、きれ

いな花を。
五56 8 まん中にまるいきれいなたまがみえる。
五56 10 きれいだこと。
五58 5 ほんとうにきれいだな。
五58 7 ほんとうに、夜の星つてきれいなものね。
五60 2 ほんとうに、きれいにさきましたね。
五62 8 きれいなきゅうりね。
五78 1 やあ、きれいですね。
五80 6 ゆかをきれいにふきました。
五81 2 ガラスもきれいになって、そとのけしきが
よくみえました。
五85 2 子どもたちがくるまでに、そこらをきれ
いにそうじしておこう。
五87 8 このおにんぎょうは、きれいな赤いおび
をしめている。
五93 8 「ああ、きれいなお月さま。」
六19 10 たいへんきれいなもんくをいきましたね。
六23 7 きれいな音だろう。
六40 8 森や、小川や、いな田などの、きれいな、
楽しかった思い出が、うかんではきえていく。
六48 5 海 どこかでだれかがめくつて、大き
なきれいなページ、生きた絵本のページ。
六51 3 屋根も、木の葉も、石ころも、みんなきれ
いに光っていました。
六55 7 そとをみると、空はいつのまにか、雲一つ
なく、きれいはれわたっていました。
六68 3 「雪のかたち」を五つばかり、きれいに写
生しました。
六69 6 そんなに大きくはありませんが、これを
じょうずにくぎつて、きれいに、むだのないよう
にへんしゅうするのは、むずかしいことでした。
六87 6 まもなく、きれいなごてんにつくでしょ

う。
六89 3 きれいな水だな。
六104 3 森の木のきれいなこと。
七31 11 あの羽をしぼったら、きれいなしるがで
そうね。
七32 9 ほんとうにきれいなね。
七32 9 おかあさん、花よりきれいなね。
八26 3 たまにかざつた、きれいな四頭びきの馬車
が走ってきます。
八67 1 よくみればきれいな子なのだ。
八88 8 こは、ほんとうにきれいで、春の喜びが
みちあふれていた。
八92 7 「新しいのが、いちばんきれいだ。」
八108 9 きれいなお米ができました。
九44 1 妹は、かきの葉を「きれいだ、きれい
だ。」といつてひろい集めては、
九44 1 きれいだ、きれいだ。
九49 2 まわりの山は、みんな、たつたまできた
ばかりのように、きれいにあらがって、
九130 3 星はだんだんきれいに光ってきました。
十14 10 「日本とフランスとは、どちらがきれい
ですか。」とたずねました。
十15 2 フランスだって、きれいなところもあり、
きたないところもあり、
十19 12 「あ、きれいなじ。」
十21 8 「おかあさん、雨がはれてきれいなね。」
十22 9 きれいにたがやされた畑。
十53 12 そこに、すいれんの花が三つほど、きれい
にさいていました。
十57 5 きれいにさきました。
十57 8 いまはきれいだけれど、コスモスは、おじ
いさんになるとかわいそうね。

十60 1 まんまるくてきれいだ。
 十二72 8 りょうしの子どもたちで、どれも身なりはきれいではないのですが、
 十三50 2 その木のかげで、きれいな鳥がわらわっている。
 十四40 2 きれいな、きれいな雲ではないか。
 十四40 2 きれいな、きれいな雲ではないか。
 十四45 11 しずけさの中から、とつぜん、まったく思いがけなく、きれいな歌が流れてきました。
 十四78 6 竹の先のほうから割ってみると、もとまで、きれいにまっすぐに割ることができました。
 十四84 2 ただ一ひらの雪ではあるが、よく見るとまことにきれいな形をしていること、
 十四93 1 その子のきれいなかみの毛は、両かたにまっわりつき、
 十五63 11 おじさんのようにきれいになったろう。
 十五84 2 なんてきれいなおかしでしょう。
 十五94 9 やあ、なんてきれいなところだろう。
 十五102 6 ぼくは、きれいではないが、いちばんたいせつなものです。
 十五103 6 みんな、いつでもあんなにきれいな。
 十五104 1 『冬の日の幸福』は、こごえた手のために、きれいなむらさき色のマントを開きます。
 十五110 5 でも、あなたは、うちのおかあさんについているけれども、ずっときれいなもの。
 十五110 11 それに、このきれいな着物は、まあ、なんでこしらえたの。
 十五113 5 でも、ずっときれいなあな。
 きれいずき 「綺麗好」(形状) 1 きれいずき
 一60 5 ぴよんちゃんも、きれいずきないいこになりました。
 き・れる 「切」(下) 6 きれる 切れる 《ーレ》

↓おもいきれる・かききれる・かみきれる・ちぎれる・とぎれる・はこびきれる・はちきれる
 四32 3 男の子は、げたのはなおが切れてあるけなかったのです。
 六32 8 糸の切れたたこのように、空にすいこまれていくかし。
 六83 10 糸がぶつりと切れて、魚はにげる。
 八99 6 これから、水がきれないように氣をつけましょう。
 十一22 3 たくさんの人の中には、わらじの切れている人もあります。
 十四56 8 もし、つるの私がとちゅうで切れたりしたら、
 キロ ↓いちまんキロあまり・しせんキロ・じつキロ・じゅうにキロ・なんびやっキロ・はちキロ・やくよんキロ・よんキロ・よんじつキロあまり
 きろく 「記録」(名) 1 記ろく
 十55 2 ことばの記ろくは、妹の心の写真になるのではないかと、ふと、こんなことを考えました。
 キログラム ↓いちキログラム・よんキログラム
 きわ ↓かべぎわ・なみうちぎわ・ひときわ・まどぎわ
 きわだ・つ 「際立」(五) 1 きわだつ 《ーッ》
 十二13 10 このごろは、きわだって美しいつやつやしたしゅの色がさしてきた。
 きわめて 「極」(副) 1 きわめて
 十一77 11 顔の上に、きわめてかすかなほおえみがうかんだのをみたような氣がしました。
 きわ・める 「窮」(下) 1 きわめる 《ーメ》↓しらべきわめる
 十五56 1 1 そのころ日本をたずねた外人の中で、富士山や磐梯山のいただきをきわめたのは、(略)

私をはじめてだろう。
 きん 「金」(名) 28 金
 五66 1 すると、金のさかながかかってきました。
 五66 2 金のさかなは、「(略)。」といいました。
 五66 10 わしは、きょう、金のさかなをとったよ。
 五67 9 おじいさんが金のさかなをよびますと、すぐでてきて、「(略)。」とききました。
 五68 10 もう一ど金のさかなのところへいって、家をもらっただい。
 五69 2 おじいさんが金のさかなをよびますと、およいできてきました。
 五70 2 金のさかなのところへいって、たのんでおくれ。
 五70 8 おじいさんが金のさかなをよびますと、金のさかながおよいできました。
 五70 8 金のさかながおよいできました。
 五71 4 おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴかぴか光るずきんをかぶり、金のうでわをはめ、
 五72 4 金のさかなに、(略)、女王になりたいってたのんでおくれ。
 五73 1 おじいさんが金のさかなをよびますと、
 五73 2 おじいさんが金のさかなをよびますと、金のさかなは、「(略)。」とたずねました。
 五75 2 金のさかなにたのんでおいで。
 五75 5 あひろい海で、金のさかなをけらいにしてやりたい。
 五76 1 おじいさんは金のさかなをよびました。
 五76 2 金のさかなは、でてきていました。
 五76 9 金のさかなは、なにもいいわなで、(略)、海の中へおよいでいてしまいました。
 五82 8 七月十五日 金 先生のお友だちが、学校をみにいらっしやいました。

七九二 7月20日 (金) 雨のちくもり
 八四二 4月27日 (金) 晴
 八八三 6月15日 (金) くもり
 八〇四 7月13日 (金) 晴
 八〇六 9月7日 (金) 雨
 八〇八 9月14日 (金) くもり
 八〇五 9月21日 (金) 晴
 一二一〇 9 まき絵というのは、うるしをぬったうえに、金や銀のこなをまいて、
 一五八二 にしきにくるまり、金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭にいっぱいつけています。
 ぎん 「銀」(名) 7 ぎん 銀
 三二五 三 うたをわすれたカナリヤは、ぞうげのふねに ぎんのかい、月夜の海にうかべれば、わすれたうたを思いだす。
 三七二 三 「ぎん」のリボンかしら。」
 六六三 アルコールは銀の水。
 八三三 天の川は、なん干なん万という星がかさなりあって、あのように、ぼうつとした銀の川のような光をはなっているようにみえるのです。
 一二一〇 9 まき絵というのは、うるしをぬったうえに、金や銀のこなをまいて、
 一二一〇 黒うるしの中に、銀や貝が光をはなっているのは、なんともいえない美しさです。
 一五一一 二 ぎぬなの、銀なの、それとも眞珠なの。
 きんいろ 「金色」(名) 3 金色
 六四五 かかしの目のまえに、風にそよぐ金色のいねが、いちめんにつづいてる。
 九一八 四 金色の小さき鳥のかたちしていちようちるなり丘の夕日に
 一一一五 オルガンのキイから、赤い、青い、金色の、ちがった形の小鳥が、はばたいてでて、

ぎんいろ 「銀色」(名) 2 銀色
 八二八 二 川の水は銀色に光り、はくちようがしずかにういていました。
 一三五 二 銀色に光った、たくさん機械は、生きもののように動いていた。
 ぎんえもん 「人名」 1 ぎんえもん
 一一一三 この村に、ぎんえもんという人がいました。
 きんかい 「近海」(名) 1 近海
 一三二七 三 デンマルクは、みどりの牧場と、《略》、近海の漁場のほかには、鉱山があるのでもなく、
 ぎんがけい 「銀河系」(名) 3 ぎんが系
 一四三三 四 この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にすぎないのです。
 一四三六 六 このぎんが系というのは、《略》天の川の内がわにあるたくさん星のむれなのです。
 一四四一 一 あがぎんが系に負けないほど大きな星の世界が、なおいくつあるのです。
 ぎんがけいぜんたい 「銀河系全体」(名) 1 ぎんが系全体
 一四三三 一〇 このぎんが系全体が、星の世界の全部かという、なかなかそうではありません。
 ぎんがみ 「銀紙」(名) 1 ぎん紙
 一四二八 八 ぎん紙でこしらえた小さなつりがねや、十字かもさげました。
 きんぎょ 「金魚」(名) 5 きんぎょ
 一三五二 二 いけには、きんぎょが三びきおよいでいます。
 一五四 二 きんぎょが一びき、すいすいとういてきたかと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。
 一三二四 四 さあさあ、きんぎょをお買いなさい。
 一三二五 五 大きなきんぎょに小さなきんぎょ。」

こんなことをいつて通る。
 一三二五 五 大きなきんぎょに小さなきんぎょ。
 きんぎょうり 「金魚売」(名) 1 きんぎょ賣り
 一三二四 四 夏は、きんぎょ賣りがやって来る。
 ぎんざ 「銀座」(地名) 1 ぎんざ
 八五二 二 秋のはじめのある晩、一家そろって、ぎんざの大通りを歩いていたら、
 ぎんざどおり 「銀座通り」(地名) 1 銀座通り
 一五四三 三 銀座通りをアメリカの一しように歩いてたが、ふと、ある店先で立ちどまった。
 きんじょ 「近所」(名) 7 きんじょ 近所
 一三九 九 きんじょの人たちもこのポストにいれます。
 一五〇 一〇 近所の人たちは、まいにち、こまった、こまったといっていました。
 八九 一〇 近所のねこやのらねこが通りかかっても、九三 四 そうして、近所からわけてもらったさつまいものなえを、手わけして植えていきました。
 一二二九 九 近所の荒地を三アールばかりかいこんで、
 一二七〇 一〇 家もせまいので、自分は、その近所に別に家をかりて住むことにしました。
 一二七 三 また、まきが少ないと、近所へ木をひろいにいったりしました。
 きんじろう 「金次郎」(人名) 28 金次郎 ↓にのみやきんじろう
 一一一八 八 この人が金次郎の父親でした。
 一一二〇 三 そういうときに、金次郎が生まれてきたのです。
 一一二〇 三 だから、金次郎は、子どものときから、家の手つだいをしてよく働きました。
 一一二〇 二 金次郎が十二のころです。

- 十一 21 3 父親が病氣でねていましたので、金次郎が、そのかわりにでることになりました。
- 十一 21 4 金次郎は、年のわりにからだが大きかったし、働きつけているので、
- 十一 21 7 金次郎は、すこしも休まず働くので、
- 十一 21 10 しごとがじゅうぶんできないので、金次郎は、ほかの人たちにすまないと思いました。
- 十一 21 11 そこで、金次郎はいいことを考えつきました。
- 十一 22 4 金次郎はわらじをさしだしていいました。
- 十一 23 2 金次郎が十四のとき、父親がなくなりました。
- 十一 23 2 金次郎の下にふたりの弟がありました。
- 十一 23 7 母親は、金次郎と相談して、すえの子どもを親類にもらってもらいました。
- 十一 23 9 ねえ、金次郎、これでわたしも、じゅうぶん働けますよ。
- 十一 24 5 金次郎は、自分の考えをくり返し話して、母親にすすめました。
- 十一 24 9 母親は、金次郎が、「もうおそいから。」というのに、その晩のうちにいて、子どもをつれてきました。
- 十一 25 4 そのあくる日から、金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうちからおきて、遠い山へいって、
- 十一 25 10 金次郎は、すこしもつかれたようすもなく、
- 十一 25 12 金次郎は、一さつの本をみつめました。
- 十一 26 9 金次郎は、それを読むとうれしくなり、いっしんに勉強がしたくなりました。
- 十一 27 3 村の人たちは、こう、うわさをしました。が、金次郎は耳にもいれず、それ続けました。
- 十一 27 8 金次郎のうちでは、その十二文さえもあ

- りませんでした。
- 十一 27 12 金次郎のうちは、こんなにもびんぼうでした。
- 十一 28 3 このとき、金次郎はたった十六でした。
- 十一 28 5 金次郎は親類のまんべえさんのところに、あずけられることになりました。
- 十一 28 7 いままででも、なまけたことのない金次郎でしたが、
- 十一 29 3 金次郎は、〈略〉いねのなえをひろって、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。
- 十一 29 12 やがて、金次郎は、親類の家からでて、もとの自分の家に帰り、
- きんせい 「金星」(名) 2 金星
- 十三 13 8 火星や金星・木星などのような星は、太陽のまわりを、大きく輪をえがいて、まわっていることがわかり、
- 十四 32 12 みなさんは、地球や金星などのわく星が、太陽を中心として回轉していることを知っています。
- キンゼー 「人名」 1 キンゼー
- 十二 77 3 メキシコのテニス選手キンゼーと私とが、いよいよ試合をする日のことでした。
- キンゼー せんしゅ 「人名」 2 キンゼー選手
- 十二 80 1 金ゼー選手はセントルイス生まれだよ。
- 十二 81 4 キンゼー選手は世界的名手ですが、ぎんせかい 「銀世界」(名) 1 銀世界
- 十四 87 6 一面の銀世界となった廣い野原を、第一の人が歩いて行く。
- きんぞく 「金属」(名) 1 金ぞく
- 九 17 4 すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。

- きんだいてきこうぎょう 「近代的工業」(名) 1 近代的工業
- 十五 45 6 日本の手工業も、〈略〉、つぎつぎと近代的工業の道をたどっていくようになった。
- ぎんてき 「銀笛」(名) 1 銀てき
- 十五 67 4 日曜学校の生徒であった私は、そのクリスマスに得意の銀てきをふいたが、
- きんとつと 「金魚」(名) 2 キントット
- 十 49 8 金魚 ハナガ サイテル——キントットガ——アドコヘイッタノ——
- 十 54 3 金魚 「キントットガ」「アドコヘイッタノ」は、そのことをいいあらわしています。
- きんねん 「近年」(名) 1 近年
- 九 24 3 近年になって、いろいろな方法でこのことをしらべてみますと、
- きんのさかな 「課名」 2 金のさかな
- 五 3 4 金のさかな……六十五
- 五 65 1 金のさかな
- きんのさかなさん 「金魚」(名) 3 金のさかなさん
- 五 66 7 金のさかなさん、早くお帰り。」
- 五 68 2 金のさかなさん、おばあさんが、新しいおけがほしいといっています。
- 五 73 5 金のさかなさん、おばあさんは、〈略〉、女王になりたいといっています。
- きんぴか 「金」(形状) 1 金ぴか
- 十五 103 10 金 「星の出を見ることの幸福」が、〈略〉、金ぴかの着物を着てついています。
- きんもくせい 「金木犀」(名) 1 きんもくせい
- 十一 38 7 金木犀 かきねににおうきんもくせい、しとしとと降る秋雨に、ちれば山にはまつたけが、

<

< [課名] 22 九

一25 四 たまいれ…………九

一31 九 ゆうやけこやけ…………十八

一181 九 ゆうやけこやけ…………十八

二35 九 春をむかえに…………六十一

二611 九 春をむかえに…………六十一

三23 二 花まつり…………九

三33 九 五人の子ども…………五十八

三581 九 五人の子ども…………五十八

四33 九 雪…………八十六

四861 九 雪…………八十六

五34 九 金のさかな…………六十五

五651 九 金のさかな…………六十五

六34 九 ぼくの発見…………九十九

六991 九 ぼくの発見…………九十九

九35 九 山のスキー場…………百四

九1041 九 山のスキー場…………百四

十一37 九 父の看病…………六十三

十一631 九 父の看病…………六十三

十二35 九 テニス…………七十七

十二771 九 テニス…………七十七

十四37 九 雪の映画…………八十三

十四831 九 雪の映画…………八十三

< [題名] 1 九

一577 (九)

< [九] (名) 6 九 9

四70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

六328 9 かかしが風にまきあげられる。

六64 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

11 12

九922 七、八、九、十」と数えながら、大

またでびよんびよんかけてきて、

十204 9 暗室。

十一56 1 2 3 4 5 6 7 8 9

10 11 12

< [句] (名) 3 句

十二754 そのしんとしたしずかさの中に、芭蕉

は心をすませ、雪の句を考えました。

十二764 先生、今夜の雪の句はいかがですか。

十二765 句か、まだできない。

< [苦] (名) 1 苦

十二511 コロンブスは、コッソリとたまごのはしを

テーブルにうちつけて、なんの苦もなく立てて

< [来] (カ変) 4 来 《キ・クレ》 ↓あゆ

みく

九1172 青ざさをいれやりたればいけのふなは

や青き葉のかげにきておる

十五112 人の家にさえずすめガラス戸の

外に來て鳴け病む人のために

十五114 わか草のはつかにもゆる庭に來てす

ずめあさりとなりへとびぬ

十五146 風くればらはたちまち火となれり

ゆれにゆるるか照りそう風に

< 1 1

四778 くくじやくのまねをするからす。

< ↓あまぐ

ぐあい [具合] (名) 4 ぐあい ↓つつきぐあい・

まげぐあい

六126 ぐあいのわるかったのは、そのためでし

た。

七997 よいぐあいに、みんな元氣よくそだってい

るので、安心しました。

九2010 協会では、おおいそぎで、その家をつぼめ

たちのためにぐあいよくつくりなりました。

九809 もし、手あたりしだいにやって、ぐあい

よくなにかをほりあてたらいいが、

くいきる [食切] (五) 1 くい切る 《一ツ》

九13210 みつばちは、つなをほどいて、あみをくい

切って、にげていってしまいました。

ぐいぐい (副) 2 ぐいぐい

六835 ぐいぐいひくぞ。

十一59 力まかせに、長いオールをぐいぐいと

こいでみたい。

くいつく [食付] (五) 1 くいつく 《一キ》

六169 そうして、力いっばいくいつきました。

くいとめる [食止] (下二) 1 くいとめる 《一

メ》

十三252 しげた林は、(略)、北海岸特有の砂丘

を、海岸近くでくいとめました。

くいとる [食取] (五) 1 くいとる 《一ツ》

七841 草をくいとったあとをみますと、かみき

れないで、のこっている葉がありました。

くう [食] (四五) 5 くら 《一エ・ワ》 ↓すく

う

八714 「おまえなんかは、ねこにくわれてしま

えばいい。」といわれた。

十744 ひとくちくえども死にもせず、ふた

くちくえども死にもせず、みくち、よくち、ぶす

はくえども、死なれもせず。

十745 ふたくちくえども死にもせず、

十747 みくち、よくち、ぶすはくえども、

死なれもせず。

十二582 もしそれができたら、毎年ひとりずつ、おに人間をくわせてやるというのであった。

くうかん 「空間」(名) 1 空間

十一682 大きくみ開いた目をあけて、じっと空間をみつめている者もありました。

くうき 「空気」(名) 17 空気

七324 空気にふれて、すこしずつのびるのね。

八807 そこへ、さわやかな空気と日の光が流れてきた。

八884 まえより強く空気をうち、とぶことができた。

十三494 空気までが、わたしたちのゆかいなじょうだんでわらい、

十四563 葉さんが、〈略〉、空気をお吸いになつて、養分におこしらえになったものでも、

十四652 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、まわりの空気にくらべてずっとかるいために、

十四656 もちろん、これは、まわりの空気の温度によつてもちがいますが、

十四683 そういふ地方のまわりに、わりあいにつめたい空気におおわれた地方があると、

十四684 あたたかい空気がぼつていくあとへ、

十四685 入れかわりに、そのつめたい空気が下からふきこんできて、大きなうずができます。

十四732 かべや屋根が熱せられると、それに接した空気がふくれてのぼる、

十四742 地面の空気が、日光のためにあたためられてできるときのはらは、

十四758

畑では空気がのぼり、森ではくだつていきます。

十五278 朝の冷たい空気の中を、アルプスの深い

谷の中を、大わしは、少年をせにのせ、

十五319 羽風で空気がゆれ動き、ちよつとでもゆだんをすれば、それにふきとばされ、

十五817 空気または日光のごとく平ほんなれよ。

十五1028 これは、『清い空気の幸福』で、ほとんどすきとおっています。

くうきちゅう 「空気中」(名) 1 空気中

十四646 空気中には、それが、しぜんにたくさんういているのです。

ぐうぐう (副) 1 ぐうぐう

一517 よにんはもたれあつて、ぐうぐうとねてしまいました。

ぐうぐうぐうぐう (感) 1 グウ、グウ、グウ、グウ、グウ

ハ5411 「グウ、グウ、グウ、グウ。」と、うさぎは、高いびきをかいて、

くうそう 「空想」(名) 2 空想

十3412 小学校をただけのかれには、手のとどきそうもない空想になりがちであつた。

十三511 新しい勇気や空想をもって、春は、また、楽しい船出のほぬのを、高くかかげる季節。

くうそうか 「空想家」(名) 1 空想家

十三197 ダルガスは、とおりのつべんの空想家ではありません。

くうちゅう 「空中」(名) 6 空中

九11210 四十メートルも空中をとんで、先生は地上の人となられた。

十四647

空中にうかんでいた雲が消えてしまったあとには、

十四6711 それは、らい雨のときに、空中におこっている大きなうずです。

十四848 空中の温度の変化、風の関係、水蒸気の

量、高度など、さまざまな条件によつて、

十五231 一わのやまわしが、サアツという羽音をたてて、空中に風をまき起して、

十五329 大わしは、空中をころぶように、くるくる舞いをして、〈略〉落ちて行きました。

くうちゅうかつそう 「空中滑走」(名) 1 空中かつそう

九1092 まるで、空中かつそうをしているようだ。

くがつ 「九月」(名) 4 九月

四1253 秋 九月は お月み。

九169 やがて、九月のなかばをすぎると、つばめは、そろそろ日本をさつていき、

九192 その年は氣候がわるくて、九月の中ごろ、きゅうに十二月の氣候と同じ寒さになり、

十四1012 じきに九月になります。

くがつじゅうくにち 「九月十九日」(名) 2 九月十九日

九223 それでも運びきれなくて、九月十九日の晩には、ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたかくした貨車をつつて送ったほででした。

九474 かねたいちろうさま。 九月十九日。

くがつじゅうしちにち 「九月十七日」(名) 1 九月十七日

九215 たくさんのつばめがはじめて運ばれてきたのは、九月十七日でした。

くがつじゅうよつか 「九月十四日」(名) 1 九月十四日

日

八1038 9月14日 曇 くもり 26度

くがつついたち 「九月一日」(名) 1 9月1日

八1026 9月1日 出 くもり 25度

くがつなのか 「九月七日」(名) 1 9月7日

八1036 9月7日 曇 雨 26度

くがつにじゅういちにち 「九月二十一日」(名) 1
 9月21日
 八〇四 9月21日 (金) 晴 27度
 くがつにじゅうくにち 「九月二十九日」(名) 1 9
 月29日
 八〇五 9月29日 (出) くもりのち雨 23度
 くがつにじゅうよっか 「九月二十四日」(名) 1 九
 月二十四日
 九二七 九月二十四日 飛行機で二千ば
 くがつみっか 「九月三日」(名) 1 9月3日
 七九四 9月3日 (雨) くもり 25度
 くがつむいか 「九月六日」(名) 1 9月6日
 七九四 9月6日 (雨) くもりのち晴 29度
 くがつよっか 「九月四日」(名) 1 9月4日
 八〇三 9月4日 (火) 晴 29度
 くさ 「茎」(名) 3 くさ
 八九四 1かぶに3本ずつ植えたのと、1本ずつ植
 えたのと二とおりにして、くさの数のふえるよう
 すをみることにしました。
 八〇五 1かぶのくさの数を数えてみますと、大き
 なかぶは30本もありました。
 一二六四 葉は青く、くさは長く、みきは高くそび
 えているが、根はちつともみえない。
 くさ 「釘」(名) 4 くさ
 三三六 かなづちで、くさをうっている人も
 あります。
 四六八 「この えんの 下の くさ、ひきぬきにく
 い。」
 四一〇二 ランプについては、(略)。くさへかけ
 るようにしたほうがいいとか、
 一四八二 ぬかにくさ。
 くさる 「区切」(五) 1 くさる 《一ツ》

六六五 そんなに大きくはありませんが、これを
 じょうずにくさって、きれいに、むだのないよう
 にへんしゅうするのは、むずかしいことでした。
 くさ 「九九」(名) 1 九九
 一四七九 「二が四」という算数の九九と、にた
 ようなものだと思いました。
 くくりつづける 「括付」(下二) 1 くくりつづける
 《ケ》
 九三六 高くて手のとどかないかれ枝は、長い竹
 ざおのさきにかまをくくりつけて、ひっかけるよ
 うにして、下から力をいれてひきおろします。
 くぐる 「潜」(四五) 3 くぐる 《ツ—リ—
 ル》
 六三〇 長い森をくぐりました。
 九二八 親のまたくぐる子うしや草の花
 一五二四 はじめてこの学校の門をくぐったときの
 ことが、はつきりうかんできた。
 くさ 「草」(名) 32 くさ 草 ↓ かれくさ・つみく
 さ・ペンペンくさ・ほしくさ・わかくさ
 一六七 くさもきもねむりました。
 二一〇 くのきなど、とりの など、そのほか
 のものにと、わけたらいいとおもいます。
 三九二 くさをちぎって いたり、かみきれを
 いたりする 小さな子がいたら、
 五四五 水をふくんだ草のうた、こけのうた、土の
 うた、いわのうた。
 五三六 みなれない木や、草や、動物がみえますね。
 五四三 のびはじめた草の上を、うれしそうにあ
 るいていました。
 六八四 たとえ動かない木でも、草でも、命を
 もっているのだよ。
 七三三 道のかたがわの草ばかりたべてあったか

らです。
 七四八 草をくいとったあとをみますと、かみき
 れないで、のこっている葉がありました。
 七六八 草をやったら、3びきとも、せつせとたべ
 ました。
 七七一 うさぎはどんな草を、いちばん喜んでたべ
 るか、しらべてみることにしました。
 七八八 新しい草をいれてやると、そればかりたべ
 て、
 七八九 まえにたべのこした古い草は、ふみつける
 だけで、ちつともたべません。
 七九四 なるべく、こくるいをやるようにして、ぬ
 れた草はやらないように注意しています。
 七九三 草のそばにきて、口をくっつけましたが、
 草はたべませんでした。
 七九三 草はたべませんでした。
 七九四 子うさぎは巣の中でねていて、親うさぎだ
 けが、草をたべていました。
 八〇三 うしは、うまくふみとどまって、おとなし
 く草をたべはじめました。
 九二八 親のまたくぐる子うしや草の花
 九三〇 ちよまはふえる力の強い草なので、
 九四一 そこは美しいこがね色の草地で、草は風に
 ザワザワ鳴り、
 九五八 そのとき、風がどうとふいてきて、草はい
 ちめんに波だち、
 九六六 草の中にあつちにもこつちにも、こがね色
 のまるいものが、ぴかぴか光っているのでした。
 九七四 きょうは、そこが日あたりがいいようだ
 から、そこんとこの草をかれ。
 九八二 大きなかまをとりだして、ザックザックと
 やまねこのまえのところの草をかりました。

をして、「フツ」と息をはきました。

くじゅう [課名] 2 九十

三35 十一 みんなのもの……………九十

十四38 十 マッチ賣りのむすめ……………九十

くじゅうく [課名] 1 九十九

六34 九 ぼくの発見……………九十九

くじゅうく [九十九] (名) 1 九十九

十二58 八 みるみるうちに工事がはかどって、九十

九の石だんができた。

くじゅうくだん [九十九段] (名) 1 九十九だん

十二57 六 ふしぎなことに、神山のほうには、昔か

ら九十九だんの石だんができています。

くじゅうくのいしだん [題名] 1 九十九の石だん

十二57 三 九十九の石だん

くじゅうし [課名] 3 九十四

三36 十二 一まいの紙……………九十四

五37 十一 ひわの子……………九十四

八310 七 いねを育てて……………九十四

くじゅうろく [課名] 2 九十六

四34 十 うらしまたろう……………九十六

十二37 十一 ある写真帳……………九十六

くじゅう [苦情] (名) 1 くじゅう

十五65 12 そこで、たまにかねた家の書生が、〈略〉

と、くじゅうの手紙を京都へ送ったりした。

くしん [苦心] (名) 2 苦心くしん

四121 3 これが、できあがるまでには、どれほど苦

心をしたことでしょう。

十45 八 名高くなったかげには、幸吉一生の苦心が

ひそんでいる。

くしん・する [苦心] (サ変) 1 苦心する 《一シ》

十二113 2 この本を日本語になおすのには、どれほ

ど苦心したかわかりません。

くず ぐいとかず

くずくず [愚図愚図] (副) 1 くずくず

五72 10 園 おまえさん、くずくずいわずに海へいっ

ておいで。

くずくず・する [愚図愚図] (サ変) 2 くずくずす

る 《一シ》

九132 4 くずくずしていると、そのまたたべられる

ので、みつばちはだいた針をだして、

十69 11 園 くずくずしているうちに、どつきにあた

るにちがいない。

くず・す [崩] (五) 2 くずす 《一シ》

五35 7 きかいで石炭をくずしてとっています。

十五39 9 「に」は「仁」というように、漢字の全

体をくずしたものから作りだしたものである。

くすのき [樟] (名) 3 くすのき

三22 2 むかし、あるところに、一本のくすのき

がはえました。

三22 5 なん年かたつうちに、このくすのきは、

いままでみたこともきいたこともないほど、

大きな木になりました。

三28 5 園 あ の いきおいの いい くすのきで つ

くった ふねだもの、

くすり [薬] (名) 11 くすり ぐおくすり・めぐす

り

三115 4 みかどへ おわかれの手紙とふしのくす

りをのこしました。

三116 3 ふしのくすり と 手紙は、かえって かな

しみをます たねになるばかりでしたので、

三117 4 園 その山の上で、ふしのくすり と 手紙

をやきすてよ。

三117 7 ふしのくすりをやいたけむりが、

四72 9 ひびのくすり。

五36 4 ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろ

いろのくすりも石炭からとれます。

五99 4 水をふきかけたり、くすりをつけてやった

りしますと、やっと生き返りました。

八11 10 みんなあわてて、口々によんで、元氣つけ

るやら、くすりをのませるやら、

十一57 6 園 はちみつやいちご、青うめ・わさび、

にがい、にがいくすり、一つ一つしみる。

十一68 4 大きなへやはうす暗く、あたりにははげ

しくすりのにおいがただよっていました。

十一80 5 病人は、〈略〉、飲み物やくすりを、少年

の手からでなければ飲まないようになりました。

くすりびん [薬瓶] (名) 2 くすりびん

三33 7 園 青色や ちゃ色の くすりびんが、たくさ

んならんで いました。

十一68 5 看護婦がふたり、手にくすりびんを持っ

て、へやを歩きまわっていました。

くずる [崩] (下二) 1 くずる 《一レ》

十五15 7 園 大きななにごともなきばらの花ふ

とのはずみにくずれたりけり

くず・れる [崩] (下二) 2 くずれる 《一レ・一レ

ル》 ぐわらくずれる

十24 10 くずれくだけの石炭、シャベルですくう石

炭。

十一35 2 園 空にくずれる雲のみな、庭にかがやく

ひまわりの花、あぶらぜみの声さがしく、

くせ [癖] (名) 4 くせ ぐななくせ

七32 8 園 あかばのくせに、ひげなんか。

十32 9 園 男のくせに。」豊田佐吉は、村の人々か

ら、こういつてあざけられた。

十52 3 「モット」ここで遊んでいたい、私にね

だったり、そのくせ、でかけようといひだしたり

十74 / いままでおいおいいたくせに、きゅうに、にっこりわらい顔になって、

くだ [簀] (名) 1 くだ

八193 ほそいくだのさきから、木の根のしるをわずかずつすっているせみの子たちは、

くだ・く [碎] (五) 5 くだく 《ーイーキーコ》
↓うちくだく

八863 あひるの子をみつめて、木ぐつてこおりをくだき、うちへつれて帰った。

八986 小石をひろい、土のかたまりをくだいてこまかくしました。

十729 大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

十三183 いかにして、國運をもとどおりにするか、これが、デンマルクの愛國者たちの心をくだいた、

もつとも大きな問題でありました。

十五301 大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かって來ました。

くだくた (形状) 1 くだくた
十一259 ふつうの子どもだったら、くだくたになつたおれるところを、

くだ・ける [碎] (下二) 4 くだける 《ーケーケル》

八1094 どんどんすつていたら、こんどはすぐにはげましたが、くだけた米もでてきました。

九116 おしまいに、海岸で波のくだけるところをきかせてくれた。

十2410 くずれくだける石炭、シャベルですくう石炭。

十二358 そうして私は、くだけた人形のかけらを足さきを感じながら、ゆかいに思いました。

くださる [下] (五) 122 くださる 《ーイーツー

ラール》↓おいでくださる・おうけとりくださる・おかえしくださる・おかけくださる・おしらせくださる・おたすけくださる・おとりくださる・おならびくださる・おのりくださる・おまちくださる・おまもりくださる・おやすみくださる・ごめんください・ごめんください

一583 あのと、たろうさんがくろいぬをおつてくださらなかったら、

一617 どうぞ おかあさんのおみやげにしてください。

二237 みてください。

二3310 ちょっとそこをどいてください。

二444 おじさん、こんやもまた、かげえをして、みせてください。

二453 はやく、せんどうさんをみせてください。

三144 おしやかさまの おしえて くださったことは、

三748 おかあさんがおしえてくださいました。

三926 花をおらないでください。

三932 どうぞ おらないでください。

三939 よござすにかわいがつてください。

三1088 そののち、みかどからたびたび お手紙をくださいましたので、かぐやひめも、

三1116 それで、たくさんのけらいにいいつけて、まもつてくださる ことになりました。

三1141 せめて 月夜には 月をみて、わたくしのことを思い出してください。

四375 ぶどうをください。

四617 「かみさま、どうぞ なかまを たすけてください。」と、おいのりをしました。

四111 どうぞ ゆっくりあそんで いってくだ

さいませ。

四116 さあ、ごえんりよなくめしあがつてください。

五104 ここは、みなさんで、苦勞をしてほつてくださったトンネルですよ。

五149 おばさん、わざわざきてくださつて、すみません。

五2210 おじいさんが、かわいがつてくださったのでしよう。

五246 男の人は立つてください。

五559 「略」と、さそつてくださいました。

五663 おじいさん、わたしを海へはなしてください。

五822 みんな、からだに氣をつけてください。

五918 水をください。

六298 なにかめぐんでください。

六299 すこしでもいいから、わけてください。

六616 みなさん、ためしてみてください。

六659 このなぞの答がわかつた人は、紙に書いてかべ新聞がかりのものにだしてください。

六663 第二号をつくる人たちは、このお話のつづきを書いてください。

六668 お話の題はべつにきめませんから、かつてつぎを考へてください。

六814 きょう一日だけ、私につりをさせてくださいませんか。

六862 にいさん、ゆるしてください。

六884 すると、海の神は、きつといいことを教えてくださるでしょう。

六902 そのいどの水を一ぱいください。

六932 年をとつたかたがあらわれて、私に海のごてんへいくようにと教えてくださいました。

六〇三 四 何でもいいから、きてください。
 六二〇 三 「略。」と、ほめてくださいました。
 六四〇 五 助けてくださいと、お願いしたところで、ゆるしてくれるみこみありません。
 七二五 四 ちよっとまわってください。
 七二七 三 先生は、あおむしがさなぎになるって、教えてくださらなかったの。
 七二九 七 それは、すずめたちにたべられないためだと、おかあさんが教えてくださった。
 七三六 一 先生 「もうすこし、中へいれてくださいませんか。」
 七四三 二 みなさん、たいへんさしでがましいことですが、わたしにちよっと話をさせてください。
 七四三 六 楽しい音楽をきかせてくださる心持を、ほんとうにありがとうございます。
 七五〇 一〇 「略。」と、元気づけてくださった。
 七五三 五 「略。」と、はげましてくださった。
 七七八 五 どこにいるか、早く教えてください。
 八一三 一〇 たかが一わの小鳥のことをと、わらわないでください。
 八六八 三 先生 ほっておいてください。
 九四六 四 「小公子」をみなさんにお話してあげてください。
 九四六 一〇 楽しく元気で勉強してください。
 九四七 七 とび道具を持たないでください。
 九六〇 九 きょうはよくきてくださいました。
 九七〇 一 先生 これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。
 九七〇 二 どうかこれから、わたしの裁判所のめいよ判事になってください。
 九七〇 三 これからも、はがきがいったら、どうかきてくださいませんか。

九七〇 七 いえ、お礼はどうかとってください。
 九七〇 一〇 先生、もうすべらしてください。
 九八三 二 先生、ちよっと待ってください。
 九八三 九 くもさん、今夜は助けてください。
 九八三 一〇 先生、命を助けておいてください。
 一〇一 一 母がこしらえてくださったパンを、ふくろからとりだして、いぬにやりながら、
 一〇五 四 先生が、はしごでいちょうの木にのぼって、いちようの葉をたくさん落してくださいました。
 一一二 六 先生 おじさん、これをはいてください。
 一一二 一〇 先生 どうかそのかわりにはいってください。
 一一二 一〇 先生 「あんまり乗らないでください、満員ですから。」と、声をかけた。
 一一三 六 先生 そんなにおさないでください。
 一一三 九 先生 よくみてください。
 一一三 一〇 先生 なんとかひとこといってください。
 一一三 一七 先生 「いまに、お医者さんがみにきてくださるだろう。」と、少年は考えました。
 一一三 八 先生 待つてください。
 一一三 八 先生 あの人、いま、ひどくわるいんですから、ゆるしてください。
 一一三 一〇 先生 ぼく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにいてください。
 一一三 一〇 先生 どうか、ここにいてください。
 一一三 一〇 先生 神さまがききをまもってください。
 一二三 一 先生 いちばん大きな日は、サリバン先生がきてくださった日です。
 一二三 一 先生 私の心の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、
 一二三 一 先生 いいえ、それよりもなによりも、私を愛するためにきてくださった——そのかたの両うで

の中に強く大きあげられました。
 一二三 三 先生、サリバン先生は、
 一二三 三 先生、私をおへやに呼んで、一つの人形をくださいました。
 一二三 一 先生、しばらくして、先生がぼうしを持ってきてくださったので、
 一二三 二 先生 「水」という字を書いてくださいました。
 一二三 二 先生 それは、先生が與えてくださった新しい目で、すべてをみるようになったからです。
 一二三 五 先生 きょうは、きつと勝ってください。
 一二三 八 先生 四年生のとき習った貝づかのことを思い出してください。
 一二三 八 先生 おぼさんだって、このごろちつとも来てくだらないじゃないですか。
 一二三 八 先生 だから、ほんとうにつれて行ってくださいよ……
 一二三 八 先生 え、おとうさんが、そう……じゃあ、かわってください。
 一二三 八 先生 早く帰ってくださいね……
 一二三 八 先生 喜んでむかえてくださったので、
 一二三 八 先生 「略。」と、いって、一まいの絵をひきだしから出して、見せてくださいました。
 一二三 八 先生 おじさんはそういって、同じひきだしから、一まいえらび出して、見せてくださいました。
 一二三 八 先生 きつと先生も、そんなお氣持で、この絵はがきを送ってくださいだんなだろう。
 一二三 八 先生 子どもたちのことをお考えになってください。
 一二三 八 先生 自分はたしかにひとりぼっちではないのだと、お考えになってください。
 一二三 八 先生 おかあさんが、ちゃんとしていてくださって、
 一二三 八 先生 子どもたちのことを思って、安らかに

八103 おこったりすると、赤い口をあけて、私たちをおどしたりかんだりします。
 八145 親ぜみが、あのほそくがった口のさきで、かたい皮にあなをあけて、
 八167 虫は、小さいけれど、親ぜみによくにて、ほそいとがった口をもっています。
 八167 その口のさきを根のにつきさして、木のしるをすいはじめます。
 八7410 したは口からたれて、目はみにくく光っていた。
 八7910 じゃあ、お願いだから口をださないでほしいね。
 九3611 手にとって口へいれると、つめたくてあまい味がしました。
 九567 その男は、横目でいちろうの顔をみて、口を曲げて、にやっとわらっていました。
 九5811 すると、男は、また喜んで、顔じゅう口のようにして、にたにたわらっていました。
 九1186 文 ぽおずきを口にふくみて鳴らすことがわすは鳴くも夏のあさ夜を
 九13411 大きな口をあいてたべようとしたとき、ちようちよは、「略」と頼みました。
 九1379 くもは、このおかあさんということばを、〈略〉。また、口にしたこともありませんでした。
 十7011 太郎かじやは、すばやく指をつつこんで、すぐそれを、口に持っていきました。
 十一868 文 ここへつれてきたときには、〈略〉、口もきけなかったのですよ。
 十一9211 五日のあいだ呼びなれていた名が、しぜんと口のにぼってきました。
 十二3611 だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をといての口の下へやりました。

十二452 文 まゆ毛も、目も、口も動くし、十三499 メアリとスーザンとエミリとが、かわいい口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわらう。
 十五855 文 しみわれ口そそぐ朝のそここの小流れ
 十五8212 ねこは、ひとことも口をきかず、十五887 文 ここにいるのは、『はちきれそうならい』で、口は耳までさけているし、十五9212 パン 口にいっぱい物を入れながら、〈略〉。
 くちかず 口数 名 1 口かず
 八827 文 おまえさんは口かずが多すぎる。
 くちぎたない 口汚 形 1 口ぎたない 一ク
 二424 文 おまえが口ぎたないいうからだよ。
 くちぐち 口口 名 5 口々
 八1110 みんなあわてて、口々によんで、元氣づけるやら、くすりをのませるやら、
 九642 やまねこが〈略〉むりにいばっていますと、どんぐりどもは、口々にさげました。
 九664 すると、また、どんぐりどもが口々にいいました。
 九8111 口々にこんなことをいうのを、先生は、耳にもおにいれにならないで、
 十四234 文 口々には、口々には、口々に答えた。
 くちこたえ 口答 名 1 口こたえ
 七577 おじいさんは、口こたえもできず、力のない足どりで、海へやってきました。
 くちこたえする 口答 サ変 1 口こたえする
 《スル》
 七156 「口こたえする。」〈略〉私たちのからだの

名まえに、このような、いろいろなつかいかたがあるのは、おもしろいではありませんか。
 くちさき 口先 名 3 口さき
 八510 かたへ乗せたり、てのひらで遊ばせたり、口さきにふくんだえさをとらせたり――
 八67 頭の上にも乗り、口さきのめしつぶもつつくようになりました。
 十二8910 そうでなかったら、ただ口さきでいうだけのことになる。
 くちばし 口 名 10 口ばし 口ばし
 二452 文 くちばしをこらへん。
 八117 くちばしから血をだして、〈略〉、からだをふるわせてもう虫の息です。
 八916 大きなくちようちは、そばへおいできて、くちばしでかるくなでてくれた。
 九161 まだ、口ばしの下の色が、親つばめほどくくありません。
 九162 口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえるのさえあります。
 九1471 くもは、つばめの口ばしにはさまれたまま、空をとんでいきました。
 九1472 くもは、力いっぱいいがけば、あるいは、つばめのくちばしからころげ落ちることができたかもしれません。
 十五266 このわしが大きくくちばしで女の子の頭でもつつけば、
 十五307 その目、そのくちばし、その羽音、まったく大きなあくまで。
 十五3110 ちょっとでも氣をゆるめると、鳥のくちばしでつき殺されます。
 くちばや 口早 形状 2 口早
 九726 やまねこは、さけの頭でなくてまあよかつ

たというふうに、口早にぎよしゃにいいました。
十一 72 7 「略」と、少年は口早にききました。
くちびる 「唇」(名) 9 くちびる

八 6 8 自分から指さきやくちびるへとびあがり、
とびついて、じょうずにえさをとったり、

十一 69 10 病人はしげしげと少年をみつめて、いく
らかわかったようでしたが、くちびるは動きませ
んでした。

十一 77 5 そうして、なにかいおうとでもするよう
に、すこしくちびるを動かしました。

十一 80 7 いくどもいくども、むりにくちびるを動
かそうとしました。

十一 88 11 病人は「略」、ときどきむりにくちびる
を動かして、なにかものをいたげにしました。

十四 43 2 囃 くちびるに歌をもて、ほがらかな調子
で。

十四 43 6 囃 日々の苦勞に、よし心配がたえなくと
も、くちびるに歌をもて。

十四 44 5 囃 くちびるに歌をもて、勇氣を失うな。

十四 49 4 囃 心に太陽をもて、くちびるに歌をもて。
くちびるにうたをもて 「題名」 2 くちびるに歌を
もて

十四 3 1 くちびるに歌をもて

十四 44 9 くちびるに歌をもて

くちぶり 「口振」(名) 1 口ぶり
六 115 11 ほんとうにほしそうな口ぶりなので、
「作ってあげようか。」といいますと、

くちまね 「口真似」(名) 1 口まね
十二 90 2 どんなたつといことばでも、ただ口まね
をして、おうむのようにとなえていたのでは、

くちもと 「口元」(名) 2 口もと
十一 77 10 コップを病人の口もとにつけたときに、

十五 69 3 その口もとがほころんで声さわやかに
「略」とよびかけそうであった。
くちや ぐめちやくちや・もみくちや

くちる 「朽」(上二) 2 くちる 《一チ》
十二 14 9 夏のころ、草とりをしてつみ重ねておい
たかれ草が、すっかりくちていた。

十二 14 12 そのくちた草をとりのけようとすると、
くつ 「靴」(名) 16 くつ ぐうわぐつ・きぐつ・き
ぐつ・ゴムぐつ

一 21 7 囃 おててつないで、のみちをいけば、み
んなかわいい ことりになって、うたをうた
えば、くつがなる。

一 23 7 囃 「くつがなる」では、あしぶみをしま
した。

一 23 9 囃 「はれた おそらにくつがなる」では、
てをうえにさしあげました。

二 26 2 囃 くつがながれてきました。

二 26 4 囃 きゅうりが、くつの中にはいりました。

五 71 5 おばあさんは、「略」、金のうでわをはめ、
赤いくつをはいていました。

六 62 4 くつが流れてきました。

六 62 5 きゅうりがくつの中にはいりました。

十一 52 6 だれかのかさのしずくが、私のくつの上
にばたばたと落ちてきたりした。

十二 11 3 囃 くつをはいている子どもはひとりもい
ません。

十五 62 2 ふみ石の上にそろえてある大小二つのく
つをちらと見た私は、

十五 62 11 囃 おじさんのくつは光っているのに、ぼ
うやのくつはほこりだらけだから、行くのはいや
だといっているのですよ。

十五 62 11 囃 ぼうやのくつはほこりだらけだから、

十五 63 7 おじさんは、「略」、かた手に小さなくつ
を持ち、かた手に大きなブラシをつかんで、
十五 64 1 だされたくつを見て、にこにこわらつ
た私は、

十五 69 7 つくえの上に、くつをみがかせた満ほう
時代の私の写真がかざられてあるではないか。

くつくくく (感) 1 クック、クック
六 128 8 「クック、クック。」といって、うまくに
げました。

くつした 「靴下」(名) 1 くつした
二 20 5 あめかさまんとごむぐつ くつした
ぐつしより (副) 2 ぐつしより

七 71 2 にわか雨は、ぐつしよりとぬらした。うま
もうまかたも、同じように。

十一 63 4 ある朝、いなかの人らしいひとりの少年
が、どろまみれにぐつしよりとぬれて、

ぐつすり (副) 2 ぐつすり
八 48 1 囃 あとはぐつすりねるばかりだ。

九 145 6 ぐつすりねむってしまったのでしょう。

くつする 「屈」(サ変) 1 くつする 《一セ》

九 123 6 茶人はすこしもくつせず、求め求めて、い
つか、「略」、ながの縣にはいった。

ぐつたり (副) 1 ぐつたり
十一 79 11 少年は、いすにぐつたりと身を落して、
すすりなきました。

くつちける (下二) 2 クツチケル 《一ケル》
十 49 1 囃 キタナイワンワンチャン——アンヨナ
メテルワ——クツチケルヨ——

十 50 9 囃 「クツチケルヨ」は、足をせなかに
「くつつけるよ。」というのです。

くつつく (五) 2 くつつく 《一イーク》
八 67 3 囃 だが、わたしのそばにくつついてね。

十四642 しずくのしんになるものがあって、そのまわりに、蒸気がこつてくつつくので、

くつつける (下二) 2 くつつける 《ケ―ケル》

七973 草のそばにきて、口をくつつけましたが、草はたべませんでした。

十509 国 「クツケルヨ」は、足をせなかに「くつつけるよ。」というのです。

ぐつと (副) 3 ぐつと
六905 ほおりのみことは、ぐつとおのみになつて、ほおりの「ああ、おいしい水。」

七463 青年は、アコーデオンを、両手でぐつとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。

八231 虫はぐつとそり返るようにして、頭をうしろにさげました。

くに (名) 54 くに 國 くに・おつきさんのくに・きたぐに・じぶんのくにのことば・しまぐに・はるのくに・はるのくにさん・ふゆのくに・ゆきぐに

一437 国 さあ、お月さんのくにへいくんだよ。

一448 国 お月さんのくにへ おいでのかたは、こちらへおならびください。

一506 国 お月さんのくにのきしやだもの。

一542 国 この お月さんの くにでは、一ねんに一どたまひろいにこのかわらにきます。

一545 国 そうして、たまが ひろえたら、お月さんのくにのなかにいれてもらえます。

一554 国 そうして、つぎのとしのたまひろいで、きれいなたまが ひろえたら、また お月さんのくにへいれてもらえます。

三768 国 丘を こえてね、よその 國へ いくんですよ。

三769 国 じゃあ、お日さまは よその 國でなにをするの。

三771 国 よその 國の 子どもたちに光をあげるのですよ。

三775 国 あなたたちが ねている あいだ、お日さまは、よその 國の 子どもが あそべるように、光をあげにいくのです。

三1104 国 この 十五夜には、月の 國から むかえがきて、かえらなければなりません。

四1312 国 の たからに いたします。

八451 わたしの病気をなおしてくれたものには、國の半分をわけてやる。

八843 はくちようはみごとな羽を廣げ、この寒い國からあたたかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。

八844 はくちようは《略》あたたかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。

九167 これからいこうとする遠い國のことを、話しあっているのかもしれない。

九235 この國の人々が、あわれなこの小鳥たちにしめしたもとも人間らしいあたたかい氣持は、

九237 この國の人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた

九247 つばめは、けつして自分の國をわすれませんでした。

十1212 国 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國にのこしておいてきました。

十162 フランスのいなかの子どもから、自分の國のことをきかれたときは、

十176 国 そういう遠い國へいくと、

十176 国 そういう遠い國へいくと、自分の國のことばがこいしくなります。

十179 国 外國でくらしみて、つくづく、自分の國のことばのありがたみを知りました。

十645 自分たちの國が持っているこのよい藝術を味わうことを、

十一1012 国 船ばかりではなく、あの町でも、あの工場でも、また、日本の國全体だって、同じことだ

十一137 ああ、われわれみんな、遠い國から旅してきた旅人のような氣持のする日だ。

十二471 国 人形しばいって、いろんな國にいろんなものがあるんですね。

十二811 日本という國をみたこともなく、

十二821 試合を見物しようと、方々の國の人々が、そのコートを目がけて集まりました。

十二1146 平和な國日本を作るために、また、文化國家をきずくために。

十二1159 歩調がそろったときに、はじめて、日本が正しい、美しい國となることができましよう。

十三62 ひばりやつばめも、やがて、遠い國からここに帰って来て、

十三1010 漢字で名まえを書かぬ國の人々などには、この考えのまったくあてはまらぬことは、

十三125 知識を廣め、學問を研究して、迷信をまったく去ってしまうようになれば、日本の國は、今日よりまだまだ進むことであらう。

十三175 デンマルクは、《略》本國と、三つの島からなっている、小さな、しずかな國であります。

十三177 おとぎばなしを、世界の子どもたちにおくった、アンデルセンの生まれた國であります。

十三178 世界の樂園といわれるこの國も、

十三181 もともとせまい、小さな國ですのに、そのもつともよい土地を失いました。

十三185 戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣はしずみ、その活動はおとろえました。

十三187 國のおこるかほろびるかは、このときにさだまり、

十三189 この苦しいときにうちかつことのできる國民だけが、國の建てなおしという大事業をなしとげて、さかえるのであります。

十三353 文字の國といわれるのも、いわれのないことではない。

十四42 名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、けっして少なくはありません。

十四232 国 それでは、これらのことばは、もとはどこの國のことばだったのだろう。

十四238 国 外國からはいってきたことばは、英語だけではなく、ほかの國からも、いろいろはいってきている。

十四244 どうしてこんなにたくさんのことばが、いろいろな國からはいってきて、日本語になったのだろうかと、ふしぎになってきた。

十四299 日本は景色のよい國で、

十四311 なんでも日本、日本と、日本だけが特別の國でもあるかのように考えて、

十四312 あなたがたのものをみる目、ものを考える力が大きくなっていけば、日本は、見ちがえるほどりっぱな國になっていくのです。

十四112 地面から高くはなれて、もう、寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、

十五428 世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかっている國があるうか。

十五798 そうした風景から、自分の國を愛するということを学んでいる日本の子どもさんたちにも、
十五801 いろいろな國の人々の間に、

くにおさん (人名) 2 くにおさん

二254 きょうは、《略》と、くにおさんと、たけこさんと、この五人のばんです。

二322 くにおさんのしたおはなし。

くにぐに 〔国〕 (名) 3 國々
八89 ほおじる自身、國々のなまりのようなことばをもっているのだそうです。

十五419 この二十六字のローマ字を利用して、
《略》多くの國々のことばが書き表わされている。

十五804 それ以前は、おたがい他國のことばはわからず、世をすごしてきたばかりでなく、

くにざかい 〔国境〕 (名) 1 くにざかい
二375 学校からかえるとき、くにざかいの山に、ゆきがふっているのをみつけました。

くにじゅう 〔國中〕 (名) 1 國じゅう
五728 女王さまのようなあるきかたも、口のききかたも知らないで——國じゅうのものわらいになるよ。

くぬぎば 〔櫟葉〕 (名) 1 くぬぎ葉
十一404 夕ぐれ寒くふくこがらしは、黄色くか

れたくぬぎ葉鳴らす。

くねくね (副) 1 くねくね
十四882 その一すじの道をながめると、一直線ではなく、くねくねとゆがんでいる。

くばる 〔配〕 (五) 2 くばる 《ラール》
五201 私のなかまは、一けん一けんにくばられはじめました。

十四305 遠いもの、大きなものに心をくばることがたりなかったのは、

くび 〔首〕 (名) 26 くび 首 下てくび
四627 かっちゃんは、いきなりへびのくびにかみつきました。

六478 ませたくびだす子うまの顔に、かきはすずなり、夕明かり。

六118 たこが青空で右や左にゆれると、自分もいっしょに首をふりながら、

六139 とらさんは、そつと首をのぼして、うさぎさんたちの方をのぞきました。

七921 そうじをしようと思って、首のところを持って、かごの中へ入れたら、

八309 そのせつな、けんぎゅうは、うしの首をかるくポンポンとたたきました。

八615 どのたまごからも小さなひなの首がでた。

八842 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっている。

八847 あひるの子は、水の上を車のようにくるくるまわり、その首をはくちょうの方へさしのべ、

八939 わかいはくちょうは、そのほそ長い首をあけて、心のそこから喜ばしうにさげんだ。

九526 いちろうは、首をひねりました。

九937 首がいたいらしく、手でさすっている。

九971 首をひつかいたからさ。

九977 たかぎ、首をさすりながら、その場にぼんやり立っている。

九981 首、いたいのか。

九993 ぼくの首をひつかいたのはだれた。」と、首をさする。

九993 ぼくの首をひつかいたのはだれた。」と、首をさする。

九1029 首は——「たかぎ」なかなかおりしたら、よくなった。」

九1021 やまだ たかぎの首をのぞきながら、「でも、みてあげよう。」

九1369 「なんだって、お月さん——」くもは、首

をねじって上の方をみあげました。

十二503 首のところだけのこして、もんだ紙のりをつけなくて、上から上からかぶせる。

十二507 首のほうからもかぶせてまるくしてから、細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。

十二532 顔は、着物のすそからさかさにいれて、首を着物にぬいつける。

十二539 ひとさし指を首の中にいれ、おや指とか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。

十四609 花も、葉も、つるも、首をひねって考えていました。

十五121 図 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸のともを見ればよきつくよなり

くひき 「九匹」(名) 3 九ひき

二299 一ひき、二ひき、《略》、九ひき、十ひき、十一ひき——おや、十一ひきしかない。

二305 一ひき、二ひき、《略》、九ひき、十ひき、十一ひき。

七894 白うさが九ひきと、黒うさを一ひきもらいしました。

くびすじ 「首筋」(名) 2 首すじ
七411 私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、せなかから、腹までふりまかれて、

八682 もう一わの鳥がとんできて、そのみにくいあひるの子の首すじにかみついた。

くひやくくじば 「九百九十羽」(名) 1 九百九十

九2212 二日同じく九百九十

くひやくねん 「九百年」(名) 1 九百年
十二1042 これは、九百年ほどまえに作られた平

等院という建物の中にある名高いほうおう堂です。
くふう 「工夫」(名) 5 くふう

三110 図 どうかして、かぐやひめを月の世界の

人にわたさないくふうはあるまいか。
十374 そこでさらに、七年間のくふうがつづけられ、みごとに、自動織機ができた。

十721 図 おれに、うまいくふうがある。
十三97 おしべのかふんがめしべにつかないよう

なくふうと、いま一つ、よくつくようなくふうをして、その実験を重ね、

十三97 いま一つ、よくつくようなくふうをして、くふうする 「工夫」(サ変) 5 くふうする 《一

サ・シ・スル》
六1198 まがつているのでめんどうでしたが、いろ

いろにくふうして、うまくはりつけました。
八1087 きかいがないのでくふうしました。

十二937 ひとりがつてんでなく、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。

十三459 三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわかるように、くふうします。

十五376 また、それまでに作られた文字を組みあわせて表わすこともくふうされた。

くべつ 「区別」(名) 2 区別
十二354 私は、いつまでたっても区別ができません

十五7410 神の目から見れば世界の人類はすべての愛する子どもなのだから、人種的な区別など、あるべきはずはない。

くぼめる ふほりくぼめる
くほん 「九本」(名) 1 9本

八1017 3本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえましたが、いちばん多いので15本になりました。

くま ぐくま
くまざさ 「隈笹」(名) 1 くまざさ

九377 図 くまざさやいろいろな名も知らない雑草が

いちめんにはえていて、なにかでできそうです。
くまどる 「隈取」(五) 1 くまどる 《一ツ》

十四932 雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわりを、花かんむりのようにくまどった。

くみ 「汲」(動) 4 くみ 組 ぐいちくみ・さんくみ・にくみ・ほねぐみ・よんくみ

四301 「くみの人みんな」にきいてもらいたいといって、文を書きました。

六5810 この人は、私たちの組のまつもとさんです。七549 式をすませてどつてくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、にこにこしていた。

十315 学校では、組の友だちとなくよくして、助けあっていたと思います。

くみあ・げる 「汲上」(下二) 2 くみあげる 《一ゲ》

十二3611 だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をといての口の下へやりました。

十二712 芭蕉のおきないうちに、いどから水をくみあげたり、ごはんをたいりしました。

くみあわす 「組合」(五) 1 組みあわす 《一サ》
十297 和音を耳にしたときは、組みあわされた一

音一音のことも、心にうかべてみたいのです。
くみあわせ 「課名」 2 組みあわせ

九222 一 組みあわせ……四
九41 一 組みあわせ

くみあわせ 「組合」(名) 9 組みあわせ
九53 これは二つの色の組みあわせですが、三色

の組みあわせにしたら、二色のときよりも、もっとがった感じがするにちがいありません。

九53 三色の組みあわせにしたら、

九69 色の組みあわせが、さまざまな感じをあらわすのと同じように、

九610 音の組みあわせも、いろいろな氣持をあらわします。

九82 色の組みあわせも、音の組みあわせも、おたがいにとけあつて、一つの感じをつくりあげると同じように、

九82 色の組みあわせも、音の組みあわせも、

九85 ことばの組みあわせも、それぞれがった新しい思いをおこさせます。

九92 二つか、三つのことばの組みあわせだと、

すぐ心にものを思いうかべることができですが、十四8612 ばんそうの音楽や、場面の組みあわせと説明のことばなどによって、

くみあわせる「組合」(下二) 3 組みあわせる

《一セ》

九62 三音、四音と組みあわせてみると、さらにちがった氣持がします。

九91 「絵はがき」「港」「友だち」など、いろいろなことばを組みあわせてみましょう。

十五375 また、それまでに作られた文字を組みあわせて表わすこともくふうされた。

くみたてる「組立」(下一) 4 組みたてる《一テ》

十359 佐吉は、もう、じつとしていられなくなり、設計図をひいては組みたて、組みたてては動かしてみた。

十359 組みたてては動かしてみた。

十三1410 自分で望遠鏡を組みたてて、それで天体を観察し、

十三443 しはいは、かならず、ふたり以上の会話から組みたてられています。

くむ「汲」(五) 11 くむ 《ム・モ・ミーン》

三103 罇 小さなひしゃくで おちゃくんで、かけてあげましょ、おしやかさま。

四165 おかあさんが、月にてらされて、水をくむ。

四544 一わの がんが、みずうみの きれいな 水をくむと、

六896 そこへ女の人がでてきて、いどの水をくもうとする。

六904 女の方は、水をくんで、ほおりのみにこにさしあげる。

九12110 ところが、てんりゅう川の中流の水をくんで、それで茶をたててみると、

九1263 そこをくんで飲んでみると、それこそまぎれもないうまい水であった。

九1267 茶人は、《略》、泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、心から楽しんだということである。

十二747 曾良が水をたくさんくんでおいてくれたし、まきもたくさんとってきてくれてあるし、

十二881 ふろ場の中で湯をかきまわしている父にこういわれたら、手おけに水をいっぱいくんで持っていくだろう。

十二9911 水をくんだり運んだりするときにもつかったことでしょう。

くむ「組」(五) 5 くむ 組む 《ミ・ミーン》↓し

くむ・のりくむ

三402 ぼくらは かたを くんで、くさはら道があるいて かえりました。

七71 罇 手をつないで校門をでていく子ども、かたを組んで話しながらでていく子ども、

九1033 ふたり、なかよくかたを組みながらさる。十一48 長いいかたを組んで、材木を遠くの山から

ら運んでくるのもみえる。

十二1063 四つに組んだ大ずもう。

くむ じなみだぐむ

くも「雲」(話手) 4 雲

六337 雲 おや、かかしくんじゃないか。」かかし「助けて——雲のおじさん。」

六341 わたしのたんぽほどこでしょう。」雲「山のかげにかくれて、ここからはみえないよ。」

六351 雲「だいじょうぶかい。」かかし「なんてらんぼうな風なんだろう。」

六354 おじさん、大風ってこわいな。」雲「ないだりあれたり、海みたいなものさ。」

くも「雲」(名) 60 くも 雲 じうすぐも・したぐも・しらくも・つきとくも・はいろぐも・ゆうやけぐも

一67 罇 なのはな、なのはな、しろいくも。

一324 お日さま——おつきさま——おほしさま——くも——かぜ——あめ——ゆき——

一511 罇 きしやは、まもなくくもの とんねるにはいります。

二46 罇 いいえ、これは、お月さまが、くもからでてくるところです。

三75 罇 白いくものながれ。

三228 とうとう、その てっぺんは、空のくもとどくようになりました。

三353 罇 白いくもが 水に うつつて います。

三67 罇 じゃあ、雲をみてごらん。

三681 青々とした中に、ふんわりした、小さな、白い雲がとんでいました。

三682 雲は、もりの 方へ しずかに しずかに とんで います。

三787 罇 雲さえ でて いなかったら、まいあさ

あえますよ。

三81 2 そのうちに、雲は雨をつれて、空をす
すんでいきました。

三94 2 あのまっ白な雲もみんなのもの。

三96 2 にわの花も、空の雲も、とおい山も、
ちかい家も、かくことができます。

三113 1 そのうちに、空から大ぜいの天人たちが、
雲にのっておりてきました。

四27 8 「雲」に話をするつもりで書きました。
四65 5 うすむらさきの雲が、おだやかにたなび
いていました。

四65 7 がんの列は、そのきれいな雲の中に、
みえなくなっていました。

四87 7 すみがまの上に、雲がでています。

四88 1 あの白い雲に、だれかが、ちぢまって
いるようです。

五51 10 海のはてから 白い雲、白い雲。
五51 11 海のはてから 白い雲、白い雲。

六10 1 そのとき、いままで雲にかくれていたたい
ようが、かおをだしたので、

六31 10 雲がちぎれてとぶ。

六32 6 顔のうしろを雲がとぶ。

六33 3 白いひげの雲が風に流されている。

六33 5 風を受けるたびに雲のからだのかっこうが
かわる。

六33 9 助けて——雲のおじさん。
六33 10 雲のおじさん、わたしのたんぽはどこで
しょう。

六34 3 雲のひげがあおられて長くのびる。
六43 11 白い雲。
六51 7 月は、雲にはいったかと思うとすぐで、で
たかと思うとまたすぐはいります。

六52 2 月はいま雲からでて、だいそぎではなれて
いきます。

六52 4 そうして、つぎの雲の方へどんどん走って
いきます。

六52 8 じつと月をみつめていると、月は動かない
で、雲がだいそぎでとんでいくようにもみえます。

六52 10 雲が走っているのよ。

六53 4 雲が走っているのよ。
六53 5 雲が走っているのよ。
六53 7 雲が走っているのよ。
六53 9 雲が走っているのよ。

六53 10 雲が走っているのよ。
六54 2 雲が走っているのよ。
六54 4 雲が走っているのよ。

六54 6 雲が走っているのよ。
六54 8 雲が走っているのよ。
六54 10 雲が走っているのよ。

六54 12 雲が走っているのよ。
六55 2 雲が走っているのよ。
六55 4 雲が走っているのよ。

六55 6 雲が走っているのよ。
六55 8 雲が走っているのよ。
六55 10 雲が走っているのよ。

六55 12 雲が走っているのよ。
六56 2 雲が走っているのよ。
六56 4 雲が走っているのよ。

六56 6 雲が走っているのよ。
六56 8 雲が走っているのよ。
六56 10 雲が走っているのよ。

六56 12 雲が走っているのよ。
六57 2 雲が走っているのよ。
六57 4 雲が走っているのよ。

六57 6 雲が走っているのよ。
六57 8 雲が走っているのよ。
六57 10 雲が走っているのよ。

六57 12 雲が走っているのよ。
六58 2 雲が走っているのよ。
六58 4 雲が走っているのよ。

六58 6 雲が走っているのよ。
六58 8 雲が走っているのよ。
六58 10 雲が走っているのよ。

六58 12 雲が走っているのよ。
六59 2 雲が走っているのよ。
六59 4 雲が走っているのよ。

ひまわりの花、(略)、晝の休みもあせがでる。
十四40 2 きれいな、きれいな雲ではないか。

十四42 5 天には雲、地にはあらそいがたえな
ろうが、心に太陽をもて。

十四63 2 ちょうど雲やきりと同じようなものです。
十四64 7 空中にうかんでいた雲が消えてしまった
あとには、

十五21 2 朝ぎりの中から、白い雲のわきたつよう
に、すべり出るまっ白なひつじのむれ、

十五82 2 雲のまぐがあがると、園の前の方に、
(略)大廣間のようなものがあらわれます。

十五108 1 金色の雲の中に、つま先で立って、
やっと思えるくらいのところにいる人、だれなの。

くも「蜘蛛」(名) 51 くも 51 びびきのくも
二21 2 先生、大きなくもがすをかけていま
した。

九30 1 くれいていく果をはるくものあお向きに
九127 2 一びきのくもがいました。

九127 3 黄色と黒のしまもようのついた大きなくも
でした。

九127 5 ある日の夕がた、このくもは、木と木のあ
いだに、果をかけました。

九129 2 くもは、その子もり歌を耳にしながら、光
る星をみあげていました。

九129 4 くもは、きつとなつてその方をみつめまし
た。

九129 7 くもが、いきなりとびかかっていくと、あ
ぶは、(略)、すいとにげていきました。

九129 10 ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもは、
やぶれたところをつくろいかけました。

九130 1 「(略)」と、くもは、足をふんばって身
がまえをしました。

九一三 風が思いだしたようにふいてくるので、あみがゆれ、くももいっしょにゆれました。

九一四 それは、みつばちであることが、くもにはすぐわかりました。

九一五 くもが、じいっと息をこらして待っている、と、

九一六 みつばちは、くものあみを知らないで、まっすぐにとんできました。

九一七 くもはみつばちにとびかかりました。

九一八 みつばちも、くもに向かいました。

九一九 くもは、ふといつなをとりだして、みつばちのからだをしぼりつけようとして、みつばちのからだをいじな針をだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。

九二〇 それにはさすがの大きなくもも、びっくりしました。

九二一 くもが、手でさすっているあいだに、みつばちは、つなをほいて、

九二二 にげていくみつばちのうしろすがたをみていましたが、くもはどうすることもできません。

九二三 たいへんと、くもが思ったとたんに、ぼさりとこうもりの羽にたたかれました。

九二四 あみは、すっかりやぶれて、くもはそのまま地面に落ちました。

九二五 くもが気がついてみると、あたりにいいにおいがします。

九二六 くもは、長い手をのぼして、わけなく白いちようちよをとらえました。

九二七 「なんだって、お月さん——」くもは、首をねじって上の方をみあげました。

九二八 くもは、このおかあさんということばを、長いこと耳にしたことはありませんでした。

九二九 くもの小さなときのこと、ゆめでもみるように思いだされてきました。

九三〇 くもは、ちようちよを手ばなしました。

九三一 くもは、とんでいくちようちよをみ送りながら、「略」と、ひとりごとをいいました。

九三二 くもは、おなががすいているのに気がつき、また、あみをかけようと考えました。

九三三 くもはのそのそと歩きました。

九三四 くもは、うつらうつらとねむくなってきました。

九三五 くもはからだを小さくまるめて、ころっと横になりました。

九三六 目をつむると、だれかが、くもの頭をなでています。

九三七 くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげとみつめました。

九三八 おかあさんときいて、くもは、手をうんとのぼして、とりすがろうとしました。

九三九 そのひょうしに、くもは、目がさめました。

九四〇 くもは、いまみたばかりのゆめを、なんともなんとも思い返しました。

九四一 くもは、目がさえてなかなかねむれません。

九四二 くもは、なんといって返事をしたいかわからないので、そのままだまっていました。

九四三 くもは、〈略〉一つ一つ思いだしているうちに、心持が、しだいにかわってきました。

九四四 くもは、そっと自分の手をのぼし足をのぼしてみました。

九四五 くもは、自分ながら自分のからだ、そらおそろしく思われてきました。

九四六 くもは、このつばめにひろわれました。

九四七 くもは、つばめの口ばしにはさまれたまま、空をとんでいきました。

九四八 くもは、〈略〉、つばめのくちばしからころげ落ちることができたかもしれせん。

九四九 こう決心がつくと、くもは、すっかりくなく気持になりました。

九五〇 そんなことをくもは思いました。

九五一 くもがのきに巣をかけることがあれば、

くもさん 雲 (名) 1 雲さん

四二八 手 白い雲さん、光ってきれいだな。

くもさん 蜘蛛 (名) 8 くもさん

九三六 雲 (名) 8 くもさん

九三七 雲 (名) 8 くもさん

九三八 雲 (名) 8 くもさん

九三九 雲 (名) 8 くもさん

九四〇 雲 (名) 8 くもさん

くものす 蜘蛛巣 (名) 2 くものす

五八〇 竹のさきにはうきをむすびつけて、てんじょうのくものすをはらいました。

七五五 なにかの花びらが、くもの巣にかかってゆれている。

くもり 曇 (名) 21 くもり ↓あさぐもり・うすぐもり

七四七 心がくもっていると、いくらなおしても、文章のくもりはとれません。

七八七 五月一日 ㊦ くもり 19度

七88	7	5月20日	(日)	くもり	18度
七89	2	5月22日	(火)	くもり	16度
七90	1	5月29日	(火)	くもり	24度
七92	1	7月20日	(金)	雨のちくもり	22度
七92	7	7月24日	(火)	くもり	19度
七93	2	8月2日	(木)	くもりのち晴	29度
七93	5	8月4日	(出)	くもり	25度
七94	1	9月3日	(月)	くもり	25度
七94	4	9月6日	(木)	くもりのち晴	29度
七96	5	11月22日	(木)	くもり	17度
七97	1	11月25日	(日)	晴のちくもり	17度
八97	1	5月21日	(月)	くもり	18度
八98	3	6月15日	(金)	くもり	24度
八101	3	8月7日	(火)	くもり	25度
八101	10	8月18日	(出)	くもりのち雨	25度
八102	6	9月1日	(出)	くもり	25度
八103	8	9月14日	(金)	くもり	26度
八105	3	9月29日	(出)	くもりのち雨	23度
八109	1	11月19日	(月)	晴のちくもり	18度
くもる [曇] (五) 7 くもる 《↑↑ラール》					
六50	3	曇 すんだ青さをもちながら、ときにはくもる晝の空。			
七47	9	心がくもっていると、いくらなおしても、文章のくもりはとれません。			
七89	8	うさぎでも、くもった日や雨降りの日は、きらいなのでしょう。			
十二71	7	そのうちに、冬がきて、くもった空がひくくたれる日が続きました。			
十二71	9	芭蕉は、くもった空をおおぎながら、雪が早く降るといいなあと待ち遠しがつていました。			
十五70	5	せきあえぬなみに目をくもらせたおばさんが、「略。」とおっしゃった。			

十五71 4 このすがたをおじさんがごらんになったら——」といって、おばさんは声をくもらせた。

くやしい [悔] (形) 1 くやしい 《↑ク》

十一62 3 園 ぼくはくやしくなったので、なに、このくらしいのことがこわいものかと、

くやむ [悔] (五) 1 くやむ 《↑ム》 ↓おくやむ

十二38 8 自分のしたことがわかったので、生まれてはじめて、くやむ心と悲しみとに胸をさされました。

くら [倉] (名) 2 くら ↓こくら・たからぐら

三112 2 おばあさんは、しめきったくらの中で、しつかりとかぐやひめをだいていました。

三113 3 すると、しめきつておいたくらの戸がひとりでにあきました。

クラークせんせい (人名) 1 クラーク先生

十一50 1 さつばろに農学校をつくられたクラーク先生もおっしゃった。

クラークはくし (人名) 1 クラーク博士

十五60 6 恩師クラーク博士の精神のやどっている札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、

くらしい [位] (名) 1 くらしい

三106 6 園 かぐやひめをこてんにつれてきたら、おまえにくらいをさずけてやろう。

くらしい (副助) 17 くらしい

六101 5 ちょうど、めがねのたまがはまるくらしいの大きさにまいて、

六101 10 さっきのつつの中へ、ちょうど、するするとはいるくらしいの大きさに作って、

八35 1 さて、空の星は、地球からのくらしいのきよりにあるのでしょうか。

九18 5 汽車や自動車もかなわないくらしいの早さですから、

九47 8 字はへたで、すみもがさがさして指につくくらしいでした。

十61 9 もう、先生のせいにくらい高くなりました。

十62 5 もう、親竹と同じくくらしいに高くなって、風にゆれていました。

十66 8 園 そちらからふいてくる風にあたっても、たちまち死ぬといわれるくらしいだ。

十一62 3 園 このくらしいのことがこわいものかと、自分からさきになって渡ってしまったのです。

十二52 2 いたぎれを、はば二センチ、長さ九センチくらいに切つて、まん中にあなをあける。

十四35 7 これを思えば、人間の力というものは、うちゅうにも負けないくらい廣大で、

十四49 7 しかし、このおじょうさんくらしい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。

十四69 7 湯げのお話は、このくらしいにして、こんどは、湯のほうを見ることにしましょう。

十四76 12 茶わんの湯のお話は、《略》、これくらしいにしておきましょう。

十四92 1 自分の足だか、ひとの足だか、わからないくらいだった。

十四100 12 まっ晝間でも、それ以上に明かるくはないと思われるくらしいであった。

十五108 2 園 金色の雲の中に、つま先で立つて、やっと思えるくらしいのところにいる人、だれなの。

くらしい [暗] (形) 26 くらしい 暗い 《↑イ・↑カッ・↑ク・↑ケレ》 ↓うすぐらい・まくら・まっくら

二52 1 六のぼめん 一どくらくなり、またあかるくなると、

三51 7 園 のみの手もとはくらくても、かっちゃん 石を切る。

四二〇 三 いままで ぐらかった へやが、あかるく
なりました。

五四三 一 一日じゅうてつだいをし、うちに帰る
ころは、もう、あたりはぐらくなっています。

五五二 二 もうすっかりぐらくなっていて、空いちめ
んに、星がでていました。

五〇四 一 みそさざいが、くらい木の中からきたので、
六四二 ぐらいはこの中にしまいこまれていた、小
さな鉄のねじが、

六五〇 六 ぐらければこそ光る星、ねむりをふらす
夜の空。

六五五 二 そのうちに、あたりがきゅうにくらくなっ
て、かげがみえなくなりました。

七六三 三 ばくちく花火が、パンパン、もうぐらく
なっている。

八二〇 九 あたりのぐらくなりかけた夕ぐれをみはか
らって、

八二二 二 もうすっかりぐらくなりました。

八七六 青いけむりが、くらい木のあいだから雲の
ようにたちのぼった。

九五三 六 「やまねこなら、けさまだくらいうちに、
馬車で、南の方へとんでいきましたよ。」

一〇八 三 暗い木立。

一一二五 四 金次郎は、とりが鳴くと、まだ暗いうち
からおきて、

一一八九 二 やさしい色がその目にうかぶこともあり
ましたが、それも、だんだん小さく、しだいに暗
くなっていきました。

一三48 四 「ます」小屋のランプが、きゅうに暗く
なりました。

一四39 一 暗いとばりが、たち切られる。

一四42 一〇 どんな暗い日だって、それが明かるく

してくれる。

一四48 一 こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よ
くあんな美しい声がだせるものだと思います。

一四54 一〇 そのこは、暗いところで、土もかたいし、
石ころなども、ごろごろしています。

一四90 三 寒いことも寒いですが、また暗さも暗かった。

一四90 四 「なんと暗い、寒い夜だろう。」

一五22 六 みんなの頭の上が暗くなって、なんだか
大きなあらしがふき起ったような音がしました。

一五七〇 一 暗い心になって、じっとおじさんの写真
に見入りながら、

ぐらい (副助) 24 ぐらい

一五五二 二 三十分ぐらいしかたっていなかったのに、

一六32 四 これぐらいの風にまけるものか。

一六三二 五 五十音というものは、〈略〉、「ちがったか
なをならべたもの」ぐらいに思っ、

一八九二 二 あいだを30cmぐらいずつあけ、きそく正し
く植えました。

一八〇五 一 本のなえのまん中からでた新しい葉が、
5cmぐらいになりました。

一八〇七 一 本ずつ植えたなえが、だいたい7本ぐら
いにふえました。

一八〇八 三 本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえま
したが、

一八〇六 二 1本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいつ
いていました。

一八〇六 四 ほかのは、だいたい12ぐらいでした。

一八〇六 七 1本のほに、多いのは180ぐらいずつつ
いていました。

一八〇八 三 風のくる場所で、目の高さぐらいのところ
からごみをふきとばさせます。

一九五二 二 つばめが電線や物ほしざおに五六ばぐらい

ならんでとまっているのを、よくみかけます。

九八四 四 まず、一メートルぐらいのはばで、東西
に四五十メートルほってみることにしよう。

九九二 二 一、二年ぐらいの男の子、

一〇一二 二 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、

一〇四八 二 その少年は、〈略〉、そのいなか町にある商
業学校の下の学年ぐらいでした。

一〇三二 二 自分ひとりぐらいどうでもいいというよう
な、無責任な、ひきょうな考えを

一一二四 二 ひとりぐらい育てるお金は、わたしが
山へいって木を切ってきてもうけますよ。

一一四五 二 すこしぐらいのことだからといって、ご
まかさなかつた弟よ。

一一八六 一〇 どうやら、あなたのむすこさんと同じ
年ぐらいのむすこがいるらしく、

一二二七 一 たった九十センチぐらいのところでも、
〈略〉手をついて、いざり歩きになります。

一二五二 九 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十
センチぐらいにつきあわせて、図の形に切る。

一四46 八 このときぐらい、しみじみと歌のありが
たさを味わったことはありませんでした。

一五35 九 いまから五六千年ぐらいまえに、
ぐらがり ↓うすくらがり

ぐらぐら (副) 2 ぐらぐら

一九39 九 一 のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず
木にしがみついたりしました。

一九七四 一 木ややぶが、けむりのようにぐらぐらゆれ
ました。

くらさ [暗] (名) 1 暗さ

一四90 二 寒いことも寒いですが、また暗さも暗かった。
くらし [暮] (名) 6 くらし

一九四七 二 ちょうちよにしても、ばらの花にしても、

たこと、くりがたぐさん落ちていたこと、
 十二92 2 となりの友だちにさわれていったこと、
 くりはあんがい少なかったこと、
 クリーム ↓アイスクリーム・アイスクリームうり
 くりかえし 「繰返」(副) 5 くり返し
 十一24 5 金次郎は、自分の考えをくり返し話し、
 母親にすすめました。
 十一26 6 その一まいめをめぐって、くり返しくり
 返し読んでみると、
 十一26 6 くり返しくり返し読んでみると、
 十一26 11 いつもその本を手からはなさず、くり返
 しくり返し、大声で読みながら歩きました。
 十一26 11 くり返しくり返し、大声で読みながら歩
 きました。
 くりかえす 「繰返」(五) 7 くり返す 《—シ》
 十40 3 同じことをなんどもくり返してみたところ
 で、かわりのあるはずはない。
 十51 4 「ハイ」「ハイ」と、なんどもくり返しま
 した。
 十一58 6 いくどもくり返しているうちに、太郎は、
 《略》すらすらといえるようになった。
 十一67 7 「《略》。」と、看護人は、くり返しなが
 ら、中へはいりました。
 十三8 10 これをいくどもくり返してたしかめ、
 十三40 7 その間、かた手に持ったさっきの手紙を
 くり返して読む。
 十三41 1 会 なんべんもくり返して読んだよ。
 くりくりさせる (下二) 1 くりくりさせる 《—
 せ》
 十56 10 ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり
 木の下においていてしまいました。
 くりごと 「繰言」(名) 1 くりごと

十五62 9 小さな声でうったえる私のくりごとを耳
 にしたおぼさんは、腹をかかえてわらいだした。
 クリスチャン (名) 1 クリスチャン
 十五57 11 会 そのころ、もう熱心なクリスチャンに
 なっていたが、ある日のこと、せい書をギリシア
 語で読みたいといひだした。
 クリスマス (課名) 2 クリスマス
 四3 2 ハ クリスマス……八十一
 四81 1 ハ クリスマス
 クリスマス (名) 5 クリスマス
 四81 3 会 きょうはたのしいクリスマス。
 四81 6 会 あかるくかざったクリスマス。
 十四97 12 そうして、こんどは、女の子は、一本の
 クリスマスの木の下にすわっていた。
 十五67 2 そのうちにクリスマスの日がめぐってき
 た。
 十五67 4 日曜学校の生徒であった私は、そのクリ
 スマスに得意の銀てきをふいたが、
 クリスマスツリー (名) 2 クリスマスツリー
 四82 4 わたくしは、ねえさんとふたりで、クリ
 スマスツリーをつくりました。
 四84 4 クリスマスツリーのそばで、みんなであ
 そびました。
 くりぬく 「割貫」(五) 1 くりぬく 《—イ》
 二26 8 くりぬいて、ふねをつくるがよい。
 くりひろい 「栗拾」(名) 6 くりひろい
 四23 7 会 そのときは、山へくりひろいにいき
 ましょうね。
 四28 9 山に いって、くりひろいをする ことが
 な。
 十二90 8 「くりひろいに行った。」太郎が、こう
 いう短い文を書いた。

十二90 10 太郎はこの「くりひろい」の中に、さま
 ざまな氣持をこめているにちがいない。
 十二91 10 「くりひろいに行った。」と書いた。
 十二92 12 なかみはそれぞれが「くりひ
 ろいに行った。」といい、
 くりひろげる 「繰広」(下二) 2 くりひろげる
 《—ゲ》
 十三29 8 黄色や、赤や、白の糸たばくりひろげ
 られ、にぎやかな話が続く。
 十五73 6 日記をくりひろげ、《略》あたりを、声
 高らかに読みあげられた。
 くる 「来」(カ変) 6 くる 来る 《キ・クル・クレ・
 コ・コイ》 ↓おちくる・がいこくからきたことば・
 やってくる・よしてきた
 一38 2 。いぬがはしってきます。しろいいぬ
 一38 3 いぬがはしってきます。しろいいぬ
 一38 6 るようにはしってきます。あさがおの
 一46 4 くしたちのぼんがきました。かぼんを
 一48 3 (四) きしががきました。かくせいき
 一50 10 うさんがまわってきていいました。「へ
 一52 1 かぜがふきこんできたので、目がさめ
 一53 4 しゃしようさんがきました。(七)
 一54 4 会 このかわらにきます。そうして、た
 一54 10 会 べんきょうしてくるのです。そうして
 一61 1 会 んどをひろってきたのですね。」「略
 一68 8 い——」ここまできたとき、とみこさ
 一21 5 会 たので、やめてきました。」「《略》。」「
 一23 4 会 も、ゆりの花にきていましたよ。」「へ
 一25 2 、おはなしをしてきました。きょうは、
 一26 2 会 くつがながれてきました。きゅうりが
 一26 3 会 うりがながれてきました。きゅうりが
 一33 8 会 うおとがしてきました。」「《略》。」と

二34 10 会 そばによって きました。はじめの
 二37 8 訓 会 そうがとんで きた。」とうたいな
 二39 2 会 が、山へのぼって きます。たろう「おと
 二46 7 会 、くもからでて くるところです。」
 二47 6 会 いちろうがでて きます。「略。」手に
 二48 6 会 へ、じろうがでて きます。「略。」いち
 二50 4 会 こが、走ってでて きます。「略。」じろ
 二54 2 会 うが、走ってでて きます。「略。」こ
 二54 6 会 うが、走ってでて きます。おかあさんの
 二57 8 会 おじいさんがでて きました。みると、わ
 二59 2 会 いだはたらいて きました。二年生も、
 二60 5 会 年生がはいって きます。そうして、こ
 二65 2 会 かぜがふいて くる。「みんな」ふいて
 二65 3 会 「みんな」ふいて くる、あたたかい
 二65 8 会 あかるくなつて きた。「みんな」あかる
 二65 9 会 あかるくなつて きた。「みけ」やあ、か
 二14 1 会 心からうまれて くるものだという
 二14 2 会 心からうまれて くることもわかりま
 二15 2 会 てんのいり口まで きますと、門ばんが
 二16 2 会 のまえにのびて きました。それをみ
 二17 4 会 ごてんにあがつて きました。はんたかの
 二20 2 会 、だんだんふえて きました。先生が、こ
 二31 3 会 光がさしこんで きます。ぼうしかけが
 二34 2 会 においがして きます。「略。」「へ
 二37 4 会 あるところに きました。白いうさ
 二38 3 会 じつてきこえて きます。」先生がこく
 二42 5 会 ら三かく、また きて四かく。」ひとり
 二44 1 会 を大ぜいつれて きました。白うさぎは
 二45 5 会 海をわたって きたかったのだ。あは
 二72 2 会 ほうきをもって きてはきました。け
 二77 8 会 ころへかえつて くるのです。だから、
 二77 10 会 きっとかえつて きてくれるの。」と、

二78 6 会 いあさかえつて きますよ。だれにも
 二92 7 会 でください。みにきた人が一本ずつ
 二103 8 会 いばんあつまつて きて、おじいさんの
 二106 5 会 ごてんにつれて きたら、おまえにく
 二109 4 会 りました。あきがきて月がうつくしく
 二110 4 会 國からむかえがきて、かえらなければ
 二112 7 会 ました。「さあ、きたぞ。」けらいたち
 二113 2 会 につれておきて きました。すると、し
 二4 6 会 らせは、ここから きます。学校にはい
 二11 4 会 みんなあつまつて きます。こくこ、しゃ
 二12 3 会 の町と、いったり きたりします。ここ
 二24 8 手 までさんぼして きました。おみやげに
 二24 9 手 もどきをとつて きました。そうして、
 二25 5 手 ちゃんがそばに くるような気がしま
 二29 3 会 いって、あそんで くることかな。おぼ
 二29 7 会 うさぎをもらつて くることかな。じぶ
 二31 9 手 女の生徒さんが きて、なっているわ
 二36 1 会 ばが、ひびいて きたのです。わかりま
 二38 2 会 うちへかえつて きました。「略。」「
 二39 2 会 とが思いだされて きました。「略。」「へ
 二45 10 会 にかおっかけて きてやしないかと思っ
 二48 1 会 高い山のそばに きました。その山の
 二49 7 会 の音がひびいて きました。二十九わの
 二50 10 会 の音が、ひびいて きました。下からね
 二53 7 会 から、風がふいて きました。あせをい
 二54 10 会 ゃんはねつがでて きたので、みんなが
 二55 2 会 島にはかりうどは きますせんが、大きな
 二56 5 会 みんながはこんで くるたべものも、お
 二58 8 会 ぼくがさがして くる。」かつちゃんは、
 二87 1 会 「とないた。冬が きたので、よろこんで
 二87 6 会 うか。風がふいて きた。すみがまの上
 二92 1 会 。しかし、降つて くる雪は、まっ黒だ。

四93 1 会 みあげて、降つて くる雪をながめる。
 四93 7 会 、どんどん 降つて くる。降つて くる雪
 四93 8 会 つてくる。降つて くる雪はみんな黒
 四95 2 会 だん下におちて くる。よくもあんな
 四102 6 会 こへかめがでて きます。かめ「うらし
 四107 9 会 だんちかづいて くる。」三のぼめん
 四108 7 会 ないしてはいつて きます。かめ「ここが
 四109 10 会 いろな魚がでて きてならぶと、その
 四111 5 会 ちそうをはこんで きます。おとひめ「さ
 四112 3 会 が、たくさんでて きて、にぎやかなお
 四116 5 会 まてばこをもって きます。おとひめ「こ
 四122 4 会 でたびをして きたのです。けれども
 四123 2 会 世に生まれて くるまでは、なん百年
 四127 1 会 のまつ原へでて きます。りようし「き
 四127 6 会 いにおいがして きます。みると、むこ
 四129 3 会 とりの女がでて きます。女「もし、そ
 五6 7 会 川は野原におりて くる。野原をゆつくり
 五8 6 会 、汽車がはいつて きたよ。」シュ、シュ
 五9 4 会 ちゃんが、乗つて きたよ。じろう、せき
 五11 3 会 ヲ。「むこうからきた汽車とすれちがつ
 五14 9 会 ばさん、わざわざきて くださって、すみ
 五16 3 会 配たつをする人がきて、「略。」といっ
 五20 8 会 おくんから手紙がきたよ。」みつおさん
 五25 6 会 になかよくなつて きました。ほんとうは
 五25 9 会 にこにこして 帰つて きました。駅の出口ま
 五25 10 会 した。駅の出口まで くと、でむかえにき
 五25 10 会 くと、でむかえにきていたおねえさんを
 五27 2 会 日でいつて 帰つて きたのですもの。どこ
 五28 10 会 をもらつて 帰つて くとちゅう、よその
 五29 3 会 。店をですこしく くと、どこかのおじ
 五38 3 会 お友だちから手紙が きました。そのかたは
 五39 3 手 冬がすぎて、春が きたからです。山のて

五42¹⁰ 手 まえを、いったりきたりします。一日じ
五48 っぽいながれこんできた。いい氣持がして
五52² 圃 になって わいてくる、わいてくる。
五52³ 圃 てくる、わいてくる。七星 ゆう
五54 さんが、かげよってきて、「略」。空のま
五56 略。「じゅんぽんがきたので、みせていた
五58 は、まもなく帰ってきました。ごろうさん
五59 た。私は、いまみてきた土星を、紙に
五64 4 さんからせわはしてきたが、日に日に大き
五66 のさかながかってきました。金のさかな
五67 5 一つも、もらってくればよかったのに。
五67 10 びますと、すぐでてきて、「略」。とき
五69 2 びますと、およいできてきました。「略」
五70 のさかながおよいできました。「略」。「へ
五72 金のさかなは、できていいました。「略」
五76 のにわから、持ってきてくれたのです。
五79 10 ら水がわきあがってくるようです。「略」
五80 4 ながあつくなってきました。七月十
五85 2 圃 「子どもたちがくるまでに、そこら
五85 7 よびながら、走ってきました。「略」。「へ
五85 8 圃 、みんなそろってきました。おや、おまつ
五85 10 圃 つさんはあとからきますよ。「略」。
五86 6 、ひとりの子どもがきます。りようかんさ
五93 7 大きな月がのぼってくるころでした。「へ
五97 4 り鳥のむれがとんできます。その中には、
五102 1 ます。人がときどきて、水道をつかいま
五103 2 てきます。すずめがきたとき、ひわが、「へ
五104 2 、くらい木の中からきたので、ひわが、「へ
五106 1 のまつの木におりてきました。ひわは、そ
五107 8 んが学校から帰ってきました。旅のひわは
五108 1 圃 み、きみ。おりてこないかい。ぼくの友
六7 5 おくからかかだしてきた。男の子と女の子

六8 7 計屋さんはいってきた。時計屋さんは、
六9 7 がまた心配になってきた。親子はそうが
六10 4 っぽいにさしこんできた。すると、ねじが
六12 1 おいて、町長さんがきた。「略」。「略」
六13 4 を運びながら歩いてくると、のどがかわき
六14 3 。けれども、だれもきてはくれません。「へ
六15 10 圃 の葉の船が流れてこなかったら、どうな
六18 10 うにしき台をおりてきて、あせをふきます
六21 7 びき、ゆっくりでてきます。大きな荷物を
六21 9 力をあわせて運んできます。きりぎりす「
六21 10 圃 おや、ありさんがきたよ。」バイオリン
六26 3 圃 て、「雪が降ってきた。」あり「今夜は
六26 5 圃 あり「三風がでてこなければいいね。ふ
六28 2 すが二ひきたずねてきます。ぼうしもかぶ
六28 10 圃 、だれかたずねてきたらしい。」あり「
六29 3 す一、二がはいってきます。あり「きり
六30 4 びんにいれてもってきます。それをきりぎ
六30 7 雪がたくさん降ってきます。——まく——
六35 6 圃 また、すごいのがくるぞ。」16 また、風
六36 4 圃 ああ、またふいてくるよ。早く、早く、
六36 11 圃 空がうす赤くなってくる。夕やけ雲がうか
六38 1 から、とびあがってくる親子のつばめ。27
六38 9 け、また、もどってきてかしの近くに
六40 2 圃 やい。すぐ帰ってきますから。」29 親つ
六41 5 かかしの方へとんでくる。35 親つばめと
六49 3 圃 ち、いつもでてくる小人たち。ふと
六54 6 圃 したが、「ここへきてごらん。ほら、よ
六58 5 年生の子が、学校にくる道で、はき物に雪
六58 9 して学校までつれてきました。この人は、
六62 4 した。くつが流れてきました。そこへきゅ
六62 4 へきゅうりが流れてきました。きゅうりが
六70 9 ねえさんが、帰ってきました。「略」。「へ

六86 9 とりの年よりがでてくる。年より「もしも
六89 5 そこへ女の人がでてきて、いどの水をくも
六90 9 っきの女の人がでてくる。女「海の神さま
六91 8 をあんないしてでてくる。海の神「さあ、
六93 9 たくさんつれてでてくる。女「魚どもをよ
六96 1 圃 つとこへよんできてくれないか。」女「
六96 3 、たいをつれてでてくる。たい「なにかご
六98 2 圃 ばりが、でてきて神さまお喜び。
六99 5 さな虫めがねがでてきた。「略」。」と思
六102 11 圃 。「おかあさん、きてごらんさい。早
六103 4 圃 んでもいいから、きてください。」ぼく
六103 7 ようにして、つれてきた。そうして、ぼく
六106 8 ぼくおんがきこえてきた。弟のだいすきな
六115 4 海外からひきあげてきた子で、來年小学校
六118 6 生きとうきあがってきました。つぎに骨の
六123 7 よろと、りすさんがきました。「略」。「へ
六128 4 。おにがあらからくると、こちらへかく
六129 9 圃 つて、追いかけてくるんだよ。」——
六133 3 圃 略。「ここまできたら、もう安心だね
六139 11 圃 。「いいところへきてくれた。おなか
六140 2 そり、そばに歩いてきました。うさぎさん
六141 5 圃 ら、あとをつけてきたのだ。」「略」。「
六142 8 、山のふもとにでてきました。やつと
六143 2 つばちさんがとんできて、「略」。「と、う
七4 2 夜明けの風が流れてくる。中庭のキャベツ
七4 9 圃 いちばんはじめにくるのは、だれかな。
七5 2 圃 鳴らして、走ってくる男の子かな。」朝
七5 3 光がななめにさしてきて。校舎の半分が光
七5 7 圃 の空にきえた。「きたきた。やつぱりあ
七5 7 圃 きた。」きたきた。やつぱりあの男
七8 4 学校のにおいがしてくる。しおがひくよう
七9 1 らラジオがきこえてくる。星のちらばった

七〇七 た。夜つゆがおりてきた。かしの木は、あ
 七一三 七を、書くことになってきたのだでしょう。「略
 七一六 の音楽が、ひびいてくる。学校の運動場に
 七二五 の唱歌が、きこえてくる。(二) 女の
 七二九 の子三「このまえきたときは、風が強か
 七三〇 ようちよがとんできた。」男の子三「白い
 七三二 、すずめがおりてきたよ。」兄「しずかに
 七三三 すずめはなにしくくるの。」すずめが、
 七三三 ちゃん。なにしくくるの。」兄「おおむし
 七三三 おむしをさがしにくるのさ。」はるお「あ
 七三三 葉を、まいとってきてね。ぼくは、びん
 七三三 いこんの葉をとってくる。兄は、しくび
 七三三 が、青くかわって来たんですよ。」母「は
 七三三 んが学校から帰ってくる。兄「おあさん、
 七三三 へ、はるおが帰ってくる。はるお「い
 七三三 さぶろうをつれてきたのでした。」「略」
 七三三 あったが、旅をしてきた私には、しみじみ
 七三三 のまえにもぼうしがきた。私も喜んで、い
 七三三 の声が耳にひびいてくる。センターが、外
 七三三 ルがビュッととんできた。ぼくは、しっか
 七三三 くのところにとんできた。ぼくはよこだき
 七三三 をすましてもどつてくる。たかやま先生
 七三三 生の唱歌がきこえてきます。つばきの花が
 七三三 ふつと、風がふいてきた。おあさんの鏡
 七三三 そとからとびこんできた。よつちゃんち
 七三三 月さん。毎日書いてきたあさがお日記。は
 七三三 かんを持って遊びにきている。よい天気。
 七三三 のさがして歩いてくる。甲「どこへい
 七三三 裁判官がはいってくる。裁判官「いった
 七三三 どこからにげてきたのではありませんかと、
 七三三 おくへはいってでてこないの、小屋へ頭
 七三三 、巣からはいだしてきました。草のそばに

七三三 ました。草のそばにきて、口をくつつけま
 八七二 たりしました。客がきてるときなど、あ
 八八二 、すぐまいもどつてきます。ろどころか
 八八二 へ飛行機でもとんでくると、そのあわてか
 八八二 るとき、追いかけてきて、かかと足の指
 八八二 して学校から帰ってきたすえの女の子が、
 八八二 ありありとうかんできて、思わずなみだぐ
 八八二 ができました。春がきて、たまごはその
 八八二 こで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をま
 八八二 。上からつたわってくるあたかさと、か
 八八二 からだが見だしてきました。せなかで
 八八二 も、はつきりとしてきます。黒いところは
 八八二 へなかが集まってきて、にぎやかな音楽
 八八二 びきの馬車が走ってきます。中には天帝が
 八八二 ている野原へおりてきました。そこには、
 八八二 をおる音がひびいてきます。天帝は、そ
 八八二 がり、ふえをふいてくる、わかい男にであ
 八八二 った、ふえをふいてきました。ふたりは、
 八八二 のたんぽぽをつんでくると、王さまは、「へ
 八八二 知らぬ人がはいって来ました。」「略」と
 八八二 き、王女がはいって来ました。」「略」と
 八八二 すというものができてきました。その人は、
 八八二 なものをさがしてきてほしい。そうして
 八八二 シャツをもらってくるように。」と、お
 八八二 らんの声がきこえてきます。王子はふと立
 八八二 幸福をわけておいてくるつもりでした。こ
 八八二 の人は、「幸福」がきたとは知りませんか
 八八二 の人も、「幸福」がきたとは知らなかった
 八八二 じきのようなものがきて、にわとりをぬす
 八八二 家の人も「幸福」がきたとは知らないよう
 八八二 すびを一つにぎってきて、「略」といっ
 八八二 たれて、いま歩いてきた足あとをみると、

八八二 目のまえにひらけてくる。いままでのぼつ
 八八二 。いままでのぼつてきた方をふり返ってみ
 八八二 むりをはいて走ってくる。みんな手をあげ
 八八二 ひるは、ひながでてくるまえに、もうつか
 八八二 ちはすぐとびだしてきた。そうして、みど
 八八二 略」と、たずねてきた年よりのあひるが
 八八二 ぐにうかびあがつてきて、うまくおよいだ
 八八二 う一わの鳥がとんできて、そのみにくいあ
 八八二 くらませて向かってきた。」「略」といっ
 八八二 とぬま地へはいってきた。あわれなあひる
 八八二 ますはげしくなってきた。あひるの子は、
 八八二 になつて、よそからきたあひるの子は、す
 八八二 氣と日の光が流れてきた。あひるの子は、
 八八二 れた。(四) 秋がきた。森の木の葉がこ
 八八二 そのうちに寒い冬がきた。あひるの子は、
 八八二 に、大きな庭の中にきていた。そこには、
 八八二 ちようがあらわれてきた。はくちようは、
 八八二 い思いがこみあげてきた。」「略」といっ
 八八二 ゆつたりと近づいてきた。「」「」かわい
 八八二 ようは、その受けてきたまじさとしあ
 八八二 は、そばへおよいできて、くちばしでかる
 八八二 た。小さな子どもがきて、水にパンや麦を
 八八二 うだ。新しいのがきた、きた。」と喜ん
 八八二 新しいのがきた、きた。」と喜んだ。子
 八八二 ていって、もらってきたパンやおかしをな
 八八二 はくちようのまえにきて頭をさげた。新し
 八八二 も、やつとめがでてきました。水にひたし
 八八二 つ新しいなえがでてきました。これで、も
 八八二 い葉がたくさんでてきました。新しい葉は
 八八二 は、まるまってでてきます。ずっと日
 八八二 をわけました。風のくる場所で、目の高さ
 八八二 きれいなお米がでてきました。 11月19日

14 9 おとうさんのそばへきて、あいさつをして
 16 7 「と、太郎がそばへきて、外国ではどんな
 18 2 1 黒い雲が流れてくる。はげしいにわか
 19 3 いる声が、きこえてくる。5 ひとりの子
 19 10 オルガンがひびいてくる。窓をあける女の
 21 3 、よちよちと歩いてくる。母親が、両手を
 21 4 手をのばしてついでくる。11 病院の庭さ
 23 1 川」の歌がひびいてくる。小川の水、きら
 25 1 の山。おしだされてくるトロッコ。ごうご
 25 4 坑内から地上にでてくる。まぶしい日光。
 25 7 どりで、家に帰ってくる。道ばたにさくた
 26 4 ゆうになつてかけてくる。工員は男の子を
 27 7 す。庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や
 34 2 やがて、困るときがくるにちがいない。そ
 36 2 はいよいよせまってくる。かれは、勇氣を
 38 5 しぎな宝石とされてきたが、しらべてみる
 40 5 はかかる。それが、くる年もくる年も、う
 40 5 。それが、くる年もくる年も、うまくいか
 41 6 新しく母員を求めてきて、やりなおしにか
 42 7 ども、はつきりしてきた。半円眞珠が思い
 43 1 び、赤しおがよせてきた。そのため、母員
 44 5 うまくを切り取ってきて、一種の手術をほ
 44 9 に、赤しおもよせてこなかった。海水の温
 52 12 た。門からもどつてきて、道にでたとき、
 54 2 、すいすいとういてきたかと思うと、また
 55 8 ふうにゆきづまってきたのでしょう。思う
 59 8 て、たくさん取ってきた。えんがわにつく
 60 1 かざった。月がでてきた。まんまるくてき
 61 1 けのこが一本はえてきました。私は、たけ
 66 7 会 そちらからふいてくる風にあたっても、
 67 6 会 がどつきを運んできてはたいへんだから
 69 4 のまん中にかかえてきました。「略。」「へ

12 11 へ、だんなが帰ってきました。すると、太
 11 4 9 く、山から運んでくるのもみえる。なに
 11 11 5 ポートが近づいてきた。「略。」「子ども
 11 12 3 春がさつて夏がくる。たんぼのわた
 11 13 7 遠い國から旅してきた旅人のような氣持
 11 19 6 ちが困つて頼みにくると、氣持よく、物
 11 20 3 金次郎が生まれてきたのです。だから、
 11 21 12 毎晩、家に帰ってくる、晝まの働きで
 11 23 5 うにか切りぬけてきましたが、いまはど
 11 24 3 会 っ木を切つてきてもうけますよ。」
 11 24 8 会 返してもらつてきましょう。」母親は、
 11 24 12 、子どもをつれてきました。そうして、
 11 27 5 ました。お正月がくると、例年のことで
 11 27 5 かぐらがまわつてきました。たいこをた
 11 32 7 会 を、海こえてきたつばくろが、す
 11 37 2 会 すずしくなつてきた。さやまめ・と
 11 37 4 会 いももふとつてくるようす。あまが
 11 38 10 会 りも高くはえてくる。かえでにうる
 11 47 2 峽をこえて内地にきたのは、ぼくの二年
 11 51 9 れながら、電車のくるのを待つていた。
 11 51 10 ていた。電車は、くるにはくるが、みな
 11 51 10 電車は、くるにはくるが、みな満員の札
 11 52 7 ぼたぼたと落ちてきたりした。けれども
 11 63 9 近くにある村からきたのです。少年の
 11 64 1 イタリアへ帰つてきて、ナポリに上陸し
 11 65 8 会 外國から帰つてきた——と、看護人
 11 65 12 会 外國から帰つてきたのです。「略。」「
 11 67 4 たドアのまえまできますと、その中には
 11 70 8 会 いなからでてきたんですよ。おかあ
 11 71 7 会 医者さんがみにきてくださるだろう。
 11 72 10 会 。それでぼくがきたのですが、どこが
 11 73 5 のはしにはいつてきました。さっきの看

11 73 9 そばのベッドまできました。医者は、せ
 11 74 3 会 う、いなかからきたのでございます。
 11 76 5 か飲み物を持つてくると、コップなりさ
 11 77 8 した。医者は二どきてみて、いくらかよ
 11 78 12 、看護婦が持つてきてくれる、すこしば
 11 81 9 のへやにはいつてきました。少年は、す
 11 82 4 少年の方へとんできました。少年は、父
 11 82 9 助手がかけよつてきました。少年は、ま
 11 83 5 会 っ。」「って手紙がきたきり、おまえがこ
 11 83 5 会 きり、おまえがこないから、どんなに
 11 86 7 会 。ここへつれてきたときには、もうす
 11 89 4 ら白くさしこんできたとき、医者が、看
 11 89 5 をつれてはいつてきました。「略。」「と
 11 91 2 プの中から取つてきました。そうして、
 11 92 11 んと口へのぼつてきました。「略。」「そ
 11 96 10 とりの少女がでてきましたので、「略」
 11 97 3 きの一枝をおつてきて、それをしずかに
 11 98 5 から家へもどつてきました。「略。」「と
 11 99 6 会 とで家に帰つてくるのは、ちょうど、
 11 10 5 人のそばによつてきて、「略。」「とたず
 11 14 1 しゆの色がさしてきた。文雄は、それが
 11 23 2 たちがひきあげてきました。せまい家な
 11 25 3 。学校から帰つてくると、わたしは民ち
 11 29 5 、学校から帰つてくると、姉が大さわぎ
 11 29 11 このごろふとつてきて愛らしくなつた民
 11 31 4 、サリバン先生がきてくださった日であ
 11 32 4 。私は、近づいてくる足音を感じました
 11 32 12 私を愛するためにきてくださった——そ
 11 36 1 がぼうしを持つてきてくださったので、
 11 37 5 ような、めばえてこようとする心のはた
 11 40 7 るサリバン先生にきていたくことにし
 11 46 11 会 動物などもでてくる。それが音楽や歌

十二 47 11 ㊦ ろさが生まれてくるのだ。たとえば、
 十二 58 1 けっして村へでてきてはならない、もし
 十二 60 1 、朝から集まってきた。長者は、なんと
 十二 60 8 くれそうになってきた。このとき、高ど
 十二 60 12 ほどまでもどってきた。それで、のこり
 十二 61 10 きはいつもここへきて、岩屋の入口で頼
 十二 62 9 、のどがかわいてきた。水を飲もうと思
 十二 71 1 うして、毎朝早くきては、芭蕉のおきな
 十二 71 7 そのうちに、冬がきて、くもった空がひ
 十二 71 12 まだなにも降ってきもしないのに、「略
 十二 73 5 ぶのものが落ちてきて、子どもたちや、
 十二 74 5 れがたから降ってきた。みるみるう
 十二 74 8 もたくさんとってきてくれてあるし、そ
 十二 75 10 ㊦ に降るのによくきたな。」「略。」「へ
 十二 75 12 ㊦ と、どうしてもくずにはいられません
 十二 76 6 なにか持ちだしてきました。それは、赤
 十二 77 9 けい場にもどつてくると、中国人らしい
 十二 89 7 いかたもかわつてくるであろう。食事の
 十二 92 4 みじの枝をとってきたこと——そんなこ
 十二 92 10 それぞれちがつてくるのも、やはりこの
 十二 93 10 とばがみがかれてくる。(三)「赤
 十二 94 8 のが思いだされてくる。太郎は、秋の青
 十二 95 4 の学校にうつってきたときのことを思い
 十二 95 12 よつて生かされてくる。十一 ある写
 十二 109 8 も外國から渡つてきていましたから、こ
 十二 110 1 が新しくはいってくることは、外國人の
 十二 110 3 、どんな育つてきました。まき絵書
 十二 111 4 にもてはやされてきました。浮世絵
 十二 115 3 な歩みをたどってきた日本を、これから
 十三 5 10 は、希望の帰ってくるとき。新しい勇氣
 十三 6 3 からここに帰つて来て、私たちの頭上に
 十三 6 10 いて、おしよせて来る。ああ、そのさか

十三 7 5 めぐつて、聞えてくる。ああ、季節のこ
 十三 13 6 とが、目につけてきたのです。熱心な学
 十三 13 12 に、地動説が出てきました。これを最初
 十三 22 2 は、年々高まつてきました。しかし、問
 十三 28 5 の方からひびいてくる、いろいろなもの
 十三 28 8 の賣りが鳴らして来る鳴りものの音がお
 十三 29 4 れている。糸屋が来る。荷車をひきなが
 十三 29 4 、ゆつくり歩いて来る。でんでんだいこ
 十三 29 7 人たちが集まつて来て、糸屋さんにとり
 十三 29 10 続く。いかけ屋が来る。これも、いろい
 十三 32 1 がら、ふれ歩いて来る。やつと目がさめ
 十三 35 2 の意味がわかつてくると、いつそうその
 十三 35 10 えが天から鳴つてきて、ホートンをにぎ
 十三 36 1 れになつてとんで来ると、ふえの音がお
 十三 36 4 ちらちらと降つてくるのも、このころで
 十三 36 5 たくさん舞つてくる。小さな光つたわ
 十三 36 7 づつ、風がふいてくると、ころころとこ
 十三 37 5 鳴る。だれも出て来ない。一どとぎれて
 十三 37 7 たままとびこんで来て、受話器をとる。
 十三 38 4 ㊦ のごろちつとも来てくだらないじや
 十三 39 2 ㊦ やんが、帰つて来たんですか……いつ
 十三 39 2 ㊦ ……え、うちに来たんですか……へえ
 十三 40 5 ㊦ マンシュウから来た竹田さん、おいで
 十三 40 9 ㊦ きよう、うちに来たんだって……うん
 十三 41 12 ㊦ ん。それで今晩来るんだらう。六時ご
 十三 43 1 ㊦ 台のまん中に出て来る。三郎 手紙を読
 十三 43 2 ㊦ 生きて帰つて来ました——か。(顔
 十三 43 3 ㊦ 生きて帰つて来ました……)しほら
 十三 43 8 ㊦ ちゃんか帰つて来たんだってね。よか
 十三 44 4 ㊦ いは、舞台に出て来る人が、ただひとり
 十三 44 9 ㊦ シュウから帰つて来た眞二くん、おしま
 十三 47 9 ㊦ ぶがぴきとんで来る。はるかな谷川を

十三 50 6 、そうじに行つて来るよ。ちよつと落ち
 十三 50 9 ない。すぐ帰つて来るんだから、きみも
 十三 51 1 つかまえに行つて来るよ。母うしのそば
 十三 51 5 だよ。すぐ帰つて来るんだから、きみも
 十三 54 9 、世界をまわつて来た人です。だから、
 十三 55 1 ㊦ 。「ああ、よく来たね。なにかおもし
 十三 58 6 ㊦ いに、旅行して来なくちゃだめですね
 十四 4 7 、そこからさしてくるとうとい光のため
 十四 6 2 胸にまでせまつてくるではありませんか
 十四 14 12 ㊦ ことが思われてくるのです。おかあさ
 十四 15 11 ㊦ いしに行く日のくるまで、いままでよ
 十四 20 5 外國からはいつてきたことばが、いろい
 十四 23 7 ㊦ 國からはいつてきたことばは、英語だ
 十四 23 8 ㊦ ろいろはいつてきている。たとえば、
 十四 24 5 國からはいつてきて、日本語になつた
 十四 24 6 、ふしぎになつてきた。それで、私は、
 十四 24 11 つしよにはいつてきたので、たとえば、
 十四 25 3 とが心にうかんできた。ものとことばが
 十四 25 6 が世の中にできてくると、ことばも、そ
 十四 25 9 れそんな気がしてきた。それから、外國
 十四 25 10 ことばがいつてきたのは、品物からだ
 十四 25 11 問などが傳わつてきたときに、そのこと
 十四 25 12 つしよに傳わつてきたのにちがいない。
 十四 26 1 、日本にはいつてきた西洋医学は、はじ
 十四 26 4 ギ医学がいつてきたときに、また、チ
 十四 26 6 ツ医学がいつてきたときにそれぞれ傳
 十四 26 10 洋音楽がいつてきたときに、いつしよ
 十四 26 10 つしよに傳わつてきたことばである。
 十四 26 12 の油絵がいつてきたときに傳わつてき
 十四 27 1 たときに傳わつてきたのだということが
 十四 27 3 ことばがいつてきたのだらうかと思つ
 十四 27 6 ㊦ いてい大陸からきたことばだ。それが

十四277㊦ 時代にはいつてきて、長いあいだつか
 十四278㊦ ように思われてきたのだ。」とおし
 十四2710 研究で、外國からきたことばの中で、西
 十四2710 中で、西洋からきたことばをできるだ
 十四2712㊦ れば、外國からきたことばが調べられ
 十四283㊦ いてい西洋からきたことばと思ってい
 十四284㊦ 。たくさん出てくるよ。それから、外
 十四288 って、家に帰ってきた。三星の光
 十四343 です。こうなると、うちゅうとい
 十四378 しぜんにわかつてくるはずです。もし、
 十四388㊦ 明かるくなってくる。」三人の朝が近
 十四394㊦ 「みんなの朝がくる。」一人の「わたし
 十四395㊦ の、楽しい朝がくる。」五人の深呼吸
 十四4011㊦ 由の光がさしてくる。」みんな「平和と
 十四416㊦ 「朝風がふいてきた。」一人の「山もは
 十四417㊦ はっきり見えてきた。」三人の「わたし
 十四418㊦ ちの前に、朝がきた。」一人の「みんな
 十四428㊦ すりや、なにごようと、平氣じやな
 十四437㊦ すりや、なにごようと、平氣じやな
 十四4512 れいな歌が流れてきました。それは女の
 十四4811 ました。助け船のくるのを待つ間、ほか
 十四502 めをぬって助けにきてくれました。やは
 十四5010 れの耳にひびいてくるように感じられる
 十四574 やどやとはいってきたものがあります。
 十四611㊦ でした。人間が来て、まいてくれたの
 十四627 たがいがおこってくるはずです。ただ一
 十四644 の研究でわかってきました。そのしんに
 十四685 下からふきこんできて、大きなうずがで
 十四726 りみだれてできてきます。これに日光を
 十四749 ことにも関係してきます。そうすると、
 十四7411 えんがつながってきます。地面の空氣が
 十四7510 畑の上からとんできて、森の上へかかる

十四774 ていると、祖父が来て、「木もと竹うら」
 十四844 から地上へ降ってくることを写して
 十四8412 た。空から降ってきた雪の一ひらを受け
 十四852 空を旅して降ってきたか、おのずから知
 十四8511 ふんだんに降ってくる雪の中から、一ひ
 十四902 きりなしに降ってくる。寒いことも寒い
 十四909 。二台の荷馬車が来たので、それをさけ
 十四977 方へずつとよってくるではないか。ああ
 十五96㊦ 口に話しつつ来る子どもと子ども
 十五205 リカ人の一家族が来て、しばらくとまっ
 十五2010 れて、散歩に出て来るのです。ニュー
 十五232 の上へ舞いおりて来ます。「略。」とい
 十五244 じをふておりて来ていますと、急に目
 十五246 かんて舞いおりて来しました。いまそれを
 十五276 年の氣にかかつて来しました。とにかく、
 十五299 年にとびかかつて来しました。両方とも必
 十五2911 、昔の物語に出てくる英ゆうのように、
 十五302 こうと、向かつて来しました。けれども、
 十五307 きおいでせまって来しました。その目、そ
 十五311 ほどこまでせまって来たこのあくまの胸を
 十五323 いう人声が聞えてきました。少女の両親
 十五324 、大急ぎでおりて来たのです。ようやく
 十五325 いる岩角近くまで来しました。けれども、
 十五331 じかいが集まって来ており、父親のうで
 十五357 だんりやくされてきたものが、文字とい
 十五384 たとおりに読んできたが、中國の発音に
 十五455 むずかしくなってきた。そこで、日本の
 十五471㊦ この店に持って来ますが、なにぶん作
 十五495 ことのできる日がきた。しかし、このよ
 十五501㊦ かくうけついでできたこのしごとは、ぜ
 十五547㊦ 博士からいつてきていた日本の学徒、
 十五599㊦ 人が舞いこんで来たものだ。それなら

十五644 あとを追って出て来られたが、門を出て
 十五664 っても、せつ々がくるごとにその人形を
 十五673 スの日がめぐってきた。新島家のとなり
 十五685㊦ が、「満ぼうが来た。みんな早く出て
 十五685㊦ いで、満ぼうが来たよ。」と、家の人
 十五699 京都までもつれて来て、朝夕かわいがっ
 十五715㊦ にお寺へ行つて来ましよう。そうして
 十五7412 、ここからわいてくるのだ——と、テー
 十五805 ず、世をすごしてきたばかりでなく、実
 十五807 それあつたりして来しました。友愛の精神
 十五8011 なたがたの時代がきたときには、私たち
 十五8210 、はじめはいつて来たとき、すこしはに
 十五929㊦ こら、チロー。来いというのに聞えな
 十五933㊦ 、おまえもすぐ来い。」いぬぶつぶつ
 十五9410㊦ だらう。どこへ来たのかしら。」光「同
 十五959㊦ ちをあんないに来た。」チルチル「あの
 十五9612 くからかけだして来て、子どもたちのま
 十五971㊦ 。どこから出て来たのだろう。だれな
 十五993 の中へかけこんで来て、ありったけの声
 十五997㊦ ん人に知られてくるね。(幸福に向か
 十五10411 ルチルに近づいて来ます。鼻を指ではじ
 十五1054㊦ あなからにげて来た「とてもたまらな
 十五1088㊦ 、ちつとも出て来ないのは。」幸福「あ
 十五10812㊦ の。」幸福「いま来ようとする新しい」
 十五1096㊦ こちらへかけてくる。あれが、あなた
 十五1099 急いでかけよって来た「喜び」たちは、
 十五1111㊦ 日の光がさしてきてね。」チルチル「お
 十五1151㊦ 上まであがって来たのは、これから下
 十五1154㊦ いまだけ天國に來ていると思つて
 十五11512㊦ こまであがって来られたの。人間が地
 十五1164㊦ あの人がつれて来てくれたの。」母の
 十五1175㊦ 光「がとうとう来てくれました。」

十五118 9 ㊦ す。ときはまだ来ないのです。でも、
十五118 10 ㊦ 、いまにきつと来るでしょう。そうし
十五118 11 ㊦ おそれず帰って来ます。さようなら。
十五120 3 ㊦ とが思い出されてきた。はじめてこの字
十五120 4 ㊦ はつきりうかんできた。在校生たちがみ
十五121 8 ㊦ 謝の念があふれてきた。それはなんととも
くるい ㊦ (名) 1 くるい

七41 8 ㊦ かなり早く走っているの、青年のからだ
はゆれていたが、ひく手にくるいはなかった。

くるう ㊦ (五) 1 くるう 《ーッ》

八81 6 ㊦ おまえさん、気がくるったのだよ。

くるくる ㊦ (副) 6 くるくる

四54 7 ㊦ ほうたいをもつていたが、手早く
くるくるとまきつけました。

五6 9 ㊦ 水車をくるくるまわし、たんぽに水をいれ、
はたけにも水をまいていく。

六32 2 ㊦ 目だまの「の」の字がくるくるまわる。

六35 10 ㊦ くるくるまいながらおちていくかし。

八84 6 ㊦ あひるの子は、水の上を車のようにくるく
るまわり、その首をはくちようの方へさしのべ、

十三38 11 ㊦ その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるく
るまわしながら、楽しそうなようす。

ぐるぐる ㊦ (副) 7 ぐるぐる

三65 5 ㊦ おとうさんは、ボートをこいでぐるぐる
ぐるぐる おまわりになりました。

三65 5 ㊦ ぐるぐる ぐるぐる おまわりになりました。

四106 3 ㊦ かめは、うらしまの手をとって、そこら
をぐるぐるとあるきまわります。

六34 8 ㊦ かかしの目だま、ぐるぐるまわりながら、
大きくなったり、小さくなったりする。

六101 4 ㊦ そうして、その一まいをぐるぐるとまいた。

六101 9 ㊦ つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐる
とまいた。

十二26 7 ㊦ なにかとりつく物があるとすぐに立ちあ
がって、そのまわりをぐるぐると歩きます。

くるくるくるくる ㊦ (副) 1 くるくる、くるくる

十一15 8 ㊦ オルガンのキイから、《略》小鳥が、は
ばたいてでで、くるくる、くるくる、ぼくたちの

頭の上を、まわりはじめる。

くるくるまい ㊦ (舞) (名) 2 くるくるまい くるく
るまい

七57 2 ㊦ 紙が、くるくるまいをしてとんでいる。

十五32 10 ㊦ 大わしは、空中をころぶように、くるく
るまいをして、《略》落ちて行きました。

ぐるぐるまわり ㊦ (回) (名) 2 ぐるぐるまわり

三64 8 ㊦ 右手と左手を はんたいに こいだら、
ぐるぐるまわりをするばかりだ。

三66 2 ㊦ おとうさんはそういって、また ぐるぐ
るまわりをなさいました。

くるしい ㊦ (苦) (形) 8 くるしい 苦しい 《ー
ーイーカッ・ーク》

四62 8 ㊦ さすがのへびも、いきが くるしくなっ
たので、力をゆるめました。

六109 9 ㊦ 自分ではなをつまんで、《略》、「ミ」、「ム」
と試みてみた。苦しい。

六111 10 ㊦ 「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。

九133 2 ㊦ それより、自分のからだははれてくるし、
いたいし、苦しくてどうにもなりませんでした。

九134 4 ㊦ いつのまにか、いまままで苦しかったからだ
のいたみもきえていきました。

十一71 4 ㊦ 病人は、身動きもしないで、苦しそうに
息を続けていました。

十三18 8 ㊦ この苦しいときにうちかつことのできる

國民だけが、《略》、さかえるのであります。

十五31 12 ㊦ その中で、女の子を後にかばいながら、
少年は苦しい戦いを続けていました。

くるしげ ㊦ (苦) (形状) 1 苦しげ

十五25 12 ㊦ さすがの大わしも、《略》、羽ばたきも苦
しげに、《略》舞いおって行きました。

くるしまぎれ ㊦ (苦紛) (名) 1 苦しきまぎれ

十五31 8 ㊦ 鳥はさけび声をたてて、苦しきまぎれに、
いっそうするどくとかばかりです。

くるしみ ㊦ (苦) (名) 3 苦しき

十四41 10 ㊦ うめは、いつもこのわる口のためとなつて、
幸吉をかばい、苦しみにたえて、なん年かをすご
した。

十四4 10 ㊦ そうして、心の正しい人々の苦しみを、
自分もともに苦しんだのです。

十四5 7 ㊦ おさないころから、人の世の苦しみをい
ろいろとなめていたからのことでした。

くるしむ ㊦ (苦) (五) 11 苦しむ 《ーマ・ーミ・ー
ン》↓おくるしむ

六96 7 ㊦ つりばりをのどにかけまして、たいへん
苦しんでいるところでございます。

八87 9 ㊦ あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どん
なに苦しんだか、

九19 9 ㊦ 寒氣のために苦しんでいるつばめのせわを
することを、

九61 2 ㊦ どうも、毎年この裁判で苦しみます。

九139 3 ㊦ いましがた、みつばちにさされて、苦し
んだことも知っています。

十二35 1 ㊦ 「ゆのみ」と「水」とでたいへん苦しん
だあとでした。

十二35 3 ㊦ サリバン先生は、《略》を、はつきり教
えるために苦しまれたのですが、

十四48 フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

十四410 そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。

十四442 他人のためにもことばをもて、なやみ、苦しんで他人のためにも。

十五508 窓 よし、どんなにお金に困っても、どんなに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。

くるっと (副) 1 くるっと
十五111 とうとう、くるっと、うしろを向いてしまったわけです。

くるま [車] (名) 9 車 じうばくるま・にくるま・はくるま・みずくるま・やぐるま

二642 りょううでを車のようにうごかす。
三1158 そこで、よいの車にのって、しずかに天へのぼっていきました。

八284 川岸にそって車を走らせていくと、
八846 あひるの子は、水の上を車のようにくるくるまわり、

十一528 電車は、歯ぎしりでもするように車の音をたてて、あらしの中をつき進んでいく。

十三334 だから、車の動いている間、たえまなく、「キリキリ、リリリリ」がひびく。

十五602 自動車に、ためらう私をおしこみ、一路自たくへと車を走らせた。

十五659 小樽で目についたといつて、車のついたみごとなおもちゃを私に送ってください。

十五6512 これから車のついたものは送ってくださるなど、くじょうの手紙を京都へ送ったりした。

くるまる [包] (五) 2 くるまる 《——リ》

七959 その毛にくるまって、うさぎの子が7ひき

いました。

十五828 とてもほんとうと思えないほど、ふとっていて、びろうどや、にしきにくるまり、

くるみ [胡桃] (名) 11 くるみ
六1229 うさぎさんたちは、くるみの木の下で遊びました。

六12210 そこには、くるみの実が、ころころと落ちていました。

六1231 うさぎさんは、くるみをひろって、石でわってたべることにしました。

六1233 窓 「このくるみを持っていって、山のてっぺんでたべよう。」

六12310 窓 「くるみをわっているんだよ。」
六1242 窓 ぼく、くるみだいすきなんだ。

六1244 窓 りすさんは、くるみがだいすきだそうだから、あげようか。

六1247 りすさんは、両手に、くるみをにぎって、おいしそうにたべました。

九5211 すこしいくと、一本のくるみの木のこずえを、りすが、ぴよんぴよんととんでいました。

九5310 ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、
十三501 わたしたちが、さくらんぼと、くるみの

ぐるりと (副) 1 ぐるりと
七743 そうして、ぐるりとわをかけ。

くれ [塊] 1 つちくれ
くれ [暮] 1 ぐれ・ゆうぐれ

クレイン (名) 1 クレイン
五331 かんばんのクレインが、あがったりさがたりして、荷物をつみこんでいます。

くれかか [暮] (五) 1 くれかか 《——ル》
六4010 日がくれかか。

くれがた [暮方] (名) 4 くれがた

七631 小さな虫がかたまって、顔のところとんでくるくれがた。

七701 くれがたの庭そうじ、それがすむのをまつていたのか、すぐうしろに、月は、音もなく、のっそりとでていた。

八768 くれがたになって、あひるの子は、ある小さなひやくしょうの小屋へやってきた。

十二744 芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれがたから降ってきました。

くれきる [暮切] (五) 1 くれきる 《——ラ》
六425 窓 さあ、みなさん、日がくれきらないうちにおねがいします。

くれたま [呉給] (五) 5 くれたま 《——エ》
二274 窓 きみ、どいてくれたまえ。

二279 窓 きみこそどいてくれたまえ。
六1301 窓 どこかへいってくれたまえ。

六13211 窓 「ぼくも、かけっこのなかにいれてくれたまえ。」

十五1014 窓 きみたちの名まえを聞かせてくれたまえ。

クレヨン (名) 6 クレヨン くれよん
一146 ほん一さつ、ちょうめん二さつ、いろがみ五まい、くれよんひととはこ。

三964 クレヨンでかくこともできます。
六1182 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、

六1371 そうして、木の切りかぶに、つぎのようなことが、赤いクレヨンで書いてありました。

十四209 クレヨン、ペン、ナイフ、ゴム、ランドセル、ピアノ、オルガン、バイオリン、

十四239 窓 クレヨン、ズボンはフランス語、

クレヨンが (名) 1 クレヨン画

七92 星のちらばった青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ。

くれる 「呉」 (下二) 122 くれる 《レ・レール》
↓おくれる

一481 四かくな かみに、まるい おおきな はん
を おしてくれました。

一601 みんな よろこんで、めいぶつのおだんご
や、おもちを、ごちそうしてくれました。

一6510 おかあさんは、わたくしを ひぎのうえに
だきあげてくれました。

二343 画 もしもし、ちょっと その ぞうという
ものに、さわらせて くれませんか。

三156 「略。」と いうて、とおしては くれま
せん。

三781 画 あしたの あさも、お日さまは きつと
かえって きてくれる。

三925 こうえんに さいた きれいな 花は、みん
なの 心を たのしませて くれます。

三992 どんな ところでも、紙は、字や
えをは こんで くれます。

四48 学校にはいる 子どもも、いちいち 知ら
せて くれます。

四52 こうえんの せわや、どうろの そうじなど
も してくれま。

四59 手紙や 小つつみなどを おくって くれま
す。

四61 いそぐ ときには、でんぼうを うって く
れます。

四62 どんな ところへでも とどけて くれます。
四64 もつといそぐ ときには、でんわを とり
ついで くれます。

四72 人々の たいせつな もちものを まもって
くれます。

四74 もつと たいせつな からだを まもって く
れます。

四79 火事がおこらないように、また、わるい
びょうきが はやらないように、氣をつて くれ
ます。

四82 こんざつする 町かどでは、きちんと せい
りして くれます。

四84 まい子を うちまで おくりとどけて くれ
ます。

四272 手 もうしばらく ないて くれたら、かご
からは なくて あげるよ。

四282 手 ぼくを のせて くれな かな。

四299 じぶんで じぶんに きて みて、なか
なか はつきりした 返事を してくれない。

四402 画 ただし ことばは、《略》お友だちに
なつたり、先生になつたり してくれま。

四452 画 かっちゃんがおしまいに してくれ
て いったから、そう したんじや ないか。

四466 画 おとといは、一ぼん せんとうに して
くれつて いったのに。

四986 画 そうだ、わたしに この かめを うつて
くれな いか。

四996 画 うつて くれる かね。

五185 《略》を、それぞれひとかたまりに わけて
くれました。

五1811 こんなに だいいじに してくれますから、おち
る 心配は ありません。

五2310 画 おかけなさい。』と いうて、かけさせて
くれたんです。

五2410 画 せきを すこし あけて くれました。

五319 画 本を だして、『略。』と いうて、ぼくに
くれました。

五623 画 花の色を 空色に そめて くれたのは、だれ
でしょう。

五6611 画 それが、海へ 帰してくれ、お礼は いくら
でも あげると いうたが、

五748 おばあさんは、おじいさんには 目も くれな
いで、けらいに、『略。』と いうつけました。

五782 画 だれが いて くれたのですか。

五786 ひまわりの 花は、いけださんが 自分の うち
の わから、持つて きて くれたのです。

五965 《略。》と、となりの おじさんが おしえ
て くれました。

六143 けれども、だれも きては くれま せん。

六199 画 みどりの 木の 葉は 喜びに みち、きよらか
な 風は、われわれの 音楽を ほめて くれる。

六961 画 「それでは、たいを ちよつと ところへ よん
で きて くれな いか。」

六1071 みんなも あまり わらつて くれな いか。

六1221 画 うさぎさん、その まつかさを くれな いか。

六13911 画 いいところへ きて くれた。

六1405 助けて くださいと、お願い した ところで、
ゆるして くれる みこみも ありません。

七93 画 わたしを うえて くれた 卒業生 たちは、ど
こに どう している だろう。

七1311 「手」と いう ことばも、さまざま な はたら
きを してくれま。

七381 私たちの ために、せい いっぱいの 力で、す
きまを こしらえて くれた いたのです。
七385 《略。》うしろのおばさんが いて くれ
ましたので、
七398 《略。》と、送つて くれました。

八78 まるで、一日の幸福を予言してくれるようです。

八132 信用してくれていたものを、あやまちのためにあわれに死なせたというなさけなさは、

八146 親せみが、〈略〉、かたい皮にあなをあけて、ていねいに生みつけておいてくれましたので、

八173 それは、だれも教えてくれたことではありません。

八4410 「わたしの病氣をなおしてくれたものには、國の半分をわけてやる。」

八4910 どの家をたずねても、みんな喜んでむかえてくれるにちがいありません。

八507 そんなまずしいなりをしても、それでも、自分をよくむかえてくれる人があったら、

八548 「〈略〉。」といってくれました。

八5410 黄色なたくあんまで、そのおむすびにそえてくれました。

八611 それに、たずねてくれるものも少ないし、八716 遠いところにくれさえすればいい。

八718 にわとりにはこずきまわされ、えさをくれるむすめには足でけとばされた。

八917 大きなはくちようたちは、そばへおよいできて、くちばしでかるくなでてくれた。

八918 小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげてくれた。

九113 はじめに、川の水の音をたたいてきかせてくれた。

九117 おしまいに、海岸で波のくだけるところをきかせてくれた。

九4311 ほしがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしとおし、のき下につるしてくれます。

九7810 主人も、くわや、ふごや、かごなどを持つてきて、かしてくれました。

九898 はなしてくれつたら、ぼくはやるよ。

九1213 帰り道で、父は次のような話をしてくれた。

十812 「〈略〉。」といながら、おとうさんにわけてくれる少女もありました。

十97 その少女のわけてくれたくりは、

十1111 ひろい集めた落ち葉を持ってきて、おとうさんにくれるようになりました。

十122 なるべく、小さな葉をくれませんか。

十124 少女たちは、〈略〉、小さなのをえらんで、ひろっててくれました。

十139 テーブルをかこんで、いなかの歌を歌ってきかせてくれました。

十141 そういかわいらしい子どもがいて、なかよしになつてくれたからです。

十335 ほかのことを考えないで、みっちりしごとをやってくれ。

十362 世間からはますますわられて、だれひとりあいてにしてくれなくなり、

十4010 あざけられ、からかわれても、その助力者となつてくれたのは、つまのうめであつた。

十4312 うめ、おまえも喜んでくれ。

十677 次郎かじや、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやつてくれ。

十707 それだけはよしてくれ。

十11710 みんながさせてくれたら、コックスのまえにすわって、整調をやってみたいな。

十1112 いい整調が、りっぱに日本じゅうの足なみをそろえてくれるにちがいないよ。

十1222 おとなの人たちはおどろいて、すぐには受けてくれませんでした、

十1231 すぐには受けてくれませんでした、お

しまいには、喜んではいてくれました。

十1277 百文はらうと、おもしろい藝をしてみせてくれます。

十17812 一日に二ど、看護婦が持つてきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、

十1813 ぼくにはだれも教えてくれるものがありません。

十2624 そののちは、だれがなんと頼んでも、かしてくれなくなったという。

十2747 曾良が水をたくさんくんでおいてくれたし、

十2748 まきもたくさんとつてきてくれてあるし、

十2813 この二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをいつてくれていることを知って、

十3215 自然は、このむずかしい問題を、かならず解決してくれるにちがいない。

十3228 ダルガス、おまえがくれるといった材木を、さあ早くもらいたい。

十3422 見せたいものだって……なにを……それきみにくれたの……マンシュウの子どもが。

十4773 ご自分にはまだ子どもたちがのこっている、子どもたちはじゅうぶん愛していてくれる、

十4711 おとうさんのご一生は、私たちにとつての手本になつてくれるでしょう。

十4911 自分を愛してくれる子どもたちのことを思つて、

十4102 ランプについては、いろいろなことを教えてくれました。

十4127 この式のランプをつかっているというのが教えてくれたことなのです。

十43710 星は、きつと、あなたがたに力をあたえてくれるにちがいありません。

十四43 1 罇 どんな暗い日だって、それが明かるくしてくる。

十四43 10 罇 どんなさびしい日だって、それが元氣にしてくれる。

十四50 2 やがて、一そののボートが、やみをぬって助けにきてくれました。

十四61 1 罇 人間が来て、まいてくれたのだった。

十四61 2 罇 その人間がせわをしてくれなかったら、

十四77 5 「木もと竹うら」ということわざを教えてくださいました。

十四79 9 「略。」と教えてくれました。

十四85 5 こんなことばによって、映画は私たちに説明してくれた。

十五19 10 深い深い谷の上を、登山電車がわれわれを運んでいってくれます。

十五57 4 罇 その一つに日本の青年をとまらせて、そのせわをしてはくれまいかと、

十五58 1 罇 そのかわり日本語を教えてください、その申し出でを承知して、

十五75 8 日本へ帰ったら、新島夫人にきょうのゆかいな会見のてんまつを伝えてくれといひながら、

十五102 11 罇 いつでもすこし悲しそうにしているのは、だれもふり向いてくれないからです。

十五116 4 罇 「あの人がつれて来てくれたの。」

十五116 9 罇 あの人、おまえたちふたりをかわいがって、たいへんしんせつにしてくれるそうだね。

十五117 5 罇 「光」がとうとう来てくれました。

十五120 5 在校生たちがみんな、私たちのために送別の歌を歌ってくれた。

十五121 1 罇 みんな元氣で、この学校を愛してくれ。

十五123 5 楽しい六か年の思い出を残してくれたこの運動場、この校舎、あの農園、

くれる 「暮」(下) 8 くれる 《—レーレル》

三51 5 罇 かつちん かつちん 日がくれて、火花がみえるのみのさき。

四88 6 罇 山は大雪、日はくれる。

四119 2 罇 とほうに くれた うらしまは、あけてみました、たまてばこ。

六43 7 それをつつむようにして日がくれる。

八47 5 日がくれましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。

九30 1 罇 くれていく菓をはるくものあお向きに

十二39 1 できごとの多かったこの日もくれて、

十二60 8 もうあとわずかというところで、日ははや西の山に傾いて、くれそうになってきた。

くれる 「樽」 じふしくれる

くる 「黒」(名) 7 黒 じろくろぶち・まっくろ

七88 2 にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白が、けんかをしてたべました。

七92 9 うさぎの毛の長さを計ってみたら、白は2cm、黒も2cm、茶は1・5cmでした。

七96 7 7 ひきの子うさぎのうち、5 ひきはねずみ色、1 ひきは白、もう1 ひきは黒でした。

七97 8 黒の子うさぎが、ちちをのうとして、親うさぎのちにすがりつきますと、

七99 3 耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6cmでした。

九127 3 黄色と黒のしまもようのついた大きなくもでした。

一41 4 でんとうのしたを、くろくすうつととんだ。

四16 6 くらい かげがついている。

四93 8 降ってくる雪はみんな黒い。

四94 4 えんとつからすがとぶように、黒い、こまかいものがとんでいる。

四95 4 降っている雪を上からみると、白くて、黒くはない。

四133 6 罇 黒い ころもの そろいで まえば、月はまっ黒、やみの夜。

五51 1 罇 あみひく人の 黒いかげ 黒いかげ。

五51 2 罇 あみひく人の 黒いかげ 黒いかげ。

五86 11 罇 黒いかみのけがふさふさして、まるい目が二つあって。

五88 4 罇 黒い ころものに赤いおび——かわいいよ。

七86 3 先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶色のうさぎを、かごにいれて

七91 8 麦をやったら、白いうさぎは、早くたべたのか、黒いうさぎの上に乗って、たべました。

七93 8 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

八24 3 黒いところは黒く、茶色のところは茶色になって、いかにもあぶらぜみらしくなります。

八24 3 黒いところは黒く、

九33 7 罇 黒くてひらたい貝がとれますので、

九63 7 みると、やまねこは、もう、いつか黒い、長いしゅすの服を着て、

九69 7 やまねこは、黒いしゅすの服をぬいで、

十18 2 黒い雲が流れてくる。

十48 11 罇 クロイ ワンワン——キタナイ ワンワン

チャン——アンヨ ナメテルワ——

十50 1 家からでてしばらくいくと、道のまん中に、

黒いぬが一びきすわっていました。

十502 「クロイワンワン」は、そのときさけん
だことばです。

十503 その黒いぬに近よってみると、

十506 黒いぬは、まえ足をあげたかと思うと、
その足をなめたので、

十531 すると、さっきの黒いぬが、

十三5712 写真で見ただけでは、〈略〉、赤いとこ
ろが黒くなったりで、どうもよくない。

十四455 マッケンナも、しずんでいく船からほう
りだされて、黒い波の間をおよいでいました。

十四634 日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬ
のでもおいてすかして見ると、

十四8812 半年も雪にとざされていた地上に、ぼ
ちちと黒い土が見えはじめたときの喜びは、

十四892 子どもたちは、この黒い土の上に集まっ
て、足でトントンとふんでみたり、

十五101 文 くんげつみて子という母の黒いこう
もり

十五2711 「あれあれ。」といっている人々の目に
は、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか

十五4811 白く焼けるはずのものが黒くなった
り、黄色くなったりして、

十五831 おくへ向かって歩いて行つて、黒いまく
をあげて、すがたをかくしてしまします。

くろいぬ 「黒犬」(名) 1 くろいぬ

一583 図 あのとき、たろうさんが くろいぬを
おってくださらなかつたら、

くろう 「苦勞」(名) 2 苦勞
五103 図 こは、みなさんで、苦勞をしてほつて
くださったトンネルですよ。

十四434 図 日々の苦勞に、よし心配がたえなくと

も、くちびるに歌をもて。

くろうさぎ 「黒兔」(名) 3 黒うさぎ
七866 黒うさぎ 390g. 白うさぎ 400g.

茶うさぎ 1kg

七894 白うさぎが9ひきと、黒うさぎを1ひきも
らいました。

七8911 茶うさぎ 1ひき 白うさぎ 10ひき 黒うさ
ぎ 2ひき

くろうし 「黒牛」(名) 5 黒うし
八294 すると、黒うしにまたがり、ふえをふいて
くる、わかい男にであいました。

八303 天帝は、ひとつこの男のうでをためしてみ
ようと考えて、黒うしのしっぽのあたりを一つき
おつきになりました。

八304 黒うしは、おどろいて、大あばれにあばれ
だしました。

八308 黒うしは、にわかにかげだし、天の川へ落
ちこもうとしましたが、

八3210 いやいよその日になると、けんぎゅうは、
黒うしに乗って、ふえをふいてきました。

くろうしょう 「苦勞性」(形状) 1 苦勞しょう

六249 図 苦勞しょうのありさんたちだな。

くろうする 「苦勞」(サ変) 2 苦勞する 《ーシ》
八639 図 わたしも、一どそれでだまされたことが
あってね、そのひなには苦勞したよ。

九426 図 苦勞してかいこんした畑のいもをほりお
こすのは、楽しく、うれしいことでした。

くろうるし 「黒漆」(名) 1 黒うるし
十二11010 黒うるしの中に、銀や貝が光をはなつて
いるのは、なんともいえない美しさです。

クローバー (名) 2 クローバー

六14210 クローバーの花が、まっ白にさいしていまし

た。

六1431 おなかのすいた五ひきのうさぎさんは、だ
いすきなクローバーをたべました。

くろざとう 「黒砂糖」(名) 1 黒ざとう
十714 図 ほんに、これは上等の黒ざとうだ。

クロスワーズパズル (名) 2 クロスワーズパズル
六688 クロスワーズパズルもこしらえました。

十二1035 クロスワーズパズルのようにならんだ文
字があつたりして、おもしろいお金です。

くろっばい 「黒」(形) 4 黒っばい 《ーイー
カッ》

七257 図 それから十日すぎて、からだは黒っば
かったのが、青くかわってきたんですよ。

七294 図 黒っばい、かわいいあおむしは、だいこ
んのはっぱと同じ色にかわっていた。

七9510 1ひきは白で、あとは黒っばい色をして
いました。

十703 うまそうなあまいにおいがして、黒っばい
ものがはいっていました。

くろぬり 「黒塗」(名) 1 黒ぬり

七469 青年は、すわって、アコーデオンを黒ぬり
のケースにおさめた。

くろむぎ 「黒麦」(名) 1 くろむぎ
十三246 そのころ、ユートランドの農夫のつくつ
た農作物は、じゃがいも・くろむぎ、そのほかわ
ずかのものにすぎませんでしたが、

くろやま 「黒山」(名) 1 黒山

八61 そのめずらしさ、おもしろさに、黒山の人
だかりだったのです。

くわ 「桑」(名) 3 くわ

三406 くわばたけのくわのはが、やわらかで、
光っていて、

三41 1 かぜがふくと、くわのはのにおいがぶんとします。

九37 1 手 小さい妹のために、くわの葉につつんで持って帰ったこともありした。

くわ 〔綴〕(名) 5 くわ

九42 10 母やおばがくわをいれるあとから、ぼくたちはむちゅうになってもをひろいました。

九78 9 主人も、くわや、ふごや、かごなどを持ってきた、かしてくれました。

十一33 7 圃 だいいこんの花にあかつきの 色ただよえば勇ましく、すき・くわ持って野にいそぐ。

十一36 1 圃 くわをかついで田をみまわれば、日はまた照って水たつぷりと、

十二57 1 雲仙岳の中ほどにある唐の池は、みそ五郎が畑をうったときのくわのあとで、

くわ・える 〔加〕(下) 7 くわえる 加える 〔エーエル〕

七44 3 私も喜んで、いくらかのお金をそれにくわえた。

九8 1 「虫の声」ということばを加えたらどうでしょう。

九20 5 そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではまにあわず、さらに二台の自動車を加えました。

九23 2 このほかに、オーストリア動物園の人たちがひき受けて送ったつばめを加えると、十万ばかりになります。

九85 1 〔窓〕 いのししやしかの角などに手を加えて、なにかの道具につかった物があつたでしょう。

十五37 3 木は、もともと形をうつしてできたものであるが、それに線を加えて、「もと」とか、「すえ」とかという考えを表わすことにした。

十五107 12 〔窓〕 それは、毎日ぼくたちを照らす光に、

二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。くわ・える 〔銜〕(下) 1 くわえる 〔エー〕

十二106 4 かえるは、うさぎの耳をくわえて、得意の足かけをしました。

くわしい 〔詳〕(形) 8 くわしい 〔ク〕 くだん だんくわしくなる

七47 4 はつきり書きあらわそうとすると、文章が、だんだんくわしくなっています。

七55 2 しかし、文章は、くわしくしさえすれば、はつきり写しだすことができるとはかぎりません。

七68 3 まえのやりかたは、ちょうど、文章をくわしく書きたすのににっています。

七78 7 〔窓〕 え、でも、そんなにくわしくござんじではありませんか。

七80 2 〔窓〕 いったい、どういうことなのか、くわしく話さない。

十四20 6 外国からはいつてきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してください。

十四84 12 空から降ってきた雪の一ひらを受けとって、それをくわしく観察してみると、

十五55 4 ホランド博士は、戦争中で費用が思うようにつかえないことについてくわしく話し、

くわつくわつ (感) 3 クワツ、クワツ

八64 2 〔窓〕 クワツ、クワツ。 という、ひなた

八65 11 〔窓〕 「クワツ、クワツ。」という、ひなた

くわばたけ 〔桑畑〕(名) 1 くわばたけ

三40 6 くわばたけのくわのはが、やわらかで、光っていて、

六25 8 〔窓〕 楽しみはいよいよくわわり、喜びはさらにたかまる。

九20 1 「略」という運動に全國民が、加わったほです。

くん 〔君〕 だおおむしくん・いちろうくん・いとうくん・おおしまくん・かかしくん・かずおくん・きしもとくん・ごろうくん・ささきくん・さぶろうくん・しんきちくん・しんじくん・たかぎくん・たかやまくん・としおくん・はるおくん・やまだくん・よしおくん

くん 〔訓〕(名) 3 訓

十五38 6 中國の発音にもついていた漢字の読みかたを「音」といい、日本のことばによる読みかたを訓という。

十五38 7 たいていの漢字には、この音と訓のふたとおりの性質のちがつた読みかたがある。

十五38 9 字によつては、いくつかの音のあるものがあり、またいくつかの訓のあるものもある。

ぐんぐん (訓) 4 ぐんぐん

三22 3 たいへんないきおいで、ひるもよるも、ぐんぐんとのびていきました。

十五56 2 すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書きつけているその力に、おどろきました。

十六61 11 たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きくなります。

十二26 11 ちゃぶ台をだして、食事の用意などをしていて、とりついてぐんぐんおしていつて、

ぐんじん 〔軍人〕(名) 1 軍人

十三18 11 このとき、希望をいだいてたちあがったひとりの軍人がありました。

ぐんぜんたい 〔郡全体〕(名) 1 郡ぜんたい

七48 6 六日の日、郡ぜんたいのドッジボール大会

があった。

け

け〔毛〕(名) 15 け 毛 じかみのけ・まきげ・ま

ゆげ・むなげ・わたげ

三46 2 いちばんしまいにいたわにざめが、白う

さぎをつかまえて、からだのけをみんなむし

りとしてしまいました。

六129 4 たぬきさんは毛をぬらしてなにかあわて

います。

七92 8 うさぎの毛の長さを計ってみたら、

七95 1 うさぎのせなかをさかさになると、毛が

ふわふわとびます。

七95 5 けさ、いつてみたら、左がわのへやに、毛

がたくさんぬけていました。

七95 8 その中に、わたのようなふわふわした毛が、

いっぱいはいつていました。

七95 9 その毛にくるまって、うさぎの子が7ひき

いました。

七96 2 7ひきの生まれたばかりの子うさぎは、わ

らの中の毛の中で、元気に動いています。

七96 9 ねずみ色の4ひきは、〈略〉、みんな、目が

あき、からだには、すっかり毛がはえました。

七99 2 子うさぎの毛の長さを計りました。

八102 7 ほの1つぶを虫めがねでみると、毛のよう

なものがたくさんはえていました。

十50 4 黒いいぬに近よってみると、ひふ病にか

かっていて、顔のあたりの毛が、ぬけていました。

十二51 4 よくかわかしてから、絵のぐで、顔を

いたり頭の毛をぬる。

十二65 1 根のさきは毛より細い。

十二65 2 毛よりもやわらかだ。

け〔氣〕↓まじりけ

け〔家〕↓にいじまけ

け 1 け

四78 1 け——けっせきしないで学校へ。

げ ↓いいたげ・かなしげ・くるしげ・たのしげ

げ 1 下

十五38 10 「上・下・生」などの読みかたをちよっ

と考えてみただけでも、

けい〔系〕↓ぎんがけい・ぎんがけいぜんたい・た

いようけい

けい〔計〕↓かんだんけい

げい〔芸〕(名) 3 げい 藝

五105 9 〇 この鳥は、いくつもげいができるのね。

十一27 7 百文はらうと、おもしろい藝をしてみせ

てくれます。

十三31 4 まるく輪になったその中で、さるがさま

ざまな藝をする。

けいい〔敬意〕(名) 1 敬意

十46 1 〇 あなたが〈略〉、眞珠を世界の人々にあ

たえたことに、心から敬意をささげます。

けいおうさんねんくがつにじゅういちにち「慶応三

年九月二十一日」(名) 1 慶應三年九月二十一日

十五58 7 〇 慶應三年九月二十一日、マサチュセツ

ツ州アマスト大学に入学、

けいかく〔計画〕(名) 1 計画 ↓だいいけいかく

十三19 1 かれは、その胸に國運回復の計画をたて、

けいけん〔経験〕(名) 3 経験

十二40 6 両親は、〈略〉、もうあ教育に経験のある

サリバン先生にきていただくことにしました。

十二92 8 それは、めいめいの生活や経験が同じで

ないためである。

十二95 12 いったん読まれてしまうと、読み手の思

いでや心持にとかされて、その人その人の生活や

経験によって生かされてくる。

けいこ〔稽古〕(名) 4 けいこ ↓おけいこ

十二22 3 〇 どんな絵の大家だって、一心にけいこ

をして、じょうずになったのだらう。

十二22 5 〇 そうだ、けいこだ。

十二22 6 〇 高い理想をめざして、いっしょうけん

めいけいこをすることだ。

十三56 9 〇 ラファエルは、〈略〉、早くから絵のけ

いこをして、たいへんじょうずであった。

けいこ・する〔稽古〕(サ変) 1 けいこする

シ

十二21 2 〇 絵をかくことも、いっしょうけんめい

にけいこしなくちゃだめでしょうね。

けいさつしよ〔警察署〕(名) 2 けいさつしよ

四7 1 こはけいさつしよです。

七79 3 〇 さあ、けいさつしよへ、いっしよにいっ

てもらおう。

けいさん〔計算〕(名) 1 計算 ↓しじょうけいさ

んする

十四34 6 博士の計算では、うちゅうのさしわたし

は、およそ二十億光年ということだ。

けいさん・する〔計算〕(サ変) 4 計算する

シ

八34 5 この早さで計算しますと、太陽から発した

光が、地球にとどくまでには、やく八分二十秒ば

かりかかることになります。

八34 11 「光年」を単位として計算しなければなら

ないほど、遠いきよりであります。

十三1411 自分で望遠鏡を組み立てて、それで天体を観察し、数学でこまかに計算した結果、
 十四356 小さな人間が、引力の法則を発見したり、うちゅうの大きさを計算したりする
 けいしや 「傾斜」(名) 1 けいしや
 九1078 いかにもすべりよさそうなけいしやが、長くつづいている。

けいしやめん 「傾斜面」(名) 1 けいしや面
 十五198 高山植物のさきみだれているけいしや面を、あるいは、〈略〉深い谷の上を、登山電車がわれわれを運んでいってくれます。

げいじゅつ 「芸術」(名) 4 藝術

十6311 能は、めんの藝術ともいわれ、
 十6312 能は、〈略〉、ギリシアの、同じめんの藝術とくらべて、研究されています。

十646 自分たちの國が持っているこのよい藝術を味わうことを、

十二1073 平安時代の終りから鎌倉時代にかけての藝術の中で、とくにすぐれたものの一つです。

げいじゅつひん 「芸術品」(名) 1 藝術品

十二1091 室町時代の藝術品です。

けいじょう ひいつびつけいじょう

けいと 「毛糸」(名) 1 毛糸

十293 たとえば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあみかたか、

けいとう ひはげいとう

けいはく 「輕薄」(形状) 1 輕はく

十二8912 それは自分の生活を輕はくにし、相手の人をいやしめることにもなるからである。

ケース (名) 1 ケース

七469 青年は、すわって、アコーデオンを黒ぬりのケースにおさめた。

けが 「怪我」(名) 3 けが ひはおおけが

五993 ひわは、かたのところにけがをして、ころがつていました。

七942 けさ、白うさは耳にけがをしました。

十二114 けが もしけがでもしてはかわいそうですから。

けがわ 「毛皮」(名) 2 けがわ 毛皮

五713 おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴかぴか光るずきんをかぶり、

十二1058 皮さいくの店らしく、なにかの毛皮がひろげてあります。

げきじょうおんがく 「劇場音楽」(名) 1 劇場音楽

九102 「劇場音楽の話」をきいた。

げくげくげく (感) 2 げくげくげく

三865 げくげくげく、げくげくげく。

三865 げくげくげく、げくげくげく。

けさ 「今朝」(名) 16 けさ

一288 けさ、あなたは、その目でなにをみましたか。

二234 先生、はねのいたんだ大きなちょうちやが、けさも、ゆりの花にきていましたよ。

四436 けさも早くから、三十はのがんは目をさました。

五383 けさ、先生に、先生のお友だちから手紙がきました。

五411 けさも、まきばにだしてやりました。

五621 けさ、こんなに大きな花を、三つもさかせたのは、だあれ。

六618 けさの温度は五度です。

七645 はつ花のさいたこと、けさ書く。

七942 けさ、白うさは耳にけがをしました。

七954 けさ、いつてみたら、左がわのへやに、毛

がたくさんぬけていました。

七995 けさみたら、母うさぎと7ひきの子うさぎは〈略〉なかよくにんじんをたべていました。

九499 「やまねこなら、けさ早く馬車で、東の方へとんでいきましたよ。」と答えました。

九523 「やまねこなら、けさ早く馬車で、南の方へとんでいきました。」と答えました。

九536 「やまねこなら、けさまだくらくらうちに、馬車で、南の方へとんでいきましたよ。」

十一512 ゆうべからの大あらしは、けさになってはまだ続いていた。

十五895 これでけさから十二どめです。

けしき 「気色」(名) 1 けしき

八251 「やがて死ぬけしきはみえずせみの声と、むかしの人がうたっています。」

けしき 「景色」(名) 22 けしき 景色

二401 たろうは、あせをふきながら、あたりのけしきをながめます。

四1274 なんとまあ、いいけしきだろう。

四1275 けしきにみとれながらあるいていますと、どこからか、よいにおいがしてきます。

五371 これは大むかしのけしきです。

五397 このきれいなけしきを、みなさんにおみせしたいと思います。

五812 ガラスもきれいになって、そのけしきがよくみえました。

六998 ぼくは、この二つをかさねたりべつべつにしたりして、つくえの上をみたりそのけしきをのぞいたりしていた。

六1001 すると、向こうのけしきが、小さく、かさまにみえた。

六1002 そのかさまにみえるけしきを、大きくし

けじめ (名) 1 けじめ

十二 30 10 会
ワンワン、ゲタナイ、アンヨ、イタ

897
1 5月21日 (月) くもり 18度

八〇九 十一月十九日 (例) 晴のちくもり 18度
けっか「結果」(名) 10 結果

十三九三 ものごとの原因と結果との関係や、

十三一四 他のごとの間に、すこしのつながりも

なく、原因と結果との関係もないのに、

十三一六 原因・結果の関係の簡単なものは、普通

の知識によって知られ、

十三一〇 それは、学者がいろいろに考えて、原因

と結果との関係を調べきわめている。

十三一四 天体を観察し、数学でこまかに計算した

結果、〈略〉を、明らかにしました

十三二二 親子の発見と努力によってもたらされた、

よい結果は、木材だけにとどまりません。

十三二五 デンマルク人のたましいは、ダルガスの

研究と実行の結果として、すっかり生まれかわり

ました。

十四八七 なん代もなん代もやってみた結果、とう

とう一つの眞理だと思われたので、

十五五五 私は、一年半の努力の結果、しゅびよく

書きあげた論文を持って、

十五五六 その際算出した高さは、実測の結果と

わずかに十フィートしかちがわなかった。

けっこう「結構」(形状) 1 けっこう

九四七 あなたは、ごきげんよろしいそうで、

けっこうです。

けっして「決」(副) 13 けっして

九一四 ゆめからさめるときには、音などはけっし

てするものではないが、やはりたいこをたたく。

九一八 なん百キロの海をひといきにとぶのも、

けっしてふしぎではありません。

九二七 つばめは、けっして自分の國をわすれませ

ん。

十三二二 めのを織るしごと、けっしてゆるがせに

してはおかれない。

十三八五 眞珠は、〈略〉ふしぎな宝石とされてきた

が、しらべてみると、けっして、ふしぎでもなん

でもないものであった。

十一六〇 あの橋はあぶないから、けっして渡っ

てはいけない。

十二五五 どちらもけっしてたやすくは登れないが、

十二五八 もしそれができなかつたら、これからの

ちは、けっして村へでてきてはならない、

十四四三 名高い文学者で、その名のわが國に知ら

れている人は、けっして少なくはありません。

十四二九 見てももらいたいなどという、どこかに

しまつてあるもののように聞えるかもしれない

が、これはけっしてそういうものではない

十四三四 うちゅうは、けっしてはてしのないもの

ではありません。

十四七九 木のほうは、これと反対に、もとのほう

を上にして、上からはものをうちこむと、まっす

ぐに割れて、けっしてそれることがありません。

十四八六 「雪國」の映画も、けっしてわるいもの

とは思わないが、

けっしょう「結晶」(名) 4 けっしょう

十四八四 一ひら一ひらの雪が、それぞれちがつた

けっしょうをしていること、

十四八六 どうして雪のけっしょうができるか、

十四八七 どんなばあい、どのようなけっしょう

になるか、

十四八九 さまざまな條件によって、雪のけっし

うがちがうわけを、

けっしょうせん「決勝戦」(名) 3 決勝戦
七五三 こんどは、さいごの決勝戦だ。

十二八二 十一ヶ國のテニス選手をなぎたおした清

水選手は、最後の決勝戦にのぞむことになりました。

十二八四 もし、この決勝戦に勝つことができた

ら、世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじ

めてもらうことになります。

けっしょうてん「決勝点」(名) 2 決勝点

六三三 決勝点は、あの山のてっぺんにしよう。

六三二 決勝点は、どこ。

けっしん「決心」(名) 2 決心

九一〇 こう決心がつくと、くもは、すっかりく

な氣持になりました。

十四八六 私には決心がつきました。

けっしん・する「決心」(サ変) 4 決心する《

シ》

九一三 やまねこは、〈略〉、とうとう決心したら

く、いいでした。

十二一六 文雄は、あれこれと考えていたが、根も

とをかこうと決心した。

十三一三 つるぎで失つたものを、すきでとり返そ

うと決心したのです。

十五五〇 「〈略〉」と決心し、いよいよこのしこ

とに熱情をこめた。

けっ・する「決」(サ変) 1 決する《―シ》

十五五七 私は、しばしためらつたのち、意を決し

て大きなドアをコツコツとノックした。

けっせき・する「欠席」(サ変) 1 けっせきする

《―シ》

四七八 け―けっせきしないで学校へ。

けつまず・く「蹴踔」(五) 1 けつまずく《―イ》

六三三 こんどはおれた木のみきにトンとけつま

ずいて、すってんころりところげました。

けづめ「蹴爪」(名) 1 けづめ

十五30 大わしは、太いけづめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かって来ました。

けど(接助) 2 けど けだけど

五173 ぼくは遠いところへいくんだけど、あて名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。

六394 あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。

けど(終助) 5 けど

五231 おじいさんが、かわいがってくださったのでしょ。」「それもあるけど。」

五245 それでうれしかったの。」「それもあるけど。」

六3911 そりやそうだけど——

九1395 だから、わたしをたべてもいいと思っているんだけど。

十二436 とこのまの人形が、動きだしそうな氣がするんだけど——

けとばす「蹴飛」(五) 1 けとばす 《一サ》

八718 にわとりにはこずきまわされ、えさをくれるむすめには足でけとばされた。

げなん「下男」(名) 2 下男

十664 でかけるとき、太郎かじゃ、次郎かじゃというふたりの下男に、「略。」というつけ、

十二708 下男のように住みこんであげてもいいけれど、芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、

けぬき「毛抜」(名) 2 毛ぬき

十三2811 かた手には、大きな毛ぬきのようなものを持ち、かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、

十三2812 とときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく。

けはい「氣配」(名) 1 けはい

十三54 ことばのないかれらのことばで、なにごとか、ささやきかわしているけはい。

ケプラー「人名」2 ケプラー

十三143 しばらくして、ドイツ人でケプラーという人が出ました。

十三148 そのケプラーと同じころ、イタリアのピサに生まれたガリレオという学者がありました。

けむり「煙」(名) 15 けむり けむりしやけむり・ゆきけむり

三1177 ふしのくすりをやいたけむりが、四1194 白いけむりがたちのぼり、元氣でわかいうらしまは、みるみるしらがのおじいさん。

五323 まっ黒なけむりをもうもうとはいって、どんな走っています。

五338 どのえんとつかからも、けむりが、むくむくとたちのぼっています。

八585 すると、おもちゃのように小さな汽車が、けむりをはいて走ってくる。

八745 青いけむりが、くらい木のあいだから雲のようにたちのぼった。

九811 「山」「けむり」「絵はがき」《略》など、いろいろなことばを組みあわせてみましょう。

九412 思わぬところに炭やき小屋があつて、ゆるいけむりのあがるのがみえました。

九741 木ややぶが、けむりのようにぐらぐらゆれました。

十548 そのけむりやほのおがおもしろいらしく、十一44 大きな汽船がけむりをはいて、

十四649 横からすかして見ると、ちょうど、けむりが廣がっているように見えるそうです。

十四6510 せんこうのけむりでもなんでも、

十四6511 けむりの出るところからいくらかの高さまでは、まっすぐにあがりますが、

十四6512 それ以上は、けむりがゆらゆらして、いくつものうずになり、

けもの「獸」(名) 2 けもの

六806 私は毎日山へいって、鳥やけものをとっていますね。

九799 むかしの人は、《略》、たべたけものの骨や、角などを、ここへすてました。

けやき「樺」(名) 2 けやき

六1316 うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、まるくならんで、話をしました。

十三43 ごらん、まだこのかれ木のままの、高いけやきのこずえの方を。

ケラー「人名」9 ケラー へレンケラー

十二399 よんでわかるように、ケラーは、めくらで、そのうえつんぽでした。

十二401 ケラーは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、みるはたらき、きくはたらきを失いました。

十二405 ケラーの両親は、《略》、すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

十二408 サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくのには、なみなみならぬどりがいりました。

十二4010 しかし、ケラーに「ことば」というものをわからせることによって、そのまっ暗なさびしい心を明くることに成功しました。

十二419 ケラーは、もうサリバン先生なしには、生きていけません。

十二422 先生も、「略。」といのりながら、一生

をケラーのためにささげました。

十二42 4 これは、ケラーのサリバン先生に対する信頼と、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、一つになったおかげです。

十二42 5 サリバン先生のケラーを思う愛情とが、

ケラーさん (人名) 1 ケラーさん

十二41 12 私に命がけでせわをすれば、ケラーさんがすぐわれるのです。

けらい 「家来」(名) 5 けらい

三11 6 それで、たぐさんのけらいにいいつけて、まもってくださることになりました。

五74 2 そばには、りっぱなけらいもついています。

五74 8 おばあさんは、おじいさんには目もくれないで、けらいに、「略。」といいつけました。

五75 5 ああひろい海で、金のさかなをけらいにしてやりたい。

五76 7 海のぬしになりたい、ひろい海で、あなたをけらいにしたいといっています。

けらいたち 「家来達」(名) 4 けらいたち

三11 8 けらいたちは、弓に矢をつがえました。

八46 1 さっそくけらいたちを集めて、「略。」と、おいつけになりました。

八46 5 けらいたちは、あちこちとさがしまわりましたが、

八46 11 けらいたちは、足をぼうにしてさがしまわりましたが、やはりみあたりませんでした。

けり (助動) 6 けり 《ケリ・ケル》

九27 1 文 ころしや子ぶたのはなもかわきけり

九30 3 文 ひたいそぐいぬにあいけり木のめ道

九116 2 文 階上のわが電燈のきえにけりみわたす

十五4 6 文 ときいきおいにまなこすら、その

行く末を見ざりけり。

十五14 5 文 目をあけてつくづく見ればらの木

にばらがまつかにさいてけるかも

十五15 8 文 大きななにごともなきばらの花ふとのはずみにくずれたけり

ける 「蹴」(五) 3 ける 《ーッ》

七92 5 だすときに、わらを足でけったりして、あ

七97 9 黒の子うさが、ちちをのうとして、親

うさぎのうちにすがりつきますと、親うさぎは、足でけて、のませませんでした。

十五104 12 ひら手でたいたたり、いそがしく足で

けったりして氣ちがいのようにねまわります。

けれど (接) 3 けれど

十一75 10 「きみがいれば、きつとよくなるから。」

「けれど、ぼくってことがわからないです。」

十五26 2 したいしだいに、下の方へ落ちるように

舞いおりて行きました。けれど、もしこのわしが、

その舞いおりるとちゅうで、高い木の上へでもと

まろうものなら、それこそたいへんです。

十五112 5 私、いつだってこの着物を着ている

のよ。けれど、人間には見えないのさ。

けれど (接助) 15 けれど

四46 7 文 おとといは、そんな氣もちだったけれど、

五27 3 文 どこかでありがとうといたいと思った

けれど、いうところがなかったものだから、

五62 10 文 たねはおかあさんがまいたのだけれど、

こんなによくできたのは、おかあさんの力ではあり

十五57 8 いまはきれいだけれど、コスモスは、おじ

いさんになるとかわいそうね。

十一8 6 文 さつきから、きみはだまっているけれど、

ぼくはきみをコックスにすいせんする。

十一75 7 文 だいぶんわるいけれど、まだ望みがある。

十二48 1 文 写真のほうはずつと便利なわけだけれど、

絵には絵のいいところがあるからね。

十五83 6 文 あてにはならないけれど、青い鳥だつて、

《略》まよいこんでいないともかぎらない。

十五83 12 文 育ちのわるいものばかりだけれど、人は

はわるくないんだよ。

十五97 6 文 おどりをおどったり、わらったりする

けれど、まだ、お話はできないのだよ。

十五115 4 文 おまえは、いまだけ天國に來ていると

思っているけれど、おまえと私とが、かわいがり

あうときは、いつでも天國にいるのですよ。

十五117 9 文 私たちは、それは幸福ですけれど、自

分たち以上のものは、見えないのです。

十五117 12 文 私たちは、それは幸福なんですけれど、

やはり、私たちの影以上のものは見えないのです。

十五118 4 文 私たちは、幸福なんですけれど、私た

ちのゆめ以上のものは、見られないのです。

けれど (終助) 4 けれど

五100 4 文 山へはなしてやりたかったんだけれど。

十一24 1 文 二三日したらなおおと思うけれど。

十二18 2 文 羽を動かしてピピッと鳴いていたと

きには、ほんとうにおかしいようでしたけれど――

十三60 10 文 ぼくには、そのうまさがよくわからな

いけれど。

けれども (接) 65 けれども

二314 ころちゃんが かぞえて みました。けれども、やっぱり一びきたりません。
 二501 それから、じろうは、りんごを たべよう とします。けれども、それを やめて、
 二531 りんごを 手に うけとります。けれども、また さちこに、りんごを かえします。
 二556 おじいさんも あります。けれども、おじいさんのおとうさんは、おいでになりません。
 二667 みんなは、「しゅしゅしゅしゅ」を、きゅうに しずかに いう。けれども、うごかす はやさにかわりはない。
 三121 一年たちました。けれども、なにも おほえません。
 三716 デビッドは いすから おりて、つまんで みました。けれども、つまむ ことは できません。
 三722 ほうきをもつて きて はきました。けれども、はきだす ことも できません。
 三1048 その 中には、みやさまがたも おいでになりました。けれども、かぐやひめは、《略》、みんな ことわって しまいました。
 三1059 それが できたら およめに いくと いいました。けれども、かぐやひめの いう ようには、だれも することが できませんでした。
 四345 みんなは、もう 一ど、かずこさんの 文を よみなおしました。けれども、べつに 気が つきません。
 四588 二十九わの かおが そろいました。けれども、もう 一わが みえません。
 四919 ほおには あせが つたわって いる。けれども、おじいさんは うれしそう。
 四1225 だんせんをつたわって、ここまで たびをして きたのです。けれども、《略》でんきゅ

うがないと、光る ことが できません。
 五155 ゆくさはむねの ところに 書いて ありますから、まちがいは ありません。けれども、この までは 旅は できません。
 五247 せきを すこし あけて くれました。けれども、《略》。』といって、とうとう かけなかつたの。
 五394 てっぺんには、まだ 雪が のこっています。けれども、中ほどから 下は、雪が ありません。
 五422 まだ、ほか かいどうへ いったことは ありません。けれども、お手紙で よく わかります。
 五633 せわは して やりました。けれども、花が ついたり、みが なつたり したのは、おかあさんの せいでは ありませんよ。
 五1086 かごの中の ひわは、なかまを よびました。けれども、旅の ひわは、その ままと んで いて しまいました。
 六142 ありは 大きな 声を だして さげ びました。けれども、だれも きて はく れません。
 六526 そうして、つぎの 雲の方へ どんどん 走って いきます。けれども、じつと 月を みつめて いると、月は 動かないで、雲が 大いそぎで とんで いく ようにも みえます。
 六788 あなたは、ねむって しまったら 動か なくなる でしょう。けれども、息は する でしょう。
 六1146 みんなが、《略》わらい ました。けれども、あげて みると、なかなか よく あがりました。
 六1167 たこを作る のは はじめて です。けれども、いっしょうけんめい に 作つたら、できない こと は ない だろうと 思いました。
 六1373 しかさん、私たちが 勝ち ましたよ。けれども、あなたの 角は ありません。
 七435 わたしは、終戦後、いつも 心さびしい 旅

をして いました。けれども、きょうは、楽しい 旅行を して おります。
 七857 あなたが たふたりが、あの 旅人を うた がったのも、むりは ない。けれども、いまの 答で 知つて いたわけが はつきり した でしょう。
 八2710 それは、天帝の ひとりむすめのは たおりひめ のすがたを、もとめて おいでになる のでした。けれども、みあたり ませんでした。
 八306 黒うしは、おどろいて、大あばれに あばれ だしました。けれども、けんぎゅうは おちついて、ふえを ふきつづけて いました。
 八387 すこしは ある。けれども、まだ じゅうぶんではない。
 八455 どうしたら 王さまの 病氣を なおす ことが できるかと、相談を はじめ ました。けれども、これという 考えは だま せん でした。
 八502 この 家を たずねても、みんな 喜んで むかえて くれる にちがひ ありません。けれども、それでは 人の 心が よく わかり ません。
 八6010 それは、たまごを かえして いる のであつた。けれども、親あひるは、ひなが でてくる まえに、もう つかれ きて いた。
 八835 そうして、およいだりも ぐつたり した。けれども、すがたが みつとも ない ので、いろいろ な 動物たちから のけもの あつかいに された。
 九479 字は へたで、すみも が さして 指につく くらい でした。けれども、いちろうは うれしく ためり ませんでした。
 九489 おそくまで ねむれ ませんでした。けれども、いちろうが 目を さました ときは、もう すつかり 明かるく なつて いました。
 九515 西なら、ぼくの うちの方だ。けれども、

まあ、もうすこしいってみよう。

九三〇 南へいったんておかしいなあ。けれども、まあ、もうすこしいってみよう。

九七一 へえ、ぼく、いろいろです。けれども、どうしてそれを知っていますか。

九二八 泉は「略」、遠い上流にあるのだとさった。けれども、流れは急流だし、

九一〇 くもはそのそと歩きました。けれども、なんだか氣がすすみません。

九〇四 くもは、力いっぱいもがけば、「略」ころげ落ちることができたかもしれません。けれども、べつににげだそうとはしませんでした。

九二六 おとうさんのそばへきて、さまざまなことを話しかけたり、わらったりしました。けれども、

「略」そばへこない女の子もありました。

九一五 自信をもって、よしやろうということができた、うれしい。けれども、ぼくにはなかなか、よきさとはいえない。

九二七 だれかのかさのしずくが、私のくつの上にぼたぼたと落ちてきたりした。けれども、その足も動かすことはできなかった。

九一八 どれもみなうまいことばだ。けれども、私は、「略」といった、しゃょうさんのことばをわすれることができない。

九一〇 けれども、病人は、いっしんに少年をみつめたあとで、目を閉じました。

九二六 こんなどころがすこしもないようにしたいのです。けれども、思うようにいきません。

九二六 ぐんぐんおしっていて、かべぎわにおしつけてしまったりします。けれども、かんじんの歩くことはまだできません。

九二六 すこしばかりの動詞も知りました。けれども、物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、「略」いく週間もたってからのことでした。

九四三 わが國に知られている人は、けつして少なくはありません。けれども、フランスのルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なびきをもつて、私たちの心をうつのです。

九四八 すすめることのできないのは、わかりきっているのですから。けれども、力をだしてしごこのことをお考えになるのです。

九四二 自分たちとはえんがないと思っている人もあるでしょう。けれども、星をこまかく観察したこと、農業が進歩したのです。

九四三 かみの毛は、両かたにまつわりつき、雪は、「略」。けれども、その小さなマッチ賣りのむすめは、自分のまき毛のことも、雪のことも考えなかった。

九四九 両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で重ねて、どうかして、あたためようとした。けれどもだめであった。

九四九 マッチはもえつくしてしまった。けれども、やっぱり、そのたくさんるろうそくはもえ続けていて、

九四二 おばあさんは、いつものように、やさしく、しんせつなようすをしていた。けれども、前よりはもつと楽しそうなようすをしていた。

九四二 「略」といった。けれども、そうではなかった。

九五二 大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かって來ました。けれども、ひらりと身をかわした少年は、

九五二 この鳥と少年との戦っている岩角近くまで來ました。けれども、戦っている人と鳥とはむ

ちゅうです。

九三九 私たちは、自分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶりや、手まねなどを用いる。けれども、それをその場にはない人や、遠くにいる人に知らせるためには、

九五五 はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。けれども、きみたちは、ほだなく、みかたができるだろう。

九五五 この世の中には、人が思うよりもっとたくさん、幸福はあるのだから。けれども、ふつうの人間には、それが見つけられないのだよ。

九五二 私が答辭を読んだ。けれども、思うことがすこしも書けていないことに氣がついた。

九五三 みんなじつとしていたけれども、なかった。

九六一 雪だるまはお話はしないけれども、はるえさんが、なにかお話をしなげたらどう。

九四二 「小公子」のセドリックは、七つ八つのころでも、せんきよのことを話していますけれども、ぼくにはまだ、セドリックほどわかりません。

九四九 茶人は、日本じゅうを歩きまわって、うまそうな水や名高いど水をためてみたけれども、どうも氣にいらなかった。

九二八 下男のように住みこんであげてもいいけれども、芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、

九五四 でも、あなたは、うちのおかあさんににているけれども、ずっときれいだもの。

九五二 「陰」(形) 1 けわしい 《イ》

九五二 まっ白な服をつけた少女の立っているよ

うなけわしい山が、「略」そびえているのでした。

けん 〔犬〕 しゃきたけん

けん 〔県〕 しゃながわけん・さいたまけん・しずお

かけん・とくしまけん・ながのけん
けん 〔軒〕 しゃいっけん・いっけんいっけん・さんげ

んぶん・にけんぶん

けん 〔助動〕 3 けん 《ケン》

十五44〔文〕 空にはなちし わがそ矢は、あわれ
いずこに 落ちにけん。

十五51〔文〕 空にとなえし わが歌は、あわれい
ずこに 落ちにけん。

十五135〔文〕 照る月の位置かわりけん鳥かごの屋
根にうつりし影なくなりぬ

げんいん 〔原因〕 (名) 6 原因

十二3511 ただ、腹だちの原因がとりのぞかれたと
いう満足を感じたばかりでした。

十三93 ものごとの原因と結果との関係や、その
間に行われる法則を知って、

十三113 他のこととの間に、すこしのつながりも
なく、原因と結果との関係もないのに、

十三114 原因と結果との関係もないのに、一つの
ことは他のことの原因であると、信ずるのである。

十三116 原因・結果の関係の簡単なものは、普通
の知識によって知られ、

十三119 まだ知られていないことはたくさんある
が、それは、学者がいろいろに考えて、原因と結

果との関係を調べきわめている。

けんか 〔喧嘩〕 (名) 6 けんか

七882 にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白
が、けんかをしてたべました。

九882 けんかをとめる声がつづく。

九915〔会〕 どうしてけんかなんかしたのさ。

九1016〔会〕 いったい、なんでけんかはじめたんだ

ろう。

九1025〔会〕 けんかの話をするのかい。

十302 もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、
《略》 わけをよく考えていつてみようと思います。

けんがく 〔見学〕 (名) 1 見学

十五526 論文を持って、その出版の用事かたがた、
東部諸州へ見学の旅にのぼった。

けんかずき 〔喧嘩好〕 (形状) 1 けんかずき
一539〔会〕 いじのわるい けんかずきの人がひろ
うと、ただのいしころになってしまいます。

けんか・する 〔喧嘩〕 (サ変) 1 けんかする 《一
シ》

九10010〔会〕 いやだな、けんかしたあとの氣持って。
げんかん 〔玄関〕 (名) 9 げんかん

五207 私は、その家のげんかんにおかれまして。
五227 いちろうさんが家に帰ると、おかあさんが、
げんかんにむかえにできました。

十二317 この日の午後、私はなんとなくものを待
つ氣持で、じつとげんかんにたたずんでいました。

十二318 午後の日光は、げんかんをおおったすい
かずらのしげみをもれて、

十三382〔会〕 げんかんがしまっていたから……
十五5912 あっけにとられているタイピストをしり
目に、げんかんに出て、

十五621 げんかんへ出かけて、ふみ石の上にそろ
えてある大小二つのくつをちらと見た私は、

十五6712 げんかんには、おもむきのあるかねがつ
るしてあって、

十五7210 自動車は、やがてこう外のすばらしい家
のげんかんに横づけになった。

げんき 〔元氣〕 (名) 22 げんき 元氣

一228 「のみちを いけば」のところは、げんき

よくあるきました。

二438 たろうは げんきよくあるきだします。

二684 「しゅしゅしゅしゅ」を、いっそう げん
きよくいう。

四334〔手〕 できあがると、男の子は、それをはい
て、元氣よく かけていってしまいました。

四506〔会〕 「かつちゃん、元氣をだせ。」

四1014〔会〕 さあ、元氣をだして おかえり。
五944 ひなはたいそう小さくて、元氣がなく、死
んだようになっておちていたのです。

五956 ひなは、みちがえるように元氣がでて、だ
んだん大きくなりました。

六729 死んでいたら、《略》、あんなに元氣のいい
顔つきもしていないはずだ――

六1165 〔略〕と、元氣のいい声でいいました。

六1355 〔略〕と、元氣のいい声をかけました。
七375 人ごみのうすぐらい中で、さぶろは、元
氣よくにこっと、私をみあげました。

七897 よく晴れた日には、とても元氣があります。
七913 このごろは天氣がわるいので、うさぎは、
元氣がありません。

七997 よいぐあいに、みんな元氣よくそだってい
るので、安心しました。

八588〔会〕 みんなその元氣でのぼろろ。

九10511〔会〕 「さあ、元氣をだして。」

九1076 みんなは喜んで、きゆうに元氣をだした。
十一2310 元氣よくいった母親も、子どもをよそへ
やってから、夜になると、ため息ばかりついて

十一442 みんな元氣のいい返事をして立ちます。
十四492 寒さに氣を失って、まるたから手をはな
さないように、こうして元氣をつけていたのです。

十四533 葉は、元氣のいい青年でした。

げんき 「元氣」(形状) 17 げんき 元氣 ↓おげんき

— 47 6 園 げんき ない おこさんだ。

— 57 6 園 「みんな げんきでうれしいな。」

— 60 4 園 おかげで、しろちゃん、げんき になりました。

四 103 9 園 もうすっかり 元氣になったの。

四 104 7 園 元氣になってよかったね。

四 119 5 園 白い けむりが たちのぼり、元氣でわかい うらしまは、みるみる しらがの おじいさん。

五 27 9 しんきちくんは、電車をおりてから、元氣にあるいて帰りました。

五 99 7 二三日すると、ひわは、もとのように元氣になって、かごの中をとびまわっていました。

五 99 9 園 「もう、元氣になったようですね。」

七 53 4 園 みんな元氣でやるんだ。

七 96 3 7 ひきの生まれたばかりの子うさぎは、わらの毛の中で、元氣に動いています。

八 24 7 このわかいあぶらぜみは、きゆうに元氣になって、そろそろと歩きだしました。

九 32 3 園 山へたきぎをとりにいったりするので、まえより元氣で、からだもしっかりしてきました。

九 46 10 園 楽しく元氣で勉強してください。

十三 50 3 さあ、元氣でゆかいに、手をつなぎましょう。

十四 43 10 園 どんなさびしい日だって、それが元氣にしてくれる。

十五 120 8 園 みんな元氣で、この学校を愛してくれ。げんきづける 「元氣付」(下二) 4 元氣づける

《ケ・ケル》

四 62 1 「〈略〉。」と、出発がかりの がんが、みん

なを 元氣づけました。

七 50 10 「〈略〉。」と、元氣づけてくださった。

八 11 10 みんなあわてて、口々によんで、元氣づけるやら、くすりをのませるやら、あたためるやら

—— あらゆる手あてをつくしましたが、十五 27 1 下の方にいる女の子を元氣づけるために

「〈略〉。」といわずにはいられませんでした。

げんきもの 「元氣者」(名) 1 元氣もの

十一 14 1 あれは、元氣ものがらだ。

げんきゅう 「研究」(名) 14 研究 ↓かがくてきけんきゅう・じゅうけんきゅう

十 38 12 それから、わか者は、眞珠目の研究に全力をつくした。

十 43 4 研究のため、死目を一つ一つ、ていねいにしらべていった。

十 44 4 よる年なみにも負けず、研究を重ねたすえ、ついに「〈略〉」を発見した。

十 45 11 世界の学者の研究によって、天然眞珠とまったく同じであることが、明らかにされた。

十三 9 5 ととのった知識とし、また、さらに進んだ研究をする土台にするのである。

十三 15 10 ガリレオも、十三年ばかりは、だまって研究を続けていましたが、

十三 20 10 ダルガスは、このあれ地に育つ木があるかないか、「〈略〉」研究を重ねました。

十三 21 6 「〈略〉。」と、熱心に研究を続けました。

十三 22 11 長男、フレデリック・ダルガスは、父の質を受けて、植物の研究がすきでしたが、

十三 25 12 デンマルク人のたましいは、ダルガスの研究と実行の結果として、すっかり生まれかわりました。

十三 26 2 誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠

な共力によって、あれ地をみどりの野とし、

十四 37 1 夫人は、「〈略〉」その感動から研究を進めて、ついにラジウムを発見したのです。

十四 64 4 そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということが、学者の研究でわかってきました。

十五 51 1 また、日本についていろいろの研究を進め、日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、

げんぎゅう 「牽牛」(人名) 9 けんぎゅう

八 29 9 園 私は、けんぎゅうというものです。

八 29 10 園 「けんぎゅうというのですか。」

八 30 7 けれども、けんぎゅうはおちついて、ふえをふきつけていました。

八 30 9 そのせつな、けんぎゅうは、うしの首をかるくポンポンとたたきました。

八 30 11 けんぎゅうは、やはりふえに心をうばわれていました。

八 31 8 けんぎゅうも、はたけにではたらかなくなりしました。

八 32 2 それをみた天帝は、たいへんおこりになつて、「〈略〉」けんぎゅうを西の岸に帰しておしまいにしました。

八 32 6 園 では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう。

八 32 9 いやいよその日になると、けんぎゅうは、黒うしに乗って、ふえをふいてきました。

けんきゅうじょ 「研究所」(名) 1 研究所

十 46 5 園 わたしが、研究所でどうしてもできなかったことが、二つあります。

けんきゅうする 「研究」(サ変) 6 研究する 《サ・シースル》

十 64 1 能は、「〈略〉」ギリシアの、同じめんの藝術

とくらべて、研究されています。

十三124 知識を廣め、学問を研究して、迷信を
まったく去ってしまふようになれば、

十三145 いっしんに観察したり研究したりして、
十三194 道路をつくったり、みぞをほったりする
ときに、よく、國土の地質や地味を研究しました

十三5612 美術の中心のフロレンスで、研究して
いるうちに、たいそう上達したのさ。

十四628 自然の現象を観察し、研究することのす
きな人には、

けんきゅうねつ 「研究熱」(名) 1 研究熱
十三36 「略。」とさとしたが、佐吉のもえるよ
うな研究熱は、どうすることもできなかった。

げんげ 「紫雲英」(名) 2 げんげ

十一329 げんげがさいて、なの花ちつて、かき
のわか葉に日の照るころは、

十一581 じゅずだま・むくろんじ、赤い、赤い
つばき、げんげの花わ、一つ一つつづる。

げんこ 「拳固」(名) 1 げんこ

九1001 あいこになるように、もう一つなぐってや
る。」と、げんこをかためて右手をふりあげる。

けんこう 「健康」(名) 1 健康

十五1026 ぼくは、あなたにつかえる『健康の幸
福』です。

けんさ 「検査」(名) 1 けんさ

一451 けんさが あるそうですね。」

げんざい 「現在」(名) 1 現在

十五415 それから、そのギリシア文字がローマに
移って、現在のようになつた。

げんじものがたり 「源氏物語」(名) 1 源氏物語

十五402 あの有名な源氏物語や枕草子などは、
すべてこのかなによって書かれた作品である。

げんしょう 「現象」(名) 1 現象

十四628 ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現象を
観察し、研究することのすきな人には、なかなか
おもしろい見ものです。

げんしよく 「原色」(名) 1 原色

十三533 絵は、はがきの上の方に、まるく原色で
すつてあります。

けんちく 「建築」(名) 1 建築

十642 日本の絵画や、庭園や、建築にも、外國と
はおもむきのちがつたおもしろいものが、たくさ
んありますが、

けんちくようざい 「建築用材」(名) 1 建築用材
十三223 みどりの野はできたが、ユートランドの
あれ地から建築用材を求めるダルガスの熱望は、
実現されません。

けんとう 「見当」(名) 3 けんとう

六754 「まだけんとうがつきません。」
六1081 そのわけは、すぐけんとうがついた。

十四657 もちろん、これは、まわりの空氣の温度
によつてもちがいますが、おおよそのけんとうは、
わかるだらうと思います。

けんどう 「県道」(名) 1 縣道

七466 黄みがかった麦ばたけ、縣道らしい白っぱ
い道、そこを自轉車に乗って走る中学生、

げんば 「現場」(名) 1 現場

十244 ヘッドライトにたよつて現場に近づく。

けんびきよう 「顕微鏡」(名) 1 けんび鏡

十四645 ふつうけんび鏡でも見えないほどの、た
いへんこまかいちりのようなものです。

けんぶつ 「見物」(名) 1 見物

十三5912 この絵の前には、〈略〉、見物の人が、
かわりばんこにやつて来て、

けんぶつ・する 「見物」(サ変) 2 見物する

八62 私も、すっかりひきこまれて、しばらく見
物したのち、その一わを買い、

十二8210 この清水選手の試合を見物しようと、
方々の國の人々が、〈略〉集まりました。

けんぶつにん 「見物人」(名) 4 見物人

十二776 スタンドには、はじまるまえからたいへ
んな見物人でした。

十二851 見物人は、いよいよ手にあせをにぎりま
した。

十三447 ただ、あいてになる人が、見物人の目に
つかないだけです。

十三4510 見物人にせなかを向けないように、

けんぶつにんたち 「見物人達」(名) 1 見物人た
ち、あらしのようなはく手をおしませんでした。

けんぼう 「憲法」(名) 1 憲法

十二1149 こんの新しい憲法は、この議事堂でた
んじょうしました。

げんまい 「玄米」(名) 2 げん米

八1006 やく12平方mの土地で、41のげん米がと
れました。

八1097 平年作は、1平方mに3・5dlのげん米が
とれるのですから、

けんめい 「懸命」(形状) 1 けんめい けんめい

十二1066 うさはけんめいにこらえましたが、た
おれそうです。

けんり 「権利」(名) 1 権利

十五794 私には、〈略〉みなさんに、このあいさ
つを送るだけの特別の権利があると信じます。

げんり「原理」(名) 1 原理

十四 69 5 まったく関係のないようなことがらが、
原理のうえからは、おたがいによくにたものである
という一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

一

こ「子」(名) 176 こ子 ↓あのこたち・おこさ
ん・おさなご・おとこのこいち・おとこのこさん・
おとこのこし・おとこのこたち・おとこのこに・お
やこ・おんなのこいち・おんなのこさん・おんなの
こし・おんなのこたち・おんなのこに・きのこ・す
ずめおやこ・せみのこたち・たけのこ・たけのこご
はん・ダルガスおやこ・ちのみご・ひわのこ・ふた
ご・みつご・みどりご・みにくいあひるのこ・みん
ないこ

一 4 3 罇 おはなをかざる、みんないいこ。

一 5 2 罇 きれいなことば、みんないいこ。

一 5 4 罇 なかよしこよし、みんないいこ。

一 60 4 罇 おかげで、しろちゃんは、げんきなこ
になりました。

一 60 5 罇 ぴんちゃんも、きれいずきないこ
になりました。

一 60 6 罇 はねちゃんも、ものを はつきり い
ういいこになりました。

一 60 8 罇 まきげちゃんも、おともだちと なかの
いい、やさしいこになりました。

三 63 6 三人の男の子は、うしろに こしかけまし
た。

三 63 7 ふたりの女の子は、まえに こしかけまし

た。

三 92 3 かみきれを いれたり する 小さな 子が
いたら、とめて やりましょう。

三 101 9 罇 これはわたしに さずかった子に ちが
いない。

四 31 8 罇 かさを さして いくと、むこうで よう
ちえんの 男の子が ないて いました。

四 32 2 罇 男の子は、げたのは ながおが 切れて あ
る けなかつたのです。

四 33 3 罇 はなが おが できあがると、男の子は、そ
れを はいて、

五 94 7 罇 「すずめの子らしいね。」
五 96 2 罇 ひわの子ですよ。

五 98 1 ひわの子は、それが 自分の なかまの 鳴き声
だと思いました。

五 100 3 罇 ひわさん、これから ぼくの子だよ。
六 7 6 男の子と女の子である。

六 7 6 男の子と女の子である。
六 7 8 男の子は、やがて しごと 台の上のものを あ
れこれといじりはじめた。

六 7 10 女の子は ただじつと みつめていたが、
六 8 3 男の子は ゆびさきで それをつまもうとした
が、あまり 小さいので つまめなかつた。

六 10 8 ふさぎこんで 下を みつめていた 女の子が、
思わず「あつ。」と さげんだ。

六 32 10 からすの子が、びつくりして すからと びだ
し、空を みあげる。

六 58 5 雪の降った 朝、一年生の子が、学校に くる
道で、はき物に 雪がついて ころびました。

六 61 10 罇 「子どもは 風の子。」
六 115 4 ただしちゃんは、海外から ひきあげて きた
子で、来年少学へ あります。

七 5 1 罇 あの白いブラウスの女の子かな。

七 5 2 罇 かばんを カチャカチャ 鳴らして、走って
くる 男の子かな。

七 5 7 罇 やっぱり あの男の子だった。

七 6 8 罇 もう 帰る子がある。
七 46 7 たがやしている 父と子、きりの花――

七 95 9 その毛に くるまって、うさぎの子が 7 ひき
いました。

八 11 1 学校から 帰ってきた すえの女の子が、茶の
まのドアを あけて、ひよいと ふみこんだと たん、

八 11 5 女の子ばかりでなく、茶のまに いたうち
じゅうのものが びつくりして、

八 12 2 みんな ないて――ことに、すえの女の子な
どは、目を なきはらしましたが、

八 16 10 せみの子から いえば、母親の ちぶさに す
がつた ようなもので、

八 20 8 せみの子は、だいたんに、まっすぐ なあな
を 地表に向けて ほつていき、

八 65 3 親あひるは、じつとその子を ながめた。
八 66 4 みんな にくいあひるの子も、いっしょになつて
およいだ。

八 67 1 罇 これは わたしの子だ。
八 67 1 罇 よくみれば きれいな 子なのだ。

八 67 10 罇 あそこにいる あひるの子を さ。
八 68 2 もう一わの鳥が とんできて、そのみに くい
あひるの子の首すじに かみついた。

八 68 9 罇 あの一わを のけた ほかは、みんな いい子
だ。

八 70 2 みんな にくいあひるの子は、《略》、にわとりか
らも ぶたれたり、つつつかれたりした。

八 70 7 あわれな あひるの子は、立っていた ほうが
いいか、歩いて いたほうが いいか さえも、わから

なかった。

八七九 そこで、みにくいあひるの子は、かきねを
とびこえてにげだした。

八七二 「これも自分がみにくいばかりに——」と、
あひるの子は思った。

八七四 あひるの子は、ここで一晚横になった。

八七九 あひるの子は、このあしの中で、横になっ
て休みたいと思った。

八七八 あわれなあひるの子はきもをつぶした。

八七四 はなをあひるの子のそばにつきつけて齒を
むいた。

八七五 あひるの子は、ため息をついた。

八七三 しかし、かわいそうにあひるの子は、おき
あがる氣にもなれなかった。

八七八 くれがたになつて、あひるの子は、ある小
さなひやくしょうの小屋へやってきた。

八七〇 風がひどいので、あひるの子は立つことも
できず、

八七四 あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあ
いているのをみつけたので、

八七三 おばあさんは、それを自分の子のようにか
わいがった。

八七五 朝になつて、よそからきたあひるの子は、
すぐにみつけられた。

八七三 そこで、あひるの子は、三週間ばかりため
しにいてもらった。

八七九 「〈略〉。」と、あひるの子にたずねる。

八八六 それで、あひるの子は、すみっこにすわっ
てばかりいた。

八八七 あひるの子は、きゆうにおよぎたくなった
ので、にわとりと思わずその話をした。

八八四 そこで、あひるの子はでかけていった。

八八五 あひるの子は、それをみて、ふしぎな氣持
になった。

八八六 あひるの子は、水の上を車のようにくるく
るまわり、その首をはくちょうの方へさしのべ、

八八八 あひるの子は、あの美しい、しあわせなは
くちょうをわすれることはできなかった。

八八五 あひるの子は、あの鳥の名も、どこへどん
でいったのかということも知らなかった。

八八六 あひるの子は、〈略〉、水の中をおよぎまわ
らなければならなかった。

八八五 あひるの子は、あながこおってしまったな
ように、いつも足をつかていなければならな
かった。

八八二 あひるの子をみつめて、木ぐつでこおりを
くだき、うちへつれて帰った。

八八四 すると、あひるの子は生き返った。

八八五 子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、
あひるの子はまたいじめられるかと思つて、

八八八 そこで、あひるの子は、バターのいれてあ
るたるの中へとびおり、

八八〇 おかみさんは声をはりあげ、火ばしであひ
るの子をうった。

八八二 子どもたちは、あひるの子をつかまえよう
として、

八八三 おりよく戸があいていたので、あひるの子
は、雪の中の草むらへはいりこんだ。

八八八 あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どん
なに苦しんだか、

八八八 ひばりが歌いだしたとき、あひるの子は、
ぬまの草むらの中で横になっていた。

八八三 すると、とつぜん、あひるの子は、つばさ
をばたつかせることができた。

八八八 あひるの子は、そのみごとな鳥を知ってい
た。

八八六 なかまに追いかけられたり、にわとりに
ぶたれたり、女の子につきのけられたり、

八八九 はくちょうはあひるの子をみた。

八九三 かわいそうにあひるの子は、ころされるも
のと思ひながら、水の上に頭をたれた。

八九〇 それは、ぶかつこうなみつもいないあひる
の子ではなかった。

八九三 私はまだみにくいあひるの子であつたと
き、

九二一 学校帰りの女の子ふたり、通りすぎる。

九二二 一、二年ぐらいの男の子、〈略〉、大またで
びよんびよんかけてきて、

九二八 勝った子が、「一、二、三——」と数えな
がら舞台はしまできてとまる。

九三三 着ぶくれて歩かされいし女の子ばたん
とたおれそのままなくも

九二七 お友だちにさそわれても、どうしてもおと
うさんのそばへこない女の子もありました。

九二七 男の子がベッドにすわっている。

九二四 ひとりの女の子が、「〈略〉。」と、「こくこ
一」の文を大きな声で歌う。

九二六 男の子が、むちゅうになつてかけてくる。

九二六 工員は男の子をだきあげる。

九二六 日の光をいっぱいに受けた、はればれとし
た父と子。

九二六 そうしたら、二年生の男の子が、ふくろろ
のからだを手でいじりました。

九二六 男の子は、「〈略〉。」といって喜びました。

九二六 三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくた
ち強い男の子だ。

十一 27 ㊦ あの子は、どうかしているのではないだろうか。

十一 34 ㊦ さなえ運ぶ子、うし追うおきな、家内そろって田植える。

十一 90 ㊦ ほんとうに感心な子だ。

十四 56 フィリップ自身、中部フランスの小さな町のまづしい木ぐつしの子に生まれ、

十四 62 老いた母を思う子の眞情は、

十四 80 2 なん百年という前からつくられて、子に、まごにと傳えたことではないかと思ひます。

十四 90 5 「略。」と、小さなマッチ賣りの女の子は、町をあらこちら歩きながら思つた。

十四 90 7 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。

十四 90 9 その上ぐつは、母親のもので、この子にとっては大きすぎた。

十四 91 4 もう一つのほうは、どこかの男の子がひろって行つてしまつた。

十四 91 5 その男の子は、これは人形のゆりかごにはもつてこいだと思つたのであろう。

十四 91 8 そこで、その女の子は、まったくはだしになつてしまつた。

十四 92 3 おおみそかの晩だというのに、その子は、まだマッチをすこしも賣つてはいなかつた。

十四 92 11 かわいそうに、その子は、おなかがすいて、こごえて、身をひきずつて歩いてた。

十四 93 1 その子のきれいなかみの毛は、両かたにまつわりつき、

十四 93 7 女の子は、窓々をおして、ちらちらとかがやくともしびの光を見た。

十四 93 11 女の子は、手にマッチの小さなたばを一つ持っていた。

十四 93 12 女の子は、どんなにか、それで火をともしてみたかつたことだろう。

十四 94 3 女の子は、二つの家の間に、ちよつとした、身をかくす場所を見つけた。

十四 94 6 女の子は、両足を「略」、ぼろぼろの着物の下で重ねて、

十四 95 1 女の子は一本のマッチをとりだした。

十四 95 3 女の子は、その上へ、小さなつめたい両手をさしのべた。

十四 95 5 その小さなほのおが、その子には、もえさかる大きなほのおのように思われた。

十四 96 2 女の子は、小さな、つめたい足を、かがやくほのおの方へのぼした。

十四 96 4 女の子は、手にもえつくしたマッチを持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。

十四 96 5 女の子は、「略」、もう一本のマッチをとつてかべでこすつた。

十四 96 10 その女の子は、中のへやをすつかり見とおすことができた。

十四 97 6 鳥は、「略」よたよた歩いて、その女の子の方へずつとよつてくるではないか。

十四 97 8 女の子のそばには、あつい、かたいかべしかのこつていなかった。

十四 97 10 女の子は、もう一本の、第三番めのマッチをすつた。

十四 97 11 そうして、こんどは、女の子は、一本のクリスマスツリーの木の下にすわっていた。

十四 98 4 たくさんの小さなろうそくが、「略」、ちかちか、ちかちかと女の子の上を照らし、

十四 98 7 女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。

十四 99 1 女の子はねむそうにつぶやいた。

十四 99 4 「略。」と、女の子は思つた。

十四 99 5 この子にとつて、ただひとりのしんせつな人であつたおばあさんが、

十四 99 9 女の子は、またもう一本のマッチを、そばのたばの中からひきだした。

十四 100 5 「略。」と、女の子は、声をあげた。

十四 100 10 「略。」と、女の子はいっしょうけんめいにたのんだ。

十四 101 6 おばあさんは、女の子をうでにかかえて、ふたりは、いっしょにふわりとまいあがつた。

十四 102 4 ㊦ かわいそうな子だ。

十四 102 4 ㊦ あの子は寒さでこごえ死んだのだ。

十四 102 5 人々は、女の子がおおみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。

十四 102 7 その子がどんなに幸福に、神さまの樂園の中で、元日をむかえているかを知らないのだ。

十五 6 5 ㊦ 六つほどの子がおよぐゆえ水わかな

十五 8 3 ㊦ さくらさくら人が子が歩かせて

十五 10 1 ㊦ れんげつみて子という母の黒いこうもり

十五 20 6 両親と子どもふたり、ひとり男の子で八つ、ひとり女の子で四つになるかわいい子どもたちでした。

十五 20 6 ひとり女の子で四つになる

十五 21 10 男の子は、小石を見つけては深い谷の中心へなげこんで、

十五 21 12 女の子は、あぶない足どりで、山の上の方に、

十五 23 5 ふと氣がついてみると、いままで先生のそばにいた女の子のすがたが見えません。

十五 23 8 大きなやまわしのつめにつかまれて、女の子はばたばたしているではありませんか。

十五 24 5 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女

の子をつかんで舞いおりて来ました。

十五24 6 いまそれをとめなければ、もうその女の子は、どこへ持って行かれるかわかりません。

十五25 2 鳥が大づめでつかんでいる女の子のからだを下へ落ちないように、

十五26 6 このわしが大きなくちばしで女の子の頭でもつつけば、

十五26 12 下の方にいる女の子を元気づけるために「略」といわずにはいられませんでした。

十五27 3 女の子は、〈略〉おどろいて氣でも失ったのか、すこしもさがわず、

十五28 7 左手は女の子の上帯にかけたままで、

十五29 3 鳥は、不意のしゅうげきにおどろいて、〈略〉、つかんでいた女の子をはなして、

十五29 4 いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつた短刀があります。

十五29 6 少年は、必死のかくごで、すばやく女の子を自分のせなかくしました。

十五29 10 少年は、右手に短刀をふりかざし、左手で女の子をかばい、

十五30 9 少年が女の子の背後にかばうようにして、すこしあとずさって、岩角へ身をよせかけたとき、

十五31 12 その中で、女の子の背後にかばいながら、少年は苦しい戦いを続けていました。

十五33 2 父親のうでにだかれた女の子は、にこにこわらって、

十五33 6 そのときの女の子の両親の喜び、

十五60 3 同志社をわが子のように、だいに胸にだいてはぐくみ育てていた新島のおじさんが、

十五96 7 小さな子がやって来た。

十五97 8 まあ、あのふとった子のわらうことはどうです。

十五99 6 また、ぼくを知っている子がいる。

十五99 9 ここにいる子をだれも知らないなんて、そんなことあるのですか。

十五115 7 どんな子だって、おかさんはひとりぎりです。

十五119 12 まあ、だまっておいでよ、いい子だから。

こ「小」 じおおさむこさむ・なかよしこよし・ゆうやけこやけ

こ「粉」 じうどんこ・こむぎこ・ひのこ

こ「潮」 じとわだこ・ミシガンこ

こ じかけっこ・かわりばんこ・すみっこ・にらめっこ

こ2 こ

三99 図 はこ

四78 5 こ——こいのたきのぼり。

こ「課名」 30 五

一2 6 五 かくれんぼ……………十二

一12 1 五 かくれんぼ

二3 1 五 おはなし……………二十五

二25 1 五 おはなし

三2 6 五 学校……………三十

三30 1 五 学校

四2 6 五 がんのなかま……………四十一

四41 1 五 がんのなかま

五2 6 五 心と心……………三十八

五38 1 五 心と心

六2 8 五 月と雲……………五十一

六51 1 五 月と雲

七3 3 五 作文……………四十七

七47 1 五 作文

八3 4 五 みはらし台……………五十六

八56 1 五 みはらし台

九3 1 五 先生とみなさんへ……………三十一

九31 1 五 先生とみなさんへ

十3 1 五 発明二つ……………三十二

十32 7 五 発明二つ

十一3 1 五 新しい出発……………四十三

十一43 1 五 新しい出発

十二3 1 五 人形しばい……………四十三

十二43 1 五 人形しばい

十三2 8 五 電話……………三十七

十三37 1 五 電話

十四2 6 五 心に太陽をもて……………四十二

十四42 1 五 心に太陽をもて

十五3 9 五 その人のことば……………七十七

十五77 1 五 その人のことば

こ「五」(話手) 2 五

九89 6 五「へんだよ。

九90 11 五「もういいたら——」と、やまだのせなかをおしながらさる。

こ「題名」 4 五

一49 7 (五)

二37 3 (五)

七2 9 (五)

七28 1 (五)

こ「五」(名) 18 五 5 (5) じしちこ・しちこさん

四70 図 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

六32 2 5 かかしのまゆがまっすぐにのびる。

六59 2 七と五と 私は、きのう、おもしろいことに気がつきました。

六59 7 うたうたは、そのことばの声のかずが、

五か七になつてゐるのです。

六60 1 ウスムラサキニ——七 ホノボノト——五

アカルクソマル——七 アサノソラ——五

六60 3 アカルクソマル——七 アサノソラ——五

六60 5 タノシイコトガ——七 アルヨウナ——五

六60 7 アサワヤカナ——七 アサノソラ——五

六60 10 カボチャノハナガ——七 サキマシタ——

五

六61 1 アンナトコロニ——七 サキマシタ——五

六64 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

11 12

八18 1 2 3 4 5 6 7 8

九88 5 たかぎには友だちの一、二、三、やまだに

は四、五、六、そのほか数人が、それぞれにわか

れてふたりをひきとめてゐる。

十19 4 5 ひとりの子どもが、立って本を読んで

ゐる。

十一11 1 トップ 3 5 7 コックス 2

4 6 8 整調

十一56 1 2 3 4 5 6 7 8 9

10 11 12

十二50 7 (5)

十二53 6 (5)

こ「後」↓しゅうせんご

こ「語」↓オランダご・がいこくご・がいらいごじ

てん・カンボジアご・ギリシアご・ドイツご・にっ

ぽんご・にっぽんごのかきあらわしかた・ひょう

じゅんご・フランスご・ポルトガルご

ごあいさつ「御挨拶」(名) 1 ごあいさつ

七44 6 1「ごあいさつをします。」といて、青

年のまえにすすみでた。

ごあんないいたす「御案内」(五) 1 ごあんない

いたす「一シ」

四106 2 1「かめ」ごあんないいたしまししょう。」

ごあんないいたす「御案内」(五) 1 ごあんない

いたす「一イ」

六91 6 1「では、そのかたをこちらへごあんないし

なさい。

こい「鯉」(名) 2 こい

四78 5 こ——こいのたきのぼり。

九33 3 1「四五十センチもあるこいもいます。

こい「濃」(形) 6 こい「一イーク」

五39 6 1「ふもとなるにしたがつて、木のみどり

がこくなつてみえます。

六40 10 夕やけがばら色にこくなる。

八23 9 みるまに、羽はすらりとのび、からだの色

もこくなつていきます。

九16 1 もう大きさは親つばめと同じですが、

まだ、口ばしの下の赤色が、親つばめほどこくあ

りません。

十57 6 白と、もも色と、こいも色のがさきまし

た。

十一47 4 津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆ

れて、

こいけ「小池」(名) 1 小いけ

四68 4 うらの小山の小いけに子がもが二百ば、

こ米が一びょう、

こいし「小石」(名) 5 小石

五5 7 小石をころころ、ころがして、

八98 5 いねがよく根をはって育つように、小石を

ひろい、土のかたまりをくだいて

九119 4 その帰りに、近道をして谷をおりてくると、

そこに小石でかこまれた美しい泉があった。

九126 7 茶人は、そこをほりくぼめ、小石でどてを

つくり、泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、

十五21 10 男の子は、小石を見つけては深い谷の中

へなげこんで、

こいし「恋」(形) 1 こいし「一ク」

十17 6 1「そういう遠い國へいくと、自分の國のこ

とばがこいしくなります。

こいし「御」(名) 1 こいし「一しよ」

十四14 10 1「もうすこしすれば、こいし「一しよ」に一

月をくらせるのだ、

こいし「御一生」(名) 1 こ一生

十四7 11 1「おとうさんのこ一生は、私たちにとつ

ての手本になつてくれるでしょう。

こいぬ「小犬」(名) 1 こいぬ

一38 5 しろいこいぬが、むこうからころげるよ

うにはしつてきます。

こいのぼり「鯉」(名) 2 こいのぼり

四124 5 五月はこいのぼり。

十一33 2 1「かきのわか葉に目の照るころは、矢車

からからこいのぼり、村のわら屋の庭に立つ。

こう「甲」(話手) 13 甲

七75 1 1「甲」どこへいったのだらうね。」

七75 5 1「甲」砂のほかに、なにもみえない。」

七76 1 1「甲」あなたがたは、なにかさがしておいでだよ

うだが——」甲「そうです。」

七76 10 1「ふたりは、なおびつくりして、甲「まった

くそのとおりです。」

七77 10 1「甲」どこでみましたか。」

七78 4 1「その荷は麦でしょう。」甲「たしかに、たし

かにそうです。」

七78 7 1「甲」え、でも、そんなにくわしくござんじ

ではありませんか。」

七78 11 1「ふたりは、また顔をみあわせていたが、甲

「どうもおかしい。

七80 3 甲「私どもは、麦をつけたらくだをつれて、さばくを通っていましたが、

七80 11 甲「すると、向こうから、『略』と、たずねるのでございます。

七81 8 甲「らくだがびっこであることも知っていました。

七82 2 甲「そのうえ、つけていた荷物の品まで、知っているじゃありませんか。」

七84 5 甲「もしもし、それなら、荷物をつけていることが、どうしてわかったのでしょうか。」

こう「甲」(名) 1 甲

七74 7 七にげたらくだ 一の場面 人 甲と乙、ほかに、ひとりの旅人。

こう「斯」(副) 77 こういふようにかこうにか

一61 4 おじいさんがこういうと、

二35 1 合 はじめのめくらは、ぞうのおなかをなでて、こういいました。

二35 4 合 二ばんめのめくらは、ぞうのきばにさわって、こういいました。

二53 10 「略」。こういって、さちこは、じろうを手まねきします。

二54 5 こういって、いちろうをよびます。

二23 10 あちらの村でもこちらの村でも、こういって、この大きな木をみあげました。

三60 7 ジュデーはこういいます。

三60 9 デビッドはこういいます。

三73 10 はじめてみんながこうさげびました。

四19 6 先生がこうおっしゃったので、

四34 4 「略」。先生にこうたずねられて、

四58 7 「略」。こういって、かっちゃんはそのしんでいました。

四63 9 こういわれて、かっちゃんは、きまりわるそうににこにこわらいました。

四11 8 合 かめ「りゅうぐうはいつもこうなのですよ。」

五29 3 合 それはこうなんです。

五30 8 合 ほんとうにすまなかつたね。きみは、ときどき、こういうことをやるのかね。

五57 4 「略」。私は、こういって、はるおのかたをそっとおさえました。

五64 9 合 おとうさんも、おかあさんも、こうしてまいにち、たっしやで生きていけるのは、だれのおかげだろう。

五85 4 りょうかんさんはこういいながら、ほうきを持って、木の葉をはきよせました。

五88 11 合 こうして右の手でだいてな、左の手でかえてさ、

五91 1 こういってから、りょうかんさんは、「略」と、おくざしきにつれていきました。

五107 2 合 ほら、羽がだめだから。こうしていつまでも、ここにいろよりしかたがないのさ。

六27 4 合 あり三「毎日あせだくだったね。」あり一「そのおかげでさ、いまこうしてあたたまることもできるし、

六54 1 ふみおは、こういって、空をみあげました。

六55 3 合 こうするとよくわかるのね。

六101 2 こう思いつくと、ぼくは、もう、じっとしていられなくなった。

六102 1 こうしてできた二本のつつは、うまくはまりあって、

六102 4 「略」。ぼくはこうひとりごとをいいながら、そとをのぞいてみた。

六113 8 ぼくは、こう考えると、『略』という氣持

は、どこかへふっとんでしまった。

六133 10 合 勝ったものになにもないなんて話はない。どうだ、こうしては。

七83 5 合 かた目だということとは、どうしてわかったのかね。旅人「それは、こうです。

八28 11 合 ほかのむすめたちは、野原で遊んでいたのに、うちのむすめは、こうしてはたらきつづけているのは感心なことだ。

八29 2 こうお考えになった天帝は、

八41 10 そのとき、王女がはいってきました。「略」。こういって、王さまにだきつきました。

八44 1 王女は、こういって、王さまにすがりつきました。

八45 7 その人は、こういいました。

八94 9 こうすると、なわしろにまいてから、早くめがでるといふことです。

九16 4 こうして、大ぜいのつばめが、ならんでいろをみると、

九68 2 合 いちろうはわらって答えました。「そんなら、こういいわたしたらいいでしよう。

九77 1 合 ごらんなさい。いまでもこうやって、人は目をたべています。

九92 11 またじゃんけんをする。こうして、ふたり、

じゅんじゅんに舞台をさる。

九136 4 こう頼まれると、だまってたべてしまいうわけにもいきません。

九143 6 目がさえてなかなかねむれませんか。

「略」。こう話しかけたのは、ばらの花でした。

九147 10 こう決心がつくと、くもは、すっかりらかな氣持になりました。

十17 7 合 こうしておまえたちに話すようなことが、思うぞんぶんつかってみたくあります。

- 十291 同じものをみるにしても、どうしてそのものがこうなったかというのを、考えて
- 十3210 豊田佐吉は、村の人々から、こういつてあざけられた。
- 十3311 佐吉の考えはこうである。
- 十411 うめは、「略。」こういつて、失望にせず幸吉を、なんどもはげました。
- 十464 エジソンはたいへん喜んで、こういった。
- 十728 こう、さしずをされて、しかたなく、
- 十1273 村の人たちは、こう、うわさをしました
- 十一6911 村もかわればかわるものか——これが父親であろうとは、とても思われませんでした。
- 十一751 医者はずっと考えてから、こういいました。
- 十二69 「略。」こういつて戸をたたきますと、
- 十二227 文雄はこう考えた。
- 十二803 こう、私がたたみかけるようにたずねたとき、
- 十二876 庭で植え木の手入れをしている父にこういわれたら、
- 十二878 手紙を書こうとして、すずりばこをあけた父にこういわれたら、
- 十二8710 ふろ場の中で湯をかきまわしている父にこういわれたら、
- 十二909 太郎が、こういう短い文を書いた。
- 十三76 ああ、季節のこういうのどかなとき、
- 十三77 こういうしずかな午前にあつて考える、
- 十三131 地面は平らなもので、日や月が、東から西へまわっているように思われます。こういううぶな考えかたがもとになって、
- 十三538 その下の白いところに、先生の手で、こ

- う書いてありました。
- 十四510 こうしたフリリップの純真さ、誠実さ、
- 十四9411 妹にしても、私にしても、心からおかあさんを愛しているからだ、こうお考えにならなければいけません。
- 十四16411 いつもこう思っていてください。
- 十四343 こうなつてくると、うちゅうというものは、どこまで廣いのか、想像がつかません。
- 十四44411 なんでこんなにほがらかでいられるのか、それを、こう話してやるのだ。
- 十四483 どうせ助からないものなら、こういう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだ
- 十四491 寒さに氣を失つて、またから手をはなさないように、こうして元氣をつけていたのです。
- 十四518 「略。」こういいだしたのは、根のしるしをつけた老人でした。
- 十四573 だから、私は、そのかぼちゃは、全部私のものだと思います。」つるがこういつたとき、
- 十四6811 茶わんの湯と、こうしたら雨のぼあいとは、よほどよく似たものと思つて
- 十五5811 こうしてなお語り続けようとする博士をさえぎつて、
- 十五6911 いまその写真の主が、こうしておじさんを見あげているのに、
- こう ↓ かべしんぶんだいいちごう・きしゃだいいちごう・だいいちごう・だいさんごう・だいにこう・だいはちごうしつ・だいよんごうしつ・につぼんりゅうがくせいだいいちごう・のうりんいちごう・ローマンこう
- こつい「厚意」(名) 1 こつ意
- 十五765 停車場まで送つてくださった博士のこつ意をふかく謝して、別れの手をさしのべると、

- こついん「工員」(名) 5 工員
- 十243 トロッコをおして、炭坑にはいつていく工員。
- 十248 あせまみれになつた工員の顔、胸、うで。
- 十253 ひとりの工員がしごとをすませて、坑内から地上にでてくる。
- 十263 工員も走りだす。
- 十265 工員は男の子をだきあげる。
- こついんたち「工員達」(名) 1 工員たち
- 十246 工員たちは、さくがん機やつるはしを持つて、石炭をほつている。
- こつえい「光栄」(名) 1 光栄
- 十五8511 あのとおりテーブルの光栄になつてい
- るさとうがしを。
- こつえん「公園」(名) 3 こつえん
- 三924 こつえんにさいたきれいな花は、みんなの心をたのしませてくれます。
- 四51 こつえんのせわや、どうろのそうじなどもしてくれま
- す。
- 十二48711 こつえんでも教室でも、どこでもやれるからね。
- こつお「小魚」(名) 2 小魚
- 十二6210 水を飲もうと思つて小川の岸にでみると、美しい小魚がおよいでいる。
- 十二631 小魚はしおからかつたので、のどがかわいてたまらない。
- こつおつ「甲乙」(話手) 5 甲乙
- 七7510 もし、もし。」甲乙が、いっしょにふり返つて、甲乙「はいはい。
- 七766 ふたりは、びっくりした顔で、甲乙「そうです。
- 七782 それから、つけた荷がありましたね。」甲

- 乙「ありました。」
- 79 6 甲「いや、あちらで、あかしをたててもらおう。」
- 82 4 甲「らくだをぬすんだのは、この男にちがいありません。」
- こうおつ 「甲乙」(名) 3 甲乙
- 75 9 もし、もし。甲乙が、いっしよにふり返って、甲乙「はいはい。」
- 79 9 甲乙。
- 80 1 旅人と甲乙が、ならんでいる。
- こうおつふたり 「甲乙二人」(名) 3 甲乙ふたり
- 74 9 甲乙ふたりが、あちこちをみまわしながら、
- なにか、ものをさがして歩いてくる。
- 77 4 このようすを、甲乙ふたりがみてとって、
- なにか、こそそささやきあう。
- 85 11 甲乙ふたり、いそいでたちさる。
- こうか 「校歌」(名) 1 校歌
- 15 12 9 先生がたがみんな、合唱してくださった校歌や、
- こうがい 「郊外」(名) 2 こう外
- 15 60 4 新島のおじさんが、やまいを札幌のこう外に養っていたのは、明治二十年の夏であった。
- 15 72 9 自動車は、やがてこう外のすばらしい家のげんかんに横づけになった。
- こうかいじゅつ 「航海術」(名) 1 航海術
- 14 32 7 航海術がさかんになったのです。
- こうかい・する 「航海」(サ変) 1 航海する 《一シ》
- 12 4 10 大洋を西へ西へと航海して陸地にであつたのが、それほどの手がらだらうか。
- こうさち 「幸吉」(人名) 14 幸吉 ひききもとこうさち
- 13 9 5 幸吉は、あわつぷほどの核をこしらえて、それを、母貝の体内にさしいれてみた。
- 14 0 7 村や町の者は、幸吉のむだばねをあざけり、そのゆめのような考えをわらった。
- 14 1 1 こういつて、失望にしむ幸吉を、なんどもはげました。
- 14 1 9 うめは、いつもこのわる口のたてとなつて、幸吉をかばい、
- 14 2 4 幸吉とうめは、たがいにはげましかった。
- 14 2 11 この光明を喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であつたうめが、この世をさつてしまった。
- 14 3 4 しかし、幸吉は、くじけはしなかった。
- 14 3 9 幸吉は、それこそ氣ちがいのようになつて、死目をどんどんみていった。
- 14 4 3 そのころ、幸吉は、すでにしらがの老人になつていた。
- 14 4 8 幸吉は、自信をもつて母貝を海中にはなつた。
- 14 4 10 幸吉は、望みをかけた第一の母貝を開いてみた。
- 14 5 8 名高くなつたかげには、幸吉一生の苦心がひそんでいる。
- 14 5 9 かつて、パリーの眞珠商たちが、幸吉の手になる養殖眞珠は、まがいものであるといつた。
- 14 6 1 幸吉は、《略》エジソンのもとをたずねて、養殖眞珠のつくりかたを、こまごまと話した。
- こうさぎょう ひきんだいてきこうさぎょう・しゅこうさぎょう
- こうくうがいしゅ 「航空会社」(名) 1 航空会社
- 9 21 11 航空会社では、お金をとらずにつばめを運ぶことを申しでました。
- こうげい ひにつばんびじゅつこうげいし
- こうけい 「合計」(名) 1 合計
- 9 23 1 二日 同じく 九百九十 五日 同じくのこりの三十九九 この合計は、約八万九千ばです。
- こうげいひん 「工芸品」(名) 1 工芸品
- 12 11 2 まき絵は、日本のすぐれた工芸品の一つで、古くから外國人にもてはやされてきました。
- こうこう 「孝行」(名) 1 こうこう
- 113 8 〇 いつまでも おそばにいて、こうこうをしたいと思ひましたのに、ほんとうに おなごりおしゅう ございます。
- こうこう 「轟轟」(形状) 1 こうこう
- 125 2 こうこうたるトロツコのひびき。
- こうこう (副) 1 ゴウゴウ
- 9 50 11 水がふえのように鳴つてとびだし、すぐたきになつて、ゴウゴウと谷に落ちていました。
- こうこうしい 「神神」(形) 1 こうこうしい 《一イ》
- 15 94 4 舞台は清らかな、こうこうしい、ばら色の美しい光に照らされます。
- こうこく 「広告」(名) 1 広告
- 9 19 11 その廣告は、たいへんなはなきようをまきおこしました。
- こうこく・する 「広告」(サ変) 1 廣告する 《一シ》
- 9 19 10 協会ではすぐに、《略》つばめのせわをするを、新聞に廣告しました。
- こうさぎ 「字免」(名) 14 子うさぎ
- 7 93 3 朝、いつてみたら、右から四ばんめのへやに、子うさぎが4ひき生まれていました。
- 7 93 8 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

七96 2 7 ひきの生まれたばかりの子うさぎは、わらの毛の中で、元気に動いています。

七96 6 7 ひきの子うさぎのうち、5 ひきはねずみ色、1 ひきは白、もう1 ひきは黒でした。

七97 2 白の子うさぎは、親について、はじめて、巣からはいだしてきました。

七97 6 ねずみ色の子うさぎが、きょうは、巣からでて歩いていました。

七97 8 黒の子うさぎが、ちちをのうとして、親うさぎのちにすがりつきますと、

七98 3 子うさぎは巣の中でねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。

七98 4 お晝ごろみたら、子うさぎは、7 ひきとも、巣からでて歩いていました。

七98 7 子うさぎが生まれてから、きょうで20 日めです。

七98 7 子うさぎと母うさぎのめかたを計ってみました。

七98 9 母うさぎは4 kg、子うさぎは、おもいで320 g、かるいので260 gでした。

七99 2 子うさぎの毛の長さを計りました。

七99 5 母うさぎと7 ひきの子うさぎは、頭をそろえて、なかよくにんじんをたべていました。

こうさく 「工作」(名) 1 工作 ↓ ずがこうさく

六117 6 紙は半紙でいいし、骨は工作のあまりのひごでまにあわせました。

こうさくしつ 「工作室」(名) 1 こうさくしつ

三35 6 画 こうさくしつでは、六年生が、はこのようなものをごしらえていました。

こうさん 「鉾山」(名) 1 鉾山

十三17 3 デンマルクは、みどりの牧場と、〈略〉と、近海の漁場のほかには、鉾山があるのでもな

く、

こうさんしよくぶつ 「高山植物」(名) 2 高山植物

十五19 8 高山植物のさきみだれているけいしゃ面を、

十五21 3 まっ白なひつじのむれ、朝風にひびくすずの音、日光にかがやく高山植物のかおり、

こうし 「子牛」(名) 6 子うし 小うし

五40 10 画 なかに、子うしが三とういます。

五41 5 画 子うしは、小川の岸をとここ走りました。

五49 6 画 子うしが水のむ岸をでる。

九28 3 画 親のまたくぐる子うしや草の花

十三51 1 子うしをつかまえに行つて来るよ。

十五84 6 画 小ひつじの足に、小うしのかんぞうもある。

こうし 「公子」 ↓ しょうこうし

こうじ 「工事」(名) 1 工事 ↓ ていぼうこうじ

十二58 7 みるみるうちに工事がはかどつて、九十九の石だんができた。

こうじ 「小路」(名) 2 小路

十三26 7 ホートンというのは、小路のことである。

十三26 8 どこの家も、高い土べいを立てめぐらしているの、小路は、おのずから高い土べい続きになっている。

こうして 「斯」(接) 5 こうして

八72 3 またさきへとんでいった。こうして、大きなぬまのあるところへやってきた。

十二12 5 少女たちは、〈略〉。こうして、ずんずんおとうさんのそばへきて、

十一76 9 こうして第一日はすぎました。

十二37 11 こうして私は、物にはみな名まえのあることがわかったのです。

十二115 8 こうして、みんなの歩調がそろつたときに、

こうじば 「工場」(名) 1 工場

十一22 2 これを持って、朝早く工場へいきました。

こうしゃ 「校舎」(名) 2 校舎

七53 校舎の半分が光つた。

十五123 5 楽しい六か年の思い出を残してくれたこの運動場、この校舎、あの農園、

こうじょう 「工場」(名) 4 工場

五34 4 この工場のきかいを動かしている力は、なんでしょう。

五36 2 この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場のきかいを動かすのです。

十一46 川上の方をながめると、近くの町の工場のかんとつが、なん本も立っているのがみえる。

十一10 11 画 あの町でも、あの工場でも、また、日本の國全体だって、同じことだと思ふ。

こうせん 「光線」(名) 2 光線

十20 9 画 白っぽくみえる太陽の光線ですが、わけてみると、こんなにさまざまな色になります。

十五107 12 画 それは、毎日ぼくたちを照らす光に、二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。

こうた 「小歌」(名) 1 小歌

十13 5 方言でできた小歌のあることを、おとうさんは、きいて知っていましたから。

こうたい 「交替」(名) 1 こうたい

七52 3 画 「場所こうたい。」しんぼんの先生のあいで、ぼくらは場所をこうたいした。

こうだい 「広大」(形状) 2 廣大

十四34 10 この廣大なうちゅうにくらべては、太陽もごく小さなものです。

十四357 これを思えば、人間の力というものは、うちゅうにも負けないくらい廣大で、

こうたいする 「交替」 (サ変) 1 こうたいする

《—シ》

七524 しんぱんの先生のあいずで、ぼくらは場所をこうたいした。

こうちようせんせい 「校長先生」 (名) 1 校長先生

十五1202 校長先生のお話を聞いていると、ずっと

まえのことが思い出されてきた。

こうつう 「交通」 (名) 1 交通

十四2410 それは、外国と交通をして、日本になかった品物が、外国から伝えられたときに、

こうてい 「校庭」 (名) 3 校庭

七53 校庭のつゆもいっぺんに光った。

七87 その声が校庭にひびきわたる。

十二955 だれも話し相手がないので、しょんぼりと校庭に立っている、と、

こうてん 「公転」 (名) 1 公轉

十三153 また、公轉といつて、自轉をしながら、

だえん形のきまつた輪をえがいて、一年に一回、太陽のまわりをまわります。

こうど 「高度」 (名) 1 高度

十四849 空中の温度の変化、風の関係、水蒸氣の量、高度など、さまざまな条件によって、雪の

けっしょうがちがうわけを、

こうどう 「坑道」 (名) 1 坑道

十四24 石炭の坑道。

こうどう 「講堂」 (名) 1 こうどう

七710 図 こうどうをのぞいてみたり、みんなが勉強する教室はいって、こしかけてみたり——

こうない 「坑内」 (名) 1 坑内

十五23 ひとりの工員がしごとをすませて、坑内か

ら地上にでてくる。

こうねん 「光年」 (名) 2 光年 ↓ いちこうねん・

いちまんこうねん・いっせんこうねん・ごじっこうねん・さんじっこうねん・じゅうまんこうねん・に

じっこうねん・にじゅうおくこうねん・にじゅうきゅうてんこうねん・ひゃくこうねん

八343 「光年」という単位です。

八3410 「光年」を単位として計算しなければなら

ないほど、遠いきよりであります。

こうのとおり 「鶴」 (名) 1 こうのとおり

八605 野原にはかれ草がつみあげられ、こうのと

りは、長い赤い足をして歩きまわっていた。

こうば 「工場」 (名) 1 こうば

三896 こうばではどうでしょう。

こうばい 「紅梅」 (名) 1 紅梅

十一307 紅梅・白梅みなりはてて、ひがんす

ぎれば風あたたかく、

こうばまち 「工場町」 (名) 1 工場町

五341 ここは工場町です。

こうふく 「課名」 2 幸福

八29 四 幸福……三十七

八371 四 幸福

こうふく 「幸福」 (話手) 14 幸福

十五995 幸福「こんにちは、チルチル。」

十五999 (幸福に向かい) きみはだれなの。」幸

福「きみ、ぼくを知らないの。」

十五1001 幸福「おい、みんな、聞いたろう。」

十五1015 幸福「あなたは、やっぱり、なんにも知

らないのですね。」

十五1010 幸福「みんな聞いたかい。」

十五1037 幸福「ええ、ええ、そうですとも。」

十五1054 幸福「なにさ、あれは、不幸のほらあな

からにげて来た『とてもたまらなくなるゆかい』

ですよ。

十五1058 幸福「あれは、『大きな喜び』ですよ。」

十五10510 きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。」

幸福「もちろん。」

十五1074 幸福「そりゃあ、そうでしょう。」

十五1084 幸福「あれは、『愛することの大きな喜

び』ですよ。」

十五1089 幸福「あれは、人がまだ知らずにいる

『喜び』たちです。」

十五10812 幸福「いま来ようとする新しい『喜び』をむかえているのですよ。」

十五1093 幸福「あなた、あの女の人を知らないのですか。」

こうふく (題名) 2 幸福

八33 幸福

八497 幸福

こうふく 「幸福」 (名) 60 幸福 ↓ おうちにいるこ

うふくども・ごこうふく・ふとったこうふく・ふ

とったこうふくさん・ふとったこうふくたち・ふ

とったこうふくども

八78 まるで、一日の幸福を予言してくれるよう

です。

八395 図 自分は、それ以上の幸福は願わない。

八498 「幸福」が、いろいろな家へたずねていき

ました。

八499 だれでも幸福のほしくない人はありません

から、

八503 「幸福」は、まずしいこじきのようななり

をしました。

八504 だれかがきいたら、自分は「幸福」だとい

わずに、「びんぼう」だといつもりでした。

は、世の中にありませんよ。

十五110 3 ㊦ これほどの幸福は、世の中にありませんよ。

十五110 8 ㊦ そのうえ、毎日、新しい力と、わかさと幸福とがますのですよ。

こうふく 「幸福」(形状) 16 幸福

八45 8 ㊦ ほんとうに幸福な人をつみつけて、その人の着ているシャツを王さまにお着せするのです。

八46 2 ㊦ そのほんとうに幸福なものをさがしてきてほしい。

八46 6 ㊦ ほんとうに幸福な人は、やすやすとみつかるものではありません。

八47 2 ㊦ 王子も、なんとかして父の病気をなおしたいと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

八48 2 ㊦ 世の中にわしより幸福なものはあるまい。

八93 2 ㊦ ほんとうに幸福であったが、すこしもいばらなかった。

十二39 3 ㊦ この日が自分にもたらした喜びを思い返していたときの私ほど幸福な子どもを発見することとは、むずかしいでしょう。

十三10 9 ㊦ 同じ名まえの人も世の中には多いが、ある人は、幸福なくらしをし、

十四14 11 ㊦ 自分としては、力のかぎりおかあさんを幸福にしておあげしよう。

十四102 7 ㊦ その子がどんなに幸福に、神さまの樂園の中で、元日をむかえているかを知らないのだ。

十五85 6 ㊦ あの人たち、ずいぶんうれしそうな、幸福そうな顔をしているなあ。

十五93 11 ㊦ さあ、みんな、力づくで、いやでも幸福にしまおうじゃないか。

十五106 4 ㊦ 『善人であることの大きな喜び』で、いちばん幸福なのですが、いちばん悲しそうです。

十五117 8 ㊦ 私たちは、それは幸福ですけれど、自分たち以上のものは、見えないのです。

十五117 12 ㊦ それは幸福なんですけれど、やはり、私たちの影以上のものは見えないのです。

十五118 4 ㊦ 私たちは、幸福なんですけれど、私たちのゆめ以上のものは、見られないのです。

こうふくたち 「幸福達」(名) 5 「幸福」(ぜいたく)たち 「幸福」たち 「幸福」たち 幸福たち

十五82 4 ㊦ いちばんふとっている「幸福」(ぜいたく)たちが、(略)、たべたり、飲んだり、

十五95 7 ㊦ かわいらしい幸福たちがやって来た。

十五101 9 ㊦ 「幸福」たちは、みなどつとわらいます。

十五103 2 ㊦ 外へ出ればいつでも、この「幸福」たちは見られます。

十五116 12 ㊦ あんまりはつきり顔を見せると、「幸福」たちがこわがるだろうって、

こうふくども 「幸福共」(名) 2 「幸福」ども 「幸福」ども

十五83 5 ㊦ あれがこの世の中でいちばんふとつただれの目にも見える「幸福」どもだよ。

十五100 9 ㊦ ほかの「幸福」ども、どつとわらいくずれる。

こうふくなかま 「幸福仲間」(名) 1 幸福なかま

十五87 3 ㊦ わたしは、幸福なかまでいちばんふとつた『お金持の幸福』です。

こうふくのその 「課色」 2 幸福の園

十五3 10 六 幸福の園……八十二

十五82 1 六 幸福の園

こうふくもの 「幸福者」(名) 1 幸福もの

八48 3 ㊦ ほんとうにわしは幸福ものだ。

こうぶつ 「鉱物」(名) 1 鉱物

十五58 10 ㊦ 室友ホランド先生、自然科学にもつと

もきょうみを有し、化学、生理、植物、鉱物、地質等をこのんで勉強す。

こうへい 「公平」(形状) 1 公平

十四61 6 ㊦ 公平について、みんなのものです。

こうま 「子馬」(名) 1 子うま

六47 8 ㊦ ませたくびだす子うまの顔に、かきはすずなり、夕明かり。

こうみょう 「光明」(名) 2 光明

十42 11 ㊦ この光明を喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であつたうめが、この世をさつてしまった。

十46 12 ㊦ 養殖眞珠発明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とするならば、作製に失敗したわたしは、星にもあたらないでしょう。

こうむる 「被」(五) 2 こうむる 《一リ》

八51 10 ㊦ 「幸福」は、さっそくごめんをこうむりました。

八53 6 ㊦ 「幸福」はまた、その家でもごめんをこうむりました。

こうもり 「蝙蝠」(名) 6 こうもり

九133 6 ㊦ 「あ、こうもりだな。」

九133 7 ㊦ こうもりは、ひょうきんなかっこをして、こちらにとんできます。

九133 9 ㊦ あみにつきあたってはいへんと、くもが思ったとたんに、ばさりとこうもりの羽にたたかれました。

九143 11 ㊦ 自分は、こうもりのために、高いところからたたき落されたが、

十五10 1 ㊦ うれんげつみて子という母の黒いこうもり

十五88 2 ㊦ 『なんにもわからないという幸福』は、

こうもりのように目が見えない。

こうもん 「校門」(名) 3 校門

七47 校門のかしの木は、目をさまして、しずかにしんこきゅうをした。

七69 手をつないで校門をでていく子ども、

十五124 校門のかしの木よ、母校よ、ばんざい。

こうもんのかしのき 「課名」 2 校門のかしの木

七22 一 校門のかしの木……四

七41 一 校門のかしの木

こうれいどおり 「号令通」(名) 1 号令どおり

十一81 コックスの号令どおりに、一糸みだれずこいでいくと、

こえ 「声」(名) 153 こえ 声 じうたこえ・おおこえ・かけこえ・ここえ・さけびこえ・なきこえ・はなしこえ・はるのこえ・ひとこえ・ふるえこえ・よびこえ・わらいこえ

四45 「略。」というこえがしました。

四44 「略。」こんなこえがきこえます。

四44 かくせいきのこえが、またひびきました。

四43 「みんないいこ」を、おおきなこえでうたいました。

四42 四42 「略。」という声でした。

四41 四41 「略。」という声でした。

四39 四39 「略。」という声でした。

四38 四38 「略。」という声でした。

四37 四37 「略。」という声でした。

四36 四36 「略。」という声でした。

四35 四35 「略。」という声でした。

四34 四34 「略。」という声でした。

四33 四33 「略。」という声でした。

四32 四32 「略。」という声でした。

四31 四31 「略。」という声でした。

四30 四30 「略。」という声でした。

四29 四29 「略。」という声でした。

四28 四28 「略。」という声でした。

四27 四27 「略。」という声でした。

二69 たしかに春の音がきこえる。

二70 「略。」という音がする。

二70 この声はひとりではなく、大ぜいの声。

二70 ひとりではなく、大ぜいの声。

三35 その音がよくひびきます。

三38 しょうかをうたっている音が、オルガンにまじってきこえてきます。

三62 みんなも声をそろえてへんじをしました。

三69 十五夜がちかくなったある夜、かぐやひめは、とうとう声をたててなきだしました。

四65 「もしもし。」と声をかけて、話ができます。

四38 「略。」という声でした。

四42 「略。」という声でした。

四41 「略。」という声でした。

四40 「略。」という声でした。

四39 「略。」という声でした。

四38 「略。」という声でした。

四37 「略。」という声でした。

四36 「略。」という声でした。

四35 「略。」という声でした。

四34 「略。」という声でした。

四33 「略。」という声でした。

四32 「略。」という声でした。

四31 「略。」という声でした。

四30 「略。」という声でした。

四29 「略。」という声でした。

四28 「略。」という声でした。

四27 「略。」という声でした。

四26 「略。」という声でした。

四25 「略。」という声でした。

四24 「略。」という声でした。

四23 「略。」という声でした。

た。

五100 「略。」と、へんな声でさえずって、さんちゃんの本をよむ声をまねます。

五100 さんちゃんの本をよむ声をまねます。

五102 「略。」と、すずしい声で鳴きます。

五104 「略。」と、いい声で鳴いて、

五105 ひわは、感心したように、いつまでもその声をきいていました。

五106 旅のひわも、大よろこびで、声をあわせてうたいました。

六14 ありは大きな声をだしてさけびました。

六17 「略。」と、大きな声をたてました。

六17 その声をきいて、はとが下の方をみますと、

六34 口をもぐもぐさせている——声がでないのである。

六43 にわたりの声。

六55 よしおが大きな声をだしました。

六59 それはことばの声のかずのことです。

六59 うたうたは、そのことばの声のかずが、五か七になっているのです。

六103 なんです、まさおさん。大きな声をして。

六104 はながつまつたために発音がでなくなるような音は、もともとはなから声のするような音にちがいない。

六108 そうして、はながつまつても発音できるような音は、はなから声でない音のはずである。

六108 ものをいうときに、声ははなからでるかわないかというのを、

六109 では、なんという音が、はなから声のでる音なのだろうか。

六109 「ム」と自分で声をだしていつてみると、

六106 はなから声がでているような気がする。

六〇九 9 はなから声がでる音であることはたしかと
 なった。
 六一〇 6 それでばくは、思わず声をたててわらって
 しまった。
 六一一 5 そこで、あらためて声をだして「ヌ」と
 いつてみた。
 六一二 7 これもはなから声がぬけているようだ。
 六一三 10 パピペポにいたるまで、みんなはなから
 声のでる音ではないことがわかった。
 六一四 5 「略」と、元氣のいい声でいきました。
 六一五 3 五ひきのうさぎさんたちは、大きな声で
 じゃんけんをして、おにをきめました。
 六一六 3 トンネルの入口のところで、だれかの声が
 します。
 六一七 5 「略」と、元氣のいい声をかけました。
 六一八 8 「略」と、われがねのような声をたて
 ました。
 六一九 2 「略」という、それこそかみなりによ
 うな声がひびきました。
 七〇四 4 大きな声で歌っていく子ども、
 七〇五 7 その声が校庭にひびきわたる。
 七〇六 7 はるお、あまり大きな声をだすから、に
 げちゃったよ。
 七〇七 10 おやつ、おかあさん、おかあさん。」大
 きな声をたてる。
 七〇八 11 大きな大きな声をだしたりして。
 七〇九 5 はるお、おかしな声で、はるお「おや、ひ
 げをはやしてる。」
 七一〇 8 「略。」頭の上で声がしました。
 七一一 1 とうとう、うれしそうに、声をたててわら
 いました。
 七一二 10 「略。」と、大きな声をだした人があつ

た。
 七二五 8 おしまいに、青年は、大きな声で、
 「略。」といって、おじぎをした。
 七二六 9 おうえんの声が耳にひびいてくる。
 七二七 3 「略。」という声がおこった。
 七二八 1 めじろの音がきこえている。
 七二九 4 ふえの音、虫の声、三日月さん。
 七三〇 2 子どもの音がきこえている。
 七三一 2 炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになつて
 いる。
 七三二 7 朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しい
 ものです。
 七三三 10 「ピオ、いい声だなあ、おまえは。」
 七三四 8 ほおじろの声をきくと、ピオのすがたがあ
 りありとくんできて、思わずなみだぐみず。
 七三五 1 文やがて死ぬけしきはみえずせみの声
 と、むかしの人がうたっています。
 七三六 8 中から人の声がきこえてきます。
 七三七 10 王子はふと立ちどまって、その声に耳をか
 たむけました。
 七三八 8 おまけに、その家にかつてあるいぬが、
 おそろしい声で追いたてるように鳴きました。
 七三九 4 「略。」と、その家のにわとりは、用
 心ぶかい声をだして鳴きました。
 七四〇 8 あひるの子は、略、自分でもおどろくほ
 どへんな大きな声をだした。
 七四一 10 おかみさんは声をはりあげ、火ばしであひ
 るの子をうった。
 七四二 1 「虫の声」ということばを加えたらどうで
 しょう。
 七四三 5 文 さるすべりラジオのほかに声もなし
 七四四 4 下からどんなに大きな声で話しかけられ

ても、きこえないときがあります。
 七四五 8 その声が、あんまり力がなく、あわれにき
 こえませんでした。
 七五六 3 けんかをとめる声がつづく。
 七五七 2 一、二年ぐらいの男の子、大きな声で、
 「略。」と数えながら、
 七五八 1 「略。」と、大きな声をかけられる。
 七五九 4 その声にはげまされて、ぼくたちは、いっ
 しょうけんめいに登っていった。
 七六〇 3 「ことばの愛」を読んでいる声が、きこえ
 てくる。
 七六一 6 「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる
 声がきこえる。
 七六二 3 「にじの歌」を歌う子どもの声。
 七六三 7 「略。」という先生の声とともに、七色
 の光が写しだされる。
 七六四 5 「こくこ」の文を大きな声で歌う。
 七六五 10 「略。」と呼ぶ声。
 七六六 11 その声をきいて、にっこりとわらう顔。
 七六七 5 「略。」というつけ、それから、きびし
 い声でいきました。
 七六八 11 太郎かじやと次郎かじやは、声をそろえて
 返事をしました。
 七六九 12 はてしもなく、ゆるやかにうつ波の声は、
 われわれの心をあらうようにきこえる。
 七七〇 10 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥
 の鳴く声をきいていよう。
 七七一 4 空にくずれる雲のみな、庭にかがやく
 ひまわりの花、あぶらぜみの声さわがしく、
 七七二 12 「略。」と、声をかけた。
 七七三 3 大きな声だが、雨や風の音のために、乗
 客の耳にきこえそうもない。

十一 77 3 少年のいたわるような声のひびきをきくと、

十一 78 6 病人がなんだかうれしそうにその話す声に「略」じつと耳をかたむけているように

十一 81 5 「略。」という声がきこえました。

十一 82 10 少年は、まだ声をだすことができませんでした。

十二 17 10 ④ あなたの声もたいそうよくおなりではありませんか。

十二 19 3 ④ あなたの鳴く声に耳をかたむけて、たいへん感心していましたよ。

十二 75 8 その声は、毎日ききなれている曾良の声です。

十二 75 8 毎日ききなれている曾良の声です。

十三 7 3 遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、ほんとうにのんびりとして、

十三 31 12 朝早く、大きな声で呼びながら、ふれ歩いて来る。

十三 32 1 やつと目がさめたころ、遠いところを通るその声を聞くのは、

十三 32 2 ゆめの中の声のように思われる。

十三 43 7 おかあさん、おかあさんの……（と、うら手に行く……声だけ続く。

十三 43 10 三郎の声が終るころ、しずかにまく。

十三 44 12 ところが、この四人の声は、見ている人には聞えません。

十三 45 1 そこで、三郎くんの声と動きだけで、四人とそれぞれ話をしているようすを、見せなくてはなりません。

十三 49 2 みどりの森が、喜びの声でわらい、

十三 49 5 みどりの丘が、その声でわらいだす。

十四 36 1 星の光は、声のないことばです。

十四 45 8 助けを求めてなきさけぶ声も、いつか聞えなくなりました。

十四 45 12 それは女の声で、しかも、調子もみだれていなければ、ふるえてもいません。

十四 48 2 こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思いました。

十四 48 5 かれは、歌の声をたよりに、その方におよいで行きました。

十四 50 3 やはり、その美しい声を手がかりにして、

十四 57 3 つるがこういったとき、高い声でわらいながら、どやどやとはいってきたものがあります。

十四 100 5 「略。」と、女の子は、声をあげた。

十五 5 3 ④ いかにも目ざとく人とても、声の行くえの 見えんやは。

十五 23 2 「あつ。」という声をたてて、

十五 26 12 少年は、ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、

十五 53 9 「カムイン」と答える、ひくい、しかも力強い声に、

十五 62 9 小さな声でうったえる私のくりごとを耳にしたおぼさんは、腹をかかえてわらいだした。

十五 69 3 その口もとがほころんで声さわやかに「略。」とよびかけそうであった。

十五 69 12 その写真の主が、こうしておじさんを見てあげているのに、おじさんの声は聞えないのだ。

十五 71 4 このすがたをおじさんがごらんになったら———と、おぼさんは声をくもらせた。

十五 72 7 「略。」と呼びかけようとしたが、声が出なかった。

十五 73 7 つくえに白線をひいて「國境」をつくったあたりを、声高らかに読みあげられた。

十五 75 12 博士は、そのことばの意味をときかねて

いた私のようなすを見て、大きな声でわられ、

十五 93 12 幸福どもは、喜びの声をあげながら、いやがる子どもたちをひきずって行こうとする。

十五 99 3 ありったけの声をはりあげて、「略。」と歌い、

十五 114 3 ④ 声までそっくりだよ。

こえ [肥] ↓ つみこえ

こえだ [小枝] (名) 2 小枝

八 21 8 地表から一メートルほどのぼったところに、小枝がわかれていました。

十三 4 4 そのこずえの、細い、細い小枝のあみ目の先にも、

こえつち [肥土] (名) 1 こえ土

八 18 11 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、つみこえやこえ土の中に生みつけられて、

こえる [肥] (下) 2 こえる 《エ》

十三 19 10 これをこえた土地とするのが、ダルガスのゆめであります。

十三 24 11 ユートランドのあれ地は、大もみの林がしげったために、こえた田園となりました。

こえる [越] (下) 13 こえる 《エーエル》 ↓ とびこえる

三 76 8 ④ 「丘を こえてね、よその 國へ いくんですよ。」

四 47 10 はたけを こえ、のはらをすぎると、高い山のそばにきました。

四 53 4 やつと 高い 山のみねを こえました。

六 137 9 うさぎさんたちは、谷をわたり、みねを一つこえました。

六 142 7 山を、いくつも、いくつも こえました。

七 5 6 こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこえて、うすべに色の空にきた。

八七五 田や野原をこえて、どんどん走っていった。
 九一七 南洋の島々から、さらに海をこえて、遠い
 オーストラリアまでいくのがあるということです。
 九二二 つばめをのせた飛行機は、〈略〉、アルプス
 をこえてヴェニスへとんでいきました。
 十一三二 麦のはしりほかがやく上を、海こえて
 きたつばくろが、すうい、すういととびまわる。
 十一四二 ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたの
 は、ぼくの二年生のときだった。
 十三二八 小もみは、ある大きさまでは、大もみの
 生長をうながす力をもっているが、それをこえる
 と、かえってさまたげになるといふ、
 十四六二 老いた母を思う子の眞情は、遠く海をこ
 えて、私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。
 ごえんりょ 「御遠慮」(名) 2 ごえんりょ
 四一六 さまあ、ごえんりょなくめしあがつてく
 ださい。
 十四一六 なにかそういったものがご入用のとき
 は、ごえんりょなくおっしゃってください。
 ごーごー (副) 1 ゴーゴ
 五五 海はまっ黒になって、波が高く、ゴーゴ
 とうなっています。
 コース ↓オフコース フォアジャパン
 コート (名) 5 コート ↓テニスコート
 七五 ぼくたちは、コートへでていった。
 十二七 時間がせまったので、私はユニホームを
 つけて、練習のためにコートにでました。
 十二八 なんどもコートでたおれました。
 十二二 試合を見物しようと、方々の國の人々が、
 そのコートを目がけて集まりました。
 十二三 まっ白い線のひかれたコートには、日ざ

しがさんと降りそそいでいました。
 コーヒー (名) 6 コーヒー
 八四 ますコーヒーをおのみにならうとすると、
 コーヒーはこがねにかわりました。
 八四 一 コーヒーはこがねにかわりました。
 十一二 おとうさんが、休み茶屋のまえにこしかけ
 て、コーヒーをわかつてもらっていますと、
 十四一三 どこまでコーヒーを入れていいの、か
 おわかりになります。
 十四二一 ミルク、コーヒー、ジャム、トマト、
 キャベツ、バス、トラック、オートバイ、
 十四二三 ゴム、ランドセル、コーヒー、コレラ、
 アルコールはオランダ語、
 コーヒーいれ (名) 3 コーヒー入れ
 十四一〇 ランプとコーヒー入れとは、あす、送
 らせます。
 十四一四 おかあさん、いま、ランプとコーヒー
 入れを送らせました。
 十四一六 コーヒー入れは、中に小さなめもりの
 ようなものがついていて、
 コーヒーこし (名) 1 コーヒーこし
 十四一三 それは、コップの上からコーヒーこし
 をとったとき、それをのせるためなのです。
 コーヒーちゃん (名) 1 コーヒー茶わん
 十三七 コーヒー茶わんのおいてあるテーブルをか
 こんで、
 コーラス (名) 1 コーラス
 十四二六 コーラスとか、ソナタとかいうことは、
 西洋音楽がはいつてきたときに、いっしょに傳
 わってきたことばであらう。
 こおり 「氷」(名) 4 こおり 氷 ↓うすこおり
 四二六 こおりの てんぷら。

八五 とうとうつかはれて、こおりの中にとじ
 こめられたまま、
 八六 一 あひるの子をみつめて、木ぐつでこおりを
 くだき、うちへつれて帰った。
 十五二四 一つまちがえは、千ひろの谷間へ、氷と
 雪の中へ、まっさかさまに落ちこむのです。
 こおる 「凍」(五) 3 こおる 《ーッー》
 八五 水のおもてがすっかりこおってしまったわに
 ように、
 八五 一 あなたがこおってしまったように、
 十一七 希望と、胸をこおらせるような失望との
 あいだで、たえずはらはらしていました。
 こおるぎ 「蟋蟀」(名) 1 こおるぎ ↓えんまこお
 るぎ
 十二一六 これは、こおるぎの巣なんだな。
 こおるぎさん 「蟋蟀」(名) 3 こおるぎさん
 十二一七 ああ、こおるぎさんですか。
 十二一八 そこへいくと、こおるぎさんよりよほ
 どいいのです。
 十二二〇 ごめんない、こおるぎさん。
 こか 「古歌」(名) 1 古歌
 十二一七 「七重八重花はさけどもやまぶきのみの
 ひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、少女の
 思いをたくしたものでありました。
 こかげ 「木陰」(名) 2 こかげ 木かげ
 三九 五人の子どもが、もみじの こかげのす
 なばで あそんでいます。
 十二一〇 ある日、リビングストーンが木かげで書物
 を読んでいました。
 こかげつ 「五箇月」(名) 1 五ヶ月
 八四 五ヶ月や八ヶ月でもありません。
 こがたな 「小刀」(名) 2 小がたな

十二89 母は〈略〉、孟子の顔をみると、つと
立って、そばにあった小がたなをとりあげました。
十二811 母は、いままでたんねんに織り続けてい
たぬのを、小がたなでたち切ってしまいました。
こがづ「五月」(名) 2 五月
四1245 五月はこいのほり。
十二822 五月、六月、七月、八月の四ヶ月にわ
たって、
こがづいつか「五月五日」(名) 2 5月5日
七881 5月5日 (出) 雨 15度
八955 5月5日 (出) 雨 15度
こがづさんじゅういちにち「五月三十一日」(名) 1
5月31日
七905 5月31日 (休) 晴 28度
こがづじゅうごにち「五月十五日」(名) 1 5月15
日
八968 5月15日 (休) 晴 20度
こがづつたち「五月一日」(名) 1 5月1日
七877 5月1日 (休) くもり 19度
こがづ「御勝手」(形状) 1 こがづ
八648(金)「それでは、こがづに。」
こがづなのか「五月七日」(名) 1 5月7日
八959 5月7日 (休) 晴 18度
こがづにじゅういちにち「五月二十一日」(名) 1
5月21日
八971 5月21日 (休) くもり 18度
こがづにじゅうくにち「五月二十九日」(名) 1 5
月29日
七901 5月29日 (休) くもり 24度
こがづにじゅうにち「五月二十二日」(名) 1 5
月22日
七892 5月22日 (休) くもり 16度

こがづにじゅうはちにち「五月二十八日」(名) 1
5月28日
七896 5月28日 (休) 晴 23度
こがづはつか「五月二十日」(名) 1 5月20日
七887 5月20日 (休) くもり 18度
こがづふつか「五月二日」(名) 1 5月2日
八951 5月2日 (休) 晴 20度
こがづむいか「五月六日」(名) 1 5月6日
七884 5月6日 (休) 雨のち晴 15度
こがね「黄金」(名) 21 こがね
三1025 おじいさんのとる竹の中には、たびた
びこがねがはいっていました。
八375 もっとたくさんこがねを集めようと願って
おいでになりました。
八378(金)「この花が、みたとおりのこがねならば、
わしもつむのだが。」
八393(金)わたしの手にさわったものが、みんなこ
がねになったら。
八401 いすはたちまちこがねにかかりました。
八402 それもこがねになりました。
八403 着物もこがねになりました。
八410 庭の草木は、みているうちに、ぴかぴかと
光ったこがねになっていきました。
八411 まずコーヒーをおのみになろうとすると、
コーヒーはこがねにかかりました。
八412 さかなをめしあがろうとなさると、これも
こがねのさかなになりました。
八415 これもこがねのたまごになりました。
八423 王女は、かたいこがねになっていたのです。
八425 王女は、王さまにとっては、世界じゅうの
こがねよりもたいせつであつたからです。
八427(金)もし、ひめが生き返るなら、わしはもう

こがねなどはいらない。
八431(金)あなたは、こがねと一ぱいの水と、どち
らをえらびますか。
八433(金)「こがねと一きれのパンとでは。」
八435(金)「こがねと王女は。」
八437(金)では、庭のいけの水をすくって、こがね
になったものにふりかけなさい。
九722(金)あなたは、こがねのどんぐり二リットル
と、しおざけの頭と、どちらがおすすですか。
九724(金)こがねのどんぐりがすすです。
九742 いちろうは、こがねのどんぐりをみ、やま
ねこは、とぼけた顔つきで遠くをみていました。
こがねいろ「黄金色」(名) 5 こがね色
八377 王女がこがね色のたんぽぽをつんでくると、
王さまは、「〈略〉。」とおっしゃいました。
八838 森の木の葉がこがね色や茶色になった。
九5411 そこは美しいこがね色の草地で、
九617 草の中にあつちにもこつちにも、こがね色
のまるいものが、ぴかぴか光っているのです。
九635 こがね色のどんぐりどもは、すこしずつし
ずかになりました。
こがねひめ「題名」 2 こがねひめ
八311 こがねひめ
八372 こがねひめ
こがねむし「黄金虫」(名) 1 こがねむし
八189 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、
つみごえやこえ土の中に生みつけられて、わずか
二三ヶ月で大きくなって、
こかぶ「五株」(名) 2 5かぶ
八1015 5かぶをのこして、ほとんど85cmになりま
した。
八1054 病気でせいのびないいねが、5かぶあり

ました。

こがも「子鴨」(名) 2 子がも

四六五 うらの小山の小さいけに 子がもが二百ぼ、

こ米が一びょう、

四六八 子がも こ米 かむ、かも 米 かむ。

こがら「小雀」(名) 1 こがら

十一四一 あれは、元氣もののがらだ。

こがらし「木枯」(名) 2 こがらし

九二七(文) こがらしや子ぶたのはなもかわきけり

十一四〇(文) タぐれ寒くふくこがらしは、黄色くか
れたくぬぎ葉鳴らす。

こがらす「子鳥」(名) 2 子がらす

六三三 おかあさんがらす、羽をさか立てて、子
がらすをすにひきもどす。

六四一 木の枝にとまっている二わの子がらす。

こがらすいち「子鳥」(話手) 3 子がらす一

六四二 子がらす「ほら、みてごらんよ。」

六四六 子がらす「おとうさんやおかあさんにも
わからないだって——

六四七 子がらす「さあ、あのかかしったら、

〈略〉なんべんもさけんでいたよ。」

こがらすに「子鳥」(話手) 2 子がらす二

六四八 かかしが帰っているだろう。」子がらす二

「うん——だけど、いったいだれがつれて帰った
んだらうね。

六四九 子がらす「なんだらうな、それ。」

こがれる ↓まちこがれる

こき ↓いねこき

こぎかた「漕方」(名) 1 こぎかた

十一七九(文) ぼくは、こぎかたがじょうずになって、
みんながさせてくれたら、コックスのまえにす
わって、整調をやってみたいな。

こぎげん「御機嫌」(名) 3 こぎげん

九四七(手) あなたは、こぎげんよろしいそうで、

けっこうです。

十五九七(文) こぎげんはいかが、こぎげんはいかが。

十五九七(文) こぎげんはいかが、こぎげんはいかが。

こぎげんよう「御機嫌良」(感) 2 こぎげんよう

四一八(文) おとひめ「こぎげんよう。」

十五八六(文) チルチルさん、こぎげんよう。

こぎつ・ける「漕着」(下二) 1 こぎつける 《一
ヶ》

十四二(文) 半円が眞円になれば成功するのだ。半分
までこぎつけた。

こぎのぼる「漕上」(五) 1 こぎのぼる 《一リ》

九四二 舟をやってこぎのぼりながら、ところど

ころでその水でお茶をたてる。

こきゅう「呼吸」(名) 2 呼吸 ↓しんこきゅう・
しんこきゅうする

十一八八 顔はむらさき色になり、呼吸はいよいよ
困難になりました。

十五二七 もう呼吸もなくなったのかと、そのこと

がまた、少年の氣にかかってきました。

こく「国」 ↓さんごくし・じゅういっかこく・ドイ
ツオーストリアにこく

こく「刻」 ↓いっこく

こく「扱」(五) 1 こく 《一イ》 ↓いねこききか
い

八四二 ぼうのあいだにいねをはさんでこいたらよ

くとれました。

こぐ「漕」(五) 13 こぐ 《一イ・ギ・グ》 ↓お
こぐ

二四五(文) 長い竹のさおで、ふねをこぎます。

三二五 「〈略〉。」とこぎました。

三六八(文) 右手と 左手を はんたいに こいだら、

ぐるぐるまわりをするばかりだ。

三六五 そこで、おとうさんは、ボートをこいで

ぐるぐる おまわりになりました。

四七三 ろ——ろをこぐ せんどうさん。

七一〇(文) 渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、

こっちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。

十一五八(文) ぼくは、大きくなったら、三ばんか四

ばんをこぐんだ。

十一五九(文) 力まかせに、長いオールをぐいぐいと
こいでみたい。

十一五二(文) その体格で、思うぞんぶん、長いオー
ルをこいだら、〈略〉、ものすごいスピードで走る
だろう。

十一六五(文) ぼくはトップがこぎたい。

十一八二(文) コックスの号令どおりに、一糸みだれ

ずこいでいくと、

十一一〇(文) 三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくた

ち強い男の子だ。

十一一〇(文) さあというときに、ひとりで責任を

しよって立つ、トップをこぐ人もいるだろう。

こく「極」(副) 8 こく

七四〇 ごくありふれた曲であったが、旅をしてき

た私には、しみじみときかれた。

十二八九 ごく簡単な「ありがとう」というあいさ
つにしても、

十二一〇 それは、もようもごくかんたんで、形も
たいへんよくまとまっています。

十四三四 この廣大なうちゅうにくらべては、太陽
もごく小さなものです。

十四三四 地球などになると、なおさら、ごくごく
小さなものです。

十四34 11 なおさら、ごくごく小さなものです。

十四86 4 ごくさいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

十五99 1 子どもの時代は、ごく短いだからね。

こくうん 〔国運〕(名) 1 国運

十三18 2 いかにして、国運をもとどおりにするか、

こくうんかいふく 〔国運回復〕(名) 2 国運回復

十三18 12 かれは、その胸に国運回復の計画をたて、

その顔にほほえみをたたえて、つるぎで失ったもの

のを、すきでとり返そうと決心したのです。

十三22 1 そこで、デンマルクの国運回復の意気は、

年々高まってきました。

こくぐら 〔穀倉〕(名) 1 こくぐら

十一49 11 日本のこくぐらは、北海道だといいます。

こくこ 〔題名〕2 こくこ

六71 8 はるえは、まえに「こくこ」でならった

「よみかき」のところを、ふと思いだしました。

六79 9 ごろうは、いつか「こくこ」でならった

「あさがおの花」を思いました。

こくこ 〔国語〕(名) 3 こくこ 国語

四11 5 こくこ、しゃかい、さんすう、りか、おん

がく、〈略〉などのべんきょうをします。

五84 8 いのうえさんは、国語の本にでていること

ばを、五十音にわけてみるといいました。

七28 7 国 きょうね、国語の時間に、先生にほめら

れたの。

こくこいち 〔題名〕2 こくこいち

十23 5 「こくこ」の文を大きな声で歌う。

十五12 8 「こくこ」の第一課「みんないい

こ」。

こくこじてん 〔国語辞典〕(名) 1 国語辞典

十四28 2 国 それは、国語辞典をひいてみると、だ

いたいわかる。

こくしん 〔御苦心〕(名) 1 ご苦心

十二19 7 国 あなただってその実をそんなに美しく

なさるには、ご苦心があたりだったでしょうね。

こくど 〔国土〕(名) 1 国土

十三19 4 戦いの間、橋をかけたり、〈略〉すると

きに、よく、国土の地質や地味を研究しましたが、

こくどう 〔国道〕(名) 1 国道

十10 6 そのあたりは、フランスの国道にそった景

色のよいところですから、

こくない 〔国内〕(名) 1 国内

十37 2 あくる年から、豊田式人力織機は、国内に

つかわれるようになったが、

こくばん 〔黒板〕(名) 6 こくばん ↓あさのこく

ばん

一17 2 あさの こくばん きれいだな。

三20 3 先生が、こくばんにつきのようなことを

おかきになりました。

三38 4 先生が こくばんに、「〈略〉。」とおかき

になりました。

五41 11 国 みんなだいじにして、こくばんのところ

にならべてあります。

十四20 8 そうして、つぎのようなことはその一

例だとおっしゃってこくばんにお書きになった。

十四21 12 とうとう、こくばんがいっぱいになって

しました。

こぐま 〔子熊〕(名) 4 子ぐま

六67 2 あるところに、一ぴきの子ぐまが住んでい

ました。

六67 9 「〈略〉。」と、子ぐまがいうと、

六67 9 さるは子ぐまをみてこわがって、

六68 2 子ぐまはまた歩いていきました。

こくみん 〔国民〕(名) 5 国民 ↓ぜんこくみん

十三18 5 戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣

はずみ、その活動はおとろえました。

十三18 7 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れな

い國民こそ、眞にすぐれた國民でしょう。

十三18 7 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れな

い國民こそ、眞にすぐれた國民でしょう。

十三18 9 この苦しいときにうちかつことのできる

國民だけが、〈略〉、さかえるのであります。

十三26 2 敗戦のために意氣のおとろえた國民は、

希望をとり返し、

こくるい 〔穀類〕(名) 1 こくるい

七91 4 なるべく、こくるいをやるようにして、ぬ

れた草はやらないように注意しています。

こけ 〔苔〕(名) 2 こけ

五4 5 水をふくんだ草のうた、こけのうた、土の

うた、いわのうた。

十五71 9 町の東にある寺の一角に、こけむす一つ

のおほか、

こけこっこう 〔感〕2 こけこっこう

三85 3 あさから よるまで こけこっこう、こけ

こっこう。

三85 3 こけこっこう、こけこっこう。

こける ↓ねむりこける・やせこける・わらいこける

ここ 〔此処〕(代名) 132 ここ ↓そこここ

一24 4 ここが 一ばん おもしろかったとおも

います。

一55 8 国 「ここにもっています。」

一61 2 国 ここに いるものは、みんな、たまを

ひろった なかまですよ。

二6 8 ここまで きた とき、 とみこさんが、

「〈略〉。」といいました。

- 二393 ㊦ おとうさん、こは、ずいぶん高いね。
 二395 ㊦ よくここまでのぼった。
 二526 ㊦ 「ここですよ、さちこさん。」
 二601 ㊦ ここまでおはなしをきいたとき、
 二706 ㊦ 「はい、ここですよ。」
 二154 ㊦ おまえさんのようなおろかもは、こ
 こをおすことはできない。
 三1610 ㊦ このはちをわたくしにとけようと
 して、手をここまでのぼしたので。
 三311 ㊦ ここはろうかです。
 三913 ㊦ わたくしは、学校へいくときと
 三918 ㊦ うちの人のかいたてがみやはがきを、
 ここにいます。
 三936 ㊦ このしばふもみんなのものです。
 四42 ㊦ こは、町やくばです。
 四44 ㊦ あかちゃんが生まれると、ここに知らせ
 ます。
 四46 ㊦ うえぼうそのの知らせは、ここからきま
 す。
 四54 ㊦ もし、人がなくなったときには、やはり
 ここにとどけます。
 四56 ㊦ こは ゆうびんきよくです。
 四71 ㊦ こは けいさつしよです。
 四85 ㊦ こは、水のきれいないけです。
 四93 ㊦ こは、町でもひょうばんのかじやさん
 です。
 四98 ㊦ こは びょういんです。
 四101 ㊦ こは しょうぼうしよです。
 四102 ㊦ こは えいがかんです。
 四103 ㊦ こは としょかんです。
 四111 ㊦ こは わたくしたちの学校です。

- 四121 ㊦ こは えきです。
 四124 ㊦ ここから、とおいとおい町へいくこと
 ができます。
 四128 ㊦ とおい とおい 町から だいじなもの
 ここにとどきます。
 四351 ㊦ ここまでいわれても、まだ、なんのこ
 だかわかりません。
 四391 ㊦ ここまで話がすすむと、みんなは、めい
 めいじぶんのことが思ひだされてきました。
 四1011 ㊦ ちょうど ここを とおりかかって よ
 かったね。
 四1051 ㊦ お礼に りゅうぐうへ おつれしようと
 思つて、ここまですいりました。
 四1088 ㊦ こが りゅうぐうでございます。
 四1223 ㊦ 長い長い でんせんをつたわつて、こ
 こまで たびをしてきたのです。
 五103 ㊦ こは、みなさんで、苦勞をしてほつて
 くださったトンネルですよ。
 五123 ㊦ ぼうや、ここですよ。
 五341 ㊦ こは工場町です。
 五341 ㊦ こで、きかいや、ひりょうなど、たいせ
 つな品物を作っています。
 五88 ㊦ さあ、ここへおいで。
 五1072 ㊦ こうしていつまでも、ここにいますよりし
 かがないのさ。
 五1074 ㊦ ここにいて、なにか、おもしろいことが
 あるのかい。
 六47 ㊦ しかし、だんだんおちついてみると、ここ
 は時計屋の店であることがわかった。
 六88 ㊦ 「ここであそんではいけない。」
 六99 ㊦ 「ここにいます。」とさげびたくてたま
 らない。

- 六118 ㊦ 自分がここにはいったために、
 六2210 ㊦ こでいっしょに音楽会をやるうじゃな
 いか。
 六2310 ㊦ こで楽しくあそんでおいで。
 六341 ㊦ 山のかげにかくれて、ここからはみえな
 いよ。
 六546 ㊦ ここへきてごらん。
 六549 ㊦ 「ここに立つて、お月さまを枝のあいだ
 からみてごらん。」
 六933 ㊦ それで、いまここへやってきたところ
 です。
 六937 ㊦ 魚どもを、みんなここへよび集めるよう
 に。
 六943 ㊦ ただけは、病氣でねておりますので、
 ここへはまいっております。
 六961 ㊦ 「それでは、たいをちよつとここへよん
 できてくれないか。」
 六1008 ㊦ それは、ここから百メートルもはなれてい
 る、向こうの家の屋根であつた。
 六1069 ㊦ ぼくは、ここだと思つて、「へ略。」といっ
 た。
 六1123 ㊦ こで、もしやと思つて、はなをつまんで
 「マ」「メ」「モ」といつてみたら、
 六12610 ㊦ 「こで、かくれんぼしよう。」
 六12911 ㊦ きみたちが、こでわいわいやっていて
 は、すぐぼくが、きつねにみつかつてしまうから、
 六1383 ㊦ 「こまできたら、もう安心だね。」
 六1385 ㊦ 五ひきのうさぎさんたちは、こでゆっく
 り休むことにしました。
 六1433 ㊦ うさぎさん、こは、しずかなところで
 すよ。
 七3211 ㊦ ここからだして、庭のだいこの葉に、

うつしてやりましょうね。

七三六(会) ここに子どもがいる。

七四五(一) ここで、ちょっとことばを切った。

七二九(会) もしあるなら、ここで、はっきりいう方がいい。

八七二(四) あひるの子は、ここで一晩横になった。

八七三(一) それから二日間、ここにそっとかくれていた。

八七四(一) あひるの子が、きびしい冬のあいだ、どんなに苦しんだか、ここで話すには

八八七(一) ここは、ほんとうにきれいで、春の喜びがみちあふれていた。

九七二(一) ここに、「月」という一つのことばがあります。

九三六(二) ここからは美しいかこうがながとれます。

九四九(七) やまねこがここを通らなかったかい。」とききました。

九五一(二) やまねこがここを通らなかったかい。」とききました。

九五二(一) やまねこがここを通らなかったかい。」とききました。

九五三(三) やまねこがここを通らなかったかい。」とたずねました。

九五六(九) やまねこさまは、いますぐにここへもどっておいでになるよ。

九六五(九) やまねこ、ここをなんとか心える。

九六六(一) ここをなんとか心える。

九六八(八) ここをなんとか心える。

九七九(三) ここが、このあいだからよくお話ししていた貝つかです。

九七九(一〇) むかしの人は、貝がらといっしょに、(略)を、ここへすてました。

九七九(一〇) それで、ここをほると、そういうものが

みつかることがあるのです。

九八一九(会) 「だめだな、ここは。」

九八二(六) 「先生、ここは貝ばかりですよ。」

九八五(五) 「ここからでも、できるかもしれないぞ。」

九八八(八) ここからでるのは、このとおりうちくだいて作った物で、

九八八(八) 「ようし、ここからすべりたいものはすべってよろしい。」といわれた。

九八八(一〇) ここまでくると、てんりゅう川もよほど水かさかへっていた。

九八八(一一) ここで茶人のしたには、まぎれもないいい味がはつきりと感じられるようになった。

九八八(一二) 茶人たちは、ここで船をすてて、岸にそつて上流に向かって歩きながら、

九八八(一三) ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、あみもほることはできませんでした。

九八八(一四) 「モット」ここで遊んでいたと、私にねだったり、

九八八(一五) 妹は、ここでまた、いろいろなものをなめるのです。

九八八(一六) 私も、ここで、いままでの作文のからをぬぎさつて、

九八八(一七) なによりおもしろいのは、大学のボートがいつもここで練習していることだ。

九八八(一八) いく日おまえはここにいたのだね。

九八八(一九) ここにあのおじさんがいます。

九八八(二〇) ぼく、ここに五日のあいだいました。

九八八(二一) ぼく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにいさせてください。

九八八(二二) どうか、ここにいさせてください。

九八八(二三) ここへつれてきたときには、もうすつ

かりわけがわからなくなっていて、

九八八(二四) 「じゃあ、ここにおいで。」

九八八(二五) じゃあ、ここに二円だけおいでいくから、こづかいにしないさい。

九八八(二六) それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口で頼んだ。

九八八(二七) ここに貝がらがあります。

九八八(二八) みなさんがたの代表が、全国からここに集まって、いろいろなことを相談します。

九八八(二九) ひばりやつばめも、やがて、遠い國からここに帰って来て、

九八八(三〇) ところが、ここに、木材よりも、農作物よりも、とうといものが生き返りました。

九八八(三一) ここに住んでいる子どもたちにとっては、

九八八(三二) いまここに持っている。

九八八(三三) たとえば、ここにあげたことばの中でも、クレヨン、ズボン、フランス語、

九八八(三四) ここに、茶わんが一つあります。

九八八(三五) お話は、すればまだいくらでもあります

九八八(三六) が、ここでは、これくらいにしておきましょう。

九八八(三七) それはいまここでいうまでもありません。

九八八(三八) ここがおじさんのおへやですよ。

九八八(三九) それで、世界平和、人間平等という理念が、ここからわいてくるのだ――

九八八(四〇) ここにいるのは、『はちきれそうなわらい』で、

九八八(四一) ここだって、どこだって、やはり、お金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多い

九八八(四二) ここにいる子をだれも知らないなんて、そんなことあるものですか。

九八八(四三) さてここに、『いちばん大きな喜び』の中に、『美しいものを見る喜び』があります。

十五109 ① 『喜び』は、たぶんここであらば純潔なものでしょう。

十五109 ② まあおまえたち、ここにいたの。

十五110 ① 私、きょう、ここにいて、それはさびしかったよ。

十五110 ② うちにいると、それが見えないが、ここでは、なにもかも見えるのですからね。

十五113 ⑨ ここでは、うちにいるときのように、しごとをしないの。

十五114 ⑨ おかあさん、ここにいるなら、ぼくもここにいたいや。

十五114 ⑩ ぼくもここにいたいや。

十五115 ⑫ でも、おまえたちは、どうしてここまであがって来られたの。

ごご ①「午後」(名) 9 ごご 午後

三23 ④ ごごになると、東がわのなん十という村々が、日かげになります。

五78 ② ⑤ ごごのずが工作の時間に、写生しましょう。

七26 ⑦ それから、いく日かたったある日の午後。

八10 ① ところが、ある土曜の午後、

九87 ③ とし ある晴れた日の午後

九113 ① 午後は、先生について、ひとりひとり、正しいすべりかたを教えていただいた。

十二31 ⑦ この日の午後、私はなんとなくものを待つ気持ちで、じつとげんかんにたたずんでいました。

十二31 ⑧ 午後の日光は、げんかんをおおったすいかずらのしげみをもれて、

十五20 ⑨ 朝の十時と午後の三時ごろと、日に二どずつ、

ごごうふく ①「御幸福」(名) 1 ご幸福

十五123 ② 先生がたのご幸福をのりいたします。

ごこえ ①「小声」(名) 1 小声

十一87 ④ また、看護人が小声でいいました。

ごこえじにさ・せる ①「凍死」(下二) 1 ごこえ死にさせる 《一セ》

十四86 ⑩ 風にあおられた雪のむれが、〈略〉、人をたおし、ごこえ死にさせてしまうことすらある。

ごこえじ・ぬ ①「凍死」(五) 1 ごこえ死ぬ 《一ン》

十四102 ④ あの子は寒さでごこえ死んだのだ。

ごこ・える ①「凍」(下二) 3 ごこえる 《一エ》

十四92 ① かわいそうに、その子は、おなががすいて、ごこえて、身をひきずって歩いてた。

十四94 ⑩ 両手もまた、寒さでほとんどごこえていた。

十五104 ① ⑤ 『冬の日の幸福』は、ごこえた手のために、きれいなむらさき色のマントを開きます。

ごこかしこ ①「此処彼処」(代名) 1 ごこかしこ

十五20 ② そこには、氣持のいい、小さなホテルがごこかしこに立っています。

ごこと ①「小言」(名) 1 ごこと

五21 ⑥ あまりこんでいましたので、みんな、ぶつぶつとごことをいいながら、

ごこのか ①「しちがごこのか」

ごこのつ ①「九」(名) 2 ごこのつ

十一3 ⑤ なたつ、やつつ、ごこのつ、とお、十一、十二、十三、十四。

十一7 ⑤ なたつ、やつつ、ごこのつ、とお、十一、十二、十三、十四。

ごこめ ①「小米」(名) 2 ごこめ

四68 ⑥ うらの小山の小さいけに子かみが二百ば、ごこめが 一びょう、

四68 ⑦ 子かみも ごこめ かむ、かも 米 かむ。

ごこよじころ ①「午後四時頃」(名) 1 午後四時ごろ

十一81 ② その日の午後四時ごろでした。

ごころ ①「心」(名) ③ ④ ころ 心 ⑤ おさなごころ・まごころ・ものごころ・わたしのころはにじをみるとおどる

一15 ⑥ ごころも つかいます。

三13 ⑦ はんたかは、このひとことを 心の中にしまいました。

三13 ⑩ きたない ことばは、きたない 心からうまれてくるものだといふことが

三14 ② きれいな ことばは、きれいな 心からうまれてくることもわかりました。

三14 ⑤ ⑥ 「おしゃかさまのおしえてくださったことは、きれいな 心になれといふ ことにながいない。」とさとりました。

三60 ② みんなの 心が あわないと、どこへもいけません。

三60 ⑩ ①「みんなの 心が あわないと、どこへもいけないじゃないか。」

三63 ① みんなの 心が あいましたから、〈略〉、丘の大きな木の ところまでの ぼりしました。

三65 ④ また、心が あわなくなりしました。

三66 ① ⑤ 心が あわなくては だめ、だめ。

三69 ② みんなの 心が あいました。

三92 ④ こうえんに さいた きれいな 花は、みんなの 心を たのしませて くれます。

三97 ⑧ 心に 思った ことは、いつの まにか きてて しまいますが、

四67 ⑦ 世界じゅうの 人の 心をつなぐ 糸を、まいにち あつかう ところ です。

四70 ② ポンポン だけい とく。 ごころは、ふりが やむと、なりもとまる。

四70 ⑥ あきの 花ばたけ とく。 ごころは、きく

ばかり。

四七〇 しみなりととく。こころは、ふればなる。
四七三 てつびんととく。こころは、『ろ』の上にある。

四七六 こころは、『は』の上にある。

四七五 は——花のようにきれいな心。

五二〇 私は、ぶじに、としおさんの心を、そのま

まみつおさんにおつたえすることができました。

六二二 「略」と、心からまんぞくした。

六六二 「略」。ありは、心から木の葉におれい

をいしました。

六九二 書いても書いても書きたりぬ、わたしの

心の小人たち、いつもでてくる小人たち。

七〇八 なん百人の子どもの顔、なん千人の子ど

もの心。

七三六 私はそういつて、どうぞぶじにつきますよ

うにと、心の中でいっています。

七四八 私は、さぶろうの方に近よりながら、車中

の人たちに、心の中でお礼をいしました。

七四四 わたしは、終戦後、いつも心さびしい旅

をしていました。

七四八 文章は、心の鏡のようなものです。

七四八 心がはつきりとしていますと、文章も、だ

んだんはつきります。

七四九 心がくもっていると、いくらなおしても、

文章のくもりはとれません。

七五七 心にはつきりとえがかれた一つのかたちは、

まじりけのない宝石のようなものであり

七六六 心に思ったことを、はつきりと写しだすと

いうことにほかなりません。

八三一 けんぎゅうは、やはりふえに心をうばわれ

ていました。

八五二 それでは人の心がよくわかりません。

八五三 「幸福」には、その家の人の心がよくわ

かりました。

八五五 おむすび一つ、たくあん一きれにも、人の

心のおくは知れるものです。

八九三 わかいはいくちようは、そのほそ長い首をあ

げて、心のそこから喜ばしようにさげんだ。

九一七 「月」だけで思ひだした心の絵とは、いく

らかちがつたものがあらわれてくるでしょう。

九二二 二つか、三つのことばの組みあわせだと、

すぐ心にもを思いうかべることができですが、

九四四 あまりたくさん重ねると、〈略〉、心の絵が

みだれてしまいます。

九四九 もし、きく人の心が高ければ、それだけ音

樂のねうちが生きてくることになる。

九五九 帰ってきたつばめをむかえる人の心は、ど

んなにうれいことでしょう。

九六八 茶人は、〈略〉、泉をくんでつれの茶人と茶

をたて、心から楽しんだということである。

九五〇 ただ、その美しいものを、すなおに感じと

る心を、われわれは失っている。

十六三 その美しいものを、すなおに感じとる心を、

もちつづけたいものである。

十九八 その少女のわけてくれたくりは、むじやき

な心からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。

十九九 和音を耳にしたときは、組みあわされた一

音一音のことも、心にうかべてみたいのです。

十三三 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、

佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

十四二 喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力

者であつたうめが、この世をさつてしまった。

十四六 あなたが〈略〉、眞珠を世界の人々にあ

たえたことに、心から敬意をささげます。

十一一 「オハナシテ」という心らしいのです。

十一二 ことばの記ろくは、妹の心の写真になるの

ではないかと、

十一三 はてしもなく、ゆるやかにうつ波の声は、

われわれの心をあらうようにきこえる。

十一六 人の心の畑にさいた、いちばん美しい花、

十一七 ひどくとげとげした心でおしあつていた

人たちも、きゆうになごやかな氣持になった。

十一九 心を休めるような希望と、

十一七 それからのちになつて、道灌は少女の心

がわかりました。

十二一 あなたは、そのさびしい氣持が

でているので、人の心を動かすのだつて、

十二二 私の心の目をあらゆるものに向けて開い

てくださるため、

十二三 めばえてこようとする心のはたらきと

いったようなあるふしぎなものを感しました。

十二四 くやむ心と悲しみに胸をさされました。

十二五 しかし、ケラーに「ことば」というもの

をわからせることによって、そのまっ暗なさびし

い心を明かすことに成功しました。

十二六 人間には、〈略〉、心にあることを、な

にか美しいものであらわそうとする氣持がある。

十二七 そうして、はい句を勉強することに心を

きめました。

十二八 そのしんとしたしずかさの中に、芭蕉

は心をすませ、雪の句を考えました。

十二九 文をなおすことはつまり心を練ることに

なる。

十二一〇 心を練るほど、ことばがみがかれてくる。

十二一 すすいととびまわるかわいい赤とんぼ

を、心の中にえがきだす。

十二947 ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいちがったものか思いだされてくる。

十二949 すすきの野原を心にえがき、

十二9510 読み手によって、三人三よう、それぞれちがったことを心の中に思いうかべる。

十二1101 外国から書物が新しくはいってくることは、外国人の心が傳わることで、

十二1102 日本はこのような心をとおりいれて、どんな育ってきました。

十二1121 三人がひとつに心をあわせた美しさは、

このとおりりっぱなものとなって生まれたのです。十二1183 いかにして、國運をもとどおりにするか、

これが、デンマルクの愛國者たちの心をくだいた、もっとも大きな問題でありました。

十三344 ほのぼのとゆれ動くかげ絵は、子どもの心をひきつけてやまない。

十三518 わたしの心は、にじを見るとおどる。

十三527 わたしの日々が、自然をしたう心で、一日一日と、むすばれていくように。

十四45 ルイ・フィリップの名は、〈略〉特別なひびきをもって、私たちの心をうつのです。

十四49 ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。

十四410 そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。

十四52 私たちを心のそこから動かし、

十四58 しかし、フィリップのすなおな心は、まづしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

十四79 国 私たちは、おとうさんのために、心からの思い出をまもることにしましょう。

十四93 国 妹にしても、私にしても、心からおか

あさんを愛しているからだ、と、

十四137 国 あなたを思うすべての心をかたむけて、さようなら。

十四253 私、このお話から、さまざまなことが心にうかんできた。

十四305 遠いもの、大きなものに心をくぼることがたりなかったのは、

十四374 心を大きくもってください。

十四423 国 心に太陽をもて、あらしがふこうが、雪がふろうが。

十四427 国 天には雲、地にはあらいがたえなからうが、心に太陽をもて。

十四447 国 心に太陽をもて、そうすりや、なんだってふっとんでしまおう。

十四493 国 心に太陽をもて、くちびるに歌をもて。

十四498 しかし、このおじょうさんくらい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。

十四828 ぼろを着ても心はにしき。

十四8510 私、あとのほうの映画に心をひかれた。

十四861 一ひらの雪をとらえて、それをいろいろな角度からながめてみることは、つましい心にはできないものではない。

十四865 ごくさいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

十四886 それとも、心の中で考えごとをしていて、思わす方向がちがったものであろうか。

十四899 読む人の心がひかれるのは、

十五57 文 国 歌のもと末ふたたびも、友の心にあられぬ。

十五176 文 国 少女たちよ、〈略〉、つづれ着るとも、失うな、やさしく清きな心が。

十五5110 祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年の月日をへだてて、いま、まごたちによってふた

たび結ばれることになった。

十五607 私の父とは、心をゆるした間がらのこととて、

十五665 満ぼろの心から、どうして新島のおじさんのすがたが消えうせよう。

十五701 暗い心になって、じっとおじさんの写真に見入りながら、

十五7810 人の心をひくために、しかめつづらをしたり、みような身ぶりをしてはならない。

十五801 友だちとして心のかよったおつきあいができるようになったのは、

十五868 国 人というものは、自分のしなければならぬつとめのために、なにかしらぎせいにする心がなければならぬものだ。

十五12310 「心に花をかざれ。」——丸山まやま——

こころ・える 「心得」(下) 3 心える 《エル》

九659 国 やかましい、ここをなんと心える。

九6611 国 ここをなんと心える。

九678 国 ここをなんと心える。

こころおき 「心置」(名) 1 心おき

十二869 心おきなく戦いぬいた両選手のために、こころがけ 「心掛」(名) 3 心がけ

十六4 心がけひとつである。

十六5 心がけひとつで、〈略〉毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができ。

十305 なんでも、そのものとををしらべていくような心がけを、もちたいと思います。

こころがまえ 「心構」(名) 2 心がまえ

十276 自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。

十四30 10 むかしのことはしばらくおき、これから
の人の心がまえは、大きくなくてはいけません。
こころざし「志」(名) 1 こころざし ↓おこころ
ざし

七44 8 たいへん失礼だと思ひますが、これは、
車中の人たちのこころざしであります。

こころとこころ「課名」 2 心と心

五26 五 心と心……三十八

五38 1 五 心と心

こころにいてゐることば「課名」 2 心に生きて
いることば

四25 四 心に生きて いる ことば……三十

四

四34 1 四 心に生きて いる ことば

こころにたいようをもて「課名」 2 心に太陽をも
て

十四26 五 心に太陽をもて……四十二

十四42 1 五 心に太陽をもて

こころにたいようをもて「題名」 2 心に太陽をも
て

十四27 心に太陽をもて

十四42 2 心に太陽をもて

こころみに「試」(副) 2 こころみに

九17 5 あるところで、こころみに、しるしをつけ
てはなしたものだといふことがわかりました。

十二55 5 「みなさん、こころみにこのたまごを
テーブルの上に立ててごらん下さい。」

こころもち「心持」(名) 11 心持

七43 7 楽しい音楽をきかせてくださる心持を、
ほんとうにありがたく思います。

九10 4 たいこのたたきかたによって、いろいろな
心持をあらわすことができるし、

九14 5 音というものは、情景をあらわすばかりで
なく、心持まであらわすことができるものらしい。
九14 8 いい音楽をきいても、それがわからないの
は、その高さを受けいれるだけの心持をもってい
ないからであらう。

九14 5 くもは、《略》思いだしているうちに、心
持が、しだいにかわつてきました。

十一89 9 5 きみは、ぼくらの心持をよく知ってい
る。

十一45 10 弟の心持を頼もしく思ひました。

十二89 6 「ありがとう」というあいさつにしても、
ほんとうに感謝の心持をこめていうときと、

十二89 9 「ごちそうさま」にしても、そのときそ
のときの心持があらわれるはずである。

十二95 11 いったん読まれてしまうと、読み手の思
いでや心持にとかされて、

十三57 10 いかにも、おかあさんの喜びという心
持が、よく出ているね。

こころよい「快」(形) 1 こころよい 《ク》
十五75 10 先ほどの話は、こころよくひきうけた
よ。

ござる「御座」(五) 56 ござる 《ーイ》 ↓ありが
とうございます・おはようございます

三16 8 8 これは、はんだかの手でございます。

三106 9 9 どこへいくのもいやでございます。

三110 3 3 ほんとうは、わたくしは 月の 世界の
ものでございます。

三113 9 9 おなごりおしゅうございます。

三116 9 9 するがにある 山が いちばん みやこに
もちかく、天にも ちかいそうでございます。
四103 6 6 このあいだ、たすけて いただいた かめ
でございます。

四105 5 8 さようでございます。

四105 8 8 りゅうぐうは、ほんとうに きれいなと
ころでございます。

四106 6 6 もうじきでございます。

四107 4 4 あれが りゅうぐうの 門で ございま
す。

四108 8 8 ここが りゅうぐうで ございます。

四110 2 2 この かたが うらしまさんで ございま
す。

四110 7 7 このあいだは、うちのかめをおたすけ
くださいます、ありがとう ございました。

四110 10 10 ほんとうに お礼の 申しようも ござい
ません。

四113 7 7 これは、まださしあげた ことのない、
おいしい ごちそうで ございます。

四114 6 6 いや、おとひめさま、なにかも じゅ
うぶんで ございます。

四115 2 2 まあ、よろしいでは ございせんか。

四115 7 7 さようで ございますか。

四116 9 9 これは、これは、おみやげまで いただき
まして、ありがとう ございます。

四117 3 3 いつまでも そのままに しておいて いた
だきとう ございます。

四117 6 6 おなごりおしゅう ございます。

四129 7 7 もし、それは、わたくしの きものので ござ
います。

四129 8 8 どうなさるので ございますか。

四130 4 4 天人のはごろもと 申しまして、あなた
がたには、ご用の ないもので ございます。

四132 1 1 それは、ありがとう ございます。

五9 8 8 どうも、ありがとう ございます。

五12 4 4 どうもありがとう ございました。

五137㊦ どうもありがとうございます。
 五266㊦ ありがとうございます。
 五411㊦ このあいだは、お手紙ありがとうございます。
 五745㊦ 「女王さま、これで、あなたもごまんどくでございましょう。」といいました。
 六915㊦ さようでございします。
 六922㊦ あ、さようでございしましたか。
 六924㊦ なにかご用でございしましたか。
 六964㊦ なにかご用でございしましたか。
 六967㊦ つりばりをのどにかけまして、たいへん苦しんでいるところでございます。
 六976㊦ このつりばりではございませんか。
 六978㊦ みつかって、ほんとうによろしゅうございしました。
 七382㊦ 「どうもありがとうございます。」
 七811㊦ 向こうから、『略』と、たずねるのでございします。
 七816㊦ 私どものらくだは、かた目でございします。
 七849㊦ 裁判官どの、それを、しらべていただきとうございします。
 八495㊦ わたしには、あいにく、一まいのシャツの持ちあわせもございません。
 八515㊦ 『びんぼう』でございします。
 八525㊦ 『びんぼう』でございします。
 八539㊦ 『びんぼう』でございします。
 九6911㊦ どうもありがとうございます。
 九7010㊦ はがきに、かねたいちろうどのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございしますか。
 十一743㊦ きょう、いなかからきたのでございします。」と、看護婦がいいました。
 十一7411㊦ 「べつにかわりはございません。」

十二61㊦ みなさん、これも人のしたあとでは、なんのどうさもないこととございしましょう。
 十四561㊦ 花さんや、葉さんや、根さんのような、特別なはたらきは、なに一つございしません。
 十五467㊦ 「はい、さようでございします。」
 十五1178㊦ 『物のわかる喜び』でございします。
 十五11711㊦ 『正義であることの喜び』でございします。
 十五1183㊦ 『美しいものを見る喜び』でございします。
 こし「越」↓えだごし・かやごし・ふゆごし
 こし「腰」(名) 18 こし
 一468 こしをかけてまっていますと、
 一4810 よにんが むきあつて、なかよく こしをかけました。
 三612 そこで おとうさんは えんがわに こしをおろして、
 三614 ほかの子どもたちも、こしをおろして、まっています。
 三1112 あまり しんぱいしましたので、かみのけが白くなり、こしも まがってしまいました。
 五237㊦ こしをかけていた知らないおじさんが、
 六908 正面に、海の神がこしをかけていらっしやる。
 六9110 ほおりのみことは、こしをかける。
 八212 あめ色をした六本足の虫が、こしを高くして、ひょっくりひょっくり歩いていくのは、
 八627 「略」と、ひとりごとをいって、こしをおろした。
 九628 きよしやもたいへんあわてて、こしから大きなかまとりだして、
 十679 次郎かじやは、こしからぬきとったせんす

を、さらりと開きました。
 十6812 いつでもにげだせるかっこうで、こしをうしろにひき、
 十一716 少年は、略、目を父親の顔からはなさないで、こしをおろして待っていました。
 十三283 そのへんを走ったり、地面にこしをおろして、あなをほったり、
 十五289 自分のこしにさしていた短刀をぬいて、
 十五712㊦ ああ、満ぼろがいすにこしをかけて、ペンをにぎっている。
 十五941 「はちきれそうなわらい」は、光のこしのあたりを、力まかせにおさえました。
 こし「興」(名) ↓おみこし
 こし「濾」↓コーヒーこし
 こしあける「扶開」(下二) 1 こしあける「ケ」
 九766 おかみさんが、店の人とふたりで、せつせと目をこじあけて、むきみをつくっていました。
 こしかけ「腰掛」(名) 6 こしかけ
 一645 わたくしは、そこに あった こしかけにもたれて、うとうとしました。
 二589㊦ みなさんのつかっている つくえも、こしかけも、長いあいだはたらいて きました。
 二606㊦ ですから、この つくえや こしかけを、かわいがって やりましょうね。
 四1085 まん中にきれいなこしかけが二つおいにあります。
 四1095㊦ さあ、どうぞ その こしかけに おかけください。
 四1097 うらしまは、右のこしかけにこしかけます。
 こしかける「腰掛」(下二) 15 こしかける「

ケ・ケル

- 二52 おかあさんが、いすに こしかけて、本をよんでいらっしゃいます。
- 三63 三人の男の子は、うしろに こしかけました。
- 三63 7 ふたりの女の子は、まえに こしかけました。
- 三63 8 まん中には、おとうさんが こしかけて、ボートをおこぎになりました。
- 四109 8 うらしまは、右の こしかけに こしかけます。
- 四111 3 おとひめさまは、左の いすに こしかけます。
- 七77 1 みんなが勉強する教室にはいつて、こしかけてみたり――
- 十10 8 橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんもよくいつてこしかけました。
- 十11 1 おとうさんが、休み茶屋のまえにこしかけて、コーヒーをわかしもらっていますと、
- 十13 7 おとうさんのこしかけているそばで、
- 十一43 7 ようち園の子どもたちは、そのまえにおとなしくこしかけています。
- 十二17 4 文雄は、三きやくにこしかけて、またふでをとってかきはじめた。
- 十二56 9 みそ五郎は、雲仙岳^{うんぜんだけ}にこしかけて、《略》、まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。
- 十三28 9 客のこしかける赤いすや、
- 十五70 6 《そのいすにこしかけてごらん。》
- こじき「乙食」(名) 4 こじき
- 八50 3 「幸福」は、まずしいこじきのようななりをしました。
- 八51 2 まずしいこじきのようなものが家のまえに

いるのをみて、「《略》。」とたずねました。

- 八53 1 こじきのようなものがきて、にわとりをぬすんでいきはしないかと思ったのでしよう。
- 八53 11 その家の人がでてみると、まずしいこじきのようなものが、おもてに立っていました。
- こじきこじし(感) 1 ゴシゴシゴシ
- 三36 2 《ガタガタ、トン、トン、トン、ゴシゴシゴシ、スススス、たいへんにぎやかでいそがしそうです。》
- こじきこうねん 「五十光年」(名) 1 五十光年
- 八35 8 このほか、五十光年のところに光っている星があります。
- こじぶん 「御自分」(名) 2 ご自分
- 十四77 1 《ご自分にはまだ子どもたちがのこっている、《略》と、お考えになってください。》
- 十四119 9 きはつ油のさしかたは、ご自分でなさってごらん下さい。
- こしめい 「御指名」(名) 1 ご指名
- 十四52 3 《それでは、座長の根さんのご指名で、私から申します。》
- こじゅう 「五十」(名) 1 五十
- 十二67 7 五十も六十も続いている。
- こじゅういち 「課名」 3 五十一
- 六2 8 五 月と雲……五十一
- 十一3 4 六 雨の中……五十一
- 十四3 2 六 とりいれまつりの夜……五十一
- こじゅうおん 「五十音」(名) 4 五十音
- 五8 8 いのうえさんは、國語の本にでていることばを、五十音にわけてみるといいました。
- 六11 1 アイウエオ、カキクケコ——という五十音の中で、
- 六112 11 ぼくは、五十音というものは、一年生のと

きにならったからよく知っているが、

- 六113 10 それよりも、五十音について、新しく思いついたことをみんなに話して、
- こじゅうく 「課名」 1 五十九
- 五3 3 八 あさがおの花……五十九
- こじゅうこ 「課名」 3 五十五
- 二3 4 八 ゆめとつくえ……五十五
- 十一3 5 七 一つ一つづつ……五十五
- 十二3 2 六 傳説……五十五
- こじゅうさん 「課名」 1 五十三
- 十三3 10 七 ある画像……五十三
- こじゅうに 「課名」 1 五十二
- 五3 2 七 星……五十二
- こじゅうにん 「五十人」(名) 1 五十人
- 九77 7 先生について、五十人のなかまが、おくれなように歩いていきました。
- こじゅうはち 「課名」 2 五十八
- 三3 3 九 五人の子ども……五十八
- 十一3 6 八 いにくいことば……五十八
- こじゅうろく 「課名」 2 五十六
- 六3 1 六 かべ新聞……五十六
- 八3 4 五 みはらし台……五十六
- こじゅんに 「御順」(副) 2 ごじゅんに
- 一48 5 《ごじゅんにゆっくりおのりください。》
- 五8 8 《「おるるかたがすんでから、ごじゅんにお乗りください。》
- こじょ 「御所」(名) 1 ごじょ
- 三107 8 「《略》。」とお思いになって、すぐこじょにつれて かえろうとなさいました。
- こじょう 「故障」(名) 1 こじょう
- 十五26 10 発動機にこじょうのできた飛行機乗りが、こじょうかいいたす「御紹介」(五) 1 こじょう

かいたす 《―シ》

十五 87 4 ㊦ 失礼ですが、この中のおもなものをこ
しょうかいたしましょう。

ごしょく 「五色」(名) 1 五色

九 5 5 四色、五色と数をましていけば、その感じ
はまたふかくなるでしょう。

こしらえあげる 「拵上」(下一) 2 こしらえあげ
る 《―ゲ・―ゲル》

十 36 4 いままで失敗のもとをとりぞいて、新
しい設計図をこしらえあげた。

十 63 7 ふつうのしぼいでは、《略》、おしろいやべ
にでけしょうをして、その役らしく顔をこしらえ
あげるのだが、

こしらえはじめる 「拵始」(下一) 1 こしらえは
じめる 《―メ》

四 83 5 ねえさんが、赤いきれでなにか こしら
えはじめました。

こしらえる 「拵」(下一) 30 こしらえる 《―エ・

―エル》↓おこしらえる

三 35 7 ㊦ こうさくしつでは、六年生が、はこのよ
うなものをこしらえていました。

三 79 3 すなで、トンネルや、いどや、家や、道を
こしらえています。

四 67 5 お正月までに、ことばあそびのたねをた
くさん こしらえて おきましょう。

四 73 5 これを あつ紙に書いて、えも つけて、
あそべるように こしらえる ことにしました。

四 82 9 ぎん紙で こしらえた 小さな つりがねや、
十字かも させました。

四 121 5 どんとうの まるい ガラスは、 どうして
こしらえたのでしょう。

五 61 10 ㊦ あのとつばみをこしらえたのは、だあれ。

五 95 3 ㊦ すりえをこしらえて、たべさせてみよう。

五 95 4 たまごのきみですりえをこしらえて、

六 68 8 一組の人がみんな考えてこしらえたまん
がです。

六 69 1 クロスワーズパズルもこしらえました。

六 126 1 ㊦ あなをほって、トンネルをこしらえて遊
ぼうよ。

七 37 11 私たちのために、せいっぱいの力で、す
きまをこしらえてくれたのです。

七 67 6 はじめ骨組みをこしらえておいて、それに
ねんどでだんだん肉づけをし、

七 95 2 寒くなったので、むしろで戸をこしらえて
やりました。

九 73 5 白い、大きなきのでこしらえた馬車が、
ひっぱりだされました。

十 39 5 幸吉は、あつつぶほどの核をこしらえて、
それを、母目の体内にさしいれてみた。

十 51 1 母がこしらえてくださったパンを、

十一 19 4 働くことがすきで、一代でりつばな身代
をこしらえました。

十二 27 9 わたしはおべんとうの包みをこしらえて、

十二 29 3 こんなふうにして、毎朝おべんとうをこ
しらえて持たせているうちに、

十二 76 7 それは、赤いおぼんの上に、雪をまるめ
てこしらえたうさぎでした。

十二 102 3 はにわには、このほか、うまや、いぬや、
鳥などをこしらえたものがあります。

十三 28 4 土でおだんごのようなものをこしらえた
り、

十三 34 2 ときには、ホートンの廣場などに、かげ
絵の舞台をこしらえて、

十四 53 10 ㊦ 私が、《略》、じりじりと暑い日に照ら

されながら、せっせと養分をこしらえて、

十四 54 1 ㊦ あれは、私たちの養分をこしらえる力
をかまわずに、あなたがたが、かってに花をさか
せたからですよ。

十四 77 3 私が、木を割ったり、竹を割ったりして、
なにかこしらえようとしていると、

十五 102 2 ㊦ 屋根をもちあげるほどの喜びをこしら
えているのですよ。

十五 110 1 ㊦ それに、このきれいな着物は、まあ、
なんでこしらえたの。

ごしんせつ 「御親切」(形状) 1 ごしんせつ

十五 119 2 ㊦ あなたは、私の子どもたちに、それは
ごしんせつでしたね。

こす 「越」(五) 2 こす 《―シース》

八 14 7 寒い冬もぶじにこすことができました。

十三 10 8 わるいといった方角へこして、つごうの
よくなった人もある。

こすい 「湖水」(名) 1 湖水

十三 48 2 山の湖水のほとり、「ます」小屋のラン
プが、きゆうに暗くなりました。

こずえ 「梢」(名) 5 こずえ

九 52 11 一本のくるみの木のこずえを、りすが、
びよんびよんとんでいました。

十 4 8 わかめをだしかけたこずえのさがが、かす
んだ空の中にとけこんでいる。

十一 37 7 ㊦ こずえをかけるもずの音も、すむ秋空
によくひびく。

十三 4 3 ごらん、まだこのかれ木のままの、高い
けやきのこずえの方を。

十三 4 4 そのこずえの、細い、細い小枝のあみ目
の先にも、《略》、季節の命はわきあがって、

こすずめ 「子雀」(名) 4 子すずめ 小すずめ

四八9 4 園 「やすみましよう。」と、子すずめが、

七二2 7 園 子すずめにやるのさ。

七二3 7 園 子すずめ、あおむしをたべるの。」兄「だ
いすきさ。」

十一14 2 あれは、この村のさみしがりの小すず
めだ。

コスモス (名) 4 コスモス

四三1 2 園 わたくしは、うちの にわに さいてい
る コスモスの 花を あげよう と思います。

十57 3 コスモスの花

十57 4 コスモスがさきました。

十57 8 いまはきれいだけれど、コスモスは、おじ
いさんになるとかわいそうね。

こすり ↓ あてこすり

こすりつ ける 「擦付」 (下一) 1 こすりつ ける

《一ヶ》

十四95 1 女の子は一本のマッチをとりだした。か
べにこすりつけて、火をつけた。

こす ー 擦 (五) 2 こする 《一ッ》

八108 8 いたといたのあいだにもみをいれ、ゴリゴ
リこすつてもみがらはじきました。

十四96 7 女の子は、《略》、もう一本のマッチを
とってかべでこすつた。

ごセット (名) 1 五セット

十二81 11 二少年のことを思つては、ふるいたつて
戦い、とうとう五セットで勝つことができました。

ごぜん 「午前」 (名) 3 午前 ↓ しずかなごぜん

十三7 1 春のきざしは、《略》、目に見えぬかすみ
のようにたなびいている、のどかな午前。

十三7 7 こういしずかな午前にあつて考える、
十三47 7 午前の森に、しかがすわっている。

ごセンチ (名) 1 5センチ

十二53 園 5センチ

ごセンチメートル (名) 2 5cm

七99 3 耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6
cmでした。

八100 5 一本のなえのまん中からでた新しい葉が、
5cmぐらになりました。

ごせんにじゅうごばん 「五千二十五番」 (名) 1 五
千二十五番

十三40 4 園 もしも、五千二十五番ですか。

ごせんば 「五千羽」 (名) 1 五千ば

九21 9 その夜半には、また一台の貨物自動車が、
五千ばのつばめをつんできました。

こそ (係助) 14 こそ ↓ それこそ

二27 8 園 きみこそ といてくれたまえ。
六50 6 園 くらければこそ光る星、ねむりをふらす
夜の空。

八48 5 園 この人こそ、さがしもとめていた人だ。

九126 3 そこをくんで飲んでみると、それこそまぎ
れもないうまい水であった。

九130 1 園 「こんどこそは、にがさないぞ。」

十39 1 このわか者こそ、のちに眞珠王として世界
に知られた御木本幸吉であった。

十69 6 園 それこそ、どくの『ぶす』だよ。

十一8 3 園 これこそ、いちばんりっぱなものだと
思う。

十二71 5 先生の近くにいればこそ、毎日教えても
らえるので、

十三18 7 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れな
い國民こそ、真にすぐれた國民でしょう。

十四15 5 園 おかあさんのおやさしさこそ、私に
とっては、いちばんとうとい宝なのです。

十四49 10 このおじょうさんこそ、ほんとうにこの

歌を歌った人というべきです。

十四81 12 園 すきこそものののじょうずなれ。

十五58 4 園 かれこそ、のちに名をなした新島襄
だよ。

ござう 「小僧」 (名) 1 小ぞう ↓ わんぱくござう

二37 8 園 山から小ぞうがとんで きた。

ござうだん 「御相談」 (名) 1 ござうだん

三107 1 みかどは、おじいさんと ござうだんに
なつて、ある日、かりのおかえりに、とつぜん
おたちよりになりました。

こそこそ (副) 1 こそこそ

七77 4 このようすを、甲乙ふたりがみてとつて、
なにか、こそこそささやきあう。

ござんじ 「御存」 (名) 6 ござんじ

一61 2 園 たろうさん、よくござんじですね。

七78 7 園 え、でも、そんなにくわしくござんじで
はありませんか。

十四53 7 園 どうして《略》、そんな大きな実
になつたかということは、ござんじないようすね。

十五90 4 園 たぶん、あなたがたも、あの鳥、どこ
にかくれているか、ござんじないでしょうね。

十五117 10 園 私をござんじですか。

十五118 2 園 あなた、私をござんじですか。

こだい 「古代」 (名) 2 古代

十二97 10 古代の人は、はいがい、はまぐり、かき、
しじみ、あかにしなどをたくさんたべていたよう
です。

十二102 2 これをみて、平和を愛した古代の人た
ちの氣持がよくわかるではありませんか。

こだいじん 「古代人」 (名) 1 古代人

十二101 5 この人形は、はにわといつて古代人の
かからほりだされたものです。

こたえ〔答〕(名) 3 答 ↓くちこたえ・くちこたえする

六65 8 このなぞの答がわかった人は、

七85 7 〔答〕けれども、いまの答で、知っていたわけがはっきりしたでしょう。

十15 5 おとうさんがしようじきにその答をしました、少年は、さらにこんなことをいいました。

こたえかた 〔答方〕(名) 1 答えかた

十五44 10 あいさつともつかず、返事ともつかない答えかたをした。

こたええる 〔答〕(下) 30 こたええる 答える ↑

エーエル ↓おこたえる

三73 3 〔略。〕みんながこたえました。

三110 6 〔略。〕とこたえました。

四21 2 〔手〕みんなは、『略。』とこたえました。

四59 7 〔略。〕とこたえるだけでした。

五62 4 あやこは、なんとこたえていいのか、わからなくなっていました。

六75 6 〔略。〕と答えました。

六116 10 〔略。〕と答えましたが、ほんとうは、

たこを作るのははじめてです。

七77 11 旅人は、それには答えないで、

八49 6 〔略。〕と答えました。

九49 11 〔略。〕と答えました。

九51 3 〔略。〕たきがピーピー答えました。

九52 5 〔略。〕と答えました。

九53 5 すると、りすは、木の上からひたいに手を

かざして、いちろうをみながら答えました。

九68 1 いちろうはわらって答えました。

九110 3 ぼくたちも、みんなつえをふって、それに

答えた。

十15 9 〔略。〕と、おとうさんが、力をいれて

答えました。

十17 1 〔略。〕と、また太郎がたずねましたの

で、おとうさんは答えました。

十一59 4 〔略。〕と答えた。

十一65 11 〔略。〕と、少年は、ますます不安を

おぼえながら答えました。

十一66 10 看護人は、少年をながめて、それには答

えないで、

十一74 12 〔略。〕と、看護婦は答えました。

十一75 6 〔略。〕と、医者は、もう一ど少年の

かたに手をかけながら答えました。

十一86 5 〔略。〕と、看護人が答えました。

十二11 6 〔略。〕と答えました。

十二71 8 芭蕉はからだがよくないので、寒さは身に

こたえましたが、雪をみるのが楽しみでした。

十二79 1 〔略。〕とはっきり答えました。

十二80 9 ことに「ジャパン」ということばに力を

いれて答えました。

十四19 5 田中さんが答えられないでいると、

十四23 6 〔略。〕と、そくさに答えた。

十五53 9 「カムイン」と答える、ひくい、しか

も力強い声に、

こたかい 〔小高〕(形) 2 小高い 《一イ》

九78 1 〔答〕そう、あの向こうの小高いところに、白

い物がちらちらとみえるでしょう。

十一4 2 近くには小高い丘があつて、

こたこた 〔副〕 1 こたこた

六4 5 いろいろな音や、みたこともないような物

が、こたこたと耳にはいり、目にはいるばかりで、

こたち 〔木立〕(名) 1 木立

十18 3 暗い木立。

こたつ 〔炬燵〕(名) 1 こたつ

六62 1 〔答〕「ねこは、こたつでまろくなる。」

こたわり 〔名〕 1 こたわり

十56 1 すこしのこたわりもなく、ぐんぐんと書き

つけているその力に、おどろきました。

こち 〔東風〕(名) 1 こち

十一42 7 〔答〕うめもほころび、こちふけば、春も目

さきに近づいた。

ごちそう 〔御馳走〕(名) 12 ごちそう

四11 5 魚たちはごちそうをはこんできます。

四113 7 〔答〕これは、まださしあげたことのない、

おいしいごちそうでございます。

六139 2 〔答〕「いいごちそうができました。」とらさんは、

〔略〕、うさぎさんたちの方をのぞきました。

六140 1 〔答〕どれ、ごちそうになろうかな。

七24 8 〔答〕さあ、おおむしくん、新しいごちそうだ。

九134 8 〔答〕うまいごちそうだ。」くもは、〔略〕白い

ちようちよをとらえました。

十三38 6 〔答〕ごちそうなんてたくさん。

十三50 1 わたしたちが、さくらんぼと、くるみの

ごちそうをならべると、

十四51 4 〔答〕ひさしぶりにごちそうをたべて、たい

へんゆかいです。

十四93 10 ただひと目でも、火の光とごちそうとを

見るだけでも、満足したであろう。

十五56 9 〔答〕きょうは、はるばるたずねてみえたあ

なたへのごちそうに、〔略〕、私がはじめて会った

日本人について話をしあげよう。

十五86 1 〔答〕きつと、おまえさんたちを、ごちそう

によぼうというのだらう。

ごちそうさま 〔御馳走様〕(感) 3 ごちそうさま

四117 7 〔答〕どうもごちそうさま。

六90 6 〔答〕ごちそうさま。

十二89 8 食事のたびごとという「いただきます」
「ごちそうさま」にしても、
ごちそうする 「御馳走」(サ変) 1 ごちそうする

《一シ》

一59 10 みんなよろこんで、めいぶつのおだんご
や、おもちゃを、ごちそうしてくれました。

ごちゃごちゃ (形状) 2 ごちゃごちゃ

二94 6 せっかくあつめたことばが、ごちゃご
ちゃになっています。

九94 あまりたくさん重ねると、ごちゃごちゃに
なつて、まとまりがつかず、

こちら「此方」(代名) 24 こちら 1 はこちら
一44 8 6 「お月さんのくにへおいでのかたは、
こちらへおならびください。」

三23 10 あちらの村でも こちらの村でも、こう
いって、この大きな木をみあげました。

四77 7 お——おにさんこちら、手のなる方へ。
四108 9 6 さあ、どうぞこちらへ。

四132 1 6 では、こちらへいただきます。

五38 8 6 そうすれば、こちらのようすが、いろ
ろとわかるだろう。

五39 9 6 こちらでは、さくらの花も、なしの花も、
《略》、いっぺんにさきだします

五42 6 6 こちらでは、田うえがはじまりました。
五91 2 6 「さあ、みんなこちらへおいで。」

六91 6 6 では、そのかたをこちらへごあんないし
なさい。

六91 9 6 さあ、どうぞこちらへ。」ほおりのみこ
とは、こしをかける。

六128 4 おにがあらからくると、こちらへかくれ、
六128 4 6 こちらからまわっていくと、みんなはあ
らへこっそりわたりました。

九31 2 6 はこちらへきてから、もう四ヶ月になりま
す。

九31 3 6 はこちらへきたときは夏の暑いさかりでし
たが、

九32 1 6 ぼくは、こちらへきてから、おとなと
いっしょに畑にでたり、

九43 1 6 はこちらはかきの木の多いところで、
九44 4 6 かきの葉を一まい一まいならべて、この
色がよいとか、こちらの色がよいとかいって

九70 9 6 はがきに、かねたいちろうどのと書いて、
こちらを裁判所としますが、

九138 8 こうもりは、ひょうきんなかつこうをして、
こちらにとんできます。

十52 2 「ワンワンチャン」と、こちらを向かせよ
うとしたり、

十四15 12 6 たとい、からだはこちらにいても、こ
のまごころを書いてお送りして、

十五57 8 6 つくえのまん中にチョークで線をひき、
向こうは日本、こちらはアメリカといつて、

十五109 6 6 手をひろげてこちらへかけてくる。
こっか 1 ぶんかこっか・へいわこっか

こづかい「小遣」(名) 1 こづかい 1 1 おこづかい
十一87 7 6 じゃあ、ここに二円だけおいていくか
ら、こづかいにしないさい。

こづかいさん「小使」(名) 2 こづかいさん
三36 4 6 こづかいさんのおへやはあたたかです。

三36 9 6 こづかいさんのおへやのものは、みん
な大きいなおもいでした。

こっき「国旗」(名) 1 国旗
十二77 4 テニスコートには日本とメキシコの国旗
が美しくひるがえつて、

こづきまわす「小突回」(五) 1 こづきまわす

《一サ》
八71 7 あひるにはかみつかれ、にわとりにはこず
きまわされ、

こっきょう「国境」(名) 1 国境

十五73 6 つくえに白線をひいて「国境」をつくつ
たあたりを、声高らかに読みあげられた。

コックス(名) 9 コックス
十一6 10 6 ポートの向きをかえたりひき返そうと
したりするときには、きつとコックスが大声でい
うだろう。

十一7 11 6 みんながさせてくれたら、コックスの
まえにすわつて、整調をやつてみたいな。

十一8 1 6 コックスの号令どおりに、一糸みだれ
ずこいでいくと、

十一8 5 6 だがね、やつぱり、いちばんだいで、
むずかしいのは、コックスだろう。

十一8 7 6 さつきから、きみはだまつているけれ
ど、ぼくはきみをコックスにすいせんする。

十一9 9 6 あんな大きな船の船長と、コックスと、
どっちがむずかしいだろうね。

十一9 12 6 しかし、りっぱなコックスは、いつか
りっぱな船長になるだろうよ。

十一10 12 6 いいコックスが日本を正しい方へつれ
ていくのさ。

十一11 11 6 1 トップ 3 5 7 コックス 2

4 6 8 整調
こっこ 1 おおにこっこ

こっこ(感) 2 コッ、コッ

八64 2 6 「コッ、コッ。」といったりして教えた
のだが、

八78 7 ねこののを鳴らし、にわとりは「コッ、
コッ。」とさわいだ。

こつこつ (副) 1 コツコツ

十五537 私は、しばしためらったのち、意を決して大きなドアをコツコツとノックした。

こつこつこつ (感) 1 コツ、コツ、コツ、コツ

八533 「コッ、コッ、コッ。」と、その家のにわとりは、用心ぶかい声をだして鳴きました。

こつそり (副) 2 こつそり

六285 こちからまわっていくと、みんなはあちらへこつそりわりました。

十一289 夜おそくこつそりと勉強を続けました。

こちち「此方」(代名) 16 こちち ↓ あちちこちち

四934 右にも左にも、むこうにもこちちにも、どこにも降る。

六042 (会) あ、人がこちちをみている。

六267 (会) 「そちちのあなと、こちちのあなとつづけようか。」

七102 (会) 渡しもりは、渡し船に子どもが乗ると、こちちの岸から向こうの岸へ、船をこいでいく。

七199 (会) 先生、こちちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。

七211 (会) あつ、こちちにも。

七406 「ねえさん、こちち。」と、私を手まねきしています。

七617 ひとところで、からすが鳴くと、あちちでもこちちでも鳴く。

七653 あちちでもこちちでも、だっこく機。

九557 おかしなかつこうの男が、〈略〉、だまつてこちちをみていたのです。

九617 草の中にあちちにもこちちにも、こがね色のまいるものが、ぴかぴか光っているのです。

十二271 たった九十センチぐらいのところでも、こちちからあちちへいくとなると、

十五859 (会) なんだか、あの人たち、こちちを見たようだ。

十五968 (会) 私たちに用のあるものは、どうせこちちを通るのだから。

十五993 (会) みんないる、みんないる、こちち見た。

十五994 (会) こちち見た。」と歌い、

こづつみ「小包」(名) 2 小づつみ 小包

四58 手紙や 小づつみなどを おくって くれま

す。

十四1211 (会) 小包二つは、おそらくいっしょには着

きますまい。

こつばめ「子燕」(話手) 3 子つばめ

六384 子つばめ「おかあさん、なんでしょう。

六393 ふきとばされたんです。きょうの大風に。」

子つばめ「へえ。

六410 さあ、かかしさん、いまから帰るのよ。」

子つばめ「みんなできみをおんぶするんだ。」

こつばめ「子燕」(名) 5 子つばめ

六383 子つばめがかかしをみつける。

六403 親つばめ、子つばめをつれてさる。

六416 親つばめと子つばめが、かかしのそばにとまる。

九155 この中には、親つばめもいますが、ことし

生まれた子つばめが、たくさんまじっています。

九187 しかし、その中には、ことし生まれた子つ

ばめがたくさんいます。

コップ (名) 5 コップ

十一765 看護婦がなにか飲み物を持ってくると、

コップなりさじなりをその手から取って、

十一779 タがた、コップを病人の口もとにつけた

ときに、

十一912 看護婦が、小さなすみれの花たばを、

ベッドの上のコップの中から取ってきました。

十二344 「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たく

さんのことばをつづることを覚え、

十四133 (会) それは、コップの上からコーヒーこし

をとったとき、それをのせるためなのです。

こつぶ「五粒」(名) 3 五つぶ

十4310 すると、五つぶの眞円眞珠が現われた。

十4311 八十五万から五つぶの眞珠が取れたわけ

ある。

十441 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめの

れいにささげて、その成功をしらせた。

こつぶこつぶ (副) 1 コップコップ

五9010 (会) それからな、おかあさんのおちちをコッ

ブコップといただいて、

こつんと (副) 2 コツンと

五911 (会) のびて、のびて、とうとうえんの下のい

たで、あたまをコツンとうったのだよ。

十二510 このときコロンブスは、コツンとたまご

のはしをテーブルにうちつけて、

こて「鑊」(いしよく) こて

こて「小手」(名) 1 小手

十五564 (会) 私は、小手をかざして足の下にひろが

る駿河湾の海岸線をながめ、

こてまり「小手毬」(名) 1 こてまり

九1145 (文) 水ぐるま近きびきにすこしゆれすこ

しゆれいるこてまりの花

ごてん「御殿」(名) 17 ごてん

三1410 おしやかさまは、たくさんのでしをつれ

て、王さまのごてんにまいりました。

三152 ごてんのいり口まで きますと、

三158 ごてんでは、おしやかさまがせきにおつ

きになりました。

三162 〇それをみた ごてんの 人々は、びっくりしてしまいました。

三174 〇はんたかは、しずかに ごてんに あがってきました。

三1063 〇「それほど きれいなのなら、 ごてんに よびたい。」とお思いになりました。

三1065 〇かぐやひめを ごてんにつれてきたら、おまえにくらいを さずけて やろう。

五7310 〇ちゃんと ごてんができていて、おばあさんは女王になっているではありませんか。

六877 〇まもなく、きれいな ごてんにつくでしょう。

六878 〇なんのごてんですか。

六879 〇海の神のごてんです。

六879 〇そのごてんの門のそばにいどがあつて、そのそばには、大きな木が立っています。

六887 〇海のごてんの門のまえに、大きな木が立っている。

六931 〇年をとったかたがあらわれて、私に海のごてんへいくようにと教えてくださいました。

八284 〇川岸にそつて車を走らせていくと、林の中に ごてんがあつて、

八285 〇天帝は、そつとごてんの中へおはいりになりました。

八322 〇それをみた天帝は、〈略〉、はたおりひめを 天の川の東の岸のごてんにもどしてしまい、

こと「言」 〇ひくりごと・ごごと・ひとこと・ひとりごと・ふたことみこと

こと「事」(名) 918 コト こと 〇あなたの おもっていることは・おしごと・かんがえごと・しごと・せいぎであることのようにこび・できごと・なにご

と・ままこと・みごと・ものごと・わらしこと

一342 〇なににでもなる ことができるなら、

一541 〇んは、ひろつた ことがありますか。」

二95 〇して、そろえる ことはできませんか。

二154 〇したら えに かく ことができるでしょう

二325 〇うものを みた ことがあるかい。」と

二328 〇らだもの、みる ことなんか できない

二331 〇、手で さわつた ことがあるかい。」と

二335 〇、さわつて みた こともない。」とい

二371 〇びとり かつて な ことを いうので、ぞ

二553 〇つてから、こんな ことを かんがえまし

二563 〇でしょう。こんな ことを かんがえてい

二119 〇ものを おしえる ことにしました。一

二127 〇えは たくさん の ことを おぼえなくて

二134 〇かわない という ことだよ。わかつたか

二141 〇るもの だ という ことが わかりました。

二143 〇らうま れて くる ことも わかりました。

二144 〇えて くださつた ことは、きれいな 心

二145 〇になれ という ことに ちがいない。」

二155 〇、ここを とおす ことは できない。」と

二1510 〇きです。ふしぎな ことに、はちをもつ

二197 〇をよく しらべる ことに しました。え

二203 〇んに つぎの ような ことを おかき になり

二226 〇は、いままで みた ことも きた ことも

二226 〇た ことも きた ことも ないほど、大

二253 〇この 木を 切る ことに しよう。」みん

二2510 〇た。そこで、切る ことに になりました。

二261 〇んな 大きな 木の こと ですから、切る の

二264 〇やつと 切つた おす ことが できました。

二266 〇うする かと いう こと になりました。

二271 〇て、ふねをつくる こと になりました。な

二273 〇た。いままで みた ことも きた ことも

三273 〇た ことも きた ことも ない、大きな

三276 〇その ふねの 早い ことです。かいを そ

三298 〇て いった という ことです。五 学校

三302 〇いで、作文を する こと になりました。」

三327 〇しずか にある こと。」と かい であ

三468 〇さが いままで の ことを はな しますと、

三485 〇さが いままで の ことを はな しました。

三716 〇けれども、つまむ ことは できません。」

三722 〇けれども、はきだす ことも できません。

三807 〇は、みんなの いう ことには おかまいな

三945 〇ろな ものを おる ことが できます。ふ

三947 〇ます。ふねを おる ことも できます。ピ

三951 〇ふくすけを おる ことも できます。き

三953 〇うせん なども おる ことが できます。こ

三957 〇紙に、えを かく ことが できます。お

三961 〇の つくえも かく ことが できます。に

三963 〇ちかい 家も、かく ことが できます。ク

三964 〇クレヨンで かく ことも できます。え

三965 〇。えんぴつで かく ことも、ふでで かく

三967 〇とも、ふでで かく ことも できます。ま

三969 〇紙に、字を かく ことが できます。大

三971 〇さな 字でも、かく ことが できます。は

三971 〇ます。はやく かく ことも、ゆっくり か

三971 〇も、ゆっくり かく ことも できます。ひ

三973 〇。ひらがなを かく ことも、かたかなを

三974 〇、かたかなを かく ことも できます。か

三975 〇す。かん字を かく ことも できます。ロ

三976 〇。ローマ字を かく ことも できます。心

三978 〇ます。心に 思つた ことは、いつの まに

三982 〇す。口では なした ことは、その まま き

三1006 〇ました。ある 日の ことです。おじいさん

三1057 〇とても むずかしい ことを いって、それ

三105 10 には、だれもすることができませんで
 三106 8 かぐやひめにこのことをつたえてたび
 三111 4 た。みかどがこのことをおききになっ
 三111 6 まもってくださることにになりました。
 三112 9 ころが、ふしぎなことに、手足の力が
 三112 10 っ、なにをするともできなくなっ
 三113 6 もう、ひきとめることもどうするこ
 三113 6 ともどうすることもできません。
 三114 1 会 て、わたくしのことを思いだしてく
 三116 2 おわすれになることができませんで
 四12 5 とおい町へいくことができません。と
 四19 2 会 いて「文を書くことは、お話をする
 四19 2 会 するのとおなじことです。お話があ
 四25 3 手 。みっちゃんのことを、みんなでお
 四28 5 をあいてに書くことに、気がつきま
 四28 8 がしたいと思うことは、なんだろう。
 四28 9 くりひろいをするとかかな。ぶどうえん
 四29 3 て、あそんでくるとかかな。おばさんの
 四29 5 てつたいをするとかかな。となりの
 四29 7 をもらってくるとかかな。じぶんで
 四33 1 手 しんせつにすること。」というおと
 四34 3 会 か氣のついたことはありませんか。
 四35 1 も、まだ、なんのこともわかりませ
 四36 3 会 ているというところが、わかりますか
 四36 7 会 「先生、こんなことがありました。」
 四39 2 めいめいじぶんのことが思いだされて
 四42 1 ムのようにのびることもあるし、きゅ
 四42 2 、きゅっとちぢむこともありました。
 四42 5 になってしまふことはありませんで
 四44 4 会 ならんでとぶことにしよう。」みん
 四47 4 会 めにして、とぶことにしようじやな
 四50 1 やられたということがわかりました。

四52 2 ぶのは、よいいなことではありません。
 四55 3 びがやってくることはありません。そ
 四57 5 をしようということになりました。
 四58 6 会 るうちに、いいこと考えたんだ。」こ
 四73 5 ようにこしらえることにしました。
 四75 10 わ——わからないことはしらべよう。
 四90 7 よう子どもたちのことを思っ、おも
 四91 1 いたつする人のことを思っ、ゆう
 四97 8 会 うらしま「そんなことをしてはいけな
 四113 3 おなじ。ある日のこと、うらしまは、父
 四113 3 しまは、父や母のことを思いだして、
 四113 6 会 まださしあげたことのない、おしし
 四114 3 会 なにかかわったことをして、おなじ
 四115 3 会 ま」でも、うちのことも氣にかかりま
 四116 6 会 ばこは、どんなことがあつても、お
 四121 2 、はたらいっていることでしょう。こんな
 四121 3 ほど苦心をしたことでしょう。でんと
 四122 6 会 がないと、光ることができません。
 四122 9 が かかっていることでしょう。「略」
 四128 5 会 きものは、みたことがない。もつて
 四131 3 会 と、天へかえることができません。
 四132 6 会 がないと、まうことができません。
 四132 10 会 は、うそということを知りません。
 四133 1 会 れははずかしいことを申しました。
 四15 7 がいるのと、おなじことです。汽車のきつ
 四15 9 どこへでも旅をすることがあります。「略」
 四20 11 さんにおつたえすることができました。
 四23 2 会 にあるの。どんなこと。「略」。「略」
 四29 2 会 というのはどんなことかね。「それはこ
 四30 8 会 きどき、こういうことをやるのかね。」
 四31 7 会 うないい子どものことが書いてあります
 四36 6 炭なしには、くらすことができません。で

五38 5 手紙の中に、こんなことが書いてありまし
 五42 2 手 かいどうへいったことはありません。け
 五54 10 つぎの星をみつけることは、できませんで
 五55 10 、おかあさんにこのことをいって、ごろう
 五61 4 会 「「めがでないことはありません。わ
 五79 2 川をみて氣のついたことを書きました。つ
 五82 3 会 べないようにすること、夜は、はらまき
 五82 4 会 、ねびえをふせぐこと、それから——」
 五82 6 、なま水をのまないことや、ねるまえにた
 五82 6 ねるまえにたべないことや、日のかんかん
 五82 7 ろで長くあそばないことなどを、話しあい
 五90 5 会 においてなさったことがあった。それで
 五96 11 会 ろまでとんでいくことはできまいよ。」「
 五98 10 会 「略」。そのばんのことでした。パタパタ
 五107 4 会 にか、おもしろいことがあるのかい。」「
 五108 2 会 。ちつともこわいことはないから、いっ
 五109 6 会 なものだ、新しいことをどんどんおぼえ
 六4 5 ろいろな音や、みたこともないような物が
 六4 8 は時計屋の店であることがわかった。自分
 六6 4 ちに、ふと、自分のことに考えおよんだ。
 六9 5 会 のでも、役にたつことがあるのかしら。
 六11 9 、ふたたび活動することができたのだと思
 六15 8 、ぶじに岸にあがることができました。「へ
 六16 7 は、ねらわれていることを知らずにいまし
 六23 2 会 いうのさ。わるいことはいわない。さあ
 六27 5 会 うしてあたたまることでもできるし、たべ
 六48 7 会 ジ。ふと、そんなこと思われる、あの
 六49 4 会 ち。ふと、そんなこと思われる、あの
 六49 9 会 朝の空。楽しいことがあるような、
 六50 8 会 の空。きたくないこともきえそうな、
 六53 2 みおは、両方のいうことをきいていまし
 六55 8 。ふみおはさっきのことを思いだして、ま

六五三 かね新聞を発行することにしました。かね
 六五六 号は、一組でつくることになりました。そ
 六五六 ねへんしゅうをするのにきめました。私
 六五七 かね新聞を発行することになりました。こ
 六五七 なにお知らせしたいことを書きます。みん
 六五七 みんなが喜ぶようなことを書きます。みん
 六五八 。みんなのしらべたことをはっぴようしま
 六五九 します。おもしろいことも、おかしいこと
 六五九 いことも、おかしいことも書きます。どう
 六五九 みなさんの氣づいたことは、なんでも、か
 六五九 きのうち、おもしろいことに氣がつかました
 六五九 ことばの声のかずのことです。うたうた
 六六四 五 タノシイコトガ——七 アルヨ
 六六二 わざの中にも、このことあてはまるもの
 六六九 るのは、むずかしいことでした。第二号が
 六七二 ら、ごろうはこんなことを考えました。い
 六七二 て、「雪だるまのことです。」と、とん
 六七二 へ。「略。」こんなことをつきからつきへ
 六七二 だ、ゆうべの命のこと、わかつたかい。
 六七二 きゆうにそんなことをきいたりして。
 六七二 に、この考えついたことを話しました。す
 六七二 。とにかく、命のことはむずかしい大き
 六七二 ごろうは、息をすることも自分の力ではな
 六七二 も自分の力ではないことをきいて、なるほ
 六七二 みこと「どういうことだ。」ほおりの「きよ
 六七二 みこと「そんなこと、いやだよ。」ほお
 六七二 、申しわけのないことをしてしまいまし
 六七二 りません。どんなことでもして、おわび
 六七二 と「いや、ゆるすことはできない。」四
 六七二 「では、私がいいことを教えてあげまし
 六七二 神は、きつといいことを教えてくださる
 六七二 、ふと、おもしろいことを発見した。左の

六九二 たちちめたりすることができ。「略」
 六九二 はりがねが六本あることまでわかる。もっ
 六九二 、そのようにいったことがあるのではない
 六九二 かげで、おもしろいことに氣がついた。弟
 六九二 ぼとがある、ということに氣がついたので
 六九二 るかでないかというのを、考えたことが
 六九二 いうことを、考えたことがなかった。これ
 六九二 ら声で音であることはたしかとなった
 六九二 、そのとき、新しいことがあたまにうかん
 六九二 だので、もうそんなことはどうでもよくな
 六九二 なの音でできていることがわかった。この
 六九二 らもはなの音であることがわかった。そう
 六九二 声の音ではないことがわかった。ぼく
 六九二 上ふかく考えてみたことはなかった。それ
 六九二 で作ったものであることがわかって、びっ
 六九二 、新しく思いついたことをみんなに話して
 六九二 作ったら、できないことはないだろうと思
 六九二 んのわら顔をかくにしました。クレ
 六九二 いました。ある日のこと、五ひきのうさぎ
 六九二 、石でわってたべることにしました。「略」
 六九二 。どうせ、足の早いことにかけては、しか
 六九二 角をおるなどというのではできません。角
 六九二 よう。ちっともいいことではないと、うさ
 六九二 ぶに、つぎのようなことが、赤いクレヨン
 六九二 こでゆっくり休むことにしました。とこ
 六九二 ぎさんたちは、そのことをすこしも知りま
 六九二 うと思ってもにげることはできません。助
 六九二 木は、子どもたちのことを、まず思いうか
 六九二 は、きょうもそんなことを考えた。そうじ
 六九二 で、わたしのみたこと、きいたことを話
 六九二 みたこと、きいたことを話したら、いく
 六九二 、持つところというになります。また

七二五 おのだしている手のことではありません。
 七二七 てある、竹や木のことをいうのです。「
 七二七 手」は、文字を書くことをさしていますが
 七二七 とばが、文字を書くことになってきたので
 七二七 。「腹に思っていること、いうこととが
 七二七 ていること、いうこととが、ちがう人が
 七二七 さん、あおむしのことを、話していたん
 七二七 これこれ、そんなこと。ねえ、はっばと
 七二七 母先生は、いいことをおっしゃいまし
 七二七 乗ったものの、動くことさえできません。
 七二七 もう二どもいったことがあるのですもの
 七二七 んさしでがましいことですが、わたしに
 七二七 はなはだですぎたことかもしれませんが
 七二七 わたしは、こんなことになろうとは思
 七二七 (一) 思っていることを、はっきり書き
 七二七 に、町の学校とやることになった。あぶな
 七二七 とが、しあいをする事になった。ぼくた
 七二七 うのボールをつかうことになった。ふえが
 七二七 にし村の学校とやる事になった。このと
 七二七 とのあいだに、勝つことができた。こんど
 七二七 、はっきり写しだすことができるとはかぎ
 七二七 みじかくなつていくことがあります。心に
 七二七 られたことばということはできません。つ
 七二七 記。はつ花のさいたこと、けさ書く。いつ
 七二七 つです。心に思ったことを、はっきりと写
 七二七 りと写しだすということにほかなりません
 七二七 たい、どういうことなのか、くわしく
 七二七 、もっとあやしいことは、この人は、私
 七二七 私どものらくだのことについて、それは
 七二七 裁判官どんなことを、知っているの
 七二七 だがかた目であることを知っていました
 七二七 だがびつこであることも知っていました

七〇九 〇、左の足の短いことを、ちゃんと知つ
 七二一 二三本ぬけていることまで。甲「そのう
 七二六 宣」ふたりのいうことは、よくわかった
 七三三 がかた目だということとは、どうしてわか
 七三七 て、びつこということは。」旅人「それは
 七三九 ぬけているということとは、なぜわかった
 七四四 いち、もつともなことがばかり。」甲「もし
 七四五 荷物をつけていることが、どうしてわか
 七四七 それが麦だということが、なぜわかった
 七五八 うたがいははれたことと思う。早くいつ
 七六三 ちは、うさぎをかうことになりました。先
 七六八 るか、しらべてみることにしました。きよ
 七八九 毎日なにかかわったことをしてかしては、
 八〇三 たが、もうどうすることもできませんから
 八一五 いまも、私はピオのことがわすれられませ
 八二〇 たかが一わの小鳥のことをと、わらわな
 八二五 寒い冬もぶじにこすことができました。春
 八三〇 とめいわくしごくなことです、せみの子
 八三六 は、どうしてこんなことができるのでしょ
 八四一 だれも教えてくれたことではありません。
 八四六 らないと、親になることができないとい
 八五二 〇。なんとという氣長なことでしょう。せみの
 八五七 う大きくなりきったことを知ります。そこ
 八六二 、いまが夏だということや、よい天氣がつ
 八六七 天氣がつづいていくことを知ります。
 八七二 、そのとおり、死ぬことなど考えられない
 八七八 ているのは感心なことだ。むすめのため
 八八三 いので、はたをおることをわすれてしま
 八八八 けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう
 八九三 天の川で楽しくあうことができました。
 八九八 ら、ずいぶん、遠いことがそうぞうされま
 九〇三 より、おしはかることはできません。ふ

九一四 八三四 二十秒ばかりかかることになります。とこ
 九二〇 八三六 運行しているということです。このきそく
 九二六 八三七 、なにひとつ不足なことはありませんでし
 九三二 八四〇 ん美しい庭をもつことができます。」こん
 九三八 八四二 らです。「困ったことになってしまった
 九四四 八四二 、こんなかなしいことはありません。」「
 九五〇 八四六 病氣をなさつて長いことお苦しみになりま
 九五六 八四八 まのご病氣をおすことができるかと、相
 九六二 八四九 に、さしあげたいことはやまやまですが
 九六八 八五九 ろうと思つた。そのことを先生に話してみ
 九七四 八六三 それでだまされたことがあつてね、その
 九八〇 八六四 るようにしてやるのができなかった。
 九八六 八六五 子どもに、およくことを教えてやるがい
 九九二 八六七 と四五日はすわることもできませんから。
 九九八 八六八 一つのうなぎの頭のことであらそつていた
 一〇〇四 八七〇 。だれにもわるいことをしないのですか
 一〇一〇 八七二 、あひるの子は立つこともできず、すわり
 一〇一六 八七四 したり、火花をだすこともできなかった。にわ
 一〇二二 八七六 は、たまごを生むことができるかい。」「
 一〇二八 八七八 花をだしたりすることができないかい。」「
 一〇三四 八八〇 まえさんは、することがないから、そん
 一〇四〇 八八二 ないから、そんなことを考えるのだよ。
 一〇四六 八八四 うすれば、そんなことは考えなくなつて
 一〇五二 八八六 、私のいつていることがおわかりになら
 一〇五八 八八八 おまえさんのいうことがわからないつて
 一〇六四 八九〇 のかね。わたしのことはいいわれないとして
 一〇七〇 八九二 のですよ。いやなことをいうようだが、
 一〇七六 八九四 たり、火花をだすことを、せいだして勉
 一〇八二 八九六 ちょうをわすれることはできなかった。
 一〇八八 八九八 でいったのかということも知らなかった。
 一〇九四 九〇〇 もつたらなど望むことができよう。その
 一〇九九 九〇二 ばさをばたつかせることができた。まえよ

一一〇四 八八八 く空氣をうち、とぶことができた。どうし
 一一一〇 八九四 られたりしたときのことを考えた。それが
 一一一六 八九六 早くめがでるということです。五月二日
 一一二二 八九八 ふえるようすをみることにしました。やく
 一一二八 八九〇 かのためだということでした。みんな
 一一三四 八九二 、あまりちがわないことがわかりました。
 一一四〇 八九四 これは平年作ということになります。1
 一一四六 八九六 ものを思いうかべることができますが、あ
 一一五二 八九八 音のばあいでも同じことです。一一音と
 一一五八 九〇〇 ろな心持をあらわすことができますし、また
 一一六四 九〇二 まな情景を写しだすこともできるという話
 一一七〇 九〇四 をたいこであらわすことなどは、ちよつと
 一一七六 九〇六 さます場面を演ずることがある。こんなと
 一一八二 九〇八 、心持まであらわすことができるものらし
 一一八八 九一〇 ねうちが生きてくることになる。三
 一一九四 九一二 らりとならんでいることがあります。この
 一二〇〇 九一四 こうとする遠い國のことを、話しあつてい
 一二〇六 九一六 なしたものだということがわかりました。
 一二一二 九一八 いくのがあるということです。日本のつば
 一二一八 九二〇 きゅうに落ちてきたことがあります。その
 一二二四 九二二 じめて、電話でこのことを知らせてしまし
 一二三〇 九二四 つばめのせわをすることを、新聞に廣告し
 一二三六 九二六 つばめを集めていることを知らせてしまし
 一二四二 九二八 ました。さいわいなことに、そのとき、あ
 一二四八 九三〇 に、飛行機をつかうことにしました。航空
 一二五四 九三二 らずにつばめを運ぶことを申しでました。
 一二六〇 九三四 につかわれたということ、たいへんあり
 一二六六 九三六 たいへんありがたいことだといわずにはい
 一二七二 九三八 ろいろな方法でこのことをしらべてみます
 一二七八 九四〇 、やはりそうであることがわかりました。
 一二八四 九四二 、どんなにうれしいことでしょう。四
 一二九〇 九四四 先生やみなさんのことを、一日もわすれ

九三七(手) 、一日もわすれたことはありません。先
 九三九(手) りません。先生のことを思うと、みなさ
 九四一(手) じゅうぶんだべることが出来ます。ぼく
 九四三(手) んで持つて帰ったこともありまして。ぼ
 九四五(手) ども、おつてよいことになっています。
 九四七(手) 近い木にのぼったことがありました。の
 九四九(手) ねずつほりおこすことにしました。苦勞
 九五一(手) 楽しく、うれしいことでした。いちばん
 九五三(手) ろから、世の中のことに注意を向けるよ
 九五五(手) ども、せんきょのことを話していますす
 九五七(手) 「略」。「大きなことだよ。大きな
 九五九(手) だめだ、そんなこと。せいの高いのだ
 九六一(手) だよ。せいの高いことなんだよ。」「略
 九六三(手) ちがうよ。大きなことだよ。」「略
 九六五(手) しても大むかしのことだが、貝などを
 九六七(手) しほらせてもらうことにします。」「主人
 九六九(手) うものがみつかることがあるのです。ひ
 九七一(手) れからほつてみることにしましょう。」「
 九七三(手) ートルほつてみることにしよう。貝や石
 九七五(手) 略」。口々にこんなことをいうのを、先生
 九七七(手) なんだんいろいろなことを知っていると
 九七九(手) まだ「つまらないことさ。ぼくがあんま
 九八一(手) 、いままで味わったこともないような、ふ
 九八三(手) の味がきえてしまうことがあつても、中
 九八五(手) 旅が終りに近づいたことを知つて喜んだ。
 九八七(手) から楽しんでいうことである。十一
 九八九(手) るしで、あみもはることはできませんで
 九九一(手) は、みつばちであることが、くもにはす
 九九三(手) が、くもはどうすることもできません。そ
 九九五(手) いうことばを、長いこと耳にしたことは
 九九七(手) 、長いこと耳にしたことはありませんで
 九九九(手) た。また、口にしたこともありませんでし

九三二(手) くもの小さなときのこと、ゆめでもみる
 九三四(手) なんにもたべないことをちゃんと知つて
 九三六(手) されて、苦しんだことも知っています。
 九三八(手) らのかげでねむることにしようかな。」「
 九四〇(手) いちようちよにあうことができた。それ
 九四二(手) ら、いいゆめをみることもできた。いま
 九四四(手) さしいことばをきくこともできた。くもは
 九四六(手) 。くもは、これらのことを一つ一つ思いだ
 九四八(手) いくらしをしていることだろう。あみをは
 九五〇(手) んて、なんとひどいことをしてきたものだ
 九五二(手) しからころげ落ちることができたかもしれ
 九五四(手) た。」「略」。そんなことをくもは思いま
 九五六(手) たかに、楽しくすることが出来る。一一
 九五八(手) です。日本人をみたことがない子どもたち
 九六〇(手) どもをさけて通つたこともありまして。し
 九六二(手) んは、子どもと遊ぶことが好きですから、
 九六四(手) わをまわしてやったこともありまして。二
 九六六(手) んなに親しみをもちことができるものかと
 九六八(手) ちでした。ある日のこと、おとうさんが、
 九七〇(手) へきて、さまざまのことを話しかけたり、
 九七二(手) でできた小歌のあることを、おとうさんは
 九七四(手) 年は、さらにこんなことをいいました。」「
 九七六(手) もから、自分の國のことをきかれたときは
 九七八(手) 、ことばを愛することを知つて、勉強し
 九八〇(手) がのきに巣をかけることがあれば、巣のは
 九八二(手) かり、そのふしぎなことにうたれ、美しさ
 九八四(手) こうなつたかということを、考えてしらべ
 九八六(手) わされた一音一音のことも、心にうかべ
 九八八(手) ら、どうしてそんなことになつたか、その
 九九〇(手) んでも、そのものとことをしらべていくよ
 九九二(手) のないひとりであることを、ほこるように
 九九四(手) さえあれば、織機のことをしらべつづけて

十三三(手) せがれた。ほかのことを考えないで、み
 十三五(手) 研究熱は、どうすることもできなかった。
 十三七(手) ば、もっと早く織ることが出来るし、ひと
 十三九(手) である。「こんなことでもいいのか。日本
 十四一(手) が二十四才のときのことである。あくる年
 十四三(手) ぐ、動力機械を作ることにとりかかった。
 十四五(手) きな役わりをはたすことであらう。眞珠
 十四七(手) 、人工で作りますことはできないものだ
 十四九(手) て、天然眞珠となることがわかつたからで
 十五一(手) も、実現できないことはあるまい。」「そ
 十五三(手) 、核をさしいれることができた、眞珠
 十五五(手) になつていた。同じことをなんどもくり返
 十五七(手) げました。ある年のこと、赤しおが、おび
 十五九(手) 考えてもみなかったことである。かれは、
 十六一(手) した半円眞珠であることが、わかつた。」「
 十六三(手) 温度や、海の深さのこともわかり、しおの
 十六五(手) 種の手術をほどこすことを発見した。」「略
 十六七(手) まつた同じであることが、明らかにされ
 十六九(手) てもできなかったことが、二つあります
 十七一(手) の人々にあたえたことに、心から敬意を
 十七三(手) 私は、べつにいそぐこともありませんでし
 十七五(手) その人には、なんのことか、おそらくわか
 十七七(手) 、くしゃみのようなことをして、「フツ」
 十七九(手) ヲ」と、おとなびたことをいいました。門
 十八一(手) 持つのだと、ませたことをいって、歩きだ
 十八三(手) イツタノ」は、そのことをいいあらわして
 十八五(手) かと、ふと、こんなことを考えました。
 十八七(手) 、考えたりしていることは、ちがつたも
 十八九(手) たのでしよう。思うことがどんどん書け
 十九一(手) らすらと書いていくことでしよう。すこし
 十九三(手) 能というものをみたことがありますか。能
 十九五(手) るうたいを、きいたことがあるでしょう。

十 64 6 のよい藝術を味わうことを、喜ぶだろうと
 十 65 5 わい人間のしそうなことを、なんでもやり
 十 66 9 会、そばへもよらぬことだ。わかったか。
 十 66 12 どくで、死ぬようなことになってはつまら
 十 67 5 いってみようということになりました。「へ
 十 5 1 こで練習していることだ。川口の子ども
 十 8 10 会 ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやな
 十 8 11 会 ぼくらのいやなことなど、きみはなん
 十 9 2 会 えていて、いいことをはっきりきめる
 十 9 4 会 しやろうということができたら、うれ
 十 10 9 会 は、ぼくがなることにきめているのさ
 十 10 12 会 体だって、同じことだと思う。いいコ
 十 17 4 が知っているいいことと、正しいことは
 十 17 5 いことと、正しいことは、おかあさま、
 十 18 7 べた二宮金次郎のことをお話します。二
 十 19 3 がいました。働くことがすきで、一代で
 十 21 1 とりずつで働くことになりました。そ
 十 21 4 そのかわりにでることになりました。金
 十 21 5 で、役にたたないことはありませんでし
 十 21 11 で、金次郎はいいことを考えつきまし
 十 22 1 いてわらじを作ることになりました。これ
 十 25 1 会 して、「どんなことがあっても、親子
 十 27 5 がくると、例年のことで、だいかぐらが
 十 27 10 な金がないというとはいえませんが。母
 十 28 6 に、あずけられることになりました。い
 十 28 7 でも、なまけたことのない金次郎でし
 十 29 6 自分のものにするのができました。こ
 十 29 11 びょうの米をとることができました。や
 十 30 1 をふたたびおこすことができました。そ
 十 30 2 せん。いろいろのことを身につけて、や
 十 34 1 麦のとりいれことなくすめば、は
 十 38 2 たち、いねもことなくとりいれた。

十 44 5 じょうをいただくことになりました。総
 十 45 11 。すこしぐらいのことだからといって、
 十 46 11 が、小さいころのことを、いろいろと思
 十 50 6 ンマルクの農業のことを勉強して、ぼく
 十 52 3 車口へもぐりこむことができた。車内は
 十 52 7 、その足も動かすことはできなかった。
 十 54 10 ことばをわすれることができない。七
 十 59 10 校から帰るときのことであつた。「略」
 十 61 9 、やつときょうのことを、ありのままに
 十 62 3 会、このくらのことがこわいものかと
 十 62 5 会 虫だ。人のいうことに「いいえ」とい
 十 62 7 会 でも、いいだすことのできないほど、
 十 62 9 会 ら、また、このことをたずねたとき、
 十 64 5 を書いて、帰ったことと、病院にはいっ
 十 64 7 、病院にはいったことを知らせました。
 十 64 11 って、家をおけることができないので、
 十 71 10 、やさしい父親のことをいろいろと思
 十 71 12 でわかれを告げたことや、家族の者が、
 十 72 1 希望をかけていたことや、手紙の着いた
 十 72 2 にか力をおとしたことなど——それから
 十 75 10 会 れど、ぼくってことがわからないんで
 十 76 2 なにといつてすることもできませんでし
 十 78 2 うと、いろいろのことを——母親のこと
 十 78 2 ことを——母親のことや、妹たちのこと
 十 78 2 ことや、妹たちのことや、父親の帰りを
 十 78 3 待ちこがれていたことなどを——それか
 十 80 1 少年をなくさめることがありました。そ
 十 80 3 けるようにみえたことです。病人は、だ
 十 82 10 は、まだ声をだすことができませんでし
 十 83 12 会 に思いがけないこともあるものだ。」
 十 89 1 がその目にうかぶこともありませんが、
 十 5 8 んのためにこんなことをいいたしたのか

十 5 12 会 のぞうさもないことでございまいしょう
 十 6 6 ねて雨具をかりることにしました。「略
 十 7 5 ましたが、なんのことだかその意味がわ
 十 8 3 したが、ある日のこと、母親がなつかし
 十 9 8 会 ち切るのと同じことです。」といいま
 十 12 4 てしまったということです。二一 写生
 十 19 10 会 年一年とすんだことをかえりみて、来
 十 19 11 会 したいと考えることができます。です
 十 20 2 会 い実をならせることができるようにな
 十 21 1 会 へ。「絵をかくことも、いっしょうけ
 十 21 8 会 らもつとさきのおしやつたり
 十 22 6 会 いけいこをするのだ。」文雄はこう
 十 23 2 の民ちゃん 長いこと外地にいた姉たち
 十 23 8 らそういうときのことを考えて、近所の
 十 23 10 、さしあたり困ることはありません。ふ
 十 24 2 、父母にとつてのことですが、わたしに
 十 26 12 、かんじんの歩くことはまだできません
 十 27 7 を持たせると立つことができると、だれ
 十 27 8 、だれかがいったことを思い出しました
 十 29 9 会 も、いつそんなことを覚えてたんでしょ
 十 30 6 民ちゃんは、そのことをいうのでしょう
 十 31 3 通じて、わすれることのできないちば
 十 31 5 なる三ヶ月まえのことでありました。こ
 十 33 12 ばをつかっていることや、そんなものが
 十 34 1 のがこの世にあることさえ知らず、ただ
 十 34 3 あいだに、なんのことともわからないま
 十 34 5 のことばをつづることを覚え、「すわる」
 十 34 6 それ名まえのあることを知ったのは、先
 十 34 8 間もたつてからのことでした。ある日、
 十 34 11 とも同じ名であることを私にわからせよ
 十 35 3 ているものであることを、はつきり教え
 十 35 6 同じ名まえであることをわからせようと

十二 37 8 いもの名であることを知りました。こ
 十二 37 10 と喜びとを與えることになったのです。
 十二 37 11 みな名まえのあることがわかったのです
 十二 38 4 がこわした人形のことを思いだして、い
 十二 38 7 した。自分のしたことがわかったので、
 十二 38 12 のことばがあったことを思いだします。
 十二 39 3 子どもを発見することは、むずかしいで
 十二 39 4 き新しい日待つことを知りました。
 十二 39 10 章が書けるということは、なんとすばら
 十二 39 11 なんとすばらしいことではありませんか
 十二 40 2 失いました。みることもできず、きくこ
 十二 40 3 ともできず、きくこともできず、話すこ
 十二 40 3 ともできず、話すこともできないので、
 十二 40 7 生にきていただくことにしました。サリ
 十二 40 10 ものをわからせることによって、そのま
 十二 40 11 心を明かるくすることに成功しました。
 十二 41 4 ひらに文字を書くことから、進んで、手
 十二 44 4 形しばいをみたことがあるかね。」「へ
 十二 45 3 ようにとびだすこともある。人形はも
 十二 47 3 ても、心にあることを、なにか美しい
 十二 48 2 人間にできないことも平気でやれる
 十二 55 2 土地はもとよりのこと、自分の生まれた
 十二 56 2 としておくということは、ただおもしろ
 十二 56 3 でなく、とうといことである。傳説を廣
 十二 57 5 ないが、ふしぎなことに、神山のほうに
 十二 57 11 んをききあげること、もしそれがで
 十二 59 1 畑を荒らすようなことはなくなった。
 十二 59 7 の長者は、先祖のことを鼻にかけて、わ
 十二 60 4 たが、いいだしたことはあとへひかない
 十二 61 8 い人が、ふとしたことから、この岩屋か
 十二 61 9 などの家具のを知った。それか
 十二 62 1 らんでいた。そのことが評判になって、

十二 62 8 いった。ある日のこと、八郎が山でしこ
 十二 63 11 のおこりだということである。七 み
 十二 69 8 に世の中をわたることができない。八
 十二 70 4 でしたが、芭蕉のことをきいてから、そ
 十二 70 5 はい句を勉強することに心をきめました
 十二 70 10 に家をかりて住むことにしました。そう
 十二 74 12 で、二三日は困ることもありません。ふ
 十二 77 4 よ試合をする日のことでした。テニスコ
 十二 78 7 うにはげまされたことはありませんでし
 十二 80 11 「なぜ、そんなことをきくのか。」と
 十二 81 1 本という國をみたこともなく、また日本
 十二 81 2 手のために、勝つことをいのつてくれ
 十二 81 3 のつてくれていることを知って、胸がい
 十二 81 10 している二少年のことを思つては、ふる
 十二 81 11 う五セットで勝つことができました。私
 十二 81 12 でも、あのときのことをわすれることが
 十二 81 12 のことをわすれることができません。
 十二 82 3 の決勝戦にのぞむことになりました。も
 十二 82 4 この決勝戦に勝つことができた、世界
 十二 82 5 、はじめてもらうことになりました。清水
 十二 84 8 とばではあらわすことができません。し
 十二 86 3 、無事に受け返すことができ、試合はふ
 十二 86 10 わけにかなわないことをすれば、たいへ
 十二 88 10 たいへんおかしなことになるばかりでな
 十二 88 10 ったとはいえないことになる。話をきく
 十二 88 11 人に満足を與えることができないし、ま
 十二 89 2 さきでいうだけのことになる。ただ習慣
 十二 89 10 の人をいやしめることにもなるからであ
 十二 89 12 の人の面影ということもできよう。()
 十二 90 6 。天氣のよかったこと、山へいったこと
 十二 90 11 こと、山へいったこと、弟やいぬをつれ
 十二 91 1 めをつれていったこと、くりがたきさん

十二 91 2 くさん落ちていたこと、カサカサと落ち
 十二 91 3 葉をふんでいったこと、小鳥が鳴いてい
 十二 91 4 小鳥が鳴いていたこと、帰っておかあさ
 十二 91 6 ゆでていただいたこと、みんなでたべた
 十二 91 6 、みんなでたべたこと——楽しかったさ
 十二 91 7 かったさまたまなことが、こまかに、こ
 十二 92 1 たみこまれていることは、太郎とはちが
 十二 92 2 さそわれていったこと、くりはあんがい
 十二 92 2 んがい少なかつたこと、そのかわりきの
 十二 92 3 がたくさんあつたこと、りすをみつめて
 十二 92 4 つけて追いかけたこと、もみじの枝をと
 十二 92 4 の枝をとってきたこと——そんなことが
 十二 92 4 たこと——そんなことがふくまれている
 十二 92 9 いても、書かれたことがそれぞれがつ
 十二 93 3 ろさがある。書くことは、話すこととち
 十二 93 3 書くことは、話すこととちがつて、その
 十二 93 7 ようにくふうすることがたいせつである
 十二 93 8 、よく手をはいることもできるし、なん
 十二 93 9 んど書きなおすことができる。文をな
 十二 93 9 きる。文をなおすことはつまり心を練
 十二 93 10 はつまり心を練ることになる。心を練る
 十二 94 11 年のいまごろのことをふと思いだす。
 十二 95 2 ばいつんで帰ったことを思う。秋子は、
 十二 95 4 つつてきたときのことを思いだす。だれ
 十二 95 10 それぞれちがつたことを心の中に思い
 十二 96 8 昔からいままでのことがさまざまに思
 十二 96 8 よう。なつかしいことや、楽しいことや
 十二 96 9 いことや、楽しいことや、ときには悲し
 十二 96 9 、ときには悲しいことなどもあるでし
 十二 97 2 れをみて、どんなことを感じるでしょう
 十二 97 7 き習った貝づかのことを思いだしてくだ
 十二 98 9 うに、古い時代のことがはつきりわかる

十二98 11 を発見してからのことであります。石
 十二100 1 ときにもつかったことでしょう。土器に
 十二103 9 なったか、考えることができますか。
 十二104 10 があらわれていることに気がつくことで
 十二104 11 ることに気がつくことでしょう。^{大和}
 十二109 7 五十年ほどまえのことです。いんさつ機
 十二110 1 しくはいってくることは、外国人の心が
 十二110 2 國人の心が傳わることで、日本はこのよ
 十二112 5 ミアという人体のことを絵いりで説明し
 十二114 6 って、いろいろなことを相談します。平
 十二115 6 ばを生かすということは、身に行うとい
 十二115 7 、身に行うということです。こうして、
 十二115 9 、美しい國となることができます。
 十二8 6 めに、知識をますことは、たいせつなこ
 十二9 1 め、すでに知ったことを材料として、考
 十二9 9 ときはみのらないことを、知るようなも
 十二10 11 たくあてはまらぬことは、いうまでもな
 十二11 2 、道理にあわなことを信ずるのを、迷
 十二11 3 信という。一つのことと他のこととの間
 十二11 3 一つのことと他のこととの間に、すこし
 十二11 4 ないのに、一つのことと他のことの原因
 十二11 4 一つのことは他のことの原因であると、
 十二11 9 だ知られていないことはたくさんあるが
 十二11 11 わめている。よいことやわるいこと、ま
 十二11 11 よいことやわるいこと、まっすぐなこと
 十二11 11 こと、まっすぐなことを曲がったことは
 十二11 11 なことや曲がったことは、知識をもとと
 十二12 2 ずらに理由のないことを信ずる迷信は、
 十二12 5 よりまだまだ進むことであらう。ガリ
 十二13 6 たづかないようなことが、目についてき
 十二13 9 て、まわっていることがわかり、また、
 十二13 11 の一つだ、ということもわかりました。

十三14 7 るものだ、ということを見しました。
 十三14 12 が動くのだということを、明らかにしま
 十三16 3 りであつたということにして、ゆるして
 十三16 6 という、そんなことはありませんでし
 十三18 8 いときにうちかつことのできる國民だけ
 十三20 7 もか牧草を植えることにありますが、も
 十三20 8 れ地に木を植えることです。ダルガスは
 十三20 10 いか、まず、このことについて研究を重
 十三21 4 ためにくじかれることなく、「略。」と
 十三21 8 らどうか、ということでありました。こ
 十三24 4 に、しもさえ見ることがあつたのです。
 十三25 9 、なおあまりあることになりました。と
 十三26 7 いうのは、小路のことである。どこの家
 十三31 7 んでもないべつのことを演じたりする。
 十三32 5 「略。」こんなことをいって通る。ア
 十三35 2 って、文字であることがわかり、その文
 十三35 4 も、いわれないことではない。正月に
 十三41 2 ⑤ うん……そんなこと……かまわないよ
 十三45 7 ん。あいてのいうことを聞いて、それか
 十三45 11 見えるようにすることも、たいせつなこ
 十三45 11 とも、たいせつなことです。六 そよ
 十三54 4 がマリアだということ、すぐにわかり
 十三55 1 ⑤ にかおもしろいこともあるのか。」
 十三57 3 ⑤ ナの像をかくことが得意だった。そ
 十三61 6 ⑤ らいよ。こんなことを考えて、きみも
 十四5 7 なめていたからのことでした。しかし、
 十四6 7 ⑤ 、おかあさんのことを考えないではい
 十四6 9 ⑤ ばんづらかつたことは、おかあさんが
 十四6 10 ⑤ っしやと思うことでした。子どもた
 十四7 1 ⑤ 。子どもたちのことをお考えになって
 十四7 6 ⑤ ければならないことが、おこつたとい
 十四7 10 ⑤ 思い出をまもることにしましょう。お

十四8 2 ⑤ とばを思いだすことにします。それは
 十四8 7 ⑤ うしてもなれることのできないことが
 十四8 7 ⑤ ことのできないことがあるとしたら、
 十四8 8 ⑤ っしやとすることです。なにも、勇
 十四8 11 ⑤ とてもわすれることのできないのは、
 十四8 12 ⑤ だしてしごこのことをお考えになるの
 十四9 1 ⑤ 私たちの生活のことをお考えになって
 十四9 8 ⑤ 考えのたりないことです。私は、おか
 十四9 10 ⑤ っちみちさけることのできなかつたこ
 十四9 10 ⑤ のでなかつたことに対して、しっか
 十四9 11 ⑤ る子どもたちのことを思つて、安らか
 十四10 2 ⑤ 、いろいろなことを教えてくれまし
 十四10 8 ⑤ ともむずかしいことはありません。い
 十四10 11 ⑤ ずおかあさんのことを思っているの
 十四11 11 ⑤ るだろうということでしたが、もしこ
 十四12 7 ⑤ が教えてくれたことなのです。その友
 十四13 5 ⑤ 。おかあさんのことを思つております
 十四13 10 ⑤ おかあさんのことを思っています。
 十四14 7 ⑤ さん、あなたのことを思うとき、「略
 十四14 12 ⑤ べ。」と、こんなことを思われてくるの
 十四15 2 ⑤ もがあるということをお考えになって
 十四15 10 ⑤ び手紙をあげることにしましょう。そ
 十四16 3 ⑤ がそばにいないことなど、すっかりお
 十四16 6 ⑤ もおかあさんのことを思っていると。
 十四20 1 ⑤ すんだら、そのことについて話をしよ
 十四20 6 ⑤ いろまじっていることをくわしく話して
 十四21 7 ⑤ 。先生は、そんなことにはおかまいなし
 十四25 2 ⑤ 傳えられたということがわかつた。私は
 十四25 3 ⑤ から、さまざまなが心にうかんでき
 十四25 4 ⑤ なっているということは、あたりまえの
 十四25 5 ⑤ は、あたりまえのことだが、なかなかお
 十四25 7 ⑤ まれるものであることが、考えられる。

十四 26 3 かがったが、このことから考えあわせて
 十四 27 1 てきたのだということが想像される。そ
 十四 27 4 れで、先生にそのことをおたずねすると
 十四 30 2 それがほんとうのことだとしても、自分
 十四 30 5 ものに心をくぼるものがたりなかったの
 十四 30 6 のは、さんねんなことだと思えます。小
 十四 30 9 ようか。むかしのことはしばらくおき、
 十四 31 2 界全体を見わたすことをわすれていたの
 十四 31 3 たのは、よくないことでした。そういう
 十四 32 5 こまかく観察したことから、農業が進歩
 十四 33 1 して回轉していることを知っています。
 十四 34 7 二十億光年ということですよ。二十億光年
 十四 35 4 すこしもかなしむことはありません。そ
 十四 35 8 しいものだということができるでしょう
 十四 36 11 動を受けたということですよ。夫人は、星
 十四 37 3 いますが、そんなことにはこたえてはい
 十四 37 7 なければならぬことは、なんであるか
 十四 37 7 んであるかということも、しぜんにわか
 十四 37 8 くしゃするようなことがあったら、どう
 十四 45 2 ある月のない夜のことです。乗っていた
 十四 46 9 がたさを味わったことはありませんでし
 十四 46 11 中にひたっていることも、わすれてしま
 十四 50 6 られました。このことは、あくる日の新
 十四 50 7 のですが、おいしいことに、歌を歌ったお
 十四 51 2 いれまつりの晩のことでした。「略。」
 十四 53 1 会 もののだということはどういたがいありま
 十四 53 4 会 ようずに自分のことを主張なさいます
 十四 53 7 会 なったかということとは、ごそんじない
 十四 54 7 会 葉さんは養分のことをおっしゃいます
 十四 54 10 会 には、土の中のことはわからないでし
 十四 57 5 はちたちだということがわかりました。
 十四 57 7 会 いぶんかってなことをいっていました

十四 57 8 会 がたは、自分のことしか考えないよう
 十四 58 1 会 さんは、養分のことをいっていらつし
 十四 58 3 会 すよ。そういうことを考えてみたこと
 十四 58 3 会 とを考えてみたことがありますか。」
 十四 59 1 会 るのが助かったことを考えてごらん
 十四 59 5 会 ちゃんなんて見たことがない。さつき
 十四 59 7 会 のです。ほかのことはわすれても、こ
 十四 59 8 会 ても、この土のことは、かたときもお
 十四 60 5 会 い、身がつてなことはないませんか。
 十四 60 7 会 たのか、考えたことがありますか。」
 十四 61 7 会 にまいてもらうことができません。
 十四 62 6 会 ろいろのこまかいことが目につき、さま
 十四 62 8 会 観察し、研究することのすきな人には、
 十四 63 9 会 いては、お話することがどつきりありま
 十四 64 3 会 くできないということが、学者の研究で
 十四 66 12 会 の上などにできることがあります。春さ
 十四 67 3 会 ら白い湯げがたつことがよくあります。
 十四 67 8 会 回轉するのを見ることがあるでしょう。
 十四 68 10 会 ろいろなかわったことがおこるのです。
 十四 69 8 会 、湯のほうを見ることがあります。白
 十四 72 12 会 したものが見えることがあります。あ
 十四 73 10 会 んであるかということとは、まだ、あまり
 十四 73 12 会 になにか関係があることだけはたしかでし
 十四 74 3 会 どうかあるかということとは、ただ、茶わん
 十四 74 8 会 るかというようにないにも関係してきま
 十四 76 6 会 これと同じようなことが、山腹と谷との
 十四 78 3 会 、まっすぐに割ることができなかったの
 十四 78 7 会 にまっすぐに割ることができました。そ
 十四 79 4 会 、けっしてそれることがありません。た
 十四 79 6 会 とか、わからないことでした。そのこと
 十四 79 7 会 ことでした。そのことを友だちに話すと
 十四 79 10 会 ら」という簡単なことを、知っているの

十四 80 1 い、だが、そのことを発見したのでし
 十四 80 1 たのでしょうか。ことによると、なん百
 十四 80 3 、まごとに傳えたことではないかと思
 十四 80 7 われたので、そのことをほかの人々に傳
 十四 84 2 いな形をしていること、しかも、一ひら
 十四 84 3 しょうをしていること、その美しい雪が
 十四 84 5 地上へ降ってくるなどを写している
 十四 85 2 、おのずから知ることができるとい
 十四 86 1 からながめてみることは、つましい心
 十四 86 10 死にさせてしまうことすらある。このも
 十四 86 11 さまを映画化することは、たやすいこ
 十四 86 11 ことは、たやすいことではあるまいが、
 十四 87 2 き生きと表現することができそうである
 十四 90 2 降ってくる。寒いことも寒いですが、
 十四 91 10 その足のつめたいことといったらなかつ
 十四 92 7 根うらの家へ帰ることもできなかった。
 十四 93 4 、自分のまき毛のことも、雪のことも考
 十四 93 4 毛のことも、雪のことも考えなかった。
 十四 93 6 のむすめの考えたことはそれであった。
 十四 93 9 じいので、そんなことを思った。ただひ
 十四 94 2 もしてみたかったことだろう。女の子は
 十四 94 12 ちで、火をともしることができたならば、
 十四 95 2 んといううれしいことだろう。明かるい
 十四 96 9 んというふしぎなことだろう。その火の
 十四 96 10 すっかり見とおすことができた。雪のよ
 十四 99 8 、話してきかせたことがあった。女の子
 十四 101 3 しんせつに見えたことは、いままでなか
 十四 101 4 いままでなかったことであつた。おばあ
 十五 20 4 います。ある夏のことでした。このユン
 十五 24 8 は、身のおぶないこともわすれて、思わ
 十五 26 7 配がある。そんなことのないうちに、ど
 十五 27 6 ったのかと、そのことがまた、少年の氣

十五 28 5 少年は、あぶないことが近づいたと感じ
 十五 35 2 だまを結びつけることも行われた。それ
 十五 35 4 しをつけてしめすことも行われた。これ
 十五 35 5 の形を絵にうつすことも行われた。この
 十五 36 6 の方法では表わすことができない。そこ
 十五 37 3 いう考えを表わすことにした。いまの「
 十五 37 5 みあわせて表わすこともくふうされた。
 十五 37 9 木」に関係のあることを表わし、字の右
 十五 38 3 本語をあてて読むこともした。このよう
 十五 38 11 ただけでも、このことがすぐ理解されよ
 十五 40 2 かも自由にうつすことができるようにな
 十五 41 10 、ローマ字で書くことができる。ローマ
 十五 41 12 るまで書き表わすことができて、標準語
 十五 45 10 のも、そのころのことであった。ある日
 十五 46 5 た。いまだで見たこともないみごとな焼
 十五 47 7 十年ばかりまえのことである。佐賀はん
 十五 48 7 でこの焼物を作ることは、むずかしいこ
 十五 48 7 とは、むずかしいことであった。今右衛
 十五 49 4 おりのものを作るのできる日があった
 十五 49 10 に目をとめて買うことがあるということ
 十五 49 11 ことがあるというのを聞いて、作品を
 十五 49 11 や箱根へ賣りだすことにしたのである。
 十五 50 3 つ消えてしまうことになりました。それ
 十五 50 4 。それはおいしいことです。品物は私が
 十五 51 10 略。」と、自分のことをうちあげた。祖
 十五 52 1 ふたたび結ばれることになった。熱情
 十五 52 3 わであったころのことである。そのころ
 十五 54 3 先生にお会いすることができた私は、な
 十五 55 1 を出版してもらうことで、恩師ジョルダ
 十五 55 4 ようにつかえないことについてくわしく
 十五 55 5 刊行のむずかしいことにおわせた。そ
 十五 55 10 化をとり入れることがさかんときで

十五 57 1 ころがある日のこと、せんばいの教授
 十五 57 9 勉学にいそむことにしたが、その日
 十五 57 11 たが、ある日のこと、せい書をギリシ
 十五 60 7 ゆるした間がらのこととて、両者のつき
 十五 61 9 まった。ある日のこと、おじさんとおば
 十五 66 5 ありし日をしのぶことをわすれなかった
 十五 66 9 都にすまいを移すことになった。十の春
 十五 67 10 が流れ出た。そのことのあったあくる日
 十五 74 3 うとも、かわいひことはみな同じであつ
 十五 74 6 れたというだけのことで、それによつて
 十五 76 1 ギーで出版することは、ひきうけたよ
 十五 79 8 國を愛するというのを学んでいる日本
 十五 79 9 、お目にかかったことがあるからです。
 十五 80 4 がいに他の國々のことはわからず、世を
 十五 80 12 われるようになることをいひます。――
 十五 83 6 青い鳥だつて、ことによるとちよいと
 十五 85 12 た。光「こわいことはいないよ。あいそ
 十五 89 1 幸福「あの男のことは、きかないほう
 十五 90 9 ブルにのぼつたことはいないようです。
 十五 91 1 たしたちのすること、みんな見ると
 十五 91 4 しごとをしないことです。わたしたち
 十五 92 7 と、いまに困ることになるから。」チ
 十五 93 2 て。なまいきなことをいうな。なにか
 十五 93 7 とおいとますることでもできませんから
 十五 94 12 物の眞実を見ることができのだよ。
 十五 96 8 よ。」光「むだなことだよ。私たちに用
 十五 97 8 った子のわらうことはどうです。なん
 十五 98 3 それを見かけることはできないよ。子
 十五 98 9 を持つていないことは、わかつている
 十五 99 10 なんて、そんなこともあるものですか。
 十五 100 6 くだちに会つたことがないんだつてさ
 十五 103 9 『星の出を見ることがないんだつてさ

十五 105 12 、『正義であることの大きな喜び』で
 十五 106 2 わらうのを見たことがあります。そ
 十五 106 3 、『善人であることの大きな喜び』で
 十五 106 5 行くのをとめることは、なかなかむず
 十五 106 6 なくさめてやるのがすきなのですか
 十五 106 10 』が、『考えることの喜び』のとなり
 十五 108 4 れは、『愛することの大きな喜び』で
 十五 110 6 、もう年をとることはいないのだからね
 十五 113 11 え、それは同じことですよ。まあ、お
 十五 113 12 、おまえ、見たことがなかったかい。
 十五 114 11 も、それは同じことです。私も下へ
 十五 115 10 、だいにすることをわすれてはなり
 十五 116 7 、あの人を見たことがなかったよ。あ
 十五 116 10 人、顔を見せることはないの。」チル
 十五 117 3 待ちわびていることを、知らないのだ
 十五 117 10 は、それは長いこと、あなたを求めて
 十五 117 11 た『正義であることの喜び』でござい
 十五 120 3 と、ずっとまえのことが思い出されてき
 十五 120 4 をくぐつたときのことが、はつきりうか
 十五 121 3 。けれども、思うことがすこしも書けて
 十五 121 4 しも書けていないことに気がついた。あ
 十五 122 8 感謝会はわすれることはできません――
 十五 122 11 など、はじめてのことなので、ほんとう
 こと(終助) 10 こと
 一 64 8 たろうさんのよくねていること。
 四 26 3 りんごさんのほつべたの赤いこと。
 四 26 4 りんごさんのかおのまじいこと。
 五 10 1 きれいな海だこと、お船もみえますね。
 五 53 8 だいたい色の大きな星だこと。
 五 56 10 きれいだこと。
 五 60 2 いい色ですこと。
 六 104 3 森の木のきれいなこと。

七三〇 白いえのぐにみどりをとがしたような、美しい羽です。

九四二 わたしの顔ばかりみて、おかしいこと。

こと「毎」(名) 2 ごと 日いちていりゆうじょごと・いつかめごと・いっしゅうかんごと・たびごと・としごと・はんごと・ひとばんごと

三三八 一だんあがるごとに、あたりのようすがかわります。

十五六六 それからいく年たっても、せつがくるごとにその人形をかざって、

こと「五度」(名) 1 五度

六六八 けさの温度は五度です。

こと「鼓動」(名) 1 ことどう

六九四 しんぞうのことどうですよ。

こと「事柄」(名) 3 ことがら

十三八六 自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことがある。

十三九一 すでに知ったことを材料として、考えをおし進め、種々のことからの関係を明らかにして、

十四六九 ちよっと見ただけでは、まったく関係のないようなことがら、

こと「副」1 コトコト

十五二一 小石を「略」なげこんで、それがコトコトと音をたてて下の方まで落ちていくのを、

こと「副」2 ことごとく

十四四五 すべてのものが、ことごとく波にのまれてしまったように、

十五二二 山の中の生活は、見るもの聞くものがことごとくめずらしく、ゆかいな楽しいものでした。

こと「今年」(名) 4 ことし

九五五 この中には、親づばめもいますが、ことし生まれた子づばめが、たくさんまじっています。

九一七 しかし、その中には、ことし生まれた子づばめがたくさんいます。

九二四 つまり、ことしある家ののき下で巣をつ

くったつばめは、

こと「助動」2 ことし 《ゴト・ゴトク》

九一八 はずきを口にふくみて鳴らすことかわずは鳴くも夏のあさ夜を

十五八七 空気または日光のごとく平ほんなれよ。

こと「今年」(名) 1 ことし竹

七六一 さきだけみえることし竹が、ざわざわと、動いている。

こと「殊」(副) 9 ことに

八七 朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しいものです。

八二二 みんなないて——ことに、すえの女の子などは、目をなきはらしましたが、

八三六 私はピアノのことがわすれられません。ことに、《略》はおじろの声をきくと、

八七 大きくなるにつれて、六本の足がだんだん強くなり、ことにまえ足は、《略》、たいへんかく、じょうぶになります。

九五二 足もひどく曲がつてやぎのようですし、ことに、その足さきは、しゃもじのようなかたちだったのです。

十四六 日本産のものは、ことに名高い。

十二八八 《略》と、ことに「ジャパン」ということばに力をいれて答えました。

十四六五 しめきったへやで、人の動きまわらないときだと、ことによくわかります。

十五六〇 四つのいたずらざかりであった。ことに、長男に生まれて父母の愛を一身に集めていた身に

とつては、天下におそるべきなものもなく、ことば「言葉」(名) 200 ことば 日あのことば・いいにくいことば・いもうたのことば・おことば・おしまいのことば・がいこくからきたことば・

ここにいていることば・じぶんのくにのことば・そのひのことば・ていうことば・ねつじょうのことば・はじめのことば・ひとつのことばから・ほめことば

一五 きれいなことば、みんないいこ。

一八九 手となかのいいことば。

一三〇 足となかのいいことば。

一三八 お日さまというひとつのことばから、おもいだしたことを、つきつきと書いてみました。

一三二 おもいだしたことを、つきつきと書いてみました。

一三二 ただおさんのかいたことば。

一三六 みちこさんのかいたことば。

一三二 まことさんのかいたことば。

一三五 よしこさんのかいたことば。

一四三 『あ』のつくことばを、みんなであつめてみましょう。

一七四 『あさ』ということばのつくものを、あつめてみましょう。

一八五 「い」のつくことばをあつめました。

一八七 「う」のつくことばと、「え」のつくことばをあつめました。

一八七 「え」のつくことばをあつめました。

一八九 「お」のつくことばをあつめました。

一九一 あつめた ことばを、みんな かきとめておきました。

一九四 せつかくあつめたことばが、ごちゃご

ちゃんになっていきます。

二一四 ところで、みんなは、小さなかみに、ひとつひとつことばをかきつけました。

二一六 ひとりがいっただことばから、おもいついたことばをじゅんじゅんにつづけて、あそびました。

二二〇 おもいついた ことばを じゅんじゅんにつづけて、あそびました。

二四〇 そんなきたないことばをつかうものではないよ。

二四二 おまえがきれいなことばで いえば、あちらだって、きれいにいうさ。

二五三 その ひとことと いうのは、きたないことばをつかわないということだよ。

二五九 そのうちに、きたない ことばは、きたない心からうまれてくるものだと

二六二 きれいな ことばは、きれいな 心からうまれてくることもわかりました。

二六五 あつめた ことばに えをかきそえました。

二七〇 この 思いがけない ことばを さいて、おじいさんも おばあさんも びっくりしました。

二七二 「略。」という おとうさんの ことばを 思い出しました。

二八四 先生は、かずこさんのおとうさんの ことばに、気が つきました。

二九〇 そのとき、ふと 思い出した ことばがありますね。

二九二 「おとうさんの ことばです。」

二九六 かずこさんの 耳には、おとうさんの ことばが、ひびいてきたのです。

三〇三 そこに いなくても、その 人の ことばが 生きている という ことが、わかりますか。

四三九 それは、おかあさんの ことばでした。

四三八 おかあさんの ことばがとめたからです。

四三九 ありを ころそうとしたとき、にいさんの ことばを 思い出して、

四三九 さくらの 枝を おろうとしたとき、おじさんの ことばに 気が ついてやめました。

四三九 ただしい ことばは、いつも、あなたが たのいい お友だちになったり、

四四〇 あなたがたは、これから、りっぱな ことばに いろいろ であうでしょう。

四四三 いいにくい ことばを みつけて、それを まちがえないで、早く いって あそぶのです。

四四八 上から よんでも 下から よんでも、おなじになる ことばを 考えだす あそびです。

四五五 を——「を」の 字は、ことばの あとにつく。

五八四 いのうえさんは、國語の本にでている ことばを、五十音にわけてみるといいました。

六二四 こんな ことばを みんな喜んできいています。

六五二 かべ新聞 第一号 はじめのことば

六五九 それは ことばの 声のかずのことです。

六五九 うたうたは、その ことばの 声のかずが、五か七になっているのです。

六六七 弟のことばをまねて、「略。」といったのである。

六六八 「略。」という ことばを、そのように いったことがあるのではない。

六六八 その、弟がまだいわない ことばを、さきに いったから 感心したのである。

六六八 弟ははなが つまんでいるために、ある ことばが、うまく 発音できなくなっている。

六六八 しかし、どんな ことばでも 発音できない わ

けではない。

六六七 発音できる ことばと、できない ことばとがある、ということに 気が ついたのである。

六七八 発音できる ことばと、できない ことばとがある、

六八七 なぜはなが つまるといえない ことばと、はなが つまってもいえる ことばとがあるのだろう、と 考えてみた。

六八七 はなが つまってもいえる ことばとが

六八八 「ナ」や「ノ」の つく ことばが あつたら、

六八九 「タ」や「ド」に いいかえれば いいわけた。

六九〇 五ひきの うさぎさんたちは、みつばちさんの ことばを、たいへん ありがたく 思いました。

七〇五 同じ「手」という ことばにも、いろいろな つかいかたがあります。

七〇六 「手」という ことばが、文字を書く ことに なってきたのでしょうか。

七〇七 「手」という ことばも、さまざま な たらきを してくれそうです。

七〇八 同じ ことばで、ちがった つかいかたがある のは、「手」だけでは ありません。

七〇九 「腹」という ことばを、いろいろ につかいたばあいを、しめした ものです。

七一一 ここで、ちよつと ことばを 切った。

七二五 よけいな ことばは、ちりほども あっては ありません。

七二六 みじかくなった 文ですが、まだ、みがき あげられた ことばという ことは できません。

七八九 ほおろろ 自身、國々の なまりの ような ことばをもっている のだそうです。

九七二 「月」という 一つの ことばがあります。

九七三 この ことばを 耳にしたり、文字で よんだり

しますと、夜のしずかなけしきを思いたします。
 九七五 この「月」ということばに、「水」ということばをそえたら、

九七五 「水」ということばをそえたら、どううけしきを思いたしますか。

九八一 「虫の声」ということばを加えたらどうでしょう。

九八四 ことばの組みあわせも、それぞれがった新しい思いをおこさせます。

九八七 「風」ということばに、ほかのことばをつけてみましょう。

九八七 ほかのことばをつけてみましょう。
 九八〇 「風」を「朝風」として、これにいろいろなことばをつけてみましょう。

九九一 「絵はがき」「港」「友だち」など、いろいろなことばを組みあわせてみましょう。

九九二 二つか、三つのことばの組みあわせだと、すぐ心にものを思いうかべることができですが、

九一〇 風といえど、「略」、「ビュウビュウ」とかいうことばであらわしているが、

九一〇 くもは、このおかあさんということばを、長いこと耳にしたことはありませんでした。

九一四 いままた、ばらの花のやさしいことばをきくこともできた。

一〇一七 太郎がそばへきて、外国ではどんなことばを話しかたずねるものですか、

一〇一八 そりゃあ、フランスではフランスのことば、イギリスではイギリスのことばを話すよ。

一〇一六 イギリスではイギリスのことばを話すよ。

一〇一四 えんぴつ一本買いにいくにも、日本のことばでは通じません。

一〇一六 国 そういふ遠い國へいくと、自分の國のこと

とばがこいしくなります。

一〇一七 こうしておまえたに話すようなことばが、思うぞんぶんつかってみたいくなります。

一〇一九 外國でくらしみて、つくづく、自分の國のことばのありがたみを知りました。

一〇一〇 ことばを愛することを知って、勉強したら、どんなにしあわせでしょう。

一〇一四 ためしに、私は、妹のいつていることばを、紙きれに書きとめてみたのです。

一〇一六 そのときのいきさつを知っている私には、このことばの意味がよくわかります。

一〇一三 「クロイ ワンワン」は、そのときさげんだことばです。

一〇一五 「オスワリシタ」と、いちいち、いぬの動作をことばにして喜びました。

一〇一七 わずかのことばですが、この中には、妹のすがたが、ありありとうかんでいます。

一〇一五 ことばの記ろくは、妹の心の写真になるのではないかと、ふと、こんなことを考えました。

一〇一六 ことばも、能は、ゆう美ですが、狂言はそうではありません。

一〇一五 そのことばをきいて、そこらの乗客は思わずはおえんだ。

一〇一四 どれもみなうまいことばだ。

一〇一三 「略」といった、しゃしようさんのことばをわすれることができない。

一〇一五 ことばははねる、つまめばにげる。

一〇一五 ことばはひびく、あしの葉のふえよ。

一〇一五 ことばは光る、プリズムのかけよ。

一〇一五 ことばはかおる。

一〇一五 ことばはしみる。

一〇一五 ことばをつづる。

一〇一八 おとうさん、こんないにくいことばは、ほかにないでしょう。

一〇一九 「おとうさんは、もったいいにくいことばを知っているよ。」と答えた。

一〇一九 「なんということばですか。」

一〇一九 「はい」ということばと、『いいえ』ということばだ。

一〇一九 『いいえ』ということばだ。

一〇一九 『はい』『いいえ』、やさしいことばではありませんか。

一〇一九 やさしいようだが、なかなかいいにくいことばだよ。

一〇一九 『いいえ』ということばはいいにくいのだ。

一〇一九 『はい』もいいにくいことばではないか。

一〇一九 あたたかい愛情のこもったことばで、しっかりするようにと病人をはげました。

一〇一八 少年は二こと三ことばをはさんで、家族のようすを話そうとしたが、

一〇一八 すると、少年のたましいのそこから、どつとことばがほとばしりました。

一〇一九 姉だけにわかるへんなことばをいつています。

一〇一九 はじめはいやがっていた民ちゃんも、〈略〉、ときどき、わからないことばで、わたしに知らせるようになりました。

一〇一九 もちろん、ことばをつかっていることや、そんなものがこの世にあることさえ知らず、

一〇一九 「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさんのことばをつづることを覚え、

一〇一九 私はその日、たくさんしたことばを覚えま

した。

十二38 11 「父」「母」「妹」「先生」などのことばがあったことを思い出します。

十二40 10 クラールに「ことば」というものをわからせることによって、

十二41 7 手のひらに文字を書くことから、進んで、手と手をにぎりあい、そのにぎりかたによって「ことば」をとりかわすようになりました。

十二80 8 「略。」と、ことに「ジャパン」ということばに力をいれて答えました。

十二84 7 大きなチルデン選手を追いつめるものすごさは、ことばではあらわすことができません。

十二88 2 ことばは、そのときのまわりのようすや〈略〉によって、いろいろなその意味がかわる。

十二88 5 「水を持っておいで。」という簡単なことばでも、

十二88 6 相手の人のいうことばのわけをよくききわけて、それによくかなうようにしなくては

十二88 11 そのわけにかなわないことをすれば、〈略〉、そのことばがわかったとはいえない

十二88 12 話をきくときには、相手の人のいっていることばをよくききわけ、

十二89 10 ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。

十二89 11 ことばの力がうしなわれていく。

十二90 2 どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのようになえていたのでは、

十二90 3 おうむのようになえていたのでは、そのことばは、すこしの力も発きしないから

十二90 5 話すことばは、その場その場にあらわれるその人の面影ということもできよう。

十二92 12 「遠足」ということばは、だれにでも同

じようにわかり、同じように通じる

十二93 2 そこにことばとしての性質があり、おもしろさがある。

十二93 6 前後の続きぐあいをよく考えて、ことばを選び、

十二93 10 心を練るほど、ことばがみがかれてくる。

十二109 10 日本のことばになおしてローマ字で書いてあります。

十二115 5 それは、民主主義ということばをほんとうに生かしていくよりほかに道はありません。

十二115 6 ことばを生かすということは、身に行うということです。

十三5 2 小さな木のめのむれは、〈略〉、ことばのないかれらのことばで、なにごとか、ささやきかわしているけはい。

十三5 3 ことばのないかれらのことばで、

十三43 3 (顔をあげて、そのことばを味わうように)生きて帰って来ました……

十三45 3 三郎くんのことばの間に、あいてがなにかいっているわけです。

十三45 5 ですから、文字にあらわれていないあいてのことばを考えて、

十三45 7 あいてのいうことを聞いて、それから三郎くんのことばをいい、

十三45 8 三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわかるように、くふうします。

十四8 3 国 それは私にとって、このうえもないいせつなことばです。

十四20 4 私たちのつかっていることばの中で、

十四20 5 外国からはいってきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してください。

十四20 7 そうして、つぎのようなことばはその一

例だとおっしゃってくくばんにお書きになった。

十四22 7 国 いや、いまは日本語にちがいないが、もとは、外国のことばさ。

十四23 2 国 「それでは、これらのことばは、もとはどの國のことばだったのだろう。」

十四23 2 国 「それでは、これらのことばは、もとはどの國のことばだったのだろう。」

十四23 7 国 外国からはいってきたことばは、英語だけではなく、

十四23 9 国 たとえば、ここにあげたことばの中でも、クレヨン、ズボンフランス語、

十四24 2 国 そのほかのことばは、みんな英語だ。

十四24 4 どうしてこんなにたくさんのことばが、いろいろな國からはいってきた、

十四24 7 国 「先生、どうして、そんなにたくさん外国のことばが、日本語になったのでしょうか。」

十四24 11 品物が、外国から傳えられたときに、そのことばもいっしょにはいつてきたので、

十四24 12 ラジオといっしょに、「ラジオ」ということばがはいり、

十四25 1 タバコとともに、「タバコ」ということばが、傳えられたということがわかった。

十四25 4 ものことばが、いっしょになっているということは、あたりまえのことだが、

十四25 7 新しいものが世の中にできてくると、ことばも、それにつれて、新しく生まれる

十四25 8 「ことばのおたんじょう」などというお話が、つくれそうな気がしてきた。

十四25 10 それから、外国のことばがはいってきたのは、品物からだけではなく、

十四25 11 学問などが傳わってきたときに、そのことばもいっしょに傳わってきたのにちがいない。

- 十四266 チフスやトラホームは、ドイツ医学がはいってきたときにそれぞれ伝わったことばで
- 十四269 コーラスとか、ソナタとかいうことばは、
- 十四2610 西洋音楽がはいってきたときに、いっしょに伝わってきたことばであろう。
- 十四2612 デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、西洋の油絵がはいってきたときに伝わってきたのだということが想像される。
- 十四273 関係のふかかった大陸からは、どんなことばがはいってきたのだろうかと思った。
- 十四276 漢語は、たいてい大陸からきたことばだ。
- 十四2710 私は、自由研究で、外国からきたことばの中で、西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと思った。
- 十四2711 西洋からきたことばを
- 十四2712 「どうすれば、外国からきたことばが調べられますか。」とおたずねした。
- 十四283 かなで書いてあることばは、
- 十四284 かなで書いてあることばは、たいいてい西洋からきたことばと思ってい。
- 十四361 星の光は、声のないことばです。
- 十四362 ことばのない詩です。
- 十四3610 先生から、星をつかめといわれ、そのことばにふかい感動を受けたということです。
- 十四441 他人のためにもことばをもて、なやみ苦しんでいる他人のためにも。
- 十四855 こんなことばによって、映画は私たちに説明してくれた。
- 十四871 ばんその音楽や、場面の組みあわせと説明のことばなどによって、かなり生き生きと表現することができそうである。

- 十五343 私たちは、自分の考えを表わすのに、ことばや、身ぶりや、手まねなどをを用いる。
- 十五386 漢字をふたとおりに読んできたが、〈略〉、日本のことばによる読みかたを訓という。
- 十五401 このかなのおかげで、日本のことばを、たやすくしかも自由にうつすことができるようになった。
- 十五419 ローマ字を利用して、発音のちがっている多くの国々のことばが書き表わされている。
- 十五4110 日本のことばも、ローマ字で書くことができる。
- 十五428 日本のことばをもっとも正しく、もっとも簡単に書き表わす方法がないものであろうか。
- 十五505 どうか、私のことばを今右衛門さんに傳えてください。
- 十五696 「つくえの上をごらん。」おばさんのことばに目をうつすと、
- 十五756 ホランド博士のあの熱情のことば。
- 十五7511 博士は、そのことばの意味をときかていた私のようすを見て、大きな声でわられ、
- 十五9212 「ぎょうぎのいいことばをつかってもらいたいものですね。」
- 十五122 これがこの級の最後のことばだ。
- ことばあそび (課名) 4 ことばあそび
- 二24 三 ことばあそび……十六
- 二161 三 ことばあそび
- 四27 六 ことばあそび……六十六
- 四661 六 ことばあそび
- ことばあそび 「言葉遊」(名) 3 ことばあそび ことば遊び
- 二163 ただおさんたちが、ことばあそびをしました。

- 四674 お正月までに、ことばあそびのたねをたくさんこしらえておきましょう。
- 六691 ことば遊びも書きました。
- ことばあつめ (課名) 2 ことばあつめ
- 三24 三 ことばあつめ……十八
- 三181 三 ことばあつめ
- ことばかず 「言葉数」(名) 1 ことば数
- 十二3011 民ちゃんのことば数のふえるのは、おどろいてしまいました。
- ことばづかい 「言葉遣」(名) 1 ことばづかい
- 十二934 書くことは、〈略〉、その場のようすが相手にみえないから、ことばづかいやいいあらわしかたには、いっそう気をつけなくてはならない。
- ことばつき 「言葉付」(名) 2 ことばつき
- 六1063 「ハダヲカブ。」というのが、いかにも弟のいいそうなことばつきである。
- 七767 旅人は、おちついたことばつきで、旅人「そのらくだは、かた目ではありませんか。」
- ことばのあい (課名) 2 ことばの愛
- 十二3 二 ことばの愛……七
- 十七11 二 ことばの愛
- ことばのあい (題名) 2 ことばの愛
- 十193 「ことばの愛」を読んでいる声が、きこえてくる。
- 十196 「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる声がかこえる。
- ことばのはたらき (課名) 2 ことばのはたらき
- 十二36 十 ことばのはたらき……八十七
- 十二871 十 ことばのはたらき
- ことばみじか 「言葉短」(形状) 1 ことばみじか
- 十五595 が、ことばみじかにその関係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、

を呼びとめて、「略。」といいながら、おとうさ

んにわけてくれる少女もありました。

十912 木の葉が黄色くなるころで、いなかの子どもにとっては、もっとも楽しい季節でした。

十101 どこへいっても、遊びたわむれている子どもにあいました。

十116 おとうさんが、子どものすきそうなおかしを、一ふくろやったのがはじまりで、

十1212 窓 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國にのこしておいてきました。

十141 一つは、そういうかわいらしい子どもがいて、なかよしになってくれたからです。

十162 フランスのいなかの子どもから、自分の國のことをきかれたときは、

十1611 窓 「子どもでも」と、また太郎がたずねましたので、おとうさんは答えました。

十194 ひとりの子どもが、立つて本を読んでいる。

十203 「にじの歌」を歌う子どもの声。

十213 そのあとから、小さな子どもが、よちよちと歩いてくる。

十2111 窓をのぞく子どものはれはれた顔。

十309 父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。

十1195 その子どもに、りえもんという人がありましたが、たいへん情ぶかい人でした。

十1204 だから、金次郎は、子どものときから、家の手つだいをしてよく働きました。

十1219 しかし、なんといつても子どもです。

十1237 母親は、金次郎と相談して、すえの子どもを親類にもらつてもらいました。

十12310 元氣よくいった母親も、子どもをよそへやってから、夜になると、ため息ばかりついて

十12411 その晩のうちにいて、子どもをつれて

きました。

十1259 ふつうの子どもだったら、くたくたになつてたおれるところを、

十14310 女の先生が、卒業する子どもの名をお読みあげになりました。

十1444 子どもと父兄と、いっしょに呼ばれているようです。

十1683 また、子どものようにうなっている者もありました。

十1712 窓 ぼくは、おとうさんの子どもですよ。

十1712 窓 おとうさんの子どものチチロですよ。

十182 孟子がまだ子どものころでした。

十1114 窓 くつをはいている子どもはひとりいません。

十1267 おじさんからゆづつてもらったもので、子どもにはりっぱすぎるほどだった。

十12393 喜びを思い返していたときの私ほど幸福な子どもを発見することは、むずかしいでしょう。

十12405 両親は、なんとかして、すこしでももののわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

十12462 窓 あやつりは〈略〉、おじさんの子どものころ、よくみたものだよ。

十12555 子どもときからききなれた傳説が、そのあいだにおりこまれていたからである。

十12724 芭蕉は、子どもが大すきでした。

十12726 そのあたりにいるのは、川べりにある船大工の子どもや、〈略〉りょうしの子どもたちで、

十12741 窓 いざ子ども走りあるかんだまあられ

十127610 ふたりは子どものようにわらいました。

十12792 その「ビューン」がとまると、〈略〉子どもが、もう、頭をつるつるにそられている。

十13313 これを聞きつけて、子どもが大ぜい集ま

る。

十13344 ほのぼのとゆれ動くかげ絵は、子どもの心をひきつけてやまない。

十133411 小さな子どもは、絵も字もわからないころから、〈略〉、れんをながめている。

十13423 窓 見せたいものだって……なにを……それきみにくれたの……マンシユウの子どもが。

十13427 窓 いっしょに、そのマンシユウの子どもに、お礼の手紙を書こうね……

十13535 その右の方に、もうひとりの子どもがよりかかっている絵です。

十14152 窓 自分には子どもがあるということをお考えになつて、力をとりなおしてくださいようにしそに見ている雪國の子どもなど、

十1596 窓 子どもみんな早口に話しつつ来る子どもと子ども

十1596 窓 子どもみんな早口に話しつつ来る子どもと子ども

十1596 窓 子どもみんな早口に話しつつ来る子どもと子ども

十15206 両親と子どもふたり、

十15218 ふたりの子どもは家庭教師につれられて、〈略〉、がけの上をそろそろと歩いていました。

十157410 神の目から見れば世界の人類はすべての愛する子どもなのだから、

十158910 (ふたりの子どもに手をだしながら) さあ、どうぞ。

十15973 窓 あれは『子どもの幸福』だよ。

十15983 窓 子どもは幸福というものは、〈略〉、いちばん美しいものに見えるものだからね。

十159812 窓 なにしろ、子どもの時代は、ごく短い

のだからね。

十五112 7 ㊦ 母親はだれだって、子どもをかわいがるときにはお金持なのですよ。

こどもいち 「子供二」〔話手〕3 子ども一

四96 7 子ども一「このかめをころがして あそぼう。」

四99 2 子ども一「この人いうて あげようか。」

四99 10 子ども一「さあ、あっちへ いって あそぼう。」

こどもさん 「子供三」〔話手〕2 子ども三

四97 6 これこれ、どうしたのだ。「子ども三」おもしろいから、かめをころがしているのです。」

四98 8 子ども三「ころがして あそぼうよ。」

こどもさんたち 「子供達」(名) 2 子どもさんたち

十五79 9 日本の子どもさんたちにも、お目にかかったことがあるからです。

十五89 2 ㊦ あれはすこしひねくれ者で、子どもさんたちにしようかいするのはむずかしい。

こどもし 「子供四」〔話手〕2 子ども四

四97 10 はなして おやり。「子ども四」だって、ぼくたちがつかまえたのだから。」

四98 7 そうだ、わたしにこのかめをうってくれないか。「子ども四」どうしよう。」

こどもしばい 「子供芝居」(名) 1 子どもしばい

十三44 1 この「子どもしばい」をするための注意

こどもたち 「子供達」〔話手〕3 子どもたち

七16 6 子ども「先生、早くでかけましょう。」

七20 1 知っている人——「子ども」はい。」

七21 6 ばらばらにわかれて、そっとね。「子ども」はい。」

こどもたち 「子供達」(名) 67 子どもたち

まっています。

三61 3 ほかの子どもたちも、こしをおろして、まっています。

三77 1 ㊦ 「よその國の子どもたちに光をあげるのですよ。」

三78 3 ㊦ よその子どもたちがわたしの お日さまをとってしまふのはいや。

四90 6 学校へ かよう子どもたちのことを思つて、おもてのとおりをさつさとほく。

四99 7 うらしまは、おかねを子どもたちの手に、それぞれわたしてやります。

四100 2 子どもたちは、「略。」といいながら、いってしまします。

五24 7 ㊦ みんなを立たせ、不自由な人や、女や、子どもたちをすわらせました。

五38 7 ㊦ こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手紙を書いてもらつて、

五38 8 ㊦ きみの受持の子どもたちに、それを送つてあげよう。

五85 2 ㊦ 子どもたちがくるまでに、そこらをきれいにそうじしておこう。

五85 5 そこへ、村の子どもたちが、「略。」

「略。」とよびながら、走ってきました。

五88 9 子どもたちが、みんな、りょうかんさんのまわりにあつまりました。

五93 1 ㊦ わからない子どもたちじゃな。

五93 3 子どもたちは、みんな帰っていきました。

五93 4 りょうかんさんは、帰っていく子どもたちをみおくつてから、

六8 5 子どもたちは思わずかおをみあわせた。

六46 4 ㊦ 北風、からかぜ、寒いのに、おちばの、おちばの子どもたち、じゃんけんばらばら かけ

ていく。

六47 1 ㊦ おちばの、おちばの子どもたち、ちゃんすずめと どこへいく。

七4 10 かしの木は、子どもたちのことを、まず思いうかべる。

七5 10 つぎからつぎへと、子どもたちがやってくる。

七8 5 しおがひくように、子どもたちが、さつと、学校からいなくなつてしまつた。

七9 8 ㊦ 毎年、新しく入学した子どもたちが、わたしのそばへやってきました。

七16 5 学校の運動場に、子どもたちが集まっている。

七19 8 子どもたちは、小さな橋を渡る。

八15 8 せみの子どもたちは、「略」トンネルをほりながら、さぐりさぐりもぐつていきます。

八18 10 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、つみごえやこえ土の中に生みつけられて、

八86 4 子どもたちはいっしょに遊ぼうとしたが、あひるの子はまたいじめられるかと思つて、

八86 11 子どもたちは、あひるの子をつかまえようとして、「略」、わらつたりさけんだりした。

八91 11 すると、ほかの子どもたちも、「略。」と喜んだ。

八92 2 子どもたちは、手をたたいておどりまわつた。

十7 6 日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。

十8 2 道で子どもたちが、なわとびをして遊んでいたりますと、そのなかまいりをして、

十11 5 いずれも、八つばかりの子どもたちでした。

十13 10 なんとかかわいらしい子どもたちではありま

三107 囀 ちょうも 小鳥も たのしそう、きょうは
あなたの 花まつり。
四151 むこうぎしの、すすきの もさもさしてい
るところから、小鳥がとびたつた。
五943 その帰り道に、一わの小鳥のひなをひろい
ました。
五996 〔小鳥でも感心なものだ、新しいことを
どんどんおぼえていく。〕
六845 〔小鳥一わとれやしない。〕
七44 どこかで小鳥が鳴いた。
七672 炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになつて
いる。
八77 朝の早いうちの小鳥の声は、ことに美しい
ものです。
八1310 たかが一わの小鳥のことをと、わらわな
いでください。
八7110 すると、草むらにいた小鳥がおそれとび
たつた。
九416 〔山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつ
かるからです。〕
九423 〔そのほか、名のわからない美しい小鳥が
たくさんいます。〕
九1096 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえが
きながら、小鳥のようにおりてくる。
十51 小鳥が鳴いている。
十277 庭の木に小鳥がくれば、〈略〉や、羽の色
や、形などを、こまかにしらべたいのです。
十一1310 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥
の鳴く声をきいていよう。
十一156 オルガンのキイから、赤い、青い、金色
の、ちがった形の小鳥が、はばたいでで、
十二914 カサカサと落ち葉をふんでいったこと、

小鳥が鳴いていたこと、
十五642 私は、それを足先につっかけるなり、す
ぐ、小鳥のようにとびだした。
ことりさん 〔小鳥〕(名) 1 小鳥さん
四604 〔小鳥さん、知りませんか。〕
ことりたち 〔小鳥達〕(名) 4 小鳥たち
四558 木の 音の 音が しましたが、それは、小
鳥たちが、ねぼけて とびまわる 音でした。
九236 この國の人々が、あわれなこの小鳥たちに
しめしたもつとも人間らしいあたたかい氣持は、
十一144 小鳥たちはみんなめいめいの歌を歌う。
十一1511 窓ガラスが、一まいこわれていて、やが
て、小鳥たちは、そこから遠い空へにげていった。
ことりや 〔小鳥屋〕(名) 2 小鳥屋
八55 で、なんだろうとのぞいてみると、ひとり
の小鳥屋が、夜店をひろげていました。
八56 小鳥屋というより、ほおじろ屋といったほ
うがいいかもしれません。
ことわざ 〔諺〕(名) 3 ことわざ
六612 いろはがるたやことわざの中にも、このこ
とのあてはまるものがみつかりました。
十四774 「木もと竹うら」ということわざを教え
てくれました。
十四776 この簡単なことわざは、木を割るときに
は、もとのほうから割るがいい、竹を割るときに
は、うらのほうから割るがいいという教えでした。
ことわり ↓おことわり
ことわりか・ねる 〔断兼〕(下) 1 ことわりかね
る 〔一ネ〕
十一608 が、いま、友だちからすすめられて、こ
とわりかねてしまった。
ことわりなさる 〔断〕(五) 1 ことわりなさる

《一イ》
十五8610 〔ていねいに、しかしきっぱりと、こと
わりなさい。〕
ことわる 〔断〕(五) 3 ことわる 《一ッーラー
ル》
三1053 どんなりつばな人の ねがいを、みん
なことわってしまいました。
十一6112 〔なぜ、そのとき、〈略〉と、きっぱ
りことわらなかったのか。〕
十一622 〔はじめ、ぼくがことわると、よわ虫だ
といってわらうのです。〕
こな 〔粉〕(名) 3 こな
五224 おじいさんにおあいして、おもちゃ、まっ
白にこなをふいたほしがきなどをいただいて、
九1094 急停止すると、ぱつと雪けむりが立ち、あ
せばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。
十二1109 まき絵というのは、うるしをぬつたうえ
に、金や銀のこなをまいて、
こなおけ 〔粉桶〕(名) 1 こなおけ
八869 あひるの子は、〈略〉、こんどはまたこなお
けにはいつてしまった。
こながれ 〔小流〕(名) 1 小流れ
十五85 〔圖〕 きみわれ口そそぐ朝のそここの小
流れ
こなみじん 〔粉微塵〕(名) 1 こなみじん
十739 〔次郎かじやは力があまり、茶だなの湯飲
みをはねとばして、こなみじんにいたしました。〕
こなゆき 〔粉雪〕(名) 1 こな雪
九1045 まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、
スキーをするには、ちょうどよかった。
こにゅうよう 〔御入用〕(形状) 1 ご入用
十四1612 〔バリーにある、なにかさういったもの

がご入用のときは、

ごにん「五人」(名) 6 五人

二25 4 きょうは、いちろうさんと、さだおさんと、
「略」、この五人のぼんです。

三58 3 五人の子どものおうちは、丘の上にあ
るのでも、ふもとにあるのでもありません。

三69 9 五人の子どもはゆうごはんをたべてい
ました。

三79 1 五人の子どもが、もみじの こかげのす
なばで あそんでいます。

五81 4 きょうは五人も休みました。

九34 6 母と、おぼと、兄と、妹と、ぼくの五人
で、三日間かかりました。

ごにんのこども「課名」2 五人の子ども

三3 3 九 五人の子ども……五十八

三58 1 九 五人の子ども

ごにんめ「五人目」(名) 1 五人め

二36 3 五人めの めくらは、足を なでて、

「略」といいました。

こぬれ「木末」(名) 1 こぬれ

十五13 1 文 あさき夜の月影清み森をなすすぎの

こぬれの高きひくき見ゆ

こねだす「捏出」(五) 1 こねだす「一シ」

十五62 3 大小二つのくつをちらと見た私は、たち

まちふくれあがってだだをこねだした。

ごねん「五年」(名) 1 五年

二59 7 四年の人たちも、五年の人たちも、六

年の人たちも、「略」、これをつかいました。

ごねんせい「五年生」(名) 2 五年生

三34 3 五年生のきょうしつでは、花のしやせ

いをしていました。

七55 10 五年生が、運動場で、たいそうをしていま

す。

この「此」(連体) 425 この

一22 2 ました。それから、このうたのゆうぎを
一30 7 にありませんか。この手で、なにをも

一31 1 もったでしょう。この手で、なにをも

一31 3 をもつでしょう。この足で、どこへい

一31 5 いったでしょう。この足で、どこへい

一54 2 ひろいました。このお月さんのくに

一54 3 どたまひろいにこのかわらにきます

二25 4 と、たけこさんと、この五人のぼんです

二47 7 できます。「このおいしそうな

二53 8 をもらいます。「このりんご、じろう

二60 6 すよ。ですから、このつくえやこしか

二70 8 という声をする。この声はひとりでは

三13 6 「略」。はんたかは、このひとことを心の

三16 9 にいますので、このはちをわたくし

三22 5 年かたつうちに、このくすのきは、い

三23 3 あさ日がでると、この木の西がわの

三25 1 も、こういって、この大きな木をみ

三25 3 しかたがない。この木を切ること

三47 6 らつしやいました。このかたは、さきほど

三60 6 になりました。「この丘の上の 大き

三60 8 うみ、みずうみ、この丘の下の。」デ

三90 4 みんなのもの このはしはみんなの

三91 4 こをとおります。このはしがなかった

三91 6 どうしましよう。このポストもみんな

三91 9 んじよの人たちもこのポストにいれま

三93 3 くれます。「略」。このていしやばもみ

三93 5 んなのものです。このでんしやもみん

三95 4 ことができます。この一まいの紙が、

三95 7 立ったりします。この一まいの紙に、

三96 6 できます。また、この一まいの紙に、

三103 3 の たつときでも、この かぐやひめのか

三106 7 は、かぐやひめに この ことをつたえて

三110 3 でございます。この 十五夜には、月

三110 7 とこたえました。この 思いがけないこ

三111 4 ました。みかどが この ことをおききに

三117 9 いました。それで、この 山の 名を、「ふ

四9 1 まるい かがみを、この 町にはめこんだ

四13 1 できます。どこも、この 町の 目です。こ

四13 2 この 町の 目です。この 町の 目です。こ

四13 2 この 町の 目です。この 町の 目です。こ

四53 2 がんの なかまは、この 山の むこうに

四53 8 がんの なかまは、この 風が なんと

四54 1 がんの なかまは、この 林の 中におり

四57 1 「略」。」「略」。」「この えんの 下の く

四68 9 「略」。」「略」。」「この えんの 下の く

四81 4 星の きれいな この よるを、みん

四96 7 います 子ども「この かめを うろがし

四98 5 うだ、わたしに この かめを うろがし

四99 2 だな」子ども「この 人 に うろがし

四99 4 さん、おじさん。この かめを うろがし

四103 10 「おかげさまで、この とおり じょうぶ

四110 2 われます。かめ「この かたが うらしま

四116 6 ます。おとひめ「この たまてばこは、

四120 8 でんとうですが、この 光を だすため

四122 5 も、ただ一つの この でんきゅうが な

四131 8 天人の しおれた、この ようすを みて、

五13 7 とうございます。この つぎの 駅ですね。

五15 5 ません。けれども、この ままでは 旅は でき

五16 4 がきて、「さあ、この かばんには いるん

五17 8 たちは まだいい。この わたしの を くらん

五31 4 は、トランクから この 本を だして、「略

五32 9 さん つんで います。この 汽車は、 なにを た

五三三 つみこんでいます。この荷物の中に、おり
 五三四 物を作っています。この工場のきかいを動
 五三六 につまれています。この石炭が、汽車や汽
 五三七 かのけしきです。このような木が、たお
 五三九 手 のめもみえます。このきれいなけしきを
 五四〇 手 んのいい花です。この花がよくさく年は
 五四二 小道 いつも通るこの小道、たのしい小
 五四四 、いつもたのしい、この小道。まどをあ
 五五〇 私、おかあさんにこのことをいって、ご
 五五七 へ。」「そうです。この春まいたのです。
 五六二 へ。」「略。」「このきゅうりだつて、
 五六五 へ。」「おとうさんは、この話をそばでおき
 五六六 へ。」「あやこも、このきゅうりも、あさ
 五六九 て、おばあさんに、このふしぎな話をしま
 五七〇 へ。」「略。」「このおにんぎょう、か
 五七二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五七四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五七六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五七八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五八〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五八二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五八四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五八六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五八八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五九〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五九二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五九四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五九六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 五九八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六〇〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六〇二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六〇四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六〇六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六〇八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六一〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六一二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六一四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六一六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六一八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六二〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六二二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六二四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六二六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六二八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六三〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六三二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六三四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六三六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六三八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六四〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六四二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六四四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六四六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六四八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六五〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六五二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六五四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六五六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六五八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六六〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六六二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六六四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六六六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六六八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六七〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六七二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六七四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六七六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六七八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六八〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六八二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六八四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六八六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六八八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六九〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六九二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六九四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六九六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 六九八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七〇〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七〇二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七〇四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七〇六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七〇八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七一〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七一二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七一四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七一六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七一八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七二〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七二二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七二四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七二六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七二八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七三〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七三二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七三四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七三六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七三八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七四〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七四二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七四四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七四六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七四八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七五〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七五二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七五四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七五六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七五八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七六〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七六二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七六四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七六六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七六八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七七〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七七二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七七四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七七六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七七八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七八〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七八二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七八四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七八六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七八八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七九〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七九二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七九四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七九六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 七九八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八〇〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八〇二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八〇四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八〇六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八〇八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八一〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八一二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八一四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八一六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八一八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八二〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八二二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八二四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八二六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八二八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八三〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八三二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八三四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八三六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八三八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八四〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八四二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八四四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八四六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八四八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八五〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八五二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八五四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八五六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八五八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八六〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八六二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八六四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八六六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八六八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八七〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八七二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八七四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八七六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八七八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八八〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八八二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八八四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八八六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八八八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八九〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八九二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八九四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八九六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 八九八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九〇〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九〇二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九〇四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九〇六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九〇八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九一〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九一二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九一四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九一六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九一八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九二〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九二二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九二四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九二六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九二八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九三〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九三二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九三四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九三六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九三八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九四〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九四二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九四四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九四六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九四八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九五〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九五二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九五四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九五六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九五八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九六〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九六二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九六四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九六六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九六八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九七〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九七二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九七四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九七六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九七八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九八〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九八二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九八四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九八六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九八八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九九〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九九二 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九九四 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九九六 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 九九八 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、
 一〇〇〇 へ。」「略。」「このおにんぎょうは、

六五八 につれてきました。この人は、私たちの組
 六六〇 ことわざの中にも、このことのあてはまる
 六六二 は五度です。毎朝、このらんに、その日の
 六六四 立つものはなかに。このなぞの答がわかっ
 六六六 さい。つづき話 この第一号に、つづき
 六六八 をつくる人たちは、このお話のつづきを書
 六七〇 いていきました。このほか、「雪のかた
 六七二 遊びも書きました。この学校の子どものか
 六七四 た。」「にいさん、この雪だるま、歩きだ
 六七六 へ。」「略。」「いま、この雪だるまが、お話
 六七八 へ。」「といながら、この手が動かないから
 六八〇 うはおとうさんに、この考えついたことを
 六八二 いさん。」「ほでりの」「このつりざおを持って
 六八四 さん。にいさんはこの弓と矢を持って
 六八六 みこと。」「はあ、この木だ。のぼつて
 六八八 ねるが、だれか、このかたのつりばりを
 六九〇 の神。」「おまえは、このかたのつりばりを
 六九二 ながら、海の神。」「このつりばりではござ
 六九四 いながら、ぼくは、この二つをかさねたり
 六九六 んは、かわるがわるこの望遠鏡をのぞいて
 六九八 。しかし、ぼくは、このおかげで、おもし
 七〇〇 ることがわかった。このほかに、弟は「ミ
 七〇二 六二二」がいえなかった。この二つは、両方とも
 七〇四 とにしました。」「このくるみを持って
 七〇六 いやしいんだ。このトンネルがほしか
 七〇八 ほしかったのさ。このあたにかいトンネ
 七一〇 し自分が勝つたら、このしかの角で、うさ
 七一二 ぼくが負けたら、この角を、おつてしま
 七一四 ました。」「なんだ、このぶどうのつるめ。
 七一六 ころげました。」「このくされ木めが。」「
 七一八 ました。ところ、この大きな岩のかげに
 七二〇 ず手をたたきます。このときの「手」は、

七二二 へ。」「略。」「このときの「手」は、
 七二四 へ。」「略。」「このようなどきの「手
 七二六 へ。」「略。」「このようなどきの「手
 七二八 手」といったら、「この手でやってみよう
 七三〇 からだの名まえに、このようなど、いろいろ
 七三二 女の子」「このまえより、なの花
 七三四 女の子四先生、この実はなににするん
 七三六 うに。」「男の子三「このまえきたときは、
 七三八 の人たちは、みんなこの老人をみた。」「略
 七四〇 もしれませんが、このかんしゃの氣持を
 七四二 ころざしですが、このお金はいただきか
 七四四 やることになった。このときは、ぼくらの
 七四六 、ちよつと考える。このようすを、甲乙ふ
 七四八 せん。そのとき、この人にであつたので
 七五〇 あやしいことは、この人は、私どものら
 七五二 をぬすんだのは、この男にちがいありま
 七五四 せん。それで、このらくだはどこか
 七五六 わないでください。この思いでは、おそら
 七五八 そうほねがおれて、このうえなくふべんで
 七六〇 鳴きはじめました。このわかいあぶらぜみ
 七六二 へ。」「天帝は、ひとつこの男のうでをためし
 七六四 きました。天帝は、このようすをごらん
 七六六 うにみえるのです。この星は、一つ一つが
 七六八 いう考えだけでは、この遠いきよりは、お
 七七〇 七まわり半します。この早さで計算します
 七七二 うわけになります。このほか、五十年の
 七七四 たれます。しかも、この大きなうちゅうは
 七七六 るということ。このきそく正しいちつ
 七七八 と、王さまは、「この花が、みたとお
 七八〇 は手をうって、「この人こそ、さがしも
 七八二 、いままでのわけをこの男に話しました。
 七八四 くるつもりでした。この「幸福」が、いろ
 七八六 た。あひるの子は、このあしの中で、横に

十二 61 8 としたことから、この岩屋からぜんやわ
 十二 71 3 ったりしました。このようにして芭蕉に
 十二 81 2 すこしも話せないこの二少年が、遠い母
 十二 82 4 りました。もし、この決勝戦に勝つこと
 十二 82 10 せん。それでも、この清水選手の試合を
 十二 84 9 ルデン選手です。このままおされるもの
 十二 90 10 を書いた。太郎はこの「くりひろい」の
 十二 91 8 とが、こまかに、この文の中にたたみこ
 十二 92 10 くるのも、やはりこのためである。しか
 十二 94 5 が「略」。——このようにまとまると
 十二 95 3 秋子は、おと年、この学校にうつてき
 十二 98 3 ていたようです。このほか魚では、たい
 十二 98 8 どをたべました。このように、古い時代
 十二 100 11 とまっています。この式の土器は、はじ
 十二 101 4 ます。はにわ この人形は、はにわと
 十二 101 11 ざってあります。このやさしいのびのび
 十二 102 3 か。はにわには、このほか、うまや、い
 十二 102 6 。夢殿の観音 この美しい、りっぱな
 十二 105 4 りつれています。この人たちの着物やか
 十二 108 10 手ぶりによって、このお面は、生きもの
 十二 110 2 ることで、日本はこのような心をとりに
 十二 111 6 富士山の絵です。この絵は北斎という江
 十二 111 9 世絵といえます。この浮世絵は、版画で
 十二 112 1 わせた美しさは、このとおりっぱなも
 十二 112 11 かったのですが、この本によって、日本
 十二 113 1 のとなりました。この本を日本語になお
 十二 114 9 の新しい憲法は、この議事室でたんじょ
 十二 115 2 帳が終りました。このような歩みをたど
 十三 4 2 前 ごらん、まだこのかれ木のままの、
 十三 10 11 の人々などには、この考えのまったくあ
 十三 11 2 、考えられない。このように、道理にあ
 十三 13 5 ました。しかし、この天動説では、どう

十三 14 3 う人が出ました。この人は、すぐれた数
 十三 17 8 の樂園といわれるこの國も、千八百六十
 十三 18 8 かほろびるかは、このときにさだまり、
 十三 18 8 ときにさだまり、この苦しいときにうち
 十三 18 11 るのであります。このとき、希望をいだ
 十三 19 11 ゆめであります。このゆめを実現するた
 十三 20 9 す。ダルガスは、このあれ地に育つ木が
 十三 20 9 かないか、まず、このことについて研究
 十三 21 2 れ地は、もはや、この強い木をやしなう
 十三 21 5 へ、く、「自然は、このむずかしい問題を
 十三 21 12 ルクの希望であるこの植林は、みごとに
 十三 23 10 たのであります。このおかげで、ユート
 十三 27 8 るもないような、このホートンではある
 十三 32 12 くひびきたる。このように、いろいろ
 十三 33 6 く。夏の日には、この音がすずしい氣持
 十三 36 4 降ってくるのも、このころである。やな
 十三 44 1 しずかにまぐ。この「子どもしはい」
 十三 44 4 ます。ところが、このしはいは、舞台上に
 十三 44 12 です。ところが、この四人の声は、見て
 十三 45 2 ません。そこに、このしばいのむずかし
 十三 54 9 人です。だから、この絵も、本物をごら
 十三 59 10 感じがするね。この絵は、たいへん大
 十三 59 11 が行ったとき、この絵の前には、一台
 十三 61 8 んなお氣持で、この絵はがきを送って
 十四 8 3 は私にとって、このうえもないたいせ
 十四 9 2 考えになって、この世の中には、まだ
 十四 11 6 送らせました。このランプは、石油で
 十四 12 5 十年このかた、この式のランプをつか
 十四 12 8 だちの母親は、このランプに満足しき
 十四 13 11 写真は、いま、この手紙を書いている
 十四 14 1 んに対しては、このうえなくまめやか
 十四 14 2 くまめやかな、このうえもなく純真な

十四 16 1 ちらにいても、このまごころを書いて
 十四 17 5 わかった。私は、この私にはわかるので
 十四 25 3 どうかあったが、このことから考えあわ
 十四 26 3 を知っています。この一むれの星を、ふ
 十四 33 2 います。しかし、この太陽系は、ぎんが
 十四 33 6 すぎないのです。このぎんが系というの
 十四 33 10 です。それでは、このぎんが系全体が、
 十四 34 10 の廣さなのです。この廣大なうちゅうに
 十四 41 2 「友よ、友よ。この美しい朝をむかえ
 十四 41 3 よう。」二人の「この光を全身にあげよ
 十四 46 7 みりした氣持で、この歌に聞きほれてい
 十四 46 8 かしれませんが、このときぐらい、しみ
 十四 49 5 のです。「略」。このおじようさんは、
 十四 49 5 おじようさんは、この歌を知っていたか
 十四 49 7 ません。しかし、このおじようさんくら
 十四 49 8 ようさんくらい、この歌の心を生かした
 十四 49 9 少ないでしょう。このおじようさんこそ
 十四 49 10 こそ、ほんとうにこの歌を歌った人とい
 十四 50 6 あげられました。このことは、あくる日
 十四 51 5 よきように、「このかばちゃはだれの
 十四 52 4 す。もちろん、このかばちゃは私のも
 十四 54 3 すよ。だから、このかばちゃは、全部
 十四 56 8 てあげるの、この私です。もし、つ
 十四 56 11 んなさい、私のこの足を、手を。こん
 十四 57 11 のです。それがこの日本でできるため
 十四 58 8 てしまします。この大きなかばちゃは
 十四 58 8 が、やっぱり、この大部分は水です。
 十四 59 7 はわすれても、この土のことは、かた
 十四 61 5 「そうです。このかばちゃは、だれ
 十四 61 8 きさえすれば、このかばちゃは、お礼
 十四 62 7 す。ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現

十四 63 3 ようなものです。この茶わんをえんがわ
 十四 63 9 ようなものです。この色については、お
 十四 69 7 す。湯げのお話はこのくらいにして、こ
 十四 73 10 う明に見えます。このふしぎなものが
 十四 77 6 えてくれました。この簡単なことわざは
 十四 85 9 くいったものだ。このように、二つの映
 十四 86 11 うことすらある。このものすごいありさ
 十四 89 2 。子どもたちは、この黒い土の上に集ま
 十四 90 9 ものだったので、この子にとっては大き
 十四 99 5 女の子は思った。この子にとって、ただ
 十五 19 6 びえているのが、このユングフラウの山
 十五 20 4 夏のことでした。このユングフラウの山
 十五 20 7 でした。それに、この子どもたちをせわ
 十五 20 9 、日に二どずつ、このふたりの子どもた
 十五 20 12 どももたちには、このヨーロッパの高い
 十五 21 7 でした。ある朝、このアメリカ人の家族
 十五 24 3 かいの少年です。このひとつじかいは、が
 十五 26 2 た。けれど、もしこのわしが、その舞い
 十五 26 6 またとちゅうで、このわしが大きなくち
 十五 29 11 英ゆうのように、このただけらしい相手
 十五 31 1 まですまて来たこのあくまの胸をめぐ
 十五 31 3 せん。大わしは、この思わぬいたでにお
 十五 31 5 かかる大わしと、この勇ましい少年との
 十五 32 5 く道を見つけて、この鳥と少年との戦っ
 十五 33 3 こにこわらつて、この自分のすくい主へ
 十五 33 9 でも、朝日の中のこの勇ましい少年をほ
 十五 35 7 ことも行われた。この絵のだんだんりゃ
 十五 36 6 形のないものは、この方法では表わすこ
 十五 38 4 読むこともした。このように、日本では
 十五 38 7 ていの漢字には、この音と訓のふたとお
 十五 38 11 てみただけでも、このことがすぐ理解さ
 十五 39 11 に大きな発明で、このかなのおかげで、

十五 40 3 子などは、すべてこのかなによって書か
 十五 41 2 出たものである。このエジプト文字がフ
 十五 41 8 二十六字である。この二十六字のローマ
 十五 42 10 うか。私たちは、この問題をもっとよく
 十五 47 1 会 とき焼いては、この店に持って来ます
 十五 47 11 れていたという。このお庭焼のために、
 十五 48 3 町を作って住み、この赤絵製作の方法が
 十五 48 7 たため、ひとりでの焼物を作ることとは
 十五 49 1 でも、やりかけたこのしごとはやめな
 十五 49 5 がきた。しかし、このような美術品を買
 十五 50 1 会 うけついできたこのしごとは、ぜひ続
 十五 50 2 会 けてください。この焼物をやめれば、
 十五 50 8 会 に苦しんでも、この赤絵の技術を続け
 十五 50 10 決心し、いよいよこのしごとに熱情をこ
 十五 54 11 のであつた。私がこの博物館をたずねた
 十五 71 3 会 にぎっている。このすがたをおじさん
 十五 73 5 会 士は、「それ、このとおりだ。」とい
 十五 79 4 校のみなさんに、このあいさつを送るだ
 十五 82 3 ルのまわりには、この地球の上でいちば
 十五 83 4 会 う。」光「あれがこの世の中でいちばん
 十五 83 7 会 ちよいとでも、この人たちのなかに
 十五 85 3 会 しく美しく、この廣間のなにもを
 十五 87 4 会 。失礼ですが、この中のおもなものを
 十五 87 7 会 いの幸福」で、このとおり、りっぱな
 十五 87 9 会 とうなずく。このなかまは、『のど
 十五 88 3 会 目が見えない。このかたがたは、『な
 十五 96 4 会 ばいいや。光「この世の中には、人が
 十五 97 10 会 いるのだらう。このへんでは、みんな
 十五 100 3 会 、聞いたらう。この人、まだぼくたち
 十五 101 10 会 聞いたかい。この人のうちに『幸福
 十五 103 2 会 ればいつでも、この『幸福』たちは見
 十五 105 2 会 くおこつて、「このらんぼうなやつ、

十五 110 11 会 チル「それに、このきれいな着物は、
 十五 112 4 会 は、いつだってこの着物を着ているの
 十五 113 12 会 なかったかい。この手でおまえのせわ
 十五 114 12 会 。おまえたちがこの上まであがつて来
 十五 117 7 会 たよ。あなた、この私がおわかりです
 十五 120 3 会 てきた。はじめてこの学校の門をくぐっ
 十五 120 8 会 みんな元気で、この学校を愛してくれ
 十五 122 1 会 ていけ。これがこの級の最後のことば
 十五 122 5 会 な氣持をだいて、この日記のふでをおこ
 十五 123 5 出を残してくれたこの運動場、この校舎
 十五 123 5 会 れたこの運動場、この校舎、あの農園、
 十五 123 5 会 十五 123 5 会 十五 123 5 会
 このあいだ 「此間」(名) 10 このあいだ
 四 103 6 会 このあいだ、たすけていただいたかめ
 でございます。
 四 110 5 会 このあいだは、うちのかめをおたすけ
 くださいまして、ありがとうございます。
 五 41 10 会 このあいだは、お手紙ありがとうございます
 ました。
 六 58 4 会 このあいだ雪の降った朝、一年生の子が、
 〈略〉はき物に雪がついてころびました。
 六 96 6 会 このあいだから、つりばりをのどにかけ
 まして、たいへん苦しんでいるところで
 九 10 2 会 このあいだ、ラジオで、「劇場音楽の話」
 をきいた。
 九 79 3 会 ここが、このあいだからよくお話ししてい
 た貝づかです。
 十一 11 6 会 このあいだのレースで勝ったボートだ
 よ。
 十二 19 2 会 このあいだの晩も、ピアノの先生が、
 散歩にいらつして、
 十四 26 1 会 このあいだ、先生から、〈略〉とうか
 がつたが、

このかた「此方」(名) 1 このかた ↓じゅうねん
このかた
十五16 人間が地上に住みつてからこのかた、
いつもたずねあぐんでいた道が、
このころ「此頃」(名) 8 このころ
七913 このころは天氣がわるいので、うさぎは、
「元氣がありません。」
十五55 このころ、私は、作文がすらすらと書けな
くなりました。
十一541 このころ、電車の中に、つぎのような
ひょう語がかかれていたのをみた。
十二1310 このころは、きわだって美しいつやつや
したしゅの色がさしてきた。
十二201 此のころでは、いつも美しい実をなら
せることができるようになりました。
十二2911 このころふとてきて愛らしくなった民
ちゃんをだいてやろうとすると、
十二303 おとなりで、このころ白いいぬをかうよ
うになりましたが、
十三383 おばさんだって、このころちっとも來
てくださらないじゃないですか。
このばめん「題名」3 五のばめん
二511 五のばめん さちは、りんごをだいた
り、ほおにつけたり、おどったりします。
四1187 五のばめん
六886 五のばめん
このひと「五人」(話手) 4 五の人
十四392 五の人「ゆめがさめた。」
十四396 五の人「深呼吸をしよう。」
十四401 五の人「喜びの光。」
十四4011 五の人「平和と自由の光がさしてくる。」
このまち「課名」2 この町

四22 一 この町……四
四41 一 この町
このむ「好」(五) 1 このむ 《一ン》
十五5810 化学、生理、植物、動物、地質等をこ
のんで勉強す。
このよ「此世」(名) 4 この世
四1231 わたくしがこの世に生まれてくるま
では、なん百年も、なん千年も、人々は 不自由
な思いをしました。
十4212 喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力
者であつたうめが、この世をさつてしまった。
十二341 ことばをつかっていることや、そんなも
のがこの世にあることさえ知らず、
十五918 それがこの世のすべてですもの。
こはく「琥珀」(名) 1 こはく
十五955 「こはくのつゆ」などがあらわれます。
こぼ「小箱」(名) 1 小ぼこ
八125 つめたくなったからだをわたにつつんで、
小ぼこにいられて、《略》うめてやりました。
こはん「御飯」(名) 7 こはん ↓あさこはん・た
けのこはん・ばんこはん・ゆうこはん
五347 おかあさんが、だいどころで、こはんのし
たくをしていらつしやいます。
五925 五 それぞれ、たけのこにこはんのつぶが―
―こりやあ、たけのここはんだよ。
五927 五 こはんの中にたけのこはいっているの
が、たけのここはんですよ。
九493 いちろうは、いそいでこはんをたべて、谷
川にそつた小道を、上の方へ登つていきました。
十594 五 「こはんをたべてから、すすきを取つて
おいで。」とおつしやつた。
十595 こはんをたべてから、山の方へいって、た

くさん取つてきた。
十二712 芭蕉のおきないうちに、いどころ水をく
みあげたり、こはんをたいたりしました。
こはんつぶ「御飯粒」(名) 3 こはんつぶ
五924 五 それ、たけのこにこはんつぶがついてい
るだらう。
五929 五 いや、たけのこにこはんつぶがついてい
るのが、たけのここはんだよ。
六1177 のりは、こはんつぶをよくねると、いいの
りができました。
こばんぼし「五番星」(名) 1 五ばん星
五547 五 「五ばん星、あんなところ。」
こびき「木挽」(名) 1 こびき
十二689 こびきの大のこはばが廣いし、
こひき「五匹」(名) 12 五ひき 五ひき
二298 五 一ひき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひ
き、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、
二304 五 一ひき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひ
き、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、
六1212 五 ひきのうさぎさんがいました。
六1214 ある日のこと、五ひきのうさぎさんは、ま
つ林の中で、まつかさで、まりなげをしたり、
六1263 五 ひきのうさぎさんたちは、めいめいにあ
なをほりはじめました。
六1273 五 ひきのうさぎさんたちは、大きな声で
じゃんけんをして、おにをきめました。
六1356 五 ひきのうさぎさんと、しかさんとは、風
のように走りだしました。
六1385 五 ひきのうさぎさんたちは、ここでゆつ々
り休むことにしました。
六1394 五 ひきのうさぎさんたちは、あせをふいた
り、ねころんだり、足をもんだりしていました。

六四二 〇なかのすいた五ひきのうさぎさんは、だ
いすきなクローバーをたべました。
六四三 五ひきのうさぎさんたちは、みつばちさん
のこぼを、たいへんありがたく思いました。
七九六 七ひきの子うさぎのうち、五ひきはねずみ
色、一ひきは白、もう一ひきは黒でした。
こひつじ 「小羊」(名) 1 小ひつじ
一五八四 小ひつじの足に、小うしのかんぞうも
ある。
こびと 「小人」(名) 2 小人
三四七 たんぽぽのみが、小人になってとんで
いました。
三九七 小人のようだった おひめさまは、三月ほ
どのあいだに、すくすくとせいがのびて、
こびとたち 「小人達」(名) 2 小人たち
六四二 書いても書いても書きたりぬ、わたしの
心の小人たち、いつもでてくる小人たち。
六四三 〇 いつもでてくる小人たち。
こひやくねん 「五百年」(名) 1 五百年
一三三九 〇 これは、いまから五百年ほど前に、イ
タリアのラファエルという画家のかいたもので、
こひやくメートル(名) 1 五百メートル
八五三 五百メートルほどさきに、ひきあげてある
小船がある。
こびようき 「御病氣」(名) 2 ご病氣
八四四 王さまは、ご病氣をなさって長いことお苦
しみになりましたが、
八四五 どうしたら王さまのご病氣をおすことが
できるかと、相談をはじめました。
ごぶさた・する 「御無沙汰」(サ変) 1 ごぶさたす
る 《一シ》
九三二 先生とみなさんへ 長らくごぶさたして

います。
こぶし 「華」↓にぎりこぶし
こぶし 「辛夷」(名) 1 こぶし
五四四 〇 私のすきな花は、こぶしの花です。
こぶた 「子豚」(名) 1 子ぶた
九二七 〇 こがらしや子ぶたのはなもかわきけり
こぶね 「小船」(名) 2 小船
八五三 五百メートルほどさきに、ひきあげてある
小船がある。
八五七 小船にいきついて、それにもたれて、いま
歩いてきた足あとをみると、
コペルニクス 「人名」 2 コペルニクス
一三三九 〇 これを最初にいいたしたのは、十六世紀
の中ごろに死んだ、ポーランドのコペルニクスと
いう人です。
一三三九 コペルニクスのいったとおり、天は動く
ものではない、地球が動くのだということを、
ごへんじ 「御返事」(名) 1 ごへんじ
一三三九 そののち、みかどからたびたび お手紙
をくださったので、かぐやひめも、そのた
びにごへんじをさしあげておりました。
ごぼう 「牛蒡」(名) 3 ごぼう
八六〇 みずうみの岸の、ごぼうのはえているとこ
ろに、一わのあひるがすわっていた。
八六八 あくる日はいいお天気で、太陽は、ごぼう
の上ををらしていた。
九三九 〇 ちよまの根は、ふといごぼうのようで、
こぼす 「零」(五) 3 こぼす 《一シース》
六三九 〇 ぼく、もう帰れないんだ。」なみだをばろ
ぼろこぼす。
一五三六 〇 電車もなみだをこぼしています。
一五四九 〇 「電車もなみだをこぼしています。」

といった、しゃしゅうさんのことばを
こぼれお・ちる 「零落」(上一) 1 こぼれおちる
《一チル》
六三七 「の」の字のはねたさきから、雨だれのよ
うななみだがこぼれおちる。
こぼれる 「零」(下二) 2 こぼれる 《一レ》
七四四 〇 道に、麦がこぼれていたからです。
九三六 〇 まっかな、かわいらしい山いちごの実が、
こぼれたように雑草の中にありました。
こま 「独楽」(名) 1 こま
三三三 〇 こまのようにまわる。
こま 「胡麻」(名) 1 こま
二一七 〇 ちくおんききしゃしゃしんややさしい
なごこままつつくえ
こまい 「五枚」(名) 2 五まい
一四五 〇 ほん一さつ、ちょうめん二さつ、いろが
み五まい、くれよんひとはこ、
一五八 〇 たばが十あって、五まいあまりました。
こまか 「細」(形状) 4 こまか
一三三 〇 庭の木に小鳥がくれば、《略》、羽の色や、
形などを、こまかにしらべたいのです。
一三九 〇 楽しかったさままなことが、こまかに、
この文の中にたたみこまれているにちがいない。
一三三 〇 自分で望遠鏡を組みたてて、それで天体
を観察し、数学でこまかに計算した結果、
一五四 〇 ローマ字をつかうと、《略》、発音のこま
かなところまで書き表わすことができて、
こまかい 「細」(形) 6 こまかい 《一イーク》
一四四 〇 えんとつからすがとぶように、黒い、
こまかいものがとんでいる。
一四六 〇 いねがよく根をはって育つように、《略》、
土のかたまりをくだいてこまかくしました。

九127 たいこを、ひくく、ごまかくつづけてうち鳴らすのであるが、

十四325 けれども、星をごまかく観察したことから、農業が進歩したのです。

十四626 よく氣をつけて見ていると、だんだんに、

いろいろのごまかいことが目につき、

十四645 ふつうけんび鏡でも見えないほどの、たいへんごまかいちりのようなものです。

ごまかす (五) 1 ごまかす 《一サ》

十一4511 すこしぐらいのことだからといって、ごまかさなかつた弟よ。

ごまごま 「細細」(副) 2 ごまごま

十四62 幸吉は、《略》エジソンのもとをたずねて、養殖眞珠のつくりかたを、ごまごまと話した。

十四856 一ひらの雪によつて、はるかに高い天空のようすが、ごまごまとわかるとすれば、

ごまつ 「小松」(名) 1 小まつ

九10611 みると、大きなうさが、ちょうど小まつの中へとびこんだところであった。

ごまりは・てる 「困果」(下) 1 困りはてる 《一テ》

十二579 昔、神山のおくにおにが住んでいて《略》田や畑を荒らすので、村の人たちは困りは

て、

ごま・る 「困」(五) 33 ごまる 困る 《一ツ・リ・ル》↓おこまる

一232 「みんな かわいい ことりになつて」のところは ごまりました。

三237 《困》 日があたらないで、ごまつたものだ。

三294 日かげになつてごまつていたたくさん

の村々は、

四431 《困》 きみ、きみ、じぶんかつてに早くとん

で いっちゃあ ごまるよ。

五1091 近所の人たちは、まいにち、ごまつた、ごまつたといつていました。

五1091 ごまつた、ごまつたといつていました。

八843 《困》 つりばりをとられた。どうしよう。困つたな。

六874 《困》 つりばりは魚にとられてしまふし、にいさんにはしかられるし、困つてないでしたのです。

六9211 《困》 兄のだいじなつりばりなので、私も困つてしまいました。

六1345 うさぎさんたちは、困つてしまいました。

七363 私は、ほんとうに困つてしまいました。

八426 《困》 困つたことになつてしまった。

九6010 《困》 じつは、おとといからめんどうなあらそいがおこつて、ちよつと裁判に困りましたので、

十74 フランスのいなかへいったときは、子どもが大ぜい、めずらしそうについてきて困りました。

十710 こんなにうるさくついてこられたときには、おとうさんも困りましたので、

十151 この少年の間には、ちよつとおとうさんも困りました。

十342 いまのようなぬの織りかたをしていたのでは、やがて、困るときがくるにちがいない。

十718 《困》 これは困つた。

十一196 村の人たちが困つて頼みにくると、氣持よく、物をわけてやつたり、

十一1912 いつのまにかびんぼうになつて、その日のくらしにも困るようになりました。

十一241 《困》 おちちはつて困るの。

十一297 この一びょうをもとにして、困っている人にかしてやつたり、

十二71 《困》 雨で困っております。

十二2310 さつまいもや野菜を作つたりしていたので、さしあたり困ることはありません。

十二638 また人にみられるのもこまる。

十二7411 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重いの、二三日は困ることもあります。

十三107 しかし、よいといった方角へ移つて困つた人もあれば、

十三584 《困》 色のあるのは、その点はよいが、すり

がうまうまいから、また困る。

十四795 ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもとか、わからないことでした。

十四1006 そうして、おばあさんが見えなくなつては困ると思つたので、

十五508 《困》 よし、どんなにお金に困つても、どんなに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。

十五927 《困》 でないと、いまに困ることになるから

十五9911 知らないなんて、そんなことあるもので

すか。」チルチルすこし困つて、「《略》。」

ごまんぞく 「御満足」(形状) 1 ごまんぞく

五745 《困》 「女王さま、これで、あなたもごまんぞくでございますよう。」

ごまんば 「五万羽」(名) 1 五万ば

九229 二十六日 汽車で 五万ば

ごみ ↓ひとごみ・みごみ

ごみ 「塵」(名) 2 ごみ

八1082 こんどは、もみごみをわけました。

八1083 風のくる場所で、目の高さぐらいのところからごみをふきとばさせます。

こみあ・げる 「込上」(下) 1 こみあげる 《一ゲ》

八891 そうして、なんだかなしい思いがこみあげてきた。

こみいりすぎる 「込入過」(上一) 1 こみいりす

ぎる 《一ギ》

十四169 罎 すこしこみいりすぎているとお考えではないかと心配していました。

こみち 「小道」(名) 6 小道 ↓ たのしいこみち

五203 しげた竹やぶの小道をとつたり、ず

しい川のきしを走ったりしました。

五472 いつも通るこの小道、たのしい小道だ。

五473 いつも通るこの小道、たのしい小道だ。

五484 いつ通っても、いつもたのしい、この小道。

九494 いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷

川にそった小道を、上の方へ登っていきました。

十二368 すいかずらのあまいにおいにひかれて、

庭の小道をおりていきました。

こむ 「込」(五) 2 こむ 《一》 ↓ いりこむ・う

ちこむ・おしこむ・おちこむ・おもいこむ・おりこ

む・かけこむ・かんがえこむ・きりこむ・ころがり

こむ・さしこむ・しのびこむ・しまいこむ・しみこ

む・すいこむ・すみこむ・すわりこむ・せきこむ・

たたみこむ・つつこむ・つみこむ・とけこむ・とび

こむ・ながれこむ・なげこむ・にげこむ・のぞきこ

む・のみこむ・のりこむ・はいりこむ・はめこむ・

ひきこむ・ひきずりこむ・ふきこむ・ふさぎこむ・

ふみこむ・まいこむ・まよいこむ・もぐりこむ・わ

りこむ

五215 あまりこんでいましたので、みんな、ぶつ

ぶつとごごとをいいながら、出口の方へでいき

ました。

五234 罎 あかね、帰りの電車はともこんでいた

んです。

ゴム (名) 3 ゴム ↓ けしゴム

四421 ゴムのように のびる ことも あるし、

きゅつとちぢむ ことも ありました。

十四209 クレヨン、ペン、ナイフ、ゴム、ランド

セル、ピアノ、オルガン、パイオリン、

十四2310 罎 ゴム、ランドセル、コーヒー、コレラ、

アルコールはオランダ語、

こむぎ 「小麦」(名) 2 こむぎ

十一396 罎 おおむぎ・こむぎの種まきすんで、そ

らまめ・えんどうみなました。

十三248 こむぎ・さとうだいこんなど、北ヨー

ロッパ産の農作物で、できないものはない

こむぎこ 「小麦粉」(名) 1 こむぎこ

十一479 うちではバターもつくったし、こむぎこ

で、おいしい、やわらかいパンもやいた。

ゴムぐつ (名) 1 こむぐつ

二205 かぜゆきあめかさまんとこむぐつく

つした

こむし 「小虫」(名) 1 小むし

十一559 罎 すずむし、小むし、チックタック時計

一つ一つひびく。

ゴムまり (名) 1 こむまり

二4510 罎 手の上にこむまりをのせているね。

こめ 「米」(名) 5 米 ↓ おこめ・ここめ・なまご

め

三2810 そののち、はやとりは、たくさんのお米や、

麦や、豆をつんで、海をわたりました。

四688 子がおこ米かむ、かも米かむ。

八1094 どんどんすっていたら、こんどはすぐには

げましたが、くだけた米もできました。

十一295 すると、秋の終りには、一びょうあまり

の米を自分のものにすることができました。

十一2910 三年めには、二十びょうの米をとること

こめいれ 「米入」(名) 1 米入れ

十二7410 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重

いので、

こめる 「込」(下一) 8 こめる 《一メ》 ↓ たちこ

める・とじこめる

十一317 罎 青い空にはかすみがかめて、ひばりは

朝から大うかれ。

十二896 感謝の心持をこめていうときと、ただと

おり一ぺんのあいさつとしていうときとは、

十二9010 太郎はこの「くりひろい」の中に、さま

ざまな氣持をこめているにちがいない。

十五311 その石を取るが早い、胸をめが

けて、全身の力をこめて投げつけました。

十五5010 「略」と決心し、いよいよこのしこ

とに熱情をこめた。

十五527 眞心こめて教えてくださった世界的魚類

学者デビッド・スター・ジョルダン博士は、

十五741 老博士は、きょうに乗じて、アメリカの

考えかたについて熱意をこめて語られた。

十五754 力をこめてさげながら、

ごめん 「御免」(名) 5 ごめん

二4210 罎 たろう「ごめんね。」

二431 罎 山びこ「ごめんね。」

四643 罎 いままでのわがまま、ごめんね。

八5110 「幸福」は、さっそくごめんをこうむりま

した。

八536 「幸福」はまた、その家でもごめんをこ

うむりました。

ごめんください 「御免下」(感) 2 ゴメンクダサイ

十494 罎 ゴメンクダサイッテ——ハイッテクノヨ

十5210 罎 「ゴメンクダサイッテハイッテクノヨ」

と、おとなびたことをいいました。

ごめんくださる「御免下」(五) 1 ごめんくださる「イ」

十五93 6 園 ごめんくださいまし。

ごめんない「御免」(感) 1 ごめんない

十二21 10 園 ごめんない、こおろぎさん。

こもみ「小縦」(名) 5 小もみ

十三21 7 アルプス産の小もみを移植してみたらどうか、ということでありました。

十三22 5 アルプス産の小もみを植えたので、かれのはふせがれましたが、

十三23 1 園 大もみがある大きさ以上に生長しないのは、きっと、小もみをいつまでも、大もみのそばにならべておくからです。

十三23 3 園 もしある時期になって、小もみを切りはらってしまったら、大もみは土地をひとりじめして、生長するにちがいありません。

十三23 7 小もみは、ある大きさまでは、大もみの生長をうながす力をもっているが、

こもり「子守」(名) 2 子もり

九26 4 園 子もりするしずかなる月なの上に

十二25 3 学校から帰ってくると、わたしは民ちゃんの子もりをひき受けます。

こもりうた「子守歌」(名) 5 こもりうた 子もりうた 子もり歌

一26 2 こもりうたがきこえます。

七41 10 青年は、つづいて日本の子もりうたをひきはじめた。

九129 2 子もり歌もきこえます。

九129 2 くもは、その子もり歌を耳にしながら、光る星をみあげていました。

九130 5 あかちゃんなき声も、子もり歌もきこえ

ませんでした。

こもる「簞」(五) 6 こもる「一ツ」↓とじこもる

八29 6 その目といい、ふえの音といい、申しぶんのないけだかさがこもっています。

九5 9 オルガンで一つの音だけひいてきいても、その音には、ある感じがこもっているものです。

十一78 4 あたたかい愛情のこもったことばで、しっかりするようにと病人を上げました。

十二16 1 日のあたるところ、かげになったところ、力のこもった角、まるみのある面、

十二83 11 ボールはたましいのこもった生きもののようになつて、はねとびました。

十四5 3 フィリップの作品の中には、〈略〉強い眞実の力が、こもっているのです。

こもれば「木漏日」(名) 1 木もれ日

十三5 5 春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ日のしめ目にもちらちらとして、

こもん「御門」(名) 1 ご門

四107 4 園 あれがりゆうぐうのご門でござい

す。

こや「小屋」(名) 12 小屋 ↓うさぎこや・うまこや・すみやきこや・とりこや・ますこや・やぎこや

七92 2 小屋からだすとき、みんな喜んですぐでま

したが、

七92 4 小屋へ頭をいれて、だきあげて、そとへだ

しました。

八47 7 そまつな一けんの小屋がありました。

八47 7 その小屋のそばを通りかかったときでした。

八48 7 「略」と喜んで、つかつかと小屋の中

へはいっていききました。

八76 9 くれがたになつて、あひるの子は、ある小

さなひやくしよの小屋へやってきた。

八76 9 小屋はひどくあれていて、どっちにたおれるかわからなかった。

八77 5 あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあ

いているのをみつけたので、

八91 1 生まれがはくちようのたまごであつてみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。

十35 11 佐吉は、一けんの小屋に閉じこもつて、

いっしんに考えぬき、

十一41 2 園 ふもとの小屋はみぞれして、うらの山

には白雪つもる。

十二36 4 ふたりは、いどの小屋をおおっているす

いかずらのあまいにおいにひかれて、

こやし「肥」(名) 1 こやし

五63 1 園 こやしをやつたり、手をやつたりした

じゃありませんか。

こやぶ「小藪」(名) 1 こやぶ

三56 6 園 うたを わすれた カナリヤは、せどの

こやぶに いけましょか。

こやま「小山」(名) 2 小山

四68 4 うらの小山の 小いけに 子が 二百ば、

こ米が一びょう、

十三7 5 からすの声も、〈略〉、白雲をかたにま

とつた小山をめぐつて、聞えてくる。

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

こ

十四 102 2 小雪の降った元日の朝、人々が、マツチ
賣りのむすめの〈略〉なきがらを見つけたとき、

こよい 「今宵」(名) 1 こよい

十一 36 8 夕風ふけたいこ鳴り、清い歌声あち
こちと、こよい楽しいぼんおどり。

こよう 「御用」(名) 5 こよう

十四 130 4 天人のはごろもと申しまして、あなた
がたには、ご用のないものでございます。

六 92 3 になにかご用でございましょうか。

六 96 4 になにかご用でございましょうか。

十四 15 4 1 おかあさんがご用でしたら、いつでも
とんで行きます。

十五 58 1 それはおやすいご用だ。

こよみ 「暦」(名) 1 こよみ

十四 32 6 こよみが作られたのです。

こら 「子等」(名) 2 子ら

九 117 5 文 1 たびのこしのめしつぶまけぼうちつど
うすずめの子らと日なたぼこする

十五 9 3 文 1 はまの子ら火をたく青き月夜となり

こら (感) 4 こら

三 79 8 1 「こら、雨、あっちへいけ。」

六 139 7 1 「こら、うさぎども。」

六 141 1 1 「こら、まで。」という、それこそかみ
なりのような声がひびきました。

十五 92 9 1 こら、チロー。

こらえる 「堪」(下) 2 こらえる 《一エ》

九 59 3 1 いちろうは、おかしいのをこらえて、
「略」とたずねますと、

十二 106 6 1 うさぎはけんめいにこらえましたが、た
おれそうです。

こらす 「蘇」(五) 1 こらす 《一シ》

十三 4 7 1 まるで、息をこらししてしずかにしている、

子どもたちのむねのように。

こらん 「御覧」(名) 46 こらん

二 9 3 1 先生が、それをこらんに なって、
「略」とおたずねになりました。

二 34 7 1 じゃあ、さわってこらん。

二 42 9 1 いてこらん。

二 45 2 1 くちばしをこらん。

三 67 7 1 じゃあ、雲をみてこらん。

三 67 8 1 そうして、風がどちらへふいて
いるか、みてこらん。

三 70 4 1 「あれ、あれこらんよ。」

三 71 3 1 「つまんでこらん。」

三 71 9 1 「では、はいてこらん。」

三 74 7 1 1 まどからのぞいてこらん。

三 84 5 1 「こらんよ。」といました。

三 107 4 1 家にはいてこらんに なると、光の中
にきれいな おひめさまがすわっています。

四 113 9 1 1 では、にぎやかな おどりを、こら
んに いれましょう。

五 11 9 1 1 ほら、あそこをこらん。

五 17 9 1 1 このわたしのをこらん。

五 57 3 1 1 「あわてないで、しずかにこらん。」

五 60 5 1 1 あとで写生してこらん。

五 64 11 1 1 さあ、考えてこらん。

五 91 4 1 1 「それ、このたけのこをこらん。」

五 92 4 1 1 みんな、もつとまえへでてこらん。

六 44 2 1 1 ほら、みてこらんよ。

六 53 7 1 1 でもね、雲をじつとみていてこらん。

六 54 6 1 1 ここへきてこらん。

六 54 9 1 1 「ここに立って、お月さまを枝のあいだ
からみてこらん。」

七 21 4 1 1 とまっているちょうちが、どんなかっ

こうをして、みつをすうか、よくこらん。

七 22 7 1 1 しずかにして、みていてこらん。

八 32 5 1 1 天帝は、このようすをこらんに なって、
「略」とおっしゃいました。

八 64 4 1 1 どれ、たまごをみせてこらん。

八 81 6 1 1 ねこにきてこらん。

八 81 8 1 1 うちのおばあさんにきてこらん。

九 119 7 1 1 この水を飲んでこらん。

十 21 10 1 1 「こらん、にじがでているよ。」

十一 62 12 1 1 それ、こらん。

十二 44 3 1 1 さあ、人形にきてこらん。

十二 48 11 1 1 お友だちとやってこらん。

十三 4 2 1 1 こらん、まだこのかれ木のままの、高い
けやきのこずえの方を。

十三 54 10 1 1 だから、この絵も、本物をこらんに なっ
ているだろうと、思ったからです。

十四 79 8 1 1 水になげこんでこらん。

十五 62 8 1 1 「満ぼう、なにが氣にさわたたの、お
ばさんにいてこらん。」

十五 68 12 1 1 あれをこらん。

十五 69 5 1 1 「つくえの上をこらん。」

十五 70 6 1 1 「そのいすにこしかけてこらん。」

十五 71 1 1 1 そのペンをにぎってこらん。

十五 71 3 1 1 このすがたをおじさんがこらんに なっ
たら――

十五 92 5 1 1 おや、光さん、こらんよ。

十五 98 11 1 1 こらん、もう行ってしまった。

こらんなさる 「御覧」(五) 24 こらんなさる 《一
イ》

二 5 9 1 1 お友だちの なを かんがえて、こらん な
さい。

二 6 5 1 1 よく かんがえて こらん なさい。

十四
70
7

夕ごはんのおぜんの上でもやれますから

した。三年生も、これで
べんきようし

五三六会
の本をだして、『これには、きみのよう

十412 ただしく発生した。これは、ある小さな生
 十415 な死んでしまった。これは、まったく考え
 十412 の真珠を発見した。これは、まえにさしい
 十429 ったので、ひとまずこれを加工して、かざ
 十447 とを発見した。「これで成功しなければ
 十482 いかと思いました。これは、足がおそいと
 十714 した。「ほんに、これは上等の黒ざとう
 十718 しまいました。「これは困った。だんな
 十788 でいく。ぼく、これがうれしんだよ
 十838 に進んでいく。これこそ、いちばんり
 十187 三 二宮金次郎 これから、私の調べた
 十221 ことにしました。これを持って、朝早く
 十226 「おじさん、これをはいてください
 十239 ねえ、金次郎、これでわたしも、じゅ
 十291 実がつきました。これを油にかえて、本
 十689 ンをあけて、「これが、きみのおとう
 十6911 かわるものか——これが父親であろうと
 十833 た。「チチロ、これはいったいどうし
 十875 「わたしは、これからすぐにうちへ
 十916 があります。これを病院の記念に持
 十53 ざわいました。これをきいたコロンブ
 十512 「みなさん、これも人のしたあとで
 十1411 がなかった。「これをとりかたづけて
 十156 てしまった。「これは、こおろぎの果
 十166 をぬりはじめた。これは、絵のすきだっ
 十186 した。はあ、これが鳴るんだと思
 十2710 「民ちゃん、これ持って学校へいき
 十397 ました。(二) これは、ヘレン・ケラ
 十424 までなりました。これは、ケラーのサリ
 十469 がつけてある。これに光をあてて影絵
 十482 形しはいだが、これは人間にできない
 十5210 、図の形に切る。これを二まい作る。(2)

十二581 できなかつたら、これからのちは、けつ
 十二584 あった。おには、これを承知して、ある
 十二594 キロの湖がある。これが湖山の池である
 十二715 てもらえるので、これがなによりうれし
 十二784 た。少年たちは、これを見て、うれしそ
 十二926 いる。ほかの人がこれと同じ文を書いた
 十二947 である。ところがこれを読んだ人々の心
 十二972 眞帳でしょうか。これを見て、どんなこ
 十二999 土器もあります。これは、食物をいれる
 十二1021 をごらんさない。これを見て、平和を
 十二1033 はじめてのお金。これは、千二百年ほど
 十二1042 。ほうおう堂。これは、九百年ほどま
 十二10510 いのもあります。これは、平安時代の町
 十二1071 だれた秋の野原。これは、鳥羽僧正とい
 十二1089 のです。能面。これは能につかうお面
 十二1096 いたお話ですが、これをキリスト教の宣
 十二1105 まき絵書だな。これは、茶だんすにに
 十二1124 です。解体図。これは、オランダのタ
 十二1137 はありませんか。これは、汽車第一号で
 十二1152 しまいのことば。これで、日本の面影を
 十二1153 ってきた日本を、これからどうもりたて
 十二810 する。そうして、これをいくどもくり返
 十二1312 が出てきました。これを最初にいいだし
 十二145 「そういう星——これをわく星といま
 十二155 りをまわります。これで、夜と晝とがあ
 十二183 どおりにするか、これが、デンマルクの
 十三196 のあれ地と戦い、これを豊かな土地にし
 十三1910 土地であります。これをこえた土地とす
 十三206 しまったのです。これを生かすのは、み
 十三2011 木でありました。これなら、ユートラン
 十三214 ルガスの誠実は、これがためにくじかれ
 十三218 とでありました。これをノルウェー産の

十三227 が、その生長は、これによつてはたされ
 十三2910 いかけ屋が来る。これも、いろいろな道
 十三313 うように聞える。これを聞きつけて、子
 十三3511 をにぎわわせる。これは、はとにふえを
 十三445 です。それでは、これはしばいではない
 十三446 、そうではなく、これでも、しばいにな
 十三539 あります。「これは、いまから五百
 十三541 われていきます。これを見て、どう思い
 十三564 されました。「これでも、本物にくら
 十三592 さいました。「これは、ドレスデンの
 十三593 いわれている。これはどう思うかね。
 十四125 ためなのです。これは、私の友だちで
 十四1510 。おかあさん、これからたびたび手紙
 十四177 なら。きょうはこれでお話をやめます
 十四1810 略。」といった。これを聞いていた野村
 十四224 「先生、私は、これはみんな、日本語
 十四256 思った。だから、これからのちも、新し
 十四294 もしれませんが、これはけつしてそうい
 十四3010 はしばらくおき、これからの人の心がま
 十四316 。あなたがたは、これからの日本にとつ
 十四356 はありませんか。これを思えば、人間の
 十四6210 がたっています。これは、いうまでもな
 十四638 がついています。これは、白いうす雲が
 十四656 よう。もちろん、これは、まわりの空気
 十四659 うずができます。これがまた、よく見て
 十四6610 ぼつていきます。これとよくにたうずで
 十四687 鳴ったりします。これは、茶わんのぼあ
 十四693 。だから、どれもこれもみんな、茶わん
 十四703 がつくでしょう。これは、夜、電燈の光
 十四717 になるわけです。これは、湯の中にうか
 十四726 てできてきます。これに日光をあてると
 十四761 むきがあります。これがあまりはげしく

十四762 ことになるのです。これと同じような氣流
 十四766 がふいています。これと同じようなこと
 十四767 けられています。これが、もうひとまわ
 十四7612 すが、ここでは、これくらいにしておき
 十四779 した。私はすぐにこれをためししてみまし
 十四793 た。木のほうは、これと反対に、もとの
 十四7911 へんちがいます。これは、ちょうど、「
 十四915 。その男の子は、これは人形のゆりかご
 十四956 ように思われた。これは、ま法のマツチ
 十五153(文) だみればこれかきりめこのぼらの
 十五196 フラウの山です。これは、富士山よりは
 十五347 ければならない。これは、記おくのため
 十五3511 ビアあたりにも、これにいた文字があっ
 十五3512 絵文字から起り、これがだんだん変わっ
 十五4411 した。「いや、これは失礼しました。
 十五466 からである。「これは賣りものですか
 十五4611 「いいえ、もうこれだけです。」「略
 十五482 絵屋もあつたが、これははん主からゆる
 十五499 わずかに外國人がこれに目をとめて買う
 十五507 である。「略」。これを耳にした今右衛
 十五598 っ、て、「おや、これはまた意外だ。じ
 十五5911 きようは、もうこれではごとはやめだ
 十五6311 た。「満ぼう、これでどうだ。おじさ
 十五649 ら、「満ぼう、これか。」と、にこや
 十五6512 ねた家の書生が、これから車のついたも
 十五681 つるしてあつて、これでたけというよ
 十五769 れた。そうして、これが新島からならっ
 十五8212 とも口をきかず、これも、右手の方のお
 十五875 たししましょう。これが、わたしのむこ
 十五876 をしています。これが『みたされたき
 十五8712 おじぎをする。』これは『なんにも知ら
 十五895 るところですよ。これでけさから十二ど

十五1017 よ。それから、これはみんな、『おう
 十五1028 かるでしよう。これは、『清い空氣の
 十五1029 おつています。これは、『両親を愛す
 十五10212 ないからです。これは、『青空の幸福
 十五1031 着ていますし、これは、『森の幸福
 十五1033 れます。また、これは、『ひなたの幸
 十五1034 着ていますし、これは、『春の幸福
 十五1038 がたになると、これが、『日ぐれの幸福
 十五10311 氣が変わると、これが、『雨の幸福
 十五1047 す。それから、これは、いや、まった
 十五1102 幸福といつて、これほどの幸福は、世
 十五1111 の愛、いいえ、これは、おまえたちの
 十五1135 あ。それから、これもおかあさんの手
 十五1146 のだよ。さあ、これで、おまえたち、
 十五1151 って来たのは、これから下へ帰ってか
 十五1215 あれもいいたい、これもいいたいと思っ
 十五1221 て生きていけ。これがこの級の最後の
 十五1223 これ(感)3 これ
 八73 「これ。」としかつたり、
 十一836 これ、チチロ。
 十一838 わたしは、これのことおり、すっかり
 十一838 じょうぶになったよ。
 十一838 これあり「之在」(ラ変)1 これあり 《ール》
 九714(手) これからは、用事これあるにつき、
 九714 明日出頭すべし、と書いていいでしょうか。
 九714 これこれ(感)3 これこれ
 二4110 これこれ、たろう。
 四975 これこれ、どうしたのだ。
 七263 これこれ、そんなこと。
 七263 これはこれ(感)1 これはこれは
 四1168 これはこれは、おみやげまで いただき
 まして、ありがとうございます。

コレラ(名)3 コレラ
 十四2110 チフス、コレラ、マラリア、トラホーム、
 アルコール、ガーゼ。
 十四2311 ゴム、ランドセル、コーヒー、コレラ、
 アルコールはオランダ語、
 十四264 コレラは、オランダ医学がいつてきた
 ときに、(略)傳わってきたことばであらう。
 これら「此等」(代名)7 これら
 六62 ねじは、これらの道具や時計をあこれと
 みくらべて、
 六1094 すると、これらははなからでる音なのだろ
 う。
 六1125 「メ」、「モ」といつてみたら、これらもは
 なの音であることがわかった。
 九144 くもは、これらのことを一つ一つ思いだし
 ているうちに、
 十三1012 日本には、毎年、約二百万人の人が生ま
 れるが、これらの人がみな同じ性質をもち、同じ
 運命をたどるとは、考えられない。
 十四232 それでは、これらのことばは、もとは
 どこの國のことばだったのだらう。
 十五355 ぼうきや、石や、貝がらなどに、はも
 のなどであるしをつけてしめすことも行われた。
 これらの表わしかたとともに、
 ころ ひいしころ
 ころ(頃)(名)56 ころ ひいまころ・おひるご
 ろ・おわりころ・ごよじころ・このころ・さんじ
 ころ・ちかごろ・てごろ・なかがごろ・ひごろ・ゆき
 だけごろ・ろくじころ
 三1091 ある年の春のころから、月のきれいな
 ばんになると、かぐやひめは、空をながめては
 ためいきをつき、

- 四八〇 〇 も—ものの花の さくころ。
- 五四三 〇 一日じゆうてつだいをして、うちに帰るころは、もう、あたりはくらくなっています。
- 五七四 〇 それから一週間もたったころ、おばあさんは、おじいさんをよんでいいました。
- 五九六 〇 夏休みがすむころには、ひなはもう、かごの中をとびまわっていました。
- 六二六 〇 雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近いころ。
- 六二七 〇 でも、夏のころはあつくてたいへんだった。
- 八二〇 〇 七年の月日がたったころ、せみの子たちは、
《略》 大きくなりきったことを知ります。
- 八二四 〇 明かるい光がさつとさすころになると、せみの羽は、ぶるぶるとふるえて、
- 八九八 〇 田植えのころになったので、しろかきをしました。
- 九二四 〇 そのころ、オーストリアは第一次世界大戦のあとで、
- 九二五 〇 オーストリアは第一次世界大戦のあとで、まだそのいたでがなおっていないころでした。
- 九四一 〇 ぼくたちがこの村へきたころは、湖には美しい白さがたくさんまいおっていました、
- 九四四 〇 かきの色づくころ、畑のいもをほりおきました。
- 九四三 〇 セドリック少年のように、子どものころから、世の中のことに注意を向けるように
- 九四六 〇 セドリックは、七つ八つのころでも、せんきよのことを話していますけれども、
- 九四九 〇 十のころであった。
- 九五二 〇 あのときとげしたいががわれて、じゅくじゅくの実の落ちるころでしたから。

- 九五九 〇 ちょうど、プラタナスという木の葉が黄色くなるころで、
- 一〇三五 〇 たまたま、そのころ、東京にはくらん会が開かれた。
- 一〇四四 〇 そのころ、幸吉は、すでにしらがの老人になつていた。
- 一〇五五 〇 思うことがどんどんと書いていたまえのころが、うらやましくさえなりました。
- 一一二〇 〇 金次郎が十二のころです。
- 一一三三 〇 かきのわか葉に日の照るころは、
- 一一四六 〇 あの山のすがたが、小さいころのことを、いろいろと思いださせる。
- 一一八二 〇 孟子がまだ子どものころでした。
- 一二一四 〇 夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいたかれ草が、すっかりくちていた。
- 一二二四 〇 文雄さんがりっぱな絵かきになるころは、わたしも、ずっと大きな木になって、
- 一二四六 〇 あやつりは《略》、おじいさんの子どものころ、よくみたものだ。
- 一二四六 〇 あのころは影絵もあったよ。
- 一二五二 〇 そのころまで、人間のからだはどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、
- 一二五八 〇 そのケブラーと同じころ、イタリアのピサに生まれたガリレオという学者がありました。
- 一二六四 〇 わかいころからいろいろな発見や発明をしました。
- 一三二五 〇 しかし、そのころの教会のぼうさんたちは、天動説を信じていましたので、
- 一三二四 〇 そのころ、ユートランドの農夫のつくった農作物は、じゃがいも・くろむぎ、そのほかわずかのものにすぎませんでした、
- 一三三二 〇 やつと目がさめたころ、遠いところを通

- るその声を聞くのは、
- 一三三三 〇 小さな子どもは、絵も字もわからないころから、《略》、れんをながめている。
- 一三三六 〇 中庭のあんずがさいて、花びらがホートンへちらちらと降ってくるのも、このころである。
- 一三三九 〇 三郎の声が終るころ、しずかにまく。
- 一三五一 〇 おさないころにそうだった。
- 一三五四 〇 わかいころ、世界をまわって来た人です。
- 一三五六 〇 そのころ、《略》 天才の集まっていた、美術の中心のフロレンスで、
- 一四五六 〇 おさないころから、人の世の苦しみをいろいろとなめていたからのことでした。
- 一四五二 〇 話は明治初年のころにさかのぼる。
- 一四五五 〇 プリンクリーが、日本政府から頼まれて《略》 やつて来たのも、そのころのことであった。
- 一五五二 〇 話は、第一次世界大戦がたけなわであったころのことである。
- 一五五二 〇 そのころ留学生としてアメリカのスタンフォード大学に学んでいた私は、
- 一五五九 〇 きょうはきみがまだ生まれないころの日本の話をさせてもらおう。
- 一五五五 〇 私が日本をおとずれたころは、西洋の文化をとり入れることがさかんなときで、
- 一五五五 〇 そのころ日本をたずねた外人の中で、
- 一五五六 〇 アマスト大学の助手をつとめていたころ、寄宿舎で二間続きの室をつかっていた。
- 一五五七 〇 そのころ、もう熱心なクリスマスチャンになっていたが、
- 一五六一 〇 そのころ、新島のおじいさんがどんなにえらいかたであるかを知らなかった私は、
- 一五五七 〇 秋たけてりんごのみのるころ、おじいさんとおばさんは京都へひきあげられたが、

十五66 11 そのころは、新島のおばさんは廣島^{ひろしま}におられて、

十五73 8 ちょうどそのころは眞夏であつたので、

ごろう (人名) 11 ころう

六70 2 ころうは、妹のはるえといっしょになって、

大きな雪だるまを作りました。

六72 4 その日、晩ごはんをたべながら、ころうは

こんなことを考えました。

六72 11 ころう、なにを考えこんでいるんだね。

六74 11 たとえ動いても、それだけでは命があると

はいえないと、ころうは思いつきました。

六75 3 「略。」ときかれて、ころうは、「略。」

と答えました。

六76 4 ころうは、「略。」といいながら、この手

が動かないから、やはり雪だるまは命がないのか

なと思ひました

六76 8 ころうが学校で、「略。」

六77 11 風や、自動車や、水車は、動いていても息

をしないから、命がないんだと、ころうは考えつ

きました。

六78 1 その夜、ころうはおとうさんに、この考え

ついたことを話しました。

六78 11 ころうは、息をすることも自分の力ではな

いことをきいて、なるほど思ひました。

六79 9 ころうは、いつか「くくこ」でならつた

「あさがおの花」を思ひだしました。

ころうくん (人名) 1 ころうくん

六76 11 なんだい、ころうくんは。

ころうさん (人名) 7 ころうさん

五54 6 そこへ、となりのころうさんが、かけよっ

てきて、「略。」

五55 10 ころうさんをさそつて、はるおといっしょ

に、学校へいきました。

五58 1 ころうさんにおみせなさい。

五58 4 まだみていたようでしたが、やつと目を

はなして、ばんをころうさんにゆずりました。

五58 9 ころうさんは、「略。」といひました。

六74 2 ねえ、ころうさん。

六78 7 ころうさん、あなた、ねむつてしまつ

たら動かなくなるでしょう。

ころがす (転) (五) 6 ころがす 《シーン》

四96 7 ころがす このかめをころがして あそぼう。

四96 8 ころがす みんなでころがそうよ。

四97 2 よいしょ、よいしょ。」かけ声をかけなが

ら、みんなでかめをころがします。

四97 6 ころがす おもしろいから、かめをころがしてい

るのです。

四98 8 ころがして あそぼうよ。

五57 小石をころころ、ころがして、いわの上か

らとびおいて、略、川は山からかけおる。

ころがりこむ (転) (五) 1 ころがりこむ 《一

ン》

六128 11 トンネルのさか道に足をすべらせて、ころ

ころと、下の方へころがりこんでいきました。

ころがりだす (転) (五) 1 ころがりだす 《一

ス》

十三36 7 ふわふわとまるくなつて、風がふいてく

ると、ころころところがりだす。

ころがす (転) (五) 6 ころがす 《一ツ》

五77 5 こわれたおけが一つ、ころがっていました。

五99 3 ひわは、かたのところをけがをして、ころ

がっていました。

六8 6 ねじは、しごと台のあしのかげにころがっ

ていった。

六72 8 死んでいたら、ころがってたおれるわけだ

し、

八15 2 ようちゅうが、略、地面に向かつて、す

べつたりころがたりしておりにきました。

十二73 6 白い小さなつぶつづぶのものが落ちてきて、

略、はね返つたりころがたりします。

ころくせんねん 「五六千年」 (名) 1 五六千年

十五35 9 いまから五六千年ぐらいまえに、アフリ

カのエジプトには、そうした絵文字とよばれるも

のがあつた。

ころくわ 「五六羽」 (名) 1 五六は

四55 4 そこで、目ざといがが五六は、あちこ

ちでみはりばんをしました。

ころげおちる 「転落」 (上) 3 ころげおちる

ころげ落ちる 《一チーナル》

六9 6 ころがす 「こんなところにくるげおちてしまつて、

もし、みつからなかつたら。」

八7 6 あとずさりして、うしろに氣づかず、テー

ブルのはしからころげ落ちたりしました。

九147 3 もがけば、あるいは、つばめのくちばしから

ころげ落ちることができたかもしれせん。

ころげまわす (転) (五) 1 ころげまわす

《一ツ》

八86 11 子どもたちは、あひるの子をつかまえてよう

として、ころげまわつて、わらつたりさけんたり

した。

ころげる (転) (下) 2 ころげる 《一ゲーゲル》

一38 6 しろいこいぬが、むこうからころげるよ

うにはしつてきます。

六136 7 こんどはたおれた木のみきにトンとけつまずいて、

すつてんころりところげました。

ころころ (副) 5 ころころ

五57 小石をころころ、ころがして、

六1210 そこには、くるみの実が、ころころと落ちていました。

六12810 トンネルのさか道に足をすべらせて、ころ

ころと、下の方へころがりこんでいきました。

九436 づつやした大きなかきが、ころころと

二つ三つ落ちてゐるのをみたときは、

十三367 ふわふわとまるくなつて、風がふいてく

ると、ころころところがりだす。

ころころ (副) 1 ころころ

九1258 大きな岩がころころとゆくてをふさぎ、

ころころする (サ変) 2 ころころする 《ーシ》

九1199 水は大きなころころした石ころのあいだか

ら、ブツブツと音をたててわきだして、

十四5412 そこは、暗いところで、土もかたいし、

石ころなども、ころころしています。

ころす [殺] (五) 9 ころす 殺す 《ーサーシ・

ーソ》 ↓ かみころす・つきころす

四394 先生、ありをころそうとしたとき、

にいさんのことばを思いだして、

四396 にいさんのことばを思いだして、ころ

しませんでした。

八131 ころしたのは、もちろんあやまちですが、

八895 みつともないものが、おくめもなく近

づいていくのだから、ころされるかもしれない。

八898 冬じゅうひもじい思いをしたりするより

は、あの鳥にころされたほうがましだ。

八904 かわいそうにあひるの子は、ころされるも

の思いながら、水の上に頭をたれた。

九1315 くもが、じいっと息をころして待っている

十一2711 母親と相談して、戸をしめきって、息を

ころして、だれもないふうをしていました。

十五267 わしが大きなくちばしで女の子の頭でも

つつけば、大けがをするか、殺される心配がある

ころちゃん (名) 1 ころちゃん

二313 ころちゃんが かぞえて みました。

ころと (副) 1 ころと

九1418 くもはからだを小さくまるめて、ころと

横になりました。

ころっば [五六羽] (名) 1 五六ば

九152 夏の終りころ、つばめが電線や物ほしざお

に五六ばぐらいならんでとまっているのを、

ころっぺん [五六遍] (名) 1 五六ぺん

九699 ぎょしゃも、大喜びで、五六ぺん、むちを

ヒユウパチツ、ヒユウパチツと鳴らしました。

ころっば [五六歩] (名) 1 五六歩

十525 五六歩いったかと思うと、

ころぶ [転] (四五) 6 ころぶ 《ーバーピー・

ブーン》 ↓ ねころぶ

六586 一年生の子が、学校にくる道で、はき物に

雪がついてころびました。

七545 あぶなくころびそうになった。

九1097 とちゅうでころんで、雪だるまになってお

きあがるものもある。

十二856 いまにもころびそうになりました。

十四817 ころばぬさきのつえ。

十五3210 大わしは、空中をころぶように、くるく

る舞いをして、《略》落ちて行きました。

ころも [衣] (名) 3 ころも ↓ はころも

四1336 黒いころものそろいで まえば、月

は まっ黒、やみの夜。

は 十五夜、まんまるい。

五884 黒いころもに赤いおび——かわいいよ。

ころりと (副) 1 ころりと

八4811 ひとりの男が、いまにもころりと横になろ

うとしているところでした。

ころんころん (感) 1 ゴロンゴロン

四181 石うすは、ゴロンゴロンといった。

ころんと (副) 1 ころんと

十531 すると、さっきの黒いいぬが、ころんと、

地べたに横になってねそべっていました。

コロンブス (人名) 4 コロンブス

十二43 コロンブスがアメリカを発見して帰った

とき、イスパニア人はたいへん喜びました。

十二47 ある日、祝賀会の席で、人々がかかるが

わる立ってコロンブスの成功を祝しますと、

十二53 これをきいたコロンブスは、つと立って、

テーブルの上のゆでたまごをとり、

十二510 このときコロンブスは、コッソリとたまご

のはしをテーブルにうちつけて、なんの苦もなく

立てていました。

コロンブスのたまご (題名) 1 コロンブスのたま

ご

十二42 コロンブスのたまご

こわい [恐] (形) 8 こわい 《ーイーカッ》

五1082 ちつともこわいことはいから、いっ

しよにあそぼうよ。

六353 おじさん、大風つてこわいな。

六1382 「ああ、こわかった。」

十129 「おお、こわい。」と、ひとりの少女が、

おとうさんをみてそっくりいました。

十131 わたしは、そんなにこわいものではあり

と、

十672 ても、こわいものはかえってみたくなり
す。

十一623 ぼくはくやしくなったので、なに、こ
のくらしいことがこわいものかと、自分からさき
になって渡ってしまったのです。

十五8512 こんどはきつね。こわいことはい
ないよ。

こわいものしらず 「恐知」(名) 1 こわいもの知ら
ず

八102 うちの中にいるかぎり、こわいもの知ら
ずで、

こわがる 「恐」(五) 3 こわがる 《一ツール》

六679 さるは子ぐまをみてこわがって、《略》、木
の上にするするとのぼっていつてしまいました。

八6310 なにしろ、水をこわがるのだから、《略》
はいるようにしてやるのができなかった。

十五11612 顔を見せると、『幸福』たちがこわが
るだらうって、心配しているのですよ。

こわき 「小脇」(名) 1 小わき

十一931 「《略》。」そういつて、少年は、その小
さな着物の包みを小わきにかかえました。

こわす 「壊」(五) 1 こわす 《一シ》

十二384 へやに帰るとすぐ、私は、自分がこわし
た人形のことを思いだして、

こわばる 「強張」(五) 1 こわばる 《一ツ》

八214 皮がこわばっていて不自由だし、目もよく
はみえないらしいので、ねこや、すずめにみつけ
られたらたいへんです。

こわれる 「壊」(下二) 6 こわれる 《一レール》

五676 うちのおけは、もう、すっかりこわれて
しまっているんだもの。

五774 こわれたおけが一つ、ころがっていました。

九798 いらなくなったりこわれたりした道具や、
十一1510 教室の高いところの窓ガラスが、一まい
こわれていて、

十四1117 たぶん、とちゅうでこわれるだろうと
いうことでした、

十四1217 もしこわれたら、そちらでわけなくか
わりをお見つけになれるでしょう。

こんこん (副) 2 こんこん

十二721 雪やこんこん、あられやこんこん。

十二721 雪やこんこん、あられやこんこん。

二451 こんどはきつね。こんこん こんこん
こんざつする 「混雑」(サ変) 1 こんざつする
《一スル》

四710 こんざつする 町かどでは、きちんとせい
りしてくれまう。

こんじき 「金色」(名) 1 金色

十五1081 遠い遠い金色の雲の中に、つま先で
立って、やっと見えるくらしいところにいる人、

コンセテラ 「人名」 1 コンセテラ

十一8310 それから、コンセテラは、それから、
あかんぼうは—みんなどうしている。

こんちゅう 「昆虫」(名) 1 こんちゅう

十四863 一ぴきのこんちゅうをながねんかかって調べ
るのも、

こんど 「今度」(名) 49 こんど

一115 こんどは、あかいたまをかぞえましょ
う。

二312 こんどは、ぼくがかぞえてみよう。

二448 こんどはきつね。

二456 おじさん、こんどは、わたくしがやっ
てみましょうか。

二604 こんど、みなさんが二年生になったら、
あたらしい一年生はいってきまう。

三265 長いあいだかかって、やっと切りたお
すことができました。こんどは、切りたおした

木を、どうするかということになりました。

三7610 こんどはマイクルがたずねました。

四234 いさんは、こんど、いつ おふねから
おかえりですか。

四516 おい、こんどは、ぼくがかわって、か
ついでいこう。

五199 ふくろの中からだされて、ほっとしてい
ると、こんどは、また、かばんの中にいれられまし
た。

五386 こんど、ぼくの受持の子どもたちに、手
紙を書いてもらって、きみの受持の子どもたちに、

それを送ってあげよう。

五4310 それから、まっかなカーネーションです。
そのたねをこんどお送りします。

五753 わたしは女王もいやになった。こんどは、
海のぬしになりたい。

六399 わたしたちのなかまがわるい虫をとって
そだてたいねを、こんどは、あなたがたがまもる
んですもの。

六573 こんど私たちの学級で、かべ新聞を発行す
ることになりました。

六1126 これらはなの音であることがわかった。
そうして、こんどは、アイウエオ、カキクケコか
ら、じゅんじゅんにいつてみたところが、

六1249 「こんどは、なにをしようか。」

六1318 「こんどはなにをして遊ぼう。」

六1366 しかさんがおこって走ると、こんどはたお
れた木のみきにトンとけつまずいて、

七55 白いちようが、〈略〉、光の中をおよいで

たが、こんどは、思いきり高くとんで、

七53 1 ちよつとのあいだに、勝つことができた。

こんどは、さいごの決勝戦だ。

七53 4 ㊦ さあ、こんどがだいじだ。

八51 11 「幸福」は、さっそくごめんをこうむりま

した。こんどは、にわたりのいる家のまえへいっ

て立ちました。

八53 7 「幸福」はまた、その家でもごめんをこ

うむりました。こんどは、うさぎのかつてある家

のまえへいって立ちました。

八57 1 わきみをしたあたりが横にそれている。こ

んどは三どめだ。

八86 9 あひるの子は、〈略〉たるの中へとびおり、

こんどはまたこなおけにはいってしまった。

八98 6 種まきのときとちがって、こんどは深くた

がやしました。

八106 1 1かぶのくきの数を数えてみますと、〈略〉。

こんどは1かぶのほの数をみんなでしらべ

八108 2 ぼうのあいだにいねをはさんでこいたら

〈略〉。こんどは、もみとごみをわけました。

八109 3 もみすりをしてみました。どんどんすつて

いたら、こんどはすぐにはげましたが、

九63 3 ぎよしゃは、こんどは、すずをガラランガラ

ン、ガラランガラとふりました。

九63 8 ぎよしゃは、こんどは、草むらをむちで二

三べん、ヒユウパチツ、ヒユウパチツと鳴らしま

した。

九92 6 うしろを向いてじゃんけんをする。こんど

は負けたらしくちどまって待っている。

九112 2 みんなは思はず手をたたいた。こんどは、

のだ先生がとばれるばんである。

九130 1 ㊦ こんどこそは、にがさないぞ。

十一45 5 弟は、〈略〉でなおして進みました。こ

んどはまちがいませんでした。

十一81 11 少年は、するどいさげびをあげて、その

場に立ちすくみました。男はみまわして、ひと目

少年をみると、こんどはかれがさげびを発しまし

た。

十二35 5 先生は失望して、一時やめていらっしや

いましたが、こんどは、二つの人形が同じ名まえ

であることをわからせようとなさいました。

十二107 6 こんどは仁王さま。

十二114 9 こんどの新しい憲法は、この議事堂でた

んじょうしました。

十三19 5 道路をつくったり、みぞをほったりする

ときに、よく、國土の地質や地味を研究しました

が、こんどは、〈略〉あれ地と戦い、これを豊かな

な土地にしよう

十三38 5 ㊦ え、え、はい……そうですか。ほんと

う……こんどの日曜ね。

十三41 9 ㊦ おぼさんがね、こんどの日曜、きみを

お客さんにして、ハイキングにつれて行くって

十四53 2 ㊦ こんどは、葉さん、いってごらんなさ

い。

十四69 7 湯げのお話はこのくらいにして、こんど

は、湯のほうを見ることにしましょう。

十四97 11 ほのおが明かるくもえあがった。そうし

て、こんどは、女の子は、一本のクリスマス木の

の下にすわっていた。

十五30 5 わしは、羽音はげしくすこし舞いたった

かと思うと、こんどは〈略〉、少年の周囲をおお

い包むいきおいでせまって來ました。

十五75 12 博士は、〈略〉、大きな声でわられ、こ

んどははつきりと、「〈略〉。」といたされた。

十五102 7 ㊦ ぼくは、〈略〉、いちばんたいせつなも

のです。こんどあったら、わかるでしょう。

こんな (形状) 99 こんな

一45 4 「〈略〉。」こんなこえがきこえます。

二21 6 ㊦ 先生、ゆうがおがこんなに大きくな

りました。

二33 7 ㊦ こんな はなしをして いると、どしん

どしんという おとが して きました。

二55 3 ゆうべ、ねどこにはいってから、こんな

ことを かんがえました。

二56 3 こんな ことを かんがえて いる うちに、

いつの まにか、ねむって しまいました。

二58 8 先生が、こんな おはなしを なさいました。

三25 5 ㊦ こんな 大きな 木を、切って いい もの

でしょうか。

三26 1 こんな 大きな 木の ことですから、切る

のにも 大さわぎでした。

四36 7 ㊦ 先生、こんな ことが ありました。

四121 2 こんな 小さな ものですが、

四128 3 ㊦ りようし「きものだな。こんな きれいな

きものは、みた ことが ない。

五16 10 こんな 話で、かばんの中はにぎやかです。

五17 6 ㊦ わたしのはこんな 小さな 字だから、なお

心配です。

五18 11 こんな だいいじに してくれ ますから、おち

る 心配は ありません。

五28 7 ㊦ ぼく、こんな 本を もらいました。

五38 5 手紙の中に、こんな ことが 書いて ありまし

た。

五48 1 おや、こんな 花が——また みつけた、きれ

いな 花を。

五60(会) この春まいたのです。たねをまいたから、
 こんなにさいたのですね。

五62(1) けさ、こんなに大きな花を、三つもさか
 せたのは、だあれ。

五62(10) こんなによくできたのは、おかあさんの
 力ではありませんよ。

五63(9) 立つようになり、あるくようになって、
 いまは、もうこんなに大きくなった。

五68(10) こんなおけなんて、とくにもならない。
 五82(1) どうして、きょうはこんなに休んだので
 しょう。

五90(10) おかあさんのおちちをコップコップとい
 ただいて、こんなにいいおぼうさんになったのだ
 よ。

五98(4) そうして、「(略)」。こんなふうに、自分で
 もさえずりはじめました。

六9(6) こんなところにくろげおちてしまつて、
 もし、みつからなかったら。

六19(3) きりぎりす「こんなによくあうと、たいこ
 のうちがいもあるよ。」

六19(10) たいへんきれいなもんくをいいましたね。
 こんな楽しいときは、二どとありませんね。

六21(4) 楽しいわれらきりぎりすの生活——「こん
 なことばをみんな喜んできいています。」

六24(2) まあいいや、こんないいときにあそばな
 いで、いつあそばうというんだね。

六24(10) バイオリン「こんな楽しさも知らないで、
 気のどくなありませんかだよ。」

六26(10) 夏のあいだに、こんなにたきぎをあつめ
 ておいて、よかったね。

六71(6) でも、こんな口じゃ、だめだわ。

六72(4) その日、晩ごはんをたべながら、ごろうは

こんなことを考えました。

六74(9) こんなことをつぎからつぎへと考えました。
 六110(1) 弟は、こんなふうにして、「はな」といっ
 ているんだと思うと、きゅうにおかしくなった。

六114(5) へんなたこだな。こんなものがあるも
 のか。」といつてわらいました。

六115(10) 「こんなたこ、ほしいなあ。」

七20(7) 一本だけのこしておきましたら、それが、
 いまちょうど、こんな白い花をつけています。

七32(1) おかあさんも、こんなところをみるのは、
 はじめてですよ。

七45(2) でも、わたしは、こんなことになろうと
 は、思っていないませんでした。

七45(3) また、こんなつもりでひいたのでもあり
 ません。

七59(1) こんなのは、みじかくなった文ですが、
 七61(8) あつちでもこつちでも鳴く。こんなに、か
 らすがいるのかしら。

八17(1) 虫たちは、どうしてこんなことができるの
 でしょう。

八40(8) 王さまは、庭へおでになりました。
 「(略)」。こんなひとりごとをおっしゃって、

八42(11) いや、いや、わたしは、こんなかなしい
 ことはありません。

八65(5) ひどく大きなひなだ。ほかのものは、一
 わだつてこんなすがたをしていない。

八88(5) 強く空気をうち、とぶことができた。どう
 してこんなになったのかわからないうちに、

八93(10) みにくいあひるの子であつたとき、こん
 な幸福があらうなどは、ゆめにも思わなかつた。

九14(2) しばいで、ゆめをみていた人が、にわかに
 目をさます場面を演ずることがある。こんなとき

にも、たいこをつかう。

九17(11) 日本のつばめは、こんなふうに渡ってい
 ますが、

九81(11) 口々にこんなことをいうのを、先生は、耳
 にもおいれにならないで、

九85(2) それには、こんな針や、もりなどがあり
 ます。

九85(8) じょうもん土器という種類で、こんなた
 だのせとものかけらがと思うような物ですが、

十7(10) おとうさんの顔をのぞきこむようにしまし
 た。こんなにうるさくついてこられたときには、

十9(4) 知らない外国人どうしでも、こんなに親し
 みをもつことができるものかと思いました。

十15(6) 少年は、さらにこんなことをいいました。
 十20(10) 白っぽくみえる太陽の光線ですが、わけ
 てみると、こんなにさまざまな色になります。

十28(3) こんな動植物だけではなく、雪のようすや、
 星の世界なども、しらべていきたいと思ひます。

十35(7) ひとつとして、日本製のものは、なかつ
 たからである。「こんなことでいいのか。」

十55(3) ことばの記ろくは、妹の心の写真になるの
 ではないかと、ふと、こんなことを考えました。

十55(8) どうして、こんなふうにゆきづまつてきた
 のでしょう。

十70(5) あまいにおいがして、黒っぽいもののは
 いっていました。「こんなどくつてありはしない。」

十74(9) 太郎かじやと次郎かじやは、こんな歌を歌
 いながらにげだしました。

十一27(12) 金次郎のうちは、こんなにもびんぼうで
 した。

十一58(10) おとうさん、こんないいにくいことば
 は、ほかにないでしょう。

十一 83 7 会 いく日おまえはここにいたのだね。どうしてこんなまちがいがおこったのだろう。
 十二 5 8 人々は、なんのためにこんなことをいじったのかと思ひながらやってみましたが、
 十二 10 12 会 じゅんさは、「こんなものをひろって、どうするのですか。」とききました。
 十二 20 5 会 わたしはこんなところがすこしもないようにしたいのです。
 十二 20 9 会 文雄さんがいってましたよ。どうしてこのざくろはこんなに美しいんだらうって。
 十二 29 3 こんなふうにして、毎朝おべんとうをこしらえて持たせているうちに、
 十二 39 10 ケラーは、めくらで、そのうえつんぽでした。それなのに、こんなりっぱな文章が書けるということは、
 十二 75 10 会 「こんなに降るのによくきたな。」
 十二 76 1 会 友だちがほしくなるのはやはりこんな晩だ。
 十二 78 7 私は、いままで試合のまえにこんなふうにはげまされたことはありませんでした。
 十二 95 8 こんな短い文であるが、
 十二 109 9 いんさつ機も外國から渡ってきていましたから、こんなりっぱな本ができました。
 十三 32 5 夏は、きんぎょ賣りがやって来る。「略。」こんなことをいって通る。
 十三 61 6 会 こんなことを考えて、きみも勉強を続けるんだね。
 十四 14 12 手 あなたのことを思うとき、「略。」と、こんなことが思われてくるのです。
 十四 24 4 どうしてこんなにたくさんのことばが、いろいろな國からはいつてきて、日本語になったのだらうかと、ふしぎになつて

十四 44 3 会 そうして、なんでこんなにほがらかでいられるのか、それを、こう話してやるのだ。
 十四 47 9 こんなきけんのせまった中で、なんというおちついた、略、ほがらかな人だらう。
 十四 48 1 自分なんか、およいでいるだけがせいぜいなのに、こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。
 十四 48 1 こんな海のまん中で、
 十四 52 9 会 こんな、十キロもあるような大きなかぼちゃでも、
 十四 55 11 会 私は、こんなに長いばかりで、略、特別なはたらきは、なに一つございません。
 十四 56 11 会 ごらんない、私のこの足を、手を。こんなに大きなきずができていますが、
 十四 72 3 こんなふうにして、湯の表面には、水のおりているところと、のぼっているところとが
 十四 85 5 こんなことばによって、映画は私たちに説明してくれた。
 十四 88 4 歩く人は、おそらく、まっすぐに歩こうと思ったのであろうが、いつのまにか曲がつてしまう。どうしてこんなに曲がるのか。
 十四 89 5 耳を地べたに近づけて、なにかもの音でも聞こうとしたりする。こんな場面を、
 十四 101 1 おばあさんが、こんなにせいが高く、りっぱで、美しく、そうして、しんせつに見えたことは、いまだでなかつたことであつた
 十五 42 7 世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかっている國があるうか。
 十五 46 10 会 こんなものが、まだほかにありますか。
 十五 92 1 こんな話をしているまに、
 十五 114 1 会 おまえのせわをしているときは、いつ

だってこんなに白くなって、光がさすのにね。
 こんなん 困難 (名) 2 困難
 九 12 17 しかし茶人は、いろいろな困難をしのいで、みんなをばげましては上流へたどつていった。
 十一 16 8 わたしをまもるためには、どんな困難とも戦う、そのうで。
 こんなん 困難 (形状) 1 困難
 十一 88 7 顔はむらさき色になり、呼吸はいよいよ困難になりました。
 こんにち 困難 (名) 6 今日
 十 45 2 今日、眞珠の産地は、略、をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、
 十三 10 3 今日でも、まだ、そうした考えがのこっている。
 十三 12 2 理由のないことを信ずる迷信は、今日、世の中にどれほど害をなしているかしかない。
 十三 12 5 日本の國は、今日よりまだまだ進むことであらう。
 十三 26 4 祖國を生き返らせ、ついに、今日のような平和國家をうち建てました。
 十五 36 1 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、略、今日のようになつた
 こんにち 困難 (名) 7 こんにちには
 一 24 8 会 十一 あいさつ 「こんにちには。」
 一 25 1 会 「こんにちには。」「こんにちには。」
 五 14 8 会 おばさん、こんにちには。
 六 22 6 会 きりぎりすさん、こんにちには。
 六 22 7 会 こんにちには。
 十 17 4 会 こんにちには。
 十五 99 5 会 こんにちには、チルチル。
 こんばん 困難 (名) 3 今晚
 九 12 7 会 今晚はうまいえさがかかるかな。

十三 39 5 会 今晚……そうですか。

十三 41 12 会 それで今晚来るんだらう。

こんばんは 「今晚」(感) 3 こんばんは

一 25 6 会 「こんばんは。」「こんばんは。」

一 25 7 会 「こんばんは。」「こんばんは。」

五 52 8 会 「こんばんは。」と、あいさつをしてい

く人もあります。

こんもり (副) 1 こんもり

四 53 10 みずうみの 島には、こんもりとした 林
がありました。

こんや 「今夜」(名) 12 こんや 今夜

二 44 3 会 おじさん、こんやも また、かげえをし

て、みせてください。

四 89 5 会 こんやは だいぶ つもるでしょう。

五 55 7 会 今夜、学校のいわで、ぼうえんきょうで

星をみせますよ。

五 56 2 会 今夜みるのは土星です。

六 26 4 会 今夜は つもるかも しれない。

六 131 4 会 このあたにかいトンネルで、今夜、ゆっ

くりとねむりたかったのさ。

八 35 5 はたおり星は、二九・五光年ですから、今

夜のはたおり星の光は、やく三十年ほどまえに発

した光だというわけになります。

九 138 9 会 くもさん、今夜は助けてください。

九 141 5 会 今夜は、ばらのかけでねむることにしよ

うかな。

十一 24 7 会 そんなら、今夜いって、返してもらっ

てきましよう。

十一 88 8 「今夜はもうだめかもしれない。」

十二 76 4 会 先生、今夜の雪の句はいかがですか。

コンロ ↳ ガスコンロ

さ

さ ↳ あおさ・あかるさ・あたたかさ・あつさ・あり

がたさ・あわたたしさ・いさましさ・うつくしさ・

うまさ・うれしさ・おおきさ・おかしさ・おそろし

さ・おもしろさ・おやさしさ・かしこさ・

くらさ・けだかさ・さむさ・しずかさ・しずけさ・

じゅんしんさ・しんけんさ・しんぼうづよさ・せい

じつさ・たかさ・たのしさ・つめたさ・とうとさ・

とくしさ・ながさ・なさけなさ・はやさ・ひもじ

さ・ひろさ・ふかさ・ふとさ・まずしさ・むずかし

さ・めずらしさ・もうしわけなさ・ものすごさ・ゆ

うかんさ・りこうさ・わかさ

さ (感) 5 さ

六 26 6 会 さ、そろそろ夕ごはんにしようか。

六 73 9 会 「さ、どつちかな。」

六 84 5 会 さ、弓矢を返すよ。

六 124 6 会 りすさん、さ、あげるよ。

六 135 2 会 さ、はじめよう。

さ (終助) 59 さ

二 35 8 会 ぞうは、大きなへびみたいなものさ。

二 42 7 会 おまえが、きれいなことばで いえは、

あちらだって、きれいにいうさ。

三 28 6 会 あの いきおいの いい くすのきで つ

くった ふねだもの、いきおいの いいのが あた

りまえさ。

四 45 7 会 気がらくにはらくさ。

四 45 9 会 とりのこされるかと思つてさ。

五 10 8 会 きかんしの人が、いっしょうけんめいに

走らせているからさ。

五 10 10 会 いちばんさきのきかん車の中でさ。

五 11 4 会 むこうからきた汽車とすれちがったのさ。

五 13 1 会 「車しようさんさ。」

五 13 3 会 まちがって乗っている人がいないか、し

らべるのさ。

五 17 5 会 ぼくは遠いところへいくんだけど、あて

名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。

五 17 9 会 うそ字さ。

五 106 11 会 ぼくはおとまができないのさ。

五 107 3 会 こうしていつまでも、ここにいますよりし

かたがないのさ。

六 22 8 会 そんな大きな物を持つてさ。

六 23 2 会 いまあそばないで、いつあそぼうという

のさ。

六 35 5 会 ないだりあれたり、海みたいなものさ。

六 82 6 会 でも、つてみるがいいさ。

六 116 9 会 作れるさ。

六 124 1 会 石でたたいて、わっているのさ。

六 131 4 会 このトンネルがほしかったのさ。

六 131 5 会 このあたにかいトンネルで、今夜、ゆっ

くりとねむりたかったのさ。

六 133 3 会 あの山のとつぺんさ。

七 19 7 会 しげた草むらの中に、かくれているの

さ。

七 22 9 会 あおむしをさがしにくるのさ。

七 22 11 会 子すずめにやるのさ。

七 23 2 会 だいすきさ。

七 24 6 会 かんないようにさ。

七 26 9 会 どうしたのさ。

八 67 10 会 あそこにいるあひるの子をさ。

八 82 8 会 だから、おまえさんとおつきあいするの

がいやなのさ。

九一六会 どうしてけんかなんかしたのさ。

九五九会 よけいなおせっかいさ。

九七九会 首をひっかいたからさ。

九九九会 そりゃそうさ。

九一〇一 ぼくもそうさ。

九一〇四会 いや、ぼくがいけなかったのさ。

九一〇七会 つまらないことさ。

九一〇九会 なんだか、いま考えるところはずかしい氣持さ。

九一〇六会 してもいいさ。

九一〇四会 では、実力があって、力いっぱいはたらくいい船員には、だれがなるのさ。

九一〇九会 もちろんさ。

九一〇一〇会 そういう男には、ぼくがなることにきめていくのさ。

九一〇一〇一 いいコックスが日本を正しい方へつれていくのさ。

九一〇一〇五 ほか、分家のおじいさんの大すきなじょうるりさ。

九一〇一〇八 所りゃ、おもしろいさ。

九一〇一〇九 帰ったばかりだから、お客さんさ……うん、うん。

九一〇一〇一〇 美術の中心のフロレンスで、研究しているうちに、たいそう上達したのさ。

九一〇一〇六 カーテンは、まどかけさ。

九一〇一〇八 宝くつはね、手おけさ。

九一〇一〇九 いや、いまは日本語にちがいないが、もとは、外國のことばさ。

九一〇一〇四 みんな不幸のところへにげこんでしま

九一〇一〇八 この人、まだぼくたちに会ったことが

ないんだってさ。

九一〇一〇一〇 「幸福」がいるかってさ。

九一〇一〇五 なにさ、あれは、〈略〉とてまたまらなくなるゆかい」ですよ。

九一〇一〇六 そりゃあそうともさ。

九一〇一〇九 けれど、人間には見えないのさ。

九一〇一〇一〇 きりょうのわるいおかあさんもないし、年をとったおかあさんもないのさ。

九一〇一〇六 光さ。

九一〇一〇四 (間助) 4 さ

九一〇一〇六 丘の木のところまでのぼってさ、それから〈略〉みずうみへいこうよ。

九一〇一〇八 こうして右の手でだいてな、左の手でかえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

九一〇一〇九 そのおかげでさ、いまこうしてあたたまることもできるし、

九一〇一〇六 あたかなへやにはいつてさ、ものごとを教えてもらえる人たちのなままりをしんだん

九一〇一〇一 もの。

九一〇一〇四 さ 1 さ

九一〇一〇一 さ——さるの木のぼり。

九一〇一〇六 サ— (名) 1 サ—

九一〇一〇八 オフコース、フォアジャパン。サ—

九一〇一〇九 さあ (感) 94 さあ

九一〇一〇一〇 さあ、お月さんのくにへいくんだよ。

九一〇一〇六 さあ、あちらのへやへいらっしやい。

九一〇一〇八 「さあ、ねましよう。」

九一〇一〇九 さあ、もうすこしのぼろう。

九一〇一〇六 さあ、いぬだよ。

九一〇一〇四 さあ、なんだろう。

九一〇一〇五 さあ、春をむかえにでかけましよう。

九一〇一〇八 さあ、ぜんそくりよくだ。

九一〇一〇二 さあ、手をつなごう。

九一〇一〇三 「さあ、これでいけるぞ。」

九一〇一〇七 「さあ、きたぞ。」けらいたちは、弓に矢をつがえました。

九一〇一〇九 さあ、用意はいいですか。

九一〇一〇一〇 「さあ、出発だ。」

九一〇一〇六 さあ、きょうは、どのへんにならびた

九一〇一〇九 いというんだね。

九一〇一〇一〇 「さあ、ひとねいりしなければ。」

九一〇一〇六 「さあ、早く、早く。」

九一〇一〇七 「さあ、でかけよう。」

九一〇一〇八 「さあ、やすもうよ。」と親すずめ。

九一〇一〇九 さあ、あっちへいつてあそぼう。

九一〇一〇一〇 さあ、元氣をだしておかえり。

九一〇一〇八 さあ、どうぞこちらへ。

九一〇一〇四 さあ、どうぞそのこしかけにおかけ

九一〇一〇六 ください。

九一〇一〇六 さあ、ごえんりよなくめしあがつてく

九一〇一〇一 ださい。

九一〇一〇三 さあ、はいはいをして、たちちして、村に

九一〇一〇八 でましよう、町にでましよう。

九一〇一〇六 さあ、改札口へいこう。

九一〇一〇九 「さあ、じろう、お乗り。」

九一〇一〇四 「さあ、このかばんにはいるんだよ。」

九一〇一〇一〇 あんまり長くみていないで、さあ、おか

九一〇一〇六 わり。

九一〇一〇九 さあ、考えてごらん。

九一〇一〇八 さあ、ここへおいで。

九一〇一〇一〇 「さあ、みんなこちらへおいで。」

九一〇一〇六 さあ、ひと休みしようではありませんか。

九一〇一〇九 さあ、はいりたまえ。

九一〇一〇四 さあ、おそくなるからでかけよう。

六三八 七 なんてしょう。あの屋根にとまっているのは。」親つばめ「さあ——」
 六四一 八 会 さあ、かかしさん、いまから帰るのよ。
 六四二 四 会 さあ、みなさん、日がくれきららないうちにおねがいします。
 六四四 一 会 なんだろうな、それ。」子からす「さあ、
 六八八 四 会 さあ、早く船にお乗りなさい。
 六九一 九 会 さあ、どうぞこちらへ。
 六九二 三 会 さあ、できたぞ。
 七四九 会 さあ、きょう、いちばんはじめにくるのは、だれかな。
 七五七 三 会 さあ、出発しよう。
 七五八 八 会 さあ、あおむしくん、新しいごちそうだ。
 七五九 七 会 さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。
 七六〇 四 会 さあ、はるお、おいで。
 七六四 四 会 さあ、いまのうちに、さきの方へいらっしやい。
 七六八 一 会 「さあ、リレーにしよう。」
 七六九 四 会 さあ、こんどがだいじだ。
 七七〇 三 会 さあ、けいさつしよへ、いっしょにいってもらおう。
 七八六 六 会 さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん美しい庭をもつことができる。
 七八七 七 会 「さあ、これをおさがり。」
 七八八 八 会 さあ、もう一曲がりだ。
 八二二 二 会 さあ、みんなそろったろうね。
 八二九 九 会 「さあ、文章はなかなかうまいようでしたよ。」といいました。
 八六二 二 会 おい、さあ早くベルを鳴らせ。
 八七一 七 会 さあ、なんだかへんですね。
 八七三 八 会 さあ、おうちへお送りいたしましょう。
 八八五 一 会 さあ、あと三十分はってみましょう。

九八八 八 会 さあ、やまだくん、これでひきわけだ。
 九八九 六 会 ふたりとも——さあ、いいかげんにして帰ろうよ。
 九八九 九 会 さあこい。」ふたりともむきになって、友だちの手からぬけだそうともかく。
 九九〇 六 会 さあ、きみたち、やまだくんをつれていけよ。
 九九三 一 会 さあ、いこう。
 九九五 三 会 さあ、でかけよう。
 九九五 一 会 「さあ、元氣をだして。」
 九一〇 一 会 「さあ、おるよ。」
 九一三 一 会 さあ、早くとんでいくがいい。
 九二〇 五 会 さあ、その白いかべに、プリズムでわけた光を写してみますよ。
 九二七 一 会 「さあ、あおげ、あおげ。」
 九二九 一 会 さあ、もとの場所において、あっちへいこう。
 九三二 二 会 「さあ、あおげ、あおげ。」
 九三三 七 会 さあというときに、ひとりで責任をしょって立つ、トップをこぐ人もいるだろう。
 九三三 一 会 さあ、いこう。
 九三三 六 会 さあ、いくのか、いかないのかね。
 九三九 九 会 「さあ、お帰り。」
 九四〇 七 会 さあ、いっちょにいきましようね。
 九四二 二 会 さあ立ったして。
 九四四 三 会 ほんとう、おじさん。」さあ、人形にきいてごらん。
 九四七 四 会 さあ、うさが勝つでしょうか、かえるが勝つでしょうか。
 九五二 八 会 ダルガス、おまえがくれるといった材木を、さあ早くもらいたい。

一三三 五 三 さあ、元氣でゆかいに、手をつなぎましょう。
 一四一 九 四 会 「さあ。」田中さんが答えられないでいると、
 一四二 一 一 会 「それではなんだろう。」さあ。
 一四二 三 九 さあたいへんだ。
 一五五 九 一 会 さあ、うちへ行こう。
 一五五 一 一 会 満ほう、いいところへつれて行ってあげるから、さあ、出かけよう。
 一五五 六 一 会 さあ、行こうぜ。
 一五五 八 一 会 (ふたりの子どもに手をだしながら) さあ、どうぞ。
 一五五 九 九 会 さあ、きみを待っているのだ。
 一五五 一〇 一 会 さあ、みんなで、力づくで、いやでも幸福にしまおうじゃないか。
 一五五 一四 六 会 さあ、これで、おまえたち、私に会ったのだから、あしたまた、あの小さな家に帰って、私がぼろぼろの着物を着ていても、わかるだろうね。
 一五五 一八 六 会 さあ、そのベールをおとりください。
 一五五 二二 四 会 さあさあ (感) 1 さあさあ
 一五五 二四 四 会 さあさあ、きんぎよをお買いなさい。
 一五五 二六 一 会 さあ (感) 2 サアツ
 一五五 二七 一 会 大きな一わのやまわしが、サアツという羽音をたてて、(略) 舞いおりて来ます。
 一五五 二八 一 会 そのとき、鳥はサアツという羽音をさせたとおもうと、
 一五五 二九 一 会 さあ (副) 1 ザアツと
 一五五 三〇 五 会 すきとおった風がザアツとふくと、くりの木はバラバラと実を落しました。
 一五五 三二 一 会 「歳」にじゅうさい・まんしちさい
 一五五 三三 一 会 [際] (名) 1 際
 一五五 三四 一 会 さい

十五566 図 その際算出した高さは、実測の結果とわずかに十フィートしかちがわなかった。

さいく じくわさいく・ぶさいく

さいくにん 「細工人」(名) 1 細工人

十五47 図 このお庭焼のために、細工人、画工、ちようこく師、下ばたらきの者などが、三十数人かかえられていた。

さいこ 「最後」(名) 7 さいこ 最後

三1054 たいていの人は、あきらめてしまいました。が、さいこまでどうしてもあきらめない人が、なんんかのこりしました。

七498 さいこに、町の学校とやることになった。

七531 こんどは、さいこの決勝戦だ。

八16 図 せみの子からいえば、母親のちぶさにすがったようなもので、とりついたがさいこ、ようにそれからはなれません。

十一71 図 去年、みおくっていつて、最後に船の上でわかれを告げたことや、

十二82 図 清水選手は、最後の決勝戦にのぞむことになりました。

十五122 図 これがこの級の最後のことばだ。

さいこうせいたち 「在校生」(名) 1 在校生たち
十五122 図 在校生たちがみんな、私たちのために送別の歌を歌ってくれた。

さいこのがっきゅうにつき 「課名」 2 最後の学級日記

十五3 図 最後の学級日記……百二十

十五122 図 最後の学級日記

さいしよ 「最初」(名) 3 最初

十三13 図 これを最初にいいだしたのは、〈略〉、ポーランドのコペルニクスという人です。

十五30 図 大わしは、太いけずめの最初の一げきで

少年の頭をくだこうと、向かって来ました。
十五80 図 いろいろな國の人々の間に、友だちとして心のかよったおつきあいができるようにになったのは、われわれが最初であります。

さいする 「際」(サ変) 1 際する 《一シ》

十五52 図 博士は、別れに際して、各地の大学者たちへのいいねいなしようかい状をくださったうえ、さいそくする 「催促」(サ変) 1 さいそくする 《一サ》

五57 図 はるおにさいそくされて、ばんをゆずりました。

さいたまけん 「埼玉県」(地名) 1 さいたま縣

九17 図 それによると、さいたま縣のあるところで、ころろみに、しるしをつけてはなしたものだといことがわかりました。

さいちゅう 「最中」(名) 1 さいちゅう じまつさいちゅう

十四58 図 あのかわききつた夏のさいちゅうに、

さいなん 「災難」(名) 1 さいなん
九18 図 ときには、あらしや、そのほかの思いがけないさいなんに、あわないともかぎりません。

さいばん 「裁判」(名) 8 裁判

九47 図 あした、めんどろな裁判をしますから、おいでなさい。

九48 図 そのめんどろだという裁判のようすなどを考えて、おそくまでねわれませんでした。

九60 図 じつは、おとといからめんどろなあらそいがおこって、ちよつと裁判に困りましたので、

九61 図 どうも、毎年この裁判で苦しみます。

九63 図 裁判も、もうきようで三日めだぞ。

九66 図 裁判も、もうきようで三日めだぞ。

九67 図 裁判も、もうきようで三日めだぞ。
九69 図 これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。

さいばん 「歳晚」(名) 1 さい晩

十五75 図 さい晩や火のご豊かの汽車けむり

さいばんかん 「裁判官」(話手) 14 裁判官

七80 図 裁判官「いったい、どういことなのか、くわしく話さない。」

七80 図 裁判官「それで、どうした。」

七80 図 裁判官「それから。」

七81 図 裁判官「どんなことを、知っているのかね。」

七81 図 裁判官「ほかにまだ、知っていたかね。」

七82 図 裁判官「ふたりのいうことは、よくわかった。」

七82 図 旅人を見て、裁判官「なにか、そちらにも、いいぶんがあるかね。」

七83 図 裁判官「なるほど。」

七83 図 裁判官「なるほど。」

七83 図 裁判官「では、まえ齒のぬけているということは、なぜわかったのか。」

七84 図 裁判官「きいてみれば、いちいち、もっともなことばかり。」

七84 図 裁判官「それについて、なにか。」

七85 図 裁判官「よしよし、よくわかった。」

七85 図 裁判官「あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、むりはない。」

さいばんかん 「裁判官」(名) 3 裁判官

七79 図 旅人。甲乙。裁判官。
七80 図 裁判官がはいってくる。
七85 図 裁判官は、ふたりのものに向かつて、裁判官〈略〉。

さいばんかんのど「裁判官殿」(名) 1 裁判官どの
七84 8 裁判官どの、それを、しらべていただき
とうございます。

さいばんしよ「裁判所」(名) 2 裁判所

九70 2 どうかこれから、わたしの裁判所のめい
よ判事になってください。

九70 9 ながきに、かねたいちろうどのと書いて
こちらを裁判所としますが、ようございますか。

さいもく「材木」(名) 3 材木

五32 7 材木や、石炭や、お米を、たくさんつん
でいます。

十一4 8 長いいかだを組んで、材木を遠くの山
から運んでくるのもみえる。

十三22 8 ダルガス、おまえがくれるといった材
木を、さあ早くもらいたい。

さいゆうき「西遊記」(題名) 1 西遊記

十三31 4 三國志とか、西遊記とかいった、中
國のむかしものがたりをやるつもりなのだが、

ざいりよう「材料」(名) 4 材料

六117 3 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹
二本と、それに、たこ糸のりなどです。

十二49 3 一 指人形の作りかた 1 材料。
十三9 1 すでに知ったことを材料として、考えを
おし進め、

十五48 12 職人のちんぎんや材料のお金をはらうた
めに、家の道具を賣らなければならなかった。

さいわい「幸」(形状) 3 さいわい

九20 8 さいわいなことに、そのとき、あいていた
家が、一けんあったので、

十四4 8 さいわいに、赤しおもよせてこなかった。
十五24 11 さいわいにその勇ましい少年は、大わし
のせにとびつき、その上へ乗りうつて、

さいわい「幸」(副) 2 さいわい

四55 5 その夜は、さいわい、雨もふらず、風も
ふかない、しずかな、星の光る夜でした。

十一61 1 さいわい近くの田で働いていた村の人た
ちに助けられて、

サイン(名) 2 サイン

十二77 9 休けい場にもどつてくると、中國人らし
い十一二の兄弟にサインを頼まれました。

十二78 2 私は、その少年の持つていたペンをかり
て、サインをしてやりました。

さえ(副助) 25 さえ

三78 7 雲さえでて いなかったら、まいあさ
あえますよ。

七34 8 私と弟のさぶろうは、乗るには乗ったもの
の、動くことさえできません。

七55 2 文章は、くわしくさえすれば、はつきり
写しだすことができますとはかぎりません。

八10 1 のらねこが通りかかって、にげるどころ
か、向かっていこうとさえするのです。

八11 7 すると、あわれにも、くちばしから血をだ
して、目さえあけたりとじたりして、

八70 8 あわれなあひるの子は、立っていたほうが
いいか、歩いていったほうがいいかさえも、わから
なかった。

八71 6 遠いところにくれさえすればいい。
八77 11 ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴
らしたり、火花をだすことさえできた。

八93 6 にわこの木でさえ、新しいはくちょうの
まえに枝をたれた。

九16 2 口ばしの両わきがいくぶん黄色にみえるの
さえあります。

十33 1 佐吉は、(略)、ひまさえあれば、織機のこ

とをしらべつづけていたのである。

十41 8 町のかげ口は、いっそうはげしくなり、
かれを氣ちがいとよび、やましとさえののしるよ
うになった。

十55 9 思うことがどんどんと書いていたまへのこ
ろが、うらやましくさえなりました。

十一9 3 ぼくらは、きみについていきさえすれ
ば、だいじょうぶだと思ふんだ。

十一27 9 金次郎のうちでは、その十二文さえもあ
りませんでした。

十一37 2 秋 はぎの花ふく朝風も、音さえす
しくなってきた。

十二25 6 そとさえ寒くなければ、ものかげへつれ
ていて、用をたさせるようにしました。

十二34 1 ことばをつかっていることや、そんなも
のがこの世にあることさえ知らず、ただ、さるの
人まねのように指を動かすだけでした。

十二56 5 その中には、世界に共通なものさえある。
十二61 4 そのあくる朝ながめると、高どのは消え
てしまつてあとかたもなく、きのう植えたなん千
アールのあめしい田さえなく、

十三21 3 ユートランドのあれ地は、もはや、この
強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていま
せんでした。

十三24 4 ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はと
きに、しもさえ見ることがあったのです。

十四61 7 いい種を、來年もわすれずにまいても
らうことができさえすれば、このかばちやは、お
札に、すっかり人間にあげてしまつても、

十四95 6 これは、ま法のマツチだろうかとさえ
思つた。

十五45 5 それまでのものの考えかたや商賣では、

ふだんの生活さえむずかしくなってきた。

さえぎる「遮」(五) 2 さえぎる《一ツ・ール》
十二656 のびていく根のさきをさえぎるものはない。

十五5812 なお語り続けようとする博士をさえぎって、「略」と、ありし昔を語ろうとした。

さえぎりはじめる「囀始」(下二) 2 さえずりはじめる《一メ》

五984 「略」こんなふうに、自分でもさえぎりはじめました。

五986 囀 ひわが、いい声でさえぎりはじめましたよ。

さえぎる「囀」(五) 5 さえぎる《一ツ・ール》

五964 囀 いまにいい声でさえぎりますよ。

五10011 「略」と、へんな声でさえぎって、さんちゃんの本をよむ声をまねます。

七716 そのずっと高いところでは、ひばりが一つ、さえぎっている。

八86 「ツツツツつころばし」とさえぎったり

十五112 囀 人の家にさえぎるすずめガラス戸の外に來て鳴け病む人のために

さえる「牙」(下二) 1 さえる《一エ》

九1434 くもは、目がさえてなかなかねむれせん。さお「竿」(名) 1 さお じだけさお・つりさお・ものほしざお

二454 囀 長い竹のさおで、ふねをこぎます。さか「坂」(名) 3 坂 じのぼりざか

九548 道はたいへんきゆうな坂になりました。九5410 いちろうは、顔をまっかにして、あせをぼとぼと落しながら、その坂を登りますと、

九10510 きゆうな坂にかかると、さかい「境」(名) 4 さかい じくになさかい

八963 はんごになわしろをきめ、そのさかいにしろしをつけました。

九1237 求め求めて、いつか、いまのしずおか縣のさかいもすぎ、ながの縣にはいった。

十四727 これに日光をあてると、熱いところとつめたいところとのさかいで、光が曲がるために、十四755 たとえば、森と畑とのさかいのようなどころですと、

さかえる「栄」(下二) 3 さかえる《一エ・ール》

十6312 ヨーロッパの大むかしにさかえた、ギリシアの、同じめんの藝術とくらべて、

十二596 一代二代はいい人で、よくさかえたが、三代めの長者は、略、わがままをしはじめた。

十三1810 この苦しいときにうちかつことのできる國民だけが、國の建てなおしという大事業をなしとげて、さかえるのであります。

さかさ「逆」(形状) 2 さかさ

七951 うさぎのせなかをさかさになると、毛がふわふわとびます。

十二531 (3) 顔は、着物のすそからさかさにいれて、首を着物にぬいつける。

さかさま「逆様」(形状) 5 さかさま じまっさかさま

六1001 すると、向こうのけしきが、小さく、さかさまにみえた。

六1002 そのさかさまにみえるけしきを、大きくしてみようと思つて、

六10311 囀 でも、さかさまじゃないの。

六1041 囀 さかさまでも、よくみえるでしょう。

九3211 秋晴れのすみきった空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中にうつつて、

さがしたす「捜出」(五) 1 さがしたす《一シ》
九1216 なんとかしてうまい水のわきでる泉をさがしだしたいものと思つた。

さがしつづける「捜続」(下二) 2 さがしつづける《一ケ》

七762 囀 さきほどから、さがしつづけているのですが。

九935 それを舞台のおくになげすめて、なお、あちこちさがしつづけるが。

さがしなさる「捜」(五) 1 さがしなさる《一イ》

七859 囀 早くいつてらくだをさがしなさい。

さがしはじめる「捜始」(下二) 1 さがしはじめる《一メ》

六98 親子はそうがかりでさがしはじめた。

さがしまわる「捜回」(五) 4 さがしまわる《一ツ・ール》

三762 みんなでさがしまわりましたが、ゆかの上にはもうみえませんでした。

六910 三人はさんざんさがしまわったが、みつからないのがっかりした。

八465 けらいたちは、あちこちとさがしまわりましたが、ほんとうに幸福な人は、やすやすとみつかるものではありません。

八4611 けらいたちは、足をぼうにしてさがしまわりました。が、やはりみあたりませんでした。

さがしもとめる「捜求」(下二) 1 さがしもとめる《一メ》

八485 囀 この人こそ、さがしもとめていた人だ。さがしもの「捜物」(名) 4 さがしもの さがし物

- 九三二 しばらく、間——やまだ、さがし物のよう
すで地面をみながらでてくる。
- 九三七 しばらくすると、たかぎもさがし物のよう
すででてくる。
- 九五六 たかぎ、ちよっとやまだの方をみるが、返
事をしないでさがし物をつづける。
- 一五七 客間に私をみちびき、自分は書さいには
いつて、しきりにさがしものをしておられたが、
さがす〔捜〕(五) 35 さがす 《サ・シ・ス・
ーセーソ》
- 二六四 「しゅしゅしゅしゅ」をつづけながら、
春をさがす。
- 二七四 「では、光のとおり道をさがしてみ
ましょう。」
- 四九八 「よし、ぼくがさがしてくる。」
- 四九八 みんなのねているひまに、かつちゃん
は、もう一ど林のおくをさがしにいきました。
- 六九三 さがせ、さがせ。」ねじはこれをきいて、
とびあがるほどうれしかった。
- 六九三 さがせ、さがせ。
- 六九三 では、さっそくさがさせてみましょう。
- 六九三 おにも、とんとこ、とんとことさがしにで
かけました。
- 七二九 あおむしをさがしにくるのさ。
- 七四〇 甲乙ふたりが、あちこちをみまわしながら
なにか、ものをさがして歩いてくる。
- 七五二 あなたがたは、なにかさがしておいでの
ようだが——
- 七六三 あなたがたは、らくだをにがして、それ
をさがしていらっしやるのではありませんか。
- 七八八 おどろいて、方々をさがして歩きました

- が、みあたりません。
- 八五五 地面においた虫たちは、やがて、思い思い
にやわらかいところをさがして、
- 八六五 虫たちは、《略》、手ごろな、皮のうすい、
しるの多い木の根をさがしてあるきます。
- 八七六 天帝は、あたりをみまわして、なにかさが
すようになさいました。
- 八八六 すると、さがしていたはたおりひめが、
いっしんにはたをおっていました。
- 八八六 むすめのために、りっぱなむこをさがし
てやろう。
- 八八六 そのほんとうに幸福なものをさがしてき
てほしい。
- 八八六 王子も、なんとかして父の病氣をなおした
いと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。
- 八八六 日がくれましたが、王子は、もうしばらく
さがそうと、歩いていきました。
- 八八六 新しいすみをひろいあげるが、自分の物で
はないので、なおあたりをさがしている。
- 八八六 さがしていたすみである。
- 八八六 岸にそって上流に向かって歩きながら、と
きどき水をふくんでは泉をさがしていった。
- 八八六 おかあさんをさがしてくるのです。
- 八八六 そうか、おかあさんをさがしにいきたい
のか、ちようちよさん。
- 八八六 そのもようが、どんな単位からなりたつて
いるか、それをさがしてみようと思います。
- 八八六 少年の父親というのは、去年、しごとを
さがしにフランスへいったのですが、
- 八八六 ねむったあとでは、目を開いたときに、
その小さな看護人をさがすようにみえました。
- 八八六 老人が、道路をうろうろとみまわしなが

- ら、なにかさがしては、それをひろってポケット
にいていました。
- 一五二六 こしようにできた飛行機乗りが、安全な
着陸地を上からさがしているような氣持で、
- 一五八三 ほんの形だけでも、廣間の方をさがし
てみよう。
- 一五九三 青い鳥をさがしているのです。
- 一五九三 『なにももののわからない幸福』をさ
がしているのです。
- 一五九三 あの女はさがしに行きたがつて、
さかだてる『逆立』(下) 1 さかだてる 《↑
テ》
- 一五九三 おかあさんがらすが、羽をさか立てて、子
がらすをすにひきもどす。
- さかな〔魚〕(名) 24 さかな ↓きんのさかな・き
んのさかなさん
- 一五九三 たねまきする人、いえをたてる人、さ
かなをとる人、きしやははしらせる人。
- 二〇八 にいさん ねえさん はなほしよる ゆめ
山川 さかなふね なみ
- 三三三 ほそ長い びんに、さかなが はいって
いました。
- 五五九 いわの上からとびおりて、さかなとジャブ
ジャブはしゃいで、川は山からかけおおりる。
- 五五九 おじいさんは、あみでさかなをとり、おば
あさんは、糸をつむいでくらしていました。
- 五五九 すると、金のさかながかかってきました。
- 五五九 金のさかなは、『《略》』といいました。
- 五五九 わしは、きょう、金のさかなをとったよ。
- 五五九 おじいさんが金のさかなをよびますと、す
ぐでてきて、『《略》』とききました。
- 五五九 もう一ど金のさかなのところへいつて、

家をもらつておいで。

五69 2 おじいさんが金のさかなをよびますと、およいできてきました。

五70 2 金（金）のさかなのところへいって、たのんでおくれ。

五70 8 おじいさんが金のさかなをよびますと、金のさかながおよいできました。

五70 8 おじいさんが金のさかなをよびますと、金のさかながおよいできました。

五72 4 金（金）のさかなに、わたしは金持のおくさんもうやになった、女王になりたいってたのんでおくれ。

五73 1 おじいさんが金のさかなをよびますと、

五73 2 おじいさんが金のさかなをよびますと、金のさかなは、「略」とたずねました。

五75 2 金（金）のさかなにたのんでおいで。

五75 5 金（金）のひろい海で、金のさかなをけらいにしてやりたい。

五76 1 おじいさんは金のさかなをよびました。

五76 2 金のさかなは、できていました。

五76 9 金のさかなは、なにもいわないで、「略」、海の中へおよいでいってしまいました。

八41 2 さかなをめしあがろうとなさると、これもこがねのさかなになりました。

八41 3 これもこがねのさかなになりました。

さかなたち 「魚達」(名) 1 さかなたち六98 5 金（金）めでた、めでたとさかなたち、みんなでまうやら、うたうやら。

さかなやさん 「魚屋」(名) 1 さかな屋さん十17 2 金（金）太郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。

さかのぼる 「潮」(五) 4 さかのぼる 《↑↑↑

ル》

九12 8 流れは急流だし、「略」。さかのぼるのもたやすくなかった。

九12 11 そこからさらに、すこしさかのぼって水を飲んでみると、いい味は、すこしもなかった。

九12 5 そこで、谷川をさらにさかのぼると、十五45 2 話は明治初年のころにさかのぼる。

さかはんしゅ 「佐賀藩主」(名) 1 佐賀はん主十五47 8 佐賀はん主は、お庭焼といって、自分の家であつた食器とか、おくりものにする焼物とかを作らせていたが、

さかみち 「坂道」(名) 3 さか道 坂道六12 10 一びきのうさぎさんが、あわててにげたので、トンネルのさか道に足をすべらせて、

九11 10 帰りは、村までくだりの坂道だ。十一25 6 坂道を、ゆっくりとした足どりで、家に帰ってくる。

さかり 「盛」(名) 1 さかり ↓いたずらざかり・でさかり・なのはなざかり・はなざかり

九31 3 金（金）こちらへきたときは夏の暑いさかりでした、

さがる ↓もえさがる さがる 「下」(五) 8 さがる 《↑↑↑ルール》

↓たれさがる・ぶらさがる 一57 9 わたくしは、かたほうだらりとさがった

しろちゃんのみみをみてきました。四55 10 つぎの日のあさ、かっちゃんは、ねつが

ずっとさがって、五33 2 かんぱんのクレインが、あがつたりさがった

たりして、荷物をすみこんでいます。五79 6 ピシャピシャと、あがつたりさがったりして、流れていきます。

六91 7 では、そのかたをこちらへごあんないしなさい。女の人、いったんさがる。

八22 8 羽がふらりとさがりました。九56 11 いちろうはぎよとして、ひと足うしろに

さがって、「略」といいました。十五11 3 チルチル つつましくすこしさがついて

る「光」を指さしながら、「略」。

さかわがわ 「酒匂川」(地名) 4 さかわ川十一19 2 二宮金次郎の生まれたところは、神奈川

縣のかやま村といって、さかわ川にそった村です。十一19 10 そのうえ、さかわ川の大水で、田や畑を

みんな流されたりしたので、十一20 12 さかわ川のていほう工事があつて、どの家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで働くことになりました。

十一28 2 さかわ川がまたあふれて、のこつていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。

さかん 「盛」(形状) 8 さかん四93 3 さかんに降る。

五35 6 さかんに、きかいで石炭をくずしてとつています。

五10 5 「略」と、せきこむように、さかんに鳴きました。

十二46 5 日本ではあまりさかんでなかったが、アジアでもヨーロッパでも、りっぱな影絵しほいができている。

十三6 11 ああ、そのさかなな春のきざしは、よもにあらわれて、

十四32 7 航海術がさかんになったのです。十四65 3 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、まわりの空気にくらべてずっとかるいために、どんどんとさかんにたちのぼります。

十五55⑩ 私が日本をおとずれたころは、西洋の文化をとり入れることがさかんなときで、

さがん「左岸」(名) 1 左岸

九12④ 右岸や左岸では、その味がきえてしまうことがあっても、

さき「先」(名) 39 さき 先 ↓あしさき・うでさき・おさき・くちさき・つまさき・てさき・にわさき・のきさき・はさき・はなさき・はるさき・みせさき・めさき・ゆくさき・ゆびさき

一10⑧ さきに、しろいたまを かぞえましよう
三51② 石より かないのみの さき、のみより
つよいうでさきで、かっちゃんかっちゃん石を切る。

三51⑥ かつちゃん かつちゃん 日がくれて、火花がみえるのみの さき。

三84③ ピーターは、はの さきに あまだれがあるのを みつけて、「略」といいました。

四50⑦ ほかのものは、あとになり、さきになりして、はげましはげまし、さげびました。

四83⑨ それをまつ枝の さきにつりさげると、
四84⑤ 一ばんさきに、ねえさんが、エスさまのおたんじょうのお話をしました。

五10⑩ いちばんさきのきかん車の中でさき。
五80⑦ 竹の さきにほうきをむすびつけて、てんじょうのくものすをはらいました。

六37⑤ 「の」の字のはねたさきから、雨だれのようになみだがこぼれおちる。
六106④ その、弟がまだいわないことばを、さきに

いったから感心したのである。
六141④ おれがさきにうさをみつけたのだ。

七30① 弟が、ぼくよりさきに、それをつけた。
七38④ さあ、いまのうちに、さきの方へいらっ

しやい。

七61① さきだけみえることし竹が、ざわざわと、動いている。

八4⑥ 北はほっかいどうから、南はきゅうしゅうやそのさきの島々まで、

八14⑤ 親ぜみが、あのほそくどがった口のさきで、
かたい皮にあなをあけて、

八16⑦ その口のさきを根の中につきさして、木のしるをすいはじめます。

八17④ 人間のあかんぼが、したのさきをじょうずにつかちちをのむのと同じように、

八19③ ほそいくだのさきから、木の根のしるをわずかずつづっているせみの子たちは、

八57③ 五百メートルほどさきに、ひきあげてある小船がある。

八58⑨ 「略」とおっしゃって、さきに立ってお歩きになった。

八72② そうして、目をふさいだが、またさきへとんでいった。

八102① いねのほのさきがふくらんで、いまにもほがでそうです。

八104② さわってみると、いままでべしやんこだったさが、ふくれてかたくなっていました。

九38⑤ 長い竹ざおのさきにかまをくくりつけて、
九110④ のだ先生がさきに、すぐつづいていい先生がすべられる。

十4⑧ わかめをだしかけたこずえのさが、かすんだ空の中にとけこんでいる。

十68② ぬき足さし足で、そとおくのへやに近づき、さきに立った太郎かじゃが、

十一62④ このくらしいことがこわいものと、
自分からさきになって渡ってしまったのです。

十二21⑧ 來年とか、さ來年とか、それからもつとさきのことをおっしゃったりすると、

十二65① 根のさは毛より細い。

十二65⑥ のびていく根のさをさえぎるものはない。

十三4⑤ こずえの、細い、細い小枝のあみ目の先にも、はやふくらと、季節の命はわきあがって、

十四72⑨ そのために、さきにいったようなもようが見えるのです。

十四78④ うらのほう、いいかえると、竹の先のほうから割ってみると、

十四81⑦ ころばぬさきのつえ。

十五47④ ブリンクリーは、まんぞくそうに赤絵のはちをながめながら、その話のさをうながした。

十五74⑤ 一方が先に生まれ、他方があとから生まれたというだけのことです。

さき ↓しらすき
さきか・ける 「咲掛」(下) 1 さきかける 《ケ》

二23⑦ だりやの花が、さきかけてしほみしました。

さきかた「咲方」(名) 1 さきかた
十27⑨ トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たんなんにみようと思います。

さきこ「話手」 1 さきこ
三8⑦ さきこ「東の友だち。」

さきそろ・う 「咲揃」(五) 1 さきそろう 《ーイ》
五45⑤ みんななかよくさきそろい 世界の花ぞ

のかざろうよ。

さきだす「咲出」(五) 1 さきだす 《ーシ》
五40① こちらでは、さくらの花も、なしの花も、

《略》、いっぺんにさきだします。

さきち 「佐吉」(人名) 13 佐吉 ひとよださきち

13210 佐吉は、《略》、ひまさえあれば、織機のことをしらべつづけていたのである。

1336 「《略》。」とさとしたが、佐吉のもえるような研究熱は、どうすることもできなかった。

1337 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

1338 佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。1339 このあいだに立って、佐吉をはげましたり、なぐさめたりしたのは、母であった。

13311 佐吉の考えはこうである。

13345 佐吉が、はじめに目をつけたのは、《略》、たて糸のあいだをぬっていく横糸であった。

133411 佐吉の考えは、しだいに高まっていったが、小学校をでただけのかれには、手のとどきそうもない空想になりがちであった。

13351 佐吉は、上京して機械館へ毎日かよった。

13358 佐吉は、《略》、設計図をひいては組みたて、組みたてては動かしてみた。

133511 佐吉は、《略》、いっしんに考えぬき、これならという一台の機械を作りあげた。

133612 試運転の日、その織機をあやつつて、りっぱにぬのを織ってみせたのは、佐吉の母であった。

13371 それは、明治二十三年、佐吉が二十四才のときのことである。

さきつづく 「咲統」(五) 1 さき続く 《一ク》

15595 囀 まんじゅしゃげおりすてある道のまんじゅしゃげさき続く

さきにおう 「咲匂」(五) 1 さきにおう 《一ウ》

5453 囀 世界のそのにさきにおう、きれいな花のその一つ。

さきはじめる 「咲始」(下一) 1 さきはじめる 《一メ》

7625 なの花ちらほらさきはじめ、うすぐもり。

さきほど 「先程」(名) 3 さきほど 先ほど 3477 このかたは、さきほど おとおりになつた

かたがたのおとうとさんです。 7762 囀 さきほどから、さがしつづけているので

すが。 1557510 囀 先ほどの話は、こころよくひきうけた

よ。 さきみだれる 「咲乱」(下二) 2 さきみだれる 《一レ》

121071 土ひょうは、はぎやすきがさきみだれた秋の野原。

155198 そのほとんどいたきまで高山植物のさきみだれているけいしゃ面を、

さきみちる 「咲満」(上二) 1 さきみちる 《一チ》

8269 馬車は、《略》、草花のさきみちている野原へおりてきました。

さきゅう 「砂丘」(名) 1 砂丘 133251 そればかりでなく、しげった林は、海岸

からふき送る砂ぼこりをふせぎ、さらに、北海岸特有の砂丘を、海岸近くでくいとめました。

さく 「作」(名) 2 作 へいねんさく 11425 囀 こしも作はよいだろう。

121087 ふたつとも鎌倉時代の作で、ほりものと

して代表的なものです。 さく 「咲」(四五) 66 サク さく 《一イ・一カ・一キ・一ク・一ケ》

1387 あさがおのはながさきました。

1388 あさがおのはながいつつさきました。

1392 うすもいろのあさがおのはなが、いつつきねにさきました。

1402 山のつつじがさいた。

1594 しろちゃんのうちは、つきみそうのさいているおはなばたけのなかにありました。

2571 なの花が、いちめんにさいていました。

3493 囀 かぼちゃの花がさきました、あんなところにさきました。

3494 囀 あんなところにさきました。

3496 囀 よあけにばあとまつき色、つゆをふくんでさきました。

3501 囀 かぼちゃの花がさきました、はかげにふたつさきました。

3502 囀 はかげにふたつさきました。

3504 囀 かなかなぜしも目がさめて、かぜにゆれゆれさきました。

3924 こうえんにさいたきれいな花は、みんなの心をたのしませてくれます。

4312 囀 わたくしは、うちのにわにさいているコスモスの花をあげようと思います。

4801 も—ものの花のさくころ。

5205 なしの花のきれいにさいている家に、はいりました。

5404 囀 白くてゆつたりとさく、ひんのいい花です。

5405 囀 この花がよくさく年は、ほう年だといいます。

5406 囀 いま、たくさんさいています。

5476 たんぽぽがさいていたり、すみれがさいていたり、名まえは知らないが、きれいな花がさいていたり。

5477 すみれがさいていたり、

- 五479 名まえは知らないが、きれいな花がさいていたり。
 五598 かきねにあさがおの花が、三つはじめてさきました。
 五5910 会 おかあさん、あさがおがさきましたよ。
 五602 会 ほんとうに、きれいにさきましたね。
 五609 会 たねをまいたから、こんなにさいたのですね。
 五621 会 けさ、こんなに大きな花を、三つもさかせたのは、だあれ。
 六6010 会 カボチャノハナガ——七 サキマシタ——五
 六611 会 アンナトコロニ——七 サキマシタ——五
 五
 六14210 クローバーの花が、まっ白にさいていました。
 七511 学校じゅうは、いちどに花がさいたようだ。
 七562 つばきの花がまっかにさいています。
 七645 はつ花のさいたこと、けさ書く。
 七671 うめがさく。
 七734 ぼたんでもさいているのかと思ったら、まあ、子どもがわらっていたんだよ。
 八127 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばきの木の根もとにうめてやりました。
 八1028 花のさいているほもみつめました。
 八1032 朝、花のようすをみにいきましたら、まださいていませんでした。
 八1034 花のさくのは、1日にすこしのあいだけだと思いました。
 九1343 まっ白なばらが、たくさんさいていたのです。
 十257 道ばたにさくたんばば、とびかうちよう

- ちよう。
 十498 会 ワンワンタッタ——ハナガサイテル——
 十5312 そこに、すいれんの花が三つほど、きれいにさいていました。
 十543 会 「ハナガサイテル」〈略〉は、そのことをいいあらわしています。
 十574 コスモスがさきました。
 十575 きれいにさきました。
 十577 白と、もも色と、こいも色のがさきました。
 十一55 きょうも、みんな話に花をさかせている。
 十一162 人の心の畑にさいた、いちばん美しい花、〈略〉、それはおかあさまの愛です。
 十一291 あくる年の春、黄色い花がさいて、たくさんの実がつけました。
 十一313 会 続くひよりにさくらがさいて、野山をかざると、もも赤く、畑にさいて、
 十一315 会 もも赤く、畑にさいて、
 十一329 会 げんげがさいて、なの花ちって、かきのわか葉に日の照るころは、
 十一379 会 あぜに火とさくまんじゅしやげ
 十二72 少女はなにを思ったのか、ふと庭さきにさいていた黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、
 十二710 会 「七重八重花はさけどもやまぶきのみひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、
 十二666 それからでた細い根が、つなのようにからみあって、葉を育て花をさかせる。
 十二9412 道ばたに野はぎがさいていたので、
 十三363 中庭のあんずがさいて、花びらがホートンへちらちらと降ってくるのも、このころである。

- 十四299 花がたえずさいていたために、天上の花を見ようとはしなかったのだろうと
 十四525 会 私の花がさかなかったら、実はつきません。
 十四528 会 花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。
 十四542 会 養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがたが、かつてに花をさかせたからですよ。
 十四5910 会 花さん、あなたが、どんなに美しくさいたって、
 十五104 会 荒れ庭にしきたる板のかたわらにふるばちならび赤き花さく
 十五144 会 目をあけてつくづく見ればばらの木にばらがまっかにさいてけるかも
 さく「裂」↓ひきさく
 さくがんき「鑿石機」(名) 1 さくがん機
 十246 工員たちは、さくがん機やつるはしを持って、石炭をほっている。
 さくせい「作製」(名) 1 作製
 十471 会 養殖真珠発明の〈略〉あなたの光明を太陽とするならば、作製に失敗したわたしは、さくひん「作品」(名) 6 作品 ↓きょうどうさくひん
 十二1031 夢殿の観音といって、いまでも、多くの人々からたつとばれている作品です。
 十三615 会 自由にふでをふるって、りっぱな作品をたくさんのはえらいよ。
 十四46 フィリップの作品の中にみなぎっている大きな愛の氣持、
 十四511 だから、フィリップの作品の中には、〈略〉強い眞実の力が、こもっているのです。
 十五403 源氏物語や枕草子などは、すべてこの

かなによって書かれた作品である。

十五49 11 ただわずかに外國人がこれに目をとめて買うことがあるというのを聞いて、作品を東京や箱根へ賣りだすことにしたのである。

さくぶん (課名) 2 作文

七33 五 作文……四十七

七47 1 五 作文

さくぶん 「作文」(名) 7 作文 いろいろなさくぶん

三30 2 「学校」というだいで、作文をするこ
とになりました。

三30 8 あとで、できた作文を、ひとりびとりよ
みました。

五84 6 とうくんは、海岸のおじさんの家で、海
の作文を書くんだといって、よろこんでいました。

十55 5 このごろ、私は、作文がすらすらと書けな
くなりました。

十55 11 あるとき、なにげなく妹の作文をみました。

十56 4 ここで、いままでの作文のからをぬぎさつ
て、新しい世界にふみだしていこうと思います。

十四89 7 同じ題の作文でも、〈略〉人によって、
文章は、どのように書きあらわされる。

さくもつ 「作物」(名) 2 作物

十三17 10 ドイツオーストリア二國との戦いに敗れ、
賠償として、シュレスウィヒとホルスタインとい
う、作物のよくできる二州をとられました。

十三19 10 ユートランドは、デンマルクの半分以上
もあって、その三分の一以上が、作物のできない
土地であります。

さくら 「桜」(名) 16 さくら いろいろなさくら・やえ
さくら

三68 8 どころもさくら。

三69 9 さくら、さくら。

三69 9 さくら、さくら。

四87 まわりには、さくらの木がたくさんう
えてあります。

四39 7 さくらの 枝をおろうとしたとき、お
じさんの ことばに 気がついて やめました。

四124 4 四月は さくら。

五10 5 あ、あそこにきれいなさくら。

五39 9 ちらでは、さくらの花も、なしの花も、
〈略〉、いっぺんにさきだします。

七9 11 さくらの花が、白くうかんでみえる。

七62 2 さくらの木が、ぬれてゆれている。

七62 3 さくらの花をしらべてみたり——どの花も、
みんな空を向いている。

七65 1 一つのまにか、葉ばかりのさくらになって、
毎日ほれ。

十一31 3 続くひよりにさくらがさいて、野山を
かざると、もも赤く 畑にさいて、

十四82 11 世の中は、三日見ぬまのさくらかな。

十五8 3 さくらさくら人が人が子を歩かせて

十五8 3 さくらさくら人が人が子を歩かせて

さくらんぼ 「桜坊」(名) 1 さくらんぼ

十三50 1 わたしたちが、さくらんぼと、くるみの
ごちそうをならべると、

さぐる 「探」(五) 3 さぐる 《一リ》

一64 10 おもわず ぼけつとを さぐりました。

八15 9 せみの子どもたちは、自分の小さなまえ足
でトンネルをほりながら、さぐりさぐりもぐつて
いきます。

八15 9 さぐりさぐりもぐつていきます。

さくら 「石榴」(名) 3 さくら

十二13 5 そこには一本のさくらの木があって、夏

じゅう美しい花をつけていたが、

十二17 2 あのだくろの色もかけてないや。

十二20 9 どうしてこのさくろはこんなに美しい
んだらうって。

さくろさん 「石榴」(名) 3 さくろさん

十二17 7 さくろさん、さくろさん。

十二17 7 さくろさん、さくろさん。

十二21 7 さくろさんが、來年とか、さ來年とか、
〈略〉さきのことをおしやつたりすると、

さけ 「鮭」(名) 1 さけ いろいろなさけ

九72 5 やまねこは、さけの頭でなくてまあよかつ
たというふうに、口早にぎょしやにいました。

十一81 6 のどまででかけたさけびを、じっとおさ
えながら。

十一81 10 少年は、するどいさけびをあけて、その
場に立ちすくみました。

十一81 11 男はみまわして、ひと目少年をみると、
こんどはかれがさけびを發しました。

さけびこえ 「叫声」(名) 2 さけび声

十五31 7 そのたびごとに、鳥はさけび声をたてて、
〈略〉、いっそうするどくとびかかります。

十五104 11 黒の肉じゅばんを着たわんぱくこぞうの
ようなのが、聞きとれないさけび声をたてて、

〈略〉、チルチルに近づいて來ます。

さけびつづける 「叫続」(下二) 1 さけびつづけ
る 《一ケ》

六14 6 「助けて、助けて。」ありは、いっしょう
けんめいにさけびつづけました。

さけぶ 「叫」(五) 35 さけぶ 《一バ・ピープ・

ーン》いろいろなさけぶ

二40 4 〈略〉とさけびます。

らのいどばたに立ちました。

十五279 大わしは、少年をせにのせ、少女を下に

さげて、《略》、下へ下へとおりて行きました。

ささ [笹] (名) 1 ささしあおささ・くまざさ

六1358 ささの中、やぶの中をとんでいきます。

ささい [些細] (形状) 1 ささい

十四864 ごくささいな感情をひろいあげて、一首

の歌をよむのも、同じ心の現われであろう。

ささえる [支] (下) 2 ささえる 《一エ》

四528 一まいの もうふのようになつて、かつ

ちゃんを ささえながら《略》とびました。

十二662 おおづなのようなたくましい根が、深く

のびてみきをささえ、廣くのびて枝をやしない、

ささきくん (人名) 1 ささきくん

五845 ささきくんは、星をしらべるといいました。

ささげもつ [捧持] (五) 1 ささげ持つ 《一ツ》

十一458 両手をずっとさしのべて、おめんじよう

をいただいて、ささげ持つようにしながら、

ささける [捧] (下) 3 ささける 《一ゲ》

十441 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめの

れいにささげて、その成功をしらせた。

十4611 あなたが自然をあいてとして、眞珠を世

界の人々にあたえたことに、心から敬意をささげ

ます。

十二422 「《略》。」といのりながら、一生をケ

ラーのためにささげました。

さささささささ (感) 1 ザザザ、ザザザ、ザ

ザザ

三873 まちの音 ザザザ、ザザザ、ザザザ。

ささだけ [笹竹] (名) 2 ささだけ

八216 地上には、一本のささだけがはえていまし

た。

八257 あのぬけがらだけは、いつまでもささだけ

にかたくすがりついています。

ささなみ [小波] (名) 1 ささなみ

十二614 高どのは消えてしまつてあとかたもなく、

《略》、みわたすかぎりささなみがうちよせる大き

な池となつていた。

ささやき [囁] (名) 1 ささやき

十一169 ひくく、かほそい、おさな子のささやき

も、ききもらさない、その耳。

ささやきあう [囁交] (五) 1 ささやきあう 《一

ウ》

七775 このようすを、甲乙ふたりがみてとつて、

なにか、こそこそささやきあう。

ささやきかわす [囁交] (五) 1 ささやきかわす

《一シ》

十三54 小さな木のめのむれは、《略》、なにごと

か、ささやきかわしているけはい。

ささや・く [囁] (五) 2 ささや・く 《一カ・一ク》

七224 ささやくように、はるおにいちちゃん、す

ずめはなにしくくるの。」

十五7511 「《略》。」とささやかれた。

さし [差] 1 さし 2 さし 3 さし 4 さし 5 さし 6 さし 7 さし 8 さし 9 さし 10 さし 11 さし 12 さし 13 さし 14 さし 15 さし 16 さし 17 さし 18 さし 19 さし 20 さし 21 さし 22 さし 23 さし 24 さし 25 さし 26 さし 27 さし 28 さし 29 さし 30 さし 31 さし 32 さし 33 さし 34 さし 35 さし 36 さし 37 さし 38 さし 39 さし 40 さし 41 さし 42 さし 43 さし 44 さし 45 さし 46 さし 47 さし 48 さし 49 さし 50 さし 51 さし 52 さし 53 さし 54 さし 55 さし 56 さし 57 さし 58 さし 59 さし 60 さし 61 さし 62 さし 63 さし 64 さし 65 さし 66 さし 67 さし 68 さし 69 さし 70 さし 71 さし 72 さし 73 さし 74 さし 75 さし 76 さし 77 さし 78 さし 79 さし 80 さし 81 さし 82 さし 83 さし 84 さし 85 さし 86 さし 87 さし 88 さし 89 さし 90 さし 91 さし 92 さし 93 さし 94 さし 95 さし 96 さし 97 さし 98 さし 99 さし 100 さし 101 さし 102 さし 103 さし 104 さし 105 さし 106 さし 107 さし 108 さし 109 さし 110 さし 111 さし 112 さし 113 さし 114 さし 115 さし 116 さし 117 さし 118 さし 119 さし 120 さし 121 さし 122 さし 123 さし 124 さし 125 さし 126 さし 127 さし 128 さし 129 さし 130 さし 131 さし 132 さし 133 さし 134 さし 135 さし 136 さし 137 さし 138 さし 139 さし 140 さし 141 さし 142 さし 143 さし 144 さし 145 さし 146 さし 147 さし 148 さし 149 さし 150 さし 151 さし 152 さし 153 さし 154 さし 155 さし 156 さし 157 さし 158 さし 159 さし 160 さし 161 さし 162 さし 163 さし 164 さし 165 さし 166 さし 167 さし 168 さし 169 さし 170 さし 171 さし 172 さし 173 さし 174 さし 175 さし 176 さし 177 さし 178 さし 179 さし 180 さし 181 さし 182 さし 183 さし 184 さし 185 さし 186 さし 187 さし 188 さし 189 さし 190 さし 191 さし 192 さし 193 さし 194 さし 195 さし 196 さし 197 さし 198 さし 199 さし 200 さし 201 さし 202 さし 203 さし 204 さし 205 さし 206 さし 207 さし 208 さし 209 さし 210 さし 211 さし 212 さし 213 さし 214 さし 215 さし 216 さし 217 さし 218 さし 219 さし 220 さし 221 さし 222 さし 223 さし 224 さし 225 さし 226 さし 227 さし 228 さし 229 さし 230 さし 231 さし 232 さし 233 さし 234 さし 235 さし 236 さし 237 さし 238 さし 239 さし 240 さし 241 さし 242 さし 243 さし 244 さし 245 さし 246 さし 247 さし 248 さし 249 さし 250 さし 251 さし 252 さし 253 さし 254 さし 255 さし 256 さし 257 さし 258 さし 259 さし 260 さし 261 さし 262 さし 263 さし 264 さし 265 さし 266 さし 267 さし 268 さし 269 さし 270 さし 271 さし 272 さし 273 さし 274 さし 275 さし 276 さし 277 さし 278 さし 279 さし 280 さし 281 さし 282 さし 283 さし 284 さし 285 さし 286 さし 287 さし 288 さし 289 さし 290 さし 291 さし 292 さし 293 さし 294 さし 295 さし 296 さし 297 さし 298 さし 299 さし 300 さし 301 さし 302 さし 303 さし 304 さし 305 さし 306 さし 307 さし 308 さし 309 さし 310 さし 311 さし 312 さし 313 さし 314 さし 315 さし 316 さし 317 さし 318 さし 319 さし 320 さし 321 さし 322 さし 323 さし 324 さし 325 さし 326 さし 327 さし 328 さし 329 さし 330 さし 331 さし 332 さし 333 さし 334 さし 335 さし 336 さし 337 さし 338 さし 339 さし 340 さし 341 さし 342 さし 343 さし 344 さし 345 さし 346 さし 347 さし 348 さし 349 さし 350 さし 351 さし 352 さし 353 さし 354 さし 355 さし 356 さし 357 さし 358 さし 359 さし 360 さし 361 さし 362 さし 363 さし 364 さし 365 さし 366 さし 367 さし 368 さし 369 さし 370 さし 371 さし 372 さし 373 さし 374 さし 375 さし 376 さし 377 さし 378 さし 379 さし 380 さし 381 さし 382 さし 383 さし 384 さし 385 さし 386 さし 387 さし 388 さし 389 さし 390 さし 391 さし 392 さし 393 さし 394 さし 395 さし 396 さし 397 さし 398 さし 399 さし 400 さし 401 さし 402 さし 403 さし 404 さし 405 さし 406 さし 407 さし 408 さし 409 さし 410 さし 411 さし 412 さし 413 さし 414 さし 415 さし 416 さし 417 さし 418 さし 419 さし 420 さし 421 さし 422 さし 423 さし 424 さし 425 さし 426 さし 427 さし 428 さし 429 さし 430 さし 431 さし 432 さし 433 さし 434 さし 435 さし 436 さし 437 さし 438 さし 439 さし 440 さし 441 さし 442 さし 443 さし 444 さし 445 さし 446 さし 447 さし 448 さし 449 さし 450 さし 451 さし 452 さし 453 さし 454 さし 455 さし 456 さし 457 さし 458 さし 459 さし 460 さし 461 さし 462 さし 463 さし 464 さし 465 さし 466 さし 467 さし 468 さし 469 さし 470 さし 471 さし 472 さし 473 さし 474 さし 475 さし 476 さし 477 さし 478 さし 479 さし 480 さし 481 さし 482 さし 483 さし 484 さし 485 さし 486 さし 487 さし 488 さし 489 さし 490 さし 491 さし 492 さし 493 さし 494 さし 495 さし 496 さし 497 さし 498 さし 499 さし 500 さし 501 さし 502 さし 503 さし 504 さし 505 さし 506 さし 507 さし 508 さし 509 さし 510 さし 511 さし 512 さし 513 さし 514 さし 515 さし 516 さし 517 さし 518 さし 519 さし 520 さし 521 さし 522 さし 523 さし 524 さし 525 さし 526 さし 527 さし 528 さし 529 さし 530 さし 531 さし 532 さし 533 さし 534 さし 535 さし 536 さし 537 さし 538 さし 539 さし 540 さし 541 さし 542 さし 543 さし 544 さし 545 さし 546 さし 547 さし 548 さし 549 さし 550 さし 551 さし 552 さし 553 さし 554 さし 555 さし 556 さし 557 さし 558 さし 559 さし 560 さし 561 さし 562 さし 563 さし 564 さし 565 さし 566 さし 567 さし 568 さし 569 さし 570 さし 571 さし 572 さし 573 さし 574 さし 575 さし 576 さし 577 さし 578 さし 579 さし 580 さし 581 さし 582 さし 583 さし 584 さし 585 さし 586 さし 587 さし 588 さし 589 さし 590 さし 591 さし 592 さし 593 さし 594 さし 595 さし 596 さし 597 さし 598 さし 599 さし 600 さし 601 さし 602 さし 603 さし 604 さし 605 さし 606 さし 607 さし 608 さし 609 さし 610 さし 611 さし 612 さし 613 さし 614 さし 615 さし 616 さし 617 さし 618 さし 619 さし 620 さし 621 さし 622 さし 623 さし 624 さし 625 さし 626 さし 627 さし 628 さし 629 さし 630 さし 631 さし 632 さし 633 さし 634 さし 635 さし 636 さし 637 さし 638 さし 639 さし 640 さし 641 さし 642 さし 643 さし 644 さし 645 さし 646 さし 647 さし 648 さし 649 さし 650 さし 651 さし 652 さし 653 さし 654 さし 655 さし 656 さし 657 さし 658 さし 659 さし 660 さし 661 さし 662 さし 663 さし 664 さし 665 さし 666 さし 667 さし 668 さし 669 さし 670 さし 671 さし 672 さし 673 さし 674 さし 675 さし 676 さし 677 さし 678 さし 679 さし 680 さし 681 さし 682 さし 683 さし 684 さし 685 さし 686 さし 687 さし 688 さし 689 さし 690 さし 691 さし 692 さし 693 さし 694 さし 695 さし 696 さし 697 さし 698 さし 699 さし 700 さし 701 さし 702 さし 703 さし 704 さし 705 さし 706 さし 707 さし 708 さし 709 さし 710 さし 711 さし 712 さし 713 さし 714 さし 715 さし 716 さし 717 さし 718 さし 719 さし 720 さし 721 さし 722 さし 723 さし 724 さし 725 さし 726 さし 727 さし 728 さし 729 さし 730 さし 731 さし 732 さし 733 さし 734 さし 735 さし 736 さし 737 さし 738 さし 739 さし 740 さし 741 さし 742 さし 743 さし 744 さし 745 さし 746 さし 747 さし 748 さし 749 さし 750 さし 751 さし 752 さし 753 さし 754 さし 755 さし 756 さし 757 さし 758 さし 759 さし 760 さし 761 さし 762 さし 763 さし 764 さし 765 さし 766 さし 767 さし 768 さし 769 さし 770 さし 771 さし 772 さし 773 さし 774 さし 775 さし 776 さし 777 さし 778 さし 779 さし 780 さし 781 さし 782 さし 783 さし 784 さし 785 さし 786 さし 787 さし 788 さし 789 さし 790 さし 791 さし 792 さし 793 さし 794 さし 795 さし 796 さし 797 さし 798 さし 799 さし 800 さし 801 さし 802 さし 803 さし 804 さし 805 さし 806 さし 807 さし 808 さし 809 さし 810 さし 811 さし 812 さし 813 さし 814 さし 815 さし 816 さし 817 さし 818 さし 819 さし 820 さし 821 さし 822 さし 823 さし 824 さし 825 さし 826 さし 827 さし 828 さし 829 さし 830 さし 831 さし 832 さし 833 さし 834 さし 835 さし 836 さし 837 さし 838 さし 839 さし 840 さし 841 さし 842 さし 843 さし 844 さし 845 さし 846 さし 847 さし 848 さし 849 さし 850 さし 851 さし 852 さし 853 さし 854 さし 855 さし 856 さし 857 さし 858 さし 859 さし 860 さし 861 さし 862 さし 863 さし 864 さし 865 さし 866 さし 867 さし 868 さし 869 さし 870 さし 871 さし 872 さし 873 さし 874 さし 875 さし 876 さし 877 さし 878 さし 879 さし 880 さし 881 さし 882 さし 883 さし 884 さし 885 さし 886 さし 887 さし 888 さし 889 さし 890 さし 891 さし 892 さし 893 さし 894 さし 895 さし 896 さし 897 さし 898 さし 899 さし 900 さし 901 さし 902 さし 903 さし 904 さし 905 さし 906 さし 907 さし 908 さし 909 さし 910 さし 911 さし 912 さし 913 さし 914 さし 915 さし 916 さし 917 さし 918 さし 919 さし 920 さし 921 さし 922 さし 923 さし 924 さし 925 さし 926 さし 927 さし 928 さし 929 さし 930 さし 931 さし 932 さし 933 さし 934 さし 935 さし 936 さし 937 さし 938 さし 939 さし 940 さし 941 さし 942 さし 943 さし 944 さし 945 さし 946 さし 947 さし 948 さし 949 さし 950 さし 951 さし 952 さし 953 さし 954 さし 955 さし 956 さし 957 さし 958 さし 959 さし 960 さし 961 さし 962 さし 963 さし 964 さし 965 さし 966 さし 967 さし 968 さし 969 さし 970 さし 971 さし 972 さし 973 さし 974 さし 975 さし 976 さし 977 さし 978 さし 979 さし 980 さし 981 さし 982 さし 983 さし 984 さし 985 さし 986 さし 987 さし 988 さし 989 さし 990 さし 991 さし 992 さし 993 さし 994 さし 995 さし 996 さし 997 さし 998 さし 999 さし 1000

十一765 看護婦がなにか飲み物を持ってくると、

コップなりさじなりをその手から取つて、

さしあける [差上] (下) 11 さしあける 《一

ゲ・一ゲル》

一2310 「はれた おそらにくつが なる」では、

てをうえにさしあげました。

一616 これをたろうさんにさしあげます。

二481 うれしそくに、そのりんごを、高くさし

あげたりにおいをかいだりします。

三10810 みかどからたびたび お手紙を ください

ましたので、かぐやひめも、そのたびにこへん

じをさしあげておりました。

四1136 これは、まださしあげたことのない、

おいしいごちそうでございます。

四1163 では、おみやげにたまてばこをさしあ

げましょう。

五664 お礼はたくさんさしあげます。

六904 女のは、水をくんで、ほおりのみにこと

さしあける。

六973 女のはつりばりを水であらつて、海の神

にさしあける。

八494 王さまに、さしあげたいことはやまやま

ですが、わたしには、あいにく、一まいのシャツ

の持ちあわせもございません。

十四1011 少なくとも、一週間ごとにお手紙をさ

しあげましょう。

さしあし 1 さしあし 2 さしあし 3 さしあし 4 さしあし 5 さしあし 6 さしあし 7 さしあし 8 さしあし 9 さしあし 10 さしあし 11 さしあし 12 さしあし 13 さしあし 14 さしあし 15 さしあし 16 さしあし 17 さしあし 18 さしあし 19 さしあし 20 さしあし 21 さしあし 22 さしあし 23 さしあし 24 さしあし 25 さしあし 26 さしあし 27 さしあし 28 さしあし 29 さしあし 30 さしあし 31 さしあし 32 さしあし 33 さしあし 34 さしあし 35 さしあし 36 さしあし 37 さしあし 38 さしあし 39 さしあし 40 さしあし 41 さしあし 42 さしあし 43 さしあし 44 さしあし 45 さしあし 46 さしあし 47 さしあし 48 さしあし 49 さしあし 50 さしあし 51 さしあし 52 さしあし 53 さしあし 54 さしあし 55 さしあし 56 さしあし 57 さしあし 58 さしあし 59 さしあし 60 さしあし 61 さしあし 62 さしあし 63 さしあし 64 さしあし 65 さしあし 66 さしあし 67 さしあし 68 さしあし 69 さしあし 70 さしあし 71 さしあし 72 さしあし 73 さしあし 74 さしあし 75 さしあし 76 さしあし 77 さしあし 78 さしあし 79 さしあし 80 さしあし 81 さしあし 82 さしあし 83 さしあし 84 さしあし 85 さしあし 86 さしあし 87 さしあし 88 さしあし 89 さしあし 90 さしあし 91 さしあし 92 さしあし 93 さしあし 94 さしあし 95 さしあし 96 さしあし 97 さしあし 98 さしあし 99 さしあし 100

さしあたり [差当] (副) 1 さしあたり

十二2310 さつまいもや野菜を作つたりしていたの

で、さしあたり困ることはありません。

さしいれる [差入] (下) 6 さしいれる 《一

レ・一レル》

十393 もし、母貝の中に、核をさしいれること

ができたら、眞珠が発生するにちがいない。

十396 幸吉は、あつぷほどの核をこしらえて、

それを、母貝の体内にさしいれてみた。

十3912 核をさしいれたために死ぬものもあつた。

十404 しかも、核をさしいれてから、眞珠になる

までには、少くとも四年はかかる。

十4112 これは、まえにさしいれておいた核によつ

て発生した半円眞珠であることが、わかつた。

1444 研究を重ねたすえ、ついに核をさし入れるときに、ほかの母貝のがいとうまくを切り取ってきて、一種の手術をほどこすことを発見した。

さしかかる「差掛」(五) 4 さしかかる《ーッ・ーリ》

4485 たににさしかかったとき、かつちゃんが、「略」と、声をたてました。

828 やがて、大きな天の川にさしかかりました。847 どんどん歩いていくと、さびしい村にさしかかりました。

9121 とうげ道にさしかかったとき、さつとふいてくる風であり、

さしかける「差掛」(下二) 2 さしかける《ーケ》

4329 雨がびしゃびしゃふるので、わたくしは、かさをさしかけてあげました。

15654 あせをふきふき歩かれた新島のおじさんと、日がさをさしかけながらついていらつしやうた新島のおばさんとの思い出は、

さしかた「注方」(名) 1 さしかた

14118 きはつ油のさしかたは、ご自分でなさってごらん下さい。

さしき「座敷」(名) 1 さしき じおくさしき

5915 みると、さしきのまん中のたたみをやぶつて、のびているだけのこがありました。

さしこむ「刺込」(五) 1 さしこむ《ーミ》

6114 ピンセットでねじをはさんで、きかいのあなにさしこみ、

さしこむ「差込」(五) 3 さしこむ《ーン》

3313 まどから光がさしこんで きます。6104 雲にかくれていたたいようがおをだしたので、日光が店いっばいにさしこんできた。

11894 あかつきの光が窓から白くさしこんできたとき、

さしず「指図」(名) 1 さしず

1728 こう、さしずをされて、しかたなく、ずつしりと重い、大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

さしすせそ 1 サシスセソ

6135 カキケコでも、サシセソでも、《略》、一ぎよう一ぎようは、なにか、ほかのぎようとはちがった性質をもっているにちがいない。

さしそめる「差初」(下二) 1 さしそめる《ーメ》

14837 春の光がさしそめて、雪どけ水が流れだすところ、

さしだす「差出」(五) 6 さしだす《ーシ》

6975 ほおりのみことのまえにさしだしながら、海の神「このつりばりではございせんか。」

11224 金次郎はわらじをさしだしていいました。

1273 少女は《略》黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、それをしずかにさしだしました。

12327 私は、近づいてくる足音を感じましたので、それが母だとばかり思いこんで、両手をさしだしました。

15333 女の子は、にこにこわらって、この自分のすくい主へ手をさしだしてました。

15861 チルチルの方へ手をさしだしながら、
幸福「チルチルさん、ごきげんよう。」

さしつかえ「差支」(名) 3 さしつかえ

8912 生まれがくちようのたまごであつてみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。

14619 このかばちは、お礼に、すっかり人間にあげてしまつても、さしつかえないと思いま

すが、どうでしょうか。

146812 しかしまた、見かたによっては、茶碗の湯と、こうしたら雨のばあいは、よほどよくにたものと思つてさしつかえありません。

さしでがましい「差出」(形) 1 さしでがましい《ーイ》

7431 みなさん、たいへんさしでがましいことですが、わたしにちよつと話をさせてください。

さしのべる「差伸」(下二) 5 さしのべる《ーベ・ーベル》

847 その首をはくちようの方へさしのべ、自分でもおどろくほどへんな大きな声をだした。

11457 両手をずっとさしのべて、おめんじようをいただいて、ささげ持つようにしながら、

14954 女の子は、その上へ、小さなつめたな両手をさしのべた。

14987 女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。

15766 停車場まで送つてくださった博士のこう意をふかく謝して、別れの手をさしのべると、

さしはじめる「差始」(下二) 1 さしはじめる《ーメ》

3813 そこへ お日さまの 光が さしはじめました。

さしまねく「差招」(五) 1 さしまねく《ーク》

1260 高どのに立っていた長者は、日のまるとのおおきをあげて、しずみかけた日をさしまねくと、

さしわたし「差渡」(名) 2 さしわたし

126812 製材所のまるとのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。

14346 博士の計算では、うちゅうのさしわたしは、およそ二十億光年ということだ。

さす「刺」(五) 4 さす《ーサ・ーシ》 じつきさ

す

三345 ㊦ まっ白な かびんに、赤い 花が さして
ありました。

九1393 ㊦ いましがた、みつばちにさされて、苦し
んだことも知っています。

十二389 生まれてはじめて、くやむ心と悲しみと
に胸をさされました。

十五289 自分のこしにさしていた短刀をぬいて、
さす「点」(五)2 さす《一シ》

十二141 このごろは、きわだって美しいつやつや
したしゅの色がさしてきた。

十五755 —ああ、忘れもしない、満面べにをさ
して語られたホランド博士のあの熱情のことば。

さす「差」(五)18 さす《一サ・一シ・一ス》ゆひ
とさしゆび・めさす・ゆびさす

三178 はたかのかからだから、きれいな 光が
さしていました。

四317 ㊦ わたくしが かさをさしていくと、
四354 ㊦ 生徒さんが 子どもの げたのはなおを
上げる あいだ、かさを さしてあげたのですね。

六142 ㊦ 野原には、日の光が いっぱいさしています。

七53 朝日の光が ななめにさしてきました。

七119 このときの「手」は、てのひらをさしてい
ます。

七121 1 このときの「手」は、文字を書くことをさ
していますが、

八241 朝日が山の上のぼって、明かるい光が
さつとさすころになると、

八344 一 光年は、光が発してから、一年かかっ
てとどくきよりをさしています。

九248 日本に春がくると思うと、もう矢もたても
たまらず、北をさしてすすむのです。

九1073 「略」と、のだ先生がつえでさされる

方を見ると、なるほどりっぱなスキー場で、

十一406 ㊦ 南にかたむく日につれて、光はまとも
にえんにさす。

十一516 私は、かさをさして電車の停留所までで
かけた。

十四47 大きな愛の氣持、そこからさしてくると
うとい光のためなのです。

十四401 ㊦ 平和と自由の光がさしてくる。

十四969 その火の光のさすところは、かべがきぬ
のようにうすくなって、

十五1110 ㊦ おまえたちがほおずりするたびに、
私の着物に、月と日の光がさしてきてね。

十五1141 ㊦ おまえのせわをしているときは、いつ
だってこんなに白くなって、光がさすのね。

さすが「流石」(副)5 さすが
四628 さすがのへびも、いきがくるしくなっ
たので、力をゆるめました。

九1326 それにはさすがの大きくも、びっくり
しました。

十二601 ㊦ 長者は、日のまるのおおぎをあげて、し
ずみかけた日をさしなねくと、さすがの太陽も、
まねかれるままに空の中ほどまでもどってきた。

十二849 しかし、さすがにチルデン選手です。

十五258 さすがの大わしも、十五六の少年に上か
らおされるので、その重さにたえられなくなつて、

さすかゝる「授」(五)1 さすかる《一ツ》
三1018 ㊦ これはわたしにさすかった子にちが
いない。

さすける「授」(下)1 さすける《一ケ》
三1066 ㊦ かぐやひめをごてんにつれてきたら、
おまえにくらいを さすけてやろう。

さする「摩」(五)6 さする《一ツ・一リール》

四1005 うらしまは、かめを だきおこして、せな
かを さすって、

九938 首がいたいらしく、手でさすっている。

九977 たかぎ、首をさすりながら、その場にぼん
やり立っている。

九993 ぼくの首をひっかいたのはだれだ。」と、
首をさする。

九1329 くもが、手でさすっているあいだに、みつ
ばちは、つなをほどこいて、

十一883 チチロはまた、病人に飲み物を飲ませた
り、ふとんをなおしたり、手をさすったり、

させき「座席」(名)2 座席
七405 三郎は、だれかにゆずってもらった座席の
上に立って、《略》、私を手まねきしています。

十一546 ㊦ おたがいにつめて、座席にもうひとり
させる「為」(下)10 させる《一セ・一セル》

見あんしんさせる・かんしんさせる・くりくりさせ
る・こごえじにさせる・しんばいさせる・しんぼさ
せる・たちおうじようさせる・はいけんさせる・ば
たばたさせる・ばちばちさせる・はったつさせる・

びっくりさせる・へいきんさせる・もぐもぐさせる
四1161 ㊦ いやいや、たいへん たいのしい 思いを
させて いただきました。

五7610 金のさかなは、なにもいわないで、しっぱ
でビシャリと音をさせて、海の中へおよいでいっ
てしまいました。

六788 ㊦ だれがそうさせるのかしら。

六814 ㊦ きょう一日だけ、私につりをさせてくだ
さいませんか。

七432 ㊦ みなさん、たいへんさしでがましいこと
ですが、わたしにちよっと話をさせてください。

九57 10 男は、喜んで、息をハアハアさせて、
 十一7 10 園 みんながさせてくれたら、コックスの
 まえにすわって、整調をやってみたいな。
 十二25 4 姉が、いそがしいので、おしめカバーを
 させたままほっておくと、
 十五28 1 そのとき、鳥はサアツという羽音をさせ
 たかと思うと、
 十五55 9 園 きょうはきみがまだ生まれないころの
 日本の話をさせてもらおう。
 させる (助動) 9 させる 《サセ・サセル》
 五96 園 じろう、せきをあげて、あのぼっちゃん
 をかけさせてあげ。
 五23 10 園 『ぼっちゃん、おかけなさい。』といっ
 て、かけさせてくれたんです。
 五95 3 園 すりえをこしらえて、たべさせてみよう。
 五95 5 たまごのきみですりえをこしらえて、たべ
 させてやりました。
 八61 8 みどりは目のためにいいから、親あひるは
 みただけみさせてやった。
 十33 7 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、
 佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。
 十一85 10 園 ぼく、あしたうちへ帰りますから、も
 うすこしここにいさせてください。
 十一85 11 園 どうか、ここにいさせてください。
 十二37 9 この生きた一ことが、私のたましいを目
 ざめさせ、
 さそ・う [誘] (五) 5 さそう 《ーイ・ツ・ーウ》
 五55 9 いってみませんか。」と、さそってくださ
 いました。
 五55 10 私は、〈略〉、ごろうさんをさそって、はる
 おといっしょに、学校へいきました。
 六24 7 さあ、おそくなるからでかけよう。」と

いって、あり一、二をさそい、
 十12 7 お友だちにさそわれても、どうしてもおと
 うさんのそばへこない女の子もありました。
 十二92 2 となりの友だちにさそわれていったこと、
 さだおさん (人名) 2 さだおさん
 二25 3 きょうは、いちろうさんと、さだおさんと、
 〈略〉、この五人の ぼんです。
 二26 8 さだおさんのしたおはなし。
 さだま・る [定] (五) 1 さだまる 《ーリ》
 十三18 8 國のおくるかほろびるかは、このときに
 さだまり、
 さだめる ↓みさだめる
 さちこ (話手) 2 さちこ
 三62 さちこ「はあ。」みんな「はあ。」
 三66 さちこ「おきあがる。」みんな「おきあが
 る。」
 さちこ (人名) 10 さちこ
 二47 2 てる人 いちろう じろう いもうとのさ
 ちこ おかあさん
 二50 4 さちこが、走ってでてきます。
 二50 6 じろうは、大きなりんごを さちこにわ
 たします。
 二51 2 さちこは、りんごをだいたり、ほおにつ
 けたり、おどったりします。
 二52 5 「〈略〉。」という、さちこの声がかかります。
 二52 7 さちこが、おかあさんの そばに かけより
 ます。
 二53 1 けれども、またさちこに、りんごを かけ
 します。
 二53 3 さちこは、またおかあさんにあげます。
 二53 6 どうとう、おかあさんは、さちこから
 んごをもらいます。

二53 10 こう いって、さちこは、じろうを手まね
 きします。
 さちこさん (人名) 1 さちこさん
 二52 6 園 「ここですよ、さちこさん。」
 さちよう [座長] (名) 1 座長
 十四52 3 園 それでは、座長の根さんのご指名で、
 私から申します。
 さつ ↓いっさつ・に さつ
 さっき [先] (名) 20 さっき
 一49 8 きがついてみると、さっきの人たちも、
 〈略〉、みんな〈略〉うさぎさんでした。
 三75 8 園 おや、さっきのお日さまの光、どこへ
 いったの。
 四20 3 手 さっき、みんなと ねこねずみをして
 あそびました。
 五55 4 園 さっきみつけた星は、どれだったかしら。
 六55 7 ふみおはさっきのことを思いだして、また、
 にわの木の下へいってみました。
 六55 9 動かないと思つてみた月は、もうさっきの
 枝のあいだにはなくて、
 六90 9 そこへ、さっきの女の人がでてくる。
 六101 10 そうして、さっきのつつの中へ、ちようど、
 するするとはいるくらいの大きさに作って、
 六105 2 さっきも、「〈略〉。」というのが、「〈略〉。」
 ときこえたので、
 七28 4 園 はるおは、さっきから、おもてで遊んで
 いますよ。
 九51 4 園 「やまねこなら、さっき馬車で、西の方
 へとんでいきましたよ。」
 九72 9 ギョーしゃは、さっきのどんぐりをますにい
 れて、はかつてさげびました。
 九95 10 やまだ、おこつていきかけるが、思いなお

して、さっきすてたじょうぎをひろってくる。

十53 すると、さっきの黒いいぬが、ごろんと、地べたに横になってねそべっていました。

十一86 ⑤ さっきから、きみはだまっているけれど、ぼくはきみをコックスにすいせんする。

十一735 さっきの看護婦と、もうひとりの看護人とながっていました。

十三407 その間、かた手に持ったさっきの手紙をくり返して読む。

十四547 ⑤ さっき、葉さんは養分のことをおっしゃいましたが、

十四581 ⑤ さっき、葉さんや根さんは、養分のことをいっていらっしやいましたが、

十四595 ⑤ さっきから問題になっている養分だって、みんな私がわけてあげたのです。

ざっくざっく (副) 1 ザックザック
九629 大きなかまをとりだして、ザックザックとやまねこのまえのところの草をかりました。

さっさと (副) 6 さっさと
三617 ⑤ 丘の木のところまで のぼってさ、それからさっさと かけおいて

四908 学校へ かよう 子どもたちのことを思っ

て、おもてのとおりをさっさと はく。

四913 ゆうびんなげいれ口のまわりをさっさと はく。

六5417 すると、月は枝のあいだにじっとしていま

すが、雲はさっさと走っていきます。

九952 そうしてさっさといきかけるが、舞台はしで足をとめる。

十一453 弟は、さっさと自分の席にもどり、そこらでなおして進みました。

ざっそう [雑草] (名) 3 雑草

九3610 ⑤ まっかな、かわいらしい山いちこの実が、こぼれたように雑草の中にありました。

九378 ⑤ くまざさやいろいろな名も知らない雑草がいちめんにはえていて、なにかでてきそうです。

十三206 これを生かすのは、みぞをほって水をそそぎ、平野の雑草をかりとり、じゃがいもか牧草を植えることにありますが、

ざっそく [早速] (副) 7 さっそく
六111 時計屋さんは、ざっそくピンセットでねじをはさみあげて、

六934 ⑤ では、ざっそくさがさせてみましょう。

七2711 ⑤ 観察日記に、ざっそく、これを写生しておこう。

八216 せみは、ざっそく、ぶさいくなかつこうをして、それにはいあがっていました。

八4511 ざっそくけらいたちを集めて、「〈略〉」と、おいしいけになりました。

八5110 「幸福」は、ざっそくごめんをこうむりました。

十五575 ⑤ ものずきな私は、それはおもしろいと、教授の申し出でをざっそく承知して、

さっと (副) 5 さっと
五488 まどをあけると、いまのぼったばかりの日の光が、さっといっばいながれこんできた。

七85 しおがひくように、子どもたちが、さっと学校からいなくなりました。

八241 朝日が山の上のぼって、明かるい光がさっとさすころになると、

八6510 さっと水の中へとびこんだ。

九122 とうげ道にさしかかったとき、さっとふいてくる風であり、竹やぶを流れてくる風であり、

ざっぱり (副) 1 ざっぱり

六46 なにがなにやら、ざっぱりわからなかった。

ざっぱりする (サ変) 1 ざっぱりする 《一シ》
八815 ⑤ それに、水の中へもぐってそこへいくと、それはざっぱりしますよ。

ざっぽろ [札幌] (地名) 4 ざっぽろ 札幌 札幌
五167 ⑤ 「ぼくは、ざっぽろまで。」

十一501 ざっぽろに農学校をつくられたクラーク先生もおっしゃった。

十五604 新島のおじさんが、やまのざっぽろの外に養っていたのは、明治二十年の夏であった。

十五617 札幌の創成(さくせい)川の岸にあった家につれられて行っても、

ざっぽろどくりつきようかい [札幌独立教会] (名)
1 札幌独立教会

十五606 恩師クラーク博士の精神のやどっている札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、

ざっぽろのうがっこう [札幌農学校] (名) 1 札幌農学校

十五605 当時、母校札幌農学校の教師をしながら、〈略〉札幌独立教会をつかさどっていた私の父

さつまいも [薩摩芋] (名) 2 さつまいも
九355 ⑤ そうして、近所からわけてもらったさつまいものなえを、手わけて植えていきました。

十二239 荒地を三ノアルばかりかいこんして、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、

さて [扱] (接) 6 さて
七752 ⑤ ちよつとのまに、いなくなりました。

さて、どこへいったものかしら。

八351 さて、空の星は、地球からどのくらいのこときよにあるのでしょうか。

十四321 さて、私は、あなたがたに星を見よう

にすすめましたが、

十四49 12 さて、おじょうさんの歌をたよりに、

マッケンナがおよいで行ったように、

十五88 6 さいて、いちばんおしまいに、ここにい

るのは、『はちきれそうなわらい』で、

十五107 10 さいてここに、『いちばん大きな喜び』

の中に、『美しいものを見る喜び』がいます。

さと「里」(名) 6 さと 里 ↓ふるさと・むらざと

五22 2 いちろうさんは、おかあさんのさとの、い

なかにいました。

十一28 5 そこで、ふたりの弟は母親のさとに、

《略》、あずけられることになりました。

十一41 1 雲はい色雲がたちこめて、さとはいぐれ

がしと降るに、

十二59 5 昔、この里に長者がいた。

十二59 10 ある年の夏、きょうは長者の家の田植え

だというので、里のおとめたちは、赤いたすきも

かいがいしく、朝から集まってきた。

十二60 3 里の人たちはおどろいたが、《略》、田植

え歌勇ましく、一心にはたらいだ。

さと「砂糖」(名) 2 さと

十五84 11 さと「だ」が、おまえさんたちは、あの

さとうがしをわすれたのじゃないかな。

十五93 6 さと「お」じょうざらしく、「略」。

さと「砂糖」(名) 5 さと「じくろざと」

十七72 12 「なあんだ、さとうだ。」

十三32 8 園においもさとも大まけだ。

十五82 10 いぬと、パンと、さとうとは、はじめは

いつて来たとき、すこしはにかなで、

十五92 1 「ふとった幸福」どもは、せつせと、い

ぬと、さとうと、パンをときつけて、えん会の中

にひきずりこんでしまいました。

十五92 10 それからさとうも、パンも、だれが行

けといた。

さと「がし」(砂糖菓子)(名) 3 さと「がし」

十五84 12 だが、おまえさんたちは、あのさとう

がしをわすれたのじゃないかな。

十五85 2 園のとおりのテーブルの光栄になってい

るさとうがしを。

十五85 4 あのさとうがしをわすれたのじゃない

かね。

さと「さん」(佐藤)(人名) 1 佐藤さん

十四22 3 佐藤さんが、「略」と、さもふしぎそ

うにいうと、

さと「せんせい」(佐藤先生)(人名) 1 佐藤先生

十五121 11 受持の佐藤先生と、教室でお別れをした。

さと「うだいこん」(砂糖大根)(名) 1 さと「うだいこ

ん

十三24 8 こむぎ・さとうだいこんなど、北ヨー

ロッパ産の農作物で、できないものはないまでに

なりました。

さと「がしま」(佐渡島)(地名) 2 さどが島

五89 7 園うらの山から海べをみれば、波にうか

んださどが島。

五90 4 園わしのおかあさんはな、ずつとまえに、

さと「が島」においてなさったことがあった。

さと「がしま」(題名) 2 さどが島

五90 1 園『さとが島』とおうたいになったとき、

おじぎをなさいましたね。

五90 5 園それでな、さとが島をうたうときには、

いつでもおじぎをするのだよ。

さと「し」(めざとし)

さと「す」(論)(五) 1 さと「す」《ーシ》

十33 6 「略」とさとしたが、佐吉のもえるよ

うな研究熱は、どうすることもできなかった。

さと「る」(悟)(五) 4 さと「る」《ーツ・ーリール》

三14 6 「略」とさとりました。

八91 4 いまは、その身をとりまくりつばなものの

中に、しみじみと幸福をさとったのである。

九122 7 それで、茶人は、泉はどうしても支流のほ

うにはなくて、速い上流にあるのだとさとった。

十五115 3 どういうように私を見なければならな

いか、それを、はつきりとさとるためだからね。

さなえ「早苗」(名) 1 さなえ

十一34 4 園さなえ連ぶ子、うし追うおきな、家内

そろって田植える。

さなぎ「蛹」(名) 5 さなぎ

七27 2 園さなぎになったのですよ。

七27 2 園先生は、あおむしがさなぎになるって、

教えてくださらなかったの。

七27 8 はるお さなぎをふしぎそうにみながら、

「これ、死んでいるの。」

七28 9 園あおむしがさなぎになったところを書い

たのが、よくできた。

七29 11 園きのう、学校から帰ってみると、あおむ

しは、もう黄色なさなぎにかわっていた。

さば「鯖」(名) 1 さば

十二98 4 このほか魚では、たい、さば、まぐろ、

かつおなどをたべました。

さばき ↓おさばき

さばく「砂漠」(名) 3 さばく

七74 8 ところ さばくの中。

七80 3 園私どもは、麦をつけたらくだをつれて、

さばくを通っていましたが、

七82 10 園私がさばくを旅していますと、砂の上に

らくだの足あとがつづいていました。

さびしい「寂」(形) 7 さびしい《イ—カツ—ク》

七四四(四) わたしは、終戦後、いつも心さびしい旅をしていました。

八四七(四) どんどん歩いていくと、さびしい村にさしかかりました。

一二二九(四) 來年とか、さ來年とか、《略》おっしやったりすると、なんとなくさびしくなります。

一二二九(四) でも、あなたの歌には、そのさびしい氣持がでているので、人の心を動かすのだから、

一二四〇(一) しかし、ケラーに「ことば」というものをわからせることによって、そのまっ暗なさびしい心を明かるくすることに成功しました。

一四四三(九) どんなさびしい日だって、それが元氣にしてくれる。

一五二〇(一) 私、きょう、ここにいて、それはさびしかったよ。

さびしすぎる「寂過」(上二) 1 さびしすぎる

《「ギル」》
一四一七(一) おひとりですさびしすぎるとは、お思ひになりませんか。

さぶろう「三郎」(話手) 7 さぶろう 三郎

三五二 さぶろう「あかるい山。」

三五四 さぶろう「あたかなかなぜ。」

三五七 さぶろう「たねまき、たねまき。」

一三三七(九) 三郎「もしもし……そうです。」

一三四〇(四) 三郎「もしもし、五千二十五番ですか。」

一三四三(二) 三郎 手紙を読みながら、「生きて帰って來ました——か。」

一三四七(三) 三郎「おかあさん、おかあさんなの……(と、うら手に行く……声だけ続く。」

七三三八 私と弟のさぶろうは、乗るには乗ったものの、動くことさえできません。

七三三九 私、さぶろうの手をしっかりとにぎり、

七三四〇 私は、さぶろうの手をしっかりとにぎり、さぶろうは、私のからだにすがりついていました。

七三五二 それでも、汽車がゆれるたびに、前後からおされて、さぶろうは、だんだん頭を私によせ、

七三五六 私とさぶろうとは、まるで、一つからだになつてしまふかと、思われるほどでした。

七三五五 私は、ありつた力の力をだして、さぶろうをかばうように両手をつつぱりました。

七三五七 《「略。」》というけあって、さぶろうをつれてきたのでした。

七三七一 私は、さぶろうのかたに手をかけて、《「略。」》ときいてみました。

七三七四 人ごみのうすぐらい中で、さぶろうは、元氣よくにこっと、私をみあげました。

七三三九 いきなりさぶろうをだきあげ、となりのおじさんの目のまえへ、つきだしました。

七三三九 おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人に渡しました。

七三三九 はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配そうに私の方をみていましたが、

七四〇二 乗客は、高いところを渡っていくさぶろうを、おもしろそうに、みおくらっていました。

七四〇四 私は、いそいで、さぶろうのあとを追いかけてました。

七四〇五 三郎は、だれかにゆずってもらった座席の上に立つて、《「略。」》私を手まねきしています。

七四〇八 私は、さぶろうの方に近よりながら、車中の人たちに、心の中でお礼をいいました。

一三三七(二) 人 三郎とこころ 三郎のうちの二室

一三三七(三) ところ 三郎のうちの二室

一三三七(七) 三郎が、ぼうしをかぶったままとびこんで来て、受話器をとる。

一三三九(一) ぼく、三郎……はい……え……真ちゃん……

一三三九(二) 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよって、ひきだしをあける。

一三三九(八) ぼく、三郎……うん……よかったなあ。

一三三九(五) 三郎、それに氣がついて、三郎「おかあさん、おかあさんなの……」

一三三九(一〇) よかったなあ……三郎の聲が終るころ、しずかにまく。

さぶろうくん「三郎君」(人名) 5 三郎くん

一三三九(八) 電話のはじめの人は、三郎くんのおぼさん、それからおとうさん、

一三三九(一) そこで、三郎くんの声と動きだけで、四人とそれぞれ話をしていようすを、見せなくてはなりません。

一三三九(三) 三郎くんのことばの間に、あいてがなにかいつているわけです。

一三三九(七) あいてのいうことを聞いて、それから三郎くんのことばをいい、

一三三九(八) 三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわかるように、くふうします。

さぶろうさん「(人名) 2 さぶろうさん

七三六四(四) さぶろうさん、もうすこし、がまんしていらつしやい。

七三七三(三) さぶろうさん、だいじょうぶ。

さま「様」 〇ありさま・エスさま・おうさま・おかあさま・おかげさま・おしゃやかさま・おつきさま・おてんとうさま・おとうさま・おとひめさま・おひさま・おひめさま・おほしさま・かねたいちろうさま

ま・かみさま・ごちそうさま・さかさま・じょう
さま・だんなさま・にいますか・におうさま・ほ
とけさま・まっさかさ・みかづきさま・みやさま
がた・やまねこさま

さま〔様〕(名) 1 さま

十五 94 7 窓 おやおや、なんてみともないさまだ
ろう。

さまさま〔様々〕(形状) 18 さまさま

六 5 4 きりや、ねじまわしや、ピンセットや、小
さなつちや、さまさまの道具も、おなじ台の上に
よこたわっている。

七 13 10 私どもの手が、さまさまなはたらきをする
ように、

七 13 11 「手」ということばも、さまさまなはたら
きをしてくれます。

九 6 9 色の組みあわせが、さまさまの感じをあら
わすのと同じように、

九 10 5 たいこのたたきかたによって、〈略〉、さま
さまな情景を写したこともできるといふ

九 10 9 にこにこわらいながらおいてくるもの、ま
じめな顔でやってくるものなどさまさまである。

十二 12 5 ずんずんおとうさんのそばへきて、さまさ
まなことを話しかけたり、

十二 20 10 窓 ただ白っぽくみえる太陽の光線ですが、
わけてみると、こんなにさまさまな色になります。

十二 63 2 能は、そのうたいにつれて、役者が〈略〉、
さまさまなしぐさをしたりするものですが、

十二 90 10 太郎はこの「くりひろい」の中に、さま
さまな氣持をこめているにちがいない。

十二 91 7 楽しかったさまさまなことが、

十二 96 8 その写真帳をひろげてみると、あなたが
たの家の昔からいままでのことがさまさまに思い

だされるでしょう。

十三 30 3 どちらにも、大小さまさまあって、音色も
ちがうし、

十三 31 4 まるく輪になったその中で、さるがさま
さまな藝をする。

十四 25 3 私は、このお話から、さまさまなことが
心にうかんできた。

十四 36 5 さまさまな術を發達させました。

十四 62 6 いろいろのこまかいことが目につき、さ
まさまのうたがいがおこってくるはずです。

十四 84 9 風の関係、水蒸氣の量、高度など、さま
さまな條件によって、雪のけっしようがちがう

さます〔寛〕(五) 8 さます 《—シー—》
四 43 7 けさも早くから、三十ばの がんは 目を
さましました。

六 44 7 窓 ぼくが目をさましたときには、おびみた
いなものが向こうの山の方へとんでいったんだよ。

六 139 1 とらさんは、晝ねをしていたのですが、う
さぎさんたちがあまりガヤガヤ話をするので、目
をさましてしまいました。

七 4 7 校門のかしの木は、目をさまして、しずか
にしんこきゅうをした。

七 41 4 目をさますと、向こうの席にひとりの青年
が立っていた。

九 14 1 しばい、ゆめをみていた人が、にわかに
目をさます場面を演ずることがある。

九 48 10 けれども、いちろうが目をさましたときは、
もうすっかり明るくなっていました。

十五 101 1 窓 ぼくたちは、あなたといっしょに、た
べたり、飲んだり、目をさましたり、

さまたげ〔妨〕(名) 1 さまたげ

十三 23 8 小もみは、ある大きさまでは、大もみの

生長をうながす力をもっているが、それをこえる
と、かえってさまたげになるといふ、

さまた・げる〔妨〕(下二) 1 さまたげる 《—ゲ—》
十五 65 11 喜んだ私は、朝早くからそれをガラガラ
とひきまわすので、家の人のねむりをさまたげて
しかたがない。

さみしがりや〔寂〕(名) 1 さみしがりや
十一 14 2 あれは、この村のさみしがりやの小すず
めだ。

さむ・い〔寒〕(形) 14 さむい 寒い 《—イ—》
カッ・カロ・ーク 《—》おおさむこさむ

四 87 5 さむい。

四 88 9 窓 からすのかんたは さむかろう。

六 46 3 窓 北風、からかぜ、寒いのに、
七 19 4 窓 それに寒かったし。

七 95 2 寒くなったので、むしろで戸をこしらえて
やりました。

八 14 7 ていねいに生みつけておいてくれましたの
で、寒い冬もぶじにこすことができました。

八 84 3 はくちょうは〈略〉、この寒い國からあた
たかい國、廣いみずうみへと、とんでいった。

八 85 6 そのうちに寒い冬がきた。

九 21 6 その日はたいへん寒いあらしの日で、朝か
ら晩まで、こやみなく雨が降っていました。

十一 40 3 窓 夕ぐれ寒くふくこがらしは、黄色くか
れたくぬぎ葉鳴らす。

十二 25 6 そとさえ寒くなければ、ものかげへつれ
ていって、用をたさせるようにしました。

十四 90 2 寒いことも寒いが、また暗さも暗かった。
十四 90 2 寒いことも寒いが、

十四 90 4 窓 「なんと暗い、寒い夜だろう。」

さむさ〔寒〕(名) 8 寒さ

九19 3 その年は氣候がわるくて、九月の中ごろ、きゆうに十二月の氣候と同じ寒さになり、
 十二71 8 芭蕉はからだがよわいので、寒さは身にこたえました。雪をみるのが楽しみでした。
 十四46 11 寒さも、つかれも、どこかへけしとんでしまつて、
 十四48 12 助け船のくるのを待つ間、〈略〉、寒さに氣を失つて、またから手をはなさないように、
 十四92 1 寒さがしみこんで、足は赤く、青くなつていた。
 十四94 10 両手もまた、寒さでほとんどこごえていた。
 十四101 11 寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、
 十四102 4 寒さの子は寒さでこごえ死んだのだ。
 さむざむ 「寒寒」(副) 1 さむざむ
 十三33 7 冬の日には、いかにもさむざむとした氣持をおこさせる。
 さめ 「雨」 ↓あきさめ・はるさめ
 さめ 「寛」 ↓めさめ
 さめ 「鮫」 ↓わにさめ
 さめやす・い 「冷易」(形) 1 さめやすい 《ーイ》
 十三24 3 しげた木のない土地は、熱しやすくさめやすいから、
 さ・める 「寛」(下) 10 さめる 《ーメーメル》
 ↓あおさめる・めさめる
 一52 1 すずしい かぜが ふきこんで きたので、目が さめました。
 一64 9 おかあさんの こえで 目が さめました。
 三50 3 かなかなぜみも 目が さめて、
 七6 1 あちこちのまどがあいて、教室も目がさめた。
 七80 7 目がさめてみると、らくだがいません。

九14 3 ゆめからさめるときには、音などはけつしするものではないが、やはりたいこをたたく。
 九142 7 そのひょうしに、くもは、目がさめました。
 十三32 1 やつと目がさめたころ、遠いところを通るその声を聞くのは、
 十四39 2 ゆめがさめた。
 十四39 2 長いゆめがさめた。
 さも 「然」(副) 3 さも
 六18 10 上でき。」と、さもまんどくそうにしき台をおりてきて、あせをふきます。
 八55 1 うさぎは、高いびきをかいて、さも樂しうに晝ねをしていました。
 十四22 6 「〈略〉。」と、さもふしぎそうにいうと、先生は、「〈略〉。」とおっしゃった。
 さやまめ 「鞘豆」(名) 1 さやまめ
 十一37 3 さやまめ・とうきびよくみのり いももふとつてくるようす。
 さゆう 「左右」(名) 2 左右
 九88 4 たかぎとやまだが左右にひきわけられたところである。
 十二104 8 屋根の形や左右にのびたろうかのかっこうにも、
 さよう 「左様」(形状) 5 さよう
 四105 5 さようで ございます。
 四115 7 さようで ございますか。
 六91 5 さようで ございます。
 六92 2 あ、さようで ございましたか。
 十五46 7 はい、さようで ございます。
 さようなら 「左様」(名) 1 さようなら
 七7 6 なんども手をふりながら、先生にさようならをして走って帰る子ども。
 さようなら 「左様」(感) 25 さようなら

三42 1 「さようなら。」
 四25 9 さようなら。
 四117 8 さようなら。
 四117 9 さようなら。
 五12 6 「ぼっちゃん、さようなら。」
 五12 7 「さようなら。」
 五16 1 「では、としおさん、さようなら。」
 五18 6 「さようなら。」
 五18 7 「さようなら。」
 五18 8 「さようなら。」おたがい、であったと思つたら、すぐおわかれでした。
 六44 11 さようなら。
 九46 11 さようなら
 十一81 5 「さようなら、看護婦さん。」という声がきこえました。
 十一87 7 さようなら。
 十一90 10 さようなら。
 十一92 9 「さようなら。」といって、名をなると呼ぼうかと思つてゐるうち、
 十一92 12 「さようなら、おとうさん。」
 十三42 11 「さようなら。」(受話器をおく。
 十四10 10 では、おかあさん、さようなら。
 十四11 1 さようなら。
 十四13 7 あなたを思うすべての心をかたむけて、さようなら。
 十四17 7 では、おかあさん、さようなら。
 十四17 8 さようなら。
 十五6 3 朝さくらみどり子にいうさようなら
 十五118 11 さようなら。
 さよなら (感) 1 さよなら
 三42 4 「さよなら 三かく、また きて 四かく。」

さら [Ⅲ] (名) 3 さら じおさら

十四133 雪に、小さなさらがあります。

十四9612 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴか光るさらをならべたテーブルが見えた。

十五435 ウインドにかざられてあるさらやはちをしげしげとのぞきこみながら、

さら [更] じおさら

さらい じおさらい

さらいねん [再来年] (名) 1 さら年

十二217 さんざくろさんが、來年とか、さ來年とか、
《略》さきのことをおしやつたりすると、

さらさら (副) 8 サラサラ さらさら

一377 川が、さらさらとながれています。

一378 ちいさな川が、うちのまえを さらさらとながれています。

八8810 はくちようは、つばさをサラサラと鳴らし、かるく水の上をおよいでいた。

八938 すると、つばさがサラサラと音をたてた。

九79 この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、

九1201 水は《略》音をたててわきだして、一方のかけたところから、さらさらと流れだしていた。

九1211 泉をあふれた水は、さらさらと走って、

《略》川に流れこんでいた。

九1262 そこで氣をつけてみると、右岸からさらさらと流れ落ちる小さな谷川がある。

さらさら (感) 3 さらさら

三866 さらさらさら、さらさらさら。

三866 さらさらさら、さらさらさら。

四897 すすめ親子のねたあとは、さらさら

さらと雪の音。

さらさらさらさら (感) 3 さらさら、さらさ

らさら

三72 さらさら、さらさらさら。

三73 さらさら、さらさらさら。

三76 さらさら、さらさらさら。

さらに [更] (副) 15 さらに

六258 楽しみはいよいよくわわり、喜びはさらにたかまる。

九62 三音、四音と組みあわせると、さらにちがった氣持がします。

九81 さらに、「虫の声」ということばを加えたらどうでしょう。

九179 南洋の島々から、さらに海をこえて、速いオーストラリアまでいくのがあるということです。

九205 そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではまにあわず、さらに二台の自動車を加えました。

九12511 そこからさらに、すこしさかのぼって水を飲んでみると、いい味は、すこしもなかった。

九1265 そこで、谷川をさらにさかのぼると、岩まからちよろちよろとわきでる泉があつて、

十156 おとうさんがしょうじきにその答をしましたら、少年は、さらにこんなことをいいました。

十374 そこでさらに、七年間のくふうがつづけれ、みごとに、自動織機ができた。

十三94 ととのった知識とし、また、さらに進んだ研究をする土台にするのである。

十三251 そればかりでなく、しげった林は、海岸からふき送る砂ぼこりをふせぎ、さらに、北海岸特有の砂丘を、海岸近くでくいとめました。

十三3310 月が出ていれば、出ていたで美しく、星の夜であれば、またさらに美しい。

十四867 いますこしふかく考えれば、さらにおもしろい場面が発見されるように思われる。

十五413 このエジプト文字がフェニキアに移って

フェニキア文字となり、さらに、そのフェニキア文字がギリシアに傳わってギリシア文字となり、

十五759 自動車のドアに手をかけた老博士が、さらに、「《略》。」とささやかれた。

さらりと (副) 1 さらりと

十679 次郎かじやは、こしからぬきとったせんすを、さらりと開きました。

サリバンせんせい (人名) 9 サリバン先生

十二314 私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな日は、サリバン先生がきてくださった日であります。

十二332 サリバン先生は、お着きになったあくる朝、《略》、一つの人形をくださいました。

十二349 サリバン先生が、ほかの大きな人形を私のひざの上において、「人形」という字をつづり

十二352 サリバン先生は、「ゆのみ」が道具で、「水」がその中はいっているものであることを、はつきり教えるために苦しめたのですが、

十二406 すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、もうあ教育に経験のあるサリバン先生にきていただくことにしました。

十二408 サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくのには、なみなみならぬどりがいりました。

十二411 サリバン先生に手をひかれ、ふたりがひとりのようになって、勉強をはじめたのです。

十二424 これは、ケラーのサリバン先生に対する信頼と、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、一つになったおかげです。

十二425 サリバン先生のケラーを思う愛情とが、サリバンせんせいなし (名) 1 サリバン先生なし

十二419 クラーは、もうサリバン先生なしには、生きていけません。

さる「猿」(名) 9 さる ↓おさるさん

四79 ↓ さるの木のぼり。

六675 すると、一ぴきのさるにであいました。

六679 さるは子ぐまをみてこわがって、

八104 そのかつこうは、さるそっくりです。

十二34 ↓ 私は、《略》、ただ、さるの人まねのように指を動かすだけでした。

十三314 まるく輪になったその中で、さるがさまざまな藝をする。

十三316 三國志とか、西遊記とかいった、中國のむかしものがたりをやるつもりなのだが、さるは、とちゅうできょんととしてやめてしまったり、

十三318 さるまわしは、さるをつかったり、せりふをいったり、《略》、なかなかいそがしい。

十四818 さるも木から落ちる。

さる「去」(五) 13 さる 去る 《ーッーリーー

ル》 ↓ うつりさる・たちさる・とりさる・ぬぎさる

六254 ありはなんにもいわないで、おもい足どりでかみてにさっていきます。

六403 親つばめ、子つばめをつれてさる。

七910 毎年、新しい卒業生たちが、わたしのそばからさっていった。

九165 まもなくさっていかねければならない日本に、なごりをおしんでいるのかもしれません。

九1610 やがて、九月のなかばをすぎると、つばめは、そろそろ日本をさっていき、

九91 ↓ もういいったら——と、やまだのせなかをおしながらさる。

九91 ↓ 友だち、たかぎをかこみながらさる。

九93 ↓ ふたり、じゅんじゅんに舞台をさる。

九936 それを舞台のおくになげすて、なお、あちこちさがしつづけながらさる。

九103 ↓ ふたり、なかよくかたを組みながらさる。

十42 ↓ 喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であつたうめが、この世をさってしまった。

十一123 春がさって夏がくる。

十三253 しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水の害のぞかれたので、

さるさん「猿」(名) 2 さるさん

六677 さん、さるさん。

六677 さん、さるさん。

六677 さん、さるさん。

さるすべり「百日紅」(名) 1 さるすべり

九295 さん、さるすべりラジオのほかに声もなし

さるまわし「猿回」(名) 2 さるまわし

十三309 その中で、いちばんさわがしくて、大きな音をたててやって来るのは、さるまわしである。

十三318 さるまわしは、さるをつかったり、せりふをいったり、《略》、なかなかいそがしい。

さわがしい「騒」(形) 4 さわがしい 《ーク》

五1010 さわがしく鳴いてみせすと、すずめは、

おどろいてとんでいってしまいました。

十一354 空にくずれる雲のみね、庭にかがやくひまわりの花、あぶらぜみの声さわがしく、

十二75 ↓ ふだんは筑波おろしがさわがしく、雨戸をゆさぶったり、

十三307 その中で、いちばんさわがしくて、大きな音をたててやって来るのは、さるまわしである。

さわぎ ↓ おおさわぎ・おおさわぎする

さわぎだす「騒出」(五) 1 さわぎだす 《ース》

十五235 先生が第一にさわぎだす、両親があわててあたりをかけまわる。

さわぎだす「騒立」(下二) 1 さわぎだす

《ーテ》
二315 十二ひきのぶたは、ぶうぶういってさわぎだしました。

さわぎやども「騒屋共」(名) 1 さわぎやども

十五897 あのとおり、さわぎやどもが、おまえさんがたを呼びたてているでしょう。

さわぐ「騒」(五) 5 さわぐ 《ーイーガ》 ↓ た

ちさわぐ

七493 あいてのセンターが、「《略》」とさわいだ。

八788 ねこはのどを鳴らし、にわとりは「コッ

コッ」とさわいだ。

十三3610 あひるが、「ガア、ガア」とさわいで行く。

十五275 つかまれている女の子は、あきらめたのか、おそろしいのか、それともおどろいて氣でも

失ったのか、すこしもさわがず、

十五826 「キャッキャッ」とさわいだり、

さわざわ(副) 4 ザワザワ さわざわ

七612 さきだけみえることし竹が、さわざわと、動いている。

九114 川波がザワザワとたちさわぐところである。

九1110 風といえば、「そよそよ」とか、「ザワザワ」とか、「ビュウビュウ」とかいうことばであ

らわしているが、

九55 ↓ そこは美しいこがね色の草地で、草は風に

ザワザワ鳴り、

さわやか「爽」(形状) 6 サワヤカ さわやか

六4310 さわやかな朝の空。

六50 ↓ 楽しいことがあるような、ああ、さわやかな朝の空。

六606 タノシイコトガ——七 アルヨウナ——

五 アアサワヤカナ——七 アサノソラ——五

ん・しちごさん

さん・ふくろうさん・ふとったこうふくさん・ふみおさん・プリンクリーさん・プリンクリーじいさん・ぼうさん・ぼうさんたち・ボーイさんたち・ぼちさん・まことさん・まさおさん・まつもとさん・まんべえさん・みかづきさん・みきこさん・みちこさん・みつおさん・みつぼちさん・みなさん・みなさんがた・みなさんじしん・みよこさん・むすこさん・めくらさん・やおやさん・よしこさん・りすさん・りようかんさん・りんごさん

十五3712 「山」を「サン」、「海」を「カイ」というようにもとの中國の發音にしたがった読みかたをしたが、

十五3712 「山」を「サン」、「略」というようにもとの中國の發音にしたがった読みかたをしたが、

十五381 「山」を「やま」、「海」を「うみ」など

とつかって、

さんおん 「三音」(名) 1 三音

九62 三音、四音と組みあわせてみると、さらにちがった氣持がします。

さんかく 「三角」(名) 2 三かく

一334 お日さま——にじ——あか——あお——きいろ——まる——四かく——三かく——

三424(金) さよなら 三かく、またきて 四かく。

さんがく ↓アメリカさんがくかいかいいん

さんかくじようぎ 「三角定規」(名) 1 三角じようぎ

九933 そのうちに、セルロイドの三角じようぎををひろいあげる。

さんかくそくりよう 「三角測量」(名) 1 三角測量

十五562(金) そのときは、まだ三角測量が行われていなかったの、富士山の高さも不明であった。

さんかくぼうし 「三角帽子」(名) 1 三かくぼうし

四837 赤いふくをきて、三かくぼうしをかぶり、

さんかげつまえ 「三箇月前」(名) 1 三ヶ月まえ

十二315 それは一八八七年の三月三日、私が満七さいになる三ヶ月まえのことでありました。

さんがつ 「三月」(名) 2 三月

四1243 三月はひなまつり。

十一633 雨の降っている三月のある朝、

さんがつみっか 「三月三日」(名) 1 三月三日

十二315 それは一八八七年の三月三日、私が満七さいになる三ヶ月まえのことでありました。

さんきやく 「三脚」(名) 2 三きやく

十二133 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、がかを立てて写生をはじめた。

十二174 文雄は、三きやくにこしかけて、またふでをとってかきはじめた。

さんくみ 「三組」(名) 4 三くみ 三組

三184 三くみは魚の名をあつめました。

三211 三くみの人たちに。

四697 三組の「なぞ」。

六565 それから、二組、三組と、じゅんじゅんにへんしゅうをすることにきめました。

さんげんぶん 「三軒分」(名) 1 三げんぶん 十三415 図 いまどこの家でも二けんぶんも、三げんぶんもの人が、寝とまりしているんだよ。

さんごくし (題名) 1 三國志 (さんごくし) 十三314 三國志とか、西遊記とかいった、中國のむかしものがたりをやるつもりなのだが、

さんこくふう 「山谷風」(名) 1 山谷風 十四766 これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。

さんさん 「散散」(副) 1 さんさん

六910 三人はさんざんさがしまわったが、みつからないのがっかりした。

さんさんと 「燦燦」(副) 1 さんさんと 十二832 まっ白い線のひかれたコートには、日ざしがさんさんと降りそそいでいました。

さんじ 「三時」(名) 1 三時 九206 自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわりきっているつばめたちを運んできました。

さんじかん 「三時間」(名) 1 三時間 十二817 三時間もぶっとおしに戦いました。

さんじかんめ 「三時間目」(名) 1 三時間め 八1033 3時間めの終りに開きはじめました。お晝の時間には、もう閉じてしまっていました。

さんじごろう 「三時頃」(名) 1 三時ごろ 十五209 朝の十時と午後の三時ごろと、日に二どずつ、《略》、散歩に出て来るのでした。

さんしせんねん 「三四千年」(名) 1 三四千年 十二976 みたところ、なんのかわりもない貝です。が、いまから三四千年もまえの貝です。

さんじっこうねん 「三十光年」(名) 1 三十光年 八353 二十光年の星もあり、三十光年の星もあります。

さんじっせん 「三十銭」(名) 1 三十銭 五158 私は、三十銭でどこへでも旅をすることができます。

さんじっセンチ (名) 2 30センチ 三十センチ 十二529 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十センチぐらいにつきあわせて、図の形に切る。

十二53 図 30センチ さんじっセンチあまり (名) 1 三十センチあまり 九3310 図 らいぎよは、大きなになると、三十センチあまりもあります。

さんじっセンチメートル (名) 1 30 cm 八992 あいだを30 cmぐらいずつあけ、きそく正しく植えました。

さんじっば 「三十羽」(名) 4 三十ば 四412 三十ばのがんは、まいにちまいにち、北へむかってたびをつづけていました。

四436 けさも早くから、三十ばのがんは目をさました。

四478 三十ばのがんは、一列になってとんでいきました。

四653 三十ばのがんは、みずうみの島をとびたちました。

さんじっぶん 「三十分」(名) 5 三十分 五551 三十分ぐらいしかたつていなかったのに、もうすつかりくらくなつていて、

八349 光のとどく時間ではかると、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。

九849 図 これで三十分ほりました。

九851 図 さあ、あと三十分ほつてみましょう。

九864 あとの三十分は、ひじょうにみじかく思われしました。

さんじっぽん 「三十本」(名) 1 30本 八1059 1かぶのくきの数を数えてみますと、大きなかぶは30本もありました。

さんじゅう (課名) 2 三十 三26 五 学校……三十

十一28 四 田園……三十

さんじゅう 「三十」(名) 2 三十 30 六404 30

十二676 のこぎりののはは、いぬの歯のようにとがつて、《略》、二十も三十も続いている。

さんじゅうアール (名) 1 三十アール

十二23 9 近所の荒れ地を三十九アルばかりかいこ
んして、
さんじゅういち (課名) 4 三十一
一36 十四 ひとつのことばから……………三十一
六26 三 かかし……………三十一
九31 五 先生とみなさんへ……………三十一
十二25 四 光を求めて……………三十一
さんじゅういち (課名) 1 31
六40 7 31
さんじゅうかん (課間) (名) 1 三週間
八79 3 そこで、あひるの子は、三週間ばかりため
しにおいてもらった。
さんじゅうく (課名) 1 三十九
三27 六 かえり道……………三十九
さんじゅうく (課名) 1 39
六43 6 39
さんじゅうくわ (課名) (名) 1 三十九わ
九22 13 二日 同じく 九百九十ぼ 五日 同じく の
こりの三十九わ
さんじゅうく (課名) (名) 1 35
六41 6 35
さんじゅうさん (課名) (名) 1 33
六41 1 33
さんじゅうし (課名) 4 三十四
一37 十五 なってみたいもの……………三十四
四25 四 心に 生きて いる ことば……………三十
四
七210 四 汽車の中……………三十四
十五211 三 文字の話……………三十四
さんじゅうし (課名) (名) 1 34
六41 2 34
さんじゅうし (課名) 3 三十七

一38 十六 だんだん くわしく なる……………三十
七
八29 四 幸福……………三十七
十三28 五 電話……………三十七
さんじゅうし (課名) (名) 1 37
六43 1 37
さんじゅうすうにん (課名) (名) 1 三十数人
十五48 1 このお庭焼のために、細工人、画工、
《略》などが、三十数人かかえられていた。
さんじゅうに (課名) 2 三十一
五25 四 石炭……………三十一
十三1 五 発明……………三十二
さんじゅうに (課名) (名) 1 32
六40 10 32
さんじゅうはち (課名) 3 三十八
二32 六 山びこ……………三十八
五26 五 心と心……………三十八
十四25 四 夜明け……………三十八
さんじゅうはち (課名) (名) 1 38
六43 3 38
さんじゅうろく (課名) (名) 1 36
六42 8 36
さんじゅうつする (算出) (サ変) 1 算出する 《一
シ》
十五56 四 足の下にひろがる駿河湾の海岸線をな
がめ、その角度を目算して紙上計算してみたが、
その際算出した高さは、
さんしゅるい (課名) (名) 2 三種類
十五42 5 いま日本では、漢字と、かたかなと、ひ
らがなの三種類の文字をつかっており、
十五42 7 世界のどこに、こんなに三種類も四種類
も文字をつかっている国があるうか。

さんしよ 「山椒」(名) 1 さんしよ
十一56 四 べにばら野ばら、さんしよの木のため、
めやぎのおちち、一つ一つかおる。
さんしよく 「三色」(名) 1 三色
九53 三色の組みあわせにしたら、《略》、もっと
ちがつた感じがするにちがいありません。
さんすう 「算数」(名) 3 さんすう 算数
四11 5 こくご、しゃかい、さんすう、りか、おん
がく、《略》などの べんきょうをします。
十58 2 算数の時間に、先生が、はしこでいちよう
の木にのぼって、
十四79 12 「二三が四」という算数の九九と、にた
ようなものだと思います。
さんせい 「賛成」(名) 3 賛成
十一510 四 ぼくもきみに賛成だ。
十四5110 四 「賛成、賛成。」
十四5110 四 「賛成、賛成。」
さんせいする 「賛成」(サ変) 3 さんせいする
賛成する 《一シ》
四44 5 みんなは、それにさんせいしました。
十一59 12 「《略》。」と、正男がいうと、一雄はす
ぐ賛成した。
十四61 12 花も、葉も、根も、みんな賛成しました。
さんセンチメートル (名) 1 3 cm
八97 2 もう、なえが、2 cmから3 cmにのびました。
さんだいめ 「三代目」(名) 1 三代め
十二59 6 三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけ
て、わがままをはじめた。
サンタクローズ (名) 1 サンタクローズ
四83 8 まっ白な あごひげをつけた サンタク
ローズのおじさんができました。
サンタクローズさん (名) 2 サンタクローズさん

四84 1 〇 サンタクローズさんがぶらんこしているよ。

四85 8 〇 おかあさんのサンタクローズさん。

さんち 「産地」(名) 1 産地

十45 2 今日、眞珠の産地は、〈略〉をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、

さんちゃん 「人名」 15 さんちゃん

五94 2 さんちゃんが、友だちと、山へわらびをとりにいきました。

五95 2 さんちゃんがひろって帰ると、おとうさんが、〈略〉、たまごのきみですりえをこしらえて、

五95 10 さんちゃんは大よろこびでした。

五97 6 さんちゃんのおうちのまつの木にとまったり、かえでの枝で休んだりしていきました。

五100 5 さんちゃんは、ひわによくいつてきかせました。

五100 8 さんちゃんがべんきようをはじめると、ひわは、「〈略〉。」と、へんな声でさえずって、

五100 11 「〈略〉。」と、へんな声でさえずって、さんちゃんの本をよむ声をまねます。

五101 2 さんちゃんが、ハーモニカをふきはじめると、ひわもよろこんで、

五102 9 さんちゃんのおかあさんが、せんたくをしますと「〈略〉。」と、ひわもまねをします。

五105 10 さんちゃんのおかあさんも、ひわをほめました。

五106 1 ある日、二三ぼのひわが、さんちゃんのうちのまつの木におりてきました。

五107 6 ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つきからつぎへときかせました。

五107 8 そこへ、さんちゃんが学校から帰ってきました。

五108 1 〇 ぼくの友だちのさんちゃんだよ。

五109 8 おとうさんのほめるのをきいて、さんちゃんは、ますますひわがかわいくなりました。

さんちゃんたち 「人名」 1 さんちゃんたち

五99 4 さんちゃんたちが水をふきかけたり、くすりをつけてやったりしますと、

さんちゅう 「山中」(名) 1 山中

十五20 4 ユングフラウの山中のホテルに、アメリカ人の一族が来て、しばらくとまっていました。

さんてんごデシリットル (名) 1 3・5 dl

八109 7 平年作は、1平方mに3・5dlのげん米がとれるのですから、

さんとう 「三頭」(名) 1 三とう

五40 10 〇 なかに、子うしが三とういます。

さんどさんど 「三度三度」(名) 1 三ど三ど

八6 10 三ど三どの食事に、テーブルの上でおしよるばんしたりしました。

さんどめ 「三度目」(名) 1 三どめ

八57 1 こんどは三どめだ。

さんにな 「三人」(名) 14 三人

二54 7 おかあさんのよこに、三人が立ちます。

二54 8 おかあさんは、三人のあたまを、しずかになでてやります。

三63 6 三人の男の子は、うしろにこしかけました。

五21 8 しかし、その中に三人だけ、たいへんよろこんで帰っていった子どもがありました。

六9 10 三人はさんざんさがしまわったが、みつからないのがっかりした。

六51 4 ふみおと、よしおと、みちこの三人が、かげふみをして遊んでいました。

六51 6 三人は遊ぶのをやめて、空をみあげました。

六55 5 それから、三人はわかれて、それぞれ家へ帰りました。

十10 9 プラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。

十10 11 三人の少女は、その葉をひろい集めて、

〈略〉、遊んでいました。

十13 4 それから、三人の少女に、歌を歌ってほし

いと頼みました。

十一60 12 すると、橋はまん中からおれて、三人は、

川の中へドブんと落ちこんだ。

十二95 9 読み手によって、三人三よう、それぞれ

ちがったことを心の中に思いうかべる。

十二112 1 三人がひとつに心をあわせた美しさは、

このとおりりつばななものとなって生まれたのです。

さんにながかり 「三人掛」(名) 1 三人がかり

十二44 11 〇 ものによつては、三人がかりで一つの

人形を動かすんだ。

さんになづれ 「三人連」(名) 1 三人づれ

十一59 9 太郎は、友だちの正男と一雄と三人づれ

で、学校から帰るときのことであつた。

さんになめ 「三人目」(名) 2 三人め

二35 7 〇 三人めのめくらは、ぞうのはなにさ

わって、「〈略〉。」といました。

七39 10 三人め、四人めと、高いところをメデシン

ボールのように送られていくうちに、

さんねん 「三年」(名) 3 三年

三12 3 二年すぎました。〈略〉。三年になりました。

十三38 7 〇 一ど、三年のときだったか、遠足で行

きました……

十四81 1 石の上にも三年。

さんねん 「残念」(形状) 3 さんねん

九七九 やまねこは、どうもいいようがまずかった、いかにもさんねんだというふうに、
 十四三〇 大きなものに心をくばることがたりなかったのは、さんねんなことだと思います。
 十五四二 なぜいままで、もつと先生がたどしたしくしなかったのだろうと、さんねんに思いました。
 さんねんせい 「三年生」(名) 3 三年生
 二五九四 三年生も、これで べんきょうしました。
 五三八六 ぼくも、三年生を受け持っている。
 十二四〇 三年生のときに習ったイソップ物語。
 さんねんめ 「三年目」(名) 1 三年め
 十一二九 三年めには、二十ぴょうの米をとることができました。
 さんのぼめん(題名) 4 三のぼめん
 二四九 三のぼめん
 四一〇 三のぼめん である 人 うらしまたろう
 たいえび そのほかいろいろな魚
 四一三 四のぼめん である 人も ところも、三のぼめんとおなじ。
 六八四 三のぼめん
 さんのひと 「三人」(話手) 8 三の人
 十四三八 三の人「明かるいひびき」。
 十四三八 三の人「朝が近づく」。
 十四三九 三の人「夜が明ける」。
 十四三九 三の人「希望の光」。
 十四四〇 三の人「おらかな朝」。
 十四四〇 三の人「新しい世界のおとずれ」。
 十四四一 三の人「喜びにみちてかがやく光」。
 十四四八 三の人「わたしたちの前に、朝がきた」。
 さんぽ 「三羽」(名) 1 三ば
 四五〇 力のつよいがが、三ばで、かっちゃんのおちていくのを、下からうけとめました。

さんばん 「三番」(名) 2 三ばん
 十一五八 ぼくは、大きくなったら、三ばんか四ばんをこぐんだ。
 十一一〇 三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくたち強い男の子だ。
 さんばんぼし 「三番星」(名) 2 三ばん星
 五五三〇 三ばん星は、ねえさんがみつけたいわ。
 五五二四 「あれ、三ばん星」。
 さんばんめ 「三番目」(名) 2 三ばんめ
 四六八 かつちゃん、三ばんめにしよう。
 四八四 三ばんめに、すじむかいのみきこさんが、しょうかをうたいました。
 さんびき 「三匹」(名) 7 三びき
 二二九 一びき、二ひき、三びき、四ひき、五ひき、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、
 二四〇 一びき、二ひき、三びき、四ひき、五ひき、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、
 三三三 いけには、きんぎょが三びき およいでいます。
 四二五 ねずみが三びき、わの中にはいり、ねこが二ひき、わのそとにいました。
 六二六 そのとき、しもてから、ありが三びき、ゆつくりでできます。
 七五七 ほたるを三びき、つかまえました。
 九三三 三びきもとてくると、うちの家族七人が、じゅうぶなべることが出来ます。
 さんびきとも 「三匹共」(名) 1 三びきとも
 七八八 四月二十九日(日) 晴 20度 草をやったら、三びきとも、せつせとたべました。
 さんびやく 「三百」(名) 1 三百
 九六〇 みんな赤いズボンをはいたどんぐりで、その数といたら、三百でもきかないほどでした。

さんびやくじゅうグラム(名) 1 390g
 七八六 黒うさぎ 390g。
 さんびやくじっぽん 「三百五十本」(名) 1 三百五十本
 九三五 いもなえは、ぜんぶで三百五十本ありました。
 さんびやくじゅうねん(名) 1 三百五十年
 十二四七 これをキリスト教の宣教師が日本に傳えたのは、三百五十年ほどまえのことです。
 さんびやくじゅうメートル(名) 1 三百五十九メートル
 九一〇 三百五十九メートルも登ったところで、つえをあげて、「略」というあいずをされた。
 さんびやくさんじゅうねん 「三百三十年」(名) 1 三百三十年
 十五四六 有田に焼物をはじめられたのは、いまから三百三十年ばかりまえのことである。
 さんびやくしゅるい 「三種類」(名) 1 三種類
 十二九七 貝づからである貝は、三種類にもほります。
 さんびやくじゅうグラム(名) 1 320g
 七九八 母うさぎは4kg、子うさぎは、おもいで320g、かるいで260gでした。
 さんぶく 「山腹」(名) 1 山腹
 十四七六 これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。
 さんぶんのいちじょう 「三分一以上」(名) 1 三分の一以上
 十三九〇 その三分の一以上が、作物のできない土地であります。
 さんぽ 「散歩」(名) 4 さんぽ 散歩
 十四六 きのおう、三つになる——まんていうと二年

三ヶ月になる妹をつれて、さんぽにできました。
十二193 園 このあいだの晩も、ピアノの先生が、
散歩にいらつして、

十五2010 このふたりの子どもたちは、両親や家庭
教師につれられて、散歩に出て来るのです。
十五217 ある朝、このアメリカ人の家族は、いつ
ものように散歩に出ました。

さんぽ・する 「散歩」(サ変) 2 さんぽする 散歩
する 《—シ》

四248 園 おとなりのまさちゃんと、あのいけ
のそばまでさんぽして きました。

十五461 ある日、プリンクラーは、どうやら覚え
た日本語で、町をひとりで散歩していた。

さんぽん 「三本」(名) 7 三ぽん 3本 三本

一148 くれよんひととはこ、ふでいれひとつ、え
んびつ 三ぽん、けしごむ ひとつ。

五778 先生のつくえのかびんに、大きなひまわり
の花が、三本かざってありました。

八993 1かぶに3本ずつ植えたのと、1本ずつ植
えたのと二とおりにして、

八1017 3本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえま
したが、いちばん多いので15本になりました。

八1063 3本ずつ植えたかぶには、
九432 園 こちらはかきの木の多いところで、どこ
の家にも、二本や三本はあります。

九434 園 ぼくたちのかりているやしきのまわり
にも、大きなかきの木が三本あります。

さんメートル (名) 1 三メートル

十五2211 三メートルもあるような羽をひろげた大
きな一わのやまわしが、

さんや 「山野」(名) 1 山野

八47 北はほっかいどうから、南はきゅうしゅう

やそのさきの島々まで、いたるところの山野に、
さんよう 「三様」(名) 1 三よう

十二959 読み手によって、三人三よう、それぞれ
ちがったことを心の中に思いうかべる。

さんよにん 「三四人」(名) 1 三四人
九10811 ぼくたち三四人は、列をはなれて、ま一文
字にすべりおりた。

し

し (課名) 45 四

一22 一 みんないいこ……………四
一25 四 たまいれ……………九

一91 四 たまいれ……………九
二22 一 「あ」のつくことば……………四

二25 四 先生……………二十一
二211 四 先生……………四

三22 一 春の 声……………四
三25 四 はやとり……………二十一

三221 四 はやとり……………二十一
四22 一 この町……………四

四25 四 心に 生きている ことば……………三十一
四 四 心に 生きている ことば……………三十一

四341 四 心に 生きている ことば……………三十一
五22 一 川のうた……………四

五25 四 石炭……………三十二
五321 四 石炭……………三十二

六22 一 小さなねじ……………四
六27 四 空のうた……………四十六

六461 四 空のうた……………四十六

七22 一 校門のかしの木……………四
七210 四 汽車の中……………三十四

七341 四 汽車の中……………三十四
八22 一 うちのほおじろ……………四

八29 四 幸福……………三十七
八371 四 幸福……………三十七

九22 一 組みあわせ……………四
九28 四 夕やけ……………二十六

九261 四 夕やけ……………二十六
十22 一 美しいもの……………四

十27 四 あなたの思っていることは……………二十
七 七

十一271 四 あなたの思っていることは……………二十
十一22 一 川口の子どもたち……………四

十一28 四 田園……………三十
十一305 四 田園……………三十

十二22 一 小さな行……………四
十二25 四 光を求めて……………三十一

十二311 四 光を求めて……………三十一
十三22 一 しずかな午前……………四

十三27 四 ホートン風景……………二十六
十三265 四 ホートン風景……………二十六

十四22 一 おかあさん……………四
十四25 四 夜明け……………三十八

十四381 四 夜明け……………三十八
十五22 一 まさに立つべし……………四

十五36 四 めぐりあい……………四十三
十五431 四 めぐりあい……………四十三

し (四) (話手) 2 四
九88 四 「さあ、やまだくん、これでひきわけ
だ。」

九903 四 「みつともないよ。」

し	〔題名〕 7 四
一48 2	(四)
二32 1	(四)
七2 8	(四)
七26 6	(四)
八3 9	(四)
八83 7	(四)
十一87 9	(四)
し	〔土〕 じきかんし
し	〔氏〕 じかし・せつし
し	〔史〕 じにっぽんびじゅつこうげいし
し	〔四〕 (名) 12 四 4 (4) じおとこのこし・お
んなのこし・こどもし	
四70 図	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
11	12
六32 1	4
六64 図	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
11	12
八17 図	1 2 3 4 5 6 7 8
九88 5	たかぎには友だちの一、二、三、やまだに
は四、五、六、	そのほか数人が、
19 2	4
十一11 図	1 トップ 3 5 7 コックス 2
4 6 8	整調
十一56 図	1 2 3 4 5 6 7 8 9
10 11	12
十二50 3	(4)
十二52 7	4
十二53 4	(4)
十四79 11	「二二が四」という算数の九九と、にた
ようなもの	だと思いました。
し	〔死〕 (名) 1 死

十四45 9	ことごとく波にのまれてしまったように、
死のしずけ	さがあたりに廣がりました。
し	〔志〕 じさんごくし
し	〔師〕 じきぐつし・せんきようし・ちようごくし
し	〔紙〕 じがようし・にほんし
し	〔詩〕 (名) 3 詩
十二47 5 図	だから、人間がいるところには、かな
らず詩もあれば、	絵もある。
十三34 10	れんは、めでたい文句や、詩の一節であ
るが、みな、	りっぱな文字で書かれてある。
十四36 2	ことばのない詩です。
し	(副助) じいましがつた
し	(接助) 56 し
三58 6	おりれば みずうみへ でられますし、のぼ
れば 大きな 木のあるところへ	でられます。
四30 10 図	おてがみを書いてもいいし、えをか
いても いいと	思います。
四42 2	ゴムのように のびる ことも あるし、
きゅつとちぢむ	ことも ありました。
五36 3	ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろ
いろのくすりも	石炭からとれます。
六27 6 図	そのおかげでさ、いまこうしてあたたま
ることもできるし、	たべものもじゅうぶなべら
れるというわけだ。	
六53 10 図	お月さまをみていと雲が動いていくし、
雲をみていと	お月さまが動いていく。
六72 8	死んでいたら、ころがってたおれるわけだ
し、目だつてつぶつてしまふだらうし、	
六72 9	目だつてつぶつてしまふだらうし、あんな
に元氣のいい顔つきも	してないはずだ――
六77 6 図	雪だるまは動きもしないし、息もしてい
ませんね。	

六77 9	いぬは動くし、いきをするから命がある。
六87 3 図	つりばりは魚にとられてしまふし、にい
さんには	しかられるし、困ってないでいたのです。
六87 4 図	にいさんにはしかられるし、
六117 6	紙は半紙でいいし、骨は工作のあまりのひ
ごでまにあ	わせました。
七19 4 図	それに寒かったし。
七35 9 図	それに、乗りがえもないし、二時間ほど
でつくのですから。	
八21 4	皮がこわばっていて不自由だし、目もよく
はみえないらしいので、	ねこや、すずめにみつ
られたら	たいへんです。
八61 1	それに、たずねてくれるものも少ないし、
ほかのあひるどもは、	みずうみでおよぎまわるほ
うが	すきであつたからである。
八64 7 図	いままでだいていたのだし、あと四五日
は	すわることもできますから。
八69 5 図	ほかのものと同じようによぶし、いや、
ほかのものより	うまくおよぐといつてもいい。
九10 5	たいこのたたきかたによつて、いろいろな
心持をあらわす	ことができるし、また、さまざま
な情景を	写しだすこともできる
九56 2	足もひどく曲がつてやぎのようですし、こ
とに、その足さきは、	しゃもじのようなかたち
だったのです。	
九122 8	流れは急流だし、雨の日も風の日もある。
九128 2	ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、
あみも	はることはできませんでした。
九128 2	雨は降るしで、
九133 2	それより、自分のからだかはれてくるし、
いたいし、	苦しくてどうにもなりませんでした。
九133 2	からだかはれてくるし、いたいし、

十316 かげで人のわる口をいわないようにしたいし、自分のもっているいいところを、えんりよしなであらわし、

十349 機械で動かせば、もっと早く織ることができし、ひとりでに、ぬのがずんずん織られていくからである。

十一45 おきをながめると、大きな汽船が〈略〉通っていくのがみえるし、川上の方をながめると、近くの町の工場のえんとつが、なん本も立っているのがみえる。

十一81 ぼくはからだもいいし、息もつづく。

十一215 金次郎は、年のわりにからだが大きかったし、働きつけているので、

十一3410 日ましに日ざしが強くなり、いねはそだつし、あぜまめのびて、

十一478 うちではバターもつくったし、こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。

十二1812 なかまだなと思ってよくいてみると、じょうずなものもあるし、へたなものもある。

十二222 先生もあるし、友だちもある。

十二238 やしきがすこし廣いし、〈略〉、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、

十二452 まゆ毛も、目も、口も動くし、ときには、したをだしたり

十二462 あやつりは文樂よりもっと古くからあったし、〈略〉子どものころ、よくみたものだよ。

十二478 でも、生きた人間のほうがうまくやれるし、それに便利でしょう。

十二486 そのうえ、手がるでおもしろいし、自分で作って動かすのは楽しいものだよ。

十二689 こびきの大のこはばが廣いし、製材所

のまるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。

十二709 芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、家もせまいので、

十二747 曾良が水をたくさんくんでおいづけたし、まきもたくさんとってきてくれてあるし、

十二749 まきもたくさんとってきてくれてあるし、〈略〉米入れの大きな入れ物もかなり重いので、

十二892 そうでないし、相手の人に満足を興えることができないし、また自分の誠意も通じない。

十二938 文を書くときには、よく手をいれることもできるし、なんでも書きなおすことができる。

十三162 ガリレオは、年をとってもいたし、めくらにもなりかけていたので、

十三303 どちらにも、小さくさまたまあって、音色もちがうし、同じ大きさのどちらでも、そのうちかたによって、調子がちがう。

十四5411 そこは、暗いところで、土もかたいし、石ころなども、ごろごろしています。

十五882 『なんにも知らないという幸福』で、〈略〉つんぼだし、『なんにもわからないという幸福』は、こうもりのように目が見えない。

十五885 ふたりとも手はパンのしんだし、目はものジャムですよ。

十五887 口は耳までさけているし、だれもそれに立ち向かうものはないのですよ。

十五1023 あなたには、なんにも見えないし、なんにも聞えないんだなあ。

十五1031 これは、『青空の幸福』で、もちろん青い色の着物を着ていますし、これは、『森の幸福』で、みどりの着物を着ています。

十五1034 『ひなたの幸福』で、ダイヤモンド色

の着物を着ていますし、これは、『春の幸福』で、きらきら光る青いたまの色をしています。

十五1129 きりょうのわるいおかあさんもないし、年をとったおかあさんもないのさ。

し 4 シ し 支 枝

四798 し——しものあき、白いいき。

十五378 「枝・板」など、その文字の左側に「木」を書いて、「えだ・いた」などと、「木」に

関係のあることを表わし、

十五379 「支・反」をおいて、「シ・ハン」という音をしめしたりした。

十五3710 「シ・ハン」という音をしめしたりした。じ「字」(名) 30 じ 字 じうそじ・にじゅうろくじ・ローマじ

一152 じをよむときには、くちをつかいます。

一161 じをかくときには、てをつかいます。

一176 どんなじがかれるでしょう。

三966 また、この一まいの紙に、字をかくことができません。

三968 大きな字でも、小さな字でも、かくことができません。

三968 大きな字でも、小さな字でも、

三987 紙にかいた字を、どこへおくってあげましょう。

三991 どんなところでも、紙は、字やえをはこんでくれます。

三994 みなさんのかいたえでも、字でも、だいにしまっておきなさい。

四7010 「い」の字とかけて、なんととく。

四714 「ろ」の字とかけて、なんととく。

四758 を——「を」の字は、ことばのあとにつく。

四77 5 る——「る」の字はこれから「い」をつかう。
四79 9 系——「系」の字もこれから「え」をつかう。

四80 5 字も書けます。

五17 3 窓 ぼくは遠いところへいくんだけど、あて名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。

五17 6 窓 わたしのはこんな小さな字だから、なお心配ですよ。

六32 2 目だまの「の」の字がくるくるまわる。

六32 3 口の「へ」の字がのびたりちんだりする。

六37 5 「の」の字のはねたさきから、雨だれのよくなみだがこぼれおちる。

九47 8 字はへたで、すみみがさがさして指につくくらいでした。

九58 2 窓 あの字もなかなかうまいか。

十二33 11 二階から母のところへかけおり、指さきで人形という字をつづつてみせました。

十二34 11 「人形」という字をつづりながら、二つとも同じ名であることを私にわからせようとなさいました。

十二37 1 「水」という字を書いてくださいました。

十三34 12 小さな子どもは、絵も字もわからないころから、〈略〉、れんをながめている。

十五36 10 「上」「下」とかいう字の起りである。

十五37 4 いまの「本」「末」とかいう字はそれである。

十五37 9 字の右側に、「支・反」を置いて、「シ・ハン」という音をしめしたりした。

十五38 8 字によっては、いくつかの音のあるものがあり、またいくつかの訓のあるものもある。

じ [次] ↓だいいちじせかいたいせん

じ [時] ↓ごよじごろ・さんじ・さんじごろ・しちじ・じゅうじ・にじ・はちじ・よじ・ろくじごろ
しあい [試合] (名) 14 しあい 試合
七49 6 第二回めには、にし村の学校としあいをした。

七50 6 はじめに、ぼくの学校とひがし村の学校とが、しあいをするようになった。

七51 5 ふえがまた「ピー」と鳴って、しあいがはじまった。

七52 5 すぐまた、しあいがはじまった。

十二77 3 メキシコのテニス選手キンゼーと私とが、いよいよ試合をする日のことでした。

十二78 7 私は、いままで試合のまえにこんなふうにはげまされたことはありませんでした。

十二79 11 窓 じゃあ、きょうのテニスの試合には、どちらをおうえんするの。

十二81 4 それからまもなく試合がはじまりました。

十二81 7 火のするようなはげしい試合が続きました。

十二82 10 この清水選手の試合を見物しようと、

十二83 8 試合がはじまりました。

十二84 3 かたずをのんで試合をみているうちに、早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、

十二85 2 試合のまつさいちゅう、〈略〉、チルデン選手はかた足をふみすべらせてしまいました。

十二86 3 無事に受け返すことができ、試合はふたたびはげしいものになっていきました。

しあう [為合] (五) 1 しあう 《ーッ》

十一5 4 それにあきると、そのボートをながめては、いろいろな話をしあって楽しむ。

しあける [仕上] (下) 2 しあける 《ーゲー・ゲル》

六11 10 時計屋さんは、しあげた時計をちよつと耳にあててから、ガラス戸だなの中につりさげた。

十五106 10 窓 『しごとをしあげる喜び』が、『考えることの喜び』のとなりにあります。

しあわせ [幸] (名) 1 しあわせ ↓ふしあわせ

八73 8 窓 きみはみつともないから、いいしあわせにあうかもしれないよ。

しあわせ [幸] (形状) 3 しあわせ

八84 9 あひるの子は、あの美しい、しあわせなはくちようをわすれることはできなかった。

十17 11 窓 おさな心にも、ことばを愛することを

知って、勉強したら、どんなにしあわせでしょう。

十一90 9 窓 帰ってしあわせにおくらし。

しあわせもの [幸者] (名) 1 しあわせ者

十五54 3 いまその大先生にお会いすることができた私は、なんというしあわせ者であろう。

じいじいじいじい (感) 1 じいじい、じいじい、じいじい

三86 8 じいじい、じいじい、じいじい。

しくびん [飼育瓶] (名) 4 しくびん

七23 7 窓 あなたは、きょう、しくびんのなつぱを、とりかえましたか。

七24 2 兄は、しくびんの中の砂に水をやる。

七30 8 立ちあがりながら、なにげなく、しくびんをみる。

七33 5 兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちようちよを、しくびんからとりだす。

じいさん ↓おじいさん・ひいおじいさん・プリンクリーじいさん

じーじーじー (感) 1 じーじー、じーじー

八24 6 あおぎりの木でも、ほかのあぶらぜみが

「じーじー、じーじー」と鳴きはじめました。

てひいていきますが、
しかえしする「仕返」(サ変) 1 しかえしする

《サ》

十五105 12 〇 『正義であることの大きな喜び』で、不正がしかえしされたときに、いつもにっこりしています。

しかく「四角」(名) 2 四かく ↓ ながしかく・ましかく

一 33 4 お日さま——にじ——あか——あお——きいろ——まる——四かく——三かく

三 42 5 〇 さよなら三かく、またきて四かく。

しかく「四角」(形状) 2 四かく 四角

一 47 9 四かくな かみに、まるい おおきな はんを おしてくれました。

十二 103 5 四角な あなが あいていたり、《略》、おもしろい お金です。

じかく「字画」(名) 1 字画

十三 10 4 名まえの 字画を 数えて、運がよいとかわるいとかきめたり、

しかけ ↓ おおじかけ

しかさん「鹿」(名) 14 しかさん

六 132 9 うさぎさんたちの まえに、大きな しかさんが あらわれました。

六 133 5 しかさんは、のっそりと 立って、山の方を みあげました。

六 133 7 〇 「しかさん、ただ遊ぶんだよ。」

六 134 1 しかさんは、もし自分が 勝ったら、このしかの角で、うさぎさんたちをつきあげるといいます。

六 134 6 どうせ、足の早い ことにかけては、しかさんにかないません。

六 134 9 しかさんに 勝ったところで、あの角をおる

などという ことはできません。

六 135 3 うさぎさんたちは、しかさんとならびました。

六 135 3 しかさんは、「《略》。」と、元氣のいい 声を かけました。

六 135 6 五ひきの うさぎさんと、しかさんとは、風のように 走りだしました。

六 136 2 しかさんも 負けてはいません。

六 136 6 しかさんが おこって 走ると、《略》 けつまずいて、すってんころり ところげました

六 137 3 〇 しかさん、私たちが 勝ちましたよ。

六 137 7 しかさんは、うさぎさんたちのあとを、ど

んどん 追いかけてました。

六 137 10 そのうちに、しかさんは、いつのまにかは

ぐれてしまいました。

しかし「然」(接) 70 しかし

四 92 1 降った 雪は まっ白だ。しかし、降って

くる 雪は、まっ黒だ。

五 21 8 みんな、ぶつぶつと ことをいいながら、

《略》。しかし、その中に 三人だけ、たいへんよろ

こんで 帰っていった 子どもが ありました。

五 22 5 おじいさんにおあいして、《略》、たいへん かわいがられました。しかし、きょうのうれしさ

は、それだけでは ありません。

五 30 1 〇 ありがとう。しかし、きみは 小さいから、

まあいいよ。

五 109 1 近所の 人たちは、まいにち、こまった、こ

まったといっていました。しかし、ひわは、すぐ

に、「《略》。」と、まねをしました。

六 4 7 なにがなにやら、さっぱり わからなかった。

しかし、だんだん おちついてみると、こは 時計

屋の店であることが わかった。

六 10 10 時計屋さんも 喜んだ。しかし、いちばん 喜んだのは ねじであった。

六 104 7 弟は、二三日 まえから、かぜ ぎみである。

しかし、ねつはないので、ねている わけではない。

六 106 2 そのように いったことがある のではない。

しかし、「《略》。」という のが、いかにも 弟のいい

そう なことばつきである。

六 107 4 ぼくの まねは しくじった。しかし、ぼくは、

この おかげで、おもしろい ことに 気がついた。

六 107 6 弟は はなが つまっている ために、ある こと

ばが、うまく 発音 できなくなっている。しかし、

どんな ことばでも 発音 できない わけではない。

七 38 7 私は、人と 人の あいだを かきわけていこう

と しました。しかし、弟の手を ひいているので、

ひとあしすむ にも、よい いでは ありません。

七 42 3 汽車は トンネルに はいった。しかし、青年

は、《略》、いっしんに ひきつづけて いた。

七 55 2 しかし、文章は、くわしく しさえす れば、

はつきり 写しだす ことができる とは かりません。

八 16 4 いいかげんに すすんで いても、なにかの

木の 根に いきあたり ます。しかし、虫たちは、

《略》皮の うすい、しるの 多い 木の 根を さがして

八 19 3 かぶとむしの子 どもたちは、《略》、わず

か 二ヶ月で 大きく なって、皮を ぬぎかえて 地の 上

へで いきます。しかし、《略》せみの 子たちは、

たいへん 生 長が おそくて、

八 76 2 やつと ひっそり した。しかし、《略》あ

ひるの子は、おきあがる 氣にも なれな かった。

八 79 4 あひるの子は、三週間 ばかり ためしに おい

てもら った。しかし、たまごは 生まな かった。

八 85 2 あひるの子は、あの 鳥の名も、《略》も 知

らな かった。しかし、いままで に だれを なつかし

く思ったよりも、あの鳥をなつかしく思った。

八五八 あひるの子は、水のおもてがすつかりこおってしまわないように、水の中をおよぎまわらなければならなかった。しかし、一晚ごとに、そのおよぎまわるあながだんだん小さくなっていった。

八九五 私のようなみつももないものが、おくめもなく近づいていくのだから、ころされるかもしれない。しかし、かまわない。

九一七 さいたま縣のあるところで、〈略〉はなしたものだということがわかりました。しかし、つばめは、もともとと南へとんでいくのです。

九一八 なん百キロの海をひといきにとぶのも、けっしてふしぎではありません。しかし、その中には、こし生まれた子つばめがたくさんいます。

九二五 オーストリアは第一次世界大戦のあとで、〈略〉。しかし、この國の人々が、あわれなこの小鳥たちにしめした〈略〉あたたかい氣持は、

九三九 そのうちに、セルロイドの三角じょうぎをひろいあげる。しかし、自分の物ではないので、それを舞台のおくになげすて、

九四〇 つれの人は、〈略〉、やめて帰ろうといった。しかし茶人は、いろいろな困難をしのいで、

九六二 毎日の生活のらんざつとあわたしさの中に、それを失っている。しかし、われわれは、いつでも、どこにでも、その美しいものを、すなおに感じとる心を、もちつづけたい

九八一 子どもをさけて通ったこともありましたが、しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶことが好きですから、

九八四 その数は、じつに八十五万にもおよんだ。しかし、幸吉は、くじけはしなかった。

一四五〇 かつて、パリーの眞珠商たちが、幸吉の手

になる養殖眞珠は、まがいものであるといった。しかし、世界の学者の研究によって、天然眞珠とまったく同じであることが、明らかにされた。

一九一六 そりゃあ、船長のほうがむずかしいだろう。しかし、りっぱなコックスは、いつかりっぱな船長になるだろうよ。

一九一七 いつのまにかびんぼうになって、その日のくらしにも困るようになりました。しかし、りえもんは、〈略〉、身代をもとのようにしたいものだ、と、

一九二一 金次郎は、すこしも休まず働くので、かえって、おとなよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。しかし、なんといいても子どもです。

一九二五 私は、かさをさして電車の停留所まででかけた。しかし、風がはげしいので、すぐかさをつぼめてしまった。

一九二七 父は、「〈略〉。」とたずねた。しかし、太郎はだまっていた。

一九三六 少年は〈略〉その名をいいました。しかし看護人は、そういう名を思い出せませんでした。

一九四六 そのつぎの日も、一日ずつとそばにいました。しかし、病人はますますわるくなるばかりでした。

一九四七 いよいよ下がきをかきはじめた。しかし、その根もとの地面には、〈略〉積み重ねておいたかれ草が、すっかりくちていた。

一九五八 いい色の絵のぐがたくさんあった。しかし、パレットの上でみたときは、ずいぶん美しくみえるが、カンバスの上にぬりつけてみると、

一九六〇 ケラーをしつけていくのには、なみなみならぬどりがいりました。しかし、ケラーに

「ことば」というものをわからせることによって、

二〇四九 花は美しく、実はうまい。しかし根はちっともみえない。

二〇五九 はたらしのある人は、はをもったのこぎりににている。しかし、いつも勉強してみがきをかけていないと、じき、役にたたなくなる。

二〇八四 大きなチルデン選手を追いつめるものすごさは、ことばではあらわすことができません。しかし、さすがにチルデン選手です。

二〇九二 同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれちがってくるのも、やはりこのためである。しかし、〈略〉なかみはそれぞれちがっても、

二一〇六 方角がよいとかわるいいかい、〈略〉。しかし、よいといった方角へ移って困った人もあれば、

二一三三 いわゆる天動説が行われていました。しかし、この天動説では、どうしてもかたづけられないようなことが、目についてきたのです。

二一五七 これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。しかし、そのころの教会のぼうさんたちは、天動説を信じていましたので、

二二〇三 ユートランドの平野には、八百年あまり前には、よくしげった森林がありました。しかし、切りとるばかりで手入れをおこたったために、土地は、年を追ってやせおとろえ、

二二一四 ユートランドのあれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていませんでした。しかし、ダルガスの誠実は、これがためにくじかれることなく、

二二二二 そこで、デンマルクの國運回復の意氣は、年々高まってきました。しかし、問題はまだの

こっています。

十四57 まずしい木ぐつしの子に生まれ、〈略〉。しかし、フィリップのすなおな心は、まずしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

十四33 この一むれの星を、ふつう太陽系とよんでいます。しかし、この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。

十四34 うちゅうというものは、どこまで廣いか、想像がつきません。しかし、アインシュタイン博士の話によると、うちゅうは、けっしてはてしないものではありません。

十四35 大うちゅうから見たら、たしかに、人間は、バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。しかし、それだからといって、すこしもかなしむことはありません。

十四49 このおじょうさんは、この歌を知っていたかどうか知りません。しかし、このおじょうさんくらい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。

十四58 おしいことに、歌を歌ったおじょうさんの名まえがわかりません。しかし、たとい、名まえはわからなくても、

十四53 花さんは、たいへんじょうずに自分のことを主張なさいましたね。しかし、〈略〉ということは、ごぞんじないようですね。

十四56 私は、〈略〉、特別なはたらきは、なに一つございせん。しかし、〈略〉でも、〈略〉でも、私が連んであげなかつたら、

十四59 ぼくは、いちばんじみなものです。しかし、土にはえていないかぼちゃんて見たこと

がない。

十四60 あのかぼちゃんは、みんなぼくのものだといつてもいいのです。しかし、ぼくは、そんなよくのふかい、身がつてなことはないませんよ。

十四61 公平について、みんなのものです。しかし、いちばんいい種を、來年もわすれずにまいてもらうことができさえすれば、このかぼちゃんは、おれに、すっかり人間にあげてしまつても、

十四68 うずの高さも、四キロとか八キロとかいうのですから、そういう、いろいろなかわたたこととおこるのです。しかしまた、見かたによつては、茶わんの湯と、こうしたら雨のぼあいとは、よほどよく似たものと

十四71 これは、湯の中にうかんでいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずです。しかし、茶わんの湯を、ふたをしないでおいたばあいには、湯は表面からもひえます。

十四73 このふしぎなものがなんであるかということは、まだ、あまりよくわかつていないようです。しかし、それも、前の温度のむらとなにか関係があることだけはたしかでしょう。

十五40 源氏物語や枕草子などは、すべてこのかなによつて書かれた作品である。しかし、いまでは漢字の長所をいかして、

十五42 三種類の文字をつかつており、そのうえ、ローマ字の教育にも努力している。しかし、考えてみると、世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかつている國があるうか。

十五49 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考へ、自分でまず、焼くしごからはじめた。しかし、そのしごとを簡単にできあがるものではなく、

十五49 やがて、思いどおりのものを作ることのできる日がきた。しかし、このような美術品を買い求めるようなものは、ほとんどいなかった。

十五51 ジャパンタイムスという新聞も発行した。しかしなんといつても、日本の古い美術に対する愛着がふかく、

十五86 ていねいに、しかしきつぱりと、ことわりなさい。

しかた「仕方」(名) 8 しかた

三15 しかたがありませんから、はんたかは門のそとにのこりました。

三23 しかたがない。

三25 日のあたるようになるには 切るよりほかにしかたがあるまい。

四60 しかたがないので、二十九わの がんは、テープルのまわりにあつりました。

五87 きょうは、おにんぎょうのおもりのしかたをしてみせてあげよう。

五107 こうしていつまでも、ここにいるよりしかたがないのさ。

十二14 文雄はそれが氣になつてしかたがなかつた。

十五65 朝早くからそれをガラガラとひきまわすので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。

しかたない「仕方無」(形) 1 しかたない「〜く」

十72 こう、さしずをされて、しかたなく、ずつしりと重い、大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

しがつ「四月」(名) 1 四月

四124 四月は さくら。しがつさんじゅうにち「四月三十日」(名) 1 4月

30日
 七874 4月30日 (月) 晴 19度
 しがつにじゅうくにち [四月二十九日] (名) 1 4月29日
 七867 4月29日 (日) 晴 20度
 しがつにじゅうしちにち [四月二十七日] (名) 1 4月27日
 八942 4月27日 (金) 晴 19度
 しがつにじゅうはちにち [四月二十八日] (名) 1 4月28日
 七862 4月28日 (出) 晴 19度
 じかに [直] (副) 1 じかに
 十四6911 それを日なたへ持ちだして、じかに日光をあて、茶わんのそこをよく見てごらんなさい。
 しがつく (五) 3 しがつくく 《一イ》
 八2110 虫は、それにとりつくくと、まえ足のつめでかたくそれにしがみついて、
 九3910 国 のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず木にしがみついたりしました。
 十五2312 わしのせにしがみついて、両足で鳥の腹をしめつけるようにしています。
 しかめつら [蟬面] (名) 1 しかめつら
 十五7810 人の心をひくために、しかめつらをしたり、みよな身ぶりをしてはならない。
 しかめる [蟬] (下二) 1 しかめる 《一メ》
 八522 いやなものでも家のまえに立ったように顔をしかめて、「略」とたずねました。
 しかも [然] (接) 9 しかも
 七818 国 らくだがびっこであることも知っていました。しかも、左の足の短いことを、ちゃんと知っているのです。
 八363 夜になって天の川をみると、〈略〉ふかい

感じにうたれます。しかも、この大きなうちゅうは、だいたいきそく正しく運行している
 十404 同じことをなんどもくり返してみたところで、かわりのあるはずはない。しかも、核をさし入れてから、眞珠になるまでには、少くとも四年はかかる。
 十二861 清水選手は、ボールをやわらかくして、しかも受けやすいところに、送ってやった
 十四4512 思いがけなく、きれいな歌が流れてきました。それは女の声で、しかも、調子もみだれていなければ、ふるえてもいません。
 十四842 よく見ると、まことにきれいな形をしていること、しかも、一ひら一ひらの雪が、それぞれがたっけしょうをしていること、
 十五388 漢字には、この音と訓のふたとおりの性質のちがった読みかたがある。しかも、字によって、いくつかの音のあるものがあり、
 十五401 かなのおかげで、日本のことばを、たやすくしかも自由にうつつことができるように
 十五539 「カムイン」と答える、ひくい、しかも力強い声に、
 しかりとばす [叱飛] (五) 1 しかりとばす 《一サ》
 八709 すがたがみつともないばかりに、みんなからしかりとばされるので、
 しかる [叱] (五) 4 しかる 《一ツ・一ラール》
 六873 国 つりばりは魚にとられてしまうし、にいさんにはしかられるし、困ってないいたのです。
 八74 「これ」としかりたり、それでもきかなければ、指で追ったりしました。
 十724 国 「このうえそんならんぼうをしては、いっそうしかられるじゃないか。」

十四929 まだ一銭ももうけてはいないので、父親が、きつとひどくしかるにきまっていた。
 じかん [時間] (名) 15 時間 ひあそびじかん・さんじかん・さんじかんめ・なんじかん・にじかん・はんじかん
 五783 国 ごこのずが工作の時間に、写生しました。
 七287 国 きょうね、國語の時間に、先生にほめられたの。
 八348 光のとどく時間ではかると、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。
 八1033 3時間の終りに開きはじまりましたが、お晝の時間には、もう閉じてしまっていました。
 十582 算数の時間に、先生が、はしごでいちようの木にのぼって、いちようの葉をたくさん落してくださいました。
 十二256 わたしは時間をはかつては、〈略〉、用をたさるようにしました。
 十二4712 国 時間をかけて絵をかくより、写真のほうがずっと便利なわけだけれど、
 十二776 時間がせまったので、私はユニホームをつけて、練習のためにコートにでました。
 十四1512 国 そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでもより時間が早くたつでしょうから。
 十四175 国 どの時間になにをしていらつしやるか、この私にはわかるのです。
 十四268 また、音楽の時間によくつかう、リズムとか、ハーモニーとか、〈略〉とかいうことは、
 十四2611 また、図画工作の時間によくいう、デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、
 十四369 キュリー夫人は、〈略〉、物理の時間に、先生から、星をつかめといわれ、

十五988 ㊦ もう時間がないのだからね。

十五9812 ㊦ やはり時間がおしいのだよ。

じかんてき 「時間的」(形状) 2 時間的

十三455 「……」を時間的に短くしたり長くしたりして、電話の話らしくしなければなりません。

十四838 春の光がさしそめて、雪どけ水が流れだすところ、それをうれしそうに見ている雪國の子どもなど、時間的に、じゅんじよをおって、とりあつかったものである。

しき 「課名」 2 四季

四36 十二 四季……百二十四

四124 十二 四季

しき 「式」(名) 5 式 ↓しゅうぎようしき・じょうもんしきどき・そつぎようしき・とよだしきじんりきしよつき・やよいしきどき

七504 どの学校のせんしゅも、みんな、運動場に整列して、式をあげた。

七547 また運動場に集まって、終りの式をした。

七548 式をすませてどどつてくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、にこにこしていた。

十二100 ㊦ この式の土器は、はじめ、東京のやよい町から発見されたので、やよい式土器という名まえがつけられています。

十四125 ㊦ 十年このかた、この式のランプをつかっているというのが教えてくれたことなのです。

しき 「時期」(名) 1 時期

十三233 ㊦ もしある時期になって、小もみを切りはらってしまったら、

しき 「直」(副) 9 じき

二702 ㊦ もうじき『春の國』だ。

四1066 ㊦ もうじきでございます。

九611 ㊦ じき、どんぐりどもがまいりました。

十221 ㊦ 「もうじきですよ。」

十一7212 ㊦ 先生が、いまじきにおいてになりますからね。

十一877 ㊦ じきまたあえるね。

十二694 ㊦ しかし、いつも勉強してみがきをかけていないと、じき、役にたたなくなる。

十四1012 ㊦ じきに九月になります。

十四136 ㊦ もうじきお目にかかれます。

じき ↓おじき

しきしや 「指揮者」(話手) 3 しきしや

六189 しきしや「上でき。」

六201 しきしや「おおいにうたい、おおいにひいて、この夏の日を楽しもうではないか。」

六256 しきしや「われわれは、おおいにうたおう。」

しきしや 「指揮者」(名) 1 しきしや

六186 まん中に、しきしやがタクトをいっしんにふっています。

しきしやのきりぎりす 「指揮者」(話手) 1

きりぎりす

六249 しきしやの「苦勞しようのありさんたちだな。」

しきだい 「指揮台」(名) 1 しき台

六1810 上でき。」と、さもまんどくそうにしき台をおりてきて、あせをふきます。

しきたり 「仕来」(名) 1 しきたり

十五453 徳川時代の長いしきたりが、明治になつてすっかりようすを変えてしまったので、

しきふ 「敷布」(名) 1 しきふ

十一1 まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。

じきよう ↓だいじきよう

しきりに 「頻」(副) 2 しきりに

十二163 そんなところをはつきりつかまえないものだと思って、しきりに木炭を動かしていた。

十五731 客間に私をみちびき、自分は書さいにはいつて、しきりにさがしものをしておられたが、しきる ↓ふりしきる

しき 「敷」(四五) 4 しき 《イ・カーキ》

三487 ㊦ 早く川の水でからだをあらって、がまのほをしいて、その上にねるがよい。

三937 やわらかなもうせんをしいたようなしぼふ、みどり色につやつと光ったしぼふ。

十三257 道路・鉄道は、いたるところにしかれました。

十五104 ㊦ 荒れ庭にしきたる板のかたわらにふるばちならび赤き花さく

しぐさ 「仕種」(名) 1 しぐさ

十632 能は、(略)、役者が美しい舞を舞ったり、さまざまなしぐさをしたりするものですが、

しくしく (副) 1 しくしく

三463 はまべでしくしくなっていました。

しくじる (五) 2 しくじる 《ーッ》

六1074 ぼくのまねはしくじった。

八689 ㊦ ほかは、みんないい子だ。あれだけはしくじったね。

シグナル (名) 1 シグナル

五121 ㊦ シグナルだよ。あれをみて、汽車が、とまったりとおったりするのだ。

しくみ 「仕組」(名) 1 しくみ

十四687 これは、茶わんのぼあいにくらべると、しくみがずっと大きくて、うずの高さも、四キロとか八キロとかいうのですから、

しくむ 「仕組」(五) 1 しくむ 《ーン》

十四841 高度など、さまざまな条件によって、雪

のけっしょうがちがうわけを、映画的手法によつて、よくわかるようにしくんだものであった。

しぐれ「時雨」(名) 1 しぐれ

十一41「罎」はい色雲がたちこめて、さとはしぐれがしとしと降るに、

しげしげ「繁繁」(副) 4 しげしげ

九四「くもは、ふしぎな顔をしながら、しげしげとみつめました。

十一69「病人はしげしげと少年をみつめて、いくらかわかつたようでしたが、

十一88「病人はしげしげと少年をみつめながら、〈略〉、なにかものをいいたげにしました。

十五43「ウインドにかざられてあるさらやはちを、しげしげとのぞきこみながら、

しげみ「茂」(名) 2 しげみ

八89「ところが、木のしげみから、二三ばの美しいはくちようがあらわれてきた。

十二31「午後の日光は、げんかんをおおったすいかずらのしげみをもれて、

しげる「茂」(五) 12 しげる「一ツ・一リール」↓おいしげる

四43「ゆうべは、ぬまのきしの、よしのきれいにしげったところで、ねむったのでした。

四48「山のふもとには、大きな木がしげっているの、そこをよけてとびました。

五20「しげった竹やぶの小道をとおりたり、すずしい川のきしを走ったりしました。

七19「しげった草むらの中に、かくれているのさ。

十一40「山のもみじ葉みなちりはてて、青くしげるはまつ・すぎ・ひのき。

十二66「深くて長い根の上に、みことな草や木が

しげっていく。

十三20「ユートランドの平野には、八百年あまり前には、よくしげった森林がありました。

十三21「両種のもみは、たがいにならんで生長し、年がたつてもかれないで、よくしげりました。

十三24「しげった木のない土地は、熱しやすくさめやすいから、

十三24「ユートランドのあれ地は、大もみの林がしげったために、こえた田園となりました。

十三24「そればかりでなく、しげった林は、海岸からふき送る砂ほこりをふせぎ、

十五24「このひつじかいは、がけの中ほどのあき地に、草のしげっている場所を見つけて、

しけん「試験」(サ変) 1 試験する「一シ」

十三20「ユートランドのあれ地にも育つだろうと思つて、実際に試験してみると、もみの木ははえるが、数年ならずしてかれてしまいました。

しごく「ぬめいわくしごく」

しごく「扱」(五) 1 しごく「一ク」

十三29「かた手には、鉄ぼうをにぎっていて、ときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく。

しごじっセンチ「(名) 1 四五十センチ

しごじゅうメートル「(名) 1 四五十メートル

九81「まず、一メートルぐらいのはばで、東西に四五十メートルはってみることにしよう。

しごと「仕事」(名) 24 しごと↓おしごと・ひとしごととする・わらしごと

五71「おばあさんは、おじいさんをうま小屋のしごとにおいやりました。

六39「あなたのしごとはこれからよ。

九23「また、飛行機という文明の利器が、このしごとにつかわれたということを、

九45「ぼくは、おとうさんのやっていたパン屋のしごとを、しんけんにやろうと思つています。

九80「まあ、おちついて、ゆっくりしごとにかかりましょう。

十25「ひとりの工員がしごとをすませて、坑内から地上にでてくる。

十33「佐吉は、父の大工のしごとを助けてはたらいていたが、

十33「ほかのことを考えないで、みっちりしごとをやってくれ。

十33「ぬのを織るしごと、けつしてゆるがせにしてはおかれない。

十一21「しごとがじゅうぶんできないので、金次郎は、ほかの人たちにすまないと思ひました。

十一63「少年の父親というのは、去年、しごとをさがしにフランスへいったのですが、

十二62「ある日のこと、八郎が山でしごとをしていると、のどがかわいてきた。

十四8「けれども、力をだしてしごとのことをお考えになるのです。

十五48「いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてしごとをしていたため、

十五48「今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考え、自分でまず、焼くしごとからはじめた。

十五48「そのしごとも簡単にできあがるものではなく、白く焼けるはずのものが黒くなったり、

十五49「それでも、やりかけたこのしごとはやめなかった。

十五50「せつかくうけつてきたこのしごとは、

ぜひ続けてください。

十五5010 いよいよこのしごとに熱情をこめた。

十五5911 金 きょうは、もうこれでしごとはやめだ。

十五914 金 それは、いつもしごとをしないことで

す。

十五1069 金 『しごとをしあげる喜び』が、『考

ることの喜び』のなりにいます。

十五1139 金 ここでは、うちにいるときのように、

しごとをしないの。

しごとい 「仕事台」(名) 6 しごと台

六48 自分のおかれているのは、しごと台の上に

のっている小さなふたガラスの中で、

六78 男の子は、やがてしごと台の上のものをあ

れこれといじりはじめた。

六86 ねじは、しごと台のあしのかげにころがっ

ていった。

六89 「略。」といいながら、しごと台の上を

みて、だしておいたねじのないのに気がついた。

六811 金 だれだ、しごと台の上をかきまわしたの

は。

六106 しごと台のそばで、ふさぎこんで下をみつ

めていた女の子が、思わず「あっ。」とさげんだ。

しごにち 「四五日」(名) 4 四五日

八647 金 いままでだいていたのだし、あと四五日

はすわることもできますから。

九128 2 ここ四五日は大風がふくし、雨は降るしで、

あみもはることはできませんでした。

九139 2 金 あなたが、この四五日、なんにもたべな

いことをちゃんと知っています。

十一28 1 ところで、そのつぎの年、母親が、四五

日の病気で死んでしまいました。

しし しのしのし

じじつ 「事実」(名) 1 事実

十三239 「略」という、植物学上の事実が、ダル

ガス親子によって、発見されたのであります。

しじぶん 「四十分」(名) 1 四十分

十48 1 四十分もかかったのではないかと思いまし

た。

しじみ 「蜆」(名) 1 しじみ

十二97 11 貝つかからでる貝は、三百種類にもものぼ

りますが、古代の人は、「略」、しじみ、あかにし

などをたくさんたべていたようです。

しじゅう 「課名」1 四十

一39 十七 山のつづじ……四十

しじゅう 「四十」(名) 1 40

六439 40

しじゅういち 「課名」1 四十一

四26 五 がんのなかま……四十一

しじゅういち 「四十二」(名) 1 41

六4310 41

しじゅうから 「四十雀」(名) 3 しじゅうから

五104 7 どこからか、しじゅうからがやってきて、

「略。」と、いい声で鳴いて、

五105 2 しじゅうからは、あくる日もやってきまし

た。

五105 6 いつのまにか、しじゅうからは、どこかへ

いってしまいました。

しじゅうく 「課名」1 四十九

三32 八 高い……四十九

しじゅうごねん 「四十五年」(名) 1 四十五年

七94 4 金 もう、四十五年にもなる。

しじゅうさん 「課名」5 四十三

一310 十八 お月さんのくに……四十三

三31 七 白うさぎ……四十三

十一31 五 新しい出発……四十三

十二31 五 人形しほい……四十三

十五36 四 めぐりあい……四十三

しじゅうさん 「四十三」(名) 1 43

六454 43

しじゅうし 「課名」2 四十四

二33 七 かげえ……四十四

五31 六 まどをあけると……四十四

しじゅうしち 「課名」3 四十七

七33 五 作文……四十七

九32 六 どんぐりとやまねこ……四十七

十34 六 私の妹……四十七

しじゅうに 「課名」1 四十一

十四26 五 心に太陽をもて……四十二

しじゅうに 「四十二」(名) 1 42

六441 42

しじゅうにち 「四十日」(名) 2 四十日

十三39 4 金 たいへんだったでしょうね……四十日

も

十三40 11 金 四十日の旅じゃつかれただろう……

しじゅうにん 「四十人」(名) 1 四十人

九104 2 ぼくたち四十人は、のだ先生といしい先生

につれられて、山のスキー場へいった。

しじゅうメートル (名) 1 四十メートル

九112 10 四十メートルも空中をとんで、先生は地上

の人となられた。

しじゅうろく 「課名」2 四十六

六27 四 空のうた……四十六

十三31 六 そよ風……四十六

しじょ 「子女」(名) 2 子女

十五74 2 親の目から見れば、自分の子女は、「略」、

かわいいことはみな同じであって、

十五748 親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、

じしょ 〔辞書〕(名) 1 辞書

十五517 また、日本についていろいろの研究を進め、日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、

じしょうけいさんする 〔紙上計算〕(サ変) 1 紙上計算する 《一シ》

十五565 足の下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ、その角度を目算して紙上計算してみたが、

ししよく 〔四色〕(名) 1 四色

九五5 四色、五色と数をましていけば、その感じはまたふかくなるでしょう。

じしよもち 〔地所持〕(名) 1 地所持

十五875 〔地所持の幸福〕で、なしのようなおなかをしています。

じしん 〔自身〕 ①フィリップじしん・ほおじろじしん・ぼくじしん・みなさんじしん・わたくしたちじしん

じしん 〔自信〕(名) 2 自信

十448 幸吉は、自信をもって母貝を海中にはなつた。

十一94 〔自信〕 そういわれて、自信をもって、よしやろうということができた、うれしい。

じすう 〔字数〕(名) 1 字数

十五417 ローマ字をつかうと、字数が少なくてすむばかりでなく、

しずおかけん 〔静岡県〕(地名) 1 しずおか県

九126 求め求めて、いつか、いまのしずおか県のさかいてもすぎ、ながの縣にはいった。

しずか 〔静〕(形状) 55 しずか

二439 かっこうが、とおくでしずかになります。二514 きゆうにおどりをやめて、しずかにな

ります。

二548 おかあさんは、三人のあたまを、しずかにたててやります。

二664 ちよっとちよっと、しずかに。

二667 みんなは、「しゅしゅしゅしゅ」を、きゅうにしずかにいう。

二685 しずかにして。

二686 もっとしずかに。みんな、きき耳をたてる。

三174 はんたかは、しずかにごてんにあがってきました。

三326 しずかにあるくこと。

三683 雲は、もりの方へしずかにしずかにとんでいます。

三683 しずかにしずかにとんでいます。

三1159 そこで、よいいの車につて、しずかに天へのぼっていききました。

四152 〔みんな、しずかに——よしきりがなから。〕

四556 その夜は、さいわい、雨もふらず、風もふかない、しずかな、星の光る夜でした。

四623 しずかなやぶのところで、はばたきの音がきこえます。

四1067 波もしずかだ。

四133 天人は、それをきて、しずかにまいます。五462 みんななかよくくらきらと、しずかな空で光ろうよ。

五573 あわてないで、しずかにごらん。

六1302 ぼくひとり、じつとしずかにしたいんだよ。

六1429 やつとしずかな廣い野原にできました。

六1433 うさぎさん、こころは、しずかなところ

すよ。

七47 校門のかしの木は、目をさまして、しずかにしんこきゅうをした。

七227 しずかにして、みていてごらん。

七318 しずかな音楽がはじまる。

七463 青年は、アコードオンを、両手でぐつとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。

七642 しずかに波がよせている。

八254 やがて、秋になると、みんな死んでしまつて、あたりもひっそりとしずかになります。

八283 川の水は銀色に光り、はくちようがしずかにういていました。

八759 しばらく、じつとしずかにしていた。

九74 このことばを耳にしたり、文字でよんだりしますと、夜のしずかなけしきを思いだします。

九264 子もりするしずかなる月の上に

九498 くりの木は、ちよっとしずかになって、

〔略。〕と答えました。

九636 こがね色のどんぐりどもは、すこしづつしずかになりました。

九692 しずかにしろ。

九8311 〔略。〕と、しずかにおっしゃいました。

九1009 たかぎしずかに、〔略。〕

九1167 ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤きかにいてすぎの山しずか

九1334 目をつぶつてしずかにしていると、

九13610 いまのぼりかけたばかりの月が、しずかに光っていました。

九1446 ちようちよにしても、ばらの花にしても、

なんとしずかなくらしをしているのだろう。十二73 少女は〔略〕黄色なやまぶきの一枝をおつてきて、それをしずかにさしました。

十二709 住みこんであげてもいいけれども、芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、十三47 まるで、息をこらしてしずかにしている、子どもたちのむねのように。

十三77 ああ、季節のこういうのどかなとき、こういうしずかな午前にあつて考える、

十三175 デンマルクは、《略》本國と、三つの島からなっている、小さな、しずかな國であります。

十三4310 よかったなあ……」三郎の音が終るころ、しずかにまく。

十四3810 夜明けの足音、しずかな夜明け。

十四559 おとなのつるは、しずかにいました。

十五72 囃 うしはしずかにのおおの大きな耳をむけぬ

十五91 囃 水はしずかに流ると見ればもの花

十五539 しずかに室内にはいった私の目に映じたのは、

十五544 博士は、しずかに歩みよる私が手にしているしうかい状に目をそいで、

十五727 しずかに頭をさげた。

十五7311 廣い食堂にみちびかれ、博士とたつたふたり、しずかに食事をしたが、

しずかさ「静」(名)2 しずかさ

十二753 その夜は、すべての音も雪にうずめられたようなしずかさでした。

十二754 そのしんとしたしずかさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の句を考えました。

しずかなごぜん「課名」2 しずかな午前

十三22 一 しずかな午前……四

十三41 一 しずかな午前

しずく「滴」(名)8 しずく

九1432 たまったつゆが、しずくになって、ポタリ

ポタリと落ちてきました。

十一185 竹の葉さきからしたたるしずく。

十一323 囃 やぶのたけのこすくすくのびて、しずくすおうとでむしが、つのをふりあげのぼりだす。

十一526 だれかのかさのしずくが、私のくつの上にぼたぼたと落ちてきたりした。

十四631 熱い水蒸気がひえて、小さなしずくになったのが、無数にむらがっているの、

十四635 日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬのでもおいてすかして見ると、しずくのつぶの大きいのが、ちらちらと目に見えます。

十四6312 まったくとう明なガス体の蒸気が、しずくになるときは、かならず、なにか、そのしずくのしんになるものがある、

十四641 そのしずくのしんになるものがある、

しずけさ「静」(名)3 しずけさ

十四3510 まあ、なんというしずけさでしょう。

十四4510 ことごとく波にのまれてしまったように、死のしずけさがあたりに廣がりました。

十四4511 そのきみのわるいしずけさの中から、とつぜん、《略》、きれいな歌が流れてきました。

シスト(名)1 シスト

十三592 囃 「シストのマドンナ」といわれているしずまる「静」(五)8 しずまる《リ・レ》

しずしずまる

九659 囃 しずまれ、しずまれ。」ぎよしゃがむちをヒュパチツと鳴らしたので、どんぐりどもはやっとしずまりました。

九659 囃 しずまれ、しずまれ。

九6511 どんぐりどもはやっとしずまりました。

九6611 囃 しずまれ、しずまれ。」ぎよしゃが、む

ちをヒュパチツと鳴らしました。

九6611 囃 しずまれ、しずまれ。

九678 囃 しずまれ、しずまれ。」ぎよしゃがむちをヒュパチツと鳴らし、

九678 囃 しずまれ、しずまれ。

九6710 どんぐりはみんなしずまりました。

しずみかける「沈掛」(下二)1 しずみかける

十二6010 長者は、日のまるのおおぎをあげて、しずみかけた日をさしまねくと、

しずむ「沈」(五)15 しずむ《ミーム・ーン》

三7410 お日さまが光りながら、いま、丘のかけへしずむところでした。

三756 そのうちに、赤いお日さまは丘のかけへしずんでいきました。

五531 西の方を見ると、日がしずんでまもない空に、大きな星が光っていました。

六431 しずんでいくお日さまをおって、町の上を列車のようにとぶつばめのむね。

七54 白いちようが、ういたりしずんだりしながら、光の中をおよいでいたが、

八725 つかれて、氣がしずんでいた。

八8310 ある夕ぐれ、太陽が美しくしずむときであつた。

十411 こういつて、失望にしずむ幸吉を、なんどもはげました。

十一7110 少年は、かなしい思いにしずみながら、やさしい父親のことをいろいろと思い返していました。

十三59 長くなしみにしずんだものにも、春は、希望の帰ってくるとき。

十三129 朝になると、日は東の空からのぼり、夕

がたになると、西の空にしずみずみ。

十三185 戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣はしずみ、その活動はおとろえました。

十四455 マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、黒い波の間をおよいでいました。

十四486 船がしずむひょうしに流れ出たものらしい一本の大きななるたに、

十四798 図 しずむほうがもとだよ。

しせい「姿勢」(名) 3 しせい

八233 しばらくそのままのしせいで動きません。

八6610 図 あのうまく足をつかうようすや、あのしせいのいいのをもてもわかる。

十二862 チルデン選手は、とりみだしたしせいで

はありましたが、やわらかなボールだったので、無事に受け返すことができ、

しぜん「自然」(名) 6 自然 ↓ふしぜん

十273 ぼくは、いままでに学んだ「自然の観察」を、ずっとつづけていきたいと思ひます。

十287 観察すればするほど、自然のおもしろさも

わかり、

十4610 図 あなたが自然をあいてとして、眞珠を世界の人人にあたえたことに、

十三215 自然は、このむずかしい問題を、かならず解決してくれるにちがいない。

十三527 わたしの日々が、自然をしたう心で、一日一日と、むすばれていくように。

十四627 ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現象を観察し、研究することのすきな人には、なかなか

おもしろい見ものです。

しぜん「自然」(副) 6 しぜん

八176 しぜんにそなわったかしこさで、これ

じょうずに生きていくのです。

十一921 五日のあいだ呼びなれていた名が、しぜん

んと口にのぼってきました。

十三2912 歩いて行くど荷がゆれて、しぜんにふん

どうがどらにあたる。

十四377 そうすれば、人間がだいいちにしなければならぬことは、なんであるかということも、

しぜんにわかつてくるはずだ。

十四646 空気中には、それが、しぜんにたくさんういてるのです。

十四7511 それで、畑の上からとんできて、森の上

へかかると、飛行機は、しぜんと下の方へおしお

ろされるかたむきがあります。

しぜんかがく「自然科学」(名) 1 自然科学

十五589 図 室友ホランド先生、自然科学にもっと

もきょうみを有し、化学、生理、植物、鉱物、地

質等をこのんで勉学す。

しせんキロ(名) 1 四千キロ

九172 とうきようから四千キロもあるフィリピン

で、(略)、子どもがつばめをつかまえました。

しセンチ(名) 1 4センチ

十二53 図 4センチ

しせんひやくしちじゅうメートル(名) 1 四千百

七十メートル

十五197 これは、富士山よりはすこし高く、四千

百七十メートルばかりの高さがあります。

しそう「思想」(名) 1 思想

十四365 むかしからすぐれた人たちは、星の光の

中からふかい思想を読みとりました。

した「下」(名) 89 した 下 ↓えんのした・くつ

した・のきした・わきのした

一413 でんとうのしたを、くろくすうつととんだ。

二182 図 上は大みず、下は大かじ、なかに。

三101 図 上と 下とを ゆびさして、お立ちに

なつていらつしやる。

三608 図 みずうみ、みずうみ、この丘の下。

四3610 図 そのとき、ぶどうだなの下をとりました。

四496 下の方から、てっぽうの音がひびいて

きました。

四503 力のつよいがなが、三ばで、かっちゃん

のおちていくのを、下からうけとめました。

四511 下からねらわれているときには、ぼら

ばらになつて、はなれてとべば安全なのです

が、

四667 「かいぶんあそび」これは、上からよん

でも 下からよんでも、おなじになることばを

考えだす あそびです。

四952 ひろがつたり、あつまつたり、ふわふわと

ながれたりして、だんだん下におちてくる。

五394 図 中ほどから下は、雪がありません。

五506 図 かけの下には、白いはま、白いはま。

五862 下の方から、「(略)」と、うたのようにふ

しをつけてよびながら、ひとりの子どもがきます。

六107 しごと台のそばで、ふさぎこんで下をみつ

めていた女の子が、

六172 その声をきいて、はとが下の方をみますと、

六379 ずっと下にみえる夕やけの大通りを、

六544 ふみおはふと氣がついて、まえの方にある

木の下へいきました。

六558 ふみおはさつきのことを思ひだして、また、

にわの木の下へいつてみました。

六654 上にすれば下になり、下にすれば上になる

ものはなかに。

- 六六四 下にすれば上になるものはなにあに。
 八八九 木にのぼって、下をみる。
 六〇二 もっと下をみる。
 六二九 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。
 六二九 うさぎさんたちは、くるみの木の下で遊びました。
 六二八 一匹きのうさぎさんが、〈略〉さか道に足をすべらせて、ころころと、下の方へころがりこんでいきました。
 六三六 うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、まるくならんで、話をしました。
 六四三 上になったり、下になったりしました。
 七九四 あと足を長くのぼして、まえ足を胸の下にいていました。
 八五〇 その木の下ですから、大小の木の根が、からみあい、かさなりあつてはえています。
 八二二 腹の下の方だけが皮にかくれています。
 八五八 下をみると、大きな川が遠くへ流れている。
 八六七 みどりの葉の下で、あたりをみまわした。
 八九四 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。
 九一六 まだ、口ばしの下の方の赤色が、親つばめほどこくありません。
 九二八 はるか下の方に美しい湖がみえます。
 九三〇 秋晴れのすみきった空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中にうつって、
 九三八 高くても手のとどかないかれ枝は、長い竹ざおのさきにかまをくくりつけて、ひっかけるようにして、下から力をいれてひきおろします。
 九三九 下からどんなに大きな声で話しかけられても、きこえないときがあります。

- 九三九 下では、兄や、母や、おばが、〈略〉。とか、〈略〉。などいわれたが、
 九四〇 また、下の方の山道を、しよいこをつけたおとなの人が、男か女かわからないが、下を向いて登ってくるのがみえます。
 九四〇 下を向いて登ってくるのがみえます。
 九四三 まわりの山は、〈略〉、きれいにもりあがつて、まっさおな空の下にならんでいました。
 九五八 一本のぶなの木の下に、たくさん白いきのこが、〈略〉、へんな樂隊をやっていました。
 九五七 〈略〉。と、男は、下を向いて、かなしそうにいました。
 九七〇 いかにもざんねんだというふうに、しばらくひげをひねったまま下を向いていましたが、
 九八一 あふれでた水は、さらさらと走って、やがて、すぐ下のすこし大きな川に流れこんでいた。
 一〇三 ポンナフという石の橋があつて、イエヌという川が、その下を流れていました。
 一〇九 プラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。
 一四八 その少年は、〈略〉、そのいなか町にある商業学校の下の学年ぐらいでしたでしょう。
 一八六 その下で、きょとんとしているあまがえる。
 一八〇 その下で、雨やどりをしているにわとりのむれ。
 二二二 その下を、あひるがならんで通っていく。
 二五〇 ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり木の下におりていってしまいました。
 二二九 まっさおな海は、太陽の下でわらっている。
 二四五 一つの太陽の下で、みんながめいめいの歌を歌っている。

- 二四七 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちょうも舞い、まっさおな海もわらい、
 二五二 金次郎の下にふたりの弟がありました。
 二五三 いちばん下のは、そのとき二つでした。
 二四三 ぼくのいすは、小さなゆりいすで、その下に、いつもかいねこのメリーがいた。
 二六九 少年は包みを下におくと、
 二七三 ひさしぶりで、姉やふたりのまごたちといっしょに、同じ屋根の下でくらせるのですから、
 二八六 だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をといての口の下へやりました。
 三三三 その下の白いところに、先生の手で、こう書いてありました。
 三六五 あたたかい空気がのぼっていくあとへ、〈略〉つめたい空気が下からふきこんできて、
 三七一 茶わんに接したところでは、湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、
 三七一 という部分からは、ひえた水が下へおり、
 四七五 それで、畑の上からとんできて、森の上へかかると、飛行機は、しげんと下の方へおしおろされるかたむきがあります。
 四九四 女の子は、〈略〉両足をそろえて、ぼろぼろの着物の下で重ねて、
 四九七 そうして、こんどは、女の子は、一本のクリスマスの木の下にすわっていた。
 五二五 けわしい山が、むらさきがかかった大空の下に、わらうようにそびえているのでした。
 五二二 それがコトコトと音をたてて下の方まで落ちていくのを、おもしろそうに見ていました。
 五二二 下の方にちらばっているひつじのむれを追いかけるように、

- 十五236 見ると、そのがけの下の方へゆったりと
んで行く大きなやまわしのつめにつかまれて、
十五253 鳥が大づめでつかんでいる女の子のから
だが下へ落ちないように、
十五2512 羽ばたきも苦しげに、しだいしだいに、
下の方へ落ちるように舞いおりて行きました。
十五2612 下の方にいる女の子を元気づけるために
十五273 下につかまれている女の子は、
十五279 大わしは、少年をせいのせ、少女を下に
さげて、ずんずん、落ちるように、下へ下へとお
りて行きました。
十五2710 落ちるように、下へ下へとおりて行きま
した。
十五2710 下へ下へとおりて行きました。
十五3210 大わしは、〈略〉、くるくる舞いをして、
下の方へ、谷の中へ落ちて行きました。
十五368 「うえ」「した」という考えを表わすの
には、線を横に引いて、「・」をその線のうえに
おいたり、したにおいたりして表わした。
十五3610 「・」をその線のうえにおいたり、した
においたりして表わした。
十五3610 「上」「下」とかいう字の起りである。
十五564 私は、小手をかざして足の下にひろが
る駿河湾の海岸線をながめ、
十五692 きずのあるみけんの下にかがやく目は、
思いなしかわいらしい見え、
十五812 天は、人のうえに人をつくらず、人のし
たに人をつくらず。
十五11412 私も下へ行くのですよ。
十五1151 これから下へ帰ってから、どういよう
うに私を見なければならぬか、
した「丑」(名)5 した

- 八174 人間のあかんぼが、したのさきをじょうず
につかつてちちをのむのと同じように、
八7410 したは口からたれて、目はみにくく光って
いた。
九12311 ここで茶人のしたには、まぎれもないい
味がはつきりと感じられるようになった。
十二452 まゆ毛も、目も、口も動くし、ときに
は、したをだしたり
十三513 まだあかんぼうで、母うしがしたでなめ
ると、よろけるんだよ。
しだい してあたりしだい
じだい 「時代」(名)7 時代 ①アマストじだい・
えどじだい・がくせいじだい・かまくらじだい・
きょうとじだい・とくがわじだい・へいあんじだ
い・みつぼうじだい・むろまちじだい
十二989 このように、古い時代のことがはつきり
わかるいとぐちとなったのは、
十二1133 新しい学問をきり開いていくときは、い
つの時代でもなみなみのどりでよくでなしとげられ
るものではありません。
十四276 したが、あまり古い時代にはいつてき
て、長いあいだつかっているうちに、
十五594 いやいや、時代がちがう。
十五8011 あなたがたの時代がきたときには、
十五8012 あなたがたの時代がきたときには、私た
ちの時代がはつきり思われるようになることを
いのります。
十五9812 子どもの時代は、ごく短いだからね
しだいしだいに 「次第次第」(副)1 しだいしだいに
十五2512 羽ばたきも苦しげに、しだいしだいに、
下の方へ落ちるように舞いおりて行きました。

- しだいに 「次第」(副)9 しだいに
七678 それにねんどでだんだん肉づけをし、しだ
いに、その人の顔ににせていくやりかたです。
九145 これらのことを一つ一つ思いだしているう
ちに、心持が、しだいにかわってききました。
十3411 佐吉の考えは、しだいに高まっていったが、
十一398 冬の用意もしだいに進み、あとはもみ
すりするばかり。
十一802 病人が、しだいに、すこしずつものがわ
かりかけるようにみえたことです。
十一892 また、やさしい色がその目にうかぶこと
もありましたが、それも、だんだん小さく、しだ
いに暗くなっていきました。
十三84 知識は、人から教えられたり、〈略〉、考
えたり、調べたりして、しだいにましていく。
十四9810 ろうそくはもえ続けていて、それが、高
く、高く、しだいにのぼって、
十五361 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文
字から起り、これがだんだん変わって、しだいに
形のきまつたものとなり、
したこう 「慕」(五)1 したう 《一ウ》
十三527 わたしの日々が、自然をしたらう心で、一
日一日と、むすばれていくように。
したがう 「従」(五)4 したがう 《一ツ・一ウ》
五396 ふもとになるにしたがって、木のみどり
がこくなってみえます。
九745 馬車がすすむにしたがって、どんぐりはだ
んだん光がうすくなって、
十四84 が、おかあさん、運命にはしたがわな
ければなりません。
十五381 「海」を「カイ」というようにもとの中
國の発音にしたがった読みかたをしたが、

したがき 「下書」(名) 3 下がき
 十二147 そうして、いよいよ下がきをかきはじめて。
 十二1510 文雄は、それをとりのけるのをやめて、また下がきにかかった。
 十二165 下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。
 したがって 「従」(接) 2 したがって
 十四3412 地球などになると、なおさら、ごくごく小さなものです。したがって、その地球の上に住んでいる人間などは、
 十四724 湯の表面には、水のおりているところ、のぼっているところとがほうほうにできます。したがって、湯の、中までも熱いところと、わりあいにぬるいところが、いろいろに入りみだれてしたく 「支度」(名) 3 したく
 五347 おかあさんが、だいどころで、ごはんのしたくをしていらっやいます。
 九734 盥 よし、早く馬車のしたくをしろ。
 十一393 盥 はじの葉も、赤く黄色く色づいて、冬のしたくをとりいそぐ 村人の目をなぐさめる。
 したく 「自宅」(名) 1 自たく
 十五602 りっぱな自動車に、ためらう私をおしこみ、一路自たくへと車を走らせた。
 したくも 「下雲」(名) 2 下雲
 九292 盥 下雲へ下雲へタやけうつりさる
 九292 盥 下雲へ下雲へタやけうつりさる
 したし 「親」(形) 1 親し 《—シキ》
 十四819 盥 親しきなかにも礼儀あり。
 したしい 「親」(形) 3 したしい 親しい 《—イ—ク》
 十三331 なんととっても、いちばん耳に親しいも

のは、水運ぶ一輪車の首であろう。
 十五796 といいますのは、私は、あの美しいあなたがたのお國を親しくおたずねして、
 十五1231 なぜいまでも、もつと先生がたとしたしくしなかったのだろうと、ざんねんに思いました。
 したしみ 「親」(名) 2 親しみ
 十九5 知らない外国人どうしても、こんなに親しみをもちことができるものかと思いました。
 十四297 どうも日本人は、むかしから、あまり星に親しみをもちていなかったようです。
 したしむ 「親」(五) 1 親しむ 《—マ》
 十五422 また、ローマ字は世界的の文字であるから、日本語が世界の人々に親しまれるようになるしたたる 「滴」(五) 2 したたる 《—ル》
 十八5 竹の葉さきからしたたるしずく。
 十九2 小学校のかわら屋根から雨がしたたる。
 したばたらき 「下働」(名) 1 下ばたらき
 十五481 このお庭焼のために、細工人、画工、ちようこく師、下ばたらきの者などが、三十数人かかえられていた。
 したばね 「下羽」(名) 1 下羽
 十五304 わしの白い下羽が、綿のように一面にちりました。
 したむき 「下向」(名) 1 下向き
 十一515 へちまの葉は、みんな下向きになってしまった。
 しだれる 「枝垂」(下二) 1 しだれる 《—レ》
 十二145 だが、根もとのところに三つ四つかたまってしだれているところもい。
 しち (課名) 31 七
 一28 七 よみかき……十五
 一151 七 よみかき

二33 七 かげえ……四十四
 二441 七 かげえ
 三31 七 白うさぎ……四十三
 三431 七 白うさぎ
 四31 七 いろはがたる……七十四
 四741 七 いろはがたる
 五32 七 星……五十二
 五524 七 星
 六32 七 だれの力……七十
 六701 七 だれの力
 七38 七 にげたらくだ……七十四
 七745 七 にげたらくだ
 八310 七 いねを育てて……九十四
 八941 七 いねを育てて
 九33 七 貝づか……七十六
 九761 七 貝づか
 十23 二 ことばの愛……七
 十38 七 ぶす……六十二
 十626 七 ぶす
 十一35 七 一つ一つづろ……五十五
 十一551 七 一つ一つづろ
 十二33 七 みえない力……六十四
 十二641 七 みえない力
 十三310 七 ある画像……五十三
 十三531 七 ある画像
 十四33 七 茶わんの湯……六十二
 十四621 七 茶わんの湯
 十五311 七 最後の学級日記……百二十
 十五1201 七 最後の学級日記
 しち (題名) 1 七
 一536 (七)
 しち 「七」(名) 17 七 7 (7)

[illegible]

<p>たつて、</p> <p>しちがつこのか 「七月九日」 (名) 1 7月9日</p> <p>7月9日 「七月九日」 (明) 晴 26度</p> <p>しちがつじゅういちにち 「七月十一日」 (名) 1 七月十一日</p> <p>5月7日 七月十一日 月</p> <p>しちがつじゅうごにち 「七月十五日」 (名) 1 七月十五日</p> <p>5月8日 七月十五日 金</p> <p>しちがつじゅうさんにち 「七月十三日」 (名) 2 7月13日 七月十三日</p> <p>5月8日 七月十三日 水</p> <p>8月4日 7月13日 (金) 晴 28度</p> <p>しちがつじゅうににち 「七月十二日」 (名) 2 7月12日</p> <p>5月7日 七月十二日 火</p> <p>8月1日 7月12日 (木) 晴 28度</p> <p>しちがつじゅうはちにち 「七月十八日」 (名) 1 7月18日</p> <p>8月8日 7月18日 (木) 晴 29度</p> <p>しちがつじゅうよっか 「七月十四日」 (名) 1 七月十四日</p> <p>5月1日 七月十四日 木</p> <p>しちがつじゅうろくにち 「七月十六日」 (名) 1 七月十六日</p> <p>5月4日 七月十六日 土</p> <p>しちがつなのか 「七月七日」 (名) 1 七月七日</p> <p>8月2日 (金) では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう。</p> <p>しちがつにじゅうよっか 「七月二十四日」 (名) 1 7月24日</p> <p>7月24日 (火) くもり 19度</p>

しががつはつか「七月二十日」(名) 1 7月20日
 七92 7月20日 (論) 雨のちくもり 22度
 しちこ「七五」(名) 1 七―五
 十二84 3 かたずをのんで試合をみているうちに、
 早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、
 しちごさん「七五三」(名) 1 七五三
 十55 7 七五三の記念写真も、思いではななるで
 しょうが、
 しちじ「七時」(名) 1 七時
 十四66 国 私は短い旅をしたあとで、七時にパ
 リーに着きました。
 しちじゅう「課名」2 七十
 六32 七 だれの力……………七十
 十二34 八 雪まろげ……………七十
 しちじゅうし「課名」2 七十四
 四31 七 いろはがるた……………七十四
 七38 七 にげたらくだ……………七十四
 しちじゅうしち「課名」4 七十七
 五35 十 学級日記から……………七十七
 十二35 九 テニス……………七十七
 十四34 八 木もと竹うら……………七十七
 十五39 五 その人のことば……………七十七
 しちじゅうろく「課名」1 七十六
 九33 七 貝づか……………七十六
 しちにん「七人」(名) 1 七人
 九33 国 三びきもとつてくると、うちの家族七人
 が、じゅうぶんだべることができます。
 しちねん「七年」(名) 2 七年
 八19 7 あぶらぜみでは、七年もかからないと、親
 になることができないといひます。
 八20 3 七年の月日がたつたころ、せみの子たちは
 〈略〉、もう大きくなりきつたことを知ります。

十一883 手をさすったり、やさしく話しかけたり、しっかりするようにとはげましたりしました。

十二1131 この本によって、日本の医学は、はじめてしっかりしたものとなりました。

十四910 どちらみちさけることのできなかったことに對して、しっかりしたかくごをおきめになり、

じっキロ (名) 1 十キロ

十四529 十キロもあるような大きなかぼちゃでも、《略》めしべの根もとが、大きくふくれたただけ

しつけ 「仕付」(名) 1 しつけ

十二261 1 いそがしいものだから、ついしつけができなくて。

しっけい 「失敬」(感) 3 しっけい

三412 1 「じゃあしっけい。」いちろうくんが、右の方にまがっていつてしまいました。

四429 1 「きみ、列をはなれちゃだめじゃないか。」しっけい、しっけい。

四429 1 「しっけい、しっけい。」

しつ・ける 「仕付」(下) 1 しつける 《一ケ》

十二409 サリバン先生が、このあらあらしいわけのわからないケラーをしつけていくのには、なみなみならぬどりがいりました。

じっけん 「実験」(名) 1 実験

十三98 おしべのかふんがめしべにつかないようなくふうと、いま一つ、よくつくようなくふうをして、その実験を重ね、

じっけんする 「実験」(サ変) 1 実験する 《一シ》

十三89 深い、正しい知識を得るには、考えたり、調べたり、《略》観察したり、実験したりする。

じつげん・する 「実現」(サ変) 5 実現する 《一サースル》

十451 大きなゆめは実現された。

十三198 かれは、科学者であり、理想を実現する誠意にみちていました。

十三1911 このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかありません。

十三221 ダルガスの希望であり、デンマルクの希望であるこの植林は、みごとに実現されました。

十三224 みどりの野はできたが、《略》建築用材を求めるダルガスの熱望は、実現されません。

じつげんできる 「実現出来」(上) 1 実現できる 《一キ》

十3810 このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。

しっこ (名) 1 しっこ

十二2410 民ちゃんはまだ、うんこもしっこもいえません。

じっこう 「実行」(名) 2 実行

十三2512 デンマルク人のたましいは、ダルガスの研究と実行の結果として、すっかり生まれかわりました。

十三262 誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、

じっさい 「実際」(名) 6 じっさい 実際

六1195 じっさいに紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ、ちょうどいい長さにひごを切りました。

九111 水の音をたいこであらわすことなどは、ちよつと考えられないが、じっさいにきいてみると、たしかに水の音である。

十399 理論と実際とは、そうやすやすと、ひとつになるものではなかった。

十三2012 これなら、ユートランドのあれ地にも育つだろうと思って、実際に試験してみると、

十三236 わかいダルガスの意見を、実際にためしみると、そのとおりになりました。

十五806 おたがい他の國々のことはわからず、世をすごしてきたばかりでなく、実際は、たがいにくみあつたり、おそれあつたりしてきました。

じっそく 「実測」(名) 1 実測

十五566 その際算出した高さは、実測の結果とわずか十フィートしかちがわなかった。

じっと (副) 30 じっと

二243 大きなあおがえるが、とうもろこしのはっぱに、じっとぶらさがっていました。

三1093 月のきれいなばんになると、かぐやひめは、空をながめてはためいきをつき、じっとかんがえこむようになりました。

四153 みんなじっとしていましたが、なかなか。

六710 女の子はただじっとみつめていたが、やがてこの小さなねじをみつめて、

六526 じっと月をみつめていると、月は動かないで、雲が大いそぎでとんでいくようにもみえます。

六535 お月さまをじっとみていてごらんさい。

六537 でもね、雲をじっとみていてごらん。

六5411 すると、月は枝のあいだにじっとしていましたが、雲はさっさと走っていきます。

六1012 こう思いつくと、ぼくは、もう、じっとしていらなくなつた。

六1302 ぼくひとり、じっとしずかにしていたんだよ。

七875 うさは、すこしもじっとしていません。

八653 親あひるは、じっとその子をながめた。

八七五 しばらく、じっとしずかにしていた。
 九四一 それで、そのまま手足をちぢめて、じっとすわっていました。
 一三五 佐吉は、もう、じっとしていられなくなり、設計図をひいては組み立て、組み立てては動かしてみた。
 一六八 大きくみ開いた目をあけて、じっと空間をみつめている者もありました。
 一七六 でも、ハンカチを目にあてているときには、じっとみつめていました。
 一七八 しみじみとしたそのように、じっと耳をかたむけているようにみえたからです。
 一八一 のどまででかけたさげびを、じっとおさえながら。
 一八三 父親は、じっと病人の方をみつめたあとで、いくども少年にほおずりしてからいました。
 一八四 病人は、そのとき、目を開いて、じっと少年をみつめました。
 一八五 父親は、じっと少年をみつめていましたが、やがてまた、病人の方をみました。
 一八六 病人は、やはりじっと少年の方をみていました。
 一八九 病人は、目を開いて少年をじっとみて、そうして、また目を閉じました。
 一九七 文雄は立ちあがってすこしはなれたところからじっとみつめた。
 二〇一 この日の午後、私はなんとなくものを待つ氣持で、じっとげんかんにたたずんでいました。
 二〇三 天は動き、地はじっとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。
 二〇四 じっと見つめているうちに、一つの明るい星が落ちるのを見た。

二二五 女の子は、〈略〉氣でも失ったのか、すこしもさわがず、あばれもせず、じっとしています。
 二七〇 暗い心になって、じっとおじさんの写真に見入りながら、
 しつない 〔室内〕(名) 1 室内
 二五三 じつかに室内にはいった私の目に映じたのは、
 じつに 〔実〕(副) 7 じつに
 二九五 じつにゆかいだ。
 二六〇 はなをつまんで、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。
 二七六 きみはじつにみにくいから、氣にいったよ。
 二八〇 じつに美しい。
 二八二 その数は、じつに八十五万にもおよんだ。
 二八五 〔いすによるマドンナ〕は、おけのそこにかいたという小さな絵だが、じつによくかけている。
 二八八 じつにめずらしい日本人が舞いこんで来たものだ。
 二九〇 ときには、十ばも二十ばも、ずらりとならんでいることがあります。
 二九二 〔実〕(副) 6 じつは
 二九五 じつは、海でつりをしていたら、つりばりをとられてしまったのです。
 三〇〇 じつは、おとといからめんどろなあらそいがおこって、ちよつと裁判に困りましたので、
 三〇五 じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうをとって遊んでいました。
 三〇九 星と人間とは、たいして関係がなさそう

ですが、じつは、ふかいつながりがあるのです。
 三四四 私にはハギンスというものですが、じつは、私のプリンクラーじいさんがね――
 三五九 じつは、私は今右衛門のまごにあたるものです。
 しっぱい 〔失敗〕(名) 5 失敗
 三六二 これも、まんまと失敗であった。
 三六四 いままでの失敗のものとをとりぞいて、新しい設計図をこしらえあげた。
 三七五 いまにもう失敗もなくなるようにしてみせます。
 三八八 白く焼けるはずのものが黒くなったり、黄色くなったりして、失敗に失敗を重ねていった。
 三九〇 失敗に失敗を重ねていった。
 しっぱいする 〔失敗〕(サ変) 1 失敗する 《一シ》
 四〇一 あなたの光明を太陽とするならば、作製に失敗したわたしは、星にもあたらないでしょう。
 四〇五 〔十四〕(名) 3 十びき
 四一〇 一びき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひき、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、十ひき、
 四一五 一びき、二ひき、三ひき、四ひき、五ひき、六ひき、七ひき、八ひき、九ひき、十ひき、
 四二〇 茶うさぎ 1 びき 白うさぎ 10 びき 黒うさぎ 2 びき
 じつフィート (名) 1 十フィート
 四二五 その際算出した高さは、実測の結果とわずかに十フィートしかちがわなかった。
 しっぽ 〔尻尾〕(名) 3 しっぽ
 四三〇 おしまいのめくらは、しっぽをもつていいました。
 四三五 金のさかなは、なにもいわないで、しっぽ

でピシャリと音をさせて、
八30 天帝は、ひとつこの男のうでをためしてみ
ようと考えて、黒うしのしつぽのあたりを一つき
おつきになりました。

しつぼう 「失望」(名) 2 失望

十41 1 こういって、失望にせずむ幸吉を、なんど
もはげました。

十一79 5 希望と、胸をこおらせるような失望との
あいだで、たえずはらはらしていました。

しつぼうする 「失望」(サ変) 1 失望する 《—
シ》

十二35 5 先生は失望して、一時やめていらっしや
いました。

しつゆう 「室友」(名) 1 室友

十五58 8 室友ホランド先生、自然科学にもっと
もきょうみを有し、

じつようじよう 「実用上」(名) 1 実用上

十四74 10 そうなると、いろいろの実用上の問題と
えんがつながってきます。

じつりよく 「実力」(名) 1 実力

十一10 3 6 では、実力があって、力いっぱいはた
らくいい船員には、だれがなるのさ。

しつれい 「失礼」(形状) 2 失礼

七44 8 たいへん失礼だと思えますが、これは、
車中の人たちのころざしであります。

十五87 4 失礼ですが、この中のおもなものをこ
しょうかいたしましょう。

しつれいする 「失礼」(サ変) 1 失礼する 《—
シ》

十五44 11 いや、これは失礼しました。

して(接) 1 して

七83 7 道のかたがわの草ばかりたべてあったか

らです。」裁判官「なるほど。して、びつという
ことは。」

して(接助) 2 してまたしても

十三21 1 実際に試験してみると、もみの木はえ
るが、数年ならずしてかれてしまいました。

十五81 6 平ぼんにしていだいなれよ。

しでかす 「仕出来」(五) 1 しでかす 《—シ》

八10 10 毎日なにかかわったことをしでかしては、
みんなをおどろかせたり感心させたりします。

じてん 「自転」(名) 2 自轉

十三15 2 自轉といつて、一晝夜に一どずつ、自分
で西から東へ一回轉します。

十三15 3 また、公轉といつて、自轉をしながら、

《略》、一年に一回、太陽のまわりをまわります。

じてん 「事典」↓だいいいひゃつかじてん

じてん 「辞典」↓がいらいごじてん・こくごじてん

じてんしゃ 「自転車」(名) 5 自てん車 自轉車

五19 11 配たつをする人は、自てん車に乗って走り
ました。

七29 4 自轉車のチューブのようにふわふわした、

黒っぽい、かわいいあおむしは、

七46 6 黄みがかった麦ばたけ、縣道らしい白つぽ
い道、そこを自轉車に乗って走る中学生、

九28 2 朝つゆの中に自轉車のりいれぬ

十23 6 自轉車に乗った中学生が、ふたりづれでな
の花畑を横ぎる。

しとう 「四頭」(名) 1 四頭

十一47 6 北海道の家には、うしが四頭いた。

じどうしゃ 「自動車」(名) 14 じどうしゃ 自動車

ひかもつじどうしゃ

三90 7 じどうしゃもとあります。

五19 5 二日めのあさ、やっと汽車からおろされ、

自動車につみこまれて、

六37 10 ずっと下にみえる夕やけの大通りを、豆つ
ぶほどの自動車や電車が、ひっきりなしにゆきき
している。

六74 9 自動車は。」

六77 10 風や、自動車や、水車は、動いていても息
をしないから、命がないんだと、

九18 5 汽車や自動車もかなわないうらいの早さで
すから、

九20 5 そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではま
にあわず、さらに二台の自動車を加えました。

九20 5 さらに二台の自動車を加えました。

九20 6 自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわ
りきっているつばめたちを運んできました。

十二11 10 汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、
日に日に進歩しています。

十五53 5 目ざすりっぱな博物館に自動車を乗りつ
け、《略》おくまった館長室の前に立った私は、

十五60 1 横づけにしてあったりっぱな自動車に、
ためらう私をおしこみ、

十五72 9 町を走り出た自動車は、やがてこう外の
すばらしい家のげんかんに横づけになった。

十五75 8 自動車のドアに手をかけた老博士が、

じどうしょっき 「題名」 2 自動織機

十3 2 自動織機

十32 8 自動織機

じどうしょっき 「自動織機」(名) 3 自動織機

十37 5 そこでさらに、七年間のくふうがつづけら
れ、みごとに、自動織機ができあがった。

十37 6 これが、日本における自動織機のはじめで
ある。

十37 7 日本の新しい出発にあたって、この自動

織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであらう。

しとうびき 「四頭引」(名) 1 四頭びき

八二六 たまでかざった、きれいな四頭びきの馬車が走ってきます。

しとしと (副) 3 しとしと

十一三二 雨 しとしとと降る春雨に、やぶのたけのこすくすのびで、

十一三八 雨 かきねににおうきんもくせい、しとしとと降る秋雨に、ちれば山にはまつたけが、

十一四一 雨 はい色雲がたちこめて、さとはしづれがしとしと降るに、ふもとの小屋はみぞれして、

しな 「品」(名) 1 品

七二二 雨 そのうえ、つけていた荷物の品まで、知っているじゃありませんか。

しなう 「撓」(五) 1 しなう 《一ツ》

十一五二 雨 その体格で、思うぞんぶん、長いオールをこいだら、オールがぎゅうぎゅうとしなうて、

しなさる (五) 1 しなさる 《一イ》

十一八七 雨 じゃあ、ここに二円だけおいていくから、こづかいにしなさい。

しなものの 「品物」(名) 6 品物

五二八 雨 むこうの店に品物をとどけて、受けとりをもらって帰ってくるうちゅう、

五三四 雨 ここで、きかいや、ひりょうなど、たいせつな品物を作っています。

十二六一 雨 そうしてよく日いつてみると、頼んだ品物がちゃんとそろってならんでいた。

十四二四 雨 外国と交通をして、日本になかった品物が、外国から伝えられたときに、

十四二五 雨 それから、外国のことばがはいってきたのは、品物からだけではなく、

十五五〇 雨 品物は私が買いうけましょう。

シナリオ (名) 1 シナリオ

六三三 これは、まがのシナリオです。
しに ↓こえじにさせる

しにがい 「死貝」(名) 2 死貝

十三四 研究のため、死貝を一つ一つ、ていねいにしらべていった。

十四九 幸吉は、それこそ氣がいのようになって、死貝をどんどんみていった。

しにん 「死人」(名) 2 死人

十一六八 雨 中には、死人のようにみえる者もあれば、十一九二 雨 そこで死人の方へ向いて、「略」と

いって、名をなんと呼ぼうかと思っているうち、しめ 「死」(五) 30 死ぬ 《ナ・ニ・ヌ・ン》

↓こえじに

五九四 ひなはたいそう小さくて、元氣がなく、死んだようになっておちていたのです。

六二六 いままで死んだようになっていたかいちゅう時計が、(略)カチカチと音をたてはじめた。

六二六 いったい、あの雪だるまは、死んでいるのか、生きていますのか。

六二七 もちろん生きていますとは思われないが、死んでいるとも思えない。

六二八 死んでいたら、ころがったおれるわけだし、

六三三 雪だるまは生きていますのしょうか、死んでいるのしょうか。

七二八 雨 「これ、死んでいるの。」
七三二 雨 死ぬといけないから、ここから出して、庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょうね。

八三三 信用してくれていたものを、あやまちのためにあわれに死なせたというなげなさは、

八二五 文 雨が死ぬけしきはみえずせみの声

八二五 雨 そのとおり、死ぬことなど考えられないほどにぎやかに鳴きたてたせみも、

八二五 雨 にぎやかに鳴きたてたせみも、やがて、秋になると、みんな死んでしまった。

八三三 二わのがんは、ぬまの中に死んで落ちた。

十三九 核をさしいれたために死ぬものもあった。

十四〇 はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もとのままになっていた。

十四一 この赤しおのために、母貝はみな死んでしまった。

十四二 母貝は、ほとんど死んでしまった。

十四六 雨 そちらからふいてくる風にあたっても、たちまち死ぬといわれるくらいだ。

十六六 そんなおそろしいどくで、死ぬようなことになってはつまらないから、

十六九 雨 それなら、もう、ふたりとも、どつきにあたって死んでいるはずじゃないか。

十六九 雨 それが、死なないのだから、『ぶす』ではない。

十七三 雨 『ぶす』をたべて死ぬのが、いちばん早道と思ったのです。

十一二八 雨 ところで、そのつぎの年、母親が、四五日の病氣で死んでしまいました。

十一九〇 雨 「死んでしまった。」
十一九二 雨 ぼく、記念に、この死んだ人にのこしていきます。

十三一四 雨 これを最初にいいだしたのは、十六世紀の中ごろに死んだ、ポーランドのコペルニクスという人です。
十三一六 雨 死ぬまで眞理を求めていたのです。
十三二五 雨 そうでなければ、死んでいたい。

十四48 4 どうせ助からないものなら、こういう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだ
 十四58 8 水がなかったら、なんでもすぐ、かれ
 たり死んだりしてしまします。

しぬ「死」(ナ変) 3 死ぬ 《ナ―ニ》

十四74 4 文韻会 ひとくちくえども死にもせず、ふた
 くちくえども死にもせず、みくち、よくち、ぶす
 はくえども、死なれもせず。

十四74 5 文韻会 ふたくちくえども死にもせず、

十四74 8 文韻会 みくち、よくち、ぶすはくえども、

死なれもせず。

しのぎ「鎗」(名) 1 しのぎ

十二86 5 両選手はしのぎをけずって戦いました。

しのぐ「凌」(五) 2 しのぐ 《―イ》

九122 11 しかし茶人は、いろいろな困難をしのいで、
 みんなをはげましては上流へたどっていった。

十三61 4 二十二か三のわかさで、せんばいをし

のいで大家になり、

しのばめん「題名」 3 四のばめん

二50 3 四のばめん

四113 1 四のばめん

六86 6 四のばめん

しのびこむ「忍込」(五) 1 しのびこむ 《―ン》

五98 11 どこかのねこが、しのびこんで、ひわをと
 ろうとしていました。

しのひと「四人」(話手) 4 四の人

十四39 1 四の人「暗いとぼりが、たち切られる。」

十四39 10 四の人「光だ。」

十四40 2 四の人「きれいな、きれいな雲ではない

か。」

十四40 10 四の人「わかわかしい世紀のひびき。」

しのびない「忍」(形) 1 しのびない 《―イ》

十二63 7 母にそのからだをみせるにはしのびない。
 しのぶ「偲」(五) 1 しのぶ 《―ブ》

十五66 5 せつがくるごとにその人形をかざって、
 ありし日をしのぶことをわすれなかった満ぼう

しば「柴」(名) 2 しば

十一25 5 遠い山へいって、しばをかつたり木を
 切ったりして、村の人に買ってもらいました。

十二76 3 やがていりには、パチパチとしばがも

えあがります。

しばい「芝居」(名) 13 しばい しかげえしばい・

かみしばい・こどもしばい・にんぎょうしばい

九14 1 しばいで、ゆめをみていた人が、にわか

目をさます場面を演ずることがある。

十63 3 能は、《略》、かぶきや、ほかのしばいとも、
 いろいろちがうところがあります。

十63 4 ふつうのしばいでは、役者がおじいさん

になったり、むすめになったり、《略》するときに

は、おしろいやべにでけしょうをして、

十二44 5 人形しばいって、人形がしばいをする

んですか。

十二45 5 あれにあわせてしばいをするんだ。

十二45 8 人間のしばいとちがって、みていると

別世界にいったような楽しい気がするよ。

十二46 4 影絵ってやつばり人形のしばいですか。

十二46 12 それが音楽や歌にあわせてしばいをする

わけだ。

十三44 3 しばいは、かならず、ふたり以上の会話

から組みたてられています。

十三44 4 ところが、このしばいは、舞台に出て来

る人が、ただひとりです。

十三44 5 これはしばいではないかというと、そう

ではなく、これでも、しばいになっています。

十三44 6 これでも、しばいになっています。

十三45 2 そこに、このしばいのむずかしさがあり

ます。

しばし「暫」(副) 1 しばし

十五53 6 館長室の前に立った私は、しばしため

らったのち、《略》ドアをコツコツとノックした。

しはじめる(下) 1 しはじめる 《―メ》

十二59 8 三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけ

て、わがままをしはじめた。

しばふ「芝生」(名) 4 しばふ

三93 6 このしばふもみんなのものです。

三93 7 やわらかなもうせんをしいたようなし

ばふ、

三93 8 みどり色につやつやと光ったしばふ。

十三55 春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ

日のしま目にもちらちらとして、

しばらく「暫」(副) 35 しばらく

二50 1 それをやめて、しばらく かんがえます。

四27 2 もうしばらく ないてくれたら、かこ

からはなして あげるよ。

四36 5 みんなは、しばらく 考えて いました。

五46 8 しばらくすると、また、「《略》。」と鳴いた。

六18 7 しばらく音楽がつづいてから終わります。

六29 5 「しばらくでしたね。」

六54 5 そうして、しばらく枝ごしに月をみていま

したが、「《略》。」と、手まねきをしました。

六95 9 海の神は、しばらくお考えになって、

七94 3 しばらく動かないで、いたそうにしていま

した。

八62 私も、すっかりひきこまれて、しばらく見

物したのち、その一わを買い、

八23 3 しばらくそのままのしせいで動きません。

八24 5 しばらくすると、れいのあおぎりの木でも、ほかのあぶらぜみが〔略〕鳴きはじめました。
 八47 5 日がぐれきましたが、王子は、もうしばらくさがそうと、歩いていきました。
 八75 9 しばらく、じっとしずかにしていた。
 八76 2 しばらくして、やっとひっそりした。
 九71 1 まだなにかいたように、しばらくひげをひねって、目をぼちぼちさせていましたが、
 九71 10 いかにもさんねんだというふうな、しばらくひげをひねったまま下を向いていましたが、
 九78 5 しばらくして、その主人といっしょにでておいでになりました。
 九93 1 しばらく、間——
 九93 7 しばらくすると、たかぎもさがし物のようすででくる。
 九94 3 しばらくして持っているすみに気がつき、
 九93 4 しばらく、目をつぶってしずかにしている
 と、
 十50 1 家からでてしばらくいくと、
 十一66 4 看護人は、しばらく考えていましたが、
 十一90 2 医者は、病人の上にしばらくのあいだうつむいていましたが、
 十二33 3 私がしばらくその人形と遊んでいますと、
 十二36 1 しばらくして、先生がぼうしを持ってきてくださったので、
 十二86 9 両選手のために、見物人たちは、しばらく、あらしのようなはく手をおしみませんでした。
 十三14 3 しばらくして、ドイツ人でケプラーという人が出ました。
 十三43 5 しばらくして、うらの方で、もの音がする。
 十四30 9 むかしのことはしばらくおき、これから

の人の心がまえは、大きくなくてははいけません。
 十四46 6 マッケンナは、しばらくしんみりした氣持で、この歌に聞きはれていました。
 十四60 10 しばらくして、根がいました。
 十五20 5 ユングフラウの山中のホテルに、アメリカ人の一家族が来て、しばらくとまっています。
 十五23 4 しばらくして、ふと氣がついてみると、
 しばりつける〔縛付〕(下二) 1 しばりつける
 一ヶ
 九131 11 くもは、ふといつなをとりだして、みつばちのからだをしばりつけようとしてました。
 しひき〔四匹〕(名) 6 四ひき 4ひき
 二29 8 一ひき、二ひき、三ひき、四ひき、
 二30 4 一ひき、二ひき、三ひき、四ひき、
 六127 7 四ひきのうさぎさんたちは、とんとこ、とんとことトンネルの中を走っていました。
 六128 3 おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさんたちは、うまくにげました。
 七93 4 朝、いつてみたら、右から四はんめのへやに、子うさぎが4ひき生まれていました。
 七96 7 ねずみ色の4ひきは、生まれてから12日めのきよう、みんな、目があき、
 じびき〔字〕(名) 1 字びき
 五84 10 どのうえさんの字びきができますね。
 しひやくグラム(名) 1 400g
 七86 6 黒うさぎ 390g、白うさぎ 400g。
 茶うさぎ 1kg
 しぶがき〔波柿〕(名) 2 しぶがき
 九43 9 うちのかきはしぶがきですから、ほしがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしにとおし、のき下につるしてくれます。
 十一37 5 あまがき・しぶがき赤くなり、くりも

ばらばら落ちだした。
 じぶつ〔事物〕(名) 3 事物
 十五35 5 これらの表わしかたとともに、事物の形を絵にうつすことも行われた。
 十五35 12 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、
 十五36 4 漢字は、いまいったように、はじめ、事物の形をうつしたのから発達したものであるが、
 じぶん〔自分〕(名) 131 じぶん 自分
 三30 4 じぶんの かきたいところへいって、そこで かいていらっしやい。
 三89 1 じぶんの 耳で きいた ひびきを、かきとって みましよう。
 四28 4 きよしさんは、じぶんを あいてに 書くことに、氣が つきました。
 四29 7 じぶんで じぶんに きいて みても、なかなか はっきりした 返事を してくれない。
 四29 8 じぶんで じぶんに きいて みても、
 四39 1 話が すむと、みんなは、めいめい じぶんの ことが 思いだされて きました。
 五78 5 ひまわりの花は、いけださんが 自分の うちの にわから、持ってきて くれた のでした。
 五96 10 自分で えさを とったり、遠い ところまで とんで いくことは できません。
 五98 1 ひわの子は、それが 自分の なかまの 鳴き声 だと思いました。
 五98 4 こんなふうに、自分でも さえずりはじめました。
 六4 8 自分のおかれていますのは、しごと台の上の のっている 小さな ふた ガラス の中で、
 六6 4 考えているうちに、ふと、自分の ことに 考えおよんだ。

六六六 なんと小さい、なさけない自分であらう。

六六〇 ただ自分だけがこのように小さくて、なんの役にもたちそうにない。

六九五 それでは、自分のようなものでも、役にたつことがあるのかしら。

六一八 自分がここにはいったために、この時計ぜんたいが、ふたたび活動することができたのだ。

六二九 自分もほんとうに役にたっているのだ。

六七八 ごろうは、息をすることも自分の力ではないことをきいて、なるほどと思いました。

六九〇 そうして、自分とあさがおの花とが、たいへん近いもののように思われました。

六〇六 「ム」と自分で声をだしていつてみると、いかにもはなから声がでているような気がする。

六〇九 ところでぼくは、自分ではなをつまんで、はなのあなから息がもれないようにして、

六〇〇 自分ではなをつまんで、「ナ」といいながら、耳できいてみると、

六二五 たかが青空で右や左にゆれると、自分もいっしょに首をふりながら、

六三六 しかさんは、もし自分が勝ったら、このしかの角で、うさぎさんたちをつきあげるといふ

七二四 いいえ、どうなるか、みんな自分でしらべるようにと、おっしゃっただけです。

七二七 なんでも、自分でみつけていきましょうね。

七四三 そこで、老人は、自分のかぶっていたぼうしを、そばの人の手に渡した。

八六八 自分から指さきやくちびるへとびあがり、とびついて、じょうずにえさをとったり、

八五八 せみの子どもたちは、自分の小さなまえ足

でトンネルをほりながら、

八五四 だれかがきいたら、自分は「幸福」だといわずに、「びんぼう」だというつもりでした。

八五〇 そんなまずしいなりをしていても、それでも、自分をよくむかえてくれる人があったら、

八七三 おしまいには、自分の兄や姉からまで、「略」といわれた。

八八二 これも自分がみにくいばかりに——

八八七 自分がみにくいので、いぬもかみつこうとしない。

八八二 おばあさんは、それを自分の子のようにかわいがった。

八八五 かしこいものたちがものをいつているときに、自分の考えなどはいえないのだよ。

八八七 あひるの子は、〈略〉、自分でもおどろくほどへんな大きな声をだした。

八九〇 そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのをみた。

九二四 つばめは、けつして自分の國をわすれませんでした。

九二五 自分の家へいそいそと帰ってきたつばめをむかえる人の心は、

九二六 上ばきを自分でつくるわらしごと

九二七 いちろうは、自分のうちのまえに、どんぐりをいれたますを持って立っていました。

九三三 しかし、自分の物ではないので、それを舞台のおくになげすめて、

九三九 新しいすみをひろいあげるが、自分の物ではないので、なおあたりをさがしている。

九四〇 じまん話を始めると、自分がいちばんりっぱだと思ふもんだね。

九四二 自分のからだははれてくるし、いたいし、

九四三 自分は、こうもりのために、高いところからたたき落されたが、

九四八 それにくらべて、自分は、なんとあらっぱいくらしをしていることだろう。

九四二 くもは、そつと自分の手をのぼし足をのぼしてみした。

九四四 くもは、自分ながら自分のからだを、そろそろしく思われてきました。

九四七 みにくいと思っていた自分のからだも、もうみにくいとは思えなくなりました。

九四八 あなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國にのこしておいてきました。

九四九 フランスのいなかの子どもから、自分の國のことをきかれたときは、

九四九 そういう遠い國へいくと、自分の國のことばがこいしくなります。

九四九 外國でくらしてみても、つくづく、自分の國のことばのありがたみを知りました。

九四九 ふだん自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたい

九四九 自分のもっているいいところを、えんりよしないであらわし、

九四九 自分をえらそうにみせかけたり、人をだましたりしないで、

九四九 自分ひとりぐらいどうでもいいというような、無責任な、ひきような考えを

九四九 自分のつとめをはたすだけの勇氣を、もちたいと考えます。

九四九 「このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。」

九四九 自分で、「イコウ」ときめてあるきかけると、道のわきで、たき火をしていました。

十55 6 むりに書くと、自分がほんとうに思ったり、感じたり、考えたりしていることは、ちがったものになります。

十一71 3 おくびよう者が、きゆうにいきおいづき、
《略》、自分も指をつっこみました。

十一20 8 父親のすきなものを買うために、自分で
わらじを作って、お金をもうけたりもしました。

十一24 5 金次郎は、自分の考えをくり返し話して
母親にすすめました。

十一28 10 その油を自分でとりたいたいと思い、
十一29 5 すると、秋の終りには、一びようあまり
の米を自分のものにするのができました。

十一30 1 やがて、金次郎は、親類の家からでて、
もとの自分の家に帰り、

十一44 3 それをみようとして、父兄の人たちは、自分
の席で立ちあがります。

十一44 9 私は、自分が呼ばれたような気がしまし
た。

十一45 3 弟は、さつさともとの自分の席にもどり、
十一49 4 ぼくは、おとうさんと同じように、ちち
うしをかって、自分でバターをつくります。

十一62 4 《略》 このくらいのがこわいものと、
自分からさきになって渡ってしまったのです。

十一64 10 母親は、《略》、自分はちのみ子もあって、
家をあけることができないので、

十一77 12 そこで、少年は、自分をなくさめて望み
をかけはじめました。

十一84 7 父親は、少年を自分の方へひっぱりまし
た。

十一86 11 《略》 同じ年ぐらいのむすこがいるらしく、
自分のむすこだと思いきんでいるようですよ。

十一89 10 そのとき、少年は、病人が自分の手には

ぎりしめたような気がしました。

十二37 7 「水」はいま自分のかた手の上を流れて
いるふしぎな冷たいものの名であることを知り

十二38 4 へやに帰るとすぐ、私は、自分がかわし
た人形のことを思いだして、

十二38 7 自分のしたことがわかったので、《略》、
くやむ心と悲しみに胸をさされました。

十二39 2 ベッドに横たわりながら、この日が自分
にもたらした喜びを思い返していたときの私ほど

十二48 6 《略》 そのうえ、手がるでおもしろいし、自
分で作って自分で動かすのは楽しいものだよ。

十二48 6 《略》 自分で作って自分で動かすのは
十二55 2 自分の生まれたところは、なんともいえ
ない暖かい感じのするものである。

十二70 10 家もせまいので、自分は、その近所に別
に家をかいて住むことにしました。

十二73 11 子どもたちのかけていく方に、自分も
いっしょにかけだしたいと思いました。

十二89 2 そうでないとして、相手の人に満足を與える
ことができないし、また自分の誠意も通じない。

十二89 3 自分が話をするときには、その場のよう
すによくあうように、氣をつけて話さなければ

十二89 11 それは自分の生活を軽はずきに、相手の
人をいやしめることにもなるからである。

十二94 9 すすきの野原を心にえがき、自分もそん
なところについて遊んでみたいと思う。

十二95 6 しょうぼりと校庭に立っていると、赤と
んぼが自分のまわりをとんでいた。

十三8 3 知識は、《略》、自分で本を読んだり、考
えたり、調べたりして、しだいにまじていく。

十三8 5 自分のつとめをはたしていくために、知
識をますことは、たいせつなことからである。

十三14 10 自分で望遠鏡を組みたてて、それで天体
を観察し、

十三15 2 自轉といつて、一晝夜に一どずつ、自分
で西から東へ一回轉します。

十三15 12 そのため、ガリレオは、ローマに呼びだ
されて、自分でも信じてはならぬ、人にも説いて
はならぬといわれました。

十三16 3 やむを得ず自分の説はあやまりであつた
ということにして、ゆるしてもらいました。

十四4 10 そうして、心の正しい人々の苦しみを、
自分もともに苦しんだのです。

十四7 3 《略》 だから、自分はたしかにひとりぼっち
ではないのだと、お考えになつてください。

十四7 12 《略》 おとうさんのお写真を、私は、いつも
自分のそばのつくえの上におきます。

十四9 11 《略》 自分を愛してくれる子どもたちのこと
を思つて、

十四14 11 《略》 自分としては、力のかぎりおあさ
んを幸福にしておあげしよう。

十四15 2 《略》 自分には子どもがあるということをお
考えになつて、

十四30 3 自分の身近なものしか見ないで、
十四46 10 いい氣持になつて、自分が水の中にひ
たっていることも、わすれてしまったほどでした。

十四47 4 おそらくは、自分と同じように、船から
なぜだされたものでしょう。

十四47 12 自分なんか、およいでいるだけがせいぜ
いなのに、

十四48 3 自分もどうせ助からないものなら、こう
いう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだ

十四53 4 《略》 花さんは、たいへんじょうずに自分の
ことを主張なさいましたね。

五417㊦ まいにち、たくさんちをしほります。
七311㊦ あの羽をしほったら、きれいなしるがで
そうね。

しま「島」(名) 8 島 ↓さがしま

三432 白うさが、島から むこうの りくへ
いってみたいと思いました。

四5310 みずうみの 島には、こんもりとした林
がありました。

四552 島には かりうどは きませんが、大きな
へびが やってくる ことがあります。

四654 三十はの がんは、みずうみの 島を とび
たちました。

五513㊦ 島をとりまく 青い海、青い海。

七657 もやのかかったおきの島、ポンポン船がで
かけていく。

十2312 長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船、
島。

十三175 わが九州^{きゅうしゅう}ほどの本國と、三つの島から
なっている、小さな、しずかな國であります。

しま「仕舞」(名) 3 しまい ↓おしまい・おし
まいのことば

二213㊦ しまいまで みて いたいとおもいまし
たが、かねが なったので、やめて きました。

三4510 いちばん しまいにいたわにぞめが、白う
さを つかまえて、

十四663 それがだんだんに廣がり、入りみだれて、
しまいに見えなくなってしまう。

しま「姉妹」↓きようだいしまい
しまいこむ「仕舞込」(五) 1 しまいこむ「一
マ」

六42 くらいはこの中にしまいこまれていた、小
さな鉄のねじが、

しまう「仕舞」(五) 206 しまう 《イー・ウ・
エー・オ・ツ・ー・ウ》↓おしまう

一462 かたなだの、てっぽうだの、あぶないも
のは みんなとりあげられてしましました。

一517 よにんはもたれあつて、ぐうぐうとねて
しましました。

一5310㊦ いじのわるいけんかずきの人がひろ
うと、ただのいしころになってしまします。

一6110㊦ でも、わたくしがもったら、ただのい
しころになってしまわなかしら。

二284㊦ そのうちに、二ひきとも、どぶんとお
ちてしましました。

二372㊦ そうつかいは、わらいながらいってし
ましました。

二509 じろうも、となりのへやへいってしま
います。

二566 こんなことをかんがえているうちに、
いつのまにか、ねむってしましました。

三137 はんたかは、このひとことを心の 中に
しましました。

三163 それをみたごてんの人々は、びっくり
してしましました。

三413 いちろうくんが、右の 方に まがつて
いってしましました。

三426 ひとりぼっちになってしましました。

三462 白うさを つかまえて、からだの けを
みんなむしりってしましました。

三764㊦ お日さまがつれていって しまったの
よ。

三784㊦ よその 子どもたちが わたしのお日さ
まをとってしまのはい。

三928 みにきた人が 一本ずつ おってしまえ

ばいまいにみんななくなってしまうでしょう。

三931 みんななくなってしまうでしょう。

三979 心に思ったことは、いつのまにかきえ
てしましますが、

三995㊦ みなさんの かいたえでも、字でも、だ
いじにしまっておきなさい。

三1053 どんなりっぱな人の ねがいをも、みん
なことわってしましました。

三1054 たいていの人は、あきらめてしましまし
たが、

三1113 あまりしんぱいしたので、かみのけ
が白くなり、こしもまがつてしましました。

三11210 手足の力がなくなつて、なにをするこ
とも できなくなつてしましました。

三1135 かぐやひめの からだは、すうつとそとへ
でてしましました。

四334㊦ できあがると、男の子は、それをはい
て、元氣よくかけていってしましました。

四425 列の かたちを かえても、ばらばらに
なつてしますることは ありませんでした。

四5110 かっちゃんは、とぶ力がなくなつてし
ましました。

四607 そのうちに、夜になってしましました。

四1002 「略。」といいながら、いってしま
ます。

四1018 かめは、ていねいにおじぎをして、海の
方へいってしまします。

五5810㊦ ぼく、大きくなるまでに、どの星もみん
なみてしまいたいな。

五625 あやこは、なんとこたえていいのか、わか
らなくなつてしましました。

五676㊦ うちのおけは、もう、すっかりこわれて

しまっているんだもの。

五七六 金のさかなは、なにもいわないで、〈略〉、海の中へおよいでいってしまいました。

五八三 〓「〈略〉。」とわらいだしたので、みんな、いっぺんにわらってしまいました。

五九二 「シッ。」というと、ねこは、おどろいてにげていってしまいました。

五九四 一 さわがしく鳴いてみせすと、すずめは、おどろいてとんでいってしまいました。

五九六 一つのまにか、しじゅうからは、どこかへいってしまいました。

五九八 けれども、旅のひわは、そのままとんでいってしまいました。

六〇五 やつとつまんだと思うと、すぐにおとしてしまった。

六〇六 〓「こんなところにころげおちてしまってもし、みつからなかったら。」

六一三 〓「あっ。」というまに、川の中におちてしまいました。

六二九 かかしのつかまったひげ、のびるだけのびてちぎれてしまふ。

六三六 〓空にきえていくかかし——点になって、おしまいはみえなくなってしまう。

六四〇 月は、もうさっきの枝のあいだにはなくて、木をずっとはずれてしまっていました。

六四八 〓「〈略〉。」といって、木の上にするするとのぼっていってしまいました。

六五二 死んでいたら、ころがってたおれるわけだし、目だつてつぶってしまうだろうし、

六五七 〓ごろうさん、あなたは、ねむってしまつたら動かなくなるでしょう。

六五八 〓 つれないどころか、申しわけのないこと

をしてしまいました。

六八四 〓 つりばりを魚にとられてしまいました。

六八五 〓 だいいじなつりばりをなくしてしまううんて。

六八七 〓 つりばりは魚にとられてしまふし、にいさんにはしかられるし、困ってないでした。

六八九 〓 じつは、海でつりをしていたら、つりばりをとられてしまったのです。

六九二 〓 兄のだいいじなつりばりなので、私も困ってしまいました。

六九七 〓 それでぼくは、思わず声をたててわらってしまった。

七〇〇 〓 新しいことがあたまにうかんだので、もうそんなことはどうでもよくなってしまう。

七〇四 〓 それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作ったものであることがわかって、びっくりしてしまった。

七〇九 〓 みんなをわらわせてやろうなどという氣持は、どこかへふっとんでしまった。

七一〇 〓 ここでわいわいやつていては、すぐぼくが、きつねにみつかってしまふから、

七一一 〓 うさぎさんたちは、そのまま向こうのやぶの方へいってしまいました。

七一二 〓 そのかわり、ぼくが負けたら、この角を、おってしまつてもいい。

七二五 〓 うさぎさんたちは、困ってしまいました。

七二七 〓 自分たちは、あの大きなすどい角で、つきあげられてしまわなければなりません。

七三〇 〓 そのうちに、しかさんは、いつのまにかはぐれてしまいました。

七三二 〓 うさぎさんたちがあまりガヤガヤ話をするので、目をさましてしまいました。

六九〇 〓 うさぎさんは、びっくりぎょうてん、みんな地面にべたんとうつぶしてしまいました。

七〇六 〓 しおがひくように、子どもたちが、さっと、学校からいなくなりました。

七〇九 〓 私とさぶろうとは、まるで、一つからだになつてしまふかと、思われるほどでした。

七二〇 〓 私は、ほんとうに困ってしまいました。

七二二 〓 ぼくのほうは、センターが外野へでてしまったので、

七二五 〓 それで、内野の人はいっしんになったので、かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。

七二七 〓 ぼくらのほうが、どんどんあてられて、センターまで、外野にでてしまった。

七三〇 〓 うす黒い雲は、どこかへいってしまったのに。

七三二 〓 ちょっとのまに、いなくなってしまった。

七三五 〓 とちゅうでひと休みしているうちに、ついで、ねむってしまいました。

七四〇 〓 が、すぐ、まえ足をおろしてしまいました。

七四二 〓 ふみこんだとたん、〈略〉むじやきに遊んでいたピオを、かた足でふんでしまったのです。

七四六 〓 地面においた虫たちは、やがて、〈略〉、地の中にかくれてしまいました。

七五〇 〓 虫は、〈略〉、まえ足のつめでかたくそれにしがみついて、動かなくなりました。

七五二 〓 やがて、秋になると、みんな死んでしまつて、あたりもひっそりとしずかになります。

七五五 〓 馬車はふたたび走りだして、草原をよこぎっていってしまいました。

七五七 〓 はたおりひめは、あまりうれいので、はたをおることをわすれてしまいました。

七五八 〓 それをみた天帝は、〈略〉、はたおりひめを

天の川の東の岸のごてんにもどしてしまい、
 八39 み知らぬ人は、そのままどこかへ行ってしまいました。
 八42 困ったことになってしまった。
 八51 その家の人は、戸をピシヤンとしまてしまいました。
 八64 年よりのあひるは、そういつて、どこかへいつてしまった。
 八71 おまえなんかは、ねこにくわれてしまえばいい。
 八73 それからピシヤ、ピシヤと、どこかへいつてしまった。
 八77 風がひどいので、あひるの子は〈略〉、すわりこんでしまわなければならなかった。
 八81 そうすれば、そんなことは考えなくなつてしまふよ。
 八85 水のおもてがすっかりこおつてしまわないうように、
 八85 あながこおつてしまわないうに、いつも足をつかっているなければならなかった。
 八86 つかれはてて、こおりの中にとじこめられたまま、身動きもせずたおれてしまった。
 八86 あひるの子は、〈略〉たるの中へとびおり、こんどはまたこなおけにはいつてしまった。
 八93 新しいはくちょうは、すっかりはにかんてしまった。
 八103 3時間めの終りに開きはじめましたがお晝の時間には、もう閉じてしまっていました。
 九95 あまりたくさん重ねると、〈略〉、まとまりがつかず、心の絵がみだれてしまいます。
 九16 十一月のはじめになれば、もうほとんどすがたをみせなくなつてしまいます。

九19 南へ飛行中だったつばめは、食にうえ、
 〈略〉、身動きもできなくなつてしまったのです。
 九48 はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうを、とんだりはねたりしました。
 九54 すこしいきましたら、谷川にそつた道は、もうほそくなつてきえてしまいました。
 九55 いちろうは、だんだんそばへいきましたが、びっくりしてたちどまつてしまいました。
 九69 どんぐりどもは、しいんとしてしまいました。
 九69 それはそれはしいんとして、だまつてしまいました。
 九80 あつちこつちほつてみて、なんにもみつからないと、だめだと思つてやめてしまふよ。
 九125 大きな支流が流れこむところへくると、ときどきあまい水の味がわからなくなつてしまふよ。
 九129 てんりゆうきょうという景色で名高いところもすぎて、四十キロあまりもきてしまった。
 九129 この二三日というものは、ちつともかからなかったから、おなががすいてしまった。
 九129 おまけに、あみに大きなあなをあけてしまいました。
 九132 みつばちは、つなをほどこいて、あみをくい切つて、にげていつてしまいました。
 九136 こう頼まれると、だまつてたべてしまふわけにもいきません。
 九145 ぐつすりねむつてしまったのでしよう。
 十33 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。
 十41 この赤しおのために、母貝はみな死んでしまつた。

十42 喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であつたうめが、この世をさつてしまった。
 十43 母貝は、ほとんど死んでしまつた。
 十51 とうとう、くるつと、うしろを向いてしまつたわけです。
 十57 ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり木の下におりていつてしまいました。
 十69 おしいれのたなのすみに、だいいじそうにしまつてあつた、一つのまるいつぼをみつつけ、
 十71 うまい、うまいとなめているうちに、つぼが、からつぽになつてしまいました。
 十72 重い、大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。
 十73 たおれたはずみに、あのだいせつなかけものを、あのとおりひきさいてしまいました。
 十63 みるみるうちにあいてをぬいてしまふよ。
 十28 ところで、そのつぎの年、母親が、四五日の病氣で死んでしまいました。
 十28 さかわ川がまたあふれて、のこつていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。
 十51 あさがおの花は、みんなふきちぎられ、へちまの葉は、みんな下向きになつてしまつた。
 十51 しかし、風がはげしいので、すぐかさをつぼめてしまつた。
 十52 電車は、くるにはくるが、みな満員の札をさげて、とまらずに走つていつてしまふよ。
 十53 乗客はおたがいにおしあつて、しゃしゅう台までいっばいになつてしまつた。
 十60 が、いま、友だちからすすめられて、ことうりかねてしまつた。
 十62 このくらしいことがこわいものかと、

自分からさきになって渡ってしまったのです。

十一73 看護婦は、ほかにはなんにもいわずに
いってしまいました。

十一76 医者はいつてしまいました。

十一90 死んでしまった。

十一92 、「だけど、ぼく、遠い道を歩いていく
んですから、しぼんでしまいます。」そういつて、
すみれをベッドの上にちらしながら、

十二8 母は、いままでたんねんに織り続けてい
たぬのを、小がたなでたち切つてしまいました。

十二12 4 そうして、ページをはぎとつて、たべて
しまったということです。

十二15 5 そうして、文雄が手をのぼすと、すばや
くあなの中へかくれてしまった。

十二16 10 カンパスの上にぬりつけてみると、思い
もよらない色になってしまふ。

十二26 11 とりついてぐんぐんおしつていつて、かべ
ぎわにおしつけてしまつたりします。

十二28 10 たもとをひいてやると、民ちゃんは、
ぱったりそこへすわりこんでしまいました。

十二30 11 民ちゃんのことば数のふえるのには、お
どろいてしまいました。

十二55 10 そういつ人たちのなくなるにつれて、
順々に消えていつてしまふものもある。

十二58 11 おにはおどろいてすがたを消してしまつ
た。

十二60 3 長者は、なんと思つたか、なん千アール
の田をきよう一日で植えてしまふといつつけた。

十二61 2 ところが、そのあくる朝ながめると、高
どのは消えてしまつてあとかたもなく、

十二63 5 そのうちからだがだんだん長くのびて、
おしまいにへびになつてしまつた。

十二85 5 どうしたはずみか、チルデン選手はかた
足をふみすべらせてしまいました。

十二86 6 夕日はすっかりおちてしまいました。
十二95 11 いつたん読まれてしまつと、読み手の思
いでや心持にかされて、

十三12 4 知識を廣め、学問を研究して、迷信を
またくとり去つてしまふようになれば、

十三16 5 では、ガリレオは、はく害のため、考え
をかえてしまつたのかといふと、

十三20 5 しかし、切りとるばかりで手入れをおこ
たつたために、土地は、年を追つてやせおとろえ
ついに、あれはてしてしまつたのです。

十三21 1 實際に試験してみると、もみの木はえ
るが、数年ならずしてかれてしまいました。

十三23 3 3 もしある時期になつて、小もみを切り
はらつてしまつたら、大もみは土地をひとりじめ
して、生長するにちがひありません。

十三31 6 さるは、とちゆうできよんととしてやめ
てしまつたり、

十三34 6 夜のふけるのも知らないで、見とれてし
まふ。

十四8 9 5 なにも、勇氣をだしてわすれてしまお
うとお思ひになるにはおよびません。

十四21 12 こくばんがいっぱいになつてしまつた。
十四22 8 8 それが長い間つかつてゐるうちに、
すっかりなれてしまつて、

十四29 3 3 どこかにしまつてあるもののように聞え
るかもしれませんが、

十四30 8 小さな島國に住んでゐたために、氣持ま
でちつぽけなものになつてしまつたのでしょうか。

十四44 8 8 心に太陽をもて、そうすりや、なん
だつてふつとんでしまふ。

十四45 1 小さな汽船が、十ばいもある定期船につ
きあつて、ちんぼつてしまいました。

十四45 9 すべてのものが、ことごとく波にのまれ
てしまつたように、

十四46 11 いい氣持になつて、自分が水の中にひ
たつてゐることも、わすれてしまつたほどでした。

十四46 12 寒さも、つかれも、どこかへけしとんで
しまつて、

十四47 8 たいいていの人は〈略〉あわてふたいてい
そのためにかえて波にのまれてしまつたのに、

十四53 12 花が開いても、とちゆうから、黄色く
なつて落ちてしまつたたくさんのかぼちゃの花を

十四56 10 私がとちゆうで切れたりしたら、〈略〉
みんなかれて、くさつてしまいます。

十四58 8 水がなかつたら、なんでもすぐ、かれ
たり死んだりしてしまいます。

十四61 9 このかぼちゃは、お礼に、すっかり人
間にあげてしまつても、さしつかえない

十四64 7 空中にうかんでゐた雲が消えてしまつた
あとには、

十四66 4 それがだんだんに廣がり、入りみだれて
しまひに見えなくなつてしまいます。

十四78 2 とちゆうから横の方へそれてしまつて、
十四86 10 風にあおられた雪のむれが、〈略〉人を
たおし、こごえ死にさせてしまふことすらある。

十四88 4 おそろく、まっすぐに歩こうと思つたの
であろが、いつのまにか曲がつてしまふ。

十四91 1 急いで道を横ぎつたときに、その上ぐつ
はぬけてしまつた。

十四91 5 もう一つのほうは、どこかの男の子がひ
ろつて行つてしまつた。

十四91 9 そこで、その女の子は、まったくはだし

なっていました。

十四963 と思うと、そのとき、ほのおは消えてしま

まい、ろはなくなっていました。

十四964 ろはなくなっていました。

十四978 ちょうどマッチはもえつくしてしまっ

十四988 と、そのとき、マッチはもえつくしてし

まった。

十五233 みんな草の上へひれふすように、思わず

たおれてしまいました。

十五265 一こくも早く谷底の地面へおりてしまわ

なければならぬ。

十五2712 人々の目には、小さな小さな黒い点かな

にかのようにしか見えなくなっていました。

十五454 徳川時代の長いしきたりが、明治になっ

てすっかりようすを変えてしまったので、

十五503 焼物をやめれば、日本から美しい

ものが一つ消えてしまうことになります。

十五8211 みんな右手の前の方に、光をとりまいて

かたまってしまいます。

十五831 黒いまくをあげて、すがたをかくしてし

まいます。

十五864 ではないと、かんじんな用むきをわすれ

てしまうからね。

十五866 おまえの氣持をくじいてしまうよ。

十五922 いぬと、さとうと、パンをときつけて、

えん会の中にひきずりこんでしまいました。

十五9311 さあ、みんな、力づくで、いやでも

幸福にしてしまおうじゃないか。

十五948 みんな不幸のところへにげこんでしま

うのさ。

十五9811 ごらん、もう行ってしまった。

十五1069 『不幸』そのもののように、みじめな

ものになってしまふのです。

十五1073 『ふとった幸福』たちといっしょに、

不幸のなかまにはいってしまった。

十五1074 あれはわるくなってしまうたのです。

十五1076 わるいなかまとつきあっていたものだ

から、すっかりくさってしまったのですね。

十五1079 ぼくたちのなかまから、いちばん美し

いものがいなくなってしまうわけですからね。

十五1121 いつもそれをどこにしまっているの。

十五1132 ほおずりをしてもらえば、すぐそのな

みだは、目の中の星になってしまふのですよ。

しまぐに「島国」(名) 1 島国

十四307 小さな島國に住んでいたために、氣持ま

でちっぽけなものになってしまったのでしょいか。

しまじま「島島」(名) 3 島々

八47 北はほっかいどうから、南はきゅうしゅう

やそのさきの島々まで、いたるところの山野に、

九179 南洋の島々から、さらに海をこえて、遠い

オーストラリアまでいくのがあるということだ。

十455 今日、眞珠の産地は、(略)、オーストラリ

アや南洋の島々であるが、

しまった(感) 2 しまった

六842 しまった。大きいのをにがした。

九1210 「しまった」(略)、くもは、やぶれた

ところをつくろいかけた。

しまばら「島原」(地名) 1 島原

十二568 昔、島原にみそ五郎という大きな男がい

た。

しまめもよう「縞目模様」(名) 1 しま目もよう

十三56 春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ

日のしま目もようにもちらちらとして、

しまもよう「縞模様」(名) 1 しまもよう

九1273 黄色と黒のしまもようのついた大きなくも

でした。

しま・る「締」(五) 1 しまる「一ツ」

十三382 げんかんがしまっていたから……

じまんばなし「自慢話」(名) 2 じまん話

九1017 ぼくがあんまりじまん話をするもんだか

ら――

九10110 じまん話をはじめると、自分がいちばん

りっぱだと思ふもんだね。

じみ「地味」(形状) 1 じみ

十四594 ぼくは、いちばんじみなものです。

しみこむ「染込」(五) 1 しみこむ「一」

十四921 寒さがしみこんで、足は赤く、青くなっ

ていた。

しみじみ(副) 5 しみじみ

七4111 ごくありふれた曲であつたが、旅をしてき

た私には、しみじみときかれた。

八709 すがたがみつともないばかりに、みんなか

らしかりとばされるので、しみじみとなさげなく

思つた。

八914 いまは、その身をとりまくりっぱなものの

中に、しみじみと幸福をさとしたのである。

十一787 話す声に――愛情とかなしみとのまじり

あつた、しみじみとしたそのちようしに、

十四469 このときぐらい、しみじみと歌のありが

たさを味わつたことはありませんでした。

しみず「清水」(名) 2 しみず

九364 大きなこうがんの岩と岩とのあいだを

流れ落ちるしみずが、せかれて、たきになり

十一181 流れやまぬ愛のしみずに、うるおされ、

やしなわれて、のびていく命のわか葉。

しみずせんしゅ「清水選手」(人名) 8 清水選手

十二823 十一ヶ國のテニス選手をなきたおした清水選手は、最後の決勝戦にのぞむことになりました。

十二827 清水選手の相手はチルデン選手でした。

十二829 みるからにりっぱな体格は、小さな清水選手のおよぶところではありません。

十二8210 それでも、この清水選手の試合を見物しようと、方々の國の人々が、そのコートを目がけて集まりました。

十二844 第一回は七―五で清水選手が勝ち、

十二844 第二回めやはり清水選手の勝となりました。

十二8512 清水選手は、ボールをやわらかくして、

しかも受けやすいところに、送ってやったので

十二867 わずかな点のちがいで、清水選手の負けとなりました。

し・みる 「染」(上二) 4 しみる 《―ミ―ミル》

九1205 おく山の雪がとけてそのましましてきたかと思われるようにつめたかった。

九1207 ちょっと齒にしみたが、うまかった。

十一573 ことばはしみる。

十一577 ちみつやいちご、青うめ・わさび、にがいに、にがいくすり、一つ一つしみる。

しめ 「占」 ↓ひとりじめする

しめ 「締」 ↓おしめカバー

しめい 「指名」(名) ↓ごしめい

しめきる 「締切」(五) 4 しめきる 《―ツ》

三1122 おばあさんは、しめきったくらの中で、しっかりとかがやひめをだいていました。

三1132 すると、しめきって おいたくらの戸がひとりでにあきました。

十一2711 母親と相談して、戸をしめきって、息を

ころして、だれもいないふうをしていました。

十四6412 しめきったへやで、人の動きまわらないときだと、ことによくわかります。

じめじめする (サ変) 1 じめじめする 《―シ》

九375 じめじめした足もとがきみがわるく、しめ・す 「示」(五) 4 しめす 《―シ―ス》

七154 「腹」ということばを、いろいろにつか

たばあいを、しめしたものです。

九236 この國の人々が、あわれなこの小鳥たちにしめしたもつとも人間らしいあたたかい気持は、

十五354 ぼうきれや、石や、貝がらなどに、はものなどでするしをつけてしめすことも行われた。

十五3710 字の右側に、「支・反」をおいて、「シ・ハン」という音をしめしたりした。

しめつ・ける 「締付」(下二) 3 しめつける 《―ケ―ケル》

十五241 わしのせにしがみついて、両足で鳥の腹をしめつけるようにしています。

十五2412 少年は、大わしのせにとびつき、その上へ乗りうつて、両足で鳥の腹をしめつけ、

十五258 両足でいっそうはげしく鳥の腹をしめつけました。

しめっぽい 「湿」(形) 1 しめっぽい 《―ク》

七108 かしの木は、あくびを一つして、しめっぽくなった葉をふるわせ、

しめなわ 「注連縄」(名) 1 しめなわ

十一414 ちみつきますせて、しめなわをはり、一夜明ければうれしはつ日。

しめ・る 「湿」(五) 1 しめる 《―ツ》

十四672 前日雨でも降って、土のしめついているところへ日光があたって、

し・める 「占」(下二) 1 しめる 《―メル》

十三195 のこった土地の大部分をしめるユートランドのあれ地と戦い、

し・める 「締」(下二) 2 しめる 《―メ》 ↓おしめる・だきしめる・にぎりしめる

五879 このおにんぎょうは、きれいな赤いおびをしめている。

八517 その家の人は、戸をピシャンとしめてしましました。

じめん 「地面」(名) 16 地面

六139 うさぎさんは、びつくりぎょうてん、みんな地面にべたんとつぶしてしましました。

八151 ようちゅうが、はいだして、おおぎりのふといみきをつたつて、地面に向かって、

八154 地面においた虫たちは、やがて、《略》、地の中にかくれてしましました。

九932 やまだ、さがし物のようすで地面をみながらでてくる。

九1311 あみは、すっかりやぶれて、くもはそのまま地面に落ちました。

十二148 その根もとの地面には、《略》 つみ重ねておいたかれ草が、すっかりくちていた。

十二297 いま、民ちゃんがひとりでおかって口から地面におりて、

十三1210 地面は平らなもので、日や月が、東から西へまわっているように思われます。

十三283 地面にこしをおろして、あなをほったり、

十四606 あなたがたは、どうして地面にはえたのか、考えたことがありますか。

十四677 たつまきのようなものになって、地面からなんメートルもある、高い柱の形になり、

十四681 そこだけは、地面から蒸発する水蒸気が、とくに多くなります。

十四7412 地面の空氣が、日光のためにあたためられてできるときのむらは、

十四10110 地面から高くはなれて、もう、寒さも、

ひもじさも、なみだもない國へ、

十五265 一こくも早く谷底の地面へおりてしまわなければならない。

十五291 ぱつと、地面へすばやくとびおりました。

しも「下」↓かわしも

しも「霜」(名) 5 しも

四798 し——しものあさ、白いいき。

八136 ことに、町はずれの野原を歩いたりいなかのしものふかい朝の野にでたとき、

十三244 ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はとくに、しもさえ見ることがあったのです。

十三248 夏、しもがおりののはまったくやみ、

十三253 しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水の害がのぞかれたので、

しもて「下手」(名) 1 しもて

六216 そのとき、しもてから、ありが三びき、ゆっくりでできます。

しもてはんぶん「下手半分」(名) 1 しもて半分

六261 かみて半分はありのいえの中、しもて半分はそとになっています。

しもばしら「霜柱」(名) 1 しも柱

十一419 圃池にむすぶほううすごおり、庭に立ったしも柱。

しゃ「車」↓いちりんしゃ・かもつじどうしゃ・きかんしゃ・じてんしゃ・じどうしゃ・じんりきししゃ

しゃ「金」↓きしゆくしや

しゃ「者」↓あいこくしやたち・おうえんしやたち・かがくしや・しきしや・しきしやのきりぎりす・じよりよくしや・すうがくしや・せかいてき

ぎよるいがくしや・てんもんがくしや・ぶんがくしや

じゃ(助動) 1 じゃ《ジャ》

五931 会 「わからない子どもたちじゃな。」「わからないおほうさん——」

じゃあ(接) 20 じゃあ

二347 会 じゃあ、さわってごらん。

三412 会 「じゃあしつけない。」

三677 会 じゃあ、雲をみてごらん。

三769 会 じゃあ、お日さまはよその國でなにをするの。

四462 会 じゃあ、かつちゃん、きょうはどこにならびたいというの。

四648 会 じゃあ、かつちゃんは、三ばんめにしよう。

五971 会 じゃあ、もうすこしね。

七167 会 先生「じゃあ、でかけよう。」

八7910 会 じゃあ、お願いだから口をださないでほしいね。

八821 会 おまえさんのいうことがわからないって。

じゃあ、だれにわかるのかね。

九9910 会 やまだ「よし、じゃあ、あいこになるように、もう一つなぐってやる。」

九1028 会 たかぎ「じゃあ、いこう。」

十一101 会 じゃあ、りっぱな整調は、りっぱな運轉をする人になるだろうね。

十一666 会 じゃあ、第四号室のいちばん向こうのベッドだ。

十一872 会 父親はチチロにいました。「じゃあ、ここにおいで。」

十一876 会 じゃあ、ここに二円だけおいていくから、こづかいにしないさい。

十二733 会 じゃあ、おじさんも手傳ってあげよう。

十二7911 会 じゃあ、きょうのテニスの試合には、どちらをおうえんするの。

十三3810 会 じらさないでいって……え、おとうさんが、そう……じゃあ、かわってください。

十三585 会 じゃあ、やっぱり、おじさんみたいに、旅行して来なくちゃだめですね。

じゃーじゃーじゃー(感) 2 ジャージャージャー

五10210 さんちゃんのおかあさんが、せんたくをしますと「ジャージャージャー、ジャブジャブジャブ。」と、ひわもまねをします。

五1038 「ジャージャージャー、ジャブジャブジャブ。」と、さわがしく鳴いてみせましたと、

じゃーじゃーじゃーじゃー(副) 2 ジャー、ジャー、ジャージャー ジャージャー、ジャージャー

ジャー

五1023 水が、ジャー、ジャー、ジャージャーと、音をたてて流れているのをきいて、

五1027 ひわは、そのまねをして、「ジャージャー、ジャージャー」と、すずしい声で鳴きます。

しゃいん「社員」(名) 1 社員

十四454 アイリッシュ・ナショナル保険会社の社員、フランク・マッケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、

しゃか ↓おしやかさま

しゃかい「社会」(名) 2 しやかい 社会

四115 こくご、しゃかい、さんすう、りか、おんがく、《略》などのペンきょうをします。

十五749 自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に巣だたせたい

じゃがいも「芋」(名) 6 じゃがいも

七882 にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白

が、けんかをしてたべました。
 十一466 じゃがいもをみると、ぼくは、北海道の
 いなかを思いだす。
 十一491 北海道へいって、じゃがいもをつくりま
 す。
 十一504 北海道へじゃがいもをつくりにいこう。
 十三207 これを生かすのは、みぞをほって水をそ
 そぎ、平野の雑草をかりとり、じゃがいもか牧草
 を植えることにありますが、
 十三245 農作物は、じゃがいも・くろむぎ、その
 ほかわずかのものにすぎませんでしたが、
 じゃがいもばたけ「芋畑」(名) 1 じゃがいも畑
 十一468 じゃがいも畑のうねの向こうに、いつも
 ぽっかりとういていたえぞ富士。
 じゃがいもをつくりに「題名」 2 じゃがいもをつ
 くり
 十一33 じゃがいもをつくりに
 十一465 じゃがいもをつくりに
 じゃがむ(五) 3 じゃがむ《ミーン》
 四2110 国「きゃっ。」といってじゃがみます。
 十四893 じゃがんで土のにおいをかいだり、
 十五648 おじさんは道ばたにじゃがんで、自分の
 せをたたきながら、「満ぼう、これか。」
 じゃき じむじやき
 しゃくし「杓子」(名) 1 しゃくし
 十二738 子どもたちは、小さな手をしゃくしにし
 て、受けようとしますが、あらははその手にはの
 らないで、
 しゃくし「市役所」(名) 1 市役所
 十四511 文学修業のためにパリに出て、市役所
 のガス係という職についたとき、
 しゃしょう「車掌」(話手) 19 しゃ
 しょう

二615 しゃ「さあ、春をむかえにでかけましょ
 う。」
 二618 しゃ「みんなのりしましたか。」
 二622 しゃ「ぼちさんはのりしましたか。」
 二624 しゃ「みけちゃんは。」
 二626 しゃ「からすさんは。」
 二628 しゃ「すずめさんは。」
 二6210 しゃ「それからぶうちゃんは。」
 二632 しゃ「みんな、そろいましたね。」
 二634 しゃ「では、しゅっぱつ。」
 二636 しゃ「ぼぼう、ぼぼう。」
 二655 しゃ「ぼう、ぼぼう。」
 二664 しゃ「ちよつとちよつと、しずかに。」
 二6610 しゃ「どこかで、春の声がするよ。」
 二681 しゃ「そうだ。」
 二685 しゃ「きこえる、きこえる。」
 二692 しゃ「たしかに春の声がきこえる。」
 二702 しゃ「もうじき『春の國』だ。」
 二704 しゃ「『春の國』さあ。」
 二7010 しゃ「さあ、ぜんそくりよくだ。」
 しゃしょうさん「車掌」(名) 8 しゃしょうさん
 車しょうさん
 一493 ぴいっと、しゃしょうさんがふえをふ
 きました。
 一509 しゃしょうさんがまわってきていいま
 した。
 一534 「略」と、わたくしがいったとき、
 しゃしょうさんがきました。
 一541 しゃしょうさんは、ひろったことがあ
 りますか。
 五131 しゃ「車しょうさんさ。」
 十一5210 しゃしょうさんは、「略」と、声をか

けた。
 十一535 そのとき、しゃしょうさんは、「略」と
 いった。
 十一549 「略」といった、しゃしょうさんの
 ことばをわすれることができない。
 しゃしょうさんたち「車掌達」(名) 1 しゃしょう
 さんたち
 一499 さつきの人たちも、しゃしょうさんたち
 も、ぼーいさんたちも、みんなながいみみの
 ある、あかい目のうさぎさんでした
 しゃしょうだい「車掌台」(名) 1 しゃしょう台
 十一534 乗客はおたがいにおしあつて、しゃしょ
 う台までいっばいになってしまった。
 しゃしん「写真」(名) 15 しゃしん 写真 ↓お
 しゃしん・きねんしゃしん
 四251 国 そうして、みつちゃんのしゃしんのま
 えにかざりました。
 五831 そのお友だちが、記念に写真を写したいと
 おっしゃいました。
 十552 ことばの記ろくは、妹の心の写真になるの
 ではないかと、
 十二4712 国 時間をかけて絵をかくより、写真のほ
 うがずっと便利なわけだけれど、
 十二965 それにはあなたがたのおとうさんや、お
 じいさんや、ひいおじいさんの写真がでていたり、
 十二965 あなたがたの小さいときの写真などもあ
 るでしょう。
 十三5711 国 絵は、写真で見ただけでは、明暗はか
 なりわかるが、色がわからない。
 十四1310 国 あなたがたのおふたりの写真は、いま、
 「略」、私の前においてあります。
 十五599 国 裏の写真やら、当時の日記やら、きみ

に見せなければならぬものがたくさんある。

十五66 2 ご両人の名まえ入りの大きな写真を二まい、満ほうへと名さしで送ってください。

十五69 2 顔をあげてへき面を見あげると、おじさんの大きな写真があった。

十五69 8 つくえの上に、くつをみがかせた満ほう時代の私の写真がかざられてあるではないか。

十五69 11 いまその写真の主が、こうしておじさんを見あげているのに、

十五70 1 じっとおじさんの写真に見入りながら、私は無言で頭をびよこんとさげた。

十五73 3 やがてすがたをあらわした博士の手には、
〔略〕、なつかしい数々の写真があった。

しゃしんちょう 〔写真帳〕(名) 5 写真帳 じあるしゃしんちょう

十二96 3 あなたがたの家に、写真帳があるでしょう。

十二96 7 その写真帳をひろげると、あなたがたの家の昔からいままでのことがさまざまに思いだされるでしょう。

十二97 1 次の写真帳は、なんの写真帳でしょうか。

十二97 1 なんの写真帳でしょうか。

十二115 2 これで、日本の面影を写した写真帳が終りました。

しゃしんや 〔写真屋〕(名) 1 しゃしんや

二17 2 ちくおんききしゃしんややさしいなごこちまつつくえ

しゃする 〔謝〕(サ変) 1 謝する 《ーシ》

十五76 5 停車場まで送ってください博士のこう意をふかく謝して、別れの手をさしのべると、

しゃせい 〔課名〕 2 写生
十二2 3 二 写生……十三

十二13 1 二 写生

しゃせい 〔写生〕(名) 4 しゃせい 写生

三34 3 五年生のきょうしつでは、花のしゃせいをしています。

三34 6 みんながそのまわりにあつまって、しゃせいをしています。

十22 3 ひとりの友だちは、水えのぐで写生をしている。

十二13 3 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、がかを立てて写生をはじめた。

しゃせいする 〔写生〕(サ変) 5 写生する 《ーシースル》

五60 5 あとで写生してごらん。

五78 3 ごこのすが工作の時間に、写生しましょう。

六68 4 「雪のかたち」を五つばかり、きれいに写真しました。

七27 11 観察日記に、さっそく、これを写生しておこう。

十四86 3 野原の中で、一本の草花を見い出して、それをたんねんに写生するのも、

しゃちゅう 〔車中〕(名) 5 車中

七40 8 私は、さぶろうの方に近よりながら、車中の人たちに、心の中でお礼をいしました。

七41 9 かるやかなしらべは、朝の光のように気持ちよく、車中のすみからすみまで流れた。

七43 3 車中の人たちは、みんなこの老人をみた。

七44 4 車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふたたび、しらがの老人のところにどった。

七44 8 たいへん失礼だと思いますが、これは、車中の人たちのこころざしであります。

シャツ (名) 4 シャツ じいちまいのシャツ

八45 8 ほんとうに幸福な人をつつて、その人の着ているシャツを王さまにお着せするのです。

八46 3 そうして、そのシャツをもらってくるように。」と、おいつけになりました。

八49 5 王さまに、さしあげたいことはやまやまですが、わたしには、あいにく、一まいのシャツの持ちあわせもございません。

十四20 10 シャツ、ボタン、ポケット、ズボン、オーバー。

しゃない 〔車内〕(名) 1 車内

十一52 3 車内はむし暑いうえに、おたがいがぬれたからで、おしたりおされたり

しゃにむに 〔遮二無二(副) 1 しゃにむに
十五68 9 おぼさんは目になみだをためながら、

しゃにむに私をおく深くひき入れた。
ジャパン 〔地名〕 1 ジャパン じおフコースフォアジャパン

十二80 8 〔略〕。と、ことに「ジャパン」ということばに力をいれて答えました。

ジャパンタイムス (名) 1 ジャパンタイムス
十五51 2 ジャパンタイムスという新聞も発行した。

じゃぶじゃぶ (副) 1 ジャブジャブ

五5 9 いわの上からとびおりて、さかなとジャブジャブはしゃいで、川は山からかけおる。

じゃぶじゃぶじゃぶ (感) 2 ジャブジャブジャブ
五102 10 さんちゃんのおかあさんが、せんたくをしますと「ジャージャージャー、ジャブジャブジャブ。」と、ひわもまねをします。

五103 8 「ジャージャージャー、ジャブジャブジャブ。」と、さわがしく鳴いてみせると、

シャベル (名) 2 シャベル
九76 4 めいめい、シャベルや移植などを持つ

て、角のむきみ屋のところに集まっています。
 十24 10 くずれくだけの石炭、シャベルですくう石炭。

しゃぼん (名) 1 シャボン

六63 7 手をあらって、しゃぼんを水の上へおいたら、つるつとすべった。

しゃぼんだま (名) 2 シャボんだま

二14 5 シャボんだまをふいてあそびました。

三83 10 窓 お日さまが、雨のつぶつぶをしゃぼんだまみたいに光らせるのよ。

ジャム (名) 2 ジャム

十四21 3 ミルク、コーヒ、ジャム、トマト、キャベツ、バス、トラック、オートバイ、

十五88 5 窓 ふたりとも手はパンのしんだし、目はものジャムですよ。

しゃもじ [杓文字] (名) 1 シャもじ

九56 3 ことに、その足さきは、しゃもじのようなかたちだったのです。

しゃりん [車輪] (名) 1 車輪

十24 2 エレベーターをあやつる大きな車輪が、まわっている。

ジャワ [地名] 1 ジャワ

十二46 7 窓 りっぱな影絵しばいができている。ジャワのものはとくに有名だね。

じゃんけん [拳] (名) 4 じゃんけん

六127 3 五ひきのうさぎさんたちは、大きな声でじゃんけんをして、おにをきめました。

七51 2 窓 じゃんけんをして、いいほうのボールをつかいなさい。

九92 5 うしろを向いてじゃんけんをする。

九92 11 またじゃんけんをする。

じゃんけんばらばら (副) 1 じゃんけんばらばら

六46 5 窓 北風、からかぜ、寒いのに、おちぼの、おちぼの子どもたち、じゃんけんばらばら かけていく。

じゃんけんぼん (名) 2 じゃんけんぼん

一12 4 窓 じゃんけんぼんよ、あいこでしょ。

六127 1 窓 「じゃんけんぼん。」

じゃんじゃんじゃん (感) 1 ジャン、ジャン、ジャン

十三31 1 「ジャン、ジャン、ジャン」というように聞える。

じゃんじゃんじゃん (感) 1 ジャン、ジャン、ジャン

十三30 11 「ジャン、ジャン、ジャン」と、はげしくたたいておいて、てのひらで、きゅうにどらをおさえるので、

ジャンプ (名) 2 ジャンプ

九110 11 ジャンプ台では、じょうずな人たちが、かわるがわるジャンプをしている。

九111 2 窓 先生がジャンプをなさるそうだ。

ジャンプだい (名) 2 ジャンプ台

九107 5 先生がつえでさされる方をみると、なるほどりっぱなスキー場で、ジャンプ台もみえる。

九110 11 ジャンプ台では、じょうずな人たちが、かわるがわるジャンプをしている。

しゅ [朱] (名) 2 しゅ

十二14 1 このごろは、きわだって美しいつやつやしたしゅの色がさしてきた。

十四81 10 しゅにまじわれば赤くなる。

しゅ [首] ↓いっしゅ

しゅう [州] ↓にしゅう・マサチューセツしゅう

しゅう (感) 1 シュウ
 三88 4 シュウ。

じゅう [課名] 17 十

一3 2 十 ゆうぎ……二十一

一21 1 十 ゆうぎ

三3 4 十 ひびき……八十五

三85 1 十 ひびき

四3 4 十 うらしまたろう……九十六

四96 1 十 うらしまたろう

五3 5 十 学級日記から……七十七

五77 6 十 学級日記から

六3 7 十 たこ……百十四

六114 1 十 たこ

九2 6 二 音というもの……十

九3 6 十 ちよ紙……百十四

九114 1 十 ちよ紙

十二3 6 十 ことばのはたらき……八十七

十二87 1 十 ことばのはたらき

十四3 8 十 マッチ賣りのむすめ……九十

十四90 1 十 マッチ賣りのむすめ

じゅう [題名] 1 十

一60 2 (十)

じゅう [十] (名) 7 十 じゅういちたい

四70 窓 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

六32 10 10

六64 窓 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

九92 2 窓 「七、八、九、十。」と数えながら、大

またでびよんびよんかけてきて、「十」でとまる。

九92 4 「十」でとまる。

十20 12 10

十一56 窓 1 2 3 4 5 6 7 8 9

じゅう 10	じゅう 11	じゅう 12
じゅう [中] じゅういちにちじゅう・うちじゅう・かお		
じゅう・がつこうじゅう・かないじゅう・からだ		
じゅう・くにじゅう・せかいじゅう・なつじゅう・		
じゅうばんじゅう・ふゆじゅう・まちじゅう・むら		
じゅう		
じゅう [往] じゅういしよくじゅう		
じゅう [自由] (名) 2 自由 じゅう		
十四 41 平和と自由の光がさしてくる。		
十四 41 平和と自由。		
じゅう [自由] (形状) 4 自由		
五 96 8 おとうさん、ひわは自由にとべるように		
なりましたね。		
十三 61 4 自由にふでをふるって、りっぱな作品		
をたくさんのこしたのはいらいよ。		
十四 29 5 だれでも、どこからでも、自由に見られ		
るものなのです。		
十五 40 1 このかなのおかげで、日本のことばを、		
たやすくしかも自由にうつつすることができ		
しゅうい [周囲] (名) 1 周囲		
十五 30 6 わしは、(略)、少年の周囲をおおい包む		
いきおいでせまってきた。		
じゅういち [課名] 15 十一		
一 3 3 十一 あいさつ……二十四		
一 24 7 十一 あいさつ		
三 3 5 十一 みんなのもの……九十		
三 90 3 十一 みんなのもの		
四 3 5 十一 一つのもので……百二十		
四 120 1 十一 一つのもので		
五 3 6 十一 りようかんさん……八十五		
五 85 1 十一 りようかんさん		
六 3 8 十一 うさぎさん……百二十一		

六 121 1 十一 うさぎさん		
七 2 3 二 手というこは……十一		
九 3 7 十一 泉を求めて……百十九		
九 119 1 十一 泉を求めて		
十二 3 7 十一 ある写真帳……九十六		
十二 96 1 十一 ある写真帳		
じゅういち [題名] 1 十一		
一 62 5 (十一)		
じゅういち [十二] (名) 7 十一 11		
一 11 3 11 一つ、むつつ、ななつ、やつ、ここ		
のつ、とお、十一、十二、十三、十四。		
一 11 7 11 一つ、むつつ、ななつ、やつ、ここ		
のつ、とお、十一、十二、十三、十四。		
四 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10		
六 33 1 11		
六 64 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10		
十一 11 12		
十一 21 5 11		
十一 56 1 2 3 4 5 6 7 8 9		
じゅういちかこく [十一箇国] (名) 1 十一ヶ國		
十二 82 2 四ヶ月にわたって、十一ヶ國のテニス選		
手をなきたおした清水選手は、		
じゅういちがつ [十一月] (名) 2 十一月		
四 125 5 十一月はきくの花。		
九 16 10 十一月のはじめになれば、もうほとんどず		
がたをみせなくなってしまう。		
じゅういちがつじゅういちにち [十一月十一日]		
(名) 1 11月11日		
七 95 3 11月11日 (日) 晴 19度		
じゅういちがつじゅうくにち [十一月十九日] (名)		

1 11月19日		
八 109 1 11月19日 (日) 晴のちくもり 18度		
じゅういちがつじゅうくにち [十一月十五日] (名)		
1 11月15日		
八 108 5 11月15日 (日) 晴 17度		
じゅういちがつじゅうさんにち [十一月十三日]		
(名) 1 11月13日		
七 96 1 11月13日 (日) 晴 12度		
じゅういちがつとおか [十一月十日] (名) 1 11月		
10日		
八 107 3 11月10日 (日) 晴 19度		
じゅういちがつじゅうくにち [十一月二十九日]		
(名) 1 11月29日		
七 98 2 11月29日 (日) 雨 13度		
じゅういちがつじゅうくにち [十一月二十五日]		
(名) 1 11月25日		
七 97 1 11月25日 (日) 晴のちくもり 17度		
じゅういちがつじゅうくにち [十一月二十二日]		
(名) 1 11月22日		
七 96 5 11月22日 (日) くもり 17度		
じゅういちがつじゅうくにち [十一月二十六日]		
(名) 1 11月26日		
七 97 5 11月26日 (日) 晴 19度		
じゅういちたいじゅう [十一対十] (名) 1 十一た		
い十		
七 52 7 どちらが勝ったかと思つて、心配している		
と、十一たい十で、ぼくらのほうが勝った。		
じゅういちに [十二] (名) 1 十二		
十二 77 9 休けい場にもどつてくると、中國人らし		
い十一の兄弟にサインを頼まれました。		
じゅういちにん [十一人] (名) 1 十一人		
十四 45 3 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、		

船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

じゅういっぴき 「十一匹」(名) 5 十一匹き

二29 10 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き——おや、十一匹きしかない。

二29 10 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き——おや、十一匹きしかない。

二30 5 三匹き、四匹き、五匹き、六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き。

二30 6 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

二31 1 六匹き、七匹き、八匹き、九匹き、十匹き、十一匹き、十二匹き、十三匹き、十四匹き、十五匹き、十六匹き、十七匹き、十八匹き、十九匹き、二十匹き。

十五 120 2 きょうは修業式があった。

じゅうく 「課名」 2 十九

四2 4 三 いろいろなあいて……十九

十五 2 10 二 大わしに乗った話……十九

じゅうく 「十九」(名) 2 19

六36 6 19

十24 8 19

じゅうくど 「十九度」(名) 8 19度

七86 2 4月28日(出) 晴 19度

七87 4 4月30日(出) 晴 19度

七87 7 5月1日(出) 晴 19度

七92 7 7月24日(出) 晴 19度

七95 3 11月11日(出) 晴 19度

七97 5 11月26日(出) 晴 19度

八94 2 4月27日(出) 晴 19度

八107 3 11月10日(出) 晴 19度

じゅうげき 「襲撃」(名) 1 じゅうげき

十五 29 2 すると、鳥は、不意のじゅうげきにおど

ろいて、《略》、つかんでいた女の子をはなして、

じゅうけんきゅう 「自由研究」(名) 1 自由研究

十四 27 10 私は、自由研究で、外国からきたことば

の中で、西洋からきたことばをできるだけたくさん

調べてみたいと思った。

じゅうく 「課名」 4 十五

一2 8 七 よみかき……十五

一3 7 十五 なってみたいもの……三十四

一34 1 十五 なってみたいもの

九2 7 三 つばめ……十五

じゅうく 「十五」(名) 3 十五 15

三19 2 虫の名は十五 あつまりました。

六34 8 15

十23 3 15

じゅうこうち 「集合地」(名) 1 集合地

九104 8 集合地は、村はずれの一本すぎのそばで

あった。

じゅうごだん 「十五段」(名) 2 十五だん

三31 6 かいだんははじめに 十五だん あがつ

て、それからまた 十五だん あがるようになって

います。

三31 6 六 それからまた 十五だん あがるように

なっています。

じゅうくど 「十五度」(名) 4 15度

七88 1 5月5日(出) 雨 15度

七88 4 5月6日(出) 雨のち晴 15度

七99 1 12月2日(出) 晴 15度

八95 5 5月5日(出) 雨 15度

じゅうごばんめ 「十五番目」(名) 3 十五ばんめ

四47 1 十五ばんめだ。

四47 3 六 かつちゃんがそういうのなら、十五ばん

めにして、とぶことにしようじゃないか。

四49 2 かつちゃんは、十五ばんめからわきにそ

れたかと思うと、

じゅうごほん 「十五本」(名) 1 15本

八101 8 3本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえま

したが、いちばん多いので15本になりました。

じゅうごメートル (名) 1 十五メートル

九39 8 根もとからかかれていた高さ十五メートル

に近い木にのぼったことがあります。

じゅうごや 「十五夜」(名) 5 十五や 十五夜

一19 1 十五や おつきさま みてはねる。

三109 6 十五夜がちかくなつたある夜、かぐや

ひめは、とうとう声をたててなきだしました。

三110 4 六 この十五夜には、月の 國から むかえ

がきて、かえらなければなりません。

三118 いよいよ十五夜になりました。
四134(国) 白いころもの そろいでまえば、月
は十五夜、まんまるい。

じゅうごろく 「十五六」(名) 2 十五六
十五242 それは、十五六になるひつじかいの少年
です。

十五259 さすがの大わしも、十五六の少年に上か
らおされるので、その重さにたえられなくなつて、
じゅうごろつぶん 「十五六分」(名) 1 十五六分
九36(手) たきぎをとりにかく山は、ぼくの家から
は十五六分ほど登るのですが、

じゅうさん (課名) 8 十三

一35 十三 手と足……二十九

一29(十三 手と足

三37 十三 かぐやひめ……百

三100(十三 かぐやひめ

四37 十三 はごろも……百二十六

四126(十三 はごろも

六23 ニイソップものがたり……十三

十二23 ニ 写生……十三

じゅうさん 「十三」(名) 5 十三 13

一113(一いつ、むつつ、ななつ、やつつ、ここ

のつ、とお、十一、十二、十三、十四。

一117(一いつ、むつつ、ななつ、やつつ、ここ

のつ、とお、十一、十二、十三、十四。

三19(魚の名は十三あつまりました。

六33(13

十22(13

じゅうさんど 「十三度」(名) 2 13度

七98(11月29日 雨 13度

七98(12月1日 晴 13度

じゅうさんとう 「十三頭」(名) 1 十三とう

五40(ぼくのうちには、うしが十三とういます。
じゅうさんねん 「十三年」(名) 1 十三年
十三159 ガリレオも、十三年ばかりは、だまつて
研究を続けていました。

じゅうさんびき 「十三匹」(名) 1 13びき

七83(うさぎは、みんなで、13びきになりました。

じゅうさんぼん 「十三本」(名) 1 十三本

九35(ぼくたちの畑がようやくかいこんされて、
三日めにやつと、うねを十三本つくりました。

じゅうさんやさん 「十三夜」(名) 1 十三夜さん

七66(ふろからみてる十三夜さん。

じゅうし (課名) 5 十四

一27(六もちもの……十四

一36(十四 ひとつのことばから……三十一

一31(十四 ひとつのことばから

四23(二にわとり……十四

八23(二あぶらぜみ……十四

じゅうし 「十四」(名) 6 十四 14

一113(一いつ、むつつ、ななつ、やつつ、このつ、と

お、十一、十二、十三、十四。

一117(一いつ、むつつ、ななつ、やつつ、ここ

のつ、とお、十一、十二、十三、十四。

三19(鳥の名は十四あつまりました。

六34(14

十22(14

十一23(金次郎が十四のとき、父親がなくなりま

した。

じゅうじ 「十時」(名) 2 十時

九21(晩の十時に、二千ぼのつばめが着きました。

十五20(朝の十時と午後の三時ごろと、日に二ど

ずつ、

じゅうじか 「十字架」(名) 1 十字か

四82(ぎん紙でこしらえた小さなつりがねや、
十字かもさげました。

じゅうじかぞう 「十字架像」(名) 1 十字かぞう

十一90(看護婦が十字かぞうをかべからはずしま

した。

じゅうしち (課名) 4 十七

一29(八あさのこくぼん……十七

一39(十七 山のつつじ……四十

一40(十七 山のつつじ

十三26(三みどりの野……十七

じゅうしち 「十七」(名) 2 17

六35(17

十23(17

じゅうしちど 「十七度」(名) 3 17度

七96(11月22日 雨 くもり 17度

七97(11月25日 雨 晴のちくもり 17度

八108(11月15日 雨 晴 17度

じゅうしど 「十四度」(名) 1 14度

七99(12月4日 雨 晴 14度

じゅうしゅうしゅうしゅう (感) 1 しゅう、しゅ

う、しゅう、しゅ

二63(一しゅう、しゅう、しゅう、しゅう、しゅ、

しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、

しゅーしゅーしゅーしゅー (感) 1 シュー、シュー、

シュ、シュ

五9(一ポ、ポー、シュー、シュー、シュ、シュ。

じゅうせんご 「終戦後」(名) 1 終戦後

七43(一わたしは、終戦後、いつも心ざびしい旅

をしていました。

しゅうてん 「終点」(名) 1 終点

五21(一だいの長い電車が、おきやくをいっぱい

乗せて、終点につきました。

じゅうに (課名) 13 十二

一 26 五 かくれんぼ……………十二

一 34 十二 人のかお……………二十七

一 27 十二 人のかお……………二十七

二 23 二 えにつき……………十二

三 36 十二 一まいの紙……………九十四

三 94 十二 一まいの紙……………九十四

四 36 十二 四季……………百二十四

四 124 十二 四季……………百二十四

五 37 十二 ひわの子……………九十四

五 94 十二 ひわの子……………九十四

九 38 十二 一びきのくも……………百二十七

九 127 十二 一びきのくも……………百二十七

十一 23 二 めいめいの歌……………十二

じゅうに (題名) 1 十二

一 64 十二 (十二)

じゅうに [十二(名) 10 十二 12

一 113 十二 いつつ、むつつ、ななつ、やつつ、こ

のつ、とお、十一、十二、十三、十四。

一 117 十二 いつつ、むつつ、ななつ、やつつ、こ

のつ、とお、十一、十二、十三、十四。

三 19 花の名は十二あつまりました。

四 70 十二 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

六 33 十二 12

六 64 十二 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

八 106 3 本ずつ植えたかぶには、いちばん多いの

で、ほかのは、だいたい12ぐらいでした。

十二 23 12

十一 20 金次郎が十二のころです。

十一 56 十二 1 2 3 4 5 6 7 8 9

10 11 12

じゅうにがつ [十二月(名) 2 十二月

四 125 十二月はもちつき。

九 193 その年は氣候がわるくて、九月の中ごろ、

きゅうに十二月の氣候と同じ寒さになり、

じゅうにがつついたち [十二月一日(名) 1 12月

一日

七 98 十二月一日(出) 晴 13度

じゅうにがつつつか [十二月二日(名) 1 12月2

日

七 99 十二月二日(出) 晴 15度

じゅうにがつつつか [十二月四日(名) 1 12月4

日

七 99 十二月四日(出) 晴 14度

じゅうにかん [十二巻(名) 1 十二巻

十五 514 日本の古い美術に対する愛着がふかく、

日本美術工芸史十二巻という大作を著わした。

じゅうにキロ(名) 1 十一キロ

十二 593 鳥取の西方約四キロのところに、まわり

十二キロの湖がある。

じゅうにさんぶん [十三分(名) 2 十三分

十 477 家から十三分ばかり歩いたところに、廣

い草原があるので、

十 479 ところが、私たちの足では十三分のとこ

ろですが、妹にはそうはいきませんでした。

じゅうにど [十二度(名) 1 12度

七 96 11月13日(出) 晴 12度

じゅうにどめ [十二度目(名) 1 十二どめ

十五 895 これでけさから十二どめです。

じゅうににちめ [十二日目(名) 1 12日め

七 968 ねずみ色の4ひきは、生まれてから12日め

のきょう、みんな、目があき、

じゅうにひき [十二匹(名) 2 十二ひき

二 288 十二ひきのぶたが、そろって川をわ

たりました。

二 315 十二ひきのぶたは、ぶうぶう いって

さわぎたてました。

じゅうにもん [十二文(名) 2 十二文

十一 278 中には、正月だというので、そのうえに

十二文はずむ者もありましたが、

十二 279 金次郎のうちでは、その十二文さえもあ

りませんでした。

じゅうにん [十二人(名) 2 十二人

九 1095 やがて、十人、二十人、つぎつぎにすべり

はじめた。

じゅうねん [十年(名) 2 十年

八 42 ちょうど十年ほどまえ、私のうちに、ピオ

という、うちじゅうの人気者がいました。

八 135 それから十年、いまでも、私はピオのことが

わすれられません。

じゅうねんこのかた [十年此方(名) 1 十年この

かた

十四 125 私の友だちで、母親が十年このかた、

この式のランプをつかっているというのが

じゅうばい [十倍(名) 1 十倍

十四 441 ローマン号という小さな汽船が、十倍

もある定期船につきあたって、

じゅうはち (課名) 7 十八

一 31 九 ゆうやけ こやけ……………十八

一 310 十八 お月さんのくに……………四十三

一 431 十八 お月さんのくに……………四十三

三 24 三 ことばあつめ……………十八

十 26 三 日の光……………十八

十一 27 三 二宮金次郎……………十八
 十四 23 二 外國からきたことば……………十八
 じゅうはち 「十八」(名) 2 18
 六 36 1 18
 十 24 1 18
 じゅうはちど 「十八度」(名) 4 18度
 七 88 7 五月20日(日) くもり 18度
 八 95 9 五月7日(月) 晴 18度
 八 97 1 五月21日(月) くもり 18度
 八 109 1 十一月19日(月) 晴のちくもり 18度
 じゅうぶん 「十分」(形状) 4 じゅうぶん
 四 64 10 四 まだ、からだがじゅうぶんではないから、あとのものがじゅんじゅんにたすけていこう。
 四 114 5 四 いや、おとひめさま、なにもかもじゅうぶんでございます。
 八 38 8 八 けれども、まだじゅうぶんではない。
 十一 25 7 十一 そのお金は多くはありませんでしたが、四人が生きていくにはじゅうぶんでした。
 じゅうぶん 「十分」(副) 6 じゅうぶん
 四 113 8 四 いや、もうじゅうぶんいただきました。
 六 27 6 六 そのおかげでさ、〈略〉、たべものもじゅうぶんたべられるというわけだ。
 九 33 11 九 三びきもとつてくると、うちの家族七人が、じゅうぶんとつてることができます。
 十一 21 9 十一 しごとがじゅうぶんできないので、金次郎は、ほかの人たちにすまないと思いました。
 十一 23 9 十一 ねえ、金次郎、これでわたしも、じゅうぶん働けますよ。
 十四 7 2 十四 子どもたちはじゅうぶん愛していてくれる、
 じゅうまい 「十枚」(名) 1 十まい

十 58 6 十 うちに帰って、十まいずつたばにして、赤いひもでいわえて数えました。
 じゅうまんこうねん 「十万光年」(名) 1 十万光年
 八 35 10 八 それどころか、十万光年の星もちらばっています。
 じゅうまんばあまり 「十万羽余」(名) 1 十万ばかり
 九 23 2 九 このほかに、オーストリア動物園の人たちがひき受けて送ったつばめを加えると、十万ばかりになります。
 じゅうメートル (名) 1 十メートル
 十五 64 5 十五 門を出て十メートルとは行かないうちに、じゅうもんじ 「十文字」(名) 1 十文字
 十四 79 1 十四 うらのほうをかるく四つに割って、あとは、十文字の小さな木ぎれをはさんで、チョンチョンとたたいて、みごとに割っていました。
 じゅうよつか じゅうよつか じゅうよつか じゅうよつか じゅうよつか
 じゅうよにん 「十四人」(名) 1 十四人
 十四 45 3 十四 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、船客十四人のゆくえがわからなくなりました。
 じゅうろく 「課名」 4 十六
 一 3 8 一 十六 だんだんくわしくなる……………三十七
 七
 一 37 1 一 十六 だんだんくわしくなる
 二 2 4 二 三 ことばあそび……………十六
 七 2 4 七 三 もんしろちょう……………十六
 じゅうろく 「十六」(名) 4 十六 16
 六 35 7 六 16
 八 106 3 八 三本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので、ほかのは、だいたい12ぐらいでした。
 十 23 7 十 16

十一 28 4 十一 このとき、金次郎はたった十六でした。
 じゅうろくせいき 「十六世紀」(名) 1 十六世紀
 十三 14 1 十三 これを最初にいいだしたのは、十六世紀のころに死んだ、ポーランドのコペルニクスという人です。
 じゅうろくど 「十六度」(名) 1 16度
 七 89 2 七 五月22日(火) くもり 16度
 じゅうろくにん 「十六人」(名) 1 十六人
 十五 48 3 十五 赤絵屋もあったが、これははん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、
 しゅえい 「守衛」(名) 1 守衛
 十五 53 5 十五 守衛にみちびかれておくまった館長室の前に立った私は、
 しゅぎ じゅぎ じゅぎ じゅぎ じゅぎ
 しゅぎ じゅぎ じゅぎ じゅぎ じゅぎ
 十五 58 2 十五 その申し出でを承知して、私はすぐに授業にかかった。
 しゅくがかい 「祝賀会」(名) 1 祝賀会
 十二 4 6 十二 ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立ってコンブスの成功を祝しますと、
 じゅくす 「熟」(五) 4 じゅくす 《一サーシ》
 四 37 2 四 そこには、ぶどうが、たくさんおいしそうにじゅくしていました。
 五 82 2 五 じゅくさないものをたべないようにすること、
 九 44 6 九 まっかにじゅくした実がすずなりになっているのを見ると、
 十 9 1 十 あのとげとげしたいがわれて、じゅくしたくりの実の落ちるころでしたから。
 しゅくする 「祝」(サ変) 1 祝する 《一シ》

十二48 ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立ってコロンブスの成功を祝しますと、しゅくちよくしつ「宿直室」(名)2 しゅくちよく室

七810 しゅくちよく室にひがともった。

七107 しゅくちよく室のひがきた。

しゅこうぎよう「手工業」(名)1 手工業

十五45 日本の手工業も、外国から新しい方法を学んで、つぎつぎと近代的工業の道をたどってしゅしゅ(感)1 しゅしゅ

二639 しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅしゅしゅ。「だんだんはやくなる。」

しゅじゅ「種」(名)2 種々

十三89 深い、正しい知識を得るには、《略》種々の器械をつかって観察したり、実験したりする。

十三91 種々のことがらの関係を明らかにして、きまつた法則を知る。

しゅしゅーしゅー(感)2 シュ、シュ、シュ、五87 シュ、シュ、シュ。

五142 シュ、シュ、シュ。

しゅしゅしゅ(感)1 しゅしゅしゅ

二6310 しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅしゅ、しゅしゅしゅ。「だんだんはやくなる。」

しゅしゅしゅしゅ(感)6 しゅしゅしゅしゅしゅ

二666 「しゅしゅしゅしゅしゅ」を、きゆうにしゅかにいう。

二672 「しゅしゅしゅしゅしゅ」をつづけながら、春をさがす。

二683 「しゅしゅしゅしゅしゅ」を、いっそうげんきよくいう。

二688 「しゅしゅしゅしゅしゅ」は、ひくくつづ

いている。

二712 「しゅしゅしゅしゅしゅ。」

二712 「しゅしゅしゅしゅしゅ。」

しゅしゅしゅしゅしゅしゅ(感)1 しゅしゅしゅしゅしゅしゅ……

二656 しゅしゅしゅしゅしゅしゅしゅ……

しゅしゅしゅしゅしゅしゅしゅ(感)2 シュシュシュシュシュシュ

二638 しゅう、しゅう、しゅう、しゅう、しゅう、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅ、しゅしゅ、

三862 ポポウ、シュシュシュシュシュシュ。

しゅじゅつ「手術」(名)1 手術

十四46 研究を重ねたすえ、ついに核をさし入れるときに、ほかの母貝のがいとうまくを切り取ってきて、一種の手術をほどこすことを発見した。

しゅじん「主人」(名)5 主人

九785 しばらくして、その主人といっしよにできておいになりました。

九789 主人も、くわや、ふごや、かごなどを持ってきた、かしてくれました。

十五447 店の主人はあわてて、「たいへん焼物がおすきなのですが、あなたは——」

十五474 店の主人は、きかれるままに語りだした。

十五517 主人は、新しい茶をハギンスにすすめながら、「《略》」と、自分のことをうちあげた。

しゅす「繻子」(名)3 しゅす

九637 みると、やまねこは、もう、いつか黒い、長いしゅすの服を着て、どんぐりどものまえにすわっていました。

九6810 やまねこは、《略》、いかにも氣どったようすで、しゅすの着物のえりを開いて、

九697 そこで、やまねこは、黒いしゅすの服をぬいで、ひたいのあせをぬぐいながら、

じゅずだま「数珠玉」(名)2 じゅずだま

十一579 じゅずだま・むくろんじ、赤い、赤いつばき、げんげの花わ、一つ一つつづろ。

十五352 ひももつかい、色のちがった貝や、じゅずだまを結びつけることも行われた。

しゅちようなさる「主張」(五)1 主張なさる

《一》

十四534 花さんは、たいへんじょうずに自分のことを主張なさいましたね。

じゅつ(感)1 ジュツ

三878 ジュツ。

じゅつ「術」(名)1 術じゅこうかいじゅつ

十四366 さまざまな術を發達させました。

しゅつしゅっぱつ(感)2 シュツシュツ、ポッポ

五322 「シュツシュツ、ポッポ、シュツシュツ、ポッポ——」汽車が走っています。

五322 シュツシュツ、ポッポ、シュツシュツ、ポッポ

しゅつとうす「出頭」(サ変)2 出頭す《一ス》

九715 出頭す べし、と書いていいでしょうか。

明日出頭すべし、と書いてもいいといえよ

九754 出頭すべし、と書いてもいいといえよ

しゅっぱつ「出発」(名)5 しゅっぱつ 出発

あたらしいしゅっぱつ

二634 では、しゅっぱつ。

二635 しゅっぱつ。

二635 しゅっぱつ。

四441 「さあ、出発だ。」とうばんのがんは、

大きな声でさげました。

十377 日本の新しい出版にあたって、この自動組織が、どれほど大きな役わりをはたすことである。

しゅっぱつがかり 「出版係」(名) 1 出版がかり

四621 「略」と、出版がかりの がんが、みなを元気づけました。

しゅっぱつする 「出版」(サ変) 4 出版する 《一シ》

四568 あしたの あさ、出版しても いいよ。

四613 あすの あさ、出版しよう。

七173 さあ、出版しよう。

八343 一光年は、光が出版してから、一年かかってとどきよりをさしています。

しゅっぱん 「出版」(名) 1 出版

十五526 私は、《略》論文を持って、その出版の用事かたがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった。

しゅっぱんする 「出版」(サ変) 3 出版する 《一シースル》

十二1127 オランダのターヘルアナトミアという人体のことを絵いりで説明した本を、いまから百八

十年まえに、日本で出版したものです。

十五551 用事は、《略》カーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらうことで、

十五761 「きみの論文を、カーネギーで出版することは、ひきうけたよ。」といったされた。

ジュデー (人名) 9 ジュデー

三593 「略」と、ジュデーが いいです。

三598 「略」と、ジュデーが いいです。

三607 「略」。ジュデーは こう いいです。

三6110 「略」。おとうさんは そう おっしゃって、ジュデーにおききになりました。

三624 「略」。ジュデーは いいました。

三668 「略」と、ジュデーが いいました。

三785 「略」と、ジュデーが いいです。

三823 「略」。ジュデーが いいました。

三824 ジュデーは 青が すきでした。

じゅばん じゅにくじゅばん

しゅびよく 「首尾良」(副) 1 しゅびよく

十五525 私は、一年半の努力の結果、しゅびよく書きあげた論文を持って、

しゅふ 「首府」(名) 1 首府

十五193 スイスの首府のベルンの町からながめる と、《略》山々がならび立っています。

しゅほう 「手法」(名) 1 手法 じゅえいがてきしゅほう

十四895 こんな場面を、映画独特の手法によって、

おもしろく編集できないだろうか。

じゅみょう 「寿命」(名) 1 じゅみょう

十四844 じゅみょうにも負けなければなりません。

しゅもく 「撞木」(名) 1 しゅもく

十五681 げんかんには、おもむきのあるかねがつるしてあって、これでたけというように、しゅもくがそえてあった。

じゅりじゅりじゅりじゅり (感) 1 ジュリ、ジュリ、ジュリ

五10411 「ジュリ、ジュリ、ジュリ、ジュリ。」と、本をよむようなひとりをいいました。

しゅるい 「種類」(名) 2 種類 じゅさんしゅるい・さんびやくしゅるい・よんしゅるい

九858 これはじょうもん土器という種類で、

十二461 指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろ種類がある。

シュレスウィヒ (地名) 2 シュレスウィヒ

十三179 ドイツオーストリア二國との戦いに敗れ、賠償として、シュレスウィヒとホルスタインという、作物のよくできる二州をとられました。

十三258 戦いによって失われたシュレスウィヒとホルスタインとは、すでにつぐなわれて、なおあまりあることになりました。

じゅわき 「受話器」(名) 4 受話器

十三377 三郎が、ぼうしをかぶったままとびこんで来て、受話器をとる。

十三3810 受話器を持ったまま、待っている。

十三3911 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよって、ひきだしをあげる。

十三4211 さようなら。(受話器をおく。)

じゅん じゅにじゅんに

しゅんかん 「瞬間」(名) 1 しゅんかん

十二329 そうして、次のしゅんかんには、私は、先生《略》の両うでの中に強くだきあげられました。

じゅんかん 「循環」(名) 2 じゅんかん

十四714 そういうふうなじゅんかんがおこります。

十四762 同じような氣流のじゅんかんが、もっと大じかけに、陸地と海との間に行われております。

じゅんけつ 「純潔」(形状) 2 純潔

十五1091 その『喜び』は、たぶんここでいちばん純潔なものでしょう。

十五1187 私たちは、強くて、純潔です。

じゅんさ 「巡査」(名) 2 じゅんさ

十二104 みていたじゅんさが、老人のそばによつてきて、「略」とたずねました。

じゅんじゅんに 「順順」(副) 7 じゅんじゅんに 順々に

二201 ひとりがいったことばから、おもいついたことばをじゅんじゅんにつづけて、
四651 図 まだ、からだがじゅんじゅんではないから、あとのものがじゅんじゅんにたすけていこう。
六565 それから、二組、三組と、じゅんじゅんにへんしゅうをすることにきめました。
六1126 そうして、こんどは、アイウエオ、カキクケコから、じゅんじゅんにいってみたところが、九395 図 上の方のかれ枝をじゅんじゅんにたたき落し、
九9211 ふたり、じゅんじゅんに舞台をさる。
十二5510 そういう人たちのなくなるにつれて、順々に消えていってしまうものもある。
じゅんじょー「順序」(名) 1 じゅんじょー
十四838 春の光がさしそめて、雪どけ水が流れだすところ、《略》など、時間的に、じゅんじょーをおって、とりあつかったものである。
じゅんしん「純真」(形状) 1 純真
十四142 手 おとうさんに対しては、《略》、このうえもなく純真な思い出がのこっています。
じゅんしんさ「純真」(名) 1 純真さ
十四510 こうしたフィリップの純真さ、誠実さ、じゅんばん「順番」(名) 3 じゅんばん
二252 じゅんばんに、おはなしをしてきました。
四443 図 きょうも、きのうと おなじじゅんばんにならんとぶことにしよう。
五567 じゅんばんがきたので、みせていただきます。
しゅんれん「春聯」(名) 1 春れん
十三356 正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。

しよ「所」 ↓いちていりゅうじょこと・けんきゅうじょ・さいばんしよ・せいざいしよ・ていりゅうじょ
しよ「署」 ↓けいさつしよ・しやうぼうしよ
しよ「こ」「背負子」(名) 1 しよこ
九409 図 下の方の山道を、しよこをつけたおとなの人が、《略》登ってくるのがみえます。
しよ「性」 ↓くろしやう
しよ「商」 ↓しんじゅしやうたち
しよ「う」「背負」(五) 1 しよ「う」
十一107 図 さあというときに、ひとりで責任をしょって立つ、トップをこぐ人もいるだろう。
しよ「仕様」(名) 1 しよ
四373 図 わたくしは、たべたくてしよがありませんでした。
じよ「上」 ↓いでんがくじよ・じつようじよ
じよ「上・下・生」などの読みかたをちよつと考えてみただけでも、
じよ「場」 ↓しやうかいじよ
じよ「スキー」 ↓うんどうじよ・きゆうけいじよ
じよ「う・スキー」 ↓いしやじよ・やまのスキー
じよ「う」
しよ「か」「題名」 2 唱歌
十一25 唱歌
十一1411 唱歌
しよ「か」「唱歌」(名) 6 しよ「か」 唱歌
三382 図 しよ「か」をうたっている声が、オルガンにまじってきこえてきます。
三404 きょうならったばかりのしよ「か」を、大声でうたいながらあるきました。

四849 三ばんめに、すじむかいのみきこさんが、しよ「か」をうたいました。
七73 図 ならったばかりの唱歌を、大きな声で歌っていく子ども、
七174 「《略》」の唱歌が、きこえてくる。
七561 一年生の唱歌がきこえてきます。
しよ「かい」 ↓ごしやうかいいたす
しよ「かい」 ↓わがしやうかい
しよ「かいじよ」「紹介状」(名) 2 しよ「かい」
十五529 博士は、別れに際して、各地の大学者たちへのていねいなしよ「かい」状をくださったうえ、十五544 博士は、しよ「かい」に歩みよる私が手にしているしよ「かい」状に目をそそいで、しよ「かい」する「紹介」(サ変) 4 しよ「かい」する「シースル」
十五892 図 あれはすこしひねくれ者で、子どもさんたちにしよ「かい」するのはむずかしい。
十五898 図 わたしは、とてもいちいちしよ「かい」してはいられない。
十五1025 図 まず第一に、ぼく自身をしよ「かい」します。
十五1043 図 それから、ぼくは、まだなかまのうちでいっとういいのをしよ「かい」しました。
しよ「がつ」「正月」(名) 2 正月 ↓おしやうがつ
十一277 中には、正月だというので、そのうえに十二文はずむ者もありましたが、
十三355 正月には、門のとびらに、まっかな紙の春れんがはりつけられる。
しよ「がつ」きぶん「正月気分」(名) 1 正月気分
十三359 子どもたちは、そのあざやかな色どりに、正月気分を味わう。
しよ「がつ」こ「小学校」(名) 7 小学校

六115 ただしちゃんは、海外からひきあげてきた

子で、來年小学校へあがります。

九587 四年生というの、小学校の四年生だろう。

十147 その少年は、小学校のいちばん上の学年か、

十192 小学校のかわら屋根から雨がしたたる。

十341 佐吉の考えは、しだいに高まっていったが、

小学校をでただけのかれには、手のとどきそうもない空想になりがちであった。

十五793 あなたがた日本の小学校のみなさんに、

十五8010 そう思いながら、年よりの私は、日本の

小学校のみなさんに、はるかなあいつを送り、

じょうき「蒸氣」(名)2 蒸氣 ↓ すいじょうき

十四6312 まったくとう明なガス体の蒸氣が、しず

くになるときは、

十四642 そのしずくのしんになるものがあつて、

そのまわりに、蒸氣がこつてくつづくので、

じょうき「定規」(名)4 じょうき ↓ さんかく

じょうき

九958 じょうきだろう。」たかぎ「なんだつてい

いじゃないか。

九9511 やまだ、おこつていきかけるが、思いなお

して、さつきすてたじょうきをひろつてくる。

九961 やまだ たかぎのまえにじょうきをつきだ

して、「略」。

九989 じょうきひろつてやったじゃないか。

じょうきやく「乗客」(名)5 乗客

七402 乗客は、高いところを渡っていくさぶらう

を、おもしろそうに、みおくっていました。

十一522 あふれそうな乗客にまじつて、どうやら

乗車口へもぐりこむことができた。

十一533 大きな声だが、雨や風の音のために、乗

客の耳にきこえそうもない。

十一534 乗客はおたがいにおしあつて、しゃしゅう

台までいっばいになってしまった。

十一539 そのことばをきいて、そこらの乗客は思

わずほおえんだ。

じょうきようがっこう「商業学校」(名)1 商業学

校

十148 または、そのいなか町にある商業学校の下

の学年ぐらいいでしたしょう。

じょうきようする「上京」(サ変)1 上京する

《一シ》

十352 佐吉は、上京して機械館へ毎日かよつた。

じょうき「情景」(名)2 情景

九105 たいこのたたきかたによつて、《略》、さま

ざまな情景を写しだすこともできる

九145 音というものは、情景をあらわすばかりで

なく、心持まであらわすことができるものらしい。

じょうけん「条件」(名)1 条件

十四849 水蒸氣の量、高度など、さまざまな条件

によつて、雪のけつしょうがちがうわけを、

じょうこう じいちしょうこう

じょうこうし「題名」4 小公子

九451「小公子」をよんでももらいました。

九451「小公子」の語にでてる、セドリック

少年のように、子どものころから、世の中のことに

注意を向けるようにと

九461「小公子」のセドリックは、七つ八つの

ころでも、せんきよのことを話していますけれど

も、

九463「小公子」をみなさんにお話してあげて

ください。

じょうさん じおじょうさん

じょうじ「障子」(名)2 じょうじ

六1028 屋根だ。じょうじだ。

六1029 おや、だれかが、じょうじのあいだから顔

をだしている。

じょうじ「正直」(形状)1 じょうじき

十155 おとうさんがじょうじきにその答をしまし

たら、少年は、さらにこんなことをいいました。

じょうじやくち「乗車口」(名)1 乗車口

十一523 あふれそうな乗客にまじつて、どうやら

乗車口へもぐりこむことができた。

じょうじょ「少女」(名)14 少女 ↓ じょうねん

じょうじょ

十812 「略」といいながら、おとうさんにわ

けてくれる少女もありました。

十97 その少女のわけてくれたくりは、むじやき

な心からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。

十109 プラタナスのなみ木の下で、おとうさんは、

三人のかわいらしい少女にもあいました。

十1011 三人の少女は、その葉をひろい集めて、

《略》、遊んでいました。

十1210 「略」と、ひとりの少女が、おとうさ

んをみてそっくりいました。

十134 それから、三人の少女に、歌を歌つてほし

いと頼みました。

十二610 おくからひとりの少女がでてきましたの

で、「略」とたのみました。

十二72 少女は《略》黄色なやまぶきの一枝を

おつてきて、それをしずかにさしました。

十二76 少女とやまぶきの花とをみくらべるばか

りでした。

十二78 それからのちになって、道灌は少女の心

がわかりました。

十二712

「七重八重花はさけどもやまぶきのみの
ひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、少女の
思いをたくしたものでありました。

十五214

まっ白な服をつけた少女の立っているよ
うなけわしい山が、

十五279

大わしは、少年をせにのせ、少女を下に
さげて、

十五323

少女の両親たちが、そのへんにいたひつ
じかいたちを頼んで、大急ぎでおきて来たのです。

しょうじょたち

「少女達」(名) 5 少女たち

十一13

コーヒーをわかつてもらっていますと、き
まって、その少女たちも遊びにきています。

十一18

おかしを、一ふくろやったのはじまりで、
その少女たちは、おとうさんのそばへくるように
なりました。

十二13

「略」と、おとうさんが頼みましたら、
少女たちは、手をとってとんでいって、

十三17

少女たちは、おとうさんのこしかけている
そばで、〈略〉テーブルをかこんで、

十五169

少女たちよ、〈略〉、つづれ着るとも、
失うな、やさしく清きな心が。

しょうじょ

「上手」(名) 1 しょうじょ

十四81

すきこそものじょうじょなれ。

しょうじょ

「上手」(形状) 17 しょうじょ おおじょう
ず・まいじょうず

六695

これをじょうじょにくぎって、きれいに、む
だのないようにへんしゅうするのは、

七117

じょうじょなできばえをみたとき、感心して、
思わず手をたたきます。

八69

自分から指さきやくちびるへとびあがり、
とびついて、じょうじょにえさをとったり、

八174 人間のあかんぼが、したのさきをじょうじょ

につかつてちちをのむのと同じように、

八177 しぜんにそなわったかしこさで、これで

じょうじょに生きていくのです。

九101 ジャンプ台では、じょうじょな人たちが、か
わるがわるジャンプをしている。

十一79 ぼくは、こきかたがじょうじょになって、
みんながさせてくれたら、

十二181 なかまだなと思つてよくきいてみると、
じょうじょなもあるし、へたなのもある。

十二191 毎晩鳴いているうちに、すこしずつ
じょうじょになっていくようです。

十二192 近ごろはたいへんじょうじょになりました。
た。

十二224 どんな絵の大家だつて、一心にけいこ
をして、じょうじょになったのだらう。

十二338 どうとうじょうじょにつづれましたとき、
私は子どもらしい喜びと得意さに大はしゃぎで、

十二703 曾良は、信州の人で、歌がたいそう
じょうじょでしたが、

十二781 その少年たちは、じょうじょにえい語をつ
かつて頼みました。

十三569 ラファエルは、〈略〉、早くから絵のけ
いこをして、たいへんじょうじょであつた。

十四534 花さんは、たいへんじょうじょに自分の
ことを主張なさいましたね。

十五445 「略」と、じょうじょな日本語で話し
かけた。

じょうじょ 「乗」(サ変) 1 乗する 《一ジ》

十五732 老博士は、きょうに乗じて、アメリカの
考えかたについて熱意をこめて語られた。

しょうぞう 「肖像」(名) 1 しょうぞう像

十三572 ミケランジェロとラファエルは、前後

して、そこからローマに出て、へき画をかいいたり、
美しいしょうぞうなどを、たくさんかいた。

じょうたい 「上体」(名) 1 上体

十五242 少年は、大わしのせにとびつき、〈略〉、
上体をびったりと鳥のせにつけて、

じょうたつする 「上達」(サ変) 1 上達する 《一
シ》

十三5612 美術の中心のフロレンスで、研究して
いるうちに、たいそう上達したのさ。

じょうだん 「冗談」(名) 1 じょうだん

十三494 空氣までが、わたしたちのゆかいなじょ
うだんでわらい、

しょうちする 「承知」(サ変) 4 しょうちする
承知する 《一シ》

九706 しょうちしました。

十二584 おには、これを承知して、ある夜、石だ
んをきずきました。

十五575 教授の申し出でをさっそく承知して、
はじめて見る東洋の青年をひきとつたが、

十五582 その申し出でを承知して、私はすぐに
授業にかかった。

じょうでき 「上出来」(形状) 2 上でき

六189 しきしや「上でき。上でき。」

六189 上でき。」と、さもまんだくそうにしき
台をおりてきて、あせをふきます。

しょうてん 「焦点」(名) 1 焦点

十三147 これをわく星といいますが——の空にえ
がく道は、だえん形であつて、太陽はいつもその
焦点にいるものだ、ということを見しました。

じょうとう 「上等」(形状) 2 上等

十714 ほんに、これは上等の黒ざとうだ。

十五90 というのは、その鳥をあまじ上等とは

思わないからです。

しょうとつ 「衝突」(名) 1 しょうとつ

十四476 たいていの人は、しょうとつのときにあ
わてふためいて、

しょうとつ・する 「衝突」(サ変) 1 しょうとつす
る 《—シ》

五115 図 しょうとつしたかと思った。

しょうねん 「題名」 1 少年

十二772 少年

しょうねん 「少年」(名) 103 少年 ↓セドリック

しょうねん・にしょうねん

九1164 文 屋根の雪かきおとしいる少年の顔の明
かるさ日のでる中に

十145 その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少
年にもあいました。

十147 その少年は、小学校のいちばん上の学年か、
《略》ぐらいでしたでしょう

十151 この少年の間には、ちょっとおとうさんも
困りました。

十155 おとうさんがしょうじきにその答をしまし
たら、少年は、さらにこんなことをいいました。

十1511 この返事に、少年も満足したらしく、

十164 かしこそうな目つきの少年でした。

十一634 いなかの人らしいひとりの少年が、《略》、
ナポリの大きな病院の門ばんのまえへいつて、

十一637 少年は、色のあさ黒い、おも長な顔で、
考えぶかそうな目をしていました。

十一639 少年は、ナポリの近くにある村からきた
のでした。

十一639 少年の父親というのは、去年、しごとを
さがしにフランスへいったのですが、

十一651 看護人を呼んで、少年をその父親のとな

ろへつれていくようにといました。

十一655 少年は、もしやわるい知らせをききはし
まいかと、おそろしさにふるえながら、その名を
いいました。

十一6511 「《略》。」と、少年は、ますます不安を
おぼえながら答えました。

十一669 「《略》。」と、少年は心配そうにききま
した。

十一6610 看護人は、少年をながめて、《略》、ただ、
「《略》。」とただけでした。

十一679 少年は、勇気をふるいおこして、その後
からついでいきながら、

十一691 少年は包みを下におくと、頭を病人のか
たのところへさげて、

十一695 少年は、身をおこして父親の方をみまし
た。

十一698 病人はしげしげと少年をみつめて、いく
らかわかったようでしたが、

十一706 「《略》。」と、少年はいいました。

十一7011 けれども、病人は、いっしんに少年をみ
つめたあとで、目を閉じました。

十一715 少年は、いすをひきよせて、目を父親の
顔からはなさないで、《略》待っていました。

十一718 「《略》。」と、少年は考えました。

十一7110 少年は、かなしい思いにしずみながら、
やさしい父親のことをいろいろと思い返していま
した。

十一723 そのとき、少年は、かるい手がふとかた
にさわったので、びっくりしてとびあがりました。

十一727 「《略》。」と、少年は口早にききました。
十一738 待っているそのあいだが、少年にはたい
へん長く思われました。

十一7312 医者が、まだとなりのベッドをはなれな
いうちに、少年は立ちあがりました。

十一741 医者は少年をみました。

十一745 医者は、手を少年のかたにかけました。

十一753 そのとき、少年は、勇気をふるいおこし
てたずねました。

十一756 「《略》。」と、医者は、もう一ど少年の
かたに手をかけながら答えました。

十一7512 少年は、もつとなにかききたかったが、
いえませんでした。

十一761 そこで、少年は看病にかかりました。

十一767 病人は、ときどき少年の方をみましたが、
わかったようなうすはしませんでした。

十一7611 夜になると、少年は、へやのすみにいす
を二つならべて、その上でねむりました。

十一773 少年のいたわるような声のひびきをきく
と、

十一7710 少年はそのふくれあがった顔の上に、き
わめてかすかなほおえみがうかんだのをみた

十一7712 そこで、少年は、自分をなぐさめて望み
をかけはじめました。

十一7811 少年は看病にいっしょうけんめいになっ
ていました。

十一792 少年は、父親のちょっとしたため息にも、
ちょっとした目つきにも、《略》氣をもんで、

十一7911 少年は、いすにぐったりと身を落して、
すすりなきしました。

十一7912 が、ただ一つ、少年をなぐさめることが
ありました。

十一803 病人は、だんだんしつかりした目を少年
の上にすえて、

十一805 飲み物やくすりを、少年の手からでなけ

れば飲まないようになりました。

十一 80 8 少年は希望に力づけられながら、

十一 81 2 ちょうど、少年がそういうのはかない希望をもつて、いっしんに看護していたときでした。

十一 81 5 少年は、思わずはっととびあがりました。

十一 81 10 少年は、するどいさけびをあげて、その場に立ちすくみました。

十一 81 11 男はみまわして、ひと目少年をみると、

こんどはかれがさけびを發しました。

十一 82 3 「チチロ。」男はそういつて、少年の方へとんできました。

十一 82 5 少年は、父親のうでの中にたおれましたが、胸がせまって息もつけませんでした。

十一 82 10 少年は、まだ声をだすことができませんでした。

十一 83 1 父親は、じっと病人の方をみつめたあとで、いくども少年にはおずりしてから

十一 84 2 少年は二こと三ことばをはさんで、家族のようすを話そうとしましたが、

十一 84 7 父親は、少年を自分の方へひっぱりました。

十一 84 8 少年はふり返って、病人の方をみました。

十一 84 11 少年は、また、病人の方をながめました。

十一 84 12 病人は、そのとき、目を開いて、じっと少年をみつめました。

十一 85 1 すると、少年のたましいのそこから、どつとことばがほとばしりました。

十一 85 12 父親は、じっと少年をみつめていました

が、やがてまた、病人の方をみました。

十一 86 12 病人は、やはりじっと少年の方をみていました。

十一 87 10 少年がベッドのそばのものと場所に帰る

と、病人はほつとしたようにみえました。

十一 88 11 病人はしげしげと少年をみつめながら、

「略」、なにかものをいいたげにしました。

十一 89 3 その晩、少年は夜どおしそばについて、病人をみまもっていました。

十一 89 8 少年は病人の手をにぎりました。

十一 89 8 病人は、目を開いて少年をじっとみて、そうして、また目を閉じました。

十一 89 10 そのとき、少年は、病人が自分の手をにぎりしめたような氣がしました。

十一 90 1 「略。」と、少年はさけびました。

十一 90 6 「略。」と、少年はさけびました。

十一 91 3 そうして、それを少年に渡しながらいいました。

十一 91 9 「略。」と、少年はいつて、「略」、一方の手で目をふきました。

十一 93 1 少年は、その小さな着物の包みを小わきにかかえました。

十二 78 2 私は、その少年の持っていたペンをかりて、サインをしてやりました。

十二 78 8 かわいい少年だったので、よくみていますと、どこかしら日本人らしいところもあるので、

十二 78 11 ふたりの少年は、にっこりとわらって、「略。」とはつきり答えました。

十五 24 2 それは、十五六になるひつじかいの少年です。

十五 24 11 さいわいにその勇ましい少年は、大わしのせにとびつき、その上へ乗りうつて、

十五 25 9 さすがの大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなつて、

十五 26 3 少年はいつ鳥のせからふり落されないので、

十五 26 9 どこでもいいから、安全な場所へおりなければならぬと、少年は思いました。

十五 26 11 少年は、ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、

十五 27 6 もう呼吸もなくなったのかと、そのことがまた、少年の氣にかかつてきました。

十五 27 9 大わしは、少年をせにのせ、少女を下にさげて、「略」、下へ下へとおりて行きました。

十五 28 5 すると少年は、あぶないことが近づいたと感じたので、

十五 29 4 いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつた短刀があります。

十五 29 6 少年は、必死のかくごで、すばやく女の子を自分のせなかくしました。

十五 29 9 大わしは「略」、おそろしいいきおいで少年にとびかかつて來ました。

十五 29 10 少年は、右手に短刀をふりかざし、左手で女の子をかばい、

十五 30 1 大わしは、太いけずめの最初の一げきで少年の頭をくだこうと、向かつて來ました。

十五 30 2 ひらりと身をかわした少年は、「略」、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。

十五 30 6 大きな風をまき起すようにして、少年の周囲をおおい包むいきおいでせまつて來ました。

十五 30 9 少年が女の子の後にかばうようにして、すこしあらずさつて、岩角へ身をよせかけたとき、

十五 30 11 少年は、すばやく短刀を持ちかえた右手で、その石を取るが早い、

十五 31 5 それからは、必死にとびかかる大わしと、この勇ましい少年との戦いです。

十五 31 6 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしとあたりまふ。

十五31¹² その中で、女の子を後にかばいながら、少年は苦しい戦いを続けていました。

十五32⁵ ようやく道を見つけて、この鳥と少年との戦っている岩角近くまで来ました。

十五32⁹ いままでむちゅうになつて少年目がけてとびかかっていた大わしは、

十五32¹¹ 少年はほつとして、思わず後へたおれかかりましたが、

十五33⁵ そのときの少年の喜び、そのときの女の子の両親の喜び、

十五33¹⁰ まっ白な山までも、朝日の中のこの勇ましい少年をほめたたえているようでした。

しょうねんしょうじょ 〔題名〕 2 少年・少女

十二4 少年・少女

十七2 少年・少女

しょうねんたち 〔少年達〕 (名) 4 少年たち

十二78¹ その少年たちは、じょうずにえい語をつかって頼みました。

十二78⁴ 少年たちは、これを見て、うれしそうに、えい語で、「略。」といました。

十二80⁴ こう、私がたたみかけるようにたずねたとき、少年たちは、「略」、ことに「ジャパン」ということばに力をいれて答えました。

十五16² 〔文〕 少年たちよ、「略」、土ぼこり顔よ、すとも、わするな、明かるくするな、え顔。

しょうばい 〔商売〕 (名) 1 商賣

十五45⁴ それまでのものの考えかたや商賣では、ふだんの生活さえむずかしくなってきた。

じょうはつ・する 〔蒸発〕 (サ変) 1 蒸発する 《スル》

十四68² そこだけは、地面から蒸発する水蒸気が、とくに多くなります。

しょうばん じおしょうばんする

じょうぶ 〔丈夫〕 (形状) 8 じょうぶ じだいじょうぶ

四103¹⁰ 〔文〕 おかげさまで、このとおり じょうぶになりました。

五18¹⁰ そこで、私たちは、じょうぶなふくろにいれられて、かぎをかけられました。

七96³ 1ぴきのこらず、じょうぶにそだてたいと思います。

八18² 六本の足がだんだん強くなり、ことにまえ足は、いつもトンネルをほるのにつかいますから、たいへんかたく、じょうぶになります。

八46⁷ 金持だと思つたらだかよわかったり、からだかじょうぶだとちえがたりなかったり、八107¹ じょうぶに作つたいねかけに、日がよくあたるようにきちんとかけました。

十一20¹ なんとかして、からだをじょうぶにして、身代をもとのようにしたいものだ、

十一83⁹ 〔文〕 わたしは、これのことおり、すっかりじょうぶになったよ。

しょうぼうしよ 〔消防署〕 (名) 1 しょうぼうしよ

四10¹ こはしょうぼうしよです。

しょうめん 〔正面〕 (名) 2 正面

六90⁸ 六のぼめん 正面に、海の神がこしをかけていらつしやる。

十一43⁵ 正面のテーブルには、赤いうめの花をいけた、大きなかびんがかざつてありました。

じょうもんしきどき 〔縄文式土器〕 (名) 2 じょうもん式土器

十二100³ 土器には、なわ目のようがあるので、じょうもん式土器といふ。

十二100⁶ じょうもん式土器のほかに、やよい式土

器というのがあります。

じょうもんとき 〔縄文土器〕 (名) 2 じょうもん土器

九84³ 〔文〕 これはじょうもん土器といつて、貝づからでる物では、いちばん多い土器です。

九85⁸ 〔文〕 これはじょうもん土器という種類で、じょうりく・する 〔上陸〕 (サ変) 1 上陸する 《シ》

十一64¹ 数日まえ、イタリアへ帰つてきて、ナポリに上陸しました。

じょうりゅう 〔上流〕 (名) 7 上流

九122¹ 茶人は、この上流にいい泉があるので、なにかと氣がついた。

九122⁷ それで、茶人は、泉はどうしても支流のほうにはなくて、遠い上流にあるのだとさつた。

九122¹¹ しかし茶人は、いろいろな困難をしのいで、みんなをばげましては上流へたどつていった。

九123⁴ あともどりして飲んでみたり、ずっと上流へいつてためしてみたり、

九124⁷ 念のため、もっと上流の本流の水を飲んでみると、もうそれはただの水であつた。

九124⁹ 〔文〕 「泉はまつ川の上流にある。」

九125¹ 茶人たちは、ここで船をすてて、岸にそつて上流に向かって歩きながら、

じょうり 〔浄瑠璃〕 (名) 1 じょうり

十二45⁵ 〔文〕 ほら、分家のおじいさんの大すきなじょうりさ。

じょうろ 〔名〕 1 じょうろ

十二87⁷ 庭で植え木の手入れをしている父にこういわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱいいて持っていくだろう。

しょうわろくねん 〔昭和六年〕 (名) 1 しょうわ六

年

九18 10 しょうわ六年の秋、オーストリアの都

ウィーンのできごとです。

じょおう 「女王」(名) 6 女王

五72 5 わたしは金持のおくさんみいやになった、

女王になりたいってたのんでおくれ。

五73 6 金のさかなさん、おばあさんは、〈略〉、

女王になりたいといっています。

五73 8 5 おばあさんは女王になりますよ。

五73 11 帰ってみると、どうでしょう、〈略〉、おば

あさんは女王になっているではありませんか。

五75 2 5 わたしは女王みいやになった。

五76 4 5 うちのおばあさんは、もう女王はいやだ

といっています。

じょおうさま 「女王様」(名) 2 女王さま

五72 7 5 女王さまのようなあるきかたも、口のき

きかたも知らないで――

五74 4 5 「女王さま、これで、あなたもごまんど

くでございましょう。」といいました。

じょきよく 「序曲」(名) 1 序曲

七46 4 5 名高いオペラの序曲である。

しよく 「色」 ↓じょきよく・さんしよく・ししよく・

にしよく

しよく 「食」(名) 1 食 ↓いしよくじゅう

九19 4 5 おりから南へ飛行中だったつばめは、食に

うえ、つめたい雨にずぶぬれになって、

しよく 「職」(名) 1 職

十四5 12 文学修業のためにパリに出て、市役所

のガス係という職についたとき、

しよくじ 「食事」(名) 7 食事

四61 3 5 とにかく食事をすませて。

四61 9 2 二十九わの がんが、食事をすませると、

五54 11 まさこをおかさんにわたして、食事をす

ませてから、

八6 11 三ど三どの食事に、テーブルの上でおしよ

うばんしたりしました。

十二26 9 ちゃぶ台をだして、食事の用意などをし

ていると、

十二89 7 食事のたびごとにいう「いただきます」

「ごちそうさま」にしても、

十五73 11 廣い食堂にみちびかれ、博士とたつたふ

たり、しずかに食事をしたが、

しよくどう 「食堂」(名) 1 食堂

十五73 10 やがてお昼どきになったので、廣い食堂

にみちびかれ、

しよくにん 「職人」(名) 1 職人

十五48 12 職人のちんぎんや材料のお金をはらうた

めに、家の道具を賣らなければならなかった。

しよくぶつ 「植物」(名) 2 植物 ↓こうさんしよ

くぶつ・どうしよくぶつ

十三22 11 長男、フレデリック・ダルガスは、父の

質を受けて、植物の研究がすきでしたが、

十五58 9 5 自然科学にもっともきょうみを有し、

化学、生理、植物、〈略〉をこのんで勉学す。

しよくぶつがくじょう 「植物学上」(名) 1 植物学

上

十三23 9 小もみは、ある大きさまでは、大もみの

生長をうながす力をもっているが、それをこえる

と、かえってさまたげになるという、植物学上の

事実が、〈略〉、発見されたのであります。

しよくもつ 「食物」(名) 1 食物

十二99 10 これは、食物をいれるためのものですが、

しよくりん 「植林」(名) 3 植林

十三21 12 ダルガスの希望であり、デンマルクの希

望であるこの植林は、みごとに実現されました。

十三24 3 ダルガスの植林以前は、ユートランドの

夏は、晝は暑く、夜はときに、しもさえ見ること

があったのです。

十三24 7 植林が成功してから以後の農業は、すっ

かりかわりました。

しよさい 「書斎」(名) 3 しよさい 書さい

十三54 11 ちょうど、おじさんは、用事がなく、

しよさいで、本を読んでいらっしやいました。

十五68 11 「おじさんが生きていたら、〈略〉――」

といいながら、主なき書さいへ私をみちびいた。

十五73 1 自分は書さいにはいって、しきりにさが

しものをしておられたが、

じよしゅ 「助手」(名) 3 助手

十一73 4 みると、医者が、ひとりの助手をつれて、

へやの向こうのしにはいってきました。

十一82 8 看護婦や、看護人や、助手がかけよつて

きました。

十五56 12 5 私がまだわかつてアマスト大学の助手

をつとめていたころ、

しよしゅう ↓とうふしよしゅう

しよせい 「書生」(名) 1 書生

十五65 12 そこで、たまにかねた家の書生が、〈略〉

と、くじょうの手紙を京都へ送ったりした。

しよだな ↓まさえしよだな

しよっき 「食器」(名) 1 食器

十五47 8 佐賀はん主は、お庭焼といつて、自分の

家でつかう食器とか、おくりものにする焼物とか

を作らせていたが、

しよっき 「織機」(名) 3 織機 ↓じどうしよっ

き・とよだしきじんりきしよっき

十33 2 佐吉は、〈略〉、ひまさえあれば、織機のこ

とをしらべつづけていたのである。
 十343 いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければならない、というのである。

十3611 試運轉の日、その織機をあやつて、りっぱにぬのを織つてみせたのは、佐吉の母であった。

しよねん 1めいじしよねん

しよもつ 1 書物

十二118 書物

しよもつ 1 書物

十二1110 ある日、リビングストーンが木かげで書物を読んでいました。

十二1111 土人のひとり、書物というものはなにかすばらしい力をもっているものだと考えました。

十二123 リビングストーンがちよつとそとにでかけたすにやつてきて、その書物を手にとりました。

十二1101 外國から書物が新しくはいってくることは、外國人の心が傳わることで、

じよりくしや 1 助力者

十4010 その助力者となつてくれたのは、つまのうめであった。

十4211 喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であつたうめが、この世をさつてしまった。

ジョルダン 1 デビッドスタージョルダンはくし

ジョルダンはくし 1 人名 2 ジョルダン博士

十五547 園 きみは、かねがねジョルダン博士からいつてきている日本の学徒、大島くんでしょう。

十五551 恩師ジョルダン博士は、そのためにはあつて早くからすすめていた。

しよんぼり 1 副 1 しよんぼり

十二955 だれも話し相手がないので、しよんぼりと校庭に立っていると、

しらが 1 白髪 (名) 5 しらが

四1196 園 白いけむりがたちのぼり、元氣でわかいうらしまは、みるみる しらがのおじいさん。

七4210 みると、しらがの老人である。

七444 車中をひとまわりすると、ぼうしは、ふたたび、しらがの老人のところにもどつた。

十443 そのころ、幸吉は、すでにしらがの老人になつていた。

十五5312 タイピストになにごとかをいいながらうたせているしらがの老しん士のすがたであつた。

しらかば 1 白樺 (名) 2 しらかば

三526 園 りすは しらかばの 木に はねて、

略。と いました。

十三172 デンマルクは、みどりの牧場と、もみと、しらかばの森林と、近海の漁場のほかに、

しらくも 1 白雲 (名) 2 白雲

十三75 からすの声も、略、白雲をかたにまとつた小山をめぐつて、聞えてくる。

十五125 園 ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

しらすぎ 1 白鷺 (名) 1 白さぎ

九419 園 ぼくたちがこの村へきたころは、湖には美しい白さがたくさんまいおいていましたが、

じらす 1 焦 (五) 1 じらす 《一サ》

十三389 園 お客さん、ぼくの知つている人……だれかしら……じらさないでいつて……

しらせ 1 知 (名) 3 知らせ

四45 うえぼうそうの知らせは、ここからきます。

十一6410 母親は、その知らせをみるとがっかりしました。

十一655 少年は、もしやわるい知らせをききはし

まいかと、おそろしさにあふるえながら、しらせ 「知 (下二) 11 しらせる 知らせる 《セーセル》 おしらせくださる・おしらせする

四44 あかちゃんが生まれると、ここに知らせます。

四48 学校にはいる 子どもも、いちいち知らせてくれます。

四314 「みんな」に知らせたいといつて、つぎのような文を書きました。

九197 ウイーンの動物ほ協会に、略、はじめて、電話でこのことを知らせてきました。

九204 協会へは、電話が、ひっきりなしにかつて、つばめを集めていることを知らせてきました。

九238 この國の人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた大きなできごとでした。

十442 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめのれいにささげて、その成功をしらせました。

十507 「アンヨ ナメテルワ」といつて、私に知らせたのです。

十一648 家族の者にかんたんな手紙を書いて、帰つたことと、病院にはいつたことを知らせました。

十二259 よごれていないほうが氣持がいいので、略、わたしに知らせるようになりました。

十五345 けれども、それをその場にいない人や、遠くにいる人に知らせるためには、

しらべ 1 調 (名) 1 しらべ

七418 かるやかなしらは、朝の光のように氣持よく、車中のすみからすみまで流れた。

しらべきわめる 1 調 (下二) 1 調べきわめる

《一メ》

十三1110 それは、学者がいろいろに考えて、原因と結果との関係を調べきわめている。

しらべつづける「調統」(下一) 1 しらべつづける《一ケ》

十332 佐吉は、《略》、ひまさえあれば、織機のことをしらべつづけていたのである。

しらべる「調」(下一) 38 しらべる 調べる 《一・べ・べル》 ↓ おしらべなさる

一452 ぬちものをしらべるのだよ。

一4510 おんなの人たちが、ながいみみをふりふり、もちものをしらべています。

三196 手わけして、そのかたちや色をよくしらべることにしました。

四761 わ——わからないことはしらべよう。

五133 ぬちまちがつて乗っている人がいないか、しらべるのさ。

五182 そのうちに、きよくの人が、私たちをかたはしからしらべていって、

五845 ささきくんは、星をしらべるといいました。

六578 みんなのしらべたことをはっぴょうします。

六599 「空のうた」をしらべてみました。

六1196 じっさいに紙の上でいろいろとまげぐあい

をしらべ、ちようどいい長さにひごを切りました。

七169 はい、しらべました。

七252 たまごをとってしらべてから、なん日はどたっているかしら。

七274 いいえ、どうなるか、みんな自分でしらべるようにと、おっしゃっただけです。

七623 さくらの花をしらべてみたり——どの花も、みんな空を向いている。

七848 裁判官どの、それを、しらべていただきとうございます。

七871 うさぎはどんな草を、いちばん喜んでたべるか、しらべてみることにしました。

八1061 こんどは1かぶのほの数をみんなでしらべてみました。

八1066 もみの数をしらべてみました。

九244 いろいろな方法でこのことをしらべてみますと、やはりそうであることがわかりました。

九862 四人が話しあつてしらべ、へんだと思う物は、みなかごの中にいれておきました。

十276 自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。

十278 庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や《略》などを、こまかにしらべたいのです。

十281 また、くもがのきに巣をかけることがあれば、果のほりかたなどを、しらべておきたいと思っています。

十285 動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思ひます。

十292 どうしてそのものがこうなつたかということ、考えてしらべたいと思ひます。

十304 なんでも、そのものとをしらべていくような心がけを、もちたいと思ひます。

十385 眞珠は、《略》、ふしぎな宝石とされてきたが、しらべてみると、けつして、ふしぎでもなんでもないものであつた。

十411 あるとき、うめが、母貝の中をしらべているうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。

十435 研究のため、死貝を一つ一つ、ていねいにしらべていった。

十1187 これから、私の調べた二宮金次郎のことをお話します。

十二564 傳説を廣く全國で調べてみると、よくにたようなのが、あちらこちらで発見される。

十三84 知識は、人から教えられたり、《略》、考えたり、調べたりして、しだいにまじっていく。

十三89 深い、正しい知識を得るには、考えたり、調べたり、《略》観察したり、実験したりする。

十三117 むずかしいものは、科学的研究によつて調べられる。

十四2711 西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと思つた。

十四2712 どうすれば、外國からきたことばが調べられますか。

十四285 外來語辭典というものもあるから、それを調べると、なおいっそうよくわかるだろう。

十四864 一びきのこん虫をながねんかかつて調べ

るのも、

しらみかける「白掛」(下二) 1 しらみかける

《一ケ》

九1477 夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりと

しらみかけてきました。

しらむ「白」(五) 1 しらむ 《一ム》

十一334 短か夜しらむを待ちかねて、《略》、す

き・くわ持つて野にいそぐ。

しらゆき「白雪」(名) 1 白雪

十一413 さとはしぐれがしとしと降るに、ふもとの小屋はみぞれして、うらの山には白雪つもる。

しり ↓ おしり

しりあい「知合」(名) 1 知りあい

九4510 兄は、大きくなつて農業をするために、いま知りあいの家でみならいをしています。

じりじり(副) 1 じりじり

十四539 じりじりと暑い日に照らされながら、

とを知ってくると思います。

九四一 両方ともあいてに気がつくが、わざと知らないふりをしている。

九四二 茶人は、長い探求の旅が終りに近づいたことを知って喜んだ。

九四六 みつばちは、くものあみを知らないで、まっすぐにとんできました。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

九四九 あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。

一二三四 ことばをつかっていることや、そんなものがこの世にあることさえ知らず、

一二三六 「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。

一二三七 物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、先生がおいでになってからいく週間もたってからのことでした。

一二三六 先生がぼうしを持ってきてくださったので、私は暖かい日なたにでかけるのだと知って、

一二三八 「水」はいま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいものの名であることを知りました。

一二三九 私は、生まれてはじめて、きたるべき新しい日待つことを知りました。

一二四〇 昔、あるまじい人が、〈略〉、この岩屋からぜんやわんなどの家具のであることを知った。

一二四一 きみたちは、日本語を知っているの。

一二四二 この二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをいのつてくれていることを知って、

一二四三 そのころまで、人間のからだはどうなっているか、ほとんど知られていなかったのですが、

一二四四 すでに知ったことを材料として、考えをおし進め、

一二四五 種々のことがらの関係を明らかにして、きまった法則を知る。

一二四六 ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、

一二四七 かふんがめしべにつくときはよくみえるが、つかないときはみえないことを、知るようなものである。

一二四八 原因・結果の關係の簡單なものは、普通の知識によって知られ、

一二四九 原因・結果の關係の簡單なものは、普通の知識によって知られ、

十三一八 もとより世の中には、科学的研究によっても、まだ知られていないことはたくさんあるが、

十三一九 夜のふけるのも知らないで、見とれてしまふ。

十三二〇 お客さん、ぼくの知っている人……だれかしら……

十三二一 名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、けっして少なくはありません。

十三二二 地球や金星などのわく星が、太陽を中心として回轉していることを知っています。

十三二三 このおじょうさんは、この歌を知っていたかどうか知りません。

十三二四 この歌を知っていたかどうか知りません。

十三二五 「木もと竹うら」という簡単なことを、知っているのといないのでは〈略〉ちがいます。

十三二六 その雪が、どこで、どのようにしてできたか、どんな天空を旅して降ってきたか、おのずから知ることができるというのである。

十三二七 人々は、女の子がおおみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。

十三二八 その子がどんなに幸福に、神さまの樂園の中で、元日をむかえているかを知らないのだ。

十三二九 新島のおじさんなら、私はよく知っています。

十三三〇 きみたちが知っているはずがない。

十三三一 そのころ、新島のおじさんがどんなにえらいかたであるかを知らなかった私は、

十三三二 平和主義の旗がしらとしてその名を知られていた老博士は、

十三三三 え、あなた、ぼくを知っているの。

十三三四 『なんにも知らないという幸福』で、

十三三五 あの子たちを知っているの。

十五95 11 会 みんな知っているよ

十五99 6 会 また、ぼくを知っている子がいる。

十五99 7 会 (光に) ぼくは、どこへ行っても、だんだんに知られてくるね。

十五99 9 会 きみ、ぼくを知らないの。

十五99 9 会 ここにいる子をだれも知らないなんて、そんなことあるのですか。

十五99 11 会 だって、ほんとに、ぼく知らない。

十五100 10 会 あなたの知っているのは、ぼくたちだけですよ。

十五101 5 会 あなたは、やっぱり、なんにも知らないのですね。

十五105 9 会 きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。

十五108 9 会 あれは、人がまだ知らずにいる『喜び』たちです。

十五109 3 会 あなた、あの女の人を知らないのですか。

十五112 1 会 ぼく、おかあさんがそんなお金持だとは知らなかった。

十五117 3 会 あの人、私たちが、あの人をずいぶん待ちわびていることを、知らないのだろう。

十五117 6 会 私たちは、ちっとも知りませんでしたよ。

しるし [印] (名) 7 しるし 1 止めじるし

五11 11 会 赤と青のしるしのついたもの。

八96 3 会 はんごとになわしろをきめ、そのさかいにしるしをつけました。

八96 6 会 ひたさない種もみをまいたところには、べつにしるしをつけておきました。

九17 6 会 それによると、さいたま縣のあるところで、こころみに、しるしをつけてはなしたものだということがわかりました。

十99 少女のわけてくれたくりは、むじやきな心

からでた、子どもらしい愛情のしるしでした。

十四51 8 会 こういいたしたのは、根のしるしをつけた老人でした。

十五35 3 会 ぼうきれや、石や、貝がらなどに、はものなどではしるしをつけてしめすことも行われた。

しるす [記] (五) 2 しるす 《—シ》

九17 4 会 すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。

十四88 1 会 ぼつりぼつりとしるした足あとが、廣野を横ぎる一すじの道となる。

しるべ [導] (名) 1 しるべ

十四87 9 会 その人の足あとをしるべに、第二の人が歩いて行く。

しれる [知] (下二) 30 しれる 知れる 《—レ—

—レル》

三44 4 会 ぼくらのほうがまけるかもしれない。

四92 2 会 まっ黒くはないかもしれないが、どうしても、白いものではない。

五27 6 会 いそがしいから、わからなかったかもしれない。

五94 8 会 ひばりかもしれないよ。

六15 11 会 もし、あの木の葉の船が流れてこなかったら、どうなっていたかしれない。

六26 4 会 今夜はつもうかもしれない。

六71 5 会 口があるから、お話もするかもしれないよ。

六101 1 会 これで、いつか、おとうさんのお話にきいた望遠鏡が、できるかもしれない。

七43 8 会 すぎたことかもしれないが、このか

んしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。

八56 小鳥屋というより、ほおじろ屋といったほ

うがいかもしれません。

八55 4 会 おむすび一つ、たくあん一きれにも、人の

心のおくは知れるものです。

八73 8 会 きみはみつともないから、いいしあわせにあうかもしれないよ。

八89 5 会 ころされるかもしれない。

九16 7 会 まもなくさつていかなければならない日本に、なごりをおしんでいるのかもしれない。

九16 8 会 これからいこうとする遠い國のことを、話しあっているのかもしれない。

九82 6 会 ここからも、でるかもしれないぞ。

九147 3 会 くもは、力いっぱいもがけば、あるいは、つばめのくちばしからころげ落ちることができたかもしれない。

十一88 8 会 今夜はもうだめかもしれない。

十二44 1 会 この人形だって、みんながねしずまったあとで、動いているのかもしれないよ。

十三7 2 会 どころもしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくで、

十三12 3 迷信は、今日、世の中にどれほど害をなしているかしれない。

十三50 8 水がすむまで見ているかもしれない。

十三61 1 会 くらべてみて、うまさからいうと、ラファエルのほうがうまいかもしれないが、

十四29 4 会 どこかにしまっているもののように見えるかもしれないが、

十四32 2 「略。」という人があるかもしれない。

十四35 1 人間などは、バクテリアよりも、もっともつと小さなものに感じられるかもしれない。

十四46 8 かれは、いままでにどれだけ歌を聞いたかしれませんが、

十四613 人間がせわをしてくれなかったら、私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。

十四805 よその民族から教えられて、それからいい伝えられているのもあるかもしれません。

十五784 はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。

しろ [代] じなわしろ

しろ [白] (名) 8 白 じうちのはおじろ・ほおじろ・ましろ・まつしろ・めじろ・もんしろちょう

七882 にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白が、けんかをしてたべました。

七928 うさぎの毛の長さを計ってみたら、白は2cm、黒も2cm、茶は1・5cmでした。

七9510 1ぴきは白で、あとは黒っぽい色をしていました。

七966 7ひきの子うさぎのうち、5ひきはねずみ色、1ぴきは白、もう1ぴきは黒でした。

七972 白の子うさぎは、親について、はじめて、巣からはいだしてきました。

七993 耳の長さは、白と黒は5cm、ねずみ色は6cmでした。

十576 白と、もも色と、こいも色のがさきました。

十三298 黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげられ、にぎやかな話が続く。

しろ・い [白] (形) 78 しろい 白い 《イ・ーク》 じまつしろい

一67 なのはな、なのはな、しろいくも。

一92 しろいたま、あかいたま、しろいたま。

一94 しろいたま、あかいたま、しろいたま。

一97 しろいたま、あかいたま、しろいたま。

一102 しろいたま。

一108 しろい、しろいたまを かぞえましょう。

一383 しろい いぬがはしってきます。

一385 しろい いぬが、むこうから ころげるように はしって きます。

一458 しろい きものをきた おんなの人たちが、

三75 しろい くものながれ。

三353 しろい くもが 水にうつっています。

三374 しろい うさぎが、はこの中で ねそべっています。

三681 青々とした 中に、ふんわりした、小さな、

白い 雲がとんで いました。

三726 「白い ひもかしら。」

三1112 あまり しんぱいしましたので、かみのけが 白くなり、

四281 白い 雲さん、光って きれいだな。

四798 しーしもの あさ、白い いき。

四881 あの 白い 雲に、だれかが、ちぢまって

いる ようです。

は十五夜、まんまるい。

四1346 白い はまべの まつ原に、波がよった

り、かえったり。

五404 白くてゆったりとさく、ひんのいい花で

す。

五507 がけの下には 白いはま、白いはま。

五508 がけの下には 白いはま、白いはま。

五510 海のはてから 白い雲、白い雲。

五511 海のはてから 白い雲、白い雲。

六333 白ひげの雲が風に流されている。

六431 白い雲。

七51 ああ、白いブラウスの女の子かな。

七54 白いちようが、ういたりしずんだりしながら、

七810 白いカーテンが黄色くみえる。

七911 さくらの花が、白くうかんでみえる。

七199 先生、こっちの白い花のはたけは、なん

のはたけですか。

七207 それが、いまちようど、こんな白い花を

つけています。

七2010 あつ、白いちようちよがとんできた。

七2011 白いちようちよが、白い花にとまった。

七2012 白いちようちよが、白い花にとまった。

七319 白いえのぐにみどりをとこしたような、

美しい羽です。

七864 先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶

色のうさぎを、かごにいれて

七917 麦をやったら、白いうさぎは、早くたべた

いのか、黒いうさぎの上に乗って、たべました。

七923 1ぴきの白いうさぎと、茶色のうさぎは、

おくへはいってでてこないで、

八1410 ニミリほどある、白いうじのようなよう

ちゆうが、はいだして、

八178 虫は、はじめは、白い、よわよわいうじのようなかたちをしています、

八842 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる首をもっていた。

八957 もみのものとのほうから、はりのようにほそい、白いめのようなものができました。

八1029 やくは、白くてにおいもなく目だちません。

九43 白い紙に赤い色をぬりますと、明かるい感じになります。

九466 手 もう、遠くの山々のいただきに、白い雪のぼうしが見えます。

九519 たくさんの白いきのこが、ドッテコドッテコと、へんな樂隊をやっていました。

九561 みえない方の目は、白くびくびくうごき、

九735 白い、大きなきこでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。

九782 圈 そう、あの向こうの小高いところに、白い物がちらちらとみえるでしょう。

九794 圈 この土の上に白くみえているのは、むかし海の中にいたいろいろな貝のからです。

九1347 おかしいなと、ふしぎに思っよくみると、それは白いちようちよでした。

九13410 くもは、長い手をのぼして、わけなく白いちようちよをとらえました。

九1441 たまたま、あの白いちようちよにあうことができた。

九1482 圈 お月さんのところへとんでいったあの白いちようちよは、どうしたろう。

十205 圈 さあ、その白いかべに、プリズムでわけた光を写してみますよ。

十225 光る白い雲、遠い山のみね、村の道、やえ

ざくらの花。

十一6912 かみの毛は白くなり、ひげはのび、顔ははれあがつてどんより赤く、

十一894 あかつきの光が窓から白くさしこんできたとき、

十二304 おとなりで、このごろ白いぬをかうようになりましたが、

十二734 話をしているうちに、パラパラと音がして、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、

十三487 とやへ追われて行く、白いレグホンたち。

十三537 その下の白いところに、先生の手で、こう書いてありました。

十四6210 第一に、湯の表面からは、白い湯げがたっています。

十四638 これは、白いうす雲が月にかかったときに見えるのと、にたようなものです。

十四672 土のしめついているところへ日光があたつて、そこから白い湯げがたつことがよくあります。

十四699 白い茶わんにはいつている湯は、

十五212 朝ぎりの中から、白い雲のわきたつように、すべり出るまっ白なひつじのむれ、

十五304 わしの白い下羽が、綿のように一面にちりました。

十五311 まわりには、鳥の白い羽が雪のようにとびちりました。

十五4810 そのしごととも簡単にできあがるものではなく、白く焼けるはずのものが黒くなったり、

十五1138 圈 でも、ずっと色が白いな。

十五1141 圈 おまえのせわをしているときは、いつだってこんなに白くなって、光がさすのね。

じろう (人名) 12 じろう

二471 でる人 いちろう じろう いもうとのさ

ちこ おかあさん

二486 そこへ、じろうがでてきます。

二488 いちろうは、りんごをだして、じろうの手にわたします。

二494 じろうは、よろこんで、りんごをもってとびまわります。

二499 それから、じろうは、りんごを たべようとします。

二506 じろうは、大きなりんごを さちこにわたします。

二509 じろうも、となりのへやへ いったいます。

二541 こう いて、さちこは、じろうを手まねきします。

二542 じろうが、走ってでてきます。

五89 圈 さあ、じろう、お乗り。

五95 圈 じろう、せきをあけて、あのぼつちゃんを かけさせてあげ。

五139 圈 わすれものはないか、じろう。

じろうかじゃ 「次郎冠者」(人名) 12 次郎かじゃ

次郎かじゃ

十652 狂言には、よく、太郎かじゃと次郎かじゃが、現われます。

十663 でかけるとき、太郎かじゃ、次郎かじゃというふたりの下男に、「(略)。」といいつけ、

十6611 太郎かじゃと次郎かじゃは、声をそろえて返事をしました。

十671 次郎かじゃは、はじめは、そのへやの方へは、顔も向けないようにしていました。

十676 圈 でも、風がどつきを運んできてはたいへんだから、次郎かじゃ、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやってくれ。

十679 次郎かじやは、こしからぬきとったせんすを、さらりと開きました。

十688 次郎かじやのほうが、太郎かじやよりも、ずっとおくびよう者でした。

十710 おくびよう者の次郎かじやは、心配になりました。

十731 次郎かじやも、そのまねをして、おいおいなきだしました。

十738 次郎かじやは力があまり、茶だなの湯飲みをはねとぼして、こなみじんにいたしました。

十742 きゆうに、につこりわらい顔になって、次郎かじやといっしょに歌いだしました。

十749 太郎かじやと次郎かじやは、こんな歌を歌いながらにげだしました。

しろうさぎ (課名) 2 しろうさぎ

三31 七 しろうさぎ……四十三

三431 七 しろうさぎ

しろうさぎ 「白兔」(名) 15 しろうさぎ

三432 しろうさぎが、島から むこうの りくへいってみたいと思いました。

三442 しろうさぎは それをみて、「略。」といいました。

三448 わにぎめは、しろうさぎの いう とおりにならびました。

三449 しろうさぎは、「略。」と かぞえながら、わたって いきました。

三452 もう ひと足で りくへ あがろうというとき、しろうさぎは、「略。」と いって わらいました。

三461 いちばん しまいにいた わにぎめが、しろうさぎをつかまえて、からだの けを みんな むしりとって しまいました。

三463 しろうさぎは いたくて たまりません。

三467 しろうさぎが いままでの ことを はなしますと、その かたがたは、「略。」とおっしゃいました。

三471 しろうさぎは すぐ 海の水を あびました。

三484 しろうさぎは いままでの ことを はなしました。

三489 しろうさぎが その とおりに しますと、からだは すぐ もの ように なりました。

七866 しろうさぎ 400g.

七894 しろうさぎが 9 ひきと、黒うさぎを 1 ひきもらいました。

七8910 茶うさぎ 1 ひき しろうさぎ 10 ひき 黒うさぎ 2 ひき

七942 けさ、しろうさぎは 耳に けがを しました。

じろうちゃん (人名) 1 じろうちゃん

五147 じろうちゃん、いらっしやい。

じろうにいさん (兄) (人名) 1 じろうにいさん

二538 どの りんご、じろうにいさんに いただいたの。

しろかき 「代掻」(名) 1 しろかき

八984 田植えのころになったので、しろかきをしました。

しろくろぶち 「白黒斑」(名) 1 白黒ぶち

五408 白黒ぶちの ちちうし です。

しろし 「白」(形) 2 白し 《一シ》

九302 まえ向ける ずめは 白し朝ぐもり

十五74 息白し いままで 残る 明星ぞ

しろちゃん (人名) 6 しろちゃん

一572 しろちゃん、はねちゃん、略、みんな

わたくしの うちに いた きようだい です

一579 わたくしは、かたほう だらりと さがった

しろちゃんのみをみて きました。

一5810 それから、そろって しろちゃんの うちへ きました。

一593 しろちゃんの うちへは、略 おはなばたけの なかに ありました。

一604 おかげで、しろちゃんは、げんきなこになりました。

一614 おじいさんが こういうと、しろちゃんは ぷくろから だいやもんどを とりだして、

しろっぼい 「白」(形) 2 白っぼい 《一イーク》

七466 黄みがかった 麦ばたけ、縣道らしい 白っぼい道、そこを 自轉車に 乗って 走る 中学生、

十209 白っぼく 見える 太陽の 光線 ですが、わけてみると、こんなに さまざまな 色になります。

しろばら 「白薔薇」(名) 2 しろばら

九140 ちようど しろばらの 花が とんで いく ように。

九146 しろばらの 花は、もう 話しかけ なくなり ました。

シロフォン (名) 2 シロフォン

六184 オルガンを ひいて いるもの、たいこを たたいて いるもの、シロフォンを たたいて いるもの、

六235 シロフォンを ひと たたきたい いて、

シロフォンの きりぎりす (話手) 5 しろぎりす

六205 シロフォンの 「さあ、ひと 休み しようでは ありませんか。」

六223 シロフォンの 「あり さん たら、あり さん。」

六227 きりぎりす さん、こんにち は。シロフォンの 「こんにち は。」

六235 シロフォンの シロフォンを ひと たたきたい

て、「略。」

六257 シロフォンの 「うた おう、うた おう。」

じわれする 「地割」(サ変) 1 地われする 《一

シ

九429 ㊦ 大きなうねのはだが地われしているのをほりおこすとき、胸がどきどきしました。

しん ㊦(名) 4 しん

十四64 ㊦ とう明なガス体の蒸気が、しずくになるときには、かならず、なにか、そのしずくのしんになるものがある、

十四64 ㊦ もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということが、

十四64 ㊦ そのしんになるものは、ふつうけんび鏡でも見えないほどの、たいへんこまかいちりのようなものです。

十五88 ㊦ 『必要以上にねむるという幸福』でね、ふたりとも手はパンのしんだし、

じん ㊦ ㊦アメリカじん・イスパニアじん・がいこくじん・がいこくじんどうし・こだいじん・ちゅうごくじん・デンマルクじん・ドイツじん・につぼんじん

じん ㊦ 1 仁

十五39 ㊦ 「仁」というように、漢字の全体をくずしたものから作りだしたものである。

しんえん ㊦(真円) (名) 1 真円

十四42 ㊦ 半円が真円になれば成功するのだ。

しんえんしんじゅ ㊦(真円真珠) (名) 4 真円真珠
十四38 ㊦ ゆめにもわすれられない真円真珠が、光っているではないか。

十四310 ㊦ すると、五つぶの真円真珠が現われた。

十四43 ㊦ やつと真円真珠ができたよ。

十四44 ㊦ はたして、真円真珠がやどっていた。

じんかく ㊦(人格) (名) 1 人格

九70 ㊦ お礼はどうかとってください。わたしの人格にかかりますから。

しんきち ㊦(人名) 1 しんきち

五28 ㊦ しんきちか、早かったね。

しんきちくん ㊦(人名) 2 しんきちくん

五27 ㊦ しんきちくんは、電車をおりてから、元氣にあるいて帰りました。

五28 ㊦ しんきちくんのおとうさんは、店でそろばんをはじいていました。

しんきちくん ㊦(題名) 1 しんきちくん

五27 ㊦ しんきちくん

しんけん ㊦(真剣) (形状) 2 しんけん
九45 ㊦ ぼくは、おとうさんのやっていたパン屋のしごとを、しんけんにやろうと思っています。

九82 ㊦ 私たちは、だんだんしんけんになってほりました。

しんけんさ ㊦(真剣) (名) 1 しんけんさ

十三61 ㊦ くらべてみて、うまさからいうと、ラファエルのほうがうまいかもしれないが、深みやしんけんさは、どうだろう。

じんこう ㊦(人工) (名) 1 人工

十37 ㊦ 世界じゅうの人から愛される真珠、これを、人工で作りますことはできないものだろうか。

しんこきゅう ㊦(深呼吸) (名) 4 しんこきゅう 深呼吸

七47 ㊦ 校門のかしの木は、目をさまして、しずかにしんこきゅうをした。

十25 ㊦ 立ちどまって、両手をひろげて深呼吸。
十四39 ㊦ 深呼吸をしよう。

十四39 ㊦ みんな氣持よく、のびのびと深呼吸をする。

しんこきゅうする ㊦(深呼吸) (サ変) 1 しんこきゅうする

五60 ㊦ 《—シ》
あのおの三つの花が、そろってしんこきゅう

しているようにみえますね。

しんさつ ㊦(診察) (名) 1 しんさつ

十一73 ㊦ その人たちは、しんさつをはじめて、一つ一つのベッドのそばに立ちどまりました。

しんし ㊦(ろうしん) しんし

しんじ ㊦(真二) (人名) 1 真二
十三40 ㊦ はい、真ちゃん……真二を呼んでいた

だいたいのです……はい。

しんじあう ㊦(信合) (五) 1 信じあう 《—エ》

十五12 ㊦ おたがい、信じあえ。

しんじくん ㊦(真二君) (人名) 1 真二くん
十三44 ㊦ 電話のはじめの人は、《略》、そのあとは

マンシェウから帰って来た真二くん、

しんじつ ㊦(真実) (名) 4 真実

十四5 ㊦ 私たち自身の生活を思わずふり返らせないではない強い真実の力が、

十五78 ㊦ ひとりの人間にとって真実であるものは、他人にとっても真実だからである。

十五78 ㊦ 他人にとっても真実だからである。

十五94 ㊦ 私たちはやつと、物の真実を見ることができただよ。

しんじゅ ㊦(題名) 2 真珠

十3 ㊦ 真珠

十37 ㊦ 真珠

しんじゅ ㊦(真珠) (名) 16 しんじゅ 真珠 ㊦しんえんしんじゅ・てんねんしんじゅ・はんえんしんじゅ・ようしよくしんじゅ・ようしよくしんじゅは

つめい

五33 ㊦ この荷物の中に、おり物や、お茶や、しんじゅなどがはいっています。

十37 ㊦ 美しい真珠、

十37 ㊦ 世界じゅうの人から愛される真珠、

十384 眞珠は、海のそこからまれにひろいあぜられる、ふしぎな宝石とされてきたが、

十394 ④ もし、母貝の中に、核をさし入れることができたなら、眞珠が発生するにちがいない。

十404 しかも、核をさし入れてから、眞珠になるまでには、少くとも四年はかかる。

十411 あるとき、うめが、母貝の中をしらべているうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。

十4311 八十五万から五つぶの眞珠が取れたわけである。

十441 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめのれいにささげて、その成功をしらせた。

十4412 第二、第三と母貝を開いていくと、どれにも眞珠が、きよらかにかがやいているではないか。

十452 今日、眞珠の産地は、ペルシア湾、セイロン島をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、日本産のものは、ことに名高い。

十469 ④ 一つは、ダイヤモンドであり、いま一つは、眞珠でした。

十4610 ④ 自然をあいてとして、眞珠を世界の人々にあたえたことに、心から敬意をささげます。

十五828 金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭にいっぱいつけています。

十五10312 ④ 『雨の幸福』で、眞珠をいっぱいつけています。

十五11012 ④ きぬなの、銀なの、それとも眞珠なの。

しんしゅう 「信州」〔地名〕1 信州

十二703 曾良は、信州の人で、歌がたいそうじょうずでしたが、

しんじゅおう 「眞珠王」(名) 1 眞珠王

十391 このわか者こそ、のちに眞珠王として世界に知られた御木本幸吉であった。

しんじゅがい 「眞珠貝」(名) 2 眞珠貝

十3812 それから、わか者は、眞珠貝の研究に全力をつくした。

十425 眞珠貝にちょうどよい海水の温度や、海の深さのこともわかり、

しんじゅがいようしよく 「眞珠貝養殖」(名) 1 眞珠貝養殖

十424 それから、眞珠貝養殖の科学的研究がつづけられた。

しんじゅしつ 「眞珠質」(名) 2 眞珠質

十388 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものが入りこみ、それに、貝の殻の眞珠質がまきつき、

十397 うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功するわけであったが、

しんじゅしょうたち 「眞珠商達」(名) 1 眞珠商たち

十459 かつて、パリーの眞珠商たちが、幸吉の手になる養殖眞珠は、まがいものであるといった。

しんしゅてき 「人種的」(形状) 1 人種的

十五7410 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別など、あるべきはずはない。

しんじゅぼがい 「眞珠母貝」(名) 1 眞珠母貝

十387 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものが入りこみ、それに、貝の殻の眞珠質がまきつき、

しんじょう 「眞情」(名) 1 眞情

十四62 老いた母を思う子の眞情は、遠く海をこえて、私たちの胸にまでせまってくる

しんしん (副) 1 しんしん

九127 たいこを、ひくく、こまかくつづけてうち鳴らすのであるが、いかにも雪がしんしんと降りしきっているような気がした。

しんずる 「信」(サ変) 7 信ずる 《—ジ—ズル》

十三112 このように、道理にあわないことを信ずるのを、迷信という。

十三115 関係もないのに、一つのことは他のことの原因であると、信ずるのである。

十三122 知識によらず道理によらず、いたずらに理由のないことを信ずる迷信は、

十三157 しかし、そのころの教会のぼうさんたちは、天動説を信じていましたので、

十三1512 そのため、ガリレオは、ローマに呼びだされて、自分でも信じてはならぬ、人にも説いてはならぬといわれました。

十三167 「略」と信じて、死ぬまで眞理を求めていたのです。

十五794 私には、〈略〉みなさんに、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。

じんせい 「人生」(名) 1 人生

十三78 「人生よ、長くそこにあれ。」

しんせつ 「親切」(形状) 10 しんせつ ↓ごしんせつ

一537 ④ しんせつないい人がひろうと、だいやもんどですが、

四331 ④ 「しんせつにすること。」というおとうさんのことばを思い出しました。

八824 ④ 人がしんせつにしてあげるときは、喜ぶものです。

十三423 ④ しんせつだね……え、ぼくに……いらないよ。

十三426 ④ へえ……そんなにしんせつだったの。

十四995 この子にとって、ただひとりのしんせつな人であったおばあさんが、

十四1002 おばあさんは、いつものように、やさし

く、しんせつなようすをしていた。

十四 101 3 おばあさんが、こんなに〈略〉、美しく、
そうして、しんせつに見えたことは、

十五 116 8 会 あの人、おまえたちふたりをかわい
がって、たいへんしんせつにしてくれるそうだね。
十五 119 4 会 私は、愛しあう人たちには、いつでも
しんせつにいたします。

しんぞう 「心臓」(名) 1 しんぞう
六 79 4 会 しんぞうのこどうですよ。

しんばい 「身代」(名) 2 身代

十一 19 4 働くことがすきで、一代でりつばな身代
をこしらえました。

十一 20 1 からだをじょうぶにして、身代をもとの
ようにしたいものだ、ほねをおっていました。

じんたい 「人体」(名) 1 人体

十二 112 5 オランダのターヘルアナトミアという人
体のことを絵いりで説明した本を、

しんちゃん 「真」(人名) 6 真ちゃん 真ちゃん

十三 39 1 会 ぼく、三郎……はい……え……真ちゃん
んが……マンシュウの真ちゃんが、

十三 39 1 会 マンシュウの真ちゃんが、帰って来た
んですか

十三 40 1 真ちゃんが書きのこしていた手紙を、
とりだして読む。

十三 40 5 会 はい、真ちゃん……真二を呼んでいた
みたいです……はい。

十三 40 8 会 あ、真ちゃん。

十三 43 8 会 おかあさん、真ちゃんが帰って来たん
だつてね。

しんちよう 「身長」(名) 1 身長

十二 82 8 身長は一・八七メートル、みるからに
りつばな体格は、

しんに「真」(副) 1 真に

十三 18 7 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れな
い國民こそ、真にすぐれた國民でしょう。

しんばい 「心配」(名) 4 心配

五 11 6 会 そんな心配はいらない。
五 19 1 こんなにだいにじにしてくれますから、おち
る心配はありません。

十四 43 5 会 日々の苦勞に、よし心配がたえなくと
も、くちびるに歌をもて。

十五 26 7 わしが大きなくちばしで女の子の頭でも
つつけば、大けがをするか、殺される心配がある。

しんばい 「心配」(形状) 8 心配
五 17 5 会 ぼくは遠いところへいくんだけど、あて
名の字がそまつなので、わかりにくくて心配さ。

五 17 7 会 わたしのはこんな小さな字だから、なお
心配ですよ。

六 9 7 それがまた心配になってきた。
七 36 10 「略」と、心配そうにいました。

七 39 9 はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配
そうに私の方をみていましたが、

九 64 1 やまねこがすこし心配そうに、それでもむ
りにいばつていきますと、

十一 71 10 おくびよう者の次郎かじやは、心配になり
ました。

十一 66 9 「略」と、少年は心配そうにききま
した。

しんばい さ・せる 「心配」(下二) 1 心配させる
した。

九 102 2 会 友だちにまで心配させて——「たかぎ
「いっしょにあやまろう、あした——」

しんばい・する 「心配」(サ変) 13 しんばいする
心配する 《—シ》

二 30 2 会 ぶうちゃんはしんばいして、もう一ど
かぞえてみました。

三 111 1 あまりしんばいしましたので、かみのけ
が白くなり、

五 68 5 会 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。
五 69 7 会 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。

五 71 1 会 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。
五 73 7 会 おじいさん、心配しないでお帰りなさい。

六 40 1 会 心配しないでまっていられっしやい。
七 52 6 どちらが勝ったかと思つて、心配している
と、十一たい十で、ぼくらのほうが勝った。

十一 72 12 会 心配しないでいらっしやい。
十一 75 5 会 「心配しないでおいで。」と、医者は、
〈略〉答えました。

十三 40 10 会 みんなで心配していた……うん、そう
……そうだつてね。

十四 16 10 会 すこしこみいりすぎているとお考えで
はないかと心配していました。

十五 116 12 会 顔を見せると、『幸福』たちがこわが
るだらうって、心配しているのですよ。

じんばおり 「陣羽織」(名) 4 じんばおり
九 59 11 やまねこが、黄色なじんばおりのような物
を着て、

九 68 11 黄色のじんばおりをちよつとだして、どん
ぐりどもに申しわたしました。

九 73 1 やまねこのじんばおりが、風にバタバタ鳴
りました。

九 74 9 やまねこの黄色のじんばおりも、ぎょしや
も、きのこの馬車も、一どにみえなくなつて、

しんばん 「審判」(名) 2 しんばん
七 51 1 しんばんの先生が、「略」といわれた。

七 52 4 しんばんの先生のあいずで、ぼくらは場所

をこうたいした。

じんぶつ 「人物」(名) 3 人物

106310 おじいさんのめん、〈略〉、それぞれの人物によって、それぞれのめんがあります。

10657 なにをしてもにくまれぬ、おもしろい人物になっています。

155710 図 その日本の青年はなかなかの人物だったよ。

しんぶん 「新聞」(名) 5 新聞 ↓かべしんぶん・かべしんぶんがかり・かべしんぶんだいいちごう・ふるしんぶん

6684 それを切りとって新聞にはりつけました。

7641 夏の風がふきこんで、新聞など動かして、ふきぬける。

91910 それと同時に、協会ではすぐに、〈略〉つばめのせわをすることを、新聞に廣告しました。

14506 このことは、あくる日の新聞に出たマツケンナの話で、あきらかになったのですが、

15513 ジャパンタイムスという新聞も発行した。

しんぶんはいたつ・する 「新聞配達」(サ変) 1 しんぶんはいたつする 《―スル》

4910 しんぶんはいたつする人のことを思つて、ゆうびんなげいれ口のまわりをさつさとはく。

しんぼ 「進歩」(名) 2 進歩

122511 図 ねえさん、たいへんな進歩ですよ。

122910 図 たいへんな進歩じゃないの。

しんぼう 「心棒」(名) 1 しんぼう

649 そばには小さなしんぼうや、は車や、ぜんまいなどがならんでいる。

しんぼうづよさ 「辛抱強」(名) 1 しんぼう強さ
11881 その熱心とそのしんぼう強さとは、まえ

とすこしもわかりませんでした。

しんぼさせる 「進歩」(下) 1 進歩させる 《―セ》

1343 そのために、いまのうちに、早く織機を進歩させておかねばならない、

しんぼする 「進歩」(サ変) 2 進歩する 《―シ》
1211311 汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、日に日に進歩しています。

14325 けれども、星をこまかく観察したことから、農業が進歩したのです。

しんみりする (サ変) 1 しんみりする 《―シ》
14466 マツケンナは、しばらくしんみりした氣持で、この歌に聞きほれていました。

しんようする 「信用」(サ変) 1 信用する 《―シ》

8132 信用してくれていたものを、あやまちのためにあわれに死なせたというなさけなさは、

しんらい 「信頼」(名) 2 信頼
81211 私は、ピアノの信頼をうらぎったのが、かなしくてなりません。

12425 これは、ケラーのサリバン先生に対する信頼と、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、一つになったおかげです。

しんり (課名) 2 眞理

1323 二 眞理……八

1381 二 眞理

しんり 「眞理」(名) 3 眞理

1374 からの声も、ほんとうにのんびりとして、ゆめのように、眞理のように、

13167 「略。」と信じて、死ぬまで眞理を求めていたのです。

14807 なん代もなん代もやってみた結果、とう

とう一つの眞理だと思われたので、

じんりき ↓とよだしきじんりきしよつき
じんりきしゃ 「人力車」(名) 1 人力車

15718 人力車に乗ったおばさんは、昔のように私をひざにのせた。

しんりん 「森林」(名) 2 森林

13173 デンマルクは、〈略〉、しらかばの森林と、近海の漁場のほかには、鉾山があるのでもなく、

13203 ユートランドの平野には、八百年あまり前には、よくしげった森林がありました。

しんるい 「親類」(名) 3 親類

11237 母親は、金次郎と相談して、すえの子どもを親類にもらってもらいました。

11285 金次郎は親類のまんべえさんのところに、あづけられることになりました。

112912 やがて、金次郎は、親類の家からでて、もとの自分の家に帰り、

じんるい 「人類」(名) 1 人類

157410 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、人種的な区別など、あるべきはずはない。

じんるいぜんたい 「人類全体」(名) 1 人類全体

14375 世界全体を、人類全体を、〈略〉うちゅう全体をながめわたす大きな目をもってください。

す

す 「果」(名) 17 す 果 ↓くものす・ふるす

2212 図 大きなくもがすをかけていました。
2229 図 すのおそうじをするので、はとをだ

ちるなり丘の夕日に

した。

と、まっ白に雪をいただく山々

はらび立つてい

すいすい (副) 4 すいすい

四四六 (副) かもめ すいすいとんでいく。

四四三 (副) かもめ すいすいとんでいく、空にほんのりふじの山。

五四二 きんぎょが一びき、すいすいとういてきたかと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。

一二九四 文字をとおして、すいすいととびまわるか、わい赤とんぼを、心の中にえがきだす。

すいせん 「水仙」(名) 1 すいせん

一一四二 (副) ふきのとうで、すいせんにおい、すいせんする 「推薦」(サ変) 2 すいせんする

《—シ—スル》

一一八七 (副) ぼくはきみをコックスにすいせんする。

一一八八 (副) ぼくらですいせんしようよ。

すいと (副) 2 すいと

九四八 あぶは、力いっぱい羽ばたきをして、すいとにげていきました。

九四一〇 風と思ったのは、そうではなくて、つばめがすいととんできたのです。

すいとう 「水筒」(名) 2 すいとう すいとう

一四九六 (副) スイトウ モッテ—オモタイカラ モッ

テ イッテ アゲル ノヨ

一五三六 そのとき、いままでかたにかけていたすいとうをはずして、手に持つといいます。

すいどう 「水道」(名) 3 水道

五五五 水力電氣をおこし、水道の水にもなり、川

はだんだん大きくなる。

五五八 鳥かごは、おひるまえは、水道のあるいど

ばたの高いところにかけますが、

五五九 人がときどききて、水道をつかいます。

すいとる 「吸取」(五) 2 吸いとる 《—ツ》

一四五四 (副) それは、大部分、根の私が、土の中か

ら吸いとって、送ってあげたものです。

一四五五 (副) そこへ細い根をのぼして、水と養分とを吸いとって、夜も晝も送ってあげるの、

すいはじめる 「吸始」(下二) 1 すいはじめる 《—メ》

一八六八 その口のさを根の中につきさして、木のしるをすいはじめます。

ずいぶん 「随分」(副) 17 ずいぶん

二四九 (副) おとうさん、こは、ずいぶん高いね。

三三三 (副) きみのなかまはずいぶん多いな。

五五五 (副) ずいぶん早いね、にいさん。

七五五 (副) きょうは、ずいぶんとんでるなあ。

八三六 この星は、一つ一つがはつきりとみえないのですから、ずいぶん、遠いことがそうぞうされ

ます。

八七二 (副) おまえさんはずいぶんみにくいね。

九五七 (副) あの文章は、ずいぶんへただったろう。

九一〇七 はじめは二列ですすんだが、谷あいでは一列になったので、ずいぶん列が長かった。

一二一六 しかし、パレットの上でみたときは、ずいぶん美しくみえるが、

一二一四 いまつかつているお金とずいぶんちがいます。

一二一五 この人たちの着物やかぶりものなども、いまのものはずいぶんちがっています。

一三三三 絵はがきをそのすりものとくらべてみると、ずいぶんちがっているのにおどろきました。

一四二二 (副) ずいぶんあるなあ。

一四二七 (副) 戸の外で聞いていると、あなたたちは、ずいぶんかつてなことをいっていましたね。

一四二八 (副) この大きなかばちは、ずいぶんかた

いようですが、やっぱり、この大部分は水です。

一五八五 (副) あの人たち、ずいぶんうれしそうな、幸福そうな顔をしているなあ。

一五八七 (副) あの人、私たちが、あの人をずいぶん待ちわびていることを、知らないのだから。

すいりよくでんき 「水力電氣」(名) 1 水力電氣

五六四 ダムにせかれていけになり、水力電氣をおこし、《略》、川はだんだん大きくなる。

すいれん 「水蓮」(名) 1 すいれん

一五三二 (副) そこに、すいれんの花が三つほど、きれいにさいっていました。

すう 「吸」(五) 5 すう 吸う 《—ウ—オ—ツ》 ↓ おすう

七二四 (副) とまっているちようちよが、どんなかつこうをして、みつをすうか、よくごらん。

八一九 木の根のしるをわずかずつっているせみの子たちは、たいへん生長がおそくて、

八二〇 せみの子たちは、はじめにはあさいところ

にいて、ほそい木の根のしるをすっています、

一一三三 (副) しずくすおうとでむしが、つのをふりあげのぼりだす。

一四五六 (副) しかし、根さんが、せっかく吸ってくださった地の中の水や養分でも、

すう 「掘」(下二) 1 すう 《—エ》

一五二二 (副) ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブリキの屋根に月うつる見ゆ

すういすうい (副) 1 すうい、すうい

一一三二 (副) 麦のはしりほかがやく上を、海こえてきたつばくろが、すうい、すういととびまわる。

すうがく 「数学」(名) 2 数学

一三二二 (副) 自分で望遠鏡を組みたてて、それで天体を観察し、数学でこまかに計算した結果、

一四二二 (副) 星をこまかく観察したこと、から、《略》。

数学が発達したのです。

すがたがくしゃ「数学者」(名) 1 数学者

十三14 4 この人は、すぐれた数学者で、また熱心な天文学者でした。

スーザン「人名」1 スーザン

十三49 8 メアリとスーザンとエミリとが、かわい口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわらう。

すうじつ「数日」(名) 1 数日

九46 5 ぼくは、この手紙を数日もまえから、喜んで書きだしました。

すうじつまえ「数日前」(名) 1 数日まえ

十一64 1 少年の父親というのは、〈略〉、数日まえ、イタリアへ帰ってきて、

すうじゅうねん「数十年」(名) 1 数十年

十五56 11 指おり数えると数十年の昔になるが、すうっと(副) 4 すうっと

一41 4 どんとうのしたを、くろくすうっととんだ。

三113 4 かぐやひめのからだは、すうっとそとへでてしまいました。

七7 9 ろうかをすうっと通ってみたり、かいだんをトントンあがってみたり、

十四46 10 なんだから、すうっといい気持ちになって、すうにん「数人」(名) 1 数人

九88 6 そのほか数人が、それぞれにわかれてふたりをひきとめている。

すうねん「数年」(名) 1 数年

十三21 1 実際に試験してみると、もみの木ははえるが、数年ならずしてかれてしまいました。

すえ「末」(名) 7 すえ 末 じこすえ・もとすえ・ゆくすえ

八11 1 学校から帰ってきたすえの女の子が、

八12 2 みんなないて——ことに、すえの女の子などは、目をなきはらしました。

九17 3 フィリピンで、ある年の十月のすえ、子どもがつばめをつかまえました。

十44 4 研究を重ねたすえ、〈略〉、一種の手術をほどこすことを発見した。

十一23 7 母親は、金次郎と相談して、すえの子どもを親類にもらってもらいました。

十五37 3 それに線を加えて、「もと」とか、「すえ」とかいう考えを表わすことにした。

十五37 4 いまの「本」「末」とかいう字はそれである。

すえつ・ける「据付」(下二) 1 すえつける「ケ」

八59 2 ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠鏡をのぞいてみた。

す・える「据」(下二) 5 すえる「エ」

三50 8 めがねをかけて石を切る、目もとをすえて石を切る、

八5 8 そばにすえた小さなかごの中から、一わずつつかみだしては

十一80 4 病人は、だんだんしっかりした目を少年の上にすえて、

十二13 3 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、

十五53 10 廣いへやの窓ぎわに大きなデスクをすえ、

すがこうさく「図画工作」(名) 3 すがこうさく すが工作 図画工作

四11 6 さんすう、りか、おんがく、すがこうさく、たいいくなどの、べんきょうをします。

五78 2 すごのすが工作の時間に、写生ししよ

う。

十四26 11 また、図画工作の時間によくいう、デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、

すかす「透」(五) 6 すかす「シ」

八10 11 ところが、ある土曜の午後、おなかをすかして学校から帰ってきたすえの女の子が、

十四63 4 日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬのでもおいてすかして見ると、

十四63 6 日光にすかして見ると、湯げの中に、にじのような、赤や青の色がついています。

十四64 9 飛行機などで、横からすかして見ると、ちょうど、けむりが横がっているように見える

十四72 11 日のあたっているかべや屋根をすかして見ると、ちらちらしたものが見えることがあり

十四73 6 つぎには、熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかして見ると、

すがた「姿」(名) 30 すがた じうしろすがた・おすがた

三107 9 すると、かぐやひめのすがたがきゆうにみえなくなりました。

三108 3 「〈略〉。」とおっしゃいますと、かぐやひめは、またすがたをあらわしました。

三115 6 かぐやひめのすがたは、それはそれはうつくしくかがやきました。

八13 8 ほかおじろの声をきくと、ピオのすがたがありありとうかんできて、思わずにみだぐみます。

八27 8 それは、天帝のひとりむすめのはたおりひめのすがたを、もとめておいでになるのです。

八29 5 そのすがたといい、〈略〉、ふえの音といい、申しぶんのないけださがこもっています。

八65 5 ほかのものは、一わだってこんなすがたをしていない。

八七〇 すがたがみつともないばかりに、みんなかしかりとばされるので、

八八五 すがたがみつともないので、いろいろな動物たちからのけものあつかいにされた。

八九七 そのとたん、すみきった水の上に自分のすがたのうつっているのを見た。

九一六 十一月のはじめになれば、もうほとんどすがたをみせなくなってしまう。

九二五 ちらりとつばめのすがたをみた人は、

九三二 秋晴れのすみきった空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中にうつって、

九四〇 道もないところから、木こりのすがたがあらわれます。

九四九 両手をひろげて高くとばれるすがたは、なんとという勇ましさであらう。

九五〇 人をだましたりしないので、ありのままのすがたで、つきあっていたいのです。

九五二 わずかのことばですが、この中には、妹のすがたが、ありありとうかんでいます。

九六四 あの山のすがたが、小さいころのことをいろいろと思いださせる。

九七三 空をとんだり、すがたを消したり。

九八二 おにはおどろいてすがたを消してしまつた。

九八八 赤色のすやきの土人形で、〈略〉、男や女のいろいろなすがたをあらわしています。

九九九 屋根の形や左右にのびたろうかのかっこうにも、ほうおうという鳥の美しいすがたがあらわれていることに気がつくことでしょう。

一〇〇五 なんとというおごそかなすがたでしょう。

一〇一五 ふと気がついてみると、いままで先生のそばにいた女の子のすがたが見えません。

一〇五三 私の目に映じたのは、〈略〉しらがの老しん士のすがたであった。

一〇六六 満ぼうの心から、どうして新島のおじさんのすがたが消えうせよう。

一〇七三 このすがたをおじさんがごらんになったら――

一〇八二 やがてすがたをあらわした博士の手には、

一〇八八 ねこは、〈略〉歩いて行って、黒いまくをあけて、すがたをかくしてしまいます。

一〇九六 美しい、天使のようなすがたをした者が、すがら しみちすがら

すがりつく 「縫付」(五) 4 すがりつく 《―イ―キ》

一〇九七 私は、さぶろうの手をしっかりとにぎり、さぶろうは、私のからだにすがりついていました。

一一〇九 黒の子うさが、ちちをのうとして、親うさぎのちにすがりつきますと、

一一二五 あのぬけがらだけは、いつまでもささだけにかたくすがりついていきます。

一一四四 王女は、こういって、王さまにすがりつきました。

すがる 「縫」(五) 1 すがる 《―ツ》 ひとりすがる

一一六〇 これは、木からいうとめいわくしごくなことですが、せみの子からいえば、母親のちぶさにすがったようなもので、

すき 「鋤」(名) 2 すき

一一三三 短か夜しらむを待ちかねて、〈略〉、すき・くわ持って野にいそぐ。

一一四二 つるぎで失ったものを、すきでとり返そうと決心したのです。

すき 「好」(形状) 24 すき しみおすき・きれいず

き・けんかずき・だいすき・ものすき

一二〇六 どんな花がすきですか。

一二一七 ピーターは赤がすきでした。

一二二八 マイクルはみどりがすきでした。

一二三九 ジュードは青がすきでした。

一二五〇 かっちゃんすきの おだんごを作りました。

一二六四 私のすきな花は、こぶしの花です。

一二七五 ぼくのすきな花は、あさがおです。

一二八六 それを知ってから、よけいにピオがすきになりました。

一二九四 私たちの家のうち、中でも茶のまほど、すきな、安心なところはなというように――

一三〇六 ほかのあひるどもは、みずうみでおよぎまわるほうがすきであったからである。

一三一四 ぼくははじめ、山へたきぎをとりにいくのが、すきではありませんでした。

一三二四 こがねのどんぐりがすきです。

一三三六 しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶことがすきですから、

一三四四 おとうさんが、子どものすきそうなおかしを、一ふくろやったのがはじまりで、

一三五二 おとうさんがそのいなか町がすきになったのも、

一三六〇 働くことがすきで、一代でりっぱな身代をこしらえました。

一三七六 父親のすきなものをかうために、自分でわらじを作って、お金をもうけたりしました。

一三八六 これは、絵のすきだったおじさんからゆづってもらったもので、

一三九四 芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、

十三2211 長男、フレデリック・ダルガスは、父の質を受けて、植物の研究がすぎでしたが、十三548 絵かきではありませんが、絵がすぎで、十四628 自然の現象を観察し、研究することの好きな人には、
十四8112 すぎこそものじようずなれ。
十五1066 、『不幸』をなぐさめてやるのがすぎなのですから。
すぎ 〔杉〕 1 すぎ
六363 すぎ「あら、子どものかかしだね。
すぎ 〔杉〕 (名) 9 すぎ「いっばんすぎ六362 すぎの木のおばさん、助けて。」すぎ「あら、子どものかかしだね。
六366 おれるようにあたまを地につけるすぎの木。
九3711 なんと十メートルもある高いすぎやまつのはえているところは、晝でもうすぐらく、
九398 一ど、すぎの木で、根もとからかれています高き十五メートルに近い木にのぼったことがありました。
九406 なたをふりおろすたびに、すぎの木は大きくゆれました。
九1166 ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤きかにいてすぎの山しずか
十一402 山のもみじ葉みなりはてて、青くしげるはまつ・すぎ・ひのき。
十五106 けがきのすぎの木ひくみとなり家の庭の植え木の青めふく見ゆ
十五131 あさき夜の月影清み森をなすすぎのこぬれの高きひくき見ゆ
すぎ 〔過〕 1 しいすぎ・おおすぎ・おひるすぎスキー (名) 7 スキー
九1046 まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、

スキーをするには、ちょうどよかった。
九1051 ぼくたちは、リックサックをせおって、スキーをつけ、
九1059 スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくきこえる。
九1091 すばらしい早さに、からだもスキーも一つになって、ビュウとうなる。
九1096 思い思いに、スキーのあとを雪の上にえがきながら、小鳥のようにおいてくる。
十四219 ボール、テニス、ピンポン、ラケット、スキー、ラジオ、ニュース、レコード、チフス、十四2312 チフス、トラホーム、ガーゼ、スキーはドイツ語。
スキーじよう (名) 4 スキー場 ひやまのスキーじよう
九1044 ぼくたち四十人は、のだ先生といしい先生につれられて、山のスキー場へいった。
九1072 あれがスキー場だ。
九1074 先生がつえでさされる方をみると、なるほどりっぱなスキー場で、ジャンプ台もみえる。
九1077 いよいよ、スキー場に着了いた。
すぎとおる 〔透通〕 (五) 5 すぎとおる 《ーッ、ーッ》
八596 山の上には、青い空がすぎとおるようになでいる。
九495 すぎとおった風がザアツとふくと、くりの木はバラバラと実を落しました。
十五18 それはすぎとおった青い色ですよ。
十五12 「ああ、すぎとおった青い色ですか。」と、日本の海の美しさを、思いうかべるように十五1029 『清い空氣の幸福』で、ほとんどすぎとおっています。

すぎま 〔透間〕 (名) 3 すぎま
三103 かきねの上からのびあがって みたたり、へいのすぎまからのぞきこんだりました。
七371 私たちのために、せいっぱいの力で、すぎまをこしらえてくれたのです。
十四674 湯げは、えんの下やかきねのすぎまから、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、
すぎる 〔過〕 (上二) 17 すぎる 《ギーギル・ギレ》 1 おおきすぎる・おおすぎる・おおぜいすぎる・こみいりすぎる・さびしすぎる・ちいさすぎる・ですぎる・とおりすぎる・ながすぎる・のびすぎる・りっぱすぎる
二647 『冬の國』もすぎでいく。
二649 すぎでいく。
三122 二年すぎました。
四4710 はたけをこえ、のはらをすぎると、高い山のそばにきました。
五393 冬がすぎて、春がきたからです。
七257 それから十日すぎて、からだが黒つぽかったのが、青くかわってきたんですよ。
九169 やがて、九月のなかばをすぎると、つばめは、そろそろ日本をさっていき、
九1237 求め求めて、いつか、いまのしずおか縣のさかいもすぎ、ながの縣にはいった。
九1238 てんりゆうきようという景色で名高いところもすぎて、四十キロあまりもきてしまった。
十五2 風が、かすかに耳もとをすぎる。
十616 もう、たけのこは、私のせいをすぎて、おにさんのせいより高くなりました。
十一308 紅梅・白梅みなりはてて、ひがんすぎれば風あたたく、
十一769 こうして第一日はすぎました。

十一789 そうして、二日めも、三日めも、四日めもすぎました。

十三246 そのころ、ユートランドの農夫のつくった農作物は、じゃがいも・くろむぎ、そのほかわずかのものにすぎませんでした。

十四777 どうしても一どはおこななければならぬことが、おこったというにすぎないのです。

十四336 この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。

ずきん「頭巾」(名) 1 ずきん

五714 おばあさんは、けがわのふくをきて、ぴかぴか光るずきんをかぶり、

すく「透」(四五) 6 すく《ーイ・ーキ》

一485 5 きしやはすいています。

六142 11 おなかのすいた五ひきのうさぎさんは、だ

いすきなクロバーをたべました。

九128 1 会 この三日というものは、ちっともかからなかったから、おなかですいてしまった。

九140 9 くもは、おなかですいてはきつた。

また、あみをかけようと考えました。

十四92 11 かわいそうに、その子は、おなかですいて、こごえて、身をひきずって歩いてた。

十五116 文 皿 ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガラス戸すきてたみにうつりぬ

すく「好」(五) 1 すく《ーイ》

十五118 2 会 私は、あなたをすいている『美しいものを見る喜び』でございます。

すぐ「直」(副) 82 すぐ↓まっすぐ

一495 きしやはすぐはっしやしました。

三173 王さまは、すぐはんたかを およびに なりました。

三44 1 「略。」といって、すぐになかまを大

ぜいつれてきました。

三47 1 白うさぎは、すぐ海の水をあびました。

三48 9 白うさぎがそのとおりにしますと、からだは、すぐもとのようになりました。

三103 4 はらの たつ ときでも、この かぐやひめのおをみると、すぐなおりました。

三107 8 「略。」とお思いになって、すぐごしよにつれてかえろうとなさいました。

四179 すぐてつだった。

四325 5 其の生徒さんは、すぐひもでげたのはなおをすけてやりました。

四53 6 会 「もうすぐだ。」

四103 3 かめは、すぐそばまで いって、大きな声で、「略。」といます。

五48 8 山のとつべんのすぐちかいところ、小さいたにまに、小さいいずみ、

五18 9 おたがい、であったと思つたら、すぐおわかれでした。

五24 2 会 ぼくは、はつと思つて、すぐ立つて、その人をすわらせてあげました。

五42 9 5 つばめが、私のすぐ目のまえを、いったりきたります。

五67 10 おじいさんが金のさかなをよびますと、すぐでてきて、「略。」とききました。

五107 9 旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木の上へにげていきましたが、

五109 2 しかし、ひわは、すぐに、「略。」と、まねをしました。

六85 やつとつまんだと思うと、すぐにおとしてしました。

六153 ありはそういつて、すぐ木の葉の船につかまりました。

六40 2 会 すぐ帰ってきますから。

六51 7 月は、雲にはいったかと思うとすぐで、でたかと思うとまたすぐはいります。

六51 8 でたかと思うとまたすぐはいります。

六108 1 そのわけは、すぐけんとうがついた。

六120 6 会 でも、のりがかわかないうちにあまりいじると、すぐはがれますよ。

六129 11 会 きみたちが、ここでわいわいやつていては、すぐぼくが、きつねにみつかつてしまうから、

七26 4 会 ねえ、はつぱと同じになるのは、鳥などに、すぐみつからないためですよ。

七36 8 すぐうしろのおばさんも、「略。」と、心配そうにいいました。

七52 5 すぐまた、しあいのはじまった。

七54 2 ぼくは、しつかり受けとめて、すぐセンターに渡した。

七70 3 くれがたの庭そうじ、略、すぐうしろに、月は、音もなく、のっそりとでていた。

七90 7 が、すぐ、まえ足をおろしてしまいました。

七92 3 小屋からだすとき、みんな喜んですぐでました。

八92 2 ときたまそのろじへだしてやっても、すぐまいもどってきます。

八45 9 会 そうすればすぐおなおりになります。

八61 6 「略。」と親あひるがいうと、ひなたはすぐとびだしてきた。

八66 2 水はひなたたちの頭の上を流れたが、すぐにうかびあがってきて、うまくおよいだ。

八74 10 ところが、ちょうどそのとき、おそろしい大きないぬがそのすぐそばに立っていた。

八78 5 朝になって、よそからきたあひるの子は、すぐにみつげられた。

八八4 10 そうして、はくちようたちがみえなくなる

と、すぐ水のどんぞこまでもぐっていった。

八八9 2 のこっていたもみを、1日、日光にかんか

んほして、すぐにもみすりをしてみました。

八八9 4 どんどんすっていたら、こんどはすぐには

げましたが、くだけた米もできました。

八八9 5 ほしてすぐ、もみすりをするものではない
と思いました。

九九2 二つか、三つのことばの組みあわせだと、

すぐ心にものを思いうかべることができですが、

九一九 それと同時に、協会ではすぐに、〈略〉つ

ばめのせわをすることを、新聞に廣告しました。

九四四 11 手 いそぐ用事だったので、先生にだけお目
にかかってすぐ帰りました。

九五〇 11 水がふえのように鳴ってとびだし、すぐた

きになって、ゴウゴウと谷に落ちていました。

九五三 2 いちろうは、すぐ手まねきして、それをよ

びとめて、「〈略〉。」とたずねました。

九五六 9 窓 やまねこさまは、いますぐにここへも

どっておいでになるよ。

九一〇 4 のだ先生がさきに、すぐつづいていしい先
生がすべられる。

九一二 1 あふれでた水は、さらさらと走って、やが

て、すぐ下のすし大きな川に流れこんでいた。

九一三 1 それは、みつばちであることが、くもには
すぐわかりました。

一三三 3 豊田式人力織機は、國內につかわれるよう

になったが、かれは、これに満足せず、すぐ、動

力機械を作ることにとりかかった。

一五四 3 きんぎよが一びき、すいすいとういてきた
かと思うと、また、すぐ水そこへもぐりました。

一七〇 11 太郎かじやは、すばやく指をつっこんで、

すぐそれを、口に持っていきました。

一一二二 12 おとなの人たちはおどろいて、すぐには

受けてくれませんでした。

一一五七 17 しかし、風がはげしいので、すぐかさを
つぼめてしまった。

一一五九 12 「〈略〉。」と、正男がいうと、一雄はす
ぐ賛成した。

一一七三 9 医者ですぐそばのベッドまできました。

一一八四 4 そのへやのすぐそばの、ドアのそとに足
音がきこえて、

一一八五 5 窓 わたしは、これからすぐにうちへ帰っ
て、おかあさんを安心させてあげよう。

一二二六 6 民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、
なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、

一二二七 2 九十センチぐらいのところでも、〈略〉、
すぐに手をついて、いざり歩きになります。

一二三三 6 私は、すぐこの指の遊びがおもしろく
なって、それをまねようとしました。

一二三八 4 へやに帰るとすぐ、私は、自分がこわし
た人形のことを思いだして、

一二七五 8 芭蕉はすぐ戸をあけました。

一二九四 4 「とんでいる。」で動いているようすがす
ぐわかる。

一二九四 6 このようにままとると、だれでも読んで、
すぐにそのわけがわかる。

一三三〇 6 「あの音は、おもちゃ屋さんだ。」
「〈略〉。」と、それぞれ子どもたちにはすぐわかる。

一三三〇 9 すぐ帰って来るんだから、きみも来たま
え。

一三五一 5 すぐ帰って来るんだから、きみも来たま
え。

一三五四 4 その絵を見ると、〈略〉、そのおかあさん

がマリアだということは、すぐにわかりました。

一三五四 7 それで、すぐに、おとなりのおじさんの
ところへ行きました。

一四五八 7 窓 水がなかったら、なんでもすぐ、かれ
たり死んだりしてしまいます。

一四六六 6 茶わんの湯げなどのばあいだと、もう、
茶わんのすぐ上から大きなうずができて、

一四七九 9 私はすぐにこれをためしてみましたが、
ほんとうにそのとおりでした。

一五二九 8 大わしはすぐにとび起きて、

一五三八 11 「上・下・生」などの読みかたをちよっ
と考えてみただけでも、このことがすぐ理解され
よう。

一五五八 2 窓 その申し出でを承知して、私はすぐに
授業にかかった。

一五六四 2 私は、それを足先につっかけるなり、す
ぐ、小鳥のようにとびだした。

一五九三 3 窓 テロリ、おまえもすぐ来い。

一五九三 1 窓 おかあさんたちが悲しそうな顔をして
いるときでも、ほおずりをしてもらえば、すぐそ
のなみだは、目の中の星になってしまふのですよ。

すぐ「過」(上) 2 すぐ「ギ・グル」

一五八四 4 窓 かわずだまりて人の足大きくする

一五九五 5 窓 ひるすぎていよよにあかきばらの花
いよよに重くかたむきふかむ

すぐ「ちからずく
すくいあげる」「救主」(下) 1 すくいあげる
《一ゲ》

一四五五 5 そうして、マッケンナも、その歌を歌っ
ていたおじょうさんも、そのほかの婦人たちも、

みんなすくいあげられました。

すくいぬし「救主」(名) 1 すくい主

十五三三 女の子は、にこにこわらって、この自分のすくい主へ手をさしだしていました。

すくう「掬」(五) 6 すくう 《ウー・オー・ツ》

八四三 庭のいけの水をすくって、こがねになったものにふりかけなさい。

八四九 王さまは、いそいで庭のいけの水をすくって、王女のからだにおふりかけになりました。

八四六 ういたもみがあったので、手ですくってみますと、かるいもみとみながらばかりでした。

九一五 父は、その泉の水を手ですくって、いくともうまそうに飲んでから、私にいった。

九二〇 手をいれて、それをすくおうとすると、十24 くれくだけの石炭、シャベルですくう石炭。

すくう「救」(五) 4 すくう 《イー・エー・ツ》

九二〇 「かわいそうなつばめをすくえ。」という運動に全國民が、加わったほどです。

十一30 やがて、村をすくい、多くの人からうやまわれるようになりました。

十二四一 私に命がけでせわをすれば、ケラーさんがすくわれるのです。

十五二七 だじょうぶだ、安心しておいで、私がいますくってあげるから。

すくう「巢食」(五) 1 すくう 《ウ》

四七六 のきばにすくう つばめさん。

三二八 また、小人のようだったおひめさまは、三月ほどのあいだに、すくすくとせいがのびて、ふつうの人の大きになりました。

十一32 しとしと降る春雨に、やぶのたけのこすくすのびて、

十三五七 あさい水には、あしのめがすくすくと、するどい角をのぞかせた。

すくない「少」(形) 7 少い 少ない 《イー・イ・カッ・ク》

八六一 たずねてくれるものも少ないし、十二七三 また、まきが少ないと、近所へ木をひろいにいったりました。

十二九二 となりの友だちにさそわれていったこと、くりはあんが少なかったこと、

十三二七 冬は冬で、風あたりの少いホートンの廣場に、子どもたちがたむろして、

十四四三 名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、けつして少なくはありません。

十四四九 しかし、このおじょうさんくらい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。

十五四一 ローマ字をつかうと、字数が少なくてすむばかりでなく、

すくなくとも「少」(副) 3 少くとも 少なくとも 十40 核をさしいれてから、眞珠になるまでには、少くとも四年はかかる。

十一七八 少なくとも、いくらかわかるであろうと思うと、いろいろのことを「略」話しかけて、

十四一〇 少なくとも、一週間ごとにお手紙をさしあげましょう。

すくむ ぐちちすくむ

すぐれる「優」(下) 8 すぐれる 《レ》

十64 能は、その中でも、もっとも日本らしい、すぐれたところのあるものとなっています。

十二一〇七 平安時代の終りから鎌倉時代にかけての藝術の中で、とくにすぐれたものの一つです。

十二二二 まき絵は、日本のすぐれた工藝品の一つで、古くから外國人にもてはやされてきました。

十三四四 この人は、すぐれた数学者で、また熱心な天文学者でした。

十三一八 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れない國民こそ、眞にすぐれた國民でしょう。

十四三六 わかしからすぐれた人たちは、星の光の中からふかい思想を読みとりました。

十五四七 「色なべしま」といわれる、色のはいったものが、いちばんすぐれていたという。

十五四八 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考え、

すける「挿」(下) 2 すける 《ゲ・ゲル》

四三二 その生徒さんは、すぐひもでげたのはなおをすげてやりました。

四三五 中学校の女の生徒さんが子どものげたのはなおをすげるあいだ、

すこい「凄」(形) 2 すこい 《イー》 ぐものすこい・ものすこさ

六三五 大風つて、こわいな。雲ないだりあれたり、海みたいなのさ。ほう、また、すこいのぐるぞ。

九二四 「すこい。」先生のからだは、美しくちゆうをとんでいく。

すこし「少」(副) 85 すこし

二39 すこし 休もうか。

二43 さあ、もうすこしのぼろろ。

二七〇 すこしたって、かげのほうで、「略」。「略」という声がする。

三二八 もうすこし おまちください。

四二四 もうすこしで、つかまりそうになったとき、またわの中ににげこみました。

四五五 かっちゃん、ねつがずっとさがって、まぶたをすこしひらきました。

五24 ㊦ せきをすこしあけてくれました。
 五29 ㊦ 店をですこしくると、
 五31 ㊦ ぼくにはすこしおもかったです、とてもうれいんです。
 五67 ㊦ 海はすこしあれていました。
 五96 ㊦ まだすこし早いようだ。
 五97 ㊦ 「じゃあ、もうすこしね。」
 六13 ㊦ もうすこしで口が水にとどきそうになったとき、足がつるとすべって、
 六29 ㊦ すこしでもいいから、わけてください。
 六104 ㊦ ただ、はながつまっているだけだが、そのために発音がすこしおかしい。
 六106 ㊦ いってから、すこしふしぜんだなと思った。
 七12 ㊦ 「略」というときの「手」は、またすこしちがいます。
 七13 ㊦ 「いますすこし、手をいれてみよう。」
 七32 ㊦ 空気にふれて、すこしずつのびるのね。
 七34 ㊦ もうすこし、中へはいれませんか。
 七36 ㊦ もうすこし、中へいれてくださいませんか。
 七36 ㊦ さぶろうさん、もうすこし、がまんしていらつしやい。
 七36 ㊦ なんだか、まわりがすこしゆるやかになり、からだがらくになったような気がしました。
 七66 ㊦ 青々とはれて、すすきすこしゆれている。
 八38 ㊦ すこしはある。
 八56 ㊦ すこし歩いてからふり返ってみると、足あとか曲がつている。
 八64 ㊦ でも、もうすこしだいてみましょう。
 八77 ㊦ あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあいているのをみつけたので、
 八95 ㊦ 水をとりかえるときにみたらもみのもとの

ほうがすこしふくらんでいました。
 八100 ㊦ どのなえからも、すこしずつ新しいなえができてきました。
 八103 ㊦ 花のさくのは、1日にすこしのあいだけだと思えました。
 九40 ㊦ すこし気がおちついてから、ぼくはあたりをみまわしますと、
 九50 ㊦ いろいろは、すこしいきますと、そこはもう、「ふえふきのたき」でした。
 九51 ㊦ まあ、もうすこしいってみよう。
 九51 ㊦ いろいろがまたすこしいきますと、
 九52 ㊦ まあ、もうすこしいってみよう。
 九52 ㊦ いろいろが、またすこしいくと、
 九53 ㊦ まあ、もうすこしいってみよう。
 九54 ㊦ いろいろがすこしいきましたら、
 九63 ㊦ こがね色のどんぐりどもは、すこしずつしずかになりました。
 九64 ㊦ 「略」やまねこがすこし心配そうに、
 九78 ㊦ もうすこしで貝づかに着くというところで、
 九78 ㊦ 先生は一けんの農家にたちよられました。
 九78 ㊦ きょうは、このかたの畑をすこしほらせてもらふことにします。
 九108 ㊦ 待て、待て、もうすこし上までいこう。
 九114 ㊦ 水ぐるま近きひびきにすこしゆれすこしゆれいるこでまりの花
 九114 ㊦ すこしゆれすこしゆれいるこでまりの花
 九121 ㊦ 水は、さらさらと走って、やがて、すぐ下のすこし大きな川に流れこんでいた。
 九125 ㊦ そこからさらに、すこしさかのぼって水を飲んでみると、いい味は、すこしもなかった。

十56 ㊦ すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書きつけているその力に、おどろきました。
 十一44 ㊦ 弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進みました。
 十一45 ㊦ すこしぐらいのことだからといって、ごまかさなかつた弟よ。
 十一73 ㊦ 医者は、せいの高い、すこしかがんだ、まじめな顔をした老人でした。
 十一77 ㊦ そうして、なにかいおうとでもするようになり、すこしくちびるを動かしました。
 十一78 ㊦ すこしよくなるかと思えば、思いがけなくまたわるくなつたりで、
 十一78 ㊦ 一日に二ど、看護婦が持ってきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、
 十一80 ㊦ 病人が、しだいに、すこしずつものがわかりかけるようにみえたことです。
 十一80 ㊦ もうすこしのあいだですから。
 十一85 ㊦ ぼく、あしたうちへ帰りますから、もうすこしここにいさせてください。
 十二16 ㊦ 文雄は立ちあがってすこしはなれたところからじつとみつめた。
 十二19 ㊦ 毎晩鳴いているうちに、すこしずつじょうずになっていくようです。
 十二23 ㊦ やしきがすこし廣い、
 十二34 ㊦ 「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。
 十二40 ㊦ 両親は、なんとかして、すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、
 十二67 ㊦ のこぎりののは、いぬの歯のようにとがって、一つおきに右と左にすこしよじれて、
 十二77 ㊦ すこしばかり手ならしをしてから、休けい場にもどつてくると、

十二903 どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのようにとなえていたのでは、そのことばは、すこしの力も発きしないから
十三113 一つのことと他のこととの間に、すこしのつながりもなく、

十三554 園 もうすこし大きいがあるよ。

十四44 フランスのルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもって、

十四1410 園 もうすこしすれば、ごいっしょに一月をくらせるのだ、

十四169 園 すこしこみいりすぎているとお考えではないかと心配していました。

十四765 すこし高いところでは、反対の風がふいています。

十四866 いますこしふかく考えれば、さらにおもしろい場面が発見されるように思われる。

十五196 これは、富士山よりはすこし高く、

十五283 ある岩角のすこしあき地のあるところを目がけておりて行きました。

十五305 わしは、羽音はげしくすこし舞いたったかと思うと、

十五309 少年が女の子を後にかばうようにして、すこしあかずさつて、岩角へ身をよせかけたとき、

十五8211 チルチルとミチルと、いぬと、パンと、さとうとは、〈略〉、すこしはに cand、

十五889 チルチル、すこし横の方に立っているひとりの「幸福」を指さして、

十五891 園 あれはすこしひねくれ者で、子どもさんたちにしようかいするのはむずかしい。

十五915 園 わたしたちは、すこしの休みもなく、飲む、たべる、ねむる、

十五992 まえよりはすこしせの高いのが、

十五9911 チルチルすこし困って、「〈略〉」

十五10210 園 いつでもすこし悲しそうにしているのは、だれもふり向いてくれないからです。

十五1163 チルチル つつましくすこしさがっている「光」を指さしながら、

すこしも「少」(副) 19 すこしも

六1388 うさぎさんたちは、そのことをすこしも知りませんでした。

七875 うさぎは、すこしもじつとしていません。

八932 ほんとうに幸福であったが、すこしもいばらなかった。

九1236 茶人はすこしもくつせず、求め求めて、いつか、いまのしずおか縣のさかいもすぎ、

九1261 そこからさらに、すこしさかのぼって水を飲んでみると、いい味は、すこしもなかった。

十一217 金次郎は、すこしも休まず働くので、

十一2510 金次郎は、すこしもつかれたようすもなく、

十一881 その熱心とそのしんぼう強さとは、まえとすこしもかわりませんでした。

十二172 園 すこしも立体感がない。

十二206 園 わたしはこんなところがすこしもないようにしたいのです。

十二276 すこしもゆだんができません。

十二322 私は、どのようなおどろきとふしぎが私を待っているのか、すこしも知りませんでした。

十二811 日本という國をみたこともなく、また日本語をすこしも話せないこの二少年が、

十四58 しかし、フィリップのすなおな心は、まづしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

十四354 しかし、それだからといって、すこしも

かなしむことはありません。

十四923 おおみその晩だというのに、その子は、まだマッヂをすこしも賣ってはいなかった。

十五274 女の子は、〈略〉おどろいて氣でも失ったのか、すこしもさわがず、

十五747 それによって兄が特権を與えられねばならないという理由はすこしもない。

十五1213 けれども、思うことがすこしも書けていないことに氣がついた。

すこす「過」(五) 3 すこす『一シ』

十四110 うめは、いつもこのわる口のたてとなつて、幸吉をかばい、〈略〉、なん年かをすこした。

十四135 園 夜をどうしてすこしておいででしょうか、お知らせください。

十五805 それ以前は、おたがい他の國々のことはわからず、世をすこしてきたばかりでなく、

すこすこ(副) 1 すこすこ

五772 おじいさんは、すこすこと、おばあさんのところへ帰りました。

スコットランド(地名) 1 スコットランド

十四4410 スコットランドの西岸のおきあい、ローマン号という小さな汽船が、十ばいもある定期船につきあたつて、ちんぼつしてしまいました。

すさび ↓てすさび

すさり ↓あとすさりする

すさる ↓あとすさる

すじ「筋」(名) 3 すじ ↓くびすじ・ひとすじ
六1191 紙のうらには、まん中に、ま四角に切ったときにつけたすじがたてについています。

六1192 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。

八223 あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、

われめができました。

すじむかい 〔筋回〕(名) 1 すじむかい

四849 三ばんめに、すじむかいのみきこさんが、
しょうかをうたいました。

すじょう 〔頭上〕(名) 1 頭上

十三64 ひばりやつばめも、やがて、遠い國から
ここに帰って来て、私たちの頭上にとびかい、

すす 〔煤〕(名) 1 すず

四943 もくもくもくと、えんとつからすすが
とぶように、黒い、こまかいものがとんでい
る。

すず 〔鈴〕(名) 4 すず

四707 すずとかけて、なんととく。

九633 ぎよしやは、こんどは、すずをガランガラ

ン、ガランガランとふりました。

九634 すずの音は、かやの森にガランガラン、ガ

ランガランとひびき、

十五213 朝風にひびくすずの音、日光にかがやく

高山植物のかおり、

すずかせ 〔涼風〕(名) 1 すず風

十一351 日ましに日ざしが強くなり、いねはそ
だつし、あぜまめのびて、ふくすず風に夕はん樂
し。

すすき 〔薄〕(名) 6 すずき

四146 むこうぎしの、すすきのもさもさしてい
るところから、小鳥がとびたつた。

七664 青々とはれて、すすきすこしゆれている。

十594 〔こはんをたべてから、すすきを取って

おいで。〕とおっしゃった。

十5910 えんがわにつくえをだして、その上にすす

きをかざった。

十二949 すすきの野原を心にえがき、

十二10611 土ひょうは、はぎやすすきがさきみだれ
た秋の野原。

すずしい 〔涼〕(形) 7 すずしい 《イ・ーク》

一5110 すずしい かげが ふきこんで きたので、
目がさめました。

五203 しげった竹やぶの小道をとおったり、すず

しい川のきしを走ったりしました。

五1028 「ジャージャー、ジャージャー。」と、す

ずしい声で鳴きます。

八2311 虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれし

そうです。

九1208 あまいような、すずしいような、氣の晴れ

晴れするような味だった。

十一372 〔薔〕はぎの花ふく朝風も、音さえすずしく

なってきた。

十三336 夏の日には、この音がすずしい氣持をお

こさせ、

すすすす (感) 1 スススス

三362 〔薔〕トン、トン、ゴシゴシゴシ、スススス、

たいへんにぎやかでいそがしそうです。

すずなり 〔鈴生〕(名) 3 すずなり

六476 〔薔〕かきの秋 やまが、草屋のきまでたれ

て、かきはすずなり、夕がらす。

六481 〔薔〕ませたくびだす子うまの顔に、かきはす

ずなり、夕明かり。

九446 〔手〕まっかにじゅくした実がすずなりになっ

ているのを見ると、

すすみ・でる 〔進出〕(下二) 1 すすみでる 《一

デ》

七447 「〔略。〕」といって、青年のまえにすすみ

でた。

すすむ 〔進〕(五) 20 すすむ 進む 《一マ・一ミ・

一ム・一ン》↓つきすすむ

三812 そのうちに、雲は 雨をつれて、空をす

すんで いきました。

四391 ここまで 話が すすむと、

六667 どんなふうにお話がすすんでいくか、樂し

みではありませんか。

七388 しかし、弟の手をひいているので、ひとあ

しすすむにも、よいいではありません。

八163 だから、虫たちが、いいかげんにすすんで

いっても、なにかの木の根にいきあたります。

九248 日本に春がくると思うと、もう矢もたても

たまらず、北をさしてすすむのです。

九745 馬車がすすむにしたがって、どんぐりはだ

んだん光がうすくなつて、

九1056 はじめは二列ですすんだが、谷あいでは一

列になったので、ずいぶん列が長かった。

九14011 けれども、なんだか氣がすすみません。

十一777 〔薔〕ボートは向きをかえて、あふないところ

からぬけだして、新しい方向に進んでいく。

十一83 〔薔〕乗り組んでいる者が、みんなそろって、

一つの生きものみたいに進んでいく。

十一398 〔薔〕冬の用意もしだいに進み、あとはのみ

すりするばかり。

十一4410 弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進

みました。

十一454 弟は、さつさともとの自分の席にもどり、

そこからでなおして進みました。

十二415 手のひらに文字を書くことから、進んで、

手と手をにぎりあい、そのにぎりかたによって

「ことば」をとりかわすようになりました。

十三87 知識には、浅いものと深いものがあるが、

その深く進んだものを科学的知識という。

十三94 原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知って、ととのった知識とし、また、さらに進んだ研究をする土台にするのである。

十三910 知識が開けず、科学の進まないところには、迷信が行われる。

十三125 知識を廣め、学問を研究して、迷信をまったく去ってしまふようになれば、日本の國は、今日よりまだまだ進むことであろう。

十五7211 ドアをおして、つかつかと中にすすんだホランド博士は、客間に私をみちびき、

すずむし「鈴虫」(名) 1 すずむし

十一559 罫 すずむし、小むし、チックタック時計、一つ一つひびく。

すずめ「雀」(話手) 3 すずめ

二629 すずめ「ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。」

二647 すずめ「もう、『冬の國』も過ぎていく。」

二698 すずめ「まあ、うぐいすさんよ。」

すずめ「雀」(名) 19 すずめ ↓おやすずめ・こすずめ・ちゅんちゅんすずめ

二167 とんぼ ぼうししか からす すずめめだ かかめめじろ

三354 罫 やねのところで、すずめがないています。

五947 罫 「すずめの子らしいね。」

五9510 ひなはすずめではありませんでした。

五1032 すずめがきたとき、ひわが、「略。」と鳴いてみせました。

五1035 すずめは、「略。」と鳴きました。

五10311 さわがしく鳴いてみせますと、すずめは、おどろいてとんでいってしまいました。

七87 すずめが、ときどき、チュンチュンと鳴く。

七2110 罫 また、すずめがおりてきたよ。

七222 すずめは、ぴよんぴよんとんで、庭のはたけの中を歩く。

七223 罫 すずめが、だいこんの葉をみているよ。

七225 罫 にいちゃん、すずめはなににくるの。

七226 すずめが、ぱつと、とんでにげる。

八187 そのかわり、親たちの大てきのすずめもねこもやってこないから、安全です。

八215 目もよくはみえないらしいので、ねこや、すずめにみつけられたらたいへんです。

九302 罫 まえ向けるすずめは白し朝ぐもり

九1175 罫 たべのこしのめしつぶまけぼうちつどうすずめの子らと日なたぼこする

十五112 罫 人の家にさえずるすずめガラス戸の外に來て鳴け病む人のために

十五114 罫 わか草のはつかにもゆる庭に來てすずめあざりてとなりへとびぬ

すずめおやこ「雀親子」(名) 2 すずめ親子

四885 罫 すずめ親子のものがたり。

四896 罫 すずめ親子のねたあとは、さらさらさらと雪の音。

すずめさん「雀」(名) 1 すずめさん

二628 罫 すずめさんは。「すずめ「ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。」

すずめたち「雀達」(名) 1 すずめたち

七296 罫 それは、すずめたちにたべられないためだと、おかあさんが教えてくださった。

すすめる「進」(下一) 4 すずめる 進める「すすめる」おしすすめる

十四371 夫人は、略、その感動から研究を進めて、ついにラジウムを発見したのです。

十五511 日本についていろいろの研究を進め、日

本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、日本人のための英語教科書の編さんまでしたりした。

十五533 ポストン、ニューヨーク、ワシントンと無事に旅を進めて、

十五552 恩師ジョルダン博士は、そのためにはずを早くからすすめられていた。

すすめる「勧」(下二) 7 すずめる 《メーメル》

三1068 おじいさんは、かぐやひめにこのことをつたえてたびたびすすめました。

十一246 金次郎は、自分の考えをくり返し話して、母親にすすめました。

十一608 が、いま、友だちからすすめられて、ことうりかねてしまった。

十四321 さて、私は、あなたがたに星を見るようにすすめました。

十五451 私はハギンスというのですが、じつは、私のプリンクリーじいさんがね——」といって、

すすめられたいすにかけて、

十五517 主人は、新しい茶をハギンスにすすめながら、「略。」と、自分のことをうちあけた。

十五5410 私が一言も発しないうちに先手をうって、かたわらにあつたいすをすすめるのであった。

すすりなき・する「啜泣」(サ変) 1 すずりなきする 《シ》

十一7912 少年は、いすにぐったりと身を落して、すすりなきしました。

すすりばこ「硯箱」(名) 1 すずりばこ

十二878 手紙を書くとして、すすりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持っていくだろう。

すそ「裾」(名) 2 すそ

六318 きもののすそが風にあおられる。

十二531 (3) 顔は、着物のすそからさかさにいれて、首を着物にぬいつける。

スター ↓デビッドスター・ジョルダンはくし

すだち・する 「果立」(サ変) 1 すだちする 《—スル》

四803 す—すだちする ひばり。

すだ・つ 「果立」(五) 1 果だつ 《—タ》

十五749 親としてみれば、自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、社会に巣だたせたいのが念願である。

すた・れる 「魔」(下) 1 すたれる 《—レ》

十三254 しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水の害がのぞかれたので、すたれた都市はふたたびおこり、

スタンド (名) 3 スタンド

十二775 スタンドには、はじまるまえからたいへんな見物人でした。

十二819 私はスタンドから一心におうえんしている二少年のことを思つては、ふるいたって戦い、

十二834 スタンドの人たちは、われるようなはく手をふたりに送りました。

スタンフォードだいがく (名) 1 スタンフォード大学

十五524 そのころ留学生としてアメリカのスタンフォード大学に学んでいた私は、

ずつ (副助) 27 ずつ

三117 そこで、まいにち かしいでしをひとりずつ、はんたかのところへやって、

三928 みんきた人が一本ずつ おつてしまえばいまいにみんななくなつてしまふでしょう。

四855 (金) 「はい、三つずつ おとりなさい。」

七324 (金) 空氣にふれて、すこしずつのびるのね。

八59 そばにすえた小さなかごの中から、一わずつつかみだしては指さきへとまらせたり、

八194 ほそいくだのさきから、木の根のしるをわずかずつずつているせみの子たちは、

八6511 「へ略。」という、ひなたちも一わずつとびこんだ。

八992 あいだを30cmぐらいずつあけ、きそく正しく植えました。

八993 1かぶに3本ずつ植えたのと、1本ずつ植えたのと二とおりにして、くきの数のふえるようすをみることにしました。

八994 1本ずつ植えたのと二とおりにして、

八1002 どのなえからも、すこしずつ新しいなえができてきました。

八1016 1本ずつ植えたなえが、だいたい7本ぐらいにふえました。

八1017 3本ずつ植えたのは、9本ぐらいにふえました。が、いちばん多いので15本になりました。

八1062 1本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいついでいました。

八1063 3本ずつ植えたかぶには、

八1067 1本のほに、多いのは180ぐらいずつついでいました。

九425 (手) ぼくのうちでは、五日めごとにひとつねずつほりおこすことにしました。

九635 こがね色のどんぐりどもは、すこしずつしずかになりました。

十586 十まいずつたばにして、

十5811 おとなりのよし子ちゃんと、なお子ちゃんに、三たばずつあげました。

十一211 さかわ川のていほう工事があつて、どの

家からも、おとなの男の人が、毎日ひとりずつで働くことになりました。

十一802 病人が、しだいに、すこしずつものがわかりかけるようにみえたことです。

十二191 (金) 毎晩鳴いているうちに、すこしずつじょうずになつていくようです。

十二582 もしそれができたら、毎年ひとりずつ、おにに人間をくわせてやるというのであつた。

十三152 自轉といつて、一晝夜に一どずつ、自分で西から東へ一回轉します。

十五209 日に二どずつ、このふたりの子どもたちは、へ略、散歩に出て來るのです。

十五10712 (金) それは、毎日ぼくたちを照らす光に、二つ三つずつ新しい光線を加えていくのです。

すっかり (副) 38 すっかり

四579 すっかり用意ができると、みはりばんのがんたちもあつめました。

四1038 (金) もうすっかり元氣になったの。

五552 三十分ぐらいしかたつていなかったのに、もうすっかりくらくなつていて、

五676 (金) うちのおけは、もう、すっかりこわれてしまつてゐるんだもの。

五1054 それで、ひわは、すっかりそのまねができるようになりました。

六297 (金) お元氣どころか、このとおりすっかりよわつて。

六972 (金) あ、これですっかりくらくになりました。

七968 みんな、目があき、からだには、すっかり毛がはえました。

八62 私も、すっかりひきこまれて、しばらく見物したのち、その一わを買ひ、

八222 もうすっかりくらくになりました。

八236 やがておきなおったかと思うと、からだはすっかり皮からはなれていました。
 八288 そのおり物の美しい光に、天帝もすっかりおみとれになりました。
 八856 あひるの子は、水のおもてがすっかりこおってしまわないように、水の中をおよぎまわらなければならなかった。
 八921 新しいはくちようは、すっかりはにかんでしまった。
 八1058 どのいねのほも、すっかり黄色になっおじぎをしています。
 九314 ⑤ いまはもうかきの葉もすっかり落ちつくして、秋も終り近くなりました。
 九3410 ⑤ どんな小さな根っこでも、すっかりとりのぞいておかないといけないといわれて、
 九445 ⑤ いつのまにか葉がすっかり落ちつくしてはだかになった木の上に、
 九4810 けれども、いろいろが目をさましたときは、もうすっかり明かくなっていました。
 九13310 あみは、すっかりやぶれて、くもはそのまま地面に落ちました。
 九14710 こう決心がつくと、くもは、すっかりくもな気持になりました。
 十一839 ⑤ わたしは、これこのとおり、すっかりじょうぶになったよ。
 十一868 ⑤ ここへつれてきたときには、もうすっかりわけがわからなくなっていて、
 十二149 夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいたかれ草が、すっかりくちていた。
 十二769 曾良は、芭蕉の子どもらしい手すさびがすっかりうれしくなりました。
 十二866 夕日はすっかりおちてしまいました。

十三156 これで、夜と晝とがあるわけも、春・夏・秋・冬のあるわけも、すっかりわかったのです。
 十三247 植林が成功してから以後の農業は、すっかりわかりました。
 十三261 デンマルク人のたましいは、(略)、すっかり生まれかわりました。
 十三458 三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわかるように、くふうします。
 十四163 ⑤ 私がそばにいないことなど、すっかりおわすれ願いましょう。
 十四228 ⑤ それが長い間つかっているうちに、すっかりなれてしまつて、日本語になった
 十四4612 寒さも、つかれも、どこかへけしとんでしまつて、すっかり、よみがえったような気持になりました。
 十四618 ⑤ このかぼちゃは、お礼に、すっかり人間にあげてしまつても、さしつかえない
 十四9610 その女の子は、中のへやをすっかり見とおすことができた。
 十五453 徳川時代の長いしきたりが、明治になつてすっかりようすを変えてしまつたので、
 十五1076 ⑤ わるいなかまつきあつていたものだから、すっかりくさつてしまつたのですね。
 十五1085 ⑤ まあ、どうあなたがやつてみたつて、あれをすっかり見るには、まだ小さすぎますよ。
 ずっしり (副) 1 ずっしり
 十二728 ずっしりと重い、大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。
 ずってんころり (副) 1 ずってんころり
 六1367 こんどはたおれた木のみきにトンとけつまずいて、ずってんころりとこぼれました。

ずっと (副) 1 ずっと
 八248 ずっととびたつたかと思うと、その鳴いているなかまのそばへ、とんでいって
 ずっと (副) 31 ずっと
 三1076 ⑤ ひょうばんよりもずっとうつくしい。
 四559 つぎの日のあさ、かっちゃん、ねつがずっとさがつて、
 五904 ⑤ わしのおかあさんは、ずっとまえに、さどが島においでなされたことがあつた。
 六379 ずっと下にみえる夕やけの大通りを、豆つぶほどの自動車や電車が、(略)ゆききしている。
 六394 ⑤ あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。
 六5510 月は、もうさつきの枝のあいだにはなくて、木をずっとはずれてしまっていました。
 七715 そのずっと高いところでは、ひばりが一つ、さえずっている。
 八5811 みはらし台に立つてみると、目のまえに高い山々がそびえて、ずっとつづいている。
 八1011 ずっと日やりがつづいたので、水をやるとうれしそうです。
 九10611 いい先生も、ずっとうしろの方から、(略)とさげばれた。
 九1234 あともどりして飲んでみたり、ずっと上流へいつてためしてみたり、
 十273 ぼくは、いまままでに学んだ「自然の観察」を、ずっとつづけていきたいと思っています。
 十6511 ずっと、ひとりであらしてしまいました。
 十688 次郎かじやのほうが、太郎かじやよりも、ずっとおくびよう者でした。
 十一457 園長さんのまえにでて、だんをあがり、両手をずっとさしのべて、

十一885 その日も、その晩も、ずっとつきそって
いました。

十一885 そのつぎの日も、一日ずっとそばにいま
した。

十二214 文雄さんがりっぱな絵かきになるころ
は、わたしも、ずっと大きな木になって、

十二4712 時間をかけて絵をかくより、写真のほ
うがずっと便利なわけだけれど、

十三273 土べいの上から、えんじゅや、やなぎや、
ねむのきの枝などが、ずっとのびだしている。

十四105 五 ほのおがゆれたりしないとか、光を
ずっとやわらかくするために小さなかさがあると
か

十四652 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、ま
わりの空気にくらべてずっとかるいために、

十四688 これは、茶わんのばあいにくらべると、
しくみがずっと大きくて、

十四976 ゆかの上をよたよた歩いて、その女の子
の方へずっとよってくるではないか。

十五981 どのどって、やはり、お金持よりびん
ぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

十五1087 すすこに、ずっと後の方に、ペールを
かぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

十五1105 五 でも、あなたは、うちのおかあさんに
にているけれども、ずっときれいだもの。

十五1135 五 でも、ずっときれいだなあ。

十五1138 五 でも、ずっと色が白いな。

十五1144 五 でも、うちにいるときよりか、ずっと
お話がうまいな。

十五1203 校長先生のお話を聞いていると、ずっと
まえのことが思い出されてきた。

すっぱぬき [素破抜] (名) 1 すっぱぬき

十649 狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱ
ぬきや、ひやかしなどで、できているといっても
よく、

ステッキ (名) 3 ステッキ

九7811 そこへ着くと、先生はステッキを深く土の
中へお立てになりました。

九792 土はやわらかで、ずぶずぶと、ステッキの
たけいっぽいにはいります。

十五647 五 やえ子、ぼくのステッキを持っておく
れ。

すでに [既] (副) 4 すでに

十443 そのころ、幸吉は、すでにしらがの老人に
なっていた。

十二351 その日はすでに、私は、「ゆのみ」と
「水」とでたいへん苦しんだあとでした。

十三810 すでに知ったことを材料として、考えを
おし進め、

十三258 戦いによって失われたシュレスウィヒと
ホルスタインとは、すでにつぐなわれて、なおあ
まりあることになりました。

す・てる [捨] (下二) 9 すてる 《一テ》↓おりす
てる・かなぐりすてる・なげすてる・やきすてる

三563 三 うたをわすれたカナリヤは、うしろの
山に すてましょか。

五78 下水の水やうんがの水、きたないどぶ水を
ながして、海のおくにくすていく。

九775 五 その貝がらをすてたところが、きょうこ
れからいく貝づかです。

九7910 五 貝がらといっしょに、〈略〉、たべたけも
の骨や、角などを、ここへすてました。

九9510 やまだ、おこっけいきかけるが、思いなお
して、さっきすてたじょうぎをひろってくる。

九1251 茶人たちは、ここで船をすてて、岸にそっ
て上流に向かって歩きながら、

十7310 五 あまりの申しわけなさに、ふたりとも、
命をすてておわびをしようと考え、

十一293 金次郎は、また、人がすてておいたいね
のなえをひろって、

十五668 父は、同志社を守り育てるために、北海
の地をすてて、京都にすまいを移すことになった。

ずどん (感) 2 ズドーン

四495 「ズドーン。」下の方から、てっぽうの音
がひびいてきました。

四509 「ズドーン。」二はつめのてっぽうの音
が、ひびいてきました。

すな [砂] (名) 10 すな 砂

一529 五 かわらの すなは、みんなちいさなほ
しみたいですね。

三792 すなで、トンネルや、いどや、家や、道を
こしらえています。

七2311 五 ぼくは、びんの中をそうじして、砂に水
をやるから。

七243 兄は、しくびんの中の砂に水をやる。

七244 五 はい、だいこんの葉——どうして、葉を
砂の中に立てるの。

七755 五 砂のほかに、なにもみえない。

七8211 五 私がさばくを旅していますと、砂の上に
らくだの足あとがつづいていました。

十387 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものが
いりこみ、それに、貝のだす眞珠質がまきつき、

十一218 すこしも休まず働くので、かえって、お
となよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十三253 しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水
の害がのぞかれたので、

十四 63 12 すべて、まったくとう明なガス体の蒸氣

が、しずくになるときには、かならず、なにか、

そのしずくのしんになるものがあつて、

十五 40 3 あの有名な源氏物語や枕草子などは、

すべてこのかなによって書かれた作品である。

十五 74 8 親としてみれば、自分の子女にはすべて

同じ教育をほどこし、同じ機会を與えて、

十五 74 10 神の目から見れば世界の人類はすべてそ

の愛する子どもなのだから、

十五 74 11 四海の民すべて兄弟姉妹である。

すべらす [滑] (五) 1 すべらす 《一シ》

九 107 10 先生、もうすべらしてください。

すべらせる じふみすべらせる

すべり おちる [滑落] (上一) 1 すべりおちる

《一チ》

四 52 3 どうかすると、するりとすべりおちそう

になり、おんぶしている がんも おちそうに

なります。

すべりおちる [滑降] (上一) 1 すべりおちる

《一リ》

九 108 11 ぼくたち三四人は、列をはなれて、ま一文

字にすべりおちた。

すべりかた [滑方] (名) 1 すべりかた

九 113 5 午後は、先生について、ひとりひとり、正

しいすべりかたを教えていただいた。

すべりだい [滑台] (名) 1 すべりだい

五 79 11 波が、すべりだいをすべるように、らくら

くと流れていきます。

すべりだす [滑出] (五) 1 すべりだす 《一サ》

九 112 3 先生は、はちまきをして、すべりだされた。

すべり・でる [滑出] (下一) 1 すべり出る 《一デ

ル》

十五 21 2 朝ぎりの中から、白い雲のわきたつよう

に、すべり出るまっ白なひつじのむれ、

すべりはじめる [滑始] (下一) 1 すべりはじめ

る 《一メ》

九 109 5 やがて、十人、二十人、つぎつぎにすべり

はじめた。

すべりぶり [滑振] (名) 1 すべりぶり

九 110 5 そのみごとにすべりぶりにみとれていると、

先生たちは、もう目のまえにこられた。

すべりよい [滑良] (形) 1 すべりよい 《一サ》

九 107 8 いかにもすべりよさそうなけいしゃが、長

くつづいていてる。

すべる [滑] (五) 16 すべる 《一ッ・一ラー・一リ・

ール》

三 88 2 すべる、すべる、ながれる。

三 88 2 すべる、すべる、ながれる。

五 79 11 波が、すべりだいをすべるように、らくら

くと流れていきます。

六 13 8 足がつるとすべって、「あつ。」というま

に、川の中におちてしまいました。

六 63 8 手をあらって、しゃぼんを水の上へおいた

ら、つるつとすべった。

六 128 10 一びきのうさぎさんが、あわててにげたの

で、トンネルのさか道を足をすべらせて、

八 15 2 ようちゅうが、はいだして、あおぎりのふ

といみきをつたって、地面に向かって、すべった

りころがつたりしておりていきました。

九 105 9 スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくき

こえる。

九 107 9 先生、まだすべってはいけませんか。

九 108 8 「ようし、ここからすべりたいものはす

べってよろしい。」といわれた。

九 108 9 12 すべりたいものはすべってよろしい。

九 110 4 のだ先生がさきに、すぐつづいてほしい先

生がすべられる。

九 110 9 それから、ぼくたちは、登っていつてはす

べり、おりてはまた登った。

九 111 6 みんなそこへいくと、いま、いしい先生が

すべられるところである。

九 113 10 林をぬって長いきよりをすべるのは、ほん

とうにゆかいであった。

十 19 9 ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上

をすべっていく。

ズボン (名) 3 ズボン

九 61 9 よくみると、これはみんな赤いズボンをは

いたどんぐりで、

十四 20 11 ハーモニカ、シャツ、ボタン、ポケット、

ズボン、オーバー。

十四 23 10 クレヨン、ズボンはフランス語、

すまい [住] (名) 1 すまい

十五 66 9 父は、同志社を守り育てるために、北海

の地をすて、京都にすまいを移すことになった。

すま・す [落] (五) 1 すます 《一シ》

六 107 10 ぼくは、夜、勉強をすましてから、

すま・す [澄] (五) 1 すます 《一ス》

十五 3 耳をすますと、なにか、かすかな音楽がき

こえてくるようだ。

すみ [炭] (名) 1 炭

七 67 2 炭を切る音も小鳥の声も、夕がたになって

いる。

すみ [隅] (名) 7 すみ じかたすみ

三 33 9 へやの すみに、かれ木が 立って いま

した。

七419 かるやかなしらは、朝の光のように氣持よく、車中のすみからすみまで流れた。

七419 車中のすみからすみまで流れた。

九68 たかき 舞台のすみからボタンをひろつてくる。

十692 おいしいれのたなのすみに、だいいじそうにしまつてあつた、一つのまるいつぼをみつつけ、

十一7611 夜になると、少年は、へやのすみにいすを二つならべて、その上でねむりました。

十五934 いぬ ぶつぶついながら、テーブルのすみで、「略」。

すみ「墨」(名) 6 すみ

七621 すみをすっている。

九478 字はへたで、すみもがさがさして指につくくらいでした。

九938 新しいすみをひろいあげるが、自分の物ではないので、なおあたりをさがしている。

九944 たかき しばらくして持っているすみに氣がつき、ちよつとためらつたのち、「略」。

九9410 さがしていたすみである。

九9810 ぼくだつて、すみをみつめてやつたじゃないか。

すみがま「炭窯」(名) 1 すみがま

四877 すみがまの上に、雲がでています。

すみきる「澄切」(五) 4 すみきる 《一ツ》

八906 そのとたん、すみきつた水の上に自分のすがたのうつっているのをみた。

九273 秋晴れのすみきつた空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中にうつつて、

十一165 天と地にかがやくものの中で、いちばん清らかな、すみきつたま、それはおかあさまの

愛です。

すみこ「話手」 3 すみこ

三610 すみこ「たなびく かすみ」

三72 すみこ「さらさら、さらさらさら」

三75 すみこ「白いくものながれ」

すみこさん「人名」 3 すみこさん

二253 きょうは、いちろうさんと、さだおさんと、すみこさんと、略、この五人のぼんです。

二287 すみこさんのしたおはなし。

四242 すみこさんは、「いもうと」にあてて書きました。

すみこむ「住込」(五) 1 住みこむ 《一ン》

十二708 下男のように住みこんであげてもいいけれど、

すみずみ「隅隅」(名) 1 すみずみ

三10210 家のすみずみまで光りかがやくほどのなで、「かぐやひめ」という名をつけました。

すみつく「住着」(五) 1 住みつく 《一イ》

十五11512 人間が地上に住みついてからこのかた、すみっこ「隅」(名) 1 すみっこ

八806 それで、あひるの子は、すみっこにすわつてばかりいた。

すみなれる「住慣」(下二) 1 住みなれる 《一レ》

十二552 先祖代々住みなれた土地はもとよりのこと、自分の生まれたところは、なんともいえない暖かい感じのするものである。

すみやきこや「炭焼小屋」(名) 1 炭やき小屋

九411 思わぬところに炭やき小屋があつて、ゆるいけむりのあがるのがみえました。

すみれ「堇」(名) 6 すみれ

三93 すみれ、たんぼぼ、れんげそう、花の

おやねがうつくしい。

三522 ありは すみれの 花に のぼり、「高い、高い」といいました。

五477 たんぼぼがさいていたり、すみれがさいていたり、

十一911 看護婦が、小さなすみれの花たばを、ベッドの上のコップの中から取ってきました。

十一922 そういつて、すみれをベッドの上にちらしながら、

十三65 すみれ、たんぼぼ、わらびや、ふきや、たけのこや、ちようや、はち、

すむ「澄」(四五) 8 すむ 《一マ・ム・メ・ン》

六502 すんだ青さをもちながら、ときにはくもる畫の空。

八596 山の上には、青い空がすきとおるようになでいる。

八965 水のすむのをまつて、むらのないようになりました。

十一348 つゆ晴れ空はみどりにすんで、

十一378 こずえをかけるもすの音も、すむ秋空によくひびく。

十二754 そのしんとしたしずかさの中に、芭蕉は心をすませ、雪の句を考えました。

十三508 でも、水がすむまで見ているかもしれない。

十五167 少年たちよ、略、土ぼこり顔よくすとも、わするな、明かるくするながえ顔。

すむ「住」(五) 16 すむ 住む 《一ミ・ム・ン》

三1003 「竹とりのおきな」というおじいさんがすんでいました。

五653 海べに、おじいさんとおばあさんが、住んでいました。

五654 ふたりは、ふるい小さな家に住んでいました。

五773 みると、まえに住んでいた、ふるい小さな家がたっていました。

六673 あるところに、一ぴきの子ぐまが住んでいました。

八189 同じ地中に住むものでも、こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、

八724 そこにはかみが住んでいた。

八779 中には、おばあさんが、ねことにわとりといっしょに住んでいた。

十二578 昔、神山のおくにおにが住んでいて、

十二702 深川ふかがわの芭蕉はしゅうの家の近くに、曾良そらという人が住んでいました。

十二706 芭蕉はたったひとりで住んでいて、なにかにつけて不自由であろうから、

十二710 自分は、その近所に別に家をかりて住むことにしました。

十三279 ここに住んでいる子どもたちにとっては、かけがえのない、楽しい遊び場所であり、

十四307 小さな島國に住んでいたために、氣持までちっぽけなものになってしまったのでしょうか。

十四3412 したがって、その地球の上に住んでいる人間などは、

十五483 はん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、

す・む「落」(五) 30 すむ 《マ・ミ・ム・メ・イン》

四613 ともかく 食事をすませて。

四619 二十九わの がんが、食事をすませると、

四695 「ダンスがすんだ。」

五88 乗りください。

五149 おばさん、わざわざきてくださって、すみません。

五307 ほんとうにすまなかったね。

五5411 まさこをおかあさんにわたして、食事をすませてから、

五966 夏休みがすむころには、ひなはもう、かごの中をとおびまわっていました。

六902 すみませんが、そのいどの水を一ぱいください。

七234 おさらいを早くすませてから、お遊びなさい。

七239 もう、おさらいがすんだから、あおむしのせわをしよう。

七528 うれしいような、すまないような氣持がした。

七548 式をすませてもどつてくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、にこにこしていた。

七702 くれがたの庭そうじ、それがすむのをまっていたのか、

八104 いねの花のすんだあとをさわってみると、

十253 ひとりの工員がしごとをすませて、坑内から地上にでくる。

十486 私は、べつにいそぐこともありませんでしたので、妹の氣のすむようにして、つれていきました。

十一2110 しごとがじゅうぶんできないので、金次郎は、ほかの人たちにすまないと思いました。

十一228 わたしがみなさんのお役にたたないで、すみません。

十一341 ほたる追う夜も重なって、麦のとりいれことなくすめば、

十一396 おおむぎ・こむぎの種まきすんで、そらまめ・えんどうみなまいた。

十一414 もちつきすませて、しめなわをはり、一夜明けばうれしいはつ日。

十一909 きみの看病はすんだ。

十二165 下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。

十二199 一年一年とすんだことをかえりみて、

十二6012 それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。

十四201 そうじがすんだら、そのことについて話をしよう。

十四203 それで、みんなは急いでそうじをすませた。

十五411 ローマ字をつかうと、字数が少なくてすむばかりでなく、

十五901 ぼくは、ほんとうにすみませんが、ちよつとのまも行かれないのです。

すもう「相撲」(名) 2 すもう じおおすもう

十三5 じつは、だんなさまのおるすのあいだ、

私どもは、すもうをとって遊んでいました。

十一52 川口の子どもたちは、いつも砂原で、すもうをとったり、おにごっこをしたりして

すもも「李」(名) 1 すもも

五3910 こちらは、さくらの花も、なしの花も、すももの花も、《略》、いっぺんにさきだします。

すやき「素焼」(名) 1 すやき

十二1016 赤色のすやきの土人形で、高さは一メートルほどあり、

すら(副助) 3 すら

八715 親あひるですら、「略」といった。

十四8610 雪のむれが、道を消し、略、人をたおし、こえ死にさせてしまうことすらある。

十五45 図ときいきおいにまなこすら、その行く末を見ざりけり。

すらすら (副) 3 すらすら

十555 このごろ、私は、作文がすらすらと書けなくなりました。

十561 なんと、わけもなく、すらすらと書いていることでしょう。

十一588 「略」と、早口にすらすらといえるようになった。

すらりと (副) 1 すらりと

八238 みるまに、羽はすらりととび、からだの色もこなっていくます。

ずらりと (副) 1 ずらりと

九154 ときには、十ばも二十ばも、ずらりとならんでいることがあります。

すり (刷) (名) 1 すり

十三583 色のあるのは、その点はよいが、すり がうまくいかないから、また困る。

すり [擦] ↓てすり・ほおすり・ほおすりする・もみすり

すりあ・げる [刷上] (下) 1 すりあげる 《一ゲル》

十二1111 この浮世絵は、版画で、絵をかく人と、それを木にほりつける人と、紙にすりあげる人との共同作品なのです。

すりえ [摺餌] (名) 2 すりえ

五953 すりえをこしらえて、たべさせてみよう。

五954 たまごのきみですりえをこしらえて、たべさせてやりました。

スリッパ (名) 1 スリッパ

七604 スリッパのへりをひとまわりして、帰っていった。

すりもの [刷物] (名) 1 すりもの

十三559 絵はがきをそのすりものとくらべてみると、ずいぶんちがっているのにおどろきました。

する [刷] (五) 1 する 《一ツ》

十三533 絵は、はがきの上の方に、まるく原色ですってあります。

する [擦] (五) 3 する 《一ツ》ひききずる

七621 すみをすっている。

八1093 どんどんすっていたら、こんどはすぐにはげましたが、くだけた米もでてきました。

十四9710 女の子は、もう一本の、第三番めのマツチをすった。

する [為] (サ変) 1146 する 《サ・シ・ショ・シロ・スリヤ・スル・スレ・セ》

あくしゅする・あとずさりする・あともどりする・あんしんする・あんないする・いきいきする・いききする・いしくする・いちかいてんする・うずうずする・うとうとする・うんこうする・えいがかする・えいずる・えんずる・えんりよする・おあいする・おあげする・おいとまする・おうえんする・おおくりする・おおさわぎする・おかえしする・おききする・おきせする・おしあいする・おしょうばんする・おしらせる・おすわりする・おたずねする・おつきあいする・おつたえする・おつれする・おどおどする・おねがいする・おはなしする・おみせる・おわかれする・おんぶする・かいけつする・かいこんする・かいてんする・かげんする・かこうする・がさがさする・がっかりする・がっしゅうする・かつどうする・がまんする・かんけいし

る・かんごする・かんざつする・かんしゃする・かんしんする・かんにんする・きゅうていしする・ぎよつとする・きよろきよろする・きらきらする・くしゃくしゃする・くしんする・ぐずぐずする・くちごたえする・くつする・くふうする・くろうする・けいこする・けいさんする・けっしんする・けつする・けつせきする・けんかする・けんきゅうする・けんぶつする・ごあんないなさる・こうかいする・こうこくする・こうして・こうたいする・ごちそうする・ごぶさたする・ごろごろする・こんざつする・さいする・さいそくする・さつぱりする・さんしゅつする・さんせいする・さんぼする・しかえしする・しけんする・しじょうけいさんする・しつかりなさる・しつかりする・じつけんする・じつげんする・しつぱいする・しつぽうする・しつれいする・じめじめする・しゃする・しゃせいする・しゆくする・しゅつぱつする・しゅつばんする・じょうかいする・じょうきようする・じょうずする・じょうたつする・じょうちする・じょうとつする・じょうはつする・じょうりくする・じわれする・しんこきゅうする・しんずる・しんばいする・しんぶんはいたつする・しんぼする・しんみりする・しんようする・すいせんする・すすりなきする・すだちする・せいかつする・せいこうする・せいぞろいする・せいちようする・せいりする・せいつする・せつする・せつめいする・せわする・せんごする・そうじする・そうしたら・そうして・そうぞうする・そうだんする・そつぎようする・そんけいする・ぞんずる・たいいんする・たいする・たくする・だっこする・たつたする・たつちする・たびする・たむろする・たんけんする・たんじょうする・ちゅういする・ちようこくする・ちよつとし

た・ちらちらする・ちんぽつする・つやつやする・つるつるする・てまねきする・てわけする・どうして・どうしても・どきどきする・とげとげする・として・どりよくする・なかだちする・なかなかおりする・ななまわりはんする・にこにこする・につこりする・にゅういんする・にゅうがくする・ねっする・ねとまりする・ねんずる・ねんねする・ノックする・のびのびする・ばたばたする・はつきする・はつきりする・はっけんする・はっこうする・はっしやする・はっする・はっせいする・はったつする・はっぴようする・はばたきする・はやがってんする・はらはらする・はればれする・はんしよくする・びかびかする・びくびくする・びっくりする・ひっそりする・ひとしごとする・ひとねいりする・ひとまわりする・ひとやすみする・ひとりじめする・ひようげんする・ひよつとすると・ふさふさする・ぶらんこする・ふわふわする・ふんとうする・ふんわりする・ペンきようする・へんしゅうする・ほおずりする・ほごする・ぼんやりする・まんぞくしきる・まんぞくする・みぞれする・めいれいする・めんする・もくさんする・もさもさする・ゆききする・ゆらゆらする・よういする・ようじんする・よげんする・よこどりする・よろよろする・りかいする・りようする・りようする・れんしゅうする・わくわくする

—122 匳 ぼ かくれんぼ するもの、よつと
—236 ぼ、らっぱのようにしました。「くつがな
—238 では、あしぶみをしました。「はれたお
—252 「略。」たねまき する人、いえを たて
—445 。」という こえが しました。(二)
—533 匳 んのおみやげにしたいな。」と、わた
—617 匳 んのおみやげにしてください。」と

—652 匳 しな人。どうかしたの。「略。」「へ
—95 匳 ます。なんとかして、そろえる こと
—135 だけみどりいろを していました。おさ
—153 お月さまは、どうしたらえにかくこ
—163 、ことばあそびを しました。はじめに
—164 じめにしりとりを しました。ただおさん
—175 かんがえものを してあそびました。「
—223 匳 いろはあそびを しました。よしこさん
—231 匳 すのおそうじを するので、はとをだ
—248 匳 うんどうかいを するのですね。」五
—252 んに、おはなしを してきました。きょ
—257 いちろうさんの した おはなし。「略
—268 さだおさんの した おはなし。「略
—287 すみこさんの した おはなし。「十二
—308 匳 ずなのに、どう したのだらう。」「略
—319 匳 て、大さわきを しました。」(四)
—322 四 くにおさんの した おはなし。「ある
—337 匳 こんな はなしを していると、どしん
—338 匳 という おとが して きました。『略
—374 五 たけこさんの した おはなし。「略
—422 匳 だれかが ばかに するんだもの。』おと
—444 匳 また、かげえを して、みせてくださ
—482 においを かいだり します。それから、と
—483 へやへいこうと して、きゆうに たち
—484 えって 手まねきを します。二の ばめ
—499 んごを たべようと します。けれど、そ
—502 って、手まねきを します。四の ばめ
—513 たり、おどったり します。きゆうにお
—525 う、さちこの 声が します。「略。」さち
—594 匳 で べんきようを しました。三年生も、
—6610 匳 かで、春の 声が するよ。」みんなは、ひ
—678 匳 。」という 声が する。ぶた「おや、ひ

—686 匳 える。しずかに して。もつとしずか
—708 匳 。」という 声が する。この 声は ひと
—714 るように、小さく する。もくろく一
—115 やかさまは、どうかして はんたかを りつ
—116 を りっぱな 人にして やりたいと、お
—119 おしえる ことに しました。一年 たち
—125 匳 たしが はなしを して みよう。」とお
—1610 匳 に とだけようとして、手を ここまで
—197 しらべる ことに しました。えを か
—253 匳 を 切る ことに しよう。」みんなは び
—257 匳 の あたる ように する には 切る より ほ
—265 おした 木を、どう するか という ことに
—302 う だいで、作文を する こと になり まし
—318 匳 れいに そうじが して あります。一だ
—342 匳 リンの においが して きます。」「略
—344 匳 花の しゃせいを して いました。まっ
—346 匳 て、しゃせいを して いました。わた
—378 匳 を つける ように して、ねて います。
—387 匳 たのしい 学校に しまし しょう。きれいな
—388 いなきようしつに しまし しょう。」とおか
—411 匳 においが ぶんと します。「略。」いち
—489 が そのと おりに しますと、からだは
—6210 そろえて へんじを しました。みんなの
—648 匳 るぐるまわりを する ばかりだ。はじめ
—6710 げました。青々とした 中に、ふんわり
—769 匳 の 國で なにを するの。」こんどは マ
—795 まわりを みたり する ひまも ありませ
—7910 匳 どを いっぱいに して もらうんだから。
—805 匳 めちゃめちゃに されちゃった。」と、
—832 匳 は だいたい 色に する からね。」そのと
—894 匳 では、どんな 音が する でしょう。かいが
—915 匳 なかったら どう しまし しょう。この ポ

三九二 三 みきれをいれたりする小さな子が
 三九六 三 れたり、立ったりします。この「まい
 三九四 一 らのぞきこんだりしました。一どでも
 三九三 三 たちは、「どうかして、あんなにきれ
 三九二 三 ようには、だれもすることができませ
 三九一 三 ました。」「どうかして、かぐやひめを
 三九〇 三 いり口でばんをしていました。夜中
 三八九 三 くなつて、なにをすることもできなく
 三八八 三 めることもどうすることもできませ
 三八七 三 て、こうこうをしたいと思ひました
 三八六 三 ろもをきせようとすると、かぐやひめは
 三八五 三 はそのとおりにしました。すると、ふ
 三八四 三 ろのそうじなどもしてくれます。もし、
 三八三 三 どのべんきようをします。ここはえき
 三八二 三 、いったりきたりします。ここから、と
 三八一 三 、「みんなじつとしていたけれども、
 三八〇 三 かった。かくれんぼしたら、わたしが
 二七九 三 ことは、お話をするとおなじこと
 二七八 三 とねこねずみをしてあそびました。
 二七七 三 もぐりこもつとしました。みんなは、
 二七六 三 ません。お話をすると、みっちゃんか
 二七五 三 くるような気がします。お花をかざ
 二七四 三 りんご」に話をすると、お花をかざ
 二七三 三 またかけつこをしようね。林のむこ
 二七二 三 で、かけつこをしようね。」とおさ
 二七一 三 は、「雲」に話をすると、つもりで書きま
 二七〇 三 な。ふわふわとして、氣もちがいい
 二六九 三 いま、わたくしがしたいと思うことは
 二六八 三 て、くりひろいをするかな。ぶど
 二六七 三 ほりのてつたいをすることかな。とな
 二六六 三 つきりした返事をしてくれない。」せつ
 二六五 三 にかおみまいをしようではありませ

四三三 一 手 は、「しんせつにすること。」という
 四三二 三 つぎのような話をしました。「略略。」「へ
 四三一 三 ー」といおうとしました。そのとき、
 四三〇 三 いやしいまねをしてはいけませんよ。
 四二九 三 りをころそうとしたとき、にいさん
 四二八 三 枝をおろうとしたとき、おじさん
 四二七 三 先生になつたりしてくれます。あな
 四二六 三 のようになつたりしました。ときには、
 四二五 三 でとぶことにしよう。」みんなは、
 四二四 三 ながおしまいにしてくれつていった
 四二三 三 ったから、そうしたんじゃないか。」
 四二二 三 おつかけてきやしないかと思つてね。
 四二一 三 ばんせんとうにしてくれつていった
 四二〇 三 、十五ばんめにして、とぶことにし
 四一九 三 て、とぶことにしようじゃないか。」
 四一八 三 からねらいうちをされるからです。山の
 四一七 三 なり、さきになりして、はげましはげ
 四一六 三 って、にげようとするものはありませ
 四一五 三 りません。どうかすると、するりとす
 四一四 三 には、こんもりとした林がありました
 四一三 三 ちでみはりばんをしました。その夜は、
 四一二 三 う木のはの音がしましたが、それは、
 四一一 三 がつてはぼたきをしたので、みんなは
 四一〇 三 んの全快いわいをしようということに
 四〇九 三 、花をかざつたりしました。すつかり
 四〇八 三 く、よきようをするよ。ねているう
 四〇七 三 えません。「どうしたんだらう。」「略
 四〇六 三 。」と、おいのりをしました。二十九わの
 四〇五 三 からぬけだそうとして、もがいている
 四〇四 三 は、三ばんめにしよう。まだ、からだ
 四〇三 三 「略略。」「るすをする。」「三組の「なぞ
 四〇二 三 こしらえることにしました。七いろ

四七六 三 。そ—そまつにするな学用品。つ—
 四七五 三 くじやくのまねをするからす。や—
 四七四 三 んじようのお話をしました。二ばんめに
 四七三 三 しろい紙しばいをしました。三ばんめに
 四七二 三 トランプあそびをしました。そのとき、
 四七一 三 ふわとながれたりして、だんだん下に
 四七〇 三 ったりはなれたりする。十うらしま
 四六九 三 「これこれ、どうしたのだ。」「子ども三
 四六八 三 「そんなことをしてはいけない。か
 四六七 三 「子ども四」どうしよう。」「子ども三」こ
 四六六 三 んな「うん、そうしよう。おじさん、お
 四六五 三 などもおじぎをします。うらしま」も
 四六四 三 いねいにおじぎをして、海の方へいっ
 四六三 三 が、海べでつりをしています。そこへ
 四六二 三 いっしんにつりをしているの、氣が
 四六一 三 やかなおどりをして、ごらんにいれ
 四六〇 三 かわたつことをして、おなぐさめい
 四五九 三 でもそのまゝにしておいていただき
 四五八 三 、どれほど苦心をしたことでしょう。
 四五七 三 いガラスは、どうしてこしらえたので
 四五六 三 ここまでたびをしてきたのです。け
 四五五 三 不自由な思ひをしました。もえてい
 四五四 三 か、よいにおいがしてきます。みると、
 四五三 三 うちのたからにしよう。りようしは、
 四五二 三 もつていこうとします。まつの木
 四五一 三 うちのたからにしようと思ひます。」
 五〇 三 なしそうなかおをして、空をみあげま
 四九 三 さあ、はいはいをして、たちちして、村
 四八 三 なさんで、苦勞をしてほつてくださった
 四七 三 たりとおつたりするのだ。」「略略。」「
 四六 三 銭でどこへでも旅をすることができま
 四五 三 五。そこへ、配たつをする人がきて、「略

518 11 。こんなだいにじにしてくれまますから、お
 519 9 らだされて、ほっとしていると、こんどは
 519 11 れました。配たつをする人は、自てん車に
 520 4 川のきしを走ったりしました。なしの花の
 525 4 会 るでにらめっこをしているようだったの
 528 6 会 。「略」。「どうしたのだね。」「略」。
 533 2 がったりさがったりして、荷物をつみこん
 534 7 、ごはんのしたくをしていらっしやいます
 535 3 のでしょう。なにをしているところでしょ
 536 7 では、石炭は、どうしてできたのでしょう
 538 4 うで、やはり先生をしていらっしやるので
 538 8 手 てあげよう。そうすれば、こちらのよう
 540 3 手 ほどたのしい氣がします。私のすきな花
 541 11 手 。みんなだいにじにして、こくばんのとこ
 542 3 手 ます。ひろびろとした、きれいなところ
 542 8 手 は、なえはこびをしています。つばめが
 542 10 手 、いったりきたりします。一日じゆうて
 543 1 手 じゆうてつだいをして、うちに帰るころ
 546 5 方でうぐいすの聲がした。「略」という
 546 8 がやんだ。しばらくすると、また、「略」
 549 1 できた。いい氣持がして、たのしくなった
 552 9 、「と、あいさつをしていく人もあります
 563 2 会 り、手をやったりしたじやありませんか
 563 3 会 「略」。「せわはしてやりました。けれ
 563 4 会 り、みがなったりしたのは、おかあさん
 564 3 会 たときからせわはしてきたが、日に日に
 564 9 会 かあさんも、こうして、まいにち、たっ
 566 9 、このふしぎな話をしました。「略」。「お
 575 5 会 さかなをけらいにしてやりたい。」おじ
 576 7 会 あなたをけらいにしたいといっています
 579 4 ったり高く鳴ったりしています。」「略」。
 579 6 がったりさがったりして、流れていきます

579 8 のびたちちんだりにしています。」「略」。
 580 6 きょうは大そうじをしました。ゆかをきれ
 582 3 会 をたべないようにすること、夜は、はら
 582 3 会 らまきをきちんとして、ねびえをふせぐ
 583 3 会 て、先生をまん中にしてならびました。先
 584 2 土 夏休みになにをするか、みんなで話し
 585 9 会 んがいない。どうしたのかい。」「略」。
 588 7 会 おもりのしかたをしてみせてあげよう。
 588 11 会 りました。「こうして右の手でだいてな
 590 6 会 いつでもおじぎをするのだよ。」「略」。
 597 8 えでの枝で休んだりしていききました。「略
 598 10 た。パタパタと音がしましたので、みんな
 599 1 で、ひわをとろうとしていました。」「略」
 599 3 たのところにけがをして、ころがつていま
 599 5 りをつけてやったりしますと、やっと生き
 599 6 返りました。二三日すると、ひわは、もと
 5101 7 うけんめいにまねをします。鳥かごは、お
 5102 6 ひわは、そのまねをして、「略」と、す
 5102 9 さんが、せんたくをしますと「略」と、
 5102 11 「と、ひわもまねをします。かえでの木に
 5105 7 、いつもそのまねをしては、ひとりよろこ
 5107 2 会 だめだから。こうしていつまでも、ここ
 5109 5 「略」と、まねをしました。「略」。「お
 567 3 にパタパタと足音がして、小さな子どもが
 568 3 でそれをつまもうとしたが、あまり小さい
 563 6 むいて水をもうとしました。もうすこし
 567 8 つまって、音楽会をしています。あるきり
 567 7 会 か。」「みんな「そうしよう、そうしよう。
 567 7 会 そうしよう、そうしよう。」テーブルの
 567 7 会 たらくやくそくをしているのです。」「
 567 7 会 るそろろはんにしようか。」「あり二、
 567 7 会 あり二、三「そうしよう。」「あり一は、

567 5 会 げでさ、いまこうしてあたままることも
 567 5 会 ていねいにおじぎをしながら、「略」。「あ
 567 5 会 す。」「あり二「どうしよう。」「あり二「かわ
 567 5 会 のびたちちんだりする。6「略」。「7
 567 5 会 り、小さくなったりする。口をもぐもぐさ
 567 5 会 さんです。」「どうしたの、いったい。」「
 567 5 会 それをつつむようにして日がくれる。美し
 567 5 会 三人が、かげふみをして遊んでいました。
 567 5 会 、「と、手まねをしました。ふたりは木
 567 5 会 たりはそのとおりにしてみました。すると
 567 5 会 枝のあいだにじっとしています。雲はさ
 567 5 会 。」「略」。「こうするとよくわかるのね
 567 5 会 聞を発行することにしました。かべ新聞第
 567 5 会 ゆんにへんしゅうをすることにきめました
 567 5 会 った、どんなものにするかといろいろ相
 567 5 会 しました。手わけをして、やっとつぎのよ
 567 5 会 ろう。だれがねむくするのだろう。(いし
 567 5 会 はなあに。二一上にすれば下になり、下に
 567 5 会 れば下になり、下にすれば上になるものは
 567 5 会 のです。そのようにして、どこまでもお話
 567 5 会 「略」。「お話もしたら、なおおもしろ
 567 5 会 ま、どんなお話をするだろう。」「そこへ、
 567 5 会 だるまが、お話をすればいいって、いつ
 567 5 会 あるから、お話もするかもしれないよ
 567 5 会 雪だるまはお話はしないけれども、はる
 567 5 会 が、なにかお話をしてあげたらどう。」「
 567 5 会 元氣のいい顔つきもしていないはずだ
 567 5 会 ちは動いたり息をしたりするから、生き
 567 5 会 いたり息をしたりするから、生きてい
 567 5 会 なことをきいたりして。」「略」。「略
 567 5 会 り大きくなったりにしているものは、みん
 567 5 会 雪だるまは動きもしないし、息もしてい

六七六 会 もしないし、息もしていませんね。」「へ
六七九 ぬは動かし、いきをするから命がある。う
六八〇 会 、動いていても息をしないから、命がない
六八二 会 けれど、息はするでしょう。だれが
六八三 会 た。ごろうは、息をすることも自分の力で
六八四 会 うだ。それがどうした。」「ほおりの「お願い
六八五 会 こと」「一どつりがしたいのです。」「ほ
六八六 会 「そんなにつりがしたいのか。」「ほお
六八七 会 をとられた。どうしよう。困ったな。」「
六八八 会 小鳥一わとれやしない。さ、弓矢を返
六八九 会 わけないことをしてしましました。」「
六九〇 会 た。」「ほおりの「どうしたのだ。」「ほおりの「つ
六九一 会 。どんなことでもして、おわびいたしま
六九二 会 いどの水をくもうとする。いどの水をみて
六九三 会 げながら、おじぎをする。」「ほおりの「すみませ
六九四 会 つは、海でつりをしていたら、つりばり
六九五 会 。」「魚たちが合唱をする。みことは、それ
六九六 会 さねたりべつべつにしたりして、つくえの
六九七 会 りべつべつにしたりして、つくえの上をみ
六九八 会 けしきをのぞいたりしていた。そのうちに
六九九 会 るけしきを、大きくしてみようと思つて、
七〇〇 会 くは、もう、じっとしていられなくなった
七〇一 会 て、動かないようにした。これで、一本の
七〇二 会 をとりつけた。こうしてできた二本のつ
七〇三 会 ばしちぢめたりすることができた。」「へ
七〇四 会 さんは、目をまるくして、「略。」「略。」「略
七〇五 会 さん。大きな声をして。」「略。」「ほく
七〇六 会 んをひっぱるようにして、つれてきた。そ
七〇七 会 みんなで大わらいをした。弟のことばをま
七〇八 会 ぼくもひとつまねをしてやろうと思つた。
七〇九 会 んでいるような気がする。そこでぼくは、
七一〇 会 息がもれないようにして、「ナ」「ノ」「

六一一 弟は、こんなふうにして、「はな」といっ
六一二 会 、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい
六一三 会 じつに苦しい。そうすると、ナニヌネノと
六一四 会 えると、弟のまねをしてみんなをわらわ
六一五 会 ま四角な紙と、骨にするほそい竹二本と、
六一六 会 らい顔をかくことにしました。クレヨンで
六一七 会 かさで、まりなげをしたり、フットボー
六一八 会 り、フットボールをしたりして遊びまし
六一九 会 ットボールをしたりして遊びました。そこ
七二〇 会 わつてたべることにしました。」「略。」「そ
七二一 会 うさぎさん、なにをしているの。」「略。」「
七二二 会 こんどは、なにをしようか。」「略。」「
七二三 会 こで、かくれんぼしよう。」「略。」「へ
七二四 会 した。」「略。」「しよう、しよう。」「へ
七二五 会 略。」「しよう、しよう。」「略。」「へ
七二六 会 な声でじゃんけんをして、おにをきめまし
七二七 会 、またはじめようとしたとき、トンネルの
七二八 会 ろで、だれかの声がします。それはたぬき
七二九 会 。」「略。」「どうしたの、たぬきさん。
七三〇 会 、じつとじつかにしていたいんだよ。」「
七三一 会 われてなんかいやしいんだ。このトン
七三二 会 くるならんで、話をしました。」「略。」「へ
七三三 会 「こんどはなにをして遊ぼう。」「略。」「
七三四 会 の山のてっぺんにしよう。いいかい。」「
七三五 会 略。」「といおうとすると、うさぎさんた
七三六 会 い。どうだ、こうしては。」「しかさんは、
七三七 会 かないません。そうすると、自分たちは、
七三八 会 のもつともとくいとすると、自分たちは、
七三九 会 と、ひとをばかにしている。ようしやは
七四〇 会 ゆっくり休むことにしました。ところが、
七四一 会 とらさんは、晝ねをしていたのですが、う
七四二 会 あまりガヤガヤ話をするので、目をさまし

六三九 だり、足をもんだりしていました。とらさ
六四〇 会 神さまにおいのりをしました。そのとき、
六四一 会 、いまたべようとしていたところだ。よ
六四二 会 たり、下になったりしました。そのあいだ
六四三 会 かにしんこきゅうをした。」「略。」「かしの
六四四 会 ういたりしずんだりしながら、光の中をお
六四五 会 生にさようならをして走って帰る子ども
六四六 会 える。バケツの音もする。水の音もする。
六四七 会 音もする。水の音もする。学校のにおいが
六四八 会 する。学校のにおいがしてくる。しおがひく
六四九 会 ちほ、どこにどうしているだろう。もう
七〇〇 会 木は、あくびを一つして、しめっぽくなっ
七〇一 会 略。」「とかいたりします。私どもの手が
七〇二 会 まざまなはたらきをするように、「手」と
七〇三 会 まざまなはたらきをしてくれませう。つぎの
七〇四 会 、この実はなににするんですか。」「先生
七〇五 会 どんなかっこうをして、みつをすうか、
七〇六 会 よ。」「兄しずかにして、みていてごらん
七〇七 会 ん、すずめはなににしてくるの。」「すずめ
七〇八 会 にいちゃん。なににしてくるの。」「兄あ
七〇九 会 しをとって、どうするの。」「兄すずめ
七一〇 会 になる。母「なにしてるの。おさらいを
七一一 会 あおむしのせわをしよう。はるお、だい
七一二 会 ちゃん。」「兄どうしたのさ。」「はるお「あ
七一三 会 たてる。母「どうしたんです。そんな大
七一四 会 きな声をだしたりして。」「はるお「い
七一五 会 むりにわりこもうとする男の人もあり、足
七一六 会 略。」「頭の上で声がしました。すぐうしろ
七一七 会 さんも、「どうかして、中へいれてやれ
七一八 会 になったような気がしました。私は、さぶ
七一九 会 だひとり、わらいもせず、両方の手でま
七二〇 会 かきわけていこうとしました。しかし、弟

七38 11 ㊦ 「さあ、リレーにしよう。」といったか
七41 11 曲であつたが、旅をしてきた私には、しみ
七43 4 ㊦ も心ざびしい旅をしていました。けれど
七43 5 ㊦ は、楽しい旅行をしております。どこの
七44 6 ㊦ 、「こあいさつをします。」といって、
七45 10 といつて、おじぎをした。「略。」これを
七46 2 は、またはくしゅをした。青年は、アコー
七47 4 り書きあらわそうとすると、文章が、だん
七47 8 す。心がはつきりとしていますと、文章も
七49 6 村の学校としあいをした。これも勝った。
七50 6 学校とが、しあいをすることになった。ぼ
七51 2 ㊦ 、「じゃんけんをして、いいほうのボー
七52 8 まないような氣持がした。第二回は、に
七54 7 まって、終りの式をした。ぼくは、うれし
七55 2 、「文章は、くわしくしさえすれば、はつき
七55 2 は、くわしくしさえすれば、はつきり写し
七55 10 動場で、たいそうをしています。一年生の
七57 2 が、くるくるまいをしてとんでいる。ろう
七58 2 ぼめがちゆう返りをした。あさがおの花が
七59 7 ろで。ボタンと音がして、まりが、そとか
七60 1 やんたちの話し声がする。考え考え歩きま
七60 8 ても、ポトンと音がする。さきだけみえる
七67 8 でだんだん肉づけをし、しだいに、その人
七72 2 そんな大きなりをして、子どものように
七77 1 いだすようなふうをして、旅人「そうして、
七80 6 ㊦ 宣「それで、どうした。」乙「目がさめて
七87 2 しらべてみることにしました。きょうは、
七87 5 は、すこしもじつとしていません。いつも
七88 2 黒と白が、けんかをしてたべました。5
七91 4 くるいをやるようにして、ぬれた草はやら
七92 2 さぎ小屋のそうじをしました。小屋からだ
七92 6 わらを足でけったりして、あばれました。

七92 10 cmでした。そうじをしようと思って、首の
七94 2 うさは耳にけがをしました。ほかのうさ
七94 3 ないで、いたそうにしていました。9月
七95 10 とのは黒っぽい色をしていました。11月
七95 10 た。 おやうさがしたのです。 もくろ
七97 8 が、ちちをもうとして、親うさぎのちち
八6 11 おしうばんしたりしました。客がきてい
八7 2 うぎのわるいまねをする、「略。」とし
八7 4 れば、指で追ったりしました。すると、だ
八7 6 からころげ落ちたりしました。朝の早い
八8 2 、「と、きいてみたりするのです。「略。」
八9 8 り頭をつつこんだりします。といえ、い
八10 1 かつていこうとさえるのです。うちの中
八10 3 かつたりおこつたりすると、赤い口をあけ
八10 4 おどしたりかんたりします。そのかつこう
八10 5 です。また、どうかすると、歩いてい
八10 6 の指をつついたりするのです。ピオのゆ
八10 9 、小さなかつこうをしていながら、毎日な
八10 10 せたり感心させたりします。ところが、あ
八11 8 えあけたりとじたりして、からだをふるわ
八12 3 ましたが、もうどうすることもできません
八15 2 たりころがつたりしておりていきまし
八17 9 じのようなかたちをしています。大きく
八21 2 (二) あめ色をした六本足の虫が、こ
八21 2 の虫が、こしを高くして、ひょっくりひょ
八21 7 さいくなかつこうをして、それにはいが
八23 2 つとそり返るようにして、頭をうしろにさ
八24 3 ようも、はつきりとしてきます。黒いこ
八24 5 なります。しばらくすると、れいのおおき
八24 8 ました。はばたきをして、すつととびたっ
八27 3 歌ったり、花つみをしたりして遊んでいま
八27 4 り、花つみをしたりして遊んでいました。

八28 11 ㊦ のむすめは、こうしてはたらきつづけて
八30 8 の川へ落ちこもうとしましたが、そのせつ
八33 3 のように、ぼうつとした銀の川のような光
八34 1 大きな單位をもとにして計ります。それは
八34 11 、「光年」を單位として計算しなければな
八36 5 よは、いったいどうしたもたれているの
八39 2 ㊦ 、「略。」「どうすれば満足なざるので
八39 6 ㊦ その願いどおりにしてあげましょう。」
八41 1 をおのみになろうとすると、コーヒーはこ
八42 2 王女はなんの返事もしません。王女は、か
八45 4 より集まって、どうしたら王さまのご病氣
八45 9 ㊦ するのです。そうすればすぐおなおりに
八46 10 だちがいなかつたりしました。けらいたち
八46 11 たちは、足をぼうにしてさがしまわりまし
八47 2 、「王子も、なんとかして父の病氣をなおし
八49 1 ろりと横になろうとしているところでした
八50 3 じきのようなりをしました。だれかがき
八50 6 んなまずしいなりをしていても、それでも
八53 2 りをぬすんでいきはしないかと思つたので
八55 1 も楽しそうに晝ねをしていました。「幸福
八56 7 まつの木を目あてにして歩きだした。まえ
八56 9 とられて、わきみをしたあたりが横にそれ
八57 4 、あれを目じるしにしてやってみよう。小
八57 7 じいさんにその話をしたら、おじいさんは
八60 5 りは、長い赤い足をして歩きまわっていた
八63 11 ㊦ だから、どんなにしても思いきつてはい
八64 1 ㊦ っではいるようにしてやるのができな
八64 3 ㊦ 略。」といつたりして教えたのだが、だ
八64 10 た。それから二三日して、とうとうその大
八65 5 ㊦ てこんなすがたをしていない。ほんとう
八68 3 ㊦ にもわるいことをしないのですから。」
八70 4 り、つつつかれたりした。しちめんちよう

八七〇 六 っ、顔をまっかにしてやってきた。あわ
八七六 会 ろにいてくれさえすればいい。」といっ
八七四 四 まわりにまちぶせをしていた。あしの上に
八七五 八 ぬもかみつこうとしない。」しばらく、
八七五 一〇 く、じっとしずかにしていた。そのあいだ
八七六 二 をきった。しばらくして、やととひっそり
八七七 一〇 は、せなかをまるくしたり、のどを鳴らし
八八〇 一 会 、せなかをまるくしたり、のどを鳴らし
八八〇 二 会 、火花をだしたりすることができると、に
八八〇 九 りに思わずその話をした。「略。」と、に
八八一 一 会 「おまえさんは、することがないから、
八八一 二 会 生みなさい。そうすれば、そんなことは
八八一 七 会 だり、もぐったりするのがいい氣持かど
八八一 九 会 こうな人はありはしないから。」「略。」
八八二 二 会 ことはいいわなとしても、おまえさん、
八八二 四 会 。人がしんせつにしてあげるときは、喜
八八二 六 会 ちのなかまいりをしたんだもの。それな
八八二 一七 会 だちはみんなそうしたものだ。まあ、
八八三 五 よいだりもぐったりした。けれども、すが
八八三 六 のけものあつかいにされた。(四) 秋
八八六 一 れたまま、身動きもせずたおれてしまった
八八六 五 いっしょに遊ぼうとしたが、あひるの子は
八八六 一七 子をつかまえようとして、ころげまわって
八八七 二 ったりさけんだりした。おりよく戸があ
八八七 七 会 うひもじい思いをしたりするよりは、あ
八八七 八 会 じい思いをしたりするよりは、あの鳥に
八八八 一 会 んでしまった。どうしていいのかわからな
八八八 四 り、あざけられたりしたときのことを考え
八八八 三 は、種もみひたしをしました。品種は、あ
八八八 八 っばいいれ、ふたをして日かげにおき、と
八八八 九 りかえました。こうすると、なわしろにま
八八八 一〇 いので、もみまきをしました。種もみひた

八八六 二 た。種もみひたしをしてから、ちょうど10
八八八 四 たので、しろかきをしました。いねがよく
八八八 六 をくだいてこまかくしました。種まきのと
八八八 九 えたのと二とおりにして、くきの数のふえ
八八八 一〇 ようすをみることにしました。やく12平方
八八八 一六 のなえも生き生きとしています。根が横へ
八八八 二四 でした。田植えをした日から、ちょうど
八八八 二五 。みんなで虫とりをしました。いねは、だ
八八八 二六 色になっておじぎをしています。1かぶの
八八八 二七 23度 いねかりをしました。いねを根も
八八八 二八 19度 いねこきをしました。いねこき
八八八 二九 に、手でいねこきをした人もいました。ぼ
八八八 三〇 きようはもみすりをしました。きかいがな
八八八 三一 、すぐにもみすりをしてみました。どんど
八八八 三二 てすぐ、もみすりをするものではないと思
八八八 三三 た、ちがった感じがします。みどり色の
八八八 三四 三色の組みあわせにしたら、二色のとき
八八八 三五 つとちがった感じがするにちがいありませ
八八八 三六 とはちがった感じがします。三音、四音と
八八八 三七 らにちがった氣持がします。オルガンのほ
八八八 三八 。このことばを耳にしたり、文字でよんだ
八八八 三九 り、文字でよんだりしますと、夜のしずか
八八八 四〇 「風」を「朝風」として、これにいろいろ
八八八 四一 っているような氣がした。ただ一つのたい
八八八 四二 、音などはけつしてするものではないが、
八八八 四三 さえあります。こうして、大ぜいのつばめ
八八八 四四 なにかしら相談でもしているようにみえま
八八八 四五 。これからいこうとする遠い國のことを、
八八八 四六 もいって、冬ごしをします。つばめは、鳥
八八八 四七 んでつばめのせわをする返事をしました。
八八八 四八 のせわをする返事をしました。それと同時に
八八八 四九 いるつばめのせわをすることを、新聞に廣

九二一 一七 行機をつかうことにしました。航空会社で
九二二 四 くべつにあたたかくした貨車を一つつけて
九二六 四 文 子もりするしずかなる月なの
九三二 二 会 をとりにつたりするので、まえより元
九三三 四 会 んのおてつだいをしました。ちよまを植
九三六 一七 会 たくてあまい味がしました。小さい妹の
九三八 七 会 ひっかけるようにして、下から力をいれ
九三八 九 会 ポキンという音がして、ガサガサと落ち
九三九 一〇 会 にしがみついたりしました。下では、兄
九四二 五 会 ほりおこすことにしました。苦勞してか
九四二 八 会 んなでもないほりをしました。大きなうね
九四三 一〇 会 から、ほしがきにするために、母がかわ
九四四 二 会 ては、ままごとをして遊びます。母やお
九四四 九 会 んにあつてお話がしたいと思いました
九四四 一〇 会 きくなつて農業をするために、いま知り
九四五 一〇 会 の家でみないをしをしています。「小公子」
九四七 六 会 めんどうな裁判をしますから、おいでな
九四八 三 、とんだりはねたりしました。ねどこにも
九四八 五 やまねこのにやあとした顔や、そのめんど
九四八 九 うは、顔をまっかにして、あせをほとほと
九四八 一〇 っ、目がちくつとしました。そこは美し
九四八 一七 会 いだしながら返事をしました。「略。」す
九四八 一八 会 男はまたいやな顔をしました。「略。」そ
九四八 一九 会 顔じゅう口のようにして、にたにたわら
九四八 二〇 会 ていねいなおじぎをしました。いちろうは
九四八 二一 会 色の目をまんまるにして立っていました。
九四八 二二 会 んになかなおりをしたらどうだ。」やま
九四八 二三 会 んになかなおりをしたらどうだ。」する
九四八 二四 会 んになかなおりをしたらどうだ。」い
九四八 二五 会 とおりです。どうしたらいいでしょう。
九四八 二六 会 ろしい。しずかにしろ。申しわたした。
九四八 二七 会 りどもは、しんとしてしまいました。そ

十315 の友だちとなかよくして、助けあっていき
 十316 口をいわないようにしたいし、自分のもつ
 十319 り、人をだましたりしないで、ありのまま
 十333 気持ちがいつかにされるのをみて、父は
 十336 うな研究熱は、どうすることもできなかった
 十339 たり、なぐさめたりしたのは、母であった
 十341 けつしてゆるがせにしてはおかれない。い
 十342 なぬのの織りかたをしていたのでは、やが
 十348 の力で動かすようにしたかった。機械で動
 十355 た身のせまい思いがした。機械は、どれひ
 十357 吉は、もう、じつとしていられなくなり、
 十358 吉は、もう、じつとしていられなくなり、
 十362 だれひとりあいてにしてくれなくなり、ま
 十385 る、ふしぎな宝石とされてきたが、しらべ
 十401 たとえ、はきだしもせず、死にもしないも
 十401 だしもせず、死にもしないものでも、あと
 十434 、幸吉は、くじけはしなかった。研究のた
 十454 イロン島をはじめとして、オーストラリア
 十4512 ることが、明らかにされた。そのうち、幸
 十4610 自然をあいてとして、真珠を世界の人
 十4612 たの光明を太陽とするならば、作製に失
 十484 り、そこで遊んだりしたからでした。私は
 十486 妹の気のすむようにして、つれていきまし
 十509 くようなかつこうをしました。「クッチケ
 十5011 やみのようなことをして、「フツ」と息を
 十515 いぬは、まばたきをしたきりで、そのパン
 十516 のパンをたべようとしません。「イラナイ
 十522 ちらを向かせようとしたら、「モット」こ
 十524 ようといいだしたりしていましたが、やっ
 十529 、はいつていこうとします。そのとき、私
 十535 ぬの動作をことばにして喜びました。その
 十547 のわきで、たき火をしていました。そのけ

十557 感じたり、考えたりしていることとは、ち
 十586 、十まいづつたばにして、赤いひもでい
 十5812 こったのをおし葉にしました。お月見
 十612 ても、せいくらべをしますよ。もう、たけ
 十614 いて、ガサガサ音がしたから、なんだろう
 十622 さまさまなしぐさをしたりするものですが
 十632 まなしぐさをしたりするものですが、かぶ
 十636 わかい男になったりするときには、おしろ
 十636 やべにでけしょうをして、その役らしく顔
 十648 美しさを現わそうとするのちがつて、狂
 十653 いたり、いたずらをしたり、また、とんで
 十655 など、よわい人間のしそうなことを、なん
 十656 かといって、なにをしてもにくまれない、
 十6511 こづかいをやったりしなければならぬの
 十664 に、「よくるすをするのだぞ。」といい
 十6611 声をそろえて返事をしました。そんなおそ
 十672 顔も向けられないようにしていました。でも、
 十674 、からだにさわりのしなないのだから、自分
 十681 れをあいつのようにして、ぬき足さし足で
 十703 うなあまみにおいがして、黒っぽいものが
 十705 などくつてありはしない。ひとつ、たべ
 十724 そんならんぼうをしては、いっそうしか
 十727 だんながだいじにしているあの湯飲み茶
 十728 、「こころ、さしずをされて、しかたなく、
 十731 じゃも、そのまねをして、おいおいなきだ
 十732 、ふたりともどうしたのだ。」だんなは、
 十7310 をすててお遊びをしようと考え、それに
 十1153 り、おにごっこをしたりして遊んでいる
 十1153 にごっこをしたりして遊んでいるが、そ
 十1169 りひき返そうとしたりするときには、
 十1169 返そうとしたりするときには、きつと

十11810 とき、ぼくらのしたいこと、ぼくらの
 十1193 ついていきさえすれば、だいじようぶ
 十1110 りっぱな運轉をする人になるだろうね
 十1113 人のような氣持のする日だ。丘の上の草
 十1119 をかしてやつたりしました。この人が金
 十1119 みんな流されたりしましたので、いつの
 十1119 もんは、なんとかして、からだをじよう
 十1120 らだをじようぶにして、身代をもとのよ
 十1120 代をもとのようにしたいものだ、ほね
 十1120 、家の手つだいをしてよく働きました。
 十1120 金をもうけたりもしました。金次郎が十
 十1121 休んだりむだ話をしているのに、金次郎
 十1121 らじを作ることにしました。これを持っ
 十1123 ません。「どうしたのです。おかあさ
 十1124 困るの。二三日したらなとおると思うけ
 十1125 かねないようにしましうね。」とい
 十1125 たり木を切ったりして、村の人に買って
 十1125 わらじを作ったりしました。ふつうの子
 十1126 ためには、学問をしなくてはならないと
 十1126 いっしんに勉強がしたくなりました。ま
 十1127 の子は、どうかしているのではないだ
 十1127 、こころ、うわさをしましたが、金次郎は
 十1127 、おもしろい藝をしてみせてくれます。
 十1127 れもないふうをしていました。金次郎
 十1127 米を自分のものにすることができました
 十1129 一ぴょうをもとにして、困っている人に
 十1129 ふやしていったりするうちに、三年めに
 十1134 そろって田植えする。きのうの畑は
 十1138 ききの人もえ顔して、その足どりも
 十1139 あとはみすりするばかり。山のも
 十1141 ろびあいさつをする。池にむすぶは
 十1142 えつけの用意をしよう。五 新しい

11442 元氣のいい返事をして立ちます。それを
 11449 ばれたような気がしました。弟は、すこ
 11458 ささげ持つようにしながら、席に着きま
 11459 した。私はほっとしました。そうして、
 11524 したりおされたりしなければならなかつ
 11527 たと落ちてきたりした。けれども、その
 11528 は、歯ぎしりでもするように車の音をた
 115911 いか、近道をしよう。」と、正男が
 11615 、「おまえはどうしたのだ。まえからあ
 11638 えぶかそんな目をしていました。少年は
 11655 い知らせをききはしまいかと、おそろし
 116711 、やせこけた顔をしている病人たちをみ
 11681 ば、びっくりでもしたように、大きくみ
 11702 、ひたいと弓形をしたまゆとのほかに
 11711 、「いったい、どうしたんですか。ぼくは
 11714 病人は、身動きもしないで、苦しうに
 11719 ました。「そうすれば、おとうさんの
 11726 ぼくの父はどうしたんでしょう。」と、
 117310 だ、まじめな顔をした老人でした。医者
 11748 にさわってみたりして、そうして、二こ
 11754 ぼくの父はどうしたのでしょうか。「へ
 117511 、「どうかよくしたいものだ。力をお
 11762 かになにといつてすることもできません
 11766 それを飲ませたりしました。病人は、と
 11768 たようなうすはしませんでした。でも
 11772 かわかりかけでもしたようにみえました
 11775 にかいおうとでもするように、すこしく
 117712 をみたような気がしました。そこで、少
 11786 わからなかつたとしても、病人がなんだ
 11787 った、しみじみとしたそのちょうしに、
 11806 のをいおうとでもしているように、いく
 11807 びるを動かそうとしました。それが、と

11808 かにもはつきりとしたので、少年は
 11818 あつくほうたいをしたひとりの男が、看
 11833 はいったいどうしたのだ。おまえはべ
 11839 かあさんはどうしているの。それから
 118311 ——みんなどうしている。わたしは、
 11843 ようすを話そうとしましたが、「略。」
 118710 と、病人はほっとしたようにみえました
 11884 にとはげましたりしました。その日も、
 11889 よいよくせわをして、ちよつとのまも
 118812 ものをいたげにしました。また、やさ
 118911 しめたような気がしました。「略。」と
 119512 ん、これも人のしたあとでは、なんの
 11967 具をかりることにしました。「略。」こ
 11975 の花の枝を手にはしましたが、なんのこ
 11991 ぼらしい身なりをした老人が、道路をう
 111012 ひろって、どうするのですか。」とき
 11114 もしけがでもしてはかわいそうです
 11143 いい。まだ青々とした木の葉の中から大
 11148 のころ、草とりをしてつみ重ねておいた
 11151 をとりのけようとすると、大きなえんま
 11157 な。そのままにしておいてやろう。」
 111611 おし、ぬりなおして、かいていくうち
 11186 ビツという音がしました。はあ、こ
 111810 ビツという音がする。みんな自分たち
 111910 っともつとよくしたいと考えることが
 11206 しみないようにしたいのです。けれど
 11219 おつしやつたりすると、なんとなくさ
 11223 一心にけいこをして、じょうずになつ
 11226 んめいけいこをすることだ。」文雄は
 11233 もえんりょうがちにしています。母をは
 112310 や野菜を作ったりしていたので、さしあ
 11249 ちゃんをなんとかして早く歩くようにし

11249 て早く歩くようにしてやりたいのです
 112411 く、いえるようにしてやりたいのです
 11257 をたさえるようにしました。はじめはい
 112512 なくなるようにしてみせます。「略」
 112610 食事の用意などをしていけると、とりつい
 112612 つけてしまつたりします。けれども、か
 11293 た。こんなふうにして、毎朝おべんとう
 112912 をだいてやろうとすると、かぶりをふつ
 11337 それをまねようとした。とうとうじ
 11361 でした。しばらくして、先生がぼうしを
 11372 。私は、身動きもせず、立つたままで、
 11375 めばえてこようとする心のはたらきとい
 11386 つぎあわせようとしたがだめでした
 11387 りました。自分のしたことがわかったの
 11405 両親は、なんとかして、すこしでももの
 11407 ていただくことにしました。サリバン先
 114011 しい心を明かるくすることに成功しまし
 114112 命がけでせわをすれば、ケラーさんが
 11435 だしそんな気がするんだけど——「へ
 11445 人形がしばいをするんですか。「略」
 11447 など、長さにすればメートル以上
 114410 なものを、どうして動かすんでしょう
 11456 わせてしばいをするんだ。「略」
 11459 うな楽しい気がするよ。「略」
 114610 をあてて影絵にしてみせるのだが、人
 114612 わせてしばいをするわけだ。「略」
 11474 であらわそうとする氣持がある。だか
 11477 にあらわそうとする望みもあるのだ。
 114910 いだけを正方形にする。ほかのはよくも
 11508 もかぶせてまわくしてから、細長く切つ
 11541 がみえないようにする。3 人形がか
 11553 ない暖かい感じのするものである。なつ

十二569、ひなたぼっこをしながら、まえの海で
 十二5610らうのを楽しみにしていた。雲仙岳の中
 十二618ずしい人が、ふとしたことから、この岩
 十二622をかりっぱなしにして返さなかった。そ
 十二628郎が山でしごとをしていると、のどがか
 十二707ろいろお手傳いをしてあげたい。下男の
 十二709はひとりしずかにしているのがすきだと
 十二7010かりて住むことにしました。そうして、
 十二712ごはんをたいりしました。また、まき
 十二713ひろいにいったりしました。このように
 十二714した。このようにして芭蕉につかえなが
 十二7112なにも降ってきもしないのに、「略」
 十二7210つも遊び友だちにしていました。「略」
 十二731「略」
 十二731「略」
 十二734「略」話をしてるうちに、パラ
 十二734、パラパラと音がして、白い小さなつぶ
 十二736たりころがったりします。「略」子ど
 十二738な手をしゃくしにして、受けようとしま
 十二738して、受けようとしては、あらはそ
 十二7310ろにとびこんだりします。芭蕉は、にっ
 十二754た。そのしんとしたしずかさの中に、
 十二7511「略」おひとりですらいられるかと思
 十二773、いよいよ試合をする日のことでした。
 十二778ばかり手ならしをしてから、休けい場に
 十二782かりて、サインをしてやりました。少年
 十二841のボールを中心にして、両選手はとぶ鳥
 十二853さいちゅう、どうしたはずみか、チルデ
 十二861ールをやわらかくして、しかも受けやす
 十二876植え木の手入れをしている父にこうい
 十二878。手紙を書こうとして、すずりばこをあ
 十二888よくかなうようにしなくてはならない。
 十二8810かなわないことをすれば、たいへんおか

十二893ない。自分が話をするときには、その場
 十二895というあいさつにしても、ほんとうに感
 十二898「ごちそうさま」にしても、そのときその
 十二8912の生活を軽はずきに、相手の人をいやし
 十二902も、ただ口まねをして、おうむのように
 十二926同じ文を書いたとしても、そのなかみは
 十二1001くんだり運んだりするときにもつかった
 十二1036だ文字があつたりして、おもしろいお金
 十二1065、得意の足かけをしました。うさぎはけ
 十二1142くなるような気がします。議事堂 み
 十三47こらしてしずかにしている、子どもたち
 十三56うにもちらちらとして、あさい水には、
 十三74とうにのんびりとして、ゆめのように、
 十三84えたり、調べたりして、しだいにまして
 十三810たり、実験したりする。そうして、これ
 十三91ったことを材料として、考えをおし進め
 十三92の関係を明らかにして、きまつた法則を
 十三94ととのつた知識とし、また、さらに進ん
 十三95らに進んだ研究をする土台にするのであ
 十三95研究をする土台にするのである。たとえ
 十三97くようなくふうをして、その実験を重ね
 十三103でも、まだ、そうした考えがのこつてい
 十三104たとえは、移轉をするのに、方角がよい
 十三106や運命をきめたりしている。しかし、よ
 十三109、幸福なくらしをし、ある人は、たいへ
 十三1112は、知識をもととして考えなければなら
 十三1112動き、地はじつとしていて動かないとい
 十三132地球もまるい形をしたもので、火星など
 十三1310人です。しばらくして、ドイツ人でケプ
 十三143したり研究したりして、そういう星——
 十三145ろな発見や発明をしました。自分で望遠
 十三1410ことを、明らかにしました。地は動く

十三153といて、自轉をしながら、だえん形の
 十三163ったということにして、ゆるしてもらい
 十三182ですから、いかにして、國運をもとどお
 十三183運をもとどおりにするか、これが、デン
 十三194、みぞをほったりするときに、よく、國
 十三196れを豊かな土地にしようとする大計画を
 十三196な土地にしようとする大計画をたてまし
 十三1911れをこえた土地とするのが、ダルガスの
 十三2212て、大きな発見をしました。わかいダル
 十三263地をみどりの野とし、祖國を生き返らせ
 十三276がつている感じがする。一見、なんのか
 十三2712夏で、ひんやりとした土べいの日かげを
 十三286耳をかたむけたりしているのである。も
 十三291くようなひびきがする。その「ビュン
 十三314がさまざまな藝をする。三國志とか、西
 十三316ゆうできよんととしてやめてしまつたり
 十三317のことを演じたりする。それが、見てい
 十三319はやしをいれたりしなければならぬ
 十三337かにもさむざむとした氣持をおこさせる
 十三348もどつて行つたりする。ホートンに面し
 十三368それをつかもうとして追いかける。大通
 十三4110「略」みをお客さんにして、ハイキングにつ
 十三4210「略」うん、楽しみにしているよ……おじさ
 十三435た……」しばらくして、うらの方で、も
 十三435の方で、もの音がする。三郎、それに氣
 十三442子どもしいい」をするための注意。しば
 十三4411、四人のひと話をしているわけです。と
 十三451人とそれぞれ話をしているようすを、見
 十三455「を時間的に短くしたり長くしたりして
 十三456に短くしたり長くしたりして、電話の話
 十三456したり長くしたりして、電話の話らしく
 十三456、電話の話らしくしなければなりません

十三4511 よく見えるようにすることも、たいせつ
 十三499 わい口をまるくして、ハ・ハ・ヒとわ
 十三562 つそう生き生きとして、その着物やはだ
 十三569 絵のけいこをして、たいへんじよう
 十三576 ながら、目を細くして、ありありとその
 十三5712 が黒くなったりので、どうもよく
 十三589 。それはそうとして、ラファエルのか
 十三599 かい。きちんとした、おごそかな感じ
 十三599 ごそかな感じがするね。この絵は、た
 十四59 ゆがめられたりはしませんでした。こう
 十四510 せんでした。こうしたフィリップの純真
 十四655 ちょっととお話をしようと思います。私
 十四666 。私は短い旅をしたあとで、七時にパ
 十四710 をまもることにしましょう。おとうさ
 十四822 思いだすことにします。それは私にと
 十四877 いことがあったら、それは、おか
 十四810 、おかあさんにしても、私にいても、
 十四810 にしても、私にいても、とてもうれ
 十四933 といえば、妹にいても、私にいても、
 十四933 にしても、私にいても、心からおかあ
 十四966 かなしい思いをしなければなりません
 十四999 さんが、ちゃんとしていてくださって、
 十四103 へかけるようにしたほうがいいとか、
 十四104 のおがゆれたりしないとか、光をすつ
 十四105 つとやわらかくするために小さなかさ
 十四124 つとやわらかくするたためなのです。こ
 十四135 ます。夜をどうしてすごしておいで
 十四1410 、もうすこしすれば、ごいっしょに
 十四1411 さんを幸福にしておあげしよう。」
 十四157 ついては、どうしたものか、ちよつと
 十四1510 をあげることにしましょう。そうすれ
 十四1511 ましょう。そうすれば、おあいしに行

十四162 のおなぐさめにしたいと思っています
 十四171 。夜が長すぎはしませんか。おひとり
 十四173 んか。どんなにしていらいっしやいます
 十四174 えるような気がします。どの時間にな
 十四175 の時間になにをしていらっしやるか、
 十四182 学校で、そうじをしているとき、高山く
 十四201 とについて話をしよう。」とおっしや
 十四2410 は、外国と交通をして、日本になかった
 十四259 つくれそうな気がしてきた。それから、
 十四2512 ちがいない。そうしてみると、このあい
 十四2712 そこで、「どうすれば、外国からきた
 十四2910 の花を見ようとはしなかったのだらうと
 十四303 んとうのことだとしても、自分の身近な
 十四3212 が、太陽を中心として回轉していること
 十四356 きさを計算したりするではありませんか
 十四3512 まれるような気がします。まことに、星
 十四373 にもつらい思いをしています。そんな
 十四376 てください。そうすれば、人間がだい
 十四376 人間がだいになければならないこ
 十四382 一の「音がする。ああ、いい音が
 十四382 ああ、いい音がする。」みんな「一の
 十四396 の人」深呼吸をしよう。」みんな「一
 十四397 のびと深呼吸をする。一の人」なんと
 十四428 陽をもて。そうすりや、なにがこよう
 十四431 陽をもて。そうすりや、なにがこよう
 十四437 歌をもて。そうすりや、なにがこよう
 十四4410 、それが元氣にしてくれる。他人のた
 十四448 陽をもて。そうすりや、なんだってふ
 十四456 いったい、なにをしているのだらう。か
 十四463 ぜいの來客を前にして、客間で歌って
 十四488 て、立ちおきをしていました。歌を歌
 十四492 ないように、こうして元氣をつけていた

十四503 い声を手がかりにして。そうして、マッ
 十四568 ゆうで切れたりしたら、それについて
 十四571 かねないようにしてあげたのです。だ
 十四588 れたり死んだりしてしまします。この
 十四6011 ました。しばらくして、根がいました
 十四612 の人間がせわをしてくれなかったら、
 十四613 たちは、はえもしなければ、大きくも
 十四618 ことができさすれば、このかぼちゃ
 十四6310 つかべつときにしましょう。すべて、
 十四686 みなりが鳴ったりします。これは、茶わ
 十四6811 わんの湯と、こうした雨のばあいと
 十四697 話はこのくらいにして、こんどは、湯の
 十四698 ほうを見ることにしましょう。白い茶わ
 十四7011 ちゃんとふたでもしておけば、ひやされ
 十四719 んの湯を、ふたをしないでおいっぱあい
 十四723 す。こんなふうにして、湯の表面には、
 十四7611 んの湯のお話は、すればまだいくらでも
 十四7612 は、これくらいにしておきましょう。
 十四773 り、竹を割ったりして、なにかしらえ
 十四774 かこしらえようとしていると、祖父が來
 十四7710 ほうから割ろうとすると、たとい、はじ
 十四793 もとのほうを上にして、上からはものを
 十四835 ようすを、映画にしたものである。雪が
 十四841 をとらえて映画にしたものである。ただ
 十四842 とにきれいな形をしていること、しかも
 十四843 つたけっしやをしていいること、その美
 十四851 こで、どのようにしてできたか、どんな
 十四857 まごまとわかるとすれば、たしかに空か
 十四887 の中で考えごとをしていて、思わず方向
 十四894 の音でも聞こうとしたりする。こんな場
 十四895 も聞こうとしたりする。こんな場面を、
 十四948 で重ねて、どうかして、あたためようと

十四 94 9 、あたためようとした。けれどもだめで
 十四 96 6 の子は、またそうしないではいられなく
 十四 100 2 んせつなようすをしていた。けれども、
 十四 100 3 しそうなようすをしていた。「略。」と
 十五 22 2 のむれを追いでもするように、とかく家
 十五 22 4 なれて行きそうにしました。そのと
 十五 22 8 起ったような音がしました。なんでしょ
 十五 23 4 ました。しばらくして、ふと気がついて
 十五 23 9 たいへんだ。どうしたらいいか。人々は
 十五 24 1 しめつけるようにしています。だれでし
 十五 26 7 つけば、大けがをするか、殺される心配
 十五 27 5 わがず、あばれもせず、じっとしていま
 十五 27 5 れもせず、じっとしています。もう呼吸
 十五 28 12 っくり返すようにするいきおいで、ぱつ
 十五 30 6 をまき起すようにして、少年の周囲をお
 十五 30 9 後にかばうようにして、すこしあとずさ
 十五 31 9 っとでもゆだんをすれば、それにふきと
 十五 32 7 前のてきを相手にしているものには、な
 十五 32 8 いう鉄ぼうの音がしたかと思うと、いま
 十五 32 10 、くるくる舞いをして、下の方へ、谷の
 十五 32 11 た。少年はほっとして、思わず後へたお
 十五 34 6 別の表わしかたをしなければならぬ。
 十五 35 10 ジプトには、そうした絵文字とよばれる
 十五 36 8 り、二本引いたりした。また、「うえ」「
 十五 36 10 、したにおいたりして表わした。「上」「
 十五 37 3 えを表わすことにした。いまの「本」「
 十五 37 10 う音をしめしたりした。漢字が中國から
 十五 38 1 がった読みかたをしたが、一方、「山」
 十五 38 3 あてて読むこともした。このように、日
 十五 44 10 かない答えかたをした。「いや、これは
 十五 47 9 か、おくりものにする焼物とかを作らせ
 十五 48 6 わかれてしごとをしていたため、ひとり

十五 48 8 絵の技術をどうかして残したいと考え、
 十五 48 11 、黄色くなったりして、失敗に失敗を重ね
 十五 49 12 へ賣りだすことにしたのである。「略」
 十五 50 7 略。」これを耳にした今右衛門は、「略
 十五 51 2 科書の編さんまでしたりした。ジャパン
 十五 51 2 編さんまでしたりした。ジャパン
 十五 52 10 いろいろではずをしておいたから、ぜひ
 十五 54 4 歩みよる私が手にしているしうかい状
 十五 55 8 、「それはそれとして、きょうはきみが
 十五 55 11 しまよおしをしていただいたものだ。その
 十五 56 10 人について話をしなう。そうそ
 十五 57 3 て、そのせわをしてはくれまいかと、
 十五 57 10 いそむことにしたが、その日本の青
 十五 58 11 裏という名を耳にした私は、とびあがら
 十五 58 11 おどろいた。こうしてなお語り続けよう
 十五 58 12 お語り続けようとする博士をさへぎって
 十五 59 3 りし昔を語ろうとした。すると博士は、
 十五 59 5 にしりぞけようとした。が、ことばみじ
 十五 60 1 に出て、横づけにしてあったりばな自
 十五 60 6 幌農学校の教師をしながら、恩師クラ
 十五 62 5 ない。ではどうしたのだ。なにが氣に
 十五 62 9 のくりごを耳にしたおぼさんは、腹を
 十五 63 1 すよ。なんとかしなければ、おみこし
 十五 66 1 を京都へ送ったりした。その次には、り
 十五 69 10 たびごとに、どうしているかとたずねら
 十五 69 12 写真の主が、こうしておじさんを見あげ
 十五 72 7 と呼びかけようとしたが、声が出なかつ
 十五 73 1 りにさがしものをしておられたが、やが
 十五 73 9 家の中はがらんとしていた。やがてお晝
 十五 73 11 、しずかに食事をしたが、平和主義の旗
 十五 74 5 力のちがいは別として、一方が先に生ま
 十五 75 5 — ああ、忘れもしない、満面べにをさ

十五 76 9 意外なあいさつをされた。そうして、こ
 十五 78 10 、しかめつらををしたり、みような身ぶ
 十五 78 11 みような身ぶりをしてはならない。すな
 十五 79 7 たり、また、そうした風景から、自分の
 十五 80 7 、おそれあつたりしてきました。友愛の
 十五 82 6 、ねむりこけたりしています。みんなび
 十五 83 3 、うれしそうにしているふとった人た
 十五 85 7 幸福そうな顔をしているなあ。あれ、
 十五 86 7 ものは、自分のしなければならなかつ
 十五 86 8 かしらぎせいにする心がなければなら
 十五 87 6 ようなおなかをしています。これが『
 十五 87 8 れがあつた顔をしています。』（略
 十五 87 12 しながらおじぎをする。これは『なん
 十五 88 3 は、『なんにもしないという幸福』と
 十五 88 9 えながらおじぎをする。チルチル、すこ
 十五 89 4 のやりなおしをするところ。これ
 十五 90 7 つかそんな話をしていた。なんでも
 十五 91 1 、わたしたちのすること、みんな見
 十五 91 3 ルチル「なにをするのです。」ふとつ
 十五 91 4 いつもしごとをしないことです。わた
 十五 92 1 略。』こんな話をしているまに、「ふと
 十五 92 4 、はねまわたりしていました。チルチ
 十五 92 11 。そこでもなにをしているんだ。」パン
 十五 93 11 いやでも幸福にしてしまおうじゃない
 十五 94 1 きずって行こうとする。その間に、「は
 十五 96 11 、わらいこけたりしながら、みどりの園
 十五 97 4 チルチル「話してもいいの。」光「ま
 十五 97 6 り、わらったりするけれど、まだ、お
 十五 97 9 しいほつたをしているのだらう。な
 十五 99 4 、陽気なおどりをします。幸福「こんに
 十五 101 2 ましたり、息をしたりして、くらしして
 十五 101 2 り、息をしたりして、くらししているの

十五102 3 ㊦ たちがなにをしていますが、あなたに
 十五102 11 ㊦ こし悲しそうにしているのは、だれも
 十五103 5 ㊦ 青いたまの色をしています。」チルチ
 十五104 12 しく足でけったりして気がいいのよう
 十五105 6 のようなすがたをした者が、きらきら光
 十五108 10 ㊦ 人たちはなにをしようとしているの。
 十五108 10 ㊦ なにをしようとしているの。なぜ横っ
 十五108 12 ㊦ 「いま来ようとする新しい『喜び』を
 十五111 7 ㊦ ちがほおずりをするたびに、私の着物
 十五112 12 ㊦ 悲しそうな顔をしているときでも、ほ
 十五113 1 ㊦ も、ほおずりをしてもらえば、すぐそ
 十五113 7 ㊦ るときやけどをしたあとまであるよ。
 十五113 10 ㊦ うに、しごとをしないの。母の愛「い
 十五113 12 ㊦ おまえのせわをしているときは、いつ
 十五115 10 ㊦ えて、だいにすることをわすれては
 十五116 8 ㊦ へんしんせつにくれるそうだね。
 十五120 6 た。その歌を耳にしなが、もっと下級
 十五121 12 、教室でお別れをした。先生は、「略」
 十五123 1 生がたとしたしくしなかったのだろうと
 するが「駿河」(地名) 1 するが
 三116 8 ㊦ するがにある山が、いちばんみやこに
 もちかく、天にもちかいそうでございます。
 するがわん「駿河湾」(地名) 1 駿河湾
 十五156 5 ㊦ 山のいただきに立った私は、小手をか
 ざして足の下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ
 するする(副) 3 するする
 三16 1 ふしぎなことに、はちをもった手が、
 するするとおしゃかさまの目のまえにのびて
 きました。
 六68 1 するは「略」、「略」といって、木の上
 にするするとのぼってしまいました。
 六101 10 そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、

するするといくくらいの大きさに作って、
 すると(接) 75 すると
 二6 11 「略。」といいました。すると、まさお
 さんが、「略。」といいました。
 二33 4 ㊦ 『略。』と、またたずねました。する
 とみんなは、『略。』といいました。
 二40 3 かつこう。」となくます。すると、とおく
 のほうでも、「かつこう。」となくます。
 二40 5 おうい。」とさげびます。すると、むこう
 のほうで、「おうい。」とさげびます。
 三26 6 こんどは、切りたおした木を、どうする
 かということになりました。すると、あのち
 えのあるおじいさんが、「略。」といいまし
 た。
 三28 3 「略。」と、せんだうたちも、みている
 人々もいました。すると、あのちえのある
 おじいさんが、「略。」といいました。
 三47 1 白うさぎはすぐ海の水をあびました。
 するといたみがいつそうひどくなつて、とて
 もたまらなくなりました。
 三81 4 そこへ、お日さまの光がさしはじめまし
 た。すると、色リボンのようなにじが空にか
 かりました。
 三107 9 すぐごしよにつれてかえろうとなさい
 ました。すると、かぐやひめのすがたがきゅう
 にみえなくなりました。
 三113 2 空から大ぜいの天人たちが、雲にのつ
 ておりてきました。すると、しめきつておい
 たくらの戸がひとりであきました。
 三117 7 おつきのものはそのとおりにしました。
 すると、ふしのくすりをやいたけむりが、
 「略」いつまでもたちのぼって

四22 3 ㊦ ねずみたちは、あわててわのそとへ
 にげました。すると、そとにいたねこがおい
 かけました。
 四84 10 みきこさんが、しょうかをうたいました。
 すると、みきこさんのいもうとのたつこさんが、
 それにあわせておどりました。
 五31 3 ㊦ 「略。』といいました。すると、その
 人は、トランクからこの本をだして、
 五59 1 「略。」といいました。するとおるおも、
 「略。」といいました。
 五65 10 おじいさんは、海にであみをなげました。
 すると、金のさかながかかってきました。
 五104 4 ひわが、「略。」と鳴きました。すると、
 みそざいは、「略。」と鳴いて、
 六10 4 日光が店いっぱいにさしこんできた。する
 と、ねじがその光を受けて、ピカリと光った。
 六54 10 ふたりはそのとおりにしてみました。する
 と、月は枝のあいだにじっとしていますが、雲は
 さつさと走っていきます。
 六67 5 お友だちと遊ぼうと思って、山の谷を歩い
 ていきました。すると、一びきのさるにであいま
 した。
 六78 2 その夜、ごろうはおとうさんに、この考え
 ついたことを話しました。すると、おとうさんは、
 「略。」とおっしゃいました。
 六88 3 ㊦ ほおりの「木にのぼるのですか。」年より
 「そうです。すると、海の神は、きつといいこと
 を教えてくださるでしょう。
 六100 1 左の手に、めがねのたまを持って、目から
 遠くはなした。すると、向こうのけしきが、小さ
 く、さかさまにみえた。
 六109 4 「かむ」の「ム」がいいにくいらしい。す

ると、これらははなからでる音なのだろう。

七36 11 「〈略〉。」と、心配そうにいいました。すると、なんだか、まわりがすこしゆるやかに、からだがらくになったような気がしました。

七80 11 図 そのとき、この人であったのです。」

裁判官「それから。」甲「すると、向こうから、

『〈略〉。』とたずねるのでございます。

八75 それでもきかなければ、指で追ったりしました。すると、だんだんあとずさりして、

八116 うちじゅうのものがびっくりして、いそいでピオをひろいあげました。すると、あわれにも、くちばしから血をだして、

八224 せなかに、たてのすじがはいり、われめができました。すると、中から、みずみずしい、や

八286 天帝は、そとごてんの中へおはいりになりました。すると、さがしていたはたおりひめが、

いっしんにはたをおっていました。

八294 天帝は、そのままそとへで、また馬車を走らせて、天の川の西の岸を通っていらつしやいました。すると、黒うしにまたがり、ふえをふいてくる、わかい男にであいました。

八493 王子は、いままでのわけをこの男に話しました。すると、その男は、「〈略〉。」と答えました。

八585 森や林の中に、みえがぐれにお寺の屋根や停車場が目についた。すると、おもちゃのように小さな汽車が、けむりをはいて走ってくる。

八593 ぼくは、みはらし台にすえつけてある望遠鏡をのぞいてみた。すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。

八68 11 「〈略〉。」といった。すると親あひるは、「〈略〉。」といつてかばった。

八71 10 そこで、みにくいあひるの子は、かきねを

とびこえてにげた。すると、草むらにいた小鳥がおそれてとびたつた。

八73 1 それから二日間、ここにそとかくれていた。すると、そこへ二わのがながやってきた。

八79 11 「〈略〉。」すると、ねこがいう。

八86 4 あひるの子をみつめて、木ぐつでこおりをくだし、うちへつれて帰った。すると、あひるの子は生き返った。

八88 3 美しい春であった。すると、とつぜん、あひるの子は、つばさをばたつかせることができた。

八91 11 「〈略〉。」とさげんだ。すると、ほかの子どもたちも、「〈略〉。」と喜んだ。

八93 7 太陽はあたたく、おだやかにてらした。すると、つばさがサラサラと音をたてた。

九17 3 フィリピンで、ある年の十月のすえ、子どもがつばめをつかまえました。すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。

九52 2 「〈略〉。」とききました。すると、きのこは、「〈略〉。」と答えました。

九53 4 「〈略〉。」とたずねました。すると、りすは、木の上からひたいに手をかざして、いちろうをみながら答えました。

九56 7 いちろうは、「〈略〉。」なるべくおちついてたずねました。「〈略〉。」すると、その男は、「〈略〉。」にやとわらっていいました。

九57 3 「〈略〉。」といいました。すると、そのきたいな男は、「〈略〉。」

九58 6 いちろうは、思わずわらいだしながら返事をしました。「〈略〉。」すると、男はまたいやな顔をしました。

九58 11 その声が、あんまり力がなく、あわれにきこえたので、いちろうはあわてていいました。

「〈略〉。」すると、男は、また喜んで、

九66 4 やまねこはぴんとひげをひねっていいました。「〈略〉。」すると、また、どんぐりどもが口々にいいました。

九108 7 「〈略〉。」といった。すると、のだ先生が、「〈略〉。」といわれた。

九122 3 舟をやとつてこぎのぼりながら、ところどころでその水でお茶をたてる。すると、いい味は、もっと遠いところで感じられる。

十43 5 研究のため、死目を一つ一つ、ていねいにしらべていった。すると、かれはきゅうにとびあがった。

十43 10 幸吉は、それこそ気持ちがいのようになって、死目をどんどんみていった。すると、五つぶの眞円眞珠が現われた。

十53 1 道にでたとき、あとをふり向きました。すると、さっきの黒いいぬが、ごろんと、地べたに横になってねそべっていました。

十72 11 そこへ、だんなが帰ってきました。すると、太郎かじやは、きゅうに両手で顔をおおい、

十129 4 金次郎は、また、「〈略〉。」いねのなえをひろって、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。すると、秋の終りには、一びょうあまりの米を自分のものにすることができました。

十160 11 そうして、いっしよにその一本橋を渡りだした。すると、橋はまん中からおれて、

十169 6 少年は、身をおこして父親の方をみしました。すると、かなしくなつてなきました。

十174 12 「〈略〉。」と、看護婦は答えました。すると、医者はずつと考えてから、こういいまし

た。

十一851 病人は、そのとき、目を開いて、じっと少年をみつめました。すると、少年のたましいのそこから、どつことばがほとぼしりでした。

十二64 ある日、太田道灌は、たかがりにでかけました。すると、にわか雨が降りだしたので、

十二108 「略。」とたずねました。すると、老人は、**「略」**ポケットに手をいれましたが、

十二112 「略。」とききました。すると、老人は廣場の方を指さして、**「略。」**と答えました。

十三291 とときどき、毛ぬきを鉄ぼうでいきおいよくしごく。すると、「ビューン」と、あとをひくようなひびきがする。

十四187 「略。」といった。すると、窓ガラスをふいていた田中さんが、「略。」といった。

十四236 「略。」と、そくざに答えた。すると先生は、「略。」

十四4510 死のしずけさがあたりに廣がりしました。すると、そのきみのわるいしずけさの中から、**「略」**、きれいな歌が流れてきました。

十四599 土が立ちました。**「略。」**すると、いたずらはちがいました。

十五258 両足でいっそうはげしく鳥の腹をしめつけました。すると、さすがの大わしも、**「略」**、その重さにたえられなくなつて、

十五284 岩角のすこしあき地のあるところを目がけておりて行きました。すると少年は、あぶないことが近づいたと感じたので、

十五291 鳥を後へひっくり返すようにするいきおいで、ぱつと、地面へすばやくとびおりました。

すると、鳥は、不意のしゅうげきにおどろいて、

十五518 主人は、新しい茶をハギンスにすすめ

ながら、「すると、あなたは、そのブリンクリーさんのおまこさんでしたか。

十五593 「略。」と、ありし昔を語ろうとした。すると博士は、「略。」と、一言のもとにしりぞけようとした。

十五1077 でも、それを妹にいつてはいけません。すると、あの女はさがしに行きたがつて、

するどい「鋭」(形)4 するどい『イー・ク』

六1347 自分たちは、あの大きなするどい角で、つきあげられてしまわなければなりません。

十一8110 少年は、するどいさけびをあげて、その場に立ちすくみました。

十三58 あさい水には、あしのめがすすくと、するどい角をのぞかせた。

十五318 鳥はさけび声をたてて、苦しまぎれに、いっそうするどくとびかかります。

するりと(副)2 するりと

四522 どうかすると、するりとすべりおちそうになり、おんぶして いる がんも おちそうになります。

四6210 その ひまに なかまのがんは、するりとぬけだしました。

すれすれ(形状)1 すれすれ

三416 ぼくらはふたりに なつて、麦のほとすれすれにあるきました。

すれちがう「擦連」(五)1 すれちがう『一ツ』

五1133 むこうからきた汽車とすれちがつたのさ。すわりこむ「座込」(五)4 すわりこむ『一ン』

八71 風がひどいので、あひるの子は立つこともできず、すわりこんでしまわなければならなかつた。

十二2810 たもとをひいてやると、民ちゃんは、

ぱったりそこへすわりこんでしまいました。

十四946 そうして、そこにすわりこんだ。

十五925 みんなは、テーブルにすわりこんでるよ。

すわる「座」(五)24 すわる『一ツ・一ラール』

三1013 その竹を切つてみますと、小さな、きれいな おひめさまがすわっていました。

三1075 家にはいつてごらんになると、光の中にきれいな おひめさまがすわっています。

四255 お花をかざると、そこにすわっているようです。

五243 ぼくは、はつと思つて、すぐ立つて、その人をすわらせてあげました。

五247 みんなを立たせ、不自由な人や、女や、子どもたちをすわらせました。

五774 入口におばあさんがすわっていました。

七152 「腹のすわった人だな。」

七468 青年は、すわつて、アコードオンを黒ぬりのケースにおさめた。

八97 びっくりして茶のまへにげこみ、そこにすわっている私のひざのあいだにもぐつたり

八609 みずうみの岸の、ごぼうのはえているところに、一わのあひるがすわっていた。

八647 いままでだいていたのだし、あと四五日はすわることもできますから。

八806 それで、あひるの子は、すみっこにすわつてばかりいた。

九637 やまねこは、**「略」**長いしゅすの服を着て、どんぐりどものまえにすわっていました。

九141 それで、そのまま手足をちぢめて、じっとすわっていました。

十 198 ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字
を読んでいる。

十 217 男の子がベッドにすわっている。

十 502 家からでてしばらくいくと、道のまん中に、
黒いぬが一ぴきすわっていました。

十 177 窓 みんながさせてくれたら、コックスの
まえにすわって、整調をやってみたいな。

十 139 丘の上の草にすわって、いつまでも小鳥
の鳴く声をきいていよう。

十 345 「すわる」「立つ」「歩く」など、すこし
ばかりの動詞も知りました。

十 347 午前の森に、しかがすわっている。

十 495 10 それがもえ続けている間、大きなろの前
にすわっていた。

十 496 5 女の子は、手にもえつくしたマッチを
持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。

十 497 12 そうして、こんどは、女の子は、一本の
クリスマスの木の下にすわっていた。

ずんずん (副) 5 ずんずん

六 537 窓 お月さまがずんずん動いていくのがよく
わかるよ。

六 126 6 あなはずんずん長くなっていました。

十 125 こうして、ずんずんおとうさんのそばへき
て、さまざまなことを話しかけたり、

十 349 機械で動かせば、もっと早く織ることがで
きるし、ひとりでに、ぬのがずんずん織られてい
くからである。

十 527 9 大わしは、少年をせにのせ、少女を下に
さげて、ずんずん、落ちるように、下へ下へとお
りて行きました。

せ

せ [背] (名) 11 せ

十五 23 10 だれか、その大わしのせの上へ、がけの
中ほどからとびついたものがあります。

十五 23 12 その人は、いっしょうけんめいにわしの
せにしがみついて、

十五 24 9 ひつじかいは、身のおぶないこともわす
れて、思わず鳥のせにとびついたのです。

十五 24 11 さいわいにその勇ましい少年は、大わし
のせにとびつき、その上へ乗りうつって、

十五 25 1 上体をびったりと鳥のせにつけて、
十五 26 4 少年はいつ鳥のせからふり落されないう
のでもない。

十五 27 9 大わしは、少年をせにのせ、
十五 64 8 おじさんは道ばたにしゃがんで、自分の
せをたたきながら、〈略〉私によびかけた。

十五 65 3 夏の日に、私をせにおいながら、あせを
ふきふき歩かれた新島のおじさんと、

十五 99 2 もう一つの「幸福」のむれ、まえよりは
すこしせの高いのが、廣間の中へかけこんで来て、

十五 105 6 せの高い、美しい、天使のようなすがた
をした者が、

せ 1 せ

四 80 2 せ——世界の子ども。

ぜ (終助) 1 ぜ

十五 63 12 窓 さあ、行こうぜ。

せい [生] ↓ いちねんせい・かきゅうせい・ごねん
せい・さいこうせいたち・さんねんせい・そつぎょ

うせいたち・だいがくせい・ちゅうがくせい・どう
きゅうせい・にっぽんりゅうがくせいいいちご
う・にねんせい・よねんせい・りゅうがくせい・ろ
くねんせい

せい [背] (名) 12 せい

三 102 8 小人のようだった おひめさまは、三月ほ
どのあいだに、すくすくとせいがのびて、

八 105 4 病氣でせいのびないいねが、5 かぶあり
ました。

九 55 4 せいのひくい、おかしなかつこうの男が、
九 65 3 窓 せいの高いのだよ。

九 65 3 窓 せいの高いことなんだよ。
十 61 6 もう、たけのこは、私のせいをすぎて、お
にさんのせいより高くなりました。

十 61 7 おにさんのせいより高くなりました。
十 61 9 もう、先生のせいくらい高くなりました。

十 15 10 窓 ぼくは、父にいたら、せいの高いりっ
ぽなからだになるだろう。

十 173 10 医者、せいの高い、すこしがんだ、
まじめな顔をした老人でした。

十 359 4 せいの高いマリアがキリストをだいて
立っていると、

十 410 1 おばあさんが、こんなにせいが高く、
りっぱで、〈略〉、しんせつに見えたことは、

せい [精] (名) 1 精

十五 95 2 窓 ダイヤモンドの光にたえられる幸福の
精を見るのだよ。

せい [製] ↓ にっぽんせい
せい [所為] (名) 2 せい

五 63 4 窓 けれども、花がついたり、みがなったり
したのは、おかあさんのせいではありませんよ。

十五 94 12 窓 ちがったように思うのは目のせいです。

せい 1 生

十五38 10 「上・下・生」などの読みかたをちよつと考えてみただけでも、このことがすぐ理解されよう。

せい い 「誠意」(名) 2 誠意

十二89 2 そうでない、相手の人に満足を与えることができないし、また自分の誠意も通じない。

十三19 8 かれは、科学者であり、理想を実現する誠意にみちていました。

せい いっぱい 「精一杯」(副) 2 せい いっぱい

七37 11 私たちのために、せい いっぱいの力で、すまをこしらえてくれていたのです。

八47 11 ㊦ ああ、せい いっぱいはたらいで、晩ごはんもいただいた。

せい いかつ 「生活」(名) 13 生活

六21 3 ㊦ 美しいぶどうに、かがやくりんご、楽しいわれらきりぎりすの生活——

十五12 毎日の生活のらんざつとあわただしさの中に、それを失っている。

十六5 心がけひとつで、われわれは、〈略〉毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができ。

十二89 12 それは自分の生活を軽はくにし、相手の人をいやしめることにもなるからである。

十二92 8 それは、めいめいの生活や経験が同じでないためである。

十二95 12 いったん読まれてしまうと、〈略〉、その人その人の生活や経験によって生かされてくる。

十四5 2 私たち自身の生活を思わずふり返らせないではない強い眞実の力が、

十四9 1 ㊦ おかあさんの生活や、私たちの生活のことをお考えになって、

十四9 1 ㊦ おかあさんの生活や、私たちの生活の

ことをお考えになって、

十四37 2 みなさん、あなたがたは、いま、日々の生活にもつらい思いをしています、

十五20 12 このヨーロッパの高い山の中の生活は、見るもの聞くものがことごとくめずらしく、

十五45 5 それまでのものの考えかたや商賣では、ふだんの生活さえむずかしくなってきた。

十五90 12 ㊦ わたしたちの生活のなまにはいつて、わたしたちのすること、みんな見るとい

せい いかつ・する 「生活」(サ変) 1 生活する 《—シ》

十四83 6 深い雪の中で生活している人々、

せい がん 「西岸」(名) 1 西岸

十四44 10 スコットランドの西岸のおきあい、

せい き 「世紀」(名) 1 世紀 ㄱじゅうろくせい き

十四40 10 ㊦ わかかわかしい世紀のひびき。

せい ぎ 「正義」(名) 2 正義

十五105 11 ㊦ 『正義であることの大きな喜び』で、不正がしかえしされたときに、いつもにっこりしています。

十五117 11 ㊦ 『正義であることの喜び』でござい

す。

せい ぎであることのよろこび 「正義喜」(話手) 1

正義である
この喜び

せい くらべ 「背比」(名) 3 せい くらべ

十五117 10 ㊦ 「私をごんじですか。
この喜び

せい くらべ

十六1 2 私は、たけのこのそばにいて、せい くらべをしたら、はなのところまでありました。

十六6 3 あしたもあさっても、せい くらべをしますよ。

十四82 4 どんぐりのせい くらべ。

せい こう 「成功」(名) 2 成功

十四42 2 かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめの

れいにささげて、その成功をしらせた。

十二4 8 ある日、祝賀会の席で、人々がかかるがわる立つてコロンブスの成功を祝しますと、

せい こう・する 「成功」(サ変) 6 成功する 《—シ—スル》

十三39 8 うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功するわけであったが、

十四40 11 ㊦ きつと成功します。

十四42 2 ㊦ 半円が眞円になれば成功するのだ。

十四44 7 ㊦ 「これで成功しなければ。」幸吉は、自信をもって母貝を海中にはなった。

十二40 11 ケラーに「ことば」というものをわからせることによって、そのまっ暗なさびしい心を明かるくすることに成功しました。

十三24 7 植林が成功してから以後の農業は、すっかりかわりました。

せい ざいしょ 「製材所」(名) 2 製材所

五108 9 近いところに製材所ができて、のこぎりのやかましい音が、あさからばんまでひびきました。

十二68 10 製材所のまるいのこぎりも、大きなさしわたしをもっている。

せい ざく ㄱあかせいざく

せい しつ 「性質」(名) 7 性質

六113 3 それがいま、一つ一つの音の性質を考えたうえで作ったものであることがわかって、

六113 6 一ぎよう一ぎようは、なにか、ほかのぎようとはちがった性質をもっているにちがいない。

十二93 2 そこにことばとしての性質があり、おもしろさがある。

十三10 6 生まれた年によって、その人の性質や運命をきめたりしている。

十三111 日本には、毎年、約二百万人の人が生まれるが、これらの人がみな同じ性質をもち、
 十五387 それで、たいていの漢字には、この音と訓のふたとりの性質のちがった読みかたがある。
 十五742 自分の子女は、その性質がどんなにちがっていても、かわいいことはみな同じで
 せいじつ 「誠実」(名) 1 誠実
 十三214 しかし、ダルガスの誠実は、これがためにくじかれることなく、
 せいじつ 「誠実」(形状) 1 誠実
 十三262 誠実な研究と、がまん強い実行と、熱誠な其力によって、あれ地をみどりの野とし、
 せいじつ 「誠実」(名) 1 誠実
 十四510 こうしたフィリップの純真さ、誠実さ、
 せいじつ 「聖書」(名) 1 せい書
 十五572 ある日のこと、せい書をギリシア語で読みたいといひだした。
 せいしん 「精神」(名) 2 精神
 十五606 恩師クラーク博士の精神のやどっている札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、
 十五808 友愛の精神が、もともととつひろがっていきますように。
 せいしんてき 「精神的」(形状) 1 精神的
 十三186 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れない國民こそ、眞にすぐれた國民でしょう。
 せいせい 「精精」(副) 1 せいせい
 十四481 自分なんか、およいでいるだけがせいぜいなのに、
 せいせき 「成績」(名) 1 成績
 十二423 そのうち、ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。
 せいぞろいする 「勢揃」(サ変) 1 せいぞろいす

る 《—シ》
 十三69 やがて、かれらもせいぞろいして、かげろうのたいまつをたいて、おしよせて来る。
 ぜいたく 「贅沢」(形状) 1 ぜいたく
 十三417 ぼくの学用品を、ぼくひとりでつかうのは、ぜいたくというもんだ。
 せいだす 「精出」(五) 1 せいだす 《—シ》
 八831 たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火花をだすことを、せいだして勉強するのだね。
 せいちょう 「生長」(名) 5 生長
 八195 木の根のしるをわずかずつづっているせみの子たちは、たいへん生長がおそくて、
 十三225 もみは、ある大きさまでのびると、そこで生長をとめました。
 十三226 アルプス産の小もみを植えたので、かれるのはふせがれましたが、その生長は、これによってはたされなかったであります。
 十三221 かれは、もみの生長について、大きな発見をしました。
 十三237 小もみは、ある大きさまでは、大もみの生長をうながす力をもっているが、
 せいちょう 「整調」(名) 4 整調
 十一712 コックスのまえにすわって、整調をやってみいな。
 十一101 りっぱな整調は、りっぱな運轉をする人になるだろうね。
 十一112 いい整調が、りっぱに日本じゅうの足なみをそろえてくれるにちがいないよ。
 十一111 トップ 3 5 7 コックス 2
 4 6 8 整調
 せいちょうする 「成長」(サ変) 4 生長する 成長する 《—シ—スル》

十五53 かいこが、皮をぬいで新しく成長していくように、
 十三219 兩種のもみは、たがいにならんで生長し、年がたつてもかれないで、よくしげりました。
 十三231 大もみがある大きさ以上に生長しないのは、きつと、小もみをいつまでも、大もみのそばにならべておくからです。
 十三234 もしある時期になつて、小もみを切りはらってしまったら、大もみは土地をひとりじめして、生長するにちがいありません。
 せいと 「生徒」(名) 4 生徒
 十198 ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字を読んでいる。
 十199 ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上をすべっていく。
 十311 ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、
 十五673 教会の日曜学校の生徒であつた私は、そのクリスマスに得意の銀てきをふいたが、
 せいどう 「制動」(名) 1 制動
 九1106 はげしい制動をかけられると、もうもうと雪けむりが立つ。
 せいとさん 「生徒」(名) 4 生徒さん
 四319 どこかの中学校の女の生徒さんがきて、なっているわけをききました。
 四324 その生徒さんは、すぐひもでげたのはなおをすげてやりました。
 四335 女の生徒さんはわたくしに、『略』といつて、
 四353 中学校の女の生徒さんが子どものげたのはなおを上げるあいだ、
 せいねん 「青年」(名) 14 青年

七415 目をさますと、向こうの席にひとりの青年が立っていた。

七417 汽車は、かなり早く走っているの、青年のからだはゆれていたが、

七410 青年は、つづいて日本の子もりうたをひきはじめた。

七424 しかし、青年は、ひく手をやめないで、いっしんにひきつづけていた。

七447 「略。」といって、青年のまえにすすみ

七4410 青年はにっこりわらった。

七458 おしまいに、青年は、大きな声で、「略。」といって、おじぎをした。

七462 青年は、アコードオンを、両手でぐっとひろげたかと思うと、しずかにひきはじめた。

七468 青年は、すわって、アコードオンを黒ぬりのケースにおさめた。

十一502 「青年よ、大きな望みをもて。」

十四533 葉は、元氣のいい青年でした。

十五573 葉は、きみは室を二つももっているようだが、その一つに日本の青年をとまらせて、

十五576 教授の申し出でをさっそく承知して、はじめて見る東洋の青年をひきとったが、

十五5710 その日本の青年はなかなかの人物だったよ。

せいふ ↓ にっぽんせいふ

せいふつ 「生物」(名) 1 生物

十四43 ある小さな生物が、海水いちめんにふえて、海水が茶色にかわるほどになるのである。

せいほう 「西方」(名) 1 西方

十二593 鳥取の西方約四キロのところに、まわり十二キロの湖がある。

せいほうけい 「正方形」(名) 2 正方形

十二4910 古新聞を二まいとも八つに切つて、そのうち一まいだけを正方形にする。

十二501 正方形の一まいにのりをつけてつつかぶせる。

せいめい 「生命」(名) 1 生命

十二3712 私の手にふれるあらゆるものが、生命をもつて動いているように感じはじめました。

せいよう 「西洋」(名) 7 西洋

八44 西洋の子どもだらうなどと、早がつてんし

十三132 東洋でも西洋でも、天は動き、地はじつとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。

十三607 「あれも、西洋の名画でしょう。」

十四2612 デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、西洋の油絵がはいってきたときに傳わってきたのだということが想像される。

十四2710 西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと思った。

十四283 「その中で、かたかなで書いてあることばは、たいてい西洋からきたことばと思つていい。」

十五5510 私が日本をおとずれたころは、西洋の文化をとり入れることがさかんなときで、

せいようい 「西洋医学」(名) 1 西洋医学

十四261 日本にはいつてきた西洋医学は、はじめオランダからはいり、そののちはドイツ医学が

せいようおんがく 「西洋音楽」(名) 1 西洋音楽

十四269 コーラスとか、ソナタとかいうことばは、西洋音楽がはいってきたときに、いっしよに傳

わってきたことばであらう。

せいり 「生理」(名) 1 生理

十五589 室友ホランド先生、自然科学にもっともきょうみを有し、化学、生理、植物、鉱物、地質等をこのんで勉学す。

せいりする 「整理」(サ変) 2 せいりする 整理する 《—シ》

四81 こんざつする町かどでは、きちんとせいりしてくれま

九868 いずれ学校へ帰つてから、もう一ど整理しまし

せいれつする 「整列」(サ変) 1 整列する 《—シ》

七503 どの学校のせんしゅも、みんな、運動場に整列して、式をあげた。

セイロンとう 「地名」 1 セイロン島

十四43 今日、眞珠の産地は、ペルシア湾、セイロン島をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、日本産のものは、ことに名高い。

せおう 「背負」(五) 3 せおう 《—ツ》

三4710 にいさまがたのおもいふくろを せおつていらつ

九367 たきぎをせおつて山からおるとき、

九1051 ぼくたちは、リックサックをせおつて、スキーをつ

せかい 「世界」(名) 38 世界 ↓ あたらしいせかい・うごきのせかい・ぎんせかい・だいいちじせかい

三1103 ほんとうは、わたくしは 月の 世界の

三1109 どうかして、かぐやひめを 月の 世界の

四802 せ——世界の子ども。

四八七 世界の子どもにうたわれて、きょうは、
 エスさま およろこび。
 五四五 世界の友よ、手をつなぎ、なかよくとんであそぼうよ。
 五四七 明かるい世界の空とんで、平和のうたをうたおうよ。
 五五三 世界のそのにさきにおう、きれいな花のその一つ。
 五五六 みんななかよくさきそろうい 世界の花ぞのかざろうよ。
 五五九 世界の空のかず多い、かがやく星のその一つ。
 五九一 高いところののぼるほど、大きな世界がみえる。
 八六一 世界は広いものだなあ。」と、ひなたちはいった。
 八六二 これが世界だと思っているのかい。
 八六二 世界は庭の向こうがわまで廣がっているのだよ。
 八六二 わたしについておいで、大きな世界の鳥小屋へつれていってあげるからね。
 八八二 私、広い世界へでたいと思っているのです。
 一八四 動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思ひます。
 一八九 このわか者こそ、のちに眞珠王として世界に知られた御本幸吉であつた。
 一九一 世界のために、きつと、あなたの願ひがないいます。
 一九四 世界の学者の研究によつて、天然眞珠とまったく同じであることが、明らかにされた。
 二〇一 あなたが自然をあいてとして、眞珠を世

界の人々にあたえたことに、
 二〇四 ここで、いままでの作文のからをぬぎさつて、新しい世界にふみだしていこうと思ひます。
 二〇五 その中には、世界に共通なものさもある。
 二〇八 もし、この決勝戦に勝つことができたなら、世界のほまれ、デビスカップを、日本では、はじめてもらうことになりまふ。
 二一四 そうして、遠いところも近くなり、世界はだんだん小さくなるような気がします。
 二一七 美しいおとぎばなしを、世界の子どもたちにおくつた、アンデルセンの生まれた國で、
 二二八 世界の樂園といわれるこの國も、
 二三九 おじさんは、へ略、絵がすきで、それに、わかいころ、世界をまわつて來た人です。
 二四二 世界の名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、
 二四三 そういうちつぽけな考えでは、とても世界の中にはたつていきません。
 二四四 このぎんが系全体が、星の世界の全部かという、なかなかそうではありません。
 二四四 あゝのぎんが系に負けないほど大きな星の世界が、なおいくつあるのです。
 二四五 大空の星をながめっていると、はてしのない、遠い世界にひきこまれるような気がします。
 二四六 新しい世界のおとずれ。
 二四七 ローマ字は、アメリカ・イギリス・《略》など、世界の大半につかわれている文字である。
 二四八 また、ローマ字は世界的の文字であるから、日本語が世界の人々に親しまれるようになるであらう。
 二五二 世界のどこに、こんなに三種類も四種類

もの文字をつかつている國があらうか。
 二五五 おもな用事は、世界の学者がだれものぞんでいるカーネギー博物館の刊行物として自分の論文を出版してもらふこと、
 二五九 神の目から見れば世界の人類はすべてその愛する子どもなのだから、
 せかいじゅう 「世界中」(名) 9 せかいじゅう 世界じゅう
 一三六 うみになつて、せかいじゅうのおふねをうかべたいからです。
 一四七 世界じゅうの人の心をつなぐ糸を、まいにち あつかうところ、
 一五二 世界じゅうで、いちばん力のつよいものはなに。
 一五三 さあ、わたしは、世界じゅうでいちばん美しい庭をもつことができる。
 一五五 王女は、王さまにとっては、世界じゅうのこがねよりもたいせつであつたからです。
 一五八 世界じゅうで、あの人はどおりうな人はありはしないから。
 一五九 この國の人々が、どんなに高い教養をもっているかを世界じゅうに知らせた大きなできごとでした。
 一六〇 世界じゅうの人から愛される眞珠、
 一六〇 これは『日ぐれの幸福』で、世界じゅうの王さまのすべりよりもつぽで、
 せかいじゅう 「世界全体」(名) 2 世界全体
 一六二 日本、日本と、日本だけが特別の國でもあるかのように考へて、世界全体を見わたすことをわすれていたのは、よくないことでした。
 一六四 世界全体を、人類全体を、そうして、うちゅう全体をながめわたす大きな目をもつて

せかいてき 「世界的」(形状) 1 世界的

十五42 I ローマ字は世界的の文字であるから、

せかいてきぎよるいがくしや 「世界的魚類学者」

(名) 1 世界的魚類学者

十五527 眞心こめて教えてくださった世界的魚類

学者デビッド・スター・ジョルダン博士は、

せかいてきめいしゅ 「世界的名手」(名) 1 世界的

名手

十二814 キンゼー選手は世界的名手ですが、

せかいへいわ 「世界平和」(名) 1 世界平和

十五7412 それで、世界平和、人間平等という理念

が、ここからわいてくるのだ——

せがむ (五) 1 せがむ 《一マ》

十二9411 弟にせがまれて、赤とんぼをとりにでか

けたが、

せがれ 「倅」(名) 1 せがれ

十334 園 おまえは太工のせがれだ。

せき 「石」 ↓だいらせき

せき 「席」(名) 12 せき 席

三158 ごてんでは、おしやかさまが せきにおつ

きになりました。

五95 園 じろう、せきをあけて、あのぼっちゃん

をかけさせておあげ。

五2410 園 せきをすこしあけてくれました。

七414 目をさますと、向こうの席にひとりの青年

が立っていた。

七428 トンネルをでたとき、向こうの席で、

「略。」と、大きな声をだした人があった。

十198 ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字

を読んでいる。

十一443 それをみようと、父兄の人たちは、自分

の席で立ちあがります。

十一453 弟は、さつさともとの自分の席にもどり、

そこからでなおして進みました。

十一458 おめんじょうをいただいて、ささげ持つ

ようにしながら、席に着きました。

十二46 ある日、祝賀会の席で、人々がかかるが

わる立ってコロンブスの成功を祝しますと、

十四204 みんなが席につくと、

十五8911 園 おふたりのために、ちゃんと席がとつ

てありますよ。

せき 「咳」(名) 2 せき

六634 弟がせきがでるので、おかあさんはゆたん

ぽをいれている。

六636 わたしもせきがでたらいいなあ。

せきあえる 「塞敢」(下) 1 せきあえる 《一

エ》

十五704 せきあえぬなみに目をくもらせたおぼ

さんが、「略。」とおっしゃった。

せきこむ 「急込」(五) 1 せきこむ 《一ム》

五1065 「略。」と、せきこむように、さかんに

鳴きました。

せきたん 「課名」 2 石炭

五25 四 石炭……三十二

五321 四 石炭

せきたん 「石炭」(名) 17 石炭

五327 材木や、石炭や、お米を、たくさんつんで

います。

五354 これは、石炭をほっているところです。

五355 まわりのかべに、石炭がでています。

五356 さかんに、きかいで石炭をくずしてとつて

います。

五358 とれた石炭は、トロッコにつんで、そとへ

はこびだします。

五361 ほりだされた石炭が、山のようにつまれて

います。

五362 この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場の

きかいを動かすのです。

五363 ガスも石炭からとれるし、そのほか、いろ

いろのくすりも石炭からとれます。

五364 いろいろのくすりも石炭からとれます。

五367 では、石炭は、どうしてできたのでしょうか。

五374 このような木が、たおれて土にうずまり、

長いあいだかかって石炭になったのです。

五376 大むかしのたいようのねつが、かたちをか

え、石炭の中にたくわえられていて、

十246 石炭の坑道。

十247 工員たちは、さくがん機やつるはしを持つ

て、石炭をほっている。

十2410 くずれくだけの石炭、シャベルですくう石

炭。

十2411 シャベルですくう石炭。

十2412 みるまに、トロッコにつまる石炭の山。

せきたんなし 「石炭無」(名) 1 石炭なし

五365 私たちは、石炭なしには、くらすことがで

きません。

せきにん 「責任」(名) 1 責任 ↓むせきにん

十一107 園 さあというときに、ひとりて責任を

しよって立つ、トップをこぐ人もいるだろう。

せきひ 「石碑」(名) 1 せきひ

八1210 「ピオのはか」と書いた、小さなせきひを

立ててやりました。

せきふ 「石斧」(名) 2 せきふ

九823 かこの中には、いつのまにか、せきふらし

い物、土器らしい物、(略)がたまっていきます。

九829 園 そら、これはせきふらしいぞ。

せきゆ 「石油」(名) 1 石油

十四116 罎 このランプは、石油でもきはつ油でも、どちらをおつかいになってもかまいません。

せく 「塞」(五) 2 せく 《一カ》

五63 ダムにせかれていけになり、

九364 罎 大きなこうがんの岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみずが、せかれて、たきになり

せけん 「世間」(名) 3 世間

十361 世間からはますますわられて、だれひとりあいてしてくれなくなり、

十五781 きみたちの考えが、たとい世間の考えとちがっていても、

十五783 はじめ、きみたちは、世間の人にわかってもらえないかもしれない。

せつ 「節」↓いっせつ

せつ 「説」(名) 2 説 ↓ちどうせつ・てんどうせつ

十三158 教会のぼうさんたちは、天動説を信じていましたので、ガリレオを呼びだし、その説を人に教えるはならない、といました。

十三163 ガリレオは、《略》、やむを得ず自分の説はあやまりであったということにして、

せつかい ↓おせつかい

せつかく 「折角」(副) 9 せつかく

二94 罎 せつかくあつめたことばが、ごちゃごちゃになっっています。

六231 罎 せつかくですが、わたしたちはみんな、はたらくやくそくをしているのです。

七454 罎 せつかくのおこころざしですが、このお金はいただきかねます。

十三424 罎 せつかくの記念品だから、とつておいたほうがいいよ……

十四511 罎 私は、せつかく花が開いても、とちゅうから、黄色くなって落ちてしまったたくさんの

かぼちゃの花を見えています。

十四562 罎 しかし、根さんが、せつかく吸ってくださった地の中の水や養分でも、

十五501 罎 せつかくうけついできたこのしごとは、ぜひ続けてください。

十五557 罎 まあ、そのようなありさまで、せつかくのおたずねもむだになるようなわけだが、

十五936 罎 せつかくおまねきをいただきながら、そうあたふたとおいとますることもできませんからね。

せつきとき 「題名」 1 石器と土器

十二991 石器と土器

せつく 「節句」(名) 1 せつく

十五664 それからいく年たつても、せつくがくるごとにその人形をかざって、

せつけいず 「設計図」(名) 2 設計図

十358 佐吉は、もう、じつとしていられなくなり、設計図をひいては組みたて、

十364 いままでの失敗のもとをとりのぞいて、新しい設計図をこしらえあげた。

せつこう 「絶好」(名) 1 せつこう

十二858 相手をいきよにうちのめすぜつこうのチャンスです。

せつこさん 「人名」 1 せつこさん

四301 せつこさんは、「くみの人みんな」にきてもらいたいといって、文を書きました。

せつし 「摂氏」(名) 1 C
六61 罎 C
せつする 「接」(サ変) 2 接する 《一シ》
十四711 そうなると、茶わんに接したところでは、

湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、

十四732 かべや屋根が熱せられると、それに接した空気がふくれてのぼる、

せつせと (副) 4 せつせと

七868 草をやつたら、3びきとも、せつせとたべました。

九766 おかみさんが、店の人とふたりで、せつせと貝をこじあけて、むきみをつくっていました。

十四539 罎 それは、私が、《略》、せつせと養分をこしらえて、送ってあげたからですよ。

十五921 「ふとった幸福」どもは、せつせと、いぬと、さとうと、パンをときつけて、

せつな 「刹那」(名) 1 せつな

八309 黒うしは、にわかにかげだし、天の川へ落ちこもうとしましたが、そのせつな、けんぎゅうは、うしの首をかるくポンポンとたたきました。

せつない 「切」(形) 1 せつない 《一イ》

十五1219 それはなんともいえない、せつない氣持であった。

せつめい 「説明」(名) 3 説明

十二454 罎 人形はものをいわないが、そのかわり説明がついている。

十四8612 ばんそうの音楽や、場面の組みあわせと説明のことばなどによって、

十五516 大英百科辞典の東洋美術についての説明は、プリンクリーのふでになったものである。

せつめいする 「説明」(サ変) 4 説明する 《一シ》

九849 罎 わたしは、なんにも説明しなかったが、十二1126 これは、《略》人体のことを絵いりで説明した本を、《略》、日本で出版したものです。

十四107 ㊦ よく説明しておもらいになるといいと思います。

十四855 こんなことばによって、映画は私たちに説明してくれた。

せど「背戸」(名) 2 せど

三566 ㊦ うたを わすれた カナリヤは、せどのこやぶに いけましょか。

八143 夏の終りに、せどのあおぎりの木の皮に生みつけられた、あぶらぜみのたまごがありました。せどもの「瀬戸物」(名) 2 せどもの

九841 ㊦ せどものかけらみたいなものがあるじゃないか。

九859 ㊦ こんなただのせどものかけらがと思うような物ですが、

セドリック (人名) 2 セドリック

九461 ㊦ 「小公子」のセドリックは、七つ八つのころでも、せんきよのことを話していますけれども、

九462 ㊦ ぼくにはまだ、セドリックほどわかりません。

セドリックしょうねん (人名) 1 セドリック少年

九452 ㊦ 「小公子」の話をでてくる、セドリック少年のように、子どものころから、世の中のことに注意を向けるようにといわれました。

せなか「背中」(名) 24 せなか

三444 ㊦ ぼくが、きみたちの せなかの上を、かぞえながらとんでいくから、

四157 えつ子がわたしの せなかで ねんねした。

四158 わたしの せなかにおおをつけて ねんねした。

四162 せながほかほか あたたかい。

四1005 うらしまは、かめを だきおこして、せな

かをさすって、

五804 水の音をきいていたら、せながあつくなってきました。

五809 それが、にしもりさんのせなかにあたりました。

五961 あたまからせなかにかけて、き色がかった美しい鳥になりました。

六1407 とらさんが手をのぼして、一ぴきのうさぎさんのせなかをおさえました。

七411 私は、D・D・Tを、頭から、首すじから、せなかから、腹までふりまかれて、

七951 うさぎのせなかをさかさになると、毛がふわふわとびます。

八222 あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、われめができました。

八227 せなががえます。

八7710 ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、火花をだすことさえできた。

八801 ㊦ おまえさん、せなかをまるくしたり、のどを鳴らしたり、

九9011 もういいったら——と、やまだのせなかをおしながらさる。

十508 いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかをかくようなかっこうをしました。

十509 「クッチケルヨ」は、足をせなかに「くっつけるよ。」というのです。

十三4510 見物人にせなかを向けないように、

十三478 そのせなかにその角のかげ。

十四975 そのやいた鳥は、肉を切るナイフとホークとをせなかに立てたまま、

十五296 少年は、必死のかくごで、すばやく女の子を自分のせなかにかくしました。

十五6411 見るなり私は、おじさんの廣いせなかにとびついた。

十五8811 ㊦ それから、あの、なまにはいらなくて、せなかをむけているのはだれです。

ぜひ「是非」(副) 2 ぜひ

十五502 ㊦ せっかくうけついできたこのしごとは、ぜひ続けてください。

十五5210 ぜひカーネギー博物館に館長ホランド博士をたずねるようにとおっしゃった。

せぼね「背骨」(名) 1 せぼね

十五2811 こしにさしていた短刀をぬいて、〈略〉、鳥のせ骨をさけて一つきつき通し、

せまい「狭」(形) 7 せまい《—イ》

二269 ㊦ せまいはしがありました。

二282 ㊦ やぎと やぎと、せまいはしの上で、つのおしあつていました。

十354 かれは、そのりっぱな機械をみて、感心するとともに、なんともいえないかた身のせまい思いがした。

十二232 せまい家なので、兄は氣のどくだといって、いつもえんりよがちにしています。

十二687 糸のこは糸のように細く、ひきまわしはひじょうにせまい。

十二709 芭蕉はひとりしずかにしているのがすきだというし、家もせまいので、

十三181 もともとせまい、小さな國ですのに、そのもつともよい土地を失いました。

せまる「迫」(五) 8 せまる《—ツ—リ》

十362 だれひとりあいてしてくれなくなり、まづしさはいよいよせまってくる。

十一826 少年は、父親のうでの中にあたれましたが、胸がせまって息もつけませんでした。

十二776 時間がせまったので、私はユニホームをつけて、練習のためにコートにでました。
十三229 「〈略〉。」といって、かれにせまりました。

十四62 老いた母を思う子の眞情は、〈略〉、私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。
十四479 こんなきけんのせまった中で、なんというおちついた、またなんというほがらかな人だらう。

十五307 わしは、〈略〉、少年の周囲をおおい包みいきおいでせまって来ました。

十五311 少年は、〈略〉、目の前二メートルほどまでせまって来たこのあくまの胸をめがけて、

せみ「蟬」(名) 13 せみ ↓あぶらぜみ・おやぜみ・かなかなぜみ

一179 せみがどこかでなきました。

七614 まよったせみが、かきの木につきあたって、バタバタやって、にげていった。

八157 せみの子どもたちは、〈略〉トンネルをほりながら、さぐりさぐりもぐっていきます。

八169 これは、木からいうとめいわくしごくなことですが、せみの子からいえば、母親のちぶさにすがつたようなもので、

八208 せみの子は、だいたんに、まっすぐなあなを地表に向けてほっていき、

八216 せみは、さっそく、ぶさいくなかつこうをして、それにはいあがっていききました。

八226 すると、中から、みずみずしい、やわらかい、せみのからだのはみだしてきました。

八242 明かるい光がさつとさすところになると、せみの羽は、ぶるぶるとふるえて、

八251 文 図 やがて死ぬけしきはみえずせみの声

八253 にぎやかに鳴きたてたせみも、やがて、秋になると、みんな死んでしまつて、

八256 せみの死がいは、ありたちがよつてたかつてひいていきますが、

十一127 まつの木では、きょうからせみが鳴きはじめた。

十一148 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちょうも舞い、まっさおな海もわらい、

せみのこたち「蟬子達」(名) 3 せみの子たち
八194 木の根のしるをわずかずつしているせみの子たちは、たいへん生長がおそくて、

八1910 せみの子たちは、はじめにはあさいところにおいて、ほそい木の根のしるをすつていますが、

八203 七年の月日がたったころ、せみの子たちは、〈略〉、もう大きくなりきつたことを知ります。

せめて(副) 4 せめて

三11310 せめて 月夜には 月をみて、わたくしのことを思い出してください。

五674 せめて、おけの一つも、もらってくればよかったのに。

九342 せめて、貝だけでもおみせしたいと思っています。

十四161 図 このまごころを書いてお送りして、せめてものおなぐさめにしたと思っています。

せめる「責」(下) 1 せめる『一メ』
十一621 父は、「なぜ、そのとき、『〈略〉。』と、きつぱりことわらなかつたのか。」とせめた。

せりふ「台詞」(名) 1 せりふ
十三318 さるまわしは、さるをつかつたり、せりふをいったり、〈略〉、なかなかいそがしい。

せる(助動) 88 せる『セ・セル』
一255 たねまきする人、いえをたてる人、さ

かなをとる人、きしやははしらせる人。
二343 せもし、ちよつとそのぞうというものに、さわらせてくれませんか。

三1210 はんたかは 目をかがやかせて、おしやかさまのおかおをみつめました。

三841 図 お日さまが、雨のつぶつぶをしゃぼんだまみたいに光らせるのよ。

三925 こうえんにさいたきれいな花は、みんなの心をたのしませてくれます。

四613 図 とにかく食事をすませる。
四619 二十九わの がんが、食事をすませると、

四1155 図 でも、うちのことも氣にかかりますので、かえらせていただきます。

五107 図 きかんしの人が、いっしょうけんめいに走らせているからさ。

五109 図 どこで走らせているの。

五243 図 ぼくは、はつと思つて、すぐ立つて、その人をすわらせてあげました。

五246 図 みんなを立たせ、不自由な人や、女や、子どもたちをすわらせました。

五247 図 女や、子どもたちをすわらせました。
五362 この石炭が、汽車や汽船を走らせ、工場のきかいを動かすのです。

五551 まさこをおかあさんにわたして、食事をすませてから、

五621 図 けさ、こんなに大きな花を、三つもさかせたのは、だあれ。

六268 あり一は、ろの火を赤くもえたさせます。
六487 図 ふと、そんなこと思わせる、あのまっさおな海の色。

六494 図 ふと、そんなこと思わせる、あのまっ白な波の音。

あれ地をみどりの野とし、祖國を生き返らせ、

十三336 夏の日には、この音がすずしい氣持をおこさせ、
 十三337 冬の日には、いかにもさむざむとした氣持をおこさせる。
 十三3511 早春になると、はとぶえが天から鳴ってきて、ホートンをにぎわわせる。
 十四53 私たち自身の生活を思わずふり返らせないではない強い眞実の力が、
 十四1017 ランプとコーヒー入れとは、あす、送らせませす。
 十四1155 おかあさん、いま、ランプとコーヒー入れとを送らせました。
 十四203 みんなは急いでそうじをすませた。
 十四542 あれは、〈略〉、あなたがたが、かつて花をさかせたからですよ。
 十五83 さくらさくら人が人が子を歩かせて
 十五479 佐賀はん主は、お庭焼といって、自分の家であつたか、おくりものにする焼物とかを作らせていたが、
 十五5311 私の目に映じたのは、〈略〉タイピストになにごとかをいながらうたせているしらがの老しん士のすがたであつた。
 十五573 きみは室を二つももっているようだが、その一つに日本の青年をとまらせて、
 十五602 一路自たくへと車を走らせた。
 十五697 つくえの上に、くつをみがかせた満ぼう時代の私の写真がかざられてあるではないか。
 十五705 せきあえぬなみに目をくもらせたおばさんが、〈略〉とおっしゃった。
 十五714 このすがたをおじさんがごらんになったら———といつて、おばさんは声をくもらせた。
 十五716 そうしておじさんを喜ばせましようね。

十五749 自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、〈略〉、社会に巣だたせたいのが念願である。
 十五962 『ふとった幸福』どもが、ひどい目にあわせたのだよ。
 十五127 高橋さんが、きょうの日記当番ですが、私にも書かせてください。
 セルロイド (名) 1 セルロイド
 九33 そのうちに、セルロイドの三角じょうぎをひろいあげる。
 せわ「世話」(名) 11 せわしおせわ
 四51 こうえんのせわや、どうろのそうじなどもしてくれませす。
 五633 せわはしてやりました。
 五643 生まれたときからせわはしてきたが、
 七2310 もう、おさらいがすんだから、あおむしのせわをしよう。
 九198 協会では、喜んでつづめのせわをする返事をしました。
 九1910 協会ではすぐに、〈略〉苦しんでいるつづめのせわをすることを、新聞に廣告しました。
 十一889 チチロは、いよいよよくせわをして、ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでした。
 十二412 私が命がけでせわをすれば、ケラーさんがすぐわれるのです。
 十四612 人間がいなかったら、また、その人間がせわをしてくれなかったら、私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。
 十五573 その一つに日本の青年をとまらせて、そのせわをしてはくれまいかと、
 十五112 この手でおまえのせわをしているときは、

せわしい ↓きぜわしい
 せわする 「世話」(サ変) 1 せわする 《—スル》
 十五208 それに、この子どもたちをせわする、ひとりの女の家庭教師がついていました。
 せん「千」↓いくせん
 せん「船」↓かもつせん・ていきせん
 せん「戦」↓けつしょうせん
 せん「銭」↓いっせん・さんじっせん
 せん「線」(名) 9 線 ↓かいがんせん・だいいっせん
 十二526 (2) あなの両わきを切りこんで、手さきをまるめ、指の線をほる。
 十二831 まっ白い線のひかれたコートには、日ざしがさんさんと降りそそいでいました。
 十四6912 みょうなゆらゆらした光った線や、うす暗い線が、不規則なまようのようになって、ゆるやかに動いているのに氣がつくでしょう。
 十四6912 うす暗い線が、
 十五367 数という形のないものを表わすのに、線を横に一本引いたり、二本引いたりした。
 十五369 「うえ」「した」という考えを表わすのには、線を横に引いて、「・」をその線のうえにいたり、したにいたりして表わした。
 十五369 「・」をその線のうえにいたり、
 十五372 木は、もともと形をうつしてできたものであるが、それに線を加えて、「もと」とか、「すえ」とかいう考えを表わすことにした。
 十五578 つくえのまん中にチョークで線をひき、向こうは日本、こちらはアメリカといつて、
 ぜん「膳」(名) 1 ぜん ↓おぜん
 十二618 昔、あるまじい人が、〈略〉、この岩屋からぜんやわんなどの家具のであることを知った。

せんいん 「船員」(名) 1 船員

十一103 図 では、実力があって、力いっぱいはたらくいい船員には、だれがなるのさ。

ぜんかい いわい 「全快祝」(名) 1 全快いわい

四575 その日のばんは、かつちゃんの全快いわいをしようというになりました。

せんきやく 「船客」(名) 1 船客

十四453 乗っていた百四人のうち、乗組員十一人、船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

せんきゅう ひやくしちねんしがつじゅういちにち

「千九百七十七年四月十一日」(名) 1 千九百七十七年四月十一日

十四113 図 パリー、千九百七十七年四月十一日

せんきゅう ひやくしちねんしがつじゅうろくにち

「千九百七十七年四月十六日」(名) 1

十四139 図 パリー、千九百七十七年四月十六日 おかあさんのことを思っています。

せんきゅう ひやくしちねんしがつとおか 「千九百七十七年四月十日」(名) 1 千九百七十七年四月十日

十四64 図 パリー、千九百七十七年四月十日 おかあさんとお話をすると思います。

せんきゅう ひやくしちねんしがつ 「千九百七十七年四月十日」(名) 1 千九百七十七年四月十日

十四451 千九百二十年十月の、ある月のない夜のことです。

せんきょ 「選挙」(名) 1 せんきょ

九461 図 セドリックは、七つ八つのころでも、せんきょのことを話していますけれども、

せんきょうし 「宣教師」(名) 1 宣教師

十二1096 イソップ物語はイソップという人が書いたお話ですが、これをキリスト教の宣教師が日本に傳えたのは、三百五十年ほどまえのことです。

ぜんご 「前後」(名) 3 前後

七352 汽車がゆれるたびに、前後からおおされて、十二542 人形がかたむかないように、話すときは人形の顔を前後に動かす。

十二935 前後の続きぐあいをよく考えて、ことばを選び、

せんこう 「線香」(名) 1 せんこう

十四6510 せんこうのけむりでもなんでも、《略》いくらかの高さまでは、まっすぐにあがりますが、せんこうはなび 「線香花火」(名) 1 せんこう花火

九285 図 持ちかえしせんこう花火のゆれている

ぜんこく 「全国」(名) 2 全国

十二564 傳説を聞く全国で調べてみると、よくにたようなのが、あちらこちらで発見される。

十二1144 議事堂 みなさんがたの代表が、全国からここに集まって、いろいろなことを相談します。

ぜんこくみん 「全国民」(名) 2 全国民

九201 「かわいそうなつばめをすくえ。」という運動に全国民が、加わったほです。

十三2511 それは、全国民のたましいでした。

ぜんご する 「前後」(サ変) 1 前後する 《ーシ》

十三571 図 ミケランジェロとラファエルは、前後して、そこからローマに出て、

せんさんびゃくねん 「千三百年」(名) 1 千三百年

十二1028 夢殿の観音 この美しい、りっぱなほとけさまは、いまから千三百年ばかりまえに作られたものであります。

ぜんじつ 「前日」(名) 1 前日

十四671 前日雨でも降って、土のしめっていると

せんしゅ 「選手」(名) 4 せんしゅ 選手 ↓キンゼーせんしゅ・しみずせんしゅ・チルデンせんしゅ

しゅ・テニスせんしゅ・りようせんしゅ

七488 ぼくも、せんしゅになって、いっしょうけんめいにやった。

七503 どの学校のせんしゅも、みんな、運動場に整列して、式をあげた。

七536 なんだか、向こうのせんしゅは、大きくて強そうだ。

十二812 二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをいのつてくれていることを知って、

せんじょう 「戦場」(名) 1 戦場

十三1812 戦場から帰ったダルガスです。

ぜんしん 「全身」(名) 3 全身

十二372 私は、身動きもせず、立ったままで、全身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。

十四413 図 この光を全身にあびよう。

十五311 石を取るが早い、《略》このあくまの胸をめがけて、全身の力をこめて投げつけました。

せんす 「扇子」(名) 4 せんす

十677 図 でも、風がどつきを運んできてはたいへんだから、次郎かじゃ、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやってくれ。

十679 次郎かじゃは、こしからぬきとったせんすを、さらりと開きました。

十6812 こしをうしろにひき、せんすの手だけをまえにつきだして、おおぎつつけていました。

十712 きゅうにいきおいづき、せんすをほうりだして、自分も指をつっこみました。

せんせい 「課名」 2 先生

二25 四 先生……二十一

二211 四 先生

せんせい 「先生」(話手) 10 先生

七167 先生、早くでかけましょう。」先生「じゃあ、

でかけよう。

七17 2 きょうは風がありませんから、ちょうちよが、たくさんとんでいるでしょう。」先生「よくおぼえていたね。」

七18 3 先生、この実はなににするんですか。」先生「そんなに実をとっちゃいけない。」

七19 1 きょうは、ずいぶんとんでるなあ。」先生「あぶないよ。」

七19 7 先生、風の日ば、ちょうちよは、どこにかくれているんですか。」先生「しげった草むらの中に、かくれているのさ。」

七19 11 先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。」先生「知っている人——」

七20 2 先生「きしもとくん。」きしもと「だいこんばたけです。」

七20 4 だいこんばたけです。」先生「そうだ。」

七20 9 いまちょうど、こんな白い花をつけています。」先生「それで知っているんだね。」

七21 3 先生「とまっているちょうちよが、どんなかっこうをして、みつをすうか、よくごらん。」

せんせい「先生」(名) 146 せんせい 先生 ↓いし いせんせい・クラークせんせい・こうちようせんせい・さとうせんせい・サリバンせんせい・サリバン

せんせいなし・だいせんせい・たかやませんせい・にいじませんせいねんぶ・にしのせんせい・のだせんせい・ホランドせんせい・みつぼうせんせい・も

りたせんせい・やまもとせんせい

一42 1 せんせいの目のなかに、わたしがいますよ。

一42 5 せんせいの目のなか、ひろいな。

二9 3 先生が、それをごらんになって、「略。」とおたずねになりました。

二21 2 先生、大きくもがすをかけていました。

二21 6 先生、ゆうがおがこんなに大きくならしました。

二22 1 先生、わたしたち、もみじのはっぱで、いろはあそびをしました。

二22 9 先生、すのおそうじをするので、はとをだいていたら、たいへんあついとおもいました。

二23 3 先生、はねのいたんだ大きなちょうちよが、けさも、ゆりの花にきていましたよ。

二23 6 先生、たいへんです。

二24 1 先生、いものはのつゆは、あれ、ただの水でしょうか。

二24 2 先生、大きなあおがえるが、とうもろこしのはっぱに、じつとぶらさがっていました。

二24 7 先生、でんせんに、つばめがたくさんとまっています。

二58 8 先生が、こんなおはなしをなさいました。

二60 3 先生は、つづけておっしゃいました。

二20 3 先生が、くぼんにつぎのようなことをおかきになりました。

三30 6 「略。」と、先生がおっしゃいました。

三38 4 先生がくぼんに、「略。」とおかきになりました。

三95 9 おとうさんのかおも、先生のつくえもかくことができます。

三99 3 先生が、「略。」とおっしゃいました。
四19 6 先生がこうおっしゃったので、
四20 8 先生が、「略。」とおっしゃいました。
四34 4 先生にこうたずねられて、みんなは、も

う一ど、かずこさんの文をよみなおしました。

四34 7 先生は、かずこさんのおとうさんのことばに、気がつきました。

四35 9 先生は、そこに気がついたのです。

四36 7 先生、こんなことがありました。

四39 4 先生、ありをころそうとしたとき、にいさんのことばを思い出して、

四39 7 先生、さくらの枝をおろうとしたとき、おじさんのことばに気がついて

四40 1 先生、ただしいことばは、いつも、あなたがたのいいお友だちになったり、先生になつたりしてくれます。

五28 8 先生からかい。

五38 3 けさ、先生に、先生のお友だちから手紙がきました。

五38 3 先生のお友だちから手紙がきました。

五38 4 そのかたは、ほっかいどうで、やはり先生をしていらっしゃるのです。

五77 8 先生のお友だちから手紙がきました。

五77 9 先生が、「略。」とおっしゃいました。

五78 10 先生といっしょに、学校のはたけのむこうを流れている小川のところにいきました。

五82 5 はらまきをきちんとして、ねびえをふせぐこと、それから——と、先生がおっしゃいました。

五82 9 七月十五日 金 先生のお友だちが、学校をみにいらっしゃいました。

五83 3 おひる休みのとき、私たちは、運動場にあつまって、先生をまん中にしてならびました。

五83 4 先生のお友だちが、「略。」とおっしゃったとき、

五八四 「略。」と、先生がおっしゃいました。

六七六 先生、ぼくたちは動いたり息をしたりするから、生きているんでしよう。

七六五 先生。

七六五 先生。

七七六 なんども手をふりながら、先生にさようならをして走って帰る子ども。

七八〇 先生のおしごとは、渡しもりのようなものだ。

七八六 先生、早くでかけましょう。

七八六 先生、きょうは風がありませんから、ちようちよが、たくさんとんでいるでしょう。

七八七 先生、この実はなににするんですか。

七八八 先生、風の日は、ちようちよは、どこにかくれているんですか。

七八九 先生、こっちの白い花のはたけは、なんのはたけですか。

七九〇 先生も、あおむしをかっていらつしやるって。

七九一 先生は、あおむしがさなぎになるって、教えてくださらなかったの。

七九二 先生は、いいことをおっしゃいましたね。

七九三 先生、きょうね、國語の時間に、先生にほめられたの。

七九四 きょう、先生にほめられたんですって。

七九五 しんぼんの先生が、「略。」といわれた。

七九六 しんぼんの先生のあいずで、ぼくらは場所をこうたいした。

七九七 先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶色のうさぎを、かごにいれて持っていらつしやいました。

七八七 先生は、「略。」とおっしゃって、さきに

立ってお歩きになった。

八五九 そのことを先生に話してみたら、先生は、「略。」とおっしゃった。

八五九 先生は、「略。」とおっしゃった。

八六〇 先生におきしますと、うんかのたまごだということでした。

八六一 先生におきしたら、このいねは、いもち病という病氣にかかったのだとおっしゃいました。

八六二 ぼくは、いまでも、先生やみなさんのことを、一日もわすれたことはありません。

八六三 先生のことを思うと、みなさんがうらやましくなります。

八六四 先生、おかわりありませんか。

八六五 ぼくは、先生やみなさんといっしょに、この湖へつりにいけたらと、いつも思っています。

八六六 いそぐ用事だったので、先生にだけお目にかかってすぐ帰りました。

八六七 先生、「小公子」をみなさんにお話してあげてください。

八六八 あの廣い学校の運動場で、先生とみなさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと思います。

八六九 先生、みなさん。

八七〇 先生が、町角までいつて、待っているようにとおっしゃったので、

八七一 先生が、リヤカーに、はこやかごなどをのせておいでになりました。

八七二 先生について、五十人のなかまが、おくれないように歩いていきました。

八七三 もうすこしで貝づかに着くというところで、先生は一けんの農家にたちよられました。

八七四 そこへ着くと、先生はステッキを深く土の中へお立てになりました。

九八〇 先生、ここは貝ばかりですよ。

九八一 口々にこんなことをいうのを、先生は、耳にもおれににならないで、

九八二 先生のかごの中には、いつのまにか、せきふらしい物、土器らしい物、「略。」がたまつて

九八三 先生のところは、いろいろでるらしいぞ。

九八四 先生のところにあるのと同じだね。

九八五 ぼく、先生におたずねしてみよう。

九八六 私はかけていつて、先生におたずねしますと、

九八七 先生がまわつておいでになりました。

九八八 先生のふえが鳴りました。

九八九 先生、まだすべつてはいけませんか。

九九〇 先生、もうすべらしてください。

九九一 先生、もういいでしょう。

九九二 先生は、ふたりとも、まだ上へ上へと登つていかれたが、

九九三 雪けむりがきえて、先生のお顔がうかぶ。

九九四 先生がジャンプをなさるそう。

九九五 たちまち先生のからだは、ちゆうにうかんだ。

九九六 先生は、はちまきをして、すべりだされた。

九九七 先生のかからだは、美しくちゆうをとんでいく。

九八〇 四十メートルも空中をとんで、先生は地上の人となられた。

九八二 午後、先生について、ひとりひとり、正しいすべりかたを教えていただいた。

九八五 先生の横顔。

九八七 窓をあける女の先生。

九八八 「略。」という先生の声とともに、七色の光が写しだされる。

十582 算数の時間に、先生が、はしごでいちようの木にのぼって、いちようの葉をたくさん落してくださいました。

十619 もう、先生のせいくらい高くなりました。

十一151 先生がオルガンをおひきになると、

十一4310 女の先生が、卒業する子どものお名前をお読みあげになりました。

十一7212 先生が、いまじきにおいでになりますからね。」看護婦は、ほかにはなんにもいわずに

十二193 先生、このあいだの晩も、ピアノの先生が、散歩にいらして、

十二2112 先生、あなたの歌には、そのさびしい気持ちがでているので、人の心を動かすのだから、あのピアノの先生がおっしゃいましたよ。

十二222 先生もあるし、友だちもある。

十二3210 先生——私の心の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、いいえ、それよりもなによりも、私を愛するためにくださった——

十二334 その人形と遊んでいますと、先生は、私の手に、「人形」という文字をつづられました。

十二347 けれども、物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、先生がおいでになってからいく週間もたってからのことでした。

十二355 先生は失望して、一時やめていらっしやいましたが、

十二3510 先生がかけらをいろいろのかたすみにはきよせておいでになっているようすを感じましたが、

十二361 しばらくして、先生がぼうしを持ってきてくださったので、

十二3611 だれかが水をくみあげていましたので、先生は私の手をといての口の下へやりました。

十二373 私は、身動きもせず、立ったままで、全

身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。

十二382 それは、先生が興えてくださった新しい目で、すべてをみるようになったからです。

十二3811 「父」「母」「妹」「先生」などのことがあったことを思い出します。

十二4111 先生も、「略。」といのりながら、一生をクラーのためにささげました。

十二714 先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、(略)、曾良は喜びました。

十二757 先生、もうおやすみですか。」その声は、毎日ききなれてる曾良の声です。

十二7511 先生は、おひとりですらどうしていられるかと思うと、

十二764 先生、今夜の雪の句はいかがですか。

十三532 もとの先生から、一まいの絵はがきをいただきました。

十三537 その下の白いところに、先生の手で、こう書いてありました。

十三552 先生からいただいた絵はがきをだして見せますと、

十三618 先生、きつと先生も、そんなお気持ちで、この絵はがきを送ってくださいたんだらう。

十四1912 そこへ先生がいらっしやう。

十四204 先生は、私たちのつかっていることばの中で、外国からはいつてきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してくださいました。

十四211 みんながおどろいていたが、先生は、つぎつぎと書き続けられた。

十四215 「略。」とかいいながら、先生のお書きになる文字に目をそそいだ。

十四217 先生は、そんなことにはおかまいなしに、どんどんお続けになった。

十四224 先生、私は、これはみんな、日本語だとばかり思っていました。

十四226 「(略)。」と、さもふしぎそうにいうと、先生は、「(略)。」とおっしゃった。

十四231 先生が、「(略)。」とおっしゃったので、

十四236 すると先生は、「(略)。」

十四243 先生のお話を聞いているうちに、

十四247 先生、どうして、そんなにたくさんの方の外国のことばが、日本語になったのでしょうか。

十四261 このあいだ、先生から、「(略)。」とうかがったが、

十四274 それで、先生にそのことをおたずねすると、先生は、「(略)。」とおっしゃった。

十四274 先生は、「(略)。」とおっしゃった。

十四369 キュリー夫人は、「(略)」、物理の時間に、先生から、星をつかめといわれ、

十五234 ふと気がついてみると、いままで先生のそばにいた女の子のすがたが見えません。

十五235 先生が第一にさわぎだす、両親があわててあたりをかける。

十五583 先生、つまり、私のかれのギリシア語の先生で、かれは私の日本語の先生というわけだが、

十五583 先生は私の日本語の先生というわけだが、

十五1212 先生は、「(略)。」とおっしゃった。

せんせいがた 「先生方」(名) 4 先生がた十五1217 読んでいるうちに先生がたに対する感謝の念があふれてきた。

十五1229 先生がたがみんな、合唱してくださいました校歌や、

十五1231 なぜいままでも、もっと先生がたとしたしくしなかったのだらうと、ざんねんに思いました。

十五 先生がたのご幸福をいのりいたします。
せんせいたち 「先生達」(名) 1 先生たち
九 110 5 そのみことなすべりぶりにみとれていると、
先生たちは、もう目のまえにこられた。
せんせいとみなさんへ 「課名」 2 先生とみなさんへ

九 3 1 五 先生とみなさんへ……三十一

九 31 1 五 先生とみなさんへ

せんぞ 「先祖」(名) 1 先祖

十二 59 7 三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけて、わがまをしました。

せんそうちゅう 「戦争中」(名) 1 戦争中

十五 55 3 ホランド博士は、戦争中で費用が思うようにつかえないことについてくわしく話し、

ぜんそくりよく 「全速力」(名) 2 ぜんそくりよく
二 70 10 二 70 10 二 70 10 さあ、ぜんそくりよくだ。

二 71 1 10 ぜんそくりよく。

せんぞだいだい 「先祖代代」(名) 1 先祖代々
十二 55 2 先祖代々住みなれた土地はもとよりのこと、自分の生まれたところは、

センター (名) 8 センター
七 48 10 ぼくのほうは、センターが外野へでてしまったので、あいてのセンターが、「略」とさ

わいだ。
七 49 1 あいてのセンターが、「略」とさわいだ。
七 51 6 ぼくらのほうが、どんなあてられて、センターまで、外野にでてしまった。

七 51 8 ひがし村の学校のセンターが、喜んで、「略」とさげんだ。

七 53 10 センターが、外野のセンターにれんらくをとって、

七 53 10 外野のセンターにれんらくをとって、

七 53 11 あいてのセンターは、ぼくをねらった。
七 54 2 ぼくは、しっかり受けとめて、すぐセンターに渡した。

ぜんたい 「全体」(名) 4 全体 いうちゅうぜんたい・からだぜんたい・ぎんがけいぜんたい・ぐんぜんたい・じんるいぜんたい・せかいぜんたい・といけんぜんたい・まちぜんたい

十 32 4 いつも、全体の中の部分、部分があつての全体、というつながりをわすれないで、

十 32 4 部分があつての全体、

十一 10 12 10 ああ、あの工場でも、また、日本の國全体だつて、同じことだと思ふ。

十五 39 9 「に」は「仁」というように、漢字の全体をくずしたものから作りだしたものである。

せんたく 「洗濯」(名) 2 せんたく
五 102 9 さんちゃんのおかあさんが、せんたくをしますと「略」と、ひわもまねをします。

十 14 3 ビエヌという川の岸には、「略」女の人たちが、ならんでせんたくをしていました。

せんたくもの 「洗濯物」(名) 3 せんたく物
六 104 2 10 向こうの家のせんたく物もみえますよ。

九 12 3 町の通りを、電線を、はたを、せんたく物をふいている風である。

十 20 12 10 せんたく物のほし場。

せんだつて 「先達」(副) 3 せんだつて
九 34 4 10 せんだつて、はじめて畑のかいこんのお

てつだいをしました。

十一 5 5 ついせんだつて、大学生に頼んで乗せてもらったうれしさで、まだむちゅうになつて

十二 18 4 10 せんだつて、ふと羽を動かしてみたら、

ピピピという音がしました。

センチ 10 いちてんごセンチメートル・いちにセンチ

チ・いっセンチ・きゅうセンチ・くじつセンチ・ごセンチ・ごセンチメートル・さんじつセンチ・さんじつセンチあまり・さんじつセンチメートル・さんセンチメートル・しごじつセンチ・しセンチ・にじゅうさんセンチ・にじゅうにセンチ・にセンチ・にセンチメートル・はちじゅうごセンチメートル・ろくセンチメートル

せんちよう 「船長」(名) 3 船長

十一 9 9 10 あんな大きな船の船長と、コックスと、どっちがむずかしいだろうね。

十一 9 11 10 そりゃあ、船長のほうがむずかしいだろう。

十一 9 12 10 しかし、りっぱなコックスは、いつかりっぱな船長になるだろうよ。

せんて 「先手」(名) 1 先手

十五 54 9 「略」と、私が一言も発しないうちに先手をうって、

センチチェンヌ (名) 1 センテチェンヌ
十 10 4 岸にある丘の上には、センチチェンヌというお寺の高いともみえました。

せんとう 「先頭」(名) 2 せんとう 先頭
四 46 6 10 おとといは、一ばん せんとうにして

くれていったのに。

九 105 4 「略」と、のだ先生が先頭に立たれ、

いしい先生は、みんなのあとからこられた。

せんどう 「船頭」(名) 1 せんどう
三 27 4 海にうかべて、大ぜいの せんどうがのりこみました。

せんどうさん 「船頭」(名) 3 せんどうさん
二 45 3 10 はやく、せんどうさんをみせてくださ

い。

二 45 4 10 はい、これは せんどうさん。

四744 ろ——ろをこぐせんだうさん。

せんだうたち「船頭達」(名) 1 せんだうたち

三282 「略」と、せんだうたちも、みている人々もいました。

セントルイス「地名」1 セントルイス

十二796 図「どこで生れたの。」「セントルイスで。」

セントルイスうまれ (名) 1 セントルイス生まれ

十二801 図 キンゼー選手はセントルイス生まれだよ。

せんななひやくねん「千七百年」(名) 1 千七百年

十五371 漢字が中國から日本に伝えられたのは、千七百年ほどまえであるが、

せんにひやくねん「千二百年」(名) 1 千二百年

十二1033 これは、千二百年ほどまえに、はじめて作られた日本のお金です。

ぜんにん「善人」(名) 1 善人

十五1063 図「善人であることの大きな喜び」で、いちばん幸福なのですが、いちばん悲しそうです。

せんばい「先輩」(名) 2 せんばい

十三613 図 なんといいても、二十二か三のわかさで、せんばいをしので大家になり、

十五571 図 ところがある日のこと、せんばいの教授がやって来て、

せんはっぴやくはちじゅうしちねん「千八百八十七年」(名) 1 一八八七年

十二314 それは一八八七年の三月三日、私が満七さいになる三ヶ月まえのことでありました。

せんばん ひきけんせんばん
ぜんぶ「全部」(名) 7 ぜんぶ 全部
六1111 図 そうすると、ナニヌネノという一ぎょうは、ぜんぶはなの音でできていることがわかった。
九357 図 いもなえは、ぜんぶで三百五十本ありました。
十二3810 全部覚えてはいませんが、
十四3311 図 このぎんが系全体が、星の世界の全部かという、なかなかそうではありません。
十四543 図 だから、このかぼちゃは、全部私のものだと思います。
十四572 図 だから、私は、そのかぼちゃは、全部私のものだと思います。
十五417 ローマ字は、全部で二十六字である。
ぜんまい「発条」(名) 1 ぜんまい
六51 図 そばには小さなしんぼうや、は車や、ぜんまいなどがならんでいる。
せんめんき「洗面器」(名) 1 せんめん器
十三289 せんめん器や、道具を入れた赤いこを、てんびんぼうでかついでやって来る。
ぜんりよく「全力」(名) 1 全力
十3812 図 それから、わが者は、眞珠貝の研究に全力をつくした。

そ

そ 1 そ

四767 図 そ——そまつにするな学用品。

九1155 図 赤いぬの一びきゆけばこの町のそこそ

こよりそいぬのあらわる
十二710 図 「七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、
ぞ(終助) 19 ぞ

三693 図 「さあこれでいけるぞ。」

三1127 図 「さあ、きたぞ。」

六356 図 ほう、また、すごいのがくるぞ。

六836 図 ぐいぐいひくぞ。
六1023 図 さあ、できたぞ。
六1091 図 これはおもしろいぞとぼくは思った。
六1103 図 これなら、弟のまねなんかわけはないぞと

思った。
六1109 図 よし、あしたはうまくやって、みんなをわ

らわせてみせるぞと思ったが、
六1418 図 よこどりすると、ゆるさないぞ。

九6310 図 裁判も、もうきょうで三日めだぞ。

九662 図 裁判も、もうきょうで三日めだぞ。

九674 図 裁判も、もうきょうで三日めだぞ。

九818 図 「なんにもないぞ。」
九825 図 先生のところは、いろいろでるらしいぞ。

九826 図 ここからも、でるかもしれないぞ。

九829 図 そら、これはせきふらしいぞ。

九1301 図 こんどこそは、にがさないぞ。
十664 図 「よくるすをするのだぞ。」

十五744 図 息白いつまで残る明星ぞ
そいつ「其奴」(代名) 1 そいつ

十五909 図 とにかく、そいつは、一どもわたしたちのテーブルにのぼったことはないようです。
そう「草」 ひつきみそう・ふくじゅそう・れんげそう
そう「艘」 ひいつそう
そう「相・推定」(形状) 118 そう

二477(会) 「このおいしそうなりんご。」
 二479 うれしそうに、そのりんごを、高くさしあげたりにおいをかいだりします。
 三107(圖) ちょうも 小鳥も たのしそう、きょうはあなたの花まつり。
 三363(会) トン、トン、ゴシゴシゴシ、スススス、たいへんにぎやかでいそがしそうです。
 三1095 月がうつくしくなると、かぐやひめのようすはいっそうかなしそうにみえました。
 四169 おかあさんのバケツがおもそうだったとき、またわの中ににげこみました。
 四224(手) もうすこしで、つかまりそうになったとき、またわの中ににげこみました。
 四371(会) そこには、ぶどうが、たくさん おいしそうにじゅくしていました。
 四523 どうかすると、するりとすべりおちそうになり、
 四524 おんぶしているがんも おちそうになります。
 四639 こういわれて、かっちゃんは、きまりわるそうににこにこわいました。
 四9110 けれども、おじいさんはうれしそう。
 四1316 いや、返せません。」天人は、かなしそうなかおをして、空をみあげます。
 五296(会) 一つは大きくて、ぼくなんか、とても持てそうもない物、
 五296(会) 一つは小さくてかるそうな物です。
 五302(会) ぼくにも持てそうですから。
 五414(手) のびはじめた草の上を、うれしそうに歩いていました。
 五527 いそがしそうに人々を通ります。
 六68(会) かたちも大きさもそれぞれが違ってはいるが、どれをみても大きくてえらそうである。

六610(会) ひとかどの役目をつとめて、世の中の役にたつのに、どれもこれも不足はなさそうである。
 六611(会) ただ自分だけがこのように小さくて、なんの役にもたさそうにない。
 六117 かいちゅう時計が、たちまち、ゆかいそうにカチカチと音をたてはじめた。
 六137 もうすこしで口が水にとどきそうになったとき、足がつるとすべって、
 六1810 上でき。」と、さもまんぞくそうにしき台をおりてきて、あせをふきます。
 六211 みんな、楽しそうにそれをたべます。
 六504(圖) 考えごとでもできそうな、ああ、おおらかな畫の空。
 六508(圖) きたないこともきえそうな、ああ、おごそかな夜の空。
 六705(会) にいさん、この雪だるま、歩きだしそうですね。
 六759(会) だいいち、おまえが生きているんだから、わかりそうなものだな。
 六1063 「(略)。」というのが、いかにも弟のいいそうなことばつきである。
 六11511 ほんとうにほしそうな口ぶりなので、「(略)。」といいますと、
 六1247 りすさんは、両手に、くるみをにぎって、おいしそうにたべました。
 七89 やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をながめている。
 七278 さなぎをふしぎそうにみながら、
 七3111(会) あの羽をしぼったら、きれいなしるがでそうね。
 七3610 「(略)。」と、心配そうにいました。
 七399 はじめ、さぶろうは、足をちぢめて、心配

そうに私の方をみていましたが、
 七401 うれしそうに、声をたててわらいました。
 七402 乗客は、高いところを渡っていくさぶろうを、おもしろそうに、みおくっていました。
 七536 なんだか、向こうのせんしゅは、大きくて強そうだ。
 七545 あぶなくころびそうになった。
 七854 もう帰ってもよろしい。」旅人は、うれしそうに立ちあがる。
 七943 しばらく動かないで、いたそうにしています。
 七977 そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。
 八2311 虫は、すずしい夜風にあたるのが、うれしそうです。
 八551 うさぎは、高いびきをかいて、さも楽しそうに畫ねをしていました。
 八7211 ぬまの水をのませてもらいたいとも思ったが、それもゆるしてもらえそうもなかった。
 八939 わかいはくちょうは、そのほそ長い首をあげて、心のそこから喜ばしそうにさげんだ。
 八989 いやいよきようは田植えだったので、みんなうれしそうでした。
 八1012 ずっと日やりがつづいたので、水をやるとうれしそうです。
 八1021 いねのほのさがふくらんで、いまにもほがでそうです。
 九379(手) くまざさやいろいろな名も知らない雑草がいちめんにはえていて、なにかでてきそうです。
 九529 きのはみんないそがしそうに、ドッテコドッテコと、へんな樂隊をつづけていました。
 九577 「(略)。」と、男は、下を向いて、かなし

十五856会 あの人たち、ずいぶんうれしそうな、幸福そうな顔をしているなあ。

十五856会 幸福そうな顔をしているなあ。

十五8511 「いちばんふとった幸福」が、〈略〉、たいぎそうに、子どもたちの方へやって来ました。

十五887会 ここにいるのは、『はちきれそうなわらい』で、

十五889 「はちきれそうなわらい」が、腹をかかえながらおじぎをする。

十五941 「はちきれそうなわらい」は、光のこしのあたりを、力まかせにおさえました。

十五10210会 いつでもすこし悲しそうにしているのは、だれもふり向いてくれないからです。

十五1064会 『善人であることの大きな喜び』で、いちばん幸福なのですが、いちばん悲しそうです。

十五11212会 おかあさんたちが悲しそうな顔をしているときでも、

そう 「相・伝聞」(形状) 13 そう

三1169会 するがにある山がいちばんみやこにもちかく、天にもちかいそうでございます。

六1244会 りすさんは、くるみがいすきだそうだから、あげようか。

八89 ほおじろ自身、國々のなまりのようなことばをもっているのだそうです。

八944 品種は、あじのよい「農林1ごう」というのだそうです。

八965 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎて、あとでなえがよくとれないそうです。

九335会 らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだんへってきたそうです。

九336会 まえは、もつともつといういろいろな魚がいたそうです。

九475会 あなたは、ごきげんよろしいそうで、けっこうです。

九1113会 先生がジャンプをなさるそう。

十四129会 その友だちの母親は、このランプに満足しているそうです。

十四6410 横からすかして見ると、ちょうど、けむりが廣がっているように見えるそうです。

十五908会 なんでも、たべてはうまくない鳥だそうじゃないですか。

十五1169会 あの人、おまえたちふたりをかわいがって、たいへんしんせつにしてくれるそうだね。

そう 「然」(副) 178 そう

一478 「〈略〉」。そういって、

二101会 人のなと、そうでないものに、わけたらいとおもいます。

二462会 「そうです。」

二681会 みんな「ひばりさんだ。」しや「そう。」

三6110 「〈略〉」。おとうさんは、そうおっしゃって、ジュデーにおきになりました。

三662 「〈略〉」。おとうさんは、そういって、またぐるぐるまわりをなさいました。

三739会 「あ、そうだ、光だ。」

四356会 「そうです。」

四3810会 「そうです。」

四453会 かつちゃんが、おしまいにしてくれていったから、そうしたんじゃないか。

四464会 「そうだな。」

四473会 かつちゃんが、そういうなら、十五ばんめにして、とぶことにしようじゃないか。

四993会 うん、そうしよう。

四1038会 かめ「このあいだ、たすけていただいたかめでございます。」うらしま「あ、そうか。」

四1104会 うらしまさんでいらっしゃいますか。」うらしま「はい、そうです。」

四1172会 うらしま「これを あけてはいけないというのですか。」おとひめ「そうです。」

五138会 「そうです。」

五244会 そう、それはよかったね。

五388会 それを送ってあげよう。そうすれば、こちらのようすが、いろいろとわかるだろう。

五5311 「〈略〉」。素晴らしいながら西の方をみると、小さな星がちらちら光っていました。

五607会 そうです。

五861会 「ああ、そうか。」

五972 そういつているうちに、秋になりました。

五1076 そういつて、ハーモニカのまねや、〈略〉を、つぎからつぎへときかせました。

六153 「〈略〉」。ありはそういつて、すぐ木の葉の船につかまりました。

六207会 ひと休みしようではありませんか。」みんな「そうしよう、そうしよう。」

六207会 「そうしよう、そうしよう。」

六267会 あり「さ、そろそろ夕ごはんにしようか。」あり「二、三、そうしよう。」

六2711会 あり「たしかにそうだ。」

六3911会 こんどは、あなたがたがまもるんですもの。」かし「そりやそうだけど——」

六7110会 そうね。はるえさんのいうとおりね。

六779 いぬは動かし、いきをするから命がある。

六788会 けれども、息はするでしょう。だれがそ

十一 9 4 ㊦ そういわれて、自信をもって、よしやろうということができた、うれしい。

十一 10 9 ㊦ もちろんさ。そういう男には、ぼくがなることにきめているのさ。

十一 20 3 ㊦ そういうときに、金次郎が生まれてきたのです。

十一 62 11 ㊦ なんだか氣まわりがわるくて、そういうえなかったのです。

十一 65 6 ㊦ しかし看護人は、そういう名を思いだせませんでした。

十一 65 10 ㊦ でかせぎ人ですか、外國から帰ってきた——と、看護人がききました。「そうです。

十一 71 9 ㊦ そうすれば、おとうさんのようすもなんとわかるだろう。

十一 72 10 ㊦ そうです。

十一 81 2 ㊦ ちょうど、少年がそういうほかない希望をもって、いっしんに看護していたときでした。

十一 82 3 ㊦ 「略。」男はそういつて、少年の方へとんできました。

十一 87 8 ㊦ 父親はそういつてでいきました。

十一 92 2 ㊦ そういつて、すみれをベッドの上にちらしながら、

十一 93 1 ㊦ そういつて、少年は、その小さな着物の包みを小わきにかかえました。

十二 20 10 ㊦ そうですか。

十二 21 3 ㊦ そうです。

十二 22 5 ㊦ 絵の大家だって、一心にけいこをして、じょうずになったのだろう。そうだ、けいこだ。

十二 23 8 ㊦ 父がまえからそういつたことを考えて、

十二 29 9 ㊦ まあ、そう。

十二 29 11 ㊦ わたしはそういうながら、〈略〉民ちゃ

んをだいてやろうとすると、

十二 43 7 ㊦ とこのまの人形が、動きだしそうな氣がするんだけど——「そうだね。

十二 44 6 ㊦ そうだ。

十二 48 5 ㊦ 「そりゃ、そうですね。」

十二 55 9 ㊦ ただ人々のあいだで語り伝えられているだけで、そういう人たちのなくなるにつれて、

十二 78 12 ㊦ ふたりの少年は、にっこりとわらって、「そうです。」とはっきり答えました。

十二 79 2 ㊦ そうだったのかい。

十二 89 1 ㊦ そうでないと、相手の人に満足を与えることができないし、また自分の誠意も通じない。

十二 89 9 ㊦ そうでなかったら、ただ口さきでいうだけのことになる。

十二 110 6 ㊦ まき絵書だな。これは、茶だんすににいてありますが、そうではありません。

十三 10 3 ㊦ 今日でも、まだ、そうした考えがのこっている。

十三 14 5 ㊦ そういう星——これをわく星といいます

十三 31 12 ㊦ 鳴りものをつかわないで、呼び声でやって来る者もある。まんじゅう屋がそうだ。

十三 37 9 ㊦ 受話器をとる。三郎「もしもし……そうです。

十三 38 5 ㊦ このごろちつとも来てくだらないじゃないですか。え、え、はい……そうですか。

十三 38 10 ㊦ だれかしら……〈略〉え、おとうさんが、そう……じゃあ、かわつてください。

十三 39 6 ㊦ 今晚……そうですか。

十三 40 11 ㊦ でもよかったよ。みんなで心配していた……うん、そう……そうだったね。

十三 40 11 ㊦ うん、そう……そうだったね。

十三 41 2 ㊦ なんべんもくり返して読んだよ。電話番号が書いてあったもんだから……そう……

十三 41 9 ㊦ ああ、リックサックも二つある。そう

だ。

十三 42 5 ㊦ とつておいたほうがいいよ……うん、うん……そう、二つあるのならもううよ……

十三 44 5 ㊦ これはしばいではないかという、そうではなく、これでも、しばいになっています。

十三 44 7 ㊦ ただ、あいてになる人が、見物人の目につかないだけです。そうでしょう。

十三 51 9 ㊦ わたしの心は、にじを見るとおどる。おさないころにそうだった。

十三 52 1 ㊦ おとなになつて、いまもそうだ。

十三 52 3 ㊦ やがて老いても、そのように。そうでなければ、死んでいたい。

十三 55 2 ㊦ 「略。」そういつて、喜んでむかえてくださったので、

十三 57 6 ㊦ 小さな絵だが、じつによくかけている。」

十三 57 10 ㊦ おじさんは、そういうながら、

十三 58 8 ㊦ そう思うかね。

十三 58 8 ㊦ まあ、そうだね。

十三 58 8 ㊦ それはそうとして、ラファエルのかいたマドンナのかつたのを見せてあげよう。

十三 58 12 ㊦ おじさんはそういつて、

十三 59 9 ㊦ ふふん、そう思うかい。

十四 15 11 ㊦ そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早かつたでしょうから

十四 16 11 ㊦ パリーにある、なにかそういつたものがご入用のときは、

十四 20 1 ㊦ みんなの話を聞きになって、「そう

か。

十四 21 5 ㊦ 「あれもそうか。」とかいいながら、

十四2512 そのことばもいっしょに傳わってきたのにちがいない。そうしてみると、
 十四294 これはけつしてそういうものではない。せん。
 十四313 そういうちっぽけな考えでは、とても世界のなかにはたつていけません。
 十四3312 このぎんが系全体が、星の世界の全部かという、なかなかそうではありません。
 十四376 大きな目をもってください。そうすれば、
 〈略〉も、しぜんにわかつてくる
 十四428 心に太陽をもて。そうすりや、なにがこようと、平氣じゃないか。
 十四437 くにびるに歌をもて。そうすりや、なにがこようと、平氣じゃないか。
 十四448 心に太陽をもて、そうすりや、なんだってふつとんでしまふ。
 十四583 そうですね。そういうことを考えてみたことがありますか。
 十四615 つるも、うなずいて、「そうです。
 十四642 もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということが、
 十四673 そういうときに、よく氣をつけて見ていてごらんさい。
 十四682 地面から蒸発する水蒸氣が、とくに多くなります。そういう地方のまわりに、
 十四689 うずの高さも、四キロとか八キロとかいうのですから、そういう、いろいろなかかったこととおこるのです。
 十四7012 そうなると、茶わんに接したところでは、湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、
 十四714 だいたい、そういうふうなじゅんかんがおこります。

十四7112 ところどころ特別につめたいむらができます。そういう部分からは、
 十四749 そうなると、いろいろの実用上の問題とえんがづながってきます。
 十四965 女の子は、またそうしないではいられないくなつて、
 十四1025 けれども、そうではなかった。
 十五247 もうその女の子は、どこへ持つて行かれるかわかりません。そう思うと、
 十五3510 アフリカのエジプトには、そうした絵文字とよばれるものがあつた。
 十五501 そうですね。
 十五624 おじさんたちと行くのがいやなのか。なに、そうじゃない。
 十五632 ああそうか。
 十五797 そうした風景から、自分の國を愛するということを学んでいる日本の子どもさんたちにも
 十五809 そう思いながら、年よりの私は、日本の小学校のみなさんに、はるかなあいさつを送り、
 十五9110 それがこの世のすべてですもの。」光
 「あなたはそう思うの。」
 十五937 せっかくおまねきをいただきながら、
 そうあたふたとおいとますすることもできません
 十五1013 おや、そうなの。
 十五1037 みんな、いつでもあんなにきれいな
 の。」幸福「ええ、ええ、そうですとも。
 十五1067 そうですね。
 十五1074 そりゃあ、そうでしょう。
 十五1106 そりゃあそうともさ。
 十五1133 ああ、そうだ。
 そう「沿」(五)7 そう「一ツ」
 六1428 谷川にそつて、山のふもとにできました。

八283 川岸にそつて車を走らせていくと、
 九494 いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷川にそつた小道を、上の方へ登つていきました。
 九541 谷川にそつた道は、もうほそくなつて
 九1251 岸にそつて上流に向かつて歩きながら、
 十106 そのあたりは、フランスの國道にそつた景色のよいところですから、
 十一192 二宮金次郎の生まれたところは、神奈川縣のかやま村といつて、さかわ川にそつた村です。
 そう「添」(五)13 そうですね。
 そう「象」(名)13 そうですね。
 二325 みんなは、そうというものをみたことがあるかい。
 二3310 そうがとおりますから。
 二342 もしもし、ちよつとそのぞうというものに、さわらせてくれませんか。
 二348 『じゃあ、さわつてごらん。』といつて、ぞうをとめました。
 二349 六人のめくらたちは、おそろおそろぞうのそばによつてきました。
 二351 はじめのめくらは、ぞうのおなかをなで、こゝろいいました。
 二353 はあ、ぞうはかべとおなじだ。
 二354 二ばんめのめくらは、ぞうのきばにさわつて、こゝろいいました。
 二357 三人めのめくらは、ぞうのはなにさわつて、『略』といいました。
 二358 ぞうは、大きなへびみたいなものさ。
 二361 ぞうは、大きなうわににているよ。
 二364 ぞうは、木のみきとおなじじゃないか。
 二368 ぞうは、なわそつくりだ。

ぞう「像」(名) 1 像 ↓じゅうじかぞう
 十三573 中でも、ラファエルは、マドンナの像をかくことが得意だった。
 そうい「相違」(名) 1 そうい
 七791 あなたは、そのらくだを、どこかへつれていったのにそういない。
 そうがかり「総掛」(名) 1 そうがかり
 六98 親子はそうがかりでさがしはじめた。
 ぞうげ「象牙」(名) 1 ぞうげ
 三575 圖 うたをわすれたカナリヤは、ぞうげのふねにぎんのかい、月夜の海にうかべれば、わすれたうたを思いだす。
 ぞうさ「造作」(名) 1 ぞうさ
 十二512 みなさん、これも人のしたあとでは、なんのぞうさもないこととごさいましょう。
 そうし ↓まぐらのそうし
 そうじ「掃除」(名) 9 そうじ ↓おおそうじ・おそうじ・にわそうじ
 三317 きれいに そうじがしてあります。
 四52 こうえんのせわや、どうろの そうじなどもしてくれます。
 七83 そうじがはじまった。
 七92 うさぎ小屋のそうじをしました。
 七9210 そうじをしようと思つて、首のところを持って、かごの中へいれたら、
 十三506 牧場の泉を、そうじに行つて来るよ。
 十四182 学校で、そうじをしているとき、高山く^{たかやま}んが、思いだしたように、「略」^{りやく}。といった。
 十四201 図 そうじがすんだら、そのことについて話をしよう。
 十四203 みんなは急いでそうじをすませた。
 そうじする「掃除」(サ変) 2 そうじする ↑

シ」
 五852 子どもたちがくるまでに、そこらをきれいにそうじしておこう。
 七2311 図 ぼくは、びんの中をそうじして、砂に水をやるから。
 そうしたら(接) 5 そうしたら
 五245 図 そうしたら、ひとりの人が立ちあがつて、
 十568 私は、遊び時間にふくろうをみにいきました。そうしたら、二年生の男の子が、ふくろうのからだを手でいじりました。
 十588 十まいずつたばにして、赤いひもでいわえて数えました。そうしたら、たばが十あつて、五まいあまりました。
 十四1012 手 じきに九月になります。そうしたら、おそばに行けます。
 十五118 図 いまにきつと来るでしょう。そうしたら、私は、もうなにもおそれず帰つて来ます。
 そうして「然」(接) 108 そうして
 一544 図 一ねんに一どたまひろいにこのかわらにきます。そうして、たまがひろえたら、お月さんのくのになかまにいれてもらえます。
 一5410 図 がっこうにはいって、べんきょうしてくるのです。そうして、つぎのとしのたまひろいで、きれいなたまがひろえたら、
 二115 みんなは、小さなかみに、ひとつひとつことばをかきつけました。そうして、ひとりびとりのかんがえどおりにわけてみました。
 二516 おどりをやめて、しずかになります。そうして、きゆうに走つてたちざります。
 二605 図 こんど、みなさんが二年生になったら、あたらしい一年生がはいつてきます。そうして、これをつかいますよ。

三275 海にうかべて、大ぜいのせんどうがのりこみました。そうして、「略」^{りやく}。とこぎました。
 三632 丘の大きな木のところまでのぼりました。そうして、そこでおもしろくあそんでから丘をおりてみずうみへでました。
 三677 図 じゃあ、雲をみてごらん。そうして、風がどちらへふいているか、みてごらん。
 三1021 てのひらにのせてかえりました。そうして、かごの中にいれて、おばあさんとふたりでだいにそだてました。
 三1039 あつまつてきて、おじいさんの家のまわりをとりまきました。そうして、かきねの上からのびあがつてみたり、
 三1133 くらゐの戸がひとりでにあきました。そうして、「略」^{りやく}かぐやひめのからだは、すうつとそとへでてしまいました。
 三1162 みかどは、そののちいつまでも、かぐやひめをおわすれになることができませんでした。そうして、ふしのくすりと手紙は、かえつてかなしみをますたねになるばかりでしたので、
 四251 図 おみやげにうめもどきをとつてきました。そうして、みつちゃんやしんのまえにかざりました。
 五671 図 わしはお礼などもらわなかった。そうして、青い海へはなしてやつたよ。
 五791 学校のはたけのむこうを流れている小川のところにいきました。そうして、川をみて氣のついたことを書きました。
 五829 先生のお友だちが、学校をみにいらつしやいました。そうして、私たちの教室にもおいでに

なりました。

五98 2 ひわの子は、それが自分のなかまの鳴き声だと思いました。そうして、「略。」こんなふう

に、自分でもさえずりはじめました。

六11 2 ねじをはさみあげて、だいいじにもとのふたガラスの中へ入れた。そうして、一つのかいちゃう時計をだしてそれをいじっていたが、

六15 4 ありはそういつて、すぐ木の葉の船にっかりました。そうしてその上に乗りました。

六16 8 ありは、いそいでかりうどのすねにはい

ぼりました。そうして、力いっぱいいきま

た。

六52 4 月はいま雲からでて、大いそぎではなれていきます。そうして、つぎの雲の方へどんどん走っていきます。

六54 5 ふみおはふと氣がついて、まえの方にある木の下へいきました。そうして、しばらく枝ごしに月をみていましたが、

六79 10 「くぐ」でならった「あさがおの花」を思い出しました。そうして、自分とあさがおの花とが、たいへん近いもののように思われました。

六101 4 ぼくは画用紙をとりだした。そうして、その一まいをぐるぐるとまいた。

六101 9 もう一まいの画用紙を、ぐるぐるとまいた。そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、するとはいるくらい

の大きさに作って、

六103 7 ぼくは、おかあさんをひっぱるよう

につれてきた。そうして、ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。

六105 11 ぼくも、もちろんわらった。そうして、に

いさんのまねのうまいのに感心した。

六108 6 はなから声の

ような音

は、はなから声

でない音のはずである。

六112 5 これら

もはな

の音であることがわかった。

そうして、こんどは、アイウエオ、カキクケコから、じゅんじゅんに

いってみたところが、

六137 1 そこには、もううさぎさん

たちはいませんでした。そうして、木の切りかぶに、つぎのよう

なことが、赤いクレヨンで書いてありました。

七74 3 みんな、集まれ、集まれ。そうして、ぐるりとわをかけ。

七77 2 旅人は、思

いだすようなふうをして、旅人「そうして、左の足が一本短くて——

七97 7 ねずみ色の子うさぎが、きょうは、巢から

でて歩いていました。そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。

八12 9 つばきの木の根もとにうめてやりました。そうして、「ピオのはか」と書いた、小さなせき

ひを立ててやりました。

八46 2 そのほんとうに幸福なものをさがしてきてほしい。そうして、そのシャツをもらってくるように。

八61 6 ひなたちはすぐとびだしてきた。そうして、みどりの葉の下で、あたりをみまわした。

八67 7 そこには、二つの鳥の家族が、一つのうなぎの頭のことであらそっていた。そうして、親あひるにつれられたひなたちが通っていくと、

八72 1 これも自分がみにくいばかりに——と、あひるの子は思った。そうして、目をふさいだが、

八72 6 朝がた、かみがとびおきた。そうして、新しいなまをみた。

八73 10 「ボン、ボン。」と、空で鳴った。そうして二わのがんは、ぬまの中に死んで落ちた。

八83 4 そこで、あひるの子はでかけていった。そうして、おいだりもぐったりした。

八84 9 あひるの子は、あの美しい、しあわせなはくちようをわすれることはできなかった。そうして、はくちようたちがみえなくなると、すぐ水の

どんぞこまでもぐっていった。

八89 1 あひるの子は、そのみごとな鳥を知っていた。そうして、なんだかなしい思いがこみあげてきた。

八89 11 はくちようはあひるの子をみた。そうして、羽をひろげてゆったりと近づいてきた。

九20 6 さらに二台の自動車を加えました。そうして自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわ

きっているつばめたちを運んできました。

九35 4 三日めにやつと、うねを十三本つくりま

した。そうして、近所からわけてもらったさつま

いものなえを、手わけして植えていきました。

九54 2 道は、もうほそくなつてきてしま

した。そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木

森の方へ、新しい小さな道がついていました。

九56 1 その男はかた目でした。そうして、みえな

い方の目は、白くびくびくうごき、

九64 6 なんとい

ったって、頭の

とがつているのがいちばんえらいのです。そうして、わたくしが

いちばんとがっています。

九70 8 お礼はどうか

とってください。〈略〉。そうして、これからは、はがきに、かねたいちろ

うどと書いて、こちらを裁判所としますが、

九73 6 大きなき

のこでこしらえた馬車が、ひっぱ

りだされました。そうして、なんだかねずみ色

のおかしな

うまがついて

います。

九74 9 馬車がと

まったときは、茶色のどんぐりに

かわっていました。そうして、やまねこの黄色の
 じんばおりも、《略》も、一どにみえなくなつて、
 九52 たかぎのそばにより、だまつたままそれを
 とりあげる。そうしてさっさいきかけが、
 九137 しずおか縣のさかいもすぎ、ながの縣には
 いった。そうして、てんりゆうきょうという景色
 で名高いところもすぎて、
 十301 すなおな子どもになりたいのです。そうし
 て、うちじゅうの人たちに、めいわくをかけない
 ようにしたいと考えます。
 十604 おかあさんが、あかちゃんをだっこして、
 おもての通りへでていらつしやつた。そうして、
 「《略》。」とおつしやつた。
 十648 狂言はめんをつけません。そうして、能が、
 美しさを現わそうとするのちがつて、狂言は、
 ひにくや、あてこすりや、《略》で、できている
 といつてもよく、
 十715 ふたりは、かわりばんこに指をつっこみま
 した。そうして、うまい、うまいとなめているう
 ちに、
 十一2412 その晩のうちにいつて、子どもをつれて
 きました。そうして、「《略》。」といいあいました。
 十一4411 弟は、すこし大またで四歩ほどまえに進
 みました。そうして、園長さんのまえに向いたと
 き、「《略》。」と、大声でいいました。
 十一4510 私はほつとしました。そうして、弟の心
 持を頼もしく思いました。
 十一609 すすめられて、ことわりかねてしまった。
 そうして、いっしょにその一本橋を渡りだした。
 十一672 長いろうかのはずれまで歩いていきまし
 た。そうして、大きなへやの、開いたドアのまえ
 まできますと、

十一749 病人の上にかがんで、みやくをみたり、
 ひたいにさわつてみたりして、そうして、二こと
 三こと看護婦にたずねました。
 十一764 はいを追つたり、うなるたびごとにかが
 んでみたり、そうして、看護婦がなにか飲み物を
 持つてくると、
 十一771 夜になると、少年は、へやのすみにいす
 を二つならべて、その上でねむりました。そうし
 て、朝になると、また看病をはじめました。そうし
 て、朝になると、また看病をはじめました。
 十一775 感謝するような色が、そのひとみに、
 ちよつとのあいだうかぶようにみえました。そう
 して、なにかいおうとでもするように、
 十一784 それからそれへと長々と話しかけて、そ
 うして、あたたかい愛情のこもつたことばで、
 しつかりするようにと病人をはげました。
 十一789 しみじみとしたそのちょうしに、じつと
 耳をかたむけているようにみえたからです。そう
 して、二日めも、三日めも、四日めもすぎました。
 十一899 病人は、目を開いて少年をじつとみて、
 そうして、また目を閉じました。
 十一913 看護婦が、小さなすみれの花たばを、
 ベッドの上のコップの中から取つてきました。そ
 うして、それを少年に渡しながらいきました。
 十二124 そとにでかけたるすにやつてきて、その
 書物を手にとりました。そうして、ページをはぎ
 とつて、たべてしまったということです。
 十二147 文雄は、《略》、根もとをかこうと決心し
 た。そうして、いよいよ下がきをかきはじめた。
 十二153 大きなえんまこおろぎが一びき頭をだし
 ていた。そうして、文雄が手をのぼすと、すばや
 くあなの中へかくれてしまった。
 十二329 だれかがそれをとらえました。そうして、

次のしゅん間には、私は、先生《略》の両うでの
 中に強くだきあげられました。
 十二358 新しい人形を手にとつて、ゆかにたたき
 つけました。そうして私は、くだけた人形のかけ
 らを足さきを感じながら、ゆかいに思いました。
 十二6110 いり用のときはいつもここへきて、岩屋
 の入口で頼んだ。そうしてよく日いつてみると、
 頼んだ品物がちゃんとそろつてならんでいた。
 十二704 歌がたいそうじょうずでしたが、芭蕉の
 ことをきいてから、その弟子になりました。そう
 して、はい句を勉強することに心をきめました。
 十二711 自分は、その近所に別に家をかりて住む
 ことにしました。そうして、毎朝早くきては、芭
 蕉のおきないうちに、いどころ水をくみあげたり、
 十二856 どうしたはずみか、チルデン選手はかた
 足をふみすべらせてしまいました。そうして、い
 まにもころびそうになりました。
 十二11311 汽車にかぎらず、船でも、自動車でも、
 日に日に進歩しています。そうして、遠いところ
 も近くなり、世界はだんだん小さくなるような
 十三810 正しい知識を得るには、考えたり、調べ
 たり、《略》観察したり、実験したりする。そう
 して、これをいくどもくり返してたしかめ、
 十三1112 よいことやわるいこと、《略》は、知識
 をもととして考えなければならぬ。そうして、
 人は、道理によつて動かなければならない。
 十三216 「《略》。」と、熱心に研究を続けました。
 そうして、かれがふと思ひうかべたのは、
 十三458 あいてのいうことを聞いて、それから三
 郎くんのことばをいい、そうして、三郎くんのこ
 とばだけで、すっかりようすがわかるように、
 十三545 そのあかちゃんがキリストで、そのおか

あさんがマリアだということは、すぐにわかりました。そうして、その絵がだいすきになりました。十四49 ふしあわせなものの中に、かえって、人間としての心のとうとさをみつけたのです。そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。

十四71㊦ 子どもたちのことをお考えになってください。そうして、ご自分にはまだ子どもたちがのこっている、〈略〉と、お考えになってください。

十四146㊦ おとうさんのお写真は、ほんとうに生き写しで、〈略〉。そうして、おかあさん、あなたのことを思うとき、

十四207 外国からはいってきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してください。そうして、つぎのようなことばはその一例だと十四375 心を大きくもってください。世界全体を、人類全体を、そうして、うちゅう全体をながめわたす大きな目をもってください。

十四443㊦ ことばをもて、なやみ、苦しんでいる他人のためにも。そうして、なんでこんなにほがらかでいられるのか、それを、こう話してやるのだ。

十四482 こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。そうして、自分もどうせ助からないものなら、こういう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだと

十四504 そうして、マッケンナも、その歌を歌っていたおじょうさんも、そのほかの婦人たちも、みんなすくいあげられました。

十四676 つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、また、たちのぼります。そうして、大きな

なうがででき、

十四686 そのつめたい空気が下からふきこんできて、大きなうがができます。そうして、ひょうが降ったり、かみなりが鳴ったりします。

十四7110 ふたをしないでおいたばあいには、湯は表面からもひえます。そうして、そのひえかたがどこも同じではないので、

十四945 女の子は、二つの家の間に、ちよつとした、身をかくす場所を見つけた。そうして、そこにすわりこんだ。

十四9711 ほのおが明かるくもえあがった。そうして、こんどは、女の子は、一本のクリスマスの木の下にすわっていた。

十四1005 「〈略〉。」と、女の子は、声をあげた。そうして、おばあさんが見えなくなつては困ると思つたので、急いで、たばの中にあつたマッチをみんな一時につけた。

十四1012 おばあさんが、こんなにせいが高く、りっぱで、美しく、そうして、しんせつに見えたことは、いままでなかったことであつた。

十五255 女の子のからだ下が落ちないように、その上帯をかたくぎつたのでした。そうして、からだの重さで上からぎゅうぎゅうとおしつけ、

十五555 それとなく論文刊行のむずかしいことをにおわせた。そうしてつぎのように語つた。

十五6411 見るなり私は、おじさんの廣いせなかにとびついた。そうして、足をばたばたさせながら、「〈略〉。」と命令した。

十五689 おばさんは目になみだをためながら、しゃにむに私をおく深くひき入れた。そうして、〈略〉、主なき書さいへ私をみちびいた。

十五715㊦ いっしょにお寺へ行って来ましょう。

そうしておじさんを喜ばせましょうね。

十五769 「〈略〉。」と、意外なあいさつをされた。そうして、これが新島からならつた日本語の一つだといわれた。

十五1036㊦ チルチル「そうして、みんな、いつでもあんなにきれいな。」

そうしゅん 「早春」(名) 1 早春
十三3510 早春になると、はとぶえが天から鳴つてきて、ホートンをにぎわわせる。

そうじょう じとばそうじょう
そうせいかわ 「創成川」(地名) 1 創成川
十五617 私は、札幌の創成川の岸にあつた家につ

れられて行つても、思うぞんぶんにふるまつた。そうそう 「然然」(感) 4 そうそう
七776㊦ そうそう、そのらくだは、まえ歯が二三本ぬけてはいませんか。

九1019㊦ あ、そうそう。
十五5611㊦ そうそう、指おり数えると数十年の昔になるが、

十五906㊦ そうそう、思い出した。
そうぞう 「想像」(名) 1 想像
十四344 こうなつてくると、うちゅうというものは、どこまで廣いのか、想像がつきません。

そうぞうする 「想像」(サ変) 2 そうぞうする
想像する 《一サ》
八336 一つ一つがはっきりとみえないのですから、

ずいぶん、遠いことがそうぞうされます。
十四271 モデルとか、バックとかいうことばも、西洋の油絵がはいつてきたときに傳つてきたのだということが想像される。

そうだい 「総代」(名) 1 総代
十一447 総代の名が、ひとときわ高く呼ばれました。

そうだん 「相談」(名) 2 相談 ↓こそうだん

八45 4 より集まって、どうしたら王さまの病氣

をなおすことができるかと、相談をはじめました。

九16 5 大ぜいのつばめが、ならんでゐるのを見る

と、なにかしら相談でもしているようにみえます。

そうだん・する 「相談」(サ変) 4 相談する 《一

シ》

六56 8 私たち一組のものは、みんな集まって、ど

んなものによいかといういろいろ相談しました。

十一23 7 母親は、金次郎と相談して、すえの子ど

もを親類にもらってもらいました。

十一27 10 母親と相談して、戸をしめきって、息を

ころして、だれもないふうをしていました。

十二114 6 議事堂 みなさんがたの代表が、全國か

らここに集まって、いろいろなことを相談します。

ぞうつかい 「象使」(名) 4 ぞうつかい

二34 1 〇 「略」。と、ぞうつかいがいました。

二34 5 〇 「略」。と、六人のめくらが、ぞうつ

かいにたのみました。

二34 6 〇 ぞうつかいは、「略」といって、

二37 1 〇 めくらが、ひとりびとりかってなこと

をいうので、ぞうつかいは、わらいながらいっ

てしまいました。

そうと (副) 1 そうと

六120 6 〇 そうとかわかしておおきなさい。

そうべつ 「送別」(名) 1 送別

十五120 5 在校生たちがみんな、私たちのために

送別の歌を歌ってくれた。

そ・える 「添」(下) 4 そえる 《一エ》 ↓かきそ

える

八54 9 黄色なたくあんまで、そのおむすびにそえ

てくれました。

九7 6 「水」ということをそえたら、どうい

うけしきを思いだしますか。

十五66 2 その次には、りっぱなむしや人形にそえ

て、ご両人の名まえ入りの大きな写真を二まい、

満ほうへと名ざしで送ってください。

十五68 1 かねがづるしてあって、これでたたくと

いうように、しゅもくがそえてあった。

そくぞ 「即座」(名) 1 そくぞ

十四23 6 「略」。と、そくぞに答えた。

そくど 「速度」(名) 1 速度

八34 4 光の速度は、一秒間に地球を七まわり半し

ます。

そくりよう ↓さんかくそくりよう

そくりよく ↓ぜんそくりよく

そこ 「底」(名) 11 そこ ↓たにそこ・どんぞこ・

みなそこ・みなぞこ

八20 1 大きくなるにつれて、だんだん地のそこふ

かくもぐりこんでいきます。

八15 5 〇 それに、水の中へもぐってそこへいくと、

それはさっぱりしますよ。

八93 9 わかいはくちようは、そのほそ長い首をあ

げて、心のそこら喜ばしそうにさげんだ。

十38 4 眞珠は、海のそこらまれにひろいあげら

れる、ふしぎな宝石とされてきたが、

十一85 1 すると、少年のたましいのそこら、

どつことばがほとばしりました。

十三57 4 〇 『いすによるマドンナ』は、おけのそ

こにかいたという小さな絵だが、

十四5 2 私たちを心のそこら動かし、

十四69 11 茶わんのそこをよく見てごらんなさい。

十四71 2 茶わんに接したところでは、湯は、ひえ

て重くなり、《略》そこの方へ向かって動きます。

十四71 5 ビーカーのそこをアルコールランプで熱

したときの水の流れと、同じようなものになる

十四72 8 その光が同じようにならず、むらになっ

て、茶わんのそこを照らします。

そこ 「其処」(代名) 131 そこ

一64 5 わたくしは、そこに あった こしかけに

もたれて、うとうとしました。

二33 9 〇 めくらさん、めくらさん。ちょっとそ

こをどいてください。

二48 6 そこへ、じろろがでてきます。

二57 7 そこへ、ひとりの おじいさんがでてき

ました。

三30 4 〇 じぶんの かきたいところへ いって、

そこで かいていらつしやい。

三34 1 〇 へやの すみに、かれ木が立ってい

ました。そこに、はくせいひのりすが、二ひきのっ

ていました。

三47 5 いたみが いっそう ひどくなつて、とて

もたまらなくなりました。そこへ、おおくにぬ

しのみことがいらつしやいました。

三60 3 みんなの 心があわないと、どこへもい

けません。そこへ ちようど おとうさんがおい

でになって、

三63 3 丘の 大きな 木のところまでのぼりまし

た。そうして、そこでおもしろくあそんでから

丘をおりて みずうみへ きました。

三74 9 「略」。〇 おかあさんが おしえて くださ

いました。みんなはそこをみました。

三81 3 そのうちに、雲は 雨をつれて、空をす

すんで いきました。そこへ お日さまの 光がさ

しはじめました。

四22 5 〇 もう すこしで つかまりそうになつた

とき、またわの中ににげこみました。そこを、わたくしがうまくつかまえました。

四二五(五) お話をすると、みっちゃんが そばに
くるような 氣が します。お花を かざると、そ
こに すわっているようです。

四三九(六) 先生は、そこに 氣がついたのです。
四三六(二) そこに いなくても、その 人の ことば
が 生きて いると いう ことが、わかりますか。

四三七(一) そのとき、ぶどうだの 下を とおり
ました。そこには、ぶどうが、たくさん おいし
そうに じゅくして いました。

四四八(三) 山の ふもとには、大きな 木が しげって
いるので、そこを よけて とびました。

四九四(四) かけ声を かけながら、みんなで かめを
ころがします。そこへ うらしまたろうが とおり
かかります。

四一〇(五) うらしまが、海べで つりを しています。
そこへ かめが でて きます。

四一〇(六) まん中に きれいな こしかけが 二つ おい
て あります。そこへ、かめが うらしまを あんな
いして はいって きます。

五一三(七) ポストにいられると、友だちといっしょ
になりました。そこへ、配たつをする人がきて、
五二一(八) 私たちは、ゆうびんきよくの 大きな はこの
中には いりました。そこは 私たちの 山です。

五二八(九) おたがいに、であつたと思つたら、すぐお
わかれでした。そこで、私たちは、じょうぶなふ
くろにいれられて、かぎをかけられました。

五二八(一〇) ありがとうございました。といって、かる
くあたまをさげて、そこを でした。
五四六(一一) そこへ、となりのごろうさんが、かけよつ
てきて、「五ばん星 あんなところ。」

五五五(一) 西の空をみましたが、わかりませんでした。
そこへ、受持のやまもと先生がおいでになつて、
「略。」と、さそつてくださいました。

五八三(二) みんな、いっぺんにわらつてしまいました。
そこを バチリと 写されました。

五八五(三) りょうかんさんは くいながら、ほうき
を持つて、木の葉をはきよせました。そこへ、村
の子どもたちが、(略)、走つてきました。

五九七(四) ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよ
むまねなどを、つきからつきへと ときかせました。
そこへ、さんちゃんが 学校から 帰つて きました。

六〇八(五) そのひよしに足をいためて、歩けなくな
りました。そこを 通りかかった人が、おんぶして
学校まで つれて きました。

六二四(六) くつが 流れて きました。そこへ きゅうりが
流れて きました。

六七〇(七) そこへ、中学校に通っているねえさんが、
帰つて きました。

六八六(八) ほおりのみことは、海べで ないて いる。そ
こへ ひとりの 年よりが でてくる。

六八七(九) 私が いいことを 教えて あげましょう。そ
こに 船がある。

六八九(一〇) 「おや、あんなところに いどがある。
きれいな 水だな。」そこへ 女の 人が でてきて、い
どの 水を くもうと する。

六九〇(一一) 正面に、海の神が こしを かけて いらつしや
る。そこへ、さつきの 女の 人が でてくる。
六九二(一二) 兄の だいじな つりばりなので、私も 困つ
て しまいました。そこへ 年をとつた かが あらわ
れて、
六九七(一三) どこかの 屋根が、めがねの たま いっぱいに
ひろがつて、ついそこにある ように みえるではな

いか。
六二九(一) まりなげをしたり、フットボールをしたり
して遊びました。そこへ、おさるさんが やつて き
ました。

六二九(二) うさぎさんたちは、くるみの 木の下で 遊び
ました。そこには、くるみの 実が、ころころと 落
ちて いました。

六二九(三) カチン、カチンと わつて いると、そこへ
ちよろちよろと、りすさんが きました。

六三六(四) ぶんぶんおこりながら、びっこを ひきひき、
てっぺんに たどり つきました。そこには、もうう
さぎさんたちは いま ませんでした。

六四四(五) あの 谷を わたるときに、ちゃんと みつけ
たのだ。そこから、あとを つけて きたのだ。

六四四(六) その あいだに、うさぎさんたちは、手をつ
ないで、そこを にげ しました。

七〇一(七) 白い カーテンが 黄色く みえる。そこから ラ
ジオが きこえてくる。

七三〇(八) そこへ、はるおが 帰つてくる。
七四六(九) 黄みがかつた 麦ばたけ、縣道らしい 白つば
い道、そこを 自轉車に 乗つて 走る 中学生、
七五七(一〇) 乙「木一本も みえない。」そこへ、ひとりの
旅人が やつてくる。

八〇七(一一) びっくりして 茶の まへに げこみ、そこに す
わっている 私の ひざの あいだにも ぐつたり

八二五(一二) せみの 子どもたちは、自分の 小さな まえ足
で トンネルを ほりながら、さぐりさぐりも ぐつて
いきます。そこは 木の下ですから、
八二五(一三) その 鳴いて いる なかまの そばへ、とんで
いって とまり ました。そこへ なかまが 集まつて きて、
にぎやかな 音楽会 の ように なりました。

八二七(一四) 馬車は、(略) 野原へ おりて きました。そ

こには、星のかんむりをつけたむすめたちが、
八45 けれども、これという考えはでませんでした。
た。そこへ、王さまの病氣をなおすというものが
でてきました。

八51 その家のまえにいつて、「幸福」が立ちま
した。その家の人は、「幸福」がきたとは知り
ませんから、

八517 その家の人は、戸をピシャンとしてみ
てみました。

八518 おまけに、その家にかつてあるいぬが、
おそろしい声で追いたてるように鳴きました。

八521 こんどは、にわたりのいる家のまえへい
つて立ちました。その家の人も、「幸福」がきた
とは知らなかったとみえて、

八529 「略」と、その家の人はふかいため
息をつきました。

八534 「略」と、その家のにわとりは、用
心ぶかい声をだして鳴きました。

八536 「幸福」はまた、その家でもごめんをこ
うむりました。

八5311 その家の人がでてみると、まずしいこじ
きのようなものが、おもてに立っていました。

八542 その家の人も「幸福」がきたとは知らな
いようでしたが、

八553 「幸福」には、その家の人の心がよくわ
かりました。

八676 みんなは鳥小屋にでかけた。そこには、二
つの鳥の家族が、一つのうなぎの頭のことであら
そつていた。

八723 こうして、大きなぬまのあるところへや
つてきた。そこにはかみが住んでいた。

八731 それから二日間、ここにそつとかくれてい

た。すると、そこへ二わのがながやってきた。
八776 あひるの子は、小屋の入口の戸がすこしあ
いているのをみつけたので、そこから中へはい
つていった。

八807 あひるの子は、すみっこにすわつてばかり
いた。そこへ、さわやかな空と日の光が流れて
きた。

八876 あひるの子は、雪の中の草むらへはいりこ
んだ。そこで、つかれきつて横になつていた。

八886 どうしてこんなになつたのかわからないう
ちに、大きな庭の中にきていた。そこには、たく
さんの木がかんばしくにおい、

九362 たきぎをとりにかく山は、ぼくの家から
は十五分ほど登るのですが、そこは、深い谷に
なつています。

九506 いちろうは、すこしいきますと、そこはも
う、「ふえふきのたき」でした。

九5010 がけの中ほどに、小さなあながあいていて、
そこから水がふえのように鳴つてとびだし、

九5411 にわかにはと明かくなつて、目がち
くつとしました。そこは美しいがね色の草地で、

九5910 おかしいと思つてふり返つてみますと、そ
こに、やまねこが、「略」立っていました。

九623 きょうは、そこが日あたりがいいようだ
から、そことこの草をかれ。

九624 そんなとこの草をかれ。

九6211 ザックザックとやまねこのまえのところの
草をかりました。そこへ四方の草の中から、どん
ぐりどもがぎらぎら光つてとびだして、

九731 やまねこのじんばおりが、風にバタバタ鳴
りました。そこで、やまねこは、大きくのびあ
がつて、

九785 先生は一けんの農家にたちよられました。
しばらくして、その主人といつしよにでておい
でになりました。

九7811 主人も、くわや、ふごや、かごなどを持
つてきて、かしてくれました。そこへ着くと、先生
はステッキを深く土の中へお立てになりました。

九822 先生は、「略」、ひとりでたんねんにほつて
おいでになります。ぼくらは、ときどき手をとめ
て、そこをのぞきにいつてみると、

九9311 そのうちに新しいすみをひろいあげるが、
自分の物ではないので、なおあたりをさがしてい
る。そこへやまだが帰つてくる。

九1052 ぼくたちは、リックサックをせおつて、ス
キーをつけ、「略」、そこへ集まつた。

九1115 「略」と、だれかがさげんだ。みんな
そこへいくと、

九1193 その帰りに、近道をして谷をおりてくると、
そこに小石でかこまれた美しい泉があつた。

九12010 あまいような、すずしいような、氣の晴
れ晴れするような味だつた。「そこに流れている
のがまつ川だ。

九12511 まつ林におおれた道もない谷まになつた。
そこからさらに、すこしさかのぼつて

九1263 右岸からさらにと流れ落ちる小さな谷川
がある。そこをくんで飲んでみると、それこそま
ぎれもないうまい水であつた。

九1267 谷川をさらにさかのぼると、岩まからちよ
ろちよるとわきでる泉があつて、それでもう終り
であつた。茶人は、そこをほりくぼめ、

十478 妹をつれて、さんぽにでました。家から十
三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるの
で、そこへつれていこうと思つたのです。

十483 道ばたにあるものを、なんでもみつつけて、それに話しかけたり、そこで遊んだりしたからでした。

十5311 あきらめて歩きかけると、水おけがありました。そこに、すいれんの花が三つほど、きれいにさいていました。

十5312 すいれんの花が三つほど、きれいにさいていました。妹は、そこへいって、

十7211 ずっしりと重い、大きな湯飲み茶碗を、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

そこへ、だんなが帰ってきました。

十7411 そこで話したとき、〈略〉、きゆうに、にっこりわらい顔になって、

十143 近くには小高い丘があって、そこからおきをながめると、

十11512 教室の高いところの窓ガラスが、一まいこわれていて、やがて、小鳥たちは、そこから遠い空へにげていった。

十1287 いままででも、なまけたことのない金次郎でしたが、そこへいってからは、いよいよいっしょうけんめいに働きました。

十1453 弟は、さっさと自分の席にもどり、そこからでなおして進みました。

十1928 すみれをベッドの上にちらしながら、「略」。そこで死人の方へ向いて、

十12135 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、がかを立てて写生をはじめた。そこには一本のざくろの木があつて、

十12198 そこへいくと、こおろぎさんよりよほどいいのです。

十208 図 ほら、そこで絵をかいている文雄さんがいってましたよ。

十2275 いまそこにいたかと思うと、もう次のへやにはいっているというように、

十2289 たもとをひいてやると、民ちゃんは、ぱったりそこへすわりこんでしまいました。

十2833 コートには、日ざしがさんと降りそそいでいました。そこへ両選手があらわれました。

十2931 「遠足」ということは、だれにでも同じようにわかり、〈略〉。そこにことばとしての性質があり、おもしろさがある。

十378 「人生よ、長くそこにあれ。」

十3225 もみは、ある大きさまでのびると、そこで生長をとめました。

十3292 その「ビューン」がとまると、そこでは、どこかの子どもが、もう、頭をつるつるにそられている。

十3342 ホートンの廣場などに、かけ絵の舞台をこしらえて、そこで、人形あやつりがはじまる。

十3452 そこに、このしばいのむずかしさがあります。

十3571 図 ミケランジェロとラファエルは、前後して、そこからローマに出て、

十4466 それは、フィリップの作品の中にみながっている大きな愛の氣持、そこからさしてくるとうとい光のためなのです。

十441912 そこへ先生がいらつしやった。

十445411 図 土の中のことばわからないでしょう。

そこは、暗いところで、土もかたいし、

十445412 図 土もかたいし、石ころなども、ごろごろしています。そこへ細い根をのぼして、

十44567 図 また、花さんでも、葉さんでも、日のあたるところや、高いところがおすきなようです。が、そこへつれて行ってあげるの、この私です。

十4672 土のしめつているところへ日光があたつて、そこから白い湯げがたつことがよくあります。

十4681 陸地の上のどこかの一地方が、日光のため、特別にあたためられると、そこだけは、地面から蒸発する水蒸気が、とくに多くなります。

十46912 茶わんのそこをよく見てごらんさい。そこには、みょうなゆらゆらした光った線や、うす暗い線が、不規則なまようのようになって、

十4722 わりあい熱い表面の水が、そのあとへ向かつて流れ、それが、おりた水のとどくじぶんにはひえて、そこからおります。

十4739 それが、ちょうどさけめのようにたて横にやぶれて、そこだけがどう明に見えます。

十4945 女の子は、〈略〉、身をかくす場所を見つけた。そうして、そこにすわりこんだ。

十5201 その登山電車のとちゅうにはいくつかの停車場があつて、そこには、氣持のいい、小さなホテルがここかしこに立っています。

十5244 草のしげっている場所を見つけて、そこへひつじをつれておりて来ていますと、

十53010 すこしあとずさつて、岩角へ身をよせかけたとき、ちょうどそこに、手ごろな岩のかけらが目にはいりました。

十5709 図 そこに赤インキがおいであるでしょう。

十5743 自分の子女は、〈略〉、かわいことはみな同じであつて、そこになんのけじめもない。

十59211 図 それからさとうも、パンも、だれが行けといつた。そこでなにをしようしているんだ。

そこく「祖国」(名) 2 祖国

十3263 がまん強い実行と、熱誠な共力によって、あれ地をみどりの野とし、祖国を生き返らせ、十五177 図 わが祖国、やがて立つべし。

そこここ 「其処此処」(代名) 2 そこここ

九155(文) 赤いぬの一ぴきゆけばこの町のそここ

こよりぞいぬのあらわる

十五85(文) きみわれ口そそぐ朝のそここの小
流れ

そこで (接) 55 そこで

一233 「みんなかわいい ことりになって」の
ところはこまりました。そこで、りようてをは
ねのようにうごかしました。

二114 そこで、みんなは、小さなかみに、ひと
つひとつ ことばをかきつけました。

三117 おしやかさまは、どうかして はんたかを
りっぱな人にして やりたいと、おおもいにな
りました。そこで、まいにち かしいでしを
ひとりずつ、はんたかのところへ やって、

三2510 おじいさんは、「略。」と いいました。

そこで、切る ことになりました。

三2610 おじいさんが、「略。」と いいました。

そこで、大ぜいの だいくを あつめて、ふねを
つくる ことになりました

三612 そこで おとうさんは えんがわに こしを

おろして、どう きまるか おまじになりました。

三654 また、心があわなくなりました。そこで、

おとうさんは、ボートを こいで ぐるぐる ぐる
ぐる おまわりになりました。

三715 「略。」おかあさんが おっしゃいました。

そこで、デビッドは いすから おりて、つまんで
みました。

三721 「略。」おかあさんが おっしゃいました。

そこで、バーバラは、だいどころから ほうきを
もって きて はきました。

三1158 かぐやひめの すがたは、それは それは

うつくしく かがやきました。そこで、 よういの
車に のって、

四188 「略。」と おっしゃった。そこで、 おか

あさんの 手の上で、力いっぱい ひいた。

四553 大きなへびが やって くる ことが あり
ます。そこで、目ざとい がんが 五六は、あちこ
ちで みはりばんを しました。

四574 そこで、略、かっちゃん の 全快いわい
を しよう という ことになりました。

五297(文) 一つは 小さくて かる そうな 物です。そこ
で、ぼくは、「略」、一つ 持つ て いって あげま
しょう。」と いいました。

五831 記念に 写真 を 写したい と おっしゃいました。
そこで、おひる 休み のとき、私たちは、運動場 に

あつまつて、先生を まん 中 に して ならびました。

五921(文) とうとう えん の 下 の いたで、あたまを コ
ツンと うった のだよ。そこで、ゆかいたをはがし

て、たたみの まん 中 に あなを あけて やつたら、

六106 その、弟が まだ いわ ない ことばを、さきに
いった から 感心 した のである。そこで、ぼくも ひ

とつまねを して やろう と 思った。

六1097 いかに も はな から 声 が でて いる ような 気が
する。そこで ぼくは、自分では なを つまんで、

《略》、「ナ」《略》と いって みた。

六1115 ただ 一つ 「ヌ」と いふ 音が ぬけて いる だけ
である。そこで、あらためて 声 を だして 「ヌ」と

いって みた。

七4311 はくしゅが 四方 から おこった。そこで、老
人は、《略》 ほうしを、そばの 人 の 手 に 渡した。

八204 せみの 子 たちは、れのいふしき なかしこさ
で、もう 大 きく なり きた ことを 知ります。そこ

で 地表 に 近づいて きて、皮を ぬぐ 日 を まつの です。

八341 星の きより になりますと、これでは、もう
まにあいません。そこで、 もつと 大きな 単位 を も
とにして 計ります。

八502 けれども、それでは 人 の 心 が よく わかり ま
せん。そこで、「幸福」は、まづ しい こじきの よ
うな なり を しました。

八567 すこし 歩いて から ふり返つて みると、足あ
とが 曲が っている。そこで、向こうに みえる まつ
の木を 目あて に して 歩き だした。

八676 そこで、みんなは 鳥小屋 に かけた。

八719 あひるには かみつかれ、にわとりには こず
きまわされ、《略》。そこで、みにくい あひるの 子

は、かきねを とびこえて にげ だした。

八793 「略。」と、おばあさんが いった。そこ
で、あひるの 子 は、三週間ばかり ためしに おいて

もらった。

八834 「どうぞ、かっ て おいでよ。」そこで、

あひるの 子 は かけて いった。

八868 牛乳が へやの 中 に 流れた ので、おかみさん
は 手 を たいて おこった。そこで、あひるの 子 は、

バッテリーの いれ て ある たるの 中へ と びおり、

九2110 その 夜半 には、また 一台の 貨物自動車 が、
五千ばの つばめを つんで きました。そこで、なる

べく 早く 南の あたか いたところへ 運ぶ ために、飛
行機を つかう こと に しました。

九658 ガヤガヤ いて、なにが なんだか、まるで
はちの 巣をつつ いた ようで、わけが わから なく な
りました。そこで、やまねこ が さげ びました。

九697 しいんとして、だま っ て しま いました。そ
こで、やまねこ は、《略》、ひたいの あせを ぬぐい

ながら、いちろうの 手 を とり ました。

九721(文) それでは、もんくは いままでの と おりに

しましよう。そこできょうのお礼ですが、

九八七 そこでみんなは、ほりだしました。

九二六 2 さかのぼって水を飲んでみると、いい味は、

すこしもなかった。そこで氣をつけてみると、

九二六 5 それこそまぎれもないうまい水であつた。

そこで、谷川をさらにさかのぼると、

十36 5 いままででの失敗のもとをとりのぞいて、新

しい設計図をこしらえあげた。そこでやっと、思

いどりの機械ができあがつた。

十37 4 かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械

を作ることにとりかかった。そこでさらに、七年

間のくふうがつづけられ、

十一21 11 しごとがじゅうぶんできないので、金次

郎は、ほかの人たちにすまないと思ひました。そ

こで、金次郎はいいことを考えつきました。

十一28 5 このとき、金次郎はたった十六でした。

そこで、ふたりの弟は母親のさとに、金次郎は親

類のまんべえさんのところに、あずけられること

になりました

十一76 1 医者はいつてしまいました。そこで、少

年は看病にかかりました。

十一77 12 きわめてかすかなほおえみがうかんだの

をみたような氣がしました。そこで、少年は、自

分をなくさめて望みをかけはじめました。

十一88 9 もうだめかもしれない。」といひました。

そこで、チチロは、いよいよよくせわをして、

十二12 2 土人のひとり、書物というものはなに

かすばらしい力をもっているものだと考えました。

そこで、リビングストンがちよつとそとにでかけ

たるすにやってくる、その書物を手にとりました。

十二63 1 小魚はしおからかったので、のどがかわ

いてたまらない。そこでまた川の水を飲んだ。

十三20 10 ダルガスは、このあれ地に育つ木がある

かないか、まず、このことについて研究を重ねま

した。そこで思いついたのは、

十三22 1 デンマルクの希望であるこの植林は、み

ごとに実現されました。そこで、デンマルクの國

運回復の意氣は、年々高まってきました。

十三44 12 この四人の聲は、見ている人には聞えま

せん。そこで、三郎くんの声と動きだけで、四人

とそれぞれ話をしているようすを、見せなくては

十四27 11 外國からきたことばの中で、西洋からき

たことばをできるだけたくさん調べてみたいと思

つた。そこで、「略」とおたずねした。

十四91 8 そこで、その女の子は、まったくはだし

になつてしまつた。

十五36 7 形のないものは、この方法では表わすこ

とができない。そこでたとえば、数という形のな

いものを表わすのに、線を横に一本引いたり、

十五45 5 それまでのものの考えかたや商賣では、

ふだんの生活さえむずかしくなつてきた。そこで、

日本の手工業も、〈略〉近代工業の道をたどつ

ていく

十五56 3 富士山の高さも不明であつた。そこで、

山のいただきに立つた私は、小手をかざして足の

下にひろがる駿河湾の海岸線をながめ

十五57 7 室は二つあつても、つくえは一つしか

なかった。そこで、大きなつくえのまん中に

チョークで線をひき、

十五65 11 朝早くからそれをガラガラとひきまわす

ので、家の人のねむりをさまたげてしかたがない。

そこで、たまりかねた家の書生が、これから車の

ついたものは送ってくださるなど、

そこら「其処」(代名) 9 そこら

四47 1 窓 そこらが一ばん安全らしい。

四106 3 かめは、うらしまの手をとつて、そこら

をぐるぐるとあるきまわります。

五85 2 窓 子どもたちがくるまでに、そこらをきれ

いにそうじしておこう。

六77 7 ふたりはそこらを見まわしていたが、

七56 7 そこらで、虫が鳴いています。

八40 8 こんなひとりごとをおつしやつて、そこら

の木の葉や花にみんな手をおふれになりました。

十一53 9 そのことばをきいて、そこらの乗客は思

わずはおえんだ。

十二25 5 民ちゃんは平氣でそこらをはいまわつて

います。

十五94 9 チルチル そこらを見まわして、

そせん「祖先」(名) 1 祖先

十四80 3 または、自分たちの祖先が発見したので

はなく、よその民族から教えられて、それからい

い伝えられているものもあるかもしれません。

そそぐ「濯」(四) 1 そそぐ《一グ》

十五85 5 窓 きみわれ口そそぐ朝のそここの小

流れ

そそぐ「注」(五) 5 そそぐ《一イーギ》↓ふ

りそそぐ

十二37 3 私は、身動きもせず、立つたままで、全

身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。

十三20 6 これを生かすのは、みぞをほつて水をそ

そぎ、平野の雑草をかりとり、じゃがいもか牧草

を植えることにありますが、

十四21 6 「略」とかいひながら、先生のお書

きになる文字に目をそそいだ。

十五54 5 博士は、しずかに歩みよる私が手にして

いるしうかい状に目をそそいで、

十五72 2 はか石に水をそそぎながら、「(略)。」と、おぼさんはふたたび呼びかけた。

そそふそそふそそふ (感) 1 ソソフ、ソソフ、ソソフ

三88 6 ソソフ、ソソフ、ソソフ。

そだち [育] (名) 3 育ち

八100 7 根が横へはるので、廣いところのほうが育ちがよいと思いました。

十五83 12 園 あの人たちは下等でもあり、たいていはまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、

十五91 11 園 あ、育ちのわるいわかい女はだれだね。

そだち [育] (五) 9 そだち 育つ 《一ツツ》六78 3 園 命のあるものは、日に日にそだっていく。

七99 8 よいぐあいに、みんな元氣よくそだっているので、安心しました。

八98 1 黄みどりの新しいなえが、だんだん育っていきます。

八98 5 いねがよく根をはって育つように、小石をひろい、土のかたまりをくだいて

八101 4 みんなで植えたなえが、いきおいよく育っていきます。

十一34 10 園 日ましに日ざしが強くなり、いねはそだち、あぜまめのびて、

十二110 2 外国から書物が新しくはいってくることは、外国人の心が傳わることで、日本はこのよう

な心をとりにいれて、どんどん育ってきました。

十三20 9 このあれ地に育つ木があるかないか、

十三20 12 これなら、ユートランドのあれ地にも育つだろうと思って、実際に試験してみると、

そだち [育] (下二) 1 そだち 《一テ》

十五17 1 園 少女たちよ、花そだてつつあきない

て、つづれ着るとも、

そだてる [育] (下二) 8 そだてる 育てる 《一

テ一テル》いねをそだてて・はぐくみそだてる・まもりそだてる

三102 3 そうして、かごの中にいれて、おぼさん

んとふたりでだいにそだてました。

四122 2 園 それから、みんなの手で そだてられ、

長い長いでんせんをつたわって、

六39 9 園 わたしたちのなかまがわるい虫をとって

そだてたいねを、

七96 3 1 びきのこらず、じょうぶにそだてたいと思

います。

十一24 3 園 ひとりぐらい育てるお金は、わたしが

山へいって木を切ってきてもうけますよ。

十二40 6 ケラーの両親は、(略)、すこしでももの

のわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

十二66 6 それからでた細い根が、つなのようにか

らみあって、葉を育て花をさかせる。

十五20 11 ニューヨークの大会で育てられた子ど

もたちには、

そちら [其方] (代名) 8 そちら

五43 3 園 そちらでも、ほたるはとびますか。

七82 8 園 なにか、そちらにも、いいぶんがあるか

ね。

九44 8 園 この夏、一ど、用事でおばがそちらにで

かけるとき、ぼくもついていったのです。

九46 7 園 なつかしいそちらの山々の景色を思いだ

します。

九133 7 思わずそちらを見ると、こうもりは、ひょ

うきんなかつこうをして、こちらにとんできます。

十66 7 園 そちらからふいてくる風にあたっても、

たちまち死ぬといわれるくらいだ。

十三36 12 子どもたちは、またそちらの方へ走って

行く。

十四12 1 園 もしこわれたら、そちらでわけなくか

わりをお見つけになれるでしょう。

そつぎようしき [卒業式] (名) 1 卒業式

十一43 3 ようち園の卒業式がありました。

そつぎよう・する [卒業] (サ変) 3 卒業する 《一

シースル》

十一43 4 弟が卒業するので、私が、母にかわって

でました。

十一43 10 女の先生が、卒業する子どもの名をお読

みあげになりました。

十二42 3 そののち、ヘレン・ケラーは、大学を

りっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。

そつぎようせいたち [卒業生達] (名) 2 卒業生た

ち

七9 3 園 わたしをうえてくれた卒業生たちは、ど

こにどうしているだろう。

七9 9 園 毎年、新しい卒業生たちが、わたしのそ

ばからさつていった。

そつくり (形状) 5 そつくり

二36 9 園 そうは、なわそつくりだ。

六110 6 「ダンダ」といってみると、いかにも弟の

いいかたそつくりになった。

八10 4 そのかつこうは、さるそつくりです。

十五44 4 園 古い焼物そつくりですね。

十五114 3 園 声までそつくりだよ。

そつち [其方] (代名) 1 そつち

六126 7 園 「そつちのあなと、こつちのあなとつづ

けようか。」

そつと (副) 11 そつと

五57 4 私は、こういって、はるおのかたをそつと

おさえました。

六130 3 とらさんは、そつと首をのぼして、うさぎさんたちの方をのぞきました。

七215 窓 ひとりびとり、ばらばらにわかれて、そつとね。

八28 5 天帝は、そつとごてんの中へおはいりになりました。

八73 1 それから二日間、ここにそつとかくれています。

九48 1 はがきをそつと学校のかばんにしまつて、うちじゅうを、とんだりはねたりしました。

九67 10 やまねこがいちろうにそつと申しました。

九98 3 たかぎ、うしろの木をひとまわりして、そつとやまだに近づく。

九145 2 くもは、そつと自分の手をのぼし足をのぼしてみました。

十67 5 自分たちも、そつといつてみようというこゝたになりました。

十68 1 ふたりは、それをあいずのようにして、ぬき足さし足で、そつとおくのへやに近づき、

そで 〔袖〕(名) 1 そで
十二53 9 ひとさし指を首の中にいれ、おや指とか指を、そでの中、いたのうしろがわにいれる。

そと 〔外〕(名) 36 そと 外 じおそと
一33 1 おへや—なか—そと—まこと

さんの かいた ことば。
三15 7 しかたがありませんから、はんたかは門の そとに のこりました。

三16 9 窓 あれは門の そとに いますので、
三113 5 かぐやひめの からだは、すうつと そとへ

でて しまいました。
四20 6 国 ねずみが 三びき、わの 中 にはいり、

ねこが二ひき、わの そとに できました。

四22 2 国 ねずみたちは、あわてて わの そとへにげました。

四22 3 国 すると、そとに いたねこが おいかけました。

四89 8 雪だというと、あさ 早くはねおきて、そとに とびだして、雪かきを なさる おじいさん。

五35 9 とれた石炭は、トロッコにつんで、そとへはこびだします。

五81 2 ガラスもきれいになって、そとのけしきがよくみえました。

六26 1 かみて半分はありのいえの中、しもて半分はそとになつています。

六26 3 あり—まどからそとをみて、「雪が降つてきた。」

六28 1 このとき、戸のそとに、きりぎりすが二ひきたずねてきます。

六55 6 ふみおがねるまえにそとをみると、空はいつのまにか、雲一つなく、

六99 8 ぼくは、《略》、つくえの上をみたりそとのけしきをのぞいたりしていた。

六102 4 ぼくはこうひとりごとをいいながら、そとをのぞいてみた。

七46 5 私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそとをながめた。

七59 8 ボタンと音がして、まりが、そとからとびこんできた。

七92 5 茶色のうさぎは、おくへはいつてでてこないので、《略》、だきあげて、そとへだしました。

八9 1 ときたまそとのろじへだしてやつても、すぐまいもどつてきます。

八29 2 こうお考えになった天帝は、そのままそとへでて、また馬車を走らせて、

十39 11 だいいち、母貝は、その核をそとにはきだして、受けつけなかった。

十60 2 窓 そとへでて、あかちゃんにも、みせてあげて。

十62 3 二階の窓からそとをみたら、
十一81 4 ドアのそとに足音がきこえて、

十二12 2 そこで、リビングストーンがちよつとそとにでかけたるすにやつてきて、

十二25 6 そとさえ寒くなければ、ものかげへつれていつて、用をたさせるようにしました。

十四57 6 窓 戸の外で聞いていると、あなたたちは、ずいぶんかつてなことをいつていましたね。

十五11 2 窓 人の家にさえずるすずめガラス戸の外に來て鳴け病む人のために

十五11 6 窓 ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガラス戸すきてたたみにうつりぬ

十五12 3 窓 ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブリキの屋根に月うつる見ゆ

十五12 5 窓 ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

十五12 6 窓 ガラス戸の外につくよをながむれどランプの影のうつりて見えす

十五12 8 窓 紙をもてランプおおえばガラス戸の外につくよの明らけく見ゆ

十五13 3 窓 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸の外明らかに月ふけわたる

十五103 2 窓 外へ出ればいつても、この『幸福』たちは見られます。

そとがわ 〔外側〕(名) 1 外がわ
十四71 4 その反対に、茶わんのまん中の方では、

ぎやくに上の方へのぼって、表面から外がわに向かつて流れます。

ソナタ (名) 1 ソナタ

十四269 コーラスとか、ソナタとかいうことは、西洋音楽がはいってきたときに、いっしょに傳わってきたことばであろう。

そなわる 「備」(五) 1 そなわる 《一ツ》

八176 しぜんにそなわったかしこさで、これじょうずに生きていくのです。

その「園」(名) 3 その 園 ↓こうふくのその・はなぞの

五453 世界のそのにさきにおう、きれいな花のその一つ。

十五822 雲のまぐがあがると、園の前方に、高い大理石のまいる柱でできた大廣間のようなものがあらわれます。

十五9611 小さな「幸福」のむれ、〈略〉、みどりの園のおくからかけだして来て、

その「其」(連体) 752 その

一88 鯛 てをうって、そのてをうえに。

一288 けさ、あなたは、その目でなにをみ

一289 略。」「きのう、そのみみでなにを

一353 略。」「略。」「そのわけは」「略

一556 略。」「あなたは、そのたまをもつて

二105 略。」「とりのなと、そのほかのものに

二117 けているうちに、そのわけかたが、い

二271 けさ、ひきのやぎが、そのはしのまん中で

二324 けさ、ひきのやぎが、そのはしのまん中で

二342 けさ、ひきのやぎが、そのはしのまん中で

二481 す。うれしそうに、そのりんごを、高く

二543 きます。「ああ、そのりんご、いちろ

二584 」。いいいますと、そのかたは、「略」。

二599 年の人たちも、そのまえの人たちも

二675 ら、春をさがす。そのとき、かげのほ

二694 声がきこえる。「そのとき、かげのほ

三132 みつめました。「そのひとことという

三159 した。でしたちは、そのわきにならびま

三1510 にならびました。そのときです。ふし

三196 した。手わけして、そのかたちや色を

三214 のわかるものは、そのなき声をかきな

三228 ました。とうとう、そのてつべんは、空

三276 。おどろいたのは、そのふねの早いこ

三289 」。いいました。そののち、はやとり

三293 をわたりました。そのおかげで、日か

三346 した。みんなが、そのまわりにあつま

三355 ないでいます。その声がよくひび

三464 ないでいます。そのとき、みなのの

三468 をはなしますと、そのかたがたは、「へ

三487 略。」「白うさが、その上になるがよ

三489 略。」「白うさが、その上になるがよ

三615 まっていました。そのとき、マイクル

三664 をなさいました。そのとき、ピーター

三701 たべていました。そのとき、ピーターは

三745 はいすをおりて、その光の中をある

三833 いました。「略。」「そのとき、おかあさ

三847 んながみますと、そのあまだれの中に

三982 はなしたことは、そのまきえてなく

三1012 ふしぎに思つて、その竹を切つてみ

三1029 さになりました。そのうつくしさはた

三1046 にたのみました。その中には、みやさ

三1056 で、かぐやひめは、その人たちにとても

三1086 お思いになつて、そのままおかえりに

三1088 になりました。そののち、みかどか

三1089 で、かぐやひめも、そのたびにこへんじ

三1098 んはおどろいて、そのわけをたずねま

三1123 た。おじいさんは、そのいり口でぼんを

三1161 ました。みかどは、そののちいつまでも

三1173 た。みかどは、「その山の上で、ふし

三1176 。おつきのものは、そのとおりにしまし

四236 おかえりですか。そのときは、山へく

四324 なかったのです。その生徒さんは、す

四3210 てあげました。そのとき、わたくし

四357 略。」「略。」「そのとき、ふと思ひ

四362 にいなくても、その人のことばが

四366 考えていました。そのとき、たろうさ

四3610 にいきました。そのとき、ぶどうだ

四377 うとしました。そのとき、わたくし

四482 そばにきました。その山のふもとには

四555 ばんをしました。その夜は、さいわい、

四574 びでした。そこで、その日のばんは、か

四629 をゆるめました。そのひまになかまの

四656 た。がんの列は、そのきれいな雲の

四843 がわりました。そのつぎの日の夜、

四853 そびをしました。そのとき、おかあさ

四1083 たろうたいえび、そのほかいろいろな

四1094 め「さあ、どうぞ、そのうしろから、お

四10910 てきてならぶと、そのそばにならびま

四1114 かけます。かめはそのそばにならびま

四1172 す。いつまでも、そのまにしておい

四1289 う。」「りようしは、そのきものをもつて

四1325 ましょう。でも、そのごろもがない

五201 はじめました。私もその人の手ににぎられ

五207 た。「略。」「私は、その家のげんかんにお

五210 としおさんの心を、そのまみつおさんに

五218 きました。しかし、その中に三人だけ、た

五243 て、すぐ立つて、その人をすわらせてあ

五二四(会) すわらせました。そのとき、どこかの女
 五三〇(会) てもらいました。その荷物は小さいわり
 五三六(会) た。駅につくと、その人は、「略。」と
 五三九(会) ました。すると、その人は、トランクか
 五三六(会) 石炭からとれるし、そのほか、いろいろ
 五三八(会) ら手紙がきました。そのかたは、ほっかい
 五四三(手) ネーションです。そのたねをこんどお送
 五四四(手) 、きれいな花のその一つ。みんなな
 五四五(手) 、かがやく星のその一つ。みんなな
 五五九(会) なたまがみえる。そのまわりに、うすい
 五六二(会) 略。」でもね、そのたねからめがでな
 五八二(会) いでになりました。そのお友だちが、記念
 五八六(会) 「略。」「略。」そのとき、下の方から
 五九三(会) とりにいきました。その帰り道に、一わの
 五九七(会) れがとんできました。その中には、ひわのむ
 五九八(会) 「略。」「略。」そのぼんのことでした
 五九二(会) をきいて、ひわは、そのまねをして、「略
 五九二(会) ように、いつまでもその声をきいていまし
 五九三(会) もやってきました。そのつぎの日もやって
 五九四(会) 、ひわは、すっかりそのまねができるよう
 五九七(会) が、ひわは、いつもそのまねをしては、ひ
 五九八(会) ども、旅のひわは、そのままとんでいつて
 六〇一(会) じもがっかりした。そのとき、いままで雲
 六〇五(会) た。すると、ねじがその光を受けて、ピカ
 六〇七(会) わるかったのは、そのためでした。」と
 六一五(会) りました。そうしてその上に乗りました。
 六一六(会) れいをいきました。そのとき、ありのま
 六一七(会) 持って通りました。そのかりうどは、きゅ
 六一八(会) な声をたてました。その声をきいて、はと
 六一八(会) えをふいています。そのほか、ハーモニカ
 六二〇(会) たいしているもの、そのうしろに合唱隊が
 六二〇(会) いか。」うたをうたう「そのとおり、そのとお

六二〇(会) す「そのとおり、そのとおり。」シロフ
 六二一(会) んできています。そのとき、しもてから
 六二七(会) ったね。」あり「そのおかげでさ、いま
 六三二(会) ラジオの音楽。23 そのビルディングの一
 六四三(会) つばめのむれ。39 その列が空にすいこま
 六四四(会) 「略。」ふたりはそのとおりにしてみま
 六五八(会) いてころびました。そのひょうしに足をい
 六五九(会) のかと考えました。そのわけがわかりまし
 六五九(会) た。うたうたは、そのことばの声のかず
 六六〇(会) 毎朝、このらん、その日の朝の温度を書
 六六六(会) をつくる人は、またそのつぎを書くのです
 六六六(会) つぎを書くのです。そのようにして、どこ
 六七二(会) 「略。」「略。」その日、晩ごはんをた
 六七二(会) は考えつきました。その夜、ごろうはおと
 六八五(会) ださいませんか。そのかわり、にいさん
 六八五(会) 神のごとんです。そのごてんの門のそば
 六八七(会) にいどがあつて、そのそばには、大きな
 六八七(会) ます。あなたは、その大きな木にのぼっ
 六九二(会) 「すみませんが、そのいどの水を一ぱい
 六九六(会) 海神」では、そのかたをこちらへこ
 六九六(会) さかさまにみえた。そのさかさまにみえる
 六九六(会) でした。そうして、その一まいをぐるぐる
 六九六(会) の大きさにまいて、その一方のはしに、め
 六九六(会) の大きさに作って、そのはしに、虫めがね
 六九六(会) っているだけだが、そのために発音がすこ
 六九六(会) 「ということばを、そのようにいったこと
 六九六(会) ことばつきである。その、弟がまだいわな
 六九六(会) う、と考えてみた。そのわけは、すぐけん
 六九六(会) せるぞと思つたが、そのとき、新しいこと
 六九六(会) た。うちへ帰って、そのたこをみて、作り
 六九六(会) てについています。そのすじにあわせてひ
 六九六(会) 「うさぎさん、そのまつかさをくれな

六九六(会) うさぎさんたちは、そのま向こうのやぶ
 六九六(会) というのです。「そのかわり、ぼくが負
 六九六(会) うさぎさんたちは、そのことをすこしも知
 六九六(会) いのりをしました。そのとき、「略。」と
 六九六(会) なつたりしました。そのあいだに、うさぎ
 六九六(会) ユンチュンと鳴く。その声が校庭にびびき
 六九六(会) 本うえたんです。そのうち、たねをとる
 六九六(会) 「兄」だいきさき。」そのとき、おかあさん
 六九六(会) つとわらいました。そのとき、ふと上を向
 六九六(会) いではありません。そのとき、そのわかい
 六九六(会) ません。そのとき、そのわかい男の人が、
 六九六(会) の手を渡り、お金がその中にたまつた。私
 六九六(会) 人に、はつきりと、そのようすがわかりま
 六九六(会) あちこちにとんだ。そのたびに、「略。」
 六九六(会) とはかぎりません。そのはたいたいに、ふで
 六九六(会) けをし、しだいに、その人の顔ににせてい
 六九六(会) いて、だんだん、その人の顔ににせてい
 六九六(会) 、にわか雨が通る。そのずつと高いところ
 六九六(会) ばつきで、旅人「そのらくだは、かた目
 六九六(会) て、甲「まったくそのとおりです。」乙「
 六九六(会) 旅人」そうそう、そのらくだは、まえ齒
 六九六(会) いや、わたしは、そのらくだをみたので
 六九六(会) しい。あなたは、そのらくだを、どこか
 六九六(会) みあたりません。そのとき、この人にて
 六九六(会) 知っていました。そのとおり、私どもの
 六九六(会) ほど。それから、そのらくだがかた目だ
 六九六(会) にふくらんでいて、その中に、わたのよう
 六九六(会) はいっていました。その毛にくるまって、
 六九六(会) 南はきゆうしゅうやそのさきの島々まで、
 六九六(会) さをとらせたり——そのめずらしさ、おも
 六九六(会) らく見物したのち、その一わを買い、小さ

八六四 持つて帰りました。その晩から家族のひと
 八六一 。ピオのほうでも、その氣になつたらしく
 八九六 でもとんでくると、そのあわてかたといっ
 八四四 りかんざりします。そのかつこは、さる
 八四八 がきてても、たまごはそのままでした。暑い
 八六六 口をもつています。その口のさきを根の中
 八八六 なくふべんですが、そのかわり、親たちの
 八三三 げました。しばらくそのまのしせいであ
 八四九 たつたかと思うと、その鳴いているなかま
 八二五 うたつていますが、そのとおり、死ぬこと
 八二七 をおつていました。そのおりの美しい光
 八二二 えになった天帝は、そのままとへで、
 八二五 男にであいました。そのすがたといい、そ
 八二五 のすがたといい、その目といい、ふえの
 八二八 。「略。」天帝は、その男にたずねました
 八三〇 とうとしましたが、そのせつな、けんぎゅ
 八三二 がたつて、いよいよその日になると、けん
 八三五 した。「略。」と、そのみ知らぬ人がいい
 八三九 した。「略。」「そのとおり。」「略。」
 八三六 「略。」「では、その願いどおりにして
 八三八 朝から、たしかにそのようになるでしょ
 八三九 」。み知らぬ人は、そのままだこかへいっ
 八四六 まごになりました。そのとき、王女がはい
 八四七 のがでてきました。その人は、こういいま
 八四八 な人をみつめて、その人の着ているシャ
 八四二 たちを集めて、「そのほんとうに幸福な
 八四三 しい。そして、そのシャツをもらつて
 八四七 小屋がありました。その小屋のそばを通り
 八四七 ふと立ちどまつて、その声に耳をかたむけ
 八四三 しました。すると、その男は、「略。」と
 八五〇 れる人があつたら、その人のところへ幸福
 八五〇 の家がありました。その家のまえにいつて

八五九 色ななくあんまで、そのおむすびにそえて
 八五五 をうれしく思つて、その家へ、幸福をわけ
 八五七 けて、おじいさんにその話をしたら、おじ
 八五九 もしろい。勉強もそのとおりだ。」とお
 八五八 曲がりだ。みんなその元氣でのぼろう。
 八五九 るだろうと思つた。そのことを先生に話し
 八六三 ことがあつてね、そのひなには苦労した
 八六四 三日して、とうとうその大きなたまごがわ
 八六三 親あひるは、じつとその子をながめた。「へ
 八六五 いた。親あひるは、そのひなをみんなつれ
 八六八 の鳥がとんできて、そのみにくいあひるの
 八七三 った。「略。」と、その一わがいった。「へ
 八七四 ところが、ちやうどそのとき、おそろしい
 八七四 ろしい大きないぬがそのすぐそばに立つて
 八七五 しずかにしていた。そのあいだも、たまの
 八八〇 、にわとりに思はずその話をした。「略」
 八八四 にくるくるまわり、その首をはくちやうの
 八八五 かし、一晚ごとに、そのおよぎまわるあな
 八八七 かんばしくにおい、その長いみどりの枝は
 八八八 た。あひるの子は、そのみごとな鳥を知つ
 八九〇 の上に頭をたれた。そのとたん、すみきつ
 八九二 い。はくちやうは、その受けてきたまづし
 八九四 て喜んだ。いまは、その身をとりまくりつ
 八九三 もいばらなかつた。そのむかし、いじめら
 八九三 かいはいくちやうは、そのほそ長い首をあげ
 八九八 になわしろをきめ、そのさかいにしろしを
 八九六 数をまわしていけば、その感じはまたふかく
 九五五 けひいてきいても、その音には、ある感じ
 九五八 樂の話」をきいた。その中で、たいこのた
 九一〇 がおもしろかつた。その例として、まず、
 九一〇 だ一つのたいこが、そのうちかたによつて
 九一四 がわからないのは、その高さを受けいれる

九一三 えました。すると、その右の足に、日本の
 九一七 りません。しかし、その中には、ことし生
 九一八 きには、あらしや、そのほかの思いがけな
 九一九 たことがあります。その年は氣候がわるく
 九一九 間に廣告しました。その廣告は、たいへん
 九二〇 知らせてきました。そのつばめを運ぶのに
 九二〇 さいわいなことに、そのとき、あいていた
 九二〇 は、おおいそぎで、その家をつばめたちの
 九二一 あると、たちまち、そのかたや、頭や、手
 九二一 九月十七日でした。その日はたいへん寒い
 九二一 ばめが着きました。その夜半には、また一
 九二四 あまりになります。そのころ、オーストリ
 九二五 大戦のあとで、まだそのいたでがなかつて
 九二九 してすすむのです。その小さな胸には、わ
 九三〇 ぼくも、はじめ、その竹ざおにかまをつ
 九四二 なくなりました。そのかわりまた、いつ
 九四二 ひわがきました。そのほか、名のわから
 九四六 にかあとした顔や、そのめんどろだといふ
 九四六 した。いちろは、その道を登つていきま
 九四九 とぼと落しながら、その坂を登りますと、
 九五四 こまれていました。その草地のまん中に、
 九五五 つてしまっていました。その男はかた目でした
 九五五 うですし、ことに、その足さきは、しゃも
 九五七 。「略。」すると、その男は、横目でいち
 九五七 いました。すると、そのきたいな男は、「へ
 九五八 しました。「略。」その声が、あんまり力
 九五八 ました。」「略。」そのとき、風がどうと
 九六三 いました。「略。」そのとき、いちろは
 九六三 はいたどんぐりで、その数といつたら、三
 九七四 ださいませんか。そのたびにお礼はいた
 九七五 があつたらしい。その目がらすてたと
 九七六 たかぎ・やまだ そのほか友だち大ぜい

11-19 5 こしらえました。その子どもに、りえも
 11-19 11 んぼうになって、その日のくらしにも困
 11-21 3 とになりました。そのとき、父親が病氣
 11-21 3 ので、金次郎が、そのかわりにでること
 11-22 9 会 ません。どうかそのかわりにはいいてく
 11-23 3 いちばん下のは、そのとき二つでした。
 11-24 10 〆」というのに、その晩のうちにいつて
 11-25 4 いいあいました。そのあくる日から、金
 11-25 6 てもらいました。そのお金は多くはあり
 11-25 11 なく、かえって、その体格もりっぱにな
 11-26 5 かしい本でした。その一まいめをめぐつ
 11-26 10 とりに山へいく、そのいき帰りに、いつ
 11-26 11 き帰りに、いつもその本を手からはなさ
 11-27 8 月だというので、そのうえに十二文はず
 11-27 9 次郎のうちでは、その十二文さえもあり
 11-28 1 した。ところで、そのつぎの年、母親が
 11-28 10 は油がいります。その油を自分でとりた
 11-38 6 画 もえ顔して、その足どりもいそいそ
 11-43 7 の子どもたちは、そのまえにおとなしく
 11-46 3 てやりなおした、その勇氣を頼もしく思
 11-48 3 さなゆりいすで、その下に、いつもかい
 11-52 7 した。けれども、その足も動かすことは
 11-53 5 なってしまった。そのとき、しゃしろう
 11-53 9 略。』といった。そのことばをきいて、
 11-59 12 はすぐ賛成した。その近道というのは、
 11-60 10 して、いっしょにその一本橋を渡りだし
 11-61 8 はだまっていた。その夜、また父にきび
 11-61 11 会 父は、「なぜ、そのとき、『略。』と
 11-64 10 ました。母親は、その知らせをみるとが
 11-65 1 した。門ばんは、その手紙をひと目みて
 11-65 2 を呼んで、少年をその父親のところへつ
 11-65 6 にふるえながら、その名をいいました。

11-67 4 えまできますと、その中にはベッドが二
 11-67 10 ふるいおこして、その後からついていき
 11-68 7 わっていました。その大きなへやのはし
 11-72 1 や、家族の者が、その旅に楽しい希望を
 11-72 3 いろ考えました。そのとき、少年は、か
 11-73 7 ついていました。その人たちは、しんさ
 11-73 8 した。待っているそのあいだが、少年に
 11-75 3 ました。「略。』そのとき、少年は、勇
 11-76 3 したり、ときどきその手にさわってみた
 11-76 6 プなりさじなりをその手から取って、看
 11-76 11 を二つならべて、その上でねわりました
 11-77 1 をはじめました。その日は、病人の目つ
 11-77 4 するような色が、そのひとみに、ちよっ
 11-77 7 を開いたときに、その小さな看護人をさ
 11-77 10 たときに、少年はそのふくれあがつた顔
 11-78 6 だかうれしそうにその話す声に——愛情
 11-78 7 、しみじみとしたそのちょうしに、じっ
 11-81 2 ました。(二) その日の午後四時ごろ
 11-81 3 いたときでした。そのへやのすぐそばの
 11-81 9 に送られながら、そのへやにはいつてき
 11-81 10 さげびをあげて、その場に立ちすくみま
 11-84 11 ました。病人は、そのとき、目を開いて
 11-88 1 をはじめました。その熱心とそのしんぼ
 11-88 1 した。その熱心とそのしんぼう強さとは
 11-88 1 したりしました。その日も、その晩も、
 11-88 4 した。その日も、その晩も、ずっとつき
 11-88 4 そっていました。そのつぎの日も、一日
 11-88 5 た、やさしい色がその目にうかぶことも
 11-89 1 っていました。その晩、少年は夜とお
 11-89 3 目を閉じました。そのとき、少年は、病
 11-89 10 いて、少年は、その小さな着物の包み
 11-93 1 ました。道灌は、その花の枝を手にはし
 11-93 5

12-7 5 、なんのことだかその意味がわかりませ
 12-8 7 かけよりました。そのとき、母ははたを
 12-10 4 いれていました。そのようすをみていた
 12-12 3 すにやってくる、その書物を手にとりま
 12-14 7 じめた。しかし、その根もとの地面には
 12-14 12 いながら文雄が、そのくちた草をとりの
 12-15 7 会 の巢なんだな。そのままにしておいて
 12-19 6 会 —あなただつてその実をそんなに美し
 12-21 10 会 なたの歌には、そのさびしい氣持がで
 12-26 7 に立ちあがって、そのまわりをぐるぐる
 12-28 2 しそうにいつて、その包みをとりあげる
 12-30 6 が、民ちゃんは、そのことをいうのでし
 12-31 10 う、めばえそめたそのなつかしい葉や、
 12-32 12 てくださつた——そのかたの両うでの中
 12-33 3 た。私がしばらくその人形と遊んでいま
 12-33 12 つてみせました。そのとき、私は、もち
 12-35 1 となさいました。その日はすでに、私は
 12-35 2 道具で、「水」がその中にはいつている
 12-38 10 されました。私はその日、たくさんのこ
 12-38 11 てはいませんが、その中には、「父」「母
 12-40 11 ることによつて、そのまっ暗なさびしい
 12-41 6 手をにぎりあい、そのにぎりかたによつ
 12-42 3 にささげました。そののち、ヘレン・ケ
 12-44 7 会 しばいがある。その人形などは、長さ
 12-45 4 会 をいわないが、そのかわり説明がつい
 12-45 11 会 つかうのだが、そのほか、指でつかう
 12-49 9 も八つに切つて、そのうち一まいだけを
 12-55 5 きなれた傳説が、そのあいだにおこま
 12-56 5 らで発見される。その中には、世界に共
 12-57 1 のくわのあとで、そのとき落ちた土くれ
 12-58 12 そくをまもつて、そののちはもう田畑を
 12-61 2 れた。ところが、そのあくる朝ながめる

- 十二 62 1 てならんでいた。そのことが評判になつて
十二 62 2 くらなくなった。その中にわるい人がい
十二 62 4 て返さなかった。そののちは、だれがな
十二 62 11 いでいる。八郎はその魚をとつてやいて
十二 63 6 の母がある。母にそのからだをみせるに
十二 65 3 りもやわらかだ。その細いやわらかなも
十二 70 4 とをきいてから、その弟子になりました
十二 70 10 いので、自分は、その近所に別に家を
十二 71 11 がつていました。そのあたりに遊んでい
十二 72 5 が大すきでした。そのあたりにいるのは
十二 73 9 ますが、あらればその手にはのらないで
十二 75 2 びくのでしたが、その夜は、すべての音
十二 75 4 しずかさでした。そのしんとしたしず
十二 75 8 ります。「略」。その声は、毎日ききな
十二 78 1 を頼まれました。その少年たちは、じょ
十二 78 2 みました。私は、その少年の持っていた
十二 80 9 れて答えました。そのひとみの中には、
十二 82 11 々の國の人々が、そのコートを目掛けて
十二 85 10 。チルデン選手もそのおうえん者たちも
十二 88 2 ろう。ことばは、そのときのまわりのよ
十二 88 3 って、いろいろにその意味がかわる。「へ
十二 88 9 ならない。もし、そのわけにかなわな
十二 88 10 るばかりでなく、そのことばがわかつた
十二 89 3 をするときには、その場のようすによく
十二 89 8 さま」にしても、そのときそのときの心
十二 89 9 しても、そのときそのときの心持があら
十二 90 3 えていたのでは、そのことばは、すこし
十二 90 5 。話すことばは、その場所の場にあらわ
十二 90 5 ことばは、その場所の場にあらわれるそ
十二 90 5 の場にあらわれるその人の面影というこ
十二 91 12 同じ文であるが、その中にたたみこまれ
十二 92 3 少なかつたこと、そのかわりきのこがた
- 十二 92 6 書いたとしても、そのなかみは、おそら
十二 93 3 こととちがつて、その場のようすが相手
十二 94 6 も読んで、すぐにそのわけがわかる。そ
十二 95 11 持にとかさされて、その人その人の生活や
十二 95 12 かされて、その人その人の生活や経験に
十二 96 7 もあるでしょう。その写真帳をひろげて
十二 112 10 ず」と読みます。そのころまで、人間の
十三 4 4 のこずえの方を。そのこずえの、細い、
十三 4 9 のむれのように。その、まだ目にもとま
十三 6 11 せて来る。ああ、そのさかな春のきざ
十三 8 7 いものがあるが、その深く進んだものを
十三 9 3 結果との関係や、その間に行われる法則
十三 9 8 なくふうをして、その実験を重ね、かふ
十三 10 6 れた年によつて、その人の性質や運命を
十三 14 7 て、太陽はいつもその焦点に在るものだ
十三 14 8 を発見しました。そのケプラーと同じこ
十三 15 7 のです。しかし、そのころの教会のほう
十三 15 8 レオを呼びだし、その説を人に教えては
十三 15 12 くとなえました。そのため、ガリレオは
十三 18 1 さな國ですのに、そのもつともよい土地
十三 18 5 の意氣はずみ、その活動はおとろえま
十三 18 12 スです。かれは、その胸に國運回復の計
十三 19 1 復の計画をたて、その顔にほほえみをた
十三 19 1 分以上もあつて、その三分の一以上が、
十三 19 9 しかありません。その第一は水で、その
十三 20 1 その第一は水で、その第二は木でありま
十三 20 1 その第一は水で、その第二は木でありま
十三 22 6 せがれましたが、その生長は、これによ
十三 23 6 ためしてみると、そのとおりになりまし
十三 24 2 ランドの氣候が、そのよい感化を受けま
十三 24 5 があつたのです。そのころ、ユートラン
十三 24 6 いも・くろむぎ、そのほかわずかのもの
十三 28 3 ぶわけではない。そのへんを走ったり、
- 十三 29 2 なひびきをする。その「ビューン」がと
十三 29 11 どらをぶらさげ、その両がわに、ふんど
十三 30 4 きさのどらでも、そのうちかたによつて
十三 30 7 にはすぐわかる。その中で、いちばんさ
十三 31 4 まるく輪になったその中で、さるがさま
十三 32 1 遠いところを通るその声を聞くのは、ゆ
十三 35 2 ることがわかり、その文字の意味がわか
十三 35 3 くと、いっそうその美しさが胸にきざ
十三 35 8 。子どもたちは、そのあざやかな色ど
十三 35 12 ぶと、風を受けてそのふえが鳴る。ふえ
十三 38 11 ま、待っている。その間に、ぼうしをぬ
十三 40 7 のを待っている。その間、かた手に持っ
十三 42 7 図、いっしょに、そのマンシェウの子ど
十三 43 3 。（顔をあげて、そのことばを味わうよ
十三 44 9 からおとうさん、そのあとはマンシェウ
十三 47 8 がすわっている。そのせなかにその角の
十三 47 8 る。そのせなかにその角のかげ。あぶが
十三 47 10 谷川を聞いているその耳もとに。きり
十三 49 5 、みどりの丘が、その声でわらいだす。
十三 50 2 うをならべると、その木のかげで、きれ
十三 52 2 やがて老いても、そのように。そうでな
十三 53 5 んをだいていて、その右の方に、もうひ
十三 53 7 っている絵です。その下の白いところに
十三 54 3 「略」。ぼくは、その絵を見ると、その
十三 54 3 その絵を見ると、そのあかちゃんがり
十三 54 3 さんがキリストで、そのおかあさんがマリ
十三 54 3 した。そうして、その絵がだいすきにな
十三 54 5 きになりました。その氣持を、だれかに
十三 54 6 くは、絵はがきをそのすりのものとくらべ
十三 55 9 生き生きとして、その着物やはだの色の
十三 56 2 であつた。が、そのころ、レオナルド
十三 56 10 図 が得意だった。その『いすによるマド
十三 57 4 図

十三576 して、ありありとその絵を目の前に見る
 十三578 かりませんが、そのマリアは、たいへ
 十三582 色のあはれ、その点はよいが、すり
 十三595 さんらしい人が、その前にひれふしてい
 十三596 る絵でした。「その絵は、たいへん感
 十三609 う。ぼくには、そのうまさがよくわか
 十四42 名高い文学者で、その名のわが國に知ら
 十四128 ことなので。その友だちの母親は、
 十四145 じがすんだら、そのことについて話を
 十四201 するようなことばはその一例だとおっしゃ
 十四207 いわれている。そのほかのことばは、
 十四242 えられたときに、そのことばもいっしょ
 十四251 つてきたときに、そのことばもいっしょ
 十四262 ンダからはいり、そののちはドイツ医学
 十四269 ハーモニートか、そのほか、コーラスと
 十四274 。それで、先生にそのことをおたずねす
 十四282 いたい。その中で、かたかなで
 十四342 す。したがって、その地球の上に住んで
 十四354 とはありません。そのバクテリアにおお
 十四361 つかめといわれ、そのことばにふかい感
 十四3612 かったのですが、その感動から研究を進
 十四385 「略」。二人のそのまのまのこころで
 十四4510 ました。すると、そのきみのわいのしず
 十四477 わてふためいて、そのためにかえって波
 十四485 の声をたよりに、その方におよいで行き
 十四488 歌っているのは、その中のひとりでした
 十四502 ました。やはり、その美しい声を手がか
 十四504 マッケンナも、その歌を歌っていたお
 十四505 おじょうさんも、そのほかの婦人たちも
 十四535 かし、どうしてそのめしべの根もとが
 十四554 私、は、やっぱりそのかぼちゃは、私の

十四572 だから、私は、そのかぼちゃは、全部
 十四612 たら、また、その人間がせわをして
 十四641 ならず、なにか、そのしずくのしんにな
 十四642 るものがあつて、そのまわりに、蒸気が
 十四644 かつてきました。そのしんになるものは
 十四684 、入れかわりに、そのつめたい空気が下
 十四712 かつて動きます。その反対に、茶わんの
 十四7110 ます。そうして、そのひえかたがどこも
 十四7112 た水が下へおり、そのまわりの、わりあ
 十四721 熱い表面の水が、そのあとへ向かつて流
 十四728 が曲がるために、その光が同じようにな
 十四729 こを照らします。そのために、さきにい
 十四733 ふくれてのぼる、そのときでる氣流の
 十四779 たが、ほんとうにそのとおりでした。竹
 十四788 とができました。そののち、氣をつけて
 十四797 ないことでした。そのことを友だちに話
 十四801 たい、だが、そのことを発見したの
 十四807 と思われたので、そのことをほかの人々
 十四844 をしていること、その美しい雪が数かぎ
 十四851 観察してみると、その雪が、どこで、ど
 十四868 ば、ふぶきなどもその一つである。風に
 十四878 人が歩いて行く。その人の足あとををしる
 十四881 すじの道となる。その一すじの道をなが
 十四908 ひっかけていた。その上ぐつは、母親の
 十四9010 横ぎつたときに、その上ぐつはぬげてし
 十四915 行つてしまつた。その男の子は、これは
 十四918 あらう。そこで、その女の子は、まっ
 十四9110 まつた。だから、その足のつめたいこと
 十四923 晩だというのに、その子は、まだマツチ
 十四926 た。思いきつて、その屋根うらの家へ帰
 十四9211 。かわいそうに、その子は、おながす
 十四931 って歩いていて。その子のきれいなかみ

十四932 わりつき、雪は、そのかなしげな、小さ
 十四933 った。けれども、その小さなマツチ賣り
 十四935 って行きながら、その小さなマツチ賣り
 十四947 子は、両足を――そのあわれな、小さな
 十四9410 どこへていた。その両手をあたためる
 十四953 した。女の子は、その上へ、小さなつめ
 十四955 手をさしのべた。その小さなほのおが、
 十四955 小さなほのおが、その子には、もえさか
 十四9510 にすわっていた。そのろの中には、美し
 十四9512 がり、ほのおは、その小さなマツチ賣り
 十四963 した。と思うと、そのとき、ほのおは消
 十四969 ぎなことだろう。その火の光のさすところ
 十四9610 にくすくすなつて、その女の子は、中のへ
 十四974 おかれてあつた。そのとき、まあ、どう
 十四974 あ、どうだろう。そのやいた鳥は、肉を
 十四976 よたよた歩いて、その女の子の方へずつ
 十四977 はないか。ああ、そのときもとき、ちょ
 十四988 さしのべた。と、そのとき、マツチはも
 十四989 ども、やっぱり、そのたくさんのろうそ
 十四993 落ちるのを見た。その星が落ちるとき、
 十四9911 からひきだした。そのマツチの火の中で
 十四1027 いのだ。人々は、その子がどんなに幸福
 十五46 なこすら、その行く末を見ざり
 十五54 やは。遠くそののちかしの木に、
 十五153 ろきて見ればその花動く。ひるすぎ
 十五1710 。きみたちのそのまともなるひとみ
 十五184 。きみたちのそのやわらかきたなご
 十五195 び立っています。その中で、一だんと高
 十五197 さがあります。そのほとんどのいたなき
 十五201 いってくれます。その登山電車のとちゅ
 十五214 山植物のかおり、その上に、まっ白な服
 十五225 にしていました。そのとき、ふいに、み

十五 22 10 なが、おどろいてその音の方へ顔を向け
 十五 23 6 まわる。見ると、そのがけの下の方へゆ
 十五 23 10 ばかりです。と、そのとき、だれか、そ
 十五 23 10 のとき、だれか、その大わしのせの上へ
 十五 23 12 だれでしょうか。その人は、いっしょう
 十五 24 6 めなければ、もうその女の子は、どこへ
 十五 24 11 した。さいわいにその勇ましい少年は、
 十五 24 11 のせにとびつき、その上へ乗りうつて
 十五 25 3 落ちないように、その上帯をかたくにぎ
 十五 25 10 らおされるので、その重さにたえられな
 十五 26 2 もしこのわしが、その舞いおるとちゅ
 十五 27 6 くなつたのかと、そのことがまた、少年
 十五 28 1 てしまいました。そのとき、鳥はサアッ
 十五 28 2 なくなつたのか、その重荷をふり落すよ
 十五 28 10 刀をぬいて、鳥がそのあき地へ身をおろ
 十五 30 7 まつて來ました。その目、そのくちばし
 十五 30 7 ました。その目、そのくちばし、その羽
 十五 30 8 、そのくちばし、その羽音、まったく大
 十五 30 12 ちかえた右手で、その石を取るが早いか
 十五 31 7 しとあたります。そのたびごとに、鳥は
 十五 31 12 とびちりました。その中で、女の子の後
 十五 32 2 続けていました。そのとき、がけの中は
 十五 32 3 女の両親たちが、そのへんにいたひつじ
 十五 33 5 だしていました。そのときの少年の喜び
 十五 33 5 きの少年の喜び、そのときの女の子の両
 十五 34 5 けれども、それをその場にいない人や、
 十五 34 8 、なわを結んで、その結びかたや、なわ
 十五 36 9 引いて、「・」をその線のうえにおいた
 十五 37 8 「枝・板」など、その文字の左側に「木
 十五 38 2 などとつかつて、その漢字の意味にあつ
 十五 39 3 っているうちに、その漢字から、日本語
 十五 41 1 にいったように、その大もとをたずねれ

十五 41 3 となり、さらに、そのフェニキア文字が
 十五 41 4 なり、それから、そのギリシア文字がロ
 十五 41 6 字といわれるのもそのためである。ロー
 十五 45 9 やつて來たのも、そのころのことであつ
 十五 46 9 略。」「略。」「そのねだんのあまりに
 十五 47 4 をながめながら、その話のさきをうなが
 十五 47 9 作らせていたが、そのお庭焼の中でも、
 十五 48 2 かえられていた。そのほかに、色絵をつ
 十五 48 9 じめた。しかし、そのしごとと簡單にで
 十五 50 11 に熱情をこめた。そのときから、プリン
 十五 51 8 とい、あなたは、そのプリンクリーさん
 十五 52 4 ろのことである。そのころ留学生として
 十五 52 6 た論文を持って、その出版の用事かたが
 十五 54 2 ランド博士、いまその大先生にお会いす
 十五 54 6 をそそいで、「そのあい色のふうとう
 十五 55 1 ヨルダン博士は、そのためのはずを早
 十五 55 7 った。「まあ、そのようなありさまで
 十五 55 12 ていたものだ。そのころ日本をたずね
 十五 56 2 じめてだろ。そのときは、まだ三角
 十五 56 5 岸線をながめ、その角度を計算して紙
 十五 56 6 算してみたが、その際算出した高さは
 十五 57 3 いるようだが、その一つに日本の青年
 十五 57 3 をとまらせて、そのせわをしてはくれ
 十五 57 10 ことにしたが、その日本の青年はなか
 十五 57 10 人物だったよ。そのころ、もう熱心な
 十五 58 1 やすいご用だ。そのかわり日本語を教
 十五 58 1 教えてくれと、その申し出でを承知し
 十五 58 6 い出して、ひとりそのときの思い出にふ
 十五 59 2 小さいとき、その新島襄にたいそう
 十五 59 5 、ことばみじかにその関係を物語る私の
 十五 60 9 おつていた私は、そのときちょうど四つ
 十五 61 5 ったのを見ても、その愛されかたがわか

十五 61 6 かたがわろう。そのころ、新島のおじ
 十五 64 4 さんとおばさんはそのあとを追つて出て
 十五 65 8 きあげられたが、その道すがら、小樽で
 十五 66 1 へ送つたりした。その次には、りっぱな
 十五 66 4 っくがくるごとにその人形をかざつて、
 十五 66 11 い京都に移つた。そのころは、新島のお
 十五 67 1 校のいきかえりにその門前を通つても、
 十五 67 4 徒であつた私は、そのクリスマスに得意
 十五 67 8 おばさんだった。そのなつかしい顔をあ
 十五 67 10 みだがり流れた。そのことのあつたあ
 十五 69 3 やわらいで見え、その口もとがほころん
 十五 69 11 たずねられたのもそのはずだ。いまその
 十五 69 11 そのはずだ。いまその写真の主が、こう
 十五 70 6 おばさんが、「そのいすにこしかけて
 十五 71 1 つたのですよ。そのペンをにぎつてご
 十五 71 9 す一つのおほか、その前に立つたおばさ
 十五 72 2 の文字をきざんだそのおくつき。はか石
 十五 73 8 られた。ちやうどそのころは眞夏であつ
 十五 73 11 の旗がしらとしてその名を知られていた
 十五 74 2 、自分の子女は、その性質がどんなにち
 十五 74 10 界の人類はすべてその愛する子どもなの
 十五 75 4 てさげびながら、そのにぎりこぶしを私
 十五 75 11 かれた。博士は、そのことばの意味をと
 十五 78 1 ちがつていても、その発表をためらつて
 十五 90 10 。というの、その鳥をあまより上等と
 十五 94 1 て行こうとする。その間に、「はちきれ
 十五 104 5 のですからね。その名はすなわち、『
 十五 106 2 がありませぬ。その後にいるのは、『
 十五 106 11 なりにいます。その後、『もののおわ
 十五 107 2 だつて、ぼく、その兄弟にあつたよ。
 十五 109 1 いるのですよ。その『喜び』は、たぶ
 十五 113 1 もらえば、すぐそのなみだは、目の中

十五113 8 色が白いな。その中から光が流れた
十五118 6 喜び「さあ、そのペールをおとりく
十五120 6 を歌ってくれた。その歌を耳にしなが
そのうえ「其上」12 そのうえ

三113 はんたかはものおぼえがわるく、そのう
え、ものがよくいえませんでした。

七82 2 乙「はい、知っていました。らくだのま
え歯が、二三本ぬけていることまで。」甲「そのう
え、つけていた荷物の品まで、知っているじゃあ
りませんか。」

九37 7 じめじめした足もとがきみがわるく、そ
のうえ「略」雑草がいちめんにはえていて、

十43 1 喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力
者であつたうめが、この世をさつてしまった。そ
のうえ、ふたたび、赤しおがよせてきた。

十一19 9 りえもんは、からだがよわくて、よく働
けませんでした。そのうえ、さかわ川の大水で、
田や畑をみんな流されたりしましたので、

十一28 8 そこへいつてからは、いよいよいっしょ
うけんめいに働きました。そのうえ、夜おそく
こっそりと勉強を続けました。

十二39 9 よんでわかるように、ケラーは、めくら
で、そのうえつんぽでした。

十二48 6 其のうえ、手がるでおもしろいし、自
分で作つて自分で動かすのは楽しいものだよ。

十二74 9 曾良が水をたくさんくんでおいてくれた
し、略、そのうえ、台所の米入れの大きな入れ
物もかなり重いので、

十三25 3 しもは消え、砂は去り、そのうえ、大水
の害がのぞかれたので、

十五42 5 いま日本では、漢字と、かたかなと、ひ
らがなの三種類の文字をつかつており、そのう

え、ローマ字の教育にも努力している。
十五110 7 私ほ、もう年をとることはないのだか
らね。そのうえ、毎日、新しい力と、わかさと幸
福がたまりますよ。

そのうち「其内」19 そのうち

二28 4 やぎとやぎと、せまいはしの上で、

つのおしあつていました。そのうちに、二ひ
きとも、どふんとおちてしまいました。

三13 9 はんたかは、このひとことを心の中
にしまいました。そのうちに、きたないことばは、
きたない心からうまれてくるものだとい
うことがわかりました。

三75 5 そのうちに、赤いお日さまは丘の
かげへしずんでいきました。

三81 2 みんなはとうとうえんがわまでにげて
いきました。そのうちに、雲は雨をつれて、空
をすすんでいきました。

三113 1 手足の力がなくなつて、なにをするこ
ともできなくなつてしまいました。そのうち
に、空から大ぜいの天人たちが、雲にのつて
おりてきました。

四60 6 そのうちに、夜になつてしまいました。
五18 2 そのうちに、きよくの人が、私たちをかた
はしからしらべていつて、

六51 5 三人が、かげふみをして遊んでいました。
そのうちに、あたりがきゆうにくらくなつて、か
げがみえなくなりました。

六99 9 つくえの上をみたりそのけしきをのぞい
たりしていた。そのうちに、ふと、おもしろいこ
とを発見した。

六137 10 長い森をくぐりました。そのうちに、しか
さんは、いつのまにかはぐれてしまいました。

八85 6 どうして、あの鳥のもっているような美し
さをもつたらなどと望むことができよう。そのう
ちに寒い冬がきた。

九93 3 なかなかみつからない。そのうちに、セル
ロイドの三角じょうぎをひろいあげる。

九93 8 首がいたいらしく、手でさすっている。そ
のうちに新しいすみをひろいあげるが、

九132 3 にげようとしたが、どうしても手足が
うまく動きません。そのうちにみつばちのからだ
も、つなまかれそうになりました。

十69 2 せんすの手だけをまねにつきだして、あ
おぎつづけていました。そのうちに、太郎かじゃは、

略、一つのまるいつばをみつ
け

十一90 12 そのうちに、ちよつとわきのほうにい
つていた看護婦が、小さなすみれの花たばを、ベッ
ドの上のコップの中から取つてきました。

十二63 4 いくら飲んでものどのかわきがとまらな
かった。そのうちにからだがだんだん長くのびて、
おしまいにへびになつてしまった。

十二71 7 先生の近くにいればこそ、毎日教えても
らえるので、これがなによりうれしいと、曾良は
喜びました。そのうちに、冬がきて、

十五67 2 学校のいきかえりにその門前を通つても、
新島家の窓は、かたくとざされてあつた。そのう
ちにクリスマスの日がめぐつてきた。

そのひとのことは「課名」2 その人のことは
十五3 9 五 その人のことは……七十七

十五77 1 五 その人のことは……ふこうそのもの
そのやま「園山」(人名) 1 園山

十五123 4 園山——

そば「側」(名) 72 そば ↓ おそば

一435 よなかに 目を あけると、 おとうさんが
そばに たつて いました。

二349 六人の めくらたちは、 おそろおそろ
うの そばに よつて きました。

二527 さちこが、 おかあさんの そばに かけより
ます。

四248 団 おとなりの まさちゃん、 あの いけ
の そばまで さんぽして きました。

四254 団 お話を すると、 みっちゃん、 そばに
くる ような 気が します。

四4710 はたけを こえ、 のはらを すぎると、 高い
山の そばに きました。

四844 クリスマスツリーの そばで、 みんなで あ
そびました。

四964 とろろ うみの そば
四1033 かめは、 すぐ そばまで いって、 大きな
声で、 「略。」 といいます。

四1114 かめはその そばに ならびます。
四1281 あれは なんだろう。」 りょうしは、 そばへ
よつて、 よく みます。

五464 おつかいにいくとき、 うらの竹やぶのそば
を通つたら、 おくの方でうぐいすの音がした。

五635 おとうさんは、 この話をそばでおきき
なつて、

五741 そばには、 りっぱなけらいもついています。
六49 そばには 小さなしんぼうや、 は車や、 ぜん
まいなどが ならんでいる。

六106 しごと台のそばで、 ふさぎこんで下をみつ
めていた女の子が、 思わず 「あっ。」 とさげんだ。

六135 ちょうど、 そばに小川が流れていました。
六149 はとは、 いそいで木の葉をとつて、 ありの
そばにおとして やりました。

六151 木の葉は船のようになって、 ありのそばを
流れました。

六388 親子のつばめ、 屋根のそばを通りぬけ、 ま
た、 もどつてきて かかしの 近くにとまる。

六417 親つばめと子つばめが、 かかしのそばにと
まる。

六548 ふたりは木のそばへ 走つて きました。
六786 そばからねえさんが、 「略。」 といいまし
た。

六879 団 そのごてんの 門のそばに いどがあつて、
そのそばには、 大きな木が 立っています。

六8710 団 そのそばには、 大きな木が 立っています。
六1152 ただしちゃんが、 そばから、 「略。」 とい
いました。

六1402 のそり、 のそり、 そばに 歩いて きました。
七99 団 毎年、 新しく入学した子どもたちが、 わ
たしのそばへ やつて きた。

七910 団 毎年、 新しい卒業生たちが、 わたしのそ
ばから かつて いった。

七4311 そこで、 老人は、 自分のかぶつていたぼう
しを、 そばの人の手に 渡した。

七973 草のそばにきて、 口をくつつけましたが、
草は たべませんでした。

八58 それがまたとくべつで、 そばに すすめた小
さなかごの中から、 一わずつつかみだしては

八249 とびたつたかと思うと、 その鳴いているな
かまのそばへ、 とんでいつてとまりました。

八478 その小屋のそばを通りかかったときでした。
八673 団 だが、 わたしのそばにくつついてね。

八7410 ところが、 ちょうどそのとき、 おそろしい
大きないぬがそのすぐそばに 立つて いた。

八7411 はなをあひるの子のそばにつきつけて歯を

むいた。
八916 大きなくちようたちは、 そばへおよいで
きて、 くちばしで かるく なくて くれた。

九44 この赤い色のそばに黄色をぬりますと、
九559 いちろうは、 だんだんそばへいきましたが、
びっくりしてたちどまつてしまいました。

九951 やがて思いきつて、 たかぎのそばにより、
だまつたままそれを取りあげる。

九1049 集合地は、 村はずれの 一本すぎのそばで
あつた。

九1476 深い森のそばをとびました。
十777 おとうさんの歩いていくそばを、 足ばやに
かけぬけていって、

十119 おかしを、 一ふくろ やつたのが はじまりで、
その少女たちは、 おとうさんのそばへくるように
なりました。

十125 こうして、 ずんずん おとうさんのそばへき
て、 さまざまなことを 話しかけたり、

十127 お友だちに さそわれても、 どうしても おと
うさんのそばへ こない女の子も ありました。

十137 おとうさんの こしかけて いるそばで、 「略」、
いなかの歌を 歌つて きかせて くれました。

十149 おとうさんのそばへきて、 あいさつをして
から、 「略。」 とたずねました。

十167 太郎がそばへきて、 外国では どんなことば
を 話すかと たずねるもの ですから、

十526 五六歩 いったかと思うと、 よそのおばさん
が、 あかちゃんをおんぶして、 そばを通りました。

十612 私は、 たけのこのそばに いって、 せいくら
べをしたたら、 はなのところまで ありました。

十668 団 ふたりとも 用心して、 そばへもよらぬこ
とだ。

十一4710 おかあさんがパンをやくそばで、ぼくは、いつも本を読んでいた。
 十一737 その人たちは、しんさつをはじめて、一つ一つのベッドのそばに立ちどまりました。
 十一739 医者がすぐそばのベッドまできました。
 十一814 そのへやのすぐそばの、ドアのそとに足音がきこえて、
 十一857 ④ いつも、ぼくがそばにいないといけな
 いのです。
 十一8710 少年がベッドのそばのものと場所に帰ると、病人はほっとしたようにみえました。
 十一885 そのつぎの日も、一日ずっとそばにいました。
 十一893 その晩、少年は夜どおしそばについて、病人をみまもっていました。
 十二87 「略」。① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖

- 十二702 深川^{ふかがわ}の芭蕉^{ばしやう}の家の近くに、曾良^{そうら}という人が住んでいました。
- 十二703 曾良は、信州^{しんしゆ}の人で、歌がたいそうじょうずでしたが、芭蕉のことをきいてから、その弟子になりました。
- 十二706 曾良は思いました。
- 十二716 先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、これがなによりうれしと、曾良は喜びました。
- 十二746 みるみるうちにつもりましたが、曾良が水をたくさんくんでおいてくれたし、
- 十二758 「略。」その声は、毎日ききなれていく曾良の声です。
- 十二769 曾良は、芭蕉の子どもらしい手すさががすっかりうれしくなりました、
- そら「空」(名) 93 ソラ 空 ↓ あおぞら・あきぞら・おおぞら・おそら・よぞら
- 二3710 空は、ほんとうに青い色でした。
- 二657 空があかるくなってきた。
- 二228 とうとう、そのてっぺんは、空のくもとにどくようになりました。
- 三392 海のような空で、ひばりがないていました。
- 三534 空 おてんとうさまは空にてり、「略。」といいました。
- 三679 「略。」と、おとうさんがおっしゃったので、みんなは空をみあげました。
- 三797 みんなは空をながめました。
- 三812 そのうちに、雲は雨をつれて、空をすすんでいきました。
- 三814 すると、色リボンのようなにじが空にかかりました。

- 三962 にわの 花も、空の 雲も、とおい 山も、ちかい 家も、かくことができます。
- 三1092 月の きれいな ぼんになると、かぐやひめは、空をながめてはためいきをつき、
- 三1131 そのうちに、空から 大ぜいの 天人たちが、雲に のつて おりて きました。
- 四257 国 わたくしは、みっちゃん^{ミツちゃん}が空をとんでいるだろうと、ときどき 思います。
- 四418 ときには、かぎなりになって、空をひっかけるようになりました。
- 四435 がんは、おたがいに いましめあつて、ぎょうぎよく 空をとびました。
- 四521 おもい かつちゃん^{カツちゃん}を かつぎながら 空をとぶのは、よいいな ことでは ありません。
- 四931 雪が 降りだすと、ぼくは まどから かおをだして 空の ほうを みあげて、
- 四941 雪が かおに かかるのも わすれて、高い 空の まんちんを みあげる。
- 四1267 空に かすんだ ふじの 山。
- 四1316 いや、返せません。」天人は、かなしそう なかおをして、空を みあげます。
- 四1354 空 かめめ すいすいとんでいく、空に ほんのり ふじの 山。
- 五447 明かるい世界の空とんで、平和のうたをうたおうよ。
- 五459 世界の空のかず多い、かがやく星のその一つ。
- 五462 みんななかよくきらきらと、しずかな空で光ろうよ。
- 五531 西の方をみると、日がしずんでまもない空に、大きな星が光っていました。
- 五537 大きな声で、はるおが、東の空をみながら

- いいました。
- 五539 それは、南東の空で光っていました。
- 五548 空のまん中に、大きな星が光っていました。
- 五549 空は、まだ、ほんのりと明かるくて、つぎの星をみつけることは、できませんでした。
- 五555 「略。」と思つて、西の空をみましたが、わかりませんでした。
- 五1068 空はひろくてもおもしろいよ。
- 六329 糸の切れたたこのように、空にすいこまれ ていくかし。
- 六3210 からすの子が、びっくりしてすからと びだし、空をみあげる。
- 六368 20 高くふきあげられて、空にきえていく かし—
- 六3610 それにつれて、空がうす赤くなってくる。
- 六436 その列が空にすいこまれていく。
- 六438 美しい空の色。
- 六4311 さわやかな朝の空。
- 六498 うすむらさきにほのぼのと、明かるくそ まる朝の空。
- 六501 楽しいことがあるような、ああ、さわやかな朝の空。
- 六503 すんだ青さをもちながら、ときにはくもる 畫の空。
- 六505 考えごとでもできそうな、ああ、おおらかな 畫の空。
- 六507 くらければこそ光る星、ねむりをふらす 夜の空。
- 六509 きたないこともきえそうな、ああ、おごそかな夜の空。
- 六516 三人は遊ぶのをやめて、空をみあげました。
- 六541 ふみおは、こういつて、空をみあげました。

六55 6 ねるまえにそとをみると、空はいつのまにか、雲一つなく、きれいはれわたっていました。
 六60 3 罫 ウスムラサキニ——七 ホノボノト——
 五 アカルクソマル——七 アサノソラ——五
 六60 7 罫 タノシイコトガ——七 アルヨウナ——
 五 アサワヤカナ——七 アサノソラ——五
 六106 7 ちょうど、空からブルン、ブルンというばくおんがきこえてきた。
 七5 6 こんどは、思いきり高くとんで、屋根をこえて、うすべに色の空にきえた。
 七8 9 やぎが、つまらなそうに、夕やけの空をながめている。
 七9 11 おほろ月が空にかかっている。
 七62 4 さくらの花をしらべてみたり——どの花も、みんな空を向いている。
 八35 1 さて、空の星は、地球からどのくらいいきよにあるのでしょうか。
 八59 6 山の上には、青い空がすきとおるようにすんでいる。
 八73 10 「ボン、ボン。」と、空で鳴った。
 九32 10 罫 秋晴れのすみきった空の下に、山のすがたが、さかさまに湖の中にうつって、
 九49 2 まわりの山は、〈略〉、きれいにありあがつて、まっさおな空の下にならんでいました。
 九147 1 くもは、つばめの口ばしにはさまれたまま、空をとんでいきました。
 九147 7 夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりとしらみかけてきました。
 十4 3 青空の美しさ、朝明けの空、夕やけの空の美しさ、月の夜、星の夜の美しさ。
 十4 3 夕やけの空の美しさ、
 十4 9 わかめをだしかけたこずえのさがが、かす

んだ空の中にとけこんでいる。
 十一15 12 窓ガラスが、一まいこわれていて、やがて、小鳥たちは、そこから遠い空へにげていった。
 十一31 7 罫 青い空にはかすみがかめて、ひぼりは朝から大うかれ。
 十一34 2 罫 麦のとりいれことなくすめば、はい色雲が空うちおおい、青葉・わか葉に雨ふりそそぐ。
 十一34 8 罫 つゆ晴れ空はみどりにすんで、日ましに日ざしが強くなり、
 十一35 2 罫 空にくずれる雲のみね、
 十二48 3 罫 空をとんだり、すがたを消したり。
 十二58 10 ところがいま一だんというところで、いちばんどりが鳴いて、東の空が明かるくなった。
 十二60 11 さすがの太陽も、まねかれるままに空の中ほどまでもどつてきた。
 十二71 7 そのうちに、冬がきて、くもった空がひくくたれる日が続きました。
 十二71 9 芭蕉は、くもった空をあおぎながら、
 十二94 8 太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむれてとんでいる景色を思い、
 十三7 2 どころもしれぬ方角の、遠い、はるかな空のおくで、鳴いているからすの声も、
 十三12 8 朝になると、日は東の空からのぼり、夕がたになると、西の空にしずみます。
 十三12 9 夕がたになると、西の空にしずみます。
 十三12 9 月も、東の空から西の空に向かって動きまします。
 十三12 9 東の空から西の空に向かって動きまします。
 十三14 6 そういう星——これをわく星といいます
 が——の空にえがく道は、だえん形であって、
 十三33 9 それだけに、空が美しい。
 十四29 6 それは、空にかがやいている星です。

十四38 8 罫 東の空が明かるくなってくる。
 十四41 11 胸をはれ。」みんな空をあおぐ。
 十四58 11 罫 それから、空から降る雨、あれだつて水ですよ。
 十四84 12 空から降ってきた雪の一ひらを受けとって、それをくわしく観察してみると、
 十四85 4 罫 雪は、空からのお手紙です。
 十四85 7 一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、たしかに空からの手紙にちがいない。
 十四85 7 罫 「空からのお手紙」とは、うまくいったものだ。
 十四99 3 その星が落ちるとき、空を横ぎって長い光のおをひいた。
 十五4 3 罫 空にはなちし わがそ矢は、あわれいずこに落ちにけん。
 十五4 7 罫 空になえし わが歌は、あわれいずこに落ちにけん。
 そら (感) 4 そら
 一52 6 罫 そら、ところどころに、おおきなほしがひかっているでしょう。
 九82 9 罫 「そら、これはせきふらしいぞ。」
 九131 8 罫 ブブブ——「そら、ひっかった。」
 くもはみつばちにとびかかりました。
 十五109 6 罫 そら、手をひろげてこちらへかけてくる。
 そらいちめん 「空二面」(名) 1 空いちめん
 五55 3 もうすっかりくらくらなっていて、空いちめん、星がでていました。
 そらいろ 「空色」(名) 3 空色
 五43 9 罫 空色のあさがおです。
 五59 8 どれも空色です。

五623 花の色を空色にそめてくれたのは、だれでしょう。

それおそろしい「空恐」(形) 1 それおそろしい

《一ク》

九455 くもは、自分ながら自分のからだだが、それおそろしく思われてきました。

それのうた「課名」2 空のうた

六27 四 空のうた……四十六

六461 四 空のうた

それのうた「題名」2 空のうた

六496 空のうた

六599 「空のうた」をしらべてみました。

それらめ「空豆」(名) 2 それらめ

十一319 聞こえんどう・それらめみな花つけて、羽音高くみつばちがとぶ。

十一397 聞こえんどう・こむぎの種まきすんで、それらめ・えんどうみなまいた。

それかえる「反返」(五) 1 それ返る《一ル》

八231 虫はぐつとそれ返るようにして、頭をうしろにさげました。

そればし「反橋」(名) 1 それ橋

八267 馬車は、七色の大きなそれ橋を音もなく渡って、《略》野原へおりてきました。

それや(感) 4 それや

六3911 それやそうだけど——

九996 それやそうさ。

十二458 それや、おもしろいさ。

十二485 それや、そうですね。

それやあ(感) 6 それやあ

三667 「それやあうまい かんがえだね。」

九994 それやあ——

十168 それやあ、フランスではフランスのことば、

イギリスではイギリスのことばを話すよ。

十一911 それやあ、船長のほうがむずかしいだろう。

十五1074 それやあ、そうでしょう。

十五1106 それやあそうともさ。

それ「刺」(五) 1 それ《一ラ》

十三293 その「ビューン」がとまると、そこでは、どこかの子どもが、もう、頭をつるつるにそれれている。

それ「其」(代名) 379 それ

一365 《略》。「略」。「それはなぜですか。」

一656 「だいやもんど。それなら、あなたの二93。(三) 先生が、それをごらんになつ

二501 します。けれども、それをやめて、しば

二561 がいありません。それは、どんなかた

二713 よく走るきもち。それがだんだんと

二162 のびてきました。それをみたごてんの

二439 。わにぎめは、「それはおもしろかろ

二442 した。白うさはそれをみて、「略」。

二458 した。わにぎめはそれをきくと、たい

二486 はなしました。「それはかわいそうだ。

二564 か。いえいえ、それはなりません。

二567 か。いえいえ、それもなりません。

二573 か。いえいえ、それもなりません。

二622 になりました。「それでいいかい。」「

二625 た。「デビッドもそれでいいかい。」「

二628 ました。「みんなそれでいいね。」「略

二669 がいいました。「それでいいかい。」「

二673 はいいました。「それでいいかい。」「

二997 くなつてから、それをみるのは、ほ

三1024 にそだてました。それからというもの

三1057 いことをいって、それができたらおよ

三1063 ききになって、「それほどきれいな

四333 ると、男の子は、それをはいて、元氣

四379 がありました。それは、おかあさんの

四383 した。「略」。「それはえらかった。

四445 《略》。「みんなは、それにさんせいしま

四447 た。ところが、「それはいけないよ。」「

四557 音がしましたが、それは、小鳥たちが、

四634 ました。みんなは、それをみて、おおよ

四663 とばをみつめて、それをまちがえない

四833 えをだしました。それはふじ山のえで

四839 できあがりました。それをまつの枝の

四851 のたつこさんが、それにあわせておど

四996 てくれるかね。それはありがたい。」

四1059 ます。」「うらしま「それはおもしろい。

四1295 ます。女「もし、それは、わたくしの

四1303 思います。」「女「それは、天人のほご

四1313 たします。」「天人「それがないと、天へ

四1321 ましょう。」「天人「それは、ありがとう

四1332 返します。天人は、それをきて、しずか

五225 ようのうれしさは、それだけではありませ

五231 《略》。「略」。「それはあるけど。」「

五244 《略》。「そう、それはよかったね。そ

五245 《略》。「略」。「それもあるけど。そ

五255 ようだったのに、それからは、みんなに

五293 《略》。「略」。「それはこうなんです。

五378 えられていて、いまそれが、私たちのため

五388 の子どもたちに、それを送ってあげよう

五539 いました。「略」。「それは、南東の空で光

五543 あんな小さいの。それより、ほら、もっ

五599 色です。あやこは、それをみつめて、「略

五6610 かなをとったよ。それが、海へ帰してく

五722 においやりました。それから三日ほどたつ

54 11 といいつけました。それから一週間もたつ
 58 9 うきがおちました。それが、にしみりさん
 58 10 といいました。「それはおもしろい。い
 59 1 略。」ひわの子は、それが自分のなまの
 59 5 いちばんはじめに、それをおかあさんがき
 59 3 きました。ひわは、それを見ると、「略」
 68 3 男の子はゆびさきでそれをつまもうとした
 69 7 だが、「略」と、それがまた心配になつた
 61 3 ちゅう時計をだしてそれをいじっていたが
 61 7 けびつづけました。それを一わのほとがみ
 62 1 みんな、楽しそうにそれをたべます。オル
 63 5 れてもってきます。それをきりぎりすにわ
 66 10 の音がよくなる。それにつれて、空がう
 64 9 とかたまりになる。それがほぐれて、一列
 64 7 すいこまれていく。それをつつむようにし
 64 10 「なんだろうな、それ。」子がらす「さ
 65 3 に氣がつきました。それはこぼの声のか
 68 4 いに写真しました。それを切りとって新聞
 68 5 にはりつけました。それは、むしめがねで
 74 3 のがありますよ。それを考えたらわかる
 74 10 たとえ動いても、それだけでは命がある
 76 2 けました。はるえはそれをみて、「略」
 67 2 「きのうから、それを考えているんで
 79 5 すよ。あなたが、それを動かそうと思つ
 80 8 みこと」そうだ。それがどうした。ほ
 93 4 「そうでしたか。それはお困りでしやう
 95 3 ません。」海の神「それはおかしい。いや
 96 8 す。」海の神「あ、それにちがいない。」
 97 10 をする。みことは、それにあわせておど
 100 8 みえるではないか。それは、ここから百メ
 113 3 たことはなかった。それがいま、一つ一つ
 113 10 っとなでしまった。それよりも、五十音に

626 2 「トンネルか。それはおもしろい。」
 629 3 れかの声がします。それはたぬきさんでし
 630 11 ってしまいました。それをみて、たぬきさ
 641 2 声がひびきました。それは、もう一びきの
 713 8 ているのでしょうか。それとよく似たつかい
 720 7 ておきましたら、それが、いまちやうど
 723 7 すよ。」母「そう、それもお勉強ですね。
 725 7 かかっていきます。それから十日すぎて、
 726 7 そうか。」(四) それから、いく日かた
 729 1 できたつて。」母「それはよかったね。ど
 729 6 にかわつていた。それは、すずめたちに
 730 1 ぼくよりさきに、それをみつけた。」そ
 733 2 ましやうね。」母「それがいいわ。」はる
 744 3 、いくらかのお金をそれにくわえた。車中
 747 6 まで書きたしても、それでいいというところ
 767 7 こしらえておいて、それにねんどでだんだ
 770 2 れがたの庭そうじ、それがすむのをまつて
 776 3 くだをにがして、それをさがしていらつ
 779 9 つくりして、乙「それにちがいますか
 777 11 したか。」旅人は、それには答えなくて、
 783 5 たのかね。」旅人「それは、こうです。道
 783 8 うことは。」旅人「それは、かた方の足あ
 784 7 「乙」そうです。それが麦だということ
 784 8 う。裁判官どの、それを、しらべていた
 784 10 います。」裁判官「それについて、なにか
 784 11 、なにか。」旅人「それはほかでもありま
 788 8 草をいれてやると、そればかりたべて、ま
 84 5 ありません。鳥——それも、日本どくとく
 85 8 たのですから……。それがまたとくべつで
 88 7 とさえずつたり——それは、鳴きかたのち
 88 8 もありましようが、そればかりでなく、ほ
 88 11 ふかい鳥だろうと、それを知ってから、よ

813 5 のないものでした。それから十年、いまも
 816 11 がさいご、ようににそれからはなれませんが
 817 2 できるのでしよう。それは、だれも教えて
 821 7 なかつたことをして、それにはいあがつてい
 821 10 ていました。虫は、それにとりつくと、ま
 821 10 え足のつめでかたくそれにしがみついて、
 827 7 うになさいました。それは、天帝のひとり
 832 1 遊びつづけました。それをみた天帝は、た
 834 3 とにして計ります。それは、「光年」とい
 840 2 わりになりました。それもこがねになりま
 850 2 ません。けれども、それでは人の心がよく
 855 6 は知れるものです。それをうれしく思つて
 856 9 もめが目について、それに氣をとられて、
 857 5 小船にいきついて、それにもたれて、いま
 857 9 おじいさんは、「それはおもしろい。勉
 860 9 るがすわっていた。それは、たまごをかえ
 863 7 わたしも、一どそれだまされたこと
 864 10 へいつてしまった。それから二三日して、
 865 1 いて、はつてでた。それは、ひどく大きな
 871 2 く思った。(二) それからのちは、わる
 872 10 たいとも思ったが、それもゆるしてもらえ
 873 1 えそうもなかった。それから二日間、ここ
 878 2 だ。おばあさんは、それを自分の子やう
 879 4 ごは生まなかつた。そればかりでなく、ね
 884 2 る首をもつていた。それははくちやうであ
 884 5 た。あひるの子は、それをみて、ふしぎな
 885 3 なつかしく思った。それは、うらやましく
 890 8 っているのをみた。それは、ぶかつたやうな
 893 4 きのことを考えた。それが、いまでは、す
 911 11 あらわしているが、それをたいこであらわ
 914 7 い音楽をきいても、それがわからないのは
 914 9 人の心が高ければ、それだけ音楽のねうち

九一七 がついていました。それによると、さいた
 九一九 る返事をしました。それと同時に、協会で
 九二二 をのせた飛行機は、それから毎日のように
 九三八 八本もでていて、それが、深いものになる
 九三〇 十本ありました。それは、七月の二十八
 九三二 すぐ手まねきして、それをよびとめて、「へ
 九三六 れども、どうしてそれを知っていますか
 九四〇 だかへんです。それは、やめたほうが
 九四四 立っていました。それからあと、「やま
 九四八 略。」「——」「それはちよつとわかり
 九五二 略。」「略。」「それがよさそうだね。
 九五四 石で作ったもの、それには石の矢じり、
 九五六 とまがく。みんなそれをおしとめる。一
 九六〇 の物ではないので、それを舞台のおくにな
 九六二 より、だまつたままそれをとりあげる。そ
 九六四 となつて、だまつてそれをとり、かばんに
 九六六 うとする。たかぎ、それをのぞきこむ。や
 九六八 んなつえをふつて、それに答えた。のだ先
 九七〇 。私は手をいれて、それをすくおうとする
 九七二 中流の水をくんで、それで茶をたててみる
 九七四 飲んでみると、もうそれはただの水であつ
 九七六 もあつたが、いまはそれもなくつて、大
 九七八 んで飲んでみると、それこそまぎれもない
 九八〇 きでる泉があつて、それでもう終りであつ
 九八二 で羽音がしました。それは、みつばちであ
 九八四 つきさしました。それにはさすがの大き
 九八六 こともできません。それより、自分のから
 九八八 思つてよくみると、それは白いちようちょ
 九九〇 略。」「——」「それまで、命を助けて
 九九二 しているのだらう。それにくらべて、自分

十〇一 わたしだしさの中に、それを失っている。し
 十〇三 した。「略。」「それはすきとおつた青
 十〇五 なりたっているか、それをさがしてみよう
 十〇七 佐吉の母であつた。それは、明治二十三年
 十〇九 なものがいりこみ、それに、貝のだす眞珠
 十一一 の核をこしらえて、それを、母貝の体内に
 十一三 とも四年はかかる。それが、くる年もくる
 十一五 にはげましあつた。それから、眞珠貝養殖
 十一七 なんでもみつけて、それに話しかけたり、
 十一九 といつてもよく、それをみていると、世
 十二一 略。」「ふたりは、それをあいつのように
 十二三 した。「略。」「それこそ、どくの『ふ
 十二五 はずじやないか。それが、死なないのだ
 十二七 した。「略。」「それだけはよしてくれ
 十二九 をつこんで、すぐそれを、口に持ってい
 十三一 て遊んでいるが、それには、大どくどう
 十三三 めいてしまう。それを思うと、ぼくは
 十三五 ぬいてしまふ。それはほくたちだ。三
 十三七 しみきつたま、それはおかあさまの愛
 十三九 をみつめました。それは「大学」といっ
 十四一 した。金次郎は、それを読むとうれしく
 十四三 は耳にもいれず、それを続けました。お
 十四五 とができました。そればかりではありま
 十四七 をして立ちます。それをみよう、父兄
 十四九 少年をながめて、それには答えないで、
 十五一 したことなど——それからそれへと、い
 十五三 など——それからそれへと、いろいろ考
 十五五 びあがりました。それは看護婦でした。
 十五七 看護婦にかわつてそれを飲ませたりしま
 十五九 たことなどを——それからそれへと長々
 十六一 どを——それからそれへと長々と話しか

十一〇一 とがありました。それは、ようだがわ
 十一〇三 そうとしました。それが、ときにはいか
 十一〇五 もありました。それも、だんだん小さ
 十一〇七 した。そうして、それを少年に渡しなが
 十一〇九 であつたのが、それほどの手がらだろ
 十一一一 枝をおつてきて、それをしずかにさした
 十一一三 るばかりでした。それからのちになつて
 十一一五 がわかりました。それは、「七重八重花
 十一一七 にかさがしては、それをひろつてポケッ
 十一一九 読んでいました。それをみた土人のひと
 十一二一 実がなつていた。それが、めきめきと大
 十一二三 てきた。文雄は、それがかきたかつた。
 十一二五 ちていた。文雄はそれが氣になつてしか
 十一二七 略。」「文雄は、それをとりのけるのを
 十一二九 す。わたしも早くそれを覚えたいと思ひ
 十三一 た日であります。それは一八八七年の三
 十三三 感じましたので、それが母だと思ひ思
 十三五 ました。だれかがそれをとらえました。
 十三七 るため、いいえ、それよりもなによりも
 十三九 もしろくなつて、それをまねようとしま
 十四一 かすだけでした。それからいく日かのあ
 十四三 じはじめました。それは、先生が與えて
 十四五 らをひろいあげ、それをつぎあわせよう
 十四七 どもでてくる。それが音楽や歌にあわ
 十四九 題をもちだした。それは、おにが一夜の
 十五一 げること、もしそれができなかったら
 十五三 はならない、もしそれができたら、毎年
 十五五 ることを知つた。それからというものは
 十五七 ちに湖となつた。それが十和田湖のおこ
 十五九 て枝をやしなひ、それからでた細い根が
 十六一 らきがあつても、それにあつみと廣さが
 十六三 だしてききました。それは、赤いおぼんの

十四 66 2 ものうづになり、それがだんだんに廣が
十四 66 7 なうづができて、それが、かなり早くま
十四 67 6 きなうづができ、それが、ちようどたつ
十四 67 11 ものがあります。それは、らい雨のとき
十四 69 10 もありませんが、それを日なたへ持ちだ
十四 70 7 てごらんなさい。それも、お湯が熱いほ
十四 72 1 へ向かつて流れ、それが、おいた水のあ
十四 73 1 が熱せられると、それに接した空氣がふ
十四 73 8 かぶさっており、それが、ちようどさけ
十四 73 11 うです。しかし、それも、前の温度のむ
十四 75 4 つ風というものがそれです。たとえば、
十四 76 3 われております。それは、海陸風とよば
十四 76 8 間の間におこると、それがいわゆる季節風
十四 80 4 から教えられて、それからいい傳えられ
十四 80 6 かもしれないせん。それは、なん回もなん
十四 83 7 流れだすところ、それをうれしそうに見
十四 84 12 らを受けとつて、それをくわしく觀察し
十四 85 11 の雪をとらえて、それをいろいろな角度
十四 86 2 花を見いだして、それをたんねんに写生
十四 89 7 じ題の作文でも、それをとりあつかう人
十四 90 9 馬車が來たので、それをさけるために、
十四 93 6 めの考えたことはそれであつた。女の子
十四 94 1 は、どんなにか、それで火をとしてみ
十四 95 8 かとさえ思つた。そればかりではない。
十四 95 8 ばかりではない。それがもえ続けている
十四 96 8 かべでこすつた。それがゆらゆらともえ
十四 98 1 にも大きな木で、それが美しくかざられ
十四 98 10 もえ続けていて、それが、高く、高く
十四 98 11 を見た。たしかにそれは星であつた。「へ
十五 21 10 中へなげこんで、それがコトコトと音を
十五 24 2 。だれでしょう。それは、十五六になる
十五 24 6 て來ました。いまそれをとめなければ、

十五315 やって来ました。それから、必死にと
 十五319 ゆだんをすれば、それにふきとばされ、
 十五337 ちのほめことば、それはいまここでいう
 十五345 いる。けれども、それをその場にいらない
 十五372 たものであるが、それに線を加えて、「
 十五374 末」とかいう字はそれである。また、そ
 十五375 れである。また、それまでに作られた文
 十五454 てしまったので、それまでのものの考え
 十五503 とになります。それはおいしいことです
 十五558 うなわけだが、それはそれとして、き
 十五558 けだが、それはそれとして、きょうは
 十五575 のずきな私は、それはおもしろいと、
 十五575 といひだした。それはおやすいご用だ
 十五641 とわらった私は、それを足先につっかけ
 十五651 私は、朝早くからそれをガラガラとひき
 十五664 ってください。それからいく年たつて
 十五746 うだけのことで、それによって兄が特権
 十五862 いうのだから。それを受けてはいけな
 十五888 いるし、だれもそれに立ち向かうもの
 十五914 です。」^{ふとった}「それは、いつもしごと
 十五917 だ。」^{幸福}「チルチル」それがおもしろいの。
 十五918 ないでしょう。それがこの世のすべて
 十五961 いたものだよ。それを、『ふとった幸
 十五965 うの人間には、それが見つけられない
 十五983 があるの。』^光「それを見かけることは
 十五988 、「略」。『光』それは、どうしても
 十五1046 の幸福』です。それは、ぼくたちのな
 十五1076 ですね。でも、それを妹にいつてはい
 十五1077 び』がいます。それは、毎日ぼくたち
 十五1109 うちにいと、それが見えないが、こ
 十五1121 かった。いつもそれをどこにしまつて
 十五1122 まつてあるの。それは、おとうさんが

十五11311 の愛「いいえ、それは同じことですよ
 十五11411 母の愛」でも、それは同じことですよ
 十五1152 ばならないか、それを、はつきりとさ
 十五1158 とりぎりです。それは、いつだって、
 十五1218 があふれてきた。それはなんともいえない
 それ(感)5 それ
 五914 「それ、このたけのこをごらん。」
 五922 そこで、ゆかいたをはがして、たたみの
 まん中にあなをあけてやったら、それ、このとお
 り、いせいいよのびるわ、のびるわ。
 五924 それ、たけのこにごはんつぶがついてい
 るだろう。
 十一6212 それ、ごらん。
 十五735 「それ、このとおりだ。」といって、
 日記をくりひろげ、
 それいじょう「其以上」(名)4 それ以上
 六1132 それ以上ふかく考えてみたことはなかった。
 八395 自分は、それ以上の幸福は願わない。
 十四6512 いくらかの高さまでは、まっすぐにあが
 りますが、それ以上は、けむりがゆらゆらして、
 十四1001 まっ晝間でも、それ以上に明かるくはな
 いと思われるくらいであった。
 それいぜん「其以前」(名)1 それ以前
 十五803 それ以前は、おたがいにも他の國々のこと
 はわからず、世をすごしてきたばかりでなく、
 それから(接)80 それから
 一222 「おててつないで」のうたをうたいま
 した。それから、このうたのゆうぎを、みんな
 がかかってにかんがえておどりました。
 一5810 「略。」といつて、おれいをいいまし
 た。それから、そろつてしろちゃんのうちへ
 いきました。

二47 「あたまで—足—あご—あさひ—
 あした—あそこ—」それから。
 二55 「たべる あめです。」「それから。」
 二87 「い」のつくことばをあつめました。
 それから、「う」のつくことばと、「え」のつ
 くことばをあつめました。
 二482 りんごを、高くさしあげたりにおいを
 かいだりします。それから、となりのへやへ
 いこうとして、
 二499 上にながてはうけ、うけては上になげ
 て、よろこびます。それから、じろうは、りんご
 をたべようとします。
 二6210 「しょう」それから ぶうちゃんは。」ぶた
 「ぶうぶう、ぶうぶう。」
 三316 かいだんは はじめに 十五だん あがつ
 て、それからまた 十五だん あがるようになって
 ています。
 三616 あのねえ、丘の 木の ところまでの
 ぼつてさ、それから さつさと かけおりて みず
 うみへいこうよ。
 三695 はじめにもりへいって、それから た
 きへでようね。
 三697 それから みんなは おもしろく あそびま
 した。
 三776 お日さまは、よその 國の 子どもがあ
 そべるように、光をあげにいくのです。それか
 ら、あさになつて、お日さまが あなたたちの
 ところへかえってくるのです。
 四122 川の 水で 生まれたものです。それか
 ら、みんなの手で そだてられ、長い長い でん
 せんをつたわって、
 五263 それから、はるこさんは、きつぷを改札の

女の人にわたしながら、

五29 ㊦ — よよし。それから、うれしかったというのとはどんなことかね。

五43 ㊦ 空色のあさがおです。それから、まっかなカーネーションです。

五54 ㊦ 空のまん中に、大きな星が光っていました。それから、あたりをみまわしましたが、

五82 ㊦ 夜は、はらまきをきちんとして、ねびえをふせぐこと、それから——

五88 ㊦ こうして右の手でだいてな、左の手でかかえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

五90 ㊦ このわしも小さいときは、オギヤア、オギヤアとないたのだよ。それからな、おかあさんのおちちをコップコップといただいて、

六55 ㊦ みちこも感心しました。それから、三人はわかれて、それぞれ家へ帰りました。

六56 ㊦ かべ新聞第一号は、一組でつくることになりました。それから、二組、三組と、じゅんじゅんにへんしゅうをすることにきめました。

六60 ㊦ それから、まえにならったのを思いだして書いてみました。

六119 ㊦ ひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。それから、よこ骨。

七10 ㊦ かしの木は、〈略〉、しめっぽくなった葉をふるわせ、それから、ねむりにおちていった。

七39 ㊦ おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人に渡しました。それから、つぎからつぎへ、〈略〉、送ってくれました。

七45 ㊦ そういつてから、老人にぼうしを返した。それから、二三どのおし問答が、ふたりのあいだにとりかわされた。

七72 ㊦ 旅人「そうして、左の足が一本短くて—

— それから——」

七78 ㊦ 旅人「それから、つけた荷がありましたね。」

七80 ㊦ そのとき、この人にであつたのです。裁判官「それから。」

七83 ㊦ なるほど。それから、そのらくだがかた目だということは、どうしてわかったのかね。

八52 ㊦ 家の人はふかいため息をつきました。それから、かつてあるにわとりに氣をつけました。

八67 ㊦ 人にふまれないように、それからねこに氣をつけてね。

八75 ㊦ はなをあひるの子のそばにつきつけて齒をむいた。それからピシヤ、ピシヤと、どこかへいつてしまった。

八76 ㊦ なん時間もたつてから、ようやくあたりをみまわし、それから、できるだけ早くぬま地をにげていった。

八81 ㊦ それから、うちのおばあさんにきいてごらん。

九11 ㊦ つぎには、雨の降るところであつた。それから、水の中にドボンととびこんだときの音もあらわした。

九33 ㊦ いなもいます。それから、らいぎよもいます。

九68 ㊦ やまねこは、なるほどというようにうなずいて、それから、いかにも氣どつたようすで、しゅすの着物のえりを開いて、

九71 ㊦ とうとう決心したらしく、いいだしました。「それから、はがきのもんくですが、

九85 ㊦ みがかれていないから、ただのわり石のようにみえる物もあります。それから土器。

九86 ㊦ かごをこのリヤカーにつみなさい。それ

から、道具を集めて、

九110 ㊦ 雪けむりがきえて、先生のお顔がうかぶ。それから、ぼくたちは、登っていつてはすべり、

九140 ㊦ ちようちよは、うれしそうに羽をととのえました。それから、まっ白な羽をひろげたかと思

うと、ひらりひらりと舞いあがりました。

九144 ㊦ ああ、白いちようちよにあうことができた。それから、いいゆめをみることもできた。

十13 ㊦ それから、三人の少女に、歌を歌ってほし

いと頼みました。

十38 ㊦ それから、わか者は、眞珠貝の研究に全力をつくした。

十66 ㊦ かけるとき、太郎かじゃ、次郎かじゃというふたりの下男に、「〈略〉。」といいつけ、それから、きびしい声でいいました。

十72 ㊦ まあ、まかせておけ。それから、おまえは、だんながだいじにしているあの湯飲み茶碗を、庭石にたたきつけろ。

十49 ㊦ 北海道へいつて、じゃがいもをつくりま

す。それから、えんばくもつくりま

す。それから、えんばくもつくりま

す。それから、えんばくもつくりま

す。それから、えんばくもつくりま

ん、それからおうさん、

十三457 あいてのいうことを聞いて、それから三郎くんのことばをいい、

十四2210 それから、タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、外国語であつたとお話しになったので、

十四2312 チフス、トラホーム、ガーゼ、スキーはドイツ語。それから、タバコ、カルタはポルトガル語、

十四2510 ことばのおたんじょう」などというお話が、つくれそうな気がしてきた。それから、外国のことばがはいってきたのは、品物からだけではなく、

十四272 バックとかいうことばも、西洋の油絵がはいってきたときに傳つてきたのだということが想像される。それから、ふと、〈略〉大陸からは、どんなことばがはいってきたのだろうかと思つた。

十四284 たくさん出てくるよ。それから、外來語辞典というものもあるから、それを調べると、なおいっそうよくわかるだろう。

十四5811 いまのお話の養分だつて、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。それから、空から降る雨、あれだつて水ですよ。

十五352 色のちがつた貝や、じゅずだまを結びつけることも行われた。それから、ぼうきや、石や、貝がらなどに、はものなどでしるしをつけてしめすことも行われた。

十五414 そのフェニキア文字がギリシアに傳つてギリシア文字となり、それから、そのギリシア文字がローマに移つて、現在のようになつた。十五714 このすがたをおじさんがごらんになつた「——」といつて、おばさんは声をくもらせた。

それから、「略。」とおつしやつた。

十五8811 それから、あの、なまにはいらないうで、せなかをむけているのはだれです。

十五9210 来いというのに聞えないのかい。それからさとうも、パンも、だれが行けといつた。

十五933 なにかおまえについているな。それから、チロー、おまえもすぐ来い。

十五1016 ぼくは、あなたのおうちの幸福のかしらですよ。それから、これはみんな、『おうちにいる幸福』ですよ。

十五1037 ええ、そうですとも。それから、夕がたになると、これが『日ぐれの幸福』で、

十五10311 『星の出を見ることの幸福』が、〈略〉、金びかの着物を着てついでいます。それからお天氣が変わると、これが、『雨の幸福』で、

十五10312 それから、『冬の日の幸福』は、ここへきた手のために、きれいなむらさき色のマントを開きます。

十五1042 それから、ぼくは、まだなまのうちにでいっとういいのをしようかしませんでした。

十五1047 それから、これは、いや、まったくおおせいすぎますね。

十五1081 それから、〈略〉、つま先で立つて、やつと見えるくらいいところにいる人、だれなの。

十五1087 それから、あすこに、〈略〉、ボールをかぶつたままで、ちつとも出て来ないのは。

十五1091 母の愛「ルルルや、それから、ミチルや。

十五1135 でも、ずっときれいだなあ。それから、これもおかあさんの手だ。

それこそ（副）5 それこそ

六1412 「こら、まで。」という、それこそかみな

りのような声がひびきました。

十439 幸吉は、それこそ氣ちがいのようになって、死貝をどんどんみていつた。

十三362 ふえには大小があるから、はとがむれになつてとんで来ると、ふえの音がおのずから和音をふくみ、それこそ天上の音楽である。

十四971 やいた鳥が——それこそほんとうのまるやきの鳥が、〈略〉、テーブルの一方におかれてあつた。

十五263 わしが、〈略〉とちゆうで、高い木の上へでもとまろうものなら、それこそたいへんです。

それそれ（感）1 それそれ

十五925 それそれ、たけのこにごはんのつぶが——こりやあ、たけのこはんだよ。

それそれ「其其」（名）18 それぞれ

四196 先生がこうおつしやつたので、みんなはそれぞれあいての人をきめてから、文を書きました。

四997 うらしまは、おかねを子どもたちの手に、それぞれわたしてやります。

五184 北の方へいく友だちと、〈略〉、東の方へいく友だちを、それぞれひとかたまりにわけて

六67 いろいろな道具、たくさん時計、それらはかたちも大きさもそれぞれちがつてはいるが、

六555 三人はわかれて、それぞれ家へ帰りました。

九85 ことばの組みあわせも、それぞれちがつた新しい思いをおこさせます。

九886 そのほか数人が、それぞれにわかれてふたりをひきとめている。

十6310 おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わかい女のめんと、それぞれの人物によつて、それぞれのめんがあります。

十63 10 それぞれのめんがあります。
 十二34 6 けれども、物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、
 十二45 1 右手を受け持つ人、左手だけの人、足だけのひと、それぞれ手わけしているんだが、
 十二92 9 みんなが「遠足」という同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれちがってくるのも、
 十二92 11 しかし、たまたまこまれているなみはそれぞれちがっても、
 十二95 10 読み手によって、三人三よう、それぞれちがったことを心の中に思いうかべる。
 十三30 5 「略略。」「いまのは、あめ屋さんだ。」と、それぞれ子どもたちにはすぐわかる。
 十三45 1 そこで、三郎くんの声と動きだけで、四人とそれぞれ話をしているようすを、見せなくてはなりません。
 十四26 6 コレらは、オランダ医学がはいってきたときに、また、チフスやトラホームは、ドイツ医学がはいってきたときにそれぞれ傳わったことばであらう。
 十四84 3 一ひら一ひらの雪が、それぞれちがったけっしょうをしていること、
 それだから (接) 1 それだから
 十四35 3 大うちゅうから見たら、たしかに、人間は、バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。しかし、それだからといって、すこしもかなしむことはありません。
 それだけに 「其丈」(接) 1 それだけに
 十三33 9 夜のホートンはまっ暗なので、はなをつままれてもわからないほどである。それだけに、空が美しい。
 それっ (感) 1 それっ

七39 7 7 「それっ。」と、送ってくれました。
 それで (接) 50 それで
 一63 4 11 いえ、あれはたろうさんたちのおくにですよ。それで あんなにおおきいのです。
 三58 5 丘のちょうど なかほどにあるのです。それで、おればみずうみへでられますし、
 三74 5 「略略。」と、おかあさんがおっしゃいました。それで、みんなはいすをおりて、
 三105 6 どうしてもあきらめない人が、なんんかのこりしました。それで、かぐやひめは、その人たちにとてもむずかしいことをいって、
 三106 4 「略略。」とお思いになりました。それで、おじいさんに、「略略。」とおっしゃいました。
 三111 5 みかどがこのことをおききになって、
 「略略。」それで、たくさんのけらいにいつけて、まもってくださることにしました。
 三117 9 ふしのくすりをやいたけむりが、山の上からいつまでもいつまでもたちのぼっていました。それで、この山の名を、「ふじの山」というようになりました。
 四30 7 11 にしださんは、きょうもびょうきで休んでいます。それで、みんなで なにか おみまいをしようではありませんか。
 五23 4 11 帰りの電車はともこんでいたんです。それで、どこかのおばあさんのよこのところに、もたれかかっていると、
 五24 4 11 そう、それはよかったね。それでうれしかったの。
 五25 3 11 「それでうれしかったのね。」
 五25 7 11 それからは、みんなにこにこして、友だちのようになくなってきました。ほんとうは、

それでうれしかったんです。
 五27 4 11 いうところがなかったものだから、それであの人にいったのよ。
 五31 10 11 「略略。」といって、ぼくにくれました。それで、ほんとうにうれしんですよ。
 五90 5 11 わしのおかあさんはな、ずっとまえに、さどが島においでなされたことがあった。それでな、さどが島をうたうときには、いつでもおじぎをするのだよ。
 五91 9 11 「水をください。」というのだよ。それで、手おけの水をかけてやると、
 五105 4 11 つぎの日もやってきました。それで、ひわは、すっかりそのまねができるようになりました。
 六93 2 11 そこへ年をとったかたがあらわれて、私に海のごてんへいくようにと教えてくださいました。それで、いまここへやってきました。
 六110 6 「ダンダ」といってみると、いかにも弟のいいかたそっくりになった。それでぼくは、思わず声をたててわらってしまった。
 七20 9 11 いまちようど、こんな白い花をつけています。」先生「それで知っているんだね。」
 七49 4 11 それで、内野の人はいっしんになったので、かえって、ぼくたちのほうが勝ってしまった。
 七80 6 11 ひと休みしているうちに、つい、ねむってしまいました。」裁判官「それで、どうした。」
 七83 1 11 それなのに人の足あとがみえません。それで、このらくだはどこからにげてきたのではないかと、思ったのです。
 七84 2 11 草をくいとったあとをみますと、かみきれないで、のこっている葉がありました。それで、菌が二三本ぬけているにちがいないと、考え
 八18 5 11 土の中は、たとえ一二センチ歩くにも、ト

ンネルをほっていかなくてはなりません。それで
たいそうほねがおれて、

八〇六 それで、あひるの子は、すみっこにすわっ
てばかりいた。

九七五 みました。それでした。

九七九 たびたけもの骨や、角などを、ここへ
すてました。それで、ここをほると、そういうも
のがみつかることがあるのです。

九八〇 ぼくがあんまりじまん話をするもんだか
ら——「たかぎ」あ、そうそう。それで、ぼくも
負けまいと思っただ。

九八六 中ほどでは、いい味はたえなかった。それ
で、茶人は、泉はどうしても支流のほうにはなく
て、遠い上流にあるのだとさとした。

九八七 なんだか氣がすすみません。それで、その
まま手足をちぢめて、じっとすわっていました。

九八八 佐吉のもえるような研究熱は、どうするこ
ともできなかつた。それで、父は、「略」、佐吉を
よその大工の家にあずけてしまった。

九八九 次郎かじやのほうで、太郎かじやよりも、
ずっとおくびよう者でした。それで、いよいよ、
おしいれをあけるときになると、「略」と、ふ
るえ声でいいながら、

九九〇 そうです。それでぼくがきたのですが、
どこがわるいのでしょうか。

九九一 わたしは「略」すっかりじょうぶに
なつたよ。それで、おかあさんはどうしているの。
十二二八 立ちはじめには、物を持たせると立つこ
とができると、だれかがいったことを「略」。そ
れで、わたしはおべんとうの包みをこしらえて、

十二五八 そういう人たちのなくなるにつれて、
順々に消えていってしまうものもある。それで、

おじいさんやおばあさんからきいた話を思いだし
て、書きのこしておくということは、

十二六〇 さすがの太陽も、まねかれるままに空の
中ほどまでもどってきた。それで、のこりの田植
えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。

十三二四 両がわの土べいの上から、えんじゅや、
「略」の枝などが、ずつとのびだしている。それ
で、ホートンは一本のトンネルのようになって、

十三四二 帰ったばかりだから、お客さんさ……
うん、うん。それで今晩来るんだらう。

十三五五 おさな子はおとなの父だ。それで、わた
しは望ましい、わたしの日々が、自然をしたらう心
で、一日一日と、むすばれていくように。

十三五七 その氣持を、だれかに話してみたくてた
まらなくなりました。それで、すぐに、おとなり
のおじいさんのところへ行ききました。

十四〇三 「略」とおっしゃった。それで、み
んなは急いでそうじをすませた。

十四二六 私は、「略」と、ふしぎになつてきた。
それで、私は、「略」とおたずねした。

十四二八 大陸からは、どんなことばがはいってき
たのだらうかと思つた。それで、先生にそのこと
をおたずねすると、

十四五五 ひさしぶりにごちそうをたべて、たい
へんゆかいです。それで、よきように、「略」
という話しあいをやつてみたら、

十四五九 畑では空氣がのぼり、森ではくだつてい
ます。それで、畑の上からとんできて、森の上へ
かかると、飛行機は、しぜんと下の方へおしおろ
されるかたむきがあります。

十五三六 これは、記おくのためにも必要な方法で
ある。それで大昔には、なわを結んで、その結び

かたや、「略」によつて、いろいろな考えを表わ
した。

十五三八 中國の發音にもついた漢字の読みかた
を「音」といい、日本のことばによる読みかたを
訓という。それで、たいていの漢字には、この音
と訓のふたとおりの性質のちがつた読みかたがあ
る。

十五七四 四海の民すべて兄弟姉妹である。それで、
世界平和、人間平等という理念が、ここからわい
てくるのだ——

それでは（接）一六 それでは
一六〇 それでは、みんな、あまの川で だいや
もんどをひろつて きたのですね。

二三〇 それでは、わたしが かぞえて みよう。
四一四 おどりも もう たくさんです。」おとひ
め「それでは、なにかかわつたことをして、お
なぐさめ いたしまししょう。」

四一七 よく わかりました。 それでは、 おいと
まいたします。

四三二 天人の まいを まって、 みせて いただ
けませんか。」天人「それでは、 お礼に まいま
ししょう。

六九四 ねじはこれをきいて、とびあがるほどう
れしかった。「それでは、自分のようなものでも、
役にたつことがあるのかしら。

六九五 それでは、たいをちよつとここへよんで
きてくれないか。

七四五 それでは、お礼にわたしのいちばんとく
いな曲を、一曲ひきましよう。

八六八 それでは、ごかつてに。
九七二 やつとあきらめていました。「それで
は、もんくはいままでのとおりにしまししょう。

九八三(会) それがよくさうだね。それではまず、一メートルぐらいのはばで、東西に四五十メートルほってみることにしよう。

一三445 ところが、このしばいは、舞台に出て来る人が、ただひとりです。それでは、これはしばいではないかという、そうではなく、

一四1910(会) 「それではなんだろう。」

一四232(会) それでは、これらのことは、もとはどこの國のことばだったのだろう。

一四3310 このぎんが系というのは、〈略〉。それでは、このぎんが系全体が、星の世界の全部かという、

一四523(会) 花は、美しいわかい女でした。「それでは、座長の根さんのご指名で、私から申します。それでも (接) 9 それでも

五617(会) それでも、まいにちあつるのをぼしたのは、だれかしら。

七351 さぶろうは、私のからだにすがりついていました。それでも、汽車がゆれるたびに、前後からおされて、

八74 ぎょうぎのわるいまねをすると、「〈略〉。」としかつたり、それでもきかなければ、指で追ったりしました。

八506 そんなまずしいなりをしていても、それでも、自分をよくむかえてくれる人があつたら、

九223 つばめをのせた飛行機は、それから毎日のように、アルプスをこえてヴェニスへとんでいきました。それでも運びきれなくて、

九641 やまねこがすこし心配そうに、それでもむりにいばつていいいますと、

一七1(会) 『トップ、バック一本。』それでもきこえなければ、また、どなる。

一二8210 りっぱな体格は、小さな清水選手のおよぶところではありません。それでも、この清水選手の試合を見物しよう、

一五491 職人のちんぎんや材料のお金をはらうために、家の道具を賣らなければならなかった。それでも、やりかけたこのしごとはやめなかった。

それどころか「其処」(接) 3 それどころか

八68 頭の上にも乗り、口さきのめしつぶもつつくようになりました。それどころか、自分から

指さきやくちびるへとびあがり、とびついて、八3510 一万光年の星もあります。それどころか、

十1216 金次郎は、年のわりからだが大きかったし、働きつけているので、役にたたないことはありませんでした。それどころか、〈略〉、すこしも休まず働くので、

それとなく「其無」(副) 1 それとなく

一五554 ホランド博士は、戦争中で費用が思うようにつかえないことについてくわしく話し、それとなく論文刊行のむずかしいことをおわせた。

それとも (接) 4 それとも

七78(会) くわしくごんじではありませんか。」

乙「それとも、だれかにおきになったのですか。」

一四886 足がつめたくなつて、立ちどまったためであろうか。それとも、心の中で考えごとをしていて、思わず方向がちがったものであろうか。

一五274 女の子は、あきらめたのか、おそろしいのか、それともおどろいて氣でも失ったのか、

一五11012(会) きぬなの、銀なの、それとも眞珠なの。それなのに (接) 3 それなのに

七8211(会) 私がさばくを旅していますと、砂の上に

らくだの足あとがつづいていました。それなのに人の足あとがみえません。

八827(会) ものごとを教えてもらえる人たちのなまじりをしたんだもの。それなのに、おまえさんは口かずが多すぎる。

一三3910 よんでわかるように、ケラーは、めくらで、そのうえつんぽでした。それなのに、こんなりっぱな文章が書けるということ、

それなら (接) 6 それなら

一三469(会) それなら、海の水をあびて、ねているがよい。

七845(会) それなら、荷物をつけていることが、どうしてわかつたのでしょうか。

八804(会) それなら、かしこいものたちがものをいっているときに、自分の考えなどはいえないのだよ。

九574(会) 「それなら、はがきをみたらう。」

一〇697(会) それなら、もう、ふたりとも、どつきにあつて死んでいるはずじゃないか。

一五599(会) めずらしい日本人が舞いこんで来たものだ。それなら裏の写真やら、当時の日記やら、

きみに見せなければならぬものがたくさんある。それなり (副) 1 それなり

八121 あらゆる手あてをつくしましたが、それなり、まもなく息をひきとりました。

それに (接) 21 それに

一四459(会) とりのこされるかと思つてさ。それに、きけんせんばんだよ。

一六114 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹二本と、それに、たこ糸やのりなどです。

七194(会) このまえたときは、風が強かつたから、ちようちよがでなかつたんですね。」女の子「そ

れに寒かったし。」

七359 ㊦ おばさんのうちへは、もう二どもいったことがあるのですもの。それに、乗りかえもないし、二時間ほどでつくのですから。

七812 ㊦ それに、もっとあやしいことは、この人は、私どものらくだのことについて、それはよく知っております。

八611 ㊦ 親あひるは、ひながでてくるまえに、もうつかれきっていた。それに、たずねてくれるものも少ないし、

八693 ㊦ あれは美しくはありませんが、たちはほんとうにいいんです。それに、ほかのものと同じようにおよぐし、

八814 ㊦ 水の上をおよぐのは、いい氣持ですからね。それに、水の中へもぐってそこへいくと、それはさっぱりしますよ。

十673 ㊦ こわいものはかえってみたくになります。それに、だんなは、ちよいちよいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、十二478 ㊦ でも、生きた人間のほうがうまくやれるし、それに便利でしょう。

十二483 ㊦ 空をとんだり、すがたを消したり。それに、人間みたいに不平やわがままをいわないからね。

十三417 ㊦ ぼくの学用品を、ぼくひとりですかうのは、ぜいたくというもんだ。それに、うちはやけなかったから、本だつてたくさんある。

十三548 ㊦ おじさんは、絵かきではありませんが、絵がすきで、それに、わかいころ、世界をまわつて来た人です。

十四122 ㊦ もしこわれたら、そちらでわけなくかわりをお見つけになれるでしょう。それに、ラン

プは、かさなしでもりっぱに役にたちます。

十四132 ㊦ 中に小さなめもりのようなものがついていて、どこまでコーヒーを入れていいのかわかりになります。それに、小さなさがありま

十五207 ㊦ 両親と子どもふたり、〈略〉それに、この子どもたちをせわする、ひとりの女の家庭教師がついていました。

十五265 ㊦ 早く谷底の地面へおりてしまわなければならない。それに、もしまたとちゅうで、このわし

十五844 ㊦ ミチル「なんてきれいなおかしでしょう。」いぬ「それに、あんなに肉がある。

十五9810 ㊦ あの子たちが青い鳥を持っていないことは、わかっているのだからねえ。それにあの子たちは、大急ぎに急いでいる。

十五11011 ㊦ チルチル「それに、このきれいな着物には、まあ、なんでこしらえたの。

十五11212 ㊦ おかあさんたちの愛は、喜びの中でも、いちばん美しい喜びなんです。それに、おかあさんたちが悲しそうな顔をしているときでも、

それは「其」(副)8 それは七813 ㊦ この人は、私どものらくだのことについて、それはよく知っております。

八815 ㊦ それに、水の中へもぐってそこへいくと、それはさっぱりしますよ。

八8210 ㊦ いやなことをいうようだが、それは、いい友だちはみんなそうしたものだよ。

十五1101 ㊦ 私、きょう、ここにおいて、それはさびしかったよ。

十五1178 ㊦ 私たちは、それは幸福ですけど、自分たち以上のものは、見えないのです。

十五11710 ㊦ 私は、それは長いこと、あなたを求

ていた『正義であることの喜び』でござい

十五11712 ㊦ 私たちは、それは幸福なんですけれど、十五1192 ㊦ あなたは、私の子どもたちに、それは

ごしんせつでした。それはそれは「其其」(副)2 それはそれは三1157 ㊦ かぐやひめのすがたは、それはそれはうつくしくかがやきました。

九695 ㊦ それはそれはいいとして、だまっ

しました。それら「其等」(代名)1 それら六67 ㊦ いろいろな道具、たくさん時計、それらはかたちも大きさもそれぞれが

つてはいるが、そ・れる「逸」(下)4 それる『レ・レル』四492 ㊦ かっちゃん

は、十五ばんめからわきにそれたかと思

うと、石ころかなにかのようにおちていきました。

八569 ㊦ かもめが目について、それに氣をとられて、わきをしたあたりが横に

四782 ㊦ もとのほうから割ろうとすると、〈略〉、きつと、とちゅうから横の方へそれ

てしまつて、十四794 ㊦ 木のほうは、これと反対に、もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、ま

つすぐに割れて、けつしてそれることがあり

ません。そろい「揃」(名)2 そろい四1336 ㊦ 黒いころもの そろいで まえ

ば、月四1338 ㊦ 白いころもの そろいで まえ

ば、月十五夜、まんまるい。そろ・う「揃」(五)20 そろ

う『イー・ツ』↓さきそろ・う・せいぞろいする・で

そろ・う一5810 ㊦ それから、そろってしろちゃん

いきました。

二28 ㊦ 十二ひきのぶたが、そろって川をわたりました。

二63 ㊦ みんな、そろいましたね。

二63 ㊦ そろいました。

三33 ㊦ はきものがきちんとそろって、わたくしたちのかえるのをまっています。

四58 ㊦ 二十五わ、二十六わ、二十七わ——と、だんだんそろいました。

四58 ㊦ 二十九わのおがそろいました。

四133 ㊦ 月の都の天人たちは、みんなそろってまいじょうず。

五60 ㊦ あの三つの花が、そろってしんこきゅうしているようにみえますね。

五85 ㊦ おお、みんなそろってきたな。

七65 ㊦ みんなそろって、うえていく。

七75 ㊦ ふたりそろって、遠くをみまわす。

八52 ㊦ 秋のはじめのある晩、一家そろって、ぎんざの大通りを歩いていましたら、

八62 ㊦ さあ、みんなそろったろうね。

八74 ㊦ がんのむれが、そろってあしのあいだからとびたつた。

九105 ㊦ みんなそろったね。

十一82 ㊦ 乗り組んでいる者が、みんなそろって、一つの生きものみたいに進んでいく。

十一34 ㊦ さなえ運ぶ子、うし追うおきな、家内そろって田植えする。

十二61 ㊦ そうしてよく日いつてみると、頼んだ品物がちゃんとそろってならんでいた。

十二115 ㊦ みんなの歩調がそろったときに、

そろえる [揃] (下) 9 そろえる 《一エール》

二95 ㊦ せっかくあつめたことばが、(略)。な

んとかして、そろえることはできませんか。

三27 ㊦ かいをそろえてひとかき水をかくと、

ふねはななつの大なみをのりきつて、

三62 ㊦ みんなも声をそろえてへんじをしました。

四41 ㊦ ものさしできちんとそろえたようになつてとんだり、

七99 ㊦ 母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭をそろえて、なかよくにんじんをたべていました。

十66 ㊦ 太郎かじやと次郎かじやは、声をそろえて返事をしました。

十一112 ㊦ いい整調が、りっぱに日本じゅうの足なみをそろえてくれるにちがいないよ。

十四94 ㊦ 女の子は、両足を——そのあわれな、小さな、赤く、青くなつた両足をそろえて、

十五62 ㊦ ふみ石の上にそろえてある大小二つのくつをちらと見た私は、

そろそろ (副) 6 そろそろ

六26 ㊦ さ、そろそろ夕ごはんにしようか。

八24 ㊦ このわかいあぶらぜみは、きゅうに元氣になつて、そろそろと歩きだしました。

九16 ㊦ やがて、九月のなかばをすぎると、つばめは、そろそろ日本をさつていき、

十四93 ㊦ 美しく火のともつた家々の前を、そろそろとかなしげに通つて行きながら、

十五21 ㊦ ふたりの子どもは(略)草花をつみながら、がけの上をそろそろと歩いていました。

十五105 ㊦ 天使のようなすがたをした者が、きらきら光る着物を着て、そろそろとやつて來ます。

そろそろ (副) 1 そろそろ

十三36 ㊦ 大通りを、ぶたがぞろぞろと歩いて行く。

そろばん [算盤] (名) 2 そろばん

四76 ㊦ よ——よみ書き そろばん。

五28 ㊦ しんきちくんのおとうさんは、店でそろばんをはじいていました。

そんけい・する [尊敬] (サ変) 2 そんけいする

そん敬する 《—シ》

十46 ㊦ そののち、幸吉は、日ごろそんけいしていたエジソンのもとをたずねて、

十五54 ㊦ そん敬していたあの有名な「ちようるいずふ」の著者ダブリュー・ジェー・ホランド博士、

ぞんじ ㇿぞんじ

ぞんずる [存] (サ変) 5 ぞんずる 《—ジ》

四60 ㊦ 「ぞんじません。」

六94 ㊦ つりばりをとつていったものはないか。」

魚「ぞんじません。」魚「とりません。」

六95 ㊦ 魚「ちつともぞんじません。」

七43 ㊦ どのどなたかはぞんじませんが、

七43 ㊦ ですぎたことかもしれませんが、このかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。

そんどう [村道] (名) 1 村道

十一38 ㊦ 村道に立つ大のほり、ゆききの人もえ顔して、その足どりもいそいそと。

そんな (形状) 63 そんな

一54 ㊦ そんなときには、はなればしにあるがっこうにはいつて、べんきょうしてくるので。

二41 ㊦ これこれ、たろう。そんなきたない

ことばをつかうものではないよ。

四46 ㊦ おとといは、そんな氣もちだったけれど、きょうはちがうんだよ。

四97 ㊦ かめをころがして いるのです。」うら

しま「そんなことをしてはいけません。」

五116 図 そんな心配はいらない。
 六228 図 きみたち、どこへいくの。」 ハーゼニカのきりぎりす
 「そんな大きな物を持ってさ。」
 六487 図 どこかでだれかがめくってる、大きなきれいなページ、生きた絵本のページ。ふと、そんなこと思わせる、あのまっさらな海の色。
 六494 図 いつもでてる小人たち。ふと、そんなこと思わせる、あのまっさらな波の音。
 六695 かべ新聞の大きさは、〈略〉。そんなに大きくはありませんが、
 六761 図 なんだい、ごろくんは。きゆうにそんなことをきいたりして。
 六818 図 そんなこと、いやだよ。
 六823 図 そんなにつりがしたいのか。
 六110 図 新しいことがあたまにうかんだので、もうそんなことはどうでもよくなってしまった。
 七82 図 かしの木は、きょうもそんなことを考えた。
 七144 図 「そんなに、手をやかせるな。」
 七183 図 そんなに実をとっちゃいけない。
 七263 図 兄「なまいきいうな、はるお。」母「これ、そんなこと。」
 七301 図 母「どうしたんです。そんな大きな声をだしたりして。」
 七345 図 そんなにおしたって、だめですよ。
 七722 図 うまよ、そんな大きななりをして、子どものように、からだまであらってもらって
 七787 図 甲「え、でも、そんなにくわしくござんじではありませんか。」
 七795 図 さあ、けいさつしよへ、いっしょにいってもらおう。」旅人「そんな。」
 八506 図 そんなまずしいなりをしていても、それでも、自分をよくむかえてくれる人があったら、

八644 図 どれ、たまごをみせてごらん。はあ、そうだ、そんなものはほっておいて、
 八811 図 おまえさんは、することがないから、そんなことを考えるのだよ。
 八813 図 たまごを生みなさい。そうすれば、そんなことは考えなくて済もうよ。
 九403 図 そんな高いところ、あぶないから、早くおいておいで。
 九653 図 だめだい、そんなこと。
 九919 図 「もういいじゃないか、そんな話——たかぎくん、いこうよ。」
 九148 図 「〈略〉。」そんなことをくもは思いました。
 十131 図 わたしは、そんなにこわいものではないませんよ。
 十302 図 もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、どうしてそんなことになったか、
 十6612 図 そんなおそろしいどくで、死ぬようなことになつてはつまらないから、
 十724 図 このうえそんならんぼうをしては、いっそうしかられるじゃないか。
 十一279 図 その十二文さえありませんでした。そんなわずかな金がないというとはいえません。
 十一531 図 そんなにぶらさがっちゃ、電車は動けませんよ。
 十一536 図 電車もなみだをこぼしています。そんなにおさないでください。
 十一6512 図 そんなに年よりではないのですが、外国から帰ってきたのです。
 十二162 図 重みのかかった枝のつけね、ふわふわした軽い葉、そんなところをはつきりつかまえたものだと思つて、しきりに木炭を動かしていた。
 十二196 図 あなただつてその実をそんなに美しく

なさるには、ご苦心があたりだつたでしょうね。
 十二299 図 まあ、そう。でも、いつそんなことを覚えたんでしょう。
 十二341 図 もちろん、ことばをつかっていることや、そんなものがこの世にあることさえ知らず、
 十二4410 図 へえ、そんな大きなものを、どうして動かすんでしょう。
 十二8010 図 ひとみの中には、「なぜ、そんなことをきくのか。」という色があらわれていました。
 十二924 図 りすをみつめて追いかけたこと、〈略〉——そんなことがふくまれている。
 十二9410 図 すすきの野原を心にかきが、自分もそんなところについて遊んでみたいと思う。
 十三166 図 はく害のため、考えをかえてしまったのかというと、そんなことはありませんでした。
 十三412 図 うん、うん……そんなこと……かまわないよ。
 十三414 図 いっしょにつかえはいいよ……うん、気のどく——そんな、だつて、いまだこの家でも二けんぶんも、三けんぶんもの人が、寝とまりしているんだよ。
 十三426 図 そう、二つあるのならもうよ……うん……へえ……そんなにしんせつだったの。
 十三566 図 そんなにちがうのですか、おじさん。
 十三618 図 きつと先生も、そんなお氣持で、この絵はがきを送つてくださったんだろう。
 十四217 図 先生は、そんなことにはおかまいなしに、どんなお続けになった。
 十四247 図 先生、どうして、そんなにたくさんの方のことばが、日本語になったのでしょうか。
 十四373 図 いま、日々の生活にもつらい思いをしています、そんなことへこたれてはいけません。

十四536 ㊦ どうしてそのめしべの根もとがふくれて、そんな大きな実になったかということは、十四604 ㊦ しかし、ぼくは、そんなよくのふかい身がつてなことはないませんよ。

十四939 ひもじいので、そんなことを思った。

十五267 このわしが大きなくばしで女の子の頭でもつつけば、大けがをするか、殺される心配がある。そんなことのないうちに、

十五567 ㊦ その際算出した高さは、実測の結果とわずか十フィートしかがわなかった。そんなわけ、私と日本とはふかい関係があるのだが、

十五907 ㊦ そうそう、思い出した。だれだか、いつかそんな話をしていたつけ。

十五9910 ㊦ ここにいる子をだれも知らないなんて、そんなこともあるのですか。

十五1112 ㊦ ぼく、おかあさんがそんなお金持だとは知らなかった。

そんなら (接) 2 そんなら

九682 ㊦ そんなら、こういいわたしたらいいでしょう。

十一247 ㊦ 金次郎は、自分の考えをくり返し話して、母親にすすめました。「そんなら、今夜いて、返してもらってきましょう。」

そんなら ㊦ おもうぞんぶん

た

た (他) (名) 4 他

十三113 一つのことと他のこととの間に、すこしのつながりもなく、

十三114 原因と結果との関係もないのに、一つのこととは他のことの原因である、信ずるのである。

十五484 この赤絵製作の方法が他にもれないように、保護されていた。

十五804 それ以前は、おたがい他の國々のことはわからず、世をすごしてきたばかりでなく、

た (田) (名) 13 田 ㊦ あおた・いなだ・みずた

八606 田や野原のまわりには、大きな森があり、森の中には深いみずうみがあった。

八765 田や野原をこえて、どんどん走っていった。

八981 どの田も、たんざくがたにでそろってにぎやかです。

十二22 田をならしている農夫。

十一1910 そのうえ、さかわ川の大水で、田や畑をみんな流されたりしましたので、

十一283 さかわ川がまたあふれて、のこっていたわずかの田や畑も、流されてしまいました。

十一294 金次郎は、(略) いねのなえをひろって、大水でいたんだ田の水たまりに植えてみました。

十一361 ㊦ くわをかついで田をみまわれば、日はまた照って水たつぷりと、

十一601 その近道というのは、田のあぜ道で、

十一611 さいわい近くの田で働いていた村の人たちに助けられて、

十二579 昔、神山のおくにおにが住んでいて、毎年村にあらわれては、田や畑を荒らすので、

十二602 長者は、なんと思つたか、なん千アールの田をきょう一日で植えてしまえといいつけた。

十二613 きょう植えたなん千アールのあの美しい田さえなく、

た (助動) 575 タ た (タ・ダ・タラ・タロ) ㊦

おおわしにのつたはなし。がいこくからきたこと

ば・しまった・たいした・ちよつとした・にげたらくだ・ふとつたこうふく・ふとつたこうふくさん・ふとつたこうふくたち・ふとつたこうふくども・よした

一98 ㊦ たま。「はいった。」(略)。「しろ

一101 ㊦ (略)。「はいった。」しろいたま。

一103 ㊦ たま。「はいった。」(略)。「あか

一104 ㊦ (略)。「はいった。」あかいたま。

一106 ㊦ 「かごにはいったたまをかぞえまし

一119 ㊦ らもおなじでしたね。もう一どやり

一179 どこかでなきだした。九 ゆうやけ

一193 ㊦ はねる。ひらいた、ひらいた。なん

一193 ㊦ ひらいた、ひらいた。なんのはなひ

一194 ㊦ んのはなひらいた。れんげのはな

一195 ㊦ げのはなひらいた。ひらいたとおも

一196 ㊦ らいた。ひらいたとおもつたら、

一196 ㊦ らいたとおもつたら、みるまにつ

一197 ㊦ みるまにつぼんだ。つぼんだ、つぼ

一201 ㊦ ぼんだ。つぼんだ、つぼんだ。なん

一201 ㊦ つぼんだ、つぼんだ。なんのはなつ

一202 ㊦ んのはなつぼんだ。れんげのはな

一203 ㊦ げのはなつぼんだ。つぼんだとおも

一204 ㊦ ぼんだ。つぼんだとおもつたら、

一204 ㊦ ぼんだとおもつたら、みるまにひ

一205 ㊦ みるまにひらいた。十 ゆうぎ 「お

一221 ㊦ うたをうたいました。それから、この

一223 ㊦ がえておどりました。わたくしは、「お

一226 ㊦ とてをつなぎました。「のみちをいけば

一231 ㊦ きよくあるきました。「みんなかわい

一233 ㊦ ころはこまりました。そこで、りょうて

一234 ㊦ うにうごかしました。「うたをうたえば

一236 ㊦ ばのようにしました。「くつがなる」で

二62 6 りがはじまりました。きゆうにあたり
 二62 7 あかるくなりました。でんとうでもつ
 二62 7 でんとうでもついたのかとおもってみ
 二62 9 がでるところでした。「略。」といい
 二63 7 いさんがいました。おんがくにつれ
 二63 10 とっておどりました。おとうさんも、わ
 二64 2 おどりまわりました。わたくしは、「み
 二64 3 こえでうたいました。「略。」わたくし
 二64 4 」。ああ、つかれた。ひとやすみ。」わ
 二64 5 しは、そこにあったこしかけにもたれ
 二64 6 うとうとしました。(十二)「略」
 二64 9 えで目がさめました。おもわずぽけっ
 二64 10 っとをさぐりました。「略。」「略」。
 二65 2 な人。どうかしたの。「略。」「略」
 二65 5 やげにいただいたの。「略。」とい
 二65 10 きあげてくれました。あいうえお「略」
 二6 8 「ここまできたとき、とみこさん
 二6 10 略。」といいました。すると、まさおさ
 二7 2 略。」といいました。「略。」「あさが
 二7 3 おもいつきましたね。では、『あさ』
 二8 3 へんなこえでいったので、みんなわら
 二8 3 みんなわらいました。(二) つぎの
 二8 6 とばをあつめました。それから、「う」
 二8 8 とばをあつめました。おしまいに、「お」
 二8 9 とばをあつめました。あつめたことば
 二9 1 つめました。あつめたことばを、みんな
 二9 1 きとめておきました。(二) 先生が
 二9 4 せつかくあつめたことばが、ごちゃ
 二9 7 たずねになりました。みんなは、いろい
 二9 8 いろかんがえました。ふみおさんは、「へ
 二10 1 ものとな、わけたらいいとおもいま
 二10 3 略。」といいました。はるこさんは、「へ

二10 6 ものとな、わけたらいいとおもいま
 二10 7 略。」といいました。ただしさんは、「へ
 二10 9 ものとな、わけたらいいとおもいま
 二11 1 略。」といいました。「略」。「そこで、
 二11 5 ばをかきつけました。そうして、ひとり
 二11 6 りにわけてみました。わけているうち
 二11 8 かわつていきました。はじめはむずか
 二11 9 しいとおもいましたが、だんだんおも
 二11 10 もしろくなりしました。一一 えにつき
 二12 3 をならべてみました。かたちのにたも
 二12 4 した。かたちのにたものをならべて
 二12 5 をならべてみました。ちがったのをな
 二12 6 みました。ちがったのをならべてみま
 二12 6 をならべてみました。いろいろかえて
 二12 7 かえてならべました。おぼさんのうち
 二13 2 つついただきました。ひとつはまっか
 二13 3 とつはまっかでしたが、ひとつは、はん
 二13 5 いろをしていました。おさらにのせて
 二13 6 のせてかざりました。大あめがふりま
 二13 7 大あめがふりました。にわに川ができ
 二14 1 わに川ができました。あめがやんで、
 二14 3 で、にじができました。大きなにじでし
 二14 4 。大きなにじでした。しゃぼんだまを
 二14 6 ふいてあそびました。赤や青やむらさ
 二14 8 のたまができました。ふたごもできま
 二15 1 ふたごもできました。まんまるいお月
 二15 2 さまがのぼりました。あんな大きな、
 二15 3 月さまは、どうしたらえにかくこと
 二16 3 ばあそびをしました。はじめにしりと
 二16 4 しりとりをしました。ただおさんみち
 二17 5 をしてあそびました。「略」。「略」。
 二17 7 略」。「ぬれたきものをきて、か

二19 6 に、ひとりがいったことばから、おも
 二20 1 ばから、おもいついたことばをじゅんじ
 二20 1 づけて、あそびました。よしこさんまこ
 二21 3 をかけていました。しまいまでみて
 二21 4 いとおもいましたが、かねがなった
 二21 5 が、かねがなったので、やめてきま
 二21 5 、やめてきました。「略」。「略」。
 二21 7 大きくまりました。「略」。「略」。
 二22 3 あそびをしました。よしこさんののは、
 二22 7 までもありました。どうしてですか。
 二23 1 はとをだいていたら、たいへんあつ
 二23 2 いとおもいました。びょうきではな
 二23 3 、はねのいたんだ大きなちようちょ
 二23 5 花にきていましたよ。「略」。「略」
 二23 7 けてしばいました。みてください。「
 二24 4 さがつていました。あんまりいろが
 二24 6 つきませんでした。「略」。「五 お
 二25 2 なしをしてきました。きょうは、いろ
 二25 7 いろろさんのしたおはなし。「略」。
 二26 1 、川がありました。くつがながれて
 二26 2 ながれてきました。きゆうりがなが
 二26 3 ながれてきました。きゆうりが、くつ
 二26 4 中にはいりました。「略」。「いい
 二26 6 へ」といいました。(二) さだおさ
 二26 8 さだおさんのしたおはなし。「略」。
 二26 9 はしがありました。二ひきのやぎが、
 二27 3 中でであいました。「略」。「と、一び
 二27 7 やぎがいました。「略」。「と、べつ
 二28 1 やぎがいました。やぎとやぎと、
 二28 3 しあつていました。そのうちに、二ひ
 二28 5 ちてしまいました。「(二) すみこさ
 二28 7 すみこさんのしたおはなし。「十二ひ

二28 8 会 川をわたりました。あさいところを
 二28 9 会 ろをわたりました。きをつけてわた
 二29 1 会 けてわたりましたから、みんなむこ
 二29 2 会 きしにつきました。きしに あがつて
 二29 4 会 かぞえてみました。一ばんはじめに、
 二29 6 会 ながかぞえました。『略。』ぶうちや
 二30 3 会 ながぞえてみました。『略。』やっぱり
 二30 7 会 。みんなわたったはずなのに、どう
 二30 8 会 なの、どうしたのだろう。『略。』
 二31 0 会 かぞえてみました。やっぱり十一ぴ
 二31 3 会 かぞえてみました。けれども、やっぱ
 二31 6 会 さわぎたてました。『略。』『略。』
 二31 9 会 さわぎをしました。」(四) くにおさ
 二32 2 会 くにおさんのした おはなし。「ある
 二32 4 会 くらがありました。そのうちのひと
 二32 5 会 いうものをみたことがあるかい。
 二32 7 会 』。』といいました。『略。』と、ほか
 二32 10 会 ものがいいました。『略。』と、また
 二33 1 会 も、手でさわったことがあるかい。
 二33 3 会 またたずねました。すると みんなは、
 二33 5 会 だ、さわってみた こともない。』と
 二33 6 会 』。』といいました。こんなはなしを
 二33 8 会 とがしてきました。『略。』と、ぞう
 二34 1 会 かいがいました。『略。』『略。』
 二34 5 会 いにたのみました。ぞうつかいは、『
 二34 8 会 ぞうをとめました。六人のめくらら
 二34 10 会 によってきました。はじめのめくら
 二35 2 会 、こういいました。『略。』二ばんめ
 二35 5 会 、こういいました。『略。』三人めの
 二35 6 会 つるして、とがったものじゃないか。
 二35 9 会 』。』といいました。四人めのめくら
 二36 2 会 』。』といいました。五人めのめくら

二36 5 会 へ。』といいました。おしまいのめく
 二36 7 会 もっていいました。『略。』めくらが
 二37 2 会 っしてしまいました。」(五) たけこさ
 二37 4 たけこさんのした おはなし。「略」。
 二37 6 会 のをみつめました。『略。』と う
 二37 8 髓 会 うがとんできた。』とうたいなが
 二37 9 会 えっていききました。空は、ほんとに
 二37 10 会 うに青い色でした。」六 山びこ で
 二39 6 会 ここまでののぼった。すこし 休もうか。
 二43 2 会 「ぼくが わるかったよう。」山びこ「わる
 二43 3 会 山びこ「わるかったよう。」おとう「ほら、
 二53 9 会 さんに いただいたの。」こう いって
 二54 3 会 さんからもらったのです。』こう いっ
 二55 4 とを かんがえました。わたくしには、お
 二55 8 には おいでになったに ちがひ ありません
 二56 2 、どんな かな だったでしょう。こんな
 二56 7 むつて しまいました。ゆめに、ひろい
 二56 9 いのはらを みました。なの花が、いちめ
 二57 1 んに さいて いました。ちようちよもと
 二57 3 よもとんで いました。わたくしは、「み
 二57 6 あるいて きました。そこへ、ひとりの
 二57 9 さんが でて きました。みると、わたくし
 二58 1 じいさんに よくに たかたでした。わた
 二58 1 よくに たかたでした。わたくしは、おも
 二58 6 こに こなさいました。(二) 先生が、
 二58 8 なしを なさいました。『略。』ここまで
 二59 2 会 たらいて きました。二年生も、これ
 二59 4 会 きようをしました。三年生も、これ
 二59 6 会 べんきようしました。四年の人たちも、
 二59 10 会 れをつかいました。」ここまで おはなし
 二60 1 でおはなしを きたとき、わたくしは、
 二60 2 を おもいだしました。先生は、つづけて

603 ておっしゃいました。「略。」九春
 604 会 が二年生になったら、あたらしい一
 618 会 「みんなのりしましたか。」みんな「のりま
 621 会 みんな」のりしました。「じゃ」「ぼちさんは
 622 会 さんはのりしましたか。」ぼち「わんわん
 632 会 んな、そろいましたね。」みんな「そろい
 633 会 んな」そろいました。「じゃ」「では、しゅ
 658 会 かるくなってきた」みんな「あかるく
 659 会 かるくなってきた」みけ「やあ、かす
 96 圓 と、おでになったか、おしやかさま。
 112 いうでしがいました。はんたかはもの
 114 くいえませんでした。おしやかさまは、
 116 おもいになりました。そこで、まいにち
 119 えることにしました。一年たちました。
 121 た。一年たちました。けれども、なにも
 122 ン。二年すぎました。まだなにもおぼ
 123 。三年になりました。やはりかしこく
 126 およびになりました。「略。」はんたか
 131 かおをみつめました。「略。」はんたか
 135 会 ことだよ。わかったかい。」はんたかは、
 138 の中にしまいました。そのうちに、きた
 141 ことがわかりました。きれいなことば
 143 こともわかりました。「略。」とさと
 144 会 しえてくださったことは、きれいな
 146 へ。」とさとりました。ある日、おしや
 148 きにあずかりました。おしやかさまは
 1410 てんにまいりました。はんたかもおし
 152 にまじっていました。ごてんのいり口
 157 そとにのりしました。ごてんでは、おし
 159 おつきになりました。でしたちはその
 159 わきになりました。そのときです。
 1510 とに、はちをもった手が、するすると

三162 えにのびてきました。それをみたごて
 三162 ました。それをみたごてんの人々は、
 三163 りしてしまいました。王さまは、「略」
 三166 とおっしゃいました。おしやかさまは、
 三171(会) ここまでのぼしたのです。」とおし
 三172 とおっしゃいました。王さまは、すぐ
 三173 およびになりました。はんたかは、しず
 三174 にあがってきました。はんたかのから
 三179 光がさしていました。三 ことばあつ
 三182 の名をあつめました。二くみは虫の名
 三183 の名をあつめました。三くみは魚の名
 三184 の名をあつめました。四くみは鳥の名
 三185 の名をあつめました。花の名は十二
 三191 十一あつまりました。虫の名は十五
 三192 十五あつまりました。魚の名は十三
 三193 十三あつまりました。鳥の名は十四
 三194 十四あつまりました。あつめたことば
 三195 まりました。あつめたことばにえをか
 三195 えをかきそえました。手わけして、その
 三197 べることにしました。えをかいいていく
 三202 だんふえてきました。先生が、こくばん
 三204 おかきになりました。「くみの人たち
 三216 略。」できあがったものをうしろの
 三216 のかべにはりました。みんなおもしろ
 三217 しろがってみました。四 はやとり
 三223 すのきがはえました。たいへんないき
 三224 とのびていきました。なん年かたつう
 三226 きは、いままでみたこともきいたこ
 三226 みたこともきいたこともないほど、
 三227 きな木になりました。とうとう、その
 三229 くようになりました。大きなえだは四
 三232 いほどになりました。まいあさ日がで

三237(会) らないで、こまったものだ。「略」。
 三251 な木をみあげました。あるちえのある
 三252 いさんがいいました。「略」。みんなは
 三259 略。」といいました。そこで、切るこ
 三2510 ることになりました。こんな大きな木
 三262 にも大さわぎでした。なん十人、なん百
 三263 が、切りはじめました。長いあいだかか
 三264 すことができませんでした。こんどは、切りた
 三265 んどは、切りたおした木を、どうするか
 三266 うことになりました。すると、あのち
 三269 略。」といいました。そこで、大ぜいの
 三271 ることになりました。なん年かかかって
 三272 ができあがりしました。いままでみたこ
 三272 した。いままでみたこともきいたこ
 三273 みたこともきいたこともない、大き
 三273 、大きなふねでした。海にうかべて、
 三275 うがのりこみました。そうして、「略」
 三275 略。」とこぎました。おどろいたのは、
 三276 ぎました。おどろいたのは、そのふねの
 三282 る人々もいいました。すると、あのち
 三285(会) すのきでつくったふねだもの、いき
 三288 略。」といいました。そののち、はや
 三292 、海をわたりました。そのおかげで、
 三295 なってこまっていたたくさんの方々は
 三297 たかになっていったという事です。
 三303 ることになりました。「略」。と、先生
 三306 がおっしゃいました。みんなはあちら
 三307 ちらにわかれしました。あとで、できた
 三308 した。あとで、できた作文を、ひとりび
 三308 りびとりよみました。「略」。と「略」。
 三324(会) います。あがったところのかべには
 三335(会) はいっていました。なの花の大きな

三336(会) けいがありました。青色やちや色の
 三337(会) なんでいきました。お米や豆をいれ
 三338(会) お米や豆をいれた、みほんのまるい
 三339(会) びんもありました。へやのすみに、
 三341(会) が立っていました。そこに、はくせい
 三342(会) きのつていきました。ナフタリンのに
 三344(会) いをしていきました。まっ白なかびん
 三345(会) さしてありました。みんながそのま
 三347(会) いをしていきました。わたくしも、早く
 三348(会) いとおもいました。「略」。「略」。
 三357(会) しらえていきました。かんなをつかっ
 三372(会) などおもいました。「略」。先生が
 三374(会) ところになりました。白いうさが、
 三389 おかきになりました。六 かえり道
 三392 りがなくていきました。ぼくらはくさは
 三394 るいてかえりました。ぼくがまん中で、
 三403 るいてかえりました。きょうならった
 三404 た。きょうならったばかりのしょうか
 三405 ながらあるきました。くわばたけのく
 三414 いってしまいました。ぼくらはふたり
 三416 すれにありました。たんぼぼのみが、
 三417 つてとんでいきました。「略」。みよこさ
 三423 こ道をかえりました。「略」。ひとりぼ
 三426 なってしまいました。ぼくは、学校どう
 三428 走ってかえりました。七 白うさぎ
 三433 みたいと思いました。ある日、はまべ
 三435 わにぎめがいましたので、これはいい
 三438 略。」といいました。わにぎめは、「略
 三442 ぜいつれてきました。白うさぎはそれ
 三447 略。」といいました。わにぎめは、白う
 三449 おりになりました。白うさぎは、「略
 三4410 わたっていきました。もうひと足でり

三45 4 会 うまくだまされたな。ぼくは海をわ
 三45 5 会 たつてきたかったのだ。あははは。」
 三45 7 いって わらいました。わにぎめはそれ
 三45 10 いそう おこりました。いちばんしまい
 三46 1 ちばんしまいにいたわにぎめが、白う
 三46 2 とつてしまわれました。白うさぎはいた
 三46 4 しくないでいました。そのとき、みな
 三46 7 たずねになりました。白うさぎがいま
 三46 10 とおっしゃいました。白うさぎはすぐ
 三47 1 海の水をあびました。するといたみが
 三47 4 まらなくなりました。そこへ、おおくに
 三47 6 いらつしやいました。このかたは、さき
 三47 8 どおとおりになつたかたがたのおと
 三48 1 つていらつしやつたので、おそくおな
 三48 1 そくおなりになつたのです。おおくにぬ
 三48 4 たずねになりました。白うさぎはいま
 三48 5 ことをはなしました。「略。」白うさぎ
 三48 10 のようになりました。八 高い 高い
 三49 3 の花がさきました。あんなところ
 三49 4 ころにさきました。よあけにばあ
 三49 6 くんでさきました。かぼちやの花
 三50 1 の花がさきました。はかげにふた
 三50 2 ふたつさきました。かなかなぜも
 三50 4 れゆれさきました。石やさん かっ
 三52 3 。（。）といいました。うぐいすはう
 三52 5 。（。）といいました。りすはしらか
 三52 7 。（。）といいました。いなかのやね
 三53 1 。（。）といいました。こどもは石の
 三53 3 。（。）といいました。おてんとうさま
 三53 5 。（。）といいました。がん がんが
 三54 7 る。山が あれた、海が あれた、
 三55 1 た、海が あれた、かぜで あれた。

三55 2 会 、 かぜで あれた。おびになつて、
 三56 2 会 うたを わすれた カナリヤは、 うし
 三56 5 会 うたを わすれた カナリヤは、 せど
 三57 1 会 うたを わすれた カナリヤは、 やな
 三57 4 会 うたを わすれた カナリヤは、 ぞう
 三57 7 会 べれば、 わすれた うたを 思いだす。
 三58 8 そびに かけました。「略。」と、ジュ
 三60 5 おききになりました。「略。」ジュデー
 三61 3 おまちなりました。ほかの子どもた
 三61 4 て、まつて いました。そのとき、マイ
 三61 8 略。」といいました。「略。」おとうさ
 三62 1 おききになりました。「略。」「略。」
 三62 4 ユデーは いいました。「略。」「略。」
 三62 7 ビッドは いいました。「略。」「略。」
 三62 10 て へんじを しました。みんなの 心が あ
 三63 1 な の 心が あいましたから、 いつしよに
 三63 2 ろまでの ぼりました。そうして、そこで
 三63 4 みずうみへ でした。みずうみには ポ
 三63 5 が うかんで いました。みんなは ポート
 三63 6 トに のりこみ ました。三人の 男の子は、
 三63 7 ろに こしかけ ました。ふたりの 女の子
 三63 8 えに こしかけ ました。まん中には、 おと
 三63 9 おこぎに になりました。みずうみを 右へ
 三64 2 おききに になりました。「略。」と、女の
 三64 4 子たちが いいました。「略。」と、男の
 三64 6 子たちが いいました。「略。」「略。」
 三64 8 会 はんたいに こいだら、ぐるぐるまわり
 三65 3 子たちが いいました。また、心が あわ
 三65 4 あわなく なりました。そこで、おとうさ
 三65 6 まわりに なりました。もう みんなは ど
 三65 8 ーバラが いいました。「略。」マイクル
 三65 10 イクルが いいました。「略。」おとうさ

三66 3 わりを なさいました。そのとき、ピー
 三66 5 会 、 「どつちへ いったら いいか、 風に き
 三66 6 略。」と、 いいました。「略。」と、ジュ
 三66 8 ユデーが いいました。「略。」おとうさ
 三66 10 おききに になりました。「略。」女の子た
 三67 2 子たちは いいました。「略。」おとうさ
 三67 4 おききに になりました。「略。」男の子た
 三67 6 子たちも いいました。「略。」と、 おと
 三67 9 さんが おつしやつたので、 みんなは 空
 三67 10 は 空を みあげ ました。青々とした 中に
 三67 10 ました。青々とした 中に、 ふんわりし
 三68 2 中に、 ふんわりした、 小さな、 白い 雲
 三68 7 雲が とんで いました。雲は、 もりの 方
 三68 10 おききに になりました。「略。」バーバラ
 三69 2 ーバラが いいました。「略。」みんなの
 三69 4 な の 心が あいました。「略。」おとうさ
 三69 7 は おつしやいました。「略。」それから
 三69 9 しろく あそび ました。お日さま 五人
 三69 9 んを たべて いました。そのとき、 ピーター
 三70 3 るのを みつけ ました。「略。」ピーター
 三70 6 は 大声で いいました。ゆかの 上に、 な
 三70 8 なにか、 長い、 光った、 ぴかぴかした も
 三70 8 光った、 ぴかぴかした ものが あります。
 三71 2 ビッドが いいました。「略。」おかあさ
 三71 4 が おつしやいました。そこで、 デビッド
 三71 6 、 つまんで みました。けれども、 つまむ
 三71 8 ーバラが いいました。「略。」おかあさ
 三71 10 が おつしやいました。そこで、 バーバラ
 三72 2 つてきて はきました。けれども、 はきだ
 三72 5 クルが たずね ました。「略。」おかあさ
 三72 7 かえしに なりました。「略。」みんなが
 三72 9 みんなが いいました。「略。」と、 また

三731 おききになりました。「略。」みんなが
 三733 んながこたえました。「略。」「略。」
 三734 会 た。「きらきらした水かしら。」「略」
 三7310 がこうさげました。「略。」マイクル
 三741 会 がこからやってきたの。「マイクルがた
 三744 がおっしやいました。それで、みんなは
 三746 まどぎわへでした。「略。」おかあさ
 三748 えてくださいました。みんなはそこを
 三749 なはそこをみました。お日さまが光り
 三7410 しずむところでした。「略。」「略。」
 三752 会 まからやってきたのね。「略。」そ
 三757 しずんでいきました。「略。」ピーター
 三759 会 光、どこへいったの。「ピーターが大
 三761 が大声をあげました。みんなでさがし
 三762 さがしまわりましたが、ゆかの 上には
 三763 うみえませんでした。「略。」おかあさ
 三764 会 ていつてしまったのよ。「おかあさん
 三765 がおっしやいました。「略。」と、デビ
 三7610 クルがたずねました。「略。」「略。」
 三787 会 えでていなかったので、まいあさあえ
 三794 であそんでいましたので、だれひとり
 三795 もありませんでした。にわかにパラパ
 三796 おとがきこえました。みんなは空をな
 三797 は空をながめました。雨でした。「略」
 三797 がめました。雨でした。「略。」バーバラ
 三799 ーバラがいました。「略。」と、デビ
 三805 会 やにされちゃった。」と、マイクルが
 三811 でにげていきました。そのうちに、雲は
 三813 すすんでいきました。そこへお日さま
 三813 がさしはじめました。すると、色リボン
 三815 が空にかかりました。「略。」ピーター
 三816 会 「赤い色、みえた。」ピーターがいい

三817 ーターがいました。ピーターは赤が
 三818 ーは赤がすきでした。「略。」マイクル
 三819 会 「みどり色、みえた。」マイクルがいい
 三8110 イクルがいました。マイクルはみど
 三821 みどりがすきでした。「略。」ジュデー
 三822 会 「青い色、みえた。」ジュデーがいい
 三823 ユデーがいました。ジュデーは青が
 三825 ーは青がすきでした。「略。」バーバラ
 三828 ーバラがいました。「略。」デビッド
 三831 ビッドがいました。「略。」そのと
 三834 いらっしやいました。「略。」とおき
 三836 おききになりました。「略。」「略。」
 三837 会 りました。「みえたよ。」「略。」と、
 三838 会 ろにだれがかけたの。」と、マイクル
 三839 イクルがきました。「略。」だんだん
 三846 略。」と、いいました。みんながみま
 三848 なにじがみえました。十ひびきあ
 三891 じぶんの耳できいたひびきを、かきと
 三914 このはしがなかったらどうしましょう
 三917 うちの人のかいたてがみやはがきを
 三923 る小さな子がいたら、とめてやりま
 三924 会 。こうえんにさいたきれいな花は、み
 三927 ください。みにきた人が一本ずつお
 三937 なもうせんをしいたようなしぼふ、み
 三937 につやつやと光ったしぼふ。「略。」
 三938 きます。心に思ったことは、いつのま
 三978 ますが、紙にかいたものは、いつのま
 三9710 ますが、口ではなしたことは、そのま
 三982 ますが、紙にかいたおはなしは、いつ
 三983 一まいの紙にかいたえを、どこにかざ
 三985 しょう。紙にかいた字を、どこへおく
 三987 みなさんのかいたえでも、字でも、
 三994 会

三999 とおっしやいました。十三 かぐやひ
 三1003 んがすんでいました。おじいさんはま
 三1005 をとりにいきました。ある日のことで
 三1011 竹が一本ありました。ふしぎに思っ
 三1014 がすわっていました。おじいさんはよ
 三1019 会 たしにさずかった子にちがいない。
 三1021 のせてかえりました。そうして、かご
 三1023 いじにそだてました。それからという
 三1025 がはいっていました。おじいさんのう
 三1026 ねもちになりました。また、小人のよう
 三1027 た、小人のようだったおひめさまは、三
 三1029 大きなになりました。そのうつくしさ
 三1031 という名をつけた。おじいさんは、き
 三1034 、すぐなおりました。世の中の人たち
 三1039 りをとりました。そうして、かきね
 三1041 きこんだりました。一どでもかぐや
 三1042 もかぐやひめをみた人たちは、「略」
 三1046 さんにたのみました。その中には、み
 三1047 おいでになりました。けれども、かぐや
 三1053 わってしまいました。たいていの人は、
 三1054 らめてしまいました。さいごまでど
 三1056 ん人かのこりました。それで、かぐや
 三1057 会 っ、それができたらおよめにいくと
 三1058 にいくといいました。けれども、かぐや
 三10510 ができませんでした。かぐやひめのひ
 三1061 だんだん高くなったのを、みかどがお
 三1064 お思いになりました。それで、おじい
 三1065 会 てんにつれてきたら、おまえにくら
 三1067 とおっしやいました。おじいさんは、か
 三1068 びたびすすめました。か、「略。」とい
 三10610 りききませんでした。みかどは、おじい
 三1073 ちよりになりました。家にはいつてご

三107 9 ろうとなさいました。すると、かぐやひ
 三107 10 みえなくなりました。みかどはびつ
 三108 4 たをあらわしました。みかどは、「略」
 三108 7 かえりになりました。そののち、みか
 三108 9 紙をくださいましたので、かぐやひめも
 三108 10 しあげておりました。ある年の春の
 三109 3 むようになりました。あきがきて月が
 三109 5 しそくにみえました。十五夜がちかく
 三109 6 五夜がちかくなつたある夜、かぐやひ
 三109 7 ててなきだしました。おじいさんとお
 三109 8 わけをたずねました。かぐやひめは、「
 三110 2 だまつていましたが、ほんとうは、わ
 三110 6 へ。」とこたえました。この思いがけな
 三110 8 もびつくりしました。「略」と、ふた
 三111 1 いろかんがえました。あまりしんばい
 三111 2 りしんばいしましたので、かみのけが
 三111 3 がつてしまいました。みかどがこのこ
 三111 5 お思いになりました。それで、たくさん
 三111 7 ることになりました。いよいよ十五夜
 三111 8 十五夜になりました。おじいさんの家
 三111 9 りは、弓矢をもつた人たちで、いくえ
 三112 1 つばいになりました。おばあさんは、し
 三112 2 あさんは、しめきつたくらの中で、し
 三112 3 めをだいていました。おじいさんは、そ
 三112 4 ばんをしていました。夜中になって、
 三112 5 が一どに十もでたかと思われるほど、
 三112 6 あかるくなりました。「略」。けらいいた
 三112 7 した。「さあ、きたぞ。」けらいたちは、
 三112 8 に矢をつがえました。ところが、ふしぎ
 三112 10 なつてしまいました。そのうちに、空か
 三113 2 がつておりました。すると、しめきつ
 三113 2 、しめきつておいたくらの戸がひと

三113 3 とりでにあきました。そうして、おばあ
 三113 4 あさんがだいていたかぐやひめから
 三113 5 へでてしまいました。もう、ひきとめる
 三113 9 たいと思いましたが、ほんとうに
 三114 3 といつて、きていたうわぎをぬいで、
 三114 5 さんにわたしました。天人がはごろも
 三115 4 すりをのこしました。天人は、いそいで
 三115 6 ごろもをきせました。かぐやひめのす
 三115 8 しくかがやきました。そこで、よいいの
 三115 10 のぼつていきました。みかどは、その
 三116 2 ができませんでした。そうして、ふしの
 三116 4 になるばかりでしたので、あるとき、「
 三116 6 たずねになりました。おつきのものは、
 三117 1 ともうしあげました。みかどは、「略」
 三117 5 いつけになりました。おつきのものは
 三117 6 のとおりにしました。すると、ふしの
 三117 7 しのくすりをやいたけむりが、山のう
 三117 8 ちのぼつていました。それで、この山
 三117 10 うようになりました。
 四5 3 し、人がなくなつたときには、やはり
 四8 9 ます。よくみがいたまるいかがみを、
 四9 2 この町にはめこんだようです。こは、
 四15 1 、小鳥がとびつた。「略」。みんな
 四15 3 なじつとしていたけれども、なかなか
 四15 3 れども、なかなかつた。かくれんぼし
 四15 4 たら、わたしがおに
 四15 4 たしがおにになつた。みんな、鳥ごやに
 四15 5 ごやにかくれていた。たまごを生んで
 四15 6 いるのを見ていた。えつ子がわたし
 四15 7 せなかでねんねした。わたしのせなか
 四15 8 をつけてねんねした。おかしをしっか
 四16 1 にもつてねんねした。せなかがほかほ

四16 3 がた、水くみにでた。おかあさんが、月
 四17 7 。学校からかえつたら、おかあさんが、
 四17 9 いていらつしやつた。すぐでつた。
 四17 9 た。すぐでつた。おかあさんの手
 四18 1 につかまつてひいた。石うすは、ゴロン
 四18 2 ロンゴロンといった。おかあさんに、「
 四18 6 へ。」とおいしやつた。そこで、おかあ
 四18 8 、力いっばいひいた。三、いろいろな
 四18 10 がこうおしやつたので、みんなはそ
 四19 6 ら、文を書きました。まさおさんは、あ
 四19 7 うな文を書きました。「さつき、みんな
 四20 2 してあそびました。みんなで手をつ
 四20 3 わをつくりました。ねずみが三びき、
 四20 4 のそとにでました。ねこの一びきは、
 四20 6 おしやいました。みんなは、『略』
 四20 10 』とこたえました。ねこのわたくし
 四21 2 うかと考えました。ねずみたちは、わ
 四21 5 こもうとしました。みんなは、「略」
 四21 9 中にはいりました。ねずみたちは、あ
 四22 2 そとへにげました。すると、そとに
 四22 3 ると、そとにいたねこがおいかけま
 四22 3 がおいかけました。もうすこしでつ
 四22 4 まりそうになつたとき、またわの
 四22 5 ににげこみました。そこを、わたくし
 四22 6 くつかまえました。「たつおさんは、
 四22 7 てて文を書きました。「略」。すみこさ
 四22 8 うえをかきました。なんのえか、あ
 四22 9 くのうちをかいたのです。やねも、か
 四23 1 しらも かきました。まども かまし
 四23 2 まども かきました。あのまどから、
 四23 4 よく星をみしましたね。にいさんは、こ

四二三(手) は、大きくなったら、にいさんとい
 四二四(手) にあてて書きました。「略。」のぶこさ
 四二四(手) んぼして書きました。おみやげにうめ
 四二四(手) をとって書きました。そうして、みっち
 四二五(手) えにかざりました。みっちゃんのこ
 四二六(手) つもりで書きました。「略。」たみおさ
 四二六(手) あいてに書きました。「略。」たろうさ
 四二七(手) らくなくしてくれたら、かごからはな
 四二七(手) 「あてに書きました。「略。」としおさ
 四二八(手) つもりで書きました。「略。」きよしさ
 四二八(手) に、気がつきました。「略。」せつこさ
 四二九(手) かなかはつきりした返事をしてくれ
 四三〇(手) て、文を書きました。「略。」かずこさ
 四三一(手) うな文を書きました。「きう、学校か
 四三一(手) がふっていました。わたくしがかさ
 四三一(手) がなくていました。どこかの中学校
 四三二(手) わけをききました。男の子は、げたの
 四三二(手) てあるけなかつたのです。その生徒
 四三二(手) すげてやりました。雨がびしゃびし
 四三二(手) かけてあげました。そのとき、わた
 四三二(手) を思いだしました。はなおができあ
 四三三(手) ったしまいました。女の生徒さんは
 四三三(手) かれていきました。「四 心に生き
 四三三(手) ずこさんの書いた文で、なにか氣の
 四三四(手) なにか氣のついたことはありません
 四三四(手) をよみなおしました。けれども、べつに
 四三四(手) 、氣がつかしました。「こまで いわれ
 四三四(手) さをさしてあげたのですね。「略。」
 四三五(手) 、ふと思いだしたことがあります
 四三五(手) そこに氣がついたのです。おとうさん
 四三六(手) が、ひびいてきたのです。わかります
 四三六(手) らく考えていました。そのとき、たろ

四三六(手) ことがありました。」といって、つき
 四三六(手) ような話をしました。「略。」「略。」
 四三六(手) かいにいきました。そのとき、ぶど
 四三七(手) 下をとおりました。そこには、ぶどう
 四三七(手) ゆくしていました。わたくしは、たべ
 四三七(手) ありませんでした。思いきって、とな
 四三七(手) いおうとしました。そのとき、わた
 四三八(手) しの口をおさえたものがありました
 四三八(手) ものがありました。それは、おかあさ
 四三八(手) んのことばでした。「略。」という
 四三八(手) という声でした。わたくしは、だま
 四三八(手) かえって書きました。「略。」「略。」
 四三八(手) それはえらかつた。たろうさんは、な
 四三八(手) わないで、かえれたのです。「略。」
 四三八(手) のことばがとめたからです。「略。」
 四三八(手) いだされて書きました。「略。」「略。」
 四三九(手) をころそうとしたとき、にいさんの
 四三九(手) ころしませんでした。「略。」「略。」
 四三九(手) 枝をおろうとしたとき、おじさんの
 四三九(手) ついてやめました。「略。」五が
 四三九(手) 「みんなよかつた。ただしのことば
 四三九(手) をつづけていました。ものさしできち
 四四〇(手) できちんとそろえたようになってとん
 四四〇(手) になったりしました。ときには、かぎな
 四四〇(手) るようになりました。ゴムのようにの
 四四〇(手) むこともありました。どのように列の
 四四〇(手) はありませんでした。「略。」「略。」
 四四〇(手) よく空をとびました。けさも早くから、
 四四〇(手) は目をさしました。ゆうべは、ぬまの
 四四〇(手) のきれいにしげったところで、ねむっ
 四四〇(手) とろで、ねむったのでした。「略。」
 四四〇(手) で、ねむったのでした。「略。」とうばん

四四二(手) な声でさげびました。「略。」みんなは
 四四二(手) にさんせいしました。ところが、「略。」
 四四二(手) 「略。」といったのは、かつちゃん
 四四二(手) は、かつちゃんでした。「略。」「略。」
 四四二(手) んおしまいだったもの。おしまい
 四四二(手) てくれていったから、そうしたん
 四四二(手) たら、そうしたんじゃないか。「へ
 四四二(手) いからって、いったじゃないか。「略。」
 四四二(手) てくれていったのに。「略。」「へ
 四四二(手) んな氣もちだったけれど、きょうは
 四四二(手) なはそうきめました。あさの風は、氣
 四四二(手) なげにあたりました。三十ばのがんは、
 四四二(手) てとんでいききました。やがて、まっば
 四四二(手) かたちになりました。はたけをこえ、
 四四二(手) 山のそばにきました。その山のふもと
 四四二(手) をよけてとびました。よく木のかけか
 四四二(手) たにさしかかつたとき、かつちゃん
 四四二(手) と、声をたてました。ほかのがんは、
 四四二(手) でとびつづけました。かつちゃんは、十
 四四二(手) めからわきにそれたかと思つと、石こ
 四四二(手) におちていきました。「略。」下の方
 四四二(手) がひびいてきました。二十九わのがん
 四四二(手) ろへあつまりました。かつちゃんが、い
 四四二(手) てつぼうでやられたということがわ
 四四二(手) ことがわかりました。力のつよいが
 四四二(手) からうけとめました。ほかのがんは、
 四四二(手) をだきかえしました。「略。」「略。」
 四四二(手) げまし、さげびました。「略。」二はつめ
 四四二(手) 、ひびいてきました。下からねらわれ
 四四二(手) だけ早くとびました。きけんなどろ
 四四二(手) らとおりました。目のまえに、

四53 1 がそびえていました。がんのなかまは、
 四53 3 うと話していました。やつと高い山の
 四53 4 のみねをこえました。「略」。「略」。
 四53 5 会 みずうみがみえた。「略」。「みずう
 四53 7 風がふいてきました。あせをいっばい
 四53 9 いい氣もちでした。みずうみの島に
 四53 10 は、こんもりとした林がありました。
 四54 1 した林がありました。がんのなかまは、
 四54 2 林の中におりました。一わのがんが、
 四54 4 、これをうけとった。一わが、きず口を
 四54 6 あらってやりました。ほうたいをもつ
 四54 6 うたいをもつていたがんが、手早く
 四54 7 とまきつけました。かつちゃんは、は
 四54 9 をうたれていました。かつちゃんはね
 四54 10 んはねつができたので、みんながか
 四55 1 ひやしてやりました。島にはかりうど
 四55 4 はりばんをしました。その夜は、さい
 四55 6 、星の光る夜でした。かさかさとい
 四55 7 はの音がしましたが、それは、小鳥た
 四55 8 とびまわる音でした。つぎの日のあさ
 四55 10 すこしひらきました。「略」。「略」。
 四56 1 会 んが、氣がついたよ。「略」。「略」
 四56 5 るようになりました。「略」。「略」。
 四56 7 会 ほんとによかったね、かつちゃん。「
 四57 2 つてはばたきをしたので、みんなは大
 四57 3 は大よろこびでした。そこで、その日
 四57 6 うことになりました。かつちゃんのす
 四57 8 だんごを作りました。くだものをあつ
 四57 9 かざったりしました。すっかり用意が
 四57 10 たちもあつめました。二十五わ、二十六
 四58 2 だんさんそいました。かつちゃんは、み
 四58 4 て、にこにこしました。「略」。「こうい

四58 6 会 、いいこと考えたんだ。」こういつて
 四58 7 たのしんでいました。二十九わのかお
 四58 8 かがそりました。けれども、もう
 四58 10 会 ません。「どうしたんだろう。」「略」。
 四59 4 へ。」とさげびました。山びこがむこう
 四59 7 こたえるだけでした。「略」。「かつちゃ
 四59 9 んどんでかけました。「略」。「略」。
 四59 10 会 をみけなかつたかい。」「略」。「へ
 四60 2 会 かまをみなかつたかい。」「略」。「へ
 四60 7 なつてしまいました。しかたがないの
 四60 9 りにあつまりました。どのがんもどの
 四61 1 よりぬれていました。いんそつがかりの
 四61 5 ははしをとりました。かつちゃんは、「へ
 四61 8 おいのりをしました。二十九わのがん
 四62 1 なを元氣づけました。みんなのねてい
 四62 3 さがしにいきました。しずかなやぶの
 四62 8 びにかみつきました。さすがのへびも、
 四62 8 きがくるしくなつたので、力をゆるめ
 四62 9 、力をゆるめました。そのひまになか
 四62 10 りとぬけだしました。「略」。「かつちゃ
 四63 3 とんで かえりました。みんなは、それを
 四63 4 、およろこびでした。「略」。「あんしん
 四63 5 会 。「ああ、よかった、よかった。」「あ
 四63 5 会 よかった、よかった。」「あんしんして、
 四63 6 ごはんをたべました。「略」。「略」。
 四63 10 こにこわりました。「略」。「略」。
 四64 6 んとあたまをさげたので、みんなもわ
 四64 7 んなもわりました。「略」。「三十ばの
 四64 7 島をとびたちました。うすむらさきの
 四65 4 たなびいていました。がんの列は、そ
 四65 6 くなつていきました。六、ことばあそ
 四65 8 う。一組であつめた「早口あそび」。「へ
 四67 7

四69 1 へ。」「二組のあつめた「かいぶん」。「略
 四69 2 ん。」「竹やぶやけた。」「略」。「略」。
 四69 3 へ。」「たしかにかした。」「略」。「略」。
 四69 5 へ。」「ダンスがすんだ。」「略」。「三組の
 四71 9 へ。」「これにあつた人には、おもちゃ
 四72 4 へ。」「これにあつた人には、ハンケチ
 四72 7 略」。「これをひいた人には、なにもあ
 四72 10 へ。」「これがあつた人には、につきち
 四73 2 るた」を考えました。たくさんおもし
 四73 3 ろいのができました。これをあつ紙に
 四73 5 えることにしました。七、いろはがる
 四75 5 ほお。ぬ——ぬれたものはほせ。る—
 四76 6 んげの花がひらいた。そ——そまつに
 四79 3 。ゆ——ゆうべみたゆめ。め——目に
 四81 6 会 あかるくかざったクリスマス。世界
 四82 5 リーをつくりました。まつの木、枝を
 四82 7 てて、色紙でおつたつるや、ふうせん
 四82 8 うせんをさげました。ぎん紙でこしら
 四82 9 ぎん紙でこしらえた小さなつりがねや
 四82 10 十字かもさげました。ほそいうろそく
 四83 1 うそくも立てました。弟が、「略」。「と
 四83 3 いのえをだしました。それはふじ山の
 四83 4 はふじ山のえでした。ねえさんが、赤い
 四83 6 こしらえはじめました。赤いふくをきて
 四83 8 なあごひげをつけたサンタクローズの
 四83 9 が、できあがりしました。それをまつ枝
 四84 2 、「略」。「といったので、ねえさんが
 四84 2 さんがわりました。そのつぎの日の
 四84 3 ちがあつりました。クリスマスツリー
 四84 4 んなであそびました。一ばんさきに、ね
 四84 6 うのお話をしました。二ばんめに、とな
 四84 8 紙しばいをしました。三ばんめに、すじ

四84 10 うかをうたいました。すると、みきこさ
 四85 1 わせておどりました。おしまいに、みん
 四85 2 プあそびをしました。そのとき、おか
 四85 4 いらっしやいました。「略。」みんなは
 四85 6 こんでもらいました。弟が、「略。」と
 四85 9 、大きな声でいったので、みんながわ
 四85 9 んながわらいました。九 雪 ゆうが
 四86 7 「略。」とないた。冬がきたので、
 四87 1 とないた。冬がきたので、よろこんで
 四87 2 、よろこんでないた。おとうさんは、町
 四87 6 か。風がふいてきた。すみがまの上に、
 四88 8 隼 いそいでかえったよ。からすの かん
 四89 6 隼 すずめ親子のねたあとは、さらさ
 四92 1 うれしそう。降った雪はまっ白だ。し
 四97 5 隼 れこれ、どうしたのだ。「子ども三」お
 四97 10 隼 たちがつかまえたのなもの。「うらし
 四101 3 隼 かかってよかったね。さあ、元氣を
 四103 5 隼 、だれかと思ったら、かめさんか。」
 四103 6 隼 すけていただいたかめでございます
 四103 9 隼 かり「元氣になったの。」かめ「おかげさ
 四104 1 隼 うぶになりました。あなたのお力で、
 四104 3 隼 いをいたしました。きょうは、お礼に
 四104 5 隼 礼にあがりました。」うらしま「お礼に
 四104 8 隼 になってよかったね。」かめ「お礼に
 四105 2 隼 までまいりました。」うらしま「なに、
 四106 9 隼 。むこうに光ったやねがみえるでし
 四110 5 隼 てくださいました。このあいだは、う
 四110 7 隼 とうございました。」うらしま「いや、
 四110 8 隼 どとおりがかったところでしたので。
 四110 8 隼 ったところでしたので。」おとひめほ
 四113 5 隼 えりたくなりました。たい「これは、ま
 四113 6 隼 、まださしあげたことのない、おい

四113 8 隼 んいただきました。」えび「では、にぎ
 四114 3 隼 、なにかかわったことをして、おな
 四114 7 隼 せわになりました。」おとひめ「どうか
 四114 8 隼 うかなさいましたか。」うらしま「あま
 四115 10 隼 できませんでした。」うらしま「いや
 四116 2 隼 ていただきました。」おとひめ「では、
 四117 4 隼 「よくわかりました。それでは、おいと
 四118 8 隼 ぼめん 生まれた村にかえったら、
 四118 8 隼 れた村にかえったら、だれも知らな
 四119 2 隼 。とほうにくれたうらしまは、あけ
 四119 3 隼 、あけてみました、たまてばこ。白
 四120 2 隼 んとうが つきました。いままでくらか
 四120 3 隼 いままでくらかったへやが、あかるく
 四120 3 隼 あかるく になりました。みんなのかおが
 四121 3 隼 どれほど 苦心をしたことでしょう。で
 四121 5 隼 どうして こしらえたのでしょうか。光って
 四122 2 隼 川の水で 生まれたものですか。それか
 四122 4 隼 たびを してきたのです。けれども、
 四123 5 隼 な 思いを しました。もえて いる 火を
 四126 7 隼 く。空に かすんだ ふじの 山。ひと
 四128 5 隼 な きものは、みた ことが ない。もっ
 四130 1 隼 わたしが ひろったのです。もって か
 四131 8 隼 す。天人の しおれた、この ようすを み
 四132 7 隼 ろもを お返ししたら、あなたは、まわ
 四133 1 隼 ことを 申しました。」りょうしは はこ
 五4 5 隼 おりる。水を ふくんだ 草のうた、こけのう
 五8 3 隼 汽車の きつぷ かったの。」「略。」パチ
 五8 4 隼 「略。」「かったよ。さあ、改札口へ
 五8 6 隼 汽車が はいって きたよ。」シュ、シュ、
 五9 4 隼 やんが、 乗って きたよ。じろう、せきを
 五10 2 隼 、まっくら になった。」「略。」「略。」
 五10 4 隼 て ほって くださった トンネル ですよ。」

五10 5 隼 もう 明かる くなった。あ、あそこ に きれ
 五11 2 隼 あっ、びっく りした。」「略。」「略。」
 五11 3 隼 「むこう から きた 汽車と すれちが った
 五11 4 隼 汽車と すれちが ったのさ。」「略。」「へ
 五11 5 隼 。」「しょうと つしたか と思った。」「略
 五11 5 隼 と つしたか と思った。」「略。」「略。」
 五11 11 隼 青の しるし の ついたもの。」「略。」「へ
 五12 4 隼 が とう ございました。」「略。」「略。」
 五13 9 隼 へ。」「やっ と ついた。わす れるもの は ない
 五14 5 隼 へ。」「おもし ろ かった。」「略。」「略。」
 五15 2 隼 おさん に あて て 書いた 手紙 です。私も、い
 五16 2 隼 いっしょ に になりました。そこへ、配 た つを
 五16 5 隼 なかばん に いれました。」「略。」「略。」
 五17 1 隼 この 中 に は い り まし た。そこ は 私 た ち の 山
 五18 5 隼 り に わ けて く れ まし た。」「略。」「略。」
 五18 9 隼 おた が い に、であ った と 思 っ た ら、す ぐ お
 五18 9 隼 に、であ った と 思 っ た ら、す ぐ おわ か れ て
 五18 9 隼 、す ぐ おわ か れ て し た。そこ で、私 た ち は
 五18 11 隼 か ぎ を か け ら れ まし た。こ ん な に だ い じ に
 五19 4 隼 、南 へ は こ ば れ まし た。二 日 め の あ さ、や
 五19 7 隼 ん き よ く に つ き まし た。ふ ぐ ろ の 中 か ら だ
 五19 10 隼 の 中 に い れ ら れ まし た。配 た つ を す る 人 は
 五19 11 隼 車 に 乗 っ て 走 り まし た。私 の な か ま は、一
 五20 1 隼 く ば ら れ は じ め まし た。私 も そ の 人 の 手 に
 五20 2 隼 こ ち ら へ ま わ り まし た。し げ っ た 竹 や ぶ の
 五20 3 隼 わ り まし た。し げ っ た 竹 や ぶ の 小 道 を と お
 五20 4 隼 し を 走 っ た り し まし た。な し の 花 の き れ い
 五20 5 隼 る 家 に、は い り まし た。「略。」私は、そ
 五20 7 隼 ん か ん に お か れ まし た。「略。」みつ お さ
 五20 8 隼 く ん か ら 手 紙 が き た よ。」みつ お さ ん が
 五20 9 隼 を 手 に と り あ げ まし た。私 は、ぶ じ に、と
 五20 11 隼 す る こ と が で き まし た。三 一 あ り が と う

五二二 　る日のゆうがたでした。　だいの長い電車
五二四 　て、終点につきました。　あまりこんでいま
五二五 　あまりこんでいましたので、みんな、ぶつ
五二七 　の方へでていきました。　しかし、その中に
五二九 　ろこんで帰っていった子どもがありました
五二一〇 　た子どもがありました。　いちろうさん
五二二 　、いなかにいきました。　ひさしぶりにおじ
五二四 　まっ白にこなこのふいたほしがきなどをいた
五二五 　んかわいがられました。　しかし、きょうの
五二八 　んにむかえにできました。「略。」「略。」「略。
五二九 　とてもうれしかった。「略。」「略。」「略。
五二一〇 　いがってくださったのでしょう。「略
五二二 　はとてもこんでいたんです。　それで、ど
五二三 　、かきさせてくれたんです。　ところが、
五二四 　まっばづえをついた、わかい人がいるん
五二五 　わらせてあげました。「略。」「それも
五二六 　う、それはよかったね。　それでうれしか
五二七 　それでうれしかったの。」「それもあるけ
五二八 　ちをすわらせました。　そのとき、どこか
五二九 　しあけてくれました。　けれども、『略』
五三〇 　うとかけなかったの。「略。」「略
五三一 　それでうれしかったのね。」「略。」「は
五三二 　しているようだったのに、それから、
五三三 　よくなってきました。　ほんとは、それ
五三四 　それでうれしかったです。」「はるこ
五三五 　こして帰ってきました。　駅の出口までくる
五三六 　、でむかえにきていたおねえさんを見つけ
五三七 　えさんを見つけました。「略。」「略。」「
五三八 　がとうございました。　といって、かるく
五三九 　げて、そこをでした。「略。」「略。」「
五四〇 　りがとうっていったのは、どういいうけ

五272会 でいつて帰ってきたのですもの。どこか
 五273会 といったいと思つたけれど、いうところ
 五273会 うところがなかったものだから、それで
 五274会 れであの人にいったのよ。」「《略》。」「へ
 五275会 あのかた、わかつたかしら。」「《略》。」「
 五276会 ら、わからなかつたかもしれません。で
 五2710 にあるいて帰りました。」「《略》。」「《略》。」「
 五282会 んきちか、早かつたね。」「しんきちくん
 五284 んをはじいていました。」「《略》。」「《略》。」「
 五286会 《略》。」「どうしたのだね。」「《略》。」「
 五287会 な本をもらいました。」「《略》。」「《略》。」「
 五2811会 その人からもらつたんです。」「《略》。」「
 五292会 から、うれしかつたというのほどんなこ
 五295会 きあるいていました。一つは大きくて、
 五2911会 《略》。」「いきました。」「《略》。」「《略》。」「
 五303会 たしてもらいました。その荷物は小さいい
 五304会 なかなかおもかつたのですが、ぼくは、
 五305会 て持っていきました。駅につくと、その人
 五307会 とうにすまなかつたね。きみは、ときどき
 五309会 、《略》。」「ときいたので、ぼくは、《略
 五3011会 いと思つていきましたが、なかなかできな
 五3011会 かなかできなかったのです。ぼくにはす
 五311会 はすこしおもかつたんですが、とてもう
 五313会 略》。」「いきました。すると、その人は
 五319会 、ぼくにくれました。それで、ほんとう
 五349 。ガスこんろにかけたかまやなべから、ゆ
 五358 とつています。とれた石炭は、トロツコに
 五361 します。ほりだされた石炭が、山のように
 五367 炭は、どうしてできたのでしょうか。みなれ
 五374 かかつて石炭になったのです。大むかしの
 五383 ちから手紙がきました。そのかたは、ほつ
 五385 とが書いてありました。《略》。」「(二)

五39 3 すがすきて、春がきたからです。山のてつ
五39 5 めがではじめました。ふもとになるにし
五41 2 にだしてやりました。のびはじめた草の
五41 3 した。のびはじめた草の上を、うれしそ
五41 4 にあるいていました。子うしは、小川の
五41 6 とことこ走りまわりました。まいにち、たくさ
五41 11 がとうございしました。みんなだいじにし
五42 2 つかいどうへいったことはありません。
五42 3 す。ひろびろとした、きれいなところだ
五42 7 えがはじまりました。私は、なえはこび
五43 2 たるをみかけました。そちらでも、ほた
五43 5 えてもらいました。ねえさんはいい声
五43 6 さんはいい声でした。ぼくのうちは花屋
五43 8 しょにうたいました。ぼくのすきな花は
五45 8 は、星だ。光った星だ。世界の空の
五46 5 竹やぶのそばを通ったら、おくの方でうぐ
五46 5 でうぐいすの音がした。「略。」というよ
五46 6 というようにきこえた。たちどまると、鳴
五46 7 ると、鳴き声がやんだ。しばらくすると、鳴
五46 8 た、「略。」と鳴いた。春になったばかり
五46 9 と鳴いた。春になったばかりだから、うま
五46 10 。帰りに、また通ったら、もう鳴いてはい
五46 10 う鳴いてはいなかった。 たのしい小道
五48 2 花が――またみつけた、きれいな花を。い
五48 7 けると、いまのぼつたばかりの日の光が、
五48 8 ばいながれこんできた。いい氣持がして、
五49 1 して、たのしくなった。あさの光に、身を
五52 7 おと大通りにでました。いそがしそうに人
五53 2 な星が光っていました。「略。」といって
五53 3 、一ばん星みつけたのね。えらいわね。
五53 5 こも、まるくふとった手をたたきました。
五53 5 った手をたたきました。「略。」大きな声

五五三六 会 「二ばん星みつけた。」大きな声で、は
 五五三七 会 をみながらいいました。「略。」それは、
 五五三九 会 の空で光っていました。「略。」「そーい
 五五四一 会 らちら光っていました。「略。」「略。」
 五五四八 会 な星が光っていました。それから、あたり
 五五四九 会 たりをみまわしましたが、空は、まだ、ほ
 五五五一 会 は、できませんでした。まさをおかあさ
 五五五二 会 のまえにでてみました。三十分ぐらいしか
 五五五三 会 しかたつていなかったのに、もうすつかり
 五五五四 会 に、星がでていました。「略。」と思つて
 五五五五 会 。「さつきみつけた星は、どれだったか
 五五五六 会 た星は、どれだったかしら。」と思つて、
 五五五七 会 て、西の空をみましたが、わかりませんで
 五五五八 会 、わかりませんでした。そこへ、受持のや
 五五五九 会 そつてくださいました。私は、おかあさん
 五五六〇 会 に、学校へいきました。もう、たくさん、
 五五六一 会 、あつまつていました。「略。」私は、「へ
 五五六二 会 、あなたのみつけた二ばん星よ。あれ土
 五五六三 会 へ。」じゅんばんがきたので、みせていた
 五五六四 会 みせていただきました。「略。」「略。」
 五五六五 会 、ばんをゆずりました。はるおは、のぞい
 五五六六 会 は、のぞいていましたが、かげんがわから
 五五六七 会 をそつとおさえました。「略。」あんまり
 五五六八 会 した。「あつ、でた、でた。」あんまり
 五五六九 会 「あつ、でた、でた。」あんまり大きな
 五五七〇 会 まり大きな声をだしたので、あたりの人が
 五五七一 会 りの人がわらいました。「略。」「略。」
 五五七二 会 みんながわらいました。「略。」はるおは
 五五七三 会 みていたいようでしたが、やつと目をはな
 五五七四 会 うさんにゆずりました。「略。」「略。」
 五五七五 会 が、ぼくのみつけた二ばん星かなあ。」
 五五七六 会 もなく帰ってきました。ごろうさんは、「へ

五五九一 会 「略。」といいました。するとほるおも、
 五五九二 会 「略。」といいました。私は、いまみてき
 五五九三 会 。私は、いまみてきた土星を、紙にしていね
 五五九四 会 ておこうと思ひました。八 あさがおの
 五五九五 会 つはじめてさきました。どれも空色です。
 五五九六 会 さがおがさきましたよ。」といいました。
 五五九七 会 「略。」といいました。「略。」「略。」
 五五九八 会 きれいにさきましたね。いい色ですこと
 五五九九 会 えが、たねをまいたのでしたね。「略」
 五六〇〇 会 ねをまいたのでしたね。「略」。「略」
 五六〇一 会 です。この春まいたのです。たねをまい
 五六〇二 会 ます。たねをまいたから、こんなにさい
 五六〇三 会 ら、こんなにさいたのですね。「略」。
 五六〇四 会 からめがでなかつたら——「略」。「へ
 五六〇五 会 わたしが水をやつたんですもの。「略」
 五六〇六 会 あつたつるをのぼしたの、だれかしら。
 五六〇七 会 こさんがひっぽつたの。「略」。「略」
 五六〇八 会 つぼみをこしらえたのは、だあれ。「へ
 五六〇九 会 を、三つもさかしたの、だあれ。」
 五六一〇 会 空色にそめてくれたのは、だれでしょう
 五六一一 会 くなつてしまいました。あさごはんのとき
 五六一二 会 たけではじめてとれたきゅうりをたべまし
 五六一三 会 きゅうりをたべました。「略」。「略」。
 五六一四 会 おかあさんがまいたのだけれど、こんな
 五六一五 会 こんなによくできたのは、おかあさんの
 五六一六 会 、手をやつたりしたじやありませんか。
 五六一七 会 わはしてやりました。けれども、花がつ
 五六一八 会 、みがなつたりしたのは、おかあさんの
 五六一九 会 おわらいになりました。「略」。「略」。
 五六二〇 会 ました。「生まれたときは、ねてばかり
 五六二一 会 は、ねてばかりいたのが、はうようにな
 五六二二 会 るに大きくなつた。「略」。「略」。

五六三三 会 りで、大きくなつたのでしようが、わた
 五六三四 会 力で、大きくなつたと思います。「略」
 五六三五 会 「略」。「生まれたときからせわはして
 五六三六 会 からせわはしてきたが、日に日に大きく
 五六三七 会 に日に大きくなつたのは、おまえひとり
 五六三八 会 さんが、住んでいました。ふたりは、ふるい
 五六三九 会 な家に住んでいました。おじいさんは、あ
 五六四〇 会 いでくらしてました。ある日、おじいさ
 五六四一 会 でてあみをなげました。すると、金のさか
 五六四二 会 ながかかつてきました。金のさかなは、「へ
 五六四三 会 「略」。」といいました。おじいさんは、「へ
 五六四四 会 、はなしてやりました。おじいさんは、う
 五六四五 会 ふしぎな話をしました。「略」。「おばあさ
 五六四六 会 金のさかなをとつたよ。それが、海へ帰
 五六四七 会 てもあけるといつたが、わしはお礼など
 五六四八 会 などももらわなかつた。そうして、青い海
 五六四九 会 海へはなしてやつたよ。」おばあさんは、
 五六五〇 会 礼をもらわなかつたの。せめて、おけの
 五六五一 会 につくればよかつたのに。うちのおけは
 五六五二 会 「略」。」といいました。あくる日、おじい
 五六五三 会 は海へやつてきました。海はすこしあれて
 五六五四 会 すこしあれていました。おじいさんが金の
 五六五五 会 「略」。」とききました。「略」。「略」。
 五六五六 会 おけを持っていました。ところが、おばあ
 五六五七 会 は海へやつてきました。海はにこつていま
 五六五八 会 海はにこつていました。おじいさんが金の
 五六五九 会 よいできてきました。「略」。「略」。
 五六六〇 会 な家がたつていました。おばあさんは、「へ
 五六六一 会 、もういやになつたから、お金持のおく
 五六六二 会 「略」。」といいました。おじいさんは、ま
 五六六三 会 た海へやつてきました。海はあれていまし
 五六六四 会 。海はあれていました。おじいさんが金の

五七〇 ながおよいできました。「略。」「略。」「
五七〇 け けようはいやになったから、お金持のおく
五七六 づつをはいていました。めしつかいたちも
五七六 つかいたちもいました。おじいさんが、「へ
五七二 ごとにおいやりました。それから三日ほど
五七二 じいさんにいきました。「略。」「おじいさ
五七二 さんいよになつた、女王になりたとい
五七二 さん、氣でもちがつたかね。女王さまのよ
五七二 と海へやってきました。海はまっ黒になつ
五七二 なってあれていました。おじいさんが金の
五七三 略。」「とたずねました。「略。」「略。」「
五七三 略。」「といました。おじいさんが帰つ
五七四 略。」「といました。おばあさんは、お
五七四 へ。」「といいつけました。それから一週間も
五七四 一から一週間もたつたころ、おばあさんは
五七五 んをよんでいきました。「略。」「おじいさ
五七五 女王もいよになつた。こんどは、海のぬ
五七五 海へやってきました。海はまっ黒になつ
五七六 のさかなをよびました。金のさかなは、で
五七六 、できていきました。「略。」「略。」「
五七七 できていきました。おじいさんは、す
五七七 のところへ帰りました。みると、まえに住
五七三 と、まえに住んでいた、ふるい小さな家が
五七四 な家がたつていました。入口におばあさん
五七四 さんがすわっていました。こわれたおけが一
五七五 ていました。こわれたおけが一つ、ころが
五七五 、ころがつていました。十 学級日記か
五七九 本かざってありました。かおよりも大きな
五七二 だれがいてくれたのですか。ごこのず
五七四 」「とおっしゃいました。ひまわりの花は、
五七四 ら、持ってきてくれたのです。これで教
五七四 てきてくれたのです。これで教室が明か

五七八 が明かるくなりました。七月十二日 火
五七九 のところにいきました。そうして、川をみ
五七九 、川をみて氣のついたことを書きました。
五七九 いたことを書きました。つぎのような文が
五七九 が、はりだされました。「略。」「略。」「
五八〇 「水の音をきいていたら、せなかがあつく
五八〇 あつくなつてきました。」七月十三日 水
五八〇 は大そうじをしました。ゆかをきれいにふ
五八〇 をきれいにふきました。かべいたもふきま
五八〇 かべいたもふきました。竹のさきにほうき
五八〇 ものすをはらいしました。むすびめがとけて
五八〇 、ほうきがおちました。それが、にしみり
五八〇 せなかにあたりました。にしみりさんはび
五八〇 といつてとびあがったので、みんなわらい
五八〇 、みんなわらいしました。ガラスもきれいに
五八〇 しきがよくみえました。七月十四日 木
五八〇 うは五人も休みました。「どうして、きょ
五八〇 うはこんなに休んだのでしょうか。みんな
五八〇 生がおっしゃいました。みんなは、なま水
五八〇 どを、話しあいました。七月十五日 金
五八二 にいらつしやいました。そうして、私たち
五八二 もおいでになりました。そのお友だちが、
五八二 いとおっしゃいました。そこで、おひる休
五八三 中にしてならびました。先生のお友だちが
五八三 略。」「とおっしゃったとき、だれかが、「へ
五八三 略。」「とわらいだしたので、みんな、いっ
五八三 わらつてしまいました。そこをパチリと写
五八三 パチリと写されました。七月十六日 土
五八三 んなで話しあいました。たかきくんは、え
五八三 記を書くといいました。たなかさんは、お
五八四 さん作るといいました。ささきくんは、星
五八四 しらべるといいました。いとうくんは、海

五八四 、よろこんでいました。いのうえさんは、
五八四 けてみるといきました。「略。」「と、先生
五八四 生がおっしゃいました。十一 りようか
五八五 の葉をはきよせました。そこへ、村の子ど
五八五 がら、走ってきました。「略。」「略。」「
五八五 みんなそろつてきたな。おや、おまつさ
五八五 がない。どうしたのかい。」「略。」「
五八五 なたがみえなかつたから、かぜでもひい
五八五 ら、かぜでもひいたかと思つて。」「略
五八五 あるかと思つていたよ。あはははは。」「
五八五 わりにあつまりました。「略。」「ひとり
五八五 、波にうかんださが島。あれは
五八五 とおうたいになつたとき、おじぎをなさ
五八五 じぎをなさいましたね。あれはどうして
五八五 略。」「とたずねました。「略。」「略。」「
五八五 島においでなつたことがあつた。それ
五八五 さつたことがあつた。それでな、さがが
五八五 、オギヤアとなつたのだよ。それからな
五八五 おぼろさんになつたのだよ。」「こうい
五八五 きにつれていきました。「略。」「みると、
五八五 たけのこがありました。「略。」「略。」「
五八五 下にあたたまをだしたので、『略。』とた
五八五 まをコツンとうつたのだよ。そこで、ゆ
五八五 あなをあけてやつたら、それ、このとお
五八五 んな帰つていきました。りようかんさんは
五八五 いどばたに立ちました。むこうの山から、
五八五 ってくるところでした。「略。」「りようか
五八五 月にみとれていました。十一 ひわの子
五八五 びをとりにいきました。その帰り道に、一
五八五 のひなをひろいました。ひなはたいそう小
五八五 、元氣がなく、死んだようになっておちて
五八五 うになつておちていたのです。「略。」「へ

五95 5 たべさせてやりました。ひなは、みちがえ
五95 7 だん大きくなりました。「略。」さんちや
五95 8 会。「ああ、よかった。おとうさん、ひと
五95 10 んは大よろこびでした。ひなはずめでは
五95 11 ではありませんでした。ひばりでもありま
五95 11 でもありませんでした。あたまかせなか
五96 1 かけて、き色がかった美しい鳥になりました
五96 1 美しい鳥になりました。「略。」と、とな
五96 5 がおしえてくれました。夏休みがすむころ
五96 7 とびまわっていました。「略。」「略。」
五96 8 会。るようになりましたね。かごからだして
五97 3 ちに、秋になりました。まいにち、わたり
五97 6 わのむれもありました。さんちゃんのおう
五97 9 んだりしていききました。「略。」ひわの子
五98 2 鳴き声だと思いました。そうして、「略」
五98 4 さえずりはじめました。いちばんはじめに
五98 5 さんがききつけました。「略。」「略。」
五98 6 会。えずりはじめましたよ。このままかつて
五98 7 会。のままかつておいたらいいでしょう。「
五98 10 そのばんのことでした。パタパタと音がし
五98 10 タパタと音がしましたので、みんながとび
五99 1 とうとうとしました。「略。」という
五99 3 ていってしまいました。ひわは、かたの
五99 4 、ころがっていました。さんちゃんたちが
五99 6 やつと生き返りました。二三日すると、ひ
五99 8 とびまわっていました。「略。」「略。」
五99 9 会。もう、元氣になったようですね。「略」
五99 10 会。鳥はとべなくなったらしい。にがしてや
五99 11 会。してやれなくなつたよ。」おとうさんに
五100 1 、ねこにひつかれた羽がぶらりとなって
五100 4 会。なしてやりたかつたんだけれど。」さん
五100 5 かいってきかせました。ひわは、「略。」

五100 7 つこい声で鳴きました。さんちゃんがべん
五103 2 きます。すずめがきたとき、ひわが、「略」
五103 4 「と鳴いてみせました。すずめは、「略」
五103 7 会。「略。」と鳴きました。ひわが、「略。」
五104 1 会。でいってしまいました。みそざいが、く
五104 2 くらい木の中からきたので、ひわが、「略」
五104 4 会。「略。」と鳴きました。すると、みそざ
五104 6 のかげにかくれました。どこからか、しじ
五105 1 とりとごとをいきました。ひわは、感心した
五105 2 会。た。ひわは、感心したように、いつまでも
五105 2 の声をきいていました。しじゅうからは、
五105 3 の日もやってきました。そのつぎの日もや
五105 4 の日もやってきました。それで、ひわは、
五105 5 きるようになりました。いつのまにか、し
五105 7 へいってしまいました。ひわは、いつも
五105 8 りよろこんでいました。「略。」さんちや
五105 10 も、ひわをほめました。秋になると、また
五105 11 り鳥がやってきました。ある日、二三ぼの
五106 2 の木におりてきました。ひわは、それを見
五106 5 、さかんに鳴きました。旅のひわも、大よ
五106 6 あわせてうたいました。旅のひわが、「略」
五106 10 会。「略。」といいました。「略。」
五107 7 つぎへときかせました。そこへ、さんちや
五107 8 校から帰ってきました。旅のひわは、おど
五107 10 上へにげていききましたが、かこのひわは、
五107 11 略。」をはじめました。「略。」かこの中
五108 5 、なかまをよびました。けれども、旅のひ
五108 8 会。でいってしまいました。近いところに製材
五108 11 会。ばんまでひびきました。近所の人たちは、
五109 1 、まいにち、こまった、こまったといつて
五109 1 会。こまった、こまったといつていました。
五109 1 会。つたといつていました。しかし、ひわは、

五109 5 「と、まねをしました。「略。」」おとうさ
五109 9 がかわいくなりました。
六4 2 にしまいこまれていた、小さな鉄のねじが
六4 3 るいところへだされた。ねじは、おどろい
六4 4 てあたりをみまわしたが、いろいろな音や
六4 5 いろいろな音や、みたこともないような物
六4 6 っぽいわけがなかった。しかし、だんだん
六4 8 であることがわかった。自分のおかれてい
六6 5 のことに考えおよんだ。「略。」ふいにバ
六7 5 くからかだしてきた。男の子と女の子で
六7 7 こらを見まわしていたが、男の子は、やが
六7 10 これといじりはじめた。女の子はただじっ
六7 11 だじつとみつめていたが、やがてこの小さ
六8 3 それをつまもうとしたが、あまり小さいの
六8 4 いのでつまめなかった。やつとつまんだと
六8 4 会。つた。やつとつまんだと思うと、すぐにお
六8 5 ぐにおとしてしまった。子どもたちは思わ
六8 6 わずかおをみあわせた。ねじは、しごと台
六8 6 げにころがっていった。このとき、父の時
六8 7 屋さんがはいってきた。時計屋さんは、「
六8 9 をみて、だしておいたねじのないのに気が
六8 10 のないのに気がついた。「略。」ねじはこ
六8 11 会。の上をかきまわしたのは。ああいうねじ
六9 4 がるほどうれしかった。「略。」と喜んで
六9 6 会。「略。」と喜んで、「略。」と、そ
六9 7 会。と、みつからなかったら。」と、それがま
六9 7 また心配になつてきた。親子はそうがかり
六9 8 かりでさがしはじめた。ねじは、「略。」
六9 10 さんさんがしまわつたが、みつからないの
六9 11 ないのがっかりした。ねじもがっかりし
六9 11 会。ねじもがっかりした。そのとき、いまま
六10 2 まで雲にかくれていたようにがおをだ

六五二、よしおがいました。月はいま雲からで
六五三、みちこがいました。ふみおは、両方の
六五三、とをきいていました。「略。」「略。」「
六五三、走っているといったね。みちこさんは雲
六五四、て、空をみあげました。よしおとみちこが
六五四、でたまりませんでした。ふみおはふと気が
六五四、る木の下へいきました。そうして、しばらく
六五四、しに月をみていましたが、「略。」「と、手
六五四、手まねきをしました。ふたりは木のそば
六五四、ばへ走っていききました。「略。」「ふたりは
六五四、とおりにしてみました。すると、月は枝の
六五四、大きな声をだしました。「略。」「略。」「
六五四、みちこも感心しました。それから、三人は
六五四、れぞれ家へ帰りました。ふみおがねるまえ
六五四、はれわたっていました。ふみおはさっきの
六五四、の下へいってみました。動かないと思って
六五四、動かないと思ってみた月は、もうさっきの
六五四、れてしまっていました。六、かべ新聞
六五四、行することになりました。かべ新聞第一号は
六五四、くることになりました。それから、二組、
六五四、することにきめました。私たち一組のもの
六五四、いろいろ相談しました。手わけをして、や
六五四、のができあがりました。かべ新聞 第一
六五四、することにしました。これには、みんな
六五四、す。みんなのしらべたことをはつぷようし
六五四、みなさんの気づいたことは、なんでも、
六五四、このあいだ雪の降った朝、一年生の子が、
六五四、がついてこびました。そのひょうしに足
六五四、歩けなくなりました。そこを通りかかっ
六五四、そこを通りかかった人が、おんぶして学
六五四、校までつれてきました。この人は、私たち
六五四、ことに気がつきました。それはことばの声

六五九、やすいかと考えました。どうして、ふだん
六五九、ないのかと考えました。そのわけがわかり
六五九、のわけがわかりました。うたうたは、そ
六五九、をしらべてみました。ウスムラサキニ
六五九、から、まえにならったのを思いだして書い
六五九、だして書いてみました。カボチャノハナ
六五九、——七 サキマシタ——五 アンナトコ
六五九、——七 サキマシタ——五 いろはがる
六五九、ものがみつかりました。これがわかったと
六五九、した。これがわかったとき、私はおもしろ
六五九、くてなりませんでした。また、ふしぎでな
六五九、ぎでなりませんでした。みなさん、ためし
六五九、川が流れていました。くつが流れてきま
六五九、くつが流れてきました。そこへきゅうりが
六五九、うりが流れてきました。きゅうりがくつの
六五九、つの中にはいりました。「略。」「といいま
六五九、略。」「といいま。みじかい文 朝
六五九、びんがきらりと光った。アルコールは銀の
六五九、。わたしもせきがでたらいいなあ。手をあ
六五九、ぼんを水の上へおいたら、つるつとすべっ
六五九、ら、つるつとすべった。つかまえて、たな
六五九、まえて、たなにあげたら、あぶくをだして
六五九、ぶくをだしておこった。どうして、八時に
六五九、のなぞの答がわかった人は、紙に書いてか
六五九、ぐまが住んでいました。お友だちと遊ぼう
六五九、谷を歩いていきました。すると、一びきの
六五九、のさるにであいました。「略。」「と、子ぐ
六五九、ていってしまいました。子ぐまはまた歩い
六五九、また歩いていきました。このほか、「雪の
六五九、きれいに写生しました。それを切りとって
六五九、新聞にはりつけました。それは、むしめが
六五九、よくみながら書いたのです。まんがもい

六六八、。まんがもいれました。一組の人がみんな
六六八、なで考えてこしらえたまんがです。クロス
六六八、ズルもこしらえました。ことば遊びも書き
六六八、とば遊びも書きました。この学校の子ども
六六八、家の場所も書きました。かべ新聞の大きさを
六六八、四まいはりあわせたものです。そんなに
六六八、むずかしいことでした。第二号がどんなふ
六六八、雪だるまを作りました。目はななも口もつ
六六八、はなも口もつけました。「略。」「略。」「
六六八、略。」「お話もしたら、なおおもしろい
六六八、んが、帰ってきました。「略。」「略。」「こ
六六八、「まあ、よくできたのね。」「略。」「こ
六六八、いって、いっていったところよ。」「これを
六六八、えさんはわらいました。「略。」「略。」「
六六八、気になっていました。はるえは、まえに
六六八、「こくご」でならった「よみかき」のどこ
六六八、ふと思いだしました。「略。」「略。」「
六六八、かお話をしてあげたらどう。「略。」「
六六八、んなことを考えました。いったい、あの雪
六六八、思えない。死んでいたら、ころがったお
六六八、もない話をもちだしたので、みんながわら
六六八、みんながわらいました。「略。」「略。」「
六六八、らなくなっちゃった。」「おかあさんが、「
六六八、すよ。それを考えたらわかるじやありません
六六八、とおっしゃいました。「略。」「略。」「
六六八、らつきへと考えました。たとえ動いても、
六六八、ろうは思いつきました。あくる朝、おとう
六六八、命のこと、わかったかい。」「ときかれて、
六六八、略。」「と答えました。「略。」「学校へい
六六八、まつの枝をつけました。はるえはそれを見
六六八、略。」「とききました。ごろうは、「略
六六八、いのかなと思いました。ごろうが学校で、

六七八 会 「略。」「わかった、わかった。」いぬ
 六七八 会 わかった、わかった。」いぬは動くし、
 六七八 会 ろうは考えつきました。その夜、ごろうは
 六七八 会 んに、この考えついたことを話しました。
 六七八 会 いたことを話しました。すると、おとうさ
 六七八 会 んは、「よく考えた。命のあるものは、
 六七八 会 」とおっしゃいました。そばからねえさん
 六七八 会 、ねむってしまったら動かなくなるでし
 六七八 会 「略。」といいました。ごろうは、息をす
 六七八 会 なるほどと思いました。「略。」ごろうは
 六七八 会 「こくご」でならった「あさがおの花」を
 六七八 会 花」を思いだしました。そうして、自分と
 六七八 会 のように思われました。八 つりばりをと
 六七八 会 だ。それがどうした。」^{ほおりの}「お願いが
 六七八 会 大きいのをにがした。あ、つりばりをと
 六七八 会 つりばりをとられた。どうしよう。困っ
 六七八 会 どうしよう。困ったな。」三のぼめん
 六七八 会 おもしろくなかった。小鳥一わとれやし
 六七八 会 りえものがなくなつたんですか。」^{ほおりの}
 六七八 会 えは、なにかつつかか。」^{ほおりの}「いいえ
 六七八 会 、つれませんでした。つれないどころか
 六七八 会 をしてしまいました。」^{ほおりの}「どうした
 六七八 会 。」^{ほおりの}「どうしたのだ。」^{ほおりの}「つり
 六七八 会 られてしまいました。」^{ほおりの}「とられた
 六七八 会 。」^{ほおりの}「とられたって。」^{ほおりの}「はい
 六七八 会 、困っていないのです。」年より「で
 六七八 会 ようでございましたか。なにかご用でこ
 六七八 会 海でつりをしていたら、つりばりをとら
 六七八 会 をとられてしまったのです。」海の神「つ
 六七八 会 困ってしまいました。そこへ年をとった
 六七八 会 。そこへ年をとったかたがあらわれて、
 六七八 会 えてくださいました。それで、いまここ

六九三 会 まここへやってきたところです。」海の
 六九三 会 海の神「そうでしたか。それはお困りで
 六九三 会 よんでまいりました。」海の神「これでみ
 六九三 会 ばりをとっていったものはないか。」魚
 六九三 会 りらくになりました。」女の人はつりば
 六九三 会 しゅうございました。」^{ほおりの}「ありがと
 六九三 会 たいとないていた、たいも喜び、お
 六九三 会 じいさんにいただいた古いめがねのたま
 六九三 会 んにかつていただいた小さな虫めがねがで
 六九三 会 な虫めがねがでてきた。「略。」と思ひな
 六九三 会 いものがみつかった。」と思ひながら、
 六九三 会 をのぞいたりしていた。そのうちに、ふと
 六九三 会 しろいことを発見した。左の手に、めがね
 六九三 会 、目から遠くはなした。すると、向こうの
 六九三 会 く、さかさまにみえた。そのさかさまにみ
 六九三 会 持って、のぞいてみた。どこかの屋根が、
 六九三 会 うの家の屋根であつた。「略。」こう思ひ
 六九三 会 さんのお話にきいた望遠鏡が、できるか
 六九三 会 していらなくなつた。ぼくは画用紙をと
 六九三 会 は画用紙をとりだした。そうして、その一
 六九三 会 いをぐるぐるまいた。ちようど、めがね
 六九三 会 めがねのたまをはめた。きちんとはまった
 六九三 会 た。きちんとはまったとき、また紙を糸
 六九三 会 はまったとき、また紙を糸できりきりと
 六九三 会 、動かないようにした。これで、一本のつ
 六九三 会 のつがでえあがつた。つぎに、もう一ま
 六九三 会 を、ぐるぐるまいた。そうして、さつき
 六九三 会 虫めがねをとりつけた。こうしてできた二
 六九三 会 けた。こうしてできた二本のつは、うま
 六九三 会 る。「さあ、できたぞ。うまくみえるか
 六九三 会 、そとをのぞいてみた。長い物がぼんやり
 六九三 会 うちに、はっきりした。電柱だ。はりがね

六九三 会 さんのところへいった。「略。」おかあさ
 六九三 会 うにして、つれてきた。そうして、ぼくの
 六九三 会 鏡をのぞいてもらった。「略。」「略。」
 六九三 会 鏡をのぞいて楽しんだ。(二) 弟は、二
 六九三 会 「略。」ときこえたので、にいさんが、
 六九三 会 んなで大わらいをした。弟のことばをまね
 六九三 会 て、「略。」といったのである。ぼくも、
 六九三 会 も、もちろんわらつた。そうして、にいさ
 六九三 会 のうまいのに感心した。弟は、まに、「へ
 六九三 会 を、そのようにいったことがあるのではな
 六九三 会 とばを、さきにいったから感心したのであ
 六九三 会 にいったから感心したのである。そこで、
 六九三 会 をしてやろうと思つた。なにかよいおりは
 六九三 会 はないかと思つていたら、ちようど、空か
 六九三 会 くおんがきこえてきた。弟のだいすきな飛
 六九三 会 て、「略。」といった。いつてから、すこ
 六九三 会 ふしぜんだなと思つた。みんなあまりわ
 六九三 会 が、「略。」といったので、みんなは、こ
 六九三 会 れで大わらいとなつた。ぼくのまねはしく
 六九三 会 くのまねはしくじつた。しかし、ぼくは、
 六九三 会 ろいことに気がついた。弟ははながつま
 六九三 会 いうことに気がついたのである。ぼくは、
 六九三 会 だろ、と考へてみた。そのわけは、すぐ
 六九三 会 すぐけんとうがついた。はながつまつた
 六九三 会 いた。はながつまつたために発音ができな
 六九三 会 ということを、考へたことがなかった。こ
 六九三 会 考へたことがなかった。これはおもしろい
 六九三 会 ろいぞとぼくは思つた。では、なんとい
 六九三 会 「ム」といつてみた。苦しい。はなから
 六九三 会 ことはたしかとなつた。自分ではなをつま
 六九三 会 ゆうにおかしくなつた。これなら、弟のま
 六九三 会 わけはないぞと思つた。なんでも、「ナ」

六二〇²^(会) あ、よくできましたね。」と、ほめてく
六二〇³ ほめてくださいました。「略」。「略」。
六二〇⁸ 上にのせておきました。「略」。ぼくは、
六二〇⁹^(会) いいな。かわいたら、糸目をつけて、
六二〇¹¹ てたまりませんでした。十一 うさぎさ
六二一³ うさぎさんがいました。ある日のこと、五
六二一⁸ したりして遊びました。そこへ、おさるさ
六二一⁹ さんがやってきました。「略」。うさぎさ
六二二³ うと、話しあいました。「略」。うさぎさ
六二二⁶ んにながてやりました。おさるさんは、き
六二二⁸ かさを受けとりました。うさぎさんたちは
六二二⁹ の木の下で遊びました。そこには、くるみ
六二二¹⁰ ころと落ちていました。うさぎさんは、く
六二三² たべることにしました。「略」。そういい
六二三⁸ 、りすさんがきました。「略」。「略」。
六二四²^(会) 「たくさんとれたね。ぼくにもちよう
六二四⁸ いしようにたべました。「略」。「略」。
六二六⁴ なをほりはじめました。まえ足でほって
六二六⁵ 土をはじいだしました。あなはずんずん長
六二六⁶ 長くなっていきました。「略」。「略」。
六二六⁹ なり、廣くなりました。「略」。「略」。
六二七⁴ て、おにをきめました。おにが、目をつぶ
六二七⁷ 略」とさげびました。四ひきのうさぎさ
六二七⁸ 中を走っていききました。「略」。「――」「
六二八² さがしにでかけました。おにの足をきい
六二八⁴ は、うまくにげました。おにがあちらから
六二八⁶ こっそりわたりました。かくれているうさ
六二八⁸ て、うまくにげました。ところが、ぴぎ
六二八⁹ なが、あわててにげたので、トンネルのさ
六二九¹¹ がりこんでいきました。「略」。新しいお
六二九¹^(会) ました。「みつけた。」新しいおにがき
六二九² またはじめようとしたとき、トンネルの入

六129 4 れはたぬきさんでした。たぬきさんは毛を
六129 7 会 「略」。「どうしたの、たぬきさん。」
六130 7 わいそうになりました。うさぎさんたちは
六130 10 へいってしまいました。それをみて、たぬ
六131 1 、大声でわらいました。「略」。「うさぎさ
六131 4 会 ンネルがほしかったのさ。このあたたか
六131 5 会 りとねむりたかったのさ。」うさぎさん
六131 7 らんで、話をしました。「略」。「略」。
六132 9 さんがあらわれました。「略」。「略」。
六133 4 会 つぺんか。わかった。」しかさんは、の
六133 5 山の方をみあげました。「略」。「略」。
六133 10 会 「略」。「勝ったものになにもないな
六134 1 は、もし自分が勝ったら、このしかの角で
六134 3 会 わり、ぼくが負けたら、この角を、おつ
六134 5 、困ってしまいました。どうせ、足の早い
六134 9 人。しかさんに勝ったところで、あの角を
六134 10 きません。角をとったところで、なんにな
六135 1 たちは話しあいました。「略」。「うさぎさ
六135 3 かさんとならびました。しかさんは、「略
六135 5 のいい声をかけました。五ひきのうさぎさ
六135 8 ように走りだしました。ささの中、やぶの
六136 3 てふりたて走りしました。ところが、ぶどう
六136 4 角がひっかかりました。「略」。「しかさん
六136 6 と、こんどはたおれた木のみきにトンとけ
六136 7 ころりところげました。「略」。「ぶんぶ
六136 10 んにたどりつきました。そこには、もうう
六136 11 たちはいませんでした。そうして、木の切
六137 2 ンで書いてありました。「略」。「略」。
六137 3 会 私たちが勝ちましたよ。けれども、あな
六137 8 んどん追いかけてました。うさぎさんたちは
六137 9 みねを一つこえました。長い森をくぐりま
六137 10 長い森をくぐりました。そのうちに、しか

六137 11 はぐれてしまいました。やがて、うさぎさ
六138 1 岩のところになりました。「略」。「略」。
六138 2 会 「ああ、こわかった。」「略」。「略」。
六138 3 会 「こまできたら、もう安心だね。
六138 4 会 「略」。「よかった、よかった。」五ひ
六138 4 会 よかった、よかった。」五ひきのうさぎ
六138 6 り休むことにしました。ところが、この大
六138 7 らさんがねむっていたのです。うさぎさん
六138 8 しも知りませんでした。とらさんは、晝ね
六138 9 んは、晝ねをしていたのですが、うさぎさ
六139 1 さましてしまいました。「略」。「とらさん
六139 2 会 いごちそうができた。」とらさんは、そ
六139 4 ちの方をのぞきました。五ひきのうさぎさ
六139 5 もんだりにしてました。とらさんは、いき
六139 8 ような声をたてました。うさぎさんは、び
六139 10 つぶしてしまいました。「略」。「のそり、
六139 11 会 ところへきてくれた。おなかがべこべこ
六140 2 そばに歩いてきました。うさぎさんたちは
六140 5 ださいと、お願いしたところで、ゆるして
六140 8 せなかをおさえました。うさぎさんたちは
六140 10 においのりをしました。そのとき、「略」
六141 2 うな声がひびきました。それは、もう一ひ
六141 3 びきのとらさんでした。「略」。「略」。
六141 4 会 にうさぎをみつけたのだ。あの谷をわた
六141 5 会 、ちゃんとみつけたのだ。そこから、あ
六141 5 会 、あとをつけてきたのだ。」「略」。「へ
六141 7 会 たべようとしていたところだ。よこどり
六142 1 んにとびかかりました。二ひきのとらさん
六142 2 みあいをはじめました。上になつたり、下
六142 3 下になつたりしました。そのあいだに、う
六142 5 そこをにげだしました。どんどん、どんど
六142 6 、どんどんにげました。山を、いくつも、

六142 7 、いくつもこえました。谷川にそって、山
六142 8 ふもとにできました。やっとしずかな廣
六142 9 な廣い野原にできました。野原には、日の光
六142 11 つ白にさいていました。おなかのすいた五
六142 11 した。おなかのすいた五ひきのうさぎさん
六143 1 ローバーをたべました。みつばちさんと
六143 6 たいながらいいました。五ひきのうさぎさ
六143 9 ありがたく思いました。
七4 4 どこかで小鳥が鳴いた。チチ、チチ、ピー
七4 8 にしんこきゅうをした。「略」。「かしの木
七5 3 がななめにさしてきた。校舎の半分が光つ
七5 3 。校舎の半分が光った。校庭のつゆもいっ
七5 4 ゆもいっぺんに光った。白いちようが、う
七5 5 光の中をおよいでいたが、こんどは、思い
七5 6 すべに色の空にきた。「略」。「かばんを
七5 7 会 空にきた。きたきた。やっぱりあの
七5 7 会 きえた。「きたきた。やっぱりあの男の
七5 7 会 りあの男の子だった。きょうは、ぼうし
七5 10 ぼこのかげにかくれた。つきからつきへと
七5 11 、いちどに花がさいたようだ。あちこちの
七6 1 て、教室も目がさめた。わらい声がはじけ
七6 3 おけいこがはじまった。「略」。「略」。
七7 3 会 く子ども、ならったばかりの唱歌を、大
七7 8 会 りたい。風になったら、学校の中を、ち
七8 2 もそんなことを考えた。そうじがはじまっ
七8 3 。そうじがはじまった。渡りろうかをとお
七8 6 いなくなってしまう。教室のまどは、ど
七8 10 よく室にひがともった。白いカーテンが黄
七9 2 くる。星のちらばった青い夜空は、子ども
七9 3 会 たしをうえてくれた卒業生たちは、どこ
七9 5 会 まで、わたしのみたこと、きいたことを
七9 5 会 のみたこと、きいたことを話したら、い

七29 11 金 なぎにかわつていた。弟が、ぼくよりさ
 七30 1 金 に、それをみつけた。」そこへ、はるお
 七30 3 金 ちゃん、帰つていたの。まだかと思つた
 七30 3 金 の。まだかと思つた。」母「いま、にいさ
 七30 4 金 よんでもらつていたところよ。きょう、
 七30 5 金 、先生にほめられたんですつて。」はる
 七30 11 金 てる。母「どうしたんです。そんな大き
 七31 3 金 兄「ちようになった、ちようになった。
 七31 4 金 た、ちようになった。」はるお「ほんと
 七31 9 金 にみどりをとかしたような、美しい羽で
 七31 11 金 「あの羽をしぼったら、きれいなしるが
 七33 5 金 たりが、いま生まれたばかりのちようちよ
 七34 3 金 、人でもいいでした。」「略。」「
 七34 7 金 する女の人もありました。私と弟のさぶろう
 七34 8 金 うは、乗るには乗つたものの、動くことさ
 七35 1 金 すがりついていました。それでも、汽車が
 七35 4 金 、思われるほどでした。私は、ありつたけ
 七35 6 金 両手をつぱりました。家をでるとき、お
 七35 9 金 、「もう二どもいったことがあるのですも
 七35 11 金 さぶろうをつれてきたのでした。」「
 七35 11 金 をつれてきたのでした。」「
 七36 3 金 に困つてしまいました。」「
 七36 6 金 中でいのつていました。」「
 七36 8 金 頭の上で声がしました。すぐしろのおぼ
 七36 10 金 心配そうにいました。すると、なんだか
 七37 1 金 からだがらくになったような気がしました
 七37 1 金 たような気がしました。私は、さぶろうの
 七37 4 金 、「。」ときいてみました。人ごみのうすぐら
 七37 5 金 と、私をみあげました。だからが、「
 七37 8 金 が、「略。」といつたので、みんながわつ
 七37 8 金 がわつとわらいました。そのとき、ふと上
 七38 1 金 こしらえてくれたのです。私は、思わ

七三八三 「と、頭をさげました。「略」。うしろの
七三八五 んがいつてくれましたので、私は、人と人
七三八七 けていこうとしました。しかし、弟の手を
七三九一 が、「略」といったかと思うと、いきな
七三九四 えへ、つきだしました。おじさんは、わら
七三九六 つぎの人に渡しました。それから、つぎか
七三九八 と、送ってくれました。はじめ、さぶろう
七三九一〇 私の方をみていましたが、三人め、四人め
七四〇一 をたててわらいました。乗客は、高いとこ
七四〇三 、みおくっていました。私は、いそいで、
七四〇四 あとを追いかけてました。三郎は、だれかに
七四〇五 かにゆずってもらった座席の上に立って、
七四〇九 中でお礼をいしました。「(二) 私は、D・
七四一二 ど、かふんにまみれたみつばちのようにな
七四一三 、汽車でねむっていた。ふいに、はくしゅ
七四一四 、はくしゅがおこった。目をさますと、向
七四一五 りの青年が立っていた。かれは、むねに、
七四一六 、大きなびかびかしたアコーデオンをだ
七四一六 ツの曲をひきはじめた。汽車は、かなり早
七四一八 のからだはゆれていたが、ひく手にくるい
七四一八 手にくるいはなかつた。かるやかなしらべ
七四一九 みからすみまで流れた。青年は、つづいて
七四一〇 りうたをひきはじめた。ごくありふれた曲
七四一一 めた。ごくありふれた曲であつたが、旅を
七四一一 ありふれた曲であつたが、旅をしてきた私
七四一一 つたが、旅をしてきた私には、しみじみと
七四一二 、しみじみときかれた。汽車はトンネルに
七四一二 はトンネルにはいった。しかし、青年は、
七四一三 んにひきつづけていた。トンネルをでたと
七四一四 いた。トンネルをでたとき、向こうの席で
七四一五 と、大きな声をだした人があつた。みると
七四一六 声をだした人があつた。みると、しらがの

七四三三 みんなこの老人をみた。「略」。はくしゅ
七四三四 い旅をしていました。けれども、きょう
七四三八 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四三九 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四〇 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四一 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四二 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四三 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四四 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四五 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四六 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四七 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四八 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四四九 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五〇 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五一 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五二 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五三 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五四 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五五 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五六 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五七 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七四五八 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五五九 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六〇 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六一 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六二 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六三 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六四 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六五 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六六 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六七 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六八 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五六九 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七〇 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七一 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七二 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七三 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七四 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七五 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七六 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七七 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七八 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五七九 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八〇 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八一 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八二 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八三 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八四 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八五 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八六 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八七 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八八 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五八九 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九〇 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九一 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九二 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九三 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九四 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九五 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九六 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九七 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九八 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七五九九 〇。はなはだですぎたことかもしれませ
七六〇〇 〇。はなはだですぎたことかもしれませ

七四八九 ようけんめいにやった。はじめに、ひがし
七四九〇 がし村の学校とやった。ぼくのほうは、セ
七四九一 が外野へでてしまったので、あいてのセン
七四九二 「略」とさわいだ。それで、内野の人
七四九三 人はいっしょになったので、かえって、ぼ
七四九四 ぼうが勝ってしまった。第二回めには、に
七四九五 の学校としいいをした。これも勝った。さ
七四九六 をした。これも勝った。さいごに、町の学
七四九七 校とやることになった。あぶなかつたが、
七四九八 なつた。あぶなかつたが、わずかのちがい
七四九九 ずかのちがい勝った。ぼくは、うれしさ
七五〇〇 さでいっぱいになった。ドッジボール大
七五〇一 ール大会がはじまつた。どの学校のせんし
七五〇二 整列して、式をあげた。はじめに、ぼくの
七五〇三 いをすることになった。ぼくたちは、コー
七五〇四 、コートへでていった。たかやま先生が、
七五〇五 元氣づけてくださった。「略」と、用意
七五〇六 、用意のふえが鳴った。しんぼんの先生が
七五〇七 「略」といわれた。ぼくらのほうのボ
七五〇八 をつかうことになった。ふえがまた「略
七五〇九 、しあいがはじまつた。ぼくらのほうが、
七五一〇 、外野にでてしまった。ぼくもあてられた
七五一一 た。ぼくもあてられた。ひがし村の学校の
七五一二 「略」とさきんだ。ぼくは氣が氣では
七五一三 声をたてる。のこつたものがふんとうした
七五一四 たものがふんとうした。やがて、「略」。
七五一五 「と、ふえがひびいた。思いがけなく、ぼ
七五一六 ぼくたちの勝となった。「略」。しんぼん
七五一七 は場所をこうたいした。すぐまた、しあい
七五一八 、しあいがはじまつた。むちゅうでやつて
七五一九 と、「略」と鳴った。どちが勝つたか
七五二〇 った。どちが勝つたかと思つて、心配し

752 7 ぼくらのほうが勝った。うれしいような、
 752 8 ないような気がした。第二回は、にし
 752 9 校とやることになった。このときは、ぼく
 752 11 に、勝つことができた。こんどは、さいご
 753 5 はげましてくださった。なんだか、向こう
 753 7 「略」はじまった。「略」おうえん
 753 11 どん、あてにあてた。あいてのセンター
 754 1 は、ぼくをねらった。ボールがビュッと
 754 1 ビュッととんできた。ぼくは、しつかり
 754 2 すぐセンターに渡した。ボールは、すばや
 754 3 やくあちこちにとんだ。そのたびに、「略
 754 3 」という声がおこった。ふいに、ボールが
 754 4 のところにとんできた。ぼくはよこだきに
 754 5 よこだきに受けとめた。あぶなくころびそ
 754 5 くころびそうになった。「略」はくしゅ
 754 6 「はくしゅがおこった。ぼくたちの勝であ
 754 7 って、終りの式をした。ぼくは、うれしく
 754 8 胸がどきどきしていた。式をすませてもど
 754 10 な、にこにこしていた。(二) しかし、
 755 7 はつきりとえがかれた一つのかたちは、ま
 757 3 る。ろうかを曲がったら、ふっと、風がふ
 757 4 っと、風がふいてきた。おかあさんの鏡、
 757 7 びき、つかまえました。雨がはれて、にじ
 758 1 にじが大きくできました。たんぼの上で、つ
 758 2 めがちゅう返しをした。あさがおの花が、
 758 5 柱時計がとまりました。黄色いやまぶきの
 759 1 のは、みじかくなった文ですが、まだ、み
 759 2 だ、みがきあげられたことばということは
 759 8 とからとびこんできた。よっちゃんたちの
 760 5 りして、帰っていった。よく落ちるかきの
 761 3 こかへいってしまったのに。まよったせみ
 761 4 まったのに。まよったせみが、かきの木に

761 5 やって、にげていった。ひとところで、か
 763 4 つくものがなくなった豆のつる。夏の風が
 764 5 さん。毎日書いてきたあさがお日記。はつ
 764 5 日記。はつ花のさいたこと、けさ書く。い
 765 7 いく。もやのかかったおきの島、ポンポン
 768 7 一つです。心に思ったことを、はつきりと
 770 2 がすむのをまっていたのか、すぐうしろに
 770 4 、のっそりとでていた。もやが深いから、
 771 2 ぐっしりとぬらした。うまもうまかたも
 773 4 いているのかと思ったら、まあ、子どもが
 773 6 子どもがわらっていたんだよ。みんな、集
 775 1 甲「どこへいったのだらうね。」乙「ち
 775 2 なくなってしまった。さて、どこへいっ
 775 3 さて、どこへいったものかしら。」ふた
 776 5 たりは、びっくりした顔で、甲乙「それで
 776 7 「旅人は、おちついたことばつきで、旅人
 777 10 甲「どこでみましたか。」旅人は、それ
 778 1 甲「それから、つけた荷がありましたね。
 778 1 けた荷がありましたね。」甲乙「ありまし
 778 2 甲乙「ありました。」旅人「その荷は麦
 778 6 、「そのらくだをみたのではありません。
 778 8 かにおききになったのですか。」旅人「い
 778 9 旅人「いいえ、みたのでも、きいたのでも
 778 9 みたのでも、きいたのでもありません。
 778 10 顔をみあわせていたが、甲「どうもおか
 779 10 こかへつれていったのにそういない。」
 780 3 どもは、麦をつけたらくだをつれて、さ
 780 4 くを通っていましたが、とちゅうでひと
 780 5 むってしまいました。」裁判官「それで、
 780 6 「それで、どうした。」乙「目がさめてみ
 780 8 さがして歩きましたが、みあたりません
 780 9 、この人であったのです。」裁判官「そ

780 11 「らくだをにがしたのではないか。」と、
 781 6 とを知っていました。そのとおり、私ど
 781 8 とも知っていました。しかも、左の足の
 781 10 にまだ、知っていたかね。」乙「はい、知
 781 11 い、知っていました。らくだのまえ園が
 782 2 のうえ、つけていた荷物の品まで、知っ
 782 4 「らくだをぬすんだのは、この男にちが
 782 6 とは、よくわかった。」旅人をみて、裁
 782 11 がつづいていました。それなのに人の足
 783 2 こからにげてきたのではないかと、思
 783 2 はないかと、思ったのです。」裁判官「な
 783 4 、どうしてわかったのかね。」旅人「それ
 783 6 ばかりたべてあったからです。」裁判官
 783 9 さくなっていました。」裁判官「では
 783 11 とは、なぜわかったのか。」旅人「草をく
 784 1 人「草をくいとったあとをみますと、か
 784 2 いる葉がありました。それで、歯が二三
 784 3 ないと、考えました。」裁判官「きいてみ
 784 6 、どうしてわかったのでしょうか。」乙「そ
 784 7 とが、なぜわかったのでしょうか。裁判官
 784 11 、麦がこぼれていたからです。」裁判官
 785 2 よし、よくわかった。らくだは、あなた
 785 3 、あなたがぬすんだのではない。もう帰
 785 6 の旅人をうたがったのも、わりはない。
 785 7 の答で、知っていたわけがはつきりした
 785 8 わけがはつきりしたでしょう。もう、う
 785 8 うたがいははれたことと思う。早くい
 786 3 かうことになりました。先生が、黒いうさ
 786 5 ていらっしやいました。私たちで、めかた
 786 5 、めかたを計りました。黒うさぎ 390
 786 8 晴 20度 草をやったら、3びきとも、せ
 786 8 、せつせとたべました。うさぎはどんな草

七872 てみることにしました。きょうは、れんげ
 七873 たねの葉をやりました。4月30日 (月)
 七879 ても喜んでたべました。5月5日 (出)
 七882 とじゃがいもをやったら、黒と白が、けん
 七883 んかをしてたべました。5月6日 (出)
 七885 べとおおばこをやったら、にんじんをやっ
 七885 ら、にんじんをやったときのように、喜ん
 七886 に、喜んでたべました。5月20日 (出)
 七889 、まえにたべのこした古い草は、ふみつけ
 七894 、13びきになりました。白うさぎが9ひき
 七895 を1びきもらいました。5月28日 (月) 晴
 七897 晴 23度 よく晴れた日には、とても元氣
 七898 うさぎでも、くもった日や雨降りの日は、
 七902 24度 よくみていたら、ねこが顔をあら
 七904 や顔をなでていました。5月31日 (水)
 七907 うしろ足で立ちました。が、すぐ、まえ足
 七908 おろしてしまいました。6月25日 (月)
 七910 、水の中へいれてみたらうさぎました。うさ
 七911 りてみたらうさぎました。うさぎのふんはま
 七914 るようにして、ぬれた草はやらないように
 七917 26度 私が麦をやったら、白いうさぎは、
 七919 に乗って、たべました。7月20日 (金)
 七922 屋のそうじをしました。小屋からだすとき
 七923 な喜んですぐでましたが、1びきの白いう
 七925 て、そとへだしました。だすときに、わら
 七926 りして、あばれました。7月24日 (火)
 七928 毛の長さを計ってみたら、白は2cm、黒も
 七929 、茶は1・5cmでした。そうじをしようと
 七931 て、かごの中へいれたら、キューと、高く
 七931 ーと、高く鳴きました。8月2日 (木)
 七933 29度 朝、いつてみたら、右から四ばんめ
 七934 ひき生まれていました。8月4日 (出)

七936 やに、えさがなかったの、かこいの鉄ぼ
 七937 を、かじっていました。子うさぎの生まれ
 七938 。子うさぎの生まれた、右から四ばんめの
 七939 が、たくさんいました。9月3日 (月)
 七942 は耳にけがをしました。ほかのうさぎがか
 七943 ほかのうさぎがかんだのです。しばらく動
 七943 たそうにしています。9月6日 (水)
 七945 のところへいつてみたら、暑いのでねむ
 七946 のでねむっていました。あと足を長くのぼ
 七948 の下にいていました。10月23日 (火)
 七952 とびます。寒くなったので、むしろで戸を
 七952 こしらえてやりました。11月11日 (出)
 七954 度 けさ、いつてみたら、左がわのへやに
 七956 くさんぬけていました。よくみると、おく
 七958 のようなふわふわした毛が、いっぱいはい
 七959 ばいはいっていました。その毛にくるまっ
 七9510 の子が7ひきいました。1びきは白で、あ
 七9510 ぽい色をしていました。11月13日 (火)
 七9510 るくなっていました。おやうさぎがし
 七9510 る。おやうさぎがしたのです。
 七962 度 7ひきの生まれたばかりの子うさぎは
 七967 もう1びきは黒でした。ねずみ色の4ひき
 七969 っかり毛がはえました。11月25日 (出)
 七973 らはいだしてきました。草のそばにきて、
 七973 、口をくつつけましたが、草はたべません
 七974 草はたべませんでした。11月26日 (月)
 七977 らでて歩いていました。そうして、にんじ
 七978 葉を、たべていました。黒の子うさぎが、
 七9710 、のませませんでした。うさぎは、人がみ
 七983 度 朝早くいつてみたら、子うさぎは果の
 七984 、草をたべていました。お晝ごろみたら、
 七984 ました。お晝ごろみたら、子うさぎは、7

七985 らでて歩いていました。12月1日 (出)
 七988 かたを計ってみました。母うさぎは4kg
 七989 いので260gでした。12月2日 (出)
 七992 毛の長さを計りました。耳の長さも計りま
 七992 耳の長さも計りました。耳の長さは、白と
 七993 ねずみ色は6cmでした。12月4日 (火)
 七995 晴 14度 けさみたら、母うさぎと7ひ
 七997 じんをたべていました。よいぐあいに、み
 七998 るので、安心しました。うまれるときは
 八43 うの人氣者がいました。西洋の子どもだろ
 八49 かわれるようになったかといえは……。秋
 八53 通りを歩いていたら、あるデパートの
 八55 店をひろげていました。小鳥屋というより
 八56 、ほおろ屋といったほうがいいかもしれ
 八57 しか賣っていませんでした。……。そ
 八58 べつで、そばにすえた小さなかごの中から
 八511 り、口さきにくんだえさをとらせたり―
 八61 黒山の人だかりだったのです。私も、すっ
 八62 て、しばらく見物したのち、その一わを買
 八64 じに持って帰りました。その晩から家族の
 八65 う名がつけられました。だんだんなれて、
 八66 もとまるようになったばかりか、頭の上に
 八68 つくようになりました。それどころか、自
 八611 うばんしたりしました。客がきてるとき
 八75 指で追ったりしました。すると、だんだん
 八76 ろげ落ちたりしました。朝の早いうちの小
 八84 ちがうと、本でよんだためです。たとえば
 八811 オがすきになりました。ピアノのほうでも、
 八91 でも、その氣になったらしく、ときたまそ
 八96 のあわてかたといったありません。びっ
 八911 うなきかんぼうでした。たとえば、近所の
 八109 、毎日なにかかわったことをしてかしては

八11 1 て学校から帰ってきたすえの女の子が、茶
 八11 2 、ひょいとふみこんだたん、うちがわで
 八11 2 むじやきに遊んでいたピオを、かた足でふ
 八11 3 た足でふんでしまったのです。「略。」と
 八11 5 でなく、茶のまにいたうちじゅうのものが
 八11 6 オをひろいあげました。すると、あわれに
 八12 1 手あてをつくしましたが、それなり、まも
 八12 1 く息をひきとりました。みんなないて――
 八12 3 目をなきはらしましたが、もうどうするこ
 八12 4 から、つめたくなつたからだをわたにつつ
 八12 8 とにうめてやりました。そうして、「ピオ
 八12 10 ピオのはか」と書いた、小さなせきひを立
 八12 10 ひを立ててやりました。かわいいものをな
 八12 11 わいものをなくしたばかりでなく、私は
 八13 1 オの信頼をうらぎつたのが、かなしくてな
 八13 1 くてなりませんでした。ころしたのは、も
 八13 1 せんでした。ころしたのは、もちろんあや
 八13 2 、信用してくれていたものを、あやまちの
 八13 3 めにあわれに死なせたというなさけなさは
 八13 4 ようのないものでした。それから十年、い
 八13 7 のふかい朝の野にでたとき、「略。」だの
 八14 3 の皮に生みつけられた、あふらせみのたま
 八14 4 のたまごがありました。親ぜみが、あのほ
 八14 5 、あのほそくがった口のさきで、かたい
 八14 6 けておいてくれましたので、寒い冬もぶじ
 八14 7 こすことができました。春がきても、たま
 八14 8 まごはそのままでした。暑い夏がやってく
 八14 9 はじめてかえりました。二ミリほどある、
 八15 3 しておいていきました。地面におりた虫た
 八15 4 ました。地面におりた虫たちは、やがて、
 八15 6 かかれてしまいました。地の中はどこもま
 八16 7 にて、ほそいとがった口をもっています。

八16 10 親のちぶさにすがつたようなもので、とり
 八16 11 なもので、とりついたがさいご、よいいに
 八17 3 、だれも教えてくれたことではありません
 八17 6 、しぜんこそなわつたかしこで、これで
 八20 3 。七年の月日がたつたころ、せみの子たち
 八20 4 もう大きくなりきつたことを知ります。そ
 八20 9 りのくらくらなかけた夕ぐれをみはからつ
 八21 2 (二) あめ色をした六本足の虫が、こし
 八21 5 すずめにみつつけられたたいへんです。地
 八21 6 だけがはえていました。せみは、さっそく
 八21 8 いあがつていきました。地表から一メートル
 八21 8 メートルほどのぼつたところに、小枝がわ
 八21 9 枝がわかれていました。虫は、それにとり
 八22 1 くなつてしまいました。もうすっかりくら
 八22 2 かりくらくなりました。あめ色のせなかに
 八22 4 、われめができました。すると、中から、
 八22 7 がはみだしてきました。せなかがです。
 八22 9 ぶらりとさがりました。足もできました。た
 八22 9 ました。足もできました。ただ、腹の下のは
 八23 3 をうしろにさげました。しばらくそのまま
 八23 5 。やがておきなおったかと思うと、からだ
 八23 7 からはなれていました。みるまに、羽はす
 八24 6 「と鳴きはじめました。このわかいあふら
 八24 8 そろと歩きだしました。はばたきをして、
 八24 8 て、すつととびたつたかと思うと、その鳴
 八24 9 でいってとまりました。そこへなかが集
 八24 11 会のようになりました。やがて死ぬけし
 八25 3 にぎやかに鳴きたてたせみも、やがて、秋
 八26 3 (一) たまでかざった、きれいな四頭びき
 八26 10 野原へおりてきました。そこには、星のか
 八27 2 星のかんむりをつけたむすめたちが、楽し
 八27 4 りして遊んでいました。天帝は、あたりを

八27 6 すようになさいました。それは、天帝のひ
 八27 10 おいでになるのです。けれども、みあた
 八27 11 みあたりませんでした。馬車はふたたび走
 八28 1 ていつてしまいました。やがて、大きな天
 八28 2 川にさしかかりました。川の水は銀色に光
 八28 3 ずかにういていました。川岸にそつて車を
 八28 6 おはいりになりました。すると、さがして
 八28 6 すると、さがしていたはたおりひめが、い
 八28 7 はたをおつていました。そのおり物の美し
 八28 8 おみとれになりました。ひめは、なにも知
 八28 9 ずにおりつづきました。「略。」こうお考
 八29 2 「こうお考えになつた天帝は、そのままそ
 八29 3 ていらつしやいました。すると、黒うしに
 八29 5 かい男にであいました。そのすがたとい
 八29 8 その男にたずねました。「略。」「略。」
 八30 4 きおつきになりました。黒うしは、おどろ
 八30 6 れにあばれました。けれども、けんぎ
 八30 8 ふきつづけていました。黒うしは、にわか
 八30 9 落ちこもうとしましたが、そのせつな、け
 八30 10 ンボンとたたきました。うしは、うまくふ
 八30 11 草をたべはじめました。けんぎゅうは、や
 八31 1 をうばわれていました。天帝は、男らしい
 八31 4 のむこにもりました。ところが、はたお
 八31 8 わすれてしまいました。けんぎゅうも、は
 八31 10 たらかなくなりました。ふたりは、毎日野
 八31 11 しく遊びつづけました。それをみた天帝は
 八32 1 けました。それをみた天帝は、たいへんお
 八32 3 おしまいになりました。はたおりひめは、
 八32 4 おりながらなきました。天帝は、このよう
 八32 8 「とおつしやいました。一年の月日がたつ
 八32 10 ふえをふいてきました。ふたりは、天の川
 八32 11 あうことができました。(二) 天の川

八三三 ように、ぼうつとした銀の川のような光を
 八三六 すと、太陽から発した光が、地球にとどく
 八三六 十年ほどまえに発した光だというわけにな
 八三七 がいらっしやいました。かわいひとりの
 八三七 とはありませんでした。もつとたくさん
 八三七 ておいでになりました。王女がこがね色の
 八三八 「この花が、みたとおりのこがねなら
 八三七 」とおっしゃいました。ある日、王さまは
 八三二 人がはいつてきました。「略。」と、その
 八三六 知らぬ人がいました。「略。」と、お答
 八三九 、お答えになりました。「略。」「略。」
 八三三 八三三 たしの手にさわったものが、みんなこが
 八三三 八三三 んなこがねになったら。「略。」「略」
 八三九 へいつてしまいました。あくる朝になりま
 八三九 あくる朝になりました。王さまは、大喜び
 八三九 おさわりになりました。いすはたちまちこ
 八四一 こがねにかかりました。王さまは、ねどこ
 八四二 おさわりになりました。それもこがねにな
 八四三 もこがねになりました。着物を着ようとな
 八四三 着ようとなさいました。着物もこがねにな
 八四四 もこがねになりました。王さまは、庭へお
 八四五 庭へおでになりました。「略。」こんなひ
 八四九 をおふれになりました。庭の草木は、みて
 八四九 に、ぴかぴかと光ったこがねになっていき
 八四九 ねになっていきました。王さまは、朝ごは
 八四九 がろうとなさいました。まずコーヒーをお
 八四二 こがねにかかりました。さかなをめしあが
 八四三 のさかなになりました。たまごをおとりに
 八四四 をおとりにしました。これもこがねのた
 八四五 のたまごになりました。そのとき、王女が
 八四七 女がはいつてきました。「略。」こういっ
 八四一 さまにだきつきました。「略。」とおっし

八四二 「とおっしやいましたが、王女はなんの返
 八四三 いこがねになっていたのです。王さまは、
 八四四 かなしみにになりました。王女は、王さまに
 八四四 りもたいせつであつたからです。「略。」
 八四六 からです。「困ったことになってしまっ
 八四六 とになってしまった。もし、ひめが生き
 八四九 ぬ人があらわれれば。「略。」「略。」
 八四二 八四二 満足なさいましたか。「略。」「略」
 八四三 八四三 て、こがねになったものにふりかけなさ
 八四三 八四三 ふりかけになりました。「略。」王女は、
 八四四 まにすがりつきました。一まいのシャツ
 八四四 がいらっしやいました。王さまは、ご病氣
 八四六 お苦しみにになりましたが、いくら手をつく
 八四五 病氣をおおしてくれたものには、國の半分
 八四五 、おだしになりました。これをきいて、ち
 八四五 り集まって、どうしたら王さまのご病氣を
 八四五 、相談をはじめました。けれども、これと
 八四五 考えはでませんでした。そこへ、王さまの
 八四六 うものがでてきました。その人は、こうい
 八四五 人は、こういしました。「略。」これをき
 八四五 んお喜びになりました。さっそくけらい
 八四六 いいつけになりました。けらいたちは、あ
 八四六 とさがしまわりましたが、ほんとうに幸福
 八四六 いなかつたりしました。けらいたちは、足
 八四六 てさがしまわりましたが、やはりみあたり
 八四七 みあたりませんでした。王子も、なんとか
 八四七 さがしにでかけました。どんどん歩いてい
 八四七 村にさしかかりました。日がくれましたが
 八四七 した。日がくれましたが、王子は、もうし
 八四七 と、歩いていきました。ところが、そまつ
 八四七 んの小屋がありました。その小屋のそばを
 八四八 のそばを通りかかったときでした。中から

八四八 りかかったときでした。中から人の声がき
 八四八 八四八 に耳をかたむけました。「略。」王子は手
 八四八 八四八 ごはんもいただいた。あとはぐっすりね
 八四八 八四八 さがしもとめていた人だ。」と喜んで、
 八四八 へはいつていきました。中には、うすぐら
 八四八 もっているだけでした。ひとりの男が、い
 八四八 しているところでした。王子は、いままで
 八四八 をこの男に話しました。すると、その男は
 八四八 「略。」と答えました。幸福「幸福」が
 八四八 へたずねていきました。だれでも幸福のほ
 八四八 ようななりをしました。だれかがきいたら
 八四八 した。だれかがきいたら、自分は「幸福」
 八四八 だというつもりでした。そんなまじしいな
 八四八 えてくれる人があつたら、その人のところ
 八四八 いてくるつもりでした。この「幸福」が、
 八四八 ある家がありました。その家のまえにい
 八四八 「幸福」が立ちました。その家の人は、
 八四八 人は、「幸福」がきたとは知りませんから
 八四八 「略。」とたずねました。「略。」「略」
 八四八 としめてしまいました。おまけに、そのこ
 八四八 てるように鳴きました。「幸福」は、さつ
 八四八 めんをこうむりました。こんどは、にわと
 八四八 えへいつて立ちました。その家の人も、
 八四八 人も、「幸福」がきたとは知らなかつたと
 八四八 きたとは知らなかつたとみえて、いやなも
 八四八 でも家のまえに立ったように顔をしかめて
 八四八 「略。」とたずねました。「略。」「略」
 八四八 いため息をつきました。それから、かつて
 八四八 とりに氣をつけました。まずしいこじきの
 八四八 きはしないかと思つたのでしよう。「略」
 八四八 声だして鳴きました。「幸福」はまた、
 八四八 めんをこうむりました。こんどは、うさぎ

八七二 一 うして、目をふさいだが、またさきへん
 八七二 二 たさきへとんでいった。こうして、大きな
 八七二 三 るところへやってきた。そこにはかみが住
 八七二 四 にはかみが住んでゐた。あひるの子は、こ
 八七二 五 こで一晩横になった。つかれて、氣がし
 八七二 六 て、氣がしずんでゐた。朝がた、かみがと
 八七二 六 た、かみがとびおきた。そうして、新しい
 八七二 八 、新しいなかまをみた。「略。」と、かも
 八七二 八 へ。」と、かみがいった。あひるの子は、こ
 八七二 一〇 って休みたいと思つた。また、ぬまの水を
 八七二 一〇 もらいたいとも思つたが、それもゆるして
 八七二 一 一 もらえそうもなかつた。それから二日間、
 八七三 一 にそつとかくれてゐた。すると、そこへ二
 八七三 二 わのがんがやってきた。どちらもたまごか
 八七三 三 まもないものであつた。「略。」と、その
 八七三 五 と、その一わがいった。「略。」このとき
 八七三 六 会 いから、氣にいったよ。どうだ、われわ
 八七三 一〇 略。」と、空で鳴つた。そうして二わのが
 八七三 一 一 まの中に死んで落ちた。「略。」と、また
 八七四 一 略。」と、また鳴つた。がんのむれが、そ
 八七四 二 あいだからとびたつた。また音がひびいた
 八七四 二 た。また音がひびいた。ものすごい鳥うち
 八七四 二 い鳥うちがはじまつたのである。かりうど
 八七四 四 にまちぶせをしてゐた。あしの上に廣がつ
 八七四 五 の枝にもものぼつてゐた。青いけむりが、く
 八七四 六 のようにたちのぼつた。かりいぬが、ピシ
 八七四 七 ぬま地へはいつてきた。あわれなあひるの
 八七四 八 の子はきもをつぶした。頭をねじ曲げてつ
 八七四 九 てつばさの中にゐた。ところが、ちよう
 八七四 一〇 すぐそばに立つてゐた。したは口からたれ
 八七四 一 一 はみにくく光つてゐた。はなをあひるの子
 八七五 一 つきつけて齒をむいた。それからピシヤ、

八五三 こかへいつてしまった。「略。」あひるの
八五六 子は、ため息をついた。「略。」しばらく
八五〇 っとしずかにしていた。そのあいだも、た
八七二 づいて火ふたをきった。しばらくして、や
八七三 、やっとひっそりした。しかし、かわいそ
八七五 る氣にもなれなかった。なん時間もたつて
八七六 ぬま地をにげていった。田や野原をこえて
八七六 どんどん走つていった。(三) くれがた
八七九 うの小屋へやつてきた。小屋はひどくあれ
八八〇 れるかわからなかった。風がひどいので、
八八三 なければならなかった。あらしはますます
八八四 すはげしくなつてきた。あひるの子は、小
八八六 いているのをみつけたので、そこから中へ
八八七 ら中へはいつていった。中には、おぼあさ
八八八 いっしよに住んでいた。ねこは、せなかを
八八九 をだすことさえてきた。にわとりは、足は
八九〇 、いたまごを生んだ。おぼあさは、そ
八九一 のようにかわいがつた。朝になつて、よそ
八九三 なつて、よそからきたあひるの子は、すぐ
八九四 、すぐにみつけられた。ねこはのどを鳴ら
八九六 「略。」とさわいだ。「略。」と、おぼ
八九七 、おぼあさんがいつた。そこで、あひるの
八九八 めしにおいてもらつた。しかし、たまごは
八九九 たまごは生まなかつた。そればかりでなく
九〇〇 とはまつたくちがつた考えをもつていた。
九〇二 った考えをもつていた。にわとりは、「略
九〇三 にすわつてばかりいた。そこへ、さわやか
九〇四 と日の光が流れてきた。あひるの子は、き
九〇五 うにおよぎたくなつたので、にわとりに思
九〇六 へに思はずその話をした。「略。」と、にわ
九〇七 、にわとりがさげんだ。「略。」「略。」
九〇八 さん、氣がくるつたのだよ。ねこにきい

八八二六 会
 のなかまゐりをしたんだもの。それなの
 八八二二 会
 ちはみんなそうしたものだよ。まあ、た
 八八三 四
 の子はでかけていった。そうして、およい
 八八三 五
 いだりもぐったりした。けれども、すがた
 八八三 六
 ものあつかいにされた。(四) 秋がきた
 八八三 八
 た。(四) 秋がきた。森の木の葉がこが
 八八三 八
 がね色や茶色になった。雲は、あられや雪
 八八三 九
 つてひくくたれていた。ある夕ぐれ、太陽
 八八三 一〇
 くしずむときであった。草むらから、大き
 八八四 一
 の一むれがやってきた。まぶしいほど白い
 八八四 二
 曲がる首をもっていた。それははくちよう
 八八四 三
 ははくちようであった。はくちようはみご
 八八四 四
 みへと、とんでいった。高く高くのぼって
 八八四 五
 く高くのぼっていった。あひるの子は、そ
 八八四 六
 ふしぎな氣持になった。あひるの子は、水
 八八四 八
 んな大きな声をだした。あひるの子は、あ
 八八四 九
 ることはできなかった。そうして、はくち
 八八四 一〇
 こまでもぐっていった。あひるの子は、あ
 八八五 一
 、どこへとんでいったのかということも知
 八八五 二
 うことも知らなかった。しかし、いまま
 八八五 三
 れをなつかしく思ったよりも、あの鳥をな
 八八五 三
 鳥をなつかしく思った。それは、うらやま
 八八五 四
 、うらやましく思ったのではない。どうし
 八八五 五
 ような美しさをもらったなどと望むことが
 八八五 六
 のうちに寒い冬がきた。あひるの子は、水
 八八五 八
 なければならなかった。しかし、一晚ごと
 八八五 九
 ん小さくなっていた。あひるの子は、あ
 八八五 一〇
 なければならなかった。とうとうつかれは
 八八六 一
 の中にとじこめられたまま、身動きもせず
 八八六 一
 せずたおれてしまった。あくる朝早く、ひ
 八八六 二
 の農夫が通りかかった。あひるの子をみつ
 八八六 三
 、うちへつれて帰った。すると、あひるの

8946。ういたもみがあつたので、手ですくつてもみがらばかりでした。水をいっぱいいれ
 8947き水をとりかえました。こうすると、なわ
 8949とりかえるときにみたらもみのものほう
 8952しふくらんでいました。 5月5日 (出)
 8954ようなものができました。これが、ほんとう
 8957、もみまきをしました。種もみひたしをし
 8961ちようど10日めでした。はんごにनावし
 8962にするしをつけました。土をあまり深くほ
 8963ないようにまきました。ひたさない種もみ
 8966さない種もみをまいたところには、べつに
 8967しをつけておきました。いつ、めがでるで
 8969みどりのめができました。ひたさないほうは
 8973から3cmのびました。ひたさない種もみ
 8974つとめがでてきました。水にひたしたほう
 8975ました。水にひたしたほうが、1週間早く
 8976、1週間早くできました。 6月13日 (水)
 8979れるようになりました。黄みどりの新しい
 8984田植えのころになったので、しろかきをし
 8984、しろかきをしました。いねがよく根をは
 8986いてこまかくしました。種まきのときとち
 8987は深くたがやしました。 6月27日 (水)
 8989きようは田植えでしたので、みんなうれし
 8991んなうれしうでした。よいお天気で、風
 8991もなくあつい日でした。なわしろからとつ
 8992。なわしろからとつたなえをみんなでわけ
 8992をみんなでわけました。あいだを30cmぐら
 8993そく正しく植えました。1かぶに3本ずつ
 8993かぶに3本ずつ植えたのと、1本ずつ植え
 8994のと、1本ずつ植えたのと二とおりにして
 8995をみることにしました。やく12平方mに1
 8996かぶばかり植えました。これから、水がき

八100 2 いなえができました。これで、もうだい
八100 5 なえのまん中からでた新しい葉が、5 cm ぐ
八100 6 cm ぐらいいりました。どのなえも生き生
八100 7 ちがよいと思いました。7月18日 (木)
八100 9 たくさんでできました。新しい葉は、まる
八101 2 っと日でりがつづいたので、水をやるとう
八101 4 25度 みんなで植えたなえが、いきおいよ
八101 6 んど85 cm になりました。1本ずつ植えたな
八101 6 した。1本ずつ植えたなえが、だいたい7
八101 7 本ぐらいいふえました。3本ずつ植えたの
八101 7 した。3本ずつ植えたのは、9本ぐらいい
八101 8 本ぐらいいふえましたが、いちばん多いの
八101 9 ので15本になりました。8月18日 (土)
八102 3 のほがではじめました。葉のついているも
八102 3 みどりのほがでました。田植えをした日か
八102 4 ました。田植えをした日から、ちょうど60
八102 7 ほがでそろいました。ほの1つぶを虫め
八102 8 くさんはえていました。花のさいているほ
八102 9 いるほもみつけました。やくは、白くてに
八103 2 うすをみにいきましたら、まださいていま
八103 3 さいていませんでした。3時間めの終りに
八103 3 りに開きははじめましたが、お晝の時間には
八103 4 じてしまっていました。花のさくのは、1
八103 5 だけだと思いました。9月7日 (金)
八103 7 きょうは雨降りでした。花は、1日開きま
八103 7 1日開きませんでした。9月14日 (金)
八104 1 度 いねの花のすんだあとをさわってみる
八104 2 までべしゅんこだったさが、ふくれてか
八104 2 かたくなっていました。二つにわつてみた
八104 3 た。二つにわつてみたら、中に、青いもの
八104 3 くふくらんでいました。これが、きつと実
八104 7 が6びきほいしました。葉のうらに、青黒

八104 10 みつけられていました。先生におきしま
八105 1 ごだということでした。みんなで虫とりを
八105 2 なで虫とりをしました。いねは、だんだん
八105 4 が、5かぶありました。先生におきした
八105 5 た。先生におきしたら、このいねは、い
八105 5 という病氣にかかったのだとおっしゃいま
八105 6 だとおっしゃいました。10月20日 (土)
八106 1 ぶは30本もありました。こんどは1かぶの
八106 2 なでしらべてみました。1本ずつ植えたか
八106 2 した。1本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐ
八106 3 ぐらいいつていました。3本ずつ植えたか
八106 3 した。3本ずつ植えたかぶには、いちばん
八106 4 いたい12ぐらいいました。両方をくらべてみ
八106 5 いことがわかりました。もみの数をしらべ
八106 6 数をしらべてみました。1本のほに、多い
八106 7 いずつつていました。ですから、1つぶ
八106 8 0つぶもみができたわけです。10月25
八106 10 いねかりをしました。いねを根もとから
八106 10 とからかりました。じょうぶに作った
八107 1 た。じょうぶに作ったいねかけに、日がよ
八107 2 にきちんとかけました。11月10日 (土)
八107 4 いねこきをしました。いねこきかきを
八108 1 、手でいねこきをした人もいました。ぼう
八108 1 きをした人もいました。ぼうのあいだにい
八108 1 いねをはさんでこいたらよくとれました。
八108 2 いたらよくとれました。こんどは、もみと
八108 2 みとごみをわけました。風のくる場所で、
八108 3 にひろげてほしました。11月15日 (木)
八108 4 のよい日に2日ほしたら、もみがよくかわ
八108 6 みがよくかわきました。きょうはもみすり
八108 7 はもみすりをしました。きかいがないので
八108 8 いのでくふうしました。いたいたいのあい

八108 9 みがらははじきました。きれいなお米がで
八108 9 なお米ができました。11月19日 (月)
八109 2 18度 のこつていたもみを、1日、日光
八109 3 みすりをしてみました。どんだんすつてい
八109 3 。どんだんすつていたら、こんどはすぐに
八109 3 どはすくにはげましたが、くだけた米もで
八109 4 げましたが、くだけた米もできました。
八109 4 けた米もできました。ほしてすぐ、もみ
八109 5 ではないと思いました。やく12平方mの土
八109 6 のげん米がとれました。平年作は、1平方
八109 6 では感じられなかった明かるさがあらわれ
八109 6 ると、また、ちがった感じがします。みど
八109 6 に、むらさをぬつたら、どうなるでしょ
八109 6 わりに、茶色をぬつたら、どうなるでしょ
八109 6 色の組みあわせにしたら、二色のときより
八109 6 りも、もつとちがった感じがするにちがい
八109 6 と、まあとちがった感じがします。三音
八109 6 ると、さらにちがった気がします。オル
八109 6 にあわせてひいてみたらどうでしょう。音
八109 6 わせると、とけあった美しいひびきとなっ
八109 6 ということばをそえたら、どういうけしき
八109 6 月」だけで思いだした心の絵とは、いくら
八109 6 は、いくらちがったものがあらわれてく
八109 6 ということばを加えたらどうでしょう。色
八109 6 も、それぞれちがった新しい思いをおこさ
八109 6 場音楽の話」をきいた。その中で、たいこ
八109 6 う話がおもしろかった。その例として、ま
八109 6 の音をとりあつた。水の音をたいこで
八109 6 たいてきかせてくれた。川波がザワザワと
八109 6 の降るところであった。それから、水の中
八109 6 にドブンとびこんだときの音もあらわし
八109 6 ときの音もあらわした。おしまいに、海岸

九一七 ころをきかせてくれた。ドンドンドンとな
 九一八 いているようであった。つぎに、風の音を
 九一九 に、風の音をたたいた。風といえば、「そ
 九二〇 うげ道にさしかかったとき、さつとふいて
 九二一 とおもしろいと思ったのは、雪の降って
 九二二 るところをあらわしたひびきである。たい
 九二三 ているような気がした。ただ一つのたいこ
 九二四 いで、ゆめをみていた人が、にわかに目を
 九二五 すが、ことし生まれた子つばめが、たくさ
 九二六 ばめをつかまえました。すると、その右の
 九二七 日本の文字をしるした小さな金ぞくのいた
 九二八 いたがついていました。それによると、さ
 九二九 るしをつけてはなしたものだということが
 九三〇 うことがわかりました。しかし、つばめは
 九三一 の方ではんしょくしたものが、秋には、南
 九三二 には、ことし生まれた子つばめがたくさん
 九三三 、きゅうに落ちてきたことがあります。そ
 九三四 る雨が降りつづきました。おりから南へ飛行
 九三五 から南へ飛行中だったつばめは、食にうえ
 九三六 きなくなっていました。ウィーンのと
 九三七 とを知らせてきました。協会では、喜んで
 九三八 をする返事をしました。それと同時に、協
 九三九 、新聞に廣告しました。その廣告は、たい
 九四〇 うをまきおこしました。「略略」という運
 九四一 に全國民が、加わったほです。協会へは
 九四二 とを知らせてきました。そのつばめを運ぶ
 九四三 の自動車を加えました。そうして自動車は
 九四四 たちを運んできました。さいわいなことに
 九四五 そのとき、あいていた家が、一けんあったの
 九四六 いた家が、一けんあったので、協会では、お
 九四七 くつくりなおしました。へやはいそいであ
 九四八 ころがつくられました。いく千というつば

九二四 や、手にとまりました。たぐさんのつばめ
 九二五 はじめて運ばれてきたのは、九月十七日
 九二六 は、九月十七日でした。その日はたいへん
 九二七 く雨が降っていました。晩の十時に、二千
 九二八 のつばめが着きました。その夜半には、ま
 九二九 ばめをつんできました。そこで、なるべく
 九三〇 つかうことにしました。航空会社では、お
 九三一 ぶことを申しでました。つばめをのせた飛
 九三二 した。つばめをのせた飛行機は、それから
 九三三 スへとんでいきました。それでも運びきれ
 九三四 べつにあたたくした貨車を一つつけて送
 九三五 車を一つつけて送ったほどでした。汽車や
 九三六 けて送ったほどでした。汽車や飛行機で送
 九三七 車や飛行機で送られた数は、だいたいつぎ
 九三八 ちがひき受けて送ったつばめを加えると、
 九三九 っていないころでした。しかし、この國の
 九四〇 の小鳥たちにしめしたもとも人間らしい
 九四一 世界じゅうに知らせた大きなできごとでし
 九四二 大きなできごとでした。また、飛行機とい
 九四三 のしごとにつかわれたということを、たい
 九四四 のき下で巣をつくったつばめは、來年また
 九四五 ることがわかりました。日本からオースト
 九四六 家ののき下につくった古巣がなつかしいの
 九四七 つばめのすがたをみた人は、きつと、「略
 九四八 じめてつばめをみたよ。」といて喜び
 九四九 いそいそと帰ってきたつばめをむかえる人
 九五〇 りまで すみきったボールの音や秋の風
 九五〇 ます。こちらへきたときは夏の暑いさか
 九五一 の暑いさかりでしたが、いまはもうかき
 九五二 終り近くなりました。ぼくは、いまでも
 九五三 を、一日もわすれたことはありません。
 九五四 っかりしてきました。ぼくがいまいる家

九三二 秋晴れのすみきった空の下に、山のすが
 九三三 っ、がくにいった油絵のように美しく
 九三四 だんだんへつてきたそうです。まえば、
 九三五 いろいろな魚がいたそうです。このほか
 九三六 へとりにいきました。村の子どもがきよ
 九三七 の湖へつりにいけたらと、いつも思っ
 九三八 てつだいをしました。ちよまを植えた一
 九三九 た。ちよまを植えた一アールあまりのと
 九四〇 三日間かかりました。ちよまの根は、ふ
 九四一 根をはっていました。また、ちよまはふ
 九四二 、ほねをおりました。小さなぼくたちの
 九四三 十三本つくりました。そうして、近所か
 九四四 からわけてもらったさつまいものなえを
 九四五 て植えていきました。いもなえは、ぜん
 九四六 百五十本ありました。それは、七月の二
 九四七 月の二十八日でしたが、村でいちばんお
 九四八 そい植えつけでした。たきぎをとりにい
 九四九 るのが楽しみでした。また山へ登るほそ
 九五〇 ごの実が、こぼれたように雑草の中にあ
 九五〇 草の中にありました。手にとつて口へい
 九五二 あまい味がしました。小さい妹のために
 九五三 つんで持つて帰ったこともありました。
 九五四 たこともありました。ぼくははじめ、山
 九五五 はありませんでした。だいいち、じめじ
 九五六 いち、じめじめした足もとがきみがわる
 九五七 いので、雨の降ったあとのようにぬれて
 九五八 方法を知らなかったの、枝ぶりのよい
 九五九 役をひきうけました。八九メートルもあ
 九六〇 に近い木にのぼったことがありました。
 九六一 たことがありました。のぼるたびにぐら
 九六二 みついたりしました。下では、兄や、母
 九六三 略。」などいわれたが、ぼくはがんばっ

九四〇四 手 ておりませんでした。木が動くので、か
 九四〇五 手 き落せませんでした。なたをふりおろす
 九四〇六 手 は大きくゆれました。すこし気がおちつ
 九四〇九 手 顔をみせていました。また、下の方の山
 九四一〇 手 、しよいこをつけたおとなの人が、男か
 九四一二 手 がるのがみえました。秋になって、ぼく
 九四一四 手 樂しみになりました。だんだんたき木と
 九四一五 手 たき木とりになれたのと、山へいくたび
 九四一八 手 たちがこの村へきたころは、湖には美し
 九四一〇 手 まいおりていましたが、いつのまにどこ
 九四一一 手 どへ渡っていったのか、いまはもうい
 九四一一 手 ういなくなりました。そのかわりまた、
 九四二一 手 んが渡ってきました。かもききました。
 九四二二 手 た。かもききました。山には、つぐみや
 九四二二 手 や、ひわがきました。そのほか、名のわ
 九四二四 手 をほりおこしました。ぼくのうちでは、
 九四二六 手 こすことにしました。苦勞してかいこん
 九四二六 手 勞してかいこんした畑のいもをほりおこ
 九四二七 手 うれしいことでした。いちばん小さな三
 九四二八 手 いもほりをしました。大きなうねのはだ
 九四二八 手 がどきどきしました。母やおぼがくわを
 九四二八 手 いもをひろいました。こちらのはかきの木
 九四三六 手 でて、つやつやした大きなかが、ころ
 九四三七 手 落ちてゐるのをみたときは、思わず手に
 九四四五 手 してはだかになった木の上に、まっかに
 九四四六 手 まっかにじゅくした実がすずなりになっ
 九四四九 手 ぽくもついていったのです。ぼくはみ
 九四四九 手 いていったのです。ぼくはみなさんに
 九四四九 手 したいと思いましたが、いそぐ用事だっ
 九四四九 手 、いそぐ用事だったので、先生にだけお
 九四四九 手 ってすぐ帰りました。おぼに、「小公子」
 九四五一 手 よんでもらいました。おぼは、「小公子」

九四五五 手 うにといわれました。ぼくは、おとうさ
 九四五六 手 うさんのやっていたパン屋のしごとを、
 九四六六 手 んで書きだしました。もう、遠くの山々
 九四七三 手 ろうのうちにきました。「かねたいちろう
 九四七八 手 指につくくらいでした。けれども、いちろ
 九四七九 手 てたまりませんでした。はがきをそつと学
 九四八三 手 だりはねたりしました。ねどこにもぐって
 九四八五 手 まねこのにやあとした顔や、そのめんどろ
 九四八八 手 でねわれませんでした。けれども、いちろ
 九四八八 手 ちろうが目を見ましたときは、もうすっか
 九四八八 手 かるくなっていました。おもてにでてみる
 九四八八 手 な、たつたいまできたばかりのように、き
 九四九二 手 下にならんでいました。いちろうは、いそ
 九四九三 手 たべて、谷川にそつた小道を、上の方へ登
 九四九四 手 方へ登つていきました。すきとおつた風が
 九四九四 手 ました。すきとおつた風がザアツとふくと
 九四九六 手 バラと実を落しました。いちろうはくりの
 九四九七 手 ここを通らなかつたかい。」とききまし
 九四九八 手 「略。」とききしました。くりの木は、ちょ
 九四九八 手 へとんでいきましたよ。」と答えました。
 九四九八 手 「略。」と答えました。「略。」くりの木
 九四九八 手 パラパラと落しました。いちろうは、すこ
 九四九八 手 えふきのたき」でした。「ふえふきのたき」
 九四九八 手 と谷に落ちていました。「略。」たきがピ
 九四九八 手 こを通らなかつたかい。」たきがピー
 九四九八 手 がピーピー答えました。「略。」「略。」
 九四九八 手 へとんでいきましたよ。」「略。」たき
 九四九八 手 えをふきつけました。いちろうがまたす
 九四九八 手 樂隊をやっていました。いちろうは、から
 九四九八 手 ここを通らなかつたかい。」とききまし
 九四九八 手 「略。」とききしました。すると、きのこは
 九四九八 手 へとんでいきました。」と答えました。

九五二五 手 「略。」と答えました。いちろうは、首を
 九五二六 手 は、首をひねりました。「略。」きのこは
 九五二六 手 隊をつづけていました。いちろうが、また
 九五二六 手 よんととんでいました。いちろうは、すぐ
 九五二六 手 ここを通らなかつたかい。」とたずねま
 九五二六 手 略。」とたずねました。すると、りすは、
 九五二六 手 をみながら答えました。「略。」「略。」
 九五二六 手 へとんでいきましたよ。」「略。」りす
 九五二六 手 略。」「南へいったなんておかしいなあ
 九五二六 手 はもういせんでした。ただ、くるみのい
 九五二六 手 の葉がちよつと光つただけでした。いちろ
 九五二六 手 つと光つただけでした。いちろうがすこし
 九五二六 手 うがすこしいきましたら、谷川にそつた道
 九五二六 手 したら、谷川にそつた道は、もうほそくな
 九五二六 手 てきてしまっていました。そうして、谷川の
 九五二六 手 な道がついていました。いちろうは、その
 九五二六 手 道を登つていきました。かやの枝は、まっ
 九五二六 手 ゆうな坂になりました。いちろうは、顔を
 九五二六 手 目がちくつとしました。そこは美しいが
 九五二六 手 でかこまれていました。その草地のまん中
 九五二六 手 ってこつちをみていたのです。いちろうは
 九五二六 手 だんそぼへいきました。びっくりしてた
 九五二六 手 どまつてしまっていました。その男はかた目
 九五二六 手 その男はかた目でした。そうして、みえな
 九五二六 手 のようなかたちだったので。いちろうは
 九五二六 手 は、きみがわるかったのですが、なるべく
 九五二六 手 ちつてたずねました。「略。」すると、
 九五二六 手 とわらつていました。「略。」いちろう
 九五二六 手 「略。」といました。すると、そのきた
 九五二六 手 なら、はがきをみたらう。」「略。」「へ
 九五二六 手 「略。」「みました。それでしたんです
 九五二六 手 ました。それでしたんです。」「略。」

九576 ㊦ ずいぶんへただったろう。」と、男は、
 九577 なしそうにいました。いちろうは氣のど
 九579 ㊦ かうまいようでしたよ。」といいました。
 九5710 ㊦ 「略。」といいました。男は、喜んで、息
 九583 「略。」とききました。いちろうは、思わ
 九584 ながら返事をしました。「略。」すると、
 九586 たいやな顔をしました。「略。」その声が
 九588 あわれにきこえたので、いちろうはあ
 九589 はあわてていいました。「略。」すると、
 九591 たわらっていいました。「略。」いちろう
 九592 ㊦ きは、わしを書いたのだよ。」いちろう
 九597 「略。」といいました。そのとき、風がど
 九599 いなおじぎをしました。いちろうは、おか
 九601 にして立っていました。やっぱりやまねこ
 九607 つきだしていいました。「略。」そのとき
 九609 ㊦ きてくださいました。じつは、おととい
 九610 ㊦ と裁判に困りましたので、あなたのお考
 九611 ㊦ いたいと思いましたが。まあ、ゆっ
 九615 ような音をききました。びっくりしてかが
 九618 か光っているのでした。よくみると、これ
 九619 な赤いズボンをはいたどんぐりで、その数
 九6110 りで、その数といったら、三百でもきかな
 九6110 もきかないほどでした。ワアワアとみんな
 九621 ㊦ のです。「あ、きたな。ありのようにや
 九627 しゃにいつけました。ぎよしやもたいへ
 九6211 ころの草をかりました。そこへ四方の草の
 九632 アワアいつていました。ぎよしや、こん
 九634 ンガラんとふりました。すずの音は、かや
 九636 つしずかになりました。みると、やまねこ
 九638 えにすわっていました。ぎよしや、こん
 九639 パチツと鳴りました。「略。」やまねこ
 九6311 ㊦ になかなかおりをしたらどうだ。」やまね

九643 、口々にさげびました。「略。」「略。」
 九652 ㊦ さんがおっしゃったじゃないか。「略」
 九657 ではちの巣をつついたようで、わけがわか
 九658 わからなくなりました。そこで、やまねこ
 九658 まねこがさげびました。「略。」ぎよしや
 九6510 パチツと鳴りましたので、どんぐりども
 九6511 やつとすまいました。やまねこはぴんと
 九661 をひねっていいました。「略。」すると、
 九663 ㊦ になかなかおりをしたらどうだ。」すると、
 九664 もが口々にいいました。「略。」「略。」
 九665 ㊦ って、頭のとがったものが、いちばんえ
 九6610 わからなくなりました。やまねこがさげび
 九6610 まねこがさげびました。「略。」ぎよしや
 九672 パチツと鳴りました。やまねこが、ひげ
 九673 をひねっていいました。「略。」「いえい
 九675 ㊦ になかなかおりをしたらどうだ。」「いえい
 九676 ㊦ です。頭のとがったのが——」ガヤガヤ
 九677 まねこがさげびました。「略。」ぎよしや
 九6710 みんなすまいました。やまねこがいちろ
 九6710 うにそつと申しました。「略。」いちろう
 九6711 ㊦ おりです。どうしたらいいでしょう。」
 九681 はわらって答えました。「略。」やまねこ
 九683 ㊦ 、こういいわたしたらいいでしょう。こ
 九689 ら、いかにも氣どつたようすで、しゅすの
 九691 もに申しわたしました。「略。」どんぐり
 九694 ㊦ くて、頭につぶれたようなやつが、いち
 九695 んとしてしまいました。それはそれはしい
 九696 だまってしまいました。そこで、やまねこ
 九698 ろうの手をとりました。ぎよしやも、大喜
 九6910 パチツと鳴りました。やまねこは、「略」
 九6911 ㊦ がとうございました。これほどのひどい
 九701 ㊦ けてくださいました。どうかこれから、

九703 ㊦ も、はがきがいったら、どうかきてくだ
 九705 「略。」といいました。「略。」「略。」
 九706 ㊦ 「しようちしました。お礼なんかいりま
 九712 ちばちさせていましたが、とうとう決心し
 九713 が、とうとう決心したらしく、いいだしま
 九713 しく、いいだしました。「略。」いちろう
 九716 はわらっていいました。「略。」やまねこ
 九717 ㊦ ね。それは、やめたほうがいいでしょう
 九719 いいようがまずかった、いかにもざんねん
 九7110 ばらくひげをひねったまま下を向いていま
 九7111 ま下を向いていましたが、やつとあきらめ
 九7111 あきらめていいました。「略。」「略。」
 九725 でなくてまあよかったというふうには、口早
 九726 ぎよしやにいいました。「略。」ぎよしや
 九728 ㊦ トルにたりなかつたら、めっきのどんぐ
 九7210 はかつてさげびました。「略。」やまねこ
 九731 にバタバタ鳴りました。そこで、やまねこ
 九733 をしながらいいました。「略。」白い、大
 九735 なきのでこしらえた馬車が、ひっぱりだ
 九736 ひっぱりだされました。そうして、なんだ
 九739 やまねこがいました。ふたりは馬車に乗
 九7310 馬車の中にいれました。ヒュウパチツ。馬
 九7311 は草地をはなれました。木ややぶが、けむ
 九741 にぐらぐらゆれました。いちろうは、こが
 九743 やまねこは、とぼけた顔つきで遠くをみて
 九744 で遠くをみていました。馬車がすすむにし
 九747 もなく馬車がとまったときは、茶色のどん
 九748 りにかわっていました。そうして、やまね
 九751 に、どんぐりをいれたますを持って立って
 九752 持って立っていました。それからあと、「
 九754 、もうきませんでした。やっぱり、「略」
 九755 いいといえよかつた、いちろうはとき

九七二 見る貝づかへいきました。先生が、町角まで
 九七三 ようにとおっしゃったので、めいめい、シ
 九七五 ろに集まっていた。おかみさんが、店
 九七六 みをくっつけていました。みるまに、貝がら
 九七九 ておいでになりました。「略」。先生につ
 九七四 会 をおもにたべていたときがあったらしい
 九七四 会 ていたときがあったらしい。その貝がら
 九七五 会 その貝がらをすてたところが、きょうこ
 九七八 うに歩いていきました。平らな畑やたんぼ
 九七九 に、一だん高くなつたところがみえます。
 九七八 会 海のいりえだったのです。そう、あの
 九八五 家にたちよられました。しばらくして、そ
 九八六 ておいでになりました。「略」。主人も、
 九八七 て、かしてくれました。そこへ着くと、先
 九八九 へお立てになりました。土はやわらかで、
 九八九 会 らよくお話していた貝づかです。この土
 九八五 会 むかし海の中にいたいろいろな貝のから
 九八八 会 たりこわれたりした道具や、たべたけも
 九八九 会 した道具や、たべたけものの骨や、角な
 九八九 会 、ここへすてました。それで、ここをほ
 九八二 うずうずしてました。「略」。「略」。
 九八〇 会 なにかをほりあてたらしいが、ただ、あ
 九八七 会 なたは、ほりだしました。「略」。「略」。
 九八二 会 んになつてほりました。「略」。「略」。
 九八三 会 略。」「骨で作ったものらしいよ。ぼく
 九八八 会 と、「よくみつけたね。あとでよくみて
 九八三 会 かにおっしゃいました。「略」。先生がま
 九八二 会 ておいでになりました。「略」。だれもか
 九八八 生のおえが鳴りました。みんなはほる手を
 九八八 はほる手をとめました。「略」。もう、む
 九八九 会 で三十分ほりました。わたしは、なんに
 九八四 会 にも説明しなかったが、みなさん自身で

九八四 会 みなさんのひろつた物の中に、いのしし
 九八五 会 かの道具につかつた物があつたでしょう
 九八五 会 つかつた物があつたでしょう。それには
 九八五 会 ります。石で作ったもの、それには石の
 九八五 会 うちくだいて作った物で、つるつるみが
 九八六 会 りもありませんでした。四人が話しあつて
 九八六 会 中にいれておきました。ピリピリツとふえ
 九八六 会 ツとふえが鳴りました。あとの三十分は、
 九八六 会 みじかく思われました。「略」。帰りは、
 九八六 会 めいめい持つてきた物があるか、おしら
 九八六 会 ーをおして歩きました。八 ながよし
 九八七 会 し とき ある晴れた日の午後とこ
 九八八 会 左右にひきわけられたところである。たか
 九八九 会 「よせよ。どうしたんだい。あんなにな
 九八九 会 二も、たかぎの落した物を集める。三た
 九八九 会 てけんかなんかししたのさ。」「びっくり
 九八九 会 」。」「びっくりしたよ。いっしょに歩い
 九八九 会 する。こんどは負けたりしたちどまつて
 九八九 会 て待っている。勝つた子が、「一、二、三
 九八九 会 、ちよつとためらつたのち、「略」。やま
 九八九 会 」。やまだ、はなれたまま、たかぎの手も
 九八九 会 ている。さがしていたすみである。受けと
 九八九 会 そばにより、だまつたままそれを取りあげ
 九八九 会 みはなにをなくしたんだ。」「たかぎ、ち
 九八九 会 おして、さつきすてたじようぎをひろつて
 九八九 会 「これきみが落したボタンだろう。」「や
 九八九 会 」。やまだ「落したんじゃない。きみが
 九八九 会 きみがむしりとつたんじゃないか。」「と、
 九八九 会 ぎ首をひっかいたからさ。」「やまだ、
 九八九 会 だ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけ
 九八九 会 おい、ボタンついたか。」「やまだ「つか
 九八九 会 うぎひろつてやつたじゃないか。」「やま

九八八 会 みをみつめてやつたじゃないか。」「たか
 九八九 会 くの首をひっかいたのはだれだ。」「と、
 九八九 会 三つきみをなぐつた。」「やまだ「よし、じ
 九八九 会 やだな、けんかしたあとの氣持つて。」「
 九八九 会 ぼくがいけなかつたのさ。」「やまだ「ぼく
 九八九 会 」「ぼくもわるかつたよ。」「たかぎ「いった
 九八九 会 でけんかをはじめたんだらう。」「やまだ「
 九八九 会 も負けまいと思つたんだ。じまん話をは
 九八九 会 ぎ「なかなかおもしろい、よくなつた。」「
 九八九 会 したら、よくなつた。」「やまだ「たかぎの
 九八九 会 山のスキー場へいった。まえの日に、こ
 九八九 会 な雪がたくさん降つたので、スキーをする
 九八九 会 は、ちよつとよかつた。集合地は、村はず
 九八九 会 本すぎのそばであつた。ぼくたちは、リッ
 九八九 会 がら、そこへ集まつた。「略」。と、の
 九八九 会 だ。」「みんなそろつたね。さあ、でかけよ
 九八九 会 なのあとからこられた。はじめは二列です
 九八九 会 じめは二列ですんだが、谷あいでは一列
 九八九 会 あいでは一列になつたので、ずいぶん列が
 九八九 会 ずいぶん列が長かつた。だんだんのぼり坂
 九八九 会 ぎながら登つていった。スキーの雪をすべ
 九八九 会 へ略。」「とさげばれた。その声にはげま
 九八九 会 んめいに登つていった。まつ林の中を通つ
 九八九 会 」「と、大声にさげんだ。みると、大きなう
 九八九 会 まつの中へとびこんだところであつた。「へ
 九八九 会 こんだところであつた。「略」。と、の
 九八九 会 きゆうに元氣をだした。いよいよ、スキー
 九八九 会 よ、スキー場に着いた。いかにもすべりよ
 九八九 会 たてるようにいわれた。百五十メートルほ
 九八九 会 十メートルほど登つたとき、ぼくが、「略
 九八九 会 が、「略。」「といった。すると、の
 九八九 会 先生「略。」「といわれた。ぼくたち三四人は

九一〇九 一文字にすべりおりた。すばらしい早さに
九一〇九 四りが立ち、あせばんだ顔に、雪のこなが降
九一〇九 五つぎにすべりはじめた。思い思いに、スキ
九一〇九 十むりが一どにあがった。先生は、ふたりと
九一〇九 一上へと登っていかれたが、三百五十メートル
九一〇九 一五十メートルも登ったところで、つえをあ
九一〇九 二というあいずをされた。ぼくたちも、みん
九一〇九 三ふって、それに答えた。のど先生がさきに
九一〇九 六う目のまえにこられた。はげしい制動をか
九一〇九 十、おりてはまた登った。ジャンプ台では、
九一一一 四と、だれかがさげんだ。みんなそこへいく
九一一一 八は、ちゆうにうかんだ。両手をひろげて高
九一二一 一は思わず手をたたいた。こんどは、のど先
九一二一 三して、すべりだされた。すばらしい早さだ
九一二一 七と、だれかがさげんだ。「略。」と、だれ
九一二一 九と、だれかがさげんだ。四十メートルも空
九一二一 十は地上の人となられた。お書になったので
九一二一 一られた。お書になったので、雪の上で楽し
九一二一 一くおべんとうをたべた。午後は、先生につ
九一二一 七たを教えていただいた。帰りは、村までく
九一二一 一とうにゆかいであった。十 ちよ紙 い
九一二一 二て 十のころであった。私は父につれられ
九一二一 三近くの高い山に登った。その帰りに、近道
九一二一 四こに小石でかこまれた美しい泉があった。
九一二一 四れた美しい泉があった。父は、その泉の水
九一二一 六んでから、私にいった。「略。」水は大き
九一二一 九は大きなごろごろした石ころのあいだから
九一二一 一出して、一方のかけたところから、さらさ
九一二一 二さらと流れだしていた。私は手をいれて、
九一二一 五てそのまましてきたかと思われるように
九一二一 六するようにつめたかった。ちよと齒にしみ
九一二一 七。ちよと齒にしみたが、うまかった。あ

九一二一 七しみたが、うまかった。あまいような、す
九一二一 九れするような味だった。「略。」泉をあふ
九一二一 一略。」泉をあふれてた水は、さらさらと走
九一二一 二な川に流れこんでいた。帰り道で、父は次
九一二一 三ような話をしてくれた。むかし、ひとりの
九一二一 四ひとりの茶人があった。茶のうまさ、お
九一二一 七だしたいものと思った。茶人は、日本じゅ
九一二一 九いど水をためてみたけれども、どうも氣
九一二一 九うも氣にいらなかった。ところが、てんり
九一二一 一と、いままで味わったこともないような、
九一二一 一しぎな味が感じられた。茶人は、この上流
九一二一 二はないかと氣がついた。舟をやってこぎ
九一二一 六いい味はたえなかった。それで、茶人は、
九一二一 七にあるのだとさとした。けれども、流れは
九一二一 九のもたやすくなかった。つれの人は、この
九一二一 一やめて帰ろうといった。しかし茶人は、い
九一二一 一上流へたどっていった。大きな支流が流れ
九一二一 一なくてならなかった。茶人はすこしもく
九一二一 七、ながの縣にはいった。そうして、てんり
九一二一 九あまりもきてしまった。ここまでくると、
九一二一 一ど水かさが増えていた。ここで茶人のした
九一二一 一じられるようになった。「略。」茶人はつ
九一二一 一人はつれの人になった。まつ川がてんりゆ
九一二一 三のほとりを流れていた。ためしにまつ川の
九一二一 五、たいへんうまかった。念のため、もつと
九一二一 六れはただの水であった。「略。」茶人は、
九一二一 一の旅が終りに近づいたことを知って喜んだ
九一二一 一たことを知って喜んだ。茶人たちは、ここ
九一二一 一は泉をさがしていった。はじめの八キロほ
九一二一 一て川べりに道もあったが、いまはそれもな
九一二一 九、まつ林におおわれた道もない谷まになっ
九一二一 一道もない谷まになった。そこからさらに、

九一二一 一は、すこしもなかった。そこで氣をつけて
九一二一 四ないうまい水であった。そこで、谷川をさ
九一二一 六れでもう終りであった。茶人は、そこをほ
九一二一 八て、心から楽しんだということである。
九一二一 二びきのくもがいました。黄色と黒のしまも
九一二一 三のしまもようのついた大きなくもでした。
九一二一 四いた大きなくもでした。ある日の夕がた、
九一二一 六だに、巢をかけました。「略。」ここ四五
九一二一 九ともかからなかったから、おなががすい
九一二一 一かすいてしまった。「ここ四五日は大
九一二一 三とはできませんでした。星が光りだしまし
九一二一 一。星が光りだしました。どこかであかちや
九一二一 三星をみあげていました。そのとき、あみが
九一二一 四がにわかにゆれました。くもは、きつとな
九一二一 五その方をみつめました。あぶが、足をひっ
九一二一 八いとにげていきました。おまけに、あみに
九一二一 九をあけてしまいました。「略。」ぶつぶつ
九一二一 一ら、くもは、やぶれたところをつくろいか
九一二一 一をつくろいかけた。「略。」と、くも
九一二一 二て身がまえをしました。星はだんだんきれ
九一二一 四れいに光ってきました。あかちゃんのなき
九一二一 六もきこえませんでした。風が思いましたよ
九一二一 六した。風が思いましたようにふいてくるの
九一二一 八いっしょにゆれました。ブンブンブン、ブ
九一二一 一ころで羽音がしました。それは、みつばち
九一二一 二にはすぐわかりました。ブンブンブン、
九一二一 六すぐにとんできました。ブンブン——「へ
九一二一 八そら、ひっかかった。」くもはみつばち
九一二一 九ちにとびかかりました。みつばちも、くも
九一二一 一、くもに向かいました。くもは、ふといっ
九一二一 一りつけようとしてました。みつばちは、その
九一二一 二てにげようとしてましたが、どうしても手足

十711 とうさんも困りましたので、子どもをさけ
 十711 子どもをさけて通ったこともありました。
 十711 ったこともありました。しかし、おとうさ
 十84 なわをまわしてやったこともありまし
 十84 ったこともありました。二月半ばかり、い
 十87 お友だちができました。そういう子ども
 十812 れる少女もありました。あのとげとげし
 十91 た。あのとげとげしたいがわれて、じゅ
 十91 がわれて、じゅくしたくりの実の落ちるこ
 十92 実の落ちるころでしたから。おとうさん
 十96 るものかと思いました。その少女のわけて
 十97 の少女のわけてくれたくりは、むじやきな
 十98 むじやきな心からでた、子どもらしい愛情
 十910 い愛情のしるしでした。ちょうど、プラタ
 十912 とも楽しい季節でした。どこへいっても、
 十101 子どもにありました。そのいなかの町に
 十103 の下を流れていました。岸にある丘の上に
 十105 高いともみえました。そのあたりは、フ
 十106 ランスの國道にそった景色のよいところで
 十108 いってこしかけました。その橋のたもとに
 十109 い少女にもありました。みあげるように高
 十1011 日のように落ちました。三人の少女は、そ
 十1012 ては、遊んでいました。おとうさんが、休
 十115 りの子どもたちでした。ある日のこと、お
 十118 しを、一ふくろやったのがはじまりで、そ
 十1110 くるようになりました。ひろい集めた落ち
 十1110 ました。ひろい集めた落ち葉を持ってきて
 十1111 れるようになりました。プラタナスの葉の
 十1112 つでほどもありました。「略。」と、おと
 十123 うさんが頼みましたら、少女たちは、手
 十124 ろってきてくれました。こうして、ずんず
 十126 らわったりしました。けれども、お友だ

十128 い女の子もありました。「略。」と、ひと
 十1210 をみてそういました。「略。」おとうさ
 十131 しておいきました。わたしは、そんな
 十133 とうさんがいいました。それから、三人の
 十134 てほしいと頼みました。方言でできた小歌
 十135 ました。方言でできた小歌のあることを、
 十136 きいて知っていました。少女たちは、
 十139 てきかせてくれました。なんとかわいらし
 十1312 なか町がすきになったのも、一つは、そう
 十141 かよしになってくれたからです。ビエンヌ
 十143 ようなものをかぶった女の人たちが、なら
 十143 んたくをしていました。フランスのいな
 十145 水にうつっていました。その川の岸で、お
 十146 の少年にもありました。たぶん、その少年
 十148 下の学年ぐらいでした。おとうさ
 十1411 略。」とたずねました。この少年の間には
 十151 とうさんも困りました。フランスだって、
 十155 きにその答をしましたら、少年は、さらに
 十156 んなことをいいました。「略。」「略。」
 十158 力はすきとおった青い色ですよ。」と、
 十1510 力をいれて答えました。この返事に、少年
 十1511 事に、少年も満足したらしく、「略。」と
 十1512 ああ、すきとおった青い色ですか。」と、
 十161 べるようにいいました。フランスのいな
 十162 の國のことをきかれたときは、おとうさん
 十163 もうれしく思いました。かしこそうな目つ
 十164 な目つきの少年でした。自分の國のこと
 十1610 がいつてきかせました。「略。」と、また
 十171 た太郎がたずねましたので、おとうさんは
 十171 とうさんは答えました。「略。」三日
 十1710 がたみを知りました。おまえたちは、お
 十1711 を知って、勉強したら、どんなにしあわ

十198 生徒が、席にすわったまま、点字を読んで
 十206 プリズムでわけた光を写してみますよ
 十211 子どものはれはれした顔。「略。」「略」
 十229 きれいにたがやされた畑。田をならしてい
 十236 歌う。自轉車に乗った中学生が、ふたりづ
 十239 ぶ。新しい家のたつた町、ふみきりばんの
 十248 あせまみれになった工員の顔、胸、うで
 十256 道を、ゆっくりとした足どりで、家に帰っ
 十267 光をいっぱい受けた、はれはれとした父
 十267 けた、はれはれとした父と子。四 あな
 十273 は、いままで学んだ「自然の觀察」を、
 十292 そのものがこうなったかということを、考
 十295 なければならなかったのか、よく考えてみ
 十297 一つの和音を耳にしたときは、組みあわさ
 十298 きは、組みあわされた一音一音のことも、
 十2910 のです。もようをみたときには、そのもよ
 十302 がけんかでもはじめたら、どうしてそんな
 十303 てそんなことになったか、そのわけをよく
 十3210 ういつてあざけられた。佐吉は、父の大工
 十331 助けてはたらいっていたが、ひまさえあれば
 十332 をしらべつづけていたのである。村じゅう
 十336 「略。」とさとしたが、佐吉のもえるよ
 十337 ることもできなかった。それで、父は、佐
 十338 家にあずけてしまった。このあいだに立つ
 十3310 り、なぐさめたりしたのは、母であつた。
 十3310 したのは、母であつた。佐吉の考えはこう
 十342 の織りかたをしていたのでは、やがて、困
 十345 、はじめに目をつけたのは、ぬのを織ると
 十346 つていく横糸であつた。横糸はおさによっ
 十348 かすようにしたかつた。機械で動かせば、
 十3411 だいに高まつていったが、小学校をでただ
 十3411 ったが、小学校をでただけのかれには、手

十34 12 想になりがちであった。たまたま、そのこ
 十35 1 はくらん会が開かれた。佐吉は、上京して
 十35 2 機械館へ毎日かよった。銀色に光った、た
 十35 2 よった。銀色に光った、たくさんの機械は
 十35 3 ののように動いていた。かれは、そのりっ
 十35 5 身のせまい思いがした。機械は、どれひと
 十35 6 製のものは、なかったからである。「略」
 十35 9 たては動かしてみた。だが、思うように
 十35 10 かなか生まれなかった。佐吉は、一けん
 十35 12 台の機械を作りあげた。これも、ままと
 十36 1 ままと失敗であった。世間からはますま
 十36 5 計画をこしらえあげた。そこでやっと、思
 十36 5 の機械ができあがった。ためしてみると、
 十36 6 はたしてよく動いた。村の人たちは、ぬ
 十36 9 会 がら、「よくやった。」「略」といっ
 十36 11 といつてほめたたえた。試運轉の日、その
 十36 12 にぬのを織ってみせたのは、佐吉の母であ
 十36 12 は、佐吉の母であった。それは、明治二十
 十37 3 かわれるようになったが、かれは、これに
 十37 4 ることにとりかかった。そこでさらに、七
 十37 5 動織機ができあがった。これが、日本にお
 十38 3 なゆめをえがいていた、ひとりのわか者が
 十38 3 とりのわか者があった。眞珠は、海のそこ
 十38 5 ぎな宝石とされてきたが、しらべてみると
 十38 6 でもないものであった。眞珠母貝の中に、
 十38 9 となることがわかったからである。「略」
 十38 12 研究に全力をつくした。このわか者こそ、
 十39 1 として世界に知られた御木本幸吉であつた
 十39 2 た御木本幸吉であつた。「略」。幸吉は、
 十39 4 会 いれることができた。眞珠が発生する
 十39 7 体内にさしいれてみた。うまく貝の中に核
 十39 8 成功するわけであったが、理論と実際とは

十39 10 なるものではなかった。だいいち、母貝は
 十39 12 て、受けつけなかった。また、核をさしい
 十39 12 また、核をさしいれたために死ぬものもあ
 十39 12 めに死ぬものもあつた。たとえ、はきだし
 十40 2 とのままになっていた。同じことをなんど
 十40 3 んどもくり返してみたところで、かわりの
 十40 6 うまくいかなかった。村や町の者は、幸
 十40 8 ような考えをわらった。まわりの者から、
 十40 10 助力者となつてくれたのは、つまのうめで
 十40 10 、つまのうめであつた。うめは、「略」。
 十41 1 、なんどもはげました。ある年のこと、赤
 十41 2 おびただしく発生した。これは、ある小さ
 十41 5 はみな死んでしまった。これは、まったく
 十41 5 く考えてもみなかったことである。かれは
 十41 6 やりなおしにかかった。町の人のかげ口は
 十41 8 ののしるようになった。うめは、いつもこ
 十41 10 、なん年かをすごした。あるとき、うめが
 十41 11 円形の眞珠を発見した。これは、まえにさ
 十41 12 えにさしいれておいた核によつて発生した
 十41 12 た核によつて発生した半円眞珠であること
 十42 1 あることが、わかった。「略」。幸吉とう
 十42 2 会 半分までこぎつけた。あと半分だ。「幸
 十42 4 がいいはげましあつた。それから、眞珠貝
 十42 4 的研究がつづけられた。眞珠貝にちょうど
 十42 5 も、はつきりしてきた。半円眞珠が思いど
 十42 7 に取れるようになったので、ひとまずこれ
 十42 8 世にだすようになった。この光明を喜んだ
 十42 10 た。この光明を喜んだのもつかのま、幸吉
 十42 11 からの助力者であつたうめが、この世をさ
 十42 12 の世をさつてしまった。そのうえ、ふたた
 十43 1 、赤しおがよせてきた。そのため、母貝は
 十43 2 とんど死んでしまった。その数は、じつに

十43 3 八十五万にもおよんだ。しかし、幸吉は、
 十43 4 、くじけはしなかった。研究のため、死貝
 十43 5 ねいにしらべていった。すると、かれはき
 十43 6 きゆうにとびあがつた。「略」。ゆめにも
 十43 7 会 あがつた。「あつた。あつた。」ゆめに
 十43 7 会 「あつた。あつた。」ゆめにもわすれ
 十43 10 をどんどんみていった。すると、五つづの
 十43 10 の眞円眞珠が現われた。八十五万から五つ
 十43 11 五つづの眞珠が取れたわけである。「略」
 十43 12 会 と眞円眞珠ができたよ。かれは、五つ
 十44 2 、その成功をしらせた。そのころ、幸吉は
 十44 3 がの老人になつていた。よる年なみにも負
 十44 4 負けず、研究を重ねたすえ、ついに核をさ
 十44 6 どこすことを発見した。「略」。幸吉は、
 十44 8 母貝を海中にはなつた。さいわいに、赤し
 十44 9 おもよせてこなかった。海水の温度に大き
 十44 10 なく、四年めになった。幸吉は、望みをか
 十44 10 幸吉は、望みをかけた第一の母貝を開いて
 十44 11 一の母貝を開いてみた。はたして、眞円眞
 十44 11 円眞珠がやどつていた。第二、第三と母貝
 十45 1 きなゆめは実現された。今日、眞珠の産地
 十45 7 名高い。名高くなつたかげには、幸吉一生
 十45 10 いものであるといつた。しかし、世界の学
 十45 12 とが、明らかにされた。そののち、幸吉は
 十46 1 ごろそんけいしていたエジソンのもとをた
 十46 2 を、こまごまと話した。エジソンはたいへ
 十46 4 ん喜んで、こういつた。「略」。六 私
 十46 6 会 してもできなかったことが、二つありま
 十46 9 会 一つは、眞珠でした。あなたが自然をあ
 十46 10 会 界の人々にあたえたことに、心から敬意
 十47 1 会 ば、作製に失敗したわたしは、星にもあ
 十47 6 て、さんぽにでました。家から十三分ば

十 47 7 十二分ばかり歩いたところに、廣い草原
 十 47 8 つれていこうと思ったのです。ところが、
 十 48 1 うはいきませんでした。四十分もかかった
 十 48 1 た。四十分もかかったのではないかと思ひ
 十 48 2 はないかと思ひました。これは、足がおそ
 十 48 4 、そこで遊んだりしたからでした。私は、
 十 48 4 んだりしたからでした。私は、べつにいそ
 十 48 5 ともありませんでしたので、妹の氣のすむ
 十 48 7 て、つれていきました。ために、私は、
 十 48 10 きれに書きとめてみたのです。クロイワ
 十 49 6 ㊦ チャンタッチシタ——オスワリシタ
 十 49 6 ㊦ ——オスワリシタ——スイトウモツ
 十 49 8 ㊦ ——ワンワンタッチ——ハナガサイデ
 十 49 9 ㊦ ——アドコヘイッタノ——イコウ——ア
 十 50 2 びきすわっていました。「クロイワンワン
 十 50 2 は、そのときさけんだことばです。その黒
 十 50 4 毛が、ぬけていました。「キタナイワンワ
 十 50 5 ワンチャン」といったのは、そのためです
 十 50 6 ぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足
 十 50 6 うと、その足をなめたので、妹はびっくり
 十 50 8 いて、私に知らせたのです。いぬは、う
 十 50 9 なかつこうをしました。「クツケルヨ」
 十 50 11 ツ」と息をはきました。妹は、わらいなが
 十 50 12 とりごとをいきました。母がこしらえてく
 十 51 1 こしらえてくださったパンを、ふくろから
 十 51 4 んどもくり返しました。いぬは、まばたき
 十 51 5 ぬは、まばたきをしたきりで、そのパンを
 十 52 1 しろを向いてしまったわけです。「ワンワ
 十 52 4 だしたりしていましたが、やっと歩きはじ
 十 52 4 っと歩きはじめました。五六歩いったか
 十 52 5 ました。五六歩いったかと思うと、よその
 十 52 6 て、そばを通りました。みると、なるほど

十 52 7 ンネテルワ」でした。妹は、また、ちょ
 十 52 8 ちょこ歩きだしましたが、よその家の門の
 十 52 10 ノヨ」と、おとなびたことをいきました。
 十 52 11 びたことをいきました。門からもどつてき
 十 52 12 どつてきて、道にでたとき、あとをふり向
 十 52 12 あとをふり向きしました。すると、さっきの
 十 53 2 てねそべっていました。「ワンワンチャン
 十 53 3 がもつくりおきました。「ワンワンチャン
 十 53 3 ㊦ チャンタッチシタ」といって喜びまし
 十 53 4 ㊦ た。「オスワリシタ」と、いちいち、い
 十 53 5 とばにして喜びました。そのとき、いまま
 十 53 6 までかたにかけていたすいとうをはずして
 十 53 8 に持つのだと、ませたことをいって、歩き
 十 53 8 って、歩きだしました。まだ、いぬが氣に
 十 53 10 かへいくところでした。あきらめて歩きか
 十 53 11 、水おけがありました。そこに、すいれん
 十 53 12 れいにさいていました。妹は、そこへいっ
 十 54 1 水の中をのぞきました。きんぎよが一ぴき
 十 54 2 すいすいとういてきたかと思うと、また、
 十 54 3 水そこへもぐりました。「ハナガサイテル
 十 54 4 ㊦ 「アドコヘイッタノ」は、そのことを
 十 54 7 たき火をしていました。そのけむりやほの
 十 55 3 んなことを考えました。新しい世界 こ
 十 55 5 と書けなくなりました。むりに書くと、自
 十 55 7 ることとは、ちがつたものになります。ど
 十 55 8 うにゆきづまってきたのでしょうか。思うこ
 十 55 9 どんどんと書いていたまえのころが、うら
 十 55 10 ましくさえなりました。あるとき、なにげ
 十 55 11 く妹の作文をみました。なんと、わけもな
 十 56 2 力に、おどろきました。かいこが、皮をぬ
 十 56 8 ろうをみにいきました。そうしたら、二年

十 56 9 だを手でいじりました。ふくろうは、目を
 十 57 1 ていってしまいました。男の子は、「略」
 十 57 2 ㊦ の子は、「おこった、おこった。」とい
 十 57 2 ㊦ おこった、おこった。」といいて喜びま
 十 57 2 ㊦ さいました。コスモスの花
 十 57 4 コスモスがさきました。きれいにさきまし
 十 57 5 。きれいにさきました。白と、もも色と、
 十 57 7 もも色がさきました。いまはきれいだけ
 十 58 4 落してくださいます。みんな負けずにひ
 十 58 5 負けずにひろいました。うちに帰って、十
 十 58 7 でいわれて数えました。そうしたら、たば
 十 58 9 、五まいあまりました。おとなりのよし子
 十 58 11 三たばずつあげました。私は、のこったの
 十 58 12 した。私は、のこったのをおし葉にしまし
 十 58 12 のをおし葉にしました。お月見 私、
 十 59 5 略。」とおっしゃった。ごはんをたべてか
 十 59 8 、たくさん取ってきた。えんがわにつくえ
 十 59 11 上にすすきをかざった。月がでてきた。ま
 十 60 1 ざった。月がでてきた。まんまるくてきれ
 十 60 3 に、「略。」といったら、おかあさんが、
 十 60 4 へでいらつしやつた。そうして、「略」
 十 60 6 略。」とおっしゃった。私も、「略。」と
 十 60 8 、月の方へ手をやったら、あかちゃん、
 十 60 10 は、「略。」といった。たけのこ うち
 十 61 1 が一本はえてきました。私は、たけのこ
 十 61 2 て、せいくらべをししたら、はなのところま
 十 61 3 ところまでありました。あしたもあさつて
 十 61 8 いより高くなりました。もう、先生のせい
 十 61 10 くらい高くなりました。たけのこは、人間
 十 62 2 て、ガサガサ音がしたから、なんだろうと
 十 62 3 階の窓からそとをみたら、大きな竹によ
 十 62 4 がによつきりでていたので、びっくりしま

十 62 4 で、びっくりしました。もう、親竹と同じ
 十 62 5 、風にゆれていました。七 ぶす 能と
 十 62 8 、能というものをみたことがありますか。
 十 63 1 なるうたいを、きいたことがあるでしょう
 十 63 12 の大むかしにさかえた、ギリシアの、同じ
 十 64 3 はおもむきのちがったおもしろいものが、
 十 64 4 日本らしい、すぐれたところのあるものと
 十 64 5 さんも、大きくなったら、自分たちの國が
 十 65 6 す。めうえのいばったものに對してもおそ
 十 65 9 のだんががありました。おかみさんをもら
 十 66 1 りでくらししていました。あるとき、このだ
 十 66 3 ればなりませんでした。でかけるとき、太
 十 66 5 びしい声でいきました。「略。」「略。」「
 十 66 9 ぬことだ。わかったか。」「略。」「太
 十 66 10 会 はい。わかりました。」「太郎かじやと次
 十 66 11 ろえて返事をしました。そんなおそろしい
 十 67 2 いうようにしていました。でも、こわいもの
 十 67 5 いうことになりました。「略。」「略。」「
 十 67 9 、こしからぬきとったせんすを、さらりと
 十 67 10 、さらりと開きました。「略。」「略。」「
 十 68 2 近づき、さきに立つた太郎かじやが、思い
 十 68 3 かみをひきあげました。「略。」「略。」「
 十 68 9 とおくびよう者でした。それで、いよいよ
 十 69 1 おぎつづけていました。そのうちに、太郎
 十 69 3 そうにしまつてあつた、一つのまるいつぼ
 十 69 4 中にかかえてきました。「略。」「略。」「
 十 70 2 ふたをあけてみました。べつにどつきもた
 十 70 4 のがはいっていました。「略。」「略。」「
 十 70 11 口に持っていました。「略。」「略。」「
 十 71 3 も指をつっこみました。「略。」「ふたりは
 十 71 5 に指をつっこみました。そうして、うまい
 十 71 7 になつてしまいました。「略。」「おくびよ

十 71 8 会 た。「これは困つた。だんなが帰つたら
 十 71 8 会 た。だんなが帰つたら、どんな目にあわ
 十 71 10 は、心配になりました。太郎かじやのほう
 十 71 11 く、わるちえがあつたから、おちつきはら
 十 72 3 ものをひきさきました。「略。」「略。」「
 十 72 10 くだいてしまいました。そこへ、だんなが
 十 72 11 んなが帰つてきました。すると、太郎かじ
 十 73 1 あげてなきだしました。次郎かじやも、そ
 十 73 1 いおいなきだしました。「略。」「だんなは
 十 73 2 会 ふたりともどうしたのだ。」だんなは、
 十 73 3 とられてたずねました。太郎かじやは、な
 十 73 4 なきながらいいました。「略。」「と、そこ
 十 73 6 会 へて遊んでいました。私が負けて、ドサ
 十 73 7 会 とこのまにたおれたはずみに、あのたい
 十 73 8 会 さいてしまいました。次郎かじやは力が
 十 73 9 会 じんにいたしました。あまりの申しわけ
 十 73 11 会 くらうかがいました、おそろしい『ぶす
 十 73 12 会 ちばん早道と思つたのです。が……。』
 十 74 1 「と、そこまで話したとき、いままでおい
 十 74 1 でおいおいいたいたくせに、きゆうに、
 十 74 3 しょに歌いだしました。「略。」「太郎かじ
 十 74 10 ながらにげだしました。だんなは、おこつ
 十 74 12 べ。」と追いかけてました。
 十 11 5 6 んで乗せてもらつたうれしさで、まだむ
 十 11 5 8 会 は、大きくなつたら、三ばんか四ばん
 十 11 5 10 会 ぼくは、父ににたら、せいの高いりつ
 十 11 5 12 会 いオールをこいだら、オールがぎゅう
 十 11 7 10 会 ながさてくれたら、コックスのまえ
 十 11 9 5 会 いうことができた、うれしい。けれ
 十 11 11 5 ートが近づいてきた。「略。」「子どもた
 十 11 11 6 会 のレースで勝つたポートだよ。頼んで
 十 11 11 8 の方へかけていった。一一 めいめいの

十 11 12 8 せみが鳴きはじめた。まっさおな海は、
 十 11 13 7 い國から旅してきた旅人のような氣持の
 十 11 15 6 、金色の、ちがつた形の小鳥が、はばた
 十 11 15 12 い空へにげていった。 おかあさま 人
 十 11 16 2 人の心の畑にさいた、いちばん美しい花
 十 11 16 5 らかな、すみきつたたま、それはおかあ
 十 11 17 3 の道をもふみわけたその足。いま、わた
 十 11 17 7 から教えられました。おかあさまの胸に
 十 11 18 7 れから、私の調べた二宮金次郎のことを
 十 11 19 1 宮金次郎の生まれたところは、神奈川縣
 十 11 19 2 、さかわ川にそつた村です。この村に、
 十 11 19 3 という人がいました。働くことがすきで
 十 11 19 4 代をこしらえました。その子どもに、り
 十 11 19 5 いう人がありましたが、たいへん情ぶか
 十 11 19 6 ん情ぶかい人でした。村の人たちが困つ
 十 11 19 7 てやつたりしました。この人が金次郎の
 十 11 19 8 金次郎の父親でした。りえもんは、から
 十 11 19 9 く働けませんでした。そのうえ、さかわ
 十 11 19 11 流されたりしましたので、いつのまにか
 十 11 19 12 るようになりました。しかし、りえもん
 十 11 20 2 ねをおつていました。そういうときに、
 十 11 20 3 次郎が生まれてきたのです。だから、金
 十 11 20 6 してよく働きました。また、父親のすき
 十 11 20 11 うけたりもしました。金次郎が十二のこ
 十 11 21 2 くことになりました。そのとき、父親が
 十 11 21 3 病氣でねていましたので、金次郎が、そ
 十 11 21 4 ることになりました。金次郎は、年のわ
 十 11 21 5 からだが大きかつたし、働きつけている
 十 11 21 6 はありませんでした。それどころか、ほ
 十 11 21 8 砂を運ぶほどでした。しかし、なんと
 十 11 21 10 まないと思ひました。そこで、金次郎は
 十 11 21 11 とを考えつきました。毎晩、家に帰つて

十一 22 1 作ることにしました。これを持って、朝
 十一 22 2 工事場へいきました。たくさんの中
 十一 22 5 しだしていいました。「略。」おとな
 十一 23 1 てくれませんでした。おしまいには、
 十一 23 1 ではいてくれました。金次郎が十四のと
 十一 23 2 親がなくなりました。金次郎の下にふた
 十一 23 3 りの弟がありました。いちばん下のは、
 十一 23 4 そのとき二つでした。どんなに病気がち
 十一 23 5 切りぬけてきました。いまはどうにも
 十一 23 8 らつてもらいいました。「略。」元氣よく
 十一 23 10 へ。」元氣よくいった母親も、子どもをよ
 十一 23 12 せん。「どうしたのです。おかあさん
 十一 24 1 図 るの。二三日したらなおると思うけれ
 十一 24 6 母親にすすめました。「略。」母親は、
 十一 24 12 もをつれてきました。そして、「略」
 十一 25 3 「いいあいしました。そのあくる日から
 十一 25 6 買つてもらいました。そのお金は多くは
 十一 25 7 はありませんでしたが、四人が生きてい
 十一 25 7 はじゅうぶんでした。夜になると、また
 十一 25 9 を作ったりしました。ふつうの子どもだ
 十一 25 9 つうの子どもだったら、くたにくになっ
 十一 25 10 、すこしもつかれたようすもなく、かえ
 十一 25 11 になっていきました。金次郎は、一さつ
 十一 25 12 の本をみつめました。それは「大学」と
 十一 26 3 て、かん文で書いたむずかしい本でした
 十一 26 5 むずかしい本でした。その一まいめをめ
 十一 26 8 と書いてありました。金次郎は、それを
 十一 26 10 がしたくなりしました。まきをとり山へ
 十一 27 1 みながら歩きました。「略。」村の人た
 十一 27 3 、うわさをしましたが、金次郎は耳にも
 十一 27 4 、それを続けました。お正月がくると、
 十一 27 6 がまわってきました。たいこをたたいて

十一 27 8 ずむ者もありましたが、金次郎のうちで
 十一 27 9 もありませんでした。そんなわずかな金
 十一 27 11 ふうをしていました。金次郎のうちは、
 十一 27 12 にもびんぼうでした。ところで、そのつ
 十一 28 2 死んでしまいました。おまけに、さかわ
 十一 28 3 れて、のこっていたわずかの田や畑も、
 十一 28 3 されてしまいました。このとき、金次郎
 十一 28 4 はたった十六でした。そこで、ふたりの
 十一 28 6 ることになりました。いままでも、な
 十一 28 7 までも、なまけたことのない金次郎で
 十一 28 7 のない金次郎でしたが、そこへいつてか
 十一 28 7 んめいに働きました。そのうえ、夜おそ
 十一 28 8 と勉強を続けました。夜の勉強には油が
 十一 28 9 にまいておきました。あくる年の春、黄
 十一 28 12 んの実がつかえました。これを油にかえて
 十一 29 1 本を読み続けました。金次郎は、また、
 十一 29 2 、人がすてておいたいねのなえをひろつ
 十一 29 3 て、大水でいたんだ田の水たまりに植え
 十一 29 4 りに植えてみました。すると、秋の終り
 十一 29 6 ることができました。この一ぴょうをも
 十一 29 11 ることができました。やがて、金次郎は
 十一 30 2 すことができました。そればかりではあ
 十一 30 4 るようになりました。四 田園 春
 十一 32 7 図 、海こえてきたつばくろが、すう
 十一 37 2 図 ずしくなってきた。さやまめ・とう
 十一 37 6 図 らばら落ちだした。こずえをかける
 十一 38 2 図 となくとりいれた。きょうはうれし
 十一 39 7 図 んどうみなました。冬の用意もした
 十一 40 4 図 、黄色くかかれたくぬぎ葉鳴らす。
 十一 40 7 図 にさす。ほしたかばちや赤や黄
 十一 41 6 図 廣場につどうたおとなりどうし、
 十一 41 9 図 り、庭に立ったはしも柱。学校へ

十一 42 8 図 目さきに近づいた。どれ植えつけれ
 十一 43 3 卒業式がありました。弟が卒業するので
 十一 43 4 にかわってでました。正面のテーブルに
 十一 43 5 いうめの花をいけた、大きなびんがか
 十一 43 6 かざってありました。ようち園の子ども
 十一 43 9 お立ちになりました。女の先生が、卒業
 十一 43 10 みあげになりました。「略。」「略。」
 十一 44 6 くことになりました。総代の名が、ひと
 十一 44 7 わ高く呼ばれました。弟の名でした。私
 十一 44 8 した。弟の名でした。私は、自分が呼ば
 十一 44 9 は、自分が呼ばれたような気がしました
 十一 44 9 ような気がしました。弟は、すこし大ま
 十一 44 10 どまにに進みました。そして、園長さ
 十一 44 11 さんのまえに向いたとき、「略。」と、
 十一 45 1 図 「あ、ましがった。」と、大声でいい
 十一 45 2 、大声でいいました。弟は、さつとも
 十一 45 4 なおして進みました。こんどはましが
 十一 45 5 ちがいませんでした。園長さんのまえに
 十一 45 8 ら、席に着きました。私はほっとしまし
 十一 45 9 私はほっとしました。そして、弟の心
 十一 45 10 頼もしく思いました。すこしぐらいのこ
 十一 46 1 図 、ごまかさなかつた弟よ。大ぜいの目の
 十一 46 2 「あ、ましがった。」とさげんだ弟よ。
 十一 46 3 「略。」とさげんだ弟よ。ましがったと
 十一 46 3 だ弟よ。ましがったとき、思いきつてや
 十一 46 3 きつてやりなおした、その勇氣を頼もし
 十一 46 4 頼もしく思いました。じゃがいもをつ
 十一 46 10 っかりとういていたえぞ富士。あの山の
 十一 47 2 をこえて内地にきたのは、ぼくの二年生
 十一 47 3 二年生のときだった。津軽海峡の海の水
 十一 47 5 ふたりに立っていた。北海道の家には、
 十一 47 6 は、うしが四頭いた。みんなちうしで

十一 47 7 くによくなれていた。うちではバッテリーも
 十一 47 8 はバッテリーもつくったし、こむぎこで、お
 十一 47 9 らかいパンもやいた。おかあさんがパン
 十一 47 11 つも本を読んでいた。ぼくのいすは、小
 十一 48 4 ねこのメリーがいた。アカシヤの花が風
 十一 48 7 ごでさかりだった。おとうさん、ぼく
 十一 48 9 くは、大きくなったら、また、おかあさ
 十一 50 1 農学校をつくられたクラーク先生もおっ
 十一 50 1 先生もおっしゃった。「略。」ぼくは、
 十一 50 3 くは、大きくなったら、どうしても北海
 十一 51 3 てもまだ続いていた。庭のあさがおの花
 十一 51 5 きになつてしまった。私は、かさをさし
 十一 51 7 停留所まででかけた。しかし、風がはげ
 十一 51 8 をつぼめてしまった。雨にうたれながら
 十一 51 9 くるのを待っていた。電車は、くるには
 十一 52 2 台の電車がとまった。あふれそうな乗客
 十一 52 3 りこむことができた。車内はむしろ暑い
 十一 52 4 、おたがいがぬれたからだで、おしたり
 十一 52 5 ければならなかった。だれかのかさのし
 十一 52 7 と落ちてきたりした。けれども、その足
 十一 52 7 ことはできなかった。電車は、歯ぎしり
 十一 52 10 もみくちやになつた。しゃしようさんは
 十一 52 12 、「と、声をかけた。「略。」とさけん
 十一 53 2 、「略。」とさけん。大きな声だが、雨
 十一 53 5 いになつてしまった。そのとき、しゃし
 十一 53 8 、「略。」といった。そのことばをきい
 十一 53 9 は思わずほおえんだ。いままで、ひどく
 十一 53 10 ひどくとげとげした心でおしあつていた
 十一 53 11 心でおしあつていた人たちも、きゆうに
 十一 54 2 やかな氣持になった。このごろ、電車の
 十一 54 3 られているのをみた。「略。」「略。」「
 十一 54 3 口ふさがず乗ったら中へ。」「略。」「

十一 54 7 、「略。」と「ゆずられたときの氣持でゆずり
 十一 54 9 、「略。」といった、しゃしようさんの
 十一 58 8 いえるようになった。太郎は得意になつ
 十一 59 4 、「略。」と答えた。「略。」「略。」
 十一 59 10 とのことであつた。「略。」と、正男
 十一 59 12 一雄はすぐ賛成した。その近道というの
 十一 60 2 い小川にかけ渡した二本橋がある。太郎
 十一 60 7 たくとめられていたのである。が、いま
 十一 60 9 わりかねてしまった。そうして、いっし
 十一 60 11 一本橋を渡りだした。すると、橋はまん
 十一 61 1 ドブンと落ちこんだ。さいわい近くの田
 十一 61 1 の田で働いていた村の人たちに助けら
 十一 61 3 になつて家に帰った。父は、「略。」と
 十一 61 5 おまえはどうしたのだ。まえからあぶ
 十一 61 5 といつておいた、あの橋を渡つたの
 十一 61 6 、「略。」とたずねた。しかし、太郎はだ
 十一 61 7 太郎はだまつていた。その夜、また父に
 十一 61 9 のまにうちあけた。父は、「略。」と
 十一 61 12 ことわらなかつたのか。」とせめた。
 十一 62 1 、「略。」とせめた。「略。」「略。」
 十一 62 3 はくやくしなつたので、なに、このく
 十一 62 4 て渡つてしまつたのです。「略。」「
 十一 62 9 のことをたずねたとき、なぜすなおに
 十一 62 10 、「とかわなかつたのだね。」「略。」「
 十一 62 11 、「とかわなかつたのです。」「略。」「
 十一 63 7 父親をたずねました。少年は、色のあさ
 十一 63 8 な目をしていました。少年は、ナポリの
 十一 63 9 村からきたのでした。少年の父
 十一 63 9 村からきたのでした。少年の父親とい
 十一 63 10 うにフランスへいったのですが、数日まえ
 十一 64 2 ポリに上陸しました。ところが、にわか

十一 64 2 にかかつて入院したので、家族の者にか
 十一 64 5 紙を書いて、帰つたことと、病院にはい
 十一 64 7 と、病院にはいったことを知らせました
 十一 64 9 ことを知らせました。母親は、その知ら
 十一 64 10 とがっかりしましたが、自分たちのみ子
 十一 64 12 、ナポリへよこしたのでした。門ばんは
 十一 64 12 へよこしたのでした。門ばんは、その手
 十一 65 2 ようにといひました。「略。」と、看護
 十一 65 4 看護人がききました。少年は、もしやわ
 十一 65 6 その名をいひました。しかし看護人は、
 十一 65 7 いだせませんでした。「年よりのでかせ
 十一 65 8 國から帰つてきた——」と、看護人が
 十一 65 9 看護人がききました。「略。」「略。」「
 十一 65 11 えながら答えました。「略。」「略。」「
 十一 65 12 國から帰つてきたのです。」「略。」「
 十一 66 2 、「といつ入院したのですか。」「略。」「
 十一 66 4 らく考えていましたが、ふと思ひだした
 十一 66 4 が、ふと思ひだしたように、「略。」と
 十一 66 7 略。」「といひました。「略。」と、少年
 十一 66 9 配そうにききました。看護人は、少年を
 十一 66 12 、「略。」といひただけでした。ふたり
 十一 67 2 といひただけでした。ふたりは、はしご
 十一 67 2 で歩いていきました。そうして、大きな
 十一 67 3 きなへやの、開いたドアのまえまできま
 十一 67 5 にならんでいました。「略。」と、看護
 十一 67 8 、中へはいりました。少年は、勇氣をふ
 十一 67 11 がら、おどおどした目を右に左に向けて
 十一 67 11 に向けて、青ざめた、やせこけた顔をし
 十一 67 11 ざめた、やせこけた顔をしている病人た
 十一 67 12 ちをみまわしました。中には、死人のよ
 十一 68 1 、びっくりでもしたように、大きくみ開
 十一 68 2 に、大きくみ開いた目をあけて、じつと

11-68 3 いる者もありました。また、子どものよ
 11-68 4 いる者もありました。大きなへやはうす
 11-68 5 ただよっていました。看護婦がふたり、
 11-68 6 きまわっていました。その大きなへやの
 11-68 10 略。」といいました。(二) 少年は包
 11-69 2 とんの上におかれたまま動かずにいる、
 11-69 3 うでをつかみました。病人は動きません
 11-69 4 は動きませんでした。少年は、身をおこ
 11-69 6 父親の方をみました。すると、かなしく
 11-69 7 ってなきだしました。病人はしげしげと
 11-69 9 、いくらかわかつたようでしたが、くち
 11-69 10 わかつたようでしたが、くちびるは動き
 11-69 11 は動きませんでした。こうもかわればか
 11-69 12 思われませんでした。かみの毛は白くな
 11-70 2 うになっていました。ただ、ひたいと弓
 11-70 2 ひたいと弓形をしたまゆとのほかに、
 11-70 3 はありませんでした。息をつくのもやっ
 11-70 4 やつと、少年はいいました。「略。」と、少年
 11-70 6 、少年はいいました。「略。」けれども
 11-70 8 なかなかでてきたんですよ。おかあさ
 11-70 8 なかなかでてきたんですよ。よくみてく
 11-70 11 んに少年をみつめたあとで、目を閉じま
 11-70 12 で、目を閉じました。「略。」病人は、
 11-71 1 ったい、どうしたんですか。ぼくは、
 11-71 4 息を続けていました。少年は、いすをひ
 11-71 6 して待っていました。「略。」と、少年
 11-71 8 、少年は考えました。「略。」少年は、
 11-71 11 思い返していました。去年、みおくつて
 11-71 12 上でわかれを告げたことや、家族の者が
 11-72 1 い希望をかけていたことや、手紙の着い
 11-72 2 とや、手紙の着いたときに、母親がどん
 11-72 2 なにか力をおとしたことなど——それか

11-72 3 いろいろ考えました。そのとき、少年は
 11-72 4 ふとかたにさわったので、びっくりして
 11-72 5 てとびあがりしました。それは看護婦でし
 11-72 5 それは看護婦でした。「略。」と、少年
 11-72 6 くの父はどうしたんでしょう。」と、
 11-72 7 は口早にききました。「略。」と、看護
 11-72 9 やさしくいきました。「略。」「略。」
 11-72 10 それでぼくがきたのですが、どこがわ
 11-73 2 いってしまいました。半時間ばかりたつ
 11-73 3 る音がきこえました。みると、医者、
 11-73 5 にはいつてきました。さっきの看護婦と
 11-73 6 とがついていました。その人たちは、し
 11-73 8 に立ちどまりました。待っているそのあ
 11-73 9 ん長く思われました。医者がすぐそばの
 11-73 10 ベッドまできました。医者は、せいの高
 11-73 10 い、すこしかがんだ、まじめな顔をした
 11-73 10 、まじめな顔をした老人でした。医者が
 11-73 11 顔をしたら老人でした。医者が、まだとな
 11-73 12 は立ちあがりしました。医者は少年をみま
 11-74 1 者は少年をみましました。「略。」と、看護
 11-74 3 、いなかからきたのでございます。」
 11-74 4 看護婦がいました。医者は、手を少年
 11-74 6 のかたにかけました。それから、病人の
 11-74 10 看護婦にたずねました。「略。」と、看護
 11-74 12 看護婦は答えました。すると、医者はち
 11-75 1 ら、こういいました。「略。」そのとき
 11-75 3 こしてたずねました。「略。」「略。」
 11-75 4 くの父はどうしたのでしょうか。「略」
 11-75 6 けながら答えました。「略。」「略。」
 11-75 7 んどくが顔にでたのです。だいぶんわ
 11-75 12 なにかききたかったが、いえませんでし
 11-75 12 、いえませんでした。医者はいつてしま

11-76 1 いってしまいました。そこで、少年は看
 11-76 2 看病にかかりました。が、ほかになにと
 11-76 2 もできませんでしたから、病人のふとん
 11-76 2 飲ませたりしました。病人は、ときどき
 11-76 7 少年の方をみましたが、わかつたような
 11-76 7 ましたが、わかつたようなうすはしま
 11-76 7 すはしませんでした。でも、ハンカチを
 11-76 8 とみつめていました。こうして第一日は
 11-76 9 第一日はすぎました。夜になると、少年
 11-76 10 の上でねむりました。そうして、朝にな
 11-76 12 看病をはじめました。その日は、病人の
 11-77 1 わかりかけでもしたようにみえました。
 11-77 2 たようにみえました。少年のいたわるよ
 11-77 3 ぶようにみえました。そうして、なにか
 11-77 5 びるを動かしました。ちよいちよいとね
 11-77 6 いちよいとねむつたあとでは、目を開い
 11-77 7 とでは、目を開いたときに、その小さな
 11-77 8 すようにみえました。医者は二どきてみ
 11-77 9 いくらかよくなったように思うといいま
 11-77 9 に思うといいました。夕がた、コップを
 11-77 10 人の口もとにつけたときに、少年はその
 11-77 10 そのふくれあがつた顔の上に、きわめて
 11-77 11 ほおえみがうかんだのをみたような気が
 11-77 11 がうかんだのをみたような気がしました
 11-77 12 ような気がしました。そこで、少年は、
 11-78 1 をかけはじめました。少なくとも、いく
 11-78 3 を待ちこがれていたことなどを——それ
 11-78 4 かい愛情のこもったことばで、しつかり
 11-78 5 人をはげました。たとえわからなな
 11-78 6 とえわからなかったとしても、病人がな
 11-78 7 みとのまじりあった、しみじみとしたそ
 11-78 7 た、しみじみとしたそのちょうしに、じ

十一 78 8 ているようにみえたからです。そうして
 十一 78 9 四日めもすぎました。すこしよくなるか
 十一 78 11 いになっていました。一日に二ど、看護
 十一 79 1 だたばせんでした。少年は、父親のち
 十一 79 7 らはらしていました。ところが、五日め
 十一 79 9 になるようになりました。医者は、まったく
 十一 79 11 りに頭をふりました。少年は、いすにぐ
 十一 79 12 すすりなきしました。が、ただ一つ、少
 十一 80 1 することがありました。それは、ようだい
 十一 80 1 だいがわるくなったにもかかわらず、病
 十一 80 3 かけるようにみえたことです。病人は、
 十一 80 3 んだんしっかりした目を少年の上にすえ
 十一 80 6 いようになりました。また、なにかもの
 十一 80 7 動かそうとしました。それが、ときには
 十一 80 8 はっきりとしましたので、少年は希望に
 十一 80 12 いって力づけました。(三) その日の
 十一 81 2 午後四時ごろでした。ちょうど、少年が
 十一 81 3 しんに看護していたときでした。そのへ
 十一 81 3 していたときでした。そのへやのすぐそ
 十一 81 5 う声がきこえました。少年は、思わずは
 十一 81 6 とどびあがりました。のどまででかけた
 十一 81 6 のどまででかけたさけびを、じっとお
 十一 81 8 つくほうたいをしたひとりの男が、看護
 十一 81 9 にはいつてきました。少年は、するどい
 十一 81 11 に立ちすくみました。男はみまわして、
 十一 82 1 さけびを免しました。「略。」男はそう
 十一 82 4 方へとんできました。少年は、父親のう
 十一 82 6 の中にたおれましたが、胸がせまって息
 十一 82 7 もつけませんでした。看護婦や、看護人
 十一 82 9 かけよってきました。少年は、まだ声を
 十一 82 11 ができませんでした。「略。」と、父親
 十一 83 1 病人の方をみつめたあとで、いくども少

十一 83 2 してからいいました。「略。」少年は二
 十一 83 3 会 いったいどうしたのだ。おまえはべつ
 十一 83 4 会 へつれていかれたのだな。わたしはま
 十一 83 5 手 会 ロをやりました。」って手紙がきた
 十一 83 5 会 』って手紙がきたきり、おまえがこな
 十一 83 6 会 がっかりしていたかわからないよ。こ
 十一 83 7 会 まえはここにいたのだね。どうしてこ
 十一 83 8 会 ちがいがおこったのだろう。わたしは
 十一 83 9 会 じょうぶになったよ。それで、おかあ
 十一 84 3 会 を話そうとしましたが、「略。」とだけ
 十一 84 5 、やっといいました。「略。」父親は、
 十一 84 7 方へひっぱりました。少年はふり返って
 十一 84 8 病人の方をみました。「略。」と、父親
 十一 84 10 れてうながしました。少年は、また、病
 十一 84 11 人の方をなめました。病人は、そのとき
 十一 84 12 少年をみつめました。すると、少年のた
 十一 85 2 ほとばしりました。「略。」父親は、
 十一 85 5 会 のあいだいました。おじさんは、いつ
 十一 85 12 をみつめていましたが、やがてまた、病
 十一 86 1 病人の方をみました。「略。」と、父親
 十一 86 3 父親はたずねました。「略。」と、看護
 十一 86 5 看護人が答えました。「略。」病人は、
 十一 86 6 会 り外国から帰ったばかりで、ちょうど
 十一 86 6 会 あなたが入院したと同じ日に、入院し
 十一 86 7 会 じ日に、入院しなです。ここへつれ
 十一 86 7 会 ここへつれてきたときには、もうすっ
 十一 86 9 会 口もきけなかったのですよ。たぶん、
 十一 86 12 の方をみていました。父親はチチロにい
 十一 87 1 会 チチロにいいました。「略。」「略。」
 十一 87 4 が小声でいいました。「略。」父親はそ
 十一 87 8 会 ってでていきました。(四) 少年がべ
 十一 87 11 、病人はほっとしたようにみえました。

十一 87 11 たようにみえました。で、チチロはまた
 十一 87 11 看護をはじめました。その熱心とそのし
 十一 88 2 かわりませんでした。チチロはまた、病
 十一 88 4 げましたりしました。その日も、その晩
 十一 88 5 つきそっていました。そのつぎの日も、
 十一 88 6 つとそばにいました。しかし、病人はま
 十一 88 6 くなるばかりでした。顔はむらさき色に
 十一 88 7 よ困難になりました。夕がたの回しんの
 十一 88 9 略。」といいました。そこで、チチロは
 十一 88 10 はなしませんでした。病人はしげしげと
 十一 88 12 いたげにしました。また、やさしい色
 十一 89 1 ぶこともありました。が、それも、だんだ
 十一 89 2 くなっていきました。その晩、少年は夜
 十一 89 4 みまもっていました。あかつきの光が窓
 十一 89 4 白くさしこんできたとき、医者が、看護
 十一 89 5 てはいってきました。「略。」と、医者
 十一 89 7 、医者はいいました。少年は病人の手を
 十一 89 8 の手をにぎりました。病人は、目を開い
 十一 89 9 また目を閉じました。そのとき、少年は
 十一 89 10 の手をにぎりしめたような気がしました
 十一 89 11 ような気がしました。「略。」と、少年
 十一 89 12 会 くの手をにぎった。」と、少年はさけ
 十一 90 1 少年はさけびました。医者は、病人の上
 十一 90 2 うつむいていましたが、やがてからだを
 十一 90 3 つすぐに立てました。看護婦が十字かぞ
 十一 90 4 べからはずしました。「略。」と、少年
 十一 90 5 会 「死んでしまった。」と、少年はさけ
 十一 90 6 少年はさけびました。「略。」と、医者
 十一 90 8 、医者はいいました。「略。」そのうち
 十一 90 9 会 みの看病はすんだ。帰ってしあわせに
 十一 90 12 のほうにいつていた看護婦が、小さなす
 十一 91 3 から取ってきました。そうして、それを

十二 91 4 しながらいいました。「略。」「略。」「
 十二 91 11 手で目をふきました。「略。」「
 十二 92 4 念に、この死んだ人にのこしていきま
 十二 92 11 いだ呼びなれていた名が、しぜんと口に
 十二 92 11 にのぼってきました。「略。」「
 十二 93 2 わきにかかえました。夜は明けかけてい
 十二 93 3 明けかけていました。
 十二 4 4 カを発見して帰ったとき、イスパニア人
 十二 4 5 たいへん喜びました。ある日、祝賀会
 十二 5 1 会 て陸地にであつたのが、それほど手
 十二 5 2 てあざわらいました。これをきいたコロ
 十二 5 3 した。これをきいたコロンブスは、つと
 十二 5 7 略。」「といいました。人々は、なんのた
 十二 5 8 なことをいいたのかと思ひながらや
 十二 5 9 がらやってみましたが、もとよりどう
 十二 5 11 く立てていいました。「略。」「やまぶ
 十二 5 12 会 、これも人のしたあとでは、なんのぞ
 十二 6 4 がりにでかけました。すると、にわか雨
 十二 6 5 わか雨が降りだしたので、近くの家をた
 十二 6 7 りることにしました。「略。」「
 十二 6 11 少女がでてきましたので、「略。」「とた
 十二 7 2 」。とたのみました。少女はなにを思っ
 十二 7 2 少女はなにを思つたのか、ふと庭さき
 十二 7 3 庭さきにさいていた黄色なやまぶきの一
 十二 7 4 かにさしました。道灌は、その花の
 十二 7 5 枝を手にはしましたが、なんのことだか
 十二 7 7 らべるばかりでした。それからのちにな
 十二 7 8 の心がわかりました。それは、「七重八
 十二 7 12 女の思ひをたくしたものでありました。
 十二 7 12 たものでありました。はた織り 孟子
 十二 8 2 子どものころでした。家をはなれて勉強
 十二 8 3 にでかけていましたが、ある日のこと、

十二 8 4 り、会いたくなつたので、学校から家へ
 十二 8 5 へもどつてきました。「略。」「といつて
 十二 8 7 ばへかけよりました。そのとき、母はは
 十二 8 8 たを織つていましたが、孟子の顔を見る
 十二 8 9 っ、そばにあつた小がたなをとりあげ
 十二 8 9 なをとりあげました。孟子がびっくりし
 十二 8 11 んに織り続けていたぬのを、小がたなで
 十二 8 11 切つてしまいました。孟子はおどろいて
 十二 9 2 会 ん、どうなさつたのですか。」「とたず
 十二 9 9 略。」「といいました。ガラスのかけら
 十二 9 11 らしい身なりをした老人が、道路をうろ
 十二 10 3 トにいられていました。そのようすをみて
 十二 10 4 のようすをみていたじゅんさが、老人の
 十二 10 7 」。とたずねました。すると、老人は、
 十二 10 9 トに手をいれましたが、とりだしてみせ
 十二 10 9 と、とりだしてみせたものは、ガラスのか
 十二 10 10 かけらばかりでした。じゅんさは、「略
 十二 11 2 略。」「とききました。すると、老人は廣
 十二 11 6 略。」「と答えました。この老人は、ペス
 十二 11 7 ッチという人でした。書物 リビング
 十二 11 9 カを探けんしていたときの話です。ある
 十二 11 10 物を読んでいた。それをみた土人の
 十二 11 11 ました。それをみた土人のひとり、書
 十二 12 1 ものだと考へました。そこで、リビング
 十二 12 2 つとそとにでかけたるすにやつてきて、
 十二 12 3 物を手にとりました。そうして、ページ
 十二 12 4 て、たべてしまつたということです。
 十二 13 4 てて写生をはじめた。そこには一本のざ
 十二 13 7 しい花をつけていたが、あらかたちつて
 十二 13 9 かの実がなつていた。それが、めきめき
 十二 14 1 美しいつやつやしたしゅの色がさしてき
 十二 14 1 ゆの色がさしてきた。文雄は、それがか

十二 14 2 それがかきたかつた。高いところからた
 十二 14 3 ろからたれさがつたのもいい。まだ青々
 十二 14 3 い。まだ青々とした木の葉の中から大き
 十二 14 6 れこれと考へていたが、根もとをかこう
 十二 14 7 をかこうと決心した。そうして、いよい
 十二 14 7 がきをかきはじめた。しかし、その根も
 十二 14 8 てつみ重ねておいたかれ草が、すっかり
 十二 14 9 すっかりくちていた。文雄はそれが氣に
 十二 14 10 てしかたがなかつた。「略。」「ひとり
 十二 14 12 文雄が、そのくちた草をとりのけようと
 十二 15 3 びき頭をだしていた。そうして、文雄が
 十二 15 5 へかくれてしまつた。「略。」「文雄は、
 十二 15 11 た下がきにかかつた。だいたいの形をし
 十二 16 1 ころ、かげになつたところ、力のこもつ
 十二 16 1 ころ、力のこもつた角、まるみのある面
 十二 16 2 面、重みのかかつた枝のつけね、ふわふ
 十二 16 2 けね、ふわふわした軽い葉、そんなとこ
 十二 16 4 木炭を動かしていた。下がきがすむと、
 十二 16 6 、色をぬりはじめた。これは、絵のすき
 十二 16 6 は、絵のすきだつたおじさんからゆずつ
 十二 16 7 らゆずつてもらつたもので、子どもには
 十二 16 7 ばすぎるほどだつた。いい色の絵のぐが
 十二 16 8 ぐがたくさんあつた。しかし、パレット
 十二 16 9 パレットの上でみたときは、ずいぶん美
 十二 16 12 とおりできあがつた。文雄は立ちあがつ
 十二 16 12 っすこしはなれたところからじつとみ
 十二 17 1 からじつとみつめた。「略。」「文雄は、
 十二 17 5 とつてかきはじめた。(一)「略。」「
 十二 17 8 会 い色になりましたね。」「ああ、こおろ
 十二 18 1 会 ビツと鳴いていたときには、ほんとう
 十二 18 2 会 かしいようでしたけれど――」「略
 十二 18 5 会 羽を動かしてみたら、ビツビツという

十二 18 6 〇 いう音がしました。はあ、これが鳴
 十二 18 8 〇 おもしろくなったのです。おとなりの
 十二 19 2 〇 うずになりました。このあいの晩も
 十二 19 4 〇 感心していましたよ。「略」。「略」
 十二 19 6 〇 ろうと思いましたが——あなただってそ
 十二 19 7 〇 心がおありだったでしょうね。「略」
 十二 19 9 〇 一年一年とすんだことをかえりみて、
 十二 19 12 〇 じめて実をつけた三年は、青い小さ
 十二 20 1 〇 なかったりだったのに、このごろでは
 十二 20 3 〇 ようになりました。「略」。「略」。
 十二 20 8 〇 んがいつてましたよ。どうしてこのざ
 十二 20 11 〇 いなと思ひましたよ。あれがあれば、
 十二 21 12 〇 おっしゃいましたよ。「略」。「略」
 十二 22 4 〇 じょうずになったのだろう。そうだ、
 十二 22 7 〇 「文雄はこう考えた。三 わたしの民
 十二 23 2 〇 長いこと外地にいた姉たちがひきあげて
 十二 23 2 〇 ひきあげてきました。せまい家なので、
 十二 23 10 〇 を作ったりしていたので、さしあたり困
 十二 24 7 〇 ちゃんをひと目みたとき、天にもものぼる
 十二 24 8 〇 るほどうれしかったのです。民ちゃんを
 十二 25 4 〇 しめカバーをさせたままほっておくと、
 十二 25 7 〇 せるようにしました。はじめはいやがっ
 十二 25 8 〇 めはいやがっていた民ちゃんも、よけれ
 十二 25 10 〇 るようになりました。「略」。「略」。
 十二 27 5 〇 す。いまそこにいたかと思うと、もう次
 十二 27 8 〇 と、だれかがいったことを思いだしまし
 十二 27 8 〇 とを思いだしました。それで、わたしは
 十二 27 11 〇 に持たせてみました。「略」。「略」。
 十二 28 4 〇 と立ちあがりました。「略」。「略」。
 十二 28 11 〇 こんでしまいました。「略」。「略」。
 十二 29 2 〇 二足ほど歩きました。こんなふうにして
 十二 29 4 〇 るようになりました。ある日、学校から

十二 29 5 〇 さわぎしていました。「略」。「略」。
 十二 29 8 〇 て道まででていたのよ。「略」。「略」。
 十二 29 9 〇 んなことを覚えてたんでしよう。たいへ
 十二 29 12 〇 きて愛らしくなった民ちゃんをだいてや
 十二 30 2 〇 」。というのでした。おとなりで、この
 十二 30 5 〇 うようになりましたが、民ちゃんは、そ
 十二 30 12 〇 ろいてしまいました。四 光を求めて
 十二 31 4 〇 生がきてくださった日であります。それ
 十二 31 6 〇 のことであります。この日の午後、私
 十二 31 8 〇 たたずんでいました。午後の日光は、げ
 十二 31 9 〇 げんかんをおおったすいかずらのしげみ
 十二 31 10 〇 りそそいでいました。もう、めばえそめ
 十二 31 10 〇 もう、めばえそめたそのなつかしい葉や
 十二 32 1 〇 れてなでていました。私は、どのような
 十二 32 3 〇 も知りませんでした。私は、近づいてく
 十二 32 5 〇 る足音を感じましたので、それが母だと
 十二 32 7 〇 手をさしだしました。だれかがそれをと
 十二 32 8 〇 それをとらえました。そうして、次のし
 十二 32 12 〇 めにきてくださった——そのかたの両う
 十二 33 1 〇 だきあげられました。サリバン先生は、
 十二 33 2 〇 は、お着きになったあくる朝、私をおへ
 十二 33 3 〇 形をくださった。私がしばらくその
 十二 33 5 〇 字をつづられました。私は、すぐこの指
 十二 33 7 〇 まねようとした。とうとうじょうず
 十二 33 8 〇 うずにつづれましたとき、私は子どもら
 十二 33 11 〇 つづてみせました。そのとき、私は、
 十二 34 2 〇 を動かすだけでした。それからいく日か
 十二 34 6 〇 の動詞も知りました。けれども、物には
 十二 34 7 〇 のあることを知ったのは、先生がおいで
 十二 34 8 〇 てからのことでした。ある日、私が新し
 十二 34 12 〇 ようとなさいました。その日はすでに、
 十二 35 1 〇 たいへん苦しんだあとでした。サリバ

十二 35 2 〇 苦しんだあとでした。サリバン先生は、
 十二 35 4 〇 るために苦しまれたのですが、私は、い
 十二 35 4 〇 ができませんでした。先生は失望して、
 十二 35 5 〇 いらっしやいましたが、こんどは、二つ
 十二 35 7 〇 ようとなさいました。私は、とうとうか
 十二 35 8 〇 にたたきつけました。そうして私は、く
 十二 35 9 〇 して私は、くだけた人形のかけらを足さ
 十二 35 9 〇 ゆかきに思いました。私は、先生がかけ
 十二 35 11 〇 ようすを感じましたが、ただ、腹だちの
 十二 35 12 〇 因がとりのぞかれたという満足を覚えた
 十二 35 12 〇 という満足を覚えたばかりでした。しば
 十二 35 12 〇 覚えたばかりでした。しばらくして、先
 十二 36 1 〇 づてきでくださったので、私は暖かい日
 十二 36 3 〇 おどりがりました。ふたりは、いどの
 十二 36 10 〇 をおりていきました。だれかが水をくみ
 十二 36 11 〇 くみあげていましたので、先生は私の手
 十二 36 12 〇 口の下へやりました。冷たい水がいきお
 十二 37 2 〇 いてくださいました。私は、身動きもせ
 十二 37 2 〇 動きもせず、立ったままで、全身の注意
 十二 37 3 〇 にそそいでいました。ところがとつぜん
 十二 37 4 〇 かしらわすれていたものを思いだすよう
 十二 37 5 〇 のはたらきといったようなあるふしぎな
 十二 37 6 〇 なものを感じました。このときはじめて
 十二 37 8 〇 ることを知りました。この生きた一こと
 十二 37 9 〇 ました。この生きた一ことが、私のたま
 十二 37 10 〇 ることになったのです。こうして私
 十二 37 11 〇 あることがわかったのです。私の手にふ
 十二 38 1 〇 に感じはじめました。それは、先生が與
 十二 38 2 〇 が與えてくださった新しい目で、すべて
 十二 38 3 〇 をみるようになったからです。へやに帰
 十二 38 4 〇 は、自分がこわした人形のことを思いだ
 十二 38 6 〇 わせようとしたがだめでした。私の

十二 38 6 ましたがだめでした。私の目にはなみだ
 十二 38 7 つばいたまりました。自分のしたことが
 十二 38 7 ました。自分のしたことがわかったので
 十二 38 8 したことがわかったので、生まれてはじ
 十二 38 9 に胸をさされました。私はその日、たく
 十二 38 10 ことばを覚えしました。全部覚えてはいま
 十二 38 12 どのことばがあつたことを思いだします
 十二 39 1 で、ごとの多かつたこの日もくれて、小
 十二 39 2 が自分にもたらしした喜びを思い返してい
 十二 39 2 びを思い返していたときの私ほど幸福な
 十二 39 5 つことを知りました。(二) これは、
 十二 39 7 カの女の人が書いた「わが生がい」の一
 十二 39 8 、日本語になおしたものです。よんでわ
 十二 39 10 のうえつんぼでした。それなのに、こん
 十二 40 1 て一年半ほどたつたとき、大病にかかつ
 十二 40 2 たらきを失いました。みることもできず
 十二 40 4 しゃくもちになつたのもむりはありませ
 十二 40 7 だくことにしました。サリバン先生が、
 十二 40 9 りよくがいました。しかし、ケラーに
 十二 40 11 ことに成功しました。だんだんちえがつ
 十二 41 1 くようになりました。もちろん、サリバ
 十二 41 3 て、勉強をはじめたのです。手のひらに
 十二 41 8 すようになりました。ケラーは、もうサ
 十二 42 2 ためにさされました。そののち、ヘレン
 十二 42 4 せにまでなりました。これは、ケラーの
 十二 42 6 とが、一つになつたおかげです。五
 十二 43 8 んからいただいた童話の本に、人形が
 十二 43 9 す話がありましたよ。」「略」。」「略
 十二 43 10 ながねしずまつたあとで、動いている
 十二 44 4 人形しばいをみたことがあるかね。」「
 十二 45 9 と別世界にいったような楽しい氣がす
 十二 45 11 とも。いまいった文樂は手でつかうの

十二 46 2 と古くからあつたし、おじさんの子ど
 十二 46 2 のころ、よくみたものだ。あのころ
 十二 46 3 ろは影絵もあつたよ。」「略」。」「略
 十二 46 5 さかんでなかつたが、アジアでもヨー
 十二 47 8 」。」「でも、生きた人間のほうがうまく
 十二 50 4 けのこして、もんだ紙にのりをつけない
 十二 50 9 から、細長く切つた古新聞にのりをつけ
 十二 53 6 (5) 顔と手をつけた着物を裏返すのでき
 十二 55 2 先祖代々住みなれた土地はもとよりのこ
 十二 55 2 と、自分の生まれたところは、なんとも
 十二 55 5 と、ときからききなれた傳説が、そのあいだ
 十二 55 6 い歴史にもとづいたものもあるが、昔か
 十二 55 7 からいい傳えられたというだけのもの
 十二 55 8 られて有名になつたものもあるが、ただ
 十二 56 1 ばあさんからきいた話を思いだして、書
 十二 56 4 てみると、よくにたようなのが、あちら
 十二 56 8 という大きな男がいた。みそ五郎は、雲仙
 十二 56 10 を楽しみにしていた。雲仙岳の中ほどに
 十二 56 11 そ五郎が畑をうつたときのくわのあとで
 十二 57 1 で、そのとき落ちた土くれが、有明海の
 十二 57 10 の難題をもちだした。それは、おにが
 十二 57 11 それができなかつたら、これからのちは
 十二 58 2 、もしそれができたら、毎年ひとりずつ
 十二 58 2 るというのであつた。おにには、これを承
 十二 58 3 だんをききだした。なにしろ、いっし
 十二 58 5 だんができあがつた。ところがいま一だ
 十二 58 9 空が明かるくなつた。おにはおどろいて
 十二 58 11 たを消してしまつた。おには約そくをま
 十二 59 1 なことはなくなつた。湖山の池 鳥取
 十二 59 5 この里に長者がいた。一代二代はいい人
 十二 59 6 人で、よくさかえたが、三代めの長者は
 十二 59 8 がまををしはじめた。ある年の夏、きよ

十二 60 1 朝から集まつてきた。長者は、なんと思
 十二 60 2 者は、なんと思つたか、なん千アールの
 十二 60 3 しまえといいつけた。里の人たちはおど
 十二 60 3 人たちはおどろいたが、いいだしたこと
 十二 60 4 いたが、いいだしたことはあとへひかな
 十二 60 5 、一心にはたらいいた。長者は、高どのの
 十二 60 6 、得意になつていた。ところで、もうあ
 十二 60 8 れそうになつてきた。このとき、高どの
 十二 60 9 高どのに立つていた長者は、日のまるの
 十二 60 10 げて、しずみかけた目をさしめくと、
 十二 60 12 どまでもどつてきた。それで、のこりの
 十二 61 1 の望みはとげられた。ところが、そのあ
 十二 61 3 なく、きのう植えたなん千アールのあ
 十二 61 5 きな池となつていた。家具の岩屋 徳
 十二 61 8 しい人が、ふとしたことから、この岩屋
 十二 61 9 のでることを知つた。それからというも
 十二 61 10 岩屋の入口で頼んだ。そうしてよく日
 十二 61 11 ってみると、頼んだ品物がちゃんとそろ
 十二 61 11 るつてならんでいた。そのことが評判に
 十二 62 2 にくようになつた。その中にわるい人
 十二 62 2 い人がいて、かりた家具をかりつばなし
 十二 62 2 にして返さなかつた。そののちは、だれ
 十二 62 3 してくれなくなつたという。十和田湖
 十二 62 4 とりの木こりがいた。名を八郎といつた
 十二 62 7 。名を八郎といつた。ある日のこと、八
 十二 62 8 のどがかわいてきた。水を飲もうと思つ
 十二 62 9 とつてやいてたべた。小魚はしおからか
 十二 62 11 魚はしおからかつたので、のどがかわい
 十二 63 1 また川の水を飲んだ。いくら飲んでもの
 十二 63 2 きがとまらなかつた。そのうちからだ
 十二 63 3 びになつてしまつた。家にはひとりの母
 十二 63 5 るうちに湖となつた。それが十和田湖の

十二664 ない、それからでた細い根が、つなよ
 十二692 る人は、はをもったのこぎりににいて
 十二697 みと廣さがなかったら、正しくりっぱに
 十二702 人が住んでいました。曾良は、信州の
 十二703 そうじょうずでした。芭蕉のことをき
 十二704 の弟子になりました。そうして、はい句
 十二705 とに心をきめました。曾良は思いました
 十二706 。曾良は思いました。芭蕉はたったひと
 十二710 住むことにしました。そうして、毎朝早
 十二712 をたいたりしました。また、まきが少な
 十二713 にいたりしました。このようにして芭
 十二714 の話をきくのでした。先生の近くにこれ
 十二716 、曾良は喜びました。そのうちに、冬が
 十二717 冬がきて、くもった空がひくくたれる日
 十二718 れる日が続きました。芭蕉はからだによ
 十二718 は身にこたえました。雪をみるのが樂
 十二719 るのが樂しみでした。芭蕉は、くもった
 十二719 。芭蕉は、くもった空をあおぎながら、
 十二7110 遠しがつていました。そのあたりに遊ん
 十二711 も、同じ氣持でした。まだなにも降って
 十二723 やしたてていました。芭蕉は、子どもが
 十二725 どもが大すきでした。そのあたりにい
 十二7211 だちにっていました。「略」。「略」。
 十二7212 なのは、雪が降った、なををして遊ぶ
 十二7311 った立っていました。子どもたちのか
 十二7312 したいと思いました。いざ子ども走りあ
 十二743 芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれ
 十二745 から降ってきました。みるみるうちにつ
 十二746 うちにつもりましたが、曾良が水をたく
 十二747 くんでおいてくれたし、まきもたくさん
 十二752 らにひびくのでした。その夜は、すべ
 十二753 も雪にうずめられたようなしずかさでし

十二753 うなしずかさでした。そのしんとした
 十二754 。そのしんとしたしずかさの中に、芭
 十二755 雪の句を考えました。トントン、トント
 十二759 すぐ戸をあけました。「略」。「略」。
 十二7510 降るのによくきたな。「略」。「略」
 十二7512 られませんでした。「略」。「略」やがて
 十二766 持ちだしてきました。それは、赤いおぼ
 十二766 まるめてこしらえたうさぎでした。なん
 十二767 らえたうさぎでした。なんてんの実が、
 十二767 ぐいれてありました。曾良は、芭蕉の子
 十二768 うれしくなりました。ふたりは子どもの
 十二7610 ようにわらいました。きみ火をたけよ
 十二774 する日のことでした。テニスコートには
 十二776 へんな見物人でした。時間がせまったの
 十二777 た。時間がせまったので、私はユニホー
 十二778 にコートにでました。すこしばかり手な
 十二7710 インを頼まりました。その少年たちは、
 十二781 つかって頼みました。私は、その少年の
 十二782 の少年の持っていたペンをかりて、サイ
 十二783 ンをしてやりました。少年たちは、これ
 十二786 略」といいました。私は、いままで試
 十二787 ふうにはげまされたことはありませんで
 十二788 はありませんでした。あまりかわい少
 十二788 かわいい少年だったので、よくみていま
 十二7811 へ」とたずねました。ふたりの少年は、
 十二791 はっきり答えました。「略」。「略」。
 十二792 た。「そうだったのかい。きみたちは
 十二795 「どこで生まれたの」「略」。「略」
 十二804 けるようにたずねたとき、少年たちは、
 十二809 をいれて答えました。そのひとみの中に
 十二812 あらわれていました。日本という國をみ
 十二811 日本という國をみたこともなく、また日

十二813 っぱいになりました。それからまもなく
 十二814 合ははじまりました。キンゼー選手は世
 十二816 らないと思いました。火のでるようなは
 十二817 い試合が続きました。三時間もふつとお
 十二818 とおしに戦いました。なんどもコートで
 十二818 ートでたおれました。たおれてはおき、
 十二819 おきては戦いました。私はスタンドから
 十二8111 つことができました。私はいまでも、あ
 十二823 選手をなぎたおした清水選手は、最後の
 十二824 むことになりました。もし、この決勝戦
 十二824 に勝つことができたなら、世界のほまれ、
 十二827 チルデン選手でした。チルデン選手は、
 十二8211 がけて集まりました。まっ白い線のひか
 十二831 つ白い線のひかれたコートには、日ざし
 十二833 りそそいでいました。そこへ両選手があ
 十二834 手があらわれました。スタンドの人たち
 十二836 ふたりに送りました。「略」。「略」試合が
 十二838 合ははじまりました。目にもとまらぬボ
 十二8311 と、ゆききました。ボールはたましい
 十二8312 たましいのこもった生きもののようにな
 十二841 て、はねとびました。一つのボールを中
 十二842 にかけまわりました。かたずをのんで試
 十二842 手の勝となりました。あの小さいからだ
 十二845 ルをうちだしました。第三回はチルデ
 十二8411 手の勝となりました。見物人は、いよい
 十二8412 あせをにぎりました。ところが、試合の
 十二852 いちゅう、どうしたはずみか、チルデン
 十二853 らせてしまいました。そうして、いまに
 十二856 びそうになりました。相手を一きよにう
 十二857 めてるときでした。清水選手は、ポー
 十二861 るに、送ってやったのであります。チル
 十二862 手は、とりみだしたしせいではありまし

十二 86 2 せいではありましたが、やわらかなボー
 十二 86 3 らかなボールだったので、無事に受け返
 十二 86 4 になっていきました。つぎつぎと、両選
 十二 86 5 けずって戦いました。夕日はすっかりお
 十二 86 6 おちてしまいました。わずかな点のちが
 十二 86 7 の負けとなりました。ネットをはさんで
 十二 86 8 く手をかわしました。心おきなく戦いぬ
 十二 86 9 おきなく戦いぬいた両選手のために、見
 十二 86 10 おしませんでした。十 ことばのは
 十二 87 6 る父にこういわれたら、バケツか、じょ
 十二 87 8 すずりばこをあけた父にこういわれたら
 十二 87 9 た父にこういわれたら、水さしに水をい
 十二 87 10 る父にこういわれたら、手おけに水をい
 十二 88 11 のことばがわかったとはいえないことに
 十二 89 10 る。そうでなかったら、ただ口さきでい
 十二 90 3 ようになえていたのでは、そのことば
 十二 90 8 くりひろにいった。」太郎が、こうい
 十二 90 9 いう短い文を書いた。太郎はこの「くり
 十二 90 11 い。天気のよかったこと、山へいったこ
 十二 90 11 たこと、山へいったこと、弟やいぬをつ
 十二 91 1 いぬをつれていったこと、くりがたくさ
 十二 91 2 たくさん落ちていたこと、カサカサと落
 十二 91 3 ち葉をふんでいったこと、小鳥が鳴いて
 十二 91 4 、小鳥が鳴いていたこと、帰っておかあ
 十二 91 6 にゆでていただいたこと、みんなでたべ
 十二 91 6 と、みんなでたべたこと——楽しかった
 十二 91 7 こと——楽しかったさまざまなことが、
 十二 91 11 くりひろにいった。」と書いた。太郎
 十二 91 11 「(略)。」と書いた。太郎と同じ文であ
 十二 92 2 にさそわれていったこと、くりはあなが
 十二 92 2 あながい少なかったこと、そのかわりき
 十二 92 3 こがたくさんあったこと、りすをみつ

十二 92 4 みつけて追いかけたこと、もみじの枝を
 十二 92 4 じの枝をとってきたこと——そんなこと
 十二 92 6 れと同じ文を書いたとしても、そのなか
 十二 92 9 書いても、書かれたことがそれぞれちが
 十二 92 12 くりひろにいった。」といい、「遠足」
 十二 94 7 ころがこれを読んだ人々の心には、めい
 十二 94 7 、めいめいがつたものか思いだされて
 十二 94 12 ぼをとりにでかけたが、道ばたに野はぎ
 十二 95 1 野はぎがさいていたので、赤とんぼはと
 十二 95 2 っぱいつんで帰ったことを思う。秋子は
 十二 95 4 学校にうつってきたときのことを思いだ
 十二 95 7 まわりをとんでいた。「(略)。」こんな短
 十二 95 10 、それぞれがつたことを心の中に思い
 十二 97 4 らがあります。みたところ、なんのかわ
 十二 97 7 四年生のとき習った貝づかのことを思い
 十二 98 2 たくさんたべていたようです。このほか
 十二 98 7 おなどをたべました。このように、古い
 十二 98 10 るいとぐちとなつたのは、アメリカのモ
 十二 99 2 器 貝づかからでたものをならべてみま
 十二 99 8 か角などで作つたつり針もあります。
 十二 100 1 るときにもつかったことでしょう。土器
 十二 101 1 い町から発見されたもので、やよい式土器
 十二 101 5 かからほりだされたものです。赤色のす
 十二 102 1 さしいのびのびした顔をこらんなさい。
 十二 102 2 ても、平和を愛した古代の人たちの氣持
 十二 102 4 鳥などをこしらえたものがあります。
 十二 102 9 かりまえに作られたものであります。夢
 十二 103 3 、はじめて作られた日本のお金です。い
 十二 103 6 ルのようにならんだ文字があつたりして
 十二 103 7 す。お金がなかったときにくらべて、お
 十二 103 9 れほど便利になつたか、考えることがで
 十二 104 3 ほどまえに作られた平等院という建物

十二 104 8 の形や左右にのびたろうかのかっこうに
 十二 105 3 大きなげたをはいた女の人が、おとをも
 十二 105 9 くだものをならべたやお屋らしいのもあ
 十二 106 3 巻物 四つに組んだ大ずもう。かえるは
 十二 106 5 の足かけをしました。うさぎはけんめい
 十二 106 6 めいにこらえましたが、たおれそうです
 十二 106 7 です。たまにかねた二ひきのうさぎが、
 十二 106 10 えんをはじめました。土ひょうは、はぎ
 十二 107 1 すきがさきみだれた秋の野原。これは、
 十二 107 1 正という人がかいた動物絵巻の一場面
 十二 107 3 で、とくにすぐれたものの一つです。さ
 十二 107 7 、大きな目、のびた手さき、しつかりふ
 十二 107 9 、しつかりふまえた両足、どこをみても
 十二 108 5 の仁王さまをほつたのは運慶だといわれ
 十二 109 3 年生のときに習ったイソップ物語。イソ
 十二 109 6 プという人が書いたお話ですが、これを
 十二 109 6 教師が日本に傳えたのは、三百五十年ほ
 十二 109 9 渡つてきていましたから、こんなりつぱ
 十二 109 10 ばな本ができました。日本のことばにな
 十二 110 3 どん育つてきました。まき絵書だな
 十二 110 7 。江戸時代にできたまき絵書だです。
 十二 110 9 は、うるしをぬつたうえに、金や銀のこ
 十二 110 9 もようをあらわしたものです。また、な
 十二 110 10 貝などをはめこんだものもあります。黒
 十二 111 2 は、日本のすぐれた工芸品の一つで、古
 十二 111 2 はやされてきました。浮世絵 おなじ
 十二 111 4 戸時代の人のかいたもので、浮世絵とい
 十二 111 8 とつに心をあわせて美しさは、このとお
 十二 112 1 のとなつて生まれたのです。解体図
 十二 112 2 を絵いりで説明した本を、いまから百八
 十二 112 6 に、日本で出版したものです。表紙の文
 十二 112 8 知られていなかったのですが、この本に

十二 13 1 じめてすっかりしたものとになりました。
十二 13 1 たものとなりました。この本を日本語に
十二 113 2 、どれほど苦心したかわかりません。新
十二 113 9 東京横濱間を走ったものであります。汽
十二 114 10 たんじょうしました。おしまいのこと
十二 115 2 日本の面影を写した写真帳が終りました
十二 115 2 写真帳が終りました。このような歩みを
十二 115 3 歩みをたどってきた日本を、これからど
十二 115 8 なの歩調がそろったときに、はじめて、
十二 5 8 どい角をのぞかせた。長くかなしみにし
十二 5 9 かなしみにしずんだものにも、春は、希
十二 7 5 雲をかたにまどった小山をめぐって、聞
十二 8 7 が、その深く進んだものを科学的知識と
十二 9 1 かめ、すでに知ったことを材料として、
十二 9 2 かにして、きまった法則を知る。いいか
十二 9 4 知って、ととのった知識とし、また、さ
十二 9 5 また、さらに進んだ研究をする土台にす
十二 9 12 と、ほうき星が出たからだといったり、
十二 10 2 があるなどといった。今日でも、まだ、
十二 10 3 も、まだ、そうした考えがのこっている
十二 10 5 きめたり、生まれた年によって、その人
十二 10 7 かし、よいといった方角へ移って困った
十二 10 7 方角へ移って困った人もあれば、わるい
十二 10 7 ば、わるいといった方角へこして、つご
十二 10 8 つごうのよくなった人もある。同じ名ま
十二 11 11 ぐなことや曲がったことは、知識をもと
十二 13 4 が行われていました。しかし、この天動
十二 13 6 が、目についてきたのです。熱心な学者
十二 13 7 それを発見しました。火星や金星・木星
十二 13 10 球もまるい形をしたもので、火星などと
十二 13 11 こともわかりました。つまり、天動説と
十二 13 12 動説が出てきました。これを最初にいい

十三 14 1 を最初にいいだしたのは、十六世紀の中
十三 14 1 紀の中ごろに死んだ、ポーランドのコペ
十三 14 3 という人が出ました。この人は、すぐれ
十三 14 4 この人は、すぐれた数学者で、また熱心
十三 14 4 心な天文学者でした。いっしんに観察し
十三 14 7 ことを発見しました。そのケプラーと同
十三 14 8 アのピサに生まれたガリレオという学者
十三 14 9 う学者がありました。わかいころからい
十三 14 10 見や発明をしました。自分で望遠鏡を組
十三 14 11 でこまかに計算した結果、コペルニクス
十三 14 11 ベルニクスのいったとおり、天は動くも
十三 15 1 、明らかにしました。地は動くといつて
十三 15 4 だえん形のきまった輪をえがいて、一年
十三 15 6 、すっかりわかったのです。しかし、そ
十三 15 8 説を信じていましたので、ガリレオを呼
十三 15 9 ない、といいました。ガリレオも、十三
十三 15 10 究を続けていましたが、だまっていられ
十三 15 11 を強くとなえました。そのため、ガリレ
十三 16 1 んぬといわれました。ガリレオは、年を
十三 16 2 、年をとつてもいたし、めくらにもなり
十三 16 2 にもなりかけていたので、やむを得ず自
十三 16 3 はあやまりであつたということにして、
十三 16 3 るしてもらいました。では、ガリレオは
十三 16 4 えをかえてしまったのかというと、そん
十三 16 5 はありませんでした。「略」と信じて
十三 16 6 で真理を求めていたのです。三 みど
十三 16 7 どもたちにおくった、アンデルセンの生
十三 17 6 デルセンの生まれた國であります。世界
十三 17 7 二州をとられました。もともとせまい、
十三 18 1 土地を失いました。ですから、いかに
十三 18 2 たちの心をくだいた、もっとも大きな問
十三 18 3 な問題でありました。戦いは敗れ、國は
十三 18 4

十三 18 6 動はおとろえました。たとえ戦いに敗れ
十三 18 7 こそ、真にすぐれた國民でしょう。國の
十三 18 11 だいてたちあがったひとりの軍人があり
十三 18 12 の軍人がありました。戦場から帰ったダ
十三 18 12 た。戦場から帰ったダルガスです。かれ
十三 19 2 て、つるぎで失ったものを、すきでとり
十三 19 2 り返そうと決心したのです。ダルガスは
十三 19 5 地味を研究しましたが、こんどは、のこ
十三 19 5 こんどは、のこった土地の大部分をしめ
十三 19 7 大計画をたてました。ダルガスは、とお
十三 19 9 意にみちていました。ユートランドは、
十三 19 11 ます。これをこえた土地とするのが、ダ
十三 20 1 二は木でありました。ユートランドの平
十三 20 2 には、よくしげった森林がありました。
十三 20 3 た森林がありました。しかし、切りとる
十三 20 4 手入れをおこたつたために、土地は、年
十三 20 5 あればてってしまったのです。これを生か
十三 20 10 て研究を重ねました。そこで思いついた
十三 20 10 。そこで思いついたのは、ノルウェー産
十三 20 11 の木でありました。これなら、ユート
十三 21 1 かれてしまいました。ユートランドのあ
十三 21 1 していませんでした。しかし、ダルガス
十三 21 3 に研究を続けました。そうして、かれが
十三 21 6 がふと思ひうかべたのは、アルプス産の
十三 21 7 もみを移植してみたらどうか、というこ
十三 21 7 うことでありました。これをノルウェー
十三 21 8 、よくしげりました。ユートランドのあ
十三 21 10 の野が廣がりました。ダルガスの希望で
十三 21 11 とに実現されました。そこで、デンマル
十三 22 1 々高まってきました。しかし、問題はま
十三 22 2 みどりの野はできたが、ユートランドの
十三 22 3 で生長をとめました。アルプス産の小も
十三 22 5

十三二二六 産の小もみを植えたので、かれるのはふ
十三二二六 のはふせがれましたが、その生長は、こ
十三二二七 てはたされなかったであります。デン
十三二二八 ぐくれるといった材木を、さあ早くも
十三二二九 かにせまりました。ダルガスの長男、
十三二二九 の研究がすきでしたが、かれは、もみの
十三二二二 きな発見をしました。わかいダルガスは
十三二三三 はらってしまつたら、大もみは土地を
十三二三三 略。」といいました。わかいダルガスの
十三二三三 とおりになりました。小もみは、ある大
十三二三三 よって、発見されたのであります。この
十三二三三 には、おいしげつたもみの林が見られる
十三二三三 ようになりました。ダルガス親子の発
十三二三三 よつてもたらされた、よい結果は、木材
十三二三三 い感化を受けました。しげつた木のない
十三二三三 けました。しげつた木のない土地は、熱
十三二三三 え見ることがあつたのです。そのころ、
十三二三三 ドの農夫のつくつた農作物は、じゃがい
十三二三三 にすぎませんでしたが、植林が成功して
十三二三三 つかりかわりました。夏、しもがおきる
十三二三三 いまでになりました。ユートランドのあ
十三二三三 もみの林がしげつたために、こえた田園
十三二三三 ったために、こえた田園となりました。
十三二三三 た田園となりました。木材があたえられ
十三二三三 木材があたえられたうえに、いい氣候が
十三二三三 があたえられました。そればかりでなく
十三二三三 りでなく、しげつた林は、海岸からふき
十三二三三 くでくいとめました。しもは消え、砂は
十三二三三 水の害のぞかれたので、すたれた都市
十三二三三 れたので、すたれた都市はふたたびおこ
十三二三三 ころに生まれしました。土地のねだんがあ
十三二三三 十ばいになりました。道路・鉄道は、い

十三二五七 ころにしかれました。とうとう、ユート
十三二五七 生まれかわりました。戦いによって失わ
十三二五八 いによって失われたシュレスウィヒとホ
十三二五八 ることになりました。ところが、ここに
十三二五九 のが生き返りました。それは、全國民の
十三二五九 民のたましいでした。デンマルク人のた
十三二五六 生まれかわりました。敗戦のために意氣
十三二五六 に意氣のおとろえた國民は、希望をとり
十三二五六 家をうち建てました。四 ホートン風
十三二六七 見、なんのかわつたところもないような
十三二六七 で、ひんやりとした土べいの日かげを選
十三二六七 器や、道具を入れた赤いほこを、てんび
十三二八九 いろな道具を入れた荷をかついでいる。
十三二九四 。まるく輪になつたその中で、さるがさ
十三二九四 。西遊記とかいった、中國のむかしも
十三二九四 。やつと目がさめたころ、遠いところを
十三二九四 きな水おけをのせた一輪車が、「キリキ
十三二九四 にもさむざむとした氣持をおこさせる。
十三二九四 ていれば、出ていたで美しく、星の夜で
十三二九四 しい。青みがかった明かるい夜空に、な
十三二九四 さは、なんといつたらよからう。ときに
十三二九四 。ホートンに面した家々の門には、「れ
十三二九四 くる。小さな光つたわたが、土べいのか
十三二九四 。ぼうしをかぶつたままとびこんで来て
十三二九四 。だれかと思つた……え、いま学校か
十三二九四 ま学校から帰つたばかり……おかあさ
十三二九四 物を取りに行つたんじゃないでしょう
十三二九四 んがしまつていたから……はい、え……
十三二九四 三年のときだったか、遠足で行きまし
十三二九四 遠足で行きました……お客さん、ぼく
十三二九四 。(受話器を持ったまま、待っている。
十三二九四 んが、帰って来たんですか……いつ……

十三三九二 ……え、うちに来たんですか……へえ……
十三三九二 ……たいへんだったでしょうね……四十
十三三九二 ……だれかと思つたんです。だって、
十三三九二 ……書きのこしていった手紙を、とりだして
十三三九二 ……ンシュウから来た竹田さん、おいでで
十三三九二 ……間、かた手に持ったさっきの手紙をくり
十三三九二 ……うん……よかったなあ。きょう、うち
十三三九二 ……よう、うちに来たんだって……うん、
十三三九二 ……でもよかったよ。みんなで心配し
十三三九二 ……なで心配していた……うん、そう……
十三三九二 ……の旅じゃつかれただらう……うん、読
十三三九二 …………うん、読んだ。いまここに持つて
十三三九二 ……くり返して読んだよ。電話番号が書い
十三三九二 ……号が書いてあつたもんだから……そう
十三三九二 ……ちはやけなかったから、本だつてたく
十三三九二 ……やないか。帰つたばかりだから、お客
十三三九二 ……それきみにくれたの……マンシュウの
十三三九二 ……ら、とつておいたほうがいいよ……う
十三三九二 ……にしんせつだったの。手紙がだせるよ
十三三九二 ……せるようになったら、いっしょに、そ
十三三九二 ……帰つて来ました……か。(顔をあげ
十三三九二 ……帰つて来ました……)「しばらくして
十三三九二 ……やんが帰つて来たんだってね。よかつ
十三三九二 ……つてね。よかつたね。よかつたなあ……
十三三九二 ……つたね。よかつたなあ……」三郎の声
十三三九二 ……ユウから帰つて来た眞二くん、おしま
十三三九二 ……り、客をむかえた赤いへや。しか
十三三九二 ……うに暗くなりました。短日、かれぎく
十三三九二 ……場が、生き生きしたみどりでわらい、き
十三三九二 ……いころにそうだった。おとなになつて
十三三九二 ……きをいただきました。絵は、はがきの上
十三三九二 ……まるまるとふとつたかわいあいあちゃん

十三53 8 う書いてありました。「略」。ぼくは、
 十三54 1 手 いう画家のかいたもので、「いすによ
 十三54 4 すぐにわかりました。そうして、その絵
 十三54 5 いすきになりました。その氣持を、だれ
 十三54 6 まらなくなりました。それで、すぐに、
 十三54 7 ところへ行きました。おじさんは、絵か
 十三54 9 世界をまわって来た人です。だから、こ
 十三54 10 るだろうと、思ったからです。ちょうど
 十三54 12 いらっしやいました。「略」。そういつ
 十三55 1 手 「ああ、よく来たね。なにかおもしろ
 十三55 2 むかえてくださったので、先生からいた
 十三55 3 先生からいただいた絵はがきをだして見
 十三55 8 せてくださいました。ぼくは、絵はがき
 十三55 12 のにおどろきました。絵はがきでも、た
 十三56 1 絵だなと思いましたが、おじさんで見
 十三56 3 おどろかされました。「略」。「略」。
 十三56 4 手 、本物にくらべたら、やっぱり、月と
 十三56 10 手 じょうずであった。が、そのころ、レ
 十三56 11 手 オの集まっていた、美術の中心のフロ
 十三56 12 手 たいそう上達したのさ。ミケランジェ
 十三57 3 手 、たくさんかいた。中でも、ラファエ
 十三57 4 手 ことが得意だった。その「いすによる
 十三57 5 手 けのそこにかいたという小さな絵だが
 十三57 7 手 うすをなさいました。「略」。「略」。
 十三57 11 手 絵は、写真で見ただけでは、明暗はか
 十三58 9 手 ファエルのかいたマドンナのかわった
 十三58 10 手 ドンナのかわったのを見てあげよう
 十三59 1 手 せてくださいました。「略」。「略」。
 十三59 5 手 ふしている絵でした。「略」。「略」。
 十三59 9 手 い。きちんとした、おごそかな感じが
 十三59 11 手 。わたしが行ったとき、この絵の前に
 十三59 11 手 すがおいてあったが、見物の人が、か

十三60 1 手 るときがなかったよ。」ぼくは、それ
 十三60 6 手 まいの絵を見ました。「略」。「略」。
 十三60 11 手 ンジェロのかいた、てんじょう画の一
 十三61 5 手 たくさんのこしたのはえらいよ。こん
 十三61 9 手 送ってくださいたんだろう。」
 十四4 4 手 は、すこしちがった特別なひびきをもっ
 十四4 9 手 とうとさをみつけたのです。そうして、
 十四4 10 手 分もともに苦しんだのです。だから、フ
 十四5 7 手 ろいろとなめていたからのことでした。
 十四5 7 手 たからのことでした。しかし、フィリッ
 十四5 7 手 りはしませんでした。こうしたフィリッ
 十四5 9 手 んでした。こうしたフィリッの純真さ
 十四5 10 手 かが、父を失った直後、文学修業のた
 十四5 11 手 係という職についたとき、ふるさとにの
 十四5 12 手 ふるさとにのこした母へ送ったつぎの手
 十四5 12 手 のこした母へ送ったつぎの手紙の中にも
 十四6 1 手 がわれます。老いた母を思う子の眞情は
 十四6 6 手 私は短い旅をしたあとで、七時にパリ
 十四6 6 手 リーに着きました。たつて以来、一分
 十四6 7 手 られませんでした。なつかしいおかあ
 十四6 9 手 ちばんつらかったことは、おかあさん
 十四6 10 手 と思うことでした。子どもたちのこと
 十四7 7 手 ことが、おこったというにすぎないの
 十四8 6 手 決心がつきました。つらいのをがまん
 十四8 7 手 ことがあるとしたら、それは、おかあ
 十四9 6 手 おしまいになったら、あなたのルイは
 十四9 10 手 とのできなかつたことに対して、しっ
 十四9 10 手 て、しっかりとかくごをおきめにな
 十四10 2 手 教えてくれました。くぎへかけるよう
 十四10 3 手 かけるようにしたほうがいいとか、調
 十四10 7 手 かいかたを書いた小さな書きつけがつ
 十四11 5 手 とを送らせました。このランプは、石

十四11 7 手 おつかいになったほうがいいのです。
 十四11 11 手 かさを送りました。たぶん、とちゅう
 十四12 1 手 ということでしたが、もしこわれたら
 十四12 1 手 が、もしこわれたら、そちらでわけな
 十四12 7 手 のが教えてくれたことなのです。その
 十四13 4 手 ヒーこしをとったとき、それをのせる
 十四14 5 手 ておいでになったときそのままです。
 十四15 1 手 お氣持になられたときには、自分には
 十四15 4 手 さんがご用でしたら、いつでもとんで
 十四15 7 手 いては、どうしたものか、ちよつと私
 十四16 9 手 れしく思いました。すこしこみいりす
 十四16 11 手 心配していました。パリにある、な
 十四16 11 手 なにかそういったものがご入用のとき
 十四18 3 手 くんが、思いだしたように、「略」。「と
 十四18 4 手 にいさんに聞いたよ。」といった。す
 十四18 6 手 「略」。「と」いった。すると、窓ガラス
 十四18 7 手 ガラスをふいていた田中さんが、「略」
 十四18 9 手 「略」。「と」いった。これを聞いていた
 十四18 10 手 。これを聞いていた野村さんが、「略」
 十四19 2 手 なんといっていたんでしよう。」とた
 十四19 3 手 「略」。「と」たずねた。「略」。「田中さん
 十四19 12 手 生がいっしょだった。みんなの話を聞
 十四20 1 手 十四20 1 手 。そうじがすんだら、そのことについ
 十四20 2 手 べ。」とおっしゃった。それで、みんなは
 十四20 3 手 でそうじをすませた。みんなが席につく
 十四20 5 手 國からはいつてきたことばが、いろいろ
 十四20 6 手 く話してくださいました。そうして、つぎの
 十四20 8 手 んにお書きになった。「略」。「略」。
 十四21 1 手 ながおどろいていたが、先生は、つぎつ
 十四21 2 手 ぎと書き続けられた。「略」。「みんなは
 十四21 6 手 文字に目をそそいだ。先生は、そんなこ
 十四21 8 手 どんお続けになった。「略」。「と」とう

十四212 いになつてしまつた。「略」。私たちは
 十四222 多いのおどろいた。佐藤さんが、「略
 十四225 〆」思つていました。」と、さもふしぎ
 十四229 〆、日本語になつたと考えていいだろう
 十四2210 〆。」とおっしゃつた。それから、タバコ
 十四2211 も、外國語であつたとお話しになつたの
 十四2212 たとお話しになつたので、私たちは、い
 十四2212 いよいよおどろいた。先生が、「略」。
 十四233 國のことばだつたのだろう。」とおつ
 十四234 〆。」とおっしゃつたので、みんなは口々
 十四236 と、そくざに答えた。すると先生は、「
 十四237 〆」からはいつてきたことばは、英語だけ
 十四239 〆、ここにあげたことばの中でも、ク
 十四245 て、日本語になつたのだろうかと、ふし
 十四246 ふしぎになつてきた。それで、私は、「
 十四248 〆」、日本語になつたのでしょう。」とお
 十四249 〆。」とおたずねした。それは、外國と交
 十四2410 て、日本になつた品物が、外國から傳
 十四2411 外國から傳えられたときに、そのことば
 十四2411 しょにはいつてきたので、たとえば、ラ
 十四251 とばが、傳えられたということがわかっ
 十四252 いうことがわかつた。私は、このお話か
 十四253 が心にうかんできた。ものとことばが、
 十四255 おもしろいと思つた。だから、これから
 十四259 そうな氣がしてきた。それから、外國の
 十四2510 とばがいつてきたのは、品物からだけ
 十四2511 などが傳わつてきたときに、そのことば
 十四2512 しょに傳わつてきたのにちがいない。そ
 十四261 日本にはいつてきた西洋医学は、はじめ
 十四263 学がおもに傳わつたとうかがつたが、こ
 十四263 わつたとうかがつたが、このことから考
 十四264 医学がはいつてきたときに、また、チフ

十四266 医学がはいつてきたときにそれぞれ傳わ
 十四266 にそれぞれ傳わつたことばであらう。ま
 十四2610 音楽がはいつてきたときに、いっしょに
 十四2610 しょに傳わつてきたことばであらう。ま
 十四271 油絵がはいつてきたときに傳わつてきた
 十四271 ときに傳わつてきたのだということが想
 十四272 ん關係のふかつた大陸からは、どんな
 十四273 とばがいつてきたのだろうかと思つた
 十四273 のだろうかと思つた。それで、先生にそ
 十四276 〆」てい大陸からきたことばだ。それが、
 十四278 〆」うに思われてきたのだ。」とおっしゃ
 十四279 〆。」とおっしゃつた。私は、自由研究で
 十四2710 究で、外國からきたことばの中で、西洋
 十四2711 中で、西洋からきたことばをできるだけ
 十四2711 べてみたいと思つた。そこで、「略」。
 十四2712 〆、外國からきたことばが調べられま
 十四281 〆。」とおたずねした。「略」。私は、な
 十四283 〆」てい西洋からきたことばと思つていい
 十四287 きな樂しきをもつたような氣持になつて
 十四288 て、家に歸つてきた。三星の光 あ
 十四298 をもつていなかったやうです。ですから
 十四299 がたえずさいいていたために、天上の花を
 十四2910 ようとはしなかつたのだろうという人も
 十四305 ことがたりなかつたのは、さんねんなこ
 十四307 な島國に住んでいたために、氣持までち
 十四309 のになつてしまつたのでしょうか。むか
 十四313 ことをわすれていたのは、よくないこと
 十四313 よくないことでした。そういうちつぽけ
 十四321 ようにすすめたが、中には、「略」
 十四325 をこまかく觀察したことから、農業が進
 十四326 ら、農業が進歩したのです。こよみが作
 十四326 。こよみが作られたのです。天文学が生

十四326 。天文学が生まれたのです。数学が発達
 十四327 す。数学が発達したのです。航海術がさ
 十四327 術がさかんになったのです。宗教も、科
 十四328 、ふかまつていったのです。よそ目には
 十四352 大うちゅうから見たら、たしかに、人間
 十四364 むかしからすぐれた人たちは、星の光の
 十四365 想を読みとりました。さまざまな術を発
 十四366 術を発達させました。聞くところによる
 十四368 ずしい学生であつたとき、物理の時間に
 十四3611 ふかい感動を受けたということですが、夫
 十四3612 星はつかまなかつたのですが、その感動
 十四371 ラジウムを発見したのです。みなさん、
 十四379 ようなことがあつたら、どうか天上の星
 十四392 〆」ゆめがさめた。長いゆめがさめた
 十四392 〆」長いゆめがさめた。三の「夜が明け
 十四416 〆」朝風がふいてきた。」三の「山もはっ
 十四417 〆」つきり見えてきた。」三の「わたし
 十四418 〆」の前に、朝がきた。」一の「みんな、
 十四451 つしてしまひました。千九百二十年十月
 十四452 とです。乗つていた百四人のうち、乗組
 十四453 からなくなりました。アイリッシュ・ナ
 十四456 をおよいでいました。助け船は、いつた
 十四457 はありませんでした。助けを求めてなき
 十四458 聞えなくなりました。すべてのものが、
 十四459 にのまれてしまつたやうに、死のしずけ
 十四4510 たりに廣がりました。すると、そのきみ
 十四4512 歌が流れてきました。それは女の声で、
 十四467 ばらくしんみりした氣持で、この歌に聞
 十四467 聞きほれていました。かれは、いままで
 十四468 どれだけ歌を聞いたかしれませんが、こ
 十四469 りがたさを味わつたことはありませんで
 十四469 はありませんでした。なんだか、すうっ

十四 46 11、わすれてしまったほどでした。寒さも
 十四 46 11しまったほどでした。寒さも、つかれも
 十四 46 12かり、よみがえったような氣持になりま
 十四 47 1な氣持になりました。歌っている人は、
 十四 47 5船からなげだされたものでしょう。たい
 十四 47 8にのまれてしまったのに、こんなきけん
 十四 47 9なきけんのせまった中で、なんというお
 十四 47 10んというおちついた、またなんというほ
 十四 48 2ものだと思いました。そして、自分も
 十四 48 4ものだと思いました。かれは、歌の声を
 十四 48 5およいで行きました。近づいてみると、
 十四 48 6ひょうしに流れ出たものらしい一本の大
 十四 48 8よぎをしていました。歌を歌っているの
 十四 48 9の中のひとりでした。まだわかいおじよ
 十四 48 11歌を続けていました。助け船のくるのを
 十四 49 2て元氣をつけていたのです。「略。」こ
 十四 49 6この歌を知っていたかどうか知りません
 十四 49 8の歌の心を生かした人は少ないでしょう
 十四 49 11うにこの歌を歌った人というべきです。
 十四 50 1ナがおよいで行ったように、やがて、一
 十四 50 2けにきてくれました。やはり、その美し
 十四 50 4その歌を歌っていたおじょうさんも、そ
 十四 50 5くいあげられました。このことは、あく
 十四 50 6くる日の新聞に出たマッケンナの話で、
 十四 50 7、あきらかになったのですが、おしいこ
 十四 50 7ことに、歌を歌ったおじょうさんの名ま
 十四 51 3りの晩のことでした。「略。」こういい
 十四 51 6(会) あいをやってみたら、おもしろいだろ
 十四 51 8「。」「こういいだしたのは、根のしるしを
 十四 51 8根のしるしをつけた老人でした。「略」
 十四 51 9をつけた老人でした。「略。」「略。」「
 十四 52 2しいわかい女でした。「略。」「略。」「

十四 52 5(会) 花がさかなかったら、実はつきません
 十四 52 12(会) 、大きくふくれただけのものです。だ
 十四 53 3(会) 氣のいい青年でした。「略。」「略。」「
 十四 53 5(会) 主張なさいましたね。しかし、どうし
 十四 53 7(会) 大きな実になったかということとは、ご
 十四 53 10(会) て、送ってあげたからですよ。私は、
 十四 53 12(会) て落ちてしまったたくさんのかぼちゃ
 十四 54 2(会) てに花をさかせたからですよ。だから
 十四 54 8(会) おっしゃいましたが、それは、大部分
 十四 54 9(会) て、送ってあげたものです。みなさん
 十四 55 10(会) しずかにいました。「略。」「つるがこ
 十四 56 2(会) 吸ってくださった地の中の水や養分で
 十四 56 4(会) こしらえになったものでも、私が運ん
 十四 56 5(会) んであげなかつたら、りっぱなかぼち
 十四 56 8(会) うで切れたりしたら、それについてい
 十四 57 1(会) ようにしてあげたのです。だから、私
 十四 57 3(会) 「つるがこういったとき、高い声でわら
 十四 57 4(会) どやとはいってきいたものがあります。そ
 十四 57 5(会) ことがわかりました。「略。」「水が続い
 十四 57 8(会) をいっていましたね。あなたがたは、
 十四 57 10(会) り太陽がなかつたら、どうなると思
 十四 57 12(会) かに送ってやつたからです。さっき、
 十四 58 2(会) らっしゃいました。それを養分につ
 十四 58 3(会) ことを考えてみたことがありますか。
 十四 58 5(会) が続いていた。「略。」「土が立ち
 十四 58 7(会) す。水がなかつたら、なんでもすぐ、
 十四 58 12(会) あのかわききつた夏のさいちゅうに、
 十四 59 1(会) れるのが助かったことを考えてごらん
 十四 59 3(会) 「。」「土が立ちました。「略。」「すると、
 十四 59 6(会) 私がわけてあげたのです。水だって、
 十四 59 7(会) めておいてあげたのです。ほかのこと
 十四 59 9(会) なはちがいました。「略。」「花も、葉

十四 59 12(会) してあげなかつたら、実は一つもつか
 十四 59 12(会) つもつかなかつたのですよ。だから、
 十四 60 7(会) して地面にはえたのか、考えたことが
 十四 60 7(会) えたのか、考えたことがありますか。
 十四 60 10(会) って考えていました。しばらくして、根
 十四 60 11(会) て、根がいました。「略。」「つるも、
 十四 60 12(会) やつと思ひだした。人間が来て、まい
 十四 61 1(会) て、まいてくれたのだった。もし、あ
 十四 61 1(会) てくれたのだった。もし、あの人間が
 十四 61 2(会) 人間がいなかつたら、また、その人間
 十四 61 2(会) してくれなかつたら、私たちは、はえ
 十四 61 3(会) くもならなかつたかもしれない。」「つ
 十四 61 11(会) 水などがいいました。花も、葉も、根も
 十四 61 12(会) みんな賛成しました。七、茶わんの湯
 十四 63 2(会) さなしくになったのが、無数にむら
 十四 63 8(会) す雲が月にかかったときに見えるのと、
 十四 63 9(会) に見えるのと、にたようなものです。こ
 十四 64 3(会) うしんがなかつたら、きりは、たやす
 十四 64 4(会) でわかつてきました。そのしんになるも
 十四 64 7(会) 空中にうかんでいた雲が消えてしまつた
 十四 64 7(会) 雲が消えてしまつたあとには、いまいっ
 十四 64 8(会) とには、いまいった、ちりのようなもの
 十四 64 12(会) ります。しめきつたへやで、人の動きま
 十四 66 10(会) す。これとよくにたうずで、もっと大き
 十四 68 3(会) い空氣におおわれた地方があると、あた
 十四 68 10(会) いろいろなかわつたことがおこるのだ
 十四 68 11(会) んの湯と、こうしたら雨のばあいとは
 十四 68 12(会) は、よほどよくにたものと思つてさしつ
 十四 69 1(会) かたは、いまいったようなばあばかり
 十四 69 2(会) ぶようすのちがつたのもあります。だか
 十四 69 4(会) ただ、ちよつと見ただけでは、まつたく
 十四 69 5(会) おたがいによくにたものであるという一

十四 69 6 らい雨をあげてみたのです。湯げのお話
 十四 69 10 は、べつにかわったようすはなにもあり
 十四 69 12 ようなゆらゆらした光った線や、うす暗
 十四 69 12 ゆらゆらした光った線や、うす暗い線が
 十四 70 12 りの茶わんにふれた部分だけになります
 十四 71 1 と、茶わんに接したところでは、湯は、
 十四 71 6 ールランプで熱したときの水の流れと、
 十四 71 9 たをしないでおいたばあいには、湯は表
 十四 71 12 部分からは、ひえた水が下へおり、その
 十四 72 2 れ、それが、おりた水のとどくじ
 十四 72 9 めに、さきにいったようなものが見え
 十四 72 12 ると、ちらちらしたものが見えることが
 十四 73 2 ると、それに接した空気がふくれてのぼ
 十四 73 8 、にじの色のついた、きりのようなもの
 十四 76 10 、夏季の南がかった風になるのです。茶
 十四 77 5 を教えてくれました。この簡単なことわ
 十四 77 8 いという教えました。私はすぐにこれを
 十四 77 9 をためしてみましたが、ほんとうにその
 十四 77 10 にそのとおりでした。竹を割るとき、も
 十四 78 3 ことができなかったのに、うらのほう、
 十四 78 8 ることができました。そのうち、氣をつ
 十四 79 2 とに割っていました。木のほうは、これ
 十四 79 6 からないことでした。そのことを友だち
 十四 79 9 と教えてくれました。「木もと竹うら」
 十四 79 12 算数の九九と、にたようなものだと思
 十四 79 12 ものだと思いました。いったい、だれが
 十四 80 1 そのことを発見したのでしょうか。こと
 十四 80 3 に、まごにと傳えたことではないかと思
 十四 80 4 ちの祖先が発見したのではなく、よその
 十四 80 7 なん代もやってみた結果、とうとう一つ
 十四 80 7 の真理だと思われたので、そのことをほ
 十四 80 9 のいい、氣のきいたものになったものと

十四 80 9 きいたものになったものとも考えられま
 十四 83 2 雪の映画を二つ見た。一つは「雪國」と
 十四 83 3 」というのであった。「雪國」は、北國
 十四 83 5 うすを、映画にしたものである。雪が降
 十四 83 9 て、とりあつかったものである。「雪」
 十四 83 10 、雪の景色を写したのではなく、雪の
 十四 84 1 とらえて映画にしたものである。ただ一
 十四 84 3 、それぞれが違ったけつしやうをしてい
 十四 84 11 かるようにしくんだものであった。空か
 十四 84 11 くんだものであった。空から降ってきた
 十四 84 12 。空から降ってきた雪の一ひらを受けと
 十四 85 1 のようにしてできたか、どんな天空を旅
 十四 85 1 を旅して降ってきたか、おのずから知る
 十四 85 2 ちに説明してくれた。一ひらの雪によっ
 十四 85 5 とは、うまくいったものだ。このように
 十四 85 8 映画に心をひかれた。ふんだんに降って
 十四 85 10 る。風にあおられた雪のむれが、道を消
 十四 86 9 る。ふぶきのやんだあとの、雪の野原の
 十四 87 4 面の銀世界となった廣い野原を、第一の
 十四 87 7 りぼつりとしるした足あとが、廣野を横
 十四 88 1 ぐに歩こうと思つたのであろうが、いつ
 十四 88 3 のか。風にふかれたからであらうか。足
 十四 88 5 って、立ちどまつたためであらうか。そ
 十四 88 6 わず方向がちがつたものであろうか。雪
 十四 88 8 雪にとざされていた地上に、ぼちちと黒
 十四 88 12 い土が見えはじめたときの喜びは、たと
 十四 89 1 あたたくながめた人によって書かれた
 十四 89 10 人によって書かれた文である。十 マ
 十四 89 10 また暗さも暗かった。「略」と、小さ
 十四 90 3 ら歩きながら思つた。女の子は、つめた
 十四 90 6 根うらのへやを出たときは、上ぐつを足
 十四 90 7 足にひっかけていた。その上ぐつは、母
 十四 90 8

十四 90 8 、母親のものだったので、この子にとつ
 十四 90 9 とっては大きすぎた。二台の荷馬車が来
 十四 90 9 二台の荷馬車が来たので、それをさける
 十四 90 9 急いで道を横ぎったときに、その上ぐつ
 十四 90 10 つはぬけてしまった。かたほうはどこへ
 十四 91 1 ほうはどこへいったか、つい見いだせな
 十四 91 2 い見いだせなかった。もう一つのほうは
 十四 91 3 行ってしまった。その男の子は、こ
 十四 91 5 ってこいだと思つたのであろう。そこで
 十四 91 7 しになつてしまった。だから、その足の
 十四 91 9 めたいことといつたらなかった。自分の
 十四 91 11 といつたらなかった。自分の足だか、ひ
 十四 92 1 らないくらいだった。寒さがしみこんで
 十四 92 2 く、青くなつていた。おみそかの晩だ
 十四 92 2 賣つてはいなかった。一はこも賣つては
 十四 92 4 賣つてはいなかった。思いきつて、その
 十四 92 5 こともできなかった。まだ一銭ももうけ
 十四 92 7 かるにきまつていた。かわいそうに、そ
 十四 92 10 きずつて歩いていった。その子のきれいな
 十四 92 12 のようにくまどつた。けれども、その小
 十四 93 3 ことも考えなかった。美しく火のともつ
 十四 93 4 美しく火のともつた家々の前を、そろそ
 十四 93 5 りのむすめの考えたことはそれであつた
 十四 93 6 ことはそれであつた。女の子は、窓々を
 十四 93 6 ともしびの光を見た。おいしそうなにお
 十四 93 8 うなにおいをかいだ。「略」。ひもじい
 十四 93 8 そんなことを思つた。ただひと目でも、
 十四 93 9 だけでも、満足したであらう。女の子は
 十四 93 10 ばを一つ持っていた。ぼろぼろの前だれ
 十四 93 11 くさんはいつていた。女の子は、どんな
 十四 94 2 ともしてみたかったことだらう。女の子
 十四 94 2 くす場所を見つけた。そうして、そこに

十四 94 6 そこにすわりこんだ。女の子は、両足を
 十四 94 7 、赤く、青くなった両足をそろえて、ぼ
 十四 94 9 あたためようとした。けれどもだめであ
 十四 94 9 れどもだめであった。両手もまた、寒さ
 十四 94 10 とんどごえていた。その両手をあたた
 十四 94 12 ともすことができたならば、どんなによ
 十四 95 1 マッチをとりだした。かべにこすりつけ
 十四 95 2 つけて、火をつけた。まあ、なんという
 十四 95 3 おがかがやきだした。女の子は、その上
 十四 95 4 い両手をさしのべた。その小さなほのお
 十四 95 6 おのように思われた。これは、魔法のマ
 十四 95 7 ろうかとさえ思った。そればかりではな
 十四 95 10 の前にすわっていた。そのろの中には、
 十四 96 1 うにおどりあがった。女の子は、小さな
 十四 96 3 のおの方へのぼした。と思うと、そのと
 十四 96 4 なくなってしまう。女の子は、手にも
 十四 96 4 、手にもえつくしたマッチを持って、つ
 十四 96 5 そうにすわっていた。女の子は、またそ
 十四 96 7 つかべでこすった。それがゆらゆらと
 十四 96 11 とおすことができた。雪のようにまっ白
 十四 97 1 光るさらをならべたテーブルが見えた。
 十四 97 1 たテーブルが見えた。やいた鳥が——そ
 十四 97 1 ルが見えた。やいた鳥が——それこそほ
 十四 97 3 方におかれてあった。そのとき、まあ、
 十四 97 4 だろう。そのやいた鳥は、肉を切るナイ
 十四 97 5 とをせなかに立てたまま、テーブルから
 十四 97 9 のこっぴななかった。女の子は、もう一
 十四 97 10 めのマッチをすった。ほのおが明かるく
 十四 97 11 かるくもえあがった。そうして、こんど
 十四 98 1 の下にすわっていた。いかにも大きな木
 十四 98 1 しくかざられていた。たくさんの小さな
 十四 98 7 を見てわらいかけた。女の子は、人形の

十四 98 8 へ両手をさしのべた。と、そのとき、マ
 十四 98 8 えつくしてしまった。けれども、やつぱ
 十四 98 11 にかがやくのを見た。たしかにそれは星
 十四 98 11 にそれは星であった。「略」。女の子は
 十四 99 1 むそうにつぶやいた。じつと見つめてい
 十四 99 3 星が落ちるのを見た。その星が落ちると
 十四 99 3 長い光のおをひいた。「略」。と、女の
 十四 99 4 と、女の子は思った。この子にとって、
 十四 99 5 んせつな人であったおばあさんが、星の
 十四 99 8 と、話してきかせたことがあった。女の
 十四 99 8 かせたことがあった。女の子は、またも
 十四 99 11 の中からひきだした。そのマッチの火の
 十四 100 1 まのおそばへ行ったらおばあさんを見た。
 十四 100 1 たおばあさんを見た。おばあさんは、い
 十四 100 2 なようすをしていた。けれども、前より
 十四 100 3 なようすをしていた。「略」。と、女の
 十四 100 5 の子は、声をあげた。そうして、おばあ
 十四 100 6 っでは困ると思ったので、急いで、たば
 十四 100 6 、たばの中にあつたマッチをみんな一時
 十四 100 7 みんな一時につけた。「略」。と、女の
 十四 100 10 けんめいにたのんだ。マッチは、はなや
 十四 100 11 やかにもえあがった。まっ晝間でも、そ
 十四 100 12 れるくらいであった。おばあさんが、こ
 十四 101 3 、しんせつに見えたことは、いままでも
 十四 101 4 、いままでもなかったことであった。おば
 十四 101 5 かったことであった。おばあさんは、女
 十四 101 8 わりとまいあがった。うれしそうに、樂
 十四 102 1 うにのぼって行った。小雪の降った元日
 十四 102 2 った。小雪の降った元日の朝、人々が、
 十四 102 3 すめの、ひえきった小さなながきを見
 十四 102 3 なきながら見つけたとき、「略」。とい
 十四 102 4 さいでこえ死んだのだ。」といった。

十四 102 5 「略」。といった。けれども、そうで
 十四 102 5 、そうではなかった。人々は、女の子が
 十四 102 6 おみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを
 十五 9 2 〇 もら手をつないだ中を日ぐれのうまが
 十五 10 2 〇 にうしをつないだ木 わか草 荒れ庭
 十五 20 4 ある夏のことでした。このユングフラウ
 十五 20 5 くとまっていた。両親と子どもふた
 十五 20 7 い子どもたちでした。それに、この子ど
 十五 20 8 師がついていました。朝の十時と午後
 十五 20 11 に出て来るのでした。ニューヨークの大
 十五 21 1 都会で育てられた子どもたちには、こ
 十五 21 1 な楽しいものでした。朝ぎりの中から、
 十五 21 4 まっ白な服をつけた少女の立っているよ
 十五 21 5 、むらさきがかつた大空の下に、わらう
 十五 21 6 びえているのでした。ある朝、このアメ
 十五 21 8 うに散歩に出ました。ふたりの子どもは
 十五 21 9 ろと歩いていました。男の子は、小石を
 十五 21 12 そうに見ていました。女の子は、あぶな
 十五 22 4 そうにしていきました。そのとき、ふいに
 十五 22 7 あらしがふき起つたような音がしました
 十五 22 8 ような音がしました。なんでしょう。み
 十五 22 12 ような羽をひろげた大きな一わのやまわ
 十五 23 3 おれてしまいました。しばらくして、ふ
 十五 23 5 で先生のそばにいた女の子のすがたが見
 十五 23 9 いへんだ。どうしたらいいか。人々はた
 十五 23 11 ほどこらとびついたものがあります。だ
 十五 24 6 舞いおりて来ました。いまそれをとめな
 十五 24 9 鳥のせにとびついたのでした。一つまち
 十五 24 9 とびついたのでした。一つまちがえ、
 十五 24 10 に落ちこむのでした。さいわいにその勇
 十五 25 4 帯をかたくぎったのでした。そうして
 十五 25 4 くにぎったのでした。そうして、からだ

十五 25 8 腹をしめつけました。すると、さすがの
 十五 26 1 いおりて行きました。けれど、もしこの
 十五 26 9 、少年は思いました。ちょうど、発動機
 十五 26 10 にこしようにできた飛行機乗りが、安全
 十五 27 2 いられませんでした。ところが、下にっ
 十五 27 3 の子は、あきらめたのか、おそろしいの
 十五 27 4 ろいて氣でも失ったのか、すこしもさわ
 十五 27 6 う呼吸もなくなったのかと、そのことが
 十五 27 7 にかかってきました。とにかく、朝の冷
 十五 27 10 とおりて行きました。もう、がけの上で
 十五 27 12 なってしまいました。そのとき、鳥はサ
 十五 28 1 という羽音をさせたかと思うと、もうた
 十五 28 2 うたまらなくなったのか、その重荷をふ
 十五 28 4 ておりて行きました。すると少年は、あ
 十五 28 6 ないことが近づいたと感じたので、左手
 十五 28 6 が近づいたと感じたので、左手は女の子
 十五 28 7 の子の上帯にかけたままで、右手をはな
 十五 28 9 のこしにさしていた短刀をぬいて、鳥が
 十五 29 1 やくとびおりました。すると、鳥は、不
 十五 29 3 もに、つかんでいた女の子をはなして、
 十五 29 4 たおれかかりました。いま、少年の左手
 十五 29 5 手には血にそまつた短刀があります。少
 十五 29 7 なかにかくしました。大わしはすぐにと
 十五 29 9 びかかって來ました。両方とも必死の戦
 十五 29 12 ちかまえていました。大わしは、太いけ
 十五 30 2 、向かって來ました。けれども、ひらり
 十五 30 2 らりと身をかわした少年は、身をかわす
 十五 30 4 一たちあびせました。わしの白い下羽が
 十五 30 4 に一面にちりました。わしは、羽音はげ
 十五 30 5 くすこし舞いたったかと思うと、こんど
 十五 30 7 でせまって來ました。その目、そのくち
 十五 30 10 角へ身をよせかけたとき、ちょうどそこ

十五 30 11 、手ごろなとがった岩のかけらが目には
 十五 30 11 が目にはいりました。少年は、すばやく
 十五 30 12 く短刀を持ちかえた右手で、その石を取
 十五 31 1 りて、まてせまって來たこのあくまの胸を
 十五 31 2 めて投げつけました。ねらいのはずれよ
 十五 31 4 まず舞いたちましたが、まだこりないで
 十五 31 4 いでやうて來ました。それから、必死
 十五 31 12 うにとびちりました。その中で、女の子
 十五 32 1 いを続けていました。そのとき、がけの
 十五 32 3 声が聞えてきました。少女の両親たちが
 十五 32 3 が、そのへんにいたひつじかいたちを頼
 十五 32 4 大急ぎでおりて來たのです。ようやく道
 十五 32 5 角近くまで來ました。けれども、戦つて
 十五 32 8 う鉄ぼうの音がしたかと思うと、いまま
 十五 32 9 てとびかかっていった大わしは、空中をこ
 十五 32 11 へ落ちて行きました。少年はほっとして
 十五 32 12 たおれかかりましたが、氣がつくと、も
 十五 33 2 親のうでにだかれた女の子は、にこにこ
 十五 33 4 さしだしていました。そのときの少年の
 十五 33 11 えているようでした。三 文字の話
 十五 34 9 ろな考えを表現した。また、木の皮や、
 十五 35 1 さなわなどであんだひもつかい、色の
 十五 35 2 かい、色のちがった貝や、じゅうだまを
 十五 35 2 けることも行われた。それから、ぼうき
 十五 35 2 めすことも行われた。これらの表わしか
 十五 35 4 つすことも行われた。この絵のだんだん
 十五 35 6 んりやくされてきたものが、文字という
 十五 35 7 ものの起りとなった。いまから五六千年
 十五 35 8 プトには、そうした絵文字とよばれるも
 十五 35 10 ばれるものがあつた。中部アラビアあた
 十五 35 11 りにも、これに似た文字があつた。漢字
 十五 35 11 に似た文字があつた。漢字も、もとは事

十五 35 12 事物の形を表わした絵文字から起り、こ
 十五 36 1 だいに形のきまつたものとなり、今日の
 十五 36 2 今日のようになつたといわれている。
 十五 36 4 漢字は、いまいったように、はじめ、事
 十五 36 5 事物の形をうつしたものであるが、形の
 十五 36 5 たものから発達したものであるが、形の
 十五 36 8 、二本引いたりした。また、「うえ」「し
 十五 36 10 いたりして表わした。「上」「下」とかい
 十五 37 2 形をうつしてできたものであるが、それ
 十五 37 3 を表わすことにした。いまの「本」「末」
 十五 37 5 それまでに作られた文字を組みあわせて
 十五 37 6 こともくふうされた。たとえば、「日」
 十五 37 7 て「森」が作られた。「枝・板」など、
 十五 37 10 音をしめしたりした。漢字が中國から日
 十五 37 11 ら日本に伝えられたのは、千七百年ほど
 十五 38 1 の発音にしたがつた読みかたをしたが、
 十五 38 1 った読みかたをしたが、一方、「山」を
 十五 38 2 漢字の意味にあつた日本語をあてて読む
 十五 38 3 て読むこともした。このように、日本
 十五 38 4 とおりに読んできたが、中國の発音にも
 十五 38 5 の発音にもとづいた漢字の読みかたを「
 十五 38 8 りの性質のちがった読みかたがある。し
 十五 38 10 ちよつと考えてみただけでも、このこと
 十五 39 2 、中國から傳つた漢字をつかつてい
 十五 39 5 りだすようになった。かたかなは漢字の
 十五 39 6 部分をとって作つたもので、たとえば、
 十五 39 7 と書くようになった。ひらがなはかたか
 十五 39 8 字の一部分をとつたのではなく、たとえ
 十五 39 9 字の全体をくずしたものでなく、たとえ
 十五 39 10 ものから作りだしたものである。かなは
 十五 40 2 できるよつになつた。あの有名な源氏物
 十五 40 3 なによつて書かれた作品である。しかし

十五 41 1 字は、まえにいったように、その大もと
 十五 41 2 ジブト文字から出たものである。このエ
 十五 41 5 のような形になった。ローマ字といわれ
 十五 43 4 うこうが歩いていったが、ふと、ある店先
 十五 43 4 店先で立ちどまった。ウインドにかざら
 十五 43 9 「——」とつぶやいた。かれは、かるくド
 十五 44 6 日本語で話しかけた。店の主人はあわて
 十五 44 10 ない答えかたをした。「いや、これは失
 十五 44 11 礼は失礼しました。私はハギンスとい
 十五 45 1 って、すめられたいすにかけて、樂し
 十五 45 1 しそうに語りだした。話は明治初年のこ
 十五 45 4 すを変えてしまったので、それまでのも
 十五 45 5 ずかしくなってきた。そこで、日本の手
 十五 45 7 ていくようになった。ハギンスの祖父に
 十五 45 9 るためにやって来たのも、そのころのこ
 十五 45 10 ころのことであった。ある日、ブリンク
 十五 45 11 は、どうやら覚えた日本語で、町をひと
 十五 46 1 とりで散歩していた。ひくい屋根も、あ
 十五 46 1 根も、あけはなした店も、のき先にかか
 十五 46 3 ものばかりであった。ある小さな店先に
 十五 46 3 さな店先に出ていた一まいの赤絵のはち
 十五 46 4 れは、びっくりした。いままで見たと
 十五 46 5 した。いままで見たと見ないものと
 十五 46 5 とな焼物であったからである。「略」
 十五 46 9 どのにおどろいた。「略」。「略」
 十五 47 4 のさをうながした。店の主人は、きか
 十五 47 5 るままに語りだした。有田に焼物がはじ
 十五 47 6 焼物がはじめられたのは、いまから三百
 十五 47 9 とかを作らせていたが、そのお庭焼の中
 十五 47 10 れる、色のはいつたものが、いちばんす
 十五 47 11 ちばんすぐれていたという。このお庭焼
 十五 48 1 人かかえられていた。そのほかに、色絵

十五 48 2 ける赤絵屋もあったが、これはほん主か
 十五 48 3 ん主からゆるされた十六人だけが、有田
 十五 48 4 に、保護されていた。ところが明治にな
 十五 48 5 の保護がなくなつたうえに、いままで、
 十五 48 6 てしごとをしていたため、ひとりでこの
 十五 48 7 かしいことであった。今右衛門は、すぐ
 十五 48 8 右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうか
 十五 48 9 しごとはじめた。しかし、そのしごと
 十五 48 12 失敗を重ねていった。職人のちんぎんや
 十五 49 1 ければならなかった。それでも、やりか
 十五 49 1 れでも、やりかけたこのしごとはやめな
 十五 49 2 ごととはやめなかった。やがて、思いどお
 十五 49 5 とのできる日がきた。しかし、このよう
 十五 49 8 ほとんどいかなかった。ただわずかに外国
 十五 49 12 賣りだすことにしたのである。「略」
 十五 50 1 よくわかりました。せつかくうけつい
 十五 50 1 ぐうけついでできたこのしごとは、ぜひ
 十五 50 7 「これに耳にした今右衛門は、「略」
 十五 50 10 ごとに熱情をこめた。そのときから、ブ
 十五 50 12 いろな焼物を集めた。また、日本につい
 十五 51 2 さんまでしたりした。ジャバンタイムス
 十五 51 3 という新聞も発行した。しかしなんといっ
 十五 51 5 いう大作を著わした。また、名高い大英
 十五 51 6 リーのふでになつたものである。主人は
 十五 51 9 おまごさんでしたか。じつは、私は今
 十五 51 10 のことをうちあげた。祖父たちの間に結
 十五 51 10 たちの間に結ばれた心が、なん十年の月
 十五 52 1 ばれることになった。熱情のことば
 十五 52 3 がたけなわであったころのことである。
 十五 52 5 ド大学に学んでいた私は、一年半の努力
 十五 52 5 ゆびよく書きあげた論文を持って、その
 十五 52 7 見学の旅にのぼった。真心こめて教えて

十五 52 7 て教えてくださった世界的魚類学者デビ
 十五 52 9 かい状をくださったうえ、いろいろでは
 十五 52 10 てはずをしておいたから、ぜひカーネギ
 十五 52 11 うにとおっしゃった。とちゅう、あるい
 十五 53 4 ツツバグに着いたのは、暑い真夏の日
 十五 53 4 夏の日朝であった。目ざすりっぱな博
 十五 53 6 びかれておくまいった館長室の前に立つた
 十五 53 6 館長室の前に立つた私は、しばしためら
 十五 53 6 、しばしためらったのち、意を決して大
 十五 53 7 ツツとノックした。「カムイン」と答
 十五 53 10 かに室内にはいった私の目に映じたのは
 十五 53 10 った私の目に映じたのは、廣いへやの窓
 十五 53 12 士のすがたであった。学生時代からそん
 十五 54 1 からそんな敬していたあの有名な「ちよう
 十五 54 3 いることができた私は、なんというし
 十五 54 6 がある。わかった、わかった。きみは
 十五 54 7 かった、わかった。きみは、かねがね
 十五 54 10 、かたわらにいたいすをすすめるので
 十五 54 10 すめるのであった。私がこの博物館を
 十五 54 11 の博物館をたずねたおもな用事は、世界
 十五 55 2 らすめられていた。あいさつを終って
 十五 55 3 話に聞きいつていたホランド博士は、戦
 十五 55 5 いことをおわせた。そうしてつぎのよ
 十五 55 6 つぎのように語った。「まあ、そのよう
 十五 55 10 日本をおとずれたころは、西洋の文化
 十五 55 12 よおしをしていたものだ。そのころ日
 十五 55 12 る日本をたずねた外人の中で、富士山
 十五 56 1 ただきをきわめたのは、アメリカ山が
 十五 56 2 く会会員であった私がはじめてだろう
 十五 56 3 われていなかった。そこで、富士山の高さ
 十五 56 3 さも不明であった。そこで、山のいた
 十五 56 4 いただきに立った私は、小手をかざし

- 十五 56 6 紙上計算してみたが、その際算出した
 十五 56 6 、「その際算出した高さは、実測の結果
 十五 56 7 、「ちがわなかった。そんなわけで、私
 十五 56 9 、「るたずねてみたあなたへのごちそう
 十五 56 10 、「がはじめて会った日本人について話を
 十五 56 12 、「手をつとめていたところ、寄宿舎で二間
 十五 57 1 、「室をつかつていた。ところがある日の
 十五 57 4 、「の話をもちだした。ものずきな私は、
 十五 57 6 、「青年をひきとったが、室は二つあって
 十五 57 7 、「一つしかなかった。そこで、大きなつ
 十五 57 10 、「そしむことにしたが、その日本の青年
 十五 57 10 、「なかの人物だったよ。そのころ、もう
 十五 57 11 、「ヤンになっていたが、ある日のこと、
 十五 57 12 、「たいといひだした。それはおやすいご
 十五 58 2 、「に授業にかかった。つまり、私はかれ
 十五 58 4 、「のちに名をなした新島襄だよ。」自分
 十五 58 5 、「自分から話したホランド博士は、遠
 十五 58 6 、「られるようすだった。——新島先生年ぶ
 十五 58 11 、「という名を耳にした私は、とびあがらん
 十五 58 11 、「ばかりにおどろいた。こうしてなお語り
 十五 59 2 、「うかわいがられたのですから。」と、
 十五 59 3 、「し昔を語ろうとした。すると博士は、「へ
 十五 59 5 、「しりぞけようとした。が、ことばみじか
 十五 59 6 、「くほど見つめていた博士は、つと立ちあ
 十五 59 9 、「が舞いこんで来たものだ。それなら襄
 十五 60 1 、「横づけにしてあったりつばな自動車に、
 十五 60 2 、「くへと車を走らせた。同志社をわが子の
 十五 60 4 、「はぐくみ育てていた新島のおじさんが、
 十五 60 4 、「こう外に養っていたのは、明治二十年の
 十五 60 5 、「二十年の夏であった。当時、母校札幌農
 十五 60 7 、「をつかさどっていた私の父とは、心をゆ
 十五 60 7 、「とは、心をゆるした間がらのこととて、
 十五 60 8 、「りひんばんであった。ふつう「満ぼう」
 十五 60 9 、「う」でとおっていた私は、そのときちよ
 十五 60 10 、「ずらざかりであった。ことに、長男に生
 十五 60 11 、「を一身に集めていた身にとっては、天下
 十五 61 1 、「いにふるまっていた。新島のおじさんと
 十五 61 3 、「て私をかわいがった。京都に帰ってから
 十五 61 3 、「ってから父に送った手紙のどれにも、「へ
 十五 61 5 、「ず書きそえてあったのを見ても、その愛
 十五 61 7 、「るかを知らなかった私は、札幌の創成川
 十五 61 7 、「創成川の岸にあった家につれられて行っ
 十五 61 8 、「んぶんにふるまった。ある日のこと、お
 十五 62 1 、「と、私をうながした。いそいそとげんか
 十五 62 2 、「のくつをちらと見た私は、たちまちふく
 十五 62 3 、「でだだをこねだした。「略。」といつて
 十五 62 5 、「い。ではどうしたのだ。なにが氣にさ
 十五 62 5 、「にが氣にさわったのかなあ。やえ子、
 十五 62 6 、「おくの手をだしたよ、よわったなあ。
 十五 62 6 、「したよ、よわったなあ。」といつて、
 十五 62 7 、「助け船を求められた。「略。」小さな声
 十五 62 8 、「にが氣にさわったの、おぼさんにいっ
 十五 62 9 、「くりごとを耳にしたおぼさんは、腹をか
 十五 62 10 、「かえてわらいだした。「略。」「略。」
 十五 63 5 、「、きちんと着ていた上着をかなぐりすて
 十五 63 10 、「ぎりみがきかけた。「略。」「だされた
 十五 63 11 、「にきれいになったろう。さあ、行こう
 十五 64 1 、「。『略。』」だされたくつを見て、にこに
 十五 64 1 、「にこにこわらった私は、それを足先に
 十五 64 2 、「のようにとびだした。「略。」「おじさん
 十五 64 4 、「追って出て来られたが、門を出て十メー
 十五 64 6 、「、無言でつ立つたまま動かなくなった
 十五 64 6 、「まま動かなくなった。「略。」「おじさん
 十五 64 7 、「った。「よわったなあ。やえ子、ぼく
 十五 64 10 、「がら私によびかけた。見るなり私は、お
 十五 64 11 、「せなかにとびついた。そうして、足をば
 十五 65 2 、「略。」と命令した。暑さのきびしい夏
 十五 65 4 、「をふきふき歩かれた新島のおじさんと、
 十五 65 5 、「いていらつしやった新島のおぼさんと
 十五 65 8 、「都へひきあげられたが、その道すがら、
 十五 65 8 、「、小樽で目についたといつて、車のつい
 十五 65 9 、「いて、車のついいたみごとなおもちゃを
 十五 65 9 、「に送ってくださった。喜んだ私は、朝早
 十五 65 9 、「くだった。喜んだ私は、朝早くからそ
 十五 65 11 、「こで、たまにかねた家の書生が、これか
 十五 65 12 、「これから車のついたものは送ってくださ
 十五 66 1 、「京都へ送ったりした。その次には、りっ
 十五 66 3 、「で送ってくださった。それからいく年た
 十五 66 5 、「とをわすれなかった満ぼうの心から、ど
 十五 66 7 、「せよう。なくなった新島のおじさんがい
 十五 66 7 、「さんがいい残された願いによって、私の
 十五 66 9 、「を移すことになった。十の春をむかえた
 十五 66 9 、「。十の春をむかえた私は、母や多くの弟
 十五 66 11 、「美しい京都に移った。そのころは、新島
 十五 67 2 、「くどざされてあった。そのうちにクリス
 十五 67 3 、「の日がめぐってきた。新島家のとなり
 十五 67 3 、「家のとなりであった教会の日曜学校の生
 十五 67 4 、「学校の生徒であった私は、そのクリスマ
 十五 67 4 、「意の銀てきをふいたが、私がだんをおり
 十五 67 5 、「を待ちかまえていた老婦人が、「略。」
 十五 67 7 、「かと私をだきしめた。ああ、なつかしい
 十五 67 8 、「島のおぼさんだった。そのなつかしい顔
 十五 67 8 、「かしい顔をあおいだ私の目からは、たま
 十五 67 9 、「ななみだが流れ出た。そのことのあった
 十五 67 10 、「。そのことのあったあくる日、私は、ひ
 十五 67 11 、「窓のあけはなれた新島家をおとずれた

十五 67 1 新島家をおとずれた。おどる胸をおさえ
 十五 67 12 ながらだとりついたげんかんには、おも
 十五 68 1 もくがそえてあった。「略。」とよんだ
 十五 68 3。「略。」とよんだつもりで、私はかね
 十五 68 3 をカーンとたたいた。音もなくドアがあ
 十五 68 4 いて、半身をだした老婦人が、「略。」
 十五 68 5 、「満ぼうが来た。みんな早く出てお
 十五 68 5 会 で、満ぼうが来たよ。」と、家の人に
 十五 68 6 おもわずとびこんだ私をだきしめた。な
 十五 68 7 んだ私をだきしめた。なつかしい新島の
 十五 68 9 おく深くひき入れた。そうして、「おじ
 十五 68 10 会 さんが生きていたら、どんなに可喜ぶ
 十五 68 11 いへ私をみちびいた。「略。」と指ささ
 十五 69 2 大きな写真があった。きずのあるみけん
 十五 69 4 びかけそうであった。「略。」おぼさん
 十五 69 7 でをとっていられたという大きなつくえ
 十五 69 7 、くつをみがかせた満ぼう時代の私の写
 十五 69 10 いがってくださったのだ。手紙のたびご
 十五 69 11 るかとたずねられたのもそのはずだ。い
 十五 70 3 をびよこんとさげた。せきあえぬみだ
 十五 70 5 だに目をくもらせたおぼさんが、「略」
 十五 70 8 へ。」とおっしゃった。「そこに赤インキ
 十五 70 12 会 におなりになったのですよ。そのペン
 十五 71 1 会 んのつかいなれたペンですよ。ああ、
 十五 71 3 会 がごらんになったら——」といって、
 十五 71 4 んは声をくもらせた。それから、「略」
 十五 71 7 へ。」とおっしゃった。人力車に乗ったお
 十五 71 8 ぼさん。人力車に乗ったおぼさんは、昔のよ
 十五 71 8 に私をひぎにのせた。町の東にある寺の
 十五 71 10 か、その前に立ったおぼさんは、「略」
 十五 71 11 会 うがまいりましたよ。」といって、私
 十五 71 12 て、私をひぎよせた。勝海舟の筆にな

十五七二 一の文字をきざんだそのおくつき。はか
 十五七四 ふたたび呼びかけた。私は、「略。」と
 十五七六 呼びかけようとしたが、声が出なかった
 十五七九 が、声が出なかった。しずかに頭をさげ
 十五八二 しずかに頭をさげた。ピッツバークの町
 十五八四 ーグの町を走り出た自動車は、やがてこ
 十五八六 んに横づけになった。ドアをおして、つ
 十五八八 つかと中にすんだホランド博士は、客
 十五九一 ものをしっておられたが、やがてあなたが
 十五九三 すがたをあらわした博士の手には、古ぼ
 十五九五 の手には、古ぼけたアマスト時代のもの
 十五九七 数々の写真があった。ふかい思い出にう
 十五九九 「國境」をつくったあたりを、声高らか
 十六〇一 かに読みあげられた。ちょうどそのころ
 十六〇三 ころは眞夏であつたので、博士の家族た
 十六〇五 はがらんとしていた。やがてお晝どきに
 十六〇七 てお晝どきになったので、廣い食堂にみ
 十六〇九 しずかに食事をしたが、平和主義の旗が
 十六一一 の名を知られていた老博士は、きょうに
 十六一三 意をこめて語られた。――親の目から見
 十六一五 があとから生まれたというだけのこと
 十六一七 たいて立ちあがつた老博士は、フィッ
 十六一九 ャナイフをにぎった右手を大きくふりま
 十六二一 鼻先につきだされた。――ああ、忘れも
 十六二三 にをさして語られたホランド博士のあの
 十六二五 とば。日本へ帰つたら、新島夫人にきよ
 十六二七 のドアに手をかけた老博士が、さらに、
 十六二九 ろよくひきうけたよ。」とささやかれ
 十六三一 へ。」とささやかれた。博士は、そのこと
 十六三三 味をときかねていた私のようすを見て、
 十六三五 とは、ひきうけたよ。」といったされ
 十六三七 へ。」といったされた。ああ、新島のおじ

十五七六 ④ っている。ださったのだ。私は、停車場
 十五七六 ⑤ で送ってくださった博士のこう意をふか
 十五七六 ⑥ なあいさつをされた。そうして、これが
 十五七六 ⑦ が新島からならった日本語の一つだとい
 十五七六 ⑧ の一つだといわれた。五 その人のこ
 十五七九 ⑦ り、また、そうした風景から、自分の國
 十五七九 ⑧ も、お目にかかったことがあるからです
 十五八〇 ② のみなさんが書いたあつ絵の本が、い
 十五八〇 ③ として心のかよったおつきあいができる
 十五八〇 ④ できるようにしたのは、われわれが最
 十五八〇 ⑤ 、世をすごしてきたばかりでなく、實際
 十五八〇 ⑥ ったりしてきました。友愛の精神が、も
 十五八〇 ⑦ たがたの時代がきたときには、私たちの
 十五八二 ② のまゐり柱でできた大廣間のようなもの
 十五八二 ③ 、ひっくりかえったかなえなどの間で、
 十五八二 ④ はじめはいって來たとき、すこしはにか
 十五八三 ③ しているふとった人たちは、だれだろ
 十五八三 ④ いちばんふとっただれの目にも見える
 十五八五 ① うがしをわすれたのじゃないかな。あ
 十五八五 ② うがしをわすれたのじゃないかね。」
 十五八五 ③ ち、こつちを見たようだ。」とうとう
 十五八五 ④ 「いちばんふとった幸福」が、テール
 十五八五 ⑤ 方へやって來ました。光「こわいことは
 十五八六 ① 「いちばんふとった幸福」テールの方
 十五八七 ③ いちばんふとった『お金持の幸福』で
 十五八七 ④ れが「みたされたきよえいの幸福」で
 十五八七 ⑤ 、ふくれあがった顔をしています。(一
 十五八七 ⑥ ます。(二)みたされたきよえいの幸福「ゆ
 十五八九 ⑥ がたを待っていたのです。あのとおり
 十五九〇 ⑥ そう、思い出した。だれだか、いつか
 十五九〇 ⑦ んな話をしていたつけ。なんでも、た
 十五九〇 ⑧ ーブルにのぼったことはないようです

十五 92 2 こんでしまいました。チルチルがふと見
十五 92 4 ったりしていました。チルチル「おや、
十五 92 10 会 れが行けといった。そこでなにをして
十五 94 2 かせにおさえました。光」ダイヤモンド
十五 94 10 会 ろう。どこへ来たのかしら。」光「同じ
十五 94 11 会 のだよ。ちがったように思うのは目の
十五 95 9 会 たちがやって来た。私たちをあんない
十五 95 9 会 をあんないに来た。」チルチル「あの子
十五 96 1 会 と、たくさんいたものだよ。それを、
十五 96 2 会 どい目にあわせたのだよ。」チルチル「
十五 96 7 会 な子がやって来た。かけて行って会お
十五 97 1 会 どから出て来たのだろう。だれなの
十五 97 8 会 あ、あのふとった子のわらうことほど
十五 98 11 会 う行ってしまった。やはり時間がおし
十五 99 4 韻 会 る、こっち見た。こっち見た。」と
十五 99 4 韻 会 た。こっち見た。」と歌い、子ども
十五 99 12 会 知らない。会ったおぼえがないもの。
十五 100 2 会 、みんな、聞いたろう。この人、まだ
十五 100 6 会 ぼくたちに会ったことがないんだって
十五 101 3 会 。ぼく、わかった。思い出したよ。で
十五 101 3 会 った。思い出したよ。でも、きみたち
十五 101 10 会 福「みんな聞いたかい。この人のうち
十五 102 8 会 す。こんどあつたら、わかるでしょう
十五 104 1 会 福」は、ごえた手のために、きれい
十五 104 4 会 いしませんでした。まもなくやって來
十五 104 10 の肉じゅばんを着たわんぱくこぞうのよ
十五 105 4 会 なからにげて來た『とてもたまらなく
十五 105 6 ようなすがたをした者が、きらきら光る
十五 105 12 会 がしかえしされたときに、いつもにっ
十五 106 2 会 のわらうのを見たことがあります。
十五 107 2 会 その兄弟にあったよ。』ふとった幸福
十五 107 3 会 はいってしまった。」幸福「そりゃあ、

十五 107 5 会
十五 107 5 会
十五 107 6 会
十五 107 6 会
十五 108 8 会
十五 108 11 会
十五 109 9 会
十五 109 12 会
十五 109 12 会
十五 110 1 会
十五 110 12 会
十五 111 5 会
十五 112 1 会
十五 112 2 会
十五 112 10 会
十五 113 7 会
十五 113 11 会
十五 113 12 会
十五 114 6 会
十五 115 1 会
十五 115 3 会
十五 115 12 会
十五 116 1 会
十五 116 2 会
十五 116 4 会
十五 116 7 会
十五 116 7 会
十五 117 5 会
十五 117 7 会
十五 117 11 会
十五 119 3 会
十五 119 7 会
十五 120 2 会

くなくなつてしまつたのです。わるいなか
とつきあつていたものだから、すつか
くさつてしまつたのですね。でも、そ
べールをかぶつたままで、ちつとも出
横ちちよを向いたままでいるの。」幸
いでかけよつて來た「喜び」たちは、「
たち、ここにいたの。思いもかけなか
いもかけなかったよ。私、きょう、こ
れはさびしかったよ。ふたりとも、お
なんでこしらえたの。きぬなの、銀な
だつことで織つたのですよ。おまえた
とは知らなかった。いつもそれをどこ
んがかぎをかけたあの戸だなの中には
いし、年をとつたおかあさんもないの
ときやけどをしたあとまであるよ。で
あ、おまえ、見たことがなかったかい
たことがなかったかい。この手でおま
たち、私に会つたのだから、あしたま
まであがつて來たのは、これから下へ
からね。わかつたかね。チルチルや、
あがつて來られたの。人間が地上に住
ずねあぐんでいた道が、どうしてわか
どうしてわかつたの。」チルチルつ
つれて來てくれたの。」母の愛、あの人
私、あの人を見たことがなかったよ。
たことがなかったよ。あの人、おま
う來てくれました。」物のわか「あなたは
知りませんでしたよ。あなた、この私
なたを求めていた『正義であること』の
ごしんせつでしたね。」光、私は、愛し
だが光っていました。チルチルびつ
うは修業式があつた。校長先生のお話を

十五120 3 が思い出されてきた。はじめてこの学校
 十五120 4 学校の門をくぐったときのことが、はっ
 十五120 4 つきりうかんできた。在校生たちがみん
 十五120 6 の歌を歌ってくれた。その歌を耳にしな
 十五120 7 っておけばよかったなと思った。「略」
 十五120 7 よかったなと思った。「略」私が答辞
 十五121 2 「私が答辞を読んだ。けれども、思うこ
 十五121 4 いことに気がついた。あれもいいたい、
 十五121 6 もいいたいと思った。読んでいるうちに
 十五121 8 の念があふれてきた。それはなんともい
 十五121 10 つない氣持であつた。受持の佐藤先生と
 十五121 12 教室でお別れをした。先生は、「略」。
 十五122 3 〽。」とおっしゃった。うれしいうな、
 十五122 9 合唱してくださった校歌や、石井先生の
 十五122 11 うれしく思いました。なぜいままで、も
 十五123 1 したしくしなかったのだろうと、さんね
 十五123 2 んねんに思いました。先生がたのご幸福
 十五123 5 い出を残してくれたこの運動場、この校
 十五123 9 いい同級生であつた。「略」——丸山
 た 1 た
 四76 4 た——高い山、ひくいたに
 だ (助動) 3333 ダ だ 《ジャ・ダ・ダア・ダッ・ダロ・
 デ・ナ・ナラ・ニ》 〆せいぎであることのよろこび・
 それだから・それなのに・なんだか
 一5 1 〇 いいこ。きれいなことば、みんな
 一13 1 〇 いかい。まあだだよ。もういいかい
 一13 3 〇 いかい。まあだだよ。もういいかい
 一17 2 のこくばんきれいだな。まどのきのは
 一22 3 、みんながかってにかんがえておどり
 一23 3 うてをはねのようにうごかしました。「くつが
 一23 6 てて、らっぱのようにしました。「くつが
 一28 7 がえたり、いろいろにかかります。「略

342 会 ることができるなら、ただおさんは、
 354 会 「略。」「きれいな はなになって、お
 386 会 からころげるように はしって きます。
 403 会 がさいた。まっかな つつじが いっぱい
 438 会 のくにへいくんだよ。いそいででか
 452 会 のをしらべるのだよ。」こんな こえが
 475 会 はいい、おさんだ。げんきな いい お
 476 会 さんだ。げんきな いい おさんだ。
 477 会 ないい おさんだ。」そう いって、お
 479 会 もつていた 四かくな かみに、まいる お
 491 会 。へやには、きれいな はなが かざつて
 503 会 んな うさぎさんじゃ ないか。」「略」
 506 会 のくにの きしゃだもの。」「おとうさん
 524 会 なんと という 川だろう。」「ひとりごと
 537 会 「あれは ふしぎな だいやもんどです
 537 会 ですよ。しんせつな いい 人が ひろう
 552 会 ひろいで、きれいな たまが ひろえたら
 576 会 「みんな げんきで うれしいな。」「九
 604 会 ちゃん、げんきな こになりました。
 605 会 んも、きれいずきな いい こになりま
 626 会 まりました。きゆうに あたりが あかるく
 634 会 。それで あんなに おおきいのです。」「
 656 会 いやもんど。それなら、あなたの 目の
 83 会 「略。」と、へんな こえで いったので
 94 会 が、ごちやごちや になって います。な
 101 会 人の など、そうで ないものに、わ
 117 会 けかたが、いろいろに かわって いきまし
 216 会 うがおが こんなに 大きく なりました
 232 会 ました。びようきで はないで しょうか。
 278 会 いました。『いやだよ。きみこそ ぞい
 307 会 なわたった はずなのに、どうしたの
 308 会 に、どうしたの だろう。』『略。』と

328 会 したちは めくらだもの、みる ことな
 353 会 は かべと おなじだ。」「二ばんめの めく
 356 会 、とがったものじゃ ないか。」「三人め
 358 会 きなへびみたいなものさ。」「いい
 364 会 のみきとおなじじゃ ないか。』とい
 368 会 みんな 大ちがいだ。ぞうは、なわそっ
 369 会 は、なわそっくりだ。」「めくらが、ひと
 371 会 りびとり かって なことを いうので、
 4010 会 い。」「たろう「だれだあい。」「山びこ「だれ
 411 会 い。」「山びこ「だれだあい。」「たろう「ぼく
 412 会 う「ぼく、たろうだよ。」「山びこ「たろ
 413 会 う「山びこ「たろうだよ。」「たろう「ぼく
 414 会 う「ぼくが たろうだよ。」「山びこ「たろ
 415 会 う。」「山びこ「たろうだよ。」「たろう「うそ
 421 会 ばをつかうものではないよ。」「たろう
 423 会 が ぼかに するんだもの。」「おとう「おまえ
 425 会 たなく いうからだだよ。おまえが きれ
 425 会 おまえが きれいなことばで いえ、
 427 会 らだつて、きれいに いうさ。」「たろう「
 429 会 おとう「ほんとうだと。」「いって くら
 434 会 んと あやまる だろう。」「たろう「おと
 439 会 、とおくで しずかにな きます。七 お
 446 会 すよ。さあ、いぬだよ。わん、わん、わ
 4510 会 」。」「さあ、なんだろう。手の上に ご
 465 会 略。」「ちきゆう だろう。」「略。」「
 477 会 この おいし そうなりんご。」「手に 大
 481 会 います。うれし そうに、その りんごを、
 483 会 うとして、きゆうに たちどま ります。
 507 会 」。」「まあ、きれいな りんご。」「略。」「
 514 会 りします。きゆうに おどりを やめて、
 515 会 を やめて、しずかにな ります。そうし
 516 会 。そうして、きゆうに 走って たちさりま

548 会 あたまを、しずかにな でて やります。
 562 会 れは、どんな か たった でしょう。こん
 585 会 んのおとうさんだよ。』と いって、に
 642 会 ううでを 車のように うごかす。」「(二)
 663 会 て いる、きれいな かすみ。」「しや「ち
 665 会 ちよつと、しずかに。」「みんなは、「しゅ
 667 会 ゆしゅ」を、きゆうに しずかに いう。け
 667 会 、きゆうに しずかに いう。けれども、
 679 会 おや、ひばりさんだ。」「みんな「ひばりさ
 6710 会 んな「ひばりさんだ。」「しや「そうだ。は
 681 会 だ。」「しや「そうだ。はやくいこう。」「
 686 会 きこえる。しずかに して。もつと しず
 686 会 。もつと しずかに。」「みんな、きき耳
 692 会 ）。」「しや「たしかに 春の 声が きこえ
 702 会 じき「春の 國だ。」「みんな「よんで
 708 会 。この 声は ひとりで はなく、大ぜいの
 7010 会 、ぜんそく りよくだ。」「みんな「ぜんそく
 714 会 とおくにな るように、小さく する。
 754 会 ぶろう「あたかな かぜ。」「みんな「か
 715 会 はんたかを りつばな 人にして やりた
 735 会 ないという ことだよ。わかつたかい。
 741 会 うまれてくる ものだという ことが わ
 742 会 かりました。きれいな ことばは、きれい
 742 会 ことばは、きれいな 心から うまれて
 745 会 ことは、きれいな 心になれ という
 754 会 おまえさんの ような おろかものは、こ
 7510 会 ときです。ふしぎな ことに、はちをも
 765 会 、「これは ふしぎだ。だれの 手だろう。
 765 会 ぎだ。だれの 手だろう。』とおつしや
 768 会 は はんたかの 手で ございます。あれ
 774 会 はんたかは、しずかに ごてんに あがつて
 777 会 からだから、きれいな 光が さして いま

三109 1 から、月のきれいなばんになると、か
三109 3 かんがえこむようになりました。あき
三109 5 つそうかなしそうにみえました。十五
三110 1 会 ふたりがどんなにおかしみになる
三110 3 会 月の世界のものでございます。この
三111 5 いへんかわいそうに思い出になりまし
三112 1 で、人でいっぱいになりました。おほ
三112 9 。ところが、ふしぎなことに、手足の力
三115 9 にのつて、しずかに天へのぼって
三116 9 会 にもかいかいそうでございます。」と
三117 9 の山」というようになりました。
四7 2 。人々のたいせつなもちものをまもつ
四7 3 。もったたいせつなからだをまもつて
四7 7 がおこらないように、また、わるいび
四7 8 がはやらないように、氣をつけてくれ
四8 5 こは、水のきれいないけです。まわり
四12 8 おい町からいいじなものがここに
四15 2 会 「みんな、しずかに――よしきりがな
四16 9 パケツがおもそうだ。パケツの中に月
四19 4 会 はできないように、文もあいてなし
四19 5 会 には書けるものではありません。」先
四20 2 きめて、つぎのような文を書きました。
四22 4 手 でつかまりそうになったとき、また
四25 5 手 そばにくるような氣がします。お花
四25 7 手 空をとんでいるだろうと、ときどき
四26 5 手 きれいね。まっ白なおさらの上では、
四27 1 手 きみのだいすきなきゅうりをあげよ
四28 1 手 、光ってきれいだな。ぼくをのせて
四28 3 手 、氣もちがいいだろうな。」きよしさ
四28 8 思うことは、なんだらう。山にいて、
四30 9 手 みまいをしようではありませんか。
四31 5 いて、つぎのような文を書きました。

四33 1 手 しは、「しんせつにすること。」とい
四35 1 まだ、なんのことかわかりません。」
四36 8 いて、つぎのような話をしました。「へ
四37 1 会 さん おいしそうにじゅくしていまし
四40 3 会 これから、りっぱなことばにいろい
四41 5 んとそろえたようになつてとんだり、
四41 7 てつりばりのようになつたりしました
四41 8 をひっかけるようになりました。ゴム
四42 1 ました。ゴムのようにのびることもあ
四42 4 りました。どのように列のかたちをか
四42 5 かえても、ばらばらになつてしまふこ
四42 7 会 はなれちゃだめじゃないか。」「略」
四42 10 会 み、じぶんかつて早くとんでいっ
四43 9 の、よしのきれいにしげったところで
四44 1 会 た。「さあ、出発だ。」とうばんのがん
四44 10 会 一ばんおしまいだつたもの。おしま
四45 3 会 ら、そうしたんじゃないか。」「略」
四45 5 会 。」「略。」「でもじゃないよ。おしま
四45 5 会 まいは氣がらくでいいからつて、い
四45 6 会 からつて、いったじゃないか。」「略」
四45 7 会 略。」「氣がらくにはらくさ。でもね、
四45 7 会 でもね、つらいんだよ。」「略。」「略
四45 7 会 、きけんせんばんだよ。あとからなに
四45 10 会 。」「略。」「そうだな。」「略。」「略
四46 4 会 。」「略。」「そんな氣もちだつたけれど、きよう
四46 7 会 ようはちがうんだよ。」「略。」「略
四46 8 会 びたいというんだね。」「略。」「略
四46 10 会 いな。十五ばんめだ。そこらが一ばん
四47 1 会 やんがそういうなら、十五ばんめに
四47 3 会 ぶことにしようじゃないか。」「みんな
四47 4 会 がて、まっばのようなかたちになりまし
四48 10 びつくりさせるのだらうと思つて、べ

四49 4 ろかなにかのようにおちていきました
四51 1 ときには、ばらばらになつて、はなれて
四51 2 なれてとべば安全なのですが、いまは、
四51 4 だれも、ばらばらになつて、にげよう
四52 2 とぶのは、よいなことではありません
四52 2 は、よいなことではありません。ど
四52 3 とすべりおちそうになります。おんぶして
四52 4 るがんもおちそうになります。」「略」
四52 5 会 ります。「きけんなところを早くは
四52 6 んは、列をきれいにしるるところでは
四52 6 いにつくるところではありません。ち
四52 7 いのもうふのようになつて、かつちや
四52 10 とびました。きけんなところは、どうや
四53 6 会 略。」「もうすぐだ。」「みずうみのほう
四54 3 みずうみのきれいな水をくむと、これ
四54 5 きず口をていねいにあらつてやりまし
四55 6 ふかない、しずかな、星の光る夜でし
四56 5 いしくたべるようになりました。」「略
四56 6 会 うだいじょうぶだよ。」「略。」「略
四57 1 会 。」「このとおりだ。」「かつちゃんか、
四57 7 かつちゃんのすきなおだんごを作りま
四58 6 会 いこと考えたんだ。」「こういて、か
四58 10 会 ん。」「どうしたんだらう。」「略。」「二
四62 3 いきました。しずかなやぶのところ、
四63 9 は、きまりわるそうににこにこわらいま
四64 1 会 いました。」「どうだい、かつちゃん。」「
四64 5 さんが、わびるようにちよこんとあたま
四64 10 会 だがじゅうぶんではないから、あと
四65 5 の雲が、おだやかにたなびいていまし
四65 7 列は、そのきれいな雲の中に、みえな
四66 8 よんでも、おなじになることを考
四69 3 略。」「略。」「たしかにかした。」「略。」

四七三 けて、あそべるように こしらえる ことに
 四七四 ン。は——花のように きれいな 心。に——
 四七五 花のように きれいな 心。に——日本一
 四七六 星の きれいな 夜空。へ——返事
 四七七 り——りんごのような 赤い ぽお。ぬ——
 四七八 だはいつも きれいに。よ——よみ 書き
 四七九 いた。そ——そまつにするな 学用品。つ
 四八〇 めはのばさぬように。ね——ねずみと
 四八一 つをなめないように。て——てんてん
 四八二 左とちがえぬように。し——しもの あ
 四八三 ス。星の きれいな このよるを、み
 四八四 をかぶり、まっ白な あごひげをつけた
 四八五 むい。雪が 降るの だらうか。風が ふい
 四八六 らと 雪の 音。雪だ という と、あさ 早
 四八七 おじいさん。どんなに つもって いても、
 四八八 降った 雪は まっ白だ。しかし、降って
 四八九 くる 雪は、まっ黒だ。まっ黒くはない
 四九〇 しても、白い ものではない。雪が 降り
 四九一 降る。降る。さかんに 降る。右にも 左に
 四九二 らすすが とぶように、黒い、こまかい
 四九三 る。よくも あんなに 雪の たねが ある
 四九四 たねが ある ものだ。降って いる 雪を
 四九五 れ、どう したのだ。「子ども三「おもし
 四九六 ない。かわい そうだから、はなして お
 四九七 がつかまえた のだもの。」うらしま「で
 四九八 「うらしま「そうだ、わたしに この か
 四九九 「でも かわい そうだな。」子ども「この
 五〇〇 かめは、ていねいにおじぎをして、海
 五〇一 いただいた かめで ございます。」うら
 五〇二 うすつかり 元氣に なったの。」かめ「
 五〇三 とおり じょうぶに なりました。あな
 五〇四 よばないよ。元氣に なって よかったね

四〇五 なに、りゅうぐうだつて。」かめ「さよう
 四〇六 て。」かめ「さようで ございます。りゅう
 四〇七 んとうに きれいな ところ で ございま
 四〇八 きれいな ところ で ございます。」うら
 四〇九 「かめ「もう じきで ございます。」うら
 四一〇 しま「いい お天氣で 氣もちが いいな。
 四一一 な。波も しずかだ。」かめ「ごらんさ
 四一二 ゆうぐうの ご門で ございます。」うら
 四一三 らしま「赤や 黄色で きれいだね。ああ
 四一四 や 黄色で きれいだね。ああ、だんだん
 四一五 そのほか いろいろ な 魚と ところ りゅう
 四一六 う まん中に きれいな こしかけが 二つ
 四一七 こが りゅうぐうで ございます。さあ、
 四一八 かけます。いろいろ な 魚が できて な
 四一九 が うらしまさんで ございます。」おと
 四二〇 が うらしまさんで いらっしゃいます
 四二一 るで ゆめの ようだ。」かめ「りゅうぐう
 四二二 うは いつも こうなの ですよ。」うらし
 四二三 ばらしい ところ だな。」おとひめ「では
 四二四 てきて、にぎやかな おんがくに あわせ
 四二五 思いたして、きゅうに 家へ かえりたく
 四二六 いいし ごちそうで ございます。」うら
 四二七 「では、にぎやかな おどりを して、ご
 四二八 かも じゅうぶんで ございます。長い
 四二九 「まあ、よろしいでは ございますか。
 四三〇 おとひめ「さようで ございますか。な
 四三一 ちの ぼり、元氣で わかい うらしまは
 四三二 、ほそい 糸の ような ものは なんて しょ
 四三三 、人々は 不自由な 思いを しました。
 四三四 うは いい お天氣だ。なんと まあ、い
 四三五 あ、いい けしき だろう。」けしきに み
 四三六 つの 枝に、きれいな ものが、かかつて

四三七 うし「あれは なんだらう。」りょうしは、
 四三八 りょうし「きもの だな。こんな きれいな
 四三九 。こんな きれいな きものは、みたこ
 四四〇 たくしの きもので ございます。どう
 四四一 。どう なさる ので ございますか。」り
 四四二 ご用の ない もので ございます。どう
 四四三 「天人の はごろもなら、なおさら お返
 四四四 天人は、かなし そうな かおを して、空を
 四四五 れを きて、しずかに まいります。天人「月
 四四六 「略。」「きれいな 海だこと、お船も み
 四四七 ちゃん、まっくらに なった。」「略。」「
 四四八 、あそこ に きれいな さくら。」「略。」「
 四四九 つしやうけんめいに 走らせて いる から さ
 四五〇 略。」「シグナル だよ。あれを みて、汽
 五〇一 とおたり する のだ。」「略。」「略。」
 五〇二 「だいたい じょうぶ だよ。」「略。」「略
 五〇三 てから、おりる んだよ。」シュ、シュ、
 五〇四 けれども、この ままでは 旅は できません。
 五〇五 かばんに はいる んだよ。」と いって、私
 五〇六 いと ころへいく んだけど、あて 名の 字が
 五〇七 て 名の 字が そまつ な ので、わかりにくく
 五〇八 は こんな 小さな 字だから、なお 心配 だす
 五〇九 ているが、うそ 字だから、とんでもない
 五一〇 くしている ところ だよ。」そのうちに、
 五一一 私たちは、じょうぶ な ふくろに いれられて
 五一二 られました。こんな に だいいじに してくれま
 五一三 た。こんな に だいいじに してくれま
 五一四 。なしの花の きれいに さいている 家に、は
 五一五 ました。私は、ぶじに、としおさんの 心を
 五一六 、おもちや、まっ白に こなの ふいた ほしが
 五一七 れしさは、それ だけでは ありません。いち

五63⁴ 会 おかあさんのせいでありませんよ。」
五63⁶ 会 「がおの花もおなじだよ。」といって、お
五63⁸ 会 たのが、はうようになり、立つようにな
五63⁹ 会 になり、立つようになり、あるくように
五63⁹ 会 なり、あるくようになつて、いまは、も
五63¹⁰ 会 まは、もうこんなに大きくなつた。」「へ
五64⁵ 会 おまえひとりの力でもなければ、おとう
五64⁷ 会 やおかあさんの力でもない。」「——」「へ
五64¹⁰ 会 いにち、たつしやで生きていけるのは、
五64¹⁰ 会 は、だれのおかげだろう。さあ、考えて
五66⁹ 会 さんに、このふしぎな話をしました。「略
五67⁶ 会 てしまつてゐるんだもの。」といいまし
五69¹⁰ 会 んが帰ると、りっぱな家がたつていました
五70³ 会 なんか、もういやになつたから、お金持
五70¹⁰ 会 やくしうはいやになつたから、お金持
五72⁴ 会 のおくさんもいやになつた、女王になり
五72⁷ 会 。女王さまのようなあるきかたも、口の
五73¹ 会 ました。海はまっ黒になつてあれていまし
五73⁶ 会 のおくさんはいやだ、女王になりたいと
五73¹¹ 会 は女王になつてゐるではありませんか。そ
五74² 会 。そばには、りっぱなけらいもついでいま
五74⁵ 会 なたもごまんぞくでございますよう。」
五75² 会 たしは女王もいやになつた。こんどは、
五75¹⁰ 会 ました。海はまっ黒になつて、波が高く、
五76⁵ 会 、もう女王はいやだといつています。海
五79³ 会 ました。つぎのような文が、はりだされま
五79⁹ 会 ぼうしが、魚のようによいでいます。」「
五79¹¹ 会 りだいをすべるように、らくらくと流れて
五80⁶ 会 した。ゆかをきれいにふきました。かべい
五81² 会 た。ガラスもきれいになつて、そとのけし
五82¹ 会 、きようはこんなに休んだのでしょう。
五82³ 会 のをたべないようにすること、夜は、は

五84 7、海の作文を書くんだといって、よろこん
 五85 2 、「そこらをきれいにそうじておこう。」
 五86 5 、「と、うたのようにふしをつけてよびな
 五87 9 、「わいいにんぎょうだ。黒いかみのけがふ
 五87 9 、「ぎょうは、きれいな赤いおびをしめてい
 五87 10 、「ている。いいおびだ。わしもほしいな。
 五88 4 、「な、へんじじゃない。黒いころも
 五89 1 、「うたをうたうのだよ。高い山からた
 五90 6 、「もおじぎをするのだよ。」「略。」「略
 五90 9 、「ギアとないたのだよ。それから、お
 五90 10 、「ただいて、こんなにいとおぼうさんにな
 五90 11 、「うさんになったのだよ。」こういつてか
 五91 9 、「略。」というのだよ。それで、手おけ
 五92 1 、「コッソとうったのだよ。そこで、ゆかい
 五92 5 、「つぶがついているだろう。それぞれ、た
 五92 6 、「たけのこはんだよ。」「略。」「略
 五92 10 、「たけのこはんだよ。」「略。」「略
 五93 8 、「。ああ、きれいなお月さま。」りよう
 五94 4 、「がなく、死んだようになっておちていたの
 五94 6 、「これ、なんのひなだろう。」「略。」「へ
 五94 9 、「ちつとも動かないじゃないか。」「略。」
 五94 10 、「。」「かわいそうなもの、ひろっていつ
 五95 6 、「は、みちがえるように元氣がでて、だんだ
 五95 8 、「とりでとべるようになるまで、かってや
 五95 10 、「した。ひなはずりめではありませんでした
 五95 11 、「せんでした。ひばりでもありませんでした
 五96 8 、「さん、ひわは自由にとべるようになりま
 五96 8 、「自由にとべるようになりましたね。かご
 五96 10 、「だすこし早いようだ。自分でえさをとつ
 五98 1 、「分のなかまの鳴き声だと思いました。そう
 五99 7 、「ひわは、もとのように元氣になって、かご
 五99 7 、「もとのように元氣になって、かごの中を

五99 9 、「た。「もう、元氣になったようですね。
 五100 3 、「これからぼくの子だよ。いつまでもかわ
 五100 4 、「やりたかったんだけれど。」さんちや
 五101 1 、「略。」と、へんな声でさえずって、さ
 五101 7 、「いっしょうけんめいにまねをします。鳥か
 五103 1 、「ておくと、いろいろな鳥がやってきます。
 五105 1 、「と、本をよむようなひとりとごをいま
 五105 2 、「わは、感心したように、いつまでもその声
 五105 5 、「のまねができるようになりました。いつの
 五106 5 、「と、せきこむように、さかんに鳴きまし
 五106 5 、「こむように、さかんに鳴きました。旅のひ
 五106 6 、「ひわも、大よろこびで、声をあわせてうた
 五107 2 、「ほら、羽がだめだから。こうしていつ
 五107 10 、「ひわは、大よろこびで、「略。」をはじめ
 五108 2 、「だちのさんちゃんだよ。ちつともこわい
 五109 6 、「。小鳥でも感心なものだ、新しいこと
 五109 6 、「鳥でも感心なものだ、新しいことをどん
 六4 4 、「わしたが、いろいろな音や、みたこともな
 六4 5 、「みたこともないような物が、ごたごたと耳
 六4 6 、「目にはいるばかりで、なにがなにやら、
 六4 7 、「こは時計屋の店であることがわかった
 六4 9 、「さなふたガラスの中で、そばには小さなし
 六5 8 、「だには、いろいろな時計がたくさんなら
 六5 10 、「わしいのはおき時計で、カッターカッター
 六5 11 、「カッターとおうようなのはしら時計であ
 六6 1 、「うなのははしら時計である。ねじは、これ
 六6 3 、「はなんの役にたつのだろう、これはどんな
 六6 4 、「ところにおかれるのだろうかと考えてい
 六6 6 、「、なさけない自分であろう。あのいろい
 六6 7 、「う。あのいろいろな道具、たくさん時計
 六6 9 、「大きくてえらそうである。ひとかどの役
 六6 10 、「も不足はなさそうである。ただ自分だけ

六6 11 、「分だけがこのように小さくて、なんの役
 六6 11 、「の役にもたそうにない。ああ、なんと
 六7 2 、「さけない身のうえであろう。」ふいにバ
 六7 6 、「た。男の子と女の子である。ふたりはそこ
 六8 11 、「ねじがない。だれだ、しごと台の上をか
 六9 1 、「れ一つしかないのだ。あれがないと、町
 六9 5 、「では、自分のようなものでも、役にたつ
 六9 7 、「と、それがまた心配になってきた。親子は
 六10 11 、「ばん喜んだのはねじであった。時計屋さん
 六11 2 、「さみあげて、だいじにもとのふたガラスの
 六11 6 、「いまで死んだようになっていたかいちゅ
 六11 7 、「ちまち、ゆかいそうにカチカチと音をたて
 六11 9 、「することができたのだと思うと、うれしく
 六12 10 、「役にたっているのだ。」と、心からまん
 六13 7 、「口が水にとどきそうになったとき、足がつ
 六14 6 、「いっしょうけんめいにさげびつづけました
 六14 11 、「。木の葉は船のようになって、ありのそば
 六15 7 、「ので、ありは、ぶじに岸にあがることので
 六16 4 、「かりうとは、きゆうに歩くのをやめて、弓
 六17 3 、「が矢をつがえているではありませんか。「へ
 六17 4 、「あぶないところだった。」といって、
 六18 10 、「さもまんぞくそうにしき台をおりてきて
 六19 2 、「んとうにいい氣持だ。」きりぎりす「こんな
 六19 3 、「りぎりす「こんなによくあうと、たいこ
 六19 5 、「よ。じつにゆかいだ。」オルガンの「みどり
 六19 7 、「にみち、きよらかな風は、われわれの音
 六19 10 、「「たいへんきれいなもんくをいしました
 六20 2 、「夏の日を楽しもうではないか。」うたを
 六20 6 、「、ひと休みしようではありませんか。」
 六21 1 、「みんな、楽しそうにそれをたべます。
 六21 11 、「りす「大きな荷物だな。」きりぎりす「ありさ
 六22 9 、「うちへ帰るところなんです。」バイオリ

六二二〇 合 に音楽会をやるうじゃないか。」あり一、
六二三一 合 「チエロの」いいだろう。いまあそばな
六二三五 合 たたいて、「どうだい。いいじゃないか
六二三六 合 「どうだい。いいじゃないか。」パイオ
六二三七 合 ひいて、「いい音だろう。きれいな音だ
六二三八 合 音だろう。きれいな音だろう。」たいこ
六二四二 合 ろう。きれいな音だろう。」きりぎりす
六二四三 合 はたらくやくそくだって。まあいいや、
六二四四 合 あそぼうというんだね。楽しむために生
六二四九 合 めに生きているんじゃないか。」あり三「
六二四〇 合 うのありさんたちだな。」パイオリンの「こん
六二四一 合 ないで、氣のどくなありさんたちだよ。
六二四二 合 くなありさんたちだよ。」オルガンの「小
六二四三 合 ね。」みんなにぎやかに音楽をはじめます。
六二四五 合 ね。ふぶきはいいやだから。」あり二「さ、
六二四六 合 あいだに、こんなにたぎぎをあつめてお
六二四七 合 あり二「ほんとだ。でも、夏のころは
六二四八 合 あつてたいへんだった。」あり三「毎日
六二四九 合 三「毎日あせだくだったね。」あり一「そ
六二五〇 合 られるというわけだ。」あり三「はたらか
六二五一 合 びはあじわえないだろう。」あり二「たし
六二五二 合 」。あり二「たしかにそうだ。」このとき、
六二五三 合 一「たしかにそうだ。」このとき、戸の
六二五四 合 ば、なんとかなるだろう。」きりぎりす
六二五五 合 「きりぎりすさんじゃないか。」きりぎり
六二五六 合 す一、二「ていねいにおじぎをしながら、
六二五七 合 ぎりす二「すこしでもいいから、わけて
六二五八 合 り二「かわいそうだね。」あり三「花のみ
六二五九 合 風。いねが波のようにゆれる。2 かかし
六二六〇 合 しのまゆがまつすぐにのびる。目だまの「
六二六一 合 の切れたたこのように、空にすいこまれて
六二六二 合 「おや、かかしくんじゃないか。」かかし

六二六三 合 てはじめての大風だ。雲のおじさん、わ
六二六四 合 る——声がでないのである。雲「だいじょ
六二六五 合 「なんてらんぼうな風なんだろう。おじ
六二六六 合 んてらんぼうな風なんだろう。おじさん
六二六七 合 らんぼうな風なんだろう。おじさん、大
六二六八 合 れたり、海みたいなのさ。ほう、また
六二六九 合 、子どものかかしだね。かわいそうに。
六二七〇 合 だね。かわいそうに。根の方へおりてい
六二七一 合 っ。」19 おれるようにあたまを地につける
六二七二 合 から、雨だれのようなみだがこぼれおち
六二七三 合 ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰
六二七四 合 、もう帰れないんだ。」なみだをほろほ
六二七五 合 かし「そりやそうだけど——」親つばめ
六二七六 合 な田などの、きれいな、楽しかった思い出
六二七七 合 ら、つむじ風のように、列をつくったつば
六二七八 合 みをおんぶするんだ。」かかし「みなさん
六二七九 合 ひきあげるついでだから、えんりよしな
六二八〇 合 町の上を列車のようにとぶつばめのむれ。
六二八一 合 。それをつつむようにして日がくれる。美
六二八二 合 とりの声。さわやかな朝の空。白い雲。42
六二八三 合 かしが帰っているだろう。」子がらす二「
六二八四 合 がつれて帰ったんだらうね。」子がらす
六二八五 合 にもわからないんだって——ぼくが目を
六二八六 合 には、おびたいなものが向こうの山の
六二八七 合 へとんでいったんだよ。」子がらす二「な
六二八八 合 子がらす二「なんだろうな、それ。」子
六二八九 合 、大きなきれいなページ、生きた
六二九〇 合 、あのまっさらな海の色。書いても
六二九一 合 る、あのまっさらな波の音。空のうた
六二九二 合 いことがあるような、ああ、さわやか
六二九三 合 ああ、さわやかな朝の空。すんだ青
六二九四 合 えこともできそうな、ああ、おおらか

六二九五 合 ああ、おおらかな晝の空。くらけれ
六二九六 合 いこともきえそうな、ああ、おこそか
六二九七 合 ああ、おこそかな夜の空。五月と
六二九八 合 ろも、みんなきれいに光っていました。ふ
六二九九 合 に、あたりがきゆうにくらくなつて、かげ
六三〇〇 合 ぎでとんでいくようにもみえます。「略」
六三〇一 合 ます。「お月さまじゃないわ。雲が走っ
六三〇二 合 ます。「略」。「へんだなあ。お月さまをみ
六三〇三 合 たいどっちなんだろう。」ふみお
六三〇四 合 ったいどっちなんだろう。」ふみおは、
六三〇五 合 ら、ふみおはふしぎでたまりませんでした
六三〇六 合 雲が走っているんだね。「略」と、
六三〇七 合 雲一つなく、きれいはれわたっていました
六三〇八 合 、やつとつぎのようなものができあがりま
六三〇九 合 。みんなが喜ぶようなことを書きます。み
六三一〇 合 五 アアサワヤカナ——五 アアサワヤ
六三一〇 合 五 アアサワヤカナ——七 アサノソラ
六三一〇 合 した。また、ふしぎでなりませんでした。
六三一〇 合 ると、ねむくなるのだろう。どうしてだろ
六三一〇 合 のだろう。どうしてだろう。だれがねむく
六三一〇 合 だれがねむくするのだろう。(いしの)
六三一〇 合 くのです。そのようにして、どこまでもお
六三一〇 合 んでいくか、楽しみではありませんか。お
六三一〇 合 ませんから、かってにつぎを考えてくださ
六三一〇 合 五つばかり、きれいに写生しました。それ
六三一〇 合 たものです。そんなに大きくはありません
六三一〇 合 が、これをじょうずにきぎって、きれいに
六三一〇 合 にくぎって、きれいに、むだのないように
六三一〇 合 に、むだのないようにへんしゅうするのは
六三一〇 合 どんなお話をするだろう。」そこへ、中
六三一〇 合 「でも、こんな口じゃ、だめだわ。」と、
六三一〇 合 んな口じゃ、だめだわ。」と、はるえは

六九七 かさねたりべつべつにしたりして、つくえ
六〇〇 一、小さく、さかさまにみえた。そのさかさ
六〇〇 二 えた。そのさかさまにみえるけしきを、大
六〇〇 六 がねのたまいっぱいにひろがって、ついそ
六〇〇 七 ついそこにあるようにみえるではないか。
六〇〇 八 にあるようにみえるではないか。それは、
六〇〇 一〇、向こうの家の屋根であつた。「略略。」こ
六〇一 八 いて、動かないようにした。これで、一本
六〇二 七 はっきりした。電柱だ。はりがねが六本あ
六〇二 八 つと下をみる。屋根だ。しょうじだ。おや
六〇二 八 屋根だ。しょうじだ。おや、だれかが、
六〇三 七 さんをひっぱり上げるようにして、つれてきた。
六〇三 一〇 六。でも、さかさまじゃないの。「略略」
六〇四 三 森の木のきれいなこと。」ぼくとおか
六〇四 七 まえから、かぜきみである。しかし、ねつ
六〇四 八 ので、ねているわけではない。ただ、はなな
六〇四 九 がつまっているだけだが、そのために発音
六〇五 一 「リヤサン」のようだ。さっきも、「略
六〇五 八 略略。」といったのである。ぼくも、もち
六〇六 二 ことばを、そのようにいったことがあるの
六〇六 二 いったことがあるのではない。しかし、「へ
六〇六 三 かにも弟のいいそうなことばつきである。
六〇六 四 いそうなことばつきである。その、弟がま
六〇六 五 ったから感心したのである。そこで、ぼく
六〇六 八 きた。弟のだいすきな飛行機である。ぼく
六〇六 九 のだいすきな飛行機である。ぼくは、ここ
六〇六 九 ある。ぼくは、ここだと思って、みんな
六〇六 一〇 六。すこしふしぜんだなと思つた。みんな
六〇七 二 弟が、「飛行機なら、ちゃんと、ヒコ
六〇七 七 も発音できないわけではない。発音できる
六〇七 九 ことに気がついたのである。ぼくは、夜、
六〇八 一 ることばがあるのだらう、と考えてみた

七106 ㊦、渡しもりのようなものだ。「しゅくち
 七106 ㊦ もりのようなものだ。」しゅくちよく室
 七115 ㊦ とほにも、いろいろなつかいかたがありま
 七117 ㊦ あります。じょうずなでばえをみたとき
 七121 ㊦ 「となると、人の手ではありません。これ
 七125 ㊦ だしている手のことではありません。あさ
 七126 ㊦ つるがまきつくように立ててある、竹や木
 七136 ㊦ 「「略」。このようなときの「手」は、ど
 七138 ㊦ よくにたつかいかたで、「まいの手」とい
 七1310 ㊦ もの手が、さまざまなたらきをするよう
 七1310 ㊦ はたらきをするように、「手」ということ
 七1311 ㊦ ことばも、さまざまなたらきをしてくれ
 七144 ㊦ 「「略」。そんなに、手をやかせるな。
 七145 ㊦ 、手にあまるしことだな。」「略」。同じ
 七146 ㊦ 「「手にとるようによくわかる。」「同じ
 七147 ㊦ 「略」。同じことばで、ちがったつかいか
 七147 ㊦ るのは、「手」だけではありません。「略
 七152 ㊦ 「腹のすわった人だな。これは、「腹」
 七153 ㊦ ことばを、いろいろにつかったばあいを、
 七158 ㊦ 名まえに、このような、いろいろなつかい
 七158 ㊦ のような、いろいろなつかいかたがあるの
 七159 ㊦ るのは、おもしろいではありませんか。
 七173 ㊦ ちよがよくでるのだったね。さあ、出発
 七183 ㊦ か。」「先生」そんなに実をとちやいけな
 七185 ㊦ から、油をとるんだからね。てんぶらは
 七187 ㊦ 「これであげるんだ。」女の子「あら、
 七191 ㊦ 川に落ちないように。」男の子「このま
 七204 ㊦ です。」「先生」そうだ。よく知っているね
 七209 ㊦ れで知っているんだね。」女の子「あッ
 七215 ㊦ びとり、ばらばらにわかれて、そつとね
 七221 ㊦ たよ。」「兄」しずかにして、みていてごら
 七224 ㊦ よ。」「ささやくように、はるお」にいちや

七246 ㊦ 兄「かれないようにさ。」「はるお 感心し
 七247 ㊦ るお 感心したように、「略」。兄「さあ、
 七248 ㊦ 、新しいごちそうだ。」「兄は、一センチ
 七263 ㊦ え、はつぱと同じになるのは、鳥などに
 七2610 ㊦ あおむしが、へんな色にかわっている。
 七271 ㊦ る。」「兄」ほんとうだ。おかあさん。黄色
 七274 ㊦ 分でしらべるようにと、おっしゃっただ
 七278 ㊦ さなぎをふしぎそうにみながら、「略」。」「
 七294 ㊦ のチューブのようにふわふわした、黒ッ
 七297 ㊦ たべられないためだと、おかあさんが教
 七298 ㊦ のをきているようなものだった。ぼくは、
 七298 ㊦ ているようなものだった。ぼくは、
 七2910 ㊦ てやるのが楽しみだ。きのう、学校から
 七2911 ㊦ むしは、もう黄色なさなぎにかわってい
 七315 ㊦ はるお「ほんとうだね、にいちやん。」「
 七318 ㊦ あ、まあ。」「しずかな音楽がはじまる。母
 七319 ㊦ りをとこしたような、美しい羽ですこと
 七3111 ㊦ ぼつたら、きれいなしるがでそうね。」「
 七325 ㊦ るのね。」「なごやかな音楽がつづく。はる
 七327 ㊦ ほんとう——ひげだね。」「はるお「あかん
 七3210 ㊦ 。」「はるお「ふしぎだな。あんなあおむし
 七345 ㊦ 「略」。」「そんなにおしたって、だめで
 七346 ㊦ 略。」「略」。」「むりにわりこもうとする男
 七355 ㊦ ぶろうをかばうように両手をつっぱりまし
 七362 ㊦ 。」「略」。」「だめだよ。とてもはいれな
 七365 ㊦ いって、どうぞぶじにつきますようにと、
 七365 ㊦ ぶじにつきますようにと、心の中でいのつ
 七367 ㊦ いる。かわいそうだ。」「頭の上で声がし
 七3610 ㊦ 略。」「と、心配そうにいました。すると
 七3611 ㊦ りがすこしゆるやかにになり、からだがらく
 七371 ㊦ なり、からだがらくになったような気がし
 七371 ㊦ がらくになったような気がしました。私は

七389 ㊦ すすむにも、よいではありません。その
 七399 ㊦ ちちめて、心配そうに私の方をみていまし
 七3911 ㊦ デシンボールのように送られていくうちに
 七401 ㊦ うとう、うれしそうに、声をたててわらい
 七403 ㊦ うを、おもしろそうに、みおくらべていまし
 七413 ㊦ れたみつばちのようになって、汽車でねむ
 七418 ㊦ なかった。かるやかなしらべは、朝の光の
 七419 ㊦ べは、朝の光のように氣持よく、車中のす
 七4111 ㊦ 。ごくありふれた曲であったが、旅をして
 七4210 ㊦ ると、しらがの老人である。「略」。」「車中
 七448 ㊦ 「たいへん失礼だと思ひますが、これ
 七449 ㊦ たちのこころざしであります。お受けと
 七453 ㊦ つもりでひいたのもありません。ただ
 七4511 ㊦ のいちばんとくいな曲を、一曲ひきまし
 七464 ㊦ かと思うと、しずかにひきはじめた。名高
 七464 ㊦ 名高いオペラの序曲である。私は、汽車の
 七4610 ㊦ 線の「はないずみ」であった。駅の名も美
 七476 ㊦ 書きたしても、それでいいところま
 七477 ㊦ なか、いきつくものではありません。文章
 七478 ㊦ 章は、心の鏡のようなものです。心がはっ
 七489 ㊦ いっしょうけんめいにやった。はじめに、
 七4910 ㊦ うれしさでいっぱいになった。ドッジボ
 七510 ㊦ んだ。ぼくは気が気ではない。みかたのお
 七525 ㊦ じまった。むちゅうでやっていると、「略
 七528 ㊦ った。うれいような、すまないような氣
 七528 ㊦ うな、すまないような氣持がした。第二回
 七531 ㊦ は、さいごの決勝戦だ。あいては、町の、
 七532 ㊦ 、いちばん強い学校だ。たかやま先生が、
 七534 ㊦ 、こんどがだいじだ。みんな元氣でやる
 七534 ㊦ じだ。みんな元氣でやるんだ。」「と、は
 七534 ㊦ んな元氣でやるんだ。」「と、はげまして
 七536 ㊦ は、大きくて強そうだ。「略」。」「はじまッ

八二七 た。すると、あわれにも、くちばしから血
 八二六 のをなくしたばかりでなく、私は、ピオの
 八二五 まちのためにあわれに死なせたというなさ
 八二四 をあけて、ていねいに生みつけておいてく
 八二三 る、寒い冬もぶじにこすことができまし
 八二二 る、白いうじのようなようちゅうが、はい
 八二一 あおぎりの根ばかりではなく、あたりの木
 八二〇 たちが、いいかげんにすすんでいっても、
 八一九 で知るのか、手ごろな、皮のうすい、しる
 八一八 うとめいわくしごくなことですが、せみの
 八一七 ぶさにすがったようなもので、とりついた
 八一六 すがったようなもので、とりついたがさい
 八一五 たがさいご、ようにそれからなれませ
 八一四 も教えてくれたことではありません。人間
 八一三 たのさきをじょうずにつかってちをのむ
 八一二 をのむのと同じように、しぜんにそなわっ
 八一〇 で、これでじょうずに生きていくのです。
 八〇九 よわしいうじのようなかたちをしています
 八〇八 んかたく、じょうぶになります。土の中は
 八〇七 がおそくて、ように大きくなりません。
 八〇六 す。なんとという氣長なことでしょう。せみ
 八〇五 ちは、れいのふしぎなかしこさで、もう大
 八〇四 かたどで、いまが夏だということや、よい
 八〇三 みの子は、だいたんに、まっすぐなあなを
 八〇二 いたんに、まっすぐなあなを地表に向けて
 八〇一 わばっていて不自由だし、目もよくはみえ
 八〇〇 さつそく、ぶさいくなかつこうをして、そ
 八九 ぐつとそり返るようにして、頭をうしろに
 八八 くそのままのしせいで動きません。やがて
 八七 ぶらぜみは、きゆうに元氣になって、そろ
 八六 みは、きゆうに元氣になって、そろそろと
 八五 ってきて、にぎやかな音楽会のようになり

八二四 やかな音楽会のようになりました。やが
 八二三 れないほどにぎやかに鳴きたてたせみも、
 八二二 もひっそりとしずかになります。せみの死
 八二一 でかざった、きれいな四頭びきの馬車が走
 八二〇 すめたちが、樂しげに歌ったり、花つみを
 八一九 、なにかさがすようになさいました。それ
 八一八 はくちようがしずかにういていました。川
 八一七 けていいるのは感心なことだ。むすめのた
 八一六 るのは感心なことだ。むすめのために、
 八一五 のために、りっぱなむこをさがしてやろ
 八一四 。黒うしは、にわかにかげだし、天の川へ
 八一三 りあつて、あのように、ぼうつとした銀の
 八一二 とした銀の川のような光をはなっているよ
 八一〇 はなっているようにみえるのです。この
 八〇九 は、二十分や三十分ではありません。五日
 八〇八 せん。五日や二十日でもありません。五ヶ
 八〇七 八三〇 月や八ヶ月でもありません。「光
 八〇六 いほど、遠いきよりであります。さて、空
 八〇五 ほどまえに発した光だというわけになりま
 八〇四 て、なにひとつ不足なことはありませんで
 八〇三 八三〇 たとおりのこがねならば、わしもつむの
 八〇二 ば、わしもつむのだが。」とおっしゃい
 八〇一 、まだじゅうぶんではない。」と、お客
 八〇〇 した。「まだ満足ではないというのです
 八九 うですか。たしかにそうですか。」「略
 八八 の朝から、たしかにそのようになるでし
 八七 八三〇 たしかにそのようになるでしょう。」「み
 八六 八三〇 王さまは、大喜びでねどこからとびおき
 八五 がねよりもたいせつであつたからです。」「へ
 八四 、ひめが生き返るなら、わしはもうこが
 八三 八四八 「ほんとうに幸福な人をみつめて、その
 八二 八四二 のほんとうに幸福なものをさがしてきて

八四三 もらってくるように。」と、おいつけ
 八四二 が、ほんとうに幸福な人は、やすやすとみ
 八四一 やすとみつかるものではありません。金持
 八四〇 はありません。金持だと思ふとからださがよ
 八三九 、からださがじょうぶだとちえがたりなかつ
 八三八 り、からだもりっぱで、なんの不自由もな
 八三七 たいと考えて、幸福な人をさがしにでかけ
 八三六 。ところが、そまつな一けんの小屋があり
 八三五 つすりねるばかりだ。ありがたい、あり
 八三四 八四二 中にわしより幸福なものはあるまい。ほ
 八三三 八四三 にわしは幸福ものだ。」「王子は手をうっ
 八三二 八四六 しもとめていた人だ。」と喜んで、つか
 八三一 八四八 幸福」が、いろいろな家へたずねていきま
 八三〇 八五〇 ずしいこじきのようななりをしました。だ
 八二九 八五〇 ら、自分は「幸福」だといわずに、「びん
 八二八 八五〇 ず」に、「びんぼう」だというつもりでした
 八二七 八五〇 幸福」が、いろいろな家をたずねていきま
 八二六 八五〇 ずしいこじきのようなものが家のまえにい
 八二五 八五〇 は、「びんぼう」でございます。」「略
 八二四 八五〇 ちじやおことわりだ。」と、その家の
 八二三 八五〇 声で追いたてるように鳴きました。「幸福」
 八二二 八五〇 ったとみえて、いやなものでも家のまえに
 八二一 八五〇 のまえに立ったように顔をしかめて、「略
 八二〇 八五〇 は、「びんぼう」でございます。」「略
 八一九 八五〇 うちじやなくさんだ。」と、その家の
 八一八 八五〇 ずしいこじきのようなものがきて、にわと
 八一七 八五〇 は、「びんぼう」でございます。」「略
 八一六 八五〇 ずしいこじきのようなものが、おもてに立
 八一五 八五〇 てくれました。黄色ななくあんまで、その
 八一四 八五〇 いて、さも樂しそくに晝ねをしていました
 八一三 八五〇 砂地の上にまっすぐな足あとをつけてみよ
 八一二 八五〇 えのよりはまっすぐだが、波うちぎわのか

八五七 一 る。こんどは三どめだ。しっかりと目あてを
 八五七 六 と、みちがえるように、まっすぐな、しっ
 八五七 六 るように、まっすぐな、しっかりと足あ
 八五七 九 勉強もそのとおりだ。」とおっしゃった。
 八五八 五 と、おもちゃのように小さな汽車が、けむ
 八五八 八 ち、もう一曲がりだ。みんなその元気で
 八五九 五 きなけしきが見えるだろう。山の上には、
 八五九 六 空がすきとおるようにすんでいる。飛行機
 八五九 七 きなけしきが見えるだろうと思った。その
 八五九 一〇 、先生は、「そうだ。高いところのぼ
 八六〇 三 なかは、いいお天気であった。麦ばたけは
 八六〇 四 からすむぎはみどりであった。野原にはか
 八六〇 九 ごをかえしているのであった。けれども、
 八六一 二 ぎまるほうがすきであったからである。
 八六一 三 がすきであったからである。とうとう、一
 八六一 一〇 「世界は廣いものだなあ。」と、ひなた
 八六二 一 た。「これが世界だと思っているのかい
 八六二 二 で廣がっているのだよ。さあ、みんなそ
 八六二 四 。「いや、みんなではない。いちばん大
 八六二 五 いつまでかかるのだろう。わたしは、も
 八六二 八 おろした。「どうだね、どんなふうだね
 八六二 八 だね、どんなふうだね。」と、たずねて
 八六三 六 んちようのたまごだよ。わたしも、一ど
 八六三 一〇 、水をこわがるのだから、どんなにして
 八六三 一〇 のだから、どんなにしても思いきって
 八六四 一 きってはいるようにしてやることででき
 八六四 三 たりして教えたのだが、だめだった。ど
 八六四 三 えたのだが、だめだった。どれ、たまご
 八六四 四 ん。はあ、そうだ、そんなものはほっ
 八六四 七 までだいていたのだし、あと四五日はす
 八六四 八 れでは、ごかつてに。」年よりのあひる
 八六五 二 ひどく大きなからだで、たいへんみにくい

八六五 二 いへんみにくいものであった。親あひるは
 八六五 四 ひどく大きなひなだ。ほかのものは、一
 八六五 八 くる日はいいお天気で、太陽は、ごぼうの
 八六六 六 、しちめんちようではない。」と、親あ
 八六七 一 これはわたしの子だ。よくみればきれい
 八六七 一 よくみればきれいな子なのだ。『略。』
 八六七 一 みればきれいな子なのだ。『略。』わた
 八六七 一 ばきれいな子なのだ。『略。』わたしに
 八六七 四 にふまれないように、それからねこに氣
 八六七 一〇 んというかつこうだろう。」という
 八六八 七 みつきたくなるんだよ。」年よりのあひ
 八六八 九 は、みんないい子だ。あれだけはしくじ
 八六九 四 のものと同じようによぶし、いや、ほ
 八七〇 三 口をいわれるばかりでなく、にわとりから
 八七〇 四 受けた船のほのようからだをふくらませ
 八七〇 六 いて、顔をまっかにしてやってきた。あ
 八七〇 七 やつてきた。あわれなあひるの子は、立っ
 八七一 二 、わるくなるばかりであった。おしまいに
 八七一 五 いわれた。親あひるですら、「略。」とい
 八七三 三 だしてまもないものであった。『略。』と
 八七三 六 にいったよ。どうだ、われわれといっし
 八七三 一〇 。『略。』このときである。『略。』と、
 八七四 三 うちがはじまったのである。かりうどは、
 八七四 六 あいだから雲のようにたちのぼった。かり
 八七四 八 いてきた。あわれなあひるの子はきもを
 八七五 一〇 らく、じっとしずかにしていた。そのあい
 八七六 三 しかし、かわいそうにあひるの子は、おき
 八七八 三 れを自分の子のようにかわいがった。朝に
 八七八 一〇 いしたもうけものだよ。これからはあひ
 八七九 一 たべられる。おすでなければいいが、ま
 八七九 四 かった。そればかりでなく、ねこやにわと
 八七九 一〇 「じゃあ、お願いだから口をださないで

八八〇 五 などはいえないのだよ。」それで、あひ
 八八〇 七 。そこへ、さわやかな空気と日の光が流れ
 八八〇 八 ひるの子は、きゆうにおよぎたくなったの
 八八二 二 なことを考えるのだよ。のどを鳴らすか
 八八二 六 、氣がくるったのだよ。ねこにきいてご
 八八二 九 あの人ほどこうな人はありはしないか
 八八二 三 とは思っていないだろうね。うぬぼれて
 八八二 四 よ。人がしんせつにしてあげるときは、
 八八二 五 です。あたたかなへやにはいつてさ、
 八八二 七 かまいりをしたんだもの。それなのに、
 八八二 八 あいするのがいやなのさ。ほんとうです
 八八二 一〇 るのです。いやなことをいうようだが
 八八二 一〇 なことをいうようだが、それは、いい友
 八八二 一〇 んなそうしたものだよ。まあ、たまごを
 八八三 一 だして勉強するのだね。『略。』『略
 八八三 三 「どうぞ、かつてにおいでよ。」そこで、
 八八三 六 ないので、いろいろな動物たちからのけも
 八八三 一〇 が美しくしむときであった。草むらから
 八八四 一 から、大きなりっぱな鳥の一むれがやって
 八八四 二 まぶしいほど白い鳥で、長くてよく曲がる
 八八四 三 。それははくちようであった。はくちよう
 八八四 三 はくちようはみごとな羽を廣げ、この寒い
 八八四 五 それをみて、ふしぎな氣持になった。あひ
 八八四 六 、水の上を車のようにくるくるまわり、そ
 八八四 八 もおどろくほどへんな大きな声をだした。
 八八四 九 の美しい、しあわせなはくちようをわすれ
 八八五 四 らやましく思ったのではない。どうして、
 八八五 五 鳥のもっているような美しさをもったなら
 八八五 七 ってしまうように、水の中をおよぎま
 八八五 一〇 ってしまうように、いつも足をつかっ
 八八七 九 冬のあいだ、どんなに苦しんだか、ここ
 八八七 一〇 こで話すにはあまりにもかわいそうである

八八七 十一 まりにもかわいそうである。太陽がてりは
 八八二 二 つていた。美しい春であった。すると、と
 八八五 三 た。どうしてこんなになったのかわからな
 八八八 四 、ほんとうにきれいで、春の喜びがみちあ
 八八八 五 の子は、そのみごとに鳥を知っていた。そ
 八八四 六 いこう。私のようなみつもなないものが
 八八四 七 く近づいていくのだから、ころされるか
 八八八 八 されたほうがましだ。」そういつて、水
 八九三 九 「——」かわいそうにあひるの子は、ころ
 八九九 〇 それは、ぶかつこうなみつもなないあひる
 八九〇 一 ともないあひるの子ではなかった。はくち
 八九〇 二 かった。はくちようであった。生まれがは
 八九一 三 はくちようのたまごであつてみれば、あひ
 八九一 四 身をとりまくりつばなもののの中に、しみじ
 八九一 五 と幸福をさつたのである。大きなはくち
 八九二 六 もたちも、「そうだ。新しいのがきた、
 八九二 七 八二八 八、いちばんきれいだ。」という、年を
 八九三 九 た。ほんとうに幸福であつたが、すこしも
 八九三 〇 身のうえになったのである。にわとこの木
 八九三 一 ある。にわとこの木でさえ、新しいはくち
 八九三 二 たたく、おだやかにてらした。すると、
 八九三 三 そこから喜ばしそくにさげんだ。「略。」
 八九三 四 八三九 五 にくいあひるの子であつたとき、こんな
 八九四 六 林「ごう」というのだそうです。やく3.6dl
 八九四 七 うから、はりのようにほそい、白いめのよ
 八九五 八 そい、白いめのようなものがでました。こ
 八九五 九 て、むらのないようになきました。ひたさ
 八九六 〇 たところには、べつにしろしをつけておき
 八九六 一 朝風にゆられるようになりました。黄みど
 八九六 二 根をはって育つように、小石をひろい、土
 八九六 三 でした。よいお天気で、風もなくあつい日
 八九六 四 八九六 五 、水がきれいなように氣をつけましよう。

八九三 六 九一〇 三 でききました。これで、もうだいじようぶ
 八九三 七 九一〇 四 でみると、毛のようなものがたくさんはえ
 八九三 八 九一〇 五 すこしのあいだだけだと思ひました。9
 八九三 九 九一〇 六 いままでべしやんこだったさきが、ふくれ
 八九四 〇 九一〇 七 と、うんかのたまごだということでした。
 八九四 一 九一〇 八 う病氣にかかったのだとおっしゃいました
 八九四 二 九一〇 九 りました。じようぶに作つたいねかけに、
 八九四 三 九一〇 〇 日がよくあたるようにきちんとかけました
 八九四 四 九一〇 一 じきました。きれいなお米がでてきました
 八九四 五 九一〇 二 もみすりをするものではないと思ひました
 八九四 六 九一〇 三 らわすのと同じように、音の組みあわせも
 八九四 七 九一〇 四 あわせも、いろいろな氣持をあらわします
 八九四 八 九一〇 五 ますと、夜のしずかなけしきを思ひだしま
 八九四 九 九一〇 六 りあげると同じように、ことばの組みあわ
 八九五 〇 九一〇 七 て、これにいろいろなことばをつけてみま
 八九五 一 九一〇 八 ち」など、いろいろなことばを組みあわせ
 八九五 二 九一〇 九 ことばの組みあわせだと、すぐ心にものを
 八九五 三 九一〇 〇 ると、ごちやごちやになって、まとまりが
 八九五 四 九一〇 一 によって、いろいろな心持をあらわすこと
 八九五 五 九一〇 二 し、また、さまざまな情景を写しだすこと
 八九五 六 九一〇 三 いてみると、たしかに水の音である。はじ
 八九五 七 九一〇 四 と、たしかに水の音である。はじめに、川
 八九五 八 九一〇 五 とたちさわぐところである。つぎには、雨
 八九五 九 九一〇 六 は、雨の降るところであった。それから、
 八九六 〇 九一〇 七 音をきいているようであった。つぎに、風
 八九六 一 九一〇 八 であらわすというのだからおもしろい。よ
 八九六 二 九一〇 九 いてみると、たしかに風の音になる。とう
 八九六 三 九一〇 〇 さつとふいてくる風であり、竹やぶを流れ
 八九六 四 九一〇 一 やぶを流れてくる風であり、町の通りを、
 八九六 五 九一〇 二 く物をふいている風である。風の音よりも
 八九六 六 九一〇 三 をあらわしたひびきである。たいこを、ひ
 八九六 七 九一〇 四 づけてうち鳴らすのであるが、いかにも雪

九一二 八 九一二 八 りしきっているような氣がした。ただ一つ
 九一二 九 九一二 九 もなるのは、ふしぎである。しばいで、ゆ
 九一二 〇 九一二 〇 ていた人が、にわかに目をさます場面を演
 九一二 一 九一二 一 はけつしてするものではないが、やはりた
 九一二 二 九一二 二 景をあらわすばかりでなく、心持まであら
 九一二 三 九一二 三 をもつていないからであらう。もし、きく
 九一二 四 九一二 四 談でもしているようにみえます。まもなく
 九一二 五 九一二 五 つけてはなしたものだということがわかり
 九一二 六 九一二 六 のつばめも同じように、ヨーロッパの北の
 九一二 七 九一二 七 も、けつしてふしぎではありません。しか
 九一二 八 九一二 八 のつばめが、きゆうに落ちてきたことがあ
 九一二 九 九一二 九 月の中ごろ、きゆうに十二月の氣候と同じ
 九一三 〇 九一三 〇 おりから南へ飛行中だったつばめは、食に
 九一三 一 九一三 一 の廣告は、たいへんなはんきようをまきお
 九一三 二 九一三 二 した。「かわいそうなつばめをすくえ。」
 九一三 三 九一三 三 ぶのに六台の自動車ではまにあわず、さら
 九一三 四 九一三 四 きました。さいわいなことに、そのとき、
 九一三 五 九一三 五 へん寒いあらしの日で、朝から晩まで、こ
 九一三 六 九一三 六 それから毎日のように、アルプスをこえて
 九一三 七 九一三 七 の汽車に、とくべつにあたたくした貨車
 九一三 八 九一三 八 一次世界大戰のあとで、まだそのいたでが
 九一三 九 九一三 九 國の人々が、あわれなこの小鳥たちをしめ
 九一四 〇 九一四 〇 國の人々が、どんなに高い教養をもつてい
 九一四 一 九一四 一 へんありがたいことだといわずにはいられ
 九一四 二 九一四 二 になつて、いろいろな方法でこのことをし
 九一四 三 九一四 三 ますと、やはりそうであることがわかりま
 九一四 四 九一四 四 る人の心は、どんなにうれしいことではし
 九一四 五 九一四 五 で、まえより元氣で、からだもしっかり
 九一四 六 九一四 六 がたが、さかさまに湖の中にうつつて、
 九一四 七 九一四 七 いれた油絵のように美しくかがやいてみ
 九一四 八 九一四 八 ともついろいろな魚がいたそうです。
 九一四 九 九一四 九 といごぼうのよう、たこの足のように

九三4 7 手、たこの足のように「かぶから七本も八
九三4 10 手 ふえる力の強い草なので、どんな小さな
九三6 9 手 両がわに、まっかな、かわいらしい山い
九三6 10 手 が、こぼれたように雑草の中にありまし
九三7 4 手 にくのが、すきではありませんでした
九三7 8 手 まざさやいろいろな名も知らない雑草が
九三8 1 手 降ったあとのようにぬれていきます。かれ
九三8 2 手 ています。かれ枝ならば、だれの山の木
九三8 7 手、ひっかけるようにして、下から力をい
九三9 4 手 す。下からどんなに大きな声で話しかけ
九三9 8 手。一ど、すぎの木で、根もとからかれて
九四2 11 手 ぐたちはむちゅうになつていもをひろい
九四3 1 手 の木の多いところで、どここの家にも、二
九四4 1 手 葉を「きれいだ、きれいだ。」とい
九四4 1 手 きれいだ、きれいだ。」といつてひろい
九四4 3 手 まで子どものように、かきの葉を「まい
九四4 6 手 木の上に、まっかにじゅくした実がすず
九四4 10 手 たが、いそぐ用事だったので、先生にだ
九四5 3 手 リック少年のように、子どものころから
九四5 5 手 注意を向けるようにといわれました。ぼ
九四5 7 手 ごとを、しんけんにやろうと思っていま
九四6 9 手 なさんが、ゆかいに遊んでいるだろうと
九四6 9 手 かいに遊んでいるだろうと思ひます。先
九四6 10 手 さん。楽しく元気で勉強してください。
九四7 5 手 げんよろしいそうで、けっこうです。あ
九四7 6 手 あした、めんどろな裁判をしますから、
九四7 8 手 ねこ拜「字はへたで、すみもがさがさし
九四8 6 手 顔や、そのめんどろだという裁判のようす
九四9 2 手 できたばかりのように、きれいにありあ
九四9 2 手 りのように、きれいにありあがつて、まっ
九四9 2 手 あがつて、まっさおな空の下にならんでい
九四9 8 手 は、ちよっとしずかになつて、「略。」と

九四9 9 手 って、「やまねこなら、けさ早く馬車で
九五0 1 手 答えました。「東なら、ぼくのいく方だ
九五0 1 手 ら、ぼくのいく方だねえ。おかしいな。
九五0 8 手 のたき」は、まっ白な岩のけけの中ほどに
九五10 手 から水がふえるように鳴つてとびだし、す
九五14 手 した。「やまねこなら、さつき馬車で、
九五15 手 「おかしいな。西なら、ぼくのうちの方
九五15 手、ぼくのうちの方だ。けれども、まあ、
九五17 手 は、またもとのようにふえをふきつづけま
九五19 手 コドツテコと、へんな樂隊をやつていまし
九五23 手 こは、「やまねこなら、けさ早く馬車で
九五27 手 ねりました。「南なら、あつちの山の中
九五27 手、あつちの山の中だ。おかしいな。まあ
九五29 手 みんないそがしそうに、ドツテコドツテコ
九五210 手 コドツテコと、へんな樂隊をつづけていま
九五36 手 した。「やまねこなら、けさまだくらい
九五43 手 谷川の南の、まっ黒なかやの木の森の方へ
九五46 手 かやの枝は、まっ黒にかさなりあつて、青
九五48 手 道はたいへんきゆうな坂になりました。い
九五49 手 ろうは、顔をまっかにして、あせをぼとぼ
九五410 手 登りますと、にわかにはっきりと明かくな
九五411 手 しいこがね色の草地で、草は風にザワザワ
九五52 手、まわりは、りっぱなオリブ色のかやの
九五53 手 は、しゃもじのようなかたちだったので
九五56 3 手 もじのようなかたちだったので。いちろ
九五56 10 手 は、いちろうさんだ。」いちろうはぎ
九五57 3 手 すると、そのきたいな男は、「略。」「略
九五57 6 手 は、ずいぶんへただったろう。」と、男
九五57 7 手 向いて、かなしそうにいました。いちろ
九五57 8 手 いちろうは氣のどくになつて、「略。」と
九五57 11 手 のあたりまでまっかになり、着物のえりを
九五58 5 手 年生だつてあんなには書けないでしやう

九五8 6 手 ると、男はまたいやな顔をしました。「略
九五8 7 手、小学校の四年生だろう。」その声が、
九五8 8 手 り力がなく、あわれにきこえたので、
九五8 11 手、顔じゅう口のようにして、にたにたわら
九五9 2 手、わしが書いたのだよ。」いちろうは、
九五9 5 手 すと、男は、きゆうにまじめになつて、「へ
九五9 5 手 は、きゆうにまじめになつて、「略。」と
九五9 6 手 こさまのぎよしゃだよ。」といいました。
九五9 9 手、ぎよしゃはきゆうにいていねいなおじぎを
九五9 9 手 はきゆうにいていねいなおじぎをしました。
九五9 11 手、やまねこが、黄色なじんばおりのよう
九五9 11 手 なじんばおりのような物を着て、みどり色
九五9 11 手 り色の目をまんまるにして立っていました
九五9 9 手 といからめんどろなあらそいがおこつて
九五9 5 手 チしおのはねるような音をききました。び
九五9 9 手 ンをはいたどんぐりで、その数といつたら
九五9 10 手 数といつたら、三百でもきかないほどでし
九五9 10 手 たな。ありのうにやつてくる。おい、
九五9 10 手 あたりがいいようだから、そこんこの
九五9 10 手、すこしずつしずかになりました。みると
九五9 10 手 うきようで三日めだぞ。いいかげんにな
九五9 10 手 だぞ。いいかげんになかなおりをしたら
九五9 11 手 おりをしたらどうだ。」やまねこがすこ
九五9 11 手 こがすこし心配そうに、それでもむりにい
九五9 11 手 うに、それでもむりにいばつていますと
九五9 10 手「大きなことだよ。大きなのがい
九五9 11 手 いちばんえらいんだよ。わたしがいちば
九五9 11 手 いちばんえらいんだよ。」「略。」「略
九五9 11 手 ながおしやつたじゃないか。」「略。
九五9 11 手。」「略。」「だめだい、そんなこと。せ
九五9 11 手と。せいの高いだよ。せいの高いこと
九五9 11 手。せいの高いことなんだよ。」「略。」

九六四会 いの高いことなんだよ。」「略。」「もう
 九六五会 しあいの強いものだよ。おしあいてき
 九六五会 あいしてきめるんだよ。」「もうみんなガ
 九六六会 いって、なにがなんだか、まるでちの果
 九六七会 の巣をつついたようで、わけがわからなく
 九六八会 うきようで三日めだぞ。いいかげんにな
 九六九会 だぞ。いいかげんになかなおりをしたら
 九七〇会 おりをしたらどうだ。」「すると、また、
 九七一会 うよ。大きなことだよ。」「ガヤガヤ、ガ
 九七二会 、また、なにがなんだかわからなくなりま
 九七三会 うきようで三日めだぞ。いいかげんにな
 九七四会 だぞ。いいかげんになかなおりをしたら
 九七五会 おりをしたらどうだ。」「いえいえ、だめ
 九七六会 で、いちばんばかで、めちやくちゃで、
 九七七会 で、めちやくちゃで、まるでなつてない
 九七八会 なるほどというようにうなずいて、それか
 九七九会 よろしい。しずかにしろ。申しわたした
 九八〇会 しろ。申しわたした。この中で、いちば
 九八一会 で、いちばんばかで、めちやくちゃで、
 九八二会 で、めちやくちゃで、てんでなつてなく
 九八三会 頭のつぶれたようなやつが、いちばんえ
 九八四会 いちばんえらいのだ。」「どんぐりどもは、
 九八五会 ぎよしやも、大喜びで、五六べん、むちを
 九八六会 だなにかいたそうに、しばらくひげをひ
 九八七会 、いかにもざんねんだというふうに、しば
 九八八会 まねこは、さけの頭でなくてまあよかった
 九八九会 というふうな、口早にぎよしやにいまし
 九九〇会 ぶが、けむりのようにぐらぐらゆれました
 九九一會 て、待っているようにとおっしゃったので
 九九二會 も大むかしのことだが、貝などをおもに
 九九三會 が、おくれないうように歩いていきました。
 九九四會 ていきました。平らな畑やたんぼの向こう

九七二会 は、波のおだやかな海のいりえだったの
 九七三会 やかな海のいりえだったのです。そう、
 九七四会 した。土はやわらかで、ずぶずぶと、ステ
 九七五会 ッキのたけいっぽいにはいります。」「略」
 九七六会 中にいたいろいろな貝のからです。むか
 九七七会 略。」「ありそうなところをほつてみま
 九七八会 略。」「ありそうなところをほつて、どんな
 九七九会 からないと、だめだと思つてやめてしま
 九八〇会 「それがよさそうだね。それではまず、
 九八一會 。」「略。」「だめだね、こは。」「略
 九八二會 、ひとりでたんねんにほつておいでになり
 九八三會 ただのわり石のような物などがたまつてい
 九八四會 、だんだんしんけんになつてほりました。
 九八五會 。」「略。」「そうだ、たしかにそうだ。
 九八六會 「そうだ、たしかにそうだ。先生のところ
 九八七會 だ、たしかにそうだ。先生のところにあ
 九八八會 るにあるのと同じだね。」「略。」「略
 九八九會 おや、これはなんだろう。針みたいだね
 九九〇會 だろう。針みたいだね。」「略。」「私は
 九九一會 略。」「と、しずかにおっしゃいました。
 九九二會 ののかけらみたいなのがあるじゃない
 九九三會 たいなものがあるじゃないか。」「先生が
 九九四會 を流し、顔をまっかにしてほつています。
 九九五會 だんだんいろいろなことを知つてくると
 九九六會 くだいて作つた物で、つるつるみがかれ
 九九七會 だのわり石のようにみえる物もあります
 九九八會 ん土器という種類で、こんなたのせと
 九九九會 けらがと思うような物ですが、これはた
 一〇〇〇會 、これはたいせつな物だから、どんな小
 一〇〇一會 れはたいせつな物だから、どんな小さな
 一〇〇二會 あつてしらべ、へんだと思う物は、みなか
 一〇〇三會 三十分は、ひじょうにみじかく思われまし

九八二會 。」「略。」「だめだよ、きみ。」「け
 九八三會 きかけられたところである。たかぎには友
 九八四會 、これでひきわけだ。」「やまだ「いやだ
 九八五會 だ。」「やまだ「いやだ。」「と、たかぎを
 九八六會 「ぼくだつていやだ。」「と、つかまれて
 九八七會 せよ。どうしたんだい。あんなになかの
 九八八會 たんだい。あんなになかのいいふたりが
 九八九會 たりが。」「五「へんだよ。ふたりとも
 九九〇會 さあ、いいかげんにして帰ろうよ。ね、
 九九一會 いよ。学校の帰りじゃないか。」「二「
 九九二會 るうちに、きゆうにつかみあいをはじめ
 九九三會 あいをはじめるんだもの。」「三「もういい
 九九四會 の。」「三「もういいじゃないか、そんな話
 九九五會 けれど、自分の物ではないので、それを
 九九六會 あげるが、自分の物ではないので、なおあ
 九九七會 、「これ、きみのだろう。」「やまだ、は
 九九八會 。さがしていたすみである。受けとりにく
 九九九會 受けとりにくい氣持でいるが、やがて思い
 一〇〇〇會 ぎの顔をみないようにして、「略。」「たか
 一〇〇一會 なにをなくしたんだ。」「たかぎ、ちよつ
 一〇〇二會 やまだ「じようぎだろう。」「たかぎ「なん
 一〇〇三會 「なんだつていいじゃないか。よけいな
 一〇〇四會 やないか。よけいなおせっかいさ。」「や
 一〇〇五會 かき「あつ、それだ。」「と喜ぶが、やま
 一〇〇六會 顔をみると、きゆうにまたつんとなつて、
 一〇〇七會 。」「やまだ「なんだ。」「と立ちどまる。
 一〇〇八會 みが落したボタンだろう。」「やまだ「落し
 一〇〇九會 やまだ「落したんじゃないか。きみがむし
 一〇一〇會 がむしりつたんじゃないか。」「と、ボ
 一〇一一會 。」「たかぎ「なんだ。」「やまだ「首、いた
 一〇一二會 かぎぶつきらぼうに、「略。」「ふたりだ
 一〇一三會 き「でも、あいこだ。」「やまだ「なにがあ

九八八 〇 だ「なにがあいこだ。」たかぎ「じようぎ
九八九 〇 ぎひろってやったじやないか。」やまだ「
九八九 〇 〇をみつけてやったじやないか。」たかぎ「
九八八 〇 〇「だから、あいこだ。」やまだ「でも、き
九八八 〇 〇つかいたのはだれだ。」と、首をさする。
九八八 〇 〇「だから、あいこだろ。」やまだ「そり
九八八 〇 〇あいこになるように、もう一つなぐって
九八八 〇 〇ぎ「もうたくさんだ。」たかぎ、頭をか
九八八 〇 〇う。たかぎ「しずかに、「略」。」やまだ「
九八八 〇 〇に、「でも、いやだな、けんかしたあと
九八八 〇 〇んかをはじめたんだろ。」やまだ「つま
九八八 〇 〇まん話をするもんだから——」たかぎ「
九八八 〇 〇けまいと思っただ。じまん話をはじめ
九八八 〇 〇がいちばんりっぱだと思ふんだね。な
九八八 〇 〇っぱだと思ふんだね。なんだか、いま
九八八 〇 〇ぎ「だいじようぶだよ。さあ、いこう。
九八八 〇 〇れの一本すぎのそばであった。ぼくたちは
九八八 〇 〇くきこえる。きゆうな坂にかかると、まえ
九八八 〇 〇いっしょうけんめいに登っていった。まっ
九八八 〇 〇へとびこんだところであった。「略」。」と
九八八 〇 〇「あれがスキー場だ。もうひと息。」と、
九八八 〇 〇と、なるほどりっぱなスキー場で、ジャン
九八八 〇 〇どりっぱなスキー場で、ジャンプ台もみえ
九八八 〇 〇なは喜んで、きゆうに元気をだした。いよ
九八八 〇 〇にもすべりよさそうないしやが、長くつ
九八八 〇 〇から追いたてようにいわれた。百五十メ
九八八 〇 〇そうをしているようだ。ふもとへきて、急
九八八 〇 〇ながら、小鳥のようにおりてくる。とちゅ
九八八 〇 〇てくるもの、まじめな顔でやってくるもの
九八八 〇 〇るものなどさまざまである。みんなが急停
九八八 〇 〇られる。そのみごとなすべりぶりにみとれ
九八八 〇 〇ブ台では、じょうずな人たちが、かわるが

九八八 〇 〇ンブをなさるそうだ。」と、だれかがさ
九八八 〇 〇がすべられるところである。たちまち先生
九八八 〇 〇なんという勇ましきであらう。みんなは思
九八八 〇 〇先生がとばれるばんである。先生は、はち
九八八 〇 〇た。すばらしい早さだ。「略」。」先生のか
九八八 〇 〇村までくだりの坂道だ。林をぬって長いき
九八八 〇 〇、ほんとうにゆかいであった。十 ちよ
九八八 〇 〇を求めて 十のころであった。私は父につ
九八八 〇 〇、いくともうまそうに飲んでから、私にい
九八八 〇 〇にいった。「どうだ。この水を飲んでご
九八八 〇 〇これは、名高い泉なんだよ。」水は大き
九八八 〇 〇は、名高い泉なんだよ。」水は大きなこ
九八八 〇 〇たかと思われようにつめたかった。ちょ
九八八 〇 〇かった。あまいような、すずしいような、
九八八 〇 〇うな、すずしいような、氣の晴れ晴れする
九八八 〇 〇の晴れ晴れするような味だった。「略」。」
九八八 〇 〇れ晴れするような味だった。「略」。」泉を
九八八 〇 〇ているのがまつ川だ。私たちの村の用水
九八八 〇 〇からひいてあるのだ。「泉をあふれでた
九八八 〇 〇道で、父は次のような話をしてくれた。む
九八八 〇 〇のうまさがいちいである。なんとかして
九八八 〇 〇まわって、うまそうな水や名高いいど水を
九八八 〇 〇ったこともないような、ふしぎな味が感じ
九八八 〇 〇ないような、ふしぎな味が感じられた。茶
九八八 〇 〇流にいい泉があるのではないかと気がつい
九八八 〇 〇、遠い上流にあるのだとさとした。けれど
九八八 〇 〇れども、流れは急流だし、雨の日も風の日
九八八 〇 〇、この茶人ほど熱心ではないから、やめて
九八八 〇 〇し茶人は、いろいろな困難をしのいで、み
九八八 〇 〇りと感じられるようになった。「略」。」茶
九八八 〇 〇もうそれはただの水であった。「略」。」茶
九八八 〇 〇ぎれもないうまい水であった。そこで、谷

九八八 〇 〇て、それでもう終りであった。茶人は、そ
九八八 〇 〇楽しんでたことである。十一 一 び
九八八 〇 〇ふくし、雨は降るしで、あみもはことは
九八八 〇 〇とき、あみがにわかによれました。くもは
九八八 〇 〇星はだんだんきれいに光ってききました。あ
九八八 〇 〇風が思ひだしたようにふいてくるので、あ
九八八 〇 〇。それは、みつばちであることが、くもに
九八八 〇 〇らないで、まっすぐにとんできました。プ
九八八 〇 〇、つなにかれそうになりました。ぐずぐ
九八八 〇 〇、みつばちはだいい針をだして、くもを
九八八 〇 〇目をつぶってしずかにしていると、また、
九八八 〇 〇。「あ、こうもりだな。」思わずそちら
九八八 〇 〇もりは、ひょうきんなかつこうをして、こ
九八八 〇 〇いがします。まっ白なばらが、たくさんさ
九八八 〇 〇かしいなど、ふしぎに思っでよくみると、
九八八 〇 〇。うまいごちそうだ。」くもは、長い手
九八八 〇 〇きません。「なんだい、なんの用かね。
九八八 〇 〇。「略」。」「なんだって、お月さん——
九八八 〇 〇かりの月が、しずかに光っていました。「へ
九八八 〇 〇——」わたし一どでいいから、お月さん
九八八 〇 〇といわれて、きゆうになつかしくなりまし
九八八 〇 〇、ゆめでもみるように思ひだされてきまし
九八八 〇 〇いと思っっているんだけど。」「略」。」「へ
九八八 〇 〇ちょは、うれしそくに羽をととのえました
九八八 〇 〇。それから、まっ白な羽をひろげたかと思
九八八 〇 〇花がとんでいくように。くもは、とんでい
九八八 〇 〇ると、わらっているではありませんか。く
九八八 〇 〇か。くもは、ふしぎな顔をしながら、しげ
九八八 〇 〇まえのおかあさんじゃないかね。」おか
九八八 〇 〇んとみじかいゆめだろ。」と、くもは、
九八八 〇 〇ても、なんとしずかなくらしをしているの
九八八 〇 〇くらしをしているのだろ。なんとおだや

九一四 七 う。なんとおだやかなくらしをしているの
 九一四 八 くらしをしているのだらう。それにくらべ
 九一四 九 らしをしていることだらう。あみをはり、
 九一五 一 ことをしてきたものだらう。くもは、そっ
 九一五 二 と思ったのは、そうではなくて、つばめが
 九一五 三 もは、すっかりくなく氣持になりました。
 九一五 四 いる。風が、かすかに耳もとをすぎる。耳
 九一五 五 と、なにか、かすかな音楽がきこえてくる
 九一五 六 がきこえてくるようだ。どこからきこえる
 九一五 七 しいものを、すなおに感じとる心を、われ
 九一五 八 しいものを、すなおに感じとる心を、われ
 九一五 九 もちつづけたものである。心がけひとつ
 九一六 〇 ある。心がけひとつである。心がけひとつ
 九一六 一 われわれは、どんなにでも毎日の生活を、
 九一六 二 日の生活を、ゆたかに、楽しくすることが
 九一六 三 ぜい、めずらしそうについてきて困りまし
 九一六 四 いくそばを、足ばやにかけぬけていつて、
 九一六 五 顔をのぞきこむようにしました。こんなに
 九一六 六 にしました。こんなにうるさくついてこら
 九一六 七 どうしても、こんなに親しみをもつことが
 九一六 八 たくりは、むじやきな心からでた、子ども
 九一六 九 葉が黄色くなるころで、いなかの子どもに
 九一七 〇 した。みあげるように高いプラタナスの枝
 九一七 一 い葉が、毎日のように落ちました。三人の
 九一七 二 、子どものすきそうなおかしを、一ふくろ
 九一七 三 やったのはじまりで、その少女たちは、
 九一七 四 んのそばへくるようになりました。ひろい
 九一七 五 うさんにくれるようになりました。プラタ
 九一七 六 ばへきて、さまざまのことを話しかけたり
 九一七 七 ちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは
 九一七 八 わたしは、そんなにこわいものではない
 九一七 九 んなにこわいものではないありませんよ。」

九一八 〇 いらしい子どもたちではありませんか。あ
 九一八 一 そのいなか町がすきになったのも、一つは
 九一八 二 は、手ぬぐいのようなものをかぶった女の
 九一八 三 ンスだって、きれいなところもあり、きた
 九一八 四 うさんがしょうじきにその答をしましたら
 九一八 五 、思いうかべるようにいました。フラン
 九一八 六 ました。かしこそうな目つきの少年でした
 九一八 七 えたちに話すようなことばが、思うぞん
 九一八 八 強したら、どんなにしあわせでしょう。
 九一八 九 きから、たきのように落ちる雨水。その下
 九一九 〇 る。だんだんまどおになる。「こぼの愛」
 九一九 一 。もうあ学校の教室である。ひとりの生徒
 九一九 二 生。「あ、きれいなじ。」8 村の林の
 九一九 三 てみると、こんなにさまざまな色になり
 九一九 四 こんなにさまざまな色になります。」10
 九一九 五 をしている。きれいにたがやされた畑。田
 九一九 六 。その流れのかすかな音。石炭の坑道。工
 九一九 七 男の子が、むちゅううになってかけてくる。
 九一九 八 ふたりのうれしそうな顔。日の光をいっば
 九一九 九 。日の光をいっばいに受けた、はればれと
 九二〇 〇 、形などを、こまかにしらべたいのです。
 九二〇 一 たなどを、たんねんにみようと思えます。
 九二〇 二 。こんな動植物だけではなく、雪のようす
 九二〇 三 わかり、そのふしぎなことにうたれ、美し
 九二〇 四 か、なぜ、このようなあみかたをしなけれ
 九二〇 五 思います。このように、なんでも、そのも
 九二〇 六 をしらべていくような心がけを、もちたい
 九二〇 七 めに、いつもすなおな子どもになりたいの
 九二〇 八 わくをかけないようにしたいと考えます。
 九二〇 九 が明かるくなるように、できないものでし
 九二一 〇 しい氣持になるようにできないものでしょ
 九二一 一 る口をいわないようにしたいし、自分のも

九二一 二 いところを、すなおに学んでいきたいと思
 九二一 三 す。自分をえらそうにみせかけたり、人を
 九二一 四 とりとして、りっぱにそのつとめをはたし
 九二一 五 でもいいというような、無責任な、ひきよ
 九二一 六 うような、無責任な、ひきよな考えを
 九二一 七 無責任な、ひきよな考えをもちたくはあ
 九二一 八 けがえのないひとりであることを、ほこる
 九二一 九 ことを、ほこるようになりたいものです。
 九二二 〇 て、おかしなやつだ。男のくせに。」豊
 九二二 一 らべつづけていたのである。村じゅうの者
 九二二 二 えは、大工のせがれだ。ほかのことを考え
 九二二 三 、佐吉のもえるような研究熱は、どうする
 九二二 四 めたりしたのは、母であった。佐吉の考え
 九二二 五 。佐吉の考えはこうである。人間の衣食住
 九二二 六 は、みんなたいせつなものであるから、ぬ
 九二二 七 んなたいせつなものであるから、ぬのを織
 九二二 八 れない。いまのようなぬの織りかたをし
 九二二 九 りかたをしていたのでは、やがて、困ると
 九二三 〇 ならない、というのである。佐吉が、はじ
 九二三 一 だをぬっていく横糸であった。横糸はおさ
 九二三 二 右へといききするのであるが、これを人の
 九二三 三 械の力で動かすようにしたかった。機械で
 九二三 四 ん織られていくからである。佐吉の考えは
 九二三 五 ない空想になりがちであった。たまたま、
 九二三 六 は、生きもののよう動いていた。かれは
 九二三 七 かれは、そのりっぱな機械をみて、感心す
 九二三 八 のは、なかったからである。「略」。佐吉
 九二三 九 る。「こんなことでいいのか。日本のゆ
 九二四 〇 た。だが、思うように動くものは、なか
 九二四 一 んに考えぬき、これならという一台の機械
 九二四 二 れも、まふまふと失敗であった。世間からは
 九二四 三 ちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎ

十 36 7 織っていく、ふしぎな機械に目をみはりな
 十 36 10 会。」「えらいものだ。」といつてほめた
 十 36 12 あやつつて、りっぱにぬのを織つてみせた
 十 36 12 せたのは、佐吉の母であつた。それは、明
 十 37 1 十四才のときのことである。あくる年から
 十 37 2 内につかわれるようになったが、かれは、
 十 37 5 つづけられ、みごとに、自動織機ができあ
 十 37 6 る自動織機のはじめである。日本の新しい
 十 37 8 役わりをはたすことであろう。眞珠「
 十 38 1 会」とはできないものだろうか。」一つぶの
 十 38 4 、海のそこからまれにひろいあげられる、
 十 38 4 あげられる、ふしぎな宝石とされてきたが
 十 38 5 、けつして、ふしぎでもなんでもないもの
 十 38 6 て、ふしぎでもないものでないものであつた
 十 38 6 もなんでもないものであつた。眞珠母貝の
 十 38 7 貝の中に、砂のような小さなものがいりこ
 十 38 9 ことがわかつたからである。「へ略。」それ
 十 39 2 知られた御木本幸吉であつた。「へ略。」幸
 十 39 8 げば、成功するわけであつたが、理論と実
 十 39 10 、ひとつになるものではなかつた。だいい
 十 40 8 り、そのゆめのような考えをわらつた。ま
 十 40 9 りの者から、どんなにあざけられ、からか
 十 40 10 たのは、つまのうめであつた。うめは、「へ
 十 41 4 かわるほどになるのである。この赤しおの
 十 41 5 てもみなかつたことである。かれは、新し
 十 41 8 とさえののしるようになった。うめは、い
 十 42 1 て発生した半円眞珠であることが、わかっ
 十 42 2 会 なければ成功するのだ。半分までこぎつけ
 十 42 3 会 つけた。あと半分だ。」幸吉とうめは、
 十 42 8 どおりに取れるようになったので、ひとま
 十 42 9 かく、世にだすようになった。この光明を
 十 42 11 吉の心からの助力者であつたうめが、この

十 43 5 一つ一つ、ていねいにしらべていった。す
 十 43 6 ると、かれはきゆうにとびあがつた。「略
 十 43 8 眞珠が、光っているではないか。幸吉は、
 十 43 9 こそ氣ちがいのようになって、死貝をどん
 十 43 11 の眞珠が取れたわけである。「へ略。」かれ
 十 44 8 はなつた。さいわいに、赤しおもよせてこ
 十 44 12 も眞珠が、きよらかにかがやいているでは
 十 45 1 かにかがやいているではないか。大きなゆ
 十 45 5 ラリアや南洋の島々であるが、日本産のも
 十 45 10 眞珠は、まがいものであるといつた。しか
 十 45 11 眞珠とまったく同じであることが、明らか
 十 45 12 あることが、明らかにされた。そののち、
 十 46 8 会 は、ダイヤモンドであり、いま一つは、
 十 47 1 会 光明を太陽とするならば、作製に失敗し
 十 48 1 四十分もかかつたのではないかと思いまし
 十 48 2 いというためばかりでなく、道ばたにある
 十 48 6 、妹の氣のすむようにして、つれていきま
 十 50 9 、せなかをかくようなかつこうをしました
 十 50 11 は、くしゃみのようなことをして、「フツ」
 十 51 5 まばたきをしたきりで、そのパンをたべよ
 十 51 10 いので、たべるように、「オハナシシテ」
 十 53 7 重いから手に持つのだと、ませたことをい
 十 53 12 が三つほど、きれいにさいていました。妹
 十 54 10 こでまた、いろいろなものをながめるので
 十 55 2 の心の写真になるのではないかと、ふと、
 十 55 6 くなりました。むりに書く、自分がほん
 十 56 3 く成長していくように、私も、ここで、い
 十 57 5 さきました。きれいにさきました。白と、
 十 57 8 した。いまはきれいだけれど、コスモスは
 十 60 1 まんまるくてきれいだ。おかあさんに、「へ
 十 62 1 どうして、あんなに早くのびるのでしょ
 十 62 2 音がしたから、なんだろうと思つて、二階

十 63 2 舞つたり、さまざまなしぐさをしたりする
 十 64 6 味わうことを、喜ぶだろうと思います。能
 十 64 12 ですが、狂言はそうではありません。つぎ
 十 65 1 は、狂言の中の有名なものです。狂言には
 十 65 5 よわい人間のしそうなことを、なんでもや
 十 66 4 会 よくするをするのだぞ。」といいつけ、
 十 66 8 会 といわれるくらいだ。ふたりとも用心し
 十 66 9 会 ばへもよらぬことだ。わかつたか。「へ
 十 66 12 いどくで、死ぬようなことになつてはつま
 十 67 2 、顔も向けないようにしていました。でも
 十 67 4 にさわりもしないのだから、自分たちも、
 十 67 6 会 できてはたいへんだから、次郎かじゃ、
 十 68 1 それをあいずのようにして、ぬき足さし足
 十 69 3 すみに、だいいじやうにしまつてあつた、一
 十 69 6 会 、どくの『ぶす』だよ。「へ略。」「略
 十 69 8 会 て死んでいるはずじゃないか。それが、
 十 69 8 会 れが、死なないのだから、『ぶす』では
 十 69 8 会 だから、『ぶす』ではない。「へ略。」「
 十 70 3 かえつて、うまさうなあまいにおいがして
 十 70 5 会 つ、たべてみようじゃないか。「へ略。」「
 十 70 7 会 みたいていのどくではないから、かえつ
 十 70 8 会 えつて、うまさうにみえるのだよ。「へ
 十 70 8 会 まそうにみえるのだよ。「へ略。」「ひき
 十 70 12 会 なあんだ、さとうだ。「へ略。」「おくび
 十 71 2 びよう者が、きゆうにいいきおいづき、せん
 十 71 4 会 は上等の黒さとうだ。」ふたりは、かわ
 十 71 6 、つぼが、からつぽになつてしまいました
 十 71 10 次郎かじゃは、心配になりました。太郎か
 十 71 11 は、氣が強いばかりでなく、わるちえがあ
 十 72 2 、とこのまのりつぽなかけものをひきさき
 十 72 4 会 っそうしかられるじゃないか。「へ略。」「
 十 72 7 会 、だんながだいいじにしているあの湯飲み

十72 郎かじゃは、きゆうに両手で顔をおおい、
 十73 二 ともどうしたのだ。」だんなは、あつ
 十73 七 会 に、あのたいせつなかけものを、あのと
 十74 二 いたくせに、きゆうに、につこりわらい顔
 十14 2 川口はいいところだ。近くには小高い丘
 十15 1 練習していることだ。川口の子どもたち
 十15 4 めては、いろいろな話をしあつて楽しむ
 十15 6 で、まだむちゆうになつてゐるのである
 十15 7 うになつてゐるのである。「略。」「略
 十15 8 四ばんをこぐんだ。力まかせに、長い
 十15 10 くもきみに賛成だ。ぼくは、父ににた
 十15 11 会 いの高いりっぱなからだになるだろう
 十15 11 会 なからだになるだろう。その体格で、
 十16 1 会 スピードで走るだろう。みるみるうち
 十16 7 会 りにゐるばかりで、べつに用もないよ
 十16 7 会 に用もないようだが、ボートの向きを
 十16 10 会 スが大声でいうだろう。「略。」「それ
 十17 8 会 れがうれしんだよ。」「略。」「略
 十17 9 会 かたがじようずになつて、みんながさ
 十18 3 会 生きものみたいに進んでいく。これこ
 十18 4 会 いちばんりっぱなものだと思ふ。」「へ
 十18 4 会 んりっぱなものだと思ふ。」「略。」「
 十18 5 会 いちばんだいで、むずかしいのは、
 十18 6 会 のは、コックスだろう。さつきから、
 十18 8 会 みのいうとおりだ。ぼくらですいせん
 十18 11 会 、ぼくらのいやなことなど、きみはな
 十19 1 会 かつてゐるだけではないに、いつもそ
 十19 3 会 、だいじようぶだと思ふんだ。」「略
 十19 3 会 うぶだと思ふんだ。」「略。」「略。
 十19 7 会 はどこへいく船だろう。」「略。」「へ
 十19 8 会 」。」「大きな船だね。きつと遠くへい
 十19 8 会 と遠くへいくんだらう。」「略。」「へ

十19 10 会 ちがむずかしいだろうね。」「略。」「
 十19 11 会 うがむずかしいだろう。しかし、りっ
 十19 12 会 しかし、りっぱなコックスは、いつか
 十19 12 会 、いつかりっぱな船長になるだろうよ
 十19 12 会 ばな船長になるだろうよ。」「略。」「
 十10 1 会 じゃあ、りっぱな整調は、りっぱな運
 十10 1 会 整調は、りっぱな運轉をする人になる
 十10 1 会 をする人になるだろうね。」「略。」「
 十10 5 会 それはぼくたちだ。三ばん、四ばんを
 十10 6 会 たち強い男の子だ。」「略。」「略。
 十10 8 会 をこぐ人もゐるだろう。」「略。」「へ
 十10 11 会 」。」「船ばかりではなく、あの町でも
 十10 12 会 づつ、同じことだと思ふ。いいコック
 十11 2 会 整調が、りっぱに日本じゆうの足なみ
 十11 6 会 、大学のボートだ。このあいだのレー
 十11 6 会 で勝つたボートだよ。頼んで乗せても
 十11 12 会 遠くとんでいく日だ。あげはのちようが
 十11 12 会 じめた。まっさおな海は、太陽の下でわ
 十11 13 会 もなく、ゆるやかにうつ波の声は、われ
 十11 13 会 の心をあらうようにきこえる。おりから
 十11 13 会 てきた旅人のような氣持のする日だ。丘
 十11 13 会 うな氣持のする日だ。丘の上の草にすわ
 十11 13 会 てもののはおじろだ。あれは、元氣もの
 十11 14 1 元氣もののこがらだ。あれは、この村の
 十11 14 3 がりやの小すずめだ。小鳥たちはみんな
 十11 14 9 も舞い、まっさおな海もわらい、たんぼ
 十11 16 5 、いちばん清らかな、すみきつたたま、
 十11 19 4 。働くことがすきで、一代でりっぱな身
 十11 19 4 で、一代でりっぱな身代をこしらえまし
 十11 19 11 のまにかびんぼうになつて、その日のく
 十11 19 12 らしにも困るようになりました。しかし
 十12 0 1 からだをじようぶにして、身代をもとの

十12 0 1 身代をもとのようにしたいものだと、ほ
 十12 0 1 ようにしたいものだと、ほねをおつてい
 十12 0 7 また、父親のすきなものをかうために、
 十12 18 となよりもよいに土や砂を運ぶほどで
 十12 3 4 つでした。どんなに病氣がちでも、父親
 十12 3 4 どんなに病氣がちでも、父親の生きてい
 十12 3 9 会 、金次郎、これでわたしも、じゆうぶ
 十12 5 1 会 わかれないようにしましうね。」「と
 十12 5 9 。ふつうの子どもだったら、くたくたに
 十12 5 9 たら、くたくたになつてたおれとこ
 十12 5 11 会 その体格もりっぱになつていきました。
 十12 6 7 でみると、りっぱな人になるためには、
 十12 7 2 会 うかしてゐるのではないだろうか。」「
 十12 7 2 会 いるのではないだろうか。」「村の人た
 十12 7 5 ると、例年のことで、だいかづらがまわ
 十12 7 7 す。中には、正月だというので、そのう
 十12 7 10 た。そんなわずかな金がないということ
 十12 7 12 のうちは、こんなにもびんぼうでした。
 十12 8 8 しょうけんめいに働きました。そのう
 十12 30 2 した。そればかりではありません。いろ
 十12 30 4 うやまわれるようになりまし。四
 十12 40 6 会 、光はまともにえんにさす。ほし
 十12 42 1 会 の、息はま白に舞いのぼる。よべ
 十12 42 5 会 としも作はよいだろう。ふきのとう
 十12 44 9 分が呼ばれたような氣がしました。弟は
 十12 45 8 、ささげ持つようにながら、席に着き
 十12 45 11 こしぐらいのことだからといって、ごま
 十12 47 3 くの二年生のときだった。津軽海峡の海
 十12 47 7 。みんなちうしで、ぼくによくなれて
 十12 48 2 、小さなゆりすで、その下に、いつも
 十12 48 6 いちごがでさかりだった。おとうさん、
 十12 49 3 うさんと同じように、ちちうしをかつて

十一 49 7 かあさんのおすきなライラックを植えます
 十一 49 10 に、負けないように働きます。日本のこ
 十一 49 11 くぐらは、北海道だといいます。さっぱ
 十一 52 2 った。あふれそうな乗客にまじって、ど
 十一 52 8 しりでもするように車の音をたてて、あ
 十一 52 10 人とがもみくちゃになった。しゃしよう
 十一 53 1 けた。「そんなにぶらさがっちゃ、電
 十一 53 3 けんだ。大きな声だが、雨や風の音のた
 十一 53 5 う台までいっぱいになってしまった。そ
 十一 53 6 います。そんなにやさないでください
 十一 53 11 人たちも、きゆうになごやかな氣持にな
 十一 53 11 きゆうになごやかな氣持になった。この
 十一 54 1 中に、つぎのようなひょう語がかかげら
 十一 54 8 みなうまいことばだ。けれども、私は、
 十一 55 4 とうむしのように、みすまししのよ
 十一 55 5 ずすましのよに、一つ一つはねる
 十一 58 8 すらといえるようになった。太郎は得意
 十一 58 9 った。太郎は得意になって、「略。」と
 十一 59 6 』ということばだ。」「略。」「略。
 十一 59 7 』やさしいことばではありませんか。」「
 十一 59 8 』やさしいようだが、なかなかいいに
 十一 59 8 にくいことばだよ。」「あくる日、太
 十一 59 10 ら帰るときのことであった。「略。」と
 十一 60 1 のは、田のあぜ道で、とちゅうに、かな
 十一 60 7 とめられていたのである。が、いま、友
 十一 61 2 んれねずみのようになって家に帰った。
 十一 61 5 えはどうしたのだ。まえからあぶない
 十一 61 6 の橋を渡ったのではないかね。」「とた
 十一 62 2 わると、よわ虫だといってわらうので
 十一 62 5 るほど、よわ虫だ。人のいうことに『
 十一 62 6 。おまえのようなよわ虫には、ひよつ
 十一 62 7 と命を失うようなあぶないときでも、

十一 62 8 はいにくいのだ。それから、また、
 十一 62 9 き、なぜすなおに『はい』といわなか
 十一 62 10 いわなかったのだね。」「略。」「略
 十一 62 12 いにくいことばではないか。」「九
 十一 63 7 あさ黒い、おも長な顔で、考えぶかそう
 十一 63 7 黒い、おも長な顔で、考えぶかそう
 十一 63 8 で、考えぶかそうな目をしていました。
 十一 64 2 ところが、にわかに病氣にかかって入院
 十一 64 4 族の者にかんたんな手紙を書いて、帰っ
 十一 65 2 へつれていくようにしていました。」「略
 十一 65 12 した。」「そんなに年よりではないので
 十一 65 12 そんなに年よりではないのですが、外
 十一 66 3 「五日ほどまえだと思えます。」「看護
 十一 66 5 と思いだしたように、「略。」「いいま
 十一 66 6 向こうのベッドだ。」「いいました。」「
 十一 66 8 しょうか。どうなんでしょう。」「と、
 十一 66 9 、少年は心配そうにききました。看護人
 十一 68 1 には、死人のようにみえる者もあれば、
 十一 68 2 くりでもしたように、大きくみ開いた目
 十一 68 3 た、子どものようにうなっている者もあ
 十一 69 11 か——これが父親であらうとは、とても
 十一 70 2 ふはち切れそうになっていました。た
 十一 71 4 ないで、苦しうに息を続けていました
 十一 71 7 きてくださったろう。」「少年は
 十一 71 9 なんとかわかるだろう。」「少年は、か
 十一 72 2 に、母親がどんなにか力をおとしたこと
 十一 72 7 「と、少年は口早にききました。」「略
 十一 73 10 かがんだ、まじめな顔をした老人でした
 十一 74 3 なからきたのでございます。」「と、
 十一 75 11 よくしたいものだ。力をおとさずにい
 十一 76 7 が、わかったようなうすはしませんで
 十一 77 2 かけでもしたようにみえました。少年の

十一 77 3 年のいたわるような声のひびきをきくと
 十一 77 4 と、感謝するような色が、そのひとみに
 十一 77 4 あいだうかぶようにみえました。そうし
 十一 77 5 うとでもするように、すこしくちびるを
 十一 77 8 護人をさがすようにみえました。医者は
 十一 77 9 かよくなったように思うといいました。
 十一 77 11 、きわめてかすかなほおえみがうかんだ
 十一 77 11 んだのをみたような氣がしました。そこ
 十一 78 1 、いくらかわかるであらうと思うと、い
 十一 78 5 しっかりするようにと病人をはげまし
 十一 78 6 んだかうれしうにその話す声に——愛
 十一 78 8 たむけているようにみえたからです。そ
 十一 78 10 たわるくなったりで、少年は看病にいっ
 十一 78 11 っしょうけんめいになっていました。一
 十一 79 4 、心を休めるような希望と、胸をこおら
 十一 79 5 をこおらせるような失望とのあいだで、
 十一 79 9 に、病人はにわかにはるくなりしました。
 十一 79 10 は、まったくだめだといわんばかりに頭
 十一 80 3 わかりかけるようにみえたことです。病
 十一 80 4 えて、うれしそうな顔を顔にうかべなが
 十一 80 5 を、少年の手からでなければ飲まないよ
 十一 80 5 れば飲まないようになりました。また、
 十一 80 6 でもしているように、いくどもいくども
 十一 80 7 もいくども、むりにくちびるを動かそう
 十一 83 3 たいどうしたのだ。おまえはべつの人
 十一 83 4 れていかれたのだな。わたしはまた、
 十一 83 6 いから、どんなにがっかりしていたか
 十一 83 7 はここにいたのだね。どうしてこんな
 十一 83 8 いがおこったのだらう。わたしは、こ
 十一 83 9 っかりじょうぶになったよ。それで、
 十一 83 12 退院するところだ。さあ、いこう。ま
 十一 84 1 こともあるものだ。」「少年は「こと三

十二 85 10 会 。ほら、あんなにぼくをみています。
 十二 86 4 会 なたと同じように、いなかのかたです
 十二 86 6 会 ら帰ったばかりで、ちょうどあなたが
 十二 86 11 会 、自分のむすこだと思ひこんでいるよ
 十二 87 11 会 はほっとしたようにみえました。で、チ
 十二 88 4 会 しっかりするようにとほげましたりしま
 十二 88 7 会 吸はいよいよ困難になりました。夕がた
 十二 88 11 会 ら、ときどきむりにくちびるを動かして
 十二 88 12 会 かものをいいたげにしました。また、や
 十二 89 6 会 いよりんじゅうだ。」と、医者はいい
 十二 89 10 会 にぎりしめたような氣がしました。「略
 十二 90 3 会 からだをまっすぐに立てました。看護婦
 十二 90 9 会 帰ってしあわせにおくらし。ほんとう
 十二 90 10 会 ほんとうに感心な子だ。神さまがきみ
 十二 90 10 会 とうに感心な子だ。神さまがきみをま
 十二 90 10 会 もってくださるだろう。さようなら。
 十二 5 1 会 れほどの手がらだらうか。」といつて
 十二 6 1 会 うさもないことでございましょう。」
 十二 7 3 会 にさいていた黄色なやまぶきの一枝をお
 十二 7 3 会 て、それをしずかにさしました。道
 十二 7 5 会 たが、なんのことだかその意味がわかり
 十二 7 12 会 いをたくしたものでありました。はた
 十二 8 10 会 いままでたんねんに織り続けていたぬの
 十二 12 1 会 をもっているものだと考えました。そこ
 十二 15 6 会 、こおろぎの果なんだな。そのままだ
 十二 15 7 会 おろぎの果なんだな。そのままだ
 十二 16 3 会 つかまえたものだと思つて、しきりに
 十二 16 6 会 これは、絵のすきだったおじさんからゆ
 十二 16 7 会 ってもらったもので、子どもにはりっぱ
 十二 16 7 会 りっぱすぎるほどだった。いい色の絵の
 十二 17 2 会 つめた。「だめだ。すこしも立体感が
 十二 17 11 会 そうよくおなりではありませんか。は

十二 18 7 会 、これが鳴るんだなと思つてやつてい
 十二 18 11 会 分たちのなかまだなと思つてよくきい
 十二 18 12 会 ると、じょうずなのもあるし、へたな
 十二 18 12 会 もあるし、へたなのもある。毎晩鳴い
 十二 19 1 会 しずつじょうずになっていくようです
 十二 19 2 会 いへんじょうずになりました。このあ
 十二 19 5 会 はあんまりへたなので、耳ざわりでい
 十二 19 5 会 ので、耳ざわりでいやがつておいでだ
 十二 19 6 会 やがつておいでだろうと思ひました。
 十二 19 7 会 その実をそんなに美しくなさるには、
 十二 19 7 会 ご苦心がおありだったでしょうね。」「
 十二 20 1 会 つかかなかつたりだったのに、このごろ
 十二 20 2 会 とができるようになりました。」「略
 十二 20 4 会 「やっぱり容易じゃないのですね。」「
 十二 20 6 会 こしもないようにしたいのです。けれ
 十二 20 7 会 ども、思うようにいきません。」「略
 十二 20 9 会 ざくろはこんなに美しいんだらうって
 十二 20 9 会 んなに美しいんだらうって。」「略。
 十二 20 10 会 また、あのような絵のぐがあればいい
 十二 21 1 会 しょうけんめいにけいこしなくちゃだ
 十二 21 3 会 雄さんがりっぱな絵かきになるころは
 十二 21 5 会 、美しいうりっぱな実をたくさんつける
 十二 21 6 会 さんつけるようになりたいものです。
 十二 21 11 会 の心を動かすのだから、あのピアノの
 十二 22 4 会 して、じょうずになったのだらう。そ
 十二 22 4 会 うずになったのだらう。そうだ、けい
 十二 22 5 会 のだらう。そうだ、けいこだ。高い理
 十二 22 5 会 そうだ、けいこだ。高い理想をめざし
 十二 22 6 会 いこをすることだ。」「文雄はこう考え
 十二 23 3 会 ました。せまい家なので、兄は氣のどく
 十二 23 3 会 で、兄は氣のどくだといつて、いつもえ
 十二 23 3 会 つもえんりよがちにしていますが、母を

十二 23 7 会 つても、いいすぎではありません。やし
 十二 24 5 会 いえは一年三ヶ月で、まだ歩けません。
 十二 24 9 会 して早く歩くようにしてやりたいもので
 十二 24 11 会 早く、いえるようにしてやりたいもので
 十二 25 1 会 だけにわかるへんなことばをいっていま
 十二 25 5 会 、民ちゃんは平氣でそこらをはいまわっ
 十二 25 7 会 用をたさるようになりました。はじめは
 十二 25 10 会 しに知らせるようになりました。」「略
 十二 25 11 会 さん、たいへんな進歩ですよ。いまに
 十二 25 12 会 もなくなるようにしてみせます。」「へ
 十二 26 1 会 いそがしいものだから、ついしつけが
 十二 27 6 会 ているというように、すこしもゆだんが
 十二 28 2 会 ゃんはうれしそうにいつて、その包みを
 十二 29 4 会 四足と歩けるようになりました。ある日
 十二 29 10 会 よう。たいへんな進歩じゃないの。」「
 十二 29 10 会 たいへんな進歩じゃないの。」「わたし
 十二 30 5 会 いいぬをかうようになりましたが、民ち
 十二 31 4 会 きてくださった日であります。それは一
 十二 31 5 会 三ヶ月まえのことでありました。この日
 十二 32 2 会 。私は、どのようなおどろきとふしぎが
 十二 32 6 会 たので、それが母だとばかり思ひこんで
 十二 33 8 会 とうとうじょうずにつづれましたとき、
 十二 33 10 会 意さに大はしゃぎで、二階から母のこ
 十二 34 2 会 るの人まねのように指を動かすだけでし
 十二 34 11 会 、二つとも同じ名であることを私にわか
 十二 35 2 会 「ゆのみ」が道具で、「水」がその中に
 十二 35 3 会 はいっているものであることを、はつき
 十二 35 6 会 人形が同じ名まえであることをわからせ
 十二 35 9 会 じながら、ゆかいに思ひました。私は、
 十二 36 2 会 なたにでかけるのだと知つて、おどろ
 十二 37 5 会 のを思ひだすような、めばえてこようと
 十二 37 6 会 らきといったようなあるふしぎなものを

十二 37 6 ようなあるふしぎなものを感しました。
 十二 37 7 流れているふしぎな冷たいものの名であ
 十二 37 7 な冷たいものの名であることを知りまし
 十二 38 1 て動いているように感じはじめました。
 十二 38 3 すべてをみるようになったからです。へ
 十二 39 3 ときの私ほど幸福な子どもを発見するこ
 十二 39 9 よんでわかるように、ケラーは、めくら
 十二 39 9 ケラーは、めくらで、そのうえつんぽで
 十二 39 10 に、こんなりっぱな文章が書けるとい
 十二 39 11 とすばらしいことではありませんか。ケ
 十二 40 11 って、そのまっ暗なさびしい心を明か
 十二 40 12 、学校にいくようになりました。もちろ
 十二 41 2 りがひとりようになつて、勉強をはじ
 十二 41 8 をとりかわすようになりました。ケラー
 十二 42 3 は、大学をりっぱな成績で卒業し、ほか
 十二 43 3 世界「ふしぎだなあ。」「略。」「ね
 十二 43 5 、動きだしそうな気がするんだけど
 十二 43 6 うな気がするんだけど。」「略。」「
 十二 43 7 ど。」「そうだね。おどろかしそう
 十二 43 7 おどろかしそうにみえるね。」「略。
 十二 44 6 「略。」「そうだ。もちろん人が動か
 十二 44 6 ん人が動かすんだがね。日本には、文
 十二 44 7 いって、りっぱな人形しばいがある。
 十二 44 9 いっているように動くよ。」「略。」「
 十二 44 12 人形を動かすんだ。からだ全体と右手
 十二 45 2 わけしているんだが、まゆ毛も、目も
 十二 45 3 がてんぐのようにとび出すこともある
 十二 45 5 いさんの大すきなじょうりさ。あれ
 十二 45 6 しばいをするんだ。」「略。」「略。
 十二 45 9 界にいったような楽しい気がするよ。
 十二 45 11 は手でつかうのだが、そのほか、指で
 十二 46 2 、よくみたものだ。あのころは影絵

十二 46 5 はあまりさかんでなかったが、アジア
 十二 46 6 パでも、りっぱな影絵しばいができて
 十二 46 8 のはとくに有名だね。牛皮を切りぬい
 十二 46 10 にしてみせるのだが、人間ばかりでな
 十二 46 11 が、人間ばかりでなく、動物などもで
 十二 46 12 ばいをするわけだ。」「略。」「略。
 十二 47 2 しかたがどんなにちがっていても、心
 十二 47 2 望みもあるのだ。」「略。」「略。
 十二 47 7 生まれてくるのだ。たとえば、わざわ
 十二 47 11 うがずっと便利なわけだけれど、絵に
 十二 48 1 と便利なわけだけれど、絵には絵の
 十二 48 1 ろで人形しばいだ、これは人間にで
 十二 48 2 いことでも平気でやれる。空をとんだ
 十二 48 3 に、人間みたいに不平やわがまをい
 十二 48 4 のうえ、手がるでおもしろいし、自分
 十二 48 6 のは楽しいものだ。こうえんでも教
 十二 48 7 きるとも。簡単な人形の作りかたを教
 十二 48 10 のすそからさかさにいれて、首を着物に
 十二 53 2 頭がみえないようにする。3 人形が
 十二 54 1 かたむかないように、話すときは人形の
 十二 54 2 い感じのするものである。なつかしい山
 十二 55 3 があるためばかりではない。子どもにと
 十二 55 4 こまれているからである。傳説には、正
 十二 55 6 きつづられて有名になったものもあるが
 十二 55 8 えられていただけで、そういう人たちの
 十二 55 9 ろみがあるばかりでなく、とうといこと
 十二 56 3 く、とうといことである。傳説を廣く全
 十二 56 4 と、よくにたようなのが、あちらこちら
 十二 56 5 には、世界に共通なものさえある。次に
 十二 57 1 ときのくわのあとで、そのとき落ちた土
 十二 57 2 海の中にある湯島であるという。九十
 十二 57 5 れないが、ふしぎなことに、神山のほう

十二 57 7 しい大きな石だんで、とても人間わざで
 十二 57 7 、とても人間わざではない。昔、神山の
 十二 57 11 きずきあげることでも、もしそれができな
 十二 58 3 せてやるというのであった。おには、こ
 十二 58 7 つしょうけんめいであるから、みるみる
 十二 59 1 田畑を荒らすようなことはなくなった。
 十二 59 4 。これが湖山の池である。昔、この里に
 十二 59 6 一代二代はいい人で、よくさかえたが、
 十二 59 10 長者の家の田植えだというので、里のお
 十二 60 6 をながめて、得意になっていた。ところ
 十二 60 8 傾いて、くれそうになつてきた。このと
 十二 60 12 りの田植えも無事にすんで、長者の望み
 十二 62 1 もかりにいくようになった。その中にわ
 十二 63 1 十和田湖のおこりだということである。
 十二 63 11 こりだということである。七 みえな
 十二 65 2 毛よりもやわらかだ。その細いやわらか
 十二 65 3 。おおづなのようなたくましい根が、深
 十二 66 1 根が、つなのようにからみあつて、葉を
 十二 66 5 根の上に、みごとに草や木がしげつてい
 十二 66 10 、いぬの歯のようにとがって、一つおき
 十二 67 4 糸のこは糸のように細く、ひきまわしは
 十二 68 6 まわしはひじょうにせまい。まっすぐに
 十二 68 7 せまい。まっすぐに長く切るのこぎり
 十二 68 8 なくなる。どんなにはたらきがあつても
 十二 69 5 ら、正しくりっぱに世の中をわたること
 十二 69 8 會長は、信州の人で、歌がたいそうじょ
 十二 70 3 かにつけて不自由であらうから、いろい
 十二 70 7 たい。下男のように住みこんであげても
 十二 70 8 蕉はひとりしずかにしているのがすきだ
 十二 70 9 しているのがすきだというし、家もせま
 十二 70 10 は、その近所に別に家をかりて住むこと

12714 ました。このようにして芭蕉につかえな
 12715 教えてもらえるので、これがなによりう
 12728 うしの子どもたちで、どれも身なりはき
 12729 も身なりはきれいではないのですが、芭
 12737 、「やあ、あられた、あられた。」子ど
 12737 、「あられた、あられた。」子どもたちは、
 12753 うずめられたようなしずかさでした。そ
 127510 した。「こんなに降るのによくきたな
 12761 、「やはりこんな晩だ。まあ、火をたきつ
 127610 りは子どものようにわらいました。き
 12776 まえからたいへんな見物人でした。時間
 12781 たちは、じょうずにえい語をつかって頼
 12784 みて、うれしそうに、えい語で、「略」
 12788 まりかわいい少年だったので、よくみて
 12792 ました。「そうだったのかい。きみた
 12802 トリス生まれだよ。」こう、私がか
 12804 たたみかけるようにたずねたとき、少年
 12813 て、胸がいっぱいになりました。それか
 12815 選手は世界的名手ですが、私もど
 12817 た。火のするようなはげしい試合が続き
 12821 せん。やわらかなボール 五月、六月
 12829 みるからにりっぱな体格は、小さな清水
 12829 手のおよぶところではありません。それ
 12835 ちは、われるようなはく手をふたりに送
 128312 た生きもののようになって、はねとびま
 12842 手はとぶ鳥のようにかけまわりました。
 12846 ほうつかいのようになって、大きなチル
 128410 ままおされるものではありません。もう
 12857 、「電光のようなボールをうちだしま
 12861 まにもころびそうになりました。相手を
 12862 りみだしたしせいではありませんが、や

12863 したが、やわらかなボールだったので、
 12863 やわらかなボールだったので、無事に受
 12863 だったので、無事に受け返すことができ
 12867 いました。わずかな点のちがいで、清水
 128610 く、あらしのようなはく手をおしませ
 12877 いれて持っていくだろう。手紙を書こう
 12879 いれて持っていくだろう。ふろ場の中
 12881 くんで持っていくだろう。ことばは、そ
 12883 よって、いろいろにその意味がかわる。
 12885 略。』という簡単なことばでも、相手の
 12888 によくかなうようにしなくてはならない
 128810 ことになるばかりでなく、そのことばが
 12891 ばならない。そうでないと、相手の人
 12893 すによくあうように、氣をつけて話さな
 12895 らない。ごく簡単な「ありがとう」とい
 12897 たまかわってくるであろう。食事のたび
 12899 があらわれるはずである。そうでなかっ
 12899 はずである。そうでなかったら、ただ口
 128912 分の生活を軽蔑しに、相手の人をいや
 12901 ことにもなるからである。どんなたつと
 12903 て、おうむのようにならえていたのでは
 12903 にならえていたのでは、そのことばは、
 12904 ないからねんぶつである。話すことばは
 129010 の中に、さまざまな氣持をこめてい
 12917 しかつたさまざまなことばが、こまかに、
 12918 なことばが、こまかに、この文の中にた
 129110 。秋子も同じように、「略」と書いた
 129112 た。太郎と同じ文であるが、その中にた
 12927 太郎や秋子と同じではなからう。それは
 12927 生活や経験が同じではないためである。み
 12928 が同じではないためである。みんなが「遠
 129210 、やはりこのためである。しかし、た

12931 れにでも同じようにわかり、同じように
 12931 わかり、同じように通じる力をもってい
 12936 、ひとりがつてんでなく、読み手によく
 12937 によくわかるようにくふうすることがた
 12937 ることがたいせつである。文を書くとき
 12945 、「——このようにまとまると、だれで
 12946 れは文字のおかげである。ところがこれ
 12959 、「こんな短い文であるが、読み手によ
 12968 のことがさまざまに思いだされるでしょ
 12988 ました。このように、古い時代のこと
 129811 見してからのことでありました。石器と
 12100 うもごくかんたんで、形もたいへんよく
 12101 のすやきの土人形で、高さは一メートル
 12101 男や女のいろいろなすがたをあらわして
 12102 氣持がよくわかるではありませんか。は
 12102 の美しい、りっぱなほとけさまは、いま
 12102 えに作られたものであります。夢殿の観
 12103 ちがいます。四角なあながあいていたり
 12103 ーズパズルのようにならんだ文字があっ
 12103 らはどれほど便利になったか、考えるこ
 12104 がついていくからだといわれていますが
 12105 安時代の町の風景で、大和絵でやわらか
 12105 大和絵でやわらかにかきあらわされてい
 12106 うさぎはけんめいにこらえましたが、た
 12107 動物絵巻の一場面でありました。平安時代
 12108 をほったのは運慶だといわれています。
 12108 とも鎌倉時代の作で、ほりものとして代
 12108 ものとして代表的なものです。能面
 12108 、生きもののようには、いろいろな表情を
 12108 ように、いろいろな表情をあらわします
 12109 ら、こんなりっぱな本ができました。日
 12110 の心が傳わることで、日本はこのよう

- 十二110 2 、日本はこのような心を取り入れて、ど
十二110 6 ていますが、そうではありません。江戸
十二111 3 れた工藝品の一つで、古くから外國人に
十二111 8 の人のかいたもので、浮世絵といひます
十二111 9 の浮世絵は、版画で、絵をかく人と、そ
十二112 1 る人との共同作品なのです。三人がひと
十二112 2 このとおりりっぱなものとなつて生まれ
十二113 4 しとげられるものではありません。汽
十二113 6 んとかわいい汽車ではありませんか。こ
十二113 7 れは、汽車第一号で、明治五年九月十二
十二113 9 浜間を走つたものであります。汽車にか
十二114 2 ん小さくなるような氣がします。議事
十二114 6 まつて、いろいろなことを相談します。
十二114 6 相談します。平和な國日本を作るために
十二115 3 ました。このような歩みをたどつてきた
十二114 7 をこらしてしづかにしている、子どもた
十二114 8 たちのむれのように。その、まだ目にも
十二116 4 にとびかい、歌うだらう。すみれ、たん
十二116 11 ああ、そのさかな春のきざしは、よも
十二117 1 えぬかすみのようにたなびいている、の
十二117 1 いている、のどかな午前。どこもしれ
十二117 2 の、遠い、はるかな空のおくで、囁いて
十二117 4 して、ゆめのように、眞理のように、白
十二117 4 うに、眞理のように、白雲をかたにま
十二117 6 のこういうのどかなとき、こういし
十二117 7 、こういしかな午前にあつて考える
十二118 6 ことは、たいせつなことがらである。知
十二118 6 いせつなことがらである。知識には、浅
十二119 2 らの關係を明らかにして、きまつた法則
十二119 5 する土台にするのである。たとえば、花
十二119 7 べにつかないようなくふうと、いま一つ
十二119 7 つ、よくつくようなくふうをして、その
十三9 9 ことを、知るようなものである。知識が
十三9 9 、知るようなものである。知識が開けず
十三9 12 うき星が出たからだといつたり、あるい
十三10 9 、ある人は、幸福なくらしをし、ある人
十三10 10 は、たいへん不幸になつてゐる。漢字で
十三11 2 れない。このように、道理にあわないこ
十三11 4 は他のこの原因であると、信ずるので
十三11 5 あると、信ずるのである。原因・結果の
十三11 6 結果の關係の簡單なものは、普通の知識
十三11 9 、学者がいろいろに考えて、原因と結果
十三11 11 いこと、まっすぐなことや曲がつたこと
十三12 2 よらず、いたずらに理由のないことを信
十三12 5 去つてしまふようになれば、日本の國は
十三12 5 まだまだ進むことであらう。ガリレオ
十三12 10 ます。地面は平らなもので、日や月が、
十三12 10 地面は平らなもので、日や月が、東から
十三12 11 まわつてゐるように思われます。こうい
十三13 1 す。こういううぶな考えかたがもとな
十三13 6 かたづかないようなことが、目について
十三13 6 きたのです。熱心な学者が、だんだんそ
十三13 8 ・木星などのような星は、太陽のまわり
十三13 10 るい形をしたもので、火星などと同じよ
十三13 10 星などと同じように、太陽のまわりをま
十三13 11 っている星の一つだ、ということもわか
十三14 3 くして、ドイツ人でケプラーという人が
十三14 4 、すぐれた数学者で、また熱心な天文学
十三14 4 学者で、また熱心な天文学者でした。い
十三14 6 く道は、だえん形であつて、太陽はいつ
十三14 7 の焦点にゐるものだ、ということを見
十三14 9 ころからいろいろな発見や發明をしまし
十三14 11 し、数学でこまかに計算した結果、コペ
十三14 12 り、天は動くものではない、地球が動く
十三14 12 い、地球が動くのだということを、明ら
十三15 1 うことを、明らかにしました。地は動く
十三15 1 ても、それは一種ではありません。自轉
十三16 3 分の説はあやまりであつたということに
十三17 4 は、鉾山があるのでもなく、いい港があ
十三17 4 、いい港があるのでなく、わが九州
十三17 5 、小さな、しづかな國であります。美し
十三17 5 さな、しづかな國であります。美しいお
十三17 7 センの生まれた國であります。世界の樂
十三18 4 とも大きな問題であります。戦いは
十三18 6 敗れても、精神的に敗れない國民こそ、
十三18 10 げて、さかえるのであります。このとき
十三19 6 戦い、これを豊かな土地にしようとする
十三19 7 いっぺんの空想家ではありません。かれ
十三19 8 。かれは、科学者であり、理想を実現す
十三19 10 物のできない土地であります。これをこ
十三19 11 、ダルガスのゆめであります。このゆめ
十三20 1 ん。その第一は水で、その第二は木であ
十三20 1 で、その第二は木でありました。ユート
十三20 3 、切りとるばかりで手入れをおこたつた
十三20 11 エー産のもみ木でありました。これな
十三20 11 ありました。これなら、ユートランドの
十三20 12 のあれ地にも育つだろうと思つて、實際
十三21 6 〈略〉と、熱心に研究を続けました。
十三21 8 うか、ということでありました。これを
十三21 12 。ダルガスの希望であり、デンマルクの
十三21 12 デンマルクの希望であるこの植林は、み
十三22 1 の植林は、みごとに実現されました。そ
十三22 7 たされなかつたのであります。デンマル
十三23 10 て、発見されたのであります。このおか
十三23 11 林が見られるようになりました。ダルガ
十三24 9 ロッパ産の農作物で、できないものはな

十三24 した。そればかりでなく、しげった林は
 十三26 をとり返し、誠実な研究と、がまん強い
 十三26 強い実行と、熱誠な共力によって、あれ
 十三26 いに、今日のような平和國家をうち建て
 十三26 、あみの目のように通じている。ホート
 十三26 のは、小路のことである。どこの家も、
 十三27 のトンネルのようになって、どこまでも
 十三27 ところもないような、このホートンでは
 十三27 な、このホートンではあるが、ここに住
 十三27 、楽しい遊び場所であり、なつかしい思
 十三27 しい思い出の天地である。冬は冬で、風
 十三27 地である。冬は冬で、風あたりの少いホ
 十三27 を楽しみ、夏は夏で、ひんやりとした土
 十三28 を持つて遊ぶわけではない。そのへんを
 十三28 おだんごのようなものをこしらえたり
 十三28 ってくる、いろいろなものに、耳をかた
 十三28 けたりしているのである。もの音には、
 十三28 音には、いろいろなものがある。まず、
 十三28 きな毛ぬきのようなものを持ち、かた手
 十三29 、あとをひくようなひびきがある。その
 十三29 でんだいこのような、ブリキのつづみを
 十三29 ン」と、かるやかな、はずむような音を
 十三29 かな、はずむような音をたてる。どこか
 十三29 げられ、にぎやかな話が続く。いかけ屋
 十三29 これも、いろいろな道具を入れた荷をか
 十三30 おもちゃ屋さんだ。」「略」と、そ
 十三30 は、あめ屋さんだ。」と、それぞれ子
 十三30 のは、さるまわしである。「ジャン、ジ
 十三31 のひらで、きゆうにどらをおさえるので
 十三31 ヤッ」というように聞える。これを聞き
 十三31 、さるがさまざまな藝をする。三國志と
 十三31 たりをやるつもりなのだが、さるは、と

十三31 をやるつもりなのだが、さるは、とちゅ
 十三31 んじゅう屋がそうだ。朝早く、大きな声
 十三32 めの中の声のように思われる。春は、な
 十三32 とも大まけだ。」と歌う。秋には、
 十三32 たとえ、鳴りものであると、呼び声で
 十三32 あろうと、呼び声であらうと、トンネル
 十三32 、トンネルのようなホートンには、それ
 十三32 、それが、ふしぎなほどよくひびきた
 十三32 わたる。このように、いろいろなものの音
 十三32 ように、いろいろなものの音がひびくが、
 十三32 を運ぶ一輪車の音であらう。水に不便な
 十三33 あらう。水に不便なベキンでは、一けん
 十三33 ホートンはまっ暗なので、はなをつま
 十三33 もわからないほどである。それだけに、
 十三33 いれば、出ていたで美しく、星の夜であ
 十三33 り美しく、星の夜であれば、またさらに
 十三33 んきんだまのような星がばらまかれて、
 十三34 文句や、詩の一節であるが、みな、りっ
 十三34 が、みな、りっぱな文字で書かれてある
 十三34 しいかざりのような氣持で、れんをなが
 十三34 きくなって、文字であることがわかり、
 十三35 いわれのないことではない。正月には、
 十三35 とびらに、まっかな紙の春れんがはりつ
 十三35 は、そのあざやかな色どりに、正月氣分
 十三35 びつけてとぼすのであるが、とぶと、風
 十三35 れこそ天上の音楽である。中庭のあなず
 十三36 るのも、このころである。やなぎのわた
 十三36 取りに行ったんじゃないでしょうか。
 十三36 てくだらないじゃないですか。え、
 十三38 ど、三年のときだったか、遠足で行き
 十三38 ながら、楽しそうなうす。え、おと
 十三39 はい。たいへんだったでしょうね……

十三39 ておっしゃるんだもの……行ってもい
 十三40 う、うちに來たんだって……うん、うん
 十三40 、そう……そうだってね。四十日の旅
 十三40 ね。四十日の旅じゃつかれたらう……
 十三40 旅じゃつかれたらう……うん、読ん
 十三41 いてあったもんだから……そう……う
 十三41 まりしているんだよ。ぼくの学用品を
 十三41 たくというもんだ。それに、うちはや
 十三41 二つある。そうだ。おばさんがね、こ
 十三41 らって、) いいじゃないか。帰ったば
 十三41 帰ったばかりだから、お客さんさ……
 十三41 れで今晩來るんだらう。六時ごろ……
 十三42 。見せたいものだって……なにを……
 十三42 もが。しんせつだね……え、ぼくに……
 十三42 つかくの記念品だから、とっておいた
 十三42 う、二つあるのならもらうよ……うん
 十三42 へえ……そんなにしんせつだったの。
 十三42 んなにしんせつだったの。手紙がだ
 十三42 紙がだせるようになったら、いっしょ
 十三42 きょうはとまるだらう……うん、樂し
 十三43 とばを味わうように、) 生きて帰って來
 十三43 ん、おかあさんなの……(と、うら手
 十三43 が帰って來たんだってね。よかったね
 十三43 終るころ、しずかにまく。この「子ど
 十三43 は、これはしほいではないかというと、
 十三44 かというと、そうではなく、これでも、
 十三44 「……」を時間的に短くしたり長くした
 十三44 うすがわかるように、くふうします。見
 十三44 かを向けないように、顔の表情がよく見
 十三44 ことも、たいせつなことです。六、そ
 十三46 あ、ヨットのようだ。チューリップ

十三4710 手で来る。はるかな谷川を聞いているそ
 十三484 ランプが、きゆうに暗くなりました。
 十三494 たしたちのゆかいなじょうだんでわらい
 十三502 のかげで、きれいな鳥がわらっている。
 十三503 いる。さあ、元気でゆかいに、手をつな
 十三503 あ、元気でゆかいに、手をつなぎまし
 十三507 をかきのけるだけだ。でも、水がすむま
 十三509 すぐ帰って来るんだから、きみも来たま
 十三512 そばに立って来るんだが、まだあかんぼう
 十三513 、まだあかんぼうで、母うしがしたでな
 十三513 ると、よろけるんだよ。すぐ帰って来る
 十三515 すぐ帰って来るんだから、きみも来たま
 十三519 さないころにそうだった。おとなになっ
 十三521 てる、いまもそうだ。やがて老いても、
 十三522 いても、そのように。そうでなければ、
 十三523 そのように。そうでなければ、死んでい
 十三524 な子はおとなの父だ。それで、わたしは
 十三528 すばれていくように。七 ある画像
 十三541(手) 家のかいたもので、『いすによるマド
 十三543 ちゃんかキリストで、そのおかあさんが
 十三544 かあさんがマリアだということは、すぐ
 十三545 その絵がだいすきになりました。その氣
 十三548 じさんは、絵かきではありませんが、絵
 十三548 せんが、絵がすきで、それに、わかいこ
 十三5410 らんになつてゐるだろうと、思ったから
 十三554(会) ますと、「それなら、もうすこし大き
 十三561 、たいへんいい絵だなと思いました、
 十三564(会) 月と太陽みたいにちがうといつてもい
 十三566(会) 略。」「そんなにちがうのですか、お
 十三569(会) いへんじょうずであった。が、そのこ
 十三574(会) かくことが得意だった。その『いすに
 十三575(会) という小さな絵だが、じつによくかけ

十三577 目の前に見るようなうすをなさいまし
 十三586(会) おじさんみたいに、旅行して来なくち
 十三588(会) 。」「まあ、そうだね。それはそうとし
 十三592(会) 美術館にある絵で、『シストのマドン
 十三597(会) だのおかあさんではなくて、キリスト
 十三598(会) よく出ているんじゃないでしょうか。
 十三599(会) した、おごそかな感じがするね。この
 十三5910(会) ん大きなりっぱな絵だよ。わたしが行
 十三5910(会) きなりっぱな絵だよ。わたしが行った
 十三6012(会) じょう画の一部だ。くらべてみて、う
 十三612(会) けんさは、どうだろう。でも、ラファ
 十三613(会) の人にもわかるだろうね。なんととい
 十三614(会) 家になり、自由にふでをふるって、り
 十三615(会) るって、りっぱな作品をたくさんこのこ
 十三617(会) 勉強を続けるんだね。きつと先生も、
 十三619(会) てくださったんだらう。」「もうろく
 十四42 界の名高い文学者で、その名のわが國に
 十四44 こしちがった特別なひびきをもつて、私
 十四47 とうとい光のためなのです。フィリップ
 十四48 もの、ふしあわせなものの中に、かえつ
 十四51 の中には、たしかに、私たちを心のそこ
 十四58 イリップのすなおな心は、まずしさのた
 十四63 までせまってくるではありませんか。
 十四73(手) 、自分はたしかにひとりぼっちではな
 十四74(手) にひとりぼっちではないのだと、お考
 十四74(手) ちではないのだと、お考えになって
 十四83(手) もないたいせつなことばです。が、お
 十四85(手) よりふかいものなんですから。私には
 十四94(手) 愛しているからだ、こうお考えにな
 十四912(手) 思って、安らかに生きていてくださる
 十四912(手) いてくださるのだと、思いたいのです
 十四103(手) ぎへかけるようにしたほうがいいのか

十四109(手) いたってべんりにできています。では
 十四111(手) ゆうでこわれるだろうということとし
 十四123(手) なしでもりっぱに役にたちます。かさ
 十四124(手) らかくするためなのです。これは、私
 十四125(手) は、私の友だちで、母親が十年このか
 十四127(手) えてくれたことなのです。その友だち
 十四131(手) なめもりのようなものがついていて、
 十四134(手) れをのせるためなのです。おかあさん
 十四141(手) えなくまめやかな、このうえもなく純
 十四142(手) うえもなく純真な思い出がのこつてい
 十四144(手) とうに生き写しで、生きておいでにな
 十四1410(手) てはいないのだ、もうすこしすれば
 十四1410(手) をくらせるのだ、自分としては、力
 十四1411(手) あさんを幸福にしておあげしよう。
 十四153(手) てくださるようにとのつています。
 十四156(手) ばんとうとい宝なのです。おとうさん
 十四158(手) あさんのおすきなようになさってくだ
 十四158(手) のおすきなようになさってください。
 十四1610(手) ているとお考えではないかと心配して
 十四171(手) んか。おひとりですさびしすぎるとは、
 十四173(手) せんか。どんなにしていらつしやいま
 十四174(手) 目に見えるような氣がします。どの時
 十四183 、思いだしたように、「略。」「といつた
 十四184(会) は、もとは英語だってね。ゆうべ、に
 十四188(会) カーテンも英語じゃないかしら。」と
 十四1910(会) 「それではなんだろう。」「(略)。」そ
 十四207 して、つぎのようなことばはその一例だ
 十四207 ことばはその一例だとおっしゃってこく
 十四2112 くばんがいっぱいになってしまった。」「へ
 十四224(会) みんな、日本語だとばかり思っていま
 十四226 、さもふしぎそうにいうと、先生は、「へ
 十四229(会) たと考えていいだろう。」「とおっしゃ

十四22 11 ボチャも、外國語であつたとお話しにな
十四23 2 会 この國のことばだつたのだから。」と
十四23 3 会 ことばだつたのだから。」とおっしゃ
十四23 7 会 ばは、英語だけではなく、ほかの國か
十四24 1 会 はカンボジア語だといわれている。そ
十四24 2 会 は、みんな英語だ。」先生のお話を聞
十四24 4 、どうしてこんなにたくさんのことばが
十四24 4 とばが、いろいろな國からはいってきて
十四24 5 日本語になつたのだからと、ふしぎに
十四24 6 ろうかと、ふしぎになつてきた。それで
十四24 7 会 うして、そんなにたくさん外國のこ
十四24 12 にはいつてきたので、たとえば、ラジオ
十四25 3 話から、さまざまなが心にうかんで
十四25 5 あたりまえのことだが、なかなかおもし
十四25 7 しく生まれるものであることが、考えら
十四25 9 話が、つくれそうな氣がしてきた。それ
十四25 11 は、品物からだけではなく、外國の学問
十四26 6 れ傳つたことばであろう。また、音楽
十四26 10 わつてきたことばであろう。また、図画
十四27 1 に傳つてきたのだということが想像さ
十四27 3 がはいつてきたのだからと思つた。そ
十四27 6 会 からきたことばだ。それが、あまり古
十四27 8 会 の日本語のように思われてきたのだ。
十四27 8 会 思われてきたのだ。」とおっしゃった。
十四28 6 会 そうよくわかるだろう。」私は、なに
十四28 7 しみをもつたような氣持になつて、家に
十四29 3 てあるもののように聞えるかもしれませ
十四29 4 してそういうものではないですね。だれ
十四29 5 こからでも、自由に見られるものなので
十四29 5 由に見られるものなのです。それは、空
十四29 9 本は景色のよい國で、花がたえずさいて
十四29 10 とはしなかつたのだからという人もあり

十四30 3 がほんとうのことだとしても、自分の身
十四30 3 ても、自分の身近なものしか見ないで、
十四30 6 たのは、ざんねんなことだと思ひます。
十四30 6 、ざんねんなことだと思ひます。小さな
十四30 8 氣持までちっぽけなものになつてしまつ
十四31 1 本だけが特別の國でもあるかのように
十四31 1 でもあるかのように考へて、世界全体を
十四31 1 そういつちっぽけな考へでは、とても世
十四31 4 本にとつてだいいじな考へがたです。あな
十四31 7 がえるほどりつぱな國になつていくので
十四31 12 たに星を見るようにすめました。中
十四32 1 がたと、あまりにかけはなれてゐるた
十四32 3 。航海術がさかんになつたのです。宗教
十四32 7 いてもいいすぎではありません。みな
十四32 11 くさんの星のむねなのです。それでは、
十四33 9 と、なかなかそうではありません。あの
十四33 12 はてしのないものはありません。博士
十四34 5 かるほどの廣さなのです。この廣大な
十四34 9 のです。この廣大なうちうにくらべて
十四34 10 ら見たら、たしかに、人間は、バクテリ
十四35 2 を計算したりするではありませんか。こ
十四35 6 けないくらい廣大で、すばらしいものだ
十四35 7 、すばらしいものだといふことができる
十四35 8 んといふおごそかなすがたでしょう。じ
十四35 11 ひきこまれるような氣がします。まこと
十四35 12 ました。さまざまな術を發達せました
十四36 6 は、まづしい学生であつたとき、物理の
十四36 8 けません。ひくつになつてはいけません
十四37 4 ないことは、なんであるかといふことも
十四37 7 やくしやするやうなことがあつたら、ど
十四37 8 の足音、しずかな夜明け。」四の人「暗
十四38 10 会 なんとさわやかな夜明けだろう。」二

十四39 8 会 わやかな夜明けだろう。」二の人は
十四39 9 会 して、「光、光だ。」四の人「光だ。」
十四39 10 会 、「四の人」光だ。」三の人「希望の光
十四40 2 会 四の人」きれいな、きれいな雲ではな
十四40 2 会 れいな、きれいな雲ではないか。」二
十四40 2 会 な、きれいな雲ではないか。」二の
十四40 5 会 の人「おほらかな朝。」みんな「おごそ
十四40 6 会 んな」おごそかな朝。」一の人「日本の
十四40 8 会 わたしたちの朝だ。」三の人「新しい世
十四42 9 会 こようと、平氣じゃないか。どんな暗
十四43 3 会 もて、ほがらかな調子で。日々の苦勞
十四43 8 会 こようと、平氣じゃないか。どんなさ
十四43 10 会 て、それが元氣にしてくる。他人の
十四44 3 会 、なんでこんなにほがらかでいられる
十四44 3 会 んなにほがらかでいられるのか、それ
十四44 4 会 う話してやるのだ。くちびるに歌をも
十四45 6 会 なにをしてゐるのだから。かれは、氣が
十四45 7 。かれは、氣が氣ではありませんでした
十四45 9 れてしまつたように、死のしづけさがあ
十四45 12 がけなく、きれいな歌が流れてきました
十四46 5 た。それは女の声で、しかも、調子もみ
十四46 5 もちがわなような歌いでした。マッ
十四47 1 よみがえつたやうな氣持になりました。
十四47 4 、自分と同じやうに、船からなげだされ
十四47 11 んといふほがらかな人だろう。自分なん
十四47 11 いうほがらかな人だろう。自分なん
十四48 1 会 だけでせいぜいなのに、こんな暗い夜
十四48 2 会 い声がだせるものだと思います。そう
十四48 3 会 せ助からないものなら、こういう美しい
十四48 4 会 んでいきたいものだと思います。かれ
十四48 11 かぶつても、平氣で歌を續けていました
十四48 12 会 をおとさないやうに、寒さに氣を失つて

十四 49 1 をはなさないように、こうして元氣をつ
十四 50 1 よいで行ったように、やがて、一そうの
十四 50 7 の話で、あきらかになったのですが、お
十四 50 10 ひびいてくるように感じられるではあり
十四 50 10 ように感じられるではありませんか。
十四 51 7 ら、おもしろいだろうと思います。」
十四 52 10 キロもあるような大きなぼちゃでも
十四 52 11 れは、花の一部であるめしべの根もと
十四 53 1 私たち花ののだということはうたが
十四 53 4 いへんじょうずに自分のことを主張な
十四 54 2 がたが、かつてに花をさかせたからで
十四 54 3 、全部私のものだと思います。「略
十四 54 9 みなさんのように、明かるい地の上で
十四 54 11 は、暗いところで、土もかたいし、石
十四 55 3 のは、たいへんなほねおります。だか
十四 55 5 やは、私のものだと思います。」「略
十四 55 9 のつるは、しずかにいました。「略
十四 55 11 「私は、こんなに長いばかりで、花さ
十四 55 11 なに長いばかりで、花さんや、葉さん
十四 56 1 、根さんのような、特別なはたらきは
十四 56 1 のような、特別なはたらきは、なに
十四 56 5 ったら、りっぱなぼちゃの実にはな
十四 56 7 ところがおすきなようですが、そこへ
十四 56 11 、手を。こんなに大きなきずができて
十四 57 1 がきれないようにしてあげたのです。
十四 57 2 、全部私のものだと思います。」「つる
十四 57 5 水、土、はちたちだということがわかり
十四 57 7 ずいぶんかつてなことをいっていまし
十四 57 12 と光とをゆたかに送ってやったからで
十四 58 2 るのは、葉さんではなくて、私ですよ
十四 58 6 ちばんたいせつなものは、私たち水で
十四 59 4 、いちばんじみなものです。しかし、

十四 59 9 すると、いたずらなはちがいました。
十四 59 10 なたが、どんなに美しくさいたって、
十四 60 2 んなぼくのものだといつてもいいので
十四 60 5 かい、身がつてなことはいいませんよ
十四 61 1 まいてくれたのだった。もし、あの
十四 61 5 ものとも、簡単にはいえませんね。公
十四 61 6 ませんね。公平にいて、みんなのも
十四 62 4 す。ただそれだけでは、なんのおもしろ
十四 62 8 究することのすきな人には、なかなかお
十四 63 2 むらがっているの、ちょうど雲やきり
十四 63 3 やきりと同じようなものです。この茶わ
十四 63 7 中に、にじのような、赤や青の色がつい
十四 63 9 るのと、にたようなものです。この色に
十四 63 12 、まったくとう明なガス体の蒸気が、し
十四 64 2 こつてくつつかの、もし、そういうし
十四 64 6 まかいちりのようなものです。空気に
十四 64 8 った、ちりのようなものばかりがのこつ
十四 64 10 廣がっているように見えるそうです。茶
十四 64 12 。しめきつたへやで、人の動きまわらな
十四 65 1 きまわらないときだと、ことによくわか
十四 65 3 どんどんとさかんにたちのぼります。反
十四 65 4 計る寒暖計があるなら、いろいろ自分
十四 65 7 んとうは、わかるだろうと思います。つ
十四 65 12 までは、まっすぐにありますが、それ
十四 66 5 湯げなどのばあいだと、もう、茶わんの
十四 66 10 れとよくにたうずで、もっと大きなのが
十四 67 7 どたつまきのようなものになって、地面
十四 67 8 になり、たいへん早さで回転するのを
十四 67 10 おこるうずのようなもので、もっと大じ
十四 67 10 うずのようなもので、もっと大じけな
十四 67 11 、もっと大じけなものがあります。そ
十四 68 1 光のために、特別にあためられると、

十四 68 10 ういう、いろいろなかわったことがおこ
十四 69 1 、いまいったようなばあいばかりでなく
十四 69 2 うなばあいばかりでなく、だいぶようす
十四 69 4 ちよつと見ただけでは、まったく関係の
十四 69 4 く関係のないようなことがらが、原理の
十四 69 5 いによくにたものであるという一つの例
十四 69 12 そこには、みようなゆらゆらした光った
十四 70 1 暗い線が、不規則なもののようになっ
十四 70 1 則なもののようになつて、ゆるやかに
十四 70 2 なつて、ゆるやかに動いているのに氣が
十四 70 5 とよく、あざやかに見えます。夕ごはん
十四 70 10 、熱がにげるためだと思つていいのです
十四 71 4 い、そういうふうなじゅんかんがおこり
十四 71 6 流れと、同じようなものになるわけす
十四 71 11 かがどこも同じではないので、ところ
十四 71 11 ところどころ特別につめたいむらができ
十四 72 6 ろとが、いろいろに入りみだれてできて
十四 72 8 その光が同じようにならず、むらになつ
十四 72 9 さきにいったようなものが見えるので
十四 73 4 をおり曲げるためなのです。つぎには、
十四 73 8 いた、きりのようなものがひと皮かぶさ
十四 73 9 うどさけめのようにたて横にやぶれて、
十四 73 9 そこだけがとう明に見えます。このふし
十四 73 10 ます。このふしぎなものがなんである
十四 73 10 ぎなものがなんであるかということとは
十四 74 4 のときだけの問題ではなく、たとえば、
十四 74 8 こるかというようなことにも関係してき
十四 75 5 とのさかいのようなところだと、畑の
十四 76 1 くなると、きんになるのです。これと
十四 76 2 。これと同じような氣流のじゅんかんが
十四 76 4 よばれているもので、晝間は海から陸へ
十四 76 6 。これと同じようなことが、山腹と谷と

十四 76 9 風(モンスーン)で、われわれが冬期に
 十四 77 6 ました。この簡単なことわざは、木を割
 十四 78 3 なって、まっすぐに割ることができな
 十四 78 6 もとまで、きれいにまっすぐに割ること
 十四 78 7 きれいにまっすぐに割ることができまし
 十四 79 2 たいて、みごとに割っていました。木
 十四 79 4 こむと、まっすぐに割れて、けっしてそ
 十四 79 8 ずむほうがもとだよ。」と教えてくれ
 十四 79 10 うら」という簡単なことを、知っている
 十四 79 12 九九と、にたようなものだと思います
 十四 79 12 、にたようなものだと思います。いっ
 十四 80 3 ごにと傳えたことではないかと思ひます
 十四 80 4 祖先が発見したのではなく、よその民族
 十四 80 7 うとう一つの眞理だと思われたので、そ
 十四 80 7 理だと思われたので、そのことをほかの
 十四 80 8 うちに、あのような、短くて調子のいい
 十四 83 2 「雪國」というのであり、もう一つは「
 十四 83 3 は「雪」というのであった。「雪國」は、
 十四 83 5 、映画にしたものである。雪が降りだし
 十四 83 8 それをうれしそうに見ている雪國の子ど
 十四 83 8 どもなど、時間的に、じゅんじよをおっ
 十四 83 9 りあつかったものである。「雪」という
 十四 83 10 景色を写したのではなく、雪の一ひら
 十四 84 1 映画にしたものである。ただ一ひらの
 十四 84 1 。ただ一ひらの雪ではあるが、よく見る
 十四 84 2 、まことにきれいな形をしていること、
 十四 84 7 あいに、どのようなけっしよになるか
 十四 84 9 度など、さまざまな條件によつて、雪の
 十四 84 11 、よくわかるようにしくんだものであつ
 十四 84 11 うにしくんだものであつた。空から降つ
 十四 85 1 どこで、どのようにしてできたか、どん
 十四 85 3 ができるというのである。「略。」こん

十四 85 6 によつて、はるかに高い天空のようすが
 十四 85 7 とすれば、たしかに空からの手紙にちが
 十四 85 8 うまくいったものだ。このように、二つ
 十四 85 9 ものだ。このように、二つの映画は、ど
 十四 85 10 にえんのあるものであるが、私はあとの
 十四 85 10 かれた。ふんだんに降ってくる雪の中か
 十四 86 1 、それをいろいろな角度からながめてみ
 十四 86 2 しにはできるものではない。野原の中で
 十四 86 3 、それをたんねんに写生するのも、一び
 十四 86 4 のも、ごくささいな感情をひろいあげて
 十四 86 5 、同じ心の現われであらう。「雪國」の
 十四 86 8 が発見されるように思われる。たとえば
 十四 86 8 きなどもその一つである。風にあおられ
 十四 86 11 は、たやすいことではあるまいが、ぼん
 十四 87 3 ることができそうである。ふぶきのやん
 十四 88 2 がめると、一直線ではなく、くねくねと
 十四 88 2 そらく、まっすぐに歩こうと思つたので
 十四 88 3 歩こうと思つたのであらうが、いつのま
 十四 88 4 。どうしてこんなに曲がるのか。風にふ
 十四 88 4 風にふかれたからであらうか。足がつめ
 十四 88 5 立ちどまったためであらうか。それとも
 十四 88 6 向がちがったものであらうか。雪國でい
 十四 88 8 さきの雪だけごろである。半年も雪にと
 十四 88 11 ろく編集できないだらうか。同じ題の作
 十四 89 6 文章は、どのような文章でも、読む人の
 十四 89 8 される。どのような文章でも、読む人の
 十四 89 9 よつて書かれた文である。十 マッチ
 十四 89 10 と暗い、寒い夜だろう。」と、小さな
 十四 90 4 つは、母親のものであつたので、この子に
 十四 90 8 ごにはもつてこいだと思つたのであらう
 十四 91 7 こいだと思つたのであらう。そこで、そ
 十四 91 12 かった。自分の足だか、ひとの足だか、

十四 91 12 足だか、ひとの足だか、わからないくら
 十四 92 1 わからなくらいだった。寒さがしみこ
 十四 92 3 。おみそかの晩だというのに、その子
 十四 92 11 いた。かわいそうに、その子は、おなか
 十四 93 1 。その子のきれいなかみの毛は、両かた
 十四 93 2 は、そのかなしげな、小さな顔のまわり
 十四 93 2 花かんむりのようにくまどつた。けれど
 十四 93 5 るそろとかなしげに通つて行きながら、
 十四 93 6 考えたことはそれであつた。女の子は、
 十四 93 8 見た。おいしそうなにおいをかいだ。「へ
 十四 93 8 見た。おいしそうなにおいをかいだ。「へ
 十四 93 10 けでも、満足したであらう。女の子は、
 十四 94 1 女の子は、どんなにか、それで火をとも
 十四 94 2 てみたかつたことだらう。女の子は、二
 十四 94 7 を――そのあわれな、小さな、赤く、青
 十四 94 9 た。けれどもだめであつた。両手もまた
 十四 94 12 もすことができたならば、どんなによか
 十四 94 12 たならば、どんなによからうか。女の子
 十四 95 2 いううれしきことだらう。明かい、赤
 十四 95 6 きなほのおのように思われた。これは、
 十四 95 6 は、ま法のマッチだらうかとさえ思つた
 十四 95 8 った。そればかりではない。それがもえ
 十四 95 8 喜びむかえるようにおどりあがつた。女
 十四 96 1 たく、いん氣そうにすわつていた。女の
 十四 96 5 なんとというふしぎなことだらう。その火
 十四 96 8 いうふしぎなことだらう。その火の光の
 十四 96 9 かべがきぬのようにうすくなつて、その
 十四 96 9 できた。雪のようにまっ白なぬのをかけ
 十四 96 12 雪のようにまっ白なぬのをかけ、ぴかぴ
 十四 97 4 ととき、まあ、どうだろう。そのやいた鳥
 十四 97 7 ずっとよつてくるではないか。ああ、そ
 十四 97 12 いかにも大きな木で、それが美しくかざ

十四 98 11 、大空の星のようにかがやくのを見た。
 十四 98 11 のを見た。たしかにそれは星であった。
 十四 98 11 たしかにそれは星であった。「へ略」女
 十四 98 12 女 はいったいなんだらうか。」女の子は
 十四 99 1 女の子はねむそうにつぶやいた。じつと
 十四 99 4 女の子は思
 十四 99 5 ところへ行くのだ。」と、女の子は思
 十四 99 5 ひとりのしんせつな人であったおばあさ
 十四 99 5 りのしんせつな人であったおばあさんが
 十四 99 7 へのぼっていくのだと、話してきかせた
 十四 100 2 は、いつものように、やさしく、しんせ
 十四 100 2 さしく、しんせつなようすをしていた。
 十四 100 3 はもっと楽しそうなようすをしていた。
 十四 100 3 つしよけんめいにたのんだ。マッチは
 十四 100 10 ツチは、はなやかにえあがった。まっ
 十四 100 12 と思われるくらいであった。おばあさん
 十四 101 1 あさんが、こんなにせいが高く、りっぱ
 十四 101 2 いが高く、りっぱで、美しく、そうして
 十四 101 3 うして、しんせつに見えたことは、いま
 十四 101 4 までなかったことであった。おばあさん
 十四 101 9 った。うれしそうに、楽しそうに、上の
 十四 101 9 そうに、楽しそうに、上の方へ、地面か
 十四 102 1 ばへ行くかのようにのぼって行った。小
 十四 102 4 女、「かわいそうな子だ。あの子は寒さ
 十四 102 4 女、かわいそうな子だ。あの子は寒さ
 十四 102 4 女、かわいそうな子だ。あの子は寒さ
 十四 102 4 女、かわいそうな子だ。あの子は寒さ
 十四 102 5 。けれども、そうではなかった。人々は
 十四 102 6 の晩に見たふしぎなまぼろしを知らない
 十四 102 6 ろしを知らないのだ。人々は、その子が
 十四 102 7 、その子がどんなに幸福に、神さまの樂
 十四 102 7 子がどんなに幸福に、神さまの樂
 十四 102 8 子か知らないのだ。
 十五 7 2 文 うれしはずかにおのおの大きな耳

十五 9 1 文 水はしずかに流ると見ればもの
 十五 19 4 がめると、まっ白に雪をいたたく山々が
 十五 20 6 、ひとり男の子で八つ、ひとり女
 十五 20 6 、ひとりは女の子で四つになるかわい
 十五 21 1 づらしく、ゆかいな楽しいものでした。
 十五 21 2 雲のわきたつように、すべり出るまっ白
 十五 21 3 すべり出るまっ白なひつじのむれ、朝風
 十五 21 4 その上に、まっ白な服をつけた少女の立
 十五 21 5 の立っているようなわいらしい山が、むら
 十五 21 6 下に、わらうようにそびえているのでし
 十五 21 7 は、いつものように散歩に出ました。ふ
 十五 21 12 を、おもしろそうに見ていました。女の
 十五 22 3 追いでもするように、とかく家庭教師の
 十五 22 4 はなれて行きそうにしてみました。その
 十五 22 8 がふき起つたような音がしました。なん
 十五 22 12 トルもあるような羽をひろげた大きな
 十五 23 3 上へひれふすように、思わずたおれてし
 十五 23 8 ばたばたしているではありませんか。さ
 十五 23 9 か。さあたひへんだ。どうしたらいいか
 十五 23 12 つしよけんめいにわしのせにしがみつ
 十五 24 1 をしめつけるようにしています。だれで
 十五 24 5 来ていますと、急に目の前へ、大きなわ
 十五 24 10 へ、まっさかさまに落ちこむのでした。
 十五 24 11 でした。さいわいにその勇ましい少年は
 十五 25 3 下へ落ちないように、その上帯をかたく
 十五 25 12 羽ばたきも苦しげに、しだいしだいに、
 十五 25 12 の方へ落ちるように舞いおりて行きまし
 十五 26 3 どもとまろうものなら、それこそたいへ
 十五 26 4 り落されないものでもない。一こも早
 十五 26 8 もいいから、安全な場所へおりなければ
 十五 26 10 行機乗りが、安全な着陸地を上からさが
 十五 26 11 さがしているような氣持で、少年は、と

十五 27 1 女 「だいじょうぶだ、安心しておいで、
 十五 27 10 ずん、落ちるうちに、下へ下へとおりて
 十五 27 12 点かなにかのようになんか見えなくなつて
 十五 28 2 荷をふり落とすように、ある岩角のすこし
 十五 28 12 ひっくり返すようにするいきおいで、ば
 十五 29 11 くる英ゆうのように、このただけしい
 十五 30 4 下羽が、綿のように一面にちりました。
 十五 30 6 風をまき起すようにして、少年の周囲を
 十五 30 9 を後にかばうようにして、すこしあとず
 十五 30 10 どそこに、手ごろなとがった岩のかけら
 十五 31 5 それからは、必死にとびかかる大わしと
 十五 31 11 白い羽が雪のようにとびちりました。そ
 十五 32 9 いままでむちゆうになつて少年目がけて
 十五 32 10 空中をころぶように、くるくる舞いをし
 十五 33 9 グフラウのまっ白な山までも、朝日の中
 十五 34 7 くのためにも必要な方法である。それで
 十五 34 7 めにも必要な方法である。それで大昔に
 十五 34 9 よつて、いろいろな考えを表わした。ま
 十五 36 2 なり、今日のようになつたといわれてい
 十五 36 4 、いまいったように、はじめ、事物の形
 十五 36 5 から発達したものであるが、形のないも
 十五 37 1 とかいう字の起りである。木は、もとも
 十五 37 2 つしてできたものであるが、それに線を
 十五 37 4 とかいう字はそれである。また、それま
 十五 37 11 千七百年ほどまえであるが、日本では、
 十五 37 12 カイ」というようにもとの中國の發音に
 十五 38 4 もした。このように、日本では一つの漢
 十五 39 4 を表わすのに便利なかたかなや、ひらが
 十五 39 5 なを作りだすようになった。かたかなは
 十五 39 6 として作ったもので、たとえば、「江」
 十五 39 7 「など」と書くようになった。ひらがなは
 十五 39 8 はかたかなのように漢字の一部分をとつ

十五 39 8 一部分をとったのではなく、たとえば、
 十五 39 9 「仁」というように、漢字の全体をくず
 十五 39 10 ら作りだしたものである。かなは、日本
 十五 39 11 とうに大きな発明で、このかなのおかげ
 十五 40 1 やすくしかも自由にうつすことができる
 十五 40 2 ことができるようになった。あの有名な
 十五 40 2 なった。あの有名な源氏物語や枕草子
 十五 40 3 った書かれた作品である。しかし、いま
 十五 40 5 に漢字をてきとうにまぜるのが、文章の
 十五 40 10 かわれている文字である。ローマ字は、
 十五 41 1 まえにいったように、その大もとをたず
 十五 41 2 文字から出たものである。このエジプト
 十五 41 5 った、現在のようになつた。ローマ
 十五 41 6 れるのもそのためである。ローマ字は、
 十五 41 7 、全部で二十六字である。この二十六字
 十五 41 11 なくてすむばかりでなく、発音のこまか
 十五 41 12 く、発音のこまかなところまで書き表わ
 十五 42 1 字は世界的な文字であるから、日本語が
 十五 42 2 に親しまれるようになるであろう。日
 十五 42 2 まれるようになるであろう。日本語の
 十五 42 7 のどこに、こんなに三種類も四種類もの
 十五 42 9 く、もつとも簡単に書き表わす方法がな
 十五 42 9 す方法がないものであろうか。私たちは
 十五 43 7 、「美しい赤色だな。あの、ニューヨ
 十五 44 2 回は今右衛門焼じゃありませんか。古
 十五 44 5 へ」と、じょうずな日本語で話しかけた
 十五 45 1 かけて、楽しそうに語りだした。話は明
 十五 45 7 たどっていくようになった。ハギンスの
 十五 45 10 、そのころのことであった。ある日、ブ
 十五 46 3 らしいものばかりであった。ある小さな
 十五 46 5 こともないみごとな焼物であったからで
 十五 46 5 ないみごとな焼物であったからである。

十五 46 5 焼物であったからである。「略」。「略
 十五 46 7 、「はい、さようでございます。」「略
 十五 46 9 ねだんのあまりに安いのおどろいた
 十五 47 2 まのかかるもので。」プリンクラーは、
 十五 47 3 は、まんぞくそうに赤絵のはちをながめ
 十五 47 7 ばかりまえのことである。佐賀はん主は
 十五 48 4 他にもれないように、保護されていた。
 十五 48 7 、むずかしいことであつた。今右衛門は
 十五 48 10 そのしごとと簡単にできあがるものでは
 十五 48 10 できあがるものではなく、白く焼ける
 十五 49 6 しかし、このような美術品を買い求める
 十五 49 7 を買い求めるようなものは、ほとんどい
 十五 49 9 った。ただわずかに外國人がこれに目を
 十五 49 12 だすことにしたのである。「略」。「これ
 十五 50 8 「よし、どんなにお金に困つても、ど
 十五 50 8 っても、どんなに苦しんでも、この赤
 十五 50 12 けられていろいろな焼物を集めた。また
 十五 51 6 ふでになったものである。主人は、新し
 十五 52 3 界大戦がたけなわであったころのこと
 十五 52 3 あつたころのことである。そのころ留学
 十五 52 3 たちへのでいいいなしようかい状をくだ
 十五 52 9 士をたずねるようにとおっしゃった。と
 十五 52 11 ワシントンと無事に旅を進めて、カーネ
 十五 53 3 暑い真夏の日の朝であつた。目ざすりつ
 十五 53 4 た。目ざすりつばな博物館に自動車に乗
 十五 53 5 強い声に、しづかに室内にはいった私の
 十五 53 9 老しん士のすがたであつた。学生時代か
 十五 53 12 していたあの有名な「ちようるいずふ」
 十五 54 1 というしあわせ者であらう。博士は、し
 十五 54 3 。博士は、しづかに歩みよる私が手にし
 十五 54 4 いすをすすめるのであつた。私がこの博
 十五 54 10 館をたずねたおもしろな用事は、世界の学者

十五 55 1 版してもらふことで、恩師ジョルダン博
 十五 55 3 ド博士は、戦争中で費用が思うようにつ
 十五 55 4 で費用が思うようにつかえないことにつ
 十五 55 6 うしてつぎのように語つた。「まあ、そ
 十五 55 7 まあ、そのようなありさまで、せっか
 十五 55 7 ようなありさまで、せっかくのおたず
 十五 55 7 おたずねもむだになるようなわけだが
 十五 55 8 むだになるようなわけだが、それはそ
 十五 55 8 なるようなわけだが、それはそれとし
 十五 55 10 ることがさかんときで、鹿鳴館とい
 十五 55 11 がさかんときで、鹿鳴館というクラ
 十五 55 12 をしていたものだ。そのころ日本をた
 十五 56 2 カ山がく会会員であつた私がはじめて
 十五 56 2 た私がはじめてだらう。そのときは、
 十五 56 3 山の高さも不明であつた。そこで、山
 十五 56 8 い関係があるのだが、きようは、はる
 十五 57 2 もっているようだが、その一つに日本
 十五 57 4 した。ものずきな私は、それはおもし
 十五 57 10 なかなかの人物だったよ。そのころ、
 十五 57 11 ころ、もう熱心なクリスチャンになっ
 十五 58 1 はおやすいご用だ。そのかわり日本語
 十五 58 3 リシア語の先生で、かれは私の日本語
 十五 58 4 先生というわけだが、かれこそ、のち
 十五 58 4 をなした新島襄だよ。」自分から話し
 十五 58 6 ていられるようすだった。——新島先生
 十五 59 1 新島のおじさんなら、私はよく知つて
 十五 59 5 が、ことばみじかにその関係を物語る私
 十五 59 8 これはまた意外だ。じつにめずらしい
 十五 59 9 こんで来たものだ。それなら裏の写真
 十五 59 11 でしごととはやめた。さあ、うちへ行こ
 十五 60 1 してあつたりつばな自動車に、ためらう
 十五 60 3 社をわが子のように、だいに胸にだい

十五 60 3 のように、だいに胸にだいてはぐくみ
 十五 60 5 、明治二十年の夏であった。当時、母校
 十五 60 8 はかなりひんぼんであった。ふつう「満
 十五 60 10 のいたずらざかりであった。ことに、長
 十五 61 1 わがままいっぱいにふるまっていた。新
 十五 61 6 おじさんがどんなにえらいかたであるか
 十五 61 6 んなにえらいかたであるかを知らなかつ
 十五 62 4 といふのがいやなのか。なに、そうじ
 十五 62 4 か。なに、そうじやない。ではどうし
 十五 62 5 ではどうしたのだ。なにが氣にさわつ
 十五 62 12 はほこりだらけだから、行くのはいや
 十五 62 12 、行くのはいやだといっているのです
 十五 63 11 う、これでどうだ。おじさんのように
 十五 63 11 おじさんのようにきれいになつたらう
 十五 63 11 のようにきれいになつたらう。さあ、
 十五 64 2 すぐ、小鳥のようにとびだした。「略」
 十五 64 3 かわいいぼうやだな。」おじさんとお
 十五 64 10 じと、にこやかにわらいながら私によ
 十五 65 9 車のついたみごとなおもちゃを私に送つ
 十五 66 1 の次には、りっぱなむしや人形にそえて
 十五 67 3 の日曜学校の生徒であつた私は、そのク
 十五 67 8 い新島のおぼさんだつた。そのなつかし
 十五 67 9 らは、たまのようななみだが流れ出た。
 十五 68 1 たたけというように、しゅもくがそえて
 十五 68 10 いたら、どんなにか喜ぶだろうに――
 十五 68 10 どのなにか喜ぶだろうに――とい
 十五 69 4 ろんで声さわやかに「略。」とよびか
 十五 69 4 「とよびかけそうであつた。「略。」お
 十五 69 8 がかざられてあるではないか。ああ、新
 十五 69 10 手紙のたびごとに
 十五 69 11 したのもそのはずだ。いまその写真の主
 十五 70 1 の声は聞えないのだ。暗い心になつて、

十五 70 12 は見えないようにおなりになつたので
 十五 71 8 さんは、昔のように私をひざにのせた。
 十五 72 7 なかつた。しずかに頭をさげた。ピツツ
 十五 73 5 れ、このとおりだ。」といつて、日記
 十五 73 7 たりを、声高らかに読みあげられた。ち
 十五 73 8 どそのころは眞夏であつたので、博士の
 十五 73 11 たふたり、しずかに食事をしたが、平和
 十五 74 2 その性質がどんなにちがつていようと
 十五 74 3 いことはみな同じであつて、そこになん
 十五 74 6 というだけのことで、それによつて兄が
 十五 74 9 たせたいのが念願である。神の目から見
 十五 74 10 その愛する子どもなのだから、人種的な
 十五 74 10 愛する子どもなのだから、人種的な区別
 十五 74 10 のだから、人種的な区別など、あるべき
 十五 74 11 民すべて兄弟姉妹である。それで、世界
 十五 74 12 からわいてくるのだ――と、テーブルを
 十五 75 7 にきよのゆかいな会見のてんまつを傳
 十五 76 4 いてくださったのだ。私は、停車場まで
 十五 76 6 は満面ににこやかなわらいをたたえなが
 十五 76 9 「略。」と、意外なあいさつをされた。
 十五 76 10 った日本語の一つだといわれた。五
 十五 77 6 、みかたができるだろう。ひとりの人間
 十五 77 7 人間にとつて眞実であるものは、他人に
 十五 77 8 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 78 8 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 78 9 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 78 10 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 79 10 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 80 1 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 80 2 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 80 3 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 80 5 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 80 9 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 80 11 人にとつても眞実だからである。人の心
 十五 81 1 人にとつても眞実だからである。人の心

十五 80 12 しく思われるようになることをいのりま
 十五 82 3 きた大廣間のようなものがあらわれます
 十五 82 4 の肉や、ふしぎなくだものを、水がめ
 十五 83 2 ルチル「あんなにうまいものをたくさ
 十五 83 2 て、うれしそうにしているふとつた人
 十五 83 3 人たちは、だれだろう。」光「あれがこ
 十五 83 5 る『幸福』どもだよ。どうもあんなまり
 十五 83 11 の人たちは下等でもあり、たいていは
 十五 83 12 るいものばかりだけれど、人はわるく
 十五 84 1 はわるくないんだよ。」ミチル「なんて
 十五 84 2 「なんてきれいなおかしでしょう。」
 十五 84 4 それに、あんなに肉がある。ちようづ
 十五 84 8 かにもうまそうだなあ。うまそうだな
 十五 84 9 なあ。うまそうだなあ。私よりよっぽ
 十五 85 1 しをわすれたのじゃないかな。あのと
 十五 85 5 しをわすれたのじゃないかね。」チル
 十五 85 6 ぶんうれしそうに、幸福そうな顔を
 十五 85 6 うな、幸福そうな顔をしているなあ。
 十五 85 9 つちを見たようだ。」とうとう「いち
 十五 85 11 えて、たいぎそうに、子どもたちの方へ
 十五 85 12 そのいい人たちだからね。きつと、お
 十五 86 2 よぼうというのだろう。それを受けて
 十五 86 3 いと、かんじんな用むきをわすれてし
 十五 86 3 ばならないものだよ。ていねいに、し
 十五 86 9 だよ。ていねいに、しかしきつぱりと
 十五 87 4 、この中のおもなものをごしようかい
 十五 87 6 地所持の幸福」で、なしのようなおな
 十五 87 6 で、なしのようなおなかをしています
 十五 87 7 よえいの幸福」で、このとおり、りつ
 十五 87 7 とおり、りつぽな、ふくれあがつた顔
 十五 87 11 をたべる幸福」で、ふたりはふたごで
 十五 87 11 ふたりはふたごで、ふたりとも、足は

15881 会 いという幸福」で、みんな魚のように
 15881 会 みんな魚のようにつんぼだし、『なん
 15881 会 のようにつんぼだし、『なんにもわか
 15883 会 こうもりのように目が見えない。この
 15884 会 るという幸福』でね、ふたりとも手は
 15885 会 手はパンのしんだし、目はもののジャ
 15887 会 『はちきれそうなわらい』で、口は耳
 15887 会 そうなわらい』で、口は耳までさけて
 15889 会 。『はちきれそうなわらい』が、腹をか
 15892 会 こしひねくれ者で、子どもさんたちに
 15906 会 い出した。だれだか、いつかそんな話
 15908 会 はうまくない鳥だそうじゃないですか
 15908 会 くない鳥だそうじゃないですか。とに
 15916 会 目がまわるようだ。『チルチル』それが
 15912 会 わかい女はだれだね。』こんな話をし
 15921 会 にをしているんだ。』パン 口にいっぱ
 15932 会 チルチル』なんだって。なまいきなこ
 15932 会 っ。なまいきなことをいうな。なに
 15939 会 を待っているのだ。おことわりはでき
 15931 会 、いやでも幸福にしてしまおうじゃな
 15931 会 にしてしまおうじゃないか。』ふとっ
 15941 会 、『はちきれそうなわらい』は、光のこ
 15943 会 しなさい。いまだよ。』チルチルは、
 15944 会 「光」のいうように、ダイヤモンドをま
 15944 会 す。舞台は清らかな、こうごうしい、ば
 15947 会 っともないざまだらう。みんなどこへ
 15949 会 、なんてきれいなところだろう。どこ
 15949 会 きれいなところだろう。どこへ来たの
 15941 会 ところにいるのだよ。ちがったように
 15941 会 。ちがったように思うのは目のせい
 15951 会 ことができるのだよ。ダイヤモンドの
 15952 会 福の精を見るのだよ。』ばらの目さめ

159512 会 たくさんいるのだろう。』光「もつとも
 15961 会 くさんいたものだ。それを、『ふと
 15962 会 目にあわせたのだよ。』チルチル』でも
 15965 会 、幸福はあるのだから。けれども、ふ
 15966 会 つけられないのだよ。チルチル「小さ
 15968 会 うよ。』光「むだなことだよ。私たちに
 15968 会 光「むだなことだよ。私たちに用のあ
 15969 会 こっちを通るのだから。ほかの者にま
 15971 会 かわいらしいのだ。どこから出て来た
 15972 会 から出て来たのだろう。だれなのだろ
 15972 会 のだろう。だれなのだろう。』光「あれ
 15972 会 だろう。だれなのだろう。』光「あれは
 15973 会 子どもの幸福』だよ。チルチル「話を
 15975 会 いの。』光「まだだよ。あれは、歌を歌
 15976 会 話はできないのだよ。』チルチルはね
 15979 会 たをしているのだろう。なんてかわい
 159710 会 服を着ているのだろう。このへんでは
 159711 会 、みんなお金持なの。』光「なんの、こ
 15981 会 、ずっと多いのだよ。』チルチル「どこ
 15985 会 のに見えるものだからね。』チルチル
 15989 会 う時間がないのだからね。あの子たち
 159810 会 わかっているのだからねえ。それにあ
 159812 会 時間がおしいのだよ。なにしろ、子ど
 15991 会 は、ごく短いのだからね。』また、も
 15994 会 とりまいて、陽気なおどりをします。幸
 15998 会 い) きみはだれなの。』幸福「きみ、ぼ
 151007 会 たことがないんだってさ。(ほかの「
 151013 会 ル」おや、そうなの。ぼく、わかった
 151012 会 でつまっているじゃないの。ぼくたち
 151024 会 にも聞えないんだなあ。まず第一に、
 151026 会 ぼくは、きれいでないが、いちばん
 151027 会 ちばんたいせつなものです。こんどあ

151028 会 い空気の幸福』で、ほとんどずっとお
 1510210 会 を愛する幸福』で、ねずみ色の着物を
 1510211 会 すこし悲しそうにしているのは、だれ
 1510212 会 『青空の幸福』で、もちろん青い色の
 151031 会 、『森の幸福』で、みどりの着物を着
 151033 会 ひなたの幸福』で、ダイヤモンド色の
 151034 会 、『春の幸福』で、きらきら光る青い
 151036 会 いつでもあんなにきれいな。』幸福
 151036 会 あんなにきれいな。』幸福「ええ、え
 151038 会 日ぐれの幸福』で、世界じゅうの王さ
 151039 会 てよりもりっぱで、おともに『星の出
 1510310 会 の神さまのような、金びかの着物を着
 1510312 会 、『雨の幸福』で、眞珠をいっぱい
 151041 会 ために、きれいなむらさき色のマント
 151045 会 兄弟ぶんのようなのですからね。そ
 151046 会 ち、『むじやんな考えの幸福』です。
 151047 会 でいっとう快活なのです。それから、
 1510410 会 ばくこぞうのようなのが、聞きとれない
 151051 会 て氣ちがいのようにはねまわります。チ
 151052 会 「このらんぼうなやつ、いったいなん
 151053 会 、いったいなんだい。』幸福「なにさ、
 151056 会 しい、天使のようなすがたをした者が、
 1510511 会 いのは、『正義であることの大きな喜
 1510512 会 の大きな喜び』で、不正がしかえし
 151063 会 るのは、『善人であることの大きな喜
 151063 会 の大きな喜び』で、いちばん幸福なの
 151064 会 、いちばん幸福なのですが、いちばん
 151067 会 やることがすきなのですから。そうい
 151068 会 そのものように、みじめなものにな
 151069 会 ように、みじめなものになってしま
 151075 会 あつていたものだから、すっかりくさ
 151083 会 にいる人、だれなの。』幸福「あれは、

十五108 8 会 をかぶったままで、ちつとも出て来な
 十五108 11 会 よを向いたままでいるの。」幸福「いま
 十五109 1 会 でいちばん純潔なものでしょう。」幸
 十五110 5 会 、ずっときれいだもの。」母の愛「そり
 十五110 7 会 ることはないのだからね。そのうえ、
 十五110 11 会 に、このきれいな着物は、まあ、なん
 十五110 12 会 らえたの。きぬなの、銀なの、それと
 十五110 12 会 。きぬなの、銀なの、それとも眞珠な
 十五110 12 会 、それとも眞珠なの。」母の愛「いいえ
 十五111 12 会 がそんなお金持だとは知らなかった。
 十五112 6 会 にも見えないのだからね。母親はだれ
 十五112 8 会 ときにはお金持なのですよ。もう、び
 十五112 8 会 もう、びんぼうなおかあさんもなけれ
 十五112 11 会 ばん美しい喜びなんですよ。それに、
 十五112 12 会 たちが悲しそうな顔をしているときに
 十五113 3 会 ル「ああ、そうだ。ほんとだ。おか
 十五113 3 会 うだ。ほんとだ。おかあさんの目の
 十五113 4 会 おかあさんの目だ。でも、ずっときれ
 十五113 5 会 、ずっときれいだなあ。それから、こ
 十五113 6 会 おかあさんの手だ。小さな指をはめ
 十五113 9 会 が流れだすようだよ。ここでは、うち
 十五113 9 会 いるときのように、しごとをしないの
 十五114 1 会 つだってこんなに白くなって、光がさ
 十五114 3 会 ルチル」ふしぎだな、おかあさん。声
 十五114 3 会 声までそっくりだよ。でも、うちにい
 十五114 6 会 、ひまがないのだよ。さあ、これで、
 十五114 6 会 、私に会ったのだから、あしたまた、
 十五114 8 会 いても、わかるだろうね。」チルチル「
 十五114 10 会 ん、ここにいるなら、ぼくもここにい
 十五115 2 会 、どういうように私を見なければなら
 十五115 3 会 りとさとするためだからね。わかったか
 十五115 8 会 同じおかあさんで、いつだって、いち

十五115 9 会 十五115 9 会 しいおかあさんなのだからね。おまえ
 十五115 9 会 十五115 9 会 おかあさんなのだからね。おまえたち
 十五115 10 会 十五115 10 会 覚えて、だいにすることをわすれて
 十五116 5 会 十五116 5 会 「あの人、だれなの。」チルチル「光さ
 十五116 8 会 十五116 8 会 いへんしんせつにしてくるそうだね
 十五116 9 会 十五116 9 会 してくるそうだね。でも、なんで、
 十五116 9 会 十五116 9 会 なんて、あんなに顔をかくしているの
 十五116 12 会 十五116 12 会 たちがこわがるだろうって、心配して
 十五117 3 会 十五117 3 会 を、知らないのだろう。(ほかの「へ略
 十五117 6 会 十五117 6 会 あなたは「光」なんです。私たちは
 十五117 8 会 十五117 8 会 のわかる喜び」でございす。私たち
 十五117 11 会 十五117 11 会 めていた「正義であることの喜び」で
 十五117 11 会 十五117 11 会 ることの喜び」でございす。私たち
 十五117 12 会 十五117 12 会 は、それは幸福なんですけれど、やは
 十五118 3 会 十五118 3 会 のを見る喜び」でございす。私たち
 十五118 4 会 十五118 4 会 私たちは、幸福なんですけれど、私た
 十五119 4 会 十五119 4 会 つでもしんせつにいたします。」物の
 十五119 9 会 十五119 9 会 ないでいるのだな。でも、どうして
 十五119 12 会 十五119 12 会 いでよ、いい子だから。」七 最後の
 十五120 8 会 十五120 8 会 よ。みんな元気で、この学校を愛して
 十五121 10 会 十五121 10 会 い、せつない気持であつた。受持の佐藤
 十五122 2 会 十五122 2 会 の最後のことばだ。」とおっしゃった。
 十五122 4 会 十五122 4 会 た。うれしいような、楽しいような、悲
 十五122 4 会 十五122 4 会 うな、楽しいような、悲しいような気持
 十五122 4 会 十五122 4 会 うな、悲しいような気持をだいて、この
 十五122 11 会 十五122 11 会 、はじめてのことなので、ほんとうにう
 十五123 1 会 十五123 1 会 しくしなかったのだろうと、ざんねんに
 十五123 2 会 十五123 2 会 ろうと、ざんねんに思いました。先生が
 十五123 9 会 十五123 9 会 みんない同級生であつた。「略。」
 だ 2 ダ
 六109 11 「ナ」といいながら、耳できいてみると、
 まるで「ダ」といっているようだ。

六110 4 「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。
 ターヘルアナトミア (題名) 1 ターヘルアナトミ
 ア
 十二112 4 オランダのターヘルアナトミアという人
 体のことを絵いりで説明した本を、
 たい (鯛) (話手) 4 たい
 四113 6 たい「これは、まださしあげたことのな
 い、おいしいごちそうでございす。」
 六96 4 たい「なにかご用でございすようか。」
 六96 6 たい「このあいだから、つりばりをのどに
 かけまして、
 六97 2 たい「あ、これですっかりらくになりまし
 た。」
 たい (体) ↓ガスタい
 たい (対) ↓じゅういちたいじゅう
 たい (隊) ↓がっしょうたい
 たい (鯛) (名) 9 たい
 二17 1 ろばたたいいもち
 四108 2 てる人 うらしまたろう たいえび その
 ほかいろいろな魚
 六82 4 会 あの大きなたいをつつてみたいのです。
 六94 1 会 たいだけは、病気でねておりますので、
 ここへはまいっておりません。
 六95 11 会 それでは、たいをちょっとここへよんで
 きてくれないか。
 六96 3 女の人、たいをつれてでてくる。
 六96 10 会 たいののどから、つりばりをとっておや
 り。
 六98 4 鯛 会 いたい、いたいとなっていた、たいも
 喜び、おめでたい。
 十二98 4 このほか魚では、たい、さば、まぐろ、
 かつおなどをたべました。

たい (助動)

158

たい 《タ・タイ・タカッ・タク・トウ》 いたい・たげ・なつて・みたいもの

343 たい だおさんは、なにになつて みたいとおもいますか。

345 たい なぜ、かぜになりたいとおもいますか。

348 たい かぜになつて、どこでも どんどんふきまわつて みたいのです。

355 たい きれいな はなになつて、おへやをかざりたいからです。

361 たい うみになつて、せかいじゅうのおふねをうかべたいからです。

367 たい たかい 木にとまつて、うたをうたいたいからです。

533 たい ひとつ ひろつて いつて おかあさんのおみやげにしたいな。

214 たい しまいまで みて いたいとおもいましたが、

311 たい おしゃかさまは、どうかして はんたかをりっぱな人にして やりたいと、

330 たい じぶんの かきたいところへ いつて、そこで かいて いらつしやい。

348 たい 早く 大きく なつて、あんな きれいな花をかきたいとおもいました。

340 たい くわのはが、やわらかで、光つていて、おかいこさんでなくても たべたいようです。

343 たい 白うさが、鳥から むこうの りくへいつて みたいと思ひました。

345 たい ぼくは 海をわたつて きたかったのだ。

365 たい だつて、もりへでたいんだもの。

365 たい たきへでたいんだもの。

3103 たい 光るように うつくしい かぐやひめに、ひと目でも あいたい ものだ。

3104 たい どうかして、あんなに きれいな 人がおよめにも らいたい ものだ。

3105 たい いつまでも おじいさんと おばあさんのおそばに いたいと思ひます。

3106 たい それほど きれいなのなら、ごてんによびたい。

3113 たい いつまでも おそばに いて、こうこうを したいと思ひましたのに、

423 たい 大きく なつたら、にいさんと いっしょに、ふねではたらきたいと思ひます。

428 たい いま、わたくしが したいと思ふことは、なんだろう。

430 たい 「くみの 人みんな」に きてもらいたいといつて、文を書きました。

431 たい 「みんな」に 知らせたいといつて、つぎのような 文を書きました。

437 たい わたくしは、たたくて しょうが ありませんでした。

446 たい じゃあ、かっちゃん、きょうは どこに ならびたいというの。

449 たい さあ、きょうは、どの へんに ならびたいというんだね。

4113 たい うらしまは、父や 母の ことを 思いだして、きゆうに 家へ かえりたく になりました。

4117 たい いつまでも そのまに して おいて いただきとう ございます。

527 たい どこか でありがとう といいたいと思つたけれど、いうところが なかったものだから、

530 たい まえからも、やりたいと思つて いました が、なかなか できなかったのです。

531 たい これからも、いつも やりたいと思ひます。

539 たい このきれいな けしきを、みなさんにおみせしたいと思ひます。

せしたいと思ひます。

542 たい 一どい つて みたいと思ひます。

553 たい 三ばん 星は、ねえさんが みつけたいわ。

558 たい はるおは、まだ みて いたいようでしたが、やつと 目を はなして、

558 たい ぼく、 大きく なるまでに、どの 星も みんな みて しまいたいな。

570 たい ひやく しょう なんか、もう いやになつたから、お金持のおくさん になりたいといつて。

571 たい おばあさんは、《略》、お金持のおくさん になりたいといつて。

572 たい 金の せかにな、《略》、女王 になりたいといつてたの でおくれ。

573 たい おばあさんは、もう 金持のおくさんはいやだ、女王 になりたいといつています。

575 たい こんどは、海の ぬし になりたい。

576 たい あの ひろい 海で、金の せかを けらいたして やりたい。

576 たい 海の ぬし になりたい、ひろい 海で、あなたを けらいたしたいといつて います。

576 たい あなたを けらいたしたいといつて います。

583 たい その お友だちが、記念に 写真を 写したいとおしやいました。

5100 たい 山へ はなして やりた かった だけ けれど。

6910 たい 「《略》。」と せき げ たく て た ま ら な い。

640 たい もう 一どあの 村に 帰りたい なあ。

657 たい これには、みんな にお知らせ したい ことを 書きます。

682 たい 一ど つりが したい のです。

682 たい そんなに つりが したい のか。

682 たい あの 大きな たいをつつて みたい のです。

6130 たい ぼくひとり、じつと し ずか に して いた い

んだよ。

六三15 〇 このあたたいトンネルで、今夜、ゆつくりとねむりたかったのさ。

七78 〇 一どでいいから、風になりたい。

七439 〇 このかんしゃの氣持を、あらわしたいとぞんじます。

七848 〇 裁判官どの、それを、しらべていただきとうございます。

七918 〇 私が麦をやったら、白いうさぎは、早くたべたいのか、黒いうさぎの上に乗って、たべました。

七964 〇 1ぴきのこらず、じょうぶにそだてたいと思います。

七9710 〇 うさぎは、人がみていると、ちちをのませたくないのでしょうか。

八472 〇 王子も、なんとかして父の病氣をなおしたいと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。

八494 〇 王さまに、さしあげたいことはやまやまですが、

八618 〇 みどりは目のためにいいから、親あひるはみただけみさせてやった。

八686 〇 あんまり大きすぎてみつともないから、かみつきたくなるんだよ。

八729 〇 あひるの子は、このあしの中で、横になって休みたいと思った。

八7210 〇 また、ぬまの水をのませてもらいたいとも思ったが、

八808 〇 あひるの子は、きゆうにおよぎたくなったので、にわとりに思わずその話をした。

八832 〇 私は、廣い世界へでたいと思っているのです。

九343 〇 せめて、貝だけでもおみせしたいと思っ

ています。

九447 〇 じゆくした実がすずなりになっているの

をみると、いまにものぼつとりたくなります。

九4410 〇 ぼくはみなさんにあつてお話がしたいと思いましたが、

九6011 〇 ちよつと裁判に困りましたので、あなたのお考えをうかがいたいと思ひましたのです。

九711 〇 やまねこは、まだなにかいいたそうに、
九802 〇 私たちは、もう、ほつてみたてうずうずしていました。

九1088 〇 「ようし、ここからすべりたいものはすべつてよろしい。」といわれた。

九1216 〇 なんとかしてうまい水のわきでる泉をさがしだしたいものと思つた。

九13611 〇 くもさん、あのお月さんのところへいつてみたいと思ひませんか。

九1373 〇 わたし一どでいいから、お月さんのところへいきたいと思ひます。

九1384 〇 「そうか、おかあさんをさがしにいきたいのか、ちようちよさん。」

九1387 〇 なんだか、わたしも、おかあさんをみたくなつたよ。

十63 〇 その美しいものを、すなおに感じとる心を、もちつづけたいものである。

十121 〇 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。

十178 〇 こうしておまえたちに話すようなことが、思うぞんぶんつかつてみたくなります。

十2112 〇 「早く、あの野原で、遊びたいな。」
十274 〇 ぼくは、いままでに学んだ「自然の觀察」を、ずつとつづけていきたいと思ひます。

十276 〇 自分の身のまわりにあるものを、よくしら

べてみる心がまえを、つくりたいと思ひます。

十278 〇 庭の木に小鳥がくれば、〈略〉、羽の色や、形などを、こまかにしらべたいのです。

十281 〇 巢のはりかたなどを、しらべておきたいと思ひます。

十285 〇 動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思ひます。

十292 〇 どうしてそのものがこうなつたかということを、考えてしらべたいと思ひます。

十295 〇 なぜ、このようなあみかたをしなければならなかつたのか、よく考えてみたいと思ひます。

十299 〇 和音を耳にしたときは、組みあわされた一音一音のことも、心にうかべてみたいのです。

十305 〇 なんでも、そのものとををしらべていくような心がけを、もちたいと思ひます。

十307 〇 ぼくは、みんなといっしょにはたらきたいと思ひます。

十309 〇 家では、弟たちのめんどうをみてやり、兄や姉の手助けとなりたいたいと思ひます。

十310 〇 父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。

十311 〇 そうして、うちじゆうの人たちに、めいわくをかけないようにしたいと考えます。

十315 〇 学校では、組の友だちとなかくして、助けあつていきたいと思ひます。

十316 〇 かげで人のわる口をいわないようにしたいし、

十318 〇 友だちのいいところを、すなおに学んでいきたいと思ひます。

十3110 〇 ありのままのすがたで、つきあつていききたいのです。

十321 〇 無責任な、ひきょうな考えをもちたくはあ

りません。

十323 この学校では、かけがえのないひとりであることを、ほころぶようになりたいものです。

十326 自分のつとめをはたすだけの勇気を、もちたいと考えます。

十348 これを人の手によらず、機械の力で動かすようにしたかった。

十523 「モット」ここで遊んでいたと、私にねだったり、

十673 でも、こわいものはかえてみたくなりません。

十159 力まかせに、長いオールをぐいぐいとこいでみたい。

十165 ぼくはトップがこぎたい。

十1712 コックスのまえにすわって、整調をやってみた。

十1810 ぼくらのしたいこと、ぼくらのいやなことなど、きみはなんでもよくわかってる。

十201 からだをじょうぶにして、身代をもとのようにしたいものだ、ほねをおっていました。

十2610 金次郎は、それを読むとうれしくなり、いっしんに勉強がしたくなりました。

十2810 その油を自分でとりたいたいと思ひ、

十7511 どうかよくしたいものだ。

十7512 少年は、もつとなにかききたかったが、いえませんでした。

十771 雨具をかりたいのですが。

十84 ある日のこと、母親がなつかしくなり、会いたくなったので、

十142 文雄は、それがかきたかった。

十163 そんなところをはっきりつかまえたものだと思つて、しきりに木炭を動かしていた。

十1710 もつともつと美しくなりたいと思つているのです。

十1910 すんだことをかえりみて、來年はもつともつとよくしたいと考えることができます。

十206 わたしはこんなところがすこしもないようにしたいのです。

十216 大きな木になって、美しいりっぱな実をたくさんつけるようになりたいものです。

十249 民ちゃんをなんとかして早く歩くようにしてやりたいのです。

十2411 早く、いえるようにしてやりたいのです。

十252 わたしも早くそれを覚えたいと思います。

十406 両親は、なんとかして、すこしでもものわかる子どもに育ててやりたいと念じて、

十708 なにかにつけて不自由であらうから、いろいろお手傳いをしてあげたい。

十7312 子どもたちのかけていく方に、自分もいっしょにかけだしたいと思いました。

十797 「日本へいきたくない。」

十798 「いきたくない。」

十9410 すすきの野原を心にえがき、自分もそんなところについて遊んでみたいと思う。

十229 「ダルガス、おまえがくれるといった材料を、さあ早くもらいたい。」

十396 あいたいな、早く……はい、四時ね。

十406 はい、眞ちゃん……眞二を呼んでいただきたいのです……はい。

十421 見せたいものだって……なにを……それきみにくれたの……マンシュウの子どもが。

十429 おみやげより、早くきみの顔が見たいよ。

十523 そうでなければ、死んでいたい。

十546 その氣持を、だれかに話してみたくてたまらなくなりました。

十912 子どもたちのことを思つて、安らかに生きていくのだと、思ひたいのです。

十162 このまごころを書いてお送りして、せめてものおなぐさめにしたいたいと思っています。

十2711 西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと思つた。

十292 あなたがたに見てもらいたいものがあるのです。

十293 見てもらいたいなどという、

十484 どうせ助からないものなら、こういう美しい歌に送られて、死んでいききたいものだ

十942 女の子は、どんなにか、それで火をともしてみたかったことだろう。

十488 今右衛門は、すぐれた赤絵の技術をどうかして残したいと考え、

十5712 ある日のこと、せい書をギリシア語で読みたいといひだした。

十749 自分の子女にはすべて同じ教育をほどこし、《略》、社会に果たせたいのが念願である。

十931 ギョウギのいいことばをつかってもらいたいものです。

十986 ぼく、あの子たちとおどりたいなあ。

十1149 ぼく、うちへ帰りたいや。

十11410 おかあさん、ここにゐるなら、ぼくもここにいたいや。

十1215 あれもいたい、これもいたいと思つた。

十1216 あれもいたい、これもいたいと思つた。

だい 「代」 ↓いちだい・さんだいめ・なんだい・に
だい

だい 「台」(名) 1 台 ↓いちだい・しきだい・し
ごくだい・しゃしうだい・ジャンプだい・すべり
だい・にだい・みはらしだい・ろくだい

六五五 ピンセットや、小さなつちや、さまざまの
道具も、おなじ台の上によこたわっている。

だい 「題」(名) 3 だい 題

三三〇 「学校」という だいで、作文をするこ
とになりました。

六六八 お話の題はべつにきめませんから、かつて
につきを考えてください。

十四八九 同じ題の作文でも、《略》人によって、
文章は、どのように書きあらわされる。

たいいく 「体育」(名) 1 たいいく

四一七 さんすう、りか、おんがく、ずがこうさく、
たいいくなどの べんきようをします。

だいいち 「第二」(名) 10 だいいち 第一 ↓かべ
しんぶんだいいち・こう・きしやだいいち・こう・につ
ぼんりゅうがくせいだいいち・こう

九二五 茶のうまさは、お茶そのもののうまさにも
よるが、たてる湯のうまさがだいいちである。

十四四〇 幸吉は、望みをかけた第一の母目を開いて
みた。

十三二〇 その第一は水で、その第二は木でありま
した。

十三二四 第一、ユートランドの氣候が、そのよい
感化を受けました。

十四三七 人間がだいいちになければならないこ
とは、なんであるかということも、

十四六二 第一に、湯の表面からは、白い湯げが
たっています。

十四八七 一面の銀世界となった廣い野原を、第一
の人が歩いて行く。

十五二三 先生が第一にさわぎだす、両親があわて
てあたりをかける。

十五四二 第一に、ぼく自身をしようかいし
ます。

十五五五 第一にいわなければならぬのは、
『正義であることの大きな喜び』で、

だいいち 「第二」(副) 4 だいいち
六五七 だいいち、おまえが生きているんだから、
わかりそうなものだがな。

七八五 だいいち、らくだがかた目であることを
知っていました。

九三七 だいいち、じめじめした足もとがきみが
わるく、そのうえ、

十三九 だいいち、母目は、その核をそとにはきだ
して、受けつけなかった。

だいいち 第一 「第一号」(名) 1 第一号
六六二 この第一号に、つづき話の第一かいめを書
きます。

だいいち 第一かい 「第一次世界大戦」(名)
2 第一次世界大戦

九二四 オーストリアは第一次世界大戦のあとで、
まだそのいたでがなおっていないころでした。

十五五三 話は、第一次世界大戦がたけなわであつ
たころのことである。

だいいちにち 「第一日」(名) 1 第一日
十一七六 こうして第一日はすぎました。

だいいちか 「第一課」(名) 1 第一課
十五四八 「こくこ」の第一課「みんないい
こ」。

だいいちかい 「第一回」(名) 2 第一かい 第一回

六六七 つづき話(第一かい)
十二八四 かたずをのんで試合をみているうちに、
早くも、第一回は七―五で清水選手が勝ち、

だいいちかいめ 「第一回目」(名) 1 第一かいめ
六六二 この第一号に、つづき話の第一かいめを書
きます。

だいいっせん 「第一線」(名) 1 第一線
十五九七 日の第一線が燈台の高きに

たいいんする 「退院」(サ変) 1 退院する 《―ス
ル》

十一八三 わたしは、いま退院するところだ。
だいうちゅう 「大宇宙」(名) 1 大うちゅう

十四三五 大うちゅうから見たら、《略》人間は、
バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。

だいいいひゃっかじてん 「大英百科事典」(名) 1
大英百科辞典

十五五五 名高い大英百科辞典の東洋美術について
の説明は、プリンクリーのふでになったもので

たいか 「大家」(名) 2 大家
十二二二 どんな絵の大家だって、一心にけいこ
をして、じょうずになったのだらう。

十三六一 なんといつても、二十二か三のわかさ
で、せんばいをしのいで大家になり、

たいかい ↓ドッジボールたいかい
たいかく 「体格」(名) 3 体格

十一五五 その体格で、思うぞんぶん、長いオー
ルをこいだら、

十一二五 金次郎は、すこしもつかれたようすもな
く、かえって、その体格もりっぱになっけいまま
した。

十二八二 身長は一・八七メートル、みるからに
りっぱな体格は、小さな清水選手のおよぶところ

ではありません。

だいがく〔題名〕1 大学

十一2512 それは「大学」といって、かん文で書いてみずかしい本でした。

だいがく「大学」(名) 4 大学よりアマストだいがく・スタンフォードだいがく

九5810 〔いいえ、大学の四年生ですよ。〕

十一410 なによりおもしろいのは、大学のポートがいつもここで練習していることだ。

十一116 〔あ、大学のポートだ。〕

十二423 そのうち、ヘレン・ケラーは、大学をりっぱな成績で卒業し、はかせにまでなりました。

だいがくしゃたち「大学者達」(名) 1 大学者たち

十五528 博士は、別れに際して、各地の大学者たちへのていねいなしよかい状をくださったうえ、

だいがくせい「大学生」(名) 1 大学生

十一55 ついせんだって、大学生に頼んで乗せてもらったうれしさで、まだむちゅうになつてい

だいかぐら「太神楽」(名) 1 だいかぐら

十一275 お正月がくると、例年のことで、だいかぐらがまわってきました。

たいぎ「大儀」(形状) 1 たいぎ

十五8511 「いちばんふとった幸福」が、(略)、たいぎそうに、子どもたちの方へやって来ました。

だいく「大工」(名) 4 だいく 大工よりふなだいく

三2610 そこで、大ぜいのだいくをあつめて、ふねをつくることになりました

十331 佐吉は、父の大工のしごとを助けてはたらいていたが、

十334 〔おまえは大工のせがれだ。〕

十338 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、

佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

たいくつまぎれ「退屈紛」(名) 1 たいくつまぎれ

七454 〔ただ、たいくつまぎれにひいたのです。〕

だいいけかく「大計画」(名) 1 大計画

十三196 ユートランドのあれ地と戦い、これを豊かな土地にしようとする大計画をたてました。

たいこ「太鼓」(名) 12 たいこよりおだいこ・でんでんだいこ

六184 ハーモニカをふいているもの、オルガンをひいているもの、たいこをたたいているもの、

六193 〔こんなによくあうと、たいこのうちがいもあるよ。〕

六239 〔たいこのきりぎりす。たいこをドンドンとたたいて、〕

九103 たいこのたたきかたによって、いろいろな心持をあらわすことができるし、

九109 水の音をたいこであらわすことなどは、ちよつと考えられないが、

九111 風といえは、(略)であらわしているが、それをたいこであらわすというのだから

九126 たいこを、ひくく、こまかくつづけてうち鳴らすのであるが、

九129 ただ一つのたいこが、そのうちかたによつて、水の音にもなり、風の音にもなり、雪の降るようすにもなるのは、ふしぎである。

九142 こんなときにも、たいこをつかう。

九144 ゆめからさめるときには、音などはけつしてするものではないが、やはりたいこをたたく。

十一276 たいこをたたいて、家から家へやってきます。

十一366 〔夕風ふけばたいこ鳴り、清い歌声あちこちと、こよい楽しいぼんおどり。〕

だいいこ「第五」(名) 1 第五

十四8711 やがて第三の人も通り、第四、第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。

たいこのきりぎりす「太鼓」(話手) 3 たいこのきりぎりす

六193 〔こんなによくあうと、たいこのうちがいもあるよ。〕

六210 〔たいこの「おやおや、ありがとうございます。」〕

六239 〔たいこのきりぎりす。たいこをドンドンとたたいて、(略)。〕

だいいこん「大根」(名) 10 だいいこんよりさとうだいいこん

四865 だいいこんをぬいていると、みそさざいが、「チャッ、チャッ」とないた。

七205 〔私のうちでは、だいいこんを、庭に二十本うえたんです。〕

七223 〔すずめが、だいいこんの葉をみているよ。〕

七2310 〔はお、だいいこんの葉をまいとつてきてね。〕

七242 〔はおは、だいいこんの葉をとつてくる。〕

七244 〔はい、だいいこんの葉——どうして、葉を砂の中に立てるの。〕

七295 〔黒っぽい、かわいいあおむしは、だいいこんのはっぱと同じ色にかわっていた。〕

七299 〔ぼくは、学校から帰ると、だいいこんのはっぱを、とりかえてやるのが楽しみです。〕

七331 〔ここからだして、庭のだいいこんの葉に、うつしてやりましょうね。〕

十一335 〔短か夜しらむを待ちかねて、だいいこんの花にあかつきの色。ただよえば勇ましく、すき・くわ持つて野にいそぐ。〕

だいいこんばたけ「大根畑」(名) 1 だいいこんばたけ

七203 〔だいいこんばたけです。〕

たいさく「大作」(名) 1 大作

十五515 日本の古い美術に対する愛着がふかく、日本美術工藝史十二巻という大作を著わした。

だいさん 〔第三〕(名) 2 第三

十4411 第二、第三と母貝を開いていくと、

十四8710 やがて第三の人も通り、第四、第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。

だいさんかいめ 〔第三回目〕(名) 1 第三回め

十二8411 第三回めはチルデン選手の時、続いて第四回めもチルデン選手の時となりまし。

だいさんこう 〔第三号〕(名) 1 第三号

六665 第三号をつくる人は、またそのつぎを書くのです。

だいさんばんめ 〔第三番目〕(名) 1 第三番め

十四9710 女の子は、もう一本の、第三番めのマツチをすった。

だいし 〔第四〕(名) 1 第四

十四8711 やがて第三の人も通り、第四、第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。

だいじ 〔大事〕(形状) 20 だいじ

三995 みなさんのかいたえでも、字でも、だいじにしまっておきなさい。

三1022 そうして、かごの中にいれて、おぼあさんとふたりで、だいじにそだてました。

四128 とおい、とおい、町からだいじなものここにどきます。

五1811 こんなにだいじにしてくれまうから、おちる心配はありません。

五4111 みんなだいじにして、こくばんのところにならべてあります。

六112 時計屋さんは、〈略〉ねじをはさみあげて、だいじにもとのふたガラスの中へ入れた。

六8511 だいじなつりばりをなくしてしまうなん

て。

六9210 兄のだいじなつりばりなので、私も困ってしまいました。

六981 〔繭〕 だいじなだいじなつりばりが、できて神さまお喜び。

六981 繭 だいじなだいじなつりばりが、

六1208 ぼくは、だいじに本ばこの上へのせておきました。

七534 〔繭〕 さあ、こんどがだいじだ。

八63 その一わを買い、小さなボールばこにいらてもらって、だいじに持って帰りました。

九1325 みつばちはだいじな針をだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。

十692 おしおのたなのすみに、だいじそうにし

十726 〔繭〕 おまえは、だんながだいじにしているあの湯飲み茶碗を、庭石にたたきつけろ。

十一85 〔繭〕 だがね、やっぱり、いちばんだいじで、むずかしいのは、コックスだろ。

十四317 あなたがたは、これからの日本にとってだいじなかがたです。

十五603 同志社をわが子のように、だいじに胸にだいてはぐくみていた新島のおじさんが、

十五115 〔繭〕 おまえたちは、おあさんをよく覚えて、だいじにすることをわすれてはなりませんよ。

だいじぎょう 〔大事業〕(名) 1 大事業

十三189 苦しいときにうちかつことのできる國民だけが、國の建てなおしという大事業をなしとげて、さかえるのであります。

たいした 〔大〕(連体) 1 たいした

八789 〔繭〕 これは、たいしたもうけものだよ。たいして 〔大〕(副) 1 たいして

十四329 よそ目には、星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、

だいしよう 〔大小〕(名) 4 大小

八1511 そこは木の下ですから、大小の木の根が、からみあい、かさなりあつてはえています。

十三303 どらにも、大小さまさまあつて、

十三3512 ふえには大小があるから、

十五622 ふみ石の上にそろえてある大小二つのくつをちらと見た私は、

だいしようぶ 〔大丈夫〕(形状) 13 だいしようぶ

四566 〔繭〕 もう、だいしようぶだよ。

四5610 〔繭〕 「だいしようぶかい。」

四10010 もう、だいしようぶ。

五135 〔繭〕 「だいしようぶだよ。」

五302 〔繭〕 だいしようぶです。

六351 〔繭〕 だいしようぶかい。

七358 〔繭〕 だいしようぶです。

七373 〔繭〕 「さぶろうさん、だいしようぶ。」ときいてみました。

八1003 これで、もうだいしようぶでしょう。

九1031 〔繭〕 だいしようぶだよ。

十6810 〔繭〕 「だいしようぶかい、あぶなくはないかい。」と、ふるえ声でいいながら、

十一93 〔繭〕 ぼくらは、きみについていきさえすれば、だいしようぶだと思ふんだ。

十五271 〔繭〕 だいしようぶだ、安心しておいで、私がいますぐつてあげるから。

だいすき 〔大奸〕(形状) 9 だいすき 大すき

四269 〔繭〕 きみの、だいすきな、きゅうりをあげよう。

六1068 弟のだいすきな飛行機である。

六1242 〔繭〕 ぼく、くるみだいすきなんだ。

六124(4) りすさんは、くるみがだいすきだそうだから、あげようか。

六142(11) おなかのすいた五ひきのうさぎさんは、だいすきなクローバーをたべました。

七232(2) 子すずめ、あおむしをたべるの。」兄「だいすきさ。」

十二45(5) ほら、分家のおじいさんの大すきなじょうるりさ。

十二72(4) 芭蕉は、子どもが大すきでした。

十三54(5) その絵がだいすきになりました。

たいする「対」(サ変) 6 対する『シー・スル』

十65(6) めうえのいばつたものに対してもおそれず、

十二42(4) これは、ケラーのサリバン先生に対する信頼と、サリバン先生のケラーを思う愛情とが、一つになったおかげです。

十四9(10) さけることのできなかつたことに對して、しっかりとかくごをおきめになり、

十四14(1) おとうさんに対しては、〈略〉純真な思い出がのこっています。

十五51(4) 日本の古い美術に対する愛着がふかく、

十五121(7) 読んでいるうちに先生がたに対する感謝の念があふれてきた。

たいせつ「大切」(形状) 13 たいせつ

四7(2) 人々の たいせつな もちものを まもつてくれます。

四7(3) もっと たいせつな からだを まもつてくれます。

五34(2) ここで、きかいや、ひりょうなど、たいせつな品物を作っています。

八42(5) 王女は、王さまにとっては、世界じゅうのこがねよりもたいせつであつたからです。

九85(10) こんなただのせともののかけらがと思う

ような物ですが、これはたいせつな物だから、

十33(12) 人間の衣食住というものは、みんなたいせつなものであるから、

十73(7) たおれたはずみに、あのたいせつなかけものを、あのとおりひきさいてしまいました。

十二93(7) ひとりがつてんでなく、読み手によくわかるようにくふうすることがたいせつである。

十三8(6) 自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことがらである。

十三45(11) せなかを向けられないように、顔の表情がよく見えるようにすることも、たいせつなことです。

十四8(3) それは私にとって、このうえもないたいせつなことばです。

十四58(6) 生きものに、いちばんたいせつなものは、私たち水です。

十五102(7) ぼくは、きれいではないが、いちばんたいせつなものです。

たいせん ↓ だいいちじせかいたいせん

だいせんせい「大先生」(名) 1 大先生

十五54(2) いまその大先生にお会いすることができた私は、なんというしあわせ者であろう。

たいそう「体操」(名) 1 たいそう

七55(10) 五年生が、運動場で、たいそうをしています。

たいそう「大層」(副) 8 たいそう

三45(9) わにざめは それを きくと、たいそうおこりました。

五94(4) ひなはたいそう小さくて、元気がなく、死んだようになっておちていたのです。

八18(5) それでたいそうほねがおれて、このうえなくふべんですが、

九33(9) 村の子どもがきょうそうでとりにいくの

で、たいそうにぎやかです。

十二17(10) あなたの声もたいそうよくおなりではありませんか。

十二70(3) 曾良は、信州の人で、歌がたいそうじょうずでしたが、

十三56(12) 美術の中心のフロレンスで、研究しているうちに、たいそう上達したのさ。

十五59(2) 私は小さいとき、その新島裏にたいそうかわいがられたのですから。

だいたい「大体」(副) 8 だいたい

八36(3) しかも、この大きなうちゅうは、だいたいきそく正しく運行しているということです。

八10(7) 1本ずつ植えたなえが、だいたい7本ぐらいにふえました。

八106(4) 3本ずつ植えたかぶには、いちばん多いので、ほかのは、だいたい12ぐらいいした。

九22(6) 汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつぎのとおりです。

十二15(11) だいたいの形をしっかりとつかんで、

十二47(2) だいたいの人間には、〈略〉心にあることを、なにか美しいものであらわそうとする氣持がある。

十四28(2) それは、國語辞典をひいてみると、だいたいわかる。

十四71(4) だいたい、そういうふうなじゅんかんがおこります。

だいたい「交代」(名) ↓ せんぞだいたい

だいたい「橙」(名) 1 だいたい

十五6(2) だいたいは実をたれ時計はカチカチと

だいたい「橙色」(名) 2 だいたい色

三83(2) ぼくは、だいたい色にするからね。

五53(8) だいたいの大きな星だこと。

だいたん 「大胆」(形状) 1 だいたん

八二〇 せみの子は、だいたんに、まっすぐなあなを地表に向けてほっていき、

たいてい 「大抵」(副) 6 たいてい ↓ なみたいてい

三〇五 4 たいていの人は、あきらめてしまいました、

十四二七五 漢語は、たいてい大陸からきたことばだ。

十四二八三 かなで書いてあることばは、たいてい西洋からきたことばと思ってい。

十四四七五 たいていの人は、しょうとつのとときにあわてふためいて、そのためにかえって波にのまれてしまったのに、

十五三八七 それで、たいていの漢字には、この音と訓のふたとりの性質のちがった読みかたがある。

十五八三 〇 〇 あの人たちは下等でもあり、たいていはまあ、育ちのわるいものばかりだけれど、

たいてき 「大敵」(名) 1 大てき

八一八 七 そのかわり、親たちの大てきのすずめもねこもやってこないから、安全です。

だいとかい 「大都会」(名) 1 大都会

十五二〇 〇 ニューヨークの大都会で育てられた子どもたちには、

だいどころ 「台所」(名) 4 だいどころ 台所

三七二 〇 〇 ところで、バーバラは、だいどころからほうきをもってきてはきました。

五三六 おかあさんが、だいどころで、ごはんのしたくをしていらつしやいます。

八五四 なさけのある人とみえて、台所の方からおむすびを一つにぎってきて、

十二七四 九 台所の米入れの大きな入れ物もかなり重

いので、一三日は困ることはありません。

たいない 「体内」(名) 1 体内

十三九 〇 〇 幸吉は、あわつぷほどの核をこしらえて、それを、母員の体内にさしいれてみた。

だいに 「第二」(名) 3 第二

十四四 〇 〇 第二、第三と母員を開いていくと、十三二〇 〇 〇 その第一は水で、その第二は木であります。

十四八七 九 その人の足あとをしるべに、第二の人が歩いて行く。

だにかいめ 「第二回目」(名) 3 第二回目

七四六 〇 〇 第二回めには、にし村の学校としあいをした。

七五二 九 第二回めは、にし村の学校とやることになった。

十二八四 四 第一回は七―五で清水選手が勝ち、第二回めやはり清水選手の勝となりました。

だいにこう 「第二号」(名) 2 第二号

六六三 〇 〇 第二号をつくる人たちは、このお話のつづきを書いてください。

六六八 〇 〇 第二号がどんなふうになるか、楽しみです。だいはちこうしつ 「第八号室」(名) 1 第八号室

十五五八 〇 〇 慶應三年九月二十一日、マサチュセツツ州アマスト大学に入学、北側の第八号室に入る。

たいはん 「大半」(名) 1 大半

十五四〇 〇 〇 ローマ字は、アメリカ・イギリス・《略》など、世界の大半につかわれている文字である。

タイピスト (名) 2 タイピスト

十五五三 〇 〇 タイピストになにごとかをいいながらうたせているしらがの老しん士のすがたであった。十五五九 〇 〇 あっけにとられているタイピストをしり

目に、げんかんに出て、

たいびょう 「大病」(名) 1 大病

十二四〇 〇 〇 クラールは、生まれて一年半ほどたったとき、大病にかかって、みるはたらき、きくはたらきを失いました。

だいひょう 「代表」(名) 1 代表

十二一四 四 議事堂 みなさんがたの代表が、全国からここに集まって、いろいろなことを相談します。

だいひょうてき 「代表的」(形状) 1 代表的

十二一〇 七 ふたつとも鎌倉時代の作で、ほりものとして代表的なものです。

だいぶ 「大分」(副) 3 だいぶ

四八九 五 〇 〇 こんやは だいぶ つもるでしょう。七一二 〇 「だいぶ手があがった。」

十四六九 二 らい雨のできたは、《略》、だいぶようすのちがったのもあります。

だいぶぶん 「大部分」(名) 3 大部分

十三一九 五 のこった土地の大部分をしめるユートランドのあれ地と戦い、

十四五四 八 〇 〇 さつき、葉さんは養分のことをおっしゃいましたが、それは、大部分 根の私が、土の中から吸いとりて、送ってあげたものです。

十四五八 九 〇 〇 この大きなかぼちゃは、ずいぶんかたいうですが、やっぱり、この大部分は水です。

だいぶん 「大分」(副) 1 だいぶん

十一七五 七 〇 〇 だいぶんわるいけれど、まだ望みがある。

たいへいよう 「太平洋」(地名) 1 太平洋

十四七六 八 これが、もうひとまわり大じかけになって、たとえば、アジア大陸と太平洋との間におけると、それがいわゆる季節風(モンスーン)で、たいへん 「大変」(形状) 15 たいへん

- 二二三 先生、たいへんです。
 三二二 たいへんないきおいで、ひるもよるも、ぐんぐんとのびていきました。
 六二七 夏のころはあつてたいへんだった。
 八二五 目もよくはみえないらしいので、ねこや、すずめにみつけれたいたいへんです。
 九一九 その廣告は、たいへんはんきようをまきおこしました。
 九三三 あみにつきあたってたいへんと、くもが思ったとたんに、
 十六七 風がどつきを運んできてはたいへんだから、次郎かじゃ、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやつてくれ。
 一二五 ねえさん、たいへんな進歩ですよ。
 一二九 たいへんな進歩じゃないの。
 一二七 スタンドには、はじまるまえからたいへんな見物人でした。
 一三三 たいへんだったでしょうね……四十日も
 一四五 水と養分とを吸いとって、夜も晝も送ってあげるのは、たいへんなほねおりです。
 一四六 たつまきのようなものになって、〈略〉高い柱の形になり、たいへん早さで回転するのを見ることあるでしょう。
 一五三 さあたいへんだ。
 一五五 けれど、もしこのわしが、その舞いおりとちゆうで、高い木の上へでもとまろうものなら、それこそたいへんです。
 二一〇 「大変」(副) たいへん
 二二三 すの おそうじをするので、はとをだしていたら、たいへんあつとおもいました。
 三三二 トン、トン、ゴシゴシゴシ、スススス、

- たいへん にぎやかでいそがしそうです。
 三三三 みかどがこのことを おききになって、たいへん かわいそうに お願いになりました。
 四一六 いやいや、たいへん たのしい 思いをさせて いただきました。
 五二八 しかし、その中に三人だけ、たいへんよろこんで 帰っていった子どもがありました。
 五二四 ひさしぶりに おじいさんにおあいして、〈略〉、たいへん かわいがられました。
 六二〇 たいへん きれいなもんくを いましたね。
 六二二 そうして、自分とあさが おの花とが、たいへん 近いものように 思われました。
 六二六 つりばりを のどに かけて、たいへん 苦しんでいると ございます。
 六四八 五ひきの うさぎさんたちは、みつばちさんのことを、たいへん ありがたく 思いました。
 七四三 みなさん、たいへん さしで がましいことですが、わたしに ちよつと 話を させて ください。
 七四八 たいへん 失礼だ と思いますが、これは、車中の 人たちの ころざし であります。
 八二二 ことに まえ足は、〈略〉、たいへん かくじょうぶ になります。
 八二五 せみの 子たちは、たいへん 生長が おそくて、ように 大きくなり ません。
 八三二 それを みた 天帝は、たいへん おおこりに なって、
 八四二 これを きて、王さまは たいへん お喜びに なりました。
 八五二 それは、ひどく 大きな からだで、たいへん みにくい もので あつた。
 九一八 つばめは、鳥の中でも、たいへん 早く とぶ鳥です。

- 九二六 その日は たいへん 寒い あらしの日で、朝から 晩まで、こやみなく 雨が 降っていました。
 九三〇 また、飛行機という 文明の 利器が、このしごとにつかわれたという ことを、たいへん ありがたいたことだといわずには いら れません。
 九四七 道は たいへん きゆうな 坂になりました。
 九五七 ぎよしやも たいへん あわてて、
 九六六 ために まつ川の水を にて 飲んでみると、たいへん うまかつた。
 一〇四 エジソンは たいへん 喜んで、こう いった。
 一一五 その子どもに、りえもんという 人が ありましたが、たいへん 情ぶかい 人でした。
 一一六 たいへん わるい でしょうか。
 一二八 待っている その あいだが、少年には たいへん 長く 思われました。
 一二九 コロンブスが アメリカを 発見して 帰ったとき、イスパニア人は たいへん 喜びました。
 一二七 たいへん いい色 になりましたね。
 一二九 近ごろは たいへん じょうずに なりました。
 一二九 あなた の 鳴く 声に 耳を かたむけて、たいへん 感心 していましたよ。
 一二六 発育が たいへん おく れていて、かわい そうです。
 一二七 たいへん おそい ようですが、いざりだす と なかなか 早い ものです。
 一二五 私は、「ゆのみ」と「水」とで たいへん 苦しんだ であつた。
 一二八 もし、その わけに かなわな いことを すれば、たいへん おかしな ことになる ばかりでなく、
 一二〇 それは、もようも ぐく かん たんで、形も たいへん よく まつて います。

十三109 ある人は、幸福なくらしをし、ある人は、たいへん不幸になっている。
 十三5512 絵はがきでも、たいへんいい絵だと思いましたが、
 十三569 画 ラファエルは、〈略〉、早くから絵のけいこをして、たいへんじょうずであつた。
 十三578 画 そのマリアは、たいへん美しくて、いかにもおかあさんらしいと思うのです。
 十三596 画 その絵は、たいへん感じがちがいますね、おじさん。
 十三5910 画 この絵は、たいへん大きなりっぱな絵だよ。
 十四96 画 おかあさん、いま、おかあさんが力をおとしておしまいになったら、あなたのルイは、たいへんかなしい思いをしなければなりません。
 十四514 画 ひさしぶりにごちそうをたべて、たいへんゆかいです。
 十四534 画 花さんは、たいへんじょうずに自分のことを主張なさいましたね。
 十四645 ふつうけんび鏡でも見えないほどの、たいへんこまかいちりのようなものです。
 十四752 地面の空気が、日光のためにあたためられてできるときのむらは、飛行家にとって、たいへんあぶないものです。
 十四7911 簡単なことを、知っているのといないのでは、たいへんちがいます。
 十五449 画 たいへん焼物がおすきのようですが、十五902 画 ぼくたちは、たいへん急いでいるのです。
 十五1168 画 あの人、おまえたちふたりをかわいがって、たいへんしんせつにくれるそうだね。
 たいまつ [松明] (名) 1 たいまつ

十三610 やがて、かれらもせいぞろいして、かげろうのたいまつをたいて、おしよせて来る。
 タイムス ↓ ジャパンタイムス
 ダイヤモンド (名) 13 ダイヤモンド だいやもんど
 一531 画 あれは、みんなだいやもんどですよ。
 一537 画 あれはふしぎなだいやもんどですよ。
 一538 画 しんせつない人がひろくと、だいやもんどですが、
 一561 ぼけつとからうずらのたまごほどあるだいやもんどをひとつとりだして、
 一6010 画 それでは、みんな、あまの川でだいやもんどをひろつてきたのですね。
 一615 しろちゃんはおくろからだいやもんどをとりだして、「〈略〉。」といいました。
 一653 画 あまの川のだいやもんど、おかあさんのおみやげにいただいたの。
 一656 画 だいやもんど。
 一468 画 一つは、ダイヤモンドであり、いま一つは、眞珠でした。
 一5838 画 だからまだ、ダイヤモンドを、まわしてはいけませんよ。
 一5943 画 ダイヤモンドをまわさない。
 一5944 「光」のいうように、ダイヤモンドをまわします。
 一5951 画 ダイヤモンドの光にたえられる幸福の精を見るのだよ。
 ダイヤモンドいろ (名) 1 ダイヤモンド色
 一51033 画 『ひなたの幸福』で、ダイヤモンド色の着物を着ていますし、
 たいよう [大洋] (名) 1 大洋
 一2410 画 大洋を西へ西へと航海して陸地にで

あったのが、それほどの手がらだらうか。
 たいよう [太陽] (名) 25 たいよう 太陽 ↓ ころにたいようをもて
 一5375 大むかしのたいようのねつが、かたちをかえ、石炭の中にかくわえられていて、
 一6102 雲にかくれていたたいようがおおをだしたので、日光が店いっぱいにさしこんで来た。
 一8346 この早さで計算しますと、太陽から発した光が、地球にとどくまでには、やく八分二十秒ばかりかかることになります。
 一8658 あくる日はいいお天気で、太陽は、ごぼうの上をてらしていた。
 一8810 ある夕ぐれ、太陽が美しくしむときであつた。
 一881 太陽がてりはじめ、ひばりが歌いだしたとき、
 一8937 太陽はあたたかく、おだやかにてらした。
 一209 画 白っぽくみえる太陽の光線ですが、わけてみると、こんなにさまざまな色になります。
 一4612 画 養殖眞珠発明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とするならば、
 一1129 まっさおな海は、太陽の下でわらっている。
 一1145 一つの太陽の下で、みんながめいめいの歌を歌っている。
 一1147 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちょうも舞い、まっさおな海もわらい、
 一126011 さすがの太陽も、まねかれるまに空の中ほどまでもどつてきた。
 一13138 火星や金星・木星などのような星は、太陽のまわりを〈略〉まわっていることがわかり、
 一131310 地球もまるい形をしたもので、火星など

と同じように、太陽のまわりをまわっている
十三146 そういう星——これをわく星といいます

が——の空にえがく道は、だえん形であって、太陽はいつもその焦点にいるものだ、

十三154 公轉といつて、自轉をしながら、〈略〉、一年に一回、太陽のまわりをまわります。

十三564 図 これでも、本物にくらべたら、やっぱり、月と太陽みたいにちがうといつてもいいな。

十四3212 地球や金星などのわく星が、太陽を中心として回轉していることを知っています。

十四3410 この廣大なうちゅうにくらべては、太陽もごく小さなものです。

十四423 圖 心に太陽をもて、あらしがふこうが、雪がふろうが。

十四427 圖 天には雲、地にはあらそいがたえなからうが、心に太陽をもて。

十四447 圖 心に太陽をもて、そうすりや、なんだってふつとんでしまふ。

十四493 圖 「心に太陽をもて、くちびるに歌をもて。」このおじょうさんは、この歌を知っていた。かどうか知りません。

十四579 圖 もし、私、つまり太陽がなかったら、どうなると思います。

たいようけい 「太陽系」(名) 2 太陽系

十四333 この一むれの星を、ふつう太陽系とよんでいます。

十四334 この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。

だいよんかいめ 「第四回」(名) 1 第四回め

十二8411 第三回はチルデン選手の勝、続いて第四回めもチルデン選手の勝となりました。

だいよんこうしつ 「第四号室」(名) 1 第四号室

十一666 圖 「じゃあ、第四号室のいちばん向こうのベッドだ。」といいました。

たいら 「平」(形状) 2 平ら

九778 平らな畑やたんぼの向こうに、一だん高くなったところがみえます。

十三1210 地面は平らなもので、日や月が、東から西へまわっているように思われます。

たいりく 「大陸」(名) 2 大陸 ↓アジアたいりく

十四273 それから、ふと、古くから日本といちばん関係のふかかった大陸からは、どんなことばがはいつてきたのだらうかと思った。

十四276 圖 漢語は、たいてい大陸からきたことばだ。

だいりせき 「大理石」(名) 2 だいりせき 大理石

七681 だいりせきや木材をけずっていつて、だんだん、その人の顔ににせていく

十五822 園の前の方に、高い大理石のまいる柱でできた大廣間のようなものがあらわれます。

たうえ 「田植」(名) 7 田うえ 田植え

五426 圖 こちらは、田うえがはじまりました。

八984 6月15日 図 くもり 24度 田植えのころになったので、しろかきをしました。

八989 いやいよきようは田植えでしたので、みんなうれしそでした。

八1024 田植えをした日から、ちょうど60日めです。

十一345 圖 さなえ運ぶ子、うし追うおきな、家内そろって田植えする。

十二599 ある年の夏、きようは長者の家の田植えだというので、里のおとめたちは、赤いたすきもかいがいしく、朝から集まってきた。

十二6012 それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。

たうえうた 「田植歌」(名) 1 田植え歌

十二604 おとめの数をまして、田植え歌勇ましく、一心にはたらいだ。

たえず 「絶」(副) 3 たえず

十一796 希望と、胸をこおらせるような失望とのあいだで、たえずはらはらしていました。

十四1011 圖 それほど、たえずおかあさんのことを思っているのです。

十四299 日本は景色のよい國で、花がたえずさいていたために、

たえま 「絶間」(名) 1 たえま

十三335 だから、車の動いている間、たえまなく、「キリキリ、リリリリ」がびびく。

たえる 「耐」(下) 4 たえる 《一エ》

十4110 うめは、いつもこのわる口のためとなつて、幸吉をかばい、苦しみたえて、なん年かをすごした。

十一423 圖 もうそうちくも重荷にたえず、つばきのの上にばたばた落す。

十五2511 さすがの大わしも、十五六の少年に上からおされるので、その重さにたえられなくなつて、十五951 圖 ダイヤモンドの光にたえられる幸福の精を見るのだよ。

たえる 「絶」(下) 3 たえる 《一エ》

九1025 右岸や左岸では、〈略〉、中ほどでは、いい味はたえなかった。

十四426 圖 天には雲、地にはあらそいがたえなからうが、心に太陽をもて。

十四435 圖 日々の苦勞に、よし心配がたえなくとも、くちびるに歌をもて。

だえんけい 「楕円形」(名) 2 だえん形

十三146 そういう星——これをわく星といいます

が——の空にえがく道は、だえん形であって、
十三153 また、公轉といつて、自轉をしながら、
だえん形のきまつた輪をえがいて、一年に一回、
太陽のまわりをまわります。

たおす〔倒〕(五) 1 たおす 《―シ》 ↓きりたお
す・なきたおす

十四8610 風にあおられた雪のむれが、《略》、人を
たおし、こごえ死にさせてしまうことすらある。

たおる〔倒〕(下二) 1 たおる 《―レ》

九1153〔文〕 着ぶくれて歩かされいし女の子ばたん
とたおれそのままなくも

たおれかかる〔倒掛〕(五) 2 たおれかかる 《―
リ》

十五293 鳥は、《略》、つかんでいた女の子をはな
して、あおむけにたおれかかりました。

十五3211 少年はほつとして、思わず後へたおれか
かりましたが、

たおれる〔倒〕(下二) 12 たおれる 《―レ・レ
ル》

五372 このような木が、たおれて土にうずまり、
長いあいだかかって石炭になったのです。

六728 死んでいたら、ころがってたおれるわけだ
し、

六1366 しかさんがおこつて走ると、こんどはたお
れた木のみきにトンとけつまずいて、

八7610 小屋はひどくあれていて、どっちにたおれ
るかわからなかった。

八861 とうとうつかれはてて、こおりの中にとじ
こめられたまま、身動きもせずたおれてしまった。

十736〔会〕 ドサリとこのまにたおれたはずみに、
十一259 ふつうの子ともだったら、くたくたに
なつてたおれるところを、

十一826 少年は、父親のうでの中にあたれました
が、胸がせまつて息もつけませんでした。

十二818 なんでもコートでたおれました。

十二818 たおれてはおき、おきては戦いました。

十二1067 うさはけんめいにこらえましたが、た
おれそうです。

十五233 みんな草の上へひれふすように、思わず
たおれてしまいました。

だが〔接〕 7 だが

八673〔会〕 わたしについておいで、大きな世界の鳥
小屋へつれていってあげるからね。だが、わたし
のそばにくつついてね。

十359 設計図をひいては組みたて、組みたてては
動かしてみた。だが、思うように動くものは、な
かなか生まれなかった。

十一85〔会〕 だがね、やっぱり、いちばんだいで、
むずかしいのは、コックスだろう。

十二144 まだ青々とした木の葉の中から大きくの
ぞいているのいい。だが、根もところどころに三
つ四つかたまってしだれているところもい。

十二765〔会〕 句か、まだできない。だが、みせるも
のがあるよ。

十五8411〔会〕 うまそうだなあ。私よりよっぽど大き
い。「さとう」だが、おまえさんたちは、あのさ
うがしをわすれたのじゃないかな。

十五9011〔会〕 というのは、その鳥をあまり上等とは
思わないからです。だが、まあいいでしょう。

たかい〔高〕(形) 94 たかい 高い 《―イ・イク・
―クレ》 ↓かんだかい・けだかい・こだかい・なだ
かい

一366〔会〕 たかい 木にとまつて、うたをうたい
たいからです。

二394〔会〕 おとうさん、ここは、ずいぶん高いね。
二481 うれしそうに、そのりんごを、高くさし
あげたりにおいをかいだりします。

三523〔会〕 ありはすみれの花にのぼり、「高い、
高い。」といました。

三523〔会〕 「高い、高い。」といました。

三525〔会〕 うぐいすはうめの木にとまり、「高
い、高い。」といました。

三525〔会〕 「高い、高い。」といました。

三527〔会〕 りすはしらかばの木にはねて、「高
い、高い。」といました。

三527〔会〕 「高い、高い。」といました。

三531〔会〕 いなかの やねの ペンペンぐさは、
「高い、高い。」といました。

三531〔会〕 「高い、高い。」といました。

三533〔会〕 こどもは石の上に立ち、「高い、高
い。」といました。

三533〔会〕 「高い、高い。」といました。

三535〔会〕 おてんとうさまは空にてり、「高い、
高い。」といました。

三535〔会〕 「高い、高い。」といました。

三1061 かぐやひめのひょうばんが、だんだん高
くなったのを、みかどがおきになつて、

四4710 はたけをこえ、のほらをすぎると、高い
山のそばにきました。

四485 山の上を高くとびこえて、たににさし
かかったとき、

四531 きげんなところは、どうやらとおろすぎ
ましたが、目のまえに、高い、高い山がそび
えていました。

四531 高い、高い山がそびえていました。
四534 やつと高い山のみねをこえました。

十三59 4 せいの高いマリアがキリストをだいて立っていると、

十四56 6 花さんでも、葉さんでも、日のあたる

ところや、高いところがおすきなようですが、

十四57 3 つるがこういったとき、高い声でわらい

ながら、どやどやとはいってきたものがあります。

十四65 2 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、ま

わりの空気にくらべてずっとかるいために、

十四67 8 たつまきのようなものになって、地面か

らなんメートルもある、高い柱の形になり、

十四76 5 すこし高いところでは、反対の風がふい

ています。

十四85 6 一ひらの雪によって、はるかに高い天空

のようすが、こまごまとわかるとすれば、

十四98 10 やっぱり、そのたくさんのろうそくはも

え続けていて、それが、高く、高く、しだいにの

ぼって、大空の星のようにかがやくのを見た。

十四98 10 高く、高く、しだいにのぼって、

十四101 2 おばあさんが、こんなにせいが高く、

りっぱで、美しく、

十四101 10 地面から高くはなれて、もう、寒さも、

ひもじさも、なみだもない國へ、

十五19 2 アルプスの山々のうち、もっとも高い山

の一つに、

十五19 5 その中で、一だんと高くそびえているの

が、このユングフラウの山です。

十五19 6 これは、富士山よりはすこし高く、四千

百七十メートルばかりの高さがありますが、

十五20 12 このヨーロッパの高い山の中の生活は、

見るもの聞くものがことごとくめずらしく、

十五26 2 もしこのわしが、その舞いおるとちゅうで、高い木の上へでもとまろうものなら、

十五82 2 園の前の方に、高い大理石のまいる柱で

できた大廣間のようなものがあらわれます。

十五99 2 もう一つの「幸福」のむれ、まえよりは

すこしせの高いのが、廣間の中につけてこんで来て、

十五105 6 せの高い、美しい、天使のようなすがた

をした者が、

たがい 「互」(名) 4 たがい じおたがい

十四2 4 幸吉とうめは、たがいにはげましあった。

十三21 9 これをノルウェー産のみの間に植えて

みると、両種のもみは、たがいにならんで生長し、

十五57 9 つくえのまん中にチョークで線をひき

向こうは日本、こちらはアメリカといって、たが

いに向かいあい、勉強にいそしむことにしたが、

十五80 6 他の國々のことはわからず、略、たが

いにくみあつたり、おそれあつたりして

たかいたかい 「課名」 2 高い高い

三3 2 八 高い 高い……四十九

三49 1 八 高い 高い

たかいたかい 「題名」 1 高い高い

三52 1 高い 高い

たかいたかい 「高軒」(名) 1 高いびき

八55 1 「略」.>と、うさは、高いびきをかい

て、さも楽しそうに晝ねをしていました。

たかが 「高」(副) 1 たかが

八13 10 たかが一わの小鳥のことをと、わらわない

でください。

たかがり 「鷹狩」(名) 1 たかがり

十二6 3 ある日、太田道灌は、たかがりにでかけ

ました。

たかき 「話手」 28 たかき

九89 3 まだやるのか。」たかき「やるよ。」

九89 9 はなしてくれたら、ぼくはやるよ。」た

かき「ぼくだってやるよ。」

九90 10 たかき「いいとも、だれがきみなんかと遊

ぶもんか——」

九94 3 たかき「しばらくして持っているすみに氣

がつき、略>、「これ、きみのだろう。」

九95 9 たかき「なんだっていいじゃないか。」

九96 3 たかき「あつ、それだ。」

九96 8 たかき「舞台のすみからボタンをひろって

くる。「これきみが落したボタンだろう。」

九97 1 たかき「首をひっかいたからさ。」

九97 11 たかき「なんだ。」やまだ「首、いたいの

か。」

九98 5 たかき「おい、ボタンついたか。」

九98 7 たかき「でも、あいこだ。」

九98 9 たかき「じょうぎひろってやったじゃない

か。」

九98 11 たかき「だから、あいこだ。」

九99 3 たかき「ぼくの首をひっかいたのはだれだ。」

と、首をさする。

九99 5 たかき「だから、あいこだろう。」

九99 7 たかき「でも、ぼくは二つなぐられて、三

つきみをなぐった。」

九100 4 たかき「もうたくさんだ。」

九100 9 たかき「しずかに、略>。」

九101 2 たかき「きみ、もうようよう。」

九101 4 かんにんするかい。」たかき「いや、ぼくが

いけなかったのさ。」

九101 6 ぼくもわるかったよ。」たかき「いったい、

なんでけんかははじめたんだろう。」

九101 9 ぼくがあんまりじまん話をするもんだから

——「たかぎ、あ、そうそう。」

九一〇 友だちにまで心配させて——「たかぎ、いっ

しょにあやまろう、あした——

九一〇 けんかの話をするのかい。」たかぎ「してもいいさ。」

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

くなった。」

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

して、「略」。

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

九一〇 首は——「たかぎ、なかなかおりしたら、よ

までは、まっすぐにありますが、

十四六八 うずの高さも、四キロとか八キロとかい

うのですから、

十五一七 これは、富士山よりはすこし高く、四千

百七十メートルばかりの高さがありますが、

十五五六 そのときは、まだ三角測量が行われて

いなかったたので、富士山の高さも不明であった。

十五五六 その際算出した高さは、実測の結果と

わずかに十フィートしかちがわなかった。

たか・し「高」(形) 1 高し「一キ」

十五九七 日の第一線が燈台の高きに

たかどの「高殿」(名) 3 高どの

十二六五 長者は、高どのの上からこのありさまを

ながめて、得意になっていた。

十二六九 高どのに立っていた長者は、

十二六二 ところが、そのあくる朝ながめると、高

どのは消えてしまつてあとかたもなく、

たかはし「高橋」(人名) 1 高橋

十五二六 高橋

たかはしさん「高橋」(人名) 1 高橋さん

十五二七 高橋さんが、きょうの日記当番ですが、

私にも書かせてください。

たかまる「高」(五) 3 たかまる 高まる「一ツ・

ル」

六二五 楽しみはいよいよくわり、喜びはさら

にたかまる。

三三 佐吉の考えは、しだいに高まつていったが、

小学校をでただけのかれには、手のとどきそうも

ない空想になりがちであった。

十三二二 そこで、デンマルクの國運回復の意氣は、

年々高まつてきました。

たがやす「耕」(五) 3 たがやす「一サ・一シ」

七467 たがやしている父と子、

八987 種まきのときとちがつて、こんどは深くたがやしました。

十229 きれいにたがやされた畑。

たかやまくん「高山君」(人名) 2 高山^{たかやま}くん 高山

十四182 学校で、そうじをしているとき、高山^{たかやま}くんが、思いだしたように、「略。」といった。

十四195 田中さんが答えられないでいると、高山くんが、「略。」

たかやまさんせい「(人名) 3 たかやま先生

七508 たかやま先生が、「略。」と、元氣づけてくださった。

七533 たかやま先生が、「略。」と、はげましてくださった。

七549 式をすましてもどつてくると、たかやま先生も組の友だちも、みんな、にこにこしていた。

たから「宝」(名) 4 たから 宝

十四287 宝 もって かえて、うちの たからにしよう。

十四302 宝 もって かえて、うちの たからにしようと思います。

十四312 宝 天人のはごろもなら、なおさらお返しはできません。國のたからにいたします。

十四155 宝 おかあさんのおやさしさこそ、私にとっては、いちばんとうとい宝なのです。

たから「接」22 たから

三778 宝 それから、あさに なつて、お日さまがあなたたちのところへ かえてくくるのです。

だから、だれにもひるとよるがあるのです。

八162 あたりの木の根ものびています。だから、虫たちが、いいかげんにすすんでいっても、なに

かの木の根にいきあたります。

八828 宝 おまえさんは口かずが多すぎる。だから、おまえさんとおつきあひするのがいやなのさ。

九9811 宝 やまだ「ぼくだって、すみをみつつけてやったじゃないか。」たかぎ「だから、あいこだ。」

九995 宝 やまだ「そりゃあ——」たかぎ「だから、あいこだろう。」

九1394 宝 いましがた、みつばちにさされて、苦しんだことも知っています。だから、わたしをたべてもいいと思っているんだけど。

十一203 そういうときに、金次郎が生まれてきたのです。だから、金次郎は、子どものときから、家の手つだいをしてよく働きました。

十二474 宝 心にあることを、なにか美しいものであらわそうとする氣持がある。だから、人間がいるところには、かならず詩もあれば、絵もある。

十三334 きしみながら、かん高いひびきをたてる。だから、車の動いている間、たえまなく、「キリキリ、リリリリ」がひびく。

十三386 宝 ごちそうなんてたくさん。だから、ほんとうにつれて行つてくださいよ……

十三549 宝 絵がすきで、それに、わかいころ、世界をまわつて来た人です。だから、この絵も、本物をごらんになっているだろうと、思ったからです。

十四51 宝 心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。だから、フィリップの作品の中に、^略「眞実の力が、こもっているのです。

十四73 宝 子どもたちはじゅうぶん愛していてくれる、だから、自分はたしかにひとりぼっちではないのだと、お考えになってください。

十四256 あたりまえのことだが、なかなかおもしろいと思った。だから、これからのちも、新しい

ものが世の中にできてくると、ことばも、

十四5212 宝 花の一部であるめしべの根もとが、大きくふくれただけのものです。だから、それは、私たち花のものだということはどうたがいありません。

十四543 宝 だから、このかぼちゃは、全部私のものだと思っています。

十四553 宝 水と養分とを吸いとつて、夜も晝も送つてあげるの、たいへんなほねおです。だから、^略かぼちゃは、私のものだと思っています。

十四571 宝 それをなおして、あなたがたがかれなようにしてあげたのです。だから、私は、そのかぼちゃは、全部私のものだと思っています。

十四601 宝 ぼくがとびまわつて、かふんをなかだちしてあげなかったら、実は一つもつかなかったのですよ。だから、あのかぼちゃは、

十四692 宝 らい雨のできたは、^略、だいぶようすのちがったのがあります。だから、どれもこれもみんな、茶わんの湯にくらべるのはむりですが、

十四9110 宝 そこで、その女の子は、まったくはだしになってしまった。だから、その足のつめたいことといったらなかつた。

十五838 宝 青い鳥だつて、^略まよいこんでいないともかぎらない。だからまだ、ダイヤモンドを、まわしてはいけないよ。

たから「高」(形状) 1 高らか

十五737 宝 「^略。」といって、日記をくりひろげ、つくえに白線をひいて「國境」をつくつたあたりを、声高らかに読みあげられた。

たからぐら「宝倉」(名) 1 宝ぐら

八381 ある日、王さまは、宝ぐらの中で、宝物をかぞえておいでになると、

たからもの「宝物」(名) 1 宝物

八38 宝ぐらの中で、宝物をかぞえておいでになると、み知らぬ人がはいつてきました。

たかり ひととばかり

たかる「集」(五) 1 たかる 《一ツ》

八25 6 せみの死がいは、ありたちがよつてたかつてひいていきますが、

たがる (助動) 1 たがる 《タガツ》

十五107 8 6 あの子はさがしに行きたがつて、

たき「滝」(名) 11 たき ひとイヤガラたき

三63 10 左へいけばたきへです。

三65 9 6 「たきへでたいんだもの。」

三69 5 6 はじめにもりへいって、それからたきへでようね。

九36 4 6 岩と岩とのあいだを流れ落ちるしみが、せかれて、たきになり流れになって、

九50 7 「ふえふきのたき」でした。

九50 8 「ふえふきのたき」は、まっ白な岩のがけの中ほどに、小さなあながあいていて、そこから水がふえのように鳴つてとびだし、

九50 11 水がふえのように鳴つてとびだし、すぐたきになって、ゴウゴウと谷に落ちていました。

九51 3 たきがピーピー答えました。

九51 7 たきは、またものようにふえをふきつづけました。

十18 8 わら屋根ののきから、たきのように落ちる雨水。

十一35 8 6 たきと落ちる大ゆうだちに、いまの暑さはどこへやら。

だき ひとこだき

だきあこ「抱合」(五) 1 だきあう 《一イ》

十五119 6 「光」の方へ行き、ふたりは長いあいだ

だきあいます。

だきあげる「抱上」(下二) 5 だきあげる 《一ゲーゲル》

一65 10 おかあさんは、わたくしをひざのうえにだきあけてくれました。

七39 2 「略。」といったかと思うと、いきなりさぶろうをだきあげ、

七92 5 茶色のうさぎは、おくへはいってでてこないで、小屋へ頭をいれて、だきあけて、

十二26 5 工員は男の子をだきあげる。

十二33 1 そのかたの両うでの中に強くだきあがられました。

だきおこす「抱起」(五) 1 だきおこす 《一シ》

四100 5 うらしまは、かめをだきおこして、せなかをさすって、

だきかかえる「抱抱」(下二) 1 だきかかえる 《一エ》

四50 4 ほかの がんは、右や左から かつちゃんをだきかかえました。

たき「薪」(名) 5 たき

六26 10 6 夏のあいだに、こんななたきをあつめておいて、よかったね。

九32 2 6 おとなといっしょに畑にでたり、山へたきをとりにつたりするので、

九36 1 6 たきをとりに行く山は、ぼくの家からは十五分ほど登るのですが、

九36 7 6 たきをせおって山からおるとき、

九37 3 6 ぼくははじめ、山へたきをとりに行くのが、すきではありませんでした。

たきぎとり「薪取」(名) 1 たき木とり

九41 5 6 だんだんたき木とりになれたのと、山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつかるからです。

だきしめる「抱締」(下二) 2 だきしめる 《一メ》

十五67 7 老婦人が、「略。」とさけんで、しつかと私をだきしめた。

十五68 6 老婦人が、「略。」と、家の人によびかけながら、おもわずとびこんだ私をだきしめた。

だきつく「抱付」(五) 1 だきつく 《一キ》

八41 10 こういって、王さまにだきつきました。

たきつくる「焚付」(下二) 1 たきつくる 《一ケ》

十二76 1 6 まあ、火をたきつけておくれ。

たきのぼり「滝登」(名) 1 たきのぼり

四78 5 こーこいのたきのぼり。

たきび「焚火」(名) 1 たき火

十54 7 「イコウ」ときめてあるきかけると、道のわきで、たき火をしていました。

たぐ「焚」(四五) 6 タク たぐ 《一イ・ク・ケ》

五32 9 この汽車は、なにをたいて走っているのしょう。

十49 9 6 イコウ—アップ タイテル

十二76 11 文 6 きみ火をたけよきものみせん雪まろ

十三6 10 やがて、かれらもせいぞろいして、かげろうのたいまつをたいて、おしよせて来る。

十三48 6 かれぎくをたいている。

十五9 3 文 6 はまの子ら火をたく青き月夜となり

たぐ「炊」(五) 2 たぐ 《一イ・コ》

五93 5 6 どれどれ、ゆうごはんでもたこうかな。

十二71 2 芭蕉のおきないうちに、いどころ水をくみあげたり、ごはんをたいたりしました。

だぐ「抱」(五) 16 だぐ 《一イ・カーキ》

二二3 1 園 すの おそうじをするので、はとをだいていたら、たいへんあついとおもいました。二五1 2 さちこは、りんごをだいたり、ほおにつけたり、おどつたりします。

三112 3 おばあさんは、しめきつたくらの 中で、しっかりと かぐやひめをだいて いました。

三113 4 おばあさんが だいて いた かぐやひめからだは、すうっと そとへ でて しまいました。五88 11 園 こうして右の手でだいてな、左の手でかかえてさ、それから、うたをうたうのだよ。

七41 6 かれは、むねに、大きなびかぴかしたアコードオンをだいて、ワルツの曲をひきはじめた。

八64 6 園 でも、もうすこしだいてみましょう。八64 6 園 いままでだいていたのだし、あと四五日はすわることもできますから。

十二29 12 このごろふとつきて愛らしくなった民ちゃんをだいてやろうとすると、

十三53 5 まだわかい、美しいおかあさんが、まるまるとふとったかわいいあかちゃんをだいていて、

十三59 4 せいの高いマリヤがキリストをだいて立っていると、

十五33 2 父親のうでにだかれた女の子は、十五60 3 同志社をわが子のように、だいに胸にだいてはぐくみ育てていた新島のおじさんが、

十五110 2 園 ふたりとも、おかあさんにだかれておくれ。

十五119 2 母の愛光をだきながら、「略。」十五112 4 うれしいような、楽しいような、悲しいような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。

たくあん 「沢庵」(名) 2 たくあん

八54 8 黄色なたくあんまで、そのおむすびにそえてくれました。

八55 4 おむすび一つ、たくあん一きれにも、人の心のおくは知れるものです。

たくさん 「沢山」(形状) 26 たくさん

三127 7 園 はんたか、おまえは たくさんの ことをおぼえなくても よろしい。

三14 9 おしやかさまは たくさんの でしをつれて、王さまの ごてんに まいりました。

三28 10 そののち、はやとりは、たくさんの 米や麦や、豆をつんで、海をわたりました。

三29 5 日かげになつてこまつていた たくさんの 村々は、

三111 5 それで、たくさんの けらに いいつけて、まもつて くださる ことになりました。

四114 2 園 おどりも もう たくさんです。四121 1 たつた一つの でんとうですが、この 光をだすために、どれほど たくさんの 人が、はたらいて いる ことでしょう。

六67 7 園 あのいろいろな道具、たくさんの時計、八52 8 園 『びんぼう』はうちじゃたくさんだ。

八88 6 たくさんの木が かんばしく におい、九20 11 たくさんの ねがはねが はりまわされて、つばめたちのとまるところが つくられました。

九21 5 たくさんの つばめが はじめて 運ばれてきたのは、九月十七日でした。

九51 9 たくさんの 白いきのこが、ドッテコドッテコと、へんな 樂隊を やつて いました。

九100 4 園 もう たくさんだ。」たかぎ、頭をかえてにげるまねをする。

十35 2 銀色に光った、たくさんの 機械は、生きもののように 動いて いた。

十一22 2 たくさんの 人の中には、わらじの 切れて いる 人も あります。

十一29 1 あくる年の春、黄色い花がさいて、たくさんの 実が つきました。

十二34 4 「ピン」「コップ」「ぼうし」など、たくさんの ことばをつづることを 覚え、

十二38 10 私は その日、たくさんの ことばを 覚え ました。

十三38 6 園 ごちそうなんて たくさん。十四24 4 どうして こんなに たくさんの ことばが、

いろいろな 國からは いって きて、十四24 7 園 先生、どうして、そんなに たくさんの 外國のことばが、日本語になつたのでしょうか。

十四33 9 このぎんが 糸というのは、〈略〉天の川の内がわにある たくさんの 星の むれな のです。

十四53 12 園 とちゅうから、黄色く なつて 落ちて しまった たくさんの かぼちゃの花を 見えています。

十四98 2 たくさんの 小さな ろうそくが、みどりの 枝の間から かやいて、

十四98 9 けれども、やっぱり、その たくさんの ろうそくは もえ 續けて いて、

たくさん 「沢山」(副) 62 たくさん

一56 10 まど の ところに、みおぼえの ある かおが、たくさん なら なくて いました。

二24 7 園 先生、でんせんに、つばめが たくさん とまつて います。

三33 1 園 でいり口には、げたばこが たくさん あります。

三33 7 園 青色や ちや色の くすりびんが、たくさん なら なくて いました。

三35 1 園 中にわに、とうもろこしが たくさん は えて います。

四8 8 まわりには、さくらの 木が たくさん う えて あります。

四三七一 そこには、ぶどうが、たくさん おいし
 そうに じゅくして いました。
 四六七五 お正月までに、ことばあそびの たねを た
 くさん こしらえて おきましょう。
 四七三二 たくさん おもしろいのが できました。
 四八二二 魚たちが、たくさんで きて、にぎやか
 な おんがくに あわせて おどりはじめます。
 五三二七 材木や、石炭や、お米を、たくさんつんで
 います。
 五三三七 えんとつがたくさん立っています。
 五四〇六 いま、たくさんさいています。
 五四一七 まいにち、たくさんちをしほります。
 五五六一 もう、たくさん、子どもや町の人々が、あ
 つまっています。
 五五六三 お礼はたくさんさしあげます。
 五八四四 たなかさんは、おしほをたくさん作るとい
 いました。
 六五〇八 まわりのかべやガラス戸などには、いろい
 ろな時計がたくさんならんでいる。
 六二〇一 テーブルには、お茶が用意してあり、くだ
 ものが、たくさんおさらにもってあります。
 六三〇七 雪がたくさん降ってきます。
 六九三九 女の人は、魚たちをたくさんつれてでてく
 る。
 六二四二 たくさんとれたね。
 七二七一 先生、きょうは風がありませんから、ちよ
 うちよが、たくさんとんでいましょう。
 七三三九 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへ
 やに、黒い小さな虫が、たくさんいました。
 七九五五 けさ、いってみたら、左がわのへやに、毛
 がたくさんぬけていました。
 八四七 いたるところの山野に、いちばんたくさん

いる鳥といわれるほおろです。
 八三七五 もっとたくさんこがねを集めようと願って
 おいでになりました。
 八四〇九 葉と葉のあいだから、新しい葉がたくさん
 できました。
 八四二八 ほの1つぶを虫めがねでみると、毛のよう
 なものがたくさんはえていました。
 八九三 あまりたくさん重ねると、ごちゃごちゃに
 なって、まとまりがつかず、
 九一五六 この中には、親づばめもいますが、ことし
 生まれた子づばめが、たくさんまじっています。
 九一八七 しかし、その中には、ことし生まれた子づ
 ばめがたくさんいます。
 九三三三 ふながたくさんいます。
 九三九一 枝ぶりのよいかれ枝のたくさんついでい
 る高い木をみつけると、
 九四一九 ぼくたちがこの村へきたころは、湖には
 美しい白さがたくさんまいおっていました。
 九四二四 そのほか、名のわからない美しい小鳥が
 たくさんいます。
 九四四五 まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、
 スキーをするには、ちょうどよかった。
 九四六三 まっ白なぼらが、たくさんさいていたのだ
 す。
 一〇四八 いちようの木にのぼって、いちようの葉を
 たくさん落してくださいました。
 一〇五九 ごはんをたべてから、山の方へいって、た
 くさん取ってきた。
 一〇六三 日本の絵画や、庭園や、建築にも、〈略〉
 おもしろいものが、たくさんあります。
 一二一六 いい色の絵のぐがたくさんあった。
 一二二五 大きな木になって、美しいりっぱな実

をたくさんつけるようになりたいものです。
 一二七六 みるみるうちにつもりましたが、曾良が
 水をたくさんくんでおいてくれたし、
 一二七八 まきもたくさんとってきてくれてあるし、
 一二九二 くりがたくさん落ちていたこと、
 一二九三 くりはあんがい少なかったこと、そのか
 わりきのこがたくさんあったこと、
 一二九八 古代の人は、はいがい、はまぐり、〈略〉
 などをたくさんたべていたようです。
 一三一一 もとより世の中には、科学的研究によっ
 ても、まだ知られていないことはたくさんあるが、
 一三三六 やなぎのわたが、どこからともなくたく
 さん舞ってくる。
 一三三九 それに、うちはやけなかったから、本
 だってたくさんある。
 一三五二 美しいしょう像などを、たくさんかい
 た。
 一三六五 自由にふでをふるって、りっぱな作品
 をたくさんのはえらいよ。
 一四二七 西洋からきたことばをできるだけたくさ
 ん調べてみたいと思った。
 一四二八 たくさん出てくるよ。
 一四四六 空気中には、それが、しぜんたくさん
 ういているのです。
 一四九二 ぼろぼろの前だれの中には、もっとたく
 さんはいっていた。
 一五五九 裏の写真やら、当時の日記やら、きみ
 に見せなければならぬものがたくさんある。
 一五八二 うまいものをたくさんたべて、うれし
 そうにしているふとった人たちは、だれだろう。
 一五九二 なんてたくさんいるのだろう。
 一五九六 もっともっと、たくさんいたものだよ。

十五964㊦ この世の中には、人が思うよりもっと
たくさん、幸福はあるのだから。
たくする「託」(サ変) 1 たくする 《ーシ》

十二712 「七重八重花はさけどもやまぶきのみの
ひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、少女の
思いをたくしたものでありました。

タクト(名) 1 タクト

六186 まん中に、しきしきがタクトをいっしんに
ふっています。

たくましい「運」(形) 2 たくましい 《ーイ》

十249 たくましい音楽。

十二661 おおづなのようなたくましい根が、深く
のびてみきをささえ、廣くのびて枝をやしない、

たくわえる「蓄」(下一) 1 たくわえる 《ーエ》
五377 大むかしのたいようのねつが、かたちをか
え、石炭の中にたくわえられていて、

たけ「丈」(名) 1 たけ ㊦ありったけ
九792 土はやわらかで、ずぶずぶと、ステッキの
たけいっばいにはいります。

たけ「竹」(名) 16 竹 ㊦おやだけ・きもとたけう
ら・ことしだけ・ささだけ
二454㊦ 長い竹のさおで、ふねをこぎます。
三1004 おじいさんはまいにち、のや山へ竹を
とりにいきました。

三1011 ねもとのぴかりと 光る 竹が 一本あり
ました。
三1012 その竹を切つてみますと、小さな、き
れいな おひめさまがすわっていました。

三1024 それからと いうものは、おじいさんの
とる 竹の中には、たびたびこがねがはいって
いました。

五807 竹のさきにほうきをむすびつけて、てん

じょうのくものすをはらいしました。

六1174 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹
二本と、それに、たこ糸やのりなどです。

七127 あさがおのつるがまきつくように立ててあ
る、竹や木のことをいうのです。

十185 竹の葉さきからしたるしずく。

十623 二階の窓からそとをみたら、大きな竹が
によつきりでいたので、びっくりしました。

十四713 私が、木を割ったり、竹を割ったりして
なにかこしらえようとしていると、

十四774 「木もと竹うら」ということわざを教え
てくれました。

十四777 竹を割るときには、うらのほうから割る
がいいという教えました。

十四7710 竹を割るとき、もとのほうから割ろうと
すると、《略》、とちゅうから横の方へそれてし
まう

十四784 竹の先のほうから割ってみると、
十四7910 「木もと竹うら」という簡単なことを、
知っているのといないのでは、

たけ「岳」㊦うんぜんだけ
だけ(副助) 95 だけ ㊦それだけに

二134 ひとつは まっかでした、ひとつは、は
んぶんだけ みどりいろをしていました。

四528 かっちゃんを ささえながら、できるだけ
早くとびました。

四597 「《略》。」とこたえるだけでした。

五218 しかし、その中に三人だけ、たいへんよろ
こんで帰っていった子どもがありました。

五226 しかし、きょうのうれしさは、それだけで
はありません。

六610㊦ ただ自分だけがこのように小さくて、な

んの役にもたちそうにない。

六358 かかしのつかまったひげ、のびるだけのび
てちぎれてしまう。

六7410 たとえ動いても、それだけでは命があると
はいえないと、ごろろは思いつきました。

六813㊦ きょう一日だけ、私につりをさせてくだ
さいませんか。

六8110㊦ たった一日だけでいいのです。

六941㊦ たいだけは、病気でねておりますので、
ここへはまいっておりません。

六1049 ただ、はながつまっているだけだが、その
ために発音がすこしおかしい。

六1114 ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだけ
である。

六1128 はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメ
その二ぎょうだけで、

七147 「手」だけではありません。

七206㊦ そのうち、たねをとるために、一本だけ
のこしておきましたら、

七275㊦ いいえ、どうなるか、みんな自分でしら
べるようにと、おっしゃっただけです。

七483 二回めのは、書きたしてあるだけ、よむ人
に、はつきりと、そのようすがわかります。

七611 さきだけみえることし竹が、ざわざわと、
動いている。

七889 まえにたべのこした古い草は、ふみつける
だけで、ちっともたべません。

七984 朝早くいってみたら、子うさぎは巢の中で
ねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。

八57 なぜなら、ほおじろだけしか賣っていな
かったのですから……。

八2210 ただ、腹の下のほうだけが皮にかくれてい

- ます。
 八257 あのぬけがらだけは、いつまでもささだけにかたくさがりついています。
 八326 国 では、七月七日の一日だけ、けんぎゅうとあうことをゆるしてやろう。
 八337 ただ「遠い」という考えだけでは、この遠いきよりは、おしはかることはできません。
 八4810 中には、うすぐらいひが一つともっているだけでした。
 八618 みどりは目のためにいいから、親あひるはみただけみさせてやった。
 八689 国 あれだけはしくじったね。
 八6911 国 たまごの中にあんまり長いので、あんなふうになっただけですよ。
 八765 できるだけ早くぬま地をにげていった。
 八1035 花のさくのは、一日にすこしのあいだけだと思いました。
 九45 この赤い色のそばに黄色をぬりますと、赤い色だけでは感じられなかった明かるさが
 九58 オルガンで一つの音だけひいてきいても、その音には、ある感じがこもっているものです。
 九76 「月」だけで思ひだした心の絵とは、いくらかちがつたものがあらわれてくるでしょう。
 九148 その高さを受けいれるだけの心持をもっていないからであらう。
 九149 もし、きく人の心が高ければ、それだけ音楽のねうちが生きることになろう。
 九156 もう大きさは親つばめと同じですが、九342 国 せめて、貝だけでもおみせしたいと思っています。
 九4410 国 いそぐ用事だったので、先生にだけお目にかかってすぐ帰りました。

- 九5311 ぶなの葉がちよっと光っただけでした。
 九1059 スキーの雪をすべる音だけが、氣持よくきこえる。
 十283 動植物だけではなく、雪のようすや、星の世界なども、しらべていきたいと思っています。
 十326 自分のつとめをはたすだけの勇氣を、もちたいと考えます。
 十3411 小学校をでただけのかれには、手のとどきそうもない空想になりがちであつた。
 十6812 こしをうしろにひき、せんすの手だけをまえにつきだして、あおぎつづけていました。
 十707 国 それだけはよしてくれ。
 十一91 国 ただ、わかっているだけではなしに、いつもそのうえを考えていて、
 十一6612 「略。」といっただけでした。
 十一845 「略。」とだけ、やつといいました。
 十一876 国 じゃあ、ここに二円だけおいていくから、こづかいにしないさい。
 十二251 姉だけにわかるへんなことをいっていきます。
 十二342 ただ、さるの人まねのように指を動かすだけでした。
 十二451 国 からだ全体と右手を受け持つ人、左手だけの人、足だけの人と、それぞれ手わけしているんだが、
 十二451 国 足だけの人と、
 十二4710 国 便利とか不便だけで物事を考えないところに、
 十二499 古新聞を二まいとも八つに切つて、そのうち一まいだけを正方形にする。
 十二503 首のところだけのこして、もんだ紙にのりをつけないで、上から上からかぶせる。

- 十二5311 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔や頭がみえないようにする。
 十二557 傳説には、〈略〉、昔からいい伝えられたというだけのもののほうが多い。
 十二559 ただ人々のあいだで語り伝えられているだけで、〈略〉消えていってしまうものもある。
 十二8910 そうでなかったら、ただ口さきでいうだけのことになる。
 十三189 苦しいときにうちかつことのできる國民だけが、〈略〉、さかえるのであります。
 十三241 よい結果は、木材だけにとどまりません。
 十三438 おかあさん、おかあさんの……(と、うら手に行く……声だけ続く。
 十三447 ただ、あいてになる人が、見物人の目につかないだけです。
 十三451 そこで、三郎くんの声と動きだけで、四人とそれぞれ話をしているようすを、見せなくてはなりません。
 十三458 三郎くんのことばだけで、すっかりようすがわかるように、くふうします。
 十三507 ちょっと落ち葉をかきのけるだけだ。
 十三5711 国 絵は、写真で見ただけでは、明暗はかなりわかるが、色がわからない。
 十四237 国 外國からはいつてきたことばは、英語だけではなく、
 十四2510 それから、外國のことばがはいってきたのは、品物からだけではなく、
 十四2711 西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと思つた。
 十四3012 なんでも日本、日本と、日本だけが特別の國でもあるかのように考えて、
 十四468 かれは、いままでにどれだけ歌を聞いた

かしれませんが、

十四481 自分なんか、およいでいるだけがせいぜいなのに、

十四527 根や、つるや、葉のないかぼちゃはありませんが、それだけでは実はずきません。

十四5212 それは、花の一部であるめしべの根もとが、大きくふくれただけのものです。

十四623 ただそれだけでは、なんのおもしろみもなく、ふしぎもないようですが、

十四681 そこだけは、地面から蒸発する水蒸気が、とくに多くなります。

十四694 ちょっと見ただけでは、まったく関係のないようなことがらが、

十四7012 ふたでもしておけば、ひやされるのは、
《略》茶わんにふれた部分だけになります。

十四739 そっだけがとう明に見えます。

十四7312 しかし、それも、前の温度のむらとなにか関係があることだけはたしかでしょう。

十四744 ただ、茶わんのときだけの問題ではなく、
十四9310 ただひと目でも、火の光とごちそうとを見るだけでも、満足したであらう。

十五3810 「上・下・生」などの読みかたをちょっと考えてみただけでも、このことがすぐ理解されよう。

十五4611 いいえ、もうこれだけです。

十五483 これはほん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、

十五746 一方が先に生まれ、他方があとから生まれたというだけのこと、

十五794 私には、《略》、このあいさつを送るだけの特別の権利があると信じます。
十五839 ほんの形だけでも、廣間の方をさがし

てみよう。

十五963 あれだけ残っていればいいや。
十五10011 あなたの知っているのは、ぼくたちだけですよ。

十五1154 チルチルや、おまえは、いまだけ天國に來ていると思っているけれど、

たけぐし「竹串」(名) 1 竹ぐし
九4311 ほしがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしにとおし、のき下につるしてくれま

す。
たけこさん「人名」2 たけこさん

二254 きょうは、《略》、すみこさんと、くにおさんと、たけこさんと、この五人のぼんです。

二374 たけこさんのしたおはなし。
たけざお「竹竿」(名) 2 竹ざお

九385 高くて手のとどかないかれ枝は、長い竹ざおのさきにかまをくりつけて、ひっかけるようにして、下から力をいれてひきおろします。

九3811 母たちもほくも、はじめ、その竹ざおにかまをつけてやる方法を知らなかったの、
たけだけしい「猛猛」(形) 1 たけだけしい

《イ》
十五2911 少年は、右手に短刀をふりかざし、《略》、このたけだけしい相手を待ちかまえていました。
たけださん「竹田」(人名) 1 竹田さん

十三405 きょう、マンシユウから來た竹田さん、おいででしょうか。
たけど(接) 2 たけど

六444 あのかかしが帰っているだろう。」子が
らす「うん——たけど、いったいだれがつれて
帰ったんだろうね。」

十一9112 一方の手で花たばを取りながら、一方の手で目をふきました。「たけど、ぼく、遠い道

を歩いていくんですから、しぼんでしまいます。」

たけとりのおきな「竹取翁」(人名) 1 竹とりのおきな

三1002 「竹とりのおきな」という おじいさんが
すんでいました。

たけなわ「酢」(形状) 1 たけなわ
十五523 話は、第一次世界大戦がたけなわであつたところのことである。

たけのこ「題名」1 たけのこ
十6011 たけのこ

たけのこ「竹子」(名) 15 たけのこ
五914 「それ、このたけのこをこらん。」

五916 みると、さしきのまん中のたたみをやぶつて、のびているたけのこがありました。

五917 このたけのこが、えんの下にあたまをだしたので、

五919 それで、手おけの水をかけてやると、たけのこがよろこんで、のびるわ、のびるわ。

五924 それ、たけのこにごはんつぶがついてい

るだろう。
五925 それぞれ、たけのこにごはんのつぶが—

—こりゃあ、たけのこごはんだよ。
五927 ごはんの中にたけのこのはいつているの

が、たけのこごはんですよ。
五929 いや、たけのこにごはんつぶがついてい

るのが、たけのこごはんだよ。
十611 うちのお庭に、たけのこが一本はえてきま

した。
十612 私は、たけのこのそばにいつて、せいくら

べをしたら、はなのところまでありました。
十615 もう、たけのこは、私のせいをすぎて、おに

十6111 たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きく
なります。

十6111 たけのこは、どうして、あんなに早くのび
るのでしょうか。

十一322 ひとしとと降る春雨に、やぶのたけの
こすくすのびて、

十三66 すみれ、たんぽぽ、わらびや、ふきや、

たけのこや、ちようや、はち、

たけのこごはん 「竹子御飯」(名) 3 たけのこは
ん

五926 図 それぞれ、たけのこにごはんのつぶが—
こりやあ、たけのこごはんだよ。

五928 図 ごはんの中にたけのこはいっているの
が、たけのこごはんですよ。

五929 図 いや、たけのこにごはんつぶがついてい
るのが、たけのこごはんだよ。

たけひこ (話し) 1 たけひこ

三89 たけひこ「南の友だち。」

たけやぶ 「竹藪」(名) 6 竹やぶ

三1009 竹やぶをみまわしていますと、ねもとの
びかりと光る竹が一本ありました。

四692 「竹やぶやけた。」

五203 しげた竹やぶの小道をとおりたり、すず
しい川のきしを走ったりしました。

五464 おつかいにいくとき、うらの竹やぶのそば
を通ったら、おくの方でうぐいすの声でした。

九122 どうげ道にさしかかったとき、さつとふい
てくる風であり、竹やぶを流れてくる風であり、

十238 窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。

たける 「蘭」(下) 1 たける 《一ヶ》

十五657 秋たけてりんごのみのるころ、おじさん
とおばさんは京都へひきあげられたが、

たこ (課名) 2 たこ

六37 十 たこ……百十四

六114 十 たこ

たこ 「風」(名) 10 たこ

四783 ふ——ふけ ふけ 風よ、たこ あがれ。

六328 糸の切れたたこのように、空にすいこまれ
ていくかし。

六1142 おじさんからたこをいただきました。

六1143 ま四角で、骨が二本しかついていないたこ
です。

六1145 図 へんなたこだな。

六1147 だれのたこよりもよくあがりました。

六1157 たこが青空で右や左にゆれると、

六11510 図 「こんなたこ、ほしいなあ。」

六11610 ほんとうは、たこを作るのははじめてです。

六1172 うちへ帰って、そのたこをみて、作りかた
を考えてみました。

たこ 「蛸」(名) 1 たこ

九347 図 ちよまの根は、《略》、たこの足のよう
に

一かぶから七本も八本もでていて、

たこいと 「風糸」(名) 1 たこ糸

六1175 材料は、ま四角な紙と、骨にするほそい竹
二本と、それに、たこ糸やのりなどです。

だし ひきだし

たしか 「確」(形状) 20 たしか

二692 図 たしかに 春の 声が きこえる。

四693 「たしかにかした。」

六2711 図 たしかに そうだ。

六774 図 たしかに、動いたり大きくなったたりして
いるものは、みんな生きものだね。

六954 図 いや、たしかにあるはずだ。

六974 図 たしかにつりばりだ。

六10910 はなから声がでる音であることはたしかと
なった。

七784 図 たしかに、たしかにそうです。

七784 図 たしかに、たしかにそうです。

八394 図 たしかにそうですか。

八398 図 あすの朝から、たしかにそのようになる
でしょう。

九111 じつさいにきいてみると、たしかに水の音
である。

九121 よくきいてみると、たしかに風の音になる。

九8210 図 そうだ、たしかにそうだ。

十四51 フィリップの作品の中には、たしかに、
《略》強い真実の力が、こもっているのです。

十四73 図 自分はたしかにひとりぼっちではない
のだと、お考えになってください。

十四352 大うちゅうから見たら、たしかに、人間
は、《略》小さなものでしょう。

十四73 図 しかし、それも、前の温度のむらとなに
か関係があることだけはたしかでしょう。

十四857 一ひらの雪によって、はるかに高い天空
のようすが、こまごまとわかるとすれば、たしか
に空からの手紙にちがいない。

十四9811 たしかにそれは星であった。

だし かける 「出掛」(下) 1 だし かける 《一
ヶ》

十448 わかめをだしかけたこずえのさがが、かす
んだ空の中にとけこんでいる。

たしかめる 「確」(下) 1 たしかめる 《一ヶ》

十三810 そうして、これをいくどもくり返してた
しかめ、

たす 「足」(五) 1 たす 《一サ》ひいたす・か
きたす

十二257 そとさえ寒くなければ、ものかげへつれて
いて、用をたさせるようにしました。

だす「出」(五) 66 だす 《「サ・シ・ス・セ」

あはれだす・あるきだす・いいだす・いざりだ
す・いたみだす・うごきだす・うたいだす・うちだ
す・うつしだす・うりだす・えがきだす・えらびだ
す・おきだす・おしだす・おだす・おちだす・おど
りだす・おもいだす・かがやきだす・かきだす・か
けだす・かたりだす・かんがえだす・きずきだす・
きりだす・こねだす・ころがりだす・さがしだす・
さきだす・さしだす・さわぎだす・すべりだす・せ
いだす・つかみだす・つきだす・つくりだす・とび
だす・とりだす・ながれだす・なきだす・なげだ
す・にげだす・ぬけだす・のびだす・のぼりだす・
はいだす・はきだす・はこびだす・はじきだす・は
しりだす・はなしだす・はみだす・はりだす・ひか
りだす・ひきだす・ひっぱりだす・ふとりだす・ふ
みだす・ふりだす・ほうりだす・ほりだす・もちだ
す・よびだす・わきだす・わたりだす・わらいだす
二176 口からたべて、おなかからだすも
のはなあと。

二48 いちろうは、りんごをだして、じろうの
手にわたします。

四506 口「かっちゃん、元気をだせ。」

四83 「略」といって、一まいのえをだし
ました。

四92 雪が降りだすと、ぼくはまどからかお
をだして空のほうをみあげて、

四104 口 さあ、元気をだしておかえり。

四120 たった一つのどんとうですが、この光
をだすために、どれほどたくさんの人が、は
たらいっていることでしょう。

五198 ふくろの中からだされて、ほっとしている
と、

五314 すると、その人は、トランクからこの本
をだして、略、ぼくにくれました。

五41 手 けさも、まきばにだしてやりました。

五576 あんまり大きな声をだしたので、あたりの
人がわいました。

五917 このたけのこが、えんの下にあたまをだ
したので、

五969 かごからだして、にがしてやりましょ
うか。

六43 小さな鉄のねじが、ふいにピンセットには
さまれて、明かるいところへだされた。

六89 しごと台の上をみて、だしておいたねじの
ないのに気がついた。

六103 そのとき、いままで雲にかくれていたたい
ようががおをだしたので、

六113 そうして、一つのかいちゅう時計をだして
それをいじっていたが、

六141 ありは大きな声をだしてさげびました。

六478 ませたくびだす子うまの顔に、かきはす
ずなり、夕明かり。

六551 よしおが大きな声をだしました。

六641 つかまえて、たなにあげたら、あぶくをだ
しておこった。

六659 このなぞの答がわかった人は、紙に書いて
かべ新聞がかりのものにだしてください。

六102 おや、だれかが、しょうじのあいだから顔
をだしている。

六109 「ム」と自分で声をだしていつてみると、
六115 そこで、あらためて声をだして「ヌ」と
いつてみた。

七125 これは、あさがおのだしている手のことで
はありません。

七156 「口をだすな。」

七227 はるお、あまり大きな声をだすから、に
げちゃったよ。

七301 そんな大きな声をだしたりして。

七321 死ぬといけないから、ここからだして、
庭のだいこんの葉に、うつしてやりましょね。

七355 私は、ありったけの力をだして、さぶろう
をかばうように両手をつっぱりました。

七42 「略」と、大きな声をだした人があつ
た。

七92 小屋からだすとき、みんな喜んですぐでま
したが、

七925 小屋へ頭をいれて、だきあげて、そとへだ
しました。

七925 だすときに、わらを足でけったりして、あ
ばれました。

八92 ときたまそとのろじへだしてやっても、す
ぐまいもどってきます。

八117 あわれにも、くちばしから血をだして、
略、からだをふるわせてもう虫の息です。

八534 「略」と、その家のにわとりは、用
心ぶかい声をだして鳴きました。

八771 ねこは、せなかをまるくしたり、のどを鳴
らしたり、火花をだすことさえできた。

八7910 じゃあ、お願いだから口をださないでは
しいね。

八802 せなかをまるくしたり、のどを鳴らした
り、火花をだしたりすることができかい。

八831 たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火
花をだすことを、せいだして勉強するのだね。

八八八 その首をはくちょうの方へさしのべ、自分でもおどろくほどへんな大きな声をだした。

九六九 しゅすの着物のえりを開いて、黄色のじんばおりをちよつとだして、

九〇五 〔さあ、元氣をだして。〕

九〇六 みんなは喜んで、きゅうに元氣をだした。

九三二 みつばちはだいいな針をだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。

一三八 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものがいりこみ、それに、貝のだす眞珠質がまきつき、

一四二 半円眞珠が思いどおりに取れるようになったので、ひとまずこれを加工して、かざり物として、ともかく、世にだすようになった。

一五九 えんがわにつくえをだして、その上にすすきをかざった。

一八二 少年は、まだ声をだすことができませんでした。

二一五 そのくちた草をとりのけようとするど、大きなえんまこおろぎが一びき頭をだしていた。

二二六 下がきがすむと、パレットの上にチューブから絵のぐをだして、色をぬりはじめた。

二二九 ちゃぶ台をだして、食事の用意などをして、

二四五 目も、口も動かし、ときには、したをだしたり鼻がてんぐのようにとびだすこともある。

二五三 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔や頭がみえないようにする。

二五五 先生からいただいた絵はがきをだして見せますと、

二五七 〔略。〕といって、一まいの絵をひきだしからだして、見せてくださいました。

二八八 なにも、勇氣をだしてわすれてしまお

うとお思いになるにはおよびません。

二八八 けれども、力をだしてしごとのことをお考えになるのです。

二九四 うまよ人間のかさから耳をだして

二九六 少年は、ときどき大きな声をだして人々を呼んだり、

三〇二 やえ子、満ぼうがまた、おくの手をだしたよ、よわったなあ。

三〇四 だされたくつを見て、にこにここわらった私は、

三〇六 音もなくドアがあいて、半身をだした老婦人が、

三〇八 (ふたりの子どもに手をだしながら) さあ、どうぞ。

三〇九 助かる 〔助〕(五) 助かる 《一ツーラ》

三一一 どうせ助からないものなら、こういう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだ

三二〇 夏のさいちゅうに、あの雨のおかげで、かれるのが助かったことを考えてごらんさい。

三三〇 〔禪〕(名) 3 たすき

三三二 たすきに ならんで、がんがかえる。

三三三 里のおとめたちは、赤いたすきもかいがいしく、朝から集まってきた。

三三六 おびに短し、たすきに長し。

三三七 〔助〕(下) 2 助く 《クークル》

三三八 神は、みずから助くる者を助く。

三三九 神は、みずから助くる者を助く。

三四〇 助けを求めてなきさけぶ声も、いつか聞えなくなりました。

三四一 助けあう 〔助合〕(五) 1 助けあう 《一ツ》

三三二 学校では、組の友だちとなかよくして、助けあっていたと思います。

三四四 〔助船〕(名) 3 助け船

三四六 助け船は、いったい、なにをしているのだろう。

三四八 助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人たちが力をおとさないように、

三五〇 〔略。〕といって、おじさんはおばさんに助け船を求められた。

三六一 〔助〕(下) 16 たすける 助ける 《一ツ》

三六二 はなれてとべば安全なのですが、いまは、かつちゃんを たすけなければなりません。

三六四 「かみさま、どうぞ なかまを たすけてください。」と、おいのりをしました。

三六六 からだがじゅうぶんではないから、あとのものがじゅんじゅんに たすけていこう。

三六八 このあいだ、たすけていただいたかめでございます。

三六九 「助けて、助けて。」ありは大きな声をだしてさげました。

三七〇 「助けて、助けて。」

三七二 「助けて、助けて。」ありは、いっしょうけんめいにさげつづけました。

三七四 「助けて、助けて。」

三七六 助けて——雲のおじさん。

三七八 すぎの木のおばさん、助けて。」すぎ「あら、子どものかかしだね。

三七八 助けてくださいと、お願いしたところで、ゆるしてくれるみこみありません。

三九〇 くもさん、今夜は助けてください。

三九二 それまで、命を助けておいてください。

十 33 1 佐吉は、父の大作のしごとを助けてはたらいっていたが、

十一 61 2 さいいい近くの田で働いていた村の人たち助けられて、みんな、ぬれねずみのようになつて家に帰つた。

十四 50 2 おじょうさんの歌をたよりに、マッケンナがおよいで行つたように、やがて、一そうのボートが、やみをぬつて助けにきてくれました。

たずね ヲおたずね

たずねあぐむ 「尋港」(五) 1 たずねあぐむ 《一

十五 116 1 人間が地上に住みついてからこのかた、いつもたずねあぐんでいた道が、どうしてわかつたの。

たずねる 「尋」(下一) 51 たずねる 《一ネーネ

ル・ネレ》ヲおたずねする・おたずねる

二 33 3 略。』と、また たずねました。

三 72 5 略。』マイクルが たずねました。

三 74 2 略。』マイクルが たずねますと、

「略。』と、おかあさんがおっしゃいました。

三 76 7 略。』と、デビッドが たずねます。

三 76 10 こんどはマイクルが たずねました。

三 109 8 おじいさんとおばあさんはおどろいて、

そのわけを たずねました。

四 34 4 略。』先生に こう たずねられて、み

んなは、もう 一ど、かずこさんの 文を よみな

おしました。

五 73 4 略。』と たずねました。

五 90 3 略。』と たずねました。

五 91 8 略。』と たずねると、

六 28 2 このとき、戸のそとに、きりぎりすが二ひきたずねてきます。

六 28 10 略。』おや、だれか たずねてきたらしい。

六 73 1 略。』おとうさんに たずねられて、

「略。』と、とんでもない話をもちだしたので、

六 94 6 略。』みなもののに たずねるが、だれか、この

かたのつりばりをとつていったものはないか。

七 81 1 略。』むこうから、『略。』と、 たずねるので

ございます。

八 29 8 略。』天帝は、その男に たずねました。

八 49 8 幸福』が、いろいろな家へ たずねていき

ました。

八 49 10 だれでも幸福のほしくない人はありません

から、どこの家を たずねても、みんな喜んでむか

えてくれるにちがいありません。

八 50 9 この「幸福」が、いろいろな家を たずねて

いきますと、いぬのかつてある家がありました。

八 51 4 略。』と たずねました。

八 52 4 略。』と たずねました。

八 61 1 それに、たずねてくれるものも少ないし、

八 62 9 略。』と、 たずねてきた年よりのあひ

るがいった。

八 79 8 略。』と、あひるの子に たずねる。

九 53 4 略。』と たずねました。

九 56 4 いちろうは、きみがわるかったのですが、

なるべくおちついて たずねました。

九 59 5 略。』と たずねますと、男は、きゅう

にまじめになつて、『略。』と いいました。

十 14 11 略。』と たずねました。

十 16 7 太郎がそばへきて、外国ではどんなことば

を話すかと たずねるものだから、

十 17 1 略。』と、また太郎が たずねましたの

で、おとうさんは答えました。

たエジソンのもとを たずねて、養殖真珠のつくり

かたを、こまごまと話した。

十 51 7 「イライノ」といって、いぬに たずねて

いるのです。

十 73 3 略。』だんなは、あつけにとられてた

ずねました。

十一 61 7 略。』と たずねた。

十一 62 9 略。』このことを たずねたとき、なぜすなお

に『はい』といわなかったのだね。

十一 63 7 ナボリの大きな病院の門ぼんのまえへ

いって、一通の手紙をみせ、父親を たずねました。

十一 74 10 病人の上にかがんで、みやくをみたり、

略。』二こと三こと看護婦に たずねました。

十一 75 3 そのとき、少年は、勇氣をふるいおし

て たずねました。

十一 86 3 略。』と、父親は たずねました。

十二 6 すると、にわか雨が降りだしたので、近

くの家を たずねて雨具をかりることにしました。

十二 9 4 略。』と たずねますと、母は、『略。』

と いいました。

十二 10 7 略。』と たずねました。

十二 78 11 略。』と たずねました。

十二 80 4 こう、私が たたみかけるように たずねた

とき、

十四 19 3 略。』と たずねた。

十五 41 1 ローマ字は、『略。』その大もとを たずね

れば、エジプト文字から出たものである。

十五 52 11 びひカーネギー博物館に館長ホランド博

士を たずねるようになつておつた。

十五 54 11 私がこの博物館を たずねたおもしろな用事は、

十五 55 12 略。』そのころ日本を たずねた外人の中で、

富士山や磐梯山のいただきをきわめたのは、

十五568 ⑤ きょうは、はるばるたずねてみえたあなたへのごちそうに、〈略〉、私のはじめて会った日本人について話をしてあげよう。

十五6911 手紙のたびごとに、どうしているかとたずねられたのもそのはずだ。

だ・せる 「出」(下) 2 だせる 《―セル》↓おもいだせる・にげだせる

十三427 ⑤ 手紙がだせるようになったら、いっしょに、そのマンシェウの子どもに、お礼の手紙を書こうね……

十四482 こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。

ただ 「徒」(名) 9 ただ

一539 ⑤ いじのわるいけんかずきの人がひろうと、ただのいしころになってしまいました。

一619 ⑤ でも、わたくしがもつたら、ただのいしころになってしまわないかしら。

二241 ⑤ 先生、いものはのつゆは、あれ、ただの水でしょうか。

三1085 ⑤ 「これは ただの にんげんでは あるまい。」とお思いになって、

九824 せきふらしい物、土器らしい物、ただのわり石のような物などがたまっています。

九856 ⑤ つるつるみがかれていないから、ただのわり石のようにみえる物もあります。

九859 ⑤ じょうもん土器という種類で、こんなただのせとものかけらがと思うような物ですが、

九1248 念のため、もっと上流の本流の水を飲んでみると、もうそれはただの水であった。

十三597 ⑤ ただのおかあさんではなくて、キリストのおかあさんという感じが、よく出ている

ただ 「唯」(副) 40 ただ

三128 ⑤ ただ ひとことを しっかりと おぼえなさい。

四1225 ⑤ けれども、ただ 一つの のでんきゅうがないと、光ることができません。

四1228 ただ 一本の マッチでも、

六610 ⑤ ただ自分だけがこのように小さくて、なんの役にもたちそうにない。

六710 女の子はただじつとみつめていたが、やがてこの小さなねじをみつめて、

六1048 ただ、はながつまっているだけだが、そのために発音がすこしおかしい。

六1113 ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだけである。

六1337 ⑤ しかさん、ただ遊ぶんだよ。

六1338 ⑤ ただ遊ぶんじや、おもしろくない。

七3710 よこのわかい男の人が、ただひとり、わらいもせずに、両方の手でまどわくをおしています。

七454 ⑤ ただ、たいくつまぎれにひいたのです。

八229 ただ、腹の下のほうだけが皮にかくれています。

八337 ただ「遠い」という考えだけでは、この遠いきよりは、おしはかることはできません。

九129 ただ一つのたいこが、そのうちかたによつて、水の音にもなり、風の音にもなり、

九809 ⑤ ただ、あっちこっちほってみて、なんにもみつからないと、だめだと思つてやめてしまふ。

十209 ⑤ ただ白っぽくみえる太陽の光線ですが、わけてみると、こんなにさまざまな色になります。

十一91 ⑤ ただ、わかつているだけではなしに、いつもそのうえを考えていて、

十一6610 看護人は、少年をながめて、それには答ええないで、ただ、「略。」といっただけでした。

十一702 ただ、ひたいと弓形をしたまゆとのほかには〈略〉父親らしいところはありませんでした。

十一7912 が、ただ一つ、少年をなぐさめることがありました。

十二341 ただ、さるの人まねのように指を動かすだけでした。

十二3511 ただ、腹だちの原因がとりのぞかれたという満足を覚えたばかりでした。

十二559 文章に書きつづられて有名になったものもあるが、ただ人々のあいだで語り伝えられているだけで、〈略〉消えていってしまうものもある。

十二562 おじいさんやおばあさんから聞いた話を思いだして、書きのこしておくということは、ただおもしろみがあるばかりでなく、

十二896 感謝の心持をこめていうときと、ただとおりのあいさつとしていうときとは、

十二8910 そうでなかったら、ただ口さきでいうだけのことになる。

十二8910 ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。

十二902 どんなたつといことばでも、ただ口まねをして、おうむのようになえていたのでは、

十三1912 このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかありません。

十三3412 小さな子どもは、〈略〉、ただ美しいかざりのような気持で、れんをながめている。

十三444 ところが、このしばいは、舞台に出て来る人が、ただひとりです。

十四623 ただそれだけでは、なんのおもしろみもなく、ふしぎもないようですが、

十四627 ただ一ぱいのこの湯でも、

十四743 湯がひえるときにできる、熱ざとつめた

さとのむらが、どうなるかということとは、ただ、茶わんのときだけの問題ではなく、

十四84 1 ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、まことにきれいな形をしていること、

十四93 9 ただひと目でも、火の光とごちそうとを見るだけでも、満足したであろう。

十四99 5 この子にとって、ただひとりのしんせつな人であつたおばあさんが、

十五15 3 ㊦ ㊦ ただみればこれかきそのめぼらの花おどろきて見ればその花動く

十五23 9 人々はただ、「略」とさけぶばかりです。

十五89 5 ㊦ わたしたちは、ただもう、おまえさんがたを待っていたのです。

ただ「唯」(接) 6 ただ

九53 10 りすはもういませんでした。ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、

十五5 9 美しいものは、いまも、どこにでもある。ただ、その美しいものを、すなおに感じとる心を、われわれは失っている。

十三44 6 これでも、しばいになっています。ただ、あいてになる人が、見物人の目につかないだけです。

十四69 3 どれもこれもみんな、茶わんの湯にくらべるのはむりですが、ただ、「略」という一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

十四79 5 ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもとか、わからないことでした。

十五49 8 このような美術品を買い求めるようなものは、ほとんどいなかった。ただわずかに外国人がこれに目をとめて買うことがあるという

ただ「駄駄」(名) 1 だだ

十五62 3 大小二つのくつをちらと見た私は、たちまちふくれあがつてだだをこねだした。

ただいま「只今」(感) 3 ただいま

七28 1 ㊦ 「ただいま。」

七28 3 ㊦ おかあさん、ただいま。

十五59 2 ㊦ 「おかあさん、ただいま。」といって、学校から帰ると、

たたえる「称」 ㊦ ほめたたえる

たたえる「湛」(下) 2 たたえる「一エ」

十三19 1 かれは、その胸に國運回復の計画をたて、その顔にほほえみをたたえて、

十五76 7 博士は満面ににこやかなわらいをたたえながら、

ただおさん「人名」 4 ただおさん

一32 2 ただおさんのかいたことば。

一34 2 ㊦ ただおさんは、なにになってみたいとおもいますか。

二16 5 ただおさん みちこさん まことさん よし

二16 5 二 おさん はと まことさん

二20 2 よしこさん まことさん みちこさん

ただおさんたち「人名」 1 ただおさんたち

二16 3 ただおさんたちが、ことばあそびを

した。

たたい「戦」(名) 9 戦い

十二77 5 テニスコートには日本とメキシコの國旗が美しくひるがえて、きょうの戦いを物語っています。

十三17 9 樂園といわれるこの國も、千八百六十四年に、ドイツオーストリア二國との戦いに敗れ、

十三18 5 戦いは敗れ、國はけずられ、國民の意氣はしずみ、その活動はおとろえました。

十三18 6 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れない國民こそ、真にすぐれた國民でしょう。

十三19 3 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたたり、道路をつくったり、みぞをほったりするときに、

十三25 8 戦いによって失われたシュレスウィヒとホルスタインとは、すでにつぐなわれて、なおあまりあることになりました。

十五29 10 両方とも必死の戦いです。

十五31 6 それからは、必死にとびかかる大わしと、この勇ましい少年との戦いです。

十五32 1 その中で、女の子を後にかばいながら、少年は苦しい戦いを続けていました。

たたかいぬく「戦抜」(五) 1 戦いぬく「一イ」

十二86 9 心おきなく戦いぬいた両選手のために、たたかう「戦」(五) 9 戦う「一イ・ウ・ツ」

十一16 8 わたしをまもるためには、どんな困難とも戦う、そのうで。

十二81 8 三時間もぶつとおしに戦いました。

十二81 9 たおれてはおき、おきては戦いました。

十二81 10 二少年のことを思つては、ふるいたって戦い、とうとう五セットで勝つことができました。

十二86 5 両選手はしのぎをけずつて戦いました。

十三19 6 ユートランドのあれ地と戦い、これを豊かな土地にしようとする大計画をたてました。

十四83 4 「雪國」は、北國の人たちが雪と戦っているようすを、映画にしたものである。

十五32 5 ようやく道を見つけて、この鳥と少年との戦っている岩角近くまで来ました。

十五32 6 戦っている人と鳥とはむちゅうです。

たたき ㊦ ひとたたき

たたきおとす「叩落」(五) 3 たたき落す「一サ・一シ」

九39 6 上の方のかれ枝をじゅんじゅんにたたき

落し、

九43 7 自分は、こうもりのために、高いところからたたき落されたが、

十五102 1 かねをたたき落し、屋根をもちあげるほどの喜びをこしらえているのですよ。

たたきおとせる 「叩落」(下) 1 たたき落せる

《一セ》

九40 5 木が動くので、かれ枝はなかなかたたき落せませんでした。

たたきかた 「叩方」(名) 1 たたきかた

九10 3 たいこのたたきかたによって、いろいろな心持をあらわすことができるし、

たたきつける 「叩付」(下) 2 たたきつける

《一ケ・一ケロ》

十72 7 6 おまえは、だんがだいにしているあの湯飲み茶碗を、庭石にたたきつける。

十二35 8 どうとうかんしゃくをおこして、新しい人形を手にとって、ゆかにたたきつけました。

たたく 「叩」(五) 31 たたく 《一イ・一カー・キ・

一ク・一ケ》

四112 8 おもしろい、おもしろい。手をたたいてよろこびます。

五53 4 えらいわね。」といって、手をたたいてやりますと、

五53 5 まさこも、まるくふとった手をたたきました。

六18 4 たいこをたたいているもの、

六18 5 シロフォンをたたいているもの、

六23 5 きりぎりすのシロフォンをひとたたきたい

て、《略》。

六23 9 たいこのきりぎりす たいこをドンドンとたたいて、

「略」。

六28 9 ふたりでたのめば、なんとかなるだろう。」

きりぎりす一が、戸をトントンとたたきます。

六124 1 石でたたいて、わっているのさ。

七11 7 じょうずなできばえをみたとき、感心して、思わず手をたたきます。

八6 10 「ピオ。」とよんでひざをたたくと、ひざ

の上にのび乗ったり、

八30 10 そのせつな、けんぎゅうは、うしの首をかるくポンポンとたたきました。

八86 7 たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、

おかみさんは手をたたいておこった。

八92 3 子どもたちは、手をたたいておどりまわった。

九11 3 はじめに、川の水の音をたたいてきかせてくれた。

九11 9 つぎに、風の音をたたいた。

九14 4 ゆめからさめるときには、音などはけつしてするものではないが、やはりたいこをたたく。

九112 1 みんなは思わず手をたたいた。

九133 9 あみにつきあたってほしいへんと、くもが思ったとたんに、ぼさりとこうもりの羽にたたかれました。

十一22 1 毎晩、家に帰ってくると、《略》、わらをたたいてわらじを作りました。

十一27 6 たいこをたたいて、家から家へやってきます。

十二6 9 こういつて戸をたたきますと、おくから

ひとりの少女がでてきましたので、

十二75 6 トントントン、トントントンと入口をたたく者があります。

十三30 12 「ジャン、ジャン、ジャン」と、はげし

くたたいておいて、てのひらで、きゅうにどらをおさえるので、

十四79 2 はじめ、うらのほうをかるく四つに割って、あとは、十文字の小さな木ぎれはさんで、

チョンチョンとたたいて、みごとに割っています。

十五64 8 おじさんは道ばたにしゃがんで、自分の

せをたたきながら、《略》私によびかけた。

十五68 1 かねがふるしてあって、これでたたけというように、しゅもくがそえてあった。

十五68 3 「《略》。」とよんだつもりで、私はかね

をカーンとたたいた。

十五75 1 テーブルをたたいて立ちあがった老博士は、

十五104 12 鼻を指ではじいたり、ひら手でたたいたり、

十五109 9 「母の愛の喜び」を手をたたいてむかえます。

ただし 「話手」 2 ただし

三4 5 ただし「山。」みんな「山、山。」

三4 9 ただし「山の山びこ。」

ただし「正」(形) 10 ただし「正しい《一イ・一ク》ひきそくたしい

四39 10 6 たたしい ことばは、いつも、あなたがたのいいお友だちになったり、先生になつたりしてくれま

九113 4 午後は、先生について、ひとりひとり、正しいすべりかたを教

十一11 1 6 いいコックスが日本を正しい方へつれていくのさ。

十一17 5 いま、わたしが知っているいいことと、正しいことは、おかあさま、あなたの目から教え

られました。

十二556 傳説には、正しい歴史にもついていたものもあるが、

十二698 どんなにはたらきがあつても、それにあつみと廣さがなかったら、正しくりっぱに世の中をわたることができない。

十二1159 歩調がそろつたときに、はじめて、日本が正しい、美しい國となることができよう。

十三88 深い、正しい知識を得るには、

十四410 そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。

十五429 日本のことばをもっとも正しく、もっとも簡単に書き表わす方法がないものであろうか。

ただしさん (人名) 2 ただしさん

二108 ただしさんは、「略」といいました。

四218 国 わたくしは、ただしさんをねらつて、

わの中へもぐりこもうとしました。

ただしちゃん (人名) 10 ただしちゃん

六1152 ただしちゃんが、そばから、「略」といいました。

六1154 ただしちゃんは、海外からひきあげてきた子で、來年小学校へあがります。

六1155 糸を持ったただしちゃんは、「略」といつてにこにこしました。

六11511 「略」と、ただしちゃんがいきました。

六1163 「略」といいますと、ただしちゃんは喜んで、

六11711 「略」と、いろいろ考えましたが、ただしちゃんのわらい顔をかくことにしました。

六1183 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつづいたら、ただしちゃんの顔が、生き生きとうきあがってきました。

六1204 国 これ、ただしちゃんにあげるの。

六1205 国 ただしちゃん、大喜びでしょう。

六1209 国 かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃんのところへ持つていつてあげるんだ。

ただす [正] (五) 1 ただす 《一サ》

十一618 その夜、また父にきびしくただされて、太郎は、やつときょうのことを、ありのままにう

ちあげた。

たたずむ [佇] (五) 2 たたずむ 《一ミーン》

十二318 この日の午後、私はなんとなくものを待つ氣持で、じつとげんかんにたたずんでいました。

十五531 とちゅう、あるいはミシガン湖のほとりにたたずみ、あるいはナイアガラの水をながめ、

たたみ [畳] (名) 3 たたみ

五915 みると、ざしきのまん中のたたみをやぶつて、のびているたけのこがありました。

五921 国 そこで、ゆかいたをはがして、たたみのまん中にあなをあけてやつたら、

十五116 国 ガラス戸の外にかいおく鳥の影のガラス戸すきてたたみにうつりぬ

たたみかける [畳掛] (下) 1 たたみかける

《一ケル》

十二803 こう、私がたたみかけるようにたずねたとき、少年たちは、「略」。

たたまこむ [畳込] (五) 3 たたまこむ 《一マ》

十二918 樂しかったさままなことが、こまかに、この文の中にたたまこまれてにちがいない。

十二9112 太郎と同じ文であるが、その中にたたまこまれていることは、太郎とはちがっている。

十二9211 しかし、たたまこまれているなかみはそれれちがって、
ただよう [漂] (五) 2 ただよう 《一エーツ》

十一336 国 だいの花にあかつきの 色ただよ

えぼ勇ましく、すきくわ持つて野にいそぐ。

十一685 大きなへやはうす暗く、あたりにははげしいくすりのにおいがただよっていました。

たち [立] 1 おおゆうだち・こだち・すだちする・

なかだちする・はらだち・ゆうだち

たち [達] 1 あいこくしやたち・あそびともだち・

あなたたち・あねたち・あのこたち・ありさんたち・ありたち・いもうとたち・うおたち・うさぎさんたち・うさぎたち・おうえんしやたち・おおきな

よろこびたち・おかあさんたち・おじさんたち・おとうとたち・おとこのこたち・おとめたち・おとも

だち・おまえさんたち・おまえたち・おやたち・おんなのこたち・おんなのひとたち・かぞくたち・か

わぐちのこどもたち・がんたち・きみたち・けらいたち・けんぶつにんたち・こういんたち・こうふく

たち・こどもさんたち・こどもたち・ことりたち・こびとたち・さいこうせいたち・さかなたち・さん

ちゃんたち・じぶんたち・じぶんたちいじよう・しやしやうさんたち・しやうじよたち・しやうねん

たち・しんじゆしやうたち・すずめたち・せみのこたち・せんせいたち・せんどうたち・そつぎようせい

たち・そふたち・だいがくしやたち・たろうさんたち・ちやじんたち・つばめたち・ていまいたち・

でしたち・てんにんたち・どうぶつたち・ともだち・ねずみたち・のうふたち・はくちやうたち・は

はたち・はんちやうたち・ひつじかいたち・ひとたち・ひなたたち・ひみずつちはたち・びようにん

たち・ふじんたち・ふとつたこうふくたち・ぼうさんたち・ボーイさんたち・ぼくたち・まごたち・むし

たち・むすめたち・めくらたち・めしつかいたち・ものたち・よつちゃんたち・よろこびたち・りよう

しんたち・れぐほんたち・わたくしたち・わたくし
たちじしん・わたしたち

たち「**太刀**」ひひとたち

たち「**性質**」(名) 1 たち

八692 あれは美しくはありませんが、たちはほんとうにいいんです。

たちあが「**立上**」(五) 17 たちあがる 立ちあがる 《「**ツ・リール**」》

四572 かっちゃん、立ちあがって、はばたきをしたので、みんなは、大よろこびでした。

五245 とうしたら、ひとりの人が立ちあがって、『略』。』といって、みんなを立たせ、

七308 さあ、はるお、いっしょに遊ぼう。」立ちあがりながら、なにげなく、ししくびんをみる。

七854 もう帰ってもよろしい。」旅人は、うれしそうに立ちあがる。

八623 「略。」といいながら、親あひるは立ちあがった。

十539 ふり向くと、いぬは、立ちあがって、のそりのそりと、どこかへいくところでした。

十722 「略。」といいながら立ちあがり、

十一443 それをみよう、父兄の人たちは、自分の席で立ちあがります。

十一7312 医者が、まだとなりのベッドをはなれないうちに、少年は立ちあがりました。

十二1612 文雄は立ちあがってすこしはなれたところからじっとみつめた。

十二266 民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、

十二284 民ちゃんはうれしそうにいて、その包みを取りあげると、よろこびと立ちあがりました。

十二292 立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二

足ほど歩きました。

十三1811 このとき、希望をいだいてたちあがったひとりの軍人がありました。

十四387 一人の立ちあがって、「夜が明ける。」

十五597 その関係を物語る私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、つと立ちあがって、

十五751 テーブルをたたいて立ちあがった老博士は、

たちおうじようさ・せる「**立往生**」(下二) 1 立ちおうじようさせる 《「**セ**」》

十四869 風にあおられた雪のむれが、道を消し、木をおり、汽車を立ちおうじようさせ、

たちおよぎ「**立泳**」(名) 1 立ちおよぎ

十四487 一本の大きななるたに、なんんかの婦人がつかまって、立ちおよぎをしていました。

たちきる「**断切**」(五) 3 たち切る 《「**ツ・ラール**」》

十二811 母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切っていました。

十二97 小まがが学問のちゅうとで家に帰ってくるのは、ちようど、織物をちゅうとでたち切ると同じことです。

十四391 暗いとばかりが、たち切られる。

たちこめる「**立籠**」(下二) 1 たちこめる 《「**メ**」》

十一409 色雲がたちこめて、さとはしぐれがしとしと降るに、

たちさる「**立去**」(五) 3 たちさる 《「**リール**」》

二516 きゆうに走ってたちさります。

六307 なんどもお礼をいってたちさります。

七8511 あまり遠くへいかないうちに。」甲乙ふたり、いそいでたちさる。

たちさわぐ「**立騒**」(五) 1 たちさわぐ 《「**グ**」》

九114 川波がザワザワとたちさわぐところである。

たちすくむ「**立竦**」(五) 1 立ちすくむ 《「**ミ**」》

十一8110 少年は、するどいさけびをあげて、その場に立ちすくみました。

たちどまる「**立止**」(五) 11 たちどまる 立ちどまる 《「**ツ・リール**」》

二483 それから、となりのへやへいこうとして、きゆうにたちどまります。

五467 たちどまると、鳴き声がやんだ。

八4710 王子はふと立ちどまって、その声に耳をかたむけました。

九5510 いちろうは、だんだんそばへきました、が、びっくりしてたちどまってしまいました。

九927 こんどは負けたりしたちどまって待っている。

九967 なんだ。」と立ちどまる。

十259 立ちどまって、両手をひろげて深呼吸。

十一688 その大きなへやはしまでいくと、看護人は、一つのベッドの頭の方に立ちどまって、

十一738 その人たちは、しんさつをはじめ、一つ一つのベッドのそばに立ちどまりました。

十四886 足がつめたくなって、立ちどまったためであろか。

十五434 銀座通りをアメリカの一しろうこうが歩いてたが、ふと、ある店先で立ちどまった。

たちなおる「**立直**」(五) 1 たちなおる 《「**ツ**」》

十二8410 もう然とたちなおって、電光のようなボールをうちだしました。

たちならぶ「**立並**」(五) 2 立ちならぶ 《「**ブ**」》

六371 ビルディングが立ちならんでいる町。

六三八 立ちならぶビルディングのあいだから、と

びあがつてくる親子のつばめ。

たちのぼる「立上」(五) 6 たちのぼる《一ツ・

リ》

三二七 すると、ふしのくすりをやいたけむりが、山の上からいつまでもいつまでもたちのぼっていました。

四二四 白いけむりがたちのぼり、元氣でわかいうらしまは、みるみるしらがのおじいさん。

五三九 どのえんとつかからも、けむりが、むくむくとたちのぼっています。

八七六 青いけむりが、くらい木のあいだから雲のようにたちのぼった。

十四六五 熱い湯ですと、湯げの温度が高く、まわりの空気にくらべてずっとかるいために、どんなとさかにたちのぼります。

十四六七 湯げは、《略》、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、また、たちのぼります。

たちはじめ「立始」(名) 1 立ちはじめ

十二二七 立ちはじめには、物を持たせると立つことができると、だれかがいった

たちまち「忽」(副) 8 たちまち

六二七 りゆうずをまわすと、いままで死んだようになつていたかいちゆう時計が、たちまち、ゆかいそうにカチカチと音をたてはじめた。

八三九 まず、いすにおすわりになりました。いすはたちまちこがねにかわりました。

八八六 あひるの子は《略》、牛乳なべの中へとびこんだ。たちまち、牛乳がへやの中に流れたので、

九二一 いく千というつばめたちは、人をおそれず、へやにはいつてくる人があると、たちまち、その

かたや、頭や、手にとまりました。

九二七 たちまち先生のからだは、ちゆうにうかんだ。

十六六 ところがふいてくる風にあたっても、たちまち死ぬといわれるくらいだ。

十五一四 風くればばらはたちまち火となれりゆれにゆるるか照りそう風に

十五二二 大小二つのくつをちらと見た私は、たちまちふくれあがつてだだをこねだした。

たちむかう「立向」(五) 1 立ち向かう《一ウ》

十五八八 『はちきれそうなわらい』で、口は耳までさけているし、だれもそれに立ち向かうものはないのですよ。

たちよる「立寄」(五) 1 たちよる《一ラ》お

たちよる

九七五 もうすこしで貝づかに着くというところで、先生は一けんの農家にたちよられました。

たつ「立」(四五) 99 タツ たつ 立つ《一タ・一チ・一ツ・一テ・一ト》いさみたつ・おた

つ・きわだつ・すだつ・つたつ・とびたつ・なみだつ・ならびたつ・なりたつ・ふりたつ・まいた

つ・まさにたつべし・めだつ・もえたつ・やくだつ・わきたつ

一三〇 たつ、あるく、はしる。

一四三 よなかに 目を、あけると、おとうさんがそばに たつていました。

二五七 おかあさんのよこに、三人が立ちます。

三三九 へやのすみに、かれ木が立っています。

三六六 ゆげがもうもうとたつています。

三三二 こどもは石の上に立ち、「《略》。」といいました。

三九五 この一まいの紙が、いろいろなかたち

になったり、ふくれたり、立ったりします。

三三三 きもちのわるいときでも、はらのたつときでも、

四九六 ひととはきはいて、うちにあがつておいでになると、ひたいからゆげがたつ。

五二四 ぼくは、はっと思つて、すぐ立つて、その人をすわらせてあげました。

五二六 男の人は立つてください。

五二六 みんなを立たせ、不自由な人や、女や、子どもたちをすわらせました。

五三七 えんとつがたぐさん立っています。

五三九 ねてばかりいたのが、はうようになり、立つようになり、あるくようになって、

五九一 おじいさんが帰ると、りっぱな家がたつていました。

五七三 みると、まえに住んでいた、ふるい小さな家がたつていました。

五九六 「《略》。」といつて、手おけをさけて、うらのいどばたに立ちました。

六六三 あれはなんの役にたつのだらう、

六六九 ひとかどの役目をつとめて、世の中の役にたつのに、どれもこれも不足はなさそうである。

六七一 ただ自分だけがこのように小さくて、なんの役にもたちそうにない。

六九五 「それでは、自分のようなものでも、役にたつことがあるのかしら。」と喜んだが、

六二九 自分もほんとうに役にたっているのだ。

六三二 「へへのへ」の顔で、風に向かって立っている。

六四九 ここに立つて、お月さまを枝のあいだからみてごらん。

六65 6 はたらくときはよこになり、休むときは立つものはなかに。
 六87 10 図 そのごてんの門のそばにいどがあつて、そのそばには、大きな木が立っています。
 六88 7 海のごてんの門のまえに、大きな木が立っている。
 六133 5 しかさんは、のっそりと立って、山の方をみあげました。
 七14 2 ゆく手に、まつの木が立っています。
 七15 7 「はがたない。」
 七40 5 三郎は、だれかにゆずってもらった座席の上に立って、
 七41 5 目をさますと、向こうの席にひとりの青年が立っていた。
 七90 6 うさがうしろ足で立ちました。
 八5 4 デパートのまえのうすくらがり、大ぜい人が立っているの、
 八51 11 こんどは、にわたりのいる家のまえへいって立ちました。
 八52 2 いやなものでも家のまえに立ったように顔をしかめて、「略。」とたずねました。
 八53 7 こんどは、うさぎのかつてある家のまえへいって立ちました。
 八54 1 その家の人がでてみると、まずしいこじきのようなものが、おもてに立っていました。
 八58 9 「略。」とおっしゃって、さきに立ってお歩きになった。
 八58 10 みはらし台に立ってみると、
 八70 7 あわれなあひるの子は、立っていたほうがいいか、歩いていたほうがいいかさえも、わからなかった。
 八74 10 大きないぬがそのすぐそばに立っていた。

八77 1 風がひどいので、あひるの子は立つこともできず、
 九29 3 図 うらがれにおろされ立てる子どもかな
 九60 1 そくに、やまねこが、「略」、みどり色の目をまんまるにして立っていました。
 九60 2 やっぱりやまねこの耳は立ってとがっているな、と思ひながらみていると、
 九75 2 いちろうは、自分のうちのまえに、どんぐりをいれたますを持って立っていました。
 九88 1 舞台の中ほどに大きな木が一本立っている。
 九97 8 たかぎ、首をさすりながら、その場にぼんやり立っている。
 九105 4 のだ先生が先頭に立たれ、
 九109 3 急停止すると、ぱつと雪けむりが立ち、あせばんだ顔に、雪のこなが降りかかる。
 九110 7 はげしい制動をかけられると、もうもうと雪けむりが立つ。
 十19 4 ひとりの子どもが、立って本を読んでいる。
 十23 9 新しい家のたった町、ふみきりばんのおじいさん。
 十33 9 このあいだに立って、佐吉をはげましたり、なぐさめたりしたのは、母であった。
 十49 7 図 ワンワン タッタ——ハナガ サイテル
 十68 2 さきに立った太郎かじゃが、思いきつて、からかみをひきあげました。
 十70 2 べつにどつきもたらず、かえって、うまさうなあまいにおいがして、
 十14 7 川上の方をながめると、近くの町の工場のとえんとつが、なん本も立っているのがみえる。
 十110 7 図 さあとうとうと、ひとりで責任をしょって立つ、トップをこぐ人もいるだろう。
 十121 5 金次郎は、「略」、働きつけているので、

役にたたないことはありませんでした。
 十一22 8 図 わたしがみなさんのお役にたたないですみません。
 十一33 3 図 かきのわか葉に日の照るころは、矢車からからこいのぼり、村のわら屋の庭に立つ。
 十一38 4 図 村道に立つ大のぼり、ゆききの人もえ顔して、その足どりもいそいそと。
 十一41 9 図 池にむすぶはうすごおり、庭に立ったはしも柱。
 十一44 2 みんな元氣のいい返事をして立ちます。
 十一47 5 ぼくは、船のかんばんに、おかあさんとふたりで立っていた。
 十二4 7 ある日、祝賀会の席で、人々がかわるがわる立ってコロンブスの成功を祝しますと、
 十二5 3 これをきいたコロンブスは、つと立って、テーブルの上のゆでたまごをとり、
 十二5 9 人々は、「略」と思ひながらやってみましたが、もとより立とうはがありません。
 十二8 8 そのとき、母ははたを織っていました、孟子の顔を見ると、つと立って、
 十二27 7 立ちはじめには、物を持たせると立つことができると、だれかがいった
 十二34 5 「すわる」「立つ」「歩く」など、すこしばかりの動詞も知りました。
 十二37 2 私は、身動きもせず、立ったままで、全身の注意を先生の指の動きにそそいでいました。
 十二60 9 このとき、高どのに立っていた長者は、
 十二68 1 のこぎりののはは、いつもやすりをかけて右と左によじつておかないと、なんの役にもたたない。
 十二69 4 しかし、いつも勉強してみがきをかけていないと、じき、役にたたなくなる。

十二73 10 芭蕉は、につこりわらって立っていました、

十二95 6 だれも話し相手がないので、しょんぼりと校庭に立っていると、

十二108 2 仁王さまは寺の門に立って、ほとけさまをおまもりします。

十三51 2 母うしのそばに立ってるんだが、〈略〉、母うしがしたでなめると、よろけるんだよ。

十三59 4 せいの高いマリヤがキリストをだいて立っていると、

十四66 6 だって以来、一分間も、おかあさんのことを考えないではいられませんでした。

十四123 3 それに、ランプは、かさなしでもりっぱに役にたちます。

十四31 5 そういうちっぽけな考えでは、とても世界の中にはたつていません。

十四59 3 土が立ちました。「ぼくは、いちばんじみなものです。」

十四62 10 第一に、湯の表面からは、白い湯げがたつています。

十四67 2 土のしめつてるところへ日光があたつて、そこから白い湯げがたつことがよくあります。

十四72 12 あの「かげろう」がたつのは、〈略〉氣流のむらが、光をおり曲げるためなのです。

十五17 8 文 誰 わが祖國、やがて立つべし。

十五18 2 文 誰 ああ、日本、まさに立つべし。

十五20 2 氣持のいい、小さなホテルがここかしこに立っています。

十五21 4 まっ白な服をつけた少女の立っているようなけわしい山が、
十五53 6 館長室の前に立った私は、
十五56 4 誰 そこで、山のいただきに立った私は、

十五71 9 町の東にある寺の一角に、こけむす一つのおほか、その前に立ったおばさんは、

十五88 10 チルチル、すこし横の方に立っているひとりの「幸福」を指さして、

十五106 11 誰 その後に、『もののわかる喜び』が立っていますが、

十五108 2 誰 つま先で立って、やっと見えるくらいのところにいる人、だれなの。

たつ 経 (五) 19 たつ 《チーツーツ》
二70 5 すこし たつて、かげのほうで、〈略〉。

「略」という声がする。
三12 1 一年たちました。

三22 5 なん年からたつうちに、このくすのきは、いままでみたこともきいたこともないほど、

大きな木になり
四24 5 誰 みつちゃんがいなくなつてから、もう半年もたちますね。

五55 2 三十分ぐらいいしかたつていなかったのに、もうすっかりくらくらなつていて、

五72 2 それから三日ほどたつて、おばあさんはおじいさんにいました。

五74 11 それから一週間もたつたころ、おばあさんは、おじいさんをよんでいました。

七25 3 誰 たまごをとつてしらべてから、なん日ほどたっているかしら。

七26 7 それから、いく日かたつたある日の午後。
八20 3 七年の月日がたつたころ、せみの子たちは、

〈略〉、もう大きくなりきつたことを知ります。
八32 9 一年の月日がたつて、いよいよその日になると、

八76 4 なん時間もたつてから、ようやくあたりをみまわし、

十一73 3 半時間ばかりたつと、ベルの鳴る音がきこえました。

十二34 7 けれども、物にはそれぞれ名まえのあることを知ったのは、先生がおいでになつてからいく週間もたつてからのことでした。

十二35 4 私は、いつまでたつても区別ができませんでした。

十二40 1 ケラーは、生まれて一年半ほどたつたとき、大病にかかつて、

十三21 10 西種のもみは、たがいにならんで生長し、年がたつてもかれないで、よくしげりました。

十四15 12 誰 そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早くたつてしようから

十五66 4 それからいく年たつても、せつくがくるごとにその人形をかざつて、

たつお (話手) 3 たつお
三7 8 たつお「おうい。」

三7 10 たつお「みんなあつまれ。」
三8 4 たつお「わになろう。」

たつおさん (人名) 1 たつおさん
四22 7 たつおさんは、「にいさん」にあてて文を書きました。

だっこ (抱) (名) 1 だっこ
十五111 4 誰 いいえ、これは、おまえたちのほおずりと、おめもと、だつこと織つたのですよ。

だっこくき 脱穀機 (名) 1 だっこくき機
七65 3 あつちでもこつちでも、だっこくき機。

たつこさん (人名) 1 たつこさん
四84 10 すると、みきこさんのいもうとの たつこさんが、それにあわせておどりました。

だっこ: する (抱) (サ変) 1 だっこする 《ーシ》
十60 3 おかあさんが、あかちゃんをだっこして、

おもての通りへでていらつしやった。

たっしや「達者」(形状) 1 たっしや

五64 9 会 おとうさんも、おかあさんも、こうして、まいにち、たっしやで生きていけるのは、だれのおかげだろう。

たった(副) 8 たった

四120 7 会 たった一つの でんとうですが、この光をだすために、どれほどたくさんの人が、はたらいている ことでしょう。

六81 10 会 たった一日だけでいいのです。

九49 1 会 まわりの山は、みんな、たったいまできたばかりのように、きれいにありあがつて、

十一28 4 会 このとき、金次郎はたった十六でした。

十二27 1 会 たった九十センチぐらいのところでも、

十二70 6 会 芭蕉はたっただひとりで住んでいて、なにかにつけて不自由であらうから、

十四94 11 会 その両手をあたためるために、一本のマッチで——ほんのたった一本のマッチで、火をと

ともすことができたならば、どんなによからうか。十五73 10 会 廣い食堂にみちびかれ、博士とたったり、しずかに食事をしたが、

たったする「立」(サ変) 1 立ったする「—シ」

十二28 12 会 さあ立ったして。」立ちあがると、民ちゃん

は、はじめて二足ほど歩きました。たっちする「立」(サ変) 3 タッチスル たっちする「—シ」

五5 3 会 さあ、はいはいをして、たっちして、村にでましよう、町にでましよう。

十49 5 会 ワンワンチャン タッチシタ——

十53 3 会 「ワンワンチャン タッチシタ」といって喜びました。

たって(接助) 9 たって

六40 5 会 帰るといったって、あんな遠いところ——でも、もう一どあの村に帰りたいなあ。

七34 5 会 そんなにおしたって、だめですよ。

九64 4 会 なんといったって、頭のとがっているのがい

ちばんえらいのです。九66 5 会 なんといったって、頭のとがったものが、

いちばんえらいんです。九98 6 会 つかなくたって、いいよ。

十17 4 会 『こんにちば。』なんていったって、だ

れもわかるものがありません。十四32 2 会 星を見たってなにになる。

十四59 10 会 花さん、あなたが、どんなに美しくさ

いたって、ぼくがとびまわって、かふんをなかだちしてあげなかつたら、実は一つもつかなかった

のですよ。十五108 5 会 まあ、どうあなたがやってみたって、

あれをすっかり見るには、まだ小さすぎますよ。だって(接) 11 だって

二42 2 会 そんなきなことばをつかうもの

ではないよ。」たろう」だって、だれかがばかにするんだもの。」

三65 7 会 だって、もりへでたいんだもの。

四45 2 会 だって、かっちゃんがおしまいにして

くれていったから、そうしたんじゃないか。四97 10 会 かわいそうだから、はなして おやり。」

子ども四」だって、ぼくたちがつかまえたのでもない。」

五27 1 会 だって、電車のおかげで、あんな遠いところ

まで、一日でいって帰ってきたのですもの。五63 1 会 だって、おかあさん。こやしをやったり、

手をやったりしたじやありませんか。

十三39 8 会 だれかと思ったんですよ。だって、お

ばさんたら、お客さんなんておっしゃるんだもの

十三41 4 会 うん、氣のどく——そんな、だって、

いまだこの家でも二けんぶんも、三けんぶんもの

人が、寝とまりしているんだよ。

十五99 11 会 チルチルすこし困って、「だって、ほ

んとうに、ぼく知らない。

十五100 10 会 (ほかの「幸福」ども、どつとわらい

ずれる。) だって、チルチルさん。十五107 2 会 あれは、いつでも、兄弟の『なにも

のわからない幸福』をさがしているのです。」

チルチル」だって、ぼく、その兄弟にあつたよ。

だって(係助) 34 だって

二42 6 会 おまえがきれいな ことばで いえ

ば、あちらだって、きれいにいうさ。

五62 9 会 このきゅうりだって、あさがおとおなじ

ですよ。六72 9 会 死んでいたら、ころがったおれるわけ

だ、目だつてつぶつてしまふだろうし、八65 4 会 ほかのものは、一わだつてこんなすがた

をしていない。九58 5 会 四年生だつてあんなには書けないでし

う。九88 10 会 ぼくだつていやだ。

九89 9 会 ぼくだつてやるよ。

九95 9 会 なんだつていいじゃないか。

九98 10 会 ぼくだつて、すみをみつけてやったじや

ないか。

十15 2 会 フランスだつて、きれいなところもあり、

きたないところもあり、日本も、やはりそれとお

りですから。十一10 12 会 船ばかりではなく、あの町でも、あの

工場でも、また、日本の國全体だって、同じこと
だと思ふ。

十二196 会 あなただってその実をそんなに美しく

なさるには、ご苦心があたりだったでしょうね。

十二223 会 どんな絵の大家だって、一心にけいこ

をして、じょうずになったのだろう。

十二4310 会 この人形だって、みんながねしずまっ

たあとで、動いているのかもしれないよ。

十二443 会 はははは——でも、動く人形だってあ

るよ。

十三383 会 おばさんだって、このごろちつとも來

てくだらないじゃないですか。

十三418 会 それに、うちはやけなかったから、本

だってたくさんある。

十四4210 会 どんな暗い日だって、それが明かるく

してくれる。

十四439 会 どんなさびしい日だって、それが元氣

にしてくれる。

十四448 会 心に太陽をもて、そうすりゃ、なん

だってふつとんでしまう。

十四5810 会 いまのお話の養分だって、水にとけて

いるから、根から実まで運んでいけるのですよ。

十四5812 会 空から降る雨、あれだって水ですよ。

十四596 会 さっきから問題になっている養分だっ

て、みんな私がわけてあげたのです。

十四596 会 水だって、ためておいてあげたのです。

十五836 会 青い鳥だって、〈略〉、この人たちのな

かまにまよいこんでいないともかぎらない。

十五9712 会 ここだって、どこだって、やはり、お

金持よりびんぼう人のほうが、ずっと多いのだよ。

十五9712 会 ここだって、どこだって、

十五10012 会 ぼくたちは、いつだって、あなたのま

わりにいるのですよ。

十五1124 会 私は、いつだってこの着物を着ている

のよ。

十五1127 会 母親はだれだって、子どもをかわいが

るときにはお金持なのですよ。

十五1141 会 おまえのせわをしているときは、いつ

だってこんなに白くなつて、光がさすのにね。

十五1157 会 どんな子だって、おかさんはひとりぎ

りです。

十五1158 会 それは、いつだって、同じおかあさん

で、

十五1158 会 いつだって、いちばん美しいおかあさ

んなのだからね。

たっといー [尊] (形) 1 たっといー 《—イ》

十二902 会 どんなたっといーことばでも、ただ口まね

をして、おうむのようにとなえていたのでは、そ

のことばは、すこしの力も発きしないから

たっといー [尊] (五) 1 たっといー 《—バ》

十二10211 会 夢殿の観音といつて、いまでも、多くの

人々からたっといーばれている作品です。

たっといー (副) 2 たっといー

七692 会 たっといーと、春は、小さな川にまで、あふ

れている、あふれている。

十一362 会 くわをかついで田をみまわれば、日は

また照つて水たっといーと、

たつまき [竜巻] (名) 1 たつまき

十四676 会 そうして、大きなうずができ、それが、

ちようどたつたつまきのようなものになつて、

たて いてだて

たて [盾] (名) 2 たて

九248 会 日本に春がくると思うと、もう矢もたても

たまらず、北をさしてすすむのです。

十419 会 うめは、いつもこのわる口のたてとなつて、
幸吉をかばい、

たて [縦] (名) 2 たて

六1191 会 紙のうらには、まん中に、ま四角に切つた

ときにつけたすじがたてについています。

八222 会 あめ色のせなかに、たてのすじがはいり、

われめができました。

たていと [縦糸] (名) 1 たて糸

十345 会 佐吉が、はじめに目をつけたのは、ぬのを

織るとき、たて糸のあいだをぬっていく横糸で

あつた。

たてなおし [建直] (名) 1 建てなおし

十三189 会 苦しいときにうちかつことのできる國民

だけが、國の建てなおしという大事業をなしとげ

て、さかえるのであります。

たてはじめる [立始] (下二) 1 たてはじめる

《—メ》

六117 会 死んだようになっていたかいちゅう時計が、

〈略〉カチカチと音をたてはじめた。

たてぼね [縦骨] (名) 2 たて骨

六1189 会 骨は、たて骨とよこ骨の二本です。

六11811 会 まず、たて骨からはじめました。

たてめぐらす [立巡] (五) 1 立てめぐらす 《—

シ》

十三268 会 この家も、高い土べいを立てめぐらし

ているので、

たてもの [建物] (名) 1 建物

十二1043 会 これは、九百年ほどまえに作られた平

等院^{どういん}という建物の中にある名高いほうおう堂^{ほうおうだう}です。

たてよこ [縦横] (名) 1 たて横

十四739 会 湯のおもてに、にじの色のついた、きり

のようなものがひと皮かぶさつており、それが、

ちようどさけめのようにたて横にやぶれて、
たてる「立」(下) 42 たてる 立てる「一テ・

一テル」あおりたてる・うちたてる・おいたて
る・おたてる・くみたてる・さかだてる・さわぎた
てる・なきたてる・はやしたてる・ふりたてる・も
りたてる・よびたてる

一253 たねまきする人、いえを たてる人、さ
かなをとる人、きしやをはしらせる人。

二687 もっとしずかに。」みんな、きき耳を た
てる。

三1097 十五夜が ちかくなつたある夜、かぐや
ひめは、とうとう声を たてて なきだしました。

四488 「あいたつ。」と、声を たてました。

四826 まつの 木の 枝を 立てて、色紙で おつた
つるや、ふうせんを 上げました。

四831 ほそいろうそくも 立てました。

五1024 水が、ジャー、ジャー、ジャージャーと、
音を たてて 流れているのをきいて、

六171 「略。」と、大きな声を たてました。

六1106 それでばくは、思わず声を たてて わらつて
しました。

六1398 「略。」と、われがねのような声を たて
ました。

七126 あさがおのつるがまきつくように立ててあ
る、竹や木のことをいうのです。

七1410 「腹を たてるな。」

七244 はい、だいこんの葉 どうして、葉を
砂の中に立てるの。」兄「かれないようにさ。」
七3010 おやつ、おかあさん、おかあさん。」大き
な声を たてる。
七401 とうとう、うれしそうに、声を たてて わら
いました。

七511 「略。」と、大声を たてる。

七796 いや、あちらで、あかしを たててもらお
う。

八1210 「ピオのはか」と書いた、小さなせきひを
立ててやりました。

八938 すると、つばさがサラサラと音を たてた。

九1201 水は大きなごろごろした石ころのあいだか
ら、ブツブツと音を たててわきだして、

九1215 茶のうまさば、お茶そのもののうまさにも
よるが、たてる湯のうまさがいちである。

九1211 ところが、てんりゅう川の中流の水をく
んで、それで茶を たててみると、

九1223 舟をやとってこぎのぼりながら、ところど
ころでその水でお茶を たてる。

九1268 泉をくんでつれの茶人と茶を たてて、

十一528 電車は、歯ぎりりでもするように車の音
を たてて、あらしの中をつき進んでいく。

十一903 医者ほ、病人の上に「略」うつむいてい
ましたが、やがてからだをまっすぐに立てました。

十二55 「みなさん、ころみにこのたまごを
テーブルの上に立ててごらん下さい。」

十二511 コロンブスは、コッソリとたまごのはしを
テーブルにうちつけて、なんの苦もなく立てて

十二133 文雄は、庭のかたすみに三きやくをすえ、
がかを立てて写生をはじめた。

十三191 かれは、その胸に國運回復の計画を たて、
その顔にはほえみを たたえて、

十三137 ユートランドのあれ地と戦い、これを豊
かな土地にしようとする大計画を たてました。

十三297 「チャカチャン、チャカチャン」と、か
るやかな、はずむような音を たてる。
十三301 「ボーン」と、かわいらしい音を たてる。

十三308 その中で、いちばんさわがしくて、大き
な音を たててやってくるのは、さるまわしである。

十三334 「キリキリ、リリリリ」ときしみながら、
かん高いひびきを たてる。

十四972 まるやきの鳥が、ほかほかとあたたかい
いきを たてて、テーブルの一方におかれてあつた。

十四975 やいた鳥は、肉を切るナイフとホークと
をせなかに立てたまま、テーブルからとびおりて、

十五2111 それがコトコトと音を たてて下の方まで
落ちていくのを、

十五231 一わのやまわしが、サアツという羽音を
 たてて、「略」、みんなの上へ舞いおりて來ます。

十五232 「あっ。」という声を たてて、みんな
「略」、思わずたおれてしまいました。

十五318 そのたびごとに、鳥はさけび声を たてて、

十五10411 わんぱくこぞうのようなのが、聞きとれ
ないさけび声を たてて、

たとい「仮令」(副) 4 たとい
十四1512 たとい、からだはこちらにいても、こ
のまごころを書いてお送りして、せめてものおな
ぐさめにしたと思っています。

十四508 しかし、たとい、名まえはわからなくて
も、あの美しい歌は、いまでも、われわれの耳にひ
びいてくるように感じられるではありませんか。

十四7710 竹を割るとき、もとのほうから割ろうと
すると、たとい、はじめにまん中になたをいれて

も、「略」横の方へそれてしまつて、

十五781 たとい世間の考えとちがつていても、そ
の発表をためらつてはならない。

たとえ「仮令」(副) 7 たとい

十六7410 たとえ動いても、それだけでは命があると
はいえないと、ごろろは思ひつきました。

六七八(三) たとえ動かない木でも、草でも、命をもっているのだよ。

八八三 土の中は、たとえ一二センチ歩くにも、トンネルをほっていかなくてはなりません。

十3912 たとえ、はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もとのままになっていた。

十一785 たとえわからなかったとしても、病人がなんだかうれしそうにその話す声に〈略〉耳をかたむけているようにみえたからです。

十三186 たとえ戦いに敗れても、精神的に敗れない國民こそ、眞にすぐれた國民でしょう。

十三3210 たとえ、鳴りものであると、呼び声であらうと、トンネルのようなホートンには、それが、ふしぎなほどよくひびきわたる。

たとえば〔例〕18 たとえ

八八4 たとえ、「いっぴつつけいじよう」と歌ったり、「ツンツンつっこばし」とさえずったり八911 たとえ、近所のねこやのらねこが通りかかって、にげるところか、向かっていこうとさえるのです。

十293 たとえ、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあみかたか、

十二4711(四) たとえ、〈略〉絵をかくより、写真のほうがずっと便利なかだけれど、

十三95 たとえ、花のおしべとめしべとの関係についていうと、

十三103 たとえ、移轉するのに、方角がよいとかわるいとかいい、

十四239(四) たとえ、ここにあげたことばの中でも、クレヨン、ズボンフランス語、

十四2412 たとえ、ラジオといっしょに、「ラジオ

オ」ということばがはいり、

十四275(四) たとえ、〈略〉漢語は、たいてい大陸からきたことばだ。

十四745 ただ、茶わんのときだけの問題ではなく、たとえ、湖や海の水が、冬になって、表面からひえていくときには、どんな流れがおこるかというようなことにも関係してきます。

十四754 たとえ、森と畑とのさかいのようなところですと、

十四768 もうひとまわり大じかけになって、たとえ、アジア大陸と太平洋との間におこると、

十四868 たとえ、ふぶきなどもその一つである。十五367 そこでたとえ、数という形のないものを表わすのに、線を横に一本引いたり、

十五376 たとえ、「日」と「月」をあわせて「明」が作られ、

十五3810 たとえ、「上・下・生」などの読みかたをちよつと考えてみただけでも、このことがすぐ理解されよう。

十五396 かたかなは漢字の一部分をとって作ったもので、たとえ、「江」から「エ」、

十五398 ひらがなは〈略〉、たとえ、「い」は「以」、「は」は「波」、「に」は「仁」というように、漢字の全体をくずしたのから作りだしたものである。

たとえよう〔書様〕(名)2 たとえよう

三1029 そのうつくしさは、たとえようもなく、家のすみずみまで光りかがやくほどなので、

十四891 半年も雪にとざされていた地上に、ぽちつと黒い土が見えはじめたときの喜びは、たとえようがない。

たどりつく〔辿着〕(五)2 たどりつく《一い

―キ》

六1369 ぶんぶんおこりながら、びっこをひきひきてつべんにたどりつきました。

十五6711 おどる胸をおさえながらたどりついたげんかんには、

たどる〔辿〕(五)4 たどる《一ツール》

九1211 しかし茶人は、いろいろな困難をしのいで、みんなをばげましては上流へたどっていった。

十二1153 このような歩みをたどってきた日本を、これからどうもりたてていけばいいでしょうか。

十三111 これらの人がみな同じ性質をもち、同じ運命をたどるとは、考えられない。

十五457 日本の手工業も、〈略〉、つぎつぎと近代的工業の道をたどっていくようになった。

たな〔棚〕(名)2 たな 1 ガラスとだな・ちゃだな・とだな・ぶどうだな・まきえしよだな

六639 つかまえて、たなにあげたら、あぶくをだしておこった。

十692 おしいれのたなのすみに、だいじそうにしまってあった、一つのまるいつぼをみつつけ、

たなか〔田中〕(人名)1 田中

十五127 田中――

たなかさん (人名)3 たなかさん 田中さん 田中さん

五844 たなかさんは、おしぼをたくさん作るといういました。

十四187 すると、窓ガラスをふいていた田中さんが、「略」といった。

十四195 田中さんが答えられないでいると、高山くんが、「略」。

たなごころ〔掌〕(名)1 たなごころ

十五185(四) ああ、日本、まさに立つべし。きみ

たちのそのやわらかきたなごころもて。

たなばた 「七夕」(名) 1 たなばた

四四八 七月は たなばた。

たなばたものがたり 「七夕物語」(名) 1 たなばたものがたり

八三五 あのだなばたものがたりのはたおり星は、

二九・五光年ですから、

たなびく 「棚引」(四五) 6 たなびく 《イ・ク・ケ》

二六五 〇 やあ、かすみが たなびいている。

二六六 〇 たなびいている、きれいな かすみ。

三六〇 〇 たなびく かすみ。

四六五 うすむらさきの 雲が、おだやかに たなびいていました。

三七七 〇 さかんな春のきざしは、よもにあらわれて、目に見えぬかすみのように たなびいている、

一五二 〇 〇 ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長く たなびける見ゆ

たに 「谷」(名) 13 たに 谷

四四八 〇 山の上を高くとびこえて、たににさしかかったとき、

四七六 〇 た——高い山、ひくい たに

六六四 〇 お友だちと遊ぼうと思って、山の谷を歩いていきました。

六六九 〇 うさぎさんたちは、谷をわたり、みねを一つこえました。

六八四 〇 あの谷をわたるときに、ちゃんとみつけたのだ。

九三六 〇 〇 ぼくの家からは十五六分ほど登るのですが、そこは、深い谷になっています。

九五一 〇 水がふえのように鳴ってとびだし、すぐたきになって、ゴウゴウと谷に落ちていました。

九一九 〇 近道をして谷をおりてくると、

一四七六 〇 これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。

一五一九 〇 氷河が無言の流れをきさんでいる深い深い谷の上を、

一五二一 〇 男の子は、小石を見つけては深い谷の中へなげこんで、

一五二七 〇 アルプスの深い谷の中を、大わしは、《略》、下へ下へとおりて行きました。

一五三二 〇 大わしは、《略》、くるくる舞いをして、下の方へ、谷の中へ落ちて行きました。

だに (副助) 1 だに

一二七 〇 〇 「七重八重花はさけどもやまぶきのみのひとつだになきぞ悲しき」という古歌に、

たにあい 「谷間」(名) 1 谷あい

九一〇 〇 はじめは二列ですんだが、谷あいでは一列になったので、ずいぶん列が長かった。

たにがわ 「谷川」(名) 7 谷川

六四八 〇 谷川にそって、山のふもとにでてきました。

九四九 〇 いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷川にそった小道を、上の方へ登っていきました。

九五五 〇 いちろうがすこしいきましたら、谷川にそった道は、もうほそくなってきてしましました。

九五二 〇 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木

の森の方へ、新しい小さな道がついていました。

九六三 〇 そこで氣をつけてみると、右岸からさらさらと流れ落ちる小さな谷川がある。

九六五 〇 そこで、谷川をさらにさかのぼると、岩まからちよろちよろとわきでる泉があつて、

一三三七 〇 〇 はるかな谷川を聞いているその耳もとに、たにそこ 「谷底」(名) 2 たにそこ 谷底

五八二 〇 〇 高い山からたにそこみれば、うりやなすびの花ざかり。

一五二六 〇 〇 一こくも早く谷底の地面へおりてしまわなければならない。

たにま 「谷間」(名) 6 たにま 谷ま 谷間

五四九 〇 山のでっぺんのすぐちかいところ、小さい

たにまに、小さいいずみ、

五四四 〇 小さいたにまに、小さいながれ山から川のあかんぼが生まれる。

八五三 〇 すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。

九三六 〇 〇 山からおりるとき、この谷まの流れには

いって、頭から水をあびるのが楽しみでした。

九二五 〇 〇 大きな岩がごろごろとゆくてをふさぎ、まつ林におおわれた道もない谷まになった。

一五二四 〇 〇 一つまちがえは、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落ちこむのでした。

たにん 「他人」(名) 3 他人

一四四四 〇 〇 他人のためにもことばをもて、なやみ、苦しんでいる他人のためにも。

一四四四 〇 〇 なやみ、苦しんでいる他人のためにも、

一五七八 〇 〇 ひとりの人間にとって眞実であるものは、他人にとっても眞実だからである。

たぬきさん 「狸」(名) 6 たぬきさん

一四二四 〇 〇 それはたぬきさんでした。

一四二四 〇 〇 たぬきさんは毛をぬらしてなにかあわてています。

一四二七 〇 〇 「どうしたの、たぬきさん。」

一四三〇 〇 〇 たぬきさんが、ま顔になつていうので、

一四三六 〇 〇 うさぎさんたちは、たぬきさんがかわいそうになりました。

一四三六 〇 〇 それをみて、たぬきさんは、「略。」と、

大声でわらいました。

たね〔種〕(名) 12 たね 種 なたね

三116 4 ふしのくすりと 手紙は、かえって かな
しみを ます たねになるばかりでしたので、
四67 5 お正月までに、ことばあそびの たねを た
くさん こしらえて おきましょう。

四95 3 よくも あんなに 雪の たねがある もの
だ。

五43 10 手 そのたねをこんどお送りします。

五60 5 会 おまえが、たねをまいたのでしたね。

五60 8 会 たねをまいたから、こんなにさいたので
すね。

五61 2 会 そのたねからめがでなかつたら――

五62 9 会 たねはおかあさんがまいたのだけれど、

七20 6 会 そのうち、たねをとるために、一本だけ
のこしておきましたら、

十一28 11 その油を自分でとりたいと思い、となり
のおばさんから一にぎりのあぶらの種をかりて、
かわらへいって、あき地にまいておきました。

十四61 7 会 しかし、いちばんいい種を、來年もわ
すれずにまいてもらうことができさえすれば、

十四82 9 まかぬ種ははえぬ。

たねまき〔種蒔〕(名) 7 たねまき 種まき

一25 2 たねまきする人、いえを たてる人、さ
かなをとる人、きしやを はしらせる人。

三57 7 会 たねまき、たねまき。

三57 7 会 たねまき、たねまき。

三58 8 会 たのしい たねまき。

八98 6 種まきのときとちがつて、こんどは深くた
がやしました。

十22 8 ひとりの友だちは、その兄といっしょに種
まきをしている。

十一39 6 会 おおむぎ・こむぎの種まきすんで、そ
らまめ・えんどうみなまいた。

たねもみ〔種籾〕(名) 4 種もみ

八96 6 ひたさない種もみをまいたところには、べ
つにしろしをつけておきました。

八96 9 種もみから黄みどりのめができました。

八97 3 ひたさない種もみからも、やつとめがでて
きました。

八106 7 ですから、1つぶの種もみから、やく15
00つぶもみができたわけです。

たねもみひたし〔種籾浸〕(名) 2 種もみひたし

八94 3 きょうは、種もみひたしをしました。

八96 1 種もみひたしをしてから、ちょうど10日め
でした。

だの(並助) 9 だの

一46 1 かたのだの、てっぽうだの、あぶないも
のはみんなとりあげられてしまいました。

一46 1 かたのだの、てっぽうだの、

八13 7 「チロリン。」だの、「チイチイチン。」だ
のと鳴いているほおじろの声をきくと、ピアノのす
がたがありとうかんできて、

八13 7 「チイチイチン。」だのと鳴いているほお
じろ

十三56 10 会 レオナルド・ダ・ビンチだの、ミケラ
ンジェロだのという天才の集まっていた、美術の
中心のフロレンスで、研究しているうちに、

十三56 11 会 ミケランジェロだのという

十五82 8 金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭に
いっばいつけています。

十五82 8 金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭に

十五82 8 金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭に
いっばいつけています。

十五82 8 金だの、眞珠だの、宝石だのを、

たのし〔楽〕(形) 1 樂し 《ーシ》

十一35 1 会 いねはそだつし、あぜまめのびて、ふ
くすず風に夕はん樂し。

たのしい〔楽〕(形) 49 タノシイ たのしい 樂
しい 《ーイー・カッ・ーク》

三58 8 会 たのしい たねまき。

三107 7 会 ちょうも 小鳥も たのしそう、きょうは
あなたの 花まつり。

三38 7 たのしい 学校にしましよう。

三99 8 会 みなさんが大きくなってから、それを
みるのは、ほんとうに たのしい ものですよ。

四63 6 あんしんして、たのしい あさごはんを た
べました、

四81 3 会 きょうは たのしい クリスマス。

四116 1 会 いやいや、たいへん たのしい 思いを
させて いただきました。

五39 2 手 ほっかいどうは、いまがいちばん たのし
いときです。

五40 3 手 きゅうにあたりが美しくなると、私は、
なんだか、ぼんやりするほど たのしい 氣がします。

五47 3 いつも通るこの小道、たのしい 小道だ。

五48 3 いっ通っても、いつも たのしい、この 小道。

五49 1 いい氣持がして、たのしく なった。

六19 10 会 こんな 樂しいときは、二どとありません
ね。

六20 11 みんな、樂しそうに それを たべます。

六21 2 会 美しい ぶどうに、かがやくりんご、 樂し
い われらきりぎりすの 生活――

六23 10 会 ここで 樂しく あそんで おいで。

六40 8 森や、小川や、いな田などの、きれいな、
樂しかった 思い出が、うかんでは きていく。
六49 9 会 樂しい ことがある ような、ああ、さわや

かな朝の空。

六58 2 「楽しい学級は、かべ新聞から。」

六60 4 園 タノシイコトガ——七 アルヨウナ——

五 アサワヤカナ——七 アサノソラ——五

七43 5 園 きょうは、楽しい旅行をしております。

七43 6 園 楽しい音楽をきかせてくださる心持を、

ほんとうにありがたく思います。

八31 10 ふたりは、毎日野原で楽しく遊びつづけま

した。

八32 11 ふたりは、天の川で楽しくあうことができ

ました。

八55 1 うさは、高いびきをかいて、さも楽しそ

うに晝ねをしていました。

九42 6 園 苦労してかいこんした畑のいもをほりお

こすのは、楽しく、うれしいことでした。

九46 10 園 楽しく元気で勉強してください。

九112 11 お晝になったので、雪の上で楽しくおべん

とうをたべた。

十6 6 心がけひとつで、われわれは、〈略〉毎日

の生活を、ゆたかに、楽しくすることができ

十9 12 木の葉が黄色くなるので、いなかの子ど

もにとっては、もっとも楽しい季節でした。

十31 3 ぼくがいるので、みんな楽しい氣持になる

ようにできないものでしょうか。

十一36 8 園 夕風ふけたいこ鳴り、清い歌声あち

こちと、こよい楽しいぼんおどり。

十一72 1 家族の者が、その旅に楽しい希望をかけ

ていたことや、

十二45 9 園 人間のしはいとちがって、みていると

別世界にいったような楽しい氣がするよ。

十二48 7 園 そのうえ、手がるでおもしろい、自

分で作って自分で動かすのは楽しいものだよ。

十二91 7 楽しかったさまざまなことが、

十二96 9 なつかしいことや、楽しいことや、とき

には悲しいことなどもあるでしょう。

十三5 12 新しい勇氣や空想をもって、春は、また、

楽しい船出のほぬのを、高くかかげる季節。

十三27 10 ここに住んでいる子どもたちにとっては、

かけがえのない、楽しい遊び場所であり、

十三38 12 その間に、ぼうしをぬぎ、指先でくるく

るまわしながら、楽しそうなようす。

十三49 7 牧場が、生き生きしたみどりであらい、

きりぎりすが、楽しい景色の中でわらう。

十四39 5 園 わたしたちの、楽しい朝がくる。

十四88 9 雪國でいちばん楽しいものは、なんと

いっても、春さきの雪どけごろである。

十四100 3 けれども、前よりはもっと楽しそうなよ

うすをしていた。

十四101 9 うれしそくに、楽しそくに、上の方へ、

〈略〉、寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、

十五21 1 見るもの聞くものがことごとくめずらし

く、ゆかいな楽しいものでした。

十五45 1 すすめられたいすにかけて、楽しそうに

語りだした。

十五122 4 うれしいような、楽しいような、悲しい

ような氣持をだいて、この日記のふでをおこう。

十五123 5 楽しい六か年の思い出を残してくれたこ

の運動場、この校舎、あの農園、

たのしいこみち 〈題名〉1 たのしい小道

五47 1 たのしい小道

たのしげ 〔案〕(形状) 1 楽しげ

八27 2 そこには、星のかんむりをつけたむすめた

ちが、楽しげに歌ったり、花つみをしたりして

たのしさ 〔案〕(名) 3 楽しさ

六24 10 園 こんな楽しさも知らないで、氣のどくな

ありさんたちだよ。

六27 9 園 はたらかないものには、この楽しさ、こ

の喜びはあじわえないだろう。

七62 3 四年生の楽しさよ。

たのしみ 〔案〕(名) 11 楽しみ

六25 8 園 楽しみはいよいよよくわかり、喜びはさら

にたかまる。

六66 7 どんなふうにお話がすすんでいくか、楽し

みではありませんか。

六69 8 第二号がどんなふうになるか、楽しみです。

七29 10 園 ぼくは、学校から帰ると、だいこんの

はっぱを、とりかえてやるのが楽しみだ。

九33 2 園 この湖へつりにいくのが、いちばんの樂

しみです。

九36 8 園 山からおりるとき、この谷まの流れには

いって、頭から水をあびるのが楽しみでした。

九41 4 園 秋になって、ぼくは山へいくのが楽し

になりました。

十二56 10 みそ五郎は、雲仙岳^{うんぜんだけ}にこしかけて、〈略〉、

まえの海で顔をあらうのを楽しみにしていた。

十二71 9 芭蕉はからだがよくないので、寒さは身に

こたえました。雪をみるのが楽しみでした。

十三42 10 園 きょうはとまるだろう……うん、楽し

みにしているよ……

十四28 7 私は、なにか大きな楽しみをもったよう

な氣持になって、家に帰ってきた。

たのしむ 〔案〕(五) 8 たのしむ 楽しむ 《

マ・ミ・ム・モ・ーン》

三92 4 こうえんにさいたきれいな花は、みんな

の心をたのしませてくれます。

四58 7 〈略〉。こういって、かつちゃんはた

のしんでいました。

六201 窓 おおいにうたい、おおいにひいて、この夏の日を楽しもうではないか。

六244 窓 楽しむために生きているんじゃないか。

六1045 ぼくとおかあさんは、かわるがわるこの望遠鏡をのぞいて楽しんだ。

九1268 泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、心から楽しんだということである。

十一54 それにあきると、そのボートをながめては、いろいろな話をしあって楽しむ。

十三2712 冬は冬で、風あたりの少いホートンの廣場に、子どもたちがたむろして、日だまりを楽しみ、

たのむ「頼」(五) 24 たのむ 頼む 《マ・ミ・ムー・メ・ン》

二345 窓 『略』と、六人のめくらが、ぞうつかにたのみました。

三1046 「略」と思って、みんないっしょうけんめいにおじいさんにたのみました。

四518 窓 「わたしが おんぶしましょう。」「たのむよ。」

五702 窓 金のさかなのところへいって、たのんでおくれ。

五725 窓 金のさかなに、〈略〉、女王になりたいってたのんでおくれ。

五752 窓 金のさかなにたのんでおいで。

六286 窓 ふたりでたのめば、なんとかなるだろう。

六2911 窓 どうかたのみます。

九1363 ちょっと待ってください。」と頼みました。

九1364 こう頼まれると、だまってたべてしまうわけにもいきません。

十123 「略。」と、おとうさんが頼みましたら、

少女たちは、手をとりあってとんでいって、

十134 それから、三人の少女に、歌を歌ってほしいと頼みました。

十一55 ついせんだって、大学生に頼んで乗せてもらったうれしさで、まだむちゅうになっている

十一117 窓 頼んで乗せてもらおう。

十一196 村の人たちが困って頼みにくると、氣持よく、物をわけてやったり、

十二72 「略。」とたのみました。

十二6110 それからというものは、いり用のときはいつもここへきて、岩屋の入口で頼んだ。

十二6111 そうしてよく日いつてみると、頼んだ品物がちゃんとそろってならんでいた。

十二624 そののちは、だれがなんと頼んでも、かしてくれなくなったという。

十二779 休けい場にもどつてくると、中國人らしい十二の兄弟にサインを頼まれました。

十二781 その少年たちは、じょうずにえい語をつかって頼みました。

十四10010 「略。」と、女の子はいっしょうけんめいにたのんだ。

十五324 少女の両親たちが、そのへんにいたひつじかいたを頼んで、大急ぎでおきて来たのです。

十五458 プリンクラーが、日本政府から頼まれて、鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって来たのも、そのころのことであった。

たのむしい「頼」(形) 2 頼もしい 《ク》

十一4510 そうして、弟の心持を頼もしく思いました。

十一463 まちがったとき、思いきってやりなおした、その勇氣を頼もしく思いました。

たば「束」(名) 5 たばしいとたば・はなたば・

みたば

十586 うちに帰って、十まいずつたばにして、赤いひもでいわえて数えました。

十588 そうしたら、たばが十あって、五まいあまりました。

十四9311 女の子は、手にマッチの小さなたばを一つつ持っていた。

十四9910 女の子は、またもう一本のマッチを、そばのたばの中からひきだした。

十四1006 急いで、たばの中にあつたマッチをみんな一時につけた。

たばこ「煙草」(名) 4 タバコ

十四2210 それから、タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、外國語であつたとお話しになったので、

十四2312 窓 タバコ、カルタはポルトガル語、

十四251 タバコとともに、「タバコ」ということばが、伝えられたということがわかった。

十四251 「タバコ」ということばが、伝えられた

たはた「田畑」(名) 1 田畑

十二5812 おには約そくをまもって、そののちはもう田畑を荒らすようなことはなくなった。

たび「度」(名) 13 たびいいたび

三1089 そののち、みかどからたびたびお手紙をくださいましたので、かぐやひめも、そのた

びにごへんじをさしあげておりました。

六335 風を受けるたびに雲のからだのかっこうがかわる。

七351 汽車がゆれるたびに、前後からおされて、

七543 そのたびに、「略。」という声がおこった。

八582 山のおねを曲がるたびに、美しい大きなけしが目のまえにひらけてくる。

九399 手 のぼるたびにぐらぐら動くので、思わず

木にしがみついたりしました。

九四〇〔手〕 なたをふりおろすたびに、すぎの木は大きくゆれました。

九四六〔手〕 山へいくたびに、めずらしい小鳥がみつかるからです。

九七〇〔手〕 そのたびにお礼はいたします。

一七六 日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。

一四六五 湯げは、えんの下やかきねのすきまから、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、

一五二八〔手〕 おまえがにっこりするたびに、わかくなるですよ――

一五二八〔手〕 おまえたちがほおずりをするたびに、私の着物に、月と日の光がさしてきてね。

たび「旅」(名) 21 たび 旅↓わたくしのたび

四四三 三十ぼのがんは、まいにちまいにち、北へむかってたびをつづけていました。

四五六〔手〕 ぼくたちのたびが、あんまりおくれるから。

四二四〔手〕 長い長いでんせんをつたわって、ここまで たびをしてきたのです。

一五三 私、いまから旅にでかけます。

一五五 けれども、このままでは旅はできません。

一五五 これは、汽車の旅にきつぷがいるのと、おなじことです。

一五九 汽車のきつぷは、遠い、近いによって、ねだんがちがいますが、私は、三十銭でどこへでも旅をすることができます。

一五五 旅のひわも、大よろこびで、声をあわせてうたいました。

一五七 旅のひわが、「へ略。」といいました。

一五八 旅のひわは、おどろいて、すぐにまつの木

の上へにげていきましたが、

一五八 けれども、旅のひわは、そのままとんでいつてしまいました。

七四二 ぐくありふれた曲であったが、旅をしてきた私には、しみじみときかれた。

七四四〔手〕 わたしは、終戦後、いつも心ざびしい旅をしていました。

九二四 茶人は、長い探求の旅が終りに近づいたことを知って喜んだ。

一四二 旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。

一七二 家族の者が、その旅に楽しい希望をかけていたことや、

一四四 四十日の旅じゃつかれただろう……うん、読んだ。

一四六 私は短い旅をしたあとで、七時にパリーに着きました。

一五二 彼の出版の用事かたがた、東部諸州へ見学の旅にのぼった。

一五三 ポストン、ニューヨーク、ワシントンと無事に旅を進めて、

一五二 新しい旅の門出、希望をもって。

たびごと「度毎」(名) 4 たびごと

一七四 病人のふとんをなおしたり、「へ略、うなるたびごとにかがんでみたり、

一五九 食事のたびごとという「いただきます」「ごちそうさま」にしても、

一五三 七 そのたびごとに、鳥はさけび声をたてて、手紙のたびごとに、どうしているかとたずねられたのもそのはずだ。

たびする「旅」(サ変) 3 旅する「へシ」

七二 私がさばくを旅していますと、砂の上に

らくだの足あとがつづいていました。

一三 七 ああ、われわれみんな、遠い國から旅してきた旅人のような氣持のする日だ。

一四八 雪が、どこで、どのようにしてできたか、どんな天空を旅して降ってきたか、

たびたび「度度」(副) 4 たびたび

一〇二 それからというものは、おじいさんの竹の中には、たびたびこがねがはいっていました。

一〇六 おじいさんは、かぐやひめにこのことをつたえてたびたびすすめましたが、

一〇八 そののち、みかどからたびたびお手紙をくださいましたので、

一四一 五 おかあさん、これからたびたび手紙をあげることにしましょう。

たびと「旅人」(話手) 16 旅人

七五 八 旅人「もし、もし。」

七五 九 「あなたですか。」旅人「あなたがたは、なにかさがしておいでのようなだが――」

七六 三 旅人「もしや、あなたがたは、らくだをにがして、それをさがしていられっしゃるのではありませんか。」

七六 八 旅人「そのらくだは、かた目ではありませんか。」

七七 二 旅人「そうして、左の足が一本短くて――それから――」

七七 六 旅人「そうそう、そのらくだは、まえ歯が二三本ぬけてはいませんか。」

七八 一 旅人「それから、つけた荷がありましたね。」甲「ありました。」

七八 三 旅人「その荷は麦でしょう。」

七八 六 旅人「いや、わたしは、そのらくだをみた

のではありません。」

七七八 旅人「いいえ、みたのでも、きいたのでもありません。」

七七五 さあ、けいさつしよへ、いっしよにいつてもらおう。」旅人「そんな。」

七七二 もしあるなら、ここで、はっきりいうがいい。」旅人「はい、申しあげます。」

七七五 旅人「それは、こうです。」

七七八 旅人「それは、かた方の足あとが、一つおきにあさくなっていましたので。」

七八四 旅人「草をくいとったあとをみますと、かみきれないで、のこっている葉がありました。」

七八四 それについて、なにか。」旅人「それはほかでもありません。」

たぴびと「旅人」(名) 14 旅人

七四七 人 甲と乙、ほかに、ひとりの旅人。

七五七 そこへ、ひとりの旅人がやってくる。

七六七 旅人は、おちついたことばつきで、旅人「そのらくだは、かた目ではありませんか。」

七七一 旅人は、思ひだすようなふうをして、旅人「そうして、左の足が一本短くて

七七八 どこでみましたか。」旅人は、それには答えがないで、また思ひだしながら、

七九二 あなたは、そのらくだを、どこかへつれていったのにそういない。」旅人はおどろく。

七九七 いや、あちらで、あかしをたててもらおう。」ふたりは、旅人の両手をとる。

七九八 人 旅人。

八〇一 旅人と甲乙が、ならんでいる。

八二七 旅人をみて、裁判官「なにか、そちらにも、いいぶんがあるかね。」

八五八 もう帰ってもよろしい。」旅人は、うれし

そうに立ちあがる。

七八六 旅人「あなたがたふたりが、あの旅人をうたがったのも、むりはない。」

七九二 あんないなかはつまらないと、わるくいう旅人もありますが、

八〇七 ああ、われわれみんな、遠い國から旅してきた旅人のような氣持のする日だ。

ダビンチ ↓レオナルドダビンチ

リユー・ジェー・ホランド博士

八五二 あの有名な「ちようるいずふ」の著者ダブリー・ジェー・ホランド博士、

たぶん「多分」(副) 5 たぶん

八四七 たぶん、その少年は、小学校のいちばん上の学年か、(略)ぐらいでしたしょう。

八六九 たぶん、遠いところに家族があるのでしょう。

八八四 たぶん、とちゅうでこわれるだろうということでしたが、

九〇三 たぶん、あなたがたも、あの鳥、どこにかくれているか、ごぞんじないでしょうね。

九二四「喜び」は、たぶんここでいちばん純潔なものでしょう。

たべのこし「食残」(名) 1 たべのこし

九三三 文 旅人「たべのこしめしつづまげばうちつどうすずめの子らと日なたぼこする

たべのこす「食残」(五) 1 たべのこす 《一シ》

七八九 まえにたべのこした古い草は、ふみつけるだけで、ちつともたべません。

たべはじめる「食始」(下) 1 たべはじめる 《一メ》

八三〇 うしは、うまくふみとどまって、おとなし

く草をたべはじめました。

たべもの「食物」(名) 2 たべもの

四五六 きず口もだんだんよくなり、(略)たべものも、おいしくたべるようになりました。

六二七 旅人「そのおかげでさ、(略)、たべものもじゅうぶなたべられるというわけだ。」

たべる「食」(下) 79 たべる 《一ベ・ベヨ・ベル》

一五六 おべんとうをたべて、ちよつとうとうとすると、きしやはもうついていました。

二五二 たべる あめですか。

二五四 たべる あめです。

二七六 「口からたべて、おなかからだすものはなにあに。」

二九四 それから、じろうは、りんごを たべようとしています。

四〇八 くわのはが、やわらかで、光っていて、おかいこさんでなくてもたべたいようです。

三六九 五人の子どもはゆうごはんをたべていました。

四一四 にわとりが、かぶのはっぱをたべている。

四三七 わたくしは、たべたくてしょうがありませんでした。

四五六 みんながはこんでくるたべものも、おいしくたべるようになりました。

四六六 あんしんして、たのしいあさごはんをたべました。

五二七 あさごはんのとき、はたけではじめてとれたきゅうりをたべました。

五八二 じゆくさないものをたべないようにすること、

五82 6 なま水をのまないことや、ねるまえにたべないことや、
 五95 3 ㊦ すりえをこしらえて、たべさせてみよう。
 五95 4 たまごのきみですりえをこしらえて、たべさせてやりました。
 六21 1 みんな、楽しそうにそれをたべます。
 六27 7 ㊦ そのおかげでさ、〈略〉、たべものもじゅうぶんたべられるというわけだ。
 六72 4 その日、晩ごはんをたべながら、ごろうはこんなことを考えました。
 六123 1 うさぎさんは、くるみをひろって、石でわってたべることにしました。
 六123 4 ㊦ このくるみを持っていって、山のとつべんでたべよう。
 六124 7 りすさんは、両手に、くるみをにぎって、おいしそうにたべました。
 六140 1 ㊦ おいしい肉がたべられる。
 六141 7 ㊦ おれが、いまたべようとしていたところだ。
 六143 1 おなかのすいた五ひきのうさぎさんは、だいすきなクローバーをたべました。
 七23 1 ㊦ 子すずめ、あおむしをたべるの。
 七29 6 ㊦ それは、すずめたちにたべられないためだと、おかあさんが教えてくださった。
 七64 2 みんな、おべんとうをたべている。
 七83 5 ㊦ 道のかたがわの草ばかりたべてあったからです。
 七86 8 草をやったら、3びきとも、せっせとたべました。
 七87 1 うさぎはどんな草を、いちばん喜んでたべるか、しらべてみることにしました。
 七87 8 うさぎは、にんじんを、とても喜んでたべ

ました。
 七88 3 にんじんとじゃがいもをやったら、黒と白が、けんかをしてたべました。
 七88 6 はこべとおおほこをやったら、にんじんをやったときのように、喜んでたべました。
 七88 8 うさぎは、新しい草をいれてやると、そればかりたべて、
 七89 1 まえにたべのこした古い草は、ふみつけるだけで、ちっともたべません。
 七91 8 私が麦をやったら、白いうさぎは、早くたべたいのか、黒いうさぎの上に乘って、たべました。
 七91 9 白いうさぎは、早くたべたいのか、黒いうさぎの上に乘って、たべました。
 七97 4 草のそばにきて、口をくつつけましたが、草はたべませんでした。
 七97 7 そうして、にんじんのやわらかそうな葉を、たべていました。
 七98 4 朝早くいってみたら、子うさぎは巣の中でねていて、親うさぎだけが、草をたべていました。
 七99 7 母うさぎと7ひきの子うさぎは、頭をそろえて、なかよくにんじんをたべていました。
 八78 11 ㊦ これからはあひるのたまごもたべられる。
 九33 11 ㊦ 三びきもとつてくると、うちの家族七人が、じゅうぶんたべることが出来ます。
 九49 3 いちろうは、いそいでごはんをたべて、谷川にそった小道を、上の方へ登っていきましました。
 九77 2 ㊦ いまでもこうやって、人は目をたべています。
 九77 4 ㊦ むかしといっても大むかしのことだが、貝などをおもにたべていたときがあったらしい。
 九79 9 ㊦ 貝がらといっしょに、〈略〉、たべたけも

のの骨や、角などを、ここへすてました。
 九112 11 お晝になつたので、雪の上で楽しくおべんとうをたべた。
 九132 4 ぐずぐずしていると、そのままたべられるので、みつばちはだいいじな針をだして、くもをねらって、ちくりとつきさしました。
 九134 11 大きな口をあいてたべようとしたとき、ちょうちよは、〈略〉と頼みました。
 九136 4 こう頼まれると、だまってたべてしまいうわけにもいきません。
 九139 2 ㊦ あなたが、この四五日、なんにもたべないことをちゃんと知っています。
 九139 4 ㊦ だから、わたしをたべてもいいと思っているんだけど。
 九139 6 ㊦ もう、おまえさんをたべやしないよ。
 十51 6 いぬは、まぼたきをしたきりで、そのパンをたべようとしません。
 十51 9 いぬは、ふり向かないので、たべるように、「オハナシシテ」という心らしいのです。
 十59 4 ㊦ 「ごはんをたべてから、すすきを取っておいで。」とおっしゃった。
 十59 6 ごはんをたべてから、山の方へいって、たくさん取ってきた。
 十70 5 ㊦ ひとつ、たべてみようじゃないか。
 十70 9 ㊦ かまわない、おれはたべてやる。
 十73 12 ㊦ 『ぶす』をたべて死ぬのが、いちばん早道と思ったのです。
 十一79 1 看護婦が持ってきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、ほとんどたべませんでした。
 十二12 4 そうして、ページをはぎとって、たべてしまったということです。
 十二62 11 八郎はその魚をとってやいてたべた。

十二916 帰っておかあさんにゆでていただいたこと、みんなでたべたこと

十二982 はいがい、はまぐり、かき、しじみ、あかにしなどをたくさんたべていたようです。

十二986 このほか魚では、たい、さば、まぐろ、かつおなどをたべました。

十四514 へんゆかいです。

十五772 生きるためにたべよ。

十五772 たべるために生きるな。

十五825 けだものの肉や、ふしぎなくだものを、〈略〉、たべたり、飲んだり、

十五832 うまいものをたくさんたべて、うれしそうにしているふとった人たちは、だれだろう。

十五8710 腹のへらないときに物をたべる幸福で、

十五907 なんでも、たべてはうまい鳥だそうじゃないですか。

十五915 すこしの休みもなく、飲む、たべる、ねむる、いやはや目がまわるようだ。

十五923 みんなとなかよくテーブルについて、飲んだり、たべたり、はねまわったりしていました。

十五934 物をたべているときは、だれにもかまっていられません。

十五1011 ぼくたちは、あなたといっしょに、たべたり、飲んだり、目をさましたり、

たほう「他方」(名) 1 他方

十五745 兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力のちがいは別として、一方が先に生まれ、他方があとから生まれたというだけのこと、

たま「玉」(名) 33 たま じしゃぼんだま・じゅずだま・なんきんだま・まがたま・まるたま・めだま

一92 四 たまいれ しろいたま、あかいたま、しろいたま。

一93 しろいたま、あかいたま、

一94 しろいたま、あかいたま、

一95 しろいたま、あかいたま、

一96 しろいたま、あかいたま、

一97 しろいたま、あかいたま、

一102 しろいたま、あかいたま、

一105 しろいたま、あかいたま、

一106 しろいたま、あかいたま、

一108 しろいたま、あかいたま、

一115 しろいたま、あかいたま、

一544 しろいたま、あかいたま、

一547 しろいたま、あかいたま、

一552 しろいたま、あかいたま、

一556 しろいたま、あかいたま、

一613 しろいたま、あかいたま、

一623 しろいたま、あかいたま、

一624 しろいたま、あかいたま、

二148 赤や青やむらさきのたまができました。

五568 まん中にまいるいきいなたまがみえる。

六994 いつか、おじいさんにいただいた古いめがねのたまと、〈略〉虫めがねがでてきた。

六9910 左の手に、めがねのたまを持って、目から遠くはなした。

六1006 どこかの屋根が、めがねのたまいっぱいひろがって、

六1015 ちょうど、めがねのたまがはまるくらいの大さにまいて、その一方のはしに、めがねのたまをはめた。

六1016 一方のはしに、めがねのたまをはめた。

八263 三 天の川 (一) たまがかざった、きれいな四頭びきの馬車が走ってきます。

八7511 たまの音はあしのあいだに鳴りひびき、てっぽうはひきつづいて火ぶたをきった。

九294 天と地にかがやくものの中で、いちばん清らかな、すみきったたま、それはおかあさまの愛です。

十四821 たまみがかざれば光なし。

十五679 そのなつかしい顔をあおいだ私の目からは、たまのようななみだが流れ出た。

十五1035 これは、『春の幸福』で、きらきら光る青いたまの色をしています。

たま「偶」じときたま

たまあられ「玉簪」(名) 1 たまあられ

十二741 いざ子ども走りあるかんだたまあられ芭蕉の待ちに待った雪が、とうとうくれがたから降ってきました。

たま「課名」2 たまいれ

一25 四 たまいれ……九

—91 四 たまいれ

たまう ↓かけたたまう・きたたまう・くれたたまう・はいりたまう・みたまう・よしたまう

たまご〔卵〕(名) 32 たまご ↓コロンブスのたまご・なまたまご・ゆでたまご

一5510 ぽけつとからうずらの たまごほど ある だいやもんどをひとつ とりだして、

四156 たまごを生んで いるのを みて いた。

五954 たまごのきみですりえをこしらえて、たべさせてやりました。

七252 たまごをとってしらべてから、なん日ほどたっているかしら。

七256 たまごから小さい虫になるのに、七日かかっています。

八144 夏の終りに、せどのおおぎりの木の皮に生みつけた、あぶらぜみのたまごがありました。

八148 春がきて、たまごはそのままでした。

八149 暑い夏がやってくると、たまごは、はじめてかえりました。

八413 たまごをおとりになりました。

八415 これもこがねのたまごになりました。

八609 それは、たまごをかえしているのであつた。

八614 とうとう、一つ一つたまごがわかれた。

八615 「ピイヨ、ピイヨ。」と、どのたまごからもし小さな首がでた。

八624 いちばん大きなたまごがまだのこっている。

八6210 一つのだまごに長くかかるのですよ。

八631 われないというたまごはどれかね。

八636 きつとしちめんちようのたまごだよ。

八643 どれ、たまごをみせてごらん。

八6410 それから二三日して、とうとうその大きな

たまごがわかれた。

八699 たまごの中にあんまり長いので、あんなふうになつただけですよ。

八732 どちらもたまごからはいだしてまもないものであつた。

八781 にわとりは、足はみじかいが、いいたまごを生んだ。

八7811 これからはあひるのたまごもたべられる。

八794 しかし、たまごは生まなかつた。

八797 「おまえさんは、たまごを生むことができるかい。」と、あひるの子にたずねる。

八812 のどを鳴らすか、たまごを生みなさい。

八821 たまごを生むか、のどを鳴らしたり、火花をだすことを、せいだして勉強するのだね。

八911 生まれがはくちようのたまごであつてみれば、あひるの小屋に生まれてもさしつかえはない。

八1048 葉のうらに、青黒いなかのたまごが生みつけれられていました。

八1051 先生におききますと、うんかのたまごだということでした。

十二55 みなさん、ころろみにこのたまごを

テープルの上に立ててごらん下さい。

十二510 コロンブスは、コッソンとたまごのはしを

テープルにうちつけて、なんの苦もなく立てて

たましい〔魂〕(名) 9 たましい

十一851 すると、少年のたましいのそこから、どつとことばがほとばしりました。

十二379 この生きた一ことが、私のたましいを目ざめさせ、

十二448 その人形などは、〈略〉、まるでたましいがはいっているように動くよ。

十二8311 ボールはたましいのこもつた生きものの

ようになつて、はねとびました。

十三2511 それは、全國民のたましいでした。

十三2512 デンマーク人のたましいは、ダルガスの研究と実行の結果として、すっかり生まれかわりました。

十四8210 三つ子のたましい百まで。

十四996 星の落ちるときは、なにかのたましいが神さまのところへのぼっていくのだと、

十五1094 あなたの二つの目をたましいのどん底におちつけて、よくごらん下さい。

だましぶね〔騙舟〕(名) 1 だましぶね

三952 きつねや、だましぶねや、紙ふうせんなどもおろすことができます。

だます〔騙〕(五) 5 だます 《―サ―シ》

三453 きみたちはうまくだまされたな。

四489 ほかのがんは、また、みんなをだましてびっくりさせるのだらうと思つて、

八637 わたしも、一どそれでだまされたことがあつてね、そのひなには苦労したよ。

十319 人をだましたりしないで、ありのままのすがたで、つきあつていきたいのです。

十654 いたずらをしたり、また、とんでもないへまをやつたり、だまされたりなど、よわい人間のしそうなことを、なんでもやります。

たまたま〔偶偶〕(副) 2 たまたま

九141 自分は、こうもりのために、高いところからたたき落されたが、たまたま、あの白いちようちよにあうことができた。

十351 たまたま、そのころ、東京にはくらん会が開かれた。

たまてばこ〔玉手箱〕(名) 5 たまてばこ

四1163 では、おみやげに たまてばこを さしあ

げましょう。

四116 5 かめが たまてばこをもつてきます。

四116 6 会 この たまてばこは、どんな ことがあっても、おあけになつてはいけませんよ。

四116 10 たまてばこを 手にもつて、うらしま「これを あけてはいけないというのですか。」

四119 3 圃 とほうに くれた うらしまは、あけてみました、たまてばこ。

たまひろい「玉拾」(名) 2 たまひろい

一54 3 会 この お月さんの くにでは、一ねんに一どたまひろいにこのかわらに きます。

一55 1 会 そうして、つぎの としの たまひろいで、きれいな たまが ひろえたら、

たまらない「堪」(形) 7 たまらない 《一いーカッーク》

三47 3 すると いたみが いっそう ひどくなつて、とても たまらなくなりしました。

六9 10 「略」とさげびたくてたまらない。

六11 10 《略》と思うと、うれしくてたまらなかつた。

十二63 1 小魚はしおからかつたので、のどがかわいてたまらない。

十三54 6 その 氣持を、だれかに話してみたくてたまらなくなりしました。

十五28 2 鳥は《略》、もうたまらなくなつたのか、その 重荷をふり落すように、ある 岩角のすこしあき地のあるところを 目かけておりに行きました。

十五105 5 会 『とてもたまらなくなるゆかい』ですよ。

たまり「溜」ひひだまり・みずたまり

たまりか・ねる「堪兼」(下二) 2 たまりか・ねる 《一ネ》

十二106 7 たまりかねた二ひきのうさが、うしろから《略》、おうえんをはじめました。

十五65 11 そこで、たまりかねた家の書生が、これから車のついたものは送つてくださるなど、くじょうの手紙を京都へ送つたりした。

たま・る「堪」(五) 5 たまる 《一ラーリ》

三46 3 白うさは いたくて たまりません。

六54 3 よしおとみちこが「月が走る。」「雲が走る。」といひあつてゐるのをききながら、ふみおはふしぎでたまりませんでした。

六120 11 ぼくは、うれしくてたまりませんでした。

九24 8 日本に春がくると思うと、もう矢もたてもたまらず、北をさしてすすむのです。

九47 9 いちろうはうれしくてたまりませんでした。

たま・る「溜」(五) 6 たまる 《一ッーリール》

七44 2 ぼうしは、つぎつぎと人々の手を渡り、お金がその中にたまつた。

九82 4 みると、先生のかごの中には、いつのまにか、せきふらしい物、土器らしい物、ただのわり石のような物などがたまっています。

九143 1 つゆが木の葉にたまりました。

九143 2 たまつたつゆが、しずくになつて、ポタリポタリと落ちてきました。

十二38 7 私の目にはなみだがいっばいたまりました。

十三36 6 小さな光つたわたが、土べいのかたすみ

に たまる。

たま・る「黙」(四五) 20 たまる 《一ッーリールーレ》

三110 2 会 おふたりがどんなに おかしみになるかと思つて、いままで たまっていきましたが、四38 1 会 わたくしは、だまってうちへ かえつて

きました。

四86 4 ゆうがた、まつの木 の 枝は、まがるほど雪に つもられて、だまっています。

五7 9 川はだまってはたらく。

九50 4 くりの木は、だまってまた実をバラバラと落しました。

九55 7 せいひのひくい、おかしなかつこの男が、《略》、だまってこつちをみていたのです。

九66 11 会 だまれ、やかましい。

九69 6 しんとして、だまってしまいました。

九95 1 やがて思ひきつて、たかぎのそばにより、だまつたままそれを取りあげる。

九96 4 だまってそれをとりあげる、かばんにいれる。

九98 3 ふたりだまる。

九105 8 みんなだまって、あえぎながら登つていった。

九136 4 こう頼まれると、だまってたべてしまふわけにもいきません。

九143 10 くもは、なんといつて返事をしていたかわからないので、そのままだまっていました。

十一8 6 会 さつきから、きみはだまっていますけれど、ぼくはきみをコックスにすいせんする。

十一61 7 しかし、太郎はだまっていた。

十三15 9 ガリレオも、十三年ばかりは、だまって研究を続けていましたが、

十三15 10 ガリレオも、《略》、だまっていられず、本を書いて、地動説を強くとなえました。

十五8 4 文 会 かわずだまりて人の足大きくすぐる十五119 12 会 まあ、だまっておいでよ、いい子だから。

たみ「民」(名) 1 民

十五74 11 四海の民すべて兄弟姉妹である。

たみおさん (人名) 1 たみおさん

四二六 7 たみおさんは、「きりぎりす」をあいてに書きました。

たみちゃん (人名) 19 民ちゃん ↓わたしのたみちゃん

十二二四 5 めいの民ちゃんは、二つ、満でいえば一年三ヶ月で、まだ歩けません。

十二二四 7 わたしは民ちゃんをひと目みたとき、天にもものぼるほどうれしかったのです。

十二二四 9 民ちゃんをなんとかして早く歩くようにしてやりたいものです。

十二二四 10 民ちゃんは、まだ、うんこもしっこもいえません。

十二二四 11 民ちゃんは、ぼつぼつものをいいかけていますが、ちよつときいてもわかりません。

十二二五 3 学校から帰ってくると、わたしは民ちゃんの子もりをひき受けます。

十二二五 5 おしめカバーをさせたままほっておくと、民ちゃんは平気でそこらをはいまわっています。

十二二五 8 はじめはいやがっていた民ちゃんも、よごれていないほうが氣持がいいので、

十二二六 3 民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、

十二二七 10 (名) 「民ちゃん、これ持って学校へいきましようね。」

十二二七 11 「(略)。」といって、民ちゃんに持たせてみました。

十二二八 1 民ちゃんはうれしそうにいて、その包みをとあげると、よちよちと立ちあがりました。

十二二八 9 たもとをひいてやると、民ちゃんは、ぱったりそこへすわりこんでしまいました。

十二二九 2 立ちあがると、民ちゃんは、はじめて二

足ほど歩きました。

十二二九 4 こんなふうにして、毎朝おべんとうをこしらえて持たせているうちに、民ちゃんは三足四足と歩けるようになりました。

十二二九 6 (名) いま、民ちゃんがひとりでおかって口から地面におりて、

十二二九 12 このごろふとつてきて愛らしくなった民ちゃんをだいてやろうとすると、

十二三〇 5 おとなりで、このごろ白いぬをかうようになりましたが、民ちゃんは、そのことをいうのでしよう。

十二三〇 11 民ちゃんのことば数のふえるのには、おどろいてしまいました。

ダム (名) 1 ダム

五六 3 ダムにせかれていけになり、水力電氣をおこし、(略)、川はだんだん大きくなる。

たむろする (名) 1 たむろする 《一シ》

十三二七 12 風あたりの少いホーントンの廣場に、子どもたちがたむろして、日だまりを楽しみ、

ため (名) (名) 133 ため

四二一 1 たった一つの でんとうですが、この光をだすために、どれほどたくさんの人が、はたらいている ことでしょう。

五三 8 大むかしのたいようのねつが、かたちをかえ、石炭の中にたくわえられていて、いまそれが、私たちのために、生き返ってはたらいっている

六一一 8 ねじは、自分がここにはいったために、この時計ぜんたいが、ふたたび活動することができたのだと思うと、うれしくてたまらなかった。

六二七 7 (名) ぐあいのわるかったのは、そのためでした。

六二四 4 (名) 楽しむために生きているんじゃないか。

六二四 9 ただ、はながつまっているだけだが、そのために発音がすこしおかしい。

六二五 5 弟ははながつまっているために、あることばが、うまく発音できなくなっている。

六二六 3 はながつまったために発音ができなくなるような音は、

六二八 8 ねんのために、はなをつまんで、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。

七二六 6 (名) そのうち、たねをとるために、一本だけのこしておきましたら、

七二六 4 (名) ねえ、はつぽと同じになるのは、鳥などに、すぐみつかからないためですよ。

七二六 6 (名) それは、すずめたちにたべられないためだと、おかあさんが教えてくださった。

七三二 1 私たちのために、せいっぱいの力で、すきまをこしらえてくれたのです。

八八 4 「どこ」というのは、同じ日本の中でも、土地土地ではおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。

八一三 3 信用してくれていたものを、あやまちのためにあわれに死なせたというなさけなさは、

八二九 1 (名) むすめのために、りっぱなむこをさがしてやろう。

八六八 8 みどりは目のためにいいから、

八八二 9 (名) おまえさんのためを思っているのですよ。

九一九 9 寒氣のために苦しんでいるつばめのせわをするのを、新聞に廣告しました。

九二〇 9 協会では、おおいそぎで、その家をつばめたちのためにぐあいよくつくりなしました。

九二一 10 なるべく早く南のあたにかいところへ運ぶために、飛行機をつかうことにしました。

九三二 1 (名) 小さい妹のために、くわの葉につつんで

持って帰ったこともありましたが。

九四三 母は、ほしがきにするために、母がかわをむいて竹くしにとおし、のき下につるしてくれまう。

九四九 兄は、大きくなつて農業をするために、いま知りあいの家でみならいをしていまう。

九四六 念のため、もつと上流の本流の水を飲んでみると、もうそれはただの水であつた。

九四七 自分は、こうもりのために、高いところからたき落されたが、

十三九 父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。

十三一 ぼくがいるために、うちの中が明かるくなるように、できないものでしょうか。

十三七 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、佐吉をよその大工の家にあずけてしまつた。

十三四 そのために、いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければならない、というのである。

十三九 核をさしいたために死ぬものもあつた。

十四〇 世界のために、きつと、あなたの願いがかないます。

十四一 この赤しおのために、母はみな死んでしまつた。

十四二 そのため、母は、ほとんど死んでしまつた。

十四三 研究のため、死員を一つ一つ、ていねいにしらべていつた。

十四八 これは、足がおそいというためばかりでなく、道ばたにあるものを、なんでもみつめて、

十五〇 「キタナイ ワンワンちゃん」といつたのは、そのためです。

十六一 そのために、能は、めんの藝術ともいわれ、わたしをまもるためには、どんな困難と

も戦う、そのうで。

十一七二 わたしのためには、いばらの道をもふみわけたその足。

十一二〇 父親のすきなものをかうために、自分でわらじを作つて、お金をもうけたりもしました。

十一二六 りつぱな人になるためには、学問をしななくてはならないと書いてありました。

十一五三 大きな声だが、雨や風の音のために、乗客の耳にきこえそうもない。

十一六四 長男にいくらかのお金を持たせ、父親の看病のために、ナポリへよこしたのです。

十二五八 人々は、なんのためにこんなことをいいだしたのかと思ひながらやつてみましたが、

十二三二 私の心の目をあらゆるものに向けて開いてくださるため、いいえ、それよりもなによりも私を愛するためにきてくださった

十二三二 私を愛するためにきてくださった

十二三五 「ゆのみ」が道具で、「水」がその中に入つてゐるものであることを、はつきり教えるために苦しめたのですが、

十二四二 「略」のといのりながら、一生をケラーのためにささげました。

十二五五 なつかしい山や、おもむきのある川などがあるためばかりではない。

十二七七 時間がせまつたので、私はユニホームをつけて、練習のためにコートにでました。

十二八二 二少年が、遠い母國の選手のために、勝つことをいのつてくれていることを知つて、

十二八六 両選手のために、見物人たちは、しばらく、あらしのようなはく手をおしませんでした。

十二九二 それは、めいめいの生活や経験が同じでないためである。

十二九二 同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれがてくるのも、やはりこのためである。

十二九九 これは、食物をいれるためのものですが、

十二四七 平和な國日本を作るために、また、文化國家をきずくために。

十二四八 また、文化國家をきずくために。

十三八六 自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことがらである。

十三一五 そのため、ガリレオは、ローマに呼びだされて、自分でも信じてはならぬ、人にも説いてはならぬといわれました。

十三一六 では、ガリレオは、はく害のため、考えをかえてしまつたのかというところ、

十三一九 このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかありません。

十三二〇 しかし、切りとるばかりで手入れをおこたつたために、土地は、年を追つてやせおとろえ、

十三二一 しかし、ダルガスの誠実は、これがためにくじかれることなく、

十三二四 ユートランドのあれ地は、大もみの林がしげつたために、こえた田園となりました。

十三二六 敗戦のために意氣のおとろえた國民は、希望をとり返し、

十三四二 この「子どもしばい」をするための注意

十四四七 それは、〈略〉大きな愛の氣持、そこからさしてくるといふ光のためなのです。

十四五八 しかし、フィリップのすなおな心は、まづしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

十四五九 かが、父を失つた直後、文学修業のためにパリに出て、

十四七九 私たちは、おとうさんのために、心か

らの思い出をまもることにしましょう。

十四 97 ㊦ かなしみのために、おからだをおいた
めになるなんて、

十四 105 ㊦ 光をずっとやわらかくするために小さ
なかさがあるとか——

十四 124 ㊦ かさは、光をへいきんさせ、もつとや
わらかくするためなのです。

十四 134 ㊦ それは、コップの上からコーヒーこし
をとったとき、それをのせるためなのです。

十四 29 10 花がたえずさいていたために、天上の花
を見ようとはしなかったのだらうと

十四 30 7 小さな島國に住んでいたために、氣持ま
でちっけな物になってしまったのでしょうか。

十四 32 4 天上の星とあなたがたとは、あまりにか
けはなれているために、自分たちとはえんがない
と思っている人もあるでしょう。

十四 44 1 ㊦ 他人のためにことばをもて、なやみ、
苦しんでいる他人のためにも。

十四 44 2 ㊦ なやみ、苦しんでいる他人のためにも。
十四 47 7 たいていの人は、しょうとつのとときにあ
わてふためいて、そのためにかえって波にのまれ
てしまったのに、

十四 57 12 ㊦ それがこの日本でできるためには、私
が熱と光とをゆたかに送ってやったからです。

十四 65 2 熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、ま
わりの空氣にくらべてずっとかるいために、どん
どんとさかんにたちのぼります。

十四 68 1 陸地の上のどこかの一地方が、日光のた
めに、特別にあたためられると、

十四 70 10 お湯がだんだんにひえるのは、湯の表面
の茶わんのまわりから、熱がにげるためだ

十四 72 7 これに日光をあてると、熱いところとつ

めたいところとのさかいで、光が曲がるために、

その光が同じようにならず、むらになって、

十四 72 9 そのために、さきにいったようなもよう
が見えるのです。

十四 73 4 そのときできる氣流のむらが、光をおり
曲げるためなのです。

十四 74 12 地面の空氣が、日光のためにあたためら
れてできるときのむらは、

十四 75 7 畑のほうが、森よりも、日光のためによ
けいあたためられるので、

十四 88 6 足がつめたくなって、立ちどまったため
であらうか。

十四 90 10 二台の荷馬車が来たので、それをさける
ために、急いで道を横ぎったときに、

十四 94 11 その両手をあたためるために、〈略〉一本
のマッチで、火をともしることができたならば、

十五 11 3 ㊦ 人の家にさえずらずめガラス戸の
外に來て鳴け病む人のために

十五 27 1 下の方にいる女の子を元氣づけるために
「〈略〉。」といわずにはいられませんでした。

十五 34 5 それをその場にいらない人や、遠くにいる
人に知らせるためには、文字に書くか、

十五 34 7 これは、記おくのためにも必要な方法で
ある。

十五 41 6 ローマ字といわれるのもそのためである。
十五 45 9 ブリンクリーが、日本政府から頼まれて、
鉄ぼうのうちかたを教えるためにやって來たのも、
そのころのことであった。

十五 47 11 このお庭焼のために、細工人、画工、
〈略〉などが、三十数人かかえられていた。

十五 48 6 いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてし
ごとをしていたため、ひとりでこの焼物を作るこ

とは、むずかしいことであった。

十五 48 12 職人のちんぎんや材料のお金をはらうた
めに、家の道具を賣らなければならなかった。

十五 51 2 日本人のための英語教科書の編さんまで
したりした。

十五 55 1 恩師ジョルダン博士は、そのためのては
ずを早くからすすめていた。

十五 66 8 父は、同志社を守り育てるために、北海
の地をすてて、京都にすまいを移すことになった。

十五 77 2 生きるためにたべよ。

十五 77 2 たべるために生きるな。

十五 78 10 人の心をひくために、しかめつらををし
たり、みような身ぶりをしてはならない。

十五 86 8 ㊦ 自分のしなければならないうとめのた
めには、なにかしらぎせいにする心がなければ

十五 89 10 ㊦ おふたりのために、ちゃんと席がとつ
てありますよ。

十五 104 1 ㊦ 『冬の日の幸福』は、こごえた手のた
めに、きれいなむらさき色のマントを開きます。

十五 115 3 ㊦ おまえたちがこの上まであがつて來た
のは、〈略〉、それを、はつきりとささるためだか
らね。

十五 120 5 在校生たちがみんな、私たちのために
送別の歌を歌ってくれた。

だめ ㊦ 駄目 ㊦ (形状) 27 だめ
三 59 7 ㊦ 「だめよ、だめよ。」と、ジューダーがい
います。

三 59 7 ㊦ 「だめよ、だめよ。」

三 66 1 ㊦ 「心があわなくてはだめ、だめ。」
三 66 1 ㊦ 「心があわなくてはだめ、だめ。」
三 79 10 ㊦ だめだよ。

四 42 7 ㊦ きみ、列をはなれちゃだめじゃない

か。

五〇七 二 画 ほう、羽がだめだから。

六七一 六 画 でも、こんな口じゃ、だめだわ。

七三四 五 画 そんなにおしたって、だめですよ。

七三六 二 画 だめだよ。

八六四 三 画 教えたのだが、だめだった。

九六四 四 画 いいえ、だめです。

九六五 三 画 だめだい、そんなこと。

九六六 五 画 いいえい、だめです。

九六七 六 画 いいえい、だめです。

九八〇 一〇 画 あっちこっちほってみて、なんにもみつ

からないと、だめだと思ってやめてしまおう。

九八一九 九 画 だめだな、ここは。

九八八 二 画 「だめだよ、きみ。」——けんかをとめ

る声がつづく。

一一七九 一〇 医者ほ、まったくだめだといわんばかり

に頭をふりました。

一一八八 八 画 「今夜はもうだめかもしれない。」

一二一七 二 画 だめだ。

一二一七 九 画 まだだめです。

一二二一 二 画 絵をかくことも、いっしょうけんめい

にけいこしなくちゃだめでしょうね。

一二二八 一二 画 だめねえ。

一二三八 六 かけらをひろいあげ、それをつぎあわせ

ようとしてしまったがだめでした。

一三二五 八 画 じゃあ、やっぱり、おじさんみたいに、

旅行して来なくちゃだめですね。

一四九四 九 けれどだめであつた。

ためいき 「溜息」(名) 五 ためいき ため息

三〇九 二 月のきれいなばんになると、かぐやひ

めは、空をながめてはためいきをつき、じつ

とかんがえこむようになりました。

八五二 九 「略」と、その家の人はふかいため

息をつきました。

八七五 五 あひるの子は、ため息をついた。

一一二三 一七 母親も、子どもをよそへやってから、夜

になると、ため息ばかりついてねむれません。

一一七九 二 少年は、父親のちよつとしたため息にも、

「略」、ふるえながら氣をもらんで、

ためし 「試」(名) 四 ためし

六一一 四 ためしに、「なんだ」というかわりに、「ダ

ンダ」といってみると、いかにも弟のいいかた

そっくりになった。

八七九 三 そこで、あひるの子は、三週間ばかりため

しにおいてもらった。

九一四 五 ためしにまつ川の水をにて飲んでみると、

たいへんうまかった。

一四八 八 ためしに、私は、妹のいつていることばを、

紙きれに書きとめてみたのです。

ためし 「試」(五) 八 ためし 《一シ》

六六一 五 みなさん、ためしてみてください。

八三〇 二 天帝は、ひとつこの男のうでをためしてみ

ようと考えて、黒うしのしっぽのあたりを一つき

おつきになりました。

九一二 九 茶人は、日本じゆうを歩きまわって、うま

そうな水や名高いいど水をためしてみたけれども、

九一三 四 ずっと上流へいつてためしてみたり、

一三三六 六 ためしてみると、はたしてよく動いた。

一三二三 六 わかいダルガスの意見を、実際にためし

てみると、そのとおりになりました。

一四六五 五 湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろ

いろ自分でためしてみると、おもしろいでしょう。

一四七九 九 私はすぐにこれをためしてみました、が、

ほんとうにそのとおりでした。

ためらう 「躊躇」(五) 四 ためらう 《一ウーツ》

九四 五 たかぎ しばらくして持っているすみに氣

がつき、ちよつとためらったのち、「略」。

一五五三 六 館長室の前に立った私は、しばしため

らったのち、「略」ドアをコツコツとノックした。

一五六〇 一 げんかんに出て、横づけにしてあつた

りっぱな自動車に、ためらう私をおしこみ、

一五七八 二 きみたちの考えが、たとい世間の考えと

ちがつていても、その発表をためらってはならな

い。

ためる 「溜」(下) 三 ためる 《一メ》

一四五九 七 画 水だつて、ためておいてあげたのです。

一五六八 八 おばさんは目になみだをためながら、

しゃにむに私をおく深くひき入れた。

一五一一 一〇 画 でも、どうしてみんな、目にいつぱい

なみだをためているの。

ためつ 「保」(五) 一 ためつ 《一タ》

八三六 五 このきそく正しいちつじよは、いったいど

うしてたもたれているのでしょうか。

たもと 「袂」(名) 五 たもと

一四一四 五 画 右に 左に ひらひらと、ゆれる たもと

がうつくしい。

一四一七 七 画 橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんも

よくいつてこしかけました。

一四一八 八 画 その橋のたもとにあるプラタナスのなみ木

の下で、

一四二二 一二 画 三人の少女は、その葉をひろい集めて、橋

のたもとと石がきのところへきては、

一四二八 八 画 たもとをひいてやると、民ちゃんほ、

ぱったりそこへすわりこんでしまいました。

たやすい 「形」 五 たやすい 《一イーク》

九二二 九 画 さかのぼるのもたやすくなかった。

十二57 5 どちらもけつてたやすくは登れないが、ふしぎなことに、神山のほうには、昔から九十九だんの石だんができています。

十四64 3 もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということが、

十四86 11 このものすごいありさまを映画化することは、たやすいことではあるまいが、

十五40 1 かなのおかげで、日本のことばを、たやすくしかも自由にうつすことができる

たより〔頼〕(名) 3 たより

十四48 5 かれは、歌の声をたよりに、その方において行きました。

十四49 12 さて、おじょうさんの歌をたよりに、マッケンナがおよいで行ったように、

十四87 12 やがて第三の人も通り、第四、第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。

たよる〔頼〕(五) 1 たよる 《ーッ》

十四24 4 ヘッドライトにたよって現場に近づく。

たら (係助) 1 たら

十三39 8 会 だつて、おばさんたら、お客さんなんておっしゃるんだもの……

たら ひとしうしたら

だらけ ひとしうだらけ

だらっだらっだらっ (感) 1 ダラッ、ダラッ、ダラッ

三87 6 ダラッ、ダラッ、ダラッ。

だらりと (副) 1 だらりと

一57 9 わたくしは、かたほうだらりとさがったしろちゃんのみみをみて きました。

たり (並助) 35 たり だり

一28 2 の おおが、わらったり、ないたり、おこ

一28 3 、わらったり、ないたり、おこったり、よ

一28 4 、ないたり、おこったり、よろこんだり、

一28 5 こったり、よろこんだり、かんがえたり、

一28 6 こんだり、かんがえたり、いろいろにか

二48 1 を、高くさしあげたりにおいをかいだ

二48 2 たりにおいをかいだりします。それか

二51 2 は、りんごをだいたり、ほおにつけた

二51 3 たり、ほおにつけたり、おどったりし

二51 3 つけたり、おどったりします。きゅう

二79 4 れひとり、上をみたりまわりをみたり

二79 4 みたりまわりをみたりする ひまもあ

三92 2 さをちぎっていれたり、かみきれをい

三92 2 、かみきれをいれたりする 小さな子

三95 5 ろなかたちになつたり、ふくれたり、立

三95 5 なつたり、ふくれたり、立つたりしま

三95 6 、ふくれたり、立つたりします。この一

三103 10 らのびあがつてみたり、へいのすきま

三104 1 まからのぞきこんだりしました。一ど

四12 2 なりの町と、いつたりきたりします。

四12 3 町と、いつたりきたりします。ここか

四40 1 会 お友だちになつたり、先生になつた

四40 2 会 り、先生になつたりしてくれま

四40 2 会 り、先生になつたりしてくれま

四41 6 ようになつてとんだり、まがつてつり

四41 7 ばりのようになつたりしました。とき

四57 8 くだものをあつめたり、花をかざつた

四57 8 たり、花をかざつたりしました。すつ

四57 8 ている。ひろがつたり、あつまつたり、

四95 1 がつたり、あつまつたり、ふわふわとな

四95 1 ふわふわとながれたりして、だんだん

四95 2 、いっしょになつたりわかれたり、ま

四95 7 になつたりわかれたり、またいっしょ

四95 8 たいっしょになつたりはなれたりする

四95 8 になつたりはなれたりする。十う

四126 5 会 に、波がよつたりかえつたり。か

四126 5 会 よつたりかえつたり。かもめすいす

四134 7 会 に、波がよつたり、かえつたり。か

四134 7 会 よつたり、かえつたり。いつのまにや

五12 1 会 、汽車が、とまつたりとおつたりするの

五12 2 会 とまつたりとおつたりするのだ。」「へ略

五20 3 やぶの小道をとつたり、すずしい川のき

五20 4 しい川のきしを走つたりしました。なしの

五33 2 クレーンが、あがつたりさがつたりして、

五33 2 、あがつたりさがつたりして、荷物をつみ

五42 9 目 目のまえを、いつたりきたりします。一

五42 10 手 えを、いつたりきたりします。一日じゅ

五47 6 たんぽぽがさいいていたり、すみれがさい

五47 7 、すみれがさいいていたり、名まえは知らな

五47 9 れいな花がさいいていたり。おや、こんな花

五63 1 会 ん。こやしをやつたり、手をやつたりし

五63 1 会 たり、手をやつたりしたじやありません

五63 3 会 れども、花がついたり、みがなつたりし

五63 4 会 いたり、みがなつたりしたのは、おかあ

五79 4 チョロ、ひくく鳴つたり高く鳴つたりして

五79 4 く鳴つたり高く鳴つたりしています。」「へ

五79 6 ヤビシヤと、あがつたりさがつたりして、

五79 6 、あがつたりさがつたりして、流れていき

五79 8 川の中の石が、のびたちちんだりしてい

五79 8 が、のびたちちんだりしています。」「へ

五96 10 会 自分でえさをとつたり、遠いところまで

五97 7 のまつの木にとまつたり、かえでの枝で休

五97 8 、かえでの枝で休んだりしていきました。

五99 4 たちが水をふきかけたり、くすりをつけて

五99 5 くすりをつけてやつたりしますと、やつと

六32 3 の「へ」の字がのびたちちんだります。

六32 3 字がのびたちちんだります。6「へ略。」

六349 ながら、大きくなったり、小さくなったり
六3410 ったり、小さくなったりする。口をもぐも
六354 雲「ないだりあれたり、海みた
六354 雲」ないだりあれたり、海みたいなもの
六769 ぼくたちは動いたり息をしたりするか
六769 動いたり息をしたりするから、生きて
六7611 そんなことをきいたりして。「略」。「
六774 「たしかに、動いたり大きくなったりし
六774 いたり大きくなったりしているものは、
六997 、この二つをかさねたりべつべつにしたり
六997 ねたりべつべつにしたりして、つくえの上
六998 て、つくえの上をみたりそとのけしきをの
六998 とのけしきをのぞいたりしていた。そのう
六102 あって、長くのぼしたりちぢめたりするこ
六102 くのぼしたりちぢめたりすることができる
六102 二つのつづをのぼしたりちぢめたり、か
六102 をのぼしたりちぢめたり、かげんしている
六121 さで、まりなげをしたり、フットボールを
六121 フットボールをしたりして遊びました。
六139 たちは、あせをふいたり、ねころんだり、
六139 ふいたり、ねころんだり、足をもんだりし
六139 ろんだり、足をもんだりしていました。と
六142 めました。上になったり、下になたりし
六142 なったり、下になたりしました。そのあ
七54 白いちようが、ういたりしぢんだりしなが
七55 が、ういたりしぢんだりしなが、光の中
七710 すうと通ってみたり、かいだんをトン
七710 ントンあがってみたり、こうどうをのぞ
七711 どうをのぞいてみたり、みんなが勉強す
七81 て、こしかけてみたり——「かしの木は
七13 「まいの手」といったり、「略」とかい
七13 、「略」とかいったりします。私どもの
七13

七3011 な大きな声をだしたりして。「はるお」に
七623 らの花をしらべてみたり——どの花も、み
七926 に、わらを足でけたりして、あばれまし
八59 は指さきへとまらせたり、かたへ乗せたり
八510 せたり、かたへ乗せたり、てのひらで遊ば
八510 、てのひらで遊ばせたり、口さきにふくん
八511 くんだえさをとらせたり——そのめずらし
八69 ようずにえさをとったり、「略」とよん
八610 ひざの上にとび乗ったり、三ど三どの食事
八611 上でおしょうばんしたりしました。客がき
八74 「略」としかなかったり、それでもきかな
八74 なければ、指で追ったりしました。すると
八76 はしからころげ落ちたりしました。朝の早
八711 て、「略」とほめたり、なでてやったり
八711 めたり、なでてやったり、「略」と、き
八82 けいじよう」と歌ったり、「ツンツンつ
八85 ろばし」とさえずったり——それは、鳴き
八86 ざのあいだにもぐったり頭をつっこんだり
八98 ったり頭をつっこんだりします。といえ
八98 にか氣にいらなかつたりおこったりすると
八103 らなかつたりおこったりすると、赤い口を
八103 て、私たちをおどしたりかんだりします。
八104 ちをおどしたりかんだりします。そのか
八106 や足の指をつついたりするので。ピオ
八106 みんなをおどろかせたり感心させたりしま
八110 ろかせたり感心させたりします。ところが
八117 だして、目さえあけたりとじたりして、か
八118 目さえあけたりとじたりして、からだをふ
八136 はずれの野原を歩いたりいなかのしものふ
八152 に向かつて、すべったりころがったりして
八152 すべったりころがったりしておいていきま

八273 ちが、楽しげに歌ったり、花つみをしたり
八273 ったり、花つみをしたりして遊んでいまし
八467 とからだがよわかつたり、からだがいじ
八467 とちえがたりなかつたり、金もあり、から
八4610 、友だちがいなかつたりしました。けらい
八642 「略」とないたり、「略」とい
八642 「略」といってたりして教えたのだが
八703 わとりからもぶたれたり、つつかれたり
八704 れたり、つつかれたりした。しちめんち
八7710 、せなかをまるくしたり、のどを鳴らした
八7710 たり、のどを鳴らしたり、火花をだすこと
八801 せなかをまるくしたり、のどを鳴らした
八801 り、のどを鳴らしたり、火花をだした
八802 たり、火花をだしたりすることができ
八817 。水の上をおよいだり、もぐったりする
八817 よいだり、もぐったりするのがいい氣持
八831 か、のどを鳴らしたり、火花をだすこと
八835 。そうして、およいだりもぐったりした。
八835 、およいだりもぐったりした。けれども、
八871 げまわって、わらつたりさけんだりした。
八872 、わらつたりさけんだりした。おりよく戸
八896 まに追いかけられたり、にわとりにぶた
八896 にわとりになつたり、女の子につきの
八897 子につきのけられたり、冬じゅうひもじ
八897 ひもじい思いをしたりするよりは、あの
八933 むかし、いじめられたり、あざけられたり
八933 れたり、あざけられたりしたときのことを
九73 このことばを耳にしたり、文字でよんだり
九73 したり、文字でよんだりしますと、夜のし
九321 いっしょに畑にでたり、山へたきぎをと
九321 きぎをとりにいったりするので、まえよ
九3910 ず木にしがみついたりしました。下では

948₃ うちじゅうを、とんだりはねたりしました
 948₃ うを、とんだりはねたりしました。ねどこ
 979₈ ㊦ に、いらなくなったりこわれたりした道
 979₈ ㊦ くなったりこわれたりした道具や、たべ
 9123₃ もどりして飲んでみたり、ずっと上流へい
 9123₄ へいってためしてみたり、深いところの水
 9123₅ 水をとって飲んでみたりしなくてはならな
 18₂ とびをして遊んでいたりしますと、そのな
 12₆ まなことを話しかけたり、わらったりしま
 12₆ しかけたり、わらったりしました。けれど
 131₉ えらそうにみせかけたり、人をだましたり
 131₉ けたり、人をだましたりしないで、ありの
 133₉ て、佐吉をはげましたり、なぐさめたりし
 133₉ ましたり、なぐさめたりしたのは、母であ
 148₃ て、それに話しかけたり、そこで遊んだり
 148₄ けたり、そこで遊んだりしたからでした。
 152₂ らを向かせようとしたり、「モット」「こ
 152₃ たいと、私にねだったり、そのくせ、でか
 152₄ かけようといひだしたりしていました、か
 155₆ 分がほんとうに思ったり、感じたり、考え
 155₆ うに思ったり、感じたり、考えたりしてい
 155₇ り、感じたり、考えたりしていることとは
 163₂ 者が美しい舞を舞ったり、ささざまなしく
 163₂ まざまなしぐさをしたりするものですが、
 163₅ がおじいさんになったり、むすめになっ
 163₅ たり、むすめになったり、わかい男になっ
 163₆ り、わかい男になったりするときには、お
 165₃ ねこかぶりをあばいたり、いたずらをした
 165₃ たり、いたずらをしたり、また、とんでも
 165₄ でもないへまをやったり、だまされたりな
 165₄ やったり、だまされたりなど、よわい人間
 165₁₀ かかり、着物をきせたり、おこづかいをや

165₁₁ 、おこづかいをやったりしなければならな
 115₂ で、すもうをとったり、おにごっこをし
 115₃ 、おにごっこをしたりして遊んでいるが
 116₈ ㊦ トの向きをかえたりひき返そうとした
 116₉ ㊦ ひき返そうとしたりするときには、き
 119₇ 、物をわけてやったり、お金をかしてや
 119₇ お金をかしてやったりしました。この人
 119₁₀ 煙をみんな流されたりしたので、い
 120₁₀ て、お金をもうけたりもしました。金次
 121₆ かの人たちは休んだりむだ話をしている
 121₆ った、しばを切ったり木を切ったりして
 125₅ かったり木を切ったりして、村の人に買
 125₅ ました、なわをなったりわらじを作ったり
 125₈ たりわらじを作ったりしました。ふつう
 125₈ る人にかしてやったり、植えるところを
 129₈ ろをふやしていつたりするうちに、三年
 129₉ たからだで、おしたりおされたりしなけ
 152₄ 、おしたりおされたりしなければならな
 152₄ たばたと落ちてきたりした。けれども、
 152₇ んで、みやくをみたり、ひたいにさわ
 174₇ たいにさわってみたりして、そうして、
 174₈ のふとんをなおしたり、ときどきその手
 176₃ の手にさわってみたり、はいを追ったり
 176₃ たり、はいを追ったり、うなるたびごと
 176₄ ごとにかがんでみたり、そうして、看護
 176₄ してそれを飲ませたりしました。病人は
 176₆ ったまわるくなったりで、少年は看病に
 178₁₀ に飲み物を飲ませたり、ふとんをなおし
 188₂ 、ふとんをなおしたり、手をさすったり
 188₃ たり、手をさすったり、やさしく話しか
 188₃ やさしく話しかけたり、しっかりするよ
 188₄ ようにとはげましたりしました。その日

1220₁ ㊦ 二つ三つ、ついたりつかなかったりだ
 1220₁ ㊦ たりつかなかったりだったのに、この
 1221₉ ㊦ とをおしやつたりすると、なんと
 1223₁₀ いもや野菜を作ったりしていたので、さ
 1226₁₂ おしつけてしまったりします。けれども
 1245₃ ㊦ は、したをだしたり鼻がてんぐのよう
 1248₃ ㊦ れる。空をとんだり、すがたを消した
 1248₃ ㊦ 、すがたを消したり。それに、人間み
 1251₄ のぐで、顔をかいいたり頭の毛をぬる。
 1271₂ から水をくみあげたり、ごはんをたい
 1271₂ り、ごはんをたいたりしました。また、
 1271₃ 木をひろいにいつたりしました。このよ
 1273₆ 落ちて、はね返ったりころがったりしま
 1273₆ 返ったりころがったりします。「略」
 1273₉ いで、顔にあたったりふところにとびこ
 1273₁₀ ところにとびこんだりします。芭蕉は、
 1275₁ 、雨戸をゆさぶったり、大川の波の音が
 1296₅ んの写真がでていたり、あなたがたの小
 1299₁₁ ちろん、水をくんだり運んだりするとき
 1299₁₁ 水をくんだり運んだりするときにもつか
 12103₅ なあながあいていたり、クロスワーズバ
 12103₆ らんだ文字があつたりして、おもしろ
 12183₃ 、人から教えられたり、自分で本を読ん
 12183₄ 、自分で本を読んだり、考えたり、調べ
 12184₄ を読んだり、考えたり、調べたりして、
 12184₄ 、考えたり、調べたりして、しだいにま
 12184₈ を得るには、考えたり、調べたり、また
 12188₈ 、考えたり、調べたり、また、種々の器
 12188₉ をつかって観察したり、実験したりする
 12188₁₀ 察したり、実験したりする。そうして、
 12189₁₁ がみだれるといったり、でんせん病がは
 12191₁₂ 出たからだといったり、あるいは、きつ

十三105 かわるいとかがめたり、生まれた年によ
 十三106 性質や運命をきめたりしている。しかし
 十三145 いっしんに観察したり研究したりして、
 十三145 観察したり研究したりして、そういう星
 十三193 の間、橋をかけたたり、道路をつくつた
 十三193 たり、道路をつくつたり、みぞをほつたり
 十三194 たり、みぞをほつたりするとき、よく
 十三283 。そのへんを走ったり、地面にこしをお
 十三284 して、あなをほつたり、土でおだんごの
 十三284 なものをこしらえたり、遠くの方からひ
 十三286 に、耳をかたむけたりしているのである
 十三316 してやめてしまつたり、とんでもないべ
 十三317 べつのことを演じたりする。それが、見
 十三318 は、さるをつかつたり、せりふをいつた
 十三319 り、せりふをいつたり、はやしをいれた
 十三319 り、はやしをいれたりしなければならな
 十三348 家にもどつて行つたりする。ホートンに
 十三456 を時間的に短くしたり長くしたりして、
 十三456 短くしたり長くしたりして、電話の話ら
 十三572 画、へき画をかいいたり、美しいしう像
 十三572 ころが黒くなつたりするので、どうも
 十四59 こしもゆがめられたりはしませんでした
 十四104 手、ほのおがゆれたりしないとか、光を
 十四355 力の法則を発見したり、うちゅうの大き
 十四356 の大きさを計算したりするではありませ
 十四563 を日の光にあてたり、空気をお吸いに
 十四568 とちゅうで切れたりしたら、それにつ
 十四588 でもすぐ、かれたり死んだりしてしま
 十四588 、かれたり死んだりしてしまいます。
 十四686 て、ひょうが降つたり、かみなりが鳴つ
 十四686 、かみなりが鳴つたりします。これは、
 十四773 私が、木を割つたり、竹を割つたりし

十四773 ったり、竹を割つたりして、なにかこし
 十四893 ントンとふんでみたり、しゃがんで土の
 十四893 土のにおいをかいだり、てのひらでなで
 十四894 のひらでなでてみたり、耳を地べたに近
 十四894 音でも聞こうとしたりする。こんな場面
 十五262 だして人々を呼んだり、とくに下の方に
 十五368 線を横に一本引いたり、二本引いたりし
 十五368 いたり、二本引いたりした。また、「う
 十五368 の線のうえにおいたり、したにおいたり
 十五368 たり、したにおいたりして表わした。」
 十五371 という音をしめしたりした。漢字が中國
 十五481 のものが黒くなつたり、黄色くなつたり
 十五481 たり、黄色くなつたりして、失敗に失敗
 十五511 日本の歴史を書いたり、辞書を作つたり
 十五511 たり、辞書を作つたり、日本人のための
 十五511 書の編さんまでしたりした。ジャパンタ
 十五661 手紙を京都へ送つたりした。その次には
 十五781 しめつづらをしたたり、みょうな身ぶり
 十五797 森や、山をながめたり、また、そうした
 十五806 がいにくみあつたり、おそれあつたり
 十五806 たり、おそれあつたりしてきました。友
 十五825 などの間で、たべたり、飲んだり、「キ
 十五825 、たべたり、飲んだり、「キヤツキヤツ」
 十五825 キヤツ」とさわいだり、歌を歌つたり、
 十五826 いだり、歌を歌つたり、ぶつかつたり、
 十五826 ったり、ぶつかつたり、よろけたり、ね
 十五826 かったり、よろけたり、ねむりこけたり
 十五826 たり、ねむりこけたりしています。みん
 十五923 ルについて、飲んだり、たべたり、はね
 十五923 、飲んだり、たべたり、はねまわつたり
 十五924 たり、はねまわつたりしていました。チ
 十五961 「のむれ、ふざけたり、わらいこけたり

十五961 たり、わらいこけたりしながら、みどり
 十五975 れは、歌を歌つたり、おどりをおどつ
 十五975 おどりをおどつたり、わらつたりする
 十五976 たり、わらつたりするけれど、まだ
 十五101 つしよに、たべたり、飲んだり、目を
 十五101 たべたり、飲んだり、目をさましたり
 十五101 り、目をさましたり、息をしたりして
 十五101 したり、息をしたりして、くらしてい
 十五101 たちは、わらつたり、歌を歌つたり、
 十五102 たり、歌を歌つたり、かべをたたき落
 十五104 。鼻を指ではじいたり、ひら手でたたい
 十五104 、ひら手でたたいたり、いそがしく足で
 十五104 そがしく足でけつたりして氣ちがいのよ
 たり「断定」(助動)1 たり《タル》
 十252 ごうごうたるトロツコのひびき。
 たり「元了」(助動)6 たり《タリ・タル・タレ》
 九117 青ざさをいれやりたればいけのふなは
 や青き葉のかげにきておる
 十五64 家を出て手をひかれたるまつりかな
 十五104 荒れ庭にきたる板のかたわらにふ
 るばちならび赤き花さく
 十五123 ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブ
 リキの屋根に月うつる見ゆ
 十五143 大きなべにばらのひと花思わぬを
 ゆららにあかく開き満ちたる
 十五157 大きななにともなきばらの花ふ
 とのはずみにくづれたりけり
 ダリヤ(名)1 だりや
 二236 だりやの花が、さきかけてしほみまし
 た。
 たりる「足」(上)9 たりる《ーリ》ひかきた
 りる

二301 一びきたりない。
 二314 けれども、やっぱり一びきたりません。
 二317 一びきたりない。
 二318 一びきたりない。
 七114 「手がたりない。」
 八468 金持だと思ふとからだがよくわかったり、からだがじょうぶだとちえがたりなかったり、九727 ニリットルにたりなかったら、めっきのどんぐりもまげてこい、早く。
 十四98 かなしみのために、おからだをおいためになるなんて、〈略〉考えのたりないことです。
 十四305 遠いもの、大きなものに心をくぼることがたりなかったのは、
 たる「樽」(名) 1 たる
 八868 そこで、あひるの子は、バターのいれてあるたるの中へとびおり、
 たる「足」(五) 1 たる 《ール》
 十三212 ユートランドのあれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていませんでした。
 ダルガス (人名) 15 ダルガスはフレデリックダルガス
 十三1812 戦場から帰ったダルガスです。
 十三193 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたり、道路をつくったり、みぞをほったりするときに、よく、國土の地質や地味を研究しましたが、
 十三197 ダルガスは、とおいいっぱんの空想家ではありません。
 十三1911 これをこえた土地とするのが、ダルガスのゆめであります。
 十三1912 このゆめを実現するために、ダルガスのとるべき手だては、ただ二つしかありません。

十三209 ダルガスは、このあれ地に育つ木があるかないか〈略〉について研究を重ねました。
 十三214 しかし、ダルガスの誠実は、これがためにくじかれることなく、
 十三2111 ダルガスの希望であり、デンマルクの希望であるこの植林は、みごとに実現されました。
 十三224 みどりの野はできたが、ユートランドのあれ地から建築用材を求めるダルガスの熱望は、実現されません。
 十三228 ダルガス、おまえがくるといった材木を、さあ早くもらいたい。
 十三2210 ダルガスの長男、フレデリック・ダルガスは、〈略〉、植物の研究がすきでしたが、
 十三2212 わかいダルガスは、父に、「〈略〉。」といいました。
 十三236 わかいダルガスの意見を、実際にためしみると、そのとおりになりました。
 十三243 ダルガスの植林以前は、ユートランドの夏は、晝は暑く、夜はときに、しもさえ見ることがあったのです。
 十三2512 デンマルク人のたましいは、ダルガスの研究と実行の結果として、すっかり生まれかわりました。
 ダルガスおやこ (人名) 2 ダルガス親子
 十三239 植物学上の事実が、ダルガス親子によって、発見されたのであります。
 十三2312 ダルガス親子の発見と努力によってたらされた、よい結果は、木材だけにとどまりません。
 だるま ゆきだるま
 だるまさん「達磨」(名) 1 だるまさん
 六722 だるまさんのうたをつくって、うたつて

あげようか。
 たれ「垂」 1 あまだれ・まえたれ
 たれ「誰」(代名) 1 たれ
 九594 九「九」 1 九「九」 1 九「九」 1
 だれ「誰」(代名) 110 だれ だれ
 一177 だれがかくでしょう。
 一178 だれがよむでしょう。
 一276 だれもおなじかお、だれもだれもちがったかお。
 一276 だれもおなじかお、
 一278 だれもだれもちがったかお。
 一278 だれもだれもちがったかお。
 二4010 だれだあい。
 二411 だれだあい。
 二422 だて、だれかがばかにするんだもの。
 三165 だれの手だろう。
 三778 だから、だれにもひととよるがあるのです。
 三786 だれにもお日さまはとられません。
 三794 むちゅうであそんでいましたので、だれひとり、上をみたりまわりをみたりするひまもありませんでした。
 三838 あんなところにだれがかけたの。
 三1006 おじいさんが、だれよりもはやく山にいて、
 三1049 わたくしはだれのところにもおよめいきません。
 三1059 けれども、かぐやひめのいうようには、だれもすることができませんでした。
 四514 だれも、ばらばらになって、にげようとするものはありません。
 四881 あの白い雲に、だれかが、ちぢまって

いるようです。

四〇三 〇五 〇六 おや、だれかと思つたら、かめさんか。

四一四 〇五 〇七 五のぼめん 生まれた村にかえつたら、だれも知らない人ばかり。

五二九 〇五 〇八 「にいさん、あのんだあれ。」

五三〇 〇五 〇九 それでも、まいにちあつるのをぼしたのは、だれかしら。

五六一 〇五 一〇 あつたぼみをこしらえたのは、だあれ。

五七〇 〇五 一一 けさ、こんなに大きな花を、三つもさかせたのは、だあれ。

五八〇 〇五 一二 花の色を空色にそめてくれたのは、だれでしょう。

五九〇 〇五 一三 こうして、まいにち、たっしやで生きて

五九一 〇五 一四 いけるのは、だれのおかげだろう。

五九二 〇五 一五 だれがいてくれたのですか。

五九三 〇五 一六 「略。」とおっしゃったとき、だれかが、

五九四 〇五 一七 「うふふ。」とわらひだしたので、

五九五 〇五 一八 だれだ、しごと台の上をかきまわしたの

は。

五九六 〇五 一九 けれども、だれもきてはくれません。

五九九 〇五 二〇 あ、だれかと思つたら、きりぎりすさん

でしたか。

六〇〇 〇五 二一 おや、だれかたずねてきたらしい。

六〇一 〇五 二二 うん——だけど、いっただれがつれて

帰つたんだろうね。

六〇二 〇五 二三 海どこかでだれかがめくつて、大き

なきれいなページ、生きた絵本のページ。

六〇三 〇五 二四 だれがねむくするのだろう。

六〇四 〇五 二五 だれがそうさせるのかしら。

六〇五 〇五 二六 みなものにつづねるが、だれか、この

かたのつりばりをとつていったものはないか。

六〇六 〇五 二七 だれか知っているものはないか。

六〇七 〇五 二八 おや、だれかが、しょうじのあいだから顔を

をだしている。

六〇八 〇五 二九 だれのとこよりもよくあがりました。

六一〇 〇五 三〇 トネルの入口のところで、だれかの声が

します。

六一一 〇五 三一 いちばんはじめにくるのは、だれかな。

六一二 〇五 三二 だれかが、「略。」といったので、みんな

がわつとわらひました。

六一三 〇五 三三 三郎は、だれかにゆづつてもらった座席の

上に立つて、

六一四 〇五 三四 だれもいない。

六一五 〇五 三五 それとも、だれかにおききになったので

すか。

六一六 〇五 三六 それは、だれも教えてくれたことではあり

ません。

六一七 〇五 三七 だれでも幸福のほしくない人はありません

から、

六一八 〇五 三八 だれかがきいたら、自分は「幸福」だとい

わずに、「びんぼう」だというつもりでした。

六一九 〇五 三九 「おまえさんはだれですか。」

七〇〇 〇五 四〇 「おまえさんはだれですか。」

七〇一 〇五 四一 「おまえさんはだれですか。」

七〇二 〇五 四二 だれにもわるいことをしないのですから。

七〇三 〇五 四三 じゃあ、だれにわかるのかね。

七〇四 〇五 四四 しかし、いままでにだれをなつかしく思っ

たよりも、あの鳥をなつかしく思つた。

七〇五 〇五 四五 春になると、だれもが、このめずらしいお

客の帰ってくるのをまちがれています。

七〇六 〇五 四六 かれ枝ならば、だれの山の木の枝でも、

おつてよいことになっています。

七〇七 〇五 四七 だれがきみなんかと遊ぶもんか——

七〇八 〇五 四八 ぼくの首をひつかいたのはだれだ。

七〇九 〇五 四九 まつ林の中を通つていくとき、だれかが、

「略。」と、大声にさげんだ。

七一〇 〇五 五〇 「略。」と、だれかがさげんだ。

七一一 〇五 五一 「略。」と、だれかがさげんだ。

七一二 〇五 五二 「略。」と、だれかがさげんだ。

七一三 〇五 五三 目をつむると、だれかが、くもの頭をなで

ています。

七一四 〇五 五四 『こんにちは。』なんていつたつて、だ

れもわかるものがありません。

七一五 〇五 五五 世間からはますますわられて、だれひと

りあいてしてくれなくなり、

七一六 〇五 五六 では、実力があつて、力いっぱいはた

らくいい船員には、だれがなるのさ。

七一七 〇五 五七 母親と相談して、戸をしめきつて、息を

ころして、だれもないふうをしていました。

七一八 〇五 五八 だれかのかさのしずくが、私のくつの上

にぼたぼたと落ちてきたりした。

七一九 〇五 五九 「だれですか、あの人は。」

七二〇 〇五 六〇 ぼくにはだれも教えてくれるものがあり

ません。

七二一 〇五 六一 立ちはじめには、物を持たせると立つこ

とができると、だれかがいった

七二二 〇五 六二 だれかがそれをとらえました。

七二三 〇五 六三 だれかが水をくみあげていましたので、

先生は私の手をといての口の下へやりました。

七二四 〇五 六四 そのことが評判になって、だれもかれも

かりにいくようになった。

七二五 〇五 六五 そのちは、だれがなんと頼んでも、か

してくれなくなったという。

七二六 〇五 六六 「遠足」ということばは、だれにでも同

だれの目にも見える『幸福』どもだよ。

したは口からたれて、目はみにくく光って

「いめんね。」

二
43
2 たろう「ぼくが
わるかったよう。」 山びこ

「わるかったよう。」

二43 5 ほら、ちゃんとあやまるだろう。」たろう
「おとうさんのおっしゃるとおりですね。」

二43 7 さあ、もうすこしのぼろう。」たろう「の
ぼろう。」

たろう 「人名」25 たろう 太郎 太郎 じうらしま
たろう

二38 3 てる人 たろう おとうさん 山びこ（声
ばかり）

二39 1 たろうと おとうさんが、山へ のぼって
きます。

二39 9 たろうは、あせを ふきながら、あたりの
けしきをながめます。

二40 4 たろうが、大きな 声で、「略。」とさけ
びます。

二41 2 会 ぼく、たろうだよ。

二41 3 会 山びこ「たろうだよ。」

二41 4 会 たろう「ぼくが たろうだよ。」

二41 5 会 山びこ「たろうだよ。」たろう「うそつ
くな。」

二41 10 会 これこれ、たろう。

二43 8 たろうは げんきよく あるきだします。

二16 7 太郎がそばへきて、外国ではどんなことば
を話すかとたずねるものだから、

二17 1 「略。」と、また太郎がたずねましたの
で、おとうさんは答えました。

二17 2 会 太郎よ、フランスでは、さかな屋さんで
も、やお屋さんでも、みんなフランス語です。

二11 58 6 くり返しているうちに、太郎は、
「略。」と、早口にすらすらといえるようになった。

二11 58 9 太郎は得意になって、「略。」という

二11 59 9 あくる日、太郎は、友だちの正男と一雄

と三人づれで、学校から帰るときのことであった。

二11 60 3 太郎は、まえから父に、「略。」としかた
く定められていたのである。

二11 61 7 しかし、太郎はだまっていた。

二11 61 8 また父にきびしくただされて、太郎は、
やつときょうのことを、ありのままにうちあけた。

二11 90 9 太郎が、こういう短い文を書いた。

二11 90 10 太郎はこの「くりひろい」の中に、さま
ざまな氣持をこめてにちがいない。

二11 91 11 太郎と同じ文であるが、その中にたまた
まこまれていることは、太郎とはちがっている。

二11 92 1 その中にたまたまこまれていることは、太
郎とはちがっている。

二11 92 7 ほかの人がこれと同じ文を書いたとして
も、そのなかみは、おそらく、太郎や秋子と同じ
ではなからう。

二11 94 8 太郎は、秋の青い空を赤とんぼがむれて
とんでいる景色を思い、

たろうかじゃ 「太郎冠者」 「人名」12 太郎かじゃ

二65 2 狂言には、よく、太郎かじゃと次郎かじゃ
が、現われます。

二66 3 でかけるとき、太郎かじゃ、次郎かじゃと
いうふたりの下男に、「略。」というつけ、

二66 11 太郎かじゃと次郎かじゃは、声をそろえて
返事をしました。

二67 1 太郎かじゃと次郎かじゃは、はじめは、そ
のへやの方へは、顔も向けないようにしていました。

二68 2 さきに立った太郎かじゃが、思いきって、
からかみをひきあげました。

二68 8 次郎かじゃのほうが、太郎かじゃよりも、

ずっとおくびよう者でした。

二69 2 太郎かじゃは、「略」、だいじそうにしまつ
てあった、一つのまるいつばをみつ、

二70 10 ひきとめるひまもなく、太郎かじゃは、す
ばやく指をつこんで、

二71 10 太郎かじゃのほうは、氣が強いばかりでな
く、わるぢえがあつたから、

二72 11 太郎かじゃは、きゆうに両手で顔をおおい、
おいおい大声をあげてなきだしました。

二73 3 太郎かじゃは、なおも、おいおいなきなが
らいました。

二74 9 太郎かじゃと次郎かじゃは、こんな歌を歌
いながらにげだしました。

たろうさん 「人名」11 たろうさん

二44 3 会 たろうさん、わたし おるすいよ。

二57 5 会 たろうさん、よくいらつしやいました。

二58 2 会 あの とき、たろうさんが くりぬを
おって くだらなかつたら、どう なつて いた
かわかりません。

二61 2 会 たろうさん、よくごぞんじです。

二61 6 会 これを たろうさんに さしあげます。

二62 1 会 どうして、たろうさん。

二64 8 会 「まあ、たろうさんの よく ねて いる
こと。」おかあさんの こえで 目が さめました。

二42 7 4 たろうさんは、「ボチ」あてに 書きました。

二43 6 6 その とき、たろうさんが、「略。」と
いつて、つぎのような 話を しました。

二43 8 3 会 たろうさんは、なぜ ぶどうを もらわな
いで、かえたのでしょうか。

二61 6 6 たろうさんが、わきから、「略。」ときき
ました。

たろうさんたち 「人名」1 たろうさんたち

七47 4 はっきり書きあらわそうとすると、文章が、だんだんくわしくなっています。

七47 9 心がはっきりとしていますと、文章も、だんだんはつきりします。

七67 7 一つは、はじめ骨組みをこしらえておいて、それにねんどでだんだん肉づけをし、

七68 1 もう一つは、だいいりせきや木材をけずっていつて、だんだん、その人の顔にせていく

八66 だんだんなれて、指さきへもかたへもとまるようになったばかりか、

八75 だんだんあとずさりして、

八17 10 大きくなるにつれて、六本の足がだんだん強くなり、

八20 1 せみの子たちは、〈略〉、大きくなるにつれて、だんだん地のそこふかくもぐりこんでいきます。

八59 9 しかし、一晚ごとに、そのおよぎまわるあながだんだん小さくなっていった。

八98 1 黄みどりの新しいなえが、だんだん育っていきます。

八105 2 いねは、だんだん黄色くなっています。

九33 5 ⑤ らいぎよがふえてからは、ほかの魚がだんだんへってきたそうです。

九41 4 ④ だんだんたき木とりになれたのと、

九55 9 いちろうは、だんだんそばへいきましたが、びっくりしてたちどまってしまいました。

九74 6 馬車がすすむにしたがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、

九82 8 私たちは、だんだんしんけんになってほりました。

九84 10 ⑩ みなさん自身で、だんだんいろいろなことを知ってくると思います。

九105 7 だんだんのぼり坂になると、からだはほつてあせがでる。

九130 3 星はだんだんきれいに光ってきました。

九131 3 プンプンブーン、羽音がだんだん近づいてきます。

十19 2 だんだんまどおになる。

十18 3 病人は、だんだんしっかりした目を少年の上にすえて、

十18 9 ⑨ また、やさしい色がその目にうかぶこともありましたが、それも、だんだん小さく、しだいに暗くなってきました。

十二18 7 ⑦ これが鳴るんだなと思ってやっていうちに、だんだんおもしろくなったのです。

十二40 12 だんだんちえがつき、もの心がついて、学校にいくようになりました。

十二63 4 そのうちからだんだん長くのびて、おしまいにへびになってしまった。

十二114 1 そうして、遠いところも近くなり、世界はだんだん小さくなるような気がします。

十三13 7 熱心な学者が、だんだんそれを発見しました。

十三35 1 だんだん大きくなって、文字であることがわかり、その文字の意味がわかってくと、

十四62 5 よく氣をつけて見ていると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、

十四66 2 けむりがゆらゆらして、いくつものうずになり、それがだんだんに廣がり、

十四70 9 茶わんのお湯がだんだんにひえるのは、

十四83 6 雪が降りだしてから、だんだんつもるようす、

十五35 7 この絵のだんだんりやくされてきたものが、文字というものの起りとなった。

十五36 1 漢字も、もとは事物の形を表わした絵文字から起り、これがだんだん変わって、

十五99 7 ⑦ (光に) ぼくは、どこへ行っても、だんだん人に知られてくるね。

だんだんくわしくなる (課名) 2 だんだんくわしくなる

一38 十六 だんだんくわしくなる……三十

七 一37 1 十六 だんだんくわしくなる

たんと ⑤ 短刀 (名) 5 短刀

十五28 9 こしにさしていた短刀をぬいて、〈略〉、鳥のせ骨をさけて一つつき通し、

十五29 5 いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつた短刀があります。

十五29 10 少年は、右手に短刀をふりかざし、左手で女の子をかばい、

十五30 3 少年は、身をかわすと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。

十五30 11 少年は、すばやく短刀を持ちかえた右手で、その石を取るが早い、

たんどく (丹毒) (名) 1 たんどく

十一75 7 ⑦ たんどくが顔にでたのです。

だんな (旦那) (名) 9 だんな

十65 3 かれらは、だんなのねこかぶりをあばいたり、いたずらをしたり、

十65 9 ある村に、けちんぼのだんながありました。

十66 2 あるとき、このだんなは、用事で、となり村までいかなければなりません。

十67 3 だんなは、ちよいちよいあひのやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、

十71 8 ⑧ だんなが帰ったら、どんな目にあわされるかわからない。

172 6 ㊦ おまえは、だんながだいじにしているあの湯飲み茶碗を、庭石にたたきつけろ。

172 11 そこへ、だんなが帰ってきました。

173 3 だんなは、あつげにとられてたずねました。

174 10 だんなは、おこつて、「略。」と追いかけてました。

だんなさま 「旦那様」(名) 1 だんなさま

173 5 ㊦ じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうをとって遊んでいました。

たんねん 「丹念」(形状) 4 たんねん

92 1 先生は、「略」、ひとりでたんねんにほつておいでになります。

127 10 トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たんねんにみようと思います。

128 10 母は、いままでたんねんに織り続けていたぬのを、小がたなでたち切つてしまいました。

148 6 3 野原の中で、一本の草花を見いだして、それをたんねんに写生するのも、

たんぼ 「田圃」(名) 7 たんぼ 田んぼ

56 10 野原をゆっくりあるいていく、水車をくるくるまわし、たんぼに水をいれ、

63 11 ㊦ 雲のおじさん、わたしのたんぼはどこでしょう。

63 9 ㊦ あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼく、もう帰れないんだ。

64 5 ㊦ 「へのへのもへ」のかかしが、むねをはつて、目をむいて、たんぼをみわたしている。

75 8 2 たんぼの上で、つばめがちゅう返りをした。

93 6 5 ㊦ たきになり流れになって、村の中を通り、田んぼに落ち、湖にまでつづいています。

なつたところがみえます。

たんぼ 「蒲公英」(名) 8 たんぼ

39 3 ㊦ すみれ、たんぼ、れんげそう、花のおやねがうつくしい。

34 1 7 たんぼの、みが、小人になってとんでいました。

54 6 たんぼがさいいていたり、すみれがさいいていたり、

83 7 王女がこがね色のたんぼをつんでくると、王さまは、「略。」とおっしゃいました。

125 7 道ばたにさくたんぼ、とびかうちようちよ。

11 12 4 たんぼのわた毛が遠くとんでいく日だ。

11 14 10 一つの太陽の下で、「略」、まっさおな海もわらい、たんぼのわた毛も遠くとんでいく。

136 5 すみれ、たんぼ、わらびや、ふきや、たけのこや、ちようや、はち、

ち

ち 「地」(名) 14 地 ちあきち・あれち・くさち・しゅうごうち・ちやくりくち・ぬまち

63 6 おれるようにあたまを地につけるすぎの木。

81 6 地面におりた虫たちは、やがて、思い思いにやわらかいところをさがして、地の中にかくれてしましました。

81 5 7 地の中はどこもまっくらです。

81 9 2 かぶとむしの子どもたちは、つみごえやこえ土の中に生みつけられて、わずかに三ヶ月で大きくくなって、皮をぬぎかえて地の上へでていきま

す。

820 1 せみの子たちは、「略」、大きくなるにつれて、だんだん地のそこふかくもぐりこんで

11 16 4 天と地にかがやくものの中で、

12 65 4 その細いやわらかなものが、地をうがち岩をおしわけ、深く廣くのびていく。

13 13 2 東洋でも西洋でも、天は動き、地はじつとしていて動かないという、いわゆる天動説が行われていました。

13 15 1 地は動くといっても、それは一種ではありません。

144 2 6 ㊦ 天には雲、地にはあらそいがたえなからうが、心に太陽をもて。

144 54 10 ㊦ 明かるい地の上でくらしているかたには、土の中のこととはわからないでしょう。

144 56 2 ㊦ しかし、根さんが、せっかく吸ってくださった地の中の水や養分でも、

15 66 8 父は、同志社を守り育てるために、北海の地をすてて、京都にすまいを移すことになった。

15 98 4 ㊦ 子どもの幸福というものは、地の上でも、天の上でも、いちばん美しいものに見える

ち 「血」(名) 2 血

81 1 7 くちばしから血をだして、「略」、からだをふるわせてもう虫の息です。

15 29 4 いま、少年の左手には女の子が、右手には血にそまつた短刀があります。

ち 1 ち ち 小さな人をおかわいがれ。

ちいさい 「小」(形) 29 小さい 《イ・イク》

27 1 4 それがだんだんととおくになるように、小さくする。

54 9 山のとつぺんのすぐちかいところ、小さい

たにまに、小さいいずみ、小さいたにまに、小さいながれ山から川のあかんぼが生まれる。

五49 小さいたにまに、小さいいずみ、

五410 小さいたにまに、小さいながれ

五410 小さいたにまに、小さいながれ

五296 一つは小さくてかるそうな物です。

五301 しかし、きみは小さいから、まあいいよ。

五303 小さいほうの荷物を、わたしてもらいました。

五304 その荷物は小さいわりに、なかなかおもかったのですが、

五543 あんな小さいの。

五908 なにおかしなものか、このわしも小さいときは、オギヤア、オギヤアといたのだよ。

五944 ひなはたいそう小さくて、元気がなく、死んだようになっておちていたのです。

六66 なんとという小さい、なさけない自分であらう。

六611 ただ自分だけがこのように小さくて、なんの役にもたちそうにない。

六84 男の子はゆびさきでそれをつまもうとしたが、あまり小さいのでつまめなかった。

六341 かしの目だま、ぐるぐるまわりながら、大きくなったり、小さくなったりする。

六1001 すると、向こうのけしきが、小さく、さかさまにみえた。

七256 たまごから小さい虫になるのに、七日かかっています。

八166 虫は、小さいけれど、親ぜみによくいて、ほそいのがった口をもっています。

八859 しかし、一晩ごとに、そのおよぎまわるあながだんだん小さくなっていった。

九3611 小さい妹のために、くわの葉につつんで持って帰ったこともありました。

九1417 くもはからだを小さくまるめて、ころっと横になりました。

十一4611 あの山のすがたが、小さいころのことを、いろいろ思い出させる。

十一891 また、やさしい色がその目にうかぶこともありましたが、それも、だんだん小さく、しだいに暗くなっていきました。

十二685 小さなやわらかい物を切るのこぎりののは、小さくてうすい。

十二846 あの小さいからだは、(略)、大きなチルデン選手を追いつめるものすごさは、

十二965 あなたがたの小さいときの写真などもあるでしょう。

十二1142 そうして、遠いところも近くなり、世界はだんだん小さくなるような気がします。

十五591 私は小さいとき、その新島裏にたいそうかわいがられたのですから。

ちいさし「小」(形)3 小さし「キ」

九1142 いもうとの小さき歩みいそがせてちよう紙かにゆく月夜かな

九1184 金色の小さき鳥のかたちしていちようちるなり丘の夕日に

十五108 ばらの木の赤きめをふくかきの上に小さき虫の出でてとぶ見ゆ

ちいさす・きる「小過」(上)1 小さすぎる「ギ」

十五1086 まあ、どうあなたがやってみたって、あれをすっかり見るには、まだ小さすぎますよ。

ちいさな「小」(連体)121 ちいさな 小さな

一378 ちいさな 川が、うちのまをを、さらさら

とながれています。

一529 かわらのすなは、みんなちいさなほしみたいですね。

二114 みんなは、小さなかみに、ひとつひとつことばをかきつけました。

二672 みんなは、小さな声で、「しゅしゅしゅしゅ」をつづけながら、春をさがす。

三103 小さなひしゃくでおちやくんで、かけてあげましょ、おしやくさま。

三6710 青々とした中に、ふんわりした、小さな、白い雲がとんでいました。

三847 みんながみますと、そのあまたれの中に、小さなにじがみえました。

三923 かみきれをいれたりする小さな子がいたら、とめてやりましょ。

三968 大きな字でも、小さな字でも、かくことができません。

三1012 その竹を切ってみますと、小さな、きれいなおひめさまがすわっていました。

四751 ち——小さな人をかわいがれ。

四829 ぎん紙でこしらえた小さなつりがねや、十字かもさげました。

四955 大きな雪、小さな雪、雪のかたちはきまつていない。

四1212 こんな小さなものですが、これができあがるまでには、どれほど苦心をしたことでしょう。

五176 わたしのはこんな小さな字だから、なお心配ですよ。

五5311 そういいながら西の方を見ると、小さな星がちらちら光っていました。

五654 ふたりは、ふるい小さな家に住んでいまし

た。

- 五773 みると、まえに住んでいた、ふるい小さな家がたっていました。
- 六42 小さな鉄のねじが、ふいにピンセットにはさまれて、明かるいところへだされた。
- 六49 自分のおかれているのは、しごと台の上ののっている小さなふたガラスの中で、
- 六49 そばには小さなしんぼうや、は車や、ぜんまいなどがならんでいる。
- 六54 ピンセットや、小さなつちや、さまざまな道具も、おなじ台の上によこたわっている。
- 六74 ふいにバタバタと足音がして、小さな子どもがふたり、おくからかけだしてきた。
- 六81 やがてこの小さなねじをみつめて、
- 六114 ねじをはさんで、きかいのあなにさしこみ、小さなねじまわしでしっかりとめた。
- 六123 小さなねじが一本いたんでいましたから、とりかえておきました。
- 六169 小さなありでも、力まかせにかんだので、かりうどもびっくりして、
- 六251 小さなからだに大きな荷物。
- 六995 古いめがねのたまと、おとうさんにかつていただいた小さな虫めがねがでてきた。
- 六1192 そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下とまん中をはりつけました。
- 七198 子どもたちは、小さな橋を渡る。
- 七631 小さな虫がかたまつて、顔のところとんでいくくれた。
- 七694 たつぷりと、春は、小さな川にまで、あふれている、あふれている。
- 七938 子うさぎの生まれた、右から四ばんめのへやに、黒い小さな虫が、たくさんいました。

- 八58 そばにすえた小さなかごの中から、一わずつつかみだしては指さきへとまらせたり、
- 八63 その一わを買い、小さなボールばこにいれてもらつて、だいに持って帰りました。
- 八108 小さな家で、小さなかつこうをしいながら、毎日なにかかわつたことをしてかしては、
- 八109 小さなかつこうをしいながら、
- 八120 「ピオのはか」と書いた、小さなせきひを立ててやりました。
- 八158 せみの子どもたちは、自分の小さなまえ足でトンネルをほりながら、
- 八585 すると、おもちゃのように小さな汽車が、けむりをはいて走ってくる。
- 八615 どのたまごからも小さなひなの首がでた。
- 八768 くれがたになつて、あひるの子は、ある小さなひやくしようの小屋へやつてきた。
- 八918 小さな子どもがきて、水にパンや麦をなげてくれた。
- 八919 いちばん小さな子どもが、「略」とさけんだ。
- 九174 すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。
- 九249 その小さな胸には、わか葉のもえる日本の春の美しさを感じうかべているのでしょう。
- 九326 ぼくがいまいる家は、山のふもとにある森の中の小さな農家ですが、
- 九3410 どんな小さな根っこでも、すつかりとりのぞいておかないといけないといわれて、
- 九351 小さなぼくたちの畑がようやくかいこんされて、
- 九427 いちばん小さな三つになる妹もつれて、うちじゅうがみんなでもほりをしました。

- 九509 岩のがけの中ほどに、小さなあながあいていて、
- 九543 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木の森の方へ、新しい小さな道がついていました。
- 九8510 これはたいせつな物だから、どんな小さなかけらでも、ひろつておきなさい。
- 九1263 そこで氣をつけてみると、右岸からさらさらと流れ落ちる小さな谷川がある。
- 九1381 くもの小さなときのこと、ゆめでもみるように思いだされてきました。
- 十122 なるべく、小さな葉をくれませんか。
- 十124 少女たちは、略、小さなのをえらんで、ひろつてきてくれました。
- 十213 そのあとから、小さな子どもが、よちよちと歩いてくる。
- 十387 眞珠母貝の中に、砂のような小さなものがいりこみ、
- 十413 ある小さな生物が、海水いちめんふえて、海水が茶色にかわるほどになるのである。
- 十1481 ぼくのいすは、小さなゆりいすで、
- 十1778 ねむつたあとでは、目を開いたときに、その小さな看護人をさがすようにみえました。
- 十19012 看護婦が、小さなすみれの花たばを、ベッドの上のコップの中から取ってきました。
- 十1931 少年は、その小さな着物の包みを小わきにかかえました。
- 十1912 二三年は、青い小さな実が、ほんの二つ三つ、ついたりつかなくなつたのだつたのに、
- 十2391 小さなベッドに横たわりながら、
- 十2685 小さなやわらかい物を切るのこぎりののは、小さくてうすい。
- 十2734 パラパラと音がして、白い小さなつぶつ

ぶのものが落ちてきて、

十二73 8 子どもたちは、小さな手をしゃくしにして、受けようとしては、

十二82 9 みるからにりっぱな体格は、小さな清水選手のおよぶところではありません。

十三4 9 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木のめのむれは、おたがいひじをつつきあって、

十三17 5 デンマルクは、〈略〉本國と、三つの島からなっている、小さな、しずかな國であります。

十三18 1 もともとせまい、小さな國ですのに、そのもっともよい土地を失いました。

十三29 11 前の荷の上に、小さなをふらさげ、

十三32 5 大きなきんぎょに小さなきんぎょ。

十三34 11 小さな子どもは、〈略〉、ただ美しいかざりのような氣持で、れんをながめている。

十三36 5 小さな光ったわたが、土べいのかたすみにたまる。

十三57 5 〔いすによるマドンナ〕は、おけのそこにかいたという小さな絵だが、

十四5 5 フィリップ自身、中部フランスの小さな町のまじしい木ぐつしの子に生まれ、

十四10 5 光をずっとやわらかくするために小さなかさがあるとか

十四10 7 〔それには、つかいかたを書いた小さな書きつけがついているはずだ。〕

十四11 10 〔いっしょに小さなを送りました。〕

十四13 1 〔コーヒー入れば、中に小さなめもりのようなものがついていて、〕

十四13 3 〔それに、小さなさながらあります。〕

十四30 7 小さな島國に住んでいたために、

十四34 10 この廣大なうちゅうにくらべては、太陽もごく小さなものです。

十四34 11 地球などになると、なおさら、ごくごく

小さなものです。

十四35 1 人間などは、バクテリアよりも、もっともつと小さなものに感じられるかもしれません。

十四35 3 大うちゅうから見たら、たしかに、人間は、バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。

十四35 5 そのバクテリアにもおとる小さな人間が、引力の法則を発見したり、

十四44 11 ローマン号という小さな汽船が、

十四63 1 熱い水蒸氣がひえて、小さなしずくになつたのが、無数にむらがつているので、

十四71 7 湯の中にうかんでいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、

十四79 1 十文字の小さな木ぎれをはさんで、チョンチョンとたたいて、みごとに割っていました。

十四90 5 〔略。〕と、小さなマッチ賣りの女の子は、町をあらこちら歩きながら思った。

十四93 2 雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわりを、花かんむりのようにくまどった。

十四93 3 その小さなマッチ賣りのむすめは、

十四93 6 その小さなマッチ賣りのむすめの考えたことはそれであつた。

十四93 11 女の子は、手にマッチの小さなたばを一つ持っていた。

十四94 7 女の子は、両足を——そのあわれな、小さな、赤く、青くなった両足をそろえて、

十四95 3 女の子は、その上へ、小さなつめたい両手をさしのべた。

十四95 5 その小さなほのおが、その子には、もえさかる大きなほのおのように思われた。

十四95 12 ほのおは、その小さなマッチ賣りのむす

めを喜びむかえるようにおどりあがつた。

十四96 2 女の子は、小さな、つめたい足を、かがやくほのおの方へのぼした。

十四98 2 たくさんの小さなろうそくが、みどりの枝の間からかがやいて、

十四98 5 いく百もの小さな人形が見おろして、

十四98 12 かがやく小さな星よ、おまえはいったいなんだろうか。

十四102 3 人々が、マッチ賣りのむすめの、ひえきつた小さなきんぎょを見つけたとき、

十五20 2 そこには、氣持のいい、小さなホテルがここかしこに立っています。

十五27 11 もう、がけの上で「あれあれ。」といっている人々の目には、小さな小さな黒い点かなにかのようにしか見えなくなっていました。

十五27 11 小さな小さな黒い点かなにか

十五46 3 ある小さな店先に出いた一まいの赤絵のはちを手にとつて、かれは、びっくりした。

十五62 9 小さな声でうったえる私のくりごとを耳にしたおばさんは、腹をかかえてわらいだした。

十五63 7 おじさんは、きちんと着ていた上着をかなぐりすてて、かた手に小さなくつを持ち、

十五86 5 小さなおかしもないの。

十五96 7 小さな子がやって来た。

十五96 11 小さな「幸福」のむれ、ふざけたり、わらいこけたりしながら、

十五113 6 小さな指ををはめている。

十五114 7 〔あしたまた、あの小さな家に帰って、〕

十五114 12 小さな家に帰るのですよ。

ちいさなおこない 〔課色〕 2 小さな行

十二2 2 一 小さな行………四

十二4 1 一 小さな行

ちいさなねじ (課名) 2 小さなねじ

六22 一 小さなねじ……………四

六41 一 小さなねじ

チズ (名) 1 チーズ

十一78 看護婦が持つてきてくれる、すこしばかりのパンとチーズも、ほとんどたべませんでした。

ちいちゃん (感) 1 チイチイチン

八137 「チロリン」だの、「チイチイチン」だのと鳴いているほおじろの声をきくと、

ちえ (知恵) (名) 6 ちえひわるちえ

三252 あるちえのあるおじいさんがいいました。

三266 すると、あのちえのあるおじいさんが、「略」といいました。

三283 すると、あのちえのあるおじいさんが、「略」といいました。

八453 これをきいて、ちえのある人たちは、みんなより集まって、どうしたら王さまの病氣をおすことができるかと、相談をはじめました。

八468 金持だと思ふとからだがよくわかったり、からだがよくぶだとちえがたりなかったり、

十二4012 だんだんちえがつき、もの心がついて、学校にいくようになりました。

チエロ (名) 1 チエロ

六182 あるきりぎりすはチエロをひいています。

チエロのきりぎりす (話手) 4 チエロのきりぎりす

六192 なかなかよくあつたね。」チエロのきりぎりす「ほんとにいい氣持だ。」

六221 チエロのきりぎりす「ありさん、ありさん。」

六231 チエロのきりぎりす「いいだろう。」

六242 チエロのきりぎりす「はたらくやくそくだって。」

ちかい (近) (形) 15 ちかい 近い 《一イーク》

おわりちかい・とおいちかい

三962 にわの花も、空の雲も、とおい山も、ちかい家も、かくことができます。

三1096 十五夜がちかくなったある夜、かくやひめは、とうとう声をたててなきだしました。

三1165 天にいちばんちかい山はどこか。

三1168 するがにある山がいちばんみやこにもちかく、天にもちかいそうでございます。

三1169 天にもちかいそうでございます。

五48 山のてっぺんのすぐちかいところ、小さいたにまに、小さいいずみ、

五1089 近いところに製材所ができて、のこぎりのやかましい音が、あさからばんまでひびきました。

六262 雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近いころ。

六7911 そうして、自分とあさがおの花とが、たいへん近いもののように思われました。

七465 私は、汽車のまどから、夕ぐれに近いそとをながめた。

七707 もやが深いから、遠いような、近いような、月明かりだ。

九337 黒くてひらたい貝がとれますので、なんども湖に近い川しもの方へとりにいきました。

九399 根もとからかかれてある高さ十五メートルに近い木にのぼったことがあります。

十二1141 そうして、遠いところも近くなり、世界はだんだん小さくなるような氣がします。

十四178 が、近いうちにまたはじめましょう。

ちがい (違) (名) 32 ちがい おおちがい・ちがいがい・ちがいがいあつかい

二558 いまはおいでになりませんが、まえにはおいでになったにちがいありません。

三145 おしゃかさまの おしえて くださったことは、きれいな心になれということにちがいない。

三1019 これはわたしにさずかった子にちがいない。

六968 あ、それにちがいない。

六1085 はながつまつたために発音ができなくなるような音は、もともとはなから声のするような音にちがいない。

六1137 一ぎよう一ぎようは、なにか、ほかのぎようとはちがつた性質をもっているにちがいない。

七499 あぶなかつたが、わずかのちがいで勝った。

七779 それにちがいありません。

七824 らくだをぬすんだのは、この男にちがいありません。

七843 それで、歯が二三本ぬけているにちがいないと、考えました。

八87 それは、鳴きかたのちがいではなく、ききかたのちがいだろうと思う人もあります。

八87 ききかたのちがいだろうと

八4910 だれでも幸福のほしくない人はありませんから、どこの家をたずねても、みんな喜んでむかえてくれるにちがいありません。

九54 三色の組みあわせにしたら、二色のときよりも、もつとちがつた感じがするにちがいありません。

九68 音をうまくあわせると、とけあつた美しいひびきとなつてきこえるにちがいありません。

九1151 いまの鳥はこの木にいるにちがいないし、ひそかに枝葉の中をみあぐる

十2810 観察すればするほど、自然のおもしろさもあり、そのふしぎなことにうたれ、美しさにお

どろくにちがいありません。

十342 いまのようなぬのの織りかたをしていたのでは、やがて、困るときがくるにちがいない。

十394 ④ もし、母貝の中に、核をさし入れることができたなら、眞珠が発生するにちがいない。

十6911 ④ ぐずぐずしているうちに、どつきにあたるにちがいない。

十一113 ④ いい整調が、りっぱに日本じゅうの足なみをそろえてくれるにちがいないよ。

十二867 わずかな点のちがいで、清水選手の負けとなりました。

十二9011 太郎はこの「くりひろい」の中に、さまざまな氣持をこめているにちがいない。

十二919 樂しかったさまたまなことが、こまかに、この文の中にたたみこまれているにちがいない。

十三216 ④ 自然は、このむずかしい問題を、かならず解決してくれるにちがいない。

十三234 ④ もしある時期になって、小もみを切りはらってしまったら、大もみは土地をひとりじめして、生長するにちがいありません。

十四227 ④ いや、いまは日本語にちがいないが、もとは、外國のことばさ。

十四2512 学問などが傳わってきたときに、そのことばもいっしょに傳わってきたのにちがいない。

十四3710 星は、きつと、あなたがたに力をあたえてくれるにちがいありません。

十四857 一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、たしかに空からの手紙にちがいない。

十五744 兄と弟とのちがいは、いでん学上の能力のちがいは別として、一方が先に生まれ、他方があとから生まれたというだけのことだ、

十五745 いでん学上の能力のちがいは別として、ちがう「違」(五) 73 ちがう 《イ・ウ・ツ・

ーワ》↓すれちがう
一278 だれもおなじかお、だれもだれもちがったかお。

二126 ちがったのをならべてみました。
二356 ④ ちがうよ。

二464 ④ 「ちがいます。」
三728 ④ 「ちがうよ。」みんながいました。

三732 ④ 「ちがうよ。」みんながこたえました。
三735 ④ 「ちがうよ。」

三737 ④ 「ちがうよ。」
四468 ④ おとといは、そんな氣もちだったけれど、きょうはちがうんだよ。

五158 汽車のきつぷは、遠い、近いによって、ねだんがちがいますが、

五727 ④ おばあさん、氣でもちがったかね。
五927 ④ あら、りょうかんさん、ちがいますよ。

五9211 ④ ちがいますよ。
六68 ④ いろいろな道具、たくさん時計、それらはかたちも大きさもそれぞれちがってはいるが、

六748 ④ あれはちがいますよ。
六796 ④ ちがうでしょう。

六1131 五十音図というものは、《略》、「ちがったかなをならべたもの」ぐらいに思つて、

六1136 一ぎよう一ぎようは、なにか、ほかのぎようとはちがった性質をもっているにちがいない。

七124 「《略》。」というときの「手」は、またすこしちがいます。

七147 同じことばで、ちがったつかいかたがあるのは、「手」だけではありません。

七1411 腹に思っていることと、いうことが、ちがう人がある。

がう人がある。

八84 同じ日本の中でも、土地土地でほおじろの鳴きかたがちがうと、本でよんだためです。

八795 そればかりでなく、ねこやにわとりとはまったくちがった考えをもっていた。

八986 種まきのときとちがって、こんどは深くたがやしました。

八1065 両方をくらべてみて、あまりちがわなことがわかりました。

九47 黄色のかわりに、みどり色をぬってみると、また、ちがった感じがします。

九54 これは二つの色の組みあわせですが、三色の組みあわせにしたら、二色のときよりも、もっとちがった感じがするにちがいありません。

九61 この音と、ほかの音とをいっしょにひいてみると、まえとはちがった感じがします。

九63 三音、四音と組みあわせてみると、さらにちがった氣持がします。

九77 「月」だけで思ひだした心の絵とは、いくらちがったものがあらわれてくるでしょう。

九85 ことばの組みあわせも、それぞれちがった新しい思いをおこさせます。

九648 ④ いえ、ちがいます。
九651 ④ いや、ちがうよ。

九667 ④ いいえ、ちがいます。
九668 ④ ちがうよ。

十557 わりに書くと、自分がほんとうに思ったり、感じたり、考えたりしていることとは、ちがったものになります。

十633 能は、《略》、かぶきや、ほかのしほいとも、いろいろちがうところがあります。

十634 いちばんちがうところは、

十642 日本の絵画や、庭園や、建築にも、外国とはおもむきのちがったおもしろいものが、たくさんあります。

十649 そうして、能が、美しさを現わそうとするのちがって、狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきや、ひやかしなどで、できている

十一156 オルガンのキイから、赤い、青い、金色の、ちがった形の小鳥が、はばたいでて、

十二458 人間のしばいとちがって、みていると別世界にいったような楽しい気がするよ。

十二472 顔の色やくらしかたがどんなにちがっていても、

十二921 太郎と同じ文であるが、その中にたまたまこまれていることは、太郎とはちがっている。

十二921 同じ文題で書いても、書かれたことがそれぞれちがってくるのも、やはりこのためである。

十二921 なかみはそれぞれちがって、

十二933 書くことは、話すこととちがって、その場のようすが相手にみえないから、

十二947 ところがこれを読んだ人々の心には、めいめいちがったものかと思ひだされてくる。

十二9510 読み手によって、三人三よう、それぞれちがったことを心の中に思いうかべる。

十二1034 いまつかっているお金とずいぶんちがいます。

十二1056 この人たちの着物やかぶりものなども、いまのものとはずいぶんちがっています。

十三303 どちらにも、大小さまざまあつて、音色もちがうし、同じ大きさのどちらでも、そのうちかたによって、調子がちがう。

十三304 そのうちかたによって、調子がちがう。

十三5511 絵はがきをそのすりのものとくらべてみる

と、ずいぶんちがっているのにおどろきました。

十三565 けれども、本物にくらべたら、やっぱり、月と太陽みたいにちがうといつてもいいな。

十三566 そんなにちがうのですか、おじさん。

十三596 その絵は、たいへん感じがちがいますね、おじさん。

十四44 けれども、フランスのルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもって、私たちの心をうつのです。

十四464 來客を前にして、客間で歌っているのと、ちつともちがわなような歌いかたです。

十四656 もちろん、これは、まわりの空氣の温度によつてもちがいますが、

十四692 もつとも、らい雨のできかたは、〈略〉、だいぶようすのちがったものもあります。

十四7911 簡単なことを、知っているのといないのでは、たいへんちがいます。

十四843 一ひら一ひらの雪が、それぞれちがったけつしょうをしていること、

十四8410 水蒸氣の量、高度など、さまざまな條件によつて、雪のけつしょうがちがうわけを、

十四887 それとも、心の中で考えごとをしていて、思わず方向がちがったものであろうか。

十五351 色のちがった貝や、じゅずだまを結びつけることも行われた。

十五388 それで、たいていの漢字には、この音と訓のふたとおりの性質のちがった読みかたがある。

十五418 ローマ字を利用して、発音のちがっている多くの國々のことばが書き表わされている。

十五567 その際算出した高さは、実測の結果とわずか十フイートしかちがわなかった。

十五594 いやいや、時代がちがう。

十五743 自分の子女は、その性質がどんなにちがっていても、

十五781 きみたちの考えが、たとい世間の考えとちがっていても、

十五9411 ちがったように思うのは目のせいです。ちがえる「違」(下) 1 ちがえる《―エ》↓ま

ちがえる・みちがえる

四796 み―右と左とちがえぬように。

ちかく「近」(名) 13 近く↓いわかどちかく・かがんちかく

六3810 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどつてきてかしの近くにとまる。

九196 ウィーンの動物ほご協会に、近くのランネルスドルフというところから、

九1192 私は父につれられて、近くの高い山に登った。

九1242 「きつと、泉はこの近くにゐる。」

九1244 まつ川がてんりゅう川に流れこんでいるところの近くまでくると、

十一42 近くには小高い丘があつて、

十一46 川上の方をながめると、近くの町の工場

のえんとつが、なん本も立っているのがみえる。

十一611 さいいい近くの田で働いていた村の人たちに助けられて、

十一639 少年は、ナボリの近くにある村からきたのでした。

十二65 すると、にわか雨が降りだしたので、近くの家をたずねて雨具をかりることにしました。

十二627 十和田湖の近くの奥瀬村に、ひとりの木こりがいた。

十二702 深川の芭蕉の家の近くに、曾良という人が住んでいました。

十二715 先生の近くにいればこそ、毎日教えてもらえるので、

ちかごろ 「近頃」(名) 2 ちかごろ 近ごろ

十二192 近ごろはたいへんじょうずになりました。

十五614 ちかごろ、満ぼう先生はいかが、毎日お話ししております。

ちかし 「近」(形) 1 近し 《一キ》

九114 水ぐるま近きひびきにすこしゆれすこしゆれいるこでまりの花

ちかすい 「地下水」(名) 1 地下水

十245 地下水の流れ。

ちかちかちかちか (副) 1 ちかちか、ちかちか

十四984 たくさんの小さなろうそくが、《略》、ちかちか、ちかちかと女の子の上を照らし、

ちかづく 「近付」(五) 18 ちかづく 近づく 《一キ・キ・ク》

一457 だんだん わたくしたちの ばんが ちかづきました。

四1078 ああ、だんだん ちかづいてくる。

八205 そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をまつのです。

八894 私のようなみつももないものが、おくめもなく近づいていくのだから、ころされるかもしれない。

八901 そうして、羽をひろげてゆったりと近づいてきた。

九984 たかぎ、うしろの木をひとまわりして、そつとやまだに近づく。

九124 茶人は、長い探求の旅が終りに近づいたことを知って喜んだ。

九133 プンブンブーン、羽音がだんだん近づいて

きます。

九147 夜明けが近づいて、東の空が、ほんのりとしらみかけてきました。

十244 ヘッドライトにたよって現場に近づく。

十682 ふたりは、それをあいずのようにして、ぬき足さし足で、そつとおくのへやに近づき、

十一114 ふえが鳴って、ふいに一そうのボートが近づいてきた。

十一428 うめもほころび、こちふけば、春も目さきに近づいた。

十二324 私は、近づいてくる足音を感じましたので、

十四389 朝が近づく。

十四486 近づいてみると、《略》一本の大きなまゐるに、なんんかの婦人がつかまって、

十五285 すると少年は、あぶないことが近づいたと感じたので、

十五104 わんぱくこぞうのようなのが、聞きとれないさけび声をたてて、なにかにぶつかりながら

チルチルに近づいて来ます。

ちかづける 「近付」(下二) 1 近づける 《一ケ》

十四894 耳を地べたに近づけて、なにかの音でも聞こうとしたりする。

ちかみち 「近道」(名) 3 近道

九1193 その帰りに、近道をして谷をおりてくると、そこに小石でかこまれた美しい泉があった。

十一591 本道は遠いから、近道をしよう。

十一5912 その近道というのは、田のあぜ道で、ちかよる 「近寄」(五) 2 近よる 《一ツ・一リ》

七408 私は、さぶろうの方に近よりながら、車中の人たちに、心の中でお礼をいいました。

十503 その黒いいぬに近づいてみると、

ちから 「力」(名) 48 力 おおから・だれのちから・みえないちから

三1129 手足の力がなくなつて、なにをすることもできなくなつてしまいました。

四502 力のつよいがなが、三ばで、かっちゃんのおちていくのを、下からうけとめました。

四5110 かっちゃんは、とぶ力がなくなつてしまいました。

四629 さすがのへびも、いきがくるしくなつたので、力をゆるめました。

五336 船は、なんの力で走るのでしよう。

五345 この工場のきかいを動かしている力は、なんでしょう。

五6211 こんなによくできたのは、おかあさんの力ではありませんよ。

五641 わたしは、おとうさんやおかあさんの力で、大きくなったと思います。

五645 生まれたときからせわはしてきたが、日に日に大きくなったのは、おまえひとりの力でもなければ、おとうさんやおかあさんの力でもない。

五647 おとうさんやおかあさんの力でもない。

五758 おじいさんは、口ごたえもできず、力のない足どりで、海へやってきました。

六218 大きな荷物を、力をあわせて運んできます。

六652 世界じゅうで、いちばん力のつよいものはなに。

六7811 ごろうは、息をすることも自分の力ではないことをきいて、なるほどと思いました。

七355 私は、ありつたけの力をだして、さぶろうをかばうように両手をつっぱりました。

七371 私たちのために、せいっぱいの力で、すきをこしらえてくれたのです。

九三4 10 ちよまはふえる力の強い草なので、

九三8 7 引っかけるようにして、下から力をいれてひきおろします。

九五8 8 その声が、あんまり力がなく、あわれにきこえましたので、

一五9 「略」と、おとうさんが、力をいれて答えました。

一三四 8 これを人の手によらず、機械の力で動かすようにしたかった。

一五六 2 すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書きつけているその力に、おどろきました。

一七三 8 次郎かじやは力があまり、茶だなの湯飲みをはねとばして、こなみじんにいたしました。

一七四 4 ぼくが力をいれて、一本バックをやる

と、ボートは向きをかえて、

一一七二 2 手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど

一一七五 11 力をおとさずにいるがいいよ。

一二二 1 土人のひとりが、書物というものはなにかすばらしい力をもっているものだと考えました。

一二一六 1 力のこもった角、まるみのある面、

一二八〇 9 「略」と、ことに「ジャパン」ということばに力をいれて答えました。

一二八九 11 ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。

一二九〇 3 おうむのようになえていたのでは、そのことばは、すこしの力も発きしないから

一二九三 1 「遠足」ということばは、〈略〉、同じように通じる力をもっている。

一二一〇七 10 大きな目、のびた手さき、しっかりふまえた両足、どこをみても、力があふれています。

一三二三 8 小もみは、ある大きさまでは、大もみの

生長をうながす力をもっているが、

一四五 3 フィリップの作品の中には、〈略〉、私たち自身の生活を思わずふり返らせないではない

強い眞実の力が、こもっているのです。

一四八 12 けれども、力をだしてしごこのことをお考えになるのです。

一四九 5 おかあさん、いま、おかあさんが力を

おとしておしまいになったら、

一四一四 11 自分としては、力のかぎりおかあさん

を幸福にしておあげしよう。

一四一五 2 自分には子どもがあるということをお

考えになって、力をとりなしておくださるよう

一四三一 10 あなたがたのものをみる目、ものを考える

力が大きくなっていけば、

一四三五 7 これを思えば、人間の力というものは、

うちゅうにも負けないくらい廣大で、

一四三七 10 星は、きつと、あなたがたに力をあたえて

くれるにちがいありません。

一四四八 12 助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人た

ちが力をおとさないように、

一四五四 2 養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがたが、かつてに花をさかせたからです。

ばいひいた。

一六 16 9 そうして、力いっぱいいきましました。

一九四 7 くもが、いきなりとびかかっていくと、あ

ぶは、力いっぱい羽ばたきをして、

一九四 2 くもは、力いっぱいもがけば、あるいは、

つばめのくちばしからころろ落ちることができた

かもしれせん。

一一一〇 3 では、実力があって、力いっぱいはた

らくいい船員には、だれがなるのさ。

ちからづく「力尽」(名) 1 力づく

一五九三 10 さあ、みんなで、力づくで、いやでも

幸福にしまおうじゃないか。

ちからづける「力付」(下) 2 力づける「ケ

一八〇 8 少年は希望に力づけられながら、いきなり

病人のうでをつかんで、

一一一八〇 12 「略」といって力づけました。

ちからづよい「力強」(形) 1 力強い「イ」

一五五三 9 「カムイン」と答える、ひくい、しかも

力強い声に、

ちからまかせ「力任」(名) 3 力まかせ

一六 16 9 小さなありでも、力まかせにかんだので、

かりうどもびっくりして、

一一一五八 5 力まかせに、長いオールをぐいぐいと

こいでみたい。

一五九四 1 「はちきれそうなわらい」は、光のこし

のあたりを、力まかせにおさえました。

ちきゅう「地球」(名) 13 ちきゅう 地球

二四六 5 「ちきゅうだろ。」

一八三四 5 光の速度は、一秒間に地球を七まわり半し

ます。

一八三四 6 太陽から発した光が、地球にとどくまでに

は、やく八分二十秒ばかりかかることになります。
八348 光のとどく時間ではかると、あの星と地球とのきよりは、二十分や三十分ではありません。
八351 さて、空の星は、地球からのくらのいきよにあるのでしょうか。

十三139 地球もまるい形をしたもので、(略)、太陽のまわりをまわっている星の一つだ、

十三1412 数学でこまかに計算した結果、コペルニクスのいったとおり、天は動くものではない、地球が動くのだということを、明らかにしました。

十三166 (副) 「やはり地球はまわる。」と信じて、

十四3212 地球や金星などのわく星が、太陽を中心として回轉していることを知っています。

十四337 このぎんが系というのは、地球をとりまいていて天の川の内がわにあるたくさん星のむれなのです。

十四3411 地球などになると、なおさら、ごくごく小さなものです。

十四3412 その地球の上に住んでいる人間などは、

十五823 この地球の上でいちばんふとっている「幸福」(ぜいたく)たちが、

ちぎる「干切」(五) 1 ちぎる 《一ツ》ふふちちぎる

三922 くさを ちぎって いたり、かみきれを いたりする 小さな子が いたら、

ちぎれる「干切」(下) 3 ちぎれる 《一レ》

六3110 3 雲がちぎれてとぶ。

六358 かかしのつかまったひげ、のびるだけのびてちぎれてしまう。

九972 やまだ、ボタンをちぎれた服の糸にむすびつけようとする。

ちく ちもうそうちく

ちくおんき「蓄音機」(名) 1 ちくおんき

二172 ちくおんき きしや しやしんや やさいい などこままつ つくえ

ちくつと (副) 1 ちくつと

九5410 その坂を登りますと、にわかにはつと明かるくなつて、目がちくつとしました。

ちくりと (副) 1 ちくりと

九1325 みつばはだいい針をだして、くもをねらつて、ちくりとつきさしました。

ちしき「知識」(名) 10 知識 しかがくてきちしき

十三83 知識は、人から教えられたり、自分で本を読んだり、(略)、しだいにましていく。

十三86 自分のつとめをはたしていくために、知識をますことは、たいせつなことがらである。

十三87 知識には、浅いものと深いものがあるが、その深く進んだものを科学的知識という。

十三88 深い、正しい知識を得るには、考えたり、調べたり、(略)観察したり、実験したりする。

十三94 ものごとの原因と結果との関係や、その間に行われる法則を知つて、ととのつた知識とし、

十三910 知識が開けず、科学の進まないところには、迷信が行われる。

十三116 原因・結果の關係の簡單なものは、普通の知識によつて知られ、

十三1112 よいことやわるいこと、まっすぐなことや曲がつたことは、知識をもととして考えなければならぬ。

十三121 知識によらず道理によらず、いたずらに理由のないことを信ずる迷信は、

十三124 知識を廣め、學問を研究して、迷信をまったくとり去つてしまふようになれば、

ちしきとめいしん「題名」 2 知識と迷信 智識と

迷信

十三24 智識と迷信

十三82 知識と迷信

ちしつ「地質」(名) 2 地質

十三194 ダルガスは、戦いの間、橋をかけたり、道路をつくつたり、みぞをほつたりするときに、よく、國土の地質や地味を研究しましたが、

十五5810 (副) 室友ホランド先生、自然科学にもっともきょうみを有し、化学、生理、植物、鉱物、地質等をこのんで勉強す。

ちじょう「地上」(名) 7 地上

八2010 タぐれをみはからつて、思いきつて土をかきわけて地上にはいだします。

八216 地上には、一本のささだけがはえていました。

九11210 四十メートルも空中をとんで、先生は地上の人となられた。

十254 ひとりの工具がしごとをすませて、坑内から地上にでくる。

十四844 その美しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ降つてくることなどを写している。

十四8812 半年も雪にとざされていた地上に、ぽちつと黒い土が見えはじめたときの喜びは、

十五11512 (副) 人間が地上に住みついてからこのかた、いつもたずねあぐんでいた道が、

ちそう ちごちそう・ごちそうさま・ごちそうする

ちち「父」(名) 35 父

四1133 うらしまは、父や母のことを思いだして、きゆうに家へかえりたくなりました。

六87 このとき、父の時計屋さんはいつてきた。

七467 黄みがかつた麦ばたけ、縣道らしい白つばい道、(略)、たがやしている父と子、きりの花―

- 八四二 王子も、なんとかして父の病氣をなおしたいと考えて、幸福な人をさがしにでかけました。
- 九一九 私は父につれられて、近くの高い山に登った。
- 九一九 父は、その泉の水を手ですくって、いくどもうまそうに飲んでから、私にいった。
- 九二一 帰り道で、父は次のような話をしてくれた。
- 一〇二六 日の光をいっぱい受けた、はればれとした父と子。
- 一〇三〇 父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。
- 一〇三三 佐吉は、父の木工のしごとを助けてはたらいっていたが、
- 一〇三三 村じゅうの者から氣ちがいあつかいにされるのを見て、父は、「略。」とさとしたが、
- 一〇三三 父は、佐吉の心をいれかえさせるために、佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。
- 一〇五〇 ぼくは、父にいたら、せいの高いりっぱなからだになるだろう。
- 一〇五二 「略。」というと、父はにこにこわらないが、「略。」と答えた。
- 一〇六四 太郎は、まえから父に、「略。」としかくともめられていたのである。
- 一一一四 父は、「略。」とたずねた。
- 一一一八 その夜、また父にきびしくただされて、
- 一一一六 父は、「略。」とせめた。
- 一一二六 父は、「ぼくの父はどうしたんでしょう。」と、少年は口早にききました。
- 一一二四 父は、「ぼくの父はどうしたのでしょうか。」
- 一二二二 父は、「自分には父もある。」
- 一二二八 父がまえからそういうときのことを考え

- て、近所の荒地を三十アールばかりかいこんして、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、
- 一二三三 「父」「母」「妹」「先生」などのことがあったことを思い出します。
- 一二三三 父が、「略。」という。
- 一二三六 庭で植えた木の手入れをしている父にこういわれたら、バケツか、じょうろに水をいっぱいいて持っていくだろう。
- 一二三八 すずりばこをあけた父にこういわれたら、水さしに水をいれて持っていくだろう。
- 一二八〇 ふろ場の中で湯をかきまわしている父にこういわれたら、
- 一三二二 長男、フレデリック・ダルガスは、父の質を受けて、植物の研究がすきでしたが、
- 一三二二 わかいダルガスは、父に、「略。」といいました。
- 一三二四 おさな子はおとなの父だ。
- 一四一五 かが、父を失った直後、文学修業のためにパリに出て、
- 一五〇七 札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、心をゆるした間がらのこととて、
- 一五六一 京都に帰ってから父に送った手紙のどれにも、
- 一五六八 私の父は、同志社を守り育てるために、北海の地をすてて、
- 一五六八 十の春をむかえた私は、「略」、ひとり父につれられて、景色の美しい京都に移った。
- ちち「乳」(名) 5 ちち ちち
- 五二七 ちちに、たくさんちちをしほります。
- 七二八 黒の子うさが、ちちをのもうとして、親うさぎのちちにすがりつきますと、
- 七二九 親うさぎのちちにすがりつきますと、

- 七二九 うさぎは、人がみていると、ちちをのませたくないのでしょうか。
- 八二五 人間のあかんぼが、したのさきをじょうずにつかってちちをのむのと同じように、
- ちち「乳牛」(名) 3 ちちうし
- 五二九 白黒ぶちのちちうしです。
- 一一四七 みんなちちうしで、ぼくによくねていた。
- 一一四九 ぼくは、おとうさんと同じように、ちちうしをかって、自分でバターをつくりまします。
- ちちおや「父親」(名) 26 父親
- 一一一八 この人が金次郎の父親でした。
- 一一二〇 父親のすきなものをかうために、自分でわらじを作って、お金をもうけたりもしました。
- 一一二一 父親が病氣でねていましたので、金次郎が、そのかわりにでることになりました。
- 一一二三 金次郎が十四のとき、父親がなくなりました。
- 一一二四 どんなに病氣がちでも、父親の生きているあいだは、「略」切りぬけてきました。
- 一一二六 少年が、「略」病院の門ぼんのまえへいって、一通の手紙をみせ、父親をたずねました。
- 一一二九 少年の父親というのは、去年、しごとをさがしにフランスへいったのですが、
- 一一二九 長男にいくらのお金を持たせ、父親の看病のために、ナポリへよこしたのです。
- 一一二九 門ぼんは、その手紙をひと目みてから、看護人と呼んで、少年をその父親のところへつれていくようにしていました。
- 一一二九 少年は、身をおこして父親の方をみましました。
- 一一二九 こうもかわればかわるものか——これが

- 父親であろうとは、とても思われませんでした。
- 十一 70 3 ひたいと〈略〉まゆとのほかに、どこ
といて父親らしいところはありませんでした。
- 十一 71 5 少年は、〈略〉、目を父親の顔からはなさ
ないで、こしをおろして待っていました。
- 十一 71 10 少年は、〈略〉、やさしい父親のことをい
ろいろと思い返していました。
- 十一 78 2 母親のことや、妹たちのことや、父親の
帰りを待ちこがれていたことなどを
- 十一 79 2 父親のちよつとしたため息にも、ちよつ
とした目つきにも、ふるえながら氣をもんで、
- 十一 82 5 少年は、父親のうでの中にたおれまし
たが、胸がせまって息もつけませんでした。
- 十一 83 1 父親は、じっと病人の方をみつめたあと
で、いくども少年にほおずりしてからいました。
- 十一 84 7 父親は、少年を自分の方へひっぱりまし
た。
- 十一 84 10 「〈略〉。」と、父親はあきれてうながし
ました。
- 十一 85 12 父親は、じっと少年をみつめていました
が、やがてまた、病人の方をみました。
- 十一 86 3 「〈略〉。」と、父親はたずねました。
- 十一 87 1 父親はチチロにいました。
- 十一 87 8 父親はそういつてでいてきました。
- 十四 92 8 まだ一銭ももうけてはいないので、父親
が、きつとひどくしかるにきまっていた。
- 十五 33 1 父親のうでにだかれた女の子は、
ちちち (感) 2 チチ、チチ
- 七 4 4 チチ、チチ、ピークイ、ピークイ、チチ、
チチ。
- 七 4 5 チチ、チチ、ピークイ、ピークイ、チチ、
チチ。

- ちちちちち (感) 1 チチチチチチ
- 五 103 6 「チチチチチ、チュビ、チュビ、チュビ。」
と鳴きました。
- ちちのかんびょう 「課色」 2 父の看病
- 十一 3 7 九 父の看病……六十三
- 十一 63 1 九 父の看病
- ちちまゐる 「縮」(五) 1 ちちまゐる 《一ッ》
- 四 88 1 あの 白い 雲に、だれかが、ちちまゐて
いるようです。
- ちち・む 「縮」(五) 3 ちちむ 《ムーン》
- 四 42 2 ゴムのように のびる ことも あるし、
きゅつとちちむ こともありまし。
- 五 79 8 川の中の石が、のびたりちちんだりしてい
ます。
- 六 32 3 口の「へ」の字がのびたりちちんだりする。
ちち・める 「縮」(下) 4 ちちめる 《一メ》
- 六 102 2 二本のつつは、うまきはまりあつて、長く
のびしたりちちめたりすることができ。
- 六 102 5 二つのつつをのびしたりちちめたり、かげ
んしているうちに、はつきりした。
- 七 39 9 はじめ、さぶろうは、足をちちめて、心配
そうに私の方をみていましたが、
- 九 141 1 それで、そのまま手足をちちめて、じつと
すわっていました。
- ちちゅう 「地中」(名) 1 地中
- 八 18 9 同じ地中に住むものでも、こがねむしや、
かぶとむしの子どもたちは、
- チチロ 「人名」 12 チチロ
- 十一 70 7 田 チチロですよ。
- 十一 70 7 田 チチロがいなかからでてきたんですよ。
- 十一 71 2 田 おとうさんの子どものチチロですよ。
- 十一 82 2 田 「チチロ。」男はそういつて、少年の

- 方へとんできました。
- 十一 82 12 田 「おお、チチロ。」と、父親は、〈略〉、
いくども少年にほおずりしてからいました。
- 十一 83 3 田 チチロ、これはいったいどうしたのだ。
- 十一 83 5 おかあさんから、『チチロをやりまし
た。』って手紙がきたきり、
- 十一 83 7 田 これ、チチロ。
- 十一 87 1 父親はチチロにいました。
- 十一 87 11 で、チチロはまた看護をはじめました。
- 十一 88 2 チチロはまた、病人に飲み物を飲ませた
り、ふとんをおしたり、手をさすったり、
- 十一 88 9 チチロは、いよいよよくせわをして、
ちよつとのまも、目を病人からはなしませんでし
た。
- チックタックどけい 「時計」(名) 1 チックタック
時計
- 十一 56 1 田 すずむし、小むし、チックタック時計、
一つ一つひびく。
- ちつじょ 「秩序」(名) 1 ちつじょ
- 八 36 5 このきそく正しいちつじょは、いったいど
うしてたまたたれているのでしょう。
- ちっとも (副) 13 ちっとも
- 五 94 9 田 ちっとも動かないじゃないか。
- 五 108 2 田 ちっともこわいことはないから、いっ
しよにあそぼうよ。
- 六 95 1 田 ちっともぞんじません。
- 六 134 11 ちっともいいことではないと、うさぎさん
たちは話しあいました。
- 七 88 9 まえにたべのこした古い草は、ふみつける
だけで、ちっともたべません。
- 九 127 8 田 この二三日というものは、ちっともかか
らなかつたから、おなががすいてしまった。

十二64 葉は青く、くきは長く、みきは高くそびえているが、根はちっともみえない。

十二64 9 しかし根はちっともみえない。

十三38 4 園 おばさんだつて、このごろちっとも来てくれないじゃないですか。

十四10 8 手 ちっともむずかしいことはありません。

十四46 4 來客を前にして、客間で歌っているのと、ちっともちがわないような歌いかたです。

十五108 8 園 あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶったままで、ちっとも出て来ないのは。

十五117 6 園 私たちは、ちっとも知りませんでしたよ。

ちっぽ (名) 1 チッポ

十二30 9 園 「チロイ、ワンワン、チッポ——ワンワン、ゲタナイ、アンヨ、イタイ、イタイ。」

ちっぽけ (形状) 2 ちっぽけ

十四30 8 小さな島國に住んでいたために、氣持までちっぽけなものになってしまったのでしょうか。

十四31 4 そういうちっぽけな考えでは、とても世界のの中にはたつていません。

ちどうせつ 「地動説」(名) 2 地動説

十三13 12 つまり、天動説とは反対に、地動説が出てきました。

十三15 11 ガリレオも、〈略〉、だまっていられず、本を書いて、地動説を強くとなえました。

ちのみこ 「乳飲子」(名) 1 ちのみ子

十一64 10 母親は、〈略〉、自分はちのみ子もあつて、家をあけることができないので、

ちひょう 「地表」(名) 3 地表

八20 5 そこで地表に近づいてきて、皮をぬぐ日をもつのです。

八20 8 せみの子は、だいたんに、まっすぐなあな

を地表に向けてはつていき、

八21 8 地表から一メートルほどのぼつたところに、小枝がわかれていました。

ちひろ 「千尋」(名) 1 千ひろ

十五24 9 一つまちがえば、千ひろの谷間へ、氷と雪の中へ、まっさかさまに落ちこむのです。

ちぶさ 「乳房」(名) 1 ちぶさ

八16 10 これは、木からいうとめいわくしごくなことですが、せみの子からいえば、母親のちぶさに

すがつたようなもので、

チフス (名) 3 チフス

十四21 10 チフス、コレラ、マラリア、トラホーム、アルコール、ガーゼ。

十四23 11 園 チフス、トラホーム、ガーゼ、スキーはドイツ語。

十四26 5 チフスやトラホームは、ドイツ医学がはいってきたときにそれぞれ傳つたことばであるう。

ちほう 「地方」(名) 2 地方 ↓ いちちほう・ねつたいちほう

十四68 2 そういう地方のまわりに、わりあいにつめたい空氣におおわれた地方があると、

十四68 3 そういう地方のまわりに、わりあいにつめたい空氣におおわれた地方があると、

ちまなこ 「血眼」(名) 1 血まなこ

十五32 6 血まなこになって目の前のできを相手にしているものには、なんにも耳にはいりません。

ちみ 「地味」(名) 1 地味

十三19 4 道路をつくつたり、みぞをほつたりするときに、よく、國土の地質や地味を研究しました

が、

ちゃ 「茶」(名) 5 茶 ↓ あまちゃ・おちゃ・お

ちゃそのもの

七92 9 うさぎの毛の長さを計つてみたら、白は2cm、黒も2cm、茶は1・5cmでした。

九121 4 茶のうまさはお茶そのもののうまさにもよるが、たてる湯のうまさがいちいちである。

九121 10 ところが、てんりゅう川の中流の水をくんで、それで茶をたててみると、

九126 8 泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、心から楽しんだということである。

十五51 7 主人は、新しい茶をハギンスにすすめながら、〈略〉と、自分のことをうちあげた。

ちゃ (接助) 8 ちゃ

四42 7 園 きみ、列をはなれちゃだめじゃないか。

五87 7 園 おかしいわ。目が四つもあっちゃ。

六39 7 園 でも、村に帰らなくちゃ。

七18 3 園 そんなに実をとっちゃいけない。

十一53 1 園 そんなにぶらさがっちゃ、電車は動けませんよ。

十二21 2 園 絵をかくことも、いっしょうけんめい

にけいこしなくちゃだめでしょうね。

十三58 6 園 じゃあ、やつぱり、おじさんみたいに、旅行して来なくちゃだめですね。

十四100 4 園 もう行っちゃいや。

ちゃあ (接助) 1 ちゃあ

四43 1 園 きみ、きみ、じぶんかつてに早くとんでいっちゃあこまるよ。

ちやいろ 「茶色」(名) 11 ちや色 茶色

三33 6 園 青色やちや色のくすりびんが、たくさんならんでいました。

五39 6 園 茶色の木のもみえます。

七86 4 先生が、黒いうさぎと、白いうさぎと、茶

色のうさぎを、かごにいれて持っていらつしやいました。

七923 1びきの白いうさぎと、茶色のうさぎは、おくへはいってでてこないの、

七936 茶色のうさぎがはいっているへやに、えさがなかったの、

八243 黒いところは黒く、茶色のところは茶色になつて、いかにもあぶらぜみらしくなります。

八244 茶色のところは茶色になつて、

八838 森の木の色がこがね色や茶色になつた。

九52 むらさきのかわりに、茶色をぬつたら、どうなるでしょう。

九747 馬車がすすむにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなつて、まもなく馬車がとまつたときは、茶色のどんぐりにかわつていました。

十413 ある小さな生物が、海水いちめんにふえて、海水が茶色にかわるほどになるのである。

ちやう (助動) 4 ちやう 《チャツ》

三85 ぼくの道は、雨にめちやめちやにされちやつた。

六73 ぼく、どつちだかわからなくなつちやつた。

七227 はるお、あまり大きな声をだすから、にげちやつたよ。

七27 黄色になつちやつた。」母」さなぎになつたのですよ。

ちやうさぎ 「茶鬼」(名) 2 茶うさぎ

七86 黒うさぎ 390g, 白うさぎ 400g, 茶うさぎ 1kg

七89 茶うさぎ 1びき 白うさぎ 10びき 黒うさぎ 2ひき

ちやかちゃんちやかちゃん (感) 1 チャカチャン、

チャカチャン

十三296 「チャカチャン、チャカチャン」と、かるやかな、はずむような音をたてる。

ちやくりくち 「着陸地」(名) 1 着陸地

十五261 こしようのできた飛行機乗りが、安全な着陸地を上からさがしているような氣持で、

ちやじん 「茶人」(名) 12 茶人

九121 ちやじん、ひとりの茶人があつた。

九121 茶人は、この上流にいい泉があるのではないかと氣がついた。

九122 それで、茶人は、泉はどうしても支流のほうにはなくて、遠い上流にあるのだとさつた。

九122 つれの人は、この茶人ほど熱心ではないから、やめて帰ろうといった。

九122 しかし茶人は、いろいろな困難をしのいで、みんなをばげましては上流へたどつていった。

九123 茶人はすこしもくつせず、求め求めて、いつか、《略》、ながの縣にはいった。

九123 ここで茶人のしたには、まぎれもないいい味はつきりと感じられるようになった。

九124 茶人はつれの人になつた。

九124 茶人は、長い探求の旅が終りに近づいたことを知つて喜んだ。

九126 茶人は、そこをほりくぼめ、小石でどてをつくり、泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、心から楽しんだといふことである。

九128 泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、ちやじんたち 「茶人達」(名) 1 茶人たち

九124 茶人たちは、ここで船をすてて、岸にそつ

て上流に向かつて歩きながら、

ちやだな 「茶棚」(名) 1 茶だな

十738 次郎かじやは力があまり、茶だなの湯飲みをはねとばして、こなみじんにしたしました。

ちやだんす 「茶單筒」(名) 1 茶だんす

十二110 まき絵書だな これは、茶だんすにいます、そうではありません。

ちやつちやつ (感) 1 チャツ、チャツ

四866 みそさざいが、「チャツ、チャツ」とな

いた。

ちやのま 「茶間」(名) 4 茶のま

八94 私たちの家のうち、中でも茶のまほど、すきな、安心なところはないというように――

八97 びっくりして茶のまへにげこみ、そこにすわっている私のひざのあいだにもぐつたり

八111 学校から帰つてきたすえの女の子が、茶のまのドアをあけて、ひよいとふみこんだたん、

八115 茶のまにいたうちじゅうのものがびっくりして、いそいでピオをひろいあげました。

ちやぶだい 「卓袱台」(名) 1 ちやぶ台

十二268 ちやぶ台をだして、食事の用意などをしてると、とりついてぐんぐんおしていつて、

ちやめぶり 「茶目振」(名) 1 ちやめぶり

八107 ピオの《略》、ちやめぶりや、おかしさなどは、まだいくら書いても書ききれません。

ちやや じやすみぢやや

ちやわん 「茶碗」(名) 21 茶わん じこーちやわん・ゆのみぢやわん

十四622 ここに、茶わんが一つあります。

十四633 この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだして、日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬの

でもおいてすかして見ると

つぎには、熱い茶わんの湯の表面を、日

知っています。

五
103
3
「チュイン、チュイン、チュイン。」

字があった。

ちゅうぶフランス (地名) 1 中部フランス

十四55 フリップ自身、中部フランスの小さな

町のまづしい木くつしの子に生まれ、

ちゅうや ↓いっちゅうや

チューリップ (題名) 2 チューリップ

十三33 チューリップ

十三471 チューリップ

チューリップ (名) 1 チューリップ

十三473 はちの羽音が、チューリップの花に消える。

ちゅうりゅう [中流] (名) 1 中流

九四10 ところが、てんりゅう川の中流の水をくんで、それで茶をたててみると、

ちゅっちゃん (感) 4 チュッちゃん

五9710 チュイン、チュイン、チュイン、チュイン、チュッテン、チュッテン、チュウチュウジ。

五9711 チュッテン、チュッテン、

五四4 「チュイン、チュイン、チュッテン、チュッテン。」と、早く、おそく、高く、ひくく、

五四4 チュッテン、チュッテン。

ちゅびちゅびちゅび (感) 1 チュビ、チュビ、

チュビ

五四6 「チチチチチ、チュビ、チュビ、チュビ。」と鳴きました。

ちゅんちゅん (副) 1 チュンチュン

七87 すずめが、ときどき、チュンチュンと鳴く。

ちゅんちゅん (感) 2 ちゅんちゅん

三855 ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。

三855 ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。

三855 ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。

ちゅんちゅんちゅんちゅん (感) 1 ちゅんちゅん、

ちゅんちゅん

ちゅんちゅん

二629 窓 すずめ「ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。」

ちよいちよい (副) 2 ちよいちよい

十673 だんなは、ちよいちよいあのへやにはいる

が、べつに、からだにさわりもしないのだから、

十一777 ちよいちよいとねむったあとでは、目を

開いたときに、その小さな看護人をさがすように

みえました。

ちよいと (副) 1 ちよいと

十五836 窓 あんまりあてにはならないけれど、青

い鳥だつて、ことによるとちよいとでも、この人

たちのなかにまよいこんでいないともかぎらない。

ちよう [町] ↓やよいちよう

ちよう [帳] ↓あるしゃしんちよう・しゃしんちよう・につきちよう

ちよう [鳥] ↓しちめんちよう

ちよう [蝶] (名) 10 ちよう ↓もんしろちよう

三107 窓 ちようも小鳥もたのしそう、きようは

あなたの花まつり。

七54 白いちようが、ういたりしずんだりしながら、光の中をおよいでいたが、

七313 窓 ちようになった、ちようになった。

七314 窓 ちようになった、ちようになった。

七586 黄色いやまぶきの花に、黄色いちようがと

まっています。

九305 窓 歩みくる胸のへにちようとびわかれ

十一125 あげはのちようが、まつのかげから舞つ

てでる。

十一148 一つの太陽の下で、せみも鳴き、ちよう

も舞い、まっさおな海もわらい、

十三67 すみれ、たんぼぼ、わらびや、ふきや、

たけのこや、ちようや、はち、

十三464 ありが、ちようの羽をひいて行く。

ちようこくし [彫刻師] (名) 1 ちようこく師

十五4711 このお庭焼のために、細工人、画工、

ちようこく師、下ばたらきの者などが、三十数人

かかえられていた。

ちようこくする [彫刻] (サ変) 1 ちようこくする

《—スル》

七674 人の顔をちようこくするのに、二つのやり

かたがあります。

ちようし [調子] (名) 6 ちようし 調子

十一787 愛情とかなしみとのまじりあった、しみ

じみとしたそのちようしに、

十三304 同じ大きなのどらでも、そのうちかたに

よって、調子がちがう。

十四119 窓 調子をととのえるには、どうをあら

こちらにまわすのです。

十四433 窓 くちびるに歌をもて、ほがらかな調子

で。

十四4512 それは女の声で、しかも、調子もみだれ

ていなければ、ふるえてもいません。

十四808 ほかの人々に傳えるうちに、あのような

短くて調子のいい、氣のきいたものになった

ちようじゃ [長者] (名) 7 長者

十二595 昔、この里に長者がいた。

十二596 三代めの長者は、先祖のことを鼻にかけ

て、わがままをしはじめた。

十二599 ある年の夏、きようは長者の家の田植え

だというので、里のおとめたちは、赤いたすきも

かいがいしく、朝から集まってきた。

十二602 長者は、なんと思つたか、なん千アール

の田をきよう一日で植えてしまえといいつけた。

十二605 長者は、高どのの上からこのありさまを

ながめて、得意になっていた。

十二609 高どのに立っていた長者は、日のまるのおおぎをあげて、しずみかけた日をさしまねくと、十二6012 それで、のこりの田植えも無事にすんで、長者の望みはとげられた。

ちょうしょ [長所] (名) 1 長所

十五404 しかし、いまでは漢字の長所をいかして、かなに漢字をてきとうにまぜるのが、文章のふつうの書き表わしかたとなっている。

ちょうせつ [調節] (名) 1 調節

十四103 調節ができるとか、ほのおがゆれたりしないとか、

ちょうそん [町村] (名) 1 町村

十三254 すたれた都市はふたたびおこり、新しい

町村が、いたるところに生まれました。

ちょうだい [頂戴] (名) 4 ちょうだい

四832 「これもさげてちょうだい。」

六1052 「紙をちょうだい。」

六1242 ぼくにもちょうだい。

七293 よんでちょうだい。

ちょうちょ [蝶蝶] (名) 26 ちょうちょ

二233 はねのいたんだ大きなちょうちょが、けさも、ゆりの花にきていましたよ。

二572 ちょうちょもとんでいました。

七163 ちょうちょ、ちょうちょ、なの葉にとまれ。

七163 ちょうちょ、ちょうちょ、

七1610 先生、きょうは風がありませんから、

ちょうちょが、たくさんとんでいるでしょう。

七172 風のない日は、ちょうちょがよくでるの

だったね。

七174 「ちょうちょ、ちょうちょ、なの葉に

とまれ。」の唱歌が、きこえてくる。

七174 ちょうちょ、ちょうちょ、

七192 このまえきたときは、風が強かったから、

ちょうちょがでなかったんですね。

七195 先生、風の日は、ちょうちょは、どこに

かくれているんですか。

七2010 あつ、白いちょうちょがとんできた。

七2011 白いちょうちょが、白い花にとまった。

七213 とまっているちょうちょが、どんなかっ

こうをして、みつをすうか、よくごらん。

七335 兄弟ふたりが、いま生まれたばかりのちょ

うちょを、ししくびんからとりだす。

九1347 おかしいなと、ふしぎに思ってたよくみると、

それは白いちょうちょでした。

九1348 ちょうちょか。

九13410 くもは、長い手をのびして、わけなく白い

ちょうちょをとらえました。

九13411 大きな口をあいてたべようとしたとき、

ちょうちょは、「略」と頼みました。

九13711 いま、ちょうちょに、「略」といわれて、

きゆうになつくなりました。

九13811 くもは、ちょうちょを手ばなしました。

九1401 ちょうちょは、うれしそうに羽をととのえ

ました。

九1405 くもは、とんでいくちょうちょをみ送りな

がら、

九1441 高いところからたたき落されたが、たまた

ま、あの白いちょうちょにあうことができた。

九1446 ちょうちょにしても、ばらの花にしても、

なんとしずかなくらしをしているのだろう。

九1482 お月さんのところへとんでいったあの白

いちょうちょは、どうしたろう。

十258 道ばたにさくたんばば、とびかうちょう

ちょ。

ちょうちょうさん [町長] (名) 2 町長さん

六92 あれがないと、町長さんのかいちゅう時

計がなおせない。

六121 一日おいて、町長さんがきた。

ちょうちょうさん [蝶蝶] (名) 2 ちょうちょうさん

九1385 そうか、おかあさんをさがしにいきたい

のか、ちょうちょうさん。

九1407 ちょうちょうさんは、羽があるからいいな。

ちょうづめ [腸詰] (名) 1 ちょうづめ

十五845 ちょうづめもある。

ちょうど [丁度] (副) 40 ちょうど

三584 丘のちょうどなほどにあるのです。

三603 そこへ ちょうど おとうさんがおいでに

なつて、「略」とおききになりました。

四527 ちょうど、一まいのもうふのようになつ

て、かつちゃんをささえながら、できるだけ早

くとびました

四101 ちょうど ここを とおりかかってよ

かったね。

四1108 いや、ちょうどとおりがかったところ

でしたので。

六135 ちょうど、そばに小川が流れていました。

六1015 ちょうど、めがねのたまがはまるくらいの

大きさにまいて、

六10110 そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、

するするといはいるくらい大きさに作つて、

六1067 なにかよいおりはないかと思つていたら、

ちょうど、空からブルン、ブルンというばくおん

がきこえてきた。

六1196 ちょうどいい長さにひごを切りました。

七207 ㊦ 一本だけのこしておきましたら、それが、いまちようど、こんな白い花をつけています。
 七412 私、D・D・Tを、頭から、首すじから、せなかから、腹までふりまかれて、ちようど、かふんにまみれたみつばちのようになって、
 七468 ちようど、汽車もとまった。
 七683 まえのやりかたは、ちようど、文章をくわしく書きたすのにています。
 八42 ちようど十年ほどまえ、
 八749 ところが、ちようどそのとき、おそろしい大きないぬがそのすぐそばに立っていた。
 八962 種もみひたしをしてから、ちようど10日めでした。
 八1024 田植をした日から、ちようど60日めです。
 九7211 ㊦ 「ちようど二リットルあります。」
 九1047 まえの日に、こな雪がたくさん降ったので、スキーをするには、ちようどよかった。
 九10611 みると、大きなうさが、ちようど小まつの中へとびこんだところであった。
 九1348 ㊦ ちようどいいや。
 九1404 ちようど白ばらの花がとんでいくように。
 十911 ちようど、プラタナスという木の葉が黄色くなるころで、
 十1211 ㊦ ちようどあなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國にのこして
 十425 眞珠貝にちようどよい海水の温度や、海の深さのこともわかり、
 十1812 ちようど、少年がそういうわけではない希望をもって、いっしんに看護していたときでした。
 十1866 ㊦ ちようどあなたが入院したと同じ日に、入院したんです。
 十二96 ㊦ おまえが学問のちゆうとで家に帰って

くるのは、ちようど、織物をちゆうとでたち切るのと同じことです。
 十三5411 ちようど、おじさんは、用事がなく、しよさいで、本を読んでいらつしやいました。
 十四632 ちようど雲やきりと同じようなものです。
 十四649 横からすかして見ると、ちようど、けむりが廣がっているように見えるそうです。
 十四676 そうして、大きなうすができ、それが、ちようどたつまきのようなものになって、
 十四738 湯のおもてに、にじの色のついた、きりのようなものがひと皮がぶさっており、それが、ちようどさけめのようにたて横にやぶれて、
 十四7911 これは、ちようど、「二が四」という算数の九九と、にたようなものだと思います。
 十四977 ああ、そのときもとき、ちようどマツチはもえつくしてしまつて、
 十五2610 ちようど、発動機にこしようのできた飛行機乗りが、安全な着陸地を上からさがしているような氣持で、
 十五3010 岩角へ身をよせかけたとき、ちようどそこに、手ごろなとがった岩のかけらが目にはいりました。
 十五609 私は、そのときちようど四つのいたずらざかりであつた。
 十五738 ちようどそのころは眞夏であつたので、ちようなん
 十一6411 母親は、〈略〉、長男にいくらかのお金を持たせ、父親の看病のために、ナポリへよこしたのでした。
 十三2210 ダルガスの長男、フレデリック・ダルガスは、
 十五6010 ことに、長男に生まれて父母の愛を一身

に集めていた身にとつては、
 ちようめん 〔帳面〕(名) 1 ちようめん
 一144 ほん一さつ、ちようめん二さつ、ちようるいずふ 〔題名〕 1 ちようるいずふ
 十五5411 あの有名な「ちようるいずふ」の著者ダブリュー・ジェー・ホランド博士、
 チョーク(名) 1 チョーク
 十五578 ㊦ つくえのまん中にチョークで線をひき、
 ちよがみ 〔課名〕 2 ちよ紙
 九36 十 ちよ紙……百十四
 九1141 十 ちよ紙
 ちよがみ 〔千代紙〕(名) 1 ちよ紙
 九1142 ㊦ いもうとの小さき歩みいそがせてちよ紙かいにゆく月夜かな
 ちよくこ 〔直後〕(名) 1 直後
 十四511 父を失つた直後、文学修業のためにパリに出て、
 ちよくせん 〔直線〕↓いっちよくせん
 ちよこちよこ 〔副〕 1 ちよこちよこ
 十528 妹は、また、ちよこちよこ歩きだしました
 が、
 ちよこんと 〔副〕 1 ちよこんと
 四645 かっちゃん、わびるように ちよこんと
 あたまをさげたので、
 ちよしゃ 〔著者〕(名) 1 著者
 十五5411 あの有名な「ちようるいずふ」の著者ダブリュー・ジェー・ホランド博士、
 ちよちよあわわ 〔感〕 1 チョチ、チョコチ、アワワ
 五52 川のかんぼ、チョコチ、チョコチ、アワワ。
 ちよっちよっちよ 〔感〕 1 チョッ、チョコッ、チョコッ

五104 5 みそさざいは、「チヨッ、チヨッ、チヨッ。」と鳴いて、木のかげにかくれました。
 ちょっと (副) 49 ちょっと
 一56 5 おべんとうをたべて、ちょっととうとうとすると、きしやはもうついていました。
 二33 9 ずっとそこをどいてください。
 二34 2 ずっと、ちょっとそのぞうというものに、さわらせてくれませんか。
 二66 4 ずっと、ちょっと、しずかに。
 二66 4 ずっと、ちょっと、しずかに。
 五55 1 食事をすませてから、またちょっと、家のまえにでてみました。
 五87 11 ずっとかしておくれ。
 六11 11 時計屋さんは、しあげた時計をちょっと耳にあててから、ガラス戸の中につりさげた。
 六23 7 バイオリンをちょっとひいて、
 六95 11 ずっと、たいをちょっとここへよんできてくれないか。
 六115 3 ずっと糸を持たせて。
 六129 6 ずっとかくしておくれ。
 七7 9 風になったら、学校の中を、ちょっとひとまわりするのだ。
 七14 5 「ちょっと、手にあまるしごとなだ。」
 七25 4 ずっとまわってください。
 七43 2 たいへんさしでがましいことですが、わたしにちょっと話をさせてください。
 七45 1 ここで、ちょっとことばを切った。
 七52 11 ボールが、よくあいてにあたって、ちょっとのあいだに、勝つことができた。
 七75 2 ずっとそのまに、いなくなりました。
 七77 3 そうして、左の足が一本短くて——それから——」といつてから、ちょっと考える。

九10 9 水の音をたいこであらわすことなどは、ちょっと考えられないが、
 九32 7 家のまえをちょっととると、はるか下の方に美しい湖がみえます。
 九49 8 くりの木は、ちょっとしずかになって、「略」と答えました。
 九53 11 ただ、くるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちょっと光っただけでした。
 九60 10 じつは、おとといからめんどろなあらそいがおこって、ちょっと裁判に困りましたので、
 九68 11 しずすの着物のえりを開いて、黄色のじんばおりをちょっとだして、
 九80 8 それはちょっとわかりませんね。
 九94 5 たかぎ しばらくして持っているすみに気がつき、ちょっとためらったのち、
 九95 6 たかぎ、ちょっとやまだの方をみるが、
 九96 6 「ちょっと待て。」
 九97 9 やまだ ずっとたかぎをみて、
 九120 6 ずっと歯にしみだが、うまかった。
 九136 2 ずっと待ってください。
 十15 1 この少年の間には、ちょっとおとうさんも困りました。
 十一74 12 すると、医者はずっと考えてから、こういしました。
 十一77 4 感謝するような色が、そのひとみに、ちょっとのあいだうかぶようにみえました。
 十一88 10 チチロは、いよいよよくせわをして、ちょっとのまも、目を病人からはなしませんでした。
 十一90 12 ずっとわきのほうにいていた看護婦が、
 十二12 2 そこで、リビングストーンがちょっとそと

にでかけたるすにやってきて、
 十二24 12 民ちゃん、ぼつぼつものをいいかけていますが、ちょっときいてもわかりません。
 十三50 7 ずっと落ち葉をかきのけるだけだ。
 十四6 5 おかあさんとちょっとお話をしようと思ひます。
 十四15 7 おとうさんのおはかについて、どうしたものか、ちょっと私にはわかりかねます。
 十四19 9 手おきはちょっとおかしいわね。
 十四69 4 ずっと見ただけでは、まったく関係のないようなことがらが、
 十五31 9 羽風で空気がゆれ動き、ちょっとでもゆだんをすれば、それにふきとばされ、
 十五31 10 ずっとでも気をゆるめると、鳥のくちばしでつき殺されます。
 十五38 10 「上・下・生」などの読みかたをちょっと考えてみただけでも、
 十五90 1 ぼくは、ほんとうにすみませんが、
 ずっとそのまも行かれないのです。
 ずっととした (連体) 3 ずっととした
 十一79 2 少年は、父親のずっととしたため息にも、
 ずっととした目つきにも、ふるえながら氣をもんで、
 十一79 2 ずっととした目つきにも、
 十四94 4 女の子は、二つの家の間に、ずっとした、身をかくす場所を見つけた。
 ちょま 〔芥〕 3 ちょま
 九34 5 ちょまを植えた一アールあまりのところです。
 九34 6 ちょまの根は、ふといごぼうのようで、
 〔略〕 一かふから七本も八本もでていて、
 九34 9 ちょまはふるえ力の強い草なので、

ちよろちよろ (副) 3 チョロチョロ ちよろちよろ

五79 4 「チヨロチヨロ、ひくく鳴ったり高く鳴ったりしています。」

六123 6 カチン、カチンとわっていると、そこへちよろちよろと、りすさんがきました。

九126 5 岩まからちよろちよろとわきでる泉があつて、それでもう終りであつた。

ちよんちよん (副) 1 チョンチョン

十四79 1 十文字の小さな木ぎれをはさんで、チョンチョンとたたいて、みごとに割っていました。

ちよんちよんすずめ [雀] (名) 1 ちよんちよんすずめ

六47 2 副 おちばの、おちばの子どもたち、ちよんちよんすずめと どこへいく。

ちらす [散] (五) 2 ちらす 《ーシ》

五50 4 副 かげをちらして岸をでる。

十一92 3 すみれをベッドの上にちらしながら、ちらちら (副) 9 ちらちら

五53 11 そういいながら西の方をみると、小さな星がちらちら光っていました。

六26 2 雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近いころ。

九7 9 この「水」は、さらさらと流れる小川ともなり、ちらちらと光るいけともなり、

九78 2 副 そう、あの向こうの小高いところに、白い物がちらちらとみえるでしょう。

十三5 6 春は、はや、しばふに落ちかかる木もれ日のしま目もようにもちらちらとして、

十三36 3 中庭のあんずがさいて、花びらがホートンへちらちらと降ってくるのも、このころである。

十三39 5 つくえの方をちらちら見る。

十四63 5 しずくのつぶの大きいのが、ちらちらと目に見えます。

十四93 7 女の子は、窓々をとおして、ちらちらとかがやくとしびの光を見た。

ちらちらする (サ変) 1 ちらちらする 《ーシ》

十四72 11 かべや屋根をすかして見ると、ちらちらしたものが見えることがあります。

ちらちらちら (副) 1 ちらちらちら

四88 3 副 ちらちらちらと雪が降る。

ちらと (副) 1 ちらと

十五62 2 ふみ石の上にそろえてある大小二つのくつをちらと見た私は、たちまちふくれあがつて

ちらばる [散] (五) 3 ちらばる 《ーッ》

七9 2 星のちらばった青い夜空は、子どものクレヨン画と同じだ。

八35 10 それどころか、十万光年の星もちらばっています。

十五22 1 また下の方にちらばっているひつじのむれを追いでもするように、

ちらほら (副) 1 ちらほら

七62 5 なの花ちらほらさきはじめ、うすぐもり。

ちらりちらり (副) 1 ちらりちらり

九145 8 くもが、月の光にちらりちらりと光りながら落ちてくる夜つゆをみていると、

ちらりと (副) 1 ちらりと

九25 4 ちらりとつばめのすがたをみた人は、きつと、「(略)。」といって喜びます。

ちり [塵] (名) 4 ちり

七55 8 よけいなことばは、ちりほどもあつてはなしません。

十四64 5 そのしんになるものは、ふつうけんび鏡でも見えないほどの、たいへんこまかいちりのよ

うなものです。

十四64 8 雲が消えてしまったあとには、いまいった、ちりのようなもののばかりがのこつていて、

十四82 2 ちりもつもれば山となる。

ちりはてる [散果] (下二) 2 ちりはてる 《ーテ》

十一30 7 副 紅梅・白梅みなちりはてて、ひがんすぎれば風あたたかく、

十一40 1 副 山のもみじ葉みなちりはてて、青くしげるはまつ・すぎ・ひのき。

ちりよく [地力] (名) 1 地力

十三21 2 ユートランドのあれ地は、もはや、この強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていませんでした。

ちる [散] (四五) 6 ちる 《ーッ・リール・レ》とびちる

七17 10 副 花がちつて、実がつきはじめてからでしよう。

九118 4 副 金色の小さな鳥のかたちしていちようちるなり丘の夕日に

十一32 9 副 げんげがさいて、なの花ちつて、かきのわか葉に日の照るころは、

十一38 9 副 かきねににおうきんもくせい、しとしとと降る秋雨に、ちれば山にはまつたけが、

十二13 7 そこには一本のざくろの木があつて、夏じゅう美しい花をつけていたが、あらかたちつて、

十五30 4 わしの白い下羽が、綿のように一面にちりました。

チルチル [話手] 44 チルチル

十五83 2 チルチル「あんなにうまいものをたくさんたべて、うれしそうにしているふとった人たちは、だれだろう。」

1583 10 チルチル「私たち、あそこへ行ってもいいの。」
 1585 6 チルチル「あの人たち、ずいぶんうれしそうな、幸福そうな顔をしているなあ。」
 1586 5 でないと、かんじんな用むきをわすれてしまふからね。」チルチル「どうして。」
 1587 1 チルチルさん、ごきげんよう。」チルチル「びっくりして、「え、あなた、ぼくを知っているの。」
 1588 11 チルチル「それから、あの、なかまにはいらないで、せなかをむけているのはだれです。」
 1589 12 チルチル「いいえ、どうもありがとう、『ふとった幸福』さん。」
 1591 3 チルチル「なにをするのです。」
 1591 7 チルチル「それがおもしろいの。」
 1592 5 チルチル「おや、光さん、ごらんよ。」
 1592 9 チルチル「チロー。」
 1593 2 チルチル「なんだって。」
 1594 6 チルチル「ふとった幸福」どもがにげて行くのを見ながら、「〈略〉。みんなどこへ行くの。」
 1594 9 チルチル「そこらを見まわして、『〈略〉。』
 1595 10 チルチル「あの子たちを知っているの。」
 1595 12 チルチル「なんてたくさんいるのだから。」
 1596 3 『ふとった幸福』どもが、ひどい目にあわせたのだよ。」チルチル「でもいいや。」
 1596 7 チルチル「小さな子がやって来た。」
 1597 1 チルチル「まあ、なんてかわいらしいのだ。」
 1597 4 『子どもの幸福』だよ。」チルチル「話をしてもいいの。」

1597 7 チルチル「はねまわりながら、『〈略〉。』
 1598 2 チルチル「どこにびんぼう人がいるの。」
 1598 6 チルチル「がまんがでなくなつて、『ぼく、あの子たちとおどりたいなあ。』
 1599 6 こんなには、チルチル。」チルチル「また、ぼくを知っている子がいる。」
 1599 11 チルチル「すこし困つて、『〈略〉。』
 15101 3 チルチル「おや、そうなの。」
 15101 8 チルチル「ぼくのうちに『幸福』がいるの。」
 15103 6 チルチル「そうして、みんな、いつでもあんなにきれいな。」
 15105 2 チルチル「びっくりしてひどくおこつて、『〈略〉。』
 15105 9 チルチル「きみ、あの人たちの名まえ知ってるの。」
 15107 2 チルチル「だつて、ぼく、その兄弟にあつたよ。」
 15108 1 チルチル「それから、あちらの遠い遠い金色の雲の中に、『〈略〉。』いる人、だれなの。」
 15108 7 チルチル「それから、あすこに、ずっと後の方に、ペールをかぶつたままで、ちつとも出て来ないの。」
 15108 10 チルチル「ほかの人たちはなにをしようとしているの。」
 15110 4 チルチル「でも、あなたは、うちのおかあさんになつてくれるけれども、ずっときれいだもの。」
 15110 11 チルチル「それに、このきれいな着物は、まあ、なんでこしらえたの。」
 15111 12 チルチル「おもしろいなあ。」
 15113 3 チルチル「ああ、そうだ。」

15114 3 チルチル「ふしぎだな、おかあさん。」
 15114 9 チルチル「ぼく、うちへ帰りたくないや。」
 15116 3 チルチル「つしましすこしさがっている「光」を指さしながら、『〈略〉。』
 15116 6 あの人、だれなの。」チルチル「光さ。」
 15116 11 チルチル「いいえ、あの人、あんまりはっきり顔を見せると、『幸福』たちがこわがるだらうつて、心配しているのですよ。」
 15119 8 チルチル「びっくりして、『どうしてないているの。』
 チルチル「(人名) 11 チルチル
 1582 10 チルチルとミチルと、いぬと、パンと、さとうとは、はじめはいつて来たとき、すこしはにかんで、
 1586 11 チルチルの方へ手をさしだしながら、
 1588 9 チルチル、すこし横の方に立っているひとりの「幸福」を指さして、チルチル「〈略〉。」
 1589 3 (チルチルの手をにぎりながら) まあ、おいでなさい。
 1591 11 ふとった幸福「光」を指さしながら、チルチルに向かって、『〈略〉。』
 1592 2 チルチルがふと見ると、かれらはみんなとなかくてペールについて、
 1594 4 チルチルは、「光」のいうように、ダイヤモンドをまわします。
 1599 5 こんには、チルチル。
 15104 11 わんぱくこぞうのようなのが、『〈略〉。』チルチルに近づいて来ます。
 15109 11 チルチルや、それから、ミチルや。
 15115 3 チルチルや、おまえは、いまだけ天國に來ていると思つてくれるけれど、

チルチルさん (人名) 2 チルチルさん

十五86(12) 田ルチルさん、ごきげんよう。

十五100(10) だつて、チルチルさん。

チルデンせんしゅ (人名) 9 チルデン選手

十二827 清水選手の相手はチルデン選手でした。

十二827 チルデン選手は、アメリカきつての名手です。

十二847 あの小さいからだだが、〈略〉、大きなチル

デン選手を追いつめるものすごさは、

十二849 しかし、さすがにチルデン選手です。

十二8411 第三回はチルデン選手の勝、

十二8412 第三回はチルデン選手の勝、続いて第

四回めもチルデン選手の勝となりました。

十二854 試合のまっさいちゅう、〈略〉、チルデン

選手はかた足をふみすべらせてしまいました。

十二859 チルデン選手もそのおうえん者たちも、

もうあきらめているときでした。

十二862 チルデン選手は、とりみだしたしせいではありましたが、〈略〉、無事に受け返すことがで

き、

ちろい (白) 2 チロイ 《一イ》

十二301(10) 「オソト、ワンワン、チロイ。」

十二308(10) 「チロイ、ワンワン、チップー—ワン

ワン、ゲタナイ、アンヨ、イタイ、イタイ。」

チロイ (名) 3 チロイ

十五929(10) チロイ。

十五929(10) こら、チロイ。

十五933(10) それから、チロイ、おまえもすぐ来い。」

いぬぶつぶついいながら、

ちろちろ (副) 1 ちろちろ

九1166(10) ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤き

かにいてすぎの山しずか

ちろりん (感) 1 チロリン

八137 「チロリン。」だの、「チイチイチン。」だ

のと鳴いているはおじろの声をきくと、

ちんからから (感) 1 チンカラカラ

五1049 チンカラカラ、チンチンカラカラ。」と、

いい声で鳴いて、

ちんぎん (賞金) (名) 1 ちんぎん

十五4812 職人のちんぎんや材料のお金をはらうた

めに、家の道具を賣らなければならなかった。

ちんちんからから (感) 1 チンチンカラカラ

五1049 チンカラカラ、チンチンカラカラ。」と、

いい声で鳴いて、

ちんちんこうこう (感) 1 チンチン、ゴウゴウ

三861 チンチン、ゴウゴウ。

ちんぼつする (沈没) (サ変) 1 ちんぼつする

《一シ》

十四451 小さな汽船が、十ばいもある定期船につ

きあたつて、ちんぼつしてしまいました。

つ

つ (助動) 1 つ 《テ》

十五145(10) 目をあけてつくづく見ればばらの木

にばらがまっかにさいてけるかも

つ 1 つ

四769 つ—つめはのぼさぬように。

つい (副) 5 つい

六1007 屋根が、めがねのたまいっばいにひろがっ

て、ついそこにあるようにみえるではないか。

七805(10) とちゅうでひと休みしているうちに、つ

い、ねむってしまった。

十一55 ついせんだつて、大学生に頼んで乗せて

もらったうれしさで、まだむちゅうになっている

のである。

十二261(10) いそがしいものだから、ついしつけが

できなくて。

十四912 かたほうはどこへいったか、つい見いだ

せなかった。

ついたち じくがつついたち・ごがつついたち・じゅ

うがつついたち・じゅううがつついたち

ついで じについで・のうときようげんについて

ついで (序) (名) 2 ついで

五299(10) ついでですから、一つ持っていってあげ

ましょう。

六422(10) 南へひきあげるついでだから、えんりよ

しなくてもいいのよ。

ついに (終) (副) 4 ついに

十四44 研究を重ねたすえ、ついに核をさしいれる

ときに、ほかの母貝のがいとうまくを切り取って

きて、一種の手術をほどこすことを発見した。

十三204 しかし、切りとるばかりで手入れをおこ

たつたために、土地は、年を追ってやせおとろえ、

ついに、あれはててしまったのです。

十三264 がまん強い実行と、熱誠な共力によって、

あれ地をみどりの野とし、祖國を生き返らせ、つ

いに、今日のような平和國家をうち建てました。

十四371 夫人は、〈略〉、その感動から研究を進め

て、ついにラジウムを発見したのです。

ついべーついべー (感) 1 ツイべー、ツイべー

五1048 ツイべー、ツイべー。

つう じい じい

つう じい じい

つう じい じい

つう じい じい

つう じい じい

つう じい じい

つう じい じい

174 ㊦ えんぴつ一本買いにいくにも、日本のことばでは通じません。

1231 ㊦ 私の一生を通じて、わすれることのできないいちばん大きな日は、

1289 ㊦ そうでないとして、相手の人に満足を與えることができないし、また自分の誠意も通じない。

1293 ㊦ 「遠足」ということばは、〈略〉、同じように通じる力をもっている。

1326 ㊦ ペキンの町には、ホートンが、あみの目のように通じている。

つーびーつーびー (感) 1 ツーピー、ツーピー
五104 ㊦ ツーピー、ツーピー。

つえ ㊦ (杖) 5 つえ ㊦ まつばづえ
九105 ㊦ ぼくたちは、〈略〉、スキーをつけ、二本の

つえをつきながら、そこへ集まった。
九107 ㊦ のだ先生がつえでさされる方をみると、なるほどりっぱなスキー場で、

九110 ㊦ 三百五十メートルも登ったところで、つえをあげて、「略」というあいずをされた。

九110 ㊦ ぼくたちも、みんなつえをふって、それに答えた。

十四81 ㊦ ㊦ ころばぬさきにつえ。
つか ㊦ ㊦ いかいづか

つかい ㊦ ㊦ おこづかい・おつかい・こづかい・ことばづかい・ぞうつかい・にんぎょうつかい・まほうつかい・めしつかいたち

つかいかた ㊦ (使方) (名) 8 つかいかた
七115 ㊦ 同じ「手」ということばにも、いろいろな

つかいかたがあります。
七110 ㊦ 「手をあわせる」の「手」も、これと同じ

つかいかたです。
七138 ㊦ それとよくにたつかいかたで、「まいの手」

といったり、「略」とかいったります。
七14 ㊦ つぎの「手」は、どんなつかいかたでしょうか。

七14 ㊦ 同じことばで、ちがったつかいかたがあるのは、「手」だけではありません。

七15 ㊦ 私たちのからだの名まえに、このような、いろいろなつかいかたがあるのは、おもしろい

十二53 ㊦ 人形のつかいかた
十四106 ㊦ それには、つかいかたを書いた小さな書きつけがついているはずだ。

つかいなさる ㊦ (使) (五) 1 つかいなさる ㊦
イ ㊦

七51 ㊦ ㊦ じゃんけんをして、いいほうのボールをつかいなさい。

つかいになれる ㊦ (使慣) (下) 1 つかいになれる ㊦
《一レ》

十五71 ㊦ ㊦ おじさんのつかいになったペンですよ。
つかう ㊦ (使) (五) 63 つかう ㊦ 《一イ・ウ・エ・

ツ・ワ》 ㊦ おつかう
一15 ㊦ ㊦ じをよむときには、くちをつかいます。

一15 ㊦ ㊦ めもつかいます。
一15 ㊦ ㊦ いきもつかいます。

一15 ㊦ ㊦ ころもつかいます。
一16 ㊦ ㊦ じをかくときには、てをつかいます。

一16 ㊦ ㊦ えんぴつもつかいます。
一16 ㊦ ㊦ かみもつかいます。

二42 ㊦ ㊦ そんなきたないことばをつかうものではないよ。

二58 ㊦ ㊦ みなさんのつかっているつくえも、こしかけも、長いあいだはたらいできました。

二59 ㊦ ㊦ 五年の人たちも、六年の人たちも、そのまえの人たちも、これをつかいました。

二60 ㊦ ㊦ そうして、これをつかいますよ。
三13 ㊦ ㊦ そのひとことというのには、きたない

ことばをつかわないということだよ。
三35 ㊦ ㊦ かななをつかっている人もあります。

四77 ㊦ ㊦ 「あ」の字はこれから「い」をつかう。

四79 ㊦ ㊦ 「え」の字もこれから「え」をつかう。

五102 ㊦ ㊦ 人がときどききて、水道をつかいます。
七13 ㊦ ㊦ このよなときの「手」は、どんないみにつかわれているのでしょうか。

七15 ㊦ ㊦ 「腹」ということばを、いろいろにつかいたばあいを、しめたものです。

七51 ㊦ ㊦ ぼくらのほうのボールをつかうことになった。

八17 ㊦ ㊦ 人間のあかんぼが、したのさをじょうずにつかってちちをのむのと同じように、

八18 ㊦ ㊦ ことにまえ足は、いつもトンネルをほるのにつかいますから、

八66 ㊦ ㊦ あのおうまく足をつかうようすや、あのしせいのおいのをみてわかる。

八85 ㊦ ㊦ あひるの子は、あながおおってしまわないように、いつも足をつかっているなければならない

八107 ㊦ ㊦ いねこききかきをつかわずに、手でいねこきをした人もいました。

九14 ㊦ ㊦ こんなときにも、たいこをつかう。
九21 ㊦ ㊦ なるべく早く南のあたいたいところへ運ぶ

ために、飛行機をつかうことにしました。
九23 ㊦ ㊦ また、飛行機という文明の利器が、このし

ごとにつかわれたということ、
九85 ㊦ ㊦ いのししやしかの角などに手を加えて、

なにかの道具につかった物があつたでしょう。

十七8 図 こうしておまえたちに話すようなことが、思うぞんぶんつかったみたいです。

十七32 あくる年から、豊田式人力織機は、國內につかわれるようになったが、

十二33 図 ことばをつかっていることや、そんなものがこの世にあることさえ知らず、

十二45 11 図 いまいった文樂は手でつかうのだが、そのほか、指でつかうもの、ぼうでつかうもの、糸であやつるものなど、いろいろ種類がある。

十二45 12 図 指でつかうもの、

十二47 12 図 ぼうでつかうもの、

十二47 12 図 絵のぐをつかって時間をかけて絵をかくより、写真のほうがつつと便利なわけだけれど、

十二53 11 人形だけを舞台へだして、つかう人の顔や頭がみえないようにする。

十二54 6 つくえやいすを重ねて、つかう人のかくれるところを作り、まくでかくす。

十二78 1 その少年たちは、じょうずにえい語をつかって頼みました。

十二89 11 ただ習慣としてことばをつかえば、ことばの力がうしなわれていく。

十二100 1 もちろん、水をくんだり運んだりするときにもつかったことでしょう。

十二103 4 いまつかっているお金とずいぶんちがいます。

十二108 9 これは能につかうお面です。

十三8 9 考えたり、調べたり、また、種々の器械をつかって観察したり、実験したりする。

十三31 8 さるまわしは、さるをつかったり、せりふをいったり、〈略〉、なかなかいそがしい。

十三31 11 鳴りものをつかわないで、呼び声でやっ

て来る者もある。

十三41 3 図 いっしょにつかえいいよ……うん、

十三41 6 図 ぼくの学用品を、ぼくひとりでつかうのは、ぜいたくというもんだ。

十四12 6 手 私の友だちで、母親が十年このかた、この式のランプをつかっているというのが、

十四20 4 私たちのつかっていることばの中で、

十四22 8 図 それが長い間つかっているうちに、すっかりなれてしまつて、

十四26 8 また、音楽の時間によくつかう、リズムとか、ハーモニとか、〈略〉とかいうことばは、

十四27 5 図 漢語をつかう。

十四27 7 図 長いあいだつかっているうちに、もともとの日本語のように思われてきたのだ。

十五35 1 また、木の皮や、あさなわなどであんだひももつかい、

十五38 2 「海」を「うみ」などにつかつて、

十五39 2 日本では、中國から傳つた漢字をつかっているうちに、

十五40 10 ローマ字は、〈略〉、世界の大半につかわれている文字である。

十五41 11 ローマ字をつかうと、字数が少なくてすむばかりでなく、発音のこまかなところまで書き表わすことができて、標準語の教育に役だつ。

十五42 5 いま日本では、漢字と、かたかなと、ひらがなの三種類の文字をつかつており、

十五42 8 世界のどこに、こんなに三種類も四種類もの文字をつかっている國があるうか。

十五47 8 自分の家をつかう食器とか、

十五57 1 図 アマスト大学の助手をつとめていたころ、寄宿舎で二間続きの室をつかつていた。

十五92 12 図 ぎょうぎのいいことばをつかつてもら

いたいものです。

つかえ ↓さしつかえ

つかえ 11 「仕」(下二) 2 つかえる 《―エ―エ》

十二71 4 このようにして芭蕉につかえながら、はい句の話をきくのでした。

十五102 6 図 ぼくは、あなたにつかえる『健康の幸福』です。

つかえ 11 「使」(下二) 1 つかえる 《―エ》

十五55 4 ホランド博士は、戦争中で費用が思うようにつかえないことについてくわしく話し、

つかえ 11 「番」(下二) 3 つかえる 《―エ》

三112 8 けらいたちは、弓に矢をつがえました。

六16 4 そのかりうどは、きゅうに歩くのをやめて、弓に矢をつがえて、木の上をねらいました。

六17 3 その声をきいて、はとが下の方をみますと、かりうどが矢をつがえているではありませんか。

つかさどる 「司」(五) 1 つかさどる 《―ツ》

十五60 7 札幌独立教会をつかさどっていた私の父とは、心をゆるした間がらのこととて、

つかつか (副) 2 つかつか

八48 7 「〈略〉。」と喜んで、つかつかと小屋の中へはいっていきました。

十五72 10 ドアをおして、つかつかと中にすすんだ

ホランド博士は、客間に私をみちびき、

つかのま 「東間」(名) 1 つかのま

十42 11 喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であつたうめが、この世をさつてしまつた。

つかまえる 「捕」(下二) 10 つかまえる 《―エ》

三46 1 いちばんしまいにいたわにぎめが、白うさぎをつかまえて、からだのけをみんなむしりとつてしまひました。

四二四[㊦] ねこのわたくしは、どのねずみをつかまえるかと考えました。

四二六[㊦] そこを、わたくしがうまくつかまえた。

四九七[㊦] だって、ぼくたちがつかまえたのだもの。

六六三[㊦] つかまえて、たなにあげたら、あぶくをだしておこった。

七五七[㊦] ほたるを三びき、つかまえました。

八八六[㊦] 子どもたちは、あひるの子をつかまえるようとして、

九一七[㊦] フィリピンで、ある年の十月のすえ、子どもがつばめをつかまえました。

一二六[㊦] そんなところをはっきりつかまえたものだと思って、しきりに木炭を動かしていた。

一三五一[㊦] 子うしをつかまえに行つて来るよ。

つかまる「捕」(五) 6 つかまる「ツ・ーリ」

四一八[㊦] おかあさんの手の上につかまってひいた。

四二四[㊦] もうすこしで、つかまりそうになったとき、またわの中ににげこみました。

六一五[㊦] ありはそういつて、すぐ木の葉の船につかまりました。

六三七[㊦] かかしのつかまったひげ、のびるだけのびてちぎれてしまふ。

一五四[㊦] 妹は、そこへいつて、水おけのふちにつかまって、水の中のをぎきました。

一四四八[㊦] 一本の大きななるたに、なんんかの婦人がつかまって、立ちおよぎをしていました。

つかみあい「掴合」(名) 2 つかみあい
一六四二[㊦] 二ひきのとらさんが、つかみあいをはじめました。

九一八[㊦] いっしょに歩いてるうちに、きゆうにつかみあいをはじめるんだもの。

つかみだす「掴出」(五) 1 つかみだす「ーシ」

八五九[㊦] そばにすえた小さなかごの中から、一わずつかみだしては指さきへとまらせたり、

つかむ「掴」(五) 14 つかむ「マー・ミー・メー・モー・ン」

九八八[㊦] ぼくだっていやだ。」と、つかまれている手をふりはなそうとする。

一一六九[㊦] 一方の手で、ふとんの上におかれたまま動かずにいる、うでをつかみました。

一一八〇[㊦] 少年は「略」、いきなり病人のうでをつかんで、「略」といつて力づけました。

一二一五[㊦] だいたいの形をしかりとつかんで、

一三三六[㊦] 子どもたちは、それをつかもうとして追いかける。

一四三六[㊦] 物理の時間に、先生から、星をつかめといわれ、

一四三六[㊦] 夫人は、星はつかまなかったのですが、その感動から研究を進めて、

一五二三[㊦] 大きなやまわしのつめにつかまれて、女の子はばたばたしているではありませんか。

一五二四[㊦] 急に目の前へ、大きなわしがひとりの女の子をつかんで舞いおりて来ました。

一五二五[㊦] 上体をびつたりと鳥のせにつけて、右手で鳥のつばさのつけねをつかみ、

一五二五[㊦] 鳥が大づめでつかんでる女の子のからだの下へ落ちないように、

一五二七[㊦] 下につかまれている女の子は、
一五二九[㊦] 鳥は、「略」、つかんでいた女の子をはなして、あおむけにたおれかかりました。

一五六三[㊦] かた手に小さなくつを持ち、かた手に大きなブラシをつかんで、力のかぎりみがきをかけた。

きなブラシをつかんで、力のかぎりみがきをかけた。

つかるかいきょう「津軽海峡」(地名) 2 津軽海峡

十一四七[㊦] ぼくが津軽海峡をこえて内地にきたのは、ぼくの二年生のときだった。

十一四七[㊦] 津軽海峡の海の水が、こいみどり色にゆれて、

つかれ「疲」(名) 1 つかれ
一四四六[㊦] 寒さも、つかれも、どこかへけしとんでしまつて、

つかれきる「疲切」(五) 3 つかれきる「ーッ」

八六一[㊦] けれども、親あひるは、ひながでてくるまえに、もうつかれきっていた。

八八七[㊦] そこで、つかれきつて横になっていた。

一一二一[㊦] 毎晩、家に帰つてくると、晝まの働きでつかれきつていながら、わらをたたいてわらじを作ることにしました。

つかれはてる「疲果」(下) 1 つかれはてる

「一テ」
八八五[㊦] とうとうつかれはてて、こおりの中にとじこめられたまま、身動きもせずたおれてしまった。

つかれる「疲」(下) 6 つかれる「ーレ」

一六四[㊦] ああ、つかれた。

八七二[㊦] つかれて、気がしずんでいた。

九三九[㊦] 八九メートルもある木の上で、なたで枝をおろすのは気がつかれます。

一一八[㊦] ぼくらのほりきつてるとき、ぼくらにつかれているとき、
一一二五[㊦] 金次郎は、すこしもつかれたようすもなく、
一三四十[㊦] 四十日の旅じゃつかれただらう……

つき「月」(名) 49 月 ↓おつきさま・おつきさん・おつきさんのくに・おつきみ・おぼろづき・ひとつき・ふたつきはん・みかづきさま・みかづきさん・みつき

三109 1 月のきれいなばんになると、かぐやひめは、空をながめてはためいきをつき、

三109 4 あきがきて月がうつくしくなると、かぐやひめのようすはいっそうかなしそうにみえました。

三110 3 ほんとうは、わたくしは 月の 世界の ものでございます。

三110 4 この 十五夜には、月の 國から むかえがきて、かえらなければなりません。

三110 9 どうかして、かぐやひめを月の 世界の人にわたさないくふうはあるまいか。

三113 10 せめて 月夜には 月をみて、わたくしのことを思い出してください。

四16 4 おかあさんが、月に てらされて、水をくむ。

四17 1 バケツの中に月がうつっている。

四17 10 ま——ま月に 月。

四133 4 月の 都の 天人たちは、みんなそろって まいじようず。

四133 7 黒い ころもの そろいで まえば、月はまっ黒、やみの夜。

四134 1 白い ころもの そろいで まえば、月は十五夜、まんまるい。

五93 7 むこうの山から、大きな月がのぼってくる ところでした。

五93 9 りょうかんさんは、いつまでも月にみとれていました。

六51 2 月の明かるい晩でした。

六51 7 月は、雲にはいったかと思うとすぐで、でたかと思うとまたすぐはいります。

六52 2 月はいま雲からでて、大いそぎではなれていきます。

六52 6 じつと月をみつめていると、月は動かないで、雲が大いそぎでとんでいくようにもみえます。

六52 7 月は動かないで、

六54 2 よしおとみちこが「月が走る。」「雲が走る。」といいあっているのをききながら、

六54 5 そうして、しばらく枝ごしに月をみていましたが、「略」と、手まねをしました。

六54 10 すると、月は枝のあいだにじつとしていますが、雲はさつさと走っていきます。

六55 9 動かないと思ってみた月は、もうさつきの枝のあいだにはなくて、

七70 4 それがすむのをまっていたのか、すぐうしろに、月は、音もなく、のっそりとでていた。

九7 2 「月」という一つのことばがあります。

九7 5 この「月」ということばに、「水」ということばをそえたら、

九7 6 「月」だけで思ひだした心の絵とは、いくらかちがったものがあらわれてくるでしょう。

九26 4 子もりするしずかなる月の上に

九27 2 月の夜をわが家のありしあたりまで

九136 10 いまのぼりかけたばかりの月が、しずかに光っていました。

九143 1 月はもう頭の上までできていました。

九145 8 くもが、月の光にちりちりりと光りながら落ちてくる夜つゆをみていると、

十4 4 靑空の美しさ、朝明けの空、夕やけの空の美しさ、月の夜、星の夜の美しさ。

十60 1 月がでてきた。

十60 8 「略」といって、月の方へ手をやったら、あかちゃんは、「略」といった。

十三12 9 月も、東の空から西の空に向かって動きます。

十三12 10 地面は平らなもので、日や月が、東から西へまわっているように思われます。

十三33 9 月が出ていれば、出ていたで美しく、星の夜であれば、またさらに美しい。

十三56 4 これでも、本物にくらべたら、やっぱり、月と太陽みたいにながうといってもいいな。

十四45 2 千九百二十年十月の、ある月のない夜の ことです。

十四63 8 これは、白いうす雲が月にかかったときに見えるのと、にたようなものです。

十五10 2 月が出る山の家にうしをつないだ木

十五12 3 ガラス戸の外にすえたる鳥かごのブリキの屋根に月うつる見ゆ

十五12 5 ガラス戸の外は月あかし森の上に白雲長くたなびける見ゆ

十五13 3 夜のどこにねながら見ゆるガラス戸の外明らかに月ふけわたる

十五13 5 照る月の位置かわりけん鳥かごの屋根にうつりし影なくなりぬ

十五13 7 月照らす上野の森を見つつあれば家ゆるがして汽車ゆきかえる

十五37 6 「日」と「月」をあわせて「明」が作られ、「木」を二つならべて「林」、三つ重ねて「森」が作られた。

十五111 9 おまえたがほおずりをするたびに、私の着物に、月と日の光がさしてきてね。

つき「付」 ↓おつき・かおつき・ことばつき・めつき

つき 「突」ひとつき

つき 「搦」ひもちつき

つき 「次」(名) 53 つぎ 次

一468 つぎのへやで、こしをかけてまっていますと、

一5410 窓 そうして、つぎのとのたまひろいで、きれいなたまがひろえたら、

二85 つぎの日に、「い」のつくことばをあつめました。

三203 先生が、こくばんに つぎのようなことをおかきになりました。

四202 まさおさんは、あいての人を「おかあさん」にきめて、つぎのような文を書きました。

四315 「みんな」に知らせたいといって、つぎのような文を書きました。

四368 「略。」といって、つぎのような話をしました。

四559 つぎの日のあさ、かつちゃんは、ねつがずっとさがって、

四843 その つぎの日の夜、お友だちがあつまりました。

五137 窓 この つぎの駅ですね。

五5410 空は、まだ、ほんのりと明るくて、つぎの星をみつけることは、できませんでした。

五793 つぎのような文が、はりだされました。

五1053 その つぎの日もやってきました。

五1077 ハーモニカのまねや、さんちゃんの本をよむまねなどを、つきからつきへときかせました。

五1077 つぎからつきへときかせました。

六524 そうして、つぎの雲の方へどんどん走っていきます。

六568 手わけをして、やっとつぎのようなものが

できあがりました。

六665 第三号をつくる人は、またそのつぎを書くのです。

六668 お話の題はべつにきめませんから、かつてつぎを考えてください。

六749 こんなことをつきからつきへと考えました。

六749 こんなことをつきからつきへと考えました。

六1019 つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐるまいた。

六1187 つぎに骨のとりつけです。

六1371 そうして、木の切りかぶに、つぎのようなことが、赤いクレヨンで書いてありました。

七510 つぎからつきへと、子どもたちがやってくる。

七510 つぎからつきへと、子どもたちがやってくる。

七141 つぎの「手」は、どんなつかいかたでしょう。

七395 おじさんは、わらいながらさぶろうを受けとって、つぎの人に渡しました。

七396 つぎからつきへ、「よいしょ。」「よしきた。」「それっ。」と、送ってくれました。

七397 つぎからつきへ、「よいしょ。」「よしきた。」「それっ。」と、送ってくれました。

七481 つぎに、「ドッジボール大会」という文章が、二へんあります。

七592 つぎのはどうでしょう。

九114 つぎには、雨の降るところであった。

九119 つぎに、風の音をたいた。

九226 汽車や飛行機で送られた数は、だいたいつぎのとおりです。

九1213 帰り道で、父は次のような話をしてくれました。

十196 「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる

声がかこえる。

十651 つぎの「ぶす」は、狂言の中の有名なものです。

十281 ところで、そのつぎの年、母親が、四五日の病気で死んでしまいました。

十541 このごろ、電車の中に、つぎのようなひょう語がかかげられているのをみた。

十885 そのつぎの日も、一日ずっとそばにいました。

十275 いまそこにいたかと思うと、もう次のへやにはいつているというように、

十329 そうして、次のしゅん間には、

十371 手に、はじめのはゆっくりと、次には早く、「水」という字を書いてくださいました。

十566 次にいくつかの例をあげてみよう。

十971 次の写真帳は、なんの写真帳でしょう。

十461 ふるさとにのこした母へ送ったつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。

十4207 そうして、つぎのようなことばはその一例だとおっしゃってこくばんにお書きになった。

十4658 つぎに、湯げがのぼるときには、いろいろのうずができます。

十4709 つぎに、茶わんのお湯がだんだんにひえるのは、「略」と思っているのです。

十4735 つぎには、熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかして見ると、

十555 そうしてつぎのように語った。

十5661 その次には、「略」大きな写真を二まい、満ほうへと名ざしで送ってくださいました。

つきあい 「付合」(名) 1 つきあい ひおつきあい・おつきあいする

十五608 私の父とは、心をゆるした間がらのこと
とて、両者のつきあいはかなりひんばんであった。

つきあう 「付合」(五) 2 つきあう 《一ツ》
十一310 人をだましたりしないで、ありのままのす
がたで、つきあっていきたいのです。

十五1075 ぬるいなかまにつきあっていたものだ
から、すっかりくさってしまったのですね。

つきあかり 「課名」 2 月明かり

七37 六 月明かり……六十九

七69 六 月明かり

つきあかり 「月明」(名) 1 月明かり

七708 もやが深いから、遠いような、近いような、
月明かりだ。

つきあ・げる 「突上」(下一) 2 つきあげる 《一
ゲ・ゲル》

六1342 もし自分が勝ったら、このしかの角で、う
さぎさんたちをつきあげるといのです。

六1347 自分たちは、あの大きなすどい角で、つ
きあがられてしまわなければなりません。

つきあた・る 「突当」(五) 3 つきあたる 《一ツ》
七614 まよったせみが、かきの木につきあたって、
バタバタやって、にげていった。

九1338 あみにつきあたってはたいへんと、くもが
思ったとたんに、ばさりとこうもりの羽にたたか
れました。

十四4411 小さな汽船が、十ばいもある定期船につ
きあたって、ちんぼつしてしまいました。

つきあわ・せる 「継合」(下一) 2 つきあわせる
《一セ》

十二386 かけらをひろいあげ、それをつきあわせ
ようとしましたがだめでした。

十二5210 古ぎれを、はば二十二センチ、長さ三十

センチぐらいにつきあわせて、図の形に切る。

つきかけ 「月影」(名) 1 月影
十五131 文 ぬれの高きひくき見ゆ

つきころす 「突殺」(五) 1 つき殺す 《一サ》
十五3111 ちよつとでも氣をゆるめると、鳥のくち
ばしでつき殺されます。

つきさ・す 「突刺」(五) 2 つきさす 《一シ》
八167 その口のさきを根の中につきさして、木の
しるをすいはじめます。

九1325 みつばはだいい針をだして、くもをね
らって、ちくりとつきさしました。

つきすすむ 「突進」(五) 1 つき進む 《一ン》
十一529 電車は、歯ぎしりでもするように車の音
をたてて、あらしの中をつき進んでいく。

つきそ・う 「付添」(五) 1 つきそう 《一ツ》
十一885 その晩も、ずつとつきそっていました。

つきだ・す 「突出」(五) 5 つきだす 《一サ・一シ》
七393 いきなりさぶろうをだきあげ、となりのお
じさんの目のまえへ、つきだしました。

九605 やまねこは、ひげをびんとひっぱって、腹
をつきだしていました。

九961 やまだ たかぎのまえにじょうぎをつきだ
して、「略」。

十6812 こしをうしろにひき、せんすの手だけをま
えにつきだして、あおぎつづけていました。

十五755 「略」をと、力をこめてさげびながら、
そのにぎりこぶしを私の鼻先につきだされた。

つきつき 「次次」(副) 6 つきつき
一321 お日さまと いうひとつのことばから、
おもいだした ことばを、つきつきと かいてみ
ました。

七441 ぼうしは、つきつきと人々の手を渡り、お
金がその中にたまった。

九1095 やがて、十人、二十人、つきつきにすべり
はじめた。

十二865 つきつきと、両選手はしのぎをけずって
戦いました。

十四211 みんながおどろいていたが、先生は、つ
ぎつきと書き続けられた。

十五456 日本の手工業も、《略》、つきつきと近代
的工業の道をたどっていくようになった。

つきつ・ける 「突付」(下一) 1 つきつける 《一
ケ》

八751 はなをあひるの子のそばにつきつけて歯を
むいた。

つきとお・す 「突通」(五) 1 つき通す 《一シ》
十五2812 こしにさしていた短刀をぬいて、《略》、
鳥のせ骨をさけて一つつき通し、

つきとくも 「課名」 2 月と雲
六28 五 月と雲……五十一

六511 五 月と雲

つきの・ける 「突除」(下一) 1 つきのける 《一
ケ》

八897 ぬ なかまに追いかけられたり、にわとり
ぶたれたり、女の子につきのけられたり、

つきはじ・める 「付始」(下一) 1 つきはじめる
《一メ》

七1710 花がちって、実がつきはじめたからで
しょう。

つきひ 「月旦」(名) 3 月旦
八203 七年の月日がたつたころ、せみの子たちは、
《略》、もう大きくなりきつたことを知ります。

八329 一年の月日がたつて、いよいよその日にな

ると、けんぎゅうは、黒うしに乗って、
十五51 祖父たちの間に結ばれた心が、なん十年
の月日をへだてて、いま、まごたちによってふた
たび結ばれることになった。

つきみそう 「月見草」(名) 1 つきみそう

一593 しろちゃんのうちは、つきみそうのさい
ている おはなばたけのなかにありました。

つきよ 「題名」 2 月夜

十五27 月夜

十五118 月夜

つきよ 「月夜」(名) 5 月夜

三576 月夜 うたをわすれたカナリヤは、ぞうげの
ふねにぎんのかい、月夜の海にうかべれば、
わすれたうたを思いだす。

三113 月夜 せめて月夜には月をみて、わたくし
のことを思いだしてください。

七56 月夜 明かるい月夜です。

九114 月夜 いもうとの小さき歩みいそがせてちよ
紙かいにゆく月夜かな

十五93 月夜 はまの子ら火をたく青き月夜となり
つく 「付」(五) 118 つく 《イ・カ・キ・ク》

↓あのつくことば・いきおいづく・いろづく・おも
いづく・かたづく・かみづく・かんがえづく・きづ
く・くいづく・くつく・しがみつく・すがりつ
く・だきつく・ちかづく・とびつく・とりつく・に
つき・ばたつく・まきつく・まつわりつく・もとづ
く・やきつく

一498 月夜 きがついてみると、

一505 月夜 やつときがついたの。

一627 月夜 どんとうでも ついたのかと おもって み
まわすと、山のうえから、おおきな お月さんが
でるところでした。

二43 月夜 『あ』のつくことばを、みんなであ
つめて みましよう。

二75 月夜 『あさ』ということばのつくものを、
あつめて みましよう。

二85 月夜 「い」のつくことばをあつめました。

二87 月夜 「う」のつくことばと、「え」のつく
ことばをあつめました。

二87 月夜 「え」のつくことばをあつめました。

二89 月夜 「お」のつくことばをあつめました。

二246 月夜 あんまりいろがにているので、ぼく
はじめは きがつきませんでした。

四166 月夜 くらいかげがついている。

四285 月夜 きよしさんは、じぶんをあいてに書く
ことに、気が つきました。

四342 月夜 かずこさんの書いた文で、なにか 氣
のついたことは ありませんか。

四346 月夜 けれども、べつに 氣が つきません。

四348 月夜 先生は、かずこさんのおとうさんのこ
とばに、気が つきました。

四359 月夜 先生は、そこに 氣が ついたのです。

四399 月夜 先生、さくらの 枝をおろうとしたと
き、おじさんのことばに 氣がついて やめまし
た。

四561 月夜 ねつが ずっとさがって、まぶたをす
こし ひらきました。「かつちゃん、氣がつい
たよ。」

四759 月夜 「を」の字は、ことばのあとにつく。

四1032 月夜 かめが よびかけても、うらしまは、いっ
しんに つりをしているので、 氣が つきません。

四1202 月夜 どんとうが つきました。

五111 月夜 赤と青のしるしのついたもの。

五248 月夜 どこかの女の人が、ぼくに 氣がついて、

五633 月夜 けれども、花がついたり、みがなったり
したのは、おかあさんのせいではありませんよ。

五742 月夜 そばには、りっぱなけいもついています。

五792 月夜 川をみて 氣のついたことを書きました。

五925 月夜 それ、たけのこにごはんつぶがついてい
るだろう。

五929 月夜 いや、たけのこにごはんつぶがついてい
るのが、たけのこはんだよ。

六810 月夜 しごと台の上をみて、だしておいたねじの
ないのに 氣がついた。

六222 月夜 「ありさん、ありさん。」よばれても、あ
りたちは 氣が つきません。

六224 月夜 はじめて 氣がついて、あり「あ、だれか
と思ったら、きりぎりすさんでしたか。」

六411 月夜 ビルディングのまどに、一つ二つと火がつ
く。

六544 月夜 ふみおはふと 氣がついて、まえの方にある
木の 下へいきました。

六586 月夜 雪の降った朝、一年生の子が、学校にくる
道で、はき物に雪がついてころびました。

六593 月夜 私は、きのう、おもしろいことに 氣がつき
ました。

六754 月夜 「まだけんとうが つきません。」

六1075 月夜 しかし、ぼくは、このおかげで、おもしろ
いことに 氣がついた。

六1078 月夜 発音できることばと、できないことばとが
ある、ということに 氣がついたのである。

六1082 月夜 そのわけは、すぐけんとうがついた。

六1103 月夜 「ナ」や「ノ」のつくことばがあつたら、
「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけた。

六1143 月夜 ま四角で、骨が二本しかついていないこ
です。

- 六119 紙のうらには、まん中に、ま四角に切ったときにつけたすじがたてについています。
- 七97 白の子うさぎは、親について、はじめて、巣からはいだしてきました。
- 八56 波うちぎわのかもめが目について、
- 八57 6 みちがえるように、まっすぐな、しっかりした足あとがついている。
- 八58 4 足もとの森や林の中に、みえがくれにお寺の屋根や停車場が目についた。
- 八59 3 すると、向こうの山の谷まにのこっている雪が目についた。
- 八67 2 わたしについておいで、大きな世界の鳥小屋へつれていってあげるからね。
- 八102 3 葉のついていているものとところから、黄みどりのほがでました。
- 八106 2 1本ずつ植えたかぶには、ほが10ぐらいついていました。
- 八106 7 1本のほに、多いのは180ぐらいずつついていました。
- 九9 4 あまりたくさん重ねると、ごちゃごちゃになって、まとまりがつかず、
- 九17 4 すると、その右の足に、日本の文字をしるした小さな金ぞくのいたがついていました。
- 九39 1 枝ぶりのよいかれ枝のたくさんついてい
- る高い木をみつけると、
- 九44 9 国 この夏、一ど、用事でおばがそちらにでかけるとき、ぼくもついていったのです。
- 九47 8 字はへたで、すみもがさがさして指につくくらいでした。
- 九54 3 そうして、谷川の南の、まっ黒なかやの木
- の森の方へ、新しい小さな道がついていました。
- 九73 7 そうして、なんだかねずみ色のおかしな

- たちのうまがついています。
- 九77 7 先生について、五十人のなかまが、おくれ
- ないように歩いていきました。
- 九93 11 両方ともあいてに氣がつくが、わざと知らないふりをしている。
- 九94 4 たかぎ しばらくして持っているすみに氣がつき、ちよつとためらったのち、「略。」
- 九98 5 国 おい、ボタンついたか。
- 九98 6 国 つかなくたって、いいよ。
- 九122 2 茶人は、この上流にいい泉があるのではな
- いかと氣がついた。
- 九127 3 黄色と黒のしまもようのついた大きなくも
- でした。
- 九134 2 くもが氣がついてみると、あたりにいいに
- おいがします。
- 九140 9 くもは、おなかがついているのに氣がつき、
- また、あみをかけようと考えました。
- 九147 10 こう決心がつくと、くもは、すっかりく
- な氣持になりました。
- 十7 4 フランスのいなかへいったときは、子ども
- が大ぜい、めずらしそうについてきて困りました。
- 十7 10 こんなにうるさくついてこられたときには、
- おとうさんも困りましたので、
- 十21 4 母親が、両手をのぼしてついてくる。
- 十1 9 2 国 ぼくらは、きみについていきえすれ
- ば、だいじょうぶだと思ふんだ。
- 十1 29 1 あくる年の春、黄色い花がさいて、たく
- さんの実ができました。
- 十1 66 11 国 「わたしについておいで。」といった
- だけでした。
- 十1 67 10 少年は、勇氣をふるいおこして、その後
- からついていきながら、

- 十一73 5 さつきの看護婦と、もうひとりの看護人
- とがついていました。
- 十一89 3 その晩、少年は夜どおしそばについて、
- 病人をみまもっていました。
- 十二20 1 国 二三年は、青い小さな実が、ほんの二
- つ三つ、ついたりつかなかったらだったのに、
- 十二20 1 国 青い小さな実が、ほんの二つ三つ、つ
- いたりつかなかったらだったのに、
- 十二40 12 だんだんちえがつき、もの心がついて、
- 学校にいくようになりました。
- 十二40 12 だんだんちえがつき、もの心がついて、
- 十二45 4 国 人形はものをいわないが、そのかわり
- 説明がついている。
- 十二104 6 ほうおう堂という名まえは、屋根のかざ
- りにほうおうがついているからだ
- 十二104 11 屋根の形や左右にのびたろうかのかつこ
- うにも、ほうおうという鳥の美しいすがたがあら
- われていることに氣がつくことでしよう。
- 十三9 6 おしべのかふんがめしべにつかないよう
- なくふうと、
- 十三9 7 いま一つ、よくつくようなくふうをして、
- 十三9 8 かふんがめしべにつくときはよくみのる
- が、つかないときはみのらないことを、
- 十三9 9 つかないときはみのらないことを、知る
- ようなものである。
- 十三10 1 きつねがつくとか、からの鳴き声がわ
- るいから不幸があるなどといった。
- 十三13 6 しかし、この天動説では、どうしてもか
- たつかないようなことが、目についてきたのです。
- 十三34 6 ふと氣がついて、子どもたちは、あわて
- て家にもどって行ったりする。
- 十三43 6 三郎、それに氣がついて、

十三447 ただ、あいてになる人が、見物人の目に
つかないだけです。

十四86(三) 私には決心ができました。

十四107(三) それには、つかいかたを書いた小さな
書きつけがついているはずで。

十四131(三) コーヒー入れは、中に小さなメモりの
ようなものがついていて、

十四344 こうなってくると、うちゅうというもの
は、どこまで廣いのか、想像がつきません。

十四525(三) 花がさかなかつたら、実はつきません。
十四527(三) 根や、つるや、葉のないかぼちゃはあ
りませんが、それだけでは実はつきません。

十四529(三) 花、とりわけ、め花がさいて、はじめ
で、かぼちゃの実がつくのです。

十四569(三) もし、つるの私がとちゅうで切れたり
したら、それについている葉でも、花でも、

十四5912(三) ぼくが《略》かふんをなだちしてあ
げなかつたら、実は一つもつかかなかつたのですよ。

十四626 よく氣をつけて見ていると、だんだんに、
いろいろのこまかいことが目につき、

十四637 日光にすかして見ると、湯げの中に、に
じのような、赤や青の色がついています。

十四703 光った線や、うす暗い線が、《略》、ゆる
やかに動いているのに氣がつくでしょう。

十四737 湯のおもてに、にじの色のついた、きり
のようなものがひと皮かぶさっており、

十五208 それに、この子どもたちをせわする、ひ
とりの女の家庭教師がついていました。

十五234 しばらくして、ふと氣がついてみると、
《略》女の子のすがたが見えません。

十五3212 氣がつくと、もう自分のまわりには、お
おぜいのひつじかいが集まって来ており、

十五4410 「たいへん焼物がおすきのようですが、
あなたは——と、あいさつともつかず、返事と
もつかない答えかたをした。

十五4410 あいさつともつかず、返事ともつかない
答えかたをした。

十五654 新島のおじさんと、日がさをさしかけな
がらついていらつした新島のお婆さんと

十五658 小樽で目についたといつて、車のついた
みごとなおもちゃを私に送ってくださった。

十五659 車のついたみごとなおもちゃを
十五6512 これから車のついたものは送ってくださ
るなど、

十五933(三) なにかおまえについているな。
十五10311(三) 『星の出を見ることの幸福』が、《略》、

金ぴかの着物を着てついています。
十五1214 けれども、思うことがすこしも書けてい
ないことに氣がついた。

つく「吐」(五) 7 つく《イー・キーク》
二416(三) たろう「うそ つくな。」

二417(三) 山びこ「うそ つくな。」

三1093 月のきれいなばんになると、かぐやひ
めは、空をながめてはためいきをつき、

八5210 《略》。と、その家の人はふかいたため
息をつきました。

八756 あひるの子は、ため息をついた。
十一2311 母親も、子どもをよそへやってから、夜
になると、ため息ばかりついてねむれません。

十一704 息をつくのもやつとのようでした。
つく「笑」(五) 5 つく《イー・キーク》 ↓おつ
く・つつつく

四788 て——てんてん手まりをつきましよう。
五241(三) ところが、ぼくのまえに、まっばづえを

ついた、わかい人がいるんです。

六1376(三) 角でついてやる。」しかさんは、うさぎ
さんたちのあとを、どンドン追いかけてました。

九1052 ぼくたちは、リックサックをせおって、ス
キーをつけ、二本のつえをつきながら、

十二272 たった九十センチぐらいのところでも、
《略》、すぐに手をついて、いざり歩きになります。

つく「就」(五) 4 つく《イー・キーク》 ↓おつ
く

九1132 午後は、先生について、ひとりひとり、正
しいすべりかたを教えていただいた。

十四512 市役所のガス係という職についたとき、
十四204 みんなが席につくと、

十五923 かれらはみんなとなかよくテーブルにつ
いて、飲んだり、たべたり、

つく「着」(五) 19 つく 着く《イー・キーク》
↓いきつく・おちつく・おつく・すみつく・た
どりつく

一567 おべんとうをたべて、ちよつとうとうと
すると、きしやはもうついていました。

二292(三) きをつけてわたりましたから、みんな
むこうのきしにつきました。

五139(三) やつとついた。
五197 やつと汽車からおろされ、自動車につみこ
まれて、ある町のゆうびんきよくにつきました。

五214 一だいの長い電車が、おきやくをいっぱい
乗せて、終点につきました。

五305(三) 駅につくと、
六157 木の葉の船は波に流されて、川の岸につき
ましたので、

六877(三) まもなく、きれいなごてんにつくでしょ
う。

七3510(三) それに、乗りがえもないし、二時間ほど

でつくのですから。

七36 5 私はそのうって、どうぞぶじにつきますようにと、心の中でのうっていました。

九21 8 晩の十時に、二千ばのつばめが着きました。

九78 4 もうすこしで貝づかに着くというところで、先生は一けんの農家にたちよられました。

九78 11 そこへ着くと、先生はステッキを深く土の中へお立てになりました。

九107 7 いよいよ、スキー場に着いた。

十一45 8 おめんじょうをいただいて、さざげ持つようにしながら、席に着きました。

十一72 2 手紙の着いたときに、母親がどんなにか力をおとしたことなど――

十四66 6 私は短い旅をしたあとで、七時にパリーに着きました。

十四12 12 小包二つは、おそろくいっしょには着きますまい。

十五53 4 カネギー博物館のあるピッツバーグに着いたのは、暑い真夏の日の朝であった。

つぐ ぐうけつぐ・とりつぐ

つくえ 〔机〕(名) 21 つくえ ぐゆめとつくえ

二17 3 ちくおんききしやしんや やさいい

なごごままつ つくえ

二58 9 みなさんのつかっている つくえも、こしかけも、長いあいだはたらいできました。

二60 6 ですから、このつくえやこしかけを、かわいがってやりましょうね。

三95 9 おとうさんの かおも、先生の つくえもかくことができます。

五77 8 先生のつくえのかびんに、大きなひまわりの花が、三本かざってありました。

六99 3 つくえのひきだしをかたづけしていると、

《略》がでてきた。

六99 7 ぼくは、この二つをかさねたりべつべつにしたりして、つくえの上をみたり

十59 9 えんがわにつくえをだして、その上にすきをかざった。

十二26 3 民ちゃんは、つくえとか、テーブルとか、なにかとりつく物があるとすぐに立ちあがって、

十二54 5 つくえやいすを重ねて、つかう人のかくれるところを作り、まくでかくす。

十三37 4 左手につくえ。

十三39 5 つくえの方をちらちら見る。

十三39 11 三郎は、受話器をかけ、電話口から、つくえの方へ走りよって、ひきだしをあげる。

十四8 1 1 おとうさんのお写真を、私は、いつも自分のそばのつくえの上におきます。

十四13 11 1 おふたりの写真は、いま、この手紙を書いているつくえの上、私の前においてあります。

十五57 7 1 東洋の青年をひきとったが、室は二つあっても、つくえは一つしかなかった。

十五57 7 1 1 そこで、大きなつくえのまん中にチョークで線をひき、

十五69 5 1 「つくえの上をごらん。」

十五69 7 1 おじさんが日夜ふでをとっていられたという大きなつくえの上に、

十五73 6 1 つくえに白線をひいて「國境」をつくったあたりを、声高らかに読みあげられた。

十五79 10 1 私のつくえの上には、日本のみなさんが書いたあつひ絵の本が、いつもおかれてあります。

つくす 〔尽〕(五) 4 つくす 《―シース》 ↓ おちつくす・もえつくす

七13 3 1 「手をつくす。」

八11 11 1 あらゆる手あてをつくしましたが、

八44 7 王さまは、ご病氣をなさって長いことお苦しみになりましたが、いくら手をつくしても、よくおなりになりません。

十38 12 1 それから、わか者は、真珠貝の研究に全力をつくした。

つくづく 〔熟〕(副) 2 つくづく

十17 9 1 外國でくらしてみても、つくづく、自分の國のことばのありがたみを知りました。

十五14 4 1 目をあけてつくづく見ればばらの木にばらがまつかにさいてけるかも

つぐなう 〔償〕(五) 1 つぐなう 《―ワ》

十三25 9 1 戦いによって失われたシュレスウィヒとホルスタインとは、すでにつぐなわれて、なおあまりあることになりました。

つくばおろし 〔筑波下〕(名) 1 筑波おろし

十二75 1 1 ふだんは筑波おろしがさがしく、雨戸をゆさぶったり、

つぐみ 〔鶉〕(名) 1 つぐみ

九42 2 1 山には、つぐみや、ひわがきました。

つくよ 〔月夜〕(名) 3 つくよ

十五12 1 1 ほととぎす鳴くに首あげガラス戸のともを見ればよきつくよなり

十五12 6 1 1 ガラス戸の外のつくよをながむれどランプの影のうつりて見えす

十五12 8 1 1 紙をもてランプおおえばガラス戸の外のつくよの明らけく見ゆ

つくりあげる 〔作上〕(下二) 3 つくりあげる

四122 8 1 1 ただ一本のマッチでも、これを作りあげるまでには、どれほど手かずがかかっていることでしょう。

九8 4 1 色の組みあわせも、音の組みあわせも、お

たがいにとけあって、一つの感じをつくりあげると同じように、

三三二 佐吉は、〈略〉、いっしんに考えぬき、これならという一台の機械を作りあげた。

つくりかた「作方」(名) 8 つくりかた 作りかた
六四二 うちへ帰って、そのたこをみて、作りかたを考えてみました。

四六二 幸吉は、〈略〉エジソンのもとをたずねて、養殖真珠のつくりかたを、こまごまと話した。

二二四 簡単な人形の作りかたを教えてあげよう。

二二九 指人形の作りかた

二二四 顔の作りかた。

二二五 手の作りかた。

二二六 4 着物の作りかたと手のつけかた。

二二七 舞台の作りかた

つくりかた「作出」(五) 3 作りだす 《—シ—ス》

三三八 世界じゅうの人から愛される真珠、これを、人工で作ridすことはできないものだろうか。

三五九 その漢字から、日本語を表わすのに便利なかたかなや、ひらがなを作りだすようになった。

三六〇 「に」は「仁」というように、漢字の全体をくずしたものから作りだしたものである。

つくりなおす「作直」(五) 1 つくりなおす 《—シ》

九二〇 協会では、おおいそぎで、その家をつばめたちのためにぐあいよくつくりなおしました。

つくる「作」(五) 77 つくる 作る 《—ツ—ラ—リ—ル》 ↓じやがいもをつくり

三二六 「くりぬいて、ふねをつくるがよい。」といいました。

三二六 そこで、大ぜいのだいくをあつめて、ふ

ねをつくることになりました

三二八 あのいきおいのいいくすのきでつくったふねだもの、

四二四 みんなで手をつないで、わをつくりました。

四二六 二十九わのがんは、列をきれいに

四二七 かつちゃんのスきな おだんこを作りました。

四二八 わたくしは、ねえさんとふたりで、クリスマスツリーをつくりました。

五三四 ここで、きかいや、ひりょうなど、たいせつな品物を作っています。

五三五 あのガスは、なにか作るのでしょうか。

五八四 たなかさんは、おしぼをたくさん作っていました。

六四一 つむじ風のように、列をつくったつばめのむれが、かかしの方へとんでくる。

六五四 かべ新聞第一号は、一組でつくることになりました。

六六三 第二号をつくる人たちは、このお話のつづきを書いてください。

六六五 第三号をつくる人は、またそのつぎを書くのです。

六七〇 ごろうは、妹のはるえといっしょになって、大きな雪だるまを作りました。

六七二 だるまさんのうたをつくって、うたつてあげようか。

六八〇 そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、するするといくらいたるの大きなきを作った、

六八三 それがいま、一つ一つの音の性質を考えた

うえで作ったものであることがわかって、

六八二 「作ってあげようか。」といいますと、

六八四 ただしちゃん喜んで、「うん、作って。」と、元氣のいい声でいきました。

六八六 ほんとうは、たこを作るのははじめてです。

六八七 けれども、いっしょうけんめいに作ったら、できないことはないだろうと思いました。

八〇一 じょうぶに作りたいねかけに、日がよくあたるようにきちんとかけました。

九二一 たくさんのはりかねがはりまわされて、つばめたちのとまるところがつけられました。

九二四 ことしある家のき下で巣をつくったつばめは、来年また、同じ巣へもどってくる

九二六 あの家のき下につくった古巣がなつかしいのでしよう。

九二七 上ばきを自分でつくるわらしごと

九二八 三日めにやっと、うねを十三本つくりました。

九二九 おかみさんが、店の人とふたりで、せつせと貝をこじあけて、むきみをつくっていました。

九三〇 骨で作ったものらしいよ。

九三二 石で作ったもの、それには石の矢じり、おもりなどいろいろあります。

九三六 ここからでるのは、このとおりうつくしいて作った物で、

九三七 茶人は、そこをほりくぼめ、小石でどてをつくり、

九三八 自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思います。

九三九 かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械を作ることにりかかった。

九四〇 父親のすきなものをかうために、自分で

- わらじを作って、お金をもうけたりもしました。
- 十一 22 1 毎晩、家に帰ってくると、〈略〉、わらをたたいてわらじを作ることにしました。
- 十一 25 8 夜になると、また、なわをなったりわらじを作ったりしました。
- 十一 47 8 うちではバターもつくったし、こむぎこで、おいしい、やわらかいパンもやいた。
- 十一 49 1 北海道へいって、じゃがいもをつくります。
- 十一 49 2 それから、えんばくもつくります。
- 十一 49 4 ぼくは、おとうさんと同じように、ちちうしをかって、自分でバターをつくります。
- 十一 50 1 さっぽろに農学校をつくられたクラーク先生もおっしゃった。
- 十一 50 4 北海道へじゃがいもをつくりにいこう。
- 十二 23 10 荒れ地を三十アールばかりかいこんして、さつまいもや野菜を作ったりしていたので、
- 十二 48 6 園 そのうえ、手がるでおもしろいし、自分で作って動かすのは楽しいものだよ。
- 十二 48 8 園 きみもひとつ、作ってみるといいよ。
- 十二 49 8 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。
- 十二 50 12 鼻や耳、ひたいやあごの形も、古新聞で作って、のりでとめる。
- 十二 52 10 これを二まい作る。
- 十二 54 8 つくえやいすを重ねて、つかう人のかくれるところを作り、まくでかくす。
- 十二 54 10 2 舞台の上には、紙やいたぎれで、木や家を作っておく。
- 十二 73 2 園 雪だるまを作るの。
- 十二 99 8 しかの角などで作ったつり針もあります。
- 十二 102 9 夢殿の観音 この美しい、りっぱなほと

- けさまは、いまから千三百年ばかりまえに作られたものであります。
- 十二 103 3 これは、千二百年ほどまえに、はじめて作られた日本のお金です。
- 十二 104 2 これは、九百年ほどまえに作られた平等院という建物の中にある名高いほうおう堂です。
- 十二 114 7 平和な国日本を作るために、また、文化國家をきずくために。
- 十三 19 3 道路をつくったり、みぞをほったり
- 十三 24 5 ユートランドの農夫のつくった農作物は、
- 十四 32 6 こよみが作られたのです。
- 十四 58 2 園 それを養分につくるのは、葉さんではなくて、私ですよ。
- 十四 80 2 なん百年という前からつくられて、子に、まごにと傳えたことではないかと思えます。
- 十五 37 5 また、それまでに作られた文字を組みあわせて表わすこともくふうされた。
- 十五 37 6 「日」と「月」をあわせて「明」が作られ、
- 十五 37 7 「木」を二つならべて「林」、三つ重ねて「森」が作られた。
- 十五 39 6 かたかなは漢字の一部分をとって作ったもので、たとえば、「江」から「エ」、
- 十五 46 12 園 「どこで作りますか。」
- 十五 47 2 園 とときき焼いては、この店に持って来ますが、なにぶん作るのにてまのかかるもので。
- 十五 47 9 佐賀はん主は、お庭焼といって、自分の家をつかう食器とか、おくりものにする焼物とかを作らせていたが、
- 十五 48 3 これははん主からゆるされた十六人だけが、有田に赤絵町を作って住み、
- 十五 48 7 いままで、焼く人と赤絵屋がわかれてし

- ごとをしていたため、ひとりでこの焼物を作ることは、むずかしいことであった。
- 十五 49 4 やがて、思いどおりのものを作ることにできる日がきた。
- 十五 51 1 また、日本についていろいろの研究を進め、日本の歴史を書いたり、辞書を作ったり、
- 十五 73 6 つくえに白線をひいて「國境」をつくったあたりを、声高らかに読みあげられた。
- 十五 81 2 天は、人のうえに人をつくらず、人のしたに人をつくらず。
- 十五 81 2 天は、人のうえに人をつくらず、人のしたに人をつくらず。
- つくれる「作」(下二) 3 つくれる 作れる 《レーレル》
- 六 116 7 園 「きみ、作れるかい。」とききました。
- 六 116 9 園 「作れるさ。」と答えましたが、ほんとうは、たこを作るのははじめてです。
- 十四 25 9 「ことばのおたんじょう」などというお話が、つくれそうな気がしてきた。
- つくろいか・ける「繕掛」(下二) 1 つくろいかける 《一ケ》
- 九 129 11 ぶつぶつひとりごとをいいながら、くもは、やぶれたところをつくろいかけました。
- つけ(終助) 1 つけ
- 十五 90 7 園 だれだか、いつかそんな話をしていたつけ。
- つけ 「付」 ↓うえつけ・おいつけ・かきつけ・しつけ・とりつけ・にくづけ・よこづけ
- つけかた 「付方」(名) 1 つけかた
- 十二 52 8 4 着物の作りかたと手のつけかた。
- つけね 「付根」(名) 3 つけね
- 四 54 8 かっちゃんは、はねのつけねをうたれて

いました。

十二162 重みのかかった枝のつけね、

十五251 上体をびったりと鳥のせにつけて、右手

で鳥のつばさのつけねをつかみ、

つ・ける「付」(下一) 85 つける 《ケケケル》

しいいつける・うけつける・うちつける・うみつけ

る・おしいつける・おしつける・おちつける・おみ

つける・かきつける・かたづける・ききつける・く

くりつける・くつつける・げんきづける・こぎつけ

る・こすりつける・しつける・しばりつける・しめ

つける・すえつける・たきつける・たたきつける・

ちかづける・ちからづける・つきつける・てりつけ

る・ときつける・とりかたづける・とりつける・な

げつける・なづける・にらみつける・ぬいつける・

ぬりつける・のりつける・はたらきつける・はりつ

ける・ひきつける・ふみつける・ほりつける・まき

つける・みつける・むすびつける

二291 ⑤ きをつけてわたりましたから、みんな

むこうのきしにつきました。

二513 さちこは、りんごをだいたり、ほおにつ

けたり、おどったりします。

三287 ⑤ 鳥のように 早い ふねだから、はやとり

という 名をつけよう。

三377 ⑤ かなあみに からだを つけるようにし

て、ねています。

三754 ⑤ ほら、どう なるか、きをつけて みて

いなさい。

三1031 「かぐやひめ」という 名をつけました。

四79 ⑤ 火事がおこらないように、また、わるい

びようきが はやらないように、氣をつけて く

れます。

四158 わたしの せなかに かおをつけて ねんね

した。

四731 これが あたった 人には、につきちようを

あげます。『ひびにつける。』という わけです。

四734 これをあつ紙に書いて、えも つけて、

四757 ⑤ る——るすいはしつかり 氣をつけて。

四838 まっ白な あごひげを つけた サンタク

ローズのおじいさんができあがりました。

四182 ⑤ お氣を つけて。」かめが、うらしまの

手をとって、でていきます。

五117 ⑤ 駅の人たちは、いつも氣をつけているよ。

五822 ⑤ みんな、からだに氣をつけてください。

五865 「略。」と、うたのようにふしをつけて

よびながら、ひとりの子どもがきます。

五995 水をふきかけたり、くすりをつけてやっ

りますと、やっとう生き返りました。

六366 おれるようにあたまを地につけるすぎの木。

六704 目はなほ口もつけました。

六761 学校へいくとき、雪だるまのかたのところ

に、まつの枝をつけました。

六1182 クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色

にぬりつぶしたら、

六1191 紙のうらには、まん中に、ま四角に切った

ときにつけたすじがたてについています。

六1209 ⑤ かわいたら、糸目をつけて、ただしちゃ

んのところへ持っていってあげるんだ。

六1415 ⑤ そこから、あとをつけてきたのだ。

七113 「手がつけられませんか。」

七135 「新しく手をつけた。」

七207 ⑤ 一本だけのこしておきましたら、それが、

いまちようど、こんな白い花をつけています。

七781 ⑤ それから、つけた荷がありましたね。

七803 ⑤ 私どもは、麦をつけたらくだをつれて、

さばくを通っていましたが、

七822 ⑤ そのうえ、つけていた荷物の品まで、

知っているじゃありませんか。

七845 ⑤ もしもし、それなら、荷物をつけている

ことが、どうしてわかったのでしょうか。

八65 その晩から家族のひとりになり、あくる日、

ピオという名がつけられました。

八272 そこには、屋のかんむりをつけたむすめた

ちが、樂しげに歌ったり、

八531 それから、かつてあるにわとりに氣をつけ

ました。

八564 ぼくは、砂地の上にまっすぐな足あとをつ

けてみようと 歩いて歩きました。

八674 ⑤ 人にふまれないように、それからねこに

氣をつけてね。

八963 はんどになわしろをきめ、そのさかいに

しるしをつけました。

八967 ひたさない種もみをまいたところには、べ

つにしるしをつけておきました。

八996 これから、水がきれないように氣をつけま

しょう。

九88 「風」ということばに、ほかのことばをつ

けてみましょう。

九810 「風」を「朝風」として、これにいろいろ

なことばをつけてみましょう。

九176 さいたま縣のあるところで、こころみに、

しるしをつけてはなしたものだ

九225 ヴェニスいきの汽車に、とくべつにあたた

かくした貨車をつつつけて送ったほどでした。

九3811 ⑤ 母たちもほくも、はじめ、その竹ざおに

かまをつけてやる方法を知らなかったので、

九401 ⑤ 足もとをよくみて、氣をつけてね。

- 九四〇^一 ^手 氣をつけてね。
 九四〇^九 ^手 しょいこをつけたおとなの人が、
 九四二^四 ^金 ねえ、きみ、うちによって、ねえさんに
 そのボタンをつけてもらわない。
 九四五^一 ぼくたちは、リックサックをせおって、ス
 キーをつけ、《略》、そこへ集まった。
 九四六^二 そこで氣をつけてみると、右岸からさらさ
 らと流れ落ちる小さな谷川がある。
 十三四^五 佐吉が、はじめに目をつけたのは、ぬのを
 織るとき、たて糸のあいだをぬっていく横糸で
 あった。
 十六三^八 能のほうでは、めんをつけます。
 十六八^八 狂言はめんをつけません。
 十一三〇^三 いろいろのことを身につけて、やがて、
 村をすくい、
 十一三一九^九 ^鯛 えんどう・そらめみな花つけて、羽
 音高くみつばちがとぶ。
 十一七五^八 ^金 氣をつけておあげなさい。
 十一七七^{一〇} コップを病人の口もとにつけたときに、
 十二一三^七 そこは一本のざくろの木があつて、夏
 じゅう美しい花をつけていたが、
 十二一九^{一〇} ^金 はじめて実をつけた二三年は、
 十二二一^六 ^金 大きな木になって、美しいりっぱな実
 をたくさんつけるようになりたいものです。
 十二四六^九 ^金 牛皮を切りぬいて、美しい色がつけて
 ある。
 十二五〇^二 (3) 正方形の一まいにのりをつけてつづ
 にかぶせる。
 十二五〇^四 (4) 首のところだけのこして、もんだ紙
 にのりをつけないで、上から上からかぶせる。
 十二五〇^{一〇} (5) 首のほうからかぶせてまわくして
 から、細長く切った古新聞にのりをつけてとめる。

- 十二五二^二 (7) 日本紙を細長く切って、一まい一ま
 いによくのりをつけてはりかためる。
 十二五三^六 (5) 顔と手をつけた着物を裏返すとき
 あがる。
 十二七〇^七 芭蕉はたったひとりで住んでいて、なに
 かにつけて不自由であらうから、
 十二七七^七 時間がせまったので、私はユニホームを
 つけて、練習のためにコートにでました。
 十二八九^四 話をするときには、その場のようすによ
 くあうように、氣をつけて話さなければならぬ。
 十二九三^五 ことばづかいやいいあらわしかたには、
 いっそう氣をつけなくてはならない。
 十二一〇一^二 この式の土器は、《略》、やよい式土器と
 いう名まえがつけられています。
 十四四九^二 寒さに氣を失って、まるたから手をはな
 さないように、こうして元氣をつけていたのです。
 十四五一^八 こういいたしたのは、根のしるしをつけ
 た老人でした。
 十四六二^五 よく氣をつけて見ていると、だんだんに、
 いろいろのこまかいことが目につき、
 十四六七^三 そういうときに、よく氣をつけて見てい
 てごらんなさい。
 十四七八^九 そののち、氣をつけて、おけ屋さんなど
 のやつているところを見ると、
 十四九五^二 かべにこすりつけて、火をつけた。
 十四一〇〇^七 たばの中にあったマッチをみんな一時に
 つけた。
 十五二一^四 まっ白な服をつけた少女の立っているよ
 うなけわしい山が、
 十五二五^一 上体をびったりと鳥のせにつけて、
 十五三五^三 ぼうきや、石や、貝がらなどに、はも
 のなどであるしをつけてしめすことも行われた。

- 十五四八^二 色絵をつける赤絵屋もあったが、
 十五八二^九 金だの、眞珠だの、宝石だのを、頭に
 いっぱいつけています。
 十五一〇三^{一〇} ^金 これが、『雨の幸福』で、眞珠をいっ
 ぱいつけています。
 十五一三三^七 ^金 おまけに、いつかランプをつけるとき
 やけどをしたあとまであるよ。
 つける 「吐可」(下二) 1 つける 《一ケ》
 十一八二^七 少年は、父親のうでの中にあたれました
 が、胸がせまって息もつけませんでした。
 つける 「着可」(下二) 1 着ける 《一ケル》
 十一八四^六 ^金 晩には家に着けるから。
 つける 「告」(下二) 1 告げる 《一ゲ》
 十一七二^{一〇} 去年、みおくっていつて、最後に船の上
 でわかれを告げたことや、
 つこう 「都合」(名) 1 つこう
 十三一〇^八 わるいといった方角へこして、つこうの
 よくなつた人もある。
 つたう 「伝」(四五) 2 つたう 《一ウーッ》
 八一五^一 ようちゅうが、はいだして、あおぎりのふ
 といみきをつたつて、《略》おりていきました。
 九一六^六 ^文 ^鯛 ちろちろと岩つたう水にはい遊ぶ赤き
 かにいてすぎの山しずか
 つたえる 「伝」(下二) 9 つたえる 傳える 《一
 エーエル》 しいいつたえる・おつたえる・かた
 りつたえる
 三一〇六^八 おじいさんは、かぐやひめに この ことを
 つたえて たびたび すすめましたが、
 十二一〇九^六 イソップ物語は《略》、これをキリスト
 教の宣教師が日本に傳えたのは、
 十四二四^{一七} それは、外國と交通をして、日本にな
 かった品物が、外國から傳えられたときに、

十四251 「タバコ」ということばが、伝えられた
ということがわかった。

十四803 なん百年という前からつくられて、子に
まごにと傳えたことではないかと思ひます。

十四808 とうとう一つの眞理だと思われたので、
そのことをほかの人々に傳えるうちに、

十五3711 漢字が中國から日本に傳えられたのは、
千七百年ほどまえであるが、

十五506 どうか、私のことばを今右衛門さんに
傳えてください。

十五758 日本へ歸つたら、新島夫人にきょうのゆ
かいな会見のてんまつを傳えてくれといひながら、

つたら (保助) 1 つたら
六4411 さい、あのかかしつたら、〈略〉、なんべ
んもなんべんもさげんでいたよ。

つたら (終助) 5 つたら
六223 ありさんつたら、ありさん。

九882 〔よせつたら。〕
九898 はなしてくれつたら、ぼくはやるよ。

九902 もういいつたら——」四「みともない
よ。

九9011 もういいつたら——」と、やまだのせな
かをおしながらさる。

つたわ・る 〔伝〕(五) 12 つたわる 傳わる
《ツツール》

四917 ほおには あせがつたわっている。
四123 長い 長い でんせんをつたわって、こ
こまで たびをしてきたのです。

八206 上からつたわってくるあたかさと、かわ
きかたで、いまが夏だということや、よい天氣
がつづいていることなどを知ります。

十二1101 外國から書物が新しくはいってくること

は、外國人の心が傳わることで、

十四2511 外國の學問などが傳わってきたときに、
そのことばもいっしょに傳わってきた

十四2512 そのことばもいっしょに傳わってきたの
にちがひない。

十四262 そののちはドイツ醫學がおもに傳わつた
とうかがつたが、

十四266 チフスやトラホームは、ドイツ醫學がは
いつてきたときにそれぞれ傳わつたことばであろ
う。

十四2610 コーラスとか、ソナタとかいうことばは、
西洋音樂がはいつてきたときに、いっしょに傳
わってきたことばであらう。

十四271 デッサンとか、モデルとか、バックとか
いうことばも、西洋の油絵がはいつてきたときに
傳わってきたのだということが想像される。

十五392 日本では、中國から傳わつた漢字をつ
かっているうちに、

十五414 そのフェニキア文字がギリシアに傳わつ
てギリシア文字となり、

つち (題名) 2 土
十三32 土
十三462 土

つち 〔土〕(名) 24 土はこえつち・ひみずつちは
ちたち

五46 水をふくんだ草のうた、こけのうた、土の
うた、いわのうた。

五373 このような木が、たおれて土にうずまり、
長いあいだかかって石炭になったのです。

六1265 まえ足でほつては、うしろ足で土をはじき
だしました。

七596 土の上、一センチほどのところで。

八183 土の中は、たとえ一二センチ歩くにも、ト
ンネルをほつていかななくてはなりません。

八2010 くらくなりかけた夕ぐれをみはからつて、
思ひきつて土をかきわけて地上にはいだします。

八963 土をあまり深くほると、根が下へのびすぎ
て、あとでなえがよくとれないそうです。

八985 いねがよく根をはつて育つように、〈略〉、
土のかたまりをくいてこまかくしました。

九7811 そこへ着くと、先生はステッキを深く土の
中へお立てになりました。

九791 土はやわらかで、ずぶずぶと、ステッキの
たけいっばいにはいります。

九794 土の土の上に白くみえているのは、むか
し海の中にいたいろいろな貝のからです。

十一218 すこしも休まず働くので、かえつて、お
となよりもよけいに土や砂を運ぶほどでした。

十三284 土でおだんごのようなものをこしらえた
り、

十四548 それは、大部分、根の私が、土の中か
ら吸いとり、送つてあげたものです。

十四5410 明かるい地の上でくらしているかたに
は、土の中のことはわからないでしょう。

十四5411 そこは、暗いところで、土もかたいし、
石ころなども、ごろごろしています。

十四593 土が立ちました。

十四594 しかし、土にはえていないかばちやな
んで見たことがない。

十四598 ほかのことはわすれても、この土のこ
とは、かたときもおわすれにできないでしょう。

十四611 「〈略〉」「〈略〉。」と、日や、土や、水
などがいいました。

十四671 前日雨でも降つて、土のしめつてい

ころへ日光があたつて、
 十四89 1 半年も雪にとざされていた地上に、ぽちっと黒い土が見えはじめたときの喜びは、
 十四89 2 子どもたちは、この黒い土の上に集まつて、足でトントンとふんでみたり、
 十四89 3 しゃがんで土のおいをかいたり、
 つち 〔槌〕(名) 1 つちひかなづち
 六54 ピンセットや、小さなつちや、さまざまな道具も、おなじ台の上によこたわっている。
 つちくれ 〔土塊〕(名) 1 土くれ
 十二57 1 唐の池は、みそ五郎が畑をうったときのくわのあとで、そのとき落ちた土くれが、有明海の中にある湯島であるという。
 つちにんぎょう 〔土人形〕(名) 1 土人形
 十二106 赤色のすやきの土人形で、高さは一メートルほどあり、
 つちほこり 〔土埃〕(名) 1 土ほこり
 十五164 〔文〕 少年たちよ、野にはたらきて、土ほこり顔よこすとも、
 つつ 〔筒〕(名) 6 つつ
 六101 8 これで、一本のつつができあがつた。
 六101 10 そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、するするといくくらいの大きさに作つて、
 六102 1 二本のつつは、うまきはまりあつて、長くのぼしたりちぢめたりすることができさる。
 六102 5 二つのつつをのぼしたりちぢめたり、かげんしているうちに、はつきりした。
 十二49 7 1 古はがきを横にまいて、ひとさし指のふとさのつつを作り、のりでとめる。
 十二50 2 3 正方形の一まいにのりをつけてつつにかぶせる。
 つつ (接助) 3 つつ

十五96 〔文〕 子どもみんな早口に話しつつ来る子どもと子ども
 十五137 〔文〕 月照らす上野の森を見つつあれば家ゆるがして汽車ゆきかえる
 十五171 〔文〕 少女たちよ、花そだてつつあきないて、つづれ着るとも、
 つつかける 〔突掛〕(下) 1 つつかける 《一ケル》
 十五64 2 だされたくつを見て、にこにことわらつた私は、それを足先につつかけるなり、すぐ、小鳥のようにとびだした。
 つづき 〔続〕(名) 1 つづき ひどべいつづき・ふたまつづき
 六66 3 第二号をつくる人たちは、このお話のつづきを書いてください。
 つづきあう 〔突合〕(五) 1 つづきあう 《一ツ》
 十三55 2 その、まだ目にもとまらぬ、小さな木のめのむれは、おたがいにいじをつづきあつて、
 つづきぐあい 〔続具合〕(名) 1 続きぐあい
 十二93 5 前後の続きぐあいをよく考えて、ことばを選び、
 つづきばなし 〔続話〕(名) 3 つづき話
 六66 1 つづき話
 六66 2 この第一号に、つづき話の第一かいめを書きます。
 六67 1 つづき話(第一かい)
 つづく 〔突〕(五) 2 つづく 《一イ一ケ》
 九65 7 ガヤガヤ、ガヤガヤいつて、なにがなんだか、まるでちの果をつついたようで、
 十五26 6 わしが大きなくちばしで女の子の頭でもつつけば、大けがをするか、殺される心配がある。
 つづく 〔続〕(五) 28 つづく 続く 《一イ一キ》

一ク》ひさきつづく・ひきつづく・ふりつづく
 二68 9 「しゅしゅしゅしゅ」は、ひくく つづいてる。
 三23 1 大きなえだは 四方にひろがつて、どこからどこまで つづいてるのか、わからないほどになりました。
 六18 7 しばらく音楽がつづいてから終わります。
 六45 9 かかしの目のまえに、風にそよぐ金色のいねが、いちめんにつづいている。
 七32 5 なごやかな音楽がつづく。
 七41 10 青年は、つづいて日本の子もりうたをひきはじめた。
 七82 11 〔文〕 私がさばくを旅していますと、砂の上からくだの足あとがつづいていました。
 八20 7 いまが夏だということや、よい天気がつづいていることなどを知ります。
 八58 11 みはらし台に立つてみると、目のまえに高い山々がそびえて、ずつとつづいている。
 八101 1 ずっと日でりがつづいたので、水をやるとうれしそうです。
 九36 5 〔文〕 たきになり流れになって、村の中を通り、田んぼに落ち、湖にまでつづいています。
 九88 3 けんかをとめる声がつづく。
 九91 3 そのほかの友だちが、落ちてくるやまだのかばんやぼうしをひろつてあとにつづく。
 九107 8 いかにもすべりよさそうないしゃが、長くつづいている。
 九110 4 のだ先生がさきに、すぐつづいてほしい先生がすべられる。
 十一8 1 〔文〕 ぼくはからだもいいし、息もつづく。
 十一31 3 〔文〕 続くひよりにさくらがさいて、
 十一35 7 〔文〕 まばゆく光るいなすまに、続いてひび

くらの音。

十一 38 ㊦ 続くひよりに勇みたち、いねもことな
くとりれた。

十一 51 3 ゆうべからの大あらしは、けさになって
もまだ続いていた。

十二 67 6 のこぎりののはは、いぬの歯のようにと
がって、〈略〉、二十も三十も続いている。

十二 67 7 五十も六十も続いている。

十二 71 7 そのうちに、冬がきて、くもった空がひ
くくたれる日が続きました。

十二 81 7 火のでるようなはげしい試合が続きまし
た。

十二 84 11 第三回はチルデン選手の勝、続いて第
四回もチルデン選手の勝となりました。

十三 29 9 黄色や、赤や、白の糸たばがくりひろげ
られ、にぎやかな話が続く。

十三 43 8 おかあさん、おかあさんの……（と、
うら手に行く……声だけ続く。）

十四 58 5 水が続いていました。

つづけなさる 「続」(五) 1 続けなさる 《―イ》
十一 75 2 ㊦ いままでどおりのてあてを続けなさい。

つづける 「続」(下) 23 つづける 続ける 《―
ケ―ケル》 ↓ あおぎつづける・あそびつづける・

おつづける・おりつづける・かきつづける・かたり
つづける・さがしつづける・さけびつづける・しら

べつづける・とびつづける・はたらきつづける・ひ
きつづける・ふきつづける・ふりつづける・もえつ

づける・もちつづける・よみつづける
二十 1 ひとりがいったことばから、おもいつい

たことばをじゅんじゅんに つづけて、

二 60 3 先生は、つづけて おっしゃいました。

二 67 3 「しゅしゅしゅしゅ」を つづけながら、

春を さがす。

四 41 3 三十ばの がんは、まいにちまいにち、北
へむかつて たびを つづけていました。

六 66 6 そのようにして、どこまでもお話を つづ
てみましょう。

六 126 7 ㊦ 「そっちのあなど、こっちのあなどつづ
けようか。」

六 126 8 ㊦ 「つづけよう。」 トンネルはだんだん深
くなり、廣くなりました。

九 12 7 たいこを、ひくく、こまかくつづけてうち
鳴らすのであるが、

九 52 10 きのはみんないそがしそうに、ドッテコ
ドッテコと、へんな樂隊をつづけていました。

九 95 7 たかぎ、ちよっとやまだの方をみるが、返
事をしないでさがし物をつづける。

十 27 3 ぼくは、いままさに学んだ「自然の観察」
を、ずっとつづけていきたいと思ひます。

十 37 4 そこでさらに、七年間のくふうがつづけら
れ、みごとに、自動織機ができあがった。

十 42 5 それから、眞珠貝養殖の科学的研究がつづ
けられた。

十一 27 4 村の人たちは、こう、うわさをしました
が、金次郎は耳にもいれず、それを続けました。

十一 28 9 そのうえ、夜おそくこっそりと勉強を続
けました。

十一 71 4 病人は、身動きもしないで、苦しうに
息を続けていました。

十三 15 10 ガリレオも、十三年ばかりは、だまっ
て研究を続けていましたが、

十三 21 6 「〈略〉。」と、熱心に研究を続けました。

十三 61 7 ㊦ こんなことを考えて、きみも勉強を続
けるんだね。

十四 48 11 頭から大波をかぶっても、平氣で歌を続
けていました。

十五 32 1 その中で、女の子を後にかばいながら、
少年は苦しい戦いを続けていました。

十五 50 2 ㊦ せつかくうけつてきたこのしごとは、
ぜひ続けてください。

十五 50 9 ㊦ よし、どんなにお金に困っても、どん
なに苦しんでも、この赤絵の技術を続けよう。

つっこむ 「突込」(五) 4 つっこむ 《―ミーン》
八 9 8 すわっている私のひざのあいだにもぐった

り頭をつっこんだりします。

十 70 10 太郎かじやは、すばやく指をつっこんで、
すぐそれを、口に持っていきました。

十 71 3 おくびよう者が、きゆうにいきおいづき、
〈略〉、自分も指をつっこみました。

十 71 5 ふたりは、かわりばんこに指をつっこみま
した。

つつじ 「躰躰」(名) 3 つつじ ↓ やまのつつじ

一 40 2 山の つつじがさいた。

一 40 3 まっかな つつじが いっぱい。

一 40 7 「かつこう」「かつこう」 つつじからな
いてる。

つった・つ 「突立」(五) 1 つつ立つ 《―ツ》

十五 64 6 私は、道のまん中で、無言でつつ立った
まま動かなくなった。

つつつく 「突突」(五) 3 つつつく 《―イ―カ・
―ク》

八 6 7 頭の上にも乗り、口さきのめしつぶもつ
つくようになりました。

八 10 6 歩いているとき、追いかけてきて、かかと
や足の指をつついたりするのです。

八 70 3 みにくいあひるの子は、〈略〉、にわとりか

六四三
七 それをつつむようにして日がくれる。

四六〇(会) おとしは ーはん せんとうに して

九八〇六〔会〕
ありそうなところって、どんなところで

しょう。

十705 こんなどくってありはしない。

十二445 人形しばいって、人形がしばいをするんですか。

十二464 影絵ってやっぱり人形のしばいですか。
十二471 人形しばいって、いろんな國にいろんなものがあるんですね。

って(終助)21 って

四1053 なに、りゆうぐうだって。」かめ「さようでございます。

五704 ひやくしようなんか、もういやになったから、お金持のおくさんになりたいって。

六242 はたらくやくそくだって。

六447 おとうさんやおかあさんにもわからないんだって——

六855 とられたって。」ほおりの「はい。」

七251 先生も、あおむしをかっていらっしやるって。

七2810 あおむしがさなぎになったところを書いてたのが、よくできたって。

七305 きょう、先生にほめられたんですって。

八821 おまえさんのいうことがわからないって。
九1011 いやだな、けんかしたあとの氣持って。

九1368 「なんだって、お月さん——」くもは、首をねじって上の方をみあげました。

十二209 どうしてこのざくろはこんなに美しいんだらうって。

十三409 きょう、うちに來たんだって……うん、うん……でもよかったよ。

十三4011 みんなで心配していた……うん、そう……そうだってね。

十三4110 おばさんがね、こんどの日曜、きみを

お客さんにして、ハイキングにつれて行くと……

十三422 見たいものだって……なにを……それきみにくれたの……マンシウウの子どもが。

十三438 おかあさん、眞ちゃんが帰って來たんだってね。

十四184 バケツは、もとは英語だってね。
十五932 なんだって。

十五1007 この人、まだぼくたちに会ったことがないんだってさ。

十五10110 『幸福』がいるかってさ。
つと(副)3 つと

十二53 これをきいたコロンブスは、つと立って、
十二88 そのとき、母ははたを織っていましたが、孟子の顔を見ると、つと立って、

十五597 私の顔を、あなのあくほど見つめていた博士は、つと立ちあがって、

つどう「集」(五)1 つどう 《ーウ》うちつどう

十一416 廣場につどうたおとなりどうし、え顔にほころびあいさつをする。

つとめ「勤」(名)4 つとめ

十三111 ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめをはたし、

十三326 自分のつとめをはたすだけの勇氣を、もちたいと考えます。

十三85 一人まえの人として、自分のつとめをはたしていくために、

十五867 人というものは、自分のしなければならぬつとめのためには、なにかしらぎせいにする心がなければならぬものだ。

つとめる「勤」(下)2 つとめる 《ーメ》

六69 ひとかどの役目をつとめて、世の中の役

にたつのに、どれもこれも不足はなさそうである。
十五5612 私はまだわかくてアマスト大学の助手をつとめていたころ、

つな「綱」(名)5 つな ↓おおづな

九1311 くもは、ふといつなをとりだして、みつばちのからだをしばりつけようとしました。

九1321 みつばちは、そのつなをさけてにげようとしたが、どうしても手足がうまく動きません。
九1323 そのうちにみつばちのからだも、つなにかれそうになりました。

九1329 みつばちは、つなをほどいて、あみをくい切って、にげていってしまいました。

十二665 それからでた細い根が、つなのようにからみあって、葉を育て花をさかせる。

つながり「繋」(名)3 つながり

十三24 いつも、全体の中の部分、部分があつての全体、というつながりをわすれないで、

十三113 一つのことと他のこととの間に、すこしのつながりもなく、

十四329 星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、じつは、ふかいつながりがあるのです。

つながる「繋」(五)2 つながる 《ーツ》

十三275 ホーントンは一本のトンネルのようになつて、どこまでもつながっている感じがする。

十四7410 そうなると、いろいろの実用上の問題とえんがつながってきます。

つなぐ「繋」(五)13 つなぐ 《ーイ・ギ・グ・ゴ》 ↓おててつないで

一212 おててつないで、のみちをいけば、
一224 「おててつないで」のところで、おともだちとてをつなぎました。

一226 おともだちとてをつなぎました。

- 三82(会) さあ、手をつなごう。
 三83(会) 手をつなごう。
 四68 世界じゅうの人の心をつなぐ糸を、まいにちあつかうところです。
 四204(手) みんなで手をつないで、わをつくりました。
 五445(圖) 世界の友よ、手をつなぎ、なかよくとんであそぼうよ。
 六1424 そのあいだに、うさぎさんたちは、手をつないで、そこをにげしました。
 七69(會) 手をつないで校門をでいく子ども、十三503 さあ、元氣でゆかいに、手をつなぎましょう。
 十五92(圖) こどもら手をつないだ中を日ぐれのうまが通る
 十五102(圖) 月が出る山の家にうしをつないだ木の
 つの「角」(名) 16 つの 角
 二282(會) やぎとやぎと、せまいはしの 上で、つのおしあっていました。
 六1341 もし自分が勝ったら、このしかの角で、うさぎさんたちをつきあげるといいます。
 六1343(會) そのかわり、ぼくが負けたら、この角を、おってしまってもいい。
 六1347 自分たちは、あの大きなすうどい角で、つきあがられてしまわなければなりません。
 六1349 しかさんに勝ったところで、あの角をおるなどということはできません。
 六13410 角をとったところで、なんになりましょう。
 六1362 角をふりたてふりたて走りしました。
 六1363 ところが、ぶどうのつるに、角がひっかかりました。
 六1373(手) けれども、あなたの角はおりません。

- 六1376(會) 角でついてやる。
 九799(會) たべたけものの骨や、角などを、ここへすてました。
 九851(會) いのししやしかの角などに手を加えて、なにかの道具につかった物があつたでしょう。
 十一324(圖) たけのこすくすくのびて、しずくすおうとでむしが、つのをふりあげのぼりだす。
 十二998 しかの角などで作ったつり針もあります。
 十三58 あさい水には、あしのめがすくすくと、するどい角をのぞかせた。
 十三478 しかがすわっている。そのせなかにその角のかげ。
 つば「鑄」(名) 1 つば
 五569(會) そのまわりに、うすい、大きな、麦わらぼうしのつばみたいなのもみえる。
 つばき「椿」(名) 4 つばき
 七562 つばきの花がまっかにさいています。
 八127 庭さきの、いちばん美しい花のさく、つばきの木の根もとにうめてやりました。
 十一424(圖) もうそうちくも重荷にたえず、つばきの上にばたばた落す。
 十一5710(圖) じゅずだま・むくろんじ、赤い、赤い
 つばき、げんげの花わ、一つ一つつづろ。
 つばくろ「燕」(名) 1 つばくろ
 十一327(圖) 麦のはしりほかがやく上を、海こえてきたつばくろが、すうい、すういとどびまわる。
 つばさ「翼」(名) 8 つばさ
 八748 頭をねじ曲げてつばさの中にいれた。
 八883 すると、とつぜん、あひるの子は、つばさをばたつかせることができた。
 八8810 はくちようは、つばさをサラサラと鳴らし、かるく水の上をおよいでいた。

- 八931 どうしていいのかわからないので、つばさの中に頭をかくした。
 八937 すると、つばさがサラサラと音をたてた。
 十五251 上体をびったりと鳥のせにつけて、右手で鳥のつばさのつけねをつかみ、
 十五303 少年は、身をおわすと同時に、右手の短刀で鳥のつばさに一たちあびせました。
 十五316 少年の投げつける石は、鳥のつばさに、胸に、目に、ひしひしとあたります。
 つばめ「課名」2 つばめ
 九27 三 つばめ……十五
 九151 三 つばめ
 つばめ「燕」(名) 43 つばめ ↓おやつばめ・こつばめ
 二247(會) 先生、でんせんに、つばめがたくさんとまっています。
 五428(手) つばめが、私のすぐ目のまえを、いったりきたります。
 六382 立ちならぶビルディングのあいだから、とびあがってくる親子のつばめ。
 六388 親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどってきかかしの近くにとまる。
 六414 つむじ風のように、列をつくったつばめのむれが、かかしの方へとんでくる。
 六428 つばめのむれ、屋根の上にひとかたまりになる。
 六432 しずんでいくお日さまをおって、町の上を列車のようにとぶつばめのむれ。
 六434 山や、みずうみや、はたけの上をひとかたまりになつてとぶつばめのむれ。
 七582 たんぼの上で、つばめがちゅう返りをした。
 九152 夏の終りごろ、つばめが電線や物ほしがお

- に五六ばぐらいならんでとまっているのを、
 九164 こうして、大ぜいのつばめが、ならんでい
 るのを見ると、
 九169 やがて、九月のなかばをすぎると、つばめ
 は、そろそろ日本をさっけていき、
 九171 つばめのゆくさは、遠い南の海のかた
 です。
 九173 フィリピンで、ある年の十月のすえ、子ど
 もがつばめをつかまえました。
 九178 しかし、つばめは、もっともつと南へとん
 でいくのです。
 九1711 日本のつばめは、こんなふうに渡ってい
 ますが、
 九181 ヨーロッパのつばめも同じように、ヨー
 ロッパの北の方ではんしよくしたものが、秋には、
 〈略〉、遠くアフリカまでもいって、
 九184 つばめは、鳥の中でも、たいへん早くとぶ
 鳥です。
 九191 約十万ばのつばめが、きゆうに落ちてきた
 ことがあります。
 九194 おりから南へ飛行中だったつばめは、食に
 うえ、つめたい雨にずぶぬれになって、
 九198 協会では、喜んでつばめのせわをする返事
 をしました。
 九1910 寒気のために苦しんでいるつばめのせわを
 することを、新聞に廣告しました。
 九201 「かわいそうなつばめをすくえ。」という
 運動に全國民が、加わったほどです。
 九203 協会へは、電話が、ひっきりなしにかかっ
 て、つばめを集めていることを知らせてきました。
 九204 そのつばめを運ぶのに六台の自動車ではま
 にあわず、さらに二台の自動車を加えました。

- 九215 たくさんつばめがはじめて運ばれてきた
 のは、九月十七日でした。
 九218 晩の十時に、二千ばのつばめが着きました。
 九219 その夜半には、また一台の貨物自動車が、
 五千ばのつばめをつんできました。
 九221 航空会社では、お金をとらずにつばめを運
 ぶことを申しでました。
 九221 つばめをのせた飛行機は、それから毎日の
 ように、〈略〉ヴェニスへとんでいきました。
 九232 このほかに、オーストリア動物園の人たち
 がひき受けて送ったつばめを加えると、十万ばあ
 まりになります。
 九241 むかしから、つばめは、同じ家に帰ってく
 るといわれています。
 九242 ある家ののき下で巣をつくったつばめは、
 來年また、同じ巣へもどってくるというのです。
 九247 つばめは、けっして自分の國をわすれませ
 ん。
 九254 ちらりとつばめのすがたをみた人は、きつ
 と、〈略〉。〉といって喜びます。
 九256 窓 きよう、はじめてつばめをみたよ。
 九258 いそいそと帰ってきたつばめをむかえる人
 の心は、どんなにうれしいことでしょう。
 九14510 風と思つたのは、そうではなくて、つばめ
 がすいととんできたのでした。
 九14511 くもは、このつばめにひろわれました。
 九14511 くもは、つばめの口ばしにはさまれたまま、
 空をとんでいきました。
 九1472 もがけば、あるいは、つばめのくちばしか
 らころげ落ちることができたかもしれせん。
 九1474 つばめは、麦畑らしい土地の上をとびまし
 た。

- 十三62 ひばりやつばめも、やがて、遠い國から
 ここに帰って来て、私たちの頭上にとびかい、
 つばめさん 「燕」(名) 2 つばめさん
 四776 の——のきばにすくう つばめさん。
 九1479 窓 自分の命は、つばめさんにあげよう。
 つばめたち 「燕」(名) 4 つばめたち
 九207 自動車は、夜なかの二時、三時にも、よわ
 りきっているつばめたちを運んできました。
 九209 協会では、おおいそぎで、その家をつばめ
 たちのためにぐあいよくつくりなおしました。
 九2011 たくさんのはりがねがはりまわされて、つ
 ばめたちのとまるところがつくられました。
 九212 いく千というつばめたちは、人をおそれず、
 つぶ 「粒」(名) 3 つぶあわつつぶ・ごつぶ・ご
 はんつぶ・ひとつぶ・まめつぶ・めしつぶ・やくせ
 んごひやくつぶ
 五926 窓 それぞれ、たけのこにごはんのつぶが—
 —こりやあ、たけのこごはんだよ。
 十四635 しずくのつぶの大きいのが、ちらちらと
 目に見えます。
 十四636 ばあいにより、つぶがあまり大きくない
 ときには、日光にすかして見ると、湯げの中に、
 にじのような、赤や青の色がついています。
 つぶす 「潰」(五) 1 つぶす 《—シ》ひぬりつぶ
 す
 八748 あわれなあひるの子はきもをつぶした。
 つぶつぶ 「粒粒」(名) 2 つぶつぶ
 三8310 窓 お日さまが、雨のつぶつぶをしゃばん
 だまみたいに光らせるのよ。
 十二734 話をしているうちに、パラパラと音がし
 て、白い小さなつぶつぶのものが落ちてきて、
 つぶやく 「眩」(五) 2 つぶやく 《—イ》

が、

十五107 8 すると、あの女はさがしに行きたがつて、つまり、ぼくたちのなかまから、いちばん美しいものがいなくなってしまうわけですからね。
つまる「詰」(五) 7 つまる 《「ツ・ール」》 ↓ ゆきづまる

六104 8 ただ、はながつまっているだけだが、そのために発音がすこしおかしい。

六107 5 弟ははながつまっているために、あることばが、うまく発音できなくなっている。

六107 11 ひとりで、なぜはながつまるといえないことばと、はながつまってもいえることばとがあるのだから、と考えてみた。

六107 11 はながつまってもいえることばとが

六108 2 はながつまったために発音ができなくなるような音は、

六108 6 そうして、はながつまっても発音できるような音は、はなから声がない音のはずである。

十五101 11 幸福でつまっているじゃないの。

つみ ↓ はなつみ

つみあ・げる「積上」(下二) 1 つみあげる 《「ゲ」

八60 4 野原にはかれ草がつみあげられ、
つみかさねる「積重」(下二) 1 つみ重ねる 《「ネ」

十二14 8 夏のころ、草とりをしてつみ重ねておいたかれ草が、

つみくさ「摘草」(名) 1 つみ草

十二12 ひとりの友だちは、妹をつれて、つつみの上でつみ草をしている。

つみこえ「積肥」(名) 1 つみこえ

八18 10 こがねむしや、かぶとむしの子どもたちは、

つみこえやこえ土の中に生みつけられて、

つみこむ「積込」(五) 2 つみこむ 《「マ・ーン」

五19 5 やつと汽車からおろされ、自動車につみこまれて、ある町のゆうびんきよくにつきました。

五33 3 かんぱんのクレインが、あがつたりさがったりして、荷物をつみこんでいます。

つみなさる「積」(五) 1 つみなさる 《「イ」

九86 6 かごをこのリヤカーにつみなさい。
つみねやま「津峯山」(地名) 1 津峯山

十二61 7 徳島縣の津峯山に、家具の岩屋というのがある。

つむ「摘」(四五) 5 つむ 《「ミ・ーム・ーン」

八37 7 王女がこがね色のたんぼぼをつんでくると王さまは、「略」とおっしゃいました。

八37 8 この花が、みたとおりのこがねならば、わしもつむのだが。

十二95 1 赤とんぼはとらずに、花を手にいっぱいつんで帰ったことを思う。

十五10 1 文 леньげつみて子という母の黒いこうもり

十五21 9 めずらしい草花をつみながら、がけの上をそろそろと歩いていました。

つむ「積」(五) 7 つむ 《「マ・ーン」

三29 1 そののち、はやとりは、たくさんのお米や、麦や、豆をつんで、海をわたりました。

五19 2 私たちは、汽車につまれて、どんどん、南へはこばれました。

五32 8 材木や、石炭や、お米を、たくさんつんでいます。
五35 8 とれた石炭は、トロッコにつんで、そとへはこびだします。
五36 1 ほりだされた石炭が、山のようにつまれて

います。

九21 9 その夜半には、また一台の貨物自動車が、五千ぼのつばめをつんできました。

十24 12 みるまに、トロッコにつまれる石炭の山。
つむぐ「紡」(五) 1 つむぐ 《「イ」

五65 7 おじいさんは、あみでさかなをとり、おばあさんは、糸をつむいでくらしていました。

つむじかせ「旋風」(名) 2 つむじ風

六41 2 つむじ風のように、列をつくったつばめのむれが、かかしの方へとんでくる。

七57 1 つむじ風が、わたしのまを走っていく。
つむる「瞋」(五) 1 つむる 《「ール」

九14 8 目をつむると、だれかが、くもの頭をなでています。

つめ「爪」(名) 3 つめ ↓ おおづめ・けづめ

四76 9 つめはのぼさぬように。
八21 10 虫は、それにとりつくくと、まえ足のつめで

かたくそれにしがみついて、
十五23 7 大きなやまわしのつめにつかまれて、女の子はばたばたしているではありませんか。

つめ「詰」 ↓ ちようづめ
つめたい「冷」(形) 19 つめたい 冷たい 《「イ・カッ・ーク」

四54 10 かっちゃんねつがでてきたので、みんながわかるがわる、つめたい水で、あたまをひやしてやりました。

八12 3 つめたくなったからだをわたにつつんで、
《略》、つばきの木の根もとにうめてやりました。

九19 4 おりから南へ飛行中だったつばめは、食にうえ、つめたい雨にずぶぬれになって、

九36 11 手にとって口へいれると、つめたくてあまい味がしました。

九二〇 6 おく山の雪がとけてそのまましみてきたかと思われるようにつめたかった。

一二三六 12 冷たい水がいきおいよく流れているあいだに、

一二三七 7 「水」はいま自分のかた手の上を流れているふしぎな冷たいものの名であることを知りました。

一四六七 5 つめたい風がふきこむたびに、

一四六八 3 そういふ地方のまわりに、わりあいにつめたい空気におおわれた地方があると、

一四六八 4 入れかわりに、そのつめたい空気が下からふきこんできて、大きなうずができます。

一四七一 11 そのひえかたがどこも同じではないので、ところどころ特別につめたいむらができます。

一四七二 7 これに日光をあてると、熱いところとつめたいところとのさかいで、光が曲がるために、

一四八八 5 足がつめたくなって、立ちどまったためであろうか。

一四九〇 7 女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。

一四九一 10 だから、その足のつめたいことといったらなかった。

一四九五 3 女の子は、その上へ、小さなつめたい両手をさしのべた。

一四九六 2 女の子は、小さな、つめたい足を、かがやくほのおの方へのぼした。

一四九六 5 女の子は、手にもえつくしたマッチを持って、つめたく、いん氣そうにすわっていた。

一五二七 8 朝の冷たい空気の中を、

つめたさ 「冷」(名) 1 つめたさ
一四七四 2 湯がひえるときにできる、熱さとつめたさとのむらだが、どうなるかということとは、

つめる 「詰」(下二) 1 つめる 《一メ》↓おいつめる・きりつめる・みつめる

一五五四 6 〇 おたがいにつめて、座席にもうひとりつもり 「積」(名) 7 つもり

二四六一 「りんご」にお話を する つもりで 書きました。

二四七八 「雲」に話をする つもりで 書きました。七四五 〇 こんなつもりでひいたのでもありません。

八五〇 四 「びんぼう」だというつもりでした。八五〇 八 それでも、自分をよくむかえてくれる人があつたら、その人のところへ幸福をわけておいてくるつもりでした。

一三三二 五 三國志とか、西遊記とかいって、中國のむかしものがたりをやるつもりなのだが、

一五五八 三 「新島のおばさん。」とよんだつもりで、私はかねをカーンとたたいた。

つもる 「積」(五) 8 つもる 《一ツ・一ラ・一リ・一ル・一レ》

四八六 四 ゆうがた、まつの木の枝は、まがるほど雪に つもられて、だまつている。

四八九 五 〇 こんやはだいぶ つもるでしょう。四九〇 一 どんなに つもっていても、おかつてからはきはじめて、かいどうへぬけて、

六二六 四 〇 今夜はつもるかもしれない。一一四一 三 〇 さとはしぐれがしとしと降るに、ふもとの小屋はみぞれして、うらの山には白雪 つもる。

一二七四 五 みるみるうちに つもりましたが、一四八二 二 ちりもつもれば山となる。

一四八三 六 雪が降りだしてから、だんだん つもるようす、

つやつや 「艶艶」(副) 1 つやつや

三九三 八 みどり色に つやつやと 光ったしほふ。

つやつや・する 「艶艶」(サ変) 2 つやつやする 《一シ》

九四三 五 〇 つやつやした大きなかが、一二一四 一 このごろは、きわだって美しいつやつやしたしゅの色がさしてきた。

つゆ 「露」(名) 6 つゆ ↓あさつゆ・よつゆ

二二四 一 〇 先生、いものはの つゆは、あれ、ただの水でしょうか。

三九六 〇 〇 よあけにばあとまつき色、つゆをふくんで さきました。

七五 四 校庭のつゆもいっぺんに光った。

九一四 一 つゆが木の葉にたまりました。

九一四 二 たまったつゆが、しずくになって、ポタリポタリと落ちてきました。

一五九五 五 「こはくのつゆ」などがあらわれます。

つゆ 「梅雨」(名) 2 つゆ

四二四 七 六月は つゆ。

一一三 八 〇 つゆ晴れ空はみどりにすんで、

つよい 「強」(形) 21 つよい 強い 《一・一イ・一カッ・一ク》 ↓がまんづよい・しんぼうづよさ・ちからづよい

三五一 三 〇 のみより つよいうでさきで、かつちんかつちん石を切る。

四五〇 二 力の つよい がんが、三ばで、かつちゃんのおちていくのを、下からうけとめました。

六六五 二 世界じゅうで、いちばん力の つよいものはなにあに。

七一九 二 〇 このまえきたときは、風が強かったから、七五三 二 あいては、町の、いちばん強い学校だ。

七五三 六 なんだか、向こうのせんしゅは、大きくて強そうだ。

八一七 一 一 大きくなるにつれて、六本の足がだんだん

強くなり、
八八四 まえより強く空気をうち、とぶことができた。

九三四(手) ちよまはふえる力の強い草なので、

九六五(金) おしあいの強いものだよ。

十六八(金) もっと強く、あおげ、あおげ。

十六八(金) もっと強く、あおげ、あおげ。

十一七(手) 太郎かじやのほうは、気が強いばかりでなく、わるちえがあつたから、おちつきはらい、

十一一〇六(金) 三ばん、四ばんをこいでいる、ぼくたち強い男の子だ。

十一三四(金) つゆ晴れ空はみどりにすんで、日ましに日ざしが強くなり、

十二三三(手) 私は、《略》そのかたの両うでの中に強く

くだきあげられました。

十三一五(手) ガリレオも、《略》、だまっていられず、

本を書いて、地動説を強くとなえました。

十三二二(手) ユートランドのあれ地は、もはや、この

強い木をやしなうにたる地力さえ、のこしていま

せんでした。

十四五三 作品の中には、《略》強い真実の力が、

こもっているのです。

十五七五(手) 「愛はにくしみよりも強い。」

十五一八(金) 私たちは、強くて、純潔です。

つら ↓しめつら

つら ↓「辛」(形) 6 つらい 《—イ—カッ》

四四五(金) おしまいは つらいよ。

四四五(金) でもね、つらいんだよ。

四四五(金) なにが つらいの。

十四六八(手) なつかしいおかあさん、おわかれして

から私がいちばんつらかったことは、おかあさん

がかなしがっていらっしやと思うことでした。

十四八六(手) つらいのをがまんして生きていきます。
十四三七(手) みなさん、あなたがたは、いま、日々の生活にもつらい思いをしていますか、

つり 【釣】(名) 8 つり

四一〇(手) うらしまが、海べでつりをしています。

四一〇(手) うらしまは、いっしんに つりをしてい

るので、気がつきません。

六八四(金) きょう一日だけ、私につりをさせてくだ

さいませんか。

六八二(金) 一どつりがしたいのです。

六八二(金) そんなにつりがしたいのか。

六九二(金) じつは、海でつりをしていたら、つりば

りをとられてしまったのです。

九三三(手) この湖へつりにいくのが、いちばんの樂

しみです。

九三四(手) ぼくは、先生やみなさんといっしょに、

この湖へつりにいけたらと、いつも思っています。

ツリー ↓クリスマスツリー

つりがね 【釣鐘】(名) 1 つりがね

四二〇(金) きん紙でこしらえた小さな つりがねや、

十字かも 上げました。

つりがね 【釣革】(名) 1 つり皮

十一五四(金) 「つり皮あげずに中ほどへ。」

つりさお 【釣竿】(名) 2 つりさお

六八二(金) このつりさおを持っていきたい。

六八三(金) はおりのみことはつりさおをひきあげる。

つりさ・げる 【釣下】(下) 2 つりさげる 《—

ゲーゲル》

四八三(金) それをまつ枝のさきに つりさげると、

六一一(金) 時計屋さんは、しあげた時計をちよっと耳

にあててから、ガラス戸だなの中につりさげた。

つりばり 【釣針】(名) 18 つりばり つり針

四四六 ものさしで きちんと そろえたように
なつて とんだり、まがつて つりばりのように
なつたりしました。

六八四(金) あ、つりばりをとられた。

六八五(金) つりばりを魚にとられてしまいました。

六八五(金) だいいじなつりばりをなくしてしまふなん

て。

六八七(金) つりばりは魚にとられてしまふし、

六九二(金) じつは、海でつりをしていたら、つりば

りをとられてしまったのです。

六九二(金) つりばりを。

六九二(金) 兄のだいいじなつりばりなので、私も困っ

てしまいました。

六九四(金) みななものにたずねるが、だれか、この

かたのつりばりをとっていったものはないか。

六九六(金) おまえは、このかたのつりばりを知らないか。

六九六(金) つりばりをのどにかけまして、たいへん

苦しんでいるところでございます。

六九六(金) たいののどから、つりばりをとっておや

り。

六九七(手) つりばりをとる。

六九七(手) 女の人をつりばりを水であらって、海の神

にさしあげる。

六九七(金) たしかにつりばりだ。

六九七(金) このつりばりではございませんか。

六九八(金) だいいじなだいいじなつりばりが、でき

て神さまお喜び。

十二九九(手) しかの角などで作ったつり針もあります。

つりばりのゆくえ (課名) 2 つりばりのゆくえ

六三三(手) つりばりのゆくえ……八十

六八〇(手) つりばりのゆくえ

つる「蔓」(名) 11 つる

五六一七 蔓 それでも、まいにちあのつるをのぼしたのは、だれかしら。

六三六 ところが、ぶどうのつるに、角がひっかかりました。

七二六 あさがおのつるがまきつくように立ててある、竹や木のことをいうのです。

七六四 豆のつるがまきついて、まきつくものになくなった豆のつる。

七六五 まきつくものがなくなった豆のつる。

一四五二 根や、つるや、葉のないかぼちゃはありませんが、それだけでは実はつきません。

一四五五 おとなのつるは、しずかにいいました。

一四五六 もし、つるの私がとちゅうで切れたりしたら、それについている葉でも、花でも、なりかけている実でも、みんなかれて

一四五七 だから、私は、そのかぼちゃは、全部私のものだと思います。」つるがこういったとき、

一四六〇 花も、葉も、つるも、首をひねって考えていました。

一四六一 つるも、うなずいて、「略。」

つる「鶴」(名) 1 つる

四八七 まつの木の枝を立てて、色紙で おったつるや、ふうせんをさげました。

つる「釣」(五) 3 つる「一ッ」

六八二 大きなたいをつつてみたいのです。

六八三 でも、つってみるがいいさ。

六八四 おまえは、なにかつったか。

つる「剣」(名) 1 つるぎ

一三九 つるぎで失ったものを、すきでとり返そうと決心したのです。

つるさん「蔓」(名) 1 つるさん

一四五四 「では、つるさん、どうぞ。」

つる「吊」(五) 5 つるす「一シ」

一五〇 鳥かごは、略、おひるすぎには、かえで

の木につるしておきます。

五〇一 かえでの木につるしておくと、いろいろな鳥がやってきます。

九四三 ほしがきにするために、母がかわをむいて竹ぐしにおし、のき下につるしてくれま

す。その両がわに、ふんどうをつるしておく。

一五七 げんかんには、おもむきのあるかねがつるしてあって、略、しゅもくがそえてあ

った。

つる「副」1 つるつと

六六八 手をあらって、しゃぼんを水の上へおいたら、つるつとすべった。

つる「副」2 つるつる

九八六 ここからでるのは、このとおりうくだいて作った物で、つるつるみがかれていないから

一三二 その「ビューン」がとまると、略、子どもが、もう、頭をつるつるにそられている。

つる「サ変」2 つるつるする「一シ」

二五六 つるつるして、とがったものじゃないか。

三二二 てすりは つるつるしています。

つる「鶴」(名) 1 つるはし

一四六 工員たちは、さくがん機やつるはしを持って、石炭をほっている。

つる「蔓奴」(名) 1 つるめ

六三六 「なんだ、このぶどうのつるめ。」

つる「副」1 つるりと

六三七 足がつるりとすべって、「あっ」というまに、川の中におちてしまいました。

つれ「連」(名) 3 つれ じさんにんづれ・ふたりづれ

九二九 つれの人は、この茶人ほど熱心ではないから、やめて帰ろうといった。

九四三 茶人はつれの人といった。

九四七 泉をくんでつれの茶人と茶をたてて、心から楽しんだということである。

つれる「連」(下) 65 つれる「一レ」おつれる

一六八 おんがくに つれて、みんなが 手をとって おどりました。

一四九 おしやかさまは たくさんの でしをつれて、王さまのごてんにまいりました。

一四一 「略。」といって、すぐに なかまを大ぜい つれて きました。

一七四 「お日さまが つれて いった しまったのよ。」おかあさんが おっしゃいました。

一八二 そのうちに、雲は 雨をつれて、空をすすんで きました。

一八五 かぐやひめを ごてんにつれて きたら、おまえに くらいを さずけて やろう。

一八八 「略。」と お思いになつて、すぐ しょに つれて かえろうと なさいました。

一九二 では、 つれて いくのは やめよう。

一九五 つれて いった もらおうかな。

一九七 「あちらへ つれて いけ。」

一九九 「略。」と、 おくざしきにつれて いきました。

二〇二 あした山へ つれて いった、 はなそうと 思っているのです。

二〇六 それにつれて、 空が うす赤 くなつてくる。

二一〇 親づばめ、 子づばめをつれて きたる。

六44 4 ㊦ うん——だけど、いったいだれがつれて帰ったんだろうね。

六58 9 そこを通りかかった人が、おんぶして学校までつれてきました。

六93 9 女の人は、魚たちをたくさんつれてでてる。

六96 3 女の人は、たいをつれてでてる。

六103 7 ぼくは、おかあさんをひっぱるようにつれてきた。

七35 11 「略。」とうけあって、さぶろうをつれてきたのでした。

七79 1 ㊦ あなたは、そのらくだを、どこかへつれていったのにそういない。

七79 7 むりにつれていく。

七80 3 ㊦ 私どもは、麦をつけたらくだをつれて、さばくを通っていましたが、

八17 10 大きくなるにつれて、六本の足がだんだん強くなり、

八20 1 大きくなるにつれて、だんだん地のそこふかくもぐりこんでいきます。

八65 9 親あひるは、そのひなをみんなつれて、水のところへおりていった。

八67 2 ㊦ わたしについておいで、大きな世界の鳥小屋へつれていってあげるからね。

八67 8 そうして、親あひるにつれられたひなたちが通っていくと、

八86 3 あひるの子をみつめて、木ぐつでこおりをくつき、うちへつれて帰った。

九42 8 ㊦ いちばん小さな三つになる妹もつれて、うちじゅうがみんなでもほりをしました。

九89 7 帰ろうよ。ね、やまだくん。」と、つれていこうとする。

九90 6 ㊦ きみたち、やまだくんをつれていけよ。

九104 3 ぼくたち四十人は、のだ先生といしい先生につれられて、山のスキー場へいった。

九119 2 私は父につれられて、近くの高い山に登った。

十22 11 ひとりの友だちは、妹をつれて、つつみの上でつみ草をしている。

十47 6 私は、きのう、三つになる——まんでいうと二年三ヶ月になる妹をつれて、さんぽにできました。

十47 8 十三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるので、そこへつれていこうと思ったのです。

十48 6 べつにいそぐともありませんでしたので、妹の氣のすむようにして、つれていきました。

十63 1 能は、そのうたいにつれて、役者が美しい舞を舞ったり、〈略〉するものですが、

十111 1 ㊦ いいコックスが日本を正しい方へつれていくのさ。

十124 11 その晩のうちにいって、子どもをつれてきました。

十140 5 ㊦ 南にかたむく日につれて、光はまともにえんにさす。

十165 2 門ばんは、その手紙をひと目みてから、看護人と呼んで、少年をその父親のところへつれていくようにといました。

十173 4 みると、医者が、ひとりの助手をつれて、へやの向こうのはしにはいつてきました。

十183 4 ㊦ おまえはべつの人のところへつれていかれたのだな。

十186 7 ㊦ ここへつれてきたときには、もうすっかりわけがわからなくなっていて、

十189 5 医者が、看護婦と看護人をつれてはい

てきました。

十二25 7 そとさえ寒くなければ、ものかげへつれていって、用をたさせるようにしました。

十二55 10 そういう人たちのなくなるにつれて、順々に消えていってしまうものもある。

十二91 1 天氣のよかったこと、山へいったこと、弟やいぬをつれていったこと、

十二105 3 大きなげたをはいた女の人が、おとをふたりつれています。

十三38 6 ㊦ ほんとうにつれて行ってくださいよ……

十三41 10 ㊦ おぼさんがね、こんどの日曜、きみをお客さんにして、ハイキングにつれて行くって……

十四25 7 新しいものが世の中にできてくると、ことばも、それにつれて、新しく生まれるものである

十四56 7 ㊦ また、花さんでも、葉さんでも、日のあたるところや、高いところがおすきなようですが、そこへつれて行つてあげるのは、この私です。

十四100 8 ㊦ いっしょにつれて行つてください。

十四100 8 ㊦ ねえ、いっしょにつれて行つてください。

十五20 10 このふたりの子どもたちは、両親や家庭教師につれられて、散歩に出て來るのです。

十五21 8 ふたりの子どもは家庭教師につれられて、〈略〉、がけの上をそろそろ歩いていました。

十五24 4 草のしげつている場所を見つけて、そこへひつじをつれておりて來ていますと、

十五61 7 私は、札幌の創成川の岸にあった家につれられて行つても、思うぞんぶんにふるまった。

十五61 11 ㊦ 満ほう、いいところへつれて行つてあげるから、さあ、出かけよう。

十五66 10 十の春をむかえた私は、〈略〉、ひとり父

につれられて、景色の美しい京都に移った。

十五 69 9 ああ、新島のおじさんは、私を京都までもつれて来て、朝夕かわいがってくださったのだ。

十五 116 3 会 あの人がつれて来てくれたの。

つ・れる 「釣」(下二) 5 つれる 《レ・レル》

六 82 5 会 そううまくつれるものではないよ。

六 83 2 会 どうしてつれないのだろう。

六 83 3 会 朝から一びきもつれないなんて——おや、ひく、ひく。

六 84 9 会 いいえ、つれませんでした。

六 84 9 会 つれないどころか、申しわけのないことをしてしまいました。

つんつんつっころぼし (名) 1 ツンツンつっころぼし

八 8 5 「ツンツンつっころぼし」とさえずったりつんと (副) 1 つんと

九 96 4 「あつ、それだ。」と喜ぶが、やまだの顔をみると、きゆうにまたつんとなつて、

つんぼ 「聾」(名) 2 つんぼ

十二 39 9 よんでわかるように、ケラーは、めくらで、そのうえつんぼでした。

十五 88 1 会 『なんにも知らないという幸福』で、みんな魚のようにつんぼだし、

後 記 ——— 編集の経過と担当者

第六期国定読本『こくご』『國語』（いわゆる みんないいこ読本）の総索引作成作業は、平成五年五月から開始された。第一期、第二期はカードを利用した手作業方式であったが、第三期からはコンピュータ利用方式に切り換え、文脈の長さ指定の自動化など、次第に効率化を進めてきた。さらに五期からは一部をK W I Cにすることにより、一層の省力化を行った。それが利用者の方々にとって大きな不便にならないことを念じている。

期を追って用例数が増え、第五期がおそらく最高になるものと思ったところ、予期に反して第六期はさらに五千例ほど上回った。第一期の約四倍の用例を二巻に収めるために、極力文脈を切り詰めてきたが、その欠を補うために平成三年からフロッピー版本文の頒布を開始した。手作業で用語総覧を作成した一期と二期についても底本の機械可読化を行い、今回の六期を加えて、一六期すべての本文を提供することが可能になった。

第六期に関する作業にたずさわったのは次の通りである。

国語辞典編集室室長 木村睦子

同調査員 林大・貝美代子・久池井紀子・山田雅一・乾とね

また、犬飼芳子・木村睦子・高比良富江・小川民が、この作業を助けた。

本書の解説は貝美代子が執筆した。

（平成七年四月木村睦子記す）

CONCORDANCE 10 TO KOKUTEI TOKUHON

1. CONCORDANCE 10 is the result of work done by the Section for Dictionary Research of the NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE.
2. CONCORDANCE 10 is published as part of the basic research materials to be used for the Historical Japanese Dictionary being planned.
3. Computer-aided concordance making was adopted from Vol.4 in the series of concordances to *Kokutei Tokuhon*, and an optical character reader was also used.
4. *Kokutei Tokuhon* was a series of Japanese textbooks edited six times by the Ministry of Education. These were used in all elementary schools nationwide for 45 school years from April 1904 to March 1949.
5. CONCORDANCE 10 covers the sixth *Kokutei Tokuhon*. The original textbooks in fifteen volumes were used for the six grades of compulsory education from April 1947 to March 1948.
6. The sixth *Kokutei Tokuhon* was revised at least once. The texts chosen for CONCORDANCE 10 are the earliest versions used in 1947, and are now in the possession of three organs and one person separately.
7. CONCORDANCE 10 covers the first half of the vocabulary of the sixth *Kokutei Tokuhon* or words from A (あ) to TU (つ); the latter half of the words from TE (て) to N (ん) will be covered by CONCORDANCE 11.
8. The introduction explains the following;
 - the transition from the fifth to the sixth *Kokutei Tokuhon*;
 - the editorial policy of the sixth *Kokutei Tokuhon*;
 - the characteristics of the sixth *Kokutei Tokuhon*; and
 - the bibliography.
9. The appendix will be contained in CONCORDANCE 11.

国立国語研究所 国語辞典編集資料10

国定読本用語総覧10 第六期 あゝつ

平成七年六月

国立国語研究所

〒一一五 東京都北区西が丘三丁目九番一四号
電話 (〇三) 三九〇〇—三一一一 (代表)

本書の市販品発行所

〒一〇一 東京都千代田区三崎町二丁目十二番十四号
電話 (〇三) 三三三〇—九四一一

株式会社 三省堂

© The National Language Research Institute 1995
Printed in Japan

UDC (075.2) 001.86: 809.56 NDC 375.933